for the sky of freedom

天竺葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｓｋｙ　ｏｆ　ｆｒｅｅｄｏｍ

【Ｎコード】
Ｎ４９８８Ｔ

【作者名】
天竺葵

【あらすじ】
華々しい技術の発展と激動の時代・・・

しかし金融危機と原発問題の傷跡はいまだ深く残る・・・現代の地球。

そして、その陰で静かに起こるポケモン文明の長きにわたる衰退と混迷の最終局面。

1つの文明の終わりが近づく…

先の読めない世界をポケモン達は歩み続ける…

経済危機、資源高騰、中東情勢、アジア情勢、財政問題、原子力・エネルギー政策、地球温暖化…

人間のエゴから生まれた“計画”の中、それでも彼らは答えを見つけるのか?

そしてそれは人類を救済するのか?

序章とあいさつに代えて（前書き）

この物語はフィクションです。
登場する人物、国家、組織、企業は現実と酷似していても一切架空であり、歴史的事象に関してもそれに対する現実世界での考察や現在の対応をなんら否定したり、批判するものではありません。
ただしこれが現実に起こりうるかどうかの判断はみなさんにお任せします。

序章とあいさつに代えて

まったくこんなことになるとは…
“彼女”が最後に感じたのはこんな（こういう状況において）ありきたりな感情だった。
それでも恐るべき海水に抵抗するわけでもなく、翻弄されるわけでもなく、まるで“自然の掟”に野生の小動物が従っていくようだった…。
そしてこの事が、この世界に新たなる変化の波を呼び起こそうとしていた…その先の結果を知る者は神のみである…

改めましてこんにちは。天竺葵です。もちろん本名ではありません。
文章力は全くありませんが、精いっぱい書くつもりです。多少厳しい物語かもしれませんがよろしくお願いします。
またこの度の東北関東大震災で犠牲になられた方々に深く哀悼の意を称しますとともに、被災された方々にお見舞い申し上げます。

“地球をかけた”計画…（前書き）

最初のは単なる挨拶ですね。今気づきました。すいません。
本当のプロローグはここからだと思います…

“地球をかけた”計画…

アメリカ　ニューヨーク　新国際連合（ＮＵＮ）本部オフィスタワーの会議室　２０１２年９月１８日

「…どうにもファンタジーじみた計画だな。」「しかし旧国連時代からの計画ですからね…」

会議室に集まった国連議会の議員代表たちの男女１５名ほどの表情は何とも言えない。投影スクリーンに情報端末から出されているのは、軍隊のＣＩＣ（空母やイージス駆逐艦にある周囲の情報や行動を表示するもの）戦況モニターのような表示。地球と月にいたる宙域の状況を映すこれまたモニターのような表示と資料のような表示。どうにも古い書物の１ページのようだがかろうじて読める字は現在の人間の言語ではなかった。

「まあこの聖書じみた計画を信じてみようじゃないか。危険であれば我々は手を引けばいいんだ。」おもむろに“国連代表”はその場の戸惑いを振り切るかのようにいった。この人物はかつての“国連事務総長”であり、現在においては国際、いや地球人類社会の代表者でもある。

もし（万が一に）宇宙人が地球にやってきたとしたら、彼が地球の代表者として接待しなければならない立場だ。

「司令。展開の手筈のほうはどうなっていますか？」彼はこの場で最年長とおぼしきアメリカ空軍の制服のような格好をした男に声をかける。
「君の指示があればもう動ける体制だよ。したければだがな。」その男は年下の代表に行った。

「フユツキ少将。人選は？」代表は一人の女性に声をかけた。女性、そう見えるだけだ。だがほかの女性と同じでも男性でもない。人間ではないからだ。

細く優美で、並の人間や獣ならプラスチック製のストローのように曲げられそうな体。
足は“体の一部”に隠れてほとんど見えない。
胸部には小豆色の突起物。体は現用艦艇のような灰褐色と日本の鉄道でいわゆるウグイス色。
彼女は会議が始まった時から何かを考えているかのようだった。
彼女はサーナイト。ポケモンの1種族である。

「…サクラ？」代表は改めて聞く。
「…あっ！大丈夫です。人選は決定しています。」エメリア自治協会治安維持軍特殊活動部隊司令官、サクラ・ワタリ・フユツキは答えた。

「そうだな、という事だ。計画はグリニッジ標準時本日１２００時から…」

サクラにとってその先の話は耳には入ってこなかった。この計画の行先のことをただただ案じるばかりであった。彼女の生まれ持っている（種族とは別に）直感が夕立の前の夏空のように暗くなり先が見通しづらくなっていた。

自分の選択は間違っているかもしれない…

その青年にポケモンと人類と地球の将来をゆだねることが…

彼が知るであろう世界の真実を。

現実を。

気づいた時には会議は終わっていた。自分があの後どういう参加をしていたかも覚えていなかった。

どうやら、議員代表は上院委員会の各国財政再建状況に関するＩＭＦの報告会へ、議長はＩＡＥＡの福島第一原発の第３回事後経過報告会議へと向かったらしい。

もちろん彼女の直感である。　正しかったが。

計画は動き出した。

国連統合空軍（Ｕｎｉｔｅｄ　Ｎａｔｉｏｎｓ　Ｉｎｔｅｒｇｒａｔｉｏｎ　Ａｉｒ　Ｆｏｒｃｅ　ＵＮＩＡＦ）の一部の部隊が最初の目標…ひこうポケモンたち…を狙った。

統合宇宙軍の監視衛星が音もなく配置に動き出した。

エメリア陸地群北大陸南部付近　その日の夕方１６００時

エメリア陸地群は南北アメリカ大陸の西、ニュージーランドやオーストラリアの北東に存在する４つの大陸からなる地域だ。とはいえ、全部合わせてもオーストラリアの４分の１程度しかないが。ただし南北にある程度広がっているため熱帯から亜寒帯まで様々な気候と土地が広がっている。

ここは１７世紀から欧米諸国の植民地競争が繰り広げられていたところだ。

しかし国際連合発足後は米ソ冷戦の緩衝地帯として国連が多くの地域を管理し、現在、北大陸の半分程度がアメリカ領、西大陸の一部が中国領、東大陸の一部が欧州連合（ＥＵ）領といった程度だ。各国の企業もそう自由には動けない。一部の地域を除けばこの陸地にはほとんど人間が住んでないといえる。

したがってここに住む非人間の知的生命体は人間のことも、その世界のこともよく知らない。どんな株価の暴落が起きても、放射能が拡散してもほぼ（人間の社会に敏感なものは別だが）お構いなしというわけである。

統合空軍のＡＷＡＣＳ（早期空中警戒機）Ｅ－７６７と統合空軍の依頼を受けた地球最大のＰＭＣ（民間軍事会社）、の２機のＥＦ－２０００は既に指定を受けた目標を捕えていた。その２機の射撃管

制装置は、１００?前方のターゲットを捕え、その指示を2発ずつ装着している対空ポケモン専用中距離ミサイルＡＰＡＭ－９Ｘに送ろうと待ち構えていた。
管制機の指示さえあればパイロットは目標を入力し、トリガーを引けば自立誘導のＡＩＭ－９同様この武器は勝手に指示通り飛んでゆくだけである。

それぞれのパイロットにも管制機のオペレーター達にも感情はあった。憐れみも感じた。狙っている相手が国軍でも武装組織でもＰＭＣでもないことも知っていた。専用の敵味方識別装置（ＩＦＦ）が既に表示していた。彼らの発するごくわずかな電波によって。

ポケモンであることが。その種族も判定していた。チルタリスが３匹。トゲキッスが1匹。背中に何匹かのせていることも。

彼らはこの計画の最初の犠牲者になるのだ。その原因はこうだ。

あるポケモンの村落にフランスの1つの原子力産業メーカーが放射性廃棄物処理施設を作ろうとした。それに反対した者たちの施設計画を妨害する重要な物品を運んでいた。

それだけだ。それに国連が出る幕でもないはずだった。
フランスに提案して手を出したのは彼らの出方を探るためだ。人間に対する“現在”の態度を。
人類によって滅ぼされつつある文明の考え方を。
この“地球の未来をかけた”「計画」のために。

本当にそれだけ。それが彼らの罪状であった。

一方的な。

やがてアラスカの統合軍司令部から攻撃許可の指示が来た。彼らはみな軍人だ。迷いはない。パイロットたちはためらうこともなく、目標を武器に認識させ反応を確認するとほぼ機械的に指示された位置でトリガーを引いた。

任務に従って。

ミサイルに一瞬の命が吹き込まれた。機体を離れると1秒未満で点火、マッハ3をはるかに超える速度で目標に向かう。

ミサイルは機械だ。センサーと誘導装置、あとは推進剤と装薬の塊だ。何の憐みも感じなければ、情をかけることもしない。考えるようにはできていない。この速度なら数十キロはあっという間だった。

4匹は驚きと恐怖を感じ始めるかどうかのところで…家族やふるさとに別れも告げられず、思いも寄せられぬまま…命中から0．1秒後には焦げた皮膚と羽と内臓と血、それに装薬とよじれた材質の粉じんと蒸気、火炎と衝撃波になって虚空に四散した。彼らの身に着けていたものも荷物も物質レベルにまで分解され飛び散った。

それぞれのHUD（ヘッドアップディスプレイ）には命中した旨が表示され、管制機も監視衛星も撃破を確認した。彼らは何の悔いも感じなかった。相手は人間ではない。

それだけで気持ちが楽であった。

ただ命中する寸前に何者かがこちらを見ている、そういう感じがした。

だが誰も気に留めなかった。編隊の左下にウミツバメの群れが見えた。今日は上空の風が強く流されているのだろう…

それから2週間後、同じ“太平洋と地球の最後のフロンティア”エメリアで1匹のベイリーフの青年が夢から目を覚ました…彼もまたポケモンの1種族である。

“地球をかけた”計画…（後書き）

いきなりこんな展開でごめんなさい…。
なんだかポケモンを知っている人に違和感を与えすぎた気がします。
内容も謎が多いと思いますが、話がずれないよう少しずつ明らかにしようと思います。自分も精いっぱい頑張ります。

軍事用語や戦法で大きく間違った描写があるかもしれませんが、そこは目をつぶって読んでいただくと幸いです。

あと今後登場するポケモンはフルネームがありますのでご了承ください。

さて、次回以降は少しずつポケダンよりのファンタジー路線にも入っていくと思います。

なお自分のスピードでは毎週1～2話が精いっぱいだと思います。
また夏休みや冬休み、その他都合で執筆を長期間見合わせることもありますのでご勘弁ください

目覚め…光の中から（前書き）

さていよいよ主人公（？）の登場です。
まだ性格がよく分かりませんが…
それは少しずつ語って行くことにします。

目覚め…光の中から

エメリア陸地南大陸某所の森の中　２０１２年１０月３日

リーヒュン・バイリング・グリーズは雨上がりの日差しに目をわずかにあけた。

夢らしいものを見た覚えはなかったが、こうなる直前にいくらか不思議なものを見た気もした。見たこともない風景が浮かび誰かの家族が（なぜか知っているように）浮かんだ。その前後に白い鳥のようなものがこちらへ飛んでくるような感触も覚えていた。

だが気づいた時には雨上がりかつ昼下がり、しかもまだ夏の気配を残す、しかも亜熱帯特有の雰囲気を持つ日差しのまぶしさによって目の前が白い光…まるで宇宙がその進化の果てにすべてを吸い込んだ重力の檻から出てきた光子（ポジトロン）でいっぱいになった最期の宇宙…に満たされ、暖かさとまぶしさに誘われて目が覚めたのである。

妹のフローラが近くにいるような気もした。が多分目覚めたばかりで寝ぼけていただけだろうと自身で解釈した。自分は昔から（とはいえ彼はまだ“人間年齢”にして１８歳である）こういう他人（ポケモン）しかも実際にいる者が持っているであろう意識の中を覗いてしまうような感覚にとらわれることがしばしばあった。

最初のうちは何の事だかよく分からなかった。しばらくしたらこれは自分の感覚がおかしいだけだと考えた（さすがに自分が変人だとは考えなかった）。だが１０歳くらいの時その時見えた意識が自分の母親の意識にそっくりな気がした。このことを話したら見事に的中していた。母からは「勘が鋭いのね。」としか言われなかった。

ところがしばらくして次にまた感じた“意識”は友人の一人、ブレイブ・エスコーツ・クレイバーの雰囲気にそっくりだった（彼はリーヒュンより2歳年上であったが、ポケモンにとってそれくらいの年差は関係なかった。ブレイブは当時イーブイであったが、今から5、6年前に遠くへ引っ越してしまい何に進化したか、そもそも今何をしているのかさえ知るすべもない彼らには人間のような高性能通信技術はおろか手紙さえまともに通じ合わないのだ）。それをブレイブに尋ねたら「そんなこと誰に聞いたんだ!?付きまとってたのかおまえ?!」と危うくケンカに発展しそうになった。

つまり正しかったのだ。見られたくない面まで。
本人も気づいてない面まで。

それ以降自分の見るものは実際にいる者の意識であると確信した。知っている者もそうでない者もいた。幸せなものも見えたしそうでないものも見えた。夢の中にまで出現し、恐怖で目をさましたこともあった。月に1回は。
そうしてそれをしばしば思い悩み、時々嫌悪した。

そんな状態が何秒続いたか。
けだるそうに彼は立ち上がった。木陰から滴った水滴が頭に、その上の葉に、体に、首周りの葉に多数掛かっており、少し体を震わせた。

身長（頭頂高）１ｍ５８?、体重４８．３３?。首周りの葉は種族の平均よりかは多い。そのうちにメガニウムに進化するのか?と思っているが、ベイリーフのままだ。

頭の上を轟音が通り抜けた。向こうのほうには巨大な灰色の鳥のようなものが通り過ぎた。
まあ、正しく言えばアメリカ空軍の戦術輸送機、ロービジ塗装のＡＣ－１３０（ハーキュリーズ）である。

だが彼は飛行機なんてものは知らないし、人間というものも見たことがない。この近くに人間がいることも来ることも聞いたことがなかった。人間世界どころか自分たちの世界が全体的にどんな場所かも教えてくれるものも知っている者もいなかった。

と言ってみたところで今日、特に行くところもないことにも気づいた。

ポケモンは（世界どこの地域でもたいてい）、人間年齢１５歳には大人とみなされる。その先は、家業を継ぐ者（たいていは農業か漁業だが）、一定の職業技術（といっても商人、職人と呼べる程度。人間のように、技術者、プログラマー、アドバイザー、オペレーター等と呼べる高度な産業は皆無だ）を身に着けるために奉公に出る者、軍人（地元を守る自警団のようなもの。それこそ“自衛隊”だ）となるものと別れていく。
この青年は家業のオレン（エメリア固有の果実の１つ。濃い青色。独特の甘さを持つが、ふつう人間や動物は食べない）農業を継ぐつもりでいたが、まだ早いうちに今日やることは終わっていた。

そういう時はたいてい町（ちょっとした集落のこと。人間から見れば村にもならない規模だが）の友人達のところに行くのが普通だが、折からのにわか雨でこんな状況下で街に行くのも、という感じの思いでこの木陰で雨が弱まるのを待っていたのだった。その間に多少昼寝っぽくなっていて、ふとしたら、雨は上がっていた…というのが正しいシチュエーションだろう。

彼は素直で普通な性格だ。対人…ポケモン…関係もまあ普通である。ただし、種族の特性上、のんびりと陽に当たるのも好きであった。

つまり、さて、どこへ行こうかと迷っていたところ。その時だった。

「…リーヒュン・バイリング・グリーズ君。ですね？…間違いない、よね？」

おもむろに聞かれた。

「…あっ　はい。」彼はちょっとびっくりしたように、ただし素直に答えた。

声の相手は、自分よりはるかに小柄で、体はデザートイエローか（鉄道でいえば）うすいカナリヤ色に近い。耳、腕、尻尾は赤くほっぺには“＋”のような模様。

彼女はプラスル。やはりポケモンの1種族である。

「そっか！やっぱりね！うん。ワタシはピトムニク・ソレイユ・マルセイエーズ。ピトムニクでもピトムとでも呼んで。ちょっと時間ある？大丈夫なら来てほしいところがあるんだけど。」

「えっ？いいですけど。一晩いないくらいなら家族は何も言わないし。でも…どこへ？」

「だいじょうぶ。変な所じゃないから。」

ピトムニクはおもむろに歩き出した。リーヒュンもあわててついて行った。

最初は普通の道（といっても無論舗装されていないし、ポケモンによって自然にできた“ちょっとよくできた獣道”ぐらいだが）だったが、次第に彼も来たことのない道になっていった。ピトムニクは時々振り向き、好奇心にあふれた表情で彼を見ていた。

もう2，3時間は歩いたか。道からも外れ、倒木がそのままになっている所を平然と渡り、魚が泳ぐ小川をザブザブと通り、人間はおろかポケモンも住んでいないところ…おそらくは昆虫や鳥、小動物ばかりの“自然”なのだろう…を進んでいた。

ピトムニクはずいぶん楽しそうだった。単にリーヒュンを連れているからだけかもしれないが。ただそもそもこういうアトラクション的難所をあえて潜り抜けて楽しむ活発なタイプの子であることぐらいはすぐに彼にも把握できた。

流石のリーヒュンも不安に駆られてきた。

「だいぶ遠いところですね。」

「うーんそうかな?そうでもないけど。ね?」

「いやぁ・・・だいぶ来てるみたいですけど…道は大丈夫なんですか?」

「もっちろん!１００%暗記済み♪。」

「そう、ですか…。」

さすがに帰り道がまるっきしわからないようでは人間より感覚の鋭いポケモンでも迷ってしまう。

「あの、どれくらいまで来たんですか？せめて帰り道ぐらいは教えていただかな…」

「もうちょっとじゃない？それより、丁寧語じゃなくていいよ。ふつうにタメ語のほうにして。ね？よそよそしくないでしょ？。」

「う、うん。で、俺が帰れるようにはしてくれるの？」

「もちろん。あ、もうすぐよ。」

そういって彼女は歩き続けた。

そうしている間にリーヒュンはピトムニクに対する不安がなぜか消えていくのが分かった。彼女は自分を陥れているわけではない。自分を利用しようとしているわけでもない。（噂話を聞いたことがある）人間に強制されているわけでもなさそうだ。人間のような（彼がうわさや聞いた話から勝手に想像しただけだが）小賢しさや欲望も感じられなかった。

むしろ好感的だった。この子（年は聞かなかったが、まぁ“この人”と呼ぶのには抵抗を感じたからだ）になら任せても問題ない。そう感じた

またしても。いつものことながらあの直感がそう言っていた。

「あっ着いたよ。ここ、ここ。」ピトムニクが言った
「ここが…？」

2匹の前にはひらけた敷地が広がっていた。
そこはリーヒュンが初めて見る光景だった。この世のものとは思えなかった。

複数の灰色の構造物。その中で特に上へ突き出した頂上に丸い構造物を乗せたもの。黒い濃紺の広いうえに果てしなく続く、しかも唐突に始まり唐突に終わっている広い道。その周囲に“おいて”あるあの巨大な鳥のようなものが多数。お皿のような巨大な物体。

ここは国連統合空軍・宇宙軍司令部直属航空、空挺部隊とアメリカ空軍・宇宙軍エメリア方面軍司令直属部隊、および国連統合軍特殊戦術戦略実験隊の施設であった。人間が築いた構造物と技術の一端である。

その技術の結晶、文明の一端が放つ“力”は並のポケモンの想像や感覚を超えるものだった

目覚め…光の中から（後書き）

ポケモンの文明が少し垣間見えますね。これじゃまるで中世ヨーロッパだろッ！！ていう指摘もあるかもしれませんが。

次回には主人公のパートナーとなる女の子が登場します。ポケモンだけど。

えっ？妹は？

後々語ります。予定。

宣告、そして使命（前書き）

さて、いよいよ相棒の女の子が登場です！！
かわいいか、と言われたら・・・
微妙です。はい。

宣告、そして使命

２匹は基地の入り口らしき場所までやって来ていた。入り口には警備兵の検問所らしい建物と厳重そうな光沢を放つ扉があった。その前の道路には警備兵と思わしき生物がたっていた。その２人の生物はここに入るものを識別し監視する者たちだった。
彼らはアメリカ陸軍の中東派遣部隊同様の格好をし、ヘルメットをかぶり、自動小銃Ｍ１２Ａ２で武装していた。

リーヒュンは初めて“人間”なるものを実際に見た。
自分より背丈は少し大きい程度。皆２足歩行で両腕を自由に使える。それはさまざまな形態をもつポケモンと比べたら文明の成長に大きくプラスに働くものであった。もっとも彼はそんなところまで考えが及ばなかったが。
しかしその人間の目線をみると彼に一つの不信感のようなものが出てきた。

この生物たちは思いやりに乏しい。自分より立場が上の者には命令に従うのみ。下の者にはその逆を行い、異質と判断したものは、人間でなければ尋ねることもせず容赦なく排除する。そんな（ポケモンから見れば）陰湿な生物の特性がも見えるようであった。実際に我々が人類自身の意思の特徴をどう考えているかは別として、彼には、この生き物がポケモンのような寛容性や優しさをあまり持っていないことがわかる気がした。

一方のピトムニクはその警備兵たちに向かっていた。そして彼女が要件を話し出す前に、彼らは向こう側からやってくるなり、一方的に声をかけた。
「証明書は？」

「あの、ピトムニク・マルセイエーズですが。…ってさぁ！もう2年いるんだから聞かなくたってさぁ、わかるでしょうに…」
「こっちは職務なんだ。勝手に通して始末書書くのはごめんだからな。で、証明書は見せられんのか？さっさと出さないならＭＰ（軍内警察）に引き渡したっていいんだぜ。」
「…たくもうぅ！出せるに決まってるわよ。」
「へへ・・ちっちゃなピトムは手が届かない。か？」
「もう！ほーら渡したよ。」
彼女はそんな冗談ともからかいともつかぬ会話を笑いながらなにかカードらしきものをその人間に手渡した。
兵士はそれに何か銀色の板切れのようなものをあてる。ＩＣタグと読み取り機である。もっとも人間と暮らしていたポケモン連中でもほとんど仕組みを知る者はいないが。続いて、べつの板切れ見たいもので彼女の眼を除き始めた。網膜チェックである。やがて詰所の中の箱のような機械をじっと見て警備兵は「ＯＫだ。」と言った。

一連の始終を見ていたリーヒュンはこう感じた。やり方は奇妙でも彼女が何者であるか調べているのはわかった。ただ、それにしては用心深い。人間の性格のせいだろうと。

「ああ、それで後ろにいるのは例の？。」
「うん。」
「それにしても、ポケモンってみんな顔そっくりすぎだよな。こいつがイケメンなのかそうじゃねえのか見分けつかないし。だいたい同じ種族がいっぱいいたら区別も何もないぞ。」
「失礼ね。私たちは見分けつくの！」
「ならいいや。俺たちはＩＣと網膜で調べられるんだからな。ちょっと準備するから待ってろ。」

「…あの?自分がなにか?」
「お前の件でだ。待っててくれ。」
そういうと警備兵は何か白いものを顔の横に当て何かをしゃべった。電話である。リーヒュンはそんなものはもちろん知らなかった。その光景を普通の時に見たら滑稽に見えるかもしれない。だが現在の“さっぱりわからない”状況と先ほど“感じた”人間に対する不信感の中ではそんなところまで感じる心の容量を彼に与えてはくれなかった。

2分すると、べつの人間の男と女がきた。二人とも軍服でない格好である。
「きみが、リーヒュン・バイリング・グリーズ君か。」
「はい。そうですけど。要件ならここで聞きますが。」
ピトムニクはその彼の言い方に吹き出しそうになった。
「話というのは別のところでいう。そんなポケモンが普段するような世間話みたいなことじゃないんだ。ついてきてくれ。」
「はっ…はぁ。」
リーヒュンは怪訝そうに2人の後を追う
「あれ?君は来ないの。?」
「うん。ワタシはここまで。またおんなじところで仕事できるといいね。」
「うん。わかった。でも仕事って…?。」
「あとはちゃんと話を聞けばいいの。キミって意外と単純そうだし。問題なさそうね。」ピトムニクはそう言いながら、彼とは反対方向へと向かった。

仕事?一緒に?彼には全くわからなかった。あまり物事に動揺することのない彼でも不安は高まるばっかりだった。もともと彼は友人たちの間でも向こう見ずで“単純”と言われるくらいまっすぐな性

格だった。その分性格に裏表が少ないので、体力も頭も優秀でなくても、自然に信頼されてゆくところもあった。そもそも昔あるあの直感力のせいで、（人間でなくポケモンが）突如として動揺“すべき”シチュエーションを回避できたことも多かった。つまりあの直感や思春期特有の将来に対する不安は別として、予想できない事態に対する不安はあまり感じたことがなかった。

2人に誘導されるがままにリーヒュンはある建物（一番大きい）入り、見たこともない箱状の部屋（エレベーター）に入り（しばらくして部屋が出ると、前とは違う場所にきたようであった）、ある部屋に入った。入る前に女性のほうがドアの前で器具の前で何かをしゃべり（直後どこからか声がしたが、それは部屋の中の者だろうと彼は思った）、その下の別の器具に何かを打ち込んだ。何をしているのかはわからないが、なぜそれをする必要があるかは何となく理解できた。

通された場所は会議室のようなところだった。円状のテーブルと周りに並ぶ椅子、テーブルの上にはやはり箱状の器具（情報端末、コンピューターのこと）があった。四隅には植物の植え込み。後方の窓からは夕暮れ近い人工物たちが石碑のように黒く染まっていた。

そこには見知らぬ男が一人。女が「到着しました。」と告げるとその男は「司令を頼む。」と言った。その後先ほどの二人は出て行ってしまった。

「キミがリーヒュン・バイリング・グリーズ。か…ああそうだったな。わたしはこの基地の司令の……だ。」その男が言った。

「あの…よく分からないけどなんですかこの状況は?。」

「それはわたしも知らないことだ。あんなファンタジーじみ者なんか信じられないからね。」

「そんなこと言われても僕は…。」

「キミのことを知る人物が…おいおいルビやめるんだ。この子は遊

びに来たわけじゃない。」
彼は先ほど連れている犬をなだめた。そうやらリーヒュンを遊び相手だと思っているらしい。
「…いやいや失礼。キミを知る人物はもうすぐ来る。ここで待っているんだ。」
と言うや否や、彼も出て行ってしまった。

黄昏に染まる部屋にリーヒュンただ一人取り残された。部屋は沈黙に静まっていた。
彼の頭の中の不安と疑問は最高潮に達し、気が付けば部屋の中をフラフラと歩きまわっていた。さまざまな疑念や質問したいことが、クラスター爆弾のようにはじけ消えて行った。
…俺がいったいなんなんだ?何をしてほしいのか?
そしてそのうちに、自分が何かとんでもないことに巻き込まれてしまったのではないか?それもかなり危険な、という一種の恐怖に満ちた感情に陥った。それが単なる取り越し苦労なのか、それともあの直感がそう言っているのかということさえ、彼にはもう分らなかった。

「あなたがリーヒュン、ですね。」何者かに背後から声をかけられ、彼は驚きのあまり首の葉が全部逆立ち、４本の足が全部宙に浮いたようになった。心臓が暴発しそうになるくらい鼓動が跳ね上がった。
後ろにいたのはサーナイト。ポケモンの一種である。

「あなたを呼んだのは私です。あなたは知らないでしょうけど。」

彼女は言った。

「あっあなたが?それよりこれは…これはどういう・・・その?。」

彼は聞きたいことがありすぎて非常口に殺到する避難民よろしく、言葉がうまくかみ合わなかった。

「私はあなたが生まれる前から知っていますから。あなたを。そして妹のフローラを。」

「・・・え?」何の事だかさっぱり理解できなかった。

彼女はおもむろに、しかもあっさりとその先を進めた。

「私はこの施設の関係者、つまり軍の関係者ですが、この1万年間のポケモンの文明の歴史を研究する立場にもあるのです。その中に今から3000年前に書かれた予見書にこう書かれています。」

「…」彼は全く反応できなかった。

「“一つの時代が終わるとき、我々の歴史の前に一つの試練が立ちはだかる。その時のある兄妹、その兄が聖なる力をもう一人の者とふるい、妹を救い、その試練をその命をもってして防ぎ我々の歴史を守らん”と。長らくそれは単なる伝説にすぎない、とされていました。」

「それが…一体…?。」

「それは現実になっているのよ。」サクラはきっぱり言った。リーヒュンの頭は混乱する一方だった。早く結論を言ってほしかった。

自分と何の関係があるのか。

「我々の文明が誕生してから数千年間、私たちは常に人間より優位な立場として尊敬され、時におそれられてきました。しかしこの数世紀の間、人間は急激に文明を発展させ、私たちの考えを超える多

くのものを作り、自然をいかにうまく利用するか試行錯誤を積み重ね、社会システムをより複雑にし、今やこの世界の外にまで資源を求めるようになったのです。その結果環境破壊や戦争が起こっているのは勝手ですけど。外の世界は…宇宙っていうんだけど…あなたは知らないわよね。ポケモンの大半はそんなこと知らないわ。それはこの話題とは関係ないからこれ以上話さないけど。」

「…それで、僕たちと何が関係あるんです？」

「肥大化しすぎた人間の文明が私たちの文明を圧迫し始めたのです。戦争、開発、経済競争。それは私たちの思想や間隔を徐々に狂わせ、私たちの社会は大きく乱れ、争いが広がっています。いまや私たちの文明はこの世界全体で急激に衰退へと向かっています。しかし、こう私たちの文明が乱れていると人間たちのほうも都合がよくない。人間たちのある集団が、私たちの社会を鎮静化させるために立ち上がったのよ。でも、その方法はなかなか見当たらなかった。自分たちのように武力だけでは難しいと考えたのです。それで私たちのようにほんのわずかですが、世界に見当識をもつポケモンに知識を求めてきたのです。その結果たどり着いたのがその伝説なの。」

「それで…？」彼は人間のやり方に更なる不快感を感じつつ、もっと大事な先を聞こうと焦った。

「その伝説にある“兄妹”というのは…。」サクラが言った。言いかけた。

そしてその言葉が、リーヒュンの知りたかった結論が言われる時が来た。

彼に対する“宣告”が…

「あなたとフローラです。」サクラがあっさりといった。
リーヒュンの心臓は吹き飛びそうになったが、そうなるどころか液体窒素に放り込まれたように冷え、固まり、静かになった。頭と首の葉までが凍りついたように動かなくなった。
あまりことが大きすぎて彼の理解の容量（キャパシティー）を超えていたのだ。
何と答えていいかわからなかった。
サクラのほうもめまいを感じたようにテーブルに手をついた。
あまりにも唐突すぎるうえ、普通のポケモンが理解できるはずもない。ましてこんなまだあどけない、純粋な青年に対して。

こんな“任務”を宣告するなんて。
世界を救うなんて。

凍りついたような沈黙を破り、窓の向こうを離陸したＣＨ－４７のダンデムローターの轟音が通り過ぎた。

「…僕は…どうしたら。」
「…何をするって…？」サクラは詰まった。
「その者には、強大な力が眠っている。その力があればどんなポケモンも人間も敵うものはない。その力をもってして文明を救う、ってところかしら・・・？。」

自分が…世界を？
彼にはもうなにがなんだかわからなかった。

「その力とは…？」
「…物事の未来を判断し、他者の意識や周囲の状況を瞬時に読み取

る。そしてその力を自分の能力として活用できる。経験、ありますか？」

リーヒュンは思い返した。これまで自分の感じたことを。
あれは偶然ではなかったのだ。全て。
というよりこの質問が発せられることはその前から薄々感じていた。

サクラは神妙な面持ちで彼を見つめた。「…そのようね。あなたのような能力は訓練すれば一気に伸びるわ。明日からはそれを始めます。」

「ま、待ってください。本当に僕はそうなるんですか？世界を救うんですか？それに家族にも友達にもそんなことは…。」

「家族やあなたの友人にはお知らせしておきます。しばらく預かる、と。」彼女はあっさり言った。

リーヒュンはもう２つ重要なことを思い出した。

「妹に…フローラになにか…？」

「私たちもそれを調べているのよ。あなたの妹に何があったか。力になれなくてごめんなさい。ただもしかしたら…何か恐るべき事態に巻き込まれたのかもしれない。」サクラは答えた。

彼はうなだれた。リーヒュンとフローラは異父兄妹だ。フローラは彼が１２歳の時…フローラがまだチコリータの時…突如として行方不明となってしまった。ポケモンの文明では、行方不明になるという事は、事件巻き込まれたかさらわれたという事を意味している。

人間に。

家族も諦めるしかなかった。この文明には人間のように大規模な捜索を行う能力も組織力もなかったから。フローラが行方不明になったという悲しみが癒えるまでかなりの時間がかかった。母はそれ以降体調を崩し、体は急に弱くなってしまった。
そのフローラはあの時やはり何かに巻き込まれたのか？しかし彼の心にはそこまで追求するゆとりはなかった。

「あと…命と引き換えというのは…？」
「その話は今日でなくてもいいでしょう？あなたもこれ以上話を聞かされても混乱するだけだわ。」サクラは彼を気遣ったのか、話すことに疲れたのか（実際辛そうだった）そこで話を打ち切った。

「最後にもう一つ。一緒にいる者とは・・・？」
「…そうね。今後あなたが能力を発揮するうえ重要な役割を果たします。あなたの能力は、信頼するパートナーがいないと引き出せないの。で、あと今後のことに関していろいろ助けてくれる。ただし必要以上に、プライベートな関係までに親密になることは許されない。そういう立場ね。難しい立場ですけど、今は気にしなくていいのよ。この施設を案内させることが最初かな？。」
サクラはドアの外に向かって呼んだ。「入っていいわよ。」

その者は入ってきた。

その女はリーヒュンと同じポケモンであった。大きさも姿も彼より

似ていてほんの少し大きい。首周りに大きなはなびら。彼女はメガニウム。ベイリーフの進化した姿である。
年齢も同じくらいか。彼はそう感じた。

だが…このメガニウムは…？

頭の雄しべのようなアンテナはオスのように長い。しかも４本。花びらは５枚でなく１０枚もあった。
そしてその瞳は…
メガニウム特有の膿のようなカナリヤ色ではない。
夏空のように澄んだ水色であった。
目線があった時、彼女が彼の心にそっと触れた、そんな気がした。
彼女はこちらを見るなり子供のような笑顔を浮かべた。
久しぶりに友人に会ったような。

「彼女はユイリィ・ランタン・プレミドール。私と同じ軍関係者でほぼ私と同じ立場です。今２０歳だからあなたより少し年上ね。ユイリィ、彼、案内してくれる？今日一晩いるところへ。」

「はい。わかりました！！」ユイリィは年のわりに高い、それでいて澄んだ声をだした。
「これからよろしくね！じゃ、あたしについてきて。」
まだまだ聞きたいことでいっぱいだったが、リーヒュンはとりあえずユイリィについて行った。

その後ろではサクラが2匹の後姿を見守っていた…

宣告、そして使命（後書き）

我ながら、変わったメガ二ウムを書いてしまいました。
これ、色違いではないんですよね。

さて、この先はしばらくファンタジー中心になると思います。
リアル志向の人たちには申し訳ありませんが、しばらく辛抱願います…
もちろん、その類の話、少しはでてきますが。

配属（前書き）

このあたりから徐々に登場ポケモンが増えていきます。
名前と種族と特徴を合致させるのが我ながら大変…

わかりにくくてすいません。

配属

１８００時　施設の一角

２匹はしばらくの間無言で基地の一角へと向かっていた。とはいっても気まずい沈黙、というわけではなかった。

敷地を歩いていると、人間たちの目線を感じた。人間の技術力からして噂くらいは知っているのだろう。その目線をちらちら感じるたび、ユイリィはやれやれ、という苦笑、（みたいなもの）を浮かべていた。しかし、リーヒュンにそれを正しく理解する心の余裕はなかった。彼の頭の中は、先ほどまでのやり取り、このシチュエーション、この先のこと等に対する疑問と不安が朝のターミナルを流れゆく人間の大河のように目の前に現れ、消えて行った。

俺はこの後どうなる？いや世界をかえる？…そもそも“地球”ってなんだよ？

いっぱしのベイリーフである彼に自分を納得させる答は全く浮かばなかった。

その一方メガニウムである前を歩く彼女は聞けば、自分の疑問になんでもこたえてくれる、そんな頼もしいような不気味なような感覚も覚えた。

ある程度敷地のはずれ…滑走路やその他の建物が一通り見えるちょっとした高台…にまでやってきた。緯度の低いこのあたりでも、すでに傾いた夕日がこの一帯を照らしている状況であった。ポケモンにとって、日没は一日の終わりに直結していた。（間違っても人間のように残業をしたり、日付が変わるまで電車が走っていたり、２４時間証券取引が行われたり、道路の明かりが一晩中照らしてい

たりと言うことはない。　まあ、軌道上や月面の施設に滞在する人々は別だ。地球標準時刻が“夜”となれば、明るさを問わず彼らは特定の時間睡眠をとる。その間地球の管制官はそこの時間を問わず起きていなければならないのだが。）

基地とは思えないほどの小道を歩いていると、ユイリィが先ほどの女の子っぽい高い声で話してきた。とても彼より年上とは思えなかった。

「ねぇリーヒュン♪。」何の遠慮も気恥ずかしさも感じない純情でさわやかな声だった。

…って何の遠慮なしにファーストネーム呼びかよ!?リーヒュンは結構驚いた。

「えっ?何いきなり?」

「ん?どう思うあたしのこと?」

「どうってさ・・・君と初めて会ったばっかだよ俺。」

「そっか…そっ…か……そうだよね。やっぱりね。問題はないよ、うん。」

彼女の言うことが唐突すぎて何と言っていいかわからない。

「な、何の話だっけ。もっとゆっくり。」

「いいのいいのいいの。それで。はぁ～。でもすごい感じるよ。感じる。だってさっきからリーヒュンはあたしのほうに探りいれてきてるもん。」

「だからさ、何の話?。」

「キミの能力よ。能力。司令が言ってたでしょ?あれ。リーヒュンはその能力が世界一、いや地球のどの生き物より高いんだよ。あたし、それに１００ドル、１００ユーロ・・・いや何ポケでもかける。うん。」

（“ポケ”は彼らの文明の多くの地域で使用されている通貨の単位

のことだ。とはいってもポケモンたちの中では物々交換やボランティア的な取引のほうがまだ多いが。少なくとも人間の“投資家”のように
金そのものを追い求めて身を滅ぼすような者はいなかった。参考までに述べると“日本”という国の“東京証券取引所”という市場の為替相場では1ポケはだいたい2円75銭~3円15銭くらいで取引される。）

「うっ、うーん?俺今理解できないんだよ。少しは聞いたけど。」
リーヒュンはユイリィのペースにもはや圧倒され、あいまいにしか答えられなかった。しかし彼女は彼の言ったことを勝手に解釈し、まるで何か月も話し相手がいなかったようにしゃべりたてている。ただ不思議なことにその解釈は驚くほど図星であったにも関わらず、彼のいつしかそれに対する不安も薄れていた。自分がこれまで感じてきた“能力”と似ているように思ったからだ。
思い切って聞いてみた。

「じゃあさ、キミにはどう見える?俺の見た感じは?」
ユイリィは笑いそうになった。「えっ!真面目にいっていいの?ありがと~。いうよ!いうよ!うん!!ズバリね…」
「なっ、なに?」
「向こう見ずでたんじゅん!!これしかないよ!!純粋な性格っともいうかなぁ?、いうけど。でも、でもズバリこれだよ。これしかない!いいなぁあたしもここまで…素直…に…なれたら…もぅ…あはは…笑える!!!…ごめんごめん……で、でも…（笑）」彼女の声は自身の爆笑に制圧され続いていなかった。
「おいおい!俺そんなにヘンか!?笑うなって!!…はぁ、だいたい初見（パッと見）で笑われるほどに俺変わり者じゃないはずだけど…。」彼は思わずそう言い返した。笑われるのは不快だったが、

怒るほどには感じなかった。

それが彼女の性格そう感じた。なぜか許す気になれた。彼女はどういう関係下でも話をぐいぐいと引っ張り相手を包み込んでゆく、そういう素質があるようだった。実際彼もそれまで渦巻いていた不安のようなものが薄らいだように感じたから。

「ご、ごめんごめん…はは…でもそれ悪いことじゃないよ。リーヒュンはそれだからこそ…なんだかこう…優しそうだもん。あっ、ついたついた。ここよ。」

ユイリィがしゃべっていていつの間にか目的のところについた。

ここは…

木造の2階建ての中くらいの建物である。自分たちの文明にもある建物を模しているようだった。ちょっと違うのは、周りを金属製の柵（フェンス）でおおわれていること。入り口のところに人間が立っていること。敷地内の四隅に細長い銀色の箱みたいなものがあること（それを見た途端、リーヒュンは誰かに監視されているような気がした。それは監視カメラ（セキュリティー）である。）

ユイリィが何かを放ってよこした。振り返りもせず。自分のツルで。彼も渡されることを一瞬前から感じていたから、自分のツルで受け取った。

「それ、ＩＣタグっていうの。これがないとここの軍の関係者ってことにならないからね。リーヒュンのことだから失くさないとは思うけど。」ユイリィはまたも彼の性格を見抜きつつ、そこにいる歩哨に声をかける。

「・・・・・・・・！（おそらくはこの人間の名だろう）連れてきたよ！。」

「いつもながらアンタは相変わらず無駄話好きだな。その上ため口。まぁいいけどよ。先週みたいにキレたりするなよな。アンタの能力、あぶねぇんだろ？こんな基地で事故って殉職だなんてやだぜ。」

「あたし、そんなだったっけ？おおげさよ。」

彼女は全く気にせず話している。だが兵士の言葉からして、明らかにここの人間はポケモンを見下しているのは明らかだった。いやもしかしたら世界どこの人間も内心はそう感じているのかもしれない。

「…で、後ろにいるのは彼か。あっ、お前お前。噂のこの女を超える奴か。何でもいいけど、よろしくな、てとこか。あとその能力、暴走させるなよ。ここは極秘だからな。　なんかやってプレスやジャーナリスト連中に嗅ぎつけられたらそれこそ一大事だ。」

「そっ、そうはしないよう…がんばります。」そう答えつつも彼はこの歩哨にちょっとした憤りをおぼえた。

　そんな顔が…といってもベイリーフの表情だが…出てしまったのだろう。歩哨は苦笑いしながら言った。

「悪かったよ。そんな顔すんなって。それより、またここで暮らす連中が増えたな。何か月か前まではここの稼働率１０％以下だったんだ。それが軍の上層部が何かに使うとか言ってお前たちの仲間が増えてきたってわけさ。何の計画かは通達されてねぇけど。言いたくないんだろ。俺たち下っ端一兵卒には…」

「あれれ？個々の歩哨さんたちってさぁ、みんな下士官以上なんじゃないの？それとも・・・・・・・はま～たケンカでもして降格しちゃった？」ユイリィは茶化した。

「んな訳ないだろ！俺、曹長だよ！ああ、あと…」兵士がツッコミをいれる。

「もし中で中隊長にあったらこれ、わたせ。歩哨のこの前の貸し、とでもいうんだ。あいさつ位するだろ？。」

「わかりましたけど…。」リーヒュンは言われるがままに硬貨を2，

3枚受け取った。
「やっぱ断れない性格だね。うん、いくよ。」ユイリィにせかされ、2匹は建物の中に入った。

この建物は・・・？

そこは1階の左半分そのまま、といった空間だった。人間だったら細かくフロアを仕切り、ドアと鍵、あとはセキュリティー機器をつけておくだろう。
だがこの部屋は、もともとは大きな1部屋であった。それ木材の仕切り板で適当に仕切り、各々の個室に仕立てているらしかった。ポケモンは建物も部屋も臨機応変にその用途を変えられるように作るのがふつうである。
その風景は19世紀のロシアのアパートの1フロアを細かく仕切って貧乏庶民に貸していたユダヤ系やドイツ系の家主がやったかのようだった
「リーヒュンのところはそこかな。まあ、そんなに広くないし、いかにも人工っぽいけど勘弁してね。」
ユイリィはおもむろにいうと彼に場所を示した。
彼は周りの目線を妙に気にしていた。でも彼らは以外にも人間のように不審感は感じていないようだった。それどころか、「よお！待ってたぜ英雄さん！」とか「わたし、君のためだったら盾にもなるよ！」とか、からかいかもしれないが、妙に期待されているように感じた。
「ねぇねぇ中隊長さん！来ましたよ。彼。結構フツーの青年だから問題なしですよ！。」ユイリィが呼ぶと一匹中隊長らしきポケモンが出てきた。

顔と両手足、（四足歩行だが）青。体の大半は黄色のふわふわした綿状の毛でおおわれている。尻尾は遮断機のような工事現場のポー

ルのような黄色と黒。その先っぽには電球のような部分。
彼はメリープであった。しかし通常の平均的な個体の倍以上の大きさはあった。
「アンタが噂のリーヒュン・バイリング・グリーズ、か。普通のベイリーフと変わらんな。いや、悪くなさそうだな、能力は。」中隊長は彼を見るなりけだるそうな声を出した。
「どうしたんだよ。なんか驚いた顔して。俺はバストーク・ラルシア・ホルスト。進化はしてないが立派なエメリア自治協会防衛軍エメリア派遣部隊第一普通歩兵師団第二大隊３０３中隊の中隊長だ。アメリカ軍や国連軍ではなんていう名称かは聞いてないけどな。まあ長い付き合い、ともなるかはしらんが、よろしく頼むぜ。指揮官付の部隊さん。」

ここまで聞いたところでリーヒュンは一番聞きたかったことを聞いてしまった。
「中隊長、年齢は？」
「なんだよ？３５歳だ。ここで最年長だな。湾岸戦争、おっとあんたは知ってなさそうだ…。とにかくだ、結構長く軍人をしている。進化してないのは茶化すのは今日だけだぞ。」バストークは自嘲気味にいった。
「そういうわけじゃ…。あっ、あと。これ、そこの人がつけだとかなんとかいって…。」彼は先ほどの金を中隊長に渡した。
「おっ…そうか！ありがとうよ。気が利くな意外と。これなら…お嬢さん、アンタのバカにつきあわせても文句言いそうには…。」バストークは自分の金を自分の区画に放り込んだ（ほかの部屋に飛び込んだかもしれないが。ポケモンは意外とおおざっぱなのだ）
「もう！、隊長ったら本人の前でいうんですか。あたし、そうする気なんですよ！！」ユイリィが笑いながら言った。
「そんなことに使われるのか？絶対君に頼まれてもバカなことはしないって！」

リーヒュンはちょっと反論しながらも思わず笑ってしまった。

彼が“軍”という言葉に連想したイメージとは程遠いポケモンたちだったが、だからこそ、自分に何があっても無条件で受け入れてくれる。

そういう予感があったのだ。

「そうだ。ピトムはうちの小隊の隊長だからな。最初あっただろ？」

思い出した。この施設まで連れってくれたプラスルである。

「えっ？彼女も？」

「そうだ。そのうちくるだろ。まあこの部隊は変わり者が多いからな。たしかにアンタもパッと見彼女がそうだとは思わなかっただろ？ん、どうしたその表情？」バストークが久々に恋愛話を聞いたようにに面白そうに言った。

「ええ？リーヒュンまさかピトムにほれてた？もぅーー！あたしじゃなかったの！？」ユイリィがおもいきっり彼に頭…まあ葉っぱがあるが…にツルでツッコミを入れてきた。

「ンな訳ない！ピトムニクはそうじゃないけど、君はもっと困るよ。」

…ひとしきり周囲から笑われた。

２３００時　サクラ指令の執務室

「・・・そう。では経過は悪くないと。」

「そうだな。帰宅した人たちにもこの１年放射線によるとおもわえる健康被害は今のところ確認されていないようだ。これで、少しは世界の“原発恐怖症”が収まってくれるといいが。」

サクラは流ちょうな英語で先々週からオーストリア、ウィーンで行われていたＩＡＥＡの福島原発事後経過報告会議に参加していた国連代表から閉幕時に出された最終報告の結果を端末越しに聞いていた。

代表は“計画”について尋ねてきた「で、その青年は見つかったかい。ベイリーフだとか言ってたが。どうだいリアクションは？」

「ええ、まぁ驚いてましたけど。」彼女はあいまいに答えた。

「すでに各地で動いてるそうじゃないか。君たちの自治協会の軍と各国やわれわれの軍が。」

「ええ。でも心配なのは、あの子、そういうのに敏感そうで…。」

サクラはリーヒュンの言った“悩み”を、言われる以上に“見透かして”いた。それができるからこそ彼女なのだが。

「うん。彼がどう感じようが関係ないな。」代表は少し鼻で笑った。

「今のところ各国のマスコミも反戦団体も気づいてはないらしい。市場にも反応は見られない。我々の社会が気づかなければ、君たちの社会だって安定するしな。」

たしかにその通りだ。ポケモンたちの治安がこれ以上乱れることが人間社会に分かれば、経済活動のリスクを警戒した各国株式市場はまだ２００８年のリーマンショックからの回復途上なのにまた先行きが不安定化して急落しかねない。

地球温暖化、中東情勢、欧州各国の財政、日本の原発問題、資源高騰、ポケモン文明の混乱。現代の人間が重要視する地球環境と経済

に対しこれ以上リスクを増やすわけにはいかない。

サクラはため息をついた。彼、国連代表は確かに人間たちにとっては“良い人”だ。２００９年の新国際連合創設以降、かつての国連のように存在が形骸化しようとした時に2代目の代表となり、3年かけてこの組織を「地球の意思調整機関」として見事建て直し、国連の名にふさわしい権威と信頼を組織に取り戻した。国際ＮＧＯ組織関係者からのたたき上げで最年少、しかも穏健で実直、寛容な性格は、多くの人々から尊敬のまなざしで見られてしかるべき人物である。

しかしその一方で人類と地球を救いたいその純粋不器用なほどの“人類愛”のせいか、ポケモンたちのことを少々手荒く扱うことも多かった。

「その青年と君の弟子…まぁそうだな。あの娘…ユイリィとかいったな、2匹が、いや2人と仲間たち、そして君たちの自治協会の軍隊がうまくやることを願おうじゃないか。我々は自分たちがやるべきことをするのみだ。」代表は言った。

「だといいのですが・・・」サクラは今は寝ているそのベイリーフの青年の様子を“読み取る”用に案じながら言った。

２０１２年１０月４日０１００時　エメリア南大陸南端沖２００キロ上空

日付が変わってまだ1時間。亜熱帯特有の生ぬるい風。満点の星空なのに漆黒の夜のように感じられる。高度１万１０００フィート、約３０５０メートル上空をアメリカ海軍第１０艦隊、通称エメリア

艦隊の旗艦ニミッツ級空母「バラク・オバマ」艦載の海軍第２０６飛行中隊所属のＦ－３５Ｃライトニング?3機とＦ－１４Ｄトムキャット1機が飛行していた。

Ｆ－１４トムキャットは１９７０年代に登場した大型の制空機だ。電子制御を駆使した可変機構、長距離ミサイルを6機同時に扱える能力はその姿と相まって、東西陣営をとわず軍人、航空ファンをうならせ、映画やゲームを通して一般大衆の人気まで集めた。

だが、それも米ソ冷戦期だからこそできたことだ。冷戦崩壊後の軍事整理のなかでこの翼はその高コストばかりが取り上げられ、老朽化も進んでいた。２1世紀5年間には退役するに違いない。そう思われていた。

しかし翼は現在につながった。２０１３年に入った今でもこの翼は、ごく少数ではあるがアメリカ軍や統合空軍では、ベテラン指揮官機専用として各個人専用にカスタマイズされ世界を飛び続けている。ということを考えると、この編隊のリーダーは１９９０年代頃からの艦載機乗り、しかも指揮官級であることがわかる。

この機体のＩＦＦ（敵味方識別装置）は実際海上にいる“目標”を識別していた。統合軍側から依頼された任務ではあったが、それを撃滅すればよかった。その理由までは通達されなかった。

赤外線識別によれば一つはホエルオー。残り2つはラプラス。多くのポケモンたちが乗っているらしい。

だがこの4機が実際に“殲滅”するのではない。彼らはこの艦隊が演習をしているふりをするだけだ。

実際に攻撃を仕掛けるものは海上にいた。

第１１艦隊の駆逐艦の中で指揮官的役割を果たすアーレイバーグ級イージス駆逐艦「エドワーズ」は船の前方にあるＶＬＳ（垂直発射装置）がすでにスタンバイ状態に入っていた。イージス艦の存在意義（アイデンティティ）ともいえる精密なレーダーと射撃指揮管制置はその哀れな“敵性艦”を確認し、狙いを定めていた。

「セーフティロック解除。発射用意。」船の射撃担当の士官が薄暗いＣＩＣで声を出す。

「用意。」艦長が返答する。数秒間の沈黙…

「確認した。」空母「バラク・オバマ」の艦長の声が響く。「遂行せよ。」

「撃て。」艦長が無感情に言った。

イージス艦の艦首だけが朝になったようだった。朝日のような光を放ちながら3発の対艦ミサイルＳＩＭ－２ＰＸは目標に向け飛び立った。

このミサイルは対艦用ＡＡＭ－８４Ｅを改良した対水上ポケモンミサイルである。

もちろんこのミサイルにも感情も憐れみももたない。３０秒ほどたつと、イージス艦には命中したという情報だけがもたらされた。実際に上空の戦闘機もミサイルが飛んでゆくのを確認した。ただ、ミサイルが目標に向かう間、戦闘機のＨＵＤには“模擬弾”と表示されていた。

４機は“演習”を終え、帰投体制に入った。まだ夜明けは遠い。こんな暗闇を飛び続けるのは鳥でも心細い。４機のパイロットたちは早く帰ってシャワーを浴びたい。そんな欲求に駆られていた。

自分たちの共謀した“殺害”など思いもしなかった。

ホエルオーもラプラスも上に乗るポケモンたちもその閃光と轟音には気づいたことには気づいただろう。むしろ沖合…街の明かりすらないのに…で満点の星空…まあそのうちのいくつかは人工衛星や軌道上の施設かもしれない…しかない中、その閃光と轟音に気づかぬほうがおかしい、といったところだ。

だがそれがなんなのか、彼らに理解することはなかった。それに対して何かしらの感情を抱く間もなかった。

ミサイルはラプラスと乗客を笹船に爆竹を投げ込んだように粉々にした。

もう一つのミサイルは巨大なホエルオーの体のど真ん中に突っ込んだ。

その0．1秒後にはその装薬と運動のエネルギーがホエルオーの体の内部の物質をも巨大なエネルギーに変えていた。

10月4日0630時　エメリア南大陸　米国空軍・国連空軍基地のはずれのポケモン専用施設。

ホエルオーの体が中から一瞬太陽が出現したかのように輝き、内部の内臓や骨や血しぶきが蒸気と化したエネルギーがその上の乗客のポケモンたちさえもエネルギーの蒸気に変換させて体から噴き出した。その直後には、ホエルオーの体はその体を轟沈する戦艦よろしく真ん中から真っ二つに割れて閃光と熱と原子レベルに分解したポケモンたちの体の物質をまき散らし…

配属（後書き）

ユイリィ；最後にまた変なシーン書いちゃって…

…結局ＳＦとミリタリーなシーンがすぐに来たようです。

ピトムニク；作者が一番好きなメカってなんなのよ?実在で。

…まぁ、航空機でいえばＦ－１４、Ｆ／Ａ－２２Ａ、スペースシャトルＯＶＴ－１００、Ｂ－７４７シリーズ、あとＳＵ－２７の系列。
艦船でいえばニミッツ級、アーレイバーグ級とか。民間船でいえばオーバーパナマックス級のコンテナ船。
陸上兵器でいえば、Ｍ１Ａ２、Ｍ２Ａ３、９０式、９９式とか…

ピトムニク；９９式って?

…中国の現用ＭＢＴです。マイナーですね

ユイリィ；で、これでポケモンなわけ?

…だって君たちポケモンじゃん。そのうちバトルっぽいのも書くからさ…

能力、発動・・・（前書き）

さあ、いよいよ主人公が能力を発揮します！！

まあ最初は全然だめですが…

能力、発動・・・

リーヒュンは飛び起きた。全身から冷や汗が噴き出し、呼吸は荒かった。心臓の鼓動が旧式の空気圧縮機（エアコンプレッサー）のように鳴っていた。

ただ幸いなことに他のみんなを起こしてはいないようだ。隣は、いつ帰ってきたのかピトムニクがまったく気づかない様子で爆睡していた。ユイリィはここではなく、施設の個室、（不公平だとは感じなかった）で過ごすらしい。

…2晩続けて…俺はどうかしているのか？…しかもまた…

そう、またしても“他者の意識”を感じてしまったのだ。しかも2晩連続で。

あのあと、ひととおり出された夕食、（ポケモンは朝晩2回だ。ここで振る舞われるのは人間が作っている物らしかったが、悪くはなかった。）を食べて、それぞれが眠りにつき始めたのだった。

ただ、リーヒュンはそうはいかなかった。ユイリィが自分のところに行ってしまうと（「あたしはあっちの施設に部屋があるんだ♪。うらやましい？　違うか、な。でもなあ～一緒に添い寝するってのも悪くないかな～。」相変わらずのマシンガントークだ。）、しばらく忘れいたあの感情が…

夜の太平洋に浮上してくるノースカロライナ級潜水艦のようにあの何とも言えない不安と疑問が湧き上がってくるのを感じた。

…俺が？司令の言ってた“能力”ってなんだ？

使命？地球？人間？それと何のつながりが？あのユイリィって人、なんなんだ。俺と会ったことなんかあったのか？あっ・・・そもそも“能力”で知っているのか。それでいいのか？

そもそもフローラに……

…まった！！フローラが！？何があったんだ？！俺の存在が……フローラに…まさか…

彼の疑問や不安はいよいよ恐怖感すら感じるほどにまで膨れ上がった。彼は首を振り、自分の体を寝かしつけようと何時間も苦しんだ。

そんな矢先に見たのが、この夢だった。

リーヒュンは目が覚めた直後、自分がどこにいるのかさえ、見当がつかなかった。感覚が、病気にかかってしおれ、干からびた野菜のようだった。それを知った時、その理由も思い出した。

…明り取り（ポケモンたちの作る建物にはガラス窓などつけなかった。ゆえに、空調設備もいらないのだが）から見える景色は、まだ東の空が明るい、といった程度だった。日の出までは少し時間がある。もう少ししたらほかのみんなも起きだすだろう（ポケモンは明確な時間概念はなかった。日が昇れば起き、日が暮れれば寝る。そんなものだ。）だから、今は…

そこまで考えた時だ。

突然あの感覚が頭の中をよぎった。

そして、昨日感じたあの恐怖にも似た感情を思い出した！ほんの一瞬であのすべてを思い出したのだ！！

あれを。
あの時の宣告、彼の生まれて今までの経験のすべて、夕焼けに染まる部屋、飛び立つＣＨ－４７の爆音、司令の言葉。

彼はそれを意識した最初の一瞬気が狂うのではないかと思った。それから、それはすべてに対する罪意識と身の毛もよだつような悪寒、自身の存在さえ否定したくなるような自己嫌悪に恐るべき変質をとげた。まるで自分の体の中で恐るべき内蔵型爆弾が炸裂しそうになった気分だった。彼は吐き気と同時にめまいがした。そのままその場で気絶しそうになった。しかしそれだけは何とかこらえた。周りに迷惑をかけるしなにより自身がそうしたくなかった。

自分に言い聞かせたかった。問題ないと。
これは自分の問題ではない、と。

リーヒュンはフラフラする４本の脚で他人を踏みつけないようにしながら（ピトムニクとバストークを危うく踏んづけそうになったが）、何とか外に出た。
近くポケモン専用らしきため池があった。水が引かれていて、どうやら井戸の代わりのようなものらしかった。彼らの文明は、水道を整備するほどに至ってない。ここで水をくみ、手足、顔、その他を洗い、水を飲むのだ。
彼は何の思考もなく、頭の部分半分くらいまでを水に突っ込んだ。自分の周りの空気に憑依するような悪寒に耐え切れなかった。しばらくの間、何も考えられず、意識も途切れかかった中で水に突っ込んでいた。

それから…どれだけ経ったか…

ふいに頭の虫食い葉っぱを誰かに引っ張られ、夢から醒めさせられるようにため池から顔を引き出された。

「…ったく！こんな朝っぱらから池に顔突っ込んだまま死んでる自殺者かと思ったぜ！ため池、おまえのつばでべとべとになっちまうぞ！俺にしてみれば、そんな水飲んでたまるかってんだよ！」快活にその声の主は言った。どうやら、怒っているというより呆れて笑っていた。

「おいおいおいおい！なんだその半分あの世に逝っちまったような顔は？それともおまえ、朝には弱かったけか。お前が来た事ぐらいは、ユイリィちゃんからばっちり入ってっからな。まあいいや。でも忘れたはいわせないぜ！　リーヒュン、おまえは忘れてても俺が忘れてそのまんま、とでも思ってんのか？」

リーヒュンはその声の主を見た。

オレンジ色、首周りのふさふさで黄色の毛としっぽ。…そして今どきの若者らしい目つき。彼の記憶が旧式のビデオテープを巻き戻すかのようにもどって…

…そうか！ブレイブ！おまえだったか！！

彼の幼少期からの無二の友人、ブレイブ・エスコーツ・クレイバーである。

「ブレイブ！そうだな？！」
「こいつ！今更気づきやがって！俺もお前も悪運と絆が強すぎだぜ！こんな辺境地で鉢合わせなんてよ。」ブレイブがうれしそうに首に飛び掛かった。ほのおタイプ特有のほんわかした体温を首の葉に感じた。
「ごめんごめん。しっかしまあ珍しいなあ！ここにきてブレイブも軍事関係者なのかよ？」
「そうだよ。俺とて軍人だ。これで地元じゃ名の知れた名コンビ復活、てわけだな！こりゃ久々に面白くなってきやがった！」
「名コンビ、かはわからないけどな…」

彼の知るブレイブは、まだイーブイだった。
だが、今となっては彼はブースター。イーブイの進化形の一種だ。種族的には、その能力の悲運さから“唯一王”ともたたかれるあのブースターである。

「…まあ、とにかく一人でも知り合いがいるのは心強いな。今後ともよろしく。」
「おう。もちろんだぜ。あっ、後な…。」
「ん？どうした？」リーヒュンが聞くと、ブレイブの顔が変わり・・・

「おまえの知ってるかわいい女の子、いるか？！いるな？！紹介しろ！！」彼は急に嬉しそうな顔になった。顔が（もともとの色を考えても）かなり紅潮しているのがわかった。

ブレイブは声をおとし、探るような口調で言った
「なっなに言ってんだブレイブ！？」

「は？女の子いねーの？ったくよぉ！お前くらいの年ならせめて一匹くらい仲良しの女の子作れよな！

まあおまえみたいな単純すぎる性格じゃ誰もこないよな。そりゃそうだ！ああ。っておいおい、ごめんな！別に悪いことじゃねいぜ！なあだからそんな顔すんなっておい！」

「・・・・・・・うん。」リーヒュンはもう言葉が返せなかった。

…こいつ…こんなに物好きだったかな？

まあ心当たりがないわけでもないが、それに関しては省くとしよう。

…とにかく、何の見識もないこの施設に連れてこられた。しかし、かねてからの友人もいるし、大半のポケモン達もたちが悪いわけではなさそうだ…

彼の精神から先ほどの恐るべきというほどの感情は（本人にとっても不気味なほど）とっくに消え失せていた。そして、彼のお得意ともいえる普段の性格が、それと交代するように顔を出していた。

…何を言われようとやって見せる。なんとかなるさ…

２０１２年１０月４日、イギリス、ロンドン証券取引所　現地時間１１３２時

…人々は厳しい目線でモニターをみつめていた。

取引所の処理端末には、この数時間浴びせるような売り注文が殺到している。

欧州連合加盟国のうち４国も同時にアメリカの証券格付け会社に国債格付けを落とされた。うちの２国は債権の信用が崩壊する寸前のレベルにまで財政が悪化していることが判明した。

欧州銀行中央委員会は２０１０ごろから、ギリシャやアイルランドの財政救済に着手しており、これ以上支援する余力は、彼らにもＥＵ諸国にも残ってはいない。これも２００８年の金融危機の名残と言ったところか。欧州経済の先行き不安がまたも燃え上がった。

さらに先日から続く、しかもここ数週間で火をつけたように悪化した地中海アフリカ諸国の情勢と、地中海周辺のポケモン社会の悪化が不安に拍車をかけた。特に後者がひどかった。

…間もなく始まるニューヨーク証券取引所、明日のシンガポール、上海、東京、シドニーなどの各市場も相当な下落が予想される。

その数時間前　現地時刻２０１２年１０月４日　１０２０時ごろ
エメリア、国連統合軍戦略戦術実験隊の施設のはずれ

施設のはずれ（居住場所があるところとは真逆）は、絵にかいたような丘と草原が広がっていた。丘の起伏のせいで施設の大半が見えなくなる。周囲の風景はところどころにある送電線の鉄塔などをのぞけば、ほぼ自然そのままの美しい風景だった。

ただ、この草原は無意味に自然のままにおいてあるのではない。何か建設する予定があるわけでもない。この草原は、この“計画”

で使用するために保持されている。
今、その草原の丘のところには、ところどころ人間が立っており、みな夏用軍服であった。さすがに防弾装備にヘルメット、というフル装備ではなかったが、手に小銃を持っている所を見ればここでなにか行われるのは明らかだ。その兵士に交じって停車するＭ９９８四輪装甲車ハンビーから察するに、個々の警備部隊には、国連陸軍に交じってアメリカ陸軍が関わっているらしい。

ここが航空・宇宙軍及び国連空軍の基地というのは、述べたとおりだ。しかしそれは建前である。
実際は、アメリカ軍の有事の際のエメリア陸地群への橋頭保として、（まあ最近はこのあたりを開発する企業の監視が多いが。金融危機以降、開発が活発になった。）海兵隊や戦車も配備されている。
このような傾向は世界各地の国連軍の基地でいえることだ。たとえば国連統合空軍の基地だったとしても、ロシアや中国は自国の機甲師団の駐屯地をも兼ねさせていたし、ヨーロッパ諸国では化学兵器や電子戦用の施設が置かれ、中東諸国では警察の詰所が併設されている所もある。もともと統合軍というものは、その半分程度を各国からの派遣部隊で構成している以上、こういった柔軟な（ある意味いい加減な）セオリーは国連も認めていた。
ここまで弾力的な（これに関する対立や懸念事案、衝突は内外からとても多い。このせいで、国際治安維持活動に重大な支障をきたす事もたびたびだ。たとえばリビア、エジプトの時もそうだった。）組織である以上、陸地群の南の大陸であるここソーラ、（南の大陸はこう呼ばれている。アメリカ領の北の大陸はニュークリアという）が１００％国連直轄だったとしても、沿岸国と共同で防衛施設を設けることは特に不思議ではなかった。

「…さて、あなたを連れてきたのは昨日話した通りです。これから先は、我々、及び軍隊の指定した方法であなたの能力を引き出させていただきます。時に相当苦痛に感じるかもしれませんが、その時の覚悟ぐらいはできているのよね？油断しないほうがいいですよ…」

国連統合軍戦略戦術実験隊（U．N．F．strategy and tactics test pokemon team ↓S．T．P．P．T．）の司令にしてポケモン自治協会国防軍エメリア防衛軍参謀、サクラ・ワタリ・フユツキ少将がいった。

リーヒュンは特にこれといった感情も持たずに聞いていた。今朝、ブレイブに会ってからというものの、この事象に対する不安や恐怖が消え去っていた。一緒に来てくれたバストークやピトムニク、そのほか中隊のポケモンたちは、彼の能力を一目見よう、といった目で眺めていた。ユイリィは彼をちらりちらりと見やり、何が起こるのかわくわくしているような子供っぽい目線をその表情とともに送り続けていた。

「さて。リーヒュン。こっちのほうに来てください。1回目の訓練です。」サクラが言った。

「…はい。」リーヒュンは言われるがままに、指差された芝生のような草原の中心のほうへと進み出た。ユイリィやピトムニク達から離れてゆく…

「1回目はあなたの能力を今どれだけ出せるか、見させてもらうわね。あなたの能力をもってすれば、あなたはわざを使うことなく思念だけで遠距離の相手を撃破できます。今後あなたが訓練してゆくなかでこの能力を高めることは極めて重要です…」

リーヒュンは途中からサクラの言葉が耳、（ベイリーフにそれら

しいものは見えないがそれらしきところ）に入ってこなかった。自分に何が起こるのか、何が行われるのか、不安感が炭に火をつけ内側から熱くなってゆくように再燃し始めていた。

「……ということで、今やってもらうことは難しいことではありません。」

サクラの言葉で我に返った。

「あそこに簡単な的みたいなものがあるわね？あそこに向かって攻撃すればいいのです。ただし、あなたの思考をあそこに一点に集めて攻撃するのよ。」

「なっ、なにで、ですか？」彼には全くわからなかった。

「思考と感情よ。はっぱカッター、マジカルリーフ、そういう物ではないの。ツルをあそこに向けてツルの先端にあなたの思いを一点に集中させるんです。多少の苦痛を伴うかもしれません。でも、そこでやめないで。」

「……」彼は答えられなかった。

…思考を一点に？集中する？…

リーヒュンの不安はどんどん高まるばかりであった。自分にそんなことができるのか？その時自分の身に何が起こるのか？今までバトル…彼は普通に生活を送ってきたのでそんなにしたことがないが…とは全く別次元の感情に突き動かされていた。

いよいよ決定的に気持ち悪くなってきた。何か起こるんだったら早くしてくれ！そういう祈るような気持ちになっていった。

「さあ、やってみて。」サクラは取り巻きの兵士から前へ歩み出ながら言った。

彼は一度周りを見た。ポケモンたちは静まりかえてきた。ユイリィはおもしろそうに、期待するかのようにこちらを眺めている。兵士たちはどうでもよさそうに立っているだけだった。

彼はツルをとりあえず的に向けた…
それで目をつぶり、意識を集中させてみた。

最初のうちは何も起こらなかった。単に奇妙な周囲の沈黙だけが聞こえた。１０秒、２０秒、３０秒、１分、１分３０秒・・・それが続いた。

ところが彼の意識下では……

まずつぶった周りの映像が光を帯び始めていた。つづいて徐々に４本の脚の感覚が薄れ、しまいには自分が高いところにぶら下げられたようにめまいにかわっていった。

…なんだこれは？

彼はそれをやめようと思った。が、見えない渦に巻き込まれていくようにその意識に引き込まれていった……

彼の意識をさまざまな映像が通り抜けた。

多くの人間が何かモニターを見ながら厳しい表情をしている・・・
公園に多くの人間が寒さの中何かのために行列を作っている・・・
多くの人間が武器をもって何かを叫び、ほかの人間がそれに向かって発砲し・・・
猛烈な雨の前に田畑が町が飲み込まれ・・・
何かわけがわからぬ建物から煙が上がり・・・

その次は・・・・・・・これは？……

ポケモンたちが…苦しみ…倒れ…故郷を追われ……泣き叫ぶ……
…声が聞こえ…
みんな、みんな……
……死んで……ゆく……
…誰が？……何が？……そしてその……次は……
そして……むこうから……何か…何か…大きくて…白い……周りは暗く…逃げ道は……しかし……そして…あたりがそれによって…
…まぶしい光と轟音に……
何が？く……る……？……

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

突如としてあたりに爆発音がした。対人地雷が暴発したように煙が上がった。

その爆発は…狙いとはとは全く違い…見物のピトムニクやバストークたちの至近で炸裂し、危うく彼らはその“爆発”でばらばらになるところだった。

ユイリィが何かをツルをふるってだし、爆発を何とか軽減した。そのおかげで、残りのみんなは吹き飛ばされるだけで済んだ。

リーヒュンはその場に倒れこんだ。何時間も全力疾走したかのように息切れとめまいがした。足がいまだに４本とも宙に浮いている感じがし、意識もフラフラであった。

サクラは無感情にいった。「…まあ、少しは耐えられたようね。最初だから仕方ないでしょう。でもこの調子だと、能力を発揮するには相当な時間が・・・・。」

彼は、そんな言葉は聞いていなかった。その疲弊とともに、一種の混乱に陥っていた。

自分に何が起こったのか？
何を起こしたのか？

…ユイリィは心配するような、ちょっとおかしかったような苦笑を浮かべていた。

能力、発動・・・（後書き）

うーん。彼、もう少し練習しないとだめですね。
予定に追われていてあんまり細かいあとがきが書けずすいません。

次回以降もしばらくこの展開で行くと思います……。

訓練の中から（前書き）

今回はみんなが受けた訓練の一部を紹介します。

まあ、ほかの話題もありますが・・・

これに似たこと、実際に去年くらいに尖閣諸島とかで会ったような…

やっぱりこのあたりは、尖閣諸島とかヨンピョン島とか問題が多い地域のようです。

訓練の中から

２０１２年　１０月７日　東シナ海　日韓ＥＥＺ付近　０５３１時

韓国海軍の浦項（ポハン）級哨戒艦２隻は冬の波濤すら感じられる中を進んでいた。もう間もなく夜が明けるとはいえ、まだ朝には程遠い明るさである。民間の船舶はこのあたりには見えない。この周囲の上空の航路（エアウェイ）にも民間機は今のところいないようだ。このあたりには遠くに蛍のように見えるのは韓国の大企業によるメタンハイドレードと天然ガス採掘プラントの施設の灯火。

このあたりには、２０世紀の末から次世代型燃料としてメタンハイドレードが大量に存在することが知られていた。実際に採掘がはじまったのは２１世紀も５年ほど過ぎてであるが、これはメタン採掘の安全技術…採掘を誤るとメタンが海中から大気へと吹き出し、ＣＯ２をはるかに超える温暖化を引き起こす危険がある…が確立するのにそれなりの時間がかかったからだ。

欧米、ロシア諸国はベーリング海やオホーツク海周辺を採掘したが、アジア極東の大経済国はこの中国沿岸のシナ海及び東海（日本海）をこぞって狙った。メタンは火力発電において徐々に石炭に引導を渡しつつある。さらに２０１１年の原発問題以後、世論の反対によって原発増設が難しい一部の国家にとって、ＣＯ２の排出が極端に少なく豊富な埋蔵量が期待できるこの資源は貴重なものであった。

中国や韓国、台湾の大手企業や政府プロジェクトはこぞって採掘を行った。しかしこのことはただでさえ沿岸が接近している極東のこの地域の領土、経済水域問題をさらに混迷させた。各国軍は自国の企業の活動を守るために侵犯の危機を侵すような監視行動を繰り返し、何度も軍事衝突寸前まで発展した。国連統合軍が介入するこ

ともしばしばであった。

少なくとも自国の勢力、国際的発言力を高めるには、自国経済を強化する必要があった。その発展に不可欠な資源を守る、さらに資源輸出で他国や勢力と関係を持つことは非常時の自国の影響力を高めることに経済協定を締結することと同じくらい極めて重要な役割を持つ。それがゆえ、企業の要請や政府の方針のままに軍は動き続けている。

経済と国家の関係は２０余年まえから逆転していた。自国の経済的繁栄と企業の活動を守るために国家と軍が存在しているも同然であった。

「…みえました。不審な艦船目標（オブジェクト）は間もなくわが国のＥＥＺ（排他的経済水域）境界線に・・・」哨戒艦のレーダー観測員がいった。艦長と当直責任者がレーダーを見た。自艦のレーダーと人工衛星、（最近は数が多すぎて衝突事故が起こるほどだ。勢力争いは宇宙にまで及んでいた）の観測結果が統合された情報が目標艦船の解析を進めていた。

「…中国艦です。２隻。反転する気配はありません。…上空にも不審なオブジェクト複数。１機は哨戒機…残りは不明（アンノウン）…」

…先ほどから英語と中国語で警告を発しているが…引き下がる様子もない。彼等らしいな…

端末が艦船のほうは判定不能、と表示した。おそらく改良か偽装が施されているのだろう

哨戒機はＹ－８ＡＳＡ。洋上偵察機の一種である

機体はイギリス製でも中国軍であるのは明らかであった。

…やつら、今日は本格的だな…艦長は思った。アンノウンの存在はなんとなくわかる。このレーダー反射反応は…

艦長は艦内送信機をとりつつ、砲術長ともう一人の要員にいった「ポケモンだ。こちらにくる公算は大きい。こちらからも、連中を出させろ。念のため戦闘配置に。艦船か哨戒機も出てくる恐れがある。火器の準備もしておけ。」

艦内に警報が鳴り響いた。本国に緊急に備え、空軍機の準備を要請した。

哨戒艦からポケモンが飛び出した。ムクホークが1匹。フライゴンが1匹。そしてチルットが2匹。

レーダーが南東に新たなオブジェクトを捕えた。

「航空機が2機、アンノウンが2、現在監査中…」レーダー手が言う。

…日本も出てきたか…艦長は思った。このあたりには日本企業のプラントもあり、ＥＥＺのお互いの主張が交錯している地域だ。周辺の不穏な空気を感じたに違いない。２年前の“異変”ともいえる震災で大被害を受けても日本とて経済大国だ。自国の経済活動を守るためにはこうもしてくるだろう。

監査結果がでた。機種はＦ－１６に酷似。つまりＦ－２Ａである。アメリカ、ゼネラルダイナミクスの機体を日本の三菱重工がライセンス生産したものだ。

ひこうポケモンの瞬間飛行速度は３００ノットをこえる。日本のポケモンも含め3者が接近するまで時間はかからない。

日本と韓国のポケモンたちが真っ先に出会った。

……しかし彼らは相手をしばらく見やると交戦しようとはしなかった。むしろ仲がよさそうである。

「おっ、トレミーか。今日も相変わらずの女だぜ。」日本側のムクバードが言った。もう無線機を切って私語に高じることができる距離だ。

「そういうロックオンも相変わらずよ。いまいちパッとしないっていうか、もう盛りを９０％ぐらい過ぎたっていうか、ね」韓国側のフライゴンも返した。

どうやらこの2匹は前々からであったことのある仲のようだ。

というより、ロックオンのほうは、トレミーに誘われて韓国の繁華街、明洞（ミョンドン）に遊びに行った仲だった。問題という物はそれくらいの意味かしかポケモン達は考えてはいなかった。

・・・・・はずだった。

中国側のポケモンが接近してくる。韓国側の隊長はいつもの顔見知りの相手だろう、と感じ普通に無線機越しに呼び掛けた。「おいおい、そんなに固い態度して飛んでくるなって。お前たちだって…。」

返答がない。相手側からは…明らかに不穏な…

「・・・なあ?」隊長の声がにわかに上ずった。

「…トレミー…」ロックオンが言った。「奴ら…は…」

相手はケンホロウやハトーボー等である。隊長は♀。
その目からは任務を遂行する無表情さと明らかな…

殺気。

隊長がそれに気づいた。
が、遅すぎた。

ケンホロウの放ったエアスラッシュは隊長の体を一瞬にして引き裂き真っ二つにした。隊長の体はニワトリを包丁でさばいたかのように血しぶきと肉片をまき散らし数千フィート下の海へと落下してゆく…その青黒い海はまるで口を広げるかのように隊長だったものの残骸を飲み込み、白い波濤のみが犠牲者への献花のように残った。
続いてハトーボーが同様の攻撃を行い、チルットを同様に粉砕した。

「こいつ!!!!」日本側は一斉に応戦した。
「なんで?!?」トレミー以下残存の韓国側も加わった。

浦項級哨戒艦のレーダーでもこれを探知した。
中国の艦船も発見したようだ。
日本のＦ－２Ａのレーダーも探知しただろう
突如として発生した乱戦。
３国の言語が同時に響き、無線が錯倒した。

１５秒程度の死闘。
トレミーは突如の戦闘に一瞬たじろいだが、５秒後にはとり直し、相手のハトーボーにむけてりゅうのいぶきを打ち込んだ。相手の動きを見事に読みつくしていた。まさしく相手が彼女の予想した位置に達したとき、いぶきのエネルギーが皮膚を貫き内臓と骨を焼いていた。
　一瞬にして生命に必要な臓器を焼き尽くされたそいつはただの意識を永遠に喪失した抜け殻となって先ほど倒した隊長と同じように東シナ海の上空を吹き飛んで行った。

…その直後。
「無駄なことをするな、帰投しろ。相手と本気じゃない。」無線機がなった。
どうやら中国側もそうらしい。生き残った連中は一気に速度を上げると、もと来た方向へと引き換えしていった。日本側の残存も彼方を飛行するＦ－２Ａの方向へと飛び去っていく。その際、ロックオンがトレミーのもとに向かってきた。

「…大丈夫か？」「…うん」
「今日は悪かったな。俺がせめて…」「あんたのせいじゃない。大丈夫。」
「…そうか」「ワタシも…なんともないしね。」
「まあな…」そう寂しそうな表情をして彼は飛び去った。
トレミーも生き残ったチルットを連れて艦へと急いだ。

「オブジェクト、速度低下。転舵を開始した模様です。」
目標（オブジェクト）は進路を変え始めた。自国側の海域へと転舵してゆくようだ。
浦項（ポハン）級の艦橋からも目標が目視できるレベルに達していた。この艦（ふね）もすでにＥＥＺいっぱいまで到達している。

艦長も目標を見た。
五星紅旗…やはり…
民間の資源調査船のように見えるが…

…東調（ドンジァオ）級情報艦か…

哨戒機も進路を変え、中国側へと飛び去った。
日本の航空機も宮崎、新田原の基地へと帰投するようだ。

トレミー達は一直線に艦をめざした。こんな戦闘は幾度となく経験していた。
だが、その途中急に悲しくなった。

…もうこんな戦いはうんざり…人間のおもちゃなんかは。…

…今度生まれ変わるなら、せめてハトかカラスが…こんな中途半端な生き物なんて…
トレミーの眼から涙が空に散った。

徐々に明るくなりつつある東シナ海の冬のような風が、

翌日の各国のメディアにはそれに関して何の報道もなかった。ポケモンが小競り合いして死んでも、戦士とはみなされないし、軍事衝突とも言われなかった。その程度の存在でしかなかったのだ。
東京や上海の株式市場にも反応はなかった。
…日本のその日のトップニュースは、東シナ海のメタン採掘に関する話題だった。

２０１２年１０月８日　ソーラ大陸の統合軍基地から北へ５キロの森　１１２０時

あれから5日ほどたった。彼の能力は思うようには伸びなかった。すでに3、４日、同じようなことを練習させられたものの、狙った場所に“攻撃”を仕掛けるどころか、その時感じる“感覚”のまえに立っていることもできなかった。ユイリィはそのたびに彼の放った“攻撃”を受け止め跳ね返し、当惑したような、それでいて面白そうな表情をするのである。
ただ、彼女とてリーヒュンにただちょっかいを出しているような態度をとっているわけではない。

「…まったく、君は俺が失敗するのがそんなに楽しいか？」
「ん～？どうかなあ？うん、それに近いかも」
「なんだよ、それ。」
「だってさあ、あんな真面目な顔して、こっちで炸裂するんだもん。そりゃ……でもね、そんなもんだよ最初のうちは。」
「はあ・・・そんなもん、ね…」

訓練はこれだけではなかった。最初の日の翌日から、自治協会国防軍、並びに国連統合軍が指定した各種訓練を受けなければならなかった。これはバストークやピトムニク達３０２中隊も一緒に受けることになったが、リーヒュンやユイリィにとってはさらなる負担であるのは言うまでもない。

なぜならその訓練という物は、普通の人間兵士が行うレベルをはるかに超えている上、どんなバトル用ポケモンたちが行うそれをも超えたレベルだったからである。

その第１に、離れた敵への攻撃方法。もともと近距離での白兵戦闘を得意とするポケモンにとって少しでも間をとって攻撃できるのは極めて有利なことであるし、万が一人間の兵器…たとえば戦闘ヘリや装甲車…を相手のするときに至近距離まで接近することは、たいていポケモンにとっては自殺行為に等しいことであるから。

…だが、５００メートル離れた的に自分の技を当てろ、と。

リーヒュンがはっぱカッターをとばした。が、当たるどころか届きもしなかった。バストークがシグナルビームを打ってみた。２００メートルくらいでエネルギーは減衰し空気中に拡散した。ピトムニクがじゅうまんボルトを放ったが、これもまた３００メートルぐらいで届かなかった。ユイリィも頑張ってみたが、マジカルリーフは３５０メートルくらいまでしか届かなかった。しかしその直後彼女は自分の能力で的を一撃で吹き飛ばして見せた。ブレイブがかえんほうしゃを出しても、せいぜい４５０メートルが精いっぱいだった。

「ったく誰があんな遠くの奴とバトルするんだっつうの！」ブレイブがぼやいた。彼はそのままピトムニクによっかかろうとしたが、彼女に「は？やめて。」とくぎを刺されひっこんだ。

次第にみんな疲弊に顔が真っ赤になってくると、担当の士官たちはこんなポケモン連中にわざを当てさせるぐらいだったら自分で打ったほうがまし、という表情をしていた。

第２に、白兵戦状態に陥った時、人間の兵器に勝つ、ということ。戦車を食い止めることができるくらいになれば、ポケモンバトルなど造作もない、ということらしい。

だが、これは…

・・・・・・戦車の装甲板を壊せと？

彼らがどんな表情をして頑張ったか、だいぶ長い話になるので全部割愛する。もちろん破れるはずもないと考えるのが正解だ。

ある休憩時間帯…

「もうやんねえ。」ブレイブがぼやいた。

「俺もしたくないよ。」リーヒュンが続いてぼやいた。

ユイリィだけ妙に平然としていた。「そんなもんよ。」

「おっ、いいところにかわいいの。」ブレイブがいきなり顔色を超えた。その目線の先には…

ピンク色の体。白いふわふわの毛。彼女はモココ。

「おーい、グラシデア！こっちこい！」ブレイブがわめいた。

グラシデアはあきれ果てた顔をしてこっちに来た。

「まーたブレイブね。なんなのよもう。」彼女は投げやりな笑顔で言った。

「いつもながら…かわいいな♪。」

「ばーか。（そういいながらブレイブのおでこのところを軽くけった。）あっ、隣にいるのが…リーヒュンか。こいつの友達？ごくろうさま。」グラシデアはそういうとどこかへ行ってしまった。

「…ああいう性格なのか？」リーヒュンが聞いた。

「ああ。あんな奴だぜ。かわいいんだけどな。中隊長の娘のくせして…」

「へー。娘に進化の先を越された、ってわけか。」彼はそこまで言いかけて…

「まった！中隊長の娘がいたのかよ？」
「そうだ。まあ仲、というと…いろいろあってな…」ブレイブが言った。

…この部隊っていろいろな人たちがいるんだな、リーヒュンは思った。

そのほかにも、この数日間は超長距離持久走、潜水耐久など、まるで生命を削るかのような訓練が相次いだ。これらに関しては、のちの話で述べていく。ただし断っておくがどれもこれもポケモンでなかったら確実に命を落としていただろう。

特に水中耐久訓練なんか。このシステムは、もともと宇宙飛行士の中でもミッションスペシャリストの船外活動訓練用のシステムを利用しているのだ。それぞれはこの宇宙服をはめた飛行士が水に入れられる（宇宙服は重いので地球上では装着すると自分では動けない）機械にしばりつけられ、手、または前足にスイッチを持たされ、さまざまな測定機器と無線機をつけられ、水の中に入ってひたすら耐えるのだ。

限界が来るまで。それが来たら例のスイッチを押せばいいのだが、この機械たちは各々の血中酸素濃度や脈拍を測っている。結果が芳しくない、たとえばまだ限界が来てないのに押した、とかがあると何度でもやり直しである。

リーヒュンとユイリィがそれをする番がやってきた。
「俺、生きて帰れるの？」彼が体に機器を装着させられながら言った。
「まさか、水嫌い？あはは、ありうる！！」彼女は相変わらずのテンションでいった。
「そんなに好きじゃない。」
「やっぱね！」彼女は全く余裕そうだ。
「よーし、始めるぞ。伝説のお二方なら一時間は余裕だな。ん？特に男のほう。やせ我慢して溺死するなよ。」担当士官が言う。オペレーターが機械を操作し、２匹を縛った機械がプールの中へ…
「そりゃ分ってますよ！そんなところまでは…」彼が言い切る前に、顔の部分まで水に落ちた。

その後どうなったかはもう分かるだろう。リーヒュンは無理をして溺死寸前まで我慢した。ユイリィがまったく平然としているので、（口の動きで、彼をからかってるのはわかった。ますます負けたくなかった）負けん気が働いたのだ。
引き上げられたとき、彼は全身、葉っぱまで血相が変わっていた。しばらくすると、ユイリィも上がってきた。彼女もちょっと心配そうな顔もしたが、それ以上に笑っていた。結局彼はブレイブなんかよりはるかに長い間耐久したものの、死にかけてしまった。士官たちが、救急車と医者を呼んで来い、といったような言葉をわめいているような気がした。（もっともエメリア語でなく英語なので、すべて推測にすぎないが。）
もうろうとする意識の下でリーヒュンの目線の先にはまだ春の模様を残す初夏の青空が広がっていた。上をアジサシのような海鳥が飛び回っているように見えたが、それがブレイブなのか、グラシデア

なのか、ユイリィなのかさえはっきり見当がつかなかった。

「あはは！リーヒュンやっちゃったね！あたしの予想通りだね、うん！」ユイリィが花びらと頭の上の４本の雄蕊のような突起から水をしたたらせながら言った。ついでに彼にアロマセラピーをしてあげながら。

「そうだぜ！ユイリィちゃん、一生懸命やめさせるように上に言ってたのによお。お前がいつまでも粘ってたからだよ！しっかし俺のほうが偉いな。ちゃんと分別つけてやめたんだから！」ブレイブが首と頭にある黄色のフサフサ毛から水を垂らしながら言った。それがリーヒュンの眼のところにいやとかかったが彼は払う気力もぬけていた。

「まあ、アンタはサボっただけでしょ。しかし彼よく頑張ったよね。ブレイブ、アンタ少しは見習ったほうがいい。」グラシデアが、苦笑しながら言った。

「はっ？グラシちゃん。俺はいっつも全力投球のはずだぜ！きみのためにね。こいつとは考えが違うんだよ！」

「セクハラとナンパ反対！」

「ブレイブさあ、今日はグラシなのね。明日はピトム？あははは！予想ついちゃった、もー流石ってところだよね。ブレイブ。」ユイリィがさわやかにいった。

「いーや、明日かユイリィちゃん！」ブレイブが笑いながら言った。

「えー？！やだやだ！」

…３匹のバカ話は延々と続くようにも思えた。

こんな訓練が、１週間、それ以上と続くにつれ、リーヒュンの心にはさまざまな不信感や劣等感が芽生え始めていた。

２０１２年１０月９日　施設のはずれの高台　１８１０時

夕日が暮れようとしていた。彼は海が見渡せる小高い斜面のちょっとした森の陰に座り、ぼんやりと飛んでゆく国連軍の戦闘機を見ていた。遠くを見ていれば多少はここのところの疲れと苦労に沈んだ気持ちも軽くなるかと思ったが、その人工の建造物がどうだとばかりに混じっているのを見ていると彼もまたポケモンであるからにして、ただ単に気分がめいるだけであった。

いつの間にかリーヒュンはそこら辺の木の枝をツルで折りとりその枝を口にくわえてくるくる回していた。子供のころから、つまりチコリータのころからの癖であった。

…なんてったって自分こんな厄介なことに？

まず自分の戦闘力の低さ。サクラ司令の言うとおり“選ばれた”のであれば、こんなに今にも死にそうな顔をして訓練をするのか？

それに、自分の“能力”が全然まともに機能したためしがなかった。それどころか、常に周囲を危険にさらしているばかりである。

そして、周りのみんなの態度。バストークやピトムニク達…ブレ

イブは友人であるが故の態度だが、あの具合ではなあ…は自分の後輩のように接してくれるが、その内実はあまりいいものではないのでは？

極めつけはユイリィの存在。あの性格、態度。彼女は明るく活発な面がある反面、出会ってからずっと、自分のことを弟のように扱い、ちゃかしたり小ばかにすることも多い。

思い返すだけで…なんだかな…

「…なーんでそんなに力はいってるのかな？リーヒュン、なんか変なこと考えてない？だから、変なところで炸裂するの。たとえば家族とか彼女のこととかさ。まあ気になるのは仕方ないけど。うん、問題ないよ。」

「それってさあ、俺をバカにしてるの？」

「えっ？ごめんごめん。そう聞こえちゃったかあ・・・つまりね。」

「やっぱなんかあるの？」

「元気にしてあげてるの！！あたしのことを考えれてればうまくいきそうだし！」

「わかったわかった。だからさ。集中させてよ。君のせいで余計に…」

…とか、

また…

「…ていうかさ、どうして俺にはそうストレートに言うのさ?まあ、君のことだからさ…でも、だんだん俺でもうざくなってくる…」

「だって、リーヒュンかわいいんだもん!」

「か、かわいい…?」

「リーヒュンは何言っても怒らないし。嫌いなんでしょ。キレたりするの。ていうか無理なんだよね。それでもって、すごい単純だからさあ。なんでも無理して頑張る、みたいなのね。それいいと思うよ。うん。いいなあ、あたしその純粋さ憧れてる・・・」

「ほめてるのかよ…なあ…(まあ言ってることは全部図星なんだけど…当たり前か…)」

このユイリィって子は。まあ、自分より年上なんだけど…

…困る。いろいろ言われてへこむ。

俺、才能なんてあるのかな…サクラさんの人違いなんじゃ…

でも…フローラが……問題に巻き込まれていたら……何とかしなければ……

そこまで考えていたとき…

ぼん！！！！背中と首の付け根のあたりを、ちょうど葉っぱの後ろあたりをたたかれた。
しかも結構太い。でも、誰がやったかなんて彼にはすぐわかった。

「明日さあ、リーヒュンとあたしと二人でやることになったんだよ！ねえねえすごいよ！」あの子供っぽい高声。この元気全開の雰囲気。（ついでにオーラ）ユイリィがまたおしゃべりしにやってきた。

はっきり言ってリーヒュンがどこに行ってもお見通しなのだろう。
何となくわかるのだろう。それが2匹が持つ能力だから仕方ないが。
「・・・あのなあ。俺は君みたいに先が見えるわけじゃないんだからさ…それとも君にはできて俺にはあんまりできなくて、それがうれしいの?」
「ごめんごめん。そうじゃなくてさ。」ユイリィが相変わらずニコニコしながら言った。この女の子は他者としゃべっているだけでうれしいらしい。「どうしたの最近?あたしがいれば大丈夫のはず、なんじゃないの?だってそういう風に思ってるでしょ。顔が言ってる、うん。」
「まあ、そうは思ってたけど…君に言われるとますます…。」
「そうそう!そうでしょ!うん。」ユイリィは頭の上の4本の突起と首の花を彼に思いっきりくっつけながら言った。
「まっ、まった。気持ち悪い。くっつけんなって。」
「やだやだ。…でもね…大変だよね…
……大丈夫だよ!うん。あたしがいる限りリーヒュンは絶対にやられない!あたしの最高のパートナーになってくれる!約束するよ。」
「そうか…自信ないけどさ…やってみるしかないよな…」
…彼女にしては少しはまともなことを言った、か…
「そうそう!そうこなくちゃ!…そろそろあたしいかなくちゃ。軍の施設のほうなんだけど。リーヒュン、これであがりでしょ。」
「うん。まあ」
「じゃ…中隊のみんなによろしくいっといてね!あとさ…」

ユイリィがまた大笑いしそうになりながら…

「明日も思いっきり失敗してね！！！見てると面白いから！！！」
「おい！俺は君の見世物じゃないんだからな！それくらいは君だって…」
彼が言いかけた時には、ユイリィはぴょんぴょんと軍の施設の方へと言ってしまった。

頭上をどこかへと飛び立つ輸送機Ｃ－１３０（ハーキュリーズ）の轟音が通過していった。

リーヒュンは立ち上がった。ユイリィのおかげで少しだけ元気になったような気がした。

明日は初めて2匹で訓練する。ちゃんと動ければいいが…

訓練の中から（後書き）

現実ではメタンハイドレードはまだ本格採掘されてはいません。
葵の物語では、現代でも科学技術が少し進んでいます。今後もそういう演出は出てくる予定です。

でも、これそのうち現実化しそう…

ユイリィって明るすぎて逆にむかつくような…そういう子です、はい。

次回、ブレイブにもパートナーが?!

変化への動揺…新たなる仲間…（前書き）

なんかストーリーが予定より遅れているような…
まあ、いっか…

変化への動揺…新たなる仲間…

２０１２年１０月１０日　エメリア陸地群　ソーラ大陸国連軍基地のはずれ　１８０５時

「あーあ……やっぱ無理なのかな…」リーヒュンはため息をつき、右前足で石ころを前に蹴っ飛ばした。

結局、ユイリィとの共同の訓練はさっぱり駄目であった。ダメというより支離滅裂という違う言葉がお似合いの情勢だった。やはり彼が思念を集中させると、周囲におぞましいばかりの光景が広がり、足、その他全身の感覚が萎え、勢いをおかしなところで暴発させてしまい彼自身もたっていることすらできなかった。さらに今回、ユイリィがいるせいか、“それ”はますます鮮明に恐るべき情景にまで仕上がった。彼女が完璧にできていることに対するリーヒュンの負けん気がそうさせているとしか思えなかった。

何せ今回は…

…真夜中のどこか。あの鳥のような機械（それは航空機の一種だった）の下で人間が話している…

…人間の市街地。多くのポケモンたちが倒れ死んでいる。周囲の人間がおびえた目でそれを見ながら歩き…人間の警察かなにかがそれを調べ…カラスやハエ、野犬を追い払い…

…1匹の…あれはイーブイか?…水の中で死んだように浮いて…その目には…

いや、それは…それは……

今までの曖昧さはなかった。目の前にそのビビットがはっきりと見えた…

…おぞましすぎる。

その日の訓練を思い出すたびに吐き気がした。

「…あはは。今日もリーヒュンよくがんばったね！先週より全然よくなったんじゃない？すごいよ。いろんな意味で。でも…でも…あはは…やっぱ…いつもああやってくれてくれるからリーヒュンはかわいいんだよね！！もう…もう…最高！…」ユイリィのあの高い声がしゃべり続けている。

「…あのな、俺が上手くいったとでも思うのかよ？やっぱり君は、俺を挑発したり怒らせるのが結局好きなわけ？」

「違う違う！そんなじゃないよ！！あたしはただ、あんなにまじめにやっているリーヒュンが素直で羨ましいなあ、ってさ…」

「そうには聞こえないよ。単におもしろがってるとしか…」

すると…この女は…

「そうそう！それ、それに近いよ！うん。でも悪い意味じゃないの。ただ単にさ…」

あっさり認めた。

「はあ…もうやめろ…わかった。君の考えはよーーくわかった。」

リーヒュンはもう言葉を続けたくなかった。これ以上彼女のペースには翻弄されたくない。

「おう、お前今日も抜群に暴走したな！！最高だぜ！！あのムキになった最後なんか俺だったら満点の評価をやるな。まあ、それがお前の良さでありバカさなんだよ！！！」

もっと話を混ぜっ返す相手、ブレイブが帰り道に加わった。

「でしょでしょ！そう思うよねブレイブも！うん。もうあれはホント…」ユイリィがまた嬉しそうに頭の４本のおしべと首のお花をプラプラさせながらしゃべり始めた。２匹のバカ話は延々と続く。リーヒュンはもう勘弁してくれ、と言わんばかりに首を振った。そこで彼は思い出した…

…あの水の中のイーブイの情景、あれって…

「な、なあブレイブ、おまえは…うーん？川とか湖に落ちたことある？」

「どうしたいきなり？まあ、お前らしいや。」ブレイブのフサフサ尻尾の振りが少し止まり、頭の上のフサフサを少し右前足で掻きながら言った。「もっちろん１回はあるぜ。お前とじゃなかったが、ダチにと遊んでたら高いところから湖に落下しちまってさ、そんとき俺は気絶してたんだけどな。奴は俺の表情見て死んだと思ったらしい。親がすっ飛んできたぜ。

…ていうか、なんでそれ知ってんだよ。」ブレイブがリーヒュンの眼を覗き込んだ。

「あ…いやな、何となく…」

「おい！お前ここんとこ大丈夫か？いつもたそがれているような眼

をしているくせによ、一度も言ったことない他人のプライベートをずばずばあてやがって!!自殺志望者かよお前は!感がいいのは昔っからだからわかるけどな、それはお前が真面目で一本気で素直だから信頼されたんだぜ!なのにそんな心気症患者のような顔してどうでもいいことばかり聞いてくるんじゃ、さすがの俺も疑うぞ!」

ブレイブの顔から茶化したようないつもの表情が消え、親友に自分の首と頭の葉っぱがいもち病ではなくうっかり白血病に罹ってしまった、と言われたかのような目線で見た。

「いやそうじゃない!俺が言いたいのは…それがブレイブの今後と何か…」

「てめえさっきから予見者みたいなことばっか言いやがって!おれをなめてんのかよ。それとも訓練とやらで気でも狂ったのか!?ええ、おい!」ブレイブがついにでた。前足でリーヒュンの首の葉っぱをつかみ、ほのおのキバで焼き切らんとばかりにまで食って掛かった。

「えっ、えっ?ブレイブ!そうじゃないの!ちょっと待って!」ユイリィが自分のツルで何とか割り込んだ。

「じゃ、なんだこいつは?ユイリィちゃんはこいつと仲間だからってこいつに悪気がないっていうのか?」

「うん!!そ、そうそう!別に問題があるわけじゃないのよ。」

「じゃなんだ?」

「リーヒュンはね、あたしと全く同じだからね、見えちゃうの相手のいろんな面が!!た、たとえばさ…隠してること、本音、その他もろもろ。悪気はないの!!あと…これって結構疲れるの。だからさ…こう…この子がいろいろ変るのは…こう…ね…」

しばらくの沈黙…

「そうか…そんなもんか…ったくよ、こいつは…」ブレイブは前足を離たが、まだ完全には納得がいかない様子だった。
「わりい、わりい、悪かったよ!!俺の誤解だ。」ブレイブは無理やり作ったような笑いを浮かべた。
「うん…すまないな…俺もここんとこさ…」
「だけどな…」その顔から笑顔が再び消える。
「俺は今の態度のようなおまえを絶対に認めねえ。あれは俺がかつて冒険してたリーヒュン、おまえじゃない。どんな状況になってもいつもどうり当たって砕けてみろ。それまで俺は……」この友人は珍しく真顔で言った。

「ねえねえ、ブレイブ!いまＯＫ?」遠くから声がした。グラシデアであった。
「あ…っ。おう、グラシか。」「どうしたの?」

「アンタのことよ、ブレイブ。今日付けで新しい辞令が来たんだってさ。そんでさ、見張りの連中が、指令地区の詰所までこい、って兵士よこしてるの。で、その人間たちはアンタを迎えに来てるってわけ。どうする?そこでユイリィちゃんといい感じになってるんなら待たせるけど?」
「おっ!!!そう来たか!!!という事は、俺にもそろそろお仲間がくっつく、という事もありか!?」
…ブレイブの目が再び輝いた。

グラシデアはやれやれ、と言わんばかりの顔だ。「それはアンタの妄想でしょ妄想!!まあ、それならやっと私からも離れてくださるでしょうけど。とにかく、来るんだったらこの兵隊さんについてってよね。」

兵士がつっこんだ。「いーや、こいつのことだから妻は何人いてもありがたい、って性分だぜ。お前さんのことも目には入れ続けるだろ。それに1ドル15セント以上はかけられる。ん?ポケがいいか?」

「もうぅ!」

「よおーっっし!!俺の時代もついにやってきやがった。さっそく会いに行ってくるぜ!!ユイリィ、お別れのキス、今日は省略だ!!!そしてリーヒュン、明日はその表情と面、直して来いよな!!!そんじゃ!」そういうが否や、ブレイブは点火したミサイルのごとく兵士の後ろに飛びついて行った。「あ、ああ…じゃあな…」とリーヒュンが言ったのもおそらくは届いてはないだろう。

彼はその姿を追うこともなく、さっきブレイブに言われたことに混乱していた。

…俺はなんなんだ?ホントに気が狂ったのか?

…なんで俺は人の秘密に入り込むことばかりしてる?…

…なんで自分で抑えられない?…

「…まったく、ブレイブってあれだから困っちゃうよね。でも、あれでも戦闘時は頼りになるんだよ!!!うん。あれ?リーヒュン、ブレイブと友達だったっけ?ごめんごめん。じゃあ知ってるよね!!」ユイリィの声が地下鉄が遠くから迫ってくるときの音と同じく

らい異次元から聞こえてくるように感じた。
「…ねえ、だ、大丈夫？……ごめん…さっき言われたこと、気にしちゃった？あたしがちゃんともう少し説明できてれば…ホント…」
彼女の声が尻すぼみになる…
「そうじゃない、そうじゃない…やっぱり俺は…」リーヒュンが沈んだ声で言った。純粋で無鉄砲な彼でも、この状況はつらく難しいに違いない。ユイリィにはすぐに理解できた。幼いころ、最初のうちは自分もそうだったし、やっと理解できたとしても、気持ちが慣れるまで相当時間がかかったから…
「だいじょーぶだよ！そんな暗い顔しなくても！いつか絶対…」

「いいよもう。迷惑ばっかかけちゃって…ごめん」彼は疲れ果てていた。

「俺は…死にはしないから…」ユイリィを残してフラフラと先に歩いて行った…

２０１２年　現地時刻１０月１１日　アメリカ、ケープカナラベル
　ＮＡＳＡ宇宙センターの格納庫
０１４０時

彼が“見た”ものは全く持って真実である。
ＮＡＳＡ（アメリカ航空宇宙局）最大の宇宙機打ち上げ施設。既に夜半過ぎ、外からこの格納庫に入ろうとするのはそのセキュリティーシステムからして不可能に近い。だが、関係者が中から入っているのは話は別だ。
　来月に打ち上げられる予定の単段スペースシャトル（ＳＳＴＯ）

ＳＳＴＯＶＴ－２００の２番機、タイタンは２度目のフライトに向けた各種点検の中日、非常灯しかついていない格納庫（ハンガー）に駐機していた。健康診断ツアーの真っ最中の中しばし簡易ホテルで翼を休める彼女の足のそばを一人の人間が歩いていた。

既に頭髪には白いものが混じるその男は、かなりのベテランのようだ。そう、彼は来月のフライトで彼女の機長（キャプテン）を務めるパイロットである。

彼が宇宙機（シャトル）のフライトにかかわるようになったのは１０年ほど前だ。空軍のエリートであったこの男は

訓練時代からの親友が、旧型のスペースシャトルＯＶＴ－１００、コロンビアの事故で死亡したことをきっかけに、すでにもう若くない年頃、空軍将校への出世の道も捨てて、この分野へと移ったのである。

その旧型のスペースシャトルは２０１２年となった今でも飛び続けている。しかし彼が今度の初フライトで乗り込むのは、ＮＡＳＡとアメリカ技術界がプライドを集めて開発した世界初のマスドライバー型打ち上げシステムを使った宇宙機（シャトル）。元はと言えば、ベンチャースター社とロッキードマーチン社の往還船Ｘ－３３。一度は中止になったものの、スペースシャトルの老朽化と民間宇宙開発の活性化、そして往還船開発と月面再開発の分離があり、この機体はスペースＸ社の手で再開発され蘇った。

この翼が２００９年にデビューし、アメリカと世界の民間宇宙開発に限りない夢を与えた時、この男もまた正式なクルーとなった。

…別にいいんだ。俺の仕事はこれなのだから…

彼はシャトルの足元に座り込んだ。先ほどの兄弟からのメールには自分の投資してている大手証券会社の株券が紙切れになるかもしれない、などという愚痴のようなものだった。呆れのひとことである。奴なんかに金を貸すもんか。

彼は投資にも、この国の経済の不安定性にも、金のことに対することおおよそに興味は薄かった。政治にもそうであった。物心ついてこの方ひたすら空に対する憧ればかりであった。根っからのパイロット、軍人一筋。その性格も不器用で一本気その物であった。

しかし、それでいて部下、同僚思いな性格は、上司に冷遇されてもひとりでに多くの信頼を経てきた。こんな深夜にもかかわらず気まぐれに格納庫を歩き回るのもまことに彼らしかった。

「…また寝てないのね。そんなのでミッションが完了できるの？」

不意に女性の声がきこえた。

「まあな。兄貴んところが破産するだとか泣きつかれたからな。国（アメリカ）と世界の経済はちゃんとは戻ってないんだろ？　自爆だぜ自爆。」

「でも、あなたは結局兄さんを助けてやろうと思っている。そうでしょ？」

「…よくわかるな。奴は妻も高校生のガキもいるんだ。それに若くない。俺は独身だからいいぜ。今度のミッションで死んだら遺産ならやる、とでも言っておくか。」

「まったく縁起でもないこというのね。私がこの子見てるんだから。」彼女はシャトルのランディングギアをたたいた。…この女はこの機体の整備に携わっているのか。

「おまえは情報機器関係なんだろ？機体のことを偉そうに言えるのかよ？」男は軽く笑いながら言った。

「それがなかったらこの機体は飛べないじゃない。それに実際にこの子に指示を出すのはあなたなんだから。あなた、もうこの子の立派な父親ね。」

「よせよ。あとな、ミッションの時のあの通信担当、頭挿げ替えてくれねえだろうか。あのトロピウス聞き取りずらいんだよ。」

「それこそ私の範囲じゃないわ…」

そんな2人の世間話は深夜の格納庫（ハンガー）へと吸い込まれてゆく。そんな

声をよそに彼女（シャトル）は来月自分が翼を広げるであろう宇宙（そら）に、無限の星空に思いを寄せながら眠り続けていた…

この翼の眠りは深い。宇宙へ送る物資を積んだ民間機（Ａ－３３０）が着陸し、車両たちが走り回っても彼女（シャトル）はピクリとも動かなかった。

２０１２年　１０月１０日　エメリア陸地群　ソーラ大陸　国連軍基地管理棟の一部屋　１９３０時

…とうとう俺ものってきたな。パートナー、女の子かな？かわいいの希望だぜ…

ブレイブは一人心地だった。みんなと別れた直後、監視の兵に呼ばれ施設のこの管理棟…施設の中核をなす大規模な建物…にやってきたのだ。理由は聞かなかったが、その理由はなんとなくわかった。特別な能力がなくても、ブレイブお得意の洞察力をもってすれば分かった。

指定されたある１室でしばらく待っていると、サクラ司令がやってきた。

「あなたを呼んだのは…まあ１つ目は、あなたの辞令ですね。」彼女はブレイブの表情と心中を読み取ったらしい。

不必要なくらい。

「あなたは本日付で…あなたが望んだとおり…３０２中隊のバストーク・ホルスト大尉付きになったわ。あなたの能力は優秀だからと

くにいう事はないけど…まあ、いつものことながら…ここはとりあえずともエメリア自治協会防衛軍、軍隊です。今後もほかの娘と度を外したくだらない事はしすぎないように。いいわね？」

「へへっ…ありがとうございます！！！」ブレイブは嬉しそうに言った。「で、他はなんです、他に？」

「全くもう…」サクラがなかば呆れながら言った。「あなたの辞令とともに、大尉付きにもう一匹加わることになったの。元はロシア陸軍にいて、ロシアの今期の統合軍派遣部隊に加わったらしいです。能力は低くないらしいですが…やっぱり癖の強い…ようですね。ここにくるんだもの。」

「そんなのぜんぜんＯＫですよ！生意気な奴だったら俺がとっちめてやりますから！で、で、そ、その子は…その子、女の子…なんすか？」ブレイブの目がギラギラと輝いた。

サクラはまたも諦めたように首を振った「…女の子よ」。

「来ったあああぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

ブレイブが歓喜の叫びをあげ、飛び跳ねた。爆発した喜びで、彼の鼻穴と口からぱちぱち火の粉が噴出した。

サクラはまたもや首を振った。「そう興奮しないの。なんであれあなたの同僚なんだから。それに実質はあなたが年下よ。気の強い子らしいから、一番女の子を扱うのが得意なあなたに任せるだけです。あの２匹には無理だわ。重圧すぎるもの。それだけです。バカなことをして彼女と関係をこじらせないこと。いいわね？」

「わかってますわかってます！了解しました！！！いやもう…！！」

ブレイブのフサフサしっぽが喜びの本能でぶんぶん振れていた。

「もう…。入っていいわよ。」サクラは言った。

統合軍兵士2人に連れられ入ってきたのは…

青っぽいグレーに近い、すっきりとした体格。尻尾や足先はネイビーブルー。背中にパンタグラフのようなひし形模様。頭の上には青い髪飾り上のもの。そこから伸びる2つのもみあげ状の飾り。

彼女はグレイシア。ブレイブと同様、イーブイの進化形態の種族の1種である。

ブレイブの目が、美しいものを見るかのように彼女を見入っていた。だが、彼の恐ろしいほどに鋭い洞察力はこのグレイシアの目線や表情だけから、彼女の経歴や性格を読み取り始めていた。

…彼女が見せる2人の兵士への目線…こりゃあ…

……相当人間が嫌いだな。憎んでるくらいだ。きっと、許可があれば即座に殺すだろうな…

…あと…この…なんだか…

…生きることにさえ疲れ果てたっぽい表情。グレイシアってのはもう少し、こう上品なイメージがない訳でもないんだが…

…それがまったく、というくらい感じられない。現実に追い詰められ続けたっていう感じの…

……苦労人。そうだぜ……なにかは知らないけど……

…こいつのプライドの高さ、マジそうだ。……でも、……

またしてもブレイブの性格が、自身の洞察を邪魔した。

この気の強そうなツンデレ具合が……今まで見てきたどんなグレイシアよりもかわいい姿と…
…最高のテイスト……
……かわいい！！！！やべぇ！！！死ぬ！！！！君の目線に焼き殺されたい！！！！……

ブレイブのオーラはサクラにもわかってしまったのだろう。「…大丈夫？」
「…へっ？…へっ？…も、べ、別に問題ありません！！」ブレイブがあわてて言った。
彼女は、ブレイブの惚れたような顔を見るなり、フンと鼻を鳴らした
「そう…ならいいわ。彼女はテルル・ルナマリア・オフリート・アストラフスキー。階級は…たしか中尉でしたね？あなたと同じです。今後とも、仲良くやること。特にブレイブ。もう1回言っときますけど、くれぐれも騒動を起こさないんですよ。いい？」サクラが期待はしていない、というような口調でブレイブに念を押した。
「もちろんっすよ！やります。ありがとうございました！！」ブレイブがうれしそうに言った。
「テルル、こんな男で申し訳ないけど、頼むわね。居住地区まで彼が案内するから。」
「よおーっし！いくぜテルル！」ブレイブが元気に言った。
「は…はあ…うん…」テルルが戸惑いとあきれが重なったような返事をし、彼について行った。

施設からポケモンたちの居住区へ向かう道、施設内の車両が行き来する道路とは異なり、ここには街灯は1つか2つしかない。つまり人間や昼行性の動物にとっては、前がかなり見えづらい状況だ。

しかしポケモンは基本は夜になったら休む生物。文明としてやむを得ない夜間の活動にはこれくらいの明るさが心地よいくらいだった。もっともブレイブの明るさはテルルのほうに終始向けられていたが。

ブースターとグレイシア。良いような悪いようなコンビである。

「なあ、テルル」ブレイブが切り出した。

「な、なによ?」テルルが不意を突かれたように言った。

「テルルは何でこの部隊に来たんだよ?」「は?」「お前がここに配属になった理由だよ。」

テルルが首を振る。

「知らないわよ。私は単にロシアとかっていう人間の国の軍で働いてただけ。なんか別のところに配属になるとかいうからきたのにさ、国連とかっていうヘンな組織の軍隊に移されたのよ…」

「へぇー。なかなか変わった入り方だな。」ブレイブが言った。

「なによ。その言い方。そんなにここ、ロシアから遠い場所なわけ?」テルルが聞いた。

ブレイブは吹き出しそうになった。「何言ってんだよテルル。ここはエメリア、太平洋上の大陸だぜ。まあアメリカ領だけどな。俺はよく知らねえけど、ロシアってのはここからずいぶん遠いらしいぜ」

テルルの声や表情が動揺した「ちょっと待ってよ!それアンタの知ってることなの!?どうせ人間の立ち話で覚えたガセネタでしょ、ねえ!」

ブレイブは思わず笑った「どうした?俺だって世界地図は見たんだぜ。そんときゃ驚いたけどな。おまえ、地図見たことないんだな?まあたいていのポケモンは見たことないか。言っとくけどな、俺の言ってることは全部本物だ。」

テルルはしばらく呆然としていたが、すぐに表情を戻した。「あっそう。そうなのね。そんなに遠くに来ちゃったんだ…まあ…」

「ほら、あそこが居住地域だ。この部隊はここに駐屯してる、と言っても間違いねえな。テルル、これからよろしくな！」
「うん…でも！」テルルの声がにわかに厳しくなる。

「ん、どうした？」

「アンタはなれなれしすぎるのよ！私、男に名前で呼ばれるの相当嫌いだから。今後、特にアンタ、気安くファーストネームで呼ばないで！いい？」

「なーに言ってんだよ！もっと仲良くやろうぜ！な？俺たちは同じ部隊だろ？」ブレイブが言いながらテルルの前足に彼の右前脚をおいた。

「はあ？！誰があんたみたいな変体色男と仲良くするのよ。絶対やだ！！！」テルルは彼の前足を振り払った。その勢いが尋常ではない。それでブレイブは思いっきり転倒した。

ピトムニク達がでてきた。「ブレイブさあ、大丈夫？まあ、そんな顔してるんだから全然余裕そうだね。いつものことだけどさ。あ、そっちにいるのがテルルちゃんか。ワタシはこの中隊の第２小隊の

ピトムニク・ソレイユ・マルセイエーズ。まあ、こっちのおっさん隊長の副官ってとこかな。どれくらい一緒にやるかは知らないけどこれからよろしくね！」

「うん。こちらこそ、よろしく。」テルルが言った。流石ピトムニクはプラスルだけあって、しゃこうかのスキルをいつ身に着けたか。生まれつきの性格か。

「・・・で俺がこの中隊隊長、バストーク・ラルシア・ホルストてわけだ。進化してないのかって質問は真っ先にしとくか？ん？まあ、そういう子ではなさそうだな、とにかく頑張ってくれよ、な？」バストークが言った。テルルは自分と背丈がそう変わらない上司におどろきながら（中隊長はメリープだ。普通の倍くらいはあったが。）言葉を返した。「は…はい、よろしくお願いします。」

「で…おれがおっさん直属の部隊の一匹、ブレイブ・エスコーツ・クレイバーだ。テルルもそうなりそうだな。そしたら俺…」ブレイブが戻ってきた。

「ふーん。そういう名前なの。まあ、覚えておくわよ。」テルルがちらっとみてつんと言った。

「あっ…大丈夫だったね。まあ大丈夫なんだけど。」ピトムニクが言った。「テルルってさあ、男のこととか嫌いなの」

「うん。まあ、まあね…私自身男が好きじゃない…」テルルがもごもごといった。

「ま、まあ他にも俺の友人含めてもう2匹いるわけだ。…あいつどこほっつき歩いてんだか…それでそれでだ。もしテルルがここに来たら、だ…そしたら俺は…」ブレイブのフサフサ尻尾が喜びにまた揺れていた。

「何よ？いやらしい顔して。」テルルが聞いた

「もっちろん最初はキス！それから、テルルをハグしてやるぜ！！いやーもう今から…」

ぼがん!!!

テルルがブレイブの頭に殴りを入れた。
「きゅぅ…」彼はその場で気絶した。

「ね、ねえ…テルル、ブレイブに厳しく…ない?」ピトムニクが苦笑した。
「そ、そうかな?ま…まあね…うん。」テルルもそんな顔をしていった。

変化への動揺…新たなる仲間…（後書き）

マスドライバーっていうのは、電磁力などを利用して機体や荷物を宇宙へと送る方法の一つです。
ただし、地球での現実利用に関しては、超電導の関係や機体への衝撃を考えると実用化は難しいようです。

初めてＳＦっぽいメカが登場しましたね。あのシャトルのイメージはエースコンバット５にでてくるあのジャンプ台みたいなところから発進するシャトルとほぼ同様と解釈いただけると幸いです。

・・・で、もっと重要なことに、おそらくこの作品最強の問題児、テルルが初登場です！！

テルル：はあ？！何が問題児よ！！？？作者だって昔は相当問題児だったでしょうに！！

…すいません。彼女に関しては、既に肩書や今後は葵の中で決まってはいますが、厳しすぎず優しすぎず慎重に彼女のセリフとストーリーを検討しています。

…まあ、確かに自分も問題児でしたけど…

新たな絆、夜空と夕日に（前書き）

うーん？
リーヒュンとユイリィって、仲良くなってるの？
リーヒュン：それは葵が決める事。

新たな絆、夜空と夕日に

２０１２年　１０月１４日　エメリア　ソーラ大陸　国連軍施設のはずれの森　　００１０時

「うっ…やっぱ…ダメ、か…」リーヒュンがぐったりと倒れこんだ。もうこんなことを繰り返して何度目か…おとといの夜から彼は自分でトレーニングを重ねていた。自分の上達が遅いことに腹が立ったのかもしれない。または、ユイリィにごちゃごちゃと笑われるのが嫌だっただけかもしれない。

ただそれよりも……一昨日ブレイブに言われた時感じた…

…俺は何をしているんだ？……人の内心が見えるだけで喜んでていいのか？……

そもそも、フローラに何があったかを調べる…それが……

何かあったのなら、フローラを、妹を…助ける。

…そのためじゃないのか？

だからこそリーヒュンは、自分で、あの思念を集中するだけで敵を攻撃する“あれ”を練習しているのであった。確かに彼がもともとから使えるわざ…マジカルリーフだとか、ギガドレインだとか、ずつき、とっしん、はっぱカッター、ツルを使ったわざ全般…は格段に攻撃力、命中率ともに向上している。

だが、ツルを使った“あの”…攻撃法となると……

集中力を引き出し、そのエネルギーを攻撃として打ち出す前に、自分の中から吹き上がってくるあのおぞましい何の物とも知らぬ光景

を伴う未知のエネルギーに自分の体力を奪われるのである。いや、それは自分の物でもあり…この世界が持っているものなのかもしれない、ただし、それが真実かどうかは彼にはわからなかった。

だが、もうやるしかない。リーヒュンの思いはもうここにしかなかった。絶対にユイリィにはバカにさせない。ブレイブの誤解を解いてやるだけの能力をだすしかない。

何よりフローラ、唯一の妹…を見つけ、救うことができるんなら…自分の体をどう痛めつけようと、どうなろうと…

時間感覚などとっくに失せていた。ここには…まあ人間が住む地域ではないのだから仕方ないが…自然の沈黙、星空、夜行の虫たちの鳴き声…あとは、彼の特訓の音だけがかすかに聞こえてくるのみ…彼はたった一人で自分の中から湧き上がり、押し流そうとする世界中の、そして自身のエネルギーの濁流に逆らっていた。

ただ単に、自分のできることをするために…

どれだけ繰り返しただろうか、再び足元が解けていくようなおぞましい感覚を振り払い、フラフラとリーヒュンが立ち上がった時、彼の首元の葉っぱ付近をツルで優しくつつかれた。

「大丈夫？もうフラフラになってるよ！まあ、リーヒュンらしくていいよね、それはそれで。」ユイリィがいつの間にかやってきたようだった。彼女の勘がこれに気付いたのだろう。いや、勘というより仲間としての思いやりか、それとも彼女らしい興味本位か。

「はあ…今度は何を言いたいんだよ?…まったく、何日間か俺がこうしているのを誰かから聞いたのか?」まあ、そういうはずがないと思いながらリーヒュンは聞いた。
「うん。中隊長から。」ユイリィは意外な答えを出した。
「え?」確かにそういえばそうだった。さっき(とはいっても何時間も前のことだが)ここに来る直前、バストークと鉢合わせしたからだ。「練習でもすんのか?」「ま、まあ…」これぐらいのやり取りしかしてないのだが。
「で、あたしが心配になってきた、てわけ。だってほっといたらリーヒュン、自分の体バラバラにしちゃうかもしれないし!!あはは…そんなわけないよね!!でもしかねないよね!!!あはは…」彼女は笑いながら言った。
「結局またそれか。俺、自分で自殺なんかしないからさ…笑うだけだったらいてくれても余計に困るだけだよ…」
「違う、違う。それ(・・)もあるけど。でも…」ユイリィの声が少し落ちる。
「あたしが…なんか、こう…力になれるとしたら…少し教えようかな?…あたしが少しでも知っていること、コツをね。」
「教える…あれ(・・)を?」思いがけない言葉だった。
「……ホントに…いいのか?司令にばれたら…」
「いいのいいの。だって…リーヒュンがとっても大変そうにしてて さ、あたしは何の苦もなくできちゃう。普通のポケモンだったらとっくに気が狂ってるかもしれない。そんな中を、リーヒュンは…あたし以上に耐えてた…」
「うん、でも…さ、それが俺のすることなんだから…なんて言ったら…」
「…今まで、茶化してばっかで…ごめんね。だから…せめて…ね?」
「……」リーヒュンは迷った。どうすべきか?
ほんの少しだけ、長く感じられたが、考えて答えた。

「わかった。教えててくれる、かな？ごめん。こんなに役立たずで…」

そのとたんユイリィにいつもの笑顔とテンションが一気に戻った「やったやった！！そう来なくっちゃね！！よおぉーーし教えちゃうよ！！！うん！！！」

「うん。まず攻撃するときはね、自分じゃなくてね、相手のことを考えるの。集中しろ、って言われてさ、自分の感覚にばっか鋭くなってたんじゃ絶対嫌なことしか思い浮かばないよ。考えたことを体全体に…ズビュビュ～って感じかな？」

「そっか…相手、か……うん。」

「でね、エネルギーがたまってきたらそれを落とさないように、ていう感じでツルの先まで持ってって。で、あとは相手に向かってそれをびゅん！！！！てやるの。」

「落とさないように…うーん？どういう感じかなあ。俺分かんないや…」ユイリィの説明は普通の者が見たら子供っぽい擬音語が多くていまいち説明としてわかりづらい。

「そうそう！落とさないの！！つつつつ～ってね。」ユイリィが自分のツルを振り振りしながら言った。相変わらずの擬音語説明だ。リーヒュンにはなんとなくわかったが。彼のようにその内容を理解し“解釈”できるのであれば、彼女の言い分もなんとか理解できる。

「落とさない、落とさない…うん、よし、少しはわかった、かな…うーん？…いや…やっぱ何かがわからない…」リーヒュンは自分の

ツルを動かしながら、数学の公式の証明が理解できたようなできないような理系学生そっくりな顔をした。

「うん！！！わかったら猛練習あるのみよ！！！それしかないよ！！！でも…誰が相手しよう、かな…」ユイリィが元気よく言った。

「ああ…どうする？」

「…うん！！決まった。あたしがやってあげる！！！あはは…楽しみ！！！」ユイリィが目を輝かせた。

「おいおい！そんなんでいいのか！俺、ポケモン相手は…」

「いいのいいの！何事も経験してみないとわからないしね。うん。さあ来て来て！！」彼女はもうやる気十分である。それが本気なのか面白がりなのかはわからないが、彼女みたいな者をまさしく♪モ〇モリマ〇マルというのであろう。ポケモンでは珍しい。夜行性も入り始めた人間だってここまではできない。

ともかく、リーヒュンはやってみた。ユイリィに言われた通り、相手のこと…つまりは彼女のこと…を精いっぱい認識し、湧き上がってくる（ように感じる）エネルギーをツル祖先端に持って行った。そしてそれを、落とさないような慎重さで維持し、なおかつ力をかけながら、一気に彼女に飛び掛かり、渾身の力でエネルギーを…

とたんに彼のまわりに“あれ”のエネルギーの濁流が襲いかかった。

気が付くと、リーヒュンはやはり４本すべての脚から力が抜け草むらに倒れていた。

「うん！だいぶやり方をマスターしてきたみたいだね！あたし、そう思う。でも…うーん？何が足りないんだろ？…もう１回やってく

れるかな?」ユイリィが言った。

もう1回。

やっぱり吹っ飛ばされたが。ユイリィはどうにも強かった。「そっか。そういうことだったんだね!!!今わかったよ!!…ねえリーヒュン、攻撃する瞬間何が見える?」

「え?何って…いろいろ…」リーヒュンはすべて話した。これまで見た光景全て。

「…やっぱね…そういうのが見えちゃうのよね…」ユイリィが思い出すように言った。

「君も…経験した?」

「もっちろん!あたし達はね、自分の周りの世界…かなり広いかな、うん…でね、それの過去、未来、現在を認識できるの。それからエネルギーや思念を引っ張り出してね、攻撃できる。そういう能力のことなのよ。自分のことじゃないんだよね。もちろん人間世界はやばいものばっかだからさ、それを選択して考えてエネルギーを取り出さないと苦しくなっちゃうよ。ごめんね。ちょっと難しいかも…」

…そうか…自分の見た“あれ”はこの世界の映像、だったのか…

リーヒュンは初めて理解した。

そうして何度か練習するうちに2匹はしばらくの間ならツルを交えていられるぐらいには成長した。

「そうか…うーん?…とはいっても、ね…どうするんだ?やっぱり、こう、見えちゃってさ…よくないものが…」

彼の質問にユイリィは少し考えた…

それから、

「うん。じゃあ今度はあたしのほうから覗いてみたいな！！リーヒュンを苦しめているその原因がわかるかもよ！！うん。もしかしたら今までと違うものが見えるかもしれないけど、頑張って耐えてみて。あたしのほうから覗いてみるよ。」と言った。

「う、うん。俺はどう協力すればいい？」

「普通にさっきと同じようにしてくれればいいよ。いつも通り頼むね！！」

リーヒュンは先ほどまでと同様に攻撃をかけた…

…こ、これは？……

…あそこにいるベイリーフ…

…隣にいる黄色いやつ…ピカチュウ、か？…そして人間の少年…黄色いやつが尻尾でぶっ叩く…少年は無視…

そのベイリーフ、逃げ出した…ピカチュウ…追ってくるのか？……

河川敷、ベイリーフが落ちたのか？！…なんたってこんなに流れが激しい？…雨上がりかそれとも…

川の轟音が…泥水が…なにも…かも…を……ま…待て…こいつは…

…フローラ、フローラな…のか？…まさか…ま…さ…

…その轟音が…恐るべき感覚が…まるで接近してくる地下鉄のトンネルのように…圧迫…をもって彼の思考を…飲み込んで…いった。

……

「ち、ちょっと大丈夫!?」ユイリィが心配そうな声を上げた。先ほどまでの笑顔はかなり消え失せていた。
「ま、まあ…大したことは…」
「そんなわけないよ!!!ごめんね!ヘンなもの…見せちゃった…」
「はあ、はあ…あ……やっぱり…な…」
リーヒュンはわざの疲労と見たものの衝撃でふらふらであった。

重苦しい沈黙……

「…あれは、…やっぱり、フローラ…なんだ、…な…」
「妹の…フローラに…何があったか…見た?…」
「まさ…まさか…とは…思ったけど…」
「……」
「……」2匹は言葉の接ぎ穂を失った。

…やっぱり、そうだったか…彼は気落ちした。
自分の妹は…やはり…問題に巻き込まれて…

ユイリィが突如として、無理やり作ったような笑顔を浮かべた。あまりにも不自然だった。
「…も、もういいよね、今日はやめよう!!それがいいよ!うん!ここまでできるようになったらさ、もう大進歩ってことで…」
「…いや、頼む、もう1回だけは!」リーヒュンが一気に言った。
「ほ、ほんと?!できるの?そんなに無理していいの?」
「なんとかするよ!だから…やってほしい、自分でこのことに納得

したい！あいまいなままじゃ困るんだよ！そうでないと…この先とてもやってなんか…」

ユイリィは戸惑った。彼にこれ以上やらせていいのか？

…まあ、彼のことだから…何とか…なるよね！！

「…もう、ほんとに真っ直ぐなんだね！見習っちゃうな、うん。じゃあもう1回やろっか！！でもほんとに最後だよ！」ユイリィが取り直したように元気よく言った。

リーヒュンは再び自分の意識を集中させた。

ユイリィのことに思考を集め…

自分のツルに…そのエネルギーを貯めていき…

それを落とさないように…そして…

そのまま飛び掛かり…ツルのエネルギーをたたきつけた……あの恐るべき感覚にたった一人立ち向かい、絶望へと押し流そうとする人間世界の薄暗闇から流れるエネルギーに懸命に逆らった……

ただでさえ彼は苦しかった…あらゆる悪寒がいっしょくたに押し寄せてきたような気分だった。

…海岸に多くのポケモンが死んでいる…人間がおびえた目でそれを…

…でも、ここで諦めるわけには…彼は頭の葉っぱまで用いて力ずくで意識を彼女と触れ合っている部分に押しとめた。

絶対に倒れるもんか……

その青年のツルを自分のツルで押しとめながら、ユイリィはすさまじいエネルギーに直面していた。「そうそう！リーヒュン、まだまだ行けるよ！！！」

そうしてそのうちに今までとは違うものを感じ始めていた…

…すごい！彼は…こんなにも…苦しいのに…耐えている！！まだ、そして今も！！

…これなら……

あたしが見たこともない未来も一緒なら見られるかもしれない！！！…あたしを超えるかもしれない…もしかしたら……いや絶対に超えてくれるよ…

…うん！がんばれ！！！…

そして…そして…

ベイリーフとメガニウム、特に伝説でもない（まあ種族の弱小ぶり

は別として）ある二匹の意識の交錯が深夜の森にエネルギーとなって広がってゆく…

気が付いたとき、リーヒュンはやはり疲れ果てて倒れていた。たとえようのないめまいと吐き気はすさまじいほどであったが、同時に奇妙なほどさわやかな達成感に似たものも感じた。

…何とか、なったのか……少なくとも気絶したわけでは…ない…

ユイリィも疲労困憊、といった顔でしゃがみこんでいた。首元の花が揺れいるから相当息が切れているようだった。でも、その目は喜びに満ち溢れていた。

「やったあ！やったね！！！！リーヒュン、さすがよ！！！すごい、すごい成長だよ！！あの中を助けられずにこんなに早くくぐり抜けたんだよ！！…あたしだってね、これができるようになるまで一年以上はかけたんだからね。本当にすごいよ！！」彼の成功を彼女は本当に喜んでくれた。

「あ、ありがとう…だけど…俺もう少しできなきゃな…こんな一回やるたびにフラフラしてたら…」

「いいのいいの！もう今日はいいよ！すごいんだよこれだけで。うん。本当におめでとう！！」

「ユイリィ…君のほうは…大丈夫かよ？ごめんな…疲れたよな…」

「大丈夫、だいじょーぶ！リーヒュンが上手くいったからあたしは全然感じないよ！！だってあたしたちは仲間なんだから！！これか

らずっとやるかもしれないんだからね！！ほんっと、リーヒュンは子供っぽいよね！！！自分の体より思いが先なんだから！！それだからいいな♪うん。とにかく、これ食べる？きっと少しは楽になるとは思うよ。」

ユイリィはぐったりしゃがみこみながらも（表情は明るかったが）そういい、ツルを少しふると、近くの機から二個何やら果実を落とした。それをすっと引き寄せツルでつかんだ。彼女は自分の分とは逆のツルで彼に渡した。

オボン。疲労回復に効く、という噂だが繁殖力が、弱いため２０世紀には人間の持ち込んだバナナやマンゴーといった熱帯果実に多くが駆逐されてしまったというめずらしい物。

リーヒュンはそれを少しだけかじっただけで、それ以上の気力はわかなかった。ユイリィも大して食べることなく、彼の隣にひっくり返った。

少し草原上になったこの森の一部。空には満天の星。遠くには海がかすかに見える。人間に生物が居住可能なその多くの地域を照明で照らされるようになった世界では、ここまで夜空を美しくみられる地域は珍しい。

ユイリィが自分のツルで、夜空の一つの赤い星を指差した「あれはね、太陽光発電衛星。」

「タ、タイヨウ…エイセイ？」リーヒュンにはよく分からない。そもそも地球が宇宙に浮かぶ星だっていう人間の常識すら、普通のポケモンは知らないのだから。

「うん。兵隊さんが話してるのを聞いただけだけど。太陽って光をだしてるよね？人間たちは宇宙にそれをキャッチする機械を置いて

地球にそのエネルギーを送って電気にするんだって。」

…そう。２００５年ごろより、アメリカや欧州連合（ＥＵ）が実験施設の組み立てを開始した大型衛星と監視ステーションからなる宇宙で、世界で一番巨大な構造物。

人類が掴もうとしている新しいエネルギー源。

これが数十年後、本格的に運用されれば、原子炉２，３基分は電力をまかなえる。現在、アメリカとヨーロッパでシステムが２つ、４人のクルーが監視任務に就いている。

試験大型衛星から実際に電力を供給し始めたのは日本だ。もっとも、日本は２０１１年の震災以降、原発の増設が世論の抵抗を受けやすくなり、増加する電力需要に対しクリーンエネルギーシフトに耐え切れなくなっていたからであるが。

そんなことは普通のポケモンたちが知るはずもない。なにせ、世界は平面で神によって太陽と月が運行されていると多くは確信しているのだから。

「・・・であの海の向こうらへんがハイドルっていう陸地。エメリア４大陸の一つ、ね。あそこにもいろいろ電気を作る場所とか、食べ物を作る場所とかがあるみたい。」

「へえー。人間って・・・すごいんだな。俺たちが、勝てるわけ、ないね、そりゃ。」

「でも、あたしたちのほうがすごいんじゃない？」

「なんで？」

「だってさ、リーヒュンも見えたとおり、人間はもめごとばっかじゃん？環境問題も残ったままだし。人間同士いがみ合ってばかり…らしいよ。ポケモンたちは、結構分かり合えるものがあるよね？」

「まあ、あるといや、あるけど。確かに初見でも悪い感じはしないよな…」

「そうそう。まあ、そんなことしてるから負けっぱなしなんだけどね！！！でも、あたしたちは幸せなんだよね。だって、こうしてさ…」

「え？・・・どういうことさ？」

「こうやってあたしはリーヒュンっていう楽しいもの見られるからね！！ホント頑張ってる姿がもう最高に楽しい！！！あはははは…」

「ったく！ほめているのか、からかっているのか相変わらず君はわからないよ…」

相変わらずの2匹の関係。

「…今日は…ありがとう。リーヒュン…あたし、少しなめてたかもしれない…あそこまで頑張ってくれるなんて。」

「迷惑かけたのは…俺だよ…」

「うんん。今日初めて分かった…あたしたち…2匹でずっとやるんだって…今後は何があっても大丈夫。あたしもついてるから。無理しないで。ね？」

「ごめんな…気遣ってくれて…」

「あとさ…あたしのこと、名前で呼んでよ。ユイリィ、て。そのほうが仲良くなれるかも。」

「う、うん…ユイリィ。」

その直後、ユイリィのツルがリーヒュンの頭…葉っぱの覆っていない部分…をこつんとつついた。

「…ていうかさ、なあにしっとりしちゃってるのよ!!?まさか…」
「な、何言ってるんだよ?勝手な妄想するなって!!」リーヒュンが首の葉っぱまで熱くなりそうになった。
「あっ!顔赤い!!ほんとほんと!!あはは…でも、そんなわけないよね!!リーヒュンみたいな子供っぽい男、あたし困る…あはは!」ユイリィが思いっきり笑った。

2匹のやり取りが星と人工衛星、その他軌道上の施設の光からなる夜空に吸い込まれていった。

2012年　10月16日　エメリア　ソーラ大陸　国連軍施設
1100時

…ったくよお!この女、やばすぎる!
…かわいい以前に強すぎるぜ!!こりゃ…今までの女の子の中で最強に手ごわくて
…かわいい相手!!
うええ、見てるだけで食べちゃいたいなあ…

ブレイブの妄想。

…その直後。
「はあ?!何ワタシの顔見て止まっちゃってさあ!ブレイブ、アンタそれでも軍人?!」

テルルの猛烈なツッコミを浴びた。

「うっ・・・わりいわりい。だからその方法は勘弁してくれっての！！」

「絶対にいや！アンタが私を見るたびに1回づつふやそうか？！ん？」

「全くブレイブったら…ごめんねテルル。こんな男で。多少は手加減して…ね？」ピトムニクが半ばあきれたように言った。

「う…そりゃけがはさせたくないよ。でも…こんな色男にごちゃごちゃ言われたり、いちゃいちゃされたりしてよくみんな逃げないよね。」

「俺…けがしてもいい…」「ハイ、アンタは引っ込む！！」頭のフサフサを痛めながらも起き上がりかけたブレイブをテルルは再び殴ってしたに崩した。

「うーん？みんなもう慣れちゃったのよね。ブレイブに。だからテルルに対してももう少ししたら普通くらいになるんじゃない？」ピトムニクが言う。

「なら・・・いいんだけど。はあ…もう…中隊長。こいつを何とかできないんですか？」テルルはため息をついた。

「それは、俺の権限じゃねえからな。いやならあの人間連中にあたってくれよ。それから、あまりにひどいようなら俺が多少制裁を入れてもいいけどな。ピトム、いいだろ？」バストークが明かりのついた尻尾で兵士たちをしゃくりながら言った。

「ま、まあ、隊長の制裁、て大したことじゃないけど。そうね。」

「う、うん…でもさあ…こんなバカ変体男と一緒にやれなんてさ…あ～どうすんのよお。」テルルが諦めたように声を上げもみあげのような飾りをなでた。

ピトムニク達とテルルが行ってしまうと、バストークは前足でブレイブを引っ張り起こした。
「いい加減やめておけ。あのお嬢さんはお前みたいなやつが嫌いな性質(たち)だ。お前、そういうのはいつもわかるんだろ？」
「いてて…でも…だって…かわいいじゃないすか！！あそこまで美貌のグレイシアならメリープ程度のおっさんでもかわいいと思いませんか？」ブレイブはあきらめない。
「今、程度、て言いやがったな。まあなんでもいいが、お前みたいな変体ブースターに言われたかねえや。」バストークが少し笑いながら言った。
「はあ…でも…ああいう性格だから…マジよけいにかわいく見えます…」ブレイブの顔が赤くなった。
「…たく、もうやめろ。ほら、行くぞ」バストークが頭を軽くたたいた。

こちらはというと、なかなか厄介な事態になっていた。

この2日間、新入りのテルルも訓練に参加していた。新しい女の子がいて、それも相当にかわいい。ブレイブにとって嬉しいことこの上なかった。
その上、このテルルはそれなりに能力があった。処々の技の攻撃力、正確さかなり優秀で、経験の長いバストークの眼さえも丸くさせるほどであった。無論、この中隊長が仲間たちを娘、息子のように（彼は“部下”とは言わなかった。それにグラシデアは例外だ）かわいがっていることもあったが。

しかしそんなテルルの欠点はと言えば…
男が…特に人間だったが…が嫌いである、というより信用しないと

いう点だ。特に彼女と最も近い仲間であるはずのブレイブとの関係は格別問題であった。先ほど述べたとおり、普段からブレイブの具合を知っているピトムニクやグラシデアからすれば大したことがないようなことでも、テルルにとっては格別な苦痛であるようだった。

ただ、読んでいる皆さんが誤解してはいけないのは、ブレイブが単なるプレイボーイというわけでは全然ないという事だ。

例えば…

筋トレを（ポケモンにとって体力は必須だ）しているとき…

「へへっ…テルル、俺が乗ってやろうか？」

「は？！何言ってんのよ！！ブレイブに乗っかられるくらいだったらさあ、私なんか…」

そういう前に彼は彼女の背中に飛び乗っていたが。

「ね、ねえ、ちょっと！！！あんた何？！何のつもりよ？！」

「ん？トレーニングに決まってるだろ！」

そういった直後にはテルルに突き落とされたが。

「ああー、もう！！！こんな色男おんぶしちゃった！！やばい…」

テルルは背中を草むらにこすり付けた…

まあ、これもまた体で直接触れ合うという彼なりのスキンシップ（ちょっと子供っぽい表現だが）であった。それがテルルにとって大変嫌だった。殴られたのはその結果でしかない。

こんな調子だから困ってしまう。バストークですらこの状況に戸惑っていた。

「…なあ、ピトム。このままでいいのかよ？」
「う、うーん？テルルちゃんさあ…ブレイブ、とじゃねえ…」ピトムニクも少々困っているようだった。

テルルはブレイブより年上ではあったが彼女のブレイブに対する態度は親しみというより、バカなことをしている男子を見ている同じクラスの女子、といった程度だった。

その午後　１４００時

午後の訓練は弓術である。ポケモンたちの戦闘において、肉弾戦以外で主力となるのはいまだに弓と矢であるのだ。もっとも人間が歴史上、またはスポーツとして認識しているよりはるかに多いレパートリーを持っていた。毒薬付き、火薬付き、高貫通力、時限発火用、信号用…人間とは別に発展した文明らしい独特の使い方である。

ところで、ここでまた新しい連中が加わったことも忘れてはならない。アメリカ空軍航空騎兵隊で、韓国空軍やイギリスのＲＡＦ（王室空軍）日本の航空自衛隊にも派遣された経験のあるムクバード、ロックオン・ストランである。階級は大尉。
テルルとは異なり、エメリア自治協会国防軍の要請を受けてやってきたロックオンはバストークより若いにしろ、それなりの実戦経験者のようだった。バストークとの“軍人としての世間話”もよくなれていた。
「まあ、アンタみたいな空中の部隊がいると、うちのひこうタイプも安心して任せられそうだな。よろしく頼むぜ若いの。」
「こちらこそ頼みますぜ、隊長さん。何せ俺とて…」そこまで彼が言ってちらっとあたりを見ると…グラシデアと目線があった。

彼女はびっくりしたような眼をして目線をそらした。
この騎兵隊員は少し笑みを浮かべ「ずいぶんとかわいい部下に恵まれてようですね、おっさんは。」といった。
「おいおい何だよ。奴はな…」バストークが声を落とした。「俺の娘だ…」
ロックオンはちょっと驚いた表情をして、バストークとグラシデア、つまりメリープとモココを交互に見て鼻で笑った。「進化、先に越されて？」
「ふん。なんだっていいぜ。とにかく、娘に手出すな。それだけだ。」バストークはこのムクバードの表情をうかがうように言った。

今後、この関係が予想だにしない事態に発展することになるのだが今は省く。

彼は、今回は弓術訓練用の的を空から投げる役目を担う。もっとも、アメリカが問題ない、とすれば、このまま入隊する予定だったが。

　この訓練においても、もちろんブレイブは優秀な部類であった。しかしテルルのそれは、彼の予想をはるかに、いや全く予想外の物であった。
「よーしよし、見てろよテルル！！！かっこいいミサイルの撃ち落し方を見せてやるぜ！！」ブレイブが意気込む。テルルは相変わらず「どこがミサイルよ？単なる的のだけなのに。これでブレイブが失敗したらさ、私思いっきり笑ってやるわよ！」といった調子だ。
「おーし、落とすぜ。俺を狙うなよ！」ロックオンが上から言った。ブレイブたちはその的に向かって一斉に矢を放った…

誰かのが命中した。いや、単に命中しただけでない。ほかの矢を全部切り捨ててその矢だけが命中したのだ！

ブレイブはしばらくの間言葉がなかった「信じらんねえ…飛んでる矢を全部ぶち抜くなんてよ…誰だよやったのは？」

やったのはテルルであった。

ブレイブにどうだ、と言わんばかりのスマイルを投げつけるかのように放り投げた後彼女の喜びの声が上がった。

「やった、やった！！ピトム、グラシ、私の言った通りになったじゃない！！」

「すごいすごい！テルルっていろいろできるんだね！」ピトムニクもうれしそうだった。

「まあ…うん。それなりに色々とやったのよ昔。」

「この調子ならブレイブも引っ込みそうね！その調子よ！」グラシデアも加わった。

ブレイブも…「さっすがテルルちゃん！俺が見込んだだけあるぜ！ちょいとばっかりサインをもらわねえと…」

「フン、アンタには無料（ただ）じゃやらないわよ！まあ、１０ポケくらいならね…」テルルは得意げな表情をブレイブに向けた。

「へっ？あ、いやいや！俺なら２０ポケでも３０ポケでも金ならいくらでもつぎ込ん…」

彼がなおも食い下がるので、テルルのあれが炸裂しそうになった。

彼女の一発はブレイブの目の前、そのまま口づけできそうな位置ま

で来た。が、さすがはブレイブそんなことなど気にも留めず…
「おっ！テルルちゃん手にキスしてほしいと…」

バキッ…そのまま顔面を直撃した。「はあ！？何勘違いしてんのよ？！」
「きゅう・・・」ブレイブは気絶しかけながらもこう思った。
…て、テルルちゃんの一発！俺は今、最高に…

そんな表情を見て（そう見えた）ピトムニクがやれやれ、という顔をした
「もう、相手の性格を見てからやってよ。毎回これじゃ、さすがに困るよ…」
「へえ、この色男、相当だな」空から降りてきたロックオンが興味深げに言った。「まあ、もちろん俺はあそこのモココ…」
「はい？あなたもしかして…グラシデアのことが…」ピトムニクはびっくりした。
「いや…別に、だ…なんでもない。」
バストークが口いっぱいにクラボ（果実の1種。それなりに味が強く、スズメやハト、野生の小動物なども嫌がる）を詰め込まれたような顔をした。

はあ…どうなることやら…

その日の夕方　1720時

居住地域への帰り道。ブレイブやテルルたちはこのまま上がりだ。
ロックオンは諸都合で軍の施設へと向かった。（その際にグラシデ

アに「そんじゃ」と言わんばかりの目線を送った）バストークはますます不振がった「なあ、グラシデア。あいつといったい…」
「知らないわよ。」グラシデアが突き放した。「だいたいね、バストーク、あんたは私に対して干渉しすぎなのよ。もう17歳にもなってまだ8歳みたいに扱うのはいい加減やめてくれます?」
「おいおい、いつものことだけどよ、父親に対して“アンタ”かよ」バストークが諦め顔になった。
「そうよ。ワタシはバストークの部下であるけどさ、言っとくけど…」グラシデアの声が小さくなる「バストーク、アンタが父親だとは…ああ、もう。」
「なんでもいいけどな、あいつがお前に迫ってきたらな、はっきり…」
「それは自分で決めるよ。アンタの干渉することじゃない…」グラシデアがうんざりした表情を浮かべ、さっさと行ってしまった。

「ねえねえ!グラシ、早いよおー!」ピトムニクが慌ててついて行った。

「中隊長?」テルルがそっと聞いた「娘さんとは折り合いが…?」
「よく分かるな」バストークがモコモコの綿毛を全部すくめた「ちょっといろいろあってな、俺のことを昔っから…」
「大変ですね。」テルルが思案顔でいった。
「でもな、あいつは悪いやつじゃないですよ。それに中隊長、アンタは立派な上司っす。父親失格でも上司として認めてくれんだったらそれはそれでいいんじゃないですか?」ブレイブが明るく言った。
「まあな…俺もそれでいいとは…思ってるけどな…」バストークが寂しそうに笑った。
「それに女の子っていうのはな、男はおろか、女同士だって知らないこと考えてるんですよ。だろ?テルル。例えばさ…」

「またくだらない事でしょ？」
「違うにきまってるだろ！…例えば…こう…自分の周りとの立ち位置とかだな。でもその一方自分の意見と主張も置いておきたい！っていう思いもある。…まあはさまれてるんだな…」
「ま、まあ…そういうこともあるのよね…」
「それはな、悪い事じゃないぜ。そうやっていくからやがて大きくなったときプライドと公共性の折り合いがつくようになる。今のうちは空気を多少無視することも極めて大事なんだな。空気に従ってばっかだと、大人になった時自分の行く道がわからなくなる、そういうこった。まあ、男でもいえるけどな。」
「へえー、たまにはアンタもまともなこと言うのね。」テルルが言った。
「へへ…それにグラシデアはあんなにかわいいだろ。テルルと同じくらいに、な！それを生んだ中隊長の器量がよかったことです！」
ブレイブは顔を赤くした。
「ったく…俺をお前と一緒にすんな…」バストークが照れたように言った。
「結局それ？！」テルルが突っ込んだ。
ただ、こういいながらも彼女はブレイブの恐るべき洞察力に度肝を抜かれていた。

…それは私に言ってるの？…私の生い立ちと今の状況を見抜いて…

「あっ…ブレイブたちか！！お疲れーー！！」不意に女の子のような高い声がした。

リーヒュンとユイリィであった。この2匹、この所は別行程なのである。

「あれ?ブレイブと一緒にいるその子は?またどっかから引っ張ってきたのかよ?」リーヒュンがテルルを見た。

「たく!お前のことだから先読みしてるかと思ったけどなあ!!お前はこういう事に限っては最強に疎いからな。こいつは昨日から加わったテルル・アストラフスキーだ。かわいいだろ?何せ今まで俺が絡んできたグレイシアの中で最高の評価だったからな…うー、テルルちゃんのオーラが隣にいるだけで…」ブレイブの尻尾のフサフサがまた楽しそうに揺れている。

「ま、まあこいつのことは許してやってくれ。昔からだからさ。俺はリーヒュン・バイリング・グリーズ…多少は話を聞いてる?ブレイブから…」

「そうそう!こいつそうだぜ!こいつが巷で噂の“特殊能力”を持ったベイリーフ、世界に1兆いる人間とポケモンとその他動物の中で、一人か二人か…いや一匹か二匹しかいねえ変人、とこだ。まあ、俺らチビのころから友達だったけどな」

「いや…変人ではないけどさ。」リーヒュンがため息をついた。

テルルは彼の首の葉っぱや頭の葉っぱをしばらくじろじろと眺め…

「あっそう。そういう人なのねあんたは。まあ、よろしくね。」

「おいおい!俺と返事が違いすぎるぜ!!」ブレイブがわめいた。

「なによ!あんたと比べればこっちはなんだかパッとしない顔してるだけどはるかにまし(・・)なのよ!」

「テルル、はっきり言うなよな!」ブレイブがツッコミを入れた。

「はは…ブレイブもいいやつに恵まれたな。仲良くやれよ。」リーヒュンが苦笑しながら言った。

「で、あたしがこの変人ベイリーフの仲間、ユイリィ・ランタン・プレミドールってわけ!うん!パッと見普通のメガニウムには見えないでしょ!」ユイリィが元気よく言った。テルルは彼女のことを

まるで投資家が新規に投資するベンチャー企業の業務概要を眺めるような無表情で見た。

普通のメガニウムの倍に分かれた首の花びら、４本に分かれ、そのうち2本を彼女の趣味で束ねた雄蕊(おしべ)上の突起物。そして何より、里山の夏空のような澄んだ瞳。

……ずいぶん長く見ていたか。テルルの表情が“普通の女の子を相手にするときの”それになった。

「う、うん！よろしくね！こっちのちょっとパッとしない男のパートナーのなのね！大変じゃない？優柔不断そうで、さ？」

「こちらこそだよ！そうそう、そうだね！それだから困っちゃうよ！」ユイリィがにこにこしながら言った。

（…何言ってんだ。一昨日の夜と言ってること違うだろ。まあ、ユイリィのことだから言っていることが時々変化するのは自身もしってるだろうし、言っても笑われるだしな…）リーヒュンがそれを聞きながら半ばあきらめたように頭の葉っぱをツルでいじり、ブレイブにこう言った。

「テルルの性格がまだよく分からないや。どんな奴？」

「へへっ、リーヒュンはそんなこと俺に聞いていいのかよ？」ブレイブの顔が真っ赤になった。

「…怒っても、笑っても、殴られてもかわいいぜ！！特に殴るとき。うおお、あの前足の使い方が実にキュート！！」

「お、怒る？気が強いの？」

「そう、かわいいくらいにな、これで泣いてくれたらさあ…」

テルルがにやりとした。「なんですって？私が…」

「う、うん…」ブレイブがますます嬉しそうになった…

バキッ！！　　またしても。

「あはは！テルルって腕っぷし強いんだね！！！」ユイリィが笑った。
「そ、そうかな？」
「おいおい、こいつには悪気はないからさあ、少しお手柔らか目に、な？」リーヒュンが思わず言った。
「えっ？何言ってんのアンタ！？こんな男には容赦しないから！こいつの友達らしいけどさ、この変態少し抑えてくれない？」
「う、うん…」

はあ…また変な新入りが増えたなあ…

５匹の後ろに見えるたそがれの夕日のそばを“定時警戒便”に飛び立つアメリカ空軍のＦ／Ａ－２２Ａが２機通り過ぎて行った…

新たな絆、夜空と夕日に（後書き）

今までにない文の長さ…

読んでいる間に飽きちゃったらほんとごめんなさい…

またもＳＦ用語登場！

宇宙太陽光発電システム、アメリカ、ヨーロッパ諸国、日本が真面目に頑張っているようです。
特に日本、２０１１年の２月にこれの２０１６年からの商用化を目指すそうです。

何せ極薄のソーラーパネル張った探査機「イカロス」を打ち上げましたし。

この軽量なパネルの打ち上げと展開がこのシステムには不可欠なそうです。

それに原発問題を日本で起こしてしまい、原発に対する不安感が高まりがちな当事国ではこの技術の将来性がますます期待されますね。
葵もかなり期待。

…ていうか、ガン〇ム００ですかねえ？それ。

それに、また登場人物（ポケモン？）が増えちゃった…

ロックオン、グラシデアと…？

ロックオン：言ってたまるか！！

…すいません。

なんか無責任に増えすぎ…

テルル：今後も増えるの？

…やばいくらい増えていきます。各々のストーリー書くの、地獄になりそうだ…

異変・絆の陰で…（前書き）

昨日に続けて連続投稿です。

ユイリィ：早くない？学校行ってんの？

…もちろん。休講があったので、９０分余計に書けました。

なお最初に注意しておきますと、
この第１０話でちょっと前半でやばいシーンが連続するかも、です。
これを読みながら食事中の人、くれぐれも注意してください。

きついシーンが苦手な方。本当にごめんなさい。でも、物語を進めていく上でどうしてもはずせなかったんです…

ホントにすいません…

そういう方はこの第１０話をパスしていただくか、前半部分の早送りをお願いします。右のカーソルをマウスで押して後半まで進んでください…

異変・絆の陰で…

標準時刻２０１２年１０月１７日　太平洋上空４５０ｋｍ　アルファ級宇宙ステーション国際共同施設「フリーダム」　０１００時

フロリダから交代のクルーと空調電源の修理品を運んできたスペースＸ社製の宇宙船ドラゴン級有人補給船がエアロックのドッキングした。

「お疲れさん。今日からは自分がこの施設の責任者になるからな。よろしく。」新しくやってきた施設の責任者が言った。「それと、……（前任者の名前）と君の代わりに彼が新しくクルーとなる。宇宙での滞在は初めてらしい。みんなもいろいろと助けてやってくれ。」

「よろしくお願いします」新入りが緊張したように言った。

「何かたくなってんだ。そんなにビビってたんじゃあ宇宙じゃやっていけないぜ?」交代のクルーが新入りの肩をポンとたたいた。

「アンタだってそうだったじゃない。おととしだっけ。アンタが新入りだったとき。」前任の責任者が彼を咎めた。

「え…はは……ん?…あの…すいません?あの海は…」新入りがちょっとキューポラ（観測用の窓）を除いて言った。

「どうした」新責任者ものぞいた。

夜のハワイ沖、ホノルルなどの部分が太平洋上に明るく輝いている…

そのわずかに南…

何もないはずのところに奇妙な海ほたるのような青白い光が…

現地時間２０１２年１０月１６日　アメリカ　ハワイ州　オアフ島
０６２０時

ホノルルはハワイの島々で最大の島、オアフ島で最大かつハワイ州で最大の都市である。一大リゾート都市でもあるこの街でも最も有名な海岸として知られるワイキキ。アメリカ、カナダといった北米、南米やニュージー単度、オーストラリアなどオセアニアだけでなく、中国、韓国、台湾、日本、シンガポール、マレーシア、タイ等のアジア・太平洋地域の人々にとっても有名な観光地であり、人気のオアシス。
その中でも高級宿泊施設、「ヒルトン・ハワイアン・ビレッジ」、アラワイ通りに面した一大スパ・リゾートホテルから直接行ける砂浜。
まだ夜が明けて間もない。海水浴やサーフィンを楽しむ人たちもまだ薄暗闇と朝焼けの陰に隠されている。水平線上ぎりぎりには国連の「人類居住地域拡大開発計画」で去年完成したメガフロート群「ソアリング２」の都市の明かりがまだ輝いている。

１９９１年、冷戦が終結し、国際問題という物が、地球人類全般の問題として認識され始めたころ、環境、人口問題という物がその代表的なものとなった。

「今や南の途上国（読んでいる皆さんが偏見を持たぬよう慎重に注釈しておくが、現在、すなわち２０１０年代の世界においてこのよ

うな呼称は死後と化しているのは明らかだ。今や日本以外の極東や中東、東南アジアの国々には欧米のいわゆる“先進国”並みか負けない経済的、政治的影響力を持つ国々は多くある）の人口爆発は危険なレベルに達している。このままでは次の世紀末（２１世紀のこと）までには、すべての耕作可能な地帯は破壊され、地球の大半の原生林は失われ、原油、石炭、水などのエネルギーは全て枯渇し、人類とすべてに地球自然界は生存が危ぶまれる状況となる。この破局を回避するには地球総面積の７割を占める海上、及び宇宙に人類の新たなる居住地、耕作地、エネルギー源を開発し、また地球内でいまだにはびこる野蛮で攻撃的な文明論（これが何を示すかは最初から読んでいただけばすぐにわかる）を排除すべきである。さもなくば、来世紀の人類と地球自然界には死と破局が待つのみ。」

…という内部の思想のもとその年の総会でこの、“地球持続のための海上、宇宙開発計画”は可決されたのである。結果としてこのハワイ沖やメキシコ湾、地中海アフリカ側沿岸には、数十基からなるメガフロート群が建造され、現在アフリカなどをはじめ、延べ１億人の人々が移民、居住している。商業、工業地域には、ヨーロッパ、アメリカやアジア新興国の企業やプロジェクトが開発に参入し、大型原発や宇宙太陽光受信アンテナ、太平洋送電網（アメリカ、カナダ、メキシコ、チリ、ペルー、ニュージーランド、オーストラリア、ベトナム、タイ、マレーシアが参加）、メタンハイドレードやレアメタル、原油の海底採掘、工場の進出が盛んである。

しかし、この計画の重大な不備は、“移民先、移民者、文化摩擦、経済摩擦”といった予知が可能な問題であった。いくら難民といえど、国連の判断だけで主権国家の国民を移住させることは国家主権の原則上できない。最初のころはたびたび相手政府が反対し、移民

は難航したが、移民者たちの自らの生活改善への希望によって“現地に似た”環境を維持することで、なんとか移民に漕ぎ付く状況が続いていた。この状況が少しでも改善するのは新国際連合発足後である。

さらには、メガフロートが完成したことによる、沿岸産業の空洞化も懸念されている。この地域での企業活動の責任問題もはっきりとは決まってはいない。極めつけは、貧困から抜け出せぬ居住者の一部が沿岸国に海賊同然の略奪行動に出たり、沿岸国に対し海上封鎖など暴動に近いデモ行動や沿岸警備隊との衝突が発生したりしているという治安上の問題だ。特にこの問題は、今後当面は続くであろう。なぜなら、メガフロートは実質的に沿岸国の領土であり、治安維持を担当するのは沿岸国軍か国連統合軍であり、その価値観、文化、生活の違いから摩擦・不満が生じるのは当然であるからである。

さて、前置きは長くなったがそんなものが見えるオアシスのビーチである若者の集団が海水浴を楽しんでいる。

不意にひとりが波打ち際で何かをふんだ。ゴム状でにゅるん、とした感じだった。彼が妙に違和感を覚え足元を見た…

「お、おい・・・」

「どうした？なんだよこれ？」

朝日の影が黒く照らし出すそれ。彼らは思いがけぬ嫌な恐怖を感じながら目を近づけた…

青いからだ。ぎざぎざの後ろにくっついた丸いボール状のしっぽ。

長い耳…

マリルリ。ポケモンである…

もう息はない……が……なんという……

…おそろしい…

胴体が炸裂寸前の水風船のように膨張し、パンパンになっている…

「！！！！！！！！」

彼らは全員が逃げ出した…

ビーチの波打ち際あちらこちらにそんなものが転がっているとは気づかず…

朝０９００時。まばゆいばかりの快晴にもかかわらず、ビーチは警察と軍に封鎖されていた。防護服を着た軍関係者が、パンパンに膨れ上がったポケモン達の死骸を回収し収容していた。

海軍は付近に展開中の空母「ロナルド・レーガン」から哨戒機Ｅ－２Ｃを発進させ、周辺海域の調査を行った。さらに配備されたばかりのフリーダム級沿海域戦闘艦で周辺海域に拡散した死骸を収容した。また、調査衛星で周辺海域の放射線量、気体の濃度などを詳細にモニタリングしたが、異常は何一つ見られなかった。

結果としてその日の夕方までに収容した遺体は１２匹。その司法解剖の結果は関係者を愕然とさせた。
胴体が腫れ上がっていたのは溺死ではない。今までの生き物で見たことのない全身および大規模な内部からの大出血性ショックと失血死。原因はもちろん不明、それしか言えなかった。
今回の件は政府、国防省にも連絡が入り、直ちに精密な調査を開始するよう命じられた。

このニュースに関しては昼の時点ではあまりは話題にはならなかった。人間やその他の海洋動物に異常がなかったためである。むしろ現在の社会情勢を考えれば、うかつに詳細を公表して不安をあおるより、ある程度の情報ですませたほうが影響が小さい、という事になり、これという詳細な公表離されなかったのであった。
インターネット空間上でも、個人のブログや交流サイトに一部のみで好事家のおしゃべりにしかなってはいなかった。

もう一つ起こっていたことが判明するまでは…

２０１２年１０月１７日　フランス南東部　モナコ　０５４５時

モナコはフランス南東部、コード・ダジュールという美しい地中海

の海岸地帯に位置する小規模な都市国家、地中海に面したニースやアンディーブに匹敵するリゾート地帯。フランスをはじめとするヨーロッパの代表的な保養地で、カジノや観光産業が盛ん。多くの欧州富裕層の財が集まり、地中海側としては珍しく、高層ホテルやタワーマンションがビーチ付近にまで作られている。

その都市国家の一角、港湾地区であるフォンヴェイユ区の波止場…

「おいおい！今から出発するからそう焦るなって！」こんな朝早くから、ある金持ち夫婦が仲良くプレジャーボートでクルージングの出発するようだ…

「まったくもう！あなたって人は準備が遅いんだから！」

「待ってろってもう…」旦那のほうが笑いながら船のエンジンをスタートさせ、ボートを止めているもやいを解こうと向かった…

…彼がたまたま水面見て、違和感を覚えるのにそう時間はかからなかった。

…まだ朝焼けでもないのに…

何だ！？この赤黒い水面は？！

奇妙な悪寒を覚えた。こ、これは…

いやな予感に震えながら彼が自分のボートのふちを見た…

赤黒い液体を吹き出しながら漂う多くの何か……これは……
…一番近く、彼の目の前を漂うのは……
…ポケモンの…フタチマルの…死んでいる…その上にはカモメがこちらを咎めるように見つめている…
そしてその向こうには…ペラップ、オオタチ、キルリア、エネコロロ…の赤黒い液を吹き出す…

…無残な光景……

「！！！！！！！！！！！！！」男のすべての毛が戦慄に逆立った。

「だ・・・だれか！だれかきてくれ！！！！」」男は驚く妻を置き去りにし波止場を走って行った…

朝９時。港湾一帯の沿岸の道路は警察車両、フランス軍特殊部隊の車両、国連の車両、報道関係者の車両で物々しい気配だった。多くの沿岸の建物や商店、高層ホテルの窓から観光客や居住者たちが

それを見つめていた。既に沿岸の道路は警察と当局によって閉鎖され、多くの観光バスや車両が足止めを食らった。

フランス政府、及びモナコ政府は、この小規模ながらきわめて異様な光景を作り出したこの事態を“未知の細菌テロ攻撃”の可能性も視野にいれた緊急事態を発令しかけたが、このご時世、そんなことをすれば市場や世論はパニックである。結局別の方法を用いて正午までコートダジュール地域の空港や港湾に警戒態勢を取り、空港周辺の民間航空路（エアウェイ）への飛行を監視した。さらに沿岸を走るすべての道路を検問し、沿岸のすべての産業、商業活動に対し１２時まで警察の警戒強化を行い、沿岸の市民に対して、正午まで外出の際に十分不審な事態に注意するよう呼びかけた。

国連統合軍とフランス軍のＮＢＣ兵器対策部隊は岸壁に流れ着いた死骸を防護服を着た隊員を使って一匹ずつ引き上げ、警察と分担して除染処理を施した車両に移した。麻薬や細菌が沿岸に残ってないか。探査装置、シェパード犬、果てには放射線測定器（サーベイメータ）まで投入した。

警察の艦船とフランス海軍のフリゲート艦ラファイエット級の１隻「ゲプラット」は、沖のほうから豪華客船や地中海の貨物船をかきわけ、多くの小型船が停泊する沿岸の隅々まで捜索し、海上にはぐれたように漂う死骸を一匹残らず収容し、彼らの運んでいた荷物（多くの船にぶつかって多くはがれきと化していたが）を拾い集めた。

さらに上空からはフランス海軍のヘリ、ＮＦＨ－９０と国連軍のヘリ、ＨＨ－６０がモナコやコートダジュール沿岸を飛び回り、残った死骸や不審な兆候がないかを調査した。

果てにはフランス軍のラファールや国連空軍のＦ－１６、イタリア空軍のユーロファイター・タイフーン２０００も加わり、地中海の北西地域を中心に警戒に当たった。この行動に対し、領空侵入を警

戒したマルタ側が警戒機をだし、一時的に緊張状態になった。

　このポケモンたちの司法解剖を行った関係者は、ハワイの時と同様、戦慄した。こんな人類に対する新たな脅威のようなものに直面してそういう“普通の”連想ができる人間は学者でも医者でもまずいない。ただし、その詳細な司法解剖の結果は、その症状があまりにも特異かつ、醜悪であること、そして世論の不安や恐怖をあおりかねないとして、彼らの死因は急性の心臓ショック死であると公表された。

その本当の死因は…名付けようがなかった。こんなに突発的にに大量出血するなんて……病名も……名付けたくもない。そう多くの関係者が思った。

が、どれほど調査しても、神経ガスや病原菌、未知のウイルス、放射線、動物や人間の異常、近海で水揚げされた魚介類でもの調査でも、いかなる異常な反応が出てこなかった。

結局この“警戒”は予定通り正午で打ち切りとなり、町は普段の活気に満ち溢れた。人々も、高々ポケモンの不審死くらいとしてあらかたが気に留めなかった。

一方、朝のハワイの一件と加えて“謎のポケモン大量死”と名付けられ、インターネット上では様々なうわさやデマが飛び交った。ハワイの場合は沖合の原発から放射性物質が漏出したのだという何と

も奇妙な説が出現し、そこの発電所を管理するドイツのＲＷＥ社の原子力部門には根拠のない抗議が殺到した。まさに時代を映すデマである。さらにフランスの件では、環境団体が魚介類を勝手に採取するポケモンに対し化学兵器を使用したというデマがながれ、それを見たという動画や目撃証言が無秩序に世界中から投稿された。

この奇妙な事態に対し、ＩＡＥＡとＷＨＯ（世界保健機関）がそれぞれ見解をだし、放射能流出はいずれでも確認されてはいない、新種のウイルス反応、毒性物質の反応はいずれでも見られないとしたが、インターネット上のデマや噂が消えるにはまだ時間がかかりそうだった…

いずれにせよ、このことがベルギー・ブリュッセルのエメリア自治協会に伝わるまでまだ時間があるだろう…

ポケモンの文明では情報伝達速度は人間の中世ぐらいだから…

２０１２年１０月３０日　エメリア陸地群　ソーラ大陸　国連軍施設　１３００時

「ジッチクンレン？」ブレイブのフサフサ尻尾がぴくっと動いた。
“ジッチ”じゃなくて、“ジッシ”。アンタそれでも２０歳？」

テルルが吹き出した。
リーヒュンはそれを聞いた途端首の葉っぱがひっくり返りそうになった。「実施、ですか…」
あの猛練習からはや2週間以上。彼の能力はまだまだ難しいとはいえだいぶ向上していた。それは練習のおかげでもあったし、リーヒュンの思いがあったからかもしれない。ユイリィがこれまで以上に親しく（？）してくれるからかもしれない。
ただ、彼がユイリィを親しく思っているかと言えば、まだ微妙な情勢だったが。

一方、ブレイブとテルルはと言えば、あんまり良好とは言えなかった。何しろテルルの心情としては、ブレイブのあの行動・言動になれることは相当に難しいものだったからである。ブレイブの法自体はテルルと一緒にいられるというだけでかなり嬉しそうだった。何せ彼にして、彼女は今までで一番かわいいとまで言うほどになったから。

これは、河川突破訓練中の時だ。このときは、リーヒュン達も一緒だった。
「すげえ、すごいぜ、テルルちゃん！！」ブレイブが声を上げた。その勢いでグラシデアを首の部分に乗せたリーヒュンに水が思いっきりかかった。
「あ？なんか見えたのかブレイブ？」「どうせまた…」グラシデアは呆れたように首を振った。
「なんだよ？気づかねえのか？お前は相変わらず女の子に鈍感だな。」「だから、テルルに何があるんだよ？」
「あの水の中でさえる体の躍動感！！すげぇぇぇ！これぞ兵隊！いや女の子！！！」ブレイブの体温が一瞬上がったらしく周辺の水が少し上がったような気がした。リーヒュンとグラシデアは瞬時に冷めた。「はあ…全く…」「ったく最低ね。」

「あーあ。またブレイブったらテルルのほうに…」首の部分にピトムニクとバストークを乗っけたユイリィが言った。
「でも、ブレイブはあんなんでよく深みに落ちないよね。まあテルルちゃんもユイリィもそうだけど。」ピトムニクがバストークと一緒に目標にでんげきはを打ち込みながら言う。「まあ、男っていうのはさ、好きな女の子に対する執念となるとものすごい勘を発動させるからな」バストークが得意げに言った。
「そうそう！中隊長もそうだったんですね」ピトムニクが楽しそうな顔をした。ユイリィも笑顔で話をリーヒュンに振った。「まあ、あたしはリーヒュンの行くとこやるとこぜーんぶわかってるけどね！」
「それはさ、単にユイリィが勘が聞くだけ…だよな？」
「うん！！あとね、大事なこと忘れてるよ！！」ユイリィが嬉しそうにリーヒュンを見た。
「え？他にもあるの？」
「ユイリィの言う事だからさ、すぐにわかるでしょ。」グラシデアが言った。
答えは…「だってリーヒュンがわかりやすいんだもん！！これしかないよ！うん！」
「やっぱり…そういう話に収束する…」彼は首を振った。

ユイリィ達は得意の“先読み”で急な流れの河川の中に深みを見つけ、自分たちの４本足のどれをつければいいか把握し、どんどん前へと進んでゆく。しかしブレイブは、テルルを追いかけて、流れを問わずザブザブと突進してゆく。それにしてもテルルの水泳能力は群を抜いていた。グレイシアにも関わらず、彼女は水泳選手、いやシャワーズ以上のスピードでぐいぐいと進んでいった。ブレイブはその後ろからテルルに飛びついた。
「テルルちゃんやっぱ最高、最強だぜ！水の中でテルルの個性はさらにさえて…」

「はあ?!いきなり何の話?」
「テルル、どこで習ったんだよ?」「いや…まあ…いろいろ…」テルルの顔が少し固まる。ブレイブはその表情からすぐに感づいたらしい。「そっか。そうなんだな。お前のおふくろがくれたんだな。大事にしろよ。」「う、うん…」
どうやらこの色男の勘は恐るべきものらしい。テルルはおの女の子への直観に強さに対する諦めと同情に対する感謝が同時にわいてきた

…そう…

いろいろと…彼女の…生い立ち…。

その時…

テルルの後ろ脚が深みにはまった。

「んんっ!」「おいテルル!!!」ブレイブはブースター特有の短足気味の前足で何とかテルルの前足をつかみ、自分側の大きい足場に渾身の力で彼女の体を引っ張り上げた。

「ばーか!!なにやってるんだよもう!お前死ぬ気かよ?!」「ご・・ごめん」

…この時、テルルとブレイブが初めてまともに協力した。
いや、助け合った、という表現が妥当である。

「…ありがとう…ブレイブ…」テルルがもごもごと言った。
「まったく！テルルは大事なところでよ……集中力欠いて…」せっかく上手くいったと思ったが…

ブレイブは掴んだままのテルルの前足を見つめ……

…表情が一変した。

「うおおお！て、て、テルルちゃんの腕つかんじゃった！！やったぜえぇぇ！！テルルちゃんのハートにこのままとつげーーき！！！」
「えっ？なに？なにすんのよ！？」
ブレイブがそのままテルルの前足向かって口を近づけ……

バキィィ！！…ザブン！！！テルルがその前にブレイブの頭のフサフサを掴み、渾身の力で彼の頭を水に突っ込んだ。
「ごぶふっ！？」

「はあ?!なにすんのよこの変態!!!あんたの狙いは結局これ!?ああーもうマジうざい!!こんな事なら自力で泳げばよかった!!!頭冷やしなさいこのバカ!!!」

ブレイブは水に突っ込まれて鼻と口から思いっきりむせた。
まあ、頭を掴まれて、半分くらいうれしかったが。

…うおおお!テルルに掴まれてる!しかも水ン中!やばい、最高だ!!!!…

上から見ていたロックオンがテルルに聞いた。「おいおいお嬢ちゃん。変態色男にはつかむのは逆効果だぜ。突き放して沈めちゃえ。」
「は・・ハイ!そうしますこんな男!!」テルルはなぜこの男がこんなに詳しいのか怪しみながらもブレイブを水に蹴り飛ばした。

まあこんな調子の連続ではある。とはいえ今の例を見たとおり、全く連携が取れないわけではなかった。
どんなやばい行動をとったとしても、ブレイブはテルルのことを仲間として認めている。テルルもそれは薄々わかっていた。テルルが認めたいとは別の話だが。

ともあれ、リーヒュンとユイリィ、テルルとブレイブ、2つのペアはお互いなりに精いっぱい奮闘したわけだ。こうしていよいよ統合軍の監視下で実施訓練を行う運びになったのである。

「…という事で今回の概要を説明します。他人に気を取られず真剣に聞くこと。」サクラ司令が始める。リーヒュンはちょっとばかり固くなった。ユイリィはそんな彼を見て前足で彼を小突いて笑った。ブレイブはテルルを窺(うかが)いながら、前足を掴むチャンスを狙っている。テルルは彼のしぐさを警戒し、前足が接近するたびに打ち払った。

「…今回の目的地は、ソーラ地域のプラウス州の南部フォンテーヌ地区。ここ、パラコン州の隣ね。まあ、この州は大きいけど。そこのフォンテーヌ地区は、隣のプラージュ地区と最近なぜか折り合いが悪くて…」

プラウス州はソーラの三州のうち、東側、つまり南米と向き合う州。フォンテーヌとプラージュは南北の行政ブロックである。

「そこで近々、軍事衝突があるかもしれない、という情報が入っています。プラージュがわの侵攻。その実態を調査するのがそれぞれの任務…ね。」

「しつもん！お互いおんなじことをするんですか？」ブレイブが聞く。

「そうよ。」サクラはあっさりといった。「この地区はエメリアでも広大なほうです。2匹でやるより4匹でやったほうがいいでしょ。リーヒュン達は東、ブレイブたちは西、それぞれしっかり頼むわね。期間は今日から4日。中継点までは国連軍が車両で移動させてくれます。そこからスタートね。何をすべきかは…あなたたちの能力が

導いてくれるでしょう…」
「すいません…国連軍は今回の件には介入しないんですか？」リーヒュンが聞く。
「ええ…」サクラが戸惑った声を上げる。「なぜか・・・出たがらないのです。ポケモンたちの騒乱は自分たちで解決しろ、そういうことみたいね…」
「はあ…」彼は頷きながらも少々納得がいかない。

…ポケモン文明が荒れ放題で困っているのは人間じゃないのか？…

「あと…」司令が言った。「バストークたち３０２中隊は予定通りのポイントで警戒任務について。当たり前だけど、万が一の場合は実力行使もＯＫよ。」
「了解しましたぜ司令。今回も全員生存でやらせていただきます。」バストークが妙に虚勢張る様な声を出した。
「久しぶりに出陣ですね！私も期待してまーす！」ピトムニクも元気よく言った。

「わーいやったやった！リーヒュンと3泊4日！これは最高の旅になりそうだね！！うん。毎日よろしくね！！」ユイリィは首の花をぴらぴらさせながら嬉しそうな声を上げた。
「うん。よろしく頼むよ…（はあ、彼女と4日も？）」

一方のブレイブのほうもテンションが上がったようだ。という事はテルルのテンションは2乗に反比例して下がるわけだが。
「すげえ！！4泊！！よろしくなテルルちゃん！！ていうか俺が

いろいろと仲良くしてやるからな！！覚悟しろよ！！…て冗談だよ！普通にやる。」ブレイブはフサフサ尻尾を本能で振りながら笑顔で言った。

「ま、まあ…ね。それに3泊…っでも！ブレイブがまたおかしなことをしたら今度はアンタの顔面マジで殴りにかかるからね！いい？！（ああ～もう！絶対そんなわけないじゃん！どうするのよお～）」テルルは諦めたように、絶望したように頭飾りから伸びるもみあげ状のものをなでた。

その3時間後。面々は出発のポイントに国連軍の4輪装甲車M９９８ハンビーで移動していた。流石に2時間近く硬いサスペンションの装甲車のしかも固いシートにいるのは相当な苦痛だったが。この手の車両のサスペンション（タイヤの衝撃を吸収するきわめて基本的な自動車部品）は、踏破性、耐被弾性を考慮してかなり固めに作られているし、シートのほうも物資や重い火器を置くことを考慮し、耐久性を優先したつくりをしているのだ。

各員の荷物のチェック。基本的には国連統合軍からの支給品である。食料、治療品、携帯無線機、あと何かの発信機と測定器を体に付けられた。これは自分たちの体の状態を常時監視するものらしい。いずれにせよ、細かい持ち物一式の話はストーリーとあまり関係がないので省略する。彼らが普段こんなものを使うことはめったにないからだ。

…俺たちは実験品か…リーヒュンは装備を無理やり人間に着けられながら思った。

ユイリィやピトムニクは食料に関してグダグダと文句を言っていた。
「こんなんじゃ2日生きていられないよ！あたしがいろいろ調達してあげるから！！すんごい期待していいから！うん！」
「え？どうやって？」
「まかせて！あたしの天才的料理方法！」
「まあ、期待しとくよ…」

ユイリィ、料理の腕は未知数だが…いい予感はしない…
…大丈夫なのか？

「おっ。つーことはさ、俺テルルちゃんの手料理食えるってことか！！やべやべやべぇ！！！」ブレイブがますます嬉しそうになった。
「はあ？！誰がアンタなんかに食べさせるのよ？！自分で作って食べれば？！」テルルはあっさり拒絶した。

「おら、そんなこと言ってねえでもう時間だ、しっかり行って来いよ！」不意に担当の兵士が声をかけた。

ピトムニクやバストークたちは所定の警戒位置へ、リーヒュン達は州の東側へ、ブレイブたちは州の西側から調査行動に出発する。

サクラはそんな一行を見送りながら、こう思った。
……もしかしたら自分の予想は間違っているかもしれない。でも、あんな一行なら何があってもきっと乗り越えてくれるはず……
彼女は彼らの無事を祈らずにはいられなかった。

「司令？あの連中、無事に帰ってこれますかね？」担当の士官（階級は少佐）に声をかけられた。
「ええ…おそらくは…」

４匹は地図を見ながら地図上に示されている街道の部分にまで到達した。この道路（もちろん未舗装ではあるが）はソーラ全体を環状に結んでいる。つまりここで双方向に向かうことになる。
東へ引くと最寄はミダスという地域。西へ行くとベネイという地域。

「よおぉーし！途中であったらバトルだな！リーヒュン、死なずに帰ってこい！！」ブレイブが声を上げた。「ああ！もちろんだ。あと、ブレイブこそテルルに迷惑かけるないでな。」リーヒュンがツルでブレイブの頭部をこつんとやった。
「テールル！ブレイブとお幸せにね♪」ユイリィが嬉しそうにそう言った。「はいはい。ユイリィこそ、こんなぽかっとした男と仲良くするのよ！」テルルもユイリィの花をたたいて言った。

２匹づつはそれぞれ東と西へと出発してゆく…

ブレイブたちが見えなくなって3秒後。ユイリィがリーヒュンに飛びついた。
「やったやった！これからうちら2匹で2人旅だよ！！！リーヒュンを4日間独り占め！！」
「ああ…まああんまり飛び出しすぎるなよ。君の勢いにあんまりついていけないから…」だがその言葉が彼女に届いたどうか。おおはしゃぎだ。
「うんうん、だいじょーぶ！あたしがいれば怖いものなんてなし！！さあー行くわよぉ！快特は出発進行3番！！」「カイトク？…な、なんで3番なの？」

…まあ…今の彼女になんか言っても聞こえないだろう…

リーヒュンは頭の葉っぱをやれやれと振ってはしゃぐ彼女について行った…

一方のブレイブも…

「よおし！！ここからは俺の時代だ！！」「なにそれ？」
「よろしく頼むぜテルルちゃん！！」ブレイブが短足気味の前足をテルルのグレイシア特有ののスマートな背中に当てようとしたが、

あっさり避けられ、勢いで転倒した。

「…まったくもう！女の子の体に馴れ馴れしく触らないでよね！」

テルルはそう言いながらも、その表情はわずかに緩んでいた…

異変・絆の陰で…（後書き）

……ホントすいません。物語の都合上とはいえ、これほど恐ろしい事態になるとは本当に思っていませんでした。

ポケモンの無残な光景を描写してしまいました…

…今反省しています…はい…

さてさて、次回はこのそれぞれ2匹のトンデモ道中の話。あとついでに（ていうよりまたもや）新キャラも?!

…見苦しい話ですいません。こういう話はなるべく最小限にとどめたいのですが…時々ご辛抱をよろしくお願いします…

実施訓練・・・（前書き）

いよいよ主人公たちが実践に遭遇、です。

まあ、一瞬ですが…

ちょっと生々しいかも…

実施訓練・・・

２０１２年　１０月３０日　エメリア　ソーラ南部　プラウス州
フォンテーヌ区東部
１１５０時

リーヒュン達は、ミダスという小さな町のような地域へやってきた。とはいっても人間のように明確な中心市街地（セントラル）が存在するわけではない。ポケモンの文明らしく街道に小さな道が交差するあたりに店やその他の公共施設があるだけだ。

その前日から2匹はソーラを巡回するように張り巡らされたこの街道を歩き、このあたりにはだいたい午前中（太陽を見て大まかに判断するだけだ。人間のように分単位の時間に追われるなんてことはない）につくことに決め、そこらへんで一休みするかと決めていた。ポケモンの旅人にとって町を目指して夜通し歩く、という事は、普段は太陽に合わせて暮らす彼らが動物的な体力を併せ持っているという点からしておかしい訳ではなかった。ただし、この日の未明から突如として大粒の雨が降り出し、しばらく手前の森の大木の下で雨宿りしていたのだ。

2匹の前方に小さな構造物が点々と並び、2本の2次元平面座標グラフの軸のように直行する道路、あとは一面に広がる大麦畑が広がっていた。

この自然に忠実に従い、自然に身を任せて作ったような風景。ここには人間の都市の雑踏も、空を飛ぶ航空機の轟音も、常に目線を向けられるような警戒感を感じさせる警戒（セキュリティー）カメラも、圧迫するようなビルや高速道路や繁華街の商店の類や生物の感覚を腐らせて行く地下世界もない。事実、地球上にある人間たちの都市は近年どこへ行っても（景観を大事するヨーロッパでさえ）再開発によって、“リトル・マンハッタン”とか“リトル・ホンコン”とか“リトル・ド

バイ”と呼ばれるようなタワー・ビル街と化した区画が目に留まるのだから。
まるで懐かしい故郷に来たよう。この青年にはそう思えた。
「すごーい！全面畑。いいなあ！あたしもこんなところに住んでみたいな！」ユイリィは遠くに見えるソーラの山々や一面の草原と麦畑を見て大はしゃぎだ。
「そっか。ユイリィはこういうところに住んだことないのか。俺は町のはずれの森に近いところに住んでたけど。少し町行くとさあ、こういう風景なんだ…」リーヒュンは故郷を懐かしむように言った。

…そう…俺の故郷…フローラを…連れて帰る…絶対に…

ユイリィの声がその彼の思いを打ち切った。
「へえ～！あたしはさあ…あんまり開けてない森みたいなところで生まれらしいの。」
「ふーん、あれ…らしい、っていうのは・・・？」
ユイリィの笑顔がちょっとだけ曇った「う…うん。あんまり覚えてないんだ。すぐに引っ越しちゃったから。でね、次のに暮らしたのは…さ…」
「あ…いいよ。言いにくそうだから、…さ。無理に言う必要ないって。」リーヒュンはユイリィの気持ちを少し感じて行った。あんまり言いたくなそうだから。

…その訳が…きっとあるから…

「う、うん！大丈夫！ありがとね！」彼女の表情が元に戻る。

2匹は麦畑の中ほどまでやってきたところで妙なことに気付いた。…あんまり耕作されていないようだな。人口が減っているのか、それとも…やはり世界の混乱が？

そう、小高い地域の入り口から見たときは、単なる麦畑が広がっていたが、近くまでやってくるとこの地域がかなり放置されていることに気付いたのだ。近くの河川は、かつてはこぎれいに整備されていたようだが、現在は草が伸びて自然に戻りかけている。そこから伸びていた用水路もところどころ壊れていて水が流れていない。麦が並んでいると思われる畑は、麦ではなくセイタカアワダチソウ…北アメリカ原産で繁殖力が極めて強い外来種の野草…で荒れ放題だった。

事実、今まで2匹が歩いていて、すれ違った人（ポケモンだが）は誰一匹たりいない。

「なあ、小麦っていうのはこういう物なのかな？」リーヒュンは思わず聞いた。

「うんん。こんなに荒れてないよ。きっとこの地域もさ…いろいろ大変なんだろうね。」ユイリィはそう言いながらも、少し心配そうな目でそれを見つめていた。

読者の皆さんは、麦と聞いてどのようなものを思い浮かべるだろうか？アメリカ、オーストラリア、ロシア等の広大な畑に見渡す限り大麦、小麦が生えていてそれを大きな機械で一気に収穫するテレビで時々見る映像が思い浮かんだに違いない。米、芋、豆、トウモロコシ以上に世界中で最もスタンダードに食される人間の主食の穀物。近年は新興工業国、特に中国、インドでの消費増大や投資マネーの流入で価格が高騰しているあれ、バイオ燃料にもなる食物だ。

ポケモン達でも小麦やクリのような穀物を主食としている。これらに関しては耕作する文明レベルには達している。もっとも自足自

給だったが。

さて、２匹は町の中心部にある公共の休憩施設のような所へやってきた。ユイリィはこの施設に関する情報は、エメリア自治協会の資料で聞いたことがある。協会が数百年前から各自治体に通達して（もっとも、ほとんどの自治体は協会の存在自体をしらないので、工夫して通達したが。それだけポケモンの文明が遅れているということだ）つくらせたのだ。ここなら、食事からある程度の情報収集、捜索、救助、相談まで、一通りできてしまう。いわゆる公立の何でも屋、ていう感じだ。この類の施設は世界どこでもそうだが、周辺住民の善意やボランティアで成り立っている。人間のように、政治家が利権を狙って建てる位置を決めたり、住民が反対したりすることはほぼない。まあ、人間のように建設するものが、半導体工場だったり、核燃料処理施設だったりしないからだが。

２匹は、食事をとりながら（代金３１ポケ１０ポケルカをどっちが払うかはそのうち決める事にした。まあこの調子だとリーヒュンが払ってそのままそうだが）周辺の客に治安状況を聞いて回った。ポケモンというのはなかなか社交的で、相手が人間でもない限り結構話に応じてくれる。

あるミルタンクの証言

「まーここは平和と言っちゃそんなもんよ。アンタたちこそ戦争持ってきたんじゃないんでしょうね」

２匹の持っているもの、つまり各種装備や弓矢の類をぶらさげていれば、兵隊に見られて当たり前である。もっとも、無線機はずしておいた。人間の物を持っているとわかれば、不審な目で見られそうだったからだ（「そんなことわかったら追い出されちゃうよ。だい

たいポケモンっていうのは人間のこと好きじゃないんだから。リーヒュンのところもそうでしょ？」）。

あるエテボースの証言

「うーん。治安と言っても近くのベネイのことぐらいしかわかんないけどなあ。特に争いが起こっているわけでもないよ。まあ、人口はどんどんどっかへ流出しているみたいだけどな。」

ユイリィはピンときた。首の花をピクリと動かしかた。「どこへ、ですか？」

住民（客）は、首をかしげた「よく知らないけどさ。山の向こうらしい。」

リーヒュンが身を乗り出した「なんのために？ここだっていい場所ですよね？」

客は声を落とした「それがなんだが…だいたいは行ってそれっきり、なんだ。出かけたり、仕事に行って、しばらくするとな、向こうで暮らしている、ていう感じの手紙が来る。で、それっきりというわけだ。僕らは、しばらく向こうで暮らしたり、ていうのは慣れてるから最初は何とも言わない。でも、いつまでも帰ってこない。そんな不思議なことがおこって、知り合いや家族が様子を見に行くと…帰ってこないんだ。彼らも引っ越したっていう手紙をよこすのさ。なんたっていうこんな…」

「そうそう！そうよね！先月だってさ、お隣の子がそういって帰ってこないし」さっきの客が突っ込んできた。

「そちらも？！」「うん！ヘンよねえ。」

「……」2匹は言葉を失った。

こんなことが普通なはずがない。

その他、数匹の客から聞く限りでもこういうのは時々あるらしい。

出発するときユイリィがボソッと言った「ね…個々の人たちも多少は気になっているみたいだけど、これってさ…絶対普通じゃないよね」

「うん。たぶん…単に向こうで暮らしてんじゃ…」リーヒュンが首の葉っぱをすくめた。

個々の情報では詳細はわからないが…

やはり…

いやな予感…

次の目的地は、ここから距離のある地域だ。隣との州境線も近い、ここを目指しているうちにもう半分も歩いてしまったことになる。

ユイリィは気を取り直したように言った。「さあ、次の村、いこいこ！」

「うん。」

「なーに考えちゃってるのよ?不安だけど大丈夫！なんかあったらあたしとリーヒュンで一緒に解決しなきゃならないんだから！多分何とかなるよ！うん。」ユイリィがツルこづいた。

「そりゃそうだ。君といれば何とかなる、よな。」リーヒュンも何とか士気を上げようといった。

「よーし…」ユイリィが言いかけたその時…

彼女は何かを見つけた。「ん？なにあれ」
「どれ？…ああ、あの草むらのところか…」
河川の荒れ放題の草むらの中。
草ではないもの。
草に似ているが……ポケモン？！
2匹は同時に動いた。
「ね、ねえ？大丈夫？」ユイリィがあわてて言った。ツルでその背中をポンポン叩いた。
「だいじょうぶか？しっかりしろ！」リーヒュンも言った。
この子は…
白い体。背中はウグイス色の草でおおわれている。耳らしきところにはピンク色の花…
何よりとっても小っちゃい…2匹で寄ってたかったらつぶしてしまいそうだ。
……シェイミ。幻の…というのは誤りだが、種族的にはそんなに多くはない。
「な、なんたってこんなところにシェイミが？」
「そんなことより！」ユイリィがツルでシェイミの胸の部分を触った。

…まだ…生きているか…

その時、シェイミがかすかに動いた。「ううん・・・？」
リーヒュンは少し安心した「ふう…死んでなかったか…よかった。」
「み…ミー…どうしたんでしゅか…ね…」シェイミが子供っぽい声を出した。
「大丈夫？君、ここで倒れてたんだよ？」ユイリィが言った。
「タ…倒れてたんでしゅか…？？」

シェイミは2匹をしばらく見つめ…

「お、お前たち！ミーを殺して食うつもりでしゅか？！」小さい手足をバタバタして逃げようとした。

「そ、そうじゃないよ！そうはしないってば！！」ユイリィが一生懸命足で優しく押さえつけようとしたが、このシェイミは彼女のツルに飛び乗り、ツルに噛みつきにかかった。
「おいおい！」リーヒュンが、自分のツルでシェイミを引きはがしにかかったが…
ユイリィは一瞬ぴくりと動いただけで、ツルをシェイミに当てた。
「うん…大丈夫…何もしないよ…」

そう…彼女はこのシェイミに気持ちを伝えたのだ…それとともにこのシェイミの状況も読み取った…
リーヒュンにもそれを感じ取れた…
…この子は…仲間と…いや家族と…はぐれて…
…家族の出身地は…スイスか…この地球全体を…花運びしているのね…
…そんなユーラシアの西端からこんな太平洋の一角に…

…もしかしたらもう帰れないかもしれない…ごめんね…あたしは…
…でも…今は…
…大丈夫…一緒にいてあげるからね…

シェイミは噛むのをやめ…彼女を見た…「ホントに…？」

その夜　１９００時
３匹はミダスと、隣の地域との境界線上にある森林地帯までやってきた。このシェイミはユイリィの背中に乗せてきた。このシェイミはここまで来る間ほとんど口を開かなかった。無理もない。何も状況がわからず、ここに落ちて（おそらくはスカイフォルムの時、午前中の雨にやられたのだろう）のちにこんなベイリーフとメガニウムに連れて行かれているのだから。シェイミがいることを考慮すると昨日のように徹夜で超えるのは無理そうだ。リーヒュンがあの能力を使って3人がいられそうな大きな木の洞を見つけ、そこで一晩過ごすことにした。
「やったやった！よーし、あたしの料理作っちゃうんだから！！期待しててていいよ！」ユイリィは絶好調だ。
「うん。わかった。…て、ほんとかよ！！」リーヒュンは頭の葉っぱがひやひやした。

でも、結果としてはそんなに悪くなかった。ユイリィは支給された弓矢で上を飛んでいたヤマバトを2，3匹見事に撃墜した。彼女はそれを難なくさばき、火をおこし（彼女がツルを振ると、ポッと火がともった）焼いて見せた。ただ、それだけだったが。要は焼き鳥。

「どお？あたしの焼いた肉？」ユイリィがにこにこしながら言った。
「う…うん。おいしいんじゃないか？（ってさあ、焼いただけじゃ

ん）」リーヒュンが言った。もっとも彼の言葉には、皮肉も、お世辞も含まれてはいなかったが。

「そうだよね！あたしのだもんね！うん。すんごい嬉しいよ！」彼女も喜びながらツルで焼いた鶏肉を掴んでかぶりついた。

「…で、君の名前はなんていうの？」リーヒュンがシェイミに聞いた。このシェイミ、小さいながらなかなかの食いっぷりだったが、そう聞かれるとぎくりと止まった。「ななな、なんでしゅか？おまえたちなんかに答えたくないでしゅ！」

シェイミはしばらく黙り…

「ロズリン…ロズリン・パーティカル・サスペンディッド…でしゅ。…男」か細い声で言った。

その1時間後くらい…ロズリンが寝静まって30分後…

「…ねえ、リーヒュン…ロズリン…どうする？」ユイリィがそっと聞いた。

「うーん？連れて帰るのが、得策かな？とは思うんだけどさ…」彼は真顔で言った。

「ほ、ほんと？！やったあ！…てさあ…」ユイリィは頭の長いほう2本の右の雄蕊（彼女の趣味で巻かれていたが）をいじりながら心配そうに言った。

「ん？なんかあるの？」

「知ってる？あたし達はね、ホントかウソかは知らないけど、世界を救う立場なの。」彼女が言った。

「だから？」

「リーヒュンは言われてないの？サクラ司令に？つまり無駄な関係は持つな、ってこと。」彼女は首の花をすくめた。

リーヒュンにもなんとなくわかった。自分たちには言葉がなくても意思はだいたい勘づく。まだ十分に能力が開花していない彼とて、ユイリィと出会ったあの日、だいたいあの司令のオーラは語りかけてきた。

…あなたは感情に流されてはいけない。最低限の感情を寄せるのはこの子だけにすること…

その言葉がいまさらになって彼の心に突き刺さった。自分は、出会った同僚たちと親しくなることも疎まれるのか？“ほどほどに”という言葉にはこんな硬直的な意味が含まれていたのか？

…彼はいまさらになって許せなかった。

そして、リーヒュンらしくそんな規則に従うわけもなかった。

「何言ってるんだよ？何であれ、俺は連れて帰る。」

「ほんと？！それなら、それならいいんだけど……でも…」

「この子はこのままにしたら確実に行き場所がないだろ。最悪生きて帰れないさ。それにこの子、結構遠くから来たみたいだ。そんな堅苦しいもの守ってられるか。ユイリィと2匹で無事に帰してやるのも仕事のうちだよ…

…っ…ごめん。俺、間違えてるかな？」

「…合ってるよ。間違ってないよ。」ユイリィが頷く。「でも、司令には…？」

「そんなの適当に考えるさ。死にかけてたとでも、ね。何とかなるだろ？」リーヒュンはツルをひょこひょこさせながら話を進めた。

しばらくの沈黙……ユイリィはしばらく考え…

「……うん！そっか、そうしようか！あはは、リーヒュンってホン

ト単純だね！規則なんか言葉じゃない！、てみたいだよ！いいと思うよ、その心意気！…」笑顔になった。
「じゃあ、決まりだな！」彼が言った……

……その瞬間。

すぴょん！という空気を切り裂く音がして2匹の至近距離に矢が突き刺さった。

ロズリンが起きた。「な、なんでしゅか？」
「おいおい！なんだよいきなり！？」「動いちゃダメ！」

ユイリィはもう相手を捕えたようだ。というよりも“見え”た。「相手は4匹。おそらく武装盗賊（ラスカル）…」
リーヒュンにもわかった。やはり“見え”た。まあ、自分の故郷で、名前ぐらいは聞いたことがあるもののこんな辺境地帯にまで危険な盗賊がいるとは信じられなかったが。「うん。相手はポケモン。どうする？」
「一気に片づけるわよ！ロズリンから離れすぎないようにね！」ユイリィの体のエネルギーが一気に高まった。まるで澄み切った夏空下の里山のような澄みきった闘志だった。
「も…もちろん！」リーヒュンも自身のエネルギーが増幅されていくのを感じた。自分の物は雨上がりの夕暮れに輝く草原。

彼にとって“あの後”の初陣。

２匹のエネルギーが一つになり、意識が周囲の空間を掴んでゆく…

２匹は同時に動いた。

戦闘は一瞬で決着がついた。

ユイリィは最初に飛びついてきたアゲハントのむしのさざめきを思念であっさり防ぎ、エネルギーが増幅されたツルで一撃で昆虫に焼けた針を突き刺すように胴体の内臓をすべて焼切った。その直後飛びついてきたマッスグマのとっしんを頭の４本の雄蕊（おしべ）で押し返し、そのまま突き飛ばした。マッスグマは常識外の運動エネルギーで大木にぶつかりそのまま動かなくなった。彼女はさらにもう１匹のマリルリにも構わずツルを突き立てた。粘土細工に穴あけドリルを突き刺したように体内組織を飛び散らせ、そいつは倒れた。

リーヒュンは最初は戸惑ったものの、無意識にポニータのかえんほうしゃをツルで防いでいた。その時、何の痛みも熱さも感じなかった。無意識のうちにツルがシールドとなっていたのだ。

彼はそれに驚く暇もなかった。なおも踏みつけにかかるそいつに彼はタネマシンガンを至近距離（というよりほぼ零距離）で叩き込んだ。

彼は自分の能力の恐ろしさに初めて気づいた……

わざを打ち込みながら、戦慄で震えるのを感じた…

自分の技が相手に当たる衝撃が頭の葉っぱに感じられた。

…普通のポケモンバトルでは考えられぬ、鉄板に連続でリベットを打ち込むような“ガンガン！”という衝撃音が。

ポニータの体にガシガシと大穴があきその力の反作用でそいつの体は裂けながら後方に吹っ飛んだ。

相手は全滅。何とか生き残ったマッスグマだけがフラフラと去って行った。2匹が追う事はなかった。

「だ、大丈夫?!」ユイリィが言った。「…うん。特にけがはしてない。」リーヒュンが言った。

「ロズリンは?」「…だ…問題…ないでしゅ」ロズリンがおびえたように言った。

彼はその直後たとえようがない疲れに襲われた…

が、その直後、死体を見るなり激しい悪寒が襲ってきた。自分が返り血を浴びていることにも気づいた。

…俺が殺した?!

…殺したのか?

「・・・ねえ?」ユイリィの声が遠くから聞こえてくるようだった。

「俺は…本当に…こんな能力を…」彼はかすれて消えそうな声で言った。

「・・・だいじょうぶ。」ユイリィがリーヒュンの首の葉っぱにツルを置いた。「この人たちにも目的があった。でも、結果的にこうでもしなきゃ私たちは…ロズリンも…やられてたかもしれない…せめて……

この人たちが…」

「そう…だな…」

2匹の表情はともに困惑と苦渋にに満ちていた。

その後、2匹は残った3匹の遺体を埋めてやった。ほかにどうしようもなかった。

…せめて、この者たちの罪が許されるように…

そのあと…しばらく、2匹はぼーっと星空を眺めていた…

ふいにユイリィが声を出した。

「さ、帰ろっか。あたし達もロズリンのところに帰らないと…ね?」

「うん…」

２０１２年　１０月３１日　ソーラ大陸　フォンテーヌ区西部　ベネイ地域のはずれの岸部　１８００時

「はあ～全くアンタはバカなことしかしないんだからさ。もうこんなことに巻き込まれるのにうんっざり！残り半分さ、私とブレイブ別々にやんない？！ん？」

「おい！さっき怪我したところに叩きを入れるかよ？う～んでもテルルに傷口触ってもらって俺は幸せだ！」ブレイブが左前脚のけがした場所をさすりさすりしながら言った。

「バーカ！何この変態！？もう一発殴ろうか？」テルルがツンとしていった。

「いや、いらねえ。もうテルルちゃんの気持ちだけでじゅ～ぶん！それよりな、夕食のほうは…ほら、そこに川あるだろ？俺がそこで魚を取ってやる。」ブレイブが腕を鳴らした。

「ぷっ・・・！あんた魚なんか取ったことあんの？」テルルが鼻で笑った。

「そんなのはな、掴みかかればいいんだ！簡単だろ？」ブレイブが言う。

「まったく！魚っていうのはね、もっと上手に取るの！」テルルが装備品の中から、自分で持ち込んだものを引っ張り出す。銛（もり）だ。「私がこれで仕留める。ブレイブは弓で魚を狙って、場所だけ示して。魚を取るっていうのはそんなに簡単じゃないのよ。それにだいたいさあ、アンタそんな怪我してて水入れないでしょ？」テルルが言った。

「おいおい！そんな持ち込んでたのかよ！さすが俺の期待したテルルのことだけ、あるぜ！」

ブレイブが自分の傷口をなでながら言った。

さて、ブレイブがけがをした理由、というのは…

こちらのほうはもっと混迷していた。ブレイブとテルルのほうもあちらの2匹同様、このベネイ地区でいろいろと調査にあたっていたのだ。しかしこちらはミダス区と異なり、社会の混乱が明らかに出現していた。

そんなところで、2匹は明らかなアルコール中毒者のようなチラチーノに絡まれたのである。どうやらブレイブとテルルが明らかに兵隊のような姿（弓矢とそのかごをぶら下げて、しかも各種装備品を持っていればばれる）が気に入らなかったらしい。

「おいこら！俺たちになんか恨みでもあんのかよ?!」ブレイブが止めようとしたが無駄だった。この女チラチーノは、懐からいきなり持っていた軍刀を振り回しながら襲いかかってきた。アルコールの入ったポケモンというのは、男女関係なく酒に酔った人間より性質が悪く凶暴だ。

「まったくよお！！なんだこいつ?」ブレイブは一瞬で背後に回り込み、チラチーノの軍刀をひったくっり、ニトロチャージをあびせて突き倒した。が、この女は寄っているとは思えない勢いで瞬時に武器を取り返し飛び掛かった。テルルが懐に飛び込み、こおりのつぶてを右前足で打ち込んだ。

「ね、ねえ！酔って訳分かんなくなってるみたいだけどさあ！なんか私に恨みあんの?!」だが、この女は、獲物を目の前にした晩秋の飢えたオオスズメバチのようにしつこかった。

「?!?!?!?」そいつは意味不明な言葉を発しながら軍刀を奪い返し、テルルの頭を両断するように振り下ろした。それをブレイブが右前足で受け止め（ここで右前足をけがした。軍刀を素手で

受け止めたのだから、切り飛ばされなかっただけましだ。）、そいつの顔にでんこうせっかをたたきこんだ。この女はようやくよろめいた。こいつはなおも抵抗しようとしたが、このチラチーノの知り合いと思われる
ブイゼルとオオタチが飛びついた。

「すいません！こいつがまた！お怪我なさってませんか？」ブイゼルが言ってきた。

「い、いいえ…大丈夫ですけど…」ブレイブがさっき軍刀を受け止めてけがした右前足をさすりさすりしながら言った。

「普通に怪我してるじゃない！まあ大丈夫ならいいけど。…で、この人どうしたんですか？」テルルが聞いた。

「いや…この人の旦那、州境界の警備兵だったんですけどね…隣の州の連中と戦闘になって殺されたんですよ。それ以来酒飲んで兵隊に八つ当たりするもんですから…」オオタチが気の毒そうにチラチーノを見やった。

「やっぱり隣の州と…」ブレイブとテルルはまさかとは思ったその事実に言葉を失った。

…やはり…ポケモン文明の混乱の波はこんな辺境地まで…

…という事だったのである。まあ、大したケガではなかったし、テルルに手当てしてもらったときブレイブは大喜びだった。（「何その顔？！」といいながら、消毒液をべちゃッ！！とやられた。痛いけどブレイブはやっぱり大喜び！！）

というわけで、夕食調達に取り掛かる。この中規模な河川には、マスやコイの類と思わしき魚がうようよしていた。テルルが川辺にから水面を眺めた。彼女にはそれなりに経験があるらしい。
「どれだよ?あれか?それか?」ブレイブが弓矢を構えたままもどかしげに見ている。
「ああーもう!!あんたはおとなしく私が言うまで待ってるのよ!!」テルルが集中力を削がれ苛立たしげに言った。
しばらくの沈黙があって…
「それ!それよ!!」「おっしゃあ!打つぜ!」ブレイブが弓矢を放つ。さすが優秀な兵士だけあって一撃でテルルが示した魚に刺さった。
「ＯＫ　!つかまえたわよ!!」テルルはそれを目印に私物の銛を構え、一気に水に飛び込みながら突き立てた。さすがはテルル、一撃で仕留めてそれを岸辺に引き上げた。
「すっげえ!どこで習ったんだそれ?」ブレイブが驚いた。
「まあね、いろいろ人生経験があるのよ!」テルルは得意げだ。
あっという間に5，6匹が岸辺に上がった。

…テルルは水面と魚達を見つめていた…

…あの時も…一緒だった…
…今も…またこうして……あの子のためだったらってここまでやってきた…
…でも…この先もこうしてやっていけるのかな?…私…軍人として…
…この男の…同僚として…

「おいどうした?もう打ったぞ」ブレイブの声がそれを打ち消した。

「う、うん！ごめんごめん。行くわよブレイブ！」テルルは気を取り直して銛を掴んで飛び掛かった…

ブレイブが火を起こし（ブースターだから）捕まえた魚をを木の枝に突き刺して焼いて食べた。
「おっやっぱ捕まえて食う魚はうまい！！」ブレイブが嬉しそうにかぶりついた。
「うん！こんな風に食べるの、何年ぶりかな…まあ、アンタとだからあんま楽しくないけど…」テルルもおいしそうに食べている。
「何言ってんだテルル！嬉しいんだろ？」ブレイブがテルルのほっぺをつつく
「何言ってんのよこの色男！」テルルがその前足を払った。

しばらく食べていて…

「なあテルル」「ん？なによ？」
「テルルはさあ…小さいころから苦労してたんだな…」ブレイブが言った。
「えっ…そんなわけないじゃん！何心配してんの？」テルルが笑うが…
「強がんなって…」ブレイブの表情が真面目になる。

「あのな、銛付きで魚がとれるやつって…なかなか多くないぞ？それによ…」彼がテルルの銛をなでる。「これ、明らかに自作品だろ？銛突きができてしかもそれを作れる。相当な手練なんだよ、おまえは。」
予期せぬ図星。「そ、そんなわけ…」テルルはこの男の恐るべき直

感能力に愕然とした。

…この男、やっぱ単なる色男ではないってこと?…

「へっ…やっぱ図星か。」彼女の表情を読み取ったブレイブが得意そうにつづけた。「まあ、テルルは…つまり…そうでもして、しかも子供のおまえが食料を取らなきゃなんないくらい大変だった。…まあ、俺の勘、というところ…だけどな。どうだ?あたりだろ?」

テルルがうつむく。目線は焚火の火を見ていた。

…まるで遠い日の記憶を探しているかのように…

それは…まるで花火を見て懐かしがる親のよう…夢を見ているかのような。

…言う?言わない?かなりの間迷った。

しばらくして……

「……うん……」テルルはわずかに答えた。

「…そっか。」ブレイブが頭の上のフサフサをいじりながら言った。「まあ、人生、てのは人の数だけポケモンの数だけあるからよ、俺はこれ以上言及はしない。ただし、苦しい中でもそういう能力をテルルにくれた連中には…帰ったら感謝…ぐらいはしとけよ。」

「うん…まあね…」テルルはひらひらした飾りをなでながら言った。
実は内心ほっとしながら…

…よかった。ブレイブはこれ以上のことはまだ見えてないのね。

…あのこと…本当のこと…だけは…絶対に誰にも言わない…

…絶対に…私の現実を……

ブレイブの表情にいつものあれが戻ってきた。
「そうだ！休暇にでもなったらさ、テルルちゃんの地元に遊びに行こうぜ！やばあぁ！楽しみになってきやがったあぁー！」
「はあ？！絶対に来させないし！ていうかさ、アンタ私がどこ出身だかわかってんの？！」テルルにもいつもの調子が戻ってきた。
「そんなの今からでもテルルちゃんから聞き出すぜ！」ブレイブがテルルのほっぺに…

ぼがん！！またしても彼女は顔面に一発撃ち込んだ。「ふん！まったく何この変態？！私の生まれた場所はね、ドバイっていうの？わかる、中東の砂漠地帯のどこだか？」

ドバイ…中東のアラブ首長国連邦の中、いや、中東の中でも最大の都市。原油、その他の資源、燃料を求めて、ヨーロッパ、アメリカ、中国、アジア等世界中の投機マネーや、投資家、石油王、巨額の富

が集まってくる。世界各国の大物企業幹部の居住区や有名人の別荘も多い。都市国民一人あたりのＧＤＰや所得は世界トップレベル。医療施設や教育施設、交通網も世界トップ水準に整備されている。世界一の高さを誇る建造物も、アメリカや中国ではなくここにある。まさに欧米、新興アジアに負けないグローバル経済面の重要な地域（エリア）。ここ発の株価下落が世界に影響することもたびたびある。エネルギーシフトが進む現代でも、アラブ首長国連邦やサウジアラビアは原子力発電所の整備や海水の淡水化に力を入れ、脱化石燃料と、それら（化石燃料）の存在その物の価値がもたらす利益の確保、欧州やアフリカ北部への電力や淡水の輸出で巨額の利潤を手に入れている。

ただし、ここで忘れてはいけないのは、こうした人間のグローバル社会で巨額の利潤と豊かさを享受できる人はそれほど多くない、という事だ。いまだに多くの中東の国々では、オイルマネーや水資源からも取り残され、宗教や民族、政治、貧困からくる紛争や戦争に苦しんでいる。

これらのことに関して、皆さんもご存じのとおり欧米や新国連（ＮＵＮ）が２０世紀の末からどれだけ手こずっているかはテレビやインターネットを見て調べればすぐにわかる通りだ。どんなに派遣軍や治安維持軍を送っても、武装組織をしらみつぶしにはできず、苦しむ現地市民の反感を買い、軍や民間のテロや戦闘に伴う被害は双方なかなか減らないのだから。もっとも、現地の価値観や考え方の違いを十分に配慮しないで“平和維持”と言ってよそ者はやってきたところで、うまくやるのは難しいだろうが。

このようなことが起きている（この問題が世界的に取りだたされる少し前だが）地域でテルルは生まれたのだ。

「ど、どばい？…知らねえ…お、教えてくれテルル…」ブレイブが痛そうな顔をしながら聞いた。

「もういい。ここまで言っても知らないのね。教えない。」テルル

はそっぽを向いて焼き魚にかぶりついた。

その夜…ブレイブが寝た後、テルルは彼を見ながらぼんやりと考えた。

森の中を、フクロウか？ミミズクか？…が鳴いている。
どっちにしろ、ヨルノズクではなさそう…

…妙に勘が鋭いわりにはさ、ブレイブって重要なところ見逃してるよね…
…私がただ単に砂漠地帯で育ったらグレイシアになるわけないじゃない…
…そう…私はロシアに…育つ間に…私が大きくなる間…そこへに向かったのよ…
数千キロを…何年も…

…どうしてかって？…

…どうなったかって？…

それは……絶対に…

…言わない。教えない…

…言わないんだから…思い出したくもない…

…あの悲しみを…

１０月３１日　プラウス州　北部街道の州境界　　２３００時

亜熱帯のこの地方なのに今日の夜空は妙に寒々しく感じる。もうさすがに１１月だからか。それとも星と月と人工衛星と宇宙ステーションの明かりからなる夜空が妙に鮮やかだからか。

　バストークの綿毛がぷるっと動いた。月の形と位置、そして日没からの時間経過を考えるとそろそろ人間でいえば日付が変わった、という頃か。ポケモンの文明にはアナログもデジタルも何も、時計

という概念はない。もっぱら天測と各人の時間経過で時間を察知する。もっとも普通だったら日が暮れたらみんな休むが。

「ふああ・・・だいぶ時間が経ちましたね。ワタシ、寝ていいですか？」ピトムニクが州境界線をぼんやり見ながら言った。あんまり眠くはなさそうだったが。

「ん？ピトムちゃんはまだ子供だから、寝たほうが育つぞ。」バストークが冗談半分に言った。

「もー！私はもう子供じゃないんですよおぉ！それにさ…」ピトムニクが少し笑いながらアメリカ陸軍用Ｍ－６７手りゅう弾を先端にくっつけた自作の矢をなでる。もう一本の矢にはスタングレネード（大音響と光を放ち、目標や犯人の動きを封じる警察の特殊部隊等が用いる非殺傷用の手りゅう弾）Ｍ－８４が無理に装着されている。

「…私はこんなにいい兵器持ってるんですから…みんなを守る義務があるの…ワタシがこうしていられるのは皆のお陰…」

ピトムニクは信じている。自分がこうしてやっていけるのは部隊の仲間全員が支えてくれるから。普段は明るく、おおざっぱな彼女でもそういう結びつきを忘れたことはなかった。

まあ、一目このえげつない兵装見ただけではこのプラスルはいったいどういう神経をしてるんだろう、と思うだろう。

ほかの仲間たちはすでに寝いっていた。普通のポケモンはそんなもんだから。

「ハハ…それにしても相変わらず物騒な武器を作ったな（誰の影響

受けたんだこいつは？）。でも、そりゃいい心意気だ。」バストークが笑った。「俺にも…こいつがあるからな」

イタリア・ベレッタ社製の拳銃、ＰＸ－４。バストーク（つまりはメリープ。まあ、普通の倍近くは大きいが）にはちょっと大きさが不釣合いだがポケモンから見れば上等な武器だ。

「ああ…おっさんとピトムニクもまだ起きてたか…」ロックオンが翼で目をこすった。

「あれれ？！グラシと一緒に添い寝してたんじゃ…」ピトムニクが聞いた。

「なんだと？」バストークの目が不審そうに輝いた。

「そんなわけないだろ！？おっさんの娘にゃ手は出さねえっての…」ロックオンがちょっと慌てた。「そ、そうですよ、今のは冗談…」ピトムニクも修正した。

「ふん。まあいい。お前が娘を侵さなければ、仲良くしたっていいけどよ…」バストークはそう言いながら少し離れたところで眠りこけているグラシデア…愛娘…をちらっと見た。

彼らの遠くのほうを2機のＡＨ－６４Ｄが飛び去っていったが、距離があるせいかそのローター音は小さく誰も気づかなかった…

その２０分後、この2機のアメリカ陸軍第１０１軍　通称、エメリア打撃軍　第2師団の対戦車航空部隊所属のＡＨ－６４Ｄはアラスカの統合軍からではなく、国防省から独自に受け取った指令のもと、隣の州の中心地にハイドラ７０ＦＦＡＲロケット弾を計４０発以上とＡＧＭ－１１４ヘルファイアミサイル合計8発を打ち込み、Ｍ２

３０・３０ミリ機関砲の雨を降らせた。
　この州がプラウス州にたいして、豊かな穀倉地帯を狙って侵攻を計画していたのは事実であった。それをアメリカがあの施設の安全性を考慮し先に対処したのである。しかし、このような計画を意図させたのは、彼らの穀倉地帯を中国の企業集団が軒並み奪い取ったからだ。彼らはポケモン達を周辺から追い出し、独自の人員と手法で耕作にあたった。中国側にしても、抵抗する住民が減ってくれることは悪い事ではなく、農地は中心部から大きく北にはずれているので、太平洋上のアメリカや日本の軍事活動をたびたび批判する中国はこれを住民との小競り合い、という位にしか考えなかった。

もちろん監視のポケモンたちはこれに気付いて応戦した。

だが、周囲３６０度のすべての脅威識別と優先順位付けを３０秒で行い、地形プロファイリング能力も持つＡＮ／ＡＰＧ－７８・ロングボウ・レーダー、夜間でも１０，０００，０００ピクセルという極めて高い可視解析機能を持つＦＬＩＲ（前方監視赤外線）機器を搭載したアローヘッド・センサー等、最新鋭のアビオニクスとサイメトリクス・インダストリース社製の戦闘管制機器を搭載した“空飛ぶ戦車”に、しかも夜闇の中で中世然とした弓矢と個々の能力でしかないポケモンが勝てるわけもなかった。
どんなに連携が得意でも、結束が強くても、状況が状況である。信念だけでは最新の大破壊マシーンには勝てないのだ。

全てのポケモンたちが、休んでいた場所で火だるまになるか、吹き飛ばされた。気づいて、逃げ出した者たちも何歩も動かないうちにＭ２３０ガトリング砲の稲妻に体を引き裂かれた。

攻撃開始から９０秒足らずで中心地域は破壊しつくされ火の海となった。その嵐が終わった時、生存したのはヘリのパイロットの４人の人間だけだった。

リーヒュンがあの時考えたとおりに…もっとも、彼とユイリィは気づかなかったが。

ブレイブとテルルも寝ていた…

バストークたちも気づかなかった…

実施訓練・・・（後書き）

あれ？またいつの間にか新キャラが…？

しかもシェイミです。ポケモンにカムバックした理由って、２００８年のシェイミだったりするんですよね…

次の回でたっぷり語っていこうと思います…

ユイリィ：また長さを更新？

…それに近いみたいです…

それぞれの“合格”というモノ…（前書き）

さてさて、実施訓練のほうは…

まあ、合格しないと話にならないような…

テルル：私不合格でいい。ブレイブともうやりたくないし。

…それは無理。

それぞれの“合格”というモノ…

２０１２年１１月２日　ソーラ大陸　国連軍の施設　１２３０時

ブレイブたちが無事帰ってきた。どうやら大したトラブルもなかったようだ。

「おっしゃあ！リーヒュンなんかより先に戻ってきたやったぜ！」

ブレイブは大喜びだ。

「…はあ…ま、良かったわね。あんたの友達より先に帰ってこれて。」テルルが首を振った。

「よぉし！帰ってきた記念に…！」「え？…何すんのよ？！」ブレイブが彼女に向かって口づけを……

…ばしぃっ！

「はあ？！もう分かってもいいんじゃないの？！その行為は危ないってさあ？！」テルルがまたしてもブレイブの顔面上部を右前足で殴った。

「ううっ…でも嬉しいぜ…テルルちゃんに突っ込みいれてもらってさ…」彼が頭のフサフサを抱えながら言った。

「んもう！…マジで困るわよ…」彼女は諦めたようにもみあげ状の頭飾りをなでた。

「おっ。テルル～！ブレイブ～！おつかれ！」ピトムニクが声を上げた。どうやら３０２中隊の連中も帰ってきたらしい。

「ピトムもグラシも元気だった？まったく、こっちは大変だったわ

よ。」テルルがぼやくような声を出した。
「うんん。普通だったよ。夜、中隊長と新型の兵装考えてたもん。」
ピトムニクは楽しそうに言った。
いったいなんというそのかわいらしい容姿と性格とは…かけ離れた女。
「そうだな。こんなに落ち着いて掛かれる仕事は久しぶりだったな。」バストークが言った。今回の警戒任務では全く戦闘はなかった。ここのところそういう出動は珍しいとはいえ（その理由、それは国連の“計画”に組み込まれたからだが）、動員されるのはたいてい過酷な戦場であったからである。例えば、エメリア陸地群なら治安のよくないハイドル大陸やサーマル大陸であり、中東でいえば、イラクやアフガニスタンとかである。２００８年のグルジア侵攻時も東欧で戦闘した。
もっともこの中隊はそういった過酷な状況下でもしぶとく全員生還してきたが。

「…で、そっちは楽しくやったか？」バストーク中隊長が聞いてきた。

ブレイブがすかさず入り込んだ。

「もっちろん！！楽しかったですよ！！何せテルルちゃんの…」彼は尻尾を振って嬉しそうに語ろうとした。
「はいはい！もういい！」テルルが彼のしっぽを引きずって後方に吹き飛ばした。グラシデアはその行動からたいてい何があったか分かったらしかった。
「そっか…よっぽどブレイブが迷惑かけたのね…まあ普段通り、ね。」
「ま、まあ…うん。」テルルはあいまいに言った。「で、でもさ…意外と…面白いところもあったよ。一回助けてくれたし。」

「う、うそ?!あんな男と一緒にいて良かったことあるの?…まあ、あいつは必要なときはだいたい頼りにはなる、のよね…」グラシデアが言った。
「そういえばそうだな。お嬢さんも少しは仲良くやれそうか?」バストークがモコモコをポフンと震わせた。
「えっ?うーん?…どうでしょうか…?…でも…」テルルは微妙に苦笑した。
「ま、状況次第で何ともなるよブレイブは。」ピトムニク行った。
「そうよね…そうだよ…うん」テルルは自分を納得させようとした。
…あの男には私のこと、みんな見えてるんだよね…許せないけど…
…仕方ないのかな?…
「
もちろん頼りになるよな?何せ俺だもんな!ん?それとも…照れて言えないか?…」ブレイブがまたもテルルの前足に不用意に近づき…
…バコォン!本日2度目のテルルのツッコミ。見事に頭を直撃した。
「きゅうぅ・・・」ブレイブ、またしても…
「…まあ、こんな調子じゃ、ね…?」テルルが首を振った。
「…うん…いえる…」ピトムニクも頷いた…
結局、ブレイブたちが戦闘を目撃したり、巻き込まれたりすることはなかったのだ。ベネイの隣、ガラテアで調べた結果もほぼベネイと同様であった。しかしその証拠という物や実態という物は一つとして浮かんでは来なかった。調査した限りにおいて、どれも噂程度としか報告はできないであろう。

「ほら、そんなところで無駄話してないで、さっさと戻る準備をしな。」担当の国連統合軍の士官が無表情に言った。残り2匹が帰り次第、この統合軍のＭ－９９８、ハンビーの車列は、プラウス州南端の施設に帰還するのである。

「おいおい。大丈夫か？まあ、お前のことだから余裕そうだがな」バストークがブレイブを立ち上がらせた。

「いてて…ぜ、全然余裕ですよ！！へへ…」ブレイブは頭のこぶをさすりながら平然と言った。

「ふん！…懲りてないわね…今後、そんな調子じゃ増えても文句言えないわよ！」テルルが彼を見て鼻で笑った。

「まあ、この男じゃ、それでもやめないだろうけど…」グラシデアが呆れたように言った。

「全然問題ないぜ！！…っていうか…あいつらは大丈夫なのかよ？」ブレイブがふと遠くを見るように言った。

ピトムニクもちょっと心配そうな声を上げた「そうだね…ユイリィちゃんたちなんもなきゃいいけど…」

で…こっちのほうは…

２０１２年１１月２日　エメリア　ソーラ南部　出発点まで２０？

０９１２時

その後の2日間はまあ、順調と言えばそうだった。2匹が次の地域、モルフェウスに立ち寄った時も、結果はミダスと同じであった。やはり隣の州に行って行ったっきりのポケモンたちが大勢いるという事だ。もちろん、この2匹がその州が中国やアメリカとのトラブルに巻き込まれたこと等想像もしなかったが（勘が聞いてもいいよう

なことなんだけど…）。

さらに、2匹に新しく加わった…拾ったのだが…シェイミのロズリンがこれまた変わっていた。2匹をびっくりさせたのはこのオスシェイミが（この種族にも性別はある）何の特別な動きを見せずにエスパータイプのそれを行うことだった。2匹の弓矢をかごから平然と引っ張り出し、前足でふわふわと浮かせていた（「何かあったんでしゅか？」）。ユイリィも知らないようで「うーん？どうしてこんな能力持ってるんだろうね？」このシェイミの家系的な問題のようだった。

でも、このシェイミがもっと面白かったのは、まだ5，6歳にもかかわらず一端のしゃべり方をしてくることだった。リーヒュンの首のあたり（彼はまだベイリーフだったが、その大きさ、体格ともにメガニウムに近かった。）に飛び乗ったまま、ユイリィの長いほうの雄蕊（おしべ）をいじりながら彼女の言うことなす事にたいしツッコミを入れてきた。どうやらこのシェイミ、ユイリィのことをなめているようである。しかも呼び捨て。

「なんたってお前は楽しそうでしゅねえ？この兄ちゃんが好きでしゅか？」

「な、何言ってるの？あたし、こんな優柔不断少年はやだ。」ユイリィが慌てて否定した。

「花がぴくぴくしてましゅね？ユイリィもまだまだ子供でしゅ。」

「そ、そんなこと言ったらさ、リーヒュンのほうが単純すぎて子供よ！」

「まあ、そうでしゅね。でも自分のことは棚上げでしゅか？」

「うぐぐぐぅぅ……！（で、でも…ここで殴るわけには…この子の思うつぼに…）」

「…あのな、本人の前でその話するか？」リーヒュンはそばで呆れて言った。ロズリンはその後も彼の首の葉っぱをがさがさ（そんなに生えてたっけか？）やりながらユイリィの行動や動き、会話に突っ込みを入れまくっていた。

さて、出発点まであと２０キロまでやってきた。この調子でいけば、正午過ぎには到着できる。３匹は森が茂る街道を歩いていた。彼らの左側は大きな河川で、覗いてみると沢まで意外なほど高さがあった。リーヒュンは、下を見ながらふと思った。

…こういう所から落ちる奴ってその間どう風景が見えるんだろうか…すると自分でも信じられないようなリアリティを持った映像が浮かんできた。あまりにも唐突でリアルすぎたので、彼は首を振ってそれを振り払った。

２匹にとっては何ともなかったが、まだ子供らしくロズリンがちょっと震えていた。

「ううう…ちょっと…怖い…でしゅ…ね…」彼の背中の草がプルプルしている。

「え?!やっぱ怖がってる?あはは!ここに限ってはあたしのこと言えないね!うん。それにしゃべり方がベタすぎるよ!どこの子供アニメ?」ユイリィが笑った。やっとこの小生意気なシェイミに反撃できたのだから。

「お前だって落ちたら怖いくせに!ミーが落としましゅよ!」このシェイミが彼女のほうに飛び掛かった。

「はあ?!何言ってるの?あんた!」彼女がツルを引き出し、首元の花に飛びついたこのシェイミを掴もうとした。ロズリンはそれをかわしたが勢い待って…彼女の背中を飛び越え…「み、みっ?!」覗いていた沢、はるか下の河川に飲み込まれそうになった…

「ち、ちょっとロズリン?!」彼女が後方から前足を延ばして小柄なシェイミを掴んだ…

が…彼女も前につんのめり、そのまま奈落に転落し始めた…

「わわっ!」

「おいおい!」リーヒュンは慌ててツルを引き出し、落ちかけた２

匹を４本のツルで何とか食い止めた…だがそのまま彼まで、爪の摩擦力がかなわず下に引っ張り込まれそうになった。
高校物理でおなじみ、あの滑車つきの自由落下…

彼が自分の全身を近くの転がった岩に着けたおかげでそのままの自由落下は免れた。ものすごい力でたたきつけられ、骨折しそうなほどの力を受けたが。
なにせ、ベイリーフ１匹で自由落下しかけているメガニウムを掴んでいるのだから。

「ご、ごめん!!」「大丈夫かよ?!」

何とか３匹まとめての力学演習問題そのままの運動は免れた。

ユイリィはそのままの姿勢であたりを感じ取った。これならまあ、なんとかなる。このままリーヒュンに無理をさせたらそれこそ力学の問題通りの結末を迎えるっぽい。
「う、うん!もう放していいよ!あとはあたしが向こうに飛びつけばいい話だし!」
「な、何言ってるんだ?!無理すんなって!」リーヒュンが岩に体を強打させたままわめいた。たぶんツルの感覚だけでつかんでいる状況を把握しているのだろう。
　実際そうだった。彼の首は思いっきり前に引っ張られ、覗き込むような視界にはとてもできない状況だった。
ユイリィに次第にゆとりが生まれてきた。別に死ぬわけもないだろう。彼が無理をして頑張っているのが次第におかしくなってきた。
本人だってわかるはずなのに。
「あはは!もう大丈夫だよ!もう向こうに…てあの世じゃないよ!

そ…その…は…反対側行く準備はできてるって！」
「だ、だから動くなって！もう少し待ってくれ！」
「ど、どうして？あたしこの通り全然余裕なんだけど！」
「だってさ、俺とユイリィはおんなじ仲間だろ？！それを大丈夫、って言われてわざわざ見捨てるか？」

彼にとっては、こんな無茶など小さいころから腐るほど経験してきた、いやしばしば自分から飛び込んでいったからなんともなかった。ところがユイリィにとってはとても新鮮に思えた。

…今まで知っている人（ポケモン）は手助けもしてくれなかった。あたしが何でも自分でできるとみていたから。あたし自身寂しかったけど自分で乗り越えてきた…

…でも、リーヒュンは…こんな変人のあたしでも…助けてくれる…みんなと同じにしてくれる…

…子供っぽいだけかもしれない…ちゃんと理解してくれるわけでもないかもしれない…

…でも…やっぱりうれしい！！…

…あたしの大切な…仲間！！！

「そ…そっか…」ユイリィが言葉を漏らした。すぐに普段の調子に戻った。

「まったく！すごい無茶だよね！さすがリーヒュン！！あはは…うん。頼むね！！」ユイリィが上に向かって言った。

リーヒュンはさらにもう2本ツルを出して、ユイリィ達を上に引きずり上げ始めた。首の葉っぱのもとから出たツルが容赦なく前へ持って行かれそうになり、体が支えにしてている岩に無情にまで食い込む。だが今の彼にはそれをやめる手段はなかったし、やめる気も全くなかった。

ユイリィも頑張った。自分の前足の爪を何とか絶壁にひっかけ自分でなるべく上へあがろうと努めた。大切な仲間の負担を減らしてやるために。

その2分後、3匹はようやく上に上がることができた。リーヒュンの体は骨が折れたような痛みと能力を引き出した後のような疲弊に襲われていた。ユイリィも4本の脚がまだ空中に浮かんでいるような激しい悪寒に襲われてしゃがみこんだままだった。ロズリンのほうは恐怖で震えていた。

彼女の表情には、恐怖を感じた時に見られるスリル的な笑顔と、感謝が入り混じっていた。

「あはは…ごめんごめん！助けようとしたらそのまま前に飛び込んじゃったよ！…ありがとうね！…もうあたしったら…」

「はあ…死ぬかもしれなかった状況にも相変わらず君はこれか…」

リーヒュンは痛む首の葉っぱをツルでなでながら呆れた。

「でも、どうしてそんなことしたの？ホントはあたし、あのまんまでも無効に飛び移れたよ！それとも怖かった？…ごめんごめん！からかってるんじゃないよ！ただ…どうしてこんなに頑張ったのかなって…」

「いや…当たり前だろ」「へっ…？」ユイリィが気付いたような顔をする。

「そうだよね…うち一人でやってるんじゃないんだよね…」
彼女は自分のツルで首元の花をなでた…

「…ありがとう…あたしのために…」「うん…」
そう。2匹であるから、これからもそうであり続けるから…

「行こうか…あと少しだもんな…」リーヒュンが立ち上がった。
「・・・うん！行こっか！！」ユイリィもロズリンを連れて歩きだした。

2012年　11月2日　ソーラ大陸　プラウス州南端　国連軍施設　1600時

「…そう…では、そのような対立は確認されなかったと…どちらもそう言うのね…」サクラ司令官が探るように聞いてきた。
結局、リーヒュン達もブレイブ達も戦闘には巻き込まれなかったし、それを目撃することもなかった。トラブルには巻き込まれたものの、それが隣の州との紛争と関係があるとは思えなかった。もっともアルコール中毒者や武装強盗（ラスカル）は増えているという報告は、やはり文明の乱れが表れつつある、という証拠なのだが。
「…その強盗の目的はやはりあなた方の金目的なのですね？」
「はい、僕の見た限りでは…」リーヒュンはこう答えたが、その言葉で、ユイリィと割り勘していないことを思い出した。

「見えた…ですか…。…あなたもだいぶ成長したようね。よくやったわ」司令官は初めて彼を誉めてくれた。
「もっちろん、あたしのお陰もありますよ！」ユイリィが自慢げに言った。
「はいはい、あなたのことも少しは評価しておくわよ。よくやった。これでいい？」司令は苦笑しながら言った。

「では、そちらのほうは単にアルコール中毒者に絡まれただけ、という事ですね？」サクラ司令がブレイブたちに尋ねた。
「簡単に言えばそんなもんです！で、これがその証拠ってわけっすよ！」ブレイブが種族特有の短足なオレンジ色の前足にある傷跡を誇らしげに見せた。
「そんなものいちいち誇らなくていいの！」テルルが彼女の種族特有の長い前足でブレイブのそれをぶっ叩いて引っ込めた。「でも、その人の旦那（ポケモン）さん、隣の州の連中と戦って戦死した。それで悲しみのあまりその人が酒びたり…とか言ってましたよ。」彼女が思い出すように続けた。「ブレイブ、そうよね？まさか、アンタそれも覚えてない、ん？」
「…んなわけねえだろ！…確かにテルルが言うとおりです。」ブレイブはブースターのオレンジ色の足をさすりさすり言った。
「そう…わかりました。」司令官は面々を、特に４匹（と新入りのシェイミ）をまじまじと見つめていた。

しばらく沈黙があって…

「各種行動状況、戦闘時のデータは皆が持って行った発信装置からだいたい回収して置いたわ。詳細はまだだけど。それで…」

「結果、どうでしたか？」ユイリィが早く聞きたい、という顔をしていた。

…合格なら…今後も認められれば…
…リーヒュンと、みんなと…今後も一緒に！！！…

「…そう焦らないの。まあ…みんなそれぞれなりに頑張ったようですね。今回は…合格、という事にするわ。」

合格…
リーヒュンにはあまり実感がわかなかった。喜びというより不安感が先だった。
…じゃあ、俺は本当に…“あれ”なのか？……
…本当にフローラを…救う…のか？

「やったやった！リーヒュンとこれからもずっとできるんだよ！ホント一緒でよかった！うん！すごいすごい！本当に…ありがとうございます司令！」
ユイリィはうれしさを隠しきれず、彼の首の葉っぱ付近に飛び掛かった。
「うぐぅぅ…く、苦しい…」彼は彼女の前足とツルで首が閉まりそうになった。

一方のブレイブは…
「よっしゃあ！テルルちゃんも確定だな！！これからも俺が思いっきり仲良くしてやるぜ！！」彼はフサフサ尻尾をぶんぶん振ってテ

ルルの頭飾りにペタペタ触った。
他方、テルルはほっとした半面、ブレイブが自分の体の一部であるグレイシア特有の頭飾りを触ってくることに対し、とてつもない不快感に襲われた。だが、指令の眼前で彼を殴り飛ばすわけにもいかず…
「あ、ありがとうございます！…ちょっとブレイブ！目上の前でやめなさいよ！」と作り笑いを浮かべた。（その時彼の耳元で「あとで覚悟あんの？！」と言っといたが、この喜ぶブースターに聞こえたかはわからない）
しかし…彼女はこうも思った。
…ブレイブじゃなかったら…私はもう逃げ出していただろうな…こんなに人間に従うのが嫌い、従うことがまるっきりいやな大人失格の私でも…乗り越えられたんだから…

「うん！リーヒュン、一緒に頑張ろうね！！」ユイリィはリーヒュンにもはや嬉しさのあまりのしかかりの状態と化していた。大きさも体格がかなり似ている2匹とはいえ、さすがにベイリーフがメガニウムにのしかかられていい思いはしない。
「わ…わかったから…思い…」彼はようやく彼女の体から身を起こした。
「ただし…」サクラ司令の声が変わる…「はい？」ユイリィが聞いた。
「そのシェイミ…ロズリンって言ったわね？彼は放す事。あなたち二人にとって感情を流されるのは危険です。まあ…規則…使命…ね。いい？」
「はい…やっぱり…ダメなんですよね…」顔では仕方がない、という笑顔を浮かべていたが、彼女は内心においてまるで節電中の大都市市民と街並みのようにしょぼくれ、がっかりしているようだった

少なくともリーヒュンにはそう感じられた…

「あと…あなたがこの子を感情に流されて保護したこと。それ自体があなたの立ち位置として重大な問題です。あなたの処分に関しては後々…決定します。いい？」司令は容赦なく続けた。そう、ユイリィ達はその能力を十分に発揮するため、他人に極端な感情移入をすることは禁止されている。たとえば捨て子を育てるとか、異性とデートをするとか。

無慈悲に見えても仕方ないといえばそうするしかなかった。

「あはは…またやっちゃった…すいません…」彼女は自嘲的な笑いを浮かべた。

「まったく、あれほど言ったのに…ただでさえリーヒュンと仲良しすぎると思ったのよ。あなたも以後十分に気を付けるように。大丈夫」司令官はリーヒュンにまで話を振ってきた。

「え、ええ…でも…それは！…」彼は戸惑った。

「まあ…かわいいガキなんだが…状況が…な…」ブレイブが首を振った。

「規則……私にはどうしようも……」テルルはこのシェイミに自分を重ねるように見つめ、うなだれた。

…そういわれるのは覚悟してたんだけど…やっぱりこの子を他の場所に移すのは…

ユイリィにとって考えるのと実際にそうなるとではやはり衝撃は大きかった…

そのロズリンのほうも、（おそらくは）人間の保護センター送りになるのだろう、という事もあってか寂しそうではあったが、それは寂しさというより、小ばかにする相手がいなくて残念、というような目をしていた。

「まあ・・・どっちでもいいでしゅよ。」

「あの！自分が何とかします！どうにかなりませんか？」リーヒュンが突然進み出た。

「…それはわかるけど仕方がないのよ。特にあなたは精神的な安定が重要なの。最初に言ったことを忘れた？これはあなたの使命です。」司令官は進み出た彼をいさめるように言った。

…確かにそれはそうである。彼がいる目的…能力を持つ意味がそれなのだから…

世界に一兆といる人間、ポケモン、すべての動物の中から、2匹だけ特殊な能力を身に着けたのだから…

「それは知っています！！」彼はまだ食い下がらない。「俺はこの子を施設に送るのは、単なる…その…人間的なものを…感じるんです！」

「本当に私をそう見る？」司令は見極めるように言った。

「はい！さらに言えば…ユイリィに全責任を押し付けるのも…」彼は今まで我慢してきた疑問や不審が一気に吹き出すのを感じた。

「…犯罪だと思います…」彼はサクラに迫った。

「…なるほど…ね…」司令がからの目を覗き込むように言った。

ただ、この青年の態度に怒りを感じるというより、彼の意思を探り、発言に対し間違いはないかと念を押すような顔だった。

「お、おい！貴様！司令に抵抗するつもりか！プレミドール中尉、これはすべて貴様の監督不十分だ！」司令お付きのコジョンドがリーヒュンに食って掛かった。それをユイリィになすりつけてまで来た。

「す、すいません！リーヒュン、いいの！私の責任！…いやいや秘書官！ホントあたしがまともに見なかったもので…あはは！…もうすいません！」ユイリィが諦めたように笑った。

「この不真面目女が！最初っから指令になんか忠誠を誓いたくもない、そういう腹積もりなんだろ？アンタに何を言ったところで聞かないだろうが…」

「そ、そこまでは…」彼女はますます諦めたように笑った。

「ラクル秘書官、別に彼女のことをそこまでとは…」サクラ司令もなだめようとした

「ふん！全くまじめにやらんか！司令もですよ！だいたいこんな最初っから不平、不満、不信の3拍子でいる果てに、司令に反抗するとは！こんなくそガキの神経など…！！」自治協会国防軍出身のこの男にとって、命令不実行は処分ものらしい。

だが、リーヒュンも我慢の限界のようだ。彼はこういう硬直した態度の連中（人間でもポケモンでもそうだ）がたまらなく嫌なのだった。

「もしダメだというなら…」彼は自分の首を相手に近づけた。ベイリーフ種族独特の首の葉っぱから放つスパイシーな香りに秘書官はむせ返りそうになった。「…あんたがこの子を…育ててみろよ…」その目線は怒りに震えていた。

「き、貴様…」コジョンドも同じくらい怒りに震えていた。

「…どうです？まさか…できないとでも？…」

ピトムニクは「さっすが。」と一連の様子を苦笑しながら見つめていた。バストークは頭の上のモコモコをいじり、「あれこそ兵隊、いや…男だぜ…」と呟いた。ロックオンはこの横暴秘書官につばめがえしをかけてやりたい衝動にかられながら、グラシデアに「お前に野郎が手出ししてきたら痛い目に見せてやるんだけどな…」と得意げに言った。

ユイリィは彼に勇ましさを感じながらも、上限を知らない無鉄砲さに爆笑しそうになっていた。

しばしの沈黙…

「こ、この…不忠者がッ！！」とうとうこのラクル秘書官は至近距離からとびひざげりを仕掛けてきた。コジョンド種族らしい素早さで。

だが、リーヒュンは攻撃が来る０．１秒前にそれを認識していた。その発展途上といえど類稀（たぐいまれ）な先読み能力で、なんとかかわし方もわかった。この秘書官が至近距離でこれを行ったのが間違いだった。それはプロの投手が打者の至近距離から投球しても球種やコースが決まらないのと同じ。彼が４本足で少し飛び退くだけでラクル秘書官はそのまま施設の床にトラブルを起こした民間ヘリが墜落するか

のごとく無様にたたきつけられた。

ユイリィは笑いをこらえた。メガニウム種族の首の花が床にくっつきそうになるくらい。ほかのみんなは驚きの表情でそれを見た。リーヒュン本人は自分の能力に驚いた顔をしていた。

このコジョンドは怒りで真っ赤になっていた。

「なぜかわすか?!よけたら軍法会議ものだぞ!」

「グンポウ…?」彼が目を丸くした直後、思いっきり顔を殴られ床に秘書官よりさらに無様にたたき倒された。

ユイリィはますます吹き出しそうになった。ほかの面々はさらに驚いた表情をしていた。

ブレイブは親友の一連の行動を感動したように見つめていた。テルルは、彼の行動に驚きと尊敬、そして嘲笑の念が入り混じったような表情をしていた。

「もうやめなさい。一発殴れば十分でしょう?」サクラ司令がなだめた。

「し、しかし…」「もういいの。」ラクル秘書官はいまだに納得がいかない顔をしていたが引き下がった。

「まあ…いいわ…あなたも少しは純粋ぶりを抑制しないと…あともう一つ。」サクラ司令はサーナイト種族の超能力でリーヒュンを起き上がらせた。彼はまだフラフラしていた。

「…何かあるんですか…?」

「あなたの見た夢、私にもわかったわ…」サクラ司令が感じ取ったままに話した。

「…それが…それで?」彼が尋ねた。

「…全部…現実化しているわよ…海岸線のポケモン死体…建物の暴発…みんな…」
「……！」彼の背中に戦慄が走った。

施設のはずれ、海岸線が見える草原地帯　１８００時
この日の夕日もことさら美しかった。今日も警戒飛行のためのＦ／Ａ－２２Ａが２機が飛び立ってゆく。
　リーヒュンは殴られたことに対する不満と司令に言われた言葉に対する不安に満たされながらそれを眺めていた。もっとも、後者のほうが強かった。

いつもの純真さはなく、彼の中では今不安と疑問が花火のようにはじけていた。

…やはり…今まで見たこと…あれは…本当だったのか…
…じゃあ、やっぱり…フローラも……
……それを……救う…ポケモンを…この世界を…救う？…

…誰に頼まれて？……俺が、か？……
……一体…どうなって…
……まてよ？…ユイリィは…状況が見えたりは…しないんだろうか？…

ぼん！彼の背中もとに強い衝撃を感じた。まあ、こんなことをするのが誰かなどとは先読みしなくても分かったが。
「やったやった！リーヒュンと一緒にこの先もできるって！嬉しい

よホントに！うちら一発突破だってね。おめでとう！」ユイリィが自分のツルでポンポン叩いてきた。

「…で、処分、どうなった？」

「ぜんぜん問題なし！多少はフォローするよう言われたけどね…でも、秘書官がいなくなったあとね、サクラさん、４匹ともよく頑張った、て言ってくれたよ！とくにあたしなんか、「今後ともうまくやれるといいわね」だってさ！だからさ、これからも頑張ろうね！！」

彼女はリーヒュンに向かってまたものしかからんとばかりに、体をぐいぐい押し付けてきた。

…全くこの女は懲りないらしい。ていうか気にしてないんだな…

…それとも…内心落ち込んでても…俺や他人には明るく振る舞うだけなのか？

「それに…さっきのあれはもう最高だったよ！！さっすが、てところだね！あはは…」ユイリィはやはりあのことに触込んできた。

「全く…結局、君は…俺をバカにしてるのか…それとも…なんだ？…」リーヒュンは諦めたように不快そうに首を振った。

彼女は妙に元気よく言った。「それとも！？教えてあげようか？！うん！」ユイリィの目が輝いた「だってリーヒュンはあたしの弟みたいな立場だもん！いろいろと見てて面白いよ！あははは…」彼女は首の花をぴらぴらいじりながら笑いこけた。

「あのな、あれは冗談じゃないよ。俺はああいう硬直体質が大っ嫌いなだけだ。ユイリィは言われて何とも思わないのかよ？」

「ん？ぜんぜん？」

「それじゃ困る！ユイリィがなんも言わないと君自身が…命令とやらで殺されるかもしれない…そうでなくても傷つくかもしれない！それが…」

「それが？」ユイリィがリーヒュンの目を興味深げに覗き込んだ。

「…困る…心配で…」彼は真顔で言った。

「えっ？…」彼女の笑顔がゆっくり退いて行った。

「…ごめん…カッコつけてさ…今俺、めちゃくちゃ恥ずかしい…だけどさ…」彼の顔が少し赤くなった。「…あんまり無理すんなよ。…俺の前で無理に明るく振る舞わなくていいよ…」

ユイリィは彼の隣に座った。「そうだよね…」

しばしの間の沈黙…

夕暮れと南半球の亜熱帯と初夏が近づきつつある夏風だけが流れてゆく…

「なーに言ってんのよ！あたしはこういう性格なんだよ！無理なんかしないって。リーヒュンとしゃべっているほうが元気になるもん！いろんな意味で面白すぎる！大丈夫大丈夫！」ユイリィがリーヒュンの虫食い葉っぱ付きの頭をツルでこつん、とやった。

「全く、結局それなんだな。気にしてやってるのに。まあいいや…俺戻るよ。」彼が諦めたように立ち上がろうとした。

「…ありがとう」ユイリィが小声で言った。

「えっ…？」

「あたし、やっぱり無理しっぱなしなんだよね。なんか明るく元気

にやってないと…って頑張っちゃうのよね…」彼女の顔が少し赤くなっていた。「あたし…ここんとこさ、人に助けてもらったことなかったからさ…ちょっと恥ずかしかった…でも…嬉しかったな…」

「そうか…」

「…わかってくれてるんだよね…あたしが思いもつかない事…そう思うよホントに…」

「そうしようとは…してるけど」

「…本当にありがとう…うちの事…いつも心配してくれてるんだよね…ごめんね…時々言いすぎちゃって…」

「大丈夫だよ…俺もさ…ユイリィがいなかったらさ…きっと耐えられなかったと思う…うん。」

「これからも…一緒なら大丈夫だよ…絶対…」

2匹はしばらく夕日に暮れゆく空を見つめていた…

ふとリーヒュンが気付くと、自分の首の葉っぱのところにユイリィが頭と4本の雄蕊(おしべ)を寄せていた。彼の顔は一気に赤くなった。

ふつうベイリーフやメガニウム系の種族は、あまり恋心を表に表現しようとはしない。プロポーズのように接近していくのは滅多にないことだ。ましてや、体をくっつけあおうとするのは、よほど既婚

の夫婦か親子の間の表現でしかないのだ。まあそれぞれの性格差も大きいが。

彼女が本気か、それともいつもの調子なのかは知らないが、そういう行為をしてきた。

「ま、待った待った！何やってるんだよ！？それは困る！」リーヒュンは慌てて自分のツルで彼女を付き戻した。

ユイリィもはっとしたような表情となった。しかしそれは1秒後にはいつものツッコミに変わった。

「えっ？えっ？！何ヘンな妄想しちゃってるの！？あはは、それは恥ずかしいよ！！リーヒュンみたいな子供が結婚するのは１０万年先、って感じだよ！誤解禁止！！あ～あ…これは受ける！！！あはは…」否定しているのか認めているのか微妙な言い方だった。

「と、とにかくやめてくれ…俺、恋愛っていうのは嫌いだ…」リーヒュンは彼女の頭がふれていた部分に違和感を覚えたように、ツルでなでた

「そうそう！そういう顔してるよ！真っ向から男！！、て顔してるもん♪」ユイリィは相変わらず笑いながら言った。

「全く…まあいいや…」彼は諦めたように笑った…

「うん。じゃあそろそろ戻ろうか…待って、しておきたいこと、まだ残ってた。」ユイリィが言った。

「ん？何すんの？」

「ツル、頭の上のほうに出してくれる？」

「う、うん…」リーヒュンには彼女が何をするのかいまいち理解できなかった。

ユイリィが息を吸い込んだ。「これからも2匹で一緒にやってくんだね。」

彼女が続ける「これからも…ずっと…よろしくね！！」

そしてツルを彼のツルにぱちんとぶつけ、そのまま巻きつけてきた。
彼女の温かさが爽やかに伝わってくる感じがした。
「よ…よろしくな。」リーヒュンはちょっと恥ずかしそうに言った…

ツルをくっつけ会い、夕日に照らされるベイリーフとメガニウム。
その向こうをアメリカ軍の対潜哨戒ヘリ、ＳＨ－６０Ｊが通り過ぎた…

２０１２年　１１月３日　ソーラ大陸の国連軍施設　管理棟の司令執務室　００３０時

「…そうか。それなら問題なく開始できるのだな。」アメリカ、ニューヨークのＮＵＮ（新国際連合）の私用オフィスにいる代表の声がサクラの手にしている携帯電話（モバイルフォン）端末から聞こえてきた。アメリカ東海岸でいえば、まだ未明だ。

「ええ、彼らの能力は十分にあります。…あとは、もう少し落ち着けばいいのですけど…」サクラは言った。

「まあ、我々には関係ない話だな。それでだ、サクラ、自治協会側との連絡はついたか？」

「ええ、まあ、任せる、だそうです。あの組織、議会もまともに運営できないみたい…」サクラは心配そうに言った。

「まあ、このところは仕方がないな。あと、自由連合側との交渉はどうなってるんだ？」司令が単刀直入に入ってきた。

もう一つのポケモン文明の政府組織に。

「それに関しては…特に…」サクラ司令は口ごもった。
あの中央アジアにある政府のことに関しては、彼女の種族としてのエスパー能力と彼女独自の能力をもってしてもよく把握できない…
代表は続けた。
「…そうか…向こうの関係者か誰かが、北欧…たしかスウェーデンとか言ってたな…で、そこで消息を絶ったらしい。自治協会側に殺害疑惑がかかっている。自治協会側が君に何か言ってきたら遠慮なく私のほうに回してくれ…」

…そう。このポケモン文明には2つの政府組織が存在するのだ…

それぞれの“合格”というモノ…（後書き）

はい、４匹とも何とか突破したわけです。誰かが不合格でもよかったんですけどね…

そうすると話を考えるのが複雑になりすぎる…

今だってかなり難解になってきてるのに…

最後にＳＨ－６０が出てきた理由、ですか？

…なんかそんな雰囲気っぽかったからです。訳が分からずすいません…

ユイリィ：とーぜん、うちとリーヒュンは仲良くなったよね？

…さあ？どうでしょうか？

衝撃の健康診断?!　そして…新たなる始まり…（前書き）

今回は比較的穏やかな展開そうです。まあ、冒頭を除いて…

途中でテルルがアルコールでとんでもないことに?!

衝撃の健康診断?!　そして…新たなる始まり…

２０１２年　現地時間１１月２日　スウェーデン　ストックホルムから５０キロの上空　０６００時

北半球の高緯度地方であるこの地域の夜明けは遅い。あと1月で冬至だが、その時期には昼まで太陽が低く、朝が抜けきらぬ間に夕日が近づくという日々がやってくる。

スウェーデンはスカンディナビア半島の東端に位置する王政国家。１９９５年にＥＵ（欧州連合）に加盟したものの、この国はスイスと同様、長年旧ＮＡＴＯ（北大西洋条約機構）寄りながらも中立国としての立場を崩してはいない。世界トップクラスの福祉国家でありながら、独自で重工業やハイテク産業を設立してきており、中でも軍需産業はアメリカやロシア、中国、欧州に負けないクオリティを持っている。北欧では珍しく、原発問題以後も原発利用の継続の姿勢を保っている。

その国の首都、ストックホルムから５０キロの高度１００００フィート上空。足元からはすでに新市街地や郊外宅地の光も遠ざかり、バルト海の黒々とした海面と沿岸の道路の明かり、そしてそこを走る自動車のライトだけがぽつぽつと並んでいる。

２機の自国・サーブ社製の汎用戦闘機、ＪＡＳ－３９Ｃグリペンは３０分前に本国防空司令部が捕えた不審な機影と思われる目標（オブジェクト）を追撃していた。２機のレーダーにはバルト海を往来する民間貨物船と、ストックホルム国際空港付近を飛ぶ旅客機や民間機が多数映っているが、彼らの目指すオブジェクトは空路（エアウェイ）からはずれながら飛行を続けていた。

２機は数分後には目標を目視していた。レーダーの識別と目視によれば相手はフライゴン。背中にもポケモンを乗せている模様。この航路での飛行の目的は不明だが、司令部側の解析によれば“敵性（ホスティル）

”であるということだ。

一方の機体のパイロットが無線システムを対ポケモン用音波発信装置に切り替える。機械が拾った音声をポケモンだけが感じることができる特定領域の音波に変換して機外に発信するシステムだ。「貴官らは現在、敵性目標として我が国の防衛システムに認識されている。この判定に意義がある場合、直ちに当機付近１００ヤードに接近せよ。」

ドイツ語で、ロシア語で、英語で2回警告を繰り返した。

オブジェクトに何の反応もない。

「目標（オブジェクト）、飛行方位、速度変化せず。指示を請う。」パイロットが司令部を呼んだ。

しばしの沈黙ののち「敵性（ホスティル）と識別。防衛攻撃を許可する。」抑揚のない声が無線機から聞こえ。レーダーのＩＦＦ識別が“不明（アンノウン）”から“敵性（ホスティル）”に切り替わった。

「遂行する。」もう片方のパイロットが無感情にいった。

その約１０秒後、ＪＡＳ－３９Ｃから放たれたミサイルによって、フライゴンと乗っていたロズレイドはまぶしい夏の朝日のような火球に吹き飛ばされ、皮膚と内臓と血液とミサイルの破片がいっしょくたになったよじれた残骸となって飛び散った。

ロズレイドはまともにミサイルを浴びたフライゴンから吹き飛ばさ

れ、まだ暗いバルト海へと落ちて行った…

２０１２年１１月３日　ソーラ大陸の国連軍の施設　ポケモンの居住地区　２０００時

…テルル、お前最高だ！酒に酔った時のこの変容具合！

ブレイブもまたアルコールがすっかり回った頭でそう考えた。

今日の午後にサクラ司令に“明日は検診があるから、夜以降は結果に影響を及ぼすような行為をしないこと”と言われた、にもかかわらず、今３０２中隊の面々はリーヒュンやブレイブたちの正式入隊と実施訓練突破を祝う懇親会の真っただ中にあった。主に食料とアルコールをどこからか調達してきたのはピトムニクとユイリィである（もっとも外見からして基地から持ってきたものとしか思えなかった。このソーラにはここと北部意外に人間は一人も住んでいないのだから。）。それにしても、全く持って状況を読めないというより、気にしていない連中だ。この場合は日本的な“空気”ではない。すでに言われたにもかかわらずやっているのだ。

まあ、それはそれは大いに盛り上がったわけであるが、何より盛り上がったのはアルコールによる性格の変化した連中であった。特にテルル。

「でさでさ、私の弟ね、めっちゃかわいいのよ！これがもう、癒されるなんのって…」普段、女の子としゃべっているときと見ても、とてつもないテンションの上がりようである。

「そうか！なるほどな。で、こんな感じなんだろ？」ブレイブが普段の勢いで体をテルルの首元とグレイシア種族特有の頭飾りにくっつける。

「そうそう！そうなのよお！めっちゃかわいいすぎるよね！！あんたもそう思ったでしょ？」普段、彼女がこの色気たっぷりのブース

ターに触られるのをどれだけ嫌がっているかを考えれば、この状態は相当異常に見えた。

ユイリィはそんな彼女を笑い（ユイリィ自身は酔ってもそんなに変わっていない。普段があれくらいだともうこれ以上無理なのだろう）、「あはは！テルル面白いぐらい変わったね！ずっとそうやってみない？」とちゃかした。

「うんうん！弟そっくりだからなそうしようかな！もうマジはまった！…」テルルが頭をブレイブにこすり付けた。

「うおおお！俺、今猛烈に感動しているぜ！！」ブレイブは大喜びしてフサフサ尻尾を振りまくっていた。

「うん！すごいすごい！じゃあこの勢いで、あたしもリーヒュンと…」ユイリィはそういいながらいつもの調子でリーヒュンの首の葉っぱのところに自分の頭を持っていこうとした。

「おいおい！何言ってんだよ。」彼は彼女の頭を押しのけた。

「まったく、お前は女ってのを理解できねえんだな！だから性格が子供、て言われるんだよ。」ブレイブが言った。

「わかったわかった。もう俺子供でいいからさ。それはそれで誇りだよ、なあ？」リーヒュンは苦笑した。ポケモンにとって人間年齢１５歳を超えれば立派な成人である。

「そうそう、その調子！そうじゃなきゃリーヒュンじゃないもんね。ワタシはバストーク中隊長で十分！」ピトムニクが少しテンションの上がった声で言った。肝心のバストークのほうは全く持って平静だったが「お、ありがとうよ。…でもなあグラシデアはすぐに酒で倒れからなあ」と言った。

「こんな時こそ父親を発揮してくださいよおっさん。」ロックオンは酒に酔って眠りこけているグラシデアを見やった。

「フン・・・たまにはそうしてみるか。」「さすが中隊長！」「おお、待ってたぜ！」バストークが寝ているグラシデアのもとに寄った。

さて、日付も変わったころ、アルコールが回りすぎでぐったりしてしまった（危険な昏睡状態ではないが）テルルをかついだブレイブは施設から少し小高い上に上がった森のところにやってきていた。ブースターがグレイシアを背負う。ちょっと微妙な光景かもしれない。

「おい…テルル、大丈夫かよ?途中でいきなりぶっ倒れちまうなんてさ。」

「う…うんん…?」テルルがとろとろと目を開けて音を出した。どうやら少しはアルコールが覚めてきたようだ。ブレイブは少しほっとした。このまま彼女は死んでしまうのではないか?そういう不安感が先ほどから芽生えていたから。

「まったくよ、酒を入れるときは自分の容量（キャパシティー）わきまえろよな。頭がフラフラになっても少し考えていればだいたい察しはつくぜ。」

「…そう…だね…」テルルは彼の言ったことに対する応答か、それとも別か、ぼんやりと呟いた。

「ね…ねえ…私…なんか言ってた?」彼女が静かに言った。

「たく!覚えてねえのか。よほど回ってたか。」ブレイブが諦めたように笑った。「あれは最高だったな!俺のさわり心地が弟そっくりだとか言って頭飾りをペタペタしてきた!いやあ、あれは俺にとって至福の瞬間!」

「な…何言ってんのよ…アンタみたいな変態に誰が…」テルルが首を振ろうとして地面に顔をこすりつけた。どうやら少し感覚が戻ってきたようだ。

「ちぇっ。元通りになってきたな!おっし、これで嫌がるかな?」ブレイブは短足気味の前足をテルルのほっぺにくっつけた。

「バカ…何やってんの?…勝手に触らないでよ…」彼女は彼の前足を自分の前足で振り払おうとしたが、まだ意識がはっきりしないらしく、その足は虚しく宙をかいた。

「へへ!やっぱりテルルちゃんにほっぺは気持ちいぜ!わかったわ

かった。まだ酔いは冷めてねえんだからよ、無理せず休め。」ブレイブは懐から持ってきたモモン（桃の一種。解毒作用とともにアルコール分解促進作用もある。ただし、味や風味は人間の栽培する改良品種と比べて一歩劣る）を彼女の口に押し込んだ。

テルルはそれを少しずつ食べていった。結局そんなに食べられなかったが。そのまだ混濁している意識の中で彼女はこう思った。

…この男…なんで私をこうまでしてくれるんだろう？…単なる遊び？…

…それとも…？

……

２０１２年　１１月４日　ソーラ大陸　国連軍施設　０６３０時

この日、久しぶりに早々と目を覚ましたリーヒュンであった。何日かぶりに…普段感じる“あれ”によるものは除き…夢の中に妹のフローラが出てきたからだ。しかも昨夜のものはかなりはっきりと出てきた。彼女は森の中でなにか訴えげにこちらを見つめ、やがて森の中に歩み去って行った。その時の表情を兄が忘れるはずもなかった。たとえそれが異父兄妹だったとしても。

…フローラ…俺に何をしてほしいんだ？…やっぱり…

…なんであったとしても…フローラを救ってやる…それまでは…

それ以上のことを考えると、気持ちがまるで水道の蛇口を占めるようにきつく息苦しくなり、もう頭が回らなかった。もういてもたっ

てもいられなかった。

彼はいつものようにピトムニク達を踏んづけないように（昨日はあの後もだいぶ遅くまでブレイブたちと盛り上がったようだ。ピクリともしない）居住施設の外へとでた。さわやかな亜熱帯特有の秋風がリーヒュンには心地よかった。一方、空にはまだ夏の青さを残していた。

彼は施設の裏側、森近くの小川に向かい、そのソーラ中央の山地からくる清流に顔を葉っぱと一緒に突っ込んだ。水の冷たい感覚、あの夢で生まれた心のよどみを思いっきり流してくれたようだった。

「おはようリーヒュン！今日は早かったんだね。」後ろからツルでポンと背中のあたりをたたかれる。ユイリィであった。

「おはよう。以外とユイリィは早起きなんだな。」彼も言った。

「そういうあたしもまあ、何してるの、て話なんだけどさ…、ねえ、あたしのこの長いほう、上手く巻けないんだけどさ、やってくれる？」

「う、うん。いいけど…この雄蕊（おしべ）のことだよね？」リーヒュンは自信はなかったが、ユイリィの頭のところから生えている黄色の突起にツルを持って行った。

彼女はメガニウムであるから触覚の役割を果たす突起が雄蕊（おしべ）のようについているわけだ。しかし彼女の特徴として、女であることを示す短めの2本から左右1本ずつ枝分かれしており、その外側の2本というのが種族の男のものよりはるかに長かった。彼女は邪魔にならないようにそれを渦巻き状に丸めて留めていた。

「う、うーん？こう？なんかへたくそだな俺。」「そうそう、そうなんだよ！すんごい嬉しい！」リーヒュンは彼女から渡されたひもで見よう見まねで彼女のおしべを結んだ。その間、終始ユイリィは喜んでいた。どうやら彼に触ってもらえるのがうれしいらしい。

いや、なかなか他人、しかも異性と関係を持ったことのない彼女は実際そうでなくても、一緒に過ごせるだけで嬉しいのであった。

2分間くらいかけて、リーヒュンは作業を終えた。

「こ、こうかな？へたくそでごめん。でも、もし無理だったら、自分でやってくれよな…」

ユイリィは川の水面でそれを確かめ、自分のツルでそれを触り…

「お、なかなかいいね。いやいや、すごい上手い！ありがとう！」

と嬉しそうだった。

「そりゃよかった。気に入ってくれたんならいいけどさ。」彼も言った。

「うん。本当にありがとうね！そうだ、せっかくだしさ、いいもの見せてあげよっか？そうするよね！」「いい物？」

ユイリィは持ってきた袋から何かを引っ張り出す。

それは、横笛に近い金管楽器の一種のようだった。だが、人間が使うモノには到底見えない。途中で3本にわかれ、それぞれの穴にはラッパ状の器具がくっついている。それは、西洋のバグパイプでもなく、東洋の篳篥（ひちりき）とも異なるものであった。

彼女が奏でる音色はリーヒュンが、いやほかのポケモンでも、人間でも、そう思うであろう、この世のものとは思えないような神秘的で美しいものであった。

「…すごいなユイリィは。そんな楽器まで弾けちゃうんだからさ。」

彼は目を丸くしていった。

「うん。これね、弾く人によって音色が全然変わるんだってさ。こ

れはあたしの家族にずっと伝わってきたものなのよ。まあ、今弾けるのはあたしだけなんだけど…でね、この曲はね“花のほころび”っていうんだって。」

花のほころび…この曲は現在、日本の渋谷駅の二番線の発車メロディーとして使用されている。聞きたい方は、ぜひ渋谷駅の2番線、山手線内回りのホームで聞いていただきたい。

「へ〜。えっ?家族は?」リーヒュンが聞いた。

「う、うんん。なんでもない。今ここでできるのは、って意味だよ。ごめんごめん、誤解させちゃって。」ユイリィは慌てて否定した。

「それでね、リーヒュンもあたし達とおんなじ能力を持ってるからさ、もしかしたら音出せるかもしれないよ!うん。やってみようよ!」

「俺に?うーん?できないとは思うけど…まあ、やってみるか。彼は空気を吹き込む位置に口を当てた。

「どこを押さえればいい?」「うーん?こことか、かな。」彼女に言われるがままに穴をいくつかツルと前足の爪で押さえた。その後そっと息を吹き込んでみた…

空気を吸こんだとたん、リーヒュンの心に澄んだ何かが入り込み、その空気に満たされた。代々ユイリィの家族が残してきた気持ちや意思を感じた。自分の中にどのように吹き込めばいいのかを意識しなくても導いてくれるようであった。

彼が吹いた音は夏空に響くローカル気動車の、ホイッスルとのどかな空気式の警笛(タイフォン)を掛け合わせたような音だった。彼女のような神秘的、というより、素朴な春の草原と夏の里山の空気を掛け合わせたような感じだった。

「すごいすごい!いい音だね!!頑張れば、きっとあたしなんかより感動させられるよ!うん。あたしかがこれから教えてあげるよ!」

ユイリィは大喜びだった。
「できたら、そうだな、よろしく頼むよ」彼も言った。
そのやり取りの最中、リーヒュンはこう感じた。
…ユイリィは…単に明るいだけじゃなくて…神秘的な感じもするな…
…何のせいだかはわからないけどさ…

その日の１１００時　国連軍の施設の一角

「す、すげえ！やっぱテルルちゃんはこういう姿もＯＫだったのか！」ブレイブが目を輝かせてテルルの様子を見た。
「はあ？！何異性の健康診断見て喜んでるの？そういうの人間界では犯罪よ！わかる？！」
「そう人間連中みたいな保守的なこと言うなよ！ポケモンなんだから、仲良くやろうぜ。な？」
「アンタとはぜっったいにお断りよ！」「おいおい動かすなって！」テルルが前足で彼を殴ろうとして、機器の担当の人間に押さえられた。

今、３０２中隊とお付きの面々は正式辞令直前の健康診断にあたっていた。病気、疾患の有無を調べるのはもちろん、体力、能力、その他ををフルに発揮できるかどうかもまで調査範囲だ。そして、今後の過酷な戦闘に耐えうるかどうかの精神面まですべて調べられる。この検査は全員が（リーヒュン、ブレイブ他４匹と３０２中隊の２６匹も）別行程で順繰りに受けても半日以上かかる予定だった。言うまでもないが、こんな偏屈連中が受けるので大幅に遅れてはいたが。検査項目は、身長（というより頭頂高）、体重という部分、視力、聴力などの検査、内臓諸臓器は内科、骨格その他は形成外科、

といったポピュラーな分野から、脳波、血流速度、心電図、ＣＴスキャンなどの精密項目、各種体力、わざの能力といった保健体育でやりそうな部分まで存在した。

もちろん、全てが全て人間そのまま、というわけではない。かといって、ポケモンの諸臓器なんて種族ごとに違うのだから、犬や猫を動物病院で検査するように扱うわけにはいかない。ある程度どんな種族でも対応できる専用の機器を使うのだが、彼等とて文明生物であり、力ずく、とはいかないからだ。しかもこの連中がある程度人間社会に知識があるとなればそれはそれは困難であった。

ところで、皆さんにとって医療機器と言えばやはりドイツ製や日本製の機器や技術がよく思い浮かぶだろう。確かに、ここにある機器はドイツの企業のものや日本の企業のものが見られた。実際中国や韓国などのアジア新興国では、日本への健康診断ツアーというものが盛んである。これは、比較的上流階層の健康意識のみならず高度な医療技術の調査も兼ねたものである。もっとも、２０１１年の東日本の震災以後ツアーは半分くらいドイツになっているが。

とにかく、医療技術というのは、情報技術、エネルギー技術、宇宙開発と並ぶ人間文明繁栄の要因（ファクター）である。医療というのは単に市民のけがや病気の治療だけでなく、経済界では、被雇用者の健康管理や労働環境整備、科学技術界では生命工学（バイオテクノロジー）、生物進化論に応用され、航空宇宙産業では、宇宙で作業にあたるクルーの健康管理にも重要な役割を果たし、史学、考古学界でも、遺骨の検査や記録の考察から人物の健康状態、生存年数などを通じて歴史を解釈する役割を果たしている。

もっとも、それがＢＣ（生物・化学）兵器やポケモンクローン兵士等あまりよろしくない事象にもつながっているわけではある。

で、彼らが時間がかかる理由とは…

そのまんま、不真面目、バカ騒ぎ、これが理由である。

特にブレイブとテルル。
「頭頂高９１．５？…よっしゃあ！テルルに勝ったぜ！」
「なーに言ってんのよ！あんたの頭のフサフサで稼いだんでしょ？！」
「へっ。何言ってんだ。テルルちゃんもそのかわいい頭飾りで稼げよ！何なら俺がやってやろうか？」ブレイブがそういって測定器をいじり（しかも相当強引に）、テルルの頭飾りをいじって…

ぼかん！「気安く触らないでよ！」テルルがまた彼の頭に一発…

体重の時はもっと困る。
「おおお…テルルちゃん痩せてんなあ！」ブレイブが体重計の電光（デジタル）表示器の数値を見ながら言った。
「まあね、ブレイブなんかと違ってやけ食いしてないのよ。」テルルは得意げだ。
「いやいや、そうじゃなくてさ！それはテルルのこの締まった…」ブレイブが彼女の後ろ脚のもも肉のあたりを…
「こ、この変態！！警察に送ろうか、ん？！」テルルが彼の左前脚をものすごい力でつかみ、ひねりながら体重計にたたきつけた。
「いてえ！やめろっつうの！別にテルルちゃんが太ってる、なんて言ったわけじゃ…」
「こらこら壊すなよ！」一連のやり取りを持っていた担当の人間が無理やり２匹を引き離した。

心電図をとるとき、たいてい心臓周辺に吸盤のような電極をくっつ

けられた経験は読者の皆さんには学生時代に一度位あるだろう。ポケモンの場合、４本足の種族では横に寝かせてそれをするのだが、それが種族によっては意外と大変なのだ。
例えば、バストーク中隊長のようなメリープ。モコモコで皮膚までたどり着けない。
「な、なあ…くすぐったいんだが…いつになったら終わるんだ？」
バストークがくすぐりの笑いをこらえたように体を震わせた。
「も、もう…あとちょっとで終わりますから。ってみてると面白いや！もう少し見ていていいですか？」ピトムニクが中隊長のもふもふを一緒に探った。
「あーあ、中隊長ちゃんと洗ってませんね？」ピトムニクがモフモフに手を突っ込みながら言った
「わ、分かったよ。（ぴ、ピトムまで…）…ああ、もう勘弁してくれ。」バストークがうめいた。
「アンタが全部毛を抜いてくりゃ一分で終わるんだが？」担当に医師たちがぼやきながら作業していた。

ブレイブとテルルの場合はもっと厄介で…
「や、やべえ！この吸盤…うう…気持ちよさすぎる…や、やめろ…」
ブレイブが気持ちよさそうに言うもので、医師たちが複雑な表情を浮かべながら電極を４本足の腹部に装着していた。
「何言ってんのよ？！」テルルが待機している場所から声を上げた。で、テルルがやる番になると…
「おお！グラフがぴくぴく触れてる。こ、これは…」
「なーに言ってんのよ。これは単に、私の脈拍通りでしょ。アンタさ、また妄想してるんでしょ？今度はいったい…」
「これはテルルの俺に対するプロポーズ指数だぜ！！」
「な、何それ？」
「つまり、お前が俺が好きだと思うと…こう動く、ってわけだ！！

ほらほら！」

…ばきぃ！！…て、もう何度目だよ。

「はあ？！ぜっっったいにやだ！！！何言ってんのよこの変態！！！」テルルが後ろ足でブレイブの顔面を至近距離で蹴っ飛ばした。

こちらはＭＲＩ（核磁気共鳴画像法）室。精密検査でおなじみ、あのトンネル状の中に寝て入って行くものだ。グラシデアにその番が回ってきた。彼女にとって人間の文明にさらされることは慣れっこで怖くもなんともなかったが、さすがにこんな機械（オランダ・フィリップス社製）に入れられることには不安感を覚えた。

「まあ、この機械はアンタを殺すもんじゃない。中を見るだけだからおとなしくしてろよ。」ロックオンが彼女に声をかけた。

「う、うん…ありがとう…ございます…」彼女がおずおずと言った。…意外とこの人（ポケモン）…心配してくれてるのね…父親（パストークのこと）と違って…

彼女は自分でもわからないが、このムクバードに対し奇妙な好意を感じた。

グラシデアが寝かされたまま（彼女はモココだから2足歩行）ＭＲＩの中に入った。担当の医師が別室（機械のある隣の部屋。ガラス越しに検査の様子が見える）の多機能情報端末（パソコン）で検査の様子や機械の動作を確認している。彼女の内部の様子が、彼女の体内にある水素、炭素、リン、ナトリウムを検知した勾配磁場コイルから受け取った信号をもとに端末のプログラムによってその個々の信号をフーリエ変換で解析し、それを人間に識別できる画像に変換され、３次

元立体の画像となって端末上に表示されてゆく。その様子をロックオンも見ていたが…

「す、すげえ!!グラシデアの体内が!実に女!!いやあ、これはすがすがしいな…」突如として歓声を上げた。医師と臨床技師は「そ、それがどうしたんだ?別に普通じゃないか?」とこぼした後、顔を見合わせて「…こいつもさっきのブースターといい勝負だな。」と医師が漏らした。

その声はガラス越しに彼女にも聞こえた。グラシデアは奇妙な表情を浮かべた。

…結局…ブレイブと言ってることが大差ないじゃない…でも…何かが…違う…

…なんでこんなに…気になるんだろう…

こんな調子の連続だから、担当の士官たちも医師たちもあきれ返っていた。こんな連中が本当に軍人なのかと疑いだした。

さて、あまたの検査のなかで、最も印象的なのは心理テストであった。何が起こったかはすぐに判断できるであろう。こういう心理テストには慣れっこのはずの担当の女性医師を思いっきり困惑させるような事態になった。珍解答、トンデモ回答が続出である。例えばロールシャッハ・テスト。これは無作為に作ったインクの染みを見せて、被験者に何に見えるかを答えさせ（正解はない）その被験者の性格や思考の傾向を調べるものである。心理学の本などを読めば見本くらいは載っているだろう。それに対する各員の回答をいくつか見てみよう（実際のテスト用のものは心理学学会では非公開となっている）。

リーヒュンの場合‥
何に見えるか、ですか？…見えたものをそのまま？…うーん…（目をつぶってしばらく考え）
…なんだか…多くの人が壁にある…窓みたいなものにうつった文字を…読んでいる…みたいな？

２０１２年１１月４日　アメリカ・ニューヨーク証券取引所　１５００時

それは実際に起こってた。どうやら某大手証券会社の経営状態が極端に悪化しているらしい。加えてアメリカやヨーロッパの１０月の工業生産指数が半年ぶりにマイナスとなった。極めつけは、中国の先月の新車販売台数が前年比に対し大きく落ちていた。世界経済に対する減速感が広がり、ロンドン、上海、ドバイ、シドニー、世界のマーケットの指数は軒並み全面安となった。ニューヨークも例外ではない。

…この半年間、全体的な経済指数は低調な物が多い。このままでは、再び後退局面に入るかもしれない…

関係者たちは厳しい目線で各企業の今日１日の終値を見つめていた。

…まあ、彼に考えろ、って言ったら何が見えるかわからないのだが…人間に言っても分からないか…

…場面を戻そう。

ユイリィの場合：
そんなことうちに聞いていいんですか？解答例通りに答えちゃいますよ。あはは！解答例が学会の冊子にあるみたいなんですよ！いやいや分かっちゃった！意味ないね！！あはは…（爆笑）そ、そ、それでですね…（笑）

…これではテストの意味がないだろうが。

ブレイブの場合：
なーに言ってんすか！これはな…そうだ！テルルだ！で、こっちはグラシ！そんでその下のがピトム！みんな女の子に見えますよ！！

…妄想で言ってはいけないだろ！！

というわけで全くテストになっていないのである。そうでなくても、たとえば普通の問診でも同様であった。いくつか見てみよう。

テルルの場合：
は？そんなこと聞いて何にするつもりですか？まさか、人間のマスコミにリークするとか？…
…家族構成？な、何よそれ？！ぜ、ぜ、絶対言わないから！

バストークの場合：
お姉ちゃん、そんな催眠術かけようたって俺には通用しませんぜ。

もっとこう普遍的な…えっ？これがふつう？…はあ～、これだけだから人間とはやりにくいんですよな。

こんな調子なので、結果がまともに出るわけがなかった。最終的には、医師たちの会話状態や態度から確認の性格が調査され、“癖はあるが思考は正常”と判定された。

検査の後　施設の一部屋　１６００時

「…まあ……正確には多少なりとも…問題はありますが…」検査にあたった関係者の代表がこの基地の司令官に報告していた。
「体力、健康状態、能力はおおよそ良好…ですか…まあ、前日にもかかわらず何匹かは飲酒をしていたようですね…」司令官が顔を占めた。
「ええ。その結果がだいぶ血液検査に出ていましたが…」
「彼らのやることは我々人間には止めようがありませんが…すいません…もう少し事前に通告を徹底しておくべきでした…」基地司令官が首を振った。
関係者がいなくなったあと基地司令官…階級章からして少将…はサクラ司令に向きかえり嫌味を込めて言った。
「全くサクラちゃん、ちゃんと通告してなかったのかね？」
「いえ…通告はしておいたのですが…あの子たちは調子に乗りやすい性質で…申し訳ありません…」彼女は首を振り振り詫びた。
「…それだけ有り余っている士気があれば、今後のその計画とやらもうまくいけばいいんだがな…」
司令は諦めたようにため息をついた。司令の飼い犬はそんなご主人

の周りを歩き回っていた。

とにかく、彼らが今後やっていくのには健康、体力上は問題ないと判断された。それに彼らの結束もなかなかよさそうだ。プライベート上ではさておき、少なくとも任務遂行中に内輪もめを起こすことはないだろう。

…サクラ司令はそう思った。

２０１２年　１１月５日　ソーラ大陸プラウス州　国連軍の施設
０８５０時

「も、もうジッコウですか！？早くありません？」ブレイブが声を上げた。

「あ、あのな、“ジッセン”だろ？実行ではないな。」リーヒュンがツッコミを入れた。

「ほ、ほんとですか？！やったやった！すごく楽しみになってきましたよ。」ユイリィが嬉しそうに首の花を動かした。その頭の上で、ロズリンが「お前と一緒はいやでしゅ。」が背中の草を震わせた。

テルルは緊張かなんなのか、かなり硬直している感じがした。

「なるほど、ようやく本格的な任務が久しぶりに回ってきた、てわけですか。」バストークは戦闘の感覚を取り戻すかのように呟いた。

ピトムニクのほうは、「ついに任務が回ってきましたね。ばっちり遂行しましょう！」と意気込んでいた。

「あなたたちもいよいよ実戦ね。今回の任務というのは、ソーラの北、ニュークリア南部のサバーブ州バージア地域にあるアメリカの

宇宙基地で打ち上げセンターの警戒を行うというモノです。」サクラ司令が手を軽く動かすと、前方の映像投光器（プロジェクター）がスイッチも入れてないのに作動した。

おそらくこの映像はアメリカ国防省か国連統合軍司令部が作成したものが情報端末を介して送られてきたのだろう。

（以下は内容）１１月１０日、アメリカフロリダ州のケネディ宇宙センターにあるマスドライバーカタパルトから重要物資を積んだＳＴＯ（単段スペースシャトル）タイタンが打ち上げられるが、それに連動して関係する小型衛星をバージア宇宙センターからもアトラスロケットで投入する。それぞれの地上での監視は州警察および施設のセキュリティー部隊が、上空の監視はアメリカ空軍の部隊が行うが、バージアには反人間勢力のポケモンが少なからず存在し、この行動を妨害してくる恐れは十二分に考えられる。

貴官らはバージア宇宙センターへと向かい、地上警戒部隊とともに打ち上げまでの警戒任務に就け。不測の事態が生じた場合は、ロケット打ち上げまでの周囲の安全を最大限死守せよ。

「…というわけです。」サクラ司令が口を開いた。「あなたたちの任務は打ち上げ台周辺の安全警戒をすればいいのよ。もちろん万が一のことがあれば、あなたたちが防衛するんだけど。まあ、それだけだからとくに難しくないわよね？」

「質問！バージアまでどうやって？」ピトムニクが言った。

「その手筈はもう整えてあります。ソーラからニュークリアまで海峡をラプラスで渡れば３，４時間。その手配は済んでいますよ。そこまでは陸路で行ってもらいます。」

「陸路ってことは、今から出発ですか？」ロックオンが質問した。

「そうよ。今から出発すれば３、４日もあればバージアにたどり着

くでしょう。そうそう、あなたはもともと航空騎兵隊なのよね？アメリカの航空騎兵部隊であなたと任務を共にしたい、という部隊がいます。上空警備は、その子たちと一緒にお願い。」
「おお、そういう事ですか。それなら心強い」彼はそういいながらまたもグラシデアのほうを向いた。彼女の顔が真っ赤になるのを見たバストークは、やれやれという顔をした。

「まあ、そんなところね。バストークさん、中隊のみんなをよろしく頼みます。」
「もちろんやらせていただきますぜ、サクラさん。今回も全員生還を！」サクラの声に、バストークがモコモコをピクンと引き締めた。
「…ここにきて初の任務ね。テルル、ブレイブをよろしくね。落ち着いて頼みます。ブレイブもあんまり迷惑かけちゃだめよ。」司令にやさしく肩をたたかれたテルルはびくんとなった。
「は、はい！…必ず…！…生きて…帰ります！」
「了解です！で、大丈夫かよ！？なんだったら俺が固まったのを直してやろうか？」ブレイブが彼女の前足をぽんと触った。
「あ、あんたに言われなくても…全然平気よ！」テルルは彼の前足を払った。

「それなら大丈夫ね…それから…」司令は残りの２匹、（とシェイミ）のほうを向いた。

「リーヒュン、いよいよあなたの初陣よ。今までやってきたように落ち着いて、集中してかかれば大丈夫。ユイリィと上手くやってね。あと…」サクラは詰まった。「…あの後考えたんだけど…あなたが頭に浮かんだことを考えすぎるとそれが現実化するのかもしれない。…くれぐれも気を付けてね。」

「は…はい…」リーヒュンにはその言葉がよく理解できなかった。

「…いよいよあなたも実力を発揮する時が来たわね。あなた信じてきたもの…未来…見れるといいわね……精一杯やるのよ。あと…ロズリンとリーヒュンを頼むわね。」

「ミーは自分で生き残りましゅよ…」

「わかりました！…大丈夫大丈夫！…みんなを連れて帰って見せます！」ユイリィはそう元気よく言った。同時に心の中で、さわやかな期待が膨らむのを感じた。

…リーヒュンと…いよいよ始まる！…

…あたしの夢…自分を探す…時が…

衝撃の健康診断?!　そして…新たなる始まり…（後書き）

テルルって酒に弱かったんですか…

まあグラシデアはすぐ寝ちゃいましたけど…

グラシデア：父親みたいに酒に強いの嫌だもん。

…そんな理由かよ!!

ちなみに、アトラスロケットは実在です。

うーん、やっぱりアメリカ領っていう設定上、アメリカにかかわる話が多い…

でも葵はべつに合衆国至上主義ではありません。

ヨーロッパとアジア新興国も好きです。

日本?…まあ好きですけど…。

政治の面では微妙。

バージアへ…そして水面下でも…（前書き）

今回は、バージアまでの道中その1です。話の都合上と葵の気力上の問題で、2話に分けさせていただきます。

後…またしても新キャラ登場！（こりないなあ…）片方は主人公たちのお友達ですが…

さてさて…？

バージアへ…そして水面下でも…

２０１２年１１月６日　プラウス州北部　プラージュ区　フォーチュナ　１４００時

一行は国連軍施設のあるパルク州を抜け、実施訓練を受けたプラウス州の北部へと進んでいた。フォーチュナはソーラの最北端、イール半島と、パルク州北端との中間地点までやってきたことを意味している。この調子なら明日か、明後日かにはイール半島の指定された海岸まで行けるかもしれない。

本当はと言えば、東部のプラウス州よりも西部のプロヴァンス州のほうが整備はされてはいるが、社会情勢がそんなにいいとは言えなかった。プラウス側のほうが治安もよく景色もよかった。

リーヒュンは、前にサクラ司令から言われたことをしきりに考えていた。自分が考えすぎるとそれが実現化する、どういう意味か彼にはわからなかった。いや、分からないのではない。その意味が昨日から少しずつ理解できるようにはなってきた。だが、それを正しく解釈しようとすると……

その恐ろしい意味に対して震えが止まらなかった。

…自分が考えたことが現実化する!?…という事は…

…あの海岸線の大量のポケモンの死骸…あれが見えたという事は…

…実際にそれが起こったという事か?!…

…待てよ?!…フローラは……
…俺が考えれば考えるほど!!?……

そんな彼の戸惑いがユイリィにも伝わってしまったのだろう。
「リーヒュン、どうしたの?」彼女が彼の頭の葉っぱをツルでつんつんした。
「ん?…まあ…いろいろとな…司令が言ってたあのこととか…」
「ああ、現実化しちゃう、てことか。うん。深く考えないほうがいいよ。」
この一言が、不思議なことにリーヒュンの心の靄を晴らした。
「そうだよな。考えてたら動けないもんな。」
「うん!やってみなきゃわかんないよ。だからやれること全力でやろ!そうすれば結果もきっとうまくいくよ。」ユイリィがツルでもう一発ポンと首元をたたいた。

「いつもごめんな。なんか俺最近、今まで見たいに決心が定まらない…」
「何言ってんだよ!秘書官に食って掛かったのは直感じゃないのか?」ブレイブが前足でリーヒュンの首元の葉っぱを触ってきた。
「いやいや。あれはふつう許せないよ。なんていうか、そのさ、凝り固まってるみたいな。」
「さっすが俺の友人だけある!そんな理由で上司に掴みかかるなんてよ!」ブレイブが笑った。彼にとってこの友人を信頼できる理由はこの性格にあるからだ。
「私としてもアンタの性格は人がいいわよね。ブレイブなんかより全然やりやすい。」テルルもそれに同調した。
「でしょでしょ!言えるよね!その上うちらより年下!かわいすぎて食べちゃいたい!」「食べたくはないけどさ…まあ、そうよね。」
ユイリィもテルルも本気でそう思っているのかは、リーヒュンにはわからなかった。「まあ、食べられたくはないな…そういや、ここ

の道の左側にはどうして柵があるんだ？」
「ん？ああ、これか。あそこにある建物と関係があるらしいよ。」
ユイリィがツルで刺すほうを見ると、かつては畑だったような荒地、柵の向こうの小高い部分に何か灰色の建物と、そこからはるか向こう側に向けて鉄塔の先端が見えた。
「そうそう。あれね、人間の施設らしいよ。まあ、何のためにあるのかは私も知らないけどさ。」ピトムニクが言った。

そこにあるのはイギリスの大手生命工学企業、デパスター―・オーシアの遺伝子培養工場である。ここではデパスター―社のクローンポケモンのＤＮＡやＲＮＡ等の保存、操作、研究並びに受精卵の制作を行っている。ここで完成した受精卵がイギリス・マンチェスターにある培養プラントに送られているのだ。
現在生命工学企業を名乗っている会社はその大半がポケモンのクローンに携わっている。代表的な企業として、世界最大手のアメリカのゼネラルバイオテクノロジーＸ社とカナダのトリトン・フェンデレーション工業社、彼らとシェアを2分するロシアのマラーノフ社、急激に成長しつつある中国の吉祥（きっしょう）生命科学人民公社、さきほど述べたヨーロッパ最大手のデパスター―社等だ。それらを支える下請け企業も多い。
ポケモンをクローンする必要性。その多くは軍事目的だ。小柄で隠密性、機動性に優れ、自身が強力な兵器となりうるポケモンは、特殊部隊にはなくてはならない存在だ。すぐれた任務遂行能力があるうえ、国連統合軍や欧米先進国において自軍の兵士を特に危険な任務にさらす必要もない。また軍事力の乏しい国々でも、人間の徴兵、

育成、保障よりはるかに安価で強力な武器を手に入れることができる。

さらにクローンの重要な使い道、それはポケモンバトルである。４年に１回夏季オリンピックと同じ年に行われる“ポケモンバトルワールドチャンピオンシップ”では、各国と選手の威信をかけ、大改良・ヘビーチューンナップが施されたポケモンが出場する。このような道具的な使い方以外でも使用法がある。病院や介護施設、児童保護施設等で通常動物と同様に行われるセラピーケア用や、刑務所の公正プログラムで犬と同様に用いられたりする。むろん家庭のペットとして、いや家族として、犬や猫、熱帯魚と同じくらいの人気を獲得していた。

そして最も重要な意義、バイオテクノロジーや生命科学、医学の進歩に貢献することだ。ポケモンは通常の動物と比べて、遺伝子の改良や抽出がとてもしやすい。ここで研究を重ねたクローン技術は、災害や伝染病、紛争で死んだ牛や豚、鶏などの家畜の再生、ＩＰＳ細胞と併用した拒絶反応のない人工臓器の開発、安全な遺伝子組み換え技術の確立などに大きく貢献している。

各企業は様々な環境下でのポケモンの培養、育成、開発に取り組んでいる。例えば、宇宙ステーションの微小重力（万有引力の公式上、重力はどこまで行ってもゼロにはならない。無重力というのは厳密には存在しない。）・高放射線下での培養や、極地などの極低温下での培養、育成などが行われている。

ただし、このような研究、開発、生産が経済、科学技術的にはよい成果をもたらしたが、全ての社会的側面でよい効果を与えはしなかった。開発、製品に関する特許問題や技術漏えい問題は頻発していたし、生命倫理・自然環境の面から、ポケモンのような文明生物を勝手に開発し身勝手に利用すること、そもそも生命を人類が創造すること、彼らが自然に紛れ込んだ時に生態系に与える悪影響に対し“人類の身勝手、傲慢”などという批判は常に絶えなかった。一

部の過激環境保護団体がアメリカのプラントに爆弾テロを行ったこともあった。

何より、国連軍、国軍、民間軍事会社、武装組織を問わず、クローンポケモン達を戦闘地域に先に行かせる“弾除け戦法”は中東紛争地帯では横行しており、その費用対効果、倫理的側面から日に日に批判は高まるばかりであり、前線の兵士たちの中にはそれを見続けた結果、精神に疾患をきたす者も現れている。

ともかく、さまざまな光と影の側面を持つポケモンクローン産業。その一角がここにあるわけである。

「…なるほどね。まあ、こんな位置にあるからしていい目的はなようだな。」

「へへ！俺もそう思うな。人間連中に一度でいいから言ってみたいぜ。“そこの可愛いお姉ちゃん、やってることはなんですか？”てな！」「お姉ちゃん、てとこがブレイブらしい。」リーヒュンとブレイブがそんな話をしていた。

「あたしが覗いてあげようか？女の子？」ユイリィがブレイブの頭をこつんとやった。

「おお、頼むぜ！それにかわいい子がいたら、俺に対しデートの申し込みをしてやってくれ。」ブレイブが嬉しそうにフサフサ尻尾を振った。ただし、彼女が思念を送ればできる話だが、彼女の言ったことは冗談半分である。ユイリィにはそれくらいの常識はある。ブレイブとて、半分冗談なのだろう。

「まったく、あんたって男は、人間だろうとポケモンだろうと女ならいいのね。こんなとこに努めている奴なんかどうせロクもないわ

よ。」テルルが鼻を鳴らした。
「そりゃそうだ。」リーヒュンが言った。一行が歩いていく間道の左側にはこの金属製の柵が建物が見えなくなる位置まで道沿いに続いていた。ただし、全員が気付いてないこと、それはこの柵が電気フェンスであることだ。誰も触らなかったのが幸いだった。

「あれ？ロズリンは？」ユイリィが自分の頭の雄蕊のあたりを見ながら言った。
「グラシのとこ。」ピトムニクがプラスル種族の短い腕で精いっぱい指差した。
「いつの間にかこっちに来たぜ。」バストークが言った。「なんかうちの娘を花と勘違いしてるっぽいな。」
なるほど、名前も確かにそっくり。子供のシェイミにも“グラシデアの花”がわかるみたいだが…
「す、すいません！ほらロズリン、戻ってきなさいよ。」ユイリィがツルでこのシェイミを引っ張ろうとした。「絶対やでしゅ！」離れようとしない。「いいよいいよ。しばらくこのままで。」グラシデアが自分の頭のモコモコ（ロズリンに踏まれてぐちゃぐちゃ）をいじりながら言った。
「ご、ごめんね！」ユイリィが申し訳なさそうな笑顔を浮かべた。

「…ほうらね？ワタシのほうがバストークより子供上手く扱えるでしょ。」グラシデアが、どうだ、と言わんばかりに言った。
「わかったわかった。お前をうまく育てた覚えはない。お前の能力は母親譲りだ。それでいいだろ？」バストークが諦めたように体を動かした。

「おっさんやられっぱなしだな。」ロックオンが少し笑った。「娘のほうが妙に出来がいいな。」
「ですよね！」グラシデアが自慢げに言った。
「グラシもなかなかきついな。ただ、それでも自分の父親なんだろ？多少は思いやってやれ。」
「もう…じゅ～ぶん思いやってますよ。」
その声を聴いたバストークは首を振った。ついでにロックオンの頭の飾り（ムクバード樹族の特有のもの）をひっぱりこんだ。
「おい、セクハラはやめろ。」
「全然してませんぜ。この子をかわいがってるだけです。」
「…たく…」バストークはため息をついた。

…こんな半分色男に娘を取られなきゃいいが…

「あーあ、あたしロズリンに完全になめられてるよね？」ユイリィがため息をついた。
「あの子も、そのうちわかるさ。」リーヒュンが自分のツルで彼女の花をやさしくたたいた。
「うんうん！私だって妹弟とは、今となっては仲良くできないんだからさ。」ピトムニクもそういった。

彼らがしばらく行くと、木でできた看板に“フォーチュナ中心部まであと２０ＫＭ”と書いてある交差点のような場所に差し掛かった。フォーチュナ中心地はその地域のかなり北端にあり、むしろイール半島に近いといえる。今日中にそこまではたどり着けるだろう。リーヒュンはその交差点の端っこに座っている（というより、ここを通っているポケモン自体少なかったが）あるポケモンが妙に気になった。
彼が思った通り、彼らがそこを通過するときそのポケモンが声を

かけてきた。
「あ、あの、すいません。国連軍から派遣された自治協会防衛軍の３０２中隊の方々、ですよね？」そのポケモンは、半分寝ぼけているような声だった。しかも、言葉のイントネーションが平坦気味。
「あ…はい…」ユイリィが声を上げた。

そのポケモンは…

水色、日本の電車でいうスカイブルー色の上半身。顔の部分にはそれなりに黒い毛（色的にはミッドナイト・ブルー）がある。下半身と後ろ足は黒い色で、家電用電源ケーブル状の尻尾の先端には星のような黄色い形をしている。
このポケモンはルクシオ。声からすれば性別は女（メス）。しかし彼女には通常のルクシオとは異なり目つきの鋭さはそれほどなく、半分居眠りしているかのようなトロンとした目つきになっている。後ろ足の黒い部分は、女としてもかなり短くひざ部分くらいまでしかない。前足の２本の階級章みたいな模様はかなり細く、もう１本さらに細い模様が左右ともにある。

「ふう…うさねは…い、いえ…やっと…会えましたね…３０２中隊の責任者の方、誰ですか？」彼女がまたしてもたるそうな、しかも訊りのかかった声を上げた。
「俺だが。バストーク・ラルシア・ホルスト大尉だ。」バストークがぴょん、と出てきた。
「で、私が実質上の副官、ピトムニク・ソレイユ・マルセイエーズです。」ピトムニクも前に出てきた。

このルクシオは自分より背の低いプラスルと、背がおんなじくらいのメリープをまじまじと見つめていた。無言でしばらく考え込んでいたようで、まるで詐欺にかけられているのではないか？と疑っているような顔だった。まあポケモン文明の情報伝達速度だから、遅かったり、不十分であったりすることは少なくなかったが。

「…なあ、俺たちが加わる、てことくらいそっちの指揮官から聞いてないのか？それとも、名前は聞いていても顔は聞いてないのか？全く、アンタはポケモンのくせに人間位敏感なんだな。」バストークが訝しげに彼女を見た。

「お、おもさげ…うっ…す、すいません…そう…そうか…まあいいよね。あ、言い忘れてですいません。ワタシ、アメリカ戦略軍ポケモン戦略戦術部隊本土防衛軍第５大隊第１１中隊隊長のスカイラブ・ナサ・バトルスター中尉です。苗字が何とも縁起的にえぐね…あ…変ですよね。だからファミリーネームのほうは覚えんでくださいな。」スカイラブは平坦なアクセントでしゃべり、時々言葉に詰まっていた。おそらく自分の訛りや方言を聞かれたくないからだろう。そして何とか標準語でしゃべろうと彼女なりに一生懸命努力しているのだろう。

「それで…ほかに皆さんは…な…何といいます？」スカイラブはできるだけ標準エメリア語に近づけようと言葉を選びながら尋ねた。

２０１２年　現地時間１１月７日　ベルギー・ブリュッセルのエメリア自治協会本部　０２００時

「…まったく、自由連合政府はまたも因縁をつけてきたのか。サクラさんのほうもなかなか大変だね。」

“何とかしてくださいよあちらの政府を。これ以上因縁ばかりつけてくるようであればそちらとしても何らかの措置を取ってくれませんか？”

小さなポケモンが、青銅の鏡のような色をした板のような大理石に話しかけていた。そこには、エメリアのソーラにいるサクラ・フユツキその人が映り、彼女の声がした。

これはサイコ遠隔通信装置。エスパータイプの能力を持つごく一部のポケモンだけが使える通信会話装置だ。中世然とした技術しか持たないポケモン文明の中で人間の文明を凌駕している数少ないオーバーテクノロジーの1つである。この装置は電力ではなく、使用できるポケモンのエスパー能力で動いている。また、電波通信と違って会話のタイムラグが生じることもない。

「それは…外交担当のクレセリアに言ってほしいな。僕の公務は多いんだからね。」そのポケモンが言った。「他にも人間たちとの会談とか取材とかだって僕が受けなきゃならない。今日なんか、連立に失敗したギリシャは今後どうしたいいか意見があるか、なんて取材に来た。財政破たんしようと、株価が暴落しようとポケモンには関係ないんだが…」

“それは…あなたにまだそういう仕事に対するキャパシティーがない、て事じゃなくて？”映像の中のサクラが自室の水槽のカクレクマノミとナンヨウハギに餌を入れながら言った。

「それでさ…、君のとこに加わったあのポケモン達、使えそうかい？何匹かは伝説通りの能力があるそうじゃないか。」

“使えるかって…まあ、そんなところでしょうね…伝説通りかはまだ知らないけど”

「僕もその様子、見たかったな。そりゃいいや。ユクシーがよかったら防衛軍本部直属にしたい、とか言ってたよ。」

“それは無理でしょうね…国連との問題もありますし”

通信装置を切ると、この小さいポケモンは部屋を出て、大理石の階段（1段1段が人間のそれと比べて低め）を上り始めた。しかし足があたるカツンカツン、という音は全くしない。

このポケモンは浮遊しているのだ。

このポケモンは次の階（フロア）の廊下の突き当たりに向かった。ドアの前にはエーフィとチャオブーが見張っていたが、彼がやってきても静止はせず、電源を切ったホンダ製の某二足ロボットのように不動の姿勢を保っていた。

このポケモンは格別立派なドアのある部屋の金メッキコーティングと彫刻が掘られた取っ手の下のほう（下のほうは4足歩行種族でも開けやすいように取っ手、上のほうは二足歩行種族や人間が開けるためのドアノブ）を掴み中に入った。
天井が高く、持て余したような広さの部屋だ。真ん中あたりには天蓋付きのベットがあり、カーテンが閉まっている。

このポケモンがそれを覗くと…

…中には、頭が星形の黄色の形、そこには水色の短冊、背中からは黄色の羽のようなものが生えたポケモンがすやすやと眠っていた。
そのポケモンの何という小ささ。人間の子供でも両手で抱っこできそうだ。
このポケモンはジラーチ。幻のポケモンとも言われているが、その

正体は自治協会の代表、すなわちポケモン文明の代表者の1匹である。まあ、地球のポケモン全員がそれを知っているわけがないが。このポケモンは再びカーテンを閉めた。そして、ろうそくが灯る窓際へと向かい、外のブリュッセルの夜景を見やった。このポケモンにはその風景に存在する意思一つ一つが見えた。

近くにはロールケーキのようなガラス張りの建物…ＥＵ（欧州連合）本部…があり、眠ることのない照明が灯っている。建物の前の円状の道路（ロータリー）には深夜にもかかわらず車両が時々動いている。おそらくは、財政問題に揺れるギリシャへの対策、ひいては即急な対策が必要なヨーロッパ経済について検討し続けているのだろう。その向こうには手前の新市街地の幻想的な明かりと奥の旧市街地の落ち着いた明かりや道路や橋の街灯が、地域をやんわりと照らしている。照明に少しかすみがちな夜空には、星々と人工衛星、宇宙施設からなる明かりが宝石のように散らばり、満月にほど近い月も見える。今日も月の南極では、小規模なＩＬＢ（国際月面基地）から資源サンプルの試験採掘を行っているのだろう。

「…全く…」このポケモンがつぶやいた。「湖の３匹、ね……。僕までそんな類に他の２匹と同じように括られたくはないな…」

月明かり、星明り、ろうそくの明かり、ブリュッセルの市街地の明かりに照らされたこのポケモン…

水色の飾りのついた頭部、そこにある赤い宝石状のもの、２つに分かれた尻尾、浮遊している…

このポケモンはアグノム。伝説のポケモンである。

２０１２年　１１月７日　エメリア　ニュークリア大陸の　サバー

ブ州　アメリカ・バージア宇宙センターから5キロメートル入った森　０１００時

「こんな3日も前から張り付く必要、か…」黄色の体、炎のような髪…ポニータ種族の青年が専用の矢（ひずめでも持ちやすいような形に改造済み、しかも発火信管付き）を前足でなでながら言った。

「もちろん、今回の目的を成功させるため、それだけでしょ。ここの住民たちを打ち上げの脅威から防衛するのよ。」金色がかった白いからだ、９本の長いしっぽ、キュウコン種族の女性…おそらくは３０歳を超えている…が左前脚で自分の脚の付け根と胸にあたる部分を守る薄い青銅製の装甲板を結び付けている革のひもを縛りなおした。

　このポニータの名は、シーベルト・ドーラ・リヒテント。エメリア陸地群のソーラ大陸、プロヴァンス州出身だが、入隊したのは自治協会側ではなく、自由連合側である。もう一方のキュウコンはアリョーナ・セミョービッチ・ハイペリオン。イスラエル出身の彼女もまた連合側の兵士である。

　自由連合は、本来ポケモン文明における世界の安定を保つ政府組織の原点として、５０００年ほど前から存在している。この組織は自分たちの能力を最大限に生かすことによって、人類に畏敬の念を与え、長く自分たちの世界を、確実に一方の崩壊につながる文明衝突から守ってきた。しかし、２０００年ほど前から現在の自治協会側…エメリアの勢力…が、人間に無意識に圧力をかけ続けていることを指摘され、関係悪化ののちに自治協会側との全面戦争へと発展した。この戦いで連合側は敗北、生き残った関係者は、中央アジアへと逃れた。自治協会側は本部のあった欧州を制圧し、現在の体制が作られた。

　しかし自由連合は現在でも存在し、人間との融和を重視する自治

協会とは逆に人間に対する独立性を主張し続けている。
今回の目的は、打ち上げの度に煙と轟音、振動によって周囲のポケモンの居住を妨害し続けるこの施設の打ち上げシーケンスを阻止する事だ。一見すれば、過激な環境保護団体のテロ行動、または本物のテロリストのアメリカ妨害に見えるが、本来のポケモンの意識からすればこちらのほうが通常であろう。
シーベルトが加わった理由はここにある。彼の家族は、あるとき中国の資源調査をしていた人間たちと故郷の村でトラブルになった挙句、彼の目の前で銃で撃たれ、犬に殺された。人間に対する怒りは大きかった。ひたすらに人間の弾圧を我慢し、融和を目指すという“彼にとっては”夢想論のようなことを言う自治協会には共感しえなかったのだ。

どちらが正義なのか?そんな子供のような問いにはことは彼を含め、アリョーナも永久に分からなそうなことだが…

しかし、彼等2匹に今、そんな理想論は関係なかった。今の彼にとって大事なこと、それは自分が人間に対して抵抗すること自体。自分がポケモンである誇りを見出すこと。そんな少年のような一途な感情だった。

街灯はおろか舗装道路もない…道らしい道自体なかったが…森の中を、宇宙センターの明かりの中、夜闇と星空、静寂だけが流れてゆく。伝令のキリンリキが走ってきて、自由連合軍ニュークリア方面軍司令部の通達を伝え、戻っていった。そのあとには、再び2匹と暗闇、静寂が取り残された。

「2，3日後には打ち上げが行われるでしょう。もちろんセンター側も何か手を打ってくるわ。それ…どんな手段だと思う?」アリョーナが小声で言った。

「相手もポケモンを出してくるよ…いや…自分たちの持っている汚い武装を使ってくるかもしれない…」

彼のいう“汚い”とは、ライフルやグレネードランチャー、擲弾、装甲車などの人間の兵器のことだ。ポケモンというのは、もともと対等な立ち位置での正面からの戦いを好む。特に自由連合側にとっては、どんなに状況が変わっても、戦いというのは弓矢と刀剣と自分の技で戦うものと、昔から信じてきた。

「そうね…」

「でも、俺は絶対に逃げたりはしない。自分がポケモンであること…自分の存在意義を…この世界に残しておきたい…俺たちは人間とは別の生物なんだ…」シーベルトが前足に足元の土を固めるほどに力をかけた。「俺の友達にも…どうしてるんだろうか?…人間たちから隠れるように暮らしてるのかな?」

(「友達?」アリョーナがシーベルトに聞いた。

「はい。リーヒュンとブレイブ…昔からみんなプロヴァンス出身で…一度はパルクに移って…ブレイブはプラウスに…俺は…サバーブに…またみんなで集まりたい…とは、思ってる…でも、もし…」

「そっか…どうでしょうね…もしそうだとしたら、あなたが守ってあげるのが…最大の友情、ていう物なんじゃないかしら?」アリョーナは彼の脚の上に自分の足を置いた。

「もちろん…そうするよ」

この青年はまだ知らなかった…

その親友たちが、人間の…宇宙センター側にいるとは…自身の敵となることは…

２匹の間を赤道からそう遠くない南太平洋から吹き込んでくる夜の風と暗闇、静寂だけが延々と通り過ぎてゆく…それを抱くかのようにバージア宇宙センターの明かりがともっていた。

バージアへ…そして水面下でも…（後書き）

ピトムニク：えっ？ポケモン文明には政府が２つあるの？

…みたいです。まあ、ポケモンにとっては地球は広大だからさ…一般庶民で両方知っている人はそういないでしょう。

今回、オーバーテクノロジーの一環として、ポケモン文明の通信装置を紹介しました。「エスパー能力の使えるごく一部」っていうのは、どれぐらいなんだろう？まあ、とくこうの種族値が一定以上のポケモン、てところですかね。

読者の皆様の解釈にお任せします。

運命の前夜…（前書き）

戦闘開始までの前夜編第２話です。

…やっぱり２話に分けて正解でした。どうにも長くなったので…

そしてまたもや新キャラ２匹！！

…この時点で増えすぎですね。

この先…まだ増えるのに…どうしよう？…

運命の前夜…

２０１２年　１１月７日　韓国　大邱（テグ）市北部　京釜（キョンブ）高速道路　１８００時

京釜高速道路は韓国最南端の港町、釜山（プサン）と韓国首都、首爾（ソウル）を結ぶ１号線と呼ばれる高速道路だ。１９６８年にアメリカ（これはベトナム戦争に韓国が出兵したことに対する見返りである）や日本からの援助でできた韓国で最初に作られた高速道路だから。現在は中国、ベトナム、パキスタン、タイ、インドなどを通じてブルガリアで欧州（ヨーロッパ）自動車道路Ｅ８０に接続するという壮大な高速道路網開発計画、“ＡＨ（アジアハイウェイ）計画”の１号線の一部ともなっている。

「…そうか。北朝鮮の例の新型…か…私も夜中には着くだろう。そちらにはこのまま直行するつもりだ。」“承知しました。”韓国政府の某関係者であるこの男は現代（ヒュンダイ）自動車の最高級車種、ヒュンダイ・エクウスの後部座席で、ソウルにいる部下に情報通信端末で連絡を入れた。どうやら、北朝鮮の基地に新型中距離ミサイルがすでに衛星写真に写っているらしい。それが例の新型であるという解析結果出たという事だ。

長らく韓国に住む人類の社会、生活、経済、あらゆる活動において、北朝鮮という存在が重大な影響を及ぼしてきたのは疑いようのない事実である。韓国の証券取引市場（極東地域の株式市場は皆そうだが）は北朝鮮が騒ぎを起こすたびに混乱が繰り返された。ソウル、その他の都市の地下街や地下鉄は、地上の核爆発にも耐えられるように核シェルターや避難所としての強度と装備を持つ施設として建設されており、定期的に避難訓練・防空訓練が行われている。２１世紀に入ってからというものの、北朝鮮の情勢はますます不安定化しており、２００６年には日本海に向けてミサイル７発を乱射、その秋には地下核実験、２００９年には弾道ミサイルを改造したロ

ケットで衛星打ち上げ（これは失敗）、２０１０年には韓国のフリゲート艦を撃沈、その秋にはヨンピョン島の軍事施設及び民間市街地に無差別砲撃等諸処の事態が生じていた。この要因には少なからず国内経済の悪化、体制の弱体化が絡んでいるとも言われている。

しかし、このような状況を打破するために開かれるはずの6か国協議は、アメリカ、ロシア、中国、韓国、北朝鮮、日本、それぞれの思惑が交錯し、２０１２年の現在でも開催回数は少なく進展も乏しかった。特に、直接旧資本主義勢力陣営と国境を向きあう事を嫌がる中国、同様の理由で中立的立場を守ろうとするロシアという2国と、かたくなに強硬路線を貫くアメリカと韓国との擦れ違いは、経済問題、宇宙軍事利用問題、ポケモン量産問題等のせいか、かなり多かった。さらに国内政局の混乱、並びに震災に伴う混乱で弱体化した日本が強硬派の足並みを乱す理由となった。一方のロシアと中国も国境線や経済を巡ってぎくしゃくしていた。このような協議があまり進まないのは自明である。

地球人間社会ではグローバル化がいかに進展しても、“地球の意思決定機関”であるはずの新国際連合が誕生しても、各国内部のかねてからの政治の思惑や方針までもを変化させることはできない。それどころか、ますます他国の思惑が理解できなくなっていくのはどの国も同様であった。自国の企業や経済活動を守るために存在している状態となった各国政府が、外交上の問題を自ら複雑化させているのだ。

韓国とて現在は同様である。アメリカが打ち上げた軍事衛星がどうやら最初通達された「極東監視用」ではなく、なぜか南太平洋上のエメリア本土付近の静止軌道の投入された。北朝鮮への支援資金ちらつかせていた資金がなぜか国連側に渡った。在韓米軍の一部部隊なぜかエメリア派遣軍に移された。朝鮮戦争以来、旧東側陣営に対する防波堤として長らく同盟を結んできた韓国とアメリカだったが、最近では韓国にも心当たりのない合衆国の行動がたびたび報告

される。インターネット上のマニアの間では、「近々北朝鮮からの核攻撃があるから撤退しているのだ。」というデマもささやかれていた。（もっともこれが真実だったら経済や社会は大混乱になっているのだが。）

…合衆国は、エメリアでまたもや事を起こそうとしているのか…中東のあれでも懲りず、か…

この男は首を振った。直後、それを頭の奥底にしまい、北朝鮮に関する報告と会議に思考を集中させた。

彼を乗せたヒュンダイ・エクウスは、夕闇迫る大邱（テグ）市郊外の高速道路をソウルに向けてひた走っていた…

２０１２年　１１月８日　エメリア　ソーラ大陸　プラウス州　イール半島の北端　エヴァンスター
１０２０時

スカイラブは本当に変わった女の子である、というのが３０２中隊のあらかたの意見であった。あの後フォーチュナに向けて歩いている際も饒舌（じょうぜつ）であった。しかし、その内容も単なる世間話のようで、まるで音声録音装置（ボイスレコーダー）のように抑揚なくバンバン聞いてきた。というよりしゃべっていないと気が済まないのかもしれない。

もう一つ彼女に関して変わったこと、それは（テルル曰く）変態色男のブレイブが、彼女に対してのみはいつもの調子で攻めない、という事だった。これは通常の彼の反応を考慮に入れておけばその異常性がすぐにわかるだろう。おそらくは、彼さえもためらわせるような“何か”を彼女が発しているのだろうとみんな思った。とはいっても、格別暗い印象には見えなかったが。

とはいえ…例えばテルルに…

「あなたはさ、家族状況、どういう感じ？」とか、あらかさまに。
「えっ…えっ？…うーん、まあ…普通じゃない？」テルルがあいまいな表情ではぐらかす。
「ふーん…なるほど。」スカイラブはそれ以上聞いてこない。

まあ、そんな類の会話が続いたわけだ。この女、普段は物静かそうだが、話が降られると、待ってましたとばかりにその饒舌ぶりを示しだした。

「…またなんだか変わり者が増えたな。」リーヒュンがボソッと言った。
「まあ…でもさ、いっぱいいたほうがそれだけ楽しいしね！」ユイリィが嬉しそうに答える。この女の子は多くの人とワイワイやることがとても好きな性質なのだ。もっとも、彼も多く一緒にやってくれるのがいることはうれしかったが。

さてさて、フォーチュナを経由して1日ほど。この一行はついにソーラの北端、イール半島最大の居住地区、エバンスター地域へとやってきた。ここの海岸から見ると、ニュークリアの南端地域であるバージアは水平線ギリギリの位置に見えるかどうか、という具合である。その幅としては、アマゾン川、黄河の一番広い部分よりわずかに狭い、と言ったあんばいだ。もっとも実質は海峡であるが故、水流はそれなりに激しかった。
「す、すげえ！こんな天然の海岸！パルクの海岸は国連とアメリカ

が半分港に埋め立ててあっからな！これだけ自然そのままだとテルルも一緒に海まで…だろ？」ブレイブがフサフサ尻尾を振って言った。

「ブレイブとはやだ。行くんだったら一人でいってよ。」テルルは頭飾りを振った。

「じゃあテルル、私たちとならいく？」ピトムニクが言った。

「う、うん！それなら行くよ。」「おいおい！何でだよ？」

「たぶんさ、それ、アンタが常態的にろくでないことしてるからじゃないの？大体アンタみたいな奴はこういう組織には1匹以上いるのよね。」スカイラブがかなり直球勝負のツッコミを入れた。

「さっすが、ラブちゃん。」ピトムニクが絶賛する。「へえ～。やっぱり顔を見れば大体男なんてわかるのよね！」

「そりゃそうよ。」スカイラブは得意げだった。

「それで、この先…どうする？」リーヒュンが前足の爪を海水に突っ込んだ。

「ん？リーヒュンだったらどうしたい？絶対こういうよね！うん。」ユイリィが自分のツルを水に突っ込んだ。

「な、なんて言うの俺？」

「泳ぐ！！！絶対こういうでしょ！！！あはは…」ユイリィが彼に水を少しひっかけながら笑った。

「く…いやいや、俺も考えたけど実行はしない。」彼は苦笑しながら首を振った。どうやらそこまで考えていたのは図星だったようだ。

「やったやった！当たりだったんだね！」「だからって水かけて遊ぶか？」彼女は大喜びで水をばちゃばちゃやった。

「こいつ！」いつの間にか2匹は仲良く水遊びをしていた。まあ、18歳と20歳が、だが。

「お二人方、若くて元気がいいな。それで、渡る手段っていうのはあいつらのことだろうな。」バストークが前足を指していった。

「そうでしょうね、何匹もいるし。上手く分配すればみんな乗れる

と思うよ。」
「そうだな。主要なみんながどう分配するかは任せるぜ。」
「もっちろんリーヒュンと一緒だねあたしは!!」ユイリィが彼に飛びついてきた。
「それは構わないけどさ。ブレイブたちは?」リーヒュンがツルでブレイブやテルルを指差しながら言った。

「あの、３０２中隊の皆さん、ていうのはあなた方ですよね?」そのポケモン…青い体、耳は渦巻き状、背中には陸地のような甲良…ラプラス種族の1匹が声をかけてきた。
「そうだ。で、自分がその中隊長のバストーク・ホルスト、てわけだ。進化していないことを先に突っ込んでおくか?まあ、そういう性質ではなさそうだな。」
「たぶん、そうだと思いますよ。」そのラプラスは言った。「それで…こちらの方々が、例の?」
「例の、ていうほどあたし達怪しいそうな人じゃ…まあ、変わってるよね。うん。あたしはさ、ユイリィ・ランタン・プレミドール。階級?中尉か少尉かな。よろしくね!!子の雄蕊の上にいるのがさ、ロズリンていうの。」ユイリィが元気よく言った。「ど、どうもでしゅ。」ロズリンは彼女の頭の上でぺこりと頭を下げた。
「で、こっちのいまいちとパッとしないベイリーフが…」
「自分でいうよ。俺はこの変なメガニウムのお友達で、リーヒュン・バイリング・グリーズ。まあ、バージアまでいろいろよろしく。あ、…階級…、ていうのは」リーヒュンが言った。
「あたしと同じ!!…たぶん。」ユイリィが言った。
「まあ、そういう事かな。」
「…ていうかさ…あたしそんなに変人?!そんなこと言ったらリーヒュンはもっと変じゃん!」ユイリィがツルで彼の頭の葉っぱを押した。
「兄ちゃんさすがでしゅね。」ロズリンがボソッと言った。

「ハハ…面白い人ばっかりですね。あ、自分のほうは、国連統合海軍、エメリア陸地群地域部隊、重装揚陸部隊第３大隊第２中隊の、アコース・キュリオン・リダイバー…階級は確か大尉です。」

　重装揚陸部隊…国連軍がこの名称を使用するはるか前から概念は存在する。最初に出現したのは１９４３年ごろのイギリスの揚陸部隊であり、１９４４年のノルマンディー上陸戦でイギリスやアメリカが初めて実戦投入した。その後は、旧ソ連や中国、日本の海上自衛隊にも盛んに使われていた。しかし、もともとから出生数の少ないラプラス種族やホエルオー種族が徴兵の対象だったため、１９９０年代に入る前には深刻な兵士不足に陥った。２０１２年現在、大規模なラプラス種族の滞在地域があるのは、オーストラリア東岸、スマトラ島沿岸、カリブ海周辺、南北両極地の海など極めて限定されている。

　この問題が、徐々にでも改善に向かうのは２１世紀も５年程入ってからである。前述のイギリス系企業、デパスタ―株式会社がクローンラプラスの量産に成功したのだ。現在、クローンラプラスは前述のアメリカ、ＧＢＴＸ社やロシア、マラーノフ社でも大量生産されている。

　もっとも、ここにいるラプラス種族たちはみな徴兵された普通のラプラスだったが。

…で、そのラプラスたちに皆がどう乗るか？残りの面々をもめにもめた末くじ引きしたところ…

「はあ？！結局ブレイブと一緒？ぜったいにやだ！！！」テルルがブレイブの首のフサフサに掴みかかった。「アンタさっき、くじをいじったでしょ？！」

「あたりまえだろ！！！海の上でテルルちゃんと一緒に過ごせるな

んてさ！落ちたら助けて人工呼吸してやっから！！」ブレイブは大喜びだ。

「誰が落ちるのよ？それに自分落ちたところで自分で泳ぐし…ああ…困る…」テルルは自分のもみあげ状の飾りを触りながらぼやいた。

「まあ、俺は飛べるからどうってことはないな」ロックオンはひこうタイプのムクバード種族だからどこでもよかったのだ。「でも、降りるところにはかわいい子がいてくれたほうが気合が出るな。」

そう言いながら彼はグラシデアのモフモフを翼でいじった。

「私で…いいんですか？」彼女は恥ずかしそうに言った。

「もちろんだぜ。」

「よ、よろしくお願いします…」グラシデアが真っ赤になった。

バストークはそんな娘の顔を見てため息をついた。

「よかったね！指名されて。がんばってね！」ピトムニクがグラシデアの背中をポンと押した。

「う、うん…」

父親のメリープの表情はますます諦めたようになった。

…なーにあの程度のセクハラ男に恥ずかしがってるんだよ？…

「おい、行くのか行かないのか？護衛艦隊は暇じゃねえんだ。」沖に留まっている艦船から小型艇（ランチ）で海岸まで来ている兵士が一連のおかしなやり取りに飽きたように声を上げた。

さて、アコース達にのった一行がバージアにつくまで、だいたい3，4時間の過程だった。周囲には護衛のアメリカ海軍フリーダム級沿岸域戦闘艦2隻がくっついていた。どうやら、302中隊の面々はそれなりに重要視されているようだった。

ブレイブはその間、終始テルルやグラシデアにちょっかいを出していた。ロックオンはグラシデアにそれが及ぶ度に空からラプラスの上に降りて、「グラシデアに手出すな。」とブレイブを彼女から

引き離しにかかった。本気で怒っているようには見えなかったが。
テルルは彼のこの調子をあきらめたように海面を見つめていた。しかし、水面を見つめている彼女には全く別の思考が芽生えていた。

…私もいよいよ実戦に出るのか…無事に生きて帰れるのかな…
…でも、絶対に帰らなきゃ…絶対…それに…ブレイブの足を煩わせはしないわよ…

「おいおい！何たそがれちゃってるんだよ？ここにきて陸地が気になってきたか？まあ、そんなもんだな初陣っていうのは。テルルは初めてなんだろ実戦は？」ブレイブが彼女の頭飾りをポンとやった。
「ま…まあね…生きては帰るわよ。」テルルは彼の前足を払いながら言った。
「さすがテルル！強気だな！かわいい戦いっぷりを期待してるぜ。」
ブレイブが楽しそうに言った。
「かわいくは…ないと思う。てゆうかさ！アンタ実戦でもそんな調子なの？！」
「だいたい変わらないよ。」グラシデアがストレートに言い切った。
「だろ！さすがグラシ。よく分かってんな！」「わかってるかどうかは知らないわよ。」グラシデアがぴしゃりと言った。
「分かりたくなくても分かるな。」ロックオンがこのラプラスの頭の上に乗った。
「ああ…気が散って戦争にならないわよ…」

「へえ～。ワタシもそれをお目にかかれるってことか。まあ…期待しとくわよ。」スカイラブも同調した。
「もちろん、期待しとけよ。」ブレイブがますます楽しそうになった。

テルルがまた首を振った。しかし同時にこんな予感もした

…この男…かなり経験してきてここまで余裕、ということは相当の腕ね…虚勢じゃない…

…ワタシより…できるってこと?…信じたくはないけど…

一方、アコース本人の背中に乗っているユイリィ達は（みんな乗ったらかなり重そうだ。）、

「ふーん。という事は今後少なからず俺の頼りになる、ということだな。俺の背中の守りは頼むぞ。」

「ハハ…分かったよ。今後なんかあったら、頑張って防いで見出るさ。」

「頼むぞ。やっぱり、リーヒュンは人がいいな。俺のぱしりになるか?」

「ならないよ。」

「うんん!あたしの為だったらぱしりにも盾にもなるんだよ!すごいでしょ。」

「おお。じゃあ俺の為にも一発やってくれるか?」

「どっちもやめとくよ。」

「恥ずかしがっちゃだめだよ!いつもうちはリーヒュンを使いまわしてるのに!」ユイリィが彼の首の葉っぱをコツコツ叩いた。

「おいおい…そうだったの?」

「あはは!さすがね!」

「お前気づいてなかったのか!!だからリーヒュンはいい奴になったんだな。大事にしろよ。」アコースが笑った。

このラプラスは最初のうちはラプラスらしい謙遜的な感じだったが、リーヒュン達が同い年ぐらいだとわかるや否や一気にタメ語になった。特にリーヒュンとアコースは同じ１８歳だと知ったとたんに一気に友達っぽく接してきた。おそらくこのラプラスの周りには同世

代が少なかったのだろう。リーヒュンにとっても全く同い年の友人がいるのは、普段とは違う意味でうれしかった。

それに、アコースはブレイブとは違ってあんまり女（メス）に執着しない、というか興味がなさそうだった。確かに純粋でいい奴だったが、女に対する無関心さすら感じられた。こういう男（オス）の類は異性との友人関係はできるが、それより先には進まないタイプだ。それで十分満足しているのか、女の子に対しては気恥ずかしいのか。

…それとも、すでにとても大事な女が一人いて他の女に手を出さないと心に決めているのか。

「あの、このままの進路でOKなんですか？」一匹の先導のラプラスが彼のもとに声をかけた。

「うん。そのまんま。」アコースは特に声も変えずに言った。

「アコース、あっちの子、女の子だったけどさ、かわいい後輩なの？」ユイリィがツルで彼の耳をつついた。

「ん？ただのラプラスだよ。メスってホント異性に声をかけるとき声変わるよな。」

「そんなこと言っていいの？かわいいとも思わない？」

「全然思わない。メスっていうのは付き合いが面倒なんだよ。」アコースが言い切った。

「俺もそうだよ。女はめんどくさい。」リーヒュンもツルでこれの耳の部分をこつんとやった。

「お、ますます仲間だな。」

「あ、あたしはめんどくさくないよね？」

「…本音は…一番面倒、だろ？」「なんて言うべき？」「はっきり言うでしゅ」ロズリンが催促した。

「ちょっと…面倒、かな。」

「なーに言ってんのよ！あたしのことが大好きなくせに！！」ユイリィがリーヒュンに、すなわち、背丈がそう変わらないメガニウムがベイリーフにのしかかった。

「うぐぇ…す、好きではないよ…」
「ユイリィもこいつにあんまりやり過ぎないほうがいい。こういう性質の男って一回いやだと思ったらそのままのこと多いからな。」
アコースが自分の背中で発生しているドタバタ騒動を案じながら言った。

そういいながらみんなは、リーヒュンのあの金管楽器状の楽器（ユイリィから借りてる）の演奏に付き合っていた。彼には（2匹ともそうだったが）、途中からは楽譜や説明がなくてもどのような音が出るかはたいてい把握できたらしい。おそらく彼の直観が徐々に働くようになっていたのだろう。
　最初のうちはユイリィがいくらかは音の出し方を教えていたものの、1時間もするとリーヒュンは彼女が目を丸くするほどにまで、自分で音を見出し、引き出せるようになってきた。もっとも、まだ音のつながりがなく、音楽の体はなしていなかったが。
「そうそう、すごいよ。ここまで音が出てくるなんて！あたしより上手くできるかもよ。うん。」
「うーん？でも俺の音、曲になってないよな。」
「でも、その音とってもいいね！なんかこう、子供が見た海っていうイメージね。」
「まあ、アンタらしい素直さが前に出ているな。ひた向き、ていうやつだ。」
ピトムニクもバストークも絶賛していた。
「いや…まだまだそこまでは…でも、ありがとうございます。」このベイリーフの青年はちょっと顔を赤らめた。
「ねえねえリーヒュン。あそこに…魚っぽいのがいるよね。あれを思い浮かべたらどういう音出せる？」ユイリィがツルで海面を指し

た。なるほど、確かに近くの水面下、澄んだ亜熱帯、南太平洋の海に魚の群れが泳いでいる。「あ、あれか…うん。」

「お願い。」彼女は言った。

彼はその魚たちに意識を集中させ、そっと楽器に空気を吹き込んだ…

出てきた音は、やはり田舎のローカル線というイメージであったが、その風景は夏の海岸線を走っているイメージだった。とてもユイリィのような感動的な神秘を感じさせる音には到達できなかった。しかし、その音にはリーヒュン独特の感性がこもっているように聞こえた。まるで、ひたすらに昆虫を追い求める人間の子供のような素直さ、そして健気さ……

…そして、それをはるか遠くの時間から、窓ガラスを通して眺めているような…

…思い出を抱きしめたような優しさも…

フリーダム級沿岸域戦闘艦のクルーたちもその音に気づいたらしく、こちらを見つめていた。

「うん！すごいよやっぱり！なんかこう…自分の感情を素直に表してる、とかいうのかな？…うん。やっぱリーヒュンは私を超える！保障するよ！」ユイリィが嬉しそうに言った。

「俺も子供の時みたいな感じだな。」バストークが思い起こすように電球上の球がついた尻尾を動かした。

「あれれ？中隊長の子供時代ってやっぱりメリープ、ですよね？」

ピトムニクが茶化すように聞いた。
「退化はしないだろ！」
「ですよね！冗談ですよ冗談！…リーヒュンの音、ユイリィちゃん並みにいいと思うよ。違った個性が感じられるもん。」
「ありがとな。でも…俺もう少し頑張らないとな。」
「さすが噂の奴だけはある！俺が言った海域のいかなるクジラなんかより全然いい！ますます気に入った。」アコースもその音を聞いて言った。

「おっ。そろそろ前に見えるものがあるだろ？あれが目的地だな。」
アコースが不意に告げた。
「やっぱ人間の施設でかいな。」「うん…」

ブレイブやテルルもその施設を見た。「や、やっぱ…人間どもの施設は…やばい…大きさだな。」彼はそういいながらテルルを見た。
…彼女の眼は冷たく人間の作った技術の結晶たちを見据えていた。

あれが…
目の前に見える灰色の建物、鉄塔、円盤状の建造物…
ポケモンたちの信じる“世界”の“外”へと向かう人間たちの玄関口の一つ…
アメリカのＮＡＳＡ（連邦航空宇宙局）のバージア宇宙センターである…

２０１２年１１月９日　アメリカ　アラスカ州　アメリカ軍エルメンドルフ空軍国連軍エルメンドルフ総合参謀司令部　２０００時

アラスカ州はアメリカの最東端に位置する州である。合衆国本土から隔絶し、カナダを挟んで存在する飛び地。米ソ冷戦の時代は旧ソ連（現在ロシア）との最前線基地となっていた。２００１年の９・１１事件以降国際的治安維持部隊の設立検討が本格化した時、その本部の候補として挙がったのがここにある米空軍基地、エルメンドルフ空軍基地であった。２００９年にＮＵＮ（新国際連合）が発足が決定し統合軍の編成が現実化すると、もともとこの施設の秘匿性の高さを利用した地球最大の軍事施設へと２００５年から大改装工事が施された。現在、この施設は本来の米空軍のほかに、海兵隊や戦略宇宙軍も施設を置き、さらに国連空軍・宇宙軍の基地、並びに統合陸、海、空・宇宙軍の指揮施設と統合参謀本部並びに統合軍前線司令部が置かれている。

もともとは、地球上の平和維持という長らくの人類の夢の為に作られた平和組織の司令部となる予定だった。しかし、そんな理想論が実現するはずはなく、実際はかねてから続く国際紛争や地域紛争鎮圧のため、そして領土や資源をめぐる国家間対立、さらにはメガフロートや制宙権、ポケモン文明衰退といった新たなる問題、そういった類の対応受け皿となっていた。そしてその対応がかつてからの対応と相変わらず、中東情勢のように解決が難航するのがふつうであった。

そんなことは当初から予想がつきそうなこと…ＰＫＯから概念上全く進歩していない組織である…でもあるが、歴史という事象は進行中の中にいる人々、つまり我々現代人類には予想や客観的考察がしにくいのだ。それがポケモンたちの言う“人間の感覚の限界”というモノでもあるが。

その施設の中でも、特に厳重に頑丈に建造された施設。この施設は地下２０メートルに作られ、地上で核爆発が発生しても持ちこたえ、そこにいるスタッフ全員が周辺と完全に孤立しても半年生き延びられるだけのインフラ、食料・水などの備蓄が置かれている。ここは国連統合軍前線司令部。スイス・ベルンにある国連統合軍本部からの指令をここで受託、分析・立案して作戦を遂行する施設である。

「…いよいよ連中の初陣、ていうわけか…」「本当にこの予定で行くのでしょうか？」

「しかし、彼らはしょせんは実験だ。正式に任務を遂行するのは統合軍だな」

「まあ、彼らの指揮、交信は予定された通りに行っていればいい。無駄な感情を加えないことだ」「そうですね。もちろん、しっかりやらせていただきます。」

「その意気だ。しっかり頼むぞ。」彼らの中でも、一番階級の高そうなアメリカ海軍そっくりの制服姿の男が言った。

国連軍の通信要員（オペレーター）たちと今回の作戦の司令官らしき男が話しているここは、前線司令部の中核をなすＩＳＣＩＣ（統合軍戦闘情報センター）の一角。前方の主要情報（メイン）ディスプレイには、地球上のあらゆる統合軍関係の航空機、艦船、戦闘車両、各部隊の位置や状況、軌道上にあるすべての衛星とホワイトバード級大型軌道船の現在位置などが表示されている。この施設で統合軍の作戦の遂行が行われるのだ。

…明日はいよいよニュークリアのバージアで打ち上げ…あのポケモンたちが初めて戦闘をするのか…

オペレーター達は複雑な感情だった。たいてい統合軍（おもに陸軍）が扱うポケモンたちは弾除け同然に扱われてきた。しかし今回の連中に関しては、“絶対に生きて返すように”という本部からの通達が来ている。

これはいったいどういうことか？

このポケモン達に…特別な能力があるのだろうか？

…オペレーター達は、そう思いながら明日の任務に向けて戦術プランの確認を進めていた。

２０１２年　１１月９日　バージア宇宙センターの敷地内　２３４０時

アメリカ、エメリア大陸のサバーブ州にあるバージア宇宙センターを星空が覆い尽くしていた。その星空をそっと包むかのような南太平洋の秋風が流れてゆく。

……いよいよ俺も実戦か……妙に緊張しないな……

リーヒュンはそう感じながら、今日掘った守備部隊用の塹壕の中で右前脚の爪先を見つめながら動かした。

昨日の夕方にここに到着し、今日1日をかけて行われたのは打ち上げ台周辺の自分たちの陣地作りだった。とはいっても、人間のように高度に機械化、システム化された文明要素はほとんどなく、塹壕ひとつほるのにも自分の体か、エンピ（スコップのこと）の類で手作業で掘るしかなかった。スカイラブの上官にあたるブラッキーが一連の行動の指示にあたったが、派遣されてきた302中隊の面々には「強制はしないから、その直感とやらで自由にやってくれ。」と、比較的自由に作業をさせてくれた。結局打ち上げ台の北西側…敵襲の可能性が一番大きい方位…の最前方に陣地を掘り（これはユイリィの勘でなく、バストークの指示だった）各員は警戒を保ったまま一夜を過ごすことになった。

またこの間に、各種戦闘用の装備が渡された。まず交信用無線装備一式。爆発その他で声を聞き取りにくい戦場では必須らしい。また、正式な状況報告や指示はアメリカ、フロリダにあるケネディ宇宙センターとアラスカの統合前線司令部からくるらしい。もっともそれがどこにあるのかは302中隊は誰も知らなかったが。

弓矢は以前からのものと同様でも、各員には守備用として、手りゅう弾が3発ずつ手渡された。ピトムニクはそれをあっという間に矢にくっつけてしまい、リーヒュンとテルルの分も同じようにしてくれた（「この方がいざっていうとき融通効くのよ」）。

もう一つは頭部や脚部、胴前方、背中の部分を守る金属製の装甲板である。これは前の健康診断の時に寸法が図られ、各自の為に独自設計されたみたいであった。製品というモノを一律に規格化したがる人間とは異なり、ポケモンはこういう手間を惜しまない。それだけの時間のゆとりや種族ごとの違いに寛容さがあるのだ。ただし、実際に装着するとこれがかなり重い。特に頭部の部分は、リーヒュンやユイリィのようなチコリータの派生種族だととても重く感じられた。ブレイブは装甲板一式を装着したテルルをみるなり、「やっぱどんなスタイルでもテルルは似合うぜ！」と嬉しそうに言った。

一方の彼女のほうは「暑くて重くてホントやってらんない」とため

息をついた。
ロックオンはムクバード種族だからそういう類は邪魔になるだけだった。
「俺の装甲板の分だけグラシを守る。」とかいってグラシデアに全部つけようとした。
「あ・・・ありがとうございます。」グラシデアが恥ずかしそうに顔を赤らめた（もともとモココだからピンクだが）。
「おい、また俺の娘にお節介してるのか?そんなのは俺のだけでたくさんだ。」バストークが嫌味を込めて言ってやった。
「いやいや、俺は別におせっかいは…焼いてないっすよ。」ロックオンは明らかに顔を赤らめた。
「ふん。全くの図星じゃねえか。いいか、アンタがどう思おうが好きになろうが…そりゃ…まあいいけどな、俺の前でよけいにベタベタすんな。」
「アンタに言われたくないわよね。ワタシ、まだ5歳児?」グラシデアが嫌悪を浮かべた。
「わ…分かったよ。俺の前でなきゃ…好きにやってくれ。」この父親メリープは諦めたように踵を返した。

ところで、ロックオンの同僚として、また新たに仲間が加わったことは忘れてはならない。統合空軍の中央アジア区域の部隊からやってきたのはスカイブルーの体、綿雲状のモフモフ翼、白く柔らかいほっぺ。チルタリス種族のチェギョン・ナンソーマ・カリワザキである。この女、自身では旧朝鮮王朝の子孫と暮らしている一族の出身だと言ってはいるが、真偽のほうはわからない。もともとチルタリス種族は優美な感じがするが、チェギョンからは、それのかけらすら感じられないきわめていまどきの女の子っぽいラフで粗暴な言葉遣いだったからだ。

「ねえねえ！私の頭のこれさあ、めっちゃかわいいよね！？それ以外許されないし！」

「うんうん！それは言えるよ！」ユイリィが一番同調していた。

「でっしょー！ユイリィとは一番仲良しになれるかも！！」チェギョンはユイリィの首の花に飛びついた。「くらえー！！コットンプレッシャー！！」

「あはは！言える言える！」彼女は大笑いだった。

「やべえ！またもやかわいい女の子！！！君何歳だ？当ててやろうか。」ブレイブが嬉しそうに飛びついてきた。「やっぱね…気を付けたほうがいいよ」「な、何を？」

「アンタ、私に答えるんだったらそんなのもっちろん決まってるわよね？」チェギョンがブレイブの目を覗き込んでにやりとした。

彼はしばらくこのチルタリスを見つめ…

「俺と同じ２０歳！！これしかねえ！！」頭のフサフサをかきながら言いきった。

「そうそうせいかーい！！！って失礼な！！私は永遠の１８歳よ！！」チェギョンがテルル顔負けのパワーでモフモフ翼を彼の頭に叩き込んだ。

「全くもう！！また新入りに絡んでるなんてさ…アンタ、やっぱただの変態よ！」テルルが気絶した彼を引きずって退場させながら言った。「あ、ごめんねごめんね。こんな色男のせいで…何もされてないよね。ワタシはテルル。よろしくね。」

「テルルちゃん…この変態男のお守り担当なの？めっちゃ大変でしょー？」チェギョンがブレイブのことを一発で切り捨てた。

「もう、大変どころじゃないわよ。私がいつも蹴りが殴りを入れないとあのバカ女の子に絡み続けるからね」テルルがいつもの調子で言い切った。ついでにまだチェギョンに飛びつこうとするブレイブを後ろ足で蹴っ飛ばした。

「うぐぇ…でもやっぱかわいい…」ブレイブがもぞもぞと言った。チェギョンは小ばかにした目で彼を見た。「こりゃあ、怪物クラスの変態ね…」

「で、このビミョーな青年が…」彼女はリーヒュンのほうを見た。「いわゆる有名なベイリーフ、てやつね…リーヒュン…て言ったよね…いうかマジ子供っぽいだけどこの表情！！」

「でしょでしょ！そうだよね！！」ユイリィが嬉しそうに同調した。「結局それかよ！…それにビミョーかは知らないけどさ。まあ、色々とよろしく。」彼は恥ずかしそうに言った。

…と、またもや新入りが加わったわけだ。まあ、やはり軍隊の中としては変わり者であった。

こうして今、リーヒュン達は明日までの奇襲に備え、自分たちで掘った塹壕の中に入っているわけだ。一通り食事らしきものも人間たち（バージア宇宙センターの警備員か陸軍らしき人が持ってきた）から供給され、各々の部分で交代で休んでよい、という旨の通達も来ていた。とはいえ、彼を含めた何匹かにはその精神的余裕はなかったのだが。

「…そっか、やっぱ眠れないのよね。うん。よくあることだよ。」ユイリィが頭部保護用の装甲板をツルで回していた。

「まあ、半分はそんなところだけど。俺の能力、役立つかな…」
「大丈夫大丈夫！もしなんかあったらあたしが全部やってあげるから。」
「ごめん…いつも足ひっぱちゃって。」
「ぜーんぜん！あたしのほうは余裕があるわけだし」
「そっか…戦争、ていうのに対してさ…怖くないの？」
「あんまりね。ただ…」彼女の声が小さくなる。「それもさ…リーヒュンが一緒にやってくれるからだと思う。なんか安心できるんだよ。こう…一緒にやれば大丈夫、いう感じがするんだよね。」
「俺が？…そんなに助けにはなってないみたいだけど…」リーヒュンが自分の頭部保護用装甲板をはずし、頭の葉っぱをツルでなでた。
「…一緒にやってくれればそれだけでいいよ。うちらは2匹で1匹分の能力を出せるから…」
「うん。俺も明日…できるだけのことはするよ。」
「その調子。これならあたしも安心だね。」ユイリィが自分のツルで彼の首の葉っぱをたたいた。「じゃあ…とりあえず休んでいいよ。あたしはずっと起きてても問題なさそう。」
「うん…でも寝れるかな？」
「とりあえず休むふりでもしておけば、十分体の為になると思うな。」
「ごめんな…頼むよ。」
リーヒュンは、頭部装甲板と弓矢一式を傍らに置き、そのまま掘った塹壕に首と頭部を押し付けた。そうなるかどうかは知らなかったが、とにかく目を閉じ、休む“努力”はした。
ユイリィの首の花からこぼれる優しい香りがここの塹壕の空気を満たしていった。
ユイリィはとろとろと眠りに落ちかけている友人をちらりと眺めた…
…まだまだ子供ね…寝顔が。
…あたしには…守る義務がある…

…そして…一緒に頑張ろうね！…
…2匹で…新しい…未来という大空へ…いこうね！！…
……
…彼女には、自身の気持ちが人間の大型旅客機（例えばＢ－７４７やＡ－３８０）のように力強く飛び上がるように思えた…

一方、テルルもやはり眠るには精神が覚醒しすぎていた。彼女は自分のもみあげ状の飾りを前足でひたすら触ったり丸めたりしながら。自分の装甲板を装着したままの前足を時々見つめた。
　ロシア陸軍での経歴がある彼女ではあったが、本格的な戦闘というのは明日が初めてになるであろう。他人（特に異性）に自分の弱みを見られたくないと人一倍プライドが高い彼女でも不安と緊張は高まる一方であった。

…私は…本当に…やれるの？…でも…もう逃げられない…
…やるしかないのよ…
彼女は自分の左前脚をぐっと握った。…あの子のためにも…生きて帰る…

「大丈夫かよ？後ろ足、がくがくになってんだろ？」ブレイブが前足をこつんと押してきた。
「い、いや…全然なってないわよ。」
「強がんなって。誰だってはじめは怖いんだぜ。俺だって初陣のときは。」
「そんなもんなの？」
「もちろんだぜ。戦争やってるとだんだん…周囲の音も指示も聞こ

えなくなってくるんだ…自分が生き残るだけで精いっぱいだからな。指示も義務も関係ねえ、てことになってくる。」

「ふーん。」

「ポケモンバトルの時とは違うからな…相手にもやばいくらい殺気を感じる…そこは慣れてて克服しねえと、死んじゃうからよ…。」

ブレイブが頭のフサフサをなでた。

「……」

「とにかく、」彼がテルルの前足を握った。「やばいと思ったら…無茶すんな。…深く入りすぎると戻れなくなるぜ。あと…」

「あと？」

「テルルの大切な奴…いるんだろ？…無事に帰ってやれよ。」

「も、もちろんよ。」テルルの顔が少し赤くなった。「…気にしてくれるんだ…ごめんね…」

「おっ、テルルちゃんが久しぶりにまともな返答♪」ブレイブが嬉しそうに言った。

「もう…」テルルが彼の前足を払った。そのまま弓と自分で持ち込んだ“私物兵器”を触りながら星空を見つめていた…

…必ず…ブレイブの脚は引っ張らない…

…そして……生きて帰る…

バストークとピトムニクはそれぞれの弓矢をチェックしていた。この２匹たち３０２中隊にとっても久しぶりの戦闘である。

「明日…どれくらいになるんでしょうね？」

「規模がどうであれ、やることはそう変わらんさ。しっかり頼むぞピトム。」バストークは自分の拳銃を前足で触った。

「うん。そうですよね。中隊長も…」ピトムニクはスタングレネード付きの矢を調整した「娘さんと…部隊のみんなを…私も…頼みま

す。」

「当たり前だ。なんであれ俺の…娘と…息子…だもんな。あんなグラシデアも…あいつこそだが…同じだ。」バストークは自分のモフモフをふるった。

…明日も…いつも通り全員生還して見せるさ…

海岸線の近くを見ると、アコース達ラプラスの連中と、ロックオンやチェギョン達がいるのが見えた。

グラシデアはスカイラブのほうの塹壕で眠り込んでいた。どうやら2匹の電気はそれなりにパターンが合致した、要は気が合うのである。

「…中隊長の娘さん…父親のごと…意外と心配してましたね…」彼女はバストークたちのほうの塹壕へとやってきた。

「まあな…口ではどうしようもないんだが…」

「ラブは…明日は大丈夫なの？」

「もっちろん。これぐらいのことじゃ…ね。」スカイラブは星空を見やった。

…明日も…この夜空のもとに…いたいな…

…家族が…故郷が…いつまでも見守ってくれる…ここに…

…今回も…守ってね…

同じころ　宇宙センターの山側の森林

「いよいよ明日奇襲か……」シーベルトがポニータ種族のお約束の蹄(ひづめ)を動かし、金属製の戦闘用蹄鉄を調整した。既に今回攻撃を仕掛ける中隊は到着している。

「あの、アリョーナさん…」
「ん？どうしたの？」アリョーナは九尾の尻尾をピクリと動かした。
「もし…俺たちが交戦する相手部隊に…リーヒュンやブレイブが…万が一いたら…」

「それはその時よ。」彼女はシーベルトの戦闘用蹄鉄に自分の前足を置いた。「それにその時はあなたが決めればいいの。あなたが最善だと思う事、それでいいのよ。」

「そう…ですか…」彼は曖昧に頷いた…

しばらくして…覚悟を決めた…

…もしいた時は…

…殺(や)る…

…俺と…彼らの…未来のためにも…この思いの為に…

それぞれの思いと意志を包み込むかのように、アメリカ本土から離れた辺境地、バージア宇宙センターの夜は静かに流れて言った。

運命の前夜…（後書き）

冒頭のほうでアジアハイウェーの話が出てきましたね。
実際、アジアハイウェーは東京の東名高速道路の起点から始まるんですけど…実際に福岡とプサンはもちろんまだ道路はありませんし、計画も未定のようです。

将来的には…東京から車で韓国、中国、中東圏、そしてヨーロッパまで行けるようになるんでしょうか…

とにかく、東名高速の用賀料金所には“アジアハイウェーの起点”なる標識は実在するみたいです。

アラスカにある米軍基地も実在です。実際秘匿性が強くて、その概要の多くは非公開みたいですが…

向こう側はロシア、つまり元はソ連ですから、設備はそれなりに充実してそうです。

で、前回の話と今回の話も含めて新入りを改めて紹介。スカイラブの言葉に時々聞き慣れない言葉の端くれがありますが…

あれ、ポケモンたちの言う地球のかなり北部の訛りなんです。設定上は。

まあ、ポケモン語、要するは足型文字ですから…

気になった方は、“岩手県の方言”で検索してください。

アコースとチェギョンは…それぞれ普通のラプラスとチルタリスです。

チェギョン：失礼ね！かわいい永遠の１８歳に対して普通って何よ普通って！？

…はいはい。

初陣・朝日の中で（前書き）

いよいよ本格的な戦闘シーンが始まります！！

ユイリィ：やっとだよね？

…まあ。それに今回冒頭にしか触れないから。

…次話にも続いていきます

初陣・朝日の中で

現地時刻２０１２年１１月１１日　台湾　台北市のあるショッピングモール　１９１５時

ここは、京華城という台北市の現代的なショッピングモール。ここにある公共街頭ディスプレイの周りに今、多くの人だかりができていた。なぜなら、台湾出身のある若者がアメリカのケネディ宇宙センターから４人の宇宙船のクルーの一人として、今まさに飛び立とうとしているからだ。

台湾、すなわち中華民国は中国史では史上初めて共和制を実現した国家だ。しかし、第２次世界大戦後には、この蒋介石の国民党政府は、毛沢東の共産党政府に内戦で敗北しこの台湾へと逃れた。その後、１９７０年代から１９８０年代にかけてアジアＮＩＥＳ（新興工業経済地域）として、急速に工業化を進めてきた。

しかし、社会主義であった中国が市場経済制度を導入すると、中国はわずか２０年強で世界第２位の経済大国へと成長し、２００７年にはアメリカ、ロシアに続いて有人宇宙飛行に成功し軍事力の現代化も一気に進行させた。台湾との軍事力バランスも簡単に覆し、台湾は圧倒的な経済、技術、資本、軍事等の中国の脅威にさらされることになっている。

もしこの若者が中華人民共和国出身だったら、おそらく彼は中国の宇宙船「神舟１」に乗っていたであろう。

このディスプレイに映し出されているのは、ＮＡＳＡのまるでジェットコースターのようなマスドライバー型打ち上げシステムの定点カメラからの映像だ。その平坦な側の端っこにいるのが、今回打ち上げられるＳＳＴＯＶＴ－２００軌道往還船の2号機、タイタンである。

２０１２年１１月１０日　アメリカ・フロリダ州　ケネディ宇宙センター　０５１５時

かつてスペースシャトルと呼ばれた軌道往還船ＯＶＴ－１００が現在でも打ち上げられている大型有人宇宙船用３７Ａ発射台のそば、並立する３７Ｂ発射台と直角の位置をなす方向に海に向かって伸びている全長６キロもの打ち上げ台。最新の軌道往還船、ＯＶＴ－２００を、液化ヘリウムの冷却で超伝導と化した磁石の反発力で宇宙へと送りだす宇宙への架け橋。米ソ冷戦の終焉に伴い一時は開発中止の危機にも直面したが、各代の合衆国大統領、国際的な科学技術機関、世界中の航空宇宙産業などの熱意により、２００８年についに初飛行に漕ぎ付いたのだ。

まだ、夜も明けきらぬ５時１０分。この宇宙への架け橋を一望できる海岸やそこに設けられた特設見物席には、すでに多くのギャラリーが世界中から車両で、観光バスで集まり、設置された巨大モニターとタイマーを見ながら、打ち上げの瞬間を今か今かと待っていた。一部のギャラリーはさらに全体像を見るべくボートやヨットで沖に出て見物する者もいた。

「…リフトオフまで２００秒。マスドライバーシステム、超電導冷却開始。」打ち上げ管制室のさまざまな指示が、この宇宙船タイタンに乗り組んだ４人の飛行士が着用しているオレンジ色の船内用宇宙服のヘルメットに装着された無線機に、ヒューストンにあるＮＡＳＡの飛行管制センターに、響き渡る。

「各部署打ち上げ最終チェック。」打ち上げ責任者の声が管制室に響く。
「エンジン系統」「ゴーフライト」
「補助ブースター」「ゴーフライト」
「マスドライバー電磁誘導」「ゴーフライト」
「自動制御」「ゴーフライト」
「飛行誘導装置」「ゴーフライト」
「機内通信」「ゴーフライト」
「機体制御」「ゴーフライト」
「全部署、問題なし、飛行実施。」責任者が言った。

そして、打ち上げ６０秒前。
「マイナス６０秒、各員、バイザーのロック確認を」４人の宇宙飛行士はそれぞれのヘルメットのバイザーをチェックした。２人はアメリカ系、１人はフランス系、もう１人は台湾出身のアジア系だ。
「誘導装置は問題なし。頼むわよ。」あの女の声が初老の機長の無線機に聞こえた。「わかってるさ。行ってくるぜ。」
「補助動力電源（ＡＰＵ）始動」「よし、始動確認。」機体の補助電源が作動し、４つのメインエンジンに推進剤となる水素と酸素を送るための電力が送られ始める。
「マスドライバーカタパルト、超電導範囲まで冷却終了。」「補助ブースター、点火回路正常、用意よし。」「イベントタイマー、タイタン側のプログラムへ。」「シャトルの進路オールクリア」「付近の上空、機影見えず。護衛機も退避完了。」
「飛行実施。」

シャトルのメインエンジンの後ろにある防音、防衝撃波フェンスが持ち上がる。軌道修正用の補助エンジンが先に点火し、シャトルの機内にも音が聞こえてきた。

「吸音フェンス全開。補助エンジン始動。カウント…15，14，13，12，11，10，9，8、メインエンジン、（点火作動）イグニション」４つのメインエンジンが始動し水素と酸素の反応による青い火炎が吹き出した。機体の振動と轟音が一気に強くなる。「3，2，1、リニアカタパルト始動。補助ブースターイグニション。リフトオフスタート。」

機体側の誘導部分に機体の電源から強力な電磁力が与えられた。機体はその超伝導で生じたすさまじい斥力と引力で一気にカタパルトを滑り出す。全長６キロのマスドライバーをわずか９０秒で駆け抜け、一気に機体はジャンプ台の上り坂へと駆け上っていく。乗員の体にジェットコースターの数十倍の重力加速度が加わる。専用の重力加速度調整システムを搭載した磁力座席（シート）でなければ確実に乗員の首の骨は折れていただろう。

「機体、マスドライバーから離脱。補助ブースターイグニション。」

マスドライバーから離れた直後、機体の背面、ペイロードハッチのそばに着けられた固体ロケットの補助ブースターが点火した。乗員には遠心力に代わって激しくシートに押し付けられるような加速度が襲う。

すでに音速を楽々と突破していたシャトルは補助ブースター、メインエンジンの推進力でさらに急加速し、空に吸い寄せられるような勢いで、補助ブースターの推進剤が出した白煙を残して朝日に輝くオレンジ色の空へと吸い込まれていく。

海岸で、特設席で、ディスプレイで、車から、沖のボートからそれを眺めていた人々から拍手と歓声が上がった。「ヒューストン、打ち上げは完了。飛行管制をそちらに引き渡す。」

「よし、我々の出番だ。」管制業務をヒューストンのＮＡＳＡ飛行管制センターに引き渡すと、ケネディ打ち上げ管制指令室（ファイアリング・ルーム）に、拍手

が響き渡った。基地の周囲を固めていた州警察の車両やセキュリティー要員の上をその轟音が通過していった。

打ち上げ責任者も今まで厳しかった表情がちらりとほころんだ。しかしすぐに顔を引き締め、通信員の一人を呼び寄せた。

「問題はバージアのほうだ。こっちが成功した旨、アラスカの国連統合軍に伝えてくれ。」

「了解しました。」

指定位置で待機していた、上空監視任務のF／A－22A2機、国連統合軍のF－16B60とAWACSのE－767にも、SSTOタイタンが飛び上がり、朝焼けの空に消えていくのが見えた。

「飛び上がったか！いい旅をしろよ！」一人のパイロットが声を上げた。

「よし。あとはバージアのアトラスも上手くいってくれ…」もう一人が呟いた。

「こちらの任務は終了だ。君たちは帰投だな。」2機のF／A－22AとE－767は、シャトルの打ち上げに驚いた海鳥たちの群れの上で基地への帰投の道についた。朝日がその3基を黒い影に照らし出していた…

「よし、俺たちも帰投だ。」「ああ。」統合軍のF－16B60、2機も彼らを右に見やりながら帰投の途についた。

もちろん、台湾・台北のショッピングモールのディスプレイの周囲も、打ち上げが行われると同時に大歓声に包まれた。彼は日本以外の極東アジアの国々でアメリカの宇宙往還船に初めて乗り組んだ男

になったのだから。

この映像…シャトルと海鳥たちが朝日に交差する美しいもの…は、さまざまな動画サイトや、ＮＡＳＡ公式サイトでも生中継され、アジアやヨーロッパ、中東の人々も見て、動画は一つの情報の記憶として残り続けるだろう。世界各国のニュースでも何か国かでは取り上げられるかもしれない。

…だが、この人達が見たのは打ち上げの全てではない。ニュース用に世界のメディアに公開されたものが全てでもない。
もう一つの打ち上げは合衆国の辺境、エメリア・ニュークリアにあるバージア宇宙センターでも行われたのだ…

その頃　アラスカ　国連統合軍前線司令部　ＩＳＦＣＩＣ　現地時刻０１１６時

「…そうか。ＳＳＴＯは打ち上げ成功か。」前線司令官がヒューストン及びケネディ宇宙センターからの報告を受け呟いた。あとは、打ち上げから８９分２１秒後にバージア宇宙センターから、連動衛星をのせたアトラスロケットを投入すればよい訳である。
　バージア周辺で何らかの妨害工作がある可能性は高い、という調査データが来ている。しかしそれが生じた場合に備え、周辺地域には宇宙センターのセキュリティー部隊やアメリカ陸軍エメリア派遣軍の対ポケモン機械化歩兵部隊も展開済みだ。上空には米空軍と統合空軍の戦闘機も警戒に当たっている。相手に人間が加わってでも

…例えば旧ソ連から流れてきたＭＩＧ－２１を使っているとか…いない限り、わざ以外の身体能力がネコ科の猛獣たちよりかは明らかに低いポケモンであれば、こちらのワンサイド・ゲームに持ち込めるはずである。例の３０２中隊の連中より大切なことは、もし不測の事態が生じたときにそれをどこまで隠蔽できるか、という事だ。ケネディの宇宙センターは、合衆国本土に近い事だけあって、カザフスタン・バイコヌールにあるロシアの宇宙基地と違って民間人の見物客も多く見らえる。しかし、バージアはエメリア行政区の４州でもっとも人口の多いエドワーズ市と郊外の大工業地帯及び太陽光発電システム発電機エリア周辺からも相当離れている上、ＮＡＳＡと軍専用の道路以外バージア地域への道が整備がほとんど進んでいない（ニュークリア北部は合衆国本土以上に高速道路、高速鉄道が整備されているが）ため、沖まで船で見物に来るもの…もともとこの周辺は船舶の航路ではないが…も、車両でやってくる報道機関（プレス）の連中も極めて少ない。上空には民間航空機の航空路（エアウェイ）も存在しない。ただし、何らかの戦闘が発生し、スタッフや防衛部隊に死傷者がでれば、この事態がメディアを通じて公表されるのは明らかだ。ニュークリアには、先の民間工業地帯のほかに宇宙太陽光受信アンテナやあの原子力発電所もある。治安が悪化していることが世間に判明すれば、経済・社会情勢の不安要素になりかねない。

「バージアにいる統合軍の警備部隊は警戒態勢に入るよう通達を。」

「了解しました。」

「３０２中隊の連中のオペレーションの準備も急いでくれ」指示が戦闘情報センターを飛び交う。「各員の生命情報装置、受信開始」

「打ち上げ護衛シーケンススタート」

…さあ見せてくれ…貴様らの能力とやらをな…

司令官は目を閉じた…

同じころ、警備にあたっている米空軍のＦ／Ａ－２２Ａ、２機と地上の州警察の部隊、並びにセンターのセキュリティー部隊にもワシントンにある国防省（ペンタゴン）から、戦闘態勢への通達が下った。

その頃、サバーブ州　バージア宇宙センター　０５０５時

「…打ち上げまで１０分、秒読み続行中」センター敷地の拡声器から、敷地の半地下にある打ち上げ管制室からの声が聞こえる。その音に驚いた小さな齧歯類系のネズミに似た少動物が塹壕の周りを這っていた。人間の警備部隊はすでに戦闘態勢についていた。

一方の彼らは……

リーヒュンはその音声でわずかに目を開けた。昨日、ユイリィに休んでいいよ、と言われて間もなくぼんやりとまどろんでいた。このまま寝てしまうと起きた時には自分は死んでしまう、そんな予感にとらわれたからだ。しかし、ぼんやりしているときにありがちな眠気と戦っているうちにそれに負けて一瞬目を閉じた時に、このベイリーフは拡声器の人間の音声にたたき起こされるこの瞬間までずっと眠りに落ちていたのだった。

「…あ、リーヒュン、おはよ。そのうち始まるみたい。とりあえず頭にそれつけていたほうがいいよ。うん。」ユイリィは、まるで朝畑道で（ポケモンの社会ではこういう道が多い）出会ったような普通の調子で言ってきた。彼女は、朝のお約束である頭の雄蕊４本のうち長いほう２本を丸めてひもで縛るという極めて日常的なことをしている。もっとも彼女はすでに装甲板一式と各種武装をすでに装備していたが。

「そうだな…いよいよ、か…」リーヒュンはそばに置いてあった装甲板を４本足の付け根あたり、胴体の前部分、首の葉っぱ付近に結びつけた。後ろのひもをユイリィが締めてくれた。

「だいぶ緊張してるね。そんなもんだよ。」

「…生きて帰れるかな…」

「だいじょうーぶだよ！だってこのあたしがついているんだもん！」彼女はツルで彼の頭をくりくりやった。

「まあ、そうだね…だといいんだけど。」リーヒュンはそう言いながらも、徐々に体が起き始めるのにつれ、言い知れない恐怖と不安が大きくなっていくのを感じた。自分の左右前足に装着された生命状態記録交信装置のセンサー（後ろ足にも首の葉っぱ元にもつけられていたが）を眺めているうちに、その不安感はいよいよ彼の思考に入り込み、立っていられないほどのめまいに代わっていった。

生命状態記録装置は、ポケモンの血液に含まれるＳＥ粒子と呼ばれる物質の流れを計測し、そのポケモンの血流、心拍数、体力、現在のエネルギー放出具合等を分析する装置である。その他細かいことは、内容があまりにも複雑なのでここでは割愛するが、この装置を使ってアラスカの統合軍前線司令部は３０２中隊その他のポケモンたちの戦闘状態を監視しているのだ。

テルルはその1時間ほど前から目が覚めていた。とりあえず装甲板と各種武装をしっかり装着しておいたが、それで安心するどころか仕込まれたように緊張感は高まるばかりであった。彼女はグレイシア種族のもみあげ状飾りを撫で付けながらそれを必死にこらえていた。

…はあ…ホントの…ホントに…始まるの?…

…ちょっとだけ…どうしよう…どうするの私?…

…今まで…通りのやり方で…行くしかないか…

「いよいよだなテルル!…相手は、そうだな、来るとしたって…そこら辺の強盗か通り魔か…とくにかく大した奴じゃねえだんろ?」ブレイブが彼女の体を前足で小突いた。

…この男…いつから起きてたの?彼女は諦め半分でそう考えた。

「うっ…そうだとしてもさ!…なんで…そんな普通にしてられるわけ?」

「何言ってんだよ。そんな始まる前からびくついたんじゃ何にも出来ねえぞ!…とにかく、今できることを全力でやろうや。」

「ま、まあね…」テルルはそう言いながら自分で持ち込んだ銛を握りしめた。もし相手が至近距離まで接近してきたらこれで仕留めるつもりであった。

「おっ、魚を取ってたそれも武器か。そのテルルらしい握り方、最高だな!」ブレイブが彼女の前足に自身の前足を重ねてきた。

「な、何やってんのよ!?アンタのその触り方…」テルルは慌てて振り払おうとした。だが、彼は彼の耳元に口を近づけた。「そうじゃねえよ。…そんなに怖がるなって。」

「…えっ?」

「そんなものに頼らなくてもいい。お前は一人でやってるわけじゃ

ないんだろ?だったらそんなにきつく身構えるなよ。」ブレイブはテルルの銛を握っている前足をそっと撫でた。「俺もリーヒュンもユイリィもほかの連中も…テルルになんかあったら助けてくれるぜ。…お前はどうやら…自分の在り方が自分を守るすべて、だとか思ってるみたいだ。…大丈夫だからな。」

ブレイブのブースター種族の体の暖かさが彼女にもほんのり伝わってきた感じだった。

「そうね…そうよね…やってみるよ…自分で…頑張る…」テルルにとって彼に言ったことすべてがまたも図星だったが、彼女の心の中からわずかに今までの不信感が昼間の氷のように溶け落ちてゆくように思えた…

「ふん、嵐当日の朝日、てところか。上空の風も順調。これは素晴らしい激戦日和だな。」ロックオンが無線機を使わず、直接隣を飛んでいるチルタリスに呟いた。

「なにいってんですか?ロックオンさんの言ってること、私にはさっぱり意味不明ですけど。」

「チェギョンみたいな子供はまだ知らなくていいんだよ。俺みたいに３０くらいになったら空の哲学がわかるようになるさ。」

「はーい…努力しまーす。」チェギョンはこのムクバードが言ってることがつまらなそうな哲学話のようだったので、いい加減な振りをしてあしらった。

アコースのそばから大空に飛びたった2匹は朝日をいっぱいに浴びながら哨戒飛行の名目で基地の周りを飛び回っていた。

バストークたち３０２中隊の面々もすでに警戒態勢に入りつつあった。彼は自分の弓矢とベレッタ社製の拳銃、無線機などをチェックしながらグラシデアのほうをちらっと見た。

「装備一式、調整終わってるんだな？いつも通りお前が中心になって連中の側面に回り込んでくれよ。いいな？」

「了解了解。バストークと違って加減位はわきまえてるわよ。」グラシデアがいかにも馴れ馴れしいような応対をした。

「んならいいけどよ、グラシは肝心なところで遅れるから…」「父親なのはわかりますけどそういう馴れ馴れしい呼び方やめてくれます？」「わかったわかった。とにかくいつも通り遂行しろよ。」

「分かったわ。あとですね、私はいつも予定通り遂行してるつもりよ。」グラシデアがちくりと父親に突っ込みを入れた。

「わかったよ。そういうことにしてやる。」

バストークは相変わらず自分を毛嫌いする娘の態度に半ばあきらめながら首を振った。

「…ピトム。お前もいつも通り、しっかりやってくれ。お前には大抵のことは任せられる。俺の部隊が主力で相手を殲滅するから、ピトムはその先陣に回ってくれよ。」

「もっちろんです！いつも先陣を任させてくれてありがとうございます！」ピトムニクは嬉しそうに言った。

「その意気だ。信用してるぜ。」「はい！やってみせます！」

ピトムニクは自分専用のＭ－６７グレネード付きの矢をなでた。

…今日もこうやって隊長やみんなのお陰で続けられる…

…また…みんなで…作戦を成功させられる…

…頑張ろう！！！

それから５０分以上何も起こらなかった。このまま無事に打ち上げられるかもしれない、スタッフも部隊も統合軍やアメリカ軍の要員たちもにわかににそう思い始めていた。

ここにきて各員の無線機が初めて鳴った。

「…３０２中隊の君たち、陸軍のポケモン部隊、聞こえているか？こちらは、今回の戦闘で君たちの管制を行う空中管制機アンタレスだ。まあ、打ち上げまであと１２０秒ほどだがな。」

「空中管制機？そんなのどこにいるのです？」バストークが不意に尋ねた。「…だから空中管制機だ。今君たちの上を飛んでいるＡＷＡＣＳだよ。」

「そ、空ですか？」ピトムニク達は上を見た。

「あのへんじゃない？」スカイラブが左前脚を指した。

「そうだね…確かに…」ピトムニクがそれをよく見ようと片目を細めた。

「普通の飛行機にしては…妙よね…」「うん…」

…確かに、基地から少し離れた上空におわん状のものを乗せた飛行機らしき黒影が大きな円を描くように回っている。アメリカや国連統合軍で一般的に使用されている空中早期警戒機（ＡＷＡＣＳ）、Ｅ－７６７である。もともとの機体はその名の通りボーイング社製の民間旅客機Ｂ－７６７－３００。空軍仕様に改造されたこの機種は、早期警戒も行う傍ら、空中の部隊管制機、いうなれば空飛ぶ管制塔である。おわん状のＡＮ／ＡＰＹ－２内臓のロート・ドームレ

ーダーは水平線外の航空機、鳥の群れ、雨雲、ポケモンを認識し、解析する優れた能力を持っている。

「私が今回君たちを担当とする管制官だ。声ぐらいは覚えておいてくれ。まあ、君たちの無線機は専用の回路で組まれているから、他の無線は聞こえないはずだがな」無線機から再び声がする。

「おいおい、おんなじ空にいながら俺たちには気づかないのか？」

「そーよそーよ！この永遠のかわいい１９歳が見えないってわけ？おじさんみたいな人…」

「今、１９歳って言ったよな。そうだよな。結局チェギョンの歳（とし）っていうのは意外と…」「べ、別に私は１８歳よ！」ロックオンとチェギョンのやり取りが聞こえてくる。この２匹は管制機に下の皆より近い位置にいるのだ。

「わかってるよ。ムクバードとチルタリスだろ？アンタレスの４時方向、距離７００ヤード、高度は１１０００フィート。」

「さっすが。もう気づいてたんだな。」ロックオンが言った。

「そりゃそうだ、何せ君たちの大きさぐらいな…」

ズドン！！！！　突如敷地はずれで白煙が上がった。

「おいおい！いまさらかよ！遅い連中だぜ！」ブレイブが声を上げた。

「い、今、今更？！ま、まだ…」テルルの体が凍りついた。彼女の脈拍は一気に心臓を破壊せんとばかりに高まった。

「や、やっぱりきたのか…」リーヒュンの４本足も衝撃に凍りついた。心の中で不安感に代わって得体のしれない気持ち悪さと悪寒が頭の虫食い葉っぱの端っこまで走った。爆発音とともに、彼に外部から一瞬恐怖に似た感情のようなものが足もとから伝わり、４本足が宙ぶらりんになったようなめまいにも見舞われた。しかし、彼にはそれがなんなのか冷静に分析する余裕は今なかった。

「やっぱね。もうやるしかないの。…あたしは…絶対に逃げないよ…」ユイリィが首元の花をすくめた。しかし彼女の顔から普段のおちゃらけた雰囲気は消え、その視線は相手を超えたはるか遠くをみつめているようだった。

彼女の思いはすでにここにいるポケモン全員と、爆音に驚いて飛び立つ鳥、上空を飛ぶ2機のＦ／Ａ－２２Ａに2機ずつ搭載されているＰＷ（プラット&ホイットニー）社製Ｆ１１９－ＰＷ１００エンジンの回転、Ｅ－７６７の管制官が見つめるレーダーの索敵、地上で警戒態勢体制に入る州警察の車両、そしてこの攻撃を仕掛けた者たちの決意を見据えていた。このメガニウムの意思の中で、人間が、動物が、ポケモンが、武器が、戦闘機が、宇宙センターの全ての構造物が、アトラスロケットが…

…彼女の意思の中で一つのエネルギーの流れとなって彼女に流れ込んでゆくのだ…

…あたしはいつでもＯＫ。リーヒュン…絶対守ってあげるからね！…

同時刻　バージア宇宙センターのはずれの森林地帯

そもそもこのような事態になった理由は…

自由連合側の中隊規模の部隊は既にいつでも行動に入れる状態になっていた。

「シーベルト、アリョーナ、予定通りにいくぞ。いいな？」今回の作戦を指揮するラクープ少佐…コリンク系統の最終進化形、レントラーである…は前方に広がるバージア宇宙センターを見つめた。

「大丈夫です。少佐」ポニータの青年は前足を動かした。

「では…まいりましょうか少佐。シーベルト、この子のことを頼むわね。いい？」キュウコンの女性は、まだ１２，３歳程度のミジュマルの頭に手をやった。

「もちろんです。行くぞ新入り！」「は、はい…」この少年は“戦場”という言葉で人間でもポケモンでもまず持つであろう不安と恐怖で震えていた。

伝令のケンホロウが木の上で翼を上にあげた。

「…作戦開始だ。皆行くぞ。」ラクープ少佐が声を上げる。

「よーし、ついてこいよ新入り。」「りょ、了解しました…」

オオタチが、キリンリキが、ワカシャモが、メブキジカが、マリルリが、コリンクが、一斉に走り出す。シーベルトやアリョーナも後に続いた。

自由連合の部隊３９匹とひこうポケモン部隊１２匹は、アトラスロケットの設置されているＡ１２発射台へと向かい始めた。新入りの

ミジュマルは、恐怖に打ち負けそうになりながらシーベルトの後についていった。彼らは雨水用の地下通路に入り、予定された各地点で、数匹ごとに分散してゆく。

数分後、指定された地上への口（塹壕の死角となっている）に達した。彼らはそれぞれ身をひるがえすように地上に出るとさらに敷地内部へと足を進めようとした。

しかし、ここで最悪の事態となってしまった。シーベルトやアリョーナ、この新入りのミジュマルが出た途端に、警戒に当たっていた基地のポケモンと鉢合わせしたのだ。もちろんラクープ少佐たちはこれを予見していたわけだが、ミジュマルの精神はこの時点で接敵という恐怖の前に崩壊した。

「！！！！？？？？」「おいこら！」鉢合わせしたシャワーズに対しシーベルトはとびげりを仕掛け、一撃で吹っ飛ばした。そいつは後ろの電灯に首を折られ、その場で絶命した。

だが同時にミジュマルも精神的に絶命した。この少年は先ほどシャワーズがやってきた方向に向けていきなり、手投げ弾を放り投げたのだ。

「おいおい！やめろ！」「ち、ちょっと？！」シーベルトとアリョーナが２匹がかりとめようとしたが、気が狂ったポケモンを止めること、それはポケモンはおろか人間でも難しいのだ。こいつは恐るべきパワーで２匹を突き飛ばすと、自分の背丈と同じくらいの軍刀をふるい、敵の塹壕の方向へ奇声を上げながらフラフラと進み始めた。

「どうします少佐？！」「仕方ない、助けろ！！！残りの連中は一気にあのトンガリあたまの破壊へと移る！！」

一斉に自由連合側のポケモンが１１Ａ発射台側、要は塹壕側へと突き進み始めた。

「前方に目標と思わしき生命反応多数。攻撃開始許可。」アラスカの国連統合軍前線司令部が、バージア宇宙センターの状況を解析してゆく。３０２中隊各員の生命状況がディスプレイの一部に表示される。オペレーター達の指示が空中管制機のアンタレスに伝わる。
「突出してる子供は妙だが、開始。予定通り戦闘シーケンスに。」
「了解、表示通りに通達する」アンタレスからの返答が聞こえた。
司令室の後方では、作戦担当の司令官と昨日到着したサクラがＣＩＣモニターを見つめていた。
「あなたの教え子…いや…仲間…遂行してくれますかね？」
「…はい、きっと…」
「そう信じているよ。失敗した場合は君の責任問題となる。」
「それは当然、でしょうね。」こう言いながらもサクラは心の中ではため息をついていた。

…人間という生き物はなぜ生死がかかっている状況でも責任や利権を考えられるの？大事なことは、いかに多くを生きて返すか、ではなくて？…

「目標接近中。最初は…前方のミジュマル。もっとも最適な位置…」
各員の無線機から管制官の声がする。「…リーヒュン、君がやれ。君の能力は地球最強らしいな。」
彼の心臓の鼓動はさらに高まった。４本足全てが3次元から吹き飛ばされた並みに耐えがたい異常な感覚に襲われた。並みのベイリーフ種族だったら、いやどの種族でもとっくに逃げ出しているだろう。

「…どうした?早くしろ。」管制機からの無線がせかす。「…了解…しました。」

リーヒュンはピトムニクがM－67手榴弾を装着してくれた矢をつがえ、弓のツル限界までひいた。手榴弾がついているから名いっぱいまで引かないと飛ばない。

ミジュマルがどこへと行くか、彼には手に取るようにわかった。しかし、次に何をすればいいのか、頭の中が真っ白だった。というよりそれを考えることを頭が拒絶していた。必死に前へと進もうとしたが、すでに耐え難いほどの悪寒は最高潮に達していた。これを振り払う手段は彼には存在しなかった。

ひとつわかること、それは自分が打てばあのミジュマルは死ぬ、そういう事だ。

彼はユイリィをちらっと見た。このメガニウムは「その調子。大丈夫だよ。」と、小さな声でいた。彼女自身もすでに矢を構えていた。しかし、彼女の夏空のような瞳から感じる意思はリーヒュンがこれまでに感じたことのない決意と彼に対する核兵器のような恐るべき圧力を放っていた。

…はやくしなさい!!!!早くしないとあんたを殺すわよ!!!!!…

これがユイリィの、このメガニウムの本心、いや、人類がかつてチェルノブイリやスリーマイル、フクシマで封印した核エネルギーと同じくらい恐るべき期間をかけ暴走寸前で封印されていた宇宙を消

滅させかねない戦闘本能、彼女も気づいていない自分の精神である。今の彼女は、本人でも気づかないうちにそのすべてを開放しつつあった。

それを見つめているベイリーフの青年は恐怖、不安、異常な圧迫感に崩壊しそうになった。もはや矢を構えて半狂乱と化したミジュマルを目で追う事しかできなかった。

彼には、あのミジュマルの全てが見えた。矢を打ったら何がおこるかも…

…俺がやればあいつは死ぬ。…ミジュマルの全てが消滅する。…

…権利があるのか俺に?!…殺すのか?

…そんなことをしていいのか?そんな権利いつ与えられた?!…

…!!!……何もしなくたって…今の彼女に…

「なにやってるんだ?!」ブレイブの声が聞こえる。「早くやれ、打つんだ!!」バストークも苛立ちと相手が接近してくる恐怖にかられた。

「この優柔不断男!!!必要なときに突っ込めないの?!」「落ち着けって!!」テルルが恐怖に駆られて声を張り上げ、自分の矢を前足を痛くなるほど握りしめた。すでに彼女の眼は泳ぎ、後ろ足が崩れ落ちそうになるほど震えていた。ブレイブは震える彼女がこのまま塹壕を飛び出すんじゃないかと無理やりテルルを掴んだ。

「私が行きます!!!」「お前、死にたいか!?」ピトムニクが塹壕を出ようとして、バストークに食い止められた。

「このままじゃ、発見される前に包囲され…」「もうばれてるんだ

よ！！！あいつが打ったら一気に仕掛ける！！」

相手が至近距離まで接近してきたいるスカイラブにはすでに生きた心地がしなかった。早くあいつが打たないと後戻りできない事態になる。

「もういい！はじめろ！！！」後方にいるアメリカ陸軍の戦闘指揮車両から無線が鳴る。

「行くぜ！！」守備部隊のブラッキーが叫ぶ。「なんたって…人間は…後ろで偉そうに！！！！！…」スカイラブも塹壕を飛び出し前方にいるみずタイプの相手を一撃で殺した。

みんなの声、始まった戦闘、そこから感じるすべての感情、リーヒュンの意識は次第に混濁していった。もはや自分が立っているのか、そもそも世界にいるのか、という感覚すらもこの混迷の前に失われていた。

彼の意識は、自分の心の宇宙という暗闇、全てから孤立した空間に取り残された。

…俺の選択に…すべてがかかって…

そう…

……

…自分がこの戦場の事象地平線（イベントホライゾン）なんだ！！！

……だからってどうすればいい！？！？今からやるのか？

……どこへ、どう、動けばいいんだよ？！！！？

…………

ばしゅっ！！！！！！！

リーヒュンとユイリィの塹壕の至近距離に矢が突き刺さった。
「うっ？！？」彼の首の葉っぱが一瞬逆立った。

ユイリィの限界もほぼ同時にやってきた。

彼女はツルで彼の弓をかまえるツルを恐るべき力でひっつかんだ。その目は既に正常とは思えない凶気を発していた。すでに彼女は戦闘の渦に飲み込まれていた。
「！！！！！！！！！！！！」彼女は、リーヒュンにも理解できない奇声を発して彼のツルを矢から引き離した。
まるで彼女のエネルギーを開放したように。

矢は弓の弾性エネルギーの大半を運動エネルギーに変換し、猛スピードで地面すれすれをわずかに上昇するように飛んだ。ユイリィの狂気と同調するように矢は凶暴な先端をホタチを振り回して走ってくるミジュマルの心臓部を直撃した。

ミジュマルはその衝撃に対し何が起こったかわからないような驚愕の表情を浮かべた。
そのまま、矢の運動量で後ろへと突き飛ばされ…
Ｍ－６７手榴弾の火薬に火がついた…

火薬の猛烈な化学反応エネルギーが突き刺さった部分からミジュマルの体内を吹き飛ばし、体の構造全てを内部から破った。
…血しぶき、肉片、火薬と火炎をまき散らし、彼のすべてが無となった。

これを合図にしたように、３０２中隊は一斉に動き出した。

「今更来たのか…」「各系統、誘導コース、異常なし」「マイナス７０秒。」「予定通り打ち上げを行う。最終確認を怠るな。」半地下の打ち上げ管制室ではセキュリティーカメラに多数映り始めた敷地のはずれで繰り広げられる戦闘のシーンに不安感を覚えながらも、スタッフたちが冷静に打ち上げシーケンスを進めた。
「大丈夫なんでしゅかね…？」打ち上げ責任者の手に抱えられたシェイミが声を上げる。
「ここは何とかなるけどな。…アンタの仲間がどうなるかは…保障しかねる。」責任者の男は無感情に打ち上げシーケンスを見つめ続けた。

ブレイブはこなれていた。最初に2，3本矢を放って、至近にいた奴を一瞬で打ちたおすと、一気に前にいる奴に飛び掛かった。
「ふん！そんな止まっていたら終わっちまうぞ?！」「き、貴様…」彼は前方にいたメブキジカにニトロチャージを直撃させた。なおもこのメブキジカは彼にウッドホーンを食らわせようと飛び掛かったが、その前足をブレイブが前足の装甲板で食い止め、こいつの胴体下部にだいもんじを浴びせた。１７００℃近い火炎が、メブキジカの皮膚と溶かし、内臓と骨を焼き尽くした。
「ぐっ…」このメブキジカが苦痛によろめき、後ろに倒れていく0.5秒間にブレイブは懐から軍刀を引っ張り出して、それをそいつの心臓に正確に突き立てた。
メブキジカは、動脈を貫かれ血しぶきを噴水のように散らしながら後方に吹き飛んだ。

テルルもブレイブに続いて飛出し、そこにいたリーフィアに飛びついた。
相手のリーフブレードをテルルもこおりのつぶてで迎撃する。
相手はこれを連続して浴びせてくる。彼女は自前の銛でそれを何とかはじいた。

「き、君も…徴兵者か?」相手のリーフィアが突如声を上げた。
「な、何言ってんのよ?アンタ敵でしょ！！！」
「そ、そうか…ぼくも徴兵されたんだ。ホントはこんなことは…」
このリーフィアはかいりきでテルルの銛を至近距離で押し返してい

く。彼女もまたかいりきでそれを掴む。
「で、それが…それが…？…」「…もうやめないか？ポケモンたちがこんな内輪もめじゃ…みんな死ぬ…僕だって…家族が…」
…わたしはそうなの？…これは…単なるもめごとに…？
…私は…私は…

リーフィアがとどめを刺すべくリーフブレードをかけて前足を振り上げた。

その時、テルルの脳天に電力が供給された街頭ＴＶように一つの信念が貫いた。
「ワタシは…私は…違うのよ！！！！！！！！！！！！！」彼女はリーフブレードを仕掛けようとした前足を猛烈な勢いで振り切り、リーフィアの首元にこおりのキバを浴びせた。
「うっ、僕は……君と…」「アンタと…一緒にしないでよ！！！！」その効果でバッタリ倒れかけた相手にテルルは銛を突き立てた。鋭い刃先が彼の胸元を貫き周囲に血をまき散らす。リーフィアは電源の切れたロボットのようにその場に崩れ落ちた。

全身に返り血を浴びたテルルは茫然（３秒ほどだが）とそれを見た。
…わたしが…倒した…ていうか…死なせた……
…彼の命を、未来を……

奪った……わたしが？！…

その直後、彼女の前にコリンクがスパークをかけながら飛び掛かってきた。直撃したショックで我に返る。

彼女はしたいから銛を引っこ抜き、飛びついてくる女(メス)コリンクの爪を受け止めた。

初陣・朝日の中で（後書き）

さあ、この先はいかに?!

詳しいあとがきは次回で!!!!!

戦闘…星を目指す光よ……（前書き）

前回の後半戦！！！

もう、まえがき省略っ！！！！！

戦闘…星を目指す光よ……

同時刻　上空３５００フィート

「３時方向に多数…くそ！後方につかれた！」「よし、そのまま。俺がしとめる。」

上空を飛ぶ飛行タイプのポケモンは想像以上に多かった。いくらワンサイド・ゲーム状態が当然の人間対ポケモンの航空戦といえど、２機で４０匹以上のひこうタイプを相手にするのはさすがに限界があった。

後方に３匹以上ポケモンが張り付く１機のＦ／Ａ－２２Ａが、何度も機体を振って回避しようとする。もう１機が目の前にいた２匹を粉々にすると、２機のＦ－１１９ＰＷ１００をフル回転させて僚機の援護に向かった。後方の増援に気付いたポケモンたちは、一斉に左側上空へと流れる。

ベクタードノズルを装備したＰｗ１００を駆使してこの機体は彼らの後ろについた。この機体はその猛禽（ラプター）のあだ名にふさわしく、格闘戦でも無類の強さを発揮する。さらに、通常飛行中は一般の鳥類と同じくらい小回りの利くはずのひこうポケモンは戦闘速度に達すると、航空機程度の旋回半径までにしか到達できなくなる。この速度で鳥同様の急旋回をしたり、細かい方向変更を行ったりすると、バランスを崩して墜落してしまうからのようだ。

機体のアクティブ・フェーズド・アレイ方式ＡＮ／ＡＰＧ－７７火器管制レーダーが前歩の目標を解析し、コンピューターを通じてコクピットのＨＵＤ（ヘッドアップ・ディスプレイ）に表示する。パイロットは彼らを１００ヤードまで引きつけると、火器セレクターをＧＥ社製Ｍ６１Ａ２機関砲（ゼネラル・エレクトリック）に切り替えトリガーを一瞬引いた。

ステルス性向上のために設けられた発射口扉が一瞬開き、２０ミリ砲を前方にぶちまける。生身同然のポケモンは瞬時にして肉片と

血液、体内エネルギーが暴走した火炎を飛び散らせながら爆散する。しかし装填弾数は有限だ。この状態が続けば、いずれ攻撃手段を失ってしまう。

…くそ（ブラスト）、おぞましい連中だ…

「おいアンタレス！増援は来るんだろ？！」一人のパイロットが苛立たしげに声を上げた。彼とて激しい飛行運動で疲弊している。アンタレスの中で戦闘機２機を担当しているのはある女性オペレーターだった。

「うちの軍の滑走路でスクランブル発進中にトラブルがあったの。統合海軍の“アクロス・オーシア”から増援のＦ－３５が２分で到着よ。あなたたち聞いてなかったの？」

「まったく、何てドジやらかしたんだ？」「もっと近くに替え玉はねえのかよ！？」

「文句は言わない！おとなしく１分そこら我慢しなさい！」彼女はパイロットたちを子供をしかりつけるかのようなセリフで黙らせた。Ｅ－７６７の機内でとなりに座っているの３０２中隊担当のオペレーターが「相変わらずの強気さだなお姉さん。」とちゃかした。

「それと、アトラスの警備も忘れないこと！！いい？」

「わかってるぜ。おふくろ」パイロットの一人が嫌味と皮肉を込めて言った。

…くそ（ブラスト）…だが…１分ぐらいだったら…もうスコアを一稼ぎできるか…

２機のＦ／Ａ－２２Ａは、それぞれ手近なポケモン達に再び集中した。

上空は地上に負けず劣らず乱戦だった。戦闘機が2機いるのはともかくとしても、上空にチェギョンとロックオンしかいないのは相当シビアであった。2匹と2機で４０匹を相手にしなければならないのだから。

しかし、このチルタリスとムクバードは、統合軍前線司令部の予想に反して大健闘していた。彼らは、相手のひこうポケモンに正面（フォン）攻撃をしかけ、敵を次々に一撃で吹き飛ばしていく。

ロックオンはパチリスやミミロルが背中にはりついたボーマンダを狙って一気に後方についた。

「きやがったぞ。撃て撃て撃て！！」「野郎っ！！」ボーマンダの言葉でパチリスやミミロルが一斉に弓矢、ほうでん、れいとうビームを乱射してくる。ロックオンは迫りくる弾幕を方向を細かく変え、体をひねり、ロールを打ってかわしていく。2，4，6，8…一発でも命中すればおしまいだ。だが一発もこのムクバードにかすりもしなかった。

「まったく、統制のねえ攻撃だぜ。そんなんじゃ、人間の空軍出身者にゃとても…」彼は相手の下部に回り込む。「ばかが！！」ボーマンダの横っ腹めがけてエアスラッシュをぶち込んだ。

でっぷりとしたドラゴンの腹が裂け、血液と肉片、内臓を散らせながら体が真っ二つになる。その破片にまみれながら乗っていたポケモンたちが吹き飛ばされてゆく。

彼に向かってピジョンが正面から襲いかかってきたが、ロックオンはすれ違いざまに「こっの！」つばめがえしで頭部を切り捨てた。

結果は見なくても分かった。

彼はさっきの続きを呟く。「…目線も合わせらんないぞ…」

チェギョンのほうは正面から飛んでくるオオスバメを捕え、「よーしよしよし！！」至近距離でりゅうのはどうを打ち込んだ。オオスバメは上に載っていたマリルとともに、エネルギーによって焼け焦げた残骸となって、朝の空へと吸い込まれていった。

「はあ？何？めっちゃ雑魚だね今の！…て！！！」彼女の左右側面からケンホロウが接近してくる。彼女はつばめがえしを仕掛けてくる２匹を至近距離まで引きつけると、一気に上に飛びあがった。急停止した２匹を上空かられいとうビームで貫き、その上から矢を１本ずつ浴びせた。

「やってやるわ！！！」「上？！」

弱点を突かれた２匹は、マイナス８０℃にもなる極寒に心臓がマヒした直後、矢によって動脈をぶちぬかれて下へと墜落していく。

「チェギョン、何匹やったか？」隣にロックオンが飛んできた。

「さあね、もう数えてませんよ…ユイリィちゃんのほう…大丈夫かな…」

「どうだかな。まあ、たまにゃ下を助けてやってもいいかもな。行ってみるか？」

「そうしましょうよ！！」２匹は地上の援護へと向けて下へと急降下した。

「左側の連中はほぼ潰走だ！よくやったなピトム！！」メリープの中隊長が無線機に向かっていった。

「ありがとうございます中隊長！！でも、私だけじゃなくてサツキとかみんなそうでしたよ。」

「そりゃそうだ。サツキはピトムと同期で俺と一緒になったからな。ついでに感謝しとくよ。」

「ついでじゃありませんよ！私もちゃんといますから！」サツキと呼ばれたキレイハナが無線機越しに声を上げる。このキレイハナ、ピトムニクと同期で３０２中隊に入った。背丈も彼女と同じくらいでバストークが格別かわいがっている一匹だ。

「それじゃ！今度は中隊長のほうに…」
「ああ待て…あっちあっち、娘とラブのいるほうに回ってくれ。あいつは当てにならない。」
「ねえちょっと、今私があてにならないとか、言いましたか？」グラシデアが無線機越しに嫌味を込めた声で言った。
「言った。お前の周りはいっぱいだから敵で。なるべくこっちにくる努力はしろ。ピトムニク、援護頼んだ。」「わっかりました…やったあ！！また撃破です！！」このプラスルは無線機越しに会話しながらもスパークをかけてあいてのヌマクローを気合でひるませ（タイプ上効果がないものの）、その隙に足をかけてひったおして軍刀を突き立てる。
　おそらく彼女は今返り血で血まみれだろう。それでもこんなに元気と正気を保っている。単なる好戦派の奴ではできない。バストークにふと、こんな思いがよぎった。
…ひょっとしたら彼女、俺より中隊長の才能があるんじゃないか？…
「だが、それはまだまだ実績を積まないとな！！」バストークはそういうと後ろを振り返りもせずに、後ろから来た3匹にでんげきはを浴びせた。「落ちやがれ！！！！」
3匹とも強大な電力で内臓が焼け落ち、黒い煙を上げて倒れる。
「フン、あれでも…相手の並、ってとこか。」
バストーク以下３０２中隊は、今のところ全員健在だった。
「グラシのおとっさん、さすがよ。」スカイラブが不快そうにしているモココの方のあたりをたたいた。彼女の米陸軍の部隊がどうなっているかさえ分からなかったが（彼女の勘ではおそらく壊滅であ

った）このルクシオは平然としていた。
「なんで？あんな不器用メリープが？」
「だってこの状況で…あんな的確に…まあいいよ。私たちもちょっくらあっちに突破する作業、はじめよっか！」スカイラブは一気に向こう側へと走り出した。
「そ、そうだね！」グラシデアも続いた。

一方リーヒュン達は既に大多数の敵に包囲されたような格好になっていた。
「2対9か！こっちの圧勝だ！！」レントラーのラクープ少佐は近くでまごまごしているデンリュウを一撃で切り捨てると、シーベルトも含めた連中に指示を送った。「一気にしとめるぞ。」
「了解！！」シーベルトはいあいぎりでかかってきたジャノビーをかえんほうしゃで焼き殺し、一気に2匹のベイリーフとメガニウムに突進した。

「リーヒュン、見えてるね！みんな倒すんだよ！！ＯＫ？」ユイリィの声がはるか遠くから聞こえる感じがした。彼はさっき殺したミジュマルの意識がまだ感じられ、悪寒と吐き気から逃れられずにいた。

…俺が殺した…殺した…いいのか？！
…あの子の人生をどれだけもぎ取る権利が……
…権利があったのか？！……

「大丈夫?!来てるよ!!!」彼女の子供のような甲高い声がまた聞こえた。

「ああ!何とかやってみる!!」リーヒュンは接近してくる方向に前意識を固めた。相手の動きがいつものように手に取ったようだった。彼はそれに集中しながら上に飛び跳ね、相手の火炎放射とれいとうビーム、むしのさざめき、その他ごっちゃな攻撃を全部かわしてマジカルリーフをぶちこんだ。「そこかっ!!!」

マジカルリーフは、アゲハントやヌオー、フタチマルを直撃し、あまりの勢いで心臓の向こう側へと貫通した。当たった連中はその運動エネルギーでボーリングのピンのように後方へ吹き飛ばされる。

「こっの弱小種族!!!」「ぐぅっ…」ワカシャモが至近距離でまわしげりを仕掛けてきた。リーヒュンはその足をツルであっさり受け止め、ブレイズキックを仕掛けようとしたもう片足も簡単に食い止めた。

「な、なんなの?!」「食らえ!!!」彼はこのほのおタイプに向かってツルを振り上げた。

彼は一瞬ためらった、つもりだった。

…またそうやって殺すのか?…

…それでいいのか?!!?…

だが、このメスがマッハパンチをベイリーフの腹にぶち込んだ。

「こっのおおおお!!!!!!!!!」「ぐえっ…」

この一発で、一瞬ためらいというリーヒュンのリミッターが解除された。

「いっけえええ!!!!!」彼はツルに最大の思念をかけてワカ

シャモの心臓部めがけて打ち込んだ。当たる瞬間、これまでにない悪寒を覚えた。またも一瞬ためらったつもりだったが、その０．１秒後には巨大なアーク溶接機並みの温度と化したツルが彼女の内臓を焼き尽くし、溶かしつくした。

ワカシャモは、何が起こったのか理解できぬまま絶命し、リーヒユンがツルを一振りすると、人工氷の上を滑るアイスホッケーのパックのようにすっ飛んで近くのフェンスにたたきつけられた。

…俺は…またしても！！！！！

だが彼にそれ以上呆然としている余裕は失われた。前方からポニータがかえんぐるまをかけて飛び掛かってきた。「あったれぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！」「なん……？！」

２匹はお互いの軍刀とツルで正面から激突した。

ユイリィは完全にこの戦場の一部となっていた。このメガニウムはツル４本とマジカルリーフ、リーフブレードをを巧みに使って前後左右の敵ポケモンを５秒でばらばらになった肉片と骨格、血液の塊に変えた。彼女に対してなされたあらゆる弓矢、わざ、手投げ弾は全部跳ね返された。

「この野郎なかなかだ！」「一気にかかる！」またもミミロップやポカブ等が４匹ほど飛び掛かってきた。「はあ…いい加減…」ユイリィはひのこやれいとうビーム等を軽く上に（と言っても５メートルは）飛び上がり、跳ねる寸前に右前足から地面に思念を送った。４匹の足元に巨大なツタが出現し、ポカブの腹を一撃で貫通して真っ二つにした。

彼女は周囲の状況を一瞬で掴みとった。

…あの子もなかなか頑張ってるね…数の上では押されてるけど…

彼女はリーヒュンのことを気遣いながらも下でツタに苦しむ3匹の感情を読み取り、自身でもぞっとするような凶的な歓喜に一瞬酔いしれた。

…ハードプラント…くさタイプの中ではトップクラスに威力が高い…

「遅いのよ!!!!」彼女は飛び跳ねている2秒間の間にM－67手榴弾を1個下にたたきつけた。炸裂して3匹が飛び散った破片の上にユイリィは降りた。

「ぐぶぅっっっ!!!!」隣のグレイシア（テルルではない）が正面から飛んできたエネルギーに4本の足を、体をもがれて吹っ飛んだ。体の穴という穴から体内の組織が噴出し、見えないプレス機に体内から潰されたようなおぞましい光景が広がる。その直後ユイリィにも同様の灼熱のエネルギーが飛び掛かってくる。

「な?!…」「仕留める!!!!」彼女は思念でそれをたたき返し、目の前から突っ込んできたキュウコンにツルで立ちふさがった。このキュウコン、なかなかできる。彼女の攻撃を予知しているかのようにすべてのツルを、いあいぎりを装甲板と自分のわざでやすやすと受け止めた。彼女もキュウコンの放つかえんほうしゃ、サイコショック、その他を全部オーラでたたき返した。2匹は、周囲にある宇宙センターの街灯を、ケーブルを、フェンスを粉々にしながら飛

び跳ね、後ろに下がり、また上から突っ込み、と目まぐるしく攻防戦を繰り広げた。

「さすがね！あなたはだいぶ成長した。」そのキュウコンがそっと言った。

「あ、あなた…」ユイリィには聞き覚えがあった。忘れもしない。彼女が国連の施設（当時は米軍）のあの極秘研究施設に預けられたとき、最初の数年間育ててくれた…

「アリョーナさん！！！！！」彼女は思念から現実に引き戻された。アリョーナはかつて娘のように育てたメガニウムに容赦なく軍刀で切りかかった「忘れてなかったの！それで…でも！！！」

「ど、どうして？！」そんな彼女の問いに母親同然だった彼女は答えず、ほのおのパンチを前足で食らわせようと飛び上がって前足を上げた。「戦況はこっちにある！！！！」

…そんな！！！！…みんなは？！…

このメガニウムにあった絶対の自信が被弾して翼がもげてゆくＳＵ－３３の断末魔よろしく心の中でばらばらに引き裂け、宇宙に四散した。

思念を最大限注入したツルでそれを受け止めながら、ユイリィはここで初めて自分たちが不利になっていることを知った。しかし、恐るべき驚愕の中でリーヒュンやブレイブを気遣う余裕は今の彼女になかった…

「き、君は!!?」リーヒュンは飛び掛かってきたポニータとこいつのだいもんじを上に飛び跳ねてかわし、たねマシンガンで弾幕を這った。だがこのポニータはそれを全部かわし彼を地面にふみつけでたたきとして再度ニトロチャージをしかけた。それが命中する0.01秒前に認識したこのベイリーフは気合でそれを弾き返す。ポニータは軍刀を引っこ抜き、リーヒュンのツルに猛烈なスピートで太刀をたたきつけまくった。

「リーヒュン?!…やはり…」このポニータは目があったとたんに驚きの声を上げた。

「そっか!?」ベイリーフも気づいた。この少年は…記憶がVHSテープを巻き戻すように走る。

…かつての…友人……

「シーベルト!?そうなんだな???!!!」

「…なんで?…しかしなっ!!」シーベルトは答えず蹄を振り上げた。「君は俺の…今敵だっ!!!」

リーヒュンはそれをツルでたたき返しリーフブレードをシーベルトの横っ腹に打ち込んだ。彼は一瞬吹っ飛びかかったが、勢いで飛びついてきたかつての友人を火炎放射で吹っ飛ばした。

「君たちのほうが不利なんだよ!!さっさと引けこの無鉄砲がっ!!」シーベルトはまるで因縁の宿敵を相手にするような怒声をあげ、リーヒュンに軍刀をふるった。「こっのっ!」このベイリーフはポニータの一太刀が脳天にあたる0.1秒前に飛び起き、ツルで弾き返した。2匹の激しい攻防が続く。シーベルトはリーヒュンを前線から次第に引き離す。このポニータは部外者の侵入を阻止するための人間が設けた電気フェンスにたたきつけようとした。

「さっさとうせろっっ!」「こ、こいつ・・・・」シーベルトのかいりきのすさまじい圧力に彼は負けそうになった。

「き、貴様ぁ!」ブレイブが後方からシーベルトに飛び掛かって首

を絞めて後ろに引き倒した。そのままブレイブはほのおのキバでシーベルトの首を焼き切ろうとしたが、このポニータは間一髪でそれを振り払い、そのままメガホーンでこのブースターを近くの建屋の壁にたたきつけた。

「おいおいブレイブ!?」「て、てめえええよくもっ!!!!!!」リーヒュンの声に同調するようにブレイブは頭の中の霧を払い、シーベルトに軍刀を突き立てようとした。だが彼も直ちに態勢を建て直し足の戦闘用強化装甲板でそれを受け止めた。シーベルトは再びベイリーフに向かい、かえんほういしゃをぶち込もうとしたが、リーヒュンはぎりぎりでツルを使ってそれを受け止め、同時に後方に確認できたポッタイシにタネマシンガンを打ち込んだ。

かえんほうしゃとタネマシンガンが2匹がすれ違いざまにお互いの至近距離を通過し、近くにいたポッタイシとキルリアを貫いた。

「!!!」
「!!!」

その2匹は、お互いの状況がそれぞれ理解できぬまま体が血しぶきと肉片を散らしながら吹き飛ばされた。

「あったれえええっっ!」シーベルトはそのまま前に駆け抜け、回り込もうとしたブレイブにかえんほうしゃをあびせた。「ちっくしょ」ブレイブは体をひねってそれをかわし、軍刀でポニータの蹄と切りかかった。このブースターとポニータの目が直後にあった。

「ブレイブ!!?君もかよ?!」「シーベルト…てめえだったのか?!」シーベルトはさっきのものと含めて二重に驚きと絶望に襲われた。

…俺の友人…どちらも……敵に?!……

……だが、しかし!!!!……

「こっちが有利なんだ！死にたくなきゃどけよ！！」「んだとこらあ！！！」ブレイブがかいりきで力任せにシーベルトを叩き潰そうとしたが、逆にとび蹴りで弾き飛ばされた。「いっけ！！」リーヒュンが後方からリーフブレードで首元をたたき切ろうとしたがこのポニータが上に飛びあがり、彼の軍刀で一発ではじかれた。

何とか態勢を立て直したブレイブが１１Ａ発射台のほうをふと見やると…先ほどと比べてだいぶ接近している…
…自分たちが不利になっているのだ……

「マイナス２０秒！」「くっそ！持つのか！？食らったら派手な花火だ！！」バージア宇宙センターの打ち上げ管制室にも戦闘の轟音が聞こえてくる。ディスプレイを見つめ続けるオペレーター達が不安の叫びをあげる。発射台付近の監視カメラにも忌々しきポケモンの姿がちらちらと移る。もう発射台に迫られていた。

「マイナス１０秒。防音プール注水」「誘導系統異常なし！」「メインエンジン、イグニション！９，８，７，６，５、…」「ちっくしょう！！奴らのが当たるぞ！」「ここまでかよ？！地上のセキュリティー部隊と空軍は寝てんのか？！」「落ち着けっ！！！防空司令部！！予定通り支援射撃を頼む！！」責任者が叫び、無線越しに支援を呼ぶ。「こ、怖いでしゅ……」ロズリンが抱えられている責任者の腕の中に頭を突っ込み震えた。
「乱戦状態だ。今やったらロケットにあたるぞ。あと統合軍の奴らの…」
「あんなクズどもに構うんじゃねえ！！ロケットを守るのが俺らと

あんたらの仕事だろうが?!」責任者が怒鳴り散らした。
「分かったよ!焦るな!支援を通達してやる」統合軍の司令官が必死に平静を保った。

「3，2，1．行くぜ!!リフトオフだっっ!!!」アトラスⅤの2基搭載された1段目RL－10A－42ケロシン化学ロケットが始動し周囲に爆炎を吹き散らしながら飛び上がる。

「打ちあがったか!よしっ!!!」F／A－22Aのパイロットが、前方で上がる白煙を見ながら叫んだ。「おい!あいつの至近距離にいるぞ!」「まかせろ!!」
「アンタ無茶よ!!」パイロットはアンタレスの管制官の制止を振り切り、愛機を白煙の至近距離に滑り込ませそのままM61A2機関砲を至近距離を飛んでいたフライゴンに浴びせ、爆散させた。「くそくそくそぉぉ!!」パイロットは危険な状況にテンションが急上昇しながら白煙と破片の中を滑りぬける。
僚機のパイロットはその状況をHUDで見ながら驚愕した。このままではあいつの機体（ラプター）は化学ロケットの反応熱に焼き尽くされちまう!!

白煙の中、被弾したポケモンがバラバラになりながら落ちてゆく。
F／A－22Aはその中をロールしながらアフターバーナーを全開にして飛び出した。「いやっほうぅぅ!スコアを稼いだぜ!!」
「あっぶねえやろうだな!!少しは身の安全を考えたらどうだ、え?!」僚機のパイロットも喜びの声を上げた。
「子供の悪ふざけもいい加減にしなさい!!もう増援が来たわよ!!あんたたちのお遊びはおしまい。まっすぐ帰投するのよ、いい?!」オペレーターが呆れながら言った。2機の上空を統合空軍のF－35Cが飛び抜け、彼らの後方にいたポケモン3匹を撃ち落とした。

「ちぇっ！まだ弾はあんのによ！了解了解…」パイロットが下を見るとさっきまで下で戦闘が起きていたあたりに爆炎が温泉のように吹き上がった。

「目標は？」「あの一帯だ。これ以上進めるなよ」「了解」バージア宇宙センターのはずれに隠れて待機していた２機のＡＨ－６４ＤはＡＮ／ＡＰＧ－７８レーダーから送られてきた指示をもとにしたＩＤＭ（改良型モデム）の指示通りに目標を前にとらえた。その直後、彼らのほぼ同じ高さの位置からアトラスロケットの白煙が上がった。前方で小競り合いを続けている連中がその白煙に巻き込まれていくが、ＡＰＧ－７８レーダーはしっかりと熱源…ポケモンが出す独特の熱と電波…を銃手（ガナー）ＨＵＤに示している。

「撃て撃て！全部やるんだ！！」「打ったら即離脱を！！」ガナーはトリガーを引いてハイドラ７０ＦＦＡＲロケット弾を全弾一帯にばらまいた。あたりに爆発の火炎と煙が舞い上がり、竜巻（トルネード）が来襲したような嵐となる。

「もういい！離れろ」「全開だ！」（ゼネラル・エレクトリック）ハイドラ７０を全弾撃ち終えた２機のＡＨ－６４ＤはＧＥ社製Ｔ－７００ＧＥ－７０１Ｃターボシャフトエンジン２基に接続されたメインローターを全開にして、ロケット弾の作りだした爆炎と嵐の中を一気に飛び抜けた。急加速、上昇で離脱するヘリの生み出す重力加速が乗員をシートに押し付ける。周囲の爆炎の中から、施設の送電線や通信搭の折れた残骸がヘリを押しつぶそうとばかりに倒れこんでくる。２機のＡＨ－６４Ｄはアトラスロケットの作り出す熱エネルギーとハイドラ７０ロケット弾が作り出した送電線や街灯の破片がが襲いかかる前にその場を離脱した。

同時にやや離れた位置に展開していたアメリカ陸軍エメリア派遣部隊のＭ２ブラッドレー歩兵戦闘車４台が有効射程２５００メートルのＭ２４２ブッシュマスター２０ミリ機関砲と有効射程３７５０メートルのＴＯＷミサイルを、先ほどハイドラロケット弾の作り出した嵐のさらに１１Ａ発射台寄りに打ち込んだ。

人間に作り出した鉄の暴風が宇宙を目指す光を守り、ポケモンたちを襲う。

アラスカにある統合軍前線司令部ＣＩＣでもポケモンたちの生命情報装置からの通信が突如として乱れた。

「どうした？」「支援射撃に巻き込まれている模様」オペレーター達が困惑しながら報告する。

「アトラスの護衛が最優先だ。様子を見る。」前線司令は無感情に言った。

「こ、これ以上は無理！早く中止を！！」サクラが無線機に飛びつこうとした。しかしそれを司令はさえぎる。「ロケットの護衛が最優先だろ？それに彼らがアンタの言う奴だったんなら、この程度の弾幕で死ぬわけがない。」

サクラは倒れそうによろめいた。

…ああ…お願い…せめて無事で…

…ど、どうなっているの?!…どうしたら!?…

テルルは戦闘の中ですでに我を失いかけていた。あのリーフィアを撃破した後、遅いかかってくるコリンクをこおりのキバで噛み切り、銛を首の動脈に打ち込んで仕留めようとしたが、なおも粘ってっ来るこの少女に近い年頃の相手に対し軍刀同士で組みついたまま停止していた。

このコリンクは既に倒れかけていたが、自分と同じぐらいの刃を何とか前足で食い止めていた「わ、私は…こんなところじゃ…」

「な、なにかあんの?!」「…みんなの為にも…死には…」コリンクは半泣きになっていた。「えっ?!…」

このグレイシアはこの哀れな相手の境遇を感じた。刃を振り落とそうとする手の力が緩んでゆく…

…この子も……私と同じように…?……

テルルの表情がわずかに緩む。

「わ、私もね…実は……」

次の瞬間、彼女たちの周辺で突如爆発の嵐が起こりテルル達は吹き飛ばされた。周囲の爆発音と爆風の中彼女は何とかこの外に逃れようと前に進もうとしたが、激しい爆発の前に息がつまり、体が完全に恐怖にすくんだ。

後ろから飛びついたロックオンとチェギョンがなおも空きあがろうともがく彼女をたたき伏せた。

「あのな!!こんな状況で頭上げたら…」「ななな、なによこれ?!」「なんかの攻撃っ!!!」

「誰?!?!」「知るかっ?!所詮は…」その直後3匹に嵐の向こうから真っ白な暴風が上に覆いかぶさった。

テルルにもチェギョンにもロックオンにも何が起きているのか全く理解できなかった。暴風の中吹き飛ばされ粉々にならないようにふせているのが精いっぱいだった。

…このまま…私…粉々にされるの…???

…ど、どうしたいいの?!?!…この状況は…

……やだ……助けて…もうむり!!!……

……早く…せめて終わって……

轟音と嵐の中、彼女にはもうなにがなんだかわからなかった。

「くそくそくそ!なんだよこりゃ?!」バストークは思わず弾幕に吹き飛ばされそうになりながらも吹き飛ばされた街灯の後ろに飛び込んだ。「あ、あっちか…ええいっ!!!」このメリープは残った部下たちを助けるべくもう一度飛び出そうとした。その直後、後ろ足を何者かに掴まれた。

「ピトムニクか?!」「隊長何やってるんですか?!!?」炸裂音の中で聞き取りにくい上伝えにくい。

「ほかの連中はどうしたんだ?!」「そ、それが…」

「サツキ!!!おまえらっ!!!」バストークは飛び出そうとした。「やめてください!!?」ピトムニクが彼のモフモフをむんずと掴んだ。

「なんでだよ?!」「言ったらあなたまで?!」「ばか!!見捨てんのか?!」

次の瞬間2匹の周りに爆炎が起こり、2匹は土埃と火炎、建物や構造物の破片に吹き飛ばされた。

リーヒュンの周りも一気に危険が迫る。シーベルトの猛攻はアフリカのサバンナで1週間獲物を食べていないライオンのようだったが、何より彼に一種の戦慄を覚えさせたのは、かつての親友であるこのポニータのセリフ・言動からそれらしきものを一切感じられないという事だった。

「…お前がどう思っているかは、…知らないけどなっ！」「そ、それが…なんだよ?!…」2匹は軍刀で、ツルで、蹄で、お互いの脳天をたたき割ろうとばかりにぶつかりあう。「こっの！！」リーヒュンは一瞬身をかがめシーベルトのかえんほうしゃをしたから潜り抜けてリーフブレードをかけようとツルを振り上げたが、相手は横にひねりように身をかわし、このベイリーフのわざは前方の建物の配電盤を焼き切って火花を散らした。「やってることは無駄なんだよお前たちのはなっ！」シーベルトは上に飛びあがってリーヒュンにかえんぐるまを浴びせようとしたが彼が思念を集中させてそれをたたき返す。勢い余ったシーベルトは味方のオオタチと警備部隊のミミロップを巻き込みながら路上に放置されていた大型トレーラーのダイムラー・フレイトライナーに突っ込んだ。その勢いでこのダイムラー社製の大型トレーラーは反対側の建屋に突っ込み大爆発する。シーベルトは大火災の中から飛び上がってリーヒュンにとび蹴りを敷けようとかかったが、彼の頭の葉っぱを叩き潰す0．2秒前に後ろへわずかに下がられたうえ、このポニータが無様にアスファルトにたたきつけられた直後横合いからブレイブが飛び掛かって彼の首に刃を突き立てようとした。「このバカがっっ！！！」

シーベルトは前足の蹄でブレイブの顎元を蹴り飛ばし、首をわずか

にそらして刃先をかわした。「ブレイブはしょせん…」「ぐっ・・・どうした?!」

「生きてても無駄って!!!!!!!!!!!!…」「んだとこらあぁぁっ!!??」シーベルトは一気に飛び起き、このかつての友人の頸動脈（首元の動脈）をたたき切ろうと軍刀を振り上げた…

3匹の周りは突如大音響と爆炎と爆風に包まれ、それぞれがそれぞれの方向へと吹き飛ばされた。

「だ、大丈夫?!」「ユイリィかっ?!」その場にたたきつけられたリーヒュンの首元に聞き慣れた甲高い声が聞こえた。ユイリィはリーヒュンの首を爆発の衝撃ではがれそうになっているアスファルトに彼女のツルでたたきつけた。

「首を上げちゃダメっっ!!」「なんで?!」「首が飛んじゃうよ?!?!」「でも?!」

「そのまま動かないで!!あたしが何とかするっ。いいっっ?!」ユイリィは自分の首を地面に伏せたままツル4本をふるって落ちてくる破片をオーラでたたきかえした。

ガンガンガンガンガン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!ベイリーフとメガニウムの周りには火炎、爆炎、土煙、無数の建屋の破片とはがれたアスファルト、周りのポケモンの残骸が、雹（ひょう）のように降り注いでくる。リーヒュンには恐るべき衝撃波と轟音の中次第に時間間隔も意識も失われていった…

……

……いったい？……これは？……

……

……お兄ちゃん……

……？？？？フローラ？……

……なにが？……私は……

……

……

……終わった……か？……リーヒュンが首をわずかにあげた。

「うぐぐッ……か、けがは？……」ユイリィも少し起き上がった。
「ない……みたいだ。…ほんとに。」「よかった…ならいいや。」
ユイリィが首の花に被った破片と硝煙を振り払った。リーヒュンも首の葉っぱに積もった土埃を払おうと首を振った。「み、みんなは？」「生きては…いるみたいだけど。」

身を起こした2匹の周りには……

穴だらけになったアスファルト、崩壊した建屋や電灯、送電線搭の残骸、くすぶったり、火を上げているがらくた、もうもうと上がる白煙…

そして……ポケモンたちの…切れ端……

「ユイリィ…」2匹の様子、そして無事を遠くから見つめていたアリョーナは涙を流しながらつぶやく。
「ごめんなさい…私は…帰るわよ……」
キュウコンは悲しげに踵を返し、荒野のようになったセンターの一角を走り去った。

「…ブレイブ……」シーベルトの声でブレイブは体をわずかに起こした。
周りにはこの世の終わりのような光景……
このブースターは土埃、硝煙、血しぶきで汚れきっていた。もっとも前にいるポニータも同様だったが。
「てめっっ！！」「もういい！」シーベルトはフラフラとニトロチ

ャージをかけようとしたブレイブを蹄で止めた。「…もう打ち上げは済んだ……俺たちは戻る……」

なるほど、先ほどまでロケットのいた１１Ａ発射台には（硝煙でほとんど見えなかったが）もうなにもいないようだ……

「……わかったよ……」ブレイブは疲れ切ったようにうなだれた。

「……リーヒュンに…よろしくと…言っておいてくれ……」「ああ…」このポニータも疲れ切ったように起き上がり踵を返しかけた。「あとな……」「…まだなんか言い足りねえか？」シーベルトが空を見上げるように言う。「お前の…仲間も…気を配ってやれよ…」

「なっっ！！！！！！」ブレイブは慌てて立ち上がって転がっていた自分の軍刀を懐の武装ベルトに引き戻すと、何か思った方向へ一目散に走りだした。

……ごめんな……２匹とも……

シーベルトはそっと呟き踵を返した……

ブレイブは、焼け野原になったような敷地の一角を全力で走った。「おい！！テルルっ！！」「ブレイブ！テルルならこのあたりだ？！」ロックオンがブレイブを誘導した。「大丈夫なのか？！」「知らん…俺とチェギョンが伏せさせたがな…気が付いたら吹き飛ばされていたんだ…」彼はいったん地上に降りると地面でよろよろと伏せこんでいるチェギョンを介抱した。

「大丈夫か？」「ま、まあ…うう…めっちゃやばかった……」この

チルタリスは一生懸命飛び上がろうとしたが、足元がおぼつかずに地面で弱弱しく翼を動かしていた。
「それだけ愚痴れるならいい…グラシの様子を見てくる……」「うん……」ロックオンは土埃と傷まみれの彼女にそう言い残すと空へ飛びあがった。

「どこ…どこなんだよあいつは?!」ブレイブは破片と土埃の中を走った。このブースターはとある塹壕の近くの土山上で急停止し、その土山のようになったものを引っ張り起こした。「こ、これかっ!!何やってんだこいつ!!??」
「う…うんん・・・?…」その土埃にまみれ、飛び散った破片で傷だらけになった物体はわずかに声を上げた。ブレイブはその場にしゃがみ込みこのポケモンの頭を抱えた。
「しっかりしろっての!!!死んでねえんだなっ?!」「生きてるわよ……」その物体、グレイシアは自力で何とか起き上がろうとした。「ねえ…ブレイブ…あのコリンクは?……」
「あ?!そ、そんなのはとっくに……」ブレイブはそこで詰まった。しばらくあたりを見回したが、コリンクらしい死体どころか破片もなかった。

…ブレイブはテルルを見ながら困惑したような表情を浮かべた。
……そうか…お前は…そいつと…

「……わからねえ……こんな状態じゃ……」ブレイブは首を振った。
「そんな…私…あの子に!!!!!!……」テルルはブレイブを振り払って飛び出そうとした。「ワタシは…あの子にっっ!!!!……」彼女は数歩も動かないうちに崩れ落ちた。「おいおい!!」

……テルルは気絶したわけではなかった。しかしブレイブに抱えられた彼女の眼は死人の目のようにはるかかなた、あの世を見つめているような表情だった……

……バストークはいつの間にか別の塹壕の所へやってきていた。

……ピトムニクは？

……グラシデアは？

……スカイラブは？

……他の連中は？

「ううっ……」塹壕の名残の中からバストークはピンク色の体を引っ張り起こした。「大丈夫かよ？」「アンタと同じくらいじゃない？……」グラシデアは父親のメリープの手を振り払って起き上がった。

「隊長の娘さん…けがはありませんよ……」スカイラブが傷だらけの前足をかばいながら言った。

「そうか……なっ！！！！！！？？？？？」バストークはこの２匹がいた隣に入っている体を引きずり出した。「サツキ！！！！」「サツキも…ここに飛び込んだんだ……」グラシデアが呟いた。攻撃の爆音と爆風の中気づかなかったのだ。

サツキ……ピトムニクと同期に入りバストークが昔からかわいがってきたキレイハナ。

……しかし……彼女の右半身はざっくりと砲弾か破片かでえぐり取られている……

「おい……」バストークは右前足で彼女に触れた……

…彼女の体はすでに氷のように……

恐怖と悲しみに震える前足で無線機を掴んだ。

「ほかの……誰かいないかっ?!」中隊長は無線機越しに叫んだ。

だが…応答はない……

周りを見回しても…あたりには死体のみ……

「そんな……うそだろ?……」

……全滅……

……自分が…3年かけた…“家族”のような……部隊……

…わずか2分で……

…この中隊長の上に現実が重りのようにのしかかり、彼の心を圧壊

させた。

「バストーク……」グラシデアが父親を見つめた……。「ごめんね…」

……すべて……

……俺の……

……責任……

メリープは前足を土にたたきつけた。目から涙がダムが決壊したように噴き出し、彼の精神的安定はそこで崩壊した。

「！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」バストークの言葉にならぬ号泣があたりに響き渡った。

「隊長…………………………ワタシ……わ、私の…すべ…」後ろからやってきたピトムニクがそこまで言って泣き崩れた。

「ピトムぅぅっっ！！！！！！！！！！！！！！」バストークは娘同然のプラスルを抱きしめ、自分のふがいなさを詫びるように泣き伏した。

ロックオンがグラシデアのもとにやってきた。事の始終を平静な目で見つめていたグラシデアだったが彼が来ると表情がゆがんだ。
「ワタシの…せいかも……」
「大丈夫だ……お前は生きてる……」
「…私は…どうしたら……」

グラシデアはこのムクバードの翼に飛び込み、肩を震わせた。

「アトラスロケットの状況を！」責任者の声が響く。

「制御回路問題なし！」「エンジン推力、出力、ともに順調！」「予定通りのコースを上昇中！！」
「人工衛星、全てにシステムに異常なし！！！」
ディスプレイに表示されたロケットの状態は良好。コースも予定通りだ。

「すべてＯＫです！全システム良好！！！！！！」別のオペレーターの嬉しそうな声が響く。

「こちら打ち上げ管制センター、…アトラスは無事だ。順調に上昇中。
……護衛に携わったすべてのセキュリティー部隊、アメリカ軍並びに統合軍の各部隊に感謝いたします！そして…打ち上げスタッフ並びに地上職員全員…よくやってくれた…おめでとう。」

打ち上げセンターの中が大歓声に包まれた……

「よっしゃあぁぁ！任務完了だぜっ！！」上空のＦ／Ａ－２２Ａのパイロットが制御盤（コンソール）を蹴っ飛ばして叫んだ。
「もう！コンソール壊しちゃだめよ……でも、よく頑張ったわね……」アンタレスのオペレーターが苦笑を漏らした。２機のＦ／Ａ－２２Ａは増援の統合空軍Ｆ－３５Ｃと合流した……

アラスカの統合軍前線司令部でも安堵の息が漏れた。
「これでひと段落というわけか…」責任者が指で帽子を回した。一応国連統合軍の出した任務…ポケモン達に出した任務…は達成されたことにはなる。
「サクラ、生き残った連中には…褒めてやってくれ……それ以外に…言葉が…見当たらん…」
「……ええ……」サクラは、ほとんどが“通信不能”となった３０２中隊の生命情報装置の表示板（ディスプレイ）を見つめた。

「こちら…アンタレスだ。」生き残った各員の無線機が鳴る。

「……諸君……厳しい状況下の中…よくやってくれた……君たちの戦果は今後、おそらくは…辞令という形…」

「て…てめえらなぁ……」バストークの涙に震える声が無線に響き渡った。

「……これが作戦成功……ていうのかっっ?!ああ?!てめえらだれか答えてみやがれっっ!!??」

「……」

打ち上げセンターや統合軍前線司令部の人間たちは絶句した……

「ホルスト大尉…」統合軍前線司令が静かに言う。「…すまない…しかし、君たちの任務の結果だ。君がどれくらい思い入れをしていたかは知らないが、君たちはポケモンだ。我々に指示に従っていればいい。そんな不満は直接、自治協会防衛軍に言ってくれ。」

「……」中隊長は反抗しなかった。このメリープの渾身の怒声はやがて嗚咽となり、その声が無線機を通じて周囲に聞こえた。

「ばかやろうこのキチガイがっ!!!てめえのところに爆弾を降らしてやっかっ?!」ブレイブが同調するように無線機に怒声を張り上げた。

「なんだと?君をこの場で除籍してもいいんだぞクレイバー中尉。」司令が脅しを聞かせた声で切り捨てた。

「してみやがれやっ!!!」ブレイブがわめき散らした。司令は首を振ってブレイブの無線機を遮断した。

「おいテルルっ!て、てめえはどう思っているんだ?!」ブレイブはテルルに掴みかかった。

「……」テルルは茫然自失した状態でこのブースターを見つめることしかできなかった。

…彼の目からは涙が止まることなく流れていた。

「…俺は…これで…よかったんだろうか?」リーヒュンはその無線を聞きながら空を見上げた。

「…あたしには……知らない……さあ…」ユイリィも力なくつぶやいた。

…2匹にはこの戦いで死んだ者たち(ポケモン)の意思がはるか虚空の彼方へと消滅してゆくのが感じられた……

…多くの命を食ったバージア宇宙センターの上にはまぶしい朝日が輝いていた……

戦闘…星を目指す光よ……（後書き）

…お疲れです。やっと終わった…

やっぱりちょっとグロかったかも…ごめんなさい……

結果は…見てのとおりです。

ちょっと燃え尽きたみたい…次の話はしばらく考えます……

あの日以降…（前書き）

結局ペースを落とさず書けました！！

ブレイブ：相変わらずのペースだな。

…まあ、速度落とすと飽きちゃいそうで…

葵は飽きっぽいのです。

あの日以降…

２０１２年　１１月１１日　フランス　パリ　　アレバＮＰ本社
０９３０時

「…バージアの…続行、ですか…はい…一部関係者から懸念？…ええ…治安？…それは我々とは…」

フランスの首都、パリは１８世紀からの伝統的な形状の建物がならび、凱旋門やいつも車両で大混雑しているロータリー状の道路、エッフェル塔やルーブル美術館、中央庁舎がある中心市街部と、それをドーナツ状に囲むように再開発され、ラ・デファンスやドゴール空港等が存在する現代的な超高層ビルが立ち並ぶ新市街地から成っている。近年では中心市街部のセーヌ川沿岸でも再開発によって高層ビルが立ち始めているが、基本的にはヨーロッパ型都市の伝統的な景観を維持しようとはなっている。

その新市街地の一角にフランスの、いや世界有数の原子力産業、アレバ社の本社ビルがある。

もともとはフランスの原子力開発のための公社であったが、現在は民間企業として存在している。国内の電力供給の８０％以上を原子力発電で賄うフランスでは重要な位置を占める企業だ。

２０１１年以降ヨーロッパではドイツ、スイス、イタリアなどでは原発全廃への動きは出ているが、自然エネルギーだけではとても電力は賄えない。結局は原子力を推進するフランス、イギリス、ポーランド、チェコ、ロシア、スウェーデン、及びトルコや中東から電力を供給してもらっているのだ。特に欧州随一の工業国であるドイツの電力不足が慢性化すると、南欧諸国の財政危機や金融危機で

傷ついたヨーロッパ統合経済並びにほころびが見えるユーロ通貨の信頼に深刻なダメージを与えかねない。さらに、ヨーロッパ圏が提唱し、南北アメリカ諸国（特にアメリカ合衆国は嫌がった）や中国、インドなどの新興アジア諸国にまで自己削減目標を提示させたＣＯ２削減目標（いわゆる京都議定書）に対し、火力発電を代替（オルターネイティブ）にすることは、自ら環境政策に逆行しているとの批判を受けかねない。経済・産業と環境維持。この２つを存続させるために原子力に対する世界の依存傾向は高まる一方であった。

無論、自然エネルギー“も”積極的に利用することが必要だし…例えば宇宙太陽光発電、メガソーラー計画等…、省エネ技術やスマートグリッド等の新しい社会・技術システムを使って経済を振興させるのも有力な手段だ。しかし、一気にすべては賄えない。代替となる間の人類世代や発展途上地域に快適で便利な製品に満ち溢れた豊かな生活を我慢し、不況に耐えろというのは倫理的にきわめて不公平だ。それらに折り合いをつけるには、リスクを最小限にとどめながら原子力を使っていくしかなかった。

インターネットのテレビ電話を切断し、アレバ社の新ＣＥＯ（最高経営責任者）は椅子を窓側に向け外に広がるパリ市を見つめた。前代の女性ＣＥＯはフランス政府の人間とトラブルになり、これがマスコミに嗅ぎつけられて自ら職を辞していた。近くの一帯は完全にアメリカの都市のようなビル群が立ち並んでいるが、その奥にはエッフェル塔や中心市街区が見える。現代と伝統が入り混じり、この都市は“花の都”の名にふさわしい華やかさと落ち着きが入り混じる絶妙な美しさを放っていた。しかし、この男が考えているのは何もそれだけではなかった。

…バージアへの進出にそこまでリスクがあったのか…

男はため息をついた。エメリア・ニュークリアで進めてきた新型トリウム原発の3号機増設についてアメリカ・サバーブ州側がいったん再検討をさせてほしいというのだ。どうにも、周辺地域の治安が悪化していることが分かったのでそのあたりのリスクを考え直したい、という旨であった。この男に“リスク”というモノがわからないはずがない。昨年の日本・福島第一原発問題をこの企業とアメリカのキュリオン社、その他さまざまな世界の技術を結集させその年の9月にはなんとか収束に持ち込んだのだから（無論、現場の日本人、その他の作業員たちの意地と執念があったのも言うまでもない。昨年3月に発生したこの問題の足をひっぱったのは遺憾ながら日本国政府の政治屋たちである）。しかしこの件は自然災害に加え、日本国のリスクマネジメントが失敗だったからだ。“治安”という問題は想定外だった。

男はタブレット端末に映し出された資料を眺める。この原発からそう離れてはいないバージア宇宙センターで地域の住民がテロ活動同然で乱入してきたこと。もし原発でこのような事態が発生すればフクシマやチェルノブイリの二の舞となる、と。

…住民…あの忌まわしい文明生物のことか？…

男は不敵な笑みを浮かべた。あいつらがなんのリスクになる？日本の原発の冷却水取水口にクラゲが詰まったとは聞いたことがある。しかしそれは普通の動物だ。動物が悪意なくトラブルの原因になることはあっても、あのくそ忌々しい文明生物には悪意を十分に持ってやってくるではないか？それなら高度セキュリティーでもなんでもすれば防げるはずだ。それに仮に襲ってきたところで何だ？奴らは中世以前の文明力しかない。そんな奴らが潜入しようにしたってせいぜいタービン建屋に行く前に警戒システムに引っかかる。施設をうろつく野犬にさえ反応するのだから。

だが、それらは彼のポケモン嫌いから来た戯言だ。経済や産業において感情論や非論理的な好き嫌いは通用しない。リスクマネージメントは十分に考慮しなければならない。

彼の携帯端末が鳴った。「私だが？」“時間ですね。下の車寄せまでお越しください”「そうだったな。すまん、すぐ行く」

アメリカの原子炉最大手、ゼネラル・エレクトリックの関係者との会合へ向かうのだ。終わるころには正午過ぎだからそのまま昼食会も兼ねる予定だった。

彼は立ち上がって鞄をとると、部屋にセキュリティーをかけて出ていった。

２０１２年１１月１６日　エメリア・ソーラ大陸　パルク州南端の国連軍施設近くの海辺　１０００時

リーヒュンにはその後４日間のことがどうにも思い出せなかった。アコースやスカイラブはどのあたりで別れたのかぐらいはかろうじて覚えている。スカイラブは３０２中隊の残存がソーラに戻るときにバージアの海岸のところでもう分かれた。彼女は打ちひしがれるバストークとピトムニクの手と前足をそれぞれ握り「残念だげど、あんたたちの問題ではないのよ。そんなに落ち込まないでよ」とそっと言っていた。彼女の部隊…アメリカ戦略軍ポケモン戦術戦略部隊の守備部隊…とて壊滅に近いダメージをうけていた。これも人間たちがこの部隊を自分たちとロケットの“弾除け”にしたことが原因であった。アコースとはフォーチュナの海岸で別れたはずだ。その別れ際に「俺もいつか君たちと一緒にやってみたい。その時は頼む…あと、中隊長さんを支えてやってくれ」と寂しそうな表情を浮かべていた。

ブレイブは完全に自失したテルルを何とか引っ張り、連れて帰った。

このグレイシアは今回の戦闘で完全に戦争というモノに翻弄されたか、それとも自分にあった自信を喪失したのか、どちらかか両方かなのだろう。こんな状況下うわの空で歩き続けるテルルに対し、さすがのこの変態ブースターもいつもの調子を発揮するのは不可能だった。

「…テルル…」「…ん?…」「…大丈夫なのか?」「…はあ…」「なんだよはあって?」「…知らない」

ブレイブの言っていることとテルルの返答は全く歯車がかみ合っていなかった。

「お、お前な、さっきから…」彼は苛立ちにかられたが、そこで彼女の表情を覗き込んで言葉を詰まらせた。

…やっぱな…よほど精神的にまいったんだろうな…

「いや…帰ったら…少し休めよ…」ブレイブがそっと言った。

「…私は…やっぱり…べ、別にっ……」テルルは言葉の切れ端のような声を挙げながらぼーっと歩き続けた。

302中隊のわずかな生存者となってしまったバストーク、ピトムニク、グラシデアは失意の中歩き続けた。ピトムニクはユイリィの背中に乗ったまま時折泣き声を上げていた。グラシデアは完全に憔悴しきった父親に多少遠慮しながら歩いている。ロックオンとチェギョンは先に自分たちで飛んで帰るらしい。バストークは茫然自失のまま、時折ブツブツとしゃべりながら歩いていた。リーヒュンはロズリンを頭に乗っけてそんな一行を見つめながら歩く。

「俺に…何かできること、ある?」その重苦しい中彼がユイリィに聞いてはみたものの、彼女は「いや…大丈夫。リーヒュンは無理しなくていいから。」と花びらの生えた首を振るばかりであった。

彼の覚えているのはおおよそその位だ。このベイリーフ自身がかな

り疲弊していたせいかもしれない。この施設に戻り、しばらくしたらもう自分の居住地区で倒れるように眠り込んでいた事ぐらいしか覚えていないのだから。おそらく、ユイリィもブレイブもテルルもそうであったに違いないと思った。サクラ司令は特にこれと言ったことを言わずにそっとしておいてくれた。

ここに帰って2日、リーヒュンは施設近くの海岸で木の枝を口元で回しながら波の打ち寄せる海岸を眺めていた。その波の打ち寄せ引くさまを眺めていると6日前の戦いで死んでいった302中隊のポケモン達の最期の感情が見えてしまいそうで、彼は首を振ってそれを払った。

……あの時……俺がもっとまともにできていたら……

……皆…助かったんじゃ……

ポン！！突如リーヒュンの首の葉っぱのもとを誰かが背後からたたいてきた。まあ、彼にはそんな気が20秒くらい前から薄々したが。

「おいおい！お前までそんな顔してんのかよ？」ブレイブが明るい声をだす。「どう調子は？あの後からちゃんと寝れてる？大丈夫そうだね！うん！」ユイリィも頭の雄蕊のあたりにロズリンを連れて元気よく言う。どうやらこの2匹はすっかり立ち直ったようだった。

「うん。だいぶ良くなった、って感じだな。……まあ、色々と…」

リーヒュンはほっとしたように力を抜いた。「…2匹は…もう大丈夫？いや、あれだけのことを経験するとさ…」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ！あたしはいつでも前向きだよ。ね？」ユイリィがメガニウム種族の長い首で（ベイリーフ種族も成長すればそうなるが）ブレイブの頭のフサフサにすり寄った。

「もっちろんだぜ！っていうかユイリィちゃんのすり寄りはやばいっ！！気持ちよさすぎるっ！」ブレイブも負けじと彼女の首の花にすり寄る。

「あはは！ブレイブはきもい！」「へへっ！」この2匹、相変わらずだった。リーヒュンはそんな2匹から元気をもらえたように感じた。

「そりゃ良かったよ。なんせバストーク中隊長とかがあの調子じゃな。それで、2人はどうしてこの辺りを？」

「なぜ、だと？もちろんテルルの為に決まってるぜ！あいつの精神的リハビリ、てやつだ。俺とユイリィが頑張ってかなり良くなってきたけどよ。今日のあたりからはちょっくらバトルくらいは、てんでこのあたりを探してたのさ。」ブレイブはふさふさ尻尾を振ってかなり嬉しそうだ。

「でね、あたしがさ、リーヒュンはここらで寝てるかもって思ったの。そしたら的中！！もう～分かりやすすぎるよね行動パターンが！！あはは…」ユイリィがまたも彼の頭の葉っぱをツルでなでた。

「寝ちゃないけどさ。まあ正解か…。テルルは？」リーヒュンがあたりを見回す。そのグレイシアは意外と近くの海岸をぼーっと見つめていた。

「そこにいるぜ。……ほら、ぼけっとすんなよ。お前のリハビリの最終メニューはバトルだからな。」ブレイブは彼女のもみあげ状かざりを前足でなでると一気に前足を掴んでこちらへと連れてきた。

「こ、この変態…だ、だから触っちゃダメって！！」テルルはいやそうに彼を振り払おうとしたが、いつもほどの調子ではなかった。リーヒュンには、まだまだ彼女の精神的回復には時間がかかりそうだといつもの直感で思った。

「うん！いつもの調子が出てきたね！これであとは殴ってくれれば

平常なんだけど。」ユイリィがツルで彼女の頭飾りをなでた。「…うん。ごめんね…なんか私迷惑かけちゃってるよね…」

「いやいや！俺はそういうテルルちゃんを見て大満足！！」ブレイブが嬉しそうに彼女の前足を触ろうとする。テルルはこのブースターの前足をむんずと踏みつけた。「はあ？！そういうのさ、倫理的にどうかと思いますけど？んん？！」

リーヒュンは苦笑した。テルル、だいぶ戻ってきたな……

「おっ！だいぶいつものテルル！」ブレイブはテルルに対してさらにすり寄る。「まったくもう！！この変態バカっ！！」彼女はこのブースターを掴んで波打ち際に放り込んだ。

「こ、こいつ！！テルルも一緒に！！」ブレイブは前足を掴んだままこのグレイシアも海に放り込んだ。

「はあ？！アンタと海水浴なんて絶対やだからね！！」彼女はブレイブの頭のフサフサを掴んで海水にたたきつけた。

「あたしもやる！！リーヒュンも来る？！」ユイリィもその後ろから海際に飛び込んだ。

「そ、そりゃ楽しそうだ……でもさあ……ぐぶっ！！！」リーヒュンは海岸際で呆れたように眺めているうちにユイリィの思念で海水に頭の葉っぱから突っ込まれた。

……久しぶりに戻ったみんなの表情。こんな時間は容赦ない人間社会の中でいつまで続くのか……

さて、彼とユイリィは2匹のバトルの様子を見ている。ブレイブは容赦なくかえんほうしゃを飛びあがってぶち込もうとするが、テルルはその真下に滑り込み市から飛び降りてくるブレイブに噛みつこうとする。ブレイブは当たる瞬間に彼女の前足を跳ね飛ばしてだいもんじを打ち込むが、テルルは後ろに飛び下がりれいとうビームを浴びせた。

「おっ！だいぶいつものツンデレ具合が戻ってきてるじゃねえか！」ブレイブが前足と首のフサフサにまとわりついた氷を払いながら言う。

「まあね！アンタとやって負けたら今度こそは私戦死しちゃうからね！！」テルルは得意げに鼻を鳴らす。

「そうか？！そんならっ！！」ブレイブは上に一気に飛び込み地中に潜りこんだ。

「そっか…あいつ、“あなをほる”を使えるたか…俺気づかなかった。」リーヒュンがボソッと呟く。「世の中そんなもんだよ。友達でも秘策のわざが多ければ多いほど楽しいじゃん。」ユイリィが楽しそうに彼のそばにしゃがみ込んだ。

「でさ…ユイリィは…ホントに大丈夫なのか？…」彼が彼女の雄蕊を見た。

「言ったじゃん！大丈夫ってさ。」

「うん。…でもなんとなくさ…君はいつも…なんかこう…うーん？」

「ん？うちのこと、なんか分かるようになってきた？」ユイリィがリーヒュンの体にすり寄ってきた。彼は自分のツルで慌てて振り払う。

「や、やめろ…とにかく、何となくユイリィは自分の感情を…隠してる…みたいな…」

「そうかなあ？…あたし、今全然元気だよ。うん。それにわかりやすいでしょこの性格！！リーヒュンといい勝負、てとこよ！。」彼

女は嬉しそうに言った。
「そんならいいや。俺ももっと軽くやれるな。」リーヒュンはほっとした様な表情をまたも浮かべる。「でも…」
「ん？まだある？」
「いや…うん…苦しかったらさ、たまには俺にも言ってくれよ。な？いつもユイリィに助けられたりしてばっかじゃさ。」
「なーにカッコつけてんのよ！あたしはいつでもリーヒュンの事を支えてるし、ついでに遊んでるんだよ！！一緒にいれば苦しいことも忘れちゃう！！そんなもんだよ。うん。」彼女は相変わらずの元気の良さ。そしてちょっと軽率な言動。
「俺が遊びかよ？まあいいや。別にあんまり君のは、慣れれば問題ないしさ…」彼はユイリィの頭の雄蕊をツルで触る。
「き、気持ちいい！初めて撫でてくれた！！てさあ、あたしのほうが年上よ！！…うん……でもね……まあ…」このメガニウムの前足がベイリーフの前足にそっと重ねる。「…ありがとう…気にしてくれてるんだよね…うちもさ…リーヒュンがいなかったら、あの日の朝で死んでたかもしれない…いくら相手の先が見えても…能力があっても…」
「そっか……そりゃそうだ。…無理すんなよ。今後も。」リーヒュンは重なった前足の爪先からユイリィの気持ちを感じた…

…2匹のつながりを…いつまでも…繋いでいきたいな…

「……いやいや！別にあたしはリーヒュンとは結婚したいとか思ってないよ。こんな純粋単純おばかなベイリーフと結婚なんかしたらさ、命が何個あっても…」

「…ったく!!ユイリィは俺を相変わらず怒らせたいのかバカにしたいのか?…はあ…君みたいな向こう見ずで元気暴走状態のメガニウムなんかと結婚したらさ、俺の命も何百個あっても…」
「何言ってんのよこの単純男!!」ユイリィは笑いながら彼に向かってぐいぐいのしかかってきた。
「わかった!わかった!俺はそういう男だ悪いか?それでいいよ、うん。でさ…」リーヒュンは彼女の頭の上のあたりを見る。「バトルしてみたい相手がいるんだ。」「だ、誰?まさかあたしと?!やったやった!そしたらあたしはもう…」
「いや…ユイリィじゃなくて…」
「なぁーんだ…ちょっとがっくし、かも。」ユイリィがちょっと悲しげに首の花びらをすくませた。
「ロズリンと…やってみたい?」「ま、まさか…ミー…とでしゅか?」このシェイミはユイリィの頭元の後ろに隠れるようにしがみついた。
「へっ?…うーん…できるのかな…この子。」

その頃　国連統合空軍・宇宙軍及びアメリカ空軍の軍事施設の航空機格納庫

「…おいおい。まーたこいつの機嫌が…」「全くこの女、すぐキレるからな…俺が整備してやってんのによ。」格納庫（ハンガー）に駐機してあるマクドネル・ダグラス社のＦ－１５シリーズの最新鋭機、Ｆ－１５

ＳＥの複座のコクピットから整備員たちのぼやきが聞こえる。また電気系統に不具合が起きたようだ。ソーラにあるこの基地にはアメリカ空軍の戦闘飛行部隊と攻撃飛行部隊がそれぞれ１個中隊、国連空軍の輸送機部隊が１個中隊、その護衛にあたる戦闘機が１個小隊おかれている。

「こんな調子じゃ午後にかかるぜ。世話焼きやがってこの機体は。」

「この機体の整備は俺だからな。てめえにいじられてハニーは怒ってるんだ。前後かわりな。俺が見る。」後部座席にいた整備員が前部座席に滑り込み、持っていた中国…もとはアメリカ…レノボ社製の携帯多目的卓上情報端末（ノートＰＣ）のジャックを機体の差込口に入れる。彼の端末には電子系統の整備、検査用の各種プログラムが作られているのだ。

戦闘機のような軍事兵器の類の電子系統というと、我々の身近にある携帯端末（モバイルフォン）のそれとは全く違う物々しいシステムで動いていると多くの読者の皆さんは感じるかもしれない。しかし、電子機器や情報機器系統の部品やハードウェアというのは世界的にきわめて統合された単一の規格である。ＵＳＢジャックという物をとっても世界でもし形が違ったら、情報交換に甚大な支障をきたすだろう。ここの端末に個性をもたらすのはむしろ内蔵されたプログラムかもしれない。しかしそれらも、インターネット上から調理方法をダウンロードして運転する日本のパナソニック社製電子レンジから、月面で地下資源サンプルの採取を行う採掘車両に持ち込まれた端末の操作プログラムまで基本的なプログラムや演算処理の原理は全く同じである。

情報技術の前世紀末からのめざましい発展は、人類繁栄をもたらしたもっとも重要な要因の一つである。サイバー犯罪や情報空間モラル、国家間の情報戦等あまたの問題を引き起こしているとしても、情報技術の発展が、一般的な機械工作から宇宙開発、エネルギー開発、医療技術、環境産業、バイオテクノロジー、金融・経済活動、あらゆる人間社会の生産、投資、開発、消費、再生、環境保護の活動を超高効率、超高速、超高精度にしたのはもちろん、我々人間そのもののライフスタイルを（地域、国家によって大きな格差があるものの）きわめて豊かにしたのは紛れもない事実であった。

　これがいかに人類社会を高度なものにしているかはポケモン達の文明と比較していただければすぐにわかる。我々の社会で地球の裏側で起こった小さな3面記事の事件すら（時には不要なほど、ふさわしくないほど）まるで誰かが見てきたような映像で動画サイトに出現しているのに対し、彼らの多くはいまだに地球は平面世界である、宇宙空間はこの世界に貼り付いていると信じているのだ。

機体の後方では左側のプラット&ホイットニー社製ＦＷ－１００－ＰＷ－２２９エンジンが外されて整備されている。そんな整備が行われている格納庫（ハンガー）の隅っこにモフモフした生物がぼんやりとしゃがみこんでいた。その表情、大きさ、姿勢からすればこれが単なる羊ではないし、誰かの飼い犬でもないことは明らかだ。

　このメリープ、バストークは焦点の定まらない目線でＦ－１５ＳＥの整備を見やり、その次に開け放たれたハンガーの扉から亜熱帯の秋空を見やった。空を眺めていても状況が変わらないことは知っている。しかし、今の彼にはそれ以外することが見当たらない。空を見ていると6日前のあの朝日がありありと焼きついてくる。（彼が思うに）自分の判断ミスで３０２中隊を全滅“させた”あの時。自分の育てた息子、娘同然の仲間達の死体も、その表情さえも。

……俺はもう…軍人辞めたほうがいいんじゃないか？…
……そもそもこんな精神状況で続行しようなんて思っているほうが……笑える冗談だろ？
…このままだと…ピトムも…娘も…死なせることに……

「…今……大丈夫？」ふと声がする。バストークが振り返るとそこには自分よりはるかに背の高いポケモン、サーナイトのサクラ司令が隣に立っている。
「ええ…まあ…」
「あなたの処遇…どうしましょうか？……あなたが望むなら…」
「予備役、ていう事ですかね？ピトムも一緒に。」バストークがモコモコ綿毛をすくめた。
「……それも可能性としてはありますけど……」サクラはしばらく言葉を考える。「…でもまだあなたには部下が残っている。中隊が存続するか…それとも別の形をとるか…量産兵士だったとしたとしても…」
「あんな連中はごめんですよ。」メリープがきっぱりと述べた「あんな無表情で…命令にしか動けない…単なる機械じゃ…困ります」
彼は人間のＧＢＴＸやデパスタ―製のあの無表情なポケモンの動きを見るたびに吐き気を覚えていた。
「そう…それもあなたの意見ね…ブリュッセルの自治協会本部、防衛軍司令部にはそう伝えておきます。…ただし、判断は向こうよ。

いい？」

「…異議ありません…」バストークは青い左前足を地面でゆすった。サクラはすっかり気落ちした彼を何とも言えぬ表情で見た。「…あなたの使命はまだまだ終わっていないわ。それに…まだあなた直属の仲間もいる……それだけは忘れないで…」このサーナイトはそう言うと彼のもとから歩み去った。バストークは諦めたように首を振った

サクラが管理棟へと戻る途中、ピトムニクと偶然出くわした。彼女とて３０２中隊の一員だ。今回の事態に気を落としているに違いない。しかし、それよりもピトムニクが自分を娘に様に扱ってくれる中隊長のことをさらに気にしているのだとサクラは感じ取った。案の定このプラスルは「中隊長…どこかにいますか？」と尋ねてくる。

「航空機の整備格納庫の所よ」「あの…調子のほうは？」「……あんまりよくない、ていうのが妥当かしら？そうよね、あれだけの事態にあって」サクラは思案顔で続ける「でも、あなたが一緒にいれば彼もまだまだやれるわ。あなたが…部下として…ではなく……一人の仲間として、ね？」

「は、はい。それなら…」ピトムニクは格納庫のほうへと走っていった。サクラはその様子を見やりながらそっとそれぞれの思念を覗き込んだ。

…お願い…苦しいけどなんとか…乗り越えて…

このプラスルは中隊長の横に座り込んだ。しばらくの沈黙。
「…中隊長…その…大丈夫ですか…？」ピトムニクが切りだす。
「…俺は…別に問題ないが…ピトム、お前は…」
「なんかあるんですか？」
「もし…中隊が予備役編入になったら…どうしたい？」
「……」バストークの唐突な問いかけにピトムニクは言葉を失う。

しばしの沈黙…格納庫の中には整備員の声と工具をいじる音、機械の騒音に満ち溢れ、翼を休めるＦ－１５ＳＥ（サイレントイーグル）が２匹を静かに見つめていた。

「…ワタシは…」ピトムニクがボソッと言った。「…たとえ…予備役編入でも…中隊長と…一緒に…やっていこうと思います。」
「…本当にか？こんな部下の命を盾にするような…」
「大丈夫！」「えっ？」「中隊長は何があっても私だけは死なせないと思ますよ！」「お、おい…ホントに…そう思っているのか…？」
バストークの顔がにわかに赤くなる。
「はい。必ず…ね？」ピトムニクがはっきりと言い切った。
「そうか…すまねえな。」バストークの電球状の球体がついた尻尾がぴくっと動き、下に垂れた。

涙が一筋…彼に目から落ちた……

「…こういう時って…ワタシは…どうしたいいんでしょうね？」グラシデアが隣を歩くロックオンに静かに言った。この２匹とチェギョンは季節の滑走路の脇に伸びる誘導路を歩き、ロックオンとチェギョンは時々ゆったりと飛び立ち、また降りてきた。３０２中隊の全滅後、グラシデアは父親のメリープとは過去にまして口を聞かなくなっていた。しかし、それはこのモココの父親嫌いというよりは、あんな自室状態になった父親に合わせる言葉見当たらないからである。

「それは…アンタが決める事だぜ。気落ちしている相手にどんな言葉をかけるべきか、それくらいは人生経験で知ってるだろ？」ロックオンがさらりと言う。

「そんなこと言われても…」

「…グラシ、その先は自分で考えてみろ。それが先輩としていえることだ」このムクバードはグラシデアの肩のモコモコに翼をやった。

「…はい…すいません…」彼女の顔が少し赤くなった。

「うん。グラシなら…何とかなるよ！」チェギョンも同調する。「でさあ、アンタはグラシデアのことが…」このチルタリスはロックオンをちらりと見た。

「…ん、ンな訳ないだろうが！」ロックオンの顔がみるみる紅潮する。「さっすが私！マジに図星だったでしょ！」チェギョンが翼のモフモフで彼に突っ込んだ。

「あはは…」グラシデアが笑う。この３匹に関して言えば、だいぶ痛手から立ち直ってきたようだ。

「あ、あとさ…うちとロックオンはさ、明日には…東南アジアでやる…なんだっけ？」「航空軍事演習だろ？」「そうそう！それよそれ！…それに行くのよ。」「な、なるほど…」グラシデアにはイマ

イチ、ピンとこない。

今回、東南アジアのマレー半島沖近海で東南アジア諸国及びアメリカの空軍が史上初めて航空軍事演習を行うことになっていた。２１世紀に入った直後からアメリカと東南アジア諸国は海軍艦艇のよる演習は行ってきた。海賊からの民間船護衛も訓練の内容に一つだったが、最も重要なものは対中国海軍、空軍対策である。２００８年の金融危機以降、人類社会において急速に経済的に重要な地位を占め始めた中国は海外輸出と急速に拡大する内需に対応するための資源開発を進めていた。急速に豊かになる自国民の食生活に同調するように漁獲高も急増し、ベトナムやマレーシアといった近隣国の領海、排他的経済水域ぎりぎりまで漁船の操業を行い、天然ガスプラントの開発を進め、国境を接しているベトナムの森林資源を世闇にまぎれて伐採、輸送する国営企業の連中も出現した。

さらに中国の急速な経済成長は、１９８０年代から先に経済成長を始めていたアジアＮＩＥＳ（新興工業経済地域）の経済を圧迫していた。多くの欧米の工業メーカーの工場は人権コストの安い中国へと流出し、アジア金融・証券の中心はシンガポールから上海に移りかけていた。現在ではアメリカや太平洋諸国

のみならず、ＥＵ諸国でも中国よりインドやマレーシア、インドネシアなどの周辺アジア諸国とのＥＰＡ（自由貿易協定）や経済連携などを重視する傾向にあるが、これは経済、政治、科学技術、軍事等あらゆる面で強引で少々身勝手な行動を繰り返し、ＣＯ２排出量削減もあまり進まない（進めようとしない）中国に対する対抗とい

う物があった。
　様々な摩擦や軋轢や衝突が相次ぐ中、中国の海軍艦艇が周辺諸国の漁船、民間船、海軍艦艇とトラブルを起こしたり果てには武力衝突に至る事態も発生した。これを警戒してアメリカ軍や国連統合海軍は塗油何アジア諸国の海軍と軍事演習を重ねてきている。しかし２０１１年に中国が本格的な航空母艦を就役させると、周辺国の領空に侵入してまで艦載機による訓練を行うようになった。２０１２年末現在で本格的な航空母艦を配備しているのはアメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国の５国と国連統合海軍のみだ。これ以上中国によって太平洋地域の政治的・軍事的バランスが動揺するのは太平洋地域の経済・治安、ひいては世界経済や秩序全体に決して好ましい事ではない。
　このような中、初の合同航空軍事演習が決定されたのである。ロックオンとチェギョンはアメリカ軍の空中管制機とともに、ロックオンのかつて在籍していた米空軍部隊の一員として参加する運びとなったのだ。

……もちろん、国連統合空軍であることは一般には公表せず。

「ぐ、ぐんじ…？という事は２匹とも…命の危険は…？」グラシデアが慌てて尋ねる。
「そんなわけないっしょ！演習なんだからさ！敵と戦うわけじゃな

いの！」
「おいおい考えすぎだぜ！いやあ、こんな娘ちゃんに心配されたらなあ…」「は？やっぱアンタもそういう類だったの？！うわ、ひくわ。」
「そうですよね…よかった…」グラシデアが安心したような顔をする。彼女たちのいる誘導路近くの駐機場には、すでに演習に参加する予定の空中管制機、Ｅ－７６７“スカイ・アイ”が到着していた…

こちらは……
「な、なんだこのシェイミ？！」リーヒュンはロズリンに３回目ぐらいに吹き飛ばされた。ロズリンは彼がリーフブレードを仕掛けてくると、何かわざをかける態勢に入りもせずに弾き返した。このベイリーフがいったん後ろに下がって一呼吸置き、タネマシンガンを打ち込んでくるとこのシェイミは多少踏ん張りながらも全部跳ね返す。ロズリンはその小さな体を上にぴょんと飛び上がるとエナジーボールを何のためもなく打ち込んできた。リーヒュンはこれを至近距離で３度も受けた。「いってぇ…なんてパワーだよ…こいつ…」

「ほ、ほんと！やばく強いよこれは！」ユイリィもほぼ同様の状況になった。このメガニウムがツルをふるって思念をぶち込むと、ロズリンは何の苦も無く彼女にそっくりエネルギーを返却してきたユイリィは１０メートルくらい後方の海岸で無様に伸びた。

「すげえ…」「さすが幻の種族…侮れないわね…」ブレイブとテルルも愕然としてその始終を見ていた。
「…お前は大したことないでしゅねえ？それで特殊能力でしゅか？」
ロズリンは得意げだ。

……あたしさあ……ホントに変な子を拾っちゃったかもしれない…
はあ…どうしよ?…

ユイリィは振り飛ばされたショックでフラフラする頭でロズリンを
連れてきたことをちょっとだけ後悔していた…

あの日以降…（後書き）

ロックオン：今日はあまり大変化はしないな。
…まあ、中継ぎ、ていう話ですから。でも次の話くらいでアンタたちは出発ですよ！

チェギョン：葵の話ってさあ、途中で妙な解説みたいなのが入るよね。あれ長ったらしくてめっちゃだるい。
…それは君の勝手。ちゃんと物語の背景を示しているのです。

きちんと読んでくださっている皆さん、本当にありがとうございます！もし興味のわいた単語があったらぜひ検索してみてください！

任務は唐突に（前書き）

ブレイブ：もう次かよ？
…そうです。はい。

テルル：うえ…もう少し休みたい……
辛抱してくれ……

任務は唐突に

現地時刻　２０１２年１１月１７日　リビア　首都トリポリから東に２００キロ　ミスラタのはずれ
１６５６時

ミスラタはリビアの首都トリポリがら東に２００キロ離れた町だ。２０１１年初頭からの内戦では、一時的には反政府軍が全体を完全制圧したものの、カダフィ大佐政権軍の反撃で奪還され、その後統合軍やフランス軍、イギリス軍が支援に入ったのちもこの街のはずれの地域では一進一退、泥沼の攻防が散発的に続いていた。紛争が始まってすぐに多くの住民たちは東の隣国エジプトに逃れはじめ、半年もすると、幾度にもわたる双方の航空爆撃と戦闘も相まって人っ子一人いない廃墟のような様相を帯びている。

そんな凄まじい戦場の雰囲気を帯びたこの町。この日の夕方もまた政府軍側の反政府武装組織を掃討する戦闘が行われている。彼らは自国民であろうとなかろうと、政権に取りつく組織に対して、相手が市民であるにもかかわらず戦車などの本格的な兵装を投入するという容赦ない掃討を繰り広げていた。その戦火をかいくぐるように走る一匹のポケモン。その容姿と身なりからして、エメリア自治協会防衛軍の一隊に配属されているらしい。上半身と前足はスカイブルー、下半身から後足、及び人間たちの電気コードのような尻尾にかけてはセミグロスブラックに近いミッドナイトブルー、耳には黄色い星のような模様。尻尾の先端も星のような形をしている。このポケモンはコリンク種族。ルクシオ種族の進化前の姿であるが、その４本足と胴体は既にルクシオ種族と同様に引き締まっている。ただしそれとはいっても、この幼げが抜けきらぬコリンクが軍人と

して活動しているにはあまりにも子供の雰囲気を残しすぎているようだ。おそらく１４，５歳…ポケモン文明でいえば成人するかどうか…位なのだろう。

曳光弾を含んだ銃弾がまるで花火から散った火の粉のように空から、交差点の左右から、無数に降り注ぎ飛び掛かってくる。「あそこにいやがるぞっ！！」「撃て撃て撃てっ！」へ政府軍の人間が次々に発砲してくるが、このコリンクはあちらこちらに散らばる住居の残骸や放置された自動車の間を巧みにすり抜け、飛び上がり、廃墟同然の建物をすり抜け一気に市街地の路地へ飛び込んだ。

「こんの野郎！！！」「どきやがれっ！！！」前から飛び出してスピードスターをかましてきたライチュウに対し、コリンクはそのエネルギー体を体をひねり、上に飛び跳ね、地面を回り、一気に相手の懐に潜り込むとしたから打ち込むようにスパークをかけた。同じでんきタイプにもかかわらず、相手は一撃で内臓や筋肉が焼け焦げて蒸発しコリンクに吹き飛ばされて路肩に転がった。

その直後、前歩で突如爆炎が上がり、土煙や瓦礫と一緒にコリンクは吹き飛ばされた。

「ちっくしょ…誰だよ…いき……」体を起こして土煙と瓦礫を振り落とした彼が凍りついた「…くっ……こいつ…」

コリンクの目の前に、彼の前に要塞のように政府軍の旧ソ連製Ｔ－８０Ｕがそびえ立った。感情のこもらぬ１０５ミリ主砲の砲口が彼を見つめている。そのくらい砲身の向こうから明らかな優越感と殺気を感じ取れる……

……俺もここまでだ…

…けどな……精いっぱいケンカ売って……死んでやるぜっ！！

彼は背中に背負った（彼にとって）必殺の洋弓銃（しかも矢先に爆薬つき）を引っ張り出し、後ろ足で立ち上がって構えた。狙いはもちろんＴ－８０の主砲。ポケモンであるが故に４本足種族が後ろ足で２本立ちできるのは普通の話だ。しかしそんなに長時間姿勢をそのまま保つのは難しいし、しかも戦車という人間の作った怪物（モンスター）に狙われるという死亡と隣り合わせの状態において自分の体を支えている後ろ足が痛みと疲労、そしてもはや見込みのない恐怖とそれに対する自虐的なおかしさで激しく震える。

もう助からない。コリンクは覚悟を決めた。今までさんざん戦場で死線を潜り抜けてきたのに、こんな戦車一匹を前にして死ぬ。そんな状況を前にして、人間でも極限の中でしばしば起こる発狂したような笑いをコリンクはこらえ続けた。

「あん？！どうしたんだジャリども！？撃てねえのか？それともその武器がいかれたかっ？！えっ、バカどもがッ！？」このコリンクは戦車の乗員を挑発するように叫んだ。それによって多少は彼も死の恐怖が取り除かれ、普段の生意気な度胸が湧き上がった。その直後……

風の音と沈黙の中、戦車の砲身の空気がわずかに動く。コリンクは感じ取った。それによって自分の死期が一気に迫ったことも理解した。左前脚で洋弓銃の先を支え、右前足でその形に合わせた丸っこい引金（トリガー）を今までにましてきつく掴んだ。しかし、自分の死がすぐそこまで来ているのに彼の気持ちは妙に勝ち誇った奇妙なものだった。

…あばよ…ガトル…グリソム…シンシア、……他の連中も……
…へっ…これであの文明サルどもの面をこれ以上拝まねえで済むぜ…

彼の目の前が白い閃光に包まれ、激しい衝撃と轟音にコリンクは吹っ飛ばされた。

……

……

……これが……あの世か？……なんも変わってねえ感じが……

コリンクはわずかに目を開けた。吹き飛ばされたうえ、体に土くれや建物の残骸、やけどしそうなほど熱い金属片が重なり、全身が傷だらけ、血まみれでずきずきと痛んだ。首や胴体の動脈を断ち切られたり頭に破片が突き刺さらなかっただけ奇跡だ。

彼の目の前には先ほど発砲したはずの戦車がひしゃげて炎上していた。周辺には戦車の破片が転がり、砲塔付近では脱出しようとして力尽きた乗員の死体が炎に焼かれて火だるまになっている。

……ったく……死に損なったか……しかし……誰が？

コリンクが体をわずかに起こすと残骸となった戦車と爆発によって火葬されている乗員の骸の後ろに誰かがいるのが見えた。夕日に照らされてポケモンが黄金の光を放っているようだ。

……あのポケモン……たしか……ベイリーフとか……

……しかし……奴らに戦車を倒せるほどの……わざが？

……

そこまで考えているといつの間にかそのポケモンらしき影は後ろへと飛び跳ね、消え去った。

その直前、あの影か彼の背中をやさしくなでたような感覚を覚えた。まるで母親が子供をなでるように。

……幻覚かよ？……そのわりには妙にはっきりと……

……！！！！！……ガトル！グリソム！シンシア！……

……あいつらはっ？！……生きているのか？？！！

コリンクは体をやっと起こし、慌てたように体をふるった。洋弓銃を瓦礫から引っ張り出して背負うと。後ろ足を引きずりながらフラ

フラと走り出した……

２０１２年　１１月１７日　エメリア・ソーラ大陸　アメリカ・国連軍の施設の管理棟の一室　０８２０時

「い、いきなり…ですか」「どうにも間に合わせな任務ですね。うん。」リーヒュンは突然の任務要請に戸惑った。ユイリィのほうはやる前から疲れたような顔をして、首元の花をツルでいじった。「いきなりでごめんなさい…あれからまだ3日しか経ってないのに…でも…」サクラの言う事もごもっともだ。彼らがここに帰ってきてわずか3日。あの過酷で悲惨な結果を招いた任務の後を考慮すれば、肉体的、精神的な疲労が取れるはずもない。「しかし…」サクラの声が真面目になる。「それだけあなた方に信頼と期待がかかっているという事です。手は抜いちゃだめよ。」彼女はそう言って手を微妙に動かすと、映像投影機（プロジェクター）を作動させスクリーンをおろした。

（以下は通達の内容）

いきなりで済まないが、ゆゆしき事態が発生した。北アフリカリビアの首都トリポリから２００キロ東に離れた町で、統合軍並びにフランス、イギリスと紛争介入行動を実施していたエメリア自治協会防衛軍第５軍北アフリカ方面部隊の突撃隊の一隊が消息を絶ってしまった。統合軍やイギリス軍が周辺警備を任せていたさなかに何らかのトラブルに巻き込まれた模様だ。遺憾ながら彼らに持たせていた状況発信装置がカダフィ大佐政権側の電波妨害か何かによってイギリスのＭＩ６当局やアメリカ国防省でも状況を確認できない。またさらに厄介なことに、彼らの１匹が持っている情報の中に、介入

に参加している統合軍、イギリス軍、フランス軍の現在の配置を示す極めて重大なデータがあることが判明した。大佐側に政府軍に渡った場合、戦況が国連側にとって大きく不利となるのは明らかだ。治安状況の悪化は北アフリカ周辺の状況の悪化を意味しており、原油その他の資源の一層の高騰、ひいては世界経済への悪影響も意味している。

直接の捜索は統合軍並びにイギリス軍が行っている。諸君らは直ちにリビアへ向かいこの突撃部隊の捜索・救出を支援せよ。エメリア防衛軍側の指示を待てずかなりイレギュラーな作戦行動とはなるが、彼らの持ったままの情報を考えるとそれはできない。

エジプト・カイロまでは統合軍の輸送機で特殊部隊とともにアメリカロサンゼルス経由で向かい、その先はイギリス軍の車両で向かう予定だ。君たちにとって航空機は初めての経験かもしれないが事態はひっ迫している。なんとか我慢してくれ。所要時間としては前回キミたちがバージアまで行った時よりはるかに短くて済むはずだ。

それに、今回は３０２中隊隊長の直属４匹だけで行ってもらう。先週の戦闘で深手を負った３０２中隊の出撃は許可できない。現在は言っている情報が国連軍とコンタクトのある反カダフィ大佐派武装組織からの限定的な情報のため、偵察機並びに偵察衛星による調査は諸君の到着寸前まで可能な限り行う。詳細な行動に関しては、行動開始時までには追って伝達する。

十分な情報がなく苦しい状況かもしれないが、頼むぞ。

「どこすかそこ？」ブレイブが頭のフサフサをいじった。

リビア…北アフリカの一角にあるこの国は豊富な原油資源に恵まれながらも、その利潤の大半をこの国の指導者カダフィ大佐とその一族、取り巻きの軍閥の政治家たちに吸われ、多くの市民たちは慢性的な低所得、厳しい言論弾圧に苦しんでいた。その時２０１０年末

から起こった中東、北アフリカの独裁政権打倒運動がこの国にも迫った。隣国エジプトで４０年続いたムバラク政権が倒され、同じく隣国であるバーレーンでも独裁政権が破壊されると、リビアでも同様の市民運動が盛んになった。これに対して政権側は市民に対して戦車や爆撃機を投入するなど激しい弾圧や虐殺をおこなったため、国際人権団体や反政府活動家ならびに国際社会から激しい反発を浴び、当時発足して2年たたない新国際連合議会も避難決議を採択し国連統合軍やイギリス軍、アメリカ軍、フランス軍による反政府体制への支援戦闘が行われた。リビア国内の反政府組織は反乱を起こしたリビア国軍の部隊や反体制派として弾圧された議員、さらには民間軍事企業の支援もあって反政府軍となるまでの勢力に成長したものの、リビア政権側の抵抗は激しく双方の損害と民間への被害は２０１２年も末となった今でも増え続けている。さらにアメリカは中東や太平洋地域での活動を維持するためにリビアへの攻撃から撤退。統合軍の派遣できる兵力にも限界があり戦局はまさしく泥沼の状態だった。

この状態が悪影響である原因、それは原油である。中国やロシア等の新興工業国の原油消費量が増え始めると、世界的に原油や食料の市場価格は高騰し始めた。さらにアメリカの金融政策によって池からあふれてジャブジャブ状態になったように供給過剰となったドル通貨が投資家や企業の手によって食料や原油、ウラン、天然ガス、トリウム、メタン、鉄鉱石、レアメタル、ボーキサイド（アルミニウムや合金の原料）等の原料市場に（特に原油）大量流入し、価格を釣り上げた。これにとどめを刺したのは北アフリカや中東の治安情勢及び国策である。２００１年のアメリカ・ニューヨークで起こった9・１１事件やその後数年間続いたイラク戦争、イギリス・ロンドンやスペインのマドリードなどでの中東イスラム原理組織による連続爆破テロ等以降、中東や北アフリカの情勢は総じて良くない。エジプトなどには工業系企業の工場もあり、そこや精油企業のパイプラインがたびたび爆破の標的にされた。さらに前にも述べたが、

アラブ首長国連邦やサウジアラビアは原子力発電所を大量増備し、脱原発を目指すドイツやイタリア、慢性的に電力不足のインドなどにまで電力を売りつけ、原油の保全して利益を得ようとしている。国策に情勢不安。原油の値段が高騰するには十分すぎる理由だ。

そのほかにもソマリア沖の海賊や地中海の移民用メガフロート、ポケモン文明の情勢等細かな要因は多いが、あまり解説するときりがなく複雑なので残りは省く。ともかく、原油の価格高騰が２００８年に発生したリーマンショックの傷跡も完全には癒えぬ地球人類社会・経済に大きな負担となっていた。これ以上原油、その他原料・資源が高騰すれば、先進国も新興国も問わず回復途上の景気が失速する要因となりかねない。すでにアジア新興国のインフレ傾向やギリシャ、アイルランドを発端とする欧州財政危機、米国の証券会社の財政問題や失業者問題、日本の震災、地球環境問題、宇宙や深海にまで及ぶ新資源の奪い合い等、景気のマイナス材料があまりにも多いのだから。

テルルは十分に休息をとることも叶わず再び任務へと赴くことに緊張していた。彼女はまだ自分がどうしてここにいるのか、なぜ戦いで自分たちと同じポケモン達を人間の命令で殺さなければならないのか、これらを十分納得させられずにいた。

…ワタシは…こんなことをしていていいの？……

……もし死んだら…あの子は…どうなる…？……

……守るって約束した…のに…

そのテルルの表情に突如ちらっと不信感のような表情が浮かんだ。ブレイブがちらっと見るとこのグレイシアの表情は不信感というよ

り憎しみにも感じられた。彼女はツンとした声でサクラに聞く。
「…それは…別に私たちが出ていくことなんですか?…」
ごもっともな発言だ。先ほど述べたようにこの任務が言い渡される理由も背景も全て人間たちの都合だ。おそらく、自分たちに襲いかかってくるポケモン達もまた命令されてやってくるだろう。農場にいる牛たち（牛の吐く息には温室効果ガスであるエタンやメタンが多い）に「環境保護のために息をするな」と言うのとはかなり異なるものの、何の関係もない人間たちの事態にポケモン達が使われていることに変わりはない。さらに先ほどの通達文章の口調からして「彼らが死んでもいいからデータだけは回収せよ」と言っているように感じられる。
「…あなた方が…信頼されている証よ。消息不明になったポケモンを探すのは人間の行方不明者を捜索するより大変です。それに中東の政情不安地帯でポケモンを探すなんて人間の命を危険にさらすだけ、ていう思惑も…ない事訳ではないでしょう…」
「はあ…やっぱりそういう…」テルルは首を振った。同時にサクラ司令に対する幻滅感も感じる。
「そんな目的で…本当に…行かなきゃならないんですか?」リーヒュンが食って掛かった。
「さっすが俺の親友!よく言ってくれるぜ!」「言ってくれるじゃん!こうじゃなくちゃね!うん」ブレイブがこのベイリーフを誉めているのか小馬鹿にしているのかという言葉を上げた。ユイリィも彼に同調するように頭の雄蕊をツルでいじった。テルルは軽く吹き出し、またしても呆れたような表情をする。
「もちろん」サクラがきっぱりと答えた。「ポケモンを探すのわね、警察犬でも難しい話なのよ。エメリア自治協会の救助隊・探検隊連盟のようにポケモン同士で探したほうがずっと速いの。それに…あの部隊はね、ほとんど14，5歳くらいの兵員しかいない部隊なの

よ。それを放っとくわけにはいかないわ…とにかく…私のほうからもお願いしておくから…頼んだわよ」

「は、はい。」リーヒュンはまだ煮え切らない表情を浮かべる。

「やれやれ、てとこだぜ。結局人間の尻拭いという訳かよ。」ブレイブが面倒くさそうに頭のフサフサをいじった。

「絶対に助けるよ！…がんばろうね！！！」「うん…もちろん。」ユイリィはリーヒュンの前足を自分の前足で握った。

「…はあ…」テルルの表情がさらに曇る。

「どうしたんだよ？」ブレイブが彼女を見たが、テルルはこのブースターの顔をしばらく見て諦めたように目線をそらした。「…いや…なんでもない。大丈夫。」

数時間後、４匹は久しぶりに雨がわずかに落ちる基地の駐機場の一角にやってきていた。すでにエジプトまで彼らと統合軍の特殊部隊８人、そしてＭ－９９８装甲車を輸送する米空軍の大型長距離輸送機（トランスポータ）、Ｃ－１７Ｂグローブマスター？が装甲車と特殊部隊の兵士を積み終えている。この機体は米国軍の厳しい要求にこたえ、長距離戦略郵送と悪条件下での着陸能力の双方を強化しており、７７トンまでの物資、人員、装甲車、戦車、戦闘ヘリを搭載して本国から前線に直接投入させることが可能だ。ここからロサンゼルス経由で大西洋から地中海側からエジプトに入るのだ。だいたい１２時間くらいの予定らしい。

この４匹にとっては初めての航空機を使った移動。この人工の鉄の鳥に乗るというだけでユイリィは嬉しそうだった。

「これで空を行けるんだね！！リーヒュンと一緒だと楽しみだなあ！」

「まあね。怖くはないな。」

「おいおい！お前のことだから面白がって飛行中に外に出てみたい、

とか言い出すなよ!!」ブレイブが彼の首元の葉っぱを前足でバサバサやった。「それはしない。んなことしたら死んじゃうだろ?」

「あはは!それは一回でいいからやってみたい!気持ちいいかもよ。」

「よぉーっし!俺はテルルと一緒に空中で…」「絶対嫌よ。」テルルが一瞬で拒絶した。しかし彼女の4本足全てがその鉄の鳥をみて震えていた。

「そっか。テルル…飛行機とか苦手?ていうかあたし達みんなはじめてなのにね!なんでこう余裕なんだろうね!大丈夫大丈夫。」ユイリィはテルルの頭飾りをツルでなでた。

「うん。もしなんかあったらさ…その時はよろしく頼むわよ。」このグレイシアが覚悟を決めたように大きく息を吸った。

「そんときゃ俺が抱きしめて落っこちてやる!!」ブレイブが嬉しそうにふさふさ尻尾を振った。「その時は振り払うから!」テルルはまたしても嫌そうな表情をこのブースターに向ける。

バストークやピトムニク、グラシデア等302中隊の面々とロックオンにチェギョンも見に来ていた。

「お前ら…絶対に帰ってこいよ。いいな。」バストークの声は不安とおそれに震えていた。

「おっさん!そんなに怖がらなくても大丈夫だっての!俺たちには心強い最強のポケモンが2匹がいるんですよ!なっ最強の2匹?」

ブレイブがリーヒュンの前足をポンとたたく。

「ま、まあ最強かは知らないけどな。ええ、やってみせますよバストークさん。」リーヒュンはちょっと恥ずかしそうにバストークのモコモコ綿毛をツルでなでた。

「もっちろん!ありがとうねブレイブ!頑張ります!中隊長!」ユイリィも続いてこの中隊長のメリープをツルでなでた。「そうか…ならいいが…」バストークは曖昧に答えた。まだ6日前のあれが気にかかっているらしい。無理もない話だが。

「頑張ってね!それしか言えない…」ピトムニクが思案顔で言う。

「あと…ロズリンをしっかり守ってね。」ユイリィは施設においていくのはなんとなく憚られたのでこのシェイミを連れて行こうと決めていた。

「大丈夫！あたしに守れないものはないよ。」このメガニウムは心配そうなプラスルをツルで持ち上げた。「ミーこいつ信用できないでしゅ。」ロズリンはリーヒュン側の背中に逃げ込んだ。

「な、何言ってんのよ？！」「俺でよかったらいいけどさ。たぶんユイリィの性格がこの子に合わないとか感じてるんだろ？」「もうっ！あたし嫌われちゃうよこのシェイミにさあ…」

「兄ちゃんのほうがいいでしゅねえ…」

リーヒュンの一言に加え、相変わらずのロズリンの態度にユイリィは花をツルでいじった。やっぱり自分は拾うべきじゃなかったのかなあ？…と。

「ユイリィ！絶対に帰ってきてね！テルルもね！私たちも明日出発なのよ。あの世で会うとか絶対にごめんって感じ！」チェギョンがユイリィとテルルにモフモフの綿毛状の翼で飛び掛かった。

「あはは！死なないよあたしの予測だと！うん。」「頑張ってはみるよ…！」メガニウムの方はいつものノリだったが、グレイシアの方はパッとしない表情を浮かべていた。

Ｃ－１７Ｂが出発する１０分ほど前、テルルは相変わらず駐機場脇の雑草をぼんやりと眺めていた。断る道はないのだが、輸送機に乗る踏ん切りがまだつかないのだ。

…本当に…帰ってこれるのかな？

……このまま……ほんとに……

「…大丈夫か?」リーヒュンがツルで彼女の背中を軽くたたいた。
「べ、別に…怖くはないわよ!…でも…」テルルは詰まる。「こんなこと…アンタみたいな男に言う話じゃない!…でも…はっきり言って…弱いところは…見せないから…」
「そっか……でさ、ブレイブと…なんかこう…上手くできそうか?」
「な、なんでそんなこと聞くのよ?」テルルが明らかにあせった表情を浮かべる。リーヒュンにはあっさり分かったが。
「いや、あいつがいろいろ迷惑かけているみたいだしな…」このベイリーフは首の葉っぱをツルで触る。「俺にも…なんでああなったのかは本当にさ…分からないんだ。…子供の時は俺と同じような性格だったと思う。」
「アンタと?じゃあ今みたいに向こう見ずで常識はずれだったのね?」テルルの表情がわずかに緩んだ。
「そうかは知らないけどさ……ただ…ごめん。」
「は?何いきなり?」
「あいつがいつも…テルルに変なことばっかしてるから…」リーヒュンは済まなさそうに首をわずかにもたげた。
「……まあ……」
「…ホントは俺が止めるべきなのかもしれない…あいつの代わりに…謝っとくよ…」
「……」テルルもうつむきがちに駐機場脇の草を眺める。

…こいつ…意外とそういう性格なのね…
…単なるバカじゃなくて……意外と…まっすぐで素直、ていうところか…

…すでにＣ－１７ＢのＡＰＵ（補助動力装置）は作動しており、その静かな音が沈黙している２匹の間に響いている。しばらくの間は無言の状態が続いた。

「…いや、大丈夫よ。」テルルが呟く。「あいつのことは慣れれば問題ないわよ。…ワタシさ、こういう事にはずっと耐えてきたから…」「耐えてきた?」

「いろいろと…あったのよ」テルルがそこらの雑草を前足で掴んでしばらく眺める。その顔は寂しげな諦めたような笑みが浮かんでいた。「い、今は言えない…そのうち言うよ…アンタなら感づかれそうだけど…」「……」リーヒュンにはもう薄々わかっていた。いや感づいてしまった。

…この女(メス)の半生は…凄まじいものだったのだろう…

「そっか…ごめんな……そろそろ出発だからさ、機内の方にいこっか。」リーヒュンが機内の方に戻ろうとする。既にC－17Bの主翼の下からは電源車両や整備員たちが離れ、メインエンジンが作動寸前であることを示していた。

「……アンタ、意外といい奴なんだね。」「え?」「ワタシの合ってきたオスっていうのは、だいたい馬鹿か、ずうずうしいやつか、そういう類しかいなくてさ…世の中そんな訳ないよね…多少はまともな奴もいたんだね…」

その時、4基のP&WF117－ターボファンPW100が始動しにわかに轟音を立て始めた。作業員たちの動きがにわかに忙しくなる。積み下ろし用後部ランプ付近に立っていた兵士が2匹のもとに

やってきて、さっさと準備するように言い残して後方へと走っていった。

「…いこっか」「…うん…」

2匹は輸送機の後部ランプへと向かった。

…自分たちの任務を遂行するため…

現地時刻　２０１２年　１１月１７日　アメリカ　カルフォニア州　バークレー付近　州間高速道路８０号線　１８００時

州間高速道路８０号線はアメリカのサンフランシスコからニューヨークやフィラデルフィア等の大都市回廊の郊外にあたるニュージャージー州ティネックを結ぶ高速道路だ。オーストラリアや南アフリカの一部にもこのような州間道路は整備されいるものの、ここまで本格的に国家の隅々…アラスカやエメリアまでも…整っているのは、典型的な車社会である合衆国ならではであった。近年は高速貨物鉄道、高速旅客鉄道などの環境重視型交通機関へのシフトも進んでいるが、この国の豊かさを示す象徴のような形で今日も多くの車両が高速道路を行き来していた。

その中一台、仕事帰りの男は愛車、フォード社製フォード・マスタング２００６の燃料ゲージをしきりに気にしていた。家までは十分なガソリンが残っていたが、今度の週末に妻と6歳になる息子と４歳の娘と遊びに行くときにはまた給油が必要そうである。

…男はため息をついた。この所のガソリン価格の高騰は異常なもの

がある。その原因の一つが自国の軍が繰り広げる中東での戦いであることも分かる。なるべく安いところを探してはいるものの、最近はどこも似たり寄ったりの価格だ。通勤で平日（ウィークデイ）はいつも車を使っている家計にとってこれは手痛い事である。それに２００８年の金融危機以降、職場の給与が下がりはしても上昇するわけもない。妻がしきりにＰＨＶ（プラグイン・ハイブリット自動車）に買い替えたほうが良いと言っているが、このところ周りを走っている車両を見てもだいぶハイブリット自動車や電気自動車が増えてきたとはいえ、それでもまだガソリン車と比べれば高めだ。あの金融危機以降、ヨーロッパやアメリカの市民は依然と比べて投資や消費に無理をしなくなっていた。家族の家計が決して良い訳ではないこの男にとっては、買って２，３年しかたたないこの車を売り払って買い替えるにはまだ早い。

…当面はこの高騰したガソリンと格闘していくしかないだろう…

男は再び意識を運転に戻した。前の車にも注意しなければならないし、鹿などの動物が出てこないとも限らない。ポケモンとぶつかったらもっと厄介だ。あのくそ忌々しい半文明生物に激突しようものなら危ない奴らの力でとんでもないことになるらしい。友人の目撃談によると、自分の子供を轢かれて怒ったエスパータイプのポケモンが、轢き潰した大型トレーラーを反対車線に吹き飛ばしたらしい。彼の運転するフォード・マスタング２００６は暮れゆく夕日に墓標のような黒い影を落とすサンフランシスコの街並みを背に多くの車両の流れに乗って郊外の自宅を目指した…

中国　上海（シャンハイ）の　古北（グーベイ）にある市場　現地時刻　同日０９００時

上海の古北地区、日本領事館もある延案西路の道沿いの一角に古北（グーベ）家楽福（イジャルフ）という食品市場がある。日本、韓国、欧米からの市民向け輸入食品はもちろん、観光客向けの地元食品も取り扱うなかなか立派な市場だ。もともと外国人居住者が多いせいもあるが。ただし、周囲の地下鉄2号、3号、4号、各線の最寄駅からでも2キロは離れているのでタクシーを使う方が早い。観光客以外にも、農薬などに関して信用ならない自国の食品より信頼できる（日本の野菜の放射能問題はあったが）輸入食品を好んで買う市民からもよく利用されている施設である。

さて、5歳になると思しき男の子を連れてやってきたある女性。今朝テレビで見た最近開通したばかりの広州と武漢を結ぶ最高時速350キロの高速鉄道の話を何度も何度もおしゃべりしてくる息子の言葉を聞き流しながら、彼女はコメの並ぶ陳列棚の値札を見てため息をついた。前来た時と比べてさらに値が上がっている。やはりこの国のインフレ傾向が影響しているのだろう。米に限らず中国ではあらゆる食料や燃料がどんどん高騰していた。第2位の経済大国になったとはいえ、一人あたりの年間所得はまだまだ低い方だ。食料の高騰は生活を苦しくし、貧しい農村地帯と比較的豊かな都市部との格差は広がる一方だった。この女性の夫も日系大手家電機器企業の工場で働いていたが、なかなか給与や処遇改善が進まずかなりの長時間労働のわりには所得が上がらなかった。食品がしかもコメなどすらこんな調子ではご近所でもたびたび話題になるマイカーの購入もも夢のまた夢だ。

世界の資源、燃料、食料の価格高騰はすでにここまで響いている。

これ以上の価格高騰を防ぐために彼らは任務を遂行させられるのだ。

２０１２年　１１月１８日　アメリカ　ロサンゼルス空港　００２０時

地球上の空港で６番目の旅客受け入れ数を誇り、アメリカでは受け入れ旅客数３位に位置するロサンゼルス空港。国内外兼用と国際線専用合わせて９つのターミナルを持つ巨大空港の国際線専用トム・ブラッドレー国際線ターミナル（ＴＢＩＴ）付近の駐機場にアメリカ空軍Ｃ－１７Ｂグローブマスター?が民間の輸送機にまぎれて停止した。周辺から燃料補給車両その他の車両や人員が忙しく動き回る。機体左舷の乗降用ハッチにタラップ車両が付き、空港関係者がＣ－１７の操縦士たちと話し始めた。ここで２時間ほど各種作業を済ませてエジプト・リビア国境線付近の国連統合空軍基地、通称“デザート・ブリッツ”に向かうのである。

この４匹を乗せたここまでの空の旅は、まあ順調と言えばそうであった。誘導路上（タキシングロード）をＣ－１７Ｂが移動している時点でユイリィとかは既に嬉しそうだった。そして滑走路を離陸のため加速（ローリング）し、機体の前脚輪（ノーズギア）と主脚輪（メインギア）が大地を蹴って機体が飛び上がると「やったね！今飛んでるんだよ！」「やべえ！人生初のひこうタイプ化！」とユイリィとブレイブは大興奮で前足をぱちんとぶつけて喜んでいた。

「おいおい。そんなに喜ぶことか?人間の機械なんだから失敗することはないだろ。」リーヒュンは苦笑した。

「なーに言ってんだよ!よし、もう少し上に上がったらお前外に出てみろ。」

「まあいいけどさ。どう外に出んだよ?」

「簡単じゃんそんなの。リーヒュンが気合であそこあけちゃえばいいの！」なるほど、確かに扉らしきものがある。

開けてはみたい。まあ開けたら周囲で何が起こるかは薄々感じたが。
「そっか、そんならやってみる？」彼が扉側に向かう。
「おいおいおいおいっ！まじか？！本気か？！さっすが俺の友人だけあるぜ！！でも、やめとけ。」
「ホントにやっちゃう？！あはは！！！さすがね！うん。でも危ないからやめた方がいいよホント。」ユイリィとブレイブは同時に突っ込みを入れる。一方のテルルの方は飛び上がるときの加速度や振動に恐怖を感じたらしく、死人のような目をしていた。
「テルル？酔ったか？」ブレイブが聞く。
「酔ってないけどさ…さっきのはちょっとビビったかも。」テルルがもみあげ状の飾りをふるえる前足で触った。
「俺と一緒なら全然問題なしだな！よっし！こっからさきはは空中デートという事で…」
「死んでも嫌よ！！」
まあ、その先はＭ－９９８１台と特殊部隊の兵員が多少乗っているだけで妙にだだっ広い空間が残るＣ－１７のカーゴベイで４匹は遊んでいた。カーゴベイには窓がないから外の様子は知る由もなかったが。

ユイリィは接続されたタラップの端っこで景色を眺めた。周辺の駐機場には民間輸送会社のＢ－７７７－３００が複数駐機し、その間を多くの貨物輸送車両や整備車両、空港のスタッフが忙しく動き回っている。ＩＣチップや半導体機器など小型で単位輸送コストが安い製品は航空機で運ぶ製品の典型例だ。やや離れたトム・ブラッドレー国際線専用ターミナルや国内外兼用ターミナルには中型の最新鋭のＢ－７８７やＢ－７３７－５００、Ａ－３２０、ボンバルディアのターボプロップ機などの国内線（ドメスティック）と思わしき機体から、超大型の

全ダブルデッカー機、Ａ－３８０、“ジャンボ機”の最新シリーズＢ－７４７－８、Ｂ－７４７－４００ＳＲなどの大型機、果てにはビジネスジェットぐらいの大きさしかない小型機も垣間見え、深夜にもかかわらずそちらでも多くの車両や人々が地上を動き回る。遠くには近未来的なデザインの管制タワーとターミナルビルがライトアップされ、その後方にはロサンゼルス、サウスゲート、カルバーシティ、イングルウッド、フローレンスグラハム等の市街地や４０５号線をはじめとする高速道路の街灯が輝いていた。レドンドビーチを望む海側には航空機のコース誘導灯や海上の船舶の明かりが星空を映したように散らばっている。

…もう夜になっちゃったんだ。一日はやっぱ長いようで早いね…

このメガニウムは頭の雄蕊（おしべ）の上で眠るロズリンの寝息を感じた。ポケモンは日が暮れればそれ以上の活動はしない。しかし、人間の世界においては必ずどこかが朝を迎え、昼を暮している。それゆえ、貿易や生産活動、金融取引に深夜も朝もない。常にどこかとオンラインで結ばれ処理や取引が行われている。それに引かれるように人類の夜は昼とさほど変わらなくなり、国によっては工場のみならず商店や交通すら２４時間稼働している所もある。まあ、宇宙ステーションや月の南極点にある資源採掘試験場は常時夜の風景が広がってはいるものの、近年の地球の都市や高速道路、海上メガフロート等はどこへ行っても一晩起きていられるほどの明かりを保ち、都市

によっては真昼同然の営業が提供されている所もあった。そんな夜景を眺めているとユイリィにはこのようなグローバル化・画一化が進んだ人類社会で終始忙しく暮らす人類の感情や愚痴、悩みが手に取るように伝わってきた。

……おつかれ。この言葉が一番人類に対する彼女の評価として適当だろう。

「うぐぅ…なんだこの空気。ユイリィはよく平気でいられるな。」ふいに外に出てきたリーヒュンがアメリカ・ロサンゼルス空港の空気に触れた途端、吐き気を催したような顔をした。

「あれ?まだ起きてたんだね。あたしには全然問題なしだけど?」

「そっか…それならいいけど。なんか俺の葉っぱが窒息しそうになってるみたいだ。」リーヒュンが首元の葉っぱに息を吹きかけた。

「ありゃりゃ!大変だねそれは。って、あたしの花にもよくないかも!」「そりゃそうだ。」

ユイリィもここで初めて気づいた。ポケモンにとって人間たちの活動でＣＯ2や窒素酸化物、その他の化学成分を含んだ空気（４，５０年前と比べて大幅に改善しているものの）は格別息苦しく汚いものであると。ベイリーフやメガニウム等くさタイプに限らずそうである。

「明日には…もう作戦に入っているのか。」リーヒュンが漏らした。

「うん。たぶんね。どうかしたの?」

「いや、大したことじゃ…大したことか……」彼は星空をしばらく眺める。「……ユイリィには…分かるか?…俺たちのやってい

ることは……本当に…？」
「だーいじょうぶだよ！あたしとブレイブたちがいれば……」ユイリィは首元の花を見つめる。「……あたしの見えるものもまだ信じられないけどさ……とりあえず頑張ってやれば何とかなるんじゃないかなあ？……」
「……そりゃそうだな。ごめんな。俺もいつも通り頑張るよ。」
「そうそう！そうこなくちゃ！」ユイリィはそこまで考えて、このベイリーフが何を気にしているのかを意識の中で認識した。
「……そっか……リーヒュンはフローラのことを……ごめんね。」
「…うん……わかっちゃったか……」彼はうつむきがちに言う。
「……俺……フローラを……助けられるのかな？……なんでこうなったかもまだわからないのにさ……」

「……リーヒュン、きっと……それも大丈夫だよ。」ユイリィが口を開く。「リーヒュンはそのためにここまで頑張ってるんだよ！みんなだったら耐えられそうにない訓練も、自分の体を壊してまでしないと使えない能力も身に付けようとしてるんだからさ。すごいんだよ！うちはそこまでやったリーヒュンの無鉄砲さと子供っぽさ評価するよ！うん。」「結局それか！？」
「違うよ…それもあるけど。」ユイリィがリーヒュンの前足に彼女の前足をそっと重ねる。「それだけ前向きに頑張れればフローラだってきっと助かる、てことよ。きっと。」
「そっか…ごめんな。いつも心配ばっかかけてるよな。たださ…」
「ん？」「その前足を乗っける動作、気持ちよくない。俺、異性とか苦手なんだよね…」
「何言ってんのよ！ホントは気持ちいくせに！ほらほらほらっ！顔

が赤くなってきたっ！あはは図星！」ユイリィが体全体をリーヒュンにのしかかるようにくっつけてきた。
「おいおい…君に言っても効き目はないからあきらめるけど…あとさ…フローラを……本当に……」リーヒュンは吹っ切れたようだ。「そうだな。必ず助ける！そうしないと。俺の妹なんだから。」
「そうこなくっちゃ！！」ユイリィが彼の頭の虫食い葉っぱをツルでなでた。

このメガニウムは星空とそれを映したように船舶と空港の明かりが散らばる海の方を見た。街の明かりでかなり霞んでいたが、ユイリィの瞳と心には星と人工衛星、宇宙ステーションなどの明かりが一面に散らばる星空が輝いていた。

……明日はいよいよリーヒュンと2回目か……
……あの子もロズリンも……待ってる皆も……ブレイブもテルルも……絶対生きて返してみせる！！
……あたしもできることは全力でやるよ！！……
……皆……見守っててね！！……

任務は唐突に（後書き）

次回くらいから戦闘です。

ところでロサンゼルス空港の写真をＷＥＢで探したところ発見しました。夜景はとってもライトアップがきれい…

あとターミナルが多い！羽田の比じゃない！

さっすが合衆国、というところでしょうか。ちなみに、フランスのシャルル・ドゴール空港や韓国の仁川（インチョン）空港も大きいようです。

あと、アメリカなどの輸送機は人員輸送にも対応しています。まとめて運ぶときは旅客機のものにそっくりなシートがカーゴベイに並んでいるらしいです。その後ろに装甲車が固定されているとかしてるようですが。

次話ではリビアでの戦闘に入ると思います…またも新キャラ登場の予感。しかもまとめて４匹。

もう止めようがありません……

軍隊というもの（前書き）

今回で戦闘に入るでしょうか…

…少しだけ？

……こりゃ長くなりそうだ……

軍隊というもの

２０１２年　１１月１８日　地球上空　およそ５００キロ　標準時刻０９１５時

彼女の思った空の上、宇宙空間では……

７日前にアメリカのケネディ宇宙センターを飛び立ったマスドライバー方式のＳＳＴＯＶＴ－２００型宇宙往還船（スペースシャトル）２号機、タイタンは地球上空５００キロの地点でホワイトバード級大型宇宙軌道プラットフォーム（プラットフォーム）船の１号機、「ディア・アイリス」に４日前からドッキングしていた。

ホワイトバード級軌道プラットフォーム船は宇宙太陽光発電システム、並びに将来の宇宙移民用スペースコロニー建造の足場として旧国際連合が１９９５年に着工し２００６年に竣工した。ＳＳＴＯ型シャトルの１０倍の大きさはあるこの軌道船はシャトルやロケットによって集めた宇宙太陽光発電システムの大規模構造物の設置を行うほか、宇宙太陽光発電システムで得たエネルギーを他の衛星や施設にリレー送信する実験などにも使用されている。しかし、近年はそれに加えて国連統合空軍・宇宙軍のレーザー兵器のテストベットとしても利用される傾向にある。

　太陽熱パネルの美しいほど白く優美な流線型の外見も相まって、かつては人類の平和な宇宙利用の象徴として造られたはずの白い鳥。それは今や夢想論と綺麗事に成り下がった。各国の経済発展のための道具として、国連軍の抑止力、軍事力の象徴として鳥は利用されているのだ。

その鳥の腹部に当たる位置に存在する2つのエアロックと作業用マニピュレーターがあるドッキングポートにタイタンはエアロックを接続し、機体背面のカーゴベイから持ってきた“極秘物資”の一つを受け渡していた。ナイロンやテフロン繊維を25層重ね、ネオプレンを塗布して気密を強化した白い船外活動（EVA）用宇宙服と、姿勢変更用パーソナルスラスターユニット…かつてMMU呼ばれた窒素ガスを使って軌道を変更する有人ユニットを小型化・高性能化したもの…を装着した3人の作業員がそれを誘導している。このシャトルからディア・アイリスのマニピュレーターに手渡された“あるもの”がこの軌道船の腹部にあるカーゴベイに物資用ガイドレールを通して運ばれてゆく。

「カーゴベイへの搬入は順調。予定時間までに仕上げられる。」「よし、その調子で頼むぞ。」船外活動をしている主任作業員とアメリカ・ヒューストンのNASA飛行管制センターのオペレーターが時折交信している。その様子を管制室後方の休憩室で見守る2人の男。

「あとは…稼働試験も順調にいくだけだな…」国連軍の制服を着た男がシャトルと軌道船から送られてくる作業の映像を見ながらつぶやいた。

「アトラスで投入した連動衛星にも異状ありません。今のところは予定通りです。」背広姿の…首から下げるICタグからしてNASAのスタッフだが…の男が答えた。

「ああ、あれか。ゆゆしい邪魔は入ったが、君たちのスタッフと君の国の軍のお陰で一発も損傷を被らなかったようだな。改めて感謝しておくよ。」

「恐れ入ります。……この武器は本当にあの文明を変えることが…」

「そうだな。それが我々人類と地球の自然を救うことになるのだ。あの程度の文明を滅ぼしたところで神も文句は言わぬだろう」制服姿の男はきっぱりと言い切った。

「まったく同感です。」背広姿のＮＡＳＡスタッフも同調した。

彼もポケモン文明の忌々しき側面を散々知っていた。少年時代に遊びに行った畜産業を営む祖父母の牛が一晩にしてポケモンによって殺され、肉も皮膚もはぎ取られた。その時の恐怖、牛に対する憐みがたびたびこの男の夢となって彼を苦しめる。マスコミが幾度にもわたって報道するには、自然に対する従属と共存、文明開発の抑制といった理想論を訴えているくせに、彼らがやっているのはアフリカの自然保護地帯の草食動物を狩り、同じく保護地帯を勝手に居住地や耕作地帯に仕立て上げ、野生どころか人間の家畜を奪い取り、オーストラリアのサンゴ礁地帯ですら漁場にし、飛行中の航空機のエンジンに石を投げ込んだり、大型クルーズ客船の推進装置を詰まらせ、ハイテク工場の汚染水処理施設を壊し、大規模工場地帯を停電させ、高速道路を１週間以上人海戦術でふさぎ、原子力発電所の冷却器系配電盤を焼き切り、メガソーラーパネルに穴をあけ、運輸会社のトラックに放火し、海上の原油や天然ガスの採掘施設を壊すといった暴力的行為である。確かに自分たちが環境を破壊し、地球自然を傷つけ、終わりのない戦争や問題を今なお繰り返しているのは事実だ。

しかし、我々人類は常に問題を解決し、向上する努力は忘れていない、はずだ。理想論やきれいごとだけをまくしたてながら環境破壊やテロリズム同前の活動を行うあのポケモン達が地球に住む資格などない。

それが…良くも悪くも、正しいにしろ間違っているにしろ…宇宙から送られてきた映像を硬い表情で見つめるこの男の心情であった。

主任作業員は宇宙服のバイザー越しに眼下と足元に広がる青い海、

雲海、緑と茶色の大地を見つめた…この高さからでは船舶も航空機も都市や農耕地帯、メガフロートすら見分けることができない。

……これが俺たちの……故郷……地球か……

そう。地球と軌道上と月面周辺の宇宙。それは現在人類が手を伸ばすことができる、直接知ることができる世界だった。あらゆる紛争、民族問題、環境問題、エネルギー問題、経済・金融問題、科学技術問題などを抱えながらこの地球は多くの人類と多種多様な生物、無数の生命を乗せてこの物理学的3次元空間上に存在している。

奇妙な世界観ばかりを考えるあの忌々しい文明も少し含めて。

2012年　11月18日　エメリア・ニュークリア大陸　サバーブ州の北部の森林　0635時

……あれはなんだったんだ?……やっぱりあいつらは……

……リーヒュンとブレイブ……俺のかつての親友だったのか?……

シーベルトは軍刀を蹄でこすりながらそう考えていた。サバーブ北部の森の中には自由連合側勢力の村落がある。そこのはずれの森の中でこのポニータはあるポケモンと“いつもの約束”をしていたのだ。

しかし、周辺に川の流れるせせらぎと野鳥の鳴き声しかしない場所でそれを待っていると、バージア宇宙センターで戦ったあのベイリーフとブースターのことがしきりに思い起こされそれが受け入れがたい不安に変わっていった。

先に述べたとおりシーベルトの決意は変わらず、たとえ友人であろうと自治協会側にいた場合は叩くのみ、と心に決めていた。しかし、人間にとってもそうではあるが、心の中で覚悟を決めるのと実際にその場に遭遇して判断を下すのとでは必要な勇気や覚悟の量というのは甚だ(はなは)しい差がある。そのシチュエーションにかなり深刻な状態で鉢合わせてしまった彼はその覚悟が激しく揺らぎ、何でもいいから彼らをこちらに引き込もうかとまで（彼にとっては）馬鹿らしく考えた。

リーヒュンとブレイブは幼少期のころから一緒に遊び、バトルをしてきた仲だった。彼ら2匹はシーベルトが10歳くらいの時にソーラのパルク州へと引っ越していったが、一番好奇心旺盛な5～8歳のころを一緒に野原や森を巡って過ごした仲間のことを忘れられるはずもない。その頃のブレイブ（まだイーブイだった）がよく意味も分からず言っていた「将来は3匹で世界征服だ！」という言葉を忘れられない。リーヒュンも（当時チコリータ）シーベルトも（当時も今もポニータ。体はずいぶん大きくなったが）一緒になってそう言っていたのは事実だ。自分たちの能力をもってすれば、この世界の隅々まで見ることができる。そう信じていた。

ところが、それが大人になることとはいえ、現実というのは過酷で冷酷で無力で非情だ。自分だけニュークリアに残ったシーベルトが次第に分かってきたこと。それはポケモンの文明は衰退しており、近い将来自分を含めて死滅するだろうという事。この世界の隅々まで勢力圏を持っているのはあのヒトという2本足でひ弱そうなサルと同種の生物であることだった。

彼の家族を殺した……あの生物。

最初のうちは信じられなかった。あんなヒョロヒョロした雑草のように立つ生物が、どっしりと大地に4本足や2本足で立つポケモン達を弾圧できるのかと。自分たちの能力をもってすればあんな生物の文明など一撃で粉砕できるはずだと。しかし現実には、人類の最大の武器は知能とそれをもってした構築された文明、自らの利益の為だったらあらゆる手段を惜しまない（彼らから見ればかなり傲慢な）大胆な向上心、行動力、知識欲、勇気、そしてあらゆる災害、自然からの苦難に屈しない（悪く言えばあきらめの悪い）根性と不屈の精神にたいして、自然に対する服従と共存、運命を享受し必要以上のものを求めず困難な自然を自らの手で切り開こうともしないポケモン達は圧倒的に劣っているという事実があり、さらに言えば、まともに競争をした場合人間はおろか、多くの野生動物にも勝てはしないという屈辱的ともいえる事だった。文明を獲得した生物たちにとって弱肉強食の象徴ともなる体力や戦闘力、生存力はあまり必要がない。この必然ともいえるベクトルの中で人間は可能な限り文明を発展させ、それをもってして自らを武装することで生物としての弱体化を切り抜け、地球の生命の中で最強とも言える立場を獲得できた。欠点があまりにも多い文明であり、環境破壊や人類間の戦争、文明のミステイクが生み出す新たな感染症や化学汚染の脅威等はますます広がりを見せているが、その中でもこの生物種が発展をやめないのは、彼らが地球全体の動向を科学という統一された分かりやすい法則で多くを理解し、技術という思考力や工夫で自分たちの豊かさや利益と、自分たちの住む世界の保持の両立を目指す取組みを状況が何であれ続けているからであろう。いかにそれぞれの利益を優先し、足並みが乱れているとしても。

それに対してポケモン文明は、いかに自然を大切にして共存してきても、文明化の故におこる種としての弱体化を認識することができず、それが故、神秘的な信仰や思考に頼って世界を知る努力を怠

ってきた。その結果がこれなのだ。

確かにポケモンの文明は寛容的で安定が取れ、自然や地球に溶け込むようになっており、対して人類の文明は地球や自然に対して挑戦的で積極的、少々傲慢、身勝手で自分たちの豊かさや利権をめぐる争いばかりを繰り返している。道徳や倫理という面から文明論を述べれば前者の方が正しいのかもしれないが、自分たちが生きている現実論を考えれば、欲望を捨てることなどできないし、豊かになることへの向上心を捨てることはできない。さらに他者の発展を拒否する権利もない。そうなると後者の方が現実味を帯びざるをえない。その上、人類が16世紀ごろヨーロッパと当時未開のアメリカ（新大陸）の間で経験した文明の衝突に伴う一方の破壊力を考えると、がぜん後者の優越性がはっきりしてしまう。

……でも……俺はポケモンだ。……せめて自分が生きている証だけは……

……勝てないのはもう分かっている……ただ翻弄されるだけは……やだ……

自分のポケモンとしての生き様を示す。そこらの犬のように人間にただ圧倒され滅ぶわけにはいかない…

シーベルトが自由連合の兵士になった理由はまさしくこれだ。家族を人間に奪われ、故郷すら追われた彼が自治協会のように人間と偽善的な安定を好むはずもなかった。

ただし、人類を憎む彼とて人間と故意に事を荒げようとは決して考えていなかった。むしろ“あれ”が先に達成できるのなら一時的に人間と手を組んでも構わないとさえ思っていた。

もう一つ自由連合にいる重大な理由と目的があるのだから……

「おいっシーベルト！どうしたんだよ？」このポニータの背中をポンとたたく者がいる。いつの間にか深く考え込んでいたようだ。

「あ…ああ……エンデバーか……」「お前な、せっかく俺がスパイのレッテルを張られる覚悟で会いにきてやってんのに、会う前からぼーっとしてるのはやめろよな。」そのポケモン、レッドブラウンとデッキタンの２色、手足は胴体の長さに対して異様に短い。また尻尾と胴体の境目がわからないほど顔から尻尾までが円柱型をしている。頭の上には短く、先の尖った耳。オオタチという種族だ。

「いつもごめんな。例のネタ、なんか分かったか？」シーベルトが軍刀を懐の装備品ベルトに戻し、４本足を少し起こした。

「ああ。駐屯地にいる情報通のエイブラムスの車長にまた聞いてきた。」エンデバーというオオタチは持ってきた人間の支給品っぽいバックから何やら紙束を引っ張り出す。精度の粗いポケモンの羊皮紙とは明らかに違うしっかりと製紙された人間の“コピー用紙”である。

Ｍ１Ａ２エイブラムス。現在はＧＥ社傘下（ゼネラルダイナミクス）のクライスラー社（自動車のダイムラー・クライスラーとは違う）が開発したアメリカ陸軍や統合陸軍の最新鋭ＭＢＴ（主力戦車）。最新鋭の機器を搭載した

現在の地球で最強の戦闘車両だが、詳しい説明は再度登場した時にあらためて述べるとする。

「やっぱお前の情報源は人間か。おまえ、人間だったら出世できるかもな。」シーベルトが少し茶化すように笑った。

「ふざけんなよ。それにお前のためにこんな情報漏えいみたいなネタ引っ張ってきてんだから、いくら人間嫌いでも文句言うな。それで…」エンデバーが頭の上の少したった毛をかきながら資料の束をポニータに渡す。「……こんな自由連合の内部情報ばっか集めて……赤い彗星じゃあるまいし…」「はっ?また何のたとえだよ“あかいすいせー”って?……」「……なんでもない。忘れろ。とにかく、お前は本当に行動するのか?」エンデバーが怪訝そうに聞く。

「ああ。もう協力してくれる奴は何匹かみつけてる。アリョーナさんもやってくれるって…そして集まったら…中央アジアにあるあの自由連合を腐らせているくそ連中どもに……」シーベルトは迷うことなく述べた。

「おいおい本気か?!おまえの先祖が自由連合の代表だってことはわかるけどな、それから追い出されたといっても１００年前の話だろ?それを今更お前の世代で…」エンデバーが鼻で笑う。

「やる、やってやるんだ!」シーベルトが蹄で鋭く地面の土を掴んだ。「俺の家族を追い出し、あんな僻地に追いやった!その果てに人間どもの殺されたんだ!人間どもに分からせる前にまずあの腐った馬鹿野郎どもを俺の手で……仇を打ってやる……」

「わかった!わかったよ!」このオオタチは勢いがるポニータをなだめるかのように短い前足で彼の前足を押さえた。「俺は確かに自由連合派の奴だ。認める。だけどな、俺はアメリカ軍の軍人だ。そんな過激な行動には加われない。応援はするだけだ!いいな!」

「わかってるさ。……ありがとう。……こんな資料ばっか運ばせちゃって……この調子で国連の人間がヨーロッパの人間の連中に話がつけられれば連合の幹部のくそどもを誘き寄せられそうだ……」シーベルトは落ち着きを取り戻し、資料の紙束を一通り眺めて自分のバックに押し込んだ。

「アメリカは信用できない、ていうのか。…まあおまえの考えだからいいや…全くお前の行動力にはあきれるぜ。」エンデバーがほっとしたように言い、アメリカ陸軍、その他アメリカ各軍の正式な拳銃であるイタリア・ベレッタ社製M９拳銃を腰に巻いたベルトに装着したホルスターから引っ張り出して眺めた。人間の大きさに合わせて作られたM９はオオタチ種族の彼にとっては少し大きめだ。

「アメリカに頼むと見返りを請求されそうに思うからな。ヨーロッパも似たり寄ったりだが、まだましそうだ……」
「おいおいおいおい！リーヒュンみたいなこと言ってんのか？あいつの直感は確かに…」
「！！、そうだ。あいつとブレイブがな……」シーベルトは思い出して言葉に詰まった。「な、なんかあったのか……」エンデバーが不安そうに表情を変える。
「……あいつらな……どうやら人間側……おそらくはアメリカか国連か、だ……の兵士になってたらしい……」「おい……マジか……？……だとしたら…俺が奴らの部隊と会うことに……なるかもな……」「……」２匹は言葉を失った。

かつての親友たちがそれぞれの人間の国家や勢力に取り込まれている。そして互いに戦うことになるかもしれない……

過酷な現実を前に沈黙する2匹の周りに聞こえるのは小川の流れる水音、風で森の木々がこすれる音、ツグミやヒバリのさえずりのみ……

２０１２年　１１月１８日　ベルギー　ブリュッセルにあるＥＵ本部の隣、エメリア自治協会政庁　　１１３０時

韓国とＥＵ諸国とのＦＴＡ（自由貿易協定）がついに締結したらしい。韓国やアジア諸国は前々から積極的にイギリスやフランスをはじめとする欧米諸国との個別のＦＴＡ交渉を進めていたが、今回のようにＥＵ、ひいてはヨーロッパ地域全体とこの協定を結ぶのは画期的なことだ。今後、韓国はアメリカともＦＴＡ交渉を進めていく予定と聞いている。

２００７年～２００８年に発生したサブプライム・ローン問題や世界金融危機は、それまで全知全能であるかのように進展してきた地球経済のグローバル化、世界の一体化に終止符を打つのではないかと当時ささやかれていた。地球規模での時代は終わり、再び地域ごとに閉鎖的な体制と関係の社会が来る、と。しかし、この予想は全くの誤りであった。確かにあれ以降、ＷＴＯ（世界貿易機関）での地球規模での経済枠組みの調整が各国の思惑も働いて難しくなっているのは事実だ。だが実際は、各国家や国家連合が他の国家や国家連合とそれぞれに経済協定を結ぶようになり、ＡＳＥＡＮ（東南アジア諸国連合）、ＮＡＦＴＡ（北米自由貿易協定）、ＡＰＥＣ（アジア・太平洋会議）、ＴＰＰ（環太平洋自由貿易協定）、Ｇ７（アメリカ・ヨーロッパ先進国会議）、Ｇ２０（世界主要２０か国会議）、ＢＲＩＣＳ（新・新興工業国）などとさまざまな会議、協定、集団が複雑な立場で互いを結びつけ合っていた。ＷＴＯもこのよう

な状況はもちろん察知していたが、それぞれの利害関係を十分調節できないままになり、単独国家間の経済問題に加えてこのような協定や会議、連合同士の問題も加わり、グローバル社会はますますたがいに親密・複雑化し貿易や経済のさらなる相互依存を、そして経済競争のさらなる一体化をもたらした。

　このような社会情勢となると、もはや国の政治の権威やその国の経済的伝統や特色は経済活動に対して何の意味もなさない。商品（ここには自然生命やポケモン、物に対する命名も含む）、サービス、金融、証券、情報、労働力（つまり人間）までもがものすごいスピードで地球を行き来し、ついていけない、もしくは時代に対応できない財、サービス、企業、そしてそのような体制を持つ国家の経済は容赦なく蹴落とされる。もちろんあの金融危機のような行き過ぎた金融活動を抑制するためＷＴＯや新国際連合は一定の経済活動のルールを設けてある。しかしそれをかいくぐるような手法がすぐに生み出されてしまう。資本主義とはそのような点で限られた資源、価値の中から可能な限り無限な利益や財・サービスを生み出す思想といえよう。

このような国家や政治レベルを超えた地球規模の資本主義、情報更新の高速化、終わらぬ科学技術の革新が連続する社会では、自らが引き起こす環境破壊、公害や事故や災害、資源やエネルギーを巡る深海から宇宙にまで広がる採掘利権争い、そのための領土問題、異文化・価値観の衝突から起こる幾多の紛争、さまざまな法律や機密をかいくぐる情報空間での問題、暴走する資本主義が生み出す世界規模での貧富の格差といったマイナス要素までもが、エコ・テクノロジーをはじめとするあまたの技術革新や新たなる社会上のビジネスの成立、更なる情報コミュニケーションシステムやセキュリティープログラムの進化、そこから生まれた金融取引の電子化、戦争やテロ抑止を商売にしてしまう民間軍事ビジネスの誕生、国家による大規模な開発、ポケモンの商品としての量産などといった新たなるビジネスを生み出してしまう。数えきれないほどのメリットもデメ

リットも存在するが、これが資本主義の自己創造性である。

このような“異常”とも言える状況の中でポケモン文明が影響を受けぬわけがなかった。農業を主体とし、文明的に脆弱で情報通信力にも劣り、貨幣よりも物々交換や善意が重視される取引しかもたぬ文明は今日の自らの利益と富を、そして明日の自らと自らの居住する地球環境を維持するのに手段を惜しまぬ人類たちにあらゆる農地を貨幣で取り上げられ、自らは“動物同然”の労働力としてこき使われ、草原や森に逃げ込めば“環境破壊”と批判をうけ、都市で物や人に危害を加えれば“危険分子”として国家権力をはじめとする暴力装置によって地下に追い払われ、そこでさらに弾圧されるという非情な現実に直面した。彼らが「将来の世代とあらゆる地球の生命の富と安全を保障するためだ」というキャッチコピーがつけば、同じ人間に対する宣伝としてもう完璧だ。頼みの政府組織も人間たちの提示した金と軍事力の前に身動きが取れなくなった。彼らの生命感覚では理解しがたいクローンのポケモン達が彼らの社会に入りこみ、彼らの結束は薄れ相互不信感は日増しに高まっているのだ。

交渉を終えた韓国やヨーロッパ諸国、欧州連合（ＥＵ）の関係者たちが次々に車寄せのところに止まって居る黒塗りの…あれはドイツのＢＭＷ社、Ｆ－０２－７４０?等の類か…車両に乗り込み欧州連合本部のロータリーを出ていく。関係者らしき人物が出てくるたびに車寄せあたりに待ち構えている数人の記者やカメラマンと思わしき人がその人物に話しかける。それを警備員たちが引き離しにかかるが、ニュースでおなじみの大混乱とは程遠い落ち着いた雰囲気だ。欧米圏とアジア圏の間の貿易の多くを占めてきた日本企業から見れば極めて重大かもしれぬが、世界や経済界から見れば、一般的な経

済関係のニュースでありそれほど騒ぐ話ではないからだろう。
　そのＥＵ本部のガラス張りで円筒状の美しいデザインをした建物の隣にいかめしいレンガ造りの建物がいくつかある。まるで中世以前のヨーロッパの城砦のようだったが、パリ・ベルサイユ宮殿を連想させるだだっ広い庭には、周囲の広場や緑化地域とは明らかに異なる植物がツタを巻いてその建物までからみついていて、多くの鳥たちがさえずり飛び交っている。飾り気のない水路には自然のままのスピードで流れができ、魚がゆっくりと泳ぎ回っている。しかし建物の大きさだけはブリュッセルの旧市街地、ＥＵ関係の施設と比べてもやけに高い。
　この建物の最上階に近い一室から次々に去ってゆく車と関係者たちをちらりと見ゆる者がいた。黄色いメロンパンのような頭の飾りがあり、アグノムと同様浮遊している。尻尾も同じように２本に分かれている。
「……そうですか……それではバストークはさぞかし……」このポケモンが知性と落ち着きがこもった声を上げる。その目の前にはあのサイコ遠隔通信機があった。
“…ええ……それで……しばらくの間、からの部隊を予備役にしていただけないかと……”相手はソーラ大陸の国連軍・アメリカ空軍極秘施設にいるサクラである。
「３０２中隊を、ですか……本人の希望は？」
“……ごめんなさい……そこまでは聞いてなくて……ただ……彼やピトムニクが再起不能かといわれると……まだ十分できそうで……”
「そう……それならもう少し様子を見ましょうか……本人がやりたいと言えば、それでいいですし。あなた方の軍が……もし３０２中隊を使いたいと言えば、状況によって、ですよ。」
“はい……それで……”通信機越しのサクラが考え込む。“例の４匹が…まもなくリビアで作戦行動に入るようです。……あの子たちもバージアでの戦闘で疲れているようですが……国連軍側がどう

しても、ていうので……”
「おそらく彼らは大丈夫ですよ。あなたの教え子もついてるんでしょ？」このポケモンは励ますように言った。
“まあ……そうですね…心配おかけしてすいません……”
「大丈夫。でも、もしあの子たちに会えたら……ぜひ一度はお目にかかりたいですわね……あと、前通話した時、アグノムがなんかまた言ってなかった？」
“うーん？どうでしょうか？……あの子もまた私の部隊を見てみたいと、ぐらいでしたよ？”
「そう…あのこもまだまだ子供ですしね……何かとつけては目立ちたがる。エムリットのほうが全然成熟している、て感じですよ。……あの子を落ち着かせるのはなかなか私でも骨が折れる……」

通信機を遮断したこのポケモンは窓辺から雨の多いこの世界有数の金融、経済都市、雲が垂れ込めるブリュッセルの旧市街地と遠くに広がる新市街地をしばらく眺めていた。それからため息をつき、今朝届いた現在世界で連絡の取れなくなっている防衛軍部隊のリストがおかれた机側に戻った。

このポケモンはユクシー―。アグノムやエムリットと同様、湖の3体といわれるポケモンである。

２０１２年　１１月１８日　リビア　ミスラタ郊外　　１５００時

イギリス軍が所有する母国の企業、ウエストランド社製（実際はアメリカ・シコルスキー・エアクラフト社の機体をライセンス生産し

たもの）のシコルスキー・Ｓ－６１ＨＣ．４、シーキング２機は高度約３００フィート（１００メートル前後）を飛行していた。国連の要請を受け、地中海北アフリカ沿岸に展開していた英国海軍インヴィンシブル級空母を改造したヘリ空母「オーシャン」から発進したＳ－６１は、エジプト・リビア国境線近くにある国連統合空軍基地“デザート・ブリッツ”に着陸すると、ロサンゼルスからアメリカ空軍のＣ－１７Ｂでやってきたポケモン達を乗せてリビア、ミスラタへと向かった。地上にいるイギリス陸軍のスイス・モクワ社製、最新鋭のピラーニャ装甲車やＧＫＮサンキー社製ＡＴ１０５サクソン等に乗った潜入部隊は既に指定されたポイントに到着しているらしい。

「指定されたポイントまで１分３０秒。お客の諸君は準備しろよな。」「おら、ねぼけんなよそこのグレイシア。死んでも知らねえぞ。」テルルの無線機にヘリの乗員の声が聞こえてくる。その声を聴き、ぼんやりとしていた彼女はハッとすると同時に、言いようのない不安と恐怖が再来し、持ち込んだ銛を再び握った。

……どうしよう……また来ちゃった……

……今度は……ダメかもしれない……もしかしたら……

そう彼女を怖がらせたのは、このＳ－６１ＨＣ．４の無機質な（人間の機械らしい）機内と機器類、そばにあるドア・ガンの所に立っている兵士のせいかもしれない。または、すでに傾きかけた夕日に照らし出されたミスラタのさびれた風景のせいかもしれない。いくら国連が海上メガフロートへの移民を進めてようとも、どんなに欧米、韓国、日本等の企業が進出して遅れていた工業化が動き出しても、アフリカの紛争、環境、民族等地域問題はまだまだ相変わらずだ。特に昨年から激しい内戦状態に陥っているリビアの風景が今こ

の瞬間外に広がっているのだから、多少気が滅入るのは無理もない事だったが。

「おいおい！もうダメか？この時点でビビってたら話になんねえぞ！」ブレイブが彼女の右前足をボンとたたいた。すでにみんな各種装甲板と無線装置、武装類を装着しているせいか、叩かれた部分がかなり痛む。テルルは気を取り戻したかのようにこのブースターに明らかな不快感を浮かべた。

「な、何言ってんのよ！それにさ…わざわざ装甲板装着したのでやる？」

「やるぜ。その程度で文句言うなって。」「文句の一つも言いたいよ全くっ……まあた……こんなところにさ……」このグレイシアの表情が曇る。「連中を救う。それだけだ」ブレイブが持ち込んだ洋弓銃を前足でなでる。「……確かにおまえにとっちゃ不条理に感じるわな…人間どものパシリっぽいからな…」「……まあね……でも…ワタシは…」「やっぱだろ？俺たちはポケモンだ。……危険にさらされた奴をほっときはしない。でもまあそれは理想論だ…本音は…」「……ブレイブ……アンタもやっぱり…」

「そうだぜ。自分の信念、それにかけりゃいいんだ。」ブレイブがテルルの前足をまたポンとやった。「テルルには守ってやりたい奴がいる、そいつのために来たんだろ？……んならそのために今を尽くせばいいんだ」

……そうよね……そのために頑張るんだからね……テルルの顔がわずかに赤くなった。同時にブレイブに対して初めて信頼のよ

うな感情が湧いてくる。

「んで、俺はもちろんテルルの為だぜ！」ブレイブが尻尾を振った。同時に前足で彼女のおなかの部分をすりすりしてきた。「やっぱテルルちゃんは肉が締まってるなあ。めっちゃかわゆすぎる！この体を明日を拝むために俺は…」

「はあっ！？キモっ！やめなさいよホントにもうっ！？」「い、うぐえっ…」テルルがその前足を猛烈な勢いで振り払った。ブレイブはその勢いでシーキングの金属製スライドドアに頭をぶっつけた。

「……ホントに助かってんのかよ？この調子で。」リーヒュンがところどころに硝煙が上がるミスラタ郊外の砂漠の風景を眺めた。開発のための地下水採掘施設や沿岸部から運ばれた淡水化される前の海水貯蔵タンクの周囲は淡水化施設や浄水施設としてある程度緑化されているものの、それ以外は北アフリカ特有の砂漠乾燥地帯だった。その風景を見つめながら彼には下から感じる微妙な気配で妙に気が重くなるのを感じた。

……下の連中は……本当に生き残っているのか？……戦闘はかなりひどかったようだが…

「うん、大丈夫大丈夫！あたしはそう感じるよ。必ず助けられるよ……」ユイリィは途中まで元気よく言ったものの言葉が尻すぼみになった。彼女にも下の状況や気配を感じたのだろう。「…全員がそうかまでは…保証できないよ…うん……ごめんね……」彼女はリーヒュンの首の葉っぱにツルを置いた。

「いや…ありがとうな。俺たちがやるんだ。それしかないんだから」このベイリーフはユイリィの頭の上にいるロズリンの葉っぱをくしゃくしゃとツルでなでた。「お前もついてきたんだからさ、しっか

り頼むぞ。バトルの能力は低くなさそうだから。」「が、頑張りましゅ……」このシェイミは不安なようだ、彼にはそう感じた。まあ、戦場に行って落ち着いていられる生き物はそういないが。「ほーんとに大丈夫なの？あたしがなんか役に立つかなっと思って連れてきたんだけど」「役に立つとかお前が決める事でしゅかね？」ロズリンがこのメガニウムの雄蕊をぐりぐりといじった。「い、痛い、いたいっ！やめてよもうう！！それにさ、あたしだって一応年上なんだからね！」「認めないでしゅ。ばかそうだから」「うぐぐぐうぅぅぅ……」「あのな、とりあえず彼女も年上なんだからビシバシいうのはどうかと思うぞ…」ユイリィがへこんだような表情を浮かべた。

「はあ…リーヒュン…どうしよう？こんな調子でロズリン扱えるのかなあ…あたしね…こういう小さい子の相手、ていうのはちょっとね。」「俺も知らないよ。…でも…たぶん何とかるなるとは感じるけどね。ユイリィが…こう…気長にやれば…」「うーん？やっぱそんなもんかな…子供って…」

今回、ロズリンを連れてきたのは、前バトルをしてみてリーヒュンが何となくそう感じたからだ。もしかしたらこのシェイミには何かしらの能力があるかもしれない、そして役に立つかもしれない、と。ユイリィも最初のうちは、「え？うーん…リーヒュンの勘があてになんない訳じゃないけど…ほら…あたしの事さ…自信ないんだ…」と難色を示していたが、施設においてゆくのも何かと考え直し、ロズリンの意志もあって（「ユイリィのバトル、生で見たいでしゅね」）仕方なく（？）連れてきたのだった。

…ちゃんと守ってあげられるかはわからない……でも…何とかなるよね！…と無理やり納得して。

「……そ、そうだよね。ありがとう！！まあもう少したてばあの子も…」彼女があいまいな笑顔を浮かべたその直後……

ボフン！遠くの方から爆音が聞こえ、硝煙のような煙が上がった。ヘリのパイロットたちが操縦席のガラス越しにそれを発見する。「おいおい？！」「ありゃなんだ？着陸点あたりだ。」

４匹の無線機も同時になった。

「奇襲だっ！！着陸部隊…至急援護を…っ！！！！！！！！！！！！！」轟音と銃撃音が響き、声が途絶える。「中隊指揮車両被弾っ！ちっくしょう早く来いっ！」「そっちだ！そっちに行きやがった」「前方の車両をやれ！撃たれる……」おそらくは潜伏していた政府軍側だろう。不意の戦闘にイギリス軍側は大混乱のようだ。

「統合軍司令部だ。待機中の部隊が奇襲された。君たちの降下ポイント付近らしい。降下と同時にまず部隊を掩護しろ。救出任務はその後だ。」アラスカ・エルメンドルフにある統合軍司令部の落ち着いた声が聞こえてくる。

十数秒後にはその上空にヘリが到達していた。だが戦況はこちらに傾いたようだ。ピラーニャ装甲車が一両被弾して炎上していたが、体勢を立て直した英軍はＴＯＷランチャーや擲弾で政府軍側の車両を粉砕してゆく。

「よっし！おまえら行って来い！援護はしてやる！」シーキングのドア・ガンの銃手（ガナー）がドアを一気に開け放ち、機関銃を乱射しながら無線機越しに叫んだ。

「おっしゃあ！行くぜこらっ。頼むぜテルル！」ブレイブが背中に回した専用の洋弓銃をバンバンとたたいてヘリから飛び出した。

「り、了解っ！一気に追い払わよ！」テルルも後から続く。

「リーヒュン！！行くよ！！いつも通り落ち着いて、ね！」「お、よしっ！頼むぞユイリィもっ！」ベイリーフとメガ二ウム２匹も続いて接地したヘリから飛び出した。

いつも通り、ユイリィの心の中に戦場の様子がグラフィックのように広がり、手で取るように状況を理解できる次元に突入した。意識を空間と一体化させた高揚感が彼女を飲み込む。その高揚感はその数秒後にはむさぼるような戦闘の狂喜に塗りつぶされた。

「撃て撃て撃てっ！」「ふん！その程度であたしに…」このメガニウムは思念で政府軍装甲車と兵士から発砲してくる弾丸と機関砲を打ち返しながら飛び掛かった。「こいつっ！」「無駄ね！」後ろから飛び掛かってつばめがえしを浴びせようとしたムクバードをツル１本で地面に首を折り飛ばした。そいつは首を折ったのみならず彼女のオーラの衝撃で体が真っ二つになった。「そう…勝てっこないよ！」彼女は車両の上部装甲にいた兵士を全部頭でたたき飛ばすと装甲車に最大馬力でツルを突き立てた。思念によって２０００℃近くになった熱エネルギーが車両の燃料と搭載していた歩兵用弾薬を誘爆させる。装甲車に乗っていた兵士は、何が起こったかわからぬ

まま爆発に巻き込まれて０．５秒後にはその体を分子レベルで蒸発させていた。彼女はそれを軽々と跳躍して着地し、リビア政府側のポケモン数匹に飛び掛かる。

「３匹かかって１匹相手に苦戦してるなんてさ！いっくらなんでも…」「き、きさまっ！…」軍刀で突きかかったギャロップをツルで腹から上に切断した。そいつは半分溶けだした内臓と血液をばらまきながらその場に溶けるように倒れる。

「そっこかっ！」「この雑魚っ！」２匹がかりでとびついてきたマッスグマのきりさきを彼女はわずかに飛びのいて首をわずかに回すだけで難なく振り切り、そのままツルで片方を掴んで至近距離でタネマシンガンを浴びせた。ガシガシと衝撃がツルに感じられ、相手は大穴が腹に相手真っ二つになる。

「もらったわよっ！！」「ううっ？！？！」もう一匹が不意を衝いてユイリィの首元にやりを突き立てようとする。その直後「ミミッ？！！」びっくりしたロズリンが彼女の頭の上で何かを打ち出した。

相手は高速で１００メートルは後方にすっとび、近くの建物に命中して暴発した。

「えっ？！何やったの今？」「ミーのわざ、でしゅかね？」

「こんのっ！」テルルもシャドーボールで装甲車を一台歩兵もろともぶっ飛ばしたが、次の瞬間何かの爆発に吹き飛ばされ、起き上がる前に上から組み付かれた。

「ううっ？」「消えなっ！！」そのクチート、どうやらさっきのはラスターカノンだったようだ。とどめを刺そうとキバを振り上げる。

「なっ…」テルルは至近距離でこおりのいぶきをぶち込み、軍刀で腹を突き刺した。血しぶきが彼女に直撃する。
「もらったぜっ！！！！」その後方からブレイブがかえんほうしゃを打ち込んでこいつを後方へたたき飛ばす。タイプの特性上フラフラになった相手に彼はＭ－６７手榴弾付きの矢をぶち込んで息の根を止めた。テルルはその間に飛び起きる。

「あんたもなかなかやるじゃない。…て後ろ！」「へへっ！さすがに…ておいっ！！」後方から飛びかかってきたツタージャにリーフブレードを打ち込まれながらも彼は前足の装甲板でそれを打ち払って後ろに飛びのき、かえんほうしゃを浴びせる態勢に入って飛び上がったツタージャの下に回り込む。だが、その前にこいつは何かの爆発に巻き込まれ体を四散させながら後方に吹き飛んだ。「なっ…？」
「いやいや。俺もこれくらいできないと、なんだか、だろ？」リーヒュンが2匹のもとに飛び込んできて首の葉っぱをふるった。だいぶ血しぶきを浴びているから5，6は人間かポケモンをやったのだろう。
「さっすが俺の友人！！持ってるだけのことあるなっ！」「そりゃな。テルルは？」「ぜっんぜん問題なしよ！」

各員の無線機が鳴り響く。
「あらかたやったようだな。深追いはやめとけ」どうやら撃退したらしい。

結局リビア軍側部隊を壊滅に近い状態まで殲滅したものの、この戦闘でイギリス軍側は指揮を兼ねた装甲車両1台が大破し、3人死亡、４人負傷。国連側からやってきた４匹の支援はできない、という事

になったらしい。これ以上部隊の損耗が大きくなれば、当然のことながら本国のメディアで報道されて部隊の派遣に対する世論感情を逆なでしかねない、というのが理由のようだ。統合軍の増援が夜には変わりに来るからそれまでは独自に捜索するよう指示が来た。

「何よそれ?それまで孤立無援、てことよね?はあ…マジやだ。」

テルルが鼻を鳴らしてもみあげ状飾りをいじる。「文句を言うな。ポケモンなんだからそれくらい慣れてるだろ?…アンタらが戦死しても戦死者数にカウントされないんだよ。…だから使われるのさ」

潜入部隊の隊長らしきイギリス人の男が引き上げ準備にかかる車両に顎をしゃくって顔をしかめた。

「……あっそう……よーくわかりました…隊長」テルルが顔をうつむかせ、思いっきり不愉快さと嫌みの込めた声を出した。激しい怒りと人間に対する呆れを感じたが、その男は首を振って装甲車の方へと向かっていった。

「そんなんで大丈夫なのかよ?」ブレイブが負傷者を乗せた先ほどまで乗っていたヘリを見ながらぼやいた。

「やってみるしかない、てことだろ?困るよな…」リーヒュンが撃破されて遠くで炎上しているイギリス軍のスイス・モクワ社製ピラーニャ装甲車とリビア軍の車両をちらりと見てため息をついた。

……最初っからこれか…生きて帰れるかな?……

軍隊というもの（後書き）

結局戦闘らしき戦闘に入らなかった……

やっぱ長期戦になりそうです……

しばらくあとがきは省略！！！、ということで…

ユイリィ：また？

…はい。

ミスラタの一角で（前書き）

またも新キャラ登場予定！！

以下まえがき省略っ！

ミスラタの一角で

２０１２年　１１月１８日　リビア・ミスラタ郊外　１６００時

「…で、どうやって探すの？あたしの勘に頼ってもらってもいいけどさ、そしたら敵と対面する事ばっかだよ。うん。」ユイリィが半分笑顔、半分困惑といった表情を浮かべて首元の花を揺らす。

「そ、それは困る！困るよ！やばいってことでしょ？」「うん。まあね」その言葉にテルルは気色ばんだ。「うええ…どうしよう…」「おいおいっ！最初っからそんなのか？ホントに生きて帰れなくなったらどうするんだよ。まあ俺がいるからその確率は大幅ダウンだけどな。」ブレイブがわずかに震える彼女の前足をなでた。彼女の方は「そんならいいんだけど。でもあんたの言う事にはイマイチ信憑性持てないし。」と少々嫌味を込めて返答した。

「ったく！相変わらずテルルちゃんだなあ！リーヒュン、お前の勘は聞いてなかったな。どう思う？」

「俺に振るか？まあいいけどさ…」リーヒュンは首元の葉っぱをツルでいじる。「ユイリィの言うとおりかな。俺の勘に頼ったら間違いなくブレイブたちは危ない。」「でしょ！うちらは問題ない、としてもね…」「まあ…だいたいは、な。」「マジかよ…別行動で行くか俺ら？」リーヒュンの自信と不安が混じった発言にブレイブが呆れたような笑みを浮かべる。

「私ブレイブとはいやよ！そのほうが余計に助からない、気がする。」テルルはますます嫌そうな表情を浮かべた。おそらくはこのブースターが嫌いというより彼と一緒にやっていると惑わされて集中できない、というニュアンスの方が先行しているのだろう。

「それも考えなくちゃいけないのかあ。うーん？」ユイリィがため息をついて先ほど被害を受けたイギリス軍の部隊が撤収する直前に入った通信のメモを眺めた。羊皮紙の文字は子供の書いたような丸

っこくて少々乱れた足型文字が走り書きされている。
「まったくだよな。それにわざわざ無線でいうより携帯型端末、とかいう物を持ってきてくれりゃよかったのに。君の文字は読みづらいし情報も少ないよ。」「そ、そんなのはさあ、言葉に含まれたあたしの意志から読めるよね！そこは突っ込まないで、お願い。」リーヒュンのぼやきにユイリィの顔が少し赤くなる。
「それは言えるぜ！ユイリィの文字は昔っから読みにくい、てアメリカ軍の連中も国連軍の連中にも評判だったからな」「そ、それは言わないでよぉ！あたしだってさ、きれいに描く努力はしたんだよ。うん！」ブレイブのツッコミにこのメガニウムの顔がますます恥ずかしそうになった。
「ともかく」テルルがため息をつく。「これを元にやれってことでしょ？」

（以下は正式な通達内容）
要救助者の１５３０時現在の位置データが解析を完了した。リビア政府側の反政府軍に対する電波妨害によって国連統合軍の観測衛星やヨーロッパ側からの長距離電波スキャンにも悪影響が出ていたが、君たちの作戦遂行に最低限役に立つだけの情報は入手できた。要救助者の現段階での生存者数は5名から１０名。軍事衛星によるセンシングの結果、その大半は君たちの降下したポイントの半径１０キロ以内にいると推定される。この範囲を重点的に捜索し、可能な限り多くの生存しているポケモンを救出せよ。なお、君たちの作戦を支援する予定だったイギリス軍の特殊部隊は、先ほどの奇襲戦で少なくない死傷者及び装備への被害を出しており、君たちへの支援は不可能となった。エジプト国境付近のデザート・ブリッツ基地周辺に駐留するアメリカ軍の部隊数も少なく、増援は困難だ。そこで、当初回収予定時刻のあす０６００時に国連統合軍の強襲ヘリＶ－２２Ｂオプスレイ2機と支援部隊がそちらに向かう事となった。この

部隊が到達するまでは君たちの判断で生存者とともにミスラタ周辺に潜伏、予定時刻になったら当初の合流ポイントに向かってほしい。ただし、先ほどの戦闘であらかた撃破したとはいえ、リビア政府軍側の部隊がまだミスラタ周辺で活動している可能性は高い。その場合、相手はポケモン以外に戦車や戦闘ヘリ、戦闘機などである可能性も十分ある。防衛戦闘は許可するが、回収時に政府軍が多いと国連軍のＶ－２２Ｂが接近できなくなる可能性もある。奴らを挑発しすぎないようなるべく最小限にとどめてくれ。

厳しい状況下かもしれないが、我々統合軍前線司令部もアメリカ・アラスカからできるだけの支援と情報提供は行う。頼んだぞ。

「これ、ね…」ユイリィが3匹の目を見回して（背中にいるロズリンは別だ。）紙をくるっと丸めて装備品のカバンに押し込んだ。「どうする？2匹2匹に分かれるのが手っ取り早いと思うけど。」

「うん。それが一番早そうだ。」リーヒュンがツルで背中にくくりつけた弓矢をいじる。「確かに。もめそうにないしね。」テルルもうなずいた。

「やった！それじゃ決まりだね！あたしはもっちろんリーヒュンと…」このメガニウムは自分より年下のベイリーフ（背丈はそう変わらないが）に首をすりすりした。「おっしゃあ！それじゃ俺はテルルちゃんと…」ブレイブもグレイシアに自分のフサフサ毛を摺り寄せる。

「困るっ！！！！」2匹は同時に拒絶した。

結局は、男（オス）は男同士で女（メス）は女同士でそれぞれ南北からこの辺りの中心部に向かうことになった。まあはっきり言ってそのほうがトラブルも（特にブレイブとテルル）も少なさそうだし、効率もよさそう

だったから。

「しっかしまあ、お前とまたこうやって悪ふざけ的な冒険をするなんて何年ぶりかなあ」ブレイブがリーヒュンの背中をポンと前足でたたいた。「そうだな。子供時代の時もこんな事してたっけな」リーヒュンも思い起こすように首元の葉っぱをいじった。「ブレイブがまだイーブイでさ、俺がチコリータだったころだ。……こっちの方かな……」「そうだったな。本当に楽しかったぜ！…」「うん。あんときは世界の事なんか知らなくてさ、シーベルトもエンデバーもおんなじだった…」彼は度重なる陸上や航空機からの砲撃やミサイルでスクラップ同然になった車両（トヨタ製）をオーラを少しかけたツルで軽々と廃墟同然の商店にどける。

「ここらを通り抜けた…３０分くらい前かな…で、あっちの方向へ向かったわけだ…」「さすがだぜ俺の親友！やっぱりあの直感の良さは嘘じゃなかったな！」「役に立てばいいけどさ。俺まだこれくらいしか見えない…ユイリィくらいになれば手に取るように状況がわかるんだけど」リーヒュンがツルを地面に当てて通り抜けていった思念を感じ取る。ブレイブは自身も瓦礫をひっくり返して生存者がいないか調べながら、その様子を目を丸めてみていた。しかし、また１か所、また１か所とリーヒュンが勘をつけたあたりを調べて言ったものの、何となく向かっていく足跡しかわからずブレイブも彼を信頼しながら作業にあたってきたが、さすがに疲れてきたようだ。

「はあ…こんな瓦礫を一個ずつひっくり返してけんのかよ？こんなことやってたら夜になっちまうぞ！」「ごめん。俺がもう少しはっきり把握できればな……もう少し頑張ってくれよ、な？」このベイリーフは友人の表情を気遣うように声を漏らした。

「いやいや！お前を責めちゃねえぞ！お前はさすがだよ。この程度

の事じゃ…」ブレイブがそこまで言った時だった。

彼らの一番近い場所から2軒隣の建物からゼブライカ、ラフレシア、サンダース、その他ごたごたとポケモンが洋弓銃、旧ソ連製アサルトライフルＡＫ－４７、弓矢や軍刀をもって出現した。その容姿からすればリビア国軍の回し者であることは明らかだった。

「こ、こいつら…そうか。」「やっぱな！ふつうこういう状況じゃ…」リーヒュンはツルをを使って持ってきた弓矢（矢先にアメリカ軍のＭ－６７手榴弾）を引っこ抜き、ブレイブは背中に装備ベルトと一緒に縛ってあった洋弓銃を前足で引っ張り出して後ろ足で立って構えた。「無駄な抵抗はやめておけ…」相手方のサンダースはなるべく戦いを避けたいような冷静さと甘い希望とを兼ねた声を上げた。確かに2対１４、これぐらいの戦力差でバトルする状態ではこの2匹に勝てるはずがない。しかし、このブースターとベイリーフはその程度で投降するはずもなかった。

　リーヒュンができるだけの意識をこの戦いに集中させる。隣にいるブレイブの息づかい、自分の意志、目の前にいる敵の感情や思考、周辺にある車や建物、機械類がいっしょくたになった瓦礫や硝煙の動き、首元の葉っぱを揺らす微妙な風、ここより南側にいるテルルやユイリィ達の状況と感情。

これまで感じたことのない奇妙な意識だった。しかし、彼には妙に納得していた。

…これが彼女の言ってた…意志か……彼自身が、周りの全てが、友人が自分の宇宙の中で公転し、一つの目的をもって運動し始める。

彼はその複雑な宇宙を心の一点に集中させ、ツルと全身にそのエネルギーを流し込む。

「いつも通りいくからな…そっちは任せた。」「おっし。やろうぜ…」2匹は静かに息を合わせ、前足を飛び出すタイミングを伺う。それは何年も前に2匹で隣町の連中とバトルした時のような感情が伴ってきたようだった。「ブレイブ…やっぱり2匹でやると…上手くやれそうだ」「俺もだぜ…」

しばしの沈黙……

その刹那……

相手のポケモン達が一斉に弓矢、でんげきは、ほうでん、マジカルリーフ、アサルトライフルの弾丸を打ち飛ばしてくる。2匹は同時に飛び跳ねた。

タネマシンガンやはっぱカッターの刃物と化した有機物やでんげきはの電気、銃弾や矢が雨あられのように降り注ぐ。ブレイブの周りに１００、２００、それ以上と無数の殺気のこもったエネルギーや物質が通り過ぎる。彼は身をひねり、跳躍でとび越え、飛び込んできたシャワーズを軍刀で切り捨て、前転をうって花びらを回避し、前から来たラフレシアをかえんほうしゃで火だるまにした。「させるかっ！」一匹のキノガッサが右手を引き延ばしてパンチを打ち込もうとする。ブレイブは前足の装甲板でそれを打ち払い、左手のそれも頭をと全身を地面に突っ伏してかわし、息を吸い込んでそのばねの勢いで上に飛び掛かってニトロチャージを浴びせた。キノガッサは前方の建物にたたきつけられながらも2本の足で壁を蹴り壊しながらまた飛び掛かってくる。「ええいっ！！」後ろからもパチリスかスパークをかけながら走りこんできた。ブレイブは息をついて上に飛び上がり、アイアンテールを仕掛けてきたキノガッサと先ほどのパチリスの上から軍刀を突き立てる。「もらったあぁあっ！」「ぐきゃっぅぅ！」「てめよくもっっっっ！」パチリスの上に刃を

突き立て、血液が噴水のようにこのブースターを襲った直後、キノガッサがばくれつパンチをあびせかかった。ブレイブは前足をかがめ頭を下げてそれをやり過ごし、同時に前へと踏み込んで奴の懐までに寄せる。「な！？」「甘いんだよっ！！」彼はその位置からだいもんじを浴びせる。１７００℃をはるかに超える熱がキノガッサの皮膚と内臓を一瞬で焼きつくした。その勢いで奴は数メートル後方のミスラタの廃墟の中へ飛び、焼けて黒こげになった物体と成り果てた。

　リーヒュンは自分の思念に妨げられることなくこれに沿ってやすやすと攻撃を跳ね返した。四方八方、崩れかけたリビアの建物の３階、がれきに埋もれた車両、倒れかかった電柱の上、撃破されたリビア軍やフランス軍、イギリス軍とも見分けのつかぬ戦車や装甲車の瓦礫の中からポケモンたちが次々に飛び出し、このベイリーフを襲う。“きりさく”にかかったリングマを片方のツルでシールドを張って防ぎ、もう一方でリーフブレードをかまし、内臓と皮膚と骨を一瞬で水蒸気に変換して、奴を思念をかけた前足で蹴り飛ばす。あくのはどうを打ち込んできたブラッキーとエーフィのエネルギー波を頭をかがめて前に突っ込み２匹のうち片方をエナジボールでバラバラにした。「ぐきゃあっっ！？」「んんんっっ…」かろうじて回避したエーフィの後方上空の建物の上からリオルがまわしげりをかけてくる。「こっのていどならっ！」リーヒュンは体と首を一気に飛び越えたエーフィ側にひねり返し、わずかに意識を送ってリオルの蹴りをふさいで弾き飛ばし、空中で体勢を立て直す前に思念を送って奴の心臓の高さから真っ二つにした。「どわあっっぅぅ！」その瞬間、彼には倒したリオルの意識が頭の中を駆け巡り、足元がほんの一瞬ふらつくのを感じた。

……しかし……しかしっ！……

「こっのののののおっ！」「っっ！！！」その隙に先ほどのエーフィがしねんのずつきをかけながら飛び掛かって組みつかれた。一瞬動揺したリーヒュンだったがそれをかろうじて首をひねって振り切

り、外しざまに軍刀を背中から突き立てた。その直後に上から低空飛行で飛び掛かってきたアーケオスに対し彼は一気に加速して頭から飛び掛かり、フルスピードで向こうの建物の廃墟へ飛び込みながら思念を送りこんだツルをこいつの心臓に突き立てる。

「もらったぁぁっ！！！！！！！！！！！！！」「ぐぶぅぅぅぅぅっっっっ！！？？」瓦礫にたたきつけられて爆発が発生し、がれきと車の残骸の上に建物の大半が崩れ落ちた。

「おいおいおいおいっ！マジで大丈夫かっ？！」その一部始終がうっかり見えてしまったブレイブは無線機越しに友人を呼ぶ。「こいつううぅぅっ！」「どふっ？！」その直後１０万ボルトをうちはなってきたピカチュウをこのブースターはどうにかかわしたが、続けて尻尾を“たたきつけてきた”それをフサフサ毛のある頭から浴びて文字通り地面にたたきつけれた。

「しねややぁぁっっ」狂喜むき出しで軍刀を振り上げるピカチュウ。その刃が脳天を貫く０．５秒前にブレイブは頭の霧を払い、奴の腹の部分にかえんほうしゃをぶち込んだ。「ぐえっ…こいつ…」腹から胸にかけて重度の熱傷を負ったピカチュウは後方に後ずさるかのごとくよろめく。「ざけんなっ！」ブレイブはその隙に後ろに飛び下がると、後ろ足で立ち、洋弓銃をそいつの心臓めがけて打ち込んだ。相手は、まるでよく振ってから開けたアメリカのコカ・コーラ社製の炭酸飲料入りの缶のごとく鮮血を吹き出して、その場に崩れ落ちた。

「大丈夫かリーヒュン？！今行ってやっからなっ！」ブレイブは黒焦げた皮膚から鮮血が池のように吹き出すピカチュウの死体を踏んづけてさっき崩壊した建物の方へと走った。

「て、てめえ！？俺を殺しに来たのかっ？！それともリビアのくそ大佐のパシリかっ？！ああ？！」「だから違うんだよっ！俺たちは君たちの救助であって…」「捕虜に取る気だな？！おいこらっ後ろ

から来たブースター！！このくそベイリーフをぶっ殺しやがれっ！！！」

「な…何やってるんだよ?!こいつも政府軍か?!」「んだとっ?！」

このブースターが見たものは……先ほどのアーケオスの死体（あちこち体が不自然な方向に折れているが）のすぐそば、がれきの中でリーヒュンと一匹のポケモンがツルと軍刀でもみ合っていた。そのポケモン、コリンク種族。しかしそのわりには前後両足がすっかり成長し、子供っぽい丸っこさは既に抜けきっており、むしろ不良のような生意気な目線の方が妙にブレイブには気になった。しかし、その装備品や持っている弓矢の形、そして彼のものと思わしきそばに転がっている洋弓銃からこいつがリビア軍ではなく自治協会防衛軍所属であることがすぐにわかる。

……そっか……こいつがその要救助者の一匹だな……すっかり動転してるだぜ……

「ブレイブ、後ろ足頼んだ！」「おっしゃあ！任せとけっ！」この2匹は見事な連携でこの闘争本能むき出しのコリンクを4本の足を押さえつけた。しばらくは押しとめられながらも必死に逃げようともがいていたコリンクだったが、しばらくすると諦めたようにうなだれその場にうずくまったままとなった。

「……俺は絶対に言わない。仲間の位置は言わねえからなっ！」

「そうじゃないんだよ！俺らはアンタらの部隊を救出しに」「くどくど言うんじゃねえっ！その証拠を見せなっ！」リーヒュンの再三の言葉にもこのコリンクは応じようとしない。

「そんなら…」彼はツルをコリンクの頭に押し当てて思念を注いだ。

「あ?！きもいからやめろよこの…」コリンクは拒絶しようとして

ふと止まった……

……な、なんだ……この……彼の中から先ほどまでの警戒心と敵対心が一気にしぼんでいく。

しばらくして……

「……アンタらは……どこのどいつだよ？……」コリンクはか細い声で尋ねてきた。

こちらもこちらで大変な情勢だった。「ええいっ！！」テルルは飛びついてきたピジョットをつばめがえしが彼女鵜の頭飾り付近の脳天を叩き切る前にこおりのキバで相手を低温マヒにさせ、そのまま銛で心臓部を一突きにした。ユイリィもそこらでまごついているラフレシアやカメール、キルリア、マイナンなどを思念を最大馬力でツルから打ちだし、全員の心臓から正確に暴発させる。「行かせんっ！」「無駄よ！」後ろから飛び掛かってきたムクバードを横に飛んでかわし、リーフブレードで地面にたたきつけて真っ二つにした。

「ま、まあこんな感じか。うん！それで救助者はこっちの方かな…」ユイリィが思念であたりの空間に意識を寄せた。救助者らしい感情が“見える”のはもう少し向こうの方だ。

テルルは倒した鳥ポケモンから血だらけになった銛を引っこ抜く。

「私はまだまだ大丈夫よ！この調子で皆がいるところまで…」「ここでしゅよ」テルルの背中に飛び移ったロズリンが前足を指した。

「ここ？ここなの？」テルルがびっくりして背中側を見た。「う、うそ？！うちの見えたものはもう少し先なのに！？あ、あんたさ、冗談で言ってるんじゃ…」ユイリィの顔が赤らむ。「ミーの予想は

ここでしゅ。たぶんお前は兄ちゃんたちのこと考えてましゅね…」
「ン、ンな訳ないじゃん！」彼女の顔はますます紅潮する。
「ほっんとにここかな？」このグレイシアとメガニウムがシェイミの示す方向を見ると…

その先には確かにこの廃墟の中の建造物の１つ。数段の下へと続く階段の下には錆び果てた扉のようなものがある。この中に要救助者がいるのだろうか？ユイリィはもう一度意識をこのあたりに集中させ、ツルを地面に当ててみた…

……確かにこの辺りには無数の感情を感じる……この奥に……
しかし…

……じゃ、じゃあ…さっきまで感じてたあれは……

彼女の顔が一気に紅潮し、首を慌てて振った。「あ、あはは！やっぱここだよね！さっすがあたしのシェイミ！なんで気づかなかったんだろ？！や、やばい…」彼女の苦笑がとても哀れに見えたテルルは前足を彼女の前足においた。「べ、別に大丈夫よ。そういう事ってさ、誰にでもあるよ！うん。」「そ、そうだよね！！あはは！うんうん。」
「だいたい予想のつく事でしゅね…」ロズリンが耳元の花を振った。

「……ともかく、この建物の中、調べてみよっか」ユイリィが気を取り直して真面目に言った。「ま、まさか…中で待ち構えてるとかは…」「ないない！大丈夫！攻撃してきたところでうちとテルルならさ。それに…」彼女はその扉の向こうを見透かすような目線をする。「…それはないと思う。みんな疲れてるみたいだし。あたしたちに助けてほしいぐらいだと思うよ…」

「それ…信用していいの？」テルルが心配そうに聞く。「うん！行ってみよっか！」ユイリィがテルルの背中をポンとツルでたたいて扉のもとに寄った。

「私が先に入る。なんかあったら後ろからやっちゃってＯＫよ。」「うん。」テルルが私物品の銛を構えユイリィがツルを使って矢を番える。「じゃ、突入はお約束の合図、ていう事で…」２匹がドアに体を寄せて構えた。

「３，２，１、」２匹の緊張感が一気に高まる。テルルは銛をきつく握りしめた。「…行って行ってっ！」ユイリィが大きく息を吸って前足で扉を蹴り飛ばし、テルルが飛び込んで中に向かって銛を構えた。

ここは……

奥行きは人間の地下倉庫並くらいに広い。ただし中には照明が一個しかないのでかなり薄暗かった。おまけにポケモン特有の生体臭と湿度がこもっていて相当息苦しい上に蒸し暑い。テルルは思わず吐き気を覚えたが、ここで吐き出すのも救助者を不安がらせるだけだったので何とかこらえた。

この空間の隅っこの薄暗いところに２匹ほどポケモンがいた。ちょろちょろと動きまわっている残りの生物はネズミの類の小型げっ歯類だ。ポケモン達の方は明らかな恐怖と不安を対空レーダーの電波信号のようにはなっていた。

「こ、これ以上接近したら……」「大丈夫大丈夫！何もしないよ。」片方がユイリィに向かって何かを振り回しながら飛び掛かった。「ち、ちょっと?！」テルルが制止に入ろうと銛を振り上げた。「こんのっっ！！」「うっ…」ユイリィはツルでこのポケモンを受け止めたが、こいつが振り回した武器か何かがこのメガニウムの右前脚の付け根あたりに当たり、少し血が散った。「ユイリィ?！」「うんん。大丈夫！……うん……ほら……怖くない…怖くない」彼女は動揺もせずにこのポケモンをツルで抱きしめ。そっと頭をなでた。「…あたしたちはね、みんなを…連れて帰るためにね…来たんだよ……」

この空間のあたりには彼女の首の花から漏れ出る香りとエネルギー、そして彼女の思念に満たされていた。その優しい気持ちを含んだ流れがテルルにも感じられた。それはまるで他人の心をそっと撫でるような……

彼女のツルで作った腕（かいな）の下でしばらくこのポケモンは敵意をむき出しにしていたが、そのうちにそれが潮が引くように消えていくのが見えた。このポケモン、水色…濃いスカイブルー…のゴムのような体。頭には青色で米海軍アーレイバーグ級イージス駆逐艦のＳＰＹレーダーを彷彿させる大きな突起。尻尾はひれのような形状で左右のほほ元にはオレンジ色の突起。種族の名をミズゴロウという。その後ろでそっと事の始終を見つめているのは白い体に水色のストライプ。ほっぺにはこのピカチュウ種族と同様の黄色い発電・蓄電部分。尻尾はそれ以外の体の部位と比べて不釣り合いなほど大きい。このポケモンはパチリス種族。しかしユイリィが見る限り、かのアメリカ・ＧＢＴＸ社製のクローンポケモンではなさそうだ。このパチリスにしろミズゴロウにしろ通常個体の平均値よりは大きい。おそらく年齢にして１４，５歳といったところか。

「お、おいらたちを…」そのミズゴロウが拍子抜けたような子供っぽい声を出す。「連れて帰ってくれるのかよ?……」

ズドン！！！突如外から轟音が響き、カラスらしき鳥たちが一斉に飛び立つ羽音が聞こえた。「なな、な、何今の？！」「もうやだぁ！！」ミズゴロウに続いてパチリスまでもがこのメガニウムのツルに飛びついた。「テルルっ、外みてっ！」「もっちろんっ！」テルルは銛を構えて扉をあけ放つ。

だがその数秒後……

「はあ？！マジでびっくりしたわよ！アンタたち大げさすぎじゃない？」この女（メス）グレイシアの普段の声がユイリィにも聞こえてきた。「だ、誰なの？」「あのな。君くらいだったらこんな殺人者が入ってきたような防御態勢とるか？」「俺の足音の区別もつかねえなんてテルルもまだまだだぜ」いつもの見慣れたブースターとベイリーフの声が聞こえる。「この助けたコリンクがな、しばらく連中の注意をひきつけるとか言ってリーヒュンと俺の手りゅう弾1個ずつ矢にくっつけて打ったんだよ。まあ、日が暮れるまで持ってくれればそれでいいんだけどな。」

「やったやった！リーヒュン無事だったんだね！まあこう来なくちゃね！うん。」ユイリィは急に笑顔になってリーヒュンにいつものことながらのしかかった（というより凄まじい勢いで飛びついた）

「ぐえっ…だからそれは重いよ…」いやがるベイリーフをよそに彼女は嬉しそうに花びら付きの首を彼の葉っぱ付きの首に押し付けた。

「でもうちが期待しただけのことはあるよ！うん。やっぱ一緒だと楽しいな♪」ユイリィにとって、リーヒュンと一緒にいられることはどんな状況下でも単純に喜ぶべきことなのだろう。

「どこも怪我してねえみたいだなテルル。少しは自信ついたか？」

ブレイブがテルルのもみあげ状飾りを前足で触ったうえに自分のフサフサ毛をテルルの首元にこすり付けた。
「き、あんた、キモイわよ全くもうっ！こんな状況で、でも女の子にはすり寄るのね。はあ、マジ呆れる…」テルルがブレイブを突き飛ばした。「でもまあ、あんたの言うとおり…少しは大丈夫になったかも…」
「だろっ？！戦場なんてこんなもんだぜ。」ブレイブが起き上がりながら体をふるう。「お前みたいに戦場が本職じゃねえ奴がこういうところで生きていくにはな、とにかく経験と慣れが最優先だ。…テルルの目的は…生活資金…だろ？」「ま、まあね…」テルルが恐るべき女の子に対する洞察力に戦慄を覚えながらもあいまいに頷く。

……このブースター、なんでそんなところまで気づいてんの？……

その夜１１月１９日　００１０時

その夜このコリンク達がようやく警戒心を解いたのは夜半も過ぎたころだった。ユイリィがミスラタの街をフラフラしていた羊…どこかの農民が飼っていたのが逃げ出したのだろう…を早業で矢を使って殺し、この半地下倉庫に引きずり込んだ。ブレイブが火をつけて肉をあぶり、生存していた３匹に食べさせてやった。彼らは何日も食事にありついていなかったような目をして食べる。ユイリィが勘で地下の壁を軽く削ると水道管を傷つけたらしく（もともと断水していたようだが）、ちょろちょろと水が出てきた。それを３匹と４匹はのどに含んで体を…特に硝煙まみれの３匹を…洗ってやった。
　そのあとは７匹はぼんやりと焚火を見つめていた。特に話す内容も見当たらなかったからだ。３匹は後から入ってきたこの４匹に明

らかな警戒心を抱いていた。ようやくでもそれが緩んだのはリーヒュンとテルルが交互に入り口を見張っている間からユイリィが持ち込んだ時間空間儀（その日の月明かりや星明りに当てると半球状の空間に現在の太陽の位置が灯る。数少ないオーバーテクノロジーの１種）を使って天測した結果もう日付も変わってからである。

「そういやさ、お前らの名前と所属を聞いてなかったな。どうだ、言えるか？」ブレイブが不意に言い出した。この３匹、ぎょっとしたように目線を合わせ顔をつきあわせて何かしら小声で相談を始めた。「どうする？」「言ったら捕虜とか…」「バカ言うんじゃねえ。俺がそいつらを殺して…」

「……そんなに迷う事か？まあこんな連中が入ってきて言いたい等は思わないけど。」「何よこんなって？私がそれなわけ？」「たぶん俺の事。」「ありゃりゃ、リーヒュン認めちゃったね。」「何となくだよ。たぶん。」「でさあ、もしこの子たちがただの民間の人（ポケモン）だったらどうするの？」テルルが３匹をちらりと見た。

「それはないぜ」ブレイブが頭のフサフサ毛をなでる。「だいたいあんなに武装を持っていることからしてな、民間人じゃ無理だ。それによ、こんな情勢であれだけ正気たもてりゃ軍人の端くれ、という可能性がでかい、てわけだ……」

しばらくして３匹が向き直った。「確かに俺らは軍人だ。それにリビア政府軍の奇襲で潰走したのも事実だぜ。イギリス軍もフランス軍も俺らよりはるかにいい武器もちながら捜索もせずに敵をつぶしたら帰りやがった。あんたらは防衛軍の回しもんか知らねえがとりあえずは救出に来てくれた。そうだろ？感謝はしとくぜ」コリンクがつっけどんな声を出す。

「で、お前らはどこの所属だ？まずそこのコリンク」ブレイブが目線を合わせた。

「自治協会防衛軍第５方面軍第２大隊所属１７６１突撃部隊隊長、レオ・バイブル・ミュースカイ。階級は…んなもん知らねえ」コリ

ンクが目線をそらしながら言った。
「その隣は?」リーヒュンがその隣でぼんやりしているミズゴロウに聞く。
「おんなじ。１７６１突撃部隊所属、グリソム・ホワイト・トルーマン。階級?おいらも知らない…」普段からこういう声、こういう性格なのだろう。
「その隣のパチリス、あなたは?」テルルが見張りを続けながら聞く。
「まったく同じです!１７６１突撃部隊所属、ガトル・ハルミア・ムソルグ・リベント!階級は…えっと…すいません!」このメスが一番軍人らしい正確さだ。「そうなんだ…そんなに私たちも階級高くないから。そう固くならなくてもいいよ…」グレイシアが銛をいじりながら思案顔で呟いた。
「で、俺らはこうやって言ったわけだ。アンタらも名乗れよ。」レオが少し脅迫するような声を出した。

真っ先に嬉しそうにしゃべりだしたのはユイリィである。
「うちはユイリィ・ランタン・プレミドール。ふつうにタメ語でOKだよ!そのほうがうちにとっても付き合いやすいしね!うん。で、頭の上にいるのがね、あたしの友達のロズリンってわけ。」彼女は頭の上で寝ているシェイミをツルで指す。
「でさ、俺がこの…変わったメガニウムの仲間?…かな…リーヒュン・バイリング・グリーズて言うんだ。まあ、よろしくな。」「さっきから気になるんだけどよ、アンタら2匹はどうにも変わってるな…俺の知ってるベイリーフやメガニウムとはずいぶん違う」レオが探るような目線で2匹を見た。確かに2匹の放つ思念が3匹を無意識のうちに探りにかかっているのは事実だ。ブレイブやテルルのように慣れてしまえば問題ないが、そうでないと奇妙な違和感を覚えてしまう。特にユイリィの方はその風変わりな姿と相まってなおさらだ。

「で、俺がこいつらの先輩…」「違うッ！」「…いやいや、友人のブレイブ・エスコーツ・クレイバーってわけだ。リーヒュンが変なことしてきた迷わず俺に通報しろよ、な？」「いや、ブレイブの方が真っ先に通報だろ」ブレイブが嬉しそうに尻尾を振る。「それに…ガトルちゃん、とか言ったな。君はすっげーかわいい！！うおおっ食べちゃいたい！」そう言ってこのブースターはガトルに飛びつく。「えっ？えええっ？」

ずがんっ！間一髪でテルルが彼の頭に殴りを入れて止めた。「ぐえ…」「何やってんのよアンタは！……ごめんごめん。こいつこういう変態馬鹿男なのよ。ワタシはね、テルル・ルナマリア・オフリート・アストラフスキーっていうの。よろしくね。で…」

彼女はレオの方に振り替えると明らかに表情が憮然とした。「アンタ、生意気すぎるのよ。アンタみたいな奴が隊長だったら絶対長続きしないから！今後は自重すること。いい？」

「て、てめえ！好き放題言いやが…」「やめとけっての！」レオがテルルに飛び掛かりそうになったがブレイブが飛び上がってこのコリンクの後ろ足を食い止めた。

「こいつはな、男(オス)に対しちゃいつもこうなんだよ！まあおまえ知ってることじゃねえけど。わりいな。理解してやってくれよ…」「ふん！そういうてめえが一番早死にするんだよ！覚悟しやがれこのくそ女。」「何言ってんのよこの半不良っ！」「レオ！やめとけよ。こんなところで仲間割れしたって…」「テルルな、こんな年下に絡んだってテルルの立場がどうこうするもんじゃないぞ。」リーヒュンとグリソムがそれぞれを止めに入る。

「…まったく！アンタの部隊だから私が命令する権利はないけどさ、

せいぜい死なせないようにやっときなよ。」「お前に言われなくてもやってらあ…」テルルとレオはお互い不満そうにつぶやいた。
「レオってさあ、こういう事ばっかだから国連統合陸軍とかっていうのの人間に見捨てられるのよ。困っちゃうよね。」「そ、そうなんだ…意外とガトルってものを言う方なのね…」ユイリィの陰で見ていたガトルが首を振った。

２０１２年１１月１９日　エメリア・ソーラ大陸　パルク州の国連軍施設　０１００時

「……つまり……このまま３０２中隊の部隊を入れ替えると？…俺なりにはそれでもいいですけど……」バストークがうわの空でいう。
「そんな簡単に決めていいの？ピトムニクはどう思ってるのかしら？」サクラはサーナイト種族特有の手でこの３０代後半のメリープのモコモコ毛をそっと触った。ピトムニクは先ほどからうつむきがちで言葉を発しようとはしない。
「……いいんですよ。こいつにもグラシデアにももう危ないことはさせない。予備役編入で帰らせた方が幸せですよ…な、ピトム？」バストークは自分より背丈の低いプラスルの頭を前足でなでた。
「隊長…ワタシは…」ピトムニクの顔が上がった。「…いやです。やらせてください。」「お前も分かっただろ？この前のあれが起こったら今度は俺もピトムも助からねえんだぞ。家族に死体も見せら

れずにバラバラになっても…」
「なりません！！！」ピトムニクがほっぺから電気をぱちぱちと飛ばす。「自信あります！だって…ほかのみんなだって今は北アフリカで…なのに私だけ逃げ出すのは……とても…」彼女の声が震える。

「……わかったよ。お前の意見はよく分かる……」バストークが苦渋の表情で漏らした。「司令さん、やっぱこいつは…諦めきれんようです……もう少し考えます……」
「そう……わかったわ……」

２匹が司令の部屋を出ていくと同時に入れ替わる形でコジョンドのラクル秘書官がアメリカ軍の制服を着た人間を連れてきた。あす以降行われる東南アジア諸国とアメリカ軍の軍事演習の件らしい。

２０１２年　１１月１８日　シンガポール　中心市街地　２２００時

　シンガポールはマレー半島の南端に位置する小規模なイギリス連邦に加盟する国家。元はイギリスの東南アジアの貿易拠点として栄えていた。１９４０年代の太平洋戦争でかつての旧日本帝国に一時占領され「昭南」という地名が与えられたが、解放とともに独立。その後は金融を中心として急速に成長し、周辺のマレーシアやタイなどの経済成長が１９８０年代頃より起こると日本に次ぐアジアの経済地域としての地位を一気に確立し、アメリカのニューヨーク、イギリスのロンドン、中国の香港に次ぐ世界第４位の金融センター

ともなった。２０１０年時点でＧＤＰは２１７３億米ドルを記録し、ＡＳＥＡＮ（東南アジア諸国連合）の金融、経済、貿易、情報の中心地ともなっており経済成長と所得水準のめざましい上昇が続く東アジア諸国の経済・産業が強大化する中国経済の前に対抗する大きな原動力でもある。

そんなアジアでも上海に次ぐ経済大都市であるシンガポールにロックオンとチェギョンはやってきていた。彼らの乗ってきた。アメリカ軍の一部として参加する（２機のＡＷＡＣＳ（空中管制機）のうち、片方は正式なアメリカ空軍の“カノープス”だ）国連統合軍機のＡＷＡＣＳ“スカイ・アイ”も、もう１機、日本の沖縄県・嘉手納基地から飛んできたカノープスやＦ／Ａ－２２Ａとともにシンガポール・チャンギ国際空港の貨物ターミナルにまぎれるように駐機していた。これまで東南アジア諸国とアメリカ軍の軍事演習は海軍艦艇が中心であり、今回初めての空軍演習ではこのようなアメリカ軍機が本格的に整備できる施設やＡＷＡＣＳのような大型機が着陸できる施設を確保できず、やむを得ず世界各地に展開する地球最大の民間軍事会社“ボラリス・セキュリティー”のスタッフが（この会社は防空軍に近い武器形態を持ち、Ｃ－１３０輸送機からＦ／Ａ－２２Ａまで様々な軍用機を運用している）チャンギ空港の一角で整備をしているのである。（シンガポール政府は当初かなり難色を示したが）

すでに各国海軍艦艇や、アメリカ海軍の空母「ジョン・Ｃ・ステニス」は既にマレー半島沖にやってきている。中国は軍事衛星やその他情報源で間違いなく察知しているだろう。今回の演習の統合指揮所（この米空母だが）にとってその状況は気ばかりに違いない。

だが、このムクバードとチルタリスにそんなものは無縁であった。Ｅ－７６７の機内にいるよりはと、チェギョンがオーチャードのスコッツ通りにあるロイヤルプラザ・オン・スコッツホテルをなんと空港の公衆電話一本で話をつけてしまったらしい。さすがは旧朝鮮

王族の一族と暮らしていたことだけあってこういうところでの顔は広いようだ。ついでに夕食までもをクレジットカード一枚で決済してしまった。その上チェギョンはかなり食欲旺盛でロックオンの倍は食べた。

「あ、あのな…そんなに食って大丈夫なのか？」

「へーきへーき！ワタシにとっては食事量イコール元気量だもんね！　ん？金？そんなのカードで支払っとくから！何ケチってんのよ？」

「そんならいいが…」ロックオンは隣でシンガポール料理の1つ、海南鶏飯（ハイナンチファン）を（これは東南アジア版チキンライスの類）口に押し込むチェギョンを見ながら首を振った。日本の東京・大田区の下町の公園で人間たちの足元でそこらのドバトや野良猫と紛れるように暮らしてきたこのムクバードにとってこのチルタリスの金銭感覚はいまいち理解しがたい。

その後2匹はマレーシアとの国境にあたるジョホール海峡付近にある橋まで飛んできた。このジョホール・コースウェイがかかる橋には幅広く、終始車両が行きかう道路（というより、シンガポールはいつも渋滞気味だ）。その向こう側にはきらめくマレーシアの市街地と検問所が見える。そこで2匹はしばらくシンガポール市街地の方を眺めていた

「昔ね、私の家族とここに来たことがあるの！めっちゃ楽しいでしょこの国！」「楽しいとか何とか言ってもとにかく夜でも明るいな」

「そんなおっさんくさい事しかわからないわけ？あーあ、せっかく食事もホテルもおごるのにまじ萎えるわ…」チェギョンがロックオンの頭の飾りをモフモフ翼で触ろうとした。「でも…確かに明るいよね……うちでもさすがに眩しいと思うのは…やっぱポケモンだから？」「だろうな…」

目の前のコースウェイには多くの車両たちが行き来し、マレーシア側から水を供給する3本の水のパイプライン及びマレー鉄道がライトアップされている。マレーシア側にも多くのビルが輝いているが、中でもシンガポール側の市街地の華やかさは群を抜いていた。シンガポールの高さトップ3を占めるビル群…ＯＵＢプラザ、ＯＵＢセンター、リパブリックプラザ…が森で一番の大木のようにそびえ、周辺にも無数の高層ビルやＭＲＴ（高架鉄道）の高架橋が木々のように乱立している。アメリカの都市部や中国や東アジア諸国の沿岸都市、ヨーロッパの都市の再開発地帯、中東の産油都市と同様だ。その奥にはチャンギ空港とシンガポール港があり、シンガポール港側は周囲の大工場地帯と２４時間発着が行われているコンテナ船バースと相まって真昼のような明るさを煌々とはなっている。このニューヨークやロンドン、上海に次ぐ巨大な経済都市には欧米やアジアの大手企業が本社や支社を構え、近年は世界的に強大な日系企業ですら昨年の未曾有の震災とそれに伴う先進国らしからぬ慢性的な電力不足を避けて日本から本社機能や工場をシンガポールや東南アジアに移すものがいる。

そんな華やかな都市を見つめていたチェギョンがふと漏らす。「ユイリィちゃんたち…無事かな?…ちゃんと帰ってこられんのかな?」

「奴らのことだから平気そうだが……まあ北アフリカだもんな……」

ロックオンも遠くの明かりにかすんだ星空を見つめていた…

２０１２年１１月１９日　リビア　ミスラタ郊外　０５３０時

「……おい君たち、聞こえるか？統合軍司令部だ。間もなく“デザート・ブリッツ”から救出部隊のヘリが出る。お客は見つかったんだな？」４匹の無線機が今回初めて音を発する。

「ふあああ…やっと…」ユイリィが家で目覚めたかのように起き上がって体をふるった。「今まで何してたんすか？！おかげでこっちは不寝番ですよ！」ブレイブが目を前足でこすりながら言う。無理もない。レオ達が寝静まった後リーヒュン達は一睡もせずにこの地下空間の見張りと無線機の指示待ちをしていたのだ。特にテルルは終始ドアの付近に立って銛を構えていたのだから（「ワタシは全然平気よ」とかいって半分眠りながら頑張っていた）。

「まあ無線が？がっただけいいだろ？…で、この後はいったい……」リーヒュンが眠そうな声を上げる。

「君たちが降下したポイントに向かってくれればいい。そこで回収のヘリと援護の部隊に会えるはずだ。０６００時ジャスト。君たちの状況は一応こちらでも衛星でモニターしているが間違えるなよ。」アラスカの国連軍司令部要員はそういうとあっさり無線を切った。ガトルやグリソムもその無線の音でとろとろと目を覚ます。

「そろそろ救出のヘリが来るらしい。だからもうすぐここを出ようと思う。」「おいら…ホタチ忘れてない…？」「…でさあ、レオはまだ寝てんの…？…」

「…？ああん？そりゃ人間の無線機、てやつだな……俺たちにもせめて１つありゃこんな目には…」とうのそのコリンクは半分寝ぼけた調子で言った。

「なーに寝ぼけてんの？！アンタたちを連れに変えるお迎えが来たのよ。」テルルがレオの洋弓銃を拾い上げながら後ろを前足で蹴り飛ばした。

「分かってるよ。お前なんかに言われなくたって残った連中と一緒

に……」彼はそこまで言いかけて止まった。

……大事なことを一つ思い出した……

……あれだっ！……

……そして恐るべき戦慄が走ったのだ！！！！！」

「待ったっっ！もう1匹いるかもしんねえ！」レオが思わず声を上げた。

「まだいたの?!」4匹がそろって声を上げた。

「もう一匹いるんだった！確かあいつは……そう、こっから東に行っただだっ広いところで…」「降下ポイントか?!」「そこ、そういう名前かよ?……とにかくそこっぽいぜ！」

「確かに……」ユイリィがツルを地面に当てる……「あのあたりにまだ誰かいる予感がする…まだ生きてるよ！！！これなら」

「なんでそんなことがわかる?!」レオがかみついた。

「彼女の能力だ！」ブレイブが言う。「彼女とこいつはな、見てなくても周囲の状況や時間前後が意識で感じられるんだよ！」ブレイブの説明は焦り気味でイマイチわかりづらかった。

「俺はどれだけか……」リーヒュンが微妙な表情を浮かべる。

「なんだそりゃ?！そんなもん信じられっか……とにかく、そこら辺にいることは間違いないんだな?」コリンクは探るように言った。「アンタのそれを信じていいんだな?」

「うん。ほとんど！」ユイリィが確信をもって言い切る。「その子、種族は？」
「ロコンだ。でもあいつのことだから……煤と硝煙まみれになってるかもしれねえ…」

「ロコンだね！うん！」
ユイリィはツルをぱちんと鳴らす。
「了解っ！リーヒュン…探しにいこっか！！」「う、うん。そうしよう！」リーヒュン達がためらわずに外に飛び出す。

「おいおい！」「あと…こいつら連れて先に行ってほしい…頼んだっ！！」「わ、分かったけどさ…はあ…あの2匹はどうしてああやって無鉄砲なの？」「さあな…」

2匹の後姿を見てブレイブとテルルは呆れたように首を振った。

ミスラタの一角で（後書き）

とまあ、次回で無事帰還できるのか？

すなわち…次回でひと段落、てわけですね…

ソーラへの帰投、唐突の出会いと認めがたい別れ（前書き）

リーヒュン：タイトルやけに長いな。

……なんとなく。

いよいよ帰投です！！やっと戦闘シーン終わりだよ……

ソーラへの帰投、唐突の出会いと認めがたい別れ

２０１２年１１月１９日　リビア　ミスラタ郊外　０５５７時

「おいおいユイリィ！出てきちゃってホントに良かったのかよ？」
「大丈夫大丈夫！あたしの勘だとあと４０秒で見つかる。うん」勢いで飛び出してしまったリーヒュン達であったが、彼自身はいきなり不安にさらされていた。ユイリィの事が信用できないわけではない。しかし……

……ホントに見つかるのか？……これってなんかの罠とかじゃ……

「何不安がってんの？すぐ見つかるって！頑張ろうねリーヒュン！」お見通しだったようだ。「あ、ああ。もうすぐそばにいるよな」「うん！」ユイリィがベイリーフの頭の葉っぱをこつんとツルで押した。
彼女の頭の上で眠りこけていたロズリンがぶるぶるっと背中の草をふるった。そしてその１秒後、このシェイミは驚いたような声を出した。「お、お前ら何やってるんでしゅか！？」「お仕事よ」「お前の頭の上だと走ったら酔うでしゅ！」このシェイミはメガニウムの頭から飛び出し、隣側のベイリーフの背中に飛び乗る。「こっちの方が安全でしゅ」「そんなりゃいいや。な？」リーヒュンの表情が緩んだ。

「おい下のポケモン達、聞こえているか？国連統合陸軍・北アフリ

カ特別区方面軍所属の特殊強襲部隊のヘリだ。今君たちの後方で予定のポイントに降下中。５匹はこっちにくるようだが…そうか、勘がいい２匹はなんか探し物か？」リーヒュン達の無線機から声が聞こえてくる。

「探し物っていうより救助者です！ちょっと遅れてるかもしれ……」

「ぜっんぜん遅れませんよ！０６００時までにはそこに行きます！約束っ！」ユイリィが彼の声を妨げた。「ならいい、０６００時まであと１２０秒ないぞ。３０秒遅れたらおいていくからな？いいか？」「もっちろん！！！」このメガニウム、危機的状況にも関わらずこの明るい声、全くの余裕そうだ。２匹の後方では大きな２組のローターを徐々に上に向けながら降下してくるヘリコプターそっくりの航空機。

この機体はＶ－２２Ｂオプスレイ。アメリカのベル・エアクラフト社が開発した垂直離着陸が可能なティルト・ローター戦術機の一種である。主翼の両端に回転翼を装備したロールス・ロイスアリソン社製Ｔ４０６ターボシャフトエンジンを装備し、回転翼の角度を前方から上方まで自由に変更可能。これによってターボブロップ航空機並みの巡航飛行からヘリコプター同様の垂直離着陸やホバリング、ＳＴＯＬ（短距離離着陸）を実現した次世代の戦術機である。しかし、その革新的な構造のせいか開発当初は墜落事故やトラブルが相次ぎ、主飛行制御（ＰＦＣＳ）システムのソフトウェア更新やティルト・ローターに不可欠な油圧制御システムの改良を経て１９８９年の開発開始から２００５年にようやく１機目がアメリカ海軍海兵隊で実戦投入に漕ぎ付いた。自動制御技術が飛躍的に成長した現在でも操縦には専門の訓練コースを受ける必要があるが、その汎用性や性能が幸いしてかなりの高コストにもかかわらずアメリカ軍や国連統合軍のみならず、イギリス、フランス、シンガポール、オーストラリアの各軍で少数ながら投入され、日本の陸、海、空、各自衛隊も２０１５年度の投入が決まっている。

「大丈夫か？あんな自信たっぷりにで言ってさ！俺遅れるのは…」「だってうちらそういう能力持ってるんでしょ？なら怖がらなくても大丈夫！」ユイリィがそこらの瓦礫の山の中に飛び込んで急停止する。「ほらっ、ここ！あたしがのでっかいのを除けるからリーヒュンはその車みたいなのをぶっ飛ばしちゃって！」「よっし！やってみる」このベイリーフが多少なりともに前足にエネルギーを送ると、一息於いてがれきに埋もれた車がまるでプラスチックの模型のようにその部分がつぶれて横に引きずられた。

「よしどいた！」「この子だよね！」ユイリィがいともあっさりと発見し、救助したそのポケモンは……

全身があずき色のような艦艇色。尻尾は6本に分かれ先がふんわりと丸まっている。頭にもフサフサの渦状になった毛。ロコン種族である。

全身瓦礫の土くれと硝煙まみれ。その瞳はまだ閉ているが、ユイリィがツルをそっと近づけるとこのロコンの心臓の鼓動、確かな息遣いが感じ取れた。この子は単に気絶しているだけか、それとも（おおよそ信じがたいが）疲れて眠っているのかのどちらかだ。

……うん！この子はまだ元気に生きている！！！……

「大丈夫！生きてるよ！リーヒュン、頼むよ！」「うん。わかった！」リーヒュンはツルでこのぐったりしたロコンを抱え上げ、背中に大の字に乗せて2本のツルで押さえる。背中の様子を見なくともだいたい感覚でしっかり乗ったとわかった。

「ヘリのところまで一気だな！」「もっちろん！」2匹はＶ－２２

Bのいる場所に向かって一気に走ったが……

「うぐっ?!」「ふひゃっ!」あと２００メートルないというところで至近距離に矢が飛んできて２匹の前足元に刺さった。「みみみっ!」急停止した反動でロズリンがユイリィの頭元の４本雄蕊を掴みきれず前に飛び出しそうになった。

前にはルクシオやキュウコン、サボネア等１０匹はいる情勢だった。
「どうする?!」「一気に突破よ!」その時……
「みぃっ!?」ロズリンが恐怖にビビったか、突如として耳の花が真っ白に輝く。その１秒後には巨大なエネルギー波が炸裂し、至近距離にいたベイリーフ（リビア軍側の）の首元を貫いた。「!!!!!!!!!!!!!!」白く眩しい閃光が超新星爆発を人間の宇宙望遠鏡で捕えたように包んだ。

「っっっ!!??」「な、なにっ??????!!!!!」

その閃光が消えた時、相手の首より上の頭部は製鉄所の炉に突っ込まれたようになくなっていた。その首のない残骸はスイッチを切られたロボットのようにはいから漏れる機体の音を出しながらその場に倒れた。

リーヒュンはそのものが遺した感情に直撃され倒れそうになった。

……何という……俺は……

その直後。

「一気に行くよっ！」ユイリィの言葉がこのベイリーフを貫いた。

脳天にランプがともったようにやるべきことが、未来が、突破口が見えた。彼にとって初めての経験。周囲の空間が手に取るようにわかる。

１秒後、１０秒後、３０秒後、市街灯のように彼の頭を、意識を駆け巡った。

……これがユイリィが見る……世界……

……世界を……見つめる……

……フローラを……

「突破して見せるっ！」リーヒュンはその意識をツルに注入し上に飛びあがる。そのまま地面に着地する０．５秒前にそのエネルギーを、「いっけえっ！」その意思を前方に殴りこんだ。

……海上から上がる煙。残骸……

……明るい夜景の中一部が穴のように真っ暗になった人間の市街地……

……街中らに倒れたポケモン達の死骸……

……そのすべてのおぞましいエネルギーを彼は受けた……

……彼はそれを振り切り、思念を前方にたたきつけた。

リーヒュンは着地し、ヘリの方へと一気に飛び込む。その直後にあたりが暴発しルクシオやサボネアが血液と肉片を散らしながらバラバラになって飛び散った。

「こんのっ！」ユイリィもその０．３秒後には敵の中へと一気に突っ込み、リーフブレードで数匹引き裂いた。なおも食い下がるワタッコ２匹のタネマシンガンを後ろを振り返りもせずに体をひねり跳躍してそれをかわし、一匹をはなびらのまいで返り討ちにした。「ぐびゅぇっ！？」相手は断末魔のような声を上げて内臓をまき散らしながら墜落する。ユイリィはＶ－２２Ｂの後部ランプに向かって左側前後の足の爪を使って方向を切り返し、カーゴベイに飛び込んだ。「長居は無用だ。だしてもいいぞっ！」「おっしゃあっ！上手くいったぜ！」その後方から援護射撃を続けていた特殊部隊の兵士たちが数人カーゴベイに飛び込む。「ずらかるぜ！」オプスレイのパイロットが一気に機体を上にあげる。ブレイブやテルルはふわりと浮きあがったヘリにジャンプして飛び上がった。

「よっしっ！そんじゃ俺が最後の一発を……」閉まってゆく後部ランプから洋弓銃を乱射していたレオがその隙間から最後の一発を打とうとした瞬間、その矢先を白い前足が掴む。そのままこのコリンクはカーゴランプの隙間から下に落っこちそうになるほど引きずられた。

「な、なんだてめえ？！」「お前も…地獄に引きずり込んで…」キュウコンが前足でランプを掴み、レオごと下に引きずりだそうとする。「ン、んだとこらぁ…」このコリンクも抵抗するが、奴の首は一気にカーゴベイの中に突っ込まれ、前にもたげかけたレオの首をばっくりかみちぎろうとした。

「ううっ？！」「ち、アンタっ？！」テルルが右前足を突っ込み、キュウコンのキバの部分が彼女の皮膚に突き刺さった。「おいおいっ？！」「はあ？！その程度！あんたのその位じゃ……」テルルが左前脚で銛を突き出す。「私たちをやれはしないのよっ！」

テルルの一突きはキュウコンの脳天を見事にぶち抜き、鮮血をまき

散らした。一瞬びくっと硬直した相手の力は1秒後に抜け、閉まりかけたカーゴランプからミスラタへと落ちていく。

「後方6時、敵性と思わしき機影！」「援護の部隊！どうしたっ！？」「落ち着け！後方２５００にいる。奴らは引きけるぜ！」「頼んだっ！」２機のＶ－２２Ｂは鉄器を避けるかのごとく地形に追従しながら速度を上げる。チルト・ローターを飛行モードに切り替えたこの機体は通常の軍用ヘリの2倍は速度を出せる。後方から迫るリビア空軍のＦ1ミラージュの1機はその後方上空から切り込んできたフランス海軍飛行隊の艦載機、ダッソーアビアシオン社の“ラファールＭ”２機が、Ｎｅｘｓｔｅｒ社製“３０Ｍ７９１”３０ミリ航空機関砲で引き千切った。

ダッソー・ラファールはフランスのアビアシオン社が開発した汎用戦闘機。当初はフランス軍もユーロファイター・タイフーンを投入する予定だったが、自国ＳＮＥＣＭＡ社のＭ８８ターボファンエンジンの採用を主張するフランスとユーロジェット社のＥＪ２００ターボファンエンジンを採用しようと強硬姿勢を見せるドイツがかたくなに対立し、フランスがついにユーロファイター・プロジェクトから離脱、独自で次世代機を開発したのだ。それゆえか機体の外見にはタイフーンと相似する点も多い。

もう1機が回避機動のため上空に飛びあがると、ラファールは敵機をヘリから振り払うため追撃にかかった。

……助かった……か……

リーヒュンに疲れがどっと押し寄せる。先ほどまで気にならなかったあの悪寒が急激に彼を襲い、デッキにしゃがみ込ませた。

「やったやった！上手くいったよ！うん！」「そうだな。少なくとも今回は成功だ」ユイリィが大喜びで彼に飛び掛かった、というよりのしかかった。「リーヒュン、見えたよね！見えたんだよね！できたんだよ！」「ホントか？あれがそうだったのかよ？」

……あの飛び降りた瞬間にあたりが暴発した……

……あの悪寒を一瞬振り払った……意識を集中させた……

「うん、そうだよ！！あたしの期待してたより全然早い！」彼女は相変わらず嬉しそうに花びらのついた首を寄せてくる。「よく頑張ったね！これならこの先も大丈夫。うちらは一緒にやっていけるよ……」「そっか……」

テルルは噛みつかれて血まみれの右前足をふるった。だいぶこっぴどくけがをしたようだが、不思議と痛みはない。むしろ奇妙な達成感があった。

……ワタシは……また帰れるんだ！

……良かった……まだ生きてる！……

「だ、大丈夫かよそこ？」ブレイブが前足で彼女の足を掴む。「ぜ、全然痛くないし！別に歩けなくもないわよ。うん。」

「強がってんのか？まあいいや……」ブレイブが頭の装甲板を外し、フサフサ毛をかいた。「お前もだいぶ思い切った行動がとれたな。

どうだ、少しは慣れたか？」「どうかな？……少しは慣れたわよ」テルルはもみあげ状飾りをなでる。左前脚で頭の装甲板と無線機を外した。「……でも…アンタがいたお陰かもしれない。ワタシはこうして……自分の意志で……生き残れたんだから」「そっか。よかったな。この先も頑張れよ……」

「うっ…やっぱ痛い……」「ほらいったろ？無理すんなって。よっしゃ！俺がなめてやる！」ブレイブがテルルの前足をなめようとする。「はあ？！断固拒否よ！」このグレイシアは迫ってきたブースターの顔を左前脚で殴りつけた。

「ううん……？」リーヒュンの背中もとでロコンがもぞもぞと動いた。

「お、おいシンシア！？てめえ無事なんだな？」「い、生きてることにはそうよ…」レオが駆け寄る。「心配させんなっつうのこのグズ女！！どこかでくだばったかと…」このコリンクの声は散々小馬鹿にしているような感じがしたが、その中には奇妙な愛着のようなものが含まれていると2匹は感じた。おそらくはレオの性格なのだろう。

「くだばらないよ……絶対に……」「へんっ、強がってんじゃねえよ。俺がどんだけ心配したか……けどまあ、よかったな、生きて帰れて……」レオはこのロコンをベイリーフの背中から引きずりおろした。

「そうだ！名前はなんて言うんだっけ？」ユイリィがカーゴベイの床でまだフラフラしている彼女をツルでなでた。全身を包み込む不思議な感覚がロコンを覆う。

「……んんと……その……」「おせえんだよ言うのが！……すまないな。こいつ何すんにも時間がかかって……こいつの名前はシンシア・ベルーサ・カウンストポビア。俺らと同じ１７６１突撃

部隊だ。」レオが頭を起こそうとしたシンシアの頭のくるくる毛を前足で押さえつける。
「うへいっ！名前も見た目もめっちゃ……」ブレイブが飛び掛かってきた。
「やめとけよ。」リーヒュンがツルで吹っ飛ばす。「このバカっ！」ぶっ飛んできたブースターをテルルが羽交い絞めにした。

２機のＶ－２２Ｂオプスレイは朝日の輝く地中海へと抜け出た。このままエジプト国境へ向かうと、リビア軍の迎撃に遭う可能性が高いという統合軍の基地“デザート・ブリッツ”の判断だ。先ほどのミラージュＦ１を片付けたフランス海軍航空隊のラファールＭがＭ８８ターボファンエンジンをアフターバーナーでフル回転させながらオプスレイの上を通り抜ける。２機のＶ－２２Ｂもこの２機に続いて地中海に展開するフランス海軍の原子力空母「シャルル・ドゴール」にいったん着艦してから改めて“デザート・ブリッツ”に護衛とともに向かうことになった。

リーヒュンはオプスレイの小さな窓越しに外を見る。朝日を浴びて輝く地中海の海。はるか前方には地中海を行き来する民間船やマルタをはじめとする諸島を結ぶカーフェリー。そしてパンケーキのような人工構造物がいくつも見えた。あれは国連の開発した海上開発メガフロート群“ソアリング３”である。ここにはハワイにあるメガフロート群“ソアリング２”と同様、おもに北アフリカ系や南欧系の移住者が居住し（特に２０１１年初頭に発生した騒乱を逃れたリビア人やエジプト人の難民、同年７月に南北が分断したスーダンなどの難民が大多数を占める）、アフリカのサハラ砂漠周辺に設けられたメガソーラー発電システムの欧州への海底ケーブル中間地点

としての役割を担い、欧州及びアメリカ、日本など先進諸国や中東、東アジアの新興工業国や経済立国等にとって自然エネルギーや大規模原子力発電（国内で脱原発を唱えるドイツですら自国の原子力企業の開発には積極的だ）、水資源、レアメタルを中心としたアフリカ開発のフロンティアとして事務所や支社、エジプトなどの騒乱を考慮して一部の機能を移転した企業（日本でいえば日産や三菱商事など）が多数存在する。もちろん、ここにも沿岸国との問題や内部の治安問題、経済格差問題、沿岸国軍とメガフロート治安維持軍との衝突といった類も多数あるが。もともとから民族や軍事独裁に伴う衝突の激しいアフリカ情勢がさらに混迷・不安定化を極めても工業化、ひいては豊かになる権利を止めることを人間同士ではできないのだ。

「やっぱ空から見ると綺麗だね！人間の作ったものでも。うん」ユイリィが一緒になって地中海を覗く。「やっぱ…リーヒュンと一緒に来れて良かったよ。うちらならこの先もずっとやっていけると思う」「うん……俺もそうしたい」

「ほんと？」「そりゃな。フローラを助けるんだったら俺とユイリィ2匹でやったほうが上手くいく気がするんだ。少なくとも2匹でやる仲なんだから」リーヒュンがはっきりとそう言う。

「あたしのこと信じてくれんだね！約束だよ！」「するよ」ユイリィの顔がにわかに赤くなった。

……良かった！あたしのことを……一緒にやってくれる！……

「これからもよろしくね！！」「もちろん！」２匹のベイリーフとメガニウムがツルをぱちんとぶつけた。
久しぶりに上手くいった。成功の証。

いつまでも続いてほしい……ユイリィは上空に輝く朝日に願いを込めた……

「突破に成功！やりました！！」アメリカのアラスカ・エルメンドルフにある国連統合軍前線司令部のＣＩＣ（戦闘情報センター）でも２機のオプスレイがリビア領空を離脱することが確認されると（この女性、まだまだ２０代前半のような声だ）安堵の声が漏れた。
「今回は犠牲もなく成功したようだな」制服に多数の勲章と階級章をつけた年配の男がそれを見ながらつぶやいた。「ええ。特殊部隊のチームが上手く彼らを掩護してくれたようです。この調子ならあの話も通ると思いますよ」ここの責任者らしき制服姿の軍人がほっとしたように言う「そうだな。代表に話をつけてくる。詳細な戦闘データの作成、急いでくれ」「かしこまりました」

制服姿の年輩の男はＣＩＣをでると、このフロアの一つ上にある司令執務室へ向かうべくスイスのシンドラー・グループ社製の（アメリカ本土なのにオーチス・エレベーター・カンパニー製ではない）エレベーター横に設置された“→”スイッチを押す。
「見事でしたね司令。という事はやはり代表に…」ふと声をかけら

れて振り向くとスーツ姿の男が一人立っていた。「いえいえ、私の手柄というより潜入したＶ－２２Ｂの乗員と部隊ですよ。私はこの結果を代表に伝えて判断を仰ぐ、それだけです」司令官は愛想よく言った。

「やはりあなたらしいですな。しかしです…」エレベーターに乗り込みながらスーツ姿の男が声を落とす。「私としてはあんな聖書じみたあれは信じがたい。それで統合軍や各国軍に損害をだし、国連の安全保障情勢にこれ以上負荷がかかるのは言語道断だ。安全保障理事会の君たちのことを認識している私を含め関係者の多くは懸念を示している。それだけは代表に伝えてほしい。せいぜい計画を進めるのならポケモンだけを盾にしろ、と」

「もちろんです安保理事長。国際情勢にこれ以上悪影響を与えることはしません。ご安心ください」「その言葉を信じたいね」終始穏やかな表情を浮かべる統合軍司令に国連安全保障理事長は怪訝そうな顔をした。

地球上の安全保障は２１世紀に入って１０余年混迷が続いている。２００１年の９．１１事件、２００３年のイラク戦争、２００６年の北朝鮮の核実験、２００８年にロシアとグルジアの間で発生した南オセチア戦争、同年５月のチベット争乱、２０１１年前後の中東、北アフリカの騒乱、今年２０１２年１月に発生したアメリカの宇宙ステーションに対する中国のミサイル攻撃未遂事件、４月に発生した地中海メガフロートでの大暴動等、人類史にこれまでなかった形の戦争や紛争が相次いでいる。そのうえ、その背後には経済格差、エネルギー開発、民族間問題、環境問題、果てには軍事企業の陰謀等これまでの国家間戦争の慣例では対処できないような事態が隠れており、国連も各国も収集の手こずってばかりだ。昨日には日本、沖縄の北西沖で宮崎県にある航空自衛隊２０４飛行隊所属のＦ－１５Ｊが突如墜落し（原因は機体トラブルである可能性が大きいが）、中国または北朝鮮の関与があるなどという信じられないデマがインターネット上に出現して両国の物議を醸しているのだ。不用意な双

方の関係悪化を避けるため、これも国連統合軍が調査することになるだろう。ただでさえポケモン文明に関する情勢もうるさいのに、極秘の“計画”によって彼らを刺激すれば、さらに収拾のつかない事態に陥る恐れがあるのだ。

エメリア・ソーラ大陸パルク州の国連軍施設ではサクラが基地司令官から作戦が成功した旨を通達されていた。

「……そう。それでは……全員無事なんですね……」「ああ。救出の方も生存者だけは完全に収容できたようだな」「あの、そのことなんですが」「ん？まだ何かあるのか？」司令官の男が飼い犬を撫で付ける手をぴたりと止める。

「救出した部隊を……あ、もし３０２中隊が本当に統合軍司令直属になるのならですけど、その場合は…彼らを３０２中隊の指揮下においてもらいのですが…」

「それは私の決める事ではないな」司令官はこのサーナイトの目を覗き込む。「はい？…」「すまないが、その件に関しては私や君の感情論が入れる事ではないんだよ。安保理を通さない計画だから決定は早いだろうが国連軍司令部がＯＫすればそうなるし、そうでなければそれはまた別になるんだ。もしＯＫだったら、統合軍が自治協会防衛軍に依頼するよ。とにかく、君はその指示に従っていればいい」

「はあ……」サクラは納得いかない表情で返答しながら、救出された部隊の隊長を務めるコリンクの思念の中に意識を集中させた。

……あの少年に……現実を受け入れるだけの余裕がどれだけあるのか？……

……人間の地球という現実を……

２０１２年　現地時刻１１月２０日　ドイツ　ベルリン郊外　ポツダム市　２１０５時

ポツダムはドイツ、ベルリンの外郭都市だ。１９４５年には、かの第２次世界大戦を終結させたポツダム宣言が発布された都市でもある。ベルリンとは異なり東西ドイツ統一までソ連側の東ドイツ領の一部であり、現在はベルリンの郊外の新都市としてポツダム広場を中心に高層ビル群として再開発されている。

この日、ポツダム会談の舞台ともなったツェツィーリエンホーフ宮殿で、１２月にニュージーランドのクライストチャーチ市で（２０１１年の地震で被害を受けたがその復興を示す形で決定。日本の宮城県・仙台市での開催も候補に挙がったが、復興の現状から２０１３年となった）開催される第１８回国連気候変動枠組み条約締約国会議（ＣＯＰ１８）の閣僚級会合が開催されたのだ。２０１３年で期限の切れるいわゆる“京都議定書”のポスト案の最終調整が今回最大の議案であるが、その会合の事前調整会議としてだいたい本会議の前にこのような閣僚級会合が実施されている。当然のことながら、新興工業国や議定書から脱退したアメリカにも排出削減枠の義務付けを目指す欧州を中心とした諸国と、それに難色を示し努力削減目標に留めようとする中国やアメリカをはじめとする諸国との交渉は難航したが、ここにきてようやく削減義務付けを現状に留めながらアメリカや中国、新興工業国にも成果公開を義務付ける削減目標提示を要件に何とか（新国連の支援もあり）軟着陸に持ち込める見通しになってきた。この数年間確実に表れている異常気象を前に、さすがの反対派諸国も“持続可能な発展と成長”を維持するために温暖化対策の行動を示さぬ訳にもいかなくなってきたのだろう。

ただし、この会議ではポケモンのエメリア自治協会及び自由連合には参加権がない。彼らも地球環境問題で少なからず被害を受けているが、人間たちにとってポケモンの文明は保護されるべき自然でもなく自然を保護すべき文明でもなかった。

開催国ドイツの閣僚の一人も会議を終え、車でベルリン市へと戻る途中だった。その途中、この人間のスーツに入れていた携帯端末のバイブレーションが呼ぶ。取り出して端末を確認すると“ドイツ北西部のポケモン達がＣＯＰ１８にポケモン文明側からの出席許可を求めてベルリン政庁に殺到している”と表示されていた。

……ふん。何も知らんくせに邪魔ばかりする。森林を不法に伐採したり海洋資源（魚介類の事であり地下資源の事ではない）を乱獲してばかりいる彼らにこそ地球からの天罰があればいいんだが…

この男はため息をついた。

車は前方に１４世紀から残る宮殿、右に近年開発されたライトアップされている高層ビル群をみながら多くの車両でやや混雑している夜の道路を走った。

２０１２年　１１月２１日　　エメリア　ソーラ大陸　パルク州

国連軍の施設　０６３０時

８匹を乗せたアメリカ空軍Ｃ－１７Ｂグローブマスター?は朝日に輝く滑走路にふわりと主車輪（メインギア）と前車輪（ノーズギア）をタッチダウンさせ、駐機場にその機体を止めた。４基のＰ＆ＷＦ１１７－ＰＷ－１００エンジンの回転が弱まると整備車両やＭ－９９８装甲車が集まり、整備員や警備の兵士たちが一斉に周囲を取り囲む。

彼らをのせたＶ－２２Ｂはあの後、フランス軍の原子力空母「シャルル・ドゴール」に着艦。被弾箇所がないか調べたのち、ラファ

ールMの護衛とともにエジプトの統合軍基地“デザート・ブリッツ”に向かった。（この基地でレオたち1761突撃隊4匹は医療検査と一切の所有品を調べられた。前線から持ってきた支給品以外は一切放棄させられたが、グリソムの“ホタテ”は「おいらが3歳の時からのお守り…」等といってなんとか免れた）その後は行きと同様アメリカ空軍の戦略輸送機C－17Bでロサンゼルス空港経由で帰った。しかし、そのロサンゼルス空港で民間のB－787が（B－787は試作当時からエンジン系を中心にトラブルが多く、ようやく投入されてからも度々こういうことがあった）滑走路上でトラブルを起こし、かなり長時間足止めを食らった。

ソーラの基地に帰還したC－17Bの後部ランプが開いて真っ先に飛び出したのはブレイブである。「おっしゃあ！戻ってきたぜ！」と、このブースターは警備にあたっているアメリカ陸軍の兵士たちも驚くスピードで駐機場の脇の草むらの方へ走り、さまざまな野草が生える草地に何度も口づけした。その様子は普段のブレイブの性格を考えると異様とも取れる光景である。

地面に何度もキスをした彼はそのまま草地に寝っころがった。背中もとにはふわふわした緑の柔らかさ。朝日のオレンジ色に輝く空は少しずつ青くなり、ぽつぽつと雲が浮かんでいる。スズメか何かの野鳥が2羽3羽と飛んでゆく。

そんな風景に目をつぶり、空気を這いに思いっきり吸い込む。このブースターの心が妙に透き通っていく。

……俺は帰ってきた……こうしてまた…自然の呼吸が感じ取れる……

その様子を見ていたテルルは驚きのあまりブレイブに駆け寄った。
「ちょ、ちょ、ちょっとあんたどうしたのいきなり?!」
「……生き返った……やっぱ最高だな……」「もしもーし?!
……ねえ!?頭が変になっちゃった?」ブレイブと彼の姿を見て驚くグレイシアの会話は全くかみ合っていなかった。
「大丈夫、大丈夫だよ!うん。」「な、なんで?」ユイリィがツルで気持ちよさそうに体を伸ばすブレイブのおなかをなでる。「ブレイブはね、どこか行って帰ってくるとね、いつもこうするの。自然の中に入ることが一番ブレイブにとって安心するみたい」「ふーん。この男にもそういうところがあるんだね」テルルはそう頷きながらふと思う。

……意外とブレイブって……小心者的なところがあるのね……
……もしかして…ああみえて…あいつは戦争とか……嫌がるタイプなのかな?……

「……という事でリーヒュンも転がっちゃいなよ!!うん。」ユイリィがツルを使ってリーヒュンをブレイブの隣に転がした。
「ぐえっ……やり方が乱暴すぎるよ……」４本足をなぎ払われるように寝っころがらされた彼だったが、その状態で一息吸い込むと奇妙なすがすがしさを感じた。

……そっか……俺はまた帰ってきたんだ……
……飛行機、とかいうのに乗ってたから3日で帰ってきたけど……
……
……ずいぶんと遠くに行った感じだな……

そう感じたのは彼の思念が背中もとの草花や空を駆け巡ったせいかもしれない。またはベイリーフ種族特有で（メガニウム種族も同じだろうが）自然の中で太陽を浴びて、頭や首元の葉っぱが喜んでいるのかもしれない。

「あはは！変人が2匹も寝っころがってる！これは笑えるね！うん」ユイリィが大笑いしながらリーヒュンに飛び掛かった。「うぶっ！…重い…」2匹は（特に後から飛び掛かったメガニウムが）楽しそうに馬乗りになって喜んでいるが、この情勢を人間の兵士たちが見ると黄色で葉っぱの生えた爬虫類もどきと、ウグイス色で花の生えた爬虫類もどきがベットの中に居るかのごとくいちゃいちゃしているようにしか見えない。「なんだあいつら？」「見ないほうがいいぜ…」

「ミーはアホなことには付き合いきれないでしゅ」ロズリンは2匹を見ながら得意げに首を振った。「でっしょー！てかアンタ年上にすごいこと言うのね」テルルがこのシェイミの言動を聞いて驚く。「よっしゃあ！ンじゃテルルも俺のとこに…」ブレイブが嬉しそうに前足でテルルの首元を掴もうとする。「はあ？！断固お断りよっ！」「うっぐぅ…気持ちいい…テルルの前足最高だ…」「このバカっ！！」テルルはブレイブの顔面に前足で蹴りを入れて首を地面にたたきつけた。

「すっげえっ！年上があんな変態的ポーズしてやがるぜ！よっしグリソム！お前も一緒に手本を見せろ！」「お、おいらが…やだよ。」「俺もやってやるから、な？」「それでもやりたかない！」「ったく！まあいいや。ンじゃシンシア！！お前がやるか？！」「絶対やんないわよ」「何言ってんだこいつは？！俺がやったる！！」「ち、

ちょっと…」その後ろからやってきたレオがグリソムやシンシアをひっくり返そうと躍起になっていた。「ひ、ひいっっ！」シンシアが拒絶のあまりじんつうりきをコリンクに対して打ち込む。レオはこのロコンから少なくとも5メートルは吹き飛ばされた。「ぐえっ…おいおいわざを隊長に対して使うかよ?！」

「あんたみたいな奴を隊長だとだれも思わないしパッと見は」ガトルが首を振った。「それはおいらにも言えるぞ」グリソムも同調。

「……お疲れ様。あんな困難な状況をよく切り開いてくれたわね。ありがとう」多くの護衛の米軍と国連軍の兵士たちに囲まれてサクラがやってきた。１７６１突撃隊の４匹は慌てて整列するが、リーヒュンやユイリィ達４匹は草むらから伸びをするように立ち上がった。

「リーヒュン。２匹で今回は上手くいった?」「まあ、前よりはですね。僕なりに点をつけるとしたら……」「ほっんとすごい頑張ってくれましたよ!リーヒュンは一人で5，６匹は倒したし!あたしの見る限り能力はすごい出てきてます!うん、はい。あたしじゃなくて彼には文字通り９５点!!!あたしは１０５点!!」「その５点のプラスマイナスはなんだよ?」「番組にした時の好感度かな?あはは!」「なんだそりゃ」

「もう…そんなに元気が残ってるならいいですけど…」サクラが背丈が同じくらいのベイリーフとメガニウムに両手をあてる。「統合軍からのデータも私の感じも…２匹ともよく成長してるわ。この先も２匹で頑張るのよ。いい?」「はい。」「もちろんです!ね?」

このサーナイト種族には２匹に確かな思いを感じた。

２匹が持つ…地球を変えるかもしれない能力を……最高に引き出す…２匹の結びつきを…

「けがは大丈夫？」「ええ。別にこのくらいだったら子供の時からいつもですし」「今回もよく頑張ってくれたわね。この雰囲気にはもう慣れた？」「あ、はい。……ロシア陸軍にいた時は人間ばっかで……でもこうしてポケモンだけの部隊も……」「だろっ？！それに俺がいるお陰で楽しさが１０００倍…」「はいはい。それいいわよ。」後ろからすり寄ってきたブレイブをテルルは軽めに前足で押しのけた。

「もう、ブレイブったら。でも……これならこの先も任せられそうね。あの2匹は時々おかしな行動をとるかもしれないけど……ブレイブ、そこは友達のよしみで察してチャンとテルルをフォローするのよ？」「もっちろんすよ司令！！！」ブレイブが元気よく答える。「テルルも…無理しない範囲でよろしくね。それと、ブレイブの相手は適当に嫌にならない程度でいいのよ」「はい！」「そりゃないですよ！？なあ、テルル？」「それはどうだろうね？」

兵士たちの陰からバストークやピトムニク達も出てきた。

「中隊長！！」「おっさん！」「お前ら…無事だったんだな……」このメリープはリーヒュンとブレイブのそばに行く。「この通り全員無事に帰りましたよ。まあ新入りも増えましたけど」「道中本当に最高でした！！新しい女の子も増えて」「お前らな…テルルちゃんとかちゃんと守ってやったのかよそれで……まあいい……とにかく……生きて帰ってきてくれただけで俺は……」声が震えるバストーク。ブレイブは前足で中隊長のモフモフをたたいた。「なーにやってんすかおっさん！俺たちが死ぬわけないでしょう！」

「テルル……ユイリィ……良かった！！……ホントに……」「また危ないところに……ブレイブになんかされなかった？」グラシデアとピトムニクが半泣きになりながら2匹のもとに飛びつく。ユイリ

ィがツルでプラスルとモココを抱きしめ、テルルが2匹の頭を前足でなでた。「大丈夫大丈夫！あたしたちが……そっか……心配してくれてありがとう」「私のことは心配しないで。このくらいの事じゃ諦めないから」

「そっか……またみんなでやれるんだね？」「もちろん！」「良かった…ホントに…」ピトムニクは再び泣き声になる。

「あれれ？ラブちゃんもきてたんだ。」「気づくのが遅いわよ」グラシデアの脇にあの印象的なたるそうな声をあげるスカイラブがいてテルルの頭飾りを触った。「ワタシも今回のので正式にここに配属になったの。テルルみたいな田舎っぺさんどやれてうれしいな。この先もよろしくね」「相変わらずビシビシ言うのね。ま、まあよろしくね」「うん！また新しく加わったね！」そう言われたテルルは頭の中でかなりの驚きと違和感を同時におぼえた。

……なんで私が“田舎っぺさん”なのよ？……私の生まれはドバイよ。あの中東の大都市……

……まあ確かに“あの時”は延々と田舎を放浪してたけど……

……もしかして私の持ってるものとか身なりとかが“田舎っぺ”？……はあ……

「おいおい。そういえばチェギョンちゃんは？」ブレイブが気付いたような声を上げる。

「ロックオンとあの子はね、昨日か一昨日かに軍事演習の言ったよ。確か…“とーなんあじあ”とかいう地方に。この世界のどこにあるかは知らない」グラシデアが右手を空に指した。

「まじかよ？！全員そろわなきゃ意味ねえじゃん！」

サクラは新しく加わったちびっこ（もう人間年齢にして１４、５歳だが）の方へ視線を移す。「よく持ちこたえたわね。私がこの部隊の…あなた達を助けてくれたね…司令官？指揮官ですね、のサクラ・ワタリ・フユツキです」このサーナイトの言葉にレオやシンシアは完全に硬直した。

「自治協会防衛軍第5普通歩兵師団第１１大隊１７６１突撃部隊長、レオ・バイブル・ミュースカイであります！！」コリンクがかみながら一気にまくしたてた。

「お、お、同じく、い、１７６１突撃部隊の…」「いいわよ。右からグリソム、ガトル、シンシア、て言うのよね。知ってるわよ。今後ともよろしくね」ミズゴロウの焦った調子を見るなり、サクラはそういって滅多にない笑顔を浮かべた。

「あ、あんたっ？！ほ、ほんとに……」スカイラブがあわてて飛びよってきた。「レオ、この人（ポケモン）知り合い？」ガトルがレオを見る。彼はそのルクシオを見て衝撃のあまり凍りついた。「ま、マジかよ…お前は……」

「！！！！！！！！！！！！！！！」「むぐげぇっ！や、やめろってのっ！！」スカイラブが自分と背丈がそうは変わらないこのコリンクに飛びつき抱きしめた。

「……そういうことか。アンタとラブは故郷(くに)じゃお隣さんだったか。そんならやりやすいだろ？」「ええ！そりゃこいつといったらもう！…ワタシが手をかけ手をかけ世話焼かせてくれましたし……」バストークの一言にこのルクシオは嬉しそうに一気にまくしたてた。「俺がやれって望んだわけじゃ…」「何いっどんのよアンタ？！散々私にお世話になって。わたしはずんごい嬉しくてもう…」「あの…メリープの中隊長も隣の副長さんもこいつの無駄話はスルーでいいっす」「ええ？私はもうちょっと彼女の…」「でしょ！だからこいつときたらさ…」「それ以上言うな！！……ほら…こうなるんで…できれば…」ピトムニクが聞きたそうなそぶりを見せるとスカイラブはますます嬉しそうに通信用や電力送信用の海底ケーブル状の尻尾をふって自慢話まくしたてようとする。

「はあ、もういいぜ……それでサクラさん。俺の仲間の残りはいつ帰ってくるんです？」レオが期待を込めた目でサクラを見た。

だが……

周囲の全員の視線が止まる。リーヒュンはブレイブと顔を見合わせた「……どうするんだ？」「知らねえのかよ……実情を言うべきか？」「……それはまずいような」「他に手はねえんだろ？いつまでも隠すか？」「そうだけどさ、だけど……なあ……」「サクラさんは…ホントこのと言うのかな？」ユイリィが2匹に顔を近づける「言うだろ？」「そうかもしれない」「あの子……大丈夫なの？」「いや……無理そうだ……」リーヒュンはそう言いながらレオの意識中に自分の意識を集中させた。テルルは何とも言えない物悲しそ

うな顔で視線をそらしている。バストークとピトムニクは諦めたように首を振った。

……そのような空気の中で……あのコリンクの甘い期待が……アセチレンガス溶接機の空気栓を徐々に開け炎が青く高温になっていくかのように……

……恐怖と恐れに置き換わっていく……信じがたい……

……本人の認めたくない……信じがたい……

「あ、あのなレオ……おいらたち以外は……」「そのさ……生き残ったのは……」

「て、てめえら何言ってやがんだ?!な、な、な、司令っ?!俺の部隊の残りはいつ帰ってくるんだよ?!」このコリンクはグリソムとガトルの言っていることを半ば恐れ、しかしそれが真実であることに半ば気づいた絶望と懇願に似た表情でサクラに迫った。

彼女は……真実を言うべきか……悩む……恐れる……

この幼げない隊長に……宣告を……

……すべての……運命と結末……

……しかし……本当に?……

だが次の彼女の言動は……本人は悲しみで倒れそうだったが……

…レオ・バイブル・ミュースカイという15歳のコリンクに対して何の同情も与えなかった。

「あなたたちが……ああ……最後の生存者……」
「嘘だ……嘘だろ？」「いえ……生き延びたのは４匹だけ……
……」
「そんなわけえねえだろ！そんならその証拠……」「ごめんな
さい…でもそれ以外に……」

……死んだ……
……俺の仲間……同じ部隊……
……俺のせい……

彼は周りの全員を見た。救いを求めて。
だが、どこにもそれはなかった。

このコリンクはその場に崩れ落ちた。
衝撃のあまり涙もなかった。ただ単にすべてを失った喪失感。
それだけだった。

朝も終わりかけた青空が異様なほど無表情に無感情に彼の頭上を覆
い尽くしていた……

ソーラへの帰投、唐突の出会いと認めがたい別れ（後書き）

やっと終わったぁー！！2回戦終了です。

ユイリィ：おつかれー！

でもなんだか、結末がまた暗い……

ところでまたもや新入り！ロコン種族のシンシア。ロコンかわいいよロコン。

葵のポケモンSS（ソウルシルバー）の初期パーティーで唯一のほのおタイプ。

シンシア：ど、どうもです……

まあ、こういうおとなしめのキャラです。今後ともよろしくお願いします。

次回？……しばらくは控えめな展開だと。たぶん。

ロックオン：俺らはどうした？！

……そのうち書くよ。ていうか次回も少し触れるよ！！

ちなみにCOP17は南アフリカのダーバンでやるらしいです。

COP18の実際の開催地？……不明。

くどくてすいませんが、ここに関する物語の記述はすべて葵のフィクションです。クライストチャーチでは実際はやらないと思います。

胎動するものその1（前書き）

その1、ていう事はまだ続く、という事です……

少しペースが落ちたかも…

胎動するものその１

２０１２年　１１月２２日　アメリカのシアトル　ＧＢＴＸ本社タワー　１９００時

シアトルはアメリカ西海岸の北西に位置する都市。アメリカの中では東海岸のニューヨーク・ワシントン都市回廊の最北端にあたるボストンより緯度が高いため、おそらくはアメリカ最北端の街とも言えよう。湾を挟んで向こう側は既にイギリス連邦カナダの都市、バンクーバーシティなのだから。シアトルは世界トップクラスの民間航空機シェアを持つ航空機メーカーの最大手、ボーイング社が本部と工場を構え、自動車、造船、情報機器、ハイテク機器などの工場もある一大工業・経済都市であるが、地上道路は恒常的に自動車で渋滞しているため、その一方で現代的に開発された中心市街地にはＬＲＴ（低床型路面鉄道）や無料バスネットワーク専用の地下トンネル“ダウンタウン・トランジット・トンネル”、ビュージェット湾のワシントン州営フェリー、タコマからの通勤電車網等が完備され、自動車のみに依存しない環境都市としての側面も持っている。

そんな都市の一角にある種の幾何学的な構造をした格別近未来的なタワーがある。地球のバイオテクノロジー・ポケモンクローン産業で最大規模のシェアを持つゼネラルリソース・バイオテクノロジーＸ、略称ＧＢＴＸ社の本社ビルである。

前述したようにＧＢＴＸはイギリスのデパスター・オーシア社、ロシアのマラーノフ社、中国の吉祥人民公社などポケモンクローン産業の先駆者として１９８５年に誕生した企業である。ＧＢＴＸが初めて量産仕様品“ＦＰ－４１８－Ａ”をリリースしたのは１９９９年。以後安定した汎用性と性能を持つクローンポケモンを続々とリリースし、最新作は今年６月に登場した“Ｆ／ＡＰ－４２４－ＸＦ２”である。

そんな大手企業の本社タワーの最上階５０階の代表取締役執務室のデスクで、ＧＢＴＸの代表取締役の男が携帯通話情報端末（モバイルフォン）で話をしている。

「なるほど…とするとまたも大口の需要家を手に入れたことになりますな」その男の声は多くの利益が入ることを確信したか、満足げだ。“とんでもない。いきなり大量発注などして申し訳ないのはこちらですよ。何せ“あれ”には最初の半年だけで万単位の個体が必要ですからね”

「心配にはおよびませんよ……我々の企業は各国軍や大手企業のように閣下のような大口需要を大勢抱えていますから。大量発注もお安いご用です」“それはありがたい”

「それで…納入先は……統合軍ではなく代表のオフィス、という事ですかな？」この社長の目がギラリと輝く。“ええ、お願いします。その先の輸出の手筈…エメリア自治協会と自由連合でしたね、それはこちらが手配済みです”「さすがは閣下。十分に用意を整えてありますね」“いやいや、私以外にも多くの優秀な国連の同期や部下がいるお陰です。お宅の製品を無駄にすることはないでしょう”

「まあいずれにせよその“計画”をやるのは、あのきちがい文明の変人ども、とですからな。とにかく、指定された料金さえお払いいただければわが社は常にお客様のニーズにこたえる製品を開発、生産いたしますよ」男が笑みを浮かべる。“もちろん。代金は抜かりなく”

情報通信端末（モバイルフォン）が切れた後、アメリカ、ニューヨークの新国際連合本部にいる国連代表は椅子を回して執務室の大型のガラス窓から見えるニューヨーク・マンハッタンのガラスと鉄筋とコンクリートと構

造物用アルミニウムからなる森林地帯…すなわち市街地…を見つめてため息をついた。いくら地球と人類の為とは言えど、あそこまで金に欲を張った男と話すというのは想像以上に気疲れし、不快なものだ。

「やれやれ、“計画”が終わったら費用の1割くらいは国連の資金として投資してほしいものだな……それが企業の社会貢献責任（メセナ）だろう……」代表は窓の外に話しかけるかのように呟いた。

一方、シアトルのＧＢＴＸ本社ビルの執務室ではやはり社長が窓の外にあるシアトルの市街地を見つめていた。はるか眼下に広がる地上をＬＲＴや自動車、オフィス街の人々が行き交い、地下トンネルの出口からはＬＲＴや路線バスが盛んに出入りしている。周囲のオフィスビル群にはボーイング社をはじめ、数多くの大手の工業や情報技術系企業のロゴが点灯されているのが見え、少し離れたビュージェット湾内には市街地の両岸を結ぶ州営フェリーと民間コンテナ船の明かりが複数交錯し、シアトル・タコマ空港に着陸するらしいボーイング社Ｂ－７３７－５００が…尾翼のデザインからして国内線航空会社…2機ほど上空でホールドしている。近くには空飛ぶ円盤をモチーフにした独特の形状をした街のシンボル、スペース・ニードルがライトアップされてそびえ、少し離れた場所には、かの有名な日本人選手が所属する球団の本拠地となるドーム型屋内球場が見える。

……国連の人間もわが社に飛びついてきたか……統合軍も取り込めればな…

社長の男はシアトルの市街地を見ながらほくそ笑んだ。

ふと外のインターフォンが鳴った。「私です。例の試作種の改造結

果のデータ解析が終了しました」きびきびとした女性の声が聞こえる。インターフォンのセキュリティーカメラには厳格そうな女性が立っていた。

「入っていいよ。技術開発本部長」社長がドアのロックを解除し、インターフォンを切りながら呟く。

「……また厄介なものが来た……か…」おそらく彼女が持ってきたのはＧＢＴＸが２００５年ごろに試作した高性能仕様のキノガッサ…性別は珍しく女だったな…の３回目の大規模改造の試験データだろう。あの女はやけに生真面目一本だから。

　無論この男とて根っから金にしか目のない小悪な人間という訳ではない。しかし大企業な社長であるがゆえに、国連の持ち出したような大きな利権の入るプロジェクトに興味とちょっとした欲を感じたにすぎないのだ。事実、この社長の公（つまりテレビやメディアの前）での印象は実直で熱心であるという評判を得ているのだから。

２０１２年　１１月２３日　オーストラリアのダーウィンから南東に約２００キロのエメリウム採掘施設　１１５０時

オーストラリアはイギリス連邦の一部をなす巨大な南半球の大陸国家。広大な草地を生かした家畜の放牧や、小麦やコメなどの企業による大規模耕作がきわめて盛んだ。しかしそれよりもこの国が地球経済で重要な地位を担う理由、それは不毛にも見えるオーストラリア大陸中央の山地には、原発問題以後も（様々な思惑を絡めて）新

興国を中心に新規建設が続く原子力発電の燃料となるウラン、機械や建築、船舶、あらゆる工業・産業で必須の鉄鉱石、一般車両、航空機、鉄道車体、大規模建築構造物等幅広い現代の人類技術で使用されるアルミニウムの原料となるボーキサイド、半導体やＬＳＩ、ソーラーパネルといったＩＴ機器やハイテク産業、環境技術産業で必須のレアメタル、軍用兵器の装甲板や軍用宇宙兵器で必ず利用される超高強度の金属であるチタニウム、現在でも火力発電用燃料の一角を担う石炭など、現代人類の超高度技術・経済社会を担うあまたの鉱業資源の埋蔵地が数多くあるからだ。２００８年の金融危機以降は、中国を中心とする新興工業国でもその需要は増え、ここの資源をめぐる競争はますます激化している。自然環境の保護に積極的に取り組む（この大陸は周囲の大陸から離れているため、読者の皆さんもご存じダチョウやカンガルーといった希少な生態系が多い）オーストラリアも、イギリス連邦本国だけでなくアメリカや日本、中国やインドなどの新興国にも多くの資源を輸出してオーストラリアのイギリス並の豊かな生活と経済を支えている。もっとも、数多くの開発のせいで周囲の環境破壊や採掘施設間でのトラブル、船舶の沿岸海洋汚染問題等が多発しているも事実だが。

さらにこの大陸にはエメリウムという名のナトリウムの同位体（アイソトープ）元素が大量に存在することが判明し、ポケモンクローン産業の重要なセクターとなっている。

この元素を周期表と比較してみると、エメリウムは同じ1族元素である（水素を除く）ナトリウムやカリウムと同様の特性を持ち、これらと2族元素であるマグネシウムやカルシウム（マグネシウムと2族2周期のベリリウムを除き、これらをアルカリ土類金属という）

が人間や普通の動物たちの体内に含まれているのと同様にポケモンの骨や臓器、その他の体の細胞に含まれている。

しかし、ポケモンを量産するにあたりこの元素はＥＳ細胞やｉＰＳ細胞などの従来の再生医療テクノロジーの応用では生成できず、臓器や骨格などの器官が形成できない事が判明した。解決手段として立案されたのが培養槽内の培養液に“天然の”エメリウムを含有させる方法だが、当初は見込みのないけがや病気になったり戦災孤児になったりしたポケモンを安楽死させて、その血液や内臓からエメリウムを抽出するという極めて非効率的で非道な方法が行われた（この事実は最近まで企業や研究を行った各国政府に伏せられていたが、２０１０年１１月にかの情報公開集団“ウィキリークス”のロシアの研究データ漏えいによって明るみに出た）。

それが現在の量産可能なシステムに漕ぎ着けたのは１９９８年に、新規石炭採掘施設の予定地選定をしていた企業が、周囲の集落に住むポケモン達が多数拾い集めてゆく鉱石を発見。これが天然のエメリウムだったのである。

以来、ＧＢＴＸやデパスター―をはじめ大手でポケモン量産にかかわる企業の大半が独自のエメリウム採掘施設を持っている。

そんな採掘場の一角、航空写真や衛星画像で見ると、計画的に掘り下げと採掘、輸送車両の道路整備を繰り返してきたドーナツ状の採掘場がミステリー・サークルのように並ぶ場所の一つのドーナツの中で、ＧＢＴＸ社にエメリウムを提供している企業は今日からフル操業だ。昨日に本社の方から突如としてエメリウム採掘の大量受注がかかった。２００８年の金融危機の影響はあまり受けていないとはいえ、２００５年に稼働したこの施設がそのポテンシャルをフルに発揮して稼働したことはなかった。

「よしよし。起動していいぞ」「了解しました」作業服にヘルメット、サングラスをかけた白人の男が無線機越しに露天資源採掘作業車、ドイツのクルップ社製“バケットホールエクスカベーター―・Ｂａｇｇｅｒ２８８Ｘ”の操作室にいる男に声をかける。操作室の５人の男がコンソールを操作するとアームの先端についた巨大ホイールが採掘場の岩盤を噛みだした。ホイールが轟音を立てて削り落としたエメリウムを含有する原石が、アームの後方につくベルトコンベアーによってバケットホイールエクスカベーター―の後方に運ばれていく。日本・コマツ社製の９３０Ｅや、アメリカ・ＣＡＴ社製のＣＡＴ７９７といった超大型ダンプ車にそれを搭載するのだ。

エメリウムは石炭や鉄鉱石とほぼ同様の岩盤に埋蔵されているため、露天炭田の採掘用に開発されたクルップ社のＢａｇｇｅｒがこの任務に最適だった。ただし、乾燥している上に気温の高いオーストラリア北部の気候に合わせて通常の２８８と比べて電源や内燃機関に対する冷却装備は強化されている。全長２４０メートル、高さは９６メートル、重さは１万３０００トン、定常運転に外部電源から１６メガワットを必要とするという地球最大の陸上マシン（ＮＡＳＡが持つ旧型スペースシャトルＯＶＴ－１００の地上トランスポーターを上回る）は、その大きさ、ギミック、轟音、あらゆる点でその場にいる人間たちの感覚を狂わせるような威容をもってそびえていた。

もっとも、作業責任者のこの男、その他多くの作業員にとってもギネス記録を保持したこの乗り物は既にこの施設での相棒であり、番長ともいえる存在だったが。

「異常はありません。俺たちはこれであがり、ですよね？」「ああ。おつかれさん」先ほど交代したバケットホイールエクスカベーターの5人の乗員のリーダーらしきポリネシア系の男が責任者の所へやってきた。「今日の昼からこのざまさ。あいつらは大変だな」「ええ。この調子じゃ数日降りるのは無理っすね。俺たちは幸運ですよ」クルップ社製エクスカベーター―のホイールが岩石を削る轟音の前に2人の声は大きめだ。この車両は96メートルもの高さに制御室があるため、いったん作業にかかったら数日は降りることができない。そのためこの車両の制御室には個室やキッチン、トイレすら設置されている。

責任者の男がふと思い出したように言った。「そういや、作業室にあった予備用バッテリーがちょくちょくなくなってる、て聞くんだが、お前ら覚えないか？」「……いや、特にないですけど」「そうか。ならいいんだ。やっぱりそういう奴はいるんだな、と思ってな」「いると思いますよ俺の村でも現場からテレビ盗んだ奴いますし。」作業員の男はエクスカベーター―の操作室を見てにやりする。この男を含め、オーストラリアの資源採掘施設で働いている人間は、オーストラリアの白人系労働者よりニューギニアやインドネシアなどから来たポリネシア系の出稼ぎ労働者が多い。実際個々の施設でも、イギリス系の関係者はこの責任者を含め全体の1割にも満たない。作業員の男のように大半はポリネシア系だった。ニューギニアや東ティモール、インドネシアなどは、この20年で急激に生活の近代化が進んだといえまだまだ欧米や東アジア、中東の大産油国と比べれば生活水準は高くない。地球の隅々まで資本主義社会や通貨による取引が浸透しているが故に、彼らのように金銭を求めて出稼ぎで労働するわけだが、欧米勢力が作った先進国であるオーストラリアには彼らにとって希少価値の多いものの宝庫であった。特に予備のバッテリーや電球、テレビやラジオといった類は彼ら住んでいるポリネシアの農村ではまだまだ数の少ない代物であり家族に喜ばれる

ものだった。トリウム原子炉や宇宙太陽光受信アンテナ等のエネルギー用メガフロートを利用した太平洋送電網計画で少しずつは電力が供給されるようになったとはいえ、まだまだその供給は安定してはおらず、それを利用する電気製品の当地での価格は、彼らの現在の所得水準からみれば今でも高嶺の花だ。労働者たちが、責任者の目を盗んではちょくちょくそういった類を業務に支障ない程度にネコババしていくのは日常茶飯事であり、企業や責任者たちもその程度の紛失は半ばあきらめていた。そういった類で国家間の対立にあまりならないのは、中東などと比べてポリネシアでは民族や宗教間でのトラブルが比較的少ないからだが。

「おーい○○○（この責任者の名）！ちょっと来てくれ！」「どうした？」「獣が一匹ひっくり返った！」「わかった。お、あがっていからな。お疲れ」「あ、お疲れっす」向こうの方で作業を監督していた別の責任者（この男の友人）がエクスカベーターのホイールがエメリウムの層状結晶を削り取る轟音の中で声を上げた。この男は作業員連中をあがらせ、声のしたＢａｇｇｅｒ２８８Ｘの１２対もある巨大な無限軌道（クローラー）の元に駆け寄る。重機のこんなところによるのは本来危険だが、エクスカベーター―は通常定位置に付いたら掘り尽くすまで絶対に動かず、動くとしても分速１０ｍのスピードで多くの人員を投入して移動を行う。２００１年にドイツでこれを行った際は２０キロ移動するのに１５００万マルク（ユーロ投入以前のドイツの通貨。現在はドイツ債でのみ使われている）の費用と７０人のオペレーターを要した。

「おいおいどうしたんだよこれ？」「突然ぶっ倒れやがった。もう息はしてねえな。医者は無線で呼んだが」駆け寄った彼がサングラスを外しその獣を見る。

作業で飛び散った岩石の端くれを運んでいたトロピウスが泡を吹いていた。白目を剥き、すでに呼吸は停止している。「たく！気合が足りねえんだよ…」彼は足先を保護する金属板の入った作業靴でトロピウスの腹を蹴ったがうんともすんとも動かなかった。

向こうの方から医療スタッフが数人駆け寄ってきて、このポケモンの様子を見た。左前脚の先に器具をそ嫡子、血圧、酸素濃度、脈拍を図る。ポリネシア系の医師（この女はインドネシアのとある農村で数少ない地域の医者として働いていたらしい）が首を振った。

「無理ね。今から車を呼んで担ぎ込んでもそれまでには蘇生する確率は0になるわ」「そうですか……ったく！……どれだけ柔いんだこいつは？」「こいつのせいでまた死亡報告書を書くなんていやだぜ！だいたいどうして自分で訴えないんだよ？」男二人はため息をつく。

「そんな縁起でもないこと言わないの！……死因は熱中症だからちゃんと書くのよ。いい？」彼女はこの2人の言動に呆れたように指を振った。「それと……」彼女は少々残念そうな顔になる「この子は彼の娘さんらしいわね。作業からしばらく放してやってね……」

「はいはい、分かりました先生」「先生じゃないわ。とにかく、ストレッチャー持ってくるから周りの野次馬を追い払って」「合点承知……おいこら、お前らは作業に戻れ！」「ぐずぐずすんなっての」2人は周囲で怪訝そうな顔をしている残りのポケモン達を追い払って作業に戻させる。「？＊＋？＊＋…」一匹のチラーミィが作業員に何か説得するかのごとくエメリア語で訴えてきた。「ああ？！お前もああなりたいか？働かなきゃ熱中症にならなくてもくたばるんだぞ？！」先にいた男が脅すような口調をしながらトロピウスの死体を顎でしゃくる。煤と埃と汗まみれのチラーミィはうなだれてクッルプ社製エクスカベーター―のクローラー脇を歩いて行った。

「＋＊¥@！！！！……」さっきからトロピウスのそばで泣き喚くチコリータがいた。声からして女（メス）。このトロピウスは男（オス）だから、こ

のチコリータの母親がメガニウムかベイリーフかのどちらかなのだろう。エクスカベーター―のホイールが岩盤層を削る轟音の中、２人の男はその哀れな光景から目をそらした。

　このような過酷な労働現場には少なからずポケモンの労働者もいる。しかし人間たちにはそれなりの生活環境も労働基準も整えられてはいるが、彼らには生活環境はおろかまともな労働基準もなく、朝９時から夕方１８時までロクな休憩時間もなく人間の嫌がる業務……例えば鉱石発掘で飛び散った土くれの片づけとか…をさせられた。飲食もろくに取れず、車で１時間ほどかかる近隣のポケモンの集落の善意によって彼らはかろうじて死なない程度に保たれていた。それでも、過酷な労働、劣悪な環境下で少なくないポケモンの過労死や労働災害、人間の従業者による暴力（ハラスメント）や差別などにあっていた。その上ポケモンは人間でもなければ動物でもない文明生物だ。どの国にも国家間の経済協定にもどの大手企業の方針にも、国連関係組織の条約にも一つとしてポケモンの労働に関する記述はない。彼らの多くはただこの地球で人間が嫌がる労働作業用の機械として、簡単に補給の利く促成軍用兵器として、国家の威信をかけたスポーツの道具として、地球の生命保護や医療技術発展のための非道な実験材料として様々な分野に何の代価もなく使われていた……

２０１２年　１１月２３日　マレー半島の東　南シナ海　１４１０時

シンガポール・チャンギ国際空港から飛び立った米空軍のＦ／Ａ―

２２Ａ４機と米空軍の空中管制機Ｅ－７６７“カノープス”が、マレー半島東にあたる南シナ海の指定された高度に到達する。周囲にはナコーンサワン県のタークリー空軍基地やナコーンラーチャシーマー県のコラート空軍基地、スラートターニー基地を飛び立ったと思わしき（タイ王国空軍の本部は王国首都バンコクの郊外、北２０キロにあるドンムアン国際空港に隣接しているが）４０３飛行隊と１０２飛行隊のＦ－１６Ａや、７０１飛行隊のサーブ３９・グリペン等が集まりつつある。少し離れた場所にはシンガポール空軍のＦ－１５ＳＧやアメリカ・イギリスの協力によって２０１０年より投入された国連統合軍でもおなじみのＦ－３５Ａも確認できた。シンガポールは今回演習指揮本部となる米海軍空母「ジョン・Ｃ・ステニス」以下の艦隊と行動を共にするフォーミタブル級フリゲート艦２隻、ヴィクトリー級ミサイルコルベット艦２隻を派遣している。マレーシア空軍のＦ／Ａ－１８Ｄ４機とＳＵ－３０ＭＫＭ４機も既にはるか上空を飛ぶ国連統合軍のＡＷＡＣＳであるＥ－７６７“スカイ・アイ”は察知しているであろう。マレーシア海軍も、イギリスのヤーロウ・シップビルダーズ社製のレキウ級フリゲート艦を２隻派遣している。

彼らの後方には民間軍事会社“ポラリス・セキュリティー”のユーロファイター・タイフーン２機と空中給油機ＫＣ－７６７も確認できる。戦闘機というものは航続距離はそう長くない。今回はこの辺りでの長期的な警戒活動飛行を想定し、このようにＰＭＣ（民間軍事企業）からの空中給油を行う事も訓練の一環とした。そのための給油用ブロープを各国軍機に装備するのはこの軍事会社が行う。陸、海、空、いずれの戦力を持つ軍事会社でも現在活動して“儲かる”地域というのは、東アジア、南ヨーロッパから北アフリカにかける地中海、中東といった地域である。周辺諸国に空中給油用の装備を供給したりするのもまた顧客を獲得するためのサービスのうちだった。このような戦争を食い物にするような企業の存在は一見するとアコギにも見えるが、国連統合軍とて彼らの顧客であるがゆえ

このような存在を否定するわけにはいかなかった。
米空軍のF／A－22Aのパイロットが眼下を見ると、南シナ海に点々と浮かぶ民間企業や官営のものなど多数の天然ガスやメタンハイドレードの採掘プラントを縫うように艦船の航跡が一転に集まりつつあった。この辺りは東南アジアや諸国の資源供給点として、東アジアのみならずヨーロッパやアメリカの企業も採掘を行っている。特にアメリカ・カナダ国境線付近で初めて実行されたシェール層の採掘事業によって世界のエネルギーの一角を担うようになり、（一部の原子力発電を嫌がる国々にとって、まだまだ発展途上の自然エネルギーより有効な電力供給源）路線バスやタクシーの燃料源でもある天然ガスはこの地域の貿易、並びに徐々に根付き始めた工業にも重要なものである。しかしここにもこの数年で中国の経済的・並びに強硬的な脅威が及びはじめ、一連の経済的・軍事的トラブルは東南アジア諸国連合内部の不信感を強め、彼らの結託を揺るがせている。東アジア地域の不安定化や国家間関係の動揺は、中国の開発や軍事膨張政策に更に付け入るすきを与え、東アジアの安定、ひいては世界情勢や世界経済に大きな懸念材料となるだろう。
今回の演習はそれを取り除くため。東南アジア諸国とアメリカの治安維持勢力が健在・強固であることを示し、中国の暴走とも言える周辺活動を牽制する狙いがある。演習最終日にはアメリカとオーストラリアと日本の海軍演習も合流させ、南シナ海では史上最大規模の軍事演習となる予定だ。

ふとF／A－22Aのパイロットの男が視線を海上の船舶の航跡から目を上げると、チルタリスとムクバードが目の前を通り過ぎていくのが見えた。この2匹、無線機を装着していることを知っているのか知らないのか、さっきから無駄な愚痴やポケモン間の世間話を繰り返していた。
「んもー！何って暑さなの！？美少女のモフモフ翼が湿気でびっしょりよ！」チェギョンが自分のくちばしで湿気でべとべとになった

モフモフ翼をいじる。確かにチルタリス種族は北欧やカナダ、ニュージーランドなど比較的冷涼な地帯を好むから、こんな赤道に近い熱帯雨林気候が快適なわけがなかったが。

「おらおら、そんなこと気にしてたら、何にもできねえぞ?」ロックオンがからかうような声を上げる。チルタリス種族とは対照的にムクバード種族は適用性が広いから、熱帯から寒帯までかなり幅広いポケモン文明の集落に確認されている。彼の性格や適応性も相まって、このような活動気候の変動や特性も問題なくやっていけるのだろう。

「何よぅ!あなたみたいに私は無頓着じゃないんですよっ!」「俺も無頓着じゃないぜ?ちゃんと頭の飾りくらいにゃ気を使ってるぞ」ロックオンは頭の飾りを触った。それだけ。「それだけじゃないですかぁ!ああーもうっ、うちの不快指数めっちゃ上昇…」チェギョンはそんな彼の言動と態度を見て諦めたように首を振る。「それだけ、だと?よっし分かった!チェギョンのモフモフ翼を俺が直してやる」ロックオンはそう言いながらチェギョンの方へと彼女の上空から一気に近寄ると、翼と閉まった右足で彼女のモフモフをいじり始める。

「ち、ちょっと!……やっぱいいですいいです!……」「ンだよ…そんならいいけどさ…」「だ、だってこんなスピードでバランス崩したら危ないじゃないですかぁ!」「わりいな。でもちょっと触ってみたらアンタのモフモフはとっても気持ちがいいぜ。よほど小っちゃいころからしっかり手入れしてきたな…」「そりゃそうですよ!何せ永遠の18歳のうちがそれに気を使わないわけ……」「だろ?俺はお前のモフモフで寝たくなった」ロックオンが顔を赤らめた。

「な、何言ってんですか?やめてくださいようもぅ!あー、あなたもブレイブと同じなんですか?超幻滅したんですけど…」チェギョンが慌てて振り払い、ムクバードに触られた部分を気持ち悪そうに振る。

「こらこら、無線装置をくだらない道具に使うな」国連統合軍のＥ－７６７“スカイアイ”から苦情のような要請が聞こえくる。

「お、ロックオン何年振りかだな！」「女の子も一緒かよ？どっかで口説いて連れてきたのか？」ふと向こう側から何匹かケンホロウやピジョット、飛行タイプのポケモンが飛んできた。装着している装甲板や無線機を見る限り、アメリカ空軍である。

「お前ら元気だったか！」「そりゃな。お前が隊長から離れた後はめんどくさいやつが着任しやがったがそいつは……半年ぐらい前にアラスカでロシア空軍のポケモンとやりあって死んだぜ。で、今は俺が隊長ってわけだ」一匹のフライゴンが名乗り出る。「マジかよ。ケルディム、お前が隊長？俺のチームで一番飛行速度が遅かったお前が…」「今更持ち出すなそれを。それによ、お前の彼女だろそいつ」「あったりまえだろうが！彼女は俺に志望でついてきたんだがらな」ロックオンが嬉しそうに隣にいたチルタリスの頭飾りを翼でたたいた。

「は？！い、いえ…そんなはずが…」「すっげえ！あんたこんなセクハラ男についてきたのか？」「確かに見た目はいいな。おれが５０ポケルカはかけてやる」「違いますよ！誤解ですぅ！」チェギョンは慌てて否定する。

……この男ってこういう集団にいたのね……

……まじドン引き……もうありえないんだけど……

２０１２年　１１月２４日　ソーラ南部のパルク州　国連軍・米軍

基地　１４００時

……俺も年を取ったのかな？……はあ……まだ１８歳で？

……思春期のせいなのかな？

リーヒュンは本来は国連軍の戦闘機の格納庫（ハンガー）であるだだっ広い倉庫のような建物の中にいた。ブレイブたちと一緒に自分の弓矢を直していたとき、こんな中年を超えたようなことをふと考えてしまった。その直後にブレイブの右前足が彼の頭の葉っぱを襲う。別に怒ることではなかったが。

「おいおいおい！何またボーっとしてるんだよ？まあ、言うなればお前もまだまだ思春期抜けきらねえ、てとこだな」「ああ…ごめんごめん。ただ…俺もまだまだここを理解できない事がさ…」「んなもん気にしてたってなにも変化しないぜ？お前には天性の何かがあるのは分かるが、それで先をみすこして悩んでたってな。お前のことだから直接行動あるのみ！だろ？」「そうそう！リーヒュンはそうじゃなきゃダメだよ！うん。さっすがブレイブだね！そうだよ。」「へへっ！ありがとよ！ユイリィちゃん！「だよな。はあ、昔みたいに何にも考えずにバカ騒ぎおこせりゃな…」リーヒュンはそう言ってツルで首元の葉っぱをいじった。

思えば彼自身がこういったことに関して戸惑いや不安を感じるようになったのは、この2か月近い帰還に限った話ではなかった。考えてみれば、この２，３年前というのが正解だ。それを人間界の用語でいえば思春期という１３歳から１９歳くらいの期間を指すのだが、ポケモン達にとってもこの期間は親元からの自立心や反抗心、内面に対する複雑な感情が入り混じる時期である。このベイリーフもまたそのような時期を漠然とした将来に対する思いを抱きながら生活していたのは、ほんの数か月前まではそれが普通だと思っていたからだ。

だが今は違う。ここにいること、自分の持つ能力を見出され、そ

れを苦しいながら現出させなければならないこと、多くのポケモン達に出会ったこと。ブレイブ、テルル、３０２中隊の面々（特にバストークやピトムニク）、自分たちが助けたレオたち１７６１突撃隊。ユイリィのこと（そんな彼の思考を読み取ってしまったのだろうか、このメガニウムはにこりとしてツルで腹のあたりをそっと触った）。

そして……フローラ……妹が……

そのあたりから何かが変わった気がした。昔のように思いっきり前に出づらいような気がする。後さき考えない純粋さ、それが妙に心配になるようになった。

……この勘の良さが周りに迷惑をかけるかもしれない……

そして“あれ”を知った後は……

……自分の能力が……取り返しのつかない事態を生むかもしれない……

「大丈夫大丈夫！リーヒュンはそれでいいよ！フローラは助かる、そう信じてれば何とかなる！」ユイリィがリーヒュンのおなかのあたりをツルでぐいぐい押してきた。ちょっと危ないが彼女なりの信頼表現かちょっかいなのだろう。

「そうだな。なんでもお見通し、てわけか。俺はまだユイリィを見通せないけど」「なーにいっての？あたしのことは絶対に見通せないよ！決まってるの」「な、なんで決まってんだよ？」「だってさ、リーヒュンの性格がそう言ってるんだもん！そんな単純さじゃうちの事もまで理解できないよ！」「あのな、またそれは君の勘だろ？勝手に決めるなってての」「あったりぃ！勝った勝った！」彼女はいつもながらのテンションだ。

「そうだぜ。こいつの無鉄砲さをなめると痛い目に遭うぞ」ブレイブが切りだした。「ん？どうして？」「こいつな、昔同じ所に住ん

でた女の子の彼氏を当てちまって、そいつら絶交させちまったんだよ！」ブレイブのフサフサ尻尾は喜びと面白さに揺れている。「な、何言ってるんだ？！あんとき俺は…」「やっべえっ！当てちまった！！！」

ブレイブの顔が一気に高揚した。リーヒュンのような友人の女話をするのは彼にとってこの上ない楽しみなのだろう。「うっそ！そんな子だったの？！さすが！」ユイリィがますます楽しそうにツルと首の花をぐいぐい押しつけてくる。

「おいおいっ！その話を今更……」「やったぜ！またも図星だ。俺の勘もいよいよ、だな」「うんうん！」「いや…はあ……確かに事実といえば事実だけどさ……」リーヒュンはこのブースターとメガニウムの会話から逃れるべく、隣のテルルに目線を送った。しかしその彼女も「それホント？！マジで引いちゃうんだけど」と言ってブレイブたちに顔を寄せた。

「やっぱテルルも気になるよな！その先の話なんだけどよ……」３匹のバカ話が延々と続き、このベイリーフは極めて恥ずかしかった。「ちょっとちょっと、４匹の皆さん、手足の方が疎かになってませんか？」ピトムニクがユイリィの頭の脇からその話を聞きながらもちくりと突っ込んでくる。

「まあ、こんな面倒くさい作業じゃても疲れるわな」バストークがぼやく。

「だってこの作業めんどくさいですよ！こんなんで矢の部分を研磨して軽くしろだなんて誰が考えたんでしょうね？」「しらねえなあ。」ユイリィがツルを使って矢の部分をこすりながらため息をついた。「ああ、くっそ！前足が死ぬ！おっさん、全員の分やっちゃってくださいよ！」ブレイブが前足をぶんぶん振ってバストークに矢を渡そうとする。確かにこの中隊長は自分の武装を他の誰よりも早く調整し終えているようだ。残りの連中がしゃべってばっかのせいもあるが。「んなこと言われたってよ、武器の手ごたえはそれぞれにしか会わないんだぞ？俺に言われたって無理な話だ。せいぜい娘の考

えがわかって関の山だぜ」メリープが矢を全部突っ返す。
「へえー？ホンットにわかるんですか？何年もまともに暮らしてないのに？」グラシデアが鼻を鳴らした。「ピトムの方が私の傾向を知ってる気がする。お願いね♪」このモココはピトムニクに矢を全部渡すと。しびれた手を振った。
「任せて！」「はあ…ったく…」ピトムニクはグラシデアから矢を全部もらい、その様子を見た父親は首を振った。
「うちはリーヒュンのくせ全部わかるよ！やってあげよっか？」ユイリィがリーヒュンの矢を背中側からツルで取る。「いや、やめとくよ。なんかとんでもないことになりそうな気がする」「なーに言ってんの？ブレイブ、もっと話していいよ」「おっしゃあ！」「アンタたちこういう話になると元気よね。で、まだ続きがあるの？」
「まだまだ！その半年後な…」
「はあ……困る……」リーヒュンが首の葉っぱをいじった。

彼らが今している「研磨」とは、弓矢の類を研磨剤（やすりの一種）でみがき、各員の扱いやすい軽さにすることである。しかしこの研磨剤をいう物がポケモン達の開発したものではきわめて扱いにくく、矢を一本調整するのにバストークのような兵士でもゆうに2時間はかかった。人間のような高速・高精度の研削加工技術…例えば縦フライス盤…の類はこの文明には存在しなかった。

「なんだよぉ。ピトムは気にならないのか？こいつの赤面の過去話」ブレイブがピトムニクを前足で抱き上げ格納庫の床に下ろす。ブースターとプラスルの背丈差というのはその位甚だしいものだったが、この文明に大きさは関係なかった。同い年くらいなら対等、4、5歳以上違えば先輩後輩。そんなものだ。

「うんん。リーヒュンの話はめっちゃ面白いよ！さっすがだよね」
「それは言えるな。俺の嫁さんもそうやって分かりたかった」ピトムニクもバストークも言って笑っていた。「だろ！？」「そうだよね！、あはは！」「いいなあ！私もそんな風に全部わかったらこんな変態にくっつかずに済んだわよ」テルルはさりげなくすり寄ってきたブレイブを右前足で押さえつけた。「分かったって俺はテルルを迎えに行ったぞ！なあ？俺たちは家族同然なんだからな」
「ま、まあ…悪くはないけどさ……家族ね……」テルルは彼に一言に神妙な面持ちになる。「……いいなあ……別にねたましくはないけど……」
「なんかあったの？」グラシデアがテルルの顔を覗き込んだ。「う、うんん！別に何でもないの。忘れて」
「な、なんだよ？俺はいつでもテルルの家族！」「うちも！」ブレイブとユイリィが同調した。「そ、そうだよね！ありがとう」テルルは無理やり表情を明るくする。
「おらリーヒュン、お前も同意だよな？」「ああ、そりゃそうだよ」リーヒュンがテルルに目線を送るとそのグレイシアはこくりと頷いた。
「あたしとリーヒュンは家族だよね、ていうか同じ一緒だよね？！」ユイリィがこのベイリーフにのしかかった、というより押しつぶした。「うぐぇ……ま、まあな」「やったあ！」
「そ、それはさすがに気持ち悪い……」「言えるかも」ピトムニクとグラシデアがボソッと小声で言った。

その数分後、ブレイブはリーヒュンを格納庫から整備部棟に向かう通路の所まで連れてきた。「どうしたんだよブレイブ？俺が彼女に何か…」「いやいやそういう訳じゃない。俺とお前を比べた時……」このブースターは遠くを見るような目線をする。

確かにブレイブ自身は女の子、（くどいようだがポケモンである）の考えることはすぐにわかるつもりだ。と言うより、性別問わず他人の空気はすぐに読めるつもりだった。リーヒュンは負けていないくらい勘が鋭くて（彼の妹フローラのことは読めなかった）、そのおかげで戦場でも何度も危機的状況を生き延びた。

だが、テルルのことは……

……何かが……違う……

「……ああ、ごめんな。それでな、やっぱ俺みたいな奴じゃあいつみたいなのの事は…」「おいおい。普段の調子はどうしたんだよブレイブ？」このベイリーフは友人のブレイブの顔を覗き込む。

「たぶん…無理そうだ……ああいうかわいそうな子は……」ブレイブが寂しそうにフサフサ毛のついた首を振る。「どうやらお前は、テルルとはうまく繋がれそうだ。もしあいつが何かあったら……教えてくれよな……」

「そんな。俺、女の子の気持ちは……知ってんだろ？」リーヒュンが首の葉っぱをびくんと動かす。その中でブレイブの中から普段の彼と違う何かが感じ取れた。

テルルの状況が難しいのは前から感じ取れたが……ブレイブは……

……そっか……普段のお前のそれは……
……やはり……何か理由が……

「な？なんか分かっただろ？」ブレイブがそんな親友のベイリーフの表情を察したように笑いながら前足で首元の葉っぱをたたく。「そんなに変な表情すんなよ！……分かってるよ。だから……頼む……テルルを……」「あ、ああ……」

2匹は格納庫の方へ戻ってゆく……

その間、リーヒュンは寂しそうなブレイブの表情がその後しばらく目に焼き付いて消えなかった……

胎動するものその１（後書き）

ちょっと1日遅れましたね……ごめんなさい……

……「その2」では、いよいよテルルの家族が?!

テルル：そんなことCMしないでよ！

胎動するものその２（前書き）

ちょっと執筆が遅延気味……もう少し速度を上げたいんですけどね…

今日も頑張っていきましょう！

胎動するものその2

２０１２年　１１月２５日　エメリアの国連軍施設の管理棟　０９１０時

「じ、辞令？ですか…」リーヒュンの顔が一瞬動揺した。「うん！これであたし達は正式におんなじ部屋でいられるてことなの。これからうちがリーヒュンに何してもＯＫ、てことよ！」「いやいや、それとは別のような気がするけど」ユイリィはいつもながらに楽しそうな声である。

「おっし。これで俺らは正規の部隊だな！今後もよろしく頼むぜ！」ブレイブは嬉しそうだ

「……さ、３０２中隊はどうなるんですか？」ピトムニクが突如不安げな声を上げる。無理もない、彼女にとってこの部隊は家族であり、学校であり、友人の家でもあったのだから。すでに彼女とバストーク、グラシデアを残して全滅して２週間以上たっていた。

「……どう、なんですか？……」バストークがモフモフ毛を震わせた。自分と自分の部隊の命運はどうなっているのか…？

「大丈夫ですよ」サクラがこのメリープとプラスルを落ち着かせるように言った。「本日付であなた達２匹並びに４匹はエメリア自治協会防衛軍第１歩兵師団第２大隊第３０２中隊からは除籍となり、別の部隊が３０２中隊として機能することになるわ」

「ううっ…やっぱり……」ピトムニクが赤く長い耳がうなだれた。やはり覚悟を決めるのと実際にその場面に遭遇するとでは大きな精神的能力を必要とするのだ。３０２中隊が現在どうであれ、彼

女にとってまさしく故郷同然なのだ。「……覚悟はしてたんだろ？…」バストークの青い前足がプラスルの腕を握る。グラシデアも寂しそうな表情をしていた。

「……あれ？……解散、てわけじゃないのよ？」「……えっ？」サクラの一言にピトムニクの顔が期待を込めて上がる。

「３０２中隊の３匹はＵＮＦＳＳＴＰＴ……国連統合戦略軍司令部直属ポケモン実験部隊として今後も活動してもらいます。リーヒュン、ユイリィ、テルル、ブレイブの４匹もバストーク・ラルシア大尉の直轄として頑張ってもらうわ。いいわね？」

「あ、……ほんとですか…そりゃ俺にとって……」バストークの顔に明らかな喜びが現れ、声がわずかに震えた。「……ありがとうございます……司令……」

「お、おっしゃあ！！俺またピトムやグラシ囲まれて……この上ねえ至福だっ！！」ブレイブが大喜びでフサフサ尻尾を振りながらピトムニクとグラシデアに飛びついた。「２匹ともよろしく頼むぜ！」

「むぎゅっ…ま、まあ…よろしくね…うん。分かったから！ね！？」グラシデアは喜びながらもこのブースターを振り払おうと首元のモコモコ毛を振った。「ううっ……ホントに、ほんとに一緒なんだね…よ、よ、よろ…し…く…」ピトムニクは彼に抱きしめられながら既に目から涙が滴っている。「もっちろん！ピトムもグラシも俺にとっちゃあ天子様だもんな！」「そ、それは嫌よ……でもまあ…いいよね……」

「やったやった！うちらまたみんな同じ部隊なんだね！これからもずーっとよろしくだよ！うん」ユイリィはそう言いながら３匹を４本のツルでむぎゅっと抱きしめ、首元の花の近くにくっつけた。「ううう…ユイリィ…うわああん！」ピトムニクは声を上げてこのメガニウムのお腹もとに抱きしめられる。「うおおおぉぉぉ！俺は今最高に幸せっ！……ううう…」ブレイブはついでのように抱きしめられてうれし泣きしている？ようだ。

「おいおい。ブレイブが泣くことじゃ違うだろうが」リーヒュンは呆れたようにその中にいるプラスルとモココをツルでなでる。「良かった。これからも一緒にやれるらしいや。俺もフローラのために行けるところまで行くよ。これからもよろしくな」「リーヒュン…そうだよね！一緒に…一緒だよね……」ピトムニクはさらに泣き続ける。そんな彼女の喜び、感動をこのベイリーフはツルの先から感じた。

「そうだ！リーヒュンもこれで１００％あたしと一緒だね！ずーっとだよ！それ以外ないし。うん。」ユイリィがリーヒュンの前足と首をツルでひっつかんでピトムニクやグラシデアと一緒に抱き寄せたうえ、首元の花でもごもごさせる。むせ返るくらい甘い香りを彼は吸い込んでしまった。

「わ、分かった分かった！やめてくれよ！むごいむごいっ…うぐぇ…」「…おーっし立ち直ったぜ親友！！！俺らは永遠に同一部隊って運命なんだよ！今後もお前の思い切ったバカを期待してっからな！」「うんうん！リーヒュンは一生あたしのものだよ。これからもいろいろ振り回してね！約束だよ！そのほうが楽しいもん」「うん！わかったよ！だ、だからさ…いい加減苦しいから首の花に突っ込むのは…」「えっ？！もっと突っ込んでほしい？あはは……！！！そんじゃ喜んで…」「おらおらいっけえぇっ！」「むぎゅぎゅっ…」

「そっか。みんなでまだやれるってわけなのね。私からもよろしくね！」テルルが歓喜の渦の中に飛び込んでピトムニクとグラシデアに前足を当てる。「うん！もちろん！」「私たち、ほんとに全員でいいんだね…」「うん！」テルルもいつの間にかその喜びの中に加わっていた。

……ワタシは……これでよかったのよ……

……何があっても……全員いれば……諦めはしない……

「うおおおぉぉ！ついでにアタックを……」「ひ、うぶぐっ！」ブレイブがそのむぎゅむぎゅ状態に紛れてテルルの顔に口づけしようとする。「よっしゃあああ！！２発成功！」「はあ？！めっちゃ不快なんだけどそれ！！！！！？？？」「最後は思いっきりハグを…」このブースターはさらに調子に乗ってグレイシアに迫る。

ばこぉん！またもやテルルの殴りが炸裂。

「ぶぐっ！で、でも感動…」「あ、あのなあ、や、やめとけっての！……うぐぇぇ！」「もう何でもいいじゃん！あはは！みんなそろいもそろって大喜び！」「ま、まあそれなら…っていい加減やめなさいこの変態！？」リーヒュンがブレイブをツルで押しとめようとしてユイリィに押しつぶされる。７匹が繰り広げる喜びと感動のもみくちゃ合戦。

それこそ、この一風変わった彼らの、いやポケモン文明本来の姿が持ついかなる危機的状況下でも助け合い、相手を信じるおおらかな喜びと安定した信頼表現を象徴しているようなもであった。何よりこのご時世どこの国の人間たちも、金融危機の傷跡残る不安定な経済に不安を抱き、（これは火力発電による温暖化での人類滅亡や電力不足での健康被害・経済恐慌を比べればはるかにましだが）原子力やメタンによる発電システムはもちろん、太陽光や波力、風力にすら信頼性で不審を抱き、宇宙開発やバイオテクノロジー、再生医療、情報化社会などといった新興の科学技術や社会システムの暴走懸念に恐怖を感じ、世界どこかでいつ襲うともしれぬテロ・紛争・災害の恐怖におびえ、巨大化した情報空間に隣人すら疑い、一部の国々では情報統制や思想統制に肩身を狭くし、またある一部ではくだらない政治屋の政局争いに失望を覚え、さらにある一部では強権的な軍や政府の指導者の弾圧から故郷も家財も失い逃げ回っている

のだから。そんな情勢にうんざりした人間がこんな彼らを見たらどんなに無表情な人でも顔をほころばさずにはいられないだろう。

とまあこんな楽しいようなめちゃくちゃなような状況が1分ほど続いた後……

「…で、１７６１突撃隊のあなた達は……」サクラは大喜びの連中を衝撃的な表情で見つめていたレオ以下グリソムやガトル、シンシアに目線を送る。「……あなた達も１１月２５日付で１７６１突撃部隊から離脱し国連統合軍直属部隊の一員になる、とエメリア協会の防衛軍から通達されているの。どう？それでいいわね？」

「……あ……はい……了解しました……」レオはこのサーナイトの目線から避けるようにして呟く。

「どうしたの？……そうよね……」「…それでも……俺……やります……」このコリンクは上の空のようだった。

「そりゃ……大丈夫？私が…」「おいらも……できなくは…」「いやいい。」レオがグリソムとガトルを制止する。「俺が隊長だ……それ以外はねえ……」「ホントに…？」年端もいかないミズゴロウとパチリスは同い年くらいのコリンクの濁った列車の前照灯に似た目を見る。「大丈夫だっての。……ありがとな……」この間シンシアは相変わらず下を向きっぱなしだったが。

「…大丈夫ね？……無理はしなくていいのよ…あと、この部隊の隊長は……」サクラはモフモフがすっかり乱れた（もともと揃ってないが）メリープに視線を合わせる。（ブレイブが「俺やるっす！」と言って前足を上げたがテルルが「このバカっ！」とその足を叩き戻した）

「バストーク、あなたに引き続きお願いしていいかしら？」

「……んん……別に異論はないですけどね……ただ…」バストー

クの顔が沈む。「俺が隊長をやったら……また……生きて返すことが……」

「大丈夫ですよ隊長♪」ピトムニクがメリープのモフモフを触って鼻をすすった。「今度はきっと大丈夫です！私が頑張って証明して見せます！！……皆がちゃんと帰ってこれるように…ね？」「わ、悪いな……いつも負担ばっかりかけてよ…」「も、もう平気です！また中隊に戻った気分でやります！ね、グラシ？」プラスルは隣にいるグラシデアの太ももものあたりに彼女の短い腕を置いた。

「う、うん。バストーク、……無理して死んだりしないのよ。葬式なんて話にならないから」このモココは呆れかえったようにまたは小馬鹿にしたようにそういって父親をちらりと見る。「わかったよ、お前に言われなくても先に死んだりはしない」バストークがため息をついて首を振った。

「そうこなくっちゃ、ですよ！うちらの隊長はこうでないとね！うん。リーヒュンも同意見同意見♪、ね？」「そりゃそうだよユイリィ。という訳で隊長、今後ともよろしくお願いします」ベイリーフとメガニウムはツルでこのメリープの中隊長、いや新隊長を前足に触れた。「ば、バカが！俺みたいな３０越えに頼りすぎんなよ…」

「あーあ、俺が隊長したかった！」ブレイブがわざとがっかりしたように頭のフサフサを前足でいじる。「ったく、そういうことは言わないの！で、ガトルやグリソムたちも今後ともよろしくね」テルルがレオたち４匹をこちらに寄せた。

「特にシンシアとガトル！お前らは俺にとっちゃかわいい妹なんだよ。絶対に前線で人間どもの盾にはさせねえ。あとな…」ブレイブの尻尾が喜びに振れる。このブースターの鼻元口元から今にも火の粉がぱちぱちと吹き出しそうだ。「お前らとは１回以上キスをしてやっからな！こうご期待、といった…」「やめなさいっ！この変態っ」

「最初っからそんなこと言うかよ？これだからブレイブは…まあいいや」リーヒュンが諦めたように友人を後ろにツルで引きずり離す。

「とにかく…俺も正式な軍人じゃないしよく知らないけどさ、ここは階級とか先任とかそういうの関係なさそうだ。まあ、そういう事で様々な面でよろしく、な？」「はーい」「あ…よろしく…お願いします…」リーヒュンのツルにガトルは嬉しそうに握り、シンシアはおずおずと前足を出した。

「そっしてあたしがいるのよね！こんな無鉄砲についていくと危ない事ばっかだから、危ないと思ったらこの子を盾にしちゃってＯＫ！、だよ。うん」ユイリィがそのわきからツルでパチリスとロコンの前足と手に触れた。「あ、あのな、最初っから変なイメージを植え付けるなよな（おそらく言っても無駄そう…）」「あはは！だって事実じゃん！リーヒュンにくっついていったら今までしょうもない事態ばっかだもん。まああたしには全然余裕で楽しかったけど！……」ユイリィがリーヒュンの右前足に前足を当てる。「……でも、まあ基本的にはリーヒュンについてっても問題ないけどね……あてにはなるよ必要なときのあてには…あんまり彼に無理させちゃだめだよ…」「俺そこまでやわじゃない…」

「へっ？…はあ…」シンシアは相変わらず状況が読み取れないようだ。

「お、おいらもいい？」グリソムがホタテ（ホタチではない）を撫でながら聞いてくる。

「大丈夫！大丈夫！」「もちろん。」「う、うん…でレオはどうすんのさ？」グリソムは幼少時代からの友人であるコリンクの方を見た。

「うっ……そうだな……よろしく頼みますよ……」レオは曖昧に答えた。

「す、すいません！いつもだったらこいつ「てめえらの命は預かった！」とか口走るくせして…ここんとこは……」「いいのいいのよ。こいつは立ち直り早いがらほっとくのが一番の治療法なんよ…」さっきからコックリコックリしていたスカイラブがふと目を覚ましたようにレオのはねっ毛のある頭を不器用になでる。

「そっか……どうしよっか……」リーヒュンがツルをこのコリンクに当てて彼の状況を読み取ってゆく……

……まあ……部隊がな……ああなっちゃったんだから……

その後1匹ずつサクラが持ってきた羽ペンとインクで誓約書に記名させられた。今後国連統合軍の一員としてあらゆる任務に異議なく参加すること、機密や情報を家族を含めた一切の他人に口外しないこと、不条理な理由で戦死しても異議を唱えないこと、等。

「やっぱこんなもの書かせるのかあ……気乗りしないなあ…」

ユイリィはその誓約書を書く各員を見て小さくため息をついた。彼女はサクラにこの書面を見せられたことがある。みんなこの内容の意味を知っているのだろうか?そう、ここに示されていることはポケモンは人間の手先であり、いかなる権利も補償も有さないという事。そんな無慈悲なことが示されているのだ。すでに統合軍内では多くのポケモンが家族のため、金のため、故郷の為に、またはそうとも知らずにこれにサインし、あまりにも過酷な世界中の紛争地帯で次々に命を落としていった…

「な…なんだこの内容?……」

リーヒュンは明らかな嫌悪と不安な表情を浮かべている。おそらく紙面の意味を感じてしまったのだろう。

しかしその迷いはやがてちょっとした決意に変わった。（ユイリィにはそう見えた）

……俺もとうとう……正式に、か……

……これでフローラに……真実に……

……自分が何者であるかに……近づけるなら……

バストークはピトムニクとグラシデアに目線を送る。ピトムニクは決意したように頷いたが、グラシデアは首のモコモコをいじってため息をついた。

テルルは首を振ってサインをする。普通に書いているにもかかわらず、走り書きしたような落ち着きのない文字だった。これで本当に“テルリウム・ルナマリア・オフリート・アストラフスキー”と書いてあるのだろうか？ブレイブは何も臆することなくさっさと書いた。はっちゃけたような足型文字だ。まあ、かろうじて“ブレイバール・エスコーツ・クレイバー”と分かるが。

サクラが全員分の誓約書を集めた。このサーナイトはサインの部分に書かれている個性の現れた署名をしばらく眺め、ひもで束ねる。

「みんな書いたわね？これで今回呼んだ理由は終わったけど…これで最初2回分の給与もちゃんと…」「給与ですか？！」テルルの目の色が豹変した。「ど、どうしたテルル？」ブレイブがちょっとびっくりしたようにグレイシアを見る。

「は？！なんでアンタはそんなに冷静なの？！だって給与なら…給与なら…」「落ち着いて…大丈夫よ。あなたの分を誰も盗ったりしないから…」サクラがテルルを落ち着かせようとする。彼女はおずおずと後ろに下がったが、その目だけはアフリカの保護地域と化したサバンナでガゼルを3日ぶりに発見したチーターよろしくギラギラと輝いていた。

「…それで、給与の現金を直接受け取りたい人いる？ドル札だけど」

「俺？……どうすればいい？」「そりゃさ、使いたければそこらで

いくらでも使えるし、そうでなければ、家族にでも送ってもらえばいいの。うん」「うーん…これ送っても使えるのかな家族…」リーヒュンにはイマイチその金の使い方が理解できない。自分の故郷の町まで行くにはやや遠い。かといって今区別金で何かしたいとは思わない。人間にとってはそれがあること自体が働く目的のようなもので、金があること自体が個人の一種のステータスシンボルのようなものだったが、ポケモンにとってはあくまで手段の一つにすぎなかった。「そっか。ならそのままでいいんじゃない？あたし達はここにいればほぼ無料（ただ）でいられるわけだし」

ユイリィに取って金とはその程度ものでしかなかった。こんな辺境地帯で、しかもポケモンとあらば金を使うような機会はあまりないのだから。

だがもう1匹過激な反応を示している奴がいた。

「か、金？おいらも…」「グリソム！そんな目つきで見ちゃダメでしょ！アンタ普段はボケボケしてるくせにそこだけは人間同様なのね？」ガトルが呆れたように言う。「だ、だって…おいらがこれ全部送れば相当の額に…」

「……あーあ。結局アンタもレオ同様なのね？まあ、今はへこんでるからそうじゃないけど」スカイラブがボソッと突っ込んだ。「今言うなそれを」コリンクは相変わらずうつむき加減だ。

「わ、私、は、早くくださいっ…」「分かってるわよ…あなたの家族に送るんだったら下にある部屋の人間たちに渡すの」サクラが持ってきたダンボール箱から札束を引っ張り出してグレイシアにそれを握らせる。「…聞いてるわ。あなたがロシア軍にいた時から手紙を書いて一緒に送ってたって。早くもって行って……」

「は、はい！！」テルルはそれを掴むと慌てて部屋を飛び出してゆ

く。

「な、何やってんだあいつは?!俺が見てやる!」「おいおい!やめとけって」リーヒュンが追いかけようとしたブレイブの胴回りをツルでつかんで食い止める。

「何言ってんだよ!?あいつが何考えてんだか…」「昨日ブレイブ自分で言っただろ?!俺にテルルは相手にできねえから頼む、って。俺の勘じゃ…」このベイリーフは少し戸惑う。「お前とテルルは…ついて行ったら確実にトラブルになるぞ…ごめん…たぶんだけど…」「…そっか…問題ねえよ」このブースターは親友のツルを解きながら言った。「問題が起ころうとなんだろうと俺はテルルのパートナー、っちゃ聞こえが良すぎるが、たぶんそれだ。……とにかく俺は奴のことを無視したりはしねえ。お前のことはいつも頼りにしてっからな……俺はテルルが何を考えてんのか見てくる」

「そっか……うん。分かった」リーヒュンがツルを振りほどく。

「ブレイブだから言わなくても分かりそうだけどさ、あんまり刺激するなよ」「分かってるぜ!お前じゃねえからバカなことを突っ込んだりはしない。それに…」ブレイブがリーヒュンの首の葉っぱを叩く。「お前がいるから俺はバランスよくやっていけてるんだ。いつもありがとな」このブースターはベイリーフの右前足で軽く前足を叩くとグレイシアが飛び出していった後を追って外へと走った。

「ブレイブとリーヒュンはホントに……信頼しあってるんだね…ちょっと感動ものかも。うん」ユイリィがツルで彼の首元にそっと触れた。「まあね…3歳か4歳ころからずっと一緒だったからな…」

話と言うのはどうやらこれでおしまいらしい。ここを次に使う人間の一同がいるらしく、アメリカ空軍の制服を着た男がこちらの様子をまざまざと覗いていた。

「で、この後どうする?中隊長♪」ピトムニクの一言にバストークがびくんとする。

「ですよね！どうしましょうか？」ガトルが調子を合わせてくる。このプラスルとパチリスは似たような性分のようだ。「こういう時にバストークは予定が決まらないんだよねえ」グラシデアが父親のメリープをからかうように言った。

「お、お前らな…こんな時ばっか隊長に振りやがって…」新隊長は体のモコモコ毛をいじりながら考えているような表情をする。やがて…

「しゃあねえ、リーヒュン、ユイリィ、お前らのカンで決めろ。」

「な、なんでですか！？」「あたし達にそこで振るんですか？！」

2匹ともひっくり返りそうになった。

「……この隊長ってこういう感じなのかな？」グリソムが呟く。「うん。そんなもん。呆れちゃうよね」グラシデアが諦めたようにこのミズゴロウの頭の突起を右手でなで、それに答えた。

「確かに言えるわね。でもレオよりかはまし。」「ああ？！何のつもりだ？」レオがスカイラブの言動に噛みつくが、このルクシオはさらりと受け流した。「あっちの方が不器用でまたからみやすいごったね…ごめん。親しみやすいってこと」スカイラブはため息をついた。またまたこの部隊は大変そうだ…

同じころ　ニュークリア大陸の　エンバーク州　アメリカ合衆国エメリア州　エドワーズ市の一角

エドワーズ市は南太平洋上エメリア大陸にあるアメリカのエメリア州の中で最大の都市。もともとこの辺りは赤道直下に近く、海岸線のすぐ近くまで熱帯雨林が張り出している状態だったが、１７８０年にアメリカ１３州がイギリスから買収したのだ。以後、綿花や穀物などの農業、各種鉄鉱石や金、原油といった資源開発を中心に繁栄してきた。１９９０年代に入り地球環境問題が表面化してくると、当時最先端のＩＴ産業や自然エネルギー開発産業、実用化されたばかりのクローンポケモン産業などをハイテク工業地帯を積極的に誘致し、１９９１年に発行された国連共同環境声明に沿って、太平洋諸国にも電力を供給する太平洋送電網計画やトリウム原子力発電所を試験的ながら実用化する一方、なかなか対策のまとまらないアメリカ本土の連邦政府より先に独自で環境政策を推進、市街地における大型バスやタクシーによる路線ネットワーク、バリアフリーと環境性を両立した交通機関である地下鉄やＬＲＴ（超低床鉄道）の積極的整備、自転車専用レーンの設置、オフィスビルやタワーマンションなどの太陽光パネル設置の義務化、スマートグリッド方式の運用、自動車専用バイパスによる渋滞緩和、徹底した廃棄物再利用システムの整備等を進め、かの金融危機以降に新規産業の振興、環境保護政策への同調のために始まった連邦政府による“クリーンニューディール”政策の大きな原点となったのだ。また、エドワーズ市は周囲を囲む熱帯雨林の保護、ひいては森林資源とポケモンを除く生物種の（生物も多様性もまた立派な資源である）保護を推進しているため、住宅地域ではない都市の郊外部分には、ビル群や工場を縫うように緑が生えわたっている。

　そんなオーストラリアのシドニーの街並みにに熱帯雨林を加えたような最新技術と自然が調和したアメリカ随一の最先端技術・環境都市の中心地に近い一角のオフィス地区にあるアメリカ発祥の某大手コーヒーチェーン店のある座席に自由連合軍の一員、ポニータのシーベルトとキュウコンのアリョーナは来ていた。２匹の前に座っているのは人間の男。

「……という事なんだな、リヒテント曹長、ハイペリオン中尉。我々ＥＵ（ヨーロッパ連合）としてとして協力できるのは直接的軍事行動と言うより間接的に君たち自由連合か自治協会の軍を刺激する事ぐらいだ。それさえそれなりのリスクは……」「それはよく知っています。とにかく、南スーダンの国境線にあるそのエメリウム水晶採掘場にいるあいつ指揮下の部隊に対して攻撃できる自治協会側の勢力はいるんですか？」「焦っちゃだめよ…すいません…この子こういう話になるとせっかちなもんで…」キュウコンは隣で力むポニータの座った背中を母親のように前足でなでる。「アリョーナさん！このチャンスを逃したら……奴らのすきを狙う事は……」シーベルトは必死に落ち着こうしながら椅子に腰かけていない前足の蹄を鳴らした。

……これが俺の最初の復讐……試金石なんだ……

……父さんや母さんを、家族と俺を……あんな辺境地に追いやったくそ共に対する……

……自らを“自由連合”と名乗る汚染水同然の野郎ども……

「分かった分かった」男は苦笑しながらタブレット端末のようなものを出し、地図を表示させた。「いいか？自由連合側の採掘場はこっち（右側の丸をペンで指した）、自治協会側のはこっちだ（少し左下の丸をさした）。距離にして1キロあるかどうか。このあたりの傾斜面（2つの間にある斜面を指した）にもエメリウム水晶が多いらしいようだ。フランスの資源探査衛星が原油埋蔵点を調査していてこうでた。（この男はもう1枚の色のついた写真を見せた。あとからＣＧで色づけされた超高精度資源衛星画像だ）この青色がエメリウム。彼らはもう知っているようだな。だからこそこの辺りを巡る両者の対立は激しい。シーベルト、君が言うにはこっちの自治協会側の軍を何かしらの刺激で突っ込ませりゃいいんだろ？」

「はい、そうです。それいいんです」「自信があるのね」「ええ。情報はエンデバーが持ってきてくれましたから」シーベルトが即答した。アリョーナは彼の言動を母親のように一つ一つ確認し、語弊がないように男に伝えた。

「そうか、それならリビアに派遣しているフランス軍でもイギリス軍でも何かしらに刺激は行える。ただな…」男が地図で少しは慣れた施設と赤いラインをペンで差す。タッチペンで拡大され、鉄条網のようなものとタンクのような構造物の航空写真が出てきた。「この施設はアメリカとイギリスの企業の原油田と精製プラントだ。高度セキュリティーシステムと自動防衛装置付きのエジプトまで伸びている。このラインはスーダン共和国と南スーダンの国境線だ。この辺りは部族間の争いがまだあるから国連統合軍が治安維持活動をしているのは知ってるよな?」「ええ、今回の戦闘はその周囲を刺激する恐れもまた…」「ああ、さすがは自由連合元幹部の子孫だけあるな」男はこのポニータを誉めるように言う。「そうだ。戦闘が激しくなると周囲の双方の国軍や統合軍の部隊が出てくるかもしれない。最悪、それが原因で南北スーダンが軍事衝突することもありうるし、そこのパイプラインと精製プラントがやられる恐れもあるんだ。このあたりの欧米アジアの経済活動を悪化させたり、北アフリカ情勢を不安定にさせてしまう恐れは残っている。やるかどうかは君の決断だ。どうする?」

「……アリョーナさん……」シーベルトはキュウコンの表情を覗き込んだ。「いいのよシーベルト。これはあなたが決める事」

このポニータは窓の外に広がる歩行者、自動車、ＬＲＴ、エドワーズの街並みをしばらく眺め…

男の持ってきたタブレット端末上の地図、木目のついた店のテーブルを見つめ……

決断した。

始めると。

全てを。

「ええ……」シーベルトの声ははっきりしていた。「お願いします」

２０１２年　１１月２５日　マレー半島　シンガポール沖　１９００時

遠くにぼんやりと見えるマレーシアのボルネオ島に夕日が沈んでゆく……

この日の訓練を終えたタイ空軍のＦ－１６ＡやＪＡＳ－３９Ｃグリペンがまずスラートターニーやコラートの空軍基地、バンコクのドンムアン国際空港に隣接する空軍本部へとまず引き上げていった。

続いてマレーシア空軍のＦ／Ａ－１８ＤとＳＵ－３０が引き上げる。

その後アメリカ空軍のＦ／Ａ－２２Ａ４機とＥ－７６７“カノープス”がポラリス・セキュリティー社のユーロファイター・タイフーン２機とＫＣ－７６７、そしてシンガポール空軍のＦ－３５Ｂ、国連統合軍のＥ－７６７“スカイ・アイ”がシンガポールのチャンギ国際空港へと向かっていった。最後に残ったのはアメリカ海軍の空母「ジョン・Ｃ・ステニス」から参加したＦ－３５Ｃ４機、Ｆ／Ａ－１８Ｅ３機、飛行隊々長の愛機と思わしきＦ－１４Ｄ１機、そしてチェギョンとロックオンを含めたポケモン達。

「もう下に空母いるじゃない！あそこに降りればいいんでしょ？」

「そう焦んなよ。航空機の着陸っていうのはな、順番ってもんがあるんだぜ？」ロックオンがさっさと空母に向かって降下しようとするチェギョンをいさめる。確かに空母周辺には先ほどの戦闘機たちが旋回しながらホールドしている。空母の航空管制無線指示とＩＬＳ（計器着陸装置）の誘導に従い空母に着艦するのだ。

「あ、あのね！うちらはポケモンであって飛行機じゃないのよ！こんな超めんどくさいことする前にそこら辺に降りちゃえばいいじゃない？」「ばーかお前自身今どれくらいのスピードで飛んでると思ってんだよ？」「えっ？べ、別に普通の鳥くらいじゃないの？」「ああ？んじゃ俺の周りを今から回ってみろ」「簡単よ」チェギョンは鼻を鳴らしてムクバードの周りを回転しようと翼に力をかけた…

「うっわわわっ！」チルタリスは内側から大きな力で黒いオレンジ色に染まる青黒い海に引きずり込まれるが如くバランスを崩し、裏返しになって海面へと落下してゆく。

「ちっ…何やってんだあの小娘女。ケルディム、アリオス、助けてやれ」「ほいよ」完全に失速して海面に落っこちてゆくチェギョンにフライゴンとオオスバメが飛び付き、彼女を上へと引っ張り上げた。

２匹によって速度と安定を取り戻し、なんとか自力で飛びなおしたこのチルタリスはロックオンの高さまで戻ると呆れかえったような笑みを浮かべるこれに対してほっぺを膨らませた。

「さ、さっきには単なる失敗よ！今度やったらたぶん…」「やめとけ、もう分かっただろ？」

「だ、だってさ、機動性で鳥に勝てないなんて…」「ったく、何と張り合ってんだよ？俺たちはダントツに速度が出てるだから失速するにきまってんだろ？」「ううう…まあね…」そう、前述したとおり、戦闘スピードにまで達したポケモンはほぼその運動特性は航空機同様である。無理な急旋回や鳥のような急減速はバランスを崩すもとだ。これによる墜落は新米のひこうタイプの兵士によくある。

無線機の指示を待ちながら彼らは海面に広がるニミッツ級空母を中心とするアメリカ艦隊、その周りにいるマレーシアのレキウ級フリゲート艦、シンガポールのフォーミタブル級ミサイルフリゲート艦、遠くを行きかう民間船、海の上に懐中電灯のように輝く天然ガスやメタンハイドレードの採掘ステーション、遠くの空をほのかに明るくしているシンガポールやタイ、マレーシア、インドネシアなどの都市の明かりをぼんやりと眺めている。

「あーあ、やっぱめっちゃ悔しいかも。ねえねえ、もう1回やりたい！」チェギョンが明るい声で無線機に呼びかける。「あのな、そんなに俺に構ってほしいか？」ロックオンが聞いてくる。「そ、そういう訳じゃないけどさ…何となく悔しい…」「分かったよ。そんなら夜は一緒に添い寝してやる。へへ、それなら不満はないだろ？」このムクバードが調子に乗って聞いてきた。「さすがだぜ！今夜は仲良くやってくれよな」「あいつやりあって生きて帰れる女の子はざらにいねえぞ」周囲の連中も茶化してくる。

「はあ？！絶対やですよあなたとは！ああもう、何へンなこと言うんですかあ？」チルタリスの顔、特に白いほっぺのあたりがみるみる赤くなる。「おっし、そんじゃあ今夜は…」「だからいやですぅ！」

その10分ほどのち、彼らは無事にニミッツ級原子力空母の上に“着艦”した。チェギョンにとっては初めてのワイヤーを使った着艦である。

「う、ウソ。私こんなに早く飛んでたの？めっちゃ驚き。なんていうかこう…」「おらおらちゃんと位置を見ろ、もうすぐだぞ」ロックオンがそう言いきらぬうちにチルタリスの前には空母の飛行甲板と誘導灯が迫る。

「うぶぶっ…ぐえええええっっ！！！」チェギョンは保護版（足を戦

闘中や着艦時に保護すると同時にＩＦＦ（敵味方識別装置）識別チップが組み込まれている）が装着された右足をワイヤーにひっかける際に、お見事バランスを崩して無様な姿で甲板に滑り込んだ。帰還している戦闘機のパイロットや周囲のフライトデッキのクルーたちが爆笑しながら戦闘機が帰ってきた時と同様に車両に乗ったりして集まってくる。

「ああーもう！！！！！サイテーにカッコ悪ーい！やり直しやり直しーぃ！」チルタリスがモフモフ翼に引っかかったワイヤーを解こうとじたばたしながら喚いた。

「お前って女は。リアクションも声もうるさいんだよ」ロックオンが呆れて首を振った。しかしムクバードは彼女のワイヤーを離そうと近寄った際に軽く口づけしてやった。「この小娘が。愛してるぜ…」周囲から一斉に歓声が上がる。

「や、やめてくださいよこんな場所で！！！うわーんファーストキス盗られたぁ！まっじうざい！！」「へっ…相変わらずうるさい女だぜ……」

チェギョンは悔しそうに翼をじたばたさせた……

「もう…シャワーと風呂が先じゃないんですか？！汗とホコリで美少女のかわいいモフモフは悲鳴を上げてますよ！」「文句を言うな。それに5分もしねえで終わるっての」

「エメリア語は分かんねえがな、さっきから何グダグダ文句言ってるんだ？ＣＩＣに入ったら無駄口は厳禁だぞ。」チェギョンとロックオンを空母の中央付近にあるＣＩＣ（戦闘情報センター）に連れ

てゆく男がチェギョンのエメリア語をはねのけ、ＣＩＣに通じるドアのカードキーを挿し込んだ。「はいはい」「了解…俺のは文句じゃありませんけど…」２匹の適当な返事が聞こえるかどうかの時、軽い電子音がしてこの男がさらに隣のパネルに何かを打ち込むと、もう一度ピッとなって鉄製の扉が開く。

このチルタリスとムクバードは夜のように薄暗く、無数のディスプレイや表示灯だけが唯一の明かりとなっているＣＩＣの一角にある円形のディスプレイの前に通され、そこにいたその危機のオペレーターらしい男と艦長らしき男に声をかけられた。

「今日もご苦労だね。国連軍のお二方さん」「…えっ？な。なんでそんなことを?!」「知ってるんですか?!ねえ、あんた漏らしたでしょ」「んなわけないだろうが…」確かにこの２匹はアメリカ軍という肩書で演習に参加しているはずだったのだ。

「……もう隠さなくてもいいよ」艦長らしき年輩の男はほほえんだ。「統合軍の管制機の言いっぷりを聞いていれば君たちが特別扱いされていることぐらいすぐにわかる」

「は、はあ…」チェギョンがうなずく。「で、君たちに一つ確かめてほしいことがあるんだ。勘のいい君たちなら何を意味するのかすぐ分かるかと思ってね…」「何を…でしょうか？」２匹が同時に聞いた。

「映してやってくれ」「かしこまりました」機器担当の男がディスプレイを操作するとコンソールの上にあるディスプレイに円筒状の中に移るデータが表示された。

「見ての表示の通り、これは中国の空母と艦隊だ。あの艦隊は数日前からベトナム沖にいる。君たちが考える限りでは…彼らの目的はなんだと思う？」

「そ、それは自分ではなく…人間ど…いや参謀の皆さんに聞くべきことでは…」「そうじゃない。同じ戦争に関わるものとしての意見も聞いておきたいんだ」「そう…なんですか…」確かにこの発言は、ロックオンが今まであってきた範囲での人間としてはかなり変わっ

ている。しかしこの男の声から皮肉な調子や軽蔑な調子は感じ取れない。

このムクバードはディスプレイに移った隣を航行するアーレイバーグ級－ジス艦のＳＰＹレーダーから送られてきたレーダー画像と、隣に表示された中国海軍空母の資料映像を見比べた。

「……俺の勘ですが……最悪は奴らも航空機を出すか艦隊ごと領海に侵入してこちらの出方を探りに来ますぜ……武力衝突までは考えられませんが…」

「私もそう思います…」チェギョンも同調する。「……もう少しこちらに接近して出方を伺うか、それ以上なら…機体を出してくるんじゃないですか？」

「そうか…君たちはそう思うか…ありがとう」艦長は２匹を先ほど連れてきた男を呼ぶ。「２匹とも、もう戻っていいよ。君、彼らを元の位置まで連れて帰ってやれ」「了解しました」

やっと今日の任務全てが終了し、チルタリスの顔が急に笑顔になる。

「やったあ！これ思いっきりシャワーを浴びて風呂入って…あれ？……ちょっとその音声いいですか？」チェギョンは少し離れた通信担当のオペレーターのもとに近づく。「あ、ああいいけど…今適当にいじってたら民間のニュースでさ……ニューヨークじゃ株価が急落らしい。イタリアの国債が急に格下げになって欧州経済の先行き懸念再燃だとか」「ち、ちょっと待って！わ、私の手持ちの終値…」

「そんなのはネットで調べろよ。これはラジオ放送」「う、ウソ？！ホントですか？！ちょっと損害が掴みきれない…うわ、マジしくっちゃった…」チルタリスの顔に明らかな動揺が広がる。

「…あの若い女の子は…投資とかやってるのかな？」彼女の様子を見ていた艦長の男が首をかしげる。

「たぶん…あいつの家族、ポケモンですけど大金持ちなんで…きっと株式売買もやってるんでしょう…」ロックオンが答えた。「なるほど、ね…」

この日、米国の証券格付け会社ムーディーズ社はイタリアをはじめとする欧州４か国の債券格付けの格下げを公式に発表した。これに関してヨーロッパやアメリカの株式市場では欧州諸国の財政懸念が再燃し、ニューヨーク、ロンドンを始めとする主要銘柄はほぼ全面安の展開となった。これに加えて成長著しいＢＲＩＣＳ諸国であるインドの新車販売台数が急激に失速し、新興アジア工業・経済国における景気の減速懸念も浮上しアジアの主要銘柄も下落。中でも日本・東京の株式市場、日経平均は１４０円以上の大幅下落となった。金融危機から丸４年。さらに加速的に進むグローバル化・一体化の流れの中ですでに欧米先進諸国のみならず世界の経済成長センターと称されるアジア・中東諸国ですら経済刺激のための市場への資金供給、新たな経済における成長分野となったエコ・テクノロジーや環境ビジネスへの研究投資や市場開拓、不況によって職を失った人々への手当や失業者現象のための大規模な公共事業の展開、環境問題や紛争問題、宇宙や生命といった技術革新で複雑化した地球経済競争を生き残るための多国家間経済共同体の設立などに巨額の財政支出を行ってきた。そのために生じた各国の財政的苦しさは相当に高まっている。せっかく財政支出で少しずつ回復してきたはずの景気をその財政が下押し圧力となっているのだ。

２０１２年　１１月２５日　エメリア・ソーラ大陸のパルク州　国連軍施設から数キロ入った森の中　１４００時

「うぶぇっ！……あんたな……さっきっからせこい手を使いやがって…」「や、やっぱやめた方がいいんじゃない？うん…」「でも、なあ…もう少しだけ…いいかな…？」リーヒュンがわずかにツルをふるうだけでレオは何度も何度も後方にぶっ飛ばされる。ユイリィ

はそれを心配そうに見ていた。「ねえねえリーヒュン…それをやめた方がいいんじゃない？」

そもそもこんなことをすることになったのは彼の意見だった。リビアから救出されてからというものの、ひどく憔悴しきっているこのコリンクの闘志を取り戻せるかもしれない。そうリーヒュンとユイリィが考えたからだ。

「一番早いよそれが。レオがこう元気になれば……もっとシンシアとかもやりやすくなるだろうしさ」「それ、勘？それともリーヒュンの甘い予想？」「もちろんどっちも」「でも…そんなことしちゃっていいの？」「やればなんとかなるさ。ダメだったらそれはそれで考えればいい」

「あ、あのな、それでケガとかさせたらどうすんだ？アンタの能力を持ってしたら、あの坊主を粉々にできちまうぞ？」バストークが怪訝そうな表情を浮かべる。

「やってみてから考えます。死なせはしないように調整しますよ」

リーヒュンの声は多少考え込んだ感じもあったが、迷いは感じられない。

「俺は知らんが…そんな調子で大丈夫かよ？」「はい、たぶん」

「そこでたぶんなの？！君らしくていっかそれで。私は止めないよ」

ピトムニクが言った。

「…そっか…うーん？…まいっか！その間はあたしも思ったし！期待してるよ、うん。もっちろん全部リーヒュンの責任でやってね！レオが死んでも、ね？」

「そりゃそうだ…って死なせはしないっての！！」

で、結果は…見事に成功しているのかいないのか。レオはすでに1

0回以上スパークやワイルドボルトを仕掛けているのにこのベイリーフに全く勝てない。
「お、おい、そこの変な女！こいつと替われ！」「う、うち？！」ともやってみたが、ほぼ同様の状態でこのメガニウムに触れる事すら出来ない。
「諦めたらどうなんでしゅかねえ？」ピトムニクに抱っこされたロズリンが首を振る。
「んだとこらあ！？おれとやるってのか？！このチビが？」「いいでしゅよ」「えっ？！ロズリン勝てるの？」「勝てましゅよ」「言いやがったなてめえ！」レオはいきり立ってこのシェイミを突き出した。
「無茶よ！？ユイリィ、やめさせた方がいい！」「アンタとは関係ねえ！これは俺とこいつとの戦いなんだよ！」このコリンクは問答無用でシェイミに飛び掛かった。
「みぃっ！！！！」ロズリンはちょっと驚きながらも口元から何かを打ちだす。至近距離まで牙を近づけていたレオは頭を振ってかわす間もなくそのエネルギーが口に飛び込んで後方に吹っ飛ばされた。
「ぐぶぶぶぅ……こ、このくそガキ……」レオがフラフラと立ち上がる。「くそガキはどっちなのよ？」とガトルが漏らした。「もう分かっだんならいい加減やめないの？」スカイラブが呆れ声を上げる。ロズリンは「まだまだでしゅね」と耳元の花を後ろ足でなでてあくびをした。
「くっ、こっのぉ……おいグリソム！てめえもこいつとやれ！」
「お、おいら？！…別にいいけどさ…さすがにそのけんか腰は…」
「はっきりしねえなあっ！？やるかやらんのかどっちなんだ、ああ？！」コリンクはグリソムに掴みかかる「わ、分かったよ…やるよ…」
「あの…すいません？ちょっとだけ…レオたちに手加減してくれません？…見ててもう危ないんですよ…」シンシアがユイリィの足元に不安そうにやってきた。

「大丈夫！リーヒュンはね、ああ無茶をやってもちゃんとわきまえてると思うよ。うん」
彼女はロコンをツルで抱きかかえながらふと彼女の意識を感じてしまった。まあそれがこのメガニウムの生まれ持ってした能力なのだが。

……この子はあんまり兵隊向きじゃないね……がんばってるけど……
……どうしよう？この子を生きて返せるかな？……
……リーヒュンはどう感じてるんだろう？……

「そんじゃさ、今度は俺は何も防いだりしないから、正面から突っ込んで来いよ」
「おっしゃあ！やってやるぜこらあ！」「う、うん……」
レオとグリソムはリーヒュンに正面から飛び掛かる。「おらあああっ！」「こんのっ！」

ずがんっ！バキッ！ニトロチャージとシェルブレードがこのベイリーフを見事に直撃したが、彼はなんとかその場に食い下がる。グリソムは一気に地中に飛び込み、レオは上空に飛びあがってつじぎりを仕掛ける。しかしリーヒュンはとっさに体を後ろに飛び下がらせため、このコリンクは見事に地面にたたきつけられる。その直後彼の真下からミズゴロウが仕掛けた。「うぶぅっ…」このベイリーフはまともに腹から突き飛ばされそうになったがなんとか４本足を踏ん張って飛び上がり過ぎたグリソムをツルで止めた。
「き、君はさすがだな。さっき何を使ってきたんだ？」「こ、これ…おいらのホタテ貝…」グリソムは首からぶら下げた貝殻を見せる。
「シェルブレードじゃない？」
「そ、それってさ、ミジュマル種族系の専売特許じゃないの？」ピトムニクがそのホタテを手に取る。「世の中変な偶然もあるんだな」

バストークがそのホタチのような貝とグリソムをまじまじと眺めた。
「は、恥ずかしいよ…これおいらのお守り……3歳の時からね」ミズゴロウの顔が少し赤くなった。リーヒュンはそのホタチからグリソムの愛着を強く感じる。
「そっか。形見のようなもんなんだな。大事にしろよ」彼はツルでミズゴロウを撫でる。
「で、あいつは大丈夫なわけ?!」「あ、動いた」グラシデアとピトムニクが地面叩きつけられていたレオを助けてやる。
「て、てめえなああっっ!」「なっ?!」コリンクは2匹を振り払ってリーヒュンに飛び掛かったが、ツルの一振りでまたしても吹き飛ばされた。
「はあ、まあいいや。とにかくの君のは単調すぎる。俺はそう思う」
「おいらもそう思った」
「こ、こいつら…」2匹のコメントにコリンクはフラフラと起き上がった。
「あ、あのなあ、いい加減諦めろよ。お前じゃ勝てない、ことは明らかだ。出直せ」「アンタみたいなおっさんにいわたかねえや!」
「ンだとこらあ?!今おっさんて言いやがったなこの野郎?俺はまだ35歳だ。それでメリープで悪いか?」「ああ、しょぼいくせによく隊長なんかに…」「うるせえこの不良がっ!」バストークはそういってレオに食って掛かるが全く持って怒っている表情ではない。おそらくはグラシデアを育てた（そして今も）経験上、こういう生意気な奴を扱う術(すべ)を熟知しているのだろう。
「まったくもう何してんですか隊長っ?」ピトムニク苦笑してがバストークを止めにかかった。「大丈夫だよピトム!多少遊んでやっただけだ」「んもう!グラシちゃんのおんなじように扱うなんてどこまでも子育て慣れしてるのね」「あったりまえだ」メリープはコリンクに掴まれて乱れたモフモフを前足で直す。「ふん。これだけのけんか腰ならお前さんは隊長するより一兵卒の方がいいと思うぜ」
「んだとおいっ!?」またしても掴みかかろうとするレオをプラス

ルは食い止めた。「そんな本気にならなくていいの！別にこの人アンタを挑発しているわけじゃないからね。でも隊長！今のは明らかに嫌味ですよ。多少は気持ちも考えないんですか？」「そうか？…すまねえなあ」あんまりこもった言い方ではない。

「ふん。……それでかわいがりっていうのかよおっさんは…」レオは煮え切らない顔で前足を土にたたきつける。

「……ねえリーヒュン、やめる？」「いや、まだやるよ」リーヒュンの表情は変わらない。「なんで？！まあいいけどさ…」「うん。奴の本質をもう少し見たい」「やっぱそんなもんなんだね！あはは、いいと思うよ。うん」ユイリィはもうそんな彼を見て諦めたように明るい声を出す。「うっせえお前ら！？もう一回やったろうか、ああん？！」コリンクがまたしても突っかかってきた。

「おっし、何回でもこい」このベイリーフは明るい声をあげてコリンクの前に立った……

胎動するものその２（後書き）

初めて南スーダンに関して触れてみました！！この独立には様々な背景があるようですが、詳しい話は活動報告でします。
それにしてもまたもや円高…欧州の国債格下げのせいでしょうか……
１３日も日経平均は続落……

テルル：ちょっと！
…なんですか？
テルル：私の弟っていうのは？
…次回に回します。

どんなに遠く離れていても……（前書き）

前回の話がまだ続いてしまいました……

もう少しご辛抱願います……

どんなに遠く離れていても……

一方こちらは……

テルルは無我夢中で居住地域に飛んで帰った。やっと手に入った金を口にくわえて。

……これでやっと……3か月ぶりくらいに…手紙を……

自分の区画で羽ペンを引っ掴んでインクに突っ込み、羊皮紙に最初の文字を書こうとした時点で彼女の前足はぴたりと止まった。同時に一種の懐疑心と自分に対する嘲笑に似た感情が同時に浮かび、ペンを持つ前足が動かなくなった。

彼女は硬直した状態で札束を見る。

……ていうかさ…いくら送るの?これルーブル紙幣じゃないじゃん!

…ここの住所どこ!?

…何を書くの!?

…ここに来たことを何て説明するのよ?!

そんな整理できていないとっ散らかったような思考に支配されたテルルは思いつくがままに、まずもらってきた１００ドル札の束を解き、適当に前足で猛スピードでその枚数を数えた。全部で５０枚、つまり５０００ドルである。現在の日本円を１ドル８０円と換算すればおよそ４０万円。このグレイシアには国連軍施設内での物品の価格やこれをポケ換算した時に周辺の集落で何が買えるのかといったドルに関する金銭感覚が全く分からない。

「は？…ううっ……あああっもーうっ、何やってんのよ私は？！適当に送っちゃう？それが一番いいわよ、いいのよっ！」テルルはブツブツと呟き、突然迷いを打ち切るかのように声を上げて１００ドル札を５，６枚残して全部束ねて封筒に放り込んだ。まさしくいい加減などんぶり勘定の典型例であったが、彼女のみならずポケモンという文明種族にとっては金というものは生活の中で使う農具や食器と同じぐらいありふれた道具でしかない。よほど相手にお世話になった…例えば命を救ってくれたとか…事ではない限り金を渡すなんてことはしなかったし、むしろそういう時は物々交換の方が多い上、相手の方が善意に任せてそういう物を断ることも多かった。この文明の中では、無理に金を渡して頼みごとをしたり、金の貸し借りをしたり、大金をつぎ込んでまで何かをすることはみっともない事であると考えられている。人間のように、１セントたりとも損をしたくないとばかりに２４時間３６５日目を真っ赤にして卓上情報端末（コン）とにらめっこしている投資家や自分の名声や権力を上げるべく地元の大規模公共事業や社会資本…例えば高速鉄道の駅や原子力発電所、メガソーラー発電所…の整備に莫大な投資をする政治家、大規模施設の開発や宇宙開発、航空産業やハイテク情報機器メーカーのように少数の大企業が資金力にものを言わせて中小企業を吸収合併したり競争で叩き潰すしてその産業分野の独占を目指すそれらの資本家といった類は、彼らの言葉で“精神的死人（パソ）”と呼んで軽蔑されていたし、熱帯雨林や南洋諸島のネイティブの住民にさえ欧米を発端にした消費文化や貨幣最優先文化に飲み込まれている現代の人類経済や社会システムのことを“精神的な貧困と飢餓の社会”とまで呼んでいた。

とはいえ、そういう道徳的な観念論がその文明や社会における安全性や繁栄に対して何の意味も持たないのは前に述べたとおりだ。

２０１２年１１月現在において結局地球や月面までの近辺の宇宙空間や深海にまで活動可能領域を広げて紛争やエネルギーといった諸問題を抱えながらも繁栄しているのは人間文明であって、ポケモンの文明は明らかに衰退し近年はさらに加速的に崩壊しかけているのだ。

ともかく、彼らの文明においては経済学などという学問はほとんど存在しない。経済学的な思考を加えると、もしテルルがその“家族”の生活資金を長期にわたって送る場合は預金準備率や物価上昇率を考慮に入れた現在割引価値を考えて銀行などの金融機関に振り込んでいった方が長い目でそうするのなら確実にポケモン文明としての生活費の大きな足しになる。が、彼女がそんな金融機関を知っているわけもなく、中途半端に金銭の必要性という人間同様の執念に憑りつかれたこのグレイシアにはやみくもに金を送ることしか頭になかったのであった。

どうにか１００ドル札の束のうち大半を押し込んだテルルであったが、それほっとした2秒後には新たなる困惑と震えが全身をペン握る前脚を走った。

“私の大切な……”ふるえる前足でなんとかこの最初の決まり文句を書いた時点で、彼女の筆は止まってしまった。何を書けばいいか分からないわけではない、そんなことは昔からいつもだった。しかし今日はそれに加えて……

……いつもなら考えないはずの過去の出来事が、羊皮紙と羽ペンとインクを見つめているうちに嫌になるほど頭をよぎり、それを振り払えなくなってしまったのだ。それにここに異動になったことをどう伝える？あの子には私のいるエメリアがどこにあるか知っている筈がないだろう。

それを隠すか？モスクワにいた時と同様“いつでもおいで”と書くのか？あの子にエメリアに来れるわけがない。人間の技術“飛行機”をもってしても、乗継だ入国だセキュリティーだ、等という訳分からないものを取っ払っても1日以上かかるのだから。

この事実を認識した途端テルルの感覚が失われ、恐るべき現実という物の前に立ちすくんで急激にマヒした自分の感情を抑えきれなくなった。

……私…遠くに来すぎちゃった……家族からこんなにも引き離されて……なんで今までこんな平静にしていられたんだろう？

……

……結局また人間の……思い通りじゃない……

……ごめんね……こんな風にしかやり取りできないなんて……

これまでにない寂しさと悲しさ、二度と帰れないかもしれない恐怖が突如として津波のようにのしかかり、彼女の平静さという心の陸地を飲み込み、押しつぶし、崩壊させる。

「わ、私は……一体……なんで……うっっっ…せめて……せめ

て…」テルルの瞳から涙が湧き上がり、紙の上にぼたぼたと染みを作った。

ブレイブは居住区画の入り口をまたいだ瞬間、テルルの嗚咽に凍りついたように前足が止まり、後ろに下がりそうになった。同時にこのグレイシアを勢いで追いかけてきてしまったことに激しい後悔を覚え始めた。

だがここで逃げ出すわけにはいかない、このブースターは前足に力を込めて前に踏み出そうとした。いくら一緒にチームを組んでいるとはいえ、すでに21になった女の子のプライベート空間を覗く、しかも泣いている奴の後ろから声をかけるには相当の勇気と度胸がいる話だし、そもそも男(オス)としてある意味犯罪的なほどバカな真似である。女(メス)の大まかな性格や行動パターンを熟知しているブレイブならそれが痛いほどわかった。

しかし、それを理由にしてほっておくことの方が最大の反則行為である、このブースターは覚悟を決めた。

「……テルル……そういう事だったんだな……」ブレイブはふるえる前足で彼女に近づき、背中の部分に前足を置く。

「はあ?!何やってんのよアンタ?!この変態っ!?痴漢っ!?侵害者っ!?」それを感じ取ったグレイシアは衝撃と激しい嫌悪を浮かべて無我夢中で彼を突き倒そうとする。ブレイブは前足が顔面を直撃する前に前足で彼女を押さえつけた。「違う!違うんだよ!話聞けこの野郎が!」「うざい!バカバカバカっ!ふんっ!女の子のプライベートをしかも私のを勝手に追いかけてきたのね?!わかっ

てんのよアンタの性分なんか！？死ね死ね死ねっこのくそバカ色男っ！？？？！」「だからなあっ！さっきみたいな表情してどこのだれがほっとくんだよ？！」必死にブレイブがテルルを押さえつける。

「うぶぶっ…」テルルはしばらくしゃくりあげながらもがいていた……

やがて……

「……ンじゃ…ぐずっ……誰が……こんなに気にするのよ？！私の事なんか……誰が助けてくれんのよ？！はっ…あんたが？！」テルルは涙を流しながらも軽蔑しきったような声を上げた。

「ったく！そこは俺が助けてやってんだろ！」ブレイブが彼女の背中をもう一度触る。「お前を忘れたことなんてこの2か月1秒もねえよ」

「…はあ？……それってさ……単なるカッコつけでしょうに…？……ブレイブ、アンタさ…真面目に女の子のこと考えた……ぐずっ……あんの？」

「……もちろんカッコつけだ。認める」「……自分でいうこと？！……どうせまた私のことを使ってっ！？…ぐずっ…こ…こ…このば…」「だけどなっ……」再び殴りかかろうとしたテルルをこのブースターは彼女の前足を押さえつけた。「……カッコつけようが小ばかにしようがお前を傷つけたつもりはない。……言うのもなんだけどよ、俺ははっきり言ってどうしようもねえ変態野郎だと……」「そんなこと…ぐずっ…よく自慢できるわね…ふんっ…呆れちゃうよもう……」テルルが鼻を鳴らし、前足で目のあたりをぬぐう。「へへっ…だが…」ブレイブの声が一瞬嬉しそうになったがすぐに落ち着きを取り戻す。「……俺を含めてだれもテルルを見捨てるわけがねえよ……言葉は違えどお前はお前として

の……立場を維持できてるだろ？ああ、な？」「まあ……アンタが何を言いたいのか……ぐずっ…さっぱり理解できないけどね」「ごめんな。俺ホンットに話下手なんだよな」「うっ…そんなこと言ってたらアンタホントに単なる変態になっちゃうよ？」このグレイシアはブレイブの前足を振り払うともみあげ状飾りを前足でいじった。彼女の心にわずかながらの安心というか安らぎというか、少しだけ気が楽になるのが感じられた。少なくとも、このブースターは言動は時に最悪にキモイが単にからかう事しか知らない今まで会ってきた男（オス）とは多少なりとも違う気がする。何かが。

「で……テルルはどうしたんだよ？」「…はっ？」テルルは我に返ってように手紙と羽ペンを見つめ、慌てて前足でブレイブの視線を遮った。「いやよ。絶対見せない」「ったく！まーたいつもの調子に…」「アンタみたいな嫌らし男に見せるものじゃないのよ！これは私のプライベートっていう……」「家族だろ？」「な、な、なんでそれを？！」テルルの顔が一気に赤くなり、尻尾が衝撃で立ちすくんでいる。「お前の顔見りゃな。金を必要とする、しかもたくさん。そういうのってだいたい家族と生活だ。やっぺ、また図星当てちまったな！」ブレイブが嬉しそうにフサフサ尻尾を振った。「はあ……なんていうか……ブレイブはカンがいいのかそれとも単なる詮索（せんさく）好きが……そっちだったら絶対にきらわれちゃうよ？アンタそれでいいの？…」「へへ、どっちでもいい…で、」ブレイブの顔が真面目になる。「……話せる範囲でいい……どうしたんだ家族が？」「……」「……悪い。無理なら言わなくていいんだ。ただ……今後お前とやっていくにあたって……お前の触れられたくないことは知っておきたい、そうじゃなきゃお互い気兼ねするだろ？」「……そうだけどさ、その……私とブレイブ意外に言わないってあんた確証できるの？ユイリィとかに…ただでさえ読み取られるのに……一言でも漏れたらおしまいよ。わかってんの？」

「もちろん……信じろよ……頼む……一緒にやる仲として遠慮してたら何もできないんだからな…」「……」

……遠慮とは違うけどさ……

……こんなこと話していいの？……

……それで気が楽になるの？……

このグレイシアの心は大いに戸惑った。ここまで知られてなおも黙るか？それとも一応はこの男を信じて多少は言うか？

テルルはしばらく手紙を見つめ、ため息をついた。

「私の家族ってのは……弟なのよ……ロシアにまだ暮らしてる……」

２０１２年　１１月２６日　ロシア　サンクトペテルブルク市　０９００時

空気がこの都市の周りに固まったような寒さをまとっている。サンクトペテルブルクの雪は痛いほどではないにしろ十分に冷え込んでいるはずなのに、まだ水分が多い重い雪だった。ここはフィンランド湾の最東端に位置し、ネヴァ川河口のデルタ地帯に位置する旧帝政ロシアの首都。ロシア革命では１０月革命や２月革命の舞台となり、世界初の社会主義国家であるソビエト連邦の首都となり、第二次大戦では包囲したナチス・ドイツの部隊を破るといった歴史の舞台にもたびたび登場。ドストエフスキーの傑作文学“罪と罰”の舞

台としても有名である。

現在でも電気機械、工作機械といった重工業から繊維、家具、食品加工といった身近な品物までの各種工業が発展し、フィンランド湾に面した港町でもあることもあってロシアでも随一の工業・経済都市であるが、１７０３年に都市の建造を始めたピョートル大帝の名付けた「北のベネツィア」という肩書にふさわしく、カザン聖堂やエカテリーナ宮殿などのヨーロッパ美術的な建造物が多数と市中心部には残存している。小規模ながらプルコヴォ空港というモスクワを結ぶ空の路線も整えられ、Ｅ１０５号線につながるＭ１８道路やＥ２０号線につながるＭ１１道路等の幹線道路網も整備、地下鉄や鉄道網も十分に張り巡らされ、港湾地帯には貨物船以外にもフィンランド湾各地を結ぶフェリーも就航している。

そんなペテルブルク市内のある大通り。舗装状態もよく、路線バスや路面電車、私設タクシー（企業ではない、いわゆる個人タクシーの一種）が行き交い、多くの歩行者が歩いている。しかし午前９時にもかかわらず市街地は、確かに湿った雪がしんしんと降っているとはいえ、まだ冬の夜が明けたばかりのように薄暗く、市街地の街灯や広告塔もいまだについたまま、行き交う車両や路面電車のライトもまばゆく輝いている。サンクトペテルブルク市はかなりの高緯度地方であるため、冬至に最も近い時期は真昼の時間はほんの３，４時間程度、夏は午前１時になっても日没寸前のような明るさを残す白夜がやってくる場所なのだ。

ヨーロッパからの中古品であるメルセデス・ベンツ社製１９９６年製の大型トレーラー、アクトロスのドライバーは今朝になって急激に冷え込みところどころに凍結したような部分が表れ始めたリチェイニ通りの幅の広い道路をいつもの調子で走らせてた。彼にとっては通り慣れたザネフスキー通りを抜けてＭ１１幹線道路へ至る道である。

ところがネヴァ川にかかる大橋を渡った直後、路肩から小さな物体がかなりのスピードでとび足してきたのだ！

「！！！！！！！！！！！！！！！」ドライバーがブレーキペダルを踏み込み周囲にブレーキ音が鳴り響くと同時にこのベンツ社製のトレーラーは凍結しかけ道路で安定を失い大きく左側の対向車線側へと飛び出してゆく。トレーラの滑った後方部分が対向車線にいたシトロエン社製エグザンティアを跳ね飛ばし、その車は隣にいた私設タクシーを巻き込みながら橋の欄干に突っ込む。

欄干の付近を歩いていたアメリカ・アップル社製の小型音楽端末を聞いている若い男と犬を連れていた老女は迫ってくる制御を失った車に恐怖に青ざめ、声を上げて道端に飛び込み、その場に伏せ、その至近距離をシトロエン・エグザンティアとそれが食い込んだ私設タクシーが火花を散らしながらかすめて欄干の市街灯をへし折った。

道を斜めに横切りはしたその陰だったが、そこにもバランスを崩した2台が飢えた猛獣の如く飛び込んでくる。だがその“彼”は恐れることも迷う事もなく欄干に軽々飛び上がり、2台がそこにぶつかる前0・5秒前には凍りつくようなフィンランド湾にそそぐ流れを失ったネヴァ川に飛び込む。彼は落下しながらも以前習った通りに大きく息を吸い込み、体を丸くして背中側から水面に突っ込んだ。メルセデスベンツ社製アクトロスのトレーラー部分はドライバーがブレーキを踏んでいるにもかかわらず向きが完全に真横を向いてもなおも止まらず、次々に車両を巻き添えにし、バンパーやライトのガラスの破片をまき散らしながらスリップしてゆく。トレーラーの部分は路面電車の線路に乗ったまま牽引部分が外れ、ハンマー投げの理論で正面からくる路面電車に飛び掛かる。「！！！！！！！！！！！！！」路面電車の運転手が恐怖の絶叫をあげ非常ブレーキをかけ、混雑した車内では乗客たちが一斉に将棋倒しとなり、荷物や携帯端末などの電子製品の類が床に吹っ飛ぶ。間一髪のところでトレーラーの部分と路面電車の双方は正面激突を免れた。夜も十分

に明けきらぬペテルブルク市の一角で激突や急ブレーキの轟音と悲鳴が上がった。

橋のたもとにある角の真下にある小型船置場に“彼”は飛び出した。彼はこんな冷たい川に飛び込んで泳いだにもかかわらず、気持ちよさそうに体をふるい、階段を2段飛ばしでとび上がって先ほどの大通りの角に飛び上がった。全身の毛は薄いコーヒーのような茶色、尻尾は大きく習字の筆のように丸くフサフサ、頭には癖のあるはねっ毛、首元には白くたっぷりしたモフモフのマフラーのような毛。彼はイーブイ種族。

「あ、モニク、オスワット、おはよう！」そのイーブイが水滴をぽたぽたさせながら元気よく言った。「おはよう…て、お前泳いできたのかよ?!」見ていたジャノビーが驚きの声を上げる。「うん」「うん、ってさあ！それは普通の登場じゃないよ。友達と待ち合わせるのに水タイプでもないくせに泳いでくることはないだろ」隣にいるシママも驚いた声を上げて首のマフラーをそのイーブイに渡す。「うんん。僕そこの端までは歩いてきたんだけどさ、道を渡ったら後ろから人間の大きな機械が突っ込んできたんだ…」彼は先ほど多重事故が起こった橋の付近を前足で示す。先ほど欄干に突っ込んだシトロエン・エグザンティアとタクシーは二台ともめり込んだ状態のまま炎上し、周囲に黒煙を噴き上げていた。携帯端末やカメラでその様子を収める人々、恐怖のあまり座り込む歩行者等が多数集まり、目撃証言を考えると事故を発生させた“加害者”とも見えるトレーラー・アクトロスのドライバーとタクシーか乗用車のドライバーらしき男の言い争う怒号がここまで聞こえてくる。「でね、安全そうだったから川に飛び込んでここまで来たんだよ。な、モニク、僕見えた?」「あの事故起こしたのはお前だったのかよ！まあ怪我がないからいいけどね」ジャノビーの方が呆れたような声を出す。

「お前らしくていいや。あれならこっち側に走ればよけられそうだったけどさ」シママはそのイーブイの首元を前足でなでる。
「うん。でも泳いで気持ちよかったよ。姉ちゃんが夏になるといつも泳ぎに連れて行ってくれたからね…」イーブイはそういって自分のびしょびしょになったイーブイ種族が好む工芸品の一種、ないろマフラーを大事そうに抱きしめ、首からぶら下げた“あるもの”も前足で首元に当てる。「良かった…テルル姉ちゃんが守ってくれたんだね…お魚さんに取られちゃうかと思った…」

そう、彼はエルヴィン・ムスペル・アストラフスキー。かのテルル・アストラフスキーの“弟”である。

彼女唯一の家族。

ブレイブはそれ以上言及はしなかった。ただテルルの顔をしばらく見て、その後は彼女の書きかけ（最初のフレーズしかなかったが）と封筒がパンパンになるほど１００ドル札が入っているのを見て頷く。
「そっか……大変なんだなテルルんとこも。お前も稼ぎ手の一匹をしなきゃならないってことだろ？」「そう……まあいろいろとね」
このグレイシアは曖昧に言葉をぼかして頭飾りを振った。このブースターはこれ以上は聞いてこないようだった。彼は言葉を守った、

彼女はそう考えようとした。

……だが……すでに感づかれている可能性もある……

……さらなる真実を……彼女がどうしても言いたくない実際を……

生い立ちを……

だが少なくとも今ブレイブはそのことに関して深く突っ込んでくる気配はない。気づいてないのか、それとも気遣っているのか、それは分からない。

「おっし。そんならさっさと書いちゃえ」「ん…だ、だからさ、それが問題なのよ！」テルルが机に向かい頭を抱える。「あ？何に問題があるんだ？」「色々とよ……どうしてエメリアに行ったのとかさ、いつになったら会えるのとかさ……ワタシもう3年も顔見てないのに…」

「おいおい……そりゃまた…何やってんだよ…」ブレイブが驚いた顔をする。「…仕方ないじゃん…ね、ねえ……今度はなんて書けばいいの？ワタシさ、前送った時にいつでもモスクワにおいでって言っちゃったんだよね…」「……ううっ……なんて書いてやるか、か……」ブースターも頭のフサフサを前足で掻いて手紙の足型文字を見つめた。

「……すまん……さすがの俺でもロシアとエメリアの距離を取り繕う事は出来ねえかもな……けど……そこはテルルの言葉で伝えてやれ」「はあ？ここにきて投げやってるつもり？」「違う。言葉なんてのは誰かに聞いて書いたって親しい奴が見ればこいつの本心じゃねえってなんて一発で見透かされる。……書くんだったらテルルが納得のいくように考えて、隠すなり本当を言うなり決めればいいんだよ」「ううっ……本当の事か…どうしよう？」テルルは頭を抱えて手紙を眺めた。

「うぐっ……どうだい？……まだやる？」「ぜえ…おうう……て、てめえなあ…さっきからいちいち聞くんじゃねえよ！……俺は……」リーヒュンといえどさすがにスパークやニトロチャージ（このコリンクはどこで覚えたのだろうか？）を２０発以上受けてもうだいぶ疲れがたまっている。フローラに付き合った時はもう少し持ったのだが。レオのほうはさらにひどい情勢で、何回もこのベイリーフにたたき返されてばかりで全身打撲痕と傷だらけであったが、レオはリーヒュンに何かしらの敵対心の類を持ったらしくフラフラになりながらも立ち上がる。「おい……今度こそは覚悟しやがれ…」「……まだやんのか…まあいいや。とにかくやってみろよ」

バストークやピトムニクはそんな光景を飽きたように眺めている。「帰りません隊長？」「今度ダメだったらそうするか……」

「ねえねえレオ！あんだの事だから言っどくけどさ、ホンットに死んじゃ困るよわたしは」

「全くもうほんとに子どもなんだからさ！！死んでも私を恨まない

でよ」
「今回はおいらも助けらんないよ！」
スカイラブやグリソム、ガトルも口々にこのコリンクをバカにしたり呆れたり心配したりする。
「お前らなあ……後ろっからうっせえよ?！……おぐっ…うう…まだまだ…」

「ま、まだやんの?！リーヒュンがやってくれていいけどさ、あんまり無理しちゃだめだよそこは。うん」「大丈夫だよ。死なせはしない」ユイリィは少々ひきつった笑顔を浮かべた。これ以上やるのは確実に双方危ない予感がする。このメガニウムのオーラは確実に彼に伝わったらしく…だが、レオを見つめるその姿からこんな風に感じ取れた…

“……だ、大丈夫なの?……”
“問題ない問題ない。俺に任せとけ……”

ユイリィは諦めたような笑顔をリーヒュンに送る。「んもう！わかった、わかったから！何してもいいよ！うん！」「うん、やってみるさ！」

「よっしゃ！もう一発来てみろ！」「ぐ……こんの野郎ぉぉっ！」
コリンクはフラフラとベイリーフに飛び掛かってワイルドボルトを叩き込んだ……

……よし……このまま……リーヒュンは気合でその電気エネルギーを偏光しながら数を数え、息を吐き切る。「うぐぐぐぐ

ぐうぅ……てめえよおおぉぉおおっっ!!!??」レオは苦しさと狂的な執念でとんでもない形相になりながら全身が暴発せんとばかりにエネルギーを放出している……

このベイリーフは覚悟を決め、全身の力を抜いた……

「おぐぅあっ?!……ぐっ……」

そして0．5秒後にはツルでコリンクを抱きかかえて首元の葉っぱに抱き寄せ、なんと自分の偏光エネルギーを解いて自ら電撃を浴びに行ったのだ!!

「う、うそ??!!なにやってんの?!」ユイリィがびっくりしたように走り寄る。「あ、あんたさ、レオの電撃をまともに受けに行くなんて一体どういう……」スカイラブが慌てて2匹を引き離そうと電流の中に飛び込んだ。

「て、お前ら何で仲間割れやってんだよ?!」バストークが軍刀を引っこ抜いてコリンクに突きつけようとする。

「いやいいんだ!!!もっとかかってくれ!全部出していいよ!!」あまりの電流の大きさに体の水蒸気が内側から暴発しそうな衝撃だったが、リーヒュンはそう言いながらレオをさらに強く抱きしめ、彼の思考に意識を集中させた。

……そうか……お前は……まだ……

……そりゃそうだ……かけがえのないものだからな……

「うグッ……何考えてんだおらあッ？！さっきからヘンなもの送りやがって…」「なんでもないさ……そのままみんな出しちゃえよ……」レオの向きになりきった猛攻の前でもリーヒュンは明るい表情でこのコリンクを抱き続ける。

……いいんだよ……別にレオのせいじゃないんだから……

……お前が頑張れば……誰も恨んじゃない……

このベイリーフの思念が少しずつコリンクに伝わり始めたか……彼の目つきが少しずつ変化していく。ユイリィには明らかにわかり、思わず呆れて吹きたしそうになった。「な、なんてったってこんな…」

「……てめえなんかに……分かるのかよ……」「……少しはな……信じろよ…」

「本当に……お前の言ってることは……それでいいんだな…」「ああ…もちろん…」

……レオなら……これからもやれるさ……

レオのワイルドボルトが弱まり、消失していく……

「ううっ…」「どぷはぁ…」２匹はその黄色い電光が収まると同時に倒れこんだ。周囲に皆が飛び掛かる「リーヒュン？！大丈夫？！」

「き、君ってやつは…もうっ？！」

「おっし！よく頑張ったな！少しは気が楽になったか？」全身がマヒしかけたままリーヒュンは尋ねた。
「……くっ……、て……」レオは茫然と彼を見つめる……

「……大丈夫かよ？」「もちろんだ……実際どうかは…分かんないけど……」

「お前……俺の為に……？」「……そうだよ……心配すんな……」

「……お前みたいな奴…何やってんだよ…」「いいだろ？レオが…そうなるんなら…構わないさ」「……俺みたいなバカ……隊長なんかやっていいのか？……」「もちろん」「……ホントかよ……俺、あいつらを守ってやれるのか…」

「レオはもう十分隊長やってるさ…」「俺が？……」

「だってここまでシンシアやガトルを連れて帰ってきたんだからな……」「……」

「な？」リーヒュンはレオをツルで抱き上げたまま、コリンクの目

を覗き込むように見つめている…
かつて小さかったフローラにそうしたように……

何かに吹っ切れたか、それともそれ以外か。このコリンクの表情が崩壊する。

「お、おれは…おれははああぁぁ！！！！！！！！……」横にぐったりとしたままのリーヒュンの首元の葉っぱ付近に、レオはツルに抱かれたまま泣きついた。
「いいんだよそれで。レオが全力でやればレオらしくみんな認めてくれるさ…」このベイリーフは優しく泣き続けるこのコリンクの頭を撫でる。そのツル先からコリンクの意志を感じ取れることができた。

……“お前とならやれる”かよ？……おいおい、さっきまでのあれはどうしたんだ？……

「こんなパターン見たことないよ！自分で技を食らってみるなんてさ！」ピトムニクがリーヒュンの頭の虫食い葉っぱを短い手で引っ張って笑った。「うう……うん。何となくそう思った」「何それ？！それもカンなの？！君って人はホンットかわってるよね！いいと思うよ」
「…ふん……お前は意外と隊長に向いてるかもな。……俺ももう少し若けりゃ体を張ってこうできたはずなんだが…」「バストークももう年なのよね、今更そんな無茶ダメよ」「うん。くれぐれもやっちゃだめですよ、隊長」グラシデアがバストークの一言に呆れたように頭のモコモコを掻き、ピトムニクが笑いながら同調してメリープの尻尾を叩く。「な、なんだよもう。全くお前らもどうしよう

もない子供だな」

スカイラブはレオを起こし上げた。「はあ、いくらあの子でも全力で技を仕掛けるなんて！」「うう…うっせえよこの田舎女…グズん…」

「レオ、おいら達は……お前の部隊だからな……恨んでないよ」

「お、お前な…お世辞かよそれは？」

「半分くらいはそうよ？」ガトルが短い手を振る。「何感動に水差すんだバーカ…」

「でもさ…」このパチリスはコリンクの頭のはねっ毛をなでる。「アンタみたいな子供がいるからまだ生き残ってられるとは思うわよ。アンタがむちゃくちゃな方法でやってくれたからね…」

「……ぐずっ…ヘンなこと言うなガトル…」レオは涙をぬぐいながら頭を振り、ほんの少し顔を赤らめてガトルの手を振り払った。

起き上がろうとした彼に激しい痺れが襲う。想像以上に電気が体を回ったようだ。

「うぐぇっ…体が…やっぱまずかったな…」「……んもぅ。さすがだよ！うん。」リーヒュンの疲れ切った表情をしたまま、まだ起き上がれない姿を見てユイリィが苦笑しながらツルで雄蕊をいじった。

「ほーんと無鉄砲なことしかしないんだね。でもそれそれでリーヒ

ユンらしいよ！いいと思うな♪」このメガニウムはベイリーフが動けないのをいいことにさっきから前足で横にさらけ出したお腹もとをしきりに小突いて笑っている。「あはは！リーヒュンのお腹気持ちいい！むにむにしてるよ！うん。」

「お、おい、ユイリィ…はあ……まあいいや」彼は諦めた表情をして痺れた体から力を抜いた。

「……ああ…やっぱ難しいわよ……」テルルはある程度書き進めた羊皮紙を見つめながら頭飾りを前足で抱えて考え込む。

「そっか。無理すんなよ。今日で書き終える必要はねえんだからな」ブレイブがそっと言った。

「そうだよね…うん…」彼女は手紙を軽く丸めて机の隅に置く。「ねえブレイブ…」「あん？どうしたんだ？」

テルルは施設の外へとゆっくり歩みだす。ブレイブがそれに続いた。

「……ブレイブはさ…なんでそんなに…」「当たり前だろ」ブレイブが得意げに頭のフサフサを震わせる。「お前が動揺するのをはじめてみたのが金のことだからな……だけどよ、…俺が言うのもなんだけどな…他人はお前が思っているよりかはましなもんだぜ。…

……テルルもあんまり気にすんなよ」

「う、うん…て、何を？」「ここの事だよ。人間どもがうじゃうじゃといて俺から見ても気分はよくねえけどさ、ここにいるポケモン達は……少なくともちゃんとつながっているぜ」

「……まあ……」グレイシアは曖昧に返事をしながら傾きかけた夕日を見つめる。

「……ていうかさ？！何でうちらはすぐこういう空気になるわけ？！ああーもう耐えらんない！何さっきからすり寄るみたいに歩いてんのアンタ？！」「ばーか！遠慮すんなよテ・ル・ル・ちゃん！」ブレイブはテルルの左前脚あたりを嬉しそうに右前足ですりすりした。

「きもいわよ！？やめなさいこのバカっ！」「へへっ！もっとやっちゃうぞぉ！」「はあ？！めっちゃ不快…もうやめて！！！！！」グレイシアはブースターの前足を振り切って前に足を速める。

……こいつはかっこいい事ばっか言ってるよね……そういう性格なのね……たぶん…

……でも…言ってることは確かにそうだし……言い方も説教ぶってない……

…信じられないけど……それがブレイブの……本心なのかな？……

分からない……まだわからないわよ……

ブレイブと自分はどうあるべきか？答えを見つけたくて、歩く道を見つけたくて、テルルはのんびり歩きながらしきりに傾いた太陽を

見つめた。上空を飛んでゆくのは統合空軍のこの基地所属のＦ－３５Ｂライトニング?だろう…

２０１２年　現地時刻１１月２６日　南スーダンの上ナイル地方ユニティ州　スーダンとの国境線付近
００５０時

日付が変わり、周囲に夜の静寂が流れる深夜の南スーダン。まだまだインフラ整備が遅れているこの地域で煌々と明かりを放っているのはアメリカ系製油会社の石油精製プラントと周囲の建物、周囲を結ぶ舗装道路の市街灯だけである。昨年7月の独立以降、アメリカや中国はこのような自国のオイルプラントや鉄鉱石、銅、タングステン等の資源採掘施設周辺を中心に雇用の創成、学校などの教育施設、道路や電気、水道といったインフラ整備の支援を行っている。無論これには資源の安全を確保するという政治的思惑も含まれているが。

さらに、アメリカや中国はここ南スーダンを利用して北側のスーダン共和国との政治的交渉を進めていた。南北スーダンともに、近年工業の進出に伴い成長著しいながら、独裁世間などの弾圧に対する革命が頻発する地中海側のイスラム系北アフリカとは異なる民族や政治情勢を抱えている。この周辺の情勢を安定させることは混迷を極める北アフリカ情勢のこれ以上の悪化を阻止するうえで極めて重要だからだ。ここのパイプラインもエジプトの港湾にまで伸びている。ここの治安が悪く、設備にリスクが出るようであればその警備に更なるコストを強いることになる。

そんな石油精製施設を遠くに見るある一角。整備された道路からも外れているせいでほぼ真っ暗に近いが、まるで１８世紀、開拓期のアメリカの炭鉱のような横穴の入り口が木々や草が刈り取られた崖に開けられており、穴の両端には火がともされている。ここはポケモン達のエメリウム水晶の採掘地だ。横穴付近には一匹のオタチが守備用の槍を抱えたままうとうとしている。

そこに４，５匹別のポケモン達が迫る。オタチがとろとろと目を開けて誰何（すいか）する間もなく、オタチはやってきたキノガッサのばくれつパンチに脳天をぶち抜かれて吹き飛び、がけに頭部を強打して絶命した。

「て、てめえら?!……」「ひっこめっ！」穴のすぐ近くから飛び出してきたゼブライカのでんげきはを軽々と上に飛び越えてかわしたレントラーがスパークを打ち込み、フラフラになったこいつの頸動脈ををキノガッサが軍刀で切り飛ばす。相手は悲鳴を上げる間もなくその場に倒れこんだ。

「よっし、一丁やるか」「自由連合のくそどもをぶっ潰す」「やってやるわよ…」３匹のオドシシとハーデリアがわずかに後方に下がると、内部のむけて何かを口から発射した。

激しい爆発音と衝撃波がアメリカの製油施設一帯に飛び散る。警備員の詰所では驚き、パイプラインが破壊されたと勘違いした警備員たちが電話を取って非常ベルを鳴らしたため、職員全員がたたき起こされる羽目になった。

寝ていた鳥や野生動物が慌てて飛び散り、横穴は内部から暴発する。
内部で休んでいたポケモン達で生き延びたものはいなかった……

２０１２年１１月２６日　ベルギーのブリュッセル、自治協会本庁舎　０２１０時

既に日付も変わって2時間以上。さすがの人間でもこの時間になれば、工場の夜勤や証券取引、消防や警察やＩＴ機器関係のコールセンター、２４時間空港などの管制業務、鉄道や高速道路の整備、港湾の深夜の積み下ろし、ヨーロッパにはほとんどないがアジアやアメリカの都市部に見られる一部商店の２４時間営業、宇宙の施設と管制センター、建物や施設のセキュリティーなど以外の人間の多くは睡眠に入っている時刻である。無論、ポケモン達はとっくに夢の中である。
それにもかからず、ブリュッセルの市街地の明かりがほのかに差し込むエメリア自治協会本庁舎の一室では、黄色いメロンパンをかぶったようなポケモン…ユクシ―だ…が人間の薄型液晶ディスプレイよろしくまばゆいばかりの光を放つ青銅製のサイコ通信装置で何者かと通話していた。
「……３０２中隊の再建と整理に関しては私に任せてくださって大丈夫ですよ」“ええ、ありがとうございます司令。それともう一つですね……”サイコ通信装置の声の主…男（オス）の声だ…が声のトーンをいくらか落とす。「ふふ…言いにくそうですよ。いつもの事なのですから、もう遠慮しなくても大丈夫ですって」ユクシーはやや緊

張気味の相手に優しい声を出す。“す、すいません…長年軍人をやっていましても、所詮自分は大尉止まり、あなたのようなトップクラスに話すのは慣れなくてですね…”その声の主は申し訳なさそうに“モフモフ”を掻く動作をした。“それで…来年度の自治協会、自由連合との定例会議を今度こそは復活させるのですか？”

定例会議、というのはエメリア自治協会と自由連合という二大ポケモン文明の統治組織が、より良い文明維持、より良い統治、良好な人間文明との外交などを対話するためにかつて人間の歴…すなわちグレゴリオ西暦…に合わせて年一回開催されていた会議のことだ。しかし二つの組織の対立が１０世紀前後の混乱ののちにいったん落ち着いた後、再び厳しくなった１９３２年以降一度も開催されてはいない。

「そうするようにエムリットとクレセリアが自由連合側と今も調整を重ねています。来年あたりは何としてでも開催へと持ち込みたい、と活きこんでいますから」クレセリアは自治協会の外交責任者、エムリットは自治協会の軍事、外交関連を除く省庁の代表責任者である。

“なるほど。それで、出席予定者の方は？”「今のところ、大きな変更はない予定ですが…ただ、彼の取り巻きの者たちがどれだけ出てくるかは、まだ確証が持てません」“分かりました。大丈夫です。勢力の数をねこなでして取り込むくらいだったら自分はこなれてますからね。その連中の連絡先のリスト、送ってくださると幸いですが…”

「ありがとうございます。さすがは前代官房長のご盟友ですね。分かりました、明日の郵便で送りましょう。そうすれば再来週くらいにはそちらに着くかと…」

そう、人間の中世以前の技術力しか持たない彼らにとって手紙というのは数少ない遠隔地との交流手段の一つ。多くの市民はそれを理解しきれていないが、ポケモン達の郵便手段というのは、本来は実

に細かく地球隅々の集落まで張り巡らされているはずなのだ。これも何世紀にもわたる調査と努力をした自治協会や自由連合といった統治機関のお陰であったが、この7，8世紀の間に人間による集落の破壊、ポケモン同士の紛争による地域や末端機構そのものの壊滅、ポケモン人口そのものの現象に伴う崩壊に近い地域の荒廃などによってすっかり瓦解してしまい、今では自治協会と関係者同士の連絡さえ確証が持てない状況下である。

“恩に切ります司令官……奴のような反乱分子に近い連中を排除することが文明再興……”相手側の送信波が突如乱れた。“も…申し訳ない……こい…が限…のよ…で……エスパー…じゃないから…”ユクシ―は表情を少しほころばせた。「いえ、大丈夫ですよ。シンシアといいましたねその子。初めてなのにここまで維持できるポケモンはそういないですわ。ゆっくりお休みするように言ってあげてくださいな…」

エメリア側の通信機が切れると、そのメリープ、バストーク・ラルシア・ホルストは荒い息をするロコンを抱きかかえた。10分間もじんつうりきを出し続けたせいですっかり疲れ果てている。

「わ、悪かった！大丈夫か…」「え…ええ…はあはあ……す…すいませんほんの少しだけで…許してください…」シンシアはメリープの前足に抱えられながら苦しそうに言った。

「いやいい！いいんだよ。ありがとうな。恩に着るぜシンシア…場所まで背負ってやる…」バストークはシンシアをモフモフ綿毛の背中に乗っけるとゆっくりと部屋を後にした…

……思った以上に事態は進みつつある……

……俺も……エメリア自治協会の一員としてそろそろ行動を起こさんとな……

……奴が遺したこの組織の為にも……

……そしてピトムニクやほかの連中のためにもな……

……こんな忌まわしきものを食い止めるために……

どんなに遠く離れていても……（後書き）

サンクトペテルブルク市……罪と罰の舞台ですか……

葵もこの物語は大好きです。あの独特の描写の深みが……

葵が小説を書きはじめた理由としては、このような古今東西の小説を色々と呼んできたこともあるかもしれません。

ちなみに葵が好きな作品としては、トム・クランシーの“レッドオクトーバー”から“大戦勃発”までの連続作品やクライブ・カッスラーの作品の中で“死の砂漠を脱出せよ”や“戦慄のウイルステロを阻止せよ”、ダン・ブラウンの“砂漠の隠密空域”や“影の爆撃機”等でしょうか。

他にも小松左京の“日本沈没”の1部と2部、新田次郎の“八甲田山死の彷徨”等も読んだことあります。新田次郎なんて渋いなあ…

当然のことながらドストエフスキーの“罪と罰”も読んだことありますよ。

これ以上核と終らないので以下割愛……

それぞれの時間（前書き）

まだ任務が始まらなーい！！

次くらいかなあ？

それぞれの時間

２０１２年　１１月２９日　マレー半島　シンガポール沖　０９４０時

米海軍ニミッツ級空母「ジョン・Ｃ・ステニス」のＣＩＣ（戦闘情報センター）に緊迫した雰囲気が漂う。室内中央の天井からつりさげられるように設置されている４つのデータリンクディスプレイとビリヤード台のような形で床に置かれている周囲戦況状況表示板ディスプレイが、突如として演習空域の北側に現れた２機の識別不明の航空機影（オブジェクト）を周囲の艦艇や上空のＥ－７６７、軍事衛星が収集したデータを集めて解析した結果を表示している。このイージス・システムを超える戦闘管制機能一式は、２００９年に新国際連合が発足し国連統合軍が設立された際に、米国国防省の航空母艦のさらなる戦闘システム強化計画に基づいて、統合海軍所属のニミッツ改級と同等の総合戦況解析能力を与えられている。

これは統合軍の主任務ともいえる“陸・海・空・宇宙における総合的な治安維持・大規模災害などの緊急事態における支援活動”を目的して、従来の艦隊の旗艦としての能力のみならず、たとえば空母から陸上に向けた特殊部隊（戦闘車両が搭載されていることもある）の送り込みや不審な軍事衛星などの追跡任務、大規模な海難事故や航空機事故等の際の大規模な捜索任務、大地震・大津波・火山巨大噴火・細菌やその他のテロ・原油や天然ガスの流出、原子力発電所事故、その他の技術汚染に伴う放射能汚染といった災害や事故などにおける捜索・救助・調査拠点といった様々な任務の中核を担うことを目的とした改装計画である。この結果、それらに対応する能力を得たのはもちろんの事、ポケモンに対する解析能力や有効な攻撃手段を分析することも可能になったのだ。

そしてその解析結果。その結果は空母のＣＩＣの中にいる要員たちの予想通り、想定内である。機種はロシア・スホーイ社製の大型制空戦闘機ＳＵ－３３Ｋ。中国軍ではＪ（殲撃）－１５と呼ばれる。ロシアの誇る垂直方向へ機種を向けたまま前方へ飛行する航法…俗にコブラと呼ばれる…を可能な大推力の戦闘機ＳＵ－２７の艦載機使用である。そしてその国籍表示は……

「中国か……こういう可能性もあるとは踏んでいたが……」今回の合同演習の総司令官らしきアメリカ海軍の制服を着た男がかぶっていた帽子をわずかに左手で持った。

「目的は…こちらの動向を探るため、ですか」「その可能性が一番高そうです」「この飛行路からしてシンガポールへという恐れもなくはありませんな」「ええ…」演習本部の参謀として「ジョン・Ｃ・ステニス」に乗り込んでいるシンガポール軍やマレーシア海軍の参謀たちが口々にディスプレイの情報を見ながら話し込む。

「私が…口を出すのも何かと思いますが……」不意にあの老練艦長がコーヒー入りのマグカップを戦況表示板の上に置く。「あの機体は…当然の事でしょうが…あの中国海軍空母から出てきたものです。…昨年にもこの辺りで同様の事がありましたが、……おそらくはあなた方が予想する通りこちらに探りを入れることを目的とした偵察か訓練である可能性が高いですね。一応は即応できる機体を向かわせ、マレーシア領空、またはシンガポール領空に侵入することだけは警戒しておいた方がいいでしょう…」

「それはそうだ。……一番動ける部隊は？」司令が航空管制オペレーターに尋ねる。「アメリカ空軍の４機とポラリス・セキュリティーの２機です」「そいつらを行かせてくれ」「了解しました」

「では…艦隊も戦闘配備に入りますかな…」艦長は艦内放送用の端末に手を伸ばす。「指すか歴戦の勇士といったところですね、これも経験論でしょうか？」参謀の一人が艦長に尋ねる。

彼はにこやかに答えた。「我々の戦士としての身構えですよ」

上空を飛ぶすでに今日の空中給油を済ましたＦ／Ａ－２２Ａ４機のパイロットの無線機から国連統合軍のＡＷＡＣＳ“スカイアイ”のオペレーターの声が聞こえた。それと同時に４機のコンソール・ディスプレイには接近してくる国籍不明機（アンノウン）の映像と情報が送られてくる。

「よっし、方位０３０、高度６０００、ヘッドオン」「了解」

「ＰＭＣの連中も後続に着け」「了解した」

Ｆ／Ａ－２２Ａ４機とユーロファイター・タイフーン２機はそれぞれプラット＆ホイットニー社製Ｆ－１１９－ＰＷ－１００とユーロジェット社製ユーロジェットＥＪ２００をフル回転でジョン・Ｃ・ステニスに同伴する第２１駆逐戦隊のイージス駆逐艦「ＤＤＧ－９７ハルゼー」や同型艦の「ＤＤＧ－８８プレブル」シンガポールやマレーシアのミサイルフリゲート艦、先日の演習から合流したアメリカ海軍やオーストラリア海軍のフリゲート艦の上空を一気に飛び越え、国籍不明機へと向かった。このような類の戦闘機のスピードをもってすれば５００キロくらいなら２０分足らずで到着する。アフターバーナーは排気に燃料を再度吹き付けて推力を得る２重燃焼なので燃料は喰らうが、このように急行する際は一番手っ取り早い手法だ。

６機は国籍不明機のやや上方、高度６５００フィートから接近した。ロックウェル・コリンズ社製ＴＴＮＴ（高速データリンク）機能付きのＨＵＤが投影されるキャノピー越しに中国軍のものと思わしきＳＵ－３３Ｋが小さく確認できる。

衛星やデータによる地形図とＡＮ／ＡＰＧ－７７レーダーの情報を合成したＩＦＤＬ（戦闘データリンクシステム）の表示によると、あと２８キロでマレーシア領空に侵入することを指し示している。

あちらの機体とてＩＦＦと対空レーダーと地形情報レーダーは搭載しているはずだ。これ以上飛行し続ければ領空侵犯となることぐらいは分かっているのだろうか？

まだ領空侵犯には至っていないが警告を加えるべきか？Ｆ／Ａ－２２Ａの小隊長が右手で握っている操縦桿に付いている無線機操作セレクターの周波数を切り替えようとと指に力がかかる。

しかしその状態が2分ほど続いたのち、2機のＳＵ－３３Ｋは2基のサチュルン／リューリカＡＬ－３１Ｋの推力をわずかに落として進路を西から北へと変更した。どうやら空母の方へと向かうらしい。

「まったく、こちらに対して何の送信もなしか。相変わらずわけのわからない連中だ」タイフーンのパイロットが漏らした。確かに中国軍の航空機は近年しきりに周辺国の領空ギリギリのラインを飛行していることはたびたび報告され、国連安全保障理事会における東アジア安全保障の課題の一つとなっている。周辺国の空軍がスクランブル発進をかけることも少なくない。「まあ、いつものことだ。我々はこれで…」

突如としてＡＷＡＣＳの無線機が鳴り響いた。「国籍不明の機影（オブジェクト）多数出現！熱源分析からしてポケモン。出現位置は…」オペレーターの声がわずかに凍りつく。「…シンガポール上空…」

「おいおい勘弁してくれよ！」６機は一気に機首を南西へと向けた。

シンガポール上空は突如として静かな乱戦状態となった。
「な、なんてやつらだ?!こんな都市上空のセキュリティーを……」一番最寄にいた「ジョン・C・ステニス」の艦載機のF／A－18EはHUDに表示された敵性(ホスティル)のポケモン達を追ってシンガポールの市街地へと突入しつつあった。周辺にはタイ空軍のJAS－39Cグリペンとシンガポール空軍のF－35B、同じ部隊のF／A－18EとF－14Dが同じように侵入したポケモン達を追撃している。これ以上彼らが侵犯を止めないようであれば撃墜せざる負えない。そうするならできるだけシンガポールから遠ざけてから撃墜する必要がある。都市上空で撃墜したり戦闘状態に至れば、市街地や市民に被害が出る恐れもあった。
「警告っ!敵ポケモン、攻撃と思われる……」「なっ!?……」突如として後方から接近してきたフライゴンが何かを打ちだしてきた。「!!!」パイロットは右側のGE社製F414－GE－400と水平舵で機体をわずかにひねってそのエネルギー体をかわす。そのエネルギーはやや前方遠くにあるガラス張りのビルに直撃し、地上に向かってガラス片と鉄骨をまき散らした。
「敵部隊、攻撃を開始した模様」「応戦を許可する」だがこの時点ですでにポケモン達は追撃する戦闘機たちもろともチャンギ国際空港を飛び越えすでにシンガポールの市街地中心部へと飛び込んでいた!

「畜生っ後ろにいやがるっ！」「よっし任せとけ。俺が片付けてやるぜ」先ほどのＦ／Ａ－１８Ｅの後方についたＦ－１４Ｄのパイロットは“Ｍ６１Ａ１”２０ミリ機関砲でまず手近なムクバードをハチの巣にした。ムクバードは血しぶきと肉片の塊となって爆発し、マリナ東通りの高速道路に墜落する。もう一匹残ったフライゴンは速力を上げて高速道路を外れると、前方に多数のコンテナ船とコンテナ、動き回る小型船舶、荷揚げ用クレーンが見えるシンガポール港側からわずかに来たにコースをとってシンガポール中心市街地側へと突っ込んでゆく。この先は特に高層ビルが乱立している地域であるが、パイロットは臆することなくフライゴンを追撃して林のようなビル群へと追い込んでゆく。

「正面からも来ます！」「落ち着け！両方とも始末してやる」複座のＦ－１４Ｄの後方座席にいるレーダー手の警告を聞いたのか聞かぬのか、前部座席のパイロットはニコール通りの交差点からビルの間をすり抜け、カラング通りと直交する交差点でＭ６１Ａ１をぶち込んでフライゴンと正面から来たウォーグルを爆砕した。同時に機体を右上方にひねって２基のＧＥ社製Ｆ１１０ＧＥ－４００エンジンをフル回転させ、都市上空へと一気に飛び出す。

ほぼ生身同然のポケモンが人間が操るハイテクの塊である戦闘機

に敵うはずもない。侵入したポケモン達の大半は2分もしないうちに粉砕された。しかし、少なからず彼らはわざを打ち込もうとして、戦闘機がそれを回避し彼らを撃墜したため彼らの爆発した切れ端やわざのエネルギーの名残がビルや道路に少なからず衝突した。

歩道を歩く住民や車両の頭上で突如轟音と共に戦闘機が通過し、直後にそばのビルの高層フロアで大爆発が起こってガラス片や金属片が雨あられと降り注ぐ。人々の間で悲鳴や怒号が飛び散り、破片がタクシーやバスのガラスを突き破り、わざのエネルギーが直撃した道路の表示板が大音響とともに倒れこみ何台もの車両や2輪車の人々を押しつぶす。ショッピングモールのプロムナードの窓ガラスが衝撃で一斉に飛び散り、植え込みやエスカレーター、下の商店、歩いている人々にガラスの雨を降らせた。オフィスビルやシンガポール証券取引所の人々にも轟音や爆発の振動が感じ取られ、情報端末や電灯、証券取引所の電光ディスプレイが一瞬振動にちらついた。

チェギョンやロックオンもこの戦闘には参加していた。チルタリスの方は一匹のトゲキッスを追って中心地のビル街上空を飛び交う。

「落ちなさいっ！」「んっぐっ…」トゲキッスははどうだんを何発も乱射し、チェギョンは全てそれを回りひねり宙返りを打ち込んでやり過ごし、りゅうのはどうを打ち込もうとしたがこれはトゲキッスに楽々とかわされる。かなり接近したトゲキッスはエアスラッシュを3発飛ばしてきたがチルタリスは2，3、と上に宙返りを打って「こんのっっ！」「そんな程度は…」りゅうのいぶきを正面めがけて発射した。しかしこれもまたトゲキッスが至近で下へともぐりこみ、エネルギーは下の道路と車両を巻き込んで暴発した。トゲキッスは猛烈な勢いでこのチルタリスを付近のビルにたたきつける。彼女の肺から息が瞬時に押し出され、猛烈な息苦しさを感じる。

トゲキッスの顔は狂的な…しかしどこか哀れんだ…表情を浮かべ

た。「まだ…若いのね…」「は…はあ?…敵に対して…何…」チェギョンが必死になって抵抗するがトゲキッスの押さえつける力は強烈だ。「あなたをやるのはかわいそうすぎる……でもっ!!!!」「うぐぅ……それより…あ、あんたどこ出身なのよ…?…」「…何のためにそんなことを…?」「なんだっていいじゃない!……ただ…同じポケモンとして……知りたいだけよ…」「ポケモンとして…」トゲキッスの表情が困惑する。

……そう……私たちは……人間とは……

彼女のチルタリスを掴む翼の力が緩む。

「そうね……私たちはね……」「そうよね!人間の使いっぱしりじゃだめよ!で、あなたはいったいどこの出身?」「私は…中国の…」「ち、中国?そういう…」

その刹那。

「もらったあああっ!!!!!!!!!!」ロックオンが後方からつばめがえしでトゲキッスの背中を貫き、ムクバードに、トゲキッスの真っ白の背中に鮮血が飛び散った。「ううっ……」

トゲキッスはそのままはるか下の地上へと落下していく……

「ロックオン！あ、あんたってやつは？！」チェギョンはこのムクバードを翼で突き飛ばした。「お前あいつに殺されかけたんだぞ？！」「で、でも！だ、だって……あの人は…私の事…」「あいつと…話したのかよ？」「うん……そしたらあの子は…」チルタリスの目から涙こぼれ落ちる。

「……そうか……ごめんな」ロックオンが言う。「……これが今の俺たち、てことだ……連帯感も絆もなにもない。人間連中に金か命令かで死ぬかもっと恐ろしい目に遭うか……それで生き残るのは人間どもだけだ……俺たちには変えられない……」

「でも！……うう……無理だよね……」チェギョンは涙を抑えてシンガポールの大空へ飛び立った……

「あのポケモン…中国だったのか……」重苦しい空気が流れる航空母艦「ジョン・Ｃ・ステニス」のＣＩＣで演習司令が無線機の声を聞いて戦況表示モニターを見て呟いた。

「……ええ……予想外というか…不意を突いたというか…彼等らしい卑劣な戦法、とでも言うべきものでしょうね…」艦長は帽子を取り目を閉じた……

結局この日の一連の騒動に関して、シンガポールや諸外国の報道機関は、シンガポール政府が公表したとおり“ポケモン達の暴挙”として報じ、最終的な死者は５人重軽傷者は３８人であると報じた。

またこの騒動がテロに酷似していたため、一時的にシンガポール、上海、首爾（ソウル）、東京、ムンバイなどのアジア株式市場は一時的に急落した。ただし、彼らが中国軍の管制下にあったかどうかに関しては確信が持てないとして、シンガポール政府及び迎撃に参加したアメリカ軍によって公表はされなかった。遭遇した市民が撮影した無数の動画が某巨大動画サイトに投稿されたが、迎撃していた機体がアメリカ軍やシンガポール軍、タイやマレーシアの軍であったため、今のところはポケモン達の正体は中国軍の手下であるという話はあまり有力になっていない……

２０１２年　１２月１日　韓国　仁川（インチョン）国際空港　１１００時

一面ガラス張りに巨大な航空機や走り回る整備車両と整備員、飛び立つ海鳥…あれはアジサシ…が日差しとともに輝いて見える。その中でも格別大きな機体、グレーとスカイブルーのツートンカラーに垂直尾翼には赤と青の独特のマーク。機体側面には上下２層にわたって豆粒のような窓ガラスが並んでいる。先ほど日本の千葉県にある成田空港（千葉県なのに“新東京国際空港”と名乗っているのはご愛嬌だ）から到着したばかりの大韓航空所有のフランス・エアバス社製超大型旅客機、Ａ－３８０－８００である。

６００人近い収容人数を誇るＡ－３８０の上下階２層に対応したボーディング・ブリッジからターミナルへ既に大勢の乗客が吐き出されている。そんな中に一人の日本人の男がいた。さらに言えばこの男は外務省の官僚の一人である。彼は日本と韓国のＦＴＡ（自由貿易協定）関係のの予備交渉でやってきたのだである。

昨年の東北・関東大震災及びそれによって併発した原発問題と全

国的な電力不足によって、多くの大手外国企業は日本からの撤退もしくは規模の縮小が相次ぎ、日本系の企業でも、本社や工場機能のすべてまたは一部を韓国や中国、アメリカなどの周辺諸国に移動するといういわゆる産業の空洞化現象が一気に強まり、日本国は深刻な不況におちいっていた。特に電力不足に関しては重大である。３・１１の原発問題から２年近い歳月が流れ、一時は高まった市民の原発不信も世界的にみれば地球温暖化に対する懸念、天然ガスやメタンハイドレードなどの化石燃料価格の高騰、太陽光や風力などの自然エネルギー開発コスト低下が予想以上に遅れている（宇宙太陽光発電システムをもってしても原発１基分、需要増加に追い付かない）などの点から、原発拡大もやむなしという風潮になりつつある。アメリカ、フランス、イギリス、ロシア、チェコ、ＢＲＩＣＳ諸国、インドネシア、トルコ、サウジアラビアなどはもちろんの事、脱原発を唱えるドイツやイタリアやスイスなどでも原発そのものに対する不信感は少しやわらいだ。ドイツは相変わらず自国の脱原発に熱心な一方、自国の企業による中東での原発建設に力を注いでいる。ヨーロッパの送電網が東欧、ロシア、中東、北アフリカにまで広がっているからこそ自国は自然エネルギーにシフトし、産業界は送電を期待できるという芸当である。現在アメリカやオセアニア、東南アジア諸国、ハワイ周辺のメガフロート群が整備しつつある太平洋送電網計画もこれに準じている。電力は重工業や情報産業のみならず自動車などの交通機関でも使われる、各種燃料と並ぶ“産業・経済・技術界の主食”なのだから。

　ところが当事国の日本は問題は収束しつつあるにもかかわらず、政府の対応に対する不信感や不安感から各地の原発の多くが点検を終了してもいまだに再開できぬ状況下にあった。代替（オルターネイト）は天然ガスなどの化石燃料であったが同じように燃料を欲する中国などの諸国との取り合いで価格が高騰していた。この結果は電気料金にダイレクトに反映され、日本の市民生活にも経済活動にも重くのしかかってくる。２代前の首相（日本ではあれから２回も首相が変わったのだ）

が唱えた自然エネルギー推進も十分な技術的コスト低下を達成できず、結局政府が唱えたのは国民の道徳論や価値観論に働きかける節電啓発でしかなかった。ここまで行ったにもかかわらず日本の電力不足は常態化しつつあり、特に原発依存率の高い関西では経済界では禁断の策ともされる計画停電寸前（ローリング・ブラックアウト）の状況が年間を通じて常識のように続いている。

それでも、多くの精密技術やハイテク工業のノウハウを持つ日本経済が世界ダントツで最悪とも言える日本国財政とともに崩壊することだけはかろうじて免れている。それを少なくともつないでいく術、それは他国との自由貿易協定であった。既に韓国はアジア諸国のみならず、アメリカ、イギリス、そしてＥＵ（欧州連合）にともＦＴＡを締結している。関税や人員交流に対する規制を緩和できるこの方法をもってすれば物も金も人も動き、日本の於ける経済活動は多少なりとも活性化するのではないか、そういう判断で経済産業省と外務省が独自に開始したものだった。

無論この方法をとった際、さらに国内産業が流出するリスクはある。しかし、自ら利権におぼれ議会も空転状態が続く政府の政治家の緩慢な判断を待っている余裕は日本経済にはもうないのだ。そういう判断でこの交渉は始まっていた。準備ができたらしかるべき政治家の判断を簡単に引き出し、すぐに締結できるように。

しかし、同席する経済産業省の役人と合流するのは5日も後の話だ。ではなぜこの男は来たか？目的は私用である。先に韓国を旅行している妻と合流して、４日くらいは各地を巡る予定だった。海外赴任が多く忙しいこの男に、たまには仕事のことを忘れて妻とともに周遊できる機会がこのチャンスがこれくらいしかなかったから。

“チリ鉱山事故の作業員、政府に賠償請求へ”“地上デジタル放送、早くも視覚障害者から不満の声”人ごみの中で相変わらずパッとし

ないヘッドラインを見た男はため息をついて携帯情報端末（モバイルフォン）をジーンズのポケットに押し込んだ。

「失礼ですが、外務省の○○○○さん、ですよね？」不意に左方から女性の声が聞こえた。しかもそれは日本語。男は首を振った。この声には聞き覚えがある。よりによってこんなところで！スーツ姿ではないので分からないはずだが。

「はい。そうですが……」彼が左を向くとかつて取材に来たことがある某新聞社の記者が男の隣を歩いている。カジュアルな格好からして彼を追いかけてきたようには見えない。

「あなたも、ご旅行で？」「ええ、友人と…」「そうですか。自分も先にっている妻と合流を。そのあとで韓国との交渉で…」「なるほど。それでですが…」この女の目が光る。「今、○○さん、先ほどの大韓航空で成田から？」「そうですが」「ええ、私もです。ところで外務省の先週の通達では…」「いえいえ私用です。費用も自分が出してますから」男は愛想よく言葉を受け流した。

先月の１７日、大韓航空のＡ－３８０が日本海（または東海）に浮かぶ孤島である独島（ドクト）…日本語で竹島…上空でデモンストレーション飛行を行った。ご存じのように水産資源豊富（かつてはニホンアシカもいた。現在は魚介類やエチゼンクラゲの宝庫）な日本海に浮かぶ独島を巡っては排他的経済水域の境界線を及び島の帰属に関係して、島根県の一部であると主張する日本と韓国と北朝鮮が長年対立している。島自体は韓国の警備部隊が常駐しているが、周辺海域には双方の漁船がたびたび操業中に双方の海上警備部隊…韓国では沿岸警備隊、日本では海上保安庁…にだおされたり銃撃されたりする事態が起こっている。このフライトを領空侵犯として抗議した日本国政府は、外務省役員全員に対して、公務の際の大韓航空利用を自粛するよう命じた。一国の政府組織が民間企業をボイコットするという異例の事態に対し、韓国と大韓航空は謝罪と撤回を請求をしたが日本国政府は全て黙殺及び拒否している。

「そういうことですよ」男は語尾に付け加えて端末を再び見る。「

ええ。しかし…外務省関係者のあなたが平然と利用したことに関して……」女がそこまで言いかけた時だった。

「＊＋‘＞?＜＞＋＊??」先を歩いているＡ－３８０の乗客たちに歩み寄っていた１匹のシキジカが女性のもとに歩み寄り体中にくっつけたかごから前足でなにか引っ張り出した。ちょっと大きめのパンダのぬいぐるみ。まあパンダが実際にいるのは中国であって韓国ではないが、この年頃では、そうでなくてもポケモンでは区別がつかないのだろう。

「あの…何か?」「;＋|＊＋‘;…」「ん?それを買ってほしいの?」「うん。お金、私のね、入れるの、ここに」彼女の反応が今までより良かったのだろう。この幼いシキジカは嬉しそうに覚えたてのような英語で言葉をまき散らす。それ同時に他の物売りのポケモン達も一斉にたかった。

……おそらく彼らはここで暮らすポケモンの孤児だろう。男はそう直感した。災害や戦争、文明の困窮の中で孤児になるポケモンは世界中にどこでもいる。しかし、こうやってターミナルで暮らしている所を見ると日本の東京や大阪の地下鉄の線路内で暮らす（この男も行き帰りの東京メトロの駅で線路方にポケモンがたかっているのを毎日見る）一度も太陽の下に出たことのないような薄汚れたポケモン達よりはるかにましで健康状態も悪くなさそうだ。

「人気そうですね。ではお先に」「は、はあ…」男はポケモンに集

られた女に機嫌よくそういうとさっさと荷物受取場・到着ロビーへと歩きだす。

……まああんなポケモン連中と比べれば日本と日本人はまだまだ大丈夫か……

２０１２年１２月３日　エメリア　ソーラ大陸　パルク州　国連軍基地　１５４５時

あれから1週間前後は平穏に過ぎた。とはいえ、いくつか興味深い出来事もあったが。

1日前の国連軍施設研究棟の2階。この施設は国連のポケモン研究を目的として軍施設に隣接する形で5階建てのガラス張りのビルがある。テルルはブレイブと一緒にこの先にあるあらかじめ指定された（サクラが教えてくれた）「言語・コミュニケーション部」の部署の部屋へと向かっていた。

「ったく…なんだよこの床は…足元がチクチクしやがる。なあテルル？」「う、うん…大丈夫かな…大丈夫だと思う？」彼女は上の空で答え、４本足の右前足で握っている封筒を強く掴む。前足首をひねって脚の甲で足の部分の代わりにして歩く。ポケモン文明で４本足種族が物を掴んで歩くときの鉄則である。

「おいおい！何かたくなってるんだよ？別に中身なんて見やしねえっての」「そうだけどさ、私はアンタと違って楽天家じゃないのよ。分かるこの気持ち？」「まあな。お前みたいな神経質そうな女が…あれほどの状況で落ち着いてるわけないよな」「そりゃ…ってさあ、

私そんなに神経質?そんなに暗いイメージだったの?」テルルがびっくりしたような表情をする。「どうだか…ピトムとか女(メス)に対しては普通だけどよ…俺ら男(オス)から見たらな…性別なんか気にするなよ」「気にする?」「ほら、テルルは男が苦手、ていうか嫌いなんだろ?でもな、世の中性別に関係なくいい奴はいい奴で、クソ野郎はそのまんまってわけだぜ」「そうよね…ブレイブのカッコつけにしか聞こえないけど」「そういうこと言うなって!俺はいつでもテルルのみ・か・た!遠慮はしないぞ…」ブレイブはテルルのもみあげ状飾りを前足でなでる。

ばしぃっ!

「はあ?!触っていい何で許可してないんだけど!?」「うぐぇ…分かった分かった…」ブレイブの頭のフサフサにまたしても彼女の前足が炸裂した。

「フン…でも……それにしても確かに歩きづらいわねこの床……」「だろ?」

人間たちの作った公共建造物…病院のほか例外も多いが…の床というのは、人間か靴を履いて歩くのを原則としてその靴が滑らぬようにザラザラにしてある。皆さんも子供の時そのような場所で靴を脱いで素足で歩いたことがあるかもしれない。ちくちくと痛く感じられたり細かい擦り傷ができたりしたかもしれない。ポケモン達は普段は素足が原則である。人間の作ったアスファルト舗装の道路や建物の床に敷き詰められたタイル、靴音が目立たぬよう敷き詰められたカーペット、つるつると光沢が出るように加工されたビニル加工が施された床等は、ポケモン達にとって暑かったり痛かったり肉球が引っかかったり滑ったりと、とても不快である。

そしてもう一つポケモン達を不快にさせるもの。冷房などの人間の空調装置である。南半球のエメリアは緯度が低いため1年を通し

て暖かいが、この辺りは初夏でありさすがに密閉性の高い現代建築のこの施設ではエアコンなしではいられない。そのためにかけられている空調機器から出てくる代替フロン冷媒によって冷やされた不自然なほど冷たい風を好むのは、ポケモン達の中でも特に不快な人間たちの性質だという事で皆目一致していた。彼らにとって自然な風が一番の心地よさである。ちなみにクルーたちの格好から見れば奇妙だが宇宙ステーション等の宇宙の施設で入っているのは暖房である。

2匹はその“言語・コミュニケーション部”と英語と足型文字で書かれた部屋の前の曇りガラスドア付近にやってきた。しかし、レバー式のドアノブにブレイブとテルルがどう後ろ足で立ちあがっても前足が届かない。「くっそっ！もう少し…もう少しなんだが…」「あのね、私が届かないんだからアンタで届くわけないでしょうに！はあ、全くもう…どうすりゃいいのよ？」「叩いてみるしかねえな……」ブレイブはそうって曇りガラスあたりを前足でたたく。

……かつんかつんかつんかつん！……

「あのですね、ご用のある方はドアにあるところにスイッチを押してカードをかざしてくれます？」中からめんどくさそうな人間の男の声が聞こえた。

「なんだよあいつ……これの事だろ」「カードっていつもかけさせられるこれ？」テルルは首元からぶら下げているカードを眺める。こんな変哲もない硬い紙切れのようなものに機械が入っているのだろうか？

「よっしゃ！テルル、俺の頭の所に座れ」「はあ？何で」「届かねえだろ前足が。おんぶしてやる。その間にスイッチおすんだ」「いやよブレイブの頭の上なんか」テルルは気持ち悪そうな目をしてブースターの頭のフサフサを眺めた。

「お前手紙出すのか出さねえのかどっちなんだ?どうしてここに来たんだよ?」「ううっ……分かったわよ。ただし10秒ね」「おっし」グレイシアは諦めたようにため息をつき、頭を下げたブレイブの頭のフサフサあたりにおしりと尻尾をおろす。

「どりゃっ!……」「うわわっ…」ブースターが2本足でよっこらと立ち上がり、グレイシアが前足で彼の頭につかまる。「やっべえテルルの感触が気持ちよさすぎる!!これは…」ブレイブが嬉しそうに尻尾を振り、テルルがぐらりと揺れる。「そんなこといいからもっと安定してよ!上手く押せない!」「分かったよ!重いから手早くやれっ!」テルルは右前足をブレイブの頭から離し、スイッチを押す。

「カードは?!」「そこの黒いところだ!」「ああ!…もう…もっと…」テルルは何とか足を伸ばしてカードを読み取り部分にかざした。

「テルル・アストラフスキー……ブレイブ・クレイバーも一緒ですか?……どうぞ」中で識別したのか、中から先ほどの男のまたしても退屈そうな声が聞こえ、ガチャっという男がした。ロックが解除されたのだろう。

「よっし…どぶはぁ!」「うぎゃんっ!?」ブレイブが力尽きるように後ろ足が崩れ、テルルが勢い余って前にすっとんでドアに顔を打った。

「やっべえ!!!テルルちゃんの尻は気持ちよすぎるぜ!な、もう一回…」「もういやよっ!…たくもう…いったあ…」ブースターの嬉しそうな声を無視してグレイシアがぶつけた小さな鼻のあたりを前足でなでた。

その後、ブレイブとテルルは特にとがめられることもなく手紙の入った封筒を受け渡すことができた。この後、ここのコミュニケーション・言語部が施設の通信管理部及び事務を通して毎週来る車両で、最寄りのアメリカ領サウスエメリア州のアンカーヘッド市に送ってくれるらしい。

「速達なら航空機の連絡便を使ってもいいんですが、それだとかなりの額になるんですよね。安いほうがいいんだよねアンタ？」相手の男はかなり流暢なエメリア語で話しかけてきた。足型文字の読み書きさえ複雑なのに、ましてやポケモンの言葉であるエメリア語を習得するには相当に骨が折れただろうな、とブレイブはある意味感心した。

「は、はい！とにかく多少遅くなってもいいからそちらで」

「ん。分かりました。ああ、あと管理部及び事務、並びに国連や郵便会社が…そうですね…簡単なセキュリティーチェックはすると思いますが、この手紙の内容や物を検閲することはありませんのでご安心ください。また、入っている通貨のほうは送り先の通貨にこちらで変換させていただきます。よろしいですね？」「ええ…お願いします」

部屋を出て、ドアが閉まると同時にテルルがため息を漏らす。「はあ…あの男の言ってること信じていいのかな？セキュリティーチェックはするんでしょ？それで中身を見られたりしたら、ね？」

「いえるな…人間ってのはああいう連中だから、どこらかの部分で中を見る可能性はでかいだろ」「そんな気安く言わ……ごめん。ブレイブにもどうしようもないか…ううう…もし書き換えられたり…」

このグレイシアはもみあげ状飾りを前足でいじくりまわす。

「もう仕方ねえだろ渡しちゃったんだからよ？それにな…」ブースターは彼女の左前脚をポンとたたいた。「もし書き換えられたりし

たら……テルルの弟の反応でだいたいわかるだろ？テルル、金いくら入れた？」「ちょっと待って…」テルルはカバンの中の小さな袋を覗く。服を着る慣習のない（人間世界でそうだったらあっさり警察に捕まるが）ポケモン文明ではカバンや袋の類は必需品だ。

「1，2，3，4，5、…100ドル、とかっていうのが6枚…もともと50枚だから…」

「そんじゃ4400ドルてわけか。…3717ルーブル14コペイカぐらいだな」「な、なんでそんなことわかるの？！」「へへっ。施設内の情報センターで適当な理由付けて聞いてきたんだよ。まあ昨日の値だけどな」「はあ…アンタそういう事には気が利くタイプなのね」テルルが驚きとあきれでため息を漏らす。

「それでな…今度返事が書けるタイミングになったら何枚札が入ってたかとか聞いてみろ。あと文面に書いてあることに十分気を付けて読めよ。明らかにおかしなことが書いてあったら…」「どうやって調べるのよ？」「テルルの弟だしすげえ大切なんだろ？そう言う奴の筆跡なんぞ見りゃわかるだろうが」ブレイブが鼻を鳴らした。

「そうよね…それで分かったらどうするのよ？」「俺に言えよ」「は？」「そしたら…さっきの人間どもを俺がぶっ潰してやる」「つぶすって…」テルルが驚いて彼を見る間にブレイブが前足をバキバキ鳴らした。「そう言う奴には容赦しねえ…ポケモンだからって他人の口調や態度がわからねえとかなめんなよ…」その表情には普段のおちゃらけた感じはなく、生真面目そのものであった。

……大半の人間どもはポケモンが手紙を読んでも大して理解できねえとおもってるけどな……

……俺らはお前らなんかより心は少なくともあるつもりだぜ…

……金と物だけに固執する猿のような冷血動物が……

意気込みと自信に満ちた表情の裏にブレイブの血液に冷たい闘志のようなものが走る……

「そ、そこまでしなくても……」グレイシアは苦笑しながらもふとこのブースターに奇妙な感情を覚える。

……私…ブレイブに……そこまで心配してもらえてるの？……

……

……正直に言うべきかな？ありがとうって……

そしてこの感情は、見事にテルル・アストラフスキーらしい言葉になった。

「んもう！そこまでしなくたって私の前足が痛いことはブレイブ自身が知ってるでしょうに？！大丈夫よ私が自分で殴りに行くから！」

「そっか。なら俺も協力して殴るぜ！」「うん。その時は、て絶対嫌よ！あんたそのあとで私にキスしようとかたくらむでしょ？」「当たり前だろ？！」ブレイブの尻尾が嬉しそうにぶんぶん振れる。

「まったくっ！だ・か・らアンタは変態って……」テルルの尻尾がため息をついたように下に下がった。

「へへっ！よっし、これで終わりだ。あいつらのとこでも遊び行くか！」「う、うん！」２匹はエレベーターの方へぴょんぴょんと走り出した。

その次の日の夕方…

「♪・」・」・」・・・;「;「¥~…」音の外れたエメリア語の歌声が聞こえてくる。「あのな、レオお前は何歳だよ?」グリソムが呆れたような声を出した。

「あん?なめんなよ。これを聞いたとき俺はまだ5歳くらい…てお前もいたじゃねえか!お前も聞いたことあんだろうが!?よっしゃ!一緒に歌えよ!」「い、いやだよ…お前自分で勝手に…」「何言ってんだこら!?その口を開けてやる!」「はあ…アンタたちまだまだ子供ねえ…それが15歳のすること?」

「うるせえガトル!お前もガキの頃は歌ってたんだろうが?」「だーかーら、そういうこと言ってるのがまだまだ子供なの!」パチリスはそう言いながら短い右手を振った。「こ、こんのぉ…」

「ありゃりゃ。まあ、どんまいだなレオ」リーヒュンがそういってコリンクの頭を撫でた。

「おいっ!兄貴も俺のことガキって言うのか?!」コリンクが嫌そうな目線でベイリーフを見つめる。「あははは!今リーヒュン、兄貴って呼ばれたでしょ!なんか嬉しそう!これは笑えるね!うん」ユイリィが彼の頭の葉っぱをツルで小突く。確かにちょっとうれしいような恥ずかしいような気分もしたが、このメガニウムにはお見通しなのだろう。

「そんなわけ…なくもないかな…」「やったやった!やっぱあたり!またもやあたし図星だったね!さっすがリーヒュンだよ。分かりやすすぎる!」「だろ?やっぱ俺の友達だけあるぜ!よっしゃレオ!俺らもその“〇〇〇〇〇(これが歌の名前だろう)”てのを歌ってやる!な、いいよなユイリィ!」「うん!リーヒュンも持っちろん一緒だよね?」「え?歌うのこれを?」

その質問に答える前にブレイブたちは音はずれの大声で“あたらしいともだち”を歌っていた。レオの声も加わって夕陽の傾きかけたパルク州の草原にヘンな生き物たちの喚き声のようなものがこだまする。茂みにいたスズメたちがその声に驚いて一斉に飛び立った。

「やっぱアンタの歌はあめってるねえ。少しは治らんのよその声？」
「お前に言われたかねえや」スカイラブの小ばかにしたような声にレオが反抗する。
「はあ…ごめんねテルル。うちのレオってこんな奴で。周りがうるさくなっちゃたよね」「うんん。ブレイブだってあんな変態男だし…もう気にしないよ」テルルは音痴の歌声を発するブレイブたちを見て頭飾りを振った。

「お前ら気持ち悪すぎでしゅ」ロズリンは気持ち悪そうな表情をしてリーヒュンの頭に飛び移る。
「俺は…やめとくよ」このベイリーフは呆れたように首と葉っぱを振った。
「でしゅよねえ……」「うん」

……こんな風に全員でいられる時間がどれだけあるかは……
…俺にもわからない……
……でもせめてできるうちは……そうしたい……

このベイリーフはそんな思いにとらわれた……

それでもこういう姿を眺めていると、リーヒュンにとってレオは小生意気な弟分のような感じに思えてきた。あれ以降このコリンクは

だいぶ元気を取り戻し、ことがある度にリーヒュンにグリソムやガトル、シンシアを連れてバトリングしようとしてきたし、ユイリィ、ブレイブ、テルル、その他を問わずちょくちょくバトリングをしていた。もともとバトリングというものが…人間の俗称はポケモンバトル。まあ公式大会でもこう呼ばれるが…ポケモン達のある意味の友情表現でもある。実際レオにとってこのベイリーフはかなり自分の立場や状況、性格を問わずに受け入れてくれそうな予感もしたし、実際彼はかなり強引なレオの攻撃っぷりや戦法、間合いの取り方にも難癖をつけなかった。

ユイリィの方もそう感じているに違いない。「でも、ほんっと、レオの無茶戦法いいと思うよ！レオらしさが見えるし、それが一番慣れてんだよね？それならその方法でいいと思うな」「へっ！あったりまえだろうが！何せこれのおかげでグリソムも俺も生きてるんだがらよ！」「お、おいら頼んだ覚えは…」「ああん？そのホタテ俺に貸してみやがれ」レオがにやりとしてグリソムからホタテを取ろうとする。「駄目、駄目だぞおいらの宝物」ミズゴロウが慌てて引っ張る「壊しはしねえよ。お前の大切なものなっだからよ…俺だって知ってる」「な、ならさわるなよ！」「それはだめだぜ。お前は俺の友達なんだからな…」コリンクとミズゴロウがホタテ貝を引っ張り合う。「こらこら…ホントもう！」スカイラブが子供をしかるように2匹を離そうとした。

「何やってんだよ。だからガトルに子どもだって言われても仕方が…」「だよね兄ちゃん！」「えっ？…君にまでそんな風に呼ばれるとな…」リーヒュンが恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「で、俺はユイリィとテルル双方の弟、ていうわけにしてくれよな！？特にテルルっ！」ブレイブがテルルに首のフサフサをすりすり

した。「ぜっったいに嫌よ！」テルルが突き飛ばした。
「うげ……でもそれでいい……」「はあ、あんたって奴はよっぽど女（メス）の誘惑に耐えらないのね。そういのを動物て言うんよ？」スカイラブが突き飛ばされて転んだブースターを見下すような目線でみた。
「うぶっ…でもラブとは…なんとなくだな…」「あっそ。ならいいけど」彼はこの女（メス）ルクシオの言動に恥ずかしそうに立ち会がった。

「あはは！何言ってんの？あたしはリーヒュンのお姉ちゃんじゃん！だからこんな風にむにーぃ！っってできるんだよ！あー楽しいな♪うん」ユイリィがそうやって彼にウグイス色の体を押し付ける。
「うぎゅぅ…首元がかなり苦しい……」このベイリーフは首を彼女の首からそらそうとしたときあることに気づく。

「あ……ちょっといいかな？」「ん、どうしたの？」メガニウムの顔がベイリーフの思案したような顔を見て表情が落ち着く。彼女には何のことだかをすぐに感じ取れた。
「ん？ちょっといいかな？」リーヒュンはツルで後ろからロコンをそっと引っ張り上げた。
「あの…どうかしました？」「なんかシンシアに……ああ、そういうことか…」
「シンシアさ……やっぱりこういう状況苦手？」「そ、そんな…別に私はどういう状況でも文句は言いませんし……」ロコンはベイリーフの唐突な言動に戸惑いつつ答える。

「いやいや、文句とかそういうのじゃなくてさ、ただ、君が居づらいかどうかってことだよここに。なんだかここに馴染めなさそうな顔を…」「おいおい兄貴、俺のまとめ方が悪いっていうのかよ？大丈夫だって。シンシアはそういう性格なんだよ。な？」レオがシンシア前足を彼女の左前脚においてに詰め寄る。
「う、うん……でも…」「でも、はなしだぜ！」
「あのな、俺が今聞いてるのはシンシアであってレオの印象じゃない」「ったくよお。こいつはあんましゃべらないから俺が代弁してやったのにさ…」コリンクはふてくされてそっぽを向いた。

「……ごめんごめん。で、シンシアはどう思う？」「うん。シンシアが思うとおりに言えばいいんだよ」「え、ええ…ワタシは……」
ロコンはリーヒュンとユイリィの目を不安そうに交互に覗き込む……

「馴染めねえ、か…まあ良くあるこったな」「うん…ワタシもそうだったかもしれない…」
それを一緒に歩きながら見つめるブレイブとテルルが顔を見合わせた……

それぞれの時間（後書き）

Ａ－３８０ですか……葵も一度は見てみたい！そして乗ってみたい！

でももちろん日本の航空会社が持っているわけありませんし、だから国内線に就航しているはずがない……

まあ、いずれ機会を待ちましょう。はい。

次回からはいよいよレオたちも部隊に加わって任務へ！

リーヒュン：作者創作に疲れてるな。

……まあね。

ブレイブ：俺は全然疲れていない！テルルがいつも疲れを取ってくれるしな！

……そういう奴は幸せだ……

行先（前書き）

さてさて、新しい任務に突入です！！！でもなんか一筋縄ではいかないみたい！！

行先

２０１２年　１２月４日　エメリア・ソーラの国連軍施設　０８２０時

「お、俺たちも…行くんですか？」レオの表情がにわかに凍りついた。「あの…せめてこの子が倒れないような場所に配置を…」「うぐ…うっせえよ！俺は大丈夫だっての！……」「そんならいいけどさ…」「なあ、任務をおいらが替わるか？」「だ、だからいらねえっての。俺は問題ない」ガトルやグリソムの声をコリンクは必死になって遮る。おそらくは彼のプライドのせいだろう。

「あなたがやりたいのであれば、止められないわ」サクラがさらりと言う。「ガトル、グリソム、シンシア、彼は部隊長じゃないけどレオのサポートをよろしく頼むわね」

彼女はそういってスクリーンの動画を手を振って再生させる。

（通達内容）

ソーラの東にあるハイドル大陸、ヴェルダー州北部の森林地帯に欧州連合のＣＥＲＮ（欧州原子核研究機構）所有の巨大な大型ハドソン衝突型の粒子加速器（サイクロトロン）実験施設と熱核原子炉実験施設がある。いずれもヨーロッパの科学技術を担う極めて重要な施設だ。この施設の電力はニュークリアのアメリカのトリウム原子力発電所と宇宙太陽光発電受信アンテナ、並びに太平洋送電網計画にあるメガフロート内の各種発電所等から送電線を通じて送られている。この送電線は地形に合わせての開発を優先したため、多数のポケモン文明集落を通過している。この辺りの集落もまた自治協会側に付く勢力と自由連合側に付く勢力が乱立し、近頃対立が激化している地域だ。

特に、州南部の比較的平原状の地帯、熱核融合型原子炉施設と粒

子加速研究施設の送電線が分岐する地帯においては、先週より双方の軍事組織が大規模な移動を始めている兆候が見られる。大規模な軍事衝突によって送電線が破損した場合、施設の安全保持並び欧州の科学研究が今後大きなダメージを受けることは必須だ。自治協会側の集落守備組織に加わり、送電線を保護しろ。国連統合軍及びアメリカ・イギリス・ドイツの3国軍が集落左右の高原地帯からの侵入を阻止する。諸君らは隣接する相手集落への街道付近に向かい中央の相手部隊を殲滅するんだ。また、今後君たちUNFSTPPT特殊部隊の無線におけるチームのコールサインは“ストーム・ロード”、“アバランチ”、“ブリザード”の3隊構成となる。

これまでにない規模でのポケモン同士の軍事衝突になるだろうが、君たちの能力をもってすればこの難局を切り抜けられると信じている。生還を祈る。

「……という事です」サクラが続ける。「今回もまた……そうね、とても不利な状況です。圧倒的多数相手に戦わなくてはいけない。あなた達は大丈夫よね？」

「あたしは全然大丈夫でーす！ね？リーヒュンもぜーんぜん慣れたよね？」「慣れたかどうかは知らないけどさ、僕の方は全く問題ないですよサクラさん…て重いっ！」ユイリィは相変わらずの元気いっぱいだ。またも彼女はこのベイリーフの首の葉っぱ元に彼女の右前足を乗っける。とはいえリーヒュンもこのメガニウムの何とも言えない明るさとまっすぐさにはすっかり慣れるしかなかった。

「お前のそういう自信はどこまで続くんでしゅかねえ？」ユイリィの雄蕊（おしべ）に掴まっているロズリンがなめきったような声を出した。「なーに言ってんのよ！アンタはあたしがいなけりゃ今頃は北アフリカでばらばらなのに！」「そういうお前もミーがいなけりゃ首がお花と一緒に飛んでましゅ」「あ、あれはさ！アンタが助けてくれたんじゃなくてたまたまあんたが正面にいてあたしの相手に当てただ

けでしょ！そういうのをね…」「助けたっていうんでしゅよ。ほかに何という言語があるんでしゅか？」「うぐぐぐぐぐぅぅ……この小生意気なシェイミ…」ユイリィは反抗のしようがなく頭の上のシェイミをツルで殴ってやろうかという衝動に駆られたが、リーヒュンにそれを察知されたのだろう。「おいおい。そんな小さい子を殴るなんていいのかよ？」「うっ…別にしないよ……うう…」「うん…そんならいいけど」メガニウムはますます悔しそうな目をして頭の上にいるロズリンを見上げる。

「もう、ユイリィ、あなたももう少し大人になりなさい……」サクラ司令も彼女の子供のような発作に呆れた。「はーい…」ユイリィはほっぺを膨らませる。

「……フローラのことに関してはまだまだ見えてこないことが多いわ。あなたに取ってってもつらい状況かよね。でも……」サクラはリーヒュンの首元の葉っぱにサーナイト種族の手を置く。「あなたは…精神的にはだいぶ大人になっているわ。それに必要なときに思いっきりもいい。まだ自分のそういう向こう見ずな面が子供に見えても、それはあなたが大人に近づきつつあるってことよ」「大人に…？」「だから……この先どんな状態があっても……諦めずに進んでほしい。そう願っているわよ」

……大人になる……何が変わるんだろうか？……

……でも……俺がそうなれば……フローラもみんなも……

……救えるのなら……

このベイリーフはその気の遠くなるような状況・重圧に押しつぶされそうになる

そしてそれを何とか飲み込もうと努力した……

「……はい」リーヒュンはかすかに答えた……そんな彼の精神内の葛藤をサクラははっきりと理解したに違いない。「頼むわね。もう少ししたら……あなたの能力も……はっきりと出てくるかもしれない…」

「うちも……頑張ります…やれることは」ユイリィがそっと声を出す。

「そうね…そこだけはあなたは頼もしいのよね。お願いよ」サーナイトはこのメガニウムにわずかに笑顔を送った。

「で、さっきの“ストームロード”っていうのはなんですか?」ユイリィが好奇心にそそられて尋ねる。サクラは手持ちの紙束を眺めながら「ええ、ストームロードはあなた達2匹とブレイブとテルルを加えたのよ。無線機による指示の際に管制のオペレーターがそう呼ぶの。…まあ私が勝手に決めたんですけどOK?」とブレイブたちにも確認する。

「もちろんっすよ司令官!やったぜ、俺らこれからもおんなじ部隊でやっていけるな!よろしく頼むぞみんな!」このブースターは嬉しそうにテルルとユイリィに両前足をぶつけた。「もっちろん!これからもずっとよろしくだよ!うん」「う、うん!でもさ!」テルルはブースターの前足を掴む。「いい加減私に対してすり寄ったりキスしようとしたりしないこと!それ約束よ。いい?」

「へへっ!絶対にやめねえ……って冗談だよ。わきまえくらいはある。そして…」彼はグレイシアのもみあげ状飾りをさらりと撫でた。

「リーヒュン!お前はこの先も俺の親友だよな。今後ともよろしく頼むぜ!」ブレイブはリーヒュンの首の葉っぱに頭のフサフサをすりすりした。「うぐぇ…あのなブレイブ、お前はホモか!?」「あ

ははははは！ブレイブがそうだったならあたしはね、リーヒュンべったり症だよ！うんうん！」メガニウムの方はベイリーフにのしかかり同然で体をよっかけた。「うぐぐぐっ！…さすがに…まあいいや…言ったって変わらないよな2匹とも」「変えねえ！」「変えないよ！」

「あーあ、あんたはこんな元気のいい友達に囲まれて幸せなのね」3匹の様子を見ていたテルルが見下したように言う。「そりゃリーヒュンはいま幸せいっぱい状況なんだよ！でもテルルもあたしの友達だよね！」「おう、そうだろ？それで俺がテルルちゃんの最高の相棒ってわけだからな！」「うん！ユイリィは私の友達！……ただしっ！アンタの相棒かどうかは知らないわよ」このグレイシアはユイリィのツルに前足をぱちんと押し付けながらブレイブに嫌そうな目線を叩きつける。

「何言ってんだこのツンデレが！？俺らは4匹いねえと話にならないんだよ！うおっしゃあ！この先もこの4匹はガンガン飛ばしていくぜ！テルル来いっ！」「は、はあ？！やめなさいよホントにもうっ…」ブレイブはテルルを前足でつかみよせリーヒュンのお腹もとに引きずり込んだ。「なんで4匹で一緒になったんだか…まあテルルもよろしくな」「むぐ…まあ…そうね」このベイリーフは、なぜかこんな状況にある種の心地よさを感じた。このチームならどこまでもいける、そんなものが。

ブレイブとてこうしているのはとても楽しい事であった。

自分の今までの生き方、今ここにいる理由、過酷な世界を知ってしまったこと。そんな事がどうでもいいように感じられる。誰にも言えない本当の理由を考えなくても済むから。

リーヒュンの友達として、ユイリィの同期として。
そして何よりテルルの大切な相棒としても。

……良かった。また４匹でやれるんだ……この先もみんなでいられることが…
……あたしにとって今は…かけがえのない時間なのよ……

ユイリィの心は今この３匹の温かい手（前足）にそっと包まれてたとえようのない光を放っているように感じられた。こうしてみんなといるだけで、彼女の生まれてから彼女の意識下を覆い尽くしていた夜闇の中に漂う雲、ほの暗い霧が朝日に照らされたように吹き飛ばされ、夏の雨上がりに現れたような澄んだ青空のように気持ちが遠くまで見渡せる、そんな思いだ。その感触は彼女の…メガニウム種族では異様な…夏空のような目の色と全く同じ。
孤独と不安にさい悩まされたこの２０年、やっと握りしめたこの思いはもう離さない、彼女は今そう誓おうと決める。

……これからもよろしくね！……約束だよ！……

そんな感情がブレイブに（彼女らしく）送られてしまったのだろう。
ふと目があった彼の顔が突如赤くなる。
「なんか言ったか？お、今俺のこと好きになったな！図星だろ？」
「それは解釈の違いだと思うな。うん」彼女はあっさり否定した。

「それで……“アバランチ”というコードは旧３０２中隊のバストーク以下の皆さんの事よ」サクラの目線がメリープやプラスル達の方向を向く。「バージア以降初の任務ね。バストーク隊長、頼みますよ。あとピトムニク……まだまだ不安は残っているかもしれないわね。でもそれは今越えなくてはならない必要な壁なの。しっかりやるのよいい？」

「はい…やってみます」ピトムニクが決意と不安が入り混じった声でうなずく。

「うう……了解しました」バストークは心なしか緊張に震えて体中のモフモフが内側に収縮したように感じられた。「自分たちは…あの…１７６１突撃隊の方もですよね？」「できれば…私たちが面倒を見るってことですか？」ピトムニクが不安そうな声を出した。「そこまで無理をしなくても大丈夫ですよ」サーナイトが優しく言う。「レオたちももういっぱしの兵隊なの。彼らにできることは任せておいて大丈夫よ。ピトムニク、グラシデア、あなた達はバストーク隊長の昔からの同僚として、ええ、部下としてかしら…レオたちと隊長の間をしっかり保ってね」「は、はい…」「分かりましたけど……」ピトムニクもグラシデアも自身のなさげな返事をする。「それと…あなたは父親をわがまま言って困らせないこと。いい？」「それは…知ってます」グラシデアはパッとしない表情をする。サクラに母親のようなことを言われたからだろう。このモココの目線からはそういう不信感にあふれた感情があらわだった。

……あなたにそういうことが言えるんですか？

……母親がいなくてどういう気持ちだかわかりますか？

「本当ならいいが」「あなたに迷惑かけたことなんかありました？」「俺はそう感じたことはないが…」「なら言わなくてもいいでしょ」父親のメリープの愚痴のような発言にグラシデアは突っ返した。

「あ、あのサクラさん！ロックオンとチェギョンちゃんの方は……」「大丈夫よ。今日で演習は終わって1週間もすれば戻ってくるんじゃないかしら？あの2匹もアバランチの舞台に入っています」「良かった…ありがとうございます……」グラシデアはほっとしたような表情をする。

「良かったねグラシ」プラスルが言う。「うん！あの人が帰ってきたら…」

「お前は何を言っているんだ？またあいつか？」バストークが諦めたように全身のモフモフをすくめた。

「そうよ。何か悪い？」モココの声ががらりと変わる。

「悪くはない……ったく、好きにしろ……」「もう干渉はいいですよ…」メリープはもう相手にしなかった。ただ、自分の娘は自分の届かないところへといってしまった。そういった寂しさを感じ始めていた。

「うん！そんじゃあレオとグリソムもよろしくね！ガトルと私はとっても気が合いそうね！シンシアも一緒に頑張ろう」ピトムニクがコリンクやミズゴロウの前足を握る。

「あ…はい…」「うう……俺も……」

「元隊長さん、あんたのやり方には期待してるぜ」バストークがレオの頭のはねっけを前足でなでた。「が、頑張りますよ……でも…あんま期待しないでください…そのほうが俺やりやすいっす…」レオはもごもごといった。

「たく！しっかりしなさい！こういう時ばっかへどもどしちゃってさ！…すいません隊長。こいつへこんだり緊張したりするとすぐこうなるんですから」「そ、そういうことここで出すな！」スカイラブがレオの前足をぱしんと叩く。

「別に俺は構わないぜ。とにかく頼むぞ」そういうバストークの心中には正直言って自身ではなく不安ばかりであった。ピトムニクも同様だったが。

……今度は……こいつらを連れて……絶対に返さなくてはいけない…
……頼むぞおまえら……

「ラブ、１７６１突撃隊の面倒はあなたに任せるわ。バストーク達との間をしっかり調整してやってね」
「了解です！グリソム、シンシア、ガトル、こいつがバカをやっだらぶっ飛ばしてでも隊長替わっていいわよ。レオのサポートをよろしくね。」スカイラブはパチリスとロコンの頭を前足でなでる。「が、がんばってみます！はい！」「私は……大丈夫ですよ…」
「そ、そういうこと人前でいうなって！特にシンシア！俺がいなきゃお前は今ここにいねえんだぞ。少しは感謝しろよな」「あんたって奴は！いいのいいのごめんねシンシア。そういう性格だからレオは」「ええ…すいません」コリンクとルクシオのやりとりにシンシアは恥ずかしそうにうつむいた。

２０１２年１２月４日　イギリス　ロンドン市内　１０００時

「ええ……それで施設への送電塔の防衛は……はい、一番懸念のある左右の丘陵地帯…ええ、統合軍は中央の街道付近で、アメリカ軍、イギリス軍、フランス軍が左右の丘陵を守備する…了解しました。素粒子加速研究施設と熱核融合型原子炉研究施設の職員の方には通常通りの業務を続けよと通達しておきました。ええ、……もちろん非常電源への備えの方だけは入念に指示しておきます…」ス

ーツ姿の男が自家用の黒いメルセデス・ベンツ社製Ｗ２２１を運転しながらハンズフリーモードにしてダッシュボードにおいた携帯情報端末（モバイル フォン）に応答する。自動車運転時の携帯電話通話は多くの国家の道路交通法で禁止とされているが、ハンズフリーモードのように手で持たずに無線機の形で会話ができるのであれば問題はない。

肌寒い１２月のロンドン。どんより曇った空の下、慢性的に通行量も歩行者の量もの多いヴィクトリア通り、テムズ川にかかる橋をメルセデスベンツ・Ｗ２２１は行き交う黒塗りのロンドン・タクシーやかつては２階建てばかりだったロンドン市内の赤色のバス…かねてはルート・マスターと呼ばれるまさしくダブルデッカーのバスだったが、安全やバリアフリーの問題から近年はごく一般的な路線バスだ…を次々にかわしてゆく。テムズ川の左手から前方にかける遠くの方にはドックランやカテナリー・ワーフと呼ばれる大規模なウォーターフロント再開発地域…これが現在のロンドン市の風景を作っている…のガラスとアルミニウム張りの高層ビル群が、シティーの伝統的な形状の建造物の合間から森のように生える。特に高いワン・カナダ・スクウェア、ＨＳＢＣタワー、シティ・グループセンター、今年４月に竣工したばかりのシャード・ロンドン・タワーはロンドンという都市が現在も世界の巨大都市であることを証明せんとばかりに、雲の合間からこぼれる光を反射して輝いている。一方橋を渡ったヴィクトリア通り…この先で３０２号線と２０２号線につながる…左手には１８，１９世紀から存在する連合王国（イギリス）繁栄の象徴であるビックベンの大時計台、国会議事堂、マンチェスター寺院がいかめしくそびえ、夜間にもなれば高層ビル群のライトアップとこれらの建造物のライトアップがテムズ川に浮かび上がり、最先端の文明の華やかさと先人たちが遺してきた落ち着いた文明の知恵や意志がフランス・パリ市同様に交錯して美しい光景を作り出す。かつてはこの地球の様々な地域を植民地化し世界の工場、世界帝国としての繁栄を謳歌していたイギリス。経済・政治の主導権をアメリカに奪われ、第二次世界大戦ではナチス・ドイツ第三帝国の恐る

べきロケット爆弾、？―１及び？―２により荒廃しても、１９７０年代以降徐々に国力と繁栄を取り戻し、現在でもアメリカや中国、インドをはじめとする新興工業国に次ぐ大工業立国・経済立国のイギリスの中心地として経済・産業・金融・文化・情報の一大センターとしてニューヨークの次、シンガポールや上海、ドバイ、フランクフルト、東京を上回る地位を固持している。

しかし、イギリス政府の関係者かつＣＥＲＮの菅家社であるこの男に、その美しい都市の感傷に浸っている余裕はなかった。一部がＥＵ（欧州連合）領となっている南太平洋のエメリア陸地群・ハイドル大陸のヴェルダー州にあるハドソン衝突型素粒子加速器関連施設と次世代小型高効率原子力発電システムとして注目される熱核融合型原子炉実験施設双方に電力を送る送電網に近いポケモンの集落間で耕作地帯を巡る対立が激化し、近々大規模な軍事行動があるかもしれないという情報が入ってきたからだ。ＥＵ非加盟国のイギリスであるが、その実験設備の整備や研究協力にはブリティッシュ・エナジー社やマグノックス・エレクトリック社等多くのイギリス系企業がかかわっており、いずれもヨーロッパの科学技術、いや人類全体の科学技術の進歩と解明に不可欠な設備である。そんな重要な設備を、たとえいっぱしの送電塔であろうとあんな神秘現象と自然崇拝にかまけたくそったれな半文明生物を気取る獣どもに壊させるわけにはいかない。特に原子炉の方は非常電源もあるが、万が一にも電力が途絶えると危険だ。冷却装置が作動不可能になる。昨年のフクシマの問題でアメリカのキュリオン社もフランスのアレバ社も、中国やインド、ブラジル、ロシア、トルコ、サウジアラビアなど原子力を進める国も、同じ立場にあるイギリスも電力の必要性は痛いほど学んだ。これは素粒子加速器の方でも同じだ。寸分狂わぬように精密に整備された機器やプログラム、貴重な実験データを失う恐れがある。既にＥＵ国各及び本国政府にも情報を通達してあるし、送電線周囲の自動セキュリティー…これはポケモンが独特に発する種の赤外線を探知すると、自動的に５キロ間隔で配備された全

自動の機関砲がその目標が動かなくなるまで、ひいてはポケモンが死ぬまで弾丸を撃ち込み続ける…や統合軍、フランス軍、イギリス軍、アメリカ軍が防衛任務にあたることは知っている。まあ奴らの政府組織がやってくれることは期待していないが。この男はこの後ブリティッシュ・エナジー社をはじめとする関係企業の重役に今回の件の状況説明をしなければならない。

「ええ、……しかし……なぜ双方の戦力をそこまで確証できるんですか？……自治協会側と自由連合側で兵力を？……なるほど、ＧＢＴＸ社が双方の戦力を対等に…それは信用していいんですね？……了解しました……」

携帯情報端末（モバイルフォン）を通話状態を手元のスイッチでオフにしたこの男だったが、ふと先ほど会話した内容のワンフレーズを思い出し、不可思議な疑問が芽生えてきた。

……兵力を合わせた？敵対する同士の戦力をどう合わせる？そんなわざと八百長した戦略シュミレーション・ゲームでもあるまいし。

自動車の運転と企業に対する説明の件であまり深くは入らなかったが、このことは彼が考えれば考えるほどますます奇妙な事態であった。彼とてＧＢＴＸ社がクローン量産のポケモン兵士を双方の対立する勢力…たとえばアメリカと中国とか…に供給、いや販売しているのはしっているし、そもそもこのようなアコギな商法は世界どこの軍需産業や民間軍事産業でもやっているらしいのはよく聞く話だ。しかし、直接既に紛争状態に入った、もしくは入る寸前の勢力同士に…噂の自治協会と自由連合のように…戦争しろと言わんばかりに兵器を売りつけることは大丈夫なのだろうか？

しかも戦力を均衡になるよう調査して供給する、そんなことは可能なのか？

……まあ、ああいう企業の事だから、戦闘が一方の圧勝とな

って地域が莫大な被害を受けることを
避けようとしているのだろう……奴ら……賢いのか……
……ずるいのか……
……それにしてもあの半文明生物、多少は話し合って衝突を
阻止する事は出来ないのだろうか？奴らは基本的に穏健で受容的な
文明を築いているはずである。こんな強情で貪欲な人間だってある
程度の軍事衝突は交渉で回避できるのに、今の奴らにそれができな
いのだろうか？

さまざまな不可思議かつ奇妙な疑問を感じつつも男はメルセデスベ
ンツ社製Ｗ２１１を飛ばし続けた…

２０１２年　１２月５日　エメリア陸地群　ウラナス海　００２５時

一行をハイドル大陸南岸まで連れてゆく米海軍第１０艦隊、通称エ
メリア派遣艦隊の一隻、アーレイバーグ級イージス駆逐艦「エドワ
ーズ」はソーラ・ニュークリア・ハイドルの３大陸によって囲まれ
たような状態となっている南太平洋の海域、通称ウラナス海と呼ば
れる地域を静かに進んでいた。このイージス駆逐艦は先月末に定期
点検を終えたばかりで第１０艦隊のニミッツ級空母「バラク・オバ
マ」とは別にこの海域で航行試験を行っていたのだが、国連統合軍
と自治協会防衛軍エメリア本土守備軍の要請にこたえてハイドル沿
岸まで送り届けてくれることになったのだ。今回の任務ではかつて
バージアに渡った時に運んでくれたラプラス、アコース・リダイバ
ーと同じ統合海軍エメリア地域重装揚陸隊第３大隊第２中隊第１０
１小隊のラプラスも参加してくれることになった。

ただ単に、駆逐艦が入れない浅瀬まで運んであとは駆逐艦の周囲の

警備をするという任務ではあったが、とうのアコース本人もこの任務を進んで引き受けたと言っていた。

さて、陽がとっぷりと暮れると、ポケモン達は、前述したとおり正確な時間の概念に乏しく、太陽を見ておおよその時間を測っていると各員は駆逐艦へと上がり、アコース達は駆逐艦の側面に手足の代わりとなるヒレをひもでくくりつける。こうすることでラプラスたちは移動しながら休む。速度がおよそ３５ノット出る分ひもがヒレに食い込んで痛そうに感じるが、慣れれば痛くないように掴まっていけるらしい。

　多くが寝静まってそろそろ日付も変わったころ、リーヒュンは駆逐艦前方の甲板の方に座って（４本足が後ろ足をおろすだけだが）久しぶりに横笛のようなあの楽器をのんびりと吹かしていた。ユイリィと同じく彼もまた、気持ちが赴くままに、楽器に感じられる先人たちの意志を感じるがままに穴をツル４本で塞ぎ、息を吹き込む。今日この楽器からこぼれる音は、海原を飛ぶユリカモメを海岸から眺めたような音だ。

「やっぱ君の出すのはいい音だな。気持ちが表れるんだろうなたぶん」不意に側面にひもで縛っていたアコースが声を上げた。

「俺の気持ち？はは……そんなにきれいかな？」リーヒュンが頭の葉っぱをツルでいじりながら言う。「たぶんそうなんだと思うよ。俺は相手の気持ちなんか全然読めないほうだけどさ……」「自分ではそういうのって見えないもんだ……俺だってさ、フローラがどこにいるのかっていう事さえ分からないんだから。もしどっかいってるだけだったら、分かった時点で軍隊辞めるよ……」「そうだよなあ。リーヒュンは別に入りたくて入ったわけじゃないからなここに……」アコースが星空を見上げる。ベイリーフはこのラプラスに続いて満天の…まあいくつかは宇宙の人工構造物だが…星空を眺めた。

その光る結晶の粒粒をまき散らしたような星空を見つめていると、この2か月以上の経験や出会いがとても遠くに、でも短い……そんなものに感じる
そして今までの人生も……あっという間に通り過ぎ……フローラとの思い出、たとえ父親は違ってもその思いでさえ……薄らいでしまったようだ。

リーヒュンは思わずツルと前足を星空の方に伸ばした。そして足の爪でつかむような動作を繰り返す。何かが手に入るようで、何かを失いたくなくて、そうせずにはいられない。

……しばらくして我に返った。俺は今一体何をしていたのだろう？……不意に虚しい感情にとらわれて、彼は首を下げて足元を見つめる。

……フローラ……いまどこにいるんだ？……
……何してるんだか知らないが……何かあったんなら……
……出てきてほしい…
……いやそれより……俺に気持ちを送ってくれよ……できるなら……
……同じように能力を持っていて……使えるのなら……

黄色いうろこのびっしり生えた爬虫類独特の前足の爪を強く握った。

「お、ユイリィちゃんも起きてたのか」アコースの声でベイリーフは感情から自分の意識を引き戻す。リーヒュンが首元の葉っぱをふるって首を上げるとユイリィがのんびりとこちらへとやってくるのが見えた。ただ、今のメガニウムからは普段のオーラからは感じられない奇妙なものが感じられる。

……何かを探している……ちょっと不安がってる……

「ん？どうした？」「えっ？うーん…」彼女にリーヒュンが真っ先に声をかけた。彼女はびくんとなってちょっと足元を眺めた後、いつもの高い声で一気にまくしたてた。

「別に理由なんてないよ！ただ単に、ほら、さっきからいい音が聞こえてくるなーて思ったからちょっとぶらついてみたの。それだけそれだけ！やっぱリーヒュンだったんだね。なんだか田舎っぽい子供の音楽……」「そっか…ならいいんだけどさ……」リーヒュンはユイリィの目をじっとのぞきこむ。「な、なんかあたしについてる？そんな訳ないじゃん！大丈夫大丈夫！いつもうちは前向きだかさあ！こんな夜中でもあんまり眠いような表情出来ないんだよね！」

「前向きと表情関係あんの？」「あ、あるある！そういうもんだよ、うん」

「ふーん、でもさ……」彼はそう言いながらメガニウムの気持ちを読み取ろうと意識を集中させてみる。まだあまりよくは見えないが、そういう努力はしてみた。

……うん。結構無理した表情だな……

……よく言う取り繕いって奴か……

そんな様子が伝わってしまったのだろうか、彼女は顔を赤らめた。

「んもう！さっきからずっとあたしに触っちゃってさあ！くすぐったいよ。どうしたの？」彼女は十分に能力が覚醒しているのでそういう感触に感じたに違いない。

「……なあユイリィ」「ん？」「なんか探してる？」「い、いきなり何聞いてんの？」ユイリィの顔がますます紅潮した。おそらくは図星だ。リーヒュンはそう確信した。

「ユイリィは、うーん……今この船で大切なものを落とした。……なんとかしたいけど心当たりがない、とか…」「そんなわけないよ！そしたらもっとまじめな顔して探してるよ」

「……そんでもって俺に気付かれたくない。そんな風に思ってるだろ？」「……」

「どう？当たったか？……俺初めてユイリィから図星とったな」リーヒュンはちょっとだけ嬉しそうに首元の葉っぱをツルでいじった。

「ああーもう当たりでいいよぉ！……ごめんねごめんね。確かにあたしは今ちょっと物を探してる。んまあ、大したものじゃないけどね。なかったらないでもういいよ…」

「うん。そんなら俺も探すよ」「だ、だいじょうぶ！ありがとね。あんなのなくてもあっても変わりはしないよ！うん」「あのな、ユイリィが探す物なんて君の性格を見ている限りよっぽどだぞ。俺が言える話じゃないけどさ」ユイリィは困惑したような笑顔を浮かべしばらく考える。

「……そうだよね……一緒に探してくれるの？」「もちろん」「ほんと？ああもうありがとうね本当に！」彼女は嬉しそうな表情をした。ユイリィはまるで心の中で花火かポンポンはじけるような……中国でよくある爆発事故ほどではない……感覚がした。

……嬉しくてぴょんぴょん飛んでいけそう。そんな気分が。

2匹はアーレイバーグ級イージス駆逐艦の前方部分までやってきた。

ここにあるのは停泊の際使うアンカーと、ヴィッカース社製ＭＫ４５型５インチ速射砲と、スタンダードＭＫ２対空ミサイル垂直発射装置（ＶＬＳ）である。

「どんな形してんだそれ？」「えーっ？……言葉じゃちょっと説明しにくいかも。なんか葉っぱを来るって丸めたみたいな、そんなものかな」ユイリィは頭の上のまるめた長い雄蕊をツルでさらにくるくるしながら、足元のアンカーを右前足でどける。その油で黒くなった爪先を見ながらため息をついた。「あーあ……これじゃ見つかっても油まみれで真っ黒かなあ？……」「うーん…そうだ。それどこに身に付けてた？」「どこ？……うん右前足のここらに付けてたかな」「お、ちょっといいかな？」「えっ？うん…」リーヒュンはツルを使ってメガニウムの右前足に触れる。「う、うわわ！くすぐったいからやめてよぉ！あははは！触られちゃったよ、うん」彼女は照れ臭いのか嬉しいのか分からない声を出す。

「ちょっと動かすなって！うーん…」リーヒュンは彼女の脚先からそこに残ったかすかな感情に気持ちを集中させた。あまりよくは見えてこない。でも何かヒントが見つかるかもしれない……そう感じたからだ。

1分ほどそうしていただろうか、このベイリーフはツルをはなし、それを甲板に押し当てながら歩き出す。「こっちかな？……そうだ……たぶん……」「ほ、ほんとに当たってんのそれで？！ビミョーなんだけど」ユイリィも後ろからゆっくりとついて行った。「……ここだ」リーヒュンはＭＫ４５速射砲の基部のあたりで止まる。「このあたりの下に……さっきの意識みたいなものを感じる。ユイリィは……そうだな……（彼はターレット部分を足の爪先で探った）……ここだ。この隙間に落としたんだと思う」

「こ、ここ？何でだろ……そっか……」ユイリィは思い返すようにつぶやく。「さっきこの船に移った時ね、ロズリンがレオにまたチビだとかバカ隊長だとか言いだしてもめちゃってさ、それでこのシェイミはこっちにほうに走り逃げしたの。あたしがこの大きな機械（ＭＫ４５速射砲をツルでコツコツ叩いた）の所に行ってね、ロズリンを引っ張り戻したんだけど……あいつったらこの周りをぐるぐる回ってこっち来ないのよ。そんでやっとこさ捕まえた時に……落としたっぽい……」「ってことはさあ、悪いのはここで寝ているロズリンなのかよ？」リーヒュンは彼女の頭の雄蕊のあたりで寝ているシェイミをツルで指す。「そうだよ！……少しは責任も感じてほしいよね……」メガニウムは困ったような顔をして頭の上で寝ているロズリンを見上げた。

「……でさあ、この隙間からどうやって取り出すの？うちらのツルじゃどうやっても入らないよね。うーん…」ユイリィが速射砲タレット部分の隙間にツルを当てる。

「……そうだよな……」「……ちょっと難しいかもね。それならそれで……」「いや、やろうと思えばいけるよ」「え、え？どうやって？」「子のでっかい機械の内側からとってみる。ほら、そこに入る口があるからさ」

「そ、そんな方法で取るの？！」「それ以外ないだろ？」「そうだけどさ……あんなところにあたし達勝手に入っていいのかな……」「なんとかなるさ」リーヒュンは何の不安もないような声で言った。

「……分かった。任せるよ。お願い」「よっし……」このベイリーフはヴィッカース社製の速射砲の後ろに回ると、ガン・ハウスのＦＲＰ製の扉の取っ手をツルでつかみ、わずかに力を込めて扉を手前にこじ開けた……

「……ふーん。あいつら2匹で仲良くやってるんだな。まあ、あんなおっきな大砲の所で何を考えてんのか知らねえけど……」2匹の様子を甲板に出てきたブレイブがアコースと一緒にちらりと見やった。「ひょっとして2匹でいちゃいちゃ……」

「してないわよ！何へンな妄想してんの？」テルルが彼の首元のフサフサをむんずと掴む。

「あーあ……お前らもいい仲間だな」ラプラスは笑いながら言った。「当然だろうが！俺とテルルちゃんは永遠の……」「はあ？！そんな訳ないじゃない！ごめんね……こいつの言ってることは気にしないで」「気にすんなって……でもな、俺とお前は少なくとも2匹でやってることは事実だろ？そんならそれは認めてくれよ……」ブレイブは頭のフサフサを前足でなでる。「認める？」「ああ、俺たちが2匹で1匹、リーヒュン達と同じくらい仲良くできるっていうことだぜ。テルルはテルルでいろいろ大変だけどよ、俺もいるし他にだってピトムもグラシもいるんだろ？」「うん、そりゃそうだけど……」グレイシアはもみあげ状飾りを前足でいじった。「……一般的にはな、一番近くにいる奴って意外とむかつくとこしか見えねえみたいだ。俺だってそうだったさ……あいつとはしょっちゅうもめてたな……」ブースターは速射砲の方をちらりと見た。「ただな、その分お互いが分かり合える点も多かったぜ……いい事だろ？」「……ふーん……で、今の私たちと関係あんの？」

「もちろん。こうやって一緒にいるとやっぱ嫌なところばっか目に入っちまうからな…」ブレイブは少し恥ずかしそうになる。自分のことを自分で言っているように感じてしまったのだろう。「……だけどな、その分仲良くなる余地も大きいんだよ。だから……その……テルル、今後もしばらくは一緒にやろうや、な？」

「な、何その不器用な雰囲気は？……分かってるわよ……ブレイブと私は……おんなじ部隊なんだから……」テルルは仕方が

ない、というように首を振って頭飾りを前足で触る。「ただし！前も言ったけどさ、あんたのその変態行動をまずなんとかすること！言い、分かった？！」

「わかってるよそんなもん！へへっ！で、でもこれだけは止められんねえよなあ！テルルの足をすりすりすんのは！うおおっ！気持ちいい！」

……ばきいぃぃっっ！特大の一撃がブレイブの頭を襲う。

「やめなさいこのバカっ！話聞いてないの？！あぁーもうやっぱうざいっ……」テルルはつくづく嫌そうな目で殴られてぺちゃんこになったこのブースターを見下ろす。

「ぐぶっぅぅ……でも俺幸せだ……」「ったく……懲りてないのねアンタは……」

「ハハ……なかなか面白いコンビだなブレイブも……さてさて……うん、日付も変わっちゃったか、俺もそろそろ休まんと……」アコースが駆逐艦から伸びるひもを自分の右前のヒレに口を使って結びつける。眠っている間にひもがほどけたらラプラスといえど人間の戦闘艦に追いつくことは不可能である

「へえ～。ねえねえアコース。寝ている間は誰が皆を見張ってるの？」テルルが尋ねる。

「普通だったら俺らの種族だとだれか2、3匹は起きてるんだけどな。でも俺の場合は心配いらない。もっといい相棒が海の中にいるからな」ラプラスはそういって海の中に首を突っ込む。「おーい雑用！俺の大事なパシリ！上がって来いっ！」

「おいおいっ…そんな呼び方なのかよ？」ブレイブがびっくりしたような表情を浮かべてアコースを見る。「それは…さすがにひどいんじゃない雑用なんて？」テルルもそういった。

「んなわけあるか！あいつは何でもしてくれるからな。おいっ、早

くしろ！」アコースは何の悪気もないような声でそういう。海中から上がってきたのは……

青いイルカのような体。頭の上には丸い電球のようなもの。そして比較的大きめの赤い瞳。このポケモンはランターン種族。

「ん？僕呼んだアコース？」「おう、呼んだぜキンケイド。こいつらに自分の肩書と名前とつらを覚えさせてやんな」このラプラスの言いっぷりは、普段のものとは全く違うものである。

「あ、うん。どうも。僕の名前はキンケイド・ミズーリ・ジークフリートていうんだ。重装揚陸隊じゃないけど、この通りアコースの立派な友達であり雑用ってとこかな。うん。よろしく」そのランターンははじることもなく自分のことを素直に言い切った。

「お、おう…よろしくな……」「よろしくね……」ブレイブとテルルはそう返事をしながらも顔を見合わせた。

……なんという自嘲……でもひねくれてない……

……何だこのランターンは？……

その頃　アメリカのニューヨーク　新国際連合本部　０２００時

「……そうか……彼らは予定通りハイドルに向かったのか……」ニューヨークの本部にいる統合軍司令は携帯情報端末（モバイルフォン）越しにエメリアにいるサクラと通話していた。

“ええ……それで、私が先ほど送った戦術プランは読んでいただけましたか？”

「最初の概要くらいはね。君の書いたものは全部文字でしかないからそんな図や表を見るようにはいかないよ……」この男は苦笑し

ながら言った。ほかの統合軍の戦術予報士同様、図や動画プログラムがが入っていればおおよその立案は掴めるが、彼女のように文章で書かれていると大まかな内容を掴むだけでも一苦労だ。これがポケモンの限界か、彼はそう思った。

モバイルフォンを切ると、休憩室の大きな窓ガラス越しにライトアップされたマンハッタンの高層ビル群を眺めた。すでに深夜の2時にもかかわらず街並みは眠ることはなく、ビルのネオンサイン、列をなしてともる室内の光、建造物の足元を網目のように照らす市街灯や自動車、看板、街頭ＴＶの明かり。

人類文明の強大なエネルギーを象徴するかのように夜闇に輝く市街地を眺めながらこの男はため息をついた。

あのサーナイト、我々が今まで示してきた“経典”を完全に鵜呑みしている。あの女は直感も思考も剃刀のように鋭い奴だが、自分の使命…彼女が勝手に信じているだけだが……と関わることになると、どんな実証のなさそうな話であろうと飛び付いてくるクセがある。それはエメリア自治協会のエムリットもユクシーも自由連合も連中もそうだ。ポケモンであるがゆえの純粋さといえば聞こえはいいが、彼等もまた自身が人間たちをそう否定するのと同様、目的のためとあらばたとえ不条理でも身勝手でも目の色を変えて飛び付いてくる。

人間との違いといったら、その意味が“自分のため”か“みんなのため”か。それしかない。むしろそれが故に人間たちから見ればとても単純で扱いやすい文明生物だ。

あのサーナイトは今まで我々の送った画像でしか見たことない“経典”を本当にすべて実在していると信じているのだろうか？

確かにそれは実在する。そして昔はエメリア自治協会の本部の地下のアーカイブに保存されていた。

しかし今それは……それに関わる書類一切を含め……

この新国連本部の地下にある倉庫に極秘裏に保管されている。

この時の…今のために……

送る画像を加工すること等、今の人間技術からすれば造作もない。そのような画像の加工と報道が…今年夏の北朝鮮の水害の記事も画像加工らしいが……社会問題や国際問題に発展することもあるが、そういった類に抵触しないか分からない範囲でこれを行う事はきわめて便利である。特にポケモンのような低レベルかつ穏健な文明を納得させるのにはうってつけだ。

……本当のその本の内容を……示されている“事象”を知っているのは……

……国連の代表や統合軍司令などほんのわずかな“人間”しかいないのだから……

唐突にモバイルフォンが鳴った。代表からである。「もしもし？」

“サクラ・フユツキはなんて言っていましたか？”「ええ、全く認識していないようです」

“それはよかった”聞こえてくる男の声が満足げに言った。“今後も当初の予定通りあの部隊を処理してください。まずは……あの２匹から”「もちろん。お言葉通り。簡単にあの能力を発揮させるわけにはまいりません。然る時が来るまでは…あのバカ騒ぎのおとり巻き連中に…泳がせましょう」

“頼みます。それで…“妹”の方も予定通りに？……”「その通りです…処理は済んでいます……それにしてもあんな伝説を信じているほうがおかしいですなあ。……なぜポケモン達は伝説や神話の類をああまで鵜呑みにできるのか。サクラ・フユツキといえど小学生の算数からやり直さなきゃダメでしょうな……我々はあのバカ騒ぎおとり巻き連中のスタンド・プレーをしばし見物といきましょう」

モバイルフォンからもかすかな笑い声が聞こえる。

司令はアラスカ・エルメンドルフにある統合軍司令部を呼びだす。
「私だ。予定通り計画を開始するぞ。まずは…あの“伝説気取り”の2匹からだ。それがすんだら、例の“妹”を予定の位置に連れていけ」

“……了解しました司令”

この男の、いや人間の冷たい声が華やかなニューヨークの明かりで影のようになった国連本部の休憩室に響いた……

行先（後書き）

最後のフレーズ……妙に怪しい……

……一体何が起こるのか?!

以下次回!!……て葵が定期試験に入ってしまうので2週間くらい
お待ちを…

目的へと向かって（前書き）

なんだか最近前書きのつけようのない……
やっぱり執筆が行き当たりばったりだからでしょうか？

目的へと向かって

２０１２年　１２月８日　エメリア　ハイドル大陸　ヴェルダー州
北部の集落　１０００時

「ぶはあ！重てえっ……なんたっていつも俺の装備品入れは…よっしゃグリソム！交代だ！」レオが容赦なく水色の首元から腹にかけて食い込む装備用具入れのバックルを前足で引っ張る。「な、そんなのはお前自身が持てよな。お前のが重いのはいつもお前が食い物もらい過ぎだからだろ？」ミズゴロウは呆れたよな顔をしてコリンクから離れた。

ハイドルの沿岸についてから3日間、一行は指定された街道…もちろん未舗装でところどころがけが崩れていたり、河川かかる橋が崩落しかけていたりした上、看板の大半はいたずらされているか、撤去された跡が残っていた…を通り、それぞれの指定された集落を経由しながら来たのだ。それぞれの集落にはドイツ陸軍や国連統合陸軍がいて、あらゆる飲食物その他の物品を供給していた。どうにも集落の住民たちから搾取したとしか思えないものばかりであり、そこの住民たちも（特にユイリィとリーヒュンは彼らの心情が具合が悪くなるほど感じた）、奇妙なほど親切にやってくれた。

テルルはそんな住民たちを見つめてため息をついた。時々ドイツ軍の車両や兵士たちにちらりちらりと目線を送っていたので、おそらくは何かしらの脅迫や脅しを受けたのだろう。彼女もそういう事は知っていた。

……というより…経験があったのだ。

「バーカ！この飯はお前らの分も含んでんだよ」「あのな、おいら頼んでないぞ」「つべこべ言うな！交代だ交代っ！」レオは立ち止まって装備用具入れのバックルを前足で首から外してグリソムの頭にかけようとした。「や、やめろって…」「おらおらっ…」2匹が一行の前後に駆け回り、ひもで同じくかけていたコリンクの真新しい頭部保護用装甲板が外れて転がる。

「なーにやってんのよアンタらは……」スカイラブがため息をついてレオの頭部保護版を拾い上げた。「へへっ！悪ふざけ…一緒にやるか？」コリンクがへらへらしながら言う。「やめとくわよ…ていうか誰もがそんなものに付き合うの？」「なーに恥ずかしがってんだよ？！お前にかけてやる」レオは重くなった装備品入れをルクシオの首にかけようとした。彼女はそれを力ずくで振りはらう。

しかしスカイラブはそんな幼い時から見守ってきたレオの一つ一つの成長とその姿を見ていると、自分の弟を見つめているような温かい気分になるのを感じた。エメリア北部の辺境からやってきたばかりで何もわからなかった彼女に、隣に住むレオ達ミュースカイ一家は自分の娘のように親切にしてくれた。そしてこのコリンクは、彼自身が物心つく前からスカイラブの友達であり、弟あり、せめてもの心の慰めでもあったのだ。

取り戻しようのない理由でやってきたこのルクシオの悲しみをぬぐうための。

スカイラブはそんな思い出をわずかに心の中から引っ張り出し、少し笑みを浮かべて首を振った。口を突いて出る言葉は相変わらずのっぺりとした田舎風味全開のアクセントだ。

「何やってんのよこのガキ連中は……ねえシンシア？ガトル？」彼女はそばにいるパチリスとロコンの頭にぽふんと前足をやった。「ですよねえ～ホントああいう子どもは困っちゃう」「私は特に気にはしてませんが…」「んだとこらあっ？！お前俺らと同世代、てか同年齢のくせに母親気取りやがって…」「…うん。だってホントアンタ達は普段でも戦闘中でも5歳程度のチワげんかか言い争いしかしてないもん。統合軍の偉い人に使い捨てにされたって仕方ないわよ…」ガトルは喧嘩っ早いレオにも全く臆することなく言い捨てる。「ああん？！その原因の大抵はな、こっの…うげ…グリソムにあんだろーが…」「なにいってるんだよ？そのまた原因は…うぐっ…レオに…」「うる…ぶへっ…やるかこらっ？！…」レオとグリソムは装備品入れのバックルをお互いの首になすりつけようともみ合いになっていた。

「全く…ますます子供ねぇ～」ガトルは短い両手をすりすりさせながら首を振った。スカイラブはミズゴロウとコリンクが落とした装甲板や真新しい無線装置・生命情報発信装置等の機器類、その他の所持品を後ろから拾いながらあきれ顔だ。「ガトルはよく大丈夫だったねこんなあほ連中の集団で」「もううんざりですけど、ほかに行く場所もないからね。むしろ規律に固くなくてましですよ」そういうパチリスの表情からはこれといった皮肉や嫌味は込められていない。「すんごい容量（キャパシティー）なのねあんたは。私もあいつの相手するときもう少しほしかったよ」「そんなことないですよ。あんなどうしようもないコリンクを何年も見てきたラブさんの方が…」

「よっしゃあ！シンシア、お前に決まりだ！全部持てっ！」「な、何よいきなり…うぶぶっ！」掴み合いの混沌から抜け出したレオは

この装備品入れをロコンの頭のくるくる毛にひっかけようとした。
「動くなってのっ！」「いやよもうっ…」嫌がった彼女ともみあいになるうちにシンシアの頭部保護装甲板やその他所有品の類がまたしても転がる。「うぐっぇっ…」レオが転がったシンシアの頭部保護装甲版につまづき、その装甲板が後ろを歩いている連中の方へ転がっていった。

「……そうかリーヒュン、お前あの速射砲の中で彼女のもの探してたのか…」ブレイブが探るように尋ねる。「まあね」リーヒュンが答えた。「うん！ブレイブだったらできなかったよ！だってセキュリティーを黙らせちゃったんだもんね！」ユイリィは彼に見つけてもらった右前足に巻いているブレスレッドをツルでいじって大喜びだ。「黙らせもしないと入った途端に警報が鳴るさ」「で、鍵をぶっ壊したんだな」「それ以外ないだろ？」リーヒュンはそれが常識さ、という表情をした。まあまっとうなポケモンだったら誰もそんなものを常識だとは思うはずがないが。「そんでもってお前は中に入ろうとして頭から弾薬庫にドーン！！て言うわけだ！お前最高だなっ！！」ブレイブがこのベイリーフの首元の葉っぱを左前脚でたたく。「アンタそれでよく生きて帰ってこれたわね。この変体ブースターだったらそのままドッカン！よ」テルルが呆れたように頭飾りを振った。「何言ってやがんだテルル！俺のもらいびで問題ゼロだぜ。やってやろうか？」「やめなさいよ…アンタの息はやばそう」グレイシアは吹きかけようとしたブースターから、嫌そうな顔をして離れた。「あははは！もうリーヒュン面白すぎるよ！だって少し考えれば４本足じゃ梯子は降りれないってわかるのに！」ユイリィは万歳をするように２本のツルをリーヒュンの首にかけた。

「それはユイリィの…まあいいや。とにかく、あの時は俺も爆発するかと思ったよ弾薬が」リーヒュンは自分の頭…虫食い葉っぱが付いている付け根あたり…にできたあざのような傷をツルでさすった。

「でも、それで怖がってちゃな……やってみなきゃわからないさ」
「何それ?!…はあ、アンタってどこまでも命知らずなのね。ある意味関心」テルルがベイリーフの足元をポンとたたく。そう言いながらもこのグレイシアは彼を多少なりとも心配している。　こんな感情を彼女が持つこと自体、自身で奇妙だ思ったが、テルルにとってリーヒュンは子供っぽいほどの単純さとひた向きさが呆れよりもある種の信頼を呼び起こさせる存在だった。

「おいおい、俺はどうなってるだよ?俺にも感心しろよな」ブレイブがテルルのもみあげ状飾りを前足でなでた。「何勝手に触ってるのよこのバカっ!アンタにあげる関心は残ってないのよ」彼女はブースターの腹元を後ろ足で蹴りとばす。
「うぶっ……いってえけど…やっぱかわいい。それこそテルルだぜ」
「ふん!懲りないんならいいけどさ、アンタにだって一応気を配ってるのよ……」グレイシアは少しうつむき加減になる。「ま、まじ?!」「はあ…アンタって昔からそんな調子なの?ねえリーヒュン、こいつって昔から?」
「さあな……いや、昔はもう少しまともだったかな」「えっ?昔はそうだったんだ」リーヒュンは思い出すようにツルで前足の装甲板にこびりついた土を（「これ重いな…」）取り払う。少し記憶をまさぐるとソーラの一角で過ごした幼き日々があの時の風、川のせせらぎ、適度な湿度を含んだ空気の温かさとともに彼の心を風船のように満たしていく。

「何言ってんだよまともって?!」ブレイブが驚いた声を上げる。
「いや、そういうまともじゃなくてさ、女の子に対してもっと普通だったってことだよ」「それは俺も補償しかねるぜ!昔は昔、今は今だろ?」「まあな」「ていうかよ、お前の方が昔からまともじゃ

なかっただろ!?」「…そうだったけか?」リーヒュンの思い起こすような表情にブレイブは面白がって笑った。「何忘れてんだこの野郎!お前が俺のひのこを全然暑がらないからって、俺がふざけてお前のツルにガンガン当てて森を火事にしたりな、エンデバーと俺とお前とで川で遊んでてな、エンデバーが流されかけて助けようとツルで引き揚げたお前が逆に深みにはまったりしたな」「ああ、俺確かにそんなことしたか……」「そして最高傑作はな、お前が大丈夫そうとか言って通り抜けた森の斜面が見事に崩れて、シーベルトとお前がまともに下に落ちたことだよ!結局助けたのは次の朝だったな、お前とシーベルトはどっちが悪いのなんのってお互いフルボッコになってたな!」「ああ……はは…俺もそんなことしたなあ……」ベイリーフは頭の葉っぱをツルでなでた。「……シーベルトか…あいつ…あの時どうして……」リーヒュンはあのポニータの事を思い出すたびに心がパイプが詰まったように苦しくなる感覚を覚える。それはおそらく彼がシーベルトの事をまだ昔遊んだ友人と同じように考えているだけかもしれないからだろうか?

「あいつなあ……俺の考えは決まってる。友人だろうがなんだろうがよ、俺たちに敵対する奴は…お前らやテルルを倒そうとする奴は容赦しねえ……」

「本当にいいのかよブレイブ?」「ああ。俺はそうする。お前は?」

「俺は…」リーヒュンは言葉に詰まった。

……ブレイブには覚悟はできている……しかし俺には……友人を……

彼にはまだまだ自覚というものがなかった。いや、そう思いたくなかった。リーヒュンにとって軍人であるということは、相手の命を理不尽に奪う非道な連中に加担するというイメージしかなかったし、今まで彼が感じてきたものすべてがそうであった。ただし、今自分

がいる部隊が軍隊の一角であるという感覚はどうしてもわかなかった。ユイリィもテルルもバストークもピトムニクも、軍人というよりはエメリア自治協会の救助隊や探検隊のような感じが“なんとなく”したから。彼らが単なる軍人ではない、という事が。

……ここは軍隊か？……それともどうなのか？……

……どうする？……なんて答える？……

リーヒュンは慎重に答えを探った。

「俺は……あいつを……」「いや、無理して決めなくていいぜ」ブレイブが彼の右前足をこつんと尻尾でたたいた。「なんだか迷ってるみたいだな。……こういうことはすぐに結論が出るもんじゃねえからな……俺だってな、こう考えるまでは……」

ブレイブもあの時からこの結論に至るまでかなり苦しかった。エンデバーとシーベルトとリーヒュンと自分。ソーラ北部で一緒に育った4匹は永遠に良くも悪くも友人であり続けるに違いない。このブースターも、多くのポケモン達がそう思っているように絆という物が社会や世界に密接に関係して、社会を構成していると信じていた。それを…アメリカの海兵隊に入ったころから徐々に肯定せざるを得なくなっていたが…あの時にはついに完全に否定された。

戦争というものは、人間の組織は、敵なれば構成する者を相手の敵にし味方にすれば相手の味方にすると。そこには個人の感情も思いも関係なく、利潤や思惑が動かしているという事。契約というものは信頼ではなく金と態度で決定されるという事。

だからこそ彼は決めた。

自分の信念を。

「……そうだな。ごめん、いつも迷惑ばっかかけちゃってさ」

「なんのなんの！お前はまだまだ１８歳だからな、青春は大いに迷って成長するんだぞ！いいな？」

「なんだそりゃ。お前の言えることかよ？」「そりゃそうだ。俺はなんたって２０だぜ！リーヒュンとは違ってもう大人なんだからな！」「なにいってだこいつは！」「へへっ！このガキが！」ブースターがベイリーフに飛び掛かり、ツルと前足で大きさの違う2匹は小突きあう。頭頂高が1．6メートルと0．9メートルではブレイブの方が飛び掛かっているようにしか見えないが、2匹のたがいに対する信頼には全く関係がなかった。

久々に親友と体をぶつけ合って楽しいと思う。ポケモンという文明では体の一部分を相手とくっつけたり交えたりするのは信頼の証である。リーヒュンもブレイブも久々にお互いがまだ友人であることを体と心で感じた。

「……はあ。で、結局アンタたちは…いい友達であるのは分かるけど……今と昔ではブレイブは変わったってことね」テルルが呆れたように、少し羨ましそうに笑顔を浮かべた。

「そうだよね！ホンット感心しちゃうよねリーヒュンには。あたし友達で良かったよ！」ユイリィは嬉しそうに彼に体と首元の花をぶっつける。「うげっ……まあいいか…とにかく、今後も何かあったら一匹で無理はすんなよ」「うん、状況によっては考えるよ！だっ

てあたし一匹でやったほうが騒ぎが大きくならない時だってあるし！リーヒュンがやるとさあ、とにかく話が大きくなるのよねえ～」

「君だって変わらないような……」

「それはユイリィの声でしゅね」メガニウムの頭の上にいたロズリンがまたもや彼女に対してちくりと言った。「待った…何言ってのよこの子供？」「ハハ…またユイリィ言われちゃったな」「んも、やめてよお！…てやめるのはアンタよ！」「やっぱりお前の声は子供っぽい甲高さでしゅねえ聞いてて耳が…」このシェイミはユイリィの雄蕊をむんずと掴み……

サツマイモを引っ張り上げるかのごとく上に引いた。

「；：；：；：；：；：；：；：；？？！！！！！！！」メガニウムが台詞にならぬ悲鳴を上げてロズリンをツルでつかんで顔の近くに持ってきた。

「何やってんのよアンタは？！うぐグッっ…いったあ～」「おいおい今のは痛いだろ？」「平気そうでしゅね」「はあ？！今度やったらあんた自分で歩かせるからね！いい？！あたしの頭の上なんかもう貸さないよ！！！！」「意外と痛かったんでしゅか……」このシェイミはばつの悪そうな表情をしてリーヒュンの背中に飛び移った。

「うううっっっ……あたしのかわいいおしべ外れちゃうよ……どうしよう？」「痛かったよな…今の一撃は」「くくっ…ねえリーヒュン、大丈夫あたしの？」「うん。どこもヘンにはなってないな」ベイリーフはメガニウムの雄蕊の生えているウグイス色の頭の部分をツルでなでた。

「うわわわわ！リーヒュンに初めて優しくしてもらっちゃった！やったやった！…ホンットにありがとうね！うんうんうん！」ユイリ

ィの表情が一気に嬉しそうになる。「なんか俺のことになると表情が変わるよな……」「もっちろん！だってあたし達は仲間でしょ！」彼女のオーラはさっきからベイリーフの心の中に向かってハートをいっぱい投げかけてくる。リーヒュンは少し恥ずかしくなりながらも彼女の気持ちをどう受け取ろうか考える。

それは彼らしい言葉で返事となった。

「た、確かに仲間だけどさ、さっきからユイリィはなんか飛ばしてるけど、俺は恋人にはならない、てかなれないと思うよ」

「なーに言ってんのよお！よーっし！ならもっと仲良くなれるようにむぎゅむぎゅしてあげる！」「や、やめろやめろ…うげえっ！」ユイリィはまたしても彼にのしかかった。

「よーっし！それじゃ俺も…」ブレイブがフサフサ尻尾をぶんぶんしながらテルルに抱きついた。

「はあ？！頭もう少し冷やしなさいよ…これくらいなら」テルルは彼のほっぺにこおりのつぶてをわずかにかけた右前足を近づけた。

－８０℃近い冷気がブースターに迫るが……

「うおおおおおおっ！気持ちいいいいっ！」ますます嬉しそうになる。

「あああああーもうっ！離れてよこの変態っ！」グレイシアはそのままストレートで殴った。

「あーあ。２匹はホントに仲よしこよしだね。隊長とグラシもこれくらいならいいのに、ですね」「うん！ありがと！」「俺はありがたくない」ピトムニクはそんな２匹を見て笑った。

「あいつは相手にしきれないな。任せるぜピトム」バストークは全身のモフモフをすくめた。

「こらこら！もうやめろよ…ん？」ユイリィの花びらをかわしながらリーヒュンは下に転がる頭部保護装甲板を引っ張り上げた。ツルで裏側を引っ張り上げると“シンシア・ベルーサ・カウンストポビア　個体識別番号：ＵＡ７６７ＡＡ７７７９１１”とシールが張られている。おそらくは国連統合軍の人間が張ったのだろう。

それをツルでつかんでいると、これがどうしてここに転がってきたのかが感じられた。ベイリーフはそれを感じてため息をついた。またあのコリンクか？見てないうちに何やってんだ？

その直後にロコンが前から走ってきた。「す、すいません！今ちょっと転がっちゃって…」「いやいや、大丈夫だよ。ちゃんとかけとけ、あと……」リーヒュンはシンシアにひもをかけてあげる。「レオのことは気にすんな。俺も気を付けるからさ」「え、ええ…ありがとうございます」彼女は顔を赤らめて前の方へと足を速めた。

そんな彼女を眺めていると、リーヒュンにはまるで彼女が妹であるかのように感じられてしまった。強気で意地っ張り、それでいてちょっと小心者なフローラとは性格は全く違うのにもかかわらず。

ユイリィにもそれが感じられた。だがそれはこのベイリーフが一番心配していることだ。そんなことにまで、“シンシアが好き？！”といつものように飛び掛からないほうがいいという事を奇妙に感じた。

しかし、このメガニウムはユイリィ・ランタン・プレミドールだ。やはりそんな彼の光景を見ていて我慢しきれずに言いかけたが……

「……ねえねえねえねえ！まだあたしのむぎゅむぎゅタイムは終わって……はあ、また無線機がうるさい…何たってこの子は…」「

この子？」「うん。無線機の事」ユイリィはそういってヘルメットの形をした頭部装甲板をはずして組み込まれた無線機部分をツルでいじった。その裏には“ユイリィ・ランタン・プレミドール、個体識別番号：３２１ＡＪＲＳ－７４７Ｂ”と書かれている。

「中の集積回路の調子が悪いのかなあ？…うちもよく知らないんだけどね人間の機械は…」

「シュウセキカイロ？」リーヒュンは首をかしげる。さすがにこの通信機器をエスパーだとは思ったことがなかったか、なんでそうなっているのかは彼にとって、“湖の３匹伝説”と同様全くの神秘であった。

２０１２年　現地時刻　１２月７日　ドイツのドレスデン市　インフィニオン・テクノロジー社の工場
１６００時

半導体集積回路というものはこういう物だ。大まかに言えば、まず集積回路の母体となるゲルマニウムやガリウムといった半導体からウエハを製造する。続いてその表面を処理し、集積回路を正確にかつ欠陥なく植えつけられようにする。この後で前工程と呼ばれる回路の植え付けが行う。次に半導体試験回路で検査をし、電流の流れに問題があれば…一回で完璧に作るのは困難…その都度欠陥救済と呼ばれる回路の補てんが行われる。

この次は後工程だ。ウエハをチップの形状に切りだすダイジング、チップを金やアルミニウム等で基盤に結合するワイヤ・ボンディングを行う。続いてモールド剤を基盤とＩＣの間に装填して本体を衝撃や水分から保護する封止作業をする。そしてＸ線や紫外線下で劣化しやすいような環境を作って回路の初期不良品を…集積回路はバスタブカーブと呼ばれる曲線関数に沿って不良品率が決まる…発見するバーンインという工程を含めた品質検査を受けたのち、ようや

くプログラムの書き込み（家電や情報端末のような量産品はその製品の組み立て工場が独自に行うので、この場合はこのまま出荷となる）に至る。

この部品ではわずかな埃や水分、油分や微小不純物入り込むことは致命傷だ。一連の工程を行うすべての工作機械や検査用機器や自動化された輸送ラインまで、ひいては工場全体が一つの巨大なクリーン・ルームと化している。大学病院の研究室にある生物学用クリーン・ルーム（まあポケモンクローン産業界は半導体業界並みに空気清浄が精密だが）より、取り込む空気をＨＥＰＡフィルターやＵＬＰＡフィルターを何重にも通す半導体集積回路製造工場の浄化装置の方が浄化精度がいい。細菌細胞１個がウエハの上に落下すると、埋め込んだ１００個のトランジスタを潰すことになる。

ドイツのドレスデン市に２００１年から稼働している母国ドイツの半導体集積回路メーカー、インフィニオン・テクノロジー社の工場では製造ラインの状況を映す情報端末のディスプレイをラインの窓ガラス越しにある管制室から全身白の防護服を着た人間たちが見つめていた。ラインが稼働している間はその空間は人間はもちろん、蚊やハエ、細菌やウイルス一つ入らないように密閉されている。経っているだけで服の埃や皮膚の角質細胞を落とし、呼吸するたびにウイルスや細菌をばらまき、歩き回って振動をもたらす人間がそのルームでディスプレイの監視などしていたら、それこそ工場の何億ドルという投資金をどぶに捨てるのと同じだ。故障や不良品のチェックや簡単な応急措置は、中にいる機械それぞれや製造ライン管制装置に組み込まれたのプログラムか管制室の制御…ほとんどはオートメーションだが…頼みである。高度に自動化されたこの製造ラインのある空間に人間がこの“宇宙服”を着用して入るとなれば、それこそ機器に重大なトラブルを起こした時に限るが、３か月は製造ラインを動かせなくなる。

この工場、この2年間ほどはラインの稼働率が向上している。２００８年の金融危機から世界的に経済が立ち直ってきたこともあり、昨年3月に日本で発生した東北・関東大震災で世界の集積回路シェアを３５パーセントを担っていた最大手、日本のルネサス・エレクトロニクス社が数か月生産できない間に世界中の機械関係企業が一部の集積回路の供給網（サプライ・チェーン）をインフィニオン社を含むアメリカ、ドイツ、台湾、韓国等のメーカーに切り替えたことも有利に働いた。地震多発地帯の日本がそんな世界シェア比率トップの生産ラインを本国に置くこと自体、半導体メーカーの常識からして奇妙なことだが、そこは技術大国であるからだろう。クリーンルームの機器に天井の配管が直撃するという普通の半導体集積回路工場だったらそのまま閉鎖になってもおかしくない被害を受けた日本の栃木県にあるルネサス社の工場だったが、震災からわずか3か月足らずで工場を復旧させ、その年の１０月にはなんと以前の生産水準に戻してしまった。さすがは日本人の粘り強い気質……集団の傾向を心理学で言う“気質”と取るのも我ながら奇妙な話だが…といったところか、世界の集積回路需要は世界中のメーカーが製造ラインを増やす以上に増加している。

今や半導体集積回路は、アメリカのアップル社製の携帯音楽用端末“ｉｐｏｄ”や中国のレノボ社製の卓上情報端末（ノートパソコン）Ｔｈｉｎｋｐａｄ、各種の携帯ゲーム機、各社の携帯情報端末のような普段から人々が持ち歩いたり接したりする情報機器、全自動洗濯乾燥機、冷蔵庫、液晶テレビ、ＤＶＤレコーダー、空調機器といった家庭用電気製品といった極めて身近なものから、自動車のエンジン（近年急速に普及したハイブリッドや電気自動車ならモーター）の制御機器、航空機の自動操縦装置や管制、大型貨物船やクルーズ客船のスタビライザー姿勢制御や位置情報装置、インターネットを構成したり企業や政府組織の情報を大量に管理する各種サーバー、大学や企業のスー

パーコンピューター、鉄道の進行や運行制御、発電所の運転情報や電力供給網の管理と制御、工場農業の栽培管理、畜産業や養殖漁業の牛や豚や魚の個体管理、工場の生産ラインのコントロール、チェーン店での売り上げ管理、セキュリティーシステム、学校の出席管理、無人宇宙船の制御やＧＰＳ衛星、宇宙太陽光発電システムの姿勢制御、月面での資源採取システムの制御、戦闘機の対空レーダーや火器管制装置といった巨大なものまでありとあらゆる人類文明の産業に必要不可欠な“産業の米・小麦”と呼ばれている。人間たちの間でも、一般の市民にとっては品物が“ブラックボックス化”する原因でもあるが、さまざまな産業や経済活動、日常生活のジャンルで電子制御機器を搭載した物が増加したこと、このような機械やサービスを用いた生活がアメリカや西ヨーロッパ、日本、オーストラリア等先進諸国９億人強のみならず、東欧・ロシアなどの東ヨーロッパ、中国やインド、韓国、ＡＳＥＡＮ諸国をはじめとするアジアＮＩＥＳ諸国、南アフリカやブラジルを加えたＢＲＩＣＳ諸国、アラブ首長国連邦等の一部の中東産油国等の新興工業国の３０億人以上の間にも急速に広がり始めたこと等がさらに拍車をかけるように、半導体集積回路の需要はあらゆる産業の中でも…環境産業と同じくらい…トップクラスに拡大し続けている。

「うーん？もうすぐその指定された位置っぽいからさ……そこで交換してもらおっかな」ユイリィはそれぞれにオーダーメイドの頭部装甲板を自分の頭に戻し、丸めた長いほうの２本の雄蕊を装甲板の隙間に調節した。

「おっ……あそこらへんじゃないか？」「ですね。ユイリィ、テルル、ついたと思うよ！」バストークが装備品入れから地形図を取り出して前方の地形を眺め、ピトムニクが声を上げた。

前方に今まで続いていた森がふっと開け、小高い丘陵地帯のような部分に出た。今まで歩いてきた集落同様、国連軍ストライカー装甲車やドイツ軍のクラウス＝マッファイ社のＡＴＦディンゴ戦闘車両が停止している。唯一違うと言ったらその台数が大変多い事と、やや離れた部分に統合軍のＳＨ－６０がいる事だった。そしてその傍らに人間たちといるのは……

サクラ・ワタリ・フユツキ。サーナイト種族のあの司令官である。

「お疲れ様。徒歩移動ばっかりで大変よね。自治協会ももっと整えればいいものを…」

「サクラさん?!」「ヘリコプターで…来たんですか?!」

「ええ、あなた方にちょっと先にこの辺りで依頼しておきたいことがあったの……」

２０１２年　１２月８日　アメリカ　ワシントン　ホワイトハウス　１０３０時

「……今回の抗議の件に関しては、シンガポールのでのわが軍の演習については各種解析データ並びに記録映像の分析から明らかなとおりです。またチベット政府とわが国の大統領が会談を行った件に関しては各国マスコミの報道通りであり、内政不干渉の原則に基づき、中国政府が連邦政府の外交交渉を批判する権利がないことを発表します……」アメリカ合衆国国務長官の女性のきびきびとした声が定例記者会見場に響き渡る。彼女が演説台を離れると集まっていた報道関係者が一斉に声を上げ、携帯型音声記録装置を向け、卓上情報端末を打つ音が聞こえてきたが、彼女はそれをすべて無視

して、もと来た会見場の後ろへと下がる。

今回の会見で明らかにしたのは、数日前の東南アジアで行われていたアメリカ、オーストラリア、ＡＳＥＡＮ諸国の合同航空・海上軍事演習における中国海軍保有のウクライナ製ヴァリャーグ級空母（ロシアのアドミラル・グズォネフ級空母をベースにした中型空母。演習ののちに衛星や戦闘機の画像の解析によって判明したが、中国側の名称は不明）から発進した艦載機がシンガポール及びマレーシアの領空にすでに侵入していたこと、その空母自体マレーシアとベトナムの排他的経済水域を航行していたこと、さらにその直後シンガポール上空に出現し、アメリカ軍の「ジョン・Ｃ・ステニス」の艦載戦闘機部隊、並びにシンガポール空軍、タイ空軍戦闘機と交戦してシンガポール市に被害を与えたポケモン達が中国軍所属であり、中国軍の指示を受けてあの空域に向かったという事。先日これに関する非難声明をシンガポール政府・ＡＳＥＡＮ首脳会議と合同で発表したことに対する中国共産党政府の反論に改めて答えたのである。

そして、その際中国がもう一つ批判してきたアメリカ政府…大統領…とチベット自治区の首脳がワシントンで会談を行ったこと。中国内陸、インドとの国境にあるチベット自治区の独立と政府組織の存在を中国は認めておらず、２００８年にはチベット及びウイグルで発生した暴動を人民解放軍で弾圧し、多くの民間人を虐殺したとされている。皮肉にもその年は北京オリンピック開催年。この行為に抗議するヨーロッパやアメリカ、中国近隣のアジア諸国や日本でも聖火リレーの妨害やオリンピックのボイコットを求める声が相次いだ。

それから、４年以上の歳月が流れても中国の態度は変わっていない。圧倒的な経済力・軍事力・人口のアドバンテージを利用してかたくなに独立自治を拒み続けている。今回アメリカは、今後のチベット及びアジア山岳地帯の中国領として存在する民族国家を、中国の…人民共和国政府であり台湾の国民党政府ではない…弾圧から少しでも開放すべく外交努力を重ねていくことを確認すべく会談を行

った。それに対する中国側の批判に反論する意見を表明したのだ。
彼女がマスコミ関係者から見えない部屋の外にたどり着くと、前方からすでに頭髪が白くなった年配のスーツ姿の男が若いがっしりとした男たちとともにやってきた。この男こそアメリカ合衆国の現在の大統領である。
「国務長官……マスコミの反応はどうでしだった?」「まったく、いつも通りですよ。意味も考えもせず質問をぶつけてくるばかり…」愛くるしい娘を抱きしめるかのような優しい声を上げた大統領に対し国務長官は愚痴をこぼすかのように言った。
「そうか……でも君は君の言いたいことを君の言葉で素直に伝えればいい。そうすれば君の立場や君自身の信念、そして言葉の意味がそう簡単に揺らぐことはないからね」「恐れ入ります。大統領」
彼女は父親か祖父に話しかけるように素直に言った。
「ところで……」大統領の男が思い起こすように遠くを眺める。「ハイドルでは…欧州連合の素粒子加速器施設と熱核原子炉を守るためにイギリス軍やフランス軍以外にもアメリカ軍も動いているらしいね」「ええ…」「その送電網の近くの……例の湖のある場所には“彼ら”も既に入っているそうじゃないか。あの子たちと連絡は掴めているのかね?」「ええ。大丈夫だと聞いております」
「あの子は……私が初めて国防長官になったころに生まれて…そのころから国防省の諜報部直属だったな…女の子の方はごく最近だったね……彼女はまだまだ子供だ。国連軍が持っている連中たちとトラブルにならなければいいが……」「大丈夫ですよ大統領。国防総省の方は常に彼らを衛星で監視しています。万が一にでも消息を絶った場合は……すぐに部隊が向かってくれますから」女は老大統領を…年老いた家族に…世話を焼くように言った。
「そうか…衛星連動の生命情報装置まで持たせたのか…すまないね……年を取ると何をするにも不安になって仕方ない…新しいことを覚えるのが難しいのと同じくらいそう思う……経験したことが足かせのようだ……」「いえいえ、人間そんなものです。私の父も母

も今でもそうですから…」国務長官はそう言いながらもこの男の記憶力には驚いていた。すでに７５を超えた老人が、素粒子研究所や熱核原子炉という言葉を覚えるのは簡単なことでは決してない。

「うん……私はこれからＮＵＮ（新国際連合）本部で代表とＮＡＴＯ諸国の閣僚会合がある。もう車も来ているそうじゃないか。もし何か情報が…いやもちろん通常の案件でもいい…あったら端末で知らせてくれ」大統領はスーツのポケットから携帯情報端末を見せながら言う。「分かりました」

しっかりとした足腰でＳＰの男たちと車寄せへと向かうアメリカの大統領。前代の大統領は史上最年少であり、間もなく迎えるこの男の後任となる候補は２人とも４０代後半だと聞いている。そういったこの数代の合衆国大統領の年齢傾向から見ればかなり年を取っていて、それでいて最新の事象に関する知識と長年経験を積んだ知恵がしっかりとバランスを取っている男の姿を、国務長官の女は尊敬の念を込めて見つめていた。

「そうだ……もう一つあったな……」大統領はふと振り返る。「３兆ドルの財政削減の件だが……債務不履行（デフォルト）だけは回避できるようにしてくれ。債務額上限引き上げでもいい。頼んだよ」

「了解しました」国務長官は答えた。

２０１２年　１２月７日　オーストラリア　ニューサウスウェールズ州　シドニー空港　１６００時

澄み切った南半球の夏空の下、シドニー空港の旅客ターミナルからやや離れた別の駐機場にはアメリカ空軍のＥ－７６７が駐機していた。ここは国連統合空軍および陸軍空挺隊の基地。新国際連合及び国連統合軍設立とともに２００９年末に完成し、ハワイのメガフロート群内の基地とともにエメリア陸地群周囲の警戒と治安維持を

行っている。

エメリア４大大陸（大陸というほどの大きさではないが）と周囲の群島は近年資源採取…鉄鉱石やボーキサイド、レアメタルやメタンガスの可採埋蔵量はどれもオーストリア以上と衛星による軌道からのセンシングで推測されている…を主とする開発が著しく、統治している国家同士のみならず国家と相手国の企業や果てには警備を担当する民間軍事会社同士の対立まで様々な問題を抱えている。たいていのエネルギー開発企業や官民合同の集団は警備会社によるセキュリティーと同様の目的で独自に民間軍事会社と契約を結んでいる。これも実際は、このような開発がポケモン達の集落やその伝統、規律を無視して開発することによる対立が原因だ。まあ昔から周辺海域のサンゴ礁への海洋汚染や有袋類をはじめとする独特の生態系の破壊に関しては言われてきているが、この場合、動物や生命は文句は言わないのでせいぜい環境保護団体の抗議程度で済む。しかし、ポケモンのような文明生物相手ではそうもいかない。通常の警備会社の装備…どんなに図体の大きい種族でも拳銃１丁で撃退は可能だが…では本気で挑んでくるこの文明生物に十分に太刀打ちできる保証は１００％とは言えなかった。企業や開発団体はそれを１００％にするとともに、周囲の集落に対する自分たちの企業活動に対する抗議や妨害を抑制する実力誇示もかねてこのような措置を取っていることが多いのである。

この基地はそういった状態で頻繁に起こる各種問題、例えば船舶の領海侵入や採掘企業の違法な開発、民間軍事会社の過度な誇示行動などの問題を仲介し治安安定を図るために存在しているのだ。

演習を終えたロックオンとチェギョンは装着されたタラップ車両か

らＥ－７６７の機外へと出た。１２月の南半球であり、シンガポール同様この辺りにも夏空が広がっているが、シンガポールのような熱帯雨林気候ではなく、からっとした暑さである。複数のＢ－７４７－８やＡ－３８０といった大型の国際線の航空機の他カナダのボンバルディア・エアロスペース社製のリアジェット６０ＸＲやＱ－３００といったオセアニアの諸島各国を結ぶ小型コミューター機と整備車両やバスが多数見える空港ターミナルの北側の遠くにはオペラハウスやハーバー・ブリッジ、シドニーＣＢＤ（業務地区）のビル群といったオセアニア・南半球で最大の情報・経済センター都市のシドニー市が見える。

「うへぇ…やっぱ人間の市街地っていうのはすげえな。どこ行ってもあんな森ようなたっかい建物を作っちまうだから…なあチェギョン？」「……は、はあ…なるほどです……」「…はあ…まだ気にしてんのかあのトゲキッスを……」ムクバードはチルタリスの頭の飾りを翼でなでた。「や、やめてくだいよっ！…はあ……そりゃ…あんな状態で…気になるじゃないですかあ…」「まあな…」「あーあ……あんなんで良かったのかな…」チェギョンは右翼のモフモフをいじりながら左翼を太陽にかざして掴むふりをして、ため息をついてその翼を開く。

はっきりいっていかにも今どきの若者の典型そうな彼女だが、実を言って並の軍人…それが人間でもポケモンでも構わない…に最低限必要な相手を殺すことに対する覚悟も、そういうことに対する融通…そこからの気持ちの切り替え…も持っているとは言えない。今のチェギョンはそれから逃れられないこと、それでいながら相手の事を考えてためらってしまうという、道徳的な常識でありながら戦場では自分の命を落とす原因に対処しなければならいという事実に苦しんでいた。数日前のシンガポールでの１件が今でもたびたび目の前にスクリーンを見るが如く蘇り、このチルタリスのパーソナリティを守る格納容器をその感情という高温高圧の化学反応している物体が内側から破壊しそうになっていた。

「良かったとか悪かったとかな、気にしたってもう戻ってこないぜ。終わったことは終わった、これからの事はこれからだ。戦争でも日常でもな」「日常…ですか……」「ああ。俺の家族は…生活がポケモンで苦しい訳でもなかったが、日本の東京って知ってるか？…そこに暮らすほかの連中と同様常にそこらの野良犬やカラスと戯れるような生活をしてたわけだ…そこでは前の失敗を引きずってたんじゃ生きてはいけない。常に今後はどうするか、そのために今どうするか、考えてなければいけなかった」「……大変だったんですね…私は……人間の建物の下で、人間の一族と家族と一緒に…不自由なく暮らしていて…」チェギョンはうつむく。

　このムクバードには痛いほどチルタリスの気持ちがわかった。彼自身幼き頃は失ったものを思い出して何度苦しい思いをしたか。自分みたいな３０に至らぬ若者が老年のようにする話でもなさそうだが、それを振り切りながら前へと進む力を身に付けるには相当の年月と努力を要した、と自負できるとロックオンは思っている。

「それも気にすんな」ロックオンはチェギョンの首元に翼を置いた。「この後はあっちの統合軍の輸送機に乗り換えだ。ハイドルであっちの連中が作戦行動に入っているって統合軍の司令部の通信が言ってただろ？次はあっちの任務に集中するだけだ。大丈夫か？」

「…は…はい」

２匹は隣…オーストラリア空軍イギリス製ホークＡＥ１００４機とともに…に駐機している統合空軍のＣ－１７Ｂグローブマスター？を見つめた。

目的へと向かって（後書き）

前書きと同様…後書きも……愚痴ばかりですいません……

そういえば実際のアメリカのデフォルトは回避されたようです。

ただ…先行きが良い訳ではないようで……

世界的な不況は日本の復興に悪影響ですよね……

待っているものは

２０１２年　１２月８日　エメリアのハイドル大陸　ヴェルダー州
統合陸軍のストライカー装甲車の中　１０４０時

「それで…依頼というのは…？」リーヒュンが不審そうな顔をして尋ねる。彼とユイリィは、サクラと共に国連軍の装甲車…内部の情報機械の多さから指揮車両か何かだろう…の中に案内された。４足歩行でも頭がつかえそうな車内で数人の統合軍の兵士が見守る中、その中にある１つの地形が表示されたディスプレイを３匹が見つめる。

「あなたと関係があるのよ……いよいよ……これがあなた達の能力の事なのかもしれないわね……」

「ホントですか？！……いよいよあたしと…」ユイリィの水色の瞳が驚き、というより別の期待に輝いていた。「もう…そういうことは今言うんじゃないのよ……」サクラがこのメガニウムの表情を見てため息をついた。「うっ…すいません……」

「あ、あの…これは一体……」ベイリーフの声が不安げになる。

「うん…リーヒュンとあたしの能力、つまりね…フローラと関係があるの」ユイリィが真顔で静かに言いながらツルで雄蕊の長いほうををいじる。

「フローラが……本当に…」リーヒュンの首元の葉っぱから背中にかけて凍りついたような感覚が走った。彼がどこかでそれを望み、どこかでそれを望んでいなかったものだったから。
妹に会えるかもしれない……期待と喜びと恐怖と不安が完全に

ガス溶接機のアセチレンと酸素の如く融合して何ともいえぬ戦慄になるのを感じた。

「彼女と直接関係あるかは分からないけど……」サクラが2匹の表情を見ながら切りだす。「……5000年以上前の昔から、世界の……それは昔の感覚でいうことね、そのどこかには時空翡翠（ひすい）というものがあって、それがポケモンの文明を安定させていると言われています」サーナイトが手をわずかに降るとタッチパネルやキーボードが勝手に動作してディスプレイの画面がそれを映し出す。

「……こんなものが…文明を…」「すごい…あたしも一つ……」

「手に入るわけないじゃないの……それで、最初にあなたたちに話した通り、あの書物に示されていることによれば、これは文明が崩壊する寸前に、選ばれたもの…つまりあなた達ね、ええ、その手によって一つとなる…と書かれていまして…」

「……」リーヒュンは微動だにしない。ユイリィは映像を見ながら不審そうな目つきをした。

「記録によるとそれは世界に4つ……でも場所は示されていないの。そのものたちが導かれてたどり着く、としか……」

ベイリーフとメガニウムは顔を見合わせた。「うちが導いてた？」

「さあな…わからない」

「それで…その一つらしき場所を…今回発見したのよ」サクラはさらに続ける。直後にディスプレイの映像が切り替わり、先ほどの地図に戻った。「ここから山沿いに20キロほど入ったここの湖…昔からここでは宝石鉱物の採取が盛んで、そこには道が通じているからとくに問題はないわね、今は利用されていないからこの辺りは自由に行ける。それでこの湖というのが…」サクラの話がふと止まる。

「それで…？」リーヒュンがせかすように言った。妹と関係がある、

その事実が彼の欲求を脅迫するかのごとく押しているのだろう。
「その書物に書かれている湖の形状と一致している上、人間たちの衛星方位観測装置（ＧＰＳ）の映像を見せてもらうとそこだけ画像に変化がみられる。すなわち、ここは強大な電波か何かを発信しているのよ」またしても映像が切り替わり、湖と森林地帯の内部映像に切り替わる。見ている統合軍兵士の一人が「よくあんなのでコンピュータがフリーズしねえよな…」と呟き、自分の無線機を取りだして見つめる。

「と、言う事は…あたし達はそこに……」ユイリィもツルを出してディスプレイを撫でる。映像が切り替わり、先ほどまで山のような部分だった場所が湖から川のように伸びる水路の映像に切り替わった。
「…そう。ここにはその時空翡翠（ひすい）がある可能性が高い。この湖の湧き出し口はここ。この洞窟は複雑に入り組んでいるわ。あと、そこは完全に地底湖のようになっているから進むのは難しいかもしれないわね。でも、そこはあなた達の能力で道を切り開くのよ」サクラはベイリーフとメガニウムの首元に両手をあてた。

「そして、洞窟にあるそれを……それしかないわね…持ち帰ってくるの。あなた達ならやってくれると信じているわ」
「あの！いいですか……」映像を食い入るように見つめていたリーヒュンがサーナイトの方を見る。「何かしら？」
「これって…全部…本当に起こっているんですか？…すいません…これは…なんかの罠なんじゃ…」「大丈夫大丈夫！あたし達なら何があって……ごめんね……心配になって当然だよね……」
「わなって何の？言っていいわよ」「……すいません…その…僕が感じるには、自治協会か自由連合かの、て思って」
「それは、私にもわかりません」サクラははっきりと言った。

「分からない、てそんな調子で皆やっているわけじゃ…」リーヒュンはサクラに食って掛かるように前足を前に出した。「他のブレイブやテルルを…危険にさらしてまでそんな行動をしたくは……」

「その気持ちは分かるけど……でも、やるしかないの。今私たちの文明は人間の文明の発展で崩壊の危険にさらされている。その人間たちがチャンスと助けをくれたし、私たちもそれを遂行できるだけの余力があるのは今しかないのよ。……あなたみたいな性格なら今しかできないのは分かるわよね？お願い…信じてくれる？」そういうこのサーナイトも得体のしれぬ迷いにさらされていた。自分たちのやろうとしていることが間違っているかもしれない……罠の可能性も謀略の可能性も0とは言えない……

……でも、今しなければもう復興するチャンスはない。やってみるしかない、と自分に言い聞かせた。

そんな彼女の決意をこのベイリーフは読み取ったのだろう。

「……は、はい……」

サクラは安心したように言葉を続けた。「ありがとう…それに今回そこに行くのはあなたとユイリィだけよ。ほかの皆は統合軍と自治協会防衛軍の予定通り、アメリカ、ドイツ、イギリスの3国の陸軍と共にこの一帯の警備を担当するわ」

「つまり…うちとリーヒュンで行けるってことですね！」ユイリィの表情がまたしても輝く。サクラは両手を前で組み合わせてため息をついた。「それはそうよ」

「やったやった！また2匹で冒険できるんだね！よろしくね！」「うん。ただ、まあ羽目を外さない程度に頼むよ」ユイリィが嬉しそ

うにリーヒュンの首元に頭と雄蕊をこすりあわせた。

「…ただし」「ただし？」メガニウムの表情から少し笑みが消えた。
「私も同行するわよ……自分の目で確かめておきたくてね」

「そ、そん……いえいえ！よろしくお願いしますぅ！」ユイリィが明らかにがっかりしたような素振りを一瞬見せた。それがサーナイトに伝わったのは当然だ。「隠さなくたっていいのよ。あなたは私がいるからがっかりしているのね」
「……うぐぅ……」

「という事なの…リーヒュン、いよいよフローラと接触することになるかもしれないわね…その時は、落ち着いて相手にするのよ。あなたなら難しくはないかもしれないわね」
「…はい。できることはやる。とにかく全力でやります」リーヒュンはややうつむきがちながらもはっきりと答えた。まだまだ妹と会う可能性があることに、一概の戸惑いと不安を感じているのだろう。

それはそれで仕方がない。こんな不可解かつあまりにも壮大な事態に巻き込まれるのは、過去にもなく今後いかなる人間も動物もポケモンも経験することがないであろう事態なのだから。

「そしてユイリィ、あなたも手を抜いちゃだめよ。ここでのあなた

達は2匹で1匹として戦わなくてはならないのだから。しっかり頼むわよ、いい？」

「もちろんです！！自分の任務をしっかりやります」メスのメガニウムはいつもより気合の入った声ではっきりと答えた。

「うん！リーヒュン…あたしが簡単に言えることじゃないよね…いつもみたいに……」「……俺がやらなきゃ誰がやるんだ？…」「大丈夫？いけるの？」ユイリィが気遣った声を出した。リーヒュンは左前脚の爪でストライカー装甲車の床を強くかき、装着している靴のような戦闘用脚部保護板を足にしっかり合わせる。「もちろん。今やれることを全力でやっていくだけさ。今回も、いつも通りよろしく頼むよ」

「そうこなくっちゃ！」ユイリィは嬉しそうに彼の前足に自身の脚部保護板を装着した前足の爪を重ねる。

「そう…」彼女はベイリーフの首元の葉っぱにツルを置いた。「フローラに……会えるといいね……」「頑張るよ……」

「大丈夫だよ…あたしがついてるから……うちらは2匹で1つだから…」

「そうだな…」

2匹は後ろ足に近い腹側に装着した装備品ベルトを締め直し、生命情報発信装置や無線機器も作動を調べなおした。軍刀や洋弓銃（これは部隊が改変されたあの時に各員に一丁ずつ渡された。ユイリィは「これツルじゃ使いにくいよ」と文句を言っていたが）の類もしっかり準備できているかも調べておいた。この程度の武装が、無線機や情報装置の類を覗けばエメリア自治協会防衛軍や自由連合軍双

方の共通した兵士たちの装備であった。明らかに欧州の人類史でいう中世前後…１０世紀から１３世紀…程のものでしかなかったが、ポケモン文明全体から見れば、これらが供給されているだけで待遇がとてもいい方であった。

リーヒュンが頭部保護装甲板（リーヒュン・バイリング・グリーズ、個体登録番号：ＴＳＪ４２６５８１―２１８５８９１―３２１ＡＪ）を取って無線機の配線コード…彼には全くわからなかったが…をツルでいじっていると背中からブレイブが飛び付いてきた。

「良かったなあお前ら！２匹＋司令で仲良く３匹旅かよ？しっかしなあ、リーヒュンお前じゃ頼りにならなさそうだぜ。うおおっ俺がユイリィちゃんと一緒なら……」

「あのな、そういうことを本人たちがいる前で言うか？」そんな彼の言葉に関わらず肝心のメガニウムの方は「そうだよね！ブレイブの方があてになるかも！あはは…」と見事に受け答えてしまった。

「だろだろ？俺も後ろっからついて行くとするか！」「ホントに来るの？！みんな一緒の方が楽しいよね！」ブースターのフサフサ尻尾が嬉しそうに揺れ始める。「ううっ…なんていう…」ベイリーフはブレイブをツルでユイリィから引き離した。「お前はついてこなくていいよ！それよりも、テルルやレオたちを頼むぞ」

「へへっ！あったりまえだろうが！それよりもな…」ブレイブがリーヒュンの左前脚を彼の両前足で握りしめた。「もしフローラにあったら…なんとしても連れ戻せよ」「わかってるさ」彼はそういってブースターの頭のフサフサにツルで触れる。「ばーか！そう言う奴ほど本番になるとできねえんだよ！…」ブレイブがやや声を落としてベイリーフを爪にさらに力をかけた。

「お前の事だから何とかなるとは思うけどな…もし何か厳しくなっても絶対に一匹で前に出ようと思うなこういう時は。ユイリィだっているんだからよ……」

「そうだな…」「……だろ？……」「どうしたんだよ？」リーヒュ

ンは普段とは違う親友の態度と表情が妙に気になる。頭部のフサフサにツルで触れてブレイブの感情が手に取るように意識下に入ってくる。

……そうか……俺のことを……心配なんだな…

「……必ず……帰ってこいよ……一緒に」ブースターの目線からは祈るような思いが感じられた。

「そりゃ…もちろん！」ベイリーフは友人の前足を握り返した。

「おっしゃあああ！頼むぜ親友！ユイリィ！こいつをしっかり頼むぞ！」

「うん！！！大丈夫大丈夫！ね？」ユイリィはブレイブの右前足をツルでパチンとやる。彼女はそうしている間にこのブースターの思いのたけ、ブレイブの信念と覚悟、それでいて拭う事の出来ないでいる彼のテンションの裏に封印された怪物、制御を失った原子力発電用原子炉（ニュークリア・リアクター）の中で、暴走し重金属性の圧力容器を圧力で蹴破らんとする核分裂の如く猛威を振るう彼の“過去”を全身で感じ取った。それはこのメガニウムにも同様に封印、抑圧された意識の中にある感覚とひとりでに天秤にかけられる。その“裁定”を待たずして彼女は彼の心情を解釈した。そして意識に痛みを感じるほどの同情のようなものが自然に意識から湧き上がってきた。

……ブレイブ……大丈夫……大丈夫だよ……あたしが何とかするから……

その気持ちが……彼に伝わったのか……

「……よし、決まったあっ！」

ブースターはその前足をしばらく握ると地面にそれを叩きつけて隣にいたテルルに声を上げた。

「よっっし！テルル頼むぜ！！！」「な、…うん…分かったわよ」

突如として声をかけられて一瞬驚いた表情をしていたテルルだったが、リーヒュン達を見るなりそれが何を意味するのかを読み取ったようである。

「はあ…アンタ達が行くのね。リーヒュン、迷惑なんかかけちゃだめよ。いい？」このグレイシアはベイリーフを見て彼女の右前足でガツンとやった。

「俺は子供じゃ……いや、わかった。心配すんな」「うっ…う…」テルルの顔がややうつむきがちになる。「…ホントに、ほんとに信じていいのよねアンタの事？！」彼女は胸ぐらを掴むかのように葉っぱを掴んだ。

「うっ…！だから大丈夫だからさ、いいだろ？！」リーヒュンの意識下では花がはじけるような軽いポンポンはじける感覚でいっぱいになり、このベイリーフは気恥ずかしそうに彼女をツルで戻した。同時に彼女に対する感謝が湧き上がる湯の如く噴き上げた。

……ごめんな……心配してくれてるんだな……

「……うん。テルルもブレイブの事は頼むぞ」「……もちろんよ」

「……あのな」ブレイブが不意に呟く。「なーにさっきから2匹

でいい感じに…」
「マジか?!……悪い……」

「なんってんだこいつはああっっ!お前みたいな単純男が俺からテルルの繊細なハートを略奪するなんて1兆年早すぎるぜ!うおおおリーヒュン!俺の初恋を返しやがれ!!!」
「うぶぶっ!……誰がとったんだよ?!というよりブレイブはテルルに…」「あったりまえだろうがっ!」「そ、それは気づかなかったな…おへっ……」「このこのこの!俺のテルルを……」リーヒュンの葉っぱの生えた首元にブレイブが飛び付き、ベイリーフの…とはいっても平均値よりずいぶん大きくなってメガニウム種族に近づいた…首が重さで前にもたげそうになった。ただし、ブースターは怒っているというより、からかった感じで飛び掛かっているようだったが。

……友人との……もしかしたら最後になるかもしれない温もりに……恐怖と不安と悲しみをうち払いたくて…

「……で、もちろんもちろんテルルは俺だよな、なあなあ?」ブレイブは表情を輝かせてリーヒュンの首から飛び降りると、(「うげっ……」ベイリーフは苦しそうな顔をしてむせた)テルルの肩の部分、(らしきところ)を掴んでゆすった。テルルの顔がとてつもなく不快そうにゆがむ。
「き、気持ち悪いわよ!……ふん、答えてもいいからゆするのはやめて」「ま、まじか?!という事はテルルの趣味はもちろん……」ブースターのフサフサ尻尾がピクンと動きを止める。「何よその期待は?」「その目つき……まさしく俺にぞっこん…」

ばこここぉぉぉん!テルルがブレイブの頭のフサフサを掴んで地面にたたきつける。

「あのですね……どっちも好きなわけないじゃないのよっ！こっっっのくそバカ変態男がっ！！！」「うっげえっ！……さ、さすがはテルル……俺に惚れて…」

ずがあああんんっ！グレイシアは彼をもう一発地面にたたきつけるなり耳元に口を近づけた。「んなわけないでしょうがっっ！！！頭冷やしなさいこのバカっっっ！！！」

「あはははは…はは…はあ…テルルも大変だよね。うん」ユイリィが苦笑しながら言った。

「全くもう……私はただリーヒュンがユイリィに迷惑かけんじゃないかって心配してただけよ」グレイシアは尻尾をしゅっと振る。

「という訳で、あんたは彼女に迷惑かけたり、足手まといになったりしないこと！ＯＫ？」

「それは最初から知ってる……それにブレイブは…まあいいや」リーヒュンはブレイブをちらりと見てツルで頭の葉っぱを撫でた。

「ユイリィ、よろしく頼むねこの男を」「もっちろん！あたしがいーっぱいリーヒュンの事をかわいがってあげるよ！」「そんなら頼もしいわね！お願いよ」「あはは！うんうん大丈夫大丈夫…」メガニウムはグレイシアの両前足を彼女自身のウグイス色のうろこと３本の爪が生えた前足でつかんで振った。

「ピトム、グラシ！シンシア達をちゃんと守ってね！」

「もちろん！ユイリィも頑張ってね！」ピトムニクはそういって彼女の背中に飛び付く。プラスルである彼女と比較した時、このメガニウムにとって彼女は子供くらいにしか見えない。

「頑張るよ！ていうか楽しんでくるよ！そりゃそりゃもう…」「テンション上がってるねえ！その理由はもちろんリーヒュンね」「他

に何があるのよぉっ！ああーもう笑える、最高に笑えるよ！うん」
彼女は首元の花と頭の雄蕊を振って嬉しそうだ。「まあそれだけのテンションがあれば大丈夫そうね。レオたちはしっかりガードしちゃうよ」
グラシデアがユイリィの首元に抱きついた。「うん！頼むよ」

「隊長、レオやグリソム…あとシンシア…お願いします」「よっし分かった。俺の15年間の手ほどきをばっちりガキどもに叩き込んでやる」バストークは青色の前足をばすんばすんとたたきつけた。「それは…お手柔らかに、ですよ。もちろん、ブレイブもお願いします。」
「よっしゃ。任せとけ。…おいブレイブ！さっさと立てよ」リーヒュンと一緒にメリープは伸びているブースターを起こし上げる。「うげっ……しかしよ…」ベイリーフはツルで親友のブースターの首のフサフサから土を払ってやった。「たく、テルルとか中隊長とかピトムニクに迷惑あんまかけんなよ」「そんなのは織り込み済みだぜ！おっさん、よろしく頼みましたよ！」ブレイブはバストークのモフモフ毛を前足でたたく。「もちろんだ。よしピトムニク、いっちょやってやるか」「了解です隊長！私たちの部隊として一発目…でもないですけど、このメンツでは一発目ですからね！」プラスルはメリープのモコモコに両手を突っ込んで電気を飛ばした。「お願いですよ隊長♪」「ああ。お前らも2匹楽しく小旅行を楽しんで来いよ」「やったやった！リーヒュン、がんばろうね！」ユイリィはそういってリーヒュンの首元に自分の首をすりすりした。「…分かった分かった。だからやめろよそれは…」

……全く異性に触れられるのは気持ち悪い。このベイリーフは改めてそう思う。

「おっし！テンションも上がったところで…テルル、お前も信頼のすりすりを…」

「しませんっ！」またも顔を赤らめてテルルにすり寄ろうとしたブレイブのほっぺを前足で突き放した。

２０１２年　地球標準時　１２月８日　ヨーロッパ上空　４５０キロメートル　２１００時

６日未明にアメリカのフロリダ州にあるケネディ宇宙センターを飛び立ったスペースシャトルＯＶＴ－１００“アトランティス”の前方に、まだ豆粒のようにしか見えないが、ホワイトバード級大型軌道プラットフォーム船“ディア・アイリス”が太陽光を浴びて、地球から飛び上がった白い天使のように輝いていた。地球からの高度はだいたい４５０キロ、静止衛星と比べればほぼ地表のような高さだが、実際に人間がそこからの眺めを見れば下に広がる青いと白、緑にあふれた地球、無数の星々が輝く夜空のような宇宙空間、赤い警戒灯を点滅させながら、無限のエネルギー源から光を受け取る宇宙太陽光発電システムの太陽光パネルがまさしくここが宇宙空間の一角であることを証明していた。

このスペースシャトルがプラットフォーム船に向かう目的はある重要物品を運び込むため。しかし7人のクルー全員がその内容を知らなかった。ただ軌道プラットフォーム船の稼働に重要なものである

としか聞かされず、カーゴベイの中を見せてもくれなかったのだ。

それに、マニピュレータで運び出すときにその姿が見えたとしても、それが何であるかはそう簡単には分からないものであるから……

……

同日　アメリカ　ニューヨーク市　マンハッタン島　４２丁目７番街　１６００時

立ち並ぶ高層ビルのガラス張りの窓ガラスや外壁に設置されたネオンサインや無数の街頭ディスプレイ。そこから流れる華やかな音楽や音声。多くの観光客やニューヨークの人々やビジネスマンらしき人達が歩道を人の大河を作りながら歩き、昨年になって日・米双方のメーカーの電気自動車やハイブリット車に全面置き換えとなったカナリア色のタクシー、通称“イエローキャブ”や最新鋭のタイムズスクエア西部にあるポート・オーソリティ・バスターミナルから出発したらしいニューヨーク市内や近隣の大都市…フィラデルフィア、ボストン、ワシントン、ニューヨークの４都市とそれを結ぶ高速道路や高速鉄道の一体は地球最大の都市と化しており、東海岸都市回廊、またはセントラルシティーズ・オブ・アースと呼ばれる…大空港を結ぶ路線バス、多くの自家用車やトラックが地球最大の交差点と呼ばれる、マンハッタンを南北に結ぶ目抜き通りのブロードウェイ交差点で通りを埋め尽くさんとばかりに流れを作る。ここにいると、多くのシャトル船や小型客船、水鳥たちが行き交うハドソン河の河辺やセントラル・パークの緑が羨ましくなる。少し空を見上げれば、セントラル・パークあたりに住むハトたちが小さな群れを作り、彼らが飛ぶ高さをはるかに上回る９・１１事件から再建され、１３０階建てにまでさらに大きくなったＷＴＣ（ワールド・トレード・センター）のノースタワーとウエストタワーをはじめとする２１世紀以降に新国際連合計画によって開発された“新摩天楼”の超高層ビル群が森のごとくそびえ

立っている。アメリカ合衆国最大の都市にして地球最大の都市群の中心地、ニューヨーク市マンハッタンは、合衆国から世界に波及した金融危機、中東と欧米、世界情勢を一変させた２００１年の９・１１事件を乗り越え、新国際連合発足とともにまさしく地球の中心都市としての貫録を放っていた。中国などの経済成長によって一時は単独１位の地位を失いかけた経済もアメリカやヨーロッパ諸国のエメリア開発の進行で勢いを取り戻し、再び中国やシンガポールと熾烈な競争を繰り広げる地球トップクラスの金融・証券センター、ニューヨーク証券取引所は、再び大きな力を持っている。

しかし、今日その通りにある経済ニュースのヘッドラインを流すディスプレイを見つめる人たちは、呆れたりため息をついたりして足早に入れ替わっていた。金融危機以降、いやそれ以前から積み重なってきたアメリカ国債がいよいよ不履行（デフォルト）する恐れが生じている問題で、またもや共和党、民主党、政府、大統領の間で、債務上限の引き上げ・財政削減とそれらの幅についての交渉がまたもや決裂してしまった。日本ほどではないにしろ欧米の財政赤字やかつてＮＩＥＳと呼ばれた新興工業国の債務残高の問題は深刻だ。Ｓ＆Ｐ社をはじめとする証券会社による各国国債格付けの変動はその国や世界の経済動向を左右しかねない。

そんな状況において今連邦政府や議会がやっているこの対立は、それがお互いの主張を通しあおうとしているだけであっても、…どこの国家でも国連議会でもおそらくは政局争いはあるだろうが…あの日本の特に混迷している政治におけるどろどろの政局争いと同様の人気取りや押し付け合いと解釈されても仕方がなかった。アメリカ国債はどこの証券企業でもトップクラスの格付けをされているが、もしこのまま交渉が決裂し債務の不履行（デフォルト）が発生すれば各国の債券市場は動揺し、あの金融危機が再来しかねないとの分析が多く出ていた。

この問題には早く決着をつけてほしい。日本の震災復興財源の時のような事態はなんとしても避けてほしい、それが世論である。その結果として、ギリシャやアイルランドをはじめとする欧州の財政問題と相まって経済への先行き不安が広まり今日のダウ平均株価の終値のほうも、機械、鉄鋼、エネルギー、運輸機械、証券、小売り、金融、保険、近年追加された生命工業を除くすべてのセクターで売り優勢となって3日連続で続落である。

最近はそういう重苦しいニュースばかりがテロップされるこのヘッドラインだが、今日もう一つ行き交う人達の注目を引いたのは、中国で発生した高速鉄道脱線事故である。中国は“自国の技術”と称する高速鉄道技術をアメリカに輸出する気は十分あったから、今回の件はそれに影響を与えそうだ。

２０１２年　１２月９日　中国　浙江省（せっこう）　温州市　高速鉄道の高架　０９００時

温州市郊外にある日本の新幹線のようなきれいに整備された鉄道の高架橋。降下の真下近くにまで近隣の白菜畑が広がっているのはさすがは中国と言ったところか。

しかし、その畑の一角には恐るべき光景が広がっていた。降下の上にいるはずの高速鉄道の車両が高架の外壁を突き破り、一両は直立するかの如く片方の先端を畑に突き刺し、もう片方は高架に力なく寄りかかるように静止している。ほかにも何両かのの車両が畑の地面の上に転がり、清潔さを醸し出すはずの白に青いストライプの車体は昨日の雷雨と転落した際の泥にまみれて無残な姿をさらしていた。車両の割れた窓ガラスからはオレンジ色の作業着にヘルメットを装着した救助チームらしき人間が生存者とも遺体とも区別できぬ人間らしきものを次々に運び出し、すでに作業が終了したらしき先

頭車両の周りにはアメリカのＣＡＴ社製のパワーショベルや重機がなんとＡＴＣや制御装置があるはずの部分をバケットの先端で押しつぶし、車体を乱暴に突きころがし、先ほど掘った穴の中に転がりいれようとしていた。重機の作業員たちはなかなか転がっていかないのに苛立ったらいしく、次第にアームの操作が乱暴になっていく。その周囲にも消防や鉄道関係者らしき多くの人間たちがその作業を見守っている。少しは慣れた農道では、国内外の報道関係やとも野次馬とも区別がつかない民衆たちが携帯端末や大小さまざまなカメラでフラッシュをたき、動画を記録していた。おそらく大型のカメラで動画を記録しているのは報道関係者で、普通のカメラでフラッシュをたいているのは新聞社や雑誌編集者か住民、携帯端末で取っているのは中国当局の人間か野次馬だ。国内外の経済や景気、生活レベルの格差が著しい中国の農村においては、また卓上情報端末や携帯情報端末各種はまだ珍しい存在である。

上海にある鉄道省の前の広場には事故の遺族や市民団体が集まり、事故車両の投棄や不十分な補償内容、情報の隠ぺいに対する抗議活動が行われていた。建物の中に入ろうとする人々を警察や警備員関係者が力づくで抑え込み、怒号や泣き叫ぶ声が響くその光景をやはり国内外のジャーナリストや報道関係者らしき人間たちがカメラや端末で記録している。

鉄道省の建物の中の一室のデスクでは、一人の男がさっき切ったばかりの電話の受話器の部分を指でせわしなくたたいていた。先ほどかかってきた電話の相手は政府当局の関係者で、すでにインターネット空間上のコミュニケーションサイトではすでに当局や関連企業に対する批判や不満、政府の対応を情報隠ぺいと批判する書き込みが相次ぎ、当局情報管理部門の必死の削除にもかかわらず書き込みが留まることを知らずに広がり続けていること、技術提供を行っている海外の企業からも問い合わせや抗議が相次ぎ、批判の発信源は

海外にも及んでいるという事だった。さらに自国のこの技術の輸出先となるはずだったアメリカからも、今後の高速鉄道敷設計画の交渉を中国からドイツか日本の企業グループに変更する可能性があるという情報が入っているという事もあった。

男はため息をついた。中国にはこの高速鉄道技術を扱う能力はないとまでネット空間上で叩かれているらしい。それもそのはず、この鉄道の車両はカナダのボンバルディア社と日本の川崎重工社の２タイプを用い、車載の自動列車制御装置はドイツ製、建設土木技術はフランスの工法というつぎはぎだらけの技術の上、中国お得意の…北京オリンピックや上海万博の時の都市整備や建設も数年だった。対して今年行われたイギリス・ロンドンオリンピックの場合は、イギリスは１０年かけて整備したらしい…わずか４年という突貫工事で線路、変電所、架線、駅舎や周辺施設、車両、整備員や乗務員の養成まで“行った”のである。先月初めの開業直後から、停電や機器トラブルが相次いでおり、やはりシステムそのものに何かしらの欠陥や手抜きがあったのは否定できない事であった。それでも当局が隠蔽し続けるのはやはり国民の体制不満を経済発展で解消するという手法を続けるしかないという事情があった。

はるか人類史初期の時代から様々な王朝や民族、政治体制によってユーラシア東部の広大な国土と人口を支配してきた中国。馬や牛、人力に頼っていた時代から代々の支配権力者たちは幾多の内乱や支配体制の滅亡と新生、モンゴル民族の侵入、ポケモン文明の破壊的猛攻、先に彼らの脅威を打ち破り大きく人類を成長させた欧米の植民地化と帝国主義を乗り越えてきた。２０世紀の末、１９８０年代からこの国は経済発展、大工業化、軍事力の大増強、技術革新によって、環境破壊、東南アジアや欧米との経済摩擦、アフリカや中東でのヨーロッパやアメリカをはるかに超える開発、周辺諸国との領土、エネルギー採掘問題、他国技術のコピー問題などを抱えて“世界の問題児”と各国や国連から非難されながらも、アメリカ合衆国に次ぐ世界第２位の経済・軍事大国としての地位を手に入れ、アメ

リカ、ロシア、欧州連合に次ぐ4番目の独自の有人宇宙飛行にも成功し宇宙開発の一角を担い、世界トップクラスのスーパーコンピュータを獲得するまでの技術力も手に入れた。しかしその強引とも（アメリカやヨーロッパもエメリア開発に対しては十分強引だが）取れる成長の恩恵に授かれるのは、１３億の人口のうちの5，６億人であり、残りのうちの1億人以上は家も戸籍も持たぬ生活者であると言われるまでに格差が広がり、無理な軍事拡大や人口抑制策は世界的にも異常なペースの少子高齢化や税収の減少、財政赤字の拡大などを招いている。さらには社会主義を基調とした情報統制や取締りが続いていることが世論や世界各国の不満を高めている。経済成長や公共財の整備、天然ガス・メタンのプラントや原子力発電所、高速鉄道技術の海外輸出を進めることは、自国産業の顧客を増やすとともに自国民に対する政府のパフォーマンスにもなるのだ。

ただし世界各国（特に欧米諸国）や人々が中国製の製品や技術をあまり好まないのはそういう売り込み優先の（商業や交易を昔から得意とする漢民族であるからこそ）体質のせいであった。そのせいか中東やアフリカ、エメリアで開発を行うとなると、必ずアメリカやヨーロッパや韓国の企業と中国の企業との激しい入札競争となる。近年の主な開発といえば、道路や学校などの公共施設開発、レアメタル（ポケモンクローンで不可欠なエメリウムを含む）や鉄鉱石等の資源開発、原子力発電所やメガ太陽光発電所、大規模送電網などのエネルギーインフラ整備、（これは欧米が一枚上手だが）植林や海水淡水化などの環境再生事業、有機農業や企業農業の育成などである。その結果はといえば、公共施設は資源開発は中国が、環境開発や電気インフラ開発は欧米がそれぞれ優勢と言った感じでいい勝負といえばいい勝負ともいえる。

……まあ世論や国際情勢が何と言ったところで当局が開発優先の姿勢を止めるわけもないだろう。この政策を止めれば、昨年初頭

中東、北アフリカの革命に乗じた騒ぎになりかねないから。そう男は思った。それにもう一つ、政府はもう一つ別の事で忙しいらしい。

……エメリアで発生していることらしいが……すでに調査に送り込んでいる。か……

……何者が？……

12月8日　エメリアのハイドル大陸　ヴェルダー州南部の森林地帯　1400時

リーヒュン達はまるで整備されていない、いや昔はそうされていたのだろうが、今となってはあちらこちらが草木やツタに覆われ、ところどころが崩れ落ち、うっそうと木が生い茂って鳥の鳴き声だけがやけに大きく響き渡る森の中をひたすら歩いた。ユイリィの方は彼と一緒、しかも2匹だけ…サクラは除き…という事でいつにもましてテンションが高めだ。このメガニウムは、楽しそうにそこらに成熟している…ここは亜熱帯気候…マンゴーやキウイなどをツルでもぎ取ってはおいしそうに食べ、ベイリーフに何個もそれを渡してきた。彼が隣で歩いている。それだけでも彼女にとってこの上ない喜び、夏の草原を照らす太陽と大空、彼女の意識が今楽しく愉快にはずんでいる理由の全て。

……うん！やっぱり…安心するよね……

ユイリィは自分の宇宙の中で意識に寄り添ってくれるもう一つの温かい恒星、精神という孤独な宇宙にたった2つしかない温もりと光をくれる存在に心が躍るのを感じていた。

リーヒュンの方はとにかくフローラの事が気になって仕方がなかった。今までは、自分が言われた通りの事をしていれば何とかなると思っていた。しかしフローラの真実を掴むために自分が直接かかわらなければならないと知った今、最初に感じたような恐怖にも似た悪寒というものが金属の熱伝導のように意識の奥から不気味にぶり返していた。サクラは彼の恐怖感を見抜いたらしく「そんなに気にしなくてもいいのよ」と首元の葉っぱの上あたりを手で叩いていた。

彼女のくれたもののとりあえず何個かは口に押し込み、何個かは装備品入れに適当に押し込んだ。

「う～ん♪やっぱり取り立てが最高よね！リーヒュンもそう思うよね！うん」彼女は彼の頭の横の部分をツルでくりくりとしながら言った。「ま、まあね……でも、さっきのオレンは…」

「えっ？うんん！さっきのは…オレンじゃなくて…ヒメリンゴ？あれ？まいっか！ま、おいしいものってとこかな！」

「はあ…ユイリィは相変わらずだよな。それでありがたいんだけどさ」「あははは！…いつからそんなこと言うようになったのリーヒュンは？もう少し元気に行かないとね！」「そりゃそうだ」

ユイリィは雄蕊をツルでいじる。「……どうしたの？なんか気に…そっか…」リーヒュンの顔をちらりと見て地面を見た。「……フローラちゃんか…そうだよね…うん…」「無事なら…いや、会えるだけでもいいんだ……そうすれば俺が何とか……」リーヒュンが右前足に力を込める。

「うん……大丈夫！何とかなるよ！」メガニウムがベイリーフの前足を保護用装甲板越しに握りしめた。「あたしとリーヒュンなら絶対大丈夫だって！今まで2回だってあんな中生きて帰ってきたじゃん！それだけうちらは運が…うんん！上手くいくってことだよ

！」

「……だよな。俺も頑張るよ…やれることはやる」彼は決意したように目線を戻した。

「そうこなくっちゃ！速射砲の中に転落して大丈夫だったんだからね！」ユイリィはリーヒュンの頭に残るあざをツルで軽く触った。

「おいおい！だからその話を蒸し返すなって……」

「んもう！あなた達は一体何でそんなに遅いのよ？ここをあがるのは大変よ」ふいにサクラの声が聞こえてきた。「速いですねえ…司令の脚は！…はあ」ユイリィがぼやいた「何言ってるのよ。このあたりの道は荒廃しているからこうやって塞いでいる所があるの」なるほど、前方の斜面に沿った道は土砂の崩落で滑り落ち、木々と土砂が道をふさいでいる。このサーナイトは身軽にその木々を飛び越え、土砂を滑ることなく進み、向こう側へと着地した。「意外と身軽なんですね…」リーヒュンが驚いたように言う。

「まあ…私も昔はね…とにかく、早く来て。湖の中を探している間に日が暮れるわよ」

「やったやった！うーんやっぱりリーヒュンから握ってもらえると気持ちいいよ！うん」「分かったからさ、もう少し君の方からもまたぐ努力を……」「してるよ！うん。これぞまさしく冒険だよね！それでそれで…」「冒険なのはわかった！とにかく、ツルで握られているとなんだか…」「楽しんだよね！嬉しいよね！うん」「はあ…まあいいや…とにかく突破」ベイリーフとメガニウムは折り重なるような木々に各々の足をまたぎ、崩れそうな土砂に爪を立て、道が正常になっている場所に向けて一歩一歩前へと進んでいった。彼女はなぜか彼のツルを掴んで嬉しそうにゆっくりと、ところどころでわざとらしい声をあげながら突破していた。

「うひゃっ……」「おいおいっ！」不意にメガニウムが右後ろ脚を倒木から滑らせて斜面…下は沢…に転げ落ちそうになった。４本足にとって、一本でもバランスを崩す…例えば穴に落ちるとか…と、再起するのは非常に困難だ。

…判断は一瞬で決まる…ベイリーフはそう直感した。その方法が意識の下から…いつものように…手に掴むように意識の表面に映される。

それがもたらす副作用を彼はためらいも考えもしなかった。

……ぐきゃっ！メガニウムの体は何本ものツルで食い止められた。ベイリーフは土に爪を食いこませ、自分の首を倒木とのつっかえ棒状態にしていた。首の骨が一斉に悲鳴を上げ、今に折れんとばかりに痛みが走り、頭の葉っぱが木に食い込んでいくような感覚を覚えた。

「リーヒュン?!」「気にすんな！とにかくそこで後ろ足を地面に捕まえろ！」「う、うん！」ユイリィは意識を斜面に集中させ、後ろ足の着陸ポイントを探してそっと爪を立てながらタッチダウンさせる。

「ご、ごめんね！……てか…そのかっこで大丈夫なの?」「う…問題なし！」リーヒュンは首の骨が押し縮められるほどの苦痛を感じながらも体勢を保ち続ける。

「う、うん。ちょっと待ってね…すぐ戻すからね…」彼女は前足に力をかけ、斜面から上りあがろうと体を動かした……

「はあ……ユイリィ……あなたって子はどうしてこんなにも……」サクラはその光景を見ながらため息をつく。

その直後。

すぴょんっ！！！！！！！2匹の間に弓矢が突き刺さる。「うぐっ…敵か？！」「そうみたいね！！」ユイリィの表情が一気に変わる。

「あなた達も何とかするのよっ！」サクラはそう言うなり、飛び込んできたシャドーボールを上に飛び上がってかわし、勢いで飛び込んできたアブソルを相性をもろともせずはどうだんで吹き飛ばす。着地する直後に飛び付いてきたドンカラスの辻斬りをサーナイトは上半身をそらして振り切り、少し後ろに下がってはかいこうせんで相手を蒸発させた。

「こ、こいつ……」シェルブレードで切りつけようとするフタチマルがサクラに飛び掛かるが、彼女は横に飛びかわして後ろからサイコキネシスをぶち込んだ。「あきらめなさいっ……」「おげげえっ…」フタチマルの手が足がホタチが首がバラバラになって飛び掛かった方向へとすっとび、血液や体液をまき散らしながら手足は道に転がり、頭部とホタチは斜面を滑り落ちてゆく。

「もらったわよっ！！！」メガニウムの方へ飛び掛かってきたロコンはそのままかえんほうしゃの体勢に空中で入る。「ええいっ！」

メガニウムは４本の脚部にエネルギーを送り込み、空中へ大きく飛び上がる。「えっ？」「そんまままああああっ！」火炎放射は虚しく地面の土を焦がし、ロコンの上から彼女はリーフブレードで彼女の首を空中でたたき切った。

彼女が着地すると同時にロコンの胴体は斜面上の倒木に鈍い音を立てて血液とともに落下し、頭部は斜面の下の沢へと落ちた。

「ううううううっ……いってえ……」リーヒュンが倒木に頭をぶつけた状態でぺちゃんこになっていた。「だ、大丈夫？！」ユイリィは着地した場所から慌てて彼の方へと向かった。彼はツルに倒木で掴まりながら、右の前後の足からフラフラと立ち上がろうとする。「あ、あのな……それだけのパワーがあるんだったら…自分で上がれよそこからさ……」ユイリィが飛び上がった時にツルでつかんでたから…」彼女が上に飛び上がった際に、勢いで支えていたツルが持っていかれ、彼は思いっきり頭部を大木にたたき蹴られたのだ。彼が意識をかけて首に力を込めていなかったら頸椎を損傷していただろう。

「う、うそ？！ごめんね……」メガニウムは申し訳なさそうな表情をしてベイリーフのぶつけた頭の部分…ちょうど葉っぱの付け根だ…をツルでなでた。

「……やはり……」「えっ？知ってるんですか？」サクラは転がっている先ほどまでフタチマルだった肉と骨の切れ端か

ら彼が持っていた小さなつるはしのような物を拾い上げる。「このあたりの集落は…あそこの沢の下が見える？」サーナイトが示す方向をベイリーフとメガニウムは見た。確かに下の方に木々の陰から見える川辺には、ポケモンのすみか…少し地面に穴を掘って木材やわらを使った“縦穴式住居”のようなモノ。これがこの文明の標準である…が複数並ぶ集落らしきものが見える。

……しかし……そこに生活の活気もポケモンがいる感覚もリーヒュンとユイリィには感じ取れなかった。住居の大半は何年も放置されたように荒れ果て崩れかけ、河辺へと向かうかつては整備されていたらしき斜面の階段は崩れ落ち、潰れかけた建物の周囲にはカラスが…しかも相当肥えた…複数集っている。

……おそらくあの建物の中には……カラスの食事が……

「このあたりの住民の多くは、昔からこの辺りの洞窟の鉱石採掘を産業にしていたの。この数十年、文明が加速的に崩壊し始めてからは…困窮した者たちは…今のように…他のものを襲って略奪で生活をつなぐことが増えているらしいのよ……」

それでも、エメリア地域の荒廃具合は地球の他の地域と比べればまだましの方だ。特に西のサーマルときたのニュークリアでは、このように文明自体の衰退、伝染病や飢餓、ポケモンどうしの紛争、人類の弾圧等で集落も生業も住処も、多くは命も失い、人間の都市に流入する者、武装盗賊（ラスカル）や乞食に身を落とす者が続出し、人間側でも治安悪化などの社会問題を誘発している……しかしユーラシア西部や北アメリカで１８世紀後半から産業革命とほぼ同じくして始ま

ったポケモン弾圧の風潮はユーラシア東部や北アフリカやオセアニアの人間にまで及んでおり、その狂気の暴風を生き延びた者の多くも安住地という決してたどり着かない観念の世界に、薬物汚染された人間の感じる“神々しい歓楽”に憑りつかれた如く、人間たちが繁栄を謳歌し厳しい自然がたびたび牙をむく世界を次々に力尽きながらも彷徨っていると言われている…

それから2時間後、3匹は広大な湖の岸部にやってきていた。まさに絵にかいたような自然そのままの光景。この辺りは森の茂みに覆われていて目の前の崖が海峡のようになっているので全体を見渡すことはできないが、隙間から見える対岸までの距離を考えると面積は相当のものであるが分かる。

「すっごーい！対岸がほとんど見えない！この湖って結構大きいんですよね？」ユイリィは湖を見て大喜びしている。

「そうよ。この入り江は狭く見えるけど、今見えたとおりあちらの方はかなりの広さね」

「そう……ここも水の湧き出し口の一つなの」サクラは水辺が続いている洞窟の入り口を指す。「ここから入って探してほしいのよ。この洞窟はこのまま地下にも溜まっている水脈につながっているから相当の迷路になっているのは確かね。その翡翠がどこにあるかは分からないわ……でも、あなた達の能力でそれを発見できるはずよ。意識をなるべく広くとってその感覚を掴みとるの。任せるわよ」

「もっちろんです！……あれ？……任せるって……」ユイリィの目が希望に輝く。いよいよ彼女が夢見ていた、さっきからずっと期待していた……

……あれが叶う時が……

「行くのはあなた達の役割。私が介入することではないのよ。あなた達ならきっと見つけ出せる、そう信じているわ」リーヒュンの首元にサーナイトの手が置かれた。「あなたの妹…フローラを必ず救い出すのよ、あなたならできる。いいわね？」

「……はい」ベイリーフに再び不安がよぎった。まだ見ぬこの水路の先に何があるのかを考えるとそれが一気に増幅して足が震えた。

……そう……この先に……何かがある……

……もしかしたらフローラ本人が……

待っているものは（後書き）

だんだんグダグダになってきてる…

なんとかせんといかんなあ……といいつつ解決方法が見当たらない

…

洞窟の奥底と

2匹とシェイミはところどころ湖ようになった洞窟を…というよりほとんど地底湖同然のような場所だったが…ザブザブと進んでいた。奥へ入れば入るほど空気は冷え冷えとしていったが、発光性のシダ植物が多いせいか、あたりは奇妙なほど明るかった。しかしこの空気はひんやりとしており、外の高温高湿度…しかも今は南半球の夏だ…を忘れさせてくれた。

「こっちだな。たぶん」「そうそう！そうだと思ったよ！」2匹は次々に現れる湖や水路をわずかに足にエネルギーを込めるだけで飛び越えてゆく。

「うんうん！リーヒュン一緒だと楽しいな♪2匹でどこまでも潜っていける感じ。うん」ユイリィは楽しそうに首の花びらを震わすと、リーヒュンの首元にツルを押し当てた。「ねえねえ、どっち向かってるか分かるよね？何となく方角が見えるよね？」「うん…方角はなんとなく感じるけど…」ベイリーフはツルで頭の葉っぱに落ちた水滴を払う。確かにこんな迷路のようでしかも単調な風景にもかかわらずわずかに足元に意識を集中させると、地図などなくても足が勝手に向かうべき場所へと向きを変えてくれている感じがする。それはやはり自分たちの能力のお陰か、それともフローラに会いたいという感情か。彼には少なくともそのどちらでもよかった。ただただどり着きたい…真実に近づきたい…そう思った。

しかし、彼を最も今当惑させているのは……

他でもない隣のメガニウムの存在である。相変わらずの元気さ、明るさ、そして彼に対するちょっかいだ。

「ねえねえリーヒュン、次どっち？右？左？」ユイリィがまたもや返事に期待しているとばかりの明るい声を出した。

「ちょっと待った……うん……」リーヒュンは足元にわずかに意識を集中させた。４本足から各々の爪を脚部保護装甲板越しに通って、湿った地面や湖を通り抜けて目的の場所へと意識と感覚が伸びる。

「うん……この正面だな……よし。これで合ってる」ベイリーフには何の戸惑いもなかった。ためらいも心配もなく正面の湖を突破しようと飛び込む。

「え？え？そんなんでいいの？！ここって結構深そ……」「何歩分もないだろ？一気に突破するだけさ」彼はそのまま向こう岸に向かって湖に飛び込む……

……が、前足２本を踏み入れた途端にユイリィの言っている意味を初めて認識した。そしてほんの一瞬だけ後悔した。ベイリーフは重力と浮力のつり合いに従って前足が水面下へと潜り来み、あとは葉っぱの生えた首から葉っぱの生えた頭まで正面から水面にたたきつけられた。

「ごぷぷっ？！！？「だ、大丈夫？！」メガニウムは慌ててツルで彼の後ろ足と胴体後部を引っ掴む。「うんぐぐぐっっっ？！？」「みみミミッ？！……」なおもそのまま湖に引きずり込まれそうになり、彼女は自分の両前足まで水に突っ込んで（首の花まで突っ込んだが）大きさも自分とそう変わらないベイリーフを…意識をかけるとすっ飛ぶのでそうもいかず、普通の最大パワーで引っ張り上げた。頭の上のロズリンがそのまま落ちそうになるほど顔が水面ぎりぎりに接近する。

「大丈夫でしゅかね？」

「うぶ……はあ……死ぬかと思った……ごめんな……」リーヒュンはシェイミにアロマセラピーで首元をさすってもらいながら

全身を震わせる。
「あはは……もう、突破するのはリーヒュンらしくていいけどね！あれであたしがいなかったらそのまま水の中に引きずり込まれてたよ！うん」ユイリィは笑いながら彼の頭をツルでくいっと押した。「ナイスファイト！！あーあ、うちもやってみたかったなあ！あたしのもそれくらいの度胸がなあ」「……なんだよそれ？」
「ねえねえリーヒュン、あたしにその度胸くれる？半分？いや、そしたらなくなっちゃう…４分の１、うんん！１０分の１でいいからくれる？！くれるよね？！あはは！……そんなにいらないよ。危なすぎるもん」「はあ……あのな、さっきから俺をバカにしてんのかよ？それとも他の何かか？」リーヒュンがため息をついて頭の葉っぱから水滴をツルで払いとる。
「ん？両方」ユイリィは即答した。「お前って奴は……他人を小馬鹿にするのが実の仕事なんでしゅかねえ？」ロズリンが頭の下に向かってぼやいた。
「もっちろん！……てかアンタだって同類でしょうに！？」彼女は頭の雄蕊の上に向かっていった。「ミーは同類になりたくないでしゅ」「同類になりたいかどうかなんてアンタが決めるんじゃないのよ…それに、あたしの仕事はアンタを守る……」「ミーは頼んでないでしゅけど……それはお前の趣味で決めたこと…」ロズリンは意にも解せず、とばかりに後ろ足で耳元の花をこすった。
「ンんんぐぐぐぐぅぅっっっ！！！……」ユイリィはツルで頭の上を殴り飛ばすわけにもいかず、悔しそうに右前足を湿った地面に踏みつけた。

「俺は何なんだ俺は……とにかく、先へ進むか…」リーヒュンは２匹のやり取りにため息をつき、頭部保護板のひもを締めなおした。
「待ってましたあ！そっちの方が浅いよ。うん。そこから前へいこ」ユイリィが待ってましたとばかりに嬉しそうな声を上げる。「よー

っし！リーヒュン、できたらまた落ちてね！そしたらまたあたしが抱っこして引き上げてあげるから！だってリーヒュンの体、気持ちいいんだもん！あはははは……」彼女は彼の首元に自分の頭の横をすりすりする。

「うっ……まあ言っても聞く耳持たずだからな……」ベイリーフは諦めたように彼女の頭部を引き離した。

そうやって何時間歩いたか分からない。道は相変わらず単調なうえ、次第に水が増えていきついにはほぼ一面水浸しの状態になった。２匹は４本足の付け根くらいまで水につかりながら先へと進む。ユイリィは「うんうん！リーヒュン、こっちの方が深くて進みやすいかもよ！あはははは……」とかとリーヒュンを散々笑ってみたり、水をわざとザブザブやって見せたりして楽しんでいた。

一方のベイリーフの方は、この先に待っている物やフローラとの再開の可能性にあれやこれやと思いを張り巡らせた。こんなことで考え込んでも何の解決にもならないし、むしろ下手に意識を遠退けすぎると逆に悪寒が走るような人間社会やポケモン達の風景が感じ取れてしまって立っていられないほどになる。それはいやでも十分承知だ。しかし考えずにはいられなかった。６，７年前だったか、まだ７歳そこらのフローラ…自分は進化したばかりだったっけ…背中に乗っけた最後の日……を思い出すたびに頭を砕きそうになるほどの自己嫌悪が襲いかかってくる。しかし…だからこそ…彼女に何かあったのなら…その真実に近づき…そして…そして…

もう何時間歩いたか分からない。リーヒュンの方は４本の脚の感覚が次第になくなってきた。生ぬるい熱帯の水が、洞窟の冷え冷えと

した空気か、それとも自分の感覚か、異様なほど冷たく感じられる。まるで先に待っている物を予想させるように……

「……もう6時間は経ったかな……うん……まだ見つからないね……」「うん……どの辺りまで来たか……」「もう少しだと思う。だんだん…何かが…もう触れるくらいまで来てるよ。冷たい中の暖かさ……そんなものなのかなあ時空翡翠っていうのは……」ユイリィはツルであたりの空気をかき集めるかのような仕草をした。「あ！あれ…」「久々に乾いた部分か……」「うんうん！ちょっと休んでいこうよ！あたしの足も感覚がないんだよね……足が腐っちゃうみたいだよ……」彼女はウグイス色の前足を前に持ち上げてふるう。リーヒュンの感覚もなくなってきたという事を何となく感じ取ったか、それとも思いやりか。

「そうしよっか……」2匹は久々に4本足を水から引き上げた。

ユイリィは何の抵抗もなくさっきまで自分たちが歩いてきた水路の水を飲む。しかも首元花も頭の雄蕊もすれすれまで突っ込んでいる。「おいおいおい……汚れてないのかよそれは？」リーヒュンはそんな彼女を見て心配しながら自身は持ってきた容器の水を口に入れる。この水は人間のものだから、フィルターやイオン交換樹脂、消毒用塩化ナトリウムが入っていてすごぶる味の悪いものだが、少なくとも安心して飲める安全な（まあ人間のやり方がポケモンに合うはずがないが、彼から見れば自分が歩いてきた水を飲む方が数倍抵抗があった）水はほかにないはずだ。「ん～？普通においしいと思うけどな。消毒薬入りよりはね」彼女は聞く耳持たずだ。「お前って意外とずぶといんでしゅねえ。それとも…単なるバカでしゅか？」ロズリンがベイリーフから水をかけて背中の葉っぱを洗っても

らいながら言った。「うーん…どっちか…ってあんたが言う事なの？！アンタだってシャワーの水とか平然と飲んでいるくせにさ……それに、あたしはちゃんときれいにはしているつもりよ」「きれいにしてるって…何か持ってきた？」ベイリーフはユイリィの水面付近を見てみる。彼女は左側のツル一本を水面に突っ込んでいた。そのツルの周りだけは奇妙な青白い光を発している。「な、何やってんだよ？」「ん？これはね、水をきれいにする、それだけかな」彼女は何の疑問もない声を発した。リーヒュンは信じられん、といった表情でそのわずかに輝く水面を見つめていた。

……彼女は…一体……？……

「どう？やってみたい？リーヒュンならきっと出来ると思うな」ユイリィが隣を開けるように少しだけ動いた。リーヒュンは戸惑った。自分にそこまでできる能力があるのか？

そんな迷いはユイリィにはお見通しなのだろう。彼女はちゃかすように言った。「リーヒュンらしくすぐやるかと思ったんだけどなあ～。それともあたしと間接キスとか考えた？あははは……」

「んなわけないだろっ！多分その真似事くらいは……」リーヒュンは顔を赤くしてその場にしゃがみ込み、片方のツルを水面に当てた。「そういう状況をツルでイメージすれば大丈夫。うん」彼女の言葉が聴覚神経から脳内にインプットされる前からメガニウムが何を言いたいのかは分かった。彼はツルに意識を集中させた……

そのツルの周りがわずかに青白く光る。同時に全身の中に清流が流れて満たしていくようなすがすがしい感覚が走った。

「こ、これが……それで…」「それは飲んじゃって大丈夫」リーヒュンは自分の起こしたその現象にびっくりしながら夢中で口を水の中に突っ込んだ。

……何か懐かしい…真夏の森の中の川の流れ……
彼にはそう感じられた。首や頭の葉っぱが、乾燥気候でスコールを浴びた植物の種子のように生命がみなぎる感覚を感じた。

「……どう？すごいでしょ…？……」ユイリィがベイリーフの表情を見てにこりとした。

2匹のツルから出ているわずかな光と水辺のあちらこちらに生える発光性の植物やキノコに照らされる水面をリーヒュンはしばらく見つめる。そうこうしているうちに徐々に周囲の音が聞こえなくなり、視界も狭くなる。とうとう時間の間隔すらも怪しくなってきた……

だんだん眠くなってきたんだな、とリーヒュンは思った。彼は昔から…特に15歳になったころから…考え込んでいるとだんだん睡眠に世界と引きずられる傾向がある。もともと向こう見ずでまっすぐな彼には、深く考えることに思考が適応していないのかもしれないと自身で感じていた。だから彼はそれに抵抗しようともせず、今回も自分の意識の変化する方向に身を任せていた……

思い浮かぶのは何年も前のフローラといった集落近くの森の中にある小川の風景。あの時は母親が再婚したばかりだった…そして新しい父親と一緒にフローラは…まだチコリータだったが…いや、今はどうなっているのかは…やってきた。自分もまだ進化してそんなに時が経っていない時だったような気がする。

自分はツルを使って川の流れを泳ぐマスやコイのような魚たちを掴もうとずぶ濡れになりながら頑張っている。まだチコリータのフローラは自分を見て笑っていた。自分は目の前を魚が通りかかる度にツルを一気に出してその魚を掴むが、水面の上にまで引き上げる前にぬるりとしたうろこを持つ魚はツルの間をひらりと通り抜けてしまう。そういえばあの時、自分は一回も魚を掴みとり損ねたことがなく、シーベルト（当時ポニータ）やエンデバー（当時オタチ）達と魚取りに行った時も苦戦する2匹を隣に自分は全員分の籠をいっぱいにしていたか……自分についてこれるライバルはブレイブ（当時イーブイ）だけだった。めんどくさがる2匹の分だけ自分（当時チコリータ）と彼でたくさん魚を取りあった。そのまま魚の群れた部分に行こうとして、何となくやめた方がいいとは思ったけど、そのまま深みにはまって死にかけた時もあったな……

その時はただ、勘が聞くだけだと思っていた
しかし……今ならその理由（わけ）がわかる。

「リーヒュン兄ちゃん！私にも取らせてえっ！」せがむフローラを自分は2本のツルで支えながらもう2本で彼女の前足を持つ。「よっし！……いけっ！！」魚が通りかかると…というより来るという直感に合わせて…フローラの前足を魚に伸ばす。が、一瞬タイミングが狂うせいか、するりと魚に逃げられてしまう。
そんな状態が何時間も続いても、フローラは「リーヒュン兄ちゃんだけ取れるなんてずるいよ！私もとる…」と半泣きになりながら自分のツルから降りなかったな……

その性格は…父親違いなのによく似ていたな……

……「ねえねえ兄ちゃん！明日もここで魚を取ろうね！」「明日じゃないけど…いつかはな」「ええぇ？！来週？明日の明日？」「近いうちだよ」「約束だよ！」「うん…」

……かごに魚をいっぱいにして帰る森の中。自分の背中に乗ったフローラ。自分のことをすぐに兄ちゃん兄ちゃんと呼んでくれた……

……フローラ…お前は今どこにいるんだよ？何があったか…俺には…俺は能力があっても……なんでお前のことは……

「……ねえねえリーヒュン……大丈夫？」隣でふと聞き慣れた高い声がした。我に返ると、先ほどまで見えていた夏の河辺ではなく、発光植物のわずかな光の前に薄暗く影を落とす自分の影と青黒い水面が目の前に見えた。

どうやら本当に眠りこけていたらしい。ユイリィは笑いながら、リーヒュンの頭の上の葉っぱをツルで触っていた。

「あ、起きた起きた。こんなところでも眠れちゃうんだね！さっすがリーヒュン！あははは…すごいと思うよ。うん」

「ううっ……ごめんな…俺どれくらい寝てた？…」「ん？ざっと1時間はコックリコックリしていたかな……うん、それぐらいだよ……」「やばいっ！ごめんなユイリィ！そんなに寝てたか俺は……」ベイリーフは目をツルでこすって前足から立ち上がろうとした。「いいよいいよ。だって4，5時間は探し回ったんだからね。そりゃあ疲れるとは思うよ。うん。もう少し休んでれば？」「いやいや、いいよいいよ……何ならユイリィも少しくらい休んだらどうだ？俺があたりを見張っとくからさ……」「うんん…ありがとうね。でもあたしはあんまり寝ないほうでさ……見張りは大丈夫かな……うん…」メガニウムは後ろ足だけ立って大きく伸びをした。「あ、

でもでも！リーヒュンと添い寝できるんだったらしてもいいかなあ♪♪。あははは……まるで5歳児！これはウケる！うん！」彼女の頭の雄蕊がにこにこした彼女の頭の動きと一緒にゆらゆら揺れる。「うっ…何が5歳児なんだよ…まあいいや……」

リーヒュンが腰を下ろすと、ユイリィがすぐに彼にのしかかるが如く首と体を倒しこんできた。「むぎゅ～ん♪」「や、やめろこら…」ベイリーフがひたすらツルで除けようとしても彼女はびくともしなかった。彼は何とも息苦しい状態になりながらも、メガニウムの体重を右側にかけられたまま水面を眺めていた。ユイリィの頭の上にいるロズリンはあきれ顔をしていた。「お前はいい年こいてなにやってるんでしゅか？…」

「べつにいいじゃん！あたしとリーヒュンはと・も・だ・ちなのよ！これもある種もコミュニケーションのうちなの！ねっねっ？」彼女は同意を求めるかのように彼にさらに強くもたれかかる。「うぐえっ……どっちでもいいけど…とにかく重い……」「だよねだよね！まああたしとリーヒュンはおんなじ位の大きさなんだけど…あはは…大きさも重さも友達だからこそだよ！うん！」

ユイリィは相変わらず楽しそうだ「はあ……君は一体どういう育ち方を…」

15分ほどリーヒュンは適当にこのメガニウムの相手をしていた。それだけで彼女は嬉しそうだった。

しかし…しばらくすると彼女はいつもの“むぎゅむぎゅ”するのを止め、何かを考えるように水面を見つめていた。

「友達、か……」「ん？どうしたいきなり？」

「リーヒュンは……あたしの事友達と思ってる？」ユイリィは唐突に聞いてくる。「えっ…？」

「あたしの事……友達だよね…仲間だよね？……」彼女は前足で、

ツルで、相手のそこに握りしめながらベイリーフを見つめた。

リーヒュンは戸惑った。ユイリィの目はこれまでになくまじめであり、その視線から、意識から、彼の意識に叩きかけるような感情を発しているのがわかる。

……どうなの……あたしは…どう見えてるの……？

……なんて答えればいい？……なんと言えばいい？……

しばらくして、リーヒュンが口を開いた。「友達かどうかはそれぞれ次第さ。たぶん…でもな…」彼はメガニウムの前足の爪をツルで優しく触る。「俺から見れば…ユイリィは仲間だ。だからこうして一緒にいる。当たり前だろ？」ベイリーフは彼女の首元の花をやさしくツルでたたいた。

「ホント？ホントにそう思ってる？！」ユイリィの夏空色の瞳がきらりと輝く。「でもでも！ホントは実はあたしのことが好きなんだよね！ほらほら顔が赤くなった！！」「い、いや何言ってんだよ？……」ユイリィはリーヒュンの首の付け根の葉っぱににまたしても首と花びらをのしかかるようにこすり付けた。「ほらほらあ！恥ずかしがらなくたっていいんだよ！あはははは……」「や、やめろ…だからそれは気持ち悪い……」

しかし、しばらくして、ユイリィが小さな声で言った。「……ありがとう……」

「……えっ……？」「あたし……友達って言われるの……初めてかも……」彼女は少しだけ顔を赤らめる。「うち……何

となくこういう性格でさ……自分でも困っちゃうんだけどね…」
「……」
2匹に間に沈黙が流れる……
「……やっぱあたしはだめだよね！ダメダメだよ！いっつもついついむぎゅむぎゅしたくなって止められないし、ついついいろんなこと言っちゃうんだよね…うんうん……」彼女の声は自虐的な笑いで始まり、次第に小さくなった。
「俺は……大丈夫だと思う……」リーヒュンが言葉を発した。
「えっ…？」
「確かに困るけどさその発言は……でも、それはそれだな。君らしさもそこに入っているから…」
「ホントに？……」「俺は認めるよ…」彼の言葉からユイリィの心の中にそっと撫でてくれるような不思議な感触を覚える。
「……そうだよね……ありがとう…ホントに……」「うん。俺は頑張るよ……君がいれば、世界がどうであっても…たとえフローラや俺たちに対して厳しくても…この先も生きていけると…諦めずに行ける思う。そう信じてるよ」
そういう彼の顔もとは、ほんのり赤く染まっている。
「うちもだようちも！うんうん！2匹ならどこまでもいける！頼りにしてるよ！」

ユイリィは寄りかかった姿勢のまま、水面を見つめるリーヒュンを見つめていた。考え込んでいると彼はすぐに眠くなる性分らしい。そんな彼を彼女は眺めながらぼんやりと彼の意識にそっと自分の意識で触ってみた。

メガニウムの意識の中では……ベイリーフは秋に成熟するリンゴ、サクッとしていて水分も甘味もちょうどいい。ネズミ、カケス、キツネといった動物から、ポケモン達まで食べに来てくれそうな感じがする。だだ、味が単純すぎてじっくり考えた落ち着きや深くすり込まれた奥深い味というものはない。何個か食べたら印象が確定してしまいそうだ。

一方の自身はグレープフルーツ。夏空のもとで成熟した水分たっぷりで突き抜けるような爽快感を持っている。鳥がたくさん突いてきそうだ。一個食べたらまた食べたくなる。その分…自分でも悩ましいが…自分の場合、それが強すぎて少々子供っぽい主張になることもある。

ただ…自分はそういうグレープフルーツとは違う。自分でも分かる。

……育った環境は…決してそうではなかったから……

だが…ユイリィにとってはリーヒュンのそんな点も…どうでも良かった。彼女自身の点も今ではどうでも良かった。隣にいるベイリーフは、ぼんやりとしながらも彼女の意識がそっと寄り添うのをただ受け止めていた。彼はおそらく気づいていない。もう少し能力が向上すれば…経験を積めば…おそらく2匹は深く分かりあい、伝えることができるのだろうが。

メガニウムの心の中で普段の夏空が夕焼け色になった。意識の宇宙に浮かぶそれぞれの意志という名の島の中にある彼女の領域。普段は突き抜けた青空と草むらと川がいろがる空間にやさしい花が次々

に開いた感じだった。

……リーヒュンは分かってくれる……あたしを認めてくれる……

……そしていつかは…きっと理解してくれる…ありのままを受け入れてくれるかな？……

彼女は自分の意識のはるか奥、人間の高層建造物でいえば地下の構造空間にも匹敵するような底にあるものをそっと覗いた。いつかは彼に見せるであろう…そこを。

一体どれほど時間が流れたか……

「ユイリィ……何か俺にした？」ベイリーフがこちらを見た。おそらく意志をまさぐり過ぎて何かが伝わってしまったのだろう。ユイリィは顔を赤らめた。「へっ？うんん！大丈夫大丈夫！何でもないよ…そろそろいこっか！うん」

２０１２年　１２月９日　フランス　セーヌ＝マリティーム県　ペンリー第一原発　１０００時

日曜日にも関わらず、多くの貨物船や観光船が行き交うドーバー海峡を望むアレバ社の管理するペンリー第一原発の駐車場は多くの関係者の車両の出入りで活気があった。

その中の一台、アメリカのゼネラル・モータース社製キャデラックＳＲＸから降りた技術職の男は、制御室のあるタービン建屋ではなく事務管理棟の方へと向かった。

管理棟の一角にある“資料情報センター”という一室。多くのガラス張りの棚と複数の情報端末が置かれている。男はその棚の一つに

付属している読み取りリーダーにＩＤカードを当て、タッチパネルに暗証番号を打ち込んだ。軽い電子音がしてロックが解除される。彼はその中から分厚いファイル取り出し、何枚かめくった。

ひとしきりその図面を眺め通した彼は、懐から携帯端末（モバイルフォン）を取り出し、パネルを一通り操作してそれを耳に当てた。一呼吸おいて、受話器から女性の声が聞こえてくる。

“どう？予備の回路は確認できた？”「ああ。設計段階から都市の方の回線が残っている。万が一送電網に問題が生じても問題ないな」“そう。その情報こっちで受け取るわよ。送ってくれる？”「もちろんだ」

図面に示された数値や回線の番号を携帯端末上から送る。この回路に関する図面のデータは、既に南太平洋上エメリア・ハイドルにある熱核反応炉試験施設にあるが、いくつか欠陥していた数値や番号をフランス・アレバ社の資料がそろっているここの情報センターで発見したのだ。依頼はもちろん本社からであるが、エメリアでの熱核反応炉の欧州共同プロジェクトに関与している彼が可及的速やかに、という事でここで調査したのだった。

「うむ……アレバ社からの依頼かな？」一通り送信を完了した男の背中でふと声がする。彼が振り返ると、普段彼が勤務している制御室の室長が立っていた。

「あ、はい。唐突に頼まれたもので…」「そうか…本社もフランス政府やＥＵ側も何を考えているのかは知らないが……エメリアでの開発争いは、完全にアメリカと中国を加えた三つ巴かな？君はこの発電所のスタッフで南太平洋での研究プロジェクトに抜擢された唯一だ。しっかりやってくれ」「はい」

そう、エメリアのハイドルで行われている熱核反応炉施設はイギリ

スやドイツとフランスを中心としたえＥＵ諸国やヨーロッパの関連企業での合同プロジェクトである。アメリカやロシアよりも熱核反応炉を実用化できれば原子力発電の小型化、ひいては制御性と安全性の向上に繋がり、従来危険だとか禁忌だとかいわれてきた宇宙船などへの原子力機関の搭載も可能となる。また、太陽光、風力、原子力、潮力等のエネルギー開発やエコ製品・エコ社会システムの開発で他の地域より一歩先を行く欧州にとって、新たなる産業の創出、それに伴う雇用の創出、すなわち経済の活性化にも大きく貢献できる。

しかし…それがある地域で起こっている真の“目的”に関して、彼らが理解できるものはなかった…

１２月９日　００３０時　ヴェルダー州　ロアクーン地区

背後に並ぶ実験施設への送電塔は、赤色の航空機激突防止警戒灯と作業足場を照らすＬＥＤ灯によって明るく輝き、その送電線のラインだけがすでに眠りについているはずの文明の集落に対して異次元空間のごとき明るさを放っている。この送電網が稼働してからおそらくそう長い年月は経っていないだろう。ロアクーン地区に住む者たちはさぞ安眠を妨害されているに違いない。前から述べている通り、ポケモン文明の夜は一部のかがり火等を除けばほぼ月や星の明かりだけであるから。というよりそれが地球生物の標準なのかもしれないが、文明という観点から考えれば都市部や道路網では終日鮮やかな（地域によっては昼のような）光で満たされている人類の文明と比べた時、その文明のパワーで大幅に見劣りしていると言われても仕方があるまい。

唯一彼らが人間の構造物や品物を見て言えること、それはそれらに

込められた感情が乏しいという事だった。確かにこの文明が好む（というよりそれ以上の技術がない）木製の看板や居住区、簡単な鉄器等には不格好ながらそれぞれに作った者や使う者の気持ちが入っているようだ。

そんな冷たく無機質にただ大きさと高さだけを持ったようにそびえ立つ金属製の送電網の“足元”の指定された位置に、バストーク・ホルスト以下ＵＮＦＳＴＰＰＴのチームとエウリディケ地区の守備部隊は既にやってきていた。

ブレイブは腰に巻きつけた装備品ベルトから水入れを引っ張り出してふたを取ると、国連軍の兵士からくすねたアルコール入りの水をちびちびと口に含んだ。無聊（ぶりょう）を酒とタバコで紛らわすという訳ではないが、なんとなく気乗りしないこの状態ではアルコールの一滴位ないと落ち着かないと感じたからだった。こういう時は散々なんとでも言えてしかも対して怒らない理解者がいてくれるとありがたいのだが運悪いかどうか、親友はいない。

「……ねえブレイブ」隣にいるのはテルルである。「ん、どうした？」「さっきからさ、何飲んでいるのそれ？」「ああこれか。ただの水、っぽく見えるけどな、アルコール入りだぜ」ブレイブは右前足で容器を軽く振る。「どうだテルル、試してみるか？」「やめとく」グレイシアは差し出されたブースターの容器を見て左前足を出す。「はあ…なんで今からアルコール入れてんのよ？」「いろいろ気乗りがしなくてな」彼は頭部保護装甲板を右前足で取った。

「うん……まあ私もだけどね。いえなけどさ」彼女も胴回りの装甲板に少し隙間を作り、水色の毛をかいた。「いろいろって何？リーヒュンとか？」

「それは…いやそれもだな。ただあいつらはあいつらで信じてるぜ。上手くやってくれるってよ」ブレイブは頭部のフサフサを前足でいじる。「あいつは…無茶ぶりが多いけどな…俺の知っている限りは

大丈夫だった。ああいう性格だからこそ、なんだろうな」
「それはそうね…」テルルも同調した。「で、それはそれで他は何なの？」
「ああ……なんとなく……今回の戦闘、いや、バージアの時もだけどよ……俺らが戦闘した後ってだいたい周辺の集落って無事じゃ済まねえ、話なんだよ……」「は？バージアの時って……ロケットを打ち上げた時だよね……あの時は……そうね…」グレイシアの耳としっぽが少しだけ下を向く。あの時はバストークやピトムニクのいた３０２中隊が全滅して…、などという記憶がよみがえる。

……しかし……戦闘がおこったのは宇宙センターの周りだけではなかったか？……彼女の記憶はそう言っていた。

「ね、ねえ……ブレイブ…あの時って…」「そう見えただけだ…あんとき俺たちにはな」ブレイブはテルルの表情から察したのだろう。「見えた…？」「俺だって基地のアメリカ軍の人間連中から聞いたときは信じられなかったぜ。……実はな…」ブースターの顔が深刻そうな表情になる。「あの後、辺りの集落の連中、恐れをなしてな…攻撃を仕掛けたのが自由連合側だった隣の集落の奴らと思い込みやがった。それで宇宙センターの周りの集落が結託して……」「そ、それで…まさか…」グレイシアが路上に転がった手製の爆弾を調べる人間の警察の爆破処理班のように尋ねた。

「ああ……ニュークリア南部の集落の半分は……巻き込まれた……」「そんなに…それが大規模になったわけ?!」テルルが驚く。
「私たちの周りにそんな情報は一度も…？」
「それが…俺たちの文明の限界だぜ……俺たちにとっちゃ３つ隣の集落は旅行先、だからな」ブレイブが諦めたようにため息をついた。
「……」

「それに…あいつらのこと分かるか？」「う、うん…あそこにいる…うん…ブイゼルとかキノガッサとかのこと？」ブースターがしめす方向をテルルは見た。近視がちな彼女でも2つ離れた送電塔の所に5，6匹いるのが見える。

「……あいつらはポケモンの量産兵士（マスプロダクト・ウォーリア）だ。地元の集落の人間じゃねえ」「うっそ……話は少し聞いたことがあるけど…人間が作った……？」

そう、彼等こそがアメリカのＧＢＴＸ社が開発した量産兵士たち。当初は潜入や破壊工作などの特殊部隊用として開発されていたが、２００１年以降たびたび発生するようになったゲリラ戦における兵士の死傷者の増加や民間軍事ビジネスの誕生、ポケモン文明の監視や潜入工作など任務といった新国際連合の安全保障理念などが彼ら…人間から見れば取引可能な商品に過ぎないが…の存在意義（アイデンティティー）を増加させ、いつしか主たる目的は国連や各国軍や依頼された民間軍事会社によるポケモン文明に対する抑圧・弾圧・鎮圧というポケモンからみれば不条理な任務と化していたのだ。

テルルは彼らの表情から生気も感情も感じ取れなかった。彼らの体がもしアルミニウムや炭素鋼でできてたら間違いなくロボットに見えるだろう。どうやら量産兵士は眠気や食欲すら感じないように生産初期の段階から制御されているらしい。彼女もブレイブもその兵士たちの製造方法などその一部すら知るはずもなかったが、おそらくは…ポケモンから見れば…ロクな方法ではないだろう、という印象が一致したらしい。ブースターとグレイシアは顔を見合わせた。グレイシアの方は見ているとだんだん悪寒が走ってくるのを感じた。

しかしこのような非道な方法を人類がとり、あらゆる政府組織も報道機関（マスコミ）も市民もほとんど省みないのはその余裕がないからである。

金融、経済、軍事、エネルギー、環境、民族、紛争、領土、技術開発等様々な問題の解決に苦闘する人類にとって、ポケモン文明が自分たちの行動を批判したり妨害したりしてくるのは単なる邪魔でしかない。倫理とか価値観とか道徳とか議論をしていては人類はおろか地球の生命や自然は崩壊してしまう。かといって、現在の不平等な生活水準や格差を放置したり、市民の自由を迫害する体制や権力を放置したりするのは、人間の言う“自由”と“正義”（まあどちらも17世紀中ごろにヨーロッパで定義されたものだが）を基調とする人間の価値観が許さない。人々の自由、主権国家の自由、経済競争と富の取得の自由、幸福追求の自由、それに加えて自然環境にも生存する権利があり、次の世代にもこれらを追及する自由がある。さらに社会の倫理や治安を守る必要もある。このように複雑に絡み合ったロープを解く作業をしている間に横から口出しされたり邪魔されたりしていては、解決は遅れるばかりになるからだ。

「……」テルルは次の言葉の出しようがなかった。人間に作られた兵士たちの存在というもの、それ自体がいっぱしのグレイシアの知識と感覚を超えていたからだ。

「まあ…俺たちにゃどうしようもねえ話だけどな……」ブレイブは諦めたような表情をして首を振ったがテルルが見る限りその表情には単なる諦めだけではなかった。

……彼の顔には明らかな憎悪が浮かんでいた……

彼女は自分の脚部装甲板のひもを締め直す。「……それだけなの？アンタが気乗りしない理由」「まだもう一つある」「やっぱね…何、それは？」「……テルルの事だ」

「は？……ワタシもなんかあるわけ？」テルルの耳が不審そう

に動いた。しかし、普段のブレイブらしい話題が出てきたような感じがして内心で安心もした。「へへっ…嬉しいか？」ブースターのフサフサ尻尾がピクンと揺れる。「全然嬉しくないですけど！」「だろだろ！って……ちがう……お前がかわいいとか飾りにすりすりしたいとかじゃねんだよ……」彼はテルルの前足に自身の前足を置いた。「うっ…だから勝手に握るとか…」彼女は思わず振り払おうとしたが、いつにないブレイブの表情で止まった。

「……こんな泥臭い戦いにお前みたいな奴が出てくるべきだとは思わねえんだ」「…泥臭い…？」グレイシアは両前足を掴まれながらも、このブースターからお前はここにいるべきじゃないから帰れ、と言っているかのような目線を感じた。

「泥臭い、か……そういう理由はまだ俺にもわからん……」ブレイブは頭のフサフサした毛をまたもやかく。その表情は険しいものであった。「その理由はいつか分かる、いつか分かるんだ！……もしそれが理解した時にはテルルに……教える……」「て、ていうかそれ何？ブレイブは何言ってんの？…」

「テルルを……もし…ここで死なせたりしたら俺は……」

「大丈夫だよ！私は何にも問題ないってば！」テルルは思わずブレイブの前足を掴みなおした。「アンタ大丈夫？！何を心配してんの？」

ブースターは思わず我に返ったような表情をする。同時に彼は自分が広大な世界に取り残されたような小ささと虚しさを覚えた。「ご、ごめんな……俺が気にしすぎてるだけか……だが…テルル、絶対に……無茶すんなよ…」「も、もちろん……」グレイシアは首から腰にかけた自分の頭部保護装甲板をいじりながら呟く。

「ここにテルルが連れてこられた目的、てのは俺もお前もしらねえが……少なくともテルルは拒否しなかったんだろ？…な？物事言われて断らねえ奴はな、結果は何であれ真面目にはやるんだぜ……や

る気のない奴は逃げ出すんだ」ブレイブがテルルの前足の付け根あたりを軽くたたいた。

「……明日も頑張ろうな……テルル……」「う、うん……」テルルには今、彼のそういう表情はひどく寂しそうで、彼が深宇宙に一人取り残されたような意識の暗闇で自分が発した恐怖と不安にひとりで立ち向かっているような気がしてならなかった。

「ねえブレイブ……」「ん？…どうした…？」「私は……生きて帰って見せる……ブレイブの足手まといにも悩みのタネにも……ならないようにやるから……」

「悪いな……心配ばっかかけてるな俺は……」ブースターは寂しそうに笑った……

「あ…あとさ…さっきのあれ、味試していいかな？」「……構わないぜ」ブレイブは容器をテルルに差し出した。

一口飲んだアルコール水。テルルにはアルコールの冷たさに何か不思議な温かさが混じったちょっと心地よい酸っぱい味と感じられた……

そんな2匹のやり取りを、イギリス・欧州連合共同の熱学原子炉施設へと続く送電塔は冷たい金属の色を照らしだしながら無表情に見下ろしていた。

「だ・か・ら・な、お前はこっちだっての！立ち位置が突っ立ってるだけで代わって行くってどういうわけだよお前は？」レオがシンシアを操り人形のように前足を掴んで連れて行き、彼女の前足を地面に押し付けた。「よし、ここな！これだけ足型つけときゃ今度こそ移動しねえだろうが。いいな？」

「わ…分かったわよ……大丈夫…」シンシアがあいまいに、というより眠そうに返事をする。無理もないもう日付も変わっている

のだから。

「あん?!どうしたお前…フン!寝ぼけてんのか?!だいたい日が暮れてからまだ……」レオは懐の装備品入れから何やら星座早見表の上にけん玉のような物が引っ付いた道具を取り出し、月明かりに当てながら棒の先端にひもで引っ付いた玉をくるくる回るように棒を振った。月明かりが下の早見表のような板に刻まれたスリットからもれだす。地面に移った影を見て、コリンクはロコンの顔をみつめ表情が曇った。普通のポケモンだったらとっくに眠っている時間だ。

レオはシンシアのことに関していろいろの思い返し、ため息をついた。彼女に夜更かしなどさせたら次の日には全員くたばる可能性が倍以上になる。

だがコリンクにそれを考慮する余裕はなかった。各員の配置位置すらまともに決まっていないのだ。ぼんやりしているシンシアを激励するように言う。「あと10分耐えろ!それも耐えらんねえのか?!ああ、このガキが?」

「アンタって奴はホント子供ね。自分の夜更かしに友達までつきあわせるつもり?」ガトルが短い右手でレオの耳を引っ張りよせた。「だいたいね…周りが見えるうちに配置なんかてきぱきと決めちゃえばよかったのよ。それをアンタがあーでもこーでもって言うから……」

「うるせえよ?!お前にゃできたのかそれを?!」コリンクがパチリスに食ってかかる。ガトルは全くおくびもせずに答えた。「もちろんよ。ワタシとアンタがこの鉄塔を背面にして正面からまずは相手に突っ込む……」彼女は長いしっぽで鉄塔をポンとたたいた。「グリソムとシンシアは…知ってるわよね?」「あ、ああ…おいら達はそこの右側の丘側からこの辺りの守備部隊と一緒に回り込んでレオたちを援護する……だよな?」グリソムが彼ら向かって右側の月明かりに黒々とした丘を見つめた。このミズゴロウにはそ

の丘の起伏やぽつぽつと立つ木々まで見えた。どうやら彼は夜でも周囲の視界がとても効くらしい。

「そう、その通りよ！さっすが、よく見えるわね。期待してるよ」

「う、うん…それほどでもないんだけどね……」ミズゴロウは恥ずかしそうに顔を赤らめた。「……という訳。何か違う？」

「俺の出番はなしか？！……はあ…お、お、お前のが…確かに……」レオは勝ち誇ったようなガトルの声に首を振った。だが、その直後にまたしても開き直ったようにまくしたてる。

「で、でもよ、そんなこと一度も言わねえだろ？！おいシンシア！お前が手間取っているせいでそこに話が……」

「……なーにお嬢さんのせいにしてるんだよ？アンタは来てからずっと自分の武器をいじってばっかで周辺の調査はガトルに任せてただろ？それをまあ、今更慌てたように…」バストークがレオのほっぺのはねっ毛をつまむ。コリンクの顔が焦ったような表情を浮かべた。「あ、あのですねおっさん！それは俺のもグリソムのも全員分を調整してやってて……」「それは夜にだってできるぜ。同い年であれ何であれまとめ役が自分の目で確かめて考えねえでどうすんだ？」３５歳のメリープはコリンクを息子をしかるように扱った。

「は、はあ…くっ……」レオはちょっとばかり不満げにうつむいた。

「それに、シンシアには無理させちゃダメ！体力に自信がない子の事も考えるの」ピトムニクがシンシアを…対して身長差がないのだが…を鉄塔の下へと下げた。「シンシアはもう休んでいいよ」

「はい……すいません、なんだか……」「大丈夫だよ。残りは私たちに任せて」プラスルは彼女を安心させるように言う。

「……わかったよ。自分の武器はしっかり抱えてろよな。盗られるんじゃねえぞ」コリンクはロコンを送電塔の鉄柱の一つに座らせると彼女の洋弓銃と軍刀、頭部装甲保護板といった一式をを前足と後ろ足で抱えさせた。

彼女はしばらく彼をぼんやりと見つめていた。「……うん……ごめんね……」「……さっさと休め。明日動けなくなっても知らねえぞ」レオはシンシアの頭のくるくるした毛を前足で不器用に撫でた。

「残りの2匹も…休んでいいよ。武器は私たちで調整しとくからさ」

「あ、はい…でも…」「いいのいいの。体が動かなかったらそれでアウトよ。寝るのも仕事のうちなんだから」不信そうな顔をするグリソムやガトルの目を見ながら笑顔でピトムニクは2匹の洋弓銃を受け取った。

彼らに高さよりはるかに高い、非情さを感じるほど高い、先端の航空接触警戒灯の赤い光を点滅させている送電塔は、何の言葉も思いやりもなく今はただ3匹の枕を引き受けていた。

「……で、…お前はどうして隊長になったんだ?」3匹が鉄塔の基部に寄り添うように寝静まった後、バストークがレオに聞いた。「……くじ引きですよ……」

「おいおい…そんな選び方をするのか防衛軍の突撃隊は」「そうっすよ。俺たちはサーマルのセレーネて言う地区の集落出身ですけど……」コリンクは右足の脚部保護装甲板を地面に押し当てる。「その地域の招集は全員出払った、だから次は15歳も対象だとかサーマルの自治組織とか言う奴が言いやがって…集められた果てに出向いた先が守備部隊じゃなくて国連とかっていう人間どもの機関の弾除けなんすよ…」

「おいおい…親が反対しなかったのか?!」メリープは衝撃を受けように問い詰めた。いくらなんでも15歳の子供を持つ親が、まだ自分の集落と周辺の自然と共に育ってきたわが子をこんな薄暗い世界の現実という死神の前にさし出すとは思えなかった。

「……隊長…」レオは言いづらそうに口を開く。「俺には……母親がいましたが……残りのあいつらは……家族のいない連中なんです。集落にあった施設に……集められていて。俺はたまたまそいつらと仲が良かった……奴らが徴兵されると聞いて……俺も……」

「そうか……すまねえな聞き出したりして……」バストークは全身のモフモフをすくめた。サーマルは中国が開発を行っている。もともとから集落間の対立が絶えない地域だったが、中国の粗暴な…まあアメリカやヨーロッパもエメリアに対して似たり寄ったりだが…開発によって食糧不足や紛争が悪化し、難民となるポケモンが増加した。これがさらなる紛争や治安悪化を招き、孤児や放浪者、そしてレオたちような年少の徴兵者や私兵を増やしている。これに対して長期的に力を失いつつある自治協会や自由連合といった中央組織や各地域の自治組織が何の有効策も打ち出せていないのは事実であった。

……この状況を一刻も早く改善するため……メリープは改めて自分と同志の進める“計画”の重要性を全身で感じた。

「……ワタシは何なのよ私は?」隣でピトムニクと一緒に洋弓銃をいじっていたグラシデアが嫌味を込めた表情で父親を見た。

「私の場合はあなた反対しませんでしたよね?」

「そ、それとこれとは理由が違うだろうが……」メリープは戸惑いながら前足で頭のモフモフをかいた。

「はあ…結局そういうのね。まあ最初から答えは期待してないわよ……」モココは鼻を鳴らしてピトムニクの隣にバストークを背にして座った。父親はそんなグラシデアをちらりと見ると、諦めたように首を振る。「すまねえな…あいつは生まれた時からかわいがったつもりなんだが…」「おじさんの娘なんすか?……」レオは驚いた

ように聞く。「すっげえ！父親しながら隊長。しかも子供も……」
「はいはい。その先はアンタが突っ込む分野じゃないでしょ」スカイラブがバストークとレオの隣に座りこんだ。「うるせえよ。２０そこらのくせに俺だけには母親ぶりやがって……」コリンクは反抗期の子供のような目線でルクシオを見た。そういう目線や態度をあらわにする相手を育てたことのある（というより現在そうだが）バストークにはすぐ分かってしまう。
「それもまた、からこしゃ…んと…余計なお世話よ…」スカイラブはまたしても訊りに詰まりながら、頭部装甲板を外して右前足で回した。「アンタもガキなんだから…何なら私がねへづけて…」「ああ？！何言ってんだ？だから俺だってもう１５歳……」
「さっすがだなラブちゃん。こんなくそガキを小さい頃からといえ、扱うのは難しかっただろうな…」バストークがスカイラブの頬の部分を左前脚で軽く触れた。「ありがとうございますです中隊長さん。それでそれで…せっかく何で一本やります？」彼女は腰についている装備品入れから白い箱を引っ張り出し、その中から白い細長いパイプ状のものを引っ張り出した。
「未成年の前だ。今は止めておけ…」バストークはそれらを羨ましそうに見つめながら言う。「ですよねですよね…レオの前じゃ教育に悪いですよね…」彼女もコリンクをちらりと見てそれを装備品入れに放り込んだ。彼はそれが何かすぐに勘付いたらしく「フン……また大人を気取るための道具か……俺には分からねえ…大人になったとか１５を超えりゃ一人前だとかってのがな…」と不満げに右後足で耳の後ろをいじった。

「何いっぱしの思春期みたいなこと言ってのよ……すいません隊長……」「いやいや、よくあるこったただぜ……これぐらいの齢になるとな、そういう責任とか自覚とか周りからさんざん言われるか

らお前もだいぶきついんだろ？」メリープはコリンクの頭のはねっ毛を前足でくしゃくしゃとやった。「きついっつうか何で言うか…」レオは恥ずかしそうな表情をする。「でもな…大人になるってことは…まず自分の行為を胸張って肯定できるようになるのが…そういう事じゃねえかな……」「胸を張って…肯定するですか…」「そうだ…めんどくさく言えば責任を持つ、てことだが…そういうことを言ってるやつはたいていできてない…俺もな……」バストークは恥ずかしそうに尻尾をぴくぴくと動かす。

「俺にも…無理そうです…」「心配すんな……そういうことをちゃんと学べていれば……ああ…俺みたいに自信を失う事はねえよ……」「……」コリンクは気恥ずかしそうに自分の胴部分の装甲板を見つめた。今まで……全てがゲリラ豪雨に伴う洪水で荒れ狂う川を流れる笹船のように厳しい現実世界に対して成り行き任せだったと初めて感じた。

レオは中隊長を見つめる。彼の目線は、明日以降自分が、そして自分たちが自らの血で染めることになるかもしれないロアクーンの大地を、背後の送電塔にある人間たちの明かりでぼんやりと照らされた自分たちが土の一部になるかもしれない地面を見つめている。しかしその表情は穏やかそのものだ。天体観測でもしているかのようにのんびりとした表情で丘陵や道や川を眺めている。

……どういう事だよ…どうすれば…アンタみたいに……

そういうのも…大人なのか？レオは自分がひどく情けなく見えた。

「ねえねえレオ、ちょっと君の洋弓銃貸してくれる？面白いのをつけてあげるよ」ピトムニクがアメリカ軍のＭ－６７手榴弾をぶらぶらさせながらコリンクに声をかけた。「そ、それを…まさか…」「大丈夫よ大丈夫！扱いには慣れてるからね！」びっくりする彼からプラスルは洋弓銃を取り上げた。

アメリカ、アラスカ州のエルメンドルフにある国連統合軍前線司令部ではオペレーターの一人が統合軍司令に声をかけた。「予定通り、アメリカ軍とドイツ軍は間もなくロアクーン地域の左翼と右翼の敵勢力を夜間攻撃で強襲します。統合軍の部隊はＵＮＦＳＴＰＰＴと地区の守備部隊が敵主力と衝突を開始したと同時に援護に回ります。送電網が危険にさらされた場合、バージアとの結果より敵味方の状態を問わず支援攻撃を行っても問題ありませんね？」「もちろんだ。バージアでの実験結果より、ポケモンという生物は予想以上の脅威回避力を持っているらしい。統合軍生命実験部と国連生命工学研究機関、世界保健機関のお墨付きだ。計画通りにやってくれ。それから」男は思案顔をする。「ＧＢＴＸが供給したクローン兵士の……湖の方に向かった奴らの監視も忘れるなよ」「了解しました」二人の男や要員達の影は、司令センターのアラスカ最大の都市アンカレッジ市のように輝くあまたの端末やディスプレイやコンソールの明かりで暗がりに沈んだ。

そのころ…ヴェルダー州の洞窟の中

再び進みだして2時間くらいは経ったか……2匹の間で感じ

る奇妙な熱のような感触は今や否定できない段階までに達していた。
「どの辺りまで来たんだろう……？」リーヒュンが不意に呟いた。その声は心なしか緊張のようなモノで震えていた。フローラが…知りたい真実が……呼んでいるような気がしてならない。「あと少し…あとほんの少しなんだ……」
「そうだね…とても近い……もうすぐだよ……」ユイリィが彼の首元の葉っぱにツルをそっと置いた。そのツルの先から彼の不安と期待がいり混じったまさしく意識下で甘い誘惑のように渦巻く意識の流れを感じ取った。
しかし…期待がもし…悪いほうに働いたら…その可能性は、否定できない。そういう事態に陥った時の絶望と苦しみと悲しさ、メガニウムにはそれが痛いほどわかった。
彼女が物心付いたときから、数えきれないほど感じたことのあるものが……

「……会えるといいね……」「うん……」「もしいたら…どうするの？」「…どうする、か……何もなければ…彼女を…連れて帰りたい……ただ…」ベイリーフの顔が暗くなる。「…そんな簡単にはいかない気がする……フローラは…あいつは……」
「……」メガニウムはかけてやる言葉が見当たらない。意識の中では、彼女の心はもどかしくて前足をゆすっていた。
「それは…うん……あっ！あれじゃない？」「ど、どこだ？！……あれかっ！」

２匹の視線の先には開けた空間……その中心、水辺に囲まれた中に浮かぶ島のような場所に…白く光を放つものが……

「うん！そうだよそうだよ！いってみよう！うん」２匹は奇妙な白い光を発している場所へと走った。

巨大な地底湖の極めて広い空間。周辺には無数の水晶が存在し、その白い発行体によってニューヨークやドバイ、上海、ロンドン、パリ、シドニー、シンガポールといった大都市の明かりのようにきらびやかな光を反射していた。その中心にある発光している物が…間違いなく……

「これが……時空翡翠……」「本当に…存在したのか……」２匹はその間にくぎ付けになって発行する物体を眺めていた。

明らかに何者かによって加工されたような台座だ。岩か金属かは分からないが、何やら幾何学的な装飾がなされている。上部からは杯（さかずき）からこぼれた水の如く水が流れ落ち、湖へと注いでいる。光はその中からこぼれているようだ……

しかしここまでユイリィは肝心の事を忘れていたことに気付いた。この翡翠をどうすればいいのだろう？持って帰ってもいいが、取るのがリーヒュンも含め４本足の種族ではなかなか取りづらい。それにもし取ってしまったら……何か起こる予感がする……

……しかもまずいことが……そうでなくても嫌な予感はさっきからするが。

「……ねえ…リーヒュン…これ…どうする？」「何って…

…もちろん取って…」

取ってどうするのかまでは聞けなかった。

ばしゅんばしゅん！2匹の正面に突如爆発が起こった。「またかっ？」「なぜこういうタイミング？！」

さっき2匹がやってきた背後に……キノガッサやブイゼルが10匹ほどいた。リーヒュンの意識下に普段と違う何かを感じた。奴ら……単なるポケモンじゃない……

その構え方、視線、表情から何かを察した。

「奴らは…普通のポケモンじゃ……」「あったりまえでしょ！？あいつらどう見ても量産兵士じゃない？！なんであいつらが……」

「な、なんだ…リョウサンって？」「人間の企業が作ったポケモンの事よ！もうもうもうっ！なんでこういう大事なタイミングに……とにかく潰すよ！」「人間って…そんなことが…」ベイリーフがメガニウムから答えを聞く前にはどうだんやハイドロポンプ、弓矢やライフル弾が雨嵐と飛び込んでくる。

……大丈夫？！

……もちろん！ここで…知るためなら……

２匹は意識というポケモンが感じ取れる独特の観念世界に意志を集中させた…

２匹は同時に奴らに飛び掛かった。

洞窟の奥底と（後書き）

なかなか進展しないですね……

文字数が多すぎるのか？

……悶々とする今日この頃…

動き出す世界

２０１２年　１２月９日　ハイドル大陸　西部　オージアン州　トータルセイユ市　０３００時

トータルセイユ市はハイドルの西部、ポケモンの言うオージアン州でアネア諸島に面した沿岸にあるフランス共和国ハイドル県で最大の都市であり、現在はイギリス、フランス、ドイツ、ベルギー等の―ＥＵ（ヨーロッパ連合）直属のエメリア地区政庁がある都市である。ここが開発され始めたのは１９００年代初期であったが、正式に本格的な都市としての開発が始まったのはＥＵの母体ともなったベネルクス三国同盟（ベルギー、ルクセンブルク、ネーデルランド↓オランダの３国。本来はヨーロッパの立憲君主制国家同士での関税協定から始まっている）現在ＥＵの政庁施設が集中している地域でもある）が結成された１９６０年頃からだった。以来この都市を発端にヨーロッパ諸国によるエメリア開発は急激に進み、ＥＵの前身である―ＥＣ（ヨーロッパ共同体）並びにＥＵへの発展の度にそれは加速していった。この地域では主に天然ガス、メタン、ウラン、鉄鉱石、石炭、レアメタルなどの資源採掘はもちろん、高度な生命科学技術産業や次世代エネルギー（熱核反応炉、地熱発電、次世代太陽光パネル等）産業の企業の研究施設や大学や国の科学技術研究施設、環境産業の実験施設、高精度の情報技術研究施設などが開発されている。

この都市も例外ではない。ここもヨーロッパの都市らしい面影を残しながらも、ヨーロッパの多くの都市と同様、伝統的建造形態の中心市街地の周囲には現代的な超高層建築が林立するという形がやはりとられている。ハイドル内にある欧州領の地域を結ぶ高速道路網、港湾、空港は当然のことながら整備される一方、中心市街地では低

床鉄道や路線バスネットワークやタクシーなどの公共交通網の整備を進め、自家用車に頼らないヨーロッパらしい都市計画がベースになっている。さらにこの都市の電力網はスマートグリッドシステムが整備されており、郊外の大規模発電所から、研究所、工場、オフィス、公共施設、一般家庭にある太陽光パネルまでネットワークに常時接続されて効率の良く、環境にやさしい電力需給バランスを提供する方法がとられている。ここではそれ以上の詳細な点は割愛する。

そんな都市の２０キロ程北に外れた場所、夜に上空や衛星写真から見ると都市の光の海から何本もの道路の光によって接続されている光の空間がある。ここがフランス軍、ドイツ軍、ＥＵ連合軍のエメリア最大の基地、トータルセイユ基地が存在する。ここに存在するのは陸軍の駐屯地と空軍の飛行場関係の施設であり海軍の施設は沿岸に別に存在している。

その一角の半地下にある総合戦略司令部の戦闘情報センターはよるにもかかわらずあわただしい空気に包まれている。

「……国連統合軍より、攻撃開始の通達がなされました……予定通りで構いませんね」

「よし…遂行せよ」「了解しました」司令官らしき…フランス軍のものに似た制服には多数の勲章が…男が情報センター中心の座席に着くと同時に、センター内に作戦開始を知らせるブザーが鳴り響いた。正面にある大型ディスプレイに映し出された情報が次々に切り替わり、エメリア全土の地形図が表示され、現在活動中の欧州連合加盟国の部隊、アメリカ軍の部隊、統合軍の部隊、サーマルの中国軍の部隊、全ての部隊の配置が表示される。

「フランス空軍第８０１空軍基地部隊は行動開始」「ドイツ空軍第５空軍師団エメリア空軍基地の予定機は行動開始」

オペレーターの声が発せられると同時に、トータルセイユ基地の並行して並ぶ2本の滑走路が十字に交差した形になっている21，22，23，24の滑走路のうち、21，22番の各滑走路にすでに待機していた、フランス空軍のダッソー・ラファールB型2機とドイツ空軍のユーロファイター・タイフーン2機のHUD（ヘッドアップディスプレイ）には、離陸経路を示した青い光の道が表示される。両手に赤い誘導灯を持った4人の誘導員たちが“ランウェイはクリア”のハンドシグナルを出して滑走路脇に下がる。

「機体制御、通信、推力機器、作動良好」「燃料搭載量は予定通り」「イジェクション・システム、正常に作動」「空対地ミサイル、誘導爆弾、安全装置開放正常」

「システムオールクリア。離陸を許可する（クリアード・フォア・テイクオフ）」「了解（ラジャー）。離陸開始」

機体のハードポイントにAGM－65マーベリック空対地ミサイルを満載した4機はそれぞれゼネラルエレクトリック社製F404とユーロジェット社製ターボEJ200をフル回転させて飛び立つ。深夜のトータルセイユの夜景に航空灯とアフターバーナーの青い炎、エンジンの轟音が響き渡った。

アメリカ領アラスカにある国連軍前線司令部も動き出す。

「予定通りだ・・・・・敵の左翼と右翼を撃滅する」「了解しました。配置のアメリカ軍と統合軍の部隊は、予定通り攻撃を開始せよ」オペレーターの一人が声を上げると同時に、戦闘情報センターが赤色の非常灯に照明が落ち、作戦開始を伝えるアラームが鳴り響く。

「司令・・・クローン兵士のほうが・・・」女性のオペレーターが声を上げる。「どうした?」司令官はメインディスプレイに映し出されたクローン兵士と行動する“ストームロード1”“ストームロード2”と表示された個体の戦闘情報を見つめ、続いて手元のコンソールのディスプレイに表示された戦術プランのリードアウトを見やる。

・・・・・・・・・・・・・・あのサーナイトの・・・・・・・・・・まあこれも想定内か・・・・・・・・・・・・・・

それから７０分後、ニュークリアのレイク州、バリスタスにあるアメリカ空軍バリスタス基地から発進したフェアチャイルド・リパブリック社製のアメリカ陸軍エメリア派遣部隊第２００１航空隊攻撃機Ａ－１０Ａ４機とトータルセイユ市の基地から発進したラファールとタイフーン２機ずつは、それぞれこの戦闘予定地帯の左翼と右翼へと飛行していた。

それとほぼ同時にするように、集落に通じる双方の街道・・・送電線のある街道から１０数キロ先で枝分かれしている・・・には、右翼はドイツ軍と国連統合軍、左翼は同じく統合軍とアメリカ軍、イギリス軍からなる地上戦闘部隊が集落の入り口付近に殺到していた。左右双方とも周辺が丘陵となっているため、走行音を絞ればほぼ暗闇しかないこの地帯で発見されることはない。ポケモンたちはそもそも・・・大半の種族はだが・・・夜になったら寝るというある意味で健全な生活をしている。それに、たとえ起きたところで相手には暗視装置などない。誘導兵器もない。相手にとって攻撃は極めて難しいものとなるだろう。

その左翼では・・・

「各車、予定時刻のＭＬＲＳ（多目的地対地誘導弾）の攻撃とともに展開する」国連統合軍の部隊指揮車らしきＭ１１２６ストライカー装甲車から各車へと連絡が飛ぶ。

指揮官は腕時計のデジタル数字をグローランプをつけて眺めた。・・・あと１０秒。多くの部隊が展開しているにもかかわらず、無線も兵士達も車両も死んだように息を潜めている。無論集落からも何の反応もない。彼らはまだ安心して眠っている。虫の鳴き声がチリチ

リと異様なほどはっきり聞こえた。

沈黙は突如破られた。部隊の後方に並んだＭ２７０ＭＬＲＳから大量のＭ２６ロケット砲がＭ２７０の砲手のＦＣＳ（射撃管制装置）操作で発射され、周囲が真昼のごとく明るくなった。「攻撃開始」その指揮官の一声で、停車していた歩兵戦闘車Ｍ１１２６、１０５ミリ砲を搭載したＭ１１２８、２丁の迫撃砲座を搭載したＭ１１２９といった国連統合軍とアメリカ軍のゼネラル・ランド・システムズ社のストライカー・ファミリーやイギリスのピラーニャⅤといった装甲車がいっせいに動き出す。５秒後にはＭ２６は集落のあちこちに着弾し始め、花火のような無数の火炎を撒き散らした。

ポケモンたちはロケット弾の爆発に吹き飛ばされ、蒸発し、体が飛び散り、中には建物や陣地ごと巨大な火炎と衝撃の渦に飲み込まれ消滅した。飛び起きた者たちも火炎の明るさしかない暗闇の中で建物や陣地から飛び出し、辺りを見回し、小川にかかる橋や建物に身を伏せながら洋弓銃を握り、自分の体内にエネルギーをこめているうちにＭ６８Ａ１Ｅ４・１０５ミリ砲やＭ２５２・８１ミリ迫撃砲の凶悪な爆発に吹き飛ばされ、Ｍｋ１９・４０ミリ擲弾やＭ２・１２．７ミリ機関銃の稲妻に体を引き裂かれた。

「各車、赤外線識別装置で周囲の監視を怠るな。誤射や不意打ちに十分警戒しろ」各戦闘車両の操縦手席や砲手の射撃装置や車長ハッチに搭載された１２．７ミリや４０ミリのターレットガンでは暗闇の中に車両や展開した歩兵たちの影とそれらの情報が表示されている。さらに各車両や個人用暗視装置ＧＶＳ－Ｖ８を装備した歩兵から集めたデータは、部隊指揮車やアラスカの司令部でも順次解析と処理を施して各車両や歩兵の各種装備機器に表示される。これにより、夜間でも効率的な戦闘を可能としている。

ＧＶＳ－Ｖ８を装備したＭ－１１２６の車長たちはハッチから身

を乗り出し、ターレットに装備されたＭｋ１９擲弾銃やＭ２重機関銃を暗視装置の表示に沿って乱射しながら突っ込む。Ｍ６８Ａ１Ｅ４機動砲を装備したＭ－１１２８は下車した歩兵たちやＭ１１２６の後方から前方に識別された建物や陣地に向かって１０５ミリ砲を打ち込み、建物ごとポケモン達を吹き飛ばす。ポケモン達は視界のほとんど聞かない暗闇の中、火炎や動き回る車両のライトめがけてめちゃくちゃな方向にそれぞれかえんほうしゃ、ハイドロポンプ、シグナルビーム、パワージェム、タネばくだん、弓矢を打ち込んでくるが、闇に飲み込まれる中のあてずっぽうであるうえ、もとより戦闘車両の装甲板はそんなものは受け付けないように作られている。まごまごしているうちに彼らは河川や建物の影や起伏を伝って来た歩兵たちの接近を許し、イラクやアフガニスタンでの戦闘で近接閉鎖戦の実績を積んだ歩兵たちに夜間戦闘システム装備のＭ４カービン銃やＭ１６Ａ４アサルトライフルの弾丸を打ち込まれて鮮血や肉片を大地にまき散らした。

わずか１０分でポケモン側の集落にいた陣営は総崩れの様相を醸していた。だが彼らの完全に負けてしまったわけではない。突如、部隊の前方の方にいたアメリカ陸軍のＭ１１２６が暴発し、周囲にいた歩兵も吹き飛ばされる。さらに別の１台の足元でも爆発が起き、右前方の駆動系を損傷したＭ１１２６は横滑りして畑に突っ込んだ。

「集落の後方に投石機と思われる支援火器陣地を確認。相当数」「機動砲部隊は直ちに殲滅を」指示が飛びＭ１１２８の１０５ミリ砲が投石器らしき巨大な構造物の影を捕え、巨大な稲妻が火を噴く。ややあって一つの構造物がまばゆい火炎に包まれて崩れ落ち、周辺にいたポケモン達を押しつぶした。彼らも次々に発射してくるが、こちらの砲身は射撃管制装置で目標にロックしているので速度を上げても砲身は常に目標を向いたまま回避走行し続けることができる。

「航空支援部隊、目標の指示を請う」「国連統合軍司令部のネットワークに表示されている。データリンクを参考に地上部隊を支援されたし」上空に到達したアメリカ陸軍第２００１航空隊のＡ－１０Ａは分散した。パイロットたちはコンソールを操作してＨＵＤとレーダーシステムを統合軍のネットワークにアクセスする。ＨＵＤとレーダー上には“敵性支援火器”と示されたブリップが表示される。

各機は２００４年に実施された精密交戦プログラム（ＰＥＰ）能力向上計画によって一新された赤外線地形追随装置と機体制御をＧＣＡＳ機器でリンクさせながら、地形すれすれを低空飛行しながら目標に接近していく。「雑魚どものけんかは買うな。目標は後方構造物」ポケモン達は様々な攻撃をＡ－１０Ａにぶつけてくるが、２０ミリ徹甲弾や榴弾の直撃にも耐える総重量４０８？のチタン合金の機体はそんな小賢しい攻撃を全く寄せ付けない。とはいえ、こんな無数の線香花火の火花のような弾幕を実際に取り抜けるパイロットたちの精神的負担は少ないものではない。誰もが早く仕留めたい、ここを飛び抜けたい、そういう思いに駆られていた。もし外したら、この花火どれか一つに巻き込まれただけで自分の肉体が火炎と破片と化してしまうのかという湧き上がるような恐怖心に襲われる低空飛行による奇襲をもう一度繰り返す羽目になる。

「目標を捕捉」パイロットは操縦桿の武装セレクターを回し、ＨＵＤに表示された目標に各々の照準をロックした。目標までの距離表示はみるみるうちに迫ってくる。

「攻撃開始っ！！」パイロットがトリガーを引くと、機体のウェポンベイに装着されたＡＧＭ－６５マーベリックミサイル４発がそれぞれの目標へ向け飛び去る。４秒ほどたち、投石用構造物は大爆発を起こして崩壊した。Ａ－１０ＡはＧＥ社製ＴＦ－３４ＧＥ１００エンジンをフル回転させ爆発の火炎の間をすり抜ける。

「目標撃破。引き続き前方の集落も掃討する」パイロットはさらに

セレクターを切り替え、主翼の両端のポッドに満載したハイドラ７０ロケット弾と機首のＧＡＵ－８・３０ミリ劣化ウラン弾を装填した機関砲を前方の陣地とも集落とも区別のつかぬ構造物の一体にぶち込んだ。重心が火花を散らし、ランチャーが拳のようにロケット弾を叩きつけるたびに、構造物から火の手が上がり、破片とも肉片や血しぶきとも分からない物体が火の粉と共に飛び散り、それらはＨＵＤ越しに見える強化繊維ガラスのキャノピーを無数に叩く。攻撃機はその嵐の中を飛び抜け、一気に上空へと退避した。

「前方の目標を掃討する」「今頃になってっ！」指揮車両の中で指揮官が舌打ちする。遅れて到着した多数のアメリカ陸軍Ｍ１Ａ２エイブラムス主力戦車がガスタービンエンジンの盛大な走行音を立てながら戦闘地帯へと突入し、ドイツ・ラインメタル社製４４口径１２０ミリ砲を敵の大型ポケモンらしき移動目標に叩き込む。そのポケモンの頭部らしき部分が大爆発を起こし、影は後方に倒れた。「っっしゃあ！！一体潰してやったぜ！！」

この辺りの複数の集落は１時間もせぬ間に完全に総崩れとなり、軍属か民間かを問わず多くのものが凶暴な暴風に吹き飛ばされ、体を破壊され、故郷を失った。

右翼でも、ドイツ軍と統合軍の陸上部隊とフランス軍とドイツ軍の航空部隊の攻撃で同様の結果となっていた。

戦闘の轟音と火炎が美しい花火のように一瞬輝く。そのたびに、多くのポケモンが命を落とし、家族や友人やきずいた村の全てを失う。

東の空がにわかに明るくなり、徐々におさまっていく戦闘の傷跡が残る硝煙と火災にかすんだ空のさなかを多くの鳥たちが木々から飛び立つ……この戦いで死んだ多くのポケモンの戦士、巻き込まれた多くの集落のもの、無数の女子供、多くの希望、大切なもの、思いがこの世界に永遠の分かれを告げるように…

その頃…ヴェルダー中南部の洞窟

ユイリィは次々に飛び込んでくるはどうだん、タネばくだん、ソニックブーム等のエネルギーや矢を次々に交わし、思念で弾き返してゆく。そしていつも通り周囲の意識が渦巻く宇宙に自分のそれを注ぎ込んだ。黒々と渦巻く霧が広がる空間を外から眺めるように、彼女の思考の中で周囲の状況が彩られ、形作り、彼女の思考の中にそれは流れ込んでいく。

メガニウムは戦いに入り浸る前に前方にいるブイゼルやキノガッサからの意識の流れを分析し経験という秤(はかり)にかけた。
普通のポケモン達とは違う。彼女は直感した。人間の部隊だろうがポケモンの政府組織の部隊だろうが、兵士に…無理やりされたものも含むが…なった者たちは、戦闘中にはまずある程度の不安や恐怖を放っている。もちろんそれらの多くは、表面上闘志や気合いに偽装されているが、だからこそ彼女には手に取る如くそれを認識してしまう。
それが今回違うのだ。奴らの放っているのは恐怖でも喜びでもなん

でもない感情。無という感情である。目的も信念も思いもない。ただの機械である。

……やはり…人間の量産品か……おそらくこの辺りには…ここを守る組織か何かがあって……

……売りつけられたのだろう……だまされて……もしくはこの辺りを領土としている―ＥＵ（ヨーロッパ連合）の警備の一環で……

……それなら…人間たちはこれを知っていたのだろうか……

……今はそんなことは関係ない……

残りの考察は、ユイリィ自身の意識の暗闇から沸き起こる闘争本能に封印された。自分の苦しみを塗りつぶそうとばかりに凶暴な戦闘への歓喜、狂的な撃破への高揚感が彼女の意識の中で黒々と吹き出し飛び散る。

「……そんならっっっ！！！！！！！！！！！」メガニウムは前方にいるキノガッサに飛び掛かる。相手は無表情のままばくれつパンチを次々に打ち出す。彼女は体を横に飛びのかせ、もう一匹きた相手も前をかいくぐり、敵が行くはずであろう場所を瞬時に予想してマジカルリーフを叩きこむ。気づいた２匹のうち跳躍が若干遅れた一匹はエネルギーが胴体を貫き。強靭な腕や足がバラバラになって飛び散った。その飛び散った肉片や血しぶきの間を潜り抜けて、一匹のブイゼルがかなりのスピードで無数のソニックブームとみずのはどうを打ち込んでくる。「みみぃっ?!」ロズリンがエナジボールを大量に打ち出してその半数くらいは打ち抜いた。しかし半数になっても相当の数だ。ユイリィは意識の下で感じ取ったすべてのエネルギーの進行方向を見定め、エネルギーを２，３，４，５，

6，7，8と首を下にもたげながらかいくぐり、４足歩行の体をできる限りひねり、エネルギーの間をジャンプし、リーフブレードを仕掛けようとツルを振り上げる。弾雨をかいくぐった先にいるブイゼルはかまいたちを打ち込む態勢に入った。

双方のエネルギーが双方の体とともに互いをすれ違い、２匹を巻き込んで大爆発を起こした。「うぐうぅっ……はあっ……」メガニウムは首元に多少の傷を受けた。花びらも多少は切れたし出血はしたが、その痛みは戦いという異常な高揚感の前に封殺されている。「まだまだよねっ！！」

彼女は左側から飛び掛かってきた別のブイゼルをツルの一振りでエネルギーを叩き込んだ。いくら体力や判断力が人工臓器やプログラム処理済みの人口脳細胞で強化されたアメリカのＧＢＴＸ社製やイギリスのデパスタ―社製のクローン兵士といえど、実質光速と同じ速度で飛び込んでくる思念を変換した想像を絶するエネルギーにアルゴリズム処理をほどこした判断力とアミノ酸やタンパク質が繊維状となった筋肉の瞬発力が敵わない。あいてはその巨大なエネルギーによって袈裟切り同様に右の肩甲骨から左の腰に掛けて体が真っ二つになり、爆発しながら肉や骨の破片をまき散らす。

「よおしよし……ぎゅうっっ？？！！……」油断した彼女。飛び散った肉片の陰から、先ほど殺し損ねたキノガッサが下からもぐりこむように飛び掛かり、血をまき散らしながらも無事な右手で彼女の腹にマッハパンチをぶち込んだ。

「こんのおっ！！！！！！！！！！！！！！」メガニウムは左側に吹き飛ばされてそのまま倒れそうになったが、右側の２本で何とか持ちこたえてもう一発リーフブレードを打ち込んでやった。「ぐぶっ……」大きくえぐられるように切り込みが入って血が滴っていた相手の傘状の脳天にもう一発切込みが入って鮮血が飛び散る。相

手はなおもフラフラと後ろに下がりながら立て直そうとしたが、彼女の頭の上にいたシェイミのリーフストームで首と胴体がちぎれ、大根おろしにしたように体の上半分は赤い肉の塊になった。

「みみみみいっっつっ！！！！！！！！！！！！！！」「な、なになにこれは?！……くううっっ……」雄蕊に掴まっているロズリンが後ろから飛びついてきたパチリスと掴み合いを演じていた。パチリスが前歯でシェイミの頸動脈を叩き切ろうと飛びつくが、その０．１秒前にシェイミの背中の草はまばゆい光を発する。

「ちょ…ちょま…」２匹のエネルギーで首を左右に振り回されるメガニウムが止める前に、シードフレアが炸裂し、ユイリィは顔面からつまずくように倒れた。

「うううっ……」パチリスの意外なほど強力なパワーにロズリンは徐々に力負けしてゆく。「！！！！！！！」パチリスがシェイミの頭の上からアイアンテールを叩きつけようとした０．２秒前にエネルギーの束がパチリスの尻尾の半分を吹っ飛ばした。

「ふうっ…大丈夫か?」リーヒュンがユイリィの前に倒れたままの首をツルで触って持ち上げた。「うぐぅ……だ、大丈夫。ありがとうね」彼女は前足に力をかけて立ち上がり、首元の花をぶるっと振った。「くっ……」一度は大ダメージを受けてその場に崩れたパチリスがフラフラと立ち上がり、エレキボールを打ち込もうと掌（てのひら）に黄色いエネルギーを注ぎ込む。「させるかっ！?」ベイリーフは奴が打ちだす０．５秒前にとびかかり、爪を相手の首元に突き立て、さらに軍刀を引っこ抜いてパチリスの心臓に突き立てる。パチリスは首の血管をそののしかかりに酷似した圧力で裂かれて、突き倒された格好のまま絶命した。

リーヒュンはそのまま正面から来たキノガッサとブイゼルに向かう。タネばくだんやみずのはどうをユイリィ同様に飛び越え、ひねり、ブイゼルに向かってはっぱカッターを大量に打ち込む。相手は瞬時に上に跳躍して全部かわし、上からハイドロポンプをしかけてくる。後ろから飛び掛かってきたキノガッサのばくれつパンチの腕をリーフブレードで対処していた彼は、もう一発それを打ち込んで一度はキノガッサをぶっ飛ばした。しかし吹き飛ばされながらも宙を打って持ち返した相手が放ったエナジーボールを後ろに飛びのいてかわしたベイリーフは飛び込んできた水圧で地面にたたきつけられる。

「うんぐぇっ……こんのぉっっ！！！！！！！！」ベイリーフは瞬時に飛び上がり、前から飛びかかってきたブイゼルにタネマシンガンを浴びせる。そのエネルギーに相手は上に突き飛ばされながらも後方に宙返りを打って地面に着地した。同時に先ほどのキノガッサと別のパチリスが彼に飛び掛かり、キノガッサがまたしても彼のはっぱカッターを低空から突っ込みながらかわして、パチリスは威力で上方へ吹き飛ばされたが、キノガッサは腹部に潜り込んでマッハパンチをぶち込まれた。

「うんげッ……」ベイリーフはまたしても肋骨の折れるような衝撃で横に倒れそうになる。

「！！！！」キノガッサがとどめを刺そうと何かを突きつけたのは…M４カービン銃だ。ベイリーフの顔もとに鉄の香りを感じるほど近く。

「やらせはっ！！！！！！！！！！……」彼は何とか体勢を保ち、は突きつけられた銃身をツルで掴み、ありったけの意識をツルに集中させた。そのクローンに対する憎悪がツル先に集中し、恐るべきエネルギーがみるみる銃身を押し曲げていく。衝撃を受けたような目をしている相手に対し、ベイリーフの憎悪はツル先からエネルギーと

なって相手の傘状の顔面をぶち抜いた。相手は後方に１０メートルは吹き飛び、洞窟の壁に叩きつけられながら爆発する。「まだいるかっ！！」彼が後ろに飛び退きながらはっぱカッターをぶち込むが、パチリスは上に飛び上がる。その刹那、飛び上がったそいつの体は後方から飛んできたエネルギーにぶち抜かれて爆発した。

「まったく！！そうやって油断すると戦果とられちゃうよ。うん」ユイリィが向こうの方からぴょんと飛び跳ねてきて、リーヒュンの首の葉っぱをツルで軽くたたいた。

「誰がとるんだよ？」「ん？あたし。あはははは！！！」全く…彼女はこういう状況でもそういう性格のようだ。「はあ……まあいいや…とにかくあそこに…」彼がそこまで言いかけた直後……

「うぐぐグッっっ……目標を……駆逐す……」既に尻尾がちぎれ、左手も左足も吹き飛ばされているエテボースがメガニウムに飛びつく。「おいおいっ？！」「こいつさっき倒し……」彼女が驚く前に相手は、この世のものとは思えない断末魔に近いうめき声をあげながら装備品ベルトからＭ９拳銃を引っ張り出す。クローン兵士は外部に向かって機械的な、それが故明らかな殺気を放っていた。ベイリーフは慌てて奴の手を切り落とすべくツルを振り上げるが、すでに相手はホルスターから引っ張り出してトリガーを握っている。意識下のエネルギーをツル先に込めるのに1秒はかかる。

それでは……間に合わない。彼はふと恐ろしいビジョンが意識全体に映像の如く浮かび上がり、意識下の感情はその恐怖に震えあがった。

しかしその直後、銃声とともにメガニウムの花びらのついた首元に飛び付いたエテボースのM9拳銃を握った両手が吹き飛び、続いて胴体を弾丸が打ちぬいた。衝撃波で吹き飛ばされながら相手はさらに無数の弾丸を浴び、5メートルは後方に吹き飛んで爆発した。

びっくりした2匹の前にポケモンが右側の岩場から現れた。1匹は前半分は明るい黄色、後ろ半分はレッドブラウンの奇妙な4足歩行の種族で、最大の特徴は首の長さ、頭には角のような白い突起、尻尾には顔のようなものが口をパクパクしている。瞳はユイリィほど澄んではいないが青色。もう1匹は先ほどまで相手にしていた同じキノガッサ種族。しかしその顔つきはまだまだ子供っぽい。無邪気にというか子供のような無心さでひょこひょこ振れている尻尾と子供のような興味を抱いた表情で2匹を見つめる丸い目。なるほど体格は先ほどまでのクローン兵士よりはるかにがっしりしているが……その表情や動きはまだ10歳くらいだ。さっきから洞窟の様子をきょろきょろと眺めている。

「……大丈夫でしたか？その装備からして……」キリンリキの方が2匹の装備を見てため息をついた。「お互い人間の組織に…まあ悪く言えばこき使われているともいうでしょうね」

「え、ええ…ありがとうございます」ユイリィが2匹を見つめながら言った。彼等もまた無線機や情報発信装置を装着している。おそらくはどこかの国軍、しかも自分たちと同様戦死されてはまずく、相当大事に“運用”されているのだろう。

「そ、それで…あなた方は…どちらの……」リーヒュンは軍刀を装備品ベルトに戻しながらキノガッサの方をちらりと見た。

……このキノガッサから感じるもの……これは…あの…

ベイリーフは怪訝そうな表情を浮かべた。というより出てしまった。
このキノガッサが放つ意識…彼の感じ取ったキノガッサの感情は…
……

先ほど殺したクローン兵士たちと似ている……

ただ少し違うのは…このキノガッサは子供のような純粋無垢な興味を……春の原っぱのようなかわいらしい関心や不思議に対する自然な疑問符を彼に向けている……

ふとベイリーフとキノガッサの目線があった。キノガッサはぴくっと目を動かすと、何かを思い出したかのようにしゃべりだす。
「は、はい…自分は……」まるで女の子様なのんびりした声だ。
「自分は…んと…えーっと…」
「あ、ああ…先に言うから…それに続いてくれ……」「は、はい…名前ですか?例えば私がアメリ…」「そ、まあ…そうだけどな……」
キリンリキがまるで小さい娘に教えるかのような声を出した。
「ああ、すいません。彼女はこういう性格でして。自分は…まあ細かいことは言えませんが…アメリカ軍国防省直属部隊のバルチャー・ハワード・オーソンです」キリンリキが前足を正して言った。おそらく2匹が軍人であることを察知したのだろう。その直後彼は頭部と脚部と胴体から腹部のステンレス製の装甲板を調整して、前足で結んでいるひもを締め直した。こなれた動作からして人間の機器や物の扱い方にはこなれているようだ。やはり人間と関係があるらし

い。

「自分は同じ部隊のルザル・イグラル・コウトウ・イプシロンです……あれ…バルチャーさん…これ…」キノガッサは上の空のように言いながら足元の何かを拾った。ネズミだ。「…これ食べれますか？」

「な……ルザル、食っちゃだめだぞ。だめだめ」キリンリキはキノガッサが持ち上げたネズミを左前脚で落とさせる。その声は、またしてもいう事を聞かない娘を叱るかのような諦めの入ったものだ。

「すいません。彼女がまた…」キリンリキが首を振った。

その直後、洞窟の奥から走る音や声がする。洋弓銃や装備品が触れ合うがさがさという音も。リーヒュンもユイリィも自分たちが来た水路の方から新たに数匹の殺気を感じた。「あなたたちの目標はあっちなんだろ？自分たちもあいつらにやられるわけにはいかない」キリンリキは時空翡翠のある天然の噴水のような場所を右前足で示した。「ここはルザルと2匹で止める。調べるんだったら、早くした方がいいよ」

「で、でも…あなた達の目的は…」ユイリィが先ほどずれた頭部装甲保護板を直して固定し直しながら尋ねた。「今はいい。とにかく早くやったほうがいいな。ルザル、いくぞ」「了解っ」ルザルは先ほどまでとは打って変った冷静な声でＭ１６Ａ４アサルトライフルを掴みとった。2匹はぴょんぴょんととがった岩場や水路を飛び出し、あっという間にいなくなった。

ベイリーフとメガニウムは噴水状の岩場を４本足とツルを使って、噴火口のような吹き出す水を中を覗き込めるうちまで上る。ただでさえよじ登るのは困難なのに、４本足についた装甲板の重さでなお

さら掴まるのが困難だった。「これが…」「うん……」何とか噴火口のような突起の上にまできた2匹は雄蕊と頭の葉っぱをつき合せるようにして水の中を覗いた。

……水が吹き出す小さな噴火口の中はまさしく火山のように黄色い光に包まれていた。その眩しさの中にわずかに見える球体の輪郭……あれが……時空翡翠なのか……

リーヒュンは……そのまばゆい光の中に…宇宙を感じた……そして……フローラ……

ここには…何かが詰まっている。
宇宙が、いやそれを超える世界全てが…
その一部が。

彼の意識の中を…黄色い光が…満たしてゆく……

……誰かが…こちらを見つめて……

……そうか……ここに……いたのか……

今まで……掴めるようでつかめなかった……謎に…不安に……
与えられた答えが…ここにあるのか。

「……なんか見えた？」ユイリィのその言葉を聞く前に彼は野生動物の本能のような衝動に駆られた。他に方法がないように感じた。

妹を救うために……フローラを救い出すために

ツルを水面に突っ込んだ。

「うぐはっ！！！！！！！！！」翡翠に触れとたんに全身を痺れるようなエネルギーが走り、危うく数メートル下の水面に落下しそうになった。メガニウムがツルを何本も出して体を支える。「だ、大丈夫？！これ、これは…」「はあ…いったいどうする？……とにかくもう一回…」「や、やめた方が…」

またしてもベイリーフは水にツルを突っ込んだが、再び激しい衝撃波に襲われ、今度はメガニウムもろとも下に落ちそうになった。

「ど、どうしよう……こんな近くにあるのに…」「ううっ……だけど…だけど…」リーヒュンはもどかしそうに右足の爪で噴水状の岩石をかいた。フローラがここに？がっているかもしれない。ここに答えはあるんだ。いつの間にか確信に変わっていた。メガニウムもうつむきかげんで掴まっている足元の凝結した粘土を爪で削る。何をすればいいかは分かっている。そして必要な能力はある。しかしそうするだけの手段がない。１００％勝てる状態にありながらラケットのないテニスプレーヤーと同様だ。しかし、自分が露骨にその態度を出すわけにはいかない。彼女に何のためらいもなければ、今すぐにでも下に飛び降りて地面から突き出したような噴水状の土の塊を粉砕していただろう。

今の彼女にはそうできない。もどかしいのは自分なんかじゃない。したくてもできないことくらいは分かってる。隣にいる年下のベイリーフ、自分が初めてまともにとりあった友人ともいえる青年が一番早くしたいのだ、と。

「みぃ……」ユイリィの頭の上にいたロズリンがふと水に前足を、そして全身を突っ込んだ。「みみみいっ……」「ちょ、ちょっと?!あんた?」メガニウムがシェイミを引き上げる前にシェイミの背中の葉っぱが輝きだす。

「こ、これは…」「分からないよ……ロズリンとこれも……何か関係が……」2匹は水にほとんど入ってしまったロズリンを驚いた表情で見守った。

「うく…うくくっ…」シェイミの花と草が発する正体不明の光はみるみるうちに大きなって行く。メガニウムはツルをシェイミに当て、彼を取り巻く空間の意識にそっと手を伸ばした。そこで起こっている現在と未来と過去に存在するあまたの意思が紡ぎだすクモの糸、送電線網、地下鉄のネットワーク、生命の脳細胞の構造の如くお互いが関与し構成あう断層線が見える。

……これがこのメガニウムに与えられた賜物だ。あらゆる人間、動物、ポケモン、人間が作り上げたあらゆる物体の意識が、もしくはそこに憑りついた意識の残響がどのように世界に影響しているかもしくは今後するかを手に、いやツルや前足に取るように把握できる。もっとも操作することはできないが。

彼女が空間に伸ばした思考の触手はその断層線を掴んだ。

この水の中にある物体は…意識空間の中ではまるで恒星。宇宙を照らす太陽。

……そして…それに触れる…それのもつ知識を知る術は……

……

「これしかないっ！」意識を自分の脳内に引き戻したユイリィは何のためらいもなくツルに意識を集中させ、水の中の光を放つ球体につっこんだ。「リーヒュン、はやく！」「な…何をだ?!」「この中の物を掴むの！」彼女の言葉にためらいや不安は感じ取れない。掴んだ断層線が迷路の出口であるかのように。

「わ、わかった!!」リーヒュンは自分のツルに意識を投入しこの物体からあふれ出すエネルギーへの恐怖と不安を意識の外へと投げ捨てて（そうしたつもりだった）水の中に突っ込んだ。

ベイリーフの意識に物体から発せられる巨大なエネルギーの津波が襲いかかり、彼を宇宙の外へと吹き飛ばそうとする。意識の中を様々な見たこともない時代の記憶、未来の意思、現在起こるあまたの意思の展開が充満する。険しい人間の表情。赤色の数字に染まるディスプレイ。どこかに罵声を飛ばしながら集結する人。民衆を弾圧する人間。炎上する人間の物体。排出される灰色の気体。大爆発する何かの建物。宇宙空間に輝く爆発炎。人間たちの怒声や苦悩、絶望、諦め。科学技術と経済という自らの生み出した逃れるすべのない怪物に従うしかない……そうでなければ自らも自然も生命も救えないから…

そして……それより恐ろしく苦しいもの……ポケモン達の死骸、その傍らで泣き叫ぶ者、追われるように苦悩を浮かべて草原歩く一向、それに襲いかかる猛獣、廃墟と化した集落……

もう無理だ…これ以上意識は……彼の意識は完全に精神の宇宙に浮かび、押し寄せるエネルギーに振り飛ばされそうになった。

……まだいける！あともう少し！……隣で寄り添うように感じるものは…彼女か？彼女も同じ意識空間に確かに存在するのだ。

……だとしたら……もう少しで……

彼は思考を集中させる。頭の中で濁流と化した戦慄的映像をできるだけ無視し、自分の望む物へと視点を向ける。

……一番知りたい真実へ……

洞窟の中の一角は今や中心の噴火口のような物体から発する青白い光に充満されていた。開けた空間の大半を覆い尽くす水面が光を反射し、天井から下がる無数の凝塊した土の突起物に散らばる鉱石も光を反射し、数少ない乾いた地面に生える発光性植物はその光でさらにまばゆく輝く。

それは…突然に見えた。

宇宙のあらゆるエネルギーの向こうから見えてくる意思……

それは形を持ち……意識も声も……ある。久遠のかなから聞こえる意思はこの世のものとは思えぬ旋律を奏でる。

そして接近するにつれ、その音声も……言葉となる

……あなたは……誰？……さっきから……
……どうして…覗いてくるの？……
……ドウシテココニイルノ？

隣にいる彼女の意識はちょっとした感動に満ちていた。
……そうだよ！これがきっと……
彼も確信した。そう……これが……求めていた……
…探していた。
信じていた…

その光が完全に空間を埋め尽くした時、光のエネルギーは突如衝撃波に代わり、２匹は噴水型の突起物から吹き飛ばされた。

「ううっ……」リーヒュンは何とか立ち上がったが、何十キロも全力で走った後のように吐き気とめまいを覚え、頭から４本足、尻尾に至るすべての関節という関節と筋肉という筋肉が、全ての細胞が悲鳴を上げているかのようにいたんだ。「これは……これは……」
「ふぅっ……いったい今のは何だったんだろうね？あたしは…ってあれ？！」ユイリィが同じような疲弊と悪寒をこらえながら視線を先ほどの場所にやったとたんに凍りついた。「は…まさか…そんな…そんなことが…」
「どうした……そこに…」リーヒュンが首を持ち上げて彼女の表情を見る。メガニウムの表情は、突如目の前が宇宙空間になってしまったような表情を浮かべている。
「……なあ……何が……」「だって…だってさ…あそこに…うん…」彼女のやや上ずった声に彼は感じ取った。

そこにある…物体を………それは恐らく……

………ありえないもの……今の彼にはそこまでしか。

ベイリーフは興味半分恐怖半分で視線を恐る恐る先ほどの位置に向けていく………

「！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」彼はその場で首の葉が凍りついたような衝撃を覚えて全身が固まった。

そこにいたのは………………

頭と首に葉っぱ。カナリアイエローの体。

顔だちも…体格も…どこかリーヒュン・バイリング・グリーズに似て………

違うのは…首の葉の数…その大きさ……そして丸っこい目つき。それぐらい。

なぜここにいるのか、姿を現したのか。その理由に、“彼女”の軌跡をまさぐると…理由は分からないがよく見えない。まるで何も暗がり、真の無のような意識だ。なぜだろうか？

だが今は…それはどうでもいい。奇妙な不安感は…再会の喜びに塗り替えられてしまった。まあ、それが普通なのだろうが。人間だっ

て行方不明になっていた家族と再会したのに、遺伝子検査をして本人であることを証明しろと相手にまくしたてる冷酷な奴はいないだろう。

ベイリーフの目線が衝撃と…感動で…震えた。
望んでいたもの……今まで探してきた存在がそこいる。

それは、かすれた声になって外の空間に表現された。
「……フローラ……ホントか？……そうなんだな……」「……」その相手は、上の空のようだ。その目は全く違うところ…高い天井のつららの如く凝塊した土からから水が滴る洞窟の壁を見透かしているかのようだった。
「そうだろ？な？……フローラ、なんだな」「……」兄は妹がおそらく何かしらの結果で疲れているか、さもなくば意識が完全に戻っていないのだろうと思った。なぜここに現れたのかという根本の理由を考える余裕は、彼の意識の宇宙に入る余地を失っていた。

兄は妹の目線に近づくように、フラフラと妹の方へと向かった。

２０１２年１２月９日　送電線付近　０６００時

「よーしよし…きやがったなあ……」ブレイブは丘のようになった送電線網から１００メートルほど離れた鉄条網の真下に掘った窪地から頭を乗り出し、丘のさらに下を眺める。すでに彼の視力で見えるギリギリの距離、およそ2キロ程遠くにうごめく生物の影が見えた。あれはこの辺りのネズミや野犬ではない。

このブースターの本能がそれを知らせた。

……野郎ども…こんな堂々ときやがって……

ブレイブは鉄条網の内側に戻り、テルルとバストークに視線を向ける。「きやがったぜ連中が。昨日決めたとおりに動きましょうかね隊長」

「それが妥当だな。ピトム、ガキ連中を起こしてやれ」「了解です隊長！」ピトムニクは掘った塹壕の様な窪地を進み、早くも血気盛んなレオと眠気の取れないグリソム、シンシア、ガトルに声をかけた。

「レオ、予定通り頼むわよ」「はいはい分かってるっすよぉ！……おらおらグリソム、ガトル、あと今起きた寝起きの！！早く準備しろっての！」

「だ、誰寝起きって？」ピトムニクが頭部保護板を頭に装着して無線機のマイク部分を調整する。「まーたシンシアの事を…おもちゃじゃないのよ。分かる？」

「だってよ…ったく、とにかくシンシア、さっさと準備しろ」コリンクが苛立ったようにロコンのぶら下げた頭部装甲保護板を頭にむぎゅっと押し付けた。彼女の方は鉄塔で目が覚めてから全く様子が変わっていないようだ。

コリンクは震える前足で軍刀の柄を握った。自分でも恐ろしいほどに意識が高ぶって制御できない。ただ始まるなら早くしろ、そういう感情があふれ出しそうだった。

……なんでこんなにも……何に期待しているんだ俺は？……

……

……へっ……来るならきやがれっ……雑魚どもが

……

「はいはい。無理はしないのよ」ピトムニクが呆れ様なセリフを残してバストークやブレイブがいる場所へと戻った。「レオが…勝手に出なきゃいいんですけど……」「さあな、てか絶対にやらせねえ。スカイラブ、グラシデア、そっちはそっちで頼むぞ」メリープが無線機のマイク部分を前足で口元に近づける。

「もちろんですよ。このくそガキに無茶はさせません」

「分かってるわよ。レオたちは死なせない。バストークこそ無駄に危険に突っ込まないでよ」メリープの無線機を装着した耳に聞こえてくるのは娘の相変わらず皮肉を込めた言い方だ。バストークはため息をついてモフモフの腰辺りに付けている無線機本体のつまみに右後ろ足を伸ばして音量を下げる。

「あのな、もう少しし優しい言い方はできねえのかよ?」「何よ優しいって?」「ううっ…た、たとえばな、こう…もう父親を気遣うとか…」「いつまで期待してるの?」モココの声が鋭くなる。「前にも言いましたよね?ワタシはバストークを父親と認めていませんから。いいわね?」

「はいはい…分かったよ…とにかく死ぬな」メリープは諦めて無線機を切った。

「相変わらず毒舌っすねグラシちゃんは」ブレイブがフサフサ尻尾をピクリと動かした。女子のはなしとなれば、ここが戦場という事を忘れられてしまう。「それはそれでめっちゃかわいい!!なあテルル?」彼は左前脚の装甲板で、テルルの右前足を触る。

「う、うん…はあ?…なんでもいいけどさ…」彼女は私物品の銛を装備品ベルトにつけたひもから取り外して撫でている。完全に上の空だ。ブレイブはため息をつきながらも、普段と全く変わらぬ態度で

グレイシアの頭飾りをこつんとたたいた。「ばーか。最初っから怖がってどうするんだよ?もう2回は経験してるんだろ?」「あのね、あんたみたいなバカじゃないし戦争で慣れなんかあるわけないじゃない?!はあ…ホントにあんたって奴は…」

「だ・か・ら・な、…慣れとかじゃねえんだよ…」ブースターは頭のフサフサをかき回すのと同じくらい手慣れた感じで、爆薬付きの矢を背中の入れ物から引っ張り出して洋弓銃に装着する。「慣れなくてもいい。ただし、いつでも言えることだけどよ、物事をやるときゃ自分のスタイルっつうもんを確立しておくもんだぜ。そうすれば……落ち着いてかかれる」

「わ、…無理かも…がんばるけど」テルルはぶっきらぼうに答えながら頭部装甲保護板をしっかりと答えし直す。そして自分の落ち着ける心境を思いうかべようと努力はしてみたが、周辺に見える鉄塔、前方に見える穏やかな緑と街道、朝の空気すら、周囲にいるブレイブやピトムニクの容姿とアンバランスな雰囲気を感じてとても落ち着く状態ではない。それにこの塹壕のような窪地に身をかがめているせいで、丘陵地帯の下の方での動きが見えない。無線機からは“顔は出すな”としか聞かされていない。

ただ…彼女には…少なくとも一つだけ決まっていることがあった。昨晩ブレイブと話す前からおおよそ決めていたことが。

……絶対に生きて帰る……命だけは……

……そして……できたら……皆も……

さすがはこのブースター、そんな彼女の表情を察して表情が明るくなる。まるで普段話しているような感じだ。「どうだ?……少しは分かったか?」

テルルも少し表情が緩む。「う、うん……私は…」

突如、無数の銃声が響き渡った。ピトムニクとバストークが洋弓銃を構え、一気に窪地のへりから顔を出す。「後方の支援攻撃ですね？！」「無線機は何も言ってねえぞ？！」

「はあ…全くうちの父親はなんでこう…うわわっ？！」「攻撃？！」少し離れた掘った窪地でも、猛烈な銃声と砲声でグラシデアやスカイラブが驚いて後方を見る。「何やってんのよ人間は？！こんな便利な機器を持っておきながら私たちはしかとしてんの？！」ルクシオは忌々しそうに腰に装着した無線機本体を右前足で叩いた。

「うおおおっっ！！きやがったかあ！！！」レオは窪地の縁から顔を出して歓声を上げた。銃撃によって乱れた相手集団の動向を見て縁を前足でガンガン叩く。「ちょっとこのばかっ？！アンタ頭をぶち抜かれたいの？頭下げなさいっ！！」

「うっせええ！！こんままじゃ戦争終わっちまうぞ？！」後ろ足を掴んだスカイラブをコリンクは蹴り倒した。「こんのバカっ？！！あんたって奴は…」コリンクの目線を見たルクシオは凍りついた。

……この表情……

……完全に…憑りつかれている……

下で起こった出来事を見てしまったのだろう。それはとても１５歳には想像できない、いや制御できないものだったに違いない。それに対する感情が興奮になって彼の思考を妨げ始めている。これは極めて危険だ。

「や、野郎ども……」コリンクの声が震える。興奮に、狂喜に。
「いっっくぜえええ!!!!!ついてきやがれえええっっ!!!!!!」
レオは憑りつかれたように洋弓銃を叩き捨てると生身一つで窪地を飛び越した。グリソムやガトルが後ろ足に飛び付いたがそのまま引きずられるように外へと飛び出す。
「おいおいやめろよっ!ったく…どうなってんだこいつ…」「アンタ死にたいの?!」「おっしゃあああ!お前らもついてこい!!いいな!?」

「まったく!!何やってんのよホントにもうっ!!」「私も行く!」グラシデアとスカイラブが転がった洋弓銃を引っ張り上げて縁を飛び出した。

「ブリザード各隊っ!!何をしている?!君たちの攻撃はまだだっ!!」アラスカの司令部から男の声が聞こえる。「見ての通りだよ司令部!だいたいアンタらがまともにそのことを通告してくれりゃ…くそ、向こうのガキどもが興奮しやがったか……なんにあせってんだあのばかが!!俺たちも援護に加わるからな!!」バストークが無線機に向かって喚いた。「ピトム、お前らの2匹も行くぜ!!」
「わっかりましたあっ!!」ピトムニクが洋弓銃を掴んで飛び出す。

「聞こえてるな部隊の諸君。管制機のアンタレスだ……君たちの新入りが勝手に飛び出したのは察知している。援護してやってくれ」
「バージア以来ですね!それで敵はどの位だあ?」無線機から聞こえた久しぶりの管制官の声にバストークが尋ねる。「敵は2個中隊。後方で統合陸軍が制圧射撃をしている。楽勝だろう?」

「問題ねえな!おっし、お前ら2匹もついてこいよっ!あれだけの部隊はな、お前らも両手でやらないとあかんぞ。どーんと行こうや

どーんとっ！！」メリープは頭部装甲保護板を左前脚でガンと殴り飛ばすと、一気に飛び出した。
「俺らも行くぜ両手で、テルル！」「う…うん！！！」ブースターの言葉にテルルも銛を引っ掴んだ。

０１００時　洞窟の中

しかし…メガニウムは、新しく出現した妹の方から…全てを凍結させるような冷気を覚えた。

彼女がまさぐった宇宙というフィルター越しにここを覗くと…あの妹は…

完全な無。意識の世界でのブラックホール。すべての消滅へとつながる空間だった。

善も悪もない。完璧な消失へと結ぶもの…事象の地平面（イベントホライゾン）だ……
感情すらない……

そこに彼がむかったら、そしてそこに意識を触れたら何が起こるか……

恐怖というものが意識の下から行き場をなくした地下水のように吹

き出す。
彼女は足元が溶けてゆくようなたまらない悪寒を覚えた。それを何とか押しとどめ、メガニウムは意識下でそこで起こる動向と結果を秤にかけた……

良いはずがない！！！！！！

ユイリィは飛び出した。引き離さなくては、２匹を。
「リーヒュンだめだよっ！！！それはっ！！」

兄は妹の目を覗き込んだ。何年も前に最後に見てから…たとえ進化をしていようとも、あの時のままで止まっている。目が。変わっていない。やはり…
「フローラ…覚えているか？…兄ちゃんを…」兄は妹の頭にツルをそっとあてた。
　彼女はほんの少しだけ遅かったようだ。兄は妹の意識に思考の触手を……すでに触れていた。
その違和感に自身が気付いた時にはすでに手遅れだった。

２つの意識の流れが一つになる…だが…妹のそれによって…色を失う。
光は果てしないエネルギーを闇にそそぎ、暗がりは加速度的に空間に広がり、飛び散った。

この妹がどうしてここに現れたのか。２匹は同時にその恐るべき理由を感じ取った。

妹目線が狂気に変わり、凄まじいエネルギーを周囲にまき散らした。
「こっのおおおおおおおおおおおおおおぉ！」そのエネルギーは現実空間で猛烈な衝撃波となり、２匹は洞窟の両端近くまで叩き飛ばされる。

リーヒュンは戦慄を覚えながらも頭の霧を振り払った。まだあきらめてはいない。今のはおそらく、何かの間違いだ。おそらくフローラは気が動転して……ちゃんと目線を合わせればわかって…

妹はこちらを発見するなり水路を猛スピードで飛び掛かってくる。兄は凶暴に飛び掛かってくるその意識に思わず身構え、洋弓銃を引っ張り出しながらも声を上げた。「フローラ！！そうなんだろ？！？な、なあ！！？」
だがその声は、妹のフローラ・エルピー・リトリム・グリーズの意識には届かない、彼女の意識は既に別物、いや置き換わった別物などない。何もなくなっているようだ。全ての声も思念も感情も彼女の放つ無への吸引力の前に集められ、はぎとられ、素粒子レベルに分解され、時間そのものが制止してしまったかのように凍りついた。

猛烈な憎悪をまとった思念が突進してくると感じた時には、妹のベイリーフの突撃は今の彼の洞察力と判断力を超えるスピードとなっていた。

激しい衝撃、そしてすべてを飲み込むような凍りついたようなフローラの意識が彼の意識と猛スピードで衝突するとともにリーヒュンは斜め後方上の壁へとたたき飛ばされる。その刹那、彼の意識空間に強烈な悪寒と吐き気を催す物が通過した感じがした。同時に彼の意識下をを走るのは、今目の前にいた妹の変容に対する驚きと動揺

が大量に。瞬時にそれを理解してしまった。

……そうか…つまり……

……何かによって…変わってしまったんだな……

……その何かとはなんだ?……

……やはり…今まで見えた…フローラの……

兄は壁に叩きつけられ一瞬意識がぐらつく中、次に何をすべきなのかを必死に探した。意識の中で妹がどうなっているのかに意識を集中させる。

だが…どうしても見えない。彼女の意識下に…感情に何があるのかさっぱり感じ取られない。

……俺はどうすればいい?どうすればあいつを止められる?!

ふと現実空間の中に、再びあの冷気の嵐が近づいてくるのを感じた。さっきと同じだ…相手は自分のあらゆる精神を自分の持つ無限の暗い無の中に封印しようとしている。

その意識が発する負のエネルギーの中である考えに行きついた。自分の宿命…まさしく前に言われた宿命がこれであるかもしれないと。

サクラの言っていたことは…紛れもないこれなのだと。

……これしか…ないのか?!…もう逃げようが……

……だったらっ!

ベイリーフは頭の霧を振り払って半分宙返りを打って４本足の爪を

壁に食い込ませた。後ろ足を蹴りだして一気に下へと飛び掛かり、下から迫る限りなく暗い地平面にツルを振り上げた。

「こっの?!」ユイリィもフローラの後方から飛び掛かってツルを振り上げたが、そのエネルギーが彼女の腰にあたる部分を焼き切る0．1秒前に、彼女がわずかに意識をかけただけで巨大なエネルギーの防壁がメガニウムのエネルギーを楽々と偏光した。彼女は目に見えぬ反力で吹き飛ばされ、地面にたたきつけられる直前に何とか着地したが、妹ベイリーフはすでに上に飛び上がって兄を叩き飛ばそうとツルを振り上げていた。「ううんっ……なんて…」

彼女は何をすべきか必死に思考をめぐらす。相手の意識の暗闇と凍えるような冷気に失神しそうになりながらも、彼女は妹を追うように前に飛び出しながら彼女のエネルギーに掴みかかる一点を探そうと焦燥にかられた。

動き出す世界（後書き）

やっとこさ戦闘が始まった…

ううん…ストーリー展開のめどがたたん…

避けられぬ交錯（前書き）

さてさて…妹が初登場して…どうなることやら…

避けられぬ交錯

3匹の戦闘は完全に行き詰っていた、というよりもフローラが2匹を終始完全に翻弄していた。彼女は双方が接近してくるたびにたやすく吹き飛ばし、全てのわざをいともたやすく偏光し、2匹の思念の触手が彼女の意識に迫る度にたやすくそれを掴んで自分の暗い、すべてが無となっている意識の事象地平面にあざ笑うかのように引きずり込もうとする。

「こっの?!」兄は壁から飛び掛かり、後ろに回り込んで中を打ちながらリーフブレードをツルで振り上げた。もう一本のツルでフローラの放ったエネルギーを打ち飛ばす。彼女のエネルギーは相当の物だ。その運動エネルギーが彼を何度も吹き飛ばしそうになったのもそうだが、第一にあの冷たい冷気のようなものが彼の意識空間にひびを入れ、意志や思考を凍りつかせようとする。

「うう…だけどっ…」兄は何とか後ろに回り込んで着地し、すぐに前へと、妹の首元に向かって飛び掛かった。「あったれええっ!」だが妹は一発目のツルにこもった草のエネルギーを後方に飛び下がり、間髪入れずに兄に飛び掛かった。通常ののしかかりではない。爪先に明らかな殺意が浮かんでいるように兄の意識に寒気が襲った。彼がそれで一瞬ひるんだ0．1秒の間に妹は兄の背中から首元に爪を引き立てた。

「うげえっっ…ううんっ!…」痛み異常に恐るべき冷気に全身が凍りつくような衝撃がリーヒュンを、フローラの兄を襲う。彼は何とかもう一本のツルでブレードを彼女の腹にぶち込んだ。

だがその瞬間、恐るべき悪寒と突き刺すような冷気の衝撃が兄を襲う。

……フローラ……どうしたんだ？……なぜ？！……兄には妹に襲いかかっている事態がなんなのかを知る術がない。ただここに、彼女に恐ろしい負のエネルギーがこもっていることだけは分かった。

「うぎゅぎゅるるっ！！！！！！」妹が獣のようなうめきをあげて兄に切りかかった。彼はかろうじて体をひねったが頭部から葉っぱの生えた首元にかけて強大なエネルギーの刃が皮膚を深々と叩き切り、鮮血が飛び散る。同時に凍結するような、南極のブリザードの様な冷気が骨の心までに達した。兄の意識がそれによって凍りついたように止まりかける。

……やめろ…止めるんだ…

……フローラ……だから……

だが、その悲痛な思いは届くはずの妹の表情に何の効果も与えなかった。妹のツルの一振りがもたらした強大なエネルギーは兄を洞窟の岩石にまで食い込むほどに頭からたたきつけた。

リーヒュンの全身はずるずるとその場に崩れ落ち、彼の意識は…霧に覆い尽くされた。

「あっ！？……」もう一匹は飛びかかりながらそれを見た。大切な…かけがえのない…仲間が…彼女の意識を恐るべき怒りが充満する。

「くっ！…何のつもりよアンタはっ？！」ユイリィは妹ベイリーフの後方から掴みかかるように前足で彼女の短いしっぽを飛び付こうとする。妹の足元からツタが三菱重工製Ｈ－２Ｂロケットの発射炎

よろしく吹き上がったが、彼女はやすやすと上に飛び上がって空中で宙を打った。「うんぐっっ！ぐるぅっ！…」フローラはアフリカのサバンナ気候帯に棲む野生の雌ライオンの様な飢えたうめき声に似た声を上げてツルを何回も降り、何発もエネルギーを飛ばした。ぞっとするような危険な感情がこもる冷気の矢がメガニウムの体と意識を無数に通過して、途方もない運動量が正負の電化の反発力のように彼女の体を地面にたたきつける。

だが、それによる傷も、頭部を強打したことによる出血も、意識を吸い取るような憎悪のエネルギーも彼女をあきらめさせる理由にならなかった。それどころか、その暗い流れに共鳴すかのように彼女の意識から黒い意識の触手を何本もフローラに向かって突き刺さろうとした。

ユイリィの意志の中を……狂的な本能にも似た快感が空間を塗りつぶすかのように飛び散り、着火剤のように炎上する。もう制御のしようがなかった。あとはその流れに従うように戦いの中へと吸い込まれていくだけ。

「こっの…@‥；・‥@「‥；…！？」メガニウムはだめ押しに飛んできた異様なエネルギーを持ったはっぱカッターの弾丸をツルを一振りして爆砕し、一瞥した妹に上から飛び掛かった。

相手はツル先から飛び出したエネルギーを右横に飛びのき、何発もかわし、お返しとばかりに同様の物を打ち込んでくる。２匹の間をエネルギーが飛び交い、周囲の地形や水面を一変させる。上下から左右からその土や結晶化した鉱石がお互いの思念によって掴まれてお互いに向かって飛び交い、それは２匹の飛び上がる足場となり、互いのわざや意識のエネルギーを跳ね返す束の間の盾となり、お互いの脚や首の骨をたたき折ろうとする鉄槌となる。周囲に人間やほかのポケモンや動物がいたら、逃げ出すかそうしようと動く前に盾として洞窟の中に飛び散るかのいずれかだ。２匹の意識空間とその

触手が織りなす空間内では、すべての物体も細胞の運動も原子核内の電子の公転もすべて2匹の流れだった。そんな中をメガニウムは少しずつ意識を自分の触手で回り込み、その流れをどうにか掴み始めた。

そしてそれを、自分の望む方向へと導く努力をし始める。

……そうそう…そのまま…いい子いい子ね……

彼女は意識下では鼻で笑っていた。狂的な戦闘本能がそうさせたのかもしれない。

ユイリィは意識空間が織りなす運命にほんの少しだけ逆らった。それには中々エネルギーがいる。

マジカルリーフでフローラを少し高台になった一角まで追い込む。彼女が嘲笑らしき表情を浮かべて大量の葉っぱを飛びかけようとした0．1秒前にメガニウムはツルでエネルギーを打ちだした。しかし、フローラではなく根元の岩石に。その部分が飛び散り、高台状になった全体が岩の壁が崩れる如く前に向かって吹き飛び、妹ベイリーフも予想外の現象に反応する間もなくその土くれと岩石と一緒に地面に叩きつけられる。その嵐から飛び下がり、メガニウムは先ほどから受けまくった岩石の拳やエネルギーの矢でできた傷跡をツルで触った。

「ふん……その程度で……」彼女は意識を徐々に自分の空間へと戻す。その途中に消しきれない飛び散った狂的な本能が彼女の口を凶暴に動かした。「…勝てると思った？このゴミ」

突如岩石が無数の凶暴な鉄槌となって前から襲いかかった。「なっなん…？！？！」ユイリィは見えるがままにそれをツルで打ち払ったがそのスピードと動きには狂気があった。最後は体を左に振ってかわした直後に正面から来たものが頭を直撃し、よろめいた0．2秒後には首と顔面に何発も当って彼女は後方に吹き飛ばされる。「うんわ…あううっ…」

「うわわっ？！」彼女の頭から飛び落ちたロズリンにも大量の憎悪が襲いかかる。「早くっ？！」どうにか頭の霧を振り払って立ち上がったメガニウムがこのシェイミを助けに飛び上がるには、時間が少々なさすぎる。彼女は恐怖に震えた。

しかしその刹那、ロズリンから奇妙なエネルギーの流れが彼とメガニウムの周りを埋め尽くし、飛び込んできた憎悪の塊を粉砕した。「ぐうううるるぅぅっっ！！！！！！！！」狂的なうめき声をあげてなおも飛び掛かる妹ベイリーフを、シェイミのもう一発がその体を前転を打つように後ろ上方へと吹き飛ばして水路へとたたき落とす。

「……シードフレア……」「お前の助けはまだまだ…でしゅね」驚くユイリィの表情を見るなりロズリンはにやりとした。

「…ミーに感謝してましゅか？」シェイミがメガニウムの足元のそばにやってきた。その表情はますます得意げだ。メガニウムはほっぺを膨らませる。「感謝？…何それ？さっきのは…」

「うぐぐぐるるっ…ぐるるっ…きゅいいいっ……こっの……この…」フローラは水面から飛び上がりびしゃびしゃと水滴をしたたらせながらなおも迫ろうとする。

その直後、もう一つ別の意識がこの妹に飛び掛かった。「リーヒュン…やっとお目覚め？」どうやら意識が戻ったらしい。まだ十分に頭の霧は取れていないようだが。

「そっこかあっ？！」リーヒュンは思念を超えたツルで、少々先ほどのショックでふらつきながらも横から飛び掛かり、フローラの葉っぱの生えた首元を叩いて水面へと水面にたたき落とす。「はあ…はあ…こん位なら…そうだな」兄は先ほど受けた出欠の激しい傷の葉っぱ付近を押さえた。「……うぅっ…でも、このバカは…どうして襲うんだ？」

「分からないよ…なんでだろうね…？」ユイリィがリーヒュンの首もとの傷口を押さえながら水面に落ちた方を見る。このベイリーフの傷跡の痛みが少し遠ざかった感じがした。「……もしかしたら…あの妹は…」「それは…どういう…？」彼も彼女もそれ以上に意識を今の出来事に寄せることはできなかった。

「うぎゅっわあああああっっ！！！！！！……」フローラが水面から飛び上がり、２匹を吹き飛ばそうとツルを振り上げる。「ま、まだ？」「フローラっ！なんでお前は…？！」２匹の意識の中を鋭い氷のようなものが襲う。それはやはり彼女から…

……それならっ！兄は即時に思い付いた。フローラに対してしてみたいこと……

彼女の真実を、正体を、何かを確かめるために。

それを冷静に…意識の宇宙の中でどのように作用するかを秤に（まあもともと彼の秤はおおざっぱにしか判定できないが）かけている余裕もなければ、かけるつもりもなかった。自信はともかくやってみれば何とかなると思う。リーヒュン・バイリング・グリーズっぽい判断だ。

「ええいっ！？」「ちょ、ちょまっ…」ユイリィが止めにかかる前に兄ベイリーフは妹に飛び掛かってツルを振り上げた。意識のできる限りをフローラに集中させながら４本足でぐいぐいと土を噛み、速度を上げる。彼女の放つ負のエネルギーが怒涛の如く彼の意識を貫くが、なんとかそれを振り払って妹に飛び掛かった。

「やめろっおおおおおおおおおおっ！」
「うぐぐぐううううっ！」

「もうっ！君って子はっ！」ユイリィも諦めたように後方からフローラめがけて飛び掛かる。全く、彼はどこまでも意識の流れを考えずに突っ込むのね。それはそれでいいんだけど。

２匹のベイリーフが、兄妹が、お互いの意識が巨大なエネルギーの激突と共にお互いの思考の触手を繋ぎ、ぶつかり、邂逅した。

……お兄ちゃん……兄の意識の霧の中で妹の声が聞こえる……

……フローラ……どうしたんだ……妹の温もりが……感じられる。

その刹那に黒い意識の、いや世界の意志の流れがその温もりも感覚も吹き飛ばした。

無限に広がるように兄の意識空間をおぞましい映像が焼きつく。海に浮かぶポケモン達の死骸。やぐらのようなものが付いた人間の船舶…その上を通り過ぎる黒い鳥のような塊…やはり人間の飛行機というものか…？

真っ暗な…あの青く輝く球体へと向けて……何か人間の機械のようなものが漂う。

悪寒が走るが…ここで諦めるわけには…ここで負けるわけには…この世界に…

兄ベイリーフはポケモン達の死骸が映る意識の霧を振り払った。

そしてそれを掴む…思考の片隅に…妹の意識の方向から振り払う…

頭の内側から爆発するような締め付けられるような痛みが走る……

どのように自分が操作しているか、全く認識できない。ただ…強烈な違和感と苦しみにもかかわらず…それを意識から遠ざけた。

……何してるのお兄ちゃん……そんなことしたら……妹の声がはるかかなたから、先ほどより幾分か遠ざかったように感じる……

……そんなことしたら…どうなるんだ…？？兄は必死で意識の

つながりに集中する。

……死んじゃうよ…だから…私を…妹の声が霧の彼方に消えるように薄らぐ…

……どうするんだ?!…お前をどうするんだ?!……

……たす……るの……すべてが…その黒い空間に、彼女が放つ自身の闇に混ざりこんでゆく……

あたりで大爆発が起きた。

ユイリィほっぺを小さい手か前脚かが叩くぺちぺちとした感覚が走る。まあよく考えれば、この状況でぺたぺたした叩き方をするのは一匹しかいないが。

「ちょ、ちょ…生きてましゅか?それとも死んでましゅか?」彼女の予想はこの甲高い子供の声と露骨な表現で確信に変わった。間違いない。この声の正体はまさしく…

「ううう…?……」ユイリィは全身節々にうずく痛みを、意識の宇宙の全周囲から圧縮されるような感覚で受け止めながら目を開ける。彼女の目線の先にいるのは、白い体に背中には草、耳元に

はピンク色の花。あの（一応）男（オス）のシェイミ、ロズリン・サスペンディッドである。このシェイミは彼女が目を開くなりバカにしたような表情をして「お前寝相が悪いでしゅね」と言う。

「えっ？！またそんなことを。ねえ、あんたは…って今あたしは？！」彼女はびっくりしたように飛び起きようとするが、足元が回転しているかのようなめまい、いや足元が溶けて無限の地底へ落下してゆくような感覚に襲われまっすぐに立てない。前後左右に貧血を起こした時と同様にふらつきながら彼女は何とか首を下げて血液が十分に脳に回るようにし、意識の霧を振り払った。何が起こったのかを必死に思い出す。思考という意識下の触手を、自分の意識とそれが通り抜けた時間にめぐらせる。

……2匹のベイリーフが……あたしは後ろから……

……それで……爆発が……それで…そして…？…

……そっか……時空翡翠はどうなったのかな……？

メガニウムは首と花びらをぶるぶるっと震わせて霧の最後の断片を意識から引き離すと、先ほど噴水状の構造になっていたあたりを見やる。しかしそこには何もなかった。地盤沈下を起こしたように先ほどのあたりは水に浸り、水が引き出していた凝塊した鉱石と粘土からなる美しい彫刻のようなものが彫られていた構造は地獄の窯のように砕け散っており、土台だけとなった構造物のから水が流れ出していた。破片も土台も水にほとんど浸った状態だ。

……そして…翡翠の太陽のような光も喪われていた。あたりには発光性植物とその光を洞窟中に多数の点々と露出している鉱石や結晶が反射した光しかない洞窟らしい薄暗さと、水が滴る音が広い洞窟と妙に高い天井に反響する（ともすれば不気味な）静寂のみである。同時に、前に感じた水晶の周りを覆う防衛本能のような意

識も感じられなくなっていた。

「うん。今なら水晶もとれ……」ユイリィは先ほどの場所へ行こうとして前足と後ろ足を2回ずつ前に進めてぴたりと止まる。視線の先にある“何か”を見て彼女の心臓は凍りついたようになった。

「リーヒュン?!そうそう、そうだよね?!」彼女は慌てて水面の方へと向かう。リーヒュンは先ほどまで翡翠のあった付近で水に入ったままの状態で気絶していた。彼の首より上の頭部は完全に水に突っ込んだまま、胴体の右側を上にして倒れている状態で、水面より上に露出しているのは首元の葉っぱと腹の部分の一部だけだ。

「ねえ!ねえ?!大丈夫?!」メガニウムは水にザブンと飛び込む。足から胴体の半分くらいまで使ってしまうくらいの深さだった。彼女はそんなことはお構いなしで進み、彼の頭部をツルと前足を使って水面下へと抱きかかえるように持ち上げる。「しんじゃ…死んじゃだめだよ!」彼女の感情の中にある種の不安が駆け巡る。もし…もし…この状態だったとしたら……

だが、そんなことはさせない。絶対にさせない。ユイリィは意識が作り出す空間の流れに意識を合わせ、ぐったりとした彼の体の状態に思いを寄せた。彼の血管を、神経を、臓器を、呼吸器を、彼女の思考が光速に近い速度で駆け巡る。

ややあって、厳しかったメガニウムの表情がわずかに緩んだ。彼は意識を失っているだけだ。ただし、その意識の空間の中ではまだ妹の事を追いかけているようだったが。

それから頭の虫食い葉っぱをツルで脇へ押しやり、ベイリーフの口元に自分のツルを近づけた。「リーヒュン…リーヒュン?!」

「うっ…うぐっ…うええっ…」リーヒュンがわずかに声を上げた。ただし、そのうめきは気管支に綿をつめられたように引っ掛かりが

ちで苦しそうだ。「えっ？うん？大丈夫？！」ユイリィはツル先に意識を再び集中させた。

……そっか……やっぱり…彼の肺には大量の水が入り込んでいるようだ。

「そうだね！すぐ楽になるから！」メガニウムはそうは言ったものの、どうすればいいかは今ひとつわからなかった。どうすればベイリーフの肺の中にある水を出せるか？

焦りの中で答えは意外とあっさり浮かんだ。何がそうさせたか？

「う、うーん…？？？…そっか！！ちょっと待ってね！」ユイリィは彼のおなか周りにツルを４本ほど巻きつけると、彼の頭と首を水面へと向け、でぷんとした（まあベイリーフやメガニウムは種族的にそういう体型だが）お腹のツルに思いっきり力をかけた。

「うぼえっっ？！？！おべべべげっ…げぼっ？！！」リーヒュンの口から唾液や体液交じりの水路の水が逆流した下水管のように吐き出された。彼の意識の霧が急激に吹き飛ぶ。

「ううっ…こ、ここは…？」「だ、大丈夫？！よかったあ～……」

「ぶはあ…ごめんな…」リーヒュンは体をぶるっと震わせ、ユイリィのツルと前足を振り払う。「大丈夫？…自力でＯＫ？」彼女は心配そうな声を上げる。先ほどまでの彼から感じる感覚としてこのベイリーフの体力が十分残っているとは到底思えない。「……うん…何とかいけそうだ…ごめんな」リーヒュンは一瞬よろめきながらも何とか水路上に自力で起き上がった。長い間水につかっていたらしく、４本足の間隔が水でふやけたようだ。「それより…フローラは…フローラ…」ベイリーフは一気に水の中を進もうとして前に

つんのめりそうになった。体がまだいう事を聞かない。歩こうとするたび、周辺の景色が回っているかのようにぐらついて見える。

「ま、まだ動かないほうがいいよ！…いや…どこにも…」メガニウムが彼をツルを使って支えながら、周辺の空間に意識の触手を伸ばして探る。先ほどまで感じた…凍りつくような冷たさ…底なしに感じる意識を吸い込んでゆく暗い重力は…もう感じない。

フローラは…居なくなってしまった、いや…消えてしまったのかもしれない。

……しかし…兄にとって……その事実は見えているはずだ……どれだけ…

……つらい事実か……

「……もういないみたい……」彼女は消え入りそうな声で漏らした。

彼女はツルで支えられているベイリーフをちらっと見る。目の前で…家族がみんな死んだような表情をしている。おそらく…同じようなものを感じ取ったのだろうか。

「フローラ……」彼は水面を死んだように見つめた。「なぜだ…どうしたんだよ？」

メガニウムの意識の中でいきなり巨大な罪悪感が広がる。それはインフレーションを起こした初期宇宙の如く膨張し、負の感情という原子をまき散らし、彼女の意識空間を突き破るように暴れんまわった。

自分の無力さ。弱さ。それは取り留めもなく彼女の骨を冷気として貫く。自分の存在が…いかに…周囲から期待されようとも…

「……ごめんね」ユイリィが呟いた。「あたし…何もできなかった…あたしの能力なんて…所詮はこの程度でしか…」「君のせいじゃない」リーヒュンがツルを彼女の首の花に当てる。「俺だって…止めるどころか…あいつの正体を知ることすらできなかったんだ。……何もかも…フローラの兄貴であるくせに…」彼の意識の中に先程の感触、フローラ・エルピー・グリーズのものらしきそれが思い出される。

……何年も前の夏。自分の妹の意識は（当時はどうしてそう感じられるか分からなかったが）こんな風には感じられなかった。……ユイリィ同じような…酸っぱくはじけた夏色……しかし今…フローラの……あの暗く恐ろしいあれは……

兄のベイリーフの意識下で苦悩が渦巻く。フローラに、妹に、近寄れない……

「どうする…」兄は意識下の渦を振り払おうと首の葉っぱを震わせる。

「リーヒュン……帰ろっか……」ユイリィが彼の前足を彼女の前足で握る。「今から探しても…今度は果てしないことになっちゃうよ…それに、少しは分かった……フローラの事……」

「そう…そうだな…もういい……」リーヒュンはもう意識空間を考えることもできないほど意識がふらついていた。またしても全身の

疲れが体内も意識下も覆い尽くしている。

「そう…そうだよね…ん？」ユイリィが足元の水中で輝くものをツルで引っ張り上げる。その黄色っぽい光をわずかに放つ球体は…

「これって……」「時空翡翠……か？」

2匹はしばしそれを見つめた。そして…同時に2匹の意識空間の中を、意識が多数浮かぶ宇宙の中をある物が漂う。
それは…ほんのり暖かい小さな夏空を中に含んだ水の玉のようなものだった。これは……

……フローラ……そうだったのか……

「……これはリーヒュンが持っていたほうがいいよ」ユイリィはひもで胴体に回していた水入れの容器を開けると、その黄色い小さな球体を中に入れてそれを水面下に沈めて周囲の水を入れた。
「だってこれはフローラの……意識が入っているのかもしれないんだよ……もしかしたら…これがフローラへと？がっているかもしれない…」

「……そうだな…」リーヒュンは恐る恐るその容器をもらい、首にそれをかけた。

不思議な温もりが彼の全身を包んでいく。それは…あの夏…新しい妹と出会ったあの時…

……チコリータだったフローラをツルで抱きしめた時のあの暖かさだった……

「大丈夫か?!」ふと2匹の背後で声がする。先ほどであったキリンリキとキノガッサ。名前はバルチャーとルザルと言ったはずだ。

「すごーい…さっきと全然変わりましたね…」ルザルがあちこちに破壊の跡をとどめる洞窟を見回して子供っぽい声を上げる。

「いや…そんな悠長な話じゃ…まあいいか…」バルチャーは周囲の光景を見渡して少し考える。この2匹が…本当にここまで壊したか?それとも…このキリンリキの経験から言って…人間の不発弾か地雷でもあったのだろうか?事前の調査と通達では、ここは昔から開発は行われていないはずだ。

彼は長めの首を振ってその思考を打ち払った。「では…戻りますか?出口までは僕たちが案内します」

エメリア陸地群　ハイドル　ロアクーン地区　１６００時

「全く…あいつらは勝手に飛び出してって……何匹か行方不明だと?大半は俺たちが殲滅したのに何やってんだか」送電線のすぐ近

く、送電網の自動防衛システムの隣から支援射撃を行ったＭ２４０重機関銃の兵士の１人がため息をついた。

周辺にいる４０ミリ擲弾砲を装備したＭ１１２６や送電網の基部に仮設した場所で支援射撃を行ったＭ２４０重機関銃の部隊は既に射撃を終了している。既に肉眼でも熱源索敵でも敵性のポケモンはいない。最後の支援射撃を行ったアメリカ陸軍エメリア打撃軍第１師団所属の戦闘ヘリコプターＡＨ－６４Ｄが行ったＡＮ／ＡＰＧ－７８レーダーを用いた索敵でも、信号を確認できないポケモン、ひいては敵性のものはいなかった。今回の戦いに参加するロアクーン地区をはじめとするヴェルダー州南部やオージアン州南部の集落の部隊、およびＧＢＴＸ社のクローン兵士たちには一応ＩＦＦ（敵味方識別装置）のセンサーを配ってある。まあ彼らの事だから、渡してないものが勝手に増援に加わったり、面倒がって体のどこか（頭部装甲板や装備品でもいいが）に装着せずにやってきた奴もいるかもしれない。それに戦闘の舞台となった集落からは参加していないはずなので、非軍属のポケモン達は認識できていない。

しかし、前線にも各国及び国連の司令部にもそれを気にする空気はなかった。別に彼らは人間でもなければ絶滅を防ぐ必要のある動物でもない。ジュネーブ条約にもレッドデータブック（絶滅に瀕した動物とその絶滅の危険性のランク付けをしている）も関係ないのだ。

この文明生物が戦争に絡むときは、集落の危険性を煽って実質自警団に等しい戦士たちを集め、相手方とぶつけ合わせればいい。こうすれば人間側の軍隊が、直接非道なほどのワンサイド・ゲームを展開する必要も、それを行う兵士たちの精神が侵されることも、彼らの巧妙な罠で人員や兵器に思わぬ被害を出す必要もない。後方か

ら援護射撃をすれば作戦は成功するのであって、軍事会社にも国軍にとってもこれほど楽な仕事はない。その分、民族間や領土やエネルギーを巡る争いが深刻な人間同士の紛争…例えば中東、アフリカ、東アジア、東欧…への戦力投入に重点を置ける。軍事会社にとってもエメリアの様な比較的争いが穏健な場所で元手を取り、中東や東欧でさらに利潤の確保をもくろむという少ない経営リスク体勢を作れる。

「今日これ以上の戦闘はなさそうだな。各部隊は通達通り分担して生存者の捜索と負傷した者の回収に当たってくれ」アラスカの統合軍前線司令部からの通達が送電線の後ろに展開している統合陸軍ハイドル派遣師団第３大隊第５、第６中隊の戦闘指揮車両から各員の無線機へ通達が下りた。

「了解しました。しかし…日没までまだ時間があります。明るいうちはまだ奇襲をかけてくる可能性も０ではありません、念のため一部の部隊は周辺の警戒を告げたほうがよいでしょう…」ある小隊本部のＭ１１２６に乗る少尉が声をかける。「そうだな…まだ、時間はある…」合同本部のオペレーターは少し考える。「うむ…各小隊は任意に警戒を取りつつ捜索を行え。異常があったらすぐ伝えろ」

「了解」歩兵を乗せたＭ１１２６装甲車や偵察小隊のＭ９９８装甲車が送電線のある丘陵地帯から先ほどまで戦闘が繰り広げられていた集落の中へと降りて行った。Ｍ２４０機関銃を担当していた兵士たちもＭ１６Ａ４アサルトライフルを握ってＭ９９８装甲車にのり、捜索へと向かう。

ＵＮＦＳＴＰＰＴの管制を担当していた管制機のＥ－７６７“アンタレス”も、機体をバージア・エドワーズ市のポート・エドワーズ空港に隣接するポート・エドワーズ空軍基地へと機首を向ける。オペレーター達はため息をついた。自分たちの本業は空中管制のはず

だが、この1月以上のうち2回の実戦双方ともに彼らと関わることになっている。統合空軍エメリア方面司令部は、いや統合軍司令部は何を考えているのだろうか？

「うえぇっ……体力全部外に出した、て感じだな……」グリソムが3匹分の頭部装甲保護板をかつぎながら漏らす。このミズゴロウのみならずみんなそうなのだろうが、最初にいた送電線のある丘陵地帯までの緩やかな長い坂道が登山鉄道の急こう配のように感じられた。「そうよねえ…全力でやるっていうのはこういう物なのかなあ…」ガトルも3匹分の洋弓銃をかつぎながら、疲れ切った声を出した。足取りが速まらない…

「うーん…でもみんな今日は頑張ったよ。うん。持とうか全部？」

「す、すいません…ありがとうございます」「…お願いします」グラシデアがガトルから、まず洋弓銃をもらってひもを肩からかける。

「ラブさん。皆の装備品も…」「そうね。渡して渡して」スカイラブがグリソムから頭部装甲保護板をもらって首から胴体にひもで回した。

「本当にすいません……なんか疲れた表情が出ちゃってますか？」

「そうねえ…皆そんなもんだよ」グラシデアがパチリスの頭を軽くなでた。「そう、ですか…私は…いやグリソムやシンシアも…サーマルの施設で育って…そこでみんなと少しやりあった位なんです…」

「なにそれ?!と、という事は家族は…」モココは息が詰まったような感覚に襲われる。「ええ…」ガトルの視線がうつむきがちになった。「レオは…隊長に話していましたけど…」「ごめん…てか、なんでバストークは教えてくんないのよ?!」2匹の言葉に、グラシデアは離れたところを歩くメリープの父親に怒りの目線を送る。あの父親は娘より仕事を優先しているどころか、同僚に対する配慮と同情すら知らないのか。

グラシデアから見てバストークはいつもそうだった。口先では父親一つで育てたとかほざいているが、実際はああでもないこうでもないと口出しするか、さもなくば放っておくかのどちらかだけであったとしか感じ取れない。
もちろん彼女自身、父親には理由があるのは知っている。しかしそれが許せない。

「まあ…いう暇がないっていうのもあるけど…」「肩持つんですかバストークの？」グラシデアがスカイラブをにらむ。「い、うんん。あの人はそういうのが苦手そうね。それなら相手にしなきゃいいのよ。グラシも17歳なんだから。あの人だってとっくに成人したって見せればわかってくれるとは思うけどね。まあケンカはしちゃだめよ」ルクシオは慌てて修正する。
「いえ…大丈夫です。昔のことはそんなに気にしてません…」ガトルは身近手の爪に入り込んだ土をだしなら呟いた。あのころは自分たちがああいう境遇になったわけがわからなかった。それが…あの境遇がいかに苦しいものかを知ったのはほんの数年前である。ガトルやグリソム、シンシアもこの激動する人間とポケモンの文明が交錯し、圧倒的な人間文明が自らの問題ともどもポケモン文明を弾圧するという地球から見ればほんの一瞬の時代における最も過酷な犠牲者の一種だった。
「そう……ん？」スカイラブの背中に背負ったレオがもぞもぞと動いた。左前脚の付け根から黄色の帯の所にかけてわざか刃かは分からないが、ざっくりと切り傷ができて血が少し滴っている。頭にも擦り傷かあざのようなものがあって、血がかさぶたのようになっていた。ただし皆は動揺はしていない。ポケモン同士の戦闘では、これくらい普通である。このコリンクが招魂尽き果てた視線の定まらぬ表情をしていることからも状況がうかがえる。レオは戦闘で疲弊しているだけだ。「どう…自分で歩ける？」「……ううう…くっそ…どけ…殺ってやるぜ…」コリンクがうわ言のような言葉をブツブ

ツと漏らすのを見て、スカイラブが首を振った。「こりゃあだめね。全く、うるさい割にはこういう時にけねえ…ん、か弱い所さらけ出すんだから…」「まあ…2匹ともがんばってたからいいんじゃないんですか？」モココが背負ったロコンに目をやって言った。シンシアはコリンクと同じようにあちらこちらにわざによるけがを被り、さらに土や埃に汚れた状態で、疲れ果てて眠りこんでいた。「シンシアは…やっぱり軍人としてここにいるのに向かないんじゃ……」

「あの…おいら達が彼女の分までやる必要が…」グリソムがレオやシンシアに目をうつし、心配そうに尋ねる。ポケモン達に役に立たない奴を切り捨てるなどという考えを持つ者はめったにない。戦争でも救助でも（彼らにとって）未開の地の探査でも、お互いがお互いを助け合うというのが常識である。これもまた、種族によって体格に大きな差がありながらも、ともに文明を築き上げてきたこの文明らしい共助の精神を体現している。役に立たない、もしくは不祥事を起こした軍の指揮官や政治家は更迭だとか、不況になったら期間労働者から切り捨てられる大手企業のような現在の人間とは違う。

「大丈夫。それは私たちも見てるから心配なし。ね？」スカイラブはミズゴロウの頭の突起をやさしくなでる。

……それにしても……レオとシンシアはどこか似通ったところがある。彼女は背中の温もりからそう感じた。態度や性格は違っても、やるときはなりふり構わず、疲れ果ててロクすっぽ状況を見ずに体を休めてしまう。

でも…だからこそ、本当に気があったら怖い物なしになるかもしれない。離れたところを歩くブースターとグレイシア、別任務でどっかに行っているベイリーフとメガニウムのように。

その感情は、スカイラブ・バトルスターらしい愚痴っぽい世の中を見放したような言葉で呟きになる。

「2匹が結婚してさあ、夫婦で仲良く探検隊でもやったら有名にでもなるだろうねえ……うん」その冗談は多少モココにも理解できたのだろう。「うふふ…それは言えますね。ただし…」グラシデアはまたしても父親のメリープを見やってため息をつき、頭部装甲板を外して手に持った。声が嫌味を込めたものに下がる。「うちの父親みたいに仕事優先にならなきゃいいですけど…」

２０１２年　１２月１０日　アメリカ　ワシントンD．C．付近
東海岸州間高速道路Ｌ－９５号線
０５００時

「…そうだな…S＆P社の代表取締役は決定に変更はないと言っていた。それで、中国政府はなんと言っている?また批判だけかな?」5インチものチタン・セラミックの装甲板と、被弾によるパンクでも走行可能なフラットタイヤという軍用車並みの防御が施された合衆国大統領専用車、ゼネラル・モータース社製ギャデラック・DTSリムジンの専用改造車は、多くの警察車両や警察のオートバイ、上空には警察ヘリによって護衛されながらワシントン中心部へと向かっていた。車両の前後１００メートルは警察車両によって完全に封鎖されている。そんな徐々に主導権を奪われつつある（世界各国の新車では、アメリカを含めた先進国は確実にハイブリッド自動車や電気自動車にシフトしつつある）をガソリンエンジンの高級車の中で、老大統領は娘にも近い年齢の国務長官と連絡を取り合った。何とか議会、民主党、共和党、政府の間で、債務上限高の引き上げと2．5兆ドルの歳出削減に関する法案を通過させ、債務不履行を回避することはできた。しかし、今なお残り続ける合衆国の財政赤字に対する懸念をにらんだアメリカ、いや世界の最大手企業債・国債格付け会社の一つであるS＆P社が、イギリスやフランスとなら

んで最上級のＡＡＡ（トリプルＡ）となっていたアメリカ国債の格付けをその下のＡＡ＋に格下げすることを決定したのだ。ムーディーズ社をはじめ他の格付け会社は据え置いたものの、最も信頼の高い国債の一つであった合衆国のものが格付けされるという事態に世界経済・金融は衝撃を受けた。これに加えて、欧州中央銀行総裁のヨーロッパ各国の財政・経済に対する不信感という不用意な発言、さらにはＩＭＦ（国際通貨基金）の理事長のさらなる不用意な懸念表明、果てにはインドと中国の物価上昇指数が過去最高を記録した上に欧米各国の経済指数の悪化が重なった。米欧諸国の経済・財政に対する不安、頼みのはずのアジア・中東経済の失速懸念がダブルパンチという事態でこの２日間は世界同時株安の様相を示している。それに関する交渉と説明を求め、国連に出向いたついでに一方が入り、大統領が直接Ｓ＆Ｐ社に出向いたわけだ。

“ええ。…批判と政府による説明を求めています。どのように返答しましょう？”

「そうだな…あの政府を黙らせる方法、簡単にはないだろう。しかし…」大統領は防弾ガラスの外側に広がるまだ夜の暗闇に包まれたワシントン郊外の市街地を眺める。この男は生理的に飛行機を好まず、合衆国内の移動は車か高速鉄道と決めていた。

「私が直接説明、というのも悪くないね？」“直接？どういう事でしょう？”彼女がびっくりしたように聞き返す。

「言葉通りだよ長官。直接中国の首相が言うとおり、わが国の国債の状況について電話会談で説明する。あの国は我が国の国債を大量に所有しているからな。手配はできるかな？」“ええ…できることには”

「そうしておくれ。さてさて…直接大統領が出てきたら…彼ら、どう言うかな？」大統領はくすくすと笑った。

現地時刻　２０１２年　１２月１０日　１６５０時　　イギリス
ロンドン市内

雪がうす暗くなりゆくロンドン市内にしんしんと降り注ぐ。周囲の市街地の照明が次第に市街地に彩りを添え、遠方のシティーやカナリーワーフの超高層ビル街、重厚にそびえるマンチェスター寺院やビックベン時計塔の照明やライトアップは、暗くなるにつれロンドンの夜景をさらに華やかにそして荘厳に演出していく。
しかし、自費で買い求めたドイツのＢＭＷ社製、７シリーズＥ６６に乗ったマグノックス・エレクトリック社の社長にはそんなものに浸る余裕はない。むしろ、先ほどから全く動かぬ中心市街の渋滞にいら立っていた。先ほどネット上で急きょ購入した１８２０分ロンドン・ヒースロー空港発ブリティッシュ・エアウェイズ４７１便、（使用機種はＢ－７４７－８らしい。もちろんファーストクラス）エメリア・エドワーズ空港行きに間に合わないかもしれない。

ロンドンの中心市街地の道路が、ここまで以上に渋滞しているのにはそれなりの理由があった。北部の都市のトッテナムで、イギリスの警察官がある男性を（しかもそれがアフリカ系の人であった事が反感を大きくした）射殺した件に対し、過剰防衛であると市民団体が抗議デモを開始した。その多くが暴徒と化してしまい、路線バスや警察車両に放火し周辺商店を爆破して商品を略奪するなどと大規模な暴動に発展した。その結果、周辺諸都市や首都ロンドンにも暴動は飛び火、ロンドン市内でも道路の封鎖や略奪や放火が相次ぎ、ロンドン市内の道路交通網は大混乱をきたしているのだ。

「おい！いつになったら前に出るんだ?!」社長は苛立たしげに声を荒げる。「前後も完全に詰まっています。迂回路も同様でしょう…くっそ！」運転手もナビゲーションのモニターを見てハンドルを腹立ちまぎれに叩いた。路線バスや自家用車やタクシーがすずなり

になった道路では、クラクションや怒号が飛び交い、何事もないように歩道を行く人々が不思議そうな表情で歩いている。

男はスーツの懐から携帯情報端末を取り出し、ブリティッシュ・エアウェイズの座席予約センターの番号を打ち込んだ。しばらく呼び出しがあってオペレーターの女の声が聞こえてくる。

「エメリア・エドワーズ空港行きで４７１便より後続はあるか？」

“申し訳ございません。４７１便が本日最後の便となります”「じゃあ１時間出発を遅らせろ！私はマグノックス・エレクトリックの社長だ！くそポケモン共のおかげでエメリアの熱核融合原子炉が吹っ飛びそうなんだぞ！フクシマの二の舞にする気か？！」

これは科学技術的には理由になっていない。核融合炉の燃料は水素やヘリウムといった太陽の活動原理と同様のものだ。一方、あの時のフクシマをはじめ現在も問題といわれる世界の原発の多くはウランやプルトニウムをはじめとする（トリウム炉はまた別だが）核反応炉である。融合炉は高温高圧の対策や制御棒といった特殊な機構を必要とせず、万が一事故が発生しても放射性物質や放射線を拡散させる心配はないのだ。核融合と核反応は全く別物といえる。

男は自分の言っていることがまったく理由になっていないと知りながらも声をまくしたてた。

“申し訳ございません社長閣下。個人の都合で出発時刻（デパッチャー・タイム）を延期するようなサービスはございません”女はこういうクレームには慣れているらしく、冷静に反応してくる。

「くそっ！」社長は端末を叩き切ると、検索サイトを起動させて予約照会を始める。４７１便より後にエメリアに出発…ノースウエスト航空２９４便…ルフトハンザ航空３５１便……これはトータルセ

イユ空港か…

端末が再び鳴った。男は荒げたうめき声のようなものをあげて耳に当てる。「どうした?」“私です”秘書の声だ。“株安の気配が止まりません。ある程度は売り払ったほうが…”「当たり前だ!……ん、そうだな…アレバ…キュリオン…日立…サムスン電子…ガスブロム…GE…シーメンス…BHP…S・P・エネルギア…ええい!下がっているのは売れ!いいな?!」“はあ…”

「たくっ!そんなこと…」男は端末をシートに叩きつけて窓の外を眺める。別に株安などどうでもいい。とにかく、エメリアにある熱核融合原子炉施設だけでも守れれば…もし何かあったら、この会社も東京電力と同じになってしまう…

外では、降り積もる雪に身を縮めながらうつむき加減の者、始まったばかりのクリスマス商戦で多くの包み箱を持った者、タブレット端末や携帯端末を覗き込む者、犬を散歩させる者等大勢の人々が行き交っている。しかしそんなものを眺めても、社長には落ち着きなど生まれなかった。

突如、BMW・E66のウインドウがコツコツとたたかれた。社長はパワーウインドウを下げる。

「何の用だ?!」外にいるのはヤナップ。「・‥。@;‥「。‥”。……」男か女かは知らぬが、この子供は持ってきた編みかごの中を男に見せた。何かの焼き菓子の一種か?突き出されたかごの中から出た香ばしい香りが車内に入っていく。だが、男はそれを毒物を見るかのように表情を歪めた。

「今はそんな暇はない…ひっこめ!」「。‥;‥。‥;?!。‥;‥(〇@)‥……」ヤナップは諦めずにかごを突き出してくる。男の

手にヤナップの体が一瞬触れ、男は気持ち悪そうに身をすくめてヤナップを外にたたき落とした。「二度と来るなっ！」男はヤナップが触れた部分を気持ち悪そうに払い落とすとパワーウインドウの閉まり際に道路に落ちたヤナップに唾を吐きかけた。「ったく…忌々しい半文明生物どもがっ……」全く、この気持ち悪い生物たちは自分たちが何をしているのか分かっているのか？まああんな無能な文明に科学的説明をしても、最初の一文字目すら理解できるはと期待していないが…

12月11日　ヴェルダー州　ロアクーン地区　0005時

テルルは星空を見ながらため息をつく。今日の天気が曇りで、湿気の多い日であったことを今頃になって思い出した。ようやく晴れてきた夜空に無数の星々がそうしてくれたのだ。…まあ全部が全部自然の星空ではない。いくつかは人間がこの世界の外側（宇宙と地球という概念を正確に知っているポケモンはわずかだ。よほどの知識があるか人間と親しい位置にない限り、世界が平面であるという原始的な思想に固執している）に作った構造物の明かりという事は彼女でも分かった。どうにも眠気が起こらない、体が睡眠欲を請求しないのだ。自分が最もなりたくない生物、人間に似てきてしまったのか？

星空の中から遠き時代の回想が彼女の意識に降り注ぐ。

人間という生き物が昼夜問わずに活動している生物であるという事は、幼いころ住んでいたアラブ首長国連邦、当時マネー流入に伴う急激な経済成長を始めたばかりのドバイで分かった。遠くに広がる巨大な樹木のような高層ビル街が放つ派手な光。イーブイだったころの彼女は毎晩その風景を楽しみにしていた。

「ねえねえお母さん！今日もきれいだね」当時暮らしていたある人間の石油会社社長夫婦の豪邸にある屋外プールで、小さなテルリウムは母親のシャワーズ、ルナマリアの背中に乗って高い声を上げた。「そうねえ、もう夜になったのね…私たちもそろそろ……」「ええーっ？テルルは全然眠くないよ。今日もあの高い木の光が消えるまで起きてるんだ♪」イーブイは遠くに輝く当時一番高かった高層ビルを前足で示した。「ほらほら！…もう少しであのきらきらが私の…きゃっ」前足をその明かりを掴もうと手を伸ばしすぎ、彼女は頭から水の中に落ちた。「もう…大丈夫？」母親の声が聞こえ、彼女は水中で体をくるっと回して水面を眺めた。「すごいすごい！きらきらは水の中からでもとーっても……」

グレイシアは我に返った。もうあの時のころは忘れよう、自分は人間なんかとは暮らしてなかった、そう思い込もうと抑圧していたのだが……そうしようと誓うたびに、月に一回、いや毎晩一回は子供のころを思い出してしまう。あの時の自分は何をバカげた妄想をしていたのか？人間がとても華やかで素晴らしい生物？華やかで繁栄しているだけで、その内実は無慈悲、残虐、利己的な生物の文明だった。“あの時”から、そして現在だってその仕打ちを骨の髄まで受けている。

テルルは装備品入れから何かを取り出して星の光に当てる。レオが使っていたものと同様だ。その影を見て彼女は首を振った。もう真夜中らしい。やっぱり自分は人間同様“昼夜兼用”の生物となりかけているのだろう。彼女はそれすら嫌だった。価値観や生活スタイルが人間に似る事さえ嫌がり、昔は日が暮れたら眠りに付こうと努力し、そして成功した。

今はどうしてできないのだろか？前と比べて“仕事量”が増えた

から?それともこの仕事が、前のそれよりもより人間と密接につながっているから?

「おおっ、テルルも寝付けねえか!俺と同族だな!」こういう状況でもっとも来てほしくない奴が彼女の頭飾りを懲りることなく前足で叩く。悪びれもせず、しかもいやらしく。

「はあ?!同族に扱わないでよこの変態っ!」テルルはブレイブの頭部のフサフサにまたしても前足の拳をぶち込んだ。「うぐえっ…束の間のひと時に爽快な一発…これぞ至福だぜ…」ブースターは一瞬ぺちゃんこになったが、1秒で4本足を立ち上あがって頭をフサフサをふるう。

「ったくもう、ふつうそんなことで気持ち良さがる奴なんていないわよ。わかってんの?」テルルは諦めたように左足の装甲板の革製の帯をほどく。「わかってるわかってる!だからこそ俺は余計に…」

「はいはいやっちゃだめ。いい?」彼女は外した部分の汗を首に普段巻いているスカーフのようなもので拭い落とした。ポケモンという文明生物群は服を着る文化はない。身に付けているといえば、ブレスレッドやリストバンド(これには集落や種族による迷信や儀式的要素もある)、女(メス)なら耳飾りの類、その程度だった。後はベールやスカーフとマフラーの類くらいだ。

現代の人間なら、アマゾンの奥地や南太平洋の孤島に暮らすネイティブの人々でさえ、アメリカやヨーロッパやアジアの国々とほぼ同様に服を着て車やバイク、推進機関付きの船が集落にいくつかはあり、テレビやラジオも集落に少なくとも一つ以上は存在し、電気も発電機や各国の支援で提供された小型ソーラーパネルから何とか使えるレベルにまで(格差は甚だしいが)に達している。だがこの文明は、現在でも伝統的な装飾や居住空間、生活時間や種族・集落での掟を守り、自然の営みやそれに基づく迷信や信仰をよりどころにして暮らしている。

「大丈夫だっての…ただ…」ブレイブが装備品ベルトの位置を後ろ足で直す。彼にとって大事なことは彼女にちょっかいを出すだけではない。「…その顔からして精神的なものだな。そういう時は無理しないで眠くなるまで何もしねえで待ってるんだ。そうすりゃ体が落ち着くって奴だ」「ふーん。そんなもんなんだ」「ま、俺は平気だけどな。しかし、女の子はそうもいかない。無理は厳禁だぜ。いいな?」「う、うん。ありがとう……」「どういう事で、テルルの装備品一式も持ってやる」「ど、どうも…」グレイシアは少し顔を赤らめながらも、ブースターに渡した。「うおおっ…テルルちゃんの肌触り…香り…まさに最高…」ブレイブは顔を赤くしながら洋弓銃や装備品一式を背中に縛って嬉しそうだ。「うう…この変態男…フン…」テルルは彼を殴りつけようと思ったが、楽しそうなそんな彼を見ているうちにその気すら失せていった。彼女にはこのブースターが何を考え、何で表現しているのかがいまいちよく理解できない。やっていることは（グレイシアから見れば）犯罪的なほどおバカな行動だが、そこに含まれている意味も普通の性欲とは異なるものを感じる。それがまだ彼女の理解の範囲を超えていたのだ。何と声をかけていいか分からないちょっと詰まったような空気を感じて1分ほどして、テルルがブレイブにおずおずと聞いてみた。「ねえ…ちょっと聞いてOK?」「ん?俺はいつでも大歓迎だぜ」「ブレイブはさ…私と一緒でそんなに楽しい?」「当たり前だろ。なんでそんなこと聞くんだよ?」ブレイブのフサフサ尻尾がぶんぶんと動く。「ま、ひょっとして…やっぱ俺に惚れている?そうだな!」「はあ?!だからそういう事じゃなくってさ……」テルルはブースターの目線を覗きこむ。「…今まで見てきて…アンタが単なる変態男じゃない。それは分かったつもりだよ」「あ、ああ…」ブレイブの表情がやや硬直する。「……私だって…こんな風に…その、別に相手が男（オス）だからといっ

て自分から波風立てに行くつもりはないよ…けど…」「ど、どうしたんだよテルル……」彼は不安そうにグレイシアを見つめた。

「俺に…落ち度があるんだったら言えよ…直すから」ブレイブとて自分がどうしようもない奴（ポケモン）であることは気づいていたし、改めようと努力しているつもりでもあった。他者から言われても悩んだりしない。自分のペースで、自分で納得できる方法で進んでいこうと。

しかし…今こうしてこのグレイシアに、おそらくは様々な意味で違ったものを感じている彼女に面食らって言われると、さすがに苦しいものがあった。星空が急激に光を失い、暗闇が制圧するかの錯覚を覚え、ブースターの意識に薄暗いものが覆いかぶさる。その勢いは暴走して海底層から海上の施設に気体が吹き出す天然ガスプラント、破損して急激に与圧を失っていく航空機の与圧隔壁のように。

「そうじゃない！そうじゃないのよ！うう…はっきり言うわよ言いたくないけど」テルルはじれったそうに首を振った。それから、自分が先ほど首からほどいたスカーフのようなものを首元に当てる。「すなわち…私を信頼できる？そういう事」彼女は慎重に言葉を選んだ。

「……うっ…なんて言っていいんだ俺は？ちっくしょ、…俺はこういう時に限って」ブレイブは頭のフサフサを右前足で掻きむしった。普段は無駄口ばっかりにもかかわらず、こういう肝心なシチュエーションでカッコよく言えない。彼自身は少なくともそういうもどかしさを周囲の考えとは別に常日頃感じていた。このブースターは少なくとも現在の同僚や友人たちからはいい奴だと言われている。しかし彼自身は、自分がまだまだ能力不足でロクもない奴だと感じてしまう。少なくとも、自分たちが知ってしまっている“人間文明に対する自分たち”という点で自分が重圧に負けたくない、そ

う思っていた。
「くっそ…俺は…」
答はなかなか見当たらない。自分に正直になれるそれが。
いつしか、上っ面の表情を探すのにあくせくしている自分になっているのに気づく。
……答えはウソでもいい。見せ掛けでもいい。何か…ブレイブは必死に意識の下で探った。
しかし、その答えは意外と近くで見つかった。普段振る舞っているのと同じ自分の側面からそれは見える。
そしてその台詞は、まことにブレイブ・エスコーツ・クレイバーらしい簡単な言葉と表情になった。
「…へへ…は、あったりまえだろうが！俺はテルルを信用しているにきまってるだろ？」ブレイブはテルルの右前足を握る。今までの胸（４本足だから微妙だが）のあたりの縛られたような苦しさがうそのように晴れた。「……前々から言いている通り、俺とお前は同僚だ。それでいてここまで潜り抜けた…まあ威張れるほどやっちゃねえけど…まだこの先は長いだろうな…少しずつでもそうなれれば…いいんじゃね？俺はそう思う」
「はあ…全くその開き直りはアンタらしいわよね」グレイシアが呆れたような笑みを浮かべた。「は？なんだそりゃ？」「だって考えてるときさ、あんなに苦しそうな表情してたわよね。それでここにきてまたカッコつけたようなセリフでしょ。まあ…それがブレイブなのかもね」
「う、うるせえな…だいたいこんなかわいい女の子がいてカッコつけないポケモンが地球…いや世界に何匹いるんだよ？まあ俺が知る

限り1匹いるがな」ブースターの顔が赤くなる。「まあ…あの子はそういう子よ…」「でもお前はあいつのことが…だろ?!俺には遠慮しちゃってよ。本命はずばり俺!!違うか?」ブレイブがテルルの頭部保護装甲板を前足でくるくるっと回してからキスをした。「ちょ、ちょま!何ワタシの物に口づけなんか…ああもうマジで汚すぎる!返しなさいこのバカっ!」「だーれが返すんだよ!一生返さねえぜ!」「こっのバカバカバカっ!」2匹はイギリス、ドイツ、フランスを中心とする欧州連合の熱核融合型原子炉施設の電源となる送電線が?がる鉄柱のもとで、ぐるぐると持ち物の取り合いに興じていた。そうやっているテルルとブレイブ双方の間からまた一つ大きなわだかまりが溶け落ちていくようだった。

「……それでさあ、ユイリィ達はいつくらいに戻ってくると思う?」テルルがブレイブから奪還した頭部保護装甲板を肩掛けのように胴体に回した。「分かんねえな。あいつらの事だから、そんなに手間暇かけそうには思わないんだが……」ブレイブが周囲を…送電塔の明かりしかないが…見回し、装備品一式を装着しているベルトを調整する。

「おいお前ら。夜更かしするのは勝手だがな、もっと声を落とせよ」近くで見張りに立っていた個人用暗視装置をヘルメットに装着している国連陸軍の兵士が、送電線防衛用の電気有刺鉄線のそばに掘られた窪地の脇を通ってやってきた。とたんにグレイシアの表情が冷たいものとなる。ブースターの方はやれやれ、といった表情で兵士を見た。

「はいはい了解しました。別に騒いじゃいませんよ」「ふん!騒ぐとかどうとかいう問題じゃなくてな、ポケモンなんだから寝ろってことだ」「おあいにく様、人間と同じく夜型生活に慣れちまったようで(「…何言ってんのよブレイブ!やめなって!」テルルが制止しようとした)。まあ寝る努力はしてみますかね……」彼は皮肉

たっぷりの声を出す。もともと彼にとって人間と話すだけで苦痛なのに、素の態度で話すなんて気がおかしくなりそうだ。少しでも気を楽にするために少々挑戦的な言葉を使っているだけである。

「ったく！態度でかく出やがって！それにしてもまあ、お前らはよくこんな電気鉄線のしたに穴掘って突撃するもんだ」兵士の男は鉄線の脇に掘られた外側へと出られる塹壕のような窪地の縁を、暗視スコープと情報連動機器付きの改装型Ｍ１６Ａ４アサルトライフルの銃身でコツコツとたたく。「あったりまえっすよ！ここの深さはだいたい２メートルはあるんでね！図体でかい種族も楽々前進できるって……あん？」ブースターがそこまで言いかけた時、塹壕の向こう側でがさがさと動く音がする。兵士は即座に反応して塹壕の深みにアサルトライフルを突っ込みながら、無線機に手を当てた。

「第４ブロック、奴らが掘った塹壕に不審な反応！」「了解した。誰何して反応がなければ排除」「了解」周囲からも同様の格好をした統合軍やアメリカ陸軍の兵士が４，５人集まる。そのうちの一人がＭ１６Ａ４の先端に装着されたライトを照らし、暗視装置付きのスコープを覗き込みながら声を出す。「……貴官の所属と姓名を伝えよ」

“……うぐ……うくくっ…”少し甲高いうめき声のような音が聞こえるだけで何の応答もない。周囲に緊張感が高まる。「排除する。用意」兵士３人がＭ１６Ａ４の銃身を突っ込み、トリガーに指をかけた。

「ちょ、ちょっと待ってよ！私が見てくる」「おいまてっ！」テルルが銃身をかき分けて塹壕の中に飛び込んだ。兵士が彼女の尻尾を掴んで引き戻そうとしたが、ブレイブがそれを押しとどめた。あの声には少々聞き覚えがある。「やらせてやってください、あいつにはきっと何か考えがあるんですよ」

飛び込んで何歩も進まないうちにグレイシアはその“相手”と頭をぶつけた。「うきゃっ！！」「いたっ！！！」しかし、テルルの考えは彼女の中で確信に変わる。相手の頭に触れた時、何か細いツルのようなものをかさっと触れた。そしてこの甘いすがすがしい香りとスパイシーな香りのブレンド。ぎゅうぎゅうに詰まってちょっとつっかえ気味な相手の大きな体。相手はまさしく……

その相手が突然聞いてきた。聞き覚えのある高い声だ。「あたしの目の色は？」

グレイシアの表情が緩んだ。相手が暗くて見えなくても分かる。「夏空の様なスカイブルー」

「あたり！」嬉しそうに相手は答える。

「じゃあ今度はこっちから。私のいっしょにいる奴の好みは？」「うん！こぼれ日の春、さわやかな夏、実り豊かな秋のような女ポケモン！」

「正解ね！」相手が答えたのは完璧なものだ。

塹壕の入り口でブレイブは嬉しそうに顔を赤らめた。「おいおいばかっ！あんなのを合言葉にしてんのかよ？……」ブースターは人間たちに向きかえる。「見てのとおりっす。知り合いのようですね。ライトをつけてやってください」

銃身から出る白い光がわずかに互いの顔を照らした。テルルの前にいるのはウグイス色の体、頭には黄色い雄蕊、首元にはピンク色の花びら、瞳は美しい夏色…

「ユイリィなのね！無事に帰ってきたんだね！」「うんうん！無事

に帰ってきちゃったよ！」

「全くもう！いつまでも帰ってこないから心配しちゃったよう！連絡ぐらいしてくれればいいのにぃ！」グレイシアがメガニウムの首に飛び付いた。思わず首を上にあげたユイリィの頭の上にいたロズリンは塹壕の天井に挟まれかける。「何やってんでしゅか？！」

「ううっ！ごめんごめん！テルル、ちょっといいかな」「う、うん」ユイリィが頭をそっと下げてシェイミを地面に下ろす。「はあ…喜ぶのはいいでしゅけどね、頭の上にいるミーを潰すなんてお前もホンットに……」「許してよお！少しぐらいはさあ」メガニウムはグレイシアの温もりを花びらのある首元の皮膚と意識下の宇宙で全身で感じ取る。宇宙の中を暖かい温度が満たしていく。

……あたしは……無事帰ってきたんだね……良かった……

……あれ？そういえば……

彼女の背中辺りでもう一つの意識がもたれかかっているのを思いだした。

「うグッ……何か忘れてないか？君たちだけで喜んでるなんてさ……」彼女にもたれかかるようにいるリーヒュンが言葉を漏らした。

「ちょ、アンタっ？！大丈夫なの？！」「うんん！全然大丈夫じゃないかも…ちょっと色々あってさ……」テルルがよれよれになったベイリーフの前足を握る。「だ、だ、だいじょばないんならなら、早く出た方がいいわよ！」「あ、ああ…うん…そうだな…」リーヒュンは考え込んだ表情を変えずに自分のツルで、首の上あたりから葉っぱの部分までざっくりと切れて血がにじんだままの大きな傷跡に当てる。そこが一番激しい痛みを発していたが、不思議なことに

彼にとって苦しみではなかった。テルルの方は傷口を見るなり愕然とする。「な、なにこれ?!やばいんじゃないのアンタ?!」「いや、大した事ははないんだ…ただ、ちょっと疲れたかな……」相変わらずベイリーフは複雑な表情を浮かべながらメガニウムから体を離して自力で立つ。「また、むちゃな戦いぶりをしたのね。それで疲れているってこと?はあ…少しは体に気を使えないの?」「どうだかなあ…でも…俺にはそういう戦い方しか…ないんだ…」リーヒュンは頭部保護装甲板を外して、それを焦点の定まらない目で見つめた。特に外す理由もないが無意識にだった。あの時の記憶が彼の意識の中で黒い煙のように渦巻き、彼の思いをぐらつかせる。

……やはり…あれはそういう……

……フローラ……だったんじゃないか?!……

「ど、どうしたの?なんかあったんでしょ?!」「う、うーん?!…そんなもんかな!ま、とにかく話はあとだね。うん。とにかく出よっか」ユイリィがツルでベイリーフの首元を軽くたたいた。テルルも後に続く。「俺の親友!よく生きて帰ってきたなあ!」リーヒュンを見るなり、ブレイブは大喜びで疲れ切った彼を前足で窪地の外側へと引っ張り上げた。「うん…ごめんな、さんざ迷惑かけて」「何言ってんだよこいつは?!気にすんなって。お互い様だろ?」ブースターは国連軍の兵士たちと一緒に引っ張り上げた後、ベイリーフの鼻のあたりについた泥と煤と血が混じったような汚れを前足でふき取ってやる。「分かってるよ。その汚れ方を見ればお前が相当無茶をやったことは分かるし、そのお前の顔からしていろいろと苦しかったのも見え見えだぜ。早く後方に下がって休みな」「あ、ああ…」「装備品と保護装甲板を持ってやっから、いいな?」「ああ、すまないな」ブレイブは疲弊した親友のはっきりとした返事を待たずに彼から洋弓銃、装備品全て、頭部装甲板をもらって首から胴体に回す。「ん?どうしたんだよそれは?」ブースターはリーヒュンの首から下げられた小さな木製の円筒型容器に目を落とす。先

ほどから彼の葉っぱ付きの首元でちゃぷちゃぷと水の入ったような音を立てて揺れていた。ベイリーフはそれに気づいてびっくりしたようにツルでそれを握る。「いや、これは大丈夫だ。俺が持ってるよ」「ホントか？実はユイリィからもらった大切なもんなんだろ？」「んなわけない！これは俺の…俺に必要な…」リーヒュンはツルでその容器を守るようにブレイブの手から守った。「そうか…ならいいんだけどよ」ブレイブは不思議そうな顔をして伸ばしかけた前足を引っ込める。親友がこんなにある一定の物に固執するのは初めてだったから。何か大事なものなのだろうか？

とりあえずは歩き出したブースターだったが、それでもさっきの物に奇妙な雰囲気を感じずにはいられない。もともと親友のベイリーフは、そういう物はあっぴろげ、というか性格的に図星を当てやすかったし本人も格別隠し立てを好む方ではなかったはずだ。まあ、彼が１０代後半（ティーンエイジャー）になってからは多少の戸惑いや葛藤はあったようだが、それはお互い様だと思っていた。だが、今回は奇妙だった。何をあんなにあいつは執着している？俺に見られちゃまずいのか？……それとも、やはりあいつやユイリィの持つ…“あれ”と関係が？

悩んだ末、ブレイブはユイリィに聞いてみた。「な、なあ…ちょっと聞いていいか？」

「ん～？リーヒュンのあれ？そうだよね！それを聞きたかったんだよね！」彼女は笑顔でブレイブの頭のフサフサにツルを当てる。彼女から見ればブレイブはリーヒュンと同じくらい簡単に意識の中身を把握することができた。もっとも、ブレイブの場合はわざとそうしているようだったが。「そう、そうだ！！さっすがユイリィ！！」

「やったやった！あたしはまたしても図星を取ったね！あはは…」

彼女位に能力が向上すると、相手や周囲の意識というのは水晶玉のような形をした宇宙空間と同様に感じ取れる。それは相手によって中身がすけすけだったり、きっちり霧でおおわれていたり、そもそも見せる気もなくほっておかれていたりするのだ。メガニウムから見た場合、ベイリーフの方は透明すぎてあらゆる光を通してしまうように見え、ブースターの方は自分から自慢するようにピカピカと輝いているように見える。

彼女はリーヒュンの首から下がった容器をちらりと見つめ、表情を戻してブレイブの耳元に口を近づけた。「あ、あれね…リーヒュンにとっては大事なものなの。だから……そっとしてあげてくれるかな？あのことに関しては」「お、おう…そういう事なら、な」彼はメガニウムの真面目な声を聞いて頷く。ユイリィがそういう顔をするぐらいだからよほどの理由に違いない。

「でねでね！ブレイブは荷物持ってあげてるんだよね？そんならうちの分もお願いしちゃいたいんだけど！ＯＫ？！」ユイリィの表情が再び明るくなった。「な、なんだよそれ？！俺もう限界いっぱいまで背負っている…」「なんでなんで？！リーヒュンの分はやってくれてあたしの分はなしなんてひどいよ！うん」

「お前は呆れた奴でしゅねえ。そういうのを子供っていうんでしゅよ」

「何言ってんのよロズリンは？！なんなら地面を自分で歩く？あたしの頭の上有料にしようか？」「ふあああ…話をするのも子供っぽいでしゅ」「うんぐぅっ…なんたってのこのシェイミは？…」

「わかったわかった！ユイリィの分も持ってやるから貸せ！」「ほんと？！わーい！」メガニウムは大喜びでツルを使って一切の装備

品と頭部保護板を外してブレイブに渡した。
「ふぅぅ！やっと首が軽くなったよ！」ユイリィは頭と花びら付きの首を解放されたように振った。「うぐ…でも…ユイリィの香りが…とっても気持ちいいぜっ！やっべええ！萌えあがる！」ブレイブは2匹分の装備をかついで重そうにしながらも、ユイリィの物が背中に乗ったとたんに嬉しそうにフサフサ尻尾をぶんぶん振った。

送電線の後方、統合軍・アメリカ軍前線司令部　０２００時

「ううっ…痛い痛い痛いっ！サクラさん…どうして先に戻っちゃったんですかあ？」ユイリィが花びらの首元にざっくりと入った傷元を治療してもらいながらボソッと言った。人間の消毒薬と包帯を使った治療法は、ポケモンにはあまりなじまない。薬品の効能ばかりで痛いだけ、アロマセラピーやいやしのねがいのように気持ちが伝わってこないのだ。
「おら、動くな。治療になんねえだろうが？」医療担当の人間が数人ががりで彼女を押しとどめた。ユイリィは危うく全員を吹っ飛ばしそうになったが、ここで能力を出すと困ったことになる。痛みと苦痛に必死に耐えた。

「本当にごめんなさい。国連軍のポケモン達が来て戻ってくるように言われたのよ。ブレイブたちが迎撃に出るっていうから…」サクラが彼女の頭の雄蕊を撫でる。「そう…そこで…そういう事が…」
「ええ……」メガニウムがうつむき加減で左前脚の爪にはいった土をツルで出す。あの時、もう一匹いた彼女は…何だったのか？彼女の意識の中に再び極限に冷たいあの感覚が点をつついたように現れる。もうあれは忘れたい。なかったことにしたい。そう思う。
……あの時いたもう1匹のベイリーフが幻影だったら、２匹の錯覚だったら…それはそれですぐ忘れられるのに。

「それで…あなたが見た者は確かにあなたの妹だった……そういう事なの？」リーヒュンの方にサーナイトは振り返る。「……もしそうだとしたら…そうですね…」彼はツルで頭の葉っぱの近くを押さえながら重苦しく答えた。そんなことは認めたくない。そうだったとしても、自分は認めざる負えないだろう。しかし今は分からない。あの“フローラらしき”女（メス）ベイリーフが、本当にフローラ・エルピー・グリーズであるのか。とにかくあの者の意識に触れようとすると、たちまち凍り付きそうな冷気、すいこまれそうな暗闇とそれに対する自分の反力で近寄れないのだ。それがあの時の戦いで、終始押されっぱなしだった理由ともなる。

「それに関しては…いろいろともう一度調べてみるわね。あなたにはとてつもなく苦しい状況かもしれない……でも…」サクラはベイリーフの左首元の葉っぱあたりから顔にかけてできた傷跡を、左手でそっと触れる。奇妙な感覚がリーヒュンの意識を伝わり、傷の痛みと苦しさが少し遠ざかるのを感じた。サクラの意識下に彼の苦しみや重さが痛いほど伝わってくる。

無理もない……自分の妹が……恐るべき事態に……陥ってしまっているのかもしれないのだから……

……サーナイトには何となく嫌な予感がしていた。よく分からないが、そういう暗いものを感じる。

「今は…明日の為に…前に進んで…いい？」「……はい…やります俺は」リーヒュンは自分のツルを握りしめた。

状況は分からない…しかし…やらなくては…

……フローラの為にも…

……真実に近づくために…今を生きなくては……

「……で、明日もまた敵さんは来る。お前らは明日やるか？」ユイリィの足元で2匹の弓矢や頭部装甲板のひもを直していたバストークが声を上げる。「無理そうだったら無理はしなくていいのよ。明日の状況次第にする？」メガニウムの背中に乗っているピトムニクが彼女の首の後ろ元を撫でる。

「うーん？……あたしはどんな状況でもＯＫだよ！うん」ユイリィがピトムニクをツルで抱っこして顔の近くまで持ってきた。大きさは雲泥の差が存在する2匹でも、実際はプラスルの方が3歳年上なのである。「ほんと？！明日からまた一緒にできるんだね！頑張ろう！」「もっちろん！」ピトムニクは嬉しそうにメガニウムの雄蕊に右手を当てた。「おっし。それならあす以降そういう形で俺たちと一緒にやってくれるか…」バストークが首元のモフモフを前足で掻く。

「…俺もやります……全然平気です」ベイリーフも声を出した。「本当？疲れてるんだったら無理はしなくてもいいんだけど…」ピトムニクがぴょんと彼の背中に飛び移る。

「いやいや、この程度の事で動けなくなったらフローラなんか助けらんないだろ？」

「さっすがリーヒュン！その意気だよ！うん」「なるほどな、本人が言う事が一番重要だ。俺は反対しない」バストークが首をふるった。

「うん、決まりだね！明日以降頑張ろうね！！」リーヒュンの首元にまたしてもユイリィが自分の首をこすりあてた。「うぐえっ……まあいいや…言ったところで…」彼は諦めたようにため息をついた。自分と彼女は、まっとうなベイリーフ種族やメガニウム種族から見たら立派な夫婦じゃないか。こんなにべたべたしあうなんて……

「おおっ……じゃあ俺たちも少し仲良く……」「しませんっ！」眺めていたブレイブはテルルに飛び付こうとしてまたしても突き飛ばされた。

「後は頼むわよ」「了解しました。司令から先に休んでくださいな」「任せてください」２匹の面倒を見るのはメリープとプラスルである。戻ってきた2匹は医療施設の隣にある空室で（とはいっても仮設の建物だが）一晩過ごすことになった。部屋の前では人間の兵士が見張りに立っている。肝心のバストークとピトムニクは、１０分もせぬうちにこくりこくりと眠り始めてしまった。彼等とてポケモンだ。人間みたいに夜更かしするようにはできていない。

ユイリィは隣ですでにぼんやりとしているリーヒュンをちらりと見て、自分の外して横にある脚部保護装甲板のひもをいじる。それから自分の長いほうの雄蕊のひもを解いて前足に輪っかにして結び、ため息をついた。今日の未明に洞窟で起こった出来事がまだありありと焼きついている。

……あの妹の恐るべき感触。狂的な表情。彼女の意識を渦巻く黒いもの。

……あれは一体……まさか本当に？

彼女は我に返った。

どうして自分がこんなに悩んでいるのだろう？一番つらいのは……

……苦しいのは……

……隣にいるかけがえのない仲間、あの子の兄のはずなのに

……

「ねえ……まだ起きてる?」ユイリィが話しかけた。あまり聞きたくないが、聞かずにはいられなかった。意識の流れというものがひとりでに導いたのだ。「……リーヒュンは…あの子をフローラだと思う?」

リーヒュンは起きていた。眠そうな目を…いや、思考に疲れ果てた目を（彼女にはそう感じた）ユイリィに向ける。「…どういう意味だよ?」

「何でもない…ごめんね…やっぱいい…」「ごまかすなって…俺は平気さ…何を聞かれようと」

「……ホントに?」「もちろん。俺とユイリィは…そういう仲なんだろ?」彼は彼女の首元の花をそっとツルでなでる。

しばらく重い沈黙が続き……

「そ、そうなら…」メガニウムは口を開いた。どの言葉が彼の意識下に傷を与えないか、爆弾を処理するような慎重さで選ぶ。「あ、あのね…フローラがもしああいう風にホントになっちゃっててさ、あたし達で…なんとかなるもんなのかな?」「……」ベイリーフは答えられず、自分の傷跡をツルでさするばかりであった。どうしてもフローラに関する意識の流れがつかめない。まるで、冬の嵐吹きすさむ東海、（または日本海ともいう）でタラやアマダイやズワイガニを追いかける韓国や中国や日本の大型漁船と漁師たちの死闘だ。前がまったく見えない。

「ご、ごめんね!ほんとごめんね!ううっ…あたしホントにバカかも」ユイリィが申し訳なさそうに彼の左前足を握った。「もうやめよっか…気にするのは…何もなかったことに…」

「いや、なんとかするさ…何とかならなくても」「…えっ?」リーヒュンは覚悟を決めたように彼女のツルを自分のツルでなでた。「

やれることは全力でやるよ……そうすれば…フローラも…まあ何とかなるんじゃないかな?俺はいつもそれだけさ」

「……そうだよね…結果が見えて悪いほうだけ怖がってちゃ何もできないもんね…」ユイリィは自分の爪をじっと見つめた。そう、彼の言うとおり…やるしかない…自分たちには…そういう能力を運命から与えられているのかもしれないのだから…

彼女の意識の中に彼の暖かい温もりのようなものが包み込み、彼女の冷たい意識の宇宙の外壁を少しだけ温めてくれた気がする。

「ユイリィ…いつもありがとうな…心配ばっかけちゃってさ…」「あたしも…リーヒュン…いつもありがとう…こんなあたしを…信じてくれて……」「大丈夫だよ…」「ねえねえ…突然だけど、リーヒュンはさ、一面切り取ったように青空が見える場所って知ってる?」「俺知らないな…どこか固有の場所?」本当に唐突過ぎる。しかし彼女らしい。彼は何も咎めなかった。彼女の言う事に不思議な力を感じた。

「うん…」メガニウムはうっとりするようにその景色を思い浮かべた。

本当に幼かった頃…育ててくれた…ポケモンに聞いた…噂の様な…

「ソーラのどこかにある…とってもきれいな場所でね…年に何回か雨上がりの虹が出ると…本当に青空と海とそれしか見えないところなんだって…」「へえ…」「それは…まあ…噂みたいなものだったんだけど…それは…何か“複数の意識が同時にやってきたときにのみ出現する”んだってさ…何か子供っぽいね……」「噂、か…」リーヒュンは自分の無線機回路つき頭部保護装甲板をコツコツと爪で

叩く。

「でも…それってもしかして…あたし達と関係がある…今はそういう気がする…」ユイリィはそっとつづけた。「あたし達の意識と…それを身近に感じられるの……分かるよね、近さは？」「うん…」意識に遠近があるのはこの2か月以上の経験でわかる。

「……だから…一緒にそこにたどり着けたら…いいなあ…」彼女の顔が少し赤くなった。ベイリーフの意識の周りに彼女の照れくさいような意識の温もりを感じる。「一緒に…そこまで行こうね…だからこそ…今をがんばろうね…」「そうだな……」彼には彼女が何を言いたいのかすぐになんとなくわかった。

……そこがあるかは分からないけど…そのために…それを信じるために…今をやるのだと。

……結果は関係ない……目的を目指すために全力でやるのだと……

かつてあったポケモンの集落、人口減や疫病で放棄されたその集落に簡易建造物や通信施設を持ち込んだだけの前線司令施設の中をサクラは進んだ。彼らが出会ったものに関する話が記憶から離れない。歩きながらサーナイトは思考をめぐらせる。

……少なくとも彼と彼女が言っていることが本当だとしたら…

……間違いない結果である。

……やはり“予定通り”という事なのか？……

……しかし……こんなに露骨に起こりうるものなのか？…

……

……もう一度代表に頼んで書物に関するデータを……送ってもらうか……

そこで彼女の思考はふと止まる。もし何か分かった時点で、あの2匹にそれを宣告するべきか。

……もしそれが……真実だったら？

……2匹は乗り越えられるのか？……それを祈るしかない……

彼女の思考は、施設と送電線の明かりしかない夜のロアクーンに沈んだ。

避けられぬ交錯（後書き）

またあんまり明るくない結果に終わって…

すいません。もっと明るい作風にしたかったんですが。

戦う意味

現地時刻　２０１２年１２月１２日　中国　北京市天安門広場　０６００時

冬の北京は乾燥している上に、皮膚に小さな針を突き刺すような肌寒さである。アメリカに次ぐ世界第２位の経済大国、あの東アジアの奇跡となった先進国である日本を追い抜いた中華人民共和国の北東に存在する人民共和国の首都、北京の天安門広場前の道路は多くの自家用車、連接バス、タクシー、自転車などが多数行き交っていた。そして天安門広場の前には、郊外のハイテク工業地帯等へと出勤途中と思われる人々、周辺に住んで毎日来ているらしい住民、国内外の観光客や取材記者といった訪問者など大勢の人々が天安門の朝の伝統行事を見物しにやってきたのだ。

やがて濃緑色の正装をした人民解放軍の衛兵たちが整然とポールの前に現れ、国歌でもある義勇軍進行曲の演奏と共に国旗掲揚が行われた。国旗を持った兵士がポールにくくりつけ手を勢いよく振りかざし、別の兵士がポール横のウインチを巻き上げる。美しく広げられた五星紅旗が国歌と共にするすると上へと上昇し、内陸の乾燥地帯からくる肌寒い風の中ではためく。その勇壮な光景を集まった人々は携帯情報端末やカメラを使って写真や動画に収めていく。

なんと言うカッコ良さ、一番飾らない言葉を使う表現とすればこれだ。アメリカのワシントン、大統領官邸前での国旗掲揚やイギリスのロンドン、バッキンガム宮殿の衛兵交代と並んで観光客にも人気の軍や守備隊の儀式。この国がひずんだ経済成長で反映していると揶揄されても、内陸の寒村で多くの人々が貧困に喘いでいるとか猛烈な物価高騰（インフレ）が世界をリードするはずの中国経済を自ら失速させ始めていると論評されても、あらゆる技術がコピー製品だとか自由な

情報や表現が侵害されているだとか開発や軍事活動が帝国主義（そんなことを行ったら米欧のポケモンに対する現在の開発もそんなものだ）のようだとかあらゆる批判を受けているとしても、この国の国旗掲揚だけは格好のいいものだ。

その衛兵の一人に、制服からして高級将校のような男が交じっている。その者が先ほどまで無線機と小声で交信していた男と耳打ちされた。高級将校の男は頷く、小声でつぶやく。

「そうか……エメリアのは…国連の回し者なんだな」「はっ、事実のようです」

ところで、兵隊というものにはいくつかのタイプがある。欧米、いわゆる西側陣営のように戦果や功労や出世を重んじるタイプ、中国や北朝鮮（こちらかなりひどいが）やかつてのロシアのように革命精神など体面を重んじるタイプ、民間軍事会社や傭兵のようにひたすらに金稼ぎに没頭するタイプ、そして訳もわからずかき集められた遠足集団の様なタイプだ。もっとも、一番最後にあげた連中が一番仲良しで和気あいあいとやっているような感じもするが。特にポケモン文明にこのタイプは最も多いといえる。

２０１２年　１２月１１日　ヴェルダー州ロアクーン　欧州連合送電塔付近　１２５０時

「距離１５００、ＨＥ（榴弾）用意」「用意よし」国連軍と共闘するアメリカ陸軍のＭ１Ａ２主力戦車の戦闘室では、右側の装填手が車長の指示のもと弾薬架から榴弾を装填してスイッチを押した。左側の砲手は熱線映像装置によって表示されたＩＶＣＳ（戦闘情報共有装置）で国連軍のデータリンクネットワークに接続されている表

示板に表示された目標をディスプレイで捕える。その表示から武器ステーションのコンソールを叩き主砲の標準をロックし、榴弾の信管に爆発時刻を入力する。

「目標…前方１５００の一団。撃てっ」方針の真後ろに座る車長の通信無線機からの指示で、Ｍ１Ａ２の主砲、ドイツ・ラインメタル社製４４口径１２２ミリ砲が獰猛な牙をむき、数秒後に目標を通りの位置に落着して爆炎と轟音をまき散らす。狙ったポケモン達１０匹ほどが一瞬で肉片と血しぶきとなって消滅した。

「よし、各車はこのままの位置で支援攻撃と送電網守備任務を続行する。相手が遠距離にある間は連中に任せろ。我々は送電線を守ればいい」各員の無線機に小隊長車からの通信が響く。

「今日のも…相変わらずのしつこさ…ぐえっ!?」ブレイブが多少止まってぼやいている合間にもコドラやサイドンといった重装甲の種族が大量のロックブラストの雨を降り注ぐ。ほのおタイプのブースターにとってはかなり痛い。あっという間にブレイブは頭のフサフサから背中まで無数の岩石がぶつかって傷だらけになった。「うげえ…おい…だいじょ…」どうにかフサフサから頭部装甲板の隙間を通って滴った血を右前足で拭って立ち上がろうとした時、彼は心臓が凍りついたかと思った。さっきまで共闘していたはずのサンダースとガバイトをはじめとする地元の部隊の連中たちが手足がもげて転がっていたからだ。どちらの残った体の部分も飛出した血と内臓でべっとりしていたし、肝心の彼も誰のものか分からぬ血を浴びてフサフサ尻尾の先まで真っ赤になっていた。おそらくはさっきのロックブラストだろう。

「くっそ…おいお前は生きてるなっ?!」ブレイブは傷だらけと血まみれになりながらも生き残っていそうな奴に声をかけた。「うっうう…中尉は…お怪我は…」彼に声をかけられてフラフラと起き上がろうとするシキジカ。ブレイブの記憶によれば、名前は確かアシアナと言った。彼女の方はこの周辺の集落防衛のために集められた

連中の一匹だった。おそらくは家族ぐるみでほぼ強引に。彼女自身がそう言っていた。

ブレイブの心中は苦しかった。同時に腹が立った。なんでこんな奴が徴兵されるのか？しかし彼とてこの戦いの中では単なる兵士、戦いのコマの一つであった。まあ正確には単なる駒ではないが。彼一匹で文句を言ったところで状況が変わるわけでもないし、彼はそうしようとも思わなかった。単に愚痴を漏らしているだけのつもりであった。

「俺はぴんぴんしてんぞ。お前の方こそ…まだいけるか？」「ええ…うっ…まだまだ体力的な問題は…」シキジカはフラフラと立ち上がる。ブースターはこいつがこれ以上大丈夫なわけがないと直感した。すでに前足二本は矢やその他の攻撃によってあちこち傷つき、背中の鮮やかな緑色は自らの傷から噴き出した血でべとべとである。彼女はまたして右に倒れそうになり、ブレイブが支えようとして背中に縛ってある矢立から矢がこぼれ落ちる。

「無理に決まってるだろうがっ？！何が大丈夫だよったく…いいか？お前はもういいから後ろの窪地にまで下がって待ってろ。そこらに行けば…！！！！」ブースターはシキジカをかばうように地面に伏せこみ、飛んできた葉っぱの嵐をやりすごす。と同時に彼は一気に前方上へと飛び上がり、かえんほうしゃを前方から飛び込んできたトロピウス2匹に打ち込む。2匹は左右に分かれてかわし、またしてもグラスミキサーの嵐が2匹を襲いかかった。「ぐぶっ…けどなっ！」「だ、大丈夫ですか？！」効果が少ないとはいえシキジカをかばうように喰らってしまった彼は一瞬倒れかかったがどうにか気を奮いなおして右前へとし滑り込み、葉っぱの嵐を飛びはなるようにかわし、片方の相手が地面に踏みつけにかかったところで上へ飛び上がった。「もらったああっ！」ブレイブが放っただいもんじで、すでに手負いだった片方のトロピウスは火だるまになってその場に倒れこみ、上に載っていたプラスルやマイナンも死骸の爆発とともに火だるまになって引き千切られた。もう一匹の方はかなりの

深手を被りながらも、一匹火炎にもろに焼かれて死亡したキノガッサが背中から落下しながらもなんとか上に飛び上がる。
しかし彼が着地してシキジカのもとに何歩も進まぬうちに彼の後方から再びロックブラストが数個襲い掛かってくる。
「やっべっ?!」「頭下げてよっ!」ブースターの頭の上をテルルが飛び越え、アイアンテールで岩石を打ち払った。とはいえ彼女が相手にしても数が多すぎる。そのうちの2つを頭にまともに受けてしまったグレイシアは後ろに吹っ飛ばされ、ブレイブのすぐ隣に落下しながらも後転を打って体勢を立て直した。「おいおいケガは?」
「それはアンタに向かって聞く台詞よっ!それより…」テルルは無線機のマイク部分をわずかに右前足でずらして左前脚で血をぬぐう。
「今の攻撃は敵さんの後方支援の連中らしいのよ。あそこにいるサイドンとかボスゴドラとかね」「そうだったか…」「今の攻撃でクローン部隊の連中と一緒にいた皆はともども全滅みたいよ」「くっそ…こっちはもうほとんど残ってねえんじゃ…」ブレイブは先ほど大量の爆炎が上がった辺りを見やった。クローン兵士のブイゼルやエテボースが死体になって大量に転がっている。手足が満足についている者も多くはないようだ。
「敵さんだってもうあれ位しかいないみたい!人間がありがたくも後方から支援してくれるおかげで、ね…」テルルが嫌味を込めて呟き、前方遠くで上がる爆炎を見る。攻撃を仕掛けているのは統合軍とアメリカ陸軍の戦闘ヘリＡＨ－６４Ｄ４機だ。おそらくは相手側の一団を掃討し終えかけているのだろうか。「ってまだいるの?!」
彼女は後ろに飛びのき、前から飛んできたケンホロウにこおりのいぶきを打ち込む。１発目はかわされ、２発目は命中したが相手のエアスラッシュを回避しきれず吹き飛ばされた。「こっんの!」ブレイブがすかさず背後からかみつき、「落ちなさいっ!」ふらついた相手を飛び上がったテルルが銛で心臓を貫いた。
「おっし!それでは早速あいつらを……」ブレイブが地面に着地し右前足の装甲板を軽くたたいて足を踏み出そうとした直後、ついに

相手の攻撃部隊はこちらに気付いらたしい。サイドンやボスゴドラの連中のロックブラストやいわなだれに伴う巨大な個体の嵐が降り注いだ。「どぶっ!?」「ええいっ?!」2匹はかろうじてそれをやりすごしたが、相手の弾幕は間髪入れずに突っ込んでくる。「どうする?!一気にやっちまうかっ?」「それ以外にあんの?方法…ひぃっ?!」テルルの耳元を岩石がかすめて炸裂する。「くっ…もう行くしかないのよ!」「あったりまえだっ!とにかく2匹…」ブースターが走りだそうとした瞬間、右後ろ足を装甲板の上から掴まれた。まるで死神があの世に引きずり込もうとするほど、皮膚が白くなるほど強く。

「な、なん?…」彼が足元を振り返る。掴まっているのはあのシキジカ、アシアナであった。彼女は戦場にいきなり降ってわいた事情を知らぬ幼子のように震えていた。その涙がにじむ目はまるで泣きそうな5歳児だ。

「あ、あの、あの…」「な、なんだよ…?…」ブースターは足を振りはらおうとするが、彼女はますます、関節が白くなるほど蹄でつかんでくる。「ね…ね…一緒にいてくれません…?…私怖い…怖い…」彼女はまさしく甲高い声を上げる。ブレイブはその表情を見て凍りついた。

……それは……まさしく…戦場の狂気。戦場の異様な危機感、周囲の全てが自分殺そうとするような圧迫感、倒れている同僚や友人の血液、死体、表情。その全てによってその者の感情をつかさどる交感神経が狂っているのだ。

「落ち着け…落ち着けって…」ブレイブは無理に明るい表情を作ろうとしたが、顔はひきつっただけだ。こんな光景を見て励まそうという方が無理と言うのである。彼はそうすることをあきらめ、転がっている彼女のヘルメット状の保護板を彼女の頭に無理やりかぶせた。「いいか、これかぶってあと2，3歩下がるんだ」彼の内心は連れて行ってやりたい、自分のもとで守ってあげたかった。だがそんなことをしていたら…自分も彼女もテルルもこの弾幕の中で息絶

えることになる。

ブースターはその悲痛な願望を振り払った。
切ない思いすら。

「そうすれば怖くない。いいか？窪地に伏せたら絶対に動くなよ、いいな！？」「…怖いです…ね、ね一緒に…」「いいな、動くな！よっしゃ！それでいいぜっ！」ブースターは右前足で装甲板越しにシキジカの頭をなでると、軍刀が装備ベルトにくっついているか確認して走り出す。「いっくぜテルル！」「う、うん！！」

２匹は岩石の弾幕を、彼らの背中にのっているパチリスやピカチュウやココドラのでんげきはやいわなだれと言ったものの嵐を飛び越え、前転を打ち、尻尾で打ち払い、みるみるうちに敵の一団へと接近する。ブレイブとテルルはかえんほうしゃとこごえるかぜでサイドンやボスゴドラの上にいる小さな連中を吹っ飛ばす。リオルやピカチュウのように火炎放射での焼死を免れた数匹も次に飛んできた－１００℃近い冷気で細胞が凍り付き、心臓が停止し、表面の皮膚を飛び散らせながら吹き飛ぶ。下にいた大型の連中にも聞いたらしく、すでに手負いの数匹はこれで撃破することができた。だがこの攻撃で相手もこちらの方向へと一気に迫ってくる。おそらくあの姿勢でボスゴドラが仕掛けてくるのはアイアンヘッド…
「おいテルル！足元だけを広範囲で足止めできっか？！」すでに何個も岩塊を浴びたブレイブは後方へ飛び下がりながら着地して無線機にどなる。「は？！できなくはないけど…でもなんで？」テルルも後方へ下がりながら頭から岩塊によって吹き出す血を左前脚で拭う。こおりタイプの彼女には何発も受けるのはさすがに堪えるはず

だ。「理由考えるな！そんなのはその場で思いつけるんだよ！いいか、お前が打ったら俺が奴らの上から仕掛ける。テルルは後ろに下がりながらできるだけ仕留めろ」「でも…私とアンタ2匹でこういう類は…うぐっ…」「いいから！…もう来てンだ…」ブレイブが飛んでくる岩の弾幕を後方に飛びのきながら無線機にわめく。相手までもう20メートルはない。彼はテルルが動くことを信じて前へと走り上へと飛び上がった。

「な、なんてったてアイツは…もうっ！」彼女ははため息をつき、軽く息を吸ってから体を躍らせて飛び上がり、弾幕の中を走った。

グレイシアは岩石の上に飛び上がり、のど元から渾身のエネルギーで大量の冷気を打ちだす。そのエネルギーは強烈なふぶきとなって迫ってくる巨体たちの足元の物質の原子運動を停止させる。多くの巨体がそれに滑り、バランスを崩し、乗っていたキレイハナやチコリータ等が転げ落ちて巨体に踏みつぶされ、足を踏まれ、首の骨を折り、装甲板や矢やその他装備品をまき散らした。

「よおおおおおしっっ！」ブレイブが上で前転を打って息を肺に送り込み、体内の熱エネルギーを流し込む。「くっらえええええええええっ！」そのエネルギーはブースターの口元から、全身から、巨大な熱波となって敵に降り注いだ。わざの名前は…“ねっぷう”。

その結果は想像を絶するものであった。サイドンやボスゴドラ本体は断末魔の声を挙げながら皮膚の表面から内部まで数秒の間に沸騰し、体内の諸器官までが3秒以内に焼きつき、全身が溶け落ち焼け落ちながらその場に倒れた。背中に乗っていた者はその装備品も体そのものも一瞬にして液体化し、弓矢の金属、装甲板の金属が残った皮膚に溶け付いた部分を残して多くが蒸発するか、黒くよじれた炭化死体と化してしまった。

テルルはそのまま前に飛び出し、まだ立ち上がろうとするボスゴドラの心臓を銛でぶち抜き、倒れているトリデプスの首を凍りのキ

バで頸動脈ごと噛み切った。ブレイブは空中からその合間に着地すると、運よく攻撃を逃れてフラフラとしているエネコロロを軍刀で一突きして窪地へと向かった。さっきので、または今までの攻撃で体力を消耗したらしく足取りが多少ふらついたが、今の彼にそれを感じる余裕はなかった。

ブースターは窪地の中に横向きに滑り込み、そこでぐったりしているシキジカの体を持ち上げる。

しかし……彼女は…彼女の周りは既に血の海であった。おそらくはあの時…最初に倒れていた時に弾丸の破片か、それ以外の負傷かで腹部かどこかから出血していのだろう。それで相当量の失血になってしまった…だがそんなことがこのブースターに理解できる余裕はなかった。目の前にポケモンが、しかも友軍の幼い女(メス)が倒れている……

「おい！おい？！……どうしたんだよアシアナ？！……」「ううっ…」ブレイブは彼女の装甲板を払い落とし、後ろ足で2本で彼女を抱えるように座った。右前足で彼女のほっぺをわずかにたたくと、彼女はわずかに目を開ける。すでに顔の周りからは血の気がうせ、青ざめ始めている。シキジカは消え入りそうな声を発しながら前足をわずかに動かした。「……帰ろう…帰ろうよ…もうやだ…」

「だったら…そんならなあ…そ…そ…なら…し…」ブースターの目から涙が何滴も落ち、彼女の鼻先に落ちる。彼はなんども左前脚で拭ったがそれは止まらない。彼には分っていた。バトルでならまだ

しも、破片の弾丸で大出血を起こしたポケモンは助からないと。この顔の色からしてもう何分も持たないという事を。だが、たとえそれが民間からの寄せ集めの徴兵者であろうと、彼には耐えられなかった。こんな民間の、しかもまだ幼い未来のあるはずの女(メス)がおそらく普通だったら平和な集落の中で家業をほぼ覚えて友人や恋人ともに幸せと一番感じるはずなのに、硝煙と血にまみれてこんな場所で息絶えるなんて。

「だったら…だったら死ぬんじゃねえよ！せ、せ…て…家族…か…ダチくらいに…このバカがッ！」ブースターは涙にむせながらも声を上げる。

彼女は…シキジカは首を振った。「うんん…もう……」「ど…何が…何だってんだ…」

「家族も…友達も…」アシアナはますます消え入りそうな声になっていく。「集落の皆…この戦いで…全滅したと……」

アシアナの声は霧のかなたへ消えていった列車の音のようになった。

「みんな…私も…行くから…ゆ…り…休…いい…」

それがこのシキジカの…この世で発した最期の音となった。

シキジカの前足が…だらりと下に下がった。

「おい…ううっ…ひっ…ひっ…」ブレイブの嗚咽が…窪地の一角に鳥のさえずりのように聞こえた。彼の意識空間は既に凍りついたように冷たくなり、感情の渦が…その容器を壊そうとばかりに意識空間にできた思考と言う時空のゆがみの底からあふれ出ようとする。今の彼を支配しているのは…戦場の殺気でも普段の信念でもなく、目の前で息絶えた彼女と彼女の全て。それを戦争と破壊という怪物の餌食にした自身に対する自責の念だけだ……

もう取り戻すことはできない。それは知っている。しかし、だか

ら…だからこそだ…だからこそポケモンは、いや人間だっておそらくは、死別というものになれることを知らない。慣れっこにならない…

しかし、それどころではないこのブースターの耳に、いやそういう状況だからこそ、入らなくてもいい声が聞こえてしまった。敵の。

それが運命なのか…炸裂寸前の彼の感情を暴走させる一撃となりうるささやきが……

「そ、そこに…まだ生きていやがるのか…この侵略者ども……人間のイヌ…」その声を聴いたブレイブはずり落ちた装甲板が転げ落ちるのを気にすることもなく窪地からはいずりあがった。傷ついた彼の体の中を激しい何かが駆け巡る。「……んだとぉ?!……てめえ……」彼の声は消え入りそうな柄もさっきに満ち溢れていた。それは怒りか、それとも哀しみか。

…ブースターの目の前にいるのは傷だらけのピカチュウ。自分の槍か何かに掴まりよろよろとこちらに近づいてくる。

目があった2匹は…どちらの意識の底から憎しみが噴き出した。

そしてお互いの目が狂気に輝く。怒りか、憎しみかによって。

でんこうせっかで飛びついてきた相手。相手はブースターに突き倒すように飛び乗ると持っていたｙ利を渾身の力で振り上げる。あとは重力の作用でこいつの心臓を装甲板ごと……

ブレイブにこれまでにない感情が湧きだした。それは危険なほど猛スピードに、どう猛に彼の意識空間を熱く埋め尽くした。そこから発したエネルギーが彼の右前足を猛烈な恒星に近い温度に変える。

彼の意識世界にあったはずのリミッターは吹き飛び、制御するすべを失った反応炉(リアクター)から恐るべき反応エネルギーが凶暴に炸裂した。

「この……野生のばっけものがああああああああああああっっ？？？？！」だがピカチュウの腹部を狙った一撃は奴の腹部を焼く代わりに右手と槍を吹き飛ばした。

「うぐあああああああっっ？！！」ピカチュウは上に吹き飛ばされる。重度の熱傷を折った右手の痛みをこらえ、全身の電気エネルギーを赤い色のほっぺの電気発生部にそそぎむ。「しねやあああああああああ！？」

しかし電気を放つ０．１秒前、奴は何者かの緑色のツルに首を掴まれた。猛烈な力が相手の気管支を締め付ける。「うぐえっ…誰が……っっ！！！！！！！！！！！！！！！」次の瞬間にはこいつの気管支は頸動脈ごと、そして頸椎ごとへし折られ、粉々になる。そのツルは絶命した黄色の体を渾身の力で投げ飛ばして敵のムクホークに直撃させた。ピカチュウの体内からあふれた電気エネルギーがムクホークのエネルギーと衝突し、大爆発する。

「大丈夫かブレイブ？」ベイリーフが窪地をずるっと滑り落ち、ブースターの傷の一つにツルを当てる。ブースターの痛みがわずかに遠ざかったような気がした。全くこいつは…俺のダチは…

「リーヒュン…お前も…無事か…」「ま、まあこのくらい。と言うよりお前のほう…っ！」友人は飛んできたエアスラッシュをツルの一振りで跳ね返し、一歩後ろに飛び退いて正確にタネマシンガンを３発放った。１発はおとり、残り２発を当てようと彼は直感した。

結果はどんぴしゃり、１発をかわしたピジョットは残り２発で心臓を打ち抜かれて墜落する。

リーヒュンはブレイブのそばに寄り、ツルでフサフサのついた頭をわずかに持ち上げる。

「へっ…はあっ…お前らしいな…たったあれだけで撃ち落とすなんてよ…」「そんな事よりブレイブはどっかに怪我でもしたか?!そうなんだな!」彼はツル先から親友の具合がどうなっているかを感じ取る。おそらくは相当の攻撃を受けて…特に岩石の類…相当の効果だ…

その直後、彼の意識空間の中に飛び込んでくる殺気を感じた。頭の上から、頭に生えた葉っぱに凍りつくような殺意を感じた。ベイリーフは慌てて視線を上げるがすでにその時には、傷だらけになったツタージャが槍を振り上げて頭の葉っぱから脳天をぶち抜こうとする体制になっていた。リーヒュンも慌ててツルを持ち上げるが一瞬だけ遅すぎる……

突如このツタージャの腹元を強力なエネルギーが襲ってこの緑色の体を後方に吹き飛ばした。続いて黄緑色のエネルギーがあとから飛んでゆき、ツタージャの体が腹から爆発ともに真っ二つになった。

「だ、大丈夫?!特にブレイブの方…ひぃっ!」窪地を覗き込もうとしたメガニウム、ユイリィ・プレミドールは右前足から窪地に滑り落ちて、2匹に突っ込む。「あ、あのな…何やってんだよ?!とにかく重いんだこっちは!…うぎゅう…」4本足がぐちゃぐちゃに混ざった状態でベイリーフがうめく。「ごめんごめん!…で、ブレイブは大丈夫なの?!」ユイリィはツルでブースターのほっぺに触れた。それだけで彼のひどい状態が、肉体的にも精神的にも傷ついた彼の状態がいやになるほどわかる。「ね、ねえブレイブ!」「うう…お前は相変わらずの女の子だな……お前と俺も同い年なのに…同じだな…」ブレイブは諦めたような笑顔をわずかに浮かべる。「

な、何それ?!……」「俺もお前も…今までさんざんいろんなものを失ってきたのに…平然とした顔をして殺しあってるなんて…俺はどうすりゃ…」

「……ブレイブ…そういう事なの…」メガニウムはブースターのほっぺを撫でながら思わず窪地の隣に視線を落とした。そこにブースターの意思を傷つける何かを感じたから。

そこにあるのは…シキジカの亡骸。

ユイリィの意識空間の中は衝撃で硬直した。同時に彼に対する憐みと自分に対するもどかしさを覚えた。

…さっきまで…あたしは…気づいてあげられなかった…結果を…ブレイブを…助けられたかもしれない

……なんで?……何であたしはここまで…

「…リーヒュン…お前だってそうだろうが…お前が持ってるそれは…何のためにある?……お前がこうしている理由も…それなんだよな…」

「……そうかもしれない…」ベイリーフは首から下げたあの小さな容器をツルで触る。ブースターの言葉の前に彼の意識下をまたしても霧が覆う。

……俺の理由?……こうしている理由か?……

何がある?

……フローラのため?……他に…他に……

一方、バストーク達旧３０２中隊とレオ達１７１６旧突撃部隊の混合部隊、ＵＮＦＳＴＰＰＴの部隊も大混乱の中で必死の戦いを繰り広げていた。しかもその状況を一層まずくしているのは、レオが一匹で前へ出たがることであった。

「こんのっ！」コリンクは前方から来たポッタイシをスパークを浴びせた。降下の相性も相まって相手は後方にフラフラと下がる。「もう！またあなたは…」ピトムニクがキノガッサの左手のパンチを全店でかわし、右手から電気エネルギーの球体（すなわちエレキボールである。）をぶちこんだ。ダメージを受けながらもプラスルをかわし、右手で後ろから刃を振りかざしてきたクローン兵士のキノガッサを彼はやすやすと上に飛び跳ね、その落下の勢いで尻尾を思わず叩きつけた。手負いの相手は傘から右の腰のあたりまでざっくりと切りつけられ、血しぶきをまき散らしなら地面に叩きつけられる。「おっ…俺アイアンテール…マジで使えたか！おっし…」レオが自分の能力に驚く間もなく、前から飛んできたバブルこうせんを右に飛んでかわしたが、その射線上後方にいたシンシアを直撃した。「うキャッ…」ロコンが後方に吹き飛ばされる。「もらったわっ！」ぺちゃんこになったロコンに向かって相手方のエモンガがエナジーボールをぶつけようと膜付きの両手にエネルギーを貯めこむ。

「させっかっ！」「何っ…！？」エモンガの後方からミズゴロウが地中から空中に飛び出し、体勢を立て直して洋弓銃のトリガーを引いた。手榴弾付きの矢がまさに緑色のエネルギーを打ちだす寸前のエモンガの背中をぶち抜き、その勢いでもう一匹のエモンガがぶつかる。２匹は作動した手榴弾の爆発に巻きもあれ、両手足がバラバラになって地面に火の粉と共に落下した。「シンシア、大丈夫か？」「グリソムさすがだぜ！俺が見越してボコした分だけ…」「あん？このくらいは問題ないよおいらには…うぐっ！」無線機越しにレオ

とグリソムが交信しようとした刹那、先ほどのポッタイシがまたしてもバブルこうせんをぶち込む。「またかよ…」ミズゴロウがハイドロポンプである程度の泡は打ち払ったが、いくつかは体勢を立て直しかけたシンシアを再び打ち倒す。「ええいしつこいのよっ！」ガトルが後方から飛び上がり長いしっぽの先から電気エネルギーの球体を打ちだした。直撃した相手は一撃で感電死してその場に倒れる。

「アンタね、いい加減後ろに下がったらどうなのよ?！私たち、かなり前に出過ぎてる…」「何言ってんだよガトル！これくらいでビビってたら…うげえっ??！」パチリスとコリンクが口論に至る直前に、レオが何者かにのしかかられた。「もらったぜ…」踏みつぶしたのはドダイトス。レオと比べた時に明らかにでかい。奴は爪を振り上げてコリンクの首を叩き切ろうとする。コリンクは左前脚で腰のあたりから刃を引っ張り出そうとするがそれも相手の巨大な足で叩きつぶされた。「うべっ?！」この巨体の上には多くのポケモンが矢を構え、わざをかけようとする。

「なにやってんだよ?！」「今助ける！」バストークがシグナルビームの嵐を、ピトムニクがでんげきはの暴風を、後方の多くのポケモンが多くのわざの稲妻をドダイトスと背中のポケモンに浴びせる。「目閉じてっ！」プラスルがスタングレネード付きの矢で上の奴らの動きを鈍らせる。その間にバストークがでんげきはを浴びせ、グラシデアがこの巨体に飛び付いて軍刀をこいつの首を叩き切った。「もらったわよっ…」モココは刃を突き刺したまま残った背中の相手に飛び掛かり、かみなりパンチで残った奴らを撃ち落とした。「うグッ…」断末魔のうめき声をあげたドダイトスは首元の動脈から、大量の血しぶきをまき散らしながら擱座（かくざ）した戦車のように崩れ落ちる。

「お見事グラシ。で、おいガキ、ケガはないか?」（グラシデアは

「あなたと違ってね」と鼻を鳴らしてから軍都を引っこ抜いて死骸から飛び降りた）メリープが死骸の間に潰されたコリンクを周辺にいたバクフーンやデンリュウと一緒に引きずり出す。「フン…先走りやがって…よし、残りの敵はアンタたちの部隊がやるんだな。頼むぞ」「了解しました」メリープに指示されたキリンリキとマイナン以下の地元の部隊は先程の敵が来た方向へと一斉に向かう。「よっしゃあ…俺らもいく…」レオは体をぶるんと震わせ前へ行こうと落ちた軍刀を掴んで走りだそうとしたが、バストークに尻尾を掴まれる。

「おい……」「な、なんすか隊長?」「お嬢さんは置き去りか?あいつはお前さんのスピードに付いていけてねえと……」バストークが皮肉な笑みを浮かべて顔をしゃくる。コリンクとの2匹の視線の先にあったのはフラフラになっているシンシアの姿であった。ガトルとグリソムとスカイラブによっこらと支えられてロコンは立っている。レオはため息をついて振り払おうとした。「まったくあのグズ!…隊長が介抱してやってください…俺は…」

次の瞬間、メリープのモフモフから突き出た前足がこのコリンクの首元を強烈な力で掴んでコリンクを地面にたたきつける。その表情には恐るべき脅迫のようなものが浮かんでいた。

「あのな…勝手に死にに行くように前に出やがった上によ…今度は…グズはほっとけ、だ?…」

「な、なんすか隊長?…俺…なんか問題でも…」隊長の恐るべき表情を見るなり、レオの表情から笑いが消えてゆく…

こんなくそ野郎は叩き潰してやりたい、メリープはそういう衝動に

駆られた。このコリンクの姿を見ているだけで、彼の精神を不快にした。

バストークは首を絞めるが如く左前脚でコリンクの首を締め上げ、右前足で彼の鼻元に拳を近づけて怒鳴り散らした。「て、てめえそれでも隊長か?!」「あ?!これで俺は隊長だ!!」コリンク負けじと声を張り上げてメリープのモフモフを後ろ足で蹴り飛ばす。「俺のやり方に…ついてこれてねえ奴は今一匹しかいねえんだよっ!ついてこれねえ奴は這いつくばってでもやらせるのが俺の…」「ざけんじゃねえ!そういうゴミみたいな思想が…」「今ゴミって言いやがったな?!」レオが軍刀を右足でつかんでバストークの首元に近づけるが、スカイラブが後方からコリンクの右前足を掴み「このバカっ!いい加減上司と部下関係くらい…」と押さえつける。彼の方はルクシオに刃を掴まれながらも口は減らず、「ゴミって言われるのは人間どもから慣れてっけどよ…隊長…アンタ…怖いのか?……それとも臆病風か…?」とまで軽蔑したように言い放った。

「ん、ンだとてめえは……俺を…貴様…そんな…」メリープの表情は怒りに引きつり、彼の思想の中の黒い天然ガス、長年の苦悩や苦しみで増幅された引火性気体が危うく暴発しそうになった。

だが…そこは既に35年生きたバストーク・ホルストらしく、なんとか暴発だけは押しとどめた。

その分…その溜まった有毒な瘴気をコリンクの意識にぶつけてやった。

メリープは早業で右前足を使って拳銃を引っこ抜き、コリンクの鼻元につきつけた。「た、隊長…何やってるんですか?!」「殺しはしねえ!ピトム、お前ならほっとくかこいつを?!」「わ、私は…」

ピトムニクは恐るべき状況の中で全く答えることはできない。このプラスルの意識は突如として外部から襲った冷気と殺気に縮こまり、凍りついていた。

「フン…で、……てめえみたいなゴミに聞いておきたいことがある…」隊長は殺気のこもった暗い声で言い放った。「貴様の部隊…そもそも何匹いた?最初から４匹か?」「そ、それは…アンタなんかに言われる…」コリンクの表情がみるみるうちに凍り付いていく。「元いた奴の数から４引いてみろ。その数だけ…貴様は殺してるんだ…それとも…いーっぴきにーひき、って数えてやらんといかんか?」

「……」レオは気まずそうに顔をそらす。意識空間の水晶玉に突如外部からひびが入った。そしてそれが、彼が忘れようとしてきた過去の出来事の冷気を意識空間にまき散らしている。

……俺が殺した?……連中を……?

……他でもない……うそだろ?

しばしの沈黙ののち……

「まあいい…」バストークの表情が普段の厭世感あふれるものに戻り、拳銃を戻す。「俺たちの世界は…人間によってめちゃくちゃだ…だからこそ…気を強くもたないといかん…」バストークの目がコリンクの黄色の瞳をグイッと覗き込んだ。「そのためには…失敗した数だけそれと正面から向き合え…いやなことなんか生きた長さだけ腐るほどあるぜ…だからこそ逃げんな…」「……はあ、はい…」コリンクは視線をそらしたまま頷いた。「はい、じゃないが……いいか…こんなご時世だからこそ…ふわふわしてねえで足元を固めるんだ…さもなきゃ…お前はいつまでたっても勝った勝ったと科学技術やら経済やらていうわけわかんねえもんで飛び跳ね回

ってる人間と同じだぞ……ピトム、俺たちの仕事は終わりだ」
「は、はい…」何事もなかったように頭部装甲板を掴んで胴体に回した隊長を見たピトムニク・マルセイエーズの頭の中は混乱していた。自分の立ち位置がどうなっているのかさえ理解できぬまま、彼女は残りの連中とともに送電線側へと向かう隊長の後ろについて行った。

送電塔付近の彫られた窪地　２２００時

夜の風景は昨日とも一昨日とも変わらない。多少違うのは、一昨日から雲がじりじりと少なくなり、より星空が鮮明になっているという事だった。前述のとおり付近に市街地も工場も発電所も道路も主だって人間が作った人工物はほとんどない暗闇と月明かりが支配する場所では、宝石をちりばめような星空が一層鮮やかに見えるのは言うまでもない。

レオは星空を見上げてため息をついた後、土汚れや血のこびりついた自分の前足を見つめてため息をついた。先ほどのバストークのあの言葉がこびりついたように耳を離れない。自分のやり方を否定したのか、それとも自分の性格を否定されたのか、それはどっちでもいい。とにかく、自分の今まで信じてきた方法を否定されたも同じだ。多少荒っぽいのは分かっている、しかしそれでも信じていた。

……俺がそんなに…おかしいのか？……あの隊長にとってだろ？……

……どんなに…戦争としてはおかしくても…これが俺なんだよ…他に何があるんだって…

コリンクは首を振り、そばに置いた頭部装甲板をガツンと叩いた。

考え直すべきか、それとも自分の考えを貫くべきか、“気を強く持て”というバストークの最後のセリフのニュアンスがコリンクにはさっぱり理解できない。

そして最後にはレオ・バイブル・ミュースカイっぽく考えることも放棄してしまった。ひたすらに考えているとまるで自分の存在を否定されそうな感覚に襲われてしまい、ひどく苛立った。星空を見上げても妙に暗く貼り付いたように見える。

ふと背中のちょうど色が変わっている辺りを軽くたたかれた。

「何やってんのよレオ。食事ぐらいまどもに食べないでどうするのよ?」独特のアクセントの平坦な言葉遣い。スカイラブであった。口にくわえてきた飯盒の様な大きな容器をくわえてきたらしい。これくらい大きなもの、しかもゆれたりすると問題をきたす者はさすがに前足を返して歩くわけにはいかず、イヌと同様に口にくわえるしかない。容器の上からは安っぽい2本のさじがはみ出し、容器の中からはうまそうな香りと湯気がゆらゆらと立ち上っている。レオはやっと思い出した。自分がまともに食事さえとっていないことを。夕方以降、少し普段の場所とは離れた窪地の片隅にいたことを。

「で、食べるの食べないの?まあさじは2本持ってきてあるのよ」

「……ま、まあな…」コリンクはとりあえず口に運んでおこうと考え、窪地底のの平坦な部分に置かれた容器からさじを掴む。普段自分が使っているのと同じサイズだ。さすがはスカイラブ、必要なさじの大きさまでわきまえてやがる。

ポケモンの食器というものはたいていその家庭、種族に合わせて手作りされている。その一方で人間たちが彼らのために職場や軍隊内で用意するものはサイズに数通りしかない。ねじや鋼材といった工業での基礎的製品を世界規模で統一化している人間にとっては、よほど大型のワンオフ構造物や機械であるか超高級品の類ではない

限り、機械による大量生産の邪魔になるこんな製品は規格を統一して当然だという考えからだ。

レオはさじを右前足で掴んで、スープ状の液体の中から浮かんでいる具ばかりをすくっては口に運ぶ。同じ容器からスープの方を何さじもすくって運ぶルクシオが唐突に話し出した。

「で、あんたはどう思ってるのよ?」「ああ?いきなり何の話だっての?」コリンクの右前足がふと止まった。「何って…アンタは隊長として今後はどうするの?」「やめろその話は。だいたいあれはあの隊長が…」レオはさじを容器の液体の中でかき混ぜるように回す。「…あのくそ男が、とか言いたいんでしょ?アンタの事だからどういう形容詞をつけるか分かんないけどね。……アンタはとりあえずでも隊長なんよ。シンシアだけじゃなくても一緒の子をほっといてどうすんの?」「ううう…俺はなあ、その…」コリンクはじれったくて尻尾をぴゅぴゅっと振った。彼女の前だとなぜか反抗する言葉に詰まる。どうしてそうなるのかがいまだにわからない。

「まあそれはアンタが決める事なのよ」スカイラブがレオの尻尾の動きを見て表情を緩める。「…ただしだけどね、少なくとも同僚の子を考えてやるのはどんな時でも必要ね。そうでなきゃアンタただでさえガキなのに、そのせいで他人死なせちゃうよ。……それにアンタみたいな奴はそういう経験をしてでも成長せんといつまでもそのまんまになるんよ…」

「うっ…お前はいつもそう言って…」普段のレオならとっくにキレてさじを叩きつけているだろうに彼女の前ではそうにならない。おそらくは幼馴染みの縁があるがゆえだろう。

「ま…そういうことは自分自身が知ってるし、私自身疎いからねそういうの。だから私はこれ以上言わないけど…」「……」

その後レオは吹っ切れたように何も言わず、夢中でさじをすくってばかりいる。スカイラブはそんなコリンクを自分の左前脚でさじを

液体の中で混ぜながら眺めていた。スープの中からは鶏肉ばかりがなくなっていく。ニンジンやキャベツやジャガイモは全くの手つかず。そんな光景を眺めていると彼女の心の中では彼は何年も前の子供のままだ、そう感じた。今も昔もコリンクのままであり変わったのは大きさと手足の長さだけだが、食べ物の好き嫌い、食べ方、尻尾の動きは全く同じ。（このルクシオの言葉を借りれば）このコリンクはまだちび助だ。しかしそんな風景を眺めているだけでスカイラブのかすみがちな意識にすがすがしい澄んだ空気が流れ込む、そんな感じがした。彼は彼女にとっての友人、同じ集落での家族と同じ、小生意気な弟分、そのすべてだったから。

「あの…レオは大丈夫？」ピトムニクがスカイラブの背後から心配そうに寄ってきた。レオの方は食べることに夢中になって全く気付いていない。

「この通りよ。まともに食べれれば人生問題なし。ごめんね、今日もお願いするわ」彼女はコリンクの洋弓銃を取り上げてプラスルに渡す。「ああそれから…隊長にはさ…こいつは問題ないって言っといて。こいつなりに考えてはいるって、ね？」

しばらくして、スカイラブは胴体に首からかけて回していたもう一つのかごの存在を思い出した。小麦粉を水と塩ともにこねて焼いたものが入っている。その塊を左前足で一個取り、それを口で運ぶ。

「俺にもそれくれ」「へっ？」「それだよそれ。俺も食いたい」レオはどうやら気づいていたらしい。それとも彼の本能か。

やっぱりこのコリンクとルクシオはあらゆる点でつながっているよ

うだ。これだけの会話ですべての意思疎通が成立するのだから。

「はいはい」スカイラブがコリンクに一つ渡した。

リーヒュンとユイリィはふらふらになったブレイブの手当が済んだのち、彼を連れて国連軍の仮設前線指揮所から元々いた欧州連合の熱核融合型原子炉実験施設の電源用送電線下の陣地と化している窪地へと歩く。とはいえ2匹が感じるのは、このブースターの意識空間を疲労と負傷という形で痛めつけている圧力というものが肉体的なケガというより精神的な傷であるという事だった。特にユイリィの方はその原因となるこびりついた彼の記憶が嫌になるほど掴み取れてしまう。いっそこんな能力がなければいいのに、彼女が時々そう思う時がある。よく考えてみればこの能力が、地球に暮らすすべての人類、動物、ポケモンの中で1兆人、匹の中から彼女と隣にいるリーヒュンが獲得し得たものなのだ。しかしその能力がゆえ、特にこの女メガニウム(メス)の幼少期を、児童期を、青春期さえも寂しくつらいものに変えてしまった……

思い出したくもない…あの時代……なぜ生まれてきたのか、どうして生き続けなければならないのか…成長するほどそれすらも分からなくなり、自分の水晶のような意識空間の球体を押しつぶされそうな恐怖と悲しみに襲われた。

ユイリィは首を振り、ツルで右の雄蕊の長いほう（くるくるに丸めてひもで束ねている方）を触る。今こんな事ばかり考えていたら、隣のベイリーフに（彼はまだ気づいていないようだった。彼も深く考えていることがあるのだろう）勘付かれて無用に気遣わせることになってしまう。

無理してでも、どうかしてでも明るく振る舞わなければ。今まで彼

女がそうしてきたのと同じように。つらい過去を押し殺してきたように。

先に口を開いたのはベイリーフの方だった。「ブレイブ…大丈夫か？」「ああ？全然問題ねえよ。だいぶ良くなった」ブレイブの意外にも元気そうな声にリーヒュンはちょっと驚いたような表情をする。「そっか…ならいいんだけどな」「おうよ。俺がこの程度の事でへこむとでも思ったか？」ブースターが面白そうにフサフサ尻尾をふる。そんな姿を見ていたベイリーフの感情は次第に重苦しくなる。気を紛らわすようにツルを使ってブレイブと自分のヘルメット状の頭部装甲板と（はっきり言って弓矢の戦争に留まらぬポケモン同士の戦いではこの装備は大して意味がない。それでも文明のお約束にのっとって気休め的に装着しているにすぎないのだ）装備品入れの位置を調整する。それから彼は自然にそこらに生えているナズナのような雑草を一本へし折って口にくわえていた。不安になったり思い悩んでいるとついついやってしまうくせだ。この数年でリーヒュンのこのくせはさらに悪くなった。年のせいか何のせいか、色々と思い悩んでしまう事が増えていると自分自身でそう思っていた。

……俺は何のために……どうしてここに来たんだ……

……フローラのため？……そんな目的でこんな戦いに参加して……何もなければ今だってソーラの一角でオレンの栽培をしていたんじゃないか……しかしそれでフローラは…妹はどうなっていたんだ？……

ベイリーフはいつの間にか首から胴体に回したあの容器を見つめ、ツルで握りしめていた。触っているとほのかに暖かくなっている。自分の体温がツルを通して伝わっただけであったが、今の彼にはこの水と翡翠が入ってちゃぷちゃぷと音を立てる容器から不思議なも

のを感じ取れた。
…この中に…妹が…フローラの意識がいる。彼女自身がいる。
…自分を待っている。
しかしそれ以上がまったくわからない。彼は、兄はもどかしすぎた。自分の能力はそこまで役立たずが?どうすれば…しかしそもそも能力が高くなるとどうなるのか、それすら恐ろしく感じた。もしそうなったら…フローラがどうなってるか…見たくもない情景が浮かんでくるのか?
彼は薄々気づきたくなくてもそう思わらざるを得ない状況を感じ取っていた。

「どうしたんだよリーヒュン?やっぱそれが気にかかるか?」ブレイブが笑いながらベイリーフの左前脚を小突く。「分かってるよ…それがユイリィからもらった大事なものだってことぐらいはな。…大事にしろよ」
「俺は……」リーヒュンはツルを容器から慌てて離す。突如として先程ブースターに言われたことがよみがえり。何かを言わなくてはと思った。あれは彼がフラフラの状態で思わず口走ったことなのかもしれない…死を目前で経験した彼が混濁した意識の中でしゃべっただけかもしれない……

しかし…だからこそ……

「俺がいる理由は……フローラのためだな…それ以外に理由なんてない。軍人とだって思ってないさ。ただこうしていれば、フローラの事が…」
「へへっ…なんっていう単純な結論なんだよ。ま、お前らしいと言えばお前らしいや…」ブースターは右前足で頭のフサフサをかく。
「そんなに先走るなよ。確かに俺だって昔みたいに後先考えず無茶

苦茶やってるお前の方が好きだ。だけどよ、お前も１８だ。そういう悩みを持っているのも見りゃわかる。だからこそな、そういう問題はもう少し考えてから結論出すもんだぜ…そんな難しいものは…誰だって思いつかないぞ」彼の話し方には全く揺らぎの内容に見える。彼の性格を考えればなおさらそう思えるに違いない。

まあ実際はちょっと違うのだが……

「そっか…ごめんな、また心配かけて」リーヒュンがツルでブレイブの頭のフサフサをポンポンと叩く。「俺は全然平気さ。どんなに苦しい道だったとしても……たとえフローラまでどんな道だったとしても…」

「そうだよ……これからも一緒に行こうね！」ユイリィにやっとしゃべるチャンスが回ってきた。気兼ねせず、思いのままに。メガニウムはベイリーフの首の葉っぱをツルでパシンと叩いた。「あたしとリーヒュンがいればどこまでも怖い物なし！うんうん」

「な、何言ってんだユイリィ！俺も加えろよな俺も」ブレイブがユイリィの右前脚元に飛び付く。彼女の方も首を下げて頭をブースターの背中にすりすりした。「もっちろん！みんながいればもっと大丈夫！」「おっしゃあ！俺達２匹、いやこいつとテルルちゃんも加えて４匹であらゆる苦難も撃破してやるってところだ！でもそんな事より今はユイリィの頭すりすりがめちゃ気持ちいいぜ！うおおっ、やばい、やばすぎる！」「でしょでしょ！あははは！」２匹のじゃれあいは収まるところを知らない。「な、なんていうか…俺はかやの外？まあいいや」リーヒュンはそんな２匹を眺めながらふと意識の中から先ほどまでの暗く冷たい気体が薄らぎ、ほのかな焚火に似た暖かさが冷えかけていた宇宙を温めてゆく感触を覚えた。

他でもない。自分の単純さ（言い換えれば無茶が）自分を生き残らせているわけではないのだ。こういう仲間が、友人がいるからこそ…自分はこうして乗り越えられるのだと。

「ちょ、ちょっとブレイブ?!アンタ大丈夫だったの?!」ふと声がして走り寄ってきたのはテルルであった。息を切らせて走ってきた彼女はブレイブの包帯が巻かれた右足から腹にかけてをちらりと見るなり、右足の付け根をグイッと彼女の左前足で掴む。「アンタあの時すごい喰らってたじゃない?それでいても動いているとか…」「うおっ、テルルお前は俺のことを心配してくれたのか!さすがは俺の期待する女の子!やっべええ、痛いけど足を撫でて…」「…はあ?」ブースターの嬉しそうな表情にグレイシアの表情がちょっと嫌そうなものになる。「大丈夫だよ。俺は大したケガなんかしてない。テルルこそ対して何ともなくて良かったぜ……」ブレイブはテルルのもみあげ状飾りを左前脚でなでる。

「……良かった…私は…だめかと思って…」彼女が消え入りそうな声でつぶやく。「何心配してるんだよ?おら、これでも飲んで落ち着けって…」ブレイブがアルコール水入りの容器を差し出そうとした。

しかし…テルルの表情が一気にゆがむ。「…どうした?…」ブレイブの表情からも明るいものが消えていった。

「こ、このバカっ!!」「うげっ?!」

グレイシアの右前足がブースターの左側の頬を激しく突き飛ばし、彼は右に吹き飛ばされてぺちゃんこになる。それを見ていた2匹にはこれまでのテルルの一撃とは違うものを感じた。今までの様なボ

ケとツッコミという構図ではない。彼女の張り裂けるような心情がはっきりと見える。

「くう…な、何すんだよいきなり…おげっ?!」転がった容器を掴もうとしたブレイブの左前脚をテルルが強烈な勢いで踏みつける。

「あのね、これだけ心配かけておいて何よそのセリフは?!誰が…誰が落ち着いてられるのよあん時のブレイブを見て!?」彼女は彼の両耳を前足でつかみ、恐ろしい形相で顔をブレイブに近づける。

「おいこらやめろって!」リーヒュンがツルでテルルを無理やり引き離そうとするが、彼女はベイリーフに向きかえる。「アンタはこいつの肩持つつもり?!」「んなわけない!テルルにとってこいつの何が気に入らないんだよ?!多少は理解してやれってこいつを」

「はあ!?何そんなこと聞いてんのよアンタ?アンタってつくづく考えがないのね!」グレイシアは彼に向かって暗くこもった声で言い放つ。「それじゃ本当にフローラを殺しちゃうわよ助ける前に。それでいいの?」「なっ…」ベイリーフはその言葉に固まった。思考が停止し、地面が溶けてゆくような悪寒に襲われる。

……どういう事だよそれは?…一体…?

グレイシアはそんな表情を見てあわてて修正した。

「ご、ごめん…そういう意味じゃない、違うのよ!…ホントに悪かった…ごめんね…」

「……俺は…大丈夫だよ」

2匹の間に気まずい沈黙が流れる。しかしもう取り返しはつかない。テルル・アストラフスキーの放った言葉という弾丸は見事にリーヒュン・バイリング・グリーズの意識をぶち抜いてしまった。

気まずいながらもテルルはブレイブに話をつけようと視線を戻す。

こいつの方も何とかして自分の意見を伝えておかなければ…
「で……ブレイブはブレイブでみたいなさ…めちゃくちゃなことしかしないのっては、どういう神経してんの？……それがいい事だとでも思った？…」テルルの声が次第に暗くなっていく。彼女の意識の中を暗い記憶がまたしても覆い尽くし、感情を閉塞していく……

……たった1匹…ポケモンはつながりを失ったら…もう生きてはいけない。文明の利器とか技術とかシステムとかじゃなくて……それを失ったら立ち直れないのよ…
……私にはわかる。それがどういう事かがわかる。その内容は言えない。でも、……それから立ち直るなんて無理。そんなことになったら性格は変わってしまうのよ……
……アンタ達はいつも一緒だった…そんなことを考えることはできないかもしれないけど……もしそれに直面したらどうするの？…せめて覚悟くらいないと…まっすぐな2匹だからゆえ…

掴んでいる彼女の前足は少しだけゆるんだ。

「ごめん…ちょっと言い過ぎかな…でも私はね…こう見えてもアンタたちの事…心配してるんだよ。それ以外に私ができる事って言ったらさ…こうやって力づくしか…思いつかないのよ…」
「……」リーヒュンとブレイブは顔を見合わせる。ベイリーフには今までどうしてもわからなかった初めて彼女の意識の本質を、水晶のような球体の中心を作り出すエネルギーの一部を垣間見たように感じられた。それは痛いほど苦しいほど彼の意識空間の底に共鳴する。

……テルルは自分以上に…他者という存在を……気にしている性格なんだ……

……だからこそ…たとえ扱いが乱暴でも…男(オス)が嫌いとは口で言っても……それを失いたくない、なくしたくないのか……

ブレイブにもわかったらしい。彼女がどうしてそう言うのか。何を求めているのか。どう表現するかを少し考える。

……そうか…そう言ってほしかったのか…なんで気づかなかったんだろう俺……

…いつもだったらそういうのはすぐ理解できるはずだったんだが……

少しあって、このブースターから言葉になってそれは出てきた。

「…迷惑かけてごめんな……悪かったよ…俺は大丈夫…」

「そう…私の事は気にしないで…ちょっと私も疲れてるせいかもしれない……ごめんね…もう少しすれば終わるかもしれない……でも…お願いだからホントに直してほしいのよそこは。私は心配なのアンタたちが」テルルはブレイブを立ち上がらせ、容器を拾い上げる。

「ユイリィ…ごめんねちょっと。でももうしないから。私もぜった…」そう言いかけたグレイシアの声が凍っていくように消えて言った。

「……うん…そうだよ…いつかは皆…なっちゃうんだよ…」

「へっ？」「…うんん。やっぱ何でもないよ。うん…」メガニウムの視線は焦点が定まらない。はるか遠くの星空を眺めているように３匹を見つめていた。リーヒュンにはその視線の奥から黒くゆがんだユイリィが見た未来が……自分たちの未来と思わしき感覚を感じた……

……これが……彼女が恐れている…未来なのだろうか…？

彼の意識の中に先程テルルに言われた言葉と彼女の暗い感情が暗いエネルギーとなって襲い掛かる。彼女は一体…何を見たんだ？……何を感じたのか？……

２０１２年１２月１２日　ヴェルダー州　ロアクーン北部　０００１時

遠くに見える欧州連合の施設へと続く送電網の河の様な明かりがこの辺りもほんのわずかに照らす。他に夜の明かりがないからであるが。

「ほ、本当に…目的が違うのか？」「当然だ。ベクレル、アイソープ、予定通りやるぞ」通常よりかは大柄で、足元の赤い炎のような毛が独特の丸みを帯びているポニータ、シーベルト・リヒテントは自分の装備品ベルトにくっつけられた真新しい“中尉”の階級章をみる。これは先月１８日ころにニュークリア西部の反自由連合派の集落を、彼と少数の部隊で壊滅させることに成功した功労からであ

る。階級制度の柔軟性では自由連合は自治協会と比べて圧倒的に富んでいる。

これはこのポニータにとってはいい事だ。自分の目的のために利用しやすいのだから。そう、彼はまたしても行動を起こそうとしている。

もっとも、今回の行動ほど彼の心情を重くするものは今までなかった。何せ今回の目的のためになる犠牲になる者は……なのだから。シーベルトはその言動や立ち振る舞いほどには精神的なものが強い訳ではなかった。自分のために他者を犠牲にするたびに、彼の意識空間にできたあまたの傷、特に子供頃にできた巨大なひび割れはうずき、ぐらつき、内部の黒々とした霧が外に吹き出しそうになる。それを必死に押しとどめている物はその黒々としたものの大半をなす家族に対する思いとそうさせた連中に対する復讐心だ。それは毎晩起こる。その声は夢に現れる。失くしたものの名をささやく。これから失うであろう名を彼に呼びかけ、嘲笑する。アリョーナの言葉に何回助けてもらったことか。それでも彼の苦しみは終わることをしらない。

しかし、ここで止めるわけにはいかないと彼はその苦しみも重圧も憎悪も全部ねじ伏せた。そして彼を支える唯一の方向、そこに向けた決意という光を意識の宇宙に送り込む。家族と自分の信念の為にも。自分の信じるポケモン文明のあるべき姿を体現するために。

「とにかく、明日は決めたとおりにやるからな。頼むぞ2匹とも。特にベクレルな」ポニータはベクレルと呼ばれたゼブライカが履いている草と革でできた脚部保護靴に（このような名称は人間が文化学上そうよんでいるだけだが）自分の保護靴越しに蹄で軽くたたく。

「そりゃ上官の言う事は…いやいや、お前にはどこまでも付き合う

ぜ。何せ下っ端時代から一緒だったろ?」彼はシーベルトの頭に自分の角のようなギザギザを当てようとして止まった。「おっと…わりい。お前は種族が違ったな…」

「いや、大丈夫さ。入った頃はお互いかえんほうしゃとスパークでぶつけ合っただろうが」

「そうだったなお前らは。何かとポケモンはどうあるべきかとか、自由連合はどう変革すべきかとか一兵卒にはどうでもいい事ばっか。んまあ、そういう変わったやり方も時がたてばいい思い出、いい成長のもとだったんだろ?」アイソープと呼ばれたサンドパンは思い返すように言う。

「ったく、お前はなに年上ぶってんだよ?俺らと同期じゃねえか?」シーベルトが軽く笑って自分の右前足の保護靴の編み上げを縛りなおす。「よし…戻るか。俺は中隊長の所に行くから」

2匹と分かれたポニータは自由連合側が接収したロアクーン北部の集落最大の通りをこの集落最大の建物に向かって歩いた。左右にある木材や草でできた商店や民家らしき建物は連合軍が接収して主だった食料や品物を巻き上げたか兵士たちの宿泊施設に摂取したかしている。元の住民たちはその建物の外壁に草やわらを敷いて寝っころがっている。おそらく水や食料も軒並み分捕られていてとてもひもじい思いをしているのだろう。

「ちょっとそこのお兄さん」シーベルトは民間のビーダルに声をかけられた。おそらくは彼の装備品ベルトにぶら下がってる階級章がほかの兵士たちより上に見えたからだろう。実際ポケモン達の軍隊内では小隊などの指揮官さえも大半は兵卒であった。シーベルトなどの尉官や中隊長の様な佐官のような上位階級者は中隊レベルではきわめて少ない。

「はい?どうしましたか?」「あの…ここの集落はいつになったら静かになるの?うちの子供たちの家はいつになったら……」母親らしきビーダルは建物の壁に寄り掛かって眠るビッパ達を指差す。こ

の女の子供たちだろうか？

「いえ…自分にもそれは決められません。僕は単なる一兵卒です。申し訳ございませんがもうしばらく辛抱願います」ポニータは言いづらそうに言葉を漏らした。

「お願いします！できるだけ早く！…私たちまでくれぐれも戦争に巻き込まれることの…」母親ビーダルの懇願するような調子にポニータの意識空間に巨大な霧が広がる。この戦いは自分のせいではない。しかし…民間を数多く巻きこんでいるのは紛れもない事実だ。

「ええ……本当にすいません…なるべく早くけりをつけるために全力を尽くします」シーベルトはビッパ達をちらりと見やると、やや暗い声で返答した。「本当に…本当に…」

「シーベルト、何してるの？」後ろから声をかけられる。後ろに立っているのは美しい毛並みのキュウコン、アリョーナ・ハイペリオンであった。彼女はビーダルの顔をちらり見るなり、優しい表情をして声をかける。「ご心配はありませんよ。私たちはこの集落を人間たちにも彼らの見方についたポケモン達にも指一本触れさせはしません。シーベルト、行きましょう」「え、ええ。アリョーナさん」シーベルトは後ろ髪を引かれる思いながらも、キュウコンの後ろについて行った。

「あの…聞いてもいいですか？」歩きながらポニータはキュウコンに聞く。「ん？どうしたの？」

「この集落は…戦闘に巻き込まれるんでしょうか？」「…うーん…どうでしょうね…」アリョーナは首から胴体にたすき掛けした頭部保護装甲板を一番右の尻尾でなでる。「……単純に言えば…すでに争いにまきまれてる、て言うのが正しいわね。私たちは…すでにこの集落をほとんど荒らしたも同然となってしまったのよ……」

「……そんな…でも…」シーベルトは愕然とした表情を浮かべたが、数秒後には認めざるを得ないという事実を認識していた。そ

の通り、自分たちはすでに多くの商品を略奪し、建物や土地を奪い取っているも同然なのである。「ええ…そんなもんですね…」

「なんでそんなことを聞くの？」「いや…その…自分たちのやっていることは…文明を自ら傷つけ、滅ぼしている事なんじゃないかと…思うんです」ポニータの声は苦渋に満ちていた。

「そうね……でも…」アリョーナが右前足をシーベルトの蹄に置く。

「…私たちはそういう相手からポケモン達を守るのが仕事なの。だとしたら…その時の民間への被害を最小限に食い止めるのが私たちの責務である、と私は思うわ」

「……はい」ポニータは首をぶるっと振って夜空を見上げる。かがり火位しかないこの文明の夜は暗い。無数の星が宝石を散らしたように、光の川のように輝き、暗いはずの空を神秘的な濃紺に染め上げている。

その中に赤い光と白く眩しい光を点滅させながらごく小さい、夜空から見れば本当に小さい影が夜空の一部を2匹から見て左から右へと横切った。「あれは…？」「人間の技術よ。飛行機っていうの」彼の子供っぽい問いかけにアリョーナは母親のように答える。彼女から見ればこのポニータはまだまだ子供だ。彼女が経験した戦場ではもっと年少の兵士もいたし、もっと幼い子供たちが家族もろとも戦いに巻き込まれて家族や友人を失い、彼や彼女自身が命を落とす姿を目撃したこともあった。

だからこそ…このキュウコンは誓っていた。彼を絶対に守り抜くと。息子同然のこのポニータに最後まで付き合うと。

シーベルトは心の迷いを打ち払った。確かに人間の世界では自分たちがこうして戦争を行っていてもあのように空を悠然と乗り物で移動している。もちろん、一部の人間たちは今回の攻撃…あの施設に反対するポケモン達の依頼だが…への対策で手を焼いているのだろう。しかし、彼らと自分たちでは文明の規模（スケール）が違う、自分たちが主に自らの周りの集落や山の向こうの集落とこの“半分くらい人間が

原因の”戦いを繰り広げ、今日や明日の食料やねぐら探しに必死になっているとき、彼らはこの世界の外の空間、星空の空間にまで（外の世界は、確か宇宙と言うらしい）活動範囲を広げて、さまざまな技術やシステムを作り上げているのだから。さっき見たように、ポケモン達の文明は荒れ果てている。そもそも文明が年老いて消えつつあるところに、人間たちが文明の力にものを言わせて自分たちの領域を開発し、彼らの戦いや労働にポケモン達を連れてゆき、新種の病原菌や開発による公害を広げ、農地をちっぽけな貨幣で（しかも最近の人間は金そのものを見せなくても金として成立させられるらしい）巻き上げ、果てには科学と言う恐るべき怪物によってポケモンと言う生命体そのものを自分たちの都合のいいように改造してそれを商品に取引している。

対して自分たちは、そんな人間たちに何度も戦いを挑んで敗北し、人間たちに脅迫されて同じ文明の集落を攻撃させられ、家族を友人を故郷を守るためにやむを得ず人間の労働力となり、一部の者は彼らの科学技術の犠牲となり、文明が衰退した現在に至っては、場所によってはその日の食料や寝床にも困り、獰猛な野生肉食動物の餌食となり、病気に侵されて死に、自然災害や事故などの人災に倒れ、同じ文明の盗賊や過激派の者たいに命や財を奪われ、多くの者が（特にエメリア以外の者は）家もなく集団で放浪する生活を続けているらしい。その情報源すら今やロクに機能していないのだ。

それを打破するにはまず、ポケモン達の意思を統一する必要がある。そのためには何世紀も前からの反乱組織である自治協会を打倒、もしくは統合するべきである。さらにそのためには…自由連合を食い物にする腐った上層部を一掃しなければならない。

シーベルト・リヒテントの…このポニータの…家族も、友人も、故郷も、あるべき自由連合とそこで暮らす者たちの何もかもの権利も人生も幸福も奪い、命まで奪った腐ったゴミども。あんな奴らのエスパータイプや伝説が示す“意識空間”で言う“意識の流れ”はあ

るべき世界では（彼の考えでは）、さしずめ例えれば浄化されるべき超高濃度の汚染水も同じである。そうすることで、この世界は浄化され、美しく正しい流れに満たされる場所となる。

そうやって初めて、ポケモン達は人間に堂々と向き合える存在になれる、と。

そう言った思考を張り巡らせているうちに2匹は目的の集落で最も大きい建物へとたどり着いた。ここは本来、エメリア探検隊連盟の探検隊基地と言う名称で使われいた施設だ。

「アリョーナ・ハイペリオン大尉、シーベルト・リヒテント中尉、入ります」2匹は施設の一階にある一室（とはいってもそこはポケモン文明らしく簡単に板で仕切られているだけだが）に入る。

この仕切られた一室を見張るのは女（メス）のロゼリアと男（オス）のメガニウム。どちらも戦闘時と同様、金属の頭部保護装甲板と安っぽい牛革を編んだ草で縛った脚部装甲板を装着している。

その一室の中にいるのはかなり強壮な体格をしたレントラー、ヘルベルト・ヨルムン・サンクト・ラクープ少佐であった。2匹の様子を見るなり、少佐は親しみを込めた声で話す。そこには、戦闘時の実に戦士らしい勇壮な冷徹さはなかった。

「おう、来たか。固くならずに座れよ、リヒテント中尉にハイペリオン大尉…そうだ、ペテルは外していいぞ。世間話しかしないからな」

「は、はい少佐」ペテルと呼ばれたジュプトルは、一瞬戸惑いながらもポニータとキュウコンを見て仕切り版の外、すなわち部屋の外へと出る。ラクープ少佐は部屋の真ん中にある焚火に串に刺した何かを突っ込みながら水差しを2つ後ろから取り出す。ポケモン文明

の建物の中では、火を使っても全く差し障りない。人間の建物のように引火したり熱で異常をきたしたりするものもないし、火災報知機や熱探知機という便利な機器もない。窓もないので煙や一酸化炭素（とはいってもこんな物質の名称は人間が付けたものだ。ここにいる誰もが知らない）が充満する恐れもない。

「そうか…明日はいよいよ俺たちの部隊も攻撃に出るんだな…」「ええ…戦果のほどは別にしろ、我々はこの地域の中央付近の敵部隊を殲滅するんですよね…」アリョーナは何の遠慮もなく差し出された水差し状の容器から中の液体を前足を使ってちびちびとあおる。中に入っているのはどうやら果実酒の一種らしい。

「で…左翼と右翼の地域はもう壊滅しているそうだな……何があったかは知らないが、この辺りの集落の連中もよくやる」「はい。あの送電網の中央地帯の相手部隊は…相当腕利きのようです」少佐はコード状の尻尾を軽く動かして、たき火の中から串を一本引っ張り出して口に運んだ。その香りからして鶏肉を焼いたもの、焼き鳥である。

「それで、シーベルトの部隊は…俺たち中隊直属部隊と共に相手の防衛陣地のほぼ中央を前進、例の強敵を粉砕すべし、という指令通りだ」「はい。周知しています」

「その場合…おそらくは相当激しいものになるだろうな……俺たちの部隊が先頭を取る。お前の部隊は左右に分けて支援するか、後方からの支援攻撃に徹してくれ」「は、はい…」シーベルトの声はややうつむきがちだった。何となく考え込んだ表情でアルコールの注がれた器の液体を見つめた。スッキリするはずの香りが妙に重い感じがする。

「お前はまだまだ若い。この程度の戦いで無茶して戦死したりしたらお前のかぞ…おっとすまない」「いえ…大丈夫です」ラクープ少佐は黄色の3本の帯が入った水色の左前脚でポニータの蹄をたたく。

「お前が軍人になった理由は…いろいろあるんだろうが…そういう信念があるんなら…こんなこざかしい争いで戦果を稼ごうなんて思わないことだ。人生と言うのはな、自分の目標のここぞというところで自分の能力を最大限に使うんだ。いつでも八方美人で完璧になんか思わねえほうがいいぞ」

「はい…ありがとうございます」ポニータは容器に入ったアルコールを右前足を使って軽く飲んだ。口元に果実の心地よい甘さと酸っぱさが広がる。

「ん…？シーベルト、なんか悩み事か？」レントラーが焚火の中から串を一本引っ張り出してシーベルトに差し出す。「そんなものは食って忘れろ…どうだ、焼いた鳥の肉なんかは？それとも、こっちの焼き物のほうがいいか？」ラクープ少佐がもう一本串を取り出す。厚手の小麦と同様の穀物を2枚重ねて焼いた生地にミルククリームが入っている。まるでマカロン（フランスの焼き菓子の一種）を焼いたようだ。「こんな手のこんだもの…このハイドルじゃ家庭料理の類らしいがな…俺が知っている限りじゃ人間と同じ装飾ばっかの料理に似てるよな…シーベルト、食ってみるか？」

「あ…はい…いただきます…」シーベルトは差し出された串を二本とも前足でとり、顔の方を近づけて食口に運ぶ。いくら自分の名前がシーベルト・リヒテントだからと言って、名前呼びされるのは正直複雑な気分だ。スウェーデンの人間の原子物理学者の名前らしいとは聞いたことがあるが、またこの名前は、昨年（２０１１年）日本と言う人間の国を悩ませた放射能という概念の量の単位であるとも聞いたことがある。もっとも彼もアリョーナも少佐も含め何がなんやら分からない言葉だったが。

彼の口の中で焼けた肉の油脂と香りが絶妙に広がる。このポニータにとっては久しぶりにまともな食事をしたような気分だった。少佐の言うとおり、食べ物を口に運ぶだけで心の奥底でうごめいていた霧が多

少なりとも取り払われたように感じられるのだ。
　そうしているうちにポニータの中に少々尋ねてみてみたいことが浮かんできた。口を動かしていることで少し気持ちが落ち着いたために出てきたのかもしれない。または先ほど少佐に言われたことによって思いついてしまった…運命…なのかもしれない。

「あの…少佐…」シーベルトがアルコールの入った容器を置く。「どうしたシーベルト？」ラクープ少佐の口調はまるで息子の話を聞いてやる父親のようだった。「い、いえ…大したことじゃないんですが…少佐の方は……どうして志願してこの戦闘に参加したんですか？」
「ど、どうしたんだよ？いきなりそんな事…まあ、自由連合や市民の自由のため、とかいう理念じみたことではないな……」レントラーはちょっと驚いたように耳をピクリと動かすと、大きな水差しからアルコールを容器にそそいでそれを一気に飲み干す。「自慢することではないが……ヴェルダー州の南部側の集落が俺の故郷でな…そこに今でも俺の家族がいるんだ…特に…息子の事がな」「む、息子さんがいるんですか？」「少佐…そんなこと私にも言ってないじゃないですか…」シーベルトもアリョーナも驚いたように声を上げた。
「まあな…そんなプライベートを他人に言う事じゃねえ、と思ったからな…」少佐は首からぶら下げて木彫りのお守りのようなものを右前足でつかむ。こういう類はポケモン文明ではよく持っている。集落の迷信とか、種族伝統の物だとか、家族が当人の無事を願掛けするために持たせるなどだ。
「俺の息子は…スパーキーと言ってな…まだ奴は8歳かそこらだ。あいつを戦いに巻き込むわけにはいかない…だからこそ…この戦闘を早く終結させるために…これはあいつが持たせたんだよ俺に」
「そんな…だったんですか…」シーベルトは言葉の接ぎ穂を失って自分の戦闘用蹄鉄の跡が残る蹄を見つめていた。

「もし…俺がダメだったら……せめてこいつだけは…スパーキーに、まあ行けりゃの話だがな…渡してくれよな…」ラクープ少佐は左前脚で容器を掴んで右前足でまたアルコールを容器に注いだ。「まあそんな心配をしていても始まらん。忠誠だとか信念だとか絆だとかも一切関係ない。要はその時に最善を尽くすだけだ」

「少佐……」ポニータは隣にいるアリョーナと顔を見合わせる……キュウコンは9本の尻尾を軽く下方向に下ろしたまま仕方がないというように頷いた。

ポニータはしばらくの間、焚火の火を見つめることしかできなかった。窓の外、空の上の方からまたしても鈍く低い音がする。だが今の彼には、人間の飛行機がこんなポケモン達の戦いなど発生していないようにに平然と定期航空路を飛んでいることなどどうでも良かった。

……少佐にも…家族がいる……そして理由がある…

…俺にだって理由はある……しかし……そのために今回は……

シーベルトの思いは焚火の明かりしかない部屋の薄暗闇に沈んだ。おそらくはアリョーナもそういう気持ちを感じ取っているに違いない。

自由連合の革命のために……ポケモンの未来のためには……

……今回は…ラクープ少佐を犠牲にしなければならいのだ…

２０１２年１２月１２日　エメリア　ニュークリア　アメリカ領エドワーズ市郊外のエドワーズ空港
０５００時

「おい、まだこんな時間から待機してんのか国連軍は？」「ええ。向こうではいつ戦闘が始まるか分からいので」空港に隣接する統合空軍エメリア地区司令部で突如たたき起こされて滑走路上に案内された英国、マグノックス・エレクトリック社の社長は、多くの情報端末や機器で埋め尽くされている統合空軍の管制機Ｅ－７６７“アンタレス”の機内にある同乗者用シートに座るなり愚痴を入れた。

確かに彼は、ハイドルにある欧州連合の熱核融合型原子炉施設の配電網に関することはプロジェクトの責任者の一人であるからして熟知している。そしてかなりの無理を承知で国連軍に同行を依頼したのは事実だ。もちろん、この男が送電網の構造やバックアップに関して知識を持ち合わせている以上、緊急時には的確にそれを伝え、作戦の遂行に貢献することが求められている。また、このような（まあヨーロッパにとっては極めて重要な施設だが）施設の存亡にかかわる事態とはいえ、いっぱしの企業の関係者が軍隊、しかも本国の軍ではなく国連軍の軍用機に登場すること自体が前代未聞であり、この施設に関わったフランス・イギリス・ドイツの各企業と欧州連合と各々の政府が国連に要請してようやくひとり分だけ許可を得ることができたのだ。しかも、万が一の際に保証はできないという条

件付きで。

その結果この施設の代表者として乗り込むことに（この男が少々わがままな点もあって）なったこの男であるが、そんな自覚や責任よりもこの空中管制機内部の狭さに対する不満や、作戦が成功するかどうかといったクレームのようなものをさっきからこぼしてばかりだった。

確かにこの男を含め企業関係者なども民間人には軍隊行動の原則（ドクトリン）や戦略や戦術の点では全くと言っていいほど理解できるはずがないのは、この機体のオペレーターもアラスカの統合軍司令部も分かっている。だいたい近年の市民社会に（西洋・東洋・中東・オセアニア・アフリカを問わず）おいて軍隊という存在は次第に国際政治でも国際経済でも市民生活でも裏方か悪者というイメージになりつつある。確かに各国のマスコミや地球規模で展開するインターネット空間での情報によって、各国軍・国連軍・民間軍事企業等の軍隊は各国の経済や開発や資源を守るべく周辺国に実力を誇示したり、紛争地帯の総統の名の下で民間人を（特に哀れに見える映像を出すせいだが）巻き込んだりと悪いイメージが定着しても仕方がない。読者の皆さんもそう思っている人は少なくないのではないか？

しかし、そのようなイメージは少々間違っている。確かに現在の地球の人類社会の主役は市民と経済と科学技術だろう。いまだに局地的な紛争や問題は数多く根深くあるとはいえ、巨大戦争や大きな争いが減りつつある世の中であることは疑いがないし、大戦がないこと程安泰なことはない。しかし軍隊はそのような世界だからこそ必要である。テロや紛争などの新なる破壊と脅威、ルールを守らぬ隣国の資源開発などから市民や国家の安全と自由、権利を守り、地球規模での紛争解決のために国際治安維持活動に協力し、災害に見舞われた自国や他国に支援の手を差し伸べ、政府や大企業のデータ

の破壊や奪取をもくろむ悪質なハッカーからサイバー空間を防衛し、月軌道にまで衛星を送って地球そのものを小惑星から守備する国軍もある。自由・民主主義・平等・世代を超えた権利が地球規模で求められる社会だからこそ軍隊という存在もまたそれに合わせて求められているのだ。

とはいえ、この男にそれを考える余裕はないだろう。管制機“アンタレス”のオペレート・クルーの全員が諦めていた。

「ふん…しかし、ここまで大規模にやる以上、もちろん施設は防衛できるんだろう?」

「もちろん。我々は全力で取り組みます。結果が何であれ」ポケモン担当のあの男が社長にむかってきっぱりと言った。この言葉はあながち当然だ。しかしマグノックス社の社長には最後の言葉さえ引っかかったらしい。「なんであれ、だと?貴様それでも統合軍の軍人か?!」「…ええ、もちろん」オペレーターは悪びれもせず答える。社長は機内のキャビンを覆い尽くすように並ぶモニターやコンソールを指差しては喚き散らした。「いいか?これだけの装備や機器を持っていながら失敗したらそれによって生じた損害は貴様らと国連に払ってもらうぞ!1ペンスも1ユーロも1セントも値引きはしない!いいな?!」

「はいはい…落ち着いてください。今あなたが喚いたところで変わりはしませんよ。それに機器を壊したら誰が責任を取るんです?」男が諦めたように言った。同時にその口調が皮肉がこもった者に変わる。

「何だとお前は?!……」社長は男に食って掛かろうとする。「おやめください社長閣下」その彼に対して、別のオペレーターであるあの女がその腕をむんずと掴んだ。「あなたが直接指揮を執るわけではありません。戦闘指揮は我々にお任せを。施設のシステムに関する話は、必要とあらば閣下にお伺いしますからご安心ください」

「ううむ……」社長は彼女の恐るべき腕力に驚きながらも、反論

のしようがなくて振り上げたこぶしを下ろす。オペレーター達の強引さには腹が立つが、自身は社長とはいえ民間人だ。戦争に関する知識は全くない。

「それに…」先ほどの男が続ける。「我々は後方からの火力支援とその情報管制だけです。直接戦闘するのは…」彼は除き窓から空港のスポットについたまばゆい灯に照らされた駐機場を見た。空港側の施設はある程度営業しており、駐機しているＢ－７８７、Ａ－３３０等の巨大な影の周りを整備車両やスタッフが動き回っているが、遠くに見える市街地も沿岸の港湾のコンテナベース以外はまだ市街灯とビルの明かり以外停止しており眠りについている。「…彼等です。ポケモンの、ね」

エドワーズ空軍基地の一角。スクランブル発進用機体がおかれているアラート・ハンガーの後方に建っている４階建ての一部屋、士官待機官舎では……

「……え～？……うーん…何書こう？」ソファーに寝そべっているチルタリス、チェギョン・カリワザキはモフモフの右翼に携帯情報端末をもってキーボードらしきものが表示されたパネルを押しながらため息をついた。隣のソファーではムクバードのロックオン・ストランがコックリコックリとしている。赤道からやや南半球よりの場所とはいえ、さすがにまだ外はかなり暗い。早起きの野鳥たちは動き始めるところだが、ポケモン達が起き始めるのはもう少し太陽の明かりが増えてからだ。この部屋は夜の人間の建物と同じように明るいものの、チェギョンが起きているのは彼女が昔から人間と一緒に暮らしてきているせいでもある。

「…ウネには……うん…まあ…こんなもんでいいかな」チルタリスはあらかた打ち終わって左のモフモフ翼で頭の飾りをかいた。友達のウネには旅行中と言ってあるが、そろそろこの嘘も通じなくなる

可能性かある。あまりにも旅行が多いからだ。だからといって自分の本職を言ったらドン引きされる可能性が濃厚だ。

チェギョンは左の翼でロックオンの尾羽を押す。「すいませ～ん！コーヒー入れてくれますう？」彼女はコーヒーは好きでも淹れ方は分からなかった。子供の時は一緒に住んでいていた李氏朝鮮王朝の末裔一家の使用人たちが身の回りの一切をしてくれていたからだ。

「……ンだよ…それくらいは自分でやれよ…まあ俺が起きてて、俺もそうしたかったからいいけどな」ムクバードは右の翼で目をこすって、ぴょんと電気ポッドの方に軽く飛んだ。「それに…お前結局一晩中その端末いじってたじゃねえか。よく目が疲れないな」「まあ１０歳の時から使ってますしね！」彼女はそう言って韓国のＬＧエレクトロニクス電子工業社製の端末を自慢げに見せる。これはＬＧ社が発売しているＣＤＭＡタイプの携帯情報端末のソフトウェアやキーなどのインターフェイスを交換して言語をエメリア語に換装したうえ、ポケモンでも扱いやすい形状にも改良されている。

「ありがとうございまーす……」チェギョンはポッドのスイッチを押したロックオンを見てぺこりと頭を下げると、再度端末の小さなディスプレイに目を落とした。そう、この地球人類社会の中で人間と同様の端末を扱えるのポケモンは、ごくわずかだ。事実、に研究のためにタッチパネルやレバーを扱えるように訓練されたチンパンジーの話はあるが、ポケモン達は使えるようになれば自由に使える相手とコミュニケーションをとれる。その需要数が極めて少ないために、ポケモン用のハイテク機器はおおかた注文生産となっている。

「おら、ここに置いとくからな…」ムクバードは淹れたてのコーヒーのカップをテーブルに置くなりチルタリスの首を翼でくいっと持ち上げた。「ポケモンなんだからコミュニケーション取るときゃ相手の目を見ろよな。じゃねえと人間と同じにされるぞ」「……え、ええ…」「だろ？お前のかわいい面をちゃんと見せてやれ」「うっ…そ、それは…」彼女は顔を少し赤らめる。「…すいません…気を付けます」

チェギョンは右の翼でカップを口―（くちばし?）に運びながらため息をつく。先ほどのロックオンの言葉が目の前のコーヒーをスプーンでかき混ぜたように頭の中を渦巻いた。

……うちが…人間と同じ?……

……それって…どういうこと?……

彼女には分らなかった。生まれた時からずっと人間が身近な場所で暮らしてきた。そのせいで自分の趣向や価値観が（チルタリス種族のカリワザキ一家自体そうだが）人間に近いモノになっているのかもしれないが、それを悪いと思ったことも疑ったことも一度たりとない。

「あの…」「ん?どうした?」チルタリスは小さな声で切りだす。

「……人間とポケモンの鎖っていうのは…どういうところで生まれるんですか…?」

「いきなりなんだよ……何だろうな…」ロックオンにとってもいきなりこんな哲学的話を切りだされてもすぐには答えを言葉にできない。本来なら自分で考えろと言いたいところだが、残念ながら彼女にはそこまでの思考は難しかったし、何より女の子にそんな悩みを抱えさせておくのは彼の信念が認めなかった。

しばらく考えてムクバードが口を開く。その間チルタリスはカップを持ったまま中に入った茶色の液体を見つめ続けた。

「……俺も哲学は知らねえが……うむ…違いは…あれだあれ」「あれってなんですか?」

「そうだそうだ、ああ…心の感じ方って奴だ。……例えば……そうだな…容姿が違っても心で通い合う物がある、みたいなものとか」

「へえ…そんなものもあるんですね……」チェギョンは今一つ理解できないままにもうなずく。

……人間とポケモンの心…？……どうすればわかるの……？

彼女は何かを思いついたように息をつくと、まだ熱いコーヒーを口に運んだ。白いほっぺの内側のあたりに程よい苦みが広がる。

「そうだ…」ロックオンは自分のコーヒーカップにミルク（とはいっても脱脂粉乳をさらに乾燥させた粉末にミルクフレーバーを入れて香り付けしただけの人間の物だが）を入れながら呟く。

「は、はい。まだ何か…？」チェギョンは身構える。まだ先程の話に続きがあるのか？

「チェギョンはブラック派か？ミルク入れてないだろ？」

「え、ええ。私はそっちです」チルタリスは腑抜けたように言った。

戦う意味（後書き）

もう少しでここでの戦闘は完結だと思います。はい。

かなり執筆が遅延していますが、もう少々ご辛抱願います。

交錯の先（前書き）

やっと戦闘シーンが終わる…

１０日分物語進めるのに１月かかった……

交錯の先

２０１２年　１２月１２日　フランス　パリ市新開発地帯　アレバ社本社　１１００時

アレバ社本社前のロータリーは国内外の報道陣とシュプレヒコールをがなり立てる反原発団体、その様子を携帯端末などで記録する野次馬たちでいっぱいだった。周囲の高層ビルからも、その異様な様子を眺める人々が見える。“原発問題の再来を許すな！”“危険地帯での原子力施設建設に断固反対！”プラカードや横断幕を掲げる群衆や音声記録装置やカメラを向けるマスコミ、それを阻止する警察や警備員の間をかき分け、アメリカ・ゼネラルモータースグループのシボレー社製のボルトと黒塗りのドイツ・メルセデスベンツ社製Ｅ３５０が車寄せに入り、中から企業の関係者と思わしき男が二人が降りて本社ビルへと向かう。報道陣の男女がマイクを男に向け、カメラを起動し、フラッシュがたかれるが、彼らはそれを無視して中に入る。

スイス・シンドラー社製のエレベーターをあがり、ビルの中ほどのフロアーにある大会議室のオートロックをＩＣカードで解錠する。中にはすでに多くの人間が集まり、前方のスクリーンにはハイドルにある原子炉実験施設と電源回路図、そして外部電源の供給網の地図が表示されている。「遅れてすいません、ちょっと本社前が騒々しいようで」「すでにこちらの方からイギリスのマグノックス社、ドイツのシーメンス社をはじめ、プロジェクト参加各国の企業が衛星テレビ通信でこの会議への参加依頼を取ってあります」

「ありがとうございます…それでは…始めましょうか…」「うむ…」

円卓の一席に座る車長に目をちらりとやったプロジェクト幹部の女が衛星通信と映像交信機器のスイッチを確認し、スクリーン前の卓

上にある端末を操作した。スクリーンに映し出された映像のうち、電源供給網の地図が拡大表示される。

「……現在、エメリア・ハイドルにある欧州共同熱学融合型原子炉の送電網周辺でのポケモンによる暴動の結果…電源供給網が被害を受け電源を喪失する恐れがでてきています。そのため国連統合軍、ドイツ軍、アメリカ軍が暴動が発生した地域にある送電線付近で治安維持活動にあたり、マグノックス社の社長も特例で国連軍航空機による現地視察に……」

２０１２年　１２月１２日　ヴェルダー州　送電鉄塔付近　０６３０時

送電線を相手側、すなわち東側から西を見て左手の小高い丘には数匹、いや１０匹以上のポケモン達の姿が確認できる。その背後には国連統合軍の歩兵を乗せたＭ１１２６ストライカー装甲車が5台待機している。この装甲車と歩兵部隊の目的は、送電網近くに展開している統合軍やアメリカ軍とは別にＵＮＦＳＴＰＰＴのポケモン達の支援を行う事。

沈黙の中、装甲車のエンジン音が響く。各車の車長と歩兵たちの無線機が鳴り響いた。

「敵残存部隊、前進を開始。一個中隊程度の規模と推測。敵主力はいまだ２０キロ後方にあり。この戦闘で前方部隊を壊滅させてけりをつけ、後方部隊は戦闘ヘリで叩き潰す」

各装甲車の銃手（ガナー）たちは装甲車の車長ハッチに装着された４０ミリ擲弾砲や１２．７ミリ重機関銃の安全装置をはずし、歩兵たちが次々に車内の配置についてゆく。その音に気付いたスズメたちが草むらから一斉に飛び立った。

そこから少し離れた丘陵地帯の淵に、４匹のエルフーンと２匹のトロピウスと２匹のマリルリ（全員がこの周辺集落出身の防衛部隊関係者）と共にサクラはこの３日間の戦いの名残をとどめる草原と街道を見つめた。そこにあったはずの緑の多くは、アメリカ軍や統合軍の人間たちが行った支援射撃で、戦闘ヘリや攻撃機の射撃で、多くのポケモン達のわざのよって焼け焦げ、地球の創世記の風景の如く穴だらけとなり、硝煙や煤で汚れ、ポケモン達の血や肉片、亡骸で染まっていた。そしてそこに横たわっているあまたの悲痛な思い、友人を、家族を、愛するものを案じ、美しき故郷を、思い出を見つめ、その理不尽で苦しみに満ちた最期の瞬間に対する悲鳴、涙、命乞い、怒り、それがこのサーナイトの意識空間を、彼女の意識の中に流れ込みつつあった。すべてがこの荒れ果てた…いや元々は果てしない年月をかけて自然がそしてそれを敏感に感じることのできるポケモン達が何世代もかけて整えてきた…大地から、地面から煙のように湧き上がっている。ここだけではない、周囲２０キロの円状の地域がドイツ軍に、イギリス軍に、統合軍に、アメリカ軍に、それらの勢力に所属する人間たちの兵器という最新技術によって、そしてポケモン達お互いの軍隊によって集落も農地も河川も荒れ果て、傷つき、多くの者たちが命を落とした。彼女にはその全てが全ての悲痛な思いが意識を駆け巡る。

「ねえロズリン…」サクラは胸元に抱えたシェイミに話しかける。この台地から感じるあらゆる悲痛な思いを前にして思わず誰かに話しかけずにはいられなかったのだ。「……ここにいるとね、色々なポケモン達の…ここにいた皆の声が聞こえるの…」サクラの左手がロズリンの背中の草を撫でる。彼女の腕の中でシェイミはコックリコックリと眠っていた。「ここに暮らしていた皆も…今戦っている皆も…あなたと一緒にいるみんなも…でもあなたにまで…そこにい

る必要はないわ…」彼女には分っていた。どんなに話しかけてもロズリンは眠っている。彼の意識にはこのサーナイトの声は届いていないだろう。しかしそうせずにはいられなかった。こんなところに、こんな空間の苦痛に一匹で立ち向かうのは彼女をもってしても耐えられないことだったから。３０年近く生きても、この能力を持つこと、それ自体を自らが受け入れて引き出すことは完全にはできない。能力を引き出すとこと、それは世界とその動きをつかさどる運命が何たるものであるかを知り、その流れを…たとえ自らと関係ある物が、それは大切なものでも愛するものであっても…無条件に受け入れて自分の使命を、運命が決定している流れを果たすことであると彼女は考えていた。もともとポケモンという文明の、そこで暮らす者たちのスタンス自体が運命と自然の流れに従い、それを尊敬しつつ生活を作り上げることにある。それからさらに一歩踏み出せばいい。ただし、その一歩というものが、かつて（２０００年に国際月面基地の開発が始まる以前、１９６９年に米ソ宇宙開発競争の中で行われたもの）初めて月面に降り立った人間、アメリカ人の宇宙飛行士が無線機越しに語ったあの言葉“人類にとっては大きな飛躍だ”以上に小さく、しかし重大なものだった。

それを受け入れるのは彼女にも難しい。今でも、昔も、これからも。ましてやこの能力が…たとえあの書物にそう書かれているとはいえど…戦いに使われなければならないとなれば、それを使う時の負担は相当だ。しかし……そうなったらあの2匹は…いったいどうやって耐える?お互い、友人たち、そして彼らが見る私たちの運命をどうやって受け入れる?……

その時だった。胸に抱かれたシェイミの中から…彼の意識空間からサーナイトの意識空間に向かて思わぬ触手が……それはこのシェイミから…探りを入れていた。

その思考はまだあどけない。無邪気で悩みも不安も一切ない、単

なる好奇心によるものからに違いないかった。

……皆は…大丈夫なんでしゅかね?……ミーはどうしてここにいるんでしゅか?……

その感覚を、その単純な問いかけを、そういう動きの全てに対し、サクラは硬直して思わずロズリンを見た。このシェイミはまさしく寝起きの表情で彼女の方を見ている。もちろん言葉を発したわけではない。しかし…彼女には分かった。このシェイミはあの方法で意識を通じてコミュニケーションを図ってきたのだ。普段一緒にいる彼らと同じように。それは奇跡…いや奇跡などではなく、サクラが感じたのは喜ばしいものを含みながらも戦慄であった。なぜ?あの記述によれば少なくともその能力を獲得したのは2匹でしかなかったのか。それにこのシェイミがいったい何と関わっているのか?

「ね、ねえ…あなたは今…何を…」サクラがわずかに声をかけた時だった。

送電網至近の支援部隊が待機している辺りから突如銃声が上がった。陣地に構築されたＭ２３０重機関銃やＭ１１２６ストライカー装甲車の４０ミリ擲弾砲や後方に待機しているＭＬＲＳ発射車両から射出された地対地誘導ミサイルが白い噴煙を、曳光弾の火箭を残し、荒れ果てた平原の、多くに意識をしみこませた大地を轟音や爆炎、粉じんと共に掘り返す。

「な、何?ここまで来てるのにどうして彼らは反応しないの?!」サクラが慌てて無線機の方に向かって声を上げた。彼等とて国連軍の一部だ。無線機だって装備している。なのにどうして今まで動きが見られない?

無線機から声がする。前線指揮所からのようだ。“いや、上空の管制機もアラスカの統合軍司令も指示は発しているが、どうやら彼

らの専用周波数が何らかの作用で錯乱しているようだ。今の砲撃で気づくには違いない。復旧し次第指示は出す”

「何だって本当にこういう時に……」サーナイトはじれったそうに首を振ると、持ってきた大きな洋弓銃のような道具を持ち上げ、先ほど爆発が起こったあたりにその先を向ける。これはエスパータイプ専用の攻撃兵器。とはいってもこんなものを持てるのは、地球全体のポケモン文明をすべて見ても人間の両手で指折り数えられる数だし、そういうことができる状況が整っているのはサクラ程度だ。何しろ自治協会防衛軍が何年もかけて地球各地のある特殊な水晶からサイコパワーを増幅させるこの機構を開発したのだから。

「あ、あの！無理に攻撃はしないでくださいよ少将！あなたはとりあえずは最先任です！こんな小競り合いで死ぬわけには……」「大丈夫よティタニア。単に支援するだけ」ティタニアと呼ばれた一匹のエルフーンが制止しようとするが、サーナイトは安心させるように表情を一瞬緩めると、再びその兵器を握って構えた方角に意識を集中させた。脚部や頭部に装甲板を装着したトロピウスの鞍（くら）の様なものが被せられた背中にマリルリやエルフーンが飛び乗る。ひこうタイプの背中に乗って戦闘を行う場合はこういう装備が文明の標準であった。サクラは一匹のマリルリをちらりと見る。「セミョーン、危なくなったらあなた方は無理しないで、それと人間の支援射撃の範囲内には入らないのよ」セミョーンと呼ばれたマリルリは軍刀を上にあげながら笑顔で言った。「まあサクラさんみたいにそういう交信できる機会が僕らにもあればいいんですけどね！まあ僕らには人間の機械はわけが分かりませんから、そこはいつも通り何とかします！」

彼を含め、大半のポケモンにとって無線機もアサルトライフルもミサイルも戦闘機も、いや兵器のみならず携帯端末や空調機や自動車といった、人間の大半が何らかの形で見たことがあり常識のよう

な機械でさえポケモン達にとっては未知の物体であった。前述したチェギョンの場合もこのサクラの場合も、こういう人間の機械を扱えるポケモン達は周囲の驚きをかうものだ。ただし、分からないからと言ってそれらを分析して他者に広く伝え、そしてそれらを新しく作り上げるという人間にとって当たり前の探求と創造の精神は彼らにはなかった。分からないものは神秘にとどめ、自分たちは自分たちの身丈にあった技術と自分の能力で満足できる生活と活動をする。常に技術も科学も、特に近年はめざましく発展を続けている人間から見れば、いやあくことなき好奇心、知識欲、向上心、たゆまない努力、失敗を超克する不屈の精神を必要とする文明の常識という観点から見れば（自分たちの発展によって環境問題などの課題を生み出し、それを解決するためにはさらに発展せねばならないというどうしようもない事情もあるが）怠慢な文明にしか見えない。実際こういう状況で文明同士が衝突した場合、怠慢な方が消滅し、積極的に成長を進めるほうが最終的に勝利を収めるのは人間とポケモン双方の歴史が幾度となく証明している。しかしポケモン達にはそれで十分だった。いや、それこそが自然と共存し、文明を世界で維持していく最善の方法だと信じているのだ。

飛び立ってゆくトロピウスをちらりと見やったサクラは再び兵器の目標に集中する。彼女の意識空間を再び向こう側にいる相手方の、そしていきなりの攻撃で混乱しているであろう彼らの空間とその動きに乗せ、運命という意識空間の水晶を流す大きな川の流れを掴む。ここからそれらどこまで読み取れるか、あるいはある程度流れを変えることができるかは能力次第だ。サーナイトは川の流れを探りながら彼女と同様、その能力を持つはずのベイリーフとメガニウムの空間をまさぐり、声にならぬ思いを必死に伝えようとした。

……お願い……早く気付いて……あなた達の未来のため

に……

リーヒュンはあれ以降寝ているような寝ていないような状態でコックリコックリしていた。まあ原因は自身がわかっている。テルルに言われたあの言葉。いつまでも記憶の中に焼き付いて離れない。この数年間のかれ自身の傾向からして、前は考えること自体嫌だったが、そのせいか深く考え込んでしまうとどうしても自分の中で帰着できず悪い方向へと想像が向かってしまう。

“アンタみたいな性格じゃフローラ殺しちゃうよ？”リーヒュンが考える限りはこのテルルのセリフは彼女の疲弊から生じた苛立ちに伴うものであると感じられた。まだなかなか本質は掴めないとはいえ、少しずつ他人の意識空間の中がどうなっているのかが肌触りの温度として、風として思考の中に入ってくるのがわかった。

しかしそれ以降がどうしてもつかめない。というよりそれ以上の領域に侵入した場合何が起こるのかが怖くて彼自身が本能的に抑止しているのだ。この能力で大事なこと、それは己の持つ恐怖や不安や懸念を振り払って踏み出すことだ。それができない、どうしてもできない。自身が知っている事だが、彼がその能力を開花させて間もないからだ。

しかしだ、その“中途半端さ”故に周辺で起こることが無意味に過剰なほど彼の思考と意識を貫き、苦しめた。今もテルルの放った一撃が彼の意識の水晶玉の急所に突き刺さり、そこから冷たくほの暗い冷気を吹き出している。

……誰がフローラを殺すんだ？…俺のなにが？……どうすれば…なくなる？……

このベイリーフはそういう思考をするのは大嫌いだ。そんなのはやって見なきゃわからない、昔ならそう言ったに違いない。しかし今

は……自分の事、妹の事、その他周りで起こることすべて、それが苦しめてくるのだ。それがゆえの不快な思考の渦へと落ち込んでしまうのだった。

……どうする…どうする……どうすればいい？……

しかし半分睡眠状態の（といって疲労が除かれるだけのものではない）うつつとした全ての思考は突如として破られた。というよりは何秒か前くらいにそれを感じていたが先ほどの思考のせいでそちらにほとんど意識が映らず、それに気づいたのは近くで大音響とともに寝ている場所が振動し、土埃が大量に降り注いでからだった。

「な、…なん？…うぐっ…」「バーカ！奴らが来たんだよ奴らが！お前のその能力ならなんとなく見えても不思議じゃねえんだけどどうしたんだ！？まあいい、とにかく潰すぜ奴らを！」リーヒュンはブレイブに後ろ足の付け根を蹴り飛ばされた。彼も慌てるように頭部装甲板をツルでつかんみ、ひもを締める前に窪地から前足が飛び出していた。その直後に大事なことを思い出し、後ろ足が完全に窪地を飛び出す前にツルを後に伸ばしてあの容器を引っ掴んだ。忘れるはずのない、あれが入った容器を。

「おいおいテルルはどうしたんだ？」「あっちの方だな！俺はお前についてきたんだから」ブレイブは進行方向左手をちらりと見る。あちらの方では既に爆発やわざのエネルギーの嵐が垣間見える。「そんな理由で…、てあっちだったのか！よっし、側面から仕掛けてやるか…」リーヒュンは４本足を横に滑らせて急停止すると、ツルで洋弓銃を掴んで手榴弾付きの矢を番える態勢に入る。何となく感じた方向に飛び出してきたが、それが間違っていたとしても不思議だとは感じなかった。昔からこういうことは何度もあったから。

「何だ、お前の朝はめちゃくちゃにいい加減だな！目が覚めて5秒で発進かよ！？まあお前の親友だからどこまでもついてくけどな」
「悪いな…また俺のカンにつきあわせて」「心配すんな！で、さっきから無線機は何も言わねえが、お前的にはどっちだ？」隣にいるブレイブが無線機を介さずに声をかける。「今そっちの方角に…だいたいこっちか、てとこに向かってるんだけどな…ただ…まだ俺のカンをあてにしないほうがいいとは…うわっ？！」「な、な、なんだこれは！？」2匹の側面に突如としてエネルギーが飛び掛かり、大爆発を起こす。どうやらそれはほのおタイプのものらしい。リーヒュンの意識の中に前方から攻撃に込められた感情が伝わる。
しかしそれは…殺意ではなく、一種の寂しさ、そして……それ以上は分からない。彼は先ほどの考えを今頃後悔した。やっぱり敵はこっちにも……

そして…その爆炎の先にいるのは……あのポニータ、シーベルト・リヒテントとゼブライカ、サンドパン、後ろにいるのはキュウコンとトゲキッス。

「……全くまたこんな状況なんてな…お前らも敵側面に回る算段だったか…」シーベルトが装甲板と一体になった戦闘用蹄鉄を地面に踏み鳴らす。「まあ…確かにな…」リーヒュンがツルでつかんだ洋弓銃を向ける。「2対5……何とかなるか……でも…シーベルト、なるべくやりたくはない」「何言ってんだよお前は！？」ブレイブが右前足の装甲板で彼の左前足をぶっ叩く。このベイリーフがこういう行動をとり、言葉が出てきた理由は……なんとなくだった。戦争であろうとなんであろうと友人であるという事は変わりない。そんな相手を殺すなんてもってのほか。そういう思考の元で、彼の意識空間から出てきたのがこの言葉だった。

しかしこの言葉は…当然のことながら失敗だった。ブレイブは戦闘態勢に入るために体温を一気にあげながらもその数秒の間に後悔した。なんたってこいつはそんなことを口走るんだ?。

「何言ってるんだお前は?」シーベルトが飛び掛かってくる。「今の俺は…少なくとも軍人だ!その程度の思いやりなどっ!」このポニータには確信があった。一気にしとめればこのベイリーフなど相性であっさり撃破できる。ブースターはそのあとでも5匹で調理すればいいと。

ポニータのかえんぐるまをベイリーフはあっさり右へ飛びかわし、背後にまわるような形でリーフブレードを叩き込むがその先端はあと数センチというところで取りこぼした。ポニータは折り返すように急反転しブースターのシャドーボールをもぐりこみ、一気に踏みつけようと飛び掛かる。「後にもまだいるのかよ?!」「もらったっ!」後から飛び掛かってきたゼブライカのワイルドボルトをブースターは上に飛び上がり、空中で上に反転しながら前足で刃を引っこ抜き上からトゲキッスに切りかかろうとするが、相手のはどうだんの打ち込みの方が早い。「んだと…」「その程度のスピードでは!!」ブースターが刃を放り捨てて噛みつく体制に入る直前、はどうだんの直撃が彼の体を吹き飛ばした。しかしそれと同時にベイリーフのツルがトゲキッスを叩き落とす。「大丈夫かブレイブ!?」「まだまだ、てリーヒュンの方こそ前からだっ!」「何…っ!!!!!!!」ベイリーフが前を向いた時にはサンドパンがブレイククローで首元の葉っぱ付近を叩き飛ばす。「そのままいただくわよっ!」キュウコンが右からだいもんじでベイリーフを叩き飛ばす。「よーっしそのまま…この雑魚程度…」「させるかっての!」仕留めにかかろうとしたポニータの戦闘用蹄鉄にブースターが飛び付い

てエネルギーをかける。想像を絶する力でポニータの体は前転するように回転して地面に叩きつけられた。

「たった2匹のくせしてっ！」派手なかいりきによる背負い投げから着地したブースターにゼブライカが迫る。「まだまだっ！」ブースターがかえんほうしゃを前に踏み出しながら打ち込むが、相手はあっさり上に飛び越え、でんげきはを何発も叩き込む。ブースターの体が動く方向は先ほどの反作用である程度固まってしまっている。「なっ…」体を回転させてなんとか2発はかわしたが、最後の2発はまともに浴びて地面に叩きつけられ、下り坂になっている送電塔からの斜面を下にずり落ちそうになった。「いただいたぜっ！」後方からサンドパンが地面に飛び込む。「やっべ…足元…」何とか立ち上がろうとするが遅すぎる。ブースターに諦めたような感情がよぎった刹那、「くるぞっ！」ベイリーフが彼を突き飛ばすと、穴から飛び出してきたサンドパンの真下に突っ込む。相手はちょうどこのままブースターを突き上げるつもりでいたようだ。思いっきり空中に飛び上がってしまった。「何っ！？」「そのままあっ！」ベイリーフはツルでつかむ。その途端にツル先から激しい冷気のようなものが噴出し、彼の意識を埋め尽くした。　相手の憎悪、このような事態に至ったことへの衝撃。そういうマイナスの感情は彼の思考を容赦なく痛めつける。自分の思考のエネルギーがこれらの感情と激突し、激しい黒いエネルギーになって襲い掛かってきた。しかしここで屈するわけにはいかない。彼は覚悟を決めた。

「……この程度はあああああっ！？」ベイリーフはその体を思いっきり投げつける。まるで野球ボールを投げたように相手は投げつけられ、トゲキッスに激突した。

その激戦というのは当の本人たちにとっては果てしなく続くように思えた。しかしそれを外部から見ている者たちからすればほんの一

瞬でしかない。ごくわずかな時間なのだ。

「貴様程度に！」「ぐえっ！？」ベイリーフの体がポニータの放つだいもんじに吹き飛ぶ。右に倒されたその体にポニータは軍刀を振り上げ、さらに前進のエネルギーが胴体前あたりに集まる。ポニータの体温が急激に上昇し強烈な熱エネルギーが放たれる。「これは？！……」「フン…今更きづいたってもう遅いんだ…」ポニータは勝ち誇ったように刃と自分の体双方を振り上げる。「貴様のような雑魚虫にはなあああああっ！！！！！！！」この時のポニータには何の同情も哀れみもなかった。ただ一つあったのは目標を完遂すること、そのために自分は目の前の相手を倒す事。

たとえそれがリーヒュン・バイリング・グリーズであろうと、ブレイブ・エスコーツ・クレイバーだろうと関係がない。

ベイリーフは驚愕した。なぜそんなことができる？！なぜここまでのセリフを吐き捨てられる？昔のこいつは…少なくとも知っている限りのシーベルト・リヒテントはこうではなかったはずだ……彼の切ない思いは届くはずが……

そういう悲痛な感情、相手の軽蔑に対する強烈な意識がベイリーフの意識下の反応炉に火をつけた。それは暴走的なエネルギーとなって意識の水晶から飛び散り、ツル先に、前足先からそのエネルギーが爆発する。

ポニータにとって奇跡とも異常ともいえる現象が発生した。強力な熱エネルギーが相手の体を焼き尽くす一瞬前、仕掛けたはずのブラストバーンが刃の一撃がベイリーフから発せられる何かによって遮られたうえにこちらに押し返されてくるのだ。「こいつ…いった

い何を…」ポニータはさらに力を込めて叩きつけようとするが、ベイリーフの反発する力はさらに大きくなり、つばぜり合い状態になった。

強力なエネルギーが激突しあう2匹の目線が一瞬合致する。その間にお互いは全ての思いを、お互いの運命を悟った。ベイリーフにはそれが意識空間を通じて直接伝わってくる。ポニータは自分の意識に飛び込んでくるような相手の間隔を訳が分からず言葉で押し返した。「きっさま……お前は何をいっているんだ……何を使って」

「何も使っちゃ……けど俺たちはどうしてこんなところで……」

「シーベルト…私がとどめを刺す……」後ろから飛びついてくるキュウコン。しかし彼女に強大なエネルギーが直撃して左側に吹き飛ばした。「ううっ…いったい何が……」バランスを立て直した彼女の目線の先に現れたのは……4本の雄蕊、ピンクと朱色2色の花びら、夏空のような色の目、キュウコンがかつて忘れもしないわが子同然の如く育てたメガニウムだった。「お久しぶりですねアリョーナさん…あたしはまたあなたの敵みたいですけど……」「ユイリィ…やはりあなたは…国連軍側に…」

「どこ行ってたんだよお前は!?」「うん!……ちょっと寝坊?…違う違う、うんうん!向こう側の皆の所にいただけ」ブースターの声にメガニウムは甲高い声で元気に答える。キュウコンは彼女の変化ぶりに改めて驚いたように見つめた。

……昔のユイリィは…こんなに明るくはなかった……どうしてこんなに?……

「更新に支障を出している電波、ハイドルのヒメル州アイリス地区にある…素粒子加速器施設から出ている模様です」アメリカ・アラスカ州の国連軍前線司令部の戦闘センターでは、軍事衛星による電波障害の解析が表示される。もう一つ送電システムと接続している施設、スイスが主体となっている欧州素粒子物理学研究施設によって開発されたハドソン衝突型素粒子加速器施設の電波である。「しかしなぜ今日に限ってそうなる?」司令官の男が無線機越しに尋ねる。「おそらくは定期的な調整運転でしょう…」この実験においてはメガ電子ボルト（メガは１０００倍）クラスの電圧を一つの粒子にかける必要であるため、完全に停止してしまうと発生する電圧差に微妙な差が生じてしまう恐れがある、その微妙な誤差でも素粒子の電磁気学・原子物理学では重大な支障をきたす。そのためには常時ごく微量な電圧を流し続け、使用しない場合でも定期的にある程度出力を上げる必要があるのだ。

「そうか。…なら調整運転を一回中止させればよいのでは…」「それが…今回の戦闘は極秘裏に行われているはずであり、公の実験スケジュールとそれに合わせた調整は停止できない、今まで何の要請もなく国連に急きょ通達されるのは我々の権益上極めて遺憾である、と難色を示していまして…」司令官は帽子を指に乗せて首を振った。確かに我々は原子力施設にばかり気を取られて素粒子施設側の企業や機構にはあまり知らせてこなかった。いきなり実験成果を狂わすような協力を要請されて不快なのもよく分かる。いやいやそれどころか、急な運転の停止は施設の設備そのものに致命的なトラブルを生じさせる恐れがあるのだ。しかし…それで送電線守備に失敗した場合は…

「…私が話す。回線を繋いでくれ」司令官の無線機に回線が渡る。相手は国連の関係者からと分かっているらしい。つながると同時に不満をあらわにした。

「いいですか、極秘裏であるというからには施設とそれに関係するものすべての安全は保障されているのと同じと宣言するのと同じです。いまさら言われたって、我々の企業の権益がかかっています……」

上空を飛ぶ国連統合軍の一空中管制・早期警戒機（ＡＷＡＣＳ）、Ｅ－７６７“アンタレス”のレーダー上でもようやく動き出したＵＮＦＳＴＰＰＴの連中を探知していた。ようやく彼ら専用の無線周波数での更新が回復し彼らにとっては奇襲に近い状態での戦いになったとはいえ、このポケモン達の活躍、特にストームロード隊各員の動きはめざましいものだった。こちらが特に指示を出す前に敵性の勢力と交戦している上、恐ろしいほど的確に相手を選びながら交戦している。統合軍や各国軍の装甲車、歩兵、ミサイルランチャー、航空機、ヘリはこのような空中管制機や前線指揮所の統合軍・各国軍の戦闘ネットワークの端末サーバや人工衛星とデータリンクをしながら的確で効率的な戦闘を行うが、中世以前のシステムしか持たないはずの彼らには何か別のつながりがるようだ。特にストームロード２は国連軍と国連機関が相当注目しているらしい。おそらくこのめざましい（オペレーター達が思い浮かべるのはオリンピック種目か４年に一度の国際大会のポケモンバトルだけだ）動きと何が関係があるのか？さらにこちらはまだまだ戦闘面では発展途上とはいえ、ストームロード１も同様のようだ。これはどういうことか？

「わが軍の追撃航空部隊、到着まで４分３０秒！」航空レーダーを覗くオペレーターの男が無線機越しに報告した。「よし、少なくと

もそれまでに部隊を殲滅しないとな、上空の奴らも出してＯＫだ」地上部隊の管制担当の男が言う。「分かったわ。こちらも部隊も出さないとね…」航空部隊の管制担当の女がコンソールを叩き、無線の周波数を切り替える。「上空の部隊！飛び出してＯＫよ。下にいる彼らの事を助けてやって！」

「そうだな、地上の連中は頭の数では不利になってる。それに敵ポケモンもかなりの手練れだ。奴ら連中の間を突進していきやが…」

「何だと?！統合軍が寄ってたかったくせにあの程度の獣ごときが撃破できんのか！?」同行してきたマグノックス社の社長が突如声を荒げる。戦況が不利になるという事は送電網が損傷する、もちろん施設にはハワイをはじめとする太平洋の発電網やニュークリア大陸からの送電網、そして非常発電機によって電源は確保されている。しかし、電力網を損傷する、それ自体が企業の信頼を失いかねないからだ。精密機器や一般電気機器の製造、エネルギー、交通機関、金融、小売り、農業とジャンルを問わず、企業の信頼が失われるという事は、その企業の営業、ひいては存続と（経営者たちの取っ手は一番重要な）自分の名声と財産を失いかねないを左右する重大な問題である。

「いいか、もし送電システムに何かの異常をきたしたらそれは国連の責任、いやあの怪獣生物どもに修繕費用、賠償金、施設の復旧費用、そして慰謝料を全額支払ってもらうぞ！相手が人間であろうとなかろうと１ペンスたりとも値引きはせん！いいな！?」

全く…そんな守銭奴的な経済人の説教など聞かなくても分かってる。こういう企業家が言うセリフは、まあ普通の平社員だって自分の首を考えて少しはそういうだろうが、決まっている。オペレーターの男はため息をついて無線機のスイッチを入れた。「今、説教声が聞こえたとおりだ。まあ施設に被害が出ないよう目標は選んで撃破するんだ、いいな?特にさっきから同じ奴としか相手をしてない誰か、無駄に突出しすぎてる誰か、とかな」男の声は冷静だった。

空中管制機Ｅ－７６７の周囲にいた国連統合戦略軍ポケモン戦略戦術実験部航空部隊所属のひこうタイプ達が一斉に下へと向かう。その中にはあのチルタリスとムクバードの姿もあった。「よおおっっし！永遠の１８歳が戦場にカムバアアッッック！！！」そのチルタリス、チェギョンは俳優に群がるファンよろしく興奮しきった声を上げて戦闘の中へと真っ先に突っ込んだ。ロックオンはそんな彼女の姿を見て頼もしくもあり心配にも感じた。確かにこのチルタリス、軍人向きとはいえない。規律無視、身なりの派手さ、ずうずうしく敬語のけの字もないおおざっぱな態度に言動。そのくせ相手を倒せばへこんだ上に長くそれを引きずる。しかし、それがゆえのテンションの高さ、前向きさもまた軍人として必要なことである。そして彼女をここまで導いたのは…極端に戦死率が高いポケモンの部隊にもかかわらず…、彼女自身の能力の高さだけではない。その明るさが、積極性がそうしているのだろう。

「無理すんなよチェギョン。なんかあったらすぐに無線機で呼べよな。この白馬に乗った王子様が…」「無理なんか…て、何言ってんですかあ?！うちはあなたとなんて…」「ふん…遠慮してんのか？とにかくそういうことにしろって」「うちは一匹でも…うわっ、こんのぉ…ほら大丈夫でしょ？」目の前でチェギョンは前から飛んできたオニドリルのみだれづきをぎりぎりで振り切り、振り返りざまにりゅうのはどうで焼いた。フラフラとこちらに飛んでくる相手の首をロックオンがつばめがえしで切り飛ばす。後続のひこうポケモン達も、前から飛んできたスワンナやハトーボーやオオスバメのべ１０匹程度の部隊と交戦を始める。彼女にもどうやら向かう場所があるらしい。

　自分たちの仲間がいる場所へと向かうチルタリスとムクバードの後方から一匹のフライゴンが一緒に乱戦の中を飛び越える。「おいおいケルディム、お前は奴らに指揮をとらんでいいのか？」「お前

と姉ちゃんだけで地上側に向かうのはあぶねえだろ?俺がお前らの背中を見る。安心して下の連中を助けてやりな」「済まねえ…後ろは頼んだ」ケルディムと呼ばれたフライゴン、ロックオンのかつての同僚はそのまま後ろへと急ブレーキをかけながら体の向きを変え、フラフラと追撃してくるムクホークを炸薬付きの矢でぶち抜いて暴発させた。

しかしそれだけで3匹を追撃する敵がいなくなったわけではない。それどころかその爆発の影から無数のハネッコ、ポポッコ、ワタッコが追撃してくる。「どうなってんだこいつ…」ケルディムは忌々しそうに吐き捨ててタネマシンガンの嵐に突入した。

「おいおいなんだよありゃ?!」「あれも全部敵なんですか!」相手の進行方向左翼側の敵をあらかた片づけたバストークとピトムニクはその後方から飛んでくる大編隊に愕然とした。そこから飛んでくるタネマシンガンの弾幕を左右に飛びのいて交わす。「ちょっとやっちゃってOK?」「うん!しっかり頼むよグラシ!」グラシデアは上に飛び上がって力を抜きながら軍刀を2本とも引っこ抜く。そのまま最高点から重力に乗って体落下し始めると同時にシグナルビームを打ちこみながら2本の刃を振りかざした。刃の動きあわせてシグナルビームによるシールドのようなものが形成され、タネマシンガンの弾幕が一斉に暴発する。

「さっすがだなグラシ!お前に剣術を教えておいて正解だったぜ。おっしピトム、俺たちもいっちょうばかしあの方法で片付けてみるか…」「えっ…あ、あれですね!ひこうタイプの大群には…」メリープとプラスルはそのまま前にある大群へと突進した。

「いっくぜえええピトムっ!」「了解っ!!!!」バストークがほうでんを放つと同時にピトムニクが上へとジャンプし、その電気エ

ネルギーの一部を受け取ると、両手からでんげきはを大群の上へとぶち込んだ。メリープの作り出した電場、その一部を回路として利用して増幅して打ちだしたプラスルの電場が巨大な空間を作り、ハネッコやワタッコの大群を覆い尽くす。飛んできた連中のあらかたはこれで感電死またはショック死して墜落していく。

そして何とか生き残ったうちの数匹が突如として何者かに引き裂かれ、血しぶきをまき散らしながら下へと墜落して行った。２匹の目の前に見覚えのあるムクバードが飛び降りる。「かなりお久しぶりですなおっさんもピトムも！」「無事だったかお前も！東南アジアでもお前のやり方は通用したんだな…」バストークはロックオンの頭の飾りを前足でガツンと叩いた。「……で、無線機の調子は相変わらずのようだが…周りはどうなってる？」「ああ…問題児の連中は勝手にやってくれてるようですけどな…チビ達の方が…だいぶ前の方にあるけど大丈夫すかね？…あいつらに先を行かせすぎるのは危険かと…」

「何だと！？…一体アイツは何を…とにかくあいつらを助けてやろうや。ピトム、グラシ、助けに行ってやるぞ」「そうですね隊長！」

「まあ…行くしかないわよね」

「お、グラシも無事だったか…」ムクバードはモココの方に飛びよって彼女の頭のモフモフを彼の右翼でなでた。「あなたこそ…無事で何よりです…よかった…」モココが顔を赤らめるのを見てムクバードが頭をもう一度叩く。「今はそれどころじゃない。今は任務に集中しておけ」

「くそくそくそっ！なんたって今回は数がすくねえわりには…無線もさっぱり鳴らねえ…一体どうなってやが…」レオの周囲には相当数の相手がいる。どうやらまたしても突進しすぎた感があるのか？

先ほどから少なくとも彼自身は、昨日と無茶具合と比べて改めたはずだった。グリソムやガトルもシンシアもかなり近い位置に、少なくとも目視できる位置にいる。しかしそれでも突出しているのだろうか？「どぐえっ？！」「このくそガキがッ！」ちらりと後方を確認したすきを突かれてコリンクは前から来たメガニウムにまたしても踏みつけられる。「ううっ…またしてもこんな重たい野郎に…」レオは後ろ足2本を何とか引き抜こうとやっきになるが相手の前足の爪が振り上げらると同時に猛烈なエネルギーがこもり始める。これは恐らくロッククライム…「これくらいのチビが勝てるわけ…」

……まさか…俺は本当に？……

コリンクの脳裏に一抹の恐怖がその時、相手のメガニウムの頭部にに黄色いエネルギーが直撃し、奴が若干後ろに下がる。その隙に花びらのある首元に高温がかった物体が飛び掛かる。相性的にはそれなりの効果があったようだ。

「何やってんの？！アンタが手柄に取る場面よ今は！」「さっさと倒しちゃいなよレオ！」スカイラブとガトルが同時に無線機に声を張り上げた。「…そ…そうか…っしゃあ……そんなら…」レオは頭部保護板が外れたままでも飛びあって姿勢を反転させて走り出す。「まだまだ…この程度…」まだまだ戦闘可能状態のメガニウムはグリソムの地中からの突撃を難なく左に飛びかわし、近寄ってきたコリンクとミズゴロウを、頭に掴みかかるように飛び掛かったパチリスを2本のツルで叩き飛ばす。レオの方は何とか右に交わしたが、グリソムとガトルにはそれをまともに浴びて突き飛ばされる。特にミズゴロウであるグリソムにはかなりの効き目があったようだ。「うぶぐっ！」彼は数メートルは左に突き飛ばされて地面に叩きつけられる。「とにかく私にできるのは…背中にいる奴らね…」スカイ

ラブはこの巨体の右側から背中にいるミジュマルに飛び付いた。「何だこいつはアッ?!」ミジュマルはめちゃくちゃな奇声を発しながらホタチと刃を掴んで彼女の爪と激突する。「くうっ…アンタもやっぱり…」ルクシオは完全に飛びついた状態になりながらもミジュマルの様子を見た。

そのミジュマル…まだ14，5、そこらくらいしかない。レオと同じくらいだ。だとすると…こいつも孤児の状態から……集められて…

彼女の心の中に一連の寂しさのようなものが走る。もしこんな戦いすらなければ……

「うおおおおおっ！」一瞬気を抜いたスカイラブの頭上からミジュマルの軍刀が襲いかかる。「！！」彼女の意識は一瞬にして巻き戻り、前方の戦いに引きずり込まれた。「こんのおおぉぉっ！」それを至近距離で振り切った彼女は前方に向かって最大限の力を込めてミジュマルを背中から突き落とした。「うぎゅわあっ！？」かかったわざはワイルドボルト。体内の細胞全ての水分が破裂するようにふっとして暴発したミジュマルは、そのまま意識を失った抜け殻となって地面に転がって体の穴という穴から血と煙を吹き出す屍をさらした。

「よし…このまま…ぐえっ！」飛び退いたレオは再びメガニウムの腹元に突進する。「貴様…」コリンクがもぐりこむ直前に相手は左後ろ足の爪でコリンクを蹴り飛ばす。腹部に激しい衝撃を覚えたレオは弾き飛ばされて地面を転がりながらも左前脚で装備ベルトから刃を引っ張り出した。「てめえええっ！？」そのまま左に転がりながらも彼は左前脚を精いっぱい突き出し、メガニウムの腹元をぐさりと刃で貫く。しかも腹部前方の中央部分、心臓へと向かう動脈辺りを。「ぐぶっぅ…くそ…だが…」「逃がすかよおっ！」かなりの深

手でよろめきながらも相手は前へと走り出す。レオも立ち上がって向かおうとしたが一瞬時間が遅れた。コリンクが慌てて追いかけるその数秒間の間にもメガニウムは足元から何か巨大なツタのようなものをばらまき、クローン兵士のブイゼルやキノガッサを、自治協会側の集落の部隊であるブラッキーとブースターを引き千切った（レオがちらりと見る限りそれはブレイブではなかった）。そしてそのツタの一部はシンシアへと…「お前何やってやがんだ?!さっさと…」コリンクの表情が一瞬固まった。前の情景がスローモーションのようだ。このままでは彼女はツタによって真っ二つに…

「くうっ!?」しかしコリンクの無線機越しの声を聞く以前にシンシアは前に飛び出す。覚悟を決めたかそれとも怯えか。「ひイイっ!」ロコンは何の抵抗も見越しもなく正面からツタをかわして右前に吹き飛ばされた状態でかえんほうしゃをぶち込んだ。

「なっ…?」しかしメガニウムは深手を負っているせいか動きが意外なほど鈍い。左によろめくように動いた後、奴はそれを正面から浴びてしまった。その巨体は顔から胴体正面にかけ焼け焦げ、グロテスクな様相を残しながら重力に屈する如く前につんのめるように倒れて爆発した。

同時に背中に乗っていたポニータが転げ落ちる。その体が地面に叩きつけられる前、相手が着地する前には奴は右側から飛び掛かったグリソムのハイドロポンプで吹き飛ばされ、１２２ミリ砲の着弾でクレーターになった穴に落ちて動かなくなった。おそらくは首から落ちたのだろう。

「おい…大丈夫かよシンシア…」「え…うん…」ロコンは体をぶるっと震わせた。「で、レオは頭のはどうしたわけ?」「はあ?何俺のこと心配してんだよ!?お前の方が危なかっただろうが…」レオは頭部装甲板が転がっている場所を見ながらシンシアの頭のフサフサを左前脚を撫でる。皮肉かもからかいかも分からなかったが、思

わずそうしてしまった。「まあ…さっきの戦果はお前の取り分でいいぜ…そういやこれがお前の初めてじゃねえか！へん、それにしてそんなでっかい野郎が初めて…」レオがそこまで言いかけた時、彼ら2匹の前でなにかの爆発が起こった。2匹は至近距離で人間の榴弾砲を受けたのと同様に吹き飛ばされ、土くれや埃がその上から降る。「な…」吹き飛ばされた2匹が立ち上がった先にいたのは…ロゼリアやその他数匹を連れたレントラーであった。

　ラクープ少佐は思わずわが目を疑う。こんなまだ成人したばかりの、まだ15歳前後のチビ達まで戦争に投入されているのか？彼は思わず聞いてしまった。その装備からして明らかなのに聞かずにはいられなかった。「お前たちもやはり…軍人なのか…」「あ？……何聞いてやがんだ敵のくせに…」レオが軍刀を引っこ抜いて飛びかかってきたが、少佐はわずかに電気をかけた左前脚でその刃を払い、このコリンクを突き倒して爪をのど元にたてる。「ちょ、ちょっと？！…」「なにやってんだよ？！」グリソムやガトルが慌てて近づいてきて洋弓銃を向ける。「アンタ！？そういうの捕虜っていうのよ分かる！？」「やめろっての」スカイラブもレオの方へと駆け寄ってきたが彼自身がそれを制止する。レントラーは彼らをちらりと見まわして頭の保護装甲板をかぶり直すように右前足を当てた。「……こんな連中が…やめようとは思わないのかよ？こんな無意味な戦闘を…今は戦争をしている場合か？」「……」「……」周囲にいる全員が回答できなかった。この敵兵は何を言っているのか？戦闘中に何という哲学的な話を…

　しかしよく考えてみれば…各員の心の中に薄暗いものが漂う。ポケモンは確かに…そういう能力を持っている文明の種族だ。だが、それが今のこの状況の言い訳になるのか？正しく言えばこれもまた人間がいなければ、人間の作ったあの送電線というおかしな形をした機械と構造物がなければ発生しなかったのではないか？

全員の間にしばし沈黙が流れる。次にどう動けばいいのか…誰にもわからなかった。

その時機、彼らの前方から暴力的な寒波と無数の弓矢の嵐、強大な電力、そしてさまざまな技の嵐が襲いかかった。「なんだと?!」「少佐っ!」レントラーをかばうように飛び上がったロゼリアがその冷気と弓矢を立てのように浴びた。彼女の華奢(きゃしゃ)な体はその冷気に凍り付き、矢の嵐の与えた強力な反動によって固定されずにプレス機にかけられた金属板如く後方に吹き飛ばさ手バラバラになった。

「ポーリアっ!……誰だ…」左に転がるようにそれらをやり過ごしたラクープ少佐が小高い丘陵の上の方を見る。そこにいたのはグレイシア、プラスル、メリープ、モココ、そしてクローンポケモン達の大群。後方を振り返れば、一緒にいたはずのガブリアスも、ギャロップも、モウカザルも、多くが攻撃の前に血しぶきと肉片をまき散らした死体をさらけ出していた。伏せた姿勢から立ち上がりながら彼は確信した。

そうか…思った以上に敵は多い…俺も逃げ切ることはできんだろうな……これが俺の最期とは…意外と早く来たものだ…

ラクープ少佐の心の中には、家族や部下をのこる悲しさも、理不尽な自由連合軍への怒りも、苦しみ死んでゆくことに対する恐怖もなかった。ただそれが来たことだけがわかった。その時が。

「野郎ども…」彼は小声でつぶやく。全ての覚悟はついていた。「一気に突っ込む!敵のポケモン達になっ!」

少佐以下、わずかに残ったポケモンたちが一斉に送電塔へ向かって

走る。一瞬気を取られたレオはそのままレントラーに蹴り倒され、シンシアは集団に吹き飛ばされた。「てっめっ！おらグリソム！あいつらを後ろからしとめるぞっ！」「お、おう…」コリンクは矢立と洋弓銃を放りなげ、ミズゴロウとともに彼らを追いかけた。

「敵残存部隊がさらに進行！」空中管制機“アンタレス”の担当員が報告する。オペレーターの男はレーダーを見つめたのち、落ち着いた声で指示を出す。この動きからして直接送電線を狙っているわけではない。奴らの狙いの第一は前後にいるポケモン達。男は無線機のスイッチを入れる。「各隊。相手は何としてでも君たちを倒したいらしい。危害を加えてくる相手は容赦なく…」「ええい貴様らなにをもたもたしてるんだ?!おい、下にいるポケモン共に言ってやれ!送電網に被害が出たら賠償金はすべて貴様と貴様の家族から搾り取ってやるとな!」社長は大声でまくしたてる。装着した無線機越しにＥ－７６７のオペレーターに、アラスカの司令部に、各国軍と統合軍の戦車や歩兵に、その怒声が飛びこんでくる。もっともポケモン達はその声にも反応しないようだ。

「おい！…ここにいる真っ先に動いたはずのこいつはなぜ止まってる?!」社長は“ストームロード４”と書かれた光点（ブリップ）を指差して怒鳴り散らした。「こいつの名前は?!」「ポケモンの名前なんか聞いて何か変わるんですか?」女性オペレーターが社長をなめた表情で見つめる。「あなたみたいな重役さんが、こんな半文明生物の名前に興味を持つかは……」「とにかく言えっ！私がこいつに言ってやる！」社長はコンソールを叩く。女はため息をついた「機器が壊れるんで落ち着いてください…彼女の名前はテルル・アストラフスキー、種族は…」「おいテルル・アストラフスキー！何を止まっているこの役立たずが！さっさと敵を潰さんとお前とお前の家族から金を巻き上げるぞっ！」社長は無線機に向かって喚き散らした。オ

ペレーターの男がその声の大きさに顔を歪めてコンソールをいじり、通信音量ボリュームを1段階下げた。

その怒声を聞いたテルル、すなわちグレイシアの意識の中が一瞬凍りついた。突如として自分の名を呼ばれ、説教された。彼女とて英語を多少は理解できる……

……その意味が分かった時、彼女凍りついた意識は内部の圧力でひびが入り、そこから黒くそして恐るべき冷気を含んだ気体が噴き出す。その期待は飛び出して0．1秒後には急激に外部の気体と反応し、凄まじい温度の熱エネルギーに変わった。

「私が…私が……役立たず……家族から金？……！！！！！！」テルルは銛を引っ掴み、矢立も装備品入れも叩き捨てて突進した。その目には激しい、いやそれどころか恐怖を感じるほどさっきのこもった黒い怒りと憎しみが燃え上がっている。

「ちょ…ちょっとテルル？！」ピトムニクが彼女の矢立と洋弓銃を取ろうとするが、突進してくる相手をちらりと見てそのまま洋弓銃だけを掴んで走り出す。「俺たちが援護する。グラシデアもちゃんとついてこいよなっ！」「そんなこと言われなくたって…」父親であるバストークの言葉にいつものことながら反抗しそうになったグラシデアだったが、なおも後方からしつこく迫ってくるワタッコたちのタネマシンガンをかわしながら転びそうになる。「大丈夫かっ！」ロックオンがそれを足で蹴り飛ばし、というか盾になるように喰らいながらも飛び上がってつばめ返しで何匹かは確実に殺した。

「す、すいません！」「まあいい、アンタらはそっちを自分の所をやれ」「分かったぜおっさん！」バストークは飛び出してきたポポッコの一団を確認もせずにほうでんして撃退した。半数ぐらいは殺すことができたか。当たった音、聞こえた断末魔の声から推測して

ここまでは全てカンだ。

「人間のごみどもがあああああああああああっっっっっ！！！！！！！！！！！！！」彼女は何のなりふりも構わず、怒りと悔しさに任せてふぶきを打ちまくった。たかがいっぱしの人間、しかも声からして特にポケモンを見下しているような奴に言われたことが彼女の狂気のような怒りに火をつけた。

そして偶然とはいえ、“家族”の話をされたことも。テルルにとって家族は……ほかでもない彼女の目的の全て、今このグレイシアがテルル・アストラフスキーとしてここにいる理由の全て、その本質であった。その対象となる家族はたった一匹、だからこそ、それだからますますかけがえのない、愛おしい、地球全てにも代えられぬ、彼女のすべてなのだ。それをもてあそぶもの、とく人間に対して抱く彼女の感情はただ一つ、殺意だけだ。

殺意。今の彼女の思考ではこの2文字に則りすべてが決定される。・

だが、そのせいかそれとも相手の能力が高いせいか、そのめちゃくちゃな乱打は威力が高まっているだけでさっぱり命中しない。「このこのこのっお！！」テルルは狂ったような声を上げながら相手の攻撃を飛び越え、滑り込み、かわしまくりながら乱射する。そうでもしなければ自分は本当に役立たずのレッテルを張られたままになる。それは彼女にとって死刑を宣告されたも同然に感じ取れた。だからこそさらに力が入り、ますます勢い任せで当たらない。完全な悪循環。

しかし今の彼女にそれを考える余裕はない。彼女の意識の全ては相手を撃破することへの執着と侮辱に対する激昂で完全に占拠されいているのだ。

「テルル！前に出過ぎだよっ！」ピトムニクが後ろから手榴弾付きの矢を2本とも放つと洋弓銃を捨てて4本足で前へと飛び掛かった。
「ピトム！…私は…私は全部…」後ろから飛び付いたプラスルをグレイシアははねのけようとする。「あんなの全部ぶっ殺して私はあああああああっ！！」「だからもう少し後方に下がって…」ピトムニクが何かを言おうとした直後、目の前から巨大な電気エネルギーの稲妻が猛スピードで迫ってきた。

目の前の相手に向かってでんげきはを打ち込む瞬間、ラクープ少佐には憐みも、嘲笑も、戦果稼ごうとする欲求もなかった。ただ前にいる相手を潰し、向こう側にいる主力を撃破する。それだけだ。自分たちの部下もそう思っているに違いない。そう確信した。

しかし放ったエネルギーが命中する直前、彼らの目の前を突然巨大なエネルギーが覆い尽くした。

「そこねっ！」丘陵の上に待ち構えていたサクラはこの瞬間を直感した。あの集団が最後。テルルやバストークやピトムニクを守る。その瞬間が今であると。
敵の位置を、どこを狙えばいいかを、どれだけ力を込めればいいのかを、彼女は瞬間的に意識空間の流れを、運命という川の流れを読み取った。
サーナイトの思いを託したサイコパワーが彼女が握る兵器から巨大な鉄槌となって飛び出し、空間を引き裂いた。彼女の周囲の空間が、そのエネルギーに反応して瞬間的に眩しい光を発する。

その直後。

「えっ？！これは…」意識を再び目の前に戻した彼女の目の前の空間に、別の意識がフラフラと向かってくるのを感じた。その意識は深く傷つき、力を使い果たしかけていた。しかしそのポケモンを動かしているもの…それは…狂気だった。

「……」彼女の意識の中をつめたいものが走る。その相手は…まだ幼い子供だった。しかもその相手の意識を狂気として構成させて渦巻くもの……

（……そう…あの子は……）サクラの意識の中でどうしようもない悲しみと自身に対する嫌悪感がわいた。どんな状況であれ子供を、しかも傷ついた子供を…しかし敵であるからにして彼女は倒さなければならないのだ。

「ううううっっ……」傷つき、ふらつきながら丘を登ってくるツタージャと目線があった瞬間、サーナイトは思わず後ずさりした。「うぐっ…うわあああああっっっ！！！！」その直後、そいつは狂的な叫びをあげて軍刀を振り回しながら駆けだす。

「ええいっ！！！！！」サーナイトは手に握っていた兵器を捨ててそのひと振りを後ろに飛びのいてかわし、右手を前に突き出してサイコパワーを正面に注ぎ込む。「ぶぎゅわあああああっ！？」ツタージャの体は内部から破壊され、血しぶきをまき散らしながらその華奢な手と足、体が全てバラバラになって飛び散った。

しばしの後、サクラの意識空間は強烈な罪悪感に覆われていた。いくら任務とはいえ、てきとはいえこんな子供を殺すのはむごすぎる。あの子の家族も友人も集落もすでにこの世にはなかった。そう彼女の意識空間は読みとっていた。

しかし、サクラにしても起きてしまった結果と運命を変えることはできない。今彼女にできることはもはやわずかしかなかった。

サーナイトは飛び散ったヘルメット彼女の半分にちぎれた胴体の頭が残っている側のそばに置く。「ごめんなさい…せめて…家族に会えるといいわね…」彼女は涙をぬぐった。

「何が……とにかく野郎を仕留めにかかるぜ……」ブースターは右手に見える草原のふもとで起こった爆発を一瞬気にしながらも洋弓銃を放り投げて前方へと向かった。「あ、あなたって子は…」「いただいたわよっ！！」メガニウムは自信が何発もの火炎を受けながらもその多くは彼女の思念が作り上げた頂上的な盾でつきとばし、ついにキュウコンの首をツルでつかみあげる。「ああうっ…」「そのままあっ！」メガニウムの意識下から噴き出した凶悪な本能がキュウコンの頸動脈ごと頸椎を打ち砕こうしたしたその刹那、トゲキッスがエアスラッシュをかけながら飛び掛かる「大尉っ！」「アンタは引っ込んでなさいよ！」メガニウムが引くように一歩分だけ足を下げながらもう一本のツルを強烈な勢いで前方に突き立てる。「きゃあっ！？」そのとんでもないスピードの前にはトゲキッスの飛ぶスピードなど製紙目標も同然だ。あっさりと凶暴な思念をまとったエネルギーが白い体をぶち抜いた。

だがその瞬間…メガニウムの意識下をある種の衝撃が貫く。同時に彼女の意識の水晶はツル先から飛び込んできた別の意識の流れに反応するようにかたまり、一瞬思考が停止した。

……あなたは……あなたは……オーメリア……なんで？……

このトゲキッス、オーメリアは彼女と同じように国連の施設で育った仲だった。同い年である彼女は８歳かそこらの時にいったんは東

ヨーロッパのセルビアという国の（メガニウムの思考の中ではうろ覚えの国名だった。その人間の国家がどれだけ遠いかは検討がつかなかった）大統領夫妻に引き取られていったことは覚えている。最後にあったのは5年前…トゲキッスはすっかり優美な雰囲気になっていた。それでも心は通じ合った。何しろ（人間の暦でいえば）生まれての8年間はごくまれに一緒になる話し相手と言ったらお互いしかいなかったから。

あの時かわしたやり取りが意識下をよぎる。

「ねえねえオーメリア！うちらが本気でやりあったらどっちが勝つと思う？」

「分かりませんわね。でもその時になったらユイリィには負けませんことよ」

「ほーんとお？！でも、そういうくらいだったら2匹共通でやっつける相手がいるといいよね！うちら2匹で頑張ればこの施設全部乗っ取れちゃうよ！うん」

「あなたも変わりましたこと。でもいつかは…本気でやっちゃいたいものですね！」

「あははは……やっちゃうやっちゃうよ！」

現実は……そうなるどころかお互いが敵になっていた。おそらくはその国の領内にたまたま自由連合と関係のある所があって、そうだろう。現に今の人間の企業や国家にとってポケモン文明の2大勢力による争いなどどうでも良い。彼らが勝手に殺しあっていてても市民や施設に悪影響を与えなければむしろ自滅してほしいくらいだった。各国家も地域の国家連合も企業も自分たちの権益を守り、もしくは拡充するためにあえてどちらか、または双方に肩入れしたり工作したりする行為に走っていた。そうすることでお互いが互いの勢

力を削りあって弱体化し、その国家や企業の活動にポケモンという妨害要素が自ら小さくなってくれる。

そんなものの前に…この2匹の絆はあっさりと破壊された。メガニウムの脳裏に強烈な憎悪と後悔の吹雪が吹き荒れ、意識空間を一瞬で凍結していくのがわかった。こんなものが見えてしまうのも彼女だからゆえだった。

だがもう戻ることはできない。助けるすべはない。メガニウムは諦めた。誤ったところで許してくれるわけもないが、他に思い付かなかった。

……ごめんね……許して……

メガニウムはツルを横に動かす。トゲキッスの体は前後で真っ二つになり、血しぶきを四散させながらメガニウムの背後に落ちた。

「こんのおおおおっ!?」ツルの力が一瞬緩むと同時に、キュウコンが猛烈な火炎の熱エネルギーを噴射した。オーバーヒートである。「うぎゅわっ!!」彼女が意識を戻した時には強力な熱と爆風によって数メートルは後ろに飛ばされた叩きつけられた。

「おい大丈夫かっ!?」ブースターが慌てて向かおうとしたその瞬間何者かに下から突き上げられて仰向けに倒され、その上から何者かに飛び掛かられる。「てめえ……まだ…おげえっ!?」何とか右

前足で刃を突き立てようとした彼だったがサンドパンの鋭い右の爪で地面に突き立てられる。先程からの戦いでかなり手負いのサンドパンは先ほどの地面からのアタックで大ダメージを受けてるブースターに左側の爪を振り上げる。「……お前らみたいな遠足集団……しかも一匹は……洞窟から翡翠を取りやがったらしいな…」「はあ!?何のこと…そうか…」ブースターはポニータともみ合っているままのベイリーフをちらりと見る。「で……どうする?…」「お前らみたいなポケモンの敵…人間の犬ども……」サンドパンが爪を振り上げる。「貴様らみたいなゴミは一匹ずつ互いの死にざま見ながらバラバラになれば……」

「んだと…てめえは……」ブースターの意識の奥底から急激に暗い物質が噴き出した。人間の犬呼ばわりされたことが彼の意識下の反応炉の制御をことごとく奪い去り、一瞬の間に感情の臨界点をあっさり通り過ぎ、凄まじいエネルギーが右前足にかかった。「……誰が好き好んでえええええっ!!!」前足から恐るべき熱エネルギーが噴出し、サンドパンの爪を振り払って胴体を貫く。「人間の犬じゃねえんだあああっ!」

ブースターの右前足の一撃はサンドパンの心臓も動脈もあっさり焼き切り、背中側へと貫通し、こいつを後方へと突き飛ばす。意識のなくなった抜け殻となった相手の体は煙を上げて無造作に空中を吹っ飛び、斜面を転がり落ちた。

「アイソープ?!」ポニータが一瞬その衝撃音に気を取られた。その瞬間にベイリーフとのつばぜり合い状態は崩壊する。「ううぐぐぐわあっ!!!!!!!!!」ベイリーフのツルと前足2本から強力なエネルギーが爆発し、同時に首周りの葉っぱから大量の葉っぱの

嵐が噴き出して、その反動でポニータを真上へと突き飛ばした。ポニータの体はそのまま斜面側に落下して見えなくなる。今の一撃でベイリーフは全ての体力を消耗してしまっていた。何とか起き上がろうとしても宇宙にふわふわと浮いてしまったかのように感覚がマヒし、強烈な吐き気と疲弊に襲われていた。必死に相手の攻撃を防いだときに意識下をよぎった映像が目の前にちらつき、さらなる悪寒に襲われた。初めて自分の意識を外に引き出そうとしたあの時のように。

……俺はいったい何をした？……ついにあれを出してしまったのか？……

……あいつは……あいつはどうなったんだ……

「うぐぐ…ううっ…」ベイリーフは前足を2本を起こしたところで力尽き、右横に倒れこむ。頭部のヘルメット状の装甲板ががらんと音を立てて草原の上に落ちる。矢立から矢がこぼれ落ちても、もう彼は意識をここに保つ力さえ失われていた。

そのまま彼の意識は深い自身の意識の底の暗闇へと落ちた。

「うぐっ……あの子は…っ！！！」キュウコンはフラフラと起き上がると。ヘルメット状の装甲板を落としたまま丘の斜面へと走って行った。「ううっ…はあ…はあ…皆は…皆は…」メガニウムがようやく体を起こすと同時に、彼女の意識空間が周りの宇宙を読み取る。

周囲に広がる状況は恐るべき感覚だった……周りにある意識全てがかすんで見える…

彼女はその結果に吐き気を覚え、危うく倒れそうになる。だが、彼女の意識空間の奥底にある本質がそれを許さなかった。彼女は気合を振り起こした。こんなところで…あたしが…倒れているわけには…

激しい爆発音ののちに少佐が気付いたとき、周囲にいた自分の見方は全員が死亡していた。全員が体内から暴発したように４本足も尻尾もバラバラになっていた。自身は飛んでくる直前にでんげきはを打ちだすため上に飛び上がったので致命傷にならずに済んだのだ。

「しかし…俺だけ残ったとしても…」

「もらったあああああああああっ！」「ぐぶっ！」不意のこのレントラーの足元から突き上げられるような衝撃を覚え、腹部に鋭いショックを覚える。飛び出してきたのはミズゴロウ。「このチビども…まだやろうっていうのか…ならばっ」ふらつきながらもラクープ少佐は上に飛び上がり、勢いのついたグリソムをスパークでた

たき落とす。
だが彼が着地した時、目の前にコリンクが同時に着地してきた。
「貴様…」コリンクはにやりとする「穴を掘るっつうのは……」その表情に少佐は衝撃を覚えた。
「2匹まとめて使えるんだよっ！！！」コリンクは軍刀を何の抵抗もなくレントラーの首元に突き立て、最大馬力で奥へと突き刺した。
……お前は……似ている……似すぎだ…大きさと声以外は…
そう…彼の息子にあまりにも似ていたのだ。その驚きの前に彼は動こうとしなかった。血しぶきをまき散らし自分の生存の可能性をことごとく奪うその一撃を甘んじて受け入れた。
「はあ…はあ…俺も…ついに……」レオは疲れ果てたようにその場に崩れ落ちる。この3日間と疲れが急にあふれ出したように全身が動かなくなった。「ついに……俺もまっとうな戦果を…」
「……おい……そこにいるお前の事だ…」「あん？…」コリンクの前足が倒れているレントラーの左前脚が強烈に掴む。「……お前は…それなりの…兵士じゃないか…穴を掘るを掘った奴の後方から使用するとはな…あいつがやったんだろ？」「あ…まあそんな感じだ…」2匹の視線の先にいるグリソムはさっきスパークを浴びながらフラフラとこちらへとやってくる。「お、おいらを…呼んだ？」
「それに…」ラクープ少佐は薄れゆく意識の中で傷口からこぼれる息の音とともに必死に何かを伝えようとした。ここに来て初めて死ぬことに対するある種の悲しさを覚えた……
……しかし…もう引き返すことはできない…もう助かるわけがない…

……せめて……こいつになら…こいつになら…伝えても……

「……お前は…俺のせがれに似ている…痛いほど…だから…こいつを…できれば俺の息子に…」レントラーはそういって首から下げている物をコリンクに付きだした。「息子の名前は…スパーキー・ヘルベルト・ラクープ……た…たの……せめ…あ……俺の……」

「おい……」レオがその左前脚から受け取った直後、その前脚は前に倒れ、そのまま動くことは2度となかった。

自由連合の士官の一匹、ヘルベルト・ラクープ少佐。ヴェルダー州ロアクーンで戦死。

「……」レオは黙って突き出された木彫りの物を眺めた。何の心当たりもない……

「大丈夫レオ?!全くあんたって奴は……またこんな方法で……」スカイラブがよれよれになったガトルをおんぶしながら駆け寄る。「俺は全然大丈夫だっての!……まあヘンなものは渡されたけどこの敵からな…」「もらったの…まあ…大事にしないとね」2匹はラクープ少佐の亡骸をちらりと見る。スカイラブはため息をついて頭部装甲板をはずした。突如として切なさがこみ上げ、思わず空を

見上げて左前脚で目元をぬぐう。彼女にとってこの朝の青空と雲は驚くほど無表情に、そしてさりげなく彼女の上を通り過ぎていくようだった。普段から無常感や世界に対するやりきれなさは分かっていたが、彼女にとってもここまでそれが胸を締め付けてくるのは初めてだった。

……なんでだろう？……どうしてここまで……

彼女のぼんやりとした思いはレオの声に打ち消された。「そうだ……シンシアあいつは……」疲弊しきった体で歩き出そうとするコリンクを彼女とバストークが食い止める。「シンシアは俺が助けてくる。お前はもういい。そこで休んでろ。ラブ、頼む」「はいはい隊長」「でも…俺がアイツの隊長であるしそれに…」「心配すんな。まあ…まだまだ俺にしちゃ隊長のたの字位だが……お前は十分役割を果たしたぞ…」メリープはコリンクのはねっ毛をやさしくなでると残存するクローン兵士（ポケモン）を連れて走っていく。

「よくやってくれた諸君。君たちの相手にするべき目標は撃破した。残りの部隊は統合軍の部隊が追撃、または先制して制圧する。君たちはもう撤収していいぞ」各員の無線機に上空にいる管制機のオペレーターの声が聞こえた。上空には追撃行うアメリカ陸軍航空隊のＡ－１０Ａ４機、ＡＨ－６４Ｄ４機、統合軍のＦ－３５Ｃ２機、空挺部隊を乗せた統合軍のＣＨ－４７４機が整然と通過し、地上では多くのＭ１１２６やＭ－１１２８といったストライカー装甲車やアメリカ陸軍のＭ１Ａ２戦車が街道を通って奥へと向かっていた。

「まあ……アンタとしてはよく頑張ったんじゃない？とにかく…」

「バーカ…お前は頑張ったのかよ?とにかく…すげえだるい……」レオは燃え尽きたようにその場に伏せ、頭部装甲板の皮ひもを解いてヘルメット状のそれを投げ捨てた。スカイラブはそんなコリンクを前足で抱きしめ、顔を摺り寄せた。「何心配かけてんのよ?……良かった……本当に生き残ってくれて……それでよかった…」頬ずりの様な事をする彼女の目に再び涙がにじむ。このルクシオにとって彼は大切な友人、そして彼が子供の時から、そしてこれからもそうでありつづけるであろう彼女のかけがえのない弟分……こんなどうしようもない現実世界でも自分を保ち続けることができる彼女のよりどころ……

「……ううっ…とにかくやめろって…」そうは言いながらも抱きしめられているレオの心の中にほのかな暖かさにも似た安心がこみ上げてきた。ゆっくりと彼の意識空間を覆い、ほのかに温めてくれる…それはまるで母親に抱かれた幼子のような不思議な心地よさであった。

コリンクは力を抜いていつの間にかそれに身をゆだねていた。

「レオ……よっぽど疲れてたんだね……良かったよ無事で…ね、ラブ?」「うん…」ピトムニクは疲れ果てたテルルを連れて2匹の隣に座る。「それよりもさ、テルルの方はやばくないの?なんだか見た目的にそうでもなさそうだけど…」「うーん…いろいろと苦しいのかなあテルル……あんな風に突然飛び出しちゃうなんてさ…」プラスルはその場に崩れ落ちてしまったグレイシアのもみあげ飾りをやさしく右手でなでる。彼女の方は性根尽き果てたような目をして朝の夏空を眺めていた……

「シーベルト!…ねえ!…しっかりしなさい……」シーベルトは首のあたりを誰かの前足が軽くたたいているのを感じた。「うう…

……俺は……」ポニータがわずかに目を開けると、その前足の主はキュウコンのアリョーナである。彼女は戦闘用の蹄鉄型の専用装甲靴をはずしていた。そのおかげで彼には彼女のさすりが母親にそうされたような心地よさに感じられる。

「大丈夫……意識もあるし…かなりケガをしているようだけど命に別状は……」アリョーナがシーベルトの腹側の傷跡を見つめた。先ほどの爆発で飛び散った鋭い土くれが刺さったか、かなり大きな海図口から血が滴っている。「そうだ…そうだ…アイソープはどうしたんだ?!」ポニータが慌てて立ち上がろうとするが後ろ足2本に重く鈍い痛みが走り、なかなか上がらない。「やめとけ!あの高さから吹き飛ばされて落ちたんだ…折れてないだけ奇跡だろ」ゼブライカのベクレルが立ち上がろうとする彼を押さえつける。ゼブライカの表情は沈んでいた。「だってな……おい……まさか…あいつは…」シーベルトの顔が青ざめる。「あそこだ……あそこにいる…ダメだったんだよ…」

上空を轟音を立てて通過していくものがある。アリョーナが言っていた飛行機という人間の道具の一種であろうか。「アメリカ軍…国連軍…AH－64D…CH－47…ヘリコプターとF－35C支援戦闘機…この戦いも…終わりそうね…」アリョーナは頭部についていたヘルメットのひもを右前足でほどく。

シーベルトは絶望にかられたような声でつぶやいた。「……アリョーナさん……少佐たちは…今頃どうなって……」「……おそらくは…もう既に…あなたが指示したとおり隊長たちは敵の勢力の中心へと向かったはず…」キュウコンもさびしげに、悲しげに言った。

「……隊長…少佐もアイソープも俺は……」シーベルトはぼんやりと自分の蹄を見つめる。

…ゼブライカのベクレルが足で示した方向にはサンドパンの亡骸が無造作に転がっていた。「くそっ…何だって…」ポニータの意識空間は押しつぶされそうになった。同時に自分のしていることがひどく下劣に感じた。何が救国だ、何が使命だ？こちらに来て一緒だった友人、自分のやっている野望に近い活動を理解し付き合ってまでくれた奴を殺して何を偉そうに！？

しかし彼はこらえた。押しつぶされれば自分の感情も意志もこの場でつぶれる。そうすれば楽になる。だが今は…今は…こんなところで立ち止まっているわけにはいかない。　人生を奪われた家族のため、自由連合の堕落した連中に幸せな未来を奪われ、または奪われかけている者、人間たちにへりくだるばかりの者によって誇りも自信も失いつつあるすべてのポケモン達、そして何より自分がシーベルト・リヒテント、ポニータという種族のポケモンとして生まれここにある理由、それに対する自身の答えを出すためにも。

そして…何より家族の為にも。

「でも…」キュウコンがポニータの前足を握る。「もしあなたが言う革命…それが成功し、真の意味でポケモン達が文明生物として存在できるようになれば…そういう組織に変革できれば……私にもわからないけど、少佐やほかの皆の死も…無駄にはならないわ…そう思うの」

「……ですよね…だからこそ俺は…ここまで…」シーベルトはのどの奥から声を振り絞った。自分に芽生えた罪悪感や逃げたい気持ちを振り払い、縊(くび)り殺すように。

「……帰りましょう……ベクレル、シーベルトの分はお願いね」
「はい、大尉。全部おれが持ってやるから遠慮するなよ」アリョーナの一声でゼブライカがポニータの脚部の装甲板と一体となった蹄鉄のひもをほどき始めた。「悪いなベクレル」「何言ってんだよ。お前は見上げた野郎だ。友人としてもな。どこまでも、地獄までもお供もするぜ」

「リーヒュン!?……ねえ大丈夫!?リーヒュン!?」この甲高い声……不器用ながら若者らしく何度も撫でるような優しい感覚を感じる……

「うぐっ……ううっ……」くらくらする頭の中で意識の霧を払ったリーヒュンがわずかに目を開ける。目の前にいるのはあのメガニウム、ユイリィであった。「あ、良かったあ～見た目じゃ死んでるように見えたよ!だってあたしが何回飛び掛かってもむぎゅむぎゅしてあげてもさあ、全然動かなっかったんだもん。リーヒュンが死んでるわけないのはあたしなら一発だけど。うん。あはは!それにしてむぎゅむぎゅで起きないなんて珍しいよ…」彼女は相変わらずの調子で彼のおなか辺りに座り込んで自分の花びら付きの首をぐいぐい押しあてていた。「はあ…はあ……なんであいつが……なんかすごい…だけどこれくらいではまだまだ…」「あ、大丈夫大丈夫!もう戦闘は終わっちゃったみたいだよ!うん。だからリーヒュンはここで休んでてOK、ってわけになってるの」メガニウムは体を震わせて立ち上がろうとしたベイリーフをツルで優しく止め、彼の胴体部分の装甲板を結んで背中側に回っているひもを3つともほどき、乗馬用の鞍の様な装甲板をはずす。少しでも軽くなったかと思った

が、軽くなった分だけあちこちの傷の痛みが強く感じられ、めまいや悪寒もぶり返したようだった。そんな彼の感覚を感じ取ったのだろうか、彼女はツルで一番深くて痛い首の葉っぱ元に左前脚の付け根にかけ手ざっくりとした熱傷と一緒になった傷をなでた。優しくさわやかな清流に似た感覚が彼の首元から頭へ、その先の葉っぱへ、４本足へと伝わり、全身の痛みが少しだけ和らぐ。「ふう…ごめん。また気を使わせちゃったな…」「大丈夫大丈夫！うちらは仲間だし友達だし、他になんていうのかなあ…うんん、まあいっか、とにかく遠慮しないで！それいいのよ！うんうん」

しかし少し痛みや苦しみが遠のくと、それだけ悪寒やめまいが再燃してしまう。ベイリーフの脳裏をあの時の…シーベルトとつばぜり合いをして意識をそれに集中してしまった時に感じたものが恐ろしいほどのインパクトを持って感じられた。その分だけ…周りに敏感になってしまったのかもしれない。さらには今回たたかった相手が…またしても…シーベルトであったということ…

その中で何より強く感じたのは…一瞬だが感じたメガニウムのもの。あれは…彼女の友人だったのか…本当に…だとしたら……彼女は……

「なあ…ユイリィ…」「んー？どうしたの？」

それ以上は聞きづらかった。そんなこと聞いたら彼女は……

しかし結局は衝動に負けた。

「さっき倒したトゲキッス……あれ…友達だったんだろ？俺にはそう感じた……それに昨日のも…」

「ああ、あのこと……うん。たしかにそうだよ。たしかにね。昨日のはちょっと、いろいろ気にしちゃってさ…」その答え方はユイリィ・ランタン・プレミドールらしいあっさりとしたものだ。彼女は

後ろ側をちらりと見てと自分のヘルメットを外すと、右左両足にまいているスカーフに似た布の左側を解いてヘルメットの内側をツルで拭く。「あれはどっちも終わったことだからさ…気にしなくていいよ。あたしも気にしてないし」

「でもさ…そんな…くっ…」リーヒュンが立ち上がろうとしながらツルでメガニウムの前足を叩く。「そんな風に済ませていいのかよ？…せめて…死ん…ごめん、どんな状況でも見に行って……」「大丈夫！大丈夫だよ…」ユイリィが普段と変わらぬ明るい調子で続ける。「今更気にしたって仕方ないじゃん。過ぎちゃったことに悩んだって仕方がないのよ。それにこの先の不安だって気にしたって変わらない。落ち込むくらいだったら次頑張ったほうがいい。あたしはそう思うよ」

「そうか…ならいいけど…」ベイリーフは納得しきらない顔でうなずいた。そんな平然としていられるはずがないじゃないか……しかし、今の彼にはそこまで深く探るほどの気力はない。今は彼女の言葉を信じるしかなかったのだ。他に方法が思い浮かばなかった……

「おいリーヒュン！良かったぜお前生きてたか…俺は本当に死んだかと思った……」「大丈夫だって！見ての通り死んではない」リーヒュンの倒れている頭側から駆け寄ってきたのはブレイブであった。ブレイブはリーヒュンの首元に馬乗りになって大喜びしている。ブースターのフサフサ尻尾がベイリーフの首の葉っぱにがさがさと触れて、互いにほのかな暖かさが伝わってくる。「それより…またあいつがいた。何を考えているんだアイツは…」「気にすんなよ今は、お前の体の方が心配だぜ。……ったく…さんざ心配ばっかかけやがってお前は……真正面から何も考えずに攻撃しやがったこのバカ…」ブレイブの心に安心感がいっぱいに広がった。他でもない…親友が

生きている。確かにいま生きて喜びを分かち合っている。かったことではない、生きていることに対して……

リーヒュンにもブレイブの思いが、体温を通じてそして彼の喜びという意識の暖かい気体として体と意識空間を駆け巡る。同時にブースターに対する自分のふがいなさも感じた。彼は単に大喜びしているだけではない。そこには…感謝も安堵もあるはずだと……おろぼけながらもベイリーフには彼の意識空間の中身が感じられる、そんな感触を覚えていた。これも…自分の能力が伸びている結果なのか？

そんな気持ちがひとりでに言葉となって口から出た。「ありがとうなブレイブ……」「何だよいきなり面喰って。気にすんなよ。最近のおまえの事だから自分の無茶加減を責めてるんだろ？まったく問題ねえよお前は。リーヒュンはお前らしいところが一番の強みだ」「そうそう！うん」ユイリィも同調するようにリーヒュンの首元を左前脚でなでる。「だろっ！？こんなに無茶苦茶で見飽きねえ奴なんか他に居ねえんだよ！やったな俺らは！」「うんうん！さっすがブレイブはかっこいいこと言うね！」ベイリーフの目の前でブースターとメガニウムは2本の前足をぱちんと合わせる。「おらおら、お前もやれって」「そうだな」

「うっしゃあ！」「やったね！」「よしっ！」ブースターがベイリーフの左前脚を持ち上げ、3匹の前足が一つに触れあう。ユイリィとブレイブにはとりあえずお互いの暖かさ、喜びを感じている余裕があった。

「ね、ねえねえブレイブ！テルルの方に行ってあげないの？」ユイリィがはっとしたように遠くの草原を眺める。すでに爆発音や戦闘音は聞こえなくなっていた。

「やっべえ！そうだそうだった！」ブレイブは衝撃を受けたように飛び上がる。「なんで気づかねえんだ俺はっ！くっそっ、リーヒュ

ン、ユイリィすぐもどっからな…すぐ戻んねえかもしれんが…たく、今更無線機が戻ったってうるせえだけだよ…待ってろ！今行くぜっ！」ブレイブは外したばかりの自分のヘルメットを前足でつかんで放り投げて頭に乗っけるとそのまま丘を下って行った。

取り残された2匹の間を奇妙にゆったりとした時間が流れていく。
「ねえリーヒュン…」ユイリィがぼんやりと空を眺めながら呟く「ん？どうした？」
「フローラに…少し近づいた？」「えっ…？」「うん…例えば…こう…何か分かるようになったとか…」
「……いや…どうだろうかな…」リーヒュンは首から下げた容器をツルで握り、あるだけの意識をそのツル先に集中させて、容器の様子を思い浮かべる。

……どうだろうか……何が見えるか…いや…彼はもどかしかった。どうして…こういう時に…

……いや…何も……まだ……

彼の意識空間は奇妙な嫌悪感と情けなさに襲われた。気持ち悪いほど自分の水晶を冷やし、溶けていくような悪寒へと変化していく。自分の情けなさに腹がたった。自分はフローラの兄貴だろうが…なんでその程度の事が…

「そっか……無理はしなくていいよ…」ユイリィがツルで彼の頭を撫でる。「大丈夫。あたしから見ればね、リーヒュンは今回すごい頑張ったと思うよ。うん。だから焦らなくても大丈夫。少しずつ向かっていけばたどり着けるよ、絶対。フローラにも…世界にも……前言ったあたしの空の場所にも」「…たどり着くために…俺はもっと…」「もちろん…うちら一緒ならどこに行っても平気だよ！」

「うん…そのために…」リーヒュンは横に倒れた状態のまま空を見上げた。まぶしい夏空の広がる季節、ベイリーフの気分はあまり晴れなかった。本当にフローラに近づけるのかという戸惑いや不安がいつまでもこびりついている。しかしその夏の朝日が輝く空のおかげで、彼の意識下ではその様々な不安も戸惑いも少しは緩み、それらが一緒になって風と共に漂っているような何とも言えない気分だった。

「大丈夫かグラシ？」「え、ええ…なんとか…」ワタッコやポポッコの大群をあらかた潰し終えた死骸の山の中でロックオンはグラシデアのそばに寄った。周囲に散らばっているのは自陣のクローンのブイゼルやエテボースの死骸も多数含まれている。そんな死骸を眺めているモココの目は恐怖と罪悪感に震えていた。自分の戦果ではなく死んでいった一つ一つの命を感じ、その恐ろしさのあまり持っている軍刀と槍をその場に落とした。「あの…私は…私は…なんでこんなことを…」「お前が悪いんじゃない……お前じゃなくて…それ以外の何かだ悪いのは…」消え入りそうな声を出したモココをムクバードは双方の翼で抱きしめた。その翼と体でグラシデアの震えを、恐怖と痛みと怯えを感じることができた。せめてこうしてやることしかできなかった。これしか浮かばなかったのだ。

「あの…いいですか?…お友達は…」「…!!…そうだ!あいつは?!」ロックオンは慌てて辺りを見回し、死骸の山の中にある一匹へっと向かって軽く飛びよった。「おいケルディム!…おい…くそっ…」

このムクバードの友人のフライゴンは……おそらくは彼が倒したであろう敵の中で同じように両手足と尻尾を引き千切られ、血まみれになって息絶えていた……

「ったく……お前さあ、確か死ぬときは空で死にたいって言ってただろ?それが…こんな地上戦で…」彼は寂しそうにそう言うと、フライゴンと自分の頭部装甲板を外して亡骸の脇に置いた。寂しかったが涙は出なかった。おそらく何度も経験してきたせいでもう悲しいと思う暇もなかったからだろう…

「おいテルル!?大丈夫かよ?!」ブレイブがテルルに走り寄って彼女の頬を左前脚でなでる。「テルルは大丈夫。ちょっと疲れたみたいで……」答えたのはピトムニク。

「ったく…無理はするなって言ってんのにこいつは…」ブースターは自分とグレイシアの足の保護装甲板を結ぶひもをほどき、外した装甲板をその場に投げ捨てた。「ううう…ううん…私は…」座るような姿勢になったブースターの前足の中でグレイシアがかすかに動く。

「……無茶するなって…お前はもう十分頑張ったんだよ…これ以上

俺は求めねえからな……」ブレイブは消え入りそうな声で呟いてヘルメットをむしり取り、そのまま頭のフサフサをかいた。「…てか…俺ダメだな。こいつをほっとくなんて……何がパートナーだよ…」

彼の心の中は罪悪感でいっぱいだった。テルルではなく自分の事に気を取られていたこと。彼女がどうなっているかを何も考えていなかった自分に腹が立った。

そして何より、そういうことを一度も省みなかったことを。

ユイリィは空を見上げる。少し雲が多いながらも澄んだ青空のもと眩しい日差しが照りつける朝のハイドル大陸。夏の草原が先ほどまでの砲撃や戦闘の後の生々しい傷跡を残しているが、光を浴びて

若草のエネルギーを取り戻したかのような緑に見えた。そしてそれは…この戦いで傷つき、死んでいった多くのポケモン達のそこに残した思いや感情をやさしく包み込んでゆくようだ。

多くのポケモン達が死んだこと、それは人間たちの都合によって引き起こされた無用な戦いで起こったという事。それがこのメガニウムにとってたまらなく苦しく、悲しかった。人間の理不尽さ身勝手さだって知っていた。

しかし彼女はもう決めていたことと割り切った。何があっても絶対に泣かない。どんなに苦しい物やつらいものが見えても泣かない。自分自身の弱さに負けないためには…そう信じていた。何年も前にサクラに自らの能力、存在意義、その使命を宣告されたときに、隣にいるベイリーフと出会ったときに、そう決めたから。

それでも苦しい。思った以上にそれを貫くのは難しい。昨日の夜だって……

……しかし今は…今だけは……ふりだけでもしなくては……そして努力しなければ……

彼女は花弁のついた首と頭を振り、ツルで長いほうの雄蕊を撫でた。改めて息を吸いこむと、奇妙なほど頭の中の霧が取り除かれ、安心感がこみあげてきた。

そんな彼らの思いを、死んでいった者たちの記憶を、欧州連合熱核融合型原子炉実験施設へと続く送電塔は太陽の光をその金属の鉄骨

に反射させながら静かに大地に立っていた。

「敵性勢力、後続の反応見えず！敵性部隊は後退してゆく模様！」「わが方の勢力の損害９０％以上なれども、ＵＮＦＳＴＰＰＴ各員は全員健在！」アメリカ・アラスカ州のエルメンドルフアメリカ空軍基地兼国連統合軍前線司令部のＣＩＣルームでは、敵部隊が送電塔から後退してゆく旨が現地上空の管制機と軌道上の軍事衛星から確認され、司令室前方の大型ディスプレイに表示される。「送電塔と電源供給の状態を確認しろ」司令の言葉と共にオペレーター達が目の前のコンソールを叩き、情報をメインディスプレイに表示させた。「送電網の損害、極めて軽微、送電電圧に異常はありません」「原子炉施設、制御装置、冷却装置、運転制御機器、すべて正常、通常電源、非常電源双方ともに問題なしです」「原子炉内部の温度、燃料気体タンクの圧力、温度ともに安定を保っています」オペレーターの声が上がる。司令は冷静に、しかしはっきりと言った。「電源守備に成功。作戦目的は達成された」この声を同時にオペレーターの間で拍手と歓声が起こる。司令の男もわずかにほほ笑んだが、すぐに顔を引き締めた。「よくやってくれた諸君、しかし我々は引き続き敵性勢力の掃討戦に移る。引き続き各員の管制を頼む。今回収集したポケモン達のデータはソーラの施設に直ちに送信しろ」司令官の男は続いて通信端末の受話器を取る。「安全は確保されました。ご迷惑をおかけし申し訳ない」電話の相手はあの素粒子加速器施設だ。相手は相変わらず憮然とした声を出す。“それはまあ…よい事ですがな…今後このような事態が発生した場合はその場で我々のような関係者に通達していただきたい…あなた方の気持ちも分かるが、我々にも実績と信頼というものがある…”

フランス・パリにあるアレバ社本社の会議室にも安泰のため息が漏

れる。前方のスクリーンに示された端末からの情報に安心たようにイスに深く腰掛け直す社長のもとに秘書の男がやってきて耳打ちした。「間もなく欧州連合と各社代表者によるＴＶ電話での合同記者会見の打ち合わせを行います。今回の結果は突発的に発生したポケモン達によるテロ未遂、という事でよろしいですね？」「よし、そうしてくれこれ以上民間の不安をあおるわけには…ん、ちょっといいかな？」男は携帯端末を取り出してスイッチを入れる。「もしもし、私だが…そうですか…アメリカ西海岸でのシェールガス採掘事業、お宅と共同でわが社の参入も…」

エメリア・ハイドルの北西にあるヒメル州、アイリスにある欧州連合原子炉施設の制御室でも、安全が確認されたという連絡が入る。「今統合軍より連絡がありました。当施設の安全は確保されたようです」端末の受話器を置いた通信担当の女の一声で、制御室内にはほっとしたどよめきが一瞬聞こえた。電源の喪失は免れた、すなわち、原子炉が暴走する機器は何とか去ったのである。現場で働いている人間にとってその時の安泰はひとしおだった。特に安堵しているのは運転責任者の男だった。彼は肩の荷が下りた微笑を浮かべながらスタッフに命じた。「これで一安心だ。みんな、この後も引き続き原子炉の安定した管理に努めてくれ」
スタッフたちは再び各座席に戻り、原子炉の状況を示す計器やモニターの監視に戻った。

現地上空を飛ぶ統合空軍のＡＷＡＣＳ、Ｅ－７６７“アンタレス”の内部では同行していたイギリス・マグノックス社の社長がディスプレイを眺めながら震える声を漏らした。「安全を確認…そうか…守られたか…」「ご覧のとおりです社長閣下。わが軍と彼らのおか

げで症か…」ポケモン達のオペレートを担当する男が社長側に席を回す。社長の男は精神的に疲れ切っていた。無理もない、こんな戦争に素人の男にとって戦闘によって原子炉が制御不能になると聞いて落ち着いていられるわけがないのだが。

「どうです?彼らに感謝の言葉でも述べられますか?」女性のオペレーターが皮肉を込めて無線機器を男に渡そうとする。「フン…まあ…うむ…君の方からでもそういう類のことを言っておいて……失礼…」「機内での電子機器の使用は…」彼女が止める前に社長は携帯端末を取り出した。「私だ…おお、お久しぶりですミスター!タタグループ(インドの重工業全般で大きなシェアを占める大財閥)からご依頼のインドの熱学原子力発電所の建造計画の件ですな……」

Ｅ－７６７はニュークリアの空軍機へと向けて進路をとる。付近をもう一機飛行しているＥ－７６７“シリウス”は掃討戦に参加する航空機と陸上部隊を管制・指揮するための交代便である。連日で３日間にわたるオペレート任務が終わろうとしていた。

２０１２年　１２月１４日　アメリカとメキシコ双方の領海に含まれるメキシコ湾内　１３００時

大統領と入れ替わるようにメキシコ湾内に浮かぶ国連海上移民メガフロート群周辺海域の視察に向かったアメリカの国務長官を乗せフロリダ州マイアミを出港したワスプ級揚陸艦ＬＨＤ－７「イオー・ジマ」(この船の艦名は言うまでもなく、太平洋戦争での激戦地、

硫黄島から由来している）は、多くのカモメをはじめとする海鳥とアメリカ沿岸警備隊のバーソルフ級巡視船2隻にかこまれメガフロート自治地域の領海、すなわちメガフロートまで12カイリの海上を航行していた。

遠方には操業するメガフロート住民のものと思われる漁船やイギリスのBPオイル社、アメリカのエクソンモービル社、オランダのロイヤル・ダッチ・シェル社、ロシアのガスブロム社、中国のペトロチャイナ社（後ろの2社は国連のメガフロート開発に便乗したものだ）といった世界各国のガス・エネルギー・資源採掘企業の原油、天然ガス、メタンハイドレード、各種希少鉱物の採掘プラントと大型の運搬船やLNGタンカーが複数見える。そのほかにレーダー上に移るのは、フロート間の連絡貨客船や空港を出発する航空機、コンテナ港に集まるパナマックス級程度のコンテナ船、ある程度距離の近いフロート間を結ぶ陸橋や宇宙太陽光受信アンテナの侵入制限エリアのセンサー（地球の軌道上のミラーと発信機で収束された太陽光は通常よりはるかに大きな熱エネルギーと各種電波を発している）の位置を示す発信機の位置、飲料水やハイテク機器製造工程で使われる純水を製造するための逆浸透方式海水淡水化システムにおける第一イオン交換膜付きの給水ポンプの位置である。2年ほど前にBPオイル社とメガフロート内の化学工場からのプラントの配管の欠損で大量の原油がメキシコ湾内に流出する事故が発生したこともあり、それ以降の小規模ながらメガフロート海上プラント双方からたびたび原油や天然ガス（リスクの大きいメタンの採掘機器には国際的に厳重な規格規制がある）の小規模な流出事故はやはり絶えないうえ、それに伴う海上漁業資源の汚染や船舶航行、メガフロート住民のそこでの労働問題を巡っての抗議行動、テロに近いプラントの占拠事件、施設の爆破、アメリカやメキシコ領海へと侵入や領土への不法な上陸等のトラブルが絶えなかった。国連主導の人類居住地域開発計画、すなわち宇宙移民技術の確立までの時間稼ぎと新

たなる農地や資源採掘地、人類居住地、大規模研究開発地、工業用地の拡大を兼ねて史上初めて開発された大型メガフロート群“ソアリング1”がこのメキシコ湾内にある。ここは、地中海やハワイ近海にあるその他のフロート群の原点として居住地区や工業地区の配置検討、波力、原子力、メタン火力、宇宙太陽光システム及びメガソーラーパネルからの太陽光といった電力ネットワークの整備、海水の淡水化や周辺部六からの採掘に伴う水やガス、原油と言ったエネルギーやインフラの供給といった点での整備基準に対する基準の発起点ともなっていた。

ワスプ級揚陸艦「イオー・ジマ」の後部甲板上で国務長官は揚陸艦の要員達から遠方に見えるメガフロート群の治安維持部隊に関する説明を受けていた。その直後、その女の秘書と思わしき男の携帯端末が鳴る。一通り相手側の会話した男は端末を切り、国務長官の女の耳元に口を近づける。

「ハイドルにある欧州連合の送電線、統合軍・アメリカ軍・ドイツ軍の連合部隊が防衛に成功したようです」「そう…国防省からね？」「ええ。」「それで…大統領の反応は？」「…国防長官の今回に関する報告と、ＦＲＢ（連邦準備制度）議長の今年度の金融政策に関する報告会見において双方でコメントを出す際、表明するようです」「分かったわ」彼女は頷き、揚陸艦の要員に目線を戻す。「失礼しました。本国の大統領官邸（ホワイトハウス）からの話でして…」「いえいえ大丈夫です。それで…」要員の男が口を開こうとした直後、艦船構造物のスピーカーからブザー鳴り響く。要員の男は無線機を腰のベルトから引っ張り出してスイッチを押す。「ブリッジ、何があった？」“不審な小型船、この艦の航行ラインと交差する恐れあり。識別信号反応なし、大きさは極めて小型です”無線機から艦橋（ブリッジ）のクルーの声が聞こえる。「民間の漁船か何かか…」男は呟いて甲板右舷の手すりから前方を見る。

確かにこの艦の進行方向右側から、小型のモーターボート程度の船が航路と交差するように接近してくる。乗っているのは2，3人の人間。何か横断幕のようなものをか掛けて叫んでいる。もっとも風と波とこちらの動力機関の音でほとんどかき消されているが。

男は首を振った。またしてもメガフロートの住民の抗議活動である。メガフロートの移民した人々の多くは人口爆発が続くアフリカ系の人間であり、ある程度合意を取っているとはいえ個人個人が持つ本国政府や移民先の政府、国連やフロート自治区の対応に不満や反発を覚える者は多かった。価値観、民族、雇用、経済、宗教、思想、格差、理由は多い。それに対する抗議や反発が往々として過激なパフォーマンスや破壊活動に発展することは少なくなかった。ひどい例ではソマリアの海賊よりも重武装を施した集団が沿岸警備隊の船舶や海上プラントを襲撃・略奪したり、欧米の環境・人権保護団体と手を組んで比較て大型の船舶や小型航空機で活動したりという事態も報告されている。無論国連や各国が黙っているわけもなく、沿岸警備隊や海軍の派遣、フロートの自治区内でのそういった組織の取り締まりと言った対策を打ってはいるが、あまり効果は上がらず、ここでの治安維持活動はいたちごっこの様相であった。

男は無線機に指示を出した。「スピーカーで警告を発しろ。優先航行権はこちらにある。念のため逆進をとって減速を開始してくれ」

“了解しました”

ブリッジの内部では当直のクルーが双眼鏡でボートの様子を確認する。乗っているのはやはり3，4人程度。はっきりとは識別できないが、全員アフリカ系の人間のようだ。という事はやはりメガフロートへの移民者か。

そして…その男の一人が振りかざしている物体は、小銃（アサルトライフル）の一種か…だとすればおそらくは旧ソ連製のものだろう。

「小癪な奴らだ…揚陸艦にソマリアの海賊まがいのことをする気か。だがな、この船は民間の貨物船じゃねえんだぞ…」当直士官は舌打ちして連絡用無線機を取る。「少佐、識別不能のボートの連中は武装している模様。国務長官以下関係者の方に艦内退避を」

「フン…また厄介な相手だな。了解した」少佐の男は首を振って無線機を元のホルダーに戻すと、男は国防長官の女と同行する政府関係者の方を振り返った。艦内のあちこちのスピーカーからベルが鳴り、周囲の動きがあわただしくなる。「不審船側から攻撃があるかもしれません。艦内に退避を」

２０１２年　１２月１５日　ニュージーランド　クライストチャーチ市　０６００時

ニュージーランド南島で最大の大都市、かつニュージーランドで最大の経済産業都市であるクライストチャーチ市の中心部の西側、中心市街を取り囲むムアハウス通りとディーンズ通りの内側の西側にはサウス・ハグレイ・パークという名の大規模な庭園地帯がある。そこは森に囲まれ、市街地の住宅や高層ビルや地震から再建された大聖堂も木々に隠されている。その中にあるビクトリア湖の湖畔に建設された美しいガラス張りの建物。２０１１年の地震の復興の象徴として開催されることの決まった第１８回国連気候変動枠組み条約締約会議（ＣＯＰ１８）のために建設されたものだ。そして今日がそのＣＯＰ１８の開催日だけあり、多くの地元警察官や警察車両が建物の周り、サウス・ハグレイ・パーク内、マドラス通り、ムアハウス通り、ディーンズ通り、ソールズベリー通り、キルモア通り、

モントリオール通りといった主要なとおりなどの警備にあたっている。特に各通りや高速道路７３号線、北西に９キロ離れたクライストチャーチ国際空港、会場に特に近いフィリップスタウン、サイデンハム、アディントンと言った地区では警察、軍、国連統合軍等のよってテロ防止のために厳重警戒となり、住民の外出やバスやタクシーや自家用車、歩行者の運行・通行・歩行に大幅な制限がかかっていた。既に会場周辺の道路には世界各国の中継車や取材関係者の人間が集まり、中継機器や衛星通信機器、カメラや音声レコーダーの整備、撮影や取材の打ち合わせを行っていた。思えば衛星を利用した通信技術の発達は、世界の情報共有の規模を一変させたものだ。近年、集積機器の高性能化に伴うさらなる情報通信技術の発達によって、動画サイトやＳＮＳ（ソーシャルネットワークサービス）が発展し、地球中の（宇宙ステーションや月面基地からもメッセージを送る飛行士たちがいるから、“正しくは地球圏で”だ）情報をリアルタイムに入手するのみならず誰でも手軽に情報を地球に向けて発信できるようになった。これらがコミュニケーションのみならず、物品・証券・サービスの取引と言った経済界の動向も大きく変革させ、経済と社会のグローバル化、一体化を進めているのは前述のとおりである。

とはいえ、まだ会議の用人達も到着していないため、そういう報道界おなじみの光景はまだ始まっていない。数十分ほど前に日本の日野自動車製大型バス、セレガハイブリッドＲＵ１ＡＷ（イギリス連邦系の国家はカナダを覗いて日本同様右ハンドルである）が到着していたが、特に用心が乗っているわけでもなく、取材陣が機器をもって殺到することはなかった。

ただし、その中ですでに数人の報道関係者の男女が音声記録装置

やカメラを回して撮影しているものがある。報道関係者以外の地元住民らしき人間もいくらかいるようで、携帯端末などで撮影しているものがいた。その視線の先にいるのは横断幕をもって地元警察当局や政府軍の警戒線の外で座りを行うポケモン達。相変わらずこの会議にポケモンからも参加させろという旨のようだ。こんな話を吹き込んだのはエメリア自治協会や自由連合の関係者かそれとも人間の誰かか、それとも人間と暮らしている者が外部の者に情報を伝えたのか。ただし、彼らの文明では情報を共有できる範囲というのはせいぜいニュージーランド南島くらいの規模しかないし、自治組織の会議機構など既に崩壊しているので、前者2つであることは考えられない。その証拠に、横断幕に書いてある趣旨は先に開かれたドイツでの閣僚会合で見られたものとは全く異なり、ＣＯＰ１８の事を全く誤解しているようだ。

警備にあたっていたニュージーランド軍の一人が何かをまくしたてて内部に入りそうになったシャワーズを足でけり戻す。全く何もわかっていない連中だ。軍人は首を振った。どうせ何を言ったって理解するとは期待してないが、ただでさえＣＯＰは各国の経済成長や環境技術や排出権取引といった環境ビジネスに関する思惑が交錯して（ヨーロッパ諸国と日本等環境対策が比較的進む国、中国やインドなど新興工業国家、アメリカやロシアや韓国など削減目標が低い国という3大勢力間での対立は特に激しい）会議は難航するのに、ここに奴らが加われればさらに会議は混迷する。そんなことで取り組みがさらに遅れることは避けなければならない。

ただ不幸中の幸い、彼らは数日前に起こった厄介事に関してはまだ知らないようだ。
エメリア西部における戦いで多数の集落が壊滅したことを……１１月初頭のニュークリアに続いてハイドルでも大規模な騒乱が発生し

たことを……

交錯の先（後書き）

長らくの間お疲れ様でした…すごい長さ…すいません

続いてゆく現実（前書き）

なんだか投稿が遅れてしまいました……

いろいろ忙しいもので……

続いてゆく現実

２０１２年　１２月１５日　ハイドル　ヴェルダー州南部　エリジウム　１４００時

一行は来た時と同様の海岸を目指して歩き続けた。その道のりで明らかに変わっていたことといえば域と比べて人間の兵士や車両…おそらくは国連やアメリカやドイツの部隊だろう…がいたるところでみられること、そしてやはりあちらこちらの集落の建物や畑に巨大な穴や焼けた跡が痛々しく残っていること。ロアクーン地区に近い場所ほど焼け野原に近い状態だった。

ここにいるベイリーフとメガニウムにはそれ以上の理由が嫌でも感じ取れてしまった。なぜポケモン達がいなくなったのか。どうしてこうなったか。その理由は、結果は、もちろん……今回の戦闘に巻き込まれたのだ。結果はいうまでもない。その多くは地域を守るために戦闘に参加するか、逃げたり隠れたりしているときに戦闘に巻き込まれて命を落とした。

リーヒュンはその最中に思わずユイリィの顔を見た。彼女もどうしようもないという表情で頷き、ツルで首元の花をいじる。おそらくはこのメガニウムもこの地域に残った意識の名残を感じているのだろう。それらは無念、悲しみ、苦しみ、怒りという極めてネガティブな感情に伴う重く冷たい、積もった雪のような感覚になって２匹の意識に浴びせてくる。リーヒュンは思わず首を振った。今回の戦闘でそれぞれの皆の事、翡翠の事、自分の能力の事、そしてフローラの事、いつものように“やってみてから”ではいかない事態に重くなってくる自分の意識をこれ以上は嫌であった。しかし考えることが苦手な性格ゆえ、深く考えるとますます深みにはまりこんでしまう彼の性格が自ら突っ込んで行ってしまい、引き返しようがなかった。

「おっ、やっと次の集落か。ここまでくれば海岸まであと少しもねえな！そうすりゃやっとこのへたれたシンシアを降ろすことができるぜ…」隣を歩いてきながら疲れ果てたシンシアのクッション代わりになっていたレオが嬉しそうに尻尾を振る。背中には彼女の分のヘルメットと洋弓銃と装備品一式を背負わされいる。「な、何を降ろすのよ…はあ…はあ…もう疲れた…」あちこちに傷跡が残るロコンは体をコリンクに寄り掛からせたままだ。「アンタが隊長でしょ…はあ…はあ、部下…いや…おんなじ部隊のポケモンを助けるのがアンタの…」「役割とかいうのかおらっ！？」「だからそういうの口で言わないのよ」ガトルが大きな尻尾からぱちぱち火花を散らしながら左前脚でレオの頭のはねっ毛を叩く。おそらく戦闘での疲れから電気が過剰に溜まっているのだろう。「だからアンタはいつまでたっても子供なのよ。そろそろ学んだらどう？」「また母親ぶりやがって…お前に言われるくらいだったらとっくに…」

「変わらんってことよ」スカイラブが耳をピクリと動かす。ついでに彼女はシンシアの体を寄りかからせた。「大丈夫。あんな奴に言われても気にしないで」「は、はい…」直後にガトルの尻尾がロコンの頭のくるくる毛を触った。パチリスの感覚神経は尻尾に多く集まっているのだ。尻尾の保護装甲板は既に外してある。「ちょっと暑い？」「う、うん…少し」「やっぱね！ほのおタイプは時々熱を吐き出さないと体に悪いのよ。特に疲れているときはね」ガトルは少々得意げだ。「確かに…そうね…うん」スカイラブも尻尾をロコンの体に当て、続いて装甲板のひもをほどいて左前脚を当てた。「うん。結構疲れているみたいだね…お疲れ」「ですよね！」「そうそう。で、つまり多少気を配るのも大切なわけよ。上っていうのはね、命令する以前に気を配ることなんよ。わかる？」

「うっ…そんなの…わかんね…」レオは気まずそうに眼をそらし、右前足の爪で左前脚の黄色い部分をかいた。「まあ…期待はしてな

いけど。アンタはいつも無茶して怪我したり風邪ひいたり無頓着だったもんね。そのたびに私が看てやったのよ。それにアンタもだいぶ疲れてるみたい。ほうでんが上手くいってない、てことよ前足がヘンのは」「あ？…そうか…」コリンク種族系列はこの辺りに電気エネルギーがたまる。これが筋肉痛のような違和感をもたらすのだ。「い、いやそれは俺の事だろ！俺は気にしねえんだからシンシアとは全然別物だっつの」レオは慌てて前足を離す。「今回はどうか知らねえけど、とにかくもう少し頑張ってくれなきゃ俺も限界来るんだよこっちは」コリンクが苛立たしげにロコンを見て首を振った。「頑張る、頑張るから…それでいいでしょ？」「うっ、だからだからな…」コリンクがますますじれったそうに首を振った。「それは分かったよ！だから結果にしてくれよそれを！結果がなきゃ何もできねえと同じになっちま…」

「…誰に対してそんなことをほざいてるんだ？」「うぎゅっ！」レオの尻を青い右前足が殴り（蹴り）つける。「いってえ…別に俺はそういう意味じゃ…」「大事なのはお前じゃなくて彼女だ」バストークの両前足がコリンクの後ろ足を掴んで引き寄せた。「お前の今回の頑張りも認める。お前に悪気がさらさらないのも分かった。この前は上がっちまって…悪かったな…」「……はあ……」「しかし…」メリープの声が幾分真剣になる。「どんなに努力したってそれが相手に認知されるとは限らねえ。お前の言ってることが彼女にゃそのままの意味でしかないことだってあるんだ。そこらは気をつけろよ」

「うっ…努力はしますよ隊長……」

コリンクは気まずそうに顔をそらし、先ほどの集団に戻る。その途中でミズゴロウの左前脚をかるく後ろ足で叩いた。「あーあ…俺もなんだかへこんだなあ…」「だからなんだよ？」グリソムが諦め

たような声を漏らす。「お前に少し八つ当たり。グリソムも隊長のお言葉をすり込んだか?」レオはもう一発ミズゴロウの前足に右前足で殴り（蹴り）を入れようとした。「や、やめろ…おいらのホタチがぶっ飛んだらどうするんだお前は?」グリソムは慌てて右に飛びのき、コリンクの一発をかわした。「ったく、お前のホタチはいつになったら稼働するんだ?…あ、そうだこれ兄貴に聞いてみるか…」レオは首から下げたあのお守り状のものをちらりと見るなり後ろへと走った。

「あいつって何かと忙しいのよねえ。昔から変わらないからホントに子どもなのよ。グリソムもさあ、あんな奴と一緒で疲れない?」スカイラブがミズゴロウの頭の突起状の部分を撫でる。「いや…確かにレオはどうしようもないですけど…その…嫌いではないです」グリソムは右前足で首から下げたホタチ貝を握りしめる。「あいつは…身寄りのないおいら達の事を同じように扱ってくれましたし…あそこの集落の連中はおいら達みたいに施設に入ったのをバカにしてましたから…」

確かにそうだった。身寄りのない連中を巻き上げた集落単位の徴兵において、レオは自らの志願で軍の関係者という奴に食い下がり、ついでに軽くバトルを仕掛けてついて行った。母親さえも“いつまでも母乳にしゃぶりつけっかよ”といってねじ伏せたほどだ。不器用で粗暴だけど、常に死ぬほど危険な状況下を、次々に仲間が死んでゆく極限状態を先頭を切って突っ込んではかいくぐった。いくら態度はそうであっても、どんな言動であっても奴は仲間相手に本当に見捨てたこともなければ本気で罵倒したり突き放したりすること

もなかった。
だからこそ1761突撃隊は残っているのだ。いまでも。ミズゴロウはそう思っていた。

「ふーん…で、レオはそれをその兵隊からもらったってわけか」リーヒュンがレオの持っていたその彫刻らしきものをツルで軽く触る。
「そう、そうなんだけどなあ兄貴…これ…どうすりゃいいんだ？そのなあ…捨てちまうわけにもいかねえんだよ……」コリンクが愚痴のように首を振った。
「当たり前だろ？これはその人の(ポケモン)…うん、思いとか願いとか入ってるんだ。無事にその家族に届けてやらないとな…」彼にはそれにこもった思いや意志が意識空間に強く感じられた。それは冷たく悲しい流れの底から熱いほどの愛しさや愛情がにじみ出ている、胸が締め付けられるような切ない物であった。
「ま、まあそうしたいのはだけどな、やっぱ俺めんどくさいぜ…任せていいか？」レオは首から外したそのまま彼に彫刻を突き出す。
「なんでだよ…そういうのは自分がやるに当り前だろ？」ベイリーフはあっさりと突き返した。「あ？！俺そういう感情的なもの嫌いだぜ。絆だとか愛だとか。やっぱやめるか」「それはやめろ。レオが渡してやれよ」ベイリーフはコリンクの頭のはねっ毛をツルで軽く押した。「ちっ、何言ってんだ。不公平だろそれは」コリンクが不平そうな表情でコード状の尻尾をしゅっと動かす。「兄貴は全然平気なんだろそういうの。俺みたいな…ガキじゃねえし」「俺もやだよ。てか大抵は普通嫌だよそういうのは」リーヒュンがツルで首元の葉っぱをいじった。ケガのせいで葉巻上の葉っぱの何枚かはざっくりと裂けている。「でもな…それを待っている家族はいるんだ。もしあったら渡してやれよ…」

「うんうん。リーヒュンに渡したらどうなるかは微妙だけどね！」

ユイリィがベイリーフの首の頭の葉っぱをツルで軽く掴んでくる。
「おいおい、俺だったら普通に渡すよ」リーヒュンは呆れたように首を振ったが起こりはしなかった。それに彼女の思いはだいたいわかる。悪い意味を含んではないから。彼は少しだけこの能力に感謝した。少しずつではあるがおかしな誤解が少なくなったような気がする。

しかし、このベイリーフが明らかに不快な感情を抱いたことはユイリィにも分かった。彼女にしても自分の軽率さには嫌気がさしていたが、他にどうしていいのかもわからなかった。それに自分のテンションを下げてしまうと、自分の心にしまったあの記憶が戻り、意識空間から自分の感覚に気持ち悪いような凍えるような悪寒が走ってしまう。何でもいい、少なくとも明るく振る舞うことがベイリーフにとっても、仲間にとっても、彼女自身にも一番いいように思えた。

しかしこのメガニウムとて冗談と優しさの分別はある。「分かってる。ごめんね…」ユイリィはツルでレオの首元の物を握る。「でも、これはちゃんと持ってないと。それがレオに託されたものだし、たぶんそう決まっちゃったんじゃないかな?」「……そ、そうか…」レオにとってユイリィの事はいまいちまだ分からなかった。たしかにリーヒュンに嬉しそうにくっつきに行っている点からして彼女が彼より年上とは思えない。しかし、底抜けのテンションの高さを持つ彼女は同時に奇妙な点も多かった。時折彼女が見せる他者の意識を見少したような言動。それを包み込むような優しさ。そして時々明らかに彼女の方から感じる不思議な感覚。くすぐったいような奇妙な感覚が、時折頭の中を駆け巡る。

(……何なんだ彼女は?どうやって育ったんだよこいつ?)

このメガニウムにもコリンクが受け取ったものに刻まれた意識が感じ取れた。（……うん……この戦争は……いろいろなものを…）

彼女は奇妙な無力感にとらわれてしまった。自分の能力が今回どれほど役に立ったか？自分が存在することがどれだけサクラのいう“世界の安定”に役に立っているのか？

（……まあ…今そういうことを気にしていても…仕方ないか…それより…サクラさんの言うとおり皆をちゃんと守ってあげることの方が大事かな……）ユイリィは自分の意識空間に湧き出した寒い霧のような不安感を振り払った。そんなに遠い事、すなわち世界の行く末や大義などは彼女でもはっきりとは見通せない。だからこそ考えてもあまり意味がない、彼女の性格がそう判断した。そんなことに悩んでいるんだったら、今こうしていられるように精一杯取り組んだ方がいいと。

……もうあの時には戻りたくないから……

……もうあんな思いはしたくないから……

一行は集落のだいぶ中心に近い場所へとたどり着く。周辺を濠のように水路が掘られ、周囲の大小の河川から水を引いているようだった。ハイドルは全体的に高山が少なく、低い山々と森から成り立っているせいか湖が多い。ゆえにそこから流れ出て海へと注ぐ河川も

多い。ハイドルはソーラ以上に農業が盛んな地域として知られていた。

「ここが集落の河川だな。水も良好みたいだから俺はちょっと水取ってくる。ピトム、テルルを頼むぞ」ブレイブは寄りかからせるように連れてきたテルルをピトムニクとバストークにゆだねた。「うん、そんじゃあピトムの分もお願いね」「それじゃ俺の分も」「うっし！」メリープとプラスルも水入れを差出し、ブースターはぴょんぴょんと小さな橋のたもとの方へと向かっていく。

「いや、私歩けないほどにはなってないし！あいつの事だから他になんかやるんじゃ…ちょ、ちょっと私もついてくよ！……」「テルル、大丈夫なの?!」グレイシアはピトムニクの腕を軽く振り払う。その直後に振り向いて、かすかに笑顔を作った。「ありがとう、だいぶ楽になったから……」

「まあ、あの子も随分と今回は目にあったけどな。それにしてもよく頑張れるもんだ」バストークがモフモフ毛をわずかに震わせ、尻尾でその端っこを撫でた。「まあ、あの2匹は…いろいろと違いますけど…きっと…いい仲間になると思いますよ」ピトムニクもテルルを見やりながら腕に付いた保護用の金属のひもをほどく。「いいチーム、か…でも今回は…俺たちは…生き残ったんだな……」「そ、そうですよ！今更ですか?!ピトム、隊長がいつまでもそれを口にしないからどうしたのかなあって……やりましたね隊長！」ピトムニクはバストークの黄色いモフモフ毛に両手を突っ込み始める。「そうか…俺たちは…皆生きてる。こんな風になったのはいつ以来かな……」メリープは周囲の皆を見回して安堵の息を漏らす。

メリープの心の中は久しぶりに穏やかで澄み切った空気で満たされたようだった。自分がこの位置についてからはロクなことがなかった。常にエメリアの本部から指揮系統は混乱しているが故に、伝令の命令で出撃してもそこでの戦闘が終わっていたり、全く違う位置で戦闘に巻き込まれたりした。その戦闘は常に過酷かつ激しく、一匹また一匹とかわいがった仲間たち、わが子同然の者たちは倒れていった。さらには国連という人間の組織になぜか編入させられ、ソーラの南端にある奇妙な施設に閉じ込められ、果てにはその仲間たちは人間に指示されたバージアでの戦いで全滅した。そのたびにこのメリープの精神は踏みつぶされ、泥と硝煙にまみれ、水をかぶり、炎や冷風にさらされ、激しくうずき、傷つき、怒りと絶望に震え、止まらぬ涙に濡れた。自分が隊長であるが故にそうなるのか、自分が一回も進化してないこと自体が力不足という事なのか、何度も思いつめ、苦しみ、時には逃げ出そうとも思った。

そんな３０過ぎの彼を支えたのは、他でもないピトムニク、純情で誠実で明るく、どんな過酷な状況でも音を上げないプラスルであり、次々に編入されたりやってきたりする全員であった。そして何より、口先は別として自分にこうしてついている愛する娘、グラシデアの存在自体だった。そして今回、ついに全員を生きて返すことができた……

「まあ…」バストークはグラシデアの方をちらりと見やる。一行が止まったのをいいことにロックオンと久しぶりに…

……というよりあのムクバードはどうして俺のモココと抱き合ってやがる!?無許可で?!

「何やってんだアイツは!?俺が止める」「ち、ちょっと?!…」メリープは鼻を鳴らしてモココの方へと向かった。

「あーあ…それぞれでいろいろと大変なんだな…おっ」集落のはずれ、小さな川にかかった木造の橋のたもとでブレイブは水入れを川に突っ込んだ。「よしよし…こん位か……」容器の半分くらいに水を入れると、ブースターは装備品入れから何やら小さなガラス容器を取り出し、そこに入っていた液体の残りを全部水に注ぐ。水入れのふたを閉めて両前足で軽く振ると再びふたを開けて中身を口に少し含んだ。程よい甘さとアルコールの香りがブレイブの口に広がる。「ふう…やっぱ疲れた時は濃いほうが美味いぜ。まあ一口で十分だが、任務も終わったんだから多少ふらついても…」

「……また何飲んでんのよこんなところで?」彼の頭上、橋の上からテルルが覗き込んでいた。「おっ!体調は大丈夫なのかよ?」「べ、別に…けがしたわけでも病気したわけでもないし……こういう時は普通にしてるのが一番の治療法、みたいなことがアンタの信念でしょ?」

「よっしゃあ!よかったなあテルルちゃん!」ブレイブの顔もと赤くなり、待ってましたとばかりにしっぽを振る。「その顔はまさしくこれを飲みたいという事だな!ほら、飲めよ」ブースターは嬉しそうに容器のふたを開け、橋（とはいっても前足が届くくらい低いが）の上に差し出す。「んでもってついでにお祝いをしてやる…」

「ちょ…ちょま…」それと同時にグレイシアの左前脚を右前足でつ

かんで口元に寄せようと…

ばこおぉん！テルルが振り払い、ブレイブの顔面に一発。「この変態！それで頭冷やしなさいバカっ！」

「うげえっ…でも…さわやかな一発が気持ちいい…」彼は両前足で花を押さえながらも嬉しそうな顔をしてフラフラと後ろの護岸に寄り掛かる。「全く…アンタは本当に変わらないのね」彼女は呆れながら容器を口に運んだ。

果実酒のさわやかな甘さが彼女を満たす。この数日間の苦しさや疲れがやや消え、周囲の川や空が久しぶりに鮮やかに見える。「うん、これは結構いけるね。後で作り方教えてよ。私が自分で作るから…ん？」テルルが木製の容器を置いてふと道の方を見る。

橋のちょうど付け根、集落と同様痛々しい傷跡が残る道の端に一匹のイーブイがこちらを見つめている。グレイシアと目が合うなり、イーブイは不安そうな表情をして駆け寄る。「あの…戦争していたみなさんですよね？」そのイーブイは少し不安そうな声をうつむき加減に漏らす。「戦争？…このあたりの？」「はい」その不安や恐怖が入り混じった視線に対しテルルは解答に詰まった。その視線の奥にこのイーブイが尋ねてきた理由が見えるから。

この子供の家族か、それとも友人かがこの戦争に巻き込まれた、そしてその安否を探しているに違いない。彼女にはそういうことに対する苦しさや怖さを身をもって経験していた。そしてそのような経験がいかに幼いポケモン達に傷を残すかもわかっていた。ポケモン文明の大半の種族や集落では、生まれてから死ぬまで子は親を尊敬し誇りを持つように教えられている。それに対し親は、いかなる場合でも子に愛情を注ぎ、守り通すのが常識といわれている。野生の動物のように天敵相手にわが子など気にせず逃げ出す姿は情けな

いとか無慈悲だとかそういう問題ではなく、自分たちにそう考えることができるようにしてくれた自然の掟という運命に与えれた義務であり、定めであると。実際問題は別としても、たとえ現実問題で社会が乱れていても、そういう考えを身に付けておくのが当然であるという風潮は今でもしっかりとのこっている。間違っても人間のように生活資金や先に生まれた子の将来の為という資金目的で子供を労働させたり、兵士に売り出したり、臓器売買させたりすることはない。ましてやかわいくないから、いらないからといってわが子をゴミ袋に入れてゴミに出したり、駅や公共施設のコインロッカーに入れたり、熱湯をかけたり、洗濯機に入れて回したりという近年の人間の行動は彼らから見れば“堕落”や“神に対する罪”でしかない。もちろんこういう相互の信頼・相愛の関係は、家族のみならず友人に対しても同様であるとされている。

だからこそ…そうするべき相手を失った者たちの悲しみやさみしさが彼女にはよく分かる。だからこそ恐ろしくて次が切りだせない。

しかしテルル・ルナマリア・アストラフスキーにはもう一つのものも同時に見える。彼女をその苦しみと悲しみから救い、次の一歩へと踏み出させる手助けをするには、まずはこのイーブイの話を聞いてあげる必要がある。それがどんなに苦しい結果を招くとしても。

「たとえ魂が異郷の大地で朽ち果てようとも、今一度絆を取り戻すには過酷な苦しさもやむを得ない」と人間のある作家が述べたように。

グレイシアは戸惑った。自分の弱さも分かる。長い間（そうかんじた）イーブイの目線を避けてうつむいていた。

そしてやっと言葉を切りだした。「うん。私もそこにいるブースターも」イーブイの表情に強い緊張が走る。「…あの、私の父さんと母さんと姉ちゃんが一端です。私は小さかったから残ったんですけど。それで…」彼女の声が上ずり、消えそうなった。「それで…

何か知っていますか？どこかで見ませんでしたか？」

やはり、思った通りだ。こう聞かれることは薄々気づいていた。しかしテルルにはそれに対する思い当たる節はなかった。見た覚えもない。「うんん。ごめんね。私にはちょっと……」

「その父さんと母さんの種族は？分かるよな？」脇の土手からブレイブが飛び上がり、イーブイに近くに歩み寄る。「な、どうしたのよいきなり？」「俺には…あるんだ」ブースターの表情は真剣そのものだがややうつむき加減だった。間違ってくれていたらありがたい、そういう表情だ。

「あるってさ、一体どこで…」「とにかく聞いてみる」細長い耳元に口を近づけてきたテルルをブレイブは振り払い、イーブイの両前足を握った。「種族は…何だった？」

しばらくの間イーブイは硬い表情でブースターを見つめ、わずかに口を開いた。「父さんがリーフィアで母さんがあなたと同じで…姉ちゃんはブラッキーでした…」

その一声が彼の意識空間にひびを入れ一部をえぐり粉々にした。自己嫌悪にも似た罪悪感が彼を襲い、後ろ足がかすかに震えるのを感じた。あの時の記憶…戦場に転がる無数の死体の中に……

この時一瞬、ブレイブ・エスコーツ・クレイバーは自分の記憶をぶち壊してやりたいと本気で思った。その真実を言う事がどれほど重大なことであり、彼女にとってどれだけのダメージになるか、彼の意識下を黒々とした極寒の物質が巡り、視界がうす暗くなったようだった。

ブレイブはテルルに振り返る。テルルはその表情からすべてを察してしまった。このイーブイが待つ運命を、彼女を襲うであろう悲運を。

しかし、ブレイブが逃れるすべはなかった。その運命は自身が知っていた。どんなに恐ろしい事態であろうと、その流れ行く先から逃げて出すことはもうできない。彼女がその結末を知る瞬間がまさ

しく今であることも、それをもたらすのが自分であることも。

ブースターが恐る恐る口を開いた。恐怖で心がすくむのを感じたが、それに対処する方法がもう分からない。できれば言いたくない。嘘でごまかしたい。だがそれをして今何になる?頬っておけば彼女はさらに家族の結末に長い間おびえ、知った後の悲しみも大きくなるのだ。それならば…今…すぐにでも終えて楽にしてやれるのか?そんな保証はどこにもないが…ほかに方法がない。「あ、あのな…君の家族っていうのは…家族っていうのはな…」イーブイの目が恐怖で見開かれる「な、なんですか?一体何が…」

その表情の前に彼の口元が凍りついた。次の言葉が彼女にどのような結果をもたらすのかが、半分見えて半分見えない。しかも見えるのは明らかな方だ。そして見えないほうはさらに恐ろしい、彼もテルルも知らないものに違いない。

しかしこうしていても彼女の苦しみを増幅させるだけだ。ブレイブは覚悟を決めた。首を絞められたような息苦しさの中、必死になって声を吐き出す。その運命を告げるために。

「君の家族は…おそらく……可能性は少ない……」

「……!」その直後、イーブイの目は大きく見開かれた。全身が激しく震えているのがブレイブにもわかった。「ご、ごめんな。こんなことは言いたくなかった…でも他になんて言えばよかったんだ?…こう言うしかなかったんだよ…」ブースターが強く前足を握りしめた。何をしても自分に対する険悪な感情が増す一方であるが、その罪悪感に支配された彼はこれ以上思考も行動も進まなかった。

「ごめんな…俺が悪かった…俺が全部…」「……いえ……大丈夫で

す……」イーブイは両足を振り払い、夏空を見上げる。目は充血していたが涙はこぼれ落ちていなかった。震えながらも口を固く結び自分の運命にじっと耐えていた。

しばしの気まずい沈黙。イーブイは震えながら空を見上げている。今にも泣き崩れそうな表情をしているが本当に長い間こらえ、青空と雲をいた。ブレイブもテルルもかけるべき言葉が見当たらなかった。何かを言うより、今は彼女の意思にゆだねるしかない。そう判断したのだ。

突如、イーブイが大きく伸びをして体を震わせると口を開く。「…ありがとうございました…本当に…本当にありがとうございます。できたら…私の家に来てくれると…」耳をぴっちりと伸ばしたその口調には悲しみも寂しさも感じられないはっきりとしたものだった。「……いいの？何かあるの？」「いいえ…でもせっかくきてくれたんですし、挨拶くらいは…それで、名前はなんて？」

「私は…テルル・ルナマリア・オフリート・アストラフスキー…て言うんだけど…」グレイシアがうつむきがちに言った。「俺は……ブレイブ・エスコーツ・クレイバー…ていう奴だ。それで君の方は？」ブレイブも同様だった。

「…ミオカ・ナミエ・オルターネイト・ソウヨウです」イーブイはっきりとした口調で言った。

ミオカとその家族が住んでいると思われる住居は、あちこちが焼け野原になった集落の中心地から北に1キロほどの位置にあった。ポケモンの文明は基本的には農耕中心であり、住居（とはいっても人

間でいう住宅とはほど遠いものだが）の密度は小さい。それでも集落と呼べる地域の外、すなわち山や森の合間に居住する数は少なく、集落の出入り口となる街道には見張り台があるのが一般的だから、個々の場合集落の規模は大まかな円とすると直径2キロ程度である。すなわち彼女の住居ははずれにあるということだ。形状は地面を少し掘り下げ、木の骨組みと藁で屋根を作った典型的な竪穴式住居である。ポケモンの文明においては種族や地域において大きな差はあるものの、このような形は平野、特に水を確保できる河川や湖の周りにできてきた集落でごく一般的だ。ほかにも森の中においては大木や倒木の根元を掘り下げたり、大木間を木材でつないだり加工したりして大規模な集合住宅のようにしたもの、川に住むみずタイプ種族など（そうでないことも多いが）では河川に木や石を積んでダムのようにしたもの、海辺や海中での生活を基本とするものは、海岸の洞窟を利用したり、海中に木材や石を運び込んで住居のように整えたりしたもの、砂漠にすむ種族や移住によって砂漠にやってきた者たちはオアシスのほとりに地下トンネルを掘ったものと多種多様である。

しかし、前述繰り返しのとおりこのような自然に密着し自然にほんの少し分けてもらった恵みを生かして暮らす彼らの方法も、数百年前から、特にこの数十年の間に急速に崩壊しつつある。エメリア各地はあまり大きな破壊や変化はないものの、ヨーロッパ各地では１８世紀ごろ、南北アメリカではアメリカの独立や南米各国のスペインやポルトガルによる植民地化の時代すなわち１８世紀末や早いところでは１６世紀からすでに始まっていた。原因は言うまでもなく人間の文明である。そして２０世後半、２０世紀末、そして２１世紀に入ると、かつて途上国と呼ばれた中東、東・東南アジア、南米、東欧、北アフリカを中心に米欧以外でも急速な経済成長が始ま

り、宇宙、深海、生命、環境と自然原理そのものにまで肉薄するような科学技術のめまぐるしい成長とあいまって中東の砂漠地帯、アフリカや南米の熱帯雨林、果てには太平洋上や月面にまで資源採掘や資源開発による開発が広がった。もちろんこの方法はエネルギー競争や格差社会や地球環境問題などの多くの弊害を生んでいるが、その問題を解決するために、弊害を生まない資源と開発、そして己の利益と名誉を求めて更なる努力を人間はしていた。そのような激動にポケモンたちはついてはいけない。各国政府の、市民の、大企業の終わることを知らぬ開発によって多くが故郷を追われ、命を落とした。人間の市街地に流入した者たちは人間でいう犯罪行動に走り、人間たちのポケモンに対する敵愾心をますます助長した。やむを得ず人間の労働力になった者たちは、何の権利も保護もなく死ぬまで酷使された。残った場所でも工場や市街地による公害、（人間の環境保護によって多少が解決されても彼らにとってはまだまだ負担だ）これらが彼らの水や食料を汚し、夜中でも消えることのない人間の施設の華やかな照明は彼らの生活リズムや健康を害し、人間の持ち込んだ各種ウイルスや犬、猫、ネズミ、ザリガニ、外来植物、トカゲ、小型げっ歯類、果てには熱帯魚、昆虫、捨てられた動物や生物たちが彼らを襲い、彼らの食糧を奪ったのだ。それから逃げるように人間の作った地下世界…例えば地下街の裏や地下鉄の線路に暮らしている者もいる。生活の基盤を奪われた者たちは終わることもなく各地をさまよい、伝説や迷信にすがって安住の地を探し、人間に目の敵にされ、多くの厳しい自然事象や生物たちの洗礼を浴び、時には諦めながら生き続けている。

ただし、彼女の家の中を2匹が覗き込む限り、そういった雰囲気は（彼らが知りうる限り）感じられなかった。仕切りを挟んで正面と奥の二部屋だけの住居、屋根に開けられた明かり取りの穴から差し込む光で見え得る火を焚く囲炉裏、家の壁に付けられた木製の棚に置かれた食器、壺、水差し、壁に立てかけられた農具、全てが生

活感そのままに整えられ、その役目を待っている以下の如くたたずんでいる。しかし2匹にとっては（特にブレイブには）その様子さえ気を重くさせるだけだった。何しろこれらを使う主たちはもう彼女を除いていないのだから。

「あの…ここでちょっと待っててください。見てほしいものがあって……」ミオカが棚にある小さな器を両前足でつかんだ。後ろ足で立ちあがっても届かないほどの高さだったが彼女はジャンプして無理やりそれを取る。それからその器を下にある水瓶に突っ込んで何かの液体を満たすと、ブレイブとテルルの前に差し出した。「うちのウブ（エメリアの果実の一種）を搾ったものです。試しに…お願いできますか？」

「わ、分かった……」ブレイブは右前足で容器を取り、黄色い液体をわずかに口に含む。口の中に広がったものは奇妙なものだった。しかし悪い意味ではない。彼の知る限りのウブの実では考えられないような独特の甘みを感じたのだ。

「……どうですか…まさか…まさかやっぱり…」イーブイの表情が急に不安を帯びる。確かにまずいと言われて傷つかぬ者はいないだろう。それはこのブースターにもわかるし、そんなことを露骨に述べる性質でもなければまずいとも思っていなかった。

「いやいや、こいつはなかなかの絶品だぜ。よくウブの酸っぱさを消して甘みを引き出せたなあ…まるで君のような愛情こもった女の子の…」「はいはいいいの！ごめんね、こいつそう言う奴でさ…でも確かに甘くていい味だよね。ミオカの家族が作ったの？」グレイシアは隣のブースターの口調に呆れながら前足の容器の中をゆする。

「はい！父さんも母さんも昔から作ってるっていってました。それにウブのみの甘さを引き出す方法も教えてくれて…確か水の与える量だとか……」絵筆のような尻尾を嬉しそうに振るイーブイの表情が途中で尻尾と共にうなだれる。「でも…父さんも母さんも…もうこの世には……それで、ごめんなさい、いきなりですけど…」ミオカはテルルの前足を彼女の前足で握る。「もしよかったら

…ここでウブのみを一緒に育ててくれませんか？…父さんと母さんの代わりになってほしいんです…」

「そ、そんな…うん…でも…」突如の言動に対しテルルの表情には明らかに動揺した素振りが見える。それは1秒後には強い苦悩に変わっていた。彼女は視線を下に下げたまま、左前脚で長いもみあげ状飾りをいじる。

　このグレイシアにはミオカの心情が痛いほどわかった。まるで自分の事であるかのように心が針で肉球をつつかれるような痛みと苦しみで震えるのを感じた。そしてそれは自分がかつて味わったもの、苦しんだものとほぼ同じであることもすぐにわかった。彼女はこのままでは生きていくことはできない。一匹になったら彼女の希望はなくなってしまうと。

　できれば一緒に残りたい、彼女の面倒を見てあげたい。本当の母親代わりにはなれなくても、せめてあの時と同じように、“彼”と同様に…

　しかし、今の彼女はテルリウム・ルナマリア・アストラフスキーではあっても国連軍の実験部隊に組み込まれた兵士としてここにいるのだ。その現実は容赦なく直後に感じた彼女の一瞬の同情を打ち砕いた。一緒に残ることなど許されるはずがない。ここにいられる時間的猶予もほんのわずかだ。彼女にとってはあまりも苦しいが、今回は…今回は…

「あ、あのね…私たちは…その…」テルルが重い口を開く。「いてくれるんですか？！」「……いや…そのね…」「……へっ？…まさか…」ミオカの表情がら一瞬浮かんだ希望がみるみるうちに消え去っていく。

「つ、つまりね…」「……どうしたんですか…あの…」グレイシアが首を振りながら必死に口を開こうとする間にも、イーブイの顔に絶望と怯えが広がっていくのが見える。それを見ているだけでテルルの心は打ち砕かれそうだった。しかしそれを否定することはできない。今の自分の立場ではイーブイをすくう術は持たないのだ。「

そ、その…だから…」「まさか……そんな…」
「ああもう、俺が言う」「ちょ、ちょっと?!」ブレイブがミオカの前足を握りしめる。「俺たちは軍人だ。さっき言っただろ?つまりは…」ブースターのオレンジ色の前足が震え、フサフサ尻尾がぴくぴくとけいれんを起こしたようになっている。ブレイブにとってもいいずらすぎた、いや苦しすぎた。こんなあどけない少女にその事実を考えられるはずがないのは痛いほどわかってる。しかし…言わない限りは何も変わるはずがない。隠したって余計に苦しく怖くなるだけだ。
ブレイブ・クレイバーは単純に、しかし苦しげに告げた。まるで相手に死刑を宣告するのと同じように。
「俺たちは…ここにいることはできねえんだよ」「…!!!!…うっ…そんなあ……」その言葉が放たれた瞬間、彼女を支えてきたかすかな希望すら破壊された。イーブイのその場に崩れこみ、全身をふるわせ始める。「……い、誰もいなかったら…私は…どうやって…」
なすすべを知らずに顔を見合わせる2匹。現実が苦しいのも、こうなることは覚悟していたこともお互い知っていた。だが覚悟を決めるのとそれを経験するのとでは、やはり全くの別物であった。
「……ううっ…父さん…母さん…私…ぐすっ…一匹でどうすればいいの?…」
ミオカ・ソウヨウの嗚咽が建物の中に響き渡る。彼女の前足を握るブレイブも、その傍らのテルルもかける言葉が見当たらない。
長い沈黙とすすり泣きの中、テルルがブレイブに突如食って掛かっ

た。「ブレイブ?!あんたって奴は何で簡単に…」「言わなきゃ何も始まんねえんだよ。お前だって知ってるだろそれくらい!?」ブースターは首周りのフサフサを掴みかかってきたグレイシアの前足を振り払う。「うくっ……じゃあどうしたら…」

「方法はある…ある事にゃあるにきまってるだろうが…」彼はテルルの肩にあたる前足の付け根あたりを軽くたたき、イーブイの方に視線を戻した。「しっかりしろ…君を見捨てるわけじゃねえ……そんなこと誰がするんだよ?」

「じゃ…じゃあ…ぐすっ…ほかにどうするんですか?」ミオカは涙で晴れ上がった眼を右前足で拭って顔を上げる。「……ここにいてくれるんですか?…ぐすっ…ううっ…でもできないなら…」

「ここにいるんじゃねえ。いいか、よく聞けよ…」ブレイブは彼女の前足をさらに強く握った。「もしお前がその気なら…もし…ここをミオカが離れても大丈夫だったんなら……俺たちについてきても全然かまわない。お前を一匹で置き去りにするわけにはいかないんだから。それともあてにできる親戚が友達はいるのか?」

「……?…」ミオカの目線は固く止まっていた。

やがて…

「……え?……友達なら探せば全然……でも…居候するのっていいんですか?……」その彼女の瞳にはかすかな希望が見え始めてもいた。

「別に悪い事じゃねえけど……しばらく離れてても支障はないってことだろ?……」「まあ…大丈夫ですけど…」「なら決まりだ。夏

が終わって冬になるくらいまででもいいから、しばらく俺たちと暮らしてみないか？俺らのいる場所はいろいろと幅が広いポケモン達もいるからな。そうすれば…いろいろと助けてくれる奴も出てくるかもしれないしな…それにもしかしたら…」ブースターは言葉を選びながら慎重に続ける。「ミオカの親…出てくるかもしれないぜ…俺の間違いの可能性だって十分ある。この辺りに終わって3日しても帰ってこないってことはどこかをほっつき歩いてるだけで、ケガか何かが済んだら帰ってくる可能性だってあるわけだ。…それまで…お前一匹じゃ家業は無理だな。隣の奴にでも頼んで、一緒に親探しに出る事にもしておけばいいだろうな…」

「ちょっとアンタ、何言ってんのそんなこと?!だいたいそんな理由で連れ出すなんて怪しいと思うでしょ周りが!?」テルルがブレイブの右前足の付け根あたりを軽く蹴り（殴り）飛ばす。「そんなことは分かってる。だけどよ、こんな不安と絶望の中っていう状況で家業が務まるのか？」

「……ま、まあ……でも私たちまた…」グレイシアは反論のしようがなくなって目線をイーブイに戻した。確かにこのままでは彼女の生活はままならないが、しかし本当にそれいいのだろうか…？

「気にすんなよ。ともかく俺はほっときはしない」ブレイブの表情は硬い。「大事なのはミオカの意見だ」

ブースターは目線を再び戻す。「ミオカ、お前はどうするか？しばらくでもいいから俺らと一緒に…来てみるか？」

イーブイはしばらくの間自分の前足の爪と土そのままの床をじっと見つめていた。やはりその表情には戸惑いと不安と悲しみが浮かんでいた。両親は死んでしまっているかもしれない事には変わりない。その中でいきなりついて行くなんて……

（…だけど…希望があるのなら…ここにいるのは怖いし苦しい…ちょっとでも…楽になるのなら）

ミオカは小さい声ながらはっきりと言った。「分かりました…秋が終わるくらいまで…一緒に探してくれませんか？…」

ブレイブは住居の外に出て裏側の畑に回る。眩しい太陽に思わず目を細めて体を震わせてから、彼は畑に実ったウブを見つめた。ソウヨウ一家が手間暇と愛情を込め、丹念に水をやり、丁寧に太陽の当たり方を考えて徴して間隔を置いたウブの眩しい緑の葉と花が風に揺れている。そこから彼には一家の誠実さと思いが感じられる。だがあたりの他の建物や敷地のあちこちに穴が開き、黒く焼け焦げ、のどかな草原風景に合わぬこげ茶の傷跡と硝煙のきついにおいが漂っている。ブースターの心の中に暗く冷たい現実がの死しかかり、息苦しさを覚えた。彼女の夢、彼女の思い、ここにあるはずだった家族の絆はもうこの世には残っていない可能性が…しかも低くない…あるのだ。

ブースターの気持ちは重苦しいさがなかなか抜けない。彼女のあの悲しみ、切ない願いを打ち砕かれた喪失感にも似た表情。それなのに彼女は、必死に現実と向き合おうとしていることが痛いほど感じられる。そしてこんな状況を作り出した、彼女にその運命を与えた者たちに対する冷たい怒り、このどうでもいいような金属製の細い棒と鉄骨を守るために多くのポケモン達を引っ張り合つめて戦わせ

た人類に対する恐るべき憎しみが湧き上がるのを感じた。

そんな中では目の前にある奇跡的に被害を免れたウブの畑だけが、せめての救いのように感じられる。彼は必死に意識空間の底から湧き上がってくる冷たい怪物のような期待を押しとどめようとした。こんなところでくじけているわけにはいかないし、こんなところで我を忘れて感情をまき散らすわけにはいかない。

（ミオカはこの畑を継ごうと強い思いを抱いている……俺はそれをかなえてやることが…そして奇跡でもいい…生きていてくれれば……）

「ねえブレイブ……」後ろからテルルが声をかける。「どうした？」
「本当に…連れてくの？」彼女の声にはありありと不安の声が浮かんでいる。「何心配してんだテルル、言っただろ？俺に任せろって」
「違う！そうじゃなくて…」グレイシアは首から下げた種族や集落ゆかりの装飾品の一部を左前脚で握りしめ、ややうつむき加減になった。「連れて帰っていいのまた？私たちは軍人なのに…普通の子をしょっちゅう連れて帰ってくるなんて…サクラさんをどう説得するのよ？」
「ったく！そんなこと心配してんのかよお前は……」ブースターが右前足で頭のフサフサを掻き、グレイシアの右前足をポンとたたく。
「気にすんなっての。俺が何とかしてやるよ…心配すんな」

「うん…でもブレイブ、バカな真似はしないでよね」テルルはブレイブの手を軽く払いのけ、ウブの畑に視線を戻す。彼女も彼の言葉で多少は安心したかしないのか、ともかく不安感は薄らいだ気がした。（まあね…ブレイブに任せれば大丈夫だよね…おそらくは…）

「あとなテルル……」「ん、何？」ブレイブの声がにわかに厳しくなる。「リーヒュンに、あいつにお前あの後話したかよ？」

「う、うんん……」テルルがうつむきながら右のもみあげ飾りをいじる。「何か…気乗りしない…」

「何だよそれは？分からなくもないけどよ、なんか……」「いいでしょ私のペースなんだから！私は気乗りしないことにはなるべく触れない努力をしてるの！それに…」テルルがツンとしたまま言う。

「あいつにさ…リーヒュンに行ってもあんまり意味があるのかもわからないのよ……」

「は？どういう意味だよそれ……」ブレイブにフサフサ尻尾がピクリと立ち上がり、グレイシアに顔を近づける。「何言ってんだお前は？…あいつが傷ついてないとでも思ってるのか？」

「違う！そんな意味じゃない！違うのよ…」テルルはブースターの前足の上に自身の前足を強く置いた。「…あいつはさ、…その、立ち直りも早いし…それにあの子はいろいろと感覚も鋭いんでしょ？…だからさ、無理に何か言っても…逆に重荷になるだけじゃない？…そう思うの」

「うぐっ……だけどな…確かにそうだけどな…」ブレイブは両前足でテルルの前足の付け根あたりを掴む。確かに彼女の言ってることは間違ってなくもない。あいつは確かにそういうのを必要としてるとは思わないし、むしろ一本気なあいつはそういう無用な心配は嫌がる方だ。しかし彼にとっては全くの論外であった。「リーヒュンがどうであろうと…お前が言ってやるのが普通だろうが？……テルルが言ったあれはさすがに言い過ぎだぞ……分かってんのかよ…

…」

「うっ……でも私は……」「相変わらずプライドの高い女だな。あいつにはユイリィがいるからとか思ってるんだろ？あのな、彼女にだってあいつにしてやれることには限りある。それに…」「……まだあるの？」

「ユイリィもおんなじ境遇なんだよ。お前は彼女がいるから奴が何とかなると思ったか？お互いが同じ境遇にいるんだ！なのにお前がそんな態度でどうする？！」

全くの図星だった。そういう期待は薄々していた。（そんな…やっぱり私は…）

彼女の心の奥底から強烈な自己嫌悪の冷気が走る。

しかし…どうやってそれを伝えればいいのか？彼女には分らない…

どうしても思いつかない…

「うう…どうしよう……私は…」尻尾からしてうなだれ、明らかな苦渋の表情を浮かべるテルルに対し、ブレイブは真顔で言い切った。

「簡単だろ?単に謝ればいいんだよ……」

「あの、お待たせしました」ミオカが自宅の出入り口から探検隊や救助隊が首から回しているカバンに似たものを首からかけて出てきた。その表情には明確な決意が浮かんでいる。その一言にも迷いや悲しみは感じられない。

「お、もう行けるのか?」ブレイブが慌てて振り返る。「はい。私はいつでも大丈夫です」イーブイの言葉にブレイブは少し驚いた。この年齢にして自分の親を探し回ることに、何の心配や怖さを感じていない。彼女は意外としっかり者のようだ。(すげえ…こいつは将来、探検隊や軍人に向いてるかもなあ…)

「ちょっといいですか?…」ミオカは家の中からカップのような容器を持ってきてウブ畑に向かう。そして何の迷いもなくそこにあるウブの幹を土をかいて引き抜くと、その容器に入れて土をいくらか前足ですくって入れる。「な、何してんだ?」「ウブ、持っていきます」イーブイは容器に入れた土を前足で固めながら言う。「父さんと母さんの…大切なものなので……」

「ああそれなら……」テルルが彼女に歩み寄り、装備品入れからひもを引っ張り出した。「そのかばんみたいなのと一緒にした方がいいね。ちょっと貸してみて」「あ、はい……」ミオカから手渡された彼女はカバンの首から回すひもの本体に近いあたりに、植木鉢のようになった容器を2，3本の紐で何回も固く縛った。「ちょっと重いからね、ほどけなくてもいいよ。そしたらまたやってあげるから」

「はい…ありがとうございます…」イーブイはぺこりと頭を下げ、慎重に落ちないように鞄のひもを首から胴体に回す。

「あの…あなた方がミオカを…しばらくって……」声をかけてきた

のはデンリュウ。「あ、すいません。私の隣に住んでいるんです。いつもお世話になってます」

「どうも…彼女をしばらく連れて行くんですけど…」ブレイブが頭を下げている途中にデンリュウは心配そうな表情でまくしたてる。

「ええ、それは彼女から聞いたんですけど…あなた方は少なくとも軍人なんでしょう?彼女を連れて行って危険な目に合わせないでくださいよ……お願いします…」デンリュウは尻尾に電球のような物体がついた尻尾をわずかに降りながらブースターの頭のフサフサを懇願するように触った。

「大丈夫です。心配しないでくださいよ……それに…」ブレイブがやや誇らしげになる。「俺たちはそこいらの兵隊じゃありませんから……」

２０１２年　１２月１６日　ウラナス海　　００１０時

行きと同じ海岸から、テスト航海途中に一行を拾ってソーラ方向へと向かうアメリカ海軍エメリア派遣艦隊のイージス艦「エドワーズ」。今回は同じ第１０艦隊のニミッツ級空母「バラク・オバマ」や「エドワーズ」と、同じアーレイバーグ級駆逐艦「ノース・エメリア」以下２隻もつれて第１０艦隊第１戦隊がフル陣営で陣形を組んでいる。今宵も満天の星空に人工衛星や宇宙ステーションの警戒灯が交じる星を散らしたような世界の下の海を、艦隊はアコースやキンケイド達と共に航行していた。

リーヒュンはこれまでにない疲れを感じたが全く眠る気にならない。むしろ眠気を作り出すことが怖くて苦しかった。今回は本当に色々なものに巡り合い、さまざまな経験をしてしまった。

そして……ついに妹に…フローラに出会ってしまった。わずかな時間ではあったが、相手は自分を敵対視していたようだが…何年かぶりに、てっきりもう会えないと思っていた中で、たとえ父親が替われど大切な、自分と血が通い、？がったフローラに出会う事が出来た。

あの時のフローラは…妹は…思い返すだけで自分の意識空間を凍らすような、全てを奪い去るような不快暗闇を持っていた。自分の能力を彼は十分には信用していない。しかし彼女から感じたその感覚に苦しめば苦しむほど、自分の能力が否定しようない真実であると薄々思うようになってしまっていた。もはやどうすればいいか考えても仕方がなくなっていたのだ。

いつの間にか考えることから逃避しようとしている自分にも気づく。しかし彼はそれを見つめる事すらできなかった。考えるほどに疑念が濃くなり、絶望に近づくような気がして、自分から意識の暗い面へと落ちる気持ち悪さを覚え、どうしようもない。

ふと後ろから声をかけられる前に、リーヒュンの意識に近づく感じの者を感じた。それは奇妙な沈んだものを持っているようだ。そして何かほのかなものを……

ベイリーフは先に振り返った。「お、テルルか……どうした？」
「えっ？！い、いや…そういうんじゃ…ないけどさ…」新入りのイーブイを背負ったグレイシアは彼の反応に一瞬ぎょっとしたように止まったが、すぐに気を取り直す。（とりあえず…何でもいい…何か言わなくちゃ…でも…）テルルは彼のそばにおどおどとそばにより、甲板の手すり付近に前足を乗せる。しかしここまで来ても何を言うべきかはっきり言って決めていなかった。自分の言ったあの言葉…あれは明らかに傷つけたのは分かる。

……“アンタそういう性格じゃフローラを殺しちゃうよ？！それいいの？！”…

グレイシアの心は思い出せば思い出すほどひどくうずく。自分がリーヒュンにどれほどな言葉を発したのかが痛いほどわかってしまった。どうして妹の事を出してしまったのか……
それが故にますます何を言うべきか、全くわからない。どうすれば彼に謝ることができるのかさえ分からなかった。

「お、今回ブレイブが連れてきた新入りのミオカか。何かとここにいる連中は変わってて、ちょっと最初は戸惑うかもしれないけど、それは慣れだな。キミの事はブレイブと俺で話をつけるよ。よろしく」「あ、はい」リーヒュンがツルでテルルの背中にいるイーブイをやさしくなでる。「そんな固くならなくていいよ。普通にお兄ち

ゃんお姉ちゃんとやりあう感じでいいからさ。みんなも多分付き合いやすいからな…」

「あ、あのね…私もちょっと…」テルルが割り込むように口を開く。

「どうした？」「……あ、あのさ…その…何日か前のあれ…」グレイシアはもみあげ飾りを右前足でしつこく丸めたり戻したりする。彼女は必死になって言葉をつなぎ、おどおどながら言いたいことは表現した。「…あの時言った言葉は…本当に…本当に…ごめん……フローラの事なんか口に……」

2匹は星空に照らされた黒い海上を眺める。艦船の構造物の照明で揺れる並みまではかろうじて確認できる、艦隊の航跡以外は静かな海面を。

「…？？……俺は気にしないよ……」「はあ？」「テルルは…そういう性格っぽいから…」

「はあっ！？…アンタは一体……」ベイリーフの反応にグレイシアの意識の底から想定外の腹立たしさが湧き上がる。

「テルルは…思ったことを口に出すっぽい…そういう感じだ……」リーヒュンは首の左側に首元の葉っぱに向かってできた傷をツルでさすり、諦めたように首を振った。「だから俺は気にしない…気にしてたらテルルとはやっていけなさそうだ」

「やっていけない…何よそれ…何その態度……」テルルは見透かされたようなその言動に思わず感情を荒げてしまった。心の底から激しい恥辱が湧き上がった。

「アンタなんでもカンでも分かったような顔しないでよ！どうせアンタなんて大して直感がきかないんでしょ！？せっかく謝ろうとしたのに何よ気にしないって？！」「な、どうしたんだよテルル？！」「フン！この程度しか言えないんだったらアンタは本当心配して損したしっ……せいぜい上官や人間の機嫌取りでもそれでしたら！？」グレイシアは甲板を右前足でガシンと一発踏み鳴らすと、つかつかと早足で踵を返して戻っていく。彼女にとってあいうストレートな返答はとにかく気に入らなかった。

（何あいつ……自分能力をもう過信しているつもり？つくづくおめでたい男（オス）ね…）

艦橋へと続く前部の構造物とヘリ甲板へと続く後部の構造物の間、ちょうど４連装ハープーン対艦ミサイル発射口のあるあたりから右舷側へと入った直後……「あーあ…まあテルルらしいけどね、うん。そういう気持ちも分からなくはないけど…」出くわす形で前から子供っぽい高い声が聞こえる。「うっ…ここにいたの！？」思わずテルルがその大柄な影の前に足を止める。彼女がほぼ見上げるような視線の先には、派手なピンク色の花びら、ウグイス色の体、頭から垂れる４本のうち長く丸められた２本の雄蕊、澄んだ夏の青空色の瞳のメガニウムがいた。

「まあね…テルルがリーヒュンの方に行く感じがしたから。なんかあったのかなあって思ったの。ほら、あたしはこう眠らないくせあるじゃん、ちょっと散歩かねてぶらついてたの」ユイリィはツルで自分の首元の花びらをいじり、雄蕊をぶるっと震わせる。テルルはそんな彼女の相変わらずの展開にちょっと拍子抜けした。「で、どうだった?リーヒュンなんか言ってた?うちに来てほしいとか。あはは…」こんな展開にもかかわらずテルルは殴りかかろうとも思わなかった。ユイリィはこういう性格なんだから、言っても動揺しそうになかった。

「うん…いや別に…大したことはケンカでもないし、いつも通りじゃない?」グレイシアは曖昧に笑みを作る。おそらくこのメガニウムには見透かされている。だが認めたくはなかった。まあ、そういう気持ちもある程度分かられてしまうかもしれないが。

「そっか。大したことは言ってないんだね?分かった。大丈夫だよあの子は」「そ、そうかな?…もし傷ついてたらさ、フォローお願いね……」「もちろん、大丈夫!」「じゃあ、私はそろそろ…」テルルがそのまま艦内に戻ろうと足を進めようとしたが、その直後、彼女の右後ろ足に絡みつくものを感じ、かなり強い力で押しとめられた。ユイリィのツルが絡んでいる。「ごめん…もう一つ言っておきたいの」「えっ?」

メガニウムの声はやや寂しそうだった。「リーヒュンの事…分かってあげてほしいな。ああいう性格でも…一生懸命やってるから…」「(……!!)」テルルの心は巨大な梵鐘の中にほ織り込まれてそれを鳴らしたかのように激しく、重く動揺した。先程までのいら立ちが突如として衝撃と苦しさ、自分に対する嫌悪に代わって行くのを覚える。

そんな彼女の動揺をメガニウムはツル先からゆっくりと、流れ込むように伝わってくると感じた。彼女は笑みを作る。「お休みテルル。お疲れ様」「う、うん…お休み…」

テルルの意識下には先ほど起こったユイリィの言葉が津波の波状攻撃の如く波紋を作り、大きな衝撃となって反響を続けていた。

（……私は…私は何も理解できてないの？……私は一体……）

（……な、何言ってんたんだテルルは？…俺に何があるんだよ？……）リーヒュンの意識空間もまた激しい同様にさらされていた。あの時の彼女の言動、失望したような表情、突如湧き出したような彼女の爆発がいつまでも思考から離れない。彼は自分の今までの彼女に対する態度と先ほどの彼女の見え得る限りの意識を照らし合わせて考えてみる。彼女の意識の流れにあるつめたいものを、自分の相手にはなった言葉に含まれている何かをほんのわずかに感じられたが、それ以上は何が何だかわからなかった。自分の言葉に落ち度があったのか…しかし考えれば考えるほど、彼女の言動が彼に仕向けた殺気が彼の意識空間の外壁を凍結させ、砕かんとばかりにのしかかってくる。

ベイリーフは首を振った。少しは和らいでいたはずの自分に対する奇妙な重苦しさがまたしても襲いかかってきたようだ。感じなくてもいいものを感じ、分からなくてもいい周囲の動きが必要以上に気になる。それに戸惑う自分の感情が他者をさらに傷つける。一体どうすれば……

隣に座りこむ誰かの意識を感じた。リーヒュンの隣にやってきたのはあのメガニウム。「テルルと何かあった？」「……俺さ…あんまりあいつとは上手くいかないみたいだな……」

「大丈夫、大丈夫。テルルはちょっと疲れてるみたい…うん、そういうときは誰だって投槍にもなりたいよ。うちの方からそう言っといた、ゆっくり休んでって、ね？」ユイリィはベイリーフの首元の葉っぱをツルで優しくつまむ。「リーヒュンもよく頑張ったよ今回。だから…しばらくはゆっくり休んでほしいな……ってあたしが決める事でもなんでもないけどね」そういう言動のユイリィは全く疲れてもいないようだった。「そうだね…いつもありがとうな」

「うんん！そんな感謝なんかされるとさあ、あたしめっちゃ恥ずかしいよ……」メガニウムはツルで右の長いほうの雄蕊をくるくると丸める。「そんな事よりさあ、今回も無事終わったわけだしいつものあれやんない？うちらも大丈夫だねってこと！」「あ、あれか…うん、やるか！」リーヒュンがツルをすっと出した。「今回もお疲れ」「やったね！」ユイリィのツルがぱちんと2匹の上で触れた。

「あーあ、もうすぐ終わり…あ、見てみて！あれすごい綺麗だね！人間の船だよ……」「あれ？ああ…確かにすごいや…まるで昼だな…」

遠方に見える海上に浮かぶ水面付近を夜光虫に覆われたホテルのような物体。派手な光を輝かせるその物体の正確な名称は、アメリカのロイヤルカリビアン・インターナショナル社所有の世界最大のクルーズ客船にして世界最大の船舶、オアシス・オブ・ザ・シーズである。全長３６１メートル、全幅最大４６．９メートル、総排水量はなんと２２５，２８２トン、乗客が最大５４００名と運行からサービスまですべての乗組員２１６０名が乗る超巨大船舶である。多くのシアター、遊園地、ゴルフ場、多数のプール、スケートリンク、トレーニングジムまで装備したまさに海を進む歓楽街、高級観光都市だ。このウラナス海にいるのはもちろんクルーズ航海である。

まさしく人間の歓楽と平和の象徴。人間の文明でさえ紛争や対立や問題が絶えないのに、ましてやポケモンの文明では地球全土で崩壊と荒廃、破壊と紛争に明け暮れ、一見すれば質素に平和なようだがその実は多くの血や涙が流れているのに、そんなこと等発生していないかのような派手で優美な姿。この時間でも多くの乗客がバーで、レストランで、バルコニーで、デッキで、プールで、幸せなひと時を過ごしているのだろう。

ざぶっ！2匹のそばの海面で誰かが浮上してきた。「お、アコース達か…何してたんだ？」「いやいや、下でちょっとばかしもめごとがあってな。サクラビスとかの移動の隊列にな、サメハダーの盗賊集団、いやナンパ集団みたいな奴が絡んでた。んでもてそれを、俺とキンケイドでフルボッコってわけだ」

「うん。僕のこの魚雷とかでね。イージス艦からちょっと失敬したんだ」キンケイドがヒレで抱えた魚雷を得意そうに見せる。このランターンはかなりの物好きのようだ。

「さすが俺の信用する雑用係だな！ホントにフットワークと手回しが早い！」「もちろん。それが僕のいる役目だからなあ」「その意気だぜパシリ！これからも頼むぞ！」ラプラスがその体…まあ彼は年のわりに小さめだが…ランターンに飛び付いた。

「あはは！みんな無事でよかったよかった、だよ！これからも色んな所についてきてほしいな」ユイリィは相変わらずのテンションの高さ。

「うん。みんながいれば、どこまでだって行けるさ。フローラだっていつかは……」リーヒュンは夜空を見上げた。フローラの事も頑張るしかない…そうすれば多少は何とかなるだろう…

そう思った。

その頃　地球軌道上　４５０キロメートル

「ＧＰＳ連動…軌道修正問題なし…」「宇宙太陽光発電システム衛星、及びスペースシャトル「ディスカバリー」からのマイクロ波エネルギー送信は非常蓄電装置・回路へと注入続行中」「照射エネルギー予定通り…出力は間もなく予定地に達します」国連のホワイトバード級軌道プラットフォーム宇宙船「ディア・アイリス」の胴体下部に設けられたカーゴベイが開かれる。そこに装着されているのは先月搭載されたばかりのあるシステム…地上に対する照射試験を行うために国連軍から供与された、ある種の試作兵器……

……いや、正しくは“計画”の一翼を担う…裁きの鉄槌……

「照射１０秒前、各員、対閃光のためバイザーをロック」プラットフォーム船艦長の一声で、操縦室に（船ではあるが大きさのわりに艦橋（ブリッジ）といえるほどこの宇宙船には部屋やスペースはない）集まったオレンジ色の宇宙服を着た７人のクルーは、装着されていたヘルメットのバイザーをロックする。

「3，2．1、…開始」

機体下部のカーゴベイが一瞬青白い、しかしほのかな光に包まれる。その粒子のそうな青白い光の流れは宇宙太陽光発電システム連動監視衛星を間をすり抜け、地球へと向かった……

２０１２年　１２月１７日　韓国　ソウル市　大統領官邸　０９５０時

韓国の大統領官邸は、青瓦台（チョンワデ）と呼ばれる李氏朝鮮王朝の太祖、李成桂（イ・ソンゲ）によって建造された景福宮（キョンボックン）を利用している施設だ。その独特の青色の瓦ぶきからアメリカの大統領官邸ホワイトハウスをもじり“ブルーハウス”とも言われている。

１９８０年代初頭からの高度経済成長により、今や単位人口当たりＧＤＰも先進国と変わらないレベルにまで成長し、自動車や電気機器・一般家電機器分野では欧米や日本と同等以上の一流大企業を所有、宇宙開発の最初の一歩である字国産ロケットによる人工衛星の宇宙への投入運用も成功、情報や文化や国際交流の点でも今や日本の東京を超えるレベルに成長した（まあ震災と原発問題の結果、日本にあった各国企業の支社がここや中国の上海に移ってきたからだが）を韓国とその首都ソウル。中国、欧米列強、そして日本などの度重なる圧政や植民地支配をはねのけ、ここ５０年以上もそして現在も北の同胞であるはずの社会主義国家の圧力にも屈しない強健な民族国家の政治の中心地となっている景福宮は高層ビル群の中で

もある種の威厳を放っている。その施設の本館と呼ばれる建屋の一角に大統領執務室はあった。

「……なるほど、北朝鮮に対する人道支援、ですか…はい…では豪雪による交通路の遮断と電力をはじめとするライフラインの復旧に対する支援…実務作業は中国、その作業員のための施設やテントの増設をアメリカと我が国が…了解しました。検討に入ります」電話越しに話しているの男は大韓民国の大統領である。相手はアメリカの外務省。内容は北朝鮮、自称は北韓（ブッカン）に対する人道支援。２０１２年～２０１３年の北半球の冬は寒気団の勢力が強く、北欧、ロシア、欧州諸国、北アメリカ、中国、韓国、の各地では観測史上最高の積雪量や最低気温の更新が相次ぎ、カザフスタンやトルクメニスタンやトルコなどでは異常な豪雪によって電機や通信といったインフラの遮断とそれに伴う工業・産業の停止、豪雪や寒気に伴う悪天候による交通事故、公共交通のマヒ、空港と航空路（エアウェイ）のクローズ、海上での船舶の遭難や座礁といった交通網の混乱、牛や豚など家畜の凍死といった農業被害、果てにはインフラが遮断された集落で凍死者が続出するまでの大混乱となり、今まで雪などほとんど降ったこと等ないインド北部、イスラエル北部、、日本の沖縄でも観測史上初めての降雪を観測し、日本の豪雪地帯である新潟や長野ではついに積雪量が５メートルを突破していた。

　このような豪雪によって被害を受けるのは北朝鮮も例外ではなかった。平等を理想に謳ったはずが世襲に伴う政治の腐敗と、それを指導する共産党と国軍の癒着によって生まれた軍事優先思考、それに伴う工業・農業双方の近代化の遅れ、それによる貧困に対する不満を言論統制や公開処刑等の恐怖政治で弾圧し、周辺国への挑発的軍事行動や兵力誇示等の軍事パフォーマンスとそのプロパガンダに

よって国民の不満をそらそうとする旧来然とした各種政策の乱れがその豪雪被害を一層助長した。もともと朝鮮半島の土地は耕作に適さないやせた土地だ。韓国のように欧米や新興アジア同様の化学肥料や現代農耕技術による農業の技術革新がない北朝鮮では、主食となるトウモロコシが常態的に不足し、凶作が発生するたびに農村の貧しい人民は飢餓同然の状態にさらされた。追い打ちをかけたのは空調機器どころか、石炭などの燃料を使った暖房すらないという農村人民の貧困だった。元々インフラの未整備で、工業化や産業の近代化の遅れているために失業者は多く、物価はずさんな金融政策で乱高下し、配給は都市部を除いて滞っていた。人々は飼料もなく痩せ細ったわずかの家畜を殺してその毛皮を羽織り、ほのおタイプのポケモンをナイフや拳銃で脅し、拉致・誘拐し、死に至るまで酷使して暖を取って寒さと飢えをしのいだ。

そんな惨状に対して常に暖かい室内で高級な西洋料理を摂り、ベンツやＢＭＷ等の高級外車を乗り回す北朝鮮の政府指導部は無策だった。アメリカやヨーロッパの交錯でスイスをはじめ世界各国の銀行や金融機関にドル、ユーロ、人民元、ウォン、シンガポールドル、ポンド、日本円等あらゆる形で預金されていた口座が凍結されたとしてもその結果はさらなる配給の遅滞という形にしかならず、元々不足気味の穀物はほとんどが軍の食料として巻き上げられたままだった。このような絶望的な状態に耐えかねた人民の一部は多大な犠牲を払いながらも国境を伝って中国や韓国に脱出し始めていた。

ともかくもわずかにでも存在するインフラを修復し、人民の生活を安定させること、それは6か国協議で長年対立を続けている韓国、北朝鮮、中国、ロシア、アメリカ、日本の間でもある程度の意見の合致があった。北朝鮮の情勢の不安定化は北朝鮮軍の暴走や過激な行動を助長するだけである。それどころかこのような形で体制が崩壊すれば国内が無法状態に陥る可能性があり、難民の中国、韓国、ロシアへの大量流入や軍隊のゲリラ化などが発生し、治安や社会情

勢の悪化が周辺国へ飛び火する恐れがあった。そしてそのことは世界経済の成長センターと呼ばれる中国や大きな経済力を持つようになった韓国の経済情勢に更なる下押し圧力となり、天然ガス、原油、地下鉱物資源をめぐる開発や対立が著しい東シナ海、南シナ海、日本海（東海）の情勢をさらに悪化させかねない。中でも北朝鮮が所有する大量破壊核兵器、すなわち大型弾道ミサイル（２００９年４月に“人工衛星打ち上げロケット”という名のもとで打ち上げ試験が行われた）をはじめとする核弾頭搭載可能な各種ミサイル技術がイランやイラクなどの核開発疑惑国どこか国際テロ組織や武装組織の手に渡る恐れもある。中でも一番懸念を深めるのは中国であった。仮に北朝鮮が崩壊して朝鮮半島が国連やアメリカの協力のもとで韓国が統一した場合、旧西側陣営（ＮＡＴＯ）と国境線を直に接することになる。それは中国にとっては何としてでも避けたいのだった。無論アメリカや韓国や日本は一刻も早い北朝鮮の体制変化と核兵器の削減、それに伴う北朝鮮の情勢安定化を目指している。（日本の存在が薄れがちになっているがそれは政治の混迷が元凶だ）その点においてこの協議が進展しづらい原因となっているのだが。

北朝鮮に対する人道支援というものは長年にわたってヨーロッパやアメリカ、中国や韓国の政府やＮＧＯを問わず行われてきているが、ここで細心の注意を払わなければならないのはその支援の実施が体勢を支援するものになってはいけない灯こと。ゆえにその流通や下請け企業、果てには決算の管理までに厳重な監査と選定が必要とされるのだ。

電話を切った大統領はデスクの上に置かれた卓上情報端末（パソコン）の画面をひと取り見る。メールボックスには“エメリアでの戦闘に極秘裏で潜入した韓国軍の諜報員からの報告”と書かれた国防部長官の秘

書官からである。
　大統領はため息をついた。「アメリカと中国はもう動いている…おそらくはイギリス、フランスは独自でも、ＥＵ（ヨーロッパ連合）も動いている、か…」男は呟くとデスクの上に置かれた携帯端末を取って耳に当てた。「私だ。安全局の連中を集めろ。中国は動き出した。アジアの軍事情勢にも変化があるかもしれない」
　安全局とは韓国国家安全局（ＮＳＳ）の事である。韓国の大統領直属の非公開情報機関であり、北朝鮮や中国、アメリカ、ロシアなどの核兵器開発関連の情報入手により自国の極秘核開発計画を進めるために設立された機関であるが、その過程において現在では国家の安全保障を目的とした情報収集、自国や関係国の要人の警護、安全保障や経済や軍事活動の脅威となる人物や組織の暗殺や排除等といった政府依頼の業務もこなしているのだ。

　その関係者の一人の男は愛車のヒュンダイ社製ジェネシスを運転してソウル市の南大門（ナンデムン）前の通りに差し掛かっていた。ちょうど官邸へと向かう途中だったが故にＮＳＳ局長からの呼び出し電話の様な連絡で彼はますます苛立った。ダッシュボード上の端末をセットしたハンドフリー通話装置のスイッチを切ると忌々しそうにパワーウインドウをおろして前を見る。今日は晴れているが豪雪ですっかり真っ白になったソウル市市街と南大門の大渋滞となった大通り。なかなか気温が上がらない中道路は半分程度凍結してはいるが、事故が起こっている様子もないしナビゲーション端末にもそんな情報は入っていない。回生ブレーキを装備したハイブリッド車や電気自動車が増えたとか（まだまだガソリン車が主流だが）タイヤチェーンの装備率が上がったとかに関わりなく今年はスリップによる交通事故が多いらしいがその情報は入っていないのだ。ジェネシスの前にいる路線バスからはたまりかねた老若男女を問わず運転手に怒声を浴びせながら次々に降りていく。その様子を何事だろうと南大門前

の広場にいた人々が見つめている。「なんたって本当に……」男が忌々しそうにドアを開けて渋滞の先を見る。突き刺すような寒さの中その目線の先、多くの警察車両のランプが見え、警察関係者らしき人物が防寒着と手袋の上からゴム手袋、マスク姿で何かを運んでいる。中には白い防護服を着た人間も。そして彼らが運び、脇の南大門の石壁に集めているのは……

　ポケモン達の死骸だった。既に遠くから見ても投資して時間が経過して建築資材のように茶色に変色しているものもあれば、今朝の寒さで死んだのか雪をかぶっているだけで固まっているものもある。小柄なルリリやチェリム程度であればスコップでどければ問題ないが、バクフーンやラグラージのような巨体種族の死骸は防護服やゴム手袋を装着した警察官や衛生局の人間が数人がかりで押すなり抱えるなりしなければならない。死因がわからない以上（明らかに凍死だが）、彼らの体にも彼らが持っていた物（例えばかごとか道具とか）の潰された残骸すらも肌で触れるわけにはいかない。

ポケモンという生物は元々は熱帯または温暖な気候の場所に暮らす文明生物だった。長い時間をかけて地球全体に拡散してその地の環境に適応していったものの、種族という限界のある彼等では、寒さや暑さに対する耐性には限界があった。さらに中途半端に文明化したことが災いし、極度の環境に耐えるだけの野生動物ほどの体力もそれを乗り越えるだけの人間並みの技術も持ち合わせていなかった。彼らに根付く相互扶助の精神をもってしても、過酷な環境や異常気象に伴う極端な気候には敵わず、近年は集落や集団単位で消滅する場所も相次いでいるのだ。

２０１２年　１２月１８日　ベルギー　フラームス＝ブラバンド州
ブリュッセル国際空港　０９００時

雪が時折勢いを強めながら降り仕切る中、エメリア・トータルセイユ空港からのルフトハンザ・ドイツ航空のフランス・エアバス社製Ａ－３４０－６００は予定より3時間遅れでブリュッセル国際空港０７Ｌ／２５Ｒ滑走路上空に姿を現す。悪天候により空港閉鎖ぎりぎりの風速の横風、Ａ－３４０は機首が右に大きく流されながらもパイロットたちは4発のイギリス・ロールスロイス社製トレント５５３エンジンで巧みに姿勢を維持し、左側の主脚輪（メインギア）から接地（タッチダウン）させて無事に着陸した。数分後、Ａ－３４０はターミナルの駐機場に入り、アメリカ・ボーイング社製のユナイテッド航空のＢ－７４７－４００の隣に落ち着き、ボーディング・ブリッジが装着される。

ボーディングブリッジから荷物受取所、通関・到着ロビーへと向かう人の流れの中に鉄鋼生産世界最大手企業、ベルギーとフランスに挟まれた小国ルクセンブルクのアルセロール・ミッタル社の重役の姿もあった。この男は先週にフランス・ドゴール空港から所用でエメリアに向かってからの帰国の途中、ある場所へと向かうためにここにやってきたのだ。このちょっとした出張が終わったら、そのまま公用車でルクセンブルクへと戻る算段である。

その所用というのは……

男の携帯端末が鳴った。「もしもし？」“〇〇〇です。予定通り到着ターミナルのタクシー乗り場の前で。すでにこちらは到着しております”「わかった。ありがとう。通関を通ったらすぐ行く」“ええ。ところで、彼らに対する条件というのは…あのままでいいのですか？”「もちろんだ。彼らには経済学的な取引等知っているわけがないからな。多少強引な取引をした方がむしろこちらの投資も少なくて済む」“ええ…”「それに相手は政府組織内の反乱分子だ。多少相手にとってそんな取引でも必死になって食いついてくれるさ」

そう、アルセロールミッタル社の提案、それはエメリア自治協会内部に存在するある集団に対しエメリア・ハイドルの一角をそこに住む集落のポケモン達を排除したうえで買収し、特殊鋼・及び普通鋼の精製用の電気炉を多数設置した大規模な工場を建築するのである。

構造物の建築資材や大型工作電子機械の土台、船舶や発電用タービンから家庭にあるラックで強度を求められる部分等にも使用されている鉄鋼。皆さんの家庭でもパソコンやテレビが置いてあるラックや棚で磁石がつけばそこは鉄でできている可能性は高い。ねじやナット、歯車などの機械要素にも鋼材が使われていることが多い。しかし製鋼というものはオーストラリアやアメリカ、ロシアや中国から輸入した鉄鉱石を溶かして形にすればいいというものではない、その用途、強度、硬さ、耐熱性、加工のしやすさなどに合わせて、鉄鉱石と同時にコークスや石炭などの物質の配分、鉄鉱石の純度、精製温度や時間の調整などの複数の要素を組み合わせる。そのためには我々の予想以上に温度、湿度が重要視される。さらに電気炉を使用するという高温かつ危険な作業空間が生まれ、そのための安定した電源確保も重要であるため。地震や火山などの災害が少なく建設する地盤が安定しているほうが俄然適している。そのような選考の結果エメリアのハイドル陸地の一角が建設予定地に決まったのだ。アルセロール社を含めドイツのティッセンクルップ社等ヨーロッパ系の鉄鋼メーカーはドイツのルール地方の工業地帯やインドや東南アジア諸国にも工場の進出を進めてきたが、特にヨーロッパにおける環境志向ビジネスの高まりの中で鉄鋼業界のヨーロッパにおけるこれ以上の拡大は難しくなってきた。もちろん鉄鋼業界も高効率の電気炉の開発や生産ラインの自動化等の省エネルギー化を進めていたが、どうしても精製において大量の燃料を消費する鉄鋼業界には

１９８０年代以降のヨーロッパの政策が求めるものには完全にはついて行けなかった。

しかし今でもアジア・中東新興国や欧米先進国を問わず鉄鋼の需要があるのは事実だ。そこでメーカーが進めたのは鉄鋼などの材料生産をエメリアでも行う事であった。これによって新興国の建築ラッシュや欧米諸国の都市再開発ラッシュに伴う需要の急拡大に自国の環境基準とは別の基準で検地を進めることができる。事実、欧州連合は自国・連合内と比較してＣＯ２や工業排水など深刻な環境問題を引き起こす要素は同じくらいの基準でも、排熱や振動などの要素は比較的甘めに設定していた。２０００年以降はエメリアでも世界各国の重工業の進出は多くなり、アメリカを発端にした金融危機、ヨーロッパ諸国の財政問題、中国やインドなどのインフレに伴う経済減速問題を乗り越えた今も進出が進んでいる。

ポケモン達を排除してまでの開発と建築、これに対する企業側の見返り、それはエメリア自治協会内部の組織にその利潤の一部を出資すること。もちろん近年価格が乱高下しているユーロやドルでなく、エメリアのポケで。彼らの目的を詳しくは聞いていないが、人間社会を脅かすほどではない内部の政治抗争であるらしい。

到着ターミナルを出た男。確かにタクシー乗り場の先端に公用車らしき黒塗りの車、ＢＭＷ社製Ｅ３６０が止まっている。ここからＥＵ本部とエメリア自治協会政庁があるブリュッセル市街地までそう時間はかかるまい……

２０１２年　１２月１９日　アメリカ　シアトル　ＧＢＴＸ　本社ビル　１６４０時

「そうですか…それは予想だにしない結果でしたね…」ＧＢＴＸ社代表取締役の男は携帯端末越しに話していた。デスクにある情報端末にはクローンポケモン兵士たちの戦闘結果とアメリカ軍国防省に配備されている例の高性能試作仕様のキノガッサの戦闘データ。“はい。ひとえに我々の采配ミスです。有効に利用できずに申し訳ない”端末の向こう側から声が聞こえる。「いえいえ。こちらの製品がまだまだ顧客の満足が行く性能を出せていないという事でして、謝罪すべきはこっちです。引き続き改良を加えた製品を閣下へと供給いたします。今後ともわが社にご贔屓賜りますようよろしくお願いします……」

数分後、会話を終えた男はチェアーを後ろに回して窓側へと向ける。彼の目の前にはすでに夕闇が広がりつつあった。ひっきりなしに降り続く雪を運ぶ雲が低く垂れこめる市街地。徐々にシアトルの高層ビルや道路や港湾を夕方から夜の暗闇が飲み込んでゆく中、港湾や貨物船の、道路や車両、路面電車の明かりが、空港に着陸する旅客機の航空灯が、高層ビル群からもれる電灯が、ビルやニードル・タワーのライトアップが美しく、そして輝かしくきらめき始めている。

「ふん…」社長はほくそ笑む。国連軍や各国軍、民間軍事会社は最も需要の高い顧客だ。民間企業での資源採掘業務や介護支援用のポケモンはあまり顧客にならない。その多くは作業ロボットや自動化（オートメーション）された採掘・作業システム、または人力によって十分成り立っているからだ。牛や豚、ヒツジや鶏といった家畜のクローン生産も人工

の拡大や新興国での食生活の欧米並みの多様化などにより需要が高いが、クローン食料や遺伝子組み換え食品がその黎明期から、そして今もなおくすぶり続ける“食の安全”という問題の中で完全に信用されたとは言えない。何より、今までで一番儲かったのはポケモンの量産だ。そして彼らはやはり戦闘に使用することが一番有効である。「まだまだわが社の実験にも協力してもらいますよ…代表閣下……」

“失礼します”ドアの外のインターフォンに連動するモニターが点灯し、軽いチャイムが鳴った。「うん、入っていいぞ」入ってきたのは技術本部長の女である。「社長閣下、アメリカと国連の方から送られてきた高性能試作機の詳細な稼働データがこれです」「分かった。ありがとう」女は社長のデスクにＵＳＢ大容量記憶デバイスと数枚の紙を置いた。社長の男はその紙に記入された文字を眺め。右手の人差し指でデスクをコツコツと叩く。

……このキノガッサが…この試作機こそが…我々の地位を神の領域へと……そう、生命の創造、それこそが神にしか与えられなかった名誉であり、威厳なのだ……

…我々はそれをついに手に入れる……

続いてゆく現実（後書き）

今回は前より短くまとまりました！とはいっても3万文字オーバーですが…

あれ？本文の所に“４万文字”て書いてあるぞ？前回４万文字を軽くオーバーしてたんですけど……大丈夫なのか…

いや…葵がもっと短くすべきなのかもしれない……

アコース：短くしろっての！俺らの出番が薄いったらありゃしないな！

……そうですね…確かに。でもいつかはきっと…

迷走

２０１２年　１２月１６日　エメリア　ソーラ大陸　パルク州　アメリカ軍・国連施設　１７３０時

「リーヒュン・バイリング・グリーズ、ユイリィ・ランタン・プレミドール、サクラっていうあんたがたの司令官がお呼びだ。さっさと執務室に行ったほうがいいぞ」国連軍・アメリカ軍・国連研究施設共用の３００席もの大きさの食堂に彼ら2匹とブレイブ、テルル、新入りのミオカと夕食にありついていた時に一番窓よりのテーブルの一角にいた5匹のもとに統合軍の兵士がやってきた。「い、今ですか？」「ウチも？リーヒュン一匹だけじゃすまない話ってことですね？そんじゃいこっか…」ユイリィの方は（彼女のような大型４本足種族ではほとんど使ってないも同然だったが）椅子をツルで後ろの窓側に後ろに押し下げ、後2本足を立ち上がらせた。「どうしたの？早く早く♪」「あ、うん……」リーヒュンも同じように立ち上がった。どうにも気乗りがしない、いやな予感がした。彼の意識の底から湧き上がる不安が早くも足取りを重くしている。そんな感触をメガニウムも感じたのだろう。「ウチがいるんだから心配しなくていいよ、ね？」ベイリーフの背中辺りをツルで軽く押しながらブレイブとテルルの方を振り向く。「ああ、残りは全部食べちゃって。今日はあたしの代金だから！」「お、おう…」「うん……」「そんじゃロズリンは食べてていいよ。先に戻っててもいいし、あとから来てもいいけど…」メガニウムが頭の上のシェイミに声をかける。「ミオカのぶんまで取らないこと！オッケイ？！」「大丈夫でしゅ、ミーはそんなに食い意地…」ロズリンは彼女の頭からテーブルの上に降り、サラダの盛り合わせに飛び付いた。「テルル、もしこの子戻るときは2回までつれってってね！後、これを持たせてよろしく！」「え？う、うん……」

グレイシアはユイリィが置いていったＩＣカード（彼らだれ一人としてその仕組みも名も知らぬが）、今回の代金、（４９８ポケ３８ポケルカ）、そしてパン、鶏肉のスープ、野菜の盛り合わせ、ハンバーグの山盛と分かれた大皿と、突っ込まれた複数のフォーク、スプーンを見ながら前足の動きを止めた。大皿で突きあうのは彼女の趣味だろうか？それにしても凄まじい量だ。「食べろって言われてもさ…ねえブレイブ、これホントに食べるの？」「あったりまえだろ！ユイリィが言うんだからこんなチャンスは滅多やたらねえぞ！」ブースターは椅子から身を乗り出してハンバーグの山にフォークを突き刺している。「あいつは結局見てないでしゅねえ？ミーをほっといたらどこまで食うか分からないでしゅ」ロズリンはスープに飛び込むような感じで顔を突っ込んでいた。「あ、あのあの！？私のスプーン…」新入りしたイーブイであるミオカ・ソウヨウはスープにさじを突っ込んだままシェイミの口にさじを引き込まれかけて困惑していた。「…て、こらこら全くもう！そういう食べ方やめてよお…」テルルはロズリンの顔を前足で引き揚げながらふと思った。あの２匹もいろいろと大変なのよね……自分たちのように単に軍人としているだけじゃないとか……

……リーヒュンには……やっぱ……

（……なんて言えばいいんだろう？……とりあえず明日にでも話を……）

あれからまだ２４時間もたっていないというのに呼び出された。ベイリーフとメガニウムはサクラ・フユツキ司令官に（はたして彼女の立場が本当にそうなのかは彼らには分らないが）、しかも当人の自室に呼び出された。リーヒュンの意識の中でそれは明らかに“嫌な予感”である。その感触は今までにない寒気とめまいになりかけたふらつき感となってすでに彼を襲っていた。隣にいるユイリィはそんなこのベイリーフの気持ちを逐一感じ取っているらしく、「大丈夫、あたしがいるからヘンな事にはならないよ…」と励ます調子でツルで優しく彼の頭の葉っぱを撫でてくる。リーヒュンにはこのメガニウムの送ってくる優しい感触は多少なりとも嫌な予感という冷たい感覚を温めてくれるように感じたが、その優しい温もりも目の前にかすかに感じる異様な冷たさにたちまち凍りついた。全く悪寒が取れない。

「ごめん、俺の気にしすぎかな？　……でも…これは一体…」「んー？まだダメ？…まあ、うちの一声で決めつけられることじゃないしね。リーヒュンのそれも経験のうちだよ。うん」「ならいいんだけどな。いつもユイリィは元気いいよな」「そうだよ！それがうちの看板でしょ！あはは…」ユイリィは少しでも隣の相棒を元気づけようとしているのか、終始明るい調子だ。彼女は何の疑念もなく通路の突き当りまで来ると扉の横に付いたスイッチをツルで押す。メガニウムが押した部分がオレンジ色に光り、間もなく扉が開いた。そのエレベーター（そういう名称はベイリーフは知らないが）の中は、人間特有の眩しいほど白い明りの雰囲気と真逆の沈黙に覆われていた。リーヒュンの表情と不安によって小刻みになる息遣いがその原因であるようだ。彼の不安に満ちた息の吸い吐きは、エレベーターに乗っている十秒ほどの間にさらにひどくなっていく。ユイリ

ィの意識にもそれが十分に伝わってきたのだろう。彼女もエレベーターを降り（扉はもちろん自動開閉だ。普段だったら興味深いだろうに）て以降、徐々に話しかけようとする思いもなくなっていった。メガニウムの気持ちの中にも、ベイリーフが感じているであろう冷たい感覚が実際に接近してきていることに気づき、徐々に意識の水晶を冷やし始めていることに気付いたのだ。今までの自分の軽率さに今更ながら後悔し、そしてこの先にあるその寒気の元凶を読み解こうと必死に思考を集中して空間の中をめぐらせる。方向を変えることはもちろんできない。それでも…その正体を読み取って…彼の支えになれたら…何でもいい、せめて今の自分に何かできることは……

しかしユイリィにしても時間が少なすぎた。４本の足で歩みを進めるうちに、とうとう目的の部屋の前にやってきてしまった。サクラ本人の執務室の前に。「リーヒュン……ごめん、ちょっとだけわかるまで遅かったかも……」彼女は申し訳なさそうにツルで雄蕊の長いほうを丸める。リーヒュンの方は完全に上がってしまっているのが分かった。それはまるで大人数の前でプレゼンテーションをする大企業の新人社員のようだ。「ううっ…まさか…でも…もう仕方がないや…俺、何とかする」「へっ？」「もうここまで気にしても仕方ないだろ？」ベイリーフは左前脚の爪で床をかしん、と鳴らす。「あとは当たって…バラバラにもなって見せるさ」「きたあっ！そうこなくっちゃ、だね！！うんうん…」メガニウムは一気に笑顔になってベイリーフの左前脚あたりに自分の右前足をぶつける。「いってえ…それにしても君は相変わらずそういう…」彼には分かっていた。今自分の言っていることは見栄っ張りに過ぎない、自分の心境はホントは２０秒前から全く変わっていないことを。そしておそらく彼女も感じ取っているのであろう。自分の言っていることは上っ面であって本心は１８０度真逆という事を。おそらくは自分をこ

れ以上不安がらせてはいけない、とにかくでも元気づけないと、と。彼女もそうであった。ユイリィ・ランタン・プレミドールにはこの先に待ち受けるもの、サクラ・フユツキがリーヒュン・バイリング・グリーズにもたらすであろう恐ろしきものがおろぼけながらも、もっと見れるはずだという彼女の自身の能力に対する歯がゆさに視界を狭めながらも感じた。その冷たい感覚は、彼にこれまでにない衝撃と傷跡を彼の意識水晶に残すだけに十分のものであると。そんなことは死んでも伝えることはできない。

しかし彼女にはすでに読み取れた。その一撃は疑いようがなくいずれの段階でこのベイリーフに襲いかかるであろうと。その瞬間は…いや考えるだけで吐き気のような具合の悪さを感じる。そしてそれはどの段階でこようと…置換積分でどこでｕ（ｔ）と与えた数式を本来のｆ（ｘ）の導関数に代入するか…と同じく同様の結果をもたらすであろうと。この運命は取り繕えない、それがゆえにメガニウムはせめてできることを精いっぱい努めようとした。少なくとも彼が、今憑りつかれているであろう不安と恐怖を何とか切り抜ける力になるようにと。

「……本当に大丈夫？」ユイリィがリーヒュンの首元の葉っぱの上にツルで軽く触れる。「分かってる、リーヒュンは全然大丈夫じゃないんだよね？あたしには…」「気にすんなっての。行ってみりゃ何とかなる。ユイリィの方こそ、サクラさんにへこへこするなよ。嫌だったらはっきり言っとけ」ベイリーフはそのツルを優しく払いのけ、メガニウムの首の花びらをやさしくなでた「……うん。もう逃げようがないしね…」彼女の鼻元が（らしき場所が）ほんのり赤くなった。「ありがとう……こんな状況でもうちの心配してくれて。そういうところは見習いたいな……」「そうかな？俺はいつもバカしかしない…」

「でもさ、それで弾薬庫に落下したくはないね！あはは…」メガニウムがベイリーフにのしかかるが如く首元に体重を乗せてきた。「はあ…ユイリィのそういうところには俺も助かってる…たぶんな…」

彼はいつもの奇抜な飛び付きにある意味で励まされながら、何とか自分の気持ちを強く持とうとした。そうでなくてはならない…フローラの為ならこの程度で音を上げていたら……

しかし、2匹の楽観したような状況とは裏腹、とはこのことか。中に入った2匹を前にサクラの表情は硬い。このサーナイトの部屋をリーヒュンはいつもの好奇心というより不安のあまりざっと見まわす。部屋はカーペット敷きに一番奥、窓側にデスクとイス、入って右側の壁側一面には書物が収められたガラス戸付きの棚がある。左側にも小さな棚みたいなものがあって、見たこともない機器、しかし明らかにポケモンの文明が作ったものと感じられた、が複数置いてあった。2匹がいるのはそのデスクから2，3メートル離れた場所、ちょうどサーナイトがデスクからしばらく歩み出た感じの格好だ。「あなた達を呼んだのは…少しは見えるわよね？」サクラはベイリーフとメガニウムに視線を送る。リーヒュンがその目線と会った時、彼女の方からかすかに同情にも似た撫でるようなものを感じる。しかし…それ以上は…本心がどうなのかは彼には分らなかった。そんな自分が…こういう時に自分のあるはずの能力が生かせない…極めて、罪悪感を感じるほどもどかしい。しかしそれを必死に集中して読み取ろうとすればするほど、先ほども、そして今もさらに強くなる不安と恐怖が自身に生み出すめまいと悪寒に邪魔をされ、それに必死に耐えるのに精いっぱいだった。

サクラはそんな彼の意識空間の混迷を察したらしく、少し悲しそうな表情をして目線をメガニウムに向ける。「ま、まあ…少しは」ユイリィは隣にいるベイリーフの表情を見て、やや深刻そうな表情をして頷く。サーナイトは彼女の態度を見て同じように頷いた。やはりこのメガニウムは状況をある程度読み取れてしまっているようだった。これから起こるはずの事態を、ここにきた意味を……

「おいおい…どうした、どうしたんだよ一体?!」「あ、あのね…今ここに来たのはね…」「全くもう…あなたは優しすぎる……」サクラがあっさりとさえぎる。

「な、何があるんですか?!僕にはさっぱりわからな……」リーヒュンは不安に満ちた声を振り絞る。それを読み取ろうと思考を寄せるするだけで、４本足から力がすっぽ抜けて倒れこみそうになるほど目の前がぐらつく。それが自分のその能力のせいか、それとも単なる考えすぎによる具合の悪さなのかはいまだにわからない。だがこのベイリーフは踏ん張り、頭の上の葉っぱや首元の葉っぱがプルプル震えるほど全身に力をかけた。

「やっぱりよね……まあ、まだあなたにそこまでの能力を身に付ける余裕も覚悟も、それなりに難しいのが事実だけど……」サクラの声はやはり彼に対する同情か何かに満ちている。彼女が左手をすっと動かすと、２匹の入ってきたドア横のスイッチが勝手に作動し部屋の照明がやや落ちると同時にデスクの上の卓上情報端末の電源が入った。「さすがですねサクラさん!うちももう少し頑張ってツルの一振りで自分の部屋の物くらいは……」「もう、今はあなたのテンションに付き合ってる余裕はないの…」ユイリィはその姿を見て目を輝かせる。思わずスイッチの方へ歩き出そうとしたが、サクラの真剣な一声に顔を赤らめ、ベイリーフの顔を見てますます気まずそうに元の位置に引き下がる。

「それで…とにかく、何があったん…」「話は簡単よ。あなた方があの水晶が無数に存在する地底湖の洞窟の中で何があったか?、それだけなの」「は、はあ…」リーヒュンにはこの言葉が延べられるという事実を何となく予想していたことを今気づいた。なぜ今になってそれに気付いたのか、なぜそれを仮定して真剣な思考へと導かれなかったのか?そんな感情や疑念の霧が彼の意識空間に広がり、それをまさぐるうちに視界がぼやけたようにすら感じる。「あの、質問が…」「何か?」サクラのめんどくさそうな、じれったそうな聞き返しにもかかわらず、彼は堂々と真正面を見据えてサーナイト

の視線にその目線を叩き込んだ。「どこまで話すんですか？ロクでもない、その…あの時は腹が減ったとかそういうのも…」

「何がろくでもないの？私は真剣よ」「ううっ…すいません。でも…今のあなたの言い方じゃ…」「そういうことを気にしてる場合では…はあ、あなたって子もどうして……」サクラに右手が彼女の腰辺りをコツコツと動き、表情には明らかに嫌気がさしていた。彼のその単純かつストレートな思考にも、垣間見える意識感覚にも加えて彼女はあまりにもじれったかった。どうしてこうにも意思が伝わらない？その隣にいるメガニウムも含め、なぜこう自分の能力をおかしな方向へと使う？

しかし…まあ今はそんなことをお説教しても仕方がない。仕方もないし、聞きたいことは全く別だから。

そんなじれったさと呆れと諦めが加わったサクラは2匹のもとにさらに歩み寄る。「どう…私に教えてくれる？特にあなたが…あの時何を感じ、何を考えたのか今、極めて重要なの」「重要、たって…もう少し待って…」サクラの拙速さにベイリーフはある種の不快感を覚えた。とにかく、そういう探りを常に入れているようなタイプの連中はポケモンだろうと人間だろうと嫌いだ。普通ポケモン同士ならもう少し思いやってものを言えないのだろうか？

そんな彼の思考を渦巻く不満もサーナイトにあっさり見通された。「…そんな感情論を持ち出してどうするのよ？あなたは深い思考をするのが苦手な方でしょ？思った通りに言っていいわ。…とにかく教えてほしいの…一つぐらいは覚えてるでしょう？」「あ、あの！リーヒュン迷ってるじゃないですか！？そんな方法じゃ単なる取調べ……」「あなたが口を出すことじゃないの。分かってるでしょ最初から」「それとこれとは違いますよ！うちはただ単に彼の…」メ

ガニウムがサクラに前足を踏み出す。「ユイリィ、あなたはそこにいなさい」サクラがやや厳しめに左手を彼女の顔のもとに突き出す。「あなたって子はいつまでたってもまだ子供…」その手から発する破壊的な重力のゆがみがユイリィの感覚で体がいたくなるほど強く感じた。しかし彼女はまだ食い下がりきったわけではなく、右前足と残りの後ろ足も前に出す。「でも…それじゃうちがここについてきた意味がないじゃないですか！？それならいっそ……」サクラがついに耐えかねてメガニウムの首元を両手でつかんでゆする。「あなただって分かってるでしょ！？あなたがここに嫌でもいなきゃならないわけが。彼の妹を完全に滅ぼす事、ポケモン文明を破壊する狂気の塊、元凶、悪魔、死神、あれを完全に消し去るのがあなた達の役割と決定づけられてるの！それ以外に何の目的が…」

「な、何言ってんですかサクラさん！？……」リーヒュンがユイリィをツルで押しのけるようにサクラに歩み寄った。その顔には明らかに絶望的な衝撃が浮かぶ。「フローラが…今…なんて…」

メガニウムとサーナイトは凍りついたようにお互いの顔を見合わせる。「……」「……」特にメガニウムの方は顔を真っ赤にしてうつむき、向かって右側に後ずさるが如く2，3歩引いた。こんなことを言うはずじゃなかった。そしてそれが明らかに自分のミスであることも理解できる。後悔の念が、間もなく吹き荒れるであろう衝撃の宣告がもたらす嵐に対する不安とともに、生ぬるい不気味な感触となって彼女の意識を震わせた。しかしもうどうしようもない、彼に残された道は宣告を受け入れるしかないのだ。

空間が凍結したような気まずい沈黙が続く。「何が…フローラに……サクラさん……」「そう…そのことなんだけど……」「教えてください！一体何が彼女の事を？！…どうして…あんな…」ベイリーフはサーナイトに顔を近づける。ああいう呼び方をされた怒りより、呼び方に至った理由に対する恐怖心が彼を突き動かしているのをサクラはすぐに見抜いた。自身の両手をツルでつかみ、彼の眼は経った今無実にかかわらず死刑を宣告された被告人のようだ。絶望

的な懇願に似たものが震える目がサーナイトの意識に深々と突き刺さる。

あまりにも長い、果てしなく続くような停止状態を、サクラ・フユツキ自身の消え入りそうな、しかし確実に発せられる言葉が打破した。「私はあなた達と戻った後……もう一度調べてみたの。あなた達の使命がどういう事か、能力が何のために存在するのか……そしたら…」「……そしたら?……」リーヒュンの意識の中にサクラの口調からの恐ろしい感触が走った。これ以上聞いたら何が起こるのか分からない。しかし逃げ道はなかった。「……フローラというあなたの妹の存在自体が……それと深く関わっている可能性があるのよ…」「!!……」サーナイトはベイリーフの意識下をそっとまさぐった。凍えたような感覚、同乗しても話が止まるだけだ、と。「だから……教えてほしいのよ。あの時…何があったのか、何をあなた達が見たのかを……少しでも可能性のあるうちに…」

「だから、だから…それが何だっていうんですか?!僕が見たのはフローラと……」彼は一瞬言いかけて首を振り、左右前足が力がかかって震えた。「やめてくださいそれ以上は!」「ユイリィ…俺は大丈夫だよ」「でも…」「心配すんな。この程度の事じゃなんともない……」彼女にだって引き際は分かる。彼は一回決めたらやる性格だ。それに止めても意味がない。どのみち結果は同じだ。「う、うん…ごめんね力になれなくてあたし…」「気にしないよ…」メガニウムはもう一歩分下がってうなだれた。

こんなことは認めたくない。認めたくはないけど……

「フローラらしき…ベイリーフ種族と……」リーヒュンは首から下げた水の入った容器を右のツルで力強く握った。「これです…翡翠…彼女がいなくなったら…取れたんです…」「本当に?…」彼の首からその容器を取り上げ、サクラは中を覗き込む。サーナイトの右手がにわかに震えていた。中にあったわずかに光り輝くゴルフボール大の球体はものは間違いない……時空翡翠だ。本当に…存在していたとは…

自分の予見が的中してしまった。間違いない。このベイリーフの妹は…彼女が持つであろう意思と彼らが感じるであろう彼女から放たれるおぞましい感触……サクラの意識空間をこれまでにない冷気が走り、足元が溶けていくようなめまいに連動した気持ち悪さを感じる。危うく後ろに倒れかかりそうになったが自分のサイコパワーをわずかに掴み、何とか踏ん張った。彼の気持ちを考えたらこんなことは…でも…他に何がある?……

「これは…本当に…そのベイリーフがいなくなったら…取れたのね?…そういうこと?」「はい…」「そして少なくともあなたはそれと戦った…」「……はい……」

「……話は早いわ。……あなたとユイリィの能力がある理由、それはフローラを倒す……」サクラはそう言うなり、リーヒュンのツルを両手で握り返し、顔をグイッと近づけた。このベイリーフはその瞬間に倒れそうになったが、その衝撃が故に最後まで気絶できず、後ろ足がけいれんを起こしたように震えながらもそれを食い下げて保っていた。「……倒す……どういう……?」彼の声はもはや会話の形態をなさず、ただ意味のない呟きのように漏れてい

た。彼の頭の中は衝撃というレベルをはるかにオーバーランした破壊的なショックと、それによって破壊された彼の自我の残骸が破片と霧が恐怖と絶望という冷気で渦巻き、全ての思考が止まって居る。周囲の空間が溶け落ち、自分が超新星の残骸が作る巨大な重力作用で素粒子レベルにまで分解されるような感覚と共に、ぐるぐるとまわっているような感覚がこのベイリーフの三半規管一（耳奥にある姿勢や体の傾きを感じる器官）をマヒさせた。

「あなた達の能力と使命…ポケモン文明をすくう…すなわち、文明を破壊しようとする脅威が存在する。それはあなたが……倒して救わねばならない脅威なのよ。……そしてそれこそが…あなたが倒すべき存在こそが…」サーナイトの両手が力強く、ベイリーフを必死に励ますような握り方になる。「そう、それこそが…フローラ・エルピー・リトリム・グリーズ…あなたの妹なのよ！」「…な…な…それ…」彼の口元がけいれんを起こしたように言葉を口走り、全身の震えが一層激しくなった。サーナイトは両手からわずかにエネルギーを引き出し、彼を支える。

「それで……お願い…見せてもう少し……」リーヒュンの体に突き抜けるような何かが走った。サクラの中から強烈な思考が意識に飛び込んできたのだ。サーナイトが必死に振り絞るように両手をベイリーフの首元の葉っぱの上あたりに乗せて意識をかける。「お願い、それしかないの！だから少しだけでものぞかせて！あなたが見たものを！あなたの妹をすくう方法なのそれが！……」「ううっ…」ベイリーフの前身の感覚も意識も空間の内部へとはじき出された。普段意識をかけると見える感触の存在するあの気持ち悪い感覚へと……

今回は特に強い……なんというエネルギー……

……

　送られてくる感覚が、意識から湧き出す巨大な黒い流れが。リーヒュンはあっという間に自分の意識をそこに保っているのが難しくなった。今見えているものが何であるのかを考える溶融がなくなるほどの吐き気、めまい、そして背筋を凍らせるような悪寒。……しかし……ここで倒れるわけには…それフローラの為なら……

……

必死に持ちこたえる努力をした。……しかし……

…今回は強すぎる……これ以上は自分の思考を除く事なんて……

……無理だ…

……もう限界だ……やめろ……これより先は

……

……

サーナイトの腕（かいな）の中でベイリーフの意識は失われた。後ろ足からがっくりと力が抜け右後ろに倒れかかった彼を、サクラは首もとを抱きかかえる両手とサイコパワーで支えた。ユイリィがびっくりしたようにベイリーフそのそばに顔を寄せる。「リーヒュン?!ね、ね

えリーヒュン？！」

「大丈夫よ。単に気を失っているだけ……」「そりゃそうですけど！なんでサクラさんは……」メガニウムはサーナイトに歩み寄った。思わずそうやってしまった。ユイリィにもリーヒュンの苦しみが、恐怖と戸惑いがはっきり感じ取れた。それは重く、苦しく彼女の意識空間に飛び付いたが、それに救いの手を差し伸べられなかった。ただ単に振り払う事しか。ユイリィにとってリーヒュンはかけがえのない存在、自分と一緒にやっているだけでなく意識下でも常にともにいてくれる存在――（まだ彼が思っているかどうかは知らないが）、そういうはずだった。まだ彼が分からなくても、いつかはきっと、きっと通い合える存在になる、そう思っていた。

それなのに…それなのに…ただ彼が自分から生み出し、自分の中でしか感じ取ることのできない苦しみを、もし助けられなくとも心の支えになることすらもできないなんて…そういう許可すら与えてくれないなんて……

メガニウムはツルに握りしめるように力をかける。「あたしに…ただ見てろなんてひどすぎます！それならいっそ……」「ユイリィ、分かってるでしょ！？あなたにはそういう使命、目的があるの！」サクラがユイリィのツルを両手で握りしめた。その際、ちらりと背後の窓の外、すでに薄暗くなりかけた施設の敷地、を見つめる。「あなたの使命は彼を支え、ともに行動し、彼を必要なときに導く、それ以外に何もする必要はないのよ」サーナイトはメガニウムの青空色の目をじっとのぞきこむ。ただし表情からは厳しさが少しずつ消え、哀れな同情のようなものが浮かんできていた。「分かってるわ…あなたの事をここまで普通の子と同じように接してくれる相手に会ったことはないのよね……でも……あなたのやるべきことは同情を寄せて甘やかす事なんかじゃない…」「甘やかしてるつもりは……そんな…」ユイリィは反論しかけながらも言葉に詰まり、前足をぎすもすさせながらツルで左側の長いほうの雄蕊をいじる。彼女

自身は甘やかしているとは思っていない。しかし、サクラの視点から、自分が幼いころから彼女に言われてきた視点から考えれば…正しい道とは到底違うのかもしれない……

「最初に言った通り、今後あなたはこの子を手助けするだけにすること、それから、彼はまだ…十分に戦闘できるだけの域には達していないようね。今後あの方法を私は考えるから、その時はあなたの方から彼に教えなさいね」「ま、まあ…あたしが習ったのと…少しは変わりますよね？」「ええ…」メガニウムは記憶をまさぐった。確かにあの方法を確実にマスターすれば、少なくとも精神面以外ではどんな状況でも確実に勝利できる。しかしそれには…彼女の意識の底、記憶という面から冷たいものがよみがえる。

「それと……」サクラの声がユイリィの思考を打ち切る。「うかつに親しくしたり守ろうとしたりしてはいけないのよ。特にこの頃あなたは彼に何の遠慮もなく仲良く振る舞い過ぎなのよ…」サーナイトが子供にお説教するような調子で言った。「……今後はきをつけます…」ユイリィは少しほっぺを膨らませてサクラの背後にあるデスクと端末に視線をそらしかけたが、思い返したように彼女の方に視線を戻した。

「そう言えば……リーヒュンから…何か分かったんですか？」

「ええ…ちょっとわね…やはり彼が思い起こしたことは現実になるみたいなのよ。この子は意識を集中した時に見える世界の現実の映像を引きずって……どうしても思い返してしまって……」サクラは気絶したままのリーヒュンを抱きかかえるようにかばいながら思案顔になる。「それで……リーヒュンは一体何を見たんですか？」「

……ヨーロッパ、場所は分かるわよね？一番最初にポケモン達がいなくなった、人間の先進国が集まる一角よ」「ええ…」「そこで…また…ポケモンの大量死が起こったのよ…」

２０１２年　１２月１６日　ノルウェー　オスロ市　０６２０時

ガラス張りの高層ビルやヨーロッパ的な低層建築が絶妙にテイストされたノルウェーの首都のオスロ。しかしその一角には見るも無残に破壊されて鉄筋やコンクリートや配線ががむき出しになり、周囲を警戒線に囲まれ、警察車両と警察官がいまだに在中している場所がある。

そう、ここは今月初頭に発生した極右派の青年による爆破テロであった。金融危機以降経済低迷が深刻化しているのは、アメリカ、西ヨーロッパ、東アジアだけではない。北欧国家であるノルウェーも同様である。しかしその中でさらに加速するグローバル化と一体化、それに伴うイスラム系移民の労働者の増加は、単にはゲルマン系ノルウェー人の失業率の高止まりの反動からくる不満のみならず、極端な白人至上主義をも刺激していた。それに共感したこの青年…極右結社“ネオナチ”のメンバーとも言われる…は爆弾テロ、並びに与党の政治集会への銃乱射事件を引き起こし、９０人以上を殺害した罪ですでに当局に逮捕されている。しかしこの事件がノルウェー国民のみならず、北欧やヨーロッパ全体に引き起こした恐怖は大きく、改めてグローバル化社会に伴う弊害といまだに残る人種問題の根深さを痛感させていた。

早朝にもかからず硬い表情で警戒線の前に立つ警察官の男達。彼らの方に向かって一人の女が青ざめた表情で走ってきた。「あ、あの…」「どうしましたか？」男たちの問いかけに女の口元は衝撃と恐怖に震えていた。「そこの角の信号の下…ポケモン達…変な血を……」

警察官の顔の色がさっと変わった。そのニュースは聞いたことがある。まさか…「と、とにかく、そちらに行ってみましょう…」一人は女と一緒に現場へと向かい、もう一人の男は警察車両に搭載されている無線機で連絡を取るべく警察車両へと向かった。

２０１２年　１２月１６日　ドイツ　フランクフルト・アムマイン
０６３０時

重工業・経済立国であるドイツ。その一方で都市開発は伝統的で古典的な低層建築物が多いこの国としては珍しく（ミュンヘンやベルリンの郊外も同様だが）超高層ビル群がマンハッタンや上海のように林立する都市。フランクフルトから夜闇が消え、どんよりと覆われた雪雲が見え始める。ここはヨーロッパでもイギリスのロンドン市に次ぐ一大金融・情報・経済都市であり、欧州中央銀行やコメルツ銀行などのＥＵの政府や民間を問わず金融機関が集中している。アメリカの外交専門誌であるフォーリン・ポリシーによれば、フランクフルトは世界第２０位の大都市、ドイツではベルリンに次ぐ第２位の大都市である。さらに環境政策にも抜かりはなく、郊外の空港や地下鉄の主要各駅には自転車貸し出しが行われ、市街地中心には自転車専用道路が整備され、路線バスやタクシーがネットワーク化されるなど、自動車のみに依存しすぎない工夫も施されている。ハイテク工業や電子機器工業や医療機器産業など現代工業の中心地となったミュンヘンとハンブルク、首都であるベルリン、その郊外

都市ポツダムと共にドイツの主要な都市を担っているのだ。

そのビル群の一角、欧州中央銀行が入っている“ユーロタワー”前の広場の植え込みになぜか無数のカラスたちが出入りしている。

「なんたってこんなに今日は…」警備員の一人が不快そうに植え込みをまさぐった。

ぐにゃっという何とも不気味な感覚が彼の手を襲う。同時に手のひらに生暖かいものが。慌てて手をひっこると、この男の手のひらには真っ赤な液体がついている。「こ、これは…」男は背筋が凍りついたような感覚に襲われる。

そしてわずかに、恐る恐る…両手で植え込みを除けてみた……

そこにあるのは……全身から噴き出したように血まみれになった…ゴム風船のように柔らかく腹や体全体が膨れ上がったチコリータの死体……首元の新芽が、頭の葉っぱの付け根が膨張にぶちぶちと破けて赤黒い液体が噴き出している……

「ううっ…何…っ！！！」思わず顔をそらした男。しかしその目線の先には……

ビル正面の植え込みや広場の街灯、案内板、案内情報表示ディスプレイ、植え込みのあらゆる場所、そして道の真ん中や車道の方にまで赤黒い液体やパンパンに膨れ上がったポケモンの死体があちこちに……倒れるように存在していた。種族も無数。ムックルやスバメといったひこうタイプも地面に落ちている。

街道ではメルセデスベンツ社やヒュンダイ社製の路線バス、フォード、ＢＭＷ、日産、トヨタ、シトロエン、オペル、さまざまな乗

用車が双方の路肩車線を避けて大渋滞を起こしている。携帯端末で写真や動画を取る歩行者たち。顔を歪め、不快そうな顔をしながら赤黒い液体があちこちに存在する歩道を歩く…中には女性や高齢者などがその悪臭と悲惨な光景に座り込んでいる……

「！！！」男は思わずあとずさりしながら、携帯端末をふるえる手で握る。だが呼んだのは自分の警備会社ではなく警察だった……

あまたの現代工業が集中する都市、ドイツ南部のミュンヘンでも同様の状況となっている。半導体メーカーのインフィニオン・テクノロジー社やキマンダ社、電気測定機械メーカーのローデ・シュワルツ社、航空用民間エンジン製造企業のＭＴＵアエロ社の本社や工場、世界の有名自動車メーカーであるＢＭＷ社、アメリカのマイクロソフト社欧州本部等が集中する都市の建物・本社ビル・工場の周囲で、道路で、公園で、高速鉄道ＩＣＥも停車する東ミュンヘン駅の構内までいたるところにポケモン達の死骸が数匹ずつは存在し、多くの野犬やカラスが群がり、警察官や公共施設の関係者がその撤去作業にあたっていたが、その死骸に関する通報はもはや市内全域に広がり、完全撤去のめどは立たない事態になっていた。

「ったく！連中は集団でハラキリ自殺かよ？」またしても通報を知らせるチャイムが鳴り、発進位置を示すディスプレイにブロップが出た。「くそったれがっ！市民もゴミの死骸数匹ずつ程度で騒ぐんじゃねえよ！」市警本部の指令センター、殺到する通報にいら立ったオペレーターの一人はコンソールを拳でばしんと叩くと、いやいやながら受話器を取った。

大規模なコンテナ貨物船発着ベースを持つエルベ川下流の都市、ハ

ンブルク市の河口へと向かう河川は点々と不気味な赤黒い液体と化していた。停泊するデンマークのモラー・マースク社、フランスのＣＭＡ・ＧＣＭ社、台湾のエバーグリーン・マリン社、イスラエルのジム海運業社、日本の商船三井社、中国の遠洋運輸集団社等有名海運企業が保有する無数のオーバーパナマックス級の大型貨物船の乗員、４５フィートコンテナを積み下ろしする大型クレーンのオペレーター、コンテナを陸送する大型トレーラーの乗員たちは、憑りつかれたような目をして、しばし呆然とそのところどころが赤黒い、そしてその周囲にはラプラスやホエルオーやプルリルの死骸が見える海を見つめていた。

この日、突如として発生したこの大規模なポケモン大量死事件の範囲はドイツの沿岸や河川流域に留まらず、北海東部からスカゲラク海峡、カテガット海峡、バルト海西部の海域を中心とする点でドイツ、デンマーク、フィンランド、スウェーデン、ノルウェーの沿岸や河川流域のあちらこちらで確認された。特にドイツのミュンヘンなどの南部では、内陸にもかからず道に産卵するほどの死体が発見されるという光景が見られた。

フランス南部やアメリカのハワイでたびたび発生してきた不審な現象が大規模に発生したこの事態に対し、ヨーロッパの各地域は、民間・政府を問わず早朝から大混乱となった。ドイツやデンマークの政府はヨーロッパ連合、周辺各国、ＷＨＯ（世界保健機関）、国連に対する報告、ならびに一般市民から多インターネットの政府広報に多数寄せられた抗議や不安の声に応える会見を何度も開き、軍にも非常事態を発令、各地の高速道路を軍で封鎖した。封鎖した高速道路（アウトバーン）はドイツ空軍やＥＵ空軍のユーロファイター・タイフーンやＦ－１６Ｃ／Ｂ６０の滑走路として利用するためだ。北海やその周

辺ではザクセン級フリゲート艦やブラウンシュバイク級コルベット艦、２１２Ａ型通常動力潜水艦などのドイツ軍艦艇、スウェーデン海軍のイェーテボリ級フリゲート艦、最新鋭のコックムス社製ヴィスビュー級コルベット艦、アメリカ海軍のサン・アントニオ級揚陸艦がベースの国連海軍ドック級揚陸艦「ノーザン・ライト」等無数の各国艦艇と搭載したＶ－２２ＢやＳＨ－６０等が周辺海域を捜索し、漂流中の死体を発見し次第回収に当たった。特に無数の死骸が密集する地域には対テロ特殊部隊が派遣され、化学防護車両に防護服を着用した兵士たちが撤去にあたった。

「……今回の事態はハワイやモナコで生じた不審死事件とほぼ同様であると発表されています。政府及びＥＵの発表によりますと、人間や他の生物に危険な影響を及ぼすような事態ではないと…」ドイツのあるテレビ局、ニュース番組のアナウンサーの女は落ち着いた声で繰り返していたが、横側から別の原稿が入ると、カメラの前にも、放送中にもかかわらずあんぐりと口を開けた。「どうした？」

「なんてことなの。これは私の自宅のある地域よ…」

アメリカのハワイやフランス南東部のモナコで生じた事件はある程度話題になっている。ＷＨＯの公式会見では、今後このような事態が各地で生じた場合でも人類ならびにその他の生物には支障のないものであるだろうと言われていた。しかし今回はそれがあまりにも大規模であるがゆえ、ヨーロッパ北部の各国の市民活動にはある程度の混乱が生じていた。北海周辺の海路やドイツの高速道路の一部に不通や規制が出ているだけにも関わらず、ドイツや北欧の工場、オフィス、商店の一部が休業、一部の路面電車や路線バスでは勤務を嫌がる運転手・車掌たちが相次いで運転本数が半分以下に、一部の航空会社のドイツ方面行の便（フライト）が着陸地をロンドン・ヒースローやパリ・ドゴールに変更し、フランクフルト国際空港には午前中は普段の大型機がほとんどおらず、小型のＢ－７３７やＡ－３５０とい

った小型機ばかりでターミナルには足止めを食らった旅客が続出した。運休が続出した国境線を超える高速鉄道の一部では乗客の検査が行われた。また各国の学校でも臨時休校が相次ぎ、市街地は日曜日を思わせるような閑散ぶりだった。

さらにはＹＯＵＴＵＢＥやＳＫＹＰＥといった動画サイトやコミュニケーションサイト、各種掲示板といったインターネット情報が一層の混乱と不信感を助長。その原因も原子力発電所からの放射能もれ、化学工業企業の危険物流出、ハイテク企業による化学汚染、さらにはドイツ軍の対ポケモン化学神経兵器の実験など事実無根のデマが飛び交った。

幸いだったのは、前述のとおり一度国連関係の国際機関が同様の事態に対する公式な会見を開いていたことがあり、パンデミックのような国際的大規模パニックが起きてもいいような今回の未曾有の事態にもかかわらず何とか秩序が保たれたという事だ。しかし、今回の事態に関する世界各国の市民の不安感は一気に高まっているに違いない。この混乱が完全に落ち着くにはとても年末年始だけでは収まらないだろうと欧米各国の政府や国連は予想していた……

それからどれほど時間が過ぎたか……

「ううっ……」リーヒュンはかすかに目を開けた。まだ目の前がぐらつき、異様な寒気が走っている。まるで数十キロ全力疾走させられた後のように全身の節々に痛みと重さを感じた。「あ、…気が付いたんだね！ホント良かったあ！」ユイリィの嬉しそうな高い声が

聞こえると同時に、彼女のウグイス色の首が彼の視線の先に現れた。
「大丈夫？なーんか一生懸命頑張ってたよね！ウチは認めるよそれ」
メガニウムは目の前に垂れてきた自分の異様に長い雄蕊を（2本は普通の女サイズだが、そこからついでに生えている2本が丸めるほど長い）をツルで払いのけた。

それを眺めていて彼は思い出した…あの時…あのサーナイトに言われたこと……

戦慄が走った。次の瞬間自分が壊れる、気が変になる、その恐怖が全身の神経を光の速度で駆け抜け、彼の意識空間を直撃した！ありえない、ありうるはずがない！フローラが敵だと！？そこまでして狩り、弾圧し、命を奪わなければならないのか？！それほどまでに恐るべき存在なのか？

彼の思考は一瞬にしてその驚愕の事実の前に屈服した。そしてその

1秒後には自分にも手の施しようのない、押さえようのない、狂的な欲求と本能に意識が支配され、全身の運動神経が逆立ち、体がびくびくけいれんを起こしたように震えだした。彼の思考が、意識が、自分の行動の全てがその本能にかられたような動きにかられた。

「くうっ……フローラを……このままにしておくわけには……」「だ、だめ!?今動いたらまた倒れちゃうよ!」メガニウムは無理やりにでも起き上がろうとしたベイリーフをツルでそっと押さえる。「で、でも…俺以外に…」「今は休んでいいから、ね?」彼女は両前足で優しく彼の横になった首のあたりを撫でる。その爪先からわずかに送られた思念が彼の疲労にそっと触れ、幾分かあの特有の感覚が収まったような気がした。リーヒュンの前身から再び力が抜け、その場に横たわりながら辺りを見回した。先程の部屋と形状は同じのようだ。しかし先程までの冷やかさとは打ってかわり、彼の意識空間を包み込むような温かさが満たしているのに気づく。まず窓以外の壁の部分には無数の植木鉢が置いてあり、壁一面に何と植物のツルが茂って部屋の壁一面が緑色のようになっている。天井からも蛍光灯の周囲にあちこちに植物の入った植木鉢がぶら下げられ、人間の製品特有の無機質さや冷たさを緩和していた。それぞれの植木鉢のそばの壁には無数の短冊のような細い紙切れが張られ、“一日水2回!”とか“日差しをなるべくあてて!”とか“この辺りで寝ない!”等と走り書きのような足型文字が書きこまれている。デスクらしきものの上にはやはり多くの花の生えた鉢植え、ガラスの外された棚の中にも書類よりも植木鉢が多い感じだ。右側の一番すみ、すなわち窓ガラス横には水道栓があり、多くのじょうろが流しの周りの床に転がされていた。

「……フローラは……」ベイリーフがわずかに声を出す。

まだ体のあちこちがうずくように痛い。「ううっ……本当に……ダメなのか……」「今は気にしなくていいよ」ユイリィがデスクの真横にある植木鉢から何か青色の木の実を取り、リーヒュンのそばに持ってくる。「リーヒュンが今気にしてたら体がもうもたないから…ウチも何とかするから…サクラさんの言葉が決まったわけじゃないし…」「それはそうだけど俺の手で……本当に……」ベイリーフは横になったまま呟く。まだ思考が、意識が安定しないし、サーナイトの言葉が信じられない。メガニウムはそんな彼の状況を感じ取り、彼の隣に４本足を折って座り込んだ。「そんなはずない…そうはさせないよ。２匹で頑張ればどんなことだって乗り切れると思うもん。今までそうだったように、ね？」彼女は優しくツルで彼の首元の葉っぱあたりを撫でる。「とにかく今は…ゆっくり休んで……」「……させない、か……」リーヒュンはツルでその青色の木の実を取り、わずかにかじった。その途端に奇妙な安心感とそれに伴う眠気がすっと意識を満たし始める。「させない…俺自身がさせないよ……絶対に…助けてみせる…」彼はもう流れに逆らおうともしなかった。疲労のあまり、おこったことの重大さをしっかり考える気力すら放棄している。今はただ…疲れで眠りたかった。

「……寝ちゃった……思い立ったら相変わらず早いのね」数分立ってユイリィはそんな彼を見て母親というものの気持ちが分かったような気がする。いや、正確には彼女自身はそういうものを受けて育った経験らしき経験はないのだが、そうやって多くのポケモンの子供たちが感じるであろう感触を意識空間の遥か奥から感じ取れた。何かに対する安心感、そこで落ち着いて心と体を休められる場所を有形無形を問わず与えられるのが母親であり、父親であり、兄姉であり、家族なのだと。

「それじゃあたしはリーヒュンのお姉ちゃん？…す、すご…！？…くもないか…」メガニウムは思わず自分の妄想に管制を挙げそうに

なったが、隣で眠りこけるベイリーフを感じ、的確に自重した。彼女はそっと立ち上がり、彼の折り重なるような前足を彼女の右前足でなでる。「お疲れ様……明日以降も頑張っていこうね……」ふと彼女が一番流しに近い、デスクから簡単にツルで届く一番お気に入りの大きめの植木鉢の中に……何と……

ピンク色のグラシデアの花を踏みつぶすようにシェイミが寝っころがっていた。（まさかこの子…この部屋に先に戻って…）

「ちょっとロズリン?!どいてどいてってばっ!!!」メガニウムは大慌てで植木鉢に飛び付き、その中のシェイミをツルで抱っこした。が、すでに遅し。「……もうっ！……あーあ……」

２０１２年　１２月２２日　アメリカ　ワシントンD．C．　国防省（ペンタゴン）本部　１３００時

アメリカの軍事行動の頭脳に当たる国防総省。その５角形の形状をしたビルから“ペンタゴン”という愛称が与えられているその施設の一室の円卓には数人の人間がいた。室内の照明は落とされ、卓上の着席位置にあるコンソール付きディスプレイと正面のスクリーンに移る画像の明かりだけがその場にいる人間たちの輪郭を浮かび上がらせている。スクリーンには別の会議と思われる何人かの人間が映っていた。スクリーンの左上に表示された数字と文字から映像はアメリカ・ニューヨークのＮＵＮ（新国際連合）の本館、旧国連の本部だった高層ビルの一室であることがわかる。

「……それで代表の方針には変化がないと?」ペンタゴン側にいる男の一人が卓上にあるマイクに口を当てる。「ええ。方法は変わるかもしれませんが、我々の目標そのものは」スクリーンの向こう側の円卓に座る男、国連代表が答えた。「計画が始まって3ヶ月、まあそもそも国連が行ってきたものも含めれば20年、ここまで周到に行ってきたのですから今が正念場です」

「しかしですね代表…」ワシントンにいる別の男が手元のコーヒーを一口運んで紙製のカップを卓上に置く。「合衆国はあなた方の計画を支援しています。ですが、国連の計画だったはずのあの2匹の殺害に失敗した。さらにハイドルでの戦闘でも彼らのチームだけをしばらく敵にさらしたにかかわらずあの2匹は生き延びたどころか、チームが一匹として戦死していない。あのベイリーフとメガニウムがこれ以上能力を開花させてはアメリカや国連、いや、あらゆる動物も人類も奴らを制御できなくなります。彼らの身勝手を抑えるためにはたとえ今後刺客を送ってでもあの2匹を殺害するなり、監禁するなりし、残りの連中にスタンドプレーをさせておくのが妥当かと思うのですが」

「ええ、どこかの段階では彼らを抑え込む必要があるでしょうね。国連統合軍から今朝がた送られてきたハイドルでの戦闘データを見る限りは国防長官の言うとおりです、ですが…」代表は右手をさっと振る。「統合軍、国連安全保障理事会の賛同者、並びに私と計画関係者での検討の結果、彼らに関してはもう少し様子を見ることにいたしました。無理に刺客を送ったりすれば却って彼らの警戒感を刺激してしまう。それに…」代表が端末をコンソールを何回か打つと、ワシントン側のスクリーンに多くのグラフ、表、数値が表示される。国連の研究施設から送られてきたものだろう。「彼らの能力は絶大、上手く利用すれば我々の計画は思った以上に良好な結果となるかもしれません。実際の作業ではなく、それを円滑にするためにやっている我々の活動の方が、です。その分統合軍や各国軍、そして民間に対する被害や報道に伴う懸念拡大も抑えられる」

「うむ…国連側がそういう方針なら一国の政府が干渉する権利はありませんな…」国防長官は首を振って頭の髪をかく。「しかし、この件に関してはより慎重な判断と選択をお願いしたい。我々合衆国やイギリスは国連の計画を極秘裏に支援していますが、もしこの先の彼らの活動が一般市民や報道機関に露呈した場合、同じ常任理事国である中国やロシアの反発は必須ですよ……」

「承知しています。その手立てはありますのでご安心ください……」

「ところで、国連軍とアメリカの生命工学技術メーカーＧＢＴＸ社の件ですが…」ワシントン側にいる女が手に持っているタブレット端末のリードアウトを見る。「地球上における人間社会の意思決定最高機関である国連が一企業と、たとえそれが軍であろうと協力関係にある事に関し、一部民間の報道関係者やジャーナリストの間に懸念が出ているようですがそれに関しては……」

「それに関してはご安心を」代表が穏やかに言う、「その費用に関しては国連本体の予算ではなく計画がわの予算が使用されています。またその使用目的も一般市民の生命、財産、安全保障、また自然生態系及び環境に一切の危害を加えないよう…」そこまで述べた時、国防省の中にいる人間たちに足元が揺れる奇妙な感覚が走った。床に接している足から、椅子に座っている下半身から伝わってくる。それはニューヨークでも同じらしい。スクリーンの向こう側でも人間たちがこちらと同じように部屋のあたりを見回している「これは…」国防長官が呟いた直後、小刻みな横揺れが激しくなり、天井から下がっているスクリーンの投影機が音をたてはじめた。部屋の壁がぎしぎしと軽い音を立て、卓上のディスプレイの映像が一瞬ちらつく、卓上に置かれたコーヒーのカップが倒れ、少し残っていた中身がこぼれ出た。館内放送用スピーカーから火災報知アラームが鳴り、自動音声が建物の外へと退避するよう呼びかけている。

会議室にいた面々が警備兵や秘書と共に屋外へと出ると、すでに国防総省の建物にいた大勢の人々が駐車場や車寄せ付近に集まっていた。雪が降りしきる中を慌てて出てきたせいか、傘をさしているものは少ない。周囲の政府関係の建物の外も同様の状態である。携帯端末で連絡をとったり、周囲の人たちと話し込んだりしている。中には恐怖でしゃがみこんでいる者もいた。アメリカ北東部において地震というものは少ない。それにこれほど大きめの揺れが来ることなど滅多にない事だろう。ただし、外から確認する限りペンタゴンにもほかのビルにもこれという被害の気配はないし、敷地周囲に植えられた並木もセキュリティーカメラ付きのフェンスも健在、足元の道路や駐車場にもひび割れなどの損傷はなく、停車している車も、充電装置に接続された米国テスラ社製の最新鋭量産型電気自動車、テスラ・モデルSや米国GM社製シボレー・ボルト、それらに電気を送る充電スタンドもそのままだった。スミソニアン博物館群の被害は…

「閣下、ホワイトハウスの方への連絡はどうしましょう?」「そうだな。この辺りでは大きな被害はないようだが…一応は無事かどうかを確かめてみるか」女性秘書に尋ねられた国防長官は携帯端末を耳に当てるが、10秒ほどして首を振った。「…だめだ。通信回線にアクセスが殺到しているらしい。ニューヨークも揺れたようだ」

この時発生した地震はアメリカ北東部では67年ぶり、M5.8という大きさにしては130年ぶりの大きさの地震だった。ニューヨーク、ワシントン、ボストンなどでも比較的大きな揺れが観測され、ニューヨーク近郊の高速道路が一時通行止め、JFK国際空港が一時、旅客機・貨物機双方の受け入れを中止し全面閉鎖、市内の地下鉄と近郊鉄道路線が運転見合わせとなり、ニューヨーク市街地内の、特に7番街ブロードウェイ地区やワシントンのスミソニアン博物館周辺の歩道には屋外に避難した人々があふれた。一部の企業

やデパートでは早々に社員の帰宅命令が出されたり今日の営業中止が宣言されたりし、ＮＹＳＥ（ニューヨーク証券取引所）では一時取引中断ののち、再開後には各株価指数が一時的に急落した。またアメリカ北東部沿岸にある原子力発電所一基といくつかの火力発電所が緊急停止したが被害はなかった。結局この地震による被害や影響はほとんどなかったあるいは一時的なものにとどまったが、地震などほとんど経験のない地域だけあって人々の驚きや恐怖感は強かった。特に昨年の日本で発生した大震災と大津波の件もあってか、ハドソン川の観光船や連絡船、周囲の港湾のコンテナ貨物船などが何の根拠もなく陸地を離れ上流や沖へと逃げ出していくという事態も発生したのだ。

ニューヨークの新国連旧本館でも会議室にいた国連代表、国連議会の議員代表の３名、安全保障理事会の関係者２名からなる男５人女２人はびっくりした表情で天井や窓の外を見つめていた。そんな中多くが思わず椅子から立ち上がっている傍らで、先程から落ち着いた表情のままのアジア系の男がいる。「自身ですか…この辺りでは珍しいですね。でも今程度の地震では大きな被害はないでしょう」「そうか…君は日本人だから…本当に大丈夫なのか？」安全保障理事会関係者の中東系の男が不安そうに窓のそばに立つ。「ええ、私の経験では。あそこの人々が逃げていくのは恐らく群集心理と今までの報道によるパニックか何かでしょう…」この男も窓の外から視界の下に広がる岸壁に隣接した公園を見下ろした。国連の関係者らしき人間や観光客らしき人間が警備員ともども小走りで海側から離れ、湾にいた連絡船も見当たらない。

日本とは反応が違うな…彼はそう思った。地震というものは南米西部、北米西部、トルコ周辺、イタリア北部、中国内陸やミャンマーやバングラデシュなどの中央アジア、日本、台湾やインドネシア

やマレーシアインド洋側などの東アジアから東南アジアの火山帯の一帯、ニュージーランドと様々な場所で発生する。しかしその中でも世界で群を抜く地震頻発地帯である日本の地震に対する落着きは、半分以上のその要因は災害時に人間が普遍的に突き動かされる利他心に（このように生じる共同体意識は震災ユートピアとも呼ばれる）よるもので日本がそう言われるのは災害が取り上げられることが多いせいだからだが、それなりに世界から驚嘆されるものだ。それはもともと控えめでおとなしい島国の人間性のせいか、それとも少なくとも3ヶ月に一回はどこに住んでいても揺れを感じるというユーラシア大陸東端の火山帯と4つの地殻プレートの上にたたずむ特異な形をした大小無数で地殻変動のただなかに存在する島々に住む人間の特性ともいうべきか。地震で破壊された商店にはほとんど略奪されることなく（窃盗はゼロではないが）商品が残り、体育館などに避難した人々は1週間もすれば家族ごと仕切りを作り、避難所でもきちんと靴をそろえて脱ぎ、食事途中に飲食店から退避させられても次の日には料金をきちんと払いにやってくる。交通機関がマヒしても人々はおとなしく徒歩で帰宅し、バスやタクシー待ちもしっかりと列を作り、道路の渋滞の中でも落ち着いて運転し、座り込むときは必ず歩道で（しかも両端にきちんとよけて座り）、街道周辺の商店が無料で徒歩帰宅者にあるだけの飲料を配り、トイレを解放する。給水や食料に配給、入浴など（日本の自衛隊は災害時の入浴支援のための設備も確保しているのだ）の順番待ちも整然としている。無論これが他国からこう称されるのは、先ほど述べた災害時に生ずる人間の助け合いの精神から生まれるユートピア精神が（または災害ナショナリズムともいう）発揮されることが地学的特性上日本が多いこと、海外の評価や報道に日本人がいい気になって自負しすぎていることがあるからだ。

この男も昨年3月11日、日本の東京都渋谷区にある国連大学にいた時に大地震に遭遇した。この時首都圏の鉄道は全面的にストップしていたのでやむを得ず同僚と共に渋谷駅近くの喫茶店（商品は提供されなかったが、休憩スペースとして店を解放していた）で日付が変わるころまで過ごした。周囲のカラオケ店やインターネットカフェは止めるどころか足止め客を狙って客引きをしていたような気がする。携帯端末が通じにくいせいか、無料となった公衆電話にはそこに長い行列が整然とできた。日付も変わって1時間ほどして、東京メトロ各線、都営大江戸線、三田線、新宿線、東武、西武、東急等の私鉄が運転を再開した時も、乗客、駅員、乗務員ともども普段のラッシュ時と変わらない雰囲気であった。JR中央線快速線の中野駅近辺にある自宅に変えるために彼が乗った東京メトロ副都心線（新宿三丁目で丸ノ内線に乗り換え、新中野へと向かった）の車掌も“お待たせいたしました…”と普段と同じ調子で案内していた。まあ、よく考えてみればこれも人間が普遍的に持つ災害時の（パニックになったら逆だが）共助の精神から生ずる落着きに他ならないことではあるが。別に日本人に限ったことではない、世界的に考えればこれを日本人の美徳のようにマスコミや言論が呼びかけるのは明らかに誤りだった、日本人らしく一時の流行に留まったとはいえ、日本と日本人を危険な全体主義と異なる価値観の排斥という太平洋戦争の過ちの繰り返しに導こうとした。国連関係者である彼だからこそ、あの時の震災をこう捉えることもできる。

地震というものはポケモン達にとってはどう映るのだろうか…建物の外の風景を眺めていた男の脳裏にふとよぎる。昨年の東北・関東大震災では東北に暮らす彼らも大きな被害を受けたはずだ。しかし彼らがその後どうなったかというニュースは全く聞こえてこないが……

同日　日本　宮城県　女川原子力発電所　　１５０５時

日本の宮城県牡鹿郡女川町と石巻市にまたがるリアス式海岸の一角の高台に存在する女川原子力発電所。そこの管理棟の車寄せには多くの宮城県警の警察車両と共に、黒塗りのトヨタ社製のオーダーメイドの高級車、トヨタ・センチュリーが2台停止している。周辺にＳＰらしきスーツを着た男や警察官らしい人間たち、報道陣らしき男女がカメラやいくばくか機材を持ってきている所を見るとここに何か重要な人物がいるらしい。

タービン建屋にほど近い場所にある制御室には緊張感が漂う。２０１１年の震災とそれに伴う原発問題の影響で次々に定期点検停止後の再起動ができない状態に陥った日本の原発。調整運転中だった北海道の泊原発3号機が運転再開したのに続き、冷温停止状態からの起動としては震災後初となる原発の再起動がついに達成されたのだ。まだ数か月は調整運転とはいえ、ついに原発の再開にたどり着いたのである。そのために政府や東北電力や新設された“原子力規制庁”は防波堤の増強や外部非常電源の新設を行ったうえで、宮城県知事や宮城県民をに対する説得と説明を繰り返すという相当な困難を重ねてきた。日本の電力供給を回復させるために、二酸化炭素排出削減の条約を達成するために、そして日本経済を再興・再生するために。

所長らしき男がコンソール中央のマスターキーをひねって始動スイッチを入れる。制御室内にブザーが鳴り響くと同時に正面の表示器のランプが次々に点灯し、出力を示す表示が久しぶりに０から上昇し始めた。ついに原子炉の制御棒が少しずつ引き抜かれ、核分裂反応が再開したのである。それぞれの座席でコンソールとディスプ

レイの監視を続けていたスタッフたちの間に拍手が沸き起こった。

「経産省大臣、規制庁長官、おかげさまで再起動に至ることができました。感謝いたします」視察に訪れた経済産業大臣と原子力規制庁長官に対し、作業着姿の原子力発電所所長は深々と頭を下げる。「いえいえ、感謝すべきはこちらです。日本経済、そして世界に貢献する日本の産業のために電力はぜひとも必要なものですから。これもすべてあなた方所員全員の努力があってのことです。今後も安全なシステムの運転をよろしくお願いします」大臣は差し出された手に握手を返しながら安堵を感じた。これが日本の経済安定化への第一歩となる。我々の内閣も役割は十分果たした、と。

日本の経済成長と高い技術力は、当時の通貨レートや労働者の質のみならず、電力の高い安定性も少なからず影響してきた。そしてその環境の中で生まれた品質の高い製品や技術は常に世界でも高い品質を誇ってきた。日産やトヨタのような自動車産業は言うまでもないし、ホンダ技研が作り出したパーソナル用小型ジェット航空機や三菱重工の無人宇宙船ＨＴＶも有名だが、シャープ、日立、パナソニック、三菱電機、東芝といったメーカーが生み出す洗濯機、掃除機、冷蔵庫、エアコン、液晶テレビといった家電機器は人類が社会的生活する上での宿命である仕事を肩代わりし、食品の品質を常に維持し、暑さや寒さなど過酷な自然環境を緩和し、多くの豊かさ、利便性、そして情報を提供してきたことは言うまでもない。日本の産業の弱点として、経済に対する政府の積極的参画が少ないこと、男尊女卑の傾向がいまだ残るなどの硬直した経営形式が存在するという点がある結果、アメリカ・アイロボット社の小型全自動掃除ロボット、アップル社の音楽端末、イギリス・ダイソン社のサイクロン式真空掃除機のように世界各国で愛用されるようなブランドには

成長できてはいないが、日本のアジアや欧米では日本の家電機器はその高性能、信頼性、省エネルギーの観点で高い評価を受けている。そしてそのような高性能、多機能の機器、精密機械類の発展を促した、すなわち自動車産業と共に日本経済と産業を戦後の廃墟と堕落の中から奇跡的な繁栄に導いたものの一角が世界トップクラスの電気供給の安定性であったのだ。

震災で揺らいだ電力の安定性に対する信頼を回復すること、それはバブル後不況に続くように発生した世界金融危機に追い打ちをかけるような震災と原発問題、それに伴う電力問題で果てしない低迷を続ける日本経済を今度こそよみがえらせることであった。少しでも原発の代替とするために日本各国では停止していた火力発電所をフル回転させて対応してきたが、東京電力横須賀火力発電所のように老朽化した施設も多くトラブルによる停止が後を絶たないうえ、地球規模での（各国政府、無数の大企業、国連すらも）資源・食料開発競争によって原油、石炭、ＬＮＧ，バイオ燃料、ウラン、トリウム、メタンといったあらゆる化石燃料が高騰したに加え、日本の所有するタンカーや資源輸送船や採掘プラントの絶対数不足、大手商社の購買力の相対的低下によって日本国の火力発電所による燃料費負担、それに直結する電気代値上げはますます日本経済の停滞を招いた。それだけではない。火力発電依存はかつて日本の某首相自らがＣＯＰ会議で発表した二酸化炭素排出量の２５パーセント削減に正面から逆行するものだ。水力発電所は無数にはあるが、それだけでは代替できない。宇宙太陽光発電システム衛星を試験的とはいえ世界で初めて稼働させて実験的に地上の受信アンテナへの商用供給を開始し、各地にメガソーラー発電所を建設し始めたが、まだまだ発展途上の技術で出力も安定しない。風力発電所や地熱発電、波力発電も進めてきたが土地収用や新しいタイプの公害等、難題が続

出して予想ほどには増えない。さまざまな省エネ製品・技術の研究開発を推奨し、企業もそれに応えてきたが使用電力が一気に減るわけではない。かといってこれまでのように使用制限令や善意に頼る節電要請は、日本経済と産業に大きな負担となり既に国民の不満も高まりつつある。原子力に対する不信感も当然強いが、経済を再興させ被災地の復興をさらに進めながらＣＯ２削減も達成する。その大きな社会実験には火力、自然エネルギーといった発電、省エネ製品やサービスという様々な分野の協力と共に原子力の存在は外せない。

経済産業大臣の秘書の携帯端末がなる。「失礼します……」男は一室を出て端末に耳を当てた。「もしもし…いかがなさいましたか…」

電話の相手は日本国首相。この男は大の航空機嫌いで、国内移動はもっぱら新幹線か公用車である。で「こっちはもうすぐ小山を通過するが…今防衛省の※※君（防衛大臣の名だろう）から連絡があった…」その声はやや深刻そうだった。「防衛省の？……このあたりで何か…」「さっきから東北…女川から東に８０キロの空域に不審なオブジェクトが滞空しているそうだ。衛星と地上レーダーの索敵ではオブジェクトは国籍不明機（アンノウン）ではなくポケモンのようだが…松島基地からスクランブルするそうだ。危害を加えはしないだろうと言ってはいたが…念のため大臣の△△君に伝えてくれ……」

公用車が待つ仙台駅へと向かう東北新幹線“はやて・こまち１７１号”編成の中ほどのＥ２系１０００代のグリーン車（とはいってもここはほとんど政府関係者で貸切だが）、車内のあちこちに警備員が立つ物々しい雰囲気の中で乗る首相は例年にない大雪にかすむ窓の外に目をやった。この男の内閣は、野党や市民団体、一部の原

発避難民集団の猛抗議の中で原発運転再開を進めた事に対する支持率低下や与党内部分裂の責任を取って来週総辞職することになっている。しかし彼は同時に次の首相になる可能性が確実な代表候補に、自分を問う重要ポストに就ける事を条件にその候補を支持すると交渉済みで、自分の辞任後の立場に関しては全く問題はなかった。

ただ、この男もこの首相としての１年弱を色々と振りかえることがある。自国の事はもちろんのこと、まだ動揺している世界経済、激動する国際情勢、そしてわけの分からぬポケモン達の情勢…今回もなぜ女川の上空なんかで不審な行動をしているのか……??

航空自衛隊松島基地を離陸した航空自衛隊第４航空団第２１飛行隊所属の２機の戦闘攻撃機、三菱Ｆ－２Ｂ（愛称は“バイパー・ゼロ”）は石川島播磨重工と米国・ゼネラル・エレクトリック社の共同開発であるＦ／１１０－ＩＨＩ－１２９ターボファンエンジンをフル回転させて女川上空へと向かう。対空レーダーで近くにいるのは、仙台空港を離陸した日本航空のＢ－７３７－５００が１機だけで、至近に注意すべき民間機はいないようだ。一面平たくしたような眼下に広がる東松島市や石巻市の沿岸部はここからでも復興の活気が見えていた。新たなる防災基準で再生された市街地。ここを含めた東北太平洋沿岸の港湾入口には津波防災の要となる合成波動防波システムの建築がはじまり、多くの資材を積んだ無数のクレーン台船とタグボートが見える。並みの合成原理によって観測、分析された津波と逆位相となる波を都市の地下に設けた波のある屋内プールと同原理の巨大空間で作り出して射出、津波の高さを失わせる。完成すれば地球でも最大クラスの構造物・システムとなるのだ。防波堤はさらに強固で１５メートル以上かつ二重のものとなり、緊急時では船舶の出入り口となる部分を含めて最大２２メートルまで上昇する巨大なシステムだ。

その上で市街地も世界最強の防災都市に生まれ変わった。大小さまざまな漁船や離島を結ぶフェリーが戻っている岸壁に立ち並ぶ水産加工工場兼倉庫の施設は全て鉄筋コンクリートかつ1階は通路、それ以上のフロアが加工工場や倉庫となり、5階や6階が駐車場となっている。またすべての建物が津波が侵入した際の避難場所となるために5階以上の高さを持ち、非常電源や非常物資の常備を義務付けている。1階を通路スペースとすることで万が一濁流に襲われても倒壊しづらい。それ以外、沿岸を走る道路に面する建物もすべて5階建て以上の鉄筋コンクリートであり緊急避難場所としても使用できる。その合間から市街地中心へと向かう道路の交差点の地下には非常防波扉があり、緊急時にはすべての沿岸道路と交わる交差点が最大15メートルの高さまで金属板で閉鎖されるのだ。こちらの方はまだ建造の途中であり、多くの重機や建物上のクレーンが立っている。その内側は市街地エリア、こちらの方では2011・3・11以前とは大きくは変化しないが、やはりすべての建物の1階は駐車場となり、等間隔で避難場所となる5階以上の建物を接地することが義務となった。それ以外の一般の住宅やマンション、路線バスやタクシーの営業所は市街中心部に存在する3メートル以上の盛り土で固められた高台へと建築される予定で、JR仙石線や石巻線、南三陸鉄道などの沿岸鉄道とその駅舎は全て高架化された。こちらの方は既にだいぶ建築が進んでいる。

これに合わせて様々な新産業の誘致も進んだ。そもそもから少子化、地元産業の衰退に苦しんできたこの地域にとって、復興雇用の創設と共に経済の活性化にもつながり、参加する政府や大企業にも大きな利益をもたらす。石巻市や東松島市、岩手県陸前高田市では養殖漁業並びに漁業生物研究センター、岩手県釜石市では鉄鋼業を生かして新金属素材や新型鉄鋼炉研究施設、福島県南相馬市、双葉町、浪江町、飯館村等の周囲には放射線物理学研究施設や放射線医療研究センター、放射線医療機器メーカーの施設というように地域の特色や被災状況に合わせて開発を進めた。また問題の電気エネル

ギーの点でも風力発電所、波力発電所、太陽光発電所の誘致、並びにスマートグリッドシステムの本格的な一般化へと向けて取り組んでいる。こうした経済活動の推進、さまざまな機関の援助、人々の努力によって復興は着実に進み、日本国の２０１２年度のＧＤＰ成長率、すなわちその国の経済力　国力を示す指数を１パーセント台に乗せるレベルにまで回復した。電力不安が解消されれば２０１３年のＧＤＰ成長率は１．５％台にまで持ってゆくこともできるだろう。もっとも、当初目標の２パーセント前半を達成するには為替市場での円高ドル安傾向…１ドル７７円台はやはり大きな負担だ…が好転する必要があったが。

しかし、現在行われているこの大規模な復興都市開発は日本円にして百兆円単位の予算・資金を必要とするうえ、完成期間も２０２５年を見込むあまりも壮大なものであった。当然財政難に悩む日本国政府は赤字国債の発行で対応したが、このあまりにも巨大なプロジェクトに対しては焼け石に水である。このプロジェクトが辛うじて成り立っているのは、国内外の主に国連メガフロート計画で実績を上げた大企業や各国の研究機関の出資があるおかげだ。その条件も、復興都市完成後に企業・機関の当地への進出をすべての費用を控除して承認するという、地元企業にとって大きなリスクを強いるものである。現実はやはり複雑かつ厳しいものなのだった。無論これに投資した赤字となった財政支出の取り返しのめども全く立てないし、１５年後に完成させられる確証もなかった。

あの悪魔のもたらした惨劇、黙示録の世紀末を思わせる絶望の中から当地の人々は這い上がり、国内外の企業・政府・機関の様々な思惑や紆余曲折を経ながらも本格復興へと確実に進む各地。ただ、Ｆ－２Ｂのパイロットたちにそれを考えさせる時間もなければ、その余裕もなかった。飛び出した青空の下に広がる雪雲と、狭くディスプレイやコンソールに囲まれたコクピットからでは人はおろか景

色も全く見渡せず、仮に見渡せたとしても高さからして認識できない。それに東松島から牡鹿半島上空の距離は、ジェット戦闘機から見ればほんの一歩程度、到着まで３０秒そこらだ。すぐにそのオブジェクトは見えてきた。「目標を視認（タリホー）。警告信号を発する」Ｆ－２のパイロットたちはターボファンエンジンの推力を引き下げながら右に２７０度ループすると、目標としてＩＦＦ識別されＨＵＤ（ヘッドアップディスプレイ）に表示された物体（オブジェクト）の後方につく。直ちに機種に装備されたポケモン識別システム付き三菱電機製Ｊ／ＡＰＧ－２ＡＳＥＡ（アクティブ式電子走査アレイ）レーダーが前方を飛行するポケモンらしき物体の発する赤外線や映像を識別・解析し、コクピットのディスプレイの一つに軽快な電子音と共に表示された。

「敵影……ヨルノズク２匹。不審挙動の目的は不明なれど現在も位置そのまま…」パイロットは操縦桿のスティックとスロットル・レバーを握りしめる。追撃のために機体の速度を既に毎時２００キロ前後にまで落としているので、機体の揚力が少なくなり振動を始めていた。「３０秒現状を維持。変更がない場合は警告射撃ののちに撃墜を許可する」「了解」２機のＦ－２Ｂは失速速度に近い状態のままゆっくりと左へと旋回しながらヨルノズクを追う。フラップを引き出した状態でも十分な揚力が確保するのが難しい速度。パイロットは愛機の推力や機首の上げ角度、フラップの具合を微妙に調整し、的確かつ正確にポケモンどもを追撃した。腕のグローブの上から付けた時計の針の刻みがじれったいほど遅い。撃墜許可を待つ３０秒はあまりにも長かった。

しかしその時間はついにやってきた。「警告射撃を行う」パイロットが操縦桿のウェポンセレクターを操作して機関砲（ガン）の位置に切り替え、トリガーを一瞬だけひく。曳光弾の交じった弾丸がポケモンどもの上部２メートル程度をかすめて空に消えた、が、ヨルノズク達に動揺は見られない。そのままの飛行を維持している。パイロッ

トは次の指示を待たなかった。

「排除」その言葉は数秒後にその言葉通りの無情な結果をもたらす。ＪＭ６１Ａ１・２０ミリ機関砲が火を噴き、ヨルノズクを２匹とも血しぶきと肉片となって飛び散った。爆発したポケモンだった残骸が破片と火花を散らしながら落下してゆく……

火花を……??

「こしゃくな連中だ……」パイロットは冷たい怒りを込めた声でつぶやく。「爆竹か…やはり原発を挑発する気だったか…」「全くだ……あれがポケモンの本心というわけか…」もう一人のパイロットも怒りで愛機の操縦桿のスティックを強く握りしめる。無理もない、多くの人々が悲しみと苦しみを背負いながら暮らす被災地上空を好き勝手に飛行した上に爆竹を放り込もうと考えていたなんて彼らにとっても、地上の管制官たちにとっても侮辱以外の何物でもないと考えるだろう。

彼等もまた昨年３月１１日に発生した震災の被災者だった。松島基地のＦ－２ＢやＴ－４や哨戒ヘリのＳＨ－６０が多数飲み込まれ、基地機能を喪失しただけではない。隊員の中に実家を、両親を、妻を、わが子を、友人を多数失ったものは多い。しかし彼らはその悲しみを必死に背負い込み、自らの任務に徹してきた。多くの被災者から感謝の声を掛けられ、全国の国民から、世界からも多くの称賛の声を得た。吉が被災しながらも自らの任務に徹し続ける兵士として。彼らの乗るＦ－２Ｂも基地で水没した１８機のうち、アメリカ・ＧＥ社や三菱重工の修復によって何とか使用可能になったわずか６機のうちの一部にすぎない。政府の慢性的な防衛関係予算不足と財政難で再配備は当面不可能とも言われていが、彼らにとって政治の思惑などはどうでもいい。

多くの困難を乗り越えてきたからこそ、彼らの故郷と人々に対する思いは強かった。どんなにポケモン達が人間の文明を“堕落した守銭奴”と呼ぼうとも、彼らのような困難と苦悩を自らの手で切り開けるような強い意志を持った人間がいる限り我々の文明に負けはない。そう信じていた。だからこそあのような行為は許せない。そもそもあの醜態が気に入らないうえに思考すらも表立ったきれいごとしか言わない連中のあのざまがさらに腹立たしい。

彼らも愛機のＦ－２も落ちていく残骸に何の同情も抱かなかった。ただ、落下地点に漁船や作業中のクレーン台船とかがいないことだけは願った。

「排除確認。各機、帰投せよ」管制官の声とほぼ同時に２機は松島基地の方向へと進路を向けた。

２０１２年　１２月２２日　エメリア　ソーラ大陸　パルク州　国連軍施設の一角　１０２０時

この国連の施設はかなり広い。確かに国連軍・アメリカ軍共同の空軍基地がある地域と施設全体の管理棟周辺はそれなりに建物が多いが、２００メートルほど北西に離れた国連の研究施設からさらに５００メートル北西に入った草原が広がる丘陵地帯は、施設の外周を示す電気フェンスとセンサー以外は本当に何もない自然そのままだ。フェンスの外にも草原は続き、数キロ先に見える小さな森林地帯がこの辺りで最も近いポケモン文明の集落となっている。

「あーあ……結局さっきは何をしてたんですか隊長？それにシンシアは一体どうして…」「いや、別に大したことじゃねえから心配すんな。彼女はちょっとついてきたんだが…体調がどうにもこうにも急にああなっちゃってな……」ピトムニクの心配したような声をよそにバストークは苦しい言い訳を強いられていた。この通常より一回り以上大きいメリープが背中にロコンを…しかも体調がひどく悪そうだ…おんぶしているからにしてプラスルの不安感もあおられている。彼らには人間の軍人のような日課というものが全くない。今日もみんなで（とはいってもしょっちゅう数匹欠けているが）適当に固まっていたら、このメリープとロコンの姿がてっきり見当たらないと思って探しに歩き回ったら、１０階建ての研究施設の２階の一室からロコンをおんぶした彼が出てきたのだ。慌てて飛び寄ったやピトムニクだったが、バストークは「ちょっと色々あってな」で取りあってくれず、「とりあえず外で休ませるぜ」とシンシアを背負ってここまで歩いてきたのだ。

別にこのバストーク・ホルストというメリープの「いろいろあってな」というものをピトムニク・マルセイエーズは何年も聞いてきているし、いくつかの事情も聞くなり、身で体験するなりして知っていたからこのプラスルはしつこく言及しようともしなかったが、それにしても今回の件はいささか奇妙すぎる。なんでシンシアが関わっているのか？なぜバストークはあの部屋にいたのか？

「それだけならいいんですけど…」プラスルは首から下げたＩＣタグ付きの身分証明書を左手でつまんでしばらく見た後、大きく伸びをするように両手を上にあげてあくびをした。「ふあーあ、もうこれでしばらく仕事っていうのもなくなるのかなあ？」

「油断すんなよ。どうせ俺たちは雑用ががりだぜ…」隣にいるメリープも彼女につられたか目を左前脚でこすってモフモフで覆われた体を震わせた。帰ってきて１週間ほどたったが、まだ疲れが取れて

いない感じがする。南半球、夏真っ盛り出映える海を一望できる草原の丘の傾斜もちょっとばかり長く感じられはしたが、疲れるものではなかった。「上のいる人間たちは俺たちをどう利用したいのかは分からねえが、こんな風にごたごたお世話してもらってる連中というのはな、その分めんどくさい仕事がくるもんだ」

「やっぱそうですよね…」「だろ?そうでなかったころ、ほらエヴァンスター特区にいたころは集落の警戒とかだけだったからな」「ええ…」プラスルは丘を一歩一歩上る自分の足を見ながら何年か前を思い出した。

あの時は自治協会防衛軍の一部隊でしかなかったし、その指揮機能も2匹が知る限り（実際は二元の暦でいう１００年以上前から）マヒしていてほとんど軍事行動らしい指示もないままに、彼らの存在意義といわれている集落の治安維持行動だけをしていた。そしてあのころは…彼女は入って数か月だったが、集落のお巡りさん的な雰囲気となっていたっけ…そこの集落の住民たちは、自分たちの事も村人同然にもてなしてくれた……そのころは楽しかったな…人間たちの地域へと部隊が移動になるまでは……

ばしんっ!ばしゅこんっ!?

「な、なにやってるんだあいつら?!」「え、どこ…っ!!!!」そんなピトムニクの思い出回想は前方で起こっている異様な事態を発見したことで突如強制終了となった。前方にいるのは掴み合いになっているベイリーフとグレイシア……どちらも見覚えがとてもあ

る。「ったく!?何やってんだアイツら?」「2匹ともいないと思ったら?!……」2匹は草原の丘を急いだ。

「だから違うんだよ!俺が言いたいのはそういう事じゃ……」「そんじゃ何?!昨日アンタが呼び出された言われたのはフローラこそが敵でアンタがそれを止めると!?アンタ、それを本気でそうするつもりなの?!」「んな訳ないだろうが!フローラが敵なはずとは信じてなんか……」「そんじゃ今すぐにでも行って言いなさいよ!自分はフローラを倒す気はない、その指示には従わないってね!!」ベイリーフを引き倒したグレイシアが凄まじい剣幕で首元の葉っぱに向けて右前足を振り上げる。「…そうしたい……当たり前だろ?……でも従わなかったら……彼女は……」「はあ?!自分の力じゃどうしようもないから、殺してもいいってこと!?このバカっ!!」凄まじい冷気がこもった右前足がベイリーフの首を直撃した。「うぐげっ……」「はっ……もういいし!普段は人間の弾薬庫に飛び込んだり、適当な思考で戦いに行ったりするくせに、そういうことは決められないのね!アンタにはもう期待しないわよっ!」グレイシアはもう一発ベイリーフの首元を右前足で殴りつけると、そのまま息も荒くバストークとピトムニクからみて右側の斜面を施設の方へ向かって歩いて行った。

リーヒュンは横たわりながらますます惨めな思いにとらわれた。昨日サクラに言われたことへの衝撃と絶望が一気に身にしみた感じがする。ついさっきまでは言われたことの重大さが強すぎたがゆえ、冷静に考える事すらできなかった。それが今、テルルに言われたことで意識空間の底からその黒く冷たい悪夢の波が巨大なエネルギーとなって彼の意識の水晶を飲み込み、押し流し、ひびだらけにした。

そう、サクラの言う事が正しければ、フローラを救うことなどできない……

「大丈夫かよ?!」「ケガとかない!?」「…まあ…」メリープとプラスルの声も全く聞こえなかった。

今までにない絶望が、それにさえ鈍感だった自分に対する憎しみが彼の思考を満たす。フローラをもしかしたら殺さなければならないことに対する悔しさと悲しみだけではない。自分はやはり甘かったのだ。こうなる可能性を考えようともしていなかった。そして気づいたこと、それは自分がそういう性格なのではなく、ただ思考から逃げているだけにすぎなかったのだと。

妹を真剣に省みていなかった自分など無用であるどころか死んでしまったほうがいいのではないか?!激しい負の感情が彼の思考を破壊していた。

「ちょっとシンシア?!」「おいおいどうしたんすか隊長!?って兄貴まで?!」後ろからやってきたコリンクとルクシオはびっくりしたような表情をした。コリンクの方、レオ・ミュースカイはベイリーフに飛び寄った。「もしかしてさっきのあいつにボコされたかよ?!」「ま、まあな……」「なんであいつを後ろからやらねえんだ!?兄貴なら余裕じゃねえのか!?」「いや…あれは…俺のせい…」リーヒュンの目線はレオを見ていない。「何言ってんだ……何言ってんだよ……」コリンクはベイリーフの首元を前足でつかむ。「あいつはどう見たってお前にあたってるだけじゃねえかよ?!それなの兄貴はどうして後ろからやらねえんだ?」「……」「ふざけんな……なんか言えっての!」コリンクの爪に強烈な電流がかかる。「兄貴ならあんなうざグレイシアぶっ殺せるだろうが?

！」「……できる…けど」「もっとしっかりしろよ兄貴は！！この野郎、立てって言ってんだよおらっ！？」コリンクの右前足がベイリーフに襲い掛かろうと……

「やめんさいアンタはもうっっ！？」レオを後から押さえつけたのはスカイラブである。「でもラブ、あんな奴許せるかよ……」「そりゃ、テルルは田舎っぺさん…いや、何となくああいう短気な子そうだけどさ…だからってあんたがキレたって解決にならないでしょうに……」スカイラブはレオを掴んで後ろに引きずり戻し、ベイリーフの目を覗き込む位置にしゃがみ込む。「で、兄（あに）さんは一体テルルと何をもめたのよ？それについでだからさ、兄（あに）さんが何を持っているのかもついでにお願い…」

「……そりゃ…あのな…」ベイリーフは苦しそうに首を振る。気まずそうに見ているバストークやピトムニクを、睨みつけるレオに視線をやり、ため息をついた。とにかく思考が回らない。絶望と不安が心を満たし、何かを言う気分ではなかった。

荒々しい足取りで施設への道を歩くテルル。その時、

「おい、何やってんんだお前は？」彼女はぎくりとして立ち止まった。怒りのあまりか至近距離に来るまで気づきもしなかった。「うっ……別に何でもない」不愛想に横を通り過ぎようとしたグレイシアの後ろ左足をそいつの左前脚が乱暴に掴んだ。「はあ？！何いきなり？」

「ふざけんな……何もない訳ねえだろうが……」ブレイブが凄まじい力でテルルの顔を右前足でぐいっと引き寄せる。ブースターは鋭く言い放った。「だから言っただろうが？お前が奴のことを分かってあげないでどうするんだよ？」

「ううっ……」グレイシアは首を振った。今更になってまたもや後悔が押し寄せた。あのベイリーフが言っていることがやはり理解できなくて…あまりにも信じられなくて…私という女（メス）は……

もう遅い…彼とはもう無理かもしれない…彼女はそう思った……

迷走（後書き）

やっと投稿です…どうしても短くできなくて…

クリスマスを超えて（前書き）

こちらではちょうどクリスマスシーズン。まあ、ポケモンにはないんですけど…

気まずい沈黙が流れる2匹。テルルの表情はブレイブが見ている間にも一層気まずく、ばつの悪い、それでいて腹立たしいような物に変化してゆく。「そんな顔したってどうしようもねえだろうが…」ブースターがグレイシアに一歩分歩み寄り、顔を近づけた。「……ンじゃどうするの?私はどうやってあいつに…それを話すの?」

(…あ?……こいつは一体…)ブースターはいろいろな意味で茫然とした。何を聞いているんだ?

「何言ってんだお前は」苛立ったブレイブがテルルの首元を前足で掴みよせた。全く彼女は対人関係というものを学んだことがあるのだろうか?「誤解を解くなんて誰かに頼むもんじゃねえよ、なあ。お前他人とマジで腹を割ったことあんのか?」「は…腹を割るって何よ?」「本気で本音をさらけ出すことだっつの!ま、そんな言葉は俺だって…」「アンタ意外と頭いいのね。性格はだめっていう意外に…」「ううっ、照れんじゃ…てか、話そらすな」彼は少し顔を赤らめてうつむきながらも、首を振って彼女の方を向きなおした。「いいか?本気で野郎に話を持ち出すんだったら、お前も本心を隠さねえ努力、てのが必要だ」「本心を隠さない…の?」右前足で苛立たしげに足元の草をいじっていたグレイシアの動きがピクリと止まる。「ああ、素直に本音を出す、そういうこった。あいつは奴自身と同じくらい他人の表側を他人の全てだと素直に信じる性質だからな。バカに見えるかもしれねえが、良く言えばそれだけ他人のことを信頼してくれるってことだ。それを知ってるやつはできる限り素直に言ってやらんと……」

「そう、それは知ってるの!そうしたいよ……」テルルはブレイ

ブの前足を振り払って何歩か前に進んだ。「でも…できないのよ…」「どうしてだ?」「あいつは私のこと全て……」

ふと後ろからかさっという歩み寄る音がする。いや、“彼女”が接近できたのは2匹が周囲に疎くなっていたか、それともネコ科の肉食動物の雰囲気を感じさせる彼女の種族の特性的性質のおかげなのだろうか。とにかく2匹には、近づいてくるまで気配は感じなかったのだ。「な、どうした……」「お疲れ、あんたとじゃなくてこっちなのよ私は」ブースターは近づいてきたルクシオに乱暴に突き飛ばされた。とはいっても彼から見れば、近寄ってきた彼女の声は（普段からこのたるそうな声が変わった所を彼は見たことがなかったが）そんなに怒ったり感情的になったようには思えない。それとも彼女の顔立ちが種族のわりに間の抜けたやる気のないようなものだからか?

「な、何…いきなり…」なぜかわからないが彼女から感じる圧力を前に、テルルはびくんと体をこわばらせ、一歩分後ろに下がったが、スカイラブがその分以上歩み寄って、両前足で彼女の首の下あたりを掴んだ。「…ふーん…テルルって意外と……」ルクシオがグレイシアの目を覗き込む。「……て言うかやっぱその、田舎な女の子ね」

「い、いきなり?!てか、前から気になってたけど…田舎って……」テルルは彼女が女相手(メス)には向ける独特の愛想笑いを含んだ明るい調子で言葉を発したが、その最後の方はふいに浮かんだる疑問と彼女の目線の前に途切れた。

スカイラブは明らかにテルルに…殺気のようなものを浮かべている…

（……へっ…どうしたの?……）彼女に最初に浮かんだ

のは驚きと疑念。自分が何か彼女とトラブルになるようなことをやらかしたのか？

「……そのままよ、そのまま！アンタみたいな女は自分と会わない奴を容赦なくはねのける！もう少し努力ってのはないの？」ルクシオは、低く冷たく言い放った。前足の爪もとにわずかながらに電力がかかり、グレイシアは肩にあたる部分に鈍い痛みを感じる。「…どうなの？図星ね……」

「……あ、あらかさまに言うのねラブは……」テルルは衝撃で反論することもままならない。「結局認めるの？……否定する場所でしょそこは！」スカイラブの脅迫じみたセリフは止まらない。

「そういうのをプライドにするなんて……大丈夫？…」

「おいおい！何の話だっての！ラブがこいつに絡むような……」ブレイブがルクシオを引き離すべく飛び掛かったが、彼女はブースターに振り返る。「アンタ…リーヒュンの…さっき会ったんだけどさ…あの兄さんの友人だったよね？」「な…おい…そうだが…」驚いたする表情をする彼を見て、ルクシオはにやりとしながら緩んだ彼の前足を振り払った。ブレイブの思考に鋭い衝撃が走る。これはまずいことになりそうだ、ぼんやりそう思った。なんとなく。

「まあ…私もあんまり深くは言わないけどさ…さっきあの子が言ったんよ。テルルとは妙にウマが合わないってね」スカイラブの声は徐々に普段の調子に戻っていくが、相変わらず不満げというか、テルルに懸念を示しているような調子は隠せない。「私にもね…テルルみたいに辺境っぽいところに住んでたり、世間をあまり見ずに育ったりしたよ。違和感も感じるよ。だけどさ……だからって何とか通じ合う努力しないでどうすんのよ？」「……うううっ」

グレイシアは俯いたままだ。ブースターは不審に思った。いつもの彼女なら何らかのリアクションを起こしているだろうに？

このお説教にも似た者は始まりも唐突だったが、終わりもスカイラブ・バトルスターらしく（？）あっさりとしたものだった。ルクシオはテルルの首の付け根、グレイシア種族特有の鎖骨辺りから前足を離し、軽くなでてやった。

「ま、私の言いたいのはそれだけ。頼むわよテルル。少なくとも仲間割れとかはやめとくごとね。彼にはちゃんと話したほうがいい、てこと」彼女は、普段のぼーっとしたような足取りで、国連施設の方へと向かっていく。その際にも彼女はテルルの3つひし形模様の入った背中を尻尾でなでていた。「んじゃ、テルルをよろしくね、ブレイブ」「お、おう…んじゃ」ブースターは普段と全く変わらぬ動きで立ちさるルクシオを茫然と見送ることしかできない。

「お、おい…」「……」ブレイブは俯いた彼女の右前足絵を自分の左前脚でさすったが、グレイシアは微動だにせず、青銅の像の如くかたまっていた。ブレイブは完全に硬直状態に落ちいている彼女の表情を覗き込んで思わずたじろぐ。テルルはショックを受けているわけでもない。スカイラブに指摘された点で落ち込んでいるわけでもなかった。

テルルの口元からかすかな、しかし確実にその声はもれた。黒々と渦巻く意識を満たす毒気を放つ液体から。「……あの野郎…」

彼女の、草原に人間によって突如湧いたように作られたジャーマングレイの（正式にはアスファルト舗装だが）固く凝固させられた道の脇にはえる舗装のはがれと土、そこから伸びた雑草を見つめる瞳は憎しみと怒りに震えている。テルル・アストラフスキーのプライ

ドという意識の水晶を維持する外壁は発泡スチロールを握りつぶすようにバリバリと崩れていった。さばさばした雰囲気だったはずのあのルクシオの毒舌を通り越した嫌味に近い発言の前に、グレイシアのここにいる女達（メス）に対する信用というものの一部がついに崩れ落ちた。信用しない相手に対してテルルが抱く感情、それは彼女のそばにいるブースターがよく知っているあれである。すでに彼女の意識下には、スカイラブに対する普通の感情はもはや全く感じず、それどころか異次元にある正体不明の物体に小馬鹿にされたような不快さや気持ち悪さにまで発展していた。彼女の全てが気に入らない、いや気に入らなくなった。リーヒュンと問題を抱えてしまったこと等一番苦しいのは自分だ。なのにあの女は…彼女は薄々思っていた。スカイラブが意外と自分と似た境遇を持っているのかもしれない、と。なのに奴は自分のことは棚上げで、エラそうな説教じみたことをつらつらと…

「……何よあのゴミクズ（・・・・）……よくもまあ無様にここまで生き残れてきたもんね……アンタだって変わりないじゃない……」テルルの声がさらに恐ろしく、凍りついたものになる。

ブースターはこのグレイシアになんと言っていいかわかないどころか、その恐ろしい表情に後ずさりしかけた。直感はこういっている。うかつに口を今はさむのは極めて危険だ。今下手なことを言ったら、殴られるどころでは済まない。自分にも彼女にも大きな傷を与えるだろう。ブレイブは後ずさりしかけた。その恐怖や不審感が自分の足元や耳元に寒気となって現れ、それなのに自分の顔から腹にかけては何もできない自分に対する憤りとやるせなさで熱くなった。しかし、そこはブレイブ・クレイバーらしくやるせなさに対する葛藤の方が勝った。彼は首を奮い、ぐっと彼女に歩み寄る。殴ら

れることの一階矢に買いが何だ?俺はそれくらい我慢が効くじゃないか?

「……バカ…そういうことは言うんじゃねえよ……」ブレイブはテルルのうつむきがちな頭をグイッと前足で持ち上げた。彼女の眼は彼を無表情に睨みつけている。彼はやや顔色を窺いながらも続けた。「……お前の気持ちは分かるけどよ、今はお前とリーヒュンの関係を直すのが最優先だろうが?ラブに対する不満はそれから言えよ。いいな?」

「……」テルルは恐怖感を覚えるほどぶぜんとした表情のまま頷き、ブレイブの前足を振り払って施設の方へと歩き出した。気に入らないどころではない、今までに感じたことのない敵愾心、自分の脅威となりうるとまで感じた。

一方、統合空軍の十字状に交差する2本の滑走路のうち、海側、すなわち南北を両端とする滑走路の南側の先端付近の草地では、ロックオンとチェギョンが適当に空中戦を演じ、グラシデアが時々それにわりこんだり眺めたりし、ガトルがグリソムのホタテ貝の使い方を特訓していた。ここから西に1．5キロほど行った草原で起こったトラブルなど知る由もなく。

「ンと……このこのこのっ!!」「うーん?どうしてかからないのかな?」グリソムが後ろ前足で立ち上がり、右前足でカルシウムを主成分とするホタテガイの貝殻をしつこくガトルの尻尾に向かって振り上げるが、パチリスが自分の尻尾で軽くミズゴロウのホタテを受け流す。その最中、一発が一瞬エネルギーがかかったように青白くなった。「おっ!かかった?!」「来た来た!頑張れ!」ガトルもその衝撃を感じたらしく、まさしくまだ15歳、すなわち大人にもなりきれず、しかし子供を抜けてしまったという葛藤の最中にいる人間の女子学生そっくりの高い声を上げる。「よし…それなら…」グリソムも勢いに乗ってさらにホタチを奮ったが、それがまぐれだ

ったようだ。それ以降全くでない。「どうなってんだこれ!?はあ…おいらじゃやっぱり種族の問題なのかよ?」彼はなけなしの一発がパチリスの尻尾にあっさりとたたき返されるのを見て疲れ果てたか、がっくりと前足をついた。ミズゴロウ種族が他の4本足種族と比べていかに足腰が固めにできているとはいえ、さすがに連続してやるのには限界がある。犬やクマに2本立ちさせるのが道化師の見世物であるのよりは数百倍ましな動きをするが。「そんな訳ないよ。ホタチがミジュマルとかフタチマルの特権な訳ないし!もう少しやってみよ!」彼女はグリソムに駆け寄り転がったホタチを彼に渡した。「う、うん……」「ほらほら、元気出して。レオみたいなバカには任せられないんだから!」「まあね…でもおいらじゃ隊長になるのは奴がいる限り無理だよな…」「そりゃそうよ。あいつに変われなんて言ったらねえ」それでもグリソムとガトルのやり取りでは、レオに対する嫌味や抗議を込めたものは何一つなかった。不満はあったが、あのコリンクはいろいろな意味で隊長だった。たとえまだ15歳の部隊であっても、周囲から“学徒動員”と冷やかされたり哀れんだ目で見られても、不器用で喧嘩っ早いながら自分たちを導いてくれた、そしてこれからも引っ張ってくれるコリンクだから。

「相変わらず読みやすい飛び方だなお前は。これが流行かよ?」「よ、読みやすいって…手かそれって流行も何もないんですけどお!?」「ないのか…俺が一つ考えるか」「考えてもいいですけど…めっちゃ…なんかこう…あれなものに仕上がりそうですね」ロックオンとチェギョンは上空で撃ち合いながらもくだらない世間話が絶えない。とはいっても、戦闘のトレーニングのほうは抜かりない。ムクバードのつばめがえしをチルタリスは宙返りを打ちながら上へと振り切り、下からと上がろうとするムクバードにりゅうのはどうの弾丸を撃ち込む。「ううぐ……そんなら!」放たれた3発中、ロッ

クオンには1発直撃し、激しい衝撃に失神しかけたが、彼はどうにか保って全力でチルタリスを飛び抜けて上を取った。「もらったぜ…」「はあ?!…ええいっ!」チェギョンは慌てて急降下で加速をつける。「うんぐっ……」「その程度でっ!」後から飛んでくるのは“かぜおこし”か“エアスラッシュ”か（後者の可能性は低いが）彼女に判断する暇もない。地面すれすれを通過する背後でムクバードが生み出した風が草を刈り、土くれを飛ばす。種族的にはロックオンの方がチェギョンより速い事は、チルタリス自身分かっている。追いつかれるのは時間の問題だ。

そこでというのも何だが、彼女はぎりぎりまで詰めさせて一気に仕掛けた。「こんのっ?!」激しい重力加速度に頭の血流が鈍ったか、一瞬めまいのようなふらつきを覚えながらも左旋回のそぶりを見せつつ上に切り込むように飛び上がった。「っ!?」ムクバードは一瞬動揺したようなひょじょうを見せて、彼女の動きを見計ら駆って左に軽く切り返しながら真上へと飛び上がる。これがチルタリスの待っていた瞬間だった。戦闘速度に入ったひこうポケモンは旋回をかけながら上に切り込むと大きく軌道がずれる。そこが好きになるのだ。「もらったあッ!!!」彼女が待ちに待ったもの、勝ち誇った声を上げてりゅうのいぶきのエネルギーをぶち込む。

だが……「甘い、甘いぜそれは」「えっ!?」ムクバードはエネルギーの直線をアッサリかいぐり、チルタリスに高速で迫る。チェギョンが行ったこの方法には致命的な欠陥がある。相手の旋回半径を利用した上からのアタックでは、攻撃する本人は停止状態となる。これはある意味では自身が絶好の的になってしまっているのだ。乱戦状態においてこの方法を的確に利用し、かつすぐに次のアクションに移るには極めて高い戦闘力と経験が要求される。お世辞にもチェギョン・カリワザキにそこまでの能力があるとは言えない。

その一方でムクバードがレーザー光線同様、直線状のエネルギーである“いぶき”をひねりながらかいくぐれたのはロックオン・ストラン自身がかなりの強者であるという動かぬ証拠。2機の能力差

（＝経験値）は広かった。チルタリスの目の前にみるみる相手は迫る。「動くなよおっ…」「だ、誰が言われて止まってんの…」命がけの戦場ではないとはいえ相手が迫ってくる、そんな彼らにありがちな恐怖心のあまり彼女は既にやけになっていた。そんな中、チルタリスの脳裏にある反撃手段が思い浮かんだ。六すっぽ考えなかったがもう仕方ない、このままムクバードの攻撃を無様に受けるよりははるかにましだ。彼女がとった奇策は……

「どふぁアッ?!」「うげえっ!?」チェギョンのモフモフ翼がロックオンに飛び掛かった。おそらくは“とっしん”のつもりか、しかしその勢いはかなりあった。バランスを失った2匹。チルタリスがムクバードを叩きつける姿勢でそのまま滑走路わきの草原に…

しかし地面に叩きつけられる0．5秒前にロックオンの体にかかった圧力は衝撃音と若干の静電気程度の痺れと共に解放され、彼はその隙に羽ばたきで揚力を取り返して、足から普通の鳥と同様に着地することができた。この感覚に彼は覚えがある。チェギョンには申し訳ない気もしたが、助けてくれたのは何せ下にいた彼女だ。ムクバードは振り返るなり、モココに軽く飛び寄った。鳥類型種族の彼にとっては短距離でも歩くよりとんだ方が速い。「おお、済まねえなグラシ。俺を助けたのか?」「え、ええ……何となくまずいかなあって思って…」グラシデアは顔を真っ赤にしながらもごもごと答え、首周りのモフモフを直す。「そんな照れるなよ…ま、俺だからかな」「い、いや…やめてくださいよもお…」「遠慮するなって」ムクバードが翼でグラシデアの首から肩にかけるモフモフを直し始める。モココの方はますます顔を赤らめたうえに、彼のやり方では彼に寄り掛かるような姿勢にならざる負えず、パッと見ではまるで抱き合っているような感じになった。ただし、それほど長い時間ではなかったが、そんな中にも彼女の心境に今まで違うものが浮かび上がるのをモココ自身感じた。「……なあグラシ、お

前は親父さんにモフモフを直してもらったことあるか？」「……ない…ですけど」「まあ……あのおやじさんのことだからそうだとは思っていたが…自分でいろいろアレンジとか、したことはあるよな？」「うーん？…あんまり…」「もったいねえなあ、グラシちゃんは顔だちも姿も結構いいのに。ピトムとかにでも聞いてみな」「は、はあ…」間違いない。モココはムクバードの翼からほのかに、しかし確かに暖かいものを感じた。「そ、そうですよね…こんな時にバストークがいなくて良かったな…」初めてこのモココはグラシデア・セルビア・ホルストとして初めてこの男（オス）にある感情を抱いたような気がした。

「あのー……私は放置ですか？あーもうめっちゃヘコんだわぁ！？」２匹の背後で、グラシデアのエレキボールを浴びて痺れた上に地面に叩きつけられたままのチェギョンが呻く。「あ、あ、ごめんね！なんか忘れてた…」モココがチルタリスに飛び寄る。チルタリスはいつの間にかため口になっている彼女にショックを覚えながらさらに続けた。「別にこれくらいの攻撃ならどうってことないけどさあ、グラシもこんな男（オス）に夢中になって気づかないなんてひどいわよお…」「ご、ほんとごめん…てか私、霧中に何か…夢中になんか…」グラシデアはますます顔を赤くして視線をそらす。ロックオンがチェギョンに軽くジャンプするように滑空して飛び寄った。彼もまた顔を赤らめている。「あ、あのな…ここでそういう事を言い張るなって……とにかく」ムクバードが右の翼でチルタリスの頭のひらひらの付け根を押す。「お前の能力じゃ、ああいうのは無謀ってもんだ。後ろや周囲の先を読めねえ状況で策略を仕掛けるのは１００年早いな。まあチェギョン、あれだけ飛べるんだったら、経験を積めば俺以上に空中での静止戦闘ができるのかもしれねえが、それまでは飛び回って確実に取りに行くのが無難だぞ」

「はあ、でも…」チルタリスは痺れる体を何とか起き上がらせなが

ら不満げに続ける。（“俺以上”ってどういう事よ?）彼女にはムクバードが単なる自意識過剰にしか見えない。まあ、最後のセンテンスは真面目なのかもしれないが。「でも、はダメだ」ムクバードが真顔で言い切る。「お前の今の腕じゃ、チェギョンの性格と重ねてみたら確実に派手な戦闘は無理だぜ。お前自体ちゃらちゃらした点と金持ち一家らしい目立ちがり屋な点は多いのは理解できるが、今は地味でもカッコ悪くてもスタンドプレイもどきは止めとけって。何せ…」彼は左翼で頭の飾りを軽くはじき、青空を見上げる。「…今のところ俺の唯一、一緒に空で死ねる相手だからな。…今まで俺がそうできなかったように…」彼の目線、夏真っ盛りの南半球低緯度地方の青空には、今までこのムクバードが、ロックオンが見届けた同僚の、そして航空自衛隊やアメリカ空軍の同期達の、表情が顔が映る。みんな死なせてしまった…自分だけはいつも生き残ってしまう…雪辱と無力感が彼の羽に、骨に、通常のたんぱく質以外にSE粒子とエメリウムを含有する…すなわちポケモンである証拠…臓器に焼けるように広がる。

「うっ……はい…」「大丈夫?!」「うん、なんとか大丈夫じゃない微妙に…」チェギョンはグラシデアに支えながらも何とか起き上がって翼を直した。その表情には煮え切らない、とはっきり出ている。それどころか彼女はいろいろな点で落ち込んでいた。隣にいるモココにため口にされたこと、そして今さっき、ムクバードに指摘されたこと。

自分の性格を否定されたこともなかった。自分が派手だと思ったこともなかった。そして自分の能力は十分通用できると、うぬぼれではないが信じていた。それを彼に破壊され、これまでにない自分の存在自体に対する疑問が意識下をぐるぐるとまわる。足元が浮いているような呆然とした感覚が彼女の末梢神経をいつまでも支配していた。

「あーれれ？大丈夫チェギョン？」そんなチルタリスの後方から、これもまた音もなく誰かが近寄ってきた、というより遠くから飛び付いてきた。チェギョンにはなんとなく誰だかわかる気がする。ずんぐりと大きめの影、いつの間にか接近してくる神出鬼没さ。そしてこの甲高く幼稚な調子の声。彼女にとっては、こういう時に元気の出る（無理やり出させられる）存在だ。

「ユイリィ……ぜ、全然大丈夫！この通り」チルタリスはメガニウムに健在ぶりを見せつけるが如く体を震う。「うーん…それは見かけ倒しかなあ？…グラシのエレキボール喰らっちゃって、そう簡単に余裕顔はできないかと思うけど…」「なーに言ってんのよ！ほらほら、私の方からむぎゅっとやってあげるわよ！くらえええっ！」チルタリスがメガニウムの花びらの首元にモフモフ翼で抱っこされるが如く飛び付いた。「あはは！気持ちいい！やばい！うける、笑える！！！もっともっと！」「でしょでしょ？もふもふうっ！！…」「きゃはは…」

「……あの２匹ってああいう調子が普通なんだろうね」「うん、それで問題がないからそれでいいんだろうけど…」その調子を見つめるグラシデアのそばにガトルが寄ってくる。モココとパチリスは習慣的の尻尾同士をくっつけていた。でんきタイプの種族同士は、それぞれの性格意外に、お互いから発せられる静電気の周波数や電圧によっても馬が合うかどうかが決まることもある。モココの感覚ではパチリスとの相性はかなりいい感じだ。「そう言えばさあグラシ、さっきのエレキボールはどこで習得した感じ？」「うん、なんとなく、かなあ」「う、うそ？！自然にできてきたって感じ？」「うん。私はバストークの一応娘でしょ？彼にくっついて色々なところに行っていたらできるようになったってとこ。それなりに訓練も練習もしたけど」「すごーい！お父さん譲りだと思うよそれ。感謝感謝、だね」ガトルがグラシデアの首の後ろに飛び付き、ぱちぱちと火花

が散る。「あ、ありがと…」モココが微妙に表情を曇らせ首を振るざまを見たパチリスは、表情を変えてもここの右肩に彼女の右手を当てた。「え、え?ごめん!なんか嫌な事だった…?」「違う…でも…バストークにもらったとは思いたくないな。自分で手に入れた物の方がいいのよ……」グラシデア・アマルフィ・ホルストにとって、父親であるバストークは父親ではなく通りすがりの男、それくらいの感情しかなかった。なぜなら……彼女自身も父親もそれによって傷つき、人生を狂わされたのだから。そのことをまだ15歳のパチリスに愚痴ったところで彼女の方が苦しく悩むだけだ。この問題は自分自身で蹴りをつけよう、そう決めていた。

まあ…できればロックオンが、あのムクバードも手伝ってくれるというのなら…この限りではないのかもしれないが……

2012年　12月24日　中国　四川省の成都市　アップル社下請け「フォックス・コン社」の工場　1715時

終業時刻も過ぎ、多くの男女が徒歩で、自転車で、自動車で帰宅の途につく。数千人単位の労働者を抱えるアメリカの電子機器大手、アップル社の下請け企業であるフォックス・コン社で最大の工場である成都工場を黄昏がつつみ始めていた。例年にない豪雪に包まれる工場地域の奥には、中国特有の派手な電飾やネオンサインが輝く成都市街の高層ビル群がぼんやりと見える。

今や新世代の携帯情報端末として先進・新興・途上を問わず地球上人間文明の各国で利用されているｉｐｈｏｎｅやパソコン、モバイルフォン、書籍が融合した次世代の情報端末として前者同様、地球上のさまざまな場面で、宇宙ステーションや月南極の月面資源採掘基地でも利用されているｉｐａｄは半導体、集積回路、コネクタ

ー等の精密電子機器の塊である。そのうち半導体・集積回路や液晶パネルなど精密かつ繊細な加工が必要な部分はアメリカやヨーロッパの下請け企業が生産を行う一方、マザーボードやコネクターなどのごく一般的な部品に関しては人件費の安い新興工業国の（まあフォックス・コン社の本社がある台湾は、日本や韓国と同様そう呼ばれる国々よりはいち早く工業化したが）下請け企業で行われている。この工場ではアップル社以外にもパソコンメーカーであるデル社やＨＰ（ヒューレット・パッカード）社といった（ともにアメリカ）企業にも精密機器用電子部品を供給しており、近年の情報化・情報機器需要の急激な高まりによって、生産ラインが常に稼働している状態が続いている。中国企業は下請け工業中心の国家から脱却を図るため、このような場所にも多くの政府の視察団や大学関係とパイプを持つの技術者を送り込んで自国企業の生産技術を高める努力を重ねている。

しかし、その需要の高まりともなう増益と生産量増加に目がくらんだか、工場の上層部の中国人は労働者に長時間にわたる労働を課し、乾いたぞうきんを絞るような生産効率化への強圧的ともいえる指導を繰り返したらしい。これに世界２位のＧＤＰを持つにも関わらず中国一般市民の所得水準がなかなか向上しない主要な原因ともいえる労働者賃金の伸び率の鈍さが重なり、ストライキや個々のサボタージュ、果てには自殺者の続出など様々な問題を引き起こした。

これだけでは済まない。中国で昔から指摘されている施設の構造や強度や設備の手抜き工事、欠陥品の使用などのハード面での問題も多かった。これによって引き起こされたのが昨年５月に工場で発生した爆発・火災事故である。死者２名、負傷者１７名を出した爆発の原因は空調機器回路の短絡（ショート）や粉じん爆発等様々な説が入り乱れたが、結局正確な結論は出ることはなく、十分な対策も施されることはなかった。それ以降その類の事故は起きていないが、生産品の品質が向上しないこと、設備面や人材面での整備のいい加減さ、事故の調査や対策のに対する姿勢の低さは現在でも中国の経済活動と中国製品の風評を悩ませている。

工場の正門からは多くの人が出てきている。携帯端末を操作したり、音楽端末のイヤホンを耳に入れていたりする人間がよくみられ、このような工場労働ではあっても男女比率を比較した際に意外と女は少なくない。

この国の工場労働者の生活水準もそれなりに上昇してきているのが目にとれるが、現状は決してそうではない。確かに十数年前と比べて、都市部に住むいわゆる富裕層に続いて、事務所や工場でサラリーマンとして働くいわゆる中間層、庶民層といわれる人口が急激に増え、彼の生活水準やスタイルも徐々に欧米…特にアメリカ、イギリス…、日本、韓国、台湾の現在のそれに少しずつ近づきつつある。

その一方で中国、インド、ブラジルといった人口の多い新興国が米欧先進国のようなライフスタイルに至ることは、それだけ多くのエネルギーを消費し、二酸化炭素をはじめとする排出物を出し、環境に負担をかけるという事でもある。ただし、環境のために資本主義と自由市場をベースとした欧米風の豊かな生活を阻害する権利は誰にもないのは前述した通り。多くの新興国は、ＣＯ２削減自己目標を提示して削減に努める一方、低排出自動車、省エネ機器、原子力発電、太陽光発電、風力発電、水浄化装置、植林技術、低環境負荷・高効率の農業技術といった低公害・低負荷の技術やサービスの発展を支援することを要請し、欧米側の企業やＮＰＯもそれに応えつつある。アメリカやヨーロッパの企業にとっては市場を獲得するに加え、“地球が一丸となった環境対策”（アメリカでいえばクリーンニューディールといい、ＥＵでいえばＣＯＰ削減目標となる）という自らが掲げたものを達成できるし、新興工業国にも自国の産業の育成や発展、雇用の改善に役立ち、環境対策にも取り組んでいるという大国になる上で重要な“優者の責任（ノーブレス・オブリージュ）”をアピールする絶好の機会であるという双方で利害の一致をみるからだ。

ただし、人口を13億人も抱える中国にはいわゆる貧困層が2億人いるという。さらに定住居を持たぬ路上生活者もいまだに数億人いるとも言われている。貧富の格差はまだまだ残っているどころか拡大する一方だ。さらに、人口抑制策の副作用がじりじりと出現し、急速な少子高齢化とこれに伴う高学歴志向が農村からの人口流出と高齢化をもたらし、さらなる農村の貧困・慢性的経済停滞を招いていた。しかし現在の政府当局にこれを本気で取り組もうとする姿勢は、世界各国や国連の懸念にもかかわらず見られない。経済成長と技術の発展による国力増強が第一目標なのだから。

その中で数人の同僚と共に出てきた一人の男も、給料を工面して半年前に手に入れた次世代型携帯端末（スマートフォン）を眺めている。この男が郊外農村から成都市に出てきたのは一昨年。もちろん家族の生活資金を稼ぐとともに、将来の資金を稼ぐためでもある。将来はいい嫁さんと子供をもらってマイホームを持つ生活をしてみたい…マイカーもあったらな…というのはあくまで夢だった。まだこの国の庶民層では一軒家もマイカーも、庶民の財布にとっては少し高嶺に咲く花。今まで貯めてきた資金の一部をやりくりして端末を手に入れたのが彼にとって精一杯……

携帯端末のバイブが鳴る。「お、鳴ってるな…誰からだ？」「…うん…」男が端末を取り出してチェックする。「来た来た、お前の彼女か？」友人たちが茶化しだす。この男、ちょっとした成り行きからだったが、間借りしているアパートの隣人の女と昨年から交際していた。彼女もまた日系家電機器メーカーの工場に都市郊外から出稼ぎに来ている人間だ。「まじか、まじか！」「んなこと自分で自慢すっかよ？」「ほらきやがった！今日はクリスマスだぜ！俺たちの給料は相変わらずだが、なんか買ってやったよな？」

「マジ…」男の表情が一変し、端末の日付表示を見る。彼は首を振って遠くにある成都市のビルのネオンサインを見つめた。すっかり

忘れていた。この所は需要の高まりだとか増産だとか言ってほとんど休みなしに働かされた。いつかはプレゼントを買ってやろうと金まで準備していたが、いつの間にかその日が来たとは……

北半球各国は例年にない雪に覆われる今年…あの日がやってきた。

２０１２年　１２月２４日　フランス　パリ市　１９０５時

フランスの首都、パリ市の象徴ともいえるエトワール凱旋門は中心市街地にほど近い位置にある。この凱旋門を中心に放射状に伸びる通りの中で最も自動車や歩行者の往来が激しい、ピュトー地区方面へと延びるグランド・アルメ通りの車道と歩道を分ける街路樹と市街灯、そして凱旋門自体さえもがまばゆい電飾に包まれライトアップされていた。相変わらず混雑しているタクシー、シトロエン製のＣ３，Ｃ４やプジョー製２０７等といったの中・小型車が中心の自家用車、観光バス、二輪車も、歩道でその幻想的な光景を携帯端末やカメラで記録する人々もクリスマスツリー同様の青白い美しい光に包まれている。凱旋門の隙間からは、セーヌ川沿岸の再開発高層ビルの光がやはり星空のように輝いている。

降りしきる雪、広大な市街地の様々なところでみられるライトアップ、大きな紙袋を抱えた人々…皆それぞれが美しいライトアップを眺め、今年を振り返りながら歩く。彼らが思うのは、家族か、友人か、愛するものか、自分の生活か、将来か、それぞれだろう。先週ドイツ・北海周辺で起こったポケモン大量死事件への不安感を感じる人もいるのだろうか。

そう、人間たちでいう今日はクリスマス…特別な日なのだ……

２０１２年１２月２４日　アメリカ・カルフォニア州　サンフランシスコ市　１８００時

　サンフランシスコ市の象徴であるゴールデン・ゲート・ブリッジを通って、市街地を南北に走る国道１０１号線とインターステート２８０号線沿いの地区。情報機器をはじめとするハイテク・電子機器産業が多数進出し、全体的に再開発の進んだ市内でも格別に高層ビルが林立する市街南部、電子機械産業の工場が多いサンフランシスコ・ベイエリアにもほど近いサウス・オブ・マーケット地区は１８５２年の観測開始以来、昨年までに１０回しかなかった中でも最も激しい雪に見舞われていた。世界的な寒波とはいえ、サンフランシスコ市の人々も今年のまさに異例な大量の積雪と寒さに身をすくめていたが、今日ばかりはそうでないようだ。ビルのオフィス、街中の商店、上から下までさまざまな階層の住宅、太平洋航路の拠点の一つとして多くの貨物船が行き交うゴールデン・ゲート・ブリッジ、ＭＵＮＩ（サンフランシスコ市営鉄道）の路面電車やケーブルカーの駅の事務所にさえ電飾のついたモミの木、派手なＬＥＤ電球が取り付けられ、すっかり暗くなった市街地に市街灯や街の明かりと共に輝いている。

　ベイエリアの観光スポットでもあり、サンフランシスコ市最大のショッピングモールでもあるベイ・ストリート・モールは、クリスマス当日にもかかわらず大勢に人間でごった返し、駐車場も相当数埋まっていた。その中の１台、欧州の工場で作られたフォード製フォード・クーガから降りてきた男もまた家族へのクリスマス・プレゼントを買いに来たのだ。郊外にある某大手電子機器メーカーに務めるこの男にとっても、金融危機以後の経済状況が良いとはいないが、せめてクリスマスの時ぐらいは、というのが彼の心情である。アメリカの２０１２年のＧＤＰ成長率は３．８％にまで回復したも

のの、非農業労働者人口の数が横ばいであるとかニュースで言っていたが実感など全くない。せめてもう少し合衆国や努める企業の製品の主な商売相手の中国やインドといった新興工業国が安定してくれれば、とは思うが、今はそんなことは気にしてはいなかった。小売業界にとって今年のクリスマス商戦も今日が最後になるだろう。少しでも値下がりして、いい物があれば、そう思った。帰った時に娘や息子は起きているだろうか……

同時刻　（１２月２５日）　ソマリア沿岸から北に約２０キロのアデン湾　０３００時

　世の中のクリスマスムードというものは、この場所にとっては無縁の言葉のようである。ソマリア北部の沖合、通称アデン湾と呼ばれる海域は、地中海・スエズ運河・インド洋と南アジア・中東・北アフリカ・ヨーロッパ・地中海国連メガフロート群を結ぶ重要航路だ。新興アジア工業国からは航空機では輸送できない大量の重工業製品…例えば自動車や電気機器…はここを通じてヨーロッパや北アフリカへ、ペルシャ湾周辺からの大型の原油輸送船（タンカー）はここを通ってヨーロッパや北アメリカへと向かう。これらに加えて世界一周の大型クルーズ客船や地域を結ぶカーフェリーも行き交う。まさにグローバル社会における交通路であり、衝突や異常接近を防止するために各船舶にはＧＰＳ衛星連動の管制機器を搭載することが求められてる。

　しかしこの地域・海域の治安は“世界最悪”といわれるものだ。その理由は海賊の存在である。とはいっても多くの皆さんが連想する某マンガのような海賊ではない。ソ連製のアサルトライフルや対戦車ミサイルで武装した屈強な人間たちが、小型のモーターボートに乗って大手海運会社のコンテナ輸送船やタンカーを襲い、金や物

品を奪い、身代金を請求するという極めて“現実的”な犯罪行為である。現代の民間船舶が、大航海時代のように金銀財宝を満載しているはずがないからだ。船によって葉摘んでいる原油や天然ガスも莫大な利益をもたらすが、人々にそれを商品にする能力はなく、手近な金や物が彼らには一番価値がある。ではなぜそのような行為に走るか？海賊の構成員の大半はソマリアなどの沿岸にある経済成長の特に遅れているアフリカ東海岸の国々出身であることが多い。今までに政治的空白に伴う無法状態で機能していない沿岸の当局や警察に変わって海賊の取締りを行っている欧米諸国や中東諸国や中国など航行が多い新興国の海軍、沿岸警備隊、民間軍事会社、国連統合海軍ソマリア派遣部隊等が拘束してきた海賊構成員の供述によると、構成員の大半は生活資金を目的とした被雇用者（エンプロイ）（ｅｍｐｌｏｙｅｅ→雇われる者）であるらしい。そして彼らの多くは漁業に従事する人々であった。

ところでソマリアやイエメンといったアデン湾沿岸の中東やアフリカでは、魚を食すことは習慣的に少ない。そこに海賊に身を落とす大きな要因がある。水揚げされた海産物の多くは周辺国…特に地中海沿岸のアフリカ諸国や南ヨーロッパ諸国…への輸出となる。それが１９９１年の内戦による政府崩壊で周辺国との適正な貿易が不可能となり、輸出が困難となった。当然この結果は行業に従事する関係者の生活を直撃する。もともとから経済発展の遅れで生活水準の悪いこの国では、収入を絶たれるという事はそのまま人生の暗転に直結する。水産物を捕獲して自給自足すればいいと思うかもしれないが、さらに追い打ちをかける事態が発生した。アメリカや欧州の大規模な漁業船団が乱獲を行ったうえ、アフリカの開発によって進出した米欧の各国政府や企業による開発で生じた産業廃棄物や軍事廃棄物からもれだした放射性物質や化学汚染物質が、魚をはじめとする水産資源を汚染させた。それも当時暫定的にソマリアを支配

していた軍部が資金目的に海上投棄を承認してしまったのだから性質が悪い。たちまち海産物を食す沿岸住民が数万人単位で、急性の内部被ばくによるらしき症状を発病し、ほとんど漁業ができなくなったのである。さらに、アジア新興国の資源目的の過激な開発進出は多くの労働者を市街地へと集め、漁村地帯は働き手すらいない状態になってしまった。

発展の遅れたこの地域では、結果は分からずじまいで終わると思われたが、その欧米企業や新興アジア諸国の楽観的予測はあっさり覆された。２１世紀に入ってからの情報技術の急速な発展は、アフリカなどの比較的貧しい人々にさえ世界の情報を手に入れることを可能にしてしまったのだ。２０１０年代に入った今では、リビアなどで難民として周辺に逃れた青年たちすら“唯一の財産”と自称して小型の端末を持ち歩き、市街地へと行けばインターネット・カフェがたいてい存在し、戒律の厳しいイスラム圏諸国の女性が動画サイトに自動車を運転する映像を公開して（イスラム圏では女性の社会進出が認められていない。しかし情報技術の発達がそのような被差別集団の自由や強圧的な権威からの解放の自覚に目覚め始めているのだ）賛否両論を巻き起こしたりという時代だ。もちろんこのことが今まで宗教、慣習、伝統といった旧来の権威や暴力装置に苦しめられてきた人々に自由、平等、民主主義という人が人らしく生きるための権利、そしてそれを求めること自体への権利に目覚めるようになった点では良い点でもあるが、負の一面、すなわち民族や宗教や人種間での軋轢を増やしたり新たに巻き起こしたりする原因ともなる。欧米の環境保護団体を名乗る集団がこの海上投棄をあっさりと告発し、その情報はいとも簡単に人々に伝わってしまった。強烈な憤りと反発を感じた彼らは武装したり、ポケモンを利用したりして自らの海域を漁船や廃棄物処理船を妨害し始め、エスカレート

した一部は航行する船舶を襲撃して金品を奪ったり、身代金を請求したりするまでになった。そんな彼らを言葉巧みに利用して組織化し、利益を稼ぐ反社会集団も出現したのだ。

その雇用主というものは現在でもはっきりしておらず、中東のイスラム原理主義系武装組織である説、北アフリカの軍事独裁国家配下の組織であるという説、はたまたイタリアや南ヨーロッパでいうマフィアとの関わりがある組織であるという説など諸処飛び交っているが、唯一判明していることは、それを利用して莫大な利益を得ている大規模かつ高度な反社会組織の存在がこのアフリカ東部海岸一帯にあることである。国連の安全保障理事会や各国軍は、この地域の安定のため、ひいては各国の物流と経済活動を保護するために、各国海軍及び国連が艦艇や哨戒航空機の派遣、沿岸国への軍事拠点の設置、特殊部隊による犯罪組織の摘発といった様々な対策や取締りを行ってきたが、この数年間で状況が大きく改善されたとは言えない。検挙したり、果てには銃撃戦で撃破・撃退したりしても湧いたように現れる。そんな無法者たちとのいたちごっこである。

その状況下で各国から派遣されている艦艇の一隻、イギリス海軍２３型フリゲート艦のＦ－２３８「ノーサンバーランド」、４５型（デアリング級）駆逐艦の４番艦、昨年２０１１年に配備されたＤ３５「ドラゴン」の艦橋（ブリッジ）では当直の索敵員たちが電子双眼鏡とレーダー・ディスプレイで周辺海域の監視にあたっている。室内は照明がほとんど落とされ、各種計器やコンソール・ディスプレイの明かりとマストや艦船構造物を照らしているいくつかの明かりだけが宇宙に輝く星の如く光っている。しかし、艦橋の防弾ガラス越し見える漆黒のアデン湾には夜空ほどではないにしろ、無数の星に似た光が

見えた。アデン湾を航行しスエズ経由で地中海へ向かう、またはインド洋側へと抜ける各国の民間のＬＮＧ輸送船や大型貨物船、こちらと同じように警戒任務に就く各国や民間軍事会社の駆逐艦やフリゲート艦などの戦闘艦艇や沿岸の基地から飛び立った哨戒機が作り出した小さな夜空。

突如として無線機が鳴り響く、各国や国連が共通して利用している対海賊の部隊専用の周波数だ。かの地域での救難要請周波数としても民間の海運業界で認知されている。「カセイル岬より西北西１１０キロの地点より救難信号を探知、第１５０合同任務部隊の米国籍艦船「レイテ・ガルフ」が急行中である。増援可能な艦船及び哨戒機は追跡せよ」「「ノーサンバーランド」及び「ドラゴン」は指定海域の東５キロの地点にいる。増援は必要か？」「もちろんだ。そちらは周辺の艦艇で最も近い位置にある。直ちに追跡任務に加われ」「了解」通信要員が国連統合海軍所属の海賊掃討部隊の司令部として機能しているグズネツォフ級空母「ライジング・サン」と交信している間にもレーダー監視のオペレーター達は水上レーダーと対空レーダーの情報分析を進め、駆逐艦「ドラゴン」のＣＩＣへと送る。ＣＩＣのディスプレイには無数の民間の貨物船やタンカーがこの海域を航行していることが目に見える。救難信号を発しているのは韓国の海運大手、韓進海運所有のパナマ船籍の大型コンテナ貨物船であった。確かにその後方２キロの地点に不審なオブジェクティブが存在していた。人工衛星と水上レーダーの分析をリンクさせた結果は、大きさが小型ボート程度であること、識別装置が搭載されていないことである。この辺りの海域にはそんな非登録の小型船舶など腐るほどいるのは既に確認済みだったが、大型コンテナ船の後方にぴたりとついて航行している点から、この小型船舶が海賊の物であるという事が分かる。普通の漁業関係者なら（多かれ少なかれ欧米に対する反感はあるのだろうが）、大型貨物船に用があるような動き方をするはずがないのだ。

「民間船舶に接近する不審船を追跡する。戦闘態勢」「了解、戦闘態勢へ」ＣＩＣ内の当直責任者の一声で艦内にアラームが鳴り響いた。不審船は「ドラゴン」と「ノーザンバーランド」のほぼ正面北よりから東進してくる。アメリカ海軍のダイゴンテロガ級ミサイル巡洋艦ＣＧ－５５「レイテ・ガルフ」が不審船を南西側から追い込む。挟み撃ちの格好だ。相手は旧ソ連製のアサルトライフルや対戦車ロケット榴弾などのテロリストに近い重装備を持っていた例も報告されているので十分な注意が必要だが、こちらは最新鋭の装備を持った駆逐艦とフリゲート艦である。万が一の事態になった場合は遠距離から速射砲ででも機関砲ででも対処できる。コンテナ船に乗り移った場合もこちらから部隊を出して背後から制圧することは十分可能だ。

防弾板にヘルメット、手には自動小銃という白兵戦闘装備でイギリス海軍のフリゲート艦「ノーザンバーランド」の乗員は艦の右舷前方の甲板、３０ミリ機関砲の防弾シールドや速射砲周辺に集まっていた。上空を爆音とともに通過していくのは、ジブチにある基地を飛び立った米国海軍の哨戒機Ｐ－３Ｃである。１９６２年初飛行というやや旧式な設計ながら現在も電子機器や哨戒設備をアップグレードし続けて多数が現役にあるターボプロップ（ガスタービンエンジンで接続されたプロペラを回す動力機関。外見はプロペラ機だが、実質はターボジェット機関とレシプロ機関の相の子。Ｐ－３Ｃにはアリソン社製Ｔ５６Ａ－１４×４）の対潜哨戒機もまた上空からの海賊発見や追跡任務に従事しているのだ。哨戒機が輪を描くように飛んでいるということは、目標はそう遠くない事を意味している。

「オブジェクティブは前方１時、距離１０００」ＣＩＣからの無線で乗員の一人が電子双眼鏡で右前方の海上を確認する。双眼鏡が捕えた赤外線反射を利用した映像は駆逐艦「ドラゴン」のＣＩＣに順次送られ表示される。２００７年に就航したばかりのデアリング

級駆逐艦は、イージス駆逐艦ほどではないが高度な索敵、分析、攻撃支持機能を有しており、実質、同行しているフリゲート艦「ノーザンバーランド」の指揮を担当しているといってよい。

「捕まえました…形状を分析します……」「ドラゴン」のＣＩＣのオペレーターがコンソールのキーを叩き、中央の戦況ディスプレイに分析結果を表示させる。「うむ…」「やはり海賊ですか…」「相変わらず懲りない奴らだ……」ディスプレイを眺める要員達が画像を覗き込んだ。「大きさはやはりごく微小、族に言うモーターボート程度の規模です…」オペレータの一人が戦況ディスプレイに寄り、画面のパネルを指で叩く。「この棒のような影が人員と思われます。そのうちの一人にくっついているような物体、おそらくこれは…」「アサルトライフルだな。最近の連中は重武装の傾向がある。おそらく対戦車ランチャーも持ってるぞ…」口を開いたのは砲術長である。「その通りです……」

「「レイテ・ガルフ」が接触を開始、当艦右舷１時の位置でも目視域に到達」ＣＩＣに右舷甲板にいる戦闘部署員からの無線が鳴った。「並行する位置に付きます」「了解。不審船、貨物船と同方向に転舵、面舵４０」船務（せんむ）長の指示で航海士が艦を転舵させ、面舵をとる。「警告信号を発信します。よろしいですね？」「よし、開始しろ」艦長が命ずると同時に、通信士はコンソールを叩いて音源を外部スピーカーに切り替えて無線機のマイクに声を入れる。「貨物船の追跡航海を中止せよ。応答、または離脱行動をとらない場合は実力行使もありうる」

船外の防弾装備を着用した砲術担当者や射撃要員の間に緊張が走る。警告を発するのは一般的な方法であるが、これが前方の不審船の海賊を刺激しないとも限らない。こちらを攻撃してくる可能性も、勢いで前方の貨物船の乗っ取りを強行される可能性もある。既にア

メリカのミサイル巡洋艦「レイテ・ガルフ」が不審船をサーチライトで照らし出しており、「ドラゴン」は不審船の右舷から回り込む形で側面についた。あとは警告および警告射撃を行い、不審船が離脱するか、実力行動に及ぶまで繰り返す。駆逐艦あるいは貨物船に攻撃を仕掛けた場合はこちらも実力行使だ。不審船を攻撃するなり、貨物船に部隊を送りこんで乗り込んだ海賊を制圧するなりする。

しかし海賊は予想に反して及び腰だった。イエメン沿岸側に舵を取ると、「レイテ・ガルフ」の前方を通過するように北へと向かって離れてゆく。まだ彼らがポケモンを連れている可能背もゼロではなかったが、先ほどの赤外線映像で見る限りは可能性は低い。すでにこちら側には駆逐艦やフリゲート艦が３隻存在する。まともに戦闘をしては対戦車ロケット榴弾では勝ち目はないし、前方の貨物船に突入しても警備艦船の部隊に背後から制圧されるのは目に見えている。海賊の人間とて自滅してまで金品を掴みに行くほど無能ではなかった。

「不審船、北部に退避していきます。周囲の多の船舶に再度接近する気配はありません」米駆逐艦「レイテ・ガルフ」から無線が鳴る。

「哨戒機は念のため追跡を続行せよ」「了解」Ｐ－３Ｃ哨戒機は４機のターボブロップの爆音を立てながら３隻の上空を飛び去った。

韓進運輸のコンテナ貨物船と３隻の艦船の背後を航行しているチリの海運会社「Ｃｏｍｐａｎｉａ　Ｓｕｄ　Ｖａｐｏｒｅｓ」のコンテナ貨物船にも不審船は目もくれずに離脱していく。「ドラゴン」のＣＩＣの要員達は安堵の息をついた。誰一人として今晩がクリスマスであったことには気づいていない。ソマリアのこの辺りにクリ

スマスを感じさせるほどの余裕が生まれるのは、まだまだ先の話、いや当面後のだろう。国際協力で世界平和を実現する、その言葉自体は夢物語のようで聞こえはいいが、その実際は不可能に近いものだと、実際に治安維持活動にあたる物やここを航海する民間海運企業の関係者たちは感じていた。どんなにグローバル、地球が一体化した現代地球社会でも、欧米の豊かさや生活の基準が地球中に浸透していても、地球の人間には文化、価値観、思想の点での相違が今でも残っている。それを誰かの手によって是正するのは不可能だ。その統一された思想や価値観が優秀だという証拠も現実論もどこにもない。かえって統一された方の反発や不満を招くだけである。

アデン湾はそんな人間世界の混迷を乗せて星空と、無数の民間貨物船舶や警備艦艇、哨戒ヘリや哨戒機、点々と存在する航路表示ブイの作り出す星のような明りに抱かれていた。

２０１２年１２月２６日　エメリア　パルク州の国連施設　０９００時

本当に突如、突然だった。国連軍の関係者が彼らの戦闘を見てみたいとやってきたのは。国連や軍の施設から１キロほど北に離れた位置にある人類の作りとポケモンの作りの折衷型の建物は、普段は守衛の兵士が３人程度しかいない状態で、ここにいる連中が建物の周囲の草地に寝っころがっていたり、敷地に最も近い集落に住むひこうタイプが郵送品を持ってきたりという場所だが、今日は全く違う。護衛のアメリカ陸軍の格好をした兵士が大勢護衛に立ち、ところどころには制服を着た高級将校、国連生命工学機関研究施設と思われる人物も見られる。建物から離れ、国連軍・アメリカ軍の軍用基地と国連の施設が一望できるだだっ広い草原にもその人影があった。

その人だかりの中心では……

クリスマスを超えて（後書き）

話が中途半端になってしまいましたね……すいません。

次回に予定外の一話分を挿入します。

思いは己の爪先に（前書き）

今回は予定に急きょ1枚追加した部分です。

……日付の進展がさらに遅いよ。

思いは己の爪先に

国連軍上層部の意向を彼らに通達したのはサクラである。「いきなりで申し訳ないんだけど…」彼女は後ろに立っている関係者の人間たちをちらりと振り返ってため息をついた。後では大勢の人間たちがポケモン達の住居を模した建物の中の様子や中に言う彼らを見ては指さし、話し合い、鼻で笑い、カメラやカムコーダ（またはビデオカメラ。日本のブランドでいう“ハンディカム”に該当するもの。子供の運動会で両親が良く持つあれである。ちなみにハンディカムというのはソニー社のブランド名でしかない）で記録するものがいる。軍人の制服を着た人間や兵士たちはほぼ男だったが、それ以外、国連関係者と思わしき恰好をしている人間には女もそれなりに多い。

「勝負は予定通り、2対2で行う。片方が戦闘不能と判断された時点で勝敗が決定するもの。手抜き、八百長、過激な戦闘行為等の無いようやってくれ、いいな?あと、2対2だからコンビは適当に決めておけよ」一般の軍人らしき男が目の前にいるポケモン達に注意がましく手を振った。この男のエメリア語は上手ではなかったが、意思は相通できている。まあ、彼らがちゃんと聞いているかどうかは期待していなかったが。案の定、彼らは整列するわけでもなく一様に固まっているだけだ。「わ、分かりました」面食らってきちんとした態度をしているのはバストークとピトムニク2匹のみであった。「ったく、本当に全員聞いているのかは知らんが、まあ来年10月の安全保障理事会では、国連はアメリカやイギリスのみならず、中国やロシアにもアンタらの存在を隠し通すことはできないだろう。記録映像は取るから、国連の恥にならぬようせいぜい真面目にやれ」

男は呆れた表情で目配せをすると、Ｍ４小銃を肩にかけ直して見張りに立っている同じような格好をした集団に戻った。その姿を見送ったメリープが隣にいるプラスルの右肩辺りを左前脚で小突く。「で、どうすりゃいいんだ俺たちは？」「よく分かりませんよピトムにだって」彼女は中隊長のにそっと顔を横から近づける。「やる内容は何となくですけど…それより組決めはどうするんですか？」「そりゃあもちろん…うう…俺も思いつかねえが…」彼は後ろ足でモフモフをかいて後ろに首をひねった。「しかしまあ、この連中ならすぐに決まるだろうよ。自然に、それとなくな」「…やっぱですよねえ」ピトムニクにもなんとなく確信が持てた。このプラスルが見てきた限り、それなりに普段のグループもおおよそ決まっているし、グループ間の軋轢も見られない。「良かったですね…今の所はもめごとなくて」

ここまで彼女が気を使うのは、中隊長のメリープと何年も公私双方で共にしてきて身に付けた物だけではなく、ピトムニク・マルセイエーズというプラスルの性格だけでもなく、彼女自身の生い立ちに理由があったのだ。彼女には自分の所属する集団、特にほぼ毎日のように共に暮らすグループの間に問題や亀裂が生じていることは、自分が傷つけられたの同じくらい耐え難い事だったから。常に自分一人で生活が成り立っているだけではない、全員がいるからこそ自分が存在できる、だからこそ自分は同じ集団を関係を気遣い上手く調整していく、それが彼女の信念だった。

「ま、マジ？！自分たちで決める！？　それなら俺はとっくにに決まっています！」バストークの首に近い左のモフモフに抱きついてきたのはブレイブである。「なんたって俺はもう…」「うん、うんうん！それはピトムも知ってるよ！ブレイブと一緒はテルル、それでいいね！？」ピトムニクがあいまいな作り笑顔と共にブースターをメリープから引き離す。「さすがだぜピトムは！よっしゃあっ！

頑張る…」「いつの間にそんなこと決まったのよ?!」そんなブースターのさらに後ろからグレイシアが前足で彼を引きずり下ろした。「へへっ!、この決定は既に数か月前から、テルルと俺が出会った時……」「はあ?!何ねぼけたこと言ってんのよバカっ?!」テルルはブレイブを強引に突き飛ばすが如く後方につき飛ばし、思わずピトムニクに向き直った。顔には女の子に見せるあいまいな作り笑いが浮かんでいる。「ね、ねえ…本当に私はこいつと…んなわけないよね?」

プラスルは焦った。テルルと組むのはブレイブしかいない、そう考えていたからだ。彼女が前回や、この2月あまりの普段の状況を最大限検討する限り彼女と最も息が合うのは他ならぬブースターしかいないと。そして彼自身が最も能力を発揮できる相手もグレイシアでしかないと。「うーん?できたら…それがね…」「う、ウソ…まさかピトムもそう思った?」プラスルは苦笑を浮かべる。「なんだよね…他にブレイブと上手くやれそうな子もここにいないからさあ、2匹でお願いできるかな?」テルルはその返答にショックと諦めが交じった表情を浮かべる。

「う、うん!　何とかやってみるよ!」テルルは笑顔を無理に作って頷き、ブレイブを方に視線を移した。「そういうこと!私の足を引っ張ったりしないで!ＯＫ?!」「あったりまえだろうが!俺達2匹になら全戦全勝無被弾だぜ!よろしくな…」ブレイブは嬉しそうにフサフサ尻尾を振ってテルルに飛び付こうとするが、グレイシアは前足で飛び付きを跳ね返した。「んもう…ブレイブ、尻尾なんか降っちゃってアンタは人間に飼いならされた犬?」「いやいや、俺はテルルちゃんの犬になりたい!やべえ今すぐなりたい…」「ならなくていいわよっ!暑苦しいしうるさいしうざいし!話し相手になったところで……」彼女は口ごもった。周囲を見回してため息をつく。良く考えてみるとはまともに話相手になってくれているのは他ならなぬ彼しかいない。

そして…自分のことを一番心配しているのもおそらく彼であるこ

とに気付いたのだ。「……うん、確かに…」「どうした？」「良く考えてみるとさ…なんで私ってブレイブにしか相談事してないのかな？別にピトムでもグラシでも…いいような気が」

「…考えてみりゃそうだな…それはたぶん…」ブースターがグレイシアの前足をこつんと叩く。「…テルルが俺のことを信頼してることじゃねえのかな？……悪い意味じゃない、本当にだ」「……私が選んだって……」「そりゃテルルが自分で選んでなくても…友人っていうのはなろうと言ってなっていくんじゃねえんだ。互いが求め合って何かに導かれるんだと俺は思ってる」

「……そう…なのね…」テルルはぼんやりとブレイブの足の付け根あたりを見る。彼の言っていることがどういう事か彼女には分らなかったが……少なくとも…間違いではないようだ。

「俺がいる限り…お前に一発も食らわせねえ。任せな」「う、うん……」

「という訳で何だが…お前らも組み分けぐらいはできるよな？」バストークは後方へと向かい、残りの連中の説得、というより組み分け要請にかかる。「別にもめてくれてもいいんだが…それで時間を食ってたら人間という生き物はせっかちだから許してくれないだろうな…」

「俺は決まった！」最初の声を上げたのはロックオンである。ムクバードが見たのはモココだ。「グラシ！もちろんだよな」「え？、ええ…それでいいです」グラシデアが顔を赤らめて頷くや否や父親であるバストークが娘のモココに飛び寄った。メリープはモココの方のモコモコ毛を青い前足で軽く掴む。「何勝手に決めてんだ？！お前は俺とやるに……」「やめなさいよホントにっ！！」娘は父親と違って勝手が効く両手で父親の前足を振り払う。「だから言ったでしょ。これは私の問題でバストークの問題じゃないの。誘ってく

れている相手を…その…断るのなんてさ」グラシデアはロックオンの方を顔を真っ赤にして見つめる。ムクバードは軽く右の翼を小さく立てて振り、わずかに視線を送っただけだ。モココはますます恥ずかしそうな顔をしながらも父親に視線を戻す。「と、と、とにかく…私はもう決まったの！他の人（ポケモン）…てかあなた自身を早く決めたら？」「ううっ…わ、分かったよ……それじゃ…ほかの皆もそうしてくれ…」メリープは諦めたような寂しそうな表情を浮かべて踵を返した。

「当然のことなんだけど…」顔を見合わせる一同の中で次に言い張ったのはスカイラブだ。「ガトル、お願いね人選」「て、勝手に決めんじゃ…！てかなんでガトルがやるんだ？！」レオがルクシオに飛び掛かった。コリンクは彼女の両前足付け根まで伸びた黒い毛の部分を駄々をこねるように引っ張る。それを相手にするスカイラブの表情は、わがまま息子を相手にする母親そのものだ。「なんとなくよ。アンタが隊長ぶって決めたら、ねえ…」「言えます」ガトルもうなずいて同意する。「うちも加わる！うちも決めたい！」チェギョンがガトルの方にふわりと軽く飛んできた。「うん！」「チェギョンはレオと違うんからね」「でしょでしょ！でも…うちは誰でも大丈夫」チルタリスはロックオンに言われたことをまだ引きずっていた。自分がやりたいやりたいと前に出ることがいささか気にかかる。

「お前ら…寄ってたかってやりやがって…おいグリソム、シンシア、お前はどうする？」コリンクがかみつくような表情で2匹に視線を移した。「お前がやってもいいけどさ、おいらはまあ、……レオよりかはガトルに任せてもいいような気がするよ…」「そ、そりゃ俺

は人選は下手…、ておい！俺じゃ役に立たねえっていうのか！？」コリンクがミズゴロウに馬乗りになる感じで飛びつく。「うぎゅえっ！別に…そういう意味は…」コリンクの尻と後ろ足に潰された彼はぺちゃんこになりながら苦しそうにしゃべった。「で、シンシアは？」「私は…得策だと思うけど…」シンシアは相変わらずうつむき加減である。そんな様子を見たレオの軽蔑したような目つきは相変わらずだ。「ったくよ…どいつもこいつも俺の能力を……」

「はいはい降りなさい、グリソムが苦しいでしょうに？」パチリスが尻尾を回してコリンクをミズゴロウから振り落とそうとした。「おおっとそうだ…でもまあ、隊長である俺の命令には逆らえないよな？」「くっそ…さっさと降りろやレオ…」ミズゴロウが強靭な４本足で体をごろりと返し、コリンクを叩き落とす。「いってえ…何やってんだグリソム！」

「はいはい、それで考えた結果……」ガトルが短い左手を振り、スカイラブとチェギョンを見やる。「レオはグリソムと。それが一番まとも、て事よ。で、私はラブちゃん、チェギョンさんはシンシアと、てことになったんだよ。それで異議ないね？」「まあレオの反論は私の人生の中で想定内だから受けつけないけど！」スカイラブはレオをちらりと見て得意げに言う。

しかしコリンクの反応は意外、嬉しそうだ。「よっし！やるぜグリソム！お前が前な」「おい！またお前が勝手に…」「反論は許さねえぜ！施設のころからそうだっただろうが！お前の分は俺が上手く決めてやる。よろしくな！」レオは左前脚をグリソムの首元を締め上げるようにまわす。「あ、ああ…まあいいか…」ミズゴロウの方も苦笑しながらも不満はなさそうだ。何せ彼にとってコリンクは…施設時代からも一番の仲で、一番気が合った（というよりコリンクが絡んだ）同士だし、こうやって駆り出された後もそうだったから…

「ラブさん、よろしくです！」「もちろん！私は誰とだって上手く

やるようコントロールする側だからね！基本的にガトルがいろいろと仕切っていいよ」「了解です！」パチリスの尻尾とルクシオの尻尾がぴっちりとあって電気が散る。スカイラブの感覚では、２匹の相性はなかなかそうだ。彼女にとっても電気での相性チェックは一番信用できると確信していた。それにガトル・リベントというこのパチリスの性格も自分と上手くやるのにぴったりだ。スカイラブは、そういう点はよく探りを入れてから考える性質であった。初見の相手からすれば、最初のうちは不愛想で変人のように見えるし、場合によっては…特に男から見ればそういう性格にしか見えないかもしれないと自分でそう思っていた。しかし彼女にとってはそれが一番の安全策だ。かつてこのルクシオが味わった異郷の地での価値観の違い、それが彼女の心の扉にまだ探りという重苦しいセキュリティー基準を作ってしまっていた。

……慣れない場所で上手くやるにはそれしかなかったから。

チルタリスはロコンの頭のくるくる毛をモフモフ翼で抱きしめるように撫でる。「よろしく！ペースはどんどん決めちゃっていいよ！」「あ、はい…でも、あなたが先に動いてくれた方が全体的に…」「いいのいいの、チェギョンはシンシアに合わせてくれるんだから、シンシアのペースで大丈夫よ」「そうそう！うちはどうにでも合わせるから、無理しないで！」「う、うん…」彼女の表情はあまりぱっとしないままであり、パチリスとチルタリスを見て曖昧に頷く。このロコンにはここにいるチルタリスの正確はいまだによく分からない、というより関わることが少なくてどう接したらいいか分からなかった。もちろん口数の少ないシンシア・ベルーサ・カウンストポビア自身にもそうなる理由があることは、彼女自身が痛いほど知っていたが。

最初にやることになったのはブレイブたちの組とレオたちの組である。決まったとたんに人間達に生命情報装置を胴体、４本足、首元に装着させられた。普段人間でいうプロテクターの役割を果たす保護装甲板と共に装着させられていた物と全く同じだ。保護装甲板というのはポケモン文明では、戦闘という過酷かつ危険な任務に就く探検隊・救助隊連盟の所属者の装備をさらに重装備化した人間でいう武具・鎧の一種である。（まあ、人間の兵士のようにＦＲＰや特殊素材の防弾装備とは全く違う原始的なものだ）その下に隠すように電極や回線を回し、同付近に装着した発信機から情報を送る。彼らにこれの仕組みも目的も全くわからなかったが、ブレイブにもテルルにも少なくともいい予感がしなかった。この理解不能な機械から取り出した何かはひとりでに人間たちの手に渡り、そしておそらくは人間たちがポケモンを思い通りに利用する研究や開発というものに使われるのだろう、と。ポケモン達には研究や開発という概念はないも同然、全ては自然から与えられたものから利用できるものだけを使う。だからこそ発展も遅く、人間の文明競争に１８世紀には負けて文明自体が崩壊しかけているのだが。

だが、ブースターとグレイシア双方、そんな哲学を考えるタイプではなかった。いつもの重苦しい装備を装着させることに対する冷やかしとリアクションばかり。頭にヘルメットをかぶせられないだけましなくらいだ。「ホントに…これ付けてやんのかよ？戦争のフリか？」「フリとかロクでもないこと言わないの！その戦争ってのを私たちはぎりぎりで生き延びてるんだから」「そりゃ…ふざけちゃねえよ。その分大勢死んでんだからな」「当たり前でしょ…だから…とにかく…こんなところでトラブル侵さず、穏便に終わらせるわよ…」彼女がちらりと人間たちの集団を見る。そこでは軍人に交じってそれ以外の格好をした（スーツ姿も私服姿もいる）男女が何か四角い板のようなものを覗き込んでいる。おそらくは映像が映し出される人間の機械だろう。テルルの表情は駅前道路の歩道に寝っ

ころがる汚れたポケモンを眺める朝の通勤客のようだ。「…あんな連中に従うのはやだけど」「分かってるさ。俺だって好きでやってんじゃねえんだ…」ブレイブの表情が人間たちを見て不快そうにゆがむ。右前足を左前脚にガシンガシンとぶち込み、そのあとで右前足の拳を地面に打ち付けて低く、殺気のこもった声がブースターの口からこぼれた。「散々俺たちを道具扱いしやがって……てめえらがやれってんだ…素っ裸で噛み合ってなぐり合って蹴りあってみろっつうんだよ……」

「…確かに。でもそれを当の人間の前で言ったらアンタは死ぬわよ。それに私には……」グレイシアはレオとグリソムの装着を手伝うスカイラブを見て左のもみあげ飾りを前足でイライラとさする。「ふん、何あの女…人間の機嫌取りのつもり?…あいつにだけは負けない…」彼女の声は殺気に満ち溢れている。ブレイブは彼女を落ち着かせるように彼女の右前足に左前脚を乗せた。「…こんな場所で喧嘩なんかするなっての。もし彼女に何といわれようとここでキレたりすんなよ、いいな?」

「無駄口叩いてねえでさっさと始めるぜ…ここにスタンバイしな」それぞれは施設傍らの草原の中に１０メートル四方程度に仕切られた空間の中にある白いラインの所に配置される。４匹ともこれが何を示すかくらいは知っていた。それぞれの集落や地域で収穫祭や神事の際に行われるいわゆる“バトル”における2対2戦と全く同じだ。人間たちも無理やり連れてきた（自分からついて行くとは考えづらい）ポケモン達を使ってやっているのだろうか?テルルの意識下にふと暗い想像が生まれた。「お前のパターンに任せる、いいな?」「そう?……それならそれで行くわよ…」ブレイブの声にテルルは頷いて前方を見た。彼女にとって、面食らって戦闘以外でバトルをするのは初めてに近い。今までとやり方と同じように前にいる相手を倒していいのだろうか?彼女には一種の疑問があった。今ま

で感じたことのないもの、自分の戦いが今まで多くを殺してきたという事実を今更思いだし、意識が恐怖と罪悪感に震えるのを感じた。目の前にいる2匹とその周囲だけが不気味なほどはっきりと見え、残りの部分に対する視覚とその他の感覚も失われ、足が無重力に漂っているような気持ち悪さを覚える。しかし今、テルル・アストラフスキーにその疑問と不安を打ち消す自己回答を見出すすべはなかった。

「っしゃあグリソム、さっき俺が決めたとおりだ。お前が前で俺が後ろから仕掛ける。いいな?」コリンクがミズゴロウの腹元に左前脚で蹴りを入れる。まあこれはこれで、レオらしい信頼表現の証でもあるのだが。「分かった!それいいよおいらは。もう反論しない……」「なんだその不満げは?!失敗したら一週間分の夕飯はグリソムのおごりにしてやるからな!」「ううっ…それはさすがに金的においらとお前のを合わせても無理だろ?」グリソムはレオの拳をよけて左に飛び退く。彼はいつものことながらこのコリンクに無茶ばかり言われているのだ。ただし、彼の表情はそれほどいやがってるようでもなく、もう諦めたような、苦笑したような調子だ。「分かってるよ!おごりはシンシアにさせりゃあいいんだろ?俺たちが勝てば、てかどやせばそうしてくれるぜアイツ!行くぜただ飯目指して!」「お、おう」ミズゴロウは正面を見据えたままふと思った。小さい頃にレオやほかの連中…そう、ここから遠く離れた北アフリカで死んでいった仲間たちとバトルをしてきたのと同じかどうかは知らないが…きっと彼とならば…何とかなるだろうか…

4匹の並んだ一瞬の沈黙…多くの兵士や国連関係者の目線が徐々にその白いラインマーカーの平面に注がれ始める。多くの意識の巨

大な流れが、これから己の信念を、感情を、闘争本能を巨大なエネルギーに変えてぶつかり合うであろう４つの意識の中に。その静寂の時間はそう長くは続かなかった。平面のほぼ中心に立った兵士の男がバレッタ社製Ｍ９拳銃を競技用ピストル代わりに上に向けて撃つ。

４匹は同時に動いた。

最も早く飛び出したブースターが真っ先に飛び掛かったのは前方のミズゴロウである。ここには“唯一王”という足の遅さや強靭な腕力に見合う能力が少ないというブースター種族の汚名を感じさせるものはみじんもない。でんこうせっかを利用して一気に飛び出し、四酸化窒素とヒドラジンを燃焼反応させた熱エネルギーを全身に逆流させる。（まだまだおせえんだよ…）ブースターの精神は一気に高揚した。燃焼反応で活発になった彼の体内の中で、まだ何もしてないというのに格別に脳細胞から噴出する興奮物質が異様な快感にも似た、いわゆるランナーズ・ハイ状態にしているのだ。もはや前にいるミズゴロウが普段目にする相手ではなく、今まで倒してきた敵兵にしかブレイブ・クレイバーには認識されなかった。

そしてそれは即座にグリソム・トルーマンに現実という恐怖をもたらす。ブースターは異常とも取れるある種の歓喜に駆り立てられて、猛烈の熱エネルギーと共に突っ込んできた。タイプ差もいかんせん破ってくると彼は認識した。「やってやるぜっ！！」「うう…んならっ！…」ブースターがかけてきたのは一発目からフレアドライブである。その強烈な熱気が彼を頭の突起から焼き尽くす０．２秒前にミズゴロウは地面に飛び込み、灼熱の火の玉が頭上数センチ上を通過した。「よっし！上手いぜっ！」コリンクは飛び込んでくるブースターの射線の右側を加速をつけて飛び出してゆく。「んだと?！おら…」ブースターは飛び上がった勢いを前転に変えて着地、草むらに足がひっかかって転びそうになったが急反転して彼らの後

ろから飛び掛かる。

「あっさり交わされるのは…」グレイシアもその時点でコリンクを撃滅すべく前へと飛び出しており、体内の塩化アンモニウムと水の反応に伴う吸熱反応で冷気を肺一杯に装填していた。「織り込み済みっていうのよっ！！」彼女は正面から飛び掛かってくる体内、特に爪先から体内で発電した電気を過負荷に持って行ってショートさせたコリンクから正面衝突するように冷気を浴びせる。コリンクは飛び込みが甘くてグレイシアの１０センチ下ほどに合わせてしまったため、冷気をまともに直撃。「どぐぇ！」「まだまだ甘いのね！」グレイシアはそのままコリンクの電気エネルギーをかわしてに着地するが、その直後腹元を下から突き上げられるように殴り飛ばされ、右側に向かって転ばされるように転倒した。「さっすが！これを待ってんだ！」「そうではないけど…とにかくは上手くいったなあ！」空中で宙を回って後ろ足から着地したコリンクは間髪入れずに再び前に突っ込む。「おい後ろだっ！」「んん？…くっそ…」ブースターがかえんほうしゃを浴びせてくるのをとっさにコリンクから言われたミズゴロウ。「動くなよおっ…」「それで止まってたら話にっ！」彼は前方のグレイシアにハイドロポンプをぶち込んだ反動で左後ろに後退し、効果の半減も相まって主だったダメージは免れたが、その反動でグレイシアはコリンクに正面から突っ込んだ。

しかしそこはテルル・アストラフスキー、飛び込んでくるコリンクに向かって右前足を振り上げる。こおりのつぶては咄嗟に出力できるために、カウンターアタックにも有効だ。コリンク側としても急激に移動方向が変化したグレイシアに牙で噛みつくにはタイミングが狂った。「うぶうっ！？…だけどなっ！」ダメージによる反動を何とかこらえて、コリンクはそのままグレイシアの頭を後ろ足の踏み台にし、ブースターにスパークをかけるモーションにそのまま

変更した。ブースターは最初からグレイシアの背後からもう一発火炎放射で援護をかけるつもりで飛び上がった軌道はコリンクのスパークと直撃ルートにあたる。

「きやがったか…ならっ！！！」ブースターはまたも体内に熱エネルギーを集める。フレアドライブには至らぬが“かえんぐるま”程度にはなっただろう。これならスパークを突き破れる、ブースターにはある意味の革新があった。しかしそれはあっさりと覆される。コリンクはブースターに当てることを主眼に置かず、スパークによって生まれた勢いで前へ突っ込んだのだ。

「マジか？！」痺れるような衝撃と共に攻撃をかわされたブースターが思わず振り返る。「うっし、もらったあ！」この時に2匹が予想したものは同じだった。狙いは…下のグレイシア。

そして、案の定グレイシアはミズゴロウを撃破すべく既に動きだしている。シャドーボール3発でミズゴロウのかわす方向を2発で断ち、1発はまともに浴びせて完全に動きを封じた。「うぶっ…」「そのままああああっ！！！」グレイシアは急停止して至近距離にそそり立つ。肺に思いっきり気を吸い込んでれいとうビームをぶち込む態勢にかかった瞬間、彼女は勝利を確信していた。（…見たわねラブ！私はアンタが思っている以上に雑魚じゃないのよ！…）

だが、その背後上からコリンクが前転を打って飛び付いた。「えっっ！？」「もらったっ！」コリンクの電気エネルギーをまとったスパークの一撃はグレイシアを顔面から転ぶかのように前に突き飛ばし、前足からバランスを崩して顔面をしたたかに打った。「うっきゃっ！？」

「頼むぜグリソム！あれだあれ！」「おいらが仕留めんのかよ！？」

「当ったり前だ！」「う、うん」ミズゴロウはわずかに後ろに下がり、わずかに息をついた。余裕も自信もないがチャンスはこれっきりしかないだろのだ。彼はわずかに跳ねて、右前足で首から下げたホタテガイを振り上げながら飛び掛かっていった……

バシュコオンッ！！！！！！ミズゴロウの叩きつけた渾身の一発は完璧なシェルブレードになった！そのみずタイプのエネルギーを乗せたホタテの強烈な剣先がグレイシアの頭飾りを直撃し、グレイシアはそのままぺちゃんこにする。「ううぐっ……ううっ…」グレイシアの意識が急激に薄らぎ、地面に倒されて立ち上がろうとする感覚すらも暗い闇の中に落ちた。「戦闘は続行不能！」先程の兵士が拳銃をまたしても空砲代わりに打った。「おお、チビどもが勝つとはな！」「やはりチビの方が機動性があるぜ！でかいばっかが能じゃねえんだ！」「て言うかあのくそ女の性格負けだろ？」「ああ、言えるなそりゃ！」兵士や国連関係者たちが口々に声を上げる。

「やったぜこらあ！！偉いぞグリソム！」レオはグリソムに飛び掛かって仰向けに突き倒した。その喜びのあまりからかグリソムの腹もとと前足の付け根のあたりに鈍い静電気に伴う痺れを感じる。「偉いって…おいらはレオと同期だろうが！？」「そんな事気にすんなって！それにお前初めてシェルブレードが決まったな！どっかで練習したのか！？」「う、うん。何日か前からやってんだけどな、まさかここで役に立つとは思わなかったよ」グリソムがレオに仰向けにされたままではあるが、左前脚で何とか掴んでいるホタテに（コリンクが爪先から電気を発しているので、だんだん感覚がしびれてきた）わずかに視線を移す。間違いない、自分はついに…まぐれかもしれないが、このホタテを……フタチマル種族のホタチ貝と同様についに活用できたのだ……このミズゴロウにとってかけがえのない大切なもの…施設に知らぬ間に連れて行かれる前に…彼の記憶にない母親から受け取った形見。（……おいらは初めて使えた…）彼は心の中でわずかにまだ見ぬ両親に感謝した。（…ありがとうな…）

「見たかよラブ！ガトル！シンシア！これが１７６１突撃隊々長

の底力ってもんだぜ！俺は永久にここの体調だから覚悟しな！」レオがルクシオやパチリスの方に向きかえて右前足を突き上げる。「そんで特に見たかラブ、もう俺はお前の弟なんかじゃねえだろうが！だろ？」「良かったね！これで子供体調も卒業ってことで！」ガトルは短い左手を振って答えるが、シンシアの方を向き直って右手で飛び出した前歯を軽くさわる。「それは…期待しないわよ」「うん、だよねえ…」パチリスの呆れた声にロコンも同調した。

「はいはい！あんたって奴も意外と進歩があるんだねえ！それを実践と隊長としての面で役に立ててよね！けんかとか、張り合いなんかで利用しちゃだめよ！」スカイラブはからかうような声をコリンクに張り上げながらも心の中にこれまでにない感情が生まれるのを感じた。彼が、あの虚勢ばってばかりの小っちゃいレオ・ミュースカイが、ここまで成長したその嬉しさ、たくましさに対する喜びと…彼がまた少しばかり自分を、彼が物心つく前から姉のように振る舞っていたスカイラブ・バトルスター自身の心から離れていく寂しさが入り混じって。

そんな彼女の意識を隅っこに思い出したもう一つの感情がよぎり、ぺちゃんこになっているグレイシアの方をちらりと一瞥した。同時に少々得意げな、見下したよう優越感が湧き上がり、彼女の嬉しさにさらに明るい日差しを注ぎ込む。予想通り、あの女は単なる強がり。能力はあるようだが軍人としてもポケモンとしても発展途上の“は”の字にも及ばない。これでこっちを向いてくれたら面白いのに、その時のリアクションを考えるだけで愉快だった。まあ、この後自身がバトルして勝った時が真の意味での歓喜になるのであろうが。

「あーあ…苦難人生のエネルギーをどこに持ってってるのよ？まさかブレイブ坊ちゃんやはっぱの兄（あに）さんに焦がれて…」彼女は勝ち誇りのあまり思わず呟いてしまった。それだけでも勝利したような気分になれる。

「ラブ…どうしたの？」キョトンとした顔で彼女の顔色をうかがう

のはチルタリスのチェギョンだった。ルクシオは慌てて笑みを作る。
「うんん！…私のちょっとした妄想よ妄想」「妄想？……そういう物でいいの…」「どうしたのよお？！そこはチェギョンらしくいかないと！」「う、うん…？…」

「大丈夫かよテルル！？」ブレイブが気絶しているテルルの首を抱え、の左のほおを軽く前足でたたいた。彼女はわずかに意識を取り戻す。まだ先程の衝撃が頭に鈍い痛みを残し、意識全体が白い霧に包まれたままだ。「ううん……？…まだまだ…」「何言ってんだ？！お前がぶっつぶれたせいでもう負けてるんだよ……」「な…何…負けようと…？」「もう終わったんだっつうの！奴らが勝ったってわけだ…いや何しろな…」
次の瞬間、テルルの意識を敗北という巨大な黒い液体が重く見たし、白い霧も同時にふり払われた。その恐ろしい屈辱にこのグレイシアが黙っていられるはずもない。彼女はブースターの前足を振り払って立ち上がろうとするもつかの間、3歩行かぬうちに倒れこむ。「はあ？！そんなはずが…」頭から上半身にかける痛みはまだ抜けきっていないようだ。彼は彼女を飛び付くように支える。「もういい…もう終わったんだよ…テルルは…」彼の声がにわかに優しくなった。「もう十分だ…休んどけ…」
「……」テルルはくらくらする意識の中で激しい屈辱感と自分に対する劣等感を感じていた。結局またもブレイブの足を引っ張った。自分が引っ張るなと強気に出たくせに最後は彼にかばわれて支えられる羽目になった。（わたしって…それくらいの…）彼女の意識を絶望という外圧が叩き潰さんとばかりにのしかかってくる。周囲の兵士や関係者の人間対の声や笑い、目線、全てが自分を嘲笑しているように感じられた。（…その程度の女だったの…その

程度の役立たずに過ぎないの？！……）

グレイシアは、その直後に思わずスカイラブを見た。彼女はガトルやシンシアと何かを話しているようだ。まさか自分のことを…そんな嫌な予感をテルルは振り払った。まだ決まったわけじゃない…彼女自身も負ければ…私と同じくらいと分かる……

見下ろすような基地の滑走路の方から轟音が聞こえた。降りたのは国連軍の輸送機Ｃ－１７Ｂ。しかし今のグレイシアには、この音さえもが自分に対する侮辱にさえ聞こえる……

「解析結果、このとおりです」「うむ…それで司令官……こんな連中があなたの部下なのか？」国連統合軍エメリア方面地区司令部からやってきた男が、国連関係者の女から差し出されたアップル社製タブレット端末を見つめて呆れ顔になる。「まったく、ポケモンという連中はサバンナのシマウマより無能でライオンより獣な生き物だ、この結果が証明しているな」もう一人の軍関係者らしき男が帽子を仰ぐように振りながら、サクラの方に数歩のんびりと歩み寄る。「その通りですね。人間たちには原始時代の生活をまねしろというくせに、この戦闘中の心拍数、血流、脳波、ＳＥ粒子反応量、単なる肉食獣だ」さらにもう一人の国連関係者と思わしきスーツ姿の男が後ろからタブレット端末を指で触り、先ほどのグレイシアの血流値解析結果を拡大する。「別に私たちがあなた方の社会的差別を誘発するためにやっているのではありません。生物種特有の反応ですよ」そんな英語のやり取りに呆れかえったサーナイトが端末のパネルの一部分を左手の先でつんつんと指差した。特にスーツ姿の男はここの施設関係者なのだから、人間でいう生命工学（バイオテクノロジー）分野にはそれなりに精通しているだろうし、ポケモンが肉食動物とは違う事は知っているはずだ。おそらくこの人間を軽蔑に走らせているのは歴史的・社会的偏見に他ならないこと、そんなことは彼女の意識の流れを捕

える感覚はあっさりと捕えていた。その感覚は冷たく、しかも胸やけが交じったような息苦しさである。

しかしサクラはそれに反論しようとも思わなかった。無数の人間たちの意識を軽く探るだけで、自分がいかに説明しようとも偏見が溶けるとは思えないと確信したからだ。「まあ、確かに生物の各種活動を解析して統計化すれば、あなた方が言っていることはあながち間違いではありませんけど」

「間違いではない？また難しい哲学に走るのかい？」最初の男が冷ややかな笑みを浮かべて一歩下がる。これに対してサクラの声も軽く軽蔑を含んだものだ。「哲学ではありませんよ。私たちの文明でいう常識、というものでしょうかね？」「常識？」「ええ、あなた方の言う理論、数学、科学を自分たちの文明と考える地球生命、地球紀行、宇宙も含めた自然運動の活動の全てにあてはめて解釈する必要はない、という事ですよ。想像の反中に留め、自分たちは自然という事象が決める運命に従うことが一番最善の道である、それが我々の文明の本質なんです」

ふん、この女もやはり反科学技術主義、反グローバル資本主義、人間社会でもたびたび見られるスローライフ主義者や自らを環境保護集団と名乗る連中と同じだ、男は心の中であざける。そう言っている人間たち自体、科学技術や資本主義経済で生きていることは当然だ。それをそっちのけに自分の意見を押し付けるのが彼らなのだ。こう言う奴の意見を聞いたところで1万年たっても人類は変化できないであろう、彼はサクラの説教打ち切るように、右手を断るしぐさと同様に軽く上げる。「なるほど、君たちの原始宗教的哲学は君たちでやってくれたまえ。それより君、さっきノックアウトしたあのグレイシアの病状伺いでもした方がいいのではないかな？何せ…」男は作業用の厚い手袋をはめたアメリカ兵たち4人がかりで抱えられるテルルを顎でしゃくる。その隣をぴょこぴょこと歩くブレイブはまるで軍用犬と同じように見えるが、兵士たちを見つめるその目線は復讐を遂げようとする殺人犯と同じような鋭いものだ。「君た

ちの戦いは…ベタ（熱帯魚の類。オス同士のメスをめぐるけんかは相手を殺傷するほど激しい）以上に激しいからな」

「テルルさん?!」サーナイトの腕に抱かれていたイーブイ、ミオカ・ソウヨウがぴょこんと飛び降りてテルルたちの方に走って行く。サクラは思わず胸を打たれた。ブレイブが無理してつれてきたとはいえ、彼女とてブースターとグレイシアを信頼している。彼女の子供っぽい、しかし純粋な信用が彼女の意識に、風となって吹き込むのを感じ取れた。「それはもちろんです。でもあの子にはそれほどの心配はないでしょうよ。何せ彼女は子供のころからあれ位の苦難を受けていたらしいですし……」

「そんじゃあ次は私……その辺名の記録を取るんだったら、ちゃんと伝わるようにやってよ人間さん」「文句を言うな肉食獣もどき。ネコ科に似てるくせに愚痴と皮肉を言うなんて上等過ぎんだよ」各種発信機器を装着したスカイラブが先ほどのラインに並ぶ。「リスは何なのよ?タイワンリスとかっていうのより私は上等なはず!」「ったく!こちのリスもどきも不満を垂れ流しやがって……」ガトルの方も人間たちに機器を装着させられながら文句をエメリア語で垂れ流し、うざがった兵士がブツブツと英語で小馬鹿にしている。「ンまあ、そんな事より勝つわよガトル!あなたが機動性で突っ込んで私がとどめを刺すから、無茶苦茶やっていいわよレオと同じに、OK?」「もっちろん!!よろしくねラブちゃん!」

「という事だ、訳が分かんねえがいつも通り2匹だな。しっかりや

っていくぜ」「了解です」一足先にラインに立ったメリープとプラスル。「全くもう隊長、少しはモフモフ家にも気を使ったらどうですかあ?だからグラシにこんな人の娘になりたくないなんて…」ピトムニクはバストークの頭の丸まった毛を両手で直してやる。こういう点での気遣いも彼女の仕事のうち、彼女自身がそう思っていた。「気にならねえんだよ…なぜかな」「そんな…グラシちゃんにも…」プラスルが不安そうに聞く。ピトムニク・マルセイエーズにとってバストーク・ホルストとその娘グラシデアの軋轢は彼女がこのメリープの部隊に入った、問より一緒になって数日後には知っていたし、何年間も2匹の間を何とか取り繕おうと様々な面で努力してきた。その時はグラシデアに何が事情があって父親が嫌いなだけだと思っていたが、しかし最近になってこの父親の不器用さ、そして彼が隠す何かが一番の問題となっているのではないかと、一番信じたくなかった方向にさえ思い出してしまったのだ。それに加えて彼女自身の心に立ちふさがる巨大な壁、自分の過去と現在、自分がしている現在の立場、それがこのピトムニクの感情と悩みをより複雑で際立ったものにしている。もっとも、このプラスルがそんな思いをあらかさまにすることはめったにない。自分はあくまでこのチームを、かけがえのない自分の心の故郷とも言える場所を明るく保つのが自分の役割だと言い聞かせ、ひたすらそうしてきた。それに誇りさえ感じるから、これからもそうすると。

　そんな彼女の思いをバストークもすぐに感じ取った。数年間気難しい、いや相手にもならない娘以上に娘同然にかわいがってきた彼女の心理を、父親失格同然ながらも生物学的にも社会学的にも（これは人間の文明と変わらない）父親であるメリープ（進化していないせいか誤解されやすいが）が分からないはずがない。彼はそっとモフモフに電気を送り、彼女に両手に流し込む。愛情を込めた頬ずりと同じくらいに。「大丈夫だ、あいつの事は…あいつは…全部俺のせいだ…だからピトムが責任を感じることはねえんだ…」「え…？」ピトムニクは思合わず両手を離す。もしかして自分は彼のとん

でもない心の闇に突っ込んでしまったのか？決して介入してはいけない空間に……

「何でもない…忘れろ…それよりな！」バストークは左後ろ足で草地を蹴り、意識に湧き上がった黒い霧を振り払った。「俺たちは勝っても負けてもいい、ただ…俺とお前が…確かに今後も上手くやっていけるように努力する、それだけだ。お前が前に行け。いつも通り俺がしとめてやる」「はい！」ピトムニクの声もさっと明るくなった。「それに…」メリープがプラスルを両前足で抱え込むように体に寄せる。「グラシデアのことは…いつも感謝してっからな。ピトムはピトムらしくあればいい。そして俺が俺らしくあれば、この2匹は永久にやれる、そう信じてるぜ」「…ありがとうございます…私もいつも…ここにいれることが誇りですから」

4匹の中で真っ先に飛び出したのはピトムニクである。ガトルとスカイラブがその一瞬後くらいにラインを飛び出し、バストークはプラスルが飛び出した直後にわずかに左前に出て電力を体に注ぎ込み始めた。プラスルが前方の2匹を忙しくさせている間に彼が後方から主力の攻撃を仕掛ける作戦、まさしく種族的な足の速・遅を生かした巧みな方法である。彼女が空中に飛び上がり、正面に向かってかみなりを照射してきた。しかし彼女自身かなり威力を落としている、この攻撃はあまり命中を意識しない牽制であったのだ。ただそれでもルクシオとパチリスは左右に飛び込んでその電気エネルギーを回避する羽目になる。「ガトル、彼女任せるよ！私は一気に！」「うん、どんどん頼むよ！」パチリスは回避したその先で飛騨市足を軸に一気に体を反転させてプラスルに飛び込む。「そのくらい一撃でっ！」プラスルは何の抵抗もなく走りこみ、またも上に飛び上がって前転しながら尻尾を他ｔきつけるか前に入る。パチリスの方

も飛び上がって尻尾を振り上げた。プラスルの“たたきつける”とパチリスの“アイアンテール”がつばぜり合いならぬ尻尾同士の一瞬の競り合いとなる。

しかし勝ったのはプラスル。やはり経験差と実績がものを言ったようで、プラスルの尻尾のエネルギーがパチリスの頭を直撃し、彼女は地面に叩きつけられた。「ううんっ!?」「うそっ?!」ルクシオは思わず彼女のほうを振り向いてしまった。思わずレオに向けてきたものと同様の母親心があふれ出しそうになったが、今ここでかばっていてはバトルにならない。本能という無慈悲な化け物に彼女は思わず罪悪感感じながらも目の前のメリープに目標を定める。しかしそんなルクシオの頭越しからメリープの合間にプラスルが飛び込む。姿勢をかがめてルクシオの下に体子と飛び込んで、前足を救おうとする算段だ。「もらったわよっ!」「ええいっ!?」体内にすでにある程度電気エネルギーを貯めこんでいたルクシオは忌々しげに息を吐くと、そのままそのエネルギーを体外にまとってプラスルに突っ込んだ。しかしプラスルの方もスパークをかけていたため、大したダメージにもならずに軽く吹き飛ばされ、ルクシオの方もその2つの電気の反作用で右側に弾き飛ばされる。彼女が何とか横に滑るのを足の爪で食い止めたその直後に、メリープのでんげきはの嵐が飛び込んむ。「仕留めて…なっ?!」しかしそのメリープをパチリスがアイアンテールで弾き飛ばし、彼は数歩分後ろに下がってパチリスにシグナルビームを打ちこむ。パチリスは右に転がるようにかわし、先程右に飛ばされたプラスルの前に飛び込んで即座に体勢を立て直す。その間にルクシオは息を吸って体制を整えた。一瞬の戦闘本能ののち、再び視界が開けて冷静に周囲の空間の間合いをとれるようになる。彼女は格別慌ててもいなかった。どちらかを落とすのなら、前のメリープをしつこく追って隙を作れば問題ない。ちょっと失礼だが、あのメリープの体力の続く具合を考えてのことだ。「年齢を知ってて幸いだっだね…」彼女は呟く。「(……相手の体力を見切るのも戦闘のうちなんよ…)」

一方、メガニウムは困惑するベイリーフを連れてそこから1キロほど離れた森の中、普段の官舎と呼ばれる建物から、普段は使われていない通用口へと続く道に左右に広がる森の一角に来ていた。この通用路は、この施設の敷地に隣接したプロテウス地区へと続いているが、敷地の外周にあたる地域には人間の文明らしく頑丈なコンクリートの壁、鉄条網、有刺鉄線が張り巡らされ、あちこちにセキュリティーカメラと熱センサーが設置されている。また壁のいたるところに“高電圧危険”、“―関係者以外立ち入り禁止(キープアウト)”、等とエメリアの足型文字とわけのわからぬ文字で書かれている。（それは英語である）

「で、リーヒュンのやることっていうのはね……」ユイリィがツルを軽く振りながらぼんやりとした表情で歩き回る。リーヒュンは彼女と共に少し歩き、怪訝そうな表情を浮かべる。いきなり彼女に呼び出されたことからして奇妙すぎる。しかもなんだこの引っかかるような足と体の重さは？まるで自分の意思がここに来たこと自体を避けているようだった。これもやはり自分の能力によって、自分の意識が警告しているのだろうか？その警告というのが誰に向けられたものなのかも彼にわからない。もしかしたら…それは目の前にいる普段よりかは真剣な表情を浮かべるメガニウムなのか…

メガニウムはつと立ち止まり、ベイリーフを見つめる。「うちとサクラさんでいろいろと考えた結果…フローラをやっつけ…ごめん、そうじゃなくてね…」「隠さなくてもいいよ。俺、覚悟はしてる…」

「ホントにごめん、でも…」彼女は彼の首元にそっとツルで触れる。本当に彼は覚悟がついているのかは分からない。どうしても感じ取ってしまう不安という寒気に震えているのを感じ取れる。「…フロ

ーラを上手く止めるにはね、普通にわざをかけても、ああいう状態のポケモンに当たるとそのエネルギーをすべて跳ね返されちゃうんだよ。リーヒュンにも分かったよね？彼女は…感情とか、気持ちとか、攻撃にこもった感情を利用してそのエネルギーを跳ね返してくるの」「そう…なのか…」リーヒュンはあの水路の洞窟での戦闘を、フローラであったはずの生物と戦闘した時の感触を思い出し、同時に背筋によろけそうになるほどの冷たさが走る。そうだ…これがあの能力の問題かは定かでないが、あの時の暗く底なしの穴に落ちるような感覚、あのこの世の物とは思えない冷気……彼女の意識から放たれたのかもしれないおぞましい感触だった。あれがフローラだとは……父親が違えど純情に仲の良い兄妹であったはずの彼女、フローラ・エルピー・リトリム・グリーズであるとは、確信はあっても、そう宣告されても信じたくない。

２匹の間に沈黙が落ちる。ユイリィにも彼の痛み、苦しみ、悲しさが意識の流れを通じて感じ取れた。彼女が施行を伸ばす必要もない。近くにいるから、それだけで冬の木枯らしのような寒い北風となって彼女の感覚を冷やした。「だからこそ」メガニウムは右前足をトントンと地面へ踏み鳴らし、足に巻いた歩行負荷軽減用の草で編んだ保護靴を（靴というより巻脚絆）ツルで外した。「これから教えるのは、ツルで剣を交えるようにつばぜり合いをする方法、色々な方法があるんだけどまとめてクロスレンジ・アサルトってアメリカや国連でいうの」「クロスレンジ・アサルト……なんかまたこう、あれだな」ベイリーフは困惑の中でも思わず言葉を漏らし、ツルで首の葉っぱをいじった。思ったことが素直に出てくる彼の性根はこんな状況でも健在らしい、というより彼の行動回路の一部分になっているのだろう。それでも彼の意識の中では不安と同時にかすかな希望のようなものを感じる。これで本当に…妹を救上げることが…おそらくは感じているであろう凶暴と狂気に対する悲しみ、無気力さから彼女を…元々いた世界へ戻せるのなら……

そんなかすかな期待はメガニウムにもはっきり伝わっていた。「

その中でも今日はその基本から入って行くからね、大丈夫？」「うん、もちろん…」「本当に？…これって…単にツルを使えばいいってもんじゃないんだよね…いろいろと意識をどこに合わせるかとか、どういうとらえ方をすればいいのかとか、体力以外の点がとても重要なの。そしてそれは多分……」メガニウムは思い出していた。自分がこの方法をサクラから教わった時。あれはまだ彼女が５，６歳の時だった…何か月もの間、気持ち悪くて、フラフラして、苦しいどころかもう逃げ出したかった。毎晩毎晩、人間の強化された施設の窓を（無駄だとは薄々感じながら）壊そうとツルを打ちつけていたっけ……その度に突然ブザーが鳴り、人間たちに別の部屋に連れて行かれた。そこで何やらわからぬ機会をつけられ、おかしな透明の管を挿し込まれ、液体がその中を伝うたびに意識が遠ざかり…気がつけば元の暗い部屋に戻されていた。サクラにはその度に説教ではなかったがああだこうだと指摘されてばかりだった。「リーヒュンにとっては…苦しいし、つらいし、傷つけることになるかもしれない……」彼女は俯きがちに前足の爪で土をかいた。「それでも…それでも…やれる？うち…心配だよ」

苦しくてはちきれそうだったチコリータ時代のユイリィ・ランタン・プレミドールを辛うじて支えていたのは、他でもないキュウコンのアリョーナとトゲキッスのオーメリアだった。しかし休講んは自分たちと敵対する勢力として、悲しいかな、敵として2度も合ってしまっている。そして当時最大の友人であったオーメリアに至っては…同い年のかけがえのない親友だった彼女は……つい最近この手で殺した。

彼女自身が、彼女自身の能力で。

それを今目の前にいる彼、あってまだ4か月にもならないのに、ありのままに自分のふるまいを認めてくれる、どうしようもない自分に素直に真っ直ぐに付き合ってくれる今かけがえのない友人に、

仲間に、大切な存在に、同じような苦しみを与えるために教えるのか？宇宙や海洋にまで活動領域を広げた人間社会の繁栄と課題と問題も、自分たちの文明の凋落と崩壊も、その中で生まれた自分という使命という問題も彼女は今までロクすっぽ考えもしなかったし、知ろうともしなかった。だが、このような立場に立つということは…やはり現実と向き合わなければならないのか？

「大丈夫だよ、そん位やりゃあいいいさ」彼は彼女の左前脚を自分の右前足で軽くたたいた。「無理といわれて無理なんて自分で作った境界線だろ？フローラを救える、それで妹が、家族が元通りになるんだったら３０日でも１００日でも俺はやる。できるまで、な」ベイリーフにの言葉からは迷いが吹っ切れていた。迷うほどに考えるという事は彼にはできなかった。それにこの方法であれば妹を助けられる。どうしてそれを迷う必要があるのか？そう思っているのだろう。今のリーヒュン・バイリング・グリーズという青年にはそれ以外になかった。

メガニウムの表情にも普段の明るさが戻ってきた。「そっか、そうこなくっちゃ！そんじゃもう始めちゃおっか！頑張ろうね！」ユイリィは早速後ろ足の保護靴もツルで草網のひもをほどいて放り投げて後ろに下がる。「よっし、やってやるか！」リーヒュンも保護靴の紐をほどいて後ろに数歩下がった。

やれば何とかなる、めちゃくちゃでもなんとかして見せる。そう思っていた。

思いは己の爪先に（後書き）

ということで、次回が正当な３８部になる予定です。実質３９部ですけど。

末筆申し訳ございません。もう少しご辛抱願います。

暮れゆく年の中で（前書き）

挿入のせいでグダグダになってしまい申し訳ない…

続きです。

（な、なんたってこんなに…）リーヒュンは激しい後悔の念にさらされていた。このツルを使った戦法は、やれば何とかなるというレベルではない。ユイリィが言うとおりに意識をツルと周囲の空間に当て込み、直感に伝わってくるがままにツルを動かしてみるが全く彼女のそれをかわすことができない。彼女のツルは本当に意識という流れをすべて掴み取っている、すなわち周囲の空間でもあらゆる物体の流れを彼女の思い通りに振る舞わせているかのようだ。ベイリーフが見ているとメガニウムの４本のツルが獲物を捕らえた獰猛なクラゲのような（まあ、カツオノエボシやエチゼンクラゲやアカクラゲはどちらかといえば獲物がやってくるのを待つ方だ。自分から襲う獰猛なクラゲは地球にはいないのだろう）動きを取っているようだった。そしてとにかくどうしようもないもの、それは意識空間の流れから逆流してくるおぞましい悪寒だった。その勢いがこれまでの比ではない。途中からはもうツルが飛んでくる間立っているのがやっとだった。やれば何とかなる、絶対にフローラを止められる能力を見つけられる、先程まで、これを行う一瞬前までは彼は信じていた。しかし、彼女が不安そうな表情を浮かべていた理由が今わかった。自分の先読み能力はやはりまだまだ、現実は甘くなかったのだ。その思い込みはいともあっさりと、積み木の白に自動車を突っ込ませるのと同じくらいもろく崩された。

３回目も前と全く同じだ。メガニウムのツルがまるで嵐に吹き飛ばされた建築物の残骸の如くのように襲い掛かってくる状況、ベイリーフは耐え切れない。彼と手ツルを出し、飛んでくるツルの猛攻に存在する意識とそれによって決定されるしなやかな物質の動きを何とか読み取ろうとしながらツルを振ってみるものの、みるみるうち

に何歩も下がっていく及び腰状態になる。「ど、どうかな…ほらもうちょっと前の方に出て！」「う、うん…ぐっ…まだまだ…」「そうそう！そんな感じ！え、あっ……うんうん…」一方の彼女、メガニウムの方は彼にいろいろアドバイスしながらも全く妥協せずにツルを意志のままに、周囲の空間の動きを感じるがままに振り、じりじり後ずさりするベイリーフを追い詰めるが如く踏み出してゆく。ただしこれはベイリーフを本気で追い込んでいるのは出なく、単純にここにある2匹の意識の変動と流れを的確に分析し、ただ単にそれに従って動いているだけだ。彼にも強圧的どころか彼女の意識が自分のことをそっと優しく包んでくる、そういう不思議な感情にとらわれていた。

ふるうスピードのあまり、ぼやけたように見えるユイリィのツル4本。リーヒュンも獰猛に飛び、鋭い冷気とも溶かすような熱気ともいえぬエネルギーを放つそれを自分のツルで何とかとらえ弾き返す努力をしたが、とてもそのスピードには追いつけない。さらに彼女のツルか彼の首を、腹を、背中を直撃する感触が尋常ではない。ムチに叩かれたあの熱く走るようなものではない。そこからすべてを飲み込んでゆくような、高いところから落下していく時のあの目の回るようなものに、この世の物とは思えない冷気を含んだとんでもない怪物だ。嵐のように、周囲がまるで自分を殺さんとばかりに襲い掛かってくるようなおぞましい意識の高波にさらされるベイリーフ。これまでにないほどの足元の全ての感覚が溶け落ちるような悪寒の前にあっという間に立っているという感覚が失われて……

リーヒュンはまたしてもぶっ飛ばされて倒れた。最期の方は自分がツルを震っていたのかどうかさえ曖昧であり、意識が遠ざかったいたのだ。彼の感覚は今、自分の意識の底から降ってわいたように（これが何のことだがは否定できない領域に達しつつあったが）自分の脳裏を映像として、音声として駆け巡ったものがもたらした例えようない気持ち悪さで満たされている。「ご、ごめんね！今のは多少やり過ぎだったかもしれない…でも…こういうもんなのよね、うん。他に…」ユイリィが慌てて飛び寄り、ベイリーフの首の葉っぱ元をツルでそっと触った。彼の全身のあらゆる臓器、筋肉、関節を動かそうとする末梢神経から中枢神経まで、あらゆる感覚系統が、意識の底から発せられる強烈な感触に疲弊し、恐怖を放っているのが分かる。並のポケモンだったらとっくに失神しているであろうが、メガニウムが感じる限り、このベイリーフが辛うじて意識を保っていられるのは彼自身の気合いに他ならないと感じられた。ここまでしてまでも目的に突き動かされる何かが。「はあ…はあ…やっぱ…何なんだよこれは？……」

「これ？…う、うーん？どうしてだろう…」彼女がツルの先からそっと意識のエネルギーを流し、ベイリーフの苦痛は彼女の放った温かみのような感覚によって少しだけ楽になった。特に関節を走る突くような痛みがぐっと遠ざかったような気がする。「どうお？ちょっとだけ楽にはできたかな？…」「今のは…そう、だったんだ…ごめんな、これくらいでへこたれたんじゃ…」「う、うんん！今は立たないほうがいいよ！もう少し、こう…休んだ方がいいかな」無理して右の前後足から立ち上がろうとするリーヒュンをツルで押さえてユイリィは横にした。今無理をさせるのは危険、そう判断したから。

うすぼんやりとした感覚で盛夏の南半球の風をリーヒュンは感じていた。人類の施設がすぐそばにあるにも関わらず、未開発のままソーラ最南端の集落と真の意味で最南端にあたる国連研究施設兼アメリカ空軍基地の敷地を人間の張り巡らせてセキュリティー・システムと共に区切るうっそうとした森の木々。その合間から見える夏空はどこまでも澄み切った青色、隣にそっと歩み寄って座り込んだユイリィの夏空の瞳の色と同じだ。彼女もまた夏の青空を見上げているようだが、一体何を思っているのか？思考を彼女の視線の先に合わせてみるが、疲弊しきった彼の今の能力では上手く掴みとることができない。

ただし、そうやって意識を探ろうとしてきたことだけはメガニウムに伝わったのだろう。目線をベイリーフの方に向けた。「ん？どうしたの？」「い、いや、ユイリィに聞くとか、別に大したことじゃないんだけどさ…」

「もしかして、うちがかわいい、とか？！あはは！そういう事は正面から言わないとリーヒュンらしくないよ？」彼女は彼が予想していたものとは全く違うツッコミで彼の首元の葉っぱに彼女の頭の黄色い雄蕊をぎゅーっと寄せてきた。「うぐぅ…全然違うんだよ。そういう事じゃなくて…」リーヒュンはちょっと恥ずかしそうにしながらも体を起こした。「あれって、やっぱり…難しいんだよな？」

「まあね。あたしだって何年もかかってやっとツル2本で使えるようになったんだよ。ウチだってすぐにできるようになって、なんて言えないよ……」ユイリィはツルで前の戦闘で傷ついたピンク色の花びらを撫で、あの時の彼女自身の思い出した。

その苦しさ、ベイリーフの意識を痛めつける異常な不快感、そして意識の底から視界に飛び込んでくるおぞましい映像や音、それはメガニウムにも分かった。やはりそうなのだ。ユイリィ・プレミド

ール自身が一番そのつらさを知っている、そしてそれを目の前にいる彼に味あわせないだけのやり方を見だがつけようとした。だが、結局は同じになってしまっている、そのどうしようもない事実をこのメガニウムは認めざるを得ない。

「あ、そういえば…そっか！！」メガニウムは思い出したように明るい声をだし、ベイリーフの右前足を彼女の左前脚でこつんとやった。「今度さ、ウチがツル2本でやってみない？いきなり4本6本飛んでくるとわけわかんなくなるから、リーヒュンにもやりやすいと思うんだけど…どうかな？」「俺は…なるべく全部でもやれば何とかなるとは思うんだけど。てかそうでもしないといつまでたっても上達しないんじゃ……それだとフローラが…」リーヒュンは慌てたように立ち上がり、首を振った。先程までの痛みと悪寒に変わって奇妙な焦燥感のようなものを思い出した気がする。フローラを助けるには、自分がこんな風にしているわけには…「そんなことないって！リーヒュン焦り過ぎだよお…」ユイリィがリーヒュンの頭の虫食い葉っぱをツルで触る。このメガニウムにはベイリーフのひた向きな思いを痛いほど感じた。フローラを、自分の妹を守りたい、そんな兄の意思を意識の流れからくみとり、熱い炎のようなものとなって彼の水晶の底を強く照らしている。だからこそ、だからこそ無理はさせちゃいけない。「……分かってる…フローラを助けたいっていうのはあたしもよく知ってる。だから…それだから…リーヒュンには無理させちゃいけないよ。大丈夫、ウチが一緒ならフローラは助けられる」

「……本当に…それで？…」ベイリーフは一歩メガニウムに近寄り、じっと彼女の顔を覗き込んだ。彼女の目線、夏色の瞳の奥に意識を集中させてみる。彼女の言っていることは本当か…？

もちろんこれは自分で読み取れるようにはなりたい。しかしどんなに表情を歪め、目を閉じてその光景を思い浮かべてもそれらしきものが浮かんでくるどころか、かえってその周囲に渦巻くこの世界

のおぞましい映像…これが今の妹のフローラと関係があるのか？…と気味の悪いめまいや寒気ばかりしか経験できない。

そんな彼の感情はユイリィにもはっきり伝わっていた。だからこそはっきりと答える。「うん…もちろんだよ」メガニウムはきっぱりと頷いた。

リーヒュン・グリーズ、ユイリィ・プレミドール、2匹が真の意味でその使命を突破するためにはこれを、今を乗り越える必要がある。

その意味を、その必要性を、2匹はお互いの目線から感じ取った。

「やろっか…」「もちろん」2匹は森の空いた部分にぴょんと左右に分かれ、お互いに向き合った。

「相変わらずミーはスルーなんでしゅねえ…」それを少し離れた場所から見つめるチビのロズリンは呆れたような目線を2匹に送る。それに気が付いたユイリィが無理な笑顔を作ってシェイミを見た。

「大丈夫大丈夫！ロズリンの事忘れてないよ！」

一方、人間のギャラリーが一杯いる状態のこちらは……

ルクシオの狙いっぷりとその威力はやはり強烈だった。どこでここまでの勢いと小賢しいと感じられるほどの巧みさを身に付けたのかは分からない、歴戦を潜り抜けてきた35歳のメリープすら舌を巻

くレベルである。この時も彼は相棒に近いプラスルと巧みに相手2匹の距離とタイミングを絞り込み、2匹まとまった所でかみなりの一斉射で相手を叩き潰そうと決めていたのだが、その追込みというのがそう簡単に行かなかった。「ピトム、もう少し前方に寄せろ！」「はい、やってみます！」プラスルがまたしてもパチリスの方へと電力を貯めこみながら突進してゆく。だが、彼女のスパークをが飛び掛かる前にパチリスはルクシオの方にぴょこんと飛びかえった。「ガトルがモコモコの方に！」「う、うん！」「足をすくってやればいいの！勝つ方法は私……」全部言い終えないうちに彼女は突っ込み、パチリスは彼女の上を小柄の体と俊敏性に任せて飛び越える。「2匹同時攻めって…そんなら一気に！」「そ、そんな簡単に決めちゃって……」後方に飛びのきながら思わず隊長の方を見た。プラスルが実質2匹を追い回していた状況下において、メリープは後方を左右に動いて大出力の攻撃をしかけており、2匹の戦術を十分に体をもって確認しているようには見えない。彼女が一緒にやってきた限り、普段から突発的な（それでも戦闘に必要なスピードと即決力はある）動きはしないバストーク・ホルストにしては今回はあまりにも拙速すぎるように思えた。これも彼の経験の一種なのだろうか？様々な判例を積み、それを的確に分析できるようになればこういう相手をロクに見ない判断も大丈夫なのだろうか？

しかしメリープは軽くうなずいて、電気が溜まり始めて輝きを増す水晶のような球のついた尻尾をぶんぶんと動かし、左前脚を踏み鳴らす。「心配するな、俺の経験がそう言っている。あの2匹方をまとめてやるぞ！」「頼みますよ、隊長！」プラスルがメリープから向かって左側に飛びのき、自分の体内に電気エネルギーを注ぎ込む。先ほどの隊長の言ったこと、何をするかは見えた。いつも通りだ、2匹で普段やっているあれ、バストーク・ホルストとピトムニク・マルセイエーズが相手をまとめて殲滅する瞬間にやる2重同時のかみなりである。ちょっとしたトリックも含有した……

その直後、パチリスが電気を前進にまといながらスパークをかけ

て走りこむ。「さっすが！俺に向かってくるとは…」「行きますよ！」「よっしゃ…」プラスルが上に飛び上がると同時に、メリープが数メートル走って全身にため込んだ電気エネルギーを思いっきり放電しようと、モフモフ毛の下の筋肉を動かした…

だがパチリスの狙いはメリープの足元であった。跳ねるように走ってきた隊長の前足が着地する場所に小さな彼女は前転するように飛びこむ。「いっけえい！」「うげっ…何だとっ！？」電力を放出しようと走り寄ってきた彼は、前足がつく前にそのまま前のめりになってバランスを崩した状態で電力をすべて吐き出した。

上に飛び跳ねた状態のプラスルは気づかぬまま、隊長の発した電気エネルギーをほっぺの電気袋に充電し、そのエネルギーに乗ってパチリスの後ろにいるルクシオに前転を打ってから飛びこんで行く。

しかし…先程の事態で静電気の斥力が生み出した血からの方向は多き狂っており、プラスルは目標よりはるか手前の地点へと飛び掛かってしまっている。「う、うそっ？！」「もらったわよっ！！」ルクシオは思わず声を上げてプラスルの頭上へとジャンプし、全身にニトロチャージのエネルギーを装填しながら一気に飛び掛かる。その強烈なほのおタイプのエネルギーがプラスルの背中と赤い小さな尻尾にかける背面にのしかかるが如く直撃し、ルクシオが草地に飛び降りると同時に彼女の体が背後で地面に強烈な勢いで叩きつけられた。

「プラスルは戦闘続行不能！」先ほどの兵士がまたも運動会のような判定をする。国連の関係者や軍の関係者が口々に野次ともはやしとも取れる声をあげた。「さっすがこの女だぜ！歴戦の２匹に勝っちまいやがった！」「やはり種族の問題だろ！」

「やったやった！ありがとガトル！」「さすがですラブさん！感動しました！」スカイラブの背中に向かってガトルが飛び付き、尻尾同士やほっぺと黒い毛同士をを絡めてバチバチと静電気を飛ばした。ルクシオにはその電気の感覚から、今回２匹で勝ち取った歓喜をこのパチリスが全身で受け止めているのを感じる。「そんなあ、

感動するほどの物ではないっしょ！私は単にガトルと一緒にうまくやった、本当にありがとうね！」「はい、一緒にやれてよかったよ！」スカイラブの意識に嬉しさが湧き出すと同時にほっとした。こんな自分についてきてくれた、そしてどうしようもない自分でも、ちっちゃなまだ15歳、軍人になれる年ごろになっているとは到底思えないパチリス、ガトル・リベントを守ってあげられた、心の底から自分の運命に、主に感謝した。

うつぶせに倒れこんだピトムニクにバストークは駆け寄った。プラスルは先程の一撃で若干熱傷の跡が残っているが、かねて動けないほどの重症ではないようだ。「ピトム、大丈夫か？！」「う、うーん…」プラスルは少し猫が伸びをするように体を伸ばすと、体を震ってぴょこんと飛び上がった。その声も明るいものであり、負けたことを苦にもしないさわやかなものだ。「は、はい！全然大丈夫ですよ！この通りぴんぴんです！」「そ、そうか……」バストークはまあ足をわずかに折り曲げて前にかがむと頭の方からピトムニクを乗っけてわずかにモフモフ毛から電気を送り込んだ。でんきタイプの種族であるが故か、プラスルの血流は電気刺激で楽になり、背中に走る鈍い痛みも少し遠ざかる。その一方でメリープの表情には申し訳なさがあふれていた。無理もない、先ほどの戦闘は明らかに彼自身の油断であり判断ミスであった。これが実際の戦場だったらピトムニクの命はなかっただろう。バストークは気が滅入ったようにため息をつき、ゆっくりと人間たちの手で石灰のマーカーで引かれた白い平面の外へと歩いてゆく。「ごめんな…今回のは完全に俺の失敗だった。まだまだ立派な奴にはなれてねえってことだよ……」「そんなことないですよ、隊長だって、ね？」「いつも悪いな……俺はお前がいなきゃ今頃は死んでるか軍人辞めて人間の地下街に座り込んでるかのどちらかだぜ……」「そんな冗談を言わないでくださいよお！私だってここまで来れたのは…」背中に乗った彼女の声

が少し下がった。　バストークが言ったことは冗談どころではない。彼らもエメリアのあちこちで人間の作った地下街ではなくても、職を（おもに農業）、居住地を失ったポケモン達が人間の多く住む地域に（そうでなくても、農村でも弾圧されたり追い払われたりすることには変わりないが）流れ込んだら、または住む場所や行き場所をなくしてどこか不本意な場所にくぎ付けにされてしまったら、（種族的に旅する者では行き場所をなくしてしまった場合もある）どうなるかを見たことがある。彼らがあったことある者の中には、自分の部隊が隣集落との騒乱で敗北し、そのまま住民ごと放浪しているといった場合もあった。もし互いが出会う事がなかったら、その時の想像はとても彼女にはできない。それがこのピトムニク・マルセイエーズの一期一会という精神である。自分が円を持った相手とは精一杯良好な関係を築く。それが彼女の優しさであり、このプラスル自身が存在できる最大の恩恵であることを彼女は考えていた。もっとも、感情には出さないが、その背後には彼女の生い立ちと経歴があった。読者のみなさんも一度は疑問に感じたであろうこと、ピトムニクには相方のマイナンはいないのか？その理由がこれに結びついているのだ。

　ただし、もちろんこの時もプラスルはそんなこと等おくびにも出さず、笑顔を無理やりでも作って切り返した。そういう暗い過去は思い出したくない。「…ほ、本当に隊長もみんなもいるからです！今回は戦闘じゃないんだし、良く頑張った、でいいじゃないですか？」「ま、まあ…単純に物事考えちゃえばって聞こえはいいがな…でもまあ良しとするか…」バストークも考え込むように首を動かした。彼自身なりにはあまり満足のいく者ではなかったし、それどころか彼女をうかつに攻撃にさらした自分に対して嫌悪感さえ覚えていたが、同様の状況下にいるであろう彼女の前で露骨に出すつもりはない。メリープにとってピトムニクはあらゆる意味で娘同然だった。悔しさも無力さも感じているであろう中で奇策に振る舞う彼女をこれ以上攻めたててはいけない、そう思ったから。

そんな2匹のもとにスカイラブとガトルが寄ってきた。ルクシオの方、すなわちスカイラブがピトムニクを抱き上げてプラスルの電気袋のあたりに彼女の額のあたりをこすりつける。「ごめんねピトムぅ！ちょとやり過ぎちゃったかも…」「うんん！そんなことないって！それにしてもラブちゃんはすごいよねえ！体調もラブの戦法にはついてけない、て感じだよ」「そんなつもりはないのよ…私なんかケンカばっかで戦法とか戦争の面でいえば私はピトムや隊長には到底、てとこ」「ねえねえ、いっそさ、ピトムにかわってバストーク隊長の直属になってみない？」「う、うっそお？！それは遠慮しておくわよ」「おいおいおい、俺に副官相当の奴がもう一匹増えるのかよ？」メリープが一歩よってルクシオのはねっ毛を前足でくしゃっとやる。「嬉しいですよね？！でしょでしょ！」

「おっす、お疲れさん。姉ちゃんのおかげでデータも十分とれたぜ」「ええ、ありがとうございますよ兵隊さん」国連の研究施設関係者と思わしきタブレット端末を持った人間の男がスカイラブに歩み寄って彼女の頭のはねっ毛をくしゃくしゃと撫でる。ルクシオの方は嫌がるどころか逆に甘えるように近寄った。「ラブちゃん、ホントすごいねえ人間の皆さんとこんなに仲良く…」「まあ、性格は様々あるっていうからなあ、世界に一匹くらい人間と上手くやれるやつがいても不思議じゃねえよ」「ラブちゃんってある意味すごい存在ですね？」「そこまで言わないでよガトル！人間と普通にやれることがおかしい訳じゃないしさ」彼女は別の人間たちの間でぐったりとしている一匹にあらかさまに視線を飛ばした。「まあそういうのがあっても悪くないがな…」バストークにもここまで初見の人間たちに警戒感なく寄っていくポケモンは見たことがない。このメリープが知っている限り大抵のポケモンは人間に対して拒否反応を示すか、よほど信頼した相手にのみポケモン同士の同じ家族や友人と同様の態度で接するといった雰囲気ばかりだったから。

「それでさ…その板みたいな機械どうやってみるの？」スカイラ

ブが人間の持っているアップル社のタブレット端末を見ようとその男の腕もとに寄る。「そんなの姉さんが見たってわかんのかよ？まあ見せてやってもいいけど」男がかがむように片膝をついて彼女が見やすいようにする。ルクシオにとっても英語や複雑な表やグラフは全く理解できないが……

スカイラブの尻尾が突然乱暴に引っ張られた。「な、何ガト…」彼女の振り向いたその先にいたのはほかでもないグレイシア。その表情は恐ろしいほどの影になっている。まるで底なしの暗さ。しかし、スカイラブは不安そうな表情を浮かべるどころか、ますます表情がつややかで愛想の良いものになる。（…全くあんたには何もかも気に入らないのね……）

ルクシオは尻尾を強引に振り払うとテルルに歩み寄り、妙に甘ったるい声を出した。「テルル？…体調の方はもう平気になったのね…それはそれは…」「あ、あのさあ……さっきから何なの…」そういう彼女の声は、恐怖とも怒りとも哀しみとも区別のつかぬ激しい感情に震えてかすれ、表情にはそれ以上に感情があらわになっていた。グレイシアはさらに続けた。初めて彼女がその感情を言葉にする。「…ホント真面目に…うざいんだけど…」そんな顔を見ているとスカイラブはますます優越感を関じてもう一歩寄る。「今更気づいた？…どこまでも自分の思考に留まることしか知らないのねアンタは」「…はあ？さっきから一体何を……アンタこそ人間に媚びばっかさあ…」「媚び、ねえ……」ルクシオが左前脚の爪をひゅっひゅっと軽く振り、辺りを見回した。ガトルとシンシアは2匹の明らかな状況に多少怖がったようにロコンの右前足とパチリスの左手を掴み合い、レオはグリソムを小突いて耳打ちしている。バストークとピトムニクは状況を理解できぬ様子。プラスルの方は明らかに不安そうな目つきをしている。人間たちの方はそんな情景をお構い

なしに話し込んだり先程まで装着していた機器類のチェックをしていたりし、２匹には軽く目線を送るだけだ。スカイラブがテルルに顔を鼻と鼻がくっつく寸前にまで近づけた。グレイシアが軽く後ずさりしそうになったがルクシオが彼女の前足両方を押さえつける。彼女の声が一気に鋭く冷たくなった。「……そんなつもりはないんよこっちは。テルルの方が逃げてるだけって事さえ理解できないの？嫌な奴は拒絶して大丈夫そうな奴だけと仲良くしてるつもり？」

「……そ、それは……私にとっては…」１５００Ｖのコンセントに前足を突っ込んだように、体をびくんと動かしたテルルの表情から怒りが消えうせ、その領域を恐怖と衝撃が埋め尽くす。目線が細かく震えているのは見たスカイラブはますます得意げに愛想笑いを浮かべた。「とにかく…私もテルルと事を荒げるつもりはないからさ、あんまり露骨な行動は示さないのと、自分の能力を過剰に信じないこと。何せさあ…」「……」テルルは答えられない。

「アンタは負けたげど私は勝った、実力差が違うの。もしテルルが、今後も自分が天才だと思っているようだったらあんたは次の戦いで死ぬ。私それに１０ポケかけるわ」

「ううっ……」「そうよね…悔しいよね……だったら改めないと…ねえ…」

テルルはうつむきがちになった後に踵を返し、速足で歩み去った。

「ラブちゃん……何かあったの？」恐る恐る前足を握ってきたのはピトムニクだった。「ごめんごめん、ちょっときつく当たっちゃったかなあ？」スカイラブが彼女のプラスの模様の入った赤いほっぺに顔の右横をこすり付けて静電気を飛ばしてから歩み去るグレイシアをちらりと見やる。数歩生み出した。バストークの右前足が彼女のはねっ毛を軽くいじった。「相変わらず厳しい嬢ちゃんだなラブは」「えへへ…すいません隊長！」「すいませんってお い、だけど

なあ…」メリープもグレイシアの方を見て声のトーンを落とした。「あんなこと言っちまったんだ。あとでフォロー位はしてやれよ。言ったまんまじゃあまりにもだろ?」「え、ええ…はい、確かにそうですよね…」「そ、そうだよラブ!あのままじゃテルル立ち直れないかもしれないよ?」「うん、大丈夫……心配かけちゃったね…」そういって彼女が歩み去った森の奥、普段使われない施設裏口ゲートの方向を見つめるスカイラブ・バトルスターにとっては内心、実際に説教したという感覚もケンカを売った感覚もなかったのだ。多少得意げな物言いになってしまったのは後悔したが、前の時もそうだった学長のわりにルクシオは怒っているわけではなかった。これもまた自分の性格なのだから、彼女自身はそう解釈していた。

「さすがだな…人生経験の質、違うぜ。まあどっちがより良いとは言えねえけど」ロックオンが遠巻きに眺めながら顔を赤らめて羽を震わせた。「…あの子なら口説き落とした時も快感も格別で…」「…まーた…大尉は今度はラブちゃんですかあ?」チェギョンはムクバードの背中辺りをモフモフで小突く。「顔にそれが出てますよ!」「心配すんなチェギョン、俺の相棒はもちろん…」彼は彼の右隣にいるモココに両翼で飛びついた。彼女の静電気などは彼にとっては大丈夫のようだ。「グラシ!お前しかない!」

「そ、そうなんですか?…」グラシデアの顔が沸騰したようにおもいっきり赤くなる。「当たり前だ。俺の運命がそう言っているんだからな」「は、はあ…どうも…」グラシデアは困惑する。「全くもう、グラシが照れてるじゃないですか!」「嬉しがってるにきまってるだろうが!よっしゃ、次は俺たちの番だな、行くぜ!」「あ、分かりました…チェギョン、よろしくね」「う、うん…」チェギョンは心配そうにテルルがいなくなった方を見た。とにかく、あの調子でスカイラブが言われたことは何だったのか?全く聞き取れなかったが、このチルタリスにはなぜかいい予感がしなかった……

テルルは茫然自失のまま歩き続ける。（……何…何よあいつ…）全身の痛みがスカイラブのあの表情と説教という毒、すなわち彼女の感じた激しい怒りと悔しさを浴びてさらに恐ろしい感覚に成長し、自分で考えるのも恐ろしいような怪物となって彼女の意識を遠ざけ、足元を何度もふらつかせる。しかしこのグレイシアは歩き続けた。ここで気を失って倒れることがあの彼女に屈するという屈辱と同様に感じ取られ、同時に自分の情けなさを露呈するような絶望的に悲観が合わせ交じってひたすらに逃げ回ることを体に強制していたのかもしれない。とにかく今の彼女には意識の底で激しく沸騰し、テルル・アストラフスキーというこのグレイシアの人生、経験、信念、プライドからなる意識の水晶の内壁を溶かす強力かつ恐ろしい液体となった絶望的な感情の暑さと苦しさに意識は敗北しかけながら、体と末梢神経がそれを拒絶して、しかし何の当てもなくフラフラと歩きまわっているのである。（……ああやって自分のことは棚上げにするのよ！あんな世渡り上手気取りなんかに私は……）彼女の意識を満たす敗北感と憎悪の中核をなす物質の組成には自分に対するものも含まれていた。

その自分に対する嫌悪が混ざりこみ始めると、うごめくその物質は間もなくルクシオに対する激しい怒りへと変化した。全身が獲物に噛みつく肉食獣のように痙攣し、体が、とくに顔と首元が急激に暑くなるのを感じる。その感覚はすぐの彼女の思考を激しく、感情的なものへと導く。ぼんやりとした意識の中、歩みがふと止まった。（……殺してやる……それしかないわ…）

自分でも身の毛がよだつ感覚がテルルの背筋を寒気となって通り抜けたが、その感情がもたらした体の動きを止めるすべを彼女は持たなかった。次に自分が何を起こすのか、ほとんど考えなくても分

かっている。このまま踵を返して官舎へ行き、“あれ”を持ってスカイラブの首元を……

「おい……おい待てっ！」そんな彼女の尻尾を強烈な力で何者かによって引っ張られ、本能的に前足の向きを先ほど来た道に方向に返す。「ったく！何やってるんだテルル？！」そこにいたのはオレンジ色、頭の上と首周り、尻尾は黄色のフサフサ毛……「……ただ単に……」グレイシア自身しゃべっている感覚もなかった。それどころか特に何かを彼にしゃべろう思わなかったが。「って……何って……」上の空のようにテルルは呟いた。「……お前なあ……」ブレイブは首を振ってテルルの肩辺りを両前足でつかむ。こういうケンカやひどい精神性ショックで茫然自失している奴に限って中東やアフリカの革命家に似たとんでもないことをしでかす恐れが、アジアや欧米の政治屋のような素っ頓狂な事を言い出す可能性がある、彼は知っていた。

こういう相手を止める方法は決まっている。かなり強引なやり方かもしれないが、通常のテルリウムにやったら明らかに半殺しにされるかもしれないが、実際にこのブースターは、ブレイブ・クレイバーとしてそれを実行する決意でいた。

彼は彼女を前足で引き寄せテルルの顔を頭飾りを自分の首元に抱き寄せた。テルルの全身の筋肉がこわばり、けいれんを起こしているのが彼の感覚に伝わる。彼の意識の底にある暗闇が、切なくそして寂しい同情となって反響した。ブレイブが味わった誰にも言えぬ過去…常に運命を呪い、わが身を消してしまいという屈辱の中で悶絶していた幼きあの時を。

ブレイブは力強くグレイシアの頭を撫で、体を強く抱きしめる。

「だから気にすんなって、そう言ってんだろうが？確かにラブはラブでやり過ぎている一面もあるぜ。でもよ、お前があああやって感情的になったってお前が今回のので負けた事実は事実、あいつが勝ったことだって関係ねえ。だから…」ひし形のある彼女も背中を右前足でポンポンと叩いた。「お前はお前であればいい。だから落ち着こうや、な？」

「（……！！！！）」たったその一言、その一言だけがこのグレイシアの意識を渦巻く凶暴な有毒物質の中和剤となった。

今までの自分は一体何を考えていたのか？自分は何を思い、何をしようとしていたのか？突如思い返したようなショックが彼女の全身を波のように飲み込んでゆく。

（……私は…私はどうして…）それと同時に全身を張りつめさせていた怒りや憎悪が急激に遠ざかり、それに代わって激しい無力感と虚脱感に襲われる。疲れと全身の痛みが蒸し返したようにテルルの体を覆い尽くし、彼女の意識は一気に白い霧の彼方へと落ちるかのごとく失われた。

「え、ええ？！テルルさん？！」びっくりしたイーブイがグレイシアの背中に飛び付く「うっ…心配すんなミオカ。ちょっとテルルは

…疲れただけだ…」「…でも…大変でしょうねテルルさんも」ミオカは心配そうに彼女の背中を降りる。「まあな…バトルっていうのは骨の折れる仕事なんだよ…」すっかり力が抜けてしまったテルルを抱きしめているブースターの意識の底では、いまだに薄暗いものがゆっくりと脈打つように漂っていた。スカイラブにではなく、バトルをやらせた人間たちに。「……バトルってのは人間にとっちゃ快楽にさえなりやがるからな。うかつにやんなよミオカも」「は、はい…」ミオカは落ち込んだ顔で頷く。「さあて…こいつを連れてってやらんと…」

ぼんやりとした白い光……何もない空間を、空中に漂う奇妙な空間に入ったような感情も感じない空間に迷い込んでしまったようだ……（……なんで私はこんなところにいるんだろう？）テルルは思わず前足を伸ばす……つもりだったが…届いたのかは分からない……それでも彼女を一生懸命前足を伸ばす努力をした。

目の前に誰かがいる…白い光の中で、宇宙の最期のような感覚が広がる意識と失神の淵で彼女の目の前の光景が替わった。彼は…彼は…弟のエルヴィン……違うのか？いや…それは…

しかしそんなことを考える余裕は今のテルルにはなかった…ただ目の前に弟がいる、それだけで…それだけで今の彼女には……（！！お願い…お願いこっちに！……）

「おいおい、寝ぼけてんのか？まあそれだけ前足を動かせるんだったらいいとするぜ…」テルルの両目の間、鼻の上あたりの白い光に

何者かに前足が当てられ、その違和感に彼女は思わず目をかすかに開いた。目の間に広がっていた白い光がぼやけ、オレンジ色の前足と頭にフサフサの毛がちょこんと乗ったオレンジ色の顔、くりっとして少し青味のかかった瞳、その横には茶色の体と首元には栗色のフサフサ毛、天井には不自然なほど明るい人間の作った光。「ううっ……私はさ……」「大丈夫だっての！お前フラフラ施設の裏口側に歩いてくもんだから、慌てて追ってったんだよ俺とミオカで。そしたらテルルはよ、ラブのことを殺すとかなんだか凄まじい表情でぶらんぶらん、だぜ。んなのに俺が軽く抱きしめてやったら突然気を失いやがって…おっ！まさかお前は…」ブレイブの顔が真っ赤になり、ふさふさ尻尾がぶんぶんと揺れ始めた。これに対しては彼女もいつものリアクションを行える。「バーカ…それで…は？…私がそんなことを…？」テルルはあの時の記憶を必死に思いだそうと記憶の彼方をまさぐる。スカイラブに……何かしたっけ？……

記憶になかった。このブースターに運ばれてそのあとルクシオに何か言ったのか、その前の記憶からざっくり抜け落ちている。

ブレイブはぼんやりとしているグレイシアの表情を見て察したのだろう。「覚えて、ねえか……別に問題はないからいいがな……皆心配してたぞ、何せこの俺がここまでおんぶしてきて…」「ちょっといいかしら？」白衣を着た人間の女がテルルの前足から伸びる透明な管が？がった機械がついた透明なやわらかい銀色の柱にぶら下がった容器をちらりと見やり、点滅する機械のスイッチを軽く3回押した。その後その女はテルルの脚先にはめられた水色の

管が?がれた機械の、何やら波のような緑色のラインが流れ数字が替わり続ける機械のモニター（心拍数、血中酸素濃度、心電図を測る機器の事）をみて、手に持て言いる板状の機械を指で叩く。「顔色もよくなったようね。おそらくはバトルによる疲労が原因。今日一晩はここにいて、明日の朝にはＯＫになるわよ」「……はい……」

「キミのけがは大したことはない。全くポケモンっていう生命体はよくできてるな」やはり白衣を着た人間の男が手に持った灰色の板状の機械を（タブレット端末というものをポケモンは無論知らない）を確認し、テルルのもみあげ状飾りを軽く触った。彼女は思わずふら追うとしたが、体がまだいう事を聞かずに前足が虚空をかいただけだ。「とにかく、今日は休んで明日帰ることだ。いいな?」「はい…」グレイシアは軽くうなずく。今は人間に露骨な表情を浮かべる気力すらなかった。

「さ、そこの2匹も今日は残っちゃだめよ」「ダメなんすか?こいつ一匹じゃ…」「それがここの衛生上の都合でダメなの!アンタたちは泥汚ればっかだから…」

「でも…確かに俺たちは汚れてるかもしれませんけど…」ブレイブはなおも食い下がる。人間の衛生基準というものはさっぱりわからなかったが、少なくとも（ポケモン達からすれば）相当なレベル、人間の精密機械で見えるレベルの清潔さなんだろうなと思い、首のフサフサを左前脚で軽くはたいてみる。この格別潔癖症ではないが、ある程度からだのきれいさには用心深く気を使っているブースターからしてみれば十分にきれいに見えた。ミオカも汚れてはいない。普段から近くの井戸の用水で体を流し、近くの海や川のほとりで水浴びしていることで十分ではないのか?「…とにかくこいつ一匹じゃ不安で…」

「私そんなに子供じゃないし!一匹で大丈夫よ……」テルルが首を振り、イーブイの方に前足を伸ばそうとする。ミオカの方がグレイシアの右前足に近寄り握ってきた。「あ、あの…早く良くなる

といいですね。明日も朝来ます」「うん、ありがとミオカ」彼女は精一杯笑顔を作って彼女の前足を握り返した。

２人の人間もブレイブとミオカもいなくなっておよそ3分後、人間用の妙に大きいベットの上でテルルは早くも孤独を感じ始めている。大丈夫と言ったことをいささか後悔していた。奥行きは１５メートルほど、幅は7，8メートルほどで、ちょうど大きな医療センターの病棟の４人部屋を2つつなげた、といった感じだ。その入って左側の一番窓よりに人間用のベットと機械が2つ3つあり、そこからいくつかのチューブやコードがちょうどテルル・アストラフスキーの体につながれている。既に外は真っ暗、いつの間にか夜になっていたらしく外には施設と国連軍施設の鮮やかな明かりと雲の多い星空、海の方にきらめく何かの（グレイシアには分らない）明かり以外は暗闇であり、山の木々の輪郭がその黒い影によってかろうじて識別できる程度だった。部屋は無機質なクリーム色と天井の白色、４隅には黒い小さな箱のような監視カメラとセンサーがあり、透き通ったあずき色のレンズが無表情にテルルをにらんでいる。ポケモンにとっては頭痛を起こしそうになるほどのまばゆい電気。ポケモンにとってＬＥＤ灯はかなり眩しい。そしてテルルが繋がれている日本のテルモ社製の心電図モニタと接続された専用コンピュータとディスプレイ（医療ドラマでおなじみの心電図や血圧を表示する機器。表示しているのはディスプレイである）が規則的に発し無駄に広く静寂に包まれる部屋に反射する軽い電子音。もちろんこの情報は国連の研究施設、すなわちこの１５階建ての研究機関メイン棟の一角に送られ、常時監視されている。スカイラブに対する憎悪感や自分に対する狂ったような失望は消えうせたが、今の自分を包み込む無機質な電子音、まばゆいばかりの蛍光灯、だだっ広い無機質な上に機械によって見張られている部屋、その全てによってテル

ルはますます気が滅入るような孤独感に包まれていた。

２０１２年　１２月２８日　中央アメリカ　カリブ海　セント・マーチン島　シント・マールテン地区　オランダ領　マホ・ビーチ　１３００時

中央アメリカ・カリブ海でキューバやハイチなどが存在する大アンチル諸島の東端にあるセント・マーチン島は、南半分がオランダ領で北半分がフランス領という特異な島である。西暦１６４８年にフランス人が、その直後にオランダ人が入植し、紆余曲折を経て２００７年に正式に分割されたのだ。いずれにせよこの島は、欧米の人々の別荘地やバカンス地として極めて有名であり、またその美しい海岸線を持つことでも有名である。

　その中でもマホ・ビーチが有名で人気があるのは島の中でも格別広く美しい海岸線を持ち多くの海水浴客を招くからだけではない。この海岸の陸地側にはプリンセス・ジュリアナ国際空港という島最大の空港があるが、１９４２年にアメリカの軍用基地として、翌１９４３年に民間転用されたこの空港の最大の滑走路はＢ－７４７－４００やＡ－３４０やＤＣ－１０といった大型の民間旅客機が離着陸するのにギリギリの２４３３メートルしかない。このため大型旅客機がビーチそばの街道を着陸の際は車にランディングギアをぶつけそうな超低高度で通過し、離陸の際も滑走路ギリギリの位置、砂浜や道路にほど近い場所からテイクオフする。この際に強烈なターボファンエンジンの爆風が背後のビーチに吹き荒れ、強烈な砂嵐が巻き上がるのだが、観光客の中には離陸の際にこの位置に立って強烈な爆風に吹き飛ばされながら海に向かって走ったり、至近の海で

強烈な波を楽しんだりとここならではのアトラクションができている。日本でも某テレビ番組でこれを使った面白実験ならぬ悪ふざけをしていた。その点において、ここのビーチは観光客にも航空ファンにも有名なスポットなのだ。

クリスマス・新年休暇でごった返すマホ・ビーチ上空数フィートを、着陸体勢に入ったフランス・エールフランス航空のＡ－３４０が通過してゆく。着陸脚（ランディングギア）をビーチ脇の街道に駐車している車両のルーフをかすめるように、上空を巨大なアルミニウムと複合素材からできた鳥が通過したビーチの一角は、海へと向かうすさまじい暴風が吹き荒れた。至近距離を４基のターボファン・エンジンの爆音を立てて通過する姿をカメラで収める人間、巨大な姿と爆風に歓声を上げる人間、海面にできたエンジンの作り出した鋭い衝撃波に、生身で、小型のヨットで風を受ける人間、サーフボードで波に乗る人間、様々な人々が楽しんでいる。誘導路のわきには数分後に離陸するＢ－７４７－４００がすでに待機しており、しばらくすればまたもすさまじいアトラクションが始まることだろう。

多くの観光客、彼らを顧客にした各種店舗、警備員や地元の警察官、カモメをはじめとする多くの海鳥でにぎやかなマホ・ビーチの一角、パラソルを広げて多くのカップルの人間の男女が日光浴に興じる中にその男もいた。この男、オフィスで知り合った女を誘ってこの地にクリスマス・年末バカンスへとやってきたのだ。ここまで来るのに航空機のビジネスクラスを、宿泊に沿岸の高級リゾートホテルを予約してしまったおかげで貯金の多くをこのバカンスにはたいてしまったが、彼にとってそんな出費はどうでも良かった。今回こそ隣にいる彼女にプロポーズしなくては、という方が最優先。

パラソルの下、レジャーシートの脇に置いた携帯端末が突如とし

てなった。ディスプレイ部分をまともに水に、何事だろうと訝しみながらスピーカー部分を耳に当てる。「はい…？」数国の間投げやりな調子を必死に隠すような素振りで応対して後、忌々しそうに通話を切って端末をわきに置いた。「どうしたの？」「いや、俺の部署の上司だ。あの野郎まだ会社にいやがるのか」「あなたのことを電話で追い回すなんてその人どうかしてるわ」「全くだ。もう端末は切ってやったぜ」違う部署だが同じ企業に勤務する女にもなんとなくわかったのだろう。「今は、君のことしか考えない」「ええ」わずかに身を起こした拍子に2人は甘い口づけ状態に入ったが、男はその甘い恋の中でも心の隅でふと思っていた。（…全く、バカンスに来ている奴にあの“計画”の事なんて聞くなよ…一般に筒抜けだろうが…）彼らの左側２００メートルで轟音と砂下無理が起こり、人々を、街道の複数の自動車を、沿岸のプレジャーボートを爆風が巻き込んだ。滑走路を先程まで離陸準備をしていたＢ－７４７－４００がＰ＆Ｗ社の４基のターボジェットエンジンをフル回転させて飛び立ってゆく。これもまた楽しんでいる人たちの歓声が聞こえる。

この男が勤務しているのはイギリス・ロンドンに本社を置く新興情報技術多国籍企業体「ニューロン・コンピューター・カンパニー株式会社」、通称名称“ＮＥＵＣＯＭ（ニューコム）　ＩＮＣ.”である。この企業は本社こそイギリスにあるものの、主要な超高精度電子機器の生産工場はフランスのパリからはるか南西、世界トップクラスの航空機メーカーのエアバス社やヨーロッパ随一の航空宇宙企業であるエネルギア社の本工場があるトゥールーズ地区に、そのほかにもスイスのベルン郊外、韓国のソウル市近郊、台湾の台南、中国では広州と四川の2か所、日本の茨城県水戸市に関連工場や下請け会社の生産関連施設が存在し、多国籍企業対と名乗っていることからも理解できるように、母体はイギリス、フランス、韓国、台湾、ロシアの電子機器やハイテク情報技術の大型企業からベンチャーまで多数である。出資者もそれらの国以外にも、中東の有力な資産家、中にはアメリカでも本国大手に苦戦するベンチャー企業関係者などが存在

する一大企業にまで成長したのだ。この企業が誕生した理由、それは地球中の情報機器産業を支配するアメリカ系の情報通信機器・ハイテク機器産業の大手巨大企業と互角の競争力を得るためである。アップル、マイクロソフト、ＨＰ、ＩＢＭといった超大手企業に対抗するために。

そしてこの男が関わっている、世界初、人類初の技術を利用した極秘計画というものにはニューコム社が史上初めて本格実用化した量子半導体回路が関わっている。半導体回路の猛烈な発達は今まで述べてき通り、数多くの人類の生活に革新的な技術や機械を作り出し、金融や工業生産にも多くの恩恵をもたらしてきたが、その発展というのは回路の極細化にある。この方法がいずれ突き当たるであろう、その細さが講師のレベルに達した時の小型化の限界という問題を突破したのが原子や光子の上に立つ最小の物質単位、量子レベルの精密さを持つ回路の実用化にある。もともとは米国のマイクロソフト社が２００５年に初めて実用に成功したものだが、本格的に商業レベルとして開発・利用に成功したのはこのニューコム社であった。実用化までには回路をインプットする工作機械のプログラム開発、ステージ部分の軸移動や切削部分の精度向上といったあらゆる工業要素の改良を積んできたが、これにより半導体回路のさらなる高性能化、ひいては更なる計算回路や機器の小型化と発展が容易になる。将来的には高速道路や路線バスの自動運行、無人大型輸送船、無人旅客機、人工知能（ＡＩ）機器の開発、さらなる高性能小型端末の開発、地球・環境シュミレータの高性能化、インターネットサーバのさらなる高速化・大容量化のみならず、理論的には人間の大脳の計算速度を超えた意識を持った情報データの構築も可能であった。意志を持った生命の構築…この量子計算回路技術はついにかつて創造主のみしかできなかった、主にさえできなかった有機物からなる肉体を持たぬ意志を持った生命の想像さえ可能にしたのだ。

生命の創造、すでにクローン技術や生命工学の発展に伴い、比較的染色体内のＤＮＡ構造が単純かつ（ＤＮＡは一般生物ではヌクレオチドという単位でらせん二重構造を描くが、ポケモンの場合は二列並行構造である）それを構成するアミノ酸塩基の種類が少ない（例えばアルギニンという塩基のＲＮＡコドンは本来６つだが、ポケモンの場合ＡＧＧ一種類のみ、同様に４種類あるグリシンもＧＧＵ一種のみ）ポケモンに関しては量産技術が整えられているが、それは一口に生命の創造といっても生体から取り出したアミノ酸を配列させたものに過ぎない。完全に無の状態から生命たるものを、しかも肉体という生命の魂胆を支える構造物を必要としない生物を実現したのがこの“生命・性格記憶データ”と通称される、今までにない大容量、超高速回路と高密度プログラムを利用した人格コピー技術の開発であったのだ。この人類をさらに創造主に近づける技術の実験台となったのは、もちろんポケモン達であった。彼らは一般の動物と異なり人間にほぼ近い感情、性格、思考持っている上、生命倫理や人権問題もおおよそ取り扱われることのない“忌み嫌われた”生命体。すなわち人間たちにとって“モルモット”になるにはこれほど適した生命はいないとされていた。

そしてこの企業が手掛ける創造主にいま最も近い技術を利用した最初の計画は…人智が及ぶことのなかった、いや想像することすらなかった壮大なものだ。かつては。

２０１２年　１２月３０日　イラク　アンバール県　ファルージャ
０５００時

２０１２年もあと４８時間を切っており、ネオンや市街灯が煌々と輝く地球各地の街の高層住宅、アパート、郊外の一軒家、農村、沿岸、海上のメガフロート、場合によって難民キャンプのテント、ネットカフェや路上のバラックという人間も、一般の工場を違って止めることのできない発電所や水道などのインフラの施設、２４時間眠ることのないインターネットサーバの管理施設や通貨取引所のオペレータ、警備会社のオペレーションルーム、消防や救急の関係者、星のような街灯が川の如くならぶ高速道路を走り続けるタクシーやバスなどの運輸業界、何か月も航海する大型貨物船の要員、航空機の離着陸を管制する空港タワーの管制官、陸海空宇宙の各国や国連の軍、はるか上空の軌道上の複数の宇宙ステーション、宇宙太陽光発電システム軌道上制御施設、月面の資源探査施設ＩＬＢ（国際月面基地：Ｉｎｔｅｒ　Ｎａｔｉｏｎａｌ　Ｌｕｎａ　Ｂａｓｅ）の要員が、地球各地の人類一人一人がそれを感じ取っているだろう。どんな人にも年越しという瞬間は、たとえその年がどんなものであろうと新年への希望とその年に対する不思議な寂しさを感じるものだ。もっとも、そう言える少しでも余裕があればの話だが。

　イラク内陸部、イラクの首都バクダッドの西にある地域に展開するアメリカ、イギリス、フランス、オランダ、イタリア、ポーランド、イラク本国政府軍等からなる多国籍軍、及び民間軍事会社ブラックウォーターＵＳＡ社の部隊の間ではそんな雰囲気は皆無だった。ファルージャは２００３年のイラク戦争開戦以降たびたび武装組織の攻撃と、それを掃討する多国籍軍との軍事衝突が相次いでおり、２００４年には痺れを切らしたアメリカを主とする多国籍軍が、バクダッドの空港閉鎖やシリア・ヨルダンの国境線の閉鎖、通信回線のかく乱といった念入りな準備と共に行った“夜明け作戦（ライジング）”によって市内の武装組織をかなりの数掃討したものの、それ以降もたびたび武装組織と思われる多国籍軍や２００９年に発足した国連統合軍

に対する攻撃が続いている。既にカウントしただけでも殺害した人数は相当数に及ぶが、しぶとくミツバチの大群のように現れる彼らの執拗な抵抗によって、多国籍軍や軍事会社の戦死者数も少なくなかった。

それでも多国籍軍や統合軍が化学兵器はおろか、ナパーム・クラスター爆弾による大規模掃討にも出ることができない理由、それはオスロ条約をはじめとする法令や国際条約に基づく残虐・無差別殺傷兵器の禁止のみならず、周囲の民間人への被害もあった。ましてやあまたの映像メディアやインターネット空間でそのような情報が流れやすいうえ、グローバル化や自由主義、人権思想の波及に伴う人々の価値観や思想の変化がある今、不用意に民間人を見きこむことは自国の軍や自国政府の印象、国民の世論支持を悪化させる原因ともなりかねない。

ここはそんな地域の一つ、アンバール県のファルージャ地区だ。アメリカ軍海兵隊第５連隊第１大隊所属の兵士とＭ１１２６ストライカー歩兵戦闘車５台、Ｍ９９８ハンビー装甲車２台、イタリア陸軍のダルド歩兵戦闘車４台、ポーランド陸軍のＡＭＶ装輪装甲車２台（この車両はフィンランドのパトリア社が開発したものだ）と多くの多国籍軍の歩兵たちが隊列をなしてある場所へと向かっている。昨日、米国海兵隊第４連隊の部隊がここから西に１０キロの地点で敵武装組織と奇襲を受けて交戦し、撃退はしたものの米軍側も３名の死者と４名の負傷者、Ｍ９９８装甲車１両が大破、同１両が損傷という被害をだしてしまった。この辺りに存在する武装組織といえば、イラク戦争の発端ともなり暫定政府に処刑されたサダム・フセイン元イラク大統領支持派の残党か、イスラム教シーア派の過激分子系列の可能性が高い（当初はアルカイダ系武装組織の関与が疑われたが、これは誤報であるという見方が強い）。そして彼らは主に旧ソ連製携帯兵器による奇襲、時にはそれらを搭載した車両により

かなり本格的な襲撃、（しかし映像媒体に移るこのような車両にトヨタのが多いのかは分からない）、もしくは自動車や人間自体を使った軍、有力企業、政府機関、国際機関の施設を狙った自爆テロ、等さまざな行動を行ってくる。いくら多国籍軍が輪やそのような機関が新鋭の機器やセキュリティーシステムを使って警戒したり、民間軍事会社や警備会社で厳重に警備しても到底すべてを防げるわけがなく、時には無関係の一般市民を巻き込み、それでさらに状況がこじれることもたびたびだった。

その原因は何か、明確な解は誰にもわからないし、決して誰かが意見を押し付けたりそれを鵜呑みにしたりしてはならないと言われる。もしアメリカやイギリスをはじめとする多国籍陣営…これはＮＡＴＯ陣営、西側世界もしくはその連邦国家が（例えばオーストラリアやニュージーランドは明らかにイギリス連邦）多いが…が主張する通り、イラクやアフガニスタンが国際テロ組織を支援していたり、大量破壊目的の核兵器を少輔して実際に世界への攻撃を計画していたり、軍事政権が国民を苦しめていたりしていたのであれば、それはそれで問題があると言われる事象だ（もっともその場合、イランやパキスタンも含まれてしまう恐れがあるが）。しかし、それらを殲滅するために多国籍軍や国連が戦闘に繰り出した結果が全て良かったとは全く思えない。確かに人々の間に西側諸国…ことに欧米…の主張する自由主義精神を植えつけた点ではそれなりの評価がなされるだろうが、中東というのは民族、国家、イスラム教が複雑に絡み合い、その関係が政治や産業や市民生活に太く深く食い込み、さまざまな価値観、それに伴う課題を抱える地域であり、自由主義陣営のツルの一鳴きで決まるような場所ではない。政権打倒によって一時的でも無法状態を生み出してしまったこと、暫定政府の誕生やその後の政策で少なからず民族や宗教の垣根への理解が不十分な点を露呈してしまったところ、さらには戦闘時に多くの一般市民を

巻き添えにしてしまい、市民の反感を少なからず買ったこと等、失敗点も多く上げなければならない。国際社会の安全を脅かす組織やそれを支援する勢力を抑止することは重要ではあるが、その根底にある政治や経済や理学的論理では説明や解釈がつかない（西洋ではこれらの方法で事象概念を解釈することを数値化と言い、そのような思考を機械的自然論という）点には十分な考慮がいかなかった。地球一体化、グローバル化時代の社会のありようの難しさを人類社会に突きつけた一面であろう。

さらに終わらないのはこれにポケモンが関与することだ。このあたりの彼らは13世紀、ムガール帝国やティムール帝国の時代から人間の宗教にも民族にも一切の肩入れや干渉をせず、欧米列強の植民地支配にも動じず、その後の紛争にも原油産業や海水淡水化工業の利権にも関与せずに自分たちの文化や価値観を守って過ごしてきている。しかしこの20年で中立は単なる冗談に成り下がった。各地の集落の中立と安泰は多国籍軍、各国の政府、武装組織、大規模開発企業や集団のいずれかが交渉・干渉してくる時点までしか続かない。駐留施設や公共施設の警備員、現地兵、自爆テロやゲリラ戦法の道具、彼らは今までの世界各地の人類史・文明史と同様、何の保護も擁護なく人間社会の猛威と混迷に飲み込まれ、酷使され、逆らう者は弾圧されて葬られたのである。

文明の衝突が生んだ宿命…弱肉強食の一般動物の原理、地球に芽吹くあらゆる生命の血液や遺伝子に刻み込まれた歴史、自由市場経済が作り出した競争原理と同様、弱いものは強いものに敗北し、吸収・破壊されていく…

無線機からの指示が飛び、イタリア軍のダルド歩兵戦闘車とポーランドのＡＭＶ装輪装甲車が街道から右翼と左翼に分散し、アメリ

カ軍の部隊がその目標地域へと続く街道にそって集落まで１５００メートルという距離に達している。上空ではまだ確認できないが、間もなくアメリカ陸軍航空隊のＡ－１０Ａ攻撃機が支援攻撃に到着する予定だったがあくまでこれは予備手段、万が一この地域に人間の武装組織が潜伏し、激しい戦闘が発生した場合に考慮したものだ。衛星や無人偵察航空機である程度の規模や様子はデータとして入手できるが、中東のこのような地域において、偵察データだけでは決して十分とは言えない。

朝霧の消えない中、ストライカー装甲車からスコープ・電子戦闘システム付きのＭ１６Ａ５アサルトライフル歩兵たちが展開し、車上では装甲車長が４０ミリ擲弾砲を射撃状態に切り替える。ただし、通常の治安維持掃討戦ではこんな至近距離に迫るのは自殺行為でしかない。それが可能なのは今回の目の前の集落は人間のものではないからだ。そして彼らの集落を攻撃する理由はただ一つ、彼らの集落が武装組織に協力している可能性が高い、それだけだった。

擲弾砲のスコープの電源を入れ、後方の司令部や今までに得た情報をリンクさせた戦闘システムのデータを表示させる。彼らの中には早く攻撃指示が出ないものかとじれったい気持ちでスコープの赤外線解析画像をにらんでいた。戦争が始まった２００３年以降、過酷かつ壮絶な戦闘によって多国籍軍の戦死者・戦傷者の数は尋常ではない。本国に無事帰国しても戦闘時に長期間さらされた恐怖と不安、自分自身が侵した戦闘と殺傷に伴う罪悪感から少なくない兵士たちが―ＰＤＳＤ（外傷後ストレス障害）を発症し、不眠やうつ病を訴えて医療機関にかかる者、幻覚やフラッシュバックにさい悩まされて凶悪犯罪に走ったり自殺したりする者も少なくなかった。来年の３月には年々減少傾向にあった多国籍軍の完全撤退が完了し、国連統合軍とそれに関係する各国軍の一部部隊のみとなる。何としても戦死してはならない、今年は叶わなかったが来年のクリスマスと新年は家族と過ごせる、そういう感情は強かった。兵士の数人は昨日戦死した友軍の兵士たちのことをちらりと思った。あと数日で

新年だったのに、クリスマスさえこんな場所で過ごさなければならなかった上に…彼らの運命に心の中でひざまずいた。不幸な3名の彼らが地上の苦しみを逃れ、主の御許(みもと)に触れることを。そして自分たちに主の御加護があることを。

その瞬間はやってきた。各員の無線機から本部の指示が飛ぶ。「予定通り。遂行せよ」「了解」兵士たちは小銃、支援機関銃、擲弾砲のスコープを覗き込んだ。赤外線で投影された影は見張り台らしき建物と上に立つぼんやりとした影…あの見張ってる種族はオオタチ?ミルホッグ?ルカリオ?それとも複数いるのか…、その背後にある川に沿って並ぶ原始的な形状をした建物を表示している。まだ朝の5時、起きているものは少ないようだ。

その言葉は発せられた。人間も彼らが使うであろう兵器や車両のシルエットも見えない、航空支援の必要はなさそうだ。「射撃開始」彼らは一斉にトリガーを引いた。右翼と左翼からも同様に発射音と銃声が響き、無数の銃弾の曳光が集落へと飛び込む。一斉射の直後に先程の見張り台が爆篇に包まれて崩壊してゆき、中にいた連中が引き千切られ飛び散るのをスコープ越しに確認、M1126の部隊と兵士たちはゆっくりと前進を開始した。もはや自由主義の理想も国際治安維持の理念も彼らには関係なかった。今日を生き延びるために、家族のもとに帰るために。

暮れゆく年の中で（後書き）

いよいよ次回、２０１３年に?!

ついでに次回で４０話突破！

新年へ（前書き）

いよいよ２０１３年へ！

新年へ

２０１２年　１２月３１日　エメリア　ソーラ地域　パルク州　国連施設の一角　１１００時

自分のやっていることは人間やほかの連中に見つかってはまずい事なのか？リーヒュンは思わず疑ってしまった。しかし一瞬でも気を抜くとユイリィのエネルギーのこもったツルの一太刀が凶暴に彼の頭の葉っぱを叩き割らんとばかりに飛び掛かってくる。「ねえねえ、何考えてんの？ほらほら、前から飛んでくるのに集中しないと！」頭の至近距離に強力な冷気となって襲い掛かるツルを、直撃する０．１秒前に意識の流れの中からその警告を感じ取り、慌ててツルで弾き返す。今のはかなりいい加減にしか彼女にはとられていないかもしれないが、今の彼にはこれが精いっぱいの大まじめだった。

「うぐっ……今のは…」「ほらほら！気を取られちゃダメだって！ウチの飛ばす一発はちゃーんと見てないと当たっちゃうよ！あれ？リーヒュンはもしかして…」「な、なんだよ？」「ウチの事が気になった！他にないよ、うん！！！！あははは！そうなら早く言ってくれればいいのにぃ…」「そ、そんなわけないだろユイリィ……うげっ？！」思わず自分の感情の記憶に意識を映そうとしてしまった彼、その直後に彼女の強烈な突きが首の葉っぱ元を直撃し、後ろに転がるように突き倒された。やけどするような鋭い熱気と貧血を起こしたような、重力の方向が突如変わったような気持ち悪い感覚に襲われる。

リーヒュンは首を振ってすぐにその感覚を振り払って立ち上がった。一発受けるたびに徐々に具合の悪さは増してくるが、まだこの程度でふらついている訳にはいかない。「大丈夫だって……もう一回頼むよ」「うん！でもちょっと疲れてきてない？」「いや、この位な

ら気合で何とかなるさ、フローラと比べたら…」「そ、そうかな？…うん、さっすが！じゃあもう一発やっちゃうよ！」ユイリィは束ねた右の頭から伸びる長いほうの雄蕊をツルで丸めて縛りなおすと、後ろにぴょんっと下がってツルをかまえる。「リーヒュンが無理そうだったらウチが何とかしてあげるから！でもダメそうだったら先にやめた方がいいかな。でもさあ、リーヒュンの事だから絶対無理するよね！」「褒めてんのかけなしてんのか冗談なのかさっぱり分かんないよユイリィは…まあいいや」「そうこなくっちゃ！それじゃあ一発いこうか…」メガニウムは雑念を振り払い、意識の水晶が無数に流れる空間からツル先にエネルギーを取り込み、意識の焦点をそこに合わせた。自分の頭の中で描いたツルの動きとエネルギーが暑さとなってツルに集まる。

息を吸い込んだ彼女は飛びつくように踏み出してツルを振り上げた。

メガニウムの方は相変わらず余裕かつ面白がったような表情で、意識の底から集めた強力な刃と化した2本のツルを交互に、しかし不規則にぶつけてくる。彼女にしかできない、他のだれにもまねのできない強烈な戦闘法だが、辛うじてでもそれを受け止めて弾き返そうと努力しているベイリーフもまた、他の誰もまねできない芸当である。もっとも彼自身の方は自分能力不足の方にじれったさを感じていた。どんなに彼女のツルの動き、自分のツルの動かし方、姿勢

を保つ移動に意識を集中させても、何となくわかってからそれに対処する動きを決定するまでに奇妙な空白が、自分でも説明のしようがない願望とは違う動きをもたらす“間”が存在し、それをどうしても振り払う事が出来ない。本当に目の前にいる彼女のように感覚が警告すると同時に対処できるほどの鋭さを手に入れること等できるのか？彼の意識の底にちらっと芽生えた疑念という黒い気体は、目の前で感じる状況という急速な温度上昇の前にたちまちのうちに膨張した。

２本に減らしてくれているとはいえ、ユイリィのツルの動きと彼女の動きは強烈だ。破壊的な大渦の中にも何かの気品を感じる。ツルを大きく振り上げ振り下ろす動作、身をひるがえし、リーヒュンの弾きと必死のツルの突く動作を首を引いて一歩分下がるだけであっさりとかわしてゆく。そして次の瞬間には左前か右前に踏み込んで彼の首の回りや腹の周辺にツルをつき、振り上げ、叩きこむ。その移動・攻撃・回避のプロセスが浮かぶと同時に彼女の筋肉と関節に指示を出しているようだ。それに対してベイリーフの動きには努力は感じさせるものの、やはり２，３歩遅れ気味になっていることは否定できない。メガニウムのフォローがなければ、最初の数発で虫食い葉っぱの上から脳天を叩き割られるか長い首が跳ね飛んで地面に落ちる羽目になるだろう。そんな焦り動揺が彼の動きをさらに固く力の入り過ぎた物にしていた。

ツル先に意識を集中させているとそこから脳内に入ってくる不快な感覚に足の爪が地面についている感覚さえ失われていくような気がする。当然といえば当然だが、すでに４か月近く感じてきたのにこ

の感覚に慣れるという事はない。彼女のツルを必死で弾き返し、その突きを一歩足を下げ、首を最大限引いてかわし、飛んでくる一振りを身を屈めてかわしているうちにそれに対する不安感や不信感、それに対処しなければという焦りは一層ひどくなってゆく。そのせいでますます動きに力みが入り、それに対してさらに向きになるという悪循環に襲われていた。「ええいっ!?」やけを起こした彼は思いっきりツルを振り上げ、彼女の頭の黄色い雄蕊のあたりに叩きつけようと振り下ろした……

バシッ!

しかしその動きはユイリィにあっさり読み取られている。リーヒュンが暴走した人間の工作機械のように前足ごと渾身の力で振り上げた一太刀は、彼女のツルに強烈な力でつかむように食い止められる。その勢いで彼は危うく前に転倒しそうになったが、彼女がもう2本のツルと前足で抱きかかえるように支えてくれた。ただし、そのせいでメガニウムの前足2本とツルはこのベイリーフの全体重50キロ以上を一瞬全部受け止める羽目になったが。

「ユイリィ?!ご、ごめん…」「…うんん。大丈夫大丈夫……」ツルを掴みあった状態で2匹は2匹はしばらく言葉がなかった。リーヒュンは自分のやったことの衝撃が体全体に伝わり、とてつもない罪悪感と後悔に襲われていた。功を焦った自分がむきになってやったことだ。彼女の傷つけていたとしたら自分は……

気まずい沈黙の中、ユイリィがツルをそっとほどき、先に口を開いた。「……難しいよね…ウチだって最初はさあ、何回も受けて傷だらけだったよ…今のリーヒュンと同じだったかな…」

「……早く習得しないとな…いつまでもユイリィの足を

引っ張るわけにもいかない。サクラさんもそれは望んでるわけないだろ……」ベイリーフが自分の垂れ下がったツルを軽く前足で蹴り飛ばした。「……それに、俺はフローラを助ける…だから今諦めるわけにはっ…！」疲労感とは別の感情に突き動かされた彼の前足が自身がかけた力で細かく震えた。フローラを真の意味で発見し、真の意味で彼女の状況を読み取り、真の意味で救い出す存在は自分でしかないのか…部屋の中を歩き回るネズミがひょっこり姿を現すのと同じくらい唐突にそんな感情が意識の片隅に浮かんだ途端、それは制御できない勢いで意識を埋め尽くしていくのを感じた。

「……大丈夫大丈夫！そのためにウチらは今やってるんでしょ？」その刹那、メガニウムが唐突にツルを振ってきた。ベイリーフは一瞬驚いたような顔をしてたじろごうとしたが、その直後、無意識にツルを頭をかばうように振りそれをはねのけていた。「な、何すんだよユイリィ？！」「うん、やったやった！今あたしのツル止めたよね！」「そ、それがいったい今のと……」

「リーヒュンは今止めたんだよ無意識に！何日か前より絶対動けるようになってるって！ウチが6か月…うん、人間でいう一日の回数の事なんだけどね…それより全然早い！しばらくやればうちなんかより絶対大物になれるって！」ユイリィは嬉しそうにリーヒュンの首にツルを巻きつけ、彼女自身のウグイス色の頭の雄蕊の付け根を彼のカナリア色の首に横からぐいぐいと押し付けた。「うげっ…だからそれは……うん…そっか、そんなら…」ベイリーフは恥ずかしそうに顔を赤らめながらも、先程ちらっと芽生えたどうしようもない不安が少し緩むのを感じた。（……確かに…何日か前と比べれば…俺が気付いていないだけかな…）

そんな彼のちょっとした心の変化もメガニウムは見落とさないし、バカな子供みたいに振る舞っている面でも実際はしっかりとフォロ

ーを加えていた。彼女は彼の葉っぱの生えた首元に巻いたツルを肩を叩いて励ますのと同じように緩め、少し下がって目線を戻す。「……ウチがいるんだからリーヒュンは一匹だけじゃないよ。いろいろわからないことも多いみたいだけど、ウチにできることがあったら何でもやってあげるから…ね？悩まなくていいよ」

「う、うん…ありがとう…というよりあんまりユイリィは年上じゃないだろ？！俺はキミの弟じゃないって…」ベイリーフはまたしても恥ずかしそうにメガニウムのツルを自分のツルで振り払い、何歩分か彼女から離れて向き合った。「とにかく、さっきくらいの速度でもう一回やってほしい。今度は全部防いでみせるよ」「うん！全然問題なしよ！やろやろ…」ユイリィは前足を地面に軽く馬のようにかいてまたもや意識をツルとその周囲に集中させた。相変わらずリーヒュンの意識は常にまっすぐで濁りのない、悪い意味で見え見えだ。自分がツルを振るったら彼は力づくでも止めにかかってくるだろう。もっともそれが彼らしくていい事なのだ。自分やサクラみたいに精通しすぎると、体の重心のかけ方やツルの振るい方、足の踏み込み方、果てには動きの気品までどうでもいいところまで気になってしまう。

（……ウチにはこの子位がいいのかもしれないね……）メガニウムは意識の中で思わず笑いがこぼれてしまった。やはり自分には上品さとか優美な動きとかそういう言葉は似合わない。まっすぐでめちゃくちゃでも熱心で力のこもった方法の方がかっこいいと思える……

２０１２年　１２月３１日　エメリア　ニュークリア地域　アメリカ領　エメリア州
アンカーヘッド市　２２３５時

エドワーズ市に次ぐアメリカのエメリア地域で第２の都市であるアンカーヘッド市。死の象徴であり、湾を挟んで東西の市街地を結ぶ現代的なゴールデン・サン・ブリッジは間もなく訪れる新年を祝うライトアップで照らし出されていた。ブリッジを一望できるアンカーヘッド・ベイ・セントラルパークにもまた新年になると同時に打ち上げられる花火を見に来た客で混雑しており、そのような人々…若者が多いが…を狙った出店やライブもたけなわといったところだ。ブリッジの下は夜間にもかかわらず大型のタンカーや貨物船がタグボートに引かれて複数出入りし、ブリッジ上の専用道路に花火見物で不法駐車する車両を取り締まるエメリア州警察の車両が赤・青色灯を回転させている。

アンカーヘッド市は南太平洋上のエメリア州におけるアメリカの港湾地域にあたり、隣接する工業地帯がフォード、クライスラー、テスラといった自国の自動車メーカーからＢＭＷ、ルノー、ヒュンダイ、タタ・モータース等のヨーロッパの名門や新興工業国の急成長を遂げる自動車メーカーの新興国・途上国向けの小型車生産の拠点として、ＧＥ、シーメンス、ＬＧ電子といった精密機器メーカーの工場地域として、ＧＢＴＸやデパスターといった新興生命工学企業の生命情報物質保管施設も存在するがゆえ、自動車運搬船や超大型コンテナ貨物船の発着ベースが多数整備されており、ニュークリア中心地域や周辺海域の原油、石炭、ボーキサイド、鉄鉱石、希少金属、メタンなどの資源・エネルギー積出のためのタンカーやＬＮＧ船が日夜出入りを続けている。隣にある州都・エドワーズ市方面へも高速道路と高速鉄道を整備し、エメリア州の民間・軍事双方の空港で最大規模を誇るエドワーズ国際空港へのアクセスも抜かりがない。

またここから１５０キロほどの地域のはずれには、トリウム塩溶解炉型原発、宇宙太陽光発電受信アンテナ、メガソーラー発電所、使用済み核燃料処理施設といったエネルギー地帯が整備され、太平洋送電網の一角としての役割も担っている。いずれももともとはポケモン達しか住んでいなかった辺境地を利用しているわけだから、環境破壊防止や公害防止にさえ考慮すればこれほど開発しやすい場所はない。ただ、人間や生態系にとって影響がないと言えばそうなのだが、地域の環境維持や地球温暖化防止策を考慮しても人類の開発によってここにもともと住んでいたポケモン達が居住地を追われ、農地や職業の場を奪われ、企業側の強制排除によって命を落とす者さえいるのは事実である。

年末年始を楽しむ人間たちの声やスピーカーから流れる音声で活気を帯び、出店やステージの照明が華やかに照らし出す公園。ハトやカラスたちは普段の夜にはないこの活況を避けて郊外の公園にねぐらを映している。そんな後編のはずれの岸壁際の手すり付近に集まるポケモン達。公園の隅っこで毛布にくるまる集落から人間の都市に流入してきた粗末な連中とは違い、（そもそもこの文明は身にまとうものは本当に少ないが）足にはいている草編みの長距離歩行用靴や身にまとっているベールもしっかりとしている。

「……1年という区切りはこうして暮れる、だよな」「あ？どうしたいきなり？」「人間にとっては時間というものは細かく区切られた…正確に社会活動の区切りを決める精密なシステムらしい。俺やベクレルの文明は…」「おいおいシーベルト、お前またそんなことを気にしてんのかよ？気にすんなって文明の差なんて」ゴールデン・サン・ブリッジのライトアップと底を流れる自動車のライトの列を、取りつかれたように眺めるポニータを親友であり部隊の同僚でもあるゼブライカ、ベクレル・アンリ・ミタカ・プルトンは種族特有の引き締まった強靭な右前足で同じような彼のオレンジ色の毛が少し

出た左前脚の付け根あたりをガツンと叩いた。このポニータとゼブライカ、名前からしてどちらも高名な北欧の原子物理学者の人間と同じである以上に神聖な時の区別の仕方があったはずだ…それを取り戻すのが…」「また始まりやがったぜ貴様の持論タイム…」「ううっ……何が“たいむ”だ…」シーベルトがじれったそうに脚絆のような保護靴を履いた左前脚の蹄を岸壁の手すりの支柱にけり当てた。やはりベクレルには自分の気性などお見通しか、彼にとってはちょっと悔しい事である反面意外とありがたい事にも感じられる。

　ポニータは気を取り直して視線を戻す。「ま、とにかく俺は達成するからな、そういう事にしておいてくれ」「ったく…それより…」ゼブライカの表情が幾分か真面目な表情に戻り、酸化銅水溶液のような濃い水色の瞳が種族本来の鋭さを取り戻す。「一度位は連中と連絡取りあってみたらどうなんだ?人間連中みたいに今すぐ、つうのは無理でも、手紙使えや3週間くらいで戻ってくんだろ?」「今は……難しいな…」「何言ってんだよ。そんな事だからお前は口下手だって」そんなベクレルの言葉をよそにシーベルトは欄干側に数歩歩き、視線をブリッジの方向へ移す。「…今俺のしていることでは…奴らに到底顔向けなんかできっこない。それに、前も言った通り、俺の理想と市民が望む文明の姿を取り戻すその日まで…腐った能無しの上層部を叩き潰すその日まで、俺は誰であろうと敵対する奴は容赦しない」「ったく!それはお前の理想だろ?現実はそう簡単に行くわけねえんだよ」ベクレルが鼻で笑い、がっちり締まった右後ろ足を後ろにかいた。「お互いの関係、きれいに言やあ絆っつ

にとってロマンチストっぽい突如としてこぼれるシーベルトの呟き（ツイート）は流しながらも受け止めてやるのが一番だ。

うんだが、そんな簡単に失われるものじゃない。強がんのは止めろ」
「強がるって…何だそれは!?」シーベルトの血相が変わる。「そのまんまだ。お前ならそう受け止めるだろ？無理して寂しいのを我慢するなよ」
「俺は我慢なんかしてない！全部本気（マジ）だっ！！」ポニータがいきり立って前足を上げる。激しい感情が突如として医師の底からこみ上げた。「野郎は、アイソープを…殺しやがったんだっ！」彼は感情に任せてゼブライカの首の下の胴体を蹴りつけた。「ぐっ…て、てめえって野郎は！…どうやったらそうやって熱くなりすぎるんだよ？」そこは彼の性格、傾向、感情を何年も前から行動を共にして知っているベクレル・プルトンらしく、前足を振り上げるポニータを彼より一回り以上大きく長い前足で欄干の金属柱に押さえつけた。熱くなったシーベルト・リヒテントを食い止めるにはこれが一番だ。彼が１０歳前後の時から、ニュークリアのある集落にやってきてからずっとそうだったから別に逆ギレする気も湧かなかった。「俺は熱くなっちゃねえよ！この感情は一般的な感情と意識を持つ生命体として当然の…」「話を自分から混ぜっ返すなシーベルト」ベクレルは強烈力をかけてくるシーベルトを前足で押さえつける。
　そのしばらく後、ポニータは首を振って前足を降ろすと、踵を再び港湾の方へと向け、視線を落とした。足元の海水は橋や都市の照明を反射して静かな波とともに輝いている。それを眺めていると、ぼんやりと輝く水玉に似た反射した明かりの一つ一つが自分の過ごしてきた人生を振り返る走馬灯のように記憶をよみがえらせてくるようだった。
　シーベルトは思わず本音を漏らした。「……俺だって殺したくない、また会ったら昔みたいにバカをやらかしてみたいんだよ！……だけど…今の俺には……」ポニータは自分の眼頭の下からこみあげてくるものを感じた。リーヒュンもブレイブも…エンデバーは今でもアメリカ軍海兵隊のエメリア方面軍だから、普段ニュークリア北部のアメリカ合衆国領との境界線あたりの警備任務に就けば

ちょくちょく会えるから別だが……あの2匹はどうして…

シーベルト・リヒテントとてまだ17歳。最初に物心ついたころ、すなわち3歳くらいの時から10歳の頃までを毎日遊びほうけて暮らした親友たちを、ましてや家族の事情…思い出したくもない、いうなれば彼が打倒を目指すエメリア自由連合の政府組織に政局争いで両親も兄妹も殺された…で引き裂かれた仲間を手にかけること等できやしないのだ。久しぶりに自分の現実に打ちのめされた惨めな気持ちを彼は感じた。相変わらず口先だけは達者な自分に無性に腹がった。

そんなポニータを見つめるベクレルはかける言葉が見当たらず、無性にシーベルトの周りをゆっくりと歩きまわった。彼とてエメリア自由連合の兵士であり、シーベルトと同じように現状の打破を目指す革新派の一匹。アメリカ軍や統合軍のポケモン達と接触したことも、シーベルトやその他の同志たちと自由連合軍上層部で体制打倒を目指す勢力とニュークリアやサーマル一帯で工作活動をしたこともある。もちろんシーベルト・リヒテントの友人であり、彼のことをよく知っていることは言うまでもない。だが…ベクレル・プルトンにしてもそのポニータの親友たちが…エメリア自治協会側の軍、しかもその部隊が国連軍の手先になっている勢力であり、彼らと敵対視しているという現実、この現実だけには口出しができなかった。人間たちはポケモン文明の自治組織、探検隊、果てには盗賊集団、勢力に関係なく自分たちの利益につながる者とは甘い誘惑で釣って契約を交わし、不要になれば容赦なく命を奪う。このゼブライカもポニータと同じくらい、文明の勢いの差というその歯がゆい現実に腹が立つ。しかし、他に手立てはない。その感情を分かち合うか、同情してやるくらいしか……

突如、先程まで港湾を眺めてばかりだったキュウコンがふとポニータに歩み寄る。「あなたが夢を果たせば…彼等だって喜んでくれるはず、そのあなたの信念でいいのよ」「信念…あの、アリョーナ

さん……」ポニータが顔をあげた。「ん？」「…俺の信念で、リーヒュン達も幸せに…できるんですか？」

「それはあなたの努力次第よ」アリョーナはシーベルトの前足の蹄をやさしく前足でなでると、ゆっくりと欄干に前足をかける。「シーベルトにはすることがある、あなたのお父様やお母様や弟・妹さんの仇を晴らし、ポケモン達が人間と対等に対話できる威厳をもった文明にを再構築するにふさわしい政治・自治体制を作ることでしょ？……物事というのはね、まずは最終目標を達成することを優先した計画を立て、それから個別の問題に対処するのよ。お友達のことも、その時に判断して対処すればあなたが後悔するような結果にはならないはずだから」

「目標というのは……」「あなたがいつも得意げに私に言っていることよ」アリョーナの口元が緩み、９本ある優美な尻尾が波を打つように動く。アリョーナ・ハイペリオン、自由連合軍所属の彼女にとって、地域の集落守備兵にベクレルやアイソープと共に志願した時のあどけなさ、両親が旅先で暗殺されたと知った時の号泣。それからどんなに小生意気で偉そうな大義ばかりまくしたてるほどに成長したとはいえ、３年ほど前に出会ったこのポニータはやはり息子同然だ。「…ポケモン達が人間と対等に話し合い、交流できる世界を作ること、それを目指すの」

「アリョーナさん…いつもすいません」シーベルトは少し顔を赤らめた。このキュウコンはやっぱり自分の母親同然だ。少し照れ臭かった。「さっすがアリョーナさん、俺と同じくらいこいつの事を…」ベクレルが得意げな笑顔を浮かべてシーベルトの前足に自分の前足を組もうとしたが、何かを思い出したように姿勢を伸ばした。このゼブライカにとってキュウコンは少なくとも階級は上である。「すいません。大尉はずいぶんこいつの事を御知りのようで……」

「いいのよベクレル」キュウコンは優しい笑みを浮かべる。「むし

ろね、アリョーナさんって呼んでほしいの。あなた達の事を見てると…そう…とても…」

「い、いいんですか大…いや、アリョーナさん?」「そうね…ありがとう」「だからって調子乗るなよベクレル」「うるせえよシーベルト!ところで…」ベクレルがシーベルトの目線まで首を下げ、ちょっかいを出すように彼の目線の先を見つめる。「お前は何か食いたい、だろ?」「そ、ンなわけ…」「そしてお前はあれが食いたい、当たりだな!?」「そ、そんな人間連中の訳は…」そらしたポニータの先程までの目線の先には人間の出店。ホットドックか何かか?「っしゃあ、当たったあ!!!全く隠す必要ねえだろシーベルト!たまにはな、人間の食い物もうまいもんだぜ。心配すんなって、1ドル数セントの金位は俺の……」嬉しそうに白く短いとげとげ状になった尻尾を振ったベクレルは自分の装備品入れの仕切りから金を引っ張り出す。「おいおい、俺は食いたいなんて言ってないだろ…」食べたいと思ったわけではないが、いつの間にか橋や港湾の明かりも、水面に輝く市街地の光も急に現実味を戻していた。食欲という自分自体が現実に引き戻されたせいもある。「遠慮すんなって!俺らの存在を知ってる人間なんてここにいると思うか?ちょっと煙たがられるかもしんねえが人間どもの事だから金出せばくれるだろ?おっし行くぜ!アリョーナさん、ちょっと待っててください…って、食べます?」「私の分はいいわよ。そこまでしかないけど、2匹で楽しんできて」「へへっ…んじゃ!」ゼブライカはなおも抵抗するポニータの前足を掴んで楽しそうにつれてゆく。その人間たちにまぎれてゆく2匹の後姿をキュウコンは感慨深く見守っていた。

やはりあの2匹は息子だ。かけがえのないわが子同然だ。この2匹は絶対に守る、たとえ命に代えてでも…アリョーナは明かりにか

すんだ星空を見上げ、心に誓った。

……そのことが…ユイリィに対する…せめてもの罪滅ぼし…なのかもしれないから…

２０１２年　１２月３１日　ドイツ　ベルリン市郊外のポツダム市
１９００時

マイナス１２度という寒波に襲われ、普段は水鳥たちが泳ぐサンスーシ宮殿の池も凍りつく年の暮れのポツダム。ベルリンから鉄道で３０分、幹線道路を自動車で２０分前後のベルリン市郊外の再開発地帯の高層ビル群の一角にあるドイツ鉄道本社ビルとソニーセンターのタワーのふもとの電飾が華やかに光る（黄色っぽい淡く優しい光が多い。日本のような白色灯の電飾はドイツ人、すなわちゲルマン民族の光彩にはまぶしすぎる）ショッピングモールは、年末にもかかわらず大勢の人間でにぎわっていた。ただ、ＬＲＴ鉄道といった公共交通網が市街地にも細かく整備されたドイツの都市であるが故か、脇を走る幹線道路は自家用車より（ドイツの市街地周辺ではフォルクスワーゲン社のゴルフＧＴＩのように小型のハッチバック車が多い。大型の自家用車や一定の排気量以上を持つ車両は都市中心部への乗り入れが制限されることが多いのだ）もメルセデスベンツ社製の大型バスや個人タクシーが多い。

暮れゆく年の市街地を忙しそうに歩き回る人たち。自家用車やＬＲＴ鉄道が道路を行きかい、現代的な高層ビルや宮殿もＬＥＤ電飾でほのかに輝いている。その一方で、アジアや中東の都市ではちょ

くちょく見受けられるポケモン達の座り込みはほとんど見られない。時刻やヨーロッパ地域の経済活動や市民生活の安全保障を謳うドイツをはじめとするヨーロッパ各国政府やＥＵ中枢機関の方針で浮浪するポケモン達の排除を徹底的に行っているためだ。

国際経済や政治の場において、（アメリカやイギリスは別としても）比較的穏やかで強引な開発等は行っていないように見えるヨーロッパ諸国だが、資本主義が世界で真っ先に発展した地域である欧州は、経済活動や自由市場における活動や意図はとてもしたたかである。ＥＵの誕生、ユーロ通貨の（この数年は金融危機・財政問題で怪しいが）導入自体、アメリカ・北米圏や中国、インド等新興国の強大な経済圏に対抗するためのものであるが、ドイツの場合はきわめて興味深い。重工業国でありながら原発という強大かつ低排出のエネルギーに安全の面から否定しているこの国が脱原発・自然エネルギー派であることはよく知られている。しかしその一方でロシアからの火力発電用天然ガスのパイプライン開発に投資し、ドイツ随一の電気機器メーカーであるシーメンス社は、フランスやイギリス、果てにはトルコやサウジアラビアといった送電網で接続された原発推進派国の関連企業に発電機用タービンや電子機器を提供している。自国からリスクのあるエネルギーを遠ざけかつ環境先進国であることを示す一方で、大きなエネルギーを使う重工業を…ひいては経済を…維持するためのエネルギーを外部から賄うという実に見事な策略といえる。何しろこの国の経済はヨーロッパ地域の経済に重大な影響力を持つからだ。

小国が分裂や統合を繰り返し、何度も戦争を経験してきたヨーロッパの民族は生き残るためなら実に様々な戦略を練る。ポケモンに対する政策もそうだ。紀元前後、ローマ帝国やフランク王国の時代から彼らの強大な力に悩まされ続けてきたヨーロッパ地域は、１４，１５世紀以後に徐々に技術を高め、１８世紀の産業革命で完全にポケモン達を技術や社会の進展で圧倒すると、社会・国家ぐるみでこの文明の排除に乗り出した。銃殺、毒殺、強制収容、植民地国への

追放と重労働……現在では多くの欧州先進国が過激な彼らの文明の弾圧が中国やインドなども横行している点を憂慮するという姿勢を表明しながらも、自国と地域には彼らが不法侵入することの無いよう各国や警備企業に対ポケモン特殊部隊を設立、港湾、空港、駅舎、幹線道路の国境ラインに厳重なセキュリティーシステムを構築するという極めて強固な保守的システムを設置している。これにより、人間による犯罪利用などは完全には減らないものの、西欧、南欧、北欧地域ではポケモンの数自体が地球の各地域の中でもきわめて少ない場所となっている。

それが良い事なのか悪い事なのか、後世の判断はまだ決定していないが、少なくともそのおかげで先進国といわれるにふさわしくポケモンに関連する犯罪は世界でトップクラスにすくない場所である。

２０１３年はもう間もなくやってくる。人々はどういう思いでそれを見つめるのだろうか…

２０１２年　１２月３１日　地球から３８万キロ　月の南極　ＧＳＴ時刻１６３０時

月面から見上げる空は地球の市街地から遠く離れ空気が澄んだ高山で天体観察したような満天の星で埋め尽くされ、そしてそれは２４時間３６５日変わることはなかった。何せ月には大気がない、それが故に月から見上げる空は常に夜である。そんなことは常識と知っていながらも、その人間は思わず白い船外作業宇宙服を着用した

右手を思わず星の海に掲げてしまった。

１９６９年の人類の月面着陸以後、アメリカやソ連による月面探査は順調に続き（アポロ１３号は重大トラブルを起こしたが）１９９２年から始まったＩＳＳ（国際宇宙ステーション）プロジェクトとほぼ同時にスタートしたのがＩＬＢ（国際月面基地）プロジェクトである。こちらもＩＳＳと同様に２０００年の完成を目指していたがＩＳＳをも大きくに上回る資材と巨額の費用、そして何より急速に進み始めたグローバル化で生じた国家間の軋轢の前に大幅な計画遅延が生じた。その後も９．１１事件やイラク戦争の長期化に伴うアメリカ財政事情の悪化や２００８年の世界金融危機に伴う欧米を中心とした参加国全体の財政事情の悪化の前にたびたびプロジェクトは挫折寸前に追い込まれた。２００５年前後には既に米国のビゲロー・スペース社の民間の宇宙ステーション「ＢＡ３３０」タイプや英国のヴァージン・ギャラクティック社の「ギャラクティック・スイート」タイプ、スペースＸ社、ロッキード・マーチン社、アリアンロケット社が開発したＩＳＳ型ベースの「アルファ」タイプといった複数の民間宇宙ステーションの建造や稼働が開始され、ＮＡＳＡ（米連邦航空宇宙局）、ＥＳＡ（ヨーロッパ宇宙機関）、ＪＡＸＡ（日本航空宇宙研究開発機構）では宇宙太陽光発電システムの計画、ミラー衛星の打ち上げを始め、ＳＳＴＯＶＴ－２００シャトルをはじめ実に様々な企業が有人宇宙船や宇宙観光機も開発や飛行を行っており、民間の開発を待つべきだという意見も各国の宇宙機関から噴出していた。

この状況の打破を常に支援してきたのは１９９４年に国連内部で誕生したＷＳＤＯ（世界宇宙開発機構）と２００９年に国連の発展として改編された新国際連合（ＮＵＮ）であった。その理由はやはり、１９９２年に国連総会の声明の一つとして出された方針……急増する人口とエネルギー消費量を考慮し、自由資本主義経済の維持と人類の一層の成長・発展を目的とした海上や海洋への居住地の拡大と新資源採掘の開発、地球軌道から月面までの近傍宇宙における

エネルギー探査や開発を拡大することによる将来的な宇宙植民までの地球環境の維持と高度な人類文明の存続・発展成長…であろう。

ともあれ、紆余曲折を経ながらもアメリカ、カナダ、イギリス、フランス、ロシアなどを中心に１２か国の参加、各種航空宇宙企業・資源採掘企業の協力のもと２０１１年５月に第一段階の居住・生活施設と試験採掘施設、作業機器の配置・試運転が完了し、８人の作業員、すなわち宇宙飛行士の第一陣チームが一年の滞在と月面資源探査、サンプル採掘を開始した。

「採掘車両の座標を衛星センシングの示す座標に連動を確認」「確認…予定通りの位置に停止中」「採掘ブームのタッチダウンとロックを再確認して」「了解…」地球のアメリカ、ヒューストンのオペレーターの女の指示が作業員の無線機に飛び、月面作業採掘車「アルマジロ」の乗員の男が与圧用強化ガラス窓から外にいる男２人に手でサインを送り、彼自身も車両のコンソールを叩いて６輪の固定用ブレーキを最終確認した。外の男２人も膝をついて作業車両の左右前方、アームやブームがあるユニットの上に張り出した操縦室の両端と車両最後尾両端から地面に突き刺さったアームの固定ボルトをチェックする。酸化チタンの微粒子が砂のようになった月の表面の下５０メートルにはヘリウム３を気体として含有する層があるが、その上から酸化チタンの表面の間は極めて固い鉄鉱石層が広がっている。採掘中に車両がわずかでも動くと（刃のついたアームの回転による反作用等）、最悪の場合そのままアームがねじれ応力で破断する恐れがある。

２人の男は固定アームのボルトをトルク制御指示器付電動ドライバで確認すると、ガラス張りの操縦室に向かってハンドサインを出した。作業宇宙服の色や形状はアポロ計画時代のころと大きく変わらないが、素材や内部の循環冷却水チューブの改良、生命維持装置の小型軽量化などによってだいぶ動きやすくなっており、まだ地上では重いと言えば重いが、転んだり膝立ちするとなかなか立てないと

いう過去の映像のようなシーンはなくなりつつある。「アーム固定値、通常通りだ」「よし」「こっちでも確認したわ。２０００ＲＰＭで開始して」「了解、２０００で開始」ヒューストンの管制センターの女の声と同時に、採掘車両乗員の男がコンソールを叩いて採掘アーム操作レバーをゆっくりと倒し始める。

傘歯歯車を３つ組み合せたような超鋼チタン合金の刃先が回転し始めると同時に、アームのシャフトも高速回転をしながら酸化チタンの砂を突き破ってその下の岩盤層に歯を突っ込む。鉱石の結晶を主体とする岩盤をチタン合金が噛み、火花を砂を散らし始めた。外の男が車両の固定状態を確認し、内部の乗員の男がディスプレイに表示されるアームの回転数や刃先温度を確かめながら操作レバーを少しずつ突っ込んでゆく。

彼らの目的は月面資源のサンプル採取、今後１０年から２０年かけて実用・商業ベースに乗せていく予定であり、彼らが行うのは地球経済やエネルギー政策に貢献する資源の種類、埋蔵量、分布、採掘方法の調査である。表面の砂に含まれる酸化チタンを精製した純チタンや極点の永久凍土地下に存在する大量の真水以外にも地下層に含有するウランやヘリウム３などが有力候補であるが、現在最も有力なのはチタンとヘリウム３である。チタンは通常の金属材料としての利用はもちろん、超鋼度と耐温度性を必要とする発電用熱核融合炉の原子炉容器の素材ともなる。ヘリウム３は熱核融合炉の主要燃料である。岩盤に穴を開けた後、ポーリングと同様に採取されたサンプルは、簡易解析を行った後に施設の近くにある貨物用着陸船で月軌道上の輸送船とドッキングし、地球へと向かう。切り離されたサンプル入りのカプセルが大気圏に突入して北米大陸またはオーストラリア大陸の回収ポイントに着陸、推進・機械ユニットは宇宙ステーションに回収されたのち、ＳＳＴＯシャトルで地球に帰還する。

現在地球上の欧米先進各国を中心に実用化試験が続く熱核融合炉発電システムだが、最大の課題となっている原子炉格納容器の素材改良と燃料の安定した供給にこれは不可欠だった。通常のウランを燃料とする沸騰水加圧型分裂炉の１０倍近い発電力を持ち、ＣＯ２を一切排出しない、通常の原発のように使用済み燃料の処理や放射能漏れリスクを懸念する必要もない、まさしく夢のエネルギーとして注目される熱核原子炉の最後の課題、地球上に少ないヘリウム燃料の確保と圧力容器素材の改良を達成する手段として月面開発は行われているのだ。

将来的には人口移住のための月面都市も建造されるかもしれない。そのためには現在は８人分の真水、電力しか確保できない施設の生活用資源供給技術をまだまだ抜本的に改良する必要があるが、この月面基地は、現在史上初めて地球以外の天体で人間が滞在できる施設、軌道上の宇宙太陽光発電システムに次ぐ地球外の資源開発の最前線、そして地球から最も遠いフロンティアである。

ＮＡＳＡであらかじめ計画された今の任務に集中しているせいか、それとも地球上と違って季節も昼夜も変化しない場所にいるせいかここにいる彼らは今日が年末であることを忘れていた。そんな彼らのいる南極点の地平線ぎりぎりに、まさしく地球から見た半月の如く青、白、その隙間から覗く緑に輝く人類の母なる大地、地球が輝いている。現在はほんのわずかしか完成していない宇宙太陽光発電リングも数世紀もの時間をかけて地球に輪を作り、人類に大きな恩恵をもたらすに違いない……

その時も人類と自然環境は維持され、地球は美しい惑星のままで残っているのだろうか……

２０１３年　１月１日　アメリカ　ハワイ州　オアフ島の南５０キロ　国連メガフロート　ソアリング２　００２０時

　デンマークに本社を置く世界最大の海運会社「Ａ．Ｐ．モラー・マースク」社のメタンハイドレード輸送船、コンテナ船でいえば９５００ＴＥＵクラスの超大型の船舶が、ソアリング２地域を円周状に囲む資源開発・エネルギーフロートにある複数のエネルギー輸送船舶発着ベースの一角にタグボートの支援を受けて接岸した。その前後にも既に他社の大型メタン輸送船がすでに停泊しており、岸壁の建屋から伸びたコンテナクレーンのそっくりな形状と動作をする巨大な伊達巻のような燃料パイプブームが、自動的に輸送船の接続ブースへと接続、注入を行っている。この建屋の中心部ある採掘区画からは複数の採掘パイプが海底に向かって伸びている。ここで採れる原油、メタン、天然ガス、トリウム、ウラン、金属資源は工業フロートの工場や発電所を中心としたエネルギー供給システムにも利用されているため、鉄鋼、船舶、大型工作機械などの受講業を中心とする工業コロニー群まで伸びる高架道路で資源を輸送するスウェーデンのボルボ・グループ傘下のマック・トラックス社の（もとはアメリカのメーカーであり、オーストラリアのロードトレインで圧倒的なシェアを持つ）ロードトレインと通称される多数の四重連結トレーラー・タンクローリーやそれに近い６００馬力・１５００ＣＣの超弩級トラックもあちらこちらを走り回っている。貨物列車にならないのは、急なスコールや荒天が珍しくないこの地域のメガフロートにおいて高波や強風の影響を受けにくく、工場地帯というものが長大編成の鉄道を敷設しにくいからだ。さらにフロート間の連絡道路は原則事故の起こることがないので、このような超大型トレーラの方が使い勝手がいい。ただし、環境に配慮した工業・交通網の建築は国連から世界中の中小企業まで経済界共通の重要事項

であり、一般旅客輸送は鉄道や公共交通機関が中心となる街づくりを基本としている。

このあたり一帯はエネルギー・金属原料採掘エリアであり、最寄りの当事国アメリカのアメリカンプレシデントラインズ社が支社をかまえる工業関係のコンテナ船発着ベースは、この一体よりさらにフロート群中心部へ1キロほど入った場所に工業フロート群に隣接している。

作業用の照明が周囲を眩しいほどに照らし出す工場地帯・港湾地域の一角で作業を見守る工場やプラントの作業員や船舶の乗組員。機械や鉱業をはじめとする生産産業、はクリスマス・年末休暇に差し掛かっているが、運輸・交通業や通貨相場（マネーレート）系の金融産業には休暇というものは原則ない。ましてや日夜途絶えさせてはならぬエネルギー供給関係の物流はなおさらだ。この地帯の作業員や船舶の要員や採掘・積載システムを操作するオペレーター達にも家族や友人が遠く離れた地球のどこかにいる者もいるはずだが、それが彼らの職務、仕事なのである。

上空を中型貨物機Ａ－３１０－３００Ｆが轟音を立てて通過してゆく。民間の空港はここから5キロほど入った居住・商業フロート近くの沖合に２４時間発着可能な国際空港として存在するからだ。人間の社会は２４時間３６５日休むことがない。

ただし、マック・トラック社の大型トレーラーが時々通過してゆく岸壁沿いのあちらこちらには粗末な物品をかつぎ、汚れた手織り

の毛布みたいな布でくるまっているポケモンがちらりほらりといる。メガフロート群では国連の規定として、犯罪やテロに利用される恐れを懸念してポケモンの移住・転入、人間による持ち込みは、個人、企業、当事国の軍隊、統合軍、いかなる場合も禁じられていた。メガフロート群の外周海域、上空から各フロートの工場地帯や地下までセンサー、レーダー、監視カメラでネットワーク化され（彼らが発する独特の電波なら普通のカモメとキャモメの区別位はあっさりみぬく）常時監視されている。それにもかかわらず“不法侵入”や不法な持込みは後を絶たたないのだ。

セキュリティー・センターで発見した警備員たちが毛布を剥ぎ取り、寝ぼけている彼らを強制連行してゆく。この風景は年が変わっても変わらない光景であった。

２０１３年　１月１日　日本　東京都台東区　東京スカイツリー上部展望台　０００１時

新年を告げる花火はまだ余韻を残し、新しい年を祝う可憐な炎色反応を利用したナトリウムやカリウムの燃焼した華の最後の数発が打ち上がり続けている。外壁のの青やピンクの鮮やかなライトアップとは対照的に、上品な落ち着きを演出する明かりに包まれたタワー展望台の内部でそれを携帯端末やカメラ類で記録している人々は若者グループや家族連れ、男女のカップルと思わしき人々などが多いようだ。すでに“昨年”となったばかりの２０１２年４月に開業した東京スカイツリーで初めてとなる年越し時間帯のオープン、毎年のことながら日本の各家庭はテレビがまだついているだろうし、インターネット空間のブログや掲示板は年越し関係の書き込みが殺

到、娯楽施設の多くは新春イベントを開催し、水道や電気などのインフラ供給は特別体勢、駅と娯楽施設や寺社を結ぶバスや電車の多くは終夜運行となり、自家用車も加わって混雑した夜を迎えている。その中でもこのタワーは多くの客やカメラを回す報道陣、マイクをもってカメラの方を向く取材者らしい女、その他多くの人間でいつにもまして賑やかなうえ、その巨大な強化繊維の窓ガラスから眺める都心の夜景も格別だった。至近にあるスカイツリーシティの高層ビルはもちろん、遠方に見える八重洲、新宿、池袋、品川、芝浦、霞が関、遠くに輝く川崎や横浜、さいたま新都心、千葉、幕張等の林のように伸びた超高層ビル群、秋葉原や渋谷周辺の繁華街を埋め尽くす鮮やかな広告塔やネオンサイン、東京ドームシティやお台場・レインボーブリッジ周辺の観覧車やアトラクションが放つ派手なライトアップ、東京港、川崎港、横浜港まで続く貨物船や客船発着タミナルや京浜工業地帯、千葉から東京湾東側の沿岸を埋め尽くす京葉工業地帯、それに関連する発電所、原油・天然ガス・メタンハイドレードの貯蔵タンクを染める黄色の作業灯、国際化・大規模化した羽田空港への航空機が利用する誘導灯、市街地をヘビのようにくねる首都高速道路のナトリウムオレンジの市街灯とそこを走る無数の自動車のヘッド・テールライトの川が作り出す華やかな夜景が人々の心をひきつけている。２０１１年の震災と原発問題に伴う電力危機から立ち直った東京・首都圏、関東地方は再びニューヨーク、上海、シンガポール、パリ、ドバイ、ロンドン、シドニーなどの巨大都市に負けない華やかな夜景を持つ都市へと復活を遂げたのだ。それは震災から立ち直りつつある日本の象徴……

２０１３年が始まった……

その数時間後　千葉県　房総半島沖　０６３０時

ロサンゼルス空港行きのノースウエスト航空のＢ－７４７－８に続いて羽田空港を午前６時に飛び立った全日本空輸のＢ－７８７は、房総半島沖でゆっくりと左旋回を続けている。抽選で選ばれた３３０人目一杯を乗せた初日の出を拝む特別フライトだ。高度２５００フィートから拝むご来光を待ちわびた人々の中には、窓際にカメラを構える人、小さな座席の窓ガラスに花を押し付けるように空の様子を見る人もいる。東の空、雲の周囲のオレンジ色は次第に鮮やかにそして眩しく輝き始め、それを目指すようにＢ－７８７は高効率・省エネルギーのロールスロイストＰＬＣ社製最新鋭のトレント１０００ターボファンジェットエンジン２基を回転させながら飛び続けている。

そしてその瞬間はやってきた。一瞬前まではオレンジ色に染まっただけの空が急に鮮やかさをまし、天から降り注ぐような白い光が満たす。地球の生命に悠久のエネルギーを注いできた太陽が今日もまた上がったのだ。機内ではカメラのシャッターを切る音、電子音、感動のため息や歓声、拍手が一斉に湧き上がる。そうだ、太陽の周りを公転する地球の新たなる１年が、人々の新たなる１年が今始まったのだ。

地球のあらゆる動物、植物、全ての生命に大いなるエネルギーをもたらし、地球の大地に、海洋に、そして宇宙や月に文明を広げてゆく人類を見守り、時に試練を、時に大きな恩恵を与えてくれ続ける水素とヘリウムからなる灼熱の恒星、太陽の眩しい朝日に照らさ

れたＢ－７８７、アメリカ、イギリス、イタリア、フランス、カナダ、オーストラリア、中国、韓国、日本の計７０社の大小企業の最新技術の結晶からなる新時代の翼は、まさしく翼を広げた巨鳥の如くその複合繊維やファインセラミックス素材からなる流線型の機体と翼を輝かせていた。

２０１３年　１月１日　エメリア　ソーラ地域　パルク州　国連施設　０５００時

「だ、だからなあ…ユイリィに来てほしいって言われたのは俺だけであってブレイブは呼んでなかったぞ。……ついてきても死ぬわけじゃないけどさ」「へへっ！親友のよしみだぜ！なんたって彼女にお前が呼び出されるなんて滅多ねえからな」早朝、彼らのいる居住施設から丘陵を下り軍の滑走路の脇を通って海岸へと向かう道を歩く最中、リーヒュンの諦め顔に対しブレイブはフサフサ尻尾を振りながら楽しそうだ。「ひょっとしたら俺に言うのは恥ずかしいからリーヒュンを通したのかもな！やっべえ俺！すげえわくわくしてきたぜ！これはユイリィの俺に対するプロポーズなのか？！」「何を勝手な妄想してんだよ…はあ、やっぱお前変わったな…」「だろ？！すげえ意味で進化しただろ？！」ブースターは楽しそうにベイリーフの首の葉っぱ元に飛び付いた。ベイリーフの首元にブースターの体温が暖かいマフラーのように温もりをもって感じられる。もっとも夏なので暑いだけだが。「あ、の、な、誰がほめてんだよ？ブレイブの女くせは、はっきり言って俺が言うのも難だが…微妙に危ない…」「危ないくらいが恋愛ってもんだぜ！ったく！お前はそういうのに疎いからってビシビシ言いやがって…」リーヒュンの首元をブレイブは前足で軽くなでた。「……分かってるよ。お前は昔から変わってない、それはそれでいいことだとは思う。恋愛に疎い

っていうのもまたお前のいいところなのかもしれねえ」「……っ？？」キョトンとしているベイリーフをよそにブースターは彼の首元から飛び降り、首のフサフサを軽く震わせる。「…恋愛ってのはよ、情熱が主な材料だからどうしても煮詰まり過ぎて醜い面をさらすことが多いんだぜ。お前みたいな奴が恋愛するとパッと見は薄っぺらい感じもするが、一番純粋でおかしなものが混ざらない、さわやかな味わいになる。初恋って奴にだ…ああ、２回目以降はダメだぜ」

「な、なんでだよ…」

「バーカ！一回目を失恋したんだよそれは！だんだん無駄に熱気ばかりが増えんだ、今度は絶対にフラれねえ、ていうのがな」ブレイブが嬉しそうに軽くぴょんぴょんとリーヒュンの背中を飛び越して左側に回った。ブレイブの顔が少し赤くなる。「いいよな…俺もそういう恋をしてみたいぜまた」「？？……ってことはブレイブは……」ベイリーフがツルでブースターの頭のフサフサを軽く押して笑った。「いいじゃないか。やり直せよその娘と」

「だろ！人生は経験値……て、何言ってんやがんだお前は？！」「おいおい、俺はまともなことを言っただけじゃないかよ？そんなにムキになって追いかける…」「ふっざんけな！お前恋愛したこともないくせに、この恋愛のベテランに何を偉そうに…」２匹は一気に海岸の付近まで駆け下った。

ユイリィは湾状になった１キロはある海岸に並ぶヤシの木の木陰、施設の方から続いてきた道から向かって右手に入った場所で明るくなり始めた空を眺めていた。頭の上ではちびっこのシェイミがコックリコックリしている。「おう、いきなりこいつ呼び出してどうしたんだユイリィ？こいつ経由で俺を呼んだんだろ？」「おいおいブレイブ、困らせるなって…」

いきなり彼女の花びらもとに体当たりの如く飛び付こうとしたブレイブをリーヒュンはツルと前足で押さえつける。が、肝心のメガ

ニウムは「あ、ブレイブも来てくれたの？うんうん、いっぱい見物がいた方が楽しいしね！」と嬉しそうにブースターを背中に乗せてあげた。「きたああっっ、やっぱ俺とデートがしたかったんだな！ダイレクトに言ったって俺大歓迎なのによ…どうして…」「うん、それは予想してたけど、てか分かってたけどね、うん。ブレイブとデートは2割かな♪……」「へっ？…にわり？」ユイリィはほっぺの所に頭をを出してきたブレイブをツルで押し戻し、呆れたようにも見ているリーヒュンに視線を向ける。「今日の日の出は特別なんだよ……それを見せたくて、ね？」「特別…？」「うん、パッと見はいつもと同じなんだけど…」メガニウムはツルでベイリーフの左前脚の付け根をつつき、そばに近づける。「人間の暦では今日は新しい年っていう物の始まりでね、人間は３６５回一日ガスいることを西暦って呼んで区切るの。今日は西暦２０１２年と２０１３年のちょうど変わって最初の日。国によっては盛大にお祝いするんだって」「西暦か…全くポケモンの中だけで生活してると、日付も時間も大雑把になるよな…」「そうだよね…うちらは時間だって適当で、暦だって普通の皆は知らないし。ここじゃあんまりわかんないけど、場所によっては春と夏と秋と冬があるからその時の風とか雲とかみて決めてるんだよねえ…」

ポケモンの文明には暦というものはない。農作業などの際には繰り返す季節の変化を空、風、温度で敏感に感じ取って決める。ゆえに決まった長期休暇などというものも存在しない。１２月３１日も１月１日も彼らにとっては安息日では（彼の文明では七日に一回。偶然ここだけは人間と同じだ）ない限り普段と何ら変わりがないのだ。もっともこの施設では安息日など関係ないが。

それに加えて時間の管理も大雑把、専用の器具で太陽の影の向きや長さから時間をおおよそ掴む。これでは精密かつ高度な技術やシステムが育つわけがないが、その分時間にも追われないし人々の生

活や気持ちや価値観も穏やかで寛容性のある。だからこそさまざまな姿かたち、生活リズムや暮らし方のある種族が入り混じっても、お互いを受け入れて文明としてやって来れたのだろう。人間の場合は肌の色が違うだけで獣扱いし、差別・弾圧され、最悪は虐殺されたという暗い歴史がある。それはエジプト、ローマ、インカ、マヤ、スペイン、イギリス、ナチスドイツ、と長い間続き、２１世紀に入った今でもイスラム原理主義と欧米自由主義、アジア新興国とアフリカ諸国のように人種、宗教、民族、主義に関係する軋轢、紛争、対立が後を絶えない。

「なるほどな…俺、ポケモンの中でしか暮らしたことがないから気づかないや…あ、太陽が出てきたみたいだ…」「うん！やっぱきれい…特別なものを感じるよこの日は」メガニウムの夏色の目は突如前方に満ちた光に輝いていた。

３匹（とシェイミ）の前に広がる海洋の下、遠くの水平線から上がってきたオレンジ色の恒星。彼らにとって太陽とは大いなるエネルギーと生命力をもたらす尊い存在、そして自分たちが生きているという希望の象徴である……

思わず彼女の隣に座りこんだベイリーフの折った前足元にメガニウムのツルがそっとあてられる。「新しい年か……今年はリーヒュンとウチの年かな。てか絶対そうするよ！うん！」「そうするって…今年はどうなるんだか…」リーヒュンはユイリィの嬉しそうな明るい調子に戸惑いながらも眩しい朝日をできる限り見上げ続ける。

今後の自分がどうなるか、彼にはまだまだ先読みできない。自分の能力、隣にいる彼女、そして…何よりフローラのこと…

しかしだからといってリーヒュン・バイリング・グリーズに選択肢はないし、考えてもいない。行く道はただ一つ、自分のやることは精一杯果たす。そして少しでも妹に近づく。

そうすれば見えてくる、フローラも、自分の事も、周りで動く世界も。なんとなくそう感じた。

「俺も頑張るよ…やることは全力でやるだけだ。今年もよろしくな」

「うん！こちらこそ今年もめっちゃくちゃよろしくだよ！ね！」彼女に満面の笑顔が広がる。ユイリィ・ランタン・プレミドールとしても自分は今日も大切な仲間たちと生きていける。

そして、今年もみんなで新しい年を迎えられる。それだけで今の彼女には朝日に宝石のように輝く海辺を見たように嬉しかった。

「俺も忘れんなよ！ユイリィもリーヒュンも俺のダチだ！今年も４匹で行くぜ！」砂浜に飛び降りたブレイブが２匹の足元に右前足を打ち込む。「もちろん！」「あんまり無茶とバカはすんなよ」

「へへっ！俺はテルル…おっ、噂をすれば！！」ブースターがふと降りてきた道を見ると、そこでぼんやりと眠そうに朝日を眺めるグレイシア。「テルルーっ！」彼は脱兎のごとくやわらかい砂浜を走って行った。

「…相変わらず忙しい奴だよブレイブは」「ホンット女の子が好きなんだね。まあそれはそれで…いいことだよ、うん」２匹は思わず顔を見合わせた。ブレイブがどうなるかといえば……

「よっしゃあテルル！２０１３年もよろし…」「朝から音量大きい！朝らしい態度ってのはないの?！」フサフサ尻尾を振り振りしながら接近してきたブレイブをテルルはあっさり払いのけてスルーし、２匹の方へと駆け寄る。「おっは、テルル！」「おはようユイリィ…」その直後に思わずベイリーフと目線が合い、思わず顔をそらしそうになったが、そういう訳にもいかずもごもごと呟いた。「お、おはよ…今年も…よろしくね…」「こっちも、な」ベイリーフは戸惑いながらもツルでグレイシアの前足をポンポンと叩く。テルルは顔を少々赤らめながらも彼のツルを振り払った。なぜか照れくさい。今までさんざんきつい事を言ってしまったにもかかわらず、不思議な感覚だった。

新年…あけましておめでとう。２０１３年。

新年へ（後書き）

かなり早いですが、明けましておめでとう、というところですね。
物語も４か月経過、葵の執筆も４か月です！

そして４０話達成！この先もどうぞよろしくお願いします。

表裏一体・喜びも涙も

２０１３年　１月３日　エメリアのソーラ地区　パルク州の国連施設・国連軍基地　１１００時

軍基地の滑走路が急ににぎやかになった。国連統合軍に東欧から持ち込まれたＳＵ－２７２機がスクランブル発進をするらしい。戦闘機、爆撃機、マルチロール機と機種ごとの分業が顕著なアメリカ系の戦闘機と異なり、戦闘機というカテゴリーに入りながら高空でも威力を発揮する格闘戦能力と長大航続距離を持つＳＵ－２７はリユーリカ設計局の（現在はスホーイ社が生産）高出力ＡＬ－３１Ｆターボファンエンジンを始動させて飛び立ってゆく。アラートハンガーからから誘導路までを地上の誘導員の両手に持ったハンドシグナルを横目に見やるほどのスピードで機体は、Ｃ－５やＣ－１７等の輸送機の間を通り抜けて誘導路に入りタキシング、すぐに滑走路（ランウェイ）の端まで来て、ＡＬ－３１Ｆ２基を全開にして離陸する。

今回２機が出撃する理由、それはソーラ南端にフランスのアレバ社が使用済み核燃料処理施設の買収を完了した（４月ほど前に地域の反対勢力を社員の派遣でねじ伏せた）地域の上空、及びカナダ、ドイツ、中国の企業が分割した（いまだに境界をめぐって対立しているが）天然ガスプラント建設予定地で連日不審な動きをするひこうタイプのポケモン達を退去させる、場合によっては撃退するものだ。

この４か月、アメリカ領に隣接するニュークリア地域に続き、ソーラ地域の反人類文明勢力は着実に減少しつつある。これもすべては“計画”のため。そして、ユーラシアや南北アメリカ、アフリカといった人間文明が完全に握っている地域でも…

そんな思惑を絡めて飛び立つＳＵ－２７の轟音を聞きながら、国連研究施設の関係者の二人の男は、機関の施設や軍施設からやや離れ、緑の残る丘陵に立つ官舎にやってきた。「なんたってこんな遠い位置にあるんですか？セキュリティーがあって守衛がばっちりいるなら、施設の隣でだっていいんですけどね……」「それは軍の上層部がそうしたんでしょう。我々もよく分かりませんよ…こいつらの司令官の少将がいないのが問題なんですけどね…」夏用の迷彩服にＭ１６Ａ５アサルトライフルという格好のアメリカ陸軍の兵士が機器を関係者２人のＩＣカードのタグを読み取る。「ＯＫです。ご用件の方は？」「テルル・ルナマリア・アストラフスキー宛てに手紙が来ています。赤外線・Ｘ線探査機による爆発物検査と毒・劇物検査は済んでいるので、あとは本人に手渡すだけです」「そ、そうですか…了解しました。…声をかけるのめんどくせえなあ…呼んだときの態度は見てるだけでうざいんだよ……」兵士はぶつくさ言いながら木造２階建ての建物の方に数歩歩き出す。「……あ、申し訳ありません。少々お待ちください」

３０秒ほどして先ほどの兵士に連れられて出てきたグレイシア。兵士が不満がったように確かに嫌そうな表情をしている。隣の兵士の足を見、顔の方を見上げてはため息をついて首を振っている。おそらくは人間が嫌いなのか、関係者の男たちは顔を見合わせた。「なんですか？」そのグレイシア、テルル・ルナマリア・アストラフスキーは国連施設の男たちと目線があった瞬間、いらだったような声を上げる。片方の男が足でグレイシアの顔面を潰してやろうと動きかけたが、もう一人がそれを制止する。「テルル・ルナマリア・オフリート・アストラフスキーで間違いないな？」「当たり前でしょ、他に替え玉でもあんの？」「お前な、そういう態度だといつか人間に殺されるぞ…で、」男はかがむように姿勢を落とし、黄土色

の封筒を突き出す。「これは？」「お前宛の手紙だ。差出人は確か…ロシアのサンクトペテルブルクの…」その言葉を聞いた瞬間、グレイシアの表情が一変した。目の前で子供を誘拐された時の母親のような怯えと狂気が入り混じった震えた目線、手紙を奪い取らんとばかりに伸ばそうとする前足。男は不思議そうに首をかしげ、茶色鵜封筒をテルルに差し出す。「どうした……いらな…」「早くっ！！」グレイシアは奪い取るように右前足で封筒をひったくると、森の方へと向かって猛スピードで走り去る。兵士と男たちは呆気にとられてそれを見送った。兵士の男が冷笑を浮かべる。「あの女…結構な精神病患者のようでして…」

「あの…テルルがどうかしたんですか？」そばにやってきたのはピトムニクとバストーク、それに加えてブレイブ。「さっき、あんたら彼女の子と呼び出したな？何か用でも？」メリープが疑った表情で兵士の黒いコンバット・ブーツに近寄る。彼の経験からしてテルルが人間とトラブルを起こした公算は大きい。だとしたら…間違いなく原因を作ったのは人間連中の方にあるに違いない……

「まさか…あいつの家族のことに関してとやかく言ったんじゃねえんだろうな？！知ってるくせにそれともいじめか…」「ち、ちょっと、ブレイブも隊長も問題起こさないでくださいよお！」プラスルがブースターとメリープの前に制止するように入り込んだ。「家族？ブレイブは何か知ってんのか…」「そりゃそうですよ…あいつの家族は……」

「分かった分かった！別に俺たちは奴とケンカしたわけじゃない」国連関係者の男がめんどくさそうに割り込む。いちいちプライベートの問題に集団で首を突っ込みたがるポケモン連中の思考の訳が、彼には分からない。「あいつに送られてきた手紙を渡しただけだ。ロシアのペテルブルクからのな。あいつ見た途端、いきなり血相変えて持ってあっちの方向に逃げやがった。あの中に金でも入ってんじゃねえのか？」男は指さす。敷地の通用口のようなゲートにつながる未舗装路……

「ペテルブルク…ロシア…手紙…そうかっ！」ブースターが突如として声を張りあげる。「ど、どうしたのブレイブ？」「ロシアと彼女につながりがあんのか？」「そうだ！間違いねえよ！あいつはっ！……」プラスル達の質問に答えもせずに彼は森の未舗装路へと飛び込んだ。

どれほど施設から遠ざかったか……テルルの目の前にはいつの間にか無機質で原生林そのままの森の木々から差し込む陽ざしによって冷たく輝いている施設との境界線の高い金属柵の前に来ていた。辺りを見回し、柵の高いところに取り付けられた警戒カメラと赤外線センサーから見えない死角となる、未舗装路の終点から１０メートルほど入った苔むした倒木のの陰に座り込む。絶対に見られない、人間だろうとポケモンだろうと機械だろうと見せやしない。野鳥の鳴き声だけが響き渡るうっそうとした森の倒木の一角で、グレイシアは隠すように手紙を前足で持ち、震える手先で中身を取り出した。前足がけいれんを起こしたように激しく自身でも信じられないほどけいれんし、２つ折りにされた手紙を開く場面に至ってはほとんど前足の３つに分かれた指先が言う事を聞かなかった。

　待っていた…この時を待っていた。本来の仕事場だったモスクワ郊外からはるか離れた南太平洋の一角、しかも人間の欲望と対立が入り乱れる辺境というテルリウム・ルナマリア・アストラフスキーにとって一番不快感のあふれる地に何の予告もなく異動させられたあの日、たった一匹の家族を、来る日も来る日も忘れること等できるはずのないたった一匹の家族をサンクトペテルブルクに置き去りにしたこと。その家族から送られてきた手紙という動力が、精神的抑圧という名の制御棒を押し下げて感情と呼ばれる核分裂反応をか

きたてる。そしてそれは、それ自身の強力な熱エネルギーによって水が沸騰した蒸気となって彼女の感情を表面化させる。

今、まさにその感情の制御棒が取り除かれようとしていた。テルルの表情という圧力容器は激しい興奮の前に崩壊寸前である。待ちに待ったやり取りに対する限りない嬉しさ、この世界で唯一、自分の本音をぶちまけても受け入れてくれるであろう相手が書いたメッセージに対する期待、しかしその一方で激しく心臓の鼓動を急き立て、鼓動をのどから飛び出させようとするある種の不安、その“弟”は自分の事を信頼しているのかという事に対する例えようのない恐怖が複雑に交差し、もはや自分が何を考えているのかさえ分からない。グレイシアは必死に自分の感情を自分の理解できる方に解釈しようとしたが、その度にネガティブな不安や恐怖が倍増する一方だ。（…これ…でも…）ふと湧き上がった感情、あわよくば水に隠してしまいたい、そういう感情にとらわれた彼女は、気が付いたときには苔むした倒木を持ち上げようとしているバカな自分がいることに気付く始末であった。（…どうする…何やってんの私は?!…読むの…読まないの……どうすんのよっ!…）手紙を倒木のそばに転がる岩の元において、取り留めもない感情に任せて右往左往したその直後、「やっぱ!」突如として声を張り上げる。意識の中で、彼女が理解するにはあまりにも大きすぎる何かが炸裂した。

……もう逃げ道はない、いやでも読むことしかないのだ……怖くても…悲しくても…

それと同時に再び手紙に対する病的とも言える愛情、しばらくでも少し湿った土と草の上にそんな家族の思いが無限に込められているで“あろう”それを置いてしまった、それだけのことに対してまるで自分でその家族を殺してしまったかのようなとてつもない罪悪感に襲われ、首を絞められたのごとき悲鳴に似た詰まった声を出し

て慌てて手紙に飛び付き、持ち上げ、頬ずりしてしまった。さらに激しくなる前足の震えはもはやどうしようもない。窒息寸前のように息を吸い、吐き、また吸って吐いたが進行級どころか過呼吸症候群のように苦しくなっただけだ。左前脚で右前足首を掴み、狂人のような表情をしながらついにテルルは４つ折りの手紙を開いた……便せん２枚、裏表にわたって子供のように少しバラバラの列になりながら並んではいるものの、しっかりと読みとれる丁寧な足型文字だ。上手とは言えないが、読みやすいとはいえる。そして何より、家族のために…無邪気に無条件で信頼するたった一匹の肉親のために…すなわちテルルのために向けられた…９歳そこらの子供の純粋さと幼さの中にその思いを閉じ込めた、何よりのメッセージとなっている。

（エルヴィン…また上手になったね…）テルルの目元は最初の一文字目を見た瞬間に崩れそうになった。成長してくれている…その激しすぎる感情の前に思わず読むのを止めようかと考えたが、そんな感情は二文字目を呼んだ直後には雲散霧消し、後はむさぼるように読み続けた。

最後の一文字まで書き尽くされたエルヴィンからのメッセージがテルルの意識に強烈な核分裂によって生まれた水蒸気となって彼女の圧力隔壁の中を一気に広がる。間違いない、弟は私の事を、たった1人の姉である私を信じてくれている。そして今でも私の事を何の疑いもなく待っていたのだ。

震える前足でグレイシアは手紙をほおのあたりに持ち上げ、思わずそのままこすり付けた、一回、また一回、その度に東欧への逃避行ともいうべき苦難に満ちた吹雪の中での彼女にとってたった一つの希望ともいうべき存在、全てを失いかけた彼女をテルル・ルナマリア・アストラフスキーとして辛うじて保たせてくれた、唯一の家族。まだエルヴィンは私の心と共にいる。私の気持ちのそばにいる。その嬉しさ、希望、2匹で過ごしたすべての思い出…凍りかけた河で魚を取り、2匹で一生懸命に火を起こし、二人で肩を寄せて眠りにつく日々、シベリア鉄道にたどり着いた時のあの思い、涙を流し、何度もキスをして別れを惜しんだ最後…

…そして…やはり自分から遠く離れた場所にいること、いや、自分の方がむしろ遠ざかってしまったことへの寂しさと切なさ、が一気にあふれ出る。全てが一つになった感情という圧力は、何の妨害も受けずにこのグレイシアの耐圧容器を突き破る。

「……私は……私は今も！！！」目から涙が止まらない。力尽

きるように岩場にぐったりと崩れ落ちた。とにかく両前足を広げ、抱きしめようとした。「一緒に…一緒っっっ！！！！！！！！…これ…からも…ずっ…と…！！！！！！」

追いついてどれほど時間がたったか声を上げて泣くテルリウムを道の大木の陰から見つめるブレイブ・クレイバーでもなすすべがなかった。これがもしテルルではなくて別の女（メス）だったら、彼は間違いなく駆け寄っていただろう。しかし、目の前にいるグレイシアがテルル・アストラフスキーという疑いようのない事実ある結果、このブースターの意識と思考の中にかけるべき言葉が見当たらない。彼は自分の運命を呪った。あの時彼女に聞いてしまったことを、彼女のあまりにも辛すぎる胸中を尋ねてしまったことを心から後悔した。

だが、それでも彼はブレイブ・エスコーツ・クレイバーだ。目の前で激しく泣きじゃくるグレイシア、テルル・ルナマリア・オフリート・アストラフスキーの同僚である、彼女が煙たがろうと小馬鹿にしようと、少なくとも彼女の同僚であるブースターだ。いつまでも何もしないこと等、彼の信念が許さない、許せないのだ。彼は覚悟を決める、フサフサ尻尾をびくんとふるい、右前足を一瞬踏み鳴らして木の陰から前に踏み出した。

一歩一歩と確実に歩み寄るブレイブにテルルは全く気付いていないようだ。ひたすら崩れ落ちるような姿勢で涙を流す彼女を前に早くも彼の心は折れそうになる。「テルル……おい……」ブースターは

逃げ出したい気持ちを無理やり抑え込み、喉の奥から振り絞ったが、消え入りかけ、かすれた声しか出ない。「…ぐずっ…ううっ……」グレイシアは全くブースターの存在にも気づいていないように泣き続けている。「……テルル……なあ…聞こえてんのか…」「……うっ…私……」

「テルル……ったく…」一瞬諦めかけた彼だったが、左前脚で頭の黄色いフサフサをかき乱して彼女のもたれかかる周囲の森や草と同じような色に苔むした岩にゆっくりと歩み寄り、泣き伏すテルルの隣にゆっくりフサフサ尻尾と尻を降ろした。「……良かったな…ロシアからだろ?」ブレイブは諦めたようにため息をつき、地面にベタンと落とした後足元の小石を右前足で弾き飛ばす。こういう女には長い時間をかけて付き合ってやるのが一番、彼はそう判断した。その一方で彼女の鳴き声を聞いていると、何もしてやれぬ自分の情けなさで自己嫌悪に陥りそうだった。彼女がどう思おうと彼女の事を一番、いや本音を一つたりとも知っているのは他ならぬ自分しかいないだろうに、リーヒュンでもユイリィでもいてくれれば状況が少しでも掴めるのか?

彼らはいない。だからこそ…自分がいる必要があるのだ。思わず立ち去りたくなる足腰の発作を彼は必死にこらえた。

「そ、そうそう、リーヒュン上手くなったんじゃない?それでいいのいいの、うん。ツル2本はもうすぐ卒業、てわけには全然いかないんだけどね」「そ、それってことは…ユイリィにしてはまだまだ

って事だろ?やっ。くっそ…どうしたら…できるっ?!」メガニウムの言っていることがほめているのも励ましているのも理解できるが、ベイリーフは異常なほどの焦燥に駆られていた。確かに少しは進歩したのかもしれない、彼女の飛ばすツルが凶暴な肉食のヘビのように飛び掛かってくる前に、彼はなんとなくその動きの映像が頭をよぎり、何となくそれに従うとその一瞬後で、先ほど見えたそうなツルの動きが見えているのだ。何となく先の予感が読めるのは小さい頃からだったが、具体的に視覚映像として出現したのは初めてだった。そしてそれに基づいて自分のツルを振ると飛んできたツルと切り結べる。今までは受けるかよけるかのどちらかが圧倒的だった自分の動きが変わってきたのだ。相変わらず彼女のツルを受けるだけで精いっぱいだったが、今までのやられっぱなしとは違う、そう感じた。

「うん!すごいよ、できてるできてる!」疲れ果て少々ふらつくリーヒュンの首元をユイリィはツルで軽くたたいた。ベイリーフは少し後ろによろめきながらも、メガニウムのツルから少し流れ込んだ彼女の明るい感情のエネルギーによって少しだけ4本の脚のふらつきが取れた感じがする。「何とかなってんのかよ俺…」「問題なしよ!今さ、リーヒュンの目の前に見えてなかった?そういう間みたいなのががあったもん」「えっ…うん、確かに…それらしき感じはしたけど」「それ、それなんだよ!目の前に一瞬先の様子が見えて分かる!それが大事!うん、」「……なるほど…」彼には他に言葉がなかった。その感覚が完璧になった時、その時周囲に感じる風景はどういう物か?

しかし期待と同時に思考の片隅に突如不安が浮かび、それが急速にリーヒュン・バイリング・グリーズの信ずる期待…妹のフローラ・エルピー・リトリム・グリーズを“あの状態”から救出する…にとって代わっていった。不安は恐怖になり、恐怖は無数の意識が流れる大河を水面に落としたインクのようにゆっくりと広がってゆき、自分自身の思考を震え上がるほどの冷気で満たす。(……ありえな

い…見えたとしたらそれは…フローラの苦しみで…）

だがそれを今出すわけにはいかない。彼は思考の中で自分のツルで自分の頭を殴り飛ばした。（妹の事は自分の問題だ…いちいち不安がってどうする?!もう決めたじゃないか、やるって、何があってもやるって…）最初は気にもしてもいなかった、なんとかなると思っていた。そして甘い期待と楽観というそれは先月の中ほどのあれで見事に打ち砕かれたはずだった。苦しく、悲しく、恐ろしい。だからこそ…今気づいた。

―逃げ道など存在しないと（・・・・・・・・・・・・）……

「ここまでくれば4本でまともに打ち合えるまでもう一歩!リーヒュンのツルって気持ちいんだよねえ～本格的に早く打ち合いたいな♪うんうん……」メガニウムはまたしてもベイリーフの横から飛び掛かるように彼女のウグイス色の頭を彼の首元にこすり付けようとしたが、思い悩んだような表情を見てそのすれすれで止めた。彼の意識空間によぎるふと思い浮かんだ不安と何かに対する恐怖、彼女には自分の苦しみのように感じられた。自分の能力が発展してゆく…その先にたどり着くものを想像すると、期待よりも恐ろしさの方が先行するのだ。

ユイリィ・ランタン・プレミドールとしてかつて味わったから、今だからこそ何かをしてあげることができる。「…大丈夫だよ気にしなくて。怖がらずに受け止めるのその感情を……そうすれば…きっと…たどり着ける……」「……」メガニウムはツルをベイリーフの首にやさしく置くと、先ほどの姿勢のままそっと彼の首

元に彼女の頭部の雄蕊のあたりを撫でるように摺り寄せる。「うっ……何したいのかが相変わらずわかんないけど……まあ、ありがとう…ユイリィ…」彼女が意識から出した温もりとでもいうべきか、恥ずかしいのか、くすぐったいのかわからない不思議な感覚に襲われる。何とも言えない感情が彼を満たしたが、そのおかげで先程までの不安や嫌な感情は霧のように溶けていく。

「うん…あ、あのさあ…」ほっぺのあたりを摺り寄せたままのユイリィが少し顔を赤らめたままボソッとしゃべる「ん？」「こう見えてもリーヒュンが好きってわけじゃないからね」「な、なんだよいきなり？」「ウチはリーヒュンと仲良くしたいとは思うけど恋愛はしたくないな、何個命あっても足りないことになりそうだもん」「何だよもう…そんならユイリィが俺に対するそんなべたべたをやめろって…そんな顔を真っ赤にさせたら誤解されるよ」リーヒュンも顔が真っ赤になった。「むぎゅうっ、だって！べたべたじゃなくてむぎゅむぎゅだって！誤解しちゃだめだよお！」「どっちでもいい…はあ…」ベイリーフは自分のツルで夢見心地のメガニウムの首をそっと引き離し、首をふるって森の方を眺める。体に染みついたような彼女の甘い香りがするが、不思議なすがすがしさを感じる。種族のせいか、それとも彼女特有の物なのかは分からないが、さらに少し気持ちが楽になったように感じた。周囲に見える木々も青さを取り戻し、木々の隙間から見える青空が少し広くなったようだった。

　少し離れた場所ではレオとシンシアが何か練習している。あのコリンクが何かしなければいいが……

「おらおら、そんな引き腰でどうすんだ！？前に攻めてみやがれや！」レオは電気エネルギーをたっぷり含んだコードのような尻尾を、飛び跳ね、体を回してシンシアにぶつけようとする。対するシンシアの方はかわし、くるくる毛の乗っかった頭を下げたり首を引いたりして、その矢継ぎ早の猛攻を防ぐのに精いっぱいだ。「や、やってるのよ私…」「気合が足りねえんだ、この程度じゃっ！…」レオは小ばかにしたように笑い、ロコンを挑発するように手加減しながら、スパークでもなんでも彼女に当たる至近距離で止めて様子を窺うように踏み込んで攻め立てた。対する彼女の方は、未開発のうっそうとしたざっと数十ヘクタールはある森に無数に存在する天然の空き地の一つであるここの端へじりじりと追いつめられるように下がってゆく。

「おいおいレオ、やり過ぎて怪我させんなよ……ひいっ」ホタチを振り回すグリソムが一瞬2匹の方を振り向いたが、すぐ近くに激しい静電気の走る爪が地面にトントンと踏み下ろされ、彼の水色の足がびくんと下がった。「はいはい、あいつは私が見とくからグリソムは集中するのよこっちに！一瞬でも気を抜いたら間違いなく死ぬんよ、状況に気を取られない、それがたとえ仲間であっても、ね？」スカイラブは尻尾をしゅっと振り、左前脚の爪先で草が生え、土が幾分湿った地面をコツコツと叩いた。「う、うん…」「さっすが、レオ何かと違って飲み込みが早い！グリソムと比べてあいつなんかさあ、一言いうたびに噛みつこうとしてきたからね子供のころ……」「飲み込みが速いって…おいらは誇るべきか呆れるべきか……」ミズゴロウは前足にホタテガイを握ったまま、ひれのような尻尾をピクリと動かし、ちらっとコリンクに目をやる。まあ、彼女の言う態度自体は、それはそれでレオ・ミュースカイの長所ともいえるが。グリソムはそう思った。

「さ、練習練習、シェルブレードはミジュマル種族の特権じゃない、ってことを見せなくちゃね！」ルクシオもまたコリンクとロコンの方をちらりと見やり、声を張りあげた。「それでアンタ！シンシア

をいじめちゃだめなんよ！」「誰もいじめてねえだろうか！どこ見てぬかしてやがんだ！」レオがスカイラブの方も見ずに負けじと声を上げる。「アンタの見えん場所から確認したの。手加減してるつもりでも彼女にとっては全力なんだから、それくらいは考えること！ＯＫ？」彼女には彼の動きの一つ一つがしっかり見えなくても理解できる。あいつの方も声を聴くだけで理解できる、不思議な嬉しさを感じた。こんな些細な事でも、それだけでレオ・ミュースカイとスカイラブ・バトルスターが何かでつながっていることを感じ取れたから。

　ルクシオは再びミズゴロウの方に集中力を戻す。「さ、やろっか！」「うん！じゃあおいらの方からやるよ…」グリソムは右前足握ったホタチに力を込め、４本の足を動き出す姿勢に構えた。

コリンクは相変わらず挑発するかのように尻尾で、水色の前足でシンシアを突き飛ばそうとする。「おら、そろそろ隙を作ってやってもいいんだぜ？」そう言いながらレオはほんの一瞬前足を踏み込むのを止めた。そこに生まれたわずかなチャンス、ポケモンであるからにしてシンシアも見逃すはずがない。「ううっ…お願いっ！」その隙に彼女は体内に熱エネルギーを思いっきり取り込み、姿勢を下げながら火炎を打ちだした。６つの尻尾が一瞬立ち上がりながら熱を輩出し、尻尾の周りから激しい陽炎が立ち上る。「うぐっ…ちっ、それでお前の全力かっ！？」やけどするような熱気を頭の先に喰らいながらもコリンクは地面に伏せるように姿勢を低くし、その０．２秒後には４本足の筋肉でばねのように飛び上がり、ロコンにスパークで突っ込んだ。彼女は飛び退こうとしたが、飛び上がるように突っ込んできた彼のスピードには間に合わず、まともに喰らって後ろに尻もちをつくようにのびた。

「あっち…ふん…」コリンクは炎を浴びて火傷したようになった頭のはねっ毛を左前脚でさする。「ったく…おま…いや、シンシアも

兄貴たちの事を見習った事くらいできたらどうなんだよ？はなっから諦めてん奴は一番最初にやられるんだぞ」「そ、そんなこと言ったって私にとってこれが精いっぱいなのよ。それを今すぐ直せって……」「直せっての！なんたってお前みたいなぐず…うっ、つまりな、努力を分かるように見せろって…」「う、うん…やってみるけど」「その気、今のセリフを見せろってことだ！だいたいお前みたいな…」

「はいはい、レオもそれ位にしようねえ…」いちいち熱の入りがちなコリンクをガトルが短い両手と体と不釣り合いに大きい尻尾で剣幕にひるむロコンから引き離した。「なんだよ、俺、たわけたことは言ってねえだろうが！だいたいこいつがいつまでたっても消極的なことが…」「そういう態度が問題っていうのよ。ね、シンシア？」「まあ、私にとってはちょっと厳しい、かな…」シンシアは6つ分かれた尻尾を少し下げ気味にしてパチリスの方に一歩寄った。「ほーらね？」ガトルは得意げに左手の3つ分かれた内を1つを立てる。彼女にとって相変わらずこのコリンクのやることは読みやすい。「ンだとこのヘタレ野郎が生意気な…」レオが思わず黄色い輪の入った前足から電気の火花を散らしてロコンに飛び掛かったが、パチリスが静電気をいっぱいにチャージした尻尾で彼のはねっ毛のあるおでこをぶっ飛ばす。「いってえ…何をしやがる」「ホンット子供なのよ！一番ヘタレる可能性が大きいのはあ・ん・た！すぐにシンシアにケンカ売らないの」「あ、ありがとうシンシア…あいつってなんで…」「か、勝手なことぬかしやがって！俺が一瞬いなくなったことをいいことにすんじゃねえよ！」激しい痺れを頭の上あたりに感じながらもコリンクはふらりと立ち上がり、またしてもロコンに飛び掛かろうとするが、後ろから静止された。

「お前な、そういうのを…ま、まあなんて言ってもいいんだが……」リーヒュンがツルと前足でレオの水色と黒の境目のある背中の部分と首のあたりを掴んで押さえつけ、コリンクは4本の足を外側に広

げるようにぺちゃんこになった。「いってえよ兄貴！首がしまるぜおい！…って俺が何だって言うんだよ？」コリンクがカナリア色の前足をわずかに自分の前足を回して払いのけて払い、首を後ろに回す。「そういうことはさあ、リーヒュンも止めまでぴしゃっと言えるように準備しなきゃダメじゃん！」「うかつに言うのもレオは言うこと聞かないんだ。頼む」「うっ…だからな」ガトルが小さな手で拳を作り、ベイリーフの左前脚に軽く入れる。ベイリーフの方はいつの間にかこのパチリスやミズゴロウがため口になっていることにちょっと驚きながらも（その一方でほっとしながら）、右前足を横に振って必死に言葉を探す。「俺が言いたいのは、シンシアに対して強気に出んなってことだよ！…たとえは言う瞬間に忘れたけど…でもそれで通じるだろ？」

「ったく…兄貴も見境なく言うなって」レオがリーヒュンの前足を振り払って抜け出し、４本足で立ち上がる。「セリフぐらい考えてからだせっての。下手にカッコつけようとすると、相手によっちゃ殺されるぜ。それにその程度で掴みかかる兄貴って以外と向こう見ずに動いてしゃべるし危なくねえか？」「アンタが説教してどうするの？！仮にもリーヒュンは年上なのにアンタはいつもそうやって…2匹そろって子ども以下ねえ」ガトルがレオの大きな右耳を尻尾の突起の部分でぶっ叩く。「おいおい俺も子ども以下か？」「へっ？あ、まあまああなたも似てると言えば似てるのよ」パチリスが左手を得意げに降ってベイリーフを見る。「……何だよそろいもそろって俺を子供扱いしやがって…はあ…まあいいや」

「諦めも早いんだなリーヒュンって」「うっグリソムまで…とにかく」半ばあきれたようにこちらを見るミズゴロウにベイリーフはますますじれったそうになりながら、コリンクのの耳をツルで軽くたたく。「無駄にチーム内の関係こじらせるようなマネとシンシアに無理させるのはやめとけ。意思疎通が難しくなるし、第一にあれだろ？」

「ううっ…そういうマネはした覚えはねえんだけど…分かったよ」レオがシンシアの方に渋々顔を向ける。「う、うん…私は問題ないから…もう少しやって、ね？」ロコンの方の表情はしっかりしている。「えっ…シンシア本当に大丈夫なの？」「うん、私だってこいつの部隊なんだから、足を引っ張るわけにもいかないし…」「そう、そんなら、レオ、やってあげてね。ただし、調子に乗って無茶しないこと！」「俺不安だぜお前が…ってまあいいけどよ。ガトル、大丈夫だっての…殺しはしねえよ」コリンクは渋い表情でうなずく。「シンシア、無茶すんなよ。なんかあったら俺でもガトルでも言えよ、な？」リーヒュンがツルを出して彼女の頭のくるくる毛にそっと触れた。彼女から特別におかしなものは感じられないようだった。自分の能力はあてにしていなかったが、小さい頃から今までそうだったように、悪い出来事が起こる前の奇妙な感覚はない。たぶん…大丈夫。

「はい、ありがとうございます」シンシアはゆっくり、しかし確実に頷くと、メープルの葉のように広がった尻尾をびんと奮い立ててレオの方へと向かった。シンシア・ベルーサ・カウンストポビアにはこのコリンクとのトレーニング（？）は結構な負担だったたが、意思は固かった。彼の足は引っ張らない。自分一匹で立って歩いていけるように頑張るのが当然だと……

「さっすがリーヒュン、だね。なんていうべきか忘れてもとりあえず行くのが」ベイリーフの後ろの首の葉っぱ元に誰かのツルが触れる。「それで強引に説得しちゃう、てところも十分子供だよね！あははは…」「でっしょ！？私の言うとおりレオと同じだよね！」「はあ…結局こうなる、か」リーヒュンはユイリィとガトルのやり取りを（パチリスはメガニウムの花びらもとに飛び付いて2匹で大

笑いされた）聞きながら諦めたようにツルで頭の虫食い葉っぱをいじる。別に嫌なわけではない、小さい頃から自分が何かをするといつも周囲から子供扱いされる。ついついしてしまう後先考えない行動や言動、自分にとっては当たり前に感じることがどうにも幼稚にとらわれるようだ。それはもはやどうしようもない一面なのかもしれない。そう思った。

「で、リーヒュンは…」メガニウムがベイリーフの方を振り返る。

「サボらないでうちと練習する！勝手にぷらっとどっか行ったと思ったら、だもんね…」「別にサボってるわけじゃないだろ?!俺は単に…」「はいはい戻ろうね！ごめんねガトル、グリソム！」彼女は多少いやがる彼の両前足を2本のツルで引きずるようにして強引に連れ去った。

数メートルほど歩いて、ユイリィがリーヒュンの聴覚器官に（それらしき頭部左側のこめかみの後ろ辺り）に口を近づける。「でさ、さっき言ってたあの件なんだけど」「…何か見えた?」「うーん…リーヒュンが感じる、て言うのはね。リーヒュンが気にかかる相手の事だと思うよ。ウチもそうだし」ベイリーフは思い起こした。あの時感じた不思議なもの、遠くから吹き渡ってくる風のようなものを。そんな彼の表情を察したらしくメガニウムの表情が若干心配そうに変わった。「でしょ?……だとしたら…テルルのことなんじゃない?ウチの予想だけどね」

「っ！！そういう事か…」その瞬間、ベイリーフの思い起こした感覚が急激に彼の中で鮮やかに、はっきりしたインパクトを帯び始めた。あれはすなわち…テルルの…彼女が何かに直面して…

彼はとっさに体が動いた。メガニウムの方は動揺しながら後に続く。

「いこう！テルルは…もしかしたら…」「そ、そうだけどさ…言って大丈夫なの?またテルルがリーヒュンに何かしたら…」「気にし

たって始まらない！ユイリィだって分かってる通り、俺が行った場所で何とかするさ」

「どうし…なんだお前らか。何を慌て…ってそういう事か…」ブースターは慌てて飛び込んできたベイリーフとメガニウムを見るなり、何かを呑み込んだような顔をして2匹の元にぴょこぴょこと歩み寄った。「まあ…俺の直感が何か言っててな。それで…テルルはどうかしたのか？」

「いや…お前らには言ってなかったよな」首を下げたリーヒュンの聴覚器官もとにブレイブが口を近づける。「…あいつの家族、親戚か…手紙が来てな、そういう事になったんだ。とにかく…口で説明できるような状態にねえ」「口に…ってさ、ブレイブの方が状況を知ってるんじゃないのかよ？」「そりゃそうだが…話すにはあまりにも…」

「……俺が聞いてみる」「やめろバカっ！お前が行ったら……たぶんまずい…」「そんなことにビビって何になるんだよ？」「お前じゃ無理だ…」進もうとするベイリーフの前足を猛烈な力の前足で食い止めるブースター、2匹が押し問答している間その刹那……

「さっきから何やってんのよアンタ達は？！」テルルが声を張り上げて岩を強烈なかいりきの右前足で叩いて立ち上がる。目からは再

び大粒の涙が噴き出していた「私の事を聞いてみる?!直感が言ってた?!バカにしないでよこのバカバカバカっ!!」グレイシアはそのまま岩に崩れるようにつっぷし、激しく嗚咽の声を上げる。

茫然と顔を見合わせる2匹、ベイリーフの方はこのブースターがかなり前からいたことを勘付いたらしくツルを振ってブースターの前足を叩き、ブースターは申し訳なさそうに尻尾と耳を下げた。ユイリィはテルルによろうとしたが、数歩行かぬうちに立ち止まる。激しく泣き続ける彼女を前にかける言葉のない虚しさ、隔絶したそれぞれの価値観の前になすすべのない状態、人間の文明に翻弄される自分たちの気まずいばかりの邂逅、胸が詰まるほどの息苦しさを感じた。

1月3日　アメリカのニューヨーク　新国際連合本部　１０００時

久しぶりに雪が上がり、青空が広がるアメリカ最大の都市、かつ地球の中心的都市であるニューヨーク。かつて臨海のダウンタウンと倉庫地帯を再開発で統合・移転しその跡地に１９６０年代に建てられた国際連合本部ビルの周囲は、２００５年からさらに再開発を進め１０階建て前後の新国際連合の各省庁ビル、国連議会上院・下院議員の高層マンションの議員宿舎、代表や議会議長等重要人物のオフィスも入っている１００階建てのオフィス・タワー（通称リパブリック・タワー）、さらに旧国連本部ビル付近にかけての敷地の沿岸は、通称“地球記念公園”と呼ばれる緑化公園に整備され、無数

の噴水が公園の周囲に環境保護の象徴として設置された太陽光パネルから得た電力で処理・浄化したニューヨーク市の使用済み水を循環させて美しい水の彫刻を作り出し、観光用の遊覧船の発着場も完備している。まさしく地球人類の意思決定の場にふさわしい貫録を放っているが、その道のいたるところにニューヨーク州警察や国連統合軍本部セキュリティー部隊のフル装備で武装した人員、警察犬、警察車両、果てには装甲車があることは、この施設が猛烈なグローバル化と華やかな技術革新の中でも様々な安全保障リスクと不穏を抱える現実社会の上に存在するということを再認識させる。特に警戒されているのはハイジャック航空機による空からの体当たり（または突入とも称される）は不法侵入した人間や自動車での自爆であり、いずれも２００１年の９・１１無差別テロ事件以降中東のみならずアフリカやアジアの一部にまで拡散しつつある宗教・思想に対する狂的な殉職者に対応するための措置を必要とされているのだ。

「会議は１１時…フユツキさんはわざわざエメリアからいらしてくれるなんて…」耳には無線機のイヤホン、腰には拳銃と電子警棒に無線機本体と緊急発信装置という物々しい格好をした屈強な男たちに囲まれた一行が記念公園の岸壁沿いを歩いている。その中心にいるのは東南アジア系の人間の女とそれと同じくらいの背丈のサーナイト。

「いえいえ、人間と同じくらいの感覚を持つ者としてこの程度の移動は私にとっては大したものではございません。警備の皆さんも…」サクラは１月付で交代になった秘書官のジャノビーや警備たちをちらりと見つめた。おそらく彼にとって飛行機での（１月２日に統合空軍の機体でニュークリア地区、アメリカ領エドワーズ市にあるエドワーズ国際空港に向かい、アメリカのＪＦＫ国際空港までユナイテッド航空のＢ－７４７－４００だった。空港からは国連の公用車）旅路や自動車というものは、いやこの距離の移動自体初めて

の経験、という表情と足取りで何とか平静を保とうと努力している。サクラはそんな彼らの体調を意識の底で明らかに感じ取り、あいまいな苦笑を浮かべ、サイコパワーを感じ取る（とされる）赤い突起のある胸の前で手を動かした。「…頑張っているようです」

彼らはエメリア正式の探検隊や救助隊の隊員が装備する頭部や胴体の保護装備に弓矢と刀という人間でいう１０世紀前後の格好をしており、周囲に立つＳＰの男たちの中にタイムスリップしてきた感じだ。それだけ人間とポケモンの文明には数世紀前から著しい格差があり（ポケモンの方は２０００年以上前からほとんど変わっていないが）、片方はめざましく発展、片方は停滞・衰退・崩壊の一途をたどっている。

「それはよかった。ところで…」女は敷地にあるガラス張りのタワーに目を向ける。「今回の会議…やはり中心だつのはサクラさん、あなたのことになるみたいですよ」「ええ、私も薄々そんな予感は致しておりましたが…」サクラも高層ビルの方に視線を映し、少しだけ意識を会議の行われるであろう一室の数時間後に向けた…会議の後、自分は代表に何かを尋ね、タブレット型端末でなにかを覗く……

「どうです？そちらの方は。あなたの息子さん娘さん同然の皆さんのご活躍はこの件の賛同者以外にも随分と知られているようで」女がサーナイトに視線を戻す「それを評価と受け取らせていただいてよろしくて…それで、随分と、ですか？確かこの件は…」「無論、マスコミやインターネットに情報が流出しているわけではありません」女は笑顔を浮かべて施設の中心地の方を指差す。「…統合軍上層部はもちろん、国連安全保障理事会でも注目を浴びていますよ。何匹かはルックスのお陰も、ね？」

「ルックス…お褒めいただいてありがとうございます」サクラは笑いつつ、不思議な可笑しさに浸りながら一瞬ハドソン川の方を眺めた。彼らの見た目が評価されるとまでは思いも見ない。

ハドソン川には（実質は港湾であるがそう呼ばれている、地下には

無数の高速道路や歩道、地下鉄も整備されている）マンハッタンの港湾地帯を発着する貨物船や湾の両岸のビル街を結ぶ…通勤利用も意外と多い…シャトル船が多数行き交っている。

その数十分後、会合が開かれる代表のオフィスが入っている新国際連合の１００階建てタワーに戻り、オフィスのある９０階へと向かうエレベーターホールに向かっている２人の背後で級に警備員たちの動きがあわただしくなった。２人が振り返ると多くの警備関係者に囲まれてやってくるのは国連議会代表の男と国連代表本人。先ほど入ってきた車寄せには米国・ゼネラル・モータース社の高級セダン車、黒色のキャディラックＳＴＳが赤青灯を回転させる警察車両と警察官や国連関係者に囲まれて止まっている。こちらに気付いた代表は足を速めて１人と１匹に近づき、にこやかに手を伸ばした。「年始から呼び出して悪いな〇〇議員。皆の予定は国連以外にもそれぞれの政府でもあるから…」「とんでもありません代表。必要があれば我々はすぐにでも参加できます」「その心意気だ」「ありがとうございます…それと議員代表」女は隣にいる既に頭に白いものが目立つラテン系の顔だちをした男にも握手を求める。「年始からご足労ありがとうございます。連絡をいただければ私が代理を務めても大丈夫でしたが…無理は禁物ですよ」「大丈夫だよ〇〇議員。自分はまだ議会の代表だ。その責務を果たす必要がある…」

「それで…サクラ、君たちの部隊の大まかな所存なんだが……」国連代表の男が握手も求めずサーナイトにそっと近づき、声を落とす。サクラは慣れっこだった。人間とポケモンが会合するとたいていの人間側代表は挨拶すらしない。後から席について話すだけだ。「私の見解では…戦闘以外の、乱戦状態よりは例えば調査だとか潜入工作だとかのほうが、データを得やすいという研究機関からの報告が

ある。その方向に転換してゆく旨は統合軍司令にもお伝えしたあるからな。詳しくはあとで述べるよ…一応先に聞いておくが…それで問題はないな？」

「……はい。これといって問題はありませんが…」「そうか、ならいいんだ。今後とも、君たちの活躍には期待しているよ」３人と１匹は大勢のＳＰに囲まれてエレベーターホールへと向かう。関係者の一人がエレベーター脇のスイッチを押したが扉の上に階数表示はなく、館内案内のヘッドラインが流れているだけだ。

１月５日　ベルギー　ブリュッセルのＥＵ本部付近　１４２０時

ロールケーキのような形状をしたヨーロッパ連合本部は大勢の報道陣でごった返している。大勢の警備員やブリュッセル市警察の関係者が、カメラや手のひらサイズの音声記録装置を構える報道陣をロータリーに入らないよう警戒する中、警察車両とバイクに警備されながら黒塗りのドイツ・ＢＭＷ社の７シリーズＥ６８（ＢＭＷ社のフラッグシップでハイブリッド自動車もある）計３台が車寄せに停止した。まもなくＥ６８の後部ドアがヨーロッパ連合本部の関係者に寄って開けられ、スーツ姿の男たちが本部の家へと入ってゆく。報道陣のフラッシュが一斉に飛び、音声記録気を持った無数の男女の声が響き渡る中、男たちはそれを無視し、警備員たちが拡声器をもって声を張り上げ、中に入らないよう押しとどめている。

その様子をよそにしたような、その建物の式にほぼ隣接したエメリア自治協会の一室でもまた何かの交渉が行われているようだ。

人間でいうバロック形式、近代ヨーロッパ建築の内装にも似ており部屋の広さもそのような建物にある会議室とほぼ同様の部屋の窓際では、一人の人間の女と妙に使用主の大きさと比較して不釣合い

のデスクの後ろ側で浮かぶポケモン、そしてもう一匹もまたそのポケモンにそっくりな姿大きさをした者がいた。デスクの上には白くきっちりと製紙された人間の者と思われる用紙。デスクでふわふわ浮かんでいるポケモンは不思議そうな顔をして見つめている。

「ただこれにサインをすればいいのよ。そこにアルペンであなたの署名、つまりお名前をいただけないかしら？」人間の女が優しい声をかける。「すいませんね、代表もまだ年齢がでして…」隣でやはり浮遊している水色の頭部を持つポケモンが流暢にしゃべる。どうやら彼はたいそうな口先上手らしい。「あの、アグノム官房長、私共欧州中央銀行はジラーチ代表の署名を必要としているのです。可能な限り代表に書いていただく必要があるので、お願いします」「それはそうですよ理事長代理さん。僕はあくまで代表の補佐官であり代表の代理ではないので…」アグノムは空中で鳥の羽が風に舞うようにくるりと回し、ジラーチの方に音もなく漂った。「そういう事だよジラーチ、ここに君の名前を書けばいい」「あ、…分かりました」ジラーチは戸惑いがらもうなずき、長さが１０センチもない小型ポケモン用の羽ペンの先をこれまた御猪口（おちょこ）のようなインク壺にひたし、用紙の指定された辺りに子供が文字を書くように記入し始める。

「失礼…」女が携帯端末を取り出す。フランス語でなにかをしゃべり、外にあるとーたりーと報道陣の群れ、止まったままの警察車両とハイブリッド車仕様の７シリーズＥ６８をちらりと見やった。どうやらＥＵ本部の方の状況はあまり思わしくないようだ。

「代理、どうかなさいましたか？」アグノムが女の方にふわりと進み、２股に分かれた尻尾の先の赤い部分を右手でこする。人間の女は平静を装いながら（通話の電源を切ると同時にネットワーク接続家電システム…これはエアコン、洗濯機、電球、冷蔵庫などの切り忘れを遠隔で解除したり、帰宅に合わせて操作できたりするという便利かつ省エネルギーを目指したシステム…が、自宅の階段のＬＥＤ電球を切り忘れているというメッセージを表示していたが）携帯

情報端末をポケットに戻す。「いえいえ、大した事ではございません。それで…」彼女は歩み寄って用紙を手に持つ。記入する場所には子供っぽいばらついた足型文字で確かに記名されている。「ありがとうございます…今後とも欧州連合の財政関係での協力をお願いします」代表が握手を求めてジラーチの小さな手を握る。「は、はい」ジラーチは不思議そうな顔をして手を差し出した。アグノムの方はすいすいと両者の間をゆっくり飛び交う。「ところで…先ほどのお話の相手、お隣の建物の関係者のようですね…」このポケモンが言っていることは紛れもない事実、それは本人も知っている。通信端末というものもどういう物かは知っている。伊達に幻といわれるエスパータイプではない。

「え、ええ…あんまりあちらは上手くいっていないようで…」女は苦笑しつつ窓の外のＥＵ本部と現代的なブリュッセル新市街地に視線を移す。「ユーロ圏の財政事情がどうも悪いようで…今年こそは安定してくれるといいのですが…」

この数日、ヨーロッパ各国では経済、財政に関して不穏な報道や発表が相次いだ。金から財政再建問題が改善しないギリシャへのユーロ圏各国による財政支援の額に関する調整が難航し、一部の国が支援の支出を拒否する構えを示したうえ、ギリシャをユーロ圏から離脱させるべきという声明を欧州中央銀行に提出。さらに1月に入ってまだ5日というのに、イタリア、スペイン、ポルトガルとヨーロッパ諸国のアメリカＳ&Ｐ社やムーディーズ社による国債格付けが次々に格下げ、または見通しが“ネガティブ（信用が低下し、今後格下げになる可能性が高い）”に下方修正となっていた。さらにアメリカの××財務長官も招いて行われた欧州中央銀行理事会は各国の対立で物別れに終わり、ヨーロッパ経済の先行き懸念はさらに強まりつつあった。米ドル、スイスフラン、ブラジルレアル、中国人民元、日本円、あらゆる通貨に対して軒並みユーロは下落し、イギ

リスを含めたヨーロッパの株式市場は軒並み大幅下落となっている。２０１０年のギリシャ財政破たんをきっかけに起こったヨーロッパ財政問題とそれに伴う経済失速への懸念。今ＥＵ本部では、相次ぐ国債の信用低下に対する対策会議が開かれている。発生から今年で３年、経済大国アメリカも失業率の高止まりや財政問題で経済は不安定、中国や中東諸国などの新興工業経済国・エネルギー経済大国も民族・治安や体制の問題に伴う政情不安、物価高騰やエネルギー価格高騰に伴う生産・消費の失速懸念が増加し、２００８年世界金融危機以来の回復基調には暗雲が垂れ込めたままだ。急速に進むグローバル化のもたらした弱点ともいうべき経済問題、今年も迷走を続けるのだろうか……

１月６日　韓国　ソウル市　大統領官邸の一角　０９５５時

韓国・ソウル市の大統領官邸、執務室に隣接するこの部屋は政府関係者でも入るのも困難である。ドアはＩＣカード式オートロックであり、そのドアの先にももう一つガラスの自動扉があって、身元を証明するＩＣタグと網膜・静脈の照合を受けなければならない。ここはそれだけ重要な場所。図書館の保存室程度の広さの部屋には、最新鋭のサーバや情報端末のディスプレイ、コンソール、キーボードが並び、中央付近の天井からは４方向に日本の三菱電機製大型の液晶モニターがおろされている

「そうか…今のところは北朝鮮側から接触する様子はないな？」

無線機を装着した人間の男がアメリカのキネシス社が開発した人間工学に基づく独特の形状をしたエルゴミクスキーボードを打ちながら無線機越しに声をかける。“はい、我が国の企業連合がポーランドに輸出する原子力発電所用出力調整棒制御機器と一式とＥＣＣＳ

（原子炉非常冷却装置）の積み込みと検査に関して不審な点はありませんでした。あと1時間ほどでシンガポール経由でドイツ、ハンブルク市の港湾へ、そこからポーランドまでは陸送となります”「よし、ポーランドまでしっかり捜査を頼む。ドイツの港湾でポーランド側の関係者と接触できるはずだ」「しっかり頼むわね…何せ今回輸出するのは…」男の隣に座るこれまた無線機を装着した女がキネシス社のキーボードをたたいて目の前の液晶ディスプレイに表示させる。「そう、我が国が20年前に核平和利用と経済発展への利用を前提に北朝鮮への軽水炉型原子炉建造計画に使用するはずだったものよ。核弾頭用の装薬生産に使用されないよう制御機器に細工はしてあって…今回、ドイツのシーメンス社が原発産業から完全撤退すると聞いて、フランス・アレバ社やロシアの企業連合とのコンペに勝っての輸出だから急きょそれは取り払ったんだけど…」「1999年に決裂で計画が中止になって以来、我が国が処分したように見せかけて封印してきたものだ。この情報をもし北朝鮮の潜入者が察知した場合、何らかの妨害を行ってくる可能性が大きい」男が液晶ディスプレイを指差す。「その通りよ」

「だから、だ…」男が再度無線機のスイッチを入れる。「いいか、万が一でも北連中の工作員らしき人間がいたらまずはこちらに報告だ。下手に動くとドイツやポーランドの民間関係者にお前の存在が露呈してまずい。対応は別途こっちが指示を出す」“了解です。仁川の空港の方は?”「今のところは連絡がないが…あの新人、大丈夫なのか…」男が無線機関係のコンソールを叩いて周波を切り替える。「仁川国際空港、本当に問題なしか?」“ちょっと待った、あの野郎どこへ…”旅客の雑踏に交じって無線機から愚痴が聞こえる。「どうしたんだ?」“彼女…あの新人が…くっそどこかへ行きやがりました!ヘンな事しなきゃいいんだけどよ…”「ったく…あれほど動かすなと言ったのに…」男がキャスター付きの椅子を後ろに思いっきり下げて足を組んだ。空港に派遣されている男、あの新人女を制止できなかったのかよ…「早く見つけて出発ロビー入口に戻れ。

そしたらこっちからとっちめてやる」“は、はい”

“…案の定ですか…”無線機越しに港湾の男が皮肉たっぷりな声が聞こえる。「まあいい、とにかくそっちはドジを踏むな…ついでに、大統領の命令のユーラシア西部のポケモンの方もできれば頼むぞ」

“了解”

「くそっ、全くドジをやらかしてくれるぜあの新人女！」無線機が切れると同時にオペレーターの男が椅子をデスクに戻し、内側を軽く蹴っ飛ばした。「まあ…うまくやればいいんですけどねえ…」2人の背後から若い男がコーヒー入りのカップをもってデスクの上に置く。「あなたも新人でしょ！いつまでも雑用ってわけにはいかないのよ」「そりゃそうっすけど…」

「……とにかく、俺たちの主任務はポーランドの方だ、シーメンスが捨ててくれた餌にしゃぶりついた我が国の企業だが、よりにもよって北絡みのものだったとはな…あとは」男が両肘をデスクについて組み、顎をそこに乗せてディスプレイを眺めた。「…大統領の言う調査の方も、訳が分からん…」

韓国の首都、ソウルの外港都市ともいえる仁川の港湾の一角、船舶に積むコンテナを背後に市街地ように並ぶコンテナヤードから持ち上げ、船舶に積んでゆく超大型クレーンがレールの上を忙しく動き回る。先程まで通信していた人間の男は港湾での作業にあたる委託業者に扮装したグレーの作業着のポケットにしまい、黄色の安全ヘルメットを深々と下げてコンテナの脇に入る。ここで見まわるフリをしながら作業の様子を見守っていた。やがて、岸壁のすぐわきの道路に並んでいるメルセデスベンツ社の大型トレーラーアクトロス後期型カーゴの1台の脇にその男は入り込んで様子をうかがう。

同じくドイツのダイムラーグループ傘下のアメリカのダイムラー・ノースアメリカトラックス社とデトロイト・ディーゼル社のフレイトライナーがクレーン台の下に入り、コンテナを切り離される。ブランドがアメリカ向けである以上、北米やヨーロッパが中心でアジアには数少ないはずのデトロイト・ディーゼル社のエンジンの轟音を立てるフレイトライナーには、企業のエンブレムも会社名も入っていない。そう、あれこそが韓国政府がポーランドに輸出する原子力発電所用の原子炉緊急冷却装置（ＥＣＣＳ）であり、本来…とはいっても２０年も前の話だが…北朝鮮に平和利用を前提に特殊な細工を施されていたものだ。近年に入って南北交渉は再開されたり中断されたりと（先述の６か国協議の対立や２０１０年に発生した延坪島に対する無差別砲撃事件等が原因）迷走しているが、北朝鮮の方はいまだに韓国が原子力施設共同建築計画を行うものと確信しているらしい。当然核開発に利用される公算、大として韓国は相手にもしていないが、北側がこれを察知すれば面倒な事態になりかねない。

ＥＣＣＳの入ったコンテナはクレーンに寄って持ち上げられ、フランスの海運会社が所有する大型コンテナ船の４０フィートコンテナの整列した山の中に置かれる。男は用心深く右から左、岸壁沿いの道に沿って辺りを見回した。このコンテナ船の前後にも同様の大型船が停泊しており、関係者らしい作業着姿の者や船員の格好をした船舶の乗員らしき者、その他それなりの数の人間がそれを見守り、トレーラーや港湾の社用車も行き交っているが、この男が判断できる限り不審な人物やポケモンは見当たらない。

上空では音を立てながらボーイング社のＢ－７７７－３００が飛び立ってゆく。首都へと続く交通の要所であるこの地域、港湾と仁川国際空港からそう離れてはいないのだ。男は上昇してゆくＢ－７７７の小くなってゆく機体を眺めた。空港の潜入警備もうまくやってくれるといいが……

２０１３年　１月７日　東南アジア上空４５０キロの地球軌道　ＧＳＴ１３００時

イギリスのグリニッジ標準時・またはアメリカ、ヒューストン管制センターの自国を使用している宇宙ステーションや月面の施設。しかし、眼下に広がるマレーシア、タイ、シンガポール、インドネシアはちょうど深夜に当たり、経済成長によってすでに欧米に負けないほど明るくなった都市部の照明と漁船の漁り火や資源採掘施設の照明からなる海上の光の点が確認できる。もっとも、地球に張り巡らされた空路を飛び交う無数の旅客機や貨物機は確認できないが。

西暦２０００年に人類初の大型の本格的な宇宙施設として完成した多国籍宇宙ステーション“アルファ１”、かつては―ＩＳＳ（国際宇宙ステーション）と呼ばれたステーションの、通称キューポラと呼ばれる観測ルームでは、クルーの男がカメラを構え、月面からヘリウム３含有の土壌サンプルを乗せて地球へと向かう輸送船のカーゴ・ベイユニットを捕えようとしていた。すでに推進・機械ユニットは切り離され、多国籍月面開発中継ステーション“ミッドナイト”にドッキング、回収済みだ。着地地点であるオーストラリア、ウーメラ砂漠の資源宇宙カプセル回収エリア（世界宇宙開発機構が管理するカプセル型宇宙船の回収地点。欧米の司令船はアメリカ・テキサス州に、ロシアや中国の司令船はロシア・シベリア地域に、民間の司令船や探査機のカプセルはオーストラリアのウーメラへと降りる。今回はＮＡＳＡ管轄の宇宙船だが、回収時刻の都合でオーストラリアへ向かうことになった）への誘導管制の方はヒューストンが行うので、今回の撮影はたまたま至近距離を通過する際の、業務の合間を縫ったものである。

「あと３０秒で通過する。見逃すなよ」「もちろんだ」アメリカ・ヒューストンからの指示も地上・宇宙交信のタイムラグを考慮した正確なものだ。大きな天体観測窓、という表現が妥当なアルミ製の

ステーションの外壁から飛び出した窓…だからキューポラと呼称される……の片方のふちに男は体を、向かい側のふちに足を伸ばしてつっかえ棒のようになって微小重力のなかで体を支えた。望遠レンズを装着したカメラをガラスに当てるように構え、ヒューストン管制センターが示した予想座標と先ほど施設内の端末で確認した予定時刻の座標、ここから見える座標を端末で確認しつつピントを調整する。この辺りを素早くやってのけるところがやはり専門職（プロフェッショナル）としての宇宙飛行士らしい。

「3，2，…通過した」「……よっし、捕まえたぞ！」キューポラから見える宇宙ステーションから伸びた太陽光発電パネルが並ぶトラスの下を一瞬で通過した白く小さな物体。それと同時に男の指が反応し、カメラからフラッシュが何発も飛んだ。撮影は成功である。

「どうだ、上手くいったか？」「ああ！この至近距離の通過は傑作だ！」端末で通過の様子を確認していた同僚のクルーがキューポラの方に移動する。「よくやった、次の広報部の目玉はこれ、だな？」

国際月面基地から運ばれるヘリウム3含有の土壌サンプルを乗せたカプセルはあと数時間で大気圏に突入する。カプセル側のスラスタによる最終軌道調整が済めば、地球の地上は目前だ……

表裏一体・喜びも涙も（後書き）

新年（２０１３年）に入ってもテンポが相変わらず……

…すいません…もう少し精進すべきなのでしょうが…

中央アジアへ（前書き）

やっとこさ新しい任務場へ……

中央アジアへ

２０１３年　１月９日　エメリア　ソーラ地域　国連施設の一角
０９００時
まだまだ夏真っ盛りの南半球・エメリア地域への帰国早々、サクラは彼らに次の任務を言い渡さなければならない。帰国間際に入った突如の依頼、重要な何かを搭載した月から地球への贈り物、宇宙船の突入カプセルが当初の予定と大幅に異なる場所に降下したうえ、カプセルの緊急発信装置も故障してＧＰＳ衛星によるセンシングが不可能となったため、国連統合軍が陸・空で通信が途絶えた位置周辺を落下点と見極め捜索中であるとらしい。が、当地が天候不順で捜索が難航しているため急きょ捜索に加われというものだった。このサーナイトに伝わったのはアメリカ・ニューヨーク郊外のＪＦＫ国際空港の出発ロビー、国連安保理事の関係者の男が山のような資料を手渡し、詳細な電子データを帰国してみているようでは遅いから帰りの機内で確認し、修正を加えてなるべく早く通達、派遣してほしいというものだった。国連統合軍の急遽増派にロシアと東欧・中央アジアからなるＣＩＳ（独立国家共同体）政府・軍は不満となるべく早い元の規模への縮小を求めている、ということであった。

ＪＦＫ空港から国連軍の機体が待つアメリカ領エメリア州エドワーズ国際空港へと向かうノースウエスト航空のＢ－７４７－８機内で、行動予定書に目を通し自分なりに修正を加えながらサクラは首を振って座席の肘掛を右手でコツコツと叩いた。東欧・ロシアと中央アジア、フランス、ドイツといったＮＡＴＯ諸国が有事の際にいつでも部隊を派遣できるようＥＵ内部で準備していたはずだし、アメリカの駐留軍も東欧のすぐ西周囲に駐屯地を持っているはずだがなぜ

今回に限って出てこない？

深く考える事ではない、原因は間違いなく国際情勢にある。一時は唯一の超大国とその同盟国であったアメリカとヨーロッパのＮＡＴＯが世界を股にかけるように軍事・政治で一極支配のような形で活動をしていたが、長引く中東での戦い、急激なアジア、東欧の新興国の経済的拡大と政治的影響力の増加により、アメリカの相対的な地位は確かに世界のトップクラスの影響力を所持しているとはいえ、２０世紀末と比べれば、政治・軍事・経済、さまざまな面で下がっている。そのためかつてのようにロシア周辺地域でＮＡＴＯ諸国が我が物顔に行動するのが難しくなってきたのだ。西太平洋や東・南シナ海で米国軍と（すなわち沖縄の米軍基地や在韓米軍）中国軍が対立するように、一時期はソ連崩壊に伴って弱体化したロシアも経済成長と資源開発で勢力を取り戻し、チェコやルーマニアに巡航ミサイル基地をかまえるＮＡＴＯ諸国と激しく対立するようになっている。無論、単なる軍事活動的問題のみならず、これも安全保障によって東欧からヨーロッパに続く天然ガスや原油のパイプライン、送電網といった経済の重要インフラ、及びそれらの開発の安全の維持というお互いの思惑、すなわち経済的面が強く関わっている。

　ロシアや東欧勢力も軍事的に拡大し西側陣営の優位が相対的に低下しつつある以上、宇宙船の捜索と言えどむやみにアメリカ軍や西欧諸国の軍を出すわけにはいかなかった。国連統合軍の方がまた国連という名の下で批判を比較的浴びずに活動できる。そういう思惑があるのだろう。ただ、書面を見つめるサーナイトには他に理由がある気がしてならない。彼女の意識がそうささやいていた。国連が行っている“計画”と何かしらの関係がある。今回によってそれが速まっただけだ、と。

「司令、いかがなさいましたか?」彼女は機内の座席で我に返った。ジャノビーのゲープコッチ秘書官が彼女の様子を気になって見に来たらしい。「ありがとうユーク。この書類に関する愚痴ってとこかしら」彼女の表情が緩む。「それと…私を上位階級の軍人のように扱わなくていいわよ。普通の先輩として接してほしいの。そのほうが私も…気が楽だから」

「あ、はい…サクラ…さん」彼は恥ずかしそうに呼んだ。その呼び方が先輩の女子と仲良くなった男子学生にあまりにもそっくりだったので、彼女は思わず吹き出しながらも彼の意識の中から優しく暖かいものを感じた。まだエメリア自治協会幹部秘書官に正式になって1週間ほどしかたっていないらしき18歳の彼の、秘書官にありがちな性格の硬直性と他社に対する高圧的な態度を微塵にも感じさせないを素直さとひた向きさが伝わってくる。

30分前後だけ借りている統合軍基地の管理棟2回にある上層部会議室に向かう通路を歩くサクラはふと我に返った。目の間に広がる無機質な通路、白い蛍光灯、扉とオートロック解錠のためのパネル、セキュリティーのためのセンサー、今自分がいるのがエメリアの国連軍基地であることを嫌でも認識させられてしまう。「サクラさんも随分とお疲れのようですね、あの飛行機とかいう人間の空飛ぶ物体に乗るのは僕にも随分と堪えましたし」ぼんやりとしていた様子を秘書官は気遣うように声をかける。「大丈夫よユーク、あなたの方こそ慣れない飛行機での旅、大丈夫だった?」「この程度でへたばっていたらエメリア公認秘書官は務まりませんよ!…あっ、ドア開けるんでしばらくお待ちください…」ジャノビーは疲れを感じさせない動き、種族特有の足の速さもあって素早く会議室のドアに付いたオートロックのテンキーパネルを打とうとツルを伸ばしたが、いつまでたっても承認を示す緑色のサインと電子音はしない。

「……どうなってるんだこいつは…くっそ…」ゲープコッチ秘書官はみるみるうちに顔を真っ赤にし、とうとう足がついているのがどうか分からないくらい背伸びしながら必死にテンキーを叩く。そうこうしているうちにドアの前まで一足遅れてついてしまったサクラは、怒るわけでもなく笑顔を浮かべてその光景を見守り、やがてそっと右手をテンキーのパネルに差し出す。「ここが間違っているのよ」彼女が素早く打ち直すだけでパネル脇のランプが緑色に点灯し、電子音と共に解錠される音がする。「す、すいません少…サクラさんすいません！今のは自分の不手……」秘書官は自分の失態にますます顔を紅潮させた。一方のサーナイトの方は、笑顔を浮かべたままドアの取っ手に手をかける。「いいのいいの、あなたはまだ新人だからら、目上の雑用と言えど最初は色々と体で覚えるのが重要なのよ」

「は、はい！では窓に下がっているあれを開けた方が…」ゲープコッチ秘書官はサクラがドアを開けるなりその隙間から身軽の細長い体ですり抜け、部屋3方向の窓ガラスを覆うブラインドカーテンを開けにかかったが、どうにもこうにもこのカーテンは自動だがらドアの脇に室内灯のスイッチと共にある上下スイッチを押さなければ上がらない。「ちょ、ちょっとユーク、カーテンはこのスイッチを押すの。大丈夫？」「あ、…再三にわたって申し訳ありません！」彼はヘビのように先のとがった顔面から火が出そうになるほど顔を真っ赤にしながらこちらに戻ってきた。そんな精力的に動き回る新人秘書官の様子をサクラは優しく見守り続ける。彼女の意識の中を、彼女の役に立ちたいと精いっぱい動くユークのしっかりとした意志が爽やかに通り抜けるのを感じた。間違いない、サクラ・ワタリ・フユツキが考える秘書官としてふさわしい物こそ、目の前でめちゃくちゃに頑張る彼なのではないか、と。エメリアの秘書官という職業は人間でいう大企業の社長・役員や大物政治家・官僚にくっついてスケジュールを管理し、当人と関係者間の連絡をし、移動手段や行動場所を確保する、頭の回転が速く、当人の為なら自分にも他人

にも厳しく、その上当人には絶対服従というかなり曲者が多い職業ではない。ポケモンの文明でいう秘書官とは、上位階級の（とはいっても地域の警察的存在がほとんどの防衛軍は階級の明確さは薄いが）軍人や実力のある探検隊・救助隊のサポートをする存在。彼らが派遣される場所、捜索を行う場所の状況を聞き込み、資料をあさり、場合によっては現地に先行して向かって調査をし、その後も探検隊や軍の当人が指揮する部隊―（彼らにとって指揮官というものは戦闘を切って戦うのが常識だ）に同行して偵察活動や水や食料の必要に応じた補給を行い、いざとなれば体を張って守る。それ以外でも、もちろん一般的に人間でいう“秘書”らしい業務もこなす。頭の回転よりも体力と判断力、何より業務を遂行するひた向きさが重要視される職業だ。それに必要な行動力も健気さも持ち合わせた彼は間違いなく自分にとって最高の右腕となってくれる、サクラは心からそう感じたのだ。

いつものように呼び出された皆さんが集合。部屋の四隅には統合陸軍の兵士の人間がいる。いつものようにサクラはわずかに手を動かしてスクリーンを投影機を起動させた。

（以下は通達文書）

数日前、月にある国際共同施設である国際月面基地から土壌資源サンプルを輸送していた宇宙船の大気圏突入カプセルがカプセル側の姿勢制御機のトラブルで大気圏再突入の最終軌道修正に失敗し、当初の降下・回収予定エリアと大幅に異なる地点、中央アジアから東ヨーロッパ付近に墜落した。緊急発信装置が墜落時に故障していたため国連軍が陸と空から捜索を行っているが、その地域に前例のない豪雪によって難航している。大気圏再突入直前の最後の飛行経

路分析から、その地点がカザフスタン・カスピ海沿岸の都市であるアクタウから東に５０キロほどの地点周辺の地帯であることが判明している。今回、君たちは統合軍中央アジア軍区への増派としてエメリア軍区から向かう特殊部隊に同行し、指定された地帯の捜索活動に加わる、それが任務だ。

交通や地形の都合上、またカザフスタンというロシア・東ヨーロッパ陣営に近いという政治的問題にともない、西欧諸国が捜索部隊を送るのがきわめて困難な場所であり、カザフスタン政府は統合軍部隊が増派されることにさえ難色を示しているが、対象はアメリカのＮＡＳＡをはじめとする欧米を中心とした国際共同プロジェクトの宇宙輸送船であるがゆえに欧米各国はなんとしても回収したいらしい。

また現地は現在、かつて経験したことのない豪雪と寒波に見舞われている。今回は君たちの低温下における活動調査も兼ねる。厳しい環境下での行動になるが、体調に十分留意しながら国連の調査、並びに捜索活動に全力を挙げろ。

北アフリカにあるリビアのミスラタの時と同じように、彼らにとってはアクタウはおろかカザフスタンという国自体、場所がどこにあるのかさえ分からなかった。「カザフスタン……この音声が嫌そうにほざく程寒いところなんですか？」バストークが通達用マイクロＳＤカードに録音された担当者の音声を小馬鹿にするようにサクラに尋ねる。「そうらしいわね。私もそこの気候に関してはよく知らないけど、まあいつもより寒いと言うより雪が、なのよ…」サーナイトが歩み寄ってカザフスタンの衛星画像を印刷した写真をメリープに見せる。隣にいたピトムニクも含め大勢の一同が覗き込む。リーヒュンの覗き込むように首を落とした後にレオとグリソムが掴まり、同じように首を落とすユイリィの首元にチェギョンが掴まり、そのわきにロックオンがグラシデアを守るように降り、大柄な2匹

の隙間からガトルとシンシアを抱えるような格好でスカイラブが覗き込む。スカイラブの前、リーヒュンとユイリィの前にミオカを背中に乗せたテルルとブレイブがいるが、テルルの方は後ろにいるスカイラブをちらりちらりと横眼をやっては、嫌そうな表情を浮かべている。向けられている彼女の方は全くお構いなしだ。サクラはグレイシアとルクシオの意識の間に横たわる奇妙な溝、特にグレイシアが意識が発している不快感が妙に気に引っかかったが、今それをこちら側から指摘していては長いことになる。

サクラはそんな2匹の空間の間から思考を戻し、バストークとピトムニクに視線を戻す。「この辺りは寒冷地帯だけど、本来雪はほとんど少ない地域なの。それが今年は、多いところでは2メートルは積もっているみたいなのよ」

「それってすごい大変じゃないですか…ポケモンは寒いの苦手なんですよね…」「まあ世界には雪ん中に住んでる奴もいるからな。何とかするしかねえぞピトム」「ううっ…なんたってピトムは寒いのやだって知ってるのに…」メリープの言葉にプラスルが赤い両手をわずかにこすった。彼女の言う事は正解である、ポケモンと言う生命体の発祥はエメリアであり、何万年もの時をかけて地球中に広がり少しずつ文明を築いたのだ。人類最古と言われるメソポタミアの文明さえ紀元前３５００年だから、文明としてはポケモン達の方がはるかに先輩なのだ。ただ文明を構成する民が人間のような超高度な文明を求めなかったからである。

「ごめんなさいピトムニク、慣れない環境だから厳しいとは思うけど、なんとか頑張って、お願い。私だって寒いのは嫌なのよ」サーナイトが右手でピトムニクの頭をわが子のように撫でる。「へっ？今回もサクラさんと一緒に……」「そう、そうなの。私は司令官でもあなた達だけの司令官で基地の軍人の皆さんは上司なのよ」「そ、そうなんですか…」「さっすが！よろしくお願いしますよサクラさん！寒いの大っ嫌いな私の分までめちゃめちゃに頑張ってくだ

さい」「ウチからもこれからもずっとよろしくですよサクラさん！ね、チェギョン！」「うんうん！ユイリィだって寒さに問題大ありだもんね！仲間仲間！そんな証にモッフモッフのコットンプレッシャーを喰らっちゃえええ…」「あははは！気持ちい気持ちいやばいよ、うんうん…」相変わらずのテンションの高さでメガニウムの首の花びらもとに飛び掛かるチルタリス。サクラはそんなユイリィの姿を見つめていると、彼女に不思議な安心感を覚えた。自分の育て方が完璧だとはお世辞にも言い難い子になってしまったが、その分どんな逆境や困難でも乗り越えられる、そういう芯の強さを身に付けたのかもしれない。しかし別の意味では……底抜けだ。例えば隣にいる友達とかに。

「うん！お祝いにリーヒュンにはむぎゅむぎゅっとしてあげる♪……」「や、やめろって…ぐえっ、苦しいだろうが…」「ウチがいればいつでもあったかいね！寒くても大丈夫大丈夫！」隣にいるリーヒュンに体重をかけるが如く首と右腹を飛び掛かるようになすりつけるユイリィ。このベイリーフとメガニウムは相変わらずだ。こうなると調子に乗る者も決まっている「おいユイリィ、俺にもむぎゅうっとやってくれるよな」「うんうん！全然うちは問題なしだよ！ほらほら、むぎゅうっっっと！」「やっべえええ！俺はいまユイリィの首の温もりに感動したぜ…」メガニウムの首元に飛び付いてブレイブがフサフサ尻尾を振りながら大喜びする。次にこのブースターがやるとしたら…「っしゃあ！テルルちゃんも…俺がポッカポカにしてや…」「やめとくわよ。アンタ普段の体温だって暑苦しいのに……」テルルは一瞬で彼のフサフサの乗っかった頭のあたりを左前脚でつき戻した。「いいなあテルルは！こおりタイプだから寒くないよねえ…」チェギョンがモフモフ翼でテルルの背中のひし形に飛び降りた。「うんん…私寒いの全くだめ……」「そ、そういうのってあるの？」ちょっと驚いたように尋ねてきたのはピトムニク。

「うん、私の生まれってロシアじゃなくて温かいところでさ…いろいろあって移動したから…」

「そっか…熱いのにはめっぽう平気なんだね」「それがさあ、そっちは種族的にダメになっちゃった」「めっちゃ温度に敏感なんだねテルル。こんな最高のもちもち肌なのに手入れ大変じゃない？」背中に乗ったままのチェギョンがグレイシアのほっぺをモフモフ翼で触る。「そ、そうかな？あんまり気にしたことない…」テルルは少し顔を赤らめた。思えば生まれてこの方、手入れなど全然気にしたことがない。意外な褒め言葉がちょっと恥ずかしいほどだった。

（……まあ、あのくそ女には負けないわよ……）

「それでだ、ますます俺の愛情という暖かさが必要になってくる！ピトムもチェギョンも遠慮しねえで受け取れテルル！！」ブレイブがまたしてもテルルに飛び掛かろうとまたしても彼女の首もとに前足をかけてくる。「はいはい、十分暖かいわよ、下がりなさいって…」「ブレイブ、アンタ単にキモイだけだし…」「もうブレイブ、アンタ、テルルに迷惑かけすぎだよお！」先ほどと同じように、先ほど以上にグレイシア、プラスル、チルタリスの３匹の前足、翼、両手でブースターを押し戻す。

「甘いなブレイブは。それなら俺の両翼が…お前らを温めてやるぜ…決まった！」その背後から飛び付いたロックオンであるが、その直後にスカイラブの前足に尾羽を引っ掴まれた。「はいはい、ナンパはそれぐらいにして温めるんだったらグラシデアにでもしどってくださいよ」「遠慮します…」そういうテルルの目線は明らかにスカイラブに向けられている。ルクシオの方は意に介さん、という顔で視線を逸らした。

その一瞬の間でも２匹の間で飛び散る火花。（…何かと因縁が大好きねえ…タンカ切ってるつもりなの、あのグレイシア…）（はあ？……あんなすぐに他人のタンカで目をそらすなんてねあのバカ女…

あの腐れにはあの種族の面がお似合いよ…）その強烈な意識の正面衝突にユイリィは思わず振り向いてしまった。「ん？どうしたのユイリィ？」「あ…うんん！何でもない、ちょっと何かを感じたかも…」心配したような表情の彼女にスカイラブは明るく言い放った。「それはユイの心配しすぎよ！いつものように隣の兄さんにでも甘えて発散しなさい！」「俺はやだって…そういうこと言うなよスカイラブ、彼女が調子に乗るだろ…」「文句は言わない、女の子の願いを聞いてやるのが男の義務！しっかり頼むわよ！」相変わらずこの女ルクシオのしゃべりっぷりは、悪く言えば立て板に水といった調子だ。「うんうん！リーヒュンにもう一回むぎゅうっと！！」「ぐえ…何回やれば気が済む……」ベイリーフにまたしても上半身を飛び掛からせながらもメガニウムの意識は、そんなスカイラブと以外にも自分に向けられるテルルの目線を感じる。彼女の意識の底に重苦しいしこりのようなものを感じた……

「ど、どうも…でもやめます」ピトムニクも恥ずかしそうに言った。「あ、当たり前だろうがラブちゃん、俺はグラシとチェギョンを１００％保障してやるって…」「あのお、私は一回も頼んでないんですけど…」チェギョンが右のモフモフ翼を野良猫を追い払うように振った。「あ、あの…私もその…頼んでません…」グラシデアが顔を真っ赤にするのに間髪入れず、ムクバードはモコのモコモコ毛のついた肩に右側の翼を回す。「遠慮するなグラシ！何せ俺の保証は最高だぜ…」「は、はい…でも私、１７歳ですし…」その言葉と同時にじろりとこちらを見るバストークをグラシデアは不快そうな表情で見つめ返す。なんでもあの父親メリープに因縁つけられていては何もできない。

各自の準備に向けて人間用の会議室の一角から出ていく一行。ユイリィはいきなり背後からテルルに左後ろ足を掴まれて出たところの角に連れ込まれた。

「ど、どうしたのテルル？……」メガニウムの意識の中に、再びあのしこりの感覚が不安と同調するかのように湧き上がった。グレイシアはメガニウムに不審そうな表情をしながら彼女の首の花びらの上あたりを両前足でつかむ。「いや……ユイには罪はない…これは私とアイツ（・・・）の問題なのは分かってるよ…でも」テルルは一瞬考え込んだように下を向いたがすぐにユイリィに目線を戻し、きっぱりと言い切った。「ユイと私は同じ部隊の同じ編成、あなたにとっては私の方が近いはず、だからスカイラブを相手にしないで」

「な、何それ？」「そのまんまよ、私の味方になってという事」

「ちょ、ちょっと待って！ウチにはテルルとラブの間に何が起こったのか全然……」メガニウムが驚いたようにツルでグレイシアの頭飾りのあたりを触った。なぜテルルとスカイラブがもめだしたのか見当もつかない。暗闇で手探りをしているような圧迫感が彼女を襲った。「とにかく！とにかくよ…お願い、ユイは私と同じでしょ…言いたいのはそれだけ」テルルはつらそうな表情を浮かべて速足で歩み去った。「ちょ、ちょっと…テルル…」一匹取り残されたユイリィの意識の中は、不安と自分に対する無力感が自らの骨と肉を焦がすような感覚でいっぱいだった。何か2匹の間で問題が発生している、それは間違いなく感じられるが…いったい何時どうやって…？なぜ自分は気づかなかったのか？

「どうした？…」ぼんやりとするユイリィの首元にリーヒュンのツ

ルが優しく触れた。そこから意識に伝わる暖かさに目の前の風景が明るさを取り戻すが、いつものように笑顔を作ろうとまではいかない。「…特に大したことじゃないんだけどさ……」メガニウムの夏空色の瞳にはありありと不安の影が浮かんでいるのをベイリーフは見た。「……やっぱり寄せ集めじゃあトラブルも起こるよね、うん…」「テルルの事か…」ベイリーフがそっとメガニウムの首をツルで優しく巻く。少しほっとしたような表情でメガニウムは呟いた。「お願い…リーヒュン、テルルと話すときは気を付けて、言葉はちゃんと選んで、ね、簡単だよね？」

「俺も約束するぜ」２匹の元にミオカを背中に乗せたブレイブがやってきてユイリィの左前脚を右前足で軽くポンポンとやった。「頼む…テルルのことで迷惑かけて…悪い」「うん…ありがとうみんな…」

同日　ロシア　サンクト・ペテルブルク市　１７３０時

サンクト・ペテルブルク駅にほど近いアカデミカ・レベテヴァ通りとレニナ広場通りという車や歩行者が多数行き交う大通りに挟まれる格好でコムソモラ通りという裏路地がある。高緯度地方であるロシアのこの地での１月は、１日を通して完全に真昼になることはなく、遅い時刻にやっと朝日に照らされたと思っているうちに太陽は地平線低い位置を通過しすぐに日没を迎えてしまう。日本でいう駅前大通りに該当するレニナ通り、それほど構想ではないとはいえ、昔ながらの建物と現代的な建物が荘厳なレンガ造りのサンクト・ペテルブルク駅へと向かう方向に青山と並び、道路沿いの歩道に並ぶ１９世紀と変わらぬ形をした市街灯、商店や街灯看板の華やかな明かりとは対照的に、この通りはレンガ造りの５階建て程度の建物に取り付けられているランプ状の市街灯だけが建物に挟まれ、日暮れ

とともに真っ先に暗闇が近づく狭い路地をぼんやりと照らしている。１８世紀や１９世紀と変わらない風景にも見えるが、集合住宅を主体とする建物の、通りに面した側には必ず1施設当たり1つ以上つけられているセキュリティーカメラやセンサー、路肩ぎりぎりに寄せて止められた自動車、たまに行き交う人間の格好や手に持った情報端末が時代が移り変わったことを物語っている。

この辺りは古き良き風景を（新しいものが良いものには変わりないが、一部時間が止まったように残っているのもいいものだ）とどめているが、欧米や東アジアや中東の一部程ではないにしろロシア有数の都市であるここもグローバル経済に組み込まれたことによる生活スタイルの西欧化、都市のメガロポリス化が進みつつある。この風景がいつまで残っているか、それは今後の再開発の拡大次第だろう。

アカデミカ・レベテヴァ通り側から見て右側の手前から3軒目に向かって華やかなレニナ広場どおり側から、子猫とどこからか逃げ出したうさぎを掛け合わせたような生物の小さな影がちょこちょこと走ってきて狭い道路を渡った。朝方から集合住宅の中に入るドアのちょうど前に駐車しっぱなしだが、どちらも今日も降り続いたはずの雪は払われているフランス・プジョーの１０６と日産の中古のパルサーＮ１５との間付近を左右も気にせず通り抜け、半分あいた状態の中庭へと続くドアを通って庭先を跳ねるように通り、階段を上り、3階にあるドアの一角で止まった。ドアの右わきにあるのはドアと建物の作りに不釣り合いなカメラ、スピーカー、マイク付きのインターフォン。しかしその小さな“彼”は自身が精いっぱい後ろ足で立ちあがったた時の背丈よりもはるかに高いそれを無視し、不自然なほどフロアの床近くまで伸びたドアの内側につながる紐を引っ張った。ガランガランというブリキでできた鐘が鳴るような音を立てて呼び鈴が部屋の内部に鳴り響く。一呼吸おいてみるが中から反応はない。「なあんだ…まだ帰ってないのか…」彼はふてくされたような声を出すと、首からぶら下げた物の中から金属製の鍵を

引っ張り出し、ドアの下の方にある小さな穴に突っ込んだ直後、内側から鍵が開く音がすると同時にドアが彼に向かって襲い掛かり、外に向かって開く扉に合わせて後ろの飛び退く。「あ、あらら！ごめんなさいねエルヴィン！」びっくりしたように顔をのぞかせたのは、腹が白い黄色い2本足立ちのドラゴンのような体、尻尾はバストークやグラシデアと同じように電球のようなものがついた黄色と黒の横じま模様。彼女はデンリュウ、メリープ・モココ種族の最終進化形だ。

「うんん、カテリーナさん、大丈夫！今日も夕食を作ってくれるんだよね！ありがとう！」その姿を見たエルヴィン・ムスペル・アストラフスキー、テルル・ルナマリア・アストラフスキーの唯一の家族にして“弟”であるイーブイは部屋の中に嬉しそうに飛び込む。

「大丈夫よ。エルヴィン一匹で普段は暮らしてるなんてそれだけで立派なんだから。家主としてこれくらい助けてあげないと」デンリュウは笑顔で言いながら右手でドアを閉める。彼女、カテリーナがポケモンでありながらこのアパート（ペテルブルクには一軒家はほとんどなく、利用者が購入済みのマンションか、利用者が借りているアパートばかりだ）の大家であることは事実である。そしてそこに住んでいるのはエルヴィンを除いて全員が人間（といってもポケモンが大家をするという状況において、いかんともしがたい偏見が発生する以上、おもにいるのはペテルブルク大学の学生ばかりだったが）であるのも事実。格別このデンリュウがイーブイを心配し、愛情をもって接するのも当然だ。

そして彼女は彼の“姉”にあたるテルリウムの事も知るポケモンであった。

部屋は日本の部屋割りでいう1DK程度、どちらも6畳程度しかないので人間から見れば狭いように見えるかもしれないが、エルヴィンくらいの小ささなら十分広すぎるほどである。ベット、イスは別にしても空調機器は一切使われた様子はなく、彼にとって（テルルにとっても）背の高すぎるテーブルも普段使用されているようには見えず、テレビや洗濯機などの家電品も一切ない。電話もなければパソコンといった上等な端末があるわけがない。暖房用の石油ストーブ（ハロゲンヒータはない）には使用されているものの、その操作はカテリーナが行っている。普通の人間の感覚からすればどれだけ貧乏なんだと嘲笑してしまうだろうが、ポケモンにはこれくらいで十分なのだ。雨風をしのげ、ダンスら取れるのは、彼らからすれば富裕層といわれるだろう。（無論彼は大金など手に持ったためしがないが）

さらにこの部屋にはこのイーブイが好き勝手に施した素朴な改装が不思議な暖かさを放っていた。玄関口からテーブルの下を通り抜けてベットに至る一直線の場所を主にわらがしきつめられ、使われていないテーブルの上や部屋の壁沿いには、植木鉢やプランターに入った小さな木が森のように並んでいる。マットレスしかないベットの上には干し草と、やはり植物の入ったプランターが置かれ、ベットの足元には唯一コンセントからコードが伸びて小さな電球につながっている。電灯用のスイッチに前足が届かない彼のためにデンリュウが置いてくれたのだ。その周りには羊皮紙と羽ペンとインク壺。初めて入った者からすればまるで小さな森に来たように思えるが、ポケモンにとってこれが良いように、エルヴィンにとっても大変住み心地がよい。そういう文明の特性であることはもちろん、彼はこれが姉のテルルからもらったプレゼントであると信じていた。自分がおぼえている限り、自分は雪景色ばかり見ていたから、姉は自分の事を気遣って形だけでも緑あふれる風景を見せてあげたいと思ってこうしてくれたのだと。そんな素朴に考えてしまうほど、彼は姉のテルリウムを信頼し、慕っていた。

「ねえカテリーナさん、テルル姉ちゃんに手紙届いたかな？」「１４日くらいたったからねえ、そろそろお姉ちゃんが読んでる頃よきっと」「そっか、今度手紙が来たらこれも一緒に送ろっかな」エルヴィンが付近の植木鉢から木の実を一つとり、キッチンで鍋をかき混ぜるデンリュウの元に走った。「そうね、私が去年持ってきたこれ、きっとテルルも喜んでくれるはずよ」「うん！それまでにもっと増えるといいな、このまかん…」「みかん、よ」「そう、うん、みかん！姉ちゃんに送るのは一番大きくておいしいのにしないとね…」エルヴィンは楽しそうにみかんを口にくわえたままベットのある窓側へと向かい、後ろ足で立ちあがって外を眺める。カテリーナはそんなイーブイの様子を見ながら、彼には伝えていない現実を思い起こした。先月来た手紙にはテルルはどうやらエメリアに移動したと言っていた。イーブイの方は手紙が来たこと自体に大喜びしていたが、デンリュウにはこれが何を意味するのか理解できる。９歳のエルヴィンには想像もつかないだろうが、姉のグレイシアはロシアからはるか離れた南太平洋の一角に移動してしまったのだ。しかもおそらくはさらに危険な任務のために…

そしてそれをいつ彼に告げるべきか、カテリーナは迷っていた。何年も姉に会えなくても平然と振る舞っている芯の強い子だから多少の事は平気そうな気がするが、それが将来になって彼の人格にどう作用することになるか、不安だから。

（テルル姉ちゃん…元気かな…エメリアって場所でお友達とかできたのかな…エメリアって…ロシアでもきれいな場所なんだろうね…）

既に外は真っ暗に近い。イーブイは市街灯に照らされ雪が降り続く裏路地を、毎日お約束のように駐車している（車というものを彼は人間の機械としかとらえていない）プジョー１０６と日産パルサーＮ１５（そんな車の名など知るわけがないが）の持ち主の人間が

現れないか楽しみに眺め、その際にふと姉のことにも思いを寄せた。いつか再開する、その日を信じて。

……ユーラシアの一角からはるか離れた南太平洋の地から中央アジアへ、明日限りかもしれない生死隣りあわせの任務へと向かうグレイシア、テルル・アストラフスキーを。

２０１３年　１月１０日　ベトナムから北東の沖合　０３２０時

シンガポールと南アフリカのケープタウン経由でドイツのハンブルクへと向かう大型コンテナ貨物船は、東南アジアから東アジアへと向かう主要海路を航行していた。遠くには同じような貨物船や東南アジアで採掘される石炭、ゴム、鉄鉱石、パーム油などの資源輸送船、欧米アジアの企業が近海に次々に開発した天然ガスやメタンハイドレードを満載したタンカー、沿岸の漁船の明かり、採掘プラントの明かりがちらほらと見える以外は星空ばかりだ。

韓国・仁川の港から乗り込んだ男は、山積みになったコンテナデッキ右舷の連絡通路から鎮座されたコンテナ達に目をやった。さまざまな海運会社や貿易会社、製品の生産会社のロゴや社名の入ったそれらの中に何のロゴも入っていない小豆色のコンテナは、他と何の違和感もなく紛れ込んでいた。その中に入っているのは、ポーランドのエネルギー公社に輸出される原発用非常冷却装置（ＥＣＣＳ）…本来は北朝鮮に輸出されるはずだったものだ…

……問題ない、当たり前と言えば当たり前だが異常はなさそうだ。自分の海運会社の乗員名簿データを偽って（韓国国家安全保障局（ＮＳＳ）が会社のサーバをハッキングして行ったのだ）乗船しているが、北朝鮮側がそこまでしてくるとは思えない。自分がこうやっ

ていることはいささかやり過ぎではないか、そう思った。宇宙から軍事衛星で攻撃するわけでもあるまいし（北朝鮮がそんな宇宙兵器を持っているという情報もなく、仮に狙っても自国の立場が悪くなるだけだ）、コンテナは海賊行動に出て奪い取れるようなものでもない上、このコンテナ船が通過するインド洋や西アフリカ沿岸の大西洋といった主要海路はソマリア沖のように各国軍や軍事会社が出るほど治安が悪い訳ではない。空路でドイツに入ってハンブルクからのトラックについて行った方が手間もかからないし、厄介事に巻き込まれる恐れも少ないのではないだろうか?。もし何らかの形でコンテナ船の責任者に正体がばれたら面倒な国際問題になる。彼とて家族も友人も、結婚はしていないとはいえ親しい彼女もいる。自分の人生を自ら危うくするようなことは自分自身の為にも組織の為にも防ぎたいところだ。

そこまで考えて男は、息を一つついて右手の拳で手すりを軽くたたくと、体の向きを海側に戻した。そんな事を気にしてても仕方がない、平穏に終わらせるには面倒だがとりあえずしっかりと業務をこなさなくては。

携帯端末が鳴った。ＮＳＳからである。“コンテナ船の方は大丈夫か?”「ええ、今のところは問題ありません…」男が舷側の手すりが輪に歩みだし、左右を眺める。周辺に見えるのは自分たちと同じような明かりがついている大型貨物船やタンカーらしき船舶、または海上プラントだ。夜間なので目視では完全に把握できないが、海賊のような小型船には艦橋の上部で回転している海上レーダーよりも目視の方があてになると聞いたことがある。念のため彼は持ってきた小型の赤外線暗視双眼鏡で（欧米の特殊部隊が使っているものと同様）もう一度見回す。先ほどまで集魚灯をつけていた現地の漁船団も既にいなくなったようだ。周囲に小型船のような影は見当たらない。「そうか…」「…周辺に不審な小型船は現在確認できず、この４日見ている限りで不審な挙動する乗員もいないようです」「分かった、明後日の未明にはシンガポール港だな。チャンギ空港に

も仁川の2人が向かっている。十分用心しろよ」「はい」
　端末を切った男だったが、ふと何かに気付いて電子双眼鏡で改めて調べてみる。そしてやはり海上の様子に違和感を覚えた。徐々に東南アジアの小島が近づいているにもかかわらず、夜のせいだと考えてもポケモンが全くいない。小島が多ければ、太陽に合わせて生活している彼等でも少なからず警備や活動の一環で動くラプラスやホエルオーがいるはずだが、今この周囲には一匹もいない。北アメリカやヨーロッパほどではないにしろポケモン達の隔離と排除は東南・東アジアでも（スイスや日本では厳しい制限と罰則規定があるとはいえ、ある程度の政府公認の自治が認められている）進んでいる（経済面のみならず衛生上、治安上でも排除・隔離することが先進国に近づくには必要だと考えている）とはいえ、まだまだ絶滅とは程遠い数が残っているはずだ。にもかかわらず今夜は一匹も、本当に影も形もない……

（……やはり…国連は動いているのか……これもまたそれの範疇に過ぎないのか…）人間の作った物体ばかりが目につく赤外線投影された風景をみながら男はふと思った。

２０１３年　１月１０日　　アメリカ北東沖上空３万フィート　Ｃ－１７機内　００１０時

　国連統合空軍エメリア方面軍区第2戦略輸送隊に所属する2機のＣ－１７グローブ・マスター?輸送機は、アメリカ東部海岸のニューアーク・リバティやＪＦＫといった巨大空港からヨーロッパ各地の空港へと向かう主要航空路の一つを飛んでいた。多数の大西洋航空路は設定されているとはいえ、フライトプランは提出済みの軍用機と言えど旅客機や貨物機のＢ－７４７やＡ－３４０の間を縫うよ

うに正しい位置を飛ばなくてはならない。かといって異常接近（ニアミス）や空中衝突を防ぎ、無用な乱気流多発地帯を飛ばず、不審機と誤認されないようにするには違う最短ルートを勝手に飛び抜けるわけにもいかない。この機体はイギリスのロンドン・ヒースロー空港を経由してカザフスタン最大の空港、アルマトイ国際空港へと向かう予定だった。問題の地点へはそこからカスピ海沿岸のアクタウに向かう。乾燥気候が多いカザフスタンや周辺のウズベキスタンやトルクメニスタンの貴重な水資源と水産加工物、カスピ海の（海とは言うが湖である）湖底に眠る資源の一大採掘拠点であるアクタウの郊外にある今回の目的地はそこから車両で５０キロ以上離れた山のふもとだ。

統合空軍のＣ－１７はゼネラルエレクトリック社のＰ＆ＷＦ１１７－ＰＷ１００ターボファンエンジン４基で上空を巡航している。彼らが乗っている機内は軍上層部の人員輸送用にカーゴベイが特別改造されており、内壁を旅客機と同様の防音装備で覆い、カーゴベイを上から見下ろせる左右端の通路の高さを基準にやはり航空機用防音板が天井代わりに貼られていた。その内側の床は搭載する戦車、兵器、車両、歩兵用の一般的なものではなく、民間機用のカーペットを張っているので中に入った者は座席のない旅客機の内部のようだと錯覚するかもしれない。ただし搭乗する種族は大きさや体格がまちまちという点に考慮して、離着陸の際には各場所に設けられた固定ベルトで体を固定することになる。

通常の量産兵士（マスプロダクト・ウォーリア）が輸送物資と同様に通常のカーゴベイに縛り付けられてることを考えれば待遇がいいように見えるかもしれないが、輸送機を使うのは上層部の軍人が前線の司令部のように十分に整備された滑走路がない場合であって、通常の空港や空軍基地を行き来する際は国連統合軍が所有するカナダ・ボンバルディア社の小型パーソナルジェット機等を利用する。つまり彼らはいくら期待される重要な部隊であっても、人間たちから見れば“物資”の範疇を出ないのということの象徴なのだ。

思惑は何であれ、リーヒュンやブレイブにとって人間の航空機という機械を使った空を飛ぶ移動は、生理的に感じる強い違和感を与えるものに他ならなかった。特に感覚が本人が閉口するほど強い…もともとあれのせいで強いのに、訓練によってますます感覚が冴えてしまった…ベイリーフにとっては、自分の体が航空機という機械の床に立っているだけなのに実際は空中を猛スピードで移動しているという、人間にとっては当たり前でもポケモンにとっては何とも気持ち悪い状態に、自分が空中に浮かんでいるようなこのめまいとふらつきでこのまま死ぬんじゃないかという恐怖と居心地の悪さでいっぱいになる場所に他ならない。離陸してからというものの、その感覚から少しでも逃れるためにまずはレオやグリソムの機内巡りに付き合ってみた。コリンクもミズゴロウもまだ１５歳とだけあって見知らぬ場所に行くとなると修学旅行のようなものであって、ところどころにある（輸送機だから並んでいるはずがない）小さな窓の外を覗き、操縦室や関係者専用の部屋へと続くオートロックされたテンキー付きのドアを後ろ足で蹴り飛ばしては（レオが）「中見せろ！」とか喚いていたが、グリソムとリーヒュン２匹で気力を持て余す彼を何とか制止するありさまだ。こんなところで物を壊したりすれば厄介な事態になる。

「あーあ、でっけえくせに人間の機械って動きづらい場所だぜ…」コリンクが機体左側に通路を歩きながら尻尾を苛立たしげに振る。ポケモンであり、しかも１年半ほど前に軍属になるまでは文明にとって当然である緑に溶け込んだ集落で奔放に暮らしてきた彼には、こんな密閉された空間に長時間閉じ込められるのは苦痛でしかなかった。「おっ！ここめっちゃ広いだけで何もねえな！」レオが目を輝やかせたのはカーゴベイを見下ろす通用路の高さに作られた天井代わりの防音壁。「な、何すんだよ？」「ここでお前のシェルブレードを見せてもらうぜ！、反論あるわけねえよな？！」「それっていいのか？！おいら達２匹で乗っかったら…」「文句言うんじ

ゃねえ！行くぞグリソム！」怪訝そうなミズゴロウをコリンクが前足を掴んで手すりから突貫で付けられたパネルの上に飛び降りた。パネルの方は軽くきしきし音をたてたが、外れて突き破りはしない。「兄貴も来いよな！３匹乗った所じゃ壊れねえだろ」「おっし、ちょっと待ってろ」リーヒュンは何の疑問もなく手すりにツルをひっかけ、前足からまたぐように手すりに飛び乗った。ツルと能力を合わせれば頭頂高１．４８メートルの彼のような種族でも（ベイリーフ種族にしては大きいが）楽々飛び上がれる。「おいおいリーヒュン、君は止めた方がいいんじゃ…」「たぶんぶっ壊れないよ、やってみるさ」さらに不安そうな表情になるミズゴロウをよそにベイリーフはそのままジャンプして着地するように天井代わりの板の上に軽く飛び降りた、つもりだった。

防音板がこれまでにない強烈なきしみと共にレオとグリソムのいる場所が軽いが異様な上下動を起こしてゆすぶられる。「やっべえ！？…」「ぶっ壊れるぞ！」飛び降りた当の彼のほうは慌てて後ろに飛びのいたが、後ろ足の付け根を手すりにまともにぶつけた上に、そのまま短い尻尾の方から通路に尻もちをつくように転げ落ちた。「大丈夫かよ兄貴？」「ああ、うん…俺の方は痛いだけで…つっか…」ベイリーフはまだ痺れるような痛みが走る後ろ足を落とした状態から何とか立ち上がる。「すまん、俺は降りるの止めとくよ」「ま、まあ…それがまともな選択だな。よっしゃあグリソム！いっちょやるぜ！」「う、うん、まあ…やってやるか！」レオがグリソムから数歩分下がって身構える。ミズゴロウの方も大きく息をついて首から下げたホタテガイを右前足でつかんで構える。リーヒュンには２匹に飛び入りできない事で、気を間際らすことができない。せめて軽く動き回れるぐらいでもいいのだが。「レオ、あんまり無茶すんな」「どうした兄貴、この機械に酔ったか？ギャロップの背中に乗ってるわけじゃねえのに、兄貴ぐらいの野郎なら大丈夫そうなのによ」「何でもない…酔っちゃないよ」彼は顔色をちらりと窺ってきたコリンクに軽くツルを振り、再び襲ってきた足元の不快な感

覚に視線を機体前方側へと向けてため息をついた。
　フライトは何時間も続く。東に向かって飛んでいるため、外の明るさの変化の様子が普段の地上から見る場合とは全く異なり時間の変化がとても速く見える。リーヒュンにとって既に夜間にもかかわらず相変わらずのユイリィの甘えに近い（彼女の方が年上なのに）“すりすり”と甲高い無駄話では気も紛れない。今の感覚の異様さを聞いてみても、完全に自分のペースに入ったメガニウムには「それ？空っていうものの感覚かな。楽しむことが大切！そういう事だよ、うん」とロクすっぽ相手にもしてくれない。彼女に付き合っていること自体は結構励ましになっているのだが、長時間となると彼女のペースについてゆくのは結構大変だ。ちょうどその時にブレイブがちょっと上の通路にぶらつきに行こうと誘ってくれた。ついでに彼女に飽きたロズリンがベイリーフの頭に乗っかってきた。
「やっぱあの感覚のせいだよな…お前の苦労も並大抵じゃねえだろ？」ブースターがベイリーフの左前脚を右前足で軽くたたく。「苦労？」「おう、まあお前の顔を見てりゃわかるわな。この空飛ぶ人間の機械のせいだろ今は？」「違いましゅねえ、兄ちゃんが嫌がってるのはあのごろつきメガニウムの方なんでしゅよ……」リーヒュンの頭の葉っぱをプラプラさせていたシェイミが“メガニウム”を強調した声をあがあげる。「おいおい本気か？！めちゃカワユスのユイリィの事がごろつきとか思ってんのか？！その台詞、１００年は早いぞリーヒュン！」ブレイブが顔を真っ赤にしながら、彼の上の方にある親友の顔を思わず見上げた。「結構そうでしゅ」ロズリンがブースターの背中にぴょこんと飛び降り、自慢げに右の花を後ろ足でかく。「でかしたぜちびっこ！これは史上最強のスキャンダル！早速当の本人に…」「そ、それは悩みの２割しかないぞ！」ベイリーフが驚いたような顔をしてツルでシェイミを自分の虫食い葉っぱの付け根に戻す。「ロズリンな、勝手な話だけを作るのは止めてくれよ」「ちょっと待った！今お前は２割だって言ったよな！？、なあ？！」ブースターがベイリーフの前に滑り込み、足を止め

る。「そ、それは…」「さすがだぜ親友、こんなところまで図星を出しやがって！やったぜおちび！」「やったでしゅ！」ブースターとシェイミがお互いの前足の拳をくっつけるように伸ばす。「はあ…なんて奴らだ……悪かったよ。今のは何かの間違いだ」ベイリーフは右前足をブースターの方に向けて小さく足元を払うように動かすと、うつむきがちに2匹から離れる。自分の軽率さに後悔した。思わず思ったことが、感じたことさえも口に出てしまう、どうにかしたいがどうしようもない。

しかしそこはブレイブ・クレイバーらしくフォローも忘れない。すかさずリーヒュンのそばにより、手すりに自分の前足を乗せる。「悪いのは俺の方だって。何でもすぱすぱと言ってくれるお前のそういうところはいいところだぜ」「そうか…ありがとうブレイブ。俺、この性格を誉められたことほぼない…」ベイリーフはブースターの方に視線を向け、ツルで彼の首のフサフサを叩く。「確かにな」「でも、さっきの2割は本音だ。彼女の全部が好きなわけじゃない、直してほしいところは直してほしい。それって悪い事かな？」「へへっ、お前どこまで恋愛に疎いんだよ？大丈夫だっての」ブレイブがリーヒュンの首元の葉っぱの付け根あたりを右前足で突っついた。「どんなに仲のいい間柄でも嫌いな面はあるし、お前の言うようによほど傷つけねえ限り言ってもいいとは思うぜ。ま、お前を見てる限りはそのうち不満がるとは思ったけどよ」「そうか、確かに言いたいと思うけど…恋愛って難しいんだな…」ベイリーフは考え込むようにつぶやく。「難しいって、おい！恋愛も数をこなさんと意味ねえぞ！」「はは、それもブレイブの性格なら絶対やるよな…１０匹やるのは止めた方がいい」「何言ってんだ？！恋愛経験ゼロの貴様がお説教なんてこの俺が許さねえぜ！おらおら！…」フサフサ尻尾をぶんぶん振りながらブースターがベイリーフの両足の間に力一杯飛び掛かる。「おいおい、やめろって！こいつ…」前足とツルで

軽くもみ合う2匹はお互い嬉しそうだった。性別を問わず、大半は体同士の接触でお互いの絆を確かめ合うのが一般的なポケモン同士、そういう些細な事でも幸せだと思える。リーヒュン・グリーズはこうしているだけでも自分の普段から感じる奇妙な感覚、自分の能力、そしてフローラの事、この謎多き世界の真実、自分へ過酷にのしかかる多くの苦悩が取り払われ、幼き頃のようにまっすぐで純粋な気持ちが意識の中に戻ってくるのを感じた。

それはブレイブ・エスコーツ・クレイバーにとっても同じ。軍属という都合で航空機には数回乗ったことがあるものの、不安感を完全になくすことはできないどころか増える一方だ。それどころかブースターはこの機械の類を信頼したことさえなかった。それはやはり…自身にもわかることのせいかもしれない。人間に対して昔から抱きながら、普段は必死に隠している、親友に、ましてや相棒であるはずのテルルには言えるはずもない自分の意識の格納容器の底なしの果てに潜む冷たい恐れ、悲しみ、そして狂うような怒りをまとった怪物を。

時にはその怪物が自分の意識の上の方に上がり、外側は必死に取り繕った古い格納容器の傷に噛みついて凶暴な毒をまき散らしてくる。だからこそ、リーヒュン・バイリング・グリーズも、ユイリィ・ランタン・プレミドールも、テルル・ルナマリア・オフリート・アストラフスキーも、全員の関係が、確かな繋がりが、彼自身が意識の底の怪物と向き合い続けることができる大きな力なのだ。

「こうしてると忘れるよな、俺たちがよく分からない人間の乗り物に乗っていることを…」「だろ？確かな乗り越える支えがあれば、相手が無言だろうと嫌だろうと何にも怖くねえって」ブースターがベイリーフの首元をもう一度軽くたたく。

「……俺にはお前やユイリィがどういう感覚を持っていてどれくらい苦しい物なのかは分からねえ」「……」「今お前が感じてるかもしれない飛行機に対する変な感覚を同じように同情してやることも

無理だ。でもだからこそ言えることがある。人間どもは言わないことをな」「何だよそれ？」ブースターが右前足の拳を左前脚にガツンとあててベイリーフに向き直る。「お前がその苦しいものを乗り越える間に、俺たちはその分お前が間に合わないことを支える。そしてな、リーヒュン達は俺たちが間に合わない点を支える。そういうのが関係ってもんだ。だからお前も乗り越えろよ、後ろは俺たちに任せて気にせず、前につっこめ！いいな？！」「ごめん……うん、俺はやることはなんであろうと全力でやる。いろいろと心配かけて悪いな」「気にすんな！お前にはまだまだ子供の時と同じような目先へのまっすぐさが残ってっから、恋愛と人生の事は俺に任せ…ぶげっ！」ブレイブが何気なくコクピット側の通路の突き当りを目にした途端、鼻血を吹きそうな顔をして慌てて下を向く。「どうした…うっ？！」リーヒュンも何気なくその方向を折った瞬間、危うく唾でむせ返りそうになった。その目線の先ではロックオンとグラシデアが何と翼と両手で抱き合い、口を触れ合わせる人間のようなあの愛情行動をしていた！

2匹の様子に先に気付いたのはモココの方だ。「ブ、ブレイブ！？私は何もしてないから、変な妄想なんかしないでよ！」「し、してねえよ！」「ほ、ホントに？」「当ったり前だろ！」ブレイブが右前足を振る。ムクバードの方も気が付いてこちらを翼で指差すように向けてくる。「アドバイスに感謝するぜブレイブ。今後の、俺とグラシの恋愛の貴重な参考になった」「あ、あの…大尉にはしてないっすけど…どうも」ブースターが顔を紅潮させて視線を逸らした。「そ、それでリーヒュンの方もさ、今の私の事、は、離しちゃだめよバストークに…許さないわよ！」「わ…分かった、…大丈夫」「お願い、絶対！あの人うるさいんだからさあもう…」「約束する！言わないからな」リーヒュンもツルを振り、思わず目線をそらしながら顔を赤らめる。「い、あっちのほう行くかブレイブ…」「あ、

おう…」ブースターとベイリーフは機体左側のカーゴベイ上通路を後ろに歩いた。まさかあんな所でもやっていたとは…「なんで気づかねえんだよお前は…」「ブレイブも気をつけろって……」ベイリーフはその間にもロックオンとグラシデアの間を流れる強い引力のようなものと、それを探るようなバストークの意識の風のような吹き込みが同時に感じられる。よくは知らないが、確かにあのメリープが娘のモココを気にする痛いほどの気持ちは、（たぶん）次元は違えど自分が妹のフロレアールを心配するのと同じように感じられる。しかし、ムクバードとの片思いとも両想いともつかぬ恋がグラシデアにどういう影響を与えるかは分からないが少なくとも父親の前から消えるという意味ではない。その点ではモココの言い分の方がスジが通る……

彼は首を振った。そんなことは自分の気にする範疇ではない、それはバストークとグラシデアというホルスト父娘の話だ。自分が気にするべきことはこのチームの関係で最も心配になるフローラとユイリィとそれから…

「！！！」リーヒュンの前足が思わず凍りついた。左側通路の一番ランプ側の窓に鼻をつけるように夜空を眺めているのは彼の気にすべきもう一匹、グレイシアのテルル・アストラフスキーと彼女とブレイブが連れてきたイーブイのミオカ・ナミエ・ソウヨウである。ベイリーフの隣にいるブレイブは明らかに女の子という相手に対する興奮を放っているのを隣の親友は意識の底で感じ取り、心の中でため息をついた。そうしている間にもブースターはグレイシアに飛び寄る。「どうしたテルルちゃん！外の夜景に俺が写ったか？！お前が行く場所俺はいつでも駆けつけるぜ！やっべ最強に決まった…」「そんな訳ないでしょうに！第一今さ、ここから夜景らしい夜景な

んて見えてないわよ」グレイシアはしゃぶりつくように飛び付いてくるブースターを前足で突っぱね、呆れて首を振り右前足を踏み鳴らした。「…私にだって考えたいこともあるし、ミオカと話したいことだってあるの」「それは分かるぜ俺にも、だからこそテルルに…」「そんな状態なら顔でわかるとか言ってるくせにさあ、周りから見たらブレイブは私にケンカ売ってるとしか思われないよ。それでいいの？」

「ブレイブさん、そこは抑えないとテルルさんが…」「大丈夫よ、ミオカの心配することじゃない」「心配すんなミオカ。俺は別にケンカ売っちゃあねえよ」ブースターは不安そうに、しかししっかりと自分に歩み寄ったイーブイを前足で抱え上げ、背中に乗せる。２匹は顔をしばらく見合わせ、ブレイブの方が先に窓の外に視線を向けた。「ま、ミオカの前で価値観での喧嘩するのはよそうや。俺たちができるだけ仲良くやったほうがこいつにもきっといい」

「そりゃあ…もちろんよ。だけど…」テルルはブレイブに歩み寄って心配したような表情で顔を近づける。「私もさ、もめ合ってる関係は嫌だしミオカにも見せたくない。ブレイブのいいところはいいところだし、それは認めたいよ。でも……っ！！」テルルが何気なく動かした目線がリーヒュンと合致したその刹那、グレイシアは思わず目線をそらそうとしたがどうしてもできない。何の変哲もないベイリーフなのに（性格（↑これは彼女の独断だが）と能力は異常にしても）、彼の目線から不思議な力をなぜか感じるのだ。やはり…自分と彼は何かで結ばれているのか、嬉しくも憎たらしくもない奇妙な感情が彼女の意識空間の格納容器に広がる。

　ベイリーフも同様だった。彼の方はむしろ鮮明に意識の中で彼女の複雑な感情や意識の動きを言葉で言い表せない感覚として感じ取れる。彼女と目に見える、意識でも感じ取れぬ何かでつながっている、そしてその結果彼女と上手くいっていない、それが周囲の心配とさらなる関係のこじれを招いている。重苦しい予感が彼の脳裏と意識を飛び抜ける。

だがベイリーフは逃げ出そうとはこれっぽちも思わなかった。この時の彼に自分の能力について明確な決意があるわけでは全くない、しかし…彼女と何とかして話をつける、彼女の疑いや戸惑いを解くには…やはり口を使うしかないし、それ以外にあっても口で話すのが手っ取り早い。そんな思いがすぐに口をついて出てしまった。「テルル…今は…」

グレイシアの方も呑んだようだ。「う、うん…ブレイブ、ミオカつれて戻ってくれる」「どうしたんだよテルル？お前またこいつと…」「そうじゃない！、ただ単に…理解したい…」

「テルルさん…何を…」「大丈夫、私の事は私に任せて、ね？」テルルは不安そうなミオカを軽く抱きしめ、ブレイブのそばに戻す。「お願い、立ち聞きとかなし！ＯＫ？」「わ、分かったよ…絶対掴み合いとかするなよ」ブレイブは怪訝そうに見つめ、去り際にリーヒュンにも小声で言う。「言葉に気をつけろよ。絶対もめんな」「分かった…もちろん何とかする、あと、ロズリンも頼む」「ミーが見てちゃだめでしゅか？」「だめだめ、年上の都合ってのが世界にはあるんだぞ」ベイリーフはツルで頭にいるシェイミをブースターの背中に乗せた。

完全に2匹が防音版の下の、カーゴベイを改良した突貫の旅客室（キャビン）へと続くタラップを降りてしまって数分間、グレイシアは窓の外に広がるラメの入った紺色インクを流したような夜空を眺めた。夜だというのに、輝く光沢のような星明り以外にも、地面・海面を覆う夜闇が彼女の知るものより妙に明るい。おそらくは人間たちの市街地が作り出す眠ることなき幻灯のせいだろうと（確かこの辺りは北アメリカと言う場所の沖のはずだ）思った。幼き自分ができ始めたばかりの中東・ドバイで憧れた幻想と同じ。

ベイリーフの方はそんな彼女の出方を窺うように一歩ずつ、ゆっくりと彼女に歩み寄る。その歩みを進めるたびに、彼の意識の中に不安を挟み込んだ緊張と呼ばれる感情が意識の格納容器の底から湧き上がり、対流した。今更ながら自分の無謀さに後悔し始めていた。この所は物事を起こすたびに、深い疑念や戸惑いを感じて踏み出すのを思わずためらってしまう事がたびたびある。その度に彼が幼き頃に、リーヒュン・バイリング・グリーズが自分自身が何者であるかなど考える必要もなかったあのころのように、まっすぐに純粋に踏み出せたらいいのにと言う切望にかられる。

しかし、結局は今の彼の足先に踏み出す以外の道はしかれていない。そしてそれは彼自身が目の前にいる彼女、テルル・アストラフスキーに対して、今行うべきことでそれ以外の事は一切念頭になく、考えようともしない。

リーヒュンは口を先に開いた。「テルル……俺にどうしてほしい？」

「は？どうするもこうするも…それはアンタが決める事であって…」

「決める事ってなんだよ？！」彼は思わずもう一歩分踏み出して長い首をテルルに近づけるが、彼女の方は首元の葉っぱから匂う“スパイシーな特異臭（化学でいうオゾンの香りに同様のもの）”に表情を歪めて一歩分後ろ足と前足を下げる。「ど、…どうして踏みよるのよ？アンタについてる葉っぱは強烈なんだから」「それは…種族的にどうしようもないんだが…俺のは確かに香りが強すぎるって言われるしな…」「そ、そんなに本気で受け止めないでよ！私はアンタがその種族であることを否定したわけじゃ…」グレイシアは傷ついたようなベイリーフの表情を見て気まずように目をそらし、長いので丸めた右のもみあげ飾りを前足できれいに丸め直す。種族の特性を批判することは文明の中では禁忌に近い。「……ごめんね…そういうつもりじゃないの…」「そう、それだよ！俺の言いたいのは」リーヒュンはまたしても熱が入ってテルルに首を近づける。「な、どうしたのいきなり…」「俺はテルルの全部が好きじゃない。だけど君がそういう人ならできる限り全部受け入れて折り合いをつ

ける。だからテルルも俺の気に入らないこと、違和感を覚えることも全部受け入れて…」「はあ?!私に我慢しろっていうわけ、リーヒュンの性格を!?」グレイシアも声を上ずらせてベイリーフに顔をグイッと近づけ、2匹の鼻と鼻がくっつかんばかりになる。「私が耐えるわけ、アンタのその無神経な行動、思ったことが口先がらでたような言動、アンタの裏表も何にもないぷかっとした性格を?!断固お断りよ!!」

「我慢しろなんて誰が言ったんだ?!対人関係は我慢することじゃないだろ!違和感や思考の差で気に入らないことくらい考えるなってことだよ!」「か、考えないでどうしろっていうのよ!?死ぬまでずっとムカつきながら過ごせってこと?!それとも何、アンタは自分の性格はアンタのヘンな能力のせいで直しようがないから、私に配慮してほしいって一方的に決めつけるの!フン、アンタはつくづく傑作品ね…」グレイシアがベイリーフの首を凄まじい勢いで機内の外壁に押さえつける。ベイリーフの意識の中に衝撃と強烈な暗い感情が同時に格納容器の底から沸騰し始め、そのこれまでにない激しい感情が容器の蒸気口(ベント)を突き破りかけた。「…な…お前は…」

「何よその顔?……傑作品て言うのはアンタのその単純さとバカさ加減のこと。アンタって奴はどこまでもポケモンです、て自称してるのよね……」テルルの口調は失望したような悲しみを帯びた。「…それでいいの?自分でフローラを殺しにいってるのよアンタは。私でもユイリィでもブレイブでも使って、多少なりとも手段を考えて生き延びないとアンタはフローラを殺すかその前に死ににいくことに…」

その言葉がリーヒュンの意識と感情という圧力容器をついに突き破った。容器の底から湧き上がり始めていた暗い感情、まっすぐ突き進んできたはずの自分の人生を突如揺るがし始めたこの数か月の苦悩の根源にあるすべてに対するモノが激しい核分裂を起こし、周辺にある大量の水を水蒸気に変え、水蒸気口から蹴破るように飛び

出したエネルギーがテルルに襲い掛かる。彼のツルが無意識のうちに目にもとまらぬ速さで彼女の顔面を突き飛ばし、背後にある手すりに体を叩きつけた。

「うぶっっ！！ぅぅ……」グレイシアの背中が手すりにぶつかる鈍い音、目の前に一瞬崩れ落ちる彼女、彼女の意識から放たれた衝撃と痛みに苦しめられた強風のような感情にベイリーフは我に返った。目の前に広がる彼女の姿を見た瞬間、彼の意識の中では、不意に沸き起こった怒りは制御棒によって瞬時に閉鎖され、それに変わって彼女に対する申し訳なさ、自分のした行為への後悔、嫌悪、自分のコントロールできない能力への恐怖が意識空間の圧力容器を満たす水を黒く染めた。目の前が湧き上がる強烈な感情によって目の前がくらみ、思わず左によろけた。

（……何をした？……俺は何をしたんだ？！）

そんな罪悪感の中でほとんど言葉がでない。こんな状況で浮かんだセリフは…これしかなかった。

「……ごめん…本当に…」リーヒュンは消え入りそうな声を出してテルルに飛び寄り、ツルでへたれ込んだ彼女の体を支えようとする。

「だ、大丈夫だから勝手に掴まないでよ！！」グレイシアはベイリーフのツルと前足を強引に振り払い、前足から体を自分で起こす。激しい痛みの走る背中と尻尾のあたりの痛みより、表情には彼に対する絶望と諦めの入り混じった暗いものが間違いなく彼に示されていた。彼は彼女の意識から発せられる悲しみを含んだ冷たいものに身をすくめ、激しく動揺しながら後に一歩下がる。「い、今のは……何かの間違いだ……ごめんな…本当に悪…」「もう期待しない…

こんな言い方はしたくないけど……アンタと私は分かりあえないよ……」グレイシアの目に熱いものが突如として、訳も分からずに吹き上げてくる。もう怒りではない、強い失望と彼に対する悲しさが彼女の感情を動揺させた。「…もう期待しない…アンタはアンタで勝手にやって…それでいいでしょそれで！」

「おいテルルっ！」リーヒュンがなんとか押しとどめようとするのを振り払ったテルルは、しゃくりあげるような音をのどから漏らしながらカーゴベイ上方の通路を下に降りるタラップへと向けてさっさと歩いて行ってしまった。後に取り残されたのはベイリーフと気まずいほどの静寂、輸送機を飛行させ続けるＧＥ社製の４基のターボファンエンジンの轟音だけ。

あまりの事態に茫然と立ちすくんだベイリーフ。彼が力尽きたように覗き窓のそばに寄りかかった直後、背後から近づく別の意識を感じた。「……だから言ったじゃん、テルルと話すときは気を付けないとって」戸惑ったような表情をするメガニウム、ユイリィ・ランタン・プレミドールがいつの間にかいた。

中央アジアへ（後書き）

しばらくはこの物語を中心に行きます。ポケモン同士の関係書くのに中々時間がかかってしまい……

時々お見苦しい点があるかもしれませんが辛抱ください。

２匹の間に沈黙が続く。ベイリーフの彼にはメガニウムの彼女の意識下にあるとげとげしい物が発する重苦しい空気が痛いほど体にこたえた。そんな彼女の目から発せられるがっかりしたような視線からだろうか、それとも本当に彼女がユイリィ・ランタン・プレミドールとしてリーヒュン・バイリング・グリーズ、彼自身にそういう圧力を意識空間を通じて送り込んでいるのか、分からない。

しかしその答えが後者であることをリーヒュンは数秒後に身をもって知ることになる。つかつかと歩み寄ったユイリィの口調は、彼が予想していた以上にきつかった。「お願いだからテルルと問題を起こすのはやめてよ…ウチ、見てるの正直やだ…」「いやだって言われても……俺にはどうしようもない、彼女は俺たちの能力を異常がってる…そんな気がする」「嫌だからって捨てられないよ！……それに…」メガニウムがベイリーフに数歩分さらに歩み寄る。「リーヒュンもテルルがどう思っているのか分かるよね？そういうとこに自分の能力を使ってほしいのよ……」「意識って……そんな探り合いをして関係を維持するモノかよ？」彼は右前足の爪で通用路の鉄鋼の床をじれったそうに鳴らす。目の前にいる彼女がここまでぐずぐずと話を引きずるように感じるのは初めてだった。「対人関係なんて探り合いでも遠慮でもない、お互いが腹を割って話せるのが親しい関係なんだ！…意識を読み取ってまでそれを維持するくらいだったら距離を置いた方がましだろ！」「じゃあ今すぐテルルと距離を置ける？！この場でテルルを追い出せるの？！」「無理に決まってる！だから腹を割って理解するんだ、ユイリィにだって俺はそうしたよ！だからテルルにだってそう接しようと努力してる！」「その結果うちら全体の関係がおかしくなってるんだよ！」「おかしくなるのは当然だって！俺にだって覚悟はしてる、関係なんてそんなもんだ！それともユイリィはチームが親しくなくてもいいから穏便

に進めば自分の任務はおしまいだなんて甘い考えしてんのか？！」

「そ、そんな訳ないじゃん！リーヒュンを含めてウチは皆が上手くいくように、って考えてみてね、そうだと思って言ってるの！」彼女の問い詰めるように彼に花びらのついた首を近づける。彼女の方が１０センチほど背が高いので、やや彼女の方が威圧しているように見える。「それが事なかれって奴に変わってるんだ！穏便に築いた関係なんて何年たっても表面止まり、俺だってブレイブと何回もつかみ合って、時には危うく死なせかけもしたさ！だからこんな状態でも普段と同じように関われる……」リーヒュンはユイリィの視線から反れるように前足で体を若干左に向ける。「……そういう点では子供の方が純真だな。君なんかと違って…」

「あのさあ！！！」メガ二ウムが思わずベイリーフの首をツルでつかんで機内の壁に叩きつけるように押し付け、後ろ足で立ちがるようにして前足で彼の首元の葉っぱを引き千切らんとばかりに締め上げた。突如として、降ってわいたような不信感が彼女の意識の中で黒い気体となって暴発する。「アンタ何勝手に話の趣旨ずらし始めてるの？！今は理想論じゃなくて今どうするかが大事なの！アンタのしゃしゃりでたお説教は１０００年早いのよ！」彼女の口調は戦闘中に発する暗くドスの効いた凶悪なものになっている。ベイリーフの意識の中に入り込んだそれが、彼の思考と意識を瞬時に凍りつかせた。彼女の意識空間が生み出す凄まじい重力の落ち込みに思わず後ろ足が一歩分下がり、逃げ出したいという本能的恐怖すら覚えた。彼女が戦闘中に発する（または意図的に開放している）それが異常なものであることは、言動や表情からも分かったし意識の流れからもおろぼけながらそんな予感がした。しかしそれが自分に向け

られているとなると話は全く別だ。これが彼女の本性……何かに対する野生の動物の比にならない危険な殺気……なのだろうか、彼の意識の底でそんな重苦しいがはじけたような気がする。

しかし彼はリーヒュンであるからにして、目の前で感情によって掻き立てられた凶暴な本能に我を忘れかけたメガニウムの一番近い（不意に彼はそう思った）友人であり、逃げ出そうともしなかったし意識がそうしたいとも思わなかった。「……ごめん…俺が間違ってた……もうやめろよ、な？」思わず口をついてこの言葉が発せられていた。彼自身が意識下で強く考えたことが思わず（まことに彼らしく）出たのかもしれない、または彼女の感情をこれ以上逆なでしないようにそう言ったのかもしれない。

しかし今の彼にはどちらにも感じられなかった。ただ単に自分の側にも感情的になった非があるのかもしれない。そう思っていた。

「……うぅっ……っ！！！」その言葉にユイリィの夏空色の目が立った今飛び起きたように開かれ、思わずリーヒュンの目を見た。そしてその直後に自分の前足とツルが何をしているのかをたった思い出したように見つめ、その目線が力なく震えはじめる。自分が立ったいま彼にしたことを思い出した。思わず感情に駆られてツルと前足を出したこと、自分とは違う意見をまくしたてる彼に彼女自身がそれを黙らせようとして意識の格納容器内の水が一瞬でも激しい沸騰を起こしたことに対し、たちまちその水の底から凍りつくような冷たい物が吹き上がって容器の水すべてを冷やす。自分自身の対する強烈な嫌悪と情けなさと恐ろしさが足先から寒気となって湧き上がる中、彼女の口からは消え入りそうな声を発した。「……そんな…こんなつもりじゃなかったの…」次の瞬間にユイリィは後ろの飛び退いて前足を降ろしてリーヒュンの首元をツル

で優しく触った。「ホントにごめんね！！今のは違うの、お願い許して！もうしない、絶対にもうしないから！うん……」「俺は…平気だよ…」「ごめんね！もうしない、約束するから！」

「……大丈夫だ……けがはしてない……」彼はわずかに頷くと疲れたように機内の内壁に寄り掛かった。全身の力が抜けていく感覚と体の節々に重りをつけられたような疲弊感に加え、自分の能力の情けなさに体が痛むのを感じる。「……どうすればいい？」「な、…何を？」「どうすれば…他人の気持ちをその場にいなくても読めるようになるんだ？…テルルの誤解を解くには…それしかないんだよな？」「うん…あたしも…そうだよね…」ユイリィも疲れと後悔が入り混じった表情を浮かべ、カーゴベイ側の手すりに首とツルをもたげて目を固く閉じた。リーヒュンと顔が合わせられない、彼の目線から覗くことができる意識の様子を考えるだけで目の前がフラフラと動くような感覚に襲われる。今まで底抜けの陽気さにカモフラージュしてきた本来の意識が彼女自身の弱さと情けなさをあざ笑うようにささやく。その嘲笑に彼女の眼頭が一瞬熱くなりそうになったが、彼女のプライドが必死に涙腺の蛇口を締め上げ、嘲笑を格納容器の水の底に沈めて縊り殺す。誰にも見せるわけにいかない…自分の弱さは自分自身で肩をつけなければならない、そう言い聞かせて意識を目の前の事象を解決する意図繰りを探すことに集中させた。

「……こんなことは言いたくないけど……」彼女は思考の中で声を振り絞るように出した。難しい意識の探索に浸っているだけでなく、自分に対する悲しさと悔しさで打ちのめされたままで普段の調子を保つことなどとてもできない。「……リーヒュンも……あたしと同じくらい…意識を読み取る…訓練をしないとテルルとは上手くいかないと思う…そう思うの…」「……訓練？」「…うん、その場にい

なくてもその子の歩いた場所、関係するものに触れ、見て、聞くだけで相手の感情や現在の心境を…完璧には無理だけど…理解して、自分の性格とは無関係に何をすればいいのかがおおよそ判断できる」

「……俺に必要な…そうだよな…」「…ただ…」ユイリィの声はさらに沈んだものになった。「…それには何年も何十年もかかるらしいし…努力して結局身に付かない可能性もあるんだって……書物にそう書いてあるってサクラさん、いうんだけど…その本…偉そうに予見してるくせに不確実なことまで書いてあるなんてね…」

「やるよ…今すぐでも…」リーヒュンが振り返って手すり側に歩み寄った。ユイリィは首を振る。「大変すぎるよ…リーヒュンは頑張って精一杯なのに……これ以上やれなんてウチ言えないよ」メガニウムは目を開けて振り返り、ベイリーフの右前足に左前脚を重ねる。

「……うん……あたしそれに関してはもう少し考える……だからリーヒュンも、テルルの事は…気を付けて……」「うん……」「それだけ…うん」

彼女はそっとカーゴベイへと降りる階段へと歩きはじめる。その途中、立ちすくんだままのベイリーフを振り返り、無理やり作った消えそうな悲しげな笑みを浮かべた。「あと……うちらは…違う生き物だから…考えが違って当たり前。……あたしの事は……無理に付き合わなくていいよ、うん。……ウチは一人ぼっちにも慣れてるから…大丈夫」「ユイリィ……」

通路に取り残されたベイリーフ一匹。直後に機体が上下に大きく揺れたが、彼はいつの間にかツルを手すりに巻きつけて掴んでいたお陰で振り飛ばされるのは免れていた。衝撃に気が付いたときにはツルを手すりに巻いていたのだ。

「能力……俺は…一体なんのために……」彼は頭の虫食い葉っぱの付け根辺りを手すりの冷たい金属に押し付けて目を閉じ、思わず右のツルを頭を抱えるようにあてる。確かに自分の能力は発言しつ

つあるのかもしれない、しかし自分の能力が本当に役立っているのか？フローラの為だと信じてきたが、それ時ｓんと、それに関係する自分の感情すらコントロールしなければならない…自分能力はほかの周囲にも負担をかけるだけではないのか？

　中継点であるイギリスのロンドン・ヒースロー空港に向かって飛行を続ける統合軍の輸送機Ｃ－１７のターボファンエンジン音だけが機内鈍く響く。今まで感じていた飛行に対する違和感や聴力器官の痛みに替わって、先ほど起こった出来事、自分の能力のあり方に対する深い混迷に自分の思考が沈んでゆくのを感じた……

２０１３年　１月１１日　　シンガポール港　　１８００時

入港から1時間が経過した。ここで大型輸送船に積まれたコンテナの一部が見上げるような大きさの忙しく動き回るコンテナクレーンによって吊り上げられ、東・東南アジア地域最大規模の港湾にふさわしい一面に広がるコンテナヤードに一角に運び込まれ、一部はコンテナクレーンの下にいるドイツ・メルセデス・ベンツ社のアクトロス・トレーラー、スウェーデン・ボルボグループ傘下の米マック・トラック社の長距離用トラックなどの輸送車両に積み込まれていく。岸壁に並ぶあまたのクレーン、そこに精白する世界各国の大型船、夕闇に染まる都市国家であるシンガポール市内でも格別壮大な光の大河を作り出すコンテナヤードや積み下ろし関連施設の作業灯、その合間を行きかう無数のトレーラー車両、やや遠方には大型クルー

ズ客船の停泊する旅客ターミナルがライトアップされ後方に森のようにそびえる市街地と共に幻想的な光を発している。

ただし、そんな人類文明の象徴ともいえる構造物と動き回る機械の美しさに浸っている余裕があるとは限らない。フランスの海運会社のこのコンテナ船舶に潜入した韓国国家安全保障局（ＮＳＳ）の男はコンテナ船から岸壁につながるラッタルを走りこんでの背後に飛び込み、コンテナヤードの背後から迫る２人組の様子を窺った。２人組の気配、それが何者であるかは男の直感がすでに判断している。それぞれ黒とブラウンのジャケットを羽織り、藍色と濃紺のジーンズをはき、どちらも黒の帽子を深々とかぶる。タラップの脇にいる彼はすぐにハンドフリーに切り替えた携帯情報端末の受話器に口をつけた。「北韓（ブッカン）の連中がきやがった、目標（オブジェクト）は２」「船舶に入る前に片付けちゃって」答えたのはＮＳＳ本部の女。「了解」男は腰に巻いてあるホルスターの拳銃を抜き取り、サイレンサーを装着した。アメリカのＣＩＡ諜報局員やイギリスの諜報機関ＭＩ６が“殺しのライセンス”があるのと同様、ＮＳＳでも必要な戦闘における殺傷は許可されているが、あらかさまに射殺すると騒ぎが大きくなる。サイレンサーはそれを防ぐためにあるのだ。

藍色のジーンズの男がコンテナの脇に入り濃紺のジーンズの方の男がタラップへと向かってくる。迫ってくる男の方をまず止める、ＮＳＳの彼は息を殺して迫ってくるのを待った。しかしまあ、周囲に人間がもう少しいればいいのに、そう思った。広大な港湾であるが故に大勢の作業員や警備員がいるのは事実だが、情報によれば３つ奥のコンテナベースに、アメリカの海運会社が運んできた米国政府からのＡＳＥＡＮ（東南アジア諸国連合）への重要物資の積み下ろしがあるらしく、このあたりの大半の関係者や警備員がその船舶の周囲に入っていた。コンテナクレーンはマイアミ、サンフランシスコ、マンチェスター、ハンブルク、上海、広州、仁川、シドニー等の世界主要港湾と同様、港湾管理施設のコントロール・ルームからのオートフォーメーション化されている。

男がタラップに足をかけた直後、ＮＳＳの彼はその男に飛び掛かって足を払い、後ろに突き倒す。コンテナの後ろにいたもう一人が発砲、もみ合う２人の背後タラップの手すりに当たって火花と共に弾かれた。迷わずＮＳＳの男はイタリア・ベレッタ社のサイレンサー付き拳銃Ｍ９２Ｅｌｉｔｅ Ａを発砲、音速をはるかにこえる鉛の弾頭は空気の入った麻袋を踏みつぶしたような鈍い音共に銃身を飛び出し、コンテナの背後にいた男の胸をぶち抜く。男は衝撃で後ろにのけぞりながら、足元から崩れ落ちるようにその場で倒れ死亡した。だが、そのすきをついてもう一人の男がＮＳＳの男の脇腹を蹴り、タラップの脇に岸壁とコンテナ船の隙間から蹴落とそうとして無様にしりもちをつかせた。その隙にＮＳＳの彼のポケットから携帯端末が転げ落ち、弾んでコンテナ船脇の海に降ちる。それに気づかぬまま男は体勢を建て直し、旧ソ連製のマカロフＰＭ拳銃を構える工作員の右手を締め上げる。その隙に放たれた一発がＮＳＳの男のこめかみをかすめ、コンテナ船の腹で極小さな煙を上げた。２人が拳銃を取りあうようにもみ合いながら背後の道路にじりじりと後退していく直後、２人の横から韓国・ヒュンダイ製トラゴ・大型トレーラーが近づいているのにお互いが気付く。「っ！！」トレーラーを運転するマレー系の男がいきなり至近距離で進路に飛び出してきた２人を避けるべく左に急ハンドルを切ったが、その右端が飛び退くのが一瞬遅れた北朝鮮の男と後ろから走ってきたブースターを突き飛ばし、バランスを失ったトレーラーはそのまま左わきのコンテナに突っ込む。工作員の男は背中から地面に叩きつけられた。

「……ったく……くそ…」飛び退いた結果左半身をアスファルトに強打したＮＳＳの男は痛みの中で何とか体を起こし、吹き飛ばされた工作員の男に近づいて抱きかかえた。顔立ちは間違いない、この男の予想通り自分と同じ朝鮮系だった。「アンタの身元を証明するものは？」「……俺の身元ではないが…これを見れば貴様にも分かるだろうよ…」ぐったりした彼はジャケットのポケットから何か

を引っ張り出して地面に放り投げた。「……金日成（キム・イルソン）バッジ……やっぱり北か……」「だが…俺は違うぞ……北朝鮮将軍同志の当局ではない…中国の連中の指示だ……」

「アンタららしからぬ行動だな。当局以外の要請で動くとは…」「き、貴様っ…南の反逆者どもが…」工作員の脅すような口調に、負けじと男はベレッタM92の銃身を工作員の鼻元に突きつけ、あざけったような声を上げた。「アンタは今のところ俺の捕虜だ。痛いマネはしないから俺の機嫌がいいうちに言うんだな…で、それは…中国政府か？……それとも企業か？」「どちらでもない…政府の水面下の存在している組織だ……」工作員は喘ぐように言った。

「…何だそれは？おいっ！！」「…我らが知っているわけないだろう……その原子力機器は…わが領土に作る物では本来ない…中国に……輸出する算段だった……」「……バカな……中国に売り飛ばして外貨を稼ぐつもりだったのか……」男は衝撃を受けた。奪い返しに来るのは北朝鮮ではないのか？！しかしいったい中国が何を？

「もう一つ…ある…中国は……国連の何かしらとやらをすでに嗅ぎ付けている……」工作員はさらに続ける。「……奴らは既に…国連とは別にアメリカの企業と手を組んで…ポケモンとやらに……核兵器を絡めようとしている……その企業というのが…国連に関与した結果得たものを…中国やロシアの企業に売りつけた…中国は…それを…高値で買い……その見返りとして…アメリカの持つ生物兵器技術の一部を…受け取っている……おそらくは…国連に対する影響力を無理矢理でも拡張するためだ…その計画で…発言力を拡大するために……俺の後ろにいた奴も…そうだ…」

ＮＳＳの男は少し離れた場所に転がるブースターだった肉片の塊を見つめた。タイヤに踏みつぶされたその体はもはや顔も胴体も分からないほどに潰れ、原形をとどめていない。「…さっき跳ねられて死んだ奴のことか？……ペラペラしゃべりやがって…何だそれは？」「ハルシア…ちっ…忘れるな……国連が何をしているのかは知らんが……既に国際社会のバランスを変え始めた…国連が手

を打ち損ねたら…中国は…暴走するぞ…」

「量産ポケモンと兵器……ＧＢＴＸが…何を……」男が工作員の方を再度振り返った時、彼は既に意識を失っていた。頭から出血しているが、首元の脈はしっかりしている。おそらくはさっきトレーラーにはねられた際に頭を打ったのだろう。トレーラーがもともと低速だったのが幸いで、もう少し早かったらこの男は即死だっただに違いない。

気絶している彼を道のわきに下ろした男は道に転がったままの肉片の近くによって、吐き気をこらえながらそれを見た。彼は生命工学専門ではない、それにポケモンのクローンでは構成する大半の細胞や臓器を細胞から作成するため、外見や回復だけでは人造かどうかはほとんど見分けがつかないうえ、一部埋め込まれている機械も小型で素人で見分けがつくものではない。これがアメリカのＧＢＴＸ社、中国、国連、そしてコンテナ船で輸送する原発用機器をどのように繋げているのか？……

周囲からバタバタと走ってくる音がする。ＮＳＳ（韓国国家安全保障局）の男が周囲を振り返ると、港湾関係者や港湾の警備員、地元の警察官が周囲を取り囲むように走ってきた。大型コンテナ船のすぐわきには警察用の小型船も接近している。どうやら工作員たちの発砲音をまともに聞いたらしい。しかし潜入・工作が専門の彼には、このように疑われること等はよくある事態であり大きく取り乱しもしなかった。警察官の部隊長らしき男が拳銃を構え、ピジン英語で声をかけてきた。「貴様、そこで何をした？」

「正当防衛です……自分がここにいたらいきなり撃ってきまして……」男は落ち着いてコンテナヤードの脇に転がる死体と拳銃を指差す。「それともう一人はもみあいになった末にそこのトレーラーにぶつかっただけですよ。幸い自分はこの通りけがはない。まあ、こ

の人は脳震盪でも起こして気絶しているだけのようですが、病院に連れて行ってやってください……」そう言いながらポケットをまさぐった時、彼は初めて携帯端末を落としたことに気付き、コンテナ船の胴体と船舶へのラッタルがかかる海を見てため息をついた。まあ衛星回線のＮＳＳ本部直通無線機も持っているから問題はないが……

２０１３年　１月１２日　アメリカ　シアトルのＧＢＴＸ本社　１２５０時

「これが…本当に？」「そう、これを今回組み込むわよ。あとはそのための知能プログラムの変更。これからプログラムの最終調整をするから、いい？」「は、はい…」本社オフィスタワーと本社研究棟を地下３階で結ぶ広いフロアの一角、複数の情報端末がついた無数の化学実験用ドラフター装置のような機器とそれを貫く円柱状の容器が列をなして並ぶ場所の一つのドラフター装置の前でＧＢＴＸ技術部長の女と副部長の男が、腐食防止用の液体に満たされた円筒状容器の中にある、無数の配線につながれた奇妙な形状をした握りこぶし大の金属の部品を眺める。来週予定されている“量産兵士高性能試験型”への横隔膜自立制御装置の装着手術を控え、装置の最終稼働試験とプログラム調整を行うのだ。

「稼働開始、まずは横隔膜の収縮動作、いける？」「はい、問題ありません」技術部長の指示と共に、後ろから見てドラフター装置の様なものの右側に座る女がキーボードを叩きながら前方のディスプレイの数値を確認する。「プログラム動作も正常です。エラーや異常処理ありません」女の隣に座る男が目の前にある情報端末のディスプレイに表示された動作プログラムのグラフィックデータを読む。

「うん、次は横隔膜の解放、やって」再び技術部長が指示を出す。だが先ほどの動作と違い、ほんの一瞬ではあるが動作に引っかかる

ようなつまづきが入った。

「動作自体は正常に完了しています」コンソールの前に座る女が何回かキーを叩いて数値を眺めた。「プログラムの方にも誤動作はありません。正常に処理されています」隣の男もデータを見ながら言いきった。「うーん?…前から時々引っかかるのよね……」

「部長、横隔膜解放時の圧力もごくわずかですが残っています。試験体に組み込むと、可能性は低いですが水中動作で誤って水を飲み込む恐れがありますね…」副部長がタブレット端末をもって部長に歩み寄り、端末上のリードアウトを見せる。「そう…困ったわね…来週なのよ装着は…」技術部長はドラフターに近寄り、右手をコンソール上について中の機械を見た。テスト用の機器にも機械のプログラムにも異状はないとすれば、構造の方に何かしらの不具合があることになる。生物に埋め込む機械だから1ミクロンのずれや１００分の1秒の誤差もその生物の動作不良、ひいては死を意味する。しかし、構造上の不具合を発見し半導体回路以上に精密な部品を交換するには数日はかかるうえ、いったん部品をばらしてしまうと組み立てによって生まれた誤差をリカバリーするプログラムの見直しと調整を再度行わなければならない。

「…プログラムの修正なら2，3時間で何とかできると思います」プログラム担当の男が声を上げる。「なるほどな…〇〇〇、できるか?」「はい、任せてください」

「それが一番早いわね…分かった、頼むわよ」「はい」部長の許可と共に男が情報端末のキーボードを打ち始める。これは自立ロボットや工作機械の制御プラグラムと何の変わりもない標準的なものだ。

「国連の方は…わが社にこれを期待して発注しているのでしょうか?」技術部副部長の男がふと呟く。「え?どういう事?」「ええ、…つまり、わが社は生命倫理という観点で議論が多く、なおかつ文明生物と権利と言う難しい問題も含有するポケモンと言う製品を利

潤の追求という経済学そのままの企業の活動目的にして生産・販売しています。これまで量産兵士の投入に慎重だった統合軍と国連上層が何を考えているのかは分かりませんが…部長も何か違和感を覚えませんか？国連の大量発注に」

「そうね、今までにない大量発注だから……」技術部長は右手をあごの下に当てながらゆっくりと数歩歩いた。自分がしていること、それを改めて考えてみると確かに周囲に並ぶ配線でつながれた液体入りの円柱容器が、生物の部品という極めて無慈悲な製品を作り出す残酷な暗さと重さを薄暗い部屋のに放っているようだ。彼女も時々それに関しては思い悩むことがある。自分のやっていることは殺人や虐待と同じではないか、と。しかし彼女には、その度にその迷いを打ち払わせてくれることがある。それは今すぐには言い表せるものではないが、それにかける思いがこの企業に彼女が勤め続けることを支えてくれる大きな力になっている。「……大丈夫よ、今まで私たちがやってきたように自分の務めを果たせば。それが人類の生命工学の進歩に貢献する。そう信じるわ」「……そうですよね…」

むしろ、それよりも気になるのは社長が進めようとしている中国やインドへの本格進出だ。おりしも国連の計画がわが社の製品で進展している今、うかつに商品を販売し情報が漏れだすようであれば、国連や国家を揺るがすきわめて厄介な事態になる。

「……まあ、その不安よりは社長に対する懸念の方が先ね。あの人中国で大量販売しようなんて何を言ってるのかしら？……」

２０１３年　１月１１日　アメリカ　アラスカ州　アンカレッジ
１６３０時

アメリカ最北端の州であるアラスカ州で最大の都市であるアンカ

レッジ。人間人口は３２万人でアリューシャン列島海域の天然ガス・原油、海底金属資源の採掘船の拠点として、古くからの漁業や林業、現在では養殖漁業研究センターや世界森林環境再生機構といった新国連（ＮＵＮ）所属の機関や民間研究企業も進出する高緯度地方の農業・自然開発業拠点の一つとして知られる同市。近年は所得税や消費税の免除によって、欧米のを中心にハイテク機械や電子機器などの企業がアジアの工業国との競争力強化のために進出、さらにこれをモデルとした企業や投資の研究企業も続々と参入し、ハワイ沖に国連のメガフロートが建設されると、太平洋送電網の一翼としてメガフロート住民向け商品の物流・生産の拠点の一つとしてもさらに重要性をましている。また、ヨーロッパ各地から北極回りで南北アメリカへと向かう貨物航空路に加え、近年はハワイ沖メガフロート群から北極経由でヨーロッパへ向かう貨物航空路の中継点としても重要な場所となっている。また、ＮＵＮの地球高速道路・鉄道網整備委員会の指導の下、アラスカからロシア連邦・極東連邦管区へと接続され、マガダン州などを経由して中国・北京へと向かうハイウェイが現在建造中であり、１５年以上先の話になるが完成すればユーラシアと南北アメリカ大陸が高速道路で結ばれることになる。無論、郊外には国連統合軍前線総司令部であるエルメンドルフ基地が存在することも忘れてはならない。

　アメリカ北部でも最大の空港であるテッド・スティーブンス・アンカレッジ空港は、この冬の寒気に伴う豪雪と基準寸前の強風より視界は最悪だ。しかしそんな状況下でも計器誘導航法（ＩＬＳ）を利用して中国国際貨物航空のＢ－７４７Ｆが着陸するのに続き、アラスカ航空が運用するフランス・エアバス社製のＡ－３２０－３００がランディング、左右翼に１基ずつ装備されたロールスロイス・カレント７００ターボファンエンジンを逆噴射して減速する。１９７０年代前後はヨーロッパから南北アメリカへと向かう旅客機の多くはアンカレッジを経由したものだが、近年の旅客機の航続距離が急激に増したことから経由利用は貨物機中心となり、現在ヨーロッ

パからアラスカに向かうにはソウルや北京からアジアの航空会社を利用するか、ホノルルやシアトルからアラスカ航空を利用する方法しかない。ある意味で不便になったと言えばその通りだが。

ＥＵの外交・安全保障を担当する欧州対外行動局の関係者であるフランス人の男もフランスのシャルル・ドゴール空港からエールフランスのＢ－７７７－３００でシアトル・タコマ空港に入り（ニューヨーク・ＪＦＫ空港にはＡ－３８０が運用されているが、シアトルには運用されていない）、アラスカ航空に乗り換えてここに来たのだ。

通関手続きを済まして到着ロビーを指定された場所に出ると、「お待ちしておりました〇〇〇さん」と担当者らしき女が握手を求めてきた。「国連統合軍前線司令部の×××指令の方だね？」「はい、到着を伝えしますので少々お待ちください」女はフィンランド・ノキア社の携帯情報端末で何やら一言・二言と連絡を入れると、男の方に振り向く。「統合軍司令部まで車でご案内いたします。どうぞこちらへ」「分かった」

空港の自動ドアが開いた瞬間、体を突き刺すような寒さが2人を襲い、男は思わず顔をしかめた。２人は空港のタクシー乗り場の前へと歩いてゆく、高緯度地方にもかかわらず、企業誘致と太平洋上のメガフロート建築により人口が増加しつつあるアンカレッジ市。遠くには高層ビルや高層住宅が少なからず確認でき、空港前のバスターミナルや駐車場の大きさと人通りからしてもそれなりの市街地域あることが確認できる。歩く歩道沿いには空港の警備員とは明らかに異なる警備関係者らしき男たちが並び、こちらを気にしている。どうやらこの男の訪問で警備にあたる国連統合軍の関係者のようだ。

２人は数人の人間と州警察の男が立つアウディ・Ａ６の前にやっ

てくる。真っ先に握手を求めてきたのがこの男にも見識がある国連安全保障理事会のアフリカ系の人間だった。「ようこそお待ちしておりました○○○さん。はるばるフランスからお越しいただき光栄です」「いえいえ、公用と言うより私自身の希望で視察に訪れたようなものですよ」「どうぞお乗りください、荷物をお預かりします」別の関係者と思われる男が荷物をトランクに収める間にフランスから来た男は車に乗り込む。運転するのはどうやら案内してくれた女のようだ。

２人の警備を担当すると思われる先ほどの男は助手席に乗り込み、アウディＡ６は２台のアラスカ州警察の車両を先頭にアンカレッジ市街を高速道路へと走る。吹雪に近くなっている市街地の歩道を眺めようにも窓ガラスはとっくに結露している。男はわずかに手で窓ガラスを吹居て外を覗くが、ビルが立ち並ぶ大通りは人通りばかりでなく自動車の行き来も多くなかった。「夕方の帰宅時間帯なのに人通りも自動車も少ないですね…普段からこんな感じですか？」「いえ、まあ普段でもアメリカの他の地域と比べれば冬のこの時期は帰宅時間も早いんですけどね…しかし今年はこのように豪雪のせいで出歩くこと自体が少なくなっているようで…」「なるほど…インフラや通信の方は……」フランス人の男がちらりと窓の外の市街灯を見つめる。すでに暗くなっているせいもあってか、市街灯も左右の市街地の照明も既に全点灯していた。

「今のところは大丈夫です。水道、電気、ガスはもともと寒冷な気候に合わせてありますし、情報通信網も問題はありません。ただ…物流の方にはさすがに影響が出てまして…」「特に航空輸送、ですか…」「ええ、カナダからの高速道路や港湾の資源採掘船にも影響は出ていまして、スーパーなどの商品やガソリン・灯油には一部品薄が出ているみたいです……」国連の男は肩をすくめる。

「そうですか……北ヨーロッパでも豪雪による停電に伴う工業生産

停滞や物流障害が発生しているようで…南半球は酷暑で…やはり温暖化が出ているようですね?」「そのようで…それで、今回の国連軍中央アジア方面への派遣ですが…」国連軍関係者がアメリカ・アップル社のタブレット端末を起動させてＥＵ対外行動局関係者に見せる。「ご存じのように、中央アジア・東ヨーロッパ東部地域に残存するポケモン達の中東方面への流出は中東方面の我々の社会における治安悪化に少なからず関わっています。流れ込んだ彼らは武装組織にとっては自爆テロの実行犯に仕立て上げる格好のエサですからね。ロシアをはじめとする東欧諸国が消極的な弾圧政策しかとらないので一向に数が減らないにもかかわらず囲い込もうともせずに…おっと語弊を招くようですいません、ＥＵに加盟している東欧地域は既定の隔離・セキュリティー政策を実行しているんでしたね…」「ええ…その結果ヨーロッパ主要都市のポケモン人口密度は世界平均の5分の1に押さえ、ポケモンに関連する犯罪発生率も極めて少なくすることができました。もっとも、このところの財政や経済に対する人間のデモや暴動はいかんともしがたいのですが…」苦笑を浮かべるＥＵの男だったが、タブレット端末にすっと指を伸ばすとともに表情を引き締める。「それで…今回の宇宙船カプセルの捜索を名目に、もっとも彼らが多いカザフスタンとその周辺を掃討すると…」

「簡単に言えばそういう事です……上手くいけば中央アジア地域の彼らの文明を半壊させることが。地球軌道上から例の軌道プラットフォーム船を投入します…前回の数倍の出力で…」「……やはり投入…ですか……この前のドイツの場合は若干パニックになりかけましたからね…ＥＵ本部の方もいまだに原因の本質を掴みかねているようです…」フランスの男はタブレット型端末上の中央アジアの衛星地図に表示された赤い円を覗き込みながら声のトーンを落とした。今回の掃討に巻き込まれるポケモン達の大半は一般的な居住や開発地帯から離れた大地や草原に暮らしている。おそらくは人知れぬ間に、生態系から独立しているので自然にも省みられず“消滅”する

のだろう。まあ、死体をあさる動物たちにとっては絶好の晩さん会だろうが…

「国連上層部へのご協力に感謝します。この計画が失敗すれば、国連はおろか加担したすべての国家が市民やマスコミという十字架に磔（はりつけ）です。そのために…ＥＵ対外行動局の上層部を中心に計画に参入していただいているという訳です」国連関係者のアフリカ系の男が静かに・鋭く言った。「ええ、存じております。アメリカ外務省の●●氏とも会談の場を設けていただいたようで…Ｇ７やＧ２０では対立ばかりになっていますが…ＮＡＴＯもＧ７も通さない会談とは…少々緊張しますなあ…」「はい。しかしいずれのうちには中東問題、経済・財政問題、エネルギー問題、エメリア開発問題、一切それらとは独立した極秘の会議が誕生するでしょう…今日がその一歩目…」国連関係者の男が頷く。国連が行っている計画のこの最終ステップは実行だけではない、基本的に“自由”にゆだねられている経済、報道、市民活動、市場から国家や国家共同体の主権・政治や国家間の領土・エネルギー・経済問題、外交問題、国家や民族間での武力紛争といった大規模かつ国際的な問題・対立まで、地球、地球上空の宇宙空間、月面、海洋にまで至るすべての人類の状態と自然環境を“通常通り”のまま、場合によっては多少こじらせてでも進める必要がある。かつて国連総会が採択し、新国連が理念を憲章として掲げた“地球平和”と“地球環境保全”を達成するための壮大な計画を達成させ、地球の人類市民に全貌を明らかにできるはるか未来のために行われる大目標に対する小目標、しかし小目標の中でも最も重大かつ困難なひとつを乗り越えなければならない。

せめてもの慰めは、そのために伴う痛みを味合うものが人間でも自然でもないだけだ……

そんな彼の姿を見ながらＥＵ対外行動局の男は心の中でため息をついた。アメリカとＥＵの上層部や自分を含めた対外行動局の一部が、すでに国連の始めた“超極秘計画”に参加していることは知っていた。自分もこうしてその一環で来ているのだが、それでもなお国連代表周辺が意図する計画の本質は理解できない。おそらくはこの男が言っているようにポケモンの数を減らすだけではないだろう。彼が来たのはその実態を調べるため、国連の動きを調査し、ドイツ、フランス、ベルギー、イタリア等のＥＵ主要国でその真相を探り行動できる可能性を見るためだ。

（……やはりＥＵも…ドイツやフランスのような主要国だけでも…この際なら同盟国内での財政支援とユーロ為替相場を巡る対立は別にして…この一件に対して探りを入れつつ、政府の行動を決定する必要があるか……確実にあるな…）

２０１３年　１月１２日　カザフスタン　アクタウから東に１００キロ　０４２０時

何もかもが凍りついてしまいそうなほど気温が下がったカザフスタン。本来この地域は草原や乾燥した台地が中心で大きな森は少ない、それがゆえにこの地域にとっては異常な量ともいえる大量に降り積もった粉雪が荒涼とした風景を一層際立てていた。この辺りは、冬の気温は低くても本来積雪は年間数センチあれば多いほうであり、ましてや銀世界になるほど積もることはこの数世紀なかったことだ。やはり偏西風の蛇行がこの数年間で最も顕著になった今年の異常な寒波をもたらしたのだろう。

一行がイギリス・ロンドンを通ってカザフスタンで最大、かつ中

央アジア地域で最大の都市であるアルマトイ市のアルマトイ国際空港経由でアクタウに入れたのは結局１１日の１５００時だった。アルマトイ国際空港は中央アジアとだけあって民間航空機は東ヨーロッパからきたＡ－３２０以外はツポレフ社のＴＵ－２０４等のロシア製のジェット機やターボプロップ機ばかりで、ボーイング社の機体など全くいない。このような住み分けも米ソ冷戦に残像といえるだろう。そこからは国連統合陸軍の宇宙船捜索への増援部隊の車列と共に、国連がチャーターし、カーテンを完全に閉鎖して外部からの目をシャットアウトした中古のドイツ・メルセデス・ベンツ製の大型観光バスでアクタウへと向かう。

その車内では旧１７６１突撃部隊とチビ２匹（すなわちロズリンとミオカ）の連中は後方の座席周囲で悪ふざけに興じ、ロックオンがグラシデアに相変わらずぺたぺたし（ピトムニクとチェギョンがグラシデアの隣で調子に乗るのでバストークはますます気に入らなかった）、バストーク自身は隊長としてサクラと国連軍の連中とで行動予定を確認していた。

そして…ブレイブが寒さで曇った窓の外の景色をテルルをそばで見守り……

残りの２匹は……何か移動だけで疲れたらしく、左右の２列座席を使って眠りに落ちていた。

このところの４匹は何かが変わった、バストーク・ホルストらし

くもう気づいている。もう1週間も前だったか、テルルが手紙をもらいブレイブが様子を見に行ったこと……あれ前後から18歳～21歳の4匹組の中で何かでもめたのだろう。気になることには気になるが、このメリープはグラシデアを育てた経験からして自分が口を突っ込むことでもないだろうと思っていた。同世代の中で起こった問題は自分たちで解決するのが最善（ベスト）だ、それにあの年頃はもめごとが多い、そういったトラブルの一つ一つがその後の人生を支える大きな糧になるから。「ブレイブたち……大丈夫なのかなあ？」「心配すんな、人生の経験のうちだぜあれは。色々とぶつかりあう事も友人だ」「…そう、ですよね…私はそういうの経験したことがなくて……」不安そうに寄ってきたピトムニクをバストークは左前脚で背中を優しく不器用にたたいた。メリープは信じている、あの4匹だからこそああやっていさかいを起こし、乗り越えてお互いを通い合わせていく、その過程に経験者が口を突っ込むべきではない。まあわが子は別だ、（彼は娘のグラシデアの方をちらっと見た）あいつをあんな色男に渡しはしない。

ピトムニクはそっとグラシデアの方に戻る。バストークがそうやって言うのなら心配はない、そう信じたかった。このプラスル自身は、オセアニアのフランス領ニューカレドニアと周囲の諸島にすむポケモン達の中でも知られる富裕層のマルセイエーズ家の中で家族と周囲の友人たちとぬくぬく生まれ育ったために、同世代間での衝突など経験したことがない。しかしそこまで注意深く気を配り、心配できる点はまことにピトムニク・ソレイユ・マルセイエーズらしいところだ。

さて、現地時間　12日午前4時はまだ真っ暗である。到着以後も存在を隠すように車両の中に閉じ込められっぱなしだった一行も寝ている所をたたき起こされる。通常の保護用防弾装備に加えて首

元など特に冷えがきやすい場所には防寒装備をさせられ、凍傷防止用・雪原移動用に４本足や手には寒冷地帯で探検隊や救助隊が使用するものと同様の太いツタで編んだ保護靴―（すなわち“かんじき”である）を装着させられた。

「や、やばい位寒い……葉っぱが凍りつく、か。…また突拍子もないところに来たなあ…」「へへっ、やっぱくさタイプの兄貴にゃ厳しい環境か？俺にとっちゃ何とも……ってやべえ寒いぞ！」リーヒュンに続いて降りようとしたレオがあまりの寒さに全身のくすんだ水色の毛を逆立てる。「やべえ…やっぱ無理だ俺……そうだ、手があったか！」コリンクはバスのステップを（無論左ハンドル）数歩駆け戻り、シンシアを引きずって外に出る。「きたぜ、この暖かさ！！！グリソム、ガトル、飛び付け飛び付け！」「な、何言ってんのよアンタ……尻尾触ったら勝手にじんつうりきでるからね！」「構いやしねえさ！俺の求めるのはお前の温かいお腹！うひょえいっ！」レオだけがテンションが高い、シンシアの白い毛のお腹もとに（かつて中国では高級着の原料としても珍重された狐の毛並そっくりである）自分のはねっ毛のあるほっぺをなすりつける。「おいらはみずタイプだから何とかするよ……」グリソムは頬にあるオレンジ色の器官を寒さでぴくぴくさせながらもこらえる。「さ、寒気いけどさ…私そんな子供の甘えはしないわよ！ね、グリソム！」ガトルも寒さに震えながらもコリンクを見てミズゴロウにくっつく。「おいおいあのなあ…レオは５歳児かよ？」リーヒュンは呆れたようにツルでロコンとコリンクを引き離した。「シンシアをあんまり困らせるなよ」「困らせるわけないだろうが！俺とシンシアはそういう仲だぜ、な？」「全く…あてになるかどうか…」レオがまたしてもシンシアの背中に飛び乗ろうとしたのでベイリーフがツルでロコンを抱き上げる。「シンシア、無茶せずやれよ。あと…レオがうるさかったらチャンとガトルにでもスカイラブにでも、な？」「あ…はい。大丈夫です」ロコンははっきりと頷いた。その目線は依然と比べて安定し、はっきりしたものになり始めていた。

「それにしても……寒い…やばいだろ…」リーヒュンは思わず首の葉っぱをこすった。

周囲は一面の白銀世界、わずかに丘上になっている周囲に人間の村らしき建物と明かりがぽつぽつと見える。向こう側へと続く道路と数えるほどの道路灯、次の市街地の距離を知らせる看板標識しかない。国連がチャーターしたバスは道路のわきに停車いるが、そこからはるか大地に向けても兵士らしき人間や統合軍のものと思わしき装甲車が点々と停止しており、ちょうど建物らしきものが見える明かりの周囲には相当数の部隊がいるようだ。どうやら捜索範囲はこの丘の向こうの方向一帯らしい。道路の反対車線を自動車のヘッドライトが（アメリカ・フォードモータースのピックアップ車）が一台通り抜けたが、以降人はおろか車も通らない。人間といえばポケモン達の間に流れるまことしやかな噂やここに来て見聞きしたことからさっするに世界の隅々まで開発して暮らしているものと思ったのだが、意外にもこういった全く開発されていない地域もあるんだなと彼は思った。ただ、動物もポケモンもいないことを考えれば、自然環境の問題からして生物自体が暮らしづらい場所なのだろう。しかしそれにしてもベイリーフ種族の彼には寒さが身に堪える。ひっきりなしに降る雪によって、既に頭の葉っぱや首元の葉っぱにも積もりだしている。おそらく捜索は一日単位で行うのだろうが、その一日さえ身がもつのか不安だ。

「ね、ねえねえ……」後ろから歩いてくる誰かに気付き、リーヒュンはとっさに振り替える。ユイリィがそっと近づいていた。「ん、どうした？」思わず彼は身構えてしまった。数日前の人間の輸送機内での出来事が意識の中の水面に再び波を打つ。しかし、彼女の目線にはこの前のような疑念の渦は無いようだった。「やっぱ寒いね……雪が多い時点でこんなもんだろうと覚悟はしてたけど……」「うん……でも何とかはなりそうだ…」「そう言い切っちゃうところ

がリーヒュンらしくていいけどね。でも……寒いのってじわじわ体力に響くからさあ……」「……そう言われるとな…俺自身なくすよ」2匹の会話はお互いを探るような口調だった。あの時の事を考えれば勘が鋭いユイリィと言えどやはり遠慮や伺いがでてしまうのだろう。そんな調子を打破すべくメガニウムが自分の首に巻いた細長いマフラーの片方を取った。「大丈夫大丈夫、これ付ければ一番冷えるとこがだいぶ良くなると思うよ。うちらは首が長いからさあ、ほんとすぐに寒くなってくるのよね…」「え？……本当にいいのか？ユイリィの方が寒くないのかよ？…女の子が体を冷やすのはあんまりよくないだろ？」リーヒュンはツルで受け取りながらそれに視線を落とす。ほかの皆は結構私物を持ち込んでいるようだ。それにしても自分はほぼ身一つでやってきてしまった、

ツル先からマフラーに残る彼女の温もりを感じた。なんだか申し訳ない、あの時も自分のせいで迷惑をかけたのにまたしてもこうやって……

ユイリィはそんな彼の目線から彼の感情を見抜いたらしく、久しぶりに笑顔を浮かべた。「大丈夫だよ！念のため2つ持ってきたら役に立ったって感じかな、うん。さすがに2つ巻いてると暑いし首を動かしづらいんだよね。リーヒュンはソーラにしかいなかったからおそらく準備はしてこないなって思って…」

「そっか……ありがとうユイリィ……」彼は少々恥ずかしいながらツルを使って首の葉巻のような葉っぱの近くにマフラーを巻きつける。

不満げなのは彼女の頭の上にいるシェイミだ。「ミーも…くさタイプなんでしゅけど。配慮もなしでしゅか？」「あなたは文句言わないの！あたしの体温で十分じゃないの？」メガニウムが小さな弟をしかるように目線を頭の上にあげる。ロズリンはさらに言葉を続けた。「草は背中にあるんでしゅよ。小さい子の温め方も知らないな

んてダメでしゅねえ？」「な、何言ってんのアンタ！ウチがいなかったら雪の中に置き去りにしちゃうよ！」「そんなことしたらお前はクビでしゅね」「うぐぐグぐぅぅっ…」ユイリィはじれったそうに前足で雪を踏み頭の上を見上げる。「分かった、分かったから…あたしの首に巻いてあるマフラーの隙間ならいいんじゃない？そこにでも入って、ね？」「ここ…でしゅか？」「う、うん…そう、そこそこ」シェイミがメガニウムの首に後ろ側をするすると降り、マフラーに両前足で作った隙間に入り込んだ。「ふーん…結構暖かいでしゅ。お前にしては気が利きましゅね？」

「しては、て余計よ！」ユイリィは相変わらずのロズリンにもはや諦めたようにつぶやく。「……という事で…今回も頑張ろうね！」

「うん、もちろん」２匹は無意識のうちにいつものようにしゃべっていたが、ユイリィが少し恥ずかしそうに視線を落とし、耐雪用の保護靴のひもを結び直す。「そうそう…」「ん、まだあるの？「……ここにいる間はさ、あの事は無かったことにしよ、それがいいと思う、うん」「……」「……大丈夫、探している間に蒸し返したりとかしないよ、約束する」「…分かった、俺もそうする」リーヒュンも頷いた。あの事を気にしていてはとても捜索にならない、それにお互い気にしあっているようでは周りを（何匹でやるのかはまだ分からないが）心配がらせることにもなる。互いも嫌な思いをしなくても済むわけだ。

「……そんなら俺も同感するぜ」ユイリィの背中にブレイブが飛び付いた。「あはは！やっぱブレイブの体ってモフモフのほかほかだね！ウチも生まれ変わるならイーブイ系がいいなあ！」「おっとお！ユイリィがリーフィアになったら俺が抱きしめ放題になっちまうだろ！やっべえ…想像するだけで…」「嬉しい！嬉しいでしょ！」「さっすがあ、勘は鋭い事だけあるぜ！」「でしょでしょ……」メガニウムがブースターを彼女の背中の上でさすりさすりして２匹は

じゃれているも同然の状態だ。リーヒュンは呆れたように彼女の背中に近寄り、ブースターをツルでおろそうとする。「相変わらずの2匹だな……まあ元気にやれるならそれでいいけどさ……」

「大丈夫だ、俺らも事を荒げるつもりはない」ブレイブはベイリーフのツルを右前足で振り払い、交互に2匹に視線を送る。「……俺たちは戦闘中は4匹で一つの塊だからな、人間が何を考えているかは知らねえが、とにかく戦闘中に私情を持ち込むのはなしだ。ケンカは帰ってからで十分だろ?」ブースターにとっても戦闘と私情は別物だった。いかに寄せ集めだろうとなんだろうと、それぞれの思いは普段出せばいい。

「な、テルル?リーヒュンともめるのは禁止だ。何もなかったように振る舞えよ」「……う、うん…とりあえず…休戦、て事で……」

「そういうわけで、決まりだな。よろしくテルル」ベイリーフが少し離れ気味のグレイシアに近づき、ツルで彼女の左前脚を軽く触った。その屈託もなく今までのいざこざを感じさせない彼の動きにテルルは一瞬動揺した素振りを見せたが、ここで拒絶反応を起こすのはさすがにまずいと思い、とりあえずの2枚返事を返す。「そう、そうよ…とりあえず生きて帰ろっか…アンタも無茶は言わないでよね」「当たり前だろ?頼むよ」「うん……(…こいつホントに単純な思考回路しかないのね。深く考えたり思い悩んだりもしない…ある意味幸せなのかな?)」グレイシアは前足でツルをそっと振り払う。とはいえ、性格に裏表がなく、悩むよりもとにかくやるタイプである彼にはずいぶんと救われているのかもしれない、そう思った。これが“普通の”18歳だったらおそらく自分は思春期特有の態度にムカついて半殺しにしているかもしれない……

4匹は人間や機械の集まる……おそらくは統合軍の兵士と兵器だろう……方へと歩く。サクラが今回のチーム分けに通達と確認はそこでやることになっているのだ。果たして今回はどのように……

動き出す世界・断絶された世界（後書き）

次回以降、いよいよ雪原での活動に突入です！

というのはポケモンの側の話、この物語の本質である人間社会の方はほぼ主要勢力が出そろいました。

難解になり過ぎたようですが、頑張って書いていきたいのでよろしくお願いします。

雪原（前書き）

この作品、ポケモンのくせに戦闘シーンが不足しているような…

気にしない気にしない

雪原

決まり方は呆気なかった。バストークやピトムニクといった旧３０２中隊は３匹で、ロックオンとチェギョンは２匹で上空から捜索、１７６１突撃隊連中はスカイラブとサクラと一緒に（レオは「監視する気か？！」とかなり衝撃を受けていたが）、ということになった。

そしてユイリィはお望みのとおりのリーヒュンと（ベイリーフは諦めたように首を振った）ご一緒。そして肝心のブレイブは、これもお約束のとおりテルルと２匹！「やっべえ！大穴を当てちまったような気分だぜ！こうなったら速攻で見つけてやる！」「だよねだよね！あはは！」

「……まあいいや…こういうのは目に見えてたもんな」リーヒュンはテンション全開のユイリィの首の花に飛び付いて大喜びするブレイブを見て諦めたように呟いた。何となくこうなる予感はしていたが、これは小さい頃から感じているものと同じなのか、それとも巷で良く言う“悪い予感があたる”ものとでもいうのか、はっきりとした証拠は分からずじまいだった。

そしてテルルの方は、あきれ果てたような表情をしてサクラに歩み寄った。「あの…なんとかなりませんこの状況？」「そうねえ…私の考える限り、あなたの一番息が合いそうなのはブレイブに感じたのよ。いつかは……きっとそうなると信じてるわ」「いつかって…サクラさんがどういう能力を持っているのか知りませんけど…私にはとても…」

「未来は常に動いてる、だから確定したわけじゃないけど…お願い……今はそれを信じて」サーナイトには、グレイシアの不安や疑念という物が意識を通じてはっきりと感覚になる。その苦しい感覚の中、彼女はできる限りテルリウムの意識の寄り添えるように思考の手を伸ばす。テルルはそんなサクラの表情を見てうなだれたような

表情を見せて視線を下に向けた。周りの状況がいつも自分の望む物、感じるものとは別の方向へと進んでゆく、わがままとは知っていてもつらい事には変わりない。

数時間後、ベイリーフとメガニウムには雪原の中を歩き続けている。彼らの任務は、指定されたルートを起伏や遠景を手掛かりに進んで宇宙船の資源カプセルを発見することのみ。しかし、この過酷な状況下で手渡された生還用のシステムは、何の変哲も機器もない無数の木の杭だけだった。これはポケモンの文明では救助や探検でごく一般的に利王される遭難防止用の目印、風景が単調な雪原や密林の中で１００歩ごとにこれを刺し、帰り道の道しるべだ。多くのポケモンが信頼しているのが理由と国連統合軍の人間たちは言っているが、正しくは“お前らにくれてやる便利な道具はない、もったいないからお前らであるものを使って何とかしろ”といういかにも投げやりな人間の意思表示だった。各員の装備にそもそも発信機がついているから、司令部や前線でＧＰＳを使って場所や状況はある程度把握できるが、各員からそれを知る術は一切ない。貴重品扱いしながら出す物は惜しむという理不尽な扱いに対して仕方がないと言い張るサクラに、ベイリーフは食って掛かりそうになったがメガニウムが首を振ってそれを制止した。彼女とて腹立たしいが今それを出したところで状況は変わらない、そう意識下でため息をついたのだ。

しかし現在のユイリィの表情には、それどころか妙に明るいものが浮かんでいる。楽しそうに雪道をぴょこぴょこと歩いていくのだ。リーヒュンは思わず聞いてしまった。「大丈夫かよそんなので？」

「え、だって今日のうちらの捜索は意味ないもん♪」「おい…何だそれは？」「だってさ、この杭を１００歩ごとに置いていってもね、ウチが感じてるその“うちゅーせん”ていう物の場所に絶対届かないんだよ！」「嘘だろ……でももしかしたら…」ベイリーフが驚いたように足を止め、辺りの風景を見渡す。豪雪で遠景の大半は灰色に霞んでいてたしかに人間の物らしき物体は見えないが、探すというものは本来そういうものではないのか？

「どっかにあるよたぶん、可能性だけでも信じてやるんだろ？そうでなきゃ…」「大丈夫大丈夫！焦ったって見つからないよ！リーヒュンもやってみれば？それがどこにあるのか思い浮かべるの」

「……それだけでいいのかよ？」「うん、それでいいの…」ユイリィがそっとそばに寄って首元の葉っぱにツルをそっとあてる。

「…それもね…この前言った通り、相手の気持ちを読めるようになる第一歩なの。ね？やってみてほしいな…」「……」リーヒュンは戸惑う。遠くにある物の様子を読み取る、これまでに意図してやってみた事の無い事だったが…？？

彼はもう一度メガニウムの方を見る。彼女ははっきりと頷いた。彼の意識の格納容器の中でわずかに（普段からすぐに下がってしまうが）制御棒が下がりかけるのを感じた。（……もしこれができれば…テルルとも何とか……）行動を司る核燃料から生まれた水蒸気が彼の意識の蒸気口から体内に向かってあふれ出す。（…それに…それがフローラへとつながる道としたら…！！…）

ベイリーフはツルをわずかに出して柔らかい雪にあてた。できる限りの意識の視界をその構造物を思い浮かべながら遠くへと持っていくイメージだけは思い浮かべてみた……

……遠い…確かに遠い……こんなに歩きにくい雪道を歩き続けても着くころには日没だろう……そんなイメージが、本当に突如として、薄ぼんやりとではあるが意識の水晶の中にはっきりと映ったような不思議な感覚がする。

（……これが?!……でも……まだ…）衝撃を覚えながらも、さらにはっきりとさせたいという衝動に駆られて彼はさらに意識を深く伸ばそうとした。

だが…そうするとやはり……足元がふらつくような得体のしれぬ感覚が湧き上がり、みるみるうちにそれは強くなっていく。思わず水の中から顔を上げたように息を吸い込んだ瞬間には、意識は元の雪原、雪の上に戻っていた。

一瞬横にふらつくベイリーフをメガニウムは咄嗟に支える。「どうだった?……うん、その顔からして…何となくでも分かった、て感じだね、うん」「……うん…確かに近くはないな…」リーヒュンは首を振った後、右前足を気合を入れるように踏み鳴らして姿勢を戻した。首を持ち上げて辺りをもう一度見回してみたが、やはり広がる風景は見渡す限りの雪原と起伏のみ。ほとんど記憶から消えかけた映像を彼は必死になって意識の中でまさぐった。じれったすぎる、どうして彼女が言うように鮮やかに、そしてはっきりと掴めないのか?

「……うん、生き物の意識じゃなくて物体だから…まだ分かりやすいんだよ。なんか見えたんだよねそれらしいものは」「…それなら俺もう一回やる、もう一回やって…」「いや、大丈夫！リーヒュンにはすごく進歩したもん！ちょっとだけでも見えたんだよ！」ユイリィがリーヒュンの左前脚を保護靴の上から右前足で重ねる。「…焦っちゃダメ、この能力は何年もかかるの。ウチと出会ってこれしか経ってないのに
少しだけでも見えるようになるなんてすんごい進歩！」「……そうか…でも」「“でも”はなし！大事なのは時間をかけて重ねる事なの…それいいよね、お願い！」メガニウムはベイリーフの首元に自分の雄蕊付いたウグイス色の頭部をこすり付ける。「い、いきなり…何だよ」「おめでとうのむぎゅむぎゅってやつかな！あははは……やばい、気持ちよさすぎてうける！」彼女はもう任務のことなどお構いなしだ。ただこうして彼とやれる、それだけでうれしかった。「今日なんかじゃ無理なんだからとりあえず杭なんて適当に置いちゃおっか！」メガニウムは爆笑しながら嬉しそうにベイリーフを横から突き倒しにかかった「うぐぇっ……いつものそれはもうやめろって…」リーヒュンが体を慌てて飛び上がらさせてメガニウムのツルと前足から逃げ出す。「やめない、やめないよ！待ってよ、てか逃がさないよあたしのむぎゅむぎゅ！」ユイリィが木の杭を適当に一本その場に突き刺し、彼の後ろを追いかけるために飛び上がった。「……お前らバカでしゅねえ……」彼女の首のマフラーの間から、ちっちゃなロズリンが呆れたように言った。いつの間にか2匹の間から輸送機の中での一件などなくなってしまったようだった。

一方、サクラが“念のため”といって同行した旧１７６１部隊の

連中も、すでに雪が降りしきる平原を数時間歩き続けている。彼女の意識の周囲にいる5匹の体力や心理的面に常に意識の一部を集中させていたが、サクラ自身が思った以上にみんな頑張っているようだった。そもそもこのサーナイトは、スカイラブはまだしもレオ達年下組を（ロズリンやミオカは任せる、もしくは“一緒にいた方がいい”にしても）ここに連れてくるのには国連統合軍上層部に対して難色を示していた。レオやシンシアが（特にロコンのシンシアには心配していた）体力不足であるとは言わないが、当地の極寒と猛吹雪を考えた時にどうしても彼らの意識の未来に引っかかる物を感じたからだ。それでも彼女が一緒に行かせることにしたのは、自分の能力は未来を１００％予想しているものではないこと、そして何より、数日前までの彼らの様子からして連れて行かないとなると年上が反発するだろうという配慮だ。前者の方は明確、リーヒュンやユイリィに色々と伝えている身であるサクラでも、この能力は永遠の謎というべきもであって、彼女にしてもまだ未来をすべて予見できるまでには至っていないのだ。まあだからこそ、司令官であるにもかかわらずこうして同行して自分の鍛錬に務めているわけであるが。後者の方も明確だった、特にユイリィやブレイブの性格というもの（ピトムニクやチェギョンもそういう傾向が強い）は、周囲に大勢いて楽しんでやる方が彼等自身のモチベーションもあがるようだし、実際動きも生き生きとしているからだ。周囲に大勢の意識が集まっている方が調子の良い感覚を持つポケモンは、心理学的にもサクラ本人にもよく理解され、分析されている。それも考慮に入れた上でサーナイトは全員を連れてきたのである。

　それでも彼女は、周辺にる面々の意識を、分かりうる限り感じ取ることに集中することを忘れない。万が一にでも体調が悪い状態でいるのは、低温・豪雪の中ではあっという間に危機的な事態に陥る原因となりかねないからだ。だから大事を取って、バストーク・ピトムニク・グラシデアの3匹の（グラシデアはかなり不満がっていたが）捜索ルートからそう遠くない位置に今いる。ロックオンとチ

ェギョンは、上空から捜索しつつ各員の動きにも気を配らせてある。（彼らは発信装置などなくても各員の姿を上空から把握できるくらいの能力は鳥類に様々な面で酷似した生物であるが故に持っている。）自分たちを国連統合軍、安全保障理事会、国連上層部がなぜ利用するのかまでは聞かされていないが、自分たちの事をかなり必要死していることは、分かりやすい人間の意識下を探る彼女の思考からも実際的な今までの指示の内容からも理解できる以前に自分たちで準備を整えたのだ。

「みんな、今のところは大丈夫？」５匹の後ろを続くように歩くサクラが声をかける。「今のところは全く問題なしっすサクラさん！雪なんて俺には何にも気にならない…」「はいはい、てか、なに司令官にそんなラフな当たり方してるんよ？」「うっせえよラブ！こういうところで堅苦しくしてたらいざというとき死んじまうぞ？」レオがスカイラブの右のはねっ毛に雪をドバっとひっかけた。「うっ…全くあんたって子はいつまでもくそガキって言われるの…」ルクシオは呆れたように首を振って右前足で目に入った雪を払い落とす。「あ、すいません。私の方はまだまだ行けます…」「そう、それなら良かったわ。レオの面倒が上手いのね、期待してるわよ」「す、すいません…」スカイラブがサクラの言葉に思わず顔を赤らめ、少し早足で前に出る。正面から褒められるという事は、彼女にとって実は初めてだった。レオが幼き頃から自分が面倒見役であった一方で、彼の人格的な面でも彼女はずいぶん気にしてきた。このコリンクが施設出身の“わけあり”であることが彼の人格面にいつか現れる、そう思ったルクシオは常に彼が寂しがったり自分の境遇に落ち込むことが無いよう努力してきつもりだ。結果的に小生意気さは別としても、彼は本当にそういう子には育ってくれた。だからこそあらかさまに言われると恥ずかしいのだ。

そんな様子を見たレオが調子に乗ったような声を上げた。「何照れてるんだよラブ？…それで、グリソムやシンシアの方もおそらく

は平気だと思うっすよ司令」
「おいおい…おいらの調子をお前が報告する事は無いだろ?」グリソムは思わずコリンクを前足で払いのけてサクラの前にでて視線を回す。「あの、自分は問題ないです。シンシアやガトルのほうに気を配ってください。特にシンシアは…無理はさせられないんで…」「ンもうグリソム!そうしてくれるのは嬉しいけどさ、心配し過ぎよ…」ガトルがミズゴロウの前に素早く飛び出して、歩きながらサクラを振り返った。「私もシンシアもまだまだ行けます!レオが足引っ張らないように頑張りますよ!ね、シンシア」「あ、うん…はい、私たちはこういう状況はいつもだったんで慣れてます……」「何言ってるんだよお前ら!?俺の足をお前らが引っ張ならわかるけどおい…」衝撃を受けたような表情を浮かべるレオをしり目に、パチリスに続いてロコンもサクラの右隣に歩み寄った。「無理はしないのよ、なんかあったらすぐに私にもレオにでもいう事。いい?」「はい…大丈夫です」シンシアの目線は彼女の方をしっかりと見据えている。サーナイトはこのロコンも彼女なりに進んでいこうとしているのを意識の中ではっきりと感じ取った。「ありがとうグリソム!どこの誰かさんと違ってちゃんと考えてる」「そりゃあおいら達は…ずっとやってきた仲だからよ。たぶんな」グリソムは少し恥ずかしそうに頭の上の突起と尻尾をぴくっと動かし、レオの方へと歩く。「お前も少しは気を配っている態度はしろって。レオだから期待はしないけどさ、さすがにわざと小馬鹿にするように扱うのはやめたほうがいいぞ」
「お、俺は別にそんなつもりねえ……て、いつの間にお前が隊長みたいに振る舞ってやがんだ?!」「おいら隊長だなんて言ってないだろうが…」「何だとグリソム…俺に従わねえお前に……電撃っ!」「や、やめろ…うぎゅっ!?」レオがグリソムに飛び掛かってふざけたようなもみあいに発展した。しかしコリンクの表情からして、ミズゴロウに怒っているというより遊んでいるようだ。そういう2匹の関係に近いのだろう。

「何してんのよレオもグリソムも…」サクラは小さい子供の動きを大人が見るような笑みを見せ、コリンクの背中に巻きつけてある木の杭を一本取る。「あなた達、ちゃんと歩数は数えてる？１００歩ずつは１００歩ずつなのよ」

「クイ？……やっべっ！」「うぶっ？！」コリンクが上にのっかたような状態のミズゴロウを４本足の渾身で突き倒して立ち上がる。すっかりマーカー用の杭の存在を忘れていた。「ガトル、シンシア、誰か知っている奴？！」「さっきアンタが前に出たあたりが１００歩、今すぐそこに置けばいいのよ、ホンットにフォローが必要な子供なのねレオは。私がいなかったら今頃遭難よ……」ガトルがレオの横に歩み寄り、得意げに短い左前脚を振った。ついでに長く大きなパチリス種族の尻尾でコリンクの頭を軽くぽかっとやった。

「まあ、アンタのそういう脳みそも長所と言えば長所なのよね」

「お、てめえら好き勝手に言いたい放題言いやがって……とにかく、俺がもう一本杭を雪に刺せばいいんだな……」顔を赤らめたレオが、前足を使って腹から背中にくっつけてきた木の杭の一本を取り出すが、直後にグリソムが彼の左前脚の付け根を軽く小突いた。「ちょっとまて！次はおいらのおろす順番だろ？！お前ばっかり優先的におろしてどうすんだよ…」「早い者勝ちだ早いもん勝ち！せーのっ！」そう言うが早いが、コリンクは両前足で柔らかい雪にくいを突き刺した。「お前なあ！？そういう勝手だから隊長止めろって言われるんだっての…」「早い者勝ちは早い者勝ちだ！もう刺さっちまったから俺の勝ちって所だぜ、どうせ次また１００歩だろ？頑張れよ副隊長」「ふざけんな、ずるいだろうがお前ばっか軽くなりやがって……」杭を引き抜こうと２匹が執拗にもみ合う。「あのお…今回降ろすのは私なのよね…」「そうよそうよ…あの２匹ってさあ、なんで何時まで経っても５歳児同然、なんだろう？……」「…さあ

ね、どうしてだろうね？」２足歩行で一番小柄だから杭は持てないガトルと、コリンクやミズゴロウと比べて明らかに杭の数が出発時のままのシンシアは顔を見合わせ、思わず双方大きな尻尾を下にたらした。ただ、パチリスにとってはこんな２匹がいるからこそ、こんな雪原でも脱落者を出さずにやっていける、そんな気がした。

サクラも同様に感じていた。「全くもう…２匹ともすぐにふざけっこになるんだから…戦闘になったら通用しないのよ…」そう言ってか細い首や華奢（きゃしゃ）な肩のあたりに巻いたマフラーや防寒用具の位置を調整するサーナイトだが、スカイラブやガトルはそんな２匹を見守っているし、シンシアもそういう性格や関係を認めているように意識下で読み取れた。ずいぶんと子供っぽいケンカに見えるが、これでこそレオ・ミュースカイとグリソム・トルーマンであるし、そうであってこその１７６１突撃隊の面々であるから。

ただ、一つだけ気がかりなことと言えば…スカイラブが数日前にもテルルに見せたあの敵愾心を燃やした目線と、時々彼女が見せる寂しそうな表情だった。どちらかが顕著に表れているというよりも、むしろ双方合わさって彼女のパーソナリティに一種の重さとなってのしかかっている、そう思う。

隣で呆れたようにコリンクとミズゴロウを見つめるスカイラブの右肩にあたる部分に、サクラの長い右手がそっと置かれた。「ねえラブ、あなたは自分がチームの中でどういう役割になっていると思うかしら？」「役割って…この５匹ですか？それとも…」彼女の両耳がびっくりしたように立ち上がる。「ええ、全体でよ。あなたは皆にどう思われているか、またはどう思われたいのか、あなたが思う事はある？」「思う事…思う事…」ルクシオは思わずかんじきのような耐雪用保護靴のはまった右前足を持ち上げ、しばらくそこと自

分の足跡を見つめる。サクラがいきなり質問してきた経緯が正確には分からないが、おそらくこの人は自分がテルル達と上手くいかない事は既に気づいているのだろうと直感で思った。それはこのサーナイトという種族のスカイラブが知りうる特性からしても、彼女が持っている“能力”を考慮したうえでも。

スカイラブ・バトルスターとしてなんというべきか、答えに窮していつのまにか右後ろ足で左後ろ足をじれったそうにこすっていた。何となく小さい頃から考えているとそうなってしまう。結果的にテルルとの関係をこじらせてしまったリーヒュンと同様、彼女自身深く考えて決断するという“道徳的”な行動が、本質を伴わずにお高く止まって居るようにしか見えないのだ。

だからこそテルルとの件はますます重苦しかった。はっきり言ってルクシオ自身にも問題はある、彼女自身認めている。しかし、自分と世の中を見る目つきや沸き立つオーラが何となく似ているテルリウムを見ていると、ついついスカイラブは得意の負けん気で彼女の前に出ようとしてしまうのだ。それを考えるたびにスカイラブの意識を形作る格納容器は苦悩という蒸気圧でひどくうずく。

少しして、ルクシオは言葉をわずかに発した。「よく…テルル達ともめてばかりで…あんまりよくも思われないかと…」

「そうね…でもそんなものよ」そんな彼女の戸惑いと悩みがはっきりと読み取れたのだろう、サクラの右手がやさしくなでるように動いた。「いいんですか…？」スカイラブが思わず向き直る。「ええ、私が思うにね、ラブくらいの年ごろだと似ている相手って結構いやなのよ。特に同性だとあの子のようにはなりたくない、あの子より私は上手のはずだって、ね？……でもそういう感性があるからこそ、分かりあったり理解しあったりする時も絶対来るの。お互いがそれでいい、と思えるようになることが大人になる、私はそう思った」

「……そうなんですか…」スカイラブが思わず下を向く。彼女の言っていることは全くの図星に近い。自分やはり大人になりきれ

ていないのだろうか…？

サクラはもう一度優しくなで、ルクシオに寄り添うようになる。

「テルルとあなたは…負けず嫌いで態度とは裏腹に面倒見が良くて……少しずつでもお互いが理解するように気持ちを落ち着かせれば…いい仲間よ2匹は…」「…ですよね…」彼女の嫌いな“道徳的”な説教であるのに、スカイラブには不思議と反感は生まれなかった。サクラはやはり母親のような存在なのか、そう感じた。

「何だってんだこの寒さ……おいシンシア！もうちょっとこっち…」「あ、あのねえ…やめてよ、私はアンタの焚火じゃないんだから…」雪原をさらに歩くことのべ数時間、旧１７６１突撃隊の御一行の道中は、レオは相変わらずシンシアやグリソムをおちょくりまわしてスカイラブやガトルがツッコむという展開が繰り返されている。そんなこんなで、またしてもコリンクは、ロコンの左側の胴体に顔と右耳をのしかかるようにこすりつけたうえにそのまま背中に飛び乗ろうとする。「やっべえこの温もり！よっしゃあ、これから俺の懐炉と枕担ってこのまま歩けっ！」「な、何するのよ……気持ち悪い……」彼女は不快そうに、６つの尻尾を飛び乗りかけたコリンクのいる背中側に曲げる。「何やってんのよこの子供！シンシア、早くたたき落としちゃいな！」ガトルが飛び乗ったレオの尻尾を両手で引きずり下ろそうしながら言う。「ほ、ほんとにいいの…？」「いいのいいの、私が許可する…」パチリスがロコンの前に回り込んで右手を前に突き出す。「お、おいガトル、お前何を……」レオが反論する間もなく、シンシアの尻尾付近から打ちだした強烈なじんつうりきで彼はロコンの右側に吹き飛ばされて、背中からやわらかい雪の上に落下した。彼女はちょっとびっくりして立ち止まり、雪の上でぺちゃんこになった彼に慌てて駆け寄る。「ごめん…大丈夫…？やり過ぎちゃったかな…」「いてえなあ…おい…」「大丈夫かよ

レオ?…まあお前が彼女にちょっかいを出すから…」グリソムが転がったままのレオを、前足で転がして立ち上がらせ用とした直後。

ばしゅこっ!!回すように引き起こされたレオの左前脚があったちょうどその場所に、何者かによって放たれた矢が飛び込んで柔らかい雪を深々に突き刺さった。「うおっっと?!……」コリンクは起き上がる瞬間にグリソムの前足をひねるように振りほどいて体勢を一気に立て直す。その直後、強力なエネルギーの塊がコリンクの前足元の15センチに落下して炸裂、彼は後ろ宙返りを打ってガトルやシンシアの間に飛び込む。「こんなところにまで俺らを入れたくねえ連中がッ!?」「あのねえ、どっちにしろアンタがさっきから騒ぎ立てるから出てくんのよああいう連中!」ガトルはほっぺにあるレモンイエローの帯電袋をバチバチさせながらも、不満の目線を明らかにレオに向けている。「んだとおら、お前らが先に発見してりゃ先手を打つことくら…」「はい、もめない!やるわよ!」サクラが4匹の前に素早く前に飛び出し、右手を正面に向けてエネルギーを張った。彼女が感じ取った一瞬のちの空間、次にくる弾幕に込められた殺気に勘付いたのだ。そしてその予想は、0．2秒後に彼女が張ったエネルギーの表面で起こった無数の小規模爆発で現実化する。それに続くように5匹＋1匹―（サクラは“人”？）の正面から放射状にポケモンの放つエネルギーと矢が雨嵐と飛びかう中、サーナイトは半球状に全員を覆うエネルギーに自分の能力を流し込みながら5匹を振り返った。自分の意識内部での思考は危険を知らせている。「やっちゃっていいわよ!相手は敵なの!」

「まってましたサクラさん!行くぜお前ら!」真っ先に飛び出すのはレオだ。

「お前らって…おいらはもうお前の部下じゃ…」「行くぜで飛び出すなんて……どこまでも思考回路が10歳未満なのね!」グリソムとガトルが呆れたように後に続き、スカイラブはシンシアの6つの尻尾辺りを右前足で押す。ロコンは今までの時と比べて、何となく

違和感を覚えていた。「大丈夫、いつも通りにやればいいの。後ろは気にしない」「……はい、前は前しかありませんから」ルクシオの言葉に彼女は勢いに乗って走り出した。「…それいいのシンシア。レオやグリソムと上手くやってね」安心したようにスカイラブは頷き、後ろに続いた。

ただし、相手はどうやら戦闘を訓練を受けた兵士ではないらしい。攻撃してくる射線が直線的そのままであるからにして、いくら14，5歳であれどエメリア自治協会防衛軍のいっぱしの部隊である彼らには劣性である。レオがその中で真っ先に、しかもあえて射線の方から飛び込んでゆく。「全然なってねえなあお前らっ……」飛んでくるハイドロポンプの水流を姿勢を下げて左前に飛びかわし、一気に上に飛び上がった。「なんていう…」コリンクの勢いにたじろいだシャワーズが数歩分後ろに飛びのいて彼に飛び掛かってくるが、レオはその勢いよりも早くスパークで突っ込んでぶっ飛ばした。「へっ！民間程度じゃ…ぐえっ？！」「俺たちは貴様らの様な盗賊（ラスカル）には……」後転を打って着地した双方でシャワーズの方が先に出た。ハイドロポンプを打ってレオを軽く後ろにぶっ飛ばしにかかる。「ええい、バカなことぬかすな…」コリンクは4本足の爪でどうにか飛ばされるのは免れた直後に、かまわずその水流を突き破るように相手に飛び掛かる。牙にかかった電気エネルギーで構わずシャワーズの首元に噛みついてそのまま相手を後ろに突き倒す。が、相手のヒレのような尻尾がコリンクの背中を何度もうち、コリンクは顎が壊れそうなほどの衝撃を受けた。「いっつッ……だが…ちっ？！」さらにその後方から迫ってくるのはエルフーン、折からの暴風に極度に軽い体を乗せて飛び掛かってくる。かけてくるのは明らかに“アクロバット”……コリンクが慌てて牙を離して体を返すように飛び上がったが速度は相手の方が圧倒的だ。「どうする…？！」シャワーズの傷口から噴水のように吹き出した血液を浴びながら、コリ

ンクはわずかでも可能性を探って体を正面に向けた。

「ええいっ！」このタイミングに活路を見出したのはグリソムである。低空すれすれのエルフーンに浴びせたのはめざめるパワーだ。「ぐぎゅっ…」「さっすがッ！」ミズゴロウの放ったそれが如何なるタイプなのかはコリンクも知らなかったが、わずかでも隙を作ることに成功した。その隙を彼は逃すはずもなく、再びかみなりのキバで相手の胴体と顔の間の“首元”にあたる部分に……「ってねえだろ?!…」噛みついた部分でレオは気づいた。ほのおのキバかけるつもりがかかってない！

さらにもう一つ間を見逃さなかったのはエルフーンの方だ。「こんのっ！?」声からして彼女は、背中にまとわりついた薄い黄土色に近い綿所の物質をまき散らしてコリンクを叩き落とした。コットンガードである。コリンクはそのコットンの嵐にぶっ飛ばされて雪原に叩きつけられた。

「ううっ！！やるしかっ！…」ふわりと着地した直後のエルフーンにロコンのかえんほうしゃが直撃、しかしその一発ではくたばらずにエルフーンはロコンに飛び付いた。「この程度の子！」「……まだ…まだ…」組みつかれた状態のロコンだったが、今回は逃げ出すわけにはいかない。戦闘に対する恐怖心に彼女は必死に目をつぶって目の前に相手に集中した。

彼女は力を抜くように後ろ回りして勢いに乗った相手はそのまま投げ飛ばす。「まわすよっ！」スカイラブがまたしてもエルフーンに噛みつく。こちらは確実のほのおのキバが決まり、相手は後に突き飛ばされた。「ありがとうございます！…んんっ！」シンシアはその合間に左横に回転しながら飛び上がって体を返し、反動に吹き飛ばされそうになりながらもだいもんじを打ち込んだ。さすがにタイプ相性的に悪い技を立て続けに浴びたエルフーンは熱傷だらけになってその場に崩れた。「ありがとうございますラブさん！」「大

丈夫！いつでも私は…」前足でシンシアを支えていたスカイラブがすぐに上に飛び上がる。飛んできたエレキボールをアイアンテールで叩き落とし、すぐさま後ろ足の筋力で彼女は打ち込んできたエモンガの上をとった。「もらったわっ！」ルクシオはそのまま後方から同様にエレキボールをぶち込んでエモンガを雪原に墜落させると、上から飛び掛かって腰回りの装備品ベルトから刀を引っこ抜いく。「きゃっ？！」「何を間抜けなっ…」踏みつけられて慌てて右手でルクシオの右前足を押さえようとしたエモンガを強引に振り払い彼女はエモンガの白い腹ど真ん中に刃を突き刺さす。「何度もなんっどもっ！」すぐさま突き刺した刃の持ち手を上に振り上げつつルクシオは空中後転をうって、自分の爪から送ったでんきショックを帯電させたエモンガの“残骸”を飛行してきたオオスバメに叩き込む。「なっ！？」エモンガが衝突したオオスバメはエモンガの傷口から血液と共に漏れ出た電気エネルギーをまともに浴びてショック死、エモンガはその衝撃で大爆発を起こして四散した。

しかしまだ終わったわけではない、先程のシャワーズはみずのはどうを2匹に連射。2匹が左右に飛んだ直後にガトルが“じゅうまんボルト”でその水分を打ち払う。「またかっ…」「行くわよっ！」パチリスはそのまま正面から連続して飛んでくるみずのはどうを気合をくぐり、飛び跳ね、最後は気合で突き破り、ほうでんでシャワーズの上方への退路を断った。

「それなら…」パチリスに飛び掛かろうとしたシャワーズだったがすでに体力の消耗も激しく動きが遅くなっている、あっという間にパチリスが上からほうでんを今度はまともに喰らわせ、大きな尻尾で相手の首元を叩いた。しかしその背後にもまだ残っており、その背後から迫るクチートがアイアンヘッドを仕掛けようと飛び掛かる。その直後、足元の雪の動きに気付いたガトル。このやり方ができると言ったら自分たち側には…「そういうことねっ！」パチリスが巨大な尻尾をばねにして後ろに飛び上がったその刹那にミズゴロウが雪原からクチートに飛び掛かった。「どげっ？！」「よっし…

！！」グリソムはそのまま上に飛び上がって腰の装備品から手榴弾を引っこ抜く。はがねタイプには無論これだ、もらったうちはよく分からなかったが、爆弾の一種であるならレオたちと一緒に仕掛けたことがある。「これで決まりだって！」グリソムは左前脚でその頭を叩き、それを下に落として自分は前転をうってダイブする。着地したミズゴロウの背後で大爆発が起き、クチートは粉砕、ふらふらになったシャワーズはひれのような尻尾と後ろ足2本が引き千切れて吹き飛ばされ、血しぶきで白い雪原を赤く染めながら雪原に転がった。

「お、俺の戦果、ゼロにはしねえ……て…っ！？」吹き飛ばされて頭を打った後にようやく頭の中の霧を振り払ったレオが慌てて辺りを見回す。一番に目に飛び込んできたのはサクラとやりあうブラッキーだった。「俺が入りますっ！」そう言ってコリンクが飛び込もうとしたもつかの間、サーナイトは掴みかかってくるブラッキーの前足を全部跳ね返した上に、タイミングを見計らったように数歩分後ろに飛び下がって右手で腰から拳銃を引っこ抜き、何のためらいもなくトリガーを引いた。彼女の意識下ではその数秒前には一瞬たりとも同情を抱いていたが、その刹那に相手が排除すべき脅威と感じたからだ。その意識下での判断は即座に現実化する。オーストリアのグロック社製グロック１７の９ミリ×１９パラベダム弾３発が見事に相手の胴体をぶち抜き、後方に数メートル吹っ飛ばす。雪原で爪を立てて急停止したコリンクは、その様子を呆気にとられたように見つめるしかなく、隣部ブラッキーの死骸が倒れこんできたところで慌ててそれをかわす。「さすがです…サクラさん……」「え、ええ、別に私もポケモンなのよ。人間みたいにふんぞり返っているだけじゃないわ」

さらに背後で猛烈な爆発が起こった。その直後に彼ら右手の斜面を下ってきたのはバストークやピトムニク達だった。「大丈夫ですか司令、今向こうの方にいた一団を軽く吹き飛ばしておきましたけどね連中が誰なのかはよく分かりませんけど……」

「そうよね…」サクラが少し悲しそうな表情を浮かべて足元のブラッキーを見下ろす。彼女のカバンや持ち物からして軍人でないことは明らかだ。サーナイトはブラッキーの遺体に残留した意識に思考をわずかに寄せる。「……彼らはここに住んでいるものではないわ。おそらくは…ロシアや中央アジアのほかの地域から移ってきて…この吹雪にまかれたのね…私たちの持ち物を…生き延びるために…」彼女は相手の首に下がったものを左手で取った。すぐにそこに遺された感情が彼女の意識の容器に痛いほど伝わってくる。あまりにもつらい、彼女の無念、苦しみにたえようがなく、彼女はすぐに手から離した。「…あそこにいるシャワーズはこの人の旦那さん……」

「私たち……どうしてこんなことを…」ピトムニクが悲しげにつぶやき、保護靴のままの右足で雪をがさがさと動かした。自分のしていること、目の前に現実に過酷な世界という流れに翻弄される意識の容器が、それによって破壊されそうになる。サクラの右手がプラスルの頭の上にやさしく置かれる。「…そうよね…でもこれが私たちがなさなければならない使命なの。明日のため…全ては…だから…今は悲しみにとらわれず、自分の事をやってほしい。できるわよね…」「…はい」

「グラシ！ケガとかない？」「私はいつでも大丈夫！ラブたちの方が心配よ」グラシデアがスカイラブに抱きしめるが如く飛び掛かり、ルクシオの毛とモコココの肩のモコモコが火花を散らす。「私がこんなところで死ぬわけないわよ。あっちの敵ちゃんは叩き潰してくれたのね…」「うん…」グラシデアがバストークの方を嫌気な顔を共にちらりと見やった。「まあ、あの人とピトムちゃんがさっきのの大半をやっちゃったんだけど…」

「ま、まあ…嫌なんよねそれは、そういうのは誰だってある。でも…」思わず苦笑を浮かべたスカイラブはグラシデアの耳元―（らしき場所）に顔を近づける。「今出すのは止めた方がいい。ケンカするのは帰ってからのお土産にするの。こんなさぶ…う、寒いところでは嫌な奴とでもやる、ＯＫ？」「う、うん…大丈夫…」「なーにその自信のない顔？もう少し、最後まで全力で行っておいで！」ルクシオは自信なさげなモココの肩に当たる部分を軽く前足で押し出し、サクラの方に振り向いた。「皆、ケガありませんよね？」「そうみたい、ありがとうラブ。あなたがシンシアとガトルを助けてくれたのね？」「いえ…助けたというより私の動きが遅いのを彼女たちが手助けしてくれた感じで……」「いいのよいいのよそんなに謙遜しなくて」サーナイトの右手がスカイラブの頭のはねっ毛にやさしく触れる。「あなたにとってレオたちが主役なら、あなたはそれをフォローする役として誇りを持っていいのよ。ラブが今ここにいる事で皆がこうして成り立っているんだから……」「すいません…毎回毎回ありがとうございます」彼女は顔を赤らめて視線を思わず下に向ける。二度も自分が前々から悩んでいたことの一つに、サクラは的確に答えてくれた。自分がレオにしてきた事、シンシアに教えようとしたことは間違いではなかった。それがちょっと照れくさい。

「ありがとうございました！私もシンシアも無事です！」「そ、そう。良かった！……」ガトルやシンシアがスカイラブの後ろ足もとに飛び付く。「でも大半はグリソムが上手くやってくれたの！ね？」「う、うん…まあおいらのできる事をやっただけだけどな」グリソムが恥ずかしそうにしながらも周囲に飛び散った木の杭を集める。「うん、シンシアのだろ？」「うん…さっきはありがとうねグリソム」ロコンはミズゴロウから受け取ったマーカー用の杭を、装備品ベルトにまきつけ直しながら少々声のトーンを軽くする。「これなら隊長替わってもいいかも」

「私も応援するわよ！レオなんかに任せてられないもん！」ガトル

も飛び寄って同調した。「そんな…おいらそこまでには至ってないだろ?…まあ、もし皆がそういうんなら考えるけどさ…」グリソムは恥ずかしそうにほっぺのオレンジ色の突起を右前足で触る。自らにしても、レオに振り回されての自分の性格にはいい思いを抱いたためしが一度もなかったが、意外と自分は頼られるんだな……コリンクに振り回されっぱなしのグリソム・トルーマンにも、いつかはレオをぶち抜いてみたいという負けん気みたいなものはあったが、いざ実際に褒められるととても恥ずかしい。同時に期待されることに対するちょっとした重みも感じた。「おいおい!俺抜きで何話してんだお前ら?!」レオが顔を真っ赤にしてグリソムに前足で掴みかかるが、ガトルがコリンクの右前足を短い両手で押さえつけ、分かってない、といった調子で尻尾を動かす。「別に今すぐクビにするなんて言ってないわよ!そうやってすぐに掴みかかるから子供よねえアンタ…」ただその直後、パチリスの声の調子が少し落ちる。彼女とてレオ・バイブル・ミュースカイが隊長としていかに苦しい立場にあるか、それは薄々なりとも知っていた。「……レオの事はみんな必要としてるよ。でもこうでも言わないと…たぶん皆…真面目一本じゃ不安なのよね…」「……そりゃな」パチリスの言葉のお陰で、自分よく起こるツッコミのような衝動は意識の格納容器内部の水に浸されて消えたが、それによって湧き上がった蒸気のように隊長という二文字に対する複雑な思いが湧き上がる。

「そう、みんな大丈夫のようね…」サクラが5匹を見回す。周囲の空間に少しだけ意識を送ってみたが、先ほどまで感じていた圧力のようなものは感じられなくなった。「それじゃあ私たちは…続けましょうか」

「……全く…こんな場所に盗賊連中がいるとは聞かされてねえぞ

……」「ですよね…でもみんな生きるために必死ってことなのかな……」「あり得る…」ピトムニクを真横に連れて歩くバストークは体のモフモフを振るって落ちてくる雪を落とす。「え?」「俺も詳しくは知らねえが、ポケモンは世界のどこにだっているって話だからな。ただ…こんな過酷な地帯にとんでもない種族がいるのは…いい意味じゃないだろ…」「やっぱり彼らは…」「ああ、司令が思った通り、何かによって住処を追われた。ここに逃げ込んだは良かったが、生活に最低限必要な食い物さえ困った。それでたまたま入ってきたような俺らに、という訳だろ…」メリープが首元の装甲部分の上から覆っているマフラーのような防寒具を前足で結び直した。そういう話はいろいろな場所で聞いたことがある、エメリア陸地群の中でも、人間たちから立ち聞きした話でも。

そして……あの“同志”達の間に流れる噂でも……ピトムニクの赤い耳が下にわずかにうなだれる。認めたくないが、ポケモン達がやはり世界のあちこちで苦しい事態に陥っているのは事実だったようだ…「ううっ……やっぱりなんですね…私たちの文明が…そうなってゆくなんて…」「…だがピトム、だからこそ立ち止まるわけにはいかないぜ」バストークの尻尾がプラスルの尻尾に触れ、パチッと火花が散る。「そんな中でも俺たちはこの文明の平和を各々の持ち場所、集落で保ち、あらゆる民の生活を守る。そうするように言われただろ?」「……ええ」「そして俺たちは人間の社会を通じて文明を守る、そういう使命で国連とかいう場所にいる。忘れんなよ…俺たちは、常に自分の持ち場で必要なことをすることをな」「はい…もちろんです」ピトムニクはわずかに頷いた。こんな重苦しい話題に陥った時、せめてもの励ましを彼の言葉からいつも受け取ってばかりだ。周囲に期待されるほど自分はまだまだ器量が足りない。

その直後、バストークはグラシデアの方をちらっと見る。「お前ももちろんだグラシ。…恋愛にかまけるなよ」「……いつもそうして

るじゃない。目に見えてバストーク、あなたの前でそういう態度した事ありました?」モココが思いっきり嫌味を込めた顔で父親の視線を覗き込む。父親メリープは顔を赤らめ少しうつむき加減ながらも反論した。「し、したことはねえとは思うが……念のためもう一回言っとく。お前も軍人なんだから…まあダメとは言わんが…」「……しませんよ私は（少なくともバストークの前では、ね?）」「ったく、これじゃ“もうだめかもわからんね”だろ…」そんなバストークの愚痴を無視したグラシデアは歩みを落として父親から少し離れる。最後のセリフを小声でつぶやきながら彼女は雪に凍える空を見上げた。（上空はもっと大変なんだろうな…あの人は…大丈夫なの?…）

寒すぎる、チェギョンの感覚はとっくにマヒしかけていた。ドラゴン・ひこうという愛称の問題と種族的問題はもとより、彼女の長続きしない性格がそれに拍車をかけているのだ。普段から飛んでいるときでさえ気にする“自慢”のモフモフ翼も頭のひらひらもどうでも良い、下なんて雪でほとんど見えっこない、寒い上に飽きたチルタリスはムクバードを甘えるように呼んだ。「すいませえん!もう寒いんで帰りましょうよお!タイプの限界ってマジあるじゃないですかあ!?」「お前は東南アジアのコシアカツバメか?!…ポケモンなんだからどの種族だって一日くらいは大丈夫って聞いたぞ」ロックオンはチェギョン・カリワザキの甘い願望をあっさりと打ち消した。ムクバードにはチルタリスの言っている意味が分かる。よく見れば寒いと言っている彼女の翼や胴体を見ても、凍結が始まっているどころか雪もほとんどついていない。雪を振り払う余裕があるならまだまだ問題はない、危ないのは体が凍り付き凍傷が始まっても、もうろうとしたまま飛び続けることだ。「気合で飛べ気合で。

そんなやる気じゃ別の意味で失速して墜ちるぞほんとに」「…はあい…気を付けてやりますぅ…」「ったく……死んでも俺に責任はねえが、４ヵ月飛んできた仲だからな。あと数時間はふんばってろよ」「数時間も、ですか?!ああーもう寒すぎるうっ！」「バーカ…お前は別の意味で危ないな」ロックオンは呆れたようにつぶやき、雪の向こうに広がる濃灰白色の空に集中した。ただ、決してチェギョンに目を配るのは忘れなかった。やる気の問題もあるが、精神面のレベルもまたこういう過酷環境での生存を左右する。彼の意識の水晶のように透明で球状の圧力容器に沈めた決意が彼の翼の毛細血管にまで響く、こんなところで彼女を失う訳にはいかない。

「はあ……結局こうなるのね……うう、寒っ……」結果としてブレイブとやることになってしまったテルルは寒そうに体中の水色の毛を震わせ、直後にもみあげ状飾りに早くも付きはじめた粉雪を左前脚で払い落とす。「何言ってんだテルルは！お前こおりタイプのくせに寒いのがダメとか聞いたことねえよ」「うるさいわね、言ったでしょ私の育ちは中東って場所の砂漠地帯なんだって！こおりタイプになっちゃったから、暑いとばてるし寒いのはいやだしめっちゃクチャ憂鬱なのよ今…」「へへっ！こうなったらやっぱやるしかねえな…」「な、何をすんの…」「おっ…その表情はもう理解したといった顔だ…」ブレイブはフサフサ尻尾を振りだす。こんな寒いそうな相手に自分の行為の正当性を主張できるチャンスなど滅多にない。「俺がテルルに飛び付いてモフモフに温かくする！さしずめブレイ

ブ特製の直接マフラーって奴だ！行くぜテルル……」そう言うが早いが、彼は彼女の背中に向かって飛び付こうとし…

どしゃっ！！！グレイシアが一瞬姿勢を低くしたせいで勢い余ったブースターは彼女の背中を跳び箱のように飛び越えて向こう側の雪に顔から突っ込んだ。テルルは呆れたようなツンとした表情をして数歩分早足で離れる。こんなものとは最初から思っていたが。「ったくもう…やばい寒いかも…で、アンタが背中に巻きついたら暑くてむさ苦しいだけじゃない。アンタが風邪ひかないように注意した方がいいわよ」「俺はいつでも大丈夫だっての……顔が冷てえ…」ブレイブはすぐさま体を起こして右前足で顔と頭のフサフサの雪を取っ払い、テルルについて行く。

２匹が本日担当するのは最初の点から南東１０キロにある窪地のような場所だ。周囲が幾分高いせいで風に流されやすい粉雪の積雪量は周囲と比べれば少々少なく、風も和らいでいたが、それでも過酷であるのは変わりない。むしろ風ではなく風で運ばれた冷気が、低い場所に溜まりこんで別の意味で体を冷やす、すなわち体力を削る。そして何よりこの地帯は、もともと乾燥した大地で目印となるものが乏しい上に、一面に降り積もった雪がその状況をさらに悪くしている。そんな彼らに手渡されたのが、あの１００歩ごとに起点から並べるように突き刺していく木の杭だ。繰り返しになり恐縮だが、ブレイブやテルルのような普通の（つまり人間のもとで長期の訓練を受けていない）ポケモン達が人間のＧＰＳ機器を扱えるわけがないからである。また先程も述べたように、これはポケモンの文明が未開の地の探索や危険地帯での救助で用いる原始的な二次遭難防止、もしくはこれにひもを伸ばして道を確保する等の目的でつか

われるものだが、それが彼らにしてみればこれで十分、むしろいろいろと応用の効く便利な方法だからそうしているのだ。２匹の方針はおおよそ決まっている。とりあえずこの低地になった場所を突破するような形で、左右を探りながらあるだけの杭を打ち込んで帰る、当初から人間の宇宙船とやら（そもそも宇宙という場所の船なんて彼らには分からない）を見つけるつもりはさらさらなかった。それにどっちみち、今日は明日以降の奥地、最も可能性のある地点への捜索に備えて雪と低温に体を慣らすのが目的だとサクラも言っている。どうせ見つかりっこない、最初からそう踏んでいたのだ。

「……９８，９９，１００っ！よっしここだ」ブレイブが自分の胴体に二重のひもで巻きつけた木の杭を前足で抜き取り、雪の上に突き刺す。杭はそのまま雪の中に沈んでしまいそうなほど深く食い込み、彼は慌てて前足の力を緩めた。自分とテルルで何本杭を持っているか分からないが、この調子でガンガン行けば体力を完全に奪い去られる前に帰ることができるだろう。そんな楽観したような予想にかられてブレイブの４本足に不思議なテンションを感じた。「おし、次…行こうぜテルル…」「う、うーん？……そ、そうよね…」テルルは背中におんぶしたミオカをちょくちょくと振り返りながら上の空でつぶやく。「…どうした？」「背中見りゃわかるでしょうに！……ミオカ、寒そうだよ……どうする？」「おいおい…」ブースターはグレイシアの絵中に乗ったイーブイに近寄り、右前足の雪中用保護靴のひもをほどく。「大丈夫かミオカ？やっぱお前を連れてくるのは、なあ……」「い、いいえ！全然大丈夫ですよ…この程度でへこたれたら来た意味ありませんし」彼女はびっくりしたようにテルルの背中から飛び降り、意気込むように前足を伸ばす。「来た意味っておい、そんな根性論で通じるような……」ブレイブが完全に保護靴を外して安物の耐寒用グローブをはめたままミオカの頭の毛を軽くおす。「何よブレイブ、いつもだったらミオカのいう事

は何でも聞くのに……」「そういう問題じゃねえ…なんだかこう…俺のカンだ…」少しうつむきがちに語尾を濁す彼の言っていることはカンではない、彼の経験論だった。もちろんソーラやアメリカ周辺を主に活動・生活してきたので、雪というものを本格的に経験するのは今回がはじめてに近い。だが、戦場と同様、こういう過酷な状態に慣れているがどうかは別としても、それに覚悟して立ち向かう明確な決意がなければいけない、そう思ったのだ。

ただし、彼の思った以上にミオカは大丈夫なようだ。ブレイブは彼女の顔をもう一度覗きこんでしばらく考え、ゆっくりと頷いた。「……いや、何でもねえ。無理だけはするな、苦しかったりつらかったりしたらすぐに言えよ」「はい、ブレイブさん」

「それから…」ブースターの右前足がイーブイの頭の毛をくしゃっと撫でる。「俺たちの事はタメ語にしてほしい…ブレイブとテルルでいい、な?」「へ?…それは…」「気にすんなって、いつまでも遠慮してたら居心地が悪いだけだぞ」ブレイブが笑顔を作ってミオカを両前足で抱きかかえた。

「う…うん…ブレイブ…」イーブイがちょっと恥ずかしそうにうなずいた。

「もう…ブレイブ、ミオカにまた…」テルルはそんな2匹をしり目に、右前足の保護靴のひもをほどき、ふわふわとした粉末のような雪をすくった。相変わらず身のすくむような寒さの中でも彼女の意識には雪の感覚がはっきりと認識される。この感覚とこの肌触りは嫌というほど経験済み、ただしすべてが嫌だという訳ではなく、その中にある、彼女がはっきりと覚えている思い出と嬉しさも、全てこの雪から味わった。その一方で、久しぶりという思いよりも、あの時がすっかり遠のいて（ある意味自発的にだが）意識の格納容器の底に沈めてしまったことによる隔絶感の方も強く感じられる。

彼女は思わず雪を掴んだ右前足を握りしめていた。その中で握られた雪がたちまち状態変化で水分に替わって滴り、わずかに残った雪

は圧力と温もりでシャーベット状にこびりついて残る。
そんなグレイシアの表情が気になったか、ブースターは彼女の目を覗き込むように頭部をやや下げた。「……どうしたテルル？」「う、ん？いや…」テルルはこびりついた雪を払い、保護靴のひも締め直す。「大丈夫、何でもないよ」

１００歩数えて歩いては杭を挿し込む相も変わらない数時間が流れた。当然のことながら、宇宙船とやらの影も破片もない。「ったく…こんな雪じゃ破片も何も半日あれば埋もれちまうに決まってるだろ…」「そこまではならないでしょうに…そんな宇宙とかいう空の上にある太陽に近い位置から落ちてきたんだったら暑くて雪が何日も溶け続けるわよ。一個でも見つけないと私たちの面目つぶれるわよ…」自然科学も観測技術も未発達の彼らにとって、２１世紀の世界でも空の上といったら太陽が近くて暑い場所という認識しか持てない。「はいはいテルル、俺は愚痴っちゃない…」ブレイブのぼやきをテルルは思案顔ながら返した。彼はテルルと彼女の後ろからぴょこぴょこついてくるミオカに振り向き、少々憂鬱そうな顔をしている。「な、なあミオカ、随分と…まあ俺たちにはよくあることだけどよ、歩き回っているが…具合は大丈夫か？」「え？……まだまだ、むしろみんなで歩いてるから安心できる、って感じで…感じかな？」ブースターの表情がやや明るさを取り戻す。イーブイの様子は意外と大丈夫そうだ。正直ほっとする一方、彼はミオカ・ナミエ・ソウヨウの体力と９歳と思えぬバイタリティに驚きを覚えた。ポケモンの文明であるがゆえ子供の時から遠出となると、原則徒歩で数日かかるのが基本だから彼女もそういう事を何度かしたことがあるのだろうが、それにしてもこんな過酷な環境を２０歳顔負けに歩き人間の訳の分からない（航空機の事だ）移動機械で気の遠くなるような距離を未知の地までやってくるとはさすがだ。
「あ、あのさあミオカ…」テルルが恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「どうかしたんですか？」「わ、私の事もタメ語でいいよ。うん。そのほうが関わりやすいし」「そんなら…それいいよテルルさん」「え？名前もテルルでいいのに…」「うんん、テルルさんは転んで起きてもテルルさんなの。それでいいよね？」「そっか……ありがとミオカ……」グレイシアはイーブイのひた向きな目線に心を打たれたような気がした。後ろからついてくる彼女の足音や温もりが、エルヴィンにそっくりに感じられる。あらゆる苦難苦行で自分の心が荒みきっていたあの時、せめてもの慰めは後ろから熱心についてくる彼だけだった…

歩いている最中、思わず保護靴を持ち上げて右前足で目を拭った。

さらに3時間ほど経過したか。出発した時と比べて明るくはなったものの、降りしきる吹雪のせいか周囲は薄暗いままだ。「どれくらい来たんだろうね……」「さあな…でもだいぶ杭を打ち込んできたから目標達成はもう少しだろ…」ブレイブは体が許す限り首を後ろに回して胴体から背中に巻きつけた杭の残りを調べ、続いてテルルの胴体巻いてあるそれも数えて保護靴の中の右前足の爪をトントンとたたいた。いつの間にか2匹合わせても残り数本になっていた。後ろを振り返ると無数の木の杭が、感覚を失いそうな見渡す限り白銀の大地に道のように並んでいる。これを辿れば帰れるわけだ。ブースターは思わず安心感を覚えながら胴体の装備品から何かを引っ張り出す。「どうだ…今何時だ？…」「無理無理、雪の降っている間は太陽の光が雪でめちゃくちゃに散らばるから時間は測れないのよ」彼らが時間を測定するあの星座早見の上にけん玉をつけたような道具を取り出した彼の右前足をグレイシアはつっけどんに押さえた。「そ、そんじゃあどうやって」「どうにもこうにもないでしょ、

明るさと頭の中で時間が流れるのを測るしか方法無いの」
「何をユイリィみたいなこと言ってやがんだ……忘れちまったよ時間なんて…」ブレイブが不服そうにブツブツ言って道具をしまう。装備品入れに戻した直後、彼は思い出したようにテルルの顔を覗く。
「てか……詳しいなテルルは、どこでそんなもん習ったんだ？」
「え、え？…別にどこだっていいじゃない！とにかくロシアに行った後に色々と経験したのよ雪の事を」彼女は慌てたように言葉をつなぎ合わせた。（それは…聞かれると一番困るのよこっちも…）いきなり一番言われたくない場所をつかれて思わず焦ったが、女の子の空気読みには（日本人のように）無用に強い彼だからここで気にされるのは困る。そんな表情が出ていないことを願うしかなかった。
「そっか、まあ世の中そんなもんか」「そう、そんなもん…」ブースターの意外とあっさりとした返答にグレイシアは思わずほっとすると同時に寂しさのようなものも感じた。

自分の受けた雪の中での想像を絶する時間……それは言葉にするのも思い出すだけでもつらいが……
テルルの心にずしりと重い物が走る。誰かに分かってもらいたい。聞いてもらうだけでもいいけど…言った時にその相手は……
そんな不安とプライドという格納容器の底の水にある本性がテルル・アストラフスキーの心を渦巻く怪物をねじり伏せた。
「さすがテルル、俺の期待するだけの…ってなんだ…あれは…」ブレイブが低地の果てにある斜面の方を眺める。「なあにブレイブこんな雪の中…あれ？」「そ、そうだ……確かにあそこに何かある…」ブレイブが保護靴付きの左前脚で指差す方向、降り積もる雪には、ほんのわずかだが黒い影が突き出したように見えた。それも見ている間にもひっきりなしに落ちてくる雪に消えてしまいそうだ。
「……ブレイブ」その先を見つめるテルルの表情に何かが走る。
ああやって雪に埋もれているものは…つめたい戦慄が彼女のひし形模様の入った背筋を貫いた。「ん？…どうした…？」「助けるわよ

！あれ何かの破片じゃない、生き物の何かなのよ！」「なんだと？！おいっ！！」突如飛び出したテルルをブレイブは慌てて走って追いかけた。

保護靴をつけていても４本足が沈み込むほどの柔らかい雪では、走るっても相当な時間がかかる。３分ほどかけて斜面の中腹にたどり着いた２匹、テルルは迷わずに前足で粉雪を掘り返した。「俺もやる」「そっちお願い」２匹は犬が土を掘り返すのと全く同じように、白い粉末を猛スピードでかきおこす。「うぐっ！……ううっ…」ある程度“それ”の姿が見えるや否や、グレイシアは渾身の力でそれを引っ張り出した。降り積もった量のわりには水分が少なく軽いせいか、ブースターが手伝う前にそれはあっさりと雪の上に出る。

……それはポケモンだった。全身そのものが植物のようなウグイス色、頭の上には大きなオレンジ色の花…ドレディア種族だ。テルルがそいつの体に触った刹那、彼女の表情の主体が焦りからちょっとした悲しみへと変わっていくのをブレイブはみた。おそらくこのポケモンは既に…彼には聞かずとも自明だった。「そうか……」彼は目を閉じる。目立った外傷も見られないこのドレディアは恐らく凍死、一瞬で死ぬことができずに徐々に体力と気力を奪われ、体が氷冷たくなっていく苦しみと恐怖にさらされながら死んだのだろう。その苦しみを考えると思わず頭のフサフサをむしり取りそうになった。

テルルも息が詰まったような表情に哀しみを浮かべ、ドレディアの葉っぱの様な手を胴体の上に乗せた。彼女にとってこんなものはいくらでも見てきた。力尽き、意識が混濁しながら死んでゆく様を。それを思いだした瞬間、彼女の意識の格納容器の底から真黒な冷気が吹き出し、危うく自分の感情という核燃料を刺激しそうになった。彼女は必死にこらえる。（あの事は忘れなくちゃ…今気にしたって戻らないのよ…）彼女は必死に言い聞かせた。気にしたところで耐

えようない悲しみが襲いかかってくるのは目に見えている。それを今ここで出すわけにはいかない。

ブースターが前足の雪を払って保護靴のひもを締め、このポケモンの周囲を見回す。本当に何もない、こいつは何も持たずにここを彷徨っていたのだろうか？「こいつは…どこから来たのか……？」

「うん…本当に何も持ってないのよね……」テルルは雪の周りを少し掘り返しながら、そいつの手がかりになる物を一つでも見つけようとした。死体が血液の凍結で黒ずんでいないことを考えると、死んでから1日あっても2日は経っていないだろう。雪の中の動物やポケモンの死体など彼女は嫌になるほど見てきている。

ふとブレイブの意識にある疑念が浮かび、みるみるうちに大きくなる。明らかに純のくさタイプが元から暮らしているようには思えないが、もしかしたらこいつは…彼自身で思い浮かべて不安はあっという間にブレイブ・クレイバーの意識の格納容器を、あまりにもむごすぎる、恐ろしいほど鮮やかすぎるビビットを放つ予想で埋め尽くした。

……もともと“何か”の原因でこいつはこの周辺に移住してきたのだろう。そしてほんの数日前に“何者か”に襲われた。慌てて逃げ出したこいつだったが、雪にも寒さにも不慣れで、あたふたと雪道を逃げ惑ううちに体力を失い、そしてここに倒れてしまった……

自分でも背筋がさらに凍りつくほどのリアルすぎる描写だ。さらに、この予想が正しいのならこいつと同様の犠牲者は少なくないはずだ。

そして犠牲者たちが見えるとすれば……

次の瞬間、彼は４本足で飛び上がるように雪で覆われた斜面を駆け上がり始めた。「ちょ、ちょっとどうしたの?!」「…早く来いテルル！犠牲に…なったのは奴だけじゃない！」「そ、それって…」ブレイブの振り絞るような声にただならぬ事態を感じ取ったテルルは、前足の保護靴もそのままにミオカを背中にのせて斜面を駆け上った。こおりタイプであるがゆえか、寒いのは嫌いでも雪原をすいすいと上っていくのは得意なようだ。

先に斜面の上に駆け上がったテルルだったが、その眼下に広がる風景に目を落とした瞬間、わが目を疑うような光景に尻尾と耳が上に逆立ったように硬直した。「な、なにこれ…」そのまま彼女は思わず後ろに下がりそうになる。「そ、本当にそうなのか……」ブレイブは衝撃を受けたような表情で彼女の背後から恐る恐る近づく。見る前から薄々は感じていた恐るべき予想、それが現実に起こっているというのか…彼女の表情と動きを見る限りそこに広がっているものがいかなるものか、いやでも予想がついてしまう。「やばい…やばいよ…あれ…」「……」グレイシアが凍り付いたように見つめている方向、ブースターも恐る恐る彼女と同じ高さの位置まで歩き、高台の下に広がる物を見つめた。

眼下に広がっているのは…彼が意識の下に満たされた冷却水が冷え切るような想像を絶する予想を下回るどころか、思わず目を背けたくなるような死体の作る魔界だった。雪雲と猛烈な吹雪にかすむ視界いっぱいに広がる純白の広大かつゆるやかな起伏、視界の限界あたりには、木々が数えうる限りで２０から３０本程度、面積にすれば２０メートル四方くらいの広さに密集した小さな森が、点々と島のように広がっている。

しかし自分のいる高くなった位置から広がる斜面と平地に視線を落とした2匹は、自分の意識がまるで地獄を見たような冷たい感覚

に震えあがるのは感じた。真っ白な雪のあちこちに倒れている物体、雪に埋もれた木立のようなものはポケモン達の死骸だったのだ。2匹、3匹のレベルではない、広大な2匹の視界の広い範囲を占める斜面から平地にはそれらが見える限り何百、何千とあった。この積雪の量と雪の降り方からして、実際にはその倍ぐらいはあるのだろう、自分の想像に戦慄を覚えながらもブースターは直感した。

2匹の絶句は何時間も続くようだった。ブレイブ・クレイバーの表情は硬いままだ。彼の意識の格納容器の中に入り込んだ冷気が分裂によるエネルギーの精製を止め、彼の全身の骨や筋肉にそこから漏れ出たくらい蒸気が流れ込んで硬直させる。背筋が冷たくなるという以前に“茫然”がブースターの全身も意識も満たしているのだ。

やがてその思考停止は静かだが強烈な憤りに変わった。彼らを、こんな極寒の地で多くの命を、多くの人生を、多くの夢を、多くの愛を奪い取った“何者か”に対する怒りに。ブレイブの耐雪用保護靴のまま右足で雪を握りしめた。（……誰が……誰がこいつらをここに導いたんだ……）意識の中で怒りという燃料棒を押さえる冷却水の水位がじわじわと下がり、彼の意識の中を核分裂反応の熱で生まれた水蒸気が埋め尽くす。「……俺はやる、殺ってやる…こいつらを…」「…は?」茫然と眺めていたテルルがブレイブの方を振り返る。「…こいつらを追いやった奴…許さねえ…」「……」テルルには返す言葉がなかった。確かに、もし誰かが意図してこういう状況を作り出したのなら、それは許せないだろう。しかしそれが誰の手でもなく、自然という運命でこうなったのなら…その時は一体誰のせいというのか…??　ただし、グレイシアはその言葉を今述べるのはやめておいた。ブースターの気持ちを考えると、とてもいう気分ではなかった。

ふいに吹き飛ばされそうな暴風に2匹とも斜面から転げ落ちそうになり、4本足の爪全てで必死にふんばる。風を特に受けやすい高台に建っているという現実に引き戻された。「もう少しだ、次行くか」ブレイブが右前足で頭のフサフサについた雪を払う。「う、うん…行くよミオカ…」テルルもすっかり凍えてしまったようなミオカを背中に乗せ、もみあげ状飾りにくっついて凍り付いた雪の塊を左前脚でこそぎ落とした。

２０１３年　１月１２日　フランス　パリ市郊外　オート・ガロンヌ県　トゥールーズ　１１００時

フランスの中では南西、オート・ガロンヌ県の内陸にある都市トゥールーズ。イギリスと面するマルセイユや地中海側の観光都市にして港湾であるコート・ダ・ジュール地方のニースといったフランスの主な貨物・旅客船舶の受け入れ港湾からは、高速道路網などを使ってもだいぶ距離がある。その一方でトゥールーズにはフランスとヨーロッパの誇る航空機メーカー、アメリカのボーイングやカナダのボンバルディア、ロシアのイリューシンと並ぶ大手であるエアバス社が本社、生産工場、飛行試験施設を構え、ＥＳＡ（ヨーロッパ宇宙開発機関）の打ち上げロケットや宇宙船の生産を担当する大手航空宇宙機メーカーのアリアンスペース社も工場と本社を構えている（もっとも打ち上げる宇宙港（スペースポート）は南米のフランス領ギアナにあるので、作られたロケットの大型パーツは空輸か港湾まで専用車両で陸送された後に専用貨物船で大西洋を渡るのだが）。さらにこの地域は航空・宇宙産業のヨーロッパ随一の地域である一方、貨物機による空輸でも十分な費用対輸送量を確保できる半導体や集積回路といった精密小型電子部品の生産企業が工場を構えていることも特色の一つである。それらの企業の中には、イギリス・マンチェスターに

本社を置く英国系の多国籍企業体であるニューロン・コンピュータ（通称：ニューコム）の、精密情報通信部門の機器生産工場と主要研究施設も存在する。

トゥールーズの再開発新市街の郊外、農業大国でもあるフランスのシステム化・効率化がなされた大規模な小麦畑と農業管理施設の真ん中に突如降ってわいたようなエアバス社の工場、本社ビル群、滑走路、格納庫には完成したばかりのエミレーツ航空向け最新鋭超大型機、Ａ－３８０が機首をのぞかせている。その敷地に隣接するような形で同じくらい広大な敷地を持つニューコム社の一拠点。巨大な駐車場と敷地の門からエントランスの動く歩道が続いている建物…まるで中国・北京にあるオリンピックメイン会場から2本の高層ビルが突き出した格好…がこの施設の本部、その背後に整然と広がる４階建て前後の正方形型をしたガラス張りの広大な建物群が生産工場だ。普段から万単位の労働者や国内外の研究者・査察者の人間がいるのだが、今日の生産工場の一角は特に多くの人間がいた。ヨーロッパ連合（ＥＵ）からの査察団が来ているためだ。

「それで……一番近いそこの工作機械が量子レベル精密回路の生産ラインですね？」「はい、他のラインはまだ通常の精密集積回路ですが。新興国での生活水準の上昇が半導体が必須の電子機械需要を上げておりますため、折からの不況でもラインは高稼働率です」大勢の関係者に囲まれながら歩く欧州（ヨーロッパ）連合の一団が二重ガラス窓で完璧に密閉されたクリーンルームの内部を覗き込むと同時に、工場の責任者らしき男が書類を見て指差しながら中の動き回る生産ラインを説明する。「それにしても…私自身、精密工業に関しては素人同然ですが…あそこで行われているレーザー加工をここから直接見ても眩しくないとは…このガラスに工夫でも？」「その通りです。内側のガラス素材ににレーザー光を減衰する微粒子を含有させています。ここのような視察用通路のガラスや作業員の保護用にも使われ

ていますよ」責任者は窓ガラスの方に近寄り、内側の窓ガラスを指差す。「なるほど…」

「さすがはアップルやマイクロソフトといった米国超大企業を追撃するグループですな…」別の男が内部を覗くように一歩近寄る。内部に並ぶ生産ラインではずらりと並ぶ工作機械がベルトを流れる小さな物体に何かを打ち込み、その終点でレールの上を走るロボットのような機械が別のラインへと小さな物体を運んでゆく。ちりやほこりを防ぐ白い作業着を着用した作業員たちはラインにあるディスプレイやコンソールを端末片手にチェックしている。

「お褒めいただき光栄です。将来的にはマイクロソフトやＩＢＭを凌駕する企業体に成長できる。そのために今後も我々はお客様のニーズにこたえていく次第です」責任者は満面の笑顔を見せた。欧州連合の関係者の評価も高いようだ、彼らと良好な関係を結ぶことは、欧州連合加盟国の軍事産業への需要拡大や研究機関への機器の提供にもつながると期待できる。「それは結構。ところで…」欧州連合の代表者が穏やかな表情のまま眉をピクリと動かす。「そのお客様というのは…もし差支えがない程度であれば…具体的には？」

「いえいえ、隠す様なことではございません……ちょっといいかな」

「はい…」責任者は後ろにいる関係者の女から数枚紙を受け取る。

「シーメンスなどの電子機器企業はもちろん、ＢＭＷやプジョーなどの自動車関連、エアバス、アリアンスペース、エネルギアなどの航空・宇宙関連、オランダのフィリップス等の医療機器など幅広く契約させていただいております。また、ダッソー・システムズ（フランスの情報機器・通信企業）といった同業の企業とも技術開発への協力を行っております」責任者は得意げに手をすり合わせる。集積回路や半導体は電子機器以外にも輸送機器や生命工学・医療機器でも広く用いられている。自分の懐の広さを改めて説明することは、企業の信頼の深さを雄弁に伝えることができる。「…またスイスのジュネーブにございます欧州原子力研究機構（ＣＥＲＮ）やロシアの情報法技術部門の研究機関とも協力を行っておりまして、世界の

民間企業から公設の研究センターまで……」

「……ロシアの…研究機関…？」ＥＵ代表者が責任者の男の穏やかな表情を浮かべたまま、男を覗き込むように見る。「ええ、ロシアの公設機関の方からも厚い信頼をいただいていますよ…」

「それは素晴らしい事です。ヨーロッパとロシア・東欧が科学技術によって親交を深める…」代表者が穏やかにそう言って再度ガラスの向こうのクリーンルームを覗き込む。

だが、向こうで忙しく動き回る工作機械や工作用ロボットに感じたのは先程のような好奇心ではなく、国連から何かしらの委託を受けているのであろうこの企業が行う、それに便乗したロシアとの接触という不信感だった。国連の言う“計画”にここを含めた複数の世界の名高い企業が参加しているとの話は以前から聞いていたが、それに乗じた企業拡大によって彼らは何を開発しているのか……

動き回るハイテク機器を見ているうちに、彼の思考に芽生えた疑念は確信へと変わりつつあった。間違いない、この企業には国連の計画から伸びる“何か”がある。

代表はもう一人の男と別のＥＵ関係者の女に振り返り、大きくうなずいた。女の方がアイコンタクトを送り、「ちょっと失礼します……」とＥＵからの警備員数人とともに歩いて行く。

「いかがなさいましたか？」ニューコム社の責任者の問いかけに、ＥＵの代表者は振り返ってにこやかに応じた。「ＥＵの研究機関に…あなた方の企業にお手伝いを採用させていただくお願いをできるよう検討しておりまして…」

工場区画棟のエントランスの自動ドアを抜け、女は左に曲がり、広い敷地を乗り付けてきた2台のドイツ・アウディ社製アウディＡ

６／Ｃ７の脇を通り抜け、建物と道路の間を作る芝生に入った。人が３人横に並べる程度の広さの芝生と道路の境界線は、人の背丈以上の（１階部分は完全に植え込みに日差しを遮られる）植え込みでおおわれており、小声で話せば人気（ひとけ）は外部からではほとんど感じ取ることができないだろう。

女は携帯端末を取り出して耳に当てた。“△△議員ですか？”でたのはＥＵ対外行動局の男。「ええ、ニューコム社の方は思った通りよ……」彼女の声が植え込みでできた影のようにトーンを下げる。まるでこれから彼女が伝えようとする事象を映したかのように薄暗かった。「…国連から何かの依頼と資金を受け取った彼等、ロシアの方に事業を拡大してるわ。国連の計画を利用するつもりよ」“やはり…”「我々も動くときみたいね。ＥＵ対外行動局長とドイツ、フランス、イタリア、ベルギー各国軍のメンバーに連絡してちょうだい……」

しゃべりながら彼女は建物の外壁によりかかった。軍や政府関係だけに留まらない、本気で欧州連合が動くとなるとニューコムに関与するヨーロッパの中の主要な電子機器、電子部品、一般機器、輸送機器、等のメーカーを洗わなければならない。

２０１３年　１月１２日　アメリカ　ワシントンＤＣ　０８４０時

あいかわらず国務長官の彼女からから入ってくる情報は難しい、老練な大統領の男は心の中で苦笑した。今朝、起床早々に端末越しに入った連絡では、連邦通貨準備機構の長官からの筋として、２０１２年度におけるアメリカのＧＤＰ成長率が、結局３．８％と当初の予想を（４．０％）２年連続で下回って最終確定したこと、２０１２年度の鉱工業生産指数は昨年と比べてそこそこ持ち直して再び上昇傾向に入ったが、個人景況感と消費物価指数は横ばいまたはわずかに悪化しているということ、完全失業率は２０１１年比０．２

％改善したものの依然９．０％に近い高めの水準が続いていること、非農業者就労人口の増加は今年も見通しが見えづらいこと、そして今年度もまたユーロ通貨圏内国の財政問題や新興工業国の経済成長の失速傾向で世界経済は不透明な状態が続くだろうという予想が出ている、とのことだった。一昨年度からアメリカ合衆国は財政赤字の削減に本格的に着手しているが、再び経済状況の悪化に伴う財政出動が必要になればこれが危うくなる可能性も否定できない。アメリカ連邦政府が憂慮すべき国内外・国際社会の問題として、経済・財政の問題もまた重くのしかかり続けてる。

　しかし彼にとっては、そんな憂鬱も日課となっている朝のホワイトハウス周囲の散歩によってやわらげることができるものの一つだった。すでに年齢が年齢であるがゆえ長い間歩き回るのは困難だったが、だからこそ健康維持に必要な軽い運動であり、自分の息子娘に近い年齢の警備達と話しながら歩き回ることが、安息日の日曜といえど公務が並んでいるという激務をこなすうえでのいい気分転換にもなる。来週にはタイのバンコクで開かれるＡＳＥＡＮ諸国の経済協定会議にオーストリアや韓国と共にオブザーバーとして出席する予定だ。巨大な経済圏を持つ中国とその企業の経済活動に対抗すべく、ＡＳＥＡＮ、アメリカ、および環太平洋地域国家、企業、多国籍企業体の開発や展開を新たな特区の整備や租税減額によって支え、環太平洋諸国とアメリカが中国に押されない大経済圏を創設するプロジェクトの一環である。

降り積もった雪は除雪車両と作業員によって道路のところどころにうず高く積まれて片付けられる最中である。今日は雪の合間の晴れといった感じだったが、この大統領の散歩はよほど嵐でもない限り毎日行われているお決まりの日課だった。彼と２人の警備の男が歩いているホワイトハウスの正面に当たる大通りは車の通りはまばらで、警備を担当する軍や警察の人間や車両ばかりが目立ち、右手、すなわち官邸の向かいにあたる公園にも人影はまばらだ。春や夏はまぶしい緑の中多くの鳥のさえずりでにぎわうのだが、今日は降り

積もった雪に押しとどめられたように静かだ。３人がのんびりと歩く道はまっ白の雪とそれによって生まれたような穏やかな静かさに包まれていた。

警備の男の通話無線機が鳴る。大柄な彼はしばらく何かを話し込んだうち、大統領の肩を軽くたたいた。「うむ、何かあったのかい？」「ええ……若干忌々しい話で申し訳ありませんが…」「いいんだいいんだ。はっきりと言ってくれた方がむしろ飲み込みやすいよ」「は、はあ…」大統領に柔和な表情に警備の男は恥ずかしそうに顔を赤らめる。先ほど連絡の入った話は相当深刻だ。だが、この大統領の事だから落ち着いて対応してくれるだろう、そう思って警備員は話を続けた。「…国防省の情報として……中国海軍の空母を含む機動艦隊が大連から動き出す公算が大きい、我が国の監視衛星の撮影で大連周辺の軍事艦艇が集結しつつあるとのことです」

「そうか……中国もついに海上航空戦力を手に入れたか……」大統領の男は右手の人差し指を白いひげが残る顎元に当てながら通り沿いに並ぶ木立とそこから顔を出す現代的な建物…省庁街は建築のフロア数が制限されている…に視線を上げる。太平洋各地域に展開するアメリカ海軍から見れば重大な事象であるかもしれないが、彼にとってその事実を受け入れるのは今歩いている道の雪が靴の裏でさくさくと音をたてるくらいシンプルで明確なものだった。米ソ冷戦の終結や９１１事件も経験した長年の政治経験のせいか、大きく取り乱すこともない。落ち着いて頭の中で対応を考えるだけだ。まずは日本の沖縄や韓国の駐留する空軍基地から警戒機を頻繁に出して警戒を強化する。次に日本の佐世保にいる艦艇を出動させて海上でも警戒する。それに加えて、場合によっては横須賀に停泊する空母「ジョージ・ワシントン」を出動させて韓国海軍との海上演習、もしくは台湾との航空演習も中国をけん制する有力な方法である。重要なのはアメリカ軍の太平洋方面の戦力をアピールすることで中国軍の活動を牽制するのはもちろんのこと、中国軍艦艇の活動が日本海（東海）や南・東シナ海の民間船航路や資源採掘プラントに関わ

る経済上、政治上の周辺諸国…韓国、中国、日本、台湾、ロシアの事である…間での対立を刺激させないことである。先日もアメリカの台湾に対する、戦闘機Ｆ－１６／Ｂ６０の輸出の件や、日本との排他的経済水域境界線にほど近い海域で海底メタンガスの船舶による調査を行ったことに対する日中間の対立など不穏な事態が相次いでいる。

「分かった…対策の根幹は改めて伝えておこう。具体的な戦略と展開は国防省と参謀本部に任せるとするか」雪道を歩きながら大統領は警備員に視線を戻し、きっぱりと言い切った。

２０１３年　１月１３日　カザフスタン　アクタウの一角　００１０時

人口がアクタウ市街地周辺に流出した結果、住む人間も家畜もいなくなったいわゆる“廃村”となった集落の建物を国連統合軍は利用していた。奇跡的に残っている送電線をできる限り使用して発電機から電力を供給している。集落のはずれへと続く道にはドイツ陸軍のフクス６輪兵員輸送車、ルクス偵察装甲車、レオパルド２Ａ５主力戦車、フランス陸軍のＶＡＢ装甲車、ＶＢＬ装輪装甲車、Ｍ２７０ＭＬＲＳ発射装置、ルクレール主力戦車、イギリス陸軍のピラーニャＶ装甲車、ＦＶ１０７シミター偵察戦闘車、ＦＶ４０３４チャレンジャー２主力戦車といったまさに西欧陸軍兵器が見本市のように並んでいる。実際、国連統合軍でアメリカの兵器が使用されているのは南北アメリカ、太平洋地域の諸国やメガフロート、エメリアのアメリカ領、台湾、韓国、中東・北アフリカの駐屯部隊やイスラエルなどアメリカと関係がある諸国であって、イギリスやＥＵ区域内の統合軍はイギリス、フランス、ドイツ、スイス各軍の装備が、東欧やロシアはロシア軍の装備が、アフリカの各地域では旧宗主国の装備が、中国周辺のアジア国家では中国軍の装備が、と拡散している。国連統合軍というものが主要国の派遣部隊で（中国やロシア

はあまり派遣していないが）構成され、統合軍が直接所有している部隊は全体の３割強でしかないのがその一因だ。統合軍であるとわかるのは車両の色、統合軍章、ちらほらといるアメリカ製のＭ９９８・４輪装甲車やＭ１１２６ストライカー装甲車がいることだ。

日付が変わって間もなく、周囲があわただしくなる。兵士たちが次々に戦車や車両に飛び乗り、エンジン音やヘッドライトの照明が廃村を満たして間もなく、列をなして部隊は台地へと向けて出発してゆく。

その中の建物の一角、村で格別大きい役場のような建物は窓ガラスや照明器具、暖房装置も取り付け直され、中は普段の建物と全く変わりない様子に落ち着いていた。使用主が突如やってきた統合軍であることは別にしても、深夜にもかかわらず多くの人間がいまだに起き、持ち込んだ計器や端末を見つめては話しこんでいる。

建物の一階で最も大きい部屋、入り口には見張りの兵士が胡散臭そうに立っているその部屋の中でも起きている連中はいた。

雪原（後書き）

雪原のシーンをかいていると思い浮かぶ曲、芥川也寸志の“組曲八甲田山”しかないんですよね…映画“八甲田山”の挿入曲なんですけど…

あの哀愁たっぷりのメロディーは泣ける。うん。

というより…１９７７年公開のこの映画を知っている人…これを読んでいる人でいるんでしょうか？……

アクタウ・氷点下の檻（前書き）

大変お待たせいたしました。

何とかアップに成功です。

アクタウ・氷点下の檻

この予想もまた薄々気づいていたのだろうか、このベイリーフはまたしても深い霧をツルと前足で探りながら進んでいる気分を感じた。思った通り、今日の捜索では誰もカプセルを見つけてはいない。サクラの言ったことはウソではなかった。明日向かうというここから６０キロ東の地点は国連統合陸軍の車両でおおよそ3時間、カザフスタン・カスピ海沿岸の平原地帯の中でも特に起伏が激しく、雪・暴風といった天候の状況は格別に厳しい、さらに大地の中で最も小規模な林が点在している（とはいっても規模はたかが知れているが）がゆえ、目標の遠距離からの発見が困難という極めて厄介な地域らしい。

そしてリーヒュンの心配を煽る事象がもう一つ、自分たちは遭遇しなかったがレオたちが襲撃されたあの盗賊とも難民とも区別のつかぬポケモン達の話だ。統合軍の人間たちは、“可能性は無きにしも非ず、あす以降は各個の判断で対処”というのみで、バストークやピトムニクの「彼らはどこから来たのか」という問いには“カザフスタン、ロシア南東部、ウズベキスタンなどに残存しているポケモン達のようだが、襲撃する原因は不明”と言葉を濁された。この軍の人間は背後の事情を知っている、リーヒュンの意識の水晶型格納容器下で少しは伸ばせるようになった“思考の手”の感触が彼の意識下に伝わってきた。異様なことに対する知識欲とでもいうべきものに、思わず“思考の手”を水晶の外の流れへと伸ばしかけたが、それに先に気付いたユイリィが「あとで教えるよ」と言って制止した。彼女の方は既に予想がついているようだ。彼女と同じように意識下の本質をすぐに掴みたい、いつものように浮かんだ疑問には自分で解を出さないと気が済まない性格の彼らしい発作を我慢するのに精いっぱいだった。

しかしその一方で、何となくだが自分がおとなしい人間の使いっぱしりになりかけている、年上組で集まっているうちに夜も更け、遅いながら食事を自分たちが一晩明かす場所に運びながら、ベイリーフの意識の格納容器の底でこんなコンプレックスにも似た感情の水の小さな対流が発生し、それが次第に大きくなっていった。リーヒュンは人間に対して格別何かしらの感情を抱いているわけではなかったが、部屋の見張りに立つ退屈そうな兵士に、無意識に首を下げてしまったことさえそれを大きくしている。自分は人間とどういう力関係なのか、自分の場所にたどり着くまでの数十秒間が数時間に感じられるほど深く思考に入り込んでいた。そしてその力関係こそが、先ほど人間たちが言う“残存している連中”に直結しているのではないかという思いが意識の中に広がっていった。そしてそれはフローラにさえ何かの関係を持っているのではないか、と。

そんな彼を現実に引き戻したのは、ブレイブのいつもと変わらぬ交流である。「おっす、大丈夫だったか？」「大丈夫も何も話してるだけさ。なんの問題もなし」「相変わらずなんだその解答は？具体的な内容もなく問題なしって」「俺が聞く限りて事だよ」「そんな判断で…まあお前らしくていいが…」ブースターの表情がにわかにベイリーフがツルで持つトレイの方を見て変わる。「そっか…俺は飯も食ってねえか……わりいわりい」「ん？ってこれは俺の食べ物のはずだけど？」「なーに言ってんだ、お前が2匹分も食うのか？」「お前こそ何言って……」自分のひょろ長い首元から伸びる2本のツルを見てリーヒュンは思わず目を丸くした。1個だけ持ってきたつもりのトレイがそれぞれのツルに1つずつ支えられている。「あ、何やってんだ俺は？でも食い物だからまあいいや、ていう訳にもなあ…」ちょっと驚いたような彼にブレイブが思わず吹きだした。「それ俺の分しろ！俺まだ飯も食ってねえんだった……」「そっか、そんならいいや」ベイリーフの片方のツルがすっと下に下がり、後ろ足2本で姿勢を起こしたブースターが前足でそれを受け取り、床

もとにトレイを置いた。ベイリーフも彼の隣に座ってトレイを置く。ポケモンの文明にテーブルやいすという概念はないのだ。

既に部屋の蛍光灯は落とされ、四隅にあるまるでテントの中で使うような白熱電球だけがすでに眠りこけている面々を照らし出すのみだったが、遅い夕食にありつく2匹にそんな事は気にならない。小さい頃から時に同じ釜の飯を食らう事も（たいていリーヒュンとブレイブがエンデバーやシーベルトの何キロも離れたところに遊びに行くことがたいていだったが。そんな中でベイリーフがさぼりがちな家業をしっかりと把握しているのは彼自身の鋭い勘のお陰ともいえる）あった仲、声を落としながらもさじを口に運びながら語り合うのは、自分たちがまさに今いる過酷な状況下での大きな癒しの一つとなった。

今日の夜に渡されたのは豆、ベーコン、キャベツをホールトマトで煮込んだスープの類としっかりと発酵してあるパンの類である。スープの量は人間の一人前を上回る量であり、人間たちから見ればこれくらいがポケモンの標準的な量だと思っているようだ。実際、20歳前後でしかも男（オス）という人間で例えれば“食べ盛り”にあたる2匹にとってはちょうどいいくらいである。ただ、コショウやハーブの類で濃厚に味付けされている点に関しては、2匹とも少々閉口してしまったという事実もまた取り上げなくてはならない。彼らの一般的な食生活は、収穫した小麦を挽いて焼いたものに、種族によって肉、植物、魚介類などが加わる程度で、人間の食事のようにかなり手を込んで味付けするようなことはめったにない。

リーヒュンよりも明らかに食事のペースが速いのはブレイブだった。無論、頭より4本足が先に動くベイリーフも食うスピードが速いのだが、このブースターがそれ以上に飯のスピードが速く、かつ食う量も多い。床にほど近い高さから見ていると、暗緑色のツルが持つ匙より、朱色の右前足が握る匙の方が明らかに速く中身をすくっているのが分かる。

そんな最中にブレイブのさじ運びが急に動きを止める。何かを思い出したように口に運ぶのを止めると、匙をまだ残っているトマト色の（ホールトマトだから当たり前だが）液体に突っ込み、右前足でそれをかきまぜはじめた。リーヒュンもツルでつかんだままの人間製のパンを口に押し込んで一気に飲み込む。このブースターが何か言おうとしている、長年来の友人としてのカンか、それとも本当に（ユイリィ曰く）少しは働くようになってきた能力のお陰か、どっちかは分からなかったがとにかくこのベイリーフにはそういう予感がした。

「……どうしたブレイブ？」「…ああ、いや、別に大したことじゃねえんだが……お前にとっちゃ大した事か…」ブースターが匙を回すのをやめ、右前足を顎の下に当てる。そうだ、あの光景だ、あれは相当やばいモノだった。おそらくこのベイリーフの事だから、もしサクラが言う事が本当なら、こいつは凄まじいものが頭に思い浮かんでしまうかもしれない。こいつは俺と違って、そういうのとは無縁に暮らしてきたからな……

ベイリーフはじれったそうな表情をして匙をツルではじいた。「お前のその顔からして大した事に決まってるだろうが？…自慢するわけじゃないけどさ、いつかブレイブは俺に言ったよな、お前にウソはつけない、てな」リーヒュンはその直後に言葉に詰まる。またしても無鉄砲に相手の痛い場所へと突っ込んでしまった、そんな後悔の念が唐突に意識の圧力容器の中を満たしてゆく。彼はため息をついてツルで首元の葉っぱをいじった。「…ごめん、何やってんだ俺はまた……とにかく、俺は大丈夫だから隠すなよ。どうせ人間連中はロクに細かい事を離さないんだからな……」「ったくもう、むきになって焦りやがって！まあそれはそれでリーヒュンらしくていいとは思うけどよ、誰にでもオープンに話し込もうとするところがお前の長所だ…」ブレイブは左前脚で頭のフサフサを軽くかき、横になるように左に体を少し倒す。ここまで疑うことも戸惑う事もなく友人の本音を聞き出そうとするこのベイリーフの接し方は、今のブ

ースターにとってはこれから話すあの件に関しての、せめてもの明るい救いだった。

ブースターは前後両前足で軽く伸びをし、ゆっくりと口を開く。

「どうやらこの地域は……俺の推測だとな、俺の知っている限りの世界から考えれば、この地域の西にある人間どもの国家の弾圧から逃げてきた連中が多いようだ…」「逃げてきた……？」「ああ、その言葉通りだ……それで……それでよ…俺たちは連中に襲われたわけじゃねえが……見ちまったんだ…雪の中に…」

その直後、ブレイブの意識下にあの映像が、あの雪原の光景が、おぞましいほど視界に焼きついた。想像を絶する恐怖が彼の意識の中に大津波となって押し寄せた。彼はその恐るべき光景の記憶から逃れるすべもなく、襲い掛かってきた記憶の大波とそれが作り出した冷たい渦に巻き込まれる。意識の格納容器の中に逆流した大量の不気味な水が、彼の意識と意思を司る核燃料を急激に冷やし、危険化学な反応を起こした。

そしてそれは、すぐにブースターの全身の震えと目線の泳ぎになる。ブレイブはそれを必死に抑えようと全身を力ませたが、震えは激しくなる一方だ。悪天候にかすむ雪原、わずかに見える木々、目の前で振り続ける雪、耳の中で反響する風の轟音…ここまでは思い出せる。

だが……その雪の中にあったもの、枯れ落ち、死んだ木々のように突き出した手足、体力を失った体の上に降り注ぐ雪に息を詰まらせながら彼らが最期に求めた救いへの悲痛な叫び……それを思い出

すと体中の筋肉が、血液が、ブレイブ・クレイバーを構成する物理的・科学的な全てと、その物体をブレイブ・クレイバーという意識に仕立てている神経細胞が、苦痛と恐怖と悲しみによじれ、引き千切られんばかりに痛めつけられた。

「…どうした…どうしたんだよそれが?!」リーヒュンの表情に明らかな不安が浮かんだ。彼はそのまま、前足でけいれんを起こしたように身を震わすブレイブの方に引きずるように近寄り、カナリア色のうろこがびっしりついた前足でブースターの体の前で組まれたオレンジ色の毛がフサフサと生えている前足を掴む。その足元の爪先から感じられるのは、このブースターがこの周囲の意識の流れに放っている明らかな恐怖だ。ベイリーフは表情を歪め、爪先から伝わってくるものに意識を集中させようと必死になった。（こういう時のために俺の能力はあるんじゃないか?!何を血迷ってる俺は?!）

ここそが、今こそが、リーヒュン・バイリング・グリーズ、自分の能力が必要とされる瞬間だ!ベイリーフはそれに意識をめいいっぱい寄せようと全ての感情を洗い流す努力をする。だが…どうしても見えない…感じられないのだ。この4か月の、彼の理解をあまりにこえる事態と訓練なる物によって、彼自身が気持ち悪くなるほど感覚が鋭くなっていることは嫌でも分かった。だが、感情の出所や感情が作り出すありとあらゆる流れは消してしまいたいほど感じ取れるのに、肝心の発信源が如何なる状態に陥っているか、すなわちどのような心境で、どのような感情を抱いているのか、それが見え

ないのだ。ユイリィが言っていた“必要な訓練”というものが今はっきりとわかった。もうちょっと前に言ってくれれば！どうしようもない事に対する感情が、彼の意識を司る格納容器内の核燃料棒から発せられる制御不能になりかけた分裂反応で生じた水蒸気となって、格納容器を危うく突き破りそうになる。

「死んでるだよっ！…」ブレイブがリーヒュンの前足をいきなり振り払い、右前足で自分の左前足をガツンと殴った。あの時に感じた真黒なものが再びブースターの意識の格納容器内部で暴発したように広がる。その恐怖、その衝撃、その悲劇がブレイブ・エスコーツ・クレイバーの意識をぶちのめし、生きたまま自分の容器の底から湧き上がる恐怖に食われている。「死んでるんだ……この寒さにやられたんだよ全員…お前も聞いただろサクラさんに…俺たちは滅びかけてんだ…」ブースターは頭のフサフサを、引き千切らんばかりに両前足で抱えて握った。

しかしその数秒後、ブースターの意識を食らい尽くした恐怖という魔物の腹を突き破るように、憎悪と憤激というブレイブ・クレイバーという普段の意識の残骸から生まれた凶暴な感情が食いちぎって飛び出し、その魔物をバラバラにした。全くおさまらない怪物は格納容器を突き破ろうとばかりに真っ赤に赤熱化した毒牙を容器に突き立て、突き破ろうとばかりに暴れまわった。

彼はその怪物に意識を飲み込まれかけている、ベイリーフにはその変化が寒気となってブースターの周りから放たれるのを感じた。「……何やってんだよ俺は…このくそがッ！…許さねえ…どうせ人間なんだろうがああいうのは……」

ブレイブの表情にその怪物は現れ、ほの暗い部屋と４隅にある白黄色の光が彼のうつむいた顔に生み出した影がそれに勢いを与えた。震える橙色の右前足でできた拳が、つるつる感と光沢をもつ大理石に見立てた床に押し付けられる。「……殺す……俺は奴らの仇を打つっ！いつか…いつか後悔したって知らねえぞ…なめんなよ俺らを

……」「……お前はそんな事を考えていたのか……」リーヒュンは恐る恐る親友の…生きたまま自信の意識の格納容器から生まれ出て、多くの意識が介在する宇宙空間へと漏れ出している友人の…前足にツルを伸ばそうとしたが、そのツル先から感じる異常な冷気の前に自分の意志がすくみ、ツルがたじろいでしまった。無駄に鋭くなった自分の直感が、このブースターの意識の容器からもれだす真っ黒い気体がブレイブ・クレイバーの意識を突き破り、前崎からフサフサ尻尾の毛一本にまで充満し、このブースターの体から床を這い広がって自分の周囲を満たしてゆくのをおぞましいまでに捉えていた。

ブースターは苦渋の表情を浮かべたまま振り絞る。「…実感はねえけど…俺は軍人だ…エメリア自治協会国防軍からも認められてる。俺がアメリカ軍にいるのは奴らの場所で人間どもの場所で生き延びるためじゃねえんだよ……ポケモン達が…俺らが、たとえ一匹残らず消え失せても、守るべきものがあるんだ、見せたい姿なんだよそれが！それは誰の為でもない、俺自身のために決まってんだ！……」ブースターはまたしても右前足で作った拳を大理石風の床にごつんと当てる。怪物にそそのかされた自分の意識が、自分の小ささと無力さを悟るようにささやく。彼はそれを必死に否定しようと言い聞かせた。

「……そうか…」ベイリーフはそんな彼から思わず目線をそらし、大理石に見立てた施設の床をじっと見つめる。揺れ動きつつある自分の運命を、何者かによって突如として乗せられたレールを、そして隣で自分と自分の文明が併せ持つ宿命に苦しむ親友の姿を、はっきりとした、これまでにない冷気として感じ取り、隣にいるブースターと同じくらい自分と自分の能力の情けなさに意識の格納容器が人間の高層ビル建築の杭打ちのように激しく内側からたたかれるのを感じた。本当に自分たちの文明が滅んでいっているのかは分からないが、自分の後先を考えないうかつさに、何も知らない無能さに、裏表もなく誰にも疑うことなく接しすぎる性格に、これまでに無か

ったほどのコンプレックスを感じる。
自分がベイリーフとして、リーヒュン・バイリング・グリーズとして自分が今何をしているのか？その答えは何なのか？そしてその問答の刹那、彼は思いがけない現実に気付く。

そう、いつの間にか自分は軍人になっているのだと。いくらこの部隊が協会の防衛軍とも人間たちの国軍とも違う、そもそも軍隊とは言い難い研究施設に所属する集団であれど、結果としては軍事行動に駆り出されているのは疑いようがない。ポケモン同士の集落を巡る争いや集落の自警目的で作られる“見張り”とは、いやエメリア自治協会に所属す如何なる探検隊、救助隊、防衛軍部隊とも全く次元の違う行動をしているに違いない。そんな場所・機関に何の疑いもなく放り込まれ、こうして自分が人間たちのご都合でわけのわからない場所を出発して、空の上という場所から落ちてきたという機械を探すという意味不明な事をさせられているのはなぜか？

ブースターが突如として立ち上がり、一発大きく伸びをしてベイリーフの方に向きかえる。「な…？」「聞きたいことがある…」驚いた表情を浮かべるベイリーフを頭部でしゃくり、無理やり部屋を出させる。２匹は不審そうな目を浮かべる兵士を無視し、ブースターがドアをけるように開け、大雪が降る建物から１００メートルほど離れた向かい側の建物の影に連れて行った。

「リーヒュン、お前はどうなんだ？お前は何のためにここにいる？！」不意を突かれた彼は思わず顔をブレイブに向ける。自分の意識

の核の容器にしまい込まれた燃料棒に思考を伸ばし、その中で必死に考える、思い浮かぶ答えは一つしかない。リーヒュンにとってここにいる目的は他に存在するわけがない。

だがそれを言葉にしようとした途端、これまで感じたことのなかった躊躇というものが彼の口を結んだ。喉の奥から声帯を通して出かけた親友の問いに対する（かれにとっては）自明な答えが、最初の一言目になろうとしていた口の動きのみが、息が狭い場所からこぼれる音のみとなり、残りは口先で凍り付いた。

茫然としたようなベイリーフの表情にブレイブは食って掛かった。「理由もないのかてめえは?!お前は何の目的もなくここに来たのかよ!?自分で選んだんじゃねえのかここにいることを!?」ブースターはベイリーフの首元の葉っぱを両前足で掴みかかった。自分の感情が暴走している、それは知っていても今のブレイブ・エスコーツ・クレイバーには止めようがなかった。自分の意識の怪物が容器を食らい強烈な毒を突き立ててくる苦しみに、彼の感情のアレルギーと化した部分、格納容器の水底に縊り殺していたはずの傷跡が悲鳴を上げ、我を失い、のた打ち回っている。「それともなんだ、あ、貴様はフローラをおもちゃにしに来たのか、おい?!」

「何を言ってんだっ!?俺はフローラを探すために来たんだって!何をお前は血迷ったことをいきなり……」リーヒュンがブレイブの首のフサフサをツルで掴み、後方に思いっきり突き倒す。「お前には知ってるわけがない…フローラがどういう風に苦しんでるかなんて死んでも言うか!…」「ああ知ってるわけがねえ!知りたかねえよ!今のお前みたいに迷ってばかりのバカの事なんかな!……」

掴みあったままの2匹のにらみ合いは数分間続いた。ブースターはベイリーフに引っ掴まれたまま、尻尾と背中を建物入口の階段に押さえつけられたままだ。お互いの意識から発せられる火花が二つ

の宇宙空間の中でぶつかり、飛び散る。

そんな中でリーヒュンの方が先に自分の意識下で起こった過剰な反応の制御を取り戻し、直後に自分のツルと前足がブレイブの腹と首元のフサフサを押し付けているという感覚をいち早く取り戻す。同時に、自分と彼の双方がこれに至った経緯が他ならぬ自分にあることを思い出し、またしても自分の単純さに意識の格納容器がうずくのを感じた。全く、自分はどうしてここまで感情的に動くようになったのか？昔の自分は確かにバカで恥知らずで向こう見ずだった、それが今でも変わらないどころか、今度は感情までもが過剰に、瞬時に反応するようになってしまっている。年齢的・精神的な意味で自分がそういう年代に差し掛かっているが故かもしれないが、それについて思い悩んだり考えたりするほど、自分の迂闊さにひどく失望してしまう。

ベイリーフは慌ててツルと前足を離した。目の前のブースターに対して自分が前足を出していることがひどく申し訳ない。「すまんブレイブ……俺がちゃんと答えないからだよな…」「……くっ……悪いのは俺の方だ…先に掴みかかってすまん…」ブレイブはかすれがちな声でそう言い、そのままの姿勢で自分の頭に右前足の拳を打ち込む。リーヒュンのツルと前足から思わず視線をそらし、すっかりひび割れた建物入口の階段を構成するコンクリートをぼんやりと眺めながら何度も息を深く吸い、吐き出す。自分の鼓動はまだわずかに早鐘を打ち続けているようだが、少しずつ、少しずつその怪物が意識から遠ざかり、それが塞いでいた周囲の景色が見えるようになってきた。いつの間にか自分は親友を連れて建物の外に飛び出していたことに、発電機による照明以外は暗闇に包まれている状態の村の名残、人間が中央アジアのカザフスタン・アクタウのはずれに

作った村の残骸を見つめているうちに初めて気が付いた。息を吸って吐く、目を閉じて自分の意識下でうごめく物に集中する、そうすることで感情の抑制という制御棒を徐々に自分の意識でのたうつ怪物のいる場所に差し込んでゆくのだ。かつて何回も経験したこういった感情を落ち着けるこの方法は、このブースターにとっては最も有効な処方箋である。

ブースターは最後に大きく息を一つつき、首を振って体を前に起こした。容器の中の恐るべき感情と記憶はすっかり冷却水の底に縊り沈めたが、そいつがいなくなった空白に何とも言えない虚脱感と、隣で俯いている親友とのこれまでにない隔絶感が耐えようのないほど大きな圧力をもって注入され、彼の全身の節々に、特に４本足の全てに強い疲労感と重りを大量につけられたような重さを感じる。「俺たちは…変わっちまったな…」「……同罪だ、俺にも問題がある。ブレイブはそれでいいんだ」心底辛そうなベイリーフの表情にブースターは、消え入りそうなほどわずかに笑みを浮かべて彼の右前足を自分の左前脚で軽く押す。「心配すんな、お前じゃなくて俺だ悪いのは。俺が軍なんかに入ったことが…軽率だったんだ…」ブレイブが表情を変えずにリーヒュンの右前足を両前足で軽く握りしめるように掴んだ。「分かってるよリーヒュン、お前が何の不安も抱かず、じゃねえや…どんな心配もせずに、こんな軍隊以上に危険な組織にいる理由…いつも色々と気疲れさせてホントにすまねえよな俺は…フローラを助ける、あいつの事を確かめる、それが兄貴として当然だよな……」「……」

「先に戻って休め、明日もどうせ強行軍だ…俺…少し考えてやらなきゃならねえな…」「…何を考えんだよ…？」「何でもいいだろうが……お前のカンを聞かせて考えろよ、な？」「あ、ああ…」ベイリーフは納得がいかなかったが、もはやこれ以上意識を集中させて

今の親友の意識の様子を探りに行くだけの気力も、そうしたいという好奇心も感じなかった。今はこのブースターを1匹にしたやったほうがいい、何となく意識に浮かんだその考えにしたがった。

ただ、そんな時でもリーヒュン・バイリング・グリーズらしいフォローは忘れなかった。「食器の方は俺が返しとっから…心配すんな」「おう、すまねえな……またお前に貸しが一つできちまったな……」「ハハ…なにが貸しだよ?そしたら俺、ブレイブに借りてばっかだろ?」「当たり前だろ…お前の貸したぶんは何年かしたら女の子にしてもらうぜ…」こういう時でも軽口を叩けるのは、親友に対するせめてもの気遣いというブレイブ・クレイバーらしいやり方だった。もともとそういう気苦労したリスクを考えたりするのが性格的に大の苦手なのにもかかわらず、さまざまな点で戸惑ったり悩んだりしている彼を、これ以上苦しめることはとてもできないからだ。現在でも自分能力の件やフローラのこと、そしてこの世界の非情な真実に心痛めている親友のまっすぐさや素直さをもうこれ以上壊さないように……

2匹のやり取りに目を覚ましてしまったテルルはそれを影から見つめていた。つかみ合った果ての表情に、彼女の意識の格納容器に巨大な石のようなものがのしかかるような重苦しさを感じた。自分がこんなところでその光景を見てしまったことにひどく嫌悪感を覚える。

彼等とて苦しいのだ、今までもそうだったし、そして昼間の光景も…私たちがまだ見通すことはできないこの世界、人間でいう地球という空間にある文明がいったいどうなっているのかが…いやな意味で見える気がする。そして何より…彼女自体が、テルル・アストラフスキー自身が経験したあの地獄も含め…それがこの世界の真実で

はないかという予感がぐるぐると彼女の中で渦巻いている。

（……みんな苦しい…そうよ、そうなの…でも…私だってそうなら……なぜみんなは…）見ているだけの自分に対するやり場のない複雑な感情が一気に意識の格納容器の底から吹き上がってきた。

歩いてきたベイリーフの前にグレイシアがふと出てしまった。リーヒュンと話すのは妙に違和感を覚え、つい苛立ってしまう、そんな普段のテルルの感情が表出する前に彼が気付いた。「テルルか……ごめん、起こしちゃったな……」「何やってんのよこんな真夜中に２匹で…」「…大丈夫だよ、心配すんな。俺たちの中でもう着いたから…」「あのね、私は心配じゃなくて……」テルルは答えに詰まる。紛れもない図星だった、心の隅では心配だったのだ。「判断はテルルがしろよ……ブレイブの近くに行ってやるか…そっとしてやるのかは…な？」リーヒュンはテルルの頭飾りの上、をしようとして首の左側、鎖骨辺りをツルで励ますように叩く。「うん……」彼女に選択するつもりはない、彼が数歩離れてすぐにブレイブのいる建物入口の階段を目指す。だがそこにたどり着く２０歩前で突如として憚られ、建物を覗ける隅に入ってしまった。彼のそばに寄ることがどうしてもできない。今のブレイブに元に行っても彼が嫌がるかもしれない、もしかしたら自分が感情を抑えきれないかもしれない、そういうもどかしいまでの不安感に負けてしまった。

テルルの目線の先ではブレイブがぼんやりと前足元のコンクリートを爪で削っている。グレイシアは戸惑いながら、かけてやる言葉も見つからずにその光景を眺める。ブースターのいる階段と木板が打ちつけられた入り口も、雪雲によって星ひとつない夜空も、なお吹きすさむ雪を大量に乗せた強い風も、彼女には太い鉄柱をつけられ

たように重苦しく感じられた……

２０１３年　１２月１３日　中央アジア　カザフスタン　アクタウから東に６５キロ　０９００時

今日の吹雪も雪原も昨日にましてひどい様相を示していた。このあたりでここまで雪が降ることは今までにもなく、いやこの先もうないだろうとも感じられる程の豪雪。車両で今日のポイントへと移動する欧州（ヨーロッパ）地域出身の統合軍兵士も、ＵＮＦＳＴＰＰＴの面々も降りしきる雪に、狭い場所に閉じ込められるような圧迫感すら覚えていた。極寒の監獄、この言葉がまさにふさわしい。

本日各員が向かうのは、昨日捜索した地域よりさらに５０キロ以上東に移動した、起伏や小規模な森林といったものが多い、すなわち昨日より一層過酷な地域である。この１週間近い捜索の中で最も宇宙船が墜落している可能性の大きい地域ではあったが、今日までの間の６，７日間はもはや人間が自力で捜索に入って帰還するのは不可能に近いほどの悪天候で、捜索は本日まで先送りされてきたのだ。それでもこの吹雪では、当然ながらヘリを使った捜索は不可能、車両で何とか視界と進路を確保できるまでの状況に何とか落ち着いたのが、昨日から今日の未明だった。

今回は捜索は、交信途絶直前の宇宙船のデータから計算ではじき出された地点を中心に、半径４キロの円状地域を南西から北西側へと弧を描くように４つに分かれて通り抜ける。統合軍の部隊も彼らの侵入ポイントと合流地点双方で状況を確認しつつ、気象状況の許す限り捜索を続ける。しかし、これはどう贔屓目に見ても、厳しい環境下で生存するための技術も捜索のために要する技術もはるかに

高度なシステムや機械を持つ人間が見ているだけで、肝心の捜索自体はポケモンに任せっきりという状態に他ならず、いかにも危ない物逃れをしているという印象は拭い去れない。

まあ、実際は人間の二次被害防止以外にも別の目的もあるのだが……そんな思惑はさておき、バストーク・ラルシア・ホルスト隊長以下の各員は、誰も経験したことがない豪雪と強風、体の内部まで凍結させそうな体感温度に身をすくめながらも出発したのであった。

……広大な零下の檻に、極寒が支配する監獄に彼らは足を踏み入れる。

結局、捜索に当たってのチーム分けの変更はなし、リーヒュンとまた一緒にやれることにユイリィは大喜びで、またしての彼の首元に自分の首を飛び掛かるようになすりつけた。「やっぱね、こういうのは自明じゃなきゃいけないよね！あはは！」「いつだって君はこんなテンションでいられるんだな……で、とにかくのしかかるように体重をかけるのは止めろって」ベイリーフは半ば諦めたようにつぶやき、猛吹雪にかすむ白銀世界を見回す。昨日に負けず劣らずどころか、昨日にも増してという言葉に合うほど天候が悪い。氷のように冷たい飛雪を横殴りにしている暴風は、雪原の中にたった2つ現れた植物の生えた3匹の生き物を、檻にはいる獲物を待っていたとばかりに凍り付かせようとするが如く冷気を帯び、ベイリーフの意識を司る極小の格納容器とそれを覆う水晶玉を、それを構成する物質の素粒子レベルで固めてしまいそうだ。

その一方で、このメガニウムの明るさは吹雪の中で不自然なほど

際立っている。「大丈夫大丈夫！寒いときはリーヒュンが私のむぎゅむぎゅ！温かいよ、うん！」ユイリィは相変わらずリーヒュンの周りを子供がはしゃぐように歩き回り、粉雪を小さなカンジキにも似た保護靴でばさばさ蹴り上げ、ツルで雪をすくっては隣の友人―（？）に頭の上からかける。彼女の意識を作る水晶玉とその内部にある核反応炉（リアクター）の格納容器は、厳寒の折でもストーブのような温かさを持ち、水晶玉を内部から暖かく輝かせている。このメガニウムにとってはベイリーフと過ごせることだけでそれほど嬉しい事なのだ。２０歳である自分にとってこんなことができる相手はまさしく彼しかいない、どんな状況下でも正確に裏表がなくありのままを認めてくれる彼と過ごしていると自分が素直になれるし、何よりそんな自分に正面から向き合ってくれる事、それが彼女の意識に大きな光を与えてくれている。

そして、ユイリィの笑顔と活発な動きがもたらす暖かさは、リーヒュンの意識の水晶玉と格納容器にも意識の流れが作り出す宇宙を通じてはっきりと届いていた。さすがに雪をひっかけられたり、体にのしかかられたりするのはちょっとばかり暑苦しいが、それ以外の点ではこのベイリーフの今の状況には大きな救いになっている。

そんな最中にリーヒュンは大事なことを思い出す。「それでさ、宇宙船のカプセルっていう場所は何となくだけど……」彼はツルを伸ばし、わずかに意識の水晶から自ら思考の触手を伸ばそうと集中した。（考える……それを思い浮かべる…）心の中でそうつぶやきながら彼は、感覚に伝わってくる小さな感覚までに全神経を集めた。そこにある物…自分の求める物……意識が流れる宇宙から噴き出す黒い感覚が彼の意識の中に入り込み、ベイリーフの頭の中でガンガンと耳鳴りのように響き始めたが、彼はそれを精いっぱい振り払おうと努めた。「え、え？…大丈夫？」ユイリィがリーヒュンの方をちらりと振り向き、少々怪訝そうな表情を浮かべて彼の背中をツルでそっと触る。彼にするなとは言うつもりはないが、自分からこんな唐突に意識を寄せに行くような気分には、彼女はなったためしが

ない。それを自分からやろうとしている、メガニウムはそんなベイリーフの姿をちょっと感動したように、ちょっとおかしいように眺め、そのあともう一歩近寄ってツルで優しく首元を撫でる。（……難しいって知ってるのに……ここはさすがって所だよね…）自分能力が未知数であること、それに思い悩むことも多そうだが、いざ必要に駆られるとそんなことお構いなしでひた向きに進めようとする。そんな彼の態度、ありように彼女の中でまたほんのりと暖かい物を感じた。

そんな状況が何分続いたか、リーヒュンはまたしても水中で何分も息を止めていたかのようによろめき、荒い息をしている。「正確には分からないな…でも、今俺が感じた雰囲気では確か…」彼は気を入れ直すように、右前足をがさがさと柔らかい雪の中で踏み鳴らしたのち、ふらりと歩きはじめる。「こっちだ…そう思う」

「なるほど、そっちだったんだね！じゃあこの方向にとりあえず歩こっか！」ユイリィは何の心配もなさそうな明るい声をだし、ベイリーフの後について行く。それから1，2時間は、今までと同じくメガニウムがはしゃぐようにベイリーフの周囲を歩き回り、彼をツルで小突き、首をすりすりし、きめの細かいかわいた雪をわざとらしく蹴り上げて大喜びしていた。

さらに2時間ほど歩く。人間の時間があてになるのなら、今はちょうど真昼時であるはずだが、周囲の風景をつめたく重苦しく覆い尽くす薄暗さは相変わらずだ。ダラダラと続く緩い上り斜面に差し掛かった3匹。ユイリィの感覚も猛吹雪の前にマヒしかけていたが、彼女の感覚からして斜面は見た目以上に長く、4，5キロはあるように感じる。雪原では目標となる対象物がきわめて少なくなるため、人間やポケモンはもちろん、動物でさえ遠近感がしだいにおかしくなり、体力の消耗を最小限に抑える必要がある状況下で無駄に動き

回ってしまう。それをリーヒュンは知っているのか、それともやはり彼らしいまっすぐさでただただ正面突破をしようとしているのか？彼女とて自分の先読み能力が１００％であるわけがない、そんな理由で今日の彼女はあることを決めていた。

ただ、こんな絶望的な風景が広がる状況下でそんな思いも多少揺らいでしまう、自分の意識の圧力容器から立ち上って水晶玉を満たしていく、不安という水蒸気に負けてしまったメガニウムは、彼女らしい婉曲を含めながらも思わず聞いてしまった。「ねえリーヒュン…正しい道はこっちで…合ってるんだよね？」

「俺はそう信じる、だからそうしてるんだけど……」「だよね！そうだよね、間違ってたらうちら戻れなくなるしね！、うん…」ユイリィは曖昧な笑顔を作りながらもリーヒュンのもとに足を速めて何とか近寄る。体重に対して４本足でそれを支える２匹は人間ほど雪に沈み込む事は無いし、雪原用の保護靴もつけているのだが、それでも人間の作った道路どころ動物の獣道でもない場所に降り積もった深雪は柔らかく、足を速めるだけでそれなりに体力を使ってしまう。彼女は彼の首元の葉っぱに掴まるが如く、ツルを彼の首元の葉っぱにかけた。「この斜面は…ちょっと感覚が掴みづらいけど結構長いよ、うん。まあウチの見た目だけどね…どうする？リーヒュンがそういうんだったら、あたしは全然登っても大丈夫だけど……」

「俺も問題ないよ、フローラのこと考えたら雪の斜面くらいで音を上げてらんない、どれだけあろうと正面突破さ」彼は首からぶら下げている上から彼女のマフラーで覆われている容器をツルで持ち上げ、ふたをそっと開けてみる。あの地底湖から持ってきた水の表面が凍り付き始めているようだったが、中の翡翠（ひすい）は普段と変わらぬ光を放ち、彼の意識の水晶玉に不思議な暖かさを感じさせていた。そう…これこそが彼の妹、フローラ・エルピー・リトリム・グリーズの小さな命、彼女へと続く道しるべ、兄はそう信じた。

「だよね！そうこなくっちゃ！うん、それなら一気に上まで…」メガニウムが気合いを入れかけたが、ふと思い出した感覚、いやさっ

きから感じている感覚が水晶玉を照らし出し、その映像を感じ取った中の圧力容器に緊張が走るのを感じた。それと同時に容器の燃料棒を冷やしている冷却水の底から、外の体感温度と同じくらい冷たい水がゆっくりと対流し始める。寒さのせいで精神的に疲れてきているからだろうか、彼女ない指揮下には急激に不安が広がり始め、本音を思わず漏らしてしまう。「…ウチのカンだとさ……もう少しこっちの方角だったんだよね…」

「おいおい、それを早く言えって！」ベイリーフが突然歩みを止め、びっくりしたような表情を浮かべてメガニウムがツルで指す方向を見つめる。まあ、その方向も別の緩やかな上り坂で、こちらよりもさらに急な斜面であるようだが。「俺の能力をあてにしてたのかよ？！何にも言わないから思わずやってみたんだが……まいったなホントに。ユイリィ、君のカンがあてになるんだったら本当に悪ふざけじゃ…」「ご、ごめんね！今日は任せよって決めてたの。リーヒュンのカンをたまには当てにしてみよっかな♪ってね…」ユイリィは満面の笑みを浮かべながらリーヒュンの体に左側からすり寄る。

「……なんたってホントに…ユイリィって奴は…」彼はもう呆れるしかなかった。意識の水晶玉が彼女の与える流れに慣れてしまったのか、それとも内部の格納容器が寒さでへたっているのか、もう怒る気力すらない。

そんなベイリーフの表情と彼の発する意識の水晶からの熱に、メガニウムは奇妙な安心感を覚えた。彼なら信用できる、なんだかんだで自分のありのままを認めてくれる、彼女の意識の水晶玉の中で小さな果実がはじけた感じがした。「……今日はリーヒュンに任せるよ……ウチのカンだって完璧にはできてないもん…今日のウチは……リーヒュンを信じる…よろしくね」「うん…ユイリィの方こそ大丈夫か?」ベイリーフがそっとメガニウムの視線を覗く。「うん、大丈夫…」「そっか、なら…行こうか」彼はツルを使って左の前後の足に装着した雪原用保護靴のひもをしっかりと結び直し、彼女の方は両前足の保護靴の下にさらに装着した綿入りの手袋の一種の（

まあ足袋（たび）というのが妥当かもしれないが、４本足の種族にとって用途は手袋と同じだ）裾を上にあげ、寒さに震えあがっているシェイミをちゃんと花びらにある首元のマフラーに入れ（「出てきちゃだめよ」）、２匹は斜面を再び登り始める。

比較的傾斜が緩く、雪のある程度固くなっている場所をリーヒュンは意識下で感じるがままに歩く。具体的にどういう場所が歩きやすいのかは知らなかったが、何となく足が動くがままに歩みを進めていくと、斜面に対してほぼ平行に歩いていたり、時にはほぼ垂直に登坂したいたりと変わって行ったが、意識の水晶玉の外側から迫ってくる感覚は確実に大きくなり、格納容器の中に確信という暖かい水が上がってくる。ユイリィの方も、真剣に頑張るそんな彼に対して徐々に口少なになり、少しだけ意識を彼のある道の先に延ばして彼をフォローするだけにした。斜面を登りきるのにさらに１時間以上経過したようだったが、２匹の足取りは先ほどより軽くなっているようだった。

最後の数十メートルをベイリーフは駆け上がる。意識の水晶玉に感じる温度が、自分たちが目標の至近距離にいることを彼に確信させた。「ここだ…この上に…」

最後の数歩を一気に踏み上がった彼が反対側の斜面を覗くと、そこには意識の底に先程思い起こしたままの光景が広がっていた。２匹のいる場所は周囲で最も高い丘陵であるらしく、周囲に広がる白銀世界が吹雪にかすむ視界が許す限り一望できる。「すっごーい…平原を一望だね…」後から駆け上がったメガニウムも、ベイリーフの隣にやってきて思わず高い声を出した。これが自分たちの任務で

はなく、単なる散策だったら、このまま彼に飛び付いて雪原から滑り降りたい、彼女は本気でそう思った。「ユイリィ、あれだよな！あれその…探してる奴…」「あ、うん！それだよ…」リーヒュンがツルで指し示す場所にあるのは……

2匹よりはるかに大きい、横の長さは5メートル、高さは4メートルはあろうかという円柱の形をした物体。本来は光沢のある銀色であったようだが、不完全な姿勢での大気圏再突入時の摩擦熱で表面のアルミニウム・チタン合金が酸化されてかなり黒ずんでいる。いや、実際はこれならまだいいほうで、燃え尽きなかった方が不思議なくらい奇跡的に形が残っている、と言うべきものだ。宇宙船やシャトルが大気圏再突入時にいかなる状況になるかは皆さんも映像でご存じであろう。雪に覆われた斜面にこれが激突した衝撃のせいか、周辺の降り積もった雪の下にはまだ黒く焦げた残骸のすすが見え、周辺の地形がすり鉢のように大きく深くえぐり取られている。それでもない土が露出した形跡がないという事は、それだけ積雪が多い事を雄弁に物語る証拠だ。

とはいえ、2匹にはそんな感覚はみじんもなく、汚れているのは太陽の近くを通り抜けたせいで焼け焦げてしまったのだろうと根っから信じていたが。

「おっし…近くに行ってみる…うぐっ！？」数百メートル離れたその場所に向かおうとしたベイリーフが雪の深みに踏み込んで前につんのめり、数メートルは滑り落ちた。「あはは！何やってんのよお、柔らかい場所に自分から飛び込むなんてホントにリーヒュンらしくていいけどね！」メガニウムが笑いながら彼に後から飛び付いて首から雪に埋もれかけた彼をツルで引き起こした。

「それでさ…これを置けってことだよね…」ユイリィが首から胴体

に回した装備品用バックのバックルに縛り付けた来たひもをほどき、ツルで灰色に輝く棒のような物体を2本取る。その先端ではいくつかの赤色の光が時折点滅している。「見つけたらこの機械をそばに置いて来いって…これが何かを出してるんだと思うよ、うん。人間の機械にしかわからない何か、ね?」「うん…こんなもの置かせるんだったら自分たちで行きゃいいのに…まあ、この大きさじゃ俺らでも運べないけどな…」リーヒュンが彼女から一本それをツルで取り、吟味するように眺める。ツルの先に意識を向けてみたが、何にも感じない、本当に何も感じなかった。これを作った人間がどういう思いだったか、どういう願いを込めて作ったのがまったくな見えてこない。彼は意識の水晶の中で軽くため息をついた。こんなものを作るくらいだったら自分で探しに入った方が早いだろ、と。

「まあいずれにしろ…」メガニウムが巨大な物体にさらにもう一歩近寄る。「これをここに突き刺せば終わりだよね!一緒にやろうよ!」メガニウムがベイリーフの右前足の付け根をツルで軽くたたく。「うん…別に問題はないけど…」「いいじゃんそれで!2匹でやった、ていう印になるの!せえの!」「ま、まだ準備してないだろって!」相変わらず自分のペースでその機械を構える彼女に彼は慌てて2本のツルで機械を持った。大きさのわりには重いが、持つのに違和感は全くない。

ずさっ!息を合わせたわけでもないのに2つの機械は同時に柔らかい雪原に入り込んだ。これで自分たちの任務は完了(コンプリート)、リーヒュンの意識の水晶から任務と言うちょっとした重みが一つ取り払われたような気がする。「やったね!うちらが一番最初に発見したんだよ、うん」ユイリィはいつにも増して満面の笑顔でリーヒュンに横から飛び掛突き、のしかかるように彼を雪の上に突き倒しかけた。「ぐえ…だっから…嬉しいと突き倒すなんて何歳の奴がするんだっての…」「だって飛び付くと寒いときは温かいし、暑いときは涼しいんだもん♪あとは嬉しいからやる表現かな?それでいいよね、うん!

それが一番の答え！あはは、それそれ、うん！……」メガニウムはそんな冗談を飛ばしながらベイリーフに体重を寄せ、しばらくしてそっと彼から離れ、続いて彼女は彼の頭の葉っぱの根元をツルでぐいぐいと押し始める。「そういえばさ、リーヒュンが場所を今日あてたよね！そんであたしの勘は大外れ！さっすがあ！」「そういやあ…俺が当てたんだよなあ…」ベイリーフの意識の中では、まだ自分が当てたという感覚はなかった。何となく任務を思い浮かべ、それで足が動くがままに歩いて行ったらこうなっただけだ。これが自分の能力とでもいうのだろうか？

その傍らでメガニウムが少し恥ずかしそうに顔を赤らめる。まだまだよくできるとは言い難いが、ひた向きで常に正面から相手に接してくれる、そして何よりそんな子供っぽいほど裏表がないところがかわいくて、ちょっと信頼してしまう。そんな彼が成長していくのは、ちょっとした先輩として、何より常に一緒にいてくれる親友として嬉しい反面、なぜだが分からないが不思議な寂しさを覚えた。自分からほんの少しずつだが、かけがえのない友達が自分から遠ざかってしまう、そんな甘酸っぱい感情が彼女の意識の水晶玉に入り込んでいく。「……この調子でリーヒュンができるようになったらさ、ウチはもう用済みになっちゃうかも…」

「それはないさ…絶対に」リーヒュンがそっと歩み寄り、ユイリィの右前足の爪もとを左前脚でポンポンとやる。「俺の能力は俺の能力でしかない、ユイリィの能力とはまた違う。サクラさんは2匹でいるからこそ能力が発揮されるって言ってたしさ、つまり…」ベイリーフが先ほどたどり着いた高台のあたりに目をやる。「…どんな状況になっても…2匹でいることになる、だからこそ、俺は君を必要とするだろうしユイリィは、ま、まあ俺を必要とする…そういう仲として当たり前だな」

「そうだよね。リーヒュン…ありがとう…ウチは……ホントに……」メガニウムが一瞬胸を打たれたように足元を見つめたが、その次の瞬間には嬉しさを爆発させる。「うん！リーヒュンはウチの物！ど

こまでもあたしの物！思いっきりむぎゅーとしてあげる！あはは！」
「うぎゅえっ……やめろって…ってまあいいや…」

2匹の無線機が同時になる。“ストームロード隊のデカブツ2匹の方だな、発見したか？”「はい！宇宙船とやらは無事残ってます、あの機械もつけておきました！」“さすがはカンの鋭い変人だな。よくやった、あとは通達のコースを通って帰還してくれ」

「相変わらずお前はうるさい性格でしゅよ、ミーをマフラーに入れたまま暴れるんじゃないでしゅ」ユイリィの首元にまかれたマフラーに入ったままのロズリンが顔をわずかに突きだし、耳元の花を寒さですくめる。「それともやっぱり……お前は兄ちゃんと結婚でもする気なんでしゅかねえ…」「な、何言ってんのよ…ウチはさ…べ、別に……そういうのがあるわけじゃなくて……」「何でしゅかその照れ具合？そういうのを“ツンデレ”って表現するんでしゅけど……」「うぎゅぐっ……」メガニウムがますます顔を真っ赤にしながらツルでシェイミを引っ張り出そうと焦るが、ロズリンは背中の葉っぱの生えた部分を上に向けてマフラーの中に滑り込む。

「な、なんだよその焦り具合？いくらなんでもさ、俺を好きなんて言うのは……真面目に困る……」「え、えっ？！違う違う違うよ！い、いっくら何でもリーヒュン好きって…命がいくらあっても足りないって……」不審そうに顔を覗き込むリーヒュンに、彼女は慌てて視線をそらしてマフラーをツルで締め直す。いくらなんでも恥ずかしい、そんなはずがない、ユイリィは必死に意識の小型格納容器の高揚を鎮めようと言い聞かせた。「と、とにかくさ…仕事は終わり終わり！早く帰って……」

その刹那、ベイリーフの右前足のすぐ元に電気エネルギーが飛び散り、リーヒュンはユイリィの近くに飛び寄った。メガニウムの表情が瞬時に引き締まり、彼女が意識の水晶玉の中にある反応炉（リアクター）が生み出す強大なエネルギーが一気に彼女自身と周囲の宇宙を満たしてゆく。「あれが例の盗賊集団みたいな奴らだね！やることはもう決まってるのよ、うん！何が何だか知らないけど、とにかく例の物から引き離して始末するから、一気に仕留めちゃうよ！」「わ、分かった！」「ウチがやる、リーヒュンはとにかく連中を高台のてっぺんまで連れてって！」そういうが早いが、メガニウムはツルを振るって何かを打ちだすと同時に、もときた斜面に向けて一気に飛び上がった。大気圏再突入用カプセルにほど近い雪原で暴発が起き、その爆発に何匹かは後方に吹き飛ばされたようだ。「連れてくって……やってみるかっ！」唐突に飛び出していった彼女にベイリーフは一瞬戸惑ったが、その直後、意識の中にそのイメージが映像となって現れた。どうしてこれが見えるのか、彼にとってもその原因を考える余地はない、と言うより考える気も起らずに彼は後ろに数歩分飛び退き、意識を周囲の宇宙に集中させた。

メガニウムは戦闘に直接かかわりたいという発作にも似た高揚感に襲われながらも、暴走しかける意識の核燃料を制御棒で力づくに押さえつけ、自分が向かうであろう数分後の未来に意識を集中させる。後方から飛んでくるタネマシンガンやかえんほうしゃの熱風や弾幕は、彼女にとっては1秒近く前から意識の中で思い浮かび、どうするか既に決定した攻撃に過ぎない、それを受け止めようとツルの先に意識をわずかに運び、足元をすくおうとする弾幕を飛び越え、ツルを飛び上がって振り下ろすだけで攻撃してきた殺意を含んだエネルギーはすべて跳ね返され、吹雪に荒れ狂う実在空間で消滅する。

同時にメガニウムは胴体にまかれたベルトにくっつく弾頭をツル

で手繰り寄せ、自分でイメージしたとおりに雪山に落としてゆく。頭の中でその光景を“描く”だけで、その1秒後にはツルが手榴弾をはじき落としている。

「止まりやがれっ！」「何言ってのよこのバカ……」右側面の柔らかい深雪で覆われた急斜面をルカリオがあがってくる。しかも彼女が皮肉な感心を覚えるほど。

メガニウムは何の疑念もなく目的の方向へと進み続けた。問題ない、こんな表面感情でしか状況を判断できない雑魚は、たとえ１０匹であろうとツル一本でバラバラにできる。そして、そんな彼女のあざ笑うかのような想像は数秒後に現実化した。相手の打ち込んできたインファイトをツル一本で弾き返し、ちょっとした小細工、そのエネルギーの方向をわずかに意識の宇宙の中でひねった。すべてのエネルギーがルカリオの手足にかかり、断末魔を上げる間もなく相手は手足がもげて飛び散る。

「……！！！！！！！！」その背後から飛び掛かってきたのはリオル、先帆の奴の子供か何かだろうが、水晶の中心部まで戦闘と任務という黒雲に埋め尽くされた今の彼女に同情意識などなかった。そいつがありったけで打ち込んだ“はどうだん”を彼女はまたしてもツルの一振りで吹っ飛ばし、リオルに直撃させる。「みみっ！」」メガニウムの首元にいたシェイミがベストタイミングで“エナジーボール”で相手の首元をぶっとした。強力な衝撃波で首を折られた相手はそのまま背中から斜面を無力に転げ落ちていく。

メガニウムは後ろ足の爪で雪を捕え、後ろ半身を滑らせるように停止した。相手は相当の数がいる、（……フン……まさにあたしの作ったステージがさぞかしお似合いの連中ね…）彼女の意識の格納容器の中で凶悪な喜び、戦闘本能に満ちた快感が核分裂反応を起こし、外側の水晶玉の機体に飛び散った。しかしその直後、彼女の水晶玉の外の流れが彼女に警告を発する。「もらったあっ！」飛び込んできたのはピカチュウ。勢いで雪原の斜面を飛び上がり空中で一回転して攻撃の態勢に……

その直後、後方から飛び掛かったベイリーフのツルがピカチュウの首を締め上げ、ベイリーフが着地すると同時にそいつを雪に叩きつける。「こんのおっ！」「ぐえっ？！！」ベイリーフは遠心力で右の両足が浮き上がるほど反時計回りに体を回し、電撃を放つ直前のピカチュウを思いっきり斜面に叩きつけ、それと同時に意識の水晶玉からツルに送り込まれたエネルギーが奴の頸椎をバラバラに砕く。ピカチュウは絶命したまま深雪の中に時速２００キロ以上で叩きつけられ、漏れ出た体内エネルギーで爆発した。

ベイリーフはメガニウムに飛び寄った。すでに背後には連中が迫っている。「どうするんだ？！」「決まってるでしょ、あんな腐れた連中の頭は……」彼女は彼の腰のベルトから手榴弾を3個まとめて取り上げ、わずかに思念を送って頭を叩き、瞬時に振りかぶった。「…冷やしてやるのよっっ！」彼女は前足が持ち上がるほどツルを振り上げ、３つまとめてそれを投げる。その３つが地面に触れる直前、彼女はもう一度ツルを一振りし、それと同時に雪原放り込んだ手榴弾のピンが飛び信管が作動する。

ついでに彼女は、またしても周囲の空間に意識を伸ばして手榴弾を掴み、的確な位置で暴発するようその斜方投射運動に小細工した。

６つの大爆発が同時に起こった。数匹はその爆発に手足をもがれ、胴体をえぐられてあちこちの方向に吹っ飛ぶ。
それと同時に彼女が思い浮かべた情景も完璧に再現された。６つ綺麗に並んだ爆発源を断面にして、深く、しかしふわふわと降り積も

った粉雪の何メートルもの層がひび割れ、反対側の斜面をすべて巻き込みながら滑り落ちはじめる。逃げようとした連中を全員巻き込んで、雪の層が斜面に平行に見て１００メートルは連鎖反応で数十メートル下へ、距離にして1キロ以上は落下していく。

だが、それはやり過ぎだった。あまりにも広い層を崩落させてしまった。戦闘に入り浸っていたメガニウムがユイリィ・ランタン・プレミドールに戻った時、彼女の意識周囲の宇宙が再三にわたって警告していたことに今更気づいた。

「ううっ?!」「やっば……」2匹とシェイミは後悔する暇もなく、崩れゆく粉雪の大波に足をすくわれた。あっという間に周囲の雪のかさが胴体を超え、首を超え、頭を超え、頭の葉っぱも雄蕊も雪の大河に飲み込まれ、胴体の横で滑るような恰好のまま2匹は斜面を滑り落ちた。

一方その時こちらも……

「本当か、見つけたか!」テルルとともに彼らの西3キロの地点を歩いていたブレイブが、耳に装着した無線機のイヤホンから流れる音声に、嬉しそうな黄色い声を上げる。「よっしゃあよくやったぜ奴ら!俺らの捜索もこれで報われたってもんだ」「あっそう…見つかったのね…まあ、良かったと言えばそうなのよね…」テルルも無線機から聞こえる人間の声に嫌悪の表情を浮かべながらも、ほっとしたように保護靴付きの右前足でもみあげ飾りの雪を払う。「ってアンタが騒いでどうすんのよ。まだ私たち帰ってないんだから、なんか合っても知らないわよ……」

ブースターの歓声に、グレイシアは呆れてツッコミを入れる気にもならない。ともかくこれで自分たちの仕事は終わり、あとは指定された場所に帰るだけ、テルル・アストラフスキーとしてはこんな雪原の中に色々な意味で長居したくなかった。彼女の生まれ育ちが故に寒いのが大嫌いなこと、そして何より…雪原の中に、思い出したくもないあのころの自分が見えてしまうこと。自分の意識の水晶の一番奥、中心にある格納容器の冷却水の一番底に沈めた物を思い起こすだけで彼女は吐き気がし、目の前の視界がフラフラする。

「それよりも、まあとにかく…」グレイシアは自分の首からかけて胴に回した装備品入れから紙を一枚引っ張り出す。とはいっても巻かれたその紙をわずかに広げて自分たちの現在位置を見るだけだ。右前足に爪先で左前足の保護靴のひもをほどき、その紙を広げようとすると、埋もれるほどの雪ですっかり手の感覚が失われかけているのが分かる。周囲は細かい起伏が多く、小さな林のような木々の集まりも点在しており、地図を読み慣れていれば迷う事は無い。「……私たちはコースを外れることなく進んできたのね。それで今この辺りだからさ…」

「こっちの方向だろ」ブレイブがテルルと頭をくっつけるように地図を覗いて右前足の先で地図の一点を指した。続いて顔を上げ、2匹（とミオカ）から見て左手、小さな林のような木々たちの左手を右前足で示す。彼の意識の水晶玉の表面に、自分たちを地図のように上から見落とす光景が鮮やかに写った。「それで…俺らが行くのはこっち、だいたい1時間は歩いてもう少し左、それで、まあだいたい2時間歩いて高地を左手に見たらそのわきを少し右、1時間で場所に付く、な？」

「あ、ブレイブよく分かるのね…」グレイシアが感心したように周囲を見回し、地図の紙を丸めて装備品入れにしまう。「アンタいつこれを読みつくしたの？」

「今朝だ、テルルが起きる前の…ざっと1時間ぐらいだな。地図は読んで使うんじゃねえんだな。頭に入れて目の前で動かして使うも

んだぜ」ブレイブが右前足のカンジキを締め直す。「周りを見ながら地図から見える風景を頭ん中で思い浮かべる、そうすれば絶対に迷わねえ」

「ふーん…てか、すごいじゃんアンタ」テルルも右前足の手袋をはめ直し、その上から保護靴を履いてひもを締める。「だろ！まあ俺はテルルのいるとこだったらどこでもいいけどな！やっべえ、テルルちゃんが地図替わりとかまじになるぜ！」気をよくしてテンションが上がったブースターがグレイシアの右側から飛び付こうとし、彼女が両前足で彼の頭を押し出すように振り払った。「だから……嬉しくなってもそれはしないの！どう見たってキモイよ…理解してる？？」「やっぱ気持ちいなテルルのモチモチほっぺ！おっしゃあ、残りを行くぜテルル、ミオカ、頭に乗れ！」「うんうん！」イーブイがグレイシアの背中を離れ、ブースターの首の後ろにしがみつく。楽しそうにフサフサ尻尾を振って歩きはじめたブレイブの後を追いながら、テルルは思わずほほが緩むのを感じた。相変わらずの女好きで、時に変態的な行動をとることも多いが、常に自分と周囲をぐいぐいと引っ張る、そんな彼の後姿が、彼女より年下であるにもかかわらず頼もしく見えた。

歩きはじめて2時間、次第に周囲が暗くなっていくのを見ると、いつの間にか一日が終わろうとしているようだった。まだブレイブの言う“左に少しそれる”はしていない。「ねえブレイブ、そろそろ左じゃないの？」「もうちょっとな、思ったより雪が柔らかい上に多いか…ちょっと遅れてるが、深夜になって迷う事はねえよ、な、ミオカ？」「うん…ブレイブと一緒なら大丈夫だよね！」「おっし、その意気だぜ！だから安心しなテルル」テルルの問いかけに彼は余裕のある声で応じる。彼の意識の中には遭難すると言う恐怖も懸念もない。ただ、頭に記憶した地図と風景を掛け合わせて進行方向を見定める、それ以外の何物でもない。そうすれば、たとえ真っ暗に

なっても精神的視界に余裕をもって進むことができる。
そんなブースターを見ているグレイシアの意識の水晶の中に、昨日の夜に見た光景が鮮やかに写った。あの時の彼の表情…うつむきがちな目線…ベイリーフと何を語り、何を掴みあったのだろうか？そして今の彼はそれを押し殺して…必死になって前を向き続けているのだろうか？

意識の水晶にある意思を司る核反応炉がわずかに精製するその疑問を抑えきれず、彼女は思わず尋ねた。「ね、ねえ…ブレイブ」「ん？どうしたんだ、来た！寒くて俺に温めてほしいんだろ！」ブレイブがフサフサ尻尾を振って後ろに駆け寄り、肩を並べるように歩き出す。「何言ってんのよこのバカっ！……そんな訳ないじゃない…」テルルが思わず足を止めた。そんな彼女の姿にちょっと驚いたか、彼も歩みを止め、彼女の方に視線を向ける。グレイシアのいつにも増して深刻そうな表情にブースターも表情を締めた。「そんな訳ない、か…言えよ…俺の事だろ、止めないぜ」「あ、あのさ、昨日の夜の件はいった……」

ばしゅっ！2匹の足元で爆発が起こり、2匹は同時に飛び退く。「何今の？！」「奴らだ、昨日チビとラブが襲われたっつう連中だろ！」「な、なら……」テルルが姿勢を少し下げて身構える。「ミオカ、後ろに下がって、ミオカに手を出させはしないよ！」「よっしゃ、下がってろよ！どうせ相手は2匹しかいねえ、一匹ずつ潰してやる！」「う、うん…」ブレイブの背中からイーブイが後ろ側に飛び降りると同時に、彼の体温が四酸化窒素とヒドラジンの自発着火作用とメタンとの混合気体による体内燃焼で急上昇した。それに伴って意識の反応炉の制御棒が急降下し、強烈な戦闘に対する興奮が彼の意識の水晶を異常発熱させる。
「行くぜこらあっ！」完全に戦闘本能によって思考を失ったブース

ターが目の前にいるエーフィに突っ込む。「ったく、アンタ気が早いのよ！」「だ、大丈夫なのテルルさん？」テルルの右後ろ足にしがみついたミオカの前足は震えている。「大丈夫、ああ見えてもブレイブはミオカの事を守ってるんだから、ここでじっとしててね」グレイシアはイーブイを木々が並ぶ脇の窪地に入れ、離れる間際に両前足で抱きしめた。「いくらこの世界が危ない場所でも私たちはずっと一緒、人間にみたいに都合よく見捨てたりはしないから」一瞬の温もりののち、グレイシアはそれに対する思いを振り払って前に飛び出した。

「喰らえっ！」「うぶっ？！」ブースターの“かみつく”の第一撃は、既にエーフィの首元を捕え、そのまま相手を後ろに突き倒した。しかしその一発程度ではくたばるはずもない。次の瞬間にはブースターは相手の“サイコキネシス”で後方に吹っ飛ばされ、頭から雪原に叩きつけられて後転をうつように転がった。これが地面だったら確実に首の骨を折っていただろう。「…くっ……この…」ブースターが仰向けになった状態から起き上がろうとするが、エーフィの強烈なサイコパワーに押さえつけられてどうにもこうにもならない。「もらったわよっ！」エーフィがブースターに飛び掛かかり、とどめの一撃を食らわせようとする体制に入った。もう一発当たれば確実に彼は手足が内部から……

だが相手がパワーを打ちだす瞬間にチャンスがある。その瞬間はサイコパワーを一瞬自分の所に戻すため、押さえつけているエネルギーは緩むのだ。

そのチャンスを、かのブレイブ・エスコーツ・クレイバーが見逃すはずもないかった。“サイケこうせん”が打ちだされたとほぼ同時に彼は飛び上がって前転を打ってそのエネルギーから逃れる。「これを読んでた？！」「これが…」彼は体を振り向くためにひねっ

て右に滑りながら急停止し、着地したばかりの相手に間髪入れずに攻め寄った。「普通だっっ！」ニトロチャージで一気にたたみかけ、相手を突き飛ばしつつ“かえんほうしゃ”で丸焼きにする。

立て続けに攻撃を浴びた相手は、後方に吹き飛ばされたのちに雪原に叩きつけられて動かなくなった。「それで…あいつ…」立て続けの攻撃に大きく息を吸き、吐いたブースターが思わずグレイシアの方向を見る。

何の因果かは分からないが、グレイシアの相手はトロピウス。素早さでも相性的にもテルルに１００％分があるが、今の状況は真逆だった。巨体にもかかわらず暗緑色の翼で、すいすいとまでは行かなくてもかなり動き回るトロピウス相手に、グレイシアは自分でもじれったいほどの苦戦を強いられていた。「おとなしく持ってるもん渡せば……」「はあ?!アンタは…くっ、金目当て?!」グレイシアはトロピウスのエアスラッシュを姿勢を下げ、後方に飛びのき、左右に交わしながら衝撃を受けた。しかしそんなことに衝撃を受けている暇もない、相手の連射はすさまじく、彼女には反撃する暇さえない。「ぐぶっ?!」一瞬気を離したすきに“げんしのちから”で彼女は左に跳ね飛ばされる。

「こんのバカがっ!!!」ブースターがトロピウスの背後から飛び掛かった。ここで“フレアドライブ”が決まれば確実に仕留められる。「もらったっ！」上に飛び上がった彼は、何の疑念もなく全身の熱エネルギーを正面に集中させた突っ込んだ……が……

（……かかってない！）

体内のエネルギー量が不十分だったか、そんな事を後悔したところで彼にはどうしようもない。それを回避しようと上に飛び上がっていたトロピウスからまたしても大量の岩石がぶち込まれ、ブースターは地面に叩きつけられた。

「申し訳ねえが…お嬢さんも始末さてもらう！」相手が飛び掛かったのはイーブイ。岩石に叩き飛ばされたグレイシアにもその光景は飛び込んでくる！「っ！？……」ミオカでは確実に助からない、いや生き残れない。突如湧いた冷たい感情に、グレイシアは意識の水晶に渦巻く霧を振り払って後方からイーブイとの間に滑り込む。

「ひいいっ！？」「仕留めるっ！」雪原の窪地にドスンと着地したトロピウスがイ―ブイを叩き潰さんとばかりに両前足を振り上げる。トロピウスの“ふみつけ”を浴びたら、たとえ衝撃波だけだったとしても助かるまい……

「私がっ！」突如襲い掛かった恐怖に立ちすくむミオカ・ナミエ・ソウヨウをグレイシアは乱暴に突き飛ばし、振り下ろされた右前足を両前足で受け止める。「うんぐグッ…アンタなんかに……ミオカを……」彼女はある限りの力を、両前足と雪の窪地でトロピウスの足とつっかえ棒になっている後ろ足に込める。隣にいるイ―ブイを殺らせはしない、今のテルル・ルナマリア・アストラフスキーにとって隣にいるイ―ブイはテルルの弟、エルヴィン・ムスペル・アストラフスキーと全く同然、自分の命に代えてでも人生を繋げるべき存在だ。

「き、貴様ああっっ！！……」その直後、その両前足にいら立ったトロピウスが渾身の力でつっかえ棒を折り飛ばす。相手の前足は慌

てて引こうとしたグレイシアの左前脚を押しつぶした。彼女の左前脚が不自然な方向にひねられ、強烈な痛みが彼女に走る。だが、今のグレイシアにとってその衝撃は一瞬でしかなかった。「！！！！！！！！！！」目の前の相手に抱いた強烈な敵愾心の前に彼女の意識の水晶は、その内部にある暴走寸前の核融合炉から放出された強烈な感情に征服されている。彼女はとっさに胴体右側に縛りつけた必殺の兵器をひもから引き抜き、折りたたまれたそれをわずかに振るって刃先を展開させる。「もらったわよっ！」「なっっ？！」彼女はそのまま前に転がり込むように前へと体重を移動させ、銛の刃をもう一度振り上げたトロピウスの腹に深々と突き刺す。「おぶっ……」「そのままああああっ！！……」後ろに倒れかかった相手、彼女は間髪入れずにれいとうビームを叩き込む。相手の巨体はそのまま後方へと倒れこみ、長い首の先の後頭部を今日出す格好であおむけに倒れて動かなくなった。突き刺した銛の刃の隙間からは、噴水のように大量の血液が噴き出しているおそらくは動脈を突き破ったのだろう。

テルルは左前脚を引きずって山のようになったトロピウスの腹元に突き刺さったままの銛を、そのもちえの端についたひもを使って右前足だけで何とか手繰り寄せ、横に傾けて引っこ抜いた。「だ、大丈夫かよ……」先ほど突き飛ばされたブレイブがフラフラと起き上がり、グレイシアの方へと駆け寄る。「私は…ちょっとこいつに踏まれたけど…問題ない…」「そうか……くっ、わりいな…俺のフレアドライブはやっぱまだまだ発展途上か……」ブースターはため息をつて自分のカンジキのような保護靴がはまった前足を見つめる。あの時自分がフレアドライブを決めていれば、彼女が踏みつぶされる事は無かったんじゃないか？自分がひどく情けなく思えた。「ブレイブ！ケガとかしてないの……」窪地からちょっと不安そうな顔をしたミオカがそっと顔を出す。「ミオカ！」ブレイブが彼女の元に走り寄り、両前足で抱え上げた。「ケガとかねえよな！な、

な!?」ブースターはイーブイを抱え上げてからのあちこちを見る。顔、体、４本足……どこにも傷はない。一瞬破裂するかとさえ思うほど加熱された彼の意識の水晶が、安心感で急激に冷めていく。「良かった……お前は俺の……」「う、うん！テルルさんが私を守ってくれたからね…ブレイブの方こそ頭のそれ…」ミオカは自らの意志でブレイブの前足から離れ、後ろ足から地面に降りる。「こ、これか……なんでもねえ、こんなの傷の範囲じゃねえだろ……」ブースターは頭のフサフサの下あたりにできた傷を左前足でさする。

「とにかく、今はさっさと例のポイントに行くことだ。行くぜテルル…」「う、うん…」何か引っかかるような口調で歩き出したグレイシアにブースターは振り返った。

「どうした?」「な、何でもない…なんかちょっと疲れただけ…ちゃんとついてくるから大丈夫…」テルルは無理やり笑みを作って応じるが、次に左前足を突けた瞬間、彼女の表情が激痛に引きつりそうになった。手袋の上から保護靴をつけているのでどれくらいのけがをしているのか外見では分からないが、この具合では何時間も歩けるのだろうか……

やはりテルルの見通しが甘かった。ものの１０分たたないうちに、左前足の痛みはすでに耐え切れないほどになっている。足を引きずるだけでも鋭い突き刺すような痛みが走る。どんなに努力しても、いとも簡単にブレイブに遅れをとってしまう。このまま彼においていかれてこの雪原に取り残されるのか、そんな根も葉もない不安で彼女には目の前の雪景色がひどく暗く見えた。

そんな彼女の様子をこのブースターが見逃すはずがなかった。左手に木々の集まり、すなわち“左に少し曲がる”場所が見えた時、彼は遅れているグレイシアに踵を返した駆け寄った。「テルル、足見せろよ」「は?」「お前の前足だっつうの！痛いんだろさっき踏ま

れた場所が。女(メス)が送れるときってのは、だいたいケンカしたか怪我して助けてほしいときなんだぜ」テルルは俯くと同時に、心の中でため息をついた。こいつは一体どこでそんな事を知ったのだろう？この男(オス)の性格か、それとも男の常識というものなのだろうか？「……ちょっとまずいかもしれない……」

彼女の姿を見ただけでブースターはくびのモフモフをすくめた。またしても図星だ、しかも負けん気の強い彼女の事だから相当痛いのを我慢していたのだろう。「ったく！そういう事は早く言えよな！それで足が動かなくなったらどうするんだよ…で、どっかで見てやらんと……」ブレイブは少し辺りを見回す。「……あそこだな。俺が見てやる」

どれほどの時間がたったか……つめたい風を受けるばかりだったベイリーフのほっぺに、小さな温かいものが何度も触れる。その物体の意識の水晶が放つ心配は、彼の意識にひときわ強い作用をもたらす。

雪崩によって突如停止したリーヒュン・グリーズの意識の核反応炉は、その温かい重いという外部電源によってわずかではあるが再稼働しはじめた。失われていた感覚の名で最初に戻ってきたのは、雪にうずもれた体の中で吹雪の中に露出している部分の感覚と聴力だ。

「何をぼやぼやしてるんでしゅか……もう暗くなってましゅよ……」

「ううう……」彼はわずかに足を動かして起き上がろうとした。重い、動かせないほど重い、そして鈍く強い痛みが走っている……まるで体の左側から小麦の袋を何十個も乗せられているような……

「兄ちゃん、何やってるんでしゅか？！」またしてもその生物の前脚か何かが、彼のほっぺをぺちぺちと叩く。リーヒュンにはすぐにわかった間違いない…隣にいるのは…

「……ロズリン…無事だったか……」彼はわずかに目を開ける。

目の前にいるのは予想通り、普段はメガニウムの上にいるシェイミだった。それと同時に記憶が戻ってくる。猛烈な吹雪、襲い掛かってくる連中、そして爆発と雪の崩壊……

「！！！」ベイリーフの意識の水晶に周囲をはるかに上回る冷気が走り、体が発作を起こしたようにびくんとひきつる。自分がこうなっているという事は彼女もそうなっているはず…彼は衝動に駆られたように体を起こした。葉っぱの生えた首の根元から、４本足と腹の周りから、そして尻尾の先からまで雪が雪崩のように崩れ落ちる。彼の上に乗っていた量のわりには、柔らかい雪のお陰であっさりと起き上がることができた。が、その直後に目の前がぐらつき、そのまま左側に倒れそうになる

「くっ……」ベイリーフは息を詰まらせるように左前後足の爪を斜面に食い込ませて何とか踏ん張った。ほぼ全身が雪の中に長い間埋もれていたせいか、感覚が冷え切って何とか歩いていくのがやっとだ。リーヒュンは崩れてさらに柔らかくなった雪と寒さによって消耗した体力という状況の中を、足の付け根まで雪に埋もれ、何度も前につんのめりそうになりながらも歩き進めた。方向は定まらなかった、寒さで薄れかけている意識で考えうる限り前に進んだ。そこに彼女はいる、そう信じて。

「どこか……どこかに……うぐっ！？」「ぎゅうっ……」下を向いたままひたすらに歩き続けるベイリーフは突如として何かを頭にぶつけた。当初からぐらついていた意識に加わった衝撃に、思わずそのままたしても気絶しそうになったが、今度倒れたら確実に凍死する、そんな恐怖が彼の４本足の支えを何とか食い止める。「うぅっ…まったく誰だって……」意識の中に充満する霧を何とか振り払ったリーヒュンが重い頭を辛うじてあげた直後、今度はその首元にウグイス色の物体が強くもたれかかって、それでまたしても後ろに倒れそうになった。それと同時に彼の意識の水晶から霧がはじけ

飛んだ。「ユイリィ!?…無事だったんだな…」「う、うん…なんとかね…はあ…はあ…リーヒュンこそ…大丈夫?」

「うん……まあ何とか…」彼はユイリィの言葉以上に、彼女のもたれかかった首と頭の黄色い雄蕊(おしべ)からわずかに伝わってくる感触が妙に気になった。体の冷たさ以上に精神的にまいっているようだ。無理もない、自分たちくさタイプが雪の中にかなりの時間放り出されていたのだから。

「そう……良かったよ、うん……」メガニウムはふらりともたげた首を上げ、自分たちが滑り降りた（落ちた）斜面の方を見つめる。さっきの崩壊ではかなりの雪が崩れ落ちたようだが、それでもその面は雪で覆われている。やはり積雪が相当量なのだ。さらに厄介なことには、さっきの崩落のせいで斜面を覆っていた雪が減り、斜面が一層急になっている。しかし2匹が向かうルートは斜面の向こう側、ここを登らなければたどり着くことはできない。「……どうする?どうやってあっちに向かう?…」

「…考えられるとしたら……」ベイリーフが一層きつくなった斜面を見つめる。既に日没が近く、辺りは薄暗くなり始めている。迂回するルートを探すのは面倒だし、何よりそこを突破する前に辺りが暗くなってしまうだろう。何の明かりもないこの場所で夜になれば前後不覚に陥るのは必至、雪山でのそれは確実に死を意味する。もう道は一つしかない。「……登って元の道に復帰、それしかないか」

同日　中国　大連(ターリェン)　大連造船所付近海域　０９００時

アメリカに次ぐ経済大国・軍事大国である中国の官民双方の造船産業の一角を担う大連船舶重工集団のドックに面した海を、ウクライナで当初ロシア海軍用に製造・進水したものの、新型空母の開発に伴って中国に譲渡され、独自の艤装を施して落成した中国海軍初の空母。その中国人民解放軍でもトップクラスの大きさを誇る大型軍用艦船が、護衛艦艇である蘭州級（ランシュウ）ミサイル駆逐艦1隻と江衛型（ジャンウェイ）フリゲート艦と共に港口へと向かう。情報漏えいを防ぐために普段いるはずの貨物船はおろか、港湾関係の船まで港外または岸壁に退避させ、岸壁という岸壁には軍の兵士や治安警察の人間と武装警備車両が物々しいまでの警備についている。

突如、艦隊が向かう港口から5，6キロ離れた海上で爆発音が響き渡り、それと同時に水柱が複数上がり、周囲の陸地の緑にいた鳥が一斉に飛び上がった。岸壁や港湾施設・作業施設の中にいる警備員や港湾関係者たち、港口周辺に移動させられた港湾の作業用船舶や民間貨物船の乗員、蘭州級駆逐艦や江衛級フリゲート艦の甲板上の乗員たちの目線が水柱の方向にそそがれる。海の方向へと向けた試射や簡単な兵装の射撃試験を陸地・港湾の至近距離でやってしまうといういかにも中国らしい行動は日常茶飯事であって人々が驚くような話ではなかったが、衝撃や爆発音に思わず振り向いてしまうのが、霊長類・哺乳類で面々と受け継がれてきた自己防衛本能とでもいうべきであろうか。

そんな中でも、空母で印象的なだだっ広い飛行甲板（フライトデッキ）の端にちょこんと飛び出した構造物、航海艦橋に立つ艦長の男は上機嫌な笑みを浮かべていた。中国海軍で最大級の艦船の前に、周囲を固める護衛艦隊は戦士の従者、岸壁の建物や港口にかかる橋から見守る人々や警察車両は見送る人民、前方で上がる水柱と爆発音でさえこの船とその艦長に上り詰めた男を称える花火と祝砲に聞こえる。

「艦長、前方航海進路上のポケモン排除がほぼ完了、情報を受諾しました」艦橋中央部分のコンソールのふちに両手を置いて、前方を

食い入るように見つめる彼に航海士長の男が歩み寄る。「よっし、舵中央、進路そのまま、港口を離脱だ！」艦長は前を見たまま声を張り上げる。

「艦載航空部隊、予定の会合時刻まであと1時間です」通信士の男が、通信用のコンソールに表示されたリードアウトを読み、艦長の男の方を座席から振り返る。「よしわかった、航空機部隊の着艦も予定通りの時刻、座標で行う。フライトデッキ担当、準備を怠るな」

「了解しました」中国軍がロシアのＳＵ－２７を独自に改良した“Ｊ（殲撃）－１１”で構成された史上初の海軍航空隊の精鋭部隊８機は1時間後に黄海で会合するのだ。

艦長は気分よく掴んでいる前方コンソールのふちを指で叩く。その隣に副長が歩み寄り、にこやかに声をかけた。「ずいぶんとご気分がよろしいようで…」「当たり前だ…ふふっ、ついにわが人民解放海軍も米海軍や統合海軍と肩を並べる海上航空戦力の第一歩、この“海龍（ハイロン）”を手に入れたのだからな、そして私がその初代責任者…武人の本望、ここにあるってわけだ…」

中国人民解放海軍自慢の、中国史上初にして新鋭の航空母艦“海龍”以下の艦隊は、１０分と経たずして港口を完全に離脱し、渤海から黄海の中心へと向けて南へと進路をとって順調に航海を進めている。艦載機部隊の第一陣が着艦するまであと５０分ほど、アメリカ海軍が太平洋艦隊に配属させたニミッツ級空母や、今年3月に就役予定とされるジェラルド・Ｒ・フォード級空母などと数の上では現在の所圧倒的に不利だが、中国海軍は今後は自国の造船産業で本格的な航空母艦の建造を続ける方針である。

これに中国随一の生命工学企業“吉祥公社”の量産兵士部隊が加われば、わが中国人民解放軍はアメリカ合衆国軍や国連統合軍とも対等に争える勢力になる、艦長はそう確信していた。

２０１３年　１月１４日　カザフスタン　アクタウから東に７２キロの地点　００２０時

「どうだ統合軍司令部、連中との連絡は？」集結地点で夜を徹して待ち続ける国連統合軍の車両群の中で通信を担当するＭ１１２６ストライカー装甲車の中では、燃料節約のために極限まで空調機器を抑えたことによる寒さの中で、通信要員が衛星通信装置を使ってアメリカ・アラスカの国連統合軍司令部があるエルメンドルフ基地と交信を繰り返している。いつまでたっても帰ってこない４匹、小規模な戦闘があったようだが、それ以降交信も信号の反応も途絶している。“こちらも全く把握できない状況だ。アクタウからの統合軍の救難ヘリは明日の天候を見ての判断となる”

「明日もこのような天候だったら司令部はどう判断する？カザフスタンやロシア政府が統合軍増援部隊の駐留を一刻も早く解消してほしいという要請も安保理に来てるらしいじゃないか」通信員は手元の端末に来ているリードアウトを見つめる。「期限は１５日０時か……明日しかチャンスはないようだが…」

“そうだ、明日も同様の気象状況の場合……”アラスカの司令部要員の声が一瞬止まり、直後、国連統合軍としての方針を冷静に告げた。“４匹は放棄処分だ。替えならいくらもでいる。君たちも気象状況が危うくなったら撤退してくれても構わない、朝までの判断は君たちに任せる”

予定通り帰ってきた連中を押し込んだＭ１１２６装甲車の中は、

重苦しいをはるかに通り越して、まるで４匹が死んでしまったかのような空気に包まれていた。バストークは不安のあまり涙を流すピトムニクをお腹のモフモフと両前足で不器用に抱えている。自分の部下を失った経験がほとんどない…あのバージアの時意外は…メリープにとって自分の部下が、いや、ここに改編されてからは家族同然だった４匹が身も凍るよなこの豪雪の中、見知らぬ大地に取り残されている。それを考えるだけで全身のモフモフが逆立つような思いだったが、それ以上に恐怖と悲しみに心を食われているプラスルの事を考えるとそんなことはおくびにも出せない。

　レオ達旧１７６１突撃隊の連中も誰一匹として眠りにつくものはいない。中でも普段は真っ先に眠りこけるコリンク自身が、一番不安そうに装甲車の細い視界窓に搭乗者用の椅子の背を後ろ足の踏み台にして食い入っている。そんな彼をぼんやりと眺めているスカイラブ、残りは椅子の周囲に座り込み、眠気にコックリコックリとしていた。その一方でロックオンとチェギョンは、こんな最悪の天候状態の中でも自ら居残りを宣言し、不寝番で空からの捜索を続けている。

人間たちからの情報は彼らに一切入ってこない、４匹がどうなっているのかも、万が一発見されない場合の手段すら伝えられていないのだ。押し込められている装甲車の一室を流れる時間の針は、アクタウ郊外の夜の暗闇を映したかのように重苦しい物が続いていた。

アクタウ・氷点下の檻（後書き）

……どうにもこうにも終わらん…どうなってるんだ…

……執筆ペースまで“八甲田山”になってきちゃったじゃないか

……

極寒の彷徨

気まずい沈黙の中、最初に口を開いたのはピトムニクだった。「ねえ……隊長？」「…どうしたピトム？」彼女を抱きかかえるように座り込んでいたバストークの意識を失いかけた目に光が戻り、ずり落ちかけたプラスルの体を青色の両前足で抱きなおす。「……私たちだけでも……助けに行きません？」

「バカっ、……そんなことしたらピトムまで……」メリープの表情が一瞬固まる。こんな吹雪の真夜中でていくのは自殺行為、自分から獰猛な自然の絞首台にかかり行くのと同然だ。それはこのプラスルも知っているはずだった。彼女は精神・肉体双方の疲弊でうわ言に近い事を言っているだけなのか？それが隊長が持つ意識の水晶の芯、意思を司る核反応炉までをじかに冷やす。「……お前を死なすわけにはいかねえんだ。出ていくなんてマネは絶対にやめろよ」

「そんな…隊長はこのまま見捨てるの…？……」ショックを受けたようにピトムニクの目が大きく開かれ、その直後、バストークの前足を振り払うようにしてＭ１１２６ストライカー装甲車の中をふらりと歩き出す。今の彼女にとっては、隊長の言動が本当に信じられなかった。あんなに同じ部隊の面々を思い、一匹も死なせはしないという信念のもとで戦闘があれば自ら先頭に立ち、国連統合軍・研究機関という人間の都合で作られた組織に移されたのちもくせの多い面々を不器用ながらまとめてきた。娘であるグラシデアとの（当のモココは父親のメリープを非難するかのような目つきで眺め、壁にもたれかかりながら首周りのモフモフを撫でていた）ごたごたも多いが、それでも自分が一生懸命仲を取り繕い、娘が自分の元から離れていくことに寂しがる隊長のせめてもの娘となれるよう、精いっぱいの事をしてきた。それなのに今の隊長は彼に一番近い４匹を平然と見捨てようとしている、ピトムニク・ソレイユ・マルセイエーズには、この空気の中でこのメリープが本当にそう見えてしまっ

た。「…そんならピトムだけでも…行っていいですか？」
「待ってましたぜピトムさん！俺らもいかせてもらうッす！」レオが黄色い声を上げてプラスルの元に駆け寄る。「そ、そう……でもそんな事したらレオも死んじゃうよ？…何かあったらピトム一匹で十分…」「俺たちは死にそうな状況は何回も経験済み、その程度の事じゃへたばるわけないじゃないですか！な、グリソム、ガトル？」「おいらはレオの振り回しに慣れてっから構わないけどさ」グリソム当人が同乗者用の座席の基部から姿勢を戻し、コリンクの元に近づく。「……ただ、この天気で行くのは…結構危ないんじゃ……」
「何言ってんだお前は？！俺とお前で散々やべえとこを渡り歩いただろうが！それでも１７６１突撃隊の……」「だ・か・らそういう問題じゃないのよ！どーしてレオはそうやって考えが短絡するかなあっ！？」ミズゴロウに前足で掴みかかるような体制になったコリンクをガトルが突き飛ばすように引き離す。「そんじゃあガトルはおっさんの言うとおりに兄貴とか全員雪に埋めるつもりか？！」「いや…そうは言ってねえよ…」バストークがぼそりと呟いたが２匹は聞く耳持たずだ。
「埋めるわけないじゃない！」パチリスが短い両手でコリンクの首に掴みかかる。「私たちが行ったって余計に足を引っ張るって事よ！」「何をくだらねえ正論をっ！」レオがガトルの黄色い帯電袋に前足爪を突き立てて火花をひらす。彼にとっては、正論や道徳論を盾に相手にまくしたてる奴が一番嫌いだ。「ガトルはアブねえってんだ！いうけどよ、そういう諦め腰の奴が真っ先に危なくなるってお前がそうなるか！？」「何言ってんのよこのバカっ！」「バカはどっちだてめえよっ！助けにもいかねえで見殺しにする奴はバカ以下の骨董品だぜ！」「何が骨董品よ！あんたのその言動さえ一昔前の不良っていう骨董品ね！」「うっせえ、やるかおら……！？」
「はいはい、もういいのよ…いい加減大人になりんさいレオは…」スカイラブがいきり立つコリンクの腹に両前足を回し、後ろにずるずると引っ張った。レオはそんな彼女に振り返って両前足で掴みか

かる。「ラブまでそんな道徳論をっ……」「あのね、アンタの解釈にはバカかきれいごとの二択しかないの？だからアンタはいつまでも皆の足を……」「ふっざけんな！誰が足を引っ張ってんだよ？！……フン、もうあてになんねえ……」コリンクが右前足を踏み鳴らし、ピトムニクに歩み寄る。「ピトムさん俺らだけでも連中助けに行きましょうや！待ってれば待ってるほど可能性が……」彼の表情がにわかに暗くなった。あの時どうしようもない自分を体を張って認めてくれたリーヒュンも、自分と同じくらいバカ騒ぎを共にしてくれるブレイブもこの地獄のような雪原を今もなお彷徨っている。それを放置すること等できるわけがない。「そう……ありがとう…そんじゃあ準備…」このプラスルには、今や正常な思考は残されていなかった。自分の立場、存在を決定してくれると信じてくれる同僚たち、彼等が死にかけているかもしれない、そんな事を想像してしまった彼女の意識の水晶と融合炉は黒い霧に埋め尽くされているのだ。

「だったらおいらが一緒に行く！」「私が行かなきゃどうしようもないじゃない！」ほぼ同時にグリソムとガトルが声を上げた。「そんなにいっぱい来てどうすんだよ！死ぬときは俺だけでたくさんだぜ……」

「あ、あのなあ、お前らいつの間に行く気になって……」定まらぬ目線のピトムニクをバストークが前足を回して抱え上げた直後、Ｍ１１２６装甲車の後方乗降ハッチが開き、統合陸軍の兵士の人間一人とサクラが入ってきた。「朝の気象状況を判断し、捜索が不可能なようならば撤収する。宇宙船は既に発見済み、天候が回復したらアメリカのＮＡＳＡの連中と駐留している管区の国連統合軍だけで何とかなる。カザフスタン政府やロシア政府がこれ以上増援部隊の滞在を認めない方針だと国連安保理に伝わっている。これ以上我々が危険を冒す必要はない」上手とは言えないエメリア語で状況を伝えた統合軍の男は、ポケモン達全員を見つめた。宣告を前に一同が凍り付いている。彼も知っている羊やネズミに似た人間でもない動

物もどきが浮かべる絶望の表情は見るだけで気持ち悪い、男はそう感じて嫌悪の表情を浮かべた。４匹いなくなったくらいでそれが何だ？そんな顔してこっちを見続けているなら全員雪の中に放り出してやりたいくらいだ。

「まあ、残念だが代わりはいくらでもいる。探したきゃ自分たちで探すんだな」

国連統合軍の人間は無表情のままそう告げると、茫然としている全員にも再び一瞥して装甲車から出て行った。アメリカ製のＭ１１２６ストライカー装甲車の分厚い乗降用ハッチが音をたてて閉められると、車内の歩兵用スペースには吹き込んだ冷風によってますます冷やされた（もとより燃料節約のため前から暖房は絞られているが）空気に加えて、統合軍の人間が伝えたあまりにも無慈悲な現実に打ちひしがれる一行の重苦しい空気がさらに強くなり、同乗歩兵用の通信機器やコンソールの電源が切られて非常灯で薄暗いこの空間がそれに拍車をかけた。ほぼ同時に入ってきたサクラは、全員の表情を見るまでもなくその空気によってひどい寒気を覚える。当然だ、自分たちの同僚が、しかも従来のあらゆる軍隊には（それは人間のあらゆる国家や民間軍事企業の軍も、ポケモン達であるエメリア自治協会の軍も含めて）到底みられない、階級差も厳しい規律も決められておらず、寄せ集められただけで仲良くやれる集団の仲間が今もなおこの吹雪の中を彷徨い、しかも人間たちは一方的にそれを切り捨てようとしている。このサーナイトにとってもその指示は到底許しがたい物だったが、かといって彼女にはこの人間側からの指示に反論・全否定できる立場ではない。４匹もいなくなっている時点で、すでに彼女が書いた戦術予定書は完全に破たんしている。しかしそんな事はおくびにも出せない、何とかしてこの状況を打破する、それがこの“部隊”の実質司令官であるサクラ・ワタリ・フユツキ自身に今託された使命なのだ。

サクラは重たい口を何とか開いた。「今あの人が言っていたとおりよ、国連統合軍がカザフスタン政府に、この辺りを領土とする人間の国だけど…そこが要請する撤収の期限は明日の深夜。そのためには明日の朝には切り上げなきゃならないの……」

「……だったら行くまでですぜサクラさん！明日の朝までだったんなら今すぐにでも出発すりゃ…」レオが待ってましたとばかりに右前足をガシンと床に踏み鳴らす。「そう、諦めないっすよ俺らは！これくらいの雪なら…」「だからそういう問題じゃないんよ。アンタはすぐそうやって都合よく解釈する……」スカイラブが相変わらずのアクセントが平坦なうえに感情に乏しい声でそう言い、コリンクの右のわき腹を軽く右前足で突く。「ああ？けに行くのは難しいってことなのよ、レオも１５なんだから大人の都合の一つくらい…」「何が大人のご都合だ！？そんなのに構けて助けに行かねえっつうのか？！お前昨日と言ってることが違うだろ…」キレたコリンクが、ルクシオの両前足付け根あたりまで伸びたミッドナイトブルーの毛を両前足で無理やり掴みかかる。それでもスカイラブの方は、レオの感情には慣れっこだとばかりに冷めた表情をしている。世の中の常識というものが大嫌いな彼女でも、レオ・ミュースカイは例外、そう信じていた。「フン…それもアンタの言いがかりっていうんよ…サクラさんは助けに行かんとは言ってないの。その位アンタの脳みそにだって理解…」「ざけんじゃねえよこの田舎っ！幼馴染だからってバカにするにも限りがあんぞこのゴミ女…」

「はあ？！誰が田舎で好きこのんで生まされたん！？」レオの挑発にも近いこのセリフにさすがのスカイラブもキレた。コリンクの首のあたりを前足でむんずと掴み、そのまま追ってしまいそうなほどの勢いでコリンクを後ろに倒そうとする。「私が好き好んでこんな種族に生まれ落ちたんか？！てめえはそう言いたいんが？！んなことほざいてるてめえだって私と同じ種族の劣化……」「うるっせやるかこの成りそこない進化が…」「何やってんだよレオは！？」「

ったく、だからお前はいつまでたっても隊長って認められねえんだ…」さらにヒートアップする2匹、グリソムとバストークでコリンクを後ろから押さえつけ、ルクシオの方はグラシデアとガトルで押さえつけた。疲労のせいでさっきからウトウトしていたシンシアもこの騒動に目を覚ましたようだ。「ダメよラブは……今ケンカしたらラブの立場が……」「そう…そりゃそうよ…」両前足で強引に背中辺りを押さえるグラシデアの言葉に、荒い息をするスカイラブの表情がわずかに落ち着く。「……サクラさん、こいつが助けに行きたいっでいうんなら自己責任で行かせでやったらどうですか？何せこのバカは無茶してもへっちゃらな…」

「ありがとうスカイラブ、あなたの意見はよく分かるわよ……」一部始終を静かに聞きつけたサクラがルクシオに歩み寄る。「そう…あなたがレオをよく知っているからこそ、こうも言えるのよね……」

「……」

「レオ、あなたがリーヒュンやブレイブを助けるっていうその意気込みは十分、もちろん助けにはいくわよ……」サーナイトはコリンクのはねっ毛を右手で優しく触る。今すぐにでも助けに行きたい、わが子も同然の（特にユイリィは生まれて間もないころから育てているので娘とほぼ同じだ）４匹を見捨てられるはずがない、それは彼女も全く同じ、このコリンクと同様の焦りと不安が自分の意識の水晶玉を覆っているのを感じる。

「バストーク……隊長であるあなたに決める権利も義務もあるわ。何匹で行くのか、どうやって行くのかはあなたが決めるのよ」「そう…ですか…俺に…権利が…」バストークはレオを押さえつけている両前足を戻し、装甲車の室内を歩き回りながら必死に考えた。いざ決めるとなると、選定が難しいどころかではない。救い出すべき相手も救うこちらも、どちらも命がかかっている状況だ。自分が間違えればレオやグリソム、ピトムニクすら殺すことになる。

強いプレッシャーがメリープにかかった。どうすればいい？今こそがバストーク・ラルシア・ホルストとして、この部隊の隊長として決断する時だ。「…くっそ……どうする…誰が行って誰を残す…？」

バストークがこの厳しい選択に思考を集中させ、右前足を車両の床に貧乏ゆすりをしている。「早くしてくださいよう…みんな死んじゃうじゃないですか…」座り込んだピトムニクが、隊長の方をちらちらと見ながら消え入りそうな声を上げる。「大丈夫だピトム、俺がむざむざと奴らを見捨てるわけねえじゃんか…」娘同然の愛情をかけ、彼女自身もまた彼に喜んでついてきてくれるプラスルの泣きそうな表情、それを見たメリープの意識の水晶玉にはさらなる外部からの重圧がかかった。彼女は自分の選択を待っている、そして周囲にいるほかの連中も自分の決心を待っている、ここまで自分の決定を重く受け止め、緊張したためしは今までにない。

「大丈夫だよピトム、絶対に皆を死なせはしない…」「うん…そうだよね…そうに決まってるよね！約束してよ！…ううっ…グラシ…」「うん、約束するよ！私が死なせはしないよ！…」パニックを起こしかけているピトムニクにつられたか、グラシデアも涙にかられてプラスルと抱き合うように肩を震わせる。このモココとて、同じ部隊の、しかもここまで様々ないざこざを共に乗り越えることができた同僚が死にかけている（かもしれない）。それを思った時に悲しみを覚えるくらいの感受性はあった。涙を右手で拭ったグラシデアは、頭のモフモフを装甲車の内壁に押し当てたまま目をつぶるバストークのほうに視線を移す。「…バストーク…ぐずんっ…たまにはびしっと決めなさいよね…隊長らしく！」「うっ…そんな事は知ってってお前は…急かすなよグラシデア」父親メリープは目を開いて振り返る、また考え込みながらせわしなく歩きはじめる。「だから急かしてないって！私は単に……」娘のモココが人間用の座席

に向かって歩いたのちにそこの背もたれに両手をかけ、じれったそうに呟く。「……バストークっていうポケモンの父親像っていうのがさ、そういうのしか無いんですよ。…たまにはびしっと決断くらいしてほしいのよ私は…」

「……グラシ…分かったよ…」グラシデアにこんな娘らしいことを言われるのは何年振りだろうか、バストークは少し恥ずかしそうに顔を赤らめる。口先では散々けなしたばかりの彼女。ただ仲が悪いどころではない、彼女には母親の件で取り返しのつかない苦しみと傷を与えてしまった。それは間違いなく自分のせいだ、冷たくあしらわれても恨まれても仕方がないどころか、それが自分が受けるべき過ちに対する大きな代償、最近はそう思うようにすらなっていたのだ。メリープは心の中でモココの言葉と思いがけない偶然に感謝した。まだ自分は父親である、グラシデア・アマルフィ・セルビア・ホルストが、心の中では自分の事を父親として、ほんの僅か、意識の隅っこだけでも認めてくれている。それだけでバストークにとっては嬉しいのだから。

　メリープは再び人選に集中する。先程、国連統合軍の人間が入ってきたときに見えた外の吹雪の具合、感じた温度と風の強さの感覚を、意識の水晶の中に冷静に思い浮かべる。続いてここにいる全員の表情と姿勢を見て体力がどれほど残っているか、この極寒の気候で一番動けるかどうかを意識の水晶をくぐらせて確認する。　こおりタイプがいるのがベストだは思うが、肝心の本人は今回の要救助者だ。自分自身の体温が高い奴を連れていくという手にした方がいい。後は気合の問題だ…こんな寒さの中で本人の気力の成否を決めるのは、意外にも根性、彼は経験からそう思った。

数分後、歩き回っていたバストークは足を止め、藍色の右前足を床にカツンと踏み鳴らす。その声にもこれまでになく生真面目なものがあった。「決まったな、全員使う。直接向かうのは俺とグラシとレオとシンシア、残りはこの周辺３００歩以内を固めて、別の方向からふらりと奴らが出て来ないか見てろ。ついでに上の連中がふらついて落ちてきたら助けてやれ」

「そ、それで私が…バストークと…？？」グラシデアが父親をびっくりしたように見つめ、続いて足元にしゃがみ込むピトムニクを見つめる。この期に及んでこの父親メリープが自分を連れて行く理由がよく分からないが、今はぐちぐち文句を言うような状況ではない、それくらいの判断力はあった。「うん…別に構わないけど……」ただ、モココは手袋と防寒具をはめ直す間でも、娘として父親に対する愚痴も忘れなかった。「……寒さでアンタがヘタレ込まないようにね。その場合は自己責任ですから」

「…ったく、自己責任とかどういう注文を叩きつける娘だよお前は…」バストークが諦めたように愚痴りながらヘルメットをかぶり直し、レオとシンシアに声をかける。「お前はほのおタイプだからな。シンシア、状況的には色々と頼りになりそうだ。よろしくな」メリープが右前足でロコンのくるくる毛を不器用に撫でる。「自信をもてよ嬢ちゃん、お前が自分なりに頑張っているのは誰が見たって分かるんだからな」

「はい…できる限り全力を尽くさせていただきます」シンシアはしっかりと頷き、首に巻いたマフラーを締め直す。「その意気だぜ…しっかり頼むぜ」隊長は隣にいるコリンクの右前足付け根を、気合を入れるようにばしんとたたく「というわけだ隊長の坊主、シンシアに無理をさせないのは絶対だ。２匹での行動は初めてだが、ドジを踏むなよ」「当ったり前じゃないすか隊長！どんな環境でも俺は常に全力ですよ！な、シンシア？」レオがシンシアの首に左前足を回し、乱暴に引き寄せる。「い、痛いじゃない…私だって頑張るって言ってるでしょ、それだからアンタは隊長じゃないって…」「う

っせえなあシンシア、ガトルそっくりに生意気こきやがって……」
「バカっ…だからお前は…」メリープがコリンクのはねっ毛を軽く右前足で突き飛ばし、４本足の防寒用手袋がはまっているのを確かめる。

「おっし…そんじゃあ俺たちは…」彼が歩き出そうとした瞬間、彼の左後足にふと飛び付くもの感じた。この飛び付き方…意識の水晶に鈍い痛みが走る。
「……私は…ピトムは…ダメ…??」目に涙を浮かべたピトムニクがバストークのモコモコ毛にほっぺを摺り寄せて火花を散らす。バストークはつらそうに眼を閉じ、うなだれた。この選択は本当にしたくなかった、しかしこの天候で彼女を連れて行くのは…身勝手かもしれないが、グラシデアを連れて行くのは自分の娘だけあって責任が取れるから、レオとシンシアを連れて行けるのはタイプの関係と気合の問題から選んだ。
　正直なところ生きて帰る自信すらない、それがバストークの本音だった。ピトムニクは気合も体力もあるが、ただ一つ、今の彼女の精神状況では万が一のことがあったら…彼女の身を案じるだけで彼の意識の水晶に寒い物が走る。こんな理不尽な選択をしなければならないこと、こんな境遇に追いやった人間と人間の作り上げたシステムには腹が立つが、今の自分に選択肢はない。だからこそこの選択をしたのだ。

「ダメじゃない…今回は、ってだけだ…」メリープはプラスルの方に振り返り、前足で彼女の両手を子供に言って聞かせるように握る。その最中、思わず本音が出てしまった。「今回の任務は…はっきり言って安全じゃない…ピトムを…お前を…」「何なんですか……何がいい訳なんですか…」「だ、だからな…」ますます体を震わせる

ピトムニクの両手をバストークは必死に握りしめる。この言葉ははっきり言って使いたくない、だが、現状を伝えるにはこれしかない。
「お前を死なすわけにはいかないんだよ、万が一の事態があったらピトムが残った奴らの指揮を執る、そうして…」
「やだっ！ピトムも一緒に行く、みんなを助ける！、絶対行く！…私の…ピトムの…いる場所を作ってくれたのに…私はあああああっ！！！！」プラスルはメリープのモフモフに飛び付き、泣きじゃくる。

彼女の温もり、彼女の涙、彼女の思い、ピトムニク・ソレイユ・マルセイエーズを感情を、意志を、全てがこのメリープのモフモフからその下の皮膚に、その下にある骨肉とＳＥ粒子を含んだ血液に痛いほど感じた。バストークはそんな彼女をただ抱きしめる事しかできなかった。「……ピトム…いいのか…お前は…無事に帰る自身も覚悟も…そりゃあるよな…」プラスルはこぼれる涙をそのままに激しくうなずく。「当たり前だよ…ピトムはいつでも、何処でもそうだったもん……」

「さっきまでの勢いはどうしたのよバストーク、ピトム加えたって状況が良くはなっても悪くはならないじゃない……」悩む父親メリープにいら立った娘のグラシデアが、父親の左後ろ足を軽く右足で蹴り飛ばす。涙をすすり上げるピトムニクを彼女は姿勢を落として（モココから見ればプラスルは小さい）両手で抱きしめながら、娘は催促するように目線を父親に送った。「…あのなあ、俺にだって考えがあって選んだんだよ。お前が…その…そんなに催促することじゃ…」「だからアンタは…そうなのよ…」モココの右手が父親メリープを指差した。グラシデアの表情にもやや暗いものが浮かぶ。
「…母さんを……そんな風に考え込むから……少しは自分で前に出

てよ…」

普通の父親だったら娘を殴りかかってしまうほどの彼女の発言だが、バストークは気のめいった表情を浮かべてピトムニクに視線を落とした。連れて行って問題だと思ってはいないが、やはりあの懸念が意識の水晶の中の空気を重たくしている。友人思いの彼女だからこそ、万が一の事態があった時に落ち着いていられるのだろうか？

万が一……考えるだけでモフモフ毛がすくむ思いがするが…考えなくてはならない。

ややあって…彼は決断した。

「そうか…準備しろ、行かせてやる」バストークは曖昧な笑顔を作り、ピトムニクの長い耳の間辺りを不器用にポンポンと叩いた。「…はい！」飛び付くように準備を始めた彼女を、彼はただ単に見守った。やはり彼女らしい、自分の存在は仲間と同じであり、自分がいるのは周りのお陰である、だからこそ自分は仲間をすくう、そういうポケモンなのだ。

「…気を付けてねバストーク、みんながあなたの期待にこたえようとしているのよ。あなたがその先頭を取って進むのよ」「もちろんですよサクラさん！無事つれて帰って見せます…」バストークが左前脚の雪原用保護靴のひもを右前足で締め直す。「……バージアでも、ヴェルダーでも一緒だった、どうしようもない俺についてきて……あの４匹は…俺の子供も同然ですから…」

「そうね…頼むわよ…」並々ならぬ覚悟をうかがわせるメリープの表情を見つめるサクラ、彼女は装甲車の壁に寄りかかり、瞑想するが如く、彼らの未来から感じられるものに意識を移した。

とりあえずは収容したはずのＭ１１２６装甲車からがさがさと出ていく一行。統合軍の通信兵が衛星回線の無線機のスイッチを入れる。「どうやら残りの連中が勝手に救出に行くようですが……制止しますか、それと認めますか？」“好きにさせろ”アラスカの司令部にいるオペレーターの声に感情はこもっていなかった。“奴らは実験品だからな。上層部は全滅しても構わない、と言うのが方針だ。我々には知らされていないが、替えはいくらでもあるらしい。

２歩進んで１歩ずり落ちるという言葉がまさにふさわしい、絶望的なほど遅い登坂だった。リーヒュンは雪の中に長時間埋もれたことですっかり体力を消耗したユイリィが強くもたれかかってくる中、４本足の付け根まで完全に沈んでしまうほどの柔らかい雪の斜面を登り続ける。「ユイリィ……大丈夫かよ？」「……ま、まあ…こんなところでへこんでたらさあ、ウチが存在する意味ないしね、うん……」メガニウムの方は、既に意識というもの自体が怪しくなっていた。彼女自身、これまでの経験で世界どこへ（エメリア陸地群のみならず地球各地も含め）行っても自分には怖い物はない、そう自負していたし、周囲の評価もそうだった。人類各国の弾圧の中、南米・アルゼンチンの最南端から南極大陸に逃げ延びるポケモン達の米・英・露・日・旧国連の合同調査のために南極に行った時でも、余裕をこいてコウテイペンギン達と戯れていられた。だが今回は違う、これまでにない吹雪と寒波という環境に対する恐怖が彼女を襲ったのだ。ユイリィ・ランタン・プレミドールとしての性格の奥底に存在する、通常動物としての本能的戦慄は、あっという間に巨大化して彼女の意識の水晶を染め上げ、内部にある感情の核分裂容器の制御を奪う。周囲の地形、首元の花びらから頭の雄蕊までを完全に凍らせるような冷風、今の彼女にはすべてが絶望的な壁となって視界を覆い尽くしている。今となっては、隣にいるベイリーフに対

する、先輩としての立場もいつものプライドもどうでも良い。せめてリーヒュンがこの難局を切り開き、生き延びる事さえできれば…今のユイリィには、すでに周囲の先を読む思考の触手を伸ばすほどの気力さえなかったが、それをいま口にするのまずい、その分別だけで今の状況を必死でこらえている。

そんな彼女の疲弊は、彼女を支えながら登坂を続ける彼にも分かった。隣で首を摺り寄せるようにもたれかかる彼女の意識の水晶が、この冷気によって凍結していくという冷たさが意識の宇宙という流れからおぞましいほど伝わってくる。

しかし今のリーヒュン・バイリング・グリーズに、それを打開できるような考えを気にするような余裕はなかった。彼とて既に足の感覚がマヒし、首元の葉っぱを凍り付かせようとする冷気と体力の消耗の前に何度も意識が飛びかけている。何度も首を振り、ツルで自分の頭をぶっ叩いて意識を渦巻く霧を払って何とか保っている。「あともうちょいだ、もう少しすれば平坦になると思う……」「……うん…そうだよね…あと少し……うぎゅっ！？」「おいおい！？」崩壊でさらに傾きを増した斜面のてっぺんを見上げた彼女が、突如として力が抜けたように後ろ足から斜面を滑り落ちかけた。ベイリーフがそれを防ごうと前足とツルで彼女の首の付け根あたりと胴体にくらい付き、絶壁の真下まで落ちる事だけはどうにか免れたようだ。前足を折るように雪に前から倒れこむユイリィの体からはすっかり力が抜けている、リーヒュンの凍えたツル先にさえそう感じられた。「ごめんね……ちょっと力が抜けちゃって……待って待って、一匹でまだ立ち上がれる…」「……本当にまだいけるのかそれで？」「う、うん…大丈夫大丈夫……」のろのろと前足を起こし、足を弱弱しく踏み鳴らした彼女には、雪を払い落とす余裕さえなくなっているようだ。「無理すんなよ…具合がダメそうだったら休んでもいいから俺は……」彼は彼女の首の後ろ辺りをそっとツルで抱えたまま再び登り始める。自分ができる限り意識を前足の先に集中させ、比較的雪が固くなっている場所を選んで足を動かした。彼女の

方もできる限り自力ついて行こうとした。隣にいるベイリーフに迷惑をかけすぎないように、メガニウムは既に感覚がほとんどない足先に残った気力と体力を集めた。

そんな状況がさらに2時間は続いたか、2匹はようやく斜面を登り、何時間も前にいた高台へと戻った。が、そんな2匹を待ち構えていたのは、高台であるはゆえの凄まじい暴風である。「うぐぅ……寒い…やばい…どうしよ？……」ユイリィはその極限まで冷え切った強風に身をすくめた。既に日没を迎えたカザフスタンの大地、周囲に人間の施設どころかポケモン一匹も住んでいないこの場所には明かりは何一つない。限りなく続く暗闇の中に取り残されるという、漠然とした恐怖が彼女の意識に襲い掛かった。「どうすんの？……こんな中で元の場所にたどり着くのは……」

「どうするって……どうするもこうするも帰るしかないだろ…」リーヒュンが表情をさらに厳しくしてあたりを見回す。周囲は真っ暗、真の意味での夜に包まれている。人間と違い、夜の暗闇には慣れているはずの彼に（何しろ5か月前までエメリアの集落に暮らしていたのだから）とってさえ、言いようのない圧迫感と不安を呼び起こすような状況である。

だからといって何もせずに思い悩み、絶望に打ちひしがれているだけでは確実の助からない、そんな本能的な恐怖に駆られてか、それとも2匹で必ず生きて帰るという普段の彼らしい気合からか、ベイリーフは周囲の空間と今までの行程頭の中に、意識の水晶に思い浮かべ、その先にある物へ思考を集める。自分の能力が信じられるというはずがなかったが、自分もそうする努力をしなくてはメガニウムに申し訳が立たない、そう思った。

しかしその直後、隣にいたユイリィが突如として左前にふらつき、リーヒュンを危うく突き倒しそうになるほどの勢いで崩れ落ちかけ、そのまま彼にもたれかかった。「どうしたんだ?!」「ううっ……

やっぱつらいよ…寒すぎる…どうしちゃったんだろあたし…」メガニウムは何とかして前につんのめることだけは免れた。今こんなところで倒れたら最後、二度と立ち上がれなくなるかもしれない、そういう気力だけが彼女を支えていた。自分の能力がこの寒気の前で完全にマヒしているのが彼女自身に感じられる。「リーヒュン…ウチはもうダメ……気持ち悪いよ、うん…だから…」

「そっか…無理すんな……俺が何とかしてみる」ベイリーフは彼女のもたれかかった首の正面をツルでゆするように撫で、もう一度目の前に広がる風景に意識を集中させる。自信などというものは全くなかったが、いつの間にか“自分も”が“自分が”に置き換わってしまっている。体力の限界に近づいている彼女と彼女の首元にいるロズリンの運命が自分の能力にかかっている、これまでにない必要性とプレッシャーに彼の意識の水晶が激しく意識の流れに揺さぶられた。しかしここで立ち止まるわけにはいかない、自分以外にもう切り開ける存在はもういないのだ。

1分ほどしてリーヒュンは大きくうなずき、右前足をで足元の雪を掃う。「決まった、こっちの方角で間違いない…俺のカンがそう言ってる…」「…そっか…じゃあ信じてもいいんだね？」わずかに表情が緩んだユイリィの左前足を、彼は雪の中に入ったままの右前足で握りしめる。彼女の足は雪の冷たさで生気を失ったように凍えていた。「もちろんやってみるさ、できることは今全力でやってみせる、な？」「さっすがあたしの育て…うんん、…こんな状況だけどお願いね…」「うん…」彼は重ねたままの右前足で彼女の左前足を温めるようにこすった。せめて見いだせるかもしれない希望、そこまで彼女の気力が持つようにと。

2匹はひたすらに歩いた。足が完全にうずもれるほどの積雪、体

に突き刺さるような風、自分の頭の葉っぱや首元の葉っぱにまとわりつき、ついには凍結してつららのように垂れさがるほど狂ったように振り続ける豪雪の中、ベイリーフはできる限り意識を自分の足元に合わせるよう努力し、周囲の意識の宇宙の流れが導く場所を探ろうと何度も周囲の光景を思い浮かべる。自分たちの位置、向かうべき場所、この先の歩きやすそうな地形……意識の水晶に浮かび、感覚的に足が導く方向、小さい頃から自分がそうだったように、“なんとなく思い浮かんだ方向”へと向かって歩みを進めた。メガニウムの方は人が変わってしまったように言葉少なとなり、時がたてばたつほどベイリーフの体の右側に強くもたれかかるようになってくる。「はあ…はあ…やばい…寒いよ…」ユイリィの足の感覚は完全に消失し、リーヒュンにもたれかかっている首の左側と花びらの周囲にしか物に触れているという意識を喪失していた。今、彼女を支えているのはただ一つ、紛れもなく隣から伝わってくる温もり…これが彼女の唯一の感覚だった…を与えてくれる彼だけだ。

この調子じゃテルルは無理だな、ブレイブは心の中でそう断言した。普通に歩いても4時間近くこの先の行程に、さらに悪化する天気の状況を考慮すると、とてもあの足の引きずり方をする彼女の負けず嫌いだけで歩けるとは思えない。ケガをした女（メス）というのは、男の（オス）足を引っ張りたくないからか、無性に無理をしてケガを悪化させ、さらに厄介な事態を招きかねない存在だ、それが彼の考え方の一つである。

とはいえ、正しい状況は実際に彼女の前足を見てみないとわからない。そのために彼は、雪に覆われた平原にところどころ島のよう

に存在する小さな林の中にある、巨大な倒木によってできたと思われる洞窟を発見したのである。「よっし、靴から何まで全部外せ」

「あ、焦らないでよ触るだけで痛い…」その場に４本足を折って座ったグレイシアは、右前足で先程トロピウスに踏みつけられた左前足の保護靴のひもをほどきにかかるが、伸ばした左前足がわずかに動くだけで突き刺したように痛む。雪原用の保護靴を外すだけで１分もかかってしまった。「後はこの手袋外すだけ……いつっ……後は私で…」右前足で手袋をはずそうとすると左前足が動き、やはり強い痛みが襲ってくる。「ああ、じれったい！俺に貸してみろ。大丈夫だ、痛くはしねえ、動かねえように右前足で付け根押さえな」

「ちょ、ちょっとアンタ…」見かねたブースターが駆け寄り、右前足で押さえつけながら左前足で手袋の口をめくるように足先へと降ろし始める。「うぐっ！何やってんのよこのバカっ！」「わめくな、一気に外すぜ、一、二、三っ！」「うきゃあんっ！？」ブレイブが一気に手袋を引きはがし、テルルが痛みのあまり一瞬伏せた体が反り返る。テルルは激痛に顔を真っ赤にしながらブレイブを軽くなじった。「痛い痛いっ！ったくもう、もっと優しくやってよこの変態男っ！」「そーっとやったらそれだけ長い間痛いんだぜ？！これで済んだことを感謝すべきだろうが！」ブースターはそんな彼女の抗議に聞く耳持たずで、手袋の外れた彼女の左前足を見るなり顔をしかめる。「……やっべえ…こんなんでよく一歩以上歩けたな……」

「……うっ…これは…さすがにまずい…よね…」グレイシアもけがをした自分の左前足を見るなり言葉を失う。

彼女の足のけがは、彼女自身これまでに経験したことのないひどい様相を示していた。グレイシア種族特有の、外見からは靴のように見える足先のネイビーブルーと淡いスカイブルーの境目部分、人間の手でいう手首から上に１０センチ程度の辺りが内出血で青黒く変色している。「どうだ…この辺りがけがの中心か…」「いったっ！？勝手に触んないでよっ！」ブレイブが前足の先で軽くつつくだ

けで、テルルは突き刺すような痛みのあまり飛び上がりそうになった。「我慢しろそれくらい。ケガってのは触診しなきゃ分かんねえんだよ……」ブースターはグレイシアと同じように４本足を折って彼女の前に座り、右前足の爪で、彼女の怪我した部分をこつんこつんと突いていく。彼の触診の度に背筋にまで走る鋭い痛み、彼女は必死に耐えた。相変わらず彼に触られるのは不快極まりない上に痛いが、我慢しなければ一向に終わらない。

１０回ほどそういう動作を繰り返したか、ブレイブは洞窟の入り口まで行ってたまった雪を前足で何とかすくい、テルルのあざとなった部分に乗せはじめた。骨折とまではいかないが、彼女はかなりこっぴどく痛めたようだ。「まあ…テルルのそこの骨にはな、ひびくらいは入ったようだ。そういう時はまず冷やすことが肝心だぜ」「…そう……やっば……どうすんのよ私？」彼の言葉に彼女は、右前足で気が滅入ったように地面の土を叩いた。ここまでのけがをしたことは今までにない、結局また自分が彼の足を引っ張ることになる。「ねえブレイブ、私を置いて先に帰ってよ。それで助けでもなんでも…」「ばーか、そんな事できるかよ。こんなところに一晩いたら、お前みたいな寒がりは死んじまうぞ？」ブースターは鼻で笑い、何度も何度も雪を運んではグレイシアの足に乗せ、いつの間にか彼女の足の周囲は雪でいっぱいになってしまった。「ほら、しばらく冷やしてその間に俺が考える」「う、うん…」

ブレイブはその間に近くの木々の枝を折っては洞窟に運び（雪は乾いていて掃えば簡単に落ちた）、自分で軽く火の粉を出して火をつける。冷たい薄暗い洞窟の中に、ほのかな明かりと暖かさが加わった。「ほーらミオカ、しばらく温まれよ」「うん…」長い間の移動で疲れ果てていたミオカは、焚火の近くによると、首から外したマフラーを胴体にかけたまますぐに眠りに落ちた。ブースターはそんなイーブイと焚火の炎を交互に見ながら帰る方法を考え、テルルはそんな彼をぼんやりと眺めている。

「よし、次はけがした部分を固定しなきゃなんねえ、ちょっと貸してみな」ブースターが徐に立ち上がり、まだ燃やしていない太めの枝2本を口にくわえてグレイシアに歩み寄る。「肉とか骨に痛みがいった時は、固めないと治んねえからな…じっとしてろよ」「じっとしてるって…何すんのよ?」「いいから見てろって。動かすなよ…」彼はそう言いながら彼女の前足の手袋をはめ直した。さらに彼は装備品入れから巾着袋を取り出して、溶け残った雪を全部中に詰めて彼女の左前脚の上に置く。続いて彼女の左前足の左右に木の枝を置き、白い固定用テープで手袋と巾着袋と2本の枝を巻き込んで縛り始める。テープと言うのは人間たちがスポーツでのケガで使用する紛れもないあれである。冷やしておいたおかげか、痛みは少し引いた様だった。テルルは食い入るようにブレイブの手つきを見つめている。本当にこのブースターは、初見の印象以上に様々なことに精通しているようだ。「……ブレイブはそんな手当ての方法どこで習ったのよ?」彼は少々得意げにフサフサ尻尾を動かす。「生活の知恵って奴だ。俺の人生の色々なところで役に立つもんだな」

「ふーん、知恵ねえ…私、そんな事意識して生活したことなくて…それでさあ…」グレイシアの表情にやや暗い物が浮かぶ。「…リーヒュンと昨日の夜…何してたわけ…?」

「ああ…あいつとか…別に大した理由じゃねえよ」テープで締め上げる彼の前足の動きがぴたりと止まる。「大したことないって…あんな掴みあってたのに?!」「掴みあうって……俺らの年ぐらいなら、友人関係それくらい普通だろ…」「全然普通じゃないし!そのさ…」グレイシアはやや俯きがちに言葉を濁す。勝手に耳に挟んだことであって言いにくいが、ほっておくわけにもいかない。「…フローラって、あの子の妹だよね…はあ、ブレイブがあそこまでムキになって詰め寄るなんて普通ないしさ…やっぱ何かあったんでしょ?…」

ブースターはしばらく考えた後、左前足で頭のフサフサを掻きむしった。「……まあな。でもそれもありと言えばありって奴だ」

その直後にブレイブが左前足をテルルを指さすようにクイクイと動かす。「確かに昨日の夜は俺のやり過ぎだった。でもな、あれ位も経験のうちに入る、関係なんて経験値次第だぜ」「何それ?!なーんか思い悩んでいるように見えたのに開き直るの?ったくもう…心配してマジ損なんだけど……」グレイシアが失望したようにため息をつき、右前足の拳を頭飾りに当てる。

「だろ!それが親友ってやつだ…」茫然とするテルルをよそに、ブレイブはすぐに彼女の左前足へのテープ巻きを再開する。とはいえ、彼の表情はやはりさえない。昨日のリーヒュンとの件は、彼にとって全くもって“普通”ではなかった。昨日彼が見た物に対するトラウマから生じた、自分の感情的な発言が親友を傷つけたのは疑いようのない事実だ。ブースターは普段からあのベイリーフの妹のフローラの件に言及するのは避けていた。あの話に関しては自分の理解をはるかに超えている件だ、それに関して口出しして親友をこれ以上苦しめるのは、ブレイブ・エスコーツ・クレイバー自身が許せないことだった。

「ただ…リーヒュンはな、あいつがいる理由は…フローラを助ける、それ以外にないって…」「…フローラか……」グレイシアはぼんやりと足元に残った雪を見つめる。「俺は……あいつの事を何一つわかってやれてねえのかもしれない……昨日もめたのはそのせいだ」「ちょ、ちょっと待ってよ。ブレイブはあの子の……なのに…そんなに何で弱気なのよいきなり?」テルルは右前足でブレイブの左前足の付け根をグイッと握りしめる。その表情は子供を心配する母親そのものだ。「…今まであんなに親友親友って嬉しそうだったじゃない……」

「……悪い……そういうつもりで言ったわけじゃねえけど……」彼は頭のフサフサ毛を左前足でくしゃくしゃと撫で、彼女と同じよう

に地面を眺める。「……だけどよ、前から言ってる通り、友人関係のうちのそれも入る。そんなもんじゃねえかな…友人なんてものはな、知っても知っても相手の本性なんてもんは永久にわからねえんだ……」「……分からない…？」「ああ、分かんねえもんだぜ。現にいま、俺はテルルの本性なんて知らねえし。やっべえ！わかったら最高だ！そのままむぎゅっとしてやる！」「ううっ…このバカやめなさいよ…」調子に乗ってもみあげ飾りに向かって伸びたブースターの左前足を、グレイシアは強引に掴んで地面にひねり下ろす。「いってえ…そこまでしなくてもいいじゃんか…まあ、それだからこそ楽しくやれるし、相手の気持ちを考えることもできる。そういうことだな」

「……」彼女は次第に弱まっていく焚火の赤色に目線を移しながら考え込んでしまった。よく考えてみると自分は、同性はまだしも異性に対しては“気が合わない”と言っては親交を嫌がり、時にはかなり強引な手に出てしまう事もある。特にリーヒュンに対しては、何かと自分と意見が相違する点ばかりが目につき、難癖をつけては文句ばかり言ってしまっている。もしブースターがいう事が少なからず真実を含んでいるものだとしたら、あのベイリーフと問題を引き起こすのは…やはり相手ではなく…否定してばかりの自分……そんな自分に対する反省のようなものが、意識の格納容器の冷却水から蒸気となって容器の中を満たしていった。

「…私だってさ…リーヒュンの事は…」グレイシアはわずかに口を開いて発した言葉、思わず出た本音だった。「まあ…努力するわよ…」ブレイブは少し驚いたように耳をピクンと動かしたが、やがて呆れたような笑みを浮かべ、左前足の先で地面をコツコツと叩いた。「ま、お前らしい返事と言えばテルルらしい判断だぜ…」「…それで…いいのかな…？」「あいつの事だから…前々合ったことを長々と尾を行く性格…ではないしな…」ブースターがテーピング固定を再開する。テルルはまたしても弱まりゆく焚火を眺め、何かが見え

るかのように押し黙っていた。

そんな最中、テルルがぼんやりと呟いた。「ユイリィ達は…バストーク隊長達とかチェギョン達とかも…もう帰ったのかな？」「……さあな…道草くってるのは俺たちだけかもしんねえけどな……」ブレイブもテープを巻き続ける両前足を止め、彼女が見つめ続ける焚火の炎に視線を向ける。（……確かにだな…火っていうのは…不思議な暖かさ…友達みたいな感じがするんだよなこういう時は……）彼には彼女がさっきから炎を眺め続ける理由が何となくわかるような気がする。その直後、たき火が映る意識の格納容器の中に、ふとベイリーフとメガニウムの姿が見えたような感じがした。彼らはどうしているのだろうか、彼女と同じような疑問がわく。無事だといいが……まさか自分たちと同じように道草くったり、最悪迷ったりしてなきゃいいが…

…何ともいえない不安に駆られたブースターが洞窟の外を見る。外はすでに暗くなりつつあったが、時折吹き込む風の様子からして天候はさらに悪くなっているのだろう。遭難したら確実に助かるまい……

しかし、ここはブレイブ・エスコーツ・クレイバーらしく、彼女の前で本音を漏らすのは止めておいた。ただでさえけがで気が滅入っているテルルに、これ以上心配させるようなことを言ってどうする？そんなごく在り来りともいえるテルリウムに対する“思いやり”が、今回も含めて彼自身の心に時折浮かぶ闇を掴み、意識の格納容器の冷却水のそこに押し鎮める手助けをしてくれる。

「……おっしゃ、これで巻き終わりだな」「う…うん、終わったの？」ブースターの言葉に我に返ったグレイシア、火を見つめすぎたせいか何となく眩しい感じが残った眼を右前足でこすり、自分の左前足を見る。けがをした部分は手袋の上から雪の入った袋と木の

枝、その上からぐるぐる巻きにした包帯代わりのテープでしっかりと固定されていた。ぎちぎちのきつきつで痛いほどだが、ブレイブがやってくれたせいなのか、それとも自分のケガの具合を見た後だからだろうか、その白いテーピングの部分に不思議な安心感を覚える。「まあな、これくらいは普通って所だ…よし、帰るぜテルル…」「も、もちろん…自分で歩いて…いつっ！！！」無理をして後ろ足を伸ばして立ち上がったテルルだったが、左前足を地面につけた途端、激しい痛みに襲われて前につんのめるように倒れた。「ったく何やってんだってんのに…骨がいってんじゃ立てるわけねえだろ…」「そんじゃどうやって帰るのよ私は？」「落ち着け、焦んなよテルル、そのために俺は考えておいた…」ブレイブは後ろ足を伸ばし、なおも達があろうとする彼女の前足を軽く押さえる。

「まずは、だ。俺の背中に巻きつけてある装甲板を全部はがせ。ひもで結んであるんだから右前足で十分だろ？」「は？何で外すのそれ？」「とにかくやれ、これが俺の考えたことだ」「…はいはい…何すんのよ…」彼女は怪訝そうな表情を浮かべながらも、彼の腹から背中にかけて兜の胴の如く巻きつけてある、チタン合金製の保護装甲板のひもをほどきはじめる。右前足しか使えないので中々手こずった。「おし、ちょっと背中を向けてくれ。お前にそれをつける」「な、何で私が…」「別に荷物持ちするつもりはねえよ」グレイシアの返事を待つこともなく、ブースターは外した彼自身の装甲板を装備品入れから取り出したひもで彼女の背中に巻きつけはじめる。「ちょ…ちょっと勝手にお腹側を触るとか…ああもうマジでキモイ……やるんだったら早くやってよね！」「やってんだろうが…文句言うなよ、な、テルルちゃん♪（うひょーい…）」普段は触れないテルルのおなかに触れることができてすっかりご満悦のブレイブ、ただし、女(メス)としての部位を意図的にさわりに行くことはしなかった。マジ切れ寸前で必死に右前足を押さえつけるテルルをよそに、難なく装甲板を縛り終える。その直後にブースターは、振り返ったグレイシアの真ん前に当たるところに立った。「よっし、これで準

備完了だ」「準備完了って…手か何で私の前に尻と尻尾を向けるわけ?」目と鼻先にあるフサフサ尻尾に後ずさりしかける彼女に構わず、彼は後ろ足を折ってお座りの体型にはいる。

「乗れよ…場所まで背負ってやる」「はあ?!断固お断りよ!アンタの背中に乗るくらいだったら我慢し…」いつもの調子でツッコミを入れようとした彼女は言葉に詰まり、自分のテープ巻きにされた左前足を見つめる。我慢して歩いて帰るとは、とてもじゃないが言える状況ではない。

彼女は渋々、と言った表情で頷いた。「はいはい、でもこんなのは今日だけよ……」「よっし決まりだ決まり!乗れ乗れ…」フサフサ尻尾を振って喜ぶブースターの背中に、グレイシアは恐る恐るまたがった。装甲板で覆われていない背中や首周りがとても暖かい、前足は彼の首周りのフサフサあたりにだらりと下げ、後ろ足は彼の太もも辺りで力を抜く。「こ、こんなもんでいいの…?」「おっしゃあそれでいい!ジャストの位置に入ってくれたなテルル!焚火の火を消してくれるか?そっから届くだろ?」「う、うん…」彼女はわずかに右側を振り返り、軽く“れいとうビーム”を打ち込む。火はあっさりと消え、洞窟の中は再び暗闇と風の冷たさに包まれた。「よし、ミオカ、自分で歩くことになるけど平気だよな?」「うん、大丈夫だよミオカは!それに…」イーブイは自分の首からマフラーを取ってテルルの首にかける。「テルルさんが寒くならないように、ね?」「ほ、ほんと?…ありがとうねミオカ」

「そんじゃ、一気に…うおっと…」「わわっ」テルルを背負ったブレイブが勢いに乗って立ち上がったとたん、想像以上の重さに左右に数歩ふらつき、彼は何とか踏ん張る。「ほんっとうにそんなんで大丈夫なの?めっちゃ不安なんだけどアンタの背中…」「心配すんな、俺の足腰は恐らく…うぶぶっ?!」「ひいいっ!!」背中のグレイシアを振り返りながら雪の中に入り込んだブースターだったが、一歩踏み込んだとたんに前足が付け根まで雪に埋もれてしまった。

「やっぱ…やっぱいいって!私自分で歩く…危ないわよアンタ!」

「強がんなテルル！これくらいどうってことねえよ……」彼は平然としたまま体勢を立て直し、そのまま雪の海に体全体を投げ出した。

体重はブレイブが２９キロでテルルが２８キロ、装甲板と装備品一式を除いても３０キロ近い物を、ブレイブは４本足で背負っているのだ。カンジキの様な保護靴もこれだけの体重では役に立たないが、今の彼にとって雪に半分沈みながらの徒歩移動は全く苦にならない。

はしゃぎながら歩くブレイブの背中に負ぶわれながらテルル。楽しそうな彼を見ているうちに、彼女は初めて心の底から申し訳ないと思うと同時に、彼に対する不思議な信頼感がわいてくるのを感じた。確かにブレイブが完璧な人材であるとはお世辞にも言い難い。調子に乗りやすく人間に対する態度もよくない、何より女（メス）くせが犯罪的なほど悪い。これはテルル自身が嫌になる点ではあったが、しかしその分、他人の感情を的確に読み、望んでいるものを差し出すという世渡り上手で、その一方で上面に留まらない懐の深さ、そして何より目的に向かうひた向きさと常にだれかと行動することを愛する純真さがあった。自分に足りない何か、それをもってして自分をぐいぐいと引っ張ってくれる、そんなブースターにグレイシアの意識の水晶の周囲を渦巻く流れが変わった。

真っ暗で何も見えないが、ブースターの意識の水晶には不安があるどころか不思議な楽しさがこみ上げてきた。洞窟に入った位置と暗記した地形図を掛け合わせ、その方向をちゃんと歩けば場所にたどり着ける。そして背中からは大切な相棒のグレイシアの温もりをオレンジ色の肌一杯で感じることができる。ブレイブは嬉しさのあまり飛び上がりたかった。

…すべてが順調、何の問題もない…自分の周りをミオカが元気よく歩き回り、背中にはテルルもいる。大切な仲間達との帰り道、幸せに胸が躍った。

歩き始めて2、3時間はたっただろうか、ブレイブの頭の上のフサフサに首を乗せるようにもたれかかっていたテルルがふと呟く。「……ごめん…また私…ホント単なるお荷物だよね……」「ああ？どうしたんだよテルル？」疲れるそぶりも見せずに快調に雪原で足を進めるブースターが、自分の頭のフサフサに思わず目線を上げる。グレイシアは、そんな彼に頭の上から、あいまいな、それでいて少々自虐的な笑みを浮かべる。「私さ…ブレイブにエラそうなこと言う割には…ドジふんでばっかだし、必要なところで役に立たないし…どうしようもないよ……もう笑えちゃう…」

「…それがいいと思うぜテルルは」ブースターの声がいくらか生真面目になる。「…は？何がいいのよ私の。アンタにはいつも…痛い事…」「俺はお前に感謝してるぜ、お前がいるから俺は度を超えねえでやっていける、いろんな意味でな…」彼は顔を少し赤らめて下を向いた。今行ったことは本当だ、もしこのチームでテルルに出会っていなかったら、ストレスからくる自分の危険な欲求を制御しきれなくなっていたに違いない。彼女のお陰でなにかのバランスがもたらされている、そう思った。

「……気の合わない奴ってのはな、上手くいかねえってはなから諦めるからできねえんだ。気が合った時はほかの何にも負けない最強のチームになるのによ。何ともったいねえ話だよな…」「……そう…そんなもんか…アンタよく知ってるのねそういう哲学を」グレイシアがブースターの首のフサフサを右前足で軽くつまむ。やっぱ

り彼には何かそういう物の天性のがあるらしい、様々な意味で関心してしまう。

「だろっ！俺の女の子から学んだ哲学とでも……あっ？」調子に乗って軽口を言いかけたブースターの正面でなにかが動いた。あの動きは野生の動物ではない、と言うよりこんな環境で夜行性の動物がいるわけがない、彼はそう分析した。「何かいるの？」「ああ、でも動物じゃ…」「そんじゃあ盗賊よ！ちょっと頭下げて。どの辺？正面？右？」背中のグレイシアが咄嗟に反応し、背中にくくりつけた洋弓銃を右後ろ足でけり上げ、右前足で正面に構える。彼女の心臓の鼓動が一気に高まった。テルルにとって夜闇で動き回る動物以外の生物は人間か盗賊かだ。「バーカ……あれが盗賊のポケモンに見えるか？よく見ろ…」洋弓銃の先端をブレイブが頭の後ろではねのける。「へ？…んなこと言われたって私は目悪いし、夜なんかじゃますます見えないわよ……」テルルは右手から洋弓銃を下げたまま、左目を閉じて夜闇を見渡した。ぼんやりと霞んだ彼女の視線の遠方に、確かにごくわずかではあるがうごめく物の影が見える。しかしこの暗闇の中では、あれが何者であるかなどブレイブにだって分からないのではないか？「で…あれが味方だって保障は？」「俺のカン」「はあ？！そんなの誰があてにすんのよ……」「心配すんな…とにかく待ってみようぜ…」

やがて影は2つになり、3つになり、最終的には5つになった。小さいのが3つ、大きめなのが2つ。やがて小さいものの2つがスピードを上げて迫り、やがてブースターの首のフサフサに飛び付いてくる。

「ピトム！」ブレイブに抱きつくように飛び掛かってきたのは、黄色い体に手や尻尾の先は明るい赤、同じように赤いほっぺには独特

の模様、プラスル種族のピトムニク・ソレイユ・マルセイエーズ本人だった。「ううっ……ブレイブも…テルルも…無事で…良かった…！！！！！！！！！！！」涙でいっぱいの顔を上げたピトムニク、ブレイブたちの顔を見るとたちまち感情をこらえきれずにブースターの首のフサフサに両手で抱きつき、小さな肩を震わせる。「……そうか…心配かけて悪かったな…俺たちが羽目を外しすぎたもんな……」ブースターはそっとプラスルの右の肩のあたりを左前足でなでる。心配してくれる同僚が、自分の無事を心から喜んでくれる存在がいることに、彼は心の中で感謝した。自分はテルルだけではない、他にも多くの存在があるからこそ、こうしてブレイブ・クレイバーとして生きているのだと。

「……ごめんねピトム…ちょっと足けがしちゃったけど……私は全然大丈夫だからさ」ブレイブの背中に背負われたテルルが、右前足でそっとプラスルの頭をやさしくなでた。彼女は自分の事をここまで気にかけ、涙を流してくれる存在がここにいることに胸を打たれた。思わず眼頭に熱いものを感じたが、ここでなくのはピトムであって自分ではない、グレイシアは少しだけ涙腺に力をかけてこらえた。ピトムニクはグレイシアの伸びた右前足をやさしく両手で握りしめる。「うん……平気そうで何よりかな……ピトムは皆が元気ならそれでいい……」

「大丈夫か2匹は……」テルルを背負ったブレイブの元にバストークがそっと歩み寄った。「この通りですおっさん！多少彼女はケガをしましたが、全然体力に支障はないっすよ！……それで…リーヒュン達のほう、もう帰ってます？」

「ううう…実はな…あいつらも目下捜索中って奴だ。お前らとおんなじように帰って来ねえからな…」「おいおい！何やってんだあのバカは…そんじゃあ俺も…」びっくりしたように彼は体から雪を払い落とす。こんなものかと薄々覚悟はしていたが、実際にそうだと言われるととてもじっとしていること等できなかった。「落ち着け…お前の体力じゃ行き倒れだぞ。それにテルルはどうする？」「……

くっ…」バストークが困ったように右前足を雪の中で踏み鳴らし、彼から向かって左側を向いた。2組も遭難しているのはなかなか厄介な話だが、この2匹はほぼ正確な方向に歩いてきている。という事はこの予想は間違っていないはずだ。「まあ…お前らの位置は正しいし、あの2匹が外れてなきゃ物の数キロだもんな距離と言っても…よし、レオ、シンシア、ここをまっすぐ向かって2匹を見つけてほしい。見つかったら照明弾を上げてくれ」「ショウメイダン…??」首をかしげるレオに対し、鼻をすすり上げたピトムニクが彼の矢立に入っている一本に右手で触れた。「これこれ…うん、これの頭を叩くと明るくなるの。上に矢ごと打ち上げれば目印にもなるし…」プラスルがコリンクの右のはねっ毛に右手をふれる。「お願い…よろしくね2匹を……ユイリィ達を…助けて…」「…いつの間に…どうもっすピトムさん…俺は…」再び泣き出しそうになった彼女に、コリンクは言葉を慎重に選んだ。自分の行動に2匹とシェイミがかかっている、今更だが緊張する。

彼はそっと頷いた。「やってみます…俺が殺すわけありませんよ……シンシア、行くぜ」「うん」

時間感覚を消失するという事がいかなる事態であるのか、同じ能力と感覚を運命的に身に付けている2匹には、その恐怖をいま、凍り付き行く全身の皮膚、その下にある肉や臓器、首元や頭部に生えた植物、そして意識を司る水晶とその内部でそのエネルギーを作り出す超小型原子炉、体と意識を構成するものすべてで感じ取っていた。そんな状況に陥ってしまった時、ただでさえ単一な、暗闇に包まれた中央アジアの大雪原は、絶望と恐怖を感じるほどの深海・外宇宙空間と化す。ユイリィの感覚と意識に関連するものすべては、今や

雪原という暗黒の宇宙・深海に息の根を止められつつあった。すでに４本足と首は宙に浮いてしまったかのように無感覚となり、山手線の様なメガニウム種族特有のウグイス色の皮膚の一部には、雪原での最大の恐怖である凍傷を示す青黒い部分ができつつあった。彼女は薄れゆく意識の中で必死に戦い、雪原と寒さによる死に対する恐怖が彼女の意識の水晶をことごとく塗りつぶす。そしてその恐怖自体が、彼女の足に残されたエネルギーの全てを注ぎ込む唯一の気力だった。

それを支えるリーヒュンがどうかと言えば、全く同じ状況になりつつある。隣にいるメガニウムが発するエネルギーが、ろうそくの火が燃え尽きるように、褐色矮星が悠久の時を経て核融合反応の機会を永久に失うように薄れ、消えつつあるのは彼の意識の水晶に外の空気を上回る冷気として伝わって彼の背筋を冷やす。「もうダメ…死んじゃう…」「何を…くっ…言ってるんだよ…？」リーヒュンの背に走る冷たさがユイリィのうわ言の様な呟きが聞こえるたびに近づき、４本足の力がスイッチを切られた２足歩行ロボットのように抜け、白い悪魔のように広がる雪の中に首から倒れこみそうになる。彼はその度に雪にほとんど埋もれた足をその場で２，３度踏み鳴らし、首を振って前を向き、自分の持てる能力全てを意識の流れゆく宇宙に集中した。立ち止まっている暇はない、ともかく感じた物を信じて前に進むしかない、自分の先読み能力を隣にいる彼女に比べてはるかに低い、そんな事は分かっていてもやるだけやるしかない、もう逃げ道はないのだから死ぬときは何かして死んだ方が後悔がない、薄れゆく意識の中でもそれはこのベイリーフのおおざっぱな性格からか、それとも“火事場の馬鹿力”と同様のやけを起こしたことによる結果か、そのような気合いだけを頼りにベイリーフは、今にも崩れ落ちてそのままになりそうなメガニウムの体重を預けられながら前に進んだ。保護靴が役に立つかなどどうでもいい、雪に埋もれながらの前身、というより（リーヒュンすらそう思ってしまった）彷徨に近い移動を続けた。

それからたった時間はまだ１０分足らずか、１時間か、いやもう何時間も歩き回ったのかもしれない！すべての希望を吸っていくような雪の大宇宙に、２匹はその意識すら完全にまもなく飲み込まれようとしている。（…本当に…ダメか……）リーヒュンは今度こそ前に倒れこみそうになった。自分の意識の格納容器に湧き上がった絶望という水が核燃料棒を凍結させていく。辛うじて彼は前足を前にだして踏ん張り、そのまま倒れる事だけはかろうじて免れた。「くっそ……なんたって俺は……」それと同時に自分のツルで頭の右を強引に殴りつけ、ベイリーフはごくわずかに残った気合を入れ直す。その直後、後にもたれかかるようについてきていたユイリィが立ち止まり、背中の重みが急激に軽くなる。「どうしたユイリィ…？？」メガニウムはベイリーフの方を見てはいない、光を失った夏の青空色の瞳が真っ暗な雪原を力なく見つめている。

彼女の意識の水晶に移ったものに、彼女自身が心を奪われていた。（…ここは…ウチはここに何を…？？？）彼女はぼんやりとした意識の中に浮かんだその光景に思わず思考の触手を伸ばし、引き寄せる。青々とした初夏の森を抜けた先にある小さな草原、人間の子供より背の高い赤色の花、草原の先に見える太陽に輝く海……そして…夏空……

ここが自分の生まれ故郷なのかもしれない、ユイリィ・ランタン・プレミドールの意識下に強い反応が走った。自分の記憶のどこをまさぐってもなく、物心ついてからはサクラに聞いても自分で資料を探しても見当たらなかった。リーヒュンと出会ってからは夢だ夢だと言って笑い飛ばしていたが、それが今、見える。かすれた意識の中で目の前に浮かんだ光景、これが…自分の故郷かそれに近い風景なのだ。

メガニウムに突如として胸を締め付けられるような切なさがこみ上げてきた。故郷に対する思いが突如として強くなったのだ。そう、これが故郷、……その想像は間もなく確信に変わろうと……

しかし彼女がツルをわずかに伸ばそうとした瞬間、その光景も陽だまりの温もりも現実という場所をいま吹き荒れる猛吹雪に吹き飛ばされた。「っ！！……うっ……」目の前に広がる暗闇と体を貫くような冷風、彼女の口から窒息したような息がこぼれた後、彼女の瞳はさらに絶望にかられて色を失う。

それと同時に自分に対するこれまでにない嫌悪と失望がこみ上げてきた。夢の様なことばかり言ってはかけがえのない友人、自分の事をありのままに受け止めてくれる大切な存在をむざむざと危険にさらし、苦しみの中に追いやろうとしている。妹を、すなわちフローラ助けたい、その一途な思いで、想像を絶するような困難を乗り越え、自分の能力を彼女が驚くようなスピードで身に付けていく彼をこんな場所で死なせてしまう……

「ごめんね！」ユイリィはリーヒュンに歩み寄り、力尽きるように首を彼の首の後ろにもたれさせた。「…な…何を…？」「ホントに…ごめんね…ウチがあんなことしなきゃ…ちゃんと考えれば…リーヒュンもロズリンも…こんな目には……」

「一番疲れているのは…お前でしゅよ……」彼女の首元にいるシェイミが心配そうに顔をのぞかせる。「何言ってんのよ！所詮ウチなんか……こんな事しかいつもしない…本当に頭がどうかしてるよ…」

「……」ベイリーフは寄りかかってくるメガニウムを呆然と見つめる。彼女がここまで弱音を吐くのは初めてだ。無理もない、自分だってどうなるか分からないのはたまらなく嫌なのだから……

しかし…ここで諦めたら本当に助からない。周囲に広がる雪原はあらゆる願望を打ち砕くように感じるほど広大だが、だからこそこの難局を切り開かなくては助からない、諦めるよりかは最後までやって後悔した方がいい。彼女の重みを支える彼の意識の水晶にその映像が強く焼きついた。

「……まだ何とかなるさ…」リーヒュンはユイリィの首をツルで優しく抱えた。「…もう少し…歩けばたどり着くと思う、俺のカンがそう言ってる」「……本当に…？？」彼女のかすかな問いかけに彼は頷く。「うん……だから…信じろよ…」「…うん…」その後、２匹は辛うじて歩き出した。相変わらずぼんやりと意識の遠のいた中での移動であり、歩いたのか分単位か、それとも何時間という単位で歩いたのかは双方分からないが、メガニウムの方はわずかに気合いを取り戻し、ベイリーフの後ろを自力で何とか歩けるほどになっていた。その一方で、残った気力でぼんやりと思い浮かぶがままに足を進め、それ以外の事はとぎれとぎれになる感覚に任せていたベイリーフの意識下に今までにない不思議な感覚が広がってきた。誰かが来る、この雪原の中を誰か（人間でも構わない）がいる……

その刹那、正面で一瞬何かが輝き、その1秒後にはポケモンが発したわざのエネルギーがその方向から迫る。

「っ！！！」ベイリーフの意識下で強烈な警告が鳴った。普段だったら咄嗟に上に飛び上がって回避できるタイミングだが、体がまったくいう事を聞かない……

その直後、２匹に襲い掛かったエネルギーはベイリーフの顔もと数十センチの場所で爆発した。「…こんのバカがッ！兄貴にケンカ売ろうなんて１００年……」リーヒュンの意識がその声で引き戻された。自分の呼び方…そして荒い口調…間違いない……「早いんだぜ雑魚がっ！！！」コリンクは容赦なく相手を攻め立てる。よくは見えないが相手はミジュマル種族、“みずてっぽう”を尻尾で叩き飛ばし、でその反動を使って２匹とミジュマルの間に入り込んでスパークで相手を叩き飛ばした。「うぐグッ…」「どうした…何か言ってほしいか、あん？」コリンクは叩き飛ばしたミジュマルの上に馬乗りになって、後ろ足で押さえつけながら右前足で軍刀を腰から引っこ抜く。「“兄ちゃんおおきに…”だろ？」コリンクは冗談を飛ばしながら、そのまま刃でミジュマルの背中を串刺しにした。

「レオと…シンシアか……」「はい、助けには来たんですけど……」リーヒュンの足元にシンシアが飛び寄る。凍傷になりかけていた彼の左前足に感じた温もり、地獄の中で見た仏、まるで天界に来たような感覚だった。「大丈夫ですか？寒いですよねそれは……」「う、うん…でも俺よりユイリィの方が危ない…彼女の方を温めてくれないか？」ベイリーフがツルで茫然としているユイリィの方をクイクイと指差す。「…はい」ロコンはメガニウムの方に駆け寄り、彼女の背中に飛び乗って足を折って座った。「……ありがとう…シンシア……」メガニウムの凍結しきった意識の水晶がロコンの熱でほのかに生き返る。ユイリィは久しぶりに自分が生きているという事を思い出し、４本足を支える体力が少しずつ戻ってくるような気がした。

「兄貴！大丈夫かよおいっ！？」リーヒュンの首元にレオがジャンプして飛び付く。首の葉っぱに感じるコリンクの温かさ、意識が急速に戻ってくるのを感じた。「ま、まあな……ごめん迷惑かけてさ。ちょっと厄介な事態になって……」「そんだけしゃべれりゃまだ生きてるってもんだぜこら！まあ…まだあんな風に盗賊がいるとはな…」コリンクがミジュマルの死体の方をちらりと振り返る。あんな子供が雪原を彷徨っている、おそらくは逃げる途中に（隊長がそう言っていた）家族からはぐれたのだろう。

「という訳だ兄貴、姉ちゃんもそうだけど、実はそんなにブレイブたちとは離れてねえんだぜ。もう終着点のあたりだったからな場所の」「そうか……そんじゃあ俺たちの行程は間違ってはなかったんだなあ…」リーヒュンはレオの右前足が指差す方向を見て肩にあたる部分をすくめ、首元の葉っぱに垂れさがった氷をツルで払い落とす。自分のカンは間違ってなかった、何となくこっちの方を歩いてきたのだが、それが正解だったのだ。「さっすがリーヒュン、ついてきてよかったと思うよウチは…」彼の後ろでユイリィが茶化すようにつぶやく。どうやらシンシアの放つ温もりで多少回復したようだ。

「ありがとう…本当に助かったんだね…」「うん…一応はな」

ベイリーフの意識から、ようやく重荷が少しだけ離れたような気がした。困難は多かったが、これでおそらくは終わったのだ。そして今回もまた全員で帰ることができる。自分たちが発信機を置いた、それが通達された任務だったのだから……

「ということで、おっさんたちに無事を知らせてやらんとな。俺、人間どもの作った無線機とやらは使い方が分からねえから…」コリンクが背中にしばりつけた洋弓銃を前足で手繰り寄せ、何か円筒状物が突いた矢をそれにつがえる。「こいつあピトムさんから習ってつけた弾の一種、盛大に光が出る奴、まあ言うなれば蛍だな……」コリンクは後ろ2本足で立ち上がり、前足のサイズに作られているトリガーに右前足の爪をかけた。「へへ…“兄ちゃん、どうして蛍はすぐしんじまうん?”か、それは運悪く蛍が寿命だったからだぜ…」

コリンクがトリガーを引き、矢が真上に向かって飛び上がった。矢の先にくくりつけられた弾頭から、キラキラと化学反応によて生じた光が高い位置で、どこかのバルビートやイルミーゼよろしく光がきらめき、やがて雪原へと落下していく。

「おっし、奴ら見つけたか!あの元気よく打ち上げた様子だと2匹とも全く持って無事だな」レオの放った（もともとは人間用の物をピトムニクが勝手に改造したものだ）照明弾の光を見上げたバストークが嬉しそうな声を出す。「やりましたね隊長!2匹とも無事だったんだ……」ピトムニクが喜びに声を詰まらせながら彼の胴体のモフモフに飛びついた。彼女の意識の水晶玉の中に、外の宇宙から心地よい温もりが流れ込み、不安でいっぱいだった空気を入れ替えていく。「そんじゃあ早速、国連軍の人間連中とほかの皆に教えてやるとするか…」メリープが左前足で胴体の左側のモフモフにうずもれかけた無線機のスイッチを入れ、そこから口元に突き出した小型マイクに声を入れる。「ブリザート隊の…いや、チームの隊長、救出に向かった連中が4匹を発見した。俺らの場所がモニターでき

てるんだったら、そこにいるからな。とりあえず軍の合流ポイントまで向かう」

「あーあ、上手くいった途端に隊長らしくしちゃって、やっぱりバストークはそういう軍人なのね…」グラシデアが呆れたように言いながら首のモコモコにかけたマフラーを締め直す。「そう言われりゃそうだな……やっぱり全員いないと…寂しいだろうが…」「そりゃそうだけど……まあ今日は無しにしとくわよ愚痴は」今のモココには、いつもの如く父親メリープに愚痴を言う気はなかった。みんなが生きている、今のところはそれを喜ぶべきだろうと……そう思ったから。

「そっか！生きてた！それ良かったごとね……そんじゃあ私らも引き上げってことになるの…」合流ポイント周囲の警戒についていたスカイラブは、嬉しそうにコード状の尻尾を振って、隣にいるグリソムとガトルを前足で抱きしめた。「ラブちゃんは…結局テルルさんの事も心配してくれてるんですよね！」「ま、まあ…そんなところかもね…」ケンカはしても、不思議と彼女と似た点がある。それが故に心配して、いや心配になってしまう。パチリスのさりげない問いかけに、ルクシオは思わず本音を漏らしてしまった。

アメリカのアラスカ州・エルメンドルフにある国連統合軍司令部・アメリカ空軍基地の司令センターに安堵のため息が漏れる。「アクタウ郊外の空港に待機しているヘリ、今日は雪雲の切れ間に入る。日の出同時に陸上部隊の指示で要救助者の回収にかかれ」

司令の男がアメリカの外務省の関係者とＥＵ対外行動局の関係者の方に向き直る。「いやいや…お騒がせしてすいません。今回の耐寒試験でも明らかでしたが、あのチームの連中は少々無茶が過ぎる

ことも多いようで……」「まあ、それくらい元気な方が軍としてもデータがとりやすいのでしょうね」アメリカ外務省の関係者の男が前方の大型ディスプレイに視線を移す。「さすがは国連……ポケモン達を我々人類の恩恵とすべく、という訳ですか…」「もちろん、我々が進めるこのプロジェクト、これは人類社会の大きな遺産となるのですから…」にこやかに話を続ける司令官の言葉に、ＥＵ対外行動局の男は心の中で眉をひそめる。耐寒試験……いったい何を試験するというのか？その結果を一体何に使用するつもりなのだろうか…？？

２０１３年　１月１５日　韓国　仁川（インチョン）広域市　０９００時

韓国の仁川広域市の中でも中心市街的な役割を担う中区（チュン）、その一角にある仁川警察署の周辺は、警備員、警察官、民間の報道陣や取材陣の人間が入り混じり騒然としていた。ニュースで騒ぎを起こした著名人が警察署へと移送される時にマスコミ関係者が署の周りにたかるのは、世界の大抵の国で“よくある事”だが、今回もそうだった。北朝鮮から韓国への亡命を行おうとして小型船で脱出し、日本海（東海）を遭難寸前で漂流しているのを日本の漁船と海上保安庁の哨戒用航空機サーブ３４０Ｂ（関西空港海上保安庁航空基地の所属）が発見したのだ。複数の子供を含む９人は、いったん最寄りの港湾がある日本・鳥取県へと海上保安庁の巡視船で移送されたが本人の希望通り韓国へ再移送、福岡空港から旅客機で仁川国際空港へと入った。仁川警察署では通関での国籍取得手続きの一環で訪れる。

彼らが北朝鮮を脱出した理由、それはやはり北朝鮮内の窮乏にあった。脱出した９人は全員が親戚関係であり、軍人であるという男によれば、近年は軍隊すらでも食料の配給、家族への給与や生活物

資の配給が滞り、自らも農業で辛うじて命は繋いできたが限界に近づき、北朝鮮から船舶による脱出を決意したという。

かつては全人民の平等と労働者主権を謳った社会主義国家、それを実現する革命軍としての意義を持っていたはずの社会主義国家の軍、米ソ冷戦崩壊以後、次々に社会主義国家が民主・自由主義経済化、もしくは自由市場経済の導入と私有財産の認可といった社会主義勢力の崩壊・自由主義化が（その典型例が、自由市場経済を導入して世界第2位の経済大国に成長した中国である）進む中、最後に残った北朝鮮もまた、計画経済という夢想の前に自国の命運を屈しつつあった。夢にとらわれる間に、軍隊と言う国家組織にすら生きるための食料を与えることができなくなっているのだ。

周囲に集る人間の動きが急激にあわただしくなった。４台ほどの警察車両が（カラーデザインがアメリカ・ペンシルバニア州警察のそれに似ているともいわれる）警戒灯を回しながら警察署敷地内に幹線道路から入り、地下駐車場へと入っていく。多くのフラッシュがたかれ、撮影用カメラを回した人間が車を追いかけるが、地下駐車場へのシャッターが閉鎖され、その隙間から撮影機器で覗き込もうとしている報道関係者たちを警備員が制止する。

街道の植え込みにいたハトたちさえ飛び立つほど喧騒に包まれたその人ごみからやや離れた場所で、その男、韓国国家安全保障局（ＮＳＳ）の２人が始終を見守っていた。うちの片方は、先日仁川国際空港で監視任務に就いていた人間だ。

今回、大韓民国大統領の指示でこの警察署へとやってきた理由、それは前もて行政安全部を通じて警察署に依頼した９人の脱北者との接触である。脱北者の存在と言うのは、北朝鮮の貧窮と混乱に対して韓国側の国家的な（すなわち、経済や生活環境、社会インフラなどでの）優位性を国内外にアピールするだけでなく、北朝鮮の内部事情を調査する上での重要な参考人となる。一端の民間人でも生

活状態や警察・軍隊による人民の取り締まり状況などを聞き出すことができるが、今回はその一人が軍人とだけあって、軍の内部事情もその男がある程度認知している可能性がある。どんな小さなことでもいいのだ。

指導層の後継者問題でも、軍事活動の活発化の件でも、米ドル・欧州ユーロ、スイスフラン、中国人民元等の海外資産の件でも、核開発の件でも、中国との経済や核技術分野での接触でも、米・露・韓・中・日との6か国協議の件でも、最近は本当に不穏な情報が多すぎる。なかでも先日、我が国の企業が製造した“わけあり”の原子力関連機器を輸送中のコンテナ船に潜入した局員が、シンガポール港で乱闘騒ぎになったという情報が一番不可解だ。あれを中国が欲し、北朝鮮に依頼したのか？そして何らかの手段であれを奪還した後の使用手段が、（捕まえた1人が正しい事を言ったのかは不明だが、その男の身柄に関してはシンガポール政府に手回しをしてあり、近いうちに韓国へと連行される）どうやら中国軍の極秘兵器と関係しており、しかもその技術に関わっているのはアメリカの生命工学最大手、ＧＢＴＸ社らしい。ＧＢＴＸ社と言えば、近頃は国連と深いコンタクトを持っている話もある。生命工学、原子力技術、中国の軍事活動、そして国連、この繋がりが何を意味するのかは分からない。

報道陣の多くが撤収に取り掛かる。取材で中継していたらしい女が車両に戻り、巨大なカメラや機器を持った男たちが撮影用の脚立を片付け始めるころを見計らい、2人の男が人ごみに紛れながらさりげなく警察署の正面玄関へと向かう。そのうちの1人が携帯情報端末（モバイルフォン）で手短に内部と連絡を取り、それとほぼ同時に中から1人男が出てきた。

「身元の証明書は？」出てきた男が抑揚のない声で言う。ＮＳＳは大統領所属でも極秘機関だ、局員や関係者の立場は厳重に管理されている。２人の男がＩＣチップ付きのカードを差し出し、警察署の関係者が何かの機器をかざした。ややあって、再び無表情のまま告げる。「どうぞこちらへ、正式な手続きと調査が始まる前にお済ませください」

２０１３年　１月１６日　アメリカ　ニューヨーク　ウォール街
１３００時

アメリカ経済の中心地にして世界経済の総本山、現在の人類の繁栄を支えるもののひとつの“はず”である超巨大自由資本主義経済のメッカともいえるウォール街。この１５年で急速に建て替えが進み、道の双方をガラス張りの超高層ビルがそびえ立つ市街地、その森の下の道路は異常な空気に包まれていた。長引く世界的不況によって経営が困難になりつつある中小企業関係者や就職難にあえぐ学生、失業者や動労組合などが、大企業、多国籍企業体、富裕層に資産が集中する現況に対し、格差の税制と富裕層への減税措置の即刻廃止を求める一万人規模の巨大集会とデモ行進の場と化しているのだ。

この日、ウォール街のまさしく中心、資本主義の官邸と言えるニューヨーク証券取引所（ＮＹＳＥ）を訪れていたアメリカ合衆国国務長官だったが、次の目的地であるＳ＆Ｐ社本社に向かうために車に戻ろうとしてＮＹＳＥ関係者やＳＰ達と共に立ち往生していた。現代的な高層建築になった本社や無数の高性能端末・機器や大型ディスプレイが並ぶとは対照的に、その下には２０世紀初頭から建て替えられていない正面エントランス。地球最高クラスのセキュリテ

ィーシステムと大勢の警備員によって、デモ隊の内部への侵入だけは免れているようだが、エントランスの前のロータリーから道路まではデモ隊の人間に埋め尽くされ、数千人規模の人間たちがウォール街を練り歩き、この辺りに集中する大手金融企業や証券企業の本社の前で拡声器等でシュプレヒコールをがなり立てる。あちこちで警察官との小競り合いが起き、一部の者が怒声を上げながらも警察官に手足を掴まれ、警察車両に運ばれていく。

国務長官の女は、エントランス付近で大勢の警備員に囲まれながらも、携帯情報端末を耳に当てる。「予想より大規模です。ちょっと今、道路がデモ隊でふさがっていて……」彼女はＳＰの一人の男の背中を叩き、様子を見に行くように伝えた。彼女は再び情報端末に意識を戻す。「それで…調査の件はおおよそ完了しました。…ＣＥＯが亡くなったアップル社に関しては株価への影響は一時的なものです。また今朝のムーディーズ社の発表したイギリスやポルトガルの民間銀行２１社の格下げとスペイン国債の格下げに関しては、やはりヨーロッパ系の株式に響いています」“そうか…アップル社の彼の熱意は常にアメリカン・ドリームを象徴していたからね…”電話の向こう側の大統領の声が若干暗くなった。

アップル社は次世代携帯情報端末やタブレット型端末といった革新的な情報機器の開発・販売で、世界金融危機と後の世界的景気低迷の中でも順調に業績と売り上げを伸ばし、昨年１２月の段階で会社の時価総額がエクソン・モービル社とＧＢＴＸ社を抜いて世界一となった。常に製品開発の先頭に自ら立って斬新なアイデアを出し続けてきたＣＥＯを失ったアップル社の株価は、同じアメリカのマイクロソフト社、新たに参入したグーグル社、世界的な大メーカーであるフィンランドのノキア社、新興ながら世界的ブランドに成長しつつある韓国のサムスン社等の巻き返しや開発競争に同社が敗北するのではないかという不安感から、一時急落したのである。

とはいえ、今回大統領の男が彼女を派遣した理由はそういう感傷であるはずがないし、じりじりと下がり続ける南欧諸国の国債格付けでもない。電話口の彼はすぐさま声のトーンを元に戻す。“それで…ＧＢＴＸはどうなってる？”「ええ、今日の世界的株価の軟調の中でも上昇を続けています…中国やロシアへの売り込みも行っているようですし……」女が外のプラカードを掲げるデモ隊を一瞥し、左手の人差し指で腰のあたりを叩く。まったく彼らのヤジは、エントランスの自動ドアの内側まで聞こえてくる。（アンタらが求めているのは格差是正であって、資本主義自体の破壊な訳がないでしょうが…）女は心の中で呆れた。確かにアメリカの自由放任な市場経済が問題を起こしているの事実だが、社会主義なんて言う２０世紀中ごろの残骸が万が一、億が一でも復活したら、それこそ全世界が北朝鮮と同じ飢餓と権力による弾圧の世界になってしまう。

女は声の音量をやや上げる。「それで…今からＧＢＴＸ社の格付けの事実確認と今後の我が国の経済政策について、Ｓ＆Ｐ社と会談を予定しているのですが…」彼女の元に先程の男が戻ってきて外の風景を指差し、首を振った。２人の目線の先にある公用車のフォード・モータース社のリンカーン・ＭＫＸは、警察車両もろとも大群衆にもまれている。「今までにこの類のデモはありましたが…ここまでの規模は前例がありませんね…」エントランスまで見送りに来たはずのＮＹＳＥ関係者の男も呟く。財政危機やユーロ通貨問題にあえぐヨーロッパ先進国、宗教・民族や経済成長によって生まれた貧困・格差に苦しむ中東やアジア新興工業国に加え、資本主義と自由市場経済の中心地であるアメリカにも、停滞する現状打破を訴えるデモや市民運動の波が押し寄せていた。

２０１３年１月１７日　ベルギーのブリュッセル　ＥＵ本部　１８２０時

それほど高層建築ではないが、現代のデザイナーの手によって芸術的な形状をした円筒状のＥＵ本部敷地内の会議センターは今宵も降り続ける豪雪の中、遠くに現代的なブリュッセル新市街地を見ながら美しくライトアップされていた。車寄せにフランス・プジョーの２０７が止まり、降りてきた人間と入れ替わるようにＥＵ関係者が車に乗り込んで駐車場へと２０７を移動させる。その一方で普段のように高級車の出入りはなく、施設全体としては静寂に包まれている。

この建物のとあるフロアは今、その階層全体が隔離されている。とはいっても人間は大勢いる、極秘会談のために関係者を完全にシャットアウトしているだけだ。

「フランス・トゥールーズにあるニューロン・コンピュータ社の主要工場、彼等はやはりドイツのＡＧＥやスウェーデンのエレクトロラックスといった民間電気機械企業に電子部品を供給しているのだけではありませんでした…」先日フランスの工場を査察したＥＵ査察団代表の男が、円卓の真上の天井に設置されたプロジェクターを手元のコンソールで操作した。自動的に天井から降ろされた正面のプロジェクター用スクリーンには、先日ニューロン・コンピュータ社の工場で撮影された動画と多数の図表が表示されている。男はレーザーポインターで表の一部を示す。「取引・出荷先にはやはり、ロシアの公設団体というものがあるようです」

「うむ…ＥＵの本部もそれは掴んでいる…」この極秘会議の議長らしき年輩の男が卓上に肘をついてくんだ両手に顎を乗せ、重苦しくつぶやく。「…この公設団体と言うのがあまり良い物であるはずがあるまい……」「その通りです。おそらくは旧ソ連時代から伝統的に存在する研究組織でしょう…」

「ええ、ロシアをはじめとする東欧は情報技術機器分野では後れを

取っていますから……」査察の際、電話連絡を取っていた女が同意する。「軍事分野、ロボット産業、…それから生命工学、さまざまな分野で応用が利きますからね…」彼女は窓の外にある、雪降る夕闇に沈むほど近い“石作りの城”を見やった。彼等には照明という技術がないので、既に夜となったこの時期の１８時には眠りにつくのだ。そして生命工学の対象の一つが彼等、そういう話もある。彼女は視線を戻し、話を続けた。「……あの会社は…例の国連のプロジェクトとも関わりがあります。動向を十分に見ておく必要が……」

「だがそれをどうやって行う？一企業の動向をどうやって調べる？」議長らしき男が肘をついて組んだ手を戻す。「ＥＵ内の自由市場経済にある一企業の取引を全て監視下に置くなど自由市場の原理に大きく反しているぞ…」「その通りだな…」別の男が葉巻をくわえ、その先端を切り落とす。「その上だな、こちらが何らかの手法でロシアとの取引を監視し、それが発覚した場合、ＥＵ諸国とロシアとの関係が急激に悪化しかねないぞ。奴らは天然ガスのパイプラインや原子力発電所からの送電網の遮断といった強硬策にも走るかもしれない。最悪、軍事的圧力をかけてくる恐れすらある」

　先進工業国を多く持つヨーロッパの電力網は、西欧・北欧のみならず、東欧やロシア、北アフリカや中東、地中海の国連メガフロート群にまで複雑につながっている。環境先進国でもあるヨーロッパとはいえど、地球でもクオリティの高い市民の生活と多くの産業を支えるためには膨大な電力が必要なのだ。２０１１年の原発問題以後、イギリス、フランス、スウェーデン、チェコ、ポーランド等が積極的に原発の新設・高性能炉への交換を進めてきたが、世論や市民投票によって早期の原発廃止や永久停止を決定したイタリアやドイツの電力を補うには、太陽光や風力の電力では到底補えず、どうしてもロシアから火力発電用天然ガスを（ドイツは石炭の産地ではあるが、石炭火力はＣＯ２排出量が多い）輸入したり、主要な原発推進国であるロシアの電力を輸入したりせざるを得ない。それを遮断されることによる影響は、正念場を迎えているヨーロッパ経済に

計り知れないものだ。

実際、東欧諸国にＮＡＴＯが（特にアメリカが推進したのだが）ＭＤ３ミサイルの配備を決定した際にも、ロシア側は天然ガスパイプラインの遮断をちらつかせた。ただでさえ東欧の一部地域での紛争によってガスラインは一定の脅威（リスク）にさらされているのに、その原因を自分から作りに行くのは馬鹿げている。

「だからこそですよ」査察団代表の男が軽く右手でスクリーンを指差す。「国連の件もそれと関連があるかもしれない、だからこそこれまでにない特務機関の新設が必要なのです。アラスカの司令部を訪れていたＥＵ対外行動局の者がアメリカ外務省の関係者と非公式に会談した情報によると、やはり国連の極秘計画は一部の大手企業を巻き込んでいます。それ自体はＥＵが関与することではありませんが、出資を受けたその企業が、勢いで他の事業や外交に関連する事業に参入すると、極めてゆゆしいことになりかねません…」

極寒の彷徨（後書き）

お疲れ様でした……これで中央アジアのシーンは終了です。相変わらずの未熟な文章ですいません。

５日を経過させるのに１０日……時間かけすぎだよ我ながら……

儚く過ぎ行く（前書き）

大変お待たせいたしました。４７話です。

儚く過ぎ行く

２０１３年　１月１７日　カザフスタン　アクタウ市街地　０９５０時

あれから3日が過ぎた。長い間雪原をさまよって軽度の凍傷に（ブレイブもテルルもすっかり体力を使い切っていたのだ）なっていた４匹と、タイプの問題に加えて長時間飛行したせいで衰弱していたチェギョン（「ううう…私もう雪原なんか行きませんよお…」彼女は運ばれる際に思いっきり弱音を吐いた）は、アクタウの東にあるカザフスタン最大にして中央アジア最大・最高水準の規模と質をもつ南部の大都市に存在する、欧米の民間医療産業と欧州の大学医学部、世界保健機関（ＷＨＯ）の医療研究センターが設立した、ユーラシア大陸各国で2番目の大きさを誇る医療センターへと送られた。ここなら5匹を収容しても、国連の派生機関であるＷＨＯを通して全員の存在を世間やマスコミから嗅ぎまわされる心配もなくせる。そのほかの一行が、国連統合陸軍の臨時増援部隊が（カザフスタン政府・軍、並びにロシア政府の要請通り）カザフスタン国外に撤収したのちにここを離れるのは１７日の予定。そして今日がその日であり、今日の夕方には、国連がヨーロッパの部隊から（ドイツ軍やフランス軍といったヨーロッパ各国軍から持ち込まれたものも含める。そもそも統合軍の多くが、欧米を中心とした各国軍部隊の派遣によって成り立っているのだが）持ち込んだ端末や通信機器といった大型物品輸送の最終便と一緒に、アクタウを出発する予定になっていた。増援の兵士の大半はイギリス・ドイツ・スイスなどのヨーロッパの国軍の兵士であり、本来は北アフリカ・南スーダン国境地帯の警備任務、リビアやエジプトでの治安維持活動に当たっていた部隊が交代する際に急きょ派遣されてきた一行であり、今回の任務を終えてようやく本国に帰還できる。

まあ、ＮＡＴＯ諸国の軍に交じってここまで統合軍の部隊がアフリカに展開している理由は、治安維持のほかにもあるのだが。

とはいってもまだ人間で言えば午前９時、アクタウ市街地郊外の飛行場まで戻ってきた一行には、夕方まで時間がある。バストークとピトムニクは、４匹がいなくなって置いていかれたも同然のミオカとロズリンを抱えて、国連軍のＭ９９８ハンビー４輪装甲車でアクタウの市街地に入った。正午まで（すなわち１２時）には戻るとの条件で、自由行動が許可されたのだ。

数日前から天候がやや持ち直し、寒風が吹き荒れる中、雲の切れ目から晴れ間も見えている。ピトムニクは小さな肺一杯に空気を吸い込んだ。「やっぱ晴れているのは空気が澄んでるね！お仕事も無事に完了したことだし…」「ミーの背中も久しぶりに光合成してましゅよ」ロズリンの背中の草も日光を浴びてきらめき、耳元以外の部分からも桃色の花がポンポンと飛び出し始めている。「すごーい…さすがロズリンは希少種族だけあるよね…ピトムも幻とかに生まれていればなあ…」「ピトムが思うほどあんまいい事は無いでしゅよ」「へ？」「こそこそ暮さなきゃならないし……人間に珍しがられるし、ロクなことがないでしゅ」「うーん…そういう点もあるのよね…」「まあ、気にしても生まれ変われないでしゅから…」シェイミはプラスルの腕の中で、うんざりしたように左後ろ足で左の花の後ろをかく。

このポケモンが言う事は少なからず真実を含んでいた。一匹しかいないわけではないが（地球上に一匹しかいない種族は、人間の学会においてはＵＭＡ（未確認動物）と同様に扱われているが、シェイミ種族のように居住地の判明例は少ないがある程度数がいる種族は、

人間たちにとって貴重な生命科学の実験材料であり、場合によっては極めて価値の高い密漁の対象であった。各国や国際機関も希少なポケモン種族に関しては保護区の制定・法令による規制など一定の対策は施していたが、アフリカのサバンナ（代表的な例としてケニア）や南米（特にブラジル）・東南アジア（特にタイとマレーシアの国境線）の熱帯雨林の国立公園と比べて管理はかなりずさんだった。それも近年のそういった国々・及び世界的な経済成長に伴う資源量の増大や欧米・アジアの企業や官民合同集団の工場の進出が加速していることから生じた開発専用特区という、何ともあべこべな存在の（木々の伐採や動物・植物資源の研究採取が認められた場所。その分ここでは遺伝子改造によって育成速度を上げ、光合成の効率を上げた樹木の植林を行い、生態系の保守を行うことが管理する企業・集団に義務付けられており、基本的な森林の育成から伐採までロボットによるオートメーション化されていることもある。違法行為、それに関する国や企業同士の対立も多いが）存在を認めていることを含めても。こんな綱渡り行為をしてまで保護区だけは設置したがるのは、熱帯雨林やサバンナに生息する動物や植物が医薬品や食料と言った貴重な資源となる将来の可能性を持っている上に、生態系のバランスというものが人類の存続から地球の気候にまでに少なからず影響しているからであって、地球の生態系から完全に離れている上、中途半端に知能が高いか故に人間にたてつくことの多い“半知的生命体”の保護区は対策上後回しにされている。

「でも…ピトムはプラスルでいいとも思ってるんだよね」ピトムニクがロズリンの背中にいっぱい生える草を右手できれいにする。「…ピトムはプラスルに生まれたから、こうやってみんなと一緒にいられる。そうじゃなきゃ違う人生を歩んでたからね…変えられない人生は…感謝しなきゃって思うの……」

「そりゃそうだ……」隣を歩くバストークの左前足が、彼女の右の

ほっぺに触れ、火花がぱちぱちと散る。「俺だってピトムがいるからこうして隊長してられるし、グラシとも何とかやっていける…お前は俺の…もう一匹の娘なのかもしれ…ったく…」メリープの藍色の顔がにわかに赤くなった。何年も前から、彼女と出会って半年くらいたったころからか、以来何回かこれを呟いてしまい、その度に恥ずかしかった思い出がある。

「もう、何言ってるんですかあ隊長！そんな事ロズリンやミオカの前で言ったら……」プラスルが顔を赤くしながら、隊長の首のモフモフ付近を右手で軽く押す。「ああ、悪い悪い、全く俺のくせはいつになっても直らんな……」「直らないってそんなもんじゃ…」そうは言いながらも満面の笑みを浮かべるピトムニク。自慢する事もなく、周囲に漏らすこともは無いが、彼女にとってバストークに娘扱いされるのはとてもうれしい事なのだ。そして今では、それがこのプラスルの誇りでもある。

彼女は赤いほっぺをメリープの顔の左横にそっとこすり付けた。「…ありがとうございます隊長」「ん？どうしたんだよいきなり…」「あの時……私一匹で勝手に飛び出していったら助からなかったと思います。隊長やグラシがいたお陰で……こうして成功したわけですし……」

「……そうか…あの時の人選は…はっきり言って間違いだったな」バストークは尻尾をシュッシュッと2回ほど振る。「…すまねえな、ピトムや連中を見てると…どうしてもお前らが息子や娘のように見えてしまって、ついつい感情が入っちまうんだ」「……そう、何ですか…皆が、子供…」彼の気持ちが何となくわかる、何年も彼の下でやってきたピトムニクにはそう思えた。「……俺も隊長としてまだまだ器が足りねえっていう事を…ただなピトム…」メリープの表情にやや熱がこもる。「俺は単なる部隊の隊長にはなりたくないし、探検隊や救助隊のリーダー的存在にもなりたくはねえんだ。俺が何となく思うのは……同じチームの連中の…なんだ、その、先輩的な存在で十分、そう思う…」「先輩…なるほどです…先輩、

か…うーん？…」真剣に考え込んだような彼女を見た彼は、慌てて左前足で彼女足の付け根あたりを叩く。「…いや、今のは俺の理想論だ。俺の見解であってピトムがそれをマネしろって言ってるわけじゃない。気にすんな…」

「いや、それいいと思います！いいと思う……」左手を頭部の下あたりに当てていたプラスルの耳がピクンとのびる。「おいおい、何がいいんだよ…そんな事やったらお前も万年中隊長どまりだぜ？…」

「そうじゃなくてその心意気が、ですよ！今後とも色々と参考にさせていただきます！」「や、やめた方がいいぞピトム…俺のマネはいい事が…」ちょっと動揺するバストークのほほ元に、ピトムニクがまたしても帯電器官をそっと当て、火花がぱちぱちと飛び散る。

「…隊長はピトムの先輩ですから…私みたいに何のとりえもないプラスルを拾って、育てて、認めてくれたんですし…」「……そりゃ…そうだがな…」「だからピトムの考える目標は隊長なんで…どんなに人間と上手くいかなくても、どんなふうに冷や飯を食わされるように扱われても…それでも私にとっての理想は、隊長みたいにどんな時でも自分の考えに素直で、ややこしい物を超えて一匹一匹をちゃんと見てくれて、全員を一つの家族にしてくれる、それが私の夢のチームですから…」

「そう言われると…かなり恥ずかしいが…」ほっぺから伝わるプラスルの温もりに、人間年齢３５歳のメリープは思わず顔を赤らめたが、同時に何だか甘酸っぱい感じがする不思議な感情を彼は感じた。まるで１０歳の頃に戻ったようだ、あの時の自分と言えば、今のちびっこや無茶をして病院送りになった４匹のように、ひたすら友人たちと集落から歩いて1週間はかかるソーラ南部の森林地帯を探索していた。その時一緒に遊んでいた同じメリープ種族が、のちに妻となるアマルフィだったよな…あの時はあの仲が結婚するほどに至るなんて思いもしなかったし、自分が世界の各地を飛び回る日々が

待ち受けているとは予想だにもしなかった。そんな（そんな年齢にはなってないが）懐かしい思い出が、意識の格納容器の冷却水を温もりとなってゆっくりとかき混ぜる。

そんな最中、彼の意識に温もりを当てえていた水が突如として温度を上げ、懐かしい温もりが急に切なさとなってきた。何かは分からないが自分はそれを求めている、それを取り返したい、体の中で突如として暑い物がこみ上げ、それに気を取られて一瞬４本足がもつれそうになる。「…ん、どうかしたんですか？」「あ、ありがとうな…ピトム…」彼女の問いかけにバストークは辛うじて声をのどの奥から絞り出す。

隣にいるピトムニクの姿と振る舞いが、突然彼がおぼえているアマルフィの姿に重なった。最後に姿を見たあの時以来、妻と自分の時間は止まったままだ……その止まった時間に折り合いをつけようと必死に努力をしてきた、そのことで上手くいかぬ娘のグラシデアとの関係を元通りにするために。それが…妻が願っていることに違いないのだから。

それなのに、今のメリープには隣にいるプラスルがアマルフィに見えてしまった。それと同時に息が苦しくなるほどの懐かしさと悲しみがこみ上げてきたのだ。

「さっすが隊長！ねえねえ、隊長はね、嬉しくて仕方ないとすぐはにかんじゃうからさ、小ばかにしたように突っ込みを入れてくるときは気をつけた方がいいよ。ね、ミオカ？」ピトムニクはバストークの背中のモフモフにおんぶされている、ミオカの左後ろ足の付け根あたりを優しくトントンとたたく。「は、はい…何だかよく分かりませんけど……」「おいピトム、勝手に俺の性格をインプットすんなよ…」メリープは恥ずかしそうに顔を赤くし、頭の横にある角

のような聴覚器官をぴくぴくと動かす。イーブイが背中に乗っていたことを思い出すと、胸に詰まるような先程の切なさが少し引き下がったようだ。「それでミオカ、お前はテルル達と一緒にここに来たんだってな？」「ええ…確かにそうですけど…」イーブイはメリープの背中からぴょこんと飛び降り、彼の方に首を向けながら並んで歩きだす。「ミオカはたしかハイドルの集落だったんだって？」「はい…でもそれが…」「俺たちが行くのはポケモンの集落って場所じゃねえ…まだミオカには分からないかもしれねえが、俺らはこの前乗ったような人間のでっかい機械で世界中のあちこちに行くんだ。その分色々なものを見聞きできるのはいいが…いろいろとめんどくさいぞ…」「隊長ぉ、あんまり怖がらせないほうがいいんじゃ…」「い、いや…そういう訳じゃない…」心配そうに駆け寄ったプラスルに対し、メリープはさっと右前足を振ってイーブイの目線をしっかりと見据える。

ポケモンの文明が多い（最近は人間の国家や企業による開発も進んでいるが、少なくとも彼女が暮らしていた場所はそうではなかった）エメリア地域で探検隊や救助隊もどきの警備活動をするのと、広大な“地球”と人間が呼ぶこの世界、人間の文明が隅々まで覆い尽くした（と彼は聞いたことがある）世界を動き回るのとでは全く状況が違う。おそらくは、ミオカ位の年齢では見るに忍びないもの、とても見せられないものも多いだろう。エメリアをポケモンの理想郷とすればその他の世界は現実だ、この世界の外に広がる空間に、ポケモン達が信仰の対象とする月で活動し、海にまで生活空間を作り、世界どこにいても瞬時に情報をやり取りし、信じられない精密なものや大きな機械を動かし、夜がなくなってしまったかのように照らすことのできるテクノロジーを持ち、空にそびえるような建物を作り、世界どこへでも1日で行ける移動手段を持ち、病気やけがを治すどころか生命を作り出す技術すら手に入れ、幾重にも張り巡らさ

れた経済や社会のシステムを活用しているにもかかわらず、民族や人種が違うだけで、複雑な機械や生活のエネルギーを手に入れるために、複雑な経済システムが生み出す金と物いう財産・欲望を手に入れるために争い、対立し、自然を破壊する人間たち。そんな光景を見にした場合、彼女の幼い心を傷つけ、一生苦しめるものを見せるかもしれない。

それでも彼女は大丈夫なのか?覚悟はあるのか?聞いておきたかった。「……それでも大丈夫か?俺たちは人間に弾圧され、文明的にも敗北し、動物にさえ生身では勝つことはできない。辛うじて人間と動物の中間にいられるのは、一般的には自然の神秘が我々に力授けている、そう言われている。ミオカのそうだろ?」「……まあ…そう言われてました」ミオカがバストークの方をしっかりと見据えている。メリープは大きくうなずいて続けた。「実際はそうはいかない、人間にとって世界を動かすのは実力と金と物だからな…この先、お前もこの世界でそういったものの端くれを覗くかもしれん。それは無残な姿と言うことが多い…」「……」

「…ミオカ、お前に覚悟はあるか?……そういう物を受け入れ、自分というものを正しく保つ覚悟が……」歩いている体のモフモフから尻尾までが、緊張で固くなっているのがメリープ自身に分かる。「どう…大丈夫?」ピトムニクも心配そうに見つめている。このイーブイの返事に何かを期待しているわけではなかったが、彼女が不安がるようであれば、連れてゆくのがちょっと難しいという事態にもなる。しかしそれを決定する権利、それはバストーク・ラルシア・ホルストには一切ないし、それを求めようとも思わなかった。大切なのは彼女本人の意志表示、自分で自分の器量を測り、それに見合った行動を考えると同時に、与えられた能力で肉体的・精神的な難局を切り開く、それの器の大小はそれぞれなのだから。

一行はアクタウ市街地の交差点の隅に立ち止まっている。周囲の

風景にさっきから気を取られていたプラスルもイーブイもメリープの方を思わず見つめている。ミオカは人間によって舗装された固い道路の模様を見つめるように考え込んでいた。まあ、そう簡単に決まるような話でもあるまい、やっぱりこの質問は早かったか、バストークは諦めたような後悔するような、あいまいかつ複雑に入り組んだ感情を覚え、左前足で腹元のモフモフを、排気ガスや車といった人間によって飛び散り、茶色くなった残雪によって汚れた地面につけないように撫で付ける。

彼女は決断した。このミオカは決めた。自分の意志で。

「……大丈夫です、そういう物と私がついて来た理由は違いますし」大きくうなずいたミオカ・ナミエ・ソウヨウの表情はしっかりとしている。「……それに、皆さんがいれば…きっと我慢できると思います」

「そうか……そんならいい」バストークの顔から緊張が消え、尻尾や角のような聴覚器官からの硬直も消えてだらりと下に下がった。

「……意外とミオカは、１０歳そこらってのに頭のいい子のようだな…しっかり頼むぜ」彼は嬉しそうにイーブイの首元のフサフサ毛を裏側を右前足でくすぐり、その後彼女を両前足で抱きかかえ、彼女のほっぺを自分のそこにこすり付ける。「や、やめてください…くすぐったいですよお……」「いやいや、お前結構嬉しそうじゃねえか…」嬉しそうに電球のようなガラス玉が突いた尻尾を振るメリープ、その最中に、彼はまたしても抱きかかえた彼女に自分の娘のような愛しさを感じたが、先ほどまで感じていた切なさとは無縁だった。

「やっぱり隊長は小っちゃい子が好きなんですねえ、…それでなんですけど…ここに来た目的の場所っていうのは……」ピトムニクが

思い出したように周囲の街並みを見つめる。人間でいうカザフスタンという国の小規模な市街地らしいが、小柄な彼女にとっては建物も、その外側についている機械も、道路にある物全ても、プラスルにはとても大きい。こんなに大きいのに、人間にとってはごく小さな市街地だというのだから驚きだ。

バストークは現実に引き戻された。元通りに広がった視野で周囲に広がる市街地を眺め、目的の場所、来た理由を思い出す。「そうだ…んと、あの辺、って奴だな」メリープが右前足で道路の向かい側にある建物を示す。「そうそう、あれだ」「あれ？…合いに行くのってポケモンですよね？」プラスルが不思議そうに首をかしげ、メリープが示した建物を見つめる。カスピ海の（無論、２匹はこの名前は知らない）港湾地区に隣接した通りに面して並ぶその建物は、４階建てで周囲と建物と大差はない。並ぶ窓の付近や建物てっぺんには白い皿を垂直に立てたような機械が並び、同じような窓の上には白やグレーの四角い箱のような機械があって中でなにかが回っている。皆さんもご存じのとおり、これは衛星テレビ用のアンテナとエアコンの室外装置。近年の圧倒的な人間社会のグローバル化と一体化、生活の画一化がもたらした産物だ。エアコンやテレビ、パソコンや携帯端末はもはや欧米、東アジア、中東の一部産油国の特権ではない。アフリカの特に貧しい地域の学校でさえ、将来の人材育成と識字率向上のために、子供たちに卓上情報端末（パソコン）の使い方を教える時代なのだから（とはいっても、こうした授業を受けられる子供は欧米やアジアの支援を受けた一部に限られているが）。

バストークは右前足でモフモフについた茶色い汚れを取り、意味もなく足元の雪でがさがさとそれを払い落とした。「そうだぜ、まあ…人間と同じように暮らしてるがな。いるかどうかは別にしてとりあえず行ってみようや」「あ、はい…それにしても人間ってホント色んなものを持ってますね。その中で生活しちゃうポケモン…ピトムには無理かな」

無理もない、ピトムニクのように（エメリアからそれほど離れていない太平洋上にある、フランス共和国領ニューカレドニア出身）自然の中、ポケモン達だけで暮らしてきたような連中が、世界の居住情勢を現在も知らなくて当然である。ポケモン達の暮らし方は何も森の中の木々の上、洞窟の中、大木の下、湖に作った木のダム、砂地のオアシス、草原の特に背丈の高い草むらの中、水が滴る地底湖、海岸の洞窟、鉱山の岩場、雪原に埋もれかけた木々、はたまた海底のサンゴ礁といった自然環境の中だけではない。人間の排出する生ごみや物珍しさに観光客がくれる菓子類に味を占めたヒグマでさえ（人間にとっては危険かつ大迷惑なので駆除するが）町の中で暮らすのと（最近顕著な例としては日本の北海道、札幌市周囲が報道されている）同様、ポケモン達も人間の地下鉄、高層道路の脇、工場の蒸留塔の下、風力発電所の根元、原子力発電所の冷却水取り入れ口、海上資源採掘プラントの温排水を出す基部、空港のはずれにある誘導灯のたもと、デパートや高層ビルの空調機器群のそば、実に多様なところに適応して生活しており（よく追い払われるが）、中にはある程度人間社会でも認められる役職につき、もしくは何らかの事情で人間にイヌやネコ同様に拾われ、現在の人間と同じように暮らしている者もいる。

「世の中はそれだけ広いってことだ。俺には無理だがな」体のモフモフをかすかに震わせてバストークは道路を渡りだした。「あ、ここ渡っちゃっていいですか？」「問題ない、何も来ないからな今んとこは…」「そっか、ミオカ、行くよ」「はい…」ピトムニクはミオカの首の後ろにまであるフサフサ毛を軽く右手で押すように並んで歩く。このイーブイにとってはもちろん、プラスルにとってもこれだけ人間の市街地を間近に見るのは初めてだった。２匹とも小さい子供のように周囲を見渡している。ピトムニクに抱っこされたロ

ズリンはなぜか平然としていた。「あれ、あんまり人間の機械には…」「でっかいだけでしゅね」シェイミは周囲を見回しては、見慣れている風景であるかような表情をしている。「子供にしては珍しい反応だな坊やは……」「何となく見たことがあるんでしゅよねこの風景……」「見たことがある…??」冗談で言ったはずだったバストークは、思わず次の言葉にまよった。彼が聞いた話では、シェイミ種族はエメリア陸地群の比較的標高が高い地域か、それ以外だとスウェーデン、ノルウェー、フィンランド、スイス、またはアルゼンチンやペルーのアンデス山脈にほど近い高山地帯にしかいないという話だ。ましてや普段は乾燥し、植物も少ない中央アジアのカスピ海沿岸にすんでいる可能性はほとんどない。それをどうしてこのシェイミは……??気になりはするが、この幼さではどうして見覚えがあるのかは本人にもはっきりわからないだろう。メリープはそれ以上言及しなかった。「…まあ、興味の範囲はそれぞれだからな」

「ふーん、見たことがあるの?」「あるんでしゅよ…何となく…」ロズリンは周囲を見回し、草の乗った背中をぶるっと震わせる。このシェイミにとって気になるのは、むしろ道行く人間や動物の視線らしい。「…全く…ミーがそんなに怪しく見えるんでしゅかね?」「う、うーん…?…やっぱシェイミだからかな…」ピトムニクも両腕で抱えたロズリンにつられるように、周囲の人間や動物たちを眺めてみる。向かい側の歩道にいる野犬がさっきからじっと眺めているのは、おそらく警戒するという本能からのものだろう。正面からすれ違う人間たちはと言えば、端末の類と思われる小さな機械を覗き込みながら歩いているか、不思議そうにこちらに目線を落とすかのどちらかだった。中には気味悪そうな表情を浮かべる人間もいる。（…やっぱポケモンって減ってるんだね……あんまり見たことがないのかな…）プラスルは心の中でそういう人間の態度に対する怒りより、ポケモンが減っているという現実に肩をすくめた。時折話には聞いていたが、こんな一見辺境にも見える場所にも人間が多く住

み、自らの生活とそれ以上の欲望を満たすための開発をしている。それが人間の本性なのだから、自分が文句を言っても仕方がないのだが。

「ついたぞピトム、ここの建物だ」「あ、はい…」バストークの一言に、ピトムニクは顔を上げて立ち止まる。目の前にあるのは、周囲のほかの人間の建物と何の変りもない普通の雑貨品店。取り扱っているものの大きさや品目（彼女には見当のつかない品物ばっかりだ）、書かれている言葉から見る限り人間向けの商品を売っているようだった。ここまで来るのに一匹もすれ違っていないが、こんなところにポケモンが本当に住んでいるのだろうか？「あのお…本当にここなんですか？」「そうだ。まあ、一見しただけじゃ絶対に分かんねえけどな…」「ふーん…」「入るぞ」「はい…」メリープは前足についた汚れた道路の残雪を掃うように両前足をこすり、何の抵抗もなく店の中に入っていく。プラスルはもう一度商店の正面を眺めまわした後、メリープに続いた。彼女の腕に抱きかかえられたロズリンが、何かを怪しむような怪訝そうな表情をする。「ここに住んでるポケモン…何だか危なそうでしゅね…」

建物の中は人間にとってはあまり広いとは言えない場所だ、小柄なピトムニクでさえそう思った。通路を挟むように所狭しと商品を並べて陳列している棚は、少なくとも高さが１．６メートルはあり、ポケモン達が使う者には到底思えない。見上げる位置にある天井には無数の白い明りを放つ電灯（人間でいう蛍光灯）が並んでいる。中にいる人間は買い物客らしき男１人、小さな男児を連れた母親、それと会計場所に立つ男女１人ずつ、彼等の上にくくりつけられたテレビからにぎやかな音が漏れている。しかしそれだけだった。ポケモンらしき姿は一匹もいない。

バストークは真っ先に会計場所へと向かい、会計台の所で背伸びをするように後ろ足で立ちあがる。「すまないが、上に住んでるベイル・リムファク・オルデランに会いに来たんだが、俺の事は奴から聞いてるだろ?」「そんな奴の事は…確かに行ってたような気もするが…誰だ?」胡散臭そうな顔をした人間の男が、レジの向こう側の下を覗き込むように立ち上がりながら極めてへたくそなエメリア語で話す。「俺の名前?バストーク・ラルシア・ホルストっていう奴だ。これで思い出したか?」「うむ…全く、ポケモンってのは似すぎなんだよ。こんなメリープ種族に固有名があったとしても意味ねえよなあ…」男が愚痴のようにつぶやき、同時に先程から情報端末に向かっていた女が、まるで全裸の変態男がやってきたかのような目でこちらに目線を移す。

少し考えた後に、人間の男が、再び一行の方を覗き込んだ。「まあ、アンタが本物の野郎の友人かは知ったこっちゃねえが、奴は呼んでやる。とりあえず待ってろよ」男は店の裏手になっている場所に入り、裏手の入り口の壁にあるスイッチを軽く一回押す。「おう、ありがとうなおっさん」メリープはプラスルの方に振り向く。彼女は怪訝そうな顔をして辺りを見回していた。「あの……本当にいるんですかこんな場所に?」「いるんだよ…まあこの上に住んでんだけどな」彼が上を見上げるように藍色の顔をしゃくる。「それと…お前が気にしてんのはああいう態度でいいかって事だろ?大丈夫、こういう時は人間に対して大きめに出た方がいいんだ…」「……なるほど…参考になります」

彼女にはそれ以上返しようがなかった。彼女とて人間と言う文明生物の自分たちに対する横暴な態度が許せるはずがないが、かといって態度をでかくすることができるような性格ではない。とにかくこのプラスルは事を暴力的なもので荒げるようなことが嫌いだった。それは自分たちの間でも、人間とのやり取りでも変わらない。

ピトムニクの渋い表情にバストークがすかさずフォローを入れる。

「いや、気にすんな。お前にマネをしろとは言わない、俺の場合は人間にバカにされないようそうやっただけだ…」メリープが左前足でプラスルの背中をポンポンと叩く。彼女が彼の事を尊敬し、信頼してくれるのは分かるが、彼女とて彼のやることの全てを気にいるはずがない、彼は強制するつもりはなかった。「…分かってるよ、ピトムはそういう性格だからな。この問題は誰かのツルの一声で決着がつく話じゃねえから俺は反対しない…」

「…ありがとうございます隊長…私のやり方が正しいかは分かりませんが、私はその道を……あれ？ロズリンとミオカは？」いつの間にかチビ2匹がいなくなっていることに気付いたのは足元をちらりと見たピトムニク。「あいつらこの店のどっかをほっつき歩いて…」

「お探しの子供はこいつらか？」2匹の背後で穏やかなバリトン声がする。2匹が振り向いた場所、すなわち店の入り口に立っていたのは、紺色に近い大柄の体格、尻尾はアザラシのヒレのように扁平形をしており、ヘルメットのような頭の物体の先端は鋭く突き出しており、北極海のイッカクを思わせる形をしている。背丈は2メートルほどもあるダイケンキ種族。背中にはイーブイとシェイミを負ぶうように乗せていた。「久しぶりだなバストーク、俺の予想通り、お前はまだ進化していないようだな」

「ベイル！！こんなに図体でかくなりやがってこの野郎っ！」メリープが嬉しそうに尻尾を振ってダイケンキの右前足に飛び付く。「んだとバストーク、好きで進化して大きくなったわけじゃねえし、だいたいお前が小さいままなのにも無理があるんだって」「俺はメリープ種族の中では図体は一回りも二回りも大きいほうなんだぜ？

まああの時の意志はいつまでたっても変わらねえ、て事だがな」「だよな、変わってたら意思疎通に困るっつうの！まあお前に時間がないのは聞いてるから、とにかく用件は手短に済ませようや。それで…」ダイケンキは背中に乗ったイーブイとシェイミを振り返る。「これ何でしゅかねえ？とっても美味いでしゅよ…」「す、すいません！止めようとはしたんですけど…ロズリンが勝手にこうしちゃうもんで…」何かの袋の中身を顔を突っ込むように食い漁るロズリンに対し、両前足でしがみつくように引っ張るミオカは半泣きになっていた。ピトムニクとバストークの表情から一瞬にして血の気がうせる。「ちょ、ちょっとロズリン！食べ物勝手に食べちゃダメでしょ！」「何やってんだよ全く……こいつここまで飯喰らいだったのかお前は…」

「ったく、お前のつれてる幻種族のチビは“よく食って育つ”の典型例だな、立派に食って育てよ」「はいでしゅ…」ダイケンキは後ろに振り向いて頷く。「で、このチビが食っちゃった物の駄賃は俺が払うから、警察呼ぶとかバカな真似はすんなよ旦那」ダイケンキの左前足の爪先が男の胸辺りすれすれに近づく。人間の男は恐れと腹立たしさが入り混じったような表情を浮かべて舌打ちすると、レジへすごすごと戻った。「うん……やっぱ目立つと言えば目立つわな……」周囲の客や外の人間たちの目線がこちらを向いていることに気づいた彼は、４匹の方を振り返って頭の先端の突起で店の外を示す。「よし、お前ら全員2階の俺んとこに来い、そこなら人間連中の目も気にならんし」「すまねえなベイル、突然押しかけて無い物ねだりするなんて……」申し訳なさそうにしているバストークの背中の辺りを、ダイケンキが左前足で優しくポンと一発叩く。「あったりまえだろ。俺とお前は１０年来の同志だからな…」

建物の裏手にある階段を上って一行は上に上がる。バストークや

ピトムニクにとっては、急なさび止め金属塗装丸出しの非常階段は段差が大きく骨が折れ、図体の大きいベイルの方も、階段の小ささに違和感を覚えているような上がり方だ。

その途中、ダイケンキが突然プラスルの方に向き直る。「ピトムって言ったよな…」「あ、はい…」「なかなかいい面構えだぜ、バストークの嫁さんになるってのも悪くないな」「う、うそ!?そんなわけありませんって…」彼女は顔を真っ赤にし、危うく大きな非常階段の段差を踏み外しそうになって両手を使って階段にしがみついた。バストークも顔を赤くして左前足でダイケンキの右前足のアシガタナのあたりに拳を打ち込む。「ば、バカっ…そんな訳ねえだろが…」「冗談だ、本気で受け止めんなって。それだけいい同僚に恵まれたってことだよ…」

「そうか…そんならはっきり言えよ、俺が誤解しちまうだろ…」彼は数歩先に駆け上がり、飛び上がるように最後の一段をあがった。正直言って親友に褒められるのは恥ずかしいが、同時に少し誇らしくも感じた。

建物の非常階段を上り、屋上へとたどり着いた2匹。通りの反対側からは、カスピ海沿岸に広がる人間の港湾の様子を見ることができる。例年にない凄まじい大雪に屋上のスペースはほとんどが埋もれているのかと思ったが、このダイケンキ種族が連日雪かきに精を出したらしく、屋上の港湾と通りに面していない側の手すりのあたりに、雪がうず高く積まれている。屋上のスペースには、建物に面した側の手すり双方から渡した物干しざおに似たものが複数あり、そこにはカスピ海で採れたものと思わしき魚が開かれて干物のように吊り下げられている。「何で魚を、お前の仕事はカスピ海周辺の集落を警備することなんじゃねえのか?」「人間連中がカスピ海の海底をあさっているらしくてな、こうやって数日に一回は魚を採ってきてはこいつの肝とかに何か溜まってねえのか調べんだよ。残った

部分はこんな風に日干しにして、あとから影響が出てこねえか調べる。カスピ海の連中はこれで食いつなぎ、これで小金を稼ぐからな…」バストークの問いかけに対し、ダイケンキ種族のベイルは得意げに答え、右前足で開いた魚をつついた。「それもここでの俺の生き方の一つになっている訳だ」

「さすが、てかどこでお前はそんな人間みたいな調査方法を思いついたんだ?まさか人間の連中に聞いてみたのか?」「聞いたわけじゃねえよ、カスピ海の連中が毎度毎度魚の中に変な味がする奴がいるっていうから、何匹か取って食ってみた、そんだけだぜ」ダイケンキは右前足にあるアシガタナと呼ばれる取り外し可能な物体の柄となる部分を、左前足でつかんで軽く動かす。「そしたら案の定だ、魚の肉のくせして少し金属の味がする奴がいやがる。どうやら…魚の乱獲じゃ物足りなくなった人間連中がやってる資源掘りが影響を及ぼしているようだな…」

「そうか…人間はあんな金属みたいなものを世界中で争うように取っては、わけのわからん機械を作るからな…」バストークは尻尾を軽く一回動かし、港湾が一望できる側の屋上の端へとゆっくり歩いて行った。「そういや…ルクセンブルクっていう国にある大手鉄鋼企業が出費してくれるんだって?ソーラに大規模製鉄施設を作るって見返りとか…」「ああ、アメリカのあの(・・)銀行経由でな」

カザフスタン、トルクメニスタン、タジキスタン、ロシアなど複数の国家に沿岸を持つカスピ海、世界(地球)最大の湖は、単なる水産資源の宝庫のみならず、メタンガスや希少金属資源、内燃機関から発電用燃料まで幅広く利用が期待されるCO2排出ゼロの新エネルギーであるマグネシウムなどの工業資源も多い。旧ソビエト連邦の時代からロシアの資源採掘公社が(この時ソ連は社会主義国家であり、全ての企業は国営だった)これに目をつけていたが、ソ連崩壊と東欧・ロシア諸国の民主化・自由市場経済化によってまずフラ

ンス、ドイツ、イギリスのエネルギー採掘企業が進出、続いてアメリカとカナダの企業が続き、近年では急成長を続ける中国の企業も進出している。この結果として、カスピ海沿岸の都市として最大のカザフスタン・アクタウの港湾は世界各国の企業の資源採掘船舶の拠点として、近年めざましく発展している。そもそもから他国の企業の水産資源独占に反発していたうえに、湖の汚染を心配した地元の漁業関係者との根強い対立もあったが、結果として漁船が操業しない海域は、各国の資源採掘船が湖上の採掘プラントから資源を回収して連日行き交う地帯と化している。ヨーロッパやロシアは採取したメタンを本国まで運ぶパイプラインの建造に着手、一部稼働しており、貯蔵施設とパイプライン制御施設の整備も着々と進んでいる。

その一方で企業や公社同士の小競り合いや沿岸の漁協との衝突といった事態が相次ぎ、カザフスタン政府やロシア連邦政府はカスピ海沿岸の警備艦艇部隊の設立という事態にまで発展していることも忘れてはならない。さらに、急激にアクタウ市街地に増えつつある海外企業関係者の人口が文化や価値観の面で地元住民と間で起こる対立、開発によって職を追われる地元の人間が増加したことによる治安の悪化、沿岸国同士のカスピ海の帰属、軍備の問題なども発生するなど、人間にとって“お約束”の事態も発生している。

そんなカスピ海沿岸の風景を眺めるメリープ。海岸は今まで多少はみてきた人間の港湾と同じように埋立てられ、そこにはやぐらのような物体を乗せた船舶やおわんを裏返したような物体を複数乗せた船舶が無数に停泊している。船舶から回収した資源を精製、貯蔵すると思われる工場や大規模構造物が鈍い稼働音を立て、地下に立ち並ぶガラス張りの現代風建築のオフィスと相まって市街地よりはるかに現代的な雰囲気となっている。辺境にも（このメリープにはそう思えた）見えるこの地を多くの人間や自動車が（トヨタやフォー

ドなどが得意とするピックアップ車や中型トラックと同じくらいシトロエンやフォルクスワーゲンなどの小型自家用車もそれなりの数が見える）得意とする敷地内の道路を行きかい、大規模な構造物が立ち並んでいる所を見ると、近年の人類世界のめざましい成長が垣間見えるようだ。

エメリアでもそうだったが、こんな場所にまで人間の開発は及んでいる、バストークは多少親友のベイルの事が心配になってきた。かといって露骨にそのことを聞くのは気が引ける、背後で同じように風景を見つめるダイケンキの表情を見て彼はそう思った。

そしてそれは、まことにバストーク・ラルシア・ホルストらしい言葉になる。「なあ、カスピ海の連中、変わりないか？」「変わらないも何も、俺らポケモンの生活がものの数年で変化する事は無いぜ…ただ…」ベイル・オルデランはもう一歩メリープの近くにより、手すりに両前足をかける。その表情には静かな諦めにも似た、寂しさにもまた似たものが浮かんでいた。「……このわずか数年でカスピ海での人間連中の資源掘りは激しくなった。この世界のどこの国だか企業だかは知らねえが、奴ら同士の小競り合いが増えてそれに巻き込まれる連中も増えた…」「……そうか…」「…あと…さっきも言った通り、奴らは環境保全とか言ってるつもりでも、俺たちには十分すぎるほど資源やガスのゴミを落としていってやがる。病気になる奴や水中の機械で事故って死ぬガキもいる。そうすれば俺たちが悪いように扱いやがる」「…俺んとこもそうだ…」「魚を食えば乱獲だ環境破壊だと言っては地元の連中も外国から来たやつらも俺らを弾圧しやがんだ……」ダイケンキの声は徐々に低く、憎しみがありありとこもった物に変わって行く。両前足の黒い爪で手すりを折らんとばかりに握りしめる彼を見ていると、メリープ自身の全身の筋肉にも力が入るようだった。直接表現はしないが、数年ぶりの再会と言うポケモンにとってはそう長くはない時間の間に親友が

味わった苦しみ、悲しみ、人間と人間社会を形成するモノ・システムに対する怒り、そういった負の感情を持つ彼の姿を見ているとバストークの方までもが息苦しさを感じるほどだ。

しかし彼はすかさず親友にフォローを入れた。負の感情というものは放っておくとさらに増殖する、そうするとますます抜け出すのが難しくなる、どこかで意識の水晶の奥底にある原子炉に溜まった水蒸気はベントしてやらないといけない。「…それでもお前はここに残っている、エメリア以外で数少ない、俺たちの文明の残る地域を守っている。世界を広く知るものとして、な?それだけで十分な仕事だぜ」「すまねえな…お前もエメリアで…あそこも人間連中の開発は進んでんだって?」「ああ…ソーラの北部もだいぶ通信施設や大規模農場ができてやがる」「そうだよな、お前だって防衛軍の一環として治安維持活動をしてんのに…俺だけ弱音はいちまった…」彼は手すりにを握りしめていた両前足を屋上の床部分にそっとおろす。メリープの方はもう一発親友のアシガタナの下あたりに左前足で軽く拳を打ち込み、笑顔で応じた。「バカっ、お互い様だ……それに外界をよく知っているものの責任ってのも俺らは同じ、自治協会とコンタクトがあるのも俺たちだけだし」

「…だよな、外からこんなに社会の現状を把握できるのは…組織の連中と人間連中以外には俺と貴様ぐらいだもんな」「そりゃそうだ…」そう答えているバストークではあるが、意識の水晶の原子炉はベイルの一言一言から感じ取れるこの地位の現状に強く痛めつけられていた。この数年間の彼周囲で起こっている動向を見ている限り、それがエメリア地域という南太平洋の一角だけで起きている出来事ではないはずだという事には薄々覚悟を持っていたが、いざそれが実際に発生していると理解せざるを得ない状況になるとやはり心が痛み、この世界における自分の存在の小ささと現実の非情さに全身の骨や臓器が焼きつくような苦しさを感じるのと同時に、このよう

な事態を打開するにはやはり自分の存在が必要だという武者震いにも似た感情が相反するような形で現出する。

「…それで…お前に見せたいものって話なんだが……」「ああ…それだったな」ベイルが声を落とし、感情を押し戻してバストークの方に振り返る。「そうだ、この周辺で活動しているベルギーの自治協会直属の郵便飛行委員会の奴が言ってたんだが、人間でいう２０１３年、この一年度のエメリア自治協会、今年の総会はやらない意向らしい…」「やらない…？…」メリープの目が不審そうにピクリと動き、ダイケンキの方に体を向きなおす。

彼が今使った総会というのは、エメリア自治協会が年に一度、“雪解けの季節”に行うポケモン達の文明の中で、最も大きい意思決定機関の一つだ。とはいってもこの文明の通信も交通も全く未発達で、１００キロ離れれば言語も慣習もまったく変わってしまい、季節感も空や風、温度を見ておおよそ掴む程度というレベルを考慮したとしても、人間から見ればかわいいものであり、開催する時期もその年年の天気によって左右される。その分意思決定といっても人間の国連や各国の議会のようにガチガチの議論で紛糾したり、賛否の勢力が議会工作などの攻防戦を仕掛けたりといったことをする場所ではなく、各々の地域の情勢を報告したり、神事や儀式の在り方、独自の占星術の的中率を検討したりとおおらかなものであり、一番遠い場所からだと行くだけで3か月もかかってしまう事も多く、特定のエスパータイプの能力だけに反応する青銅や水晶から作られたサイコ通信機を利用して本部近く（とはいっても歩いて2週間はかかるが）にいる代表者とやり取りするといった具合だ。

しかしそう簡単には開けないから、人間から見れば内容が１０００年以上前にありそうな話でも当の本人たちは大まじめであり、気に入らないからと採決を拒否したり、投票させないために会期が過ぎるまで話を間延びさせたりするという行為は一切ない生真面目な

話し合いである。

それが…今年はない？「それは…マジか？」「ああ…かなり信頼できる筋だ」ダイケンキの真顔を見ているうちに、メリープの顔にありありと驚きが浮かび上がってくる。あまりに突拍子すぎる、そんな表情は親友にも見通された。「その証拠っていうのが…これだ。郵便飛行隊の連中が言ってたこと全部の記録とそれを元に俺が書いた占星図、見るか？」「あ、ああ…」ベイルの前足が差し出す物をバストークはひったくるようにもぎ取る。有識のポケモン達は、物事の決定は話し合い、迷信、儀式的な意味合いのほかにも、縁起担ぎの目的でその時の夜空の天体図の変化などでも調整される。もちろん人間の天文学的に考えれば、地球から見える限りの天体の変化がそんな頻繁に変化が起こるわけがないのだが、ポケモン達から見れば地球大気の揺らぎによる星のちらつきさえ“何かが起こった”と見なされる。

「……これが…しかし俺の渡されたこれとは…」「だよな、だからお前に持ってこいと言ったんだそれを」ダイケンキから渡された紙に書き込まれたものを呆然と眺めたメリープは、自分の首から胴体に回されたカバン（探検隊連盟内では“トレジャーバック”と俗称される）から先月後半に受け取った手紙を前足で取り出し、内容を見比べる。変化しているのは疑いようのない事実だった。

何かが起こったのは確実、この世界でなにかが起こっているという事に対しては、彼自身薄々覚悟をしていたが、実際にその影響が自治協会定例の総会にまで及んでいるとは、それもよくない意味であるが故に、彼はいよいよ心の奥底に恐れの様な不安のような重苦しい物を感じた。ただし、バストーク・ホルストであるが故に迷信だけで確信するつもりはない、尋ねるのは不安だったが、このメリープにはそれ以外に選択肢はない。「それで……その証拠は？何か

実際に起こったのか？」

「ある、そりゃあるさ…」ベイルは厳しい表情をより一層あらわにする。目の前にいるバストークの表情から察するに今ここでこれを言うのは気が引けるが、ほおっておいてもいずれ彼は知ることになるだろうし、何より１０年以上前からの同志に対して真実を隠すつもりは毛頭ない。「まずは、中央アフリカ北部の地方だ。あそこでは最近南スーダンていう人間の国家が新しくできたようだが…」

「それと…何か関係が？」「ああ、あそこの独立はアメリカや中国がガスや金属などの資源目的によるものらしい、それであのあたりはな、アフリカに残るポケモン達の大規模な居住地帯の一角だろ？」

「そうだ、俺だって知ってはいる…それが…まさかあれなのかよ…？？」

バストークは顔をほんのわずかに、その先の言葉を恐れるかのようにダイケンキに顔を近づける。「残念だが…抗争に巻き込まれたようだ。２月ほど前から連絡の飛行隊は来ない、現地所属の探検隊・救助隊との連絡もない、陸路・海路双方の輸送部隊も行ったきりになって誰も行こうとしねえ、おそらくは…」彼はうなだれ、右前足の爪をじっと眺める。「…虐殺されたんだろう。あそこはこの世界で少ない居住地帯だからな。野生動物を飼い慣らして自分たちの身を守っていたはずだが…」ベイルの表情が苦悩にゆがむ。「人間どもは希少野生動物は保護するくせに…そいつらも殺したんだろうか…」

「……」あまりにも衝撃的な現実の前に、メリープは言葉を失ったまま親友から離れようとしたが、親友の方が彼の左後ろ足を軽く引っ張った。現実から逃げるなと言わんばかりに。「もう一つある、残念だがもう一つ…」「まだ…」彼の表情がますます血の色を失う（とはいってもメリープ種族の顔の色が藍色なので人間にはその様子をつかみにくいが）のを見て、このダイケンキはさらに沈痛な面

持ちでわずかに頷く。これ以上言いたくない、しかしベイル・オルデランはやはり隠すつもりはない。「…ああ、残ったのは北欧のスウェーデンの周辺なんだが、そこの代表者、もう4か月も前か…が突然移動中にいなくなっちまってな…」「いなくなった…？それは…」「…ああ、そういう事になるな…」ダイケンキはわずかに答える。「代表者が全くいなくなったあそこは自治組織も探検隊も機能不全になってな……集落ごとの対立がぶり返したり、人間どもに金と実力で買収されたり、品物の供給が滞って土地を捨てたりとめちゃくちゃさ…それに勘付いた人間たちが介入するもんだから…こっちもダメだろう…」

「……そうか…」メリープはショックの中で辛うじて認識できる程度に頷き、建物の屋上の手すりに頭のモフモフをがっくりと乗せる。ベイルが言ったこの二つが何を意味するのか、バストークにははっきりわかっていた。現在エメリア自治協会がエメリア陸地群以外の地上で連絡が取れる地区は、ダイケンキが告げたアフリカ中央北部、北欧のバルト海地域、朝鮮半島、ニューギニア、日本の本州だけだ。かつて地球中の大陸や諸島に無数に存在したポケモンの文明の大規模な集落群は、この５００年でほとんど失われていた。自治協会がエメリアのニュークリア南部にあった時代から、“蒸発（エバプレート）”と呼ばれてきたこの事象によって残った数少ない場所で最大だった二つが今回で失われた、この事態は極めて深刻、というより絶望的な事態だ。すべての集落群が蒸発（エバプレート）してしまったら、自治協会が存続する意味を完全に失うことなる。

やはり自治協会の今の連中が無知すぎる、メリープの全身骨や肉がその現実に焼かれるように痛んだ。代表継承の都合とはいえ、あんな幼きポケモンを代表に据え、おとり巻きわずか3匹のうち1匹

がその実際の職務を遂行するためではなく、自分の利権を増やすために心血を注いでいる状態で、総会を開こうにも各地の代表も本部に努める連中も減る一方、人間に文明の腐敗だとかエラそうな批判を繰り返すわりには、自分たちは話し合うどころかほとんど機能さえしていない。そして結果がこれだ。自由連合側がどうなっているかあ知らないが、きっと似たり寄ったりの状況なのだろう。連帯を失った文明が如何なる状態にあるか、バストーク・ラルシア・ホルストは何度もその目で見、自分の皮膚で感じ、その実情を体を張って経験した。だからこそ苦しみは大きい。

2匹はしばらくそのままの体勢で押し黙っていた。人間の港湾からひびくカザフスタン・アクタウの市街地の様子とは全く異なり現代的な、カスピ海の金属資源やメタンの採掘船、プラントへの輸送船、陸地の精錬・貯蔵工場から聞こえる活気のある騒音だけが、2匹の間にある雪によって冷やされた空気を流れていく。「……バストーク…お前には信じられないかもしれんが…実情だ…」重苦しい沈黙の中、ベイルがわずかに口を開く。彼はそっとバストークの方に歩み寄り、うなだれたメリープのモフモフ毛におおわれた背中に右前足を乗せる。「すまん…こんな事を言うつもりはなかった…」「…分かってる。少し落ち着かせたいだけだ…」メリープはそのままの姿勢でわずかに目を開く。あいまいなセリフだったが、親友のダイケンキには彼の受けた衝撃と悲しみの大きさがはっきりと理解できた。「だが…俺たちは誓ったはずだ。何があっても…自分たちの使命を果たすと…」「ああ…」

ベイルは励ますようにさらに続ける。「現在を打破するため、次に生まれてくる命のためだったいかなる手段も痛みも耐えるってな……」

唐突にバストークは顔を上げる。ベイルの方を振り向き、右前足でダイケンキの左前足の爪辺りを軽く拳で叩いた。その表情には無理に作ったような明るい表情が浮かんでいる。「分かってるさ…俺がそれ位の事で諦めると思ったかベイル?」彼は気合を入れるように右後ろ足で屋上の雪をひっかく。「…そういう事が起きているんだったら…ますます俺たちが必要ってことだ、それ以外に解釈なんてねえだろ?」

「そうか…さっすが俺の親友だ、それ位じゃあ俺以外の同志にも申し訳が立たんからな」ダイケンキの表情にも明るさが戻ってくる。しかし彼には何となくわかっていることがある、バストークは恐らく自分の事を気遣って無理に表情を作っているのだろう、と。しかし今のベイルはそれを咎める気はなかった。彼がそうやって努力しようとしているのなら、自分が口を出す必要はない。

「当ったり前だろ、何せ俺がこの計画を…」メリープが言おうとした直後、下の方で激しく何かにぶつかる音、誰かのうめき声、人間の物と思われる悲鳴が聞こえた。2匹の神経は同時にその衝撃音にすべての意識を移させる。「どうした…?!」「下だ、行くぜ!」「おう…」

その騒音は1回、商店の目の前のとおりからだった。非常階段から飛び降りるように駆けつけた2匹、店頭の前に駐車していたアメリカ・フォード社製の1994年製エクスプローラーとドイツ・メルセデスベンツ社製の小型トラックの間に、巨大なポケモンらしき生物がぶっ倒れている。紫色の芋虫型の胴体、頭に生えた2本の角のような触覚、ペンドラー種族だ。そいつに馬乗りになっているのはピトムニクだった。赤色のほほにある帯電器官から火花がまだ散っているのを見ると、こいつをぶったおすのに相当のエネルギーを

使ったようだ。「大丈夫か?!」駆け寄ったバストークにプラスルは振り返って笑顔で応じる。「す、すいません隊長…ロズリンが勝手にでて言ったらこのポケモンとぶつかってね、それで暴れるから私が倒したってわけです」当のシェイミとイ―ブイは寄り添いながら震えている。「そうか…そんなら良かったが…」「お嬢さんさすがだな…人目もはばからないどころか一撃でっかいのを倒すなんて並大抵の度胸じゃねえ…」ベイルはバストークにゆっくりと近寄り、周囲を少し見まわした。周囲の人間たちは驚きと恐怖が入り混じった表情を浮かべながら、迷惑そうに横目で見て通り過ぎていく。警察の人間が来たら厄介なことになる、探検隊の連中を呼ぶとするか。

ダイケンキは思わず呟く。「いい娘さんに近い奴を持ったなバストーク、これならお前の心の支えの点でも完璧だ」「そう言われると…恥ずかしいです…」「ば、バカ…そういう事を本人の前で言うなって…」プラスルの恥ずかしそうな表情を見るなりメリープも顔をわずかに赤らめる。しかしやはり図星だった、やっぱり彼女の存在は自分の中では娘以上に大きい、そう思った。

一方、アクタウ市街地郊外にある空港では……

「よっしゃあ!今日はおっさんもいねえからグラシを思う存分だ!」

「な、何すんですか?」小規模な地方空港であるアクタウの空港の駐機場の脇、除雪もされていない場所にグラシデアを連れてきたロックオンは嬉しそうに空中で宙を一回売って彼女の前に着陸する。一方の彼女の方は、明らかに照れたような顔をしてかじかむ両手をこすりあわせている。「俺の練習に付き合ってもらうぜ、お前が好きにでんきタイプの攻撃を打ち出してな、俺がかわすなり跳ね返すなり頑張るってわけだ、行くぜグラシ!」「ちょ、ちょっと…」モ

ココの返事を聞く間もなく、ムクバードは空へと飛び上がった。「おら、さっさとやってくれよお嬢さん！グラシの事だからやってくれるんだろその顔は？」「う、うん…」

「んならほら、さっさと始めろって！」ムクバードが上空でホバリングしながらじれったそうに左足をモココの方に指している。「は、始めます……始めるよ…」その何となく押しつけがましい彼の態度に面倒くさくなったか、それとも何となく彼の指示に逆らえ中井と思ったか、彼女自身にもどっちかは分からなかったが、とにかく彼女は恥ずかしさの交じった渋々顔でありながらも両手やモフモフ毛の首に巻いた防寒具を外し、一応のつもりで“ほうでん”をぶち込む。

ムクバードはモココの放つ電気エネルギーを上下に飛びこし、左右にかいくぐり、電気エネルギーの切れ目を見つけて飛びまわる。「ええい…さすがはグラシ、結構濃密だな…」そんな事をいちいち呟いている間にも、彼の周りには電気エネルギーの網が彼を掴みとらんとばかりに襲い掛かってきた。至近をそれが通過するだけで、ドアノブに触れた時の静電気と同じ感触が翼の先端を、頭の飾りを、尾羽の先端を通り過ぎていく。一発でも当たれば最低でも半日は失神する羽目になるだろう。しかし彼は全力で飛び回っているという訳ではなかった。まだ余力がある、きっと下の彼女が自分のタイプの問題を考えて多少遠慮しているのだろう、そう思った。

彼女にもそれは分かっているようであり、彼女が得意とする濃密な電気エネルギーの弾幕を縦深に張って、自分の方に向かってくる相手をそこに誘い込むという彼女独特のスタイルを維持しながらも、その火力は少々押さえているようだ。

そんな外部から見れば“殺し合い”のようにも見える状況が3分

は続いたか、ムクバードは電撃の合間をかいくぐって雪原に着地し、右の翼をモココに向かって軽く振ってから彼女の方にそっと飛び寄って行った。彼の表情に気付いた彼女の方は既に攻撃を止めていたが、それほど足腰の強さ、すなわち素早さがある方とは言えないモココ種族であるが故に、前後へとそれなりに動き回るこの戦法でだいぶ疲れ切ったらしく、その場の雪原に座り込んで息をついている。

ロックオンはグラシデアの表情を見るなり、右の翼で彼女の首のモフモフを抱えるように隣に座り込んだ。彼女が疲れているのは無理もない話だ、彼でさえ疲労がたまっていると自覚できるのだから。自分の反応速度が落ちている事ぐらい飛んでいてわかる。「まあな、…俺もだいぶ雪原では体に堪えたし、今だって寒いのは嫌ってもんだ……自分ももう少し鍛錬が必要って所か…」ムクバードはモココの背中を軽く翼で叩く。「お前の弾幕もさすがって所だ、そのうちおっさんを超えることもできるぜ」

「そう…なんですか…」「さすがだグラシ、俺が見越した理想の女だけある！今後も期待できるとはこのこった……」「え、ええ…理想っていうのは…」「その通りだぜ、かわいらしい容姿、澄み切った口当たり、そして強さ、３つがそろってこそ初めて人生のなかで他者から評価されるんだよな。やっべ！グラシはその点でおいては完璧！……」「それは…ありがとうございます…」嬉しそうにしゃべりたくるムクバードを横目に見るモココ。父親のバストークとの関係と自分の立場にある種のコンプレックスを感じているグラシデアにとって、毎回毎回褒められるのは嬉しかったが、ロックオンのしゃべり方から感じられる好意にはどうもいい印象が抱けない。それを考えているとだんだん彼を正視できなくなり、彼女は思わず目線を下に向けてまま凍える両手をこすりあわせていた。

そんなグラシデアの表情からロックオンは察した。「グラシ…俺がお前をどう思っているか…やっぱり気になるよな…」ムクバードが左の翼で自分の頭の飾りを撫でる。予想以上に自分の存在は彼女に奇異に見えたらしい。「すまん…俺がお前に悪く思われるようで

あったら…」「そ、そういう訳じゃないんですけど…」モココが顔を赤くし、わずかに目線をムクバードの方に移す。どうやら自分の態度こそ彼の気を悪くさせた、そんな後悔を感じた。

「ただ……俺から見ると、グラシは俺と?がる何かを感じる。それにお前は…」ロックオンはグラシデアを見つめたまま頷く。「…自分で思っている以上にいい女だと思うぜ。主観的にみると自分ってもんはまじで憎たらしいからな…それを励ますのは周囲の役目、ってわけだ」

「……そうなんですか…」モココはムクバードの方を思わず見る。これまでにない物を彼に感じた。意識の水晶がほのかに熱を帯びるのを感じ、顔のあたりが熱くなっているのに気づく。

「おっしゃ、もう一発やってみるか」ムクバードは翼を元に戻して広大な雪原に埋もれかけた空港の滑走路の方に向き直った。今空港に駐機しているのは国連のＣ－１７Ｂ２機だけだ。国連統合空軍が独自に所有するこの機体は小型機用の滑走路やある程度の広さを持つ高速道路でも離着陸できる。後方の整備された基地や本国の本格的な拠点から、前線の不整地や過酷な地形下でも着陸できる、戦略輸送機として開発されたこの機体の本領ともいえる。

「あ、あの…」ロックオンが翼を広げた直後、座り込んでいたグラシデアが後ろから小走りで駆け寄る。「どうしたグラシ…??」ムクバードの視線を見るなり、モココはまたしても恥ずかしさのあまり言葉に詰まってしまう。今の気持ちを何と言っていいのか、彼女には若手いても伝える方法が分からなかった。

悩んだしまいに彼女はまったく関係ない事を言ってしまった。「…チェギョンは…具合大丈夫なんでしょうか?」

「ああ……まあ彼女の事だから数日すればぴんぴんして帰ってくる

だろうよ」そうは言ってみたものの、ムクバードの意識の底では明らかにあのチルタリスを心配していた。

２０１３年１月１９日　韓国　京畿道（キョンギド）　平沢市（ピョンテク）　１５００時

釜山と同じく、韓国有数の港湾都市にして軍港、西を黄海に接する市街地であり、日本ともカーフェリーで結ばれている平沢市。ここを母港とする大韓民国海軍第２艦隊の艦船は今、出港準備に追われている。世宗大王級イージス駆逐艦「栗谷李珥（ユルゴク・イ・イ）」以下、李瞬臣（イ・スンジン）級駆逐艦のＤＤＨ－９７６「文武大王（ムンムデワン）」、ＤＤＨ－９７８「王建（ワンゴン）」、独島（ドクト）級揚陸艦のＬＰＨ－６１１１「独島」は、東シナ海で急遽行われる米韓共同演習に参加するための準備を行っていた。アメリカ海軍第７艦隊の在韓部隊とともに出港後、日本の佐世保にもたびたび寄港する空母「ロナルド・レーガン」以下の機動艦隊とも合流、１週間の予定で海軍航空隊も含めた大規模演習を行う予定だ。

そんな韓国有数の軍港、出港間近の駆逐艦が停泊する接岸ベースから少し離れた、平沢市が市街地や民間のカーフェリーターミナル、民間の造船所が一望できる岸壁を歩く２人の人間の男。「…それにしてもかなり強引な演習ですな、アメリカ政府は一体何を考えていることやら…ＮＳＳ（韓国国家安全保障局）の君になら多少は知ってるんだろ？」「それは買いかぶり過ぎですよ閣下、ＮＳＳと言えどただ単に大統領の指示を受けるだけなのですから。ただ、アメリカ海軍は今年に入ってからハワイやハワイの国連メガフロート護衛に統合軍として参加していた艦艇の一部を西海岸の基地や日本の基地に呼び戻しています。おそらくはこの演習も何か関係があるのでしょう」「ああ…それでもだ、大統領閣下と参謀部もよくこんな演習を許可したものだ」「はい…大統領直々のゴーサインでしたから

ね…裏でなにか交渉でもあったのでしょうか…いずれにせよ、大統領のおとり巻きとＮＳＳの上層部しか詳細は知らないのですから…」

若いほうの男が、遠くに見える旅客専用ターミナルの前にある岸壁で行われている、カーフェリーの旅客乗船扱いと自動車積み込み作業を見やる。最近の旅客船ターミナルは空港の旅客機と同じく、人間はターミナルから直接ボーディング・ブリッジを通って船内に入れる。護衛艦用の岸壁から少し離れ、倉庫地帯に面したこの岸壁にはこの２人以外には人間はいないが、周囲の軍用艦艇や民間工場や造船所から響き渡る音で結構にぎやかだ。

今回の米韓合同演習でこのＮＳＳの男と韓国海軍の士官に通達されていること、先週、中国海軍の大型空母が中国史上初めて機動艦隊を編成して軍事行動を開始しているが、それに対するけん制目的であること。その事実は、米・韓双方の軍事観測衛星と通信の解読で明らかになった。太平洋地域で空母を中心とした海上航空戦力を所持する艦隊を持つのは、アメリカ海軍、ロシア海軍、国連統合海軍だけであった。特に中国の機動艦隊が、黄海、渤海、シナ海といった太平洋西部の地域に展開するのは極めてゆゆしい事態だ。この地域でのミリタリーバランスが一変し、中国軍自体の韓国領海周辺での軍事行動の活発化はもちろん、アメリカ、ヨーロッパ、韓国、ロシア、台湾、中国、日本などの民間企業の資源採掘プラントが複雑に入り組んで立地するこの地域の経済活動に悪影響を与える懸念が出てくる。北朝鮮の軍事活動に何らかの刺激を与える可能性もある。

「そろそろ時間か…」海軍士官の男が腕時計を見た。ＮＳＳの男も自分の時計を見て頷く。「……艦に戻るとしましょう。今回の演習に伴う中国海軍の動向の極秘捜査、ご協力に感謝いたします」

２０１３年　１月２０日　イギリスのロンドン郊外　ロンドン・ヒースロー国際空港　００２５時

一行を乗せた国連統合空軍の（この機体は国連統合軍が独自に所有している。もちろんアメリカ空軍から期間ごとに派遣されている機体もある）輸送機Ｃ－１７Ｂ２機は、カザフスタン最大のアルマトイ空港を経由して、イギリスのロンドン郊外にあるヒースロー空港まで戻ってきた。通常、ロンドン・ヒースロー空港は軍用関係の航空機の取り扱いはしないが、この機体はアルマトイ空港でもそうだったように、国連の“事業用”、すなわち“貨物機”と同様の扱いを受けている。確かにＥＵやイギリスの各国軍の派遣部隊が使った大型機械（例えば衛星通信用の機器や端末など）、すなわち国連が借りた物を返還する、すなわち各国軍由来の統合軍部隊が持ち返るための荷下ろしというものは行ったが、その内容物に関しては下請けの運送会社にさえも厳重に秘匿されていた。

そしてもう一つ、空港における着陸時間が極端に長い。通常の民間の貨物輸送機（アメリカのフェデラル・エクスプレス社の様な民間貨物空輸企業ではＤＣ－１０やＢ－７７７、Ｂ－７４７の貨物機仕様が多く用いられる）は、旅客機扱いの少ない深夜に飛行、着陸して整備、給油、貨物の積み下ろしを含めて２，３時間で離陸していくが普通だが、特殊な事情を抱えた２機のＣ－１７Ｂは、ただでさえ貨物機で混雑している深夜時間帯の航空路（エアウェイ）の隙間を縫うように飛ばねばならず、普通の旅客機乗継なら２４時間以内にたどり着けるはずが、１７日に出発して２０日になった今でもまだイギリス・ヒースロー空港に駐機しているのである。

日付が変わったばかりではあるが、広大な現代建造物である空港

旅客ターミナルと駐機場は、建物からこぼれる明かり、駐機場を照らし出すスポット用ライト、滑走路や誘導路を示す誘導灯によって真昼のような明るさだ。Ｃ－１７の周囲にも民間貨物機のＢ－７４７－４００Ｆ（Ｆは貨物機を示す）やＢ－７７７Ｆが、貨物出し入れ用に大型化された機体側面の格納ドアや、大型貨物の積み下ろしのために口を開けたように上に開いているノーズのカーゴ・ベイからハイリフト・ローダー車やベルト・ローダー車を介して荷物の積み下ろしを行っている。その間を多数のコンテナを連結したＵＬＤ（航空貨物）搬送トラックや作業員を移動させる小型事業用車が動き回り、大勢の作業員の人間が歩き回り、端末で状況をチェックし、荷物の積み下ろしや機体整備・給油のための機器を操作している。ここで働く人間たちには、旅客機の離着陸が圧倒的に多い昼間や午後６時～午後９時前後も忙しいが、貨物機の受け入れが多い午前０時～午前３時も同じくらい忙しい。世界のほかの空港と同じように、ここでも作業員のシフト制は当然とられているが、空港全体の風景としては２４時間休むことがない。

やっぱり寝付けない、リーヒュンはＣ－１７輸送機の左舷に装着されたタラップから、周囲の風景をぼんやりと眺める。空は真夜中なのに人間の作り出した建物や構造物、機械、駐機する航空機や走り回る車両が放つ光で目が痛くなるほど明るい。その目をツルで少しこすって遠くの方を見渡す。夜空と地上の境目あたりに、夜の星をいくつも合わせたような光の帯が（それはロンドン市やその郊外に広がるニュータウンの明かりだった）広がっている。周囲に駐機しているＢ－７４７やＢ－７７７が装備するロールスロイス社やＧＥ社のターボジェット・ファンエンジンがアイドリングし、聴覚器官の奥で巨大な滝が流れ続けるような音が響き渡っている。

昼間のように照らし出するイギリス随一の空港の旅客ターミナルや駐機場、航空機整備棟の照明と作業車両、貨物輸送トラック、航空

機の轟音に包まれる中、作業関係者の人間たちは脇目も振らずに作業にいそしんでいるが、同じように駐機場に止まる“極秘任務”である国連所属のＣ－１７には、タラップ車両の元にいる見張りの警備員達さえ目もくれない。ましてやそのタラップの上からぼんやりとその風景を眺めるベイリーフ種族がいることなど誰も気にしていない。

当の本人であるリーヒュン・バイリング・グリーズの意識の水晶には、この人工のポケモン達にとっては不自然な照明とクロスオーバーするように、数日前までいたあの吹雪に閉ざされるカザフスタンの平原が映し出されていた。あそこで出会った“通常ではない”姿のポケモン達、その容姿、持ち物、その表情からしてそれは明らかだ。不気味なほど豪雪の前に真っ白に染まった大地の中をさまようその姿を。深く考えることが大嫌いかつ生理的にできないこの男（オス）ベイリーフは、ただでさえ疲弊しきった頭でそれをとやかく考えているうちに、何度もタラップの手すりから首をもたげそうになってしまっている、意識が近づいてはターミナルや空港の敷地の遠方に広がる市街地と思わしき人工の明かりをぼんやりと見つめ、この数日を振り返っては意識が遠ざかり、首が手すりの金属にもたげてくる、これを繰り返していた。

そんな最中、彼の頭の中で唐突にある思考が明かりをつけたように広がり、それが頭から葉っぱのついた首元へ、そして力の抜けかけた４本足にジワリと広がっていった。それはやはり、この数日間に猛吹雪の中で見たあの光景の事だった。

もしかしたら、自分が目にしたあの光景は、ここだけで起こっている出来事ではないのではないか、ハイドルで洞窟を目指した山道で沢の崖の下に見えた集落の残骸、北アフリカのリビアで見た廃墟の中をさまようポケモン達……その風景が彼の意識の水晶に突如として鮮やかによみがえり、それに反応した原子炉の冷却水の底から背

筋が凍るような冷たい水が湧き上がってくる。そう、あの光景こそが、この5か月近い歳月の中で見てきたものが、自分が訳も分からずピトムニクにつれてこられたとき、サクラが最初に宣告したあの意味の事なのではないか？“ポケモンの文明の終わり…”その言葉が耳鳴りのように彼の意識の水晶を反響し、響き渡った。そしてそれが自分と妹のフローラという存在にある“伝説”に深く関与しているとしたら……

リーヒュンの意識が突如として現実に引き戻された。こうしているだけでもイギリス・ロンドンの真冬の風が頭や首の葉っぱを痛めつけるような寒さを運んでくるのに、それとは全く違う体の底から湧き上がるような寒さが、背中から短いしっぽにかけ手を伝うように、しかし確実に凍らせていく。それと同時にこのベイリーフは自分の感覚がこれまでになく、自分でも拒絶したくなるほど敏感になっているのを感じた。そこに何かがあるのか、何を感じ取ることができるのか、後先考えない好奇心から次の瞬間にはそれを覗きこんでしまった。

前方の夜景が渦を巻くように揺らぎ、足元の感覚が前後左右上下にフゴイドとダッチロールの混合運動のように気持ち悪くぐらついた。彼は前足をタラップの手すり下のふちに伸ばして踏ん張る。ここで落下したら自分の生命にも、周囲の人間たちにも厄介な出来事を招く。

「！！」どうにかタラップに4本足を保った刹那、彼は突如としてユイリィの言葉を思い出す。もしかしたら…これが思い出した記憶に含まれる感情に突っ込んでしまう、すなわち記憶や間隔に眠る物から感情や精神状況を読み取る、彼女の言っていたその能力の事なのかもしれない。瞬時に沸き起こったこの事象に衝撃を覚えつつも、ベイリーフはまたしても自分の後先考えない性格に負けてその感覚に集中してしいた。しかしその先はどうしても見えない、めまいにも似た気持ち悪さが足元から全身に湧き上がってくる。だがそれを

見ずにはいられない。そこに自分の能力の意義がある…そしてフローラへとつながる道があるのかもしれない……

「だ、大丈夫?!」誰かの声が遠くから聞こえたような気がした途端、リーヒュンの首元に温かい感覚が走り、意識の底から湧き上がる冷たい感情に凍えていた４本足の爪先にまでゆっくりとその温もりが広がった。人間が寒い日にバスルームで湯につかった時、湯に入っている腰の上あたりから下半身の部分が感じるあの温もりだ。彼の意識を包み込んでいたおぞましい感覚も、視界に焼きつくように思い出した映像の類も一気に揺らぎ、思わず伸ばしてそのまま戻れなくなった直感的思考が自分の中に戻る。足元の水平感覚もどうにか戻ってきたベイリーフが後ろを振り返る、彼がさっき思い起こしたあの言葉に出てきたメガニウム種族、ユイリィ・ランタン・プレミドールだった。彼女の青空色の眼には心配と安堵が入り混じっている、リーヒュンにはそう思えた。「…良かった、その金属の場所に頭をペタンとして変な顔をしてるから具合悪いのかと思ったよ、うん」ユイリィの甲高い声を聞くと、ベイリーフ自身も不思議な安心感を感じる。なぜかは分からないが彼女がいると自分の能力を極度に不安がる必要がない、そういう感情からなのかもしれない。「いや、心配かけてごめんなユイリィ、ちょっと頭が疲れたらまたさ……変な事を考えたのかもしれない……」「そっか…リーヒュンには気になっちゃうんだよね、リーヒュンらしくてそれはいいとは思うけどね、うん……」メガニウムの表情に素朴な優しさのようなものが現れ、彼の方に数歩近寄る。どうやら彼女には、彼が何をしたのかはすぐにわかるらしい。「…そう、突然できたりできなかったりするのよこの能力は。…なぜか疲れたり落ち着かない時に限って感覚が冴えたりもするけどね。ウチの場合は…うん、何年もかかったからさあ…リーヒュンみたいにいきなりってわけじゃ…でも、どっちにしろそんなに焦ったって仕方がないよ、そうやって少しずつ

分かって行けばいいから…」「そうだよな…ありがとうユイリィ…」リーヒュンは顔が少し火照るのを感じ、ユイリィの目線から少しだけ視線をそらしてしまった。誰とでも自然体で接することが普通の彼でも、女の子あいては理由が分からないがどうにも苦手だ。まあ…思い当たる節がなくもないのだが……

そんな彼の姿に彼女は普段の調子を取り戻す、やっぱりこのベイリーフはこうでなくちゃ自分の元気も出ない。「という訳で…」メガニウムはベイリーフへ飛び付くように胴体をドカンとこすりよせる。「おっはようリーヒュン♪」「ぐぎゅっ?!なんだよいきなり…」いやがる彼をよそ眼に、彼女は元気いっぱいかつテンション激高状態だ。「え、これ?今回の成功おめでとうでむぎゅっとしてんの!あはは…」「うぐっ……ま、まあユイリィがそこまで元気になったんならよかったよ。あんとき俺、心配したぜユイリィの事…」「大丈夫大丈夫!リーヒュンとの雪の中はホント楽しかったもんね!また一緒にいこっかな♪それぞれでね、ついでに遭難するのも…」「遭難?!」「うん!リーヒュンと一緒なら全然怖くないもん!」「うっ……あのなあ、君があんな風に…(っていつもの事ながら聞いてない…)」リーヒュンは諦めたように首を振り、ツルを使ってユイリィの首を胴体を無理やり引き離そうとする。とはいえ、彼女の元気そうな姿を見て彼は本当に安心した。5，6日前に雪原から助け出されたときは、この女メガニウムはその場で死んでしまいそうなほど衰弱しきっていたのだから。ベイリーフとて彼女と同じように、あれで4本足全部が凍傷にかかり、今でも包帯の上から保護靴を履いている状態であるうえにまだうずくような痛みと痺れが残っている。

楽しそうに体をのしかからせるユイリィを見ていると、リーヒュ

ンには彼女が本当に自分より2歳年上の２０歳には見えない。

しかしその“むぎゅむぎゅ”の真っ最中、メガニウムの表情からいつものおふざけが消え去る。「…ありがとうリーヒュン…今回は本当に…」「…ん??」「……リーヒュンがいたから…ウチもロズリンも助かったんだよ…」ユイリィはリーヒュンの首の温もりを感じ取るようにゆっくりと顔の横の部分をこすり付ける。「今回はね…リーヒュンの能力で助かったみたいなもんだよね。あたしが証明するよ、うん」

「そっか…ありがとうユイリィ…」ベイリーフは寄り添ってくる彼女を受け止めたまま、ぼんやりと遠くに見える夜景を見つめる。「でも…俺らはそういう事をしなきゃなんない立場だからさ、今度君にまた何かあったら、俺ができる限り何とかしてみる。その時は頼りになんないかもしれないけど…またよろしく頼むよ」「…うん…」「当たり前だろ?ぶっ倒れてる奴の前を素通りするバカがどこにいるんだよ?」彼ははっきりと言った。「……リーヒュン…そうだよね…」メガニウムの意識の水晶の中がほのかに暖かくなったような気がする、その安心感、喜びのようなものが彼女の花びらの生えた首元から尻尾の先へとゆっくりと広がっていった。

彼は自分の事を支えてくれる、夜空をぼんやりと眺めながら彼女はそっと意識の宇宙空間に思考を伸ばしてみる。隣にいる彼の水晶から感じるもの、ユイリィ・ランタン・プレミドールの意識の水晶の底で渦巻くものを包んでくれるかのようだった。リーヒュン・バイリング・グリーズは確かに自分と何かでつながっている、そしてそれは今までになく信頼できる…安心して信じることができる…

彼女の口からか細い声が漏れる。「……ありがとう……これからも…よろしくね…」

今の彼女の気持ちを表す言葉は、こんな陳腐なものではあっても他にはない。すべてをはっきりと表現した、単純だが素直な表現だった。

「それとね…」少しを顔を赤らめながらメガニウムが続ける。「リーヒュンの能力って…ウチなんかより全然上だよ、うん」

「俺の…能力…？？」「そうだよ…リーヒュンの能力、すごい勢いで伸びてるの…ウチもびっくりするくらいの感じで、ね？」「伸びてる…」メガニウムののしかかりになんとか４本足をタラップの上でふんばりながら、ベイリーフはあの時の感覚に意識を集中させてみる。…どういう事なのか、彼にはイマイチよく分からない。しかし…あの雪の中で自分は、確かに頭で思い浮かんだとおりに足を動かしていた。もう思考がめちゃくちゃだったのもあるが、自分の能力に何となく確信を持ってそれに従っていたのもまた事実だ。

「…それでいいの」そんなリーヒュンの考えを感じ取ったに違いない、ユイリィは首を摺り寄せたまま彼を励ますように続ける。「ほら…リーヒュンは最初にバージアに行った時からずっと生き残ってきたよね？あんな先頭の中を、こう言うのもなんだけどさ、全く戦闘経験のないポケモンが生き残るのって本当に奇跡に近いの」「そうだよな…よく考えてみれば…ユイリィ同じように」ベイリーフは思い返してみる。確かに…ニュークリア地域に行った時も、ハイドル地域に行った時も自分は生きて帰ってきた。北アフリカに急き

ょ言った時も帰ってきた。彼が見る限り多くのポケモン達が、戦おうと逃げ惑おうと死んでいくのを見た。その中で素人であるはずの自分は生きている、しかも重傷を負う事もなくこうして生き延びている。ベイリーフの心の中に花火のように小さな驚きがはじけ、それと同時に複雑な感情も柳型花火の残像のように広がった。

これもフローラと自分の能力に関係がある、リーヒュンは何となくそう感じて首からぶら下げた容器に思わずツルを当てる。その容器の中…すっかり中の水は元通りになり、中で軽く動く翡翠にぶつかってはぴちゃぴちゃと音をたてている…からは期待に反して何も感じられない。ただ容器に伝わる彼自身の温もりと、普段から感じる“フローラに近い何か”の感覚だけだ。

「それなのよ、能力っていうのはそれでいいの…周りと違う、周りと違ってどんな状況でも乗り超えてゆく…それを受け入れて頑張る、それが重要なんだよ」ユイリィがツルで彼の首元をさすり、自分の左前足を彼の右前足にそっと乗せる。「この間はごめんね。リーヒュンはさ、これからも…どうしようもないウチだけど…信じてくれる？」「…もちろん」ベイリーフははっきりと頷く。「こんなに役立たずな俺で本当にごめん…でも、やれるところまで頑張る。どういう結末が待っていても結果は後悔しないさ」

「うん…よろしくね…」メガニウムは目を閉じ、そっとベイリーフの体に自分の体をゆだねた。今までの緊張感も疲れも温もりの中に溶けていくようだった。

「…そうだ！今回は“ぱっちん”やってなかったよね！今やろうよここで！」ユイリィがリーヒュンの体が離れ、笑顔で言った。「“ぱっちん”？？…何それ？」「ほら、いつものあれ、あれだよ！うん」メガニウムが自分の右のツルを上に伸ばして掲げる。「そっ

か…そうだよな…またなんか変な名前つけちゃって…まあいいや」
ベイリーフは思い出したように頷き、一歩右前足を踏み出した。彼女の顔に満面の笑顔が広がる。

「そんじゃ！…成功おめでと！」「お疲れ！」

2匹のツルが頭上でパチンとなる。駐機場の背後にある滑走路からフランス・エアバス社製の貨物機であるＡ－３３０－２００Ｆが、2基のプラット&ホイットニーＰＷ４０００ターボファンエンジンを全開にして飛び立ち、夜空を轟音で引き裂く。

「ねえねえ！ちょっと下に降りてみない？あれとか見てて面白いじゃん！うん！」「そ、それっていいのかよ？」「大丈夫大丈夫！ほらほら…」リーヒュンが返答する間を与える前に、ユイリィが彼のツルを自分のツルで引っ張るようにタラップを降りる。「何をしているお前ら？脱走した無登録のポケモンはヨーロッパ連合内とイギリスじゃ殺害されるのは知ってるよな？」2匹が滑走路を舗装している強化コンクリートの地面に降りるや否や、見張りに立っている赤外線暗視装置を装着した統合軍兵士が不審そうに声をかけてくる。すぐ傍ではＵＬＤ（航空貨物）トレーラーを多数連結したトラックを見送っていた作業員らしき女が不審そうにこちらを見ていた。テンションの上がったメガニウムに連れてこられたベイリーフではあったが、そんな人間の姿を見てつくづく嫌悪を覚える。人間の機械を壊すつもりはない、少しぐらい息を抜いたっていいじゃないか、と。

彼ははっきりと言った。「逃げませんよ、別に見張らなくたっていいじゃないですか物を盗むわけじゃあるまいし」

メガニウムも笑顔のまま兵士に言う。「そうですよそうですよ！アメリカ軍の手先で情報収集でもないんで安心してください」

統合軍兵士は呆れたようにタラップの方を指差す。「おかしな言い訳をすんな、とにかくお前らは目立つんだよ、さっさと戻れ」

「そんなに俺らが不審ですか？俺たちにだって多少は外の空気を…」ベイリーフは食い下がらない。「そういう問題じゃない、お前らの機密保持は規則だ。我々の首を飛んじゃ困る」「首って…人間ってどうしてここまで…」「だからお前らが変なんだって…」

「ヘンって言ったら人間もポケモンもヘンですよね？」メガニウムが兵士の方に一歩近寄る。「あははは、じゃないですか！やっぱり人間の言う事は違うってことですよね！うん」

「なーに言ってんだお前ら…」兵士の人間の男は彼女から離れるように歩き、目線をＣ－１７の主翼の下に止まっている給油車両の方に移す。ポケモンの言う事は全く持って腹立たしいが、あのメガニウムを暴走させるようなことはごめんだ。

そんな2匹と国連の人間とのやり取り、輸送機横のタラップの手すり付近に顔を出したテルルはぼんやりと眺めている。固定された左前足の代わりをする松葉づえが許す限り手すりに近寄り、右前足を手すりの上にかけて深夜の空港を見つめていた。「はあ…何やってんのよあの子たちは？」

でも良かった、今回も全員無事に生きて帰れる、そして自分も…何事もなく（彼女にとってケガ程度は大事に入らない）帰ることができる。

彼女は首から下げたものの一つをそっと右前足で取り、飾りのつ

いた額にそれを当ててゆっくりと目を閉じる。「エルヴィン…ありがとう…姉ちゃんはまだ大丈夫だからね…」彼女は大きく息を吸い込んだ。自分はまだ生きている、かけがえのない弟とまだ同じ世界にいる、冷え切ったイギリスの空気だがとてもすがすがしく感じられた。

テルルは再び目を開いた。彼女の右前足には今は熟睡しているブレイブからもらった焼きオボンの串刺し（焼きミカンと同じように疲労回復にいいとされている。あのブースターはアルマトイにいた行商のポケモンから、季節的に結構な値段で買ったようだ）を持ったままだった。ここまでサービスをしてくれる彼には今回もすっかりお世話になってしまった。「……ブレイブったらこんな希少なものをねえ…ごめんねブレイブ…」彼女は開いたままの乗降ドアの方に振り向き、程よい焦げ目の突いたオボンをかじる。口の中に広がる暖かな甘味の中にブレイブの思いが含まれている、そんな気がする。

グレイシアの瞳に映った空港の奥に見える無数の人間の市街地や高速道路の明かりは、夜も眠ることのない騒音と活気に包まれる人間世界を変わることなくほのかに照らし出しているが、それと同時に幻想的に暗闇の中を漂っているようにも見える。それは一晩限りの夜闇を照らし出し、翌朝には儚く散ってゆく蛍のようだった。

戸惑い

２０１３年　１月２２日　東シナ海北部　対馬海峡の北東の海域
１６１０時

日没近き東シナ海、この日も激しい雪と暴風で冬の嵐だった。それにもかかわらず、韓国の漁船が蟹や鱈をはじめとする水産資源を求めて荒海に船団で乗り出している。迫る暗闇と吹雪によって数百メートルもない視界ぎりぎりに、韓国や台湾の企業が所有する天然ガス採掘プラントのやぐらを示す警戒灯が輝いている。

アメリカ海軍のニミッツ級空母「ロナルド・レーガン」（日本近海にやって来るのは東北・関東大震災時の“オペレーション・トモダチ”以来だ）以下、ペルシャ湾での任務から一時的に佐世保に寄港していた第５艦隊第７駆逐戦隊以下の小規模なアメリカ海軍打撃群の艦隊は、韓国海軍世宗大王級イージス駆逐艦「栗谷李珥（ユルゴク・イ・イ）」以下の駆逐艦隊並びに独島（ドクト）級揚陸艦「独島」と共に、暗闇の迫る東シナ海の荒波の中ゆっくりと航海を続けていた。昼過ぎ前後は、この数日間の最悪の気象状況の中でもまだ雪も弱く、風も波も小康状態であり、揚陸艦「独島」から空母「ロナルド・レーガン」へのヘリによる乗員・物資の移送訓練や「ロナルド・レーガン」艦載機部隊である第１５４戦闘飛行隊所属のＦ－３５ＣやＦ／Ａ－１８Ｅによる攻撃訓練も、スケジュールより大幅に遅れかつ大幅に縮小しながらもなんとか行っていたが、数時間もたたぬうちに急激に天候が悪化し、ヘリや艦載機の回収が終わらぬうちに着艦が危険なほどに空母や揚陸艦の揺れが激しくなってしまった。やむを得ず艦載機部隊は韓国南部の空軍基地へと給油の為のみに向かい、天候が回復し次第空母に帰投するという措置を取ることになった。

空母「ロナルド・レーガン」の会議室には米海軍と韓国海軍双方の将校たちが集結している。ただし、この1時間で急速に天候が悪くなり、もはや各艦艇へのヘリでの帰投は不可能になっていた。無論、各艦に搭載されているモーター付きゴムボートの通船（ランチ）で戻ろうなど正気の沙汰ではない。天候が好転し次第各艦に戻る予定だった。

しかし、それはこの数日間不可能かもしれない、そういう懸念も出現し始めていた。最新の気象観測及び気象データの分析でによると、東シナ海のこの地域は現在大規模な雪雲に覆われており、西高東低という日本列島が生み出す独特の気圧配置がもたらす嵐で、向こう数日間は荒れた天気が続く予想となっている。この状況は単に空母艦載機・ヘリコプターの離着陸や駆逐艦の各種演習ができないばかりか、これ以上天候が悪化すると、荒波に伴う艦艇へのリスクも否定できない。同行している米海軍ダイゴンデロガ級ミサイル巡洋艦、ＣＧ－６２「チャンセラーズビル」やアーレイバーグ級ミサイル駆逐艦、ＤＤＧ－７３「ディケーター」（ともに第7艦隊所属、第５艦隊空母打撃群第７駆逐戦隊が長崎に寄港する際は護衛を行う事もある）のイージス・レーダーは、例の中国海軍の空母を含む機動艦隊（暗号無線の傍受によってその艦名が“海龍（ハイロン）”であることは認識されている）が北西の黄海に近い海域に展開していることも認知されており、相手側もこちらとほぼ同じ状況下にあるようだ。

既にアメリカ本土の国防省からは、この数日間に続けて明日以降も天候が改善しない場合、今回の米韓合同演習はいったん中止、空母「ロナルド・レーガン」やミサイル巡洋艦「チャンセラーズビル」以下の艦隊は日本の長崎・佐世保に入港し、２月以降に再度実施時期を検討するという方針を艦隊及び韓国軍側に打ち出しているという旨の通信が入っている。この状況ではその可能性が濃厚だ。

激しく荒波に揺れる韓国海軍の駆逐艦「栗谷李耳」の後方甲板の手すりで、吹雪にかすむはるか彼方を韓国国家安全保障局（ＮＳＳ）の男は恨めしそうに眺めていた。この数日間、この艦隊のレーダーから中国機動艦隊らしき映像が消えた事は無い、中国艦もこの天候では全力で航海できるはずがない、一気に接近することだって可能なのだ。我々はすぐそばにいる、なのに正体を確認することすらできない、ロクな演習もできずに冬の嵐の荒波にただ停泊する数日間、それがもどかしくて仕方がなかった。

ところで今回の米韓の演習には国連統合海軍は参加していない。というより、西太平洋で行われる軍事演習に統合海軍・空軍のオブザーバーがつく事はほとんどない。ここにも現在の国連統合軍の厳しい実情がある。前述のとおり統合軍というものの８割は期限を設定して指定された管区の軍に各国が部隊を送る、いうなれば“参加義務のある派遣労働”の形態である。管区に入るの大抵近隣諸国の国軍であり、アフリカや中東の一部のように政治機能がマヒしている場合は欧米諸国を中心に部隊を送ることになっているが、その一方で国連安全保障理事会の常任理事国は「十分に派遣できるだけの余力と政治的安定がある」として、そのような代行を受ける権利はない。これに対して中国とロシア、すなわち当初から統合軍の結成を批判していた２国は既定の３割程度しか部隊の派遣を行っていない。独立国に対する内政不干渉の原則に基づき、強制することは無論できない。この地域の理事国の１国であるアメリカができる限り増派し（無論本国の任務もあるので限界がある）、統合軍直属の艦艇も派遣することもあるが、強大な軍事大国の２国分の部隊を穴埋めするにはあまりにも少なすぎた。結果として中東地域同様、統合軍の数が少ないことにより周辺諸国が大規模な演習を行いやすい状況であり、その結果、中東、東アジア、東欧の情勢は国連改編前とほとんど変化がないという事態になっている。

２０１３年　１月２５日　タイの中部　アユタヤ県　１１００時

１９８０年代から急速に工業化を進め、東南アジア諸国及びＡＳＥＡＮ圏内でも比較的高い経済・生活水準を保っているタイ王国の中部、および隣国のカンボジアは、長引く大雨とそれに伴う河川の増水、それによる首都バンコクへの浸水被害を懸念する政府の決定で行われた上流の大型ダムの放水のタイミングミスによって、この数年で最も深刻な洪水被害に見舞われていた。死者は３００人以上、被災者は万単位に及び、幹線道路や主要鉄道が冠水、発電所などのインフラの一部も損傷・使用不能となり、中流層の住宅街の多くが人間の胸のあたりまで水につかるレベルになっている。昨年の総選挙で圧勝した与党から成るタイ政府は、首都バンコクの浸水のみは断固阻止すべく、バンコク北部のドアンムン国際空港を絶対防衛線にして中心市街地・高層オフィスビル街・繁華街の浸水対策を進めている。その一方でそれに関する報道・発表がやはり一般市民の不安感を招き、バンコクを中心とするタイ中部の店舗から乾電池、懐中電灯、飲料水、非常食、携帯ラジオなどの備蓄品が買いだめで消え去り、２０１１年の日本と同様の状態となっていた。元々国土の多くが湿地等の低海抜地帯からなるタイ王国は、洪水時の排水装置の整備を都市部を中心に（欧米の支援のもと）進めてきたが、それに対する一般国民の信頼は大して厚くない。

さらに深刻なのは中部の湿地・水田地帯に開発されたタイ・アユタヤ県の５つの中でも広大な工業地域の一つであるバンパイン工業地帯も浸水、インフラの遮断が発生し、数多くの大手企業の生産工場が操業停止状態に陥っていることである。バンパインにはアメリカのウエスタンデジタル社や日本の日立ストレージテクノロジーといったＨＤＤ（ハードディスクドライブの略、各種大型端末に内蔵された記憶媒体であり、いわゆるローカル・ドライブにあたる）の

生産工場やホンダや日産といった日本の大手自動車メーカーが東南・東アジアの庶民層に向けて販売している小型・中型車両の工場があり、これも含めて欧米、アジア新興国の電子機械、自動車といった主要企業合計３００社以上の工場が被災してしまった。昨日前後から徐々に水は引き始めているが、雨が再び降る危険性は残るうえ、復旧には数週間レベルという（日本の企業界は東北・関東大震災で痛い目を見て対策をしていたにもかかわらずこうなった）サプライチェーンにとって致命的ともいえる時間がかかる事態に陥り、家庭用電気機器や今後の世界各国での商品供給がストップする恐れすら浮上してきている。

周囲の土地よりやや高くなっているはずの日立ストレージテクノロジー社の工場の敷地も全て膝辺りまで浸かるほどの水に襲われ、精密な機器のラインがある工場内部まで水が流れ込んでいた。工場裏の駐車場の車両は、全てルーフと窓ガラスのみが辛うじて見える状態になっている。

多くの日本人スタッフ（日本の企業では、トップの大半は本国から派遣されている）や現地労働者と共に事務棟の屋上に上がった経理担当の男は、屋上から見える工場の敷地内を見つめてため息をつき、せわしなく屋上を歩き回っている。彼が所有している日産のアジア向け車両・マキシマＡ３３はとっくに駐車場を襲った濁流に飲み込まれていた。バンコク郊外に住む家族とは2日前に無事を確認したのが最後で、それ以降は工場の固定電話も携帯端末も一切通じない。今日になってようやく非常用衛星電話が1機使用できるようになったばかりで、それも怪しい状態が続いている。自分の身はまだしも、家族への心配は募る一方だった。

同僚の女が浸水を免れた3階から屋上に上がり、その男に声をかける。「ロシアの例のお客様より連絡が…」「…分かった…すぐ行

く…」男は気を落としたようにうなずき、重い足を引きずるようにゆっくりと階段へと向かう。

何を言われるかは分かっている。ロシアの情報技術研究機関から注文されていた特殊タイプのＨＤＤは試作品は水没、生産ラインの機器にインプットしたはずのデータも停電で失われていた。バックアップはもちろんあるが、この状況では１カ月は復旧は無理だろう。実際問題、周囲の日本・欧米企業の工場の中でかなりひどい被害を受けた場所の１つがここである。誠に遺憾だが、今回の注文はキャンセルしてもらうしかない……

２０１３年　１月２７日　ソーラ地域　０９００時

一行が南太平洋の微小大陸であるソーラに帰ったのは、結局現地時間１月２１日の朝の事で（アメリカのサンフランシスコ国際空港でも、エアウェイの都合で数時間待たされた）あった。それから７日あまり、相変わらず人間の作った施設とその周囲で暮らしている各員の日常に大きな変化はない。ただし、９日から２１日まで慣れぬ地で連続稼働だった彼らは相当に疲弊していた。ポケモンの文明にとって、人間社会のような分単位で時間に追われるスケジューリングは、あまりにもきつい。彼らが１月と１０日かけてすることは人間の７日間と大差がないくらいである。

リーヒュンとユイリィはそんな中でも、自分の感覚を維持するのに無理に力を抜かすことは許されない。特にリーヒュンの方は、いわゆる能力の“伸び盛り”の時期に差し掛かっているとのサクラや国連研究機関の見解の元、かなり厳しい訓練が課されていた。もっともこの男（オス）ベイリーフ種族の方にそれを嫌がる気配はない。今回の中央アジア・カザフスタン方面での捜索活動でわかったこと、それは自分の妹のフローラを救う命運が紛れもなく自分の能力にかかっているという事だからである。

２８日、この日は彼の訓練にサクラ自身が付き合うことになった。それが何かを彼に伝えることになる、彼女がそう思ったからしい。ベイリーフ種族の方は少々心配そうな表情はしていたが、直前にはもう覚悟を決めたようであり、「何とかしてみるさ」の一点張りだった。「何とかなるって…それはウチに決められることじゃないけど…でもいいなあ！サクラさんから直接訓練してもらえるなんて」「？？…ユイリィはあの人（ポケモン）から教えてもらったことないのか？」「そう、そうなのよ、うん。リーヒュンがしてもらえるじゃん、ウチが同じくらいだったときは自分で考えろ、で終わりだったよ…」女（メス）メガニウムはツルで右側の長いほうの雄蕊をきれいに丸め直す。自分と彼では立場も状況も違う。しかし彼は教えてもらえる、そんな彼を、ユイリィは心配というより羨望の視線で見ていた。彼女自身はサクラから直接訓練されたことはない。ひたすらに自分で感じ、自分の感覚を一点に集め、できるまで努力、あのサーナイトは彼女にそうとしか言ってくれなかった。そのサクラに悪意がない事は能力ができたての彼女（当時はチコリータ種族から進化する直前）にもなんとなく理解できたが、あの時は本当に苦しかった。地球中の人間、動物、植物、ポケモンの中で、空間を渦巻き時間を流れてゆく“意識”なる物を敏感に感じ取り、それをある程度操り、自分のエネルギーとして利用することができるというただ二匹（もう一方はサクラのこと）獲得したこの能力を発揮するには、周囲の空間に伸ばした意識をその場に保つという難題がある。今のリーヒュンがそれを少しずつ習得してきているこの段階が最も苦しい、他人では考えられないようなものを感じ、前後の時間の記憶と意思が見え、頭の中にインプットした思考が現実化する。まるで自分が周囲の世界の全てから浮き立ち、孤立してしまうような違和感を覚える。これを乗り越える方法はただ一つ、気合という非科学的・非論理的な精神論調しかなかった。ユイリィ・ランタン・プレミドールがこれを克服するのには5年かかった。その時の孤立感、寂しさ、苦痛、恐怖といったら……彼女自身そこの記憶に触れるたびに、言いよう

のない全身の倦怠感と胸を締め付けるような息苦しさを感じる。それでも彼女が諦めなかったのは、それ以外にやることがなかったからだ。諦めれば自分の存在意義、たった1匹で人間の施設に暮らしている理由を失ってしまう、サクラや国連の人間にそう言われるわけでもなく、自分で直感的にそれを感じ、幼き物心はその恐怖に夜な夜な震え、窓もない無機質な人間の作った建物の地下、消灯された暗闇の中で、泣きながら意識の水晶に忍び寄る怪物と必死に戦った。

「…ユイリィ…大丈夫か？」ベイリーフの言葉に、メガニウムは首を振ってそのかつての残像を振り払う。いつの間にか過去の記憶に意識を奪われてしまっていたようだ。「う、うん…大丈夫」「そっか、…そんじゃあユイリィは自分で全部身に付けたんだよなあ……」「まあね…」「そんでもって俺が…サクラさんに教わるってことになるってことか…まあやってりゃ何とかなるだろ」リーヒュンが歩く最中に右前足の爪で土を軽くトントンとたたく。「そう来なくっちゃ！頑張ろうねリーヒュン！」「うん…ぐえっ？！」ユイリィが嬉しそうにツルを彼の首の後ろに回して飛び付く。こうやってこのベイリーフと話しているだけで（半分くらいはおちょくっているのだが）、彼女が意識の水晶の限りなく奥底に沈みながらも、時折沸騰した対流のように湧き上がっては彼女を苦しめる記憶の声を沈んでゆき、再び目の前の夏空が鮮やかな青みを取り戻してくるようだった。研究機関の施設に隣接する統合空軍・アメリカ空軍の基地の滑走路にほど近い草原へとのんびりと向かう2匹、ユイリィは夏真っ盛りの澄み切った空気を肺一杯に吸いこんだ。

過去にしがみついても現在は変わらない、すでに流れの後ろに遠ざかった過去ではなく目の前の今に集中するべき、これもまたあの時

に意識下に伝わってきたものから教わったものの一つである。

しかしやはりサクラの訓練は甘くない。リーヒュンがこれまでユイリィから習ったことに全力をかけているのは事実だったが、このサーナイトに対してそれが伝わっているのかは、彼には理解できないが可能性は甚だ低いと感じられてしまった。自分の意識をツルの先と周囲の世界の流れに集中させ、それを感じるがままにツルを振り下ろすが、彼女の両手が作り出すエネルギーは何の苦も無くそれを偏光する。「まだまだ…あなたならまだ前に出られるはず！」「うぐっ…そうしたいですけど！」「そう思うならそれを行動に！来るのよもっと！」「は…はい！」ベイリーフはこの状況を打破すべく必死にツルを振っては落とし、サーナイトに向かって積極的に踏み込んでゆく。意図的に受け手に回っている彼女の方は、じわりじわりとツルから振り落とされるエネルギーを自分のサイコパワーで相殺してゆく。リーヒュンは一生懸命やっている、その出し方はいささか無理矢理で彼らしい力押しのような感じだが、サクラから見れば彼の凄まじい伸び具合に驚嘆すら感じていた。傍らで吹き出しそうな表情をして眺めているユイリィでさえ、“クロスレンジ・アサルト”と呼ばれるリーフブレード、ローキック、マッハパンチ等の直接攻撃を、多くの意識が流れる宇宙空間にある道のエネルギーから引き出して増幅するこの方法を習得するのに、６歳から初めて１０年はかかった。それを彼はたったの５か月でここまで扱えるようになっている、すなわち意識の流れる宇宙から自分の意識を司る水晶から引き出し、強烈な負の感情すら持ったそれが放つおぞましい感覚を耐え抜き、自分の攻撃媒体（すなわちリーヒュンにとってはツル）に乗せ、それが伝えるがままに攻撃、回避、足と体の使い方を覚えつつある。驚きと同時にサクラは誇らしくも思った。まだま

だ未熟ではあるが、彼は彼女の予想を（ユイリィの予想もそうだろうが、あのメガニウム種族がそうやって真面目な考察をしているはずがないだろう）はるかに超えて成長している、そしてこの先も持ち前のひた向きさで突っ込んでくれるに違いない。

そんな名門大学に進学したわが子を誇る人間の母親のような感情に囚われてしまったサクラ・ワタリ・フユツキであったが、すぐにその感情を振り払い、種族特有の鋭い洞察力で自分の意識の水晶に映るものと周囲の空間の流れる先に集中した。何かを誇りに思ったり、喜びを感じることは、意志を持つ生命にとっては自身の意識の水晶を澄み切った透明にし、その奥底にあって感情を司る極小の原子炉（リアクター）の調子を整えてくれるが、過度なプライドや歓喜は直感や予想といった意識の空間を流れから読み取る感覚をマヒさせ、自分の感覚の視界を狭める原因になる、このサーナイトはそう信じている。それを配慮に入れれば目の前にいるベイリーフ種族はまだまだ発展途上、厳しく指摘するとすれば下手くそとでも言うべきであろうか。リーヒュン・バイリング・グリーズの頑張りは認めなければならないが、彼の動きは彼女から見れば、全く読み取れる勢い半分の物に過ぎない、この手法は個性が如実に出るとは言ってもそれで済ませていては訓練する意味がない、そこにたどり着くために一定の方法（メゾット）は必要だ。日本の武道でいう“守・破・離”とはこの事である。

「すごいわね…でもっ！」このサーナイトは一気に攻めに出る。食い下がるのを止めて飛んできた2本のツルを一撃を彼女の左手の先端から放ったエネルギーで難なくやり過ごすと、そのエネルギーの流れを意識の水晶の中から微妙に“ひねり”、それをベイリーフのツルの方向に叩き込む。「なんっ……？！」寸前でそれを感じ取った彼が辛うじてそれを偏光したが、彼女の方は既に勢いでサイコパワーを叩き込み、優美な両手でベイリーフの首元を、増幅された“ほのおのパンチ”殴る。一撃喰らうたびにベイリーフの感覚がぐら

つき、あの例えようもない気持ち悪さが背中から足先まで走る。これが目の前のサーナイト種族の持つ能力に違いない、周囲の空間と完璧に同調したような動き、その美しさの底から放たれる攻撃へのオーラ、相手に意識の水晶を通して直接与えてくるようなプレッシャー、全てが雄弁に証明している。「ぐうっ…これは…」徐々に狭まりゆく感覚の中、気が付けば彼は自分の動きがほとんどあてずっぽうになっていることに気付いた。普段と同じようにそこに思考を伸ばしていくことすら叶わない。

「決めるわよ！」最後に彼女は、しなやかな下半身から繰り出される強烈な“まわしげり”でベイリーフの首元右側にとどめを刺す。彼が何とか足元に突き出そうとしたツルは間に合うことなく、彼から向かって左側に頭の虫食い葉っぱからたたき倒された。

「お疲れ様…あなたのやり方は悪くはないの……」「……そう…何ですか…」ぶっ倒れたまま起き上がることのできないリーヒュンの首を、サクラはそばに寄って優しく抱える。激しい動きによって体温が上昇した彼の首元から、不思議な涼しさにも似た感覚が入り込み、それが力が抜けた４本足から頭の葉っぱの先まで伝わってきた。先ほどの“あれ”で残っていたためまいや吐き気と奇妙な寒さがだいぶ後方に遠ざかったような気がする。「はっきり言えば、あなたの場合はまだ自分の感情を優先して走りがちね、あなたの性格は理解し、ひたすらに頑張れることは素晴らしい…」「…ありがとうございます」「ええ、ただし…」サクラの声がにわかに厳しくなる。「そういうあなたの性格がこの能力の本領と合致しているわけではないわ。リーヒュンは何を思い浮かべ、何に集中しているの？」「何、と言われると…」リーヒュンは草地に倒れこんだままの姿勢で、いまだに少しフラフラする頭でそれを思い浮かべてみる。

当然と言えば当然だが、このベイリーフに解答は１つしかなかった。

「もちろん…妹です…フローラの事です。他に何かあるわけ…」「そう…そうよね…」サーナイトは顔の下に右手を軽く当て、何歩かゆっくりと歩く。彼がこう答えるのは先に読む以前に当然かもしれない、彼女はそう思った。とはいっても同乗してどうにかなる問題ではない。「それも大事よ、でも自分の先走る傾向は自分で管理しないといけないの」彼女はゆっくりと彼の方に戻る。「まず必要な事は、自分の感情を別にして周囲の空間を論理的に、冷静に把握すること。それを行うには何が起こっても…誰かが死にそうでも…その流れに従って自分に必要なことを意識することなのよ」「そ、そんな…」見殺しなんてありえない、ベイリーフの目に衝撃が浮かび上がったようだが、サーナイトはお構いなしで続ける。「それに耐えられないと、あなたはいつまでたっても…」「何が起こってもって…隣で死にそうな奴がいてもほっとけ、ていうんですか？」「…そういう可能性もあるかもしれないわね」「そこまでして僕は…」「やらない、ていうの？！あなたはそう言おうとしたのね！」サクラの目に冷たい物が浮かび、リーヒュンの顔もとに彼女の顔が近寄る。

「俺は死にそうな奴を見捨てるほど人間じみてません！」ベイリーフは思わずツルでサーナイトの首を締めそうになった。彼女に対するこれまでにない不信感と敵対心が、彼の意識の水晶を赤熱化させる。「そういう問題じゃないのよ！とにかく……！」

彼女は大きく息をつき、加熱しすぎた自分の心を冷ますように視線を夏空に移し、それから数歩後ろに下がる。それと同時にこんな事で教え子と口げんかする自分を思い出し、浅はかな行動に公開すると同時に、自分の器量の小ささに嫌気を感じてしまった。「……ごめんなさい…あなたの言うことすべてを否定するわけじゃないの…」「それは……分かります…」地面の方に視線を向けたまま彼は

か細い声を出す。自分の言動と行動の幼さが骨に染み入るほどの苦しさとなって感じられるが、その意識の水晶の片隅では、まだ目の前の彼女に対する不信感が残っていた。信念より目の前の状況が先、彼女は命を軽視するその程度の物が本心なのだろうか、立場的にこの考えが不謹慎なのは理解していてもその感情を振り払う事がどうしてもできなかった。

「でも…ともかく」サクラはリーヒュンにゆっくりと近寄り、もう一度首をそっと抱きかかえる。「あなたにはもう少し訓練が必要ね、あなたの事を否定はしないけど、時には自分の価値観を様々な方向から見るのも重要なの。それを忘れないで」「……はい」ベイリーフはサーナイトの顔を見つめ、明らかに気落ちした表情をしていた。

その直後、このベイリーフ種族の意識の水晶に強烈なものが走り、彼の体中の神経を一気に緊張させた。それはほかでもない自分のやっている意味、リーヒュン・バイリング・グリーズ自身がここにいる事を選んだ信念、想像絶する苦痛とおぞましい感覚に耐える理由、探検隊とも軍隊とも違う（そう彼には感じられた。実際そうなのだが）目的でこの場所で気の遠くなるような距離を移動させられ、ポケモンが経験する事は無いであろう危険な行動を強いられ、それでも彼がやると決めた意味そのものである。彼の目には、その意味である存在、たとえ血の交じりが違えど、生まれが違えど血のつながった兄妹に違いない存在、まだ世間も知らぬうちに家族から何かの力で引き離され、今強大な危険にさらされているであろうフロレアールの姿、その幼きまなざし、その声が聞こえた。

「でも…僕はまだまだ…フローラの為だったら…」

それにかられたリーヒュンは、力の戻ってこない４本足を何とか地面に置き、横向きになった体を必死になって起こそうとする。自分

がここで倒れているわけにはいかない、あの時見たようにフローラは恐ろしい何かによって意識を食い物にされている、それと比べたらまだまだ自分は、そんな（悪い訳ではないが）感情任せの衝動が彼の肉と神経を強く刺激した。だが、何とか右側に体を起こした直後、深い沼地に片方の前足を突っ込んだように前の景色がぐらつき、そのまま右前足から反対側に倒れこみそうになり、サクラが何とか彼の両前足の付け根を両手で押さえる。「無理はしちゃだめよ。もう少しは姿勢を楽にしてゆっくり休んで」「し、でも…」「でも、はなし。あなたは十分努力している、それに妹との境遇を比べて自分の身を裂いてでも助けたい、それは認めるわよ。でも…」彼女は目を閉じ、彼の葉っぱの生えた首元に右手を当てる。このサーナイトの手先から伝わってくる温もり、それに含まれている思い、彼女の意識の水晶玉を暖かくした。サクラは先ほどの自分が彼に叩きつけた言語に深い後悔を覚え、本当に申し訳ないという思いに胸が締め付けられるような苦しさを覚える。「…あなたの感情はまだ十分に落ち着いてないわね。フローラの為ならそういう点からも整えていくのも重要なのよ」「……それは…そうですけど…」「お願い…そこを理解し、自分に生かしてほしい。まず今のあなたに必要なのはそういう点なの。いい？」「は、はあ…」リーヒュンはがっくりと力が抜けたようにその場に４本足を折ってしゃがみ込み、足元の雑草に視線を伏せた。そんな彼の姿を見ているサクラは、同情しそうになる自分を必死に抑え込み、彼からゆっくりと離れる。このベイリーフが妹を大切に思い、自分の体を削り、上手く進まぬ自分の能力に激しい嫌悪を覚えているのは分かる。事情を知っていればそれに同情しないものはいないのだろうが、この能力は誰かの慰めではなく、自身の強い精神力からしか与えられない。彼女は祈るしかない、彼が自分の意識に潜在する欠点を見つめ、そこを打ち破り、自分の意志で周囲の意識をエネルギーに変えられることを。本当の能力が発揮されるのはそこからだ。そこにたどり着くのさえ難しい。

たどり着くと言えば、サーナイトは傍らにいるメガニウムに視線を移す。ユイリィは2匹のやり取りを凍り付いたように見つめていたらしい。サクラは諭すように右手の先端を立て、軽く横に振った。彼女に対するあたりはリーヒュンのそれとは別の話だ、１５年も訓練しているのに彼女にはどこか抜けている所がある。ユイリィの能力はサクラが認めるほど高いが、精神面ではサクラが呆れかえるほどの子供っぽい点を残している。

「それじゃあ次はユイリィ、あなたの番よ」サーナイトは抑揚のない声で言う。「あ…ウチですか？！」「もう…見てればいいなんて思ってたの？」サクラは左手を額の部分に当て、右手を腰の部分にやってため息をつく。ユイリィらしいと言えばそうではあるが、ここまで油断しているとは…多少の先読み位あの子にはお手の物のはずなのに、どうして肝心な時に使わずロクでもない事には使う？彼女はいう事を聞かない自分の娘に母親が感じるような感情を思わず抱いてしまった。「…あなただって能力は１００％のはずがないの、だからこうしてあなたも呼び出したのよ」「…はーい…」「もう…何よその気のない返事？あなたも5か月一緒にいるんだから、リーヒュンのそういうところは見習ってもいいんじゃないの？」「ねえサクラさん…あたしとリーヒュンは全然違う存在だから、ってこの前言ってたじゃないですか」「あのねユイリィ、そういう都合のいい解釈だけしてても世の中はやっていけないの、前からあなたもそう思ってるんでしょ？」サクラがユイリィの方にゆっくりと歩み寄る。「そりゃそうですけど…」「それならやらなきゃダメよ、あなただって彼と同じように必要とされているんだから…」「はいはい…」右手を手招きするように動かすサーナイトにメガニウムは渋々頷き、長いほうの雄蕊を束ねているひもを縛りなおす。「だ、大丈夫リーヒュン？まあウチも最初はこうだったけどね」「ううっ…俺は大丈夫だから…君もあんまり無理すんなよ」「大丈夫大丈夫！ウ

チ、そこはリーヒュンと同じで思い切った無茶にも慣れ…」「ユイリィ、そういう世間話はいらないの、早くお願い」
「はーい…やって来るからね」「うん」サクラのちょっと厳しい催促にユイリィはほっぺたを少し膨らませ、４本足余っている保護靴をツルで外しにかかる。

やはり彼女は動きがまったく違う、このベイリーフは彼女に対するちょっとした羨望と感動を抱く以上に、自分の能力の未熟さに対するじれったさを感じながらその光景を眺めていた。あのメガニウムはサーナイトの一撃一撃に表情を変えることなくそれを自分のツルで受け止め、それを偏光し、巧みに体をひねってかわし、隙を見つけては前足を踏み込んでツルを振り下ろす。自分も含めて彼女も体が大きいほうの種族だが、彼女はまるで小柄な種族が素早く動き回るように、訓練された小型犬が勇敢に相手に立ち向かうが如く体を動かしている。それにつられるようにサーナイトの動きも自分の時と比べて相当熱が入っているようだ。このベイリーフには、２匹から放たれている意識の宇宙空間から引き出され、お互いの攻撃を繰り出す部分から噴き出す強力なエネルギーが、まるで2匹のいる地面が限りなく下へと溶け落ちていくような空間にしているように感じられた。

ただし、実際にやっている2匹、特にメガニウムの方がそう思っているかといえば、いささか異なっている。特にこのメガニウム、ユイリィ・ランタン・プレミドールの方は特にそうではない。いつもの調子で意識を周囲を流れていく意識の感覚に集中し、そこから出したエネルギーを込めたツルを振り、自分の感覚が流れてく方向が示すとおりに体の銃身を前後に寄せて体を自在に動かし、相手の

攻撃をかわし、一気に切り込む、この繰り返しだ。こんな事は１０年以上やってきているから造作もないはずだった。

しかし今日は何かが変だ、彼女自身そう思った。彼女にはその感覚と実際の行動に奇妙なワンテンポ、理解できない意志とのずれを自身の動きに感じてしまう。（…は?!…なにこれ…?…）そのじれったいほどの違和感を必死に修正しようと、彼女は必死に意識の宇宙を流れる気体に自分の意識を流し込み、そこから自分の中にエネルギーを注ぎ込む。それでも動きは全く変わらない、まるで入力した機械言語の信号を出力するまでの間に別の端末に入力して再処理をしているような、プログラムのループ文を余計に一回繰り返している、そういう自分の感覚と行動に何かの遅れが挟まっているようだ。

「…どう調子は?」「ま、まあまあだと思います…うっ…」いったん動きを止めたサクラに、ユイリィは荒い息をしながら適当な受け答えをした。普段だったらこの数分間の動きと戦闘などそこらをブレイブ達とフラフラ散歩するのと大差ないはずだが、今日の意味不明な違和感を修正し、どうにかしていつも通りの動きにもってゆくのに激しい疲れを覚えていた。彼女の調子がおかしい事は、サクラにはすでに見抜かれているに違いない、娘同然の彼女の事をこのサーナイトが見逃すはずがないからだ。

しかしメガニウムは苦しい息を必死にこらえ、息切れを起こしている肺と気管支の激しい呼吸の運動を無理矢理押さえつけた。ばれているのは分かっている、百も承知で合ってても、弱音を吐くのは彼女自身のプライドが許さなかった。（…うーん?…どうしたんだろう…結構やばいかも…）彼女の意識の水晶の片隅に、言いようのない不安に似た感情が種火のように出現するのを感じた。

その後も状況はよくなるどころか悪くなる一方だった。彼女が一発ツルを振るうごとに、あの違和感が増えはしなくても明確になっていく。明らかにこのメガニウムには、自分の感じることができる…これが彼女の能力のたまものだった…ものに対して４本足や体の動きがついてくるまでの間に奇妙なずれを感じている。修正しようにもそれは叶わない、それに目をふさぎ、前にある物、数秒後の未来に出現するであろう前方のサーナイトとの間に形成された空間での事象に意識を伸ばしていくが、その思考の触手と空間との間さえ、その違和感が意志を持って嘲笑っている怪物のように入り込んできた。ここまで来るとどうしようもなくなってくる、もはや自分の意志とは大幅にずれたタイミングでしか体が動きと認識にしかついてこられない。あたかも自分の体が自分の意志とは無関係に動いている、彼女はそんなある意味恐ろしい感覚にさえ襲われていた。

遠くから眺めているリーヒュンにもなんとなく彼女の動きに対する違和感が見えていた。人間などの普通の目で見ればいかにもユイリィとサクラの動きが（自分を含めてだが）異常なものであり、想像を絶しているとしか言いようがないが、普段から彼女の戦闘時の動きを見てきている彼には、あの動きがいつもとは違って若干隙があるように思える。彼女はこれまでにない事態にかなり焦っている、おろぼけではあるが彼にはそう感じられた。それは他人の表情や心境を見るという点での常識化、それともやはり、サクラの指摘する能力の一貫なのか、決め手となる確信はまだ持てなかったが。

だが、自分の予感がうそではないことをリーヒュンは間もなく知った。「え、え…どうして今日はこんなに…?!」彼女自身の中で感じる違和感に、ユイリィの口から思わず言葉となってそれに対する不安がもれだしてくる。彼女の中での違和感は限界に達していた。

まだ何時間もやったわけでもないのに全身の関節が疲労に喘ぎ、それを動かす筋肉も同様に疲れ果て、痙攣しそうになっている。そんな自分が情けなく悔しく、必死に努力すればするほどそれが明らかになる。ツルを一回振るうたびにサクラの両手にはねのけられ、彼女の蹴りを辛うじて首を後ろにそってかわし、一回でも形勢を逆転する機械を窺ってはみるが、それを探る感覚がもはや目の前の状況と合致しておらず、気が付けばサーナイトの一撃一撃をどうかわすのかに気を取られて防戦一方、どんどん後ろに下がっている自分がいた。もはや自分の力では、自分の作り出した水晶の中心へと自らのエネルギーを吸い込んでいく巨大な流れに逆らう力に立ち向かいようがなくなっている。（どうすればいいの、本当にまずい、真剣（ガチ）にやばいんだけどっ！）ユイリィの意識は全てそこに向かって内側に収束してゆく。周囲の視界も足元の感覚もおかしくなってきた。これ以上はどうしようもない、もはや防ぎようが……

その違和感に思わず動きを止めたのはユイリィ自身ではなく、サクラの方であった。彼女は顔と顔がくっつきそうなほどの至近距離で、ピンク色の花びらの突いた首を下にもたげて荒い息をつくメガニウムを見つめ、それから一回ため息をつく。道理でおかしいと思った、いつもの彼女ならこの程度の事で疲れるはずもないし、こんな切羽づまって必死になった動きを彼女がするわけがないからだ。サクラがあの時意識の水晶のすぐ外側で感じ取ったあの違和感は、やはり嘘ではなかった。そしてその違和感というものが間違いなく目の前にいるユイリィ・プレミドールから発せられ、その原因が一体何であるかもすぐに読み取ることができた。彼女の能力は群を抜いて高いし、性格的にも悪い子ではないのは分かるが、こんな事にはなるなと彼女に再三指導してきたはずだ、まあこのメガニウムの事だからいずれはこうなることもあり得るだろうと覚悟はしてきたが、本

当にこうなってしまうとは。ようやく体の調子を取り戻したような表情を浮かべながらこちらを見つめているベイリーフの進歩に対する誇りは雲散霧消し、目の前で疲れたような表情を浮かべる、幾年も教えてきながら問題点が完全に抜けきらないメガニウムに対する不満と憂鬱ばかりが意識の水晶を覆い尽くすのをサーナイトは感じた。

サクラはユイリィの下に下がったままになっているウグイス色の首元にそっと右手を当てる。「どうしたのよユイリィ？あなたにしては動きに自信が無いようね？」「そ、そういう訳じゃないんですけど…」メガニウムは力ない声で首を振り、自分のツルで重たい首をゆっくりとサクラの方に持ち上げる。あの時…といっても1分前の事だが…自分がどうなっていたのか、今でさえはっきりと思い出すことができない。先ほどまで強く感じていた違和感の一部が、まるで残像のように自分の体に残っているようだった。「…何ていうかその、いつもと違って…見えてくる感覚にね、何かが挟まってるみたいなんです。こんな事って何回かありましたっけ…？？」

「やっぱり…まったくあなたって子は…」サーナイトは軽くひざをつき、困ったような表情を浮かべてこのメガニウムの青空色の目をじっと覗き込んだ。思った通りだ、彼女は何かに無意識のうちに気を取られている。ユイリィには昔からあることではあるが、それを発見することが彼女にとっては難しいらしい。「いい、今日もユイリィは何かに気を取られているの、それもこれまでになく気持ちをそっちに寄せてしまっている。それを自分で探しなさい」「は、はい…でもウチは」「でも、じゃないの。自分の意識の中から外に向かって出ていく方向を見極めて、どこへ向かい、その原因があるのかを見つけるの、前から言ってるでしょ？」「ま、まあ…」「ならやるの、いい？…」ユイリィの戸惑ったような声にサクラは少し語気を強める。

彼女に顕著な欠点の一つは移り気が激しく、結構気を取られやすい性格である点だ。そのせいで彼女自身が秘めるこの能力の高い成長

可能性を相殺してしまっている。昔からそれを克服するように言い聞かせてはきたのだが、相変わらずのようだ。“三つ子の魂百まで”といってもいいようにも見えるが、比喩などというものは都合よく作られているため、論理的思考的冷静な分析が必要なこの能力においてはこれでは済まされない。

「わ、分かりました…んと…」メガニウムは頭をかしげるように曲げ、自分の意識に思考を集中させる。調子がいい時でさえ、もしくは調子に乗っているときでさえ（調子がいい時に起こるわけがないのだが）自分の深層での考えがどこに向かっているのか考えるのは嫌いなのに、そんなこともその事情もサクラは知っているはずなのに、こんな疲れ切った中でやれなんて無理に決まってんでしょ、そう言いたかったが、さすがいま文句を言うのは状況的にまずい、彼女は渋々その思考を続ける。まずは自分の水晶の中にあるあらゆる期待・液体から感覚を離し、水晶が透明に見えるようになるまで思考を空っぽにする。それから意識の水晶から出ていく自分のエネルギーがどこに向かっているのかを感覚的に掴み、その結果を水晶の表面に写し取る。他人に口頭で説明してもキチガイ扱いされるのがオチのようだが、彼女やサクラのようにそれを知る術を持つ者にとっては感覚的にその手筈をその結果を理解できるのだ。

2分ほどが数時間に感じられた。ユイリィはようやくその結果を見つけることができた。ここまで明確に自分の思考がゆく方向を見出せたのは初めてであり、普段の彼女だったら飛び上がって大喜びするところだが、今回の結果が彼女をそうさせなかった。メガニウムは喜びどころか衝撃と戸惑いばかりを感じ、いつしかそれは深い憂

鬱へと変化して行く。
なぜなら……その相手は…

「あの…サクラさん？」「分かったのね、それで誰、あなたの気持ちがついつい寄せられるほどの相手というのは？」
「……いや…その…リーヒュンです…近くにいるから言うのもなんですけど」ユイリィは顔を真っ赤にしながらリーヒュンの方に向き直る。「あの…あの…ウチはやっぱり…あの子の事が気になるみたいで」

「っ！！！」当のベイリーフの方は頭と首の葉っぱの付け根が強烈に熱くなるのを感じると同時に、思わずメガニウムから目線をそらしてしまった。そんな事を眼前で（とはいっても、この場には２匹とサクラとロズリンしかいないが）あらかさまに言われることへの衝撃は並大抵ではない。これがブレイブだったら大喜びで彼女に飛び付くだろうな、などという妄想等浮かぶはずもなく、彼は途方もない恥ずかしさと衝撃でその場に硬直してしまった。どうにか先程サクラにやられた感覚から体調を持ち直し、立ち上がったばかりなのに、またしてもリーヒュンの目の前がぐらつき、２匹から離れるようにいつの間にか数歩下がっている自分にくづく。その過程で後ろにいたロズリンを左後ろ足で踏んづけそうになった。「何を恥ずかしがってるんでしゅか？」「そ、そういう問題じゃなくてさ…」彼は必至に喉の奥から声を振り絞った。まるで周囲の空気濃度が（無論、人間、動物、ポケモンを問わず空気で生命が呼吸に必要なのは酸素だが）突然半減してしまったようだ。「な、なあユイリィ…今の…本気か？」「え、え？…微妙なんだけど…うん…」彼の言葉に、ユイリィは思い切り恥ずかしそうに顔を赤らめて数歩歩み寄る。自分の言ったことが具体的に何を示しているのか、はっきり言って彼女には理解できなかった。だからどうやって答えればいいのかさ

え水晶玉のどこからも浮かんでこない。そもそも今のメガニウムにはその疑問に答えるという意思すら感じない。「そ、それじゃあ…思い付きだったのかよ?」「そ、そんな訳ないじゃん!ウチはさ、ただ…」

「まったく、あなた達は何してるのよ?」サクラがじれったそうに2匹の間に入り込み、右手を2匹を遮る。こんなところでいかにも恋愛に不慣れな2匹の恥ずかしい問答を聞くのは、今必要な事と何の関係もない。「とにかくユイリィ、最初にも言ったでしょ、リーヒュンと関係を深くし過ぎないの。というよりそもそもそういう突拍子もない迂闊なことを口に出さないのよ、それで…」彼女はメガニウムの首元にそっと右手を与える。「あなたにとってこの子が…大事なのはわかるけど、それはそれ、これはこれでちゃんと分けて欲しいのよ。それくらい簡単でしょ?」「は、はあ…」顔を赤くしたままメガニウムは僅かに首を縦に動かす。そんな気恥しそうな顔をしている彼女の心情など、このサーナイトには簡単にわかってしまう。

サクラはさらに続けた。「本当はといえば、あなたが親密にならないように私が間に入るなりするべきなのよ。あなたが年頃だからしてないのであって…」

「そ、そんな!?」メガニウムの表情に強い驚きと失望の表情が浮かぶ。彼女はサクラに体が密着するほど近づき、ツルでサクラの右手を掴んだ。「あ、あの…それだけは…やめてくださいません?!そんなことしたら…」ユイリィは懇願するかのように説得を続ける。「…リーヒュンとウチ…楽しくなくなっちゃうよ…ですから…」「おいおい…今そういう訳じゃないって言ったのは君だろ?」リーヒュンが後ろから彼女に歩み寄り、自分の首元から伸びるツルで彼女

のツルを引き離そうとする。「違う、違うのよ！だからウチはそういう意味じゃ…」「だ…だからねユイリィ、私はあなた達に一言も話すなとは言ってないのよ。私が言いたいのは…」サーナイトが掴まれていない左手でメガニウムのツルにそっと意識を送り込む。メガニウムが意図もしないうちに力が抜け、ツルがだらりと地面に下がった。このメガニウム種族はどうして５歳の男の子のようなことしか言えないことがあるのだろうか、１５年以上暮らしてきたサクラ・フユツキにとっても理解しがたい点だった。

「…あなた達が仲良くなるのを止めろってわけじゃないの。気が散るほどお互いを気にしあうのを止めなさい、って言ってるだけよ。この能力は２匹いた方がいいとは言うわよ。それでも…」サクラはユイリィとリーヒュン双方に見せるように左手を軽く振る。「…一定以上に距離を保つこと、そういう事よ。あなた達の関係は歴史上何の記述もないけど、出現する２匹が仲が良い、という訳ではないの。それなら…もし愛し合うほどの仲なら絶対記述するわよ…」サーナイトは２匹の姿を見つめ、それから意識を２匹の水晶を結ぶエネルギーの方へと意識を伸ばす。あの記録の実物は見たことがないが、そういう記述はなかったはずだ。そして今の２匹には、恋愛といえるほどのエネルギー的つながりは感じられないが、行動にくぎを刺しておくことは十分に意味があるはずだ。「そういう事、今後はお互いの距離感に注意し、近すぎるようであれば互いに制止しあうの、いい？」

「制止って…そんなんじゃとても…」リーヒュンが突如としてサクラの方に顔を向ける。彼の眼には彼女に対する明らかな不信感が表れていた。「それじゃあ仲良くするなと同然ですよ、そこは何とかならいんですか？！」「な、何言ってるのリーヒュン？あなただってこんな彼女の相手をするのはとても大変な…」「大変な、とか悪

いイメージ止めてくださいよサクラさん！」ユイリィが顔を真っ赤にしながら、またしても懇願するように彼女の右手を掴む。

「そりゃあ…そうですけど…」「自分で言わないでよお！」ベイリーフが顔を赤くして下を向きかけたが、首を振って鼻の（らしき場所）上の熱さをはらい、サーナイトの方に首を上げた。彼女の言う事は明らかに図星、彼自身メガニウムには色々と付き合わされたことも多いが、彼の中でそれとこれとは全く別物だ。「でも…僕は別にそれが全部嫌いじゃないです。ユイリィのそういう点も受け入れます、ダメだなんておかしいですよ！他人にくぎを刺されてちゃ普通にだって…」「…まったくもう、あなたも先週の雪原の件で仲良くなっちゃったの？」サクラは困り果てたように口を反論する。「あの時だって彼女を抱きかかえて帰ってくるなんてあなたが死んだらどうするのよ？私は最初にあなたにも言ったわよね、仲良くはほどほどにしなさいって」「じゃあ…サクラさんは僕に……」リーヒュンは声のトーンを落として彼女に迫る。次に彼女が言うであろう言葉に、これまでにない嫌な予感がした。「…そう、あなたが感じているものその通りよ、あの時あなたはユイリィを見捨てでも戻るべきだった、それが運命ならばそれも仕方ないのよ、あなたの使命はフローラを助ける事、同乗で彼女と運命を共にすることじゃないの」

次の1秒間、このベイリーフの意識の原子炉から思わず感情の制御棒が脱落した。サクラが言ったことが放ったエネルギーが彼の意識の水晶を貫き、その奥の原子炉を鋭く、そして冷たく刺激する。「アンタは…アンタは…それでも…」彼は声を震わせて彼女の両腕にツルを巻きつけ、両前足で彼女の胴体を掴みかかりそうになった。

「……他人の命を預かる…素質あんのかって…」

「ち、違うよリーヒュン、これが本当なんだって！あの時悪いのはなにもかもウチなの！だからしないでよそんな事…」ユイリィがリ

ーヒュンの持ちあがりそうになった前足を彼女の右前足の爪で押さえつけた。「ユイリィには責任ないって…この問題は俺と…」

サクラの意識の水晶の中に強烈な衝撃が飛び込む。感情がむき出しになった彼に対する驚きではない。彼の言った言葉に含まれるものが、宇宙を伝わってこのサーナイトの水晶を揺らし、水晶内の液体を激しく揺さぶった。「……素質は分からないわ。私だって完璧な人(ポケモン)ではないのだから。それでも…」サクラは茫然としたまま思わず空を見上げる。夏真っ盛りの南半球の青空の中には自分の姿が見えるはずがないが、明るいはずの夏空が奇妙なほど低く、自分に覆いかぶさってくるような重く見えた。「……あなたを傷つけたのなら…本当にごめんなさい。でも、それでも私は…あなた達の未来は…上手くやることに全てがかかっている、そう信じてるの…」「……ですよね…」メガニウムはつらそうな表情でサーナイトの方を見る。「……すいませんサクラさん……」ベイリーフはツルを解き、上がりかけた前足を完全に地面に下ろす。上官という言葉は当てはまりづらいが、少なくとも先輩である彼女に掴みかかったこと、それに対する後悔と罪悪感が大波となって彼の水晶を揺さぶり、自分の幼稚さにひどく恥ずかしさと情けなさを覚えた。「…本当にすいません。全部…自分のせいだという事は分かってます」「大丈夫よ……私にだって非はあるの…」

「あ、あの…お取込み中かもしれませんけど…」3匹の背後で声がする。やってきたのはバストークとピトムニクだった。「俺たちの方はピトムと一緒に、隣のプロテウス地区までちょっとぶらついてくるんですが…問題ありませんよね？」

「え、ええ、もちろん問題はないわよ。あなたの方こそ順調に進んでるの？」「順調という言葉かは知らんですけど、努力している事

には努力しています。何せ…」メリープは声をやや下げながらも得意げに尻尾をクイクイと動かす。「……俺らが成功することによってポケモン達の未来に、何かしら明るい物をもたらすのですから、音を上げてなんかいられん、そういうことですよ」

「そう、よろしく頼むわね」サクラは意識の中に入り込んだ先程の冷気を振り払い、何とか表情を明るくする。先程の件でさすがこのメリープとプラスルには心配をかけたくない。これはチーム本来の意図とは関係ない、この状況を作ったであろう“記録”とそれに関わる数匹にしか関係ないから、他を巻き込もうとは到底思えない。

「もちろんですよサクラさん！な、ピトム？」「え、はい！そりゃあそうですよね…」バストークの左前足で軽く頭を撫でられたピトムニクは一応明るい返事をしておいたが、内心このメリープが何を考えているかは彼女にもわからなかった。

「そうだわ、一緒に行くんだったら……」サーナイトはベイリーフとメガニウムの方にちらっと視線を向ける。「リーヒュンとユイリィも一緒に連れて行っても差し支えないわよね？たまには外の人間のいない風景も見せてあげたいし」「いやいや！問題はありませんよ！」「ピトムも全然ＯＫだよ！」プラスルは嬉しそうに、右手を2匹の方に振る。

「なら、決まりね…」サクラは2匹の方の向き直る。「たまには2匹も行ってきてみれば？この所はアクタウといいアルマトイといいロンドンといい、人間の市街地ばかり見てきているわよね？」

「え、はい…ですけど俺たちの訓練は……」リーヒュンの戸惑ったような表情に、サクラは彼にゆっくり歩み寄って彼の聴覚器官に口を近づける。「…無理をする必要はないわ、精神というものの調子には波があるから、たまには別の事をしてみるのもいい事よ」「はあ…」ベイリーフは納得いかなそうな顔をしながらも頷く。そういうサーナイトの表情に何処か寂しそうなものがあったからだ。先ほどの件と関連がる、そして今日それができない原因がやはり自分にあるのか？久しぶりにポケモン文明そのままを見に行けるはずの

彼の気分はあまり良い物ではなかった。

「あなたもよユイリィ、あなたも多少考えてみるのもいいかもしれないわね」彼女は続いてメガニウムにも視線を移す。「か、考えるって何を…」「そういう事よ。仲良くしちゃいけないわけじゃないけど、その距離っていうのを具体的に掴んでほしいの。ＯＫ？」彼女にそっと近寄り、左手の先端を彼女の頭にある２本の雄蕊の付け根あたりに当てるサクラの声はベイリーフの時よりやや厳しかった。「…考えてみます…いこっかリーヒュン…」「う、うん…」２匹はお互い気乗りしないまま、保護靴のひもをツルで締め始めた。

一行を見送るサクラ、彼女はベイリーフとメガニウムの後姿に申し訳なさを覚えた。自分たちの使命とはいえ、１８歳と２０歳という感情も豊かでさまざまな好奇心を抱いて進むことができる年代で、その能力が意識と思考の集中が必要であるが故に、深い交流さえ許せないとは。その運命を与えてしまったのが他ならぬ自分のようだ。リーヒュンにしろユイリィにしろ、この“使命”において消耗する精神力は並大抵ではない。それを考えると必要のないときは少しでも気を晴らさせてやりたかったが、場合によってはお互いの能力を削りあうことにもなる。どんなに辛くても、ここは自分の娘・息子同然の２匹に感じる本能的優しさを何とか抑えるしかない、それが…それこそが、２匹を最善の宝庫へと導く道であるのだから、彼女の意識の水晶から呼び起こされる感覚が彼女のそう伝えている。

「サクラさん！！」彼女の後方でまたしても声がし、サクラは思考の中から自分の意識を引き戻す。やってきたのはレオとガトル。「ん？どうしたの？」彼女は優しく問いかける。彼らの前でさっきの事を引きずっているわけにはいかない。「シンシアに飲ませるのってたしか…オレンでしたよね？…あいつったらまだ調子が悪くて…」

種族のわりに随分と大きいコリンクが居住区のある方を右前足で示す。「そーゆー言い方はないでしょうに。だからレオはいつまでたっても…」パチリスの右手がコリンクの左前脚の付け根を軽くたたく。「ああ？だからそれはもう聞き飽きたってのに…」

「はいはい、ケンカしないの、オレンの木はこっちじゃなくて西側の通用ゲート側にあるから、私が一緒に行くわよ…」彼女は僅かに笑顔を浮かべてガトル達と歩き出す。

そんなこんなで、突如理由をつけられて今日の訓練は終わってしまった。一行は普段よく行く森の中の開けた草むらを通り抜け、国連施設敷地の裏口を通り抜け（バストークが懐からＩＣカードを引っ張り出し、それを分厚い金属製のドアの隅にある機械の挿入口らしき場所に差し込んで傍のスイッチを押すと、扉は自動で開いた）、最寄といっても歩いて2時間ほどかかるプロテウス地区へと向かう。国連施設の北東側にある敷地を出て間もなく森は開け、前方は広大な草原地帯、まさしくポケモンの文明が根付く風景そのままであった。普段だったら一気にテンションが上がっている、憂鬱なことも日々感じる自分に対するコンプレックスも消え去ってしまう、そのはずなのに今日のユイリィはまったく元気が出ない。彼女の意識の水晶の中では、先ほどサクラから言われたあの言葉が何度も何度も反響し、周囲の青空さえ重くのしかかってくるような感じがした。メガニウムは隣にいるリーヒュンの方を、何度も何度も表情を窺うように覗き込む。ベイリーフの方も何かを考え込むように、正面を見据えたままその目線は風景とは全く違う方向を向いている。

突如としてこんな風について行くように言われたのは自分のせいである可能性が高い、おそらくは自分がサクラの精神的な“何か”を乱し、これ以上訓練をできなくしてしまったのではないか、いつしかそう言った後悔が彼の体を重くしていた。確かにあのサーナイ

トが言った“あの時ユイリィを見捨ててもよかった”というセリフは許せない、という言葉では表現できないほどの感情が湧き出てきた事を記憶しているし、今でもそう思ってはいるが、それに対して自分は瞬間的に感情の制御を失ってしまった。前々から周囲に言われている自分の“無鉄砲さ”を抑えきることができなかった、自分の幼さに実に嫌気がさしてきた。

そんな雰囲気を真っ先に感じ取ったのはピトムニクである。このプラスルには、なんとなく2匹が今一つ元気がないのをすぐに察したに違いない。通用口のある高台から坂を下り始めてほどなく、彼女はユイリィの花びらが生えた首元にぴょこんと飛び付く。「ねえねえユイリィ」「ん、どうしたのピトム?」「サクラさんとあの時ケンカとかしたでしょ?」「え、そうかな…どうして?」「だってそういう顔してるもん、見れば書いてあるのよ」「け、ケンカって程じゃないけど…」メガニウムは何とかごまかそうと笑顔を取り繕ったが、それがピトムニクには通用しないということは薄々勘付いていた。

このプラスルの意識の水晶は極めて薄くかつ強靭にできており、周囲のエネルギーを自分の中に取り込んだり、それを的確に観察したりするのが得意なタイプの、あらゆる点で典型例といえる。感覚ではなく普通の観念的言葉に直せば、お人よしなうえ仲間想いなしっかり者、といったところだ。もちろんユイリィにも彼女の性格は自分の持つ能力、すなわち意識のエネルギーを感じ取り、その先を読むという賜物のフィルターを通さなくてもそれは分かるが、この能力があるからこそ各々の性格を見た目以上に深く、正しく解釈することができる。

「確かに…ケンカしたほどの物ではないみたいだけどさ、でも何かなあ、こう…そういう顔してる。リーヒュンともしゃべんないし」「そ、そうかな…んと…」またも的確に掴まれてしまったメガニウムは、無理やりな笑顔を作って隣のベイリーフにのしかかるように飛び付いた。「ほらほら、いつものウチと変わんないよ！ね、リーヒュン？」「うぎゅぇ…どういう転換の速さだよ？」突如首元にかかった重みに、リーヒュンは左に倒れこみそうになったが、咄嗟に左足双方を踏ん張っていたために、これまでにない彼女ののしかかり（飛び掛かり？）で押しつぶされずに済んだ。「大丈夫大丈夫！ウチは転換速いからあんまり気にもしないしね！」「うーん、差っすがユイといったところかな。昔っから落ち込んだり立ち直ったり忙しいけど、リカバリー早いのよねえ…」メガニウムの首にしがみついたままピトムニクは楽しそうだ。「は、早い？」「そうそう、本当にそうだよユイは。それはそれで面白いし、明るくていいなとはおもけど」リーヒュンの方にプラスルは軽く右手を動かしながら、ちょっとからかい気味な声で説明する。「でしょでしょ！そういう性格でウチ良かったよ、うん。よーし記念にリーヒュンにむぎゅむぎゅっとしてあげる♪」「おいおいおい！俺はそういうつも…うげっ？！」メガニウムはベイリーフに問答無用で体重をさらにかけ、ベイリーフは彼女の体重に倒れこみかけた。「ん～やっぱリーヒュンの体はさあ、むにむにしてて気持ちいいよ、うん！このままあたしの枕になっちゃうね！」「だ、だからそう言うつもりじゃ…（聞いてないか…）」はっきり言って彼女の“むぎゅむぎゅ”は暑苦しいが、彼自身、そんな彼女の明るい振る舞いと声を聞いていると励まされるような気がした。そのおかげで、少しだけ先ほどから意識の水晶に奇妙な液体となって溜まりこんでいたもやもやしたものが遠ざかったような気がする。「な、なんたってお前はミーが頭にいる事を気にしないんでしゅかね？」「いいじゃん別に！ちゃーんと掴まってれば落ちる事は無いの、うん」「そりゃそうでしゅけど…」ユイリィの頭の雄蕊に掴まっているロズリンが、揺れる彼女の

頭の上に必死にしがみついた。

とはいえ、このメガニウムとて先ほどのサクラとのいざこざを完全に忘れてしまったわけではない。しばらく歩いて彼女はベイリーフから重心を戻し、大きく息をついて４本の雄蕊をきれいに直す。「これでいいのかなあ？そう思うのはいつもの事だけどね」「あ？ユイちゃん、サクラさんともめたのか？」ユイリィの呟きに少し先を歩いていたバストークが一向に振り返る。「まあ、そんな感じでしょうね隊長」メガニウムが軽くため息をつき、ツルで束ねた方の雄蕊をきれいに丸め直す。「サクラさんと…リーヒュンとあんまり仲良くしないで、て言われるんです。気を散らすからってね」「ううっ…その点でじゃあ俺には難しいなあ…」メリープは少し困ったような表情を浮かべ、全身のモフモフ毛をすくめる。サクラたちの言う2匹の“能力”に関しては、信じないとまでは言わないが、イマイチ彼には理解しづらい事であった。「んもう！隊長もそう固いこと言わないで何でもいいから言ってあげてよお…」「うんん、いいのいいのピトム。これは単にウチが勝手に愚痴ってるだけだし…」バストークの背中に飛び付くピトムニクの背中を、ユイリィは軽くツルで突く。彼女は少しさみしそうな声で続ける。「まあ…あたしにも問題があると言えば問題あるんですけどね…物事長続きしないし、飽きっぽいし、これがウチの性格、だなんてやっぱ笑ってちゃいけないのかな…」

「ん、そうだぜピトム！考えてる、考えてるんだ今……」「それ考える事…」「俺にはそうだ」急かすようなプラスルの言動に焦ったバストークは歩く最中に左前足を地面に強く一回踏みつけ、何度も首を振って必死に考えている。ともかく何かを言ってあげること、自分が言える先輩としての低減、それをバストーク・ラルシア・ホルストというメリープの経験という膨大な記録集の中から探す。そして思いついた言葉は、まさしくバストーク・ホルストらしい言

葉だった。「まあ、友人同士の仲なんて自分と相手で決める事だ。誰かに干渉されて距離感を考えるなんて、それじゃ家同士の政略縁組と同じだろうが、ユイなら隣の兄ちゃんの気持ちをしっかり把握しながら距離を決めていく、それだけだぜ」

「さっすが隊長、言ってくれますね！」「あ、はい…そういうんでいいんですか？」「もちろん、助言からその先どう道を作るかは受けて次第だし、どういう道ができても誰にも批判する権利はねえんだ」バストークは尻尾を軽く振り、リーヒュンの右前足にも自分の左前足の拳を軽く打ち込む。「しっかりやれ兄貴…いや嬢ちゃんより年下だっけか…ともかく、男（オス）ってもんは必要な時にメリハリがなきゃ女（メス）になったほうがましって奴だぞ」「え…？？…はい…努力はします」ベイリーフは恥ずかしそうに顔を赤らめ、思わずメガニウムの方を見た。「な、なあ、俺的には別にこの距離感でいいんじゃないかって思うんだけど。それでいいよな？距離感なんてい人それぞれ、誰かに決められた道は息苦しいしな」「もっちろん！この位の方がちょうどいいもんね！そうだよ、うん」ユイリィは笑顔全開で彼の方にまたしてもすり寄る。「サクラさんじゃなくたって距離感は自分で決めちゃうよね！そんじゃあ…嬉しいから…」「だから、それはしなくて…まあいいや、やってもいいけど倒れるほどやんなよ」「やったやった！そんじゃあ遠慮なく！」「うげっ？！やっぱやめろ…重い、重いっての…」「あはは！もうやめないよ、てか止められないよ、うん」

「ったく、さっすがこの2匹って所だ。サクラさんともめたところで変わりそうにないなこりゃ」「それがいいとこなんだよね2匹の」バストークとピトムニクはそんな2匹とシェイミを、呆れと関心が入り混じった表情で見つめ、メリープの方は尻尾を軽く動かして前方に視線を戻す。やはりあの2匹はこうでなくちゃ話にならない、どういう能力とやらを持っているか彼には見当がつかなかったが、

目の前に広がる道が遠くに見えているプロテウス地区に続くように、いずれかは自分にも理解できるような形で2匹は示してくれる、そう思った。

「ねえねえピトム、ウチらどこへ向かってるの？」「うーん？ピトムも聞いて…隊長、今日どこ行くんですか？」「ほーら、あそこだあそこ、町の中心部じゃねえけどこの辺りじゃ有名な探検隊連盟の拠点だぜ…」バストークは藍色の右前足で一行の右手前方、人間でいう竪穴式住居そっくりの居住用の建物の中にある、（文明としては）立派にできた建物を示す。どうやら設備自体は半地下のようで、左手にある幅5メートルくらいという広めの岸部がある河川の土手が、これまた高さ5，6メーターはあることからもそれが伺える。とすると派手に突き出している構造物は飾りに違いない。

「探検隊かあ…ピトム達と業種が似てるようで遠い存在ですね…」「探検隊なあ、俺の故郷にもあったよ…」「リーヒュンのとこってどこ所属？」「それは知らないけどさ…聞いたことある話だと、北の方から来てるとか言ってたしな…」リーヒュンが懐かしそうにその建物を見つめる。探検隊というのは救助隊とほぼ同じ目的と意義を持つポケモン達の組織である。遭難者の救出、遺失物品の捜索、犯罪者の確保以外にも、測量や調査における同行や森林、荒野といった（ポケモン達にとって）未開地域の調査などまで幅広く行う。連盟というものがあることにはあるが、もちろん人間の国際機関のように高度に組織化・システム化されたものではなく、そういう広く知られた名前を名乗る同業者たちの話し合いの場であり、エメリアには1つしかないが、世界には無数に存在し続けているで「あろう」ものだ。

「そっか…まあ来たと言ってもこういう組織はどこにでもあるから詳しくは知らないけど、ありがたい存在だよね。実質無償奉仕なわけだし」「うん…金取ってるなんて聞いたことないよ俺も」

「やっぱウチらには自分たちの文明が一番だよね！何となく落ち着くよ、うん」ユイリィは楽しそうに辺りを見回している。このメガニウムには、この辺りの全ての光景がどこかで出会ったような、自分がそこを通り過ぎたことのあるような景色に見え、なぜか心が沸き立つのを感じる。舗装されていない道、そのわきに生える草や点々と並ぶ居住用の建物、そこを行きかうポケモン達、今の人類社会の大半が画一化とグローバル化、華々しい技術の発展と経済成長によって完全に失ってしまいつつ（発展・成長すること自体は素晴らしい事であるが）ある暖かな社会を、彼女は吸い込む息、肌に感じる風、意識の流れてゆく宇宙から触れることのできるエネルギーで存分に感じることができた。

「そりゃあ、俺たちが同じ文明の生き物だからさ、お、それで…今日は入口の足型調査はいらん、って言ってたな」バストークが一行の先頭を切って地面に置かれている足型チェック用の木の格子を軽く飛び越える。それから４匹は、建物の地下…すなわちこの施設の本体の区画…へと向かう丸太製のハシゴ（４本足種族でもおりやすいように、一段一段に深めのくぼみが入っている）を降り、地下２階に当たる階層にある場所へと降りて行った。

戸惑い（後書き）

結局また中途半端な結末に…

なるべく速度を上げなくては……

探検隊の施設

一行を地下2階で迎えてくれたのは、ピンクと白の美しい毛並み、水風船のような体の上には細長い耳、頭には丸い桃色の毛、かなり大きなエメラルド色の瞳、プクリン種族の男と、そのそばにいる黒を基調に腹の部分が派手派手しい色遣いをし、頭の上には音符のような形をした突起、尻尾の尾羽もタクトのような形をした鳥、ペラップ種族の男であった。「やあ、よく来たね僕のトモダチ、僕の手紙もちゃんと届くようになったのは進歩進歩♪」「あ、あのなあ、お前くらい歳になったらそんなの一般常識のレベルだろうが。ったくこのバカはいつになったら……」バストークが素っ頓狂な声を上げるプクリンを見下したように首を振り、左前足をプクリンの前に軽く突き出す。「んまあとにかく、こうしてアンタが言うからまた来たんですぜ、1年ぶりくらいにな」「あ、あの隊長…お知り合いで？」「知り合いっつうかなんて言うか……ちょっとした情報手段、て奴だ。何せ…」「あ、あなたですね、親方様に対して相変わらずの…」「だって友達なんだからいいじゃん。ね、僕のトモダチ？」「ま、まあそういう事だとアンタが思っているんだったら幸せもんだ。そんで親方さんとその従者っぽいチビ、俺らは…前から言ってる通り、エメリア自治協会直属の関係者なんだよこっちは。とはいってもこっちが客だからな。こっちのプラスルのが俺と同僚の…」「ピトムニク・ソレイユ・マルセイエーズです！隊長、ピトムの事は同僚じゃなくて娘じゃなかったの？」「あ、あのな、前はそう言ったがこういう場においてそういうのを言うもんじゃねえだろうが…」元気よく前に飛び出したプラスルをメリープは左前足で押さえつける。

「それで…後ろにいる連中が俺の新しい…新しくもねえか5か月経ったし、とにかく俺と同じように自治協会直属の奴らだ」バストー

クが後ろにいる2匹に振り返り、軽く顔を正面にいるプクリンとペラップの方に向ける。

「リーヒュン・バイリング・グリーズです」「というよりは自分たちは国…うぎゅっ?!」「はいはい違うの、違うんだよね、うん。そんでもってあたしがユイリィ・ランタン・プレミドール。バストークさんと今同じ部隊なんですよね」ベイリーフをのしかかるように押しのけ、元気よく右前足を上げるメガニウム。その直後、一歩前に出ると同時にベイリーフの方に顔を近づけた。「嘘も方便っていうでしょ！人間と一緒なんて言ったら怪しまれるから、隊長はそう言ってんの、少しは先を読んでよね…」「あ、ああ…でもばれた方がますますだろ…」「それでも仕方ないのよ、今日はそういう気分ってことにすればいいよね、うん。オッケ?」「…そっか、ンならそういう事にするっきゃないな…」リーヒュンはイマイチ釈然としないまでも頷く。彼にとって所属を偽ってまで関係をやりくりするのはたまらない違和感を覚えるものだ、関係を作るんだったら最初から堂々と腹を割るべき、そういう信念がまたしても表面に出かかってしまった。

「ミーの事はどうなってるんでしゅかねえ?」ユイリィの頭の上にいるロズリンが彼女の頭の先端にまで乗り出す。「んもう、だから知ってるって…それでもってこの子があたしのお友達、ていうのもなんですけど、それに近い存在で、ロズリン・ダブルスリップっていうんです」メガニウムがツルで頭の上のシェイミを指し示す。「そんでもって下にいるこいつが悪さをしないようにミーが…みみっ?!」さらに前に乗り出したロズリンは勢い余ってメガニウムの頭から前へと転げ落ちそうになり、彼女がどうにか2本のツルで受け止める。「まったくもう、ここが戦場とか絶壁とかだったら死んでるよアンタは…」「へえ～なんだか楽しそうなコンビだねえ♪」プクリンが興味深そうにエメラルド色の大きな瞳を動かし、2匹の方に近寄る。このプクリン（おそらく男（オス）だろう）にとっても、夏空色の瞳に4本の雄蕊を持つメガニウム種族は見たことがないらしい。

そして幻種族と呼ばれるシェイミを連れていることがますます目に留まったようだ。「楽しい楽しい、そうだよ！うん。でもリーヒュンと一緒だともう最高に楽しいよ！うんうん！」ユイリィは楽しそうにリーヒュンにまたしても体重をかけてすり寄る。「うぐえっ？！だからユイリィが嬉しいのはわかったからさ、ちょっと重い…はあ…」彼は左前足を踏ん張って彼女の体重を何とか支えながら、プクリン達の方に視線を向ける。「す、すいません。彼女はそういう性格なもんで…」

「3匹そろって楽しそうだね、僕もそうやって…ん？」プクリンの足元を通り抜け、2匹の前に現れた小さなポケモンがいた。限りなく黒に近い紺色の体、首元にはさらに濃い色のマフラーのような毛、頭にある炎のようなフサフサ、4本足の先端には靴のような赤色の部分、濃い藍色をした瞳、ゾロア種族のようだ。リーヒュンとユイリィの大柄な体と長い首の先端にある頭部を、興味深そうに見上げている。「あれ？お客さんの前に出てきたもいいから足元じゃなくて正面から出てこないとねフェノール、これからちょっとこの人達と用事があるからしばらくは僕の部屋にいてくれるかな？」プクリンは足元を見下ろし、そっとゾロアを抱え上げる。「そ、それでは親方様…彼は部屋に戻して…」「うん、お願いね」プクリンはペラップにゾロアを受け渡し、ペラップは翼を使ってゾロアを頭に抱えるように背中に乗せた。「ほら、親方様に迷惑をかけるなっていつも言ってるだろ…」「おいら迷惑かけちゃなんかないぞ…」ふと振り向いたゾロアの目線がベイリーフと合った。その直後、ベイリーフの意識下に不思議なもの、その目線から感じる奇妙な繋がりのようなものを感じる。それに気づいたようにわずかに笑顔を見せるゾロア、それに対して彼はわずかにほほ元を緩めてしまった。彼が感じたのは不思議な親近感そのもの、お互いがお互いの事を前から知っていたような、そんな感覚だ。リーヒュンはおもわずユイリィの方に振り向く。彼女の方も少し笑顔を作り、彼の方に大きくうなずいた。このメガニウムにはベイリーフ以上に分かる物があった。あ

のゾロアは何かが自分たちと?がっている、ひょっとしたら自分たちの未来にも、その存在が関わってくるかもしれない。意識の水晶が無数に浮かぶ宇宙の中からそのエネルギーを強く感じた。

「ありゃりゃ…ごめんねえ、僕のトモダチぃ、フェノールにはお客さんの時は出てくるなって言ってるのにね。それはそれで…」プクリンが周囲を見回し、軽く両手をこすりあわせる。「バストークの要件は昼ごはんの後にしよっか。結構長い話になるだろうから」

だが、昼食の後にあのプクリン（本名は結局聞かずじまいだった）との部屋に入れたのはバストークとピトムニクだけであって、2匹の方は、「悪いけど…お前らとはまた事象の違う話だ、むやみに聞くとお前らが動揺してサクラさんに迷惑かけるからな」と入れてもらえず、その間町を適当にぶらついてていい、と言われた。とはいっても2匹は行くあてがあるわけでもないといった感じで、この施設の地下一階へと上がってきたところだ。

「別に俺は何を言われたって覚悟はついてんのにさ……面倒くさい世の中だよ」「何言ってんのリーヒュン、色々と一番びっくらぽんするのはリーヒュンなんだよいつも」「び、びっくりって…」「うん、いつも何かあると皆の中で一番そういう顔してる」いや俺は普通にリアクションを取ってるだけで反応てか、自然な受け止めってか…」「あはは！そういう単純な受け止めがリーヒュンっぽくていいんだけどね！やばい笑えてきた…」ユイリィは変なツボに入ってしまったらしく、爆笑しながらリーヒュンにすり寄ってくる。「って何がおかしいんだよ…」「あ、あは…ごめんごめん、いやそれにしてもここってホント気持ちいい場所だよね、うん。なんていうか、

こう…広々してとも言えるし、ほのぼのした明るい感じもあるし、それでいて町全体を支えてるって感じのオーラも出てるし」ベイリーフに少し嫌そうな表情をされてツルで体を引き離されたメガニウム、彼女は勢い半分で話題を違う方向に持って行った。「…いいなあこの場所、ウチも住むんだったら、とか考えるんだけどさあ、あの機械半分の場所も慣れちゃうと離れづらいんだよね」

「そっか…俺はやっぱポケモンが自分達で作ったほうが性に合うって感じだよ。なんかこう…人間の作る場所っていうのは…」ベイリーフは辺りを見回しながら、普段自分がいる国連の研究機関兼国連統合軍・アメリカ軍共同基地の施設の感触を思い浮かべる。人一倍感覚の鋭くできている彼であるがゆえ、その風景を思い出すと同時にそこにある物体に感じる不思議な感触が手に取るように伝わってくる。この数か月間目にし、鶴屋前足で触れた物はといえば…「…なんかこう、作った側の形ってのが…ないんだよな。…なんか金のために作った、作ってやったんだから文句言うな、とかさ、または使用者側に文句つけられたくないから、て表情で慎重に作った、とかそういう感じしかしない…」

「なるほど、リーヒュンもそう思うんだね、うん。ウチもなんとなくそういう感じはするの、これも能力のうちだよ…」「うん、そう思った」ユイリィもやはりそういう物を感じ取る力を持っている、リーヒュンはそう思った。

彼も小さい頃から自分の身の回りにある物が自分の方を見つめ、手を差し伸べてくるような不思議な感じを抱いていたし、少し物心がついてからは、それは自分の考えすぎか道徳的な意味で作り手の気持ちというのものがあるんだろうな、と感じていたのだ。それが今のこの状況に?がっているとは当時思いもしなかったが、今その能力を知って、そして人間世界にも触れてようやく理解できた。

そして…自分の首から下げている容器…あのハイドルの地底湖の水に入った小さな翡翠(ひすい)からも…常に伝わってくる。彼女が、妹が、フ

ローラ・エルピー・グリーズが。

「そう言えばさ…」彼は気が付いたかのように彼女の方を見る。「ユイリィは昔からここに住んでるんだろ?」「うん、ここじゃなくてここの隣の施設だけどね」

ベイリーフが1，2歩足を動かす。「この辺とか来たことあるの?」「来たことあるって?」「ほら…たまには遊びに来るとかさ」「うんん、そういう事は無かった」メガニウムの表情がいくらか寂しそうになる。「ていうか、あの施設から出たことすらないんだよウチ。今日初めてリーヒュンと一緒にここに来たんだもん」「って…それホントか?」彼の意識の水晶で、前からわずかに感じていたものが突如として大きくなり始める。そう、底抜けに明るい彼女の背負ったもの、ユイリィ・ランタン・プレミドールがその心中にしまい込んだものは相当の物なのではないかという不審が。

そんな表情にも彼女はさらりと答える。「もちろん…ウチがウソつくようなポケモンには見えないでしょ?」「あ、ああ…そりゃ確かにそうだけど…」ベイリーフは驚いたようにメガニウムの顔を覗き込んだ。その目にはウソをついているように見えないし、持ち前の直感もそうとは言っていない。「色々と理由があってさあ…」“びっくらぽん”とした彼を横目に、彼女はツルで自分の束ねた雄蕊を丸め直し、ゆっくりと数歩歩く。「サクラさんね、外に遊び行くとね、ウチの集中が乱れるからとか言って一度も出してくれなかったんだよ」「それ…マジかよ?」「うん、ウチ全部ほんとだよ、うん」彼女はツルで首の花びらをいじる。あんまり思い出したくないと言えば思い出したくないが、これに関しては言っても支障はない。「…何となく外の景色は浮かぶんだけどね、それにあの中でうち楽しかったし」

「……」リーヒュンには返答にしようがなかった。覚悟はしていたが、まさかそこまで深刻だったとは、本当にユイリィは外に出たことがなかった、そしてあの国連という人間の機関に、あの

生命工学とかいう意味不明な人間の技術の研究ために作られた、まるで文明生物がもつ感情や温かみを感じさせないあそこにずっと暮らしてきた。それは半年前までは（ポケモン達にとってはそう長くない時間だが）ソーラ南部の一角でぬくぬくと暮らしてきた彼、リーヒュン・バイリング・グリーズには到底理解の範疇に入れることのできないものである。

リーヒュンは返答に詰まった。意識下の中で次に伝えるべき言葉を一生懸命考えてみたが、ユイリィの言ったことがあまりにも大きすぎ、その言霊（この表現、いかにも原始的なアミニズム思想過ぎだろうか？）の放つエネルギーに思考の半分くらいを奪われてしまっている、すなわち言葉が思い浮かばない状態だ。

彼はようやくそれを見つけ、重い口をやっとこさ開いた。彼女の目線や表情から憚られる雰囲気でもないが、それでも女相手（メス）だといつもの勢いのよさ（悪く言うと無鉄砲さ）は出てこない。「あ、あのさユイリィ…？」「ん？どうしたの？」「いや…今度、一回俺の…」

そんな彼の背中に小さな何かが飛び乗る。「んっ…？？」その感触に気が付いたベイリーフが思わず首を右まわして自分の短い尻尾の方を見た。しかしこの感覚は間違いない、誰が乗っかっているのか、何となくそう感じる。

彼の背中にいた物、それは先ほどのゾロア種族だった。「おいら、また遊びに来てやったぞ」「って、さっき会ったばっかだろ？んまあそれは別に構わない話だけどさ…」「お前ら、残りの2匹に追い出されたんだろ？」

「お、追い出されたって…そこまでは無いけどね…」メガニウムが苦笑を浮かべながらも、何の抵抗もなくゾロアに近寄りツルで軽く持ち上げる。ゾロアの方は遠慮もなく続けた。「それで、親方さんは話が長くなるって言ってたよな、ということはお前ら両方と

も待ってるんだよな？」「うん…そう言われてみればそうだ、な？」「うん…確かにね」リーヒュンとユイリィは思わず顔を見合わせる。

「そんなら決まりだ」そのゾロアはリーヒュンの背中から地面に飛び降り、得意そうな表情で一角を右前足で示す。「おいら、分け合ってここの施設に入ったんだけど、おいらも親方さんみたいになってみたい。だからお前に頼みごとするぞ」「な、何を…？」

ベイリーフの怪訝そうな表情に、ゾロアはますます得意げな表情をする。「おいらも親方並みに強くなる、だからおいらとバトルして強くするんだ。できるよな？」

「え、バトル？そうこなくっちゃ！リーヒュンはこういうさあ、いきなり展開大好き男だもんね、もちろんやるよね？」「お前の方、なかなかノリのいい女だな」「でっしょー！！あはは！君も最高に楽しい子だと思うよ、うん」ベイリーフは取り残すようにユイリィとそのゾロアが勝手にテンションを上げてゆく。メガニウムはゾロアに歩み寄ってツルで彼を持ち上げて早くも仲よしこよしだ。それはそれでこの子にとっていい事であるに違いない、ベイリーフの思考の中でそれはあっさり決まった。「そう来たら俺もやんなくちゃな、よし、君に一丁付き合うか」

「やっぱりそう来たな、お前ら2匹に感謝するぞ。そうだ…おいらの名前まだ言ってないな、フェノール・ヒドロキシ・モルバーリットルって言うんだ」そのゾロア種族、フェノールはメガニウムの背中に飛び乗る。「そっか！そんでそんでね、ウチはユイリィ・ランタン・プレミドールって言うんだよ！ずっとよろしくだね！うん」ユイリィはツルで背中にいるゾロアの頭の毛をツルでくしゃにくしゃにする。「それでもって、俺がリーヒュン・バイリング・グリーズて言うんだ。まあ、今日しかいないとは思うけどよろしくな」リーヒュンの方も彼女に近寄り、彼女の背中にいるフェノールの背中にツルをそっと伸ばしたが、自分の言っていることがウソになるかもしれないという直感を、ツルの先が彼に届いたときに感じた。何だかこのゾロアとは一回限りの付き合いにはならないかもしれない、

悪くは全然思わなかったが不思議な感情が意識の水晶に芽生えるのを感じとる。そうとも知らずフェノールの方はベイリーフの方に視線を向け、少し笑顔を作った。「リーヒュン…種族の名前に似てる。変わった名前だな」「ホント、そうだよね！変わった名前だよね、うん！」

「なっ？！……」ベイリーフの顔が赤くなった。確かに自分の名前…似ている。妹のフローラは全然違うのに。

3匹は地上へと続く垂直の梯子とは別に、地下2階に当たるフロア（地下1階が所属する探検隊用スペースなのに対し、2階はプクリンの弟子にあたる面々が利用するスペースである）の窓際にある小さな通用口から外に出た。通用口の外は、先ほど道の左手に見えた高い土手の下にあった河川敷、川自体の横幅は10メートル前後で広さはそこそこといった感じだが、それに比べて河川敷は左右とも10メートル近くはある。ともにところどころに葦（アシ）が群生し、崖のように切り立った天然の堤防の付近には多くの広葉樹が並木のように生えているが、ポケモン達の住居があるようには見えない。上流側に200メートルほど離れた場所には、欄干の無い木製の橋が（川に洗われる橋桁は石積み）広い河川を横切るようにかかっている。「ここでするの？」「そうだぞ」「こういうとこってさ、普通に種族寄っては暮らしてるんじゃないのか？」「だよねえ、ねえフェノール、ここらへんに暮らしてるポケモン達っていない？」「一匹もいないぞ」「一匹も…」ユイリィは思わず辺りを見回す。確かにここは、彼女の知っている通常の河川敷とは異なる空気を持っているように感じられた。明らかに自然の物とは思えない石の積み方、川の中にダムの如く積まれた木材のドーム、河川敷の岩場に立てかけられた木の骨組みと葉からできた文明の建物らしき物体の残骸。し

かしそこには活気も生活の息吹も感じられない。何年も雨風に使われることなくさらされた廃線鉄道のように。

メガニウムは背中のゾロアをそっとツルで触る。「フェノールは昔からここに住んでる？」「そうだぞ」ゾロアはこくりと頷く。「ずっと前からこの辺りは…こうだった？」「いや…2年くらい前には…こうだったな」彼は彼女の花びらの上あたりにしがみつき、同じように周囲を見た。「…おいらが分かっているときにはいっぱいいたのに…だんだん減ってきて荒れ地になったんだぞ…理由は分かんないけどな」

「そっか…そうだよね…」ユイリィはため息をつき、足元の石ころをツルで遠くに跳ね飛ばす。やはりここもそうだ、こんな人間の社会から一番遠く離れているも同然のこの地域にさえ人口が減りつつある、午後の少しだけ傾いた日差しに照らされる河川がその現状を一層強く訴えかけるように感じ取れた。ポケモン達の異変は深刻だ、お前たちはそれに対処するために存在するのだろう、と。

3匹がたどりついたのは、そんな河川敷のほぼ中央に位置する代わり映えもしない場所だ。ただし周囲に大きな石ころや木材が転がっていないので、ポケモン達から見れば何となく広場のようにも見える。「よっし、この辺りだ、お前ら2匹にもちょうど動きのいい広さだな」フェノールはメガニウムの背中からぴょこんと飛び降りる。「ここでおいらとバトルするんだぞ、最初は…リーヒュン、お前からだからな」

「おいおい本気か……俺がやんのかよ？」リーヒュンがびっくりしたように、フェノールの方を見てしまう。「そうだぞ、なんか問題あんのか？」ゾロアは何の遠慮もなく首を縦に振る。「別にやってもいいんだけどさ…その…まあいいや」「そうこなくっちゃ！一発間はお願いね、て言うか思いっきり面白いところ見せてよね！」ユ

イリィは早くも興味深そうに眼を丸めて2匹を観戦する気いっぱいだ。「いや…失敗する気はないよ…」

ベイリーフはツルで自分の前足の保護靴を外し始めた。自分の能力が正面に出てしまって彼を怖がらせるかもしれない、しかし、おそらくはこのゾロアがその程度の事で諦めるような奴ではないだろう、彼のカンが意識の水晶の水をそうやって波立たせていた。「よし、やってやる」「さっすが種族そっくり本名！ノリがいいんだな！」

「そうそう！リーヒュンはそういうのへの突っ込みはうまいんだよね、うん」「だ、だからなあ…（てか聞かないタイプだよな…ああ言う奴は）…というより、何でユイリィまで一緒に…」ベイリーフがまたしても恥ずかしそうに顔を赤らめ、ツルで首元の葉っぱをいじった。やっぱり自分の本名は変だ、何かは知らないが不思議な恥ずかしさを覚える。「おし、そんじゃあ始めるぞ」「うん、先行はフェノールの方からでいいよ」リーヒュンはフェノールの前に立ち、軽く息を吸って意識を目の前の空間に集中させる。今回はちびっ子とやりあうんだからそんなに力む必要もない、戦闘というものがここまで落ち着いてできたらいいのに、意識の水晶のふちにふとそんな考えが浮かんだような気がした。

　なかなかこのゾロアは子供のわりには戦闘能力がある、ベイリーフはそう思った。彼の放つ“はっぱカッター”一発一発を、あのちびっ子は巧みに左右に交わして接近してくる。「なあフェノール、君は一体…うっっとぉ…バトルを習ったんだい？」「それ…ううん…親方さんからだぞ」ゾロアはベイリーフの放った葉っぱを上に飛び越えた。「親方さん…あのプクリンの事からか。あの人はさ、なかなか…うっつ…強いのか？」「もちろんだぞ、おいらがあの人から習うほどだからな…」「そっか…それじゃフェノールはいい師匠がいるってことか…良かったな」しかし、リーヒュンは飛び付いて

きたフェノールを、ツルで軽く後ろにいとも簡単に払い落とす。これもやはり自分の能力のせいだろうか、あのちびっ子がどのように問いつき、どのように仕掛けてくるのかが何となく見え、自分でも無意識のうちに体を後ろに下げて間合いを作る、または前に踏み込んで一気にかかる、どちらかを行っていた。すなわち自分でもこのチビをいじめているつもりはないのだが、無意識に感覚に従っている限りこのゾロアは、ベイリーフを傷つけるはおろか飛び付く事さえできないのである。

それでもフェノール・モルバーリットルは諦めようともしない。彼はまたしても弾き飛ばされながらも後転をうつように地面に着地し、右前足を踏み鳴らした。「まだまだ、おいらがこの程度で負けてるわけにはいかないんだ！」「そうか、そんなら兄ちゃんの方も負けてられんな！」ベイリーフも数歩後ろに下がり、再び息を吸って前方のゾロアに意識を合わせる。その一方で彼は、目の前にいるこのちびっ子に、何処か自分に似ているという感情を抱きはじめている事に気付いていた。

「何やってるんでしゅかそこのチビ、兄ちゃんに勝つなんて１００年早いでしゅよ」ユイリィの頭の上にいたロズリンが突如野次とも挑発ともしれぬ言葉を吐く。「あ、あのねえアンタ！部外にいる人(ポケモン)が何言ってんの！？」メガニウムが頭の上の黄色い雄蕊に掴まるシェイミの背中をツルで殴りつけるが、時すでに遅し、それ完全に聞きつけたゾロアの方がメガニウムの足元に食って掛かる。「お前、そんな場所にいつからいるんだ？」「昔からいましゅけどねえ…」シェイミの方が相変わらず小馬鹿にしたような態度、メガニウムが何とかして状況を取り繕おうとする。「ご、ごめん、ごめんねフェノール！こいつはね、ウチのお友達で…」「ロズリン・ダブルスリップでしゅ」ロズリンがユイリィの頭から乗り出そうとし、彼女が再びシェイミをツルで軽く支える。さっきも同じようにした頭から落下しそうになったのに、このチビは学ぶというレベルに達してい

ないらしい。「ほらほら…アンタまた下に落ちるでしょうに…」「お前と違ってそこ位は分かってやってましゅよ…ほらね」シェイミがメガニウムの2本の雄蕊の付け根を前足でつかんでゆすり、メガニウムの方はその不快感に慌ててその右前足をツルで振り払おうとした。「ちょ、ちょま…もう止めてよ気持ち悪いじゃん！…」

「そんな事より、お前どう見ても生意気すぎるぞ……」ユイリィの右前足元にいるフェノールが、見上げるようにしてロズリンのほうを右前足で示す。「あの兄ちゃんの前においらお前の事をぶっ倒す」「何を言ってるんでしゅかねえ？」そういうシェイミの方も、メガニウムの背中を伝って地面に飛び降りてゾロアの方に向き直る。ユイリィもちょっと驚いたように首をフェノールの方に下げた。「ん？どうしてこの子を先に…」「チビは一匹で十分なんだぞ」

「それは…本気で言ってるのかアンタ？そこまで情勢はひどいのか？」「うん…僕もあまり信じたくはないけど…」プクリンの“私用オフィス”にあたる部屋、バストークは、プクリンが差し出した書類を呆然と眺めていた。エメリア各地の現況を所属する各探検隊から集めたものらしいが、このメリープが想像した以上に自体は悪い。それも途中からは、目も覆いたくなるような情報が無数に書き記されている。「それで…ここにある移転、というのは、人間連中に追い出された、て事でいいんだな」「そうだよ…」プクリンは桃色の右手で、彼の持っている用紙の一角を指さす。そこにはあるソーラ北部の集落が“環境悪化で移動”と示されているが、バストーク・ホルストにはそれが何を示すか、あまりありがたいとは言えない経験のせいで理解できてしまう。「南部の諸島を訪れていたはずの代表者が帰って来なくなった後辺りの事か…」「うん…」プクリンは

重苦しくうなずく。バストークにとってその先はさらに聞きづらい事であるのだが。これに関しては国連施設の人間連中から聞いたことがある。「少なくない数が…抵抗して殺されたんだろ？」「…そうらしいんだ…」

フランスの最大手原子力企業が使用済み核燃料というエネルギーを取り出すために使った物質の残りを安全に放棄するための“処理施設”というものを作ろうとした。もちろんポケモン達は反対する、環境アセスメントをしっかりする、すなわち自然は守ると言っても反対するのが彼らにとって当然だ。環境を守る以前に、そのような物体を神聖な自然という宇宙に設置すること自体反対なのだから。武器を持って人間たちをシャットアウトし始めた彼らにしびれを切らした人類側は、民間軍事会社の航空部隊を利用し、ソーラ南部の諸島からという偽の手紙を作成、ソーラ南端沖におびき出して代表以下集落の有力者を“排除”した。有力者を失って混乱する集落をよそに、フランス政府と企業連合は国連統合軍の支援を受けてついに広大な敷地を確保したのである。自分の能力と武器で反撃するものも、頑強にその場に留まって無言の抗議をする者も少なくなかったが、統合軍を出した以上その結果は明白だ。

その件に対して彼は何も返すことができなかった、憤りは感じたが、その時にはどうしようもない。あの話を警備の兵士に聞いたとき、その男が言っていた最後の言葉が、彼の耳の奥、聴覚神経に嫌というほどこびりついている。「所詮アニミズムの野蛮文明科学的説明をしても意味はない、人間の中にだって科学技術を犬畜生のように扱う環境右翼どもがうじゃうじゃいるんだからな。ま、いずれにせよ土着宗教の戯言が主の審判を受けたと考えりゃいいんだよ、主が忌まわしき文明生物もどきに神の刻印を授けられるわけがない」

メリープは首を振り左後ろ足を地面に蹴りつけてそれを振り払っ

た。こんなところで感情を高ぶらせてはいけない、どっちにしろプクリンのあの表情と資料の多さからして、もっとひどい事象がまだまだあるに違いない。「こ、これが…全部…」「落ち着けピトトム、お前だって知ってるだろ?」容姿を見ながら声を震わすピトトムニクの背中に自分の電球付き尻尾を回しながら、彼は静かに口を開く。このプラスルに見せるにはあまりにもむごすぎる現実、しかし仕方がない、そういう経験をしながら自分の道を見つけるのも人生のうち、彼はそう思っていた。「で、こっちにあるのは…」

結局、ロズリンとフェノールはケンカというよりじゃれ合いとなってしまい、気が付けば2匹は河川の浅瀬で水を掛け合っている状態になっていた。「さっすがやる事にタイプがタイプだけありましゅねえ?」「お前みたいなおとぼけシェイミの方がタイプと不釣り合いなだけだぞ…」リーヒュンとユイリィはその2匹の様子をぼんやりと眺めている。「ほらほら、2匹ともあんま深い所入っちゃだめだよ、うん」「お前と比べたらミーの方が落ちないでしゅよ」「おい、あのユイリィっていう女、そんなに変わってるのか?」「そうでしゅね、変わってるというより変態でしゅよ」「まあ、そう見えなくもないけどな」

「ま、また…ねえロズリン!またあたしに関して変なこと言わないの!」メガニウムがツルのを軽く振って2匹を呼ぶが、シェイミとゾロアはお構いなしだ。「とにかく、ユイリィがそう言うとおり、あんまりふざけて流されたりすんなよ」「大丈夫でしゅよ」ベイリーフもツルを軽く振り上げると同時に、メガニウムの方が気恥ずかしそうにつぶやきた。

「あーあ…ウチって小っちゃい子になめられる位の実力しかないのかなあ?」「ん?どうかしたか?」リーヒュンがユイリィの方に首を向ける。彼女の表情には、喜びと寂しさが入り混じったようなあ

いまいなものが浮かんでいた。「う、うんん、別に大したことじゃないんだけどね…」メガニウムは自分の首の一番下にある花びらを丸め、そこについた土をツルで払う。「朝の頃にさ…サクラさん言ってたじゃん?」「ん?…ああ、あれか…」ベイリーフはやや視線を下に向け、足元の小石を軽く右前足で転がす。

今朝の事だったかあれは、自分たちがサクラとちょっとしたことでもめたことを。彼の意識の水晶の中では、まだあのサーナイトが言った言葉が空間の中で反響して止むところを知らない。“……”

「リーヒュンは……ホントはどう思ってる?」「何を?」「うちらってさあ…距離があったほうがいいのかな?」「うん…」彼女も彼と同様に表情をわずかに下に俯かせていた。はっきり言ってこんな事は言いたくない、ユイリィにとってリーヒュンは掛け値なしの友達であり、パートナーである、彼女自身はそう思いたかった。しかしその一方で、自分の妹のため、もしくは今こうして一緒にいる仲間や他ならぬ自分のために、あそこまで苦しい訓練と努力をこなしている彼に、ちょくちょく迷惑をかけてしまうのも他ならぬ自分であると彼女自身そう痛感することも多い。「俺の方は別に…」「え?…」「俺はこれで問題ないと思うよ。距離感なんてお互いで決めりゃいいんだから、さっき言っただろ?」「そ、そうだよね、そうだよ!…うん、だけど…」メガニウムは川で水をかけ合うシェイミとゾロアの方に視線を移す。遊ぶ2匹、そしてその周囲に広がる集落の跡地を見ていると、自分たちの置かれている状況が一層痛々しく、そして確信をもって彼女の意識の水晶とその奥の原子炉に圧力をかけてくる。今まであちらこちらで見てきたポケモン文明の行く末に対する不安が、今まで気にもしなかったものに対して自分の無力さ、情けなさで体の節々が痛むような気がする。自分は隣にいるベイリーフに甘え、ちょっかいをだし、足を引っ張り、この間は危うく死にそうになったのだから。「ウチもね…国連のこのチームの中にいてこうしている限り…いつまでもリーヒュンと遊び半分じゃいられない、て思っちゃうんだよね。うん、ホントに」「…だよな」

ベイリーフは数歩前に出て、同じように河川敷を軽く見まわす。夏真っ盛りの午後の風が吹き抜けていくが、この風景を見ているとその風がなぜか虚しく、哀愁を含んだものに感じられる。これはそばにいる彼女も感じているのだろう。

2匹はしばらく押し黙った。お互いが何を感じているのかを気にすると、これは容易に回答を出せる問題ではなかった。

ユイリィが先に口を開く。「だから…どうすればいいんだろうちら？」「……うーん…どうする、か…」「もし…リーヒュンがそれでもいいよ、て言ってくれたら…」彼女はかすかに呟く。「…少し距離を置いてみてもいいかもしれない…でも…ウチ心配だよ」「…何がだよユイリィ？」「うん…リーヒュンは一匹でも大丈夫？何かあっても…一匹で苦しんだり、そういうことしない？」「…俺が…そうかな…」リーヒュンは数歩後ろに下がり、彼女のそばに寄る。「だってさ…フローラの事だって…ウチがいなかったらブレイブ位しか知らないと思うよ」「……」彼は返答しようがない。こんな事を言われるのは初めてだったから。「それにこの先は…もっとつらい事ばっかりかもしれない、リーヒュンにとって耐えられないことかもしれないのに…それでもし苦しそうな顔してたら…ウチは一体……」

「ユイリィ……そうか…」彼はすまなそうに目線を空の方にそらす。彼女が自分を心配してくれているという事実が痛いほど身にしみる、彼女はどうしようもなく向こう見ずなうえに、そのくせ冷静に考えることが苦手な自分を見抜き、どうすればいいのかを真剣に考えてくれている、何と返事すれば彼女を安心させられる？

リーヒュン・バイリング・グリーズは隣に寄り添う彼女の意識を思い浮かべ、そこから感じ取れるものに全ての感覚を集中させた。他人の感情を読み取り、的確にそれを認識する、今こそそれが必要な時だが……やはりよくは分からない……言うことは決まっている、でもそれを決断するために必要な事が…見えない。

彼はじれったさに右前足を地面に叩きつけそうになった。なぜここまで自分は役立たずなのか、なぜ自分は彼女に迷惑をかけるだけなのか、中央アジアへ向かう航空機の中で彼女に言われた事、それはやはり必要なことだというのに…どうして？

ベイリーフは諦めた。というより、言うことが決まっている以上、躊躇しているのにこれ以上耐えられなかったのだ。そしてかけるべき言葉は、今の彼に2つ以上は存在しない。

「大丈夫だよユイリィ、俺と君はこの距離がちょうどいいと思う」

「そ、それって…」メガニウムのほっぺが少しだけ赤みを帯びる。

「そういう事だよ…サクラさんに何て言われようと…俺はこのままでいいと思うからさ」彼はメガニウムの右前足に自分の左前足をそっと乗せる。「…迷惑も心配も…そればっかかけてごめんな。この先も…2匹で頑張ろう」

「…リーヒュン…そうだよね…良かったよ、うん」彼女は顔を赤らめ、そのまま彼の首元に自分の頭部をこすり付ける。彼女の意識の水晶の中に彼の温もりがじんわりと広がり、周囲の風によってその心地よさが体中に入ってくるような気がした。「これからも…この先もよろしくね…一緒に道を歩いていこうね…」「そうだな…」ベイリーフはじんわりと彼女の重みがかかった状態でわずかに頷く。いつの間にか彼女を振り払おうとしない自分がいる事に気付いた。

「いや…ごめんね…こんな事まで話そうとは思ってなかったんだけど…」「……いや、いい…とにかく真実がこれほどなら、な…」バストークの声は枯れかかっていた、というのは涙ではない。彼にとってこれくらいの現実など何度も見た、慣れていると言えば聞こえが悪いが、あまりにも多くの現実を見過ぎてもう諦めてしまっていたのだ。仮に涙が出るタイプだったとしても、おそらく涙を

流すほどにはならないだろう、彼はそう思った。「……ピトムたちは…どうすれば…」「…そういう問題じゃない、これはお前の責任じゃないんだ」「でも…何もしないなんて…」恐怖と悲しみに震えながらメリープの体のモフモフにしがみつくピトムニク。彼女にとってやはりこの現実は受け入れがたいものだ。「…ピトムはもう十分に頑張ってる、何かをこの世界にしてるんだぜ?」「でも…この人達(ポケモン)を助けることができなかったんだよ?…その人たちは…」プラスルは半泣きになりながらメリープのモフモフを一層強く握りしめる。この資料はピトムニク・マルセイエーズにとっては耐えがたい真実、彼女が信ずる、もしくは信じてきた“信頼と平和”という甘いものに突きつけられた判決だ。彼女の考えが甘いという事は無い、それを夢見、それを信じて自分の人生を歩むことは素晴らしいことかもしれない、しかしそれに対する現実、足に地をつけるべき場所はどこかに存在するのであって、それは時としてあまりにも無残なことすらある。

「お前も子供じゃねえんだろピトム?夢みたいなこと言ってんじゃ…」「夢とかじゃないんですよ!私はいつでも…だから耐えられない…」「…それは知ってる!それは知ってるんだ!ピトムの性格はよく知ってる…だがなあ…」しがみついてくるピトムニクに、バストークは半分おどつきながらも反論する。彼女を泣かせるのは彼の性分からしてできるはずがないが、今回はどうするべきか…迷った挙句にメリープは決めた。「…頼む、理解してくれこれを。道は現実という地面の上にしかできねえ、理想も大事だが理想という空に道を敷いても落っこちるだけなんだ…」

「そんなこと言われたって!!ピトムに隊長はいつも自分の信ずる道を行け…」プラスルは反論しようとして口ごもる。

バストークの言っていることがウソでないという事実に今気づいた。別に彼が自分の事を娘同然にかわいがってくれるからではない、

自分の考え方とやり方を認めてくれるからでもない、しかし今重要なのは自分の感情の問題ではないという事を。この件で一番心を痛めているのは、この父親同然のメリープなのだ、自分が彼の思考を妨害するようなことがあってはならない、と。

それからわずかに、消え入りそうにつぶやいた。「……ですよね…」

「すまんピトム、お前の気持ちも考えずこんな事に巻き込んで…」バストークが藍色の右前足でピトムニクの左足をさすった。「いいえ…大丈夫ですよ隊長…」「ああ…本当に悪いな、俺はお前に迷惑しか書けることができない…」彼はわずかに顔を赤らめ、それから震える前足をもう一度資料の方に伸ばす。この2枚が一番ひどい、片方はソーラ最北部の海岸に、ニュークリアの方から大量のポケモンの遺体が漂着しているという話、ニュークリアはアメリカ領だ、これは完全にアメリカ政府か企業が…またしても…自分たちに抵抗する集落を“排除”したに違いない。

もう一つは、エメリア四陸地の西部、サーマル地区東海岸周辺の物だ。なんとサーマル東地域周辺の全ての探検隊・救助隊連盟の施設と連絡が取れなくなったとのことだった。サーマルは中国領であり、中国らしい豪快な開発が（アメリカやEUのエメリア開発も同じだが）行われ、彼等は人民解放軍主力部隊を直接集落に送り込んで撃退するという戦争同然の行為を行っているという話もある。加えてあの地域はもともと集落間の対立が根強い、中国という国家の侵入によって対立と混乱は泥沼化していたのだ。その地域で起こった出来事、これが良い意味であるはずがない。おそらくは中国軍の手によって組織ごと破壊させられたか、良くても制圧されて機能を奪われたのだ。

「親方さん、アンタはどう思うよ?ここまで異常事態が起こっていて、ちょっくら調査の一つや二つをしようとかそろそろ思わねえか?」「……うーん…」「…いや、アンタが悪いと言ってるんじゃないんだ俺は…ただし…」表情を一層暗くするプクリンに対し、バストークが前言撤回のために慌てて左前足を振った。この親方（すなわち、この施設の責任者）がこの事態に誰よりも心痛めているのは十分にわかる。「俺たちの文明は今でも次の命の幸せと、今を力強く生きる決意でここにいるはずだ。俺たちのような組織はそういう理想を伝えるためにもある、所詮は伝説とか道徳程度の物だが、どちらにせよ今が…それを果たす役目だと俺は思う」「そうだよ…自分たちの世界は自分たちで守る…ただ…」「どうした?」「すでにそのために多くの探検隊・救助隊が犠牲になっている。これ以上喪ったら、僕らのこの世界を自分たちで守りきれなくなる」プクリンは暗い表情でうつむく。「……そうだよな…」

既に１０万年…人類の文明史よりはるかに長い…にわたって自然という神から授かった知識と能力を使い、自分たちが自然の流れという輪廻を一周し終えるときに幸せと思えるような生活システムを、自分たちの文明は作ってきたつもりだ、そして今、自分たちは自然の運命に従い、新しい生命に文明のバトンを渡すときに差し掛かっているとされている。信仰を含んだ想像上の理想論であったが、彼等の文明は本能でも思考でもそれを信じている、それをわが子に教え、その子その子に語り継ぎ、何百世代とそう来ていた。

しかしそれが変化しようとしている、しかも悪い方向に。次に文明を継ぐ予定の生物が、結果として人間…彼等の学問的分類ではホモ・サピエンス種族というらしいが…という猿の子孫にあたる生物、好奇心もが知識欲も物質的欲も強く、自分の生き残るため、自分の利益の為ならどう種族の命すら惜しまず、多少の肌の色、外見、思

想、価値観、文化の違いだけで殺し合い奪い合い、科学技術という名のもとにこの世界のあらゆる場所に調査と資源、それが生む金という利益を求め、生命という自然…ポケモンにとっては神同然…が作り出したかけがえの無い存在を都合よく作り変える、そういう生物である。

そして今、ポケモンの文明はその生物種によってその文明の循環の過程を破壊され、人間の文明によって恐ろしい結果へと発展しようとしている。それが何なのかはまだ分からないが、いずれにせよいい結果ではないのは明らかである。それから逃げ出すのは極めて簡単だ。

しかし…だからこそ、調査し、それを見極めなければならない。何も知らない間にこの歴史から消滅させられるよりは、何が起こっているのかを自分たちで確かめ、それがもたらす不幸からできる限り多くの同胞をすくい、その非を記録して残されたすべての世代へと伝えてゆく、それが必要なのだ。

バストーク・ラルシア・ホルストは決断し、右前足の拳を左前足にぶち込む。自分の行動の真実は彼には伝えられないが、これで彼の決意はカザフスタンの同志と出会った時以上に深まった。「…だからこそ、この件を俺は調べる。手始めはソーラ北部に行ってみるとするぜ…」

「え、それっていつ行くんですか…？」ピトムニクがびっくりしたように顔を上げ、メリープの方を見る。彼はプラスルにはっきりと言った。「明日だ、北部には２週間もあれば行けるわな。明日出て３０日あれば帰れるだろ？」

４匹の元にバストークとピトムニクが戻ってきたのはそれから2時間ほどたってからだった。「すまんなお前ら、ダラダラと話を長くとっちまって」「うんん！これ位どうってことないですよ隊長！うちらとっても楽しかったし、ね？」ユイリィがリーヒュンの頭を軽くツルで小突き、水に横になった部分から体を起こす。２匹もいつの間にかロズリンとフェノールと一緒に川辺で水浴び状態になっていた。「う、うん…だけど…」ベイリーフも体を起こしたが、シェイミとじゃれ合った状態のゾロアの方にちらりと視線を向ける。という事は自分たちはこれで帰ることになる、これ以上フェノールと一緒にいる事は出来ない。「ごめんなフェノール……俺らはもう帰んなきゃなんない…まあそんなに遠くには住んでないから…」「そっか！そんじゃあいつでも遊びに来れるな！」「まあね、ここから歩いて…」そこまで言いかけた彼は、思わず言葉を詰まらせてしまった。

そう、自分たちのいる場所は人間の施設、ここから3時間しか離れていないとはいえ、そこに横たわる巨大な人間という壁が存在する。河川の向こう側の岸の背後にそびえる高台、その先端には金属質の物体が不釣り合いに突き出している。あれが…そう、自分たちの存在する世界、いつの間にか自分たちがやってきてしまった世界なのだ。

「まあ、明日も来ると言えば来るけどねここに。私たちにもちょっとすることができちゃってさ」そんなベイリーフの表情に気付いたピトムニクがゾロアの方に歩み寄った。「ホントか？！」「ンまあ…そうなったみたいだな…」リーヒュンはフェノールをツルで水の中から抱き上げる。理由は知らないが明日もここに来れる、このゾ

ロアがいる事に不思議な安心感のようなものを感じた。「そんじゃ…明日も来るからな」

「ところで…」ユイリィがメリープの方に向き直る。「どうして明日も行くんですか？」「ま、まあ事情があってな…」バストークはプラスルの方に向き直り、お互いで大きくうなずいた。「明日から…ソーラ北部の方まで行ってくる、まあ3，4週間は開けることになるわな」

一方、ブレイブは足がまだ完全には治っていない（松葉づえは外していたが、あと数日間は動かさないように、という国連施設の人間たちの指示だった）テルルができない分、同じように中央アジアでの行動で凍傷にはなったものの、すでに回復したチェギョンとのトレーニングに勤しんでいる。そのそばでグラシデアとロックオンがまたしてもカザフスタンでやった時と同じような訓練をしている。

4匹がいるのは米空軍と統合空軍が共同利用している駐機場のはずれだ。元々配備されている機体がそれほど多くないため、時々統合軍のF／A－22Aやユーロファイター・タイフーンがスクランブル発進するか、どちらかの勢力の輸送機が着陸するかであって、駐機場は本来のキャパシティに対してかなり持て余している。まあだからこそいても文句は言われないのであって、チェギョン達が全開で飛び回り、ブレイブたちが全力で動け回る場所といったらここしかない、とブースターが勝手に決めたのだった。

しかし、ここの所のチルタリスは今一つ元気がない、ブレイブ・エスコーツ・クレイバーの予想は見事に的中した。「おら、どうしたチェギョン?!仕掛けてから反転が遅いじゃねえか?いつもだったらもっと鋭く切り込んでくるはずじゃ…」「う、うんうん、やってるわよ!こう見えても私は努力してんの!無理言わないでよお…」チルタリスは表情を歪め、必死になって彼の後ろに回り込む。ひこうタイプだから後ろを取るのはめっぽう早い。「こ、この……いっけっ!」旋回半径をかなり小さくとっているので、正面を捉えた時にはブースターの至近距離である。彼女は何とか“りゅうのはどう”を打ち込んだが、彼はそのまま前に前転下のと一気に体向きを切り返し、“かえんほうしゃ”ですかさず反撃する。「うあっち?!…こ、このまんま終われないわよ…」なんでこんなに体の言う事を聞かない、足元にやけどしそうなほどの熱さを覚えながら、チェギョン・カリワザキは自分の体を殴りつけたい発作にかられる。ただでさえ体の調子が振るわないのは理解できるが、ここまで違和感を覚えたのは初めてだった。いくら羽ばたいて速度を上げ、尾羽を微妙に調整して舵を切ろうとは思っても体がついてこない、いつもならモコモコ翼で鋭く切り裂ける空気が今日は妙に重く、粘り気を持っているようだ。

チルタリスは何とかして上にループをうち、体をロールさせて再びブースターの背後を取る。今度こそ当てて見せる、彼女の意識の水晶に奥にある原子炉からでた強大な熱が伝わった。「決めるわよ!」彼女はそのまま体の正面に自分の体内から出したエネルギーを集め、体勢を再度を整える。これが“ゴットバード”の形であることを瞬時に見抜いたブレイブは、瞬時に後方に宙を打って間合いをとり、体の重心下げて体内の発熱反応を促進させた。いける、チルタリスがそう来るのならこっちも大技で仕留めてやる、戦闘になると体内の熱によって副腎髄質が活性化し、アドレナリンが大量分泌されて異様なテンションになる彼の性格は今回も健在だ。「こんの

っ！！」「ええい！？」２匹が仕掛けたのはほぼ同時だ、ブレイブが４本足で地面を蹴って飛び上がり、チルタリスが一気に速力を上げて突っ込んだ。

　が、ブースターの方はまたしてもかかっていない、いけると思うほど感じていたあの熱気が突如として消え去り、彼に残されたのは空中に飛び跳ねて突っ込んでいるというふわりとした感覚だけ。「んだってんだこい…っ？！」気づいた時にはチルタリスはほぼ真正面である。「こんならっ！」彼女は一瞬勝ち誇ったような快感を覚え、そのまま突撃する体勢に入る。

　しかしブレイブがその程度で喰らってしまうはずがない、その１，２秒間の間に彼はとっさに判断して前に体を丸め、前転をするように彼女の下をほんの数センチ差で通り抜ける。一瞬決まるかと思った展開はあっさり逆転する。「うっそっ？！」スピードに乗り過ぎたチェギョンはそのまま地面に高速で突っ込んでゆく。「っ？！」ブースターが航空機用に格別丈夫に作られたコンクリートに着地した刹那、チルタリスはグラシデアをかすめ（モココは間一髪で左に飛びのく）、文字通り地面に“墜落”した。航空機と違って爆発炎上する事は無いが、凄まじい衝撃に彼女の体は高い場所から落ちた木の箱が割れて飛び散るようにバウンドし、数十メートルは滑ってぺちゃんこになる。その様子を３００メートル以上離れたところで、スクランブル発進用格納庫の警備に当たっていたアメリカ軍の兵士がちらりと振り返ったが、特に驚く様子もなく警備を続けている。

「な、何今の？…ひいっ！」グラシデアは一瞬飛び込んできたその物体の方を振り返りそうになったが、自分はロックオンと向き合っているという事実からして脇目を振るわけにはいかない。その隙にもムクバードの強烈な“つばめがえし”を仕掛けに正面から突っ込んでくる。「大丈夫だ止まんな！俺が保障する」かろうじて彼の一

撃を後ろに飛びのいて交わしたモココは、ふと生まれたその物体に対する心配を振り払い、前方を飛び越えて後ろに回り込んでゆくムクバードの方に体の向きを変えた。彼は大きめの旋回半径を取っている、次来るとしたら“ブレイブバード”に違いない、自分は…とここ前思った時、彼女の意識に突然躊躇が芽生える。本当に突然だった。

自分は彼に対して本気で仕掛けてもいいのだろうか、自分の方が彼より相性の上で大変有利、だからこそもし当ててしまったら…自分でも信じがたい感情だった。（ど、どうすればいいんだろ私……やっていいの…？）体が少し固まっている、彼女の意識の水晶の水が不意に変質し、体の動きを妨げているようだ。彼女の不安は彼の上空から接近してくる姿が大きくなればなるほど高まってゆく。

しかしこのモココとて、そこらの人間に飼い慣らされた犬や猫でなければ、人間の曲芸のためにおとなしくさせられたトラでもヒグマでもない。目の前に接近してくる脅威があれば、彼女の生命体・文明としての戦闘本能は瞬時に彼女の体を動かす。モココは瞬時に足で地面を蹴って正面に飛び掛かり、咄嗟に“かみなり”を仕掛けていた。体内から発せさせられた電気エネルギーが空中を矢のように飛び、その電源御なっているモココの意識は（でんきタイプは放電するとこうなることが多い）そのエネルギーの増幅で一瞬霞む。

が、やはり先ほどの戸惑いがタイミングのずれを生み、それが一撃の失敗に?がる。彼女の電気エネルギーは至近距離でムクバードをかすめはしたが、決定打にならずに後方に飛び去り、静電気となって消滅した。「あっ?!」「やっべっ!?」彼は彼女の一撃が当たらなかったのを見て咄嗟に飛行コースを変えようと体を左にひねったが、あまりにも速度が出過ぎていてもはや間に合わない。強力なエネルギーがたまった右の翼が彼女の腹を直撃し、彼女は後方に吹き飛ばされ、衝撃で意識が瞬間的に混濁しながらもなんとか両足で着地したが、先ほどの一撃に全身の力が入らず、そのまま後ろに倒れこんだ。

「おいグラシ！」ロックオンはそのまま正面に着地、右足を突き出してそこを軸に回転して倒れているグラシデアの方に再度飛び寄る。「うう…はあ…すいません…」グラシデアはロックオンの姿を見るなり、何とか上半身だけを起こす。「いや、俺が悪いんだ！お前に非はねえ、だから…大丈夫か…」両翼でモココの首から背中にかけての後ろを持ち上げる（普通の鳥類では思いもつかないだろう、これもポケモンゆえだ）ムクバードの表情は明らかに動揺している。彼の意識の水晶は今、これまでにない自分対する嫌悪で背筋が冷たくなるほど冷やされていた。抱えている翼が震え、彼女の表情に視界が合わない。

そんな彼の震える目線を覗き込んだモココは、鈍いながら強い痛みが走る丸い（太っているのではない。種族の問題であってむしろ彼女は痩せている方だ）腹元を右手で軽くさする。「い、いえ…大丈夫です。これくらいならバストークともやった事ありますし」モココは気合を入れるように体を震わせ、自分の2本足の支持力でどうにか立ち上がる。少しだけめまいのように視界が揺れ、前に倒れこみそうになったが、すぐにそれも遠ざかって足元の感覚がはっきりし、両足と体を支える背骨にも力が戻ってくるのを感じた。

「…そうか…本当にもう…いいのか？」「は、はい…大丈夫です…」ロックオンのつくづく打ちひしがれたような表情に、グラシデアは安心させるように彼の右の翼を左手で優しく触る。「心配をかけてすいません。でも…これ位でへたばれませんから」「そっか…それなら良かったんだ。それでも…」触ってくれたことに彼は思わず顔を赤らめたが、すぐにそれは彼女に対する申し訳なさで消え去る。彼はすまなそうな顔をしながらも、不意に彼女の両腕を翼で握る。

「……俺ももう少し考えんといけねえな、グラシはおっさんから預かったも同然だ、むやみに怪我させるわけにはいかねえんだよ」「そ、そんな…私バストークに心配なんかどうせ…」「おっさんがそ

んな訳ねえじゃんか…」ふてくされた声を出すモココに、ムクバードはやや語気を強めて両でをさらに強く握る。「そいつがどんなに嫌でも自分の家族を投げ捨てる奴なんかまんざらいるもんじゃない、グラシは嫌いかもしれんが、多少はおっさんを気遣ってやれって」「んなこと言われたってあの人は…」「少しでいい、それでいい、な？」「ま、まあ…そんなら…」彼女は少し口ごもりながらも曖昧に頷く。説教されるのは嫌いだが、彼に言われると不思議な説得感がある、彼女はそう思えて奇妙な恥ずかしさを覚えてしまった。

「…分かってる、おっさんがお前を逢いすぎるせいでグラシは寂しい。その分は…」彼はいきなり彼女を引き寄せる。「俺が埋めてやる…任せな」

「っん？！？！」顔に火がついたように恥ずかしい、グラシデアは慌てて振り払おうとしたが手遅れ、ロックオンの懐に見事に引き寄せられてしまった。信じられないのと同時に耐えがたい恥ずかしさに足が震える。目の前の視界がぼやけ、彼の温もりがあまりにも熱すぎるように思えた。

しかししばらくすると、彼女のそう言った緊張や気恥ずかしさが不思議と薄らいでくる。どうしてかは分からないが、彼女の意識がその温もりを求めたかのようにその温かさに寄り添い始めたようだった。

「うぶぶっ！！？？」「どうし…おげっ？？！」その様子を振り返ったブレイブとテルルは思わず自分の唾液にむせ返りそうになる。「え、一体どうしたのブレイブ？」「バカっ！ああいうのはみるんじゃねえミオカ！」「な、なん…うぶっ！」テルルの背中の上で興味深そうに見つめているミオカを、ブレイブが左前足で彼女の頭を押し下げる。「何して…何してんの２匹？」「と、とにかく…ロックオンの方を呼んでやれ」「アンタがやりなさいよ」「こういうと

ころに男(オス)が介入したらそれこそやべえよ！」ブースターが２匹の方をなるべく見ないように視線を下げたままグレイシアの右前足を自分の左前足で小突く。これはまずい、バストークに見つかったら自分もテルルも２匹も恐らくは、彼の直感はそう鋭くささやく。「…おっさんには言うなよ、とにかく適当な理由をつけて引き離してやれって！」「て、適当な…ってブレイブの方こそ…」「いいから早くしろ！間合いを調整するのも関係のうちだ」「そ、そんなら…ミオカ、ちょっと降りて！！」「うん…」テルルは顔が熱くなるほどの気恥ずかしさを振り払い、イーブイを背中から降ろして２匹の方に駆け寄る。左前足がテープで固定されているのでやや引きずるような歩き方だったが、彼女の気配に気づいたムクバードが慌ててモココを両翼から引き離した。「どうしたテルル？お、俺は何もしてねえぞ？」

「そ、そんならそれいいです、それで…」もはやグレイシアには自分がグラシデアを引き離そうとしているのか、それともチェギョンの様態を案じて呼びに行ったのかそれを考える冷静さを失っていた。「ね、ねえねえグラシ！何してるのかは知らないけどさ、ちょっと状況がまずい！」「じ、状況？…！そっか、チェギョンさんがさ、さ、さっきの…」モココは顔を赤らめたままもごつく。さっきまでの温もりに感覚も思考もマヒしたままだったが、テルルの明らかに動揺した（その意味は彼女には理解できない）表情でその意識の霧は瞬時に吹っ飛ぶ。「そんじゃあやばいんじゃん！」「そ、そうなの、状況悪いの！とにかく…」「何だとおい！？どうしてそれを先に言わないんだテルリン！？」焦ったように首を縦に振り、前足をぎすもすさせるテルルに真っ先に反応したのはロックオンの方だ。「え、あの…」「チェギョン、待ってろ！」ムクバードはいきなり２匹の間を飛び上がり、１０メートルも離れていないチェギョンの方に飛び寄った。

「な、何よあの男(オス)…大丈夫グラシ…？」その始終を呆然と見た後、

何とか冷静さを取り戻したテルルがグラシデアに尋ねる。「うん…特に何かあったわけじゃないけど…」モココはロックオンの方をちらりと見、またしても顔を赤らめた。「なんなんだろうあの人？…もしかして私の…」「そ、それはないと思うよ、私約束する！ああいうバカ男ってのは殴らないと直らないから」「そうなの？」「うんうん、そういうもんなのよ男っていうのは、好きでもないくせにああいう態度しちゃう」「な、なるほどね…」テルルは日本人のようなあいまいな作り笑いを浮かべ、前足をこすりあわせる。やっぱり女の子相手だと彼女はよくしゃべるし性格もよくなる、男嫌いには理由はなくもないのだが。

「まあブレイブはいつまでたっても直らないけど…それより…」グラシデアが彼女の耳にそっと口を近づける。「さっきテルリンて言われたよね？」「は？！何それ…」「あの人そう言ってたよ、確かテルルのことテルリンだって…」「そ、それって…」グレイシアは思わずムクバードの方を見る。彼に対する腹立たしさが突如として湧いてきた。何という呼び方、気楽にそんな名前で呼ばれるとは。

彼女は顔を気恥しさに真っ赤にし、悔しさに右前足を踏み鳴らした。「ああーもう！何言ってんのよあの変態バカ！2匹そろって頭冷やしなさいよ…ったくマジメにトラウマになるんだけど！」

ブレイブはロックオンの方を見て、軽くチェギョンを抱きかかえるように両前足で彼女の鶴のような首を起こした。チルタリスは意識はあるようだが、先ほどの衝撃かそれとも精神的なショックか、何かよってぼんやりと空を見上げている。「まあ…軽く脳しんとうを起こしたくらいっすねロックさん。ポケモンってのは丈夫にできてますから」「そりゃそうだ…そこに関しては人間に負けねえな…」ムクバードもそっとチルタリスのモフモフ翼を自分の左翼で優しくなでる。「大丈夫かチェギョン？」「…ううっ…私は一体…ああもう…」「フン…そうやって愚痴れれば大丈夫だな。俺が抱えてやる

よブレイブ。こいつは俺の相棒だから…出のいいお嬢さんを無様に横にするわけにはいかんわな」「すまねえっすロックさん」ブレイブはゆっくりとチェギョンの頭を降ろす。入れ替わるようにロックオンの両翼が彼女の頭を支えるのと同時に、彼はぺたりと地面に後ろ足の付け根とフサフサ尻尾を降ろした状態から復帰し、４本足で正しく立っている状態に戻る。「ふぅ……ふぅ……私は…なんでこう…」ムクバードに頭と首を抱えられると同時に、チルタリスが姿勢を起こそうと僅かに身を動かした。「無理すんなって…あの勢いで地面に叩きつけられたら、普通の奴じゃ大ケガだろ？お前は運が良かったんだよ」「だ、大丈夫ですって…」彼女は首を振って意識の霧を掃い落とし、一生懸命左側に体を起こすべく足に力をかける。「…私はこの程度の女(メス)じゃ……終れないんですよ…」

「おいおい、何言ってんだチェギョン？」ブースターのバカにしたような笑顔が、ゆっくりと消えてゆき、チェギョンの表情を覗き込むようにそっと頭を近づける。何かが違う、いつもの彼女とどこかがおかしい、女好きな彼だからこそ理解できた。「普段のお前らしくねえぞ…っっと…」彼は右前足を使い、どうにか立ち上がりかけたチルタリスが再び左側に倒れるのを防ぐ。「…まあ、ここに来てお前も5か月くらい経つか…そりゃ時に調子が振るわんことだってあるだろうが…」「……そりゃそうだけど…はあ、やっぱ私って…ああもうどうしたらいいの…」どうにか立ち上がりながらも、自分の情けなさに気を落とすチルタリス。どうにか彼女が体勢を取り戻したのを確認したブースターが、少し後ろに下がって自分の頭のフサフサを左前足でかき回す。彼女の表情を見ればどういう状況に彼女が置かれているかくらいは分かる、それを見た彼は思わず同情にも似た感情を覚えてしまった。

２０１３年　１月２８日　アメリカ合衆国　ワシントンＤ．Ｃ．
１５００時

超高層ビルが林立する都市の存在比率が世界のどこの国家を比べてもトップクラスに多い（近年はライバルに近い存在である中国もそうなりつつある）アメリカとしては珍しく、比較的建造物高さを揃えて整備されている（とはいっても形状や外見は極めて現代風のガラス張り建築も多い）ワシントン、アジア外遊でシンガポール、台湾、韓国、日本を周り、日本の東京、羽田空港から大統領専用のＢ－７４７－４００“エアフォース・ワン”で帰国したばかりのアメリカ合衆国大統領の男は、大統領専用車のゼネラル・モータース社製キャディラックＲＢＸでワシントンの一角にある国防省の特異な形状をした巨大施設“ペンタゴン”に到着した。専用車のキャディラックＲＢＸ２台の周囲は州警察やアメリカ軍の車両や装甲車、オートバイの厳重な護衛が敷かれ、車寄せの周囲はアリの這い出る隙間もないほどの警察関係者や軍関係者の人間で固め、マスコミ関係の人間は遠巻きにそれを撮影するしかない状況である。

大統領と国務長官の女を出迎えたのは、中年の国防長官と１７日にアラスカの国連統合軍前線司令部兼エルメンドルフ空軍基地を視察していたあの外務省の男である。「お久しぶりです大統領閣下、韓国とのＦＴＡ（自由貿易協定）の締結は無事終了したようですね、おめでとうございます」「どうもありがとう●●次官、韓国首脳の

手ごたえもなかなか良かったよ。しかし、実際に締結に尽力したのは…」大統領は次官と握手しながら、国務長官の方に視線を移す。「△△△△長官、君のお陰だ、今回の米韓ＦＴＡ締結はＮＡＦＴＡ（北米自由貿易協定：アメリカ、カナダ、メキシコが締結）に次ぐ大きな前進だよ」「そんな…何も私一人の力ではありませんし」彼女は顔をやや赤らめ、大統領に続いて時間の男に右手を伸ばす。「ご協力ありがとうございます国務長官閣下」「ええ……今回の協定でパナマ、コロンビアとも同様の協定を締結したし、次のイギリスとＥＵ（ヨーロッパ連合）とのＦＴＡ交渉、並びにＴＰＰ（環太平洋経済協力パートナーシップ）の前進にも大きな弾みとなるはずね…」

そう、先日1月２０日、アメリカ合衆国は韓国、コロンビア、パナマとＦＴＡを締結し、ＮＡＦＴＡ以来の大掛かりな経済連携の関係が構築された。経済的超大国の地位を不動にしたアメリカは、長年“一国行動主義”の一貫で独立した経済体制を維持してきたが、ヨーロッパ諸国や東南アジア諸国の連合化、中国の急速な成長、中東産油国の経済的発言力拡大、並びに２００８年の世界金融危機によって、現在その地位は相対的に下がりつつある。無論その経済規模は世界トップクラスではあるが、経済的地位を維持する…ひいては国力と国際的地位を不動のものとする…と事を考慮すると、やはり経済協定の締結は極めて重要なポジションにあると言える。今回に限らず、ＦＴＡというものには、農業・工業・サービス業など業種を問わない商品の輸出入における関税の撤廃や運輸・流通・販売コストの削減だけでなく、工業製品やサービス形態の規格の（特に自動車、電気製品、農産物、金融関係では重要）統一、科学技術研究での連携、労働者や技術者の相互移動の自由化、労働基準の統一、商品に関する資源・材料購入及び輸出入ルート（おもに海路・空路）の維持・安全保障面の連携など幅広い分野で双方の経済に大きなメ

リットをもたらす。現在こちらも調整中のＥＵ・イギリスとのＦＴＡ締結、及びＡＳＥＡＮ諸国やインドとの経済連携を確立できれば、大西洋・太平洋双方でのアメリカ、欧米、旧アジアＮＩＥＳ諸国の経済的地位が中国にこれ以上侵略される恐れはなくなる、そう予想されていた。

そしてもう一つ、韓国とのＦＴＡ締結には、外交的・軍事的双方で米韓同盟の深化にも大きな意味がある。中東やアフリカの一部とは別であるが、東アジア西太平洋地域も軍事・政治双方での国家間対立が激しい地域だ。ことに韓国と台湾は、強大な軍事大国である中国、もとは同一の国家でありながら、社会主義の名を謳った軍事独裁政権で暴走を続ける西太平洋の“時限爆弾”的存在の北朝鮮といった問題のある国家の軍事的脅威が近く、これに海洋プラントから採掘されるエネルギー・希少資源問題や竹島（独島）、尖閣諸島、日本海（東海）などの領土問題、呼称問題、択捉や色丹といった北方領土問題における日露間の対立といった政治的問題と6か国協議の駆け引きが加わって、問題や懸念が一層複雑化している。とくに中国の軍事行動や開発が西太平洋で拡大することは、西太平洋各国、場合によっては国連の安全保障にすら不安定要素の増大につながりかねない。国家間、または国際機関を通しての対話が平行線をたどり、軍事的実力行使も一般市民から快く思われない現在、経済的・政治的・安全保障面での結託は国際競争における大きなアドバンテージ要素となる。

これを考えると、残念ながら筆者を含め読者の皆様の大半が暮らしているであろう日本国が、政局に左右されていかに世界情勢に取り残されているのかがよく見える。日本が米日同盟をかたくなに信じて惰眠を貪るうちに、進展しない米軍基地の問題に苛立ったアメリカは、その安全保障同盟を韓国や台湾に求め、東南アジアや諸国の海軍演習（あのシンガポール沖の時は空軍もやったが）にも参加してアジア・太平洋での協調体制を確立してしまっている。国際情勢は変わり、アメリカはそれに対応するという人間文明として常識的

行動をしたに過ぎない。無論日本の必要性がなくなったわけではないが、おそらくはあの東北・関東大震災時・原発問題時の“オペレーション・トモダチ”すら、アメリカ軍の必要性を前面に押し出し、日本国内の米軍基地移転交渉を有利に進める政治的材料に変質しているだろう。それを考慮に入れれば、アメリカが同盟にも日本より好意的で交渉の進みが早く、経済活動や・企業活動の点でも日本よりも将来性の見込める韓国を重視した外交にシフトしても、それは長年存在してきた「人間の国家」の常識に過ぎない。

専用車を降りた一行は大勢のＳＰの男たちに囲まれ、前方にあるアメリカ合衆国の国防の総本山であるペンタゴンの、名前の由来となった通り5角形の形状をしている中央の建物を目指す。「それで●●次官、アラスカの国連軍司令部の方はどうだったかな？」「ええ、やはり国連上層部の指示か統合軍と安全保障理事会の指示かは不明ですが、連中はポケモン達を調査以外の目的で利用しているのはやはり事実です」次官の男は両腕をこすりあわせる。「そしてもう一つ言えば……統合軍自体も宇宙船捜索とは別の目的を持って部隊を派遣したようですね」「別の目的？」国務長官の女が眉を寄せて尋ねる。「はい、単に…月面から送られた資源の一部が統合軍にわたる予定だったらしいのですが…それにしても陸軍だけで大隊単位で部隊を送るのは多すぎです。ＰＫＯから引き続いているスーダン安定化ミッションについているヨーロッパ管区内の部隊を交代間際に送るほどですから、おそらく国連には他の目的もあったのでしょう」「別の目的ねえ…代表と上層部が企画している例の…」

「その通りです」国防長官の男が軽くうなずき、右手をわずかに上を示すが如く動かす。「おそらくは国連が１９９２年に採択したあの方針、メガフロートもその一部に含むあの事ですよ…軍を動かすほどといったら、おそらくは彼らの文明でしょうな」国防長官は大統領の方を見た。「私もそう思うな。昨年からたびたび発生している、というより昨日も中央アジア一帯で発生したポケモン達の不審

死事件といい、南スーダンで起こっているポケモンを原因とする治安の悪化も、国連が裏でなにか関与していれば説明がつく」「関与といえば…」国防長官が注意深くアメリカ大統領の表情を覗きこむ。「大統領、近日発見された中国海軍の機動艦隊の件ですが、悪天候でいったん中止となった米韓海上演習は2月初頭にも再開する予定で、その際に艦載機部隊による中国機動艦隊の状況調査も行う予定となりました」「そうか……中国軍の動きが目立ち始めたのも昨年の9月だったからな、何か国連と関与があるとすれば…ゆゆしき事態だ」大統領はため息をつき、前方に広がる特異な形状の現代建築の上に広がる冬空を見上げる。経済、環境、東アジア、中東とアメリカを取り巻く問題の上にさらに新たな問題が加わろうとしている、何となく覚える憂鬱感に風が一層冷たく感じた。

２０１３年　１月２８日　ドイツ　ミュンヘン市　インフィニオン・テクノロジー本社　０９００時

　ニューヨークを発端にした格差社会是正を求めるデモは、イタリア、スペイン、イギリス、香港、フィリピン、台湾、日本、オーストラリアと世界各国に波及していた。しかし、それも拡大するにつれていつのまにか“脱資本主義”“脱原発”“科学技術至上主義反対”“地球温暖化反対”“ＴＰＰ反対”“反グローバル化”等と本質のずれたもの、拡大解釈しすぎた物に変質、一部の過激論者のパフォーマンスと化し、一般市民の同情や支持を失いつつあった。２０１１年初頭にエジプト、バーレーン、リビアと独裁政権を民衆が次々と打倒し、共産党一党政権である中国でも大規模なデモやチベット人、ウイグル人の独立を求める暴動にまで影響を及ぼした“アラブの春”と同様、ここでもツイッターやフェイスブックといった

インターネットでの波及効果はあったが、デモ内容の拡大化や過激化に伴い情報技術があだとなり、インターネット上で徐々にデモに対する反論異論が続出、世界中に波及したこの行動も現在は勢いを失っている。

それでもなお、格差是正などさまざな現実社会に対する不満を持った人々のデモは続く。ドイツの一大都市であるミュンヘン市、大規模半導体・電子機器部品メーカーであるインフィニオン・テクノロジー本社の高層ビルの中でさえ、目下の大通りで気勢を張り上げる人間たちの声が聞こえてくる。インフィニオン社代表取締役の私用オフィスは比較的高層階にあり、空調機器も完璧に整備されているがゆえ窓も開閉できないように固定窓となっているが、静かになると下の方から時折群集の声が聞こえてくるのが分かる。

「…それにしてもまあ、よくデモが長続きするもんですな。反格差だったはずが我が国の原発運転延長反対にすり替わったというわけか…」「そのようですね代表…失礼…」インフィニオン社を訪れているＥＵ対外行動局の男がコーヒーのカップを右手で採り、わずかに中身を口に運ぶ。

当初は２０２２年までの全原発停止を掲げていたドイツであったが、石炭や燃料価格の高騰、世界的な電気自動車の普及や電気機器の増加にともなう電力需要の拡大それに対する自然エネルギーの発電効率の伸びが予想を下回っている事、ＣＯ２削減という状況下で火力発電の増強が困難であることなどを背景に、ドイツ政府はこれを昨年暮れに撤回、運転停止までの期間をスイスと同じ２０３５年に延長したのだ。主要な原発推進国であるイギリス、フランス、スウェーデン、チェコ、ポーランドが原発の増設や高効率化を進め、

北アフリカ・サハラ砂漠での大規模太陽光発電施設が拡大しても、ヨーロッパや電力網でつながっている中東、東欧、北アフリカ、地中海の国連メガフロート群における電力需要の高まりに追い付かず、重工業国であるドイツはこれ以上の電気代高騰を抑えるために原発の延長を決めた。それがやはり、すなわちあらかたの予想通りという意味で、環境保護派・反原発派の人間たちの反対と抗議を食らった形だ。

男は下の通りを歩く人間たちのその声を聞いているといつも違和感を覚える、経済にしろ原発にしろ科学技術にしろ、反対する人間は誰もが納得でき、論理的に正しく証明できる対抗策をまったく持っていないという事だ。一番わかりやすいのは原発の代替は?というもの、自然エネルギーがあてになるはずがない、蓄電技術が発達しつつあるが、一番日照時間の長い夏に完璧な快晴だったとしてもせいぜい家の電気製品、照明、空調、端末を動かすのが関の山。火力を代替なんて馬鹿げた話だ、事実ある調査によれば、火力発電を行うプロセスにおける犠牲者が生じるリスクは原子力によるそれよりはるかに高いと言われている。これに加えて将来の温暖化による災害犠牲を考慮すると火力の方が圧倒的に危ない。枯渇する恐れも高く、燃料代も高い、それならば最大限安全性を高めながら後者を使ったほうがベストだ。

まあ、社会的ヒステリーで動いている人間は5年たてば忘れる、大きなムーブメントになることは恐らくないだろう、男はそう思った。

「しかし、わが社とは関係がないですよあれは。デモの参加者の多くは公務員、建設業、小売業といった被雇用者の待遇が当初から問題になっていた業種中心ですから」「全く持ってその通りです。現在となっては反グローバリズムや脱原発、資本主義解体といった戯

言しか言わない活動家ばかりになっていますしね」対外行動局の男がもう1度カップを口に運んだ。全く人間という生き物は、自分に何の危害もなければ周囲の騒音などというものは気にならなくなる生き物らしい。

「では…あなたのご依頼の件を続けましょうかな」「お願いします、閣下」取締役の男が燻らせていた葉巻を灰皿に押し付け、ＥＵ対外行動局関係者へテーブルの上に置かれたタブレット情報端末と書類を見せる。「先ほどお見せしたのが、わが社が現在までに取引している相手先です。わが社の取引相手にニューロン・コンピューター社が含まれている事、これは事実ですなあ、それで…」男が端末をタッチペンで叩き、画像が切り替わる。「こちらが、わが社各企業並びに研究機関に提供した機器類の一覧です。この一覧、株主やわが社の広報でも利用しておりますので、お持ち帰りいただいても差し支えはありませんが、いかがなさいますか？」「恐縮です、失礼します…」ＥＵ関係者がタブレット端末の脇にＵＳＢ大容量記憶デバイスを挿し込み、デバイスにある小さな複数のスイッチを何度も爪先で叩く。デバイス内臓のＬＥＤが青く点滅した。

この男はその途中、ちらりと取締役の顔を伺ったが、相変わらず穏やかな表情を保ったままだ。国家とほぼ同等の機関であるＥＵの関係者にここまで簡単にデータを渡す、何となく不審な感じもするが、おそらくこれは取引先企業や株主に公表しているデータと変わりがないのだろう。ただし、もらえるというからにはもらわないという選択肢はない。データを本部にある機器で特殊な方法を使って検索すれば、改ざんされていたとしても上書き前のメモリを復元できる。

「それで…ニューロン・コンピュータ社との取引した製品はこちらです」「なるほど…」取締役はそばにある複数の紙の書類をＥＵ関係者の方に渡す。取引相手、取引した内容、日付、流通ルート、代金の引き落としなど詳細に書かれているが、利用目的が何かであるかは書かれていない。「…これで…よろしいですかな？」「ええ、ただ…」ＥＵの男は指先で書類のある欄を指差す。「これらの商品

の目的というものは交渉中にご存じないでしょうか？」「うむ…あの企業とはすでに5年来…取引を開始してからも、その利用内容までは説明されておりません」

「…聞いたことがないと？」「ええ…残念ながら…」目をわずかに瞬かせた男に、代表取締役は大きくうなずく、その直後に彼の携帯情報端末の呼び出しが鳴った。「私だが？」“営業部門です、部長の方から…”「ああ分かった、すぐ行く」営業部門の女からの電話を取締役は素早く応対し、端末を切ってＥＵ対外行動局員の方に向き直る。合うと言ってもこの部屋の隣、公用執務室だが。「失礼、数分ほど外しますが、よろしいですかな」「もちろんです。押しかけたのはこちらですから…」

取締役の男が出て言って間もなく、ＥＵ関係者の男は立ち上がり、窓の方へと歩み寄って下の様子を眺める。いつの間にかデモ隊の一行がこの企業の敷地にも流れ込み、車寄せに止まっているドイツ・ＢＭＷ社の公用車、Ｅ６８が出られなくなるほどになっている。男は舌打ちして窓を軽く右手の拳で叩いた。腹立たしい訳ではないが、こういう光景を見ていると何となく面倒くさい。

その直後、男は携帯端末を手に取り、耳に当てる。「私です、インフィニオン社もあそことの商品開発提携はしていないようです……」

探検隊の施設（後書き）

今日で執筆開始から5か月…何だか日付の進行が遅れてきたようです。

次回で2月に入ります。

新たなる変革

２０１３年　１月２８日　エメリアソーラ地域　パルク州　プロテウス地区　０８５０時

昨日の一行がやってきたというその一報、真っ先に飛び出してきたのはフェノールであった。「やっぱ、やっぱきたんだな！おいらずっと待ってたぞ！」「そっか、今日も来た…いや、何て言ってやればいいのかな？…」リーヒュンはとりあえずツルで、このゾロアを種族を自分の元に抱え上げる。「さすがは種族名そっくり兄ちゃんだ！こう見えてもおいら期待してたんだぞ」「何だよそっくりって…まあいいか」自分の呼ばれ方が少々気にかかるが、不思議とこのちびっ子にこう呼ばれることに対して、彼は抵抗を感じるどころか奇妙な嬉しささえ感じた。ツルの先から伝わってくる温かさ、自分と会った時の子の笑顔、意識の水晶の底がこの感覚が何であるのかを如実の彼に伝えてくる。

そう、間違いない、この暖かさは妹のフローラと同じ……同じだった。このちびっ子が妹と同じように自分を信用し、自分に飛び付き、自分の温もりを心地よく思ってくれる、このベイリーフ自身気づいていなかったが、なぜフェノールの気持ちがそうであろうと読めた、今のリーヒュン・バイリング・グリーズにはそう感じ取れたのだ。

「あはは！すっかりフェノールのお兄ちゃんになっちゃったね、うん」「まあ、そういう事になったな、俺はそれで構わないけどさ」ユイリィが彼の左隣からツルを伸ばし、ゾロアを自分の方に寄せる。フェノールはそんな彼女と視線が合うなり、頭の上のロズリンに右前足を出す。「おう、ちびっ子！ユイリィの頭の上の乗り心地、今日も平気か？」「いつにも増して最悪でしゅね」「な、何また言ってんのよロズリン！」シェイミに乗っかられているメガニウムが、

またしても気恥ずかしそうに身を乗り出しているシェイミの頭の部分をツルで押し込む。「だってお前の頭の黄色い雄蕊はぐにゃぐにゃして気持ち悪いんでしゅよ。本当はミーが引っこ抜いて…」「ば、バカバカ！それだけは止めてよ、うん、お願いだからそれは困る…」「このメガニウム、面白い奴だな。ますます気に入ったぞ」「うっぐぐぐっ……」首の花びら元にフェノールに飛び付かれたユイリィは、顔は赤らめて頭上でへらへらしているシェイミを突き飛ばしたくなる衝動を必死にこらえた。まったく、薄々こんな予感はしたが、ロズリンのせいでこのゾロアまで自分の事をなめ始めたようだ。しかしその一方で、ひょろ長い首元と頭の上にいるちびっ子にケンカを本気で売ろうとする自分がいない事にも同時に気付き、何となくこの2匹に対する優しい感情も覚えている。

それが…いわゆる“愛おしさ”と表現される感情に違いない、ユイリィ・ランタン・プレミドールはそう思った。

「…お、お前ら、すっかりチビと仲良くなりやがって…まあ悪い事じゃあねえけどなあ…とにかく」そんなベイリーフとメガニウムの様子を見ていたバストークが、自分の両前足の保護靴のひもを締め直す。戦闘時は基本的に素足のポケモンだが、長い距離や不整地を歩くときは、木の蔦を編み上げた保護靴を装着すると大変楽になるとされ、種族にもよるが一般的な長距離移動や探検隊・救助隊の不整地（例えば岩場、深い樹海、湿地、雪原等）での調査・捜索活動において幅広く利用されている。「俺たちは結果としてひと月は空けることになる、サクラさんはまだしもだが、国連の人間たちもかなり渋っていたけどな、まあ発信機をもって居場所を教えてくれればひと月だけ特別に許してやるって言ってた」メリープは胴体にぶっ違いに回した装備品入れから小さな機械を取り出す。ＧＰＳ発信機、この小さな機械から人間や動物、ポケモンには見えない電波

を発し、空の上にある宇宙空間を飛行している人工衛星を経由して場所を人間側に伝えるシステムだ。「これがどれだけあてになるかは知らねえが、とりあえずそう言うんなら、って持ってくぜ」

「まったく…どれだけ人間ってせっかちな生物なんですか？」「知らねえなあ…まあ兄ちゃんみたいなまっすぐなポケモン種族には到底受け入れがたいもんだろ？」「そりゃあ、だってこんなの付けていちいち見張るなんてどこまで信用できないって奴ですよ俺に言わせてみれば」リーヒュンがバストークの装備品入れのバックルにリボンでくくりつけたその機械をツルで軽くつつく。いつにも増して人間の機械の類からは、作った人の熱意や温かさというものは伝わってこない。こんなもので監視をしたところで、それで満足したつもりなのだろうか、同じ職業（彼は職業だとは思わなかったが）でやっている間柄として、多少は似姿が違えど信用してあげてもいいんじゃないか、メリープとプラスルの装備品入れに装着された光が点滅している機械を見つめているうちに、彼はそういう感情を抱いてしまった。

そんな彼の左前足をユイリィの右前足の爪が軽くつついてくる。「取ろうとなんて思っちゃだめだよ、うん。さすがにそれやったらさあ、うちら掴まっちゃうからね」「い、いや、俺は別にとる気はないけど…」ベイリーフがメガニウムの方を振り返り、わずかに左前足を自分の内側に寄せる。「ただ…何だか見張ってるのはちょっと気分のいいもんじゃないからさ、取れちゃってくれたらありがたいとは思う」「まあね、さすがリーヒュンは考えちゃうんだよねそういう事、うん。いいと思うよそれ」彼女は満面の笑みを浮かべながら彼の背中をツルでなでてしまった。やっぱりこのベイリーフはそう考えていたのだろう、隣にいる意識から発せられるエネルギー、特に彼は本当にわかりやすい。

しかしそれが彼のいいところなのかもしれない、メガニウムはそれを感じて顔がほのかに熱くなるのを感じた。彼は感情を無理に取り繕うタイプではないし、慣例や理不尽な常識に無意識に従うタイ

プではない。人間や思想や価値観の違う相手とぶつかりやすく、融通の利かない性格だが、だからこそ信頼できる、だから自分の事も素直に認めてくれる、と。

「まあ、ピトム達はそういうのには慣れているから、あんまりこれに感じては気にしないで、それより…」ピトムニクがリーヒュンのそばにそっと歩みよる。「隊長がいない間は別の子がこのチームの隊長をしなくちゃなんないんだけど…」「ん？何かあんのかよピトム？」「うーん…大したことじゃないんだけど…」プラスルがベイリーフの右前足元にそっと近づき、左手をそこに当てる。「ほら、原則として隊長みたいな年上、または階級…まあないのも同然だけど…的な問題で上位の子がやらなきゃいけなのね。ロックオンはね、アメリカ空軍から派遣されてるから例外、ラブもアメリカ陸軍だから国連のあれに正式には入れないの。とすると…」「すると？」「テルルなんだよね次が。ラブちゃんと上手くやってくれればいいけどさあ…」

「やばいな、結構大変だと思うよ、それ、バストークさん、それ何とかならないんですか？」ベイリーフは思わずバストークに聞いた。あまりいい予感がしない、自分の考えすぎか、それともあまり先までまだ見越せないのか、彼女、テルルの表情と顔を思い浮かべるとそんな予感がした。「いや、悪いな…本当はユイにでもさせてやりたいんだが…」メリープは左前足で胴体のモフモフを掻き、それからその毛を思いっきり震わせる。「…お前たちはそもそも気苦労が多い立ち位置だからな。させてやりたいけど、それでお前らが苦しくなるようだったら俺はできん…」

「大丈夫ですよ隊長！うちらに任せてくれればどうにも…」「いや、すまない、これは俺の判断だ」「ど、どうしてですか？」ユイリィがバストークの方に数歩踏み出す。彼女からしてみれば、多少

気恥しいだけで何の造作もない事だ。まあその恥ずかしさが気を散らす原因になるかもしれないが。一方の隊長の表情はパッとしないままである。「お前らの今の状況をサクラさんから聞いた……あの人(ポケモン)が言うには、お前ら今…お互い悩んでんだろ自分たちがどうあるべきか?」「…まあ…」ベイリーフとメガニウムはお互いに顔を見合わせる。「…迷いがあるうちはな、まとめ役はやらないほうがいい。自分の道筋が分からんのに他人の道筋なんか決定できねえんだ。テルルは…見た目上は知らんが、ともかく階級も経験も上だ」

「まあ…2匹ともごめんね、今回はテルルにお願いしよっかなって……」ピトムニクが申し訳なさそうに、両手で首から左側の腰へ向けて回した装備品入れのバックルを調整し直す。「慣例慣例って…そこで考えるのが…」「…リーヒュン、だめ」プラスルに食って掛かろうと前に踏みだしたベイリーフを、メガニウムのツルと右前足が制止する。それに気づいた彼は思わずメガニウムを見、バストークを見、ピトムニクも見直した。メリープにもプラスルにもそれぞれに考えた果てに決断したという、多少怪訝そうな表情の中に決心が何となく感じ取れる。

それと同時に、先程のまでの不満のようなもの…まことにリーヒュン・バイリング・グリーズらしい理不尽な慣例に対する不快感…が、意識の水晶の水の中に溶けて消えていくのを感じ、それと同時に自分の相変わらずの幼稚さ・無能さに思わず体が熱くなるのを感じた。ここで不満言ったところで何になる、自分に隊長が務まるとでも思っているのか?

リーヒュンはすまなそうに一歩下がった。「すいませんバストークさん…隊長が僧院だったら、俺にも異論は全くありません…俺には別に集中すべきがあるんですよね…」「いや、いいんだ。お前が詫びることじゃない。元はといえばこんなくだらねえ規則作りやがった奴に文句を言ってやりたいんだが…」メリープが彼の左前足の

付け根あたりを、自分の右前足でポンポンとやる。このメリープとて人間の規則や常識、自分たちの間にある慣例を鵜呑みにする気はない。しかし今回はそれを考慮して決定する余裕がなかっただけ、いい加減な予想で決めるよりかは一時的には規則に従ったほうが丸く収まることが多い、これもバストーク・ラルシア・ホルストの３５年にわたる人生経験の一つだった。「…テルルと上手くやってくれ。彼女は自分の考え方や意見を否定されるのも嫌だし、お前のように意見をズバズバ切りだす奴にも慣れてねえんだ。お前とユイの能力ってのは、それくらいわかるんだろ?それを忘れんな、関係ってのは時に妥協するのも必要だ」

「……はい…なんとかやってみせます」ベイリーフは葉っぱ付きの首を一回振って疑念を振りきり、大きくうなずいてメリープの右前足に自分の右前足を差し出す。「さっすがと言うところだぜリーヒュン。お前はやりだしたらまじめにやる方だからな、しっかり頼むぞテルルのサポートを」バストークはリーヒュンの表情を見つめ、彼の右前足の爪をしっかりと自分の右前足で握る。彼の表情からすれば問題ない、こいつなら何かあっても最後は上手く丸まってくれるだろう。メリープはベイリーフ種族の足に触れる自分の右前足にあるごくわずかな爪と、藍色の自分の毛から伝わってくる温かさの中にそれを感じたような気がする。

「よろしくねユイリィ、リーヒュンをばっちりサポートしてあげて!」「大丈夫大丈夫!ウチはこう見えても何回もリーヒュンの無鉄砲に付き合ってきてるからね!うん」ピトムニクがユイリィのツルに軽く抱き上げられ、彼女の首元の大きな花にプラスルの方が飛び付く。「はあ、相変わらず俺をバカにしてんのか怒らせて楽しんでるのか…」「ん?ユイは多分ね、楽しんでるんだと思うよ」リーヒュンの呆れたような表情にも、ピトムニクは調子を合わせる。「さっすがピトム!あはは…」ユイリィの方はまたしてもテンション全開でプラスルをツルで持ち上げ、自分のほっぺたにぎゅっと彼女の赤色の帯電袋をこすり付ける。もちろんピトムニクは電気をかけ

ていないので火花は散らない。「リーヒュン、そういう事だから、頑張れ！」「う、うん…わかった」「もっと自信出していかないと！テルルとは普通に接して少しずつ積み上げていけばいい、そうすればあの子も上手く距離を取ってくれると思うよ」「うん、そうだよな」ベイリーフはプラスルの伸ばしてきた左手を自分のツルで握り返す。彼女の左手の温もり、それが彼の意識の水晶の底にある感情の原子炉をゆっくりと動かした。サクラが何と言おうと関係ない、自分の集中すべき場所は自分の使命とフローラの事だけではないのだ。彼はもう一度バストークの方を見る、メリープは目の前にいるベイリーフの表情に、自分の右前足と左前足をこすり合わせながらはっきりと首を縦に振った。

リーヒュンもユイリィもこれなら大丈夫だ、彼等だけではない、テルルも含めてお互いがお互いの道に添う事が出来ればそれぞれの道は安定する。多くのひこうタイプが飛行した後のわずかな空気の流れに乗ればどこへでも辿りつける、自治協会郵便飛行隊の連中が言っていた座右の銘と同じように。（無論これは人間たちの飛行機が不正確だ、と言いたいわけではない。むしろ人間の航空機の方が、信号を感知し、自動操縦システムと機器が正常に動作していれば数センチも狂わず、列をなしてエアウェイを高速飛行し続けることができる）もちろん彼の隣にいるユイリィを含め、多くの協力があっての話だが。

はっきり言ってバストークには、今のチームが同僚意識はあっても、お互いの事を支えあえる仲間としての意識があるかどうか確固たる自信はなかった。プライベート面で上手くやれなければそれは人間の社会の縦割りと同じ、公私双方出来なければそこらのカラスの群れと大差ない、長年の間ポケモンの文明の中で部隊を率い、救助隊や探検隊の調査のお供をし、ここに来てからは人間社会の息苦しさも経験した彼だからこそ思う。救助隊や探検隊や自治協会の部隊が、職業や職務、義務からくる意識とは別の物で動いているからこそ、

その目的を遂行できるのだと。

「よーしよしよし…んじゃそろそろ出発するか…ピトム、いくぞ」
「あ、はい…それじゃあ2匹とも、よろしく頼むね！」ピトムニクがユイリィの首元から軽く飛び降りた。「うん！大丈夫だよ、いない間は全部うちに任せていいからね」「テルルとは上手くやるからさ、隊長の事よろしくな」「うん、大丈夫」リーヒュンとユイリィはともにプラスルの方にツルを伸ばし、彼女が2匹にほっぺの帯電袋をこすり付ける。ピトムニクにとってこの2匹との別れが最期になるとは考えるはずがないが、ひと月以上外すというのは人間の時間間隔にも慣れている彼女にはやはり長い時間なのだ。たとえポケモン達が、1週間程度の留守もちょっとしたお出かけと考えてしまうような、そういうのんびりした文明であったとしても。
「ただ…」プラスルはバストークの方に振り返る。「…やっぱ2匹と探検隊一行だけでは寂しいですよね…」「まあな…ピトムにとっちゃあなかなか寂しいもんがあるよな」「はい…」「そこでだ」メリープが背後に置いてある何かを両前足で抱えて引っ張り出す。「こいつのほうがあてになんねえ人間の無線機なんぞよりずっと役に立つ代物だぜ。それにこいつはな、ここの南端辺りに巣を作ってるからあそこにも届くらしい、売りつけた奴が例の入り口辺りにこいつが飛んでくよう仕掛けもばっちりのようだ」
「すごーい！！ありがとうございます隊長！」ピトムニクが目を輝かせてそのかごに近寄る、かごの中にいるのは伝書バト、すなわちカワラバト（我々にも身近なドバト）の一種のような鳥だった。ポケモン達の間にも飛行タイプの郵便飛行部隊が存在するが、それを介さない連絡…例えば旅の道中…などでの連絡手段としてハトを使う者も多い。「いやいや、こんなことに付きあわせちまうお前に対するせめてもの詫びって奴だ。こいつは俺からのプレゼントってことだな」

「とんでもないです隊長、やっぱりかわいいよねえ鳥は…うん…」プラスルは夢中になってかごの中のハトを眺め続ける。やはり人間の機械は彼女の性に合わない。自然に接し、自然の息吹を存分に感じ取れるもの、生き物、植物が身近にあることは、ピトムニク・ソレイユ・マルセイエーズにとってかけがえのない事、彼女自身そう思っていた。

しかしその一方、と言うより案の定と言えば案の定であるが、こちらはそう簡単に丸く収まるはずがなかった。一番動揺しているのは、隊長の代理をするようういきなり言い渡されたテルル・アストラフスキー当人である。突然統合軍の兵士に呼ばれ、居住用施設の正門に呼び出された。「本当に…私がやるんですか？」「ああそうだ、お前らの隊長さんがぶらぶら遊びに行くっつうからな、あのモフモフおっさんが直々にお前がするよう言ったんだぜ」「……でも私は…そういう器じゃ…」いつもの人間に対する険悪な態度は今のグレイシアにはない、衝撃のあまり４本足が立つのが難しくなるほど震え、目の前の景色が渦を巻いて揺れるように感じられる。「器とかっていうか、お前らのグループ関係っていう物の鉄則で先任者がリーダーやるんだってよ、お前が久しぶりにでしゃばれて良かっただろうが？」「よくない！いいわけないじゃない…だって…」「いつまでも言い訳逃れをしてんじゃねえよ隊・長。必要な伝達、来月はお前がってことになるからな」国連統合陸軍の（任期交代でここにいる統合軍部隊も今日から変わった。今度派遣されてきたのはシンガポール陸軍からの部隊らしい。まあいずれにせよここは、秘匿性が高い上にアメリカ軍の基地もあるので、親米国家が中心になるようアメリカが国連に働きかけているのだろうが）人間の男は、持っている暗視装置スコープと情報連動システム付きＭ１６Ａ５アサルトライフルの銃身をグレイシアの頭飾りに軽く向ける。「…下手なことしてクビになんなよ」「んなことは知ってるわよ…」テルルは人間の兵士に思いっきり嫌味な表情を突きつけ、そのまま踵を返す。全

く人間という生き物はどこまでほかの生物を、特に自分たちポケモンを見下しているんだろうか、自分たちの間でさえ人種が違うの思想が違うので殺しあい、奪い合ってる原始的な動物のくせに、そのくせわけのわからない文明ばかりはこの世界を支配するほど……そんな彼女の思考は長く続かなかった。考え込むあまりにまたしても森の方へとフラフラと歩き出すうちに、今後に対する不安がまるで来たばかりの時の如く再燃し、そのネガティブな心境で目の前の視界が急激に狭くなるのを感じた。

（ありえない…なんでバストークさんは私なんかを…？）普段の居住用の建物から森の通用門へと続く道を歩くテルルの意識の水晶の中では、さまざまな感情の冷却水が渦を巻き、激突し、飲み込んでは波立ち続けている。隊長は自分に何を期待しているのかは分からない、おそらくは何か考えがあって…そうしているのだろうが、しかしこの言いようのない不安は何だろうか？（もし自分がやって取り返しのつかない事態になったら？誰が責任取るのよ…？？隊長とピトムニクが帰ってくるまでひと月ね…それまで…せめてどこにも派遣されなければ…自分は何もしなくてもいい……お願い…何も起こんないで……）

しかし、テルルの不安はその数秒後にはかなり嫌な形で的中してしまった。彼女は右後ろ足の付け根あたりを誰かに何度も小突かれ、最初のうちは気づかなかったが、５回程そうされてやっと気づく。

「まったく…まあいきなり隊長やれって言われていい気分がするわけないのは分かるのよね…」この口調、高いとも低いともつかない微妙な女の子声、そして平坦なアクセント…彼女にはすぐに理解できてしまう。かといってしかとしていたらますます厄介な事態になる、意を決したようにグレイシアは背後を振り返った。

背後にいたのはもちろんスカイラブ、彼女の表情に怪訝そうなもの

を浮かべるレオもご一緒である。「バカ…お前いきなり掴みあうとかやめろっての…」「アンタは引っ込んで！年下だがらアンタとは無縁の話なの」「ああ？！ざけんなてめえ、いちいち俺に対して年上ぶりやがって……」「はいはい怒らないの…だがらアンタは見境ないって言われるんよ、それ理解？」彼女は無理やりでも静止しようとするコリンクを左前足で軽く突き飛ばす。スカイラブはテルルの目を探るように覗き込み、抑揚も感情もあまりこもらない声で続ける。「テルル…アンタ良かったね、隊長さんの推薦でテルルが代理？まあ私らの規則って言うより伝統だから…文句言わないけど…」「…そ、それがどうかしたの？それに…」テルルは引きつった愛想笑いを浮かべる。ここはどうにかしてやり過ごさなければ、スカイラブが今回の決定を心地よいとは思わないのは目に見えている。だがここでいきなり自分がキレたらまた人間連中やサクラに何と言われるか考えたくもない、とにかくここは落ち着いていかなくては。彼女は言葉を選ぶように慎重につづけ、自分の意識の原子炉を刺激する敵対心を押し沈めた。「……この1か月は休戦ってことで…いいよね？」

「うん…テルルにしては落ち着いた判断したわねえ、いいと思うよそれ、私だってもめたくはないから」ルクシオはますます不可解な表情で、グレイシアを表情を覗くようにもう一歩近寄る。（…はあ？！…ほとんど理由はアンタでしょうに…）意識の水晶化では原子炉が暴発寸前、危うく右前足が出かかっているが、テルルは最後の最後でその衝動を押しとどめ、ぴくぴくとけいれんする右前足を抑えた。ひと月言いたい放題言わせてそのあと寝ている間にボコボコにしてやろうか、そんな危険な感情すら彼女の頭を何度もよぎるほどだ。「…そうよね…私だって無理にもめはしたくないし」「ただし…」スカイラブが顔をテルルに引き寄せる。「…え？」「…テルルに聞いておきたいことがあるんよ」「な、何を…？？」グレイシアは彼女の剣幕に思わず後ずさりしそうになり、そのうち一歩だけ後ろ足を下げてしまった。「アンタ…このひと月全員生き延びさせ

られるは自信あるの？」「生き延びるってそんな……」「……やっぱりね、私もテルルもこういうのは初めてだから批判のつけようがないけどさ」ルクシオは子供に説教するような表情で右前足の爪をわずかに立てて振る。「…事は最悪の事態まで見透かして自分の秤に真っ先にかけるもんよ、できる事はできる、できない事はできないんだから」

「だ、だからそれで…」テルルは思わず一歩踏み出した。「すなわちよ、テルルはそれをしてなかった、なみに覚悟あるポケモンだったら真っ先に考える事を、ね？」

「…はあ？そんじゃあ私は…何なのよ？」テルルの表情が一気に引きずり、スカイラブの方に顔をグイッと引き寄せた。もう耐えられない、彼女の中で目の前のルクシオ種族に対する敵愾心が意識の水晶の中で急加熱し、目の前の相手がぶち殺されて当然の獣にしか見えない。「おいバカ…やめろラブ！」「だ・か・ら、レオとは関係のない話なんよ、それにアンタには危害加えないから」「けど…ぐえっ？！」腰のあたりに飛び付くレオをスカイラブは軽く振り払った。この自分と背丈がすっかり近くなってしまったコリンクの気持ちは痛いほどわかる、どんなに小生意気でムカつく相手だとしても幼馴染がケンカしていて止めない奴がいるわけがない。しかし…スカイラブにとってはレオがそうであるこそ、こうせずにはいられない。

彼女は殺気立つテルルの表情にも臆することなく、もう一度右前足の爪を立てて軽く振る。「何なの…それは自分で決める事でしょうに？すなわちはね…アンタにレオやシンシアを預けておくことはできないって事よ。うん、そういう事」「はあ？…何言ってんのよ…」グレイシアは凄まじい表情でルクシオの首元に両前足をかける。もはや我慢の限界だ、これ以上このバカ女にエラそうな事を叩かせるわけにはいかない。

そんな状況でも平然としているスカイラブ、彼女はついにこの言葉、テルルを決定的にキレさせる一撃を、しかしそれを冷静に抑揚のな

い声で放った。「ま、あんた自身も保険金かけておいた方がいいんじゃない？何となく隊長するとかそういう考えすんなら、せめてアンタの家族のために遺産くらいは作っておくべきね。下手すればそういうことになるんよアンタの家族が」

その瞬間、テルル・アストラフスキーの意識の原子炉の制御棒が吹っ飛び、凶悪なエネルギーが水晶の外壁から危険な熱さとなった水蒸気を噴出させた。自分の家族、自分の家族の話を持ち出されたことに、もはや感情の制御を失っていた。「ふざけんじゃないわよこのバカ女…・」」‥・・！!??」グレイシアは目の前のルクシオに右前足をストレートにぶち込み、そのまま後ろに突き倒す。「アンタ……アンタは…お前は…このくそ変態、この変形化け物っっ!?」

「何が化けもんよ!?てめえだってそこらの化け物そっくり動物もどきじゃないんのよ?!」これに対してスカイラブも暴発しかけた。化け物、動物、スカイラブ・バトルスターが最も毛嫌いする自分の呼ばれ方。自分の種族がネコ科の生まれそこないで、男女(オスメス)関わらず顔がこういう姿をしてしまっている事、それがポケモンの宿命であると思い込もうと彼女は必死に努力をしていたが、こんな風に真正面から言われると耐えられないものがある。仰向けに押し倒されたままの姿勢で彼女、「ええいっ!?」「うぎゅ?!」隙を突くように右前足でテルルの左側のほっぺをぶん殴り、その隙に左前足で腰元をまさぐって軍刀を引っこ抜いて前に突き出した。その先端は刃の金属の臭いが感じ取れるほどグレイシアの鼻先に接近する。「バカっ?!何やってんだラブ…」「アンタは引っ込んで、私がこの腐れ女(メス)程度止めてあげる…」ルクシオの両前足を引き留めようとしたコリンクを、グレイシアは右前足だけで乱暴に突き飛ばした。「いってえ…マジな事やっちゃダメっすよテルルさ…」レオは前足で蹴

られた鼻元を押さえながら立ち上がったが、目の前にある2匹から放たれる恐ろしい気迫の前に彼でさえ逃げ出しそうになる。

　にらみ合うその時間は数秒間にも、数分間にも、はたまた永遠にも感じられた。その刹那、テルルは右前足を振り上げることなくスカイラブの顔面にそれをぶち込み、もう一回右前足をわずかに動かす。それと同時に右前足の横から銛の先端が飛び出し、ルクシオの鼻数ミリの位置にその先が迫った。「な…何よアンタ…」

「…フン、このヘタレ女、それ位の事にも気づかなかったの…」

グレイシアがにやりとしてスカイラブを挑発的な目で見降ろす。彼女の至近まで接近していた刃の先が僅かに触れたらしく、自分の鼻の上から滴った血の味が口元に広がるが、今のテルリウムには全く気にならない。今までさんざん言われ放題にされたてきた宿敵、スカイラブ・バトルスターに武器を突きつける、経験したことのない凶悪な喜びが銛を突き出した右前足を震えさせる。「…私がアンタごときで諦めると思った?アンタみたいな人間に尻尾振ってるような奴とは違うのよ私は、テルルは!そういう人生経験をしてきてるのよ!」

「ふーん…テルルはそういう生き方をしてきたのね、よく分かるわよその気持ち…」この女ルクシオは落ち着いた表情を取り戻し、やれやれと首を振った。全くこの程度で本気でキレかけた自分が馬鹿らしすぎる、こんな暴走女(メス)グレイシアに言うセリフを考えるより、レオ達ちびっ子をどう生き延びさせるかを考えている方がいい。「ただし、今のでますます解が出たわね」「何よ…何の解よ…言えこのバカ女っ!?」スカイラブの相変わらずの調子に、テルルは銛を危うく彼女に突き刺しそうになった。あわや爆発寸前、というように顔を引きつらせるテルル相手に、スカイラブは何も取り乱すことなく最後の止めを刺す。「アンタといたら１００％の確率で私か誰かが1匹以上死ぬ。ま、せいぜいそういう感情の解消役になってくれるのは家族ね。アンタじゃ家族を殺しかねないけど……まあせい

ぜい感情を抑える努力を弟さんの前でしてやりんさい」

「何言ってんの…それを私に言うの……てか何でそれを知ってるの？？」「もちろん、兵士の皆さんからアンタの取り乱しを聞いちゃったんよ、テルルの家族は唯一、弟なんでしょ？だったらアンタのその大切な家族を銛で突き刺す前に、自分の性格を直してから彼に会いなさいよね。私自分の同僚が殺人犯とかいやよ」

私が…殺す……？？エルヴィンを…自分の手にかける…？！

ありえない…ありえないわよ！…

スカイラブ・ナサ・バトルスターの口から放った一撃は、見事に目の前のグレイシア種族の意識を突き破り、ボール紙の人形を包丁で突き刺したように破壊する。その次の瞬間、テルル・ルナマリア・アストラフスキーの意識の水晶に愛する弟、エルヴィン・ムスペル・アストラフスキーのあの笑顔、自分を見つめる瞳、いつか若さを失っても変わらないであろうあの眼差しが焼きついた。

自分が存在するのはそのため。

このため。

愛する弟を、たった1匹の肉親、愛する存在の全て、このグレイシアがテルル・アストラフスキーとしてこの世界に脈打つ理由、目的、存在自体を作り上げるすべてを、このネコ科動物もどきのルクシオ種族が踏みにじった。目の前にいるこの女（メス）ルクシオが自分がグレイシア種族たるすべての理由を破壊し、それに泥をかけ、血の池に投げ込む。

（……殺す！！なぶり殺しにするわよっ！…）

そしてその1秒後、テルル・ルナマリア・アストラフスキー、21歳の女（メス）グレイシア種族には、目の前にいるスカイラブ・バトルスタ

ー、本来同僚であるはずの存在が殺すべき獣、ネズミ以下の価値しかないゴミにしか見えなかった。彼女の全てが、グレイシアの感情の全てが自分が付き倒した目の前の敵を殺すという狂気に変わった。

「死っねやあああああ！！！」「おうぎゅっ！？」テルルの右前足が押さえつけているスカイラブの顔面を凄まじい力で殴り飛ばし、彼女の後頭部を地面に叩きつける。「くたばれ……こっのゴミ女っっっ！！！！！！」グレイシアは迷わず右前足の内側に装着した銛を振り出し、飛び出したそれの柄を右前足でつかむ。後頭部を強打したスカイラブが姿勢を起こす間もなく、テルルは後ろ足の強烈な力で彼女を押さえつけ、彼女の顔面を貫くべく思いっきり上半身をそらし、目の前のルクシオ種族に向かって銛を振り上げた……

ばきっ！！！スカイラブのはねっ毛の下あたりが銛で貫通するあと5センチの所で銛の刃先が止まった。テルルのほっそりした胴体に橙色（オレンジ）の両前足が強引に彼女を押さえつけ、後ろに引き倒す。「このバカっ！！！何血迷ったことやってやがんだテルル？！目を覚ませっての！！」その正体はブレイブ。ブースターはグレイシアをあお向けに突き倒し、彼女の顔面に何発も右前足をぶち込む。「ううっ私は…私は…私はああっっ！！？？」「こん野郎…何をまたバカなことを…ぐえっ…」もがくように飛んでくるテルルの両前足の殴りを顔面に、首のフサフサ毛の下の腹の部分には後ろ足の蹴りを無数に浴びながらも、ブレイブ・グレイバーはテルルの首を両前足で押さえつける。とはいっても絞めるほどではない、荒くなった息の通り道を調整し、すいこむ量を安定させることで落ち着かせようとしている、感情的になって危険な状態の女を停止させるにはこの方法が一番、このブースターはそう信じていた。

1分ほど彼女の暴走を押さえつけたブレイブ、一緒に飛び込んできたグラシデアと最初からいたレオがスカイラブをかばい、どうにか起き上がらせる。「ったく…何だかんだ俺にほざくくせして、お前だって大差ないじゃねえかよ……」「うっさいわねえ……はあ…はあ…あー今回はやばいと思ったわよ…」コリンクの両前足でどうにか体を起こし、座り込むような格好にまで体勢を戻したルクシオ種族が、左前足で乱れた顔から頭にかけるはねっ毛をきれいに直す。「ラブちゃん大丈夫?」「う、うん…何とかね…」「良かった…」グラシデアが草地に転がった刃を右手で取り、軽くそれを振ってみる。「ラブちゃんのこれって軽くて振りやすいのね、あの人が言うには4本足種族には軽めで動かしやすいほうが良くて、2本足になったら質量があるのを使ったほうがいいんだって」「そうなんだ、私のはアメリカ陸軍…アメリカって知らないよね…まあ、ここからそれなりに離れた人間のでっかい国家の軍から渡されたものなんだけど。あの人ってバストークさん?グラシの親父さんなのよね」「そうよ…唯一あの人(ポケモン)に感謝するとしたら、私にこの剣術を教えてくれたことくらいかな?」

「そ、そんなの教えてもらったの?」「うん…とりあえずは…」モココはピンク色の両手でルクシオの軍刀を持ち、その質量感を感じる。幼き頃に父親から教えてもらったそれらの使い方、当の本人は「護身用だ」とか言っていたが、まさか自分までこの職業に入れられるとは思わなかった。「ラブのは大丈夫だったよ」「そっか、ありがと」グラシデアが軍刀を渡し、スカイラブが腰に右前足でそれを戻す。「あの人さあ、何かソーラ北部にぶらぶらほっつき歩きに行ったんだって?」「そう、そうらしいわよ」「全くもう…私の事を娘とか思ってんなら連れてかなくてもそれ位は先に言えばいいのに…」モココは鼻を不満そうに鳴らした。自分の事を何が何でも束縛するくせに、自分のやる事は棚上げにする。だから彼女は父親のメリープがいまだに許せない、そのせいで…そのせいで…彼女の運命は狂わされた、そう思っているのだから。「うーん…まあその結

果、隊長をどうしようかってバストークさんが考えた果てに…」ルクシオがブレイブに押さえつけられたテルルをちらりと見やり、呆れたように左前足を小さく振る。「慣習的にはあの子なんだろうけど…ああいうやばい性格の子はねえ…」

「やばいって…よく考えりゃ今回挑発してたのは9割9分おまえしかいねえだろーが…」「あれは挑発じゃなくて真実でしょうに…」スカイラブが怪訝そうな表情でレオを見つめる。「バカっ……言っていい事といけねえことくらい考えろやラブ…」「何をまた偉そうに…」「ふざけんな…いいか、お前のことをテルルさんが大っ嫌いだと思ってるのはラブだって見えるだろ?それを開き直って怠慢張るとかどういうつもりだよ?お前な、何年も一緒にいて俺がラブのその開き直りをいいと思ったことねえよ」「はあ?何を勝手にあんたが……」ムカついて右前足を振り上げかけたスカイラブは、レオの表情を見ているうちに詰まった。まさか彼にこう言われるとは思わない、彼が2歳、すなわち種族的にはもう4本足立ちができるが、まだ物心に至るかどうかというレベルの時点から共に暮らし、姉同然に面倒まで見たこのコリンク、レオ・バイブル・ミュースカイがここまで到達していたとは。

彼女はしばらく押し黙り、やがて消え入りそうな声でつぶやく「……私ってさ……アンタにはそういう……その…」「…何だよ?」コリンクがルクシオの表情を覗き込み、スカイラブは少し恥ずかしそうに口を開いた。「…私が…やっぱ卑屈な女に見える?…そうよね…当たり前よね…」

「あ、あのなあ…そういうてめえの態度が開き直りだって……」レオは解答にかなり窮する。彼が覚えている限り彼女がこんな表情をするのは初めてだった。コリンクは言葉を選んで慎重に続ける。「……まあ…でも俺はラブの事を全否定するつもりはねえ」コリンクは少し顔を赤らめる。「こんなバカな俺でも隊長やって最近分かったからな……どんな奴がいたって言い、必要なのはそれをどうする

かだって。それが俺の立場だという事な…」

「……レオ…アンタ少しは大人になったのね…」「…うるせえよバカ…こんな場所にいたら嫌でも大人にさせられるんだよ…融通も聞かず、何でも常識や慣習で切り捨てるアホな人間野郎の大人にな…まあ人間どもの子供は知らねえけど」彼は恥ずかしそうに彼女から数歩下がり、夏空を見上げた。昔からポケモンであろうと大人というものは彼の性分には合わない、融通も利かないし常識にとらわれ、必要とあらば他人の命すら奪う。人間という“くそったれ”な文明生物、彼からすれば猿もどきのくせして自分たちの文明を弾圧し、世界中で、良くは知らないがこの世界の外の空間にまで欲に手をだし続ける文明生物の存在を知ってからはポケモンの大人達がいかにマシで寛容性のある存在であるかを知ったが、大人という概念に対しての敵愾心は一層強くなった。こんな性格にはなりたくない、その思いでレオ・バイブル・ミュースカイは生きてきたのである。

「ラブちゃん…ちょいとばかりいいか……」ぐったりとしているテルルを背負ったブレイブが3匹に近づく。「…どうしたのブレイブ坊ちゃん?」「坊ちゃんって…ラブそんなに年上だったっけか?まあ何でもいいけど…」ブースターが恥ずかしそうに右前足で首周りのフサフサをかき回す。「ラブが…テルルと仲が良くねえのは分かる。俺だって全員にいい顔をしろとまでは言わねえ……ただ…」彼は寂しそうな表情でスカイラブに一歩近づき、わずかに首を縦に振った。目の前のルクシオと比べた時、テルルの性格はあまりにも短絡的で幼稚すぎると思うが、背中のグレイシアの事を思うと何も言わないわけにはいかなかった。「…ラブも…一応は隊長になったこいつに…無理させねえでほしいんだ。テルルも望んで隊長になったわけじゃないんだからよ…こいつ一匹で抱え込んできっと苦しいんだと思うんだ。隊長として、こいつなりにな」

「……そうよね…私が…やっぱり悪い…言い過ぎかもしれないのよね…」スカイラブは立ち上がり、済まなそうにつぶやく。テルルに対する申し訳なさと、降ってわいたようなこれまでにない自分に対する険悪感に体の節々が重く感じたられた。

さて、バストーク一行が出発してしまった後、リーヒュンたちはパルク州プロテウス地区から、徒歩3時間（これでも国連の施設から最寄だ）の国連施設兼統合空軍基地へと向けて歩いていた。サクラにはバストーク達を見送ったらすぐに帰るとしか言っておらず、彼自身訓練をさぼるつもりは全くない。妹のフローラが…首から下げた木製容器に入っている翡翠から感じられる温もり…それにかかっている、それを考えるだけで彼はサボタージュする気など全く起こらないのだ。

「ね、ねえ…フェノールが…ついてきてるよ?」ユイリィが後ろを振り返り、やや怪訝そうな声を漏らす。「確かにね…まあ、あの子の事だから暇を持て余してやってるんだろうな」「そうだけど…ウチからすればそうじゃなくてさ、フェノールを…国連の施設に連れてっちゃっていいの?」彼女には分かる、時折自分たちの居住区にやって来る郵便飛行隊のフワライドやフワンテ、ペリッパーでさえ、国連並びに施設を利用する国連統合軍とアメリカ空軍の機密保持を絶対条件に認可された連中であることを。すなわち、あそこへの民間のポケモンの侵入は許可されていないのだ。「だって…飛行隊の人達（ポケモン）は普通に入って来るだろ?あれはまた別か?」「当たり前じゃん!……飛行隊どころかここの皆だってあそこの施設は知らないんだから。バストークさん達が親方さんに言わなかったよね?あれなのよ、うん」

「ホントかよ?…まったくめんどくさい連中だな人間という生物は…」メガニウムのツルがベイリーフの首の下を軽くたたき、彼の方

は戸惑った表情で自分のツルでそこら辺の木の枝を拾い、その先を口にくわえる。色々と迷ったことがあると口先で寂しくなる、リーヒュンのくせだった。「どうする…どうすんだよ？」「どうするもこうするもないでしょ、うん。かわいそうだけどさ……」

「おいらヒマだぞ！」思い悩む2匹の背後で元気よく声がする。2匹が振り返った目線の先には、予想通りフェノール・モルバーリットルが嬉しそうに2匹を見つめていた。「兄ちゃんもユイもどこかに出かけるみたいだな！夜にならないうちに帰れば親方さんは何にも言わないし、片道3時間くらいなら途中までついてっていいか？」「お出かけって…ウチらの場所に帰るだけだよ、うん……てかいつの間にそういう呼び方にしたわけ？」ユイリィが顔を少し赤らめてフェノールの方に歩み寄る。「お前の頭の上にいるちびっ子に教えてもらったぞ」「ミーが教えたんでしゅけど、代名詞は無論、お前が妥当でしゅね」「…このバカっ……もう…」メガニウムは頭の上のシェイミを見上げ、思わず右前足を踏み鳴らす。

「ま、まあ…それならそれでいいだろ？、ただし…」リーヒュンも同じようにゾロアの元に数歩分戻る。「……ユイリィ、俺たちの場所…連れてっちゃだめなんだよな？」「うん…でも…このまま帰すってわけにもいかないしね」彼女の方もフェノールをそっとツルで抱えた。6時に出ても行くのに3時間、すでに2時間近く滞在し、また帰るのに3時間、ここで道草を食ったら結局帰るころには夕方になってしまう。ユイリィは意識の水晶が浮かぶ、時間という流れに手を伸ばし、その先の読める限りを頭に思い浮かべる。サクラとの訓練と言っても今日できるのはたかが知れているし、このちびっ子を置いてきぼりにしていく方がよほど自分の心を苦しめ、能力を引き出す事を妨げる結果になる。

ならいっそ！彼女の中で隣にいるリーヒュン並みに吹っ切れた勢いというものが湧き上がった。「うん！こうなったら今日練習さぼろっか！」「珍しい決断だなユイリィにしては！俺もそうしよっかなって思ってたし」「でっしょ、ウチもリーヒュンのマネしよっかな♪とかね！あははは！」「マネしなくてもいいとは思うけど…まあいいや。でも…」ベイリーフがふとちょうど太陽のあるあたり、南側の小高い場所に見える明らかに人間が作った構造物がある方向…国連の施設だ…を見やる。「それさ、サクラさんにどうやって伝えるんだ？」

「方法？方法ならちゃーんと持ってるんだよ、うん」メガニウムがツルの先端をわずかに口に当て、思いっきり息を吹く。初夏の野原を流れていくような澄んだ笛音があたりに響き渡り、数分としないうちに彼女のツルの上にグレーのカワラバトが飛んできた。「この子はセレーネ、ウチの伝書鳩って奴かな、うん。“せっちゃん”でいいよその呼び方で」

結局、４匹は近くを流れる河川で相変わらず遊んで時を過ごし、２時間ほどはあっという間に過ぎ去ってしまった。

その帰り際、リーヒュンはやっぱり何か寂しい物を感じた。２日間だけとはいえ、自分の事を兄ちゃん兄ちゃんと言ってくれるフェノールに、彼は愛おしささえ覚えていた。「そうだ、フェノールの渡しておきたいものがあるんだ…」その時彼が首から外してゾロアの胴体に回したもの、ポケモン達なら男女構(オスメス)わず手足や首に巻きつけている、種族や地域の伝統となっているミサンガの類である。「何だよこれ？」「約束の一つだ。兄ちゃんとフェノールがまた会えるようにってな」ちょっと不思議そうな表情をするゾロアに、ベイリーフは胴体にそれを巻きつけ、ツルでちびっ子の頭の上にあるフ

サフサ毛をくしゃっと撫でた。「絶対会えるさ…兄ちゃん、約束する」「うん！」フェノールが屈託のない笑顔で彼の葉っぱのある首元に飛び付く。

リーヒュンはその温もりの中から、自分とこのちびっ子を結ぶ不思議な感覚に気付いた。彼とはまたいつかどこかで再開する、そしてその時は…きっと…フェノールは、自分たちと何かで結ばれるかもしれない……それは妹のフローラに抱きつかれて時の感覚に似ていた。

わずかに傾きかけた太陽、まさしく午後の青空のなかに、彼はそう感じた。

国連の敷地になりながら一切開発の行われていない、通用口へと抜ける森の中の道。東側と西側にある正規のゲートには、セキュリティセンサーと守衛の詰所があり、そこからソーラの東西沿岸を延びる道路は、ソーラの北部の港湾まで舗装と街灯が完備され、ポケモンが侵入しないように延々と電子鉄線で守られている。そうでないこの場所は、センサーとＩＣカードリーダーのあるゲートが無人であるだけで、それ以外は全くの手つかずである。

テルルには戻る気は全くなかった、あの時、スカイラブに思わず飛び掛かって、それから…その先の事は全く思い出せない。ブレイブの背中で意識を取り戻した時には、１２月末の時のようにまたしても全身から力が抜け、もはやおろしてもらっても立ち上がる気力すらわかない状態になっていた。今回に限っては医療施設送りは免れたものの、あの居住施設に戻るとなると意識の水晶が強烈に反

応し、たちまち吐き気に襲われた。あそこに戻ればあいつと顔を合わせることになる、その時の相手の悦に入った表情、それを考えるだけで、もう二度と敷地をまたぎたくないという衝動にすらかられた。

とはいっても、今のこのグレイシアに行く場所があるわけもない。テルルはとりあえずバストークが置いていった、エメリア語で書かれた直筆の紙束、すなわちエメリア自治協会防衛軍、部隊長業務で必要な行動の方法を示した資料を持って森の道の一角にぼんやりと体を降ろしていたが、数時間たっても紙に書かれた言葉が一つも入っていない自分がそこにはいた。彼女の思考の大半は、今朝がたに起こったあの騒動に関するぼんやりとした怒り、絶望、悲しみ、自嘲が入り混じった感情に支配され、彼女の意識の水晶は全てそれがもたらした水によって毒されている。最初のうちこそ、問題があるのはあのルクシオ、スカイラブであるという絶対的な憎悪が思考を停止させるほど渦巻いていたが、時間が経てば経つほど、彼女に肉体的にも精神的にも勝った試しのない自分に対する嫌悪にそれは取って代わり、次第に悔しさよりも自分への絶望で体が重くなっていくのを感じた。せめてブレイブでもいてくれたら！そう思った時にはすでに手遅れ、自分の思考がもたらした虚脱感がテルルの体と思考をマヒさせていた。どうすればいい…自分が本当に隊長をやっていいのだろうか、スカイラブが放った言語に含まれるとげが、テルル・ルナマリア・アストラフスキーの自尊心を揺るがし、傷つけ、意識の水晶玉に容赦なく突き刺さって破壊しようとする。自分が本当にちびっ子たちを殺すというのか？ウソだと信じたかったが、考えればそうするほどその言語が放つ冷たいエネルギーが、彼女の思考と意識から冷静さと平常心を失わせてゆく。バストーク手書きの指南書を持つ両前足が震え、不安と恐れのあまり彼女は今にも発狂するんじゃないかという恐ろしい寒気に飛び上がりそうになる。

（ダメ…やはりだめ…このままじゃとても……）

その直後、テルルの背中、ネイビーブルーのひし形模様の辺りにそっと優しく触れる感覚を感じる。「どうしたのテルル？隊長になって…やっぱり気苦労が多いのね。聞いたわよ」気が滅入ったようにうずくまる彼女の隣にそっと腰を下ろしたのはサクラだった。「ええ…彼女とは…やっぱり馬が…」グレイシアの表情に消え入りそうな笑顔が浮かぶ、年齢や目上・目下を問わず、女と話すとなるといつも適当な愛想笑いを日本人のように浮かべてしまうテルルでも、今回自体にはさすがにそこまではいかない、サクラは恐らく騒動を遠くから見た統合軍の人間の歩哨が交代の際に責任者に報告し、その責任者が彼女に伝えたのだろう。どうせ自分が怒られるに決まっている、精神的に疲弊しきった彼女にはそれを真剣に心配する余力すらない。どうにでもなれ、自分に対する絶望に追い打ちをかけるが如く、そんな投げやりな感情が彼女の意識の水晶を巣食った。「ラブとの事？ええ、それもまあ…そうよね…」「…すいませんでした。全部私の幼さゆえに…」「そうじゃないの、あなたはそれでいいのよ…ケンカしても殴りあってもいいの」「え…？」サーナイトの思いがけない言葉に、テルルは一瞬息が詰まったかのようになる。サクラは左手のひらでそっと彼女の背中を撫でた。手先から感じるグレイシアの意識が持つエネルギーが、彼女の意識の水晶の周囲を渦巻く空間をゆっくりと回り、水晶の中にある感情の原子炉のセンサーがそれを感じ取る。テルル・アストラフスキーは思った通り、隊長に無理やりされたという不安感と、スカイラブとの騒動がもたらした自分の素質に対するプレッシャーを、本人も気付かぬうちに受け続けているに違いない。

「隊長に限らずね…上からまとめる仕事って言うのは、自分の心と

の我慢比べなの。自分は楽をしたいけど、自分と一緒にいる仲間、部下じゃなくて友達に近いものよ、みんなの迷惑をかけてはいけないって感じよ」「……力比べ…ですか？」「そう、いわば自分とのバトルって所かしら。一対一で、戦場で、探検や救助の現場で、各々生きる中で、自分に勝たないといけない、人生は常に自分を見つめ、自分と常に戦っていくのよ。ほかの子たちとの関係もそうね、相手を絶対に認めたくない、そういう自分に負けることなく相手は相手で、ね？」「……」「ええ、信頼できる場所を見つけてそれをお互いに分かち合えれば……自分をより前に進めることができる…そう思うわ」「…サクラさん…」テルルの意識の中の重圧が、思考を縛っている足かせが突如ゆるんだようだ。サーナイトの一言一句に感じられる不思議な優しさが、グレイシアを苦しめていた痛みを、悲しさを、悔しさを、そして苦悩をすべて押し流してくれる感じがした。「このひと月はあなたが隊長をするの。だから…よろしく頼むわね、私にとって…あなただって大切な娘のように見えるもの」

「あの…サクラさん！」「ん？どうしたの？」テルリウムは思わずサクラの方を振り返り、勢いで前足が上がりそうになった。遠くから包んでくれるような優しさに似た感覚に、眼頭のあたりが訳も分からぬうちに熱くなり、思わず涙が出そうになるのを必死にこらえる。「…私…ワタシは……な…みん、皆の…たい…隊長に…なれ…ますか？」一言喉の奥から絞り出すたびに、目の奥から熱い物がこみ上げ、頬を伝いそうになる。グレイシアはぎりぎりでそれをこらえ続けた。サクラの前で弱いところを見せるなんて情けない、そんな事をしたら隊長としての素質を疑われるかもしれない。
そんな彼女の悲痛な頑張りがサクラ・ワタリ・フユツキの心を打ち、彼女の姿を１０数年も前の自分の姿と思わず重ねてみる。自分がまだサーナイト種族に進化する直前だったかあれは、人間の大学を出

て旧国連に入り、戦術予報士としての資格と共に軍人としての素質を見出されたあの時、生まれ持った自分の奇妙な能力が、ポケモンの文明そのものと深く関与していると知り、旧国連の上層部に自治協会の派遣員から引き抜かれたころだった。人間たちにバカにされるまいと必死に努力をした。自治協会公認の全てのポケモン達とバトルを重ね、自分の能力を引き出す術を、書物を漁って必死に探し、その深刻さにおびえながらもその訓練を独力で重ねた。旧国連の人間たちの期待、周囲からの嘲笑、何度も涙をこらえ、ひたすらに自分の道を探したのだ。

だからこそ、そうだからこそサクラにはテルルの心情が、期待されたり挑発されたり周囲の身勝手な目線に翻弄され、自分の能力の低さに絶望し、誰も理解できない孤独にさい悩まされながら前に進むしかない時の心情が、痛いほどわかった。「もちろん…あなたならなれるわよ……」「（！！！）」嬉しさと戸惑いが入り混じり、目を見開くグレイシアを背中をもう一度サクラは優しくなでた。「あなたは…とても我慢強くて…それでいて自分の思う事をまっすぐに貫く。…それが隊長に必要なことなのよ…だから…」サクラはめったやたらに見せない笑顔を彼女に向ける。「…時には思いっきり泣くのも人生、ね？」

認めてくれた、テルル・アストラフスキーの意識の水晶の中でその喜びが、安心感が、このサーナイトに対する感謝が、ダムが決壊したように水晶の奥底、感情を司る原子炉にほど近い空間にある、想像を絶する苦難、苦悩、悲しみ、怒りで増殖し続けてきた巨大な腫瘍にひびを入れ、その中からそれらすべてが一気に溢れ出す。それと原子炉から湧き出した嬉しさと感謝の沸騰水が混ざり合い、意識の水晶の温度を急上昇させたのだ。

「サクラさん…！！！……ワタシ……！！！！！！！！！！！！！」こみ上げてきた涙はついに我慢できずに洪水のように彼女の顔を洗う。複雑かつ強烈な感情の前にテルルは屈し、サクラの腕の中に力なく倒れこんだ。

２０１３年　１月３１日　タイ中部の首都バンコク北　ドンムアン国際空港　０９００時

タイ中部を襲った洪水は首都バンコクのオフィス街や官庁街、超高層ビル街から繁華街まで襲い掛かっていた。もともと海面からの高さが低い都市であるバンコク、政府や市の努力にもかかわらず洪水を防ぎきることができず、アジアの水の都とも言われたバンコクの水路のあちらこちらから流された船舶が、現代的な幹線道路、ルーフまで水に使った自動車の間を無情に流れていく。

緊急支援を受け付ける拠点の一つとなり、一応の応急処置を済ませたドンムアン国際空港…バンコク周辺の避難民の避難所ともなっている…は、民間航空貨物・旅客便の受け入れこそ停止していたが、欧米諸国から中国、韓国、ベトナム、マレーシアなどの近隣アジア新興諸国、並びに新国際連合の支援物資や人員を乗せた輸送機でごった返している。

ドンムアン国際空港は、Ｂ－７４７やＡ－３４０、イリューシンＩＬ－９６のような大型旅客機、貨物機の着陸を可能とし、タイ空軍の司令部と基地も併用となっているため、世界各国や国連機関の大型機も着陸することができ、大型作業機械、巨大建築資材や大型トレーラーのような機械・車両の積み下ろしも可能としている。浸水によって主要幹線道路や鉄道が大きなダメージを受けている今、主要な交通・物流機関は空路、または港湾経由の海路しかない。海路の方もコンテナ船によって港まで物資を運べたとしても、冠水が

市街地まで及んでいる今となってはその機能は低下し、トラックや軍の車両が入れない場所へはやはりヘリコプターか輸送機しか被災地に救援物資を送る手段はない。一番頼れる物流機関が航空機の身になってしまった今、電気、水道、ガスといったライフラインを応急処置で復旧させたドンムアン国際空港は、今回の水害救援の最大拠点となっていた。

駐機上の端に浸水で放置されたＢ－７６７やＡ－３３０１機ずつ以外に民間旅客機は見当たらず、多くの民間・各国軍のチャーターしたロシア・アントノフ設計局製の大型輸送機Ａｎ－１２４や民間に払い下げられたロッキード・マーチン社製の輸送機Ｃ－５といった貨物機でごった返すドンムアン国際空港に国連統合軍直属のＣ－１７Ｂグローブマスター３がランディングし、数分後には本来なら民間機が駐機するエリアの指定された場所に機体が停止する。直ちにタラップ車や整備車両が到着するのはもちろんの事、後方のカーゴベイが開き、満載した救援物資の段ボール箱の山を降ろしにかかる。救援物資は食料、水、毛布、医薬品、医療など最低限の必需品から、携帯端末や懐中電灯などに必須の乾電池や発電機まで多岐にわたっている。これらは首都バンコクやドンムアン国際空港のガラス張り現代建築の（今や世界どこの空港ターミナルもガラス張りの現代建築が当然となりつつある、せめて海外からの人間に綺麗に見せるためだろう）旅客ターミナルに（浸水と誘導・管制システムの停電にと伴うダウンで民間旅客機の扱いは数日前から完全にストップしている）、タイ中部のアユタヤ県周辺の避難した被災者に、未舗装路や浸水地域でも走破できるドイツ・メルセデスベンツ社の中・大型トラックで運ばれる。

あちらこちらに残る水たまり、泥と草をかぶった誘導機器、流されたまま放置されたＵＨＤトラックやベルトローダー車が放置されるなどいまだに浸水被害の傷跡が残るドンムアン空港の旅客ターミナルへと歩く国連関係者の男２人、先遣して現地入りしている国連の救援チームと合流する予定になっていた。２人は本来は航空手荷物積み下ろしの関係者が使用するターミナル１階の解放された扉から到着ロビーに入る。到着ロビーは、河川の氾濫を警戒して先週から避難してきている避難民のテントで小さな市街地のようになっているが、到着案内などを行う大型モニターや自動ドア、エスカレーターやエレベーターも完全に機能を停止し、ロビーの照明こそ最小限付いているがそれは空港の自家発電機によるものであった。それでも足りない…例えば救護場所で使う医療電子機器や照明の電力…面は、無数のガソリン式の発電機が唸りを発し、電力を補っている。これもタイ政府以外にも世界各国や国際機関、民間のボランティア団体が送ったものだ。「国連難民高等弁務官事務所（ＵＮＨＣＲ）より寄付された救援物資、国連救援部隊の第２陣と共に到着しました。」「はるばるご苦労様です〇〇〇〇さん」先遣隊の隊長である女はやってきた男２人のうちの片方に手を伸ばす。「いえいえ、××さんの方こそ今回の救援活動の方、お疲れ様というところです」「とんでもない、だいぶ救援チームや救援物資も集まってきたようで…」女がちらりと周囲にを見渡す。支援に当たっているのはタイ政府・警察消防関係者のみならず、各国の支援派遣団やボランティア機関、国際的なＮＧＯやＮＰＯ団体も多くみられる。一行の近くにはアメリカと中国から派遣されてきた緊急支援チームの人間がいた。国際社会でどれほど対立していようと、国際協力の場では関係がない、このような支援活動は、被支援国民の自国に対する評判を上げるばかりでなく、国際社会での絶好のパフォーマンスとなる。「今回の水害、規模はかなりの大きさのようですね？」輸送機できたもう一人の男が女に尋ねる。「ええ、首都バンコク周辺はまだいい方のようです。アユタヤの海外企業工業団地周辺は位階が水没す

るほどらしいですよ」

「それはまた厄介な事態だな、これもやはり地球温暖化の…」その男がそこまで言いかけた時、ロビー入口のバスターミナルへと続くドア付近で何者かの大きな物音がした。

一行や周囲のスタッフが振り返ると、現地の警察か軍の関係者らしき人間が空港ロビー周辺にいるポケモン達に銃を突きつけ、外で待つ軍のトラックに無理やり詰め込んでいく。それに呼応するように避難民の中からも周囲をうろつく非人間文明生物を蹴りだし、殴り飛ばし、警察や軍に突き出す者たちも現れていた。警察官たちはロビーの中をゆっくりと歩き回り、避難民の荷物を盗もうとするポケモンを電流の流れる刺叉で捕まえ、単独でうろつくもので身分を証明できない（すなわち人間とではなく自分たちで生活している）者を容赦なく連行してゆく。避難民が自分の家族と主張する者にさえ、証明書を見せろだの、自治体に許可は取ったのかだのしつこく言及している。慣れない避難生活に疲れ切った人間の難民の中には、そんな警察官の態度にいら立ってくってかかる者もいる。おそらくは溺死したと思わしきわが子（すなわちオタチ）を背負い、何かを延々とエメリア語で抗議し続けていると思われるオオタチを、警察官は電子刺叉で感電させ、マスクに防護服、手袋をはめた関係者がそいつと死んだ子供の骸をまるで汚物を処理するかのようにトラックへと運び、彼等の荷物も同様にビニール袋に放り込む。泣き喚くシママに警察関係者が銃を突きつけ、その子を人質に兄弟姉妹と母親らしきゼブライカをトラックの方へと誘導していく。そんな光景にもかかわらず関係のない避難民たちは見向きもせず、普段ならあだこうだとうるさい国内外のメディアの取材陣らしき人間たちも、それに特に気を止める事は無かった。

「……まあお約束と言えばお約束ですね、ポケモンというものは人

間には好まれない」先ほどの男が小馬鹿にしたようにポケモン隊の姿を軽く指差す。「ええ、国連も各国も支援は人間優先、良くてＮＰＯ団体のペットや家畜の救済ですから…」

そう、昨年１１月に発生したシンガポールでのひこうポケモン達のテロの件、中国軍の実験部隊が意図的にやったとされる疑惑というより、東南アジア諸国ではポケモンそのものに対する嫌悪感が高まっていた。そもそもから東南アジアの経済成長と生活水準の向上に寄与している欧米・アジアの工業進出に難癖をつけ、天然ガス、ゴム、パーム油、鉄鉱石、銅や錫（スズ）といった資源の採掘やプランテーション採掘、養殖業業施設の整備に猛烈に抵抗し、その中で行う環境保護すら甘い甘いと批判してばかりの彼らの文明に対し、あの件は致命的ともいえる国家・市民双方の反感と警戒感を抱かせた。あれ以降、ＡＳＥＡＮ諸国の“ポケモン狩り”は中国や中東諸国、アメリカや北欧の右派団体、熱狂的なローマ・カトリック教会なみにエスカレートし、特殊部隊によって集落ごと根こそぎ虐殺されるなどという事態が後を絶たない。もちろん保護団体の反発は続出しているが、国際世論やほかの環境保護団体ですらポケモン保護には消極的にである現状を考えれば、その声はたかが知れている。

人間の文明の前にポケモン達は都合よく扱われていた、人類の思い通りにするためなら不必要でも文明生物としての権利と義務を押し付け、都合が悪くなれば“ただの動物未満の化け物”として何の救済も受けることができないのだ。

「失礼…」もう一人の男の携帯端末が鳴った。「ええ……トルコ東部の大地震の件、原発と送電網の方は影響なし…分かりました。今日中にこちらを出発し、シンガポール・チャンギ空港経由でそちらに向かいます」

２０１３年　２月１日　ギリシャ首都　アテネ市　中心部　１３３０時

ギリシャ共和国の首都、アテネ市の中心部にほど近いシンタグマ広場は、殺気立ち、緊迫した空気が漂い、場所場所でその空気が炸裂したかのように爆発、人間の叫び声、逃げ惑う足音、警察や軍の車両らしき走行音、催涙弾どころか暴徒と警察官・軍人双方の実体弾や対戦車ロケット砲の発砲音すら響き渡り、まるで小規模な市街地戦闘の様相を醸し出していた。

首都の一角にあるとある国営金融機関の一室、その窓ガラスにさえぎられた外で爆発が起こった。デモ隊の弾圧のため出動していた国軍の歩兵戦闘車ＢＭＰ－３（西側諸国の武装の多いギリシャ軍だが、このようにロシアなど東側勢力の武器も多く所有している）の一台が被弾し炎上、数人の乗員が火だるまになって路上に転がり出て、やがて炎上したまま動かなくなった。気勢を上げて突っ込んでゆくのは、暴徒化したデモ隊の人間たちや彼等が所有する米国のフォード・モータス社のピックアップ車、Ｆシリーズ８であり、何と中東のように支援機関銃やロケット砲で武装している。しかし国軍がテロリスト同然のデモ隊に屈するはずもない、炎上する戦闘車の背後にいた２台のＢＭＰ－３が１００ｍｍ低圧砲を打ち込み、ピックアップ車は大爆発を起こした。周囲にいたデモ隊の乗車していた人間が跡形もなく吹き飛ぶ。勢いを吹き返した防弾装備の警察部隊と軍治安維持部隊の人員と車両群は、雲の子を散らしたように逃げ出すデモ隊の人間の男達に（もちろんデモ隊には女も多かったが、暴徒化する人間はたいてい男だった）催涙弾を浴びせ、負傷したり

しつこく投石を続けるデモ隊を片っ端から逮捕していった。中には大小のカメラを回し、撮影・録音機器でしつこくその様子を撮影し続けた結果、身柄を拘束された国内外のジャーナリストらしき人間の姿もある。

この日、国際通貨基金（ＩＭＦ）から８０億ユーロ以上の追加金融支援を受ける実質上の緊縮財政を行う法案が、ギリシャ政府と議会が正式に決定したのだ。緊縮財政は、社会保険制度の縮小はもちろん、国家の職員である公務員の大規模なリストラクチャリングを行う事も意味する。金融機関のリストラに伴う失業者に加え、多くの歴史的建造物や観光名所を国が管理するが故に、ギリシャ国内労働人口のかなりの部分を占める公務員の多くが失職するのは自明で、これに反発した各分野の公務員も失業者に合流して緊縮財政に対する抗議デモを展開し、この暴動はギリシャ各地に広がりを見せていた。かたくなにデモ隊を弾圧し、緊縮財政の方針を切り替えない政府に対し、ついにギリシャの公務員・民間企業の労働組合連合は４８時間のゼネストへ突入したのに続き、一部の暴徒と化したデモ隊参加者は、どこからともなく入手した火炎びんや旧ソ連製の対戦車ロケット弾・歩兵小銃さえ手に取り、ゲリラ同然のこの騒動に対して警察や国軍まで出動する騒ぎとなった。この日、アテネ市のほぼすべての商店、交通網、公共施設は休業となり、路線バス、地下鉄、ブルガリアやルーマニアを結ぶ海外長距離バス、テッサロニキやペロポソネス半島方面の鉄道は軒並み運休、アテネ国際空港を離発着するすべての国内外の航空路線も全て欠航となった。

ギリシャ国有の金融機関の責任者は、窓ガラスの外での恐ろしい事態をわずかに見やり、電話の受話器を掴んだ。
電話の相手は欧州中央銀行の関係者の女。“それで…政府はやはり緊縮財政を止める気はないのね？”「当然だ…何せデモ隊の一部が武装した車両に乗ってきてるんだからな！今こっちじゃ銃撃戦にな

ってる！」男は電話の受話器をもたっまま姿勢を低くして窓ガラスに近づき、ギリシャの首都アテネ市市街地で繰り広げられているゲリラ戦同然の事態になった大規模デモの様子を覗き込む。警察と軍は勢いを取り戻し、なおも抵抗を続けるデモ隊の人間たちを次々に取り押さえ、逮捕していく。再び激しい銃声が響き、市民か兵士かは知らないが一人その場に倒れた。デモ隊の群集は再び逃げ散り始め、ポリカーネイドのシールドと防弾装甲服、電子警棒を装着した治安維持部隊の隊員たちが彼らを追いかけ、背後の装甲車が放水と催涙弾を浴びせる。「聞こえただろ今！ともかくこっちはデモだとか財政だとか言ってるレベルじゃない、放火や略奪も起こっているんだ、ここだってどうなるか分からない…」“それなら…あなたも必要な書類をもって早く退避した方がいいわね…暴徒が侵入してきても絶対に資料や電子データを渡しちゃだめよ。その建物…地下室や金庫みたいな場所はある？”電話越しの女はひどく冷静だった。「…ある事にはある…今回の決定に合わせて待機していた職員も皆その中だ、私だって早く逃げたいよ！」男は苛立たしげに声を荒げ、もう一度下の通りに視線を落とした。彼自身戦争など経験したことがなかったが、この数日間のデモを通り越した騒動で、それが何たるものなのか初めて身を持って知ったのだ。それに引き替え電話越しの女はこっちの様子など知ったこった無いのだろう、テレビやインターネットなど電子メディアを通してみる暴動や略奪は、それが持つ戦争やテロ同然の殺気立ち、緊迫した空気が完全に抜け落ちているのだから。「それよりもだ…今回の事態をＥＵはどうするんだね？！イギリスがＥＵから完全離脱するか否かなどやる前に……」“欧州中央銀行、並びにＥＵの財政問題諮問委員会の決定はそのままよ。ただし、この所のギリシャにおける騒乱に関しては既にギリシャ一国では手に負えないわ、一説では一部の暴徒の集団にロシア系の武装組織が武器を提供しているとも言われてるの。既にＥＵ加盟各国軍と国連安全保障理事会、並びに国連統合軍の緊急の治安回復……”

「ぐわっ…」がりがり、という嫌な音をたてて突如電話が途切れ、それとほぼ同時に爆発音がして、窓ガラスの一部が割れちる。細かい窓ガラスを掃い、男は再び窓の外を覗き込んだ。火炎びんの直撃を受けたギリシャ陸軍のＢＭＰ－７が炎上し、治安維持部隊の装甲車の放水がそちらに向けられ、死傷した兵士たちを同僚が担いでいる。それでも治安維持部隊はひるむことなく発砲し、火炎瓶を投げた男を容赦なく射殺した。おそらく装甲車が乗り上げ爆発した部分の地下にあった電話線が切れたのだろう。「ちっ！」男は舌打ちして電話の受話器をうっちゃり、ガラス片や砂ぼこりをかぶった資料の紙束とＵＳＢ大容量記憶デバイスを引っ掴む。「警備員の封鎖網が突破されました！暴徒の一部がもう銀行内に入ってます、現金輸送用エレベーターで早く地下へ…」「ああ、分かってる、今行く！」ドアを開けて飛び込んできた部下の男に催促され、彼は資料を手に持って部屋を飛び出した。銀行内の全ての災害用非常ドアは閉鎖され、オートロックがかかっており、地下室は爆弾テロにも耐えられるように設計されているから容易に侵入することはできない。しばらくそこに身を潜めていれば大丈夫だろう……

市街地の上空に侵入したギリシャ陸軍対戦車航空隊の２機のＡＨ－６４Ｄ戦闘ヘリ、銃手（ガナー）の男は震える両腕を強く握り、再びトリガーを掴んだ。情報では一部の軍部隊や警察部隊がデモ隊に寝返り、東欧の武装組織の一部がデモ隊に武器を供給とも言われている。武力行使をしてくる重大脅威を排除し、警察・治安維持部隊の活動を支援するのが自分たちの任務。しかし、それでも我々が攻撃せねばならないのは自国民なのだ。この男は我が身を呪った、せめて自分の射撃によって死を迎える自国民がいるのなら、彼等の苦しみが一瞬で終わり、彼ら自身がおかした罪が主の前で赦されることを願うしかない。

しかしこの男とて軍人だ、一息ついたのちには目の前の任務に集中

し、レーダースコープ上に表示されたシーカーに意識を戻す。赤外線分析によって旧ソ連製の対戦車ロケット砲を搭載している車両が目標だ。

ギリシャの財政破たんから発したヨーロッパ・ＥＵ諸国の経済問題、その震源地で起こったデモは今や決定的な市民の不満の爆発となってこのような前代未聞の事態にまで発展していた。

そして、この背後にあるもう一つの真実が、ヨーロッパ・東欧の情勢にとある緊張をもたらすことになるとは……

２０１３年　２月３日　東シナ海北東部　対馬沖の海域　１１００時

日本の長崎・佐世保港から出発したアメリカ海軍第５艦隊第４１打撃群の空母「ロナルド・レーガン」以下の艦隊が、韓日間において定められた排他的経済水域境界線上に到達しようとしている。先週までの荒天とは打って変わり、日本の暦でいう“立春”、すなわち春の訪れという名にふさわしい澄み切った青空と、冷たいながらも穏やかな北風が海域を流れていた。

アメリカ海軍の空母「ロナルド・レーガン」のＣＩＣ（戦闘情報センタ）、韓国海軍第２艦隊との合流までにはまだ時間があり、さほど緊張した空気は流れていない。艦隊はあすから、延期されていた２週間の予定で演習を行う。「韓国海軍艦隊との集結点まであと６５マイル」「了解、現進路を保て」空母を先導するアメリカ海軍ダイゴンデロガ級ミサイル巡洋艦「チャンセラーズビル」の要員の人間達、航海用の機器や電子端末が並ぶ航海艦橋から見える防弾ガラス右舷前方に広がるのは、あまたの資源採掘海上プラントとそこから資源を輸送する各種輸送船やタンカーの姿である。

東シナ海から日本海（韓国の別称は東海）に浮かぶ韓国、台湾、ロシアはもちろん、中国、アメリカ、カナダ、イギリス、日本まで多くの国家の企業や政府機関が所有する天然ガス、メタンハイドレード、希少金属資源の採掘・精製プラント。オセロゲームのマスのような正方形をした小さな台地が列をなして並び、さながら小さな工場が海上に出現したかのように見える。数百メートルから一千メートルそこの海底、さらに数百メートルそこにある採掘エリアまで掘り下げ、安全に、環境を保護しつつ、かつ高効率で大量に気体や液体、金属岩石をくみ出すための技術が企業活動のレベルにまで達したのはこの5年の間の事だ。切削機器の改良、切削のパイプラインの建造方法、資源をくみ上げるポンプ技術、海上にある精練・貯蔵システムの改良、それらの安全システムの確立、さらにそれらを稼働させるエネルギーの省エネ化、あらゆる要素を経済産業技術として確立させるのにかかった時間、費用、試行錯誤、幾多もの事故や犠牲、その代償は計り知れないが、この技術の経済化は、当初から一部の国や企業に偏っていたレアメタルやメタン燃料の採掘場所を大幅に拡大し、採掘可能年数を飛躍的に高めることになった。無論これらの資源が、省エネ製品や自然エネルギープラントの機器など環境保全技術と各国の経済に貢献している事は言うまでもない。ただし、この事が各国の“資源ナショナリズム”や採掘企業の経済的支配を助長し、領土問題や軍事活動問題を助長している点も忘れられない。

韓国海軍第2艦隊との合流ポイントをめざし航行を続けるアメリカ海軍第5艦隊第41戦隊の空母「ロナルド・レーガン」以下のアーレイバーグ級イージス駆逐艦やダイゴンデロガ級ミサイル巡洋艦の艦隊。その背後には、海軍エメリア派遣部隊に配属直前、最新鋭

のバージニア級原子力潜水艦の6番艦にして通称“バージニア改級”と呼ばれる潜水艦、第2次世界大戦で最も多くの日本海軍商船を撃沈し、武勇艦もしくは“真珠湾の復讐者”と呼称されてハワイに保存されている歴戦の潜水艦と同名の“ボーフィン”、および同じくバージニア級原子力潜水艦“ノースカロライナ”の姿もある。

まだ北風冷たき東シナ海、ここでもまた一つ、世界が動き出そうとしていた。

新たなる変革（後書き）

執筆開始から5か月ですか…だんだん遅れてきたなあ、はい。でも…まあこの先は気にせずやっていきましょうや、そういう心境です。

ちなみに…実際のギリシャは内乱みたいにはなっていません、今後のストーリー展開に絡めるため、少しやり過ぎぎみになりました。

あと、最後の方でてきたアメリカ海軍の原子力潜水艦“ボーフィン”は、実在するバージニア級の架空の潜水艦です。ボーフィンという名前は、アメリカ大陸にすむ水辺の生物の名をあやかった、太平洋戦争時のアメリカ海軍の潜水艦からとっています。“ボーフィン”は太平洋戦争時には当時の潜水艦隊の中で最多の日本帝国海軍艦船を撃沈した英雄艦として、現在もハワイ・オアフ島で保存される超有名艦です。

まあ…学童を多数乗せた民間疎開船「対馬丸」を撃沈したりもしましたが、相手が貨物船かつ外見からは積み荷や客が何なのかは判断できないので、この行為自体は、日本の一部団体が叩きまくるほど違法でも虐殺でもありません。

興味のある方はぜひ検索してみてください。

見えぬ器（うつわ）というモノ

２０１３年　２月４日　ギリシャ　アテネ市　６時３０分

最初の暴動発生から５０時間近い時間が経過し、ゼネスト実行時間を終えてだいぶ平静を取り戻しつつある今でも、ギリシャのアテネ市の情勢が完全に安定したとは言えない。その一方でＥＵや国連安保理の対応は早かった。既にギリシャ政府の手におえないレベルにまで発展している、武装したデモ隊による破壊活動に対し、ドイツ、イタリア、ベルギーの各国陸軍が治安時部隊として装甲車と歩兵部隊の派遣を決定した。これに続いて国連安全保障理事会と統合軍も緊急でギリシャの治安維持にあたることを決定、南ヨーロッパ管区内の対戦車ヘリ部隊（もっとも、これはドイツ軍のものだが）が出動するに至る。しかしデモ隊の一部は、本来の目的を外れてまで抗争を激化させ、小型プロペラ機による警察機関への発煙弾・酪酸の投げ込みまで行い始めた。これに対して統合空軍は、黒海周辺の管区（すなわちブルガリアやスロベニア軍派出の）Ｆ－１６Ｃを発進させてこれを排除させたが、地上の最後まで抵抗を続ける暴徒はついに政府機関の建物の一つを占拠、武装した車両や人間たちがバリゲートを築き、緊縮財政の撤回を行わない限り占拠を続けるとの声明を出して頑強に持ちこたえ続けている。ギリシャ陸軍、並びに欧州各国軍が即時の投降と武装蜂起を命じたがそれに応じる者は少なく、かといって内部に関係者が、相手側が無発表ながら人質として取り残されている可能性も否定できない（公務員の安否確認は停電に伴う情報ネットワークの遮断で不可能になっていた）現在、むやみに建物を破壊することのできない、そのような情勢が歯がゆいほど続いていた。

２月４日未明、すでにデモ自体は一時収束に向かっているにもかかわらず、政府関連の建物周囲の通りと周辺の建物には全く人気がない。替わってドイツやイタリアの装甲車がその通りを例の建物を囲うように並び、暗視装置を装着した歩兵たちが敷地正門の警備員用詰所付近に大勢構えている。上空には統合陸軍の対戦車ヘリＡＨ－６４Ｄが上空を飛び回りって警戒し、地上部隊の持ち込んだライトにその建物は真昼のように照らし出されている。そこの建物こそが、暴徒と化したデモ隊が最後に籠もる場所なのだから。すでに最初の史上最大規模デモ開始から２日、デモ隊の人間たちがどこからともなく入手したアサルトライフル、対戦車ロケット砲、手榴弾などによる過激な抵抗と、それを排除すべき集まった警察、国軍の治安維持部隊、ＥＵ各国の部隊、統合軍のヘリとの抗争で、民間人、政府側双方に１００人単位の死傷者が続出、民間での逮捕者は２日で３００人を超え、市街地のあちこちは空襲を受けたかのようにいまだに硝煙のにおいと火災の名残を残す黒煙でうっすらと煙っている。暴動による市民生活やライフラインへの影響も甚大で、いまだにバス、地下鉄、路面電車、タクシーは運休、郊外のアテネ空港も暴徒が侵入してターミナルビル施設のみならず航空運用施設も損害を受けて閉鎖、全ての公共施設が無期限閉鎖、すべての公立教育機関が２月７日まで休業予定というありさまで、ストライキや電話線や送電線の破壊で消防や救急関係にも行動不能、それどころか一部の消防官や警察官、果てには一部の軍部隊…彼等もまた緊縮財政で甚大な被害を受ける公務員である…がデモ隊に造反するありさまだ。半ば“無法地帯”と化したアテネ市中心部、この２日間はデモ隊や暴徒の上げる気勢、過激派と治安維持部隊双方の発砲音や爆発音だけが響き渡り、多くの市民が地下室やアテネ市郊外へと避難する事態になっていた。

そんな情勢にケリをつけるべく集まったギリシャ陸軍の特殊部隊は、金融機関の建物の正面にあるセキュリティー用の詰所の背後に

身を潜める。その直後、詰所のゲートを突き破り、雨除け用の屋根を崩しながら巨大な軍用車両が建物正面に陣取った。ギリシャ陸軍の主力戦車であるレオパルド２Ａ４、ドイツのクラウス＝マッファイ社が開発した、世界最強クラスのＭＢＴ（主力戦車）の１種類だ。武装したデモ隊が旧ソ連系の武装組織から武器供給を受けた可能性が高いと、ＥＵ側から報告を受けたギリシャ政府は、建物の奪還よりも脅威となるデモ隊過激派の排除を優先したのである。

まもなく、レオパルド２Ａ４のラインメタル社製４４口径１２２ミリ砲が火を噴き、建物のほぼ正面が爆炎に包まれて、華奢な彫刻はとがった無数の土くれとなって地面に転げ落ちる。それと同時に車長側ハッチから身を乗り出した乗員が、暗視装置付き１２．７ミリ機関銃を前方の促成バリゲートに向かって乱射し始めた。最初の砲撃で生き残った暴徒たちが発砲してくるが、複合素材と被弾傾斜の良くするために独特の角度がつけられた主力戦車のチョバム・アーマーと呼ばれる装甲はそんなものは受け付けない。

その直後に上空をホバリングしていたＡＨ－６４Ｄも発砲を開始、３０ミリガトリング砲で建物の窓という窓を打ち破り、対戦車ロケット砲をかまえる暴徒を次々に吹き飛ばした。その支援射撃が完了したのち、主力戦車はドイツ・ＭＴＵ社のＭＴ８８３Ｖ１２気筒ディーゼルエンジンと前進５段・後進３段のオートマッチックトランスミッション制御機器を一律のシステムで電子制御する“ユーロ・パワーパック”駆動装置をフル回転させてバリゲートを突き破り、建物に接近すべく敷地の奥へと入り込んだ。その背後からギリシャ陸軍の特殊歩兵部隊が続いていく。

主力戦車を含む本格的陸軍部隊の前に、小火器しか持たないゲリラ同然の人間の集団は歯が立たない。事態は一気に急展開をむかえたのであった。

その情勢を２４時間体制で見守るベルギー・ブリュッセルのＥＵ（ヨーロッパ連合）本部。その対外行動局関連の一室で事態を見守る男４人女１人の人間たちは現在、精神的・肉体的疲弊の極みにある。円卓にある各員のディスプレイに映る情報にここ数時間変化はなく、事態は悪化しているわけではないが改善しているわけでもなかった。衛星回線を通じて統合軍から送られてくる現地の画像や各国のマスコミが伝えるニュース、ギリシャ政府や国連安保理からの新しい発表もない。

情報収集にあたる男の目の前にある灰皿にはすでに菅らの山ができ、今彼はその上からさらにもう一本煙草を押し付けて消す。ＥＵ加盟国内で起こっている今回の事態に対する緊張感よりも、いつまでたっても帰れないことに対するいらだちと疲労によって、部屋の空気がひどく重苦しく感じられる。男は右手で目を軽くこすり、手元にある情報端末を開いてネットワークにアクセスした。動きのないこちら以上に気になるのは、こちらも議会が夜を徹して紛糾しているであろう、突如発生したイギリスのＥＵ離脱の議決を巡る騒動だ。下院で造反が続出し、否決こそされたものの英国首相の政権運営の責任問題の発展している。その状況についても把握しておかなければならない。

そんな静寂を破るように、現行された照明がつくこの部屋にＥＵ関係者の女が入ってきた。「どうした……？」「ギリシャの占拠されていた金融機関…特殊部隊が突入し、解放しました。人質となっていた金融機関関係者7人を解放した模様です」

「そうか……一応は解放に成功したのか……」「ええ、抵抗を続ける暴徒は射殺、残存する関与者の身柄は全員拘束された模様です」

情報収集に疲弊し切っていたＥＵ対外行動局の人間たちは、その一方で顔を上げて眠たい目をこする。べったん喜ばしいとも思わない、ただようやく終わった、これでようやく眠ることができる、そうい

う思いが各員の間の空気に流れていた。「しかし…」男がもう一度目をこすり、わずかに席から立ち上がりながらも硬い表情を保つ。「…その…銃撃を加えてきた連中がそこまでの武装を持っている理由等いうのは…」「はい、その情報に関しては…」女が手元のタブレット端末を見る。「旧ソビエト製のライフルや対戦車ミサイルなどの武装が大半、おそらくは東欧・またはロシア系の武装組織から入手したものと思われます」

「ロシアか…」男は関上げこんだように薄暗い室内から窓の外を見る。まだ夜明けが遠いベルギー・ブリュッセル市街地の明かりは、市街灯や遠方に広がるブリュッセル新市街地の建物の黄色と白の入り混じったものしかない。そのまだ夜の明けぬ市街地を眺めているうちに、その景色の中にヨーロッパとロシアの今後を見たような気がした。イギリスのニューロン・コンピュータ社とロシアの情報技術研究機関の件といい、今回の大暴動との件といい、ひょっとしたら今回の事態がロシア・東欧諸国とヨーロッパ連合との関係の間に新しい展開を生み出すかもしれない。それが何なのかはまだ分からないが……

男は腰を伸ばし、女の方に振り返る。「わかった、その件に関しても調べてみようか。東欧圏と西欧圏の間にまた何かしらひずみが生まれる可能性もあるがな」

２０１３年　２月５日　アメリカ　ニューヨーク市中心部　１６時４０分

アジアでいう香港や上海同様、欧米でトップクラスの繁華街にして地球随一の情報発信地であるアメリカ・ニューヨークのブロー

ドウェイ通り。かつて犯罪多発地帯・スラム街としてアメリカの地下社会の象徴と言われた忌まわしき記憶はすでにとどめず、立ち並ぶ現代建築のビル群の壁という壁にはネオンサイン、広告塔、街頭映像ディスプレイが立ち並び、すでに夕闇が近づく市街地を眩しく照らし出している。除雪車両を大量増派して何とか間に合うレベルの除雪作業を終えた通りを走る自動車やタクシー、それでも間に合わぬほどの豪雪がどっさりと積もった信号機や道路をアーチ状にかかる表示灯、警戒カメラ、道行く人々が見えなくなるほどうず高く除雪した雪が置かれる歩道と車道の境目。

地球温暖化になかなか歯止めがかからない状況下にもかかわらず、今年の北半球を襲った寒波と豪雪はひどいものである。もっとも、２０１２年の南半球の寒波の時点で兆候はあったが。マヤ文明の示すとされる２０１２年１２月２１日の人類終焉と呼ばれるオカルトのブームにのって騒ぎたてる連中もいたが、結局何事も（ポケモン大量死は噂が多いが）なく、地球人類の世界は２０１３年も2月目を迎えていた。

そんなブロードウェイ通りと交差する大通りにほど近い一角、高層ビルの周辺は物々しい雰囲気に包まれている。武装した警察官がそのビルの入り口に多く立ち、面する通りの一番近い双方の交差点は警察車両によって道行く車両に対する検問が張られ、入り口に面する側の歩道はマスコミ関係者を含めて一般の通行は禁止、このビルの１０階はフロアそのものが封鎖されていた。

物騒な雰囲気の震源地はその１０階にある高級レストランだ。この日、ここでは新国際連合代表、国連上下議院議長、国連安全保障理事会関係者数名（本来は上層部が出る予定だったが、ギリシャのデモがゲリラ戦に近い暴動に発展して統合軍が出動するほど緊迫化していたために、ひと段落した今も情報収集にあたるため欠席）、

が集まった夕食会が行われている。もちろん、２０世紀前半から存在する高層ビルである（マンハッタン島郊外の超高層ビル街開発事業同様、昔から摩天楼が広がるマンハッタン地域の多くの古い超高層ビルが現代風のそれに建て替えられている）エンパイア・ステートの周辺には、国連上層部の人間がひいきする超高級店もあるが、代表はあえてここを選んだ。

議題とはいっても、食事をしている間は大した事は無かった。本題に入る前は南極で進む世界各国や企業による資源採掘、海水や氷の温度差を利用した熱発電プラントと平行作業で進むオーストラリア、アルゼンチンへの送電計画の状況、将来の人口爆発の備えてメガフロートやスペースコロニー同様に検討されている南極都市計画の現状、及びそれによって生じた南極の分割問題から（２０１１年末に南極の領有化を禁止していた１９６１年制定の南極条約は完全に破棄され、環境保護を条件に自国の基地、および将来建築されるであろう基地の半径１００キロとその縁の中心を南極点へと伸ばしていった軌跡を元にした扇形を当事国の領域とする“南極開発条約”が南極に基地をかまえる主要国の多く（日本は南極環境の保護を訴えて反対）の間で締結された）入り、世界人口が２０１１年の７０億人突破から2年足らずで７１億人に達したこと、メガフロート周辺の海賊問題、国連が独自に建造中の宇宙ステーション“ラプラス１”の進捗状況、イラクやアフガニスタンにおける各国軍と統合軍の状況、一昨年民主化したばかりのリビアやエジプトの情勢、太平洋西部で激化するアメリカ、中国、ロシア、韓国、台湾、北朝鮮の軍事活動における対立、深刻化する欧州財政問題とそれに伴う景気低迷からくるヨーロッパ全体でみられる北アフリカ系イスラム移民に対する差別・排斥問題、増加する一方のエメリア地域の各国軍部隊と軍事行動の問題、開発領域の問題など（これは米国・ＥＵ・中国）

が切りだされていた。

しかし、その本題は食後のコーヒーの中でついに切りだされる。「エメリアと言えば…代表、例の連中の現況、順調と言えるでしょうか？」アメリカ領域…すなわちニュークリア地域…における東南アジア、中国を除く東アジア諸国企業の進出の話題の中で、国連議会議長が唐突に話を切りだす。国連代表はコーヒーカップを一回口に運ぶ。「ああ、その事か。現在の所、エメリア自治協会と国連特殊生物機関が選定したチームに欠損はなく、特殊生物機関によるデータ収集と分析も順調に進んでいるよ」

「はい…安全保障理事会の方でも今のところ新国連上層部の行動が、理事会の主要国の批判を受けているという事態にまでは発展していません」安全保障理事会の関係者の一人が、そう言って葉巻に火をつけ一服吸い込む。あの“計画”の話になると円卓を囲む空気が少しだけ変わって行く、議院議長はそう思った。安全保障理事会の男が話を続ける。「ただし、アメリカ、イギリス、ロシア等一部の常任理事国が、統合軍の軌道上からの…あの“掃討”に対して疑問を持っている可能性も疑われますが」

「それは…思った以上に厄介なことでは？」議院議長が唐突に彼に聞く。「まあ…心地の良くない事態ではあります」「とにかくいずれにせよ、私たちが統合軍を利用した大規模な行動をしている以上、米、英、仏、露、中等の主要国にある程度自体を察知されることは避けられないな」代表が卓上に両肘をつき、顔の前で手を組み合わせる。主要国に多少行動が察知されても問題ない、その真実を多少発見されても問題ない、要はその行動を断罪されなければいいのだ。国際法を厳守して人類社会に危害を加えず、極端な自然生態系の破壊などをしなければ、世界各国や市民に対する…新国際連合の設立の理念でもある…罪とはならないのだから。「それでは…代表はある程度の各国の動きは黙秘する、しばらくはそういう方針ですね？」

「ああ、しばらくはそうせざる負えないだろう。今後も機密保持を

厳守してくれ」「了解しました……」議院議長の男はわずかに頷き、ぬるくなったコーヒーをわずかに口へと運ぶ。

「それで…計画に参加しているＧＢＴＸ社やニューロン・コンピュータ社の件ですが…」安保理の男が口を開き、手元のタブレット端末を代表側に差し出してタッチペンでディスプレイを何回か叩いた。

「国連の出資、並びに国連の研究機関が提供した技術を元手に、中国、ロシアの関連機関や企業との取引拡大を図っている模様です。あと…例のメガフロートを利用した疑似環境システム開発計画の中心となる企業についても…」「そうか…やはり彼らは事業拡大に手を出したか…」代表の男はもう一度コーヒーを口に運び、カップを置いたのちに再び両肘をついた。想定がなかったわけでもないし、地球の経済システムの大半が自由主義経済を導入している以上それを否定することはできないが、それが国際情勢に何かしらの影響を与えすぎるようであれば…例えば軍の意向に組み込まれる取引をするとか…、それは困る。経済を上向ける力以上に、国際社会の関係悪化というもののが与える経済活動へのマイナス面が非常に大きいし、それに加えて安全保障条約に齟齬（そご）をきたすようであれば、自分たちの計画と失敗と国連そのものの信用の失墜につながりかねないからだ。「いかがなさいましょう？」「もう少し様子を見てくれ、ＷＴＯやＩＭＦをはじめとする国連の経済関連機関にさえ経済活動・企業活動を不当に干渉する権利はないからな、万が一の事態になったら、ＷＴＯを経由して何かしらの制裁をあたえる事はできる」「いささか…綱渡り様な感じですなあ」安保関係の別の男が腕組みをし、代表の顔をちらりとの覗き込むように顔を近づける。「計画というものは、そもそもある程度のリスクは伴うものだよ。それを恐れて手を出さなければ問題は一向に解決しない」

「ええ…自分の方は代表の意見でしたら反対しませんが…万が一の事態の時は…」議院議長がカップに入った匙をわずかにかき回す。代表は表情を緩めて答えた。「その時の責任は…すべて私だ…」「あなたが…？」「ああ、君たちに責任を取らせるつもりはない、議

会や国連総会で罷免決議が出たら、私は一人で受け入れる。君たちを巻き込むつもりはない」　「……分かりました」議長の男はわずかに頷く。それにしても代表という男には、底知れぬ何かがあると議院議長は彼の表情から感じた。腹黒いだとか策士とかだという訳では決してない、彼の職務に対する熱心さは、国際政治界の中でもなかなかの高評価を得ている。しかしそれ熱心さがゆえ、時として思い切りの良すぎる、政治的に言えば大胆すぎる行動をしている点も否定できない。自分の情熱の失敗した際の代償は相当大きい、その際は自分たちの責任問題も免れ得ないだろう。

議長は窓の外の夜景にちらりと目をやる。ニューヨークのこの辺りでは１０階の建物等低層階だ、周囲は１００階建て以上のガラス張りの超高層ビルが林のようにそそり立ち、その足元に１０階から１５階前後の華やかなネオンサインや広告塔、市街地映像ディスプレイが光を放つ商用施設がある。その光の洪水の足元を黄色の市営タクシーや乗用車、大勢の人々が行き交っている。地球でも随一の都市であるマンハッタン周辺と、高速道路や高速鉄道で結ばれたボストン、フィラデルフィア、ワシントン、ニューヨークとその近郊住宅地からなるアメリカ東海岸都市回廊は、まさしく人類繁栄の象徴としての姿を持っていた。

その一方で、続く地球規模の経済開発と環境破壊、加速する人口爆発、深海や宇宙にまで広がるエネルギー問題、民族や宗教の対立、資源をめぐる各国の経済・軍事的攻防、核兵器、化学兵器、ロボット兵器、細菌兵器といった大量破壊兵器所有国家への懸念、情報サイバー空間やバイオテクノロジーといったハイテク産業を巡る国家や巨大企業の攻防、多くの課題を抱える人類社会という面も存在する。そう、自分たちの行動は、この難局と混迷の時代を切り抜ける一つの、しかし大きな一手となるに違いない。もちろんこの計画では、現状の国際情勢をも保ちながらという極めて慎重な行動を要する点もあるうえ、あの文明生物をなるべく波風立てないように排除売る

必要もあるという、大変難しいかじ取りを強いられるものだが、今はそれを信じるしかなかった。人類社会と地球という世界の将来を守るには、環境の保全と人類社会の安全保障という新国連の理念を完全にサボタージュするとはいえ、本来は自分たちが即急に可決すべき…中東・北アフリカ情勢でさえ…さまざまな国家間・国家内紛争や対立にあふれる現代社会をむやみに守勢してバランスを崩すわけにはいかないし、そもそもポケモンというある程度の犠牲もやむを得ないものなのだ、と。

「代表…もう一つ聞いておきたいことがあります」安全保障理事会関係者がおもむろに口を開く。「絶大な能力測定値を出す例の2匹の件ですが…代表はあの2匹の能力…信じていますか?」「2匹…そうだったな、GBTX社のクローン兵士でもいまだに手におえない連中の事か…なるべくはあそこの施設に幽閉して、必要な時で出したほうがいいんだが…」代表の男は組んだ両腕の上に顔を乗せる。データ解析や衛星通信による行動パターン分析では、これまで人間が電子データ化した限りのポケモン達のなかで、信じられないような能力値を持っている事が分かる。本来は他のチームとさえ接触させないほうがいいのだが、彼等にも性格というものがあるのであり、エメリア自治協会側が実質の登録をして国連が貸与されるという形をとる以上、交友関係までもに介入することは難しい。

「分からんな…あんな神話じみた話が実在するはずがないが…」代表の男はわずかに考え、答えた。「しかし…本来彼らが持っているはずの書物や資料は既に国連の手中にある。十分な認識者の少ない彼らの感情は、こちらの改編情報でいくらでも操作できるよ」

様々な思惑が交差する国連内部、きらびやかな都市の照明や広告用情報機器の明かりと生活する人間や車両、音響機器の喧騒が響いているにもかかわらず、その模索と試行錯誤の真っただ中にいる人類社会を象徴するような夜の闇が、アメリカ・ニューヨーク市の一角

の窓の外は広がっていた。

同日　中国　北京　西城区（シーチョワン）　２０時００分

　中国の首都・北京市の北西に位置し、中国の国会と言える人民大会堂をはじめとする人民共和国の政治・軍事の中心部となっている西城。人民大会堂の建物にほど近い中華人民共和国外交部の建物から、多くの警備員や警察官に囲まれて出てきたのは、アメリカ合衆国外務省の関係者の男である。この日、アメリカ合衆国外務省は中国外交部の上層部と非公式・非公開で接触し、地球人類社会で二大超大国となった米国と中国の間で平行線をたどる外交・経済・軍事問題について意見をかわし、同時に中断状態が続く北朝鮮をめぐる６か国協議の北朝鮮への出席交渉に交わしても話し合ったとみられているが、報道陣は完全シャットアウトで行われたため、その全容は一般には公開されていないのだ。

　嗅ぎ付けた一部の報道陣のフラッシュが飛ぶ中、アメリカ外務省関係者達は中国が使用しているドイツ・メルセデスベンツと米国・ダイムラー・クライスラーの共同開発した高級車、ＳクラスＷ２２１に乗り込み、まもなく中国当局の警察関係車両とともに北京市内にあるホテルを目指して出発した。

　２台のメルセデスベンツ社製高級車、ＳクラスＷ２２１に分乗したアメリカ合衆国外務省関係者たち。その中の一人、外務次官の男は窓の外に広がる北京市中心部、天安門広場周辺の広々とした敷地と通りを走る無数の車両、路線バス、タクシー、行き交う多くの人間たち、遠方に広がる商業特区のオフィスビル街をちらりと見やる。外部に広がる北京市以外にも、中国は上海、広州、成都、仁

川等の現代的な大都市を多く抱え、シカゴ、シアトル、ロサンゼルス、サンフランシスコ、ボストン、ニューヨーク等とやはり大都市を抱えるアメリカ合衆国とほぼ肩を並べる規模に成長した中国、アメリカに次ぐ世界第2位の国家になったが故に周辺国や国際社会での軋轢や対立も合衆国と同じくらい多い。今回の非公式会談もそれらに関する者であった。そして結果は……

男は携帯情報端末を手に取り、耳に当てる。電話の相手は外務省長官。“ご苦労だったな●●●君、で、中国の反応はどうだった?”

「ええ、まず現在行っている2週間程度の予定の米韓海軍軍事演習の件ですが…」次官の男はシートの端を右手人差し指で軽くつついてから切りだす。「…中国側としては、過度な中国領海側への侵入がない限り、強い抗議はしないという事です。そういう風に終始繰り返していましたが…」

“やはりか、言葉のニュアンスを微妙にして話を濁したがる中国らしいな”外務長官の鼻を鳴らすような音がそれに続く。「ええ、彼等は恐らく…機動艦隊を警備に出してくる可能性はあります。一度も自国の艦隊に関しては触れていませんでした」次官の男はややためらいがちに話を進めた。中国の事だから自国に都合の悪い話は出さない方針なのだろう、アメリカとロシアに続いて大型空母と機動艦隊を整備した中国海軍、アメリカやロシアはその存在自体は察知しても、詳細な行動パターンや性能などははっきりせず（建造されたウクライナの造船所の資料における…ＣＩＡが造船所のサーバから極秘裏に入手したものである…設計図と、衛星画像に映ったその姿とでは改造によって外見に甚だしい変化がある。おそらく内部の機器や動力機関相当の改良がくわえられており、造船所のデータはほとんどあてにならない）、中国自身もそれに関する発表を避けていた。機動艦隊の存在は、太平洋西部におけるミリタリーバランスの変化、軍事行動に対する周辺国世論の対中感情の悪化、民間企業

による資源採掘や空路・海路といった経済活動の敬遠など大きな影響を出す恐れがある。その結果が中国自身にもたらす負の側面も少なくない。中国側は機動艦隊の存在を、実力誇示における“最後の切り札”として温存しておくつもりなのだろう。

次官はさらに話を切りだした。「それから、エメリア関係で気になる点が2つほど…」“ほう、ここでも中国は文句を言っているのかな?”「まあ…文句と言えば文句でしょうが…」次官は思わず苦笑してしまった。アメリカ政府の人間にとっては、中国というものは自分たちを批判する存在にしか感じ取れないらしい。事実と言えば事実だが。「ソーラ北部、中部の農業開発地帯における中国企業の件ですが…警備部隊と称する治安警察派遣部隊を撤退させるつもりはないとのことです。また、前々から指摘されている、我が国の生命工学企業ＧＢＴＸ社との技術取引の件、あれはＧＢＴＸ社が独自で行ったものとの報告があるという説明をしておりますが……」“まったく、奴らしい解答だな。欧米諸国もエメリアの開発方法に関してはずいぶんと強引な手を使う事も多いからあまり文句はいえんが、それを口述にエメリアに対しても軍部隊を送る気でもあるのだろうか彼らは”ワシントンにいる外務長官は呆れたようにため息をつく。「それに関してはやはり具体的なコメントを控えておりましたが、まあ機動艦隊を整備するほどですから、今後中国は自国が建造するであろう大型空母を中心とした機動艦隊を足掛かりに、エメリアの軍部隊の整備も当然行ってくるでしょう」

“そうか…詳しい状況はホテルに付いたら端末経由で送ってくれ。例の録音機器と隠しカメラは仕込んだんだろう?”「はい…もちろん」男はポケットに入った小さな機器を左手でまさぐる。

黄昏に暮れなずむ北京市街地、外務次官の男には雪と市街の明かり

に輝く外の風景が一瞬しか続かない幻想のように思えた。自分たちがもめていることもこの時間の流れから見ればほんのひと時、ポケモンというあの神を冒涜したような姿かたちをした文明生物が信仰する“時間”や“空間”といった奇妙な概念は、もしかしたら本当に雄大かつ壮大で人間の人智を超えてしまうのではないか。この男はそういうカルト信仰みたいなものには全く興味がないが、自分たちが直面する不毛の対立、人間のスケールを超えてゆく自らが作り出した科学技術、人間文明を象徴するともいえる都市の夕暮れの景色、歩く人々、いろいろ考えているとそんな“神秘主義的”考え方があながちウソではないようにも感じられるものなのか、この男はそんな感情に囚われた。

アメリカやカナダといった北米諸国、ヨーロッパ諸国、中国、日本、韓国、台湾、オーストラリアといったアジア・オセアニア諸国など実に世界各国の国家プロジェクトや民間大手企業が工場建設や食料生産、資源採取のために入っているエメリア地域。そこでの三大勢力であるアメリカ、中国、ＥＵ、それぞれが派遣している自国軍の（ＥＵはフランスとドイツ）部隊はそれほど多くはない。国連統合軍を機能させることによってエメリア地域が国際情勢の新たなる問題の火種となることを防ぐという、いわゆる“ホノルル・メガフロート条約”が存在しているからだ。しかし近年に入って資源採掘権や工場進出をめぐる国際間競争が激化してくると、自国のプラントや市民の保護を謳って各勢力とも軍の増派を繰り返しつつある。中でも熱心なのは中国で、アメリカと同様規模の主力戦車を含む機甲部隊と歩兵戦闘車部隊を編成し、空軍基地の本格整備やミサイル駆逐艦を含む大規模な艦隊の整備にも着手しているとの情報もある。おそらくはエメリアにおける自国の存在感を高める意図があるのだろう。もちろんこの動きに対抗するようにアメリカ・ＥＵ双方、並びに国連統合軍も増派して対抗しているが、この結果がさらに南太平洋に浮かぶ微小大陸群における各国の対立を激化せているのは言

うまでもなかった。しかしどの勢力も引き下がるわけにはいかない、２００８年の金融危機の後に一気に注目が集まったエメリア地域の開発、金融危機やその後の不況の後遺症とひずみに苦しむ各国にとって、経済成長の起爆剤となる最後の場所がそこなのだから。

アメリカ外務省の関係者が去った後の会議場、円卓の半分側にはまだ中国の外務部関係者たちが残っていた。天井から下がった高級なシャンデリアの明かりを手元にある水の入ったコップに反射している。一人の男がその水をわずかに口に運び、大きくため息をついて指を組み合わせる。全くアメリカがまた我が国の行動に警戒を抱いている。あの国自身は世界中に自国の艦隊や駐留基地を作って我が物顔をしているのに、中国に対してはいちいち文句をつけないと気が済まない。軍事力増大を狙った外交をしているつもりは全くないどころか、そういう外交を長年続けているのは欧米諸国の方ではないか。ポケモン量産兵士（マスプロダクティブ・ウォーリア）の件も彼等は嗅ぎまわり過ぎだ、中国軍はアメリカやロシアが行っているものと同様、軍産複合体という形で吉祥公社から技術給与を受けているに過ぎない。吉祥公社がＧＢＴＸ社からどんな技術供与を受けようと、“自由市場経済”企業の経済活動で国家が介入することが許されないと主張しているのは、ほかならぬ欧米ではないのか？まあ、当局の調査によって黒いうわさらしき噂は入ってくることにはくる、ＧＢＴＸの技術協力を受けた際に吉祥グループが相当の額をＧＢＴＸ社名義のその振込先は不明、すなわちその企業が通常融資を受けていない金融機関らしい。

とにかく、今重要なことは米韓合同演習の際にはトラブルを避けつつ、必要な事態になった時にわが方の空母を含む機動艦隊の存在

をしっかりと示す事。それは国際的影響力の…何かと他国から批判される…拡大以前に体制維持のためだ。この国政治体制、ひいては自分の権力基盤を守るためには、経済や情報面での自由を規制している国民の不満を、経済開発関連や軍事力関連のアピール（国営報道機関のニュースは政府の広報としても機能させられる）で逸らすしかないのだ。

「代表…党への連絡の方は…」「ああ、方針に変化はない」男は両肘をテーブルから降ろし、ガラスのコップを右手の人差し指で軽くつつく。彼は隣の男に伝える。「機動艦隊の演習は予定通り再開、人民解放軍へ通達を要請しろ」「かしこまりました」隣の男は携帯端末を懐から取り出し、部屋の外へと向かった。

２０１３年　２月６日　エメリアのソーラ地域、国連軍施設　１０時１５分

結局自体は、ユイリィやリーヒュン達が何となく予想した（というより思い浮かんでしまった）通りになった。ソーラ北部へと向かったバストーク達に変わって、一応の隊長になったテルルであったが、やはり彼女にとってこの立場は重圧以外の何物でもないようだ。テルルなりには一生懸命努力しているつもりだったが、彼女自身が満足するレベルには達することができなかった。

今日のトレーニングは３対３、通称“トリプルバトル”と呼ばれるものだ。３対３というのは勿論バスケではなく、３対３でポケモンバトルをすることである。人間たちがやるオリンピック（２０１２年にイギリス・ロンドンで開催された）の正式種目にある“ポケモンバトル”でいう“シングル”及び“ダブル”以上に、数が多いが故に動きづらいといえば動きづらい。それあるがこそ３匹の間での連携や精神的団結が重要だった。「…という訳で考えてみたんですよ、私は」テルルが一同に向かって右前足を軽く動かし、同時に

全員を見まわす。やはり何となくだが、自分のしていることへの違和感が気になって仕方がない。「テルル…やっぱりリーダーシップは苦手か」リーヒュンはそんな彼女を見ているだけで、いつもの事のように頭の中にそんな連想が浮かぶ。それはグレイシアの相変わらず戸惑ったような表情のせいか、その少しおどおどしたしゃべり方のせいか、それともしかしたら、自分自身の持つその感覚がやはり鋭くなっているせいか、いずれにせよ、彼自身が前々から思っている間の良さのせいであろう、そう思った。「まあね、それぞれに長短はあるからね、本当はその植物にあった土地に植えてあげるのが一番だよ、うん」ユイリィも隣に軽く寄り添っている（というより、相変わらずリーヒュンに彼女が軽く体重をかけるように体をくっつけている）ベイリーフと同様のものを感じている。ただし、彼女にはもう一つ、だからと言って隊長を肩代わりすることはテル本人が許さないであろうとも分析していた。それは諦めが悪いとか、極端に意地が強いとかそういう言葉で意義されるものとは全く違うもので、本人が知らず知らずのうちに積み重ねて意識の水晶を磨き、形作ってきた自信と目的をはっきり持った時の動作の相手に対する思やりというものからくるものだ、と。

しかしこのメガニウムはやはりユイリィ・ランタン・プレミドールであるがために、そういう落ち着いた分析をしていてもやはり隣のベイリーフを茶化したくなる。「そんならそんなら！リーヒュン変わってみたい、そう思ってるでしょ？でしょ？」「い、いや変わりたくない、俺さあ、リーダーシップの最初の字もないから」「そーんなこと言っちゃってさ！本当は俺が振り回してやるぜ！、とかそういうのありそうな顔をしてるよ、うん」「何だよありそうな顔って？」

「ん？リーヒュンの単純さ加減と向こう見ずの良さかな！何か、こう、むやみに突っ込んだ結果として上手くいきそうな、そういう感じかな！うん！それそれ」「あのなあ、それを誰がほめ言葉に…」リーヒュンはやや呆れたような顔をしてユイリィ側から1歩分左に

動く。そんな彼を、彼女は逃がさないとばかりに大股で彼より大きく左により、彼の首にツルを回して自分の首を摺り寄せた。「うんん！ウチの褒め言葉だよ、うん。リーヒュンは今とーっても嬉しいんだよね、そうだよね、あはは！」「それはユイリィの…まあいいや、それが君の考えなら別にいいよ、生き方なんてそれぞれ自由に飛び込んでいいもんだからさ」ベイリーフは、嬉しそうにすり寄ってくるメガニウムを自分のツルと右の前後足で押し返しながらも、そんな風に自分の事を受け止めてくれる彼女に対する不思議な感覚を覚えた。ここに来ての訓練、見たこともない場所への冒険、多くの出会い、その中で気づいたことはといえば、確かに自分はバカで向こう見ずで思考回路が単純すぎるという気恥しい物ばかりに感じていた。しかし隣にいる彼女は、そんな自分何かとて子供っぽいとかどうしようもないとかいっては、自分よりはるかに年の低い弟のように扱ってくるが、その一方で自分の無鉄砲さと突き抜けた直進性を、まっすぐで信頼できると考えてくれているようだ。そう言うメガニウムの動きが、彼女の生い立ちに起因する何かがバックグラウンドとなっているという予感が何となくするが、それが性格であれ精神的何かであれ、頼られることに対する感情をここまで正面から感じるのも初めての経験で、ベイリーフにはいささか恥ずかしく感じられた。

「はいはい、ユイとアンタはふざけない、それで…」「まってましたぜ隊長！何というかわいさ、最強だぞテルリン！！」２匹の方をちらりと見返ったテルルに対して、ブレイブがフサフサ尻尾を振って飛び掛かろうとする。「何が待ってるのよブレイブ…てか、アンタまで何をテルリンとか呼んでるわけ?!」「へへっ、ロックさんに教えてもらったんだよ。最高の呼び方じゃねえか！やべえ、かわいさで俺、即死する！」「最高の呼び名って…あなたはホントに教えたんですかこいつに！?」グレイシアが顔を紅潮させてロックオンの方をちらりと見やる。「当ったり前じゃねえか、お前にふさわしいニックネームはこれしかない！そう俺が断言した。なあグラシ

？」「は、はあ…ひいぃ…」ムクバードの両翼にまたしても抱かれたグラシデアは恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしながらも、慌てて首を振ってその熱気を掃い、テルルの方に向き直る。「ごめんねテルル、こいつに口封じしときゃよかったね」「そ、そのほうが良かったわよね、まあそういう、事に…」彼女はモココにまたしても曖昧な愛想笑いを送り、視線を元に戻してじれったそうに右前足で自分のもみあげ状飾りをいじった。ロックオンはバストーク隊長、すなわちグラシデアの父親がいないことをいい事に結構やりたい放題だ。それはそれでいいとして、それで懸念される父娘のトラブルよりも、彼女にはもっと気にしていることがあった。「ま、まあそれでさ、3対3だから絶対最初に誰がやるかもめるわけなのよね。どうやって決める？」

「そりゃもちろん！」ツルを上に振り上げたのはユイリィである。「もちろんリーヒュンと一緒にうち等とテルルで3匹でやるにしたいな♪」「おいおい、俺は強制参加かよ？テンションに乗せてやったってロクなことないぞユイリィ？まあ、思い立ったが吉日とがいうからそれはそれで動きやすいとは思うから、それでいいけど」「ほーらそう来なくっちゃ！頑張ろうねリーヒュン！」「あ、ああ」彼女はもうリーヒュンとできる物と確信したように、大喜びで彼に飛び付く。その一方でベイリーフは嫌には思わなかった、やはりこのメガニウムとやる方がなぜか性に合う、そんな気がしたから。

「はあ…ユイ達は一応そういう事で組むことにして…」「それじゃあそれに乗って俺はテルルと……」調子に乗ったブレイブがテルルの背中に飛び乗らんとばかりに駆け寄る。「はあ？そんなわけ…できなくも無いけど…」グレイシアはうかつに前足で殴り飛ばすわけにもいかず、とりあえず両前足で押しのけておくことしかできない。やっぱり自分もやらなくてはいけない、その現実に初めて気づいた。隊長という仕事だからチーム分けという次元ベクトルの要素から逃れる事は出来ないのだ。それを知っているのかいないのか、それとも彼女が迂闊にツッコミを入れることが今できないを知っての事か、

ブースターはますます嬉しそうに調子に乗ってくる。「できなくねえなら決まりだ！俺とミオカとテルリン３匹でやる、それでいいだろうが！」

「え、私もやんの？」彼の背中にいるイ―ブイが驚いたように瞬きする。ブースターは背中側に見えるよう右前足を軽く動かす。「そうだ、頑張るぜ俺ら！我らの新隊長テルリウムちゃまのご支援ここにありってもんだぜ！」不必要に興奮するブースターの頭のフサフサを、グレイシアは両前足で無理矢理押さえつける。「あ、あのねえ…それはアンタの妄想なのよ妄想！いつも一緒にいるって自負するんだったらこういうフォローは必要でしょうに…」

「ばーか、これでしてねえ訳ないだろうが…」ブレイブはテルルの前足を軽く頭を引いて降ろし、耳をピクンと動かす。やはり彼女は緊張しているせいか、何となく動作に固さとたどたどしさを感じる、ツッコミ一つの感覚でさえ彼には違って感じられた。これは本人は気づかない精神的緊張、特に女（メス）に多い物だ。「いいか、緊張してるときゃなるべくでも見知りのある奴とやったほうがいいんだよ、俺は万全だから…隊長とかに囚われず思いっきり行け、いいな？」

「え、…分かったわよ…そんなら私は……」そう言われてみればそうだが、微妙に納得がいかないながらも頷こうとしたが、その直後に背後から声がかかる。「ちょっと待った新隊長さん！俺らはオール・シカトすかい？」声を上げたのは、元エメリア自治協会防衛軍１７６１突撃隊々長のレオである。「はいはい、テルさんが気づかない訳ないでしょ！いちいち自己主張しないの！」「うっせえよガトル！こういう時に必要なのは好印象なんだっての！しっかり前に出ないと…」「そーゆー思考回路が問題なのよ！アンタって子はどこまでも子供なんだからねえ……」グレイシアの前に歩み出すコリンクを、ガトルが両手で引き戻そうとする。「大丈夫よ、レオ達をほっとくわけないじゃない、皆の分もちゃんと考えてるから」「本

当に、本当すか？」「もちろん」テルルは怪訝そうなコリンクの頭部のはねっ毛辺りに軽く右手を当てる。前の前にいるレオ・ミュースカイとて隊長だったのだ、自分にやることの先が見えているのかが心配になる気持ちが分かるような気がする。「さすがテルル、そのあたりの気前もしっかりとしてて俺もう…」「はいはい、ブレイブの意見はよーく分かったから、迷惑かけんなよテルルに」リーヒュンはまたしても隊長に飛び付こうとした親友をツルで押さえつける。全くこの男（オス）はこんな性格で困る、妹のフローラの方がまだ意地が強いだけだったから。「んなわけねえだろ親友！俺は単に…」「はいはい、気持ち悪いつらは下がりなさい」その隙にグレイシアが両前足でブースターを強引に押しのけ、ベイリーフの方に曖昧な表情を作った。「ああ…ありがとうねリーヒュン…」「うっ…うん…テルル…」ベイリーフ、グレイシア双方は恥ずかしそうに顔をお互いからそらす。特にリーヒュンの方は、意識の水晶化に一瞬映りこんだものを思い出すと、本当に体が硬くなるほどのものを感じてしまった。

（何かは知らないが…これが…彼女がしてほしかったことなのか…？？）その恥ずかしさに思わず数歩下がりながらも、彼の意識の水晶の表面に映った物を感じ、これまでにない衝撃を覚えた。そう、ユイリィに言われたあの事、何となくではあるが、ブレイブが飛び掛かった時にテルルが覚えたであろうこと、普段だったら気にかからなかったに違いない、彼女の「隊長だから殴り飛ばすわけにはいかないけど、どうすればいいの？」という戸惑いを感じ、咄嗟にフォローに入ったのだ。対人関係（ポケモン）では当たり前の事なのかもしれないが、彼にはそれが本当にはっきりと、表情を彼女が変えていないにもかかわらずそう示しているように見えた、だから不思議なのだ。

「…は？どうしたのアンタ？」「…？いや、別に何でもない」「な、何よその恥ずかしそうなの？！ま、ま、まさかアンタ…うそでしょこのバカ…」グレイシアがベイリーフの顔を覗き込み、顔を真

っ赤にして数歩歩み寄った。このポカっとした男（オス）が何を考えているのかさっぱりわからないが、テルル・アストラフスキーの脳内に浮かんだものは、彼女が最も信じたくない、最も屈辱的に感じるものだ。彼女は何の抵抗もなく彼の首の葉っぱ元に掴みよる。「て、て、早く撤回しなさいこのバカっ！何恥ずかしそうにしてんのよ！ああーもうマジ恥ずかしい…」「だからなあ！！そういうヘンな理由じゃなくてさ、そういう…すなわち…」

「違う、違うよ！うん。リーヒュンが感じたのはそういうのじゃないの！こういう子にはテルルみたいな子は早すぎるって事、うん」2匹の微妙な“触発状態”を回避したのはユイリィであった。「そ、そうよねそうなんだよねアンタ！いつもの変な直感が騒いじゃったのよね！」「そ、そんならいいんだが…」「そうしなさい、そうしなさいよ。ね、ね？」テルルはリーヒュンの葉っぱを軽くたたいてから前足から離し、無理に作った勢いで話をつける。グレイシアにとってはこういう状況が最も苦手だ、男子に対する拒否反応をどうにか我慢しながら、女子に対してのテンションを保たなければならない。

「でっしょー！そういう事なんだよ、うん。リーヒュンもそうだよね、だよね？」ユイリィもまた笑顔でベイリーフの首元をツルで撫でてくる。「うん…そういうもんだけどさあ、ユイリィに言われると……まあいいや、そういう事にしよっか…」彼はメガニウムの他者の動かし方にかなりの戸惑いを覚えながらも、とりあえず頷いておいた。テルルの表情を見ている限り、このままいつものように理由を尋ねていたら終わらなくなる。たぶん。「俺は置き去りか？！あ、あのなあ…それはまじで展開が…」「はいはい結構、今日はそこらで止めておきなさい…」慌ててベイリーフとメガニウムの間から出てきたブレイブ。その一呼吸だけでテルルの意識の水晶の中から迷いが消えた。なぜだろう、とにかくそういう事だ、グレイシアはいつもの調子でブースターを右前足で地面に突き倒した。

「それじゃあとにかく……」「ちょっと待って」どうにか落ち着きを取り戻し、前に踏み出ようとしたテルルを遮ったのはスカイラブだ。グレイシアの表情に暗い物が浮かび上がった。またしても何かこの女は私に難癖をつけてくるんじゃないか、彼女の意識にこの数か月で蓄積された不純物を含んだ水分が、彼女の体を冷たくする。グレイシアは思わず身構えるような体勢をとる。こうはしたくなかったが止むをえまい、目の前のルクシオ見ているだけで目の前の視界が狭く暗くなり、眼前にいる者への警戒心に葦が振るえるのを感じた。「な、何よ…ラブ…」「もう、身構えないでよテルル…私はケンカするつもりはないのよ今…」スカイラブは彼女に向かって、いつものようにわかってないわね、という表情というより、むしろ何を警戒してるの、という表情を浮かべる。隊長なんだからもう少し思い切った構えをしなさいよねと言いたいところだが、さすがにそれを言うのはまずい。ルクシオはブレイブの方をちらりと見る。ブースターは彼女と目線が合うなり表情を切り替え、無茶すんな、とばかりに右前足を小さく動かした。いつもの彼だったらその場で止めに入るところだが、今回は何とかその衝動を抑えた。先日スカイラブに言った“彼女の気持ちも分かってやれ”という約束、彼女はそういう物を破る人間には思えないが、不安感はある。しかし自分がここで踏み出すわけにはいかない、とりあえず万が一何があっても出られるように構えるだけにした。

　ルクシオは一瞬考え込み、言葉を続けた。「とりあえず思った、テルル達がやるんだったら、私の方はレオ達に決めさせてもいい？」「…決める？ラブが？」グレイシアは一瞬戸惑う。普段に自分だったら瞬時に拒絶していただろうが、さすがに今それを口と自分の体に出すのは難だ。彼女の首元に飛び付く寸前で自分の前足を抑え、どうにか気持ちを押さえつけた。「すなわちよ、自分の方を決めさせてほしいってこと。テルル達の分は選択肢はもちろんテルルの分、オッケ？」「は、はあ…すなわちそれは…」テルルは慎重に続ける。スカイラブの右前足の爪がまたしてもちっちっ、とばかりに軽く動

いた。しかしその表情は普段の説教がましい物はない。いつものようにルクシオ種族の鋭い目つきがトロンと下がった、全てをあきらめて眺めているような何の感情もこもらないものだ。「こういうフォローの仕方もあるでしょ？……人選って意外と気を揉む物なんよ……」

「う、うん…どうも…」テルルは曖昧に頷く。スカイラブが一体何を考えているのかは分からないが、おそらくあのときブレイブが彼女に何かを伝えてくれたのだろう、今のところケンカを売るつもりはないようだ。彼女はもう一度全員を見回す。これでいいのかは知らないが、ともかくそういう事で決定だ。「そ、それじゃあ…そういう事で…」「ちょっと待った…」声を上げたのはロックオンだ。「ん…何か？」「それにしてもなあ…チェギョンの方がどうなってる事やら…」ムクバードは相変わらず隣で意気消沈しているチルタリスを右の翼で優しく抱える。「…へ？…私は…その…どうしよう…」チェギョンの方は相変わらずの沈んだ表情をしていた。何だか調子が上がらない、ここまで気分が上がってこないのはどうしてだろう、前々のケガでしばらく人間の医療区画に入れられた後、彼女のテンションはますます下がっていた。今や自分に対する自身を完全に失い、自分がここに来た理由も思い出せない。なんでこんな場所に入り込んでしまったのか、吹いてくる風さえも自分の存在に疑問を呈してくるかのように感じられる。

こんな状況で出させるわけにはいかない、ロックオンは翼から伝わってくるチェギョンの感触から分かった。彼女を荒療治する手もない事にはないが、それをやった時にどうなるかは、彼には同僚にそれをした経験から痛いほど知っている。そして…それもまた…彼の意識の水晶に溜まるしこりの一つなのだが。

ムクバードはとにかく、グレイシアの方に軽く右翼を動かす。こういう時はしばらく様子を見て、彼女の調子を確かめることが重要だ。「まあ…先にやってくれテルリン、こいつのメンタルはもうちょっと調整する必要があっから」「そ、そう…ならそういう事で…」

「……そんでもってなんだけどさ」スカイラブは呆れたように鼻を鳴らしてから１７６１突撃隊の方に向き直る。確かに数日前、ブレイブはテルルに無理をさせるなと言っていた。そして何とか彼女をさせてやってくれと。無論このルクシオも事を荒げるつもりはないし、そういう派手な事や女の愛憎劇のようなことは自分に合わないし嫌いだ、彼女はそう思っているのは事実である。

しかし、彼女は生きても死んでもスカイラブ・バトルスターであるという物理的・化学的事実を曲げる事は出来ない。それであるが故に、彼女が一概にあのグレイシアを信頼するはずもなかった。サクラに言われた通り、無理にケンカをするつもりはない、ただ状況を見ていくだけだ、信頼するかどうかはもう少し考える、と。そのやり方にテルル・ルナマリア・アストラフスキーが如何なる癇癪を起そうと、それは彼女の方の問題であるから。少なくともこのルクシオはそう思おうと決めていた。

「誰がやる？」「誰がって…お前が決めるって言ったじゃねえかよ？」彼女の突拍子もない言葉に、レオが首をかしげる。スカイラブという女(メス)が、ボーっとしていたと思ったらいきなりおかしなことを言いだす、いろいろ言って“変わり者”であることは昔から知っているが、相変わらず彼女の調子には、このコリンクでさえ戸惑う時が多い。「……もちろん私は確定よ。問題はトリプルなんだから残りの２匹を決めるって事なんよ…それはアンタとグリソム出決めんの」「お、おいら…やっぱりそうだったんですか」「って、お前それで理解したのかよグリソム？俺だっていまだにできねえよラブの言葉に」グリソムとレオは思わず顔を見合わせる。コリンクが分かるのは、おそらく親友のミズゴロウがいつもの調子で何となく答えてしまったのだろう。「で、お前はラブとやりたいのか？」「いや、したくない。なんかおいらの調子に合いそうにないだろ？レオとだったらまあまあ、ってとこかな」

「だろ、さっすが俺の親友…って結局やんねえのかよ!?」グリソムの返事に期待していたレオは思わず後ろにひっくり返りそうになって数歩下がった。まあコリンクにとっては、こういうこのミズゴロウ種族の性格がグリソム・トルーマンの素直さを示しているいい点だと思っているのだが。

「さっすがグリソムちゃん!そういう所がまたこいつを支えるんよねえ。それで…」スカイラブは自分の調子で話をぐいぐい進めてしまう。「ガトル!私とやってみる?」「うーん…どうしよっかな…」パチリスはルクシオを見、コリンクを見、それから軽く尻尾を動かして彼女の方に進んだ。「うん、レオとやんないんだったら私やる」「ああ?!お前またしても…てか何で勝手にラブが決めに入ってるんだよ?!」レオがいきり立ってスカイラブに近寄るが、それに歩み出て止めたのがガトル、彼女は右手を軽く振る。「ホンット子供ねえアンタは。アンタが決めようとするとね、何かと強引沙汰になるからラブさんが上手くコントロール取ってくれてるのよ」「ま、まあそんなところね…さすがガトル」「はい!だって私がレオの尻を拭わないと成り立ちませんしね」ガトルはスカイラブに対し笑顔で答える。「て、てめえ…確かに俺はてっとり早く決めたいが……」コリンクは顔を赤くしながらも、どうにか後に引っ込んだ。ガトルの言う事は全く持って図星だ、確かに自分は何事も力づくで前に進めたがっている、スカイラブがいるとどうにも自分の調子を持っていけない、そんな自分がじれったくてたまらない。

「ま、まあお前らしいからよしとするか…それで俺は…」レオが体勢を立て直してスカイラブに一歩分近寄る。しかしその直後、なぜか彼の中の自信が妙に消えている感じがした。この所は特に感じることが多い、突然自分の中にあるテンションが夕立(スコール)の雲が夏空を覆い尽くす用に一気に消え、疑心という黒雲が意識の中の水晶に突然広がってくる。特にスカイラブと面食らって話すとそうだ、彼女の自分の器の大きさがどうしても気になり、自分のしていること、自分の立場差えば難しく思えてしまうのだ。「ったくもう…今度は

どうしたわけ……」「お、俺さ…ラブの前だと…何か自身出ねえって感じだ…」「はあ？　ったくどうしたって言うのよいきなり、アンタのいつもの調子はどこいっちゃ……」神妙な面持ちをしているコリンクをルクシオは鼻で笑いかけたが、考え直したように彼の右前足の上に自分の左前足を重ねる。

そう、隊長はこのコリンク、レオ・ミュースカイなのだ。自分がいつもの調子で振り回すわけにはいかない、彼女の心の中ではレオはまだ5歳児、はっきり言ってそう思っていたい、彼は自分の人生で意識の水晶の中に作り上げられた心の壁を低くし、逃げ出したくなる外の世界とコンタクトするチャンスを与えてくれる存在なのだ。「…ごめんごめん…決めるのはアンタなのよね…」それから彼女は優しく彼の目を覗き込んだ。そんな顔している、自分が羨ましかった、自分が経験してみたかったあの時代、純粋に自分の思うとおりに進み、思い悩み、色々とぶつかる年ごろを。「…何ワタシの顔見て落ち込んでるん？開き直るつもりはないけどさ…人生はそれがないと取れる木の実も美味しくないんよ。さまざまな場所から考えて、失敗して、それで採れるから木の実は味が良くなるの、レオはアンタらしくやって行けばいいのよ」「…何の事だが知らねえが…まあ…いいか……」コリンクは無理やりでも気を取り直そうと右前足を軽く踏み込む。とりあえずこんな場所で戸惑っているわけでも行かない、北アフリカのリビア、ミスラタ（自分たちが人間たちに送り込まれたのはこういう名前の場所であると知った）での一件以降不安定になっている気持ちをどうにか押さえつけた。「そんでもってだな…グリソムいやだ、ガトルもいやだ、という事は…」

「私かあ…」出てきたのはシンシア。「あん？！ちょっと待ったお前とは……」「レオ、そんなこと言っちゃダメ」スカイラブの声がしかりつけるように少しだけ鋭くなった。レオのこの面に関してはまだ自分が見ておかないといけない、彼に悪気はないのだろうが、少なくとも彼の性格を考えるとそうだ。「はいはいはい…分かったよラブ、そんで…」コリンクはルクシオの右前足を振り払い、シン

シアの方に向き直る。「大丈夫かよ？お前の事だからまた途中で…」「レオ、大丈夫だって言ってるでしょ？私そこまで弱くはないし…それに…」「何だよ今度は？」コリンクは、ちょっとためらったようなロコンの顔を覗き込んだ。「確かに私は…足を引っ張ること多いけどさ…でも、この前レオと一緒に雪ん中進んだよね？」「ああ…それが…」「それで分かった、私は今ここにいる、このチームに確かにいるんだって。だから…どんなに遅くても…アンタが何て言おうとも私のやり方でやる。そうすれば、いつかは皆に追い付けるから」

「シンシア…いつからそこまでカッコつけるようになりやがって…」「べ、別にカッコつけてるとか考えてないし…」「そ、そんならそれで気にしねえが…」コリンクは思わず首を振り、大きく息を吸ってからロコンの方を見直す。いつからこんなこと言って前に出たがるようになったのか、彼には自分の性格が彼女に移ってしまったかのようで気になって仕方がない。シンシア・カウンストポビアの努力を、性格を否定するつもりはないが、不安で仕方がない。レオは思わずスカイラブの方を助けを求めるように見てしまった。しかしルクシオは、コリンク自身に催促を促すように顔をしゃくっただけだ。どうする、どうすればいい、これまでにない不思議なプレッシャーを感じる。シンシアと一緒にやって…自分は大丈夫なのだろうか？

やや間をおいて、彼はロコンの方に向き直る。「…分かった…ただし、負けたら承知しねえぞ」

「何よあの女…結局私はあてになんないから自分で決めたいだけじゃない……」そんな一行の姿を遠巻きに見ていたテルルは、もう呆れたともどうしようもないと言わんばかりに首を振ってから、自

分の前足の保護靴のひもをほどきにかかる。「待ってましたぜテルリン！隊長になったばかりに先頭を切っていくなんて気合の入り方も十分だぜ！」そんな彼女を、ブレイブは挑発したかのように彼女の背中に飛び乗ろうとしてきたが、グレイシアは苛立たしげにブースターの首元を、編み上げを外しかけた左前足で突き飛ばす。「いってえ…いくら緊張してるからってそんなにきつく当たるこたあねえだろ…」「違う、それとは全然違うのよ！なんていうかその…」彼女は思わず左前足保護靴のひもをほどく手を止め、自分の左前足を見つめる。不思議な、何ともいえない焦燥を感じた。何に焦っているんだろうか、何を緊張して不安がっているのだろうか？何とも言えない意識の水晶化に広がる靄に、グレイシアで不安感と焦りでしゃべる声すら上手く出せないほどだった。「……私さ…やっぱり下手くそかもしんない…隊長として…上手くいくかどうか…分かんないわよ…」

「……気にすんなよテルル。俺はラブには言っておいた」ブースターはすぐに右前足の保護靴を脱ぎ捨て、その右前足でテルルの左前足を握る。「どんなにお前が隊長として下手くそでも……どんなに気に入らねえように見えても、あいつのやり方として認めてくれって。後の摺合せなんて後でゆっくり考えればいいんだ…」「ま…まあね…」テルルは曖昧に首を縦に振り、握られた左前足を見る。隊長格はやっぱりブレイブの方がふさわしいんじゃないか、ちらりと生まれた。「とにかく…」ブレイブは右前足の力をわずかに強める。「今はお前が考え、お前が道を作る時だ。迷って作った道は壊れるのがオチだからな、ここぞと決めたらまっすぐ行けよ、な？最初の3匹は俺とテルルとミオカ。ユイ達にはそう言っておく」

「…う、うん…頼むわよブレイブ…」

「よっしゃ、行くぜテルル！ミオカも！」「うん！」ブースターの背中からイーブイが飛び降り、2匹が元気よく右前足と左前足を重ねあわせる。そんな2匹を見つめるグレイシア、前々からバストーク隊長が言っていたように、隊長職というもの、いやこういう職

業というもの自体、いやな奴とでもやっていく技量が求められるという事がこれなのだろうか、そういう思いが意識の水晶の片隅に、土からオレンの新芽が出てくるように生まれた気がした。

道を探し続ける

3対3というものは本当に独特の動きと連携を要求される、このグレイシア種族、テルル・アストラフスキーは戦闘中でもそう思った。左隣のブースターは比較的自分の範囲を大きくとって来るのに対し、右隣のイーブイはまだ子供であるからか、比較的守備範囲を小さくとっている。守備範囲の大きいブレイブは前方の相手に対して積極的に攻めかかるのに対して、ミオカの方はどうしても守備一辺倒になってしまう。「ブレイブ、攻め込みすぎないでよ！後ろにいるミオカも……」「見逃しちゃねえぜ！後ろにだってしっかり眼はあるつもりだ……」ブースターはグレイシアの前歩を右に飛び込み、イーブイの方に向かう“エレキボール”のエネルギーをフサフサ尻尾で跳ね返してやった。「あ、すいませ…」「前見な前を！頭上げろ！」雨嵐と飛んでくるポケモン特有のエネルギーにすくんでいる女(メス)イーブイをちらりと見やるだけ、ブースターはそのまま前と飛び込む。目の前にいるロコン種族は大した脅威にはならない、彼はそう直感した。彼女はメスとしては頑張ってはいる、それは認められるが、それが故に彼には彼女を攻め落とす気にはなれない。このブースター、ブレイブ・クレイバーがぶち落としてやりたいのは、前3匹の中で一番図体のでかいルクシオ種族だ。あの女(メス)の気迫がはたしてどこまで続くか、期待していると言えば期待していた。とはいってもあまり感情的にさせてはいけない、ブースターの意識の水晶玉の片隅にはしっかりとそういう配慮があった。自分と相手方もう一匹のコリンクしか男(オス)はいない、だからこそ女(メス)同士の掴みあいになったら自分たちが止めに入らないとどうしようもない、と。しかしそうやって思考を一瞬でも逸らすと、コリンクが積極的に掴みかかりに入ってくる。どうやらこいつは、今まで彼が見てきた諸処のでんきタイプの中でもよほど直接突っ込む手法を好むらしい、だったとしたら余計に面白い、ブレイブはそのコリンクの攻撃を後ろに

飛びのき、ほんの一瞬息をついてそいつと背後のルクシオを縦列で捉えた。「2匹まとめてか…こいつは息の合いだな…」

一方そのルクシオ種族、スカイラブ・バトルスターの狙いはあくまでグレイシアに絞りたいのが本音だが、肝心のコリンク種族、レオ・バイブル・ミュースカイがめちゃくちゃな突撃手法に出てばかり、彼の後方フォローにつくので忙しすぎる。そのわりに彼女右隣のロコン種族、シンシア・カウンストポビアは堅実な動きを見せている。自分やコリンクと比べると動きが早いとは言えないが、“かえんほうしゃ”を打ち出す自分の間合いとタイムラグを的確に読み取り、その分を考慮して遅れ遅れではあるがしっかり後方に飛びのいてからそれを発射している。彼女が主に狙っているであろう相手か誰なのか、なかなかはっきりしてこないのが課題の一つだった。ブースターには特性“もらいび”の関係上命中しても効果がないのは自明だが、彼女はそこにまで目が回らないらしい。同様にちびっ子のイーブイを狙っておけば一撃で仕留められるはずのだが、そこにも視界が追いつかないらしく、かなり控えめながらも彼女はしつこくグレイシア（相性の問題上ベストと言えばそうだ）に攻撃し続けている。「んんっ？！」「その程度で！」グレイシアはそれを全く受け付けることなく上に飛び上がり、“ふぶき”を真上から彼女に浴びせる。「なんでこの女（メス）は……！」ルクシオがすかさずフォローに入る。“ほうでん”で零下数十度にもなる凍結した気体のエネルギーをぶち破り、2匹とも宙をうって地面に飛び降りる。「ありがとうございます…」「ほら、うん、感謝する前に相手を掴むんよ」「はい……」シンシアは体を震って凍結した氷の結晶を落とし、すかさず前を向いた。そんな彼女のひたむきな姿にスカイラブの表情が少し緩む。「そう、そうこないとね！あれこれ悩んだって現状は変わらないもんよ。目の前にあることから優先的……」

「もらったぜこいつは！」そんな彼女の言葉は一瞬で打ち消される。グレイシアの方に無造作に“ワイルドボルト”で飛び込んでいくコ

リンク。「ちょ、ちょま……」ルクシオが制止する間もなくレオは突撃した。グレイシアがそれにむざむざと当たるわけがない、彼女は直線的動きしかできない状態のコリンクを左に体をひねってかわし、一瞬で背後に喰らいつき、“れいとうビーム”でコリンクを前に突き飛ばす。「いってえ…」「このバカ晒しすぎっしょ！」ルクシオは相変わらずの男(オス)を見てじれったいそうな表情を浮かべ、すかさず援護に入った。彼女のかけた“ニトロチャージ”はグレイシアに完全に命中とまではいかなかったが、かすっただけでも相性上それなりに効果はある。彼女のが横に回避したすきをついて彼女は弟分に該当するコリンクに飛び寄る。「やっぱアンタはブレイブ狙って！あの女(メス)は私がぶっ飛ばす」「ああ？！どうして…」「いいから！その方はアンタにとっちゃ大物でしょうに！」「大物…大物…おっしゃあやったるぜっ」その一言だけでコリンクの目に輝きが戻り、そっとの方に脱兎の如く飛び込んでゆく。「ってどこまでこいつ単純なのよ？あいつ単なる犬？…まあいいとして…」相変わらず子供っぽい興奮で物事を判断してしまうレオに、スカイラブは思わず吹き出しそうになった。それはそれでこのコリンクらしい、そしてそれこそが、自分が何年も面倒をみて、彼の起こす厄介事にとことん付き合ってきたルクシオのスカイラブ・バトルスターには愛おしい。しかし彼女はすぐにその懐古を意識の水晶から振り払い、水晶玉の中にある感情を司る原子炉(リアクター)の制御棒を的確に引っこ抜く。もちろん目の前のグレイシア、テルル・アストラフスキーを直接狙うつもりはない。申し訳ないが彼女の隣にいるちびっ子、イーブイ種族のミオカ・ナミエ・ソウヨウに多少やってみるとしよう、そうルクシオは決めた。当然のことながら本気であてはしない、彼女の素振りを見るのとあのグレイシアの反応を調べるだけだ。普段から遺書にいるブースターはまだしも、このグレイシアがミオカを守り切れること等、彼女は最初から期待していない。だからこそこのイーブイの動きを調べ、的確に生き残る方法を教える、それも愛情のうちだとスカイラブは信じていた。ミオカにたいする思いやり半分、テルリ

ウムに対する挑発半分、それ位である。彼女のその時の心情では、自分は冷静に対処しているつもりだった。

そんな一行のバトルを見ているベイリーフとメガニウム。とくに男(オス)ベイリーフの方は妙に落ち着かない気分だった。リーヒュンの意識の水晶をゆっくりと渦巻いて回転するもの、先ほどテルルに自分が言った言葉と行動、もしかしたらあれこそが…隣にいるユイリィが言っていた“感情の動きを読み取る”物の一貫なのだろうか？そんな考えが彼の意識の水晶に突然湧き上がり、それは次第に確証へと進んでいきそうな気がする。

だからといってこのベイリーフは嬉しさを感じなかった。それどころか、そう考えた途端に不安にも恐怖にも似た感情が、自分の足の爪先や尻尾の先までゆっくりと広がっていくの覚えた。ありえない、そんな能力があった所で何になる？

そんな彼の動揺する心境はメガニウムには見えるのだろう、彼女は座り込むために折り曲げた左前足の爪先でそっと彼の右前足のあたりに触れる。「そっか、リーヒュンのあの時の動きって、テルルの事を考えた…ていうか見えたんだね？」「そうかな？…うん、そう言われてみればそうだよな…」「すごいよそれ、つまりリーヒュンは、周囲のみんなが思ってる感情がだんだん見えるようになったって事、うん！」「うん…ただ…」ベイリーフは不安そうな顔でメガニウムの方を見る。自分の能力が少しずつでも伸びる、それがフローラの為なら、隣にいる彼女やチームのためになるのなら、彼にとって嬉しいと言えばそうであるが、同時にその先に対する不安もあった。今まで見てきたもの、この5か月間で、世界の中のわずかではあるだろうが自分が見た物、経験したものの大きさ、それが自分やフローラに？がっているというサクラの言葉、全く見えない真実というものが彼の意識の水晶を何度も揺らす。そして何より…ユイ

リィやテルルと、ブレイブとさえ時としてぶつかり合ってしまう自分、昔はなんにも、いやその5か月前までは何も気にせず付き進めたはずなのに。「俺がその能力を身に付けて…大丈夫なんだろうか？」「うーん…大丈夫かそうじゃないのかって言うのはね、ウチにもよく分かんない事なんだよね…」メガニウムがツルで自分の束ねた雄蕊を丸め直す。「分かんない？」「うん、もちろん使えるのはリーヒュンとウチとサクラさんしかしないんだけどね。ただ、やっぱり精神的に安定してて、自分の能力に自信を持ってるほうがいいみたい」

「精神的安定、か…今の俺じゃ無理かな」リーヒュンはちょっと恥ずかしそうに両前足の爪先をこすりあわせる。いつもはじけ飛んだような性格をしているユイリィに言われるのもなんだが、核心をついていると言えば核心をついている。「ただね…」彼女のがそっと彼の方を見る。「ウチからしてみればそれは関係ないと思うよ、うん。そんなこと言ったらウチの性格は一体って話じゃん？」「ユイリィ…意外と自覚してる？」「え？！そんなもんだよ、うん。ウチの性格なんてこんなもん！あはは…」メガニウムが満面の笑顔でベイリーフにまたもや“すりすり”をかけてくるが、彼女は途中でそっと体を戻す。「いいの、それでいいんだと思うよ、うん。ウチなりにはね、リーヒュンみたいな子でも……むしろその方がいいんじゃないかな、って思う。頭だけが良くて何でもかんでも従ってる子より、まあウチはどうか知らないけど……とにかく、とにかく力任せでもさ、自分の思った通りに進むことができて、自分の考えにまっすぐで、そういう方がこの能力ってとても役に立つんじゃないかなって、そう思うのよね」「そっか…何だかまだ分かんないけど」「うん…ほら、リーヒュンてさ、この5か月間やってきて一発も攻撃を受けたことないじゃん、すごいよねそれって、うん」「確かに…それって…」「うん、ポケモンの中にいて、戦争同然の状態でここまで生き残れるってざらにできるもんじゃないと思うよ、うん。…ほら、ハイドル言った時もさ…集落の皆も自分の故郷を守るため

に立ち上がって…ダメになっちゃったよね…あれだけ大変なんだよこの世界は」「……」ベイリーフは思い返す。自分の経験を、自分の見てきた世界を。多くのポケモン達が状況どうであれ、自分の故郷を、信じるものを、愛するものを守るために立ち上がり、多くが死んでいくのを自分は目の当たりにしている。その中で自分は生き残ってきている。

リーヒュン・バイリング・グリーズの意識の水晶の中に冷たい物が走った。おかしすぎる、戦争経験のない自分が生き残っているのはどうしてだろうか?あれだけ過酷な世界の現実の中で生き残れるのはなぜなのか?「ンまあとにかく……」ユイリィがそっと励ますようにつぶやく。彼女にしても軍人でない自分がここまで生き残っているのは謎以外の何物でもない。ここでそれについて論じるのは相当面倒かつ辛い事だ。「…おそらくは…ウチの推測だけどさ……リーヒュンがひた向きに頑張ってる、絶対にフローラを助けるんだってやっているから…きっと大丈夫なんだと思う。それは気にしないほうがいいよ、うん。うちらでは軍隊って言っても…半分探検隊や救助隊と同じもんだしね」

「…ユイリィがそう言うんならそういう解釈をしちゃっていいのか。そんならいいんだけどさ…」リーヒュンがすっと立ち上がり、大きく猫のような伸びをする。別に根本的な解決が示されたわけでもなく、むしろ自分の愚痴のようなものになってしまったが、彼の意識の水晶化を渦巻いていた霧がまたしてもひとつ消え去る、そんな気がした。「大丈夫大丈夫!あたしが一緒なら怖い物ないって!うん!」このメガニウムにしても目の前のベイリーフがまっすぐに突き進んでくれること、それだけでも彼女に移るその姿は新鮮で頼もしい物なのだから。

だが、こっちはそうもいかないらしい。スカイラブのしつこい集中砲火にテルルは爆発寸前だった。しかも自分ではなくミオカをあえて狙い、自分が援護しようとひきつけてくる。その果てにあのル

クシオはイーブイに当てる手前、ミオカがビビって後ろに下がろうとする直前でわざと間をおき、自分が入り込むのを待っているかのようだ。「そうそうそう、そうやっていく突っ込んでくるのが…」「うんんっ!?」イーブイの“とっしん”をルクシオはやすやすと後方に飛びのき、はずみで大きく上に体が飛び跳ねてしまったイーブイの腹元に身を屈めて“スパーク”を仕掛ける。「わわっ?!」「そんの間…」思わず体をこわばらせてしまったイーブイだったが、その攻撃は命中することなく彼女のすぐ下を通り抜ける。ルクシオはちらりと目線を彼女の方に送り、表情を緩める。「まあ、そんなもんよ、自分のわざを出すときはまず隙を与えない！これ鉄則ね」「は、はあ…」

「ミオカはまだまだ子供……うんぐっ?!」「ええいっ！」ルクシオが飛び込む方向の先にいるのはグレイシア、やはりここにいるイーブイを守るつもりで来たのだろうか、相方のブースターはコリンクとロコンで引きつけてあるから、自分と正面から対峙できるのはこのグレイシアだけだ。ルクシオは接地すると同時に体を左に滑らせ、４本足の爪をスパイク代わりに急停止する。直後にグレイシアが放った“こおりのつぶて”のエネルギーを乗せた右前足が彼女に突っ込むが、彼女は何の違和感も覚えず自分の右前足をバックハンドにしてそれを受け止めた。対峙する２匹、お互いの視線が至近距離で交錯し、火花を散らすかにも見える。

スカイラブ・バトルスターは何の激しい感情も抱かなかった。そう、彼女からしてみれば目の前にいるグレイシア、テルルに対しては今これという怒りも失望もあるわけではない。彼女の性格を、彼女の性格としての器を、自分の意識の水晶にある秤にかけて分析しただけである。

一方のテルル・アストラフスキーの薄い紺色の瞳孔からは冷たく、激しい感情が噴き出している。今ここで目の前のルクシオを右前足で殴る（蹴りつける）訳にはいかない、真相はどうにか知らない、

彼女があてになるとは思いたくない、しかし口頭で彼女がケンカを売りたくないといった以上、自分の方から手を出すわけにはいかない。でも目の前の彼女を見ていると、テルルの意識の水晶は激しく感情の原子炉が放つエネルギーの熱せられ、今にも感情のコントロールが利かなくなりそうだった。とにかく許せない、今スカイラブがやっていた行動の意味をようやく理解した、彼女の視線が“いまさら何よ”とそそのかしている。不慣れなミオカ・ソウヨウを攻撃したことではない、民間出身でここに色々な都合があっているだけのミオカを傷つけるわけにはいかない、そんな自分の思いをあいつは巧みに利用し、自分の試そうとしているに違いない。自分がどこまで他人に献身できるか、どれだけ自分の身を捨てられるかを。

奇妙なにらみ合いは１０秒間ほど続く。「ど、どうしたんだテルル？」「テルルさん？」ブレイブとミオカもテルルの方に飛び寄ってくる。そんな2匹の感触を感じ取ったグレイシアは我に返った。ここで暴発するわけにはいかない、そんな事をしたら一応は隊長としての責任以前、目の前のルクシオの思うつぼだ。彼女はブースターとイーブイの方に向き直り、かなり無理な笑顔を作る。「う、うん…そろそろ交代って所かな」

「うん！次はうちらの番って所かな、リーヒュン、頑張ってこうね！」「うん、ユイリィも無茶すんなよ、お互いでフォローの仕合って所だな」保護靴のひもをツルでほどき始めるベイリーフとメガニウム。頭から生えた黄色い雄蕊の長いほうの対をツルで丁寧に直していくユイリィの背中にふわりと何かが触れる。彼女には何となくその感触と、接近してくる意識の動きで誰なのかが分かった。「ね、ねえユイリィ…」やってきたのはチェギョン、相変わらずパッとしない表情をしている。「う、うんうん！どうしたの？」メガニウム

が彼女の方へとわずかに視線を下げる、チルタリスの目線には戸惑いと不安がありありと浮かんでいた。「た、大したことじゃない…て言うのまじウソになるけどね…」チェギョンは、深刻そうにうつむいたまま、自分のモフモフ翼の汚れを取る。ユイリィは励ますかのような笑顔を作って、彼女の背中にあたる首の部分にツルを回した。「平気平気！ウチはどんな時でも絶好調を保つタイプだもんね」「そ、それなら…ちょっと聞いていい？」チルタリスは恥ずかしそうに続ける。「ワタシさあ……最近なんとなく自信なくしたっぽいのよ。こういう時ってどうすれば元気になる？」「え、え……そっか…まあそういうときもある物なんだよね、うん」メガニウムはチルタリスの表情を覗き込み、優しくツル２本を彼女の首に回す。ツルの先から伝わってくる感触、彼女の意識の水晶には痛いほどわかった。自分もこういう経験なら何度もしたことがある、目の前にいるチェギョンの知っている限りの生い立ちと性格を考えるとなおさらだ、今まで積み上げてきた自信が何かをきっかけに突如として崩れ落ち、そこに残るのは漠然とした不安と苦しさだけ。それがどんなに苦しい物なのか、ユイリィ・ランタン・プレミドールとしてというよりは、彼女の信じる思いやりというものからはっきりと分かる。「うん、無理はしないこと、鉄則かな。悪あがきすると深みにはまるからね、やっぱメインテインが一番！」「う、うん…そうだよね、そういう考えでいいんだよね」「ほらほら！チェギョンらしく前にガッツリ進んでいかないと！」メガニウムはそう言いかけて、ツルでそっと彼女の首元を撫でる。一気に明るく進めたいところが、彼女の表情とツル先から感じる限り、彼女の悩みというものは相当だった。「…大丈夫、ごめんね、そんな簡単なことじゃないよね。とりあえず…それが見えてくるまで一つ一つ道を進んでいけばいい、あたしはそう思うよ」「そ、そうだよ！ワタシらしくいかないとへこむよね！そ、そんじゃあ…ワタシもとりあえず…がんばるよ。うん。だから…今回はよろしくね…」「うん、それでさあチェギョン、できたら…」ユイリィがツルで自分の首元を指差す。

「あれ…モフモフっとやってくれない？」「えっと…そう、それよね！そんじゃあ久しぶりに！」「そ、そうそう気持ちいいよ！うん、やばい！あははは！」チルタリスは少し安心したように、メガニウムに花びらの生えた首元にモフモフ翼で飛び掛かって抱きつく。実際のところ彼女はそう感じていた、少しだけ心の中に渦巻いていた霧が振り払われた、そんな気がする。焦っても仕方がない、とにかく今は我慢して少しずつでも切り開ければいい、チェギョン・ナンソーマ・カリワザキはそう思った。

しかし、ユイリィのちょっと温まった意識も長くは続かなかった。リーヒュンと共に森林の中に広がる草地の中央へと向かう彼女。「そんでロズリン、今日はアンタもやるんだから、ウチとリーヒュンの迷惑かけないのよ」「どっちが迷惑かけるんでしゅかね？」メガニウムの頭の上にいるシェイミは、彼女を小馬鹿にするように彼女の雄蕊をごちょごちょと小さい両前足でいじりまわす。「ば、バカ…ウチのそこはダメって言って…」「お、おいおいロズリン、さすがにユイリィの雄蕊はそのままにしてやれって」リーヒュンがツルを使ってシェイミを抱えておろし、自分の頭の虫食い葉っぱを付け根にシェイミの両前足を回させる。「兄ちゃんがそういうんなら仕方がないでしゅね、ユイリィみたいなバカ女に言われるのと格が違いましゅから」「うんぐっっぅ！こっのバカシェイミ……ウチが捨てられないからって言いたい放題……」シェイミの相変わらず自分を見下した態度に、彼女は悔しそうにツルで長いほうの（このせいでユイリィが通常の女メガニウム種族に見えないのだが）雄蕊を無理矢理整え直す。ベイリーフはそんな彼女に苦笑しながら頭の上のシェイミに視線を送った。「ま、まあ…ロズリンもちびっ子だからな。でもなあロズリン、さすがにやり過ぎないほうがいいぞ……」

２匹の前からやってきたテルル。ユイリィの表情を覗き込むなり、彼女の方に一気に飛び寄り、右前足で彼女の左前脚あたりを叩く。「ねえユイ」「ん、なあに？」メガニウムはとっさに首をグレイシアの顔と同じ高さのあたりにまで下げる。彼女は何か言いたさげ、それも直感だった。テルルは声を落とし、一言だけ呟く。「ラブの事はあてにしないで」

「へ、あてに？」「だからあんな奴の事、信頼しちゃいけないって事よ！」グレイシアの表情が若干厳しくなる。このメガニウムだけは味方につけておきたい、スカイラブの方に言いなりにさせるわけにはいかない。ユイリィの理解を待つまでもなく、テルルは一気に続けた。「いい、くれぐれもラブに何と言われようとあてにしないで、ユイは私と同じ区分に入ってるんでしょここでは？ＯＫ」「ちょ、ちょっとテル…」メガニウムが慌てて聞き返そうとする前に、グレイシアはツンとした表情のまま後ろに歩み去る。「どうしたユイリィ？」リーヒュンがキョトンとして近寄ってきても彼女は動けなかった。「うんん…テルル…大丈夫なのかな？」メガニウムは消え入りそうな声でつぶやき、思わず背後を振り向く。意識の水晶の中では、彼女はなった言葉に含まれた意味がはっきりと伝わってくる。そこに含まれるあまりにも深い、スカイラブとテルルの溝、２匹の意識の水晶のエネルギーのぶつかり合いに心が痛み、自分の無力さに４本足の感触が薄らぐのを感じた。

２０１３年　２月７日　ギリシャ　アテネ市　７時３５分

ヨーロッパの朝は早い、日本でいう市役所が開いている時間は、日本が９時に対しヨーロッパは平均的に８時には空いている。公立の小中学校の１時間目も一般的に８時３０分から始まることが多い。

その一方で…近年は急速に変わりつつあるが…ヨーロッパの感覚として、夜遅くまで残業するという傾向は少ない。公立学校の授業も基本的に午後1時には終わる。職場においても、上司・部下を問わず17時とか18時とかになったら一斉に退社し家に帰る、俗にいう“定時退社”が最近まで常識だったし、一般的な小売業（個人商店・大型ショッピングモールを問わず）もたいてい18時から20時の間に閉店するのが普通で、24時間営業など皆無だった。変わりつつあるのはこの10年前後、加速的に進むグローバル化やアジア工業国の効率的なビジネス運用法などの思想が入り込み、ドイツなど比較的慣習に厳しい国にも変化が及ぶ、証券・金融取引やエネルギー産業、産業機械・ハイテク精密部品の生産ベルトラインなどでは24時間シフト制・機械によるオートメーションシステムが組まれ、都市や都市近郊の（環境だの、何だかんだと言ってドイツの自動車保有率は、世界の中でも高い。だからこそ郊外型店舗も出店するのだ）ショッピングモールの営業も営業法改正で23時までの体制が一般化、ドイツ諸都市近郊の路線バスや鉄道の終電時刻もどんどん遅くなり、タクシーの深夜サービスも常識となっている。オランダのアムステルダムやコペンハーゲンでは、日本の大手24時間営業小売りチェーン店がアジアや北アメリカに続いて進出している。急激な地球人類社会の一体化は、ヨーロッパ発祥の自由資本主義経済と、アジア諸国に見られる勤労優先思考をひとりでに融合し、効率と利益の為なら24時間休むことのない傾向を、ヨーロッパの田園地帯や中央アジアの山間部まで広げつつある。

とはいってもヨーロッパの社会慣習の全てが失われてしまったわけではない、大規模デモもようやく鎮静化したギリシャ共和国のアテネ市、やはり朝早くやってなるべく仕事を早く終わらせる考え方（悪く言えば俗にイタリア人を示す“仕事の金とすべてはバカンスの

ため”という言い方になってしまうが）は健在で、すでにあちらこちらの商店がシャッターを開け始めている。しかしこの朝は異様だった、大規模デモ（というより暴動）に伴う破壊や略奪の跡が残る市街地の商店のシャッターの多くは閉められ、企業の建物の駐車場は空っぽ、大通りの人通りもわずか、路面電車や路線バスもほとんど走っておらず、幹線道路も閑散とし、町は日曜日のように静まり返っている。無理もない、破壊された自動車の残骸、崩れ落ちたレンガ、一部が焼け焦げた建物、ところどころに残る人間の出血が残した忌まわしき痕、ゲリラ戦に近い過激派デモの傷跡はあまりにも深いのだ。ギリシャ政府によって報道の一部の真偽は不明だが、市民が知りうる限りの情報においては、今回のデモと騒乱に伴う犠牲者はデモ隊６７人と警察と軍関係者１４人、逮捕者は２００人以上に上っているという事、政府の非常事態宣言は今日の午前０時をもって解除され、国営や公共の機関も本日より業務再開という旨である。しかしその犠牲者というものが何によるものなのか、その事実は伏せられていた（とはいっても時すでに半分ほど遅し、インターネットの動画サイトや情報共有サイトでは、警察治安部隊や軍の装甲車や歩兵、対戦車ヘリ部隊が火炎瓶を投げるデモ隊の人間や一般車両にまで実弾を発砲する映像が生々しく出されていた）が。こんな状況では市民の不安感がぬぐわれるはずもなく、大半の民間企業や個人商店、個人タクシーの大半は今週いっぱいの休業を決めるところも多く、公立学校の自動の大半も親の判断で欠席させる状況が続いていた。

その中でも最も激しい衝突、いや戦闘が発生したギリシャ国営の金融機関の周辺では、最後まで立て籠もっていたデモ隊の人間の身柄をようやく拘束、警察・消防の車両のライトが輝く中を、警察官と治安維持部隊の人間に抱えられるように連行されていく。周囲の通りには警戒線が張られて一般の立ち入りは禁止され、そのすぐ外で

ようやく現地入りした海外のメディアの中継車両が並び、多くの放送機器を持った人間の男がマイク片手に喋り続ける女や男にそれを向けている。

一方、過激派が最後まで抵抗した施設に入り込んだ警察関係者や軍の関係者らしき人間達、地下にあるこの建物の金庫は過激派たちの中心拠点のようになっていた。「…それでだ、内部に侵入した奴ら、オートロックは拳銃か何かでぶっ飛ばしたようだ」そのうちの一人の男が新型携帯情報端末を耳に当て、右手に指で焼け焦げた金庫のオートロックパネルを触る。暗証番号をうつタッチパネルと指紋照合機械からなるオートロック装置の中心部には、人間の小指の径程度の穴が開き、その周囲には同心円状のひびと焼け焦げた痕が残っている。しかしこんな事をしても開場されないのは明白だ。おそらくは苛立った人間が至近距離で拳銃を撃って破壊したのだろう。“拳銃で?そんなのでオートロックが開くわけがないじゃない”「だからさ、今足元にある工事作業用の機器で鍵をぶっ潰したらしい…」電話越しのＥＵ関係者の女の問いかけに、男はかがみこんで足元に転がる電動穴あけドリルと、コンクリートやアスファルトを破砕する工事用機器、それらの電源となったであろう発電機を眺め、穴あけドリルを思わず手に取る。周辺に電子工作用の精密ドライバーと何かの電子部品が同じように落ちていることを考えると、最初のうちはオートロックをこじ開けようとはしたようだが、それが上手くいかずに途中からは力づくになって入り込もうとした結果、このような工事現場にあるような作業機械で強引に破壊したのだろう。こんな手を取るのはデモ隊しかいない、男はドライバーを軽く上に投げるように手でもてあそびながらため息をついた。ああいう輩は口先だけではエラそうな信念を語っているが、やる事は銀行強盗と同じかそれ以下の野蛮な手口しかない。

「それでだ…内部の方も相当なブツが残っていやがる…」“ブツ?やっぱり…あれで彼らは武装していたの?”「ああ、それもかなりの数が残ってるから…おそらくは組織絡みの連中だ…」男は懐中電

灯を手に取り、荒らされた金庫の中に入る。電子ロックによって厳重に守られていたはずの棚は全て電動ドリルで破られ、紙幣のあらかたは抜き取られていた。部屋の隅のコンセントに差し込まれたコードの先には複数の情報端末、ギリシャ陸軍特殊部隊の急襲によって持って逃げる暇もなかったらしく、電源が入ったままでＵＳＢ大容量デバイスやＤＶＤデータデバイスもそのまま放置されている。ここでもインターネット上へのデモや暴動に関する声明や宣伝活動の一部を発信していたに違いない。

しかしこの男が最も興味深いのは、そのわきに放置されたアサルトライフルや対戦車ロケット弾であった。ここにある物だけでライフル５，６丁、ロケット砲７丁、軍用の無線機すらある。ここまで数の装備は、いくらインターネットのサイトで探しても存在しない、拳銃や暗殺道具の一つや二つが高値で裏取引されるサイトなら腐るほど存在するが、これほどの装備を、しかも子の数だけそろえるのは普通の犯罪取引では不可能だ。

「そんでもってだ…このライフルにはちゃんと製造番号（シリアルナンバー）が残ってるからな…」男がそのうちの一丁を右手に取り、連射・単発セレクターの上に刻まれたシリアルナンバーとキリル文字を見つめる。１９４９年に開発されて６５年、今もなお東欧、中東、アフリカの軍事組織や武装組織、テロリストの間で使用され、総生産数は１億丁以上を数える大ベストセラー、旧ソ連イジェウスク造兵廠が生産し続けるＡＫ－４７アサルトライフルだ。脇に転がるのはやはりソ連のバザルト社が開発し、中東における紛争では洋の東西を問わず必ずと言っていいほど使われ（一説にはこれが世界での小規模な紛争を助長しているという捉え方もある）、当事国治安維持部隊、非合法武装組織、民間軍事会社等あらゆる組織で利用される（その扱いやすさと実力から、情報を奪取したアメリカのエアトニック・ＵＳＡ社も生産し、ＮＡＴＯ陣営寄りの中東諸国の軍部隊に配備している他、日本やヨーロッパなどの西側陣営諸国でも、研究や自国の対戦車擲弾砲の改良のために少数購入している）対戦車擲弾砲、ＲＰ

G－7である。やはりこんな事かとは思ったが、この銃身の煤けた具合、マガジンを受ける部分やセレクターのツマミの欠損、挿した油の多さから配慮すると、購入ルートは恐らく非合法でこれを最初に手に入れた武装組織や武器商人に違いない。そして彼らが手に入れるとすれば、それはソ連崩壊と東欧諸国の独立によって軍籍を失ったソビエトの軍人たち、すなわち現在のロシアと?がる人間たちであろう。

「今から撮影データを送る。そこに書いてある数字からこいつらの製造場所、製造時期を見て、旧ソ連のどこの部隊に言ったか見てくれないか?」“分かったわ。それで、今そこにある端末や記憶媒体はどうするの?”「警察や当局にもっていかれる前にある程度は俺の持ってるデバイスで落とそう。書き換え以前のデータもそれがあれば修復できる」男はアサルトライフルに示されている製造ロット番号とキリル文字を携帯情報端末（モバイルフォン）で撮影し、女のいるベルギー・ブリュッセルにあるＥＵ対外行動局のサーバへと送り始めた。ＥＵ対外行動局には、このような女法技術機器の解読や文政を行うシステムは十二分に完備されている、ＥＵの名の下で警察や軍、ギリシャ政府に要請すれば後からでも情報を回してもらう事はできるが、何らかの情報操作をされる懸念が無きにしも非ずであることを考えると、特別に同行が許可され、警察の押収が始まる前にいくらかデータを取っておく方が得策だ。

発見できた限りのアサルトライフルや対戦車ロケット擲弾砲の製造ロットを撮影し、ＥＵ側へとその画像を送信した男。間もなくギリシャの警察当局の人間たちが多数入り、実況見分に入るのでＥＵ関係者は外に出てほしいと言われた。べったん彼は抵抗しない、ギリシャ政府にＥＵからの命令として今回の騒乱に関する物品を提出しろと言えばギリシャ政府は逆らえないし、すでに特殊な機器を利用してＵＳＢデバイスのデータの相当量を回収することに成功して

いる。彼は外に出てそのデータを送信するために、俗にスマートフォンと呼ばれる次世代型携帯情報端末の電源を入れようとして思わず立ち止まる。今回のギリシャ騒乱の件にｓ手も、イギリスとフランスの合弁企業であるニューロン社の件についても不審な件が本当に多い。やはりこの２つには何か糸でつながっているに違いない、何となくこの男にもそう思えた。だからこそＥＵもこのように直接的な捜査に乗り出したのだろう。

男は思わず空を見上げる。道行く人々もまばら、火炎瓶や擲弾で傷つき、痕跡を多くのこす建物、焼け焦げたまま転がる小型乗用車両、あちらこちらにいる警察官や軍人、規制戦の背後で撮影機器を回す国内外のマスコミ関係者、軍の車両、その全てを見下ろしている、春の訪れもそう遠くないギリシャの青空が妙にすがすがしく感じられた。

ベルギー、ブリュッセルにあるＥＵ本部の駐車場、夜が明けたばかりのブリュッセル市街地近郊の空気を、自家用車であるフランス・シトロエン社製のアクトロスから女は吸い込んだ。先ほど連絡を取った男が送ったギリシャで発見された武器のデータ、すでに本部にある対外行動局用の分析サーバと端末に送られているのであろう。彼女は警衛のたつ中央の自動ドアへと歩きながら考える。ギリシャで起こった暴動が、どれほど国連が動かしているとされる“計画”と絡んでいるかは知らない、しかしそこにある物は…もしかしたらそれに導く手掛かりになるかもしれない……

２０１３年　２月７日　エメリア・ソーラ地域南端の国連施設　１１時００分

この日、一行の元に突然依頼したいことがある、と言ってやってきたポケモンがいた。それもプロテウス地区からではなく、ソーラ南端の森林地帯を一つ越えた（徒歩で１５時間以上かかる）ガラテ

ア地区からはるばるやってきたらしい。プロテウス地区へと?がる元々の道が伸びている通用門、その外側センサーが反応して統合軍施設の（国連の研究機関から５００メートルは離れたアメリカ空軍施設に隣接する形で存在する。おもに国連研究機関・空軍施設双方のセキュリティーを担当する）地下にある総合セキュリティーセンターに自動通報したのだ。ソーラの最南端、南太平洋に存在するエメリア陸地群の最南端に位置するこの施設の秘匿性（とはいっても人類社会では、ある程度の施設に関する事項までは世界各国・市民に公表されている。無論中国やロシアなどはアメリカとの共有を、エメリア開発・領有の平等を損なうものとして批判している）の確保やポケモンによる破壊活動を防止するために、警戒システムは世界（人類社会）でも最高クラスのものが利用され、敷地の外壁から１キロまでの森林内部に林立する樹木のいたるところにポケモン用センサーが無数に設置しているのをはじめ、何重もの防衛措置が施されている。通常、センサーに内蔵された自動警告音声に従わないポケモンは敵性と見なされ、センサーの至近距離に設置された２０ミリ機関砲（統合軍の艦船に搭載されているものとほぼ同様で、ポケモンの発する電波を探知・自動攻撃するようプログラムされている）で排除するのが原則だ。しかし久しぶりのセキュリティーシステムの作動からか、統合軍の責任者の指示で殺害されることなく、そのポケモンは対応した警備兵と共に中に入る事が出来たのだ。

　それに対応した国連統合陸軍の兵士は面倒くさそうに一行のいる居住地域へと連れて行った。ポケモンの外客が来るなどもってのほかだ、ここに勤務する（もちろんここに定住しているわけではない）国連機関、国連統合軍、アメリカ空軍関係者の人間たちの機密保持でさえ大変で、近頃はブログやツイッター等のインターネット上の情報発信すら制限されているのに、ましてやロクすっぽ情報源を持たず、流言やデマさえ口コミで広がってしまう未開文明生物を見張

るのはますます面倒である。肝心の中に連れてこられたマグマラシの方は、不安に身をすくめ、人間に鞭打たれる馬のように怯え硬直しながら居住地域の所へと歩かされる。この男から見ればここは処刑台へ向かう１３階段、左右を固めるように歩いている人間たち（しかもその装備や身なり、手に取っているＭ１６Ａ５アサルトライフルからして敵意を放ち続けているようにしか見えない）と手に持つ武器の先端が自分の背中に押し付けられて、このポケモンは生きた心地がしなかった。自分の家族や周囲から聞いてきたとおりだ、人間というものは自分達とは違う姿かたちをした者には、相当な敵意を持つ非情な生物らしい。

真っ先に出てきたのはユイリィである。そもそも彼女にはこの数分前から何となく予感がした、今日は久しぶりに誰かが外からくるという事、そしてそれが自分たちを新たな場所へと導くであろうという事を。意識の水晶のエネルギー循環を読むことができる彼女の思考の触手が、その幼い子供の冒険心に湧く期待を感じ取っていた。

「どうもです！こんなところに来るなんて珍しいですよね、うん！」

「は、はあ…それは…初めまして…」「余計なことを言うな。見たもの聞いたものを口外したら射殺するぞ」相変わらず緊張した面持ちのマグマラシの背中を、統合軍の兵士が脅すようにアサルトライフルの銃身で何度も触る。「ひいっ！？い、言いません！言いませんよ！ここに来たのは…」「耳障りだ来客、それ以上しゃべっても殺すぞ！黙って用件だけ言え」人間の持つライフルの銃身が持つ冷たい金属の感触を頭の上に感じ、全身を震わせたように口を前足で塞ぐ。もう限界だった、もし人間が手に持つ奇妙な武器で攻撃しないのであれば、彼はすっ飛んで行っただろう。

「やめてくださいよお兵隊さん…ウチらしゃべったりしませんから」メガニウムが呆れたように銃身ツルでつかんで引き離し、もう片方

のツルで背中を撫でてやる。マグマラシの年齢はおおよそ16，7歳、おそらく話に聞いていた人間に合うのも初めてなのだろう。「あのな、アンタがしゃべるかどうかは関係ないんだ。問題はな、この外から来たグズ野郎がべらべらこの施設の事を漏らしたりしなきゃ…」「大丈夫大丈夫！うちらは約束したものはしっかり守る生物なんですよ！ね？」「は、はい…そりゃもちろん…」相変わらず奇妙なほど草木が整っている人間好みの風景を不安そうに見まわすマグマラシ。

このオスの放つ恐怖、不安を彼女ははっきりとツルの先から読み取った。他人ごとではない、確かにユイリィ・ランタン・プレミドールはここで生まれ育ったから人間という存在はポケモンと同じ、姿が違うだけで言語や思考を理解できる文明生物であるという感触が当たり前だった。しかし、長い間人間を見てきた彼女だからこそ、人間に初めて会う時のポケモンがいかに恐怖心を覚えるか感覚的に理解できる。

「それはそれなんだよ…まあこんなことしている間にも情報漏えいリスクは高まってるんだからな、さっさと要件を吐かせろこの変態女」兵士がユイリィの方に銃身を向けたが、彼女はそれに臆することもない。「なーにが変態なのよ？そんなこと言ったらウチも兵隊さんも変態になっちゃうじゃん！」「だからなあ…そんな無駄口をしてるヒマがあったらさっさと…」

「ダメダメ！お互い分かりあうのにはまずコミュニケーションなんだから！」メガニウムがマグマラシの低い視線に向かって首を下げ、同時に両前足を折り曲げてさらに視線を下げる。完全に一緒には徒弟ならないが、目線をなるべく近づけるのはコミュニケーションの鉄則、彼女はそう思っていた。「それで、ここに来た要件というのはどうしたの？あたし達に何かやってほしい事があるってことだよね？」「は、はい…それが結構…」マグマラシのパッとしない表情からして、彼が持ってきた問題は海千山千の大物、おそらくは普通

の探検隊ではできない様なものに違いない。そしてユイリィの意識の水晶の周囲を走る流れから感じる者、それは恐らくこのポケモンの住む村や集落を危険に陥れるほどの生物が出現するといったものなのだろう。

「うん、じゃあ先に聞いてみたいことがるの、うちらの事はどこで？」「どこって言うよりかは、むしろプロテウス地区の探検隊の場所に言ったら探検隊が全部外に出てる、って話なんですよ」

「そっか、それでうちらもいるって事を…」その外に出ている原因がバストーク達ではありませんように、彼女は心の中でそう願った。しかしその直後、思いがけない事に気づき、思わず顔色を変えて尋ねてしまった。「…ていうか、そんな話誰から聞いたの？」「はい、聞いたのは親方さんです、プロテウス地区の南端には相当の腕の立つ探検隊に近いエメリア国防軍の部隊があるからそこに頼んでみたらどうかって言ってました」

「親方さん…プクリン…名前は…んまいっか、とにかくそう言われたのよね？やっぱねえ、うちらは軍隊って言うより探検隊とか救助隊に近い仕事が多いから、まあエメリアにいる自治協会の部隊は戦争は基本的にしないし」「はい、相当腕が立っているからそういうお仕事なら上手にこなしてくれるはずだって」「うん！任せておいて、うち等のチームなら動物狩りとか悪人の確保とかは余裕だからね！」ユイリィは自慢げにツルを軽く振った後、マグマラシに歩み寄って彼の右前足を自分の左前足で握った。もちろん彼女の言っている事はウソであるが、このメガニウムにはちょっとした確信がある。この5か月の経験からしてきっとうまくいくに違いない。たぶん。

「ちょ、ちょっと待てよユイリィ！俺らそんな仕事したっけ…？」リーヒュンが背後から慌てたように駆け寄る。ユイリィの方は彼の方を向き直り、分かってないなあとばかりにツルを動かす。「いいのいいの！探検隊もバトルも回数重ねて場数を踏めば、応用は効くんだから、そういう風なスタンスを踏むのはリーヒュンだよね？」

「そう言われりゃそういうもんだが…ああ、そうだ。俺はリーヒュン・バイリング・グリーズ、彼女の友達って言うかなんて言うか、そういう一緒にいる立場ってところかな…」「なんていうかじゃないでしょうに！リーヒュンはウチの弟みたいな存在なんだよ！かわいくててプニプニしててむぎゅむぎゅしてて…とってもいい子！」「いつの間にまた変な…うぐえっ？！」メガニウムが嬉しそうにベイリーフの左側から体重をかけてくる。「と、とにかく…よろしくな」

「そうそう！それで言い忘れてたね、うん。ウチはユイリィ・ランタン・プレミドール、結構な変人に見えるでしょ、うん。よろしくね！」メガニウムがそのままの姿勢でマグマラシの方にツルを伸ばし、彼の前足を再度握る。「は、はあ…よろしくお願いします」来客のポケモンは戸惑いながらもそれに応じた。この2匹を見ている限り、自分が知っている探検隊や救助隊とは全く違う、こんな連中が本当に役に立つのだろうか？

「そうだ…という事で…俺たちに解決してほしいこと、何なんよね？対応できる限りだったらどんな事でもするけど……」ベイリーフがどうにかメガニウムのすり寄りを押し戻し、マグマラシの方に歩み出る。「えっと…結構大変なんですが…」彼の表情がやや曇った。

「ここから北西に言った沿岸にほど近い場所にガラテアという地域があって、そこは大規模な湿地帯が広がる場所なんです」「…なるほど、北西の方、プロテウス地区よりさらに北西ってとこなんだ」

「はい。プロテウス地域の隣の集落ってだいたいそんな感じの場所です」マグマラシ種族は右前足で土の上に、ソーラ地域の大まかな輪郭を描き、自分の持ってきた地図を参照しながらその地図の左下辺りに目印をつける。「そこで今起こってる話なんですが、この湿地帯に今、普段はいないはずの生物が…」

「だからどうしてほしいんだ？先に動詞を言え外客！アンタああしろこうしろと言ってこいつらの情報盗むんだろ？おい！？ここでぶっ殺したっていいんだぜ？」話の進んでいかないやり取りに、いら

だった国連統合軍の兵士が下手くそなエメリア語をまくしたてながら銃身を再びマグマラシの方に向ける。このポケモンは再び体をすくめ、両前足で頭を抑え込んだ。「すいませんすいません！言いいます、今すぐ言いますから」「そんじゃ早く用件だけ言え！てめえらのぼろ集落なんぞ戦闘ヘリ一機で…」

がしっ！ベイリーフのツルが銃身を捕え、マグマラシの頭部からじりじりと押し戻しにかかる。「な、貴様…」「…アンタなあ…誰が望んで…貴様らのおんぼろ機器一粒に…」手に伝わった彼の強烈な怒り、その勢いに兵士は後方に数歩押し戻された。それに抵抗してアサルトライフルを前に突き立てようとするが、目の前にいる自分の背丈よりやや小さい男(オス)ベイリーフのツルが発する異様な力の前に、頑強な腕力をもってしても押し戻される。

リーヒュン・バイリング・グリーズの朱色の目には激しい火が燃え盛っている。意識の水晶の奥底にある原子炉から激しい熱エネルギーが、彼のツルに想像を絶するパワーを注ぎ込んでいた。

こいつらが……こいつらが……自分が見てきた限りのポケモン達を殺し…故郷を奪い…それぞれの幸せを根こそぎ破壊したのだ。未来も、夢も。そしてこの世界の辺境地に追いやり、自分たちは自分たちだけが生き延びるため、そしてより快適さと便利さだけを追求するための安全を守るために罪のないその他すべてを巻き込んでいる。勿論その全てを見たわけでもないし、人間たちの間にだって争いや目的はあるのだが、今のこのベイリーフが知りうる限り、見てきた限りの風景から考えられ、意識の水晶を過熱させる感情はそれに対する怒りしかなかった。目の前で民間の、この世界の真実を知らず（情報がない、それも別の意味で幸せなのかもしれないが）ポケモン達だけの集落で幸せに暮らしてきたであろうこのマグマラシが、何の罪もないのに人間に脅され、死の恐怖に震えている。本人は気づかなかったが、リーヒュンには感じられた、目の前の男(オス)が放つ恐怖が自分の感情と意識に呼びかけてくるのを。それが連鎖反応

的に意識の水晶のエネルギーに働きかけ、それを増幅させ、その波は彼が一番触れたくない場所である妹のフローラに関する面をも刺激する。こいつらだ…こいつらのせいだ…こいつらみたいな文明がなければフロレアールも…そして自分だって…

「ち、違うよ、とにかく…すいません！本当にすいませんです！そういう訳じゃ……」ユイリィが慌てて間に入り込んでベイリーフを後ろに押し下げる。このメガニウムとて自分の感情を隠している、前の前にいる人間をぶち殺してやりたい、彼女の感情の原子炉は暴走寸前だった。しかし自分の感情と意識の間に入れる事の出来る薄い壁がその暴走したエネルギーを抑え込んでいる。それもまたユイリィ・ランタン・プレミドールの鍛錬のたまものだ、ここで感情をむき出しにするのは極めてまずい、そうなったら彼も自分も単なる処罰では済まぬ事態になるだろうと。

ふと、兵士が持っている携帯無線機の着信を知らせるブザー音が鳴り響く。「はい…はい？戻ってこい…そんじゃこいつらを誰が…はあ…はあ…」男は納得のいかないという表情のまま無線機のスイッチを切って無線機を元の位置に戻し、３匹に向き直る。「フン…まあ、いい…」国連陸軍の兵士の方も多少はビビったか、それともこれ以上の対応が馬鹿らしく思えたのか、それとも無線で受けたであろう指示がめんどくさい物だったのか、そんな曖昧な表情を浮かべて人間の男は数歩下がった。「とにかく、話をつけるんだったらさっさとしろよ。ロクでもねえことを言ったらお前らもろとも処刑してやっからな。全く、こんないかれ連中はカザフスタンの雪山でも北アフリカの砂漠ででもくたばってりゃ……」

「んだとこいつ……」「だめだよ」リーヒュンは歩み去る人間に後方から飛び掛かって、ツルで首を締めそうになったが、そんな彼をユイリィはさらに両前足とツルを使って食い止める。「なんでだよ？！あんなクソ野郎なんかちょっと叩けば音を上げるさ…」「そ

ういう問題じゃないの！ここであの人間を…まあ最悪殺したりなんかしたら、リーヒュン掴まるどころじゃすまないって！それで…」メガニウムは強引にツル先にエネルギーを集中させ、ベイリーフの首ごと体を自分の方向に向けさせた。肝心のベイリーフの方はそれを振りほどこうと首を背後にのけ反らせながらますますいきり立つ。「それでどうした！？まだ来てもない未来におびえて何もしないのかユイリィは？！」「それとこれとは違うんだよ、違うに決まってるでしょうに！そんな事も考えられないのその節穴…」彼女はそこまで言いかけ、思わず止まった。自分の両前足とツルにまたしても強烈な力がかかり、彼の胴体前部と首元に掴みかかっているのをはっきりと見てしまった。

「そ…そんな…そういうつもりじゃないのよ…ごめん…」メガニウムはベイリーフからツルと両前足を慌てて振り払う。またしてもやってしまった、何年にもわたり押し殺す方法を身に付けてきたのに、自分の感情が彼の事になると抑えることができなくなってくる、ユイリィの意識下に、あの輸送機での一件と同じ凍り付くような冷たさがゆっくりと湧き上がる。「ただ…リーヒュンが捕まったら…フローラもこのままになっちゃうよ？あのままで見捨てるののフローラを？そんな事…ウチが…」

「…フローラ……そんな訳…させるわけないだろうが…」ベイリーフの意識の水晶を過熱していたエネルギーの電源がぷっつりと切れた。感情が落ち着いてくるとともに、周囲の景色が色合いを取り戻し、４足元の感覚もはっきりしてくる。リーヒュンはまたしても自分の軽率さを呪った。うっかり間違えれば自分は射殺されていただろう、そしたら目の前にいるユイリィは…そして妹のフローラは…本当に危ない所だったのだ。

彼は数歩後ろに下がり、首をしたにうなだれるかのごとく下げる。自分の犯そうとしたことにここまで後悔の思いを覚えたのは数年ぶりくらい、そんな気がする。自分はいつまでこんな強引な行動に出

る事を繰り返さなければならないのか、そんな疑問が意識の水晶の液体をゆっくりと立ち上がる津波にした。「ごめん俺のほうこそ……なんでこんなにバカなんだろう?」「大丈夫……大丈夫だよ…」彼女がそっと歩み寄り、彼の首の葉っぱ付近にそっとツルを当てる。「ウチも…人間の事は正しいと思ったことないから……違うものを受け入れられるかどうかなんてそれぞれの器量だしね、うん」「……」ベイリーフは思わず自分の前足を見つめる、わずかについている土汚れが、自分の心の乱れの写し絵となって際立っているような気がした。

「そう…すなわちあなたは、この子たちに、湿地に現れたその生き物を対峙する、もしくは捕獲してほしい、そういう事ね?」来客のマグマラシの周囲に集まった一行、サクラは来客の視線にできるだけ姿勢を低くしながら尋ねる。「はい…でも相当手ごわい生き物のようで……」

「大丈夫大丈夫!うちら、そういう動物くらいだったら怖くないもん!ね、テルル?」ユイリィが嬉しそうにテルルの首の周りにツルを回す。そう、今の隊長は彼女よりはるかに背の小さいこのグレイシア種族、テルル・アストラフスキーなのだ。「う、うん…サクラさん、行ってきてもいいですか?」グレイシアはサーナイトに少し恥ずかしそうに聞いてみた。テルルの意識下によぎる、何日か前には彼女に、隊長にさせられた重圧とプレッシャーに泣きついてしまった、そんな自分がここで隊長ぶって前に出ることなどして良い物であろうか?

そんな彼女の表情から何かを察したか、サクラそっと左手でテルルの頭飾りのあたりを撫でる。「もちろん、国連の人間には数日間だけ話をつけておくわよ。ただし…」彼女は思案顔でここにいる一匹一匹を見回す。「…近々、場合によってはまた私たちに要請が来るかもしれないわ。その場合はこちらから連絡をするわね、ユイ、あなたのハトを借りてもいい?」

「は、はい！ちょっと待っててください……」ユイリィが軽くツルを口に当ててヒュイッとならすと、居住施設の背後の森から一匹のハトが飛び、彼女のツルの上に降りてくる。「ね、せっちゃん（セレーネというのが名前だが）、サクラさんのところ、お願いね」カワラバトは彼女が頭元を撫でるだけですっと飛び立ち、サクラの左手に止まる。「ええ、それじゃあテルル、よろしく頼むわよ」

「は、はい」テルルは緊張気味に頷いた。いよいよ自分が隊長として、正規の仕事ではないが行動する時が来たのだ。成功するかどうかには全く自信がない、しかし、バストークやピトムニクが自分の年齢という慣習以上に考えた末に自分を選んだに違いない、その期待にそうには何としてでも努力しなくては……」

「それから……」サクラがもう一言付け加える。「万が一の際の事と…ええ、あとは…精神的訓練の一環としてなんだけど、私の秘書官も同行させてもらっても構わないかしら？」

２０１３年　２月８日　東シナ海　韓国・日本の排他的経済水域境界線付近　５時２５分

暦の上では春でも２月の東シナ海の風は冷たい。合同演習を行うアメリカ海軍第４１空母打撃艦隊のニミッツ級空母「ロナルド・レーガン」、並びにダイゴンデロガ級ミサイル巡洋艦「チャンセラーズビル」以下の艦隊と、大韓民国海軍第２艦隊所属の世宗大王級イージスミサイル駆逐艦「栗谷李耳（ユルゴクイ・イ）」、並びに独島（ドクト）級揚陸艦「独島（ドクト）」以下の艦隊の演習は未明から行われていた。

米国の空母「ロナルド・レーガン」のカタパルトから発進するＦ／Ａ－１８Ｅ。それに続き、配備数がまだそれほど多くないロッキード・マーチン社と欧米諸国の企業との共同開発で製作された次世代統合戦闘攻撃機（ＪＳＦ）、Ｆ－３５Ｃが２機、同様に「ロナルド・レーガン」のカタパルトから発進していった。フライトデッキのクルーが装着された無線機で連絡を取りあい、機体をカタパルトへと誘導し、滑走シャトルを機体の前輪（ノーズギア）に装着、定位置についてパイロットにハンドシグナルを送る、この作業を幾度となく繰り返し、計４機のアメリカ海軍航空隊の艦上戦闘攻撃機がまだ夜も明けぬ東シナ海へと飛び上がっていく。同時に韓国海軍の強襲揚陸艦「独島（ドクト）」からも対潜哨戒ヘリであるＳＨ－６０Ｋが２機出撃した。この日の早朝行われたのは対潜水艦哨戒・迎撃訓練である。東・南シナ海、日本海（東海）からオホーツク海にいたる海域は、ロシア、中国、韓国、北朝鮮、台湾、日本の領海や経済水域に複雑に入り混じる上、アメリカや資源採掘を行う各国の大企業の思惑がそこに絡んでくる極めて政治的・経済活動的に混沌とした地域であるが故に軍事活動も盛んであり、頻繁なミサイル駆逐艦や大型正規空母、並びに沿岸基地の航空機による哨戒飛行が過度な軍事力誇示として批判されがちな（格別日本の批判が根強い、国際的に見れば自国の領空・領海を警備するのは常識であるが、この国は一応“軍備非保持”を原則としているだからであろう）この海域において近年各国とも急激にその軍事的価値が高まりつつあるのが潜水艦隊による隠密行動である。この方法であれば相手沿岸国の警備艦艇と直接接触する事もなく、民間船や飛行中の民間旅客機、海上に設置された資源採掘プラントとの（日本から東アジア主要国へと続く主要な海路や空路が多く存在するこの地域、記録を探れば複数出てくる）衝突事故や領空・領海侵入に関するトラブルを起こす可能性も極めて低い、中でも長期間の潜水行動可能時間と強大なペイロードを持つ原子力潜水艦は、日本や韓国に展開するアメリカ海軍や極東方面のロシア海軍が複数所有しているのをはじめ、中国海軍でも複数運用されている。その

ような傾向があるからこそ、潜水艦の軍事行動に伴う有事の際の対処法を訓練する価値は言うまでもない。潜航する潜水艦に対しては対潜魚雷、浮上している際は航空機や駆逐艦の対艦ミサイルによる攻撃が有効である。ただし、ここで注意しなければならないのは現代の潜水艦というものは、その構造、使用素材、機器や兵装の改良によってレーダー波や軍事偵察衛星が発信する赤外線電波の反射を低減し、対潜哨戒機や駆逐艦の音響ソナーでも反応しにくいという極めてステルス性の高い兵器であるという事だ。動力機関の音を拾えばいいという考えもあるかもしれないが、水中推進装置や内燃機関の改良でそれは大きく低減できるし、原子力機関となればその稼働音自体がほとんどない。逆に現代の潜水艦は魚雷は勿論、ある程度の水深なら弾道ミサイルや対空ミサイルを水中発射できる能力も備えているため、能力や兵装にもよるがうかつに接近すれば1隻の潜水艦だけで複数の航空機でも艦艇でも部隊を大混乱に陥れることが可能だ。イージス艦などの高性能の駆逐艦の対潜ロケット弾で水深の深い位置に追い込み、対潜魚雷などで仕留める。浮上した際は電子戦機（アメリカ海軍航空隊ではＥＡ－６ＢやＥ／Ａ－１８Ｇなどがある）ではで電波妨害をかけ、その隙に対艦ミサイルで撃沈する。その方法を綿密に訓練する必要があるのは明らかだ。

米韓合同艦隊の周囲を時計回りに旋回しながら潜航し、敵の潜水艦…こうなる恐れが最も高いのは中国だが…役となるのは、バージニア級潜水艦「ノースカロライナ」と最新鋭のバージニア改級潜水艦、アメリカ海軍の潜水艦で最も栄光のある名を授けられた「ボーフィン」である（前述の通り、第2次世界大戦における潜水艦「ボーフィン」は、旧日本海軍の艦艇及び輸送船を最も多く撃沈した艦だ。１９４４年8月某日には旧日本海軍の輸送船「対馬丸」以下…それも複数の駆逐艦の護衛がある中…の艦隊を一晩で4隻沈める快挙をやってのけた）中でも「ボーフィン」は今年1月に竣工し、4

月より太平洋艦隊に実戦配備予定の艦、ステルス性や索敵能力はアメリカ海軍一、世界で見ても第1位クラスの実力を持っている事は言うまでもない。幾多にも及ぶ対潜水艦訓練と最先端の装備を持つアメリ海軍ミサイル駆逐艦・ミサイル巡洋艦と空母搭載機航空部隊、そして世界屈指の性能を持つ大韓民国海軍の世宗大王級イージス駆逐艦にとっても絶好の力試しの相手であるのだ。

アメリカ海軍のイージス艦「ディケーター」や韓国海軍のミサイル駆逐艦「文武大王（モンデワン）」の艦橋構造物の前方に設けられたアスロック対潜魚雷発射装置から、ＭＫ１４対潜魚雷に見せかけた模擬弾が次々にうちだされ、海中へとイルカのように飛び込む。潜航を続ける米海軍の原子力潜水艦「ボーフィン」は、一般的に魚雷を回避する手段として、音響囮（デコイ）を打ちだしながら、ジャミング装置を利用しながら相手の誘導魚雷をかく乱、同時に推力を極限まで絞りこませる。原子力潜水艦「ボーフィン」は推力を失った巨大な水中の物体となり、艦内に存在する空気が作り出す浮力と潜水艦自体の質量が生み出す重力の差の分だけゆっくりと水中を降下していく。

「目標、潜航開始、深々度に退避行動の模様」「対潜ヘリ部隊、予定通りの攻撃を」「了解した」合同艦隊の中核となった米海軍空母「ロナルド・レーガン」のＣＩＣから発せられる指示、独島（ドクト）級揚陸艦…その名の通り、日本海（東海）に浮かぶ日本が島根県の“竹島”と自称する小島から由来している……の航空管制室経由で目標データを受け取ったＳＨ－６０Ｋは戦闘行動に入る。「ソナー・ブイ投入」「データリンク開始」対潜ヘリのパイロットの一人が、サイクリックスティック（機体の前進と後退、並びにバンクの調整に利用する）に装着されたセレクターを回してトリガーを引くと、魚雷発射口のそばに装着されたソノ・ブイが投下、真下にある蒼い海面へと軽い水しぶきを上げて落下する。この哨戒ヘリに搭載された誘導魚雷（ホーミング）はセミアクティブホーミング、すなわち発射した機体側の火器管制装置の誘導とデータリンクしながら目標を追撃するタイプで

あり、ジャミング下での命中精度を維持できる一方、発射した機体側は迎撃されるリスクを侵して誘導を続ける必要がある。そのリスクがある以上、絶対的な命中精度の確保は必須条件であり、機体側のソナーと海中のターゲットの仲介役としてソノ・ブイは投入されるのだ。

「目標座標データ、入力よし」「攻撃行動に移る。」２機のＳＨ－６０Ｋのパイロットはコレクティブ・スティック（機体の上昇と降下、メインローター出力の調整を行う）をわずかに下におろしながら握っている面をわずかにひねり、出力を上げながら降下し始めた。対潜攻撃の際の誘導魚雷投下高度は決められており、高度が高すぎると着水の際の衝撃波で信管が作動してしまう恐れがある。もちろんそうならないよう万全のプログラムが組み込まれているが、行動に電子化・システム化された兵装による一撃必殺が常識の現在の兵器体系においては、一回の攻撃の失敗は即座に反撃を浴びる、すなわち貴重な人材と高度に機械化された兵器の全損…ひいては死…を意味する。そう、現在の軍事兵器はその活動場所が何であれ、陸を走り、空を飛び、海上や海中を動き回り、宇宙空間を周回する一種の精密機器だ。個々の性能は極めて高いが、一発の被弾ですべての能力を喪失してしまう脆い存在である。

「攻撃開始」その直後、２機の対潜ヘリから海面に向けて魚雷に見立てた演習用弾頭が海面に向けて投下され、数秒で海面に着水、水しぶきを上げて目標へと向かう。対潜ヘリは一気に速度を落とし、魚雷を目標へと誘導するための行動へと移る。ソノブイのデータと火器管制装置のデータをリンクさせて発信し、誘導魚雷に受け取らせるには常に発射した兵器を一定の角度以内にとらえ続けなければならない。無論、演習である今回は命中させるつもりはないが、そのプロセスだけは綿密に訓練を積む必要がある。

最新鋭の米海軍潜水艦バージニア改級「ボーフィン」がその動向を

見逃すはずがない。直ちにこの艦は囮（デコイ）を投下し、出力を上げて海上へと急速に上昇していく。もともとステルス性の高いバージニア級潜水艦を改造型であるこの艦船であれば、誘導魚雷を回避すること等難しい事ではない。

勿論この反応を他の艦船や航空機部隊も察知している。急速に浮上してくる相手に対して次の攻撃手段は、艦載機部隊による対艦ミサイルである。空母「ロナルド・レーガン」から発進した米海軍航空隊のＦ／Ａ－１８ＥとＦ－３５Ｃは艦隊の進行する向きから１１時方向に数十キロ離れた、演習の目標となる潜水艦「ボーフィン」へと、高度は１０００フィート前後で保ちそれぞれ（Ｆ／Ａ－１８Ｅは）Ｆ－４１４ｌＧＥ－４００ターボエンジン２基と（Ｆ－３５Ｃは）Ｆ－１３５－４００ターボファンエンジン１基を全開にし、全力で向かい始める。Ｆ／Ａ－１８Ｅは両翼の、Ｆ－３５Ｃは機体中央部に格納されたウェポンステーションに２発ずつ搭載したＡＧＭ－８４Ｅ…その識別番号からして、本来は長距離空対地ミサイルを対艦仕様に改造したもの…対艦ミサイルに見立てた演習用弾頭を発射するのだ。航空機に搭載したレーダーが索敵可能な範囲を見る限り、艦隊から南に１２０キロの海域に民間の大型コンテナ船が一隻、北西１３０キロと南東１５０キロの、高度２万９０００フィートに民間機のＢ－７８７とＢ－７７７－３００が飛行しているだけ、この辺りは金属資源・燃料資源採掘の海上プラントが比較的少ない海域であり、現在のところ演習に支障は出ていない。無論、海上資源採掘技術が飛躍的に向上した現代であるが故に、軍事演習の海域や空域もそれを考慮に入れて策定しているのだが、それ以上に周辺の海域や空路への通達の万全さも重要になっている。陸上部隊には演習場が（日本では富士山周辺の火力演習場が代表的だ）あるからまだいいが、航空部隊と海上艦隊は必然的に公海または自国の領海内や領空で行わざるをえず、民間機との空中衝突や民間船との以上接

近や潜水艦と一般船舶の衝突といった大惨事を招く事態を回避するためにも、万全の備えと通達が必要である。

米海軍の航空機４機が出撃した空母「ロナルド・レーガン」の艦中央部に存在する航空管制センターでは、発進した自軍の艦載機部隊や独島級揚陸艦から出撃した対潜ヘリ2機の管制に管制官たちが無線で呼びかけ、手元のタッチパネル式コンソールを忙しくたたいて業務に精を出し、その隣にある空母ＣＩＣ（戦闘情報ステーション）では、周辺を固めるアメリカや・韓国双方の艦艇に忙しく指示を送り続けている。しかしその傍らでは、数人のアメリカ海軍と韓国海軍の要員、それに同行した韓国国家安全保障局の男がＣＩＣ中央にある戦況表示板の一角をレーザーポインタで示していた。「…どうやら、やっこさんも動き出すようです」「はい…天候が回復した途端だな…中国側もこちらの動きを察知して……」「まあ、そう焦ってもこちらから行く必要もあるまいってことですよ」緊張したような面持ちのＮＳＳの関係者に対し、アメリカ海軍の参謀が穏やかにその輝点（ブリップ）を指差す。輝点は１つではない、既にアメリカと（こちらはＤＤＧ－７３「ディケーター」）韓国で（こちらは「栗谷李珥（ユルゴクイ・イ）」）双方一隻ずつ来ているイージス駆逐艦のレーダーと軌道上の軍事衛星が解析し、アメリカ本国・ワシントンの国防省にあるデータネットワークにアクセスして、艦影の合致も終了したものが戦況版のディスプレイに表示されている。

その艦影、演習を行っている艦隊の北より、レーダー索敵ギリギリの位置に停泊しているその艦艇は「海龍（ハイロン）」と表示されている。そう、先月の末に米国の軍事衛星が発見した中国海軍初の正規空母とその空母が所属する機動艦隊なのだ。

「しかし…ＮＳＳはこの調査を目的としてきているのです。この至

近距離にいながら何の情報収集もせずに帰ることは…」「まあまあ落ち着け政府の人間さん、●●●（韓国の大統領の名）大統領が何を考えているのかは知らんが、ここはあくまで軍事演習だ。政治の駆け引きや工作の場ではない」少々焦りがちなＮＳＳの男の左肩を、大韓民国海軍の参謀が軽くたたく。「それは…存じています…しかし、我が国と東アジアや太平洋地域の安全保障のためには…多少危険なあれもやむを得ないかと」

「さすがだな君は。やはり情報屋畑を進んでいるという表情をしている」アメリカ海軍の別の参謀がほほ元ほころばせ、ＮＳＳ関係者の方を見る。分かる、顔を見れば情報屋一本の人間が持つ特有のひた向きさがある。自分たち現代の軍人は上位階級であっても、情報技術によってデータ化・組織化された戦力という司令部のコマの一つである。だからこそそういう点での諦めというか、歯車の一部となる覚悟というものが自分の思考や行動パターンをそう変化させてしまう。ここまで情熱的にできる男が羨ましい、この参謀はそう思った。「…いいんだそれで、情報屋というものは積極的なものの方がいいからな。インターネット上のニュースが入ってくるくらいアンテナが立っていたほうがいい」

「あ、ありがとうございます…そう言ってくださると、普段から隠れるように仕事をしている我々としてはとても」韓国人は上手とは言えない英語で顔をはにかませる。そう言う立場だとはいえ、自分たちの仕事は政府にも国民にも気づかれない、またはゴシップ誌のネタにされる、もしくは重大な局面で不祥事をやらかして国際問題に発展する、そんな面倒くさくて気まずいものであるという事は覚悟していたし、誰かに感謝されるものもないという事は覚悟はしていた。だからこそ思いがけない形で評価されるのは嬉しい。

その一方で、同席している韓国海軍関係者が思わず顔を見合わせるのも、このアメリカ海軍の男には見えた。それはそうだ、軍事行動に国家中枢のトップしか詳細を知らない特別機関の関係者が同行

している中では気分がいいはずもない、少なくとも今の人間社会のシステムに入ってしまった人間当人たちにとっては、別の場所から自分たちのしていることを監視させられるのは、たまらなく嫌な事なのだから。

「ん？…国防省か…」ＣＩＣにある、アメリカ本国政府に直結している通信機が鳴る。それを取ったオペレーターの男が、その後参謀の一人に歩み寄った。「国防省からです。南太平洋・エメリア州にある太平洋送電網、軌道上に建設中の我が国の宇宙太陽光発電システム、並びにわが国の軍事衛星一基のネットワークが中国からと思われるハッキングを受けました」「中国が？」「送電網や軌道上太陽光パネルの稼働に異常はない模様ですが、機密情報およびプログラムが漏えいしたかどうかに関しては調査中とのことです」「そうか……分かった」参謀の男が左手を軽く上げる。「また中国ですか…今度はエメリアのエネルギー供給網と宇宙まで…」「そうだ…相変わらず読めん国だ中国は」韓国国家安全保障局関係者の怪訝そうな声に、アメリカ海軍の参謀は一回頷いたのち、右手に持っていた帽子をかぶり直したのちに戦況表示板の輝点に再び目を落とす。アメリカのＣＩＡやイギリスのＭＩ６等の諜報機関に負けず、中国も情報テクノロジーを利用した調査行動の猛者になってきた。しかも中国は国家当局直属のハッカー集団とそれを育成する機関まであるというから性質が悪い。官民問わず、中国のハッキングやコンピュータウイルスを利用した情報収集活動の被害を受けた国家機関、研究機関、大企業は少なくない。

そしてその中国のさらなる行動を誘発しかねないもの、中国の海軍行動力を飛躍的に向上させるであろう正規空母以下の機動艦隊も、アメリカや韓国の艦隊を遠くから見つめるが如くそれらを示す情報処理端末が示す輝点となって輝いていた。

再びＣＩＣの端末の一つが鳴る、どうやら空母の航空管制室からしい。「こちらＣＩＣ…？」無数の光を放つコンソールについている通話装置を取るオペレーター。やがて通話装置を戻し、中央戦況ディスプレイの上にぶら下がっている大型液晶画面の画像を切り替える。「大佐、中国機動艦隊とわが合同艦隊の合いにある海域、北西１００キロに不審な海上移動中の物体（オブジェクト）を確認、熱源解析の結果、クローンのラプラス種族であることが判明しました」液晶画面に映るのは、イージス艦や航空機の識別装置が捕えた微弱な電波から抽出・解析した数値と軍事静止衛星が捉えた物体の赤外線画像。「うむ……これは中国海軍が出したものに違いないんだな？」アメリカ海軍の参謀が手元のマグカップの中身を口に運んでからディスプレイを見上げる。「はい、目標の発する微弱電波にポケモン特有のものと、位置情報伝達用ビーコンの物が合成されています。ビーコンの電波の解析の結果、デパスタ―社のものと判明しました。イギリス企業からラプラスを購入するのは中国海軍が多いですから、航空部隊と米海軍のイージス艦「ディケード」が迎撃に向かいます」

「了解した…」アメリカ海軍の参謀は帽子をかぶり直し、戦況情報ディスプレイをを見つめる数人に視線を送る。「やはりですね…こちらに探りを入れる気は十分か…」韓国国家安全保障局の男が、急きょ目標の方へと向かうＦ／Ａ－１８Ｅ、Ｆ－３５Ｃ、イージス艦「ディケード」、潜水艦「ボーフィン」を示す輝点を見つめながら呟いた。その目標が出現したのは、アメリカのエクソン社とイギリスのＢＰオイル社が事業を進める天然ガス採掘プラントにほど近い位置だ。だいぶ民間施設に近い、中国海軍はどのような意図を持っているのであろうか……

手さぐりと定まった道

２０１３年　プロテウス地区郊外の森　００時４０分

すでに日付は変わった時刻、一行は夜道をひたすら歩き続ける。自分たちの文明には標準的な森の中の未舗装路、その道の上にアーチ状に生い茂る葉の隙間から覗く星と月の明かりが唯一の照明である。しかし、人間の文明と違って夜はほぼ明かりがゼロのこの文明にとっては、それがとても際立って明るく見える。

太陽に合わせて寝起きし、天候に合わせて職業に従事し、それがなければ自分が自然から受け取った能力を高めていくためにお互いの力を試しあって時を過ごすポケモン達とその文明、バトル（これは人間の呼称だが）なる物は、自分の守護の（己の能力を利用した悪事を働くものが近頃はきわめて多い）ためだけではなく、収穫や大漁を祈願して自然に捧げるという形式で集落内、または周辺集落の数地区まとめて行って楽しむ祭りという側面も持っている。人間の世でいう２１世紀、人類の活動地域が地球の外、周回軌道宇宙空間から月面まで及び、広大な海洋の一角に新たな居住地域を作り上げ、その下に広がる深海の底から資源を濠だし、そこから作られたあまたの商品、サービス、またはエネルギーを元に昼も夜も同じ明るさの都市、工場、交通網を作り、地球という空間どこにいても瞬時にデータや情報をやり取りし、作り出した無数の工作機械やロボットが人類の到底行えない工作活動や危険な作業の大半を肩代わりし、医療という技術が生命そのものを自由に操り、作り出せる時代。人類一般市民の大半が同じような機械によって利便性を高めた生活を望み、ひたすらに金を求めて競争する時代、そのせいか国家間でも国家連合間でも企業間でも争いや対立は絶えず、地球気候を変えるほどの環境問題も残り、テクノロジーが（原子力も、風力発電低周波公害も、バイオ燃料による土地の買い占めも、遺伝子組み換え品

がもたらす健康被害も、サイバーテロによる機密情報流失も）もたらす新たな災害が大きな問題となっている。それに対処するため人間たちは新たな巨大な組織やシステムを作り、その間で新たな問題が起こり…を繰り返しているうちに、今の人類文明のほとんどは、何重にも入り組んだ巨大な組織やシステムに自ら支配され、それに逆らえば生活できない状態に陥っている、そんな時代だ。その良くも悪くも（何もしなければ文明は成長せず、多くの文明居住者が諸処の脅威に苦しむことになる。成長し、拡大すること自体は素晴らしい事だ。ダウンシフトなどという物は文明の滅亡を招くのみである）強大な文明の前に押しつぶされ、すり潰され、多くが苦しみながらも、今なお残る健全な集落では、彼らは伝統を守り、自然や自然現象を恐れ敬い、謙虚でありながらのんびりとした文明の中で暮らしている。彼らが衰退し、滅亡していくのは、悪く言えばそれがきわめて惰弱だからであり、文明の必然を彼等自身が認めたに過ぎないからだ。

一行はたびたび他の旅人や探検隊にすれ違う。集落やその周辺の警備のために夜行性種族を中心に見張りが点々とおり、急を要する救助依頼や捜索願いの対応は夜でも行われている。

そんな中を歩く一行の中で一番浮いている存在は、サクラに言われるがままに派遣されてしまった彼女自身の秘書官、ジャノビー種族のユーク・ゲープコッチである。どうやら自分が３０日ほど前に着任したことに対して、連中はほとんど興味を抱いていなかったらしい。年上世代であるロックオンやチェギョンに至っては完全に彼を年下扱いしているようで、「足を引っ張るなよ」とか「どんくらい経験あるか教えて！」とかもう完全にタメ語状態だ。加えて暫定隊長のテルルはこのジャノビーにシカトを決め込み、時折自分の隣にゴミが置かれたような目線でこちらに目配せをしてくる始末。あまり理解されていないことに対してのショックに加え、何のためらい

もなくタメ語で当たられたことに対することに、彼は自信を喪失していた。

一行から遅れるように後ろを歩くユーク。その直後、彼の葉っぱ上の尻尾に何かが乗り、いきなり後方に引っ張られるような感覚を覚え、後ろに引き倒されそうになる。「な…何だ…?!」「…相変わらず固くなってましゅねえ?お前もユイリィにそっくりってところでしゅ…」そこにいたのはシェイミ、ユークの葉っぱを白い両前足で折り曲げ、背中に生える植物の突起を折り曲げている。くすぐったいような痛いような感覚に彼は思わず尻尾を振ってそれを掃おうとした。「ば、バカやめろ…やばい、葉っぱがちぎれ…」

「ったくもう!先まで寝てると思ったら起きた途端に何やってんのよロズリン?!」前の方から慌てて飛んできたのはユイリィ、ジャノビー種族の背中にしがみつくロズリンをツルで頭の上に戻す。シェイミはメガニウムをなめきった表情をして、自分の足元にある首の部分を見下ろした。「新しく入った一行に洗礼しましゅね。お前もやってほしかったんでしゅかねえあの時?」「洗礼って…まあとにかく!」彼女は頭上を見上げる。「もうこんな時間なんだから子供は寝とかないと!明日の朝になってアンタがウチの頭で寝てたら叩き落とすわよ?」「お前が先に転びそうでしゅね」

「うぐぐぐぅぅっ!」ユイリィはじれったそうに右前足を踏み鳴らす。相変わらず自分の頭の上にいるシェイミ種族、ロズリン・ダブルスリップが自分を見下していることが気に入らない、というより無性に悔しさを覚える。サクラ曰く人間年齢換算ではまだ10歳にも届いていないらしいこのシェイミ、しかし自分と数人だけに見せる生意気な毒舌ぶりが想像を絶している。どうしてこのような事態に陥ったのだろうか?

「と、ともかく…」メガニウムが気を取り直してジャノビーの方を振り返る。思いがけない事態に目が点になっている彼と目が合った途端、この女メガニウム(メス)は思わず笑いそうになった。よく考えてみたら、目の前にいるユーク・ゲープコッチは自分より2歳年下、

それにこのジャノビーの意識の水晶から出てくるエネルギー、このような実践経験がほとんどなく、そもそもから今回の予定外の行動に緊張を覚えているようだ。とすると先輩は自分である。

そうと決まればユイリィ・ランタン・プレミドールがとる態度はひとりでに決まってしまう。そのメガニウム、ユイリィ・ランタン・プレミドールはいつも通りのため語で、いつもの口調と表情で、両前足をぎすもすと動かしながらサクラの秘書官に応じた。「ごめんねユーク、ロズリンっていうのはこういう性格なんだよね、うん」

「そういう性格って…っていうか、君まで何でタメ語を…」「うんん、ウチってそういう性格なの、うん。だからこれからよろしくね！」「て、というよりアンタは俺より…や、やめろっ！」嫌がるジャノビーをしり目に、メガニウムはツルで彼の短い手の上あたりを掴み、自分体に思いっきり引き寄せた。一瞬の出来事、その結果の重大さに気づいたとき、ユーク・ゲープコッチの意識の水晶が水蒸気の加熱膨張で爆発しそうになった。彼女は一体何をしているのか、なんで自分はこんな格好で彼女の花びらが生えた首元に飛び付いているのか。彼自身、自分が恋愛とは無縁だと信じてきたにもかかわらず、突如このメガニウムが行ってきた行動に、彼はとんでもない恥ずかしさに足の力が抜けそうになる。

ユークは短い両手とツルを使ってユイリィを遠ざけようと躍起になった。「ば、バカ、やめろ、恥ずかしいだろうが…」「あはは！何か秘書官って気持ちいい肌触りしてるよね！これからウチのむぎゅむぎゅ候補第2号かも…」

「2号っていつの間にそんなものを決め…と、とにかくだ…」メガニウムの背後からツルを伸ばし、彼女をジャノビーからどうにか引き離しにかかったベイリーフ。「…やめとけよユイリィ、他の奴に見つかったら気持ち悪いだけだぞ？」

「来た来た！むぎゅむぎゅ1号！リーヒュンにやっちゃうおっかな♪」「って何すんだって今度は？」「研究し尽くされたウチ最高の一発！特別にプレゼント！それいっ！」「おいおい…うぐぇっ？

！」リーヒュンの首元にユイリィが自分の首を乗っけ、それではすまずに彼女は、自分の全体重を彼の右横にもたれ、そのまま押し倒した。体重６０キロのメガニウムの飛び掛かりに、胴体左側を地面に叩きつけられたベイリーフの肺から空気が漏れだし、一瞬息がつまりかける。「ユイリィ…は、早く離れろ…俺苦しい…」「そ、ごめんね…そんじゃあ少し緩めてあげるね、うん」「それは根本的解決…ぶへっ？！」彼女は一瞬胴体を起こしかけたが、ちょっと後ろに下がっただけでまた手しても彼の右胴体にまたがり、自分の頭部を彼の首の葉っぱ辺りに嬉しそうにこすり付けはじめる。メガニウムが離れたはいいが、当の彼女にベイリーフが犠牲になっているというそんな姿を見たユークは複雑な感情に襲われた。「なあ、なあアンタ…彼がかわいそうじゃないのか…それから頭の上のシェイミも…」「んー？大丈夫大丈夫！ロズリンはあたしのこういう行動に合わせて掴まってくれるし、リーヒュンはもう慣れっこだから平気だもん！ね、リーヒュン？」メガニウムは相変わらず笑顔のままベイリーフに飛び付いている。「いや、慣れてるわけないだろうが…うう…」「誰が掴まってると思ってるんでしゅかねこいつは？こんな事だからユイリィはいつまでたっても…なんでしゅよ」

「…君たちは一体……？」ジャノビー種族のユークはそんな光景を見てまたしても目を点にしている。エメリア自治協会のエメリア本土地域部で訓練を受けた（探検隊責任者や軍上級者に付く秘書官になる訓練というものがある。これは候補生たちを密林の中に放り込んで、ある物を探させたり、一定量の水を運ばせたりなどといったある種の探検隊業務に似たものだが、詳しくは後々説明する）時には、探検隊や救助隊というものはそれなりに規律がある物だと思っていたし、サクラ・フユツキの秘書官になった時も、働く場所やそのサーナイト種族の立場が少々特殊とはいえ、そのような空気を感じたことはあった。もともとポケモン文明の組織やチームというものに、人間の組織や機関のような厳格な役職別の身分差や先任の物言いなどは存在しない。せいぜい先輩後輩、明らかな年上年下や

立場の差位だったし、上に立つ者にもそれ位の空気しかないものだ。しかしそれを考慮しても、彼等の（一部の）自分に対する何の抵抗もなさ、悪く言えば馴れ馴れしさに彼は相当の違和感を覚える。このチームはどんな経歴を持ってきたのだろう、詳しい事はサクラからは効いていなかった。ただ単にこのチームがエメリア自治協会国防軍や自治協会自体に目をつけられていること、そして人間の国連という組織と大きな繋がり（コンタクト）を持っている事、それだけだった。

「ん？どうしたんですか秘書官さん？」ユイリィがリーヒュンとのじゃれ合いに飽きたかのごとく立ち上がり（その拍子に彼女の左後ろ足が彼の腹元を踏んづけた）、ユークの方に向き直る。ジャノビーはそんな彼女の合いも変わらない子供っぽい目つきに思わず一歩下がったが、彼女はますます楽しそうに長いウグイス色の首をグイッと近づけてくる。「い、いや…そうじゃなくて、アンタ達ってのは…変わってるなって思うんだ」「…変わってる、ありがとうございます！うちら本当に変わり者なん…」メガニウムはそこまで嬉しそうに言いかけて言葉に詰まり、神妙な面持ちをして夜空に無数に散らばる宝石へと視線を移す。変わっている、良く言われることだが自分は本当に変わっていること、ユイリィ自身それは知っていた。そしてそれは自分に初対面する人全員（ポケモン）に、初めて会う人間たち全員にそう言われる。

このメガニウムはそのことに関して、最近まで一度も恥じた事は無かった。それはそう言われることへの自虐的誇りであり、諦め半分の嬉しい事でもあった。それもまた個性のうち、嬉しくなると止まらなくなる感情表現、移り気の激しさ、どこまでも底抜けな明るい振る舞い…そう思っていた。

しかしこの数か月間で自分の考えと価値観が、意識の水晶を満たす気体の流れが少しずつ変化していることが分かる。「……そう見えます、よね？…うーん…どうしたらいいんだろ？」「変人…変人って言うのは…どういう基準があるんだろうな」「う、うーん？…本

当のとこはうちにもよく分かんないんだよね、うん」リーヒュンが体をよっこらと起こし、そのベイリーフはメガニウムの後ろにそっと寄る。ユイリィの言っている事は彼女自身のみを指していることではない、そして彼を揶揄する意図もない、直感的に意識の水晶に伝わる物が彼の思考にそう伝えていた。

「い、いや、それ自体は悪い事じゃないんだ」ジャノビーが少し焦ったように短い左手をわずかに動かして前言を撤回する。「…ただな、俺が今まで経験したものと違って…そういう色眼鏡で物を見てしまうのがこの職業の弱点って奴か…それでも」「それで…何かあるんですか？」メガニウムが表情を戻して彼の目線を覗き込む。彼女の意識の水晶の外壁がそれを感じ取った。このジャノビーが次に問いかけるであろう質問、それは自分たちにとって重大な、今まで自分たちがあまり意識していなかったものであろうと。

そしてユークはやはりこの質問をぶつけてきた。「……アンタ達はどういう目的があってここにいられる？どうして…サクラさんが言うには人間の機械で世界のあちこちに飛ばされていたそうじゃないか？それだけの気合いがどこにある…？？」

「気合、ですか…どうなんだろ……」ユイリィがツルで左側の長い雄蕊を丁寧に整えながら考える。やはりそうだ、こういう質問がいささか飛んでくると直感が伝えていたが、いざそれに直面すると本当に答えが思い浮かばない。メガニウムは意識の水晶の奥底に眠る自分の記憶、使った後の感情という使用済み燃料を覗いてみる。自分がそういう事を意識したことは一度なかったような気がした。それが故にますます答えに詰まり、いつしかそれが不安に似た物となって彼女の尻尾の先までにゆっくりと広がる。自分はこのままでいいのだろうか？自分はここにいる何の意志も目標もなかった。幼少時代から人間たちの施設に閉じ込められ、多くのポケモン達と知り合い、遊びはしたが、親子や親友という普遍的な感情を含んでいる外界と隔離されて育ち、いつの間にかこのチームが編成されていった。まずはバストークやピトムニクといった自治協会の軍部隊、

それからブレイブ、テルル、ロックオン、グラシデア、チェギョン、スカイラブ、レオ達青年突撃部隊、と増えていき、その最中でリーヒュンとロズリンにも出会った。その中で自分の立ち位置を明白に考えてみたことは一度もなかったのだ。

リーヒュンといえば、そういう彼自身も目的というものがなかなか思い浮かばない。隣にいるユイリィの状況はまだよく分からないが（彼の今の洞察力では、彼女にも自分と同様この能力のせいで特殊な事情があるという事までだ）、少なくとも自分がこのチームに入ってきた理由が特殊であることは分かった。なにせ自分がこのような探検隊、救助隊、防衛部隊のような職業になりたいと思ったことは一度もないどころか、知っている限りの家族にもそういう経験がある（自分の父親も、妹であるフローラの父親も含め）とは聞いたことがない。しかし自分はこの5か月間で世界のあちこちを飛ばされ、何度も戦いを切り抜け、想像を絶する世界を見てきた。その中を生き残ってきている。

それを考えていると、自分がその状況、すなわち戦場も同然もしくはそれ以上の過酷な現場を経験し、生き残ってきたこと、そのために多くのポケモン達に攻撃を加え、時として彼らを倒してきた事実がまたしても意識の水晶に現実的な映像となって映りこみ、ますます自分自身に対する疑念が深くなっていく。

なぜ自分は生き残っているのか?戦争の経験はゼロである自分がまったくケガを（あの忌まわしき“フローラらしき”相手との時は別だ）しないどころか、意識せぬままに挑んできた相手をことごとく退けてきたのだ。もしかしたら…もしかしたらそれは自分の能力と深く結びつく“何か”と関係があるのだろうか?何となくそういう

予感がする。それがどういう物でどういう形を帯びているのか、または形のない概念的なものなのか、それすらわからないが、自分の能力が自分のこれまでの経験、さらには人生にも関与しているのではないか、そう思った。

「おいおい、アンタまでヘンな不安を抱く必要はないぞ？」そんなベイリーフの表情に気付いたジャノビーが、彼に向かって釈明する。リーヒュン・バイリング・グリーズの意識の水晶の外に出ていた思考が、電気掃除機のコードを巻き上げるようなスピードで自分のガラス内部へと戻った、また自分は不必要に考えこんでしまったのかもしれない、深い思考が苦手で、直感的な行動しかできない、にもかかわらずこの所どうにも陥りやすい戸惑いと悩みの迷宮に落ち込む思考がまたしても顔を出したのだろう。

「あ、はい…でも自分が何となく思うに俺は…」「……中途半端じゃなくたっていい、何せ俺だって決まっちゃねえからな」ユークはリーヒュンの首元の葉っぱを自分のツルでポンポンと叩く。「深く考えるのもいいが、直感に従って体で考えてもいいと思うんだよ俺は。俺にはそれしかできなかった」ジャノビーは少し恥ずかしそうな表情をする。秘書官の要請を受けている間、自分は突っ込む勢いは誰にも負けなかったが、そのせいで目標を達成するのはいつも遅かった。目の間にいる彼もひょっとしたら自分に似ている性格の奴なのかもしれない。「…俺もアンタらの事がよく分かんねえんだ。今回の仕事で多少なりとも何か掴めればいいとは思う」

「…はい、それならよろしく頼みます秘書官」ベイリーフは秘書官のツルに自分のツルをすっと乗せる。ツル先から伝わってくるユーク・ゲープコッチの意識が自分に似ている気がする、自分と同じく

らい直感的で、動き出したら気が済まない性格なのだろう。同情とまではいかないが、それに対する薄々な期待をわずかに感じる。

「うんうん！大丈夫大丈夫！ウチもそうしたいと持ってるよ秘書官さん事。リーヒュンの噂と武勇伝ならいくらでも紹介できるからね！」「何言ってんだよユイリィ！？また変な噂話を立てちゃ…どえっ？！」「おいおい…アンタ達はどういう神経してるんだ？」相変わらず子供のようにじゃれ合う2匹（とはいってもあらかたメガニウムが遊んでほしいようしか見えなかったが）をみながら、ジャノビーはまたしてもある種の不安感のようなものに襲われる。面白いと言えば面白いが、真剣に自分に関することで戸惑う姿の背後に何か大きなものを背負っている、そんな気がしてならない。そしてそれは、ベイリーフとメガニウムも同じだった。自分はどうあるべきか、自分がどうしてここに所属しているのか、その目的をいまだに決められずにいる自分達がいたのだ。

「そして俺はどうなってるかって言うと！」ユイリィの背中にフサフサ尻尾を振りながら飛び付いてきたのはブレイブ。夜中だというのに彼女と同様、絶好調だ。「やべえ！交互ってのもいいもんだな、ユイの甘い香りにテルリンのむちむちほっぺ！やばい、気持ち良過ぎて死んじゃうぜ俺！」「ホント？！ブレイブにものしかかってあげたいけどなあ！ウチ多すぎるんだよねえ、うん」「おっしゃあ！今すぐやってくれそれを！リーヒュンの特権にはさせないぜその快感！」「誰が快感なんだ…まあいいやブレイブだから」リーヒュンの諦めたような目線などお構いなし、ブースターは楽しそうにメガニウムの首元にしがみついて顔をこすり付けている。

「はいはい誰でもいいから迷惑かけないのよ！ブレイブって奴は女の子がいるだけでテンションが上がるのね」メガニウムの左後方からテルルが歩み寄り、ブレイブの胴体に両前足を回して抱き上げる。ブースターの方は嫌がるどころかますます嬉しそうな表情を浮かべ、今度はわざと彼女にしがみつこうとし始める「うおおっ！テルちゃ

んの抱っこがマジ気持ちいい！やっべえ、もうショック死しそ…」ばこおんっっ！「はあ?！何この気持ち悪いド変態、変質者っ！?アンタなんて抱えるてるつもりないわよバカっ！」グレイシアがブースターを叩き落とし、彼は地面に頭から地面に落ちてぺちゃんこになる。「いってえ…でも…最高だ…」「あはは…テルルそんな事して大丈夫なの?」ユイリィがブレイブを気遣うように振り返る。「平気平気、あいつは3秒後には復活してるから。当てていい加減ってそいつの顔見ると書いてあるのよ」「そっか、まあブレイブってそういう精神はいつでも健在なんだよね、うん。ウチの方は別に気にならないんだけど…」「ホントなのユイ?！あいつのバカな真似も平気?」「うん、ウチにとっては大したことないかな」驚くテルルを横目に、彼女は大きくうなずく。「どんな相手であれ、あんな風に自分に体を寄せてくれるとうれしいんだよね。なんていうか、こう…安心できるって感じかな、うん」

「とはあ…やっぱユイはキャパシティ大きいのね私と違って…」グレイシアは驚いた表情で彼女の青空色の瞳を覗き、それから隣にいるベイリーフにも視線を移す。こんな愚痴じみた話ではこれという気兼ねも起こらない、そういう彼女特有の勢いに乗って彼に呟いてしまった。「それにさあ、アンタもよくあんな奴の友人でいられるわよね」「よく、ていうわけじゃないけどさ。なんであれ俺とはそういう仲だったからかな」リーヒュンが思い出すように、後ろから追いかけてくるブレイブの方に首を回す。「昔はあそこまで女好きじゃなかったんだ…俺みたいになかなか勢いもよくて、シーベルトやエンデバーとの間を上手く取り持つ、そう言う奴だった」思い返せば、いつの間にか親友の豹変した正確にも慣れきっている自分がいた。ベイリーフにとってあのブースターのブレイブ・クレイバーは、いや彼にとって自分も欠かすことのできない存在だ。今までも、それから今も。一緒に遊んだ中だけではない、バカをやって何度も2匹で死にかけたこともあった、何度も衝突した、ここにやってきたばかりのフローラの事も気にかけてくれた。そして今も何度も死

にかける経験しているし、何度もケンカし、掴みあっている、そして…フローラの事も案じてくれる。「まあ、アンタとあいつがそうだったことはあいつ自身がそう言ってたしね、そんなら気にしなくていいんだけど…」「テルルとは…どうなるんだろうか？」「…ワタシ？…な、何誤解してんのアンタ？私とアンタは全然…」彼の目線にテルルは解答に窮する。普段と同じようなこの男(オス)ベイリーフに対する違和感を覚えた。やはり自分と彼の間には、何か広い溝のようなものが横綿わっている、そういう感じがする。しかし、目の前にいる彼はその激しい水の流れがある広い溝に飛び込み、こっちに渡ろうと必死にもがいているに違いない。

「…俺は努力する」リーヒュンがテルルの右前足首辺りにツルを当てる。「…俺はテルルを理解したい、ここにいる限りは…いつかきっと…だな」

「それが…アンタの方針って事ね、その解釈でいい？」「うん、それでいいよ。テルルも…そういう点では頼むからな」グレイシアは右前足を引いてツルを振り払う。「ま、まあ他人の方針は自分の考えに影響及ぼさないわけだし、今後も私は私なりの考えで行かせてもらうから」「うん、頼むぞ隊長、ついでにその仕事も頑張れよ」「は、は？……そりゃサボりはしないわよ…」彼女は不思議な気恥しさを覚え、彼から思わず目線をそらした。自分の領域にこのベイリーフはまたしても飛び込もうとすることに対する苛立たしさではなく、心のどこかでそれを見守っているような、そんな変わった気分だった。

そんな彼女を見つめるリーヒュン・バイリング・グリーズの意識の水晶の中に小さな気体の塊が浮かび、ゆっくりとそれが広がる。もしかしたらそれが自分の答えなのかもしれない、それこそが、自分がここにいる理由なのかもしれないと。

ユイリィはそんな彼を見つめ、ツルをそっとからの首の後ろにまわす。彼女の意識の水晶に伝わるエネルギーは、隣にいるベイリーフ種族の感じ方、捉え方をはっきりと捕えていた。彼自身はそういう

所に関心があまりなく、こういう感じ方をするのには戸惑っている、それでもそれに対する意志ははっきりとしており、というよりもそういうとらえ方をして一図に前に進むのが彼のやり方、エネルギーの流れがそう言っている。「やっぱ優しいんだねリーヒュンって。それでまっすぐに進んでくれるんだから、少しくらいウチも見習いたいなあ…」「見習うって…俺の性格どうしようもないぞ？」

「やめとけよユイ、こいつの性格見てたら途中で死んじゃうぜ？」

「ってあんたやっぱり復活早っ！」ブレイブが懲りもせずにメガニウムの首に背後から飛び付く。「ふ、ふざけんな。何勝手な噂を立ててんだブレイブ？！」リーヒュンが顔を恥ずかしそうに真っ赤にしてユイリィの首から自分のツルでブースターを抱きかかえて引き寄せ、そのまま自分の首の上部に近づける。「うん！それは十分知ってるよ！でも、やっぱこれだからリーヒュンにくっついていくのは楽しいなって思うんだよね！」「だろ、危ないけどくっついていくと信頼できる、それがこいつの良さだよな」メガニウムの方もブースター種族のそれに調子を合わせてきた。「ったく…なんだかんだ言ってブレイブもユイリィも…」

「分かってるよリーヒュン、お前はそう言う奴だからな、それは悪い事じゃないぜ、てかいい事だろ…」ブースターはベイリーフの鼻元に右前足をゴツンと当てる。「…お前の突き進んでばっかの性格はな、俺らにとっちゃとても励みになる。常識とか慣習とかにとらわれねえそういう所だ」「……ああ…」「何恥ずかしそうな顔をしてんだよ？お前は昔とは全然変わってねえんだ、だから…これからもその調子で頼むぞ、な？」「そっか…皆そう言うんだったら悪い気はしないけど…」

「うんうん、ウチもリーヒュンのそういう性格はいいと思うな」彼にまたしても飛び付いてくるメガニウム。「き、君が、ユイリィが言ってくれても嬉しいと…うぐぇっ？！」ベイリーフの右側の胴体に彼女がまた体重を思いっきりかけてくる。相変わらず仲よしこよし、のようにも見える2匹。

「あーあ……何やってんのよユイは？」2匹の様子を見ながらテルルはあきれ顔だ。「あれが本物の友情ってもんだ、ポケモン同士のな。という事で…」ブレイブがリーヒュンとユイリィの仲よしこよしを顎でしゃくり、それから目を輝かせて彼女の方を見る。グレイシアは思わず一歩下がった。次に目の前のブースターが何をするか、彼女には見え見えだ。案の定彼はそうしてきた。「っしゃああ、俺とお前も…」

ばっこおおおんっ！！今夜2度目の右前足が、強引にブースターを突き飛ばして数メートルは右横に宙を舞った。「だ、大丈夫ブレイブ？」心配そうに左側の両前足元に潰れたブレイブに視線を落とすユイリィ。どんな時でも敏感に周囲の動きを読み取ることができる、それがリーヒュンと遊んでいた時だとしても。「ううっ…いってえけど…俺幸せだ…」「フン、何やってんのブレイブ。私がそういうの受け付けないって知ってるでしょ？」「ま、まあそんならいいよね、うん」

「とにかく…俺はどうってことないぜ。テルリンの為なら何発でもオッケ、それが俺のポリシーって奴だ」ブースターはわずか数秒で立ち直り、グレイシアの方にぴょんと飛び寄ってそばを歩きはじめる。まるで寄り添うように。当然のことながらテルルは嫌がった、なんであれブレイブの体温、しかもわざと仲良しのカップルのように寄り添ってくる彼の熱が不快なものにしか感じられない。「へへ、俺の人生決まったな！お前と一緒ならどこへでも行ける、てか、ついてくぞ俺！」「は、はあ？！…やめてよこの痴漢…」

「まあ、それはテルルの考えにもよるけどな実際は…」彼の声のトーンが少しだけ下がった物になる。彼女はわずかに眉間にしわを寄せ、彼の顔を覗き込んだ。「…私の考えってさ、ブレイブは私がどうであろうといつもそうでしょうに…」「…いーや、お前の考えに従うつもりだ」ブレイブがテルルの右前足付け根に軽く左前足の拳を当てる。「さっき、あの秘書官様がヒュンとユイに聞いてたじゃねえか、なんでここにいる事が出来るのかって…」「ま、まあ…そ

んなことも言ってたけど、今度は何よ?」彼女の不審そうな表情は戸惑いに切り替わっていく。この勢いはまたしてもだ、何となく予測はあったが止めようとはなぜか思わなかった。ブースターは再び歩き始めたグレイシアの顔を探るように続ける。「…俺だって全然分かんねえけどよ、何かこう…一つだけ思い浮かぶものがあるんだ」

「…一つだけ?」

「ああ、それはつまり…」彼は立ち止まり、彼女の右前足に自分の左前足を重ねあわせる。ちょっと恥ずかしいが、今のこの感情を表そうとして思わずやってしまった。「テルル、お前しかいないんだ」

「うう……何よそれ…」グレイシアは顔を真っ赤にして視線を下に逸らしてしまった。彼女の意識の水晶にこのブースターのセリフが矢となって突き刺さり、矢の先端に塗られた感情がゆっくりと内部の期待へと入り込み、その奥底にある感情と意思を司る原子炉の運転に変化を与える。それは自分の気恥ずかしさとなり、そして目の前にいるブレイブ・エスコーツ・クレイバーに対する恥ずかしさにもなった。どう大目に見ても彼の言ったセリフは、(彼女が知っている社会的通念の限りは)自分に対するマジメな告白にしか聞こえない。そんなものはテルル・ルナマリア・アストラフスキーにとってつかみどころがなく、どうやって答えていいものかさっぱりわからない。

そんな感情の前にむずむずとする口を、このグレイシア種族はどうにか開く。「…なんて答えてほしいの…アンタは?」「…それはお前が決める事だろうが」「んなこと言ったってさあ…」彼女は解答に窮し、思わず両耳と尻尾が下に下がってしまった。このブースターには悪気はない、むしろ答えるのは自分であるのは常識だ、数秒後に彼女は自分の軽率な発言を後悔し始める。自分も目的など意識したことがなかった。弟のエルヴィンのため、たった一匹の愛する家族、自分の存在の全てと自負できる存在、その生活のために全てを尽くす、たったそれだけですべての仕事をしてきたのだ。だから、

このチームにいる目的など一度も考えたことがなかった。

ただ…彼が自分の事をとやかく心配するのも無理はない、そんないつものこの世に対する諦めにも似た感情に加え、不思議な暖かさのようなものを感じる。自分の世渡りが下手すぎる、気まずそうに現在も早くなりがちな自分の進むべき足取りははっきりしていないのではないか。

ひょっとしたら…スカイラブ（彼女は爆睡するレオを背負い、ウトウトするグラシデアに時々ツッコミを入れながら後ろの方を歩いていた）になんだかんだ言われるのもそのせいではないか、そういう感覚が意識をよぎった。

数分間は顔も合わせず歩いたか、テルルは重たい口をようやく開き、その中で集め、形にした言葉を選んでゆっくりと切りだす。「もう少し…考えていいものかな?…ワタシまだ決まんないのよ、なんでここに来てここにいるのかを…」「そっか…焦んなよ」ブレイブがテルルのもみあげ状飾りを軽く右前足でなでる。「目的なんてのは最初は見えねえさ、やっているうちに自分の目的や思いを見つける、それも幸せなもんだな」

「…悪いな、アンタらにも変な感情を抱かせたか…」申し訳なさそうな表情を浮かべ、足を速めて歩み寄ってきたのは、ジャノビー種族のユーク・ゲープコッチ秘書官である。「俺もよく考えりゃ素人同然だからな。あんまり気にしなくていいぞ俺の言動に」「なんのなんの!年下と言えどきたしてまっせ秘書官様!」ブースターがノリのいい明るい表情でユークの右手に向かって自分の右前足を伸ばす。「な、テルル?」

「え、ええ…まあ彼とそういう事で…いいです」「そ、そうか…」グレイシアは、彼に前足で示されて恥ずかしそうにするジャノビーへ向かって曖昧な笑顔を浮かべる。人生経験で気苦労の絶えないテルル・アストラフスキーにとって、年上や目上の態度というもは常に目障りに写って仕方がない。そして今回も、サクラの秘書官であ

るユーク・ゲープコッチに対してあまりいい感情は思い浮かばない、しかし、こんな自分たちと年の瀬が同じ彼の顔を見ていると彼は案外そういう類ではなさそうだという思いが、意識の水晶の端っこに少しだけ浮かぶのを感じた。

彼女の戸惑いははっきりと表情に出てしまい、ユークはまた周囲を歩いている連中に目配せする。自分はこの年頃にありがちな自分の内面にある物に対する悩みを、エメリアの秘書官となる過程でどうにか拭い去ろうと努力したが、自分と年代が同じ、しかし背負っている運命や想いは全く違う彼らを見ていると、封印したはずの思いが自分の意識の水晶の底から湧き上がってくるのを感じる。自分は一体どうあるべきか、初めて彼らの様子を見る夜、彼の感情は複雑に揺れ動いていた。

2月8日　ガラテア郊外の湿地帯　6時30分

ガラテア郊外の湿地帯はとてつもなく広い場所だった。しかもこの日の天候は曇りで一時的に小雨が降り、湿度が高いせいか、いや、そもそも湿度が高い風土なのか、一帯は立ち上る霧で視界は500メートルもない。うかつに目標…例の動物…を追って飛び込んだらあっという間に前後不覚に陥る、ガラテア集落から伸びる道の端から湿地帯の内部にかけて伸びる杭とそれを結びつける縄、それが彼らにとって重要な、そして数少ない目印の一つだった。ここに来て合流してきた一行がいる。国連の施設のあるソーラ最南端にやってきたあのマグマラシ（名前はスカラー・クルイークというらしい）と、彼と同じようにこの湿地に近い集落に住んでいるポケモン達だ。湿地帯という地域の特性と気候だけあってか、その大半はみずタイプやくさタイプであり、そうでないのはマグマラシのスカラーと、合流した一行の代表的存在であるウインディ種族のモーリス・アネックスだけである。

「そんで、どうするかって言うと…」テルルは自分を取り囲むようにいる一行を前に、軽く右前足を動かしてから周囲を見回したが、その直後に自分たちを覆い尽くす霧に言葉を失う。やろうにも何から手を付けていいのかさっぱりわからない、周りの状況を肉眼で探ろうにも視界が５００メートルない現況では、うかつに動いたら自分たちがこの湿地の深みにはまりこむか、潜むという凶暴な生物に食いちぎられるだけだ。「んと…ああ…どうすりゃいいの…」グレイシアの表情ははあたりを見ながらみるみるうちに険しくなる。自分の無能さに対する怒りが強くなってきた、どうしてこういうことを想定していなかったのか？

「ん、そういう時はまず確認だ！だから地図は頭に書き写したほうがいいんだよ…」初っ端から焦った表情を浮かべる彼女に、ブレイブが地図を引っ張り出して彼女に渡しかけて止まる。「ま、こんな状況じゃ地図見たってしょうがねえわな。これだけ霧が出てやがんだ、死ぬわけでもないのに感情でうかつに動くのは…あんまり賛成できない」「え、ええ…そんじゃどうするの、もしかしたら霧が晴れて…」

「晴れるわけないんよこの状態じゃ」前に出てきたのはスカイラブ。テルルの表情がぎくりと固まった。「え、…どうして、どうして？」「だいたいこの湿度と風よ。霧が重くて風もない、水蒸気はこの辺りから立ち上っているから煙と同じになってる、今日中には晴れそうにないわね」彼女は足元の雑草を右前足掴み、軽く上に投げてから息を吹きかけて飛ばす。草の切れ端はルクシオの域で舞い上がることなく、重力に従う物体となってポトリと落ちた。彼女がまたもやグレイシアに向かって、分かってないわねと言わんばかりに右前足の爪をひゅっひゅっと動かす。「天気の把握ってのは、探検や救助ではなかなか重要なポイントなのよね。一つ一つをおろそかにしない、それ理解？」「さっすがラブ、無駄知識が時には…」からかい半分で彼女に飛び付いたレオは、テルルの表情を見るなり顔色を

変え、スカイラブの後ろ左足を軽くつつく。このコリンクの脳裏には5，6日前のあの光景がありありと浮かんでいた。「や、やめろよラブ！またお前…」「ケンカを売るって言うつもりねレオは。それは知ってるわよ」彼女は左後ろ脚あたりにいる幼馴染を不器用に振り払い、グレイシアの方にもう一歩近づく。「いろいろ大変だろうけど、不自然に見えるほど細かく見とくのもリーダーとしての気質のうちね、いい？」

「は、はあ…そうよね…ラブ…」テルルはぴくぴくとする顔の筋を押しとめ、震える右前足を必死に抑える。とにもかくにも気に入らない、スカイラブ自体はそういうつもりはない、そう理解しようと努めてはいるが、それでも納得がいかない。しかし今の彼女はテルル・アストラフスキーであるからにして殴りかかるわけにもいかない、彼女は自分の感情につられて動きそうになる前足を、何とか湿地帯の湿った土に食い込ませた。

「そ、それで…どうしよう…」グレイシアは再び困惑した表情を浮かべて周囲を見渡す。本当に何をしていいのか分からない。またしても自分の隊長としての気質に疑いを感じ、そのせいか周囲の湿った空気が重苦しくのしかかってくるが……

（どうする？！しっかりしなさいよ私！こんなところで迷ってたら私は……）

同日　韓国　ソウル市　大統領官邸　０９時３０分

大韓民国大統領官邸のある青瓦台（チョワンデ）、官邸の一角にある大統領の執

務室の電話が鳴る。“ＮＳＳです。例の原発用の製品、明日の未明にオランダのロッテルダム港に到着します”「そうか、予定通りの日数で来てるな？」“はい、シンガポール港で若干のトラブルはありましたが、それ以降コンテナ船のトラブルは特になく航行スケジュールも予定通り、との潜入調査員から報告が入っています”

「若干、か……場合によっては若干で済まないかもしれん」大統領はわずかに厳しい声でつぶやき、目の前にある卓上情報端末のキーボードを数回たたく。シンガポールの件、既に裏情報ルートによるシンガポール政府との極秘工作で、コンテナ船に侵入未遂を侵した北朝鮮出身を語った男の一人の身柄を韓国に引き渡してある。取り調べたのは韓国の警察のみならず、大統領自身が指揮するＮＳＳ（韓国国家安全保障局）も同様に行った。しかし、この男は再三の取り調べ（ＮＳＳが拷問に近い方法で自白を強要したという噂もあったが、それはどうでも良かった）にもかかわらず黙秘を続け、その後の心理医学者や医療関係者による脳波検査や精神分析でも知的障害や精神疾患は認められなかった。現在はソウル市内にある某警察署に拘置されているが、この男が真相を語らない以上、先日脱北してきた北朝鮮軍属の男とその家族への聞き取り調査の結果も役に立たない。その男が言うには、確かに北朝鮮軍・及び指導者層の間には核兵器と原子力産業の研究を行う機関があるとのことだが、シンガポールから身柄を回したこの人間がそうであるという証拠が発見できない限り、そこを筋にしたさらなる調査は難しかった。もちろん北朝鮮国内には自国から潜入した調査員も複数おり、ＮＳＳと同様の秘匿回線を用いて常時政府に報告を送っているが、現在までの所では北朝鮮共産党に直属している、すなわち政府に直接リンクしたそのような組織があるという報告はなく、潜入調査と共に情報回線の分析も行っているアメリカもそのような組織が存在するという発表はない。

しかしこれが真実であれば、極めてゆゆしき事態にもなりかねな

い。ＮＳＳ調査員がその男を取り押さえた時に発したとされる言葉、本来北朝鮮国内に建設されるはずだった原発の部品、狙っているのは北朝鮮ではなく中国であるという話もあるからなおさらである。そしてもう一つの言葉、クローン量産兵士に核武装（マスプロダクト・ウォーリア）、その言葉の意味は全く分からないのである。体内に核兵器を埋め込んで爆弾テロの道具に仕立てるつもりなのだろうか、それともまったく別の方法を用いてそのような狂気の道具に仕立て上げようとする気なのか？そうだとしたら欧米・アジアに複数ある大手生命工学企業の関与さえ疑わなければならない。その調査・潜入は相当リスキーなもののとなる。経済誌の調査でもマクロ経済の指数分析がやっとなのに、巨大な経済大国である中国の全ての取引内容を洗い出すことは到底不可能であり、仮にできたとしてもその内容はかなり誤差の含んだものであって、それを元に行動に移すのは難しすぎる。うかつに企業の調査に入れば、国家による自由経済下の企業を取り調べたとして糾弾されてしまう恐れがある。

そして何より、一歩間違えれば中国との外交上の重大な問題になる恐れは極めて高い、そしてそれは南北朝鮮の外交上・軍事上の問題解決、並びにアメリカ、ロシア、日本を加えた６か国協議の停滞、最悪は韓国に対する北朝鮮の軍事活動の活発化…２０１０年のヨンピョン島砲撃事件や頻発する軍用機の韓国領空内への侵入は現在でも記憶に新しい事象だ…を招く恐れすらあるのだ。

とはいってもそれを恐れて何もしないわけにはいかない。“一応は後退するＮＳＳの調査員に対して警戒を厳にするよう指示をしておきました。大統領の方からもポーランド政府に原子力発電所周辺と輸送ルートの警備強化の要請、よろしくお願いします”「よしわかった。この後にポーランド政府との電話会談があるからな、そっちも十分に連絡を密にしておけよ」

電話を切った大統領はちらりと執務室の窓の外を見やる。城壁の中に建てられた官邸施設敷地内にたつ木立はまだ枯れ色のままだが、そこに差し込む陽ざしは徐々に春めいたものとなっている。城壁の外側に広がるソウル市の高層ビルや高層マンション群が見え、春が近づく太陽の光に輝き、木立の並ぶ道を警備の兵士が例年にない積雪を踏み鳴らしながら歩き回っている。しかし、大統領はそこまで気を留めることなく手元にある卓上情報端末に再び目を落とす。今日はかなり忙しいスケジュールだ、まずは先ほど電話越しでも言ったポーランド政府用人との原発輸出に関する電話会談、続いて議会における来年度予算の正式承認への署名と議員連合との会食、その次は韓国随一の電子機器企業であるＬＧ電子社と重役との、ＦＴＡを締結したばかりのアメリカにおけるＧＥ社等との企業提携・アメリカでの事業拡大戦略に関する会議、最後に中国大使との夕食会（ここでは来年度の新国際連合議会、ならびに9月末に行われる国連総会における国連安全保障理事常任理事国の、国家追加法案に対する意見交換も行う予定だ。ドイツ、インド、ブラジルの常任理事国入りは賛成でよいのだが、日本に関しては、韓国及び常任理事国である中国双方、歴史上の確執から反対という方向で一致していた）である。

大統領は時計をちらりと見た後、キーボードの脇にあるデスクと一体化したタッチパネル式のコンソールを叩く。通話装置に出たのは秘書。「私だ、ポーランド政府の方に通信回線を回してくれ、それから車両の準備の方も進めておけ」

そのころ　オランダ　ロッテルダム市

元々から西ヨーロッパの交通・商業・経済の地とした発展してきたオランダでもヨーロッパでも随一の港湾都市であり、オランダ国

内ではトップ、ＥＵ・イギリスといったヨーロッパ諸国の中でも指５本に入る経済・工業・金融都市であるロッテルダム市。無数のトレーラーへの積み下ろし用コンテナクレーンが立ち並び、アメリカ・カナダをはじめとする北米やスエズ運河、地中海経由で東南・東アジア諸国やってきたコンテナ船、中東及び海上メガフロートから原油、天然ガス、メタン、希少金属資源を輸送してきたタンカーや資源運搬船が多数停泊し、積み下ろし作業を行っている。

韓国のＮＳＳから交代で派遣された調査員２人は、ロッテルダム市から高速バスや電車で４０分前後にあるオランダ最大の空港、韓国・仁川空港からスキポール空港へ空路―（ＫＬＭオランダ航空のＢ－７７７－２００ＥＲ）でオランダに入った．コンテナ船の乗員を示す制服を、現地の関係者が裏ルートで借りた乗用車、アウディＡ６－Ｃ７の車中で脱ぎ捨てて着替えるＮＳＳの男。「延々と大変だっただろ？この先は俺らに任せて、お前は早くソウルに帰ってやれ」「すまねえな、この先もミスなく頼むぜ」交代に来た２名の調査員は、この先はドイツの運輸会社の関係者に成りすまして原発の建築場所であるポーランドへと向かう。

「そんでもって、だ。これを渡しておかんと…」コンテナ船でやってきた調査員の男が、腰のベルトからＮＳＳとの直通衛星通信機とイタリア・ベレッタ社の拳銃であるＭ９２、それとアメリカで護身道具として普通に売られている標準的なスタンガンとほぼ同様の性能を持つ電子警棒を、新たにやってきた男に全て取り外して渡す。「ぶっ壊すなよ。一応ライセンスがあるんだからなこいつら」「分かってるぜそんなの。紛失したら最悪、終身刑もあり得るからな…」受け取った調査員はそれらを運輸会社の作業服の上着裾に隠れる場所、ズボンのベルトにしっかりと装着する。「それから…」彼はポケットから米・アップル社の新世代携帯情報端末（スマートフォン）とＩＣカードを差し出す。「アドレスからお前の機種を割り出した。シンガポールで北韓（ブッカン）とやりあった時に落としたんだって？情報端末はこの職業の生

命線だ。今度は落とすなよ」「おう、すまねえ。そんで、こっちのＩＣは…」男は双方を受け取り、左手でＩＣカードをひっくり返す。差し出したほうの調査員が答えた。「港湾関係の企業って事で入ってきたんだ。出る時もそれが必要だからな。おそらくは正体ばれねえだろ？」「よっし、分かった」

「そんじゃあ俺らは行くとするか、おい●●、一仕事やるぜ」「は、はい…」新たにやってきたもう一人は、昨年の後半に新たに調査員ライセンスを取得したばかりの新人の女。緊張で体がこわばっているのが分かる。まあこんな命がけ、かつ国家の命運を握る潜入を生業とする職業であるからこそ無理もない事だが。船舶で入った調査員の男がその女の肩に軽く右手の拳を打ち込み笑った。「何やってんだ●●？その程度でビビってたら銃撃戦の時どうすんだ…何せ…」彼は頬にあるあざをさすり、表情を引き締める。「今回の件は北韓（ブッカン）（北朝鮮）も中国も関わってるって話じゃねえか。旧ソ連系の奴らと通じて俺らを阻止してくる可能性もある。いいか、物はもちろん、データや資料もとらせるな」「分かりました…」

「分かってるよ×××、出て切ったって武装組織だ、ポーランド政府とドイツ政府に回したから、今回は極秘裏に軍用ヘリとドイツ陸軍の特殊部隊も運輸企業と原子力企業に紛れる。北の金で雇えるゲリラ程度軽く殲滅できるさ」もう一人の男が声のトーンを落とし、真顔で言った。

彼らの言っている事は真実、大韓民国大統領の直接の許可に基づいて設立され、必要とあれば参考人の拷問、マインドコントロール、拳銃やライフルの携帯、暗殺用毒物の使用、国家機密級の海外サーバへのハッキング、及びコンピュータウイルスの使用や武器の遠隔操作による破壊活動まで許可される韓国国家安全保障局。アメリカ・ＣＩＡの極秘部隊やイギリスの特殊諜報機関、旧ソ連のＫＧＢから続くロシア・諜報部隊、中国にも多数存在する水面下機関等と同等

規模の活動力を持ち、万一は外交上の重大な問題を招きかねないこの組織と活動の規則は厳重で、関係者は家族、友人から自身のブログやＳＮＳ（ソーシャルネットワークサイト）まで、一切の情報開示を禁止するのはもちろん、職場の位置を厳重に秘匿するため、タクシーの利用や労災保険への加入すら禁止されていた。その分保障は政府が行うのだが、労災保険に入っていないとあっては、（そうと言えばそうだが）この職業は裏社会の仕事も同然だ。拳銃やスタンガンといった武器類・ハッキング用機器などの重要機器の紛失などの失態を侵せば、終身にわたり公務員に就職する権利を奪われ、最悪は当局に身柄を拘束されることすらある。その分、韓国の国家・地方公務員の中でも破格の給与、及び家族の人数や状況に合わせて相当の高待遇があるわけだが、それは当人との血の契約から成り立っている。国家の命運を大きく左右する重要かつ極めて危険な職業である。

乗ってきたドイツ・アウディ社のアウディＡ６－Ｃ7から降りる調査員２人。周囲にはコンテナの積み下ろしを行う大型クレーンの轟音、走り回る作業車両やトレーラー、作業員の声でにぎわう。２人はコンテナの脇から岸壁側へと出る。先ほどの調査員が潜入してきたコンテナ船からすでに例の物品の降ろし作業は完了したらしい、ポーランドの原子力企業のものらしきメルセデスベンツ・アクトロス社の２５３８後期型大型トラックには既にそれは乗せられ、周囲には同企業の車両に偽装した民間警備員とドイツ陸軍特殊部隊の車両、オランダの国境線まで護衛するオランダの警察部隊の車両と２輪車が前後を固めていた。トラックに乗っている荷台にある物こそ、韓国から輸出される原子力発電所内の原子炉緊急冷却装置（ＥＣＣＳ）の重要部品……

車両の方からゲルマン系の男が２人に歩み寄る。調査員の男は瞬時に、この男がドイツ陸軍の特殊部隊の内通者であることを見抜いた。

「アンタらが例の…」調査員の彼は流暢なドイツ語で応じる。「そうだ、ポーランドまでよろしく頼む」

２０１３年　２月９日　アメリカのシカゴ市　ｉｒｏｂｏｔ本社
１１時００分

北アメリカの北東部、アメリカ合衆国とイギリス連邦を成す一大国家であるカナダとの国境線ともなっている五大湖。そのうちの一つであるミシガン湖の沿岸にあるアメリカ合衆国第２位、世界でもトップクラスの超巨大都市であるシカゴはある。デトロイト同様、自動車、大型電気工作機械、家庭用電気製品、鉄鋼製造といった重工業で栄え、１９２０年代のアメリカ合衆国の急成長を支え、現在地球人類社会全体に（廃棄から再生・リサイクルへと環境志向に進化しつつも）浸透した、生産・消費中心社会…いわゆる“アメリカ型市民生活”と呼ばれる…の礎となった都市とも言われる。１９７０年代の不況や日本の重工業が世界に台頭した結果、一時的には衰退もささやかれたが、アメリカ連邦政府の新興産業育成に伴う新産業と企業の成長に伴う経済回復により、１９９０年代以降に都市衰退の危機を脱出、問題視されていた治安問題の一定の回復と共に人口は再び増加に転じるとともに都市化が一層加速し、４００メートル以上の超高層建築が複数存在する、現代の人類社会を象徴するにふさわしい風格を持つ風景が広がる。アメリカの自動車大手企業の復活や韓国、中国、インドなどの新興工業国自動車産業も積極的に誘致、情報技術機器産業、ロボット産業、生命工学企業、航空宇宙産業といった最新の科学技術を担う新興ハイテク産業の積極的な工場進出に伴い、アメリカ合衆国の工業、金融の一大拠点となった都市だ。

この都市にあるロボット産業系企業の中で最大、いや世界で最も巨大なロボット生産・開発企業のｉｒｏｂｏｔ（ロボット）…家庭用掃除ロボッ

ト“ルンバ”でおなじみ…の本社はシカゴの郊外２０キロの場所にある。シアトルに本社を置く生命工学企業、ＧＢＴＸ社の研究員の男は降りしきる雪の中、幹線道路の豪雪に伴う渋滞で遅れたタクシーを飛び降り、片側２車線もの広さを持つ工場内部への道路の歩道をひたすらに向かう。ここで行われるある実験を見に行くため、同僚たちに続いてシアトルから航空機で向かおうとしたはいいが、例年にない大雪のせいで、よりにもよって自分の登場する便で国内外線全ての離発着が見合わせ、空港がクローズしたのだ。昨年完成したばかりの北部大陸縦断高速鉄道も同様に、異常な豪雪に除雪が間に合わず数日間の運休が確定、最後の手段ともいえる高速バスも、高速道路上の積雪と凍結、それに伴う多重交通事故の続出で車線規制と大幅な最高速度制限がかかったことで大渋滞が発生、高速バスの到着のめどが立たなくなったのだ。やむを得なくこの技術者の男は空港に多数の足止め客と共に残留、運行を開始したのは雪が幾分か弱まった、閉鎖から６０時間以上も経過してからだった。運よく男は再開第一便となったアメリカの格安航空会社の最大手、サウスウエスト航空の国内線の座席確保に成功、格安航空会社特有の窮屈な座席に（彼の乗ったＢ－７３７－８００も例外にもれず、乗客数を増すために座席幅を極端に狭くしてあった）耐え、何とかシカゴのオヘア国際空港にたどり着くことができたのだ。そこからはタクシーで２９０号線、通称“ドワイド・Ｄ・アイゼンハワーエクスプレスウェイ”を、積雪による速度制限で混雑する中をできる限り飛ばさせた。

　男は雪道の中を傘も差さずにひたすら走る。前方に広がるｉｒｏｂｏｔ社の工場の指定された建物に向かうために、男は前もって受け取った地図データを携帯情報端末で小走りで確認する。どれほど距離があるか、距離表示に目を止める暇はなかった。査察と実験の開始時刻は既に過ぎている、ともかく急がなくては。

その直後、背後から車両のクラクションを鳴らされた。まったく自分が歩いている場所が悪いとでも言いたいのか、男はじれったそうに背後を振り返る。クラクションを鳴らしたのは先ほどのタクシーだ。車道側のドアからドライバーが顔を出す。「まったく、ここの企業の工場は走っても1時間じゃまわれないっすよ研究者さん。場所を言ってくれれば俺が連れてってやりますから」「す、すまん」男は恥ずかしそうに後部ドアを開けてタクシーに飛び乗る。そう、ここシカゴにあるｉｒｏｂｏｔ社の主工場はとてつもなく広い、敷地が7キロ四方のおおよそ正方形という小さな街並みのような場所だ。徒歩で時間のかかる場所は、主に自動運転バスや地下に張り巡らされた新交通システムそっくりのシャフトを利用する。シカゴの巨大都市群を遠方に見据えるこの敷地には、掃除用ロボットなどの家庭用ロボットから、危険作業用―（特に原発用ロボットは、２０１１年のフクシマ原発問題以降に急発達している）、施設警戒用、災害救助用、果てには軍事用や宇宙船外作業用といった国家機密級のロボットまでさまざまな種類・形式の生産、開発を行う各種工場、物理的工学から知能プログラムまでこの産業に関わる各種開発を行う研究施設、万単位の従業員や労働者、研究スタッフや契約した警備会社の警備員といった関係者とその家族までが生活する巨大集合住宅団地まで存在する、まさしく小さな市街地である。

タクシーに乗って指定された研究棟までどうにかたどり着いた、主要研究棟らしきその建物の脇には、男も見慣れたＧＢＴＸ社のロゴが入ったアメリカ・フォードグループ傘下、スウェーデンのボルボＦＨ／ＦＭ社の大型トレーラー・ＦＨ－１６が2台と、複数の高級セダンが停車している。当然と言えば当然だが、既に査察のＧＢＴＸ幹部も専用測定機器の類も、そして例の“実験品”も到着している、仕事の都合で半日出発が遅れたばかりに3日空港で近く足止めを食らった。本来だったらこの危機が到着する前にここに来て、

すでにｉロボット側の研究者と接触しているはずだったのだ。
男は受付で待っていた女に付き添われ、研究棟の奥にあるエレベーターへと向かう。周囲にいる研究員や従業員の人間たちは息を切らせて入ってきたこの男に目を止める事もない。無理もないだろう、男はそう思った。何せこの実験―（またはテスト自体）極秘で行われているのだから。
エレベーターで地下５階にある研究実験場に到達するまでの数十秒が何分にも感じられた、シンドラー社製のエレベーターのドア上にある階数表示ディスプレイのカウントがじれったい。ここで実験施設の責任者らしき男と女がバトンタッチし、ＧＢＴＸ社の彼はその男と共に通路を小走りに急いだ。ひとりでに足が速くなるのを責任者が追う格好だった。技術者の男と同僚の子供、過酷な制作過程を乗り越えたわが子の雄姿を見届けたい、その思いで白い蛍光灯が並ぶ通路を急ぐ。

ＩＣカード認証機付きのドアを責任者が明けるとともに、技術者は中に転がり込むように入り込んだ。「すいません部長。航空機の方の欠航が思った以上に長引いて」「いいのいいの、大丈夫よ。試験は今開始したところだから」ＧＢＴＸ社技術部長の女に軽く引っ張られるように、技術副部長の男は薄暗い実験試験場を一望できる窓をそばのコンソールへと歩み寄る。忙しく作業をしている同僚達やｉｒｏｂｏｔ社の研究者、吸音材の入った窓ガラスと壁の向こう側、薄暗いリサイクルセンターの容器包装資材ストックヤードそっくりの縦横２５メートルはある試験場。その中で、ＧＢＴＸ社技術部トップが取り組んできた最高性能の試験品、次世代のＧＢＴＸ社商品のフラッグシップにふさわしい“わが子”は、世界トップのロボット産業が誇る高性能ロボット相手にその雄姿を存分に発揮していた。

間違いない、自分たちの期待に応えるため、自分の信ずる道を進むため、この人間にとっては恐怖心すら覚える薄暗い試験場で、彼女は間違いなく研究チームの、いやＧＢＴＸ社の“愛娘”となっている。

人類と比べて文明技術と比較しては、比べようがないほど格下のポケモンだが、彼らは時としては人類の脅威ともなりうる凶悪・邪悪な存在だ。彼等を駆逐し、人類の安全保障を確固たるために旧発達したのがロボット産業である。特に１９８０年代初頭以後の情報技術の急速な発達は、夢物語と言われてきたロボットの可能性を大きく進めるものとなり、２１世紀も１５年近く経過した今、ポケモン駆逐用の軍事ロボット、通称で制圧用ロボットと言われるロボットの性能は、あらゆるポケモンの戦闘力をはるかに凌駕するものとなっていた。もちろんこれらの技術の一部は欧米や中国、ロシアなどにも渡り、現在の主要国家間における軍事的緊張の一員となっているのも事実だが。

そしてその超高性能ロボットに互角に張り合える生物兵器の開発、それは合衆国が、現在その初期段階である軍事対立に入り、いずれ迎えるであろう中華人民共和国との本格的な国家競争において大きな影響力を持つに違いない。太平洋に眠る限りないレアメタルや、メタン、天然ガス、トリウム、マグネシウムなどの豊富な資源、消費と生産を支えるであろう国連メガフロート、軌道上での覇権すら決定するに違いない宇宙太陽光発電衛星受信プラント、世界の成長センターとも言われるアジア・太平洋地域の経済的覇権を手に入れる本格的な米中冷戦時のために。

アメリカ・シカゴ市の一角、ＧＢＴＸ社とｉｒｏｂｏｔ社の関係者たちは、ｉロボット社研究棟の地下５階に存在する第２地下試験場の光景とディスプレイに映る数値やデータを食い入るように見つめ

ている。２機の次世代対ポケモン制圧ロボットの試作品、ＸＦ／ＳＰＤ－２１は、グレネードやミサイルの着弾をも苦としない複合装甲で覆われた試験場に、米海軍のイージス駆逐艦が搭載しているものの口径をさらに大きくしたＭ６１Ａ３７対ポケモン６連装機関砲の大雨を降らせた。鉛の弾頭と装薬からなるその雨粒は、曳光弾のオレンジ色引きながら、複合装甲の試験場内壁を跳弾し、自身の強化装甲も雨粒を弾き、試験場内部を分析不可能なほど跳ね返り続ける。クローラ付きの４本足、前２本の先端に取り付けられた対ポケモン近接戦闘用クロー、胴体の下部に装着された３６０度射角を持つ２丁のバルカン砲、胴体の４方向には肉食獣の目の如く、ストロンチウム炎色反応の色に輝く赤外線・可視光線探知センサ、ポケモンを探知し、追い込み、抹殺するためだけに作られた複合素材のクモは、センサから受け取った情報から、胴体中央に内蔵された中央の高機能思考回路で目標（ターゲット）の種族、現在地、未来移動位置を瞬時に予測、高性能リチウムイオンバッテリ及び高出力用小型液体電池から得た電力を元に４本足の関節、クローラにエネルギーを送り、瞬間時速５０ｋｍ／ｈにもなる俊敏さで目標を狙うに最適な位置へ移動して攻撃を行う。その大柄かつ敏速な動きとセンサの不気味な輝き、そして容赦のない機関砲の轟音、まさしく軍事用制圧ロボットの名にふさわしい活躍を見せる。

だが、これだけの最新の兵器をもってしても、ＧＢＴＸが生んだ最高傑作、人類技術の結晶である軍事用ロボットをはるかに上回るＧＢＴＸ社の“マスコット”はそれを全く受け付けなかった。“商品”の脳内神経細胞の一角に内蔵された連動集積回路のアルゴリズムがその商品の思考・分析に入り込み、各種感覚の情報を瞬時に分析し、最適な行動支持を直接脳細胞にインプットする。指示を受けた商品は何の抵抗もなくその命令を、運動神経を経由して四肢に送り、投薬強化と人工筋細胞の植え付けを行った筋肉がそれに応じた殻を動かす動作を行う。そこで消費される大量の血中酸素の供給を保持

するため、拍出力の強化を施した人工心臓が連動集積回路の指示で、自律神経とは無関係に出力を上げ、横隔膜を刺激して呼吸量を増やす。

「耐水試験に入ります、注水開始」「了解、水深、予定通りにセット」ｉｒｏｂｏｔ社の責任者の指示でオペレータの一人がコンソールを叩く。２重窓の外に広がる試験場の左右の内壁が滝の上方と化し、試験場の無機質な空間をたちまち滝つぼの湖へと変えた。ロボットの方は問題ない、クローラと水中推進システムが作動し、武装もプログラムの指示で自動的に水中戦闘モードへと切り替わる。水中音波用ソナーが胴体から立ち上がり、コンソール上には２機とも水中戦闘態勢に入った旨が表示される。「試作機、水中戦闘モードに自動意向」「体内血中酸素濃度問題なし。気管支弁自動閉鎖、圧力よし」同僚の男が持ち込んだ測定機器のコンソールを叩き、突如形成された人工の湖に身を沈めていく実験体のデータ測定を続ける。「そうね、今のところは気管支弁と自律神経抑制プログラムの動きは正常ね」「ええ、埋め込み手術（オペ）前の最終調整はぎりぎりでしたし」技術部長の女は、ロボット試験場用のコンソールの脇に置いた卓上情報端末のキーボードを打ち込む男の脇にそっと寄り、端末のディスプレイを覗き込む。（ベースはアメリカのマイクロソフト社が開発した某ＯＳだが）独自の解析プログラムのウインドウ上に示されている数値と図表は、試作品の呼吸を司る気管支の閉塞が、試作品の自律神経の神経伝達物質を遮断して独自の電気刺激によって実行されている事、それ行う閉鎖弁の圧力が正常であること、体内に内蔵された酸素タンクの残圧が正常であること、肺胞を通じて酸素をやり取りする血液側の濃度が問題ない事、本来排出されるの二酸化炭素の一時貯留システムが正しく機能していることを示している。男の示すデータを確認しながら、女は安堵の息を漏らした。自分たちＧＢＴＸ社技術部トップが直接参加する企業最高機密の次世代製品開発プロジェクト。相次ぐトラブルや埋め込み予定機器の不調に

悩まされ、この企業間実験に辛うじて間に合わせたようなものだが、何とか状態は保たれているのだ。

実験場の強化ガラスの眼下は今や海洋研究開発に関わる企業や行政法人の施設にある調査機器試験場プールとなり、水中で繰り広げられる戦闘が引き起こす爆発が水しぶきを引き起こし、そして…その実験品は時折水面に躍り上がり、また宙をうって水中に飛び込む。その姿、ガラスの内側から、そして内部に付けられたカメラの映像をディスプレイ越しに見守る人間たちにはまさしく優美なる物であった。多くの人間たちには、その姿は歌声で船乗りを誘い深海へと引きずり込む海神、セイレーンの如く映った。「さすがはＧＢＴＸ社の最高傑作、わが社の最新鋭ロボットとプログラムが苦戦するほどとは…」ｉｒｏｂｏｔ社の上層部と思わしき男が、僅かに表情を緩めながら一歩窓ガラスの方による。「ありがとうございます△△△さん、しかし、ｉｒｏｂｏｔ社の軍事用ロボット社の性能も相当のものですな。わが社のフラッグシップともいえる試作機とここまで動かしまわすのは、そちらの技術の高さを立派に証明しています」声を上げたのはＧＢＴＸ社のあのあの代表取締役。彼は満足そうな表情を作り、ＧＢＴＸ社の技術者たちが作業しているコンソールまで近寄ってくる。数十分前に駆け込んできた副技術部長の男は、この取締役がいる事に初めて気づいた。「…これほどの数値が出ているという事は、この試作品には相当の負荷がかかっているという事ではないでしょうかな」「なるほど…今後はとも、ロボット産業と生命工学産業は成長分野ですからね…」現代を代表する産業の一角をなす両産業で世界トップの事業展開規模を誇る2企業の重役はわずかに顔を見合わせて笑った。ＮＹＳＥ（ニューヨーク証券取引所）への上場とダウ平均株価指数を（世界を代表する経済指数であるダウ平均株価は、ダウ・ジョーンズ社が格付けを行って認定した大手主要銘柄で構成される）形成する主要銘柄への登録によって、超大

国アメリカ合衆国を、いや世界を代表する超大手企業に成長した2社であるが、電気自動車産業、新エネルギー産業、航空宇宙産業、情報技術機器産業、医療機器産業等と同じように、この2つはまだまだ無限の可能性を持つ新興産業だ。それはそれだけの利潤の拡大、弾いて企業活動規模と時価総額のさらなる拡大、そしてそれは自分たちのさらなる富と名誉の獲得へと?がる。

「…うむ、期待しているぞ技術部長」GBTX社の代表取締役は、前方のコンソールと端末のディスプレイに見入る技術部長に声をかける。この女は少し驚いたように後ろ振り返ると、声を引き締めながらディスプレイの方を指差す。「とんでもございません、今後とも微力ではございますが、企業の一層の繁栄と人類へ与える恩恵のため、一層努力してまいります」

しかし彼女は心の奥底でため息をつき、肩をすくめていた。取締役の男の声を聞いているといつも思うこと、それは彼の目的は人類に対する恩恵や科学技術の発展ではなく、あくまで自分の利益が露骨に最優先であるという事だ。もちろん企業の業績を良くし、一層の事業拡大を図るために一層質の良い製品を開発する、それは技術部長の女にしても当然の事であり、給与待遇が良くなることほどよい事は無い。しかし、彼女の信念で最優先するのは、この生命工学産業を通じて人類に貢献すること、そして大学時代から学んできた生命工学の成果を社会で試すというものである。そういう視線から代表取締役を見てみると、何という守銭奴なんだという嫌な気分を抱いてしまうのも事実だ。

しかしこの女とて社会常識と通念はしっかり持っている、一端の技術者が指摘したところで、取締役会にたてつくことはできないという事だ。それに会社の代表を決めるのは世界各国の株主であって、自分のような従業員やスタッフではない。自分の考えや目標を仕事を通じて貢献するには、理不尽に見える出来事や気に入らないことも受け入れ、それに従う、企業という巨大な機構の歯車の中ではそれが常識であると彼女はしっかりと意識している。

女は雑念を払い、目の前でおこなわれている性能実証試験に集中する。「内臓タンクのオキシジェン量、ドロップはない？」副部長の男に声をかける。「はい、オキシジェンのクオンティ、オキシジェン・プレッシャ、ボトル弁調整プログラム・電気系統にも問題ありません」彼は手に持っているタブレット端末を彼女の方に見せ、タッチペンを叩いて出力された情報を説明する。「現在のところ血中酸素の過剰消費もなく、自律神経抑制回路も正常に作動しています」「それならいいわ、それで…気管支閉鎖弁のプレッシャと電圧の方も問題ない？」「大丈夫です、手術前に懸念された電圧降下、周波数の異常振動、プレッシャの喪失も大幅に改善されています」「ええ、それは良かった」「さすがだな、調整して暮れた連中にも礼を言ってやらなきゃならん」「はい、ありがとうございます。本社の研究施設にいる連中にもそう伝えておきましょう」技術部上層部の男と女は安堵を覚えながらタブレット型情報端末のタッチパネルと、オペレータのコンソール上部についたディスプレイの数値を交互に見る。最大の懸念であった水中行動中の気管支閉鎖システムの機構は目標値に達し、自律神経遮断海路とその代替となる神経細胞内蔵型の識別・行動支持回路も正常に作動している。しかしこれ終わるわけではない、センサ感知や数値上のデータでは正常に試作品が動作しているのは分かるが、肝心の水中で行われている模擬戦闘がどの程度のレベルに達しているかは、強化窓ガラスの下に広がる波立った水面がカーテンとなってしまっている。「◎◎◎◎さん、戦闘ロボットの観測データは？」「現在分析できた限りですが、この機体が搭載している中央制御システムに内蔵されたパターンデータとはかけ離れた数値が出ています」ｉｒｏｂｏｔ社の関係者が手元のキーボードを打ち、目の前にあるディスプレイに映るデータを読む。「おそらく、あなた方の試作品の戦闘パターンは、わが社の蓄積記録にはない異例のものです。あなた方の技術力の向上を物語る雄弁な証拠ですよ」「ありがとう。でも、それでも戦闘中の映像を見たいものね、カメラを回せる？」水中でどのような戦闘機動を取って

いるか、それはｉｒｏｂｏｔ社側にもＧＢＴＸ社側にも貴重な参考データになるに違いない。「はい、内壁４方向の中央部分にある汎用可視光線カメラと天井にある赤外線投影機から映像を解析して回せます」「ええ、それではお願いします」「分かりました…おい、水面下映像の解析センサを上げろ、それからヘッドアップディスプレイの投影準備も頼む」「はい」ｉｒｏｂｏｔ社の男が隣にいる数人に技術者に命じる、コンソール上にあるディスプレイの上方が切り替わるのとほぼ同時に、目の前にある大型のガラス窓の上から薄いスモークガラスが一枚降り、わずかに黄緑色を放ち始めた。赤外線画像を投影するためのディスプレイ、センサの信号を変換し、窓ガラス越しの映像とほぼ同様に赤外線画像を出力するのだ。「こっちは戦闘データの採取に集中するわよ、体内各部の数値を厳密にとって」「分かりました」ＧＢＴＸ社の調査員の男がコンソールを叩き、各種分析機器の感度を上げにかかる。「…我々の技術の結晶、水中下でどのような動きを見せるか…」副部長の男は一歩ディスプレイの降りた窓ガラスにもう一歩近寄り、その下で波立つ水面を見つめる。情報端末でのＣＧシュミレーションでの運動はいくらでも見てきたが、実際に試作機が、いや自分たちの娘同然の存在が実際に水中下で活動するのは今回が初めてである。しかしこの彼の意識の中にあった“わが子”への不安感は徐々に消え失せ、替わって言いようのない期待に胸が膨らむのを感じた。間違いない、あの試作機はやってくれる、そういう物だった。

しかし、窓ガラス越しの風景やディスプレイ・コンソール上のデータに一喜一憂し、彼等の横で相変わらず自らの出世という野望を語り合うアメリカ、そして世界随一の大手企業の重役たちの傍らにいる“一匹”は、目線も体も微動だにすることなく、ロボット試験場の隅でｉｒｏｂｏｔとＧＢＴＸ双方の関係者に囲まれながら窓ガラスを見つめていた。「うむ、どうかな君？君のお友達がわが社の軍

事ロボットと互角に張り合う。素晴らしい事ではないか？」ｉｒｏｂｏｔ社の幹部が、その“一匹”の方に振り返り、ゆっくりと歩み寄る。人間たちよりわずかに小さい頭頂高１．５２メートルの馬によく似た体格、前部はカナリアイエロー、後部はレッドブラウンという特異な毛の色合い、キリン同様にひょろりと長い首、細いながらもがっしりとした健脚、とその先端にある頭部にあるコバルトブルーの瞳、頭部に生える白い２本の突起、キリンリキ種族は微動だにしない。そばにいた関係者の男が幹部の方に一歩進み出で、このポケモンを軽く指差す。「そんな滅相もない事を聞いて答えられるわけがありませんよ閣下」「それもそうだな□□□君、この生き物がわが社の、いや人類最先端のテクノロジーを理解できるとは思えん。彼等にはＩＣ回路の一つさえロクに…」

「自分は…」キリンリキは一瞬英語で言いかけて詰まる。説明しようがない怒りににた感情が自分の意識の水晶を満たしていくのを感じた。何を言っているんだこいつらは、一度にたくさん計算ができるだけの小さな電気機器を集めて機械を作った所で何だ、勝手に生物の遺伝子という、人間やポケモンの目に見えない生物を構成する物質を操作できるようになったからそれどうした、結局は自分たちの富、便利さ、過剰な安全、将来の人類の快適な暮らしを求めるために使っているだけではないか。

しかし、ここでそんな事を言う事は憚られるもの、彼にはそう言った常識はあった。彼は人間たちに数歩歩み寄りながら言葉を選ぶ。そして流暢な英語でこう告げた。「…自分はアメリカ合衆国に忠誠を誓う者です。政府と国防省の決定には従うのみであります」

「相変わらず生真面目一本だな、バルチャー・オーソン大尉」ＧＢＴＸ社の取締役がゆっくりと彼の元に近寄り、見下したような笑みを浮かべる。「まあ、いう事を聞く上に能力の高い通常のポケモンの価値は無限だからな。すべてのポケモンが君みたいな素直さを持

っていればいいんだが……」「は、はい…それは…理解しています」バルチャーはどう\返事を返していいか分からなかった。あまり良い意味含まれているとは思えないが、彼が言っていることが、自分たちに対する侮辱から来ているのか、それとも自分に対する期待から来ているのかが掴めない。

曖昧な返事の前に、取締役は顔を近づけ、わずかに表情を厳しくする。「今後とも協力しろオーソン大尉。今後ともアメリカ合衆国から委託を受けた我々に従ってもらうだけだ」「ど、どういう事です？」「君にそれ以外の選択肢はない、それを怠った場合は合衆国に対する反逆と見なされる。何せ…」人間の男は窓ガラス側を一瞬見やる。「彼女だっているのだからな…君がわが社の命令に背けば、わが社が合衆国から受ける代償と損失は極めて大きい、そして彼女も…」彼の声はおどすように鋭くなる。「命はないのだ」

「…理解しています」バルチャーはか細い声で答えた。

脅迫に近いこの人間の言葉に意識の水晶が大きく揺さぶられ、内部を渦巻く意志という名のエネルギーが大きく乱れている。今までかすかに抱いていた不安という映像が一気に具体性を帯びて彼の目の前に現れ、思わずその場に崩れ落ちそうになった。目の前の薄暗い部屋の光景がめまいのようにぐらつく中、彼は失われかけた足の感覚をどうにか維持し、足を踏ん張らせる。厳しい宣告、いや脅迫の前に人間と同じように感情を持つポケモン達には、それに対する職や童謡もまた人間と同じように種族やタイプに関係なく感じられる。このキリンリキ自体エスパータイプというカテゴリー分類に属するものだが、人間の世でいうこういうオカルト的職業の人間が受け取られるほど、ポケモンのエスパータイプは便利なものではないのだ。

彼の隣ではＧＢＴＸ社取締役とｉｒｏｂｏｔ社の関係者が再び今後の事業戦略に関して議論している。しかし、その言葉のいかなる断

片も、今のこのキリンリキ種族の意識の水晶に認識されることはなかった。彼の思いは今、窓ガラスの向こう側にあるロボット試験場にできた湖の中、人間によって無理やり装着させられた機械によって息の苦しさも体の疲弊感も…どちらも生物として当然の危機回避本能による反射である…ねじ伏せられ、人間の作りだした殺りく兵器、そして人間の国家間同士の対立で自国の技術力を誇示する道具として造られた恐ろしい機械に、たった一匹で立ち向かっている相棒に全て寄せられていた。

黄緑色のかさ上の頭部、その下にあるくりくりした幼児の好奇心をたたえた瞳、自分の後ろをちょこちょこと、しかしひた向きについてくる２５歳とは思えないあどけなさと素直さ、そして見るものあるものすべてに気を取られ、手に取り、口に入れてしまうという旺盛な好奇心とそのまなざし。当初アメリカ国防省の人間が言うには、彼女は幼き時から諸事情で（人間はこの類の言葉ではぐらかすのが大好きらしい）ポケモンの文明と、あらゆる文明生物の成長過程そのものから切り離されて育ったとされている彼女。最初は戸惑ったが、当時、ポケモンとしてはめずらしく通常の人間の４年制大学を卒業し、アメリカ国防省管轄のこの機関に入ったばかりの彼に断る術はなかった。

それでも…バルチャー・ハワード・オーソンは彼女を引き取った、そして彼女と公私ともに共に歩んできた。彼女の性格でなにかと職務上危険なトラブルに巻き込まれることもあったし、プライベートの点でも気苦労させられることも多かったのは事実だが、その過程で、その過程があったからこそ、次第にバルチャーは、このキリンリキ種族は信じ始めたのだ。彼女を守ることを、この肉体の成長に取り残されてしまったような幼女のような心を持つキノガッサ種族と共に歩むことを。

（ルザル…頼む…）バルチャーは目を閉じ、全ての意識を窓ガラスの外へと集中させようとする。あの窓の向こうで、人間の作り上げた凶器を目の前にし、ルザル・イグラル・イプシロンは何を思っているのだろうか？それを考えるといてもたってもいられずに前に踏み出しそうになる。彼女は、あのキノガッサは自分に襲い掛かる無数の弾丸と呼吸を締め付ける大波におびえ、怖がっているのか？それとも、彼女の奇妙な点としてあげることができる戦闘中の指示を受けた際のあれ、全ての感情を捨てた機械も同然になったあの感情と表情のまま目の前の機械を壊すことに没頭しているのか？人間への、アメリカ合衆国への忠誠も、アメリカ・ニューメキシコの小さな集落に住む家族への約束も、今の彼にはまったく関係ない。不安が募れば募るほど今のバルチャーは無力感に襲われ、ただただルザルの祈ることしかできなかった。

「…どうした？体調でも悪いのか？」そんなキリンリキの姿にｉｒｏｂｏｔ社の関係者の一人が声をかける。「いえ…体調は特に悪くは…」「まあ…君にここで倒れられては、わが社の責任問題になりかねんからな、おい君、上に連れていって外の空気を吸わせてやれ」「はい」

バルチャーはｉｏｒｂｏｔ社の関係者の一人である女と数人の米国防省警備関係者と共に、施設１階の裏手にある職員専用の通用ドア（とはいってもやはりＩＣリーダ付きのオートロックだ）から外に出る。「あっちの本社タワーに行けば展望デッキもあるんですけどね。あそこならミシガン湖の湖底資源採掘船もプラントも、２９０号線からシカゴ市内や空港を飛び立つ飛行機も一望できますが…」女が遠くに見える、無数の工場やタワーが並ぶ敷地内でも特に高い７５階建ての２本の大木を指差すが、今のバルチャー・ハワード・

オーソンには全く聞こえない。ともかく、あの無数の機器や液晶パネルが輝く薄暗い実験場管制室から、あの人間の狂気がにじみ出る恐ろしい場所から出られたこと、それで十分だ。思い切り吸い込んだ冬の北米、ミシガン湖沿岸の空気がとてもすがすがしく感じられた。

心の片隅では、まだあの試験場に取り残され、戦闘用ロボットと向き合い続けるキノガッサ種族、ルザルの無事を願いながら。

手さぐりと定まった道（後書き）

中途半端に終わってしまいすいません……

今度はポケモンサイドを集中的に書こうと思います。

揺れ動く使命

「ねえねえリーヒュン、テルル…迷ってるみたいだけどどう思う？」「うーん…むやみに歩き回るのは危険だとは思うけどな」言葉に詰まり、気まずい（とポケモン達には思える）沈黙を打破しようと窒息したような顔をしてしきりに辺りを見回すグレイシア。そんな彼女をベイリーフとメガニウムはただただ見つめている以外になかった。特に女メガニウム種族のユイリィ・ランタン・プレミドールには、テルルの意識が発する明らかな動揺がエネルギーとなって自分の水晶の周りを通り過ぎていくのが手に取るようにわかる。何の予備知識もないままに、年齢の理由だけで隊長にのし上げられてしまったグレイシア、当然と言えば当然だが、かといって何もしないのもはばかられた。かといって無理にでしゃばってもテルルの自信を失わせるうえ、スカイラブの心情を考えれば自分が踏み出すこともできない。このメガニウムの意識の水晶を埋め尽くす気体の中には、先月ルクシオが言っていた冷静な言葉と、つい最近のグレイシアの台詞双方の残響がいまだに気体の分子を振動させ、彼女の精神の重荷になっている。スカイラブ・バトルスター、テルル・アストラフスキー、双方の主張する意味も彼女には分かった。お互いがどこか似ている点がる、似ているからこそ違和感を覚え、それが敵愾心につながるという事を。

ユイリィには分かることがある、そう、今の自分が2匹の関係をどう導くのか、その複雑に絡み合った意識の流れを生み出す繊維を形作る決定権が自分にあることだ。それは決して気持ちのいい事ではない、しかし、それが運命であるのなら逆らうことはできない、このメガニウム自身そう思っている。

そしてそれに関し、もう一つ新たな発想がメガニウムの意識の中で生まれていた。自分が戸惑っていても打開策にはならない、それならば、トレーニングも兼ねて隣にでテルルを見つめているリーヒ

ユン・バイリング・グリーズ、このベイリーフ種族に聞いてみてもいいんじゃないか、と。「うーん、リーヒュンはどう思う?」「何を?」「ほら、テルルが今何を考えているかって事」「そ、そりゃ…」リーヒュンは自分の前足に視線を落とす。表情を見るだけではおそらく無理だろう、隣にるユイリィの青空色の目が彼にそれを伝えている。しかし、自分の他人の感情に対する洞察力がここであてになるのだろうか?彼にはほとんど自信がなかった。普段は後先考えぬ突撃と体当たり的な生き方で周りをよく振り回してきたこのベイリーフ種族ではあるが、特に女の子に対する洞察はどうも苦手だった。それは少なからず彼の性格、価値観に起因され、どうしても曲がったことが嫌いで、常に自分を相手に裏表なくさらけ出す分、道徳的当然と相手の完全な意思表示を全員に求めてしまう面に問題がある。すなわち社会的通念にはあてはめる事の出来ない心境を抱えていることが多い年頃の女(メス)に対しては反感を抱かれることが多いのだ。それが今までのテルル・アストラフスキーとのもめ合いであり、彼女と自分の間に感じる溝のような感覚なのである。

「大丈夫だって、うん。相手の表情じゃなくて相手の目の奥を覗く感じかな。今目の前にある物、それに集中して奥にあるものを見抜くって事なの」メガニウムが彼の右前足にそっと自分の左前足を乗せ、温めるようにこする。「でも、とはいっても…ユイリィは知ってるんだよなテルルを」「そりゃもちろん、だからこそリーヒュンに聞きたい、どう思ってるのか見てみたい」彼女はブレイブやスカイラブがあだこうだと舌戦を展開する前で、完全に血が上がっているグレイシアの方に目線を移す。「正しくなくたっていい、他人の気持ちには本人にも正解なんてないんだからね、そういう努力が大事なんだよ。だから…どうかな?」

「そんなら…やってみるか」「そうこなくちゃ!」ベイリーフは明らかに焦りを浮かべるグレイシアの目に視線を合わし、全ての感覚と思考をそこへと持って行った。自信があるわけではないが、ユイリィが自分に期待している、と言うより導いてくれる、リーヒュ

ンはいつの間にか彼女の作り出した意識の流れに乗せられ、自分の突撃的な精神も相まっていつの間にかそれに集中していた。

彼女の濃い藍色に染まる瞳の先に見えるもの…相変わらず自分の周囲の感覚に手を伸ばすのは気持ち悪い、体中の感覚がひっくり返り、頭の葉っぱの先から後ろ足の爪までに冷たい液体がゆっくりと粘り気をもってうごめいているようだ。しかしそれはどうにか我慢できるようにはなってきている。我慢はできてもたどりつくのは難しいが、やってみなければ意味がない、彼はそういう考えを持って全力で自分の周りにある通常の五感では察知できぬ動きに集中し続けた。深く考え込むのがめんどくさい、そんな事をしているといつの間にか意識と思考自体が停止してしまう彼だったが、今回もご多分に漏れず眠りこけてしまいそうな状況をベイリーフは必死にこらえていた。

だが、しびれを切らしたテルルがそれを突如として打ち切る。平静さを失ったグレイシアが2匹の前に猛然と歩み寄った。「ちょっとアンタ、何を私の顔をぼけっと眺めてるわけ?!」「っ!?ど、どうした…」「ふん、そんな事してるんだったらアンタのカン使って!どう思うこの状況、どうすればいいの私は?!」

「待て待て!今考えるよ今から…」リーヒュンは当惑しながらも自分の感覚を4本足が立っている湿った地面の方へと移した。しかしそれが遅い、随分と先ほどのでエネルギーを消耗したらしく、何となく体が重くなり始めていた。彼自身じれったいほどに。

「ああ、もういい!時間が…ったくもうっ!?」「あのなあ、俺はやってるんだぞ!?テルルの心情なんかに合わせて…」「はあ?!何よ合わせてやるって?!そんな事は望んでるわけ…」

「う、うん、それはだめなのテルル!お願い!」ベイリーフの首元を掴み、前足で強引に突き飛ばそうとしたグレイシアを、このメガ

ニウムは後ろに回ってツルで彼女の背中を掴み、彼から無理やり引き離す。「それでそれで、うんうん…それでいいの、ウチなりには知ってるから、落ち着いて、ね？ね？」「そんな悠長な…いや…そん…」ユイリィがツル先から送り込んだエネルギーの前に、テルルの熱くなった思考回路が急激に冷め、視界が広がって周囲の霧に覆われた景色が急激に色合いを取り戻した。それと同時に、またしても感情に流された自分に対する嫌悪で彼女自身の水晶がうずくのも感じた。（…どこまでバカなの自分は？！私は…何してるの…？？）「ご、ごめんねユイ…そういうつもりじゃないんだけど…どうして私みたいな…」「平気平気！テルリンは隊長として頑張ってるんだもんね、そうやって色々と探ってみるのも人生っていうからね、うん。それで…」あまりテルルの自信を失わせたくない、ユイリィは慎重に言葉を選び、彼女から一歩踏み出して霧に覆われた湿地帯を見回す。足元の水気をたっぷり含んだ土、生い茂るコケ、まとわりつく水蒸気は彼女にこの地域の陰鬱さと部外者を寄せ付けない難攻不落さを意識の水晶に伝えてくる。「…うん、この湿地帯は縦横に数キロはあるみたい、と言うよりもウチらのいるこの地面も水の上に浮かぶ浮草みたいな感じみたい…」メガニウムがゆっくりと水辺に向かって歩き、ツルを水辺にそっと乗せる。ここにいる全員の目線が彼女にそそがれていた。「…こういう状況でむやみに動くのは…え、うんん！見ないで見ないで、これ全部ウチの適当な予想だし！」彼女にとってヘンに期待されるのは慣れている事ではあるが、同時にひどく恥ずかしい事でもあった。信頼されるのは嬉しい事だが、このメガニウム種族のユイリィ・ランタン・プレミドールは半信半疑で期待されることにはどうも違和感を感じるものがある。「いや、大きさと地形判断ではユイの判断が正しい、って感じだ」ゆっくりと踏み出したのはブレイブ。ブースターは右前足で足元をトントンとたたく。「この下も泥の塊、水の底の地面は底なし沼になってるし、かき出せばいつでも水辺にすることができるぜ。すなわち…」彼の表情が締まる。「視界が効かない状態では…死にに行

くようなもんだ。そういう判断でいいだよな、ヒュンもそう思ってるんだよな?」

「あ、ああ…うん、そう思う」唐突に話を振られながらも、リーヒュンは曖昧にブレイブの方に頷き、ツルで足元の地面を撫でる。なぜかさっきから足元に伝わってくるものがあった、それもいい意味を持たない何かが。もしかしたら…それが例の“生物”なのではないか、と。「…その生き物って言うのはさ、おそらくこの辺りの広い範囲をぶらぶらしてる感じがするな。うかつに手足を突っ込んだりしたら、その生き物にぱっくりやられそうだ…」「ば、バカ…兄貴それってマジかよ?」レオが右前足で目の前の土を振り払い、彼の方をじっと見つめる。「うん…確率は高い…そう思う」「うえっ…なんて奴を相手にするんだ俺らは。…こういうアブねえ仕事って人間野郎がやるもんじゃ…」「何よ、まだまだアンタって以外に子供なのね」ガトルがコリンクにツッコミを入れ、コリンクの方はパチリスの方に顔を真っ赤にして振り返った。「んなこと言うんじゃねえよガトル!お前らだって…」

「ま、まあまあとにかく…現地の方、2匹の判断は妥当なんすよね?」2匹の押し問答をよそに、ブレイブが現地の関係者であるウインディ種族のモーリス・アネックスに話を振り込む。「まあ妥当と言えば正しいな。自分たちはこんな状況で湿地帯の生物排除なんかしたことねえが…」彼は自分胴体に巻きつけた捕獲用のさす叉と銛を右手でなでる。「…これだけの頭数がいれば、明日以降もこの状態であっても可能と言えば可能だ」「どうもっす、そんでテルル、どうするんだ?」

「う、うん…それじゃあ…」テルル・アストラフスキーは右前足でもみあげ状の飾りを撫で、ゆっくりと水辺の方に歩み寄る。「とりあえず、近場がどうなって…わわっ?!」その直後、彼女の足元にある湿地帯の土がぐらりと崩れ、彼女は顔面から湿地帯の水面に突っ込んだ。「出やがったか、土を突き崩してくんのはその生物やらだ!」ウインディ種族のモーリスがさす叉を引っこ抜いて飛び寄る。

「あの女（メス）、こんままだと野郎に食いつかれる！なんとかするぞ！」
「あのバカっ？！いきなりヘンな事…おいヒュン、ユイ、お前ら左右に回れ、でてきたら野郎の頭をツルで潰せ！俺がテルリンを引き上げる！」３匹も崩れ落ちた湿地帯のふちへと駆け寄った。

水中に関しては問題ない、グレイシアは水中で一瞬動揺したが、すぐに意識を体の中に戻し、体を回転させて水面に浮かび上がった。後足元にすでにそいつはいる、水面から上半身を引き上げると同時に彼女は右前足をわずかに降って、彼女の必殺の武器を前に引き出した。今は別の場所にいるピトムニクが彼女のために作ってくれたもののおかげで、それは難なく彼女の右前足に収まる。「来るっ！」グレイシアは一回体を水面から持ちげるて体を回し、銛を持った前足と顔を水面に近づけた。その生き物の黒い影は数秒で彼女の水面ぎりぎりに接近してくるが、テルル・アストラフスキーにはそれだけの時間あれば十分だ。魚を採る要領と同じ、その生物の口と牙が襲い掛かる０．２秒前、彼女は７年以上の経験で気づかれた正確無比の制度で、迫りくるその生物に向かって銛を強く突き立てる。

銛の柄を掴む両前足に伝わる獲物の振動、しかしそれはこれまでに彼女感じたこのない強い物であった。「これは…大きい、てかやばい！？」「どうしたテルル…すげえ！何だこの生き物は？！」突き刺さった銛に激しく抵抗するその生物の表面が一瞬水面の上に出ると同時に、ブレイブは“かえんほうしゃ”を打ち込んで一瞬でも打ち込んでテルルを掩護しようと努めた。
なるほどポケモンとは似ても似つかぬ醜悪な姿、全身がオリーブドラブ色のいぼが覆われた奇怪な生き物。体を魚をのようにうねら

せて激しく抵抗するその姿はとても魚類ではない、とはいってもブースターもグレイシアもこの程度の生物に恐れをなして動けなくなる性格ではない。

が、その確信は甘かったようだ。その生物のパワーは想像を絶するものであった。「ううっ?!やばいやばいやばい!」「おいおいおいっ!?…どわっ!?」ブースターが彼女の後ろ足を掴んだが間に合わず、グレイシアは水深くに潜ろうとするその生物に銛ごと引きずり込まれた。「引きずり込まれる、行くぜみずタイプっ!」「お、おう…」何とかブースターが尻尾を掴んで完全に水面に引きずり込まれるのは防いでいる状況下、コリンクとミズゴロウが水に飛び込んでグレイシアの左右を引っ張る。「無理すんなお前ら、一緒に自分まで引きずり込まれるぞ!?」「んなこと言ったって見殺しにできないっすよおっさん!俺とグリソムはこういう事には慣れてるもんで!」かなり大きい銛を突き立てるモーリスに対して、水に平然と飛び込んだレオ・ミュースカイは声を荒げる。みずタイプでなくてもグリソム・トルーマンと幼少期から一緒だった彼はこういう事には慣れているし、そもそもテルル・アストラフスキーがその生物にぶっ殺されるのを黙ってみているという事の方がこのコリンクにはできない。

とはいっても何匹そろったところで勢いは生物の方が上だ。「どっきなさいよっ!?」浅い水面に上半身を突っ込みながらもみあいになっている3匹の脇からメガニウムが前足を上げてしまう勢いでツルを振り上げ、強烈なエネルギーが乗ったその物体を生物のいぼへと突き立てた。(…テルリン!ここで死んじゃだめだよ!)そんな思いがユイリィ・ランタン・プレミドールの意識の水晶の奥にある原子炉のフル稼働にし、そこから生まれた凶暴かつ強力なエネルギーが彼女のツルに恐ろしいまでの破壊力を与えていた。飛び散るその生物の血液、相当な深手にあえぐその生物の激しくくねる体。一瞬引きずりこもうとする勢いが緩む。「リーヒュン、一気に!」「よっし!」その間にベイリーフが前足とツルを水面に突っ込み、

グレイシアと彼女を助けようとするコリンクとミズゴロウをまとめて引き上げにかかる。だがその生物も、まだ諦めようとはしない、むしろ大多数に相手が増えたことに興奮したか、そいつは銛が多数（モーリス以外にも、マグマラシのスカラーをはじめ多くの地元の連中が刃物を突き立てていた）突き刺さったまま体を返し、銛を離そうとしないグレイシアの首元にその巨大な口を開けた。「ううっ？！」彼女の目の前に広がる赤い汚れがおぞましくついた凶暴な牙と口腔、その汚れ具合からしてこの生物が何をしてきたのかは明らかだ、これはまずい、もう無理、テルルは突如として湧きあがる本能的恐怖に目を閉じた。

バキッ！？その牙が彼女の首を叩き切る直前、何かの強大な力でそれ止まる。それはとっさの判断、ベイリーフ種族の直感的な決断であった。「ううっ…」「ちょっとアンタ？！」リーヒュン・バイリング・グリーズの咄嗟の反応、彼はツル2本で強引にその生物の口をこじ開け、閉まりかけた電車のドアに傘を挿し込んで再開閉させる悪徳乗客の如く前足を生物の獰猛な歯に食い込ませていたのだ。「テルル、早く引っこ抜けっ！」「う…アンタはどうするのよ！？」「この程度…問題なんかっ！」神経伝達物質がもたらす緊急時の意識の高揚が彼の神経から右前足の痛みを奪う、右前足一本くらいケガをしようと引き千切られようと今はそんなこと関係ない、放っておいたらこのグレイシアは首をもがれるのだ、どうせやるんなら体を張るのが当たり前、そんな感情すら今のベイリーフにはなかった。ただ単に助ける、フローラを救うのと同じように、ともかく衝動的な感情だった。

噛みついた瞬間、その生物がかみついた前足に気を取られて力が抜ける、後方にいた数匹がグレイシアごと飛び込んだ数匹をその生

物ごと引き上げにかかる。これなら何とかなる、捕まえる事は出来ないが、少なくとも全員が助かることはできる、メガニウムもブースターもいつの間にかそちらを最優先にしていた。それぞれの前足が、ツルが、両手がその生物を陸上側に引き上げ、その勢いでそれやグレイシアに掴まっていた全員をようやくの事で元いた湿地帯にできた埋立地に引き戻す。それと同時にその爬虫類は深く傷ついた身を躍らせ、尻尾で周囲の連中を軽く振り払いながら水に飛び込み、姿を消した。

「大丈夫かテルル?!」リーヒュンは自分のことなどお構いなしで湿地のふちに両前足をかけ、水から一気に飛び上がった。グレイシアの方は引き上げられた場所でぐったりと倒れこみ、焦点の定まらない目で目の前の苔を見つめている。その原因はおそらく肉体・精神の相当の疲弊だろう、彼女のフラフラになった意識のエネルギーをベイリーフはなんとなくそう感じる。自分の助けが良かったのか悪かったのかは分からないが、ともかく助かってよかった、自分のケガ程度は周りも分かってくれる、彼はそう読んだ。「ごめんテルル、俺が止めてりゃこんな事には…」「大丈夫よ私は…はあ…はあ…この位で音なんか上げてたら私は…」テルルは彼から差し出されたツルを左前足で振り払い、顔に付いた水草を続いて拭い落とす。体を震う気力すら失い、ずぶ濡れの体から落ちて自分の周囲を水が濡らしていく。疲れたわけではない、精神的に疲れたわけでもない、彼女の精神と意識をマヒさせているのは自分に対する情けなさと消えてしまいたくなるほどの恥辱だった。「バーカ、何強がってんだお前は?」2匹の脇からブレイブが歩み出て、右前足で彼女の顔に残る水滴を全部拭ってやる。「とにかく、お前も含めて全員助かって何よりだ。レオもグリソムも何とか無事だったしな」

「へへ、さっすがだろブレイブ!俺とグリソムで行けば怖い物ね

えよ！な？」「ま、まあ…おいらがレオに振り回される形何だけど…それでいいとするか」ブースターに話を振られて得意げなコリンクとミズゴロウは両前足をばしっと合わせる。こんな状況にもかかわらず、レオ・ミュースカイとグリソム・トルーマンは幼少期からの友人であり、１７６１突撃隊の同僚であった。少なくともまだ彼ら２匹の世界では周囲はまだ冒険している場所であった。今のところは（・・・・・・）、もちろんいつかはこの世界の現実に気付く事にはなるのだが。「まあ、その勢いで頑張るんよレオ。アンタが其のテンションを持ち続けて入れば、世の現実に負ける事は無いわよね」「バーカ、現実位なら負けた覚えはねえぜ。現実なんか俺の右前足でぶっ潰してやる」「はいはい…」両前足から火花を散らしながら意気込むコリンクを見つめる彼女、スカイラブは少し胸が苦しくなるのを感じる。自分の幼馴染、いや自分の弟ともいえる彼がいつか見るであろう現実、その時に彼から奪い取られるであろう彼の心意気と生意気盛り特有の明るさ、それを考えるだけで辛かった。自分がアメリカ陸軍（バージア地域の時、何の目的かは知らないが、伝達に彼らについて行くよう命じられた）の西海岸地域メキシコ国境線の対ポケモン警戒部隊に配属された時から、間違いなくこのルクシオは誓っていた。このコリンクは巻き込まないと、レオだけは自分がどんな指示を受けようと守ると。しかし今、スカイラブ・ナサ・バトルスターは彼とこのような形で再開しているのだ。それに対して彼女は運命を呪おうとも思わなかったし、国連やアメリカといった人間側の勢力に抵抗しようとも思わなかった。今でもそうである、自分も世界も何でもいい、とにかくコリンクと友人たちが、未来を背負うであろう子供が助かればいいと。

「それにしても兄（あに）さん……随分とがんばったわね？」リーヒュンの右前足から噴き出す血をスカイラブはぼんやりとした目つきで眺

めている。べったんこれくらいの出血では、彼も自分も騒ぐようなものではないだろう。「え、…ああ、これか」彼女の予想通り、彼は自分の右前足を見て初めて気づいたような目をする。黄色い細かいうろこがびっしりとある表面に無数に傷があり、そこから血がゆっくりと漏れ出している。「やっべえ、それで痛くねえのかよ?!」ブースターが顔の色を変えてベイリーフに飛び寄る。いつの間にかできた小さな地の水たまりに驚愕の表情をしばらくは浮かべていたが、やがてブースターの方は呆れたような笑みを浮かべながら、ベイリーフの右前足にある傷口をポンポンと叩いた。「ま、お前のそういう顔を見る限り平然としてるから問題ねえって感じだ」「やっぱ!またやっちゃたねリーヒュン。もうさすがだよ!うん」「だろ?こいつって本当に昔っからバカやってケガ続発だったからな!」「まあいいや…足がちぎれたわけでもないしな」まるで心配もしていない声を上げるブレイブとユイリィを見つめ、彼は右前足の傷口をツルで触る。今頃になってかまれた傷口が、いや右前足全体がピリピリと痛み始めているようだ、リーヒュンにとってこれは普通だと思えた。昔から無謀をやってけがをしたこと（ハイドル地域への船…とはいっても米海軍のアーレイバーグ級イージスミサイル駆逐艦だが…の速射砲でやらかした時の事も含め）等、思い出す必要もないほどあるのだから。

「それでさあ…」ユイリィがツルで自分に付いた水滴を軽く払い落とし、ぐったりと憔悴しきっているテルルに歩み寄る。「…ごめんね、銛持ってかれちゃったみたい。テルリンが肌身離さないものだとは知ってるけど…」「……は?!ワタシ、私の!?」彼女の一言にグレイシアは飛び上がり、慌てて水辺のふちに進もうとしたところですぐにその場に倒れこんだ。強い絶望が彼女の冷え切った体と意識に更なる追い打ちとなり、あまりにも悲しい現実に彼女は気を失いそうになった。中東・ドバイの養殖場でポケモン向けの魚介類養殖を行って巨額の富を得た父母、愛する両親に銛突きを教えてもらったのはいつだっただろうか、その時から持っていた両親の

形見であり、アストラフスキー家族の形見であり、数少ない私物の一つであった銛、それがあの生物に持っていかれた。ただの物にすぎないのにとてつもない喪失感に彼女は襲われる。

「ホントに…ごめんね…ウチが拾って上げられれば…」ますます打ちひしがれた顔をするグレイシアに、メガニウムはかける言葉がなかった。しかしそれ以上に、彼女のモチベーションの下がり具合を考慮すると、今日の活動はほぼ無理そうだ。「テルル……今日はやらないほうがいいと思う、うん。これだけ視界も悪いし、ね？」

「まあな…そういう事にして…いいすか？」「ああ…その方がいいな」ウインディ種族のモーリスは自分の銛とさす叉を胴体後部に巻きつけ直し、周囲を見回す。まだ朝と言うのに霧は時間を追うごとに濃くなってきているように見える、今日捜索に入るのは危険そうだ、地元民の直感がそう言っていた。「とにかく、けが人は自分たちの集落の方へ、残りは半日くらいかけてこの辺りの地形把握にあたったほうがいいな」

結局、この日は集落の通りからほど近い周囲１．５キロ四方の捜索に終わり、本格的な捜索はあす以降という事になった。地元民であるマグマラシのスカラーがその日の夜空の星の霞み具合を見て曰く、明日以降は少しずつ霧が晴れていくだろから、捜索に支障はないらしい。つまり本格的なその生物の捜索と駆除は明日以降という事になった。

霧に伴う湿気が一体を包んでいる夜半過ぎ、全く寝につく事の出来ないテルルが、湿地帯に入る集落はずれの小高い道から、まだ霧にかすんでいる湿地帯を見下ろしてため息をつく。彼女を落ち込ませているのは水に落ちたこと直接ではない、隊長でもあるにもかかわらず自分が取り乱すことに終始していたこと、そしてようだしない事態に困惑した果てに、周囲に迷惑をかけたことが、彼女の意識の

水晶が流れていく場所を激しく波立たせ、中の期待を不安定にかき混ぜていはするが、それが本当の理由ではない。

ともあれ…本当に彼女が一番後悔していたこと、一番の落ち込みの要因は…やはり自分の銛をその生物に突き刺したままにしてしまったことだった。あれは大切な家族の形見だけではない、弟のエルヴィンとの苦難の放浪生活、その中で最愛の弟と共にして僅かな思い出、自分の汗と血がしみ込んだもはやこのグレイシアの一部だ。それが生物に突き刺さったまま、その生物と共に果てしないとも感じさせる広大な湿地帯の湖の中をさまよっている、テルル・アストラフスキーにとってそれは自分が湖に落ちておぼれているのも同然である。今の彼女には隊長としての才覚だとか、リーダーとしての本質だとかそういう物に対する不安や悩みの大半は、自分の体の一部、エルヴィン・ムスペル・アストラフスキーと自分を直接結ぶ数少ない品に対する思いに取って代わられているのだ。

「…テルル…そりゃあ眠れないよな…」彼女の隣にそっと近寄ってくる誰かがいる。すっかり打ちひしがれているテルリウムでもその足音と声に気付き、思わず視線をそちらの方に返す。しかしその直後、近寄ってきた相手の表情を見た彼女のリアクションは淡白だった、と言うよりもその相手ではそれ以外に言葉の見つけようがない。

「別に…アンタこそまだ起きてるのね。…アンタって意外と寝ちゃいそうな性格っぽく見えるけどさ、ホントは案外と夜寝ない方なの？」

「うん。最近は色々と悩むことも多くてな…したくないんだけど」リーヒュンは恥ずかしそうに少しだけ顔を赤らめ、グレイシアの横にもう一歩分よる。「…昔っから俺は後先考えない方だって周りから言われたけど、ここんとこ…そうもいかない。色々と…自分の事で、な」「色々と、ねえ…まあ細かい干渉はワタシしない方だからこれ以上は聞かないけど」彼女は右前足で自分のもみあげ状飾りを不器用になでる。少なくともこのベイリーフ種族の前では感情をさらけ出すわけにはいかない、息苦しくなるほどの不安を彼女は必死

にこらえ続けた。

一方の彼には、そんなテルルのやせ我慢が痛いほど感じられ、それがまるで自分の事であるかのように感じられる。「…テルルは…まあ…無理して気持ちを押し殺さないほうがいい、そう思う」「…何よそれ？」リーヒュンの目線の方に彼女は振り向く。彼は視線の合った彼女の目を見つめ、わずかに頷いた。「俺なりにはな、我慢ばっかりしてたって仕方がない、やるんだったら思い切って出た方がいい、いつもそう思うんだ。何にしても、な」グレイシアは気まずそうに視線を目の前の湿地に戻したように見えるが、ベイリーフは時折彼女がこちらを、しかも自分の右前脚（包帯がまかれている）に意識が注がれるのをなぜか感じた。「ん…このケガの…」思わず言いかけた彼は途中で言葉に詰まった。グレイシアは相変わらず湿地帯を見下ろすのみだ、同時にかつてユイリィが言っていたある台詞の残響が、自分の意識の水晶に含まれる気体の分子を揺さぶるのを感じる。

（……っ！！…これが…彼女の言う…感情が伝達されて…）

彼は思わず自分の傷口をツルで触る。もしこれが真実だったとしたら、自分の能力はまた少し前進したことになる。しかしそれは彼にとって嬉しいだけではない、意識の中には不安というものも同時に湧き上がった。これ以上自分の感覚がサクラやユイリィの言うとおりに敏感になるとはたして何が起こるのか、そしてフローラと自分の間を渦巻く果てしない謎に何をもたらすのか、普段は怖い物知らず（のように見える）彼の中に大きな不安となってそれがゆっくりとうねりを持つのを感じる。

とはいえ、それ以上の不安や戸惑いに苦しんでいる彼女の前でそんな事を口にするなどとてもできないし、彼はリーヒュン・グリーズであるからにして考えようともしなかった。むしろ彼の意識は目の前にいるグレイシア、テルル・アストラフスキーの沈んだ表情に注がれている。これまで自分と彼女の間で起こったトラブルを考えると、顔を合わせるのさえ嫌になるのはこの年頃の常だが、このベイ

リーフにはそういう済ませ方をするのが他人を表層だけで見捨てている事と同然に見え、どうしても許せなかったのだ。「大丈夫だっての、何をそんなに暗い顔してるんだよ?テルルはテルルらしく隊長やってんだろ?俺はそれを認める」「……」沈黙と彼女の目線、彼は慌てて前言を撤回した。「…ごめん、俺が言えることじゃないな…俺が悪かったよ」このベイリーフは自分の言ったことに早くも後悔した。彼女の性格とリアクションなんてわかりきっていることじゃないか、かけるべき言葉はそうであるかもしれないが、少なくとも彼女のような性格を考慮すればそれは正しくないと知ってることじゃないか、なのにどうして自分は感情に流される?

しかしテルルは、気まずいような沈黙ではあるがその後は何も言わずに、自分の伸ばした右前足の毛並と霧にかすむ湿地帯を交互に見つめているのみだった。リーヒュンはわずかに息をつき、軽く自分の左前足で彼女の右前足あたりを少し握る。「ただ…忘れんなよ、俺は俺なりに、ユイリィは彼女なりに、ブレイブは奴なりに、ラブはラブなりにテルルの事に一定の価値観を持っている。そうやんなきゃ何も始まらないさ」「……」テルルは相変わらずぼんやりとした目で遠くを見つめたままだ、ベイリーフはもう一度息を吸い込み、右前足の爪で彼女の前足を軽くつつく。「苦しくなったら無理すんな、殴ってでも掴んでもいいから誰かに…ああ、その加減と相手は弁えろよな。俺はいつでもいいけどさ」彼女は返事がないが、きっと聞いている事には聞いているのだろう、なんとなくだが彼の直感はそう言っていた。「あと…テルルの銛は俺たちで何とかするよ、約束する」「…??……」その言葉にグレイシアはわずかに反応し、ベイリーフの方を振り返ったが、苦しそうに息を吐き出し、視線を再び足元に戻す。

リーヒュンは立ち上がり、大きく伸びをする。あんまり言葉をかけても彼女が苦しいだけだ、今はそっとしておくのがいいのだろう、

そう自分に言い聞かせ、その場を去ろうとした。「おやすみテルル…眠るとよくなることだってあるぞ……」

「ね、ねえ!?」テルルが慌てて立ち上がり彼の方に一瞬振り向けかけたが、その直後すぐに視線を恥ずかしそうに戻す。「アンタこそ…休むときに休んどかないと疲れちゃうわよ。あと、右足とか無茶する位だったら自分の体を守ってよね」「こ、これか?」リーヒュンは思わずツルで右前足の包帯をさする。彼女がこんな優しい言葉をかけてくるのは初めてだ、なぜだかはわからないが、顔もとがわずかに赤くなるのを感じた。「大丈夫だってこれ位、ブレイブやエンデバーが一緒にいるころは、骨折ったり頭打ったりもっと危ないことしたからさ」

「…そう…んならいいんだけど。それに私は…」テルルが恥ずかしそうに、消え入りそうな声でかすかに呟いた。「…この位で…諦めたりしないから…おやすみ…」

「そっか…ならいいんだ…頼むから無茶すんな」ベイリーフはグレイシアの方に少しだけ向き直り、もう一言付け加えた。「……早く寝ろよテルル」

「さっすがリーヒュン♪」集落の方に戻る道の最中、リーヒュンの隣にいつの間にかメガニウムが満面の笑みで一緒に歩いていた。どうやらユイリィは彼の様子を遠巻きに見ていたようだ。「な、何を勝手に見てるんだよ?!」「んー?だってリーヒュンのやり取りがどんなふうに進むか見てると楽しいもん!」「楽しいっておい、俺のやり取りのどこが…」「そうそう!そうやって突き進むとこがリーヒュンらしくていいと思うよ!うんうん!」彼女は相変わらずの笑顔で、またしても隣にいる自分と背丈がほとんど変わらないベイリーフに飛び掛かる。「うげっ?!だっから…嬉しいからってそれは止めた方が…」「何言ってんの!リーヒュンなら嬉しいときにや

ってもいい、そう思ってるからやってるんだよ、うん。だって嬉しそうじゃん！あはは！やばい、そう思ってるでしょ、うん！」ユイリィは完全に自分のペースに乗って、彼に自分の体重をぐいぐいと押しかけている。「嬉しいってか…まあいいや（どうせ聞いてないだろうし…）」リーヒュンは諦めたような苦笑を浮かべ、ツルで彼女の首元の花と首元をやれやれと言わんばかりにそれぞれ掴んで引き離す。彼女の頭の上で眠っていたシェイミのロズリンが、傾いたメガニウムの頭の上で迷惑そうな表情を浮かべて目を右前足でこする。「何をやってるんでしゅかこんな夜中に？」

「でも…さすがだと思うよ、うん…」メガニウムは体重の重心を自分の足に戻しながらも自分のウグイス色の首はそっとベイリーフの首元にすり寄せたままになった。右のほほ辺りから伝わってくる彼の温もり、リーヒュンの意識の持つ素直さと温かさ、それがとても心地よく感じられる。「リーヒュンはテルルを体を張って突っ込んで守った。自分がケガをしてでも守りたいものがある、やらなきゃいけない事がある。それはすごいと思うの」「ま、まあ…でもああでもしなきゃテルルは助からないし、同僚としては普通にすることなんだろ？」「うん、それもあるけど…ウチには…」ユイリィはツルを出して彼の右前足の包帯をさする。ツル先の傷口に残っているのは痛みいだけでなく、テルルを助けるという気合と思い、そういう感情が彼女には感じられる。「……そんなかな…よく分かんないけど」

ベイリーフの意識の水晶が放つ温もり、融通が利かないながら、常に自分の思いを裏表無く差し出し、決して他人に裏の感情を持たない。そんな彼とならどこまでも行ける、メガニウムは本気でそう思い始めている。（…私の空、やっぱりリーヒュンとなら行けるかもしれない！…）彼女はそっと瞳を閉じ、全身の力を抜く。自分の意識の水晶からあふれ出た子供のような気持ちが、彼の意識の水晶へと流れていくのを感じた。

（…どこまでも一緒がいいな…いつまでも…頑張れるよあたしは…）

「や、やめろよユイ…」ベイリーフはそこまで言いかけたが、力を抜いて寄り添ってくる彼女の体をいつの間にか受け止めていた。彼女は自分を信じている、そしてその感情には愛憎劇のようなものが一切ない、夏の夕空に近い澄み切ったものである、そう彼には感じられる。照れくさい一方で、彼女が自分に寄り添っていること、それに対する不思議な安心を感じた。

「でもね…」メガニウムがベイリーフの方に茶化したような視線を送る。「ウチは好きって言う感情じゃないんだよ、ただ単に遊んでる、そういう感情だからね。誤解とか絶対だめだよ、うん」「って？！……そんなんじゃ確実に誤解されるぞユイリィ…」

僅かに湿地帯に入り込み、足元の感覚を確かめるスカイラブ、グリソム、シンシア。「アンタら2匹の感覚はなかなかのもんだからね。あの生き物がどこにいるかくらいは確かめとかんとならんのよ」「うん…でもどうだかなあ、おいらには何も感じられないんだ…本当に…」ミズゴロウは怪訝そうな顔をしながら、感覚神経の集まる頭の上の突起やほっぺのオレンジ色の鰓に感覚を集中させる。「だから、そうやって決めたら話にならないでしょうにグリソム、曖昧でもいいから何か感じたらすぐ私に伝えるの。理解？」「うーん…やってみはするけどさ…」「ダメダメそんな弱気じゃ、言いたいことはびしっと伝えんと」スカイラブは自身の無さげなグリソムの表情を見て、右手の爪を立てて振る。このミズゴロウの欠点は、…まあレオが振り回しすぎるせいなのかもしれないが…自分に対して自信をあまり持っていないという事だ。彼の潜在的な能力とバトルでの実力は身の丈以上のものを持っているが、自身を持って動けないせいでその3割くらいを無駄にしている。ルクシオ種族の言葉には少々なりとも厳しい物を含んではいるが、それは彼女なりの優しさと面倒見の良さからくるものなのだ。

それはグリソム・トルーマンにも十分理解できていた。鰓や頭部突起に伝わってくる周囲の空気の微妙な振動に集中する、本来それは

種族の特性の一つであるからにして彼には造作もない事だった。しかし今のこのミズゴロウからすれば、それに対する緊張感はそれなりのものがある。彼自身自分の直感が当たるとは思えなかったが、少なくともスカイラブは自分の感覚をあてにして明日以降の動きを何考えているに違いない。なぜそうするかは理解できないが。しかしとうとう我慢できず、思わずグリソムは尋ねてしまった。これでテルル達ともめられては極めてまずい。「あ、ラブ…何でおいら達を使うの？今後を決めるのはテルルさんなんじゃないの？」「違う違う、そういう理由じゃないのよ。私が考えるのは、テルル一匹で決めるより、万が一には自分達で別ルートから彼女を助ける。そういう事よ」スカイラブが右前足で近くの雑草をむしり、息をかけてそれを吹き飛ばす。「当てにならない訳じゃないんよ彼女が。ただねえ…」ルクシオはちょっとした高台のようになっている土手を見上げ、ぼんやりと湿地帯を見つめるグレイシアと、彼女からゆっくりと離れていくベイリーフをちらりと見やる。見た目からすれば2匹が争ったような感じもないし、相変わらずグレイシアの方が爆発した形跡もない。「……私とあの子2匹で2段構えした方が確実性がある、そういう事よ」彼女は隣にいるグリソムの背中を左前足でポンポンと励ますように叩く。「グリソムやシンシアの能力は低くないんだから、自身持ってやっていいのよ。それはＯＫ？」「うん…まあもちろんの事だよ。な、シンシア？」「え、あ…うん…了解ですラブさん」

「さすが！2匹とも物わかりが早い！」ルクシオはミズゴロウに続いてロコン種族のシンシアの頭にあるくるくる毛を、くしゃくしゃと左前足でなでる。良くも悪くも物わかりが早く、一回動き出したら止まらない、そんなレオのくせが移ったのかは知らないが、ともかく彼らのそういう点に関しては高く評価できる。これでいい、これで彼らがあれば自分はいいのだ、彼女はそう意識下で言い聞かせようとした。そうやってこの子たちがこの世界に負けずに生き、明日へと希望を持ってくれればいいと。そしてテルルもいつかは…

きっといつかは…と。

2月9日　9時00分

翌日の午前9時ごろ、周囲を覆っていた霧はだいぶ晴れ、徐々に南太平洋に浮かぶエメリア地域の澄み切った夏空が湿地帯の緑を明るくし始めている。多くの野鳥が水辺の草地を飛び交い、小さな魚が水面に小さな同心円を作っては消える。これだけの視界があればガラテア郊外の集落を苦しめるその危険生物を捕獲するには十分だ。しかし、突如一向に向かって飛んできたカワラバトがその空気を一変させた。「あーあ…せっちゃんが悪い訳じゃないんだけどさ、ちょっとこれは早すぎよね、うん」ユイリィが自分の伝書用のカワラバト（名前はセレーヌ、せっちゃんと呼んではいるが、どう間違っても節子とかという前時代的な名ではない）の足にくくりつけられた手紙を見つめてため息をつく。「まさか帰ってこいなのかよ？」

「そう、サクラさんもそういう可能性があるんだったら最初っから伝えてほしいんだけど…」「何だよ…」リーヒュンも彼女に続いてその手紙に視線を落とす。人間の作ったと思わしき滑らかにコーティングされた用紙の切れ端、そこに書かれたサクラらしいきっちりと整った足型文字には、緊急でやってほしい事があるから今すぐ帰ってきてほしいとの事であった。帰ってくるのはスカイラブとレオ以下旧1761突撃隊メンバー以外の全員だ、居残り組は秘書官のユークと共に生物の駆除と捜索を続行して、との事である。「何よ以外って。サクラさんもあんまり人聞きのいい人(ポケモン)じゃないって事よね…」スカイラブが2匹の脇から容姿を覗き込み、その後鼻を鳴らして尻尾を軽く動かす。あのサーナイトが何を考えているのか、どういう性格なのかはいまだに彼女にも掴み兼ねる話題だったが、自分たちといつもの4匹とは完全に別物に扱っている、そういう予感がする。とはいってもこのルクシオはそういう事には慣れっこだ、これくらいの扱いで不満に思っていたらどこでも目の敵にされる事

ぐらいは分かっていた。「それならそれでOKって事、私らでこっちは何とかするから、ユイさんは気兼ねなくあちらの仕事に集中して頼むわよ」「うん、それならこの場はラブと…」そこまで言いかけたメガニウムは思わずテルルの方を見てしまった。数日前に彼女呟いた言葉はまだ、このメガニウムの意識の水晶に残っているのだ。ユイリィは自分の言った事を後悔した、何度こういう間違いをしていれば気が済むのか、と。

しかしテルル・アストラフスキーの方は何の反論もすることなく、2匹のやり取りを視線の定まらぬ目で見つめている。「…皆さんに任せるってことになるね、うん。よろしく頼むよ」「待ってましたぜユイさん！おっしゃ、一発大物をやってやるか！頼むぜグリソム、ガトル！」前足の爪を電気エネルギーでバチバチと鳴らすコリンクに、ミズゴロウとパチリスは（特に女（メス）の方は格別）彼のテンションの上がり過ぎを警戒しているようだ。「はいはい、最初から飛ばしすぎないのよレオ。アンタがその生物に引きずり込まれないようにね」

「抑えは頼むわよガトル、こいつがバカしそうになったら殴ってでも止めてやって問題ゼロだから！」「おいラブ！また勝手な…」「これくらい言わんとアンタは止まらんからね、言われても仕方がないって事なんよ」スカイラブは顔を赤くするレオを軽く流し、成り行きに動揺を浮かべるテルルの方に歩み寄る。「それで…はあ、隊長はアンタでしょうに？」彼女は分からず屋の子供をたしなめる表情をし、腰にひもで巻いた軍刀を右前足で引っこ抜いて差し出す。「な、なにこれ…」「銛が一本ないくらいでオドオドしてたら仕事にならないでしょうに。アンタの銛は突き刺さってんだから、私たちがそんなのひねり上げて奪還しとくわよ」「は、はあ？……」ルクシオは困惑するグレイシアの右前足に自分の刃の鞘をしっかりと握らせる。「…分かる？アンタが隊長なのよ、それ理解、しっかりしないさいな。そんで…」彼女は隣にいるブレイブに向かって右前足でテルルの方にサインを送る。「アンタが彼女の頼みの綱だから

ね、彼女に何かあったら体張ってでも防いでやるんよ？」

「当ったり前でしょうが！俺はいつでもテルルと一緒！な、テルル？」ブースターはグレイシアの首の後ろに右前足を回して飛び掛かるが、彼女の方は相変わらず湿地帯を焦点の定まらぬ目で見つめているだけだ。「……テルル？」「…テルルさんどうかしたの？」「…こりゃあ…相当まいってるわね…」

ブレイブ、スカイラブ、ブースターの背中にいるイーブイ種族のミオカ、３匹は顔を見合わせた。

その頃、ソーラ地域北部

「こいつ…一体どうなって！？」メリープの嫌な予感は的中していた。ソーラ北部で起こっている惨劇は真実である、多くの者たちが人間の各国や大手企業の農地開発やバイオ燃料開発…これに関してはアメリカ、ドイツ、フランスなどがアフリカや南米と同じように企業によって集落単位で農地や空き地を買収し、耕作地、精製プラント、それを稼働させる発電施設をセットで作ってしまう…で土地を失い、ここに流れ込んでいたのだ。当然のことながら貧困問題と治安悪化が発生し、その一部は武装盗賊（ラスカル）化した。そして今、河口にほど近い河川にかかる木製の橋…欄干などは一切ない…そういった連中にバストーク・ラルシア・ホルストと一行は襲撃されている。

「まだきやがるのかこのバカは？！」「おぐっ？！」何発攻撃を受けてもなおしつこく抵抗してくる武装盗賊のピジョット、メリープにとって相性は問題ないが、相手のくどさにはこの隊長も驚いていた。これくらい意地の強いひこうタイプが一匹くらいチームにいればいいのに、チェギョンみたいにその場の空気に流されやすいのも

幾分困ったものである……

そんな一瞬の感情の隙を相手は確実についた。「ううっ?!」メリープに“エアスラッシュ”が直撃し、彼は後方に叩き飛ばされた。そのままもんどりうって橋のふちから河川に転落しそうになる。「ええい?!」だがそこには相手側の隙がある、ピジョットが目の前を通り過ぎた瞬間、このメリープは両前足で掴まった状態で渾身の“ほうでん”を相手に喰らわせたのだ。もともとから相当数の被弾があったそのひこうタイプはそれが致命傷になったのだろう、そのまま河川に墜落し、二度と上がっては来なかった。

「こいつっ!」「まだいたか…くっそっ」その背後からケンホロウがピジョットの仇をうつが如く飛び込んでくる。メリープは前足に力をかけて欄干から飛び上がり、そのまま姿勢を回しにかかるが、相手はめっぽう早い、電気エネルギーが放出臨界に達する前に相手は彼に到達するに至るであろう……

その刹那、彼の後方からケンホロウに飛び掛かったのはプラスル。さすがこのメリープと共に数年間一緒にやってきたピトムニク・ソレイユ・マルセイエーズである、そのフォローのタイミングも絶妙で完璧なものだった。「ンんっ!?」「んだと…」相手はこのプラスル種族の奇襲を回避できず、まともに彼女の攻撃ルートに飛び込んでくる、というよりそれがプラスルの狙いであった。「ええいっ!」彼女はそのまま“ワイルドボルト”で相手の腹元に突っ込んで後方に跳ね飛ばし、その反動の勢いで体を一回転させて橋側に着地する。「すまねえなピトム、…っておい?!」「わわっ?!」一瞬気が緩んだその瞬間にも、ケンホロウはまだ突っ込み、ピトムニクをそのまま突き倒す。相手の両翼とプラスルの両手両足がもみ合い、小柄で大きさが圧倒的に不利な彼女と相当手負いの相手とのつき落としあいが繰り広げられていた。しかしそれでもパワー面で有利な

のは相手、徐々にプラスルは橋のふちへと追い込まれていく。「まずい…これは…」必死に抵抗する彼女の脳裏にある物がよぎる。普段から彼女といた、そして今でもいるはずだった友達との約束、種族的にそうであらねばならなかったはずのかけがえのない存在…プラスルの思考は、体に溜まりゆく電気エネルギーに阻害され始めた。どうにか“スパーク”にでも持っていきたいところだが、相手が足と翼で強烈に掴みかかり、エネルギーを体外に放出するタイミングを掴めないのだ。これは危険な事である、でんきタイプが放電できないと強力な電圧が蓄電器官で抑えきれなくなり、ついには体内に漏れ出して自分の臓器や細胞を、人間の電子レンジと同じ要領で焼き尽くしてしまう恐れがある。しかしここで帯電を止めたら自分は確実に死ぬ。ピトムニク・マルセイエーズにはどうしようもない行き詰まりだ。

しかしその刹那、ケンホロウの背中にメリープが飛び付いた。瞬時に右前足で、モフモフ毛でいっぱいの胴体の中心付近に巻きつけた装備品入れの中から例の兵器を引き抜き、両前足でそれをかまえる。人間用の大きさであるそれは彼には少々大きく、使えるチャンスは一度だけだ。しかしバストーク・ホルストはためらおうともしなかった、目の前で自分の愛娘、自分が命に替えてでも守り通そうと誓ったプラスルのためなら手段を惜しむことはできない。

イタリア・ベレッタ社のＭ９２拳銃が火を噴き、弾丸がケンホロウの胴当てをぶち抜いて貫いた球はプラスルの股の間を通って橋を突き破った。そのひこうタイプはがっくりと力が抜け、そのままプラスルの上に崩れ落ちて痙攣するだけとなる。豆粒ほどの傷口が判断できなくなるほどの出血の噴水が、メリープと藍色の細かい毛が生えた足元とケンホロウの下敷きの状態となっているプラスルを容赦なく濡らし、自分たちの周囲に赤色の海を作りあげていく。

「うう…ピトムは何とか…無事みたいです」ピトムニクは自分の上に覆いかぶさった相手の体から自分の胴体と両足を引き抜き、赤い頬の帯電袋から火花を散らしながらフラフラと起き上がった。「…でもちょっと…溜まってるかな…」彼女は左手で自分の帯電袋を押し、飛び散るスパークを感触で確かめる。やはり帯電しすぎたせいか何となく気持ち悪い、帯電をもう少し押さえておいた方が良かったのだろうと思った。「大丈夫か…ピトム？どこもやられて…な？」バストークが心配そうに端に転がる彼女の装備品一式、洋弓銃を拾い、両前足で彼女に差し出す。「う、うん！ピトムは全然…ありがとうございます…」プラスルは大きく息を吸い込み、溜まり過ぎた電気エネルギーをゆっくりと外部へと放出しながらそれを受け取った。男メリープ（オス）は神妙な面持ちで周囲を見渡し、表情をややしかめてモフモフ毛をすくめる。「ったく…どういう風の吹き回し…」

その直後、彼等から２０メートルほど離れた橋の終着点あたりで衝撃音が走り、何匹かの武装盗賊が河川へと突き飛ばされる。「え、まだ相手が…」思わず身構えて姿勢を構えたプラスル種族の目線の先にいたのは、河川の中をゆっくりとこちらに泳いでくるラプラスとランターン。バストークにもピトムニクにも２匹には見覚えがある。「お久しぶりですバストーク隊長、随分と大変な事態だったようですね…」「なん月ぶりかだなアコース、ああ…そして隣にいるのは…」「ダチです、てか自分の使いっぱしりです！そうだよな、それ以外の反論は許さねえぜキンケイド？！」そのラプラス種族、アコース・リダイバーは隣にいるランターン種族のキンケイド・ミズーリのヒレが変形したちょうちんを自分の左ヒレで軽く突き飛ばす。「そりゃあそうさ、それで…」ランターンは橋の上にいる２匹に気付き、橋のたもとまで泳ぐ。「あ、初めて会いますね。僕はアコースのお友達…てか手先道具みたいな存在かな、そんなののキン

ケイド・ミズーリって言います」
「ど、道具って…そんなんでいいの?」「うん。僕の誇りだからねそれは」「そっか…そ、そんならいいんだけど…よろしくね」そんな自己紹介でも笑顔のキンケイドに、ピトムニクは苦笑しながらも橋のたもとに歩み寄って右手を伸ばす。「全然問題ないんだよこいつは、生まれて死ぬまで俺の道具になってくれっからなこいつは。異論はないだろ?」アコースが何のためらいもなく言葉を浴びせていくが、ランターンの方はこれが普通と言わんばかりの表情をしている。「うん、反論はしないよ。他に行くあてもないしね」
「それで、隊長とピトムだけでどうかしたんですか?」ラプラスは前のヒレで1回水をかき、橋の方にゆっくりとよる。バストークはためらいもなく真意を口にした。「ああ、ここら辺の治安情勢がプロテウス地区の探検隊連盟の連中がさ、悪いって言うんでな、国連の方から軽く休みもらって調べにかかってるんだ。…って後ろにも探検隊連中が…」メリープが背後を振り向き、その先の言葉に詰まった。ふと気が付けば、けがをしていない探検隊連中の方が少なくなっている、中には今回の奇襲でかなりの深手を負って倒れている奴もいる。「う、大丈夫かおい?特にお前だ、名前は…」「彼はソルビンです。さっきの奴のをまともに浴びちゃって……どう…するんですか?」腹元から血をべったり流しながら動けなくなっているシママ種族をかつぐベイリーフ種族が深刻そうな表情をしている、まあこんな状態で平然としていられる方が、中国のひき逃げ被害者(中国の某所で年端もいかぬ女の子が、ひき逃げされたまま誰も関わってくれずにそのまま失血死し、国内外で物議をかもした。当局側はコメントしていない)放置でもあるまいしおかしいのだが。「ええい…一番近くの集落まで連れてってやるからな、それまで何とかして踏ん張らせろ」「ど、どうやってですか?」「バカ、そこは頭を使うんだよ。確かお前は…アザミ、とか言ったなポケモンには自分の能力があるんだろ?」メリープはパニックになりかけの女(メス)に向かって右前足を説教するように動かす。それでも声が大して荒く

ないのは、彼自身の信念によるものだった。おどすように説教したところで相手は怖がるだけ、バストーク・ラルシア・ホルスト自体目下や子供相手に手を上げるのが苦手なタイプであることも一因だが、主だった要員は前者にある。「ある事にはあるんですけど…」「求められる時に思い浮かばんでどうする？探検隊だろうがなんだろうが、頭の隅には常に非常事態の指南書を開く、それが構えるって奴だよ」そしてメリープは彼女に対するフォローも忘れない。「大丈夫だ、意識は失っているようだがそれは瞬間的な奴だ。傷は深いが致命傷にはなってない、安心しろ」

「それにしても…随分と荒っぽい連中だったんすか…」「まあな…知ってる連中は知ってるんだが、この辺りの治安の管理もゴミ箱行きって奴だぜ」アコースは先ほど自分たちが倒したポケモン達のうち、まだ橋の上に倒れたままのロズレイドやリーフィアを見つめ、軽く首を振る。彼にとってもここまで物騒な連中は初めてだ。ラプラスの表情が徐々に暗くなり、耳のような側頭部のカールした突起物をわずかに動かす。「くっそ…食い物がなきゃ取りあいになるのは人間だって分かってんじゃねえのか」

「アコースも知ってるの？」欄干ギリギリのふちからから彼の甲羅上の背中に降りるピトムニク。彼はプラスルの方に首を回し、ゆっくりと後ろに下がった。「うん、これくらいの話だったらよく聞くんだ……エメリア地域に浮かぶ海なんて飢餓地獄さ」

「飢餓？！ってことは食べ物がなくなってるって事？！」ピトムニクの目が驚きに見開かれる。「なくなってるね、ここんとこは特にひどいかな」キンケイドがゆっくりと泳ぎより、アコースの甲羅のふちに右のヒレを軽く当てる。「ニュークリアとソーラの海峡にあたる島々は特に危ないよ」「この辺りか？」バストークが右前足で河口の方を示し、ランターン種族は軽くうなずいた。「そう、この

辺りなんだ…人間の船や海上のよく分かんない工場（プラント）が増えてきてさ、うかつに近づくとほかの国のスパイだなんだって攻撃される、そうすると誰も離島に荷物を運ばなくなるんだ」

「で、そこでは食料がなくなり、その困った奴らは周辺のほかの集落に食い物を取りに行くか、それとも人間の船や工場を襲って食い物を奪いにかかる。それで何匹人間に殺されたことやら…」ラプラス種族が彼に続き、右のヒレで軽く水面を叩く。このラプラスとてそういう光景を思い出したいわけではない、それでも話の中でそれを切りだせるのは、彼の意識の中にその光景がはっきりと残っているからだ。「そんでもって、それを理由にして人間連中は周辺諸島のポケモン達を弾圧しにかかる、最悪は殺しにかかるんだよな。自分たちの間でも殺し合ったり、海の底を掘って何か取りあったり、忙しい上にわけのわからん生物って奴だ人間は…」「…ったく…お前の周りでもそんな事ばっかなのか。覚悟はしていたが…」「すいません隊長、俺みたいな男はヘンな事の饒舌で…」メリープのガラス玉付きの尻尾ががっくりと下がる。やはり覚悟を決めるのと現実に直面するのとでは雲泥の差があった。これがやはり現実だったか、目の前にいるアコースも国連統合海軍エメリア管区の重装揚陸隊であり、それはすなわち管区の警備部隊も兼ねているという事だ。彼はその目で、自分と同じようにこの世界の真実を確かに見てきたに違いない。

しかし、バストーク・ホルストは表情を何とかして厳しくなり過ぎないように努めた。自分の知っているその奥にある　更なる真実は相当のものだ、おそらくはそういう事に慣れているであろうラプラスも、それを知ったらかなりの精神的深手を負うことになるだろう、それを考えたらあまり厳しい観測を示さないのもまた方針の一つであり、そしてそれがこの世界の希望でもある。一匹でも多くが希望をつないでくれること、もともと自分たちの文明が持っていた協調と融和の精神を次世代につないでいくことになるのだから。「いや、俺の方は全く大丈夫だ。それに…俺たちが行動しているのはそうい

う目的もあるんだからな」「ですよね、そうですよね隊長！ピトムはどこまでもそれを貫く隊長について行きますから」「おいおいピトム…面食らってアピールすんなって」「さすがですよ隊長、いい仲間を持ちましたね…」「アコースまでよせって…」ピトムニクがバストークの左側のモフモフ毛におおわれた胴体にすり寄り、その発言にバストークは顔を赤らめる、カザフスタン・カスピ湖沿岸にすむベイルに言われた時もそうだったが、なぜかこのプラスルがいる、そしていつも周囲から“いい娘を持った”と言われる。そしてそうされると、とても照れくさく感じる。原因は分からなかったが、おそらくは自分の精神がまだグラシデアと共にあるせいかもしれない、彼は薄々そう思っていた。１７歳の娘のモココはまだまだメリープからすれば一人前の年齢ではない、何度も彼女に煙たがられ、ロクにとりあってもらえない事への寂しさからか、その思いが意地を張って強くなっているのだ、と。そしてその埋め合わせ、自分でも気づかぬ意識の水晶の中から求めている慰めが、そばにいるプラスル種族のピトムニク・マルセイエーズなのだろうと。

「とにかく、そこのケガしたソルビン…だっけ？アザミちゃんの背中にいる子、ほかの皆も、とにかく一番近い集落に連れてったやらなきゃならないですね、大丈夫そっちは？」「え、ええ…息の方も全然…」「うん、良かったよかった。それじゃ、早くいくところってところね」ピトムニクがシママを背負ったベイリーフの方に駆け寄る。彼女に性分にしては当然のことながらほおっておくこと等できない。「ま、待たせたなピトムもアンタらも。それじゃアコース、キンケイド、とにかく俺らは…」バストークが彼女に続いて一行の方に合流しようとした直後、橋の向こう側、先ほどラプラスやランターンが倒したリーフィアやロズレイドが（まだ動かないのを見ると、２匹ともショック死したのだろう）倒れている側から何匹下のポケモンがやって来るのが見える。「な、何だよあいつら？ま

だ俺らに恨みでもあるってのか?!そんなら…」「気が早すぎますよお隊長!」洋弓銃を胴体に回したベルトかた洋弓銃を左後ろ足でけり上げ、前足でそれを掴んで構えるメリープをピトムニクは両手で抑え込む。しかし彼女にも近寄ってくる存在が何であるのか、それどころが相手が誰であるのか見覚えさえあった。

「あ、アンタは…」「そっちこそ…見覚えがあるな…なんでこんなところに……?」

彼らと出会った側の一匹、薄いカナリア色にオレンジ色から淡赤の毛、頭頂高は1．15メートル、ポニータ種族のシーベルト・リヒテントは凍り付いた、目の前にいるメリープとプラスル、彼等はニュークリア南部、ハイドル西部でも出会った。立場上は敵として、集落とそこに関わる人間の身勝手な理由によるやむを得ない都合から、敵対する立場としてであったことがある。その直後、彼の意識の水晶に強烈映像がよぎり、次の瞬間には目の前のメリープ種族に対する感情が全て敵意というオセロの黒の向きに変わる。

（…間違いない…こいつが…こいつの同僚が…アイソープを殺した…ヘルベルト・ラクープ少佐も殺した…）

そう、このポニータが大切に思うもの、かけがえのない同胞を、シーベルト・リヒテントが信じる道に立ちふさがっている存在の一角、リーヒュンやブレイブを取り込み、理由はあれども自分と敵対させている、そういう存在なのだ。「アンタは…今度は何をかぎまわっている?今度は何をする気だよ?」

「貴様こそ…お仲間引きいれて何を遊びまわっている?」メリープ側が脅すような口調でポニータに一歩近寄る。こいつらが…バージア地域で自分の部下を、息子娘同然の同僚を殺した、直接ではな

いがそれも同然だ。それだけで憎しみがわいてきた。「大した年齢でもねえくせにお高く止まりやがって…お前ってもしかして金持ちの子息だったりすんのか？」「んだとおいっ！？アンタみたいな地面張って金を稼いでるような奴と俺は違うんだよ俺は！こっちには目的が…」

「はいはい、分かったよシーベルト！お前の意志は十分なほど分かった！」隣にいるゼブライカのベクレル・プルトンが制止にかかった。思わず持論で熱くなりがち、全くこのポニータは世話が焼ける、しかし今回に限ってはこのゼブライカも複雑な気持ちになった。

「そうだそうだっての！ここで戦争の話を持ち出すなんて気がどうかしてんぞ！」ベクレルと同様に飛びついたのはオオタチ種族のエンデバー・リシャトルである。彼とて２匹の気持ちは分かる。目の前にいる相手は状況がどうであれ、彼等にとっては一度は敵対した相手であるのだ。ベクレルの意識の水晶の中にも違和感という、何となく普段と違う期待が入ってくるのを感じるが、さすがにここでそれ表現するのもまずい。ただ、エンデバーにはシーベルトに１００％共感できるものがある。それはこのポニータ曰く、眼前のメリープのチームにいつの間に入った友人たちの存在だった。

２匹の後方にいるポケモン達（何匹かは武装強盗の奇襲によりかなりの深手を負っている）は装備品からして探検隊連盟の者だろう、そんな連中の眼前で、ポケモン達の生活から遠く離れた場所にある２つの政府組織のチワげんか（彼は一瞬、本当にそう思ってしまった）を、普通のポケモン達の大半は知らないであろう世界の騒動を露呈する必要はない。

それはバストーク達側も同じだ。「隊長、今やる場所じゃないですよ！まさか本気でやるんじゃ…ンもうとにかくぅ！」ピトムニクが半泣きになりながら殺気立つメリープの尻尾に掴みかかり、何とかして後ろに下げようともがいている。こんなところでやり合うなど彼女にとってはとても耐えられない、何の理由もなく、何の目的もなきのに感情に任せて相手を理解できないなんて、このプラスル

には耐えられない事であった。
　そんな彼女の思いが少しは通じたか、それとも一時的な感情が覚めて普段の彼の冷静な判断力が戻ってきたのか、バストークは思わず後ろ振り向き、泣きそうな顔をして掴まる彼女に目を瞬かせる。
「あ、ああ…それは分かってる」自分の無能さがモフモフ毛を焦がすほど熱くさせるのを感じた。自分は何をしているんだ?自分は一体何を感情的になっているんだ?ポケモン同士は本来無駄に戦う生物ではない、バトルというのは思想的・宗教的な儀式であって、己の利益や立場をかけて殺しあう際の道具ではないのだ、必要意外な場所では自分の能力を出すな、そうピトムニクや連中に言って聞かせたのは確かに自分だ。そのはずの自分が、理由は無きにしも非ずだが感情を抑えきれない、そんな自分に対する恥ずかしさを体いっぱいで感じた。

　メリープの表情を伺い、腹が上下するほど荒い息をしていたポニータ、友人であるゼブライカに右前足を保護靴の上から抑えられたシーベルトは首を振り、左前足を軽く踏み鳴らして自分の気持ちを落ち着かせる。「ま、まあ…俺とてアンタらのここでトラブルを起こすのは望んでない。それいいよなアンタも?」「あ、ああ…」「フン、約束するんだったらもっとはっきり了承を示してくれよ。以心伝心とか言ってはっきり意見を言えないそれがポケモンの悪い癖だって…」「つまりはだな、休戦でいいってことだよ。なんでそこまで説明してやらんと…」「アンタって奴は…」目の前にいるポニータの聞き分けがなさすぎる、じれったそうに右前足を振るメリープの態度に、彼は再び感情を抑えきれずに踏み出そうとする。「隊長、だからっ!!」「だからやめろよシーベルト」ピトムニクとベクレル、双方が双方を押さえつけるためにまたもや踏み出す。「そうよシーベルト、あなたって人(ポケモン)がそういう性格なのは分かるけど、少なくとも民間人の前、あんまり職業人の気質は出さないほうがい

いのよ」ポニータ、ゼブライカ、オオタチの後ろで悠然と事態の成り行きを見守っていたキュウコン、アリョーナ・ハイペリオンが九尾の尻尾を軽く動かし、つかつかとバストークの方に歩み寄る。今は少々感情が高ぶっているようだが、それだからこそそのメリープの目には実直さと同僚を守る一途な感情が入っている、彼女はそう思った。「すいません隊長さん、彼、そういう性格でして…でも決めたことは守る方なので…あまり彼を戸惑わせるような言葉…気を付けていただくと幸いです」「それなら…自分の方も…」「こちらとしては約束しますが、どうします？」「は、はい…」メリープは目の前のキュウコンの視線を覗き、そしてあまり納得のいかない表情ながら頷いて右前足を差し出す。キュウコンの方も右前足を差し出し、彼の前足にそっと重ねた。表情は釈然としないがその前足の出し方、自分が重ねた時にもうろたえたそぶりを見せない前足、アリョーナ・ハイペリオンには眼前のバストーク・ホルストに対する警戒感が溶けていくのを感じた。

「それで…」アリョーナはバストークの後ろで固まっているベイリーフとシママに視線を向ける。「探検隊の方々にはけが人もいるのね、大丈夫、１０分歩けば隣の集落なのよ。案内するわ、あなた方も大丈夫？」キュウコンは後ろにいるオオタチ、ポニータ、ゼブライカに振り返る。「もちろん…俺なりには」「あ、はい、自分も…」

「ちっ…何だあの目は…」しかし、視線を戻した彼女の背後で、メリープやプラスルにシーベルトはちらちらと目配せをする。相変わらず彼の中では警戒心は解けなかった、というよりも過去の事に関する因縁に惑わされ、正しい判断ができていない状態にある。それはこのポニータ自身分かっている、しかしそれを認めたくない。アリョーナにもベクレルにもだからお前は子供だとたびたび言われる、それでも、どうしても、直すことは難しい事だった。「気にすんなよシーベルト、相手だってケンカはしたくねえだろうよ」エンデバーが短い両手で彼の左前脚あたりを軽くたたいたが、ポニータ

の方は一向に収まる気配を見せない。「そりゃそうだが、相手の出方は常に伺わなきゃなんねえんだっての。お前は昔っからそういう…」「分かった分かった、そういう事にしようやそういう事に…」オオタチは呆れたように苦笑した。まあこういう性格がシーベルトらしいと言えばそういう点で良いと評価できる、彼の良き理解者であるエンデバー・リシャトルだからこそそういう評価をつけてあげることができる。しかし、時にはもう少しこのポニータにも成長してほしい時も度々あるのは事実だった。

ふと背後から寄ってきたのは通信用のデンショバト。電子通信機器などの面では世界最強のシステムを持つアメリカ軍ではあるが、エメリア各地に潜伏する自国所属のポケモン隊の間ではこのような極めて原始的な通信手段も残っているのだ。「ん、なんだヘヨンか、今度はアメリカ軍の何の命令だいヘヨン?」エンデバーは鳩…名をヘヨンと言うらしい…の足にくくりつけられた紙を外し、結んである紐をほどく。しかし彼の表情は読み始めて数秒後にはゆがんだ。「…今すぐ場所まで戻ってこいだ?せっかく面白くなってきた場所でかよ…」

２０１３年　２月９日　ロシア　モスクワから南に３５キロ　ドモジェドヴォ国際空港
９時４０分

ドモジェドヴォ国際空港は、ロシア連邦の首都モスクワに最も近

い場所に（急行バスで３０分、直通列車で２５分、タクシーも複数の企業が入っているとモスクワ方面への交通の便もいい）位置し、シベリア、コーカサス方面への国内線の中心であると同時に、就航する国際線の便も（日本航空の成田便も運航している）最も多く、貨物空運企業であるエロフロート・ロシア航空も本拠地にするロシア最大のハブ空港である。この空港に降り立ったトランスアエロ航空が所有するイリュージン社の…原型はエアバス社のＡ－３４０－３００であるとも噂されているが…大型旅客機ＩＬ－９６、定刻通りに着陸した旅客機は、何のトラブルもなく指定されたターミナルＡに接続している駐機スポット、日本航空が保有する成田からフライトしてきたＢ－７７７－３００の脇にランプインした。作業用車両が一斉に集まると同時にボーディング・ブリッジが接続され、多くの人間を中心とした旅客…９９％人間だが…が一斉に降りてターミナルの手荷物受取場、入国審査場へと向かう。

　その乗客の中には、ロシア政府機関の関係者の男も一人いた。彼が入国審査場でＩＣタグを一枚差し出し、保安員がそれをリーダにかざすだけで彼は審査場を通過、到着ロビーを素通りしてターミナル前の通りへと出る。旅客がモスクワ方面への急行バスを待つターミナルの一角に、不釣り合いな雰囲気のドイツ・ＢＭＷ社のクーペ、Ｅ６３・６３０ｉが止まっており、男がそのそばに行くと同時にドライバー側のドアが開く。「お待ちしておりました」「ああ、すまない」出て来た男と入れ替わるようにロシア政府関係者はＥ６３に乗り込み、そのままタクシーやバスの流れに乗って空港を出発した。

　中心部へ向かう幹線道路に入り、周囲の車の流れが安定して間もなく、男はＥ６３・６３０ｉのシフトレバーの脇に付けられた小さなコンソールを何回か叩く。これは車内運転者用通話装置、携帯端末をかけながらも車両を運転するという悪習慣が知らずと身に付い

てしまっている日本ではあまりお目にかからないが、欧米・アジアを中心に世界的に見れば、ある程度の所得と生活水準を持つドライバーにはごく標準的な装備だ。注意力がそれでも会話に向かってしまうとはいえ、少なくとも手に端末を取るよりははるかに安全である。ダッシュボードの脇に付いた携帯情報端末と接続し、手元のコンソールでハンドフリーに切り替え、設定した車内スピーカーからも音声を受信できる。

通話発信の指示を手元から送って間もなく、音声が端末と社内のスピーカーに響き渡った。しかしこの端末が発信したこの番号は、民間や通常の官公庁間で使用されるそれとは異なる特殊な信号で、万が一でも別の回線を通じて盗聴されることを防いでおり、設定されていない軍用の信号受信機器を用いても音声出力する事はできない。さすがはアメリカに中国と並ぶハッカー大国と（当のアメリカやその同盟国のイギリスも彼らに負けずとも劣らぬ情報戦の猛者なのだが）皮肉られるだけ、情報戦に対する攻守双方のテクニックを身に付けていると言えるものだろうか。

「どうだった〇〇〇〇〇、ニューコム社の反応の方は？」聞こえてきたのはロシア連邦情報技術開発センターの上層部の男の声。「反応は悪くありません、今後ともわが研究機関に対する部品とシステム供給は続けてくれるそうです」ＢＭＷ・Ｅ６３のハンドルを握る関係者の彼は淡々と結果を述べた。「そうか…これで我々の情報技術の成長も安定していきそうだな」「はい、次世代偵察衛星への分析発信機器の開発も、これで間に合いそうです」男は事実を落ち着いて告げる。彼が予想していた以上の成果を上げられたのは彼自身嬉しかったが、何もこんな場所で自慢するものでもない。それにうかつにそういう話に気を取られるのは、目の前の大型トレーラーや乗用車への注意を散漫にする恐れがある。

彼が訪れていたのはイギリス・ロンドンにあるニューロン・コンピュータ社の本社であり、代表取締役との極秘交渉を行ったのである。その目的はただ一つ、ロシアの情報技術での民間産業・国家戦略双方での水準向上を目指し、アメリカのマイクロソフト社やＩＢＭ社といった情報機器技術で世界トップクラスにいるこの超大手企業との技術提供の拡大交渉に乗り出したのだ。情報産業にせよ、深海・宇宙開発にせよ、ナノテクノロジーにせよ、エネルギー・環境産業にせよ、医療技術開発にせよ、ある程度の経済規模や国力を持つ国家や国家所属の機関が民間の大手企業に研究への協力を求めるのは一般的だ。科学技術が発達した２１世紀の今、科学技術の研究レベルの高さは経済成長の大きな武器となり、国家戦略や国力増大の大きなパワーとなると同時に、周辺国や国際社会への実力パフォーマンスにもつながる。この男もニューロン社への訪問の前に、同じくイギリスの中でも最大級の電気機械メーカーであるマグノックス・エレクトロニック社も訪れており、世界的には需要が急伸しつつある原子力発電所や、次世代の電気エネルギー源の主力となるであろうレーザーヘリウム核融合炉の開発・改良に関する技術交流を、自国の企業と深めることで同意を非公式の会談という形ではあるが得てきた。現在の科学技術というものは一分野に留まる物ではない、それぞれの分野が相互に関係性を持ち、一つの製品として一般市民の、いや人間の生活や生産活動にその成果を投下し、お互いの技術と人類の文明を向上させる良い刺激となる。もちろん経済や景気、国家の国力に与える好影響は言わずもがなだ。

これはロシアの情報技術の工場には重要な事象の一つだった。東西冷戦の末期にあたる１９８０年代、アメリカで急成長を始めたＩＣをはじめとする情報機器産業は瞬く間に人間の経済、社会、科学技術に大きな影響を及ぼし、２０年たたずとして一般市民の生活、企業の生産活動、果てには国家の産業戦略や国際政治の対話方法までもを大きく変え、そこから発進される情報ひとつで、国際社会の情

勢を変えることができるほどの可能性を良くも悪くも秘めるようになった。それにソ連をはじめとする東欧諸国は大きく出遅れ、事実上の国交断絶状態にあった米国とソ連では技術交流すらままならず、社会主義の副作用による深刻な不況、労働者の職務放棄や大規模ストライキの連鎖、自国民の生活の困窮とそれに対する不満からくる暴動の連鎖、アフガニスタン侵攻をはじめ軍事力でのプロパガンダの相次ぐ失敗で疲弊しきったソ連と、利己主義に走って腐敗した政治家たちには、かつてはアメリカと月面を目指して争った宇宙開発競争のように科学技術の発展へと尽力する余力は残されていなかった。その後遺症は現在も残っており、流体力学に基づいた形状設計や素材選定、エンジン出力では欧米と対等の能力を持つ最新鋭旅客機のＩＬ－９６はグラスコクピット化…すなわち操縦制御システムや航法装置の情報化…が大幅に遅れている。今回業界トップ企業であるイギリスのニューロン社と提携して情報技術機器研究を行えることは、ロシアの国家戦略として極めて重要な一歩であったのだ。まあ、自国企業や自国の開発プロジェクトの一層の進化のみならず、軍事利用や国家間の調査活動にも重大な影響を及ぼすはずの物なのだが。

「うむ、収穫があったにもかかわらずそれでというのも何だが…」スピーカー越しに聞こえる上司の声のトーンがやや下がる。「彼ら…金の出所の件でなにか言ってなかったか？」「いいえ、特には…」男は思い出しながら口を開いた。特にダッシュボード上の機器に接続された端末に向けて声を張り上げる必要もない、欧米・アジア双方での常識ではあるが、これに対応している端末側が入力した音声信号を分析し、騒音か人の声かを認識して信号を修正してくれるからだ。「ええ、特にコメントはありませんでした」「そうか…あの企業はあくまで民間市場に対する供給優先主義で、国家規模での研究プロジェクトには介入しないらしかったが…なぜここに来てそん

なコストのかかる方に?」無線機の声が訝しげに尋ねる。民間の企業や市場で取引する場合と異なり、研究プロジェクト鵜や計画に参入しても、直ちに利潤が上がるとは限らない。将来の科学技術の成長とそれによって生じる市場での利益獲得を想定し、企業は国家レベルでの研究に参加するのであって、場合によっては市場にそれが還元されずに出費のみで終わる可能性もあったし、そうなった例は歴史上少なくない。そういう物に投資したがらない企業というものは良く存在するもので、イギリス・フランスを中心とする多国籍企業体であるニューロン社も今まではその一角であった。

それがここに来て急激に方針転換を始めた。EUの素粒子加速器研究施設のプロジェクトや今回の東欧圏における情報技術開発プロジェクトといった莫大な資金を必要とする大規模計画へと積極的に参加し始めたその企業、ニューロン社の業績が大きく変化したわけでもなく、代表取締役社長をはじめとする上層部が入れ替わったという人事情報もない、なにより決算報告書内にはそれを行う準備をした痕跡を読み取ることができない、一体どこからそれを可能にするほどの融資を受けたのだろうか?

「ただ…一つだけ彼らが仄めかしていたことがあります…」車中の男が答える。「融資先の金融機関として…アメリカの一企業が協力し、プロジェクト参入に必要な予算を賄う予定だそうです」「アメリカの金融証券企業?」「ええ、大手のようですが…」彼は答えながらも思考は別の所へと向かっていた。シティバンク、AIGグループ、S&P、世界を牛耳る…2008年の金融危機の引き金ともなったが…アメリカの大手金融関連企業の名が次々に思い浮かぶ。そこから融資を受けることができれば相当の資本力が手にはいる事になるが、その企業とニューロン社の接点は、経済アナリストの彼にもどうしても思い浮かばない。

「…分かった、その点も一つの収穫と言えそうだ。今後、アメリ

カの金融機関のサーバーにも調査をかけられるか、政府の方に聞いてみなきゃならんな。それで…」一瞬切れると思ったスピーカーの声が、真剣な面持ちのままで話を続ける。「まだ…何か？」いったんは目の前の道路の流れに意識を戻した男が尋ねた。「ああ、ちょっとな…ロシア陸軍の武器の一部がな、武装組織に流出してギリシャの暴動に使われたらしい。それに関してＥＵ側が調査をいらしてきたんだが…イギリスでは話題にはなってなかったか？」

「…いえ…こちらではそうではありませんでしたが…横流しとは…」一瞬は道路上に戻りかけた意識が再び別の思考へと向かう。しかし暴動で横流しされたロシア陸軍の武器が使用された事ではなかった、それが真実ならその件は欧州とロシアの間にまたしても緊張をもたらすのではないか、そんな漠然とした不安に、豪雪と前方の急行バスが巻き上げる雪煙で視界がかすみ、中を運転しているＥ６３／６３０ｉのハンドルを握る手に力が入るのを感じる。思わず力が入った足が、バルブトロニック付きＮ５２ＤＯＨＣエンジンの回転数を上げた。

２０１３年　２月１０日　東シナ海　１６時２０分

暮れなずむ初春の東シナ海、日本の対馬から…まあ領海１２カイリ分は少なくとも離れているが…それほど離れていない海域の米韓海軍共同軍事演習の今日の日程も、無事終了しようとしていた。数日前から後半の日程として行われている、アメリカ合衆国国防省とロッキード・マーティン社が開発した訓練用囮（デコイ）とクローンのひこうポケモンを使用した航空要撃訓練、韓国海軍揚陸艦「独島（ドクト）」所属の

対潜ヘリＳＨ－６０…遅れていた防塩処理を施し、ようやく外界での演習に参加できるようになった…しの援護や空母部隊に奇襲をかける対艦航空部隊に対する迎撃を想定したものだ。航空部隊に対しては一般的な軍事ヘリは丸腰同然であり、ひとたびＡＡＭ（対空ミサイル）に捕捉されたら脅威回避用熱源であるフレアを投下しない限り、一撃で撃墜されてしまう。米海軍の空母「ロナルド・レーガン」所属の航空部隊に配属されているＦ－３５ＣとＦ／Ａ－１８Ｅのパイロットたちは、実戦さながらで飛び回る（とはいっても囮の飛行物体である以上、時速は４００キロ前後である）デコイやポケモンをＡＡＭ－９赤外線アクティブ誘導短距離ミサイルで惜しむことなく攻撃し、訓練のメニューを忠実にこなす。その間米海軍のダイゴンンデロガ級ミサイル巡洋艦「チャンセラーズビル」や韓国海軍の世宗大王級ミサイル駆逐艦「栗谷李耳（セジョンデワン・ユルゴク・イ・イ）」をはじめとする護衛艦隊部隊も、各艦個別のＡＩＭ－２スタンダード対空ミサイルとＭ６１Ａ１・６連装２０ミリ機関砲…アメリカのレイセオン・システム社の開発したこの自動防空システムは世界各国の海軍艦艇で用いられている…をはじめとするファランクス・システムを用いた空対艦ミサイルと航空機の迎撃訓練を行った。

高度１５０００フィート上空、空母「ロナルド・レーガン」への着艦体制へと移行するため降下していくＦ／Ａ－１８ＥとＦ－３５Ｃの部隊。ここまで薄暗くなってくると、光の吸収によってもともとから青く見える海面の暗さによって空母や駆逐艦の姿が海面の影と同じになってしまう。これに加えて西の水平線上に沈む夕日が逆行となってコクピットのＨＵＤを通して見える前方の風景はさらに暗さをまし、目視による着艦は極めて困難になる。パイロットたちはコンソールを操作し、着陸装置（ランディングギア）、フラップ、エレベータ（水平尾翼）及びトリムタブ（エレベータの端についている微調整用の水平

尾翼）の油圧量（ハイドロプレッシャ）と電気系統の確認、着艦ワイヤーの降下確認、ＧＰＷＳ（対地高度警報装置）やＩＬＳ（計器誘導着陸装置）の動作確認、火器管制システムのロックを順次確認していく。中でも重要なのはＩＬＳシステムである。着陸時には自動操縦装置（オートパイロットシステム）は使用できない、地上やメガフロートの空港に降りるにしても海上を移動する航空母艦に降りるにしても、速度を十分に搾りわざと揚力を落とす着陸という動作では、小は自家用プロペラ機や大企業のビジネスジェット機から大は旅客機、大型機械貨物機、ＳＳＴＯスペースシャトル（シャトルの場合は無推力で軌道上から降りてくるが）までわずかな風向き、風量、エンジンや飛行機器の調子、気圧や気流の変化によっても、そもそも軽く作られている航空機の機体の挙動が変わる。ハイテク機器の塊である軍用機も例外にもれず、制御機器が発達した現代でも着陸の際の着陸脚損傷（ランディングギア）、しりもち事故、果てには墜落などは少なくない。官民問わず航空界では着陸の８分と離陸の３分は“魔の１１分”と呼ばれるもっとも自己リスクが高まる時間と言われている。同時に、航空機を操縦するパイロットの技量が真に問われる瞬間でもある。

　パイロットたちは無線機から聞こえてくる空母航空管制室オペレータの指示で順次計器類をチェックしていった。目の前にある計器類や大型ディスプレイの星空から一瞬目をそらすと、強化繊維ガラスのキャノピー越しに広がる眼下の海面にも、空から落ちてきた流れ星が海面に浮かんだかのごとく青白や赤褐色の光が並んでいることが理解できる。アメリカ、イギリス（ＢＰオイル社はイギリス連邦の資源採掘企業である）、ロシア連邦、中国、韓国、日本などの資源採掘プラント・精錬工場や輸送船からの光と、海上プラントの構造物への航空激突警戒灯（↑高層ビルの先端で点滅する赤い光と同じ）だ。

再び航空無線の受信を示す音声が鳴り響き、１機のＦ／Ａ－１８Ｅのパイロットは左手でつかんでいる推力（巣ラスタ）レバーに付いている無線機周波数調整ツマミをわずかに指で動かす。今回の演習で艦隊と航空機部隊の援護に付いていた電子戦機、ＥＡ－６Ｂ：その名の通りかの艦載攻撃機、Ａ－６イントルダーがベースである：が着陸態勢に入ったようだ。米国海軍のニミッツ級空母は離陸に関しては蒸気圧カタパルト（国連統合海軍直属の２艦は電磁（リニア）カタパルトが標準装備）から２機同時射出ができるが、着陸は当然のことながら１機ずつとなる。通常は前も持って設定されたフライトプランに基づく部隊順だが、場合によっては着陸は燃料残量の少ない機体から、もしくは航空管制室の管制システムが各機のトランスポンダやパイロットからの無線報告を介して機体のトラブルや損傷状況に応じての順番でのものに変わる。パイロットは推力を絞って降下させつつ、空母の上空を４機編隊の小隊長（ウィングリーダー）に続いて輪を描いた。周囲の海上に広がっていた民間の船舶や採掘プラントの明かりが徐々に平坦となって視界から少なくなり、自分の愛する翼が眼下に存在する航空母艦、愛しき故郷を目指すが如く艦隊の明かりがわずかずつではあるが近づいてくる。いつの間にかこの男も、眼下の航空母艦が自分の航空機と同じような故郷に思える、そういう心自身の心情に気付いた。

そんな中、Ｆ／Ａ－１８Ｅの計器類を調べていた男の目線が、多機能レーダーの画面を覗き込んでふと止まる。索敵範囲の限界ギリギリ、艦隊から８０キロ北西の地点に海上の目標を示す輝点（ブリップ）が表示されているのだ。そのデータは直ちに空母「ロナルド・レーガン」やアーレイバーグ級イージス艦「ディケーター」の索敵データと照合され、レーダーディスプレイ上に結果が表示される。
中国海軍の空母「海龍（ハイロン）」と護衛する駆逐艦一（中国の同系列の駆逐艦やフリゲート艦は無数に存在し、その全てを分析・識別するのは

アメリカをもってしても不可能だった）である。そして中国らしいと言えばそうではあるが、周囲にいる民間貨物船の航路と交差しているのにお構いなしで航海を続けている。……やはり彼らは米韓合同艦隊の演習に合わせるように公開を行っているのであろう。名目上は公開試験というだろうが、実際の目的は実力誇示（パフォーマンス）と合同演習に対するけん制目的に（アメリカ・韓国の今回の行動も中国に対するけん制目的でもあるが）違いない。パイロットはそう思った。

海面を、空を、人間の文明の物体を橙色に染めていたら落日もとうに失せ、星空と人類が宇宙へと地球から投げ入れた物体が放つ光がちりばめられた漆黒の夜空が全てを飲み込んでゆく。この海周囲は今日もまた穏やかとは言えなかった。ここの北部、日本海（東海）の北端でのロシア軍航空機の中国領空への侵入未遂、ここの南部、沖縄沖での中国漁船の日本領海侵入と、海上保安庁の巡視船による乗組員の身柄拘束が相変わらず発生している。今頃は関係諸国の通信ホットラインが鳴り、インターネット上の掲示板サイトでは斜に構えた人間たちが適当な意見を書きこんでいるのだろう。流れゆくときの中で人間たちは、今日もなお模索と混迷を続けていた。

２０１３年　２月１１日　エメリア　ソーラ地域　パルク州　国連施設　０５時３０分

夜も明けつつある国連軍側の本部指令施設にあたる５階建ての建物、この軍基地の実質の司令官に当たるアメリカ軍の将校は、不機嫌そうに会議室の円卓にある椅子に座り込む。隣にはやはり深刻そうな顔をした国連統合空軍指令兼軍施設全体の指令にあたる男、ＵＮＦＳＴＰＰＴの実働調査を担当する国連機関の関係者たちが同じように座って話し込んだり、円卓の座席の前に内蔵されたディスプレイを見つめたりしている。発生した事態は極めてゆゆしい物だ、

即急な対策を今すぐにでも始めたいところだが、にもかかわらずそれを担当する連中はまだ来ない。各員の焦燥といらだちは募るばかりだった……

都合（前書き）

お待たせいたしました、第５５話投稿です（↑ってどっかの飲食店かよ？）

都合

結局大した休みも与えられずに戻ってきた7匹、こんな夜も明けたばかりの早朝にたたき起こされてかなり眠そうだ。サクラはそんな一匹一匹の姿を見てからわずかに手を動かし、プロジェクターの電源を入れる。それとほとんど同時に室内の照明が降り、スクリーンが降りた。

（以下は映像内の通達内容）

ゆゆしき事態だ、アメリカの生命工学企業最大手ＧＢＴＸ社のネットワークサーバが外部から侵入され、当社と関連する大手ロボット生産企業の重要データの一部が別ファイルとなって外部に持ち出された。アメリカ当局はただちに侵入したファイルのアドレスから端末と利用者を断定、該当するアドレスと該当するファイルが添付されているアドレスによる一切のアクセスを世界全てのサーバから遮断し、身柄の拘束へ向け警察が動いている。当該の人物は中国系のハッカーグループの一員であることが電子戸籍データの調査で判明している。ネットワーク操作から彼らとグループの行動を特定した、彼等は車両を使ってシアトルから西海岸沿岸の高速道路を利用してサンフランシスコ経由でＵＳＢデバイスをもってメキシコへ逃走、メキシコ経由でキューバへ向かう方向とカナダ・バンクーバー経由で中国へと空路で逃走する2段構えだ、送信を遮断された現在、彼等はデータをハードウェアで直接外部へと持ち出す算段らしい。キューバは旧ソ連時代から共産主義諸国と親密な関係にあり、そこから中国政府内部の機関に旧ソ連時代に建設された基地の暗号通信機からデータを送信するようだ。１９６２年に極秘裏に建設された旧ソ連の核兵器貯蔵施設での極秘通信に利用されていた機器ではあ

るが、現在のアメリカの技術をもってしても解読に手間を要する厄介な機器である。冷戦終了とともに廃棄されたものと思われていたが、統合軍の軍事衛星により、発信機器が実用状態に入っていると断定された。そちらに対してもアメリカ軍の海兵隊特殊部隊が関係者の拘束へと動いている。

空路と海路のセキュリティーと比べ、高速道路網のセキュリティーは確実性の面で劣っている。警察の検問と封鎖線のみで完全に防衛しきれる保証はない、ロボットやクローン兵士で広く使用される機器、素材、プログラム、電子回路、実験記録など最先端技術の機密データを多く含むこの情報が流出すれば、アメリカ合衆国の国防はおろか、アジア・太平洋地域の軍事バランスに深刻な悪影響を及ぼす恐れは極めて高い。

諸君らはバンクーバー方面とサンフランシスコ方面の二手に別の機体で向かい、地元警察当局の被疑者確保、緊急の際は殺害を支援せよ。バックアップデータは既に確保されているため、緊急時には被疑者の乗る車両ごと破壊しても構わない。データの中国への流出は何としてでも阻止しろ。状況は刻々と変化している、細かい指示に関してはアラスカの統合軍司令部より随時送るのでそのつもりでいるように。

なお、今回の任務の内容、任務中に見聞きした企業や国家に関する機密情報を保持を厳守するように。階級、役職、立場を問わず、人間、ポケモン如何なる他者に対する口外を、口頭、文面、インターネットのネットワーク上、その他の通信機器での交信、あらゆる手段で今後一切禁ずる。

「一切禁ずるって…口頭以外でできちゃう人はどうするんですか？」映像が停止すると同時にメガニウムが、右のツルを軽く動かしながら薄笑いを浮かべる。「あのねえ、あなた寝ぼけて聞いてるの？あ

なた達2匹は気を付けてれば大丈夫でしょうに…」サクラはそんな彼女に、子供の行為に対する親の呆れ顔を送り、そんなものに構ってられないという態度で右手をわずかに動かす。このサーナイト種族が送りだしたサイコパワーが、スクリーンとプロジェクターの操作インターフェイス…すなわちコンソールや表示液晶…の回路にデンリュウを送り込み、コンソールを叩いて機械を動かしているのと同じような結果をもたらしているのだ。「はーい…」「全くあなたは…気まずくしないようになんて今いらないのよ…」サクラには分かった、ユイリィが冗談を言っているつもりはない、通達の中で読み取れた言いようのない不安感と不信を紛らわせるため、周囲を包むであろう不穏な空気を紛らわせるためにわざと言っているのだろうと。サクラ・フユツキとて今回やってきた突然の指示には不信感を感じずにはいられなかった。現在の人間社会では深刻であれなんであれ、最先端文明の一角である情報空間からのデータ流出やシステム破壊はよくある事件ではないのか?世界各国の大手企業や国家機関サーバに対する、コンピュータウイルスによるデータ破壊、ハッキング、情報流出さえ珍しい事ではない。にもかかわらず通信記録やアクセス端末のアドレスと使用者を割りだし、空港、港湾、高速道路を検問してまで流出を阻止し、該当アドレスの送受信を停止してまで守り抜きたい情報とは果たして何なのか?

ただし、このサーナイトはその懸念を口に出すのは避けた。彼女の意識の水晶の中には、この任務を繋ぐ無数の流れの先にある物、それに一抹の不安を感じざる負えなかったが、あくまで未来というものは変化する者、そしてそれに感情を左右されることは時間の浪費と精神的な負担にしかならない、そう彼女は解釈しているのだから。「という事で、今回はどう見てもわき役って事よ。だからアメリカの州警察や軍の指示に従って臨機応変に行動すること。いいわね?」

「まったく、結局は人間連中が面倒なお仕事を手伝うってわけですか…その程度の仕事だったら人間たちだけで十分…」「バーカ、

それだけ俺らの面を人間に見せつけられるチャンスなんだぜこれは。リーヒュンと俺でポケモン達は柔くねえって事、見せつけてやろうぜ」リーヒュンが直感的にサクラの考えている事を感じ、目をこすってから怪訝そうにあたりを見回す。またしても人間たちの、しかも今度は特定の国家のよく分からない技術に関する仕事、このベイリーフは本気で思うようになった。今まで自分が見てきたのはほんの一部でしかないだろうが、人間の科学技術といい社会システムといい、あの文明が作り出す者は皆複雑で、巨大で、身の丈をはるかに超えていると。ブレイブは相変わらず人間に対する不信感を露骨に表情に示す彼の背中に飛び乗る。このブースターにしてみれば内容が何であれ、自分の能力を存分に出すことができる。何より一行で各地を飛び回れること、それだけでブレイブ・クレイバーには嬉しい事なのだ。「相変わらずだよなブレイブは、それはそれでいいんだけどさ…」「だろ?!お前らと一緒なら、俺はどこまでもぶっ飛ばせる」ブースターの表情とフサフサ尻尾がその先の台詞に対する喜びを存分に表す。「…そして…そしてな、女の子も腹いっぱい!だろユイ!?俺と一緒に付いてきてくれるよな?!」「うん!もちろん……」ユイリィがベイリーフの背中に乗ったブースターのそばに寄り、ツルで彼の頭のフサフサをぐいぐい押しだす。「…ついてくけどウチの相手はリーヒュンって決まってるもんね!」「うげっ…また勝手に…まあいいけどな」体重を自分の方にかけてくるメガニウムに閉口するベイリーフ、異性のすり寄りなど経験したこともなかったし、彼女がしてくるまでそんな事は想像すらしていなかった、相変わらず彼にとっては女の子の相手をするのはどうも気が引けることである。「そ、そんなことないだろユイちゃん!?俺はお前に何回プロポーズして…」「あはは!今までのってプロポーズだったんだあ?なかなかいい手法してるとは思ったけどね。なかなか面白かったよ、うん!」「ゆ、ユイ…」思いがけない彼女のスルーにちょっとだけへこんだかのように見えるブレイブは、リーヒュンの背中からユイリィのウグイス色の背中にぴょこんと飛び乗る。

しかし…「うおおお、その彼な男の子のパスさばき！それこそ俺の期待するユイの姿！」「でっしょー？さすがは肥えたブレイブの目だね、うん。お礼はむぎゅっと返しであげるよ」メガニウムが背中にツルを回し、ブースターの顔を自分のほっぺにこすり付ける。ブレイブにとっては何にも代えられない至福の瞬間、彼のテンションも水が沸騰するが如く急上昇だ。「やっべえええ！ユイのモチモチほっぺが半端ねえ！俺は今最高に感動してる！……」

「わわ…何でブレイブはこうやって…」興奮に体を揺らすブースターの背中にしがみついていたイーブイ種族のミオカ、彼女は慌てて隣のベイリーフの首に飛び付いた。彼の方はイーブイを背中にツルをかけて彼女を抱える。「ミオカも大変だよな…いろいろと…いや、面白い皆とやれてさ…」「い、いえ…私は全然大丈夫です、あの方が私も元気になりますし」イーブイはブースターの方を見て笑顔を見せた。ミオカ・ソウヨウにも今後に対する不安は多くある、ブレイブやテルルといる事はとても支えになるから。

「ああもう何やってんだお前らは…」相変わらずくだらないふざけっこにいら立ったアメリカ空軍の関係者の人間が、思わず身を座席から乗り出す。「お前らがするのはくだらんじゃれあいじゃねえんだ！わが合衆国の重大機密を物理的に盗み出される以前に、我々エメリア方面軍幹部の出世がかかってるんだ！真面目にやらんかマジメに！？」「まったく貴様らという獣は！こんな連中に頼む前に、高速道路の封鎖と検問と銃撃をこなせるセキュリティーロボットの一体や二体くらいｉｒｏｂｏｔは……」「分かった分かった、アメリカ合衆国の意見はよく理解している…」「理解しているんだったら、こんな連中より自前の特殊強襲部隊を編成してほしいですな司令官！」たしなめようとした国連統合軍関係者の前にアメリカの男の片方がタブレット端末を突き出して指差す。「統合軍は常任理事

国の派遣部隊の動向に左右されすぎですよ。中国やロシアの理解なぞアメリカやイギリスは期待してませんけどね、こういう緊急事態時のためにＳＥＡＬＳ（シールズ：アメリカ海兵隊特殊部隊）１チーム位はせいぜい部隊を用意しないで、国連上層人物が万が一の事態にあった場合でも対応が取れる…」

「それは知っていまけどね…我々だって加盟国が資金を予定通り毎年毎年出してくれれば安全保障理事会の軍も独自装備の調達が早いんですよ、こんな汚らしい半文明生物に金払う以前に！！……」苛立った国連関係者の男もアメリカ軍の人間の鼻元に人差し指を突きつける。この男が言っている事はあながち間違いではない、旧国際連合時代から各国が連合の予算となるはずの支出金の滞納や金額不足は常識で、常に国際連合と直属機関の活動の妨げとなっていた。そしてその大半の要因は米英仏をはじめとする西側陣営と中露をはじめとする東側陣営の対立や、大国の内政事情によるものだった。そしてその状況は新国際連合となった現在でも、事態は改善はすれど解決する気配はなく、むしろ経済成長で大国と肩を並べるようになったインド、ブラジル、ドイツ、日本といった非常任理事国の大国・新興工業国の思惑も加わって一層複雑になっていた。予算不足の影響を受けるのは統合軍や地球社会での安全保障機関も例外ではない、統合軍の国連直轄の部隊が少ないのはこの予算の問題にも起因しているのだ。

「ちっ…何言ってやがんだてめえら！？俺らだって誰が好き好んでこんな場所にいると思ってんだおら？！」こんな場所でも繰り広げられる大国と国際統治機関の攻防、くだらない人間同士の言い争いにマジ切れしたブレイブが、顔を真っ赤にして彼らのいる卓上の方に飛び掛かる。英語を理解できる彼にとって、自分たちを転がり込んだ家畜のように扱われている事実に我慢が効かなかった。「……

貴様あ……ロクな任務も遂行できねえくせに、どの性分で存亡の危機にあるアメリカ合衆国へ物申しているつもりだ?!」ブースターの態度に怒り狂う男が卓をばしんと叩いて立ち上がり（その衝撃で内蔵されたコンソールとディスプレイが危うく壊れそうになった）、衝撃で跳ね飛んだコーヒーカップの中身が彼の顔面を洗う。「ロクな任務だあ?!てめえらがロクなことさせねえからに決まってんだろうがっ!?」完全に感情の原子炉が制御不能（アンコントローラブル）に陥ったブレイブ・クレイバーが、目の前に倒れたコーヒーカップを横に跳ね飛ばしてその男に顔をグイッと近づける。このブースターの目は、意識の水晶の内部から暴走して溢れた気体のもたらす殺気に満ち溢れ、目の前にいる人間が、目の前で自分に拳銃を突きつけてくる文明生物が、今の彼には殺すべき対象にしか見えなかった。掴みかかってその首をねじ折ってやる、危険な衝動に前足の拳が鳴るのを感じた。「やめろってのブレイブ!ここでやったら…」「んだとおい!!こいつらが何言ってんのか分かってんのかお前は?!」後ろから前足で飛びつく親友のベイリーフに、彼は目に殺意に近い感情を浮かべたまま右前足で人間たちを指差す。そう、リーヒュンには英語は理解できない、だから普段の彼だったらツルで絞めにかかるであろう態度を彼は看過しているのだ。親友がいかに人間の常識論に敵意を抱いているのか、このブースターには理解できている。しかし今のブレイブにそれを考慮する感情的余裕は全くなかった。リーヒュンに全てを、この人間たちが何を言っているのか（多少感情任せの拡大解釈もあったが）、全てを告げてしまった。「…どういう事だよ?」「こいつらはな、ポケモンを殺すが俺らの定めっつってんだよおい!俺らは人間にも自然に価値がない文明生物、死んでくれた方が得だってんだこいつらは!」

その1秒後、頭頂高が1．5メートル以上、いつメガニウム種族に進化してもおかしくない大きさになっているベイリーフが卓上に前足を叩きつけ、その衝撃か、それとも彼も持つ能力か何かのせいか、周辺にある機器が火花を散らした。「……何言ってるつもりだ

おい?!好き好んで誰が同じ文明をぶっ壊すってんだっ!!??」

「てめえら…何をさっきから…」「それは脅しかよ…?…よくもまあ…」リーヒュンに見下ろされる形となったアメリカ軍の人間が突きつけたベレッタM92、しかし彼はツルでそれを掴み、瞬時にしてそれを強烈な力で捻じ曲げはじめた。「貴様……よくも…」男は信じられぬ力で銃身を破壊するこのベイリーフに恐怖を感じつつも、何とかトリガーに指をかける事は保った。

目の前にいる彼の瞳の奥は強烈な感情の前に制御を失っている、野生の本能に（この文明生物は人間と比べてまだ動物に近い）近い捕食への欲求を放っているかのごとくこの人間には見えた。これがリーヒュン・バイリング・グリーズが持つ本能、いや周囲にいる全員はそれ以上に持っている野蛮な闘争心なのだ、そう思った。

「やめろっ!」統合陸軍の関係者がタブレット端末を横に投げ捨て、拳銃を抜くと同時に、周辺を固めていた兵士が一斉に彼らに向けてM16A5アサルトライフルを突きつける。しかし2匹で終わるどころか、ベイリーフとブースターを突き飛ばすようにもう1匹がテーブルに飛び上がり、統合軍の関係者に右前足を突きつけた。「お前もやる気か…体調を代行している貴様が…お笑い草だな…」「どっちがお笑い草でしょうよ……はあ?…私たちが役に立たないと…ここまでさせられながらまだ足りないと?……」「…足りない?国連から見れば貴様らのやっている事に十分はない、アンタらの仕事はいつでも中途半端で終わるんだがな…」国連関係者が拳銃の先をテルルの頭飾りに向ける。しかしこの言葉が止めになるはずもなく、むしろテルル・アストラフスキーの意識の水晶と感情の原子炉を刺激してしまった。さっきから自分の都合を、人間本来の傲慢な感情をさらけ出すこの男たちにこのグレイシアが感じるものはただ一つ、昔からそうであり、今もそうであり、これからもそうであろう、幼

少時代に彼女の意識の水晶に傷を与えた経験から生まれた感情にすぎなかった。「……ふざんけじゃないわよこのゴミクズ生物!?さっさとくたばりなさいよこのバカっ!!」

ばしっ!振りあがったグレイシアの右前足の付け根を押さえつけた薄いウグイス色の右手。「テルル…もういいのよ、あなたは隊長でしょ、こんなところで感情的になってどうするのよ?」「ですけど!……あ…しかし…でも…」「そうよ…落ち着いて、あなた達のこれまでの任務、私たちは十分に認められるから……」

たったそれだけ、サクラのその言葉と右前足に伝わる優しい感覚、それだけでテルルの意識下にあった風船は一気にしぼんだ。殺気と激しい感情に包まれていた周囲の景色が再び明るくなり、テルルは自分の浅はかさで足の先までが疼く。これでも自分は隊長なのだろうか?自分はサクラの評価と期待にこれで答え、今彼女が言った説得にも似たそれにふさわしい存在になれるのだろうか?果てしない罪悪感と嫌悪が彼女の意識の水晶を見たし、それに自分の感情がおぼれているが如く目の前の景色がぐらついた。「……すいません…ワタシは所詮……」「大丈夫よテルル、あなたがそうやって前に進めるんだったら、いつかは周囲も分かってくれる。出てくる結果を焦っちゃいけないの。いい?」サーナイトはグレイシアを卓上から降ろし、乱れたもみあげ状の飾りを両手で直してやる。「……はい……すいませんでした…」尻尾や耳が下を向いたままの彼女は、軽くため息をつき、体をぴくりと震わせてから後ろに下がった。自己嫌悪なるものが彼女の意識の水晶を隙間なく埋め、眠気と疲労感が滝となってグレイシアの水晶を襲う。

「それで…あなた達もそう前に出ないの。ほらほら後ろに下がる、今は主義主張を気にする場所じゃないでしょうに」サクラはその様子を見つめていたブースターとベイリーフを後ろに下げる作業に取り掛かる。どうやらサクラの冷静な対応に拍子抜けしたか、2匹ともその場で固まっていた。「しかし彼らがそう言うんだったら…」「それは後で言っておくわよ。ここで食い下がったら話が進まない

でしょ？」「でも……」

「リーヒュン、分かる？ここはもういいわよ…」なおもツルで人間たちを示すリーヒュンの首元に、サクラはそっと右手を当て少しだけ口調を厳しくする。「あなたは自分のすべきことに集中するの、いい？」「……それは…分かります」彼は周囲にいる人間をもう一度だけ一瞥し、ゆっくりと後ろに下がる。「だったらそういう事なのよ、ええ、そうね。ユイ、この子を頼むわね。少なくともあなたが年上なんだから」「はい…そうだよねリーヒュン、もういいんだよね？」「う…まあ…これ以上荒げはしないさ…」無理に作ったような笑顔で自分の左前足の付け根あたりを軽くつつくメガニウムに、ベイリーフはわずかに頷いた。「そう、そうだよね、うん」その彼の表情からユイリィは（首元の花びらのすぐ上にイーブイのミオカがしがみついている）に多くの物を感じる。それは同情でもあるし、彼の子供っぽさに対する可笑しさでもあり、同時に素直さに対する純粋な感心でもあった。本来だったら“そうこなくっちゃ”とリーヒュンに飛び掛かっている所だが、ユイリィにはそれ位をわきまえる常識はある。しかしこのメガニウムの意識の水晶の中にある、このベイリーフに対するある種の信頼は、以前にもまして膨らんだ。なぜだかは彼女自身にもわからないが、少なくとも自分の感情を忠実に表せる彼に対する憧れか、それとも羨望の思いに近い物と彼女には感じられた。

「いずれにせよ、指示があった通りに今回はサンフランシスコ方面とバンクーバー方面に分かれることになるの。エドワーズ空港でバンクーバー方面へ行くグループは民間機で空港入りしてもらうわ。最終決定は統合軍の上層部がやっている能力分析の結果から決定されるの。たぶんエドワーズ空港で指定されると思から、まずはエドワーズ空港へ向かう事ね」サクラはとりあえずは落ち着かせた一行

を見回す。いつもだったらブレイブ辺りが大騒ぎになるところだが、今日のブースターは疲れと先ほどの件で相当へこみ、ユイリィの方も彼らに配慮してかいつもの調子で言葉を発しようとはしなかった。とはいっても一行の間を流れる重苦しい空気の大半は（グラシデアとロックオンとチェギョンは、終始こくりこくりとしている）、ガラテアの湿地帯における捜索からくる数日間の疲労によるものであった。

「まったく…ポケモンとやらはどこまでも常識をわきまえない生物だな…」アメリカ軍の関係者がコーヒーカップを戻し、タオルでこぼれ出た液体をふき取る。「全く持ってだな…フユツキ少将、これはアンタの教育不行届きだ……」国連統合軍の男が彼に同意し、タブレット端末を拾い上げる。「…今回の件に対する処分はこの任務が終了後、統合軍、並びに安保理事会から言い渡されるだろう。厳しき沙汰を覚悟するんだな」

「それは…もちろんの事です」サクラは人間たちの方を向き、一応は反省したように軽く頭を下げておいたが、内心は人間たちの虚勢張った態度に呆れていた。まあ何を言ったところで人間という生物の態度が直るとは期待していないし、彼等の方にも非があるのは事実だが、はっきり言って彼らを怒らせたのは人間たちの方の言動である、それを棚上げに彼らを教育不行届きなどと決めつけるのはいかがなものか、彼女の意識の水晶内部ではそう冷静に分析していた。

２０１３年　２月１１日　ドイツ・ハンブルク　１７時１５分

ドイツ最大の港湾を持つハンブルク市、無数のコンテナクレーンと

作業ヤード、停泊する大型コンテナ船や資源輸送船…ＬＮＧ，石炭、鉄鉱石、メタン、ウラン、トリウム、マグネシウム、水素、ボーキサイド、海底マンガン等資源の数とそれを運ぶ大型船舶の種類を挙げればきりがない…の明かりが暮れゆくハンブルク市の一角を真昼の如く照らし出している。

無数のコンテナ貨物船やＬＮＧタンカーが停泊する岸壁を一望できるハンブルク港のトレーラーヤードの一部は物々しいまでの雰囲気に包まれていた。無数の警察車両に囲まれているドイツ・メルセデスベンツ社製のアクトロス後期型２５３８トレーラー2台の周囲には濃紺のコートを着込んで無線機を耳に装着し、スタンガンやアサルトライフルで武装した警察官の人間が２０人以上立ち、港湾関係者や海運・陸運企業の関係者すら周囲には近寄れない状況となっている。企業のロゴも文字も一切入っていないトレーラーの積み荷、ここには韓国の企業連合アメリカのＧＥ社（ゼネラル・エレクトリック）と共同でポーランドへと輸出する重要物品が入っている。ポーランドのエネルギーエンジニアリング企業であるＥＷ社（エネルゴプロジェクト・ワルシャワ）が建築中の原子力発電所の、原子炉緊急冷却装置の部品だ。

「それで…韓国からの同行者２人の件ですが……」警備車両にアクトロス２５３８トレーラーの前に停止しているＥＷ社の小型自動車から黒いコートを着た長身の男が降り、携帯情報端末を耳に当てる。

「…万が一の事がなければ、そちら側に報告することも特にないという事でいいですね？」“ええ、そう対応してＯＫよ”電話の相手はＥＵ対外行動局に所属するあの女である。“あと…本日付でＥＵ（ヨーロッパ連合）の承認で私たちの組織はＥＵ対外行動局から離れ、ヨーロッパ特別連合諜報局（ＥＳＵＩＳ）として独立することになったわ”

「ついに各国軍を利用できる独立組織が誕生したわけですか…それでドイツ軍からは特殊部隊の自分たちが正式に、という訳ですね？」“そうよ、これでヨーロッパもこの所の物騒な世界に探りを入れられるって事”「なるほど…」緊急時に備えてＥＷ社の車列に同行し

ている、ドイツ陸軍特殊部隊の男が一瞬携帯端末を耳から離し、多くのコンテナ船が貨物の積み下ろしを行う岸壁と、背後に広がるライン川のドーバー海峡へと?がる河口に位置するハンブルクの海面を見つめる。彼が思っている以上にヨーロッパにおける展開は早いようだ。ギリシャでの暴動、韓国がポーランドで行う原発建設でのテロ懸念、イギリス・フランスの合弁企業であるニューロン・コンピュータ社によるロシア軍機関への量子回路用電子部品の輸出疑惑と問題が続出している。そして何より、数日前からイタリアにまで拡散しつつある財政問題から発展した経済危機の波紋とその裏で各国の財政資金繰りで暗躍する中東エネルギー国やアメリカの金融機関、場合によっては軍の特殊部隊を利用しなければならい程の重大な事象に発展する可能性もある。そしてその背後に国連が関与している可能性、事態を重く見たＥＵ本部は１１日付で、対外行動局の外部機関としての特別諜報組織であるＥＳＵＩＳの編成を承認、即日でＥＵ対外行動局から選抜された関係者…もちろんその職務と選抜された事実は厳重に秘匿されるが…を各役職に就かせた。これと同時に、ドイツ、フランス、ベルギー、イタリアの各国軍と政府の内部にＥＳＵＩＳの要請で行動する陸・海・空軍の特殊部隊を指定するよう要請、これによりＥＵは事実上のＥＵ（ヨーロッパ連合）軍を利用し、アメリカを軸とするＮＡＴＯとも独立して直接的な諜報活動や潜入工作を行う事が可能になったのだ。

男は無数の大型貨物船とコンテナクレーン、運送企業のトレーラー、作業車両が港湾関係者の人間たちに交じって眩しい照明に照らされる岸壁から視線を戻し、右手で目をこすってから端末を耳に当てる。“それで…どうなの?ハンブルク港経由の荷物はそちらに到着してる?”「はい、ちょうど船から降ろされて…今こっちに来ます」男は再度照明に照らされる岸壁の方に目をやる。少し離れたベースに

停泊している…その前方にも1隻別の貨物船が停泊していて見えにくいが…パナマックス級のコンテナ船から降ろされた、こちらのトレーラーと同じ塗色と大きさをしたコンテナが、アメリカのフォード社傘下であるボルボＦＨ／ＦＭ社のトラックに乗せられてこちらのトレーラーヤードへとやって来る。スカイブルーのつなぎ服に黄色い作業員用ヘルメットをした作業員と地元の警察官や港湾の警備関係者がその通り道の警戒に当たり、こちら側を固めていた警察官の代表者の男が数名向かっていく。「これで予定の物品はすべてそろいました。出発は日付が変わってからだと思います」

“了解したわ、この後も警備の方をよろしく頼むわね”電話越しの女の声が若干真剣な口調になる。“今回の機器の件、もとは北朝鮮との共同経済開発の一環として利用されるはずだったもののらしいの。シンガポールで北朝鮮の工作員らしき人間がコンテナ船に入ろうとして拘束されてるけど、どうやら後方に中国も関わってらしいわ。とにかく、今回の輸送に関しては色々と思惑が絡んでいるみたい”

「なるほど…さすがはスイスの銀行に金を入れ、指導者の子息をオックスフォードなんかに入れる国。ヨーロッパにも侵入はあり得るという事ですね、了解しました閣下、御心配なく」男は女を励ますように受話器に声を送る。“そう上手くいけばいいんだけど…さっきロシア政府から連絡があって……”「…何か？」口ごもる端末越しの女の声に男は眉をピクリと動かす。“チェコでのＮＡＴＯによるＭＤ（対戦略弾道ミサイル防衛システム）配備の件、ロシア側も駐留しているモルドバにミサイルの配備を行うと言っているのよ……”

男は端末を切った後にため息をつき、右足の靴先をコツコツとアスファルトに踏み鳴らす。ギリシャで発見されたロシア陸軍の火器、それのさらなる操作や売買ルートの確保をロシアに要請していたら今度は陸軍ミサイル部隊の配備問題が発生したのだ。まるで１９８年代後半の再来に似た事態に特殊部隊の男は憂鬱感を覚えながら、作業関係者と共に、少し離れた貨物船ベースに停泊する大型コンテ

ナ船から降ろしたばかりの原発関連機器を搭載したコンテナを乗せてゆっくりとやって来るアクトロス・トレーラーの方へと歩いていった。

その頃、チェコ首都、プラハ郊外　南西に３０キロ　１８時１５分

チェコ郊外に南西へ３０キロ、ブルゼニとの中間に位置する森林地帯、高速道路Ｅ５０号線に沿った地域の一角に突如現れた人工物。中欧・東欧地域の空路全体をカバーする巨大な御椀が、南太平洋のメガフロート群内に浮かぶ宇宙太陽光発電受信、エネルギー変換施設のパラボラと同じように列をなして並んでいる。チェコもドイツ、スイス、イタリアといったＥＵ主要経済国の中で原発の縮小を行っている…全廃止はどの国も時期が先送りされたが…電力を補うために原発の積極誘致を行っているが、この施設はチェコ政府がエネルギー開発企業と連携して建造した電力供給プラントでもなければ、西欧・北欧の大手企業の工場を誘致して作られる、経済成長戦略としての工業地帯でもない。

高速道路のＩＣから伸びる、本来なら郊外から都市へと延びる幹線道路といった雰囲気であるはずの道路の一角に突如出現した工場の営門を思わせる詰所、周辺の市民からも警備員が普段突っ立っているだけで何の動きもない変わった場所（インターネット内では何かと噂が立ってはいたが）だと思われていた場所は今日、ついに動きがあった。ドイツ・クルップ社の戦車トランスポーターであるＳＬＴ５０－３が数十台も警察車両に先導されてあらわれ、その検問所を通って施設の内部へと入り始めたのだ。敷地の周囲は高さ５，６メートルほどあるコンクリート製の壁に覆われ、無数の警戒カメラと赤外線センサで常時監視されており、周辺の市民はおろか反戦団体を支援するジャーナリストや各国のマスコミの間でもその内部は全く知られていない。巨大な白いパラボラだけが針葉樹林の合間から見える施設、ついに動き始めたのである。そして今までは民間の

警備会社の警備員や地元の警察官ばかりが警備にあたってきた場所に、ＮＡＴＯの兵士が現れた。その兵士の迷彩服の左腕には星条旗、そしてＳＬＴ５０－３とトレーラーが輸送している各種ユニットのカバーにも星条旗。

そう、彼等はアメリカ合衆国軍だ。そしてこの施設は、アメリカを主導とするＮＡＴＯ諸国が計画するＭＤ（戦略弾道ミサイル防衛システム）の中核となる対空、対宇宙レーダーとミサイル発射システム、それらを完成する防空司令部である。ＮＡＴＯ諸国、とくにドイツやフランスといったＥＵ加盟国は、ルーマニアやブルガリアのようにＥＵに加盟しながらもロシア軍が駐留するという事態に懸念を表明しており、１９９７年のユーゴスラビア紛争、１９９５年のコソボ内戦、２００８年のグルジアでの南オセチア侵攻といった冷戦以降も続く東欧・ロシア地域の混乱と相まってロシアに対する不信感は根強い。再三にわたるＮＡＴＯによるルーマニア、モルドバからのロシア軍撤退要請は当然のことながらロシア軍側の交渉拒否で決裂している。すなわちロシア政府はグルジア、ルーマニア、モルドバといった東欧・黒海周辺での影響力を自ら引くという選択肢はないという国際社会に向けた明らかな宣言である。

それともう一つ、西ヨーロッパの先進工業国を支えるエネルギー・資源、ことに天然ガスや原油の一大拠点としても黒海の海上プラント・精製設備からパイプラインは重大な経済的・政治的な意味双方を持っている。チェコやポーランド、スロバキアのように比較的ＥＵ側に近い国々はスウェーデン、イギリス、フランスと同じように原子力発電の積極的拡大を（もちろん自国の工業発展にも力を注いでいる）行い、地中海メガフロート“ソアリング３”の原発や北アフリカの砂漠地帯のメガソーラー発電所から海底の超伝導ケーブルを通過する電力網の拡大を行っているとはいえ、いまだにロシア方

面からの原発によるエネルギー、火力発電所用の天然ガス、自動車やその他の工場でも必要な原油と言った資源・エネルギーの多くは大きな比率を占めている。ロシアの影響力をここに残すという事は、ロシアにとっては1つの政治的な外交カードを手札に加えていつでも場に出せるという事だ。経済や生産活動、それに関連する国家間の経済提携や技術成長戦略などがその国家の国際社会における地位を決定づける現在、このカードを持つ価値は極めて大きい。

その分ＥＵ諸国との対立は深まるばかりだった。ＥＵ側…事にドイツ…から見れば、ロシア軍が国会周辺の諸国に駐留しているという事は、万が一欧州とロシアの間に外交問題が生じた場合にいつでも軍事圧力をかけられるという意思表示に他ならない。事実、ロシア軍がルーマニア、モルドバ、グルジア、に駐留させている陸、海、空の部隊数だけで各々数個師団である。民族の対立で現在でも政情不安定な国々も少なくない黒海周辺・バルカン半島の国家の政情に合わせて行動し、言いがかりをつければ、ロシア本土の部隊の展開速度に乗ってユーゴスラビア、セルビア、ウクライナ、スロバキア、ベラルーシ、ポーランドにまで一気に進出できる規模だ。それなれば東西冷静構造の再来は目に見ており、ＮＡＴＯ陣営としても無策でいるわけにはいかない。欧州各国…ことに米軍や英軍を駐屯させ、イタリアやドイツをはじめとするＥＵ諸国の軍の増強を促し、ＮＡＴＯ陣営側の会議機構を残すのは当然の結果である。欧州の治安と政治的安定…ひいてはアメリカとカナダを含む西側諸国経済活動圏の安全保障…のさらなる一手として計画が進められてきたのがＭＤ（弾道ミサイル防衛）システム、すなわち現在も残り続けるロシアの弾道ミサイルの存在と言うリスクに対処する手段なのだ。手始めとしてロシア・東欧陣営よりではない中欧・東欧諸国、つまりチェコ、オーストリア、スロベニアなどにアメリカ率いるＮＡＴＯ陸軍の駐留施設、及び弾道ミサイル防衛用ＰＡＣ３ミサイルユニットとヨーロッパ全空域防衛レーダー網の構築である。最初に配備の始まったチェコのレーダー・対空防衛施設は順次拡張が進められており、

最終的にはアメリカ本土の空軍部隊から派遣された弾道飛行圏における戦略ミサイル迎撃の特殊航空部隊の展開も行う予定だ。

ただし、これに伴うチェコをはじめとする中欧諸国世論の反応は五分五分であった。アメリカをはじめとするＮＡＴＯ陣営との友好関係は、自国も懸念するロシアの軍事圧力、エネルギー・資源輸送ラインの掌握から自国の安全保障や経済活動の保障の確立に貢献し、強大な欧米諸国の企業工場の誘致といった経済活動での副次効果も期待できる。しかしその一方で、現在の中欧経済におけるロシアとそれに関連する企業の影響力は強く、万が一そちらとの友好関係が破たんした場合の経済・外交政治双方の影響を考慮する根強い反対論もあった。特に政治家層では旧ソ連・ＷＴＯ（ワルシャワ条約機構）の時代からロシアとコンタクトを持った政治家も多く、一度は対立関係にあったＮＡＴＯ（北大西洋条約機構）の軍事勢力を迎えることに対する強い不信感があった。

こうした政情・世論はＮＡＴＯ本来の目論見である中央における一大ミサイル防空網の構築と陸上部隊駐屯地の建設という計画を根本的に揺るがし、金融危機による欧米社会での不況と財政問題、それに伴うチェコでの国民投票によるＭＤ施設の建設が否決されたことで一時は完全に頓挫しかけたことすらあった。とはいってもＮＡＴＯ陣営としてはロシア軍の軍拡…ひいては経済を支える資源輸送ルートの圧迫…を黙って看過するわけにもいかず、２０１１年末にようやく中途半端かつ縮小された規模ではあるが、ＮＡＴＯ陣営によるＭＤ施設・ミサイル迎撃航空部隊基地建設の承認、並びに一部地域でのＮＡＴＯ諸国陸軍部隊の駐留が許可された。世論が多少なりともそちらに傾いた原因は、近年のロシアの軍事活動が急速に周辺諸国へと拡大していること、世界的なエネルギー需要の急増と価格の高騰により、以前にもましてロシアが国際社会でエネルギーパイ

プラインの存在を外交カードで振り出してくるようになった事などがある。

これに対するロシアの反発は当然のことながら激しかった、アメリカを含むＮＡＴＯ諸国は自国の軍事活動と経済圏の安全保障を口実に軍備を拡張し、東欧諸国にＣＩＳ（独立国家共同体）からの脱退とＥＵ加盟を促しているも同然と言う抗議がロシア政府高官から相次いだが、現在アメリカやドイツはこのような表現を断固として否定、ヨーロッパ全土の経済活動に影響力を振りかざしすぎているのはむしろロシアであり、黒海周辺の諸国から駐屯部隊の撤退もしくは縮小、原油や天然ガス採掘企業との癒着の解消をしなければヨーロッパ・ロシア地域での安全保障はあり得ないとしている。はっきり言ってこれは、太平洋地域における米・韓・台・ＡＳＥＡＮ諸国と中国の太平洋の資源と経済圏をめぐる民間大企業を巻き込んだ対立や、中東における民族・宗教対立がもたらす政情不安に原油・マグネシウム採掘、水資源の確保、送電網の維持、それらと中東エネルギー国家や欧米の金融機関が握る投機マネーが複雑に絡んだ紛争問題と全く同じ意地の張り合いだが、降参した方が負けとなるのは人間社会の常であり、同時に経済・環境開発活動という大きな利権と国際社会へのアピール活動…ひいては国力…を失いかねない人間社会にとっては重大なケンカなのである。

この日運び込まれたのは、アメリカ軍が弾道ミサイル迎撃の要としているパトリオットＰＡＣ３のユニット１０基。ＡＮ／ＭＰＱ－５３ＲＳ、ＡＮ／ＭＳＱ－１０４ＥＣＳ（射撃管制装置）、ＡＮ／ＭＳＱ－１１６ＩＣＣ（情報調整システム）、ＡＮ／ＭＲＣ－１３７ＣＲＧ（無線中継機器）、発電機とＥＣＳデータリンク接続用のファイバーケーブルのユニットが付属したＭ９０１ミサイルランチャーに分割され、各々のカーゴがＳＬＴ５０－３に牽引されてきた。

（フェーズドアレイ・レーダー）

すなわち本来は戦車トランスポーターであるＳＬＴ５０－３トレーラーが５０台も列を連ね、多くの警備員が見守る中この正体不明の施設敷地内へと入っていくという騒々しい光景が広がっているのだから、気づく物が誰もいないわけがない。当初からアメリカ軍のＭＤ配備に反対していた周辺住民が早くも抗議の声を上げ始め、やがてカメラや端末を向ける見物人を呼び寄せはじめる。しかし、周辺の手近な人口が少ないこの場所の抗議活動は結局大したレベルにはならず、数十人が騒ぐ程度のものにとどまっている。

ＮＡＴＯ迷彩の戦闘服を着用した一人の男が最後に営門を通過するトレーラーを見送る。警衛がドライバーにＩＣタグを請求し、トレーラーに積載されている機器についたコードもリーダで読み取るという綿密な検査を行ってから施設内に入っていく車両。同僚の兵士たちが施設の建設に抗議するチェコ市民が施設に入らないよう、営門周囲の道路に封鎖線を張り、抗議活動をする人間とそれを面白がって端末のカメラで…おそらくは動画サイトに投稿（アップ）されるだろうが…撮影する連中を追い払っていた。

男の無線機本体のランプが受信したことを告げ、耳に装着したイヤホンが突如としてなる。“一応搬入は終了した。周辺の野次馬を施設に近づけるなよ”「近づけるな、とは？」男の眉がピクリと動く。“そのままだ。不穏な行動をとらせるわけにはいかない”無線機越しに聞こえる内部のセキュリティールームのオペレーターの声が真剣になる。“万が一でも内部に侵入した場合はすぐに連絡、直ちに確保に入れ。抵抗するなら排除も構わん”「心得ています。実弾利用も許可されているので」兵士は右手に持つアサルトライフルのトリガーに指を軽くかける。“その心意気だ、しっかりやってくれ”「了解しました」男は無線機を取り上げて声を入れ、それを戻した後Ｍ１６Ａ５アサルトライフルを握り直す。中東やアジアの（近年は反中国に傾きつつあるが）一部に反米・反ＮＡＴＯの世論が根強いのはもちろんだが、東欧諸国がアメリカや西欧列強に友好的かと言えば決してそうではない、世界どこでもテロがあり得る現在、気

を抜くわけにはいかない。彼は複合素材の防弾ヘルメットに装着されたＶＡＤＳ暗視装置のバイザーを下げ、機器のスイッチを入れた。その最中、男はふと黄昏に黒く染まる針葉樹の背後に見える白いテーブルプレートに目をやる。すでに迫る夕闇に影を濃くしているその物体の受信部分の突起の先端に輝く航空警戒灯とパラボラの基部に付けられた照明がその巨大構造物、ヨーロッパの空と軌道圏を見つめる瞳を照らし出していた。このレーダーサイトはイギリス・ニューロン社製の全波長帯分析機器と全周波数の電波妨害を検知・無効化するシステム、及び軌道上の監視衛星とデータリンクして航空機やミサイルの種別・国籍・所属集団の識別から搭載物の検査、飛行ルート予想や飛行目的の３次元予測までを全自動で行う高性能の分析・計算システムを搭載している。アメリカのＩＢＭ社、マイクロソフト社、Ｈ＆Ｐ社、アップル社といった世界に股をかける情報端末機器製造、内部ソフトウェア企業、ＯＳ企業の超大手と勢力を二分する総合情報機器企業の最先端技術…層状３次元半導体回路と量子回路の…を駆使したシステム。それは今、ヨーロッパ、北アメリカ、北アフリカにまで及ぶ欧米・ロシア・中東を巻き込む民族紛争と自国企業のエネルギー利権をめぐる攻防、東西冷戦がもたらした傷跡に資源ナショナリズム、グローバル規模での製品生産・消費、情報ネットワークや金融証券取引の地球規模化という超巨大資本主義の攻防と政府・民間双方の思惑が、世界の新たな刃となってそこを再び刺激しようとしている。そんな複雑怪奇な高度科学技術とシステムに揺れる人類社会を、その技術力が作り上げた森林にそびえる巨大なテーブルディッシュは、人間の電子機械が持つ独特の無表情で見つめていた。

２０１３年　２月１２日　アメリカ　シカゴ郊外　ｉｒｏｂｏｔ社
主工場　８時２０分

シカゴ近郊から自家用車やバス、シカゴ市内から伸びる地下鉄を

利用して通勤している人々…すなわち内部の団地に居住していない人々…にとってはちょうど出社時刻に当たる時間に差し掛かっている。しかしこの日、世界最大のロボット工業企業であるｉｒｏｂｏｔ社の最大の生産拠点であるここの正門は、多くの報道関係者で埋め尽くされている。ＡＢＣ放送をはじめとするアメリカ国内の主要メディアはもちろん、イギリスのＢＢＣや中国の中華国営放送といったヨーロッパ、アジア新興経済国の主な放送メディアも、市街地の大通りを思わせる片側３車線の幹線道路がオフィス街と工場地帯が混合した工場地帯内部へと続く正門に集まった。警備員や警察官が警戒線を張る中、報道機器や衛星中継用のパラボラを積んだ車両が左右の１車線を埋め、カメラ目線の人間の男女がタブレット端末の情報に目を落としながら生中継や取材に臨み、カメラや音響機器を持つスタッフの背後では、各々の責任者らしき人間が携帯情報端末でしきりに何かを話し込んでいる。

　折からの大寒波で雪が終わりなく降りしきる中、付近の様子が急激ににぎやかになった。警察官一気に周囲の道路に歩み出し、工事現場で夜間に人や車両を誘導する際に使う誘導灯を手に持って周囲の封鎖にかかる。それと同時に工場から出る側の道路へ向かって左右から一斉に報道陣が道路から飛び出し、道をふさがれた自家用車やタクシーが急停止した。その直後に工場内部から警察車両に先導された米・ＧＭ社製の高級車、キャディラックＣＲＴ３台が正門を抜け、高層ビルの立ち並ぶシカゴ市中心部にある２９０号線へと向かっていく、たかれるフラッシュ、車両の内部を見つめるカメラのレンズ、警察関係者や報道関係者同士の喧騒、どこから見てもこの企業が通常の状態ではないのは明らかだが、世界各地に顧客を持つこの超大手企業であるがゆえ、生産自体は平常通り、高層団地の従業員もシカゴ市近郊から通勤してくる従業員も予定通りの出勤だ。それ故に歩道・車道問わずに集結したマスコミ関係者によって道路は大渋滞が発生、歩道でもマスコミ関係者の動きに翻弄されてその場で立ち止まる通勤者で埋め尽くされた。

２４時間体制で稼働するｉｒｏｂｔ社の最終組立工場（アッセンブリー）のベルトラインを外から視察する工場部門責任者の男の端末が鳴る。「今度は何だまったく……」男はいまいましそうに吐き捨て、とりあえず端末を耳に当てる。「何だ次は？」“連邦政府関係者の方ですが、東シナ海で米韓合同海軍演習中の部隊が中国艦隊と緊張状態に入り、そちらの対応に向かう必要があると…ＧＢＴＸ社の方には代理人が出るそうです”「出れない？他にこの状況を理解できる奴でもいるって言うのか今？」“…それはこちらでも理解できません”男は眉にしわを寄せる。今回の問題はアメリカ合衆国の国防を根本から揺るがしかねない事態だ、問題の火種となったＧＢＴＸ社への説明要求、最も自社の機密情報の扱いといった事情に精通した連邦政府国防省関係者と共に向かう予定だった。その人間が出られないとなれば事態はますます進展が遅れる、ただでさえ情報開示や事情説明を嫌がるＧＢＴＸ社の口を開くことができなければ、こちらの意思表示がさらに難しくなってしまう。男は深い失望を覚えながら端末越しに続ける。「…それで、代理人とやらは当然のことながら発言力を持った奴なんだろうな？」“ええ…一応は元の人間の側近だそうですが…細かい点まではこちらでも掴みかねます”

端末越しの男は左手の中指でじれったそうに腰のあたりをつつく。不安は募る一方だ、これで来た代理人がろくに事情を知らなかったらどうなる？企業同士のこういう意思表示や情報開示要求の点で重要なことは、大手金融機関でも政府機関でも発言力に実力と実績のある人間を後ろ盾にすることなのだ。ただし、こんな事をここで批判したところで相手の男にはどうしようもないし、自体が変わると思えなかった。「そうか…とにかく対応は厳格に行うよう伝えてくれ。わが社とロボット産業の存続がかかっている」“分かりました”

男はスライド式の携帯情報端末をゆっくりと閉め、生産ラインを一望できるガラス窓の反対側へと視線を向ける。外部の混乱でシフトの従業員がたどりつけない中、夜勤の労働者の人間たちは…まあ多くは広大な工場内の団地に居住しているが…1時間延長でＮＣ工作機械や組み立て用ロボットのモニターを確認し、手元のパネルのキーを叩いてロボットの組立を続けている。責任者は窓に元に歩み寄り、頭をガラスに付けて目を閉じた。今回のトラブルでこの企業を潰すわけにはいかない、アメリカ最大、世界最大のロボット産業を破壊するわけにはいかない。しかしこの件は今の自分では止められない、一刻も早く問題を起こした被疑者が拘束され、公正厳格なる裁きを受ける事、それを彼は主に祈るしかなかった。

前々から発生した際のリスクが懸念されていた恐ろしい事態、その悪夢はついに現実化したのだ。先日のｉｒｏｂｏｔ社とＧＢＴＸ社による軍用ロボットとポケモン量産兵士試作機（マスプロダクティブ・ウォーリア）の運用試験、双方に使用されている部品、材質、プログラム回路などのデータがＧＢＴＸ社のサーバが外部のネットワークから攻撃を受けた際に流出したのだ。文明の最先端機器である軍用半自律…遠隔操作も内部プログラム自動制御も可能という事だ…ロボットを支えている精密かつ高性能の半導体と言った電子部品、強力なエネルギーを貯蓄し、フルに引き出すための超高電圧蓄電用リチウムバッテリーとエネルギー伝達回路、最先端機器の塊である機体を頑強に守り、かつ極限まで運動性を高めるための軽量化を促す金属イオン含有型炭素繊維合成素材の材質、接触物や哨戒物を見分ける各種センサ、高精度アクチュエータやサーボモータなどその大半は生産企業と部品メーカー、場合によっては国家や民間の研究機関との間で極秘裏に生産・開発

されたものである。その情報が流出したとなればその企業の生産活動はおろか、他国の技術輸出戦略に大きく有利に働いてしまい、場合によっては当事国の国家戦略自体の帰趨を揺るがしかねない深刻な事態に陥る可能性もある。その企業の信頼が失墜し、業績に悪影響を与えるのは言うまでもない。今回の事態で最大の懸念は、ＧＢＴＸ社のみならずｉｒｏｂｏｔ社やその部品、機器、素材製造にあたるメーカーの情報も同時に流出したこと、軍用制圧ロボットというアメリカ合衆国の国防に重大な影響を与える機器のデータが流出したという事だ。事態を重く見たアメリカ合衆国国防省はサイバー犯罪対処部門のインターネット上捜査によって情報を流出させたハッカーグループを特定、その実行を行った端末をアドレスとプロキシから割り出し、カナダのバンクーバーとアメリカのサンフランシスコで被疑者の身柄拘束へ向けて州警察やカナダ警察当局と共同ですでに動き始めている、との事であった。

その頃、ガラテア郊外の湿地帯

すでに夜もすっかり更けているにもかかわらず、一行は眠ることなくその生物の排除を続行していた。「動かないなこいつは、すでに衰弱してんだろう」「でしょうね、突き刺さったこのひもが入っていきませんし」ガラテア周囲に住む地元の連中であるモーリスとスカラーは、水中捕獲用のワイヤー付き銛が刺さり、一直線に水面下へと入り込んでいる銛から伸びるひもを前足2本でつかみなおす。ただし、この時間はそう長くは続かないと双方は見ていた。この生き物は水生生物だから魚と同じ、体力が戻れば最後の力で振りほどこうと暴れ出すだろう。水面へあがろうとしてひもがたわんだ瞬間がチャンスだ。

それすぐに来た、２匹が走行予想した直後に水面に激しい気泡と同心円があらわれ、ぴんと張っていたひもが急激にたわむ。「きやがった、スカラー引くんだ！俺が奴の尻を叩く！」「は、はい！」マ

グマラシ種族と背後の連中が“かいりき”でひもを引き上げる。獲物が水上に上がってくると同時に、ウインディ種族は“かえんほうしゃ”をその影めがけて打ち込んだ。かがり火と満天の星明り以外暗やみに包まれていた湿地帯の一角が、一瞬ではあるが昼の明るさとなり、１５００℃近い火炎によって水面に近い水が瞬時に沸騰して蒸発する。でこぼこしたうろこに覆われた尻尾をやけどさせるほどに温度が急上昇した水に驚くその生物、対して負傷させるものではないが、通常の生物あいてであってポケモン達の体細胞の遺伝子に含まれる染色体の塩基配列の差が作り出す、各々の使用する能力の相性…人間のスポーツでいうタイプ相性…は考慮する必要がない。要は驚いて上に飛び上がってくれればいい。というよりモーリス自身、そうなることを望んでいたのだ。「よっしゃ、ちびっ子！掴みかかって止めてやれ！」

「あいよおっさん！」レオが後ろ足2本で達が上がり、右前足の爪先で洋弓銃の彼向けに改良されたトリガーを引く。打ちだしたのはワイヤーの付いた生物捕獲用の返しがついた矢だ。すでに再三の攻撃で矢や銛、槍と各々の能力が打ちだしたエネルギーを無数に浴びたその生物にそれがあたり、一瞬周囲の海面が赤く染まった。「おっし！グリソム、ガトル、シンシア、行って来い！」コリンクが洋弓銃も左前足に装着した盾代わりの装甲板も投げ捨て、水に向かって走る。「グリソム！一気にダイブだ！ドッカンとやったろうや！」

「そりゃもちろんな」ミズゴロウ種族は水中での活動には全く困らない、グリソムは至近距離に暗い影をうごめかせている生物の間近に飛び込み、一気にその生物の下へともぐりこむ。「ちょ…ってアンタ？！何をまた無謀な…」「目の前に歩いてくるチャンスを待ってられっかよ！シンシアとガトル使って後方お守り！行くぜこの野郎っ！」スカイラブがコリンクを止める間もなく、彼は突き刺さった矢から伸びるひもを掴んで水の中に飛び込んだ。「ったくレオはっ…また私の踏みつけてさあ…」彼女は水の中で動き回る生物と格闘するコリンクの姿を諦めたように見つめた。まあルクシオにとっ

ては、こういうレオの無茶ぶりを頼もしく思う事も多いのだが。「それで！ガトルと私は上がってきた生物にトドメをぶっさす！シンシアは左手に回り込んであいつをビビらせて！理解？」

「オッケイ！あいつ頼りになんないから、行くわよシンシア！」「うん、そっちの方もお願い！」ガトルとシンシアは互いの目で意志を確認し、すぐに示された方向に散る。「いいガキを持ったな姉ちゃん！お前の財産だから大事につれってやれよ！」「ありがとうございますモーリスさん！彼らは元気の良さだけが取り柄ですから！」

岸辺から7メートルほど離れた場所で上がる水しぶきに向かって伸び、生物に強く引かれる縄を前足で抑え込んでいるウインディ種族のモーリスの脇にガトルとスカイラブが駆け寄る。レオが投げ捨てていった洋弓銃には紐が巻きつけられ、先端に取り付けられた別の矢が杭となって洋弓銃を糸車にしていた。どうやらこのウインディ種族はレオが何をしたいのかを分かっているらしい、無論パチリスが理解しているかは別としても、女(メス)ルクシオにしてみてもコリンクのしたいことは明らかだった。2匹は顔を見合わせて頷き、パチリスも2匹を見てから波立つ水面の方に視線を戻す。結局ルクシオからしてみれば自分の考えていてが方法をまたしても彼の思い付きで覆された格好だったが、そんな行動の速さと後先考えない突撃調子があのレオ・バイブル・ミュースカイのいい所、小さい時から弟同然のコリンクのやり方を口先で小馬鹿にできても止めに入る事まではできない。スカイラブ・バトルスターは常にそう感じてきた、困った性格でもあるが、そして彼が無茶でもなんでも動くんだったら自分はフォローに回るだけ、彼女はそう考えているのだ。

武器やポケモン達の攻撃で傷ついているにもかかわらず、その生物はいまだに危険な怪力をもってコリンクの方に巨大なあごを回し、そいつの首を叩き切ろうと暴れまわっている。しかしこの程度のこ

とでこのコリンクが腰を抜くこと等ない、むしろこういう奴を見ているとレオ・ミュースカイの血が騒ぎ、言いようがない興奮に自分の尻尾や前足の筋肉にある帯電・蓄電部分に力が入るのを感じた。「へん！よくもまあこんだけ攻撃を浴びながら…」コリンクはひもを巻きつけた右前足をちらりと確認し、そのまま生物の潜る方向へとは逆に進み、一瞬水面から飛び上がって潜る勢いをつけると同時に肺から息を吸いだして呼吸を整える。息を吐き出しておけば、水面に飛び込むまでの間に肺の中へ外の空気が自然に入ってくる、グリソムやかつての仲間達と川で遊んだときに自然に体が覚えた感覚であった。再び水の中に飛び込んだコリンクの眼下に上がってくる爬虫類の影が見える、その前を巧みに泳ぎ回るグリソムは、全く恐れていないといった表情で一瞬だけ潜ってくるコリンクと目を合わせる。「これでいいな？」「助かるぜグリソム！」ミズゴロウは気勢を入れるコリンクを横目に、水面の至近距離で再び水中へと潜り込む。頭の上の突起や頬にあるオレンジ色の鰓周囲の感覚器官が、後ろから追いかけてくる生物の息遣いや４本足を動かした際にできる水流の微妙な変化をキャッチし、ミズゴロウ種族という本能的な何かが彼の魚同様の尻尾と水かき付きの手足を巧みに動かす。完全に彼の事を獲物として…おそらくは次の犠牲者として…認識した爬虫類は、再三にわたってその巨大なあごとその中に付いた鋭い歯を振りかざし、ミズゴロウを捕えて食いつこうとばかりに襲い掛かってくるが、その残忍な捕食者の攻撃パターンを微妙に変わる生物から吐き出される息がもたらす水分子の振動から彼は瞬時に読み取り、そいつと比べてはるかに小柄なその体を生かして左右へ上下へ全てかわしていく。グリソムは待っているのだ、この生物が次に呼吸するタイミングを。その際には必ずその生物は浮上する耐性になる、コリンクはその隙を狙ってこの生物に仕掛ける算段であり、レオの考えていること等、ハイドルで小さい時から育ってきた彼にはコリンクの目を見るだけでわかった。

ついにその時は来た、ミズゴロウをひたすらに追い回していた爬虫

類は突如として水面へと向かって泳ぎ始める。「レオ、行けるぞ！」「任せろっ！！」生物の背中に突き刺さった返し付きの矢から伸びた紐を両前足にくくりつけているコリンクが一機に尻尾へと飛び掛かった。ミズゴロウの水中にも対応した視界の先にあるこの上の陸地には数匹の影、それ誰なのかまでは分からないが、少なくとも上がってきたその生物に攻撃を仕掛ける連中であることには間違いない、グリソムは洞窟のようになった、湿地帯の陸地の下に広がる空間に飛び込み、その生物の腹が激しくくねりながら猛スピードで通過していくのを見守る。

「うげっ…くっそが！？」水上へ大きく身を踊りだした水中生物と共に水面から飛び出したコリンク、激しい衝撃とそのショックで右前足に巻きつけた紐がスカイブルーにフラットイエローの毛とその下の皮膚に食い込んでくる痛みを何とかこらえる。その生物の動きに合わせて目まぐるしく入れ替わる彼の視線に、ロコン種族とマグマラシ種族の姿が一瞬ではあるが確認できた。「シンシア、早くぶち込め！そうじゃねえと…」「え、…そうだよね、そうよね！」「早くしろ…うぐっ？！」声を上げる前にコリンクは獰猛に体をくねらせるその生物によってふたたび水面へと叩きつけられる。「レオ！？…ひいっ！」自分の部隊の同僚が、危険な冒険を共にしてきたコリンクが…それがシンシア・ベルーサ・カウンストポビアの意識に強くインプットされ、心臓が縮み上がらせる一瞬の恐怖を超克した感情がロコンを岸辺ぎりぎりに駆け込ませ、水面で激しく暴れる爬虫類の至近距離で“エナジーボール”をぶちませた。しかし爬虫類の尻尾のムチが岸辺のふちをなめ、彼女の耳元を打って水中に落下させるのはほぼ同時だった。「きゃん？！」「おいおいっ！」ロコンと共に“かえんほうしゃ”をぶち込んだマグマラシ種族のスカラーがシンシアが転落した岸辺へと飛び寄る。だが2匹の攻撃は決して無駄ではない、2匹が放ったポケモン特有の体内エネルギーの

一部は爬虫類の顎の下を直撃し、この生物は腹を水面上に向けて後ろへと叩き飛ばされたのだ。先ほど振るった尻尾の勢いでコリンクは水面上へと飛び上がり、そのまま宙で一回転して無様にさらけ出された生物の腹元へ飛び掛かった。これがチャンス、このコリンクが、レオが待っていた一瞬しか来ない攻撃のタイミングである。「もらったあ！」ついにやってきた攻撃の瞬間に興奮した彼の神経が上半身…すなわち首から前足、胴体の前半部にかける部分…の筋肉により多くある発電器官を不必要にまで活動させ、前足の立てた爪先から火花が散るほどにまで出力を高めた“スパーク”となって爬虫類の腹元に襲い掛かった。

瞬間的に湿地帯の湖の表面を電気が走り、ナトリウムランプのようなオレンジ色の光に水面がわずかに輝く。……寸刻して浮かび上がったのは爬虫類の腹向けになった胴体であった。強烈な電流の前に自律神経で動いているはずの心臓が突如として流れ込んだ電流によって拍動に支障をきたしたらしく…確かに地球生物の神経細胞は体内の電気的刺激を伝達物質が伝えている…、４本足や尻尾の先をけいれんさせてその場に漂うのみとなっている。その脇からコリンクは水面に上がった。「どうだラブ!?俺の手際は世界一だろーが?!」「こ、このバカっ！一体全体どういう神経がここまで無謀な…」スカイラブが満面の笑顔で生物の背中に刺さった銛から伸びるひもを巻きつけたままの右前足を突き上げるコリンクに向かって水に飛び込み、爬虫類の胴体にひも付きの槍を一本突き刺す。「なーに心配そうに飛び込んできてるんだよラブ?俺はもうガキじゃねえんだぞおら！これで明らかになっただろうが、こいつは俺の戦果だぞ！いいな?」「はいはい…アンタがやったんならサクラさんにもそう伝えておくわよ」大物を仕留めた嬉しさにはしゃぐレオに、スカイラブは子供に対する諦めとかわいさを混ぜた曖昧な表情を彼に送り、

ガトルやモーリスの待つ岸辺に左前足を上げる。「かかりました！あとはそっちに向かって引いてやってください！」「よーし分かった！アンタらも押してくれると助かる！」「了解です！……まあ…」モーリスの返事を待った女(メス)ルクシオはコリンクの方に振り返り、それから彼の方へとゆっくりと泳ぎよる。「…ここまで無茶するとは…成長したのかバカになったのか…今はそれで良し、ね。そういう事にするわよ今日は」

「当ったり前だ！今日の獲物は１００％俺…」左前足で右前足のひもを外しにかかるコリンクの脇に上がる無数の気泡、まもなく水色の突起が、オレンジ色の柔らかい器官が水面に上がり、その上半身全体がレオのとなりに浮かび上がった。「さっすがはレオの手の早さ、今回も上出来だな！」

「よくやったぜグリソム！やっぱ俺とお前がいりゃあ雨も雨に入んねえぜ！」「半分くらいはおいら、半分はお前だな！今日の手柄は半分半分ってとこか」「バーカ、俺が７割、ラブたちが１割、でお前は…」「おいおいおい、２割しか貢献してないって事かよレオ？！自慢じゃないが、おいらがいなきゃあの生物は…」「細けえこた、いらねえんだよ！ともかくお前の名前があるだけでＯＫだろ！な、異議なし！」コリンクがミズゴロウを追い払わんとばかりに前足で水をかける。「うえっ？！分かった、分かったからこんなの所でふざけ合い…こいつ？！」相も変わらずレオの悪ふざけに翻弄されるグリソム、しかしいつの間にか彼もコリンクに向けて“みずでっぽう”をぶっ放して応戦する。どちらも後ろ足で立ち泳ぎ（とはいってもグリソムはみずタイプで問題はないのだが）、マヒしている水生動物に掴まりながら遊んでいる２匹。無理やり巻き込まれた形のミズゴロウではあったが、小さい頃からの友人との水で戯れるのはやはり格別だった。暑い訳でもないが、跳ね飛んでは顔にかかる水、そのなかにサーマルの身寄りのない子供を収容する公設の場所に預けられてからというもの、全く身寄りもない中、地元の子供たちの見下した視線の中で唯一親しくしてくれたこのコリ

ンクの気持ちと態度には見えない真の意味での思いを感じる。
「まったくもう、こんなところでグリソムまで巻き込んじゃって…アンタは5歳児?」スカイラブは水の掛け合いに発展した2匹を呆れた調子で見つめ、ふざける一方の2匹をしり目に漂う紐を右前足でつかむ。「モーリスさん、OKってとこ!こっちも押しにかかります!」彼女は岸辺にいる連中の方に軽く左手を上げ、水をかけ合う2匹の方に泳ぎ、左右前足でつかむ。「ほらほら、こいつを岸にまで持ってくわよ、アンタらも手伝って」
「ううっ…ちょっとラブさん…それは痛いです…」「うっと…ごめんね」ミズゴロウがルクシオに掴まれた左前足の付け根あたりを無理して振り払い、ルクシオの方は慌てて右前足を引く。水は電気を通す、のではなく普遍的に水に含まれるナトリウムイオンやマグネシウムイオンが導電作用をもっているから、彼女の爪先から出る電流が彼にも伝わりやすい、みずタイプ種族の細胞が持つ遺伝子の染色体の一部が電気の通過に弱いのだ。そんなグリソムの表情に思い出したスカイラブは、自分の配慮力の未熟さを痛感した。まだまだ自分はそういう器に達していない、自分の信じる、レオに対してなりたくて、結局彼の方から少しずつ離れていきつつある状況下で捨てきれない“レオ・ミュースカイの姉”なる存在にはまだ達していない。「それで…俺からは離さんのかい?」「…は?…アンタは私の同じタイプ種族なんだから問題ないでしょうに…まあ、ちょっと痛かったらごめんね…」
「いやいや、大丈夫です…おいらさっきのスパークでもちょっとばっかり痺れるから…」
ミズゴロウが左前足でオレンジ色の感覚器官を触る。彼が感じているピリピリした感覚はスカイラブがもたらしたものではない、先ほどレオが生物を仕留めるためにはなった“スパーク”が水中に流した電気によるものだ。
「だろ?俺のスパークもだいぶ上がってきたじゃねえか、それとも浴びれて血行がよくなったか?」コリンクが右前足の爪でミズゴロ

ウの顎元をつつく。ミズゴロウの顔にピリピリとした感覚が走る。「いってえ…やめろよレオ」「へへっ、こうやってお前にちょびっと電気を送ってコミュニケーションをとれるのは俺とお前の特権だもんな…という事で…」コリンクが銛を結んだ紐を外した右前足を少し上にあげる。「兄貴と姉さんマネっぽく…やったな！」「お疲れっす！」さすがは意思が伝わる幼き頃からの友人といったところか、その様子に気づいたミズゴロウも右前足を上げる。レオとグリソムは右前足をぱちんとぶつけあった。「それだけやって笑ってられる友達ってのはそうそういないんよレオ、あんまり無理させちゃだめ…んで、これからこいつを岸まで運んでいくから手伝ってよね」ルクシオはコリンクの背中を軽く右前足で押し、すぐにそれを戻して両前足で生物の体を押し始める。「はいはい…」隣に付いて押し始めたコリンクに一瞬目をやる彼女、内心は羨ましかった。彼の無二の親友であるミズゴロウ、もちろん岸にいるパチリスやロコンのような存在も、彼女にとっては本当に羨望の目で見る存在だったのだから。

その理由は今思い出したくはない…今はただ、彼等を見守りたかった。いつか、もっと大人に（2匹とも15歳だからポケモンでは成人だが）なった暁には、世界の現実を知り、困難な情勢を憂いるであろう2匹、しかしそれまでは…少しでも人生の糧となる思い出と経験を、まだこの事態を“冒険”感じられるうちに多くの物事を積んでいくのを見守りたい……

無事に最初の一匹目を岸にあげた3匹。ガトルとシンシアはでこぼこしたその生物の表面を気持ち悪そうに見つめながら、その生物に突き刺さった銛や槍をくまなく探しては引っこ抜く。「よいしょっと…んんっ？」「だ、大丈夫シンシア？！」「うん…なんとか…行

けるよ」ロコンは自分の背丈以上に大きさがある生物捕獲用の銛を両前足で掴み、後ろ2本足でふらりと歩き出す。「おお娘ちゃん、こいつはあ俺のもんだ。ありがとうよ」「あ、はい…」ウインディ種族のモーリスが左前足を出して彼女の抱える巨大な銛を受け取り、腰の太い紐にそれをぶら下げる。「ナイスファイトだったな、あの先っ走りのいいガキには、お前みたいな奴が必要だ、しっかりささえてやれ」「は、はあ…どうもです」モーリスの左前足が彼女の頭のくるくる毛を不器用に撫で、ロコンは顔を赤くして視線を下に下げる。こんな事を言われるのは、自分をレオが必要としていると言われるのは、シンシアにとって初めてだった、同時にシンシア・カウンストポビアには実感もなかった。しかしなぜかは知らないが、不思議な恥ずかしさで意識の水晶が満たされていくのを感じる。「って…お前が何で水ん中に落ちるんだよ?」水から上がって体を震ったレオがシンシアの方に駆け寄る。「こいつが頑張ったという何よりの証拠じゃねえか、なあスカラー、こいつなかなかやっただろ?」「はい、なかなか生物捕獲にいいチャンスを作ってくれました。よくやったぞシンシアちゃん」マグマラシ種族のスカラーがモーリスの方に大きくうなずき、シンシアの胴体もとにそっと近寄る。相変わらずびしょびしょであるロコンは、体の右側がほのかに暖かくなるのを感じた。「という訳だ、俺も確かに彼女が体張ってお前のチャンスを作るのは見た。ちびっ子、彼女を褒めてやれ」「お、俺が?!」顔をにわかに赤くするレオのはねっ毛を、モーリスが右前足で軽く押さえる。彼の神経からしてみれば、こういう生意気こいたガキというものは比較的おとなしい子に対して弱い、それを見越したうえでの言葉だ。案の定、コリンクは顔を赤くしながらロコンの方に目線をおく。「さ、さすがだなお前…これでいいのか?」「え…え?…うん…」レオとシンシアはロクに視線を合わせようともせず、恥ずかしそうに2，3言口にしただけだ。「あーあ、肝心な時にアンタって恥ずかしがるのよ?ホンットにいつまでも子供ねアンタは」ガトルが軽く笑いながらコリンクの尻尾を右手で軽く掴

んで引き寄せる。「シンシア、レオの相手なんて軽く流すだけでいいのよ。そんなに恥ずかしがらないの…」「うん…そうだけど恥ずかしいもんは結構来るのよお」シンシアはパチリスに見られてます顔を赤く…もともと赤いから人間には理解しにくいが…し、数歩後ろに下がる。「うっせえよガトル…俺のどこが恥ずかしいんだよバカ…」レオも恥ずかしそうに2匹から視線をそらし、上げたばかりの生物の様子を見に歩き出す。

「隊長さんの銛はない、か…」モーリスが引き上げた生物に足をかけて動かす。無数に刺さっている槍や銛の中に、テルルが持っていたと思われる一般的な漁業用の銛はどこにも刺さっていない。「まあ、隊長代理ですけどね……」スカイラブが適当に捕捉を加え、挿さった矢を右前足でわずかに動かして傷口をまさぐる。別に彼女を小馬鹿にするつもりはこのルクシオ種族にない、グレイシアの銛を返すという約束はしっかりと守る必要がある。いずれにせよはっきりとした証拠はないが、おそらく先日グレイシアが捕えかけた生物とは別の個体だ。複数いるという話は真実であったようだ。「それで秘書官さん、アンタは一体何やってんの?」「お、俺は、こっちを探してました!そっちはどうかしたんですか?」ジャノビー種族のユークは、ここから数キロ離れた場所を探し回っているうちに任務が終わってしまったらしい。「はあ…アンタって秘書官とは思えないバカさ加減ね。こっちじゃ一匹捕まえるのに大わらわだってのにさ…」スカイラブは彼の短い右手を、自分の右前足の爪先を押し付ける。「お疲れっす秘書官さん!結局そっちは戦果ゼロって事すか…俺なんかこいつを一匹で…」「はいはいレオ、アンタがとどめを刺した、金星の印だけはちゃーんと付けておくわよ…」獲物の腹に右前足の拳をばしばしと押し付け、得意げなレオを脇目に、ユークの方へともう一歩歩み寄る。「そんでもって…まあ、アンタは一

匹で空回りして結局こうなったといわけ…」「そ、それは…俺はなんだか…」ジャノビーは毒舌を振るうルクシオに対し目を点にしている。そんな彼に対して彼女は容赦なく続ける、全くこういう熱くなりがちなタイプに奴は、自分の間違いに気づくのも遅いが、多少なりときつい事を言っても傷つかないおおらかさもある。「とにかく…」ルクシオは、テルル達に説教するいつものやり方、またしても彼に向けて右前足の爪を立ててちっちっと振る。「アンタなかなかの逸材ね、気取った奴の多い世界でそこまでのバカさ加減を発揮できるのは大物の器なんよ。ここはまだ戦場って場所じゃないから、ここで自分の加減と世界の現実をすり合わせる訓練を積んでよね」「は、はあ…やっぱ実践を積むと、言う事が違うっか…」厳しい彼女の助言か皮肉か、ジャノビー種族のユークはショックを受けたようにスカイラブの方を見つめていた。口先以上に彼の意識の水晶は女(メス)ルクシオの発言が放ったエネルギーをまともに浴びている。実際問題、最初は何とかなるだろうとユーク・ゲープコッチは思っていた節があった。秘書官の認定には探検隊や救助隊に近い訓練を受けている。このチームもほぼ同じ雰囲気だろうと。しかしその甘い予想が全くのはずれだったのだ。

そんな彼の姿にスカイラブは、意外にもユークに対する母親じみた感情を覚える。無理もないと言えば無理もない、彼にとっては初の任務なのだから。しかし彼女の大嫌いな秘書官だとか政治家だとかそういう類に属しているわりに、このジャノビー種族は自分の感情に任せて動く、悪く言えば向こう見ずでよく言えば実に素直な性格の持ち主、とルクシオは分析していた。今はいない誰かにそっくり、ちゃんとコツを掴めば相当優秀な人材になるだろう、そんな小さな期待が彼女の意識の水晶玉にある気体をかき混ぜているのに気づいた。

２０１３年　２月１２日　エメリア　ニュークリア地域北部　エドワーズ国際空港　００時０５分

やはり自分たちは極秘の“荷物”扱いらしい。７匹―（とシェイミ、イーブイ）の間にはそれに対する諦めにも似た空気が漂っていた。アメリカ領エメリア州の州都エドワーズ市から１５キロ程度しか離れていないエドワーズ国際空港は、ハワイのホノルルやその沖５０キロに位置する国連開発の移民メガフロート群“ソアリング２”と並ぶ南太平洋空路の拠点である。２４時間離発着可能の空港だけあって、国連統合空軍司令部が保有する（案の定、護衛の兵士の人間が、機体の周囲あちこちに立っている）輸送機、Ｃ―１７Ｂも駐機している貨物機用ベースはロンドン・ヒースロー、ロサンゼルス両空港と同じように世界の空輸企業各社が保有するＢ―７７７やＤＣ―１０、Ａ―３３０のような大型機が止まり、作業用車両、コンテナローダー、ＵＨＤ牽引トラックが行き来し、多くのパイロットや空港作業員がその周囲を歩き回ったり、積み下ろしするコンテナを見ていたりする。少し離れた旅客ターミナルはターミナルビルの照明はついているが、さすがに日付が変わって３０分も経過した現在は離発着も少なく、ユナイテッド航空のＢ―７４７―８がちょうどランプをトーイング車のプッシュオフで離れようとしている所だ。

そしてこの場所で、カナダ・バンクーバーへと向かう連中は、国連統合空軍のＣ―１７Ｂ輸送機…内部のカーゴベイがポケモンの居住環境に似せた特別仕様だが…から、エア・カナダのバンクーバー国際空港行き１２１１便で（Ｂ―７８７で運用されている）カナダへと向かうのだ。「それにしてもまあ、今回は変わった方法になったな。確定事象じゃないけどさ、ブレイブとテルルが離れ離れにな

ったらどうすんだよ?」「ま、ちょっとさびしいと言えばさびしいわな。不安というより心配ってのが先か…」C－17に装着されたタラップから空港の夜景を見つめるブースターとベイリーフ、特にブレイブの方は、初秋の夜に輝くエドワーズ国際空港の広大な旅客ターミナル、航空機用ランプやそこを行きかう車両のライト、作業員のベストに付けられた警戒用の点滅ＬＥＤ、タキシングウェイやランディングウェイを示す誘導灯、その遠くに広がるエドワーズ湾と船舶、その奥に広がるアメリカ領エドワーズ市の夜景にある種の感傷を覚えてしまった。リーヒュンの言うとおり、自分とテルリウムが別行動をする恐れがあるのはこれが初めてだ。このブースターはブレイブ・クレイバーであるからにしてこの決定に駄々をこねたり、不満を親友のベイリーフにぶつけたりというマネをするつもりは全くないし、数日間（彼は少なくともそう読んでいた）別行動をするだけで二度と会えないのと同じ…確証はないが…悲しさを覚えたりする性質でもないが、いざその時が迫ってくると胸に詰まる物がある。何でもない別行動だけであるというのに、彼の意識下にはグレイシアがベイリーフやメガニウムに取り返しのつかない事をやらかすんじゃないか、ひょっとしたら、本当に恐ろしい場合は、リーヒュンにもユイリィにもテルルにも、これが最期になるのではないかという奇妙な、背筋も凍り付く感覚が浮かんでは消え、沈んでは現れていた。「どうした?」「……いや違う、違うんだぜこれは。ただなあ…」ブレイブは自分の目線を覗いてくる親友の表情に慌てて大きく首を縦に振り、右前足で首周りのフサフサをきれいに直す。「…いったん体をそばで温めあった連中ってのは…離れづらいもんがあるよな…なんかこう、そいつの温もりが嫌でも忘れられねえって奴だ…」

「まあ…それはあるさ、誰にでもな」リーヒュンもツルで自分の首の葉っぱを軽くひねり、また元に戻す。ブレイブの言っている事が彼の意識の水晶に詰まった水をゆっくりと温め、感情という対流をもたらすのが分かった。それと同時に目の前の親友の思う感情が痛

いほど身にしみる。そう、一度知った温もりは忘れられない、ブースターの言っている事はこのベイリーフがいつも感じているものと全く同じなのだ、自分がフローラを忘れられないように、危険な、世界を一変させかねない事態にある義妹を想い、自分がそれを探るためにここにいる事ができるのは、他ならない自分の感情だった。温もりを求める、フローラという過去の大切な体温を思い出すという感情のために。

タラップの脇に警察車両に囲まれた一台のバスが現れ、停止する。空港内のランプに旅客を運ぶ（ボーディングブリッジのない場所）ための、空港リムジンと呼ばれる車両だ。おそらくは自分たちを運ぶだけのためにチャーターされ、空港警察の車両に守られているのだろう。案の定出てきたのは警察官らしき人間と空港職員らしき人間たち。

そう、もう出発の時は近づいているのだ。ポケモンの時間にしてはあまりにも短い３０分、人間にとってこれだけ何もせず待つのはじれったいほど長い３０分はもう過ぎ去っていたのである。ただ、彼等は下でなにかを話し合っているらしく、タラップの上にはまだ上がってくる気配はなかった。

「あとな…」ブースターがわずかに口を開く。こんな事はあまり思い出したくないのだが、少なくとも誰もあの後口にしない状況を放っておくという訳にもいかなかった。「朝は…俺が悪かったな。ああいう類の発言…どうにも許せなかった」「…そんなこと言ったら…俺も同じさ…」ベイリーフは申し訳なさそうに頷き、自分の両前足の爪をわずかにこすりあわせる。彼の方にしてもあまり考えたくはなかったが、少なくとも親友がどう考えているかは教えてほしい、リーヒュン・グリーズ特有の感情はブレイブ・クレイバーにやはりそれを求めていた。

北アメリカの地（前書き）

さてさて、５６話目まで来ましたが、ここから少しだけ方針変更。今後数話は場面の焦点を北米とアメリカ合衆国の動向に絞ろうと思います。

ころころ変わると飽きちゃいますしね…今までですいませんでした

「ふああーあ、あんた達は夜になっても元気がいいのよね。もしかして私に似てきた?」2匹の事などお構いなしのひとりごとか、それとも単にかまってほしいだけの呟きなのか、チルタリス種族のチェギョンが2匹の間を抜け、C－17Bに接続されているタラップにぼんやりと座り込んだ。「やっぱ人間の施設って夜は明るいね。私にばっちりフィットするのはこっちなのよねえ。ポケモンの文明って夜暗すぎなのよ。そんで…はあ、マジでネタ切れ寸前よウネに対して」彼女は胴体にひもで回した装備品入れ（トレジャーバックとも呼ばれる）から韓国・LG電子社製の携帯情報端末を引っ張り出し、右手となっているモフモフ翼…鳥類の翼はまさしく2足歩行哺乳類の手に当たるのだが…でキーを打ち続ける。「いよっす！俺はいつでも女の子に対してはいつでも元気いっぱい、目がパッチリの男(オス)だからな。たまには俺にもユイにするようにモフモフしてくれよ！」「バカ、何やってんだよブレイブ?」フサフサ尻尾が喜びに振れるブースターのブレイブが彼女の背後に飛び付こうとするが、ベイリーフ種族のリーヒュンがツルを彼の胴体に回して食い止めた。

「うげっ!?…べ、別にいいじゃねえかよ?ギョンちゃんだって俺とのフサフサ抱っこは気持ちいい、って言うわけだしな」「ギョンちゃんって…まーた変な呼び方を…」

「はあ?!今こいつそんな風に私を呼んだ!?」チルタリスの顔が一気に紅潮し、振り向いた勢いで右の翼に持った端末が転げ落ちかける。「そう呼んだの?ヒュン、こいつそう呼んでた?!」「っと…あ、ああ…うん。確かにそうだったな」ベイリーフが咄嗟にツルで端末を拾う。ブースターはさらに嬉しそうな表情をしてチルタリスの首元に前足を回して飛び付く。「あったりまえだろうが！チェギョンでギョンちゃん、やっべええ！俺の傑作中でも最強の……」

「何言ってんのよバカ！ああーガチでへこむんだけどその呼び方、

うわトラウマになったやばいやばい…」チェギョンが首を回してブレイブの胴体前部に頭突きを食らわせ、彼をタラップのデッキに叩き落とした。「いってえ…何もそこまでしなくたっていいだろうがギョンちゃん…いい呼び方じゃねえかよ…」「う…今のはちょっとし過ぎだった?…ごめんごめん…」痛そうに起き上がるブースターにチルタリスは少しだけ申し訳なさそうな顔をし、頭の飾りを左前足で直す。

「大丈夫だよこいつは。俺が見てる限りこの程度で怪我する奴じゃないさ、それで…チェギョンのだろこれ?」「あ、うん…ありがと」リーヒュンのツルが携帯端末を差し出し、彼女は少し恥ずかしそうにそれを受け取った。「家族か誰かにもらった機械か…大切にしとけよな」「まあね、でもこういうのって1年すれば…あ、1年って言うのは1日が３６５回の人間の数え方なんだけど…すぐ古くなって取り替えなのよ、壊れれば買って送ってもらえばいいわけだし」彼女は悪びれもせず答える。このチルタリス、チェギョン・カリワザキにとってはそれが普通だ、というより携帯端末たる物、今や世界どこへ行っても長くて３，４年で買い替えるのが普通である。そもそも人間の文明の機器は数年で新機種が登場し、従来のものが時代遅れになるという傾向が多い。航空機、船舶、宇宙施設、発電施設、巨大建築物はまだしも、自動車、白物家電、情報通信機器、工作機械、作業ロボットの変化は早い。省エネ・地球環境保全基準が年々厳しくなるのはもちろん、その危機に搭載された機能・性能やコンテンツの進化が早いこと、最大は新製品を出すことによる利潤確保と企業間競争への勝利を目的とした産業界各社の思惑によるものだ。新機能、利便性、快適性、省エネ、低公害…あまたのメディアを使えばキャッチコピーは世界中を駆け巡り、顧客は飛びついてくる。

「はあ…それが人間のやり方か、それを否定する気はないけど…」ベイリーフは何とも言えない表情をし、タラップの手すりに数歩歩み寄る。「人間のやり方って…まあアンタは知らないよね…」

「…世界はどうなってんだかな……」ベイリーフが軽く息をつき、首の部分をタラップの手すりにゆっくりと乗せた。「ちょ、ちょっと、最近ヒュン疲れてるよね？最初にあったころは無茶苦茶に飛ばしてた、みたい？なのに…どうしたのよいきなり？」「いや、俺も年齢なのか、それとも人間たちといるせいか、前みたいに何も考えずうごけたらいい、そう思うんだ…」

「アンタ、一体どうしちゃって……」リーヒュンの思い悩んだ表情を見るのはチェギョンにとって初めて、思わず出かけた笑顔を消した、ユイリィでさえ見たことがないに違いない。もしかしたら自分は彼の本音を聞いてしまうのではないか、ポケモンならとっくに眠りにつくはずの時間帯に轟音と喧騒に包まれる人間の文明を見つめていると、彼女の意識の水晶の中でそんな不安を感じた。とはいえ思い当たる節がなくもない。「……そっか、朝の件よね…アンタにしては怒るのが早かったわよね…」

「抑えられなかったんだ俺、どうしてなのか全然分かんない…」ベイリーフは自分のツルを手すりにかけ強く握る。こんな事は考えたくもないのに記憶にこびりついて離れない、苦しい思考に意識の水晶が苦痛のうめきを上げ、内部の気体圧力が高まったように息苦しさを覚えた。あの時自分が人間に飛び付いたのはなぜか？普段の自分だったらこの程度の事は呆れて気にしないはずなのに、気が付いたときには感情に流されて前に踏み出していた。「どうかしてた…皆の言う無茶ぶりじゃすまないはずなのに…」「うーん…私にもよく…どうしてなんだろ？」そう、それがまったく理解できなかった。そのうちには自分の感情という物にさえあの“能力”、一端の民間人である自分が軍隊同然の場所に放り込まれたにもかかわらずこうして平然と生き延びている、その不可思議な事態の原因を作っているであろう“能力”、それに関係する何かが意識の中にさえ入

り込み、自分の性格に取り返しのつかない何かを送り込んでいるのではないか、考えたこともないような不安に取りつかれるのは感じた。「……チェギョン…君に言うのも何だけど、性格ってここまで変わるもんなのかよ?俺そういうの一度も考えたことなかったんだ…」

「…うん…変わるって時は変わるのよ」チルタリスはゆっくりと彼のそばに寄り、視線の先にある人間の手で固められた地面に広がる星空を見つめる。轟音を立てながら飛び立つ1機の貨物機…A－340－300F…を眺めていると、今の彼が抱える悩みという物がおろぼけながら理解できる気がした。それは自分が昔も今も感じ、悩んでいるものに違いない。自分の立場とおかれた状況、その糸が複雑であれば複雑なほど、性格が素直でまっすぐなほどその苦しさは大きくなると。

しかし…自分が言うのも憚られる、チェギョンはそう思ってしまった。この数か月ここにいて思うこと、自分という物を深く見つめたことがない自分がでしゃばり、偉そうなことを言える立場にあるのだろうか?ロックオン曰く自分の内面しか見ない奴の方が大問題だとは言うが、果たして自分はどうなのか…そのせいで彼女の口先は決心がつかなかった。

「私が言うのも…ホントはユイが言ったほうがリーヒュンの為だとは思うからさ…」チルタリスは重い口をようやく開く。「ごめんね…でも私じゃ大したこと言えないから、ユイにあったら聞いてごらんよ。そのためにユイは一緒なんでしょ?」「まあな、…チェギョンにも難しかったか…」

「ったく…お前はいつも他人に投げるんだな」「へ?…ブレイブ?」チルタリスの左の翼辺りに右前足の甲を軽く当てるブレイブ。「お前な、完璧な答えがないからって他人に任せんのか?そこまで自分の答えに自信がねえのか?」「自信なんか…あるわけないでしょうに…」真面目な表情でこちらを見つめるブースターにチェギョンは恥ずかしそうに答えた。目の前にいる彼の性格というのものが、彼

女にはまだ完ぺきには掴めない。

「ま、ギョンは金持ちの子息だからそういう事は考えなくて普通だけどよ…」「悪かったわね、どうせ私は金持ちよ…」ちょっとふてくされる彼女をしり目に、彼は右前足をタラップの床に軽く踏み鳴らす。「バカ、怒んなって。世の中にガチ１００％の解を出せる奴なんかいねえんだから、ヒュンにはお前なりのアドバイスってもんがあるだろうが」「私なりの…」チルタリスは思わず自分の足先をぼんやりと見つめこむ。

「そう、お前なりって奴だな。アドバイスってのは不完全でも必要な奴にとってはいっぱいもらったほうが励みになるんだ」「それってあんたの哲学？テルリンがいつもぼやいてる歩く格言集ね」

「へへっ！ありがとうよギョンちゃん！それっ！」「あのな、ブレイブの目的はそっちか？」苦笑するリーヒュンをよそ眼に、ブレイブはフサフサ尻尾を振りながらチェギョンの首元にまたしてもおんぶされるように飛び付く。自分がそんな格言を言っているつもりはさらさらなかったが、今のブレイブ・エスコーツ・クレイバーには彼女のそれがほめ言葉として受け止められた。「ほら、早く言ってやれよ。悩んでる方がみっともねえぞ、感じたことを素直に出せって。それだけで相手は嬉しいんだぜ？」

「ま、まあ……そんなら…一つだけ私から言える事言うよ」今のチルタリスにブースターを振り落とすほどの精神的余裕はない、ベイリーフの方に視線を向け、猛烈な気恥しさを感じながらも口をゆっくりと開いた。「とにかく…変わるもんは変わるよ考え方も。でもそれをどう感じるかは…それぞれじゃないの？」

「そっか…」何となくではあるが、ベイリーフは頷く。なるほど親友のブースターが言うとおり根本的な解決ではない、しかし彼は不思議と意識の水晶の中にる気体の圧力が下がり、胸を詰まらせていたほどの戸惑いから少しなりとも呼吸が楽になるのを感じる。そして思わずリーヒュン・バイリング・グリーズらしく、口からこんな言葉が出てしまった。「ごめんごめん、何かチェギョンに心配かけ

すぎてるような気がするな」「は、は？あんまり私の言葉、真に受けないでよ…私のダッサイこのアドバイス恥ずかしすぎる…」チェギョンは気恥ずかしそうにタラップを数段降りて座り込む。自分の無茶ぶりや感情の露出振りで相手に心配をかけたくない、そういう彼の性格が言葉となって出てきたのだろうが、彼女にしてみれば自分が少しでも信用されてしまっているのではないかという感じがし、それと同時に自分の今思い悩んでいる事が意識の水晶の底から対流によって上がってくる感覚を覚えた。

「……私にだって最近は自信ってもんなんてほとんどあれよ…、どうしてなのかは知らないけど」チェギョンの口から愚痴がこぼれる。「…今まで自分の立場とかやってる事とか考えたことなかった…自分が役に立ってるかどうか気になっちゃって…何か調子が上がんないのよね最近…」思い返してみれば見るほどいやな気分に襲われ、自分の意識がそこから逃げようとしている感覚を覚える。それを感じているとチルタリスはますます自分に対する自身がなくなっていくように思えてしまう。「……まあ、ヒュンに話すことじゃないのよね。アンタはもっと大変なんだから…」

「…そんなこと言ったら俺だって一緒じゃねえかよ」ブースターがチルタリスの背中から飛び降り、軽く体を震わせてベイリーフの隣に体を並べる。「俺もあん時はそうだった…お前と全く同じで感情を抑えきれなかった」

「ブレイブもか…それでさ、あの時の人間たち、本当にお前の言うとおりの事だったのかよ？」リーヒュンが怪訝そうな表情でブレイブの方を見る。「ああ、そうだぜ。俺たちのことな、なめ腐りやがって…」ブースターは前足を手すりに上げ、左前足を右足の拳に当ててバキバキと鳴らしている。ベイリーフの目には彼の表情は憎悪に燃えていた。真昼同然の明るさになっている周囲、人間の作り出した技術の象徴ともいえる航空機を支える広大な施設と設備を見つめる親友の、わずかに青みがかった瞳の奥には、ベイリーフでさえ後ろに引きそうになるほどの殺気に満ち溢れている。リーヒュン

は隣にいるブレイブの放つ感情が、またしても自分の意識の水晶を満たす気体を刺激し、自分の直感が警告を鳴らすのが分かったが、同時に自分が逃げ出す必要はないんだというたしなめに似た感覚にも襲われた。「…てめえらなんか俺らで束になりゃ瞬殺なんだ…甘くみんなよこの野郎…」

「俺も…奴らの事はぶっ潰してやりたい、今すぐにでもな」ベイリーフも隣にいるブースターに自分の意見をはっきりと伝えた。思わず何も言わずにはいられなかった。「文明的に勝ってるだけで思い上がってるんだろあいつらは?だったらいつかは俺らで見返してやりゃいいさ」彼はツルを手すりに巻きつけ、手すりが震えるほど力をかける。

「さすがは俺の親友、よくぞ言ってくれた!早速このさ…っておい!」ブースターがベイリーフのツルを左前足で握ろうとして慌てて引っ込める。「おいリーヒュン、お前なんてことをしてやが…」

「どうしたブレイ…うっ、なんだ…こりゃ…?!」親友の焦った顔に思わず自分の手すりを握るツルを見たベイリーフは愕然とした。直線だったはずのタラップの手すりを構成する金属パイプが熱して曲げたかの如く大きく変形し、ちょうど彼がツルで握っていたあたりの手すりが支柱までも折り飛ばして手前に倒れていたのだ。「これってお前が……」「んなわけないだろ?…何で…っ!」

否定しかけたリーヒュンだったが、記憶の中からある言葉が突如として湧きだし、彼の意識の中で強く共鳴する。間違いない、あれはもう半年以上前、ユイリィに自分の能力の引き出す方法を特訓させてもらった時だ。“自分の感情をね、思い浮かべた物やこうした行って感情をツルに持ってくるんだよ”そう、これである。彼の頭の上にある葉っぱから頭部を通り、長い首を下がり、背中の部分に向かって冷たい感覚が流れた。自分の意識を満たしていた感情を思い出すとその可能性は一層濃厚になる。自分の感じていた感情、それが自分のツルに伝わり、恐ろしいほどの力に……

いや、こんな事が起こり出したのは今日だけではない、１０日ほ

ど前もそうだったではないか、ガラテアの沼地に現れた生物の駆除を依頼してきたマグマラシ種族のスカラー、施設の機密保持という名の下で脅しをかける統合軍兵士の人間が握るアサルトライフルの銃身をとっさに掴み、飴細工のように曲げてしまった。その時の人間の顔がはっきりと思い浮かぶほど記憶は鮮明だった。

「…ごめんなブレイブ」リーヒュンは思わずブレイブの左前足に自分のツルを巻きつける。「あ？いきなりどうしたんだよ？」「いや…俺のせいで…皆の周りがごたごたしてる気がするんだ…」「バーカ、お前らしくねえなあ、まあやってみる、っていつもみたいに流しちまえばすぐ話だろ？お前の感覚がちょっとばっかし…」彼のツルを右前足で振りほどこうとしたブースターだったが、彼の表情からただならぬものを読み取り、少し小馬鹿にしたような笑顔を慎重に消す。小さい頃から何年間もこのベイリーフと過ごし、今もこうして一緒にいるブースターには今まで見てきた彼の表情や言動にはない深刻なものを感じ取った。そこまで分析できるのは荒っぽい言動や素振り、危険なほどの性癖を持ちながらも、常に周囲の状況や自分を囲む者たちの内面や本音までに気を配り、やるときは持ち前のこのベイリーフに負けぬ勢いと力攻めでぐいぐいと周囲を引っ張るブレイブ・エスコーツ・クレイバーらしい鋭さなのかもしれない。「……すまん、今のは忘れろ。お前の直感は昔っから鋭かったもんな…俺もリーヒュンがどういう状況でどういう感覚を持っているのかは知らないが…誰もお前の事を責めたりゃしねえって…」「俺もそう信じたい、そう信じたい。今まで起こったことすべては偶然なんだっていいたいよ！」リーヒュンは右前足をタラップの床に強く押し当てる。これまでにない自分に対する不安感とそれを掴めぬ歯がゆさを同時に感じた。何かがおかしい、自分の周りで起きている事すべてが悪意を持って自分と自分の周りにいる全員を巻き

込もうとしている、一歩間違えば戦慄が走るほどの物に恐怖を覚えると同時に、それを見抜こうと必死になってい自分の感覚に意識を合わせる。しかしその先が見えない、わずかに感じられるのはそのおぞましい程にはっきりとした、意識の水晶の底に芽生えた不安という種である。そしてそれが…最近の自分の性格を何となく変えている、自分自身が気づいてしまうほどの理由になってしまっている気がする。やはり…自分の感情に能力が入り込み…それで…それで…「もう無理だ…」彼は苦しそうに呟く、本当に息苦しかった。「今の俺は踏み出していいのかよ…このまま?…どうしたら…」これまでそういう不安という物に自分は興味を向けてこなかった、ただ自分のやる事が、何となくそう感じた方に突っ込んでいくだけで現実化し、良くも悪くも先の事を見少している、そういう得意げな感情さえも小さい頃は覚えていた。そしてそれがもたらした持ち前の性格が、ただただその時その時を冒険するように仕向け、その感覚を存分に楽しんできた。だがそれが今となっては…昔からこれでいい、そのやり方でいいと信じてきた方法が大きく変わろうとしている、嫌でも自分のそれは既に否定されかけている。そしてもう変わり始めている、自分自身も、自分の周囲すら巻き込んで。

そしてそれはフローラの事さえも……

「……それはお前の考え方次第だぜ」ブレイブは表情を引き締め、親友の右前足の爪辺りを左前足でかるくこすってやる。このブースターからすればベイリーフの抱える掴みどころのない感情とそれに対する苦しさという物は、一匹だけでは手に負える話ではない、そういう物だった。ましてや小さい頃から一緒の仲、自分のアドバイスに自信があるとか間違って時の責任だとか、そういう物に構っている余裕はない。「リーヒュン自身が変わっている、それでいいんだと言えばだれも文句を言わねえし、昔のように…まあ今でもお前は変わんねえように見えるけど、とにかくそうありたいと思ってや

れば、誰も文句は言わねえよ」ブースターは何度もベイリーフの右前足の爪先をこする。彼の右前足が何となく震え、少し冷たくなっているような気がした。「あとな…誰もリーヒュン達の能力が迷惑だ、怖いだなんて誰も思ってねえよ。毎日毎日一緒に寝てる奴を怖がってたら過労死しちまうぜ？……安心しろや、昔かっらお前が他人の事を無条件に信じ切るのと同じ、な？」

「それから…私ももう一つだけいい？」話を聞く一方だったチェギョンが携帯端末をトレジャーバックなる物に収めてタラップを数段上がってくる。「自分の事を信じ切って突っ込むのも方法のうちよ」チルタリスは恥ずかしそうな笑顔を浮かべる。「ほら、私なんか今もそうだし、困っちゃうけどね…」

「そっか。まあ、そんな感じでいいんだよな……」ベイリーフは思い切り変形したタラップを一回ツルでなでる。意識の水晶の中を渦巻いていた気体の流れが変わり、呼吸を圧迫していた何かが少しだけゆるんだ気がした。しばらく目の前に広がる人間の空港の風景を見つめた後、彼は吹っ切れたかのように息を吐き出し、長い首を前に思いっきり伸ばした。「色々と心配かけて悪いなブレイブ……チェギョンも」リーヒュンは右前市を軽く踏み鳴らしたのち、ブレイブの両前足にツルをそっと当てる。「俺は逃げはしない…今はまだ分からいけどさ、…見えない影を怖がっても仕方ないんだよな」

「その息だ、まだまだ細かい事は分からない、そういう時に際需要なのは前を向いて突っ切る、それだけだぜ！」ブースターは嬉しそうに尻尾を振り、ベイリーフの背中にあたる部分に飛び乗った。「今後とも細かい事は考えずにやれることとしてこうや！」「うん、手探りしてりゃ真っ暗でも辿りつく場所はあるってことだ！」ベイリーフの首に生える葉っぱのあたりに両前足を回し、ブースターは自分の頬を彼の首に押し付ける。「これからも期待してるぜ相棒！」

「よろしくな」

「あーあ、相変わらず仲がいいのね2匹は。私にもそれ位のいい奴がほしいよ…」仲よしこよしの2匹を見つめているうちに思わずこぼれたチェギョンの笑顔、それにブースターは過剰反応してしまった。すなわちチルタリスは地雷を踏んでしまったのである。「何言ってんだギョンちゃん！俺っつー最高のパートナーがいるだろうが！」彼の輝く目線がチルタリスの方に向く。「ちょ、ちょま…」「うおっしゃー！！分かんないギョンちゃんに俺が優しく教えてやるぜ！！」またしてもチルタリスの華奢なスカイブルーの首に飛び付こうとするブレイブ。

「って何やってんだよブレイブ？相変わらず理解しづらいな俺には……」なぜここまで親友は女好きになってしまったのか？リーヒュンは何とも言えない複雑な感情を感じつつもブースターの胴体にツルを回し、彼をチルタリスから引き離した。

そんなこんなをしていて間もなく、タラップの元に出てきたのはサクラ。手に持っているのは資料らしき紙数枚がある。「それで…国連側とアメリカ国防省の対策チームが検討した結果が出たわよ」

「来た！俺はどうすか俺は？！」ブースターが期待したように体を震わせ、彼女の方へと真っ先に歩み寄った。「そう焦らないの、その件なんだけどね…」サーナイトは子供に言って聞かせるという表情で姿勢を彼の目線と合うまで下げ、書類の1枚にちらりと視線を送る。まあ読まなくても頭に入れてはいるが、あまり今回は目の前にいるブレイブにとってはいい話とは言えない。なぜなら2分割が…なのだから。

「その件、言うわよ…」「へ…何か俺に…」彼女の表情に少し笑顔が消えるブレイブ、サクラは大きく息を吸い込んでから口を開いた。

「今回あなたとテルルは別行動になったの、あなたとグラシデアと

チェギョンはカナダ・バンクーバー方面になったのよ。残りはサンフランシスコ方向ってこと」

「……そう…すか…それはすなわち…」ブースターはまだ事態をよく呑み込めていないらしく、目を丸くしてサーナイトを見つめた後、思わず自分の左前足の肉球側をじっと見ている。彼は頭の中で彼女の言ったことを冷静に分析し、言葉を仕分け、丁寧に再構築した。すなわち…それが示す理由とは……

（！！）ブレイブは愕然とした、その直後にそれは戸惑いと失望に変わった。恐れていたことと言えば恐れていたことだが、まさか本当にそうなるとは思わなかった。「…俺は…テルルとは…別行動になるって事……」

「ええ、本当に申し訳ないと思うわよ…」サクラはブースターの頭にあるフサフサにそっと右手を当てる。「い、いやいや、それならそれで決定すよサクラさん！別に俺は決定に反対するタイプじゃねえし、そういう事だったら、全然…」

「…大丈夫？…あなたはテルルなしでも集中できる？」「そ、そりゃもちろん…」「ならいいんだけど…」心配をかけまいとでも言うのか、明るく振る舞う彼の表情と当てた右手の感覚が伝えてくるものに彼女は戸惑う。彼の意識は明らかに一抹の寂しさと不安を放っている、彼にとってテルル・アストラフスキーは自分の命にでも代えて、たとえ自分の未来が途絶えようとも守ってあげたい存在、そういう物を感じた。だからこそ自分の決定が、というより国連側が適当に通達し、それにある程度修正を加えたものが、自分でも許せないものに思えてならなかった。ブレイブ・クレイバーが任務に集中できないという理由以前に、この先長い間共に過ごしていく彼が、あのグレイシア種族を思うであろう気持ちを考えると、この決定がその可能性を奪っていくものに見えてしまってならないのだ。

「まあ、それならいいわ。ブレイブはグラシデアとチェギョンをしっかり頼むわね。気の強さとしてはあなたが一番そうなのだから、ね？」「おっし、分かりました！ギョン！一緒に頼むぜ、やっべえ、

ついに俺にもモフモフをだっこする瞬間が…」「…わわわっ?!」

嬉しさにかられたのか、それとも意図的か、ブースターはまたしてもチルタリスに、しかも彼女の胴体を覆うモフモフ毛にダイブしようとする。当然のことながらチェギョンはそれを振り飛ばした。

「もうっ!さっきから私のモフモフに飛び付きすぎなのよ!…あーったくぅ!レディーの最高品質になんて事をする…」真っ白なっくちばしで自分の毛を整え直す彼女は、突然思い出したように華奢な首を持ち上げる。

「そう言えば…私はグラシ達と一緒に行くのよね…ロックさんとは別ってわけ…」彼女は不思議な寂しさを感じる。ロックオンとはこの数か月間ずっと一緒に飛んできた仲だ、自分がなかなかうまくいかないこの頃を何とかできたのは他ならぬ彼のお陰でだったのかもしれない、それを考えると意識の水晶にある種の孤独感が芽生えた。自分と2匹しかいないひこうタイプ、無限に広がる大空では同業は多くいた方が助かるのに……

「俺を呼んだか?…なんだかグラシが眠そうでな…俺が抱っこして三分しても寝ぼけてるもんだから…」噂をすれば影とはこの事、解放されたC－17Bのドアからモココを左の翼で抱えて出てきたのはそのムクバード種族である。彼はチェギョンを見るなり右の翼をすっと前に出した。「…まあ、お前とは別行動になるからな。俺が言ったことをしっかり守るんだぞ。そうすりゃどこでも生き残れる…たぶんな」

「そ、そんなんでいいんですか?」何を学んだのか?この数か月、彼から何を教わったのか?突然分かれることになった緊張感からか、彼女には何一つ思い出せなかった。記憶をどうまさぐっても彼の発言に対するフォルダーは未使用のようだ、不安に駆られたチルタリスは彼の方に数歩歩み寄る。「…とりあえずは頑張りますけど…」

「けど、じゃねえよけどじゃ」ロックオンは分かってないな、とばかりに右の翼を彼女の頭の上にある飾りに当ててきれいに整える。

「不確定要素ばっかりあげてどうすんだ?確定した言葉でびしっと

決めろ」「は、はあ…頑張り、ます…これでいいですか？」

「そうだ、それでいい、出がマジなだけあって聞き分けのいい女の子だな。大丈夫、お前ならきっと問題ねえよ今回は。それに…」ロックオンは右の翼でチェギョンの白く柔らかいほっぺを軽くつつく。何とも言えない気持ちよさ、軽く冗談の一つや二つでも飛ばしてやろうかと彼は思ったが、彼女の目を見ていると彼もまた一抹の寂しさという物を感じた。「…俺の方が心配なんだろ？気にすんな、それよりグラシを無事に帰せよ。こいつは俺の嫁さん第一候補……」

「はい…っていつの間にそんな事が？！」

「嫁さん？！…何言ってるんですか……？」そのムクバードの一言にグラシデアは覚醒したらしい、彼女は顔を真っ赤にして彼とチルタリスを交互に見つめる。「や、やめてくださいよお…ワタシは…そんな…」

「だろ？嬉しいよな？」冗談半分で彼の両翼がモココを首周りにあるモフモフを抱きしめ、自分の元へと近づけていく。「キャ…」「あの、あんまり嬉しそうじゃないような…」「構わねえさ、いつかは俺の事を旦那だと思ってくれるぜ」チルタリスの心配そうな表情をよそに、ムクバードはモココが思わず飛ばす静電気もなんのその、強く抱きしめていた。

あまりの恥ずかしさに顔がやけどしそうになるグラシデア、ショックで周りの音も周囲の視界も曖昧になる程だったが、ふいにロックオンの小さな声が聴覚器官を通って彼女の意識にはっきりと飛び込む。「……無事に帰ってこい、いいな？」「……う？？」気恥ずかしさのあまり息が詰まる、彼女は狭くなった気管支から空気が漏れるかのような声しか出せなかった。「……お前が助かるんなら俺は何でもする……だからくれぐれも…」彼は左の翼で彼女の首周りのモフモフ毛をポンとたたき、目を閉じた。「…神の御加護があらんことを…グラシ…」

「……あの…」グラシデア・ホルストの意識の中に今までとは全く違う、これまでに経験したことない感情が湧き上がる

のを彼女自身感じる。照れくさいよな、それでいて嬉しいような、考えるだけで体が温かくなるような、そんなものだった。

「気を付けて行って来いよ、な？」ロックオンはグラシデアの頭の丸まったモフモフ毛をもう一度翼の先で突き、彼女の後ろへと軽く飛び退く。「よっし！よろしくなグラシ！やっべえ、ギョンちゃんと合わせて2匹でモフモフ！今の俺は最高に幸せ……」その直後に正面から飛び付いてきたのはブレイブ。ロックオンとは全く違う、強引に感じる前足の抱きしめだった。「んぎゅ？！…ね、ねえ気持ち悪い！やめてよオ…」「へへ！よろしく頼むぜモコモコちゃん！」

「な、何それ……」

「よろしくねグラシ！」「う、うん。チェギョンとは初めて一緒になるんだね…」チルタリスの言葉にはどうにか返せたものの、今のモココにはそこまでブースターに構う精神的余裕はない。彼女は思わず後ろ振り返る。ムクバードはタラップと機体の境目、機内の照明がぼんやりと照らす辺りで右手を機内の壁にあてて体重をそこにかけ、何かを祈るように目を閉じている。おそらくは自分のため、彼の思いが如何なるものなのか、グラシデアはそれを考えるだけで先程の不思議な感情が熱を帯びるのを感じた。

「まったく…お前は女の子相手だとすぐに飛び掛かるんだな…やめとけよ」事態の成り行きを眺めていたベイリーフ種族、恋愛に対して全く疎い彼だったが、少なくともこれだけは言える、モココに無理やり抱きついている目の前にいるブースターをツルで後ろに引き離す。「ヒュンも羨ましいだろ？」「い、いや、そんな…」「ったく、無理に照れた顔すんなって！ともかく……」ブレイブは親友のツルを解き、下に降りる。「ユイやテルリンをしっかり頼むぜ。あとはやってる時はさっきの事、気にすんな。結果が出てくるのは目の前から何だから」

「ああ…ブレイブもしっかりやってくれよ」リーヒュンはツルで彼の頭のフサフサをかき回しながらも思わず周囲を見回す。周りにいる者たちの感情が複雑に揺れ動いている、自分はその軸でもなんでもないが、周囲を渦巻く意識のようなものが自分の水晶の周りを渦を巻いて流れていくのを感じる。それは息が少し詰まるような、それでいてちょっと気を遠くしそうな変わったものだった。

「そうそうそれから…」2匹の元に歩み寄るサクラ。「カナダの方に行くチームにはね、一匹アメリカ軍から同行してくれる子がいるのよ」「へ、その子…女の子すか？」「バカ…すぐそっちに行くなって…」

「女の子じゃないわよ。でも…」彼女は表情を少し緩め、タラップの手すりに歩み寄る。曲がっていること等は気にしなかった、リーヒュンがそこに残した感情から原因が分かるから。「…あなた達のお友達よ…昔の」

「お友達？……そうか！」ベイリーフの意識の水晶にはっきりとした何かがよぎる。昔の友人というのは…自分が直感的に感じたのは…間違いない！一瞬の疑問符は即座に喜びへと変わった。

「お呼びですかい国連所属の司令官？」一行が振り向いた直後、空港職員と思われる作業着を着た人間と明らかに軍関係者らしき（左肩に星条旗と部隊章があった）迷彩服と手にはアサルトライフルという格好の人間が複数人上がってきた。彼らの合間にいるのは濃淡2色のブラウンの毛並、手足と不釣り合いで尻尾との区別がつかないほどの長さを持つ胴体、そしてわずかにエメラルド色の瞳を持つオオタチ種族。そのオオタチはベイリーフとブースターを見るなり右手を前に突きだし、こちらを指差してくる。その表情には驚き以上に嬉しさが表れていた。「ブレイブ、リーヒュン、お前らが……こんな所で！」

「エンデバー！！てめえだったのか！」真っ先に飛び付いたのはブレイブ、勢い余ってエンデバーをタラップの階段に突き倒してし、自分も数段落下してしまったが、２匹ともそんな事を気にすることのもなく大喜びしている。「何年ぶりに合うんだろうなお前とは！随分でっかくなったじゃねえか！」「バカ、お前だってころっころのイーブイだったくせにいつからその種族なったんだっての！！」ブースターが仰向けになったオオタチに４本足でしがみついている状況ではあるが、オオタチも嬉しそうに胴体の最後部にある尻尾に当たる部分を振り、満面の笑顔でブースターの飛び付きを受けている。

「まあ、お前がブレイブだという事、もちろん俺が忘れてるわけないぜ、一目見りゃお前があのイーブイだなんてすぐ分かるからな」「当たり前だな！何せこれがある限り…」ブレイブが左前足の付け辺りをエンデバーの目の前に突き出す。彼の首の周りに生えるフサフサ毛が漏れ出したように黄色い毛が小さな炎の模様を作り出していた。これも彼がイ―ブイ種族の頃からあるものだ。

「ああ、それも健在か。いやいや…それにしてもお前らと少しの間だがご同行できるなんて奇跡って奴だ。頼むぜブレイブ」「へへ！コロコロのイーブイ時代じゃねえからな、俺の手際見て驚くなよ！！」オオタチが嬉しそうに体を起こし、ブースターの首周りに短い手足を回す。同性・異性関係なく体を触れ合せることが絆の強さの証であるポケモンの文明、ブレイブ・クレイバーはエンデバー・リシャトルの体から感じる温もりに意識の水晶をゆだねる。何年ぶりかの再開、国連軍と国連機関双方に所属するこのチームには、気苦労や世界の現実に対する苦しみを感じることも多い。彼にとって多くの仲間と再会し、新しく出会う事は自分の意識の感情の安定を保つうえでなくてはならない存在だったのだ。

「おいおい、俺を忘れるなよ。お前と一緒にバカやった仲だろ？」リーヒュンも４本足を人間に合わせた（人間は２本足なのは当然だ。ペット等は貨物扱い、車いすやストレッチャーは別のドアからエレ

ベーター車両で乗り込む）タラップの階段に取られながら数段降りてくる。「リーヒュンも何年振りかだな、お前らはカナダじゃねえのか？」「ああ、俺らはこのままサンフランシスコ行だからな……」オオタチはベイリーフの長い首元に飛び付き、そのままリーヒュンの特大マフラーになって巻きついた。ベイリーフには彼の温もりが首全体から体へとゆっくりと伝わっていく。そう言えばチコリータだったころもオタチだった彼が自分の背中に膜のような両手を広げて飛び付き、速成のベールみたいになったっけ……そんな懐かしい記憶が彼の温もりによって意識の水晶の底から湧き上がってきた。だが、リーヒュン・バイリング・グリーズにはもう一つの事実も分かっていた。地上やタラップの所にまで集まってきている人間たち、ブレイブをはじめとする一行はもう出発しなければならないのだ。

「…まあ…今度また合流した時にもう一回だな。お互い頑張っていこうか」

「しっかり頼むぜそっちも！合流する場所でまた落ち合おうや！」

エンデバーも嬉しそうに答える。これが終わった後の予定は何も聞かされていなかったが、また彼とは会える気がする、そしてなぜだか知らないが彼とはまた仲良くやれるのかもしれない、そんな感じがする、ベイリーフに直感がそう言っていた。

その頃、東シナ海

予想していたとはいえ、実際にこういう事態が来た時の緊張感は格別である。「貴国の艦隊は現在、大韓民国のＥＥＺ（排他的経済水域境界線）上に位置している。艦隊は直ちに反転、韓国経済水域内から離脱せよ」アメリカ海軍第５艦隊、第４１打撃艦隊群の空母「ロナルド・レーガン」のＣＩＣには張りつめた空気が漂っていた。最終日が近付く米韓合同軍事演習は現在中断し、数日前から突如と

して渤海から東シナ海・韓国東方沖へと移動しつつある中国海軍の機動艦隊の追跡と警戒に全力を注いでいる。「貴国の艦隊は現在、大韓民国のＥＥＺ上に位置している…」通信士の１人は英語、うろ覚えの中国語と韓国語を用い（後者の可能性はほぼないとはいえ）、全周波数帯で警告を発し、別の男はコンソールのキーを打って警告文を中国艦隊の識別装置のコードへと向かって発信している。現在米海軍と統合海軍直属のニミッツ級空母は、順次アメリカ海軍のアーレイバーグ級イージス駆逐艦と同等の性能を持つ火器管制装置や通信指揮装置への換装をはじめとする内部情報システムの強化を行っており、従来はイージス艦とのデータリンクを必要としていた艦隊指揮機能が１艦で行えるレベルにまで電子情報機器とシステム全体が強化されている。しかし、近年は中国艦隊も兵装・システム双方の急速な電子化と現代化で、周辺国の漁船や軍用艦船に対する電波妨害や疑似ターゲティング（誘導兵装の照準ロックさせる）といった過激な軍事行動に出る事も…その度に中国は相手側の領海侵入や軍事的挑発に対する対抗策だと主張するが…度々だ。空母「ロナルド・レーガン」に随伴するアメリカ海軍のイージス駆逐艦「ディケーター」もまた、全周波数帯に対する別波長による音声警告と識別装置コードに対する別プログラムでの警告文を送信し続けている。やがて韓国海軍の揚陸艦ＬＳＨ－６００１「独島（ドクト）」も英、中、韓の各言語で警告を発し始める。「中国機動艦隊、進路そのまま、航行速度もそのままです」繰り返される警告と相手の応答を待つ沈黙、その中でレーダー担当のオペレーターがうす暗いＣＩＣに星空を作り出すコンソールのディスプレイを見つめ、感情のこもらない声を上げる。「ＩＦＦ、トランスポンダ、無線機、全て応答ありません。」ヘッドホンを装着する無線士が静かに言う。「相手側の艦隊は搭載艦載機による演習を続行しています」

「まあ、聞いているとは期待できんがな……」アメリカ海軍参謀の一人がＣＩＣ中央部にある、食堂のテーブル以上に巨大な戦略情報ディスプレイに映る輝点（ブリップ）を見つめ、帽子をいったん頭から外す。

「でしょうね、こんな事態は初めてではありませんから、今までの実績からして中国がこの程度で離脱するとは思えない…」海軍の参謀たちは平和的な解決など期待していなかった、韓国、台湾、日本がそうであるように、自国の領海・空内や自国の企業が保有する資源プラント周辺に出現した中国関連の航空機や船舶を追い払う方法、それは相手が軍用艦艇だろうと民間船だろうとこちらの航空機や艦艇…国軍でも沿岸警備隊でも…を緊急発進させるか、哨戒中の部隊を急行させて直接警告を加える事だ。それでも食い下がらないどころか、乗り込んだり空港へ誘導しようとすると抵抗してくる場合さえある。それが漢民族の気質なのかはどの国家のいかなる人種にも分からないが、少なくとも通信による警告に恐れおののいて引き返すような連中ではない事は確かだ。

「艦載機部隊、韓国領空内に一部侵入……」レーダー観測のオペレーターが声を上げる。「相変わらずの連中だ、特に目的があるようにも思えんが…それは連中の頭を覗ける奴にしかわからない事だ…」参謀の一人が手に持った葉巻を灰皿に押し付ける。「「栗谷李耳（ユルゴク・イ・ィ）」より連絡、空母「ロナルド・レーガン」より航空機の緊急発信を求める、との事です」先ほどとは別の通信士がディスプレイに映ったリードアウトを読む。「なるほど…出せ、か…」合同艦隊の実質司令官にあたる男はそうつぶやき、大型ディプレイに映る輝点をじっと見つめる。まあ韓国側からしてみれば自国の領空内に中国軍機が入ってきた、それだけでゆゆしい事態なのだ。もちろん韓国空軍が本土基地からＦ－１５Ｋによるスクランブル発進をかけるのだろうが、中国軍艦載機側が察知して退避すればスクランブル発進の意味はなくなる。韓国側とすれば何としてでもここの所顕著な中国側の軍事行動を牽制したいのだろう。

「……了解した、艦長、航空機部隊は出せるか？」「はい、出せるだけの体制は整っています」「よし、航空機部隊をスクランブルさせろ。中国軍機の行動を牽制、これ以上の韓国領空の審判を許すな」司令官は帽子をかぶり直し、コーヒーカップをディスプレイの

脇に移動させた。アメリカ海軍空母のＣＩＣに鳴り響く警報音、航空指揮責任者が無線機を掴み、航空管制室に発信指示を伝える。戦況ディスプレイ真上に設置された４つの液晶ディスプレイに表示されているのは、空母とアメリカと韓国のイージス艦と駆逐艦、「ディケーター」と「文武大王（ムンムデワン）」が解析した上空飛行中の目標である。エンジン排気、機体のシルエット、搭載武装や塗装を分析し、識別プログラムに記憶されたデータと照合するのだ。解析結果は見ずとも明らか、ロシア空軍の傑作機であるＳＵ－２７に独自開発の中国産機器を搭載したＪ（殲撃）－１１艦載機仕様である。司令官の男は心なしか自分が緊張しているのを感じる、南シナ海でも東南アジア・オセアニア諸国や民間軍事会社との合同演習で中国軍艦艇と接触することは度々あったにもかかわらずだ。今回に限って何となく嫌な予感がする。それは軍人の直感とも、人間本来の危機回避本能とも取れる自分の意識が発する警告だった。

アメリカ海軍空母「ロナルド・レーガン」の飛行甲板（フライトデッキ）は、一気に戦場の雰囲気が強くなった。すでにスクランブル発進用武装も準備を終え、電源車からエンジン始動用の電力注入も済まし、操縦コンソール、油圧系統、飛行制御や火器管制を司る電子系統のチェックを終えたマグドネル・ダグラス社製の汎用艦載攻撃戦闘機、Ｆ／Ａ－１８Ｅにパイロットたちが飛び乗る。キャノピーを降ろし、直ちに非常射出座席のチェックを行う間に、すでに空母側の射出用蒸気カタパルトの取り付け作業すら終えている機体の背後に防炎・防熱用のバリアーが上がる。空母側の飛行管制室オペレーターが離陸許可を出し、Ｆ／Ａ－１８Ｅのパイロットがコンソールのスイッチを一押しするだけで機体の発艦は全自動で行われる、あらかじめプログラムされた発進シークエンスと空母側の射出プログラムをリンクさせ、指定された順に４つの射出ポイントに内蔵され、加圧された蒸

気カタパルトの固定ブロックが外れると同時に、２機のＧＥ社製Ｆ－４１４―ＧＥ４００ターボファン・エンジンがマックパワーとなり、燃料と武装を合わせて２０トン以上の機体を空母から打ちだした。着陸脚が空母のデッキを離れたＦ／Ａ－１８Ｅは指定された高度まで自動操縦、着陸脚の収容から火器管制装置の解除まで離陸シークエンスが全て自動で行われていく。

さすが世界最強のテクノロジーと軍事力を持つアメリカ合衆国の海軍部隊、数分後には４機が指定された高度に集結し、不審機の機影（オブジェクティブ）の方向へと向かい始める。「国籍不明機の座標、現在の母艦を起点に１－１－２、方位３００から３１１、不明機４機の高度は１００００。各機、許可のない射撃は禁ずる、領空侵犯中の不明を退避させることを最優先だ。周囲の民間機、民間船舶、民間の採掘プラント構造物に警戒しつつ指定された座標へ向かえ」「はいはい了解、許可ある間でトリガーに指一本触れませんよ」くどいようなおせっかいのような米海軍空母「ロナルド・レーガン」の航空管制室からの無線に、小隊長（ウィングリーダー）のパイロットは二つ返事で軽く流す。この男からしてみれば、目の前の不明機が適正であるのならさっさと撃ち落してやりたいというのが心情だが、政治と外交というものはそう本能が赴くままの行動は許されないものだ。そんな事は既に何回も、指がひとりでにトリガーから離れるほど聞いている。「よーしよしよし、各機、座標と高度は分かったな。一気に奴らの尻に食いつくぞ！」パイロットは手元のコンソールに指定された高度と座標を打ち込み、それからわずかに左手でスラストレバーを前に倒すと同時に右手のコントロールスティックをわずかに左に倒しつつ左足の電子制御のラダーペダルを踏み込んだ。ＨＵＤに表示された座標・高度指示の赤い輝点へと向かって高度表示と座標表示の数値が変化し、主翼のエルロンとエレベータ（水平尾翼）が機体を傾け、スタビラ

イザ（垂直尾翼）とラダーが機体の向きを変える。同時にＦ－４１４－ＧＥ４００ターボファンの回転数が上がり、その振動と加速度が自分のシートに押し付けられた背中とスラストレバーを握る左手に伝わってきた。

ターボファンジェットを積んだ航空機の速度と距離感は普通の人間がその数値を聞いて感じるものとは全く違う、加速した４機はわずか１分５０秒程度で８０キロ近い距離を飛行し、あっという間に指定された座標へと到達した。「目標を視認。航空管制室、警告の再発信を」「了解した…」空母「ロナルド・レーガン」のＣＩＣも航空部隊の到達を確認したらしく、小隊長が軽く無線を入れるだけで先程までと同じく全周波数帯での領空侵犯警告を再開した。まずは英語、一息入れて中国語、もう一テンポおいて念のためでは韓国語、パイロットたちにはＣＩＣの通信員が通信機越しに発している警告が不気味なほど長く、じれったい物に感じられた。２基のターボファンジェットの唸りはサイレンサーをつけたヘッドホンとヘッドマウントディスプレイ映像投影装置付きのヘルメットの内側にまで伝わり、ことに小隊長（ウイングリーダー）はまだ戦闘機動をとってもいないにもかかわらず、酸素マスクから吸い込み吐き出す呼吸の回数が増え、それを感知したセンサーが吸入量を増やすのを感じた。戦闘機乗りの本能がもたらしているのは目の前の不明機に対する闘争心ではない、まさに敵意そのものである。目の前にいる不審機…中国軍機なのは明らかだが…が太陽光をわずかに反射しながら飛行するその姿が、こちらに対する冷ややかな薄笑いを浮かべ、嘲っている、そうにしか見えなかった。

「各機、不明機（アンノウン）の反応は？」警告を発したアメリカ海軍空母の航空管制室が飛行中の自軍機に問いかける。小隊長は強化繊維ガラスのキャノピー越しに飛び続ける不明機を見つめる。ヘッドマウント

ディスプレイ越しに風景を見る彼の眼には、目標コンテナと残数値の表示が合成されて見える相手機の動きに変化があるようには見えない、相変わらず不明機は進路を北に取り、韓国領空識別圏をなぞる飛行を続けている。男はヘルメットに内蔵された無線機の交信を行う右手のスティックに付いているスイッチを押した。「特にない、無線による交信もしていない」「同意です」「３番機、同様です」僚機のパイロットも口をそろえる。そうしている間にも小隊長は左手で握るスラストレバーを２つとも前へ、ごくわずかに倒し、Ｆ－４１４－ＧＥ４００の出力を上げる。Ｆ／Ａ－１８Ｅはわずかに速度を上げ、不明機の方へとゆっくりと接近し始めた。「こちらからも警告を加える、別に機体が出現したら報告しろ」「あまり接近しすぎるな、万が一敵側の僚機に回られたら逃げられないぞ」「…それは俺が何とかする」不審がる関せ員の声などお構いなし、小隊長のパイロットは右手のスティックをわずかに左に倒し、同時に左足のフットペダルを少しだけ踏む。迷っている暇はない、放っておけば相手は領空侵犯を続ける、祖国に侵入しているわけでもないのに、彼のアメリカ軍人としての中国に対する敵対心からか、戦闘機乗りの本能が一層強く騒ぎ、何もせずに見ているわけにはいかなかった。彼の手足と体になったＦ／Ａ－１８Ｅは機体を左に傾けてゆっくりと上空をスライド、灰褐色に明るいスカイブルーの不明機から４時方向、３５フィートの位置にまで接近する。「３番機、４番機、後方の奴を見張れ、火器管制オートロックは解錠していて構わん」「了解です」ダイヤモンドの左と後方の機体を成す機体がゆっくりと速度落とし、小隊長機からゆっくりと後ろへと下がっていく。「国籍不明機に次ぐ、アメリカ海軍機の誘導に従い、韓国領空内から速やかに離脱せよ。韓国空軍機かそちらの１０時方向から5分以内に到着する、猶区審判を続けた場合は貴官の強制着陸の上、身柄を拘束する可能性もある」男は無線機の周波数帯を空母ＣＩＣから送信された周波数に（中国空軍機の解析された周波数帯がヘッドマウントディスプレイ機器に内蔵されたヘルメットのゴーグルに映し出さ

れた）切り替え、英語で警告を発する。
　数秒間の間をおいたがやはり不明機に反応はない、男は軽く息をつき、再度英語で警告を発する。「我の誘導に従い韓国領空を離脱せよ、貴官のトランスポンダはスコーク７６を発していない、無線が聞こえているならギアダウンしろ」「無理な警告は止めろ、中国当局の批判の的だぞ」「そんなのに構うのは政治家でたくさんだ」空母ＣＩＣの警告を無視し、男は苛立った素振りでコンソールを叩き、火器管制装置の解除と目標標準を開始していた。対空レーダーと連動する赤外線センサーが捕える不明機の排熱をセンサーが捕え、それを火器管制装置を経由して機体のウェポンベイに装着されたＡＩＭ－９空対空ミサイルに目標データを刻み込み、機体コンソール上部のＨＵＤとヘッドマウントディスプレイにロックを知らせる表示が現れる。男の我慢は徐々に限界へと近づいていた。彼にとってあくまで正面にいるのは敵機、中国軍機の行動は明らかに意図的な領空侵犯だ、男は国際法規を呪った。意図的な領空侵犯という犯罪行為を何の警告なしで撃墜できれば！そうすれば中国もおとなしくなるだろうに、と。
　スティックに装着された武装セレクターを切り替え、すでに武装発射トリガーに右手の人差し指をかけて待つ時間があまりにも長く感じられる。グローブ越しに伝わってくるＦ／Ａ－１８Ｅの振動さえ愛機が目の前にいる明らかな敵機を喰らいたいという発作を起こしていることを雄弁に物語っていた。「不明機にロックしているのか？くれぐれも射撃は禁ずる」「当たり前だ」機体が空母の航空管制室に向けて発信し続けている自機情報にオペレーターが念を押す。不明機４機に喰らいつくＦ／Ａ－１８Ｅのパイロットは必死に撃墜という軍人の本能を抑え込み、発作に震える口先で警告を続ける。
「直ちに韓国領内から退避せよ、間もなく警告射撃に入る」

その直後、彼のやや左下を飛行する不明機がゆっくりと機体を右に傾け、滑り降りるかのごとく高度を下げながら彼の機体の下をすり抜けていく。「不明機、領空からの離脱ルートに入った模様」男はコンソールのディスプレイに映る対空レーダーを見つめがら呆気にとられたように無線を入れる。衛星地形図とデータリンクして表示された領空識別線を機影は通過し、公海へと飛び去って行く。「了解した、目標機種の識別は大丈夫だったか?」「識別通り、機体はＪ－１１、ＳＵ－２７のコピーだ」パイロットはコンソールのレーダーに表示された情報とヘルメットのゴーグルに見える景色の上から映し出された目標コンテナの情報を確認し、右下方へと視線を落とす。洗練された空力設計の基づく流麗な曲線美を持つ機体、美しい外見とは裏腹に世界最強クラスの推力を持つその尾部に2機装着されたターボファンジェット、旧ソ連時代からアメリカ軍のＦ－１４，Ｆ－１５、そしてＦ／Ａ－２２Ａの仮想敵として各国軍人・民間を問わず知名度の高いロシア空軍の戦闘機ＳＵ－２７と同じ形状の機体。これに独自の改良と国産機器の換装を行った中国海軍航空部隊の主力戦闘機のＪ－１１であること、それはコピー機の主翼左右とスタビライザーにある五星紅旗からも明らかである。

小隊長機と2番機からやや離れた位置を飛んでいた2機のＦ／Ａ－１８Ｅもゆっくりと前へと速度を上げてくる。小隊長の男は思わずコクピット正面のコンソールとディスプレイを蹴り付けそうになった。あまりにもあっけない、あちらから入ってきたくせに何の返答もなく帰投していく等何様のつもりだ?しかしその発作は彼自身が抑制を聞かせてやめておいた、コンソールやディスプレイなどの操縦用インターフェイスは精密にできている、蹴っ飛ばして破壊したら修理費どころか責任問題になりかねない。渋々パイロットは無線機の周波数をアメリカ海軍飛行隊に戻し、口を開いた。「識別航空

機は韓国領空から離脱、当部隊のスクランブル任務も終了だ、これより……」

そう言って火器管制装置にロックをかけようと左手を伸ばした瞬間、ゴーグルに表示されたヘッドマウントディスプレイとコンソール上方のＨＵＤの黄緑色の表示に赤い警告メッセージが付き、甲高いミサイル赤外線探知警報が鳴りだす。「ブレイク、２時方向５００フィート！」「ちっ！」男はとっさの判断でスラストレバーをいっぱいに倒し、右手のスティックを手前に引き上げる。「散開しろ！目標は５以上！」Ｆ－４１４－ＧＥ４００の出力が急上昇し、機体本来の性能で一気に高度と速度を上げる機体、その急激な加速度で視界正面のヘッドマウントディスプレイとコンソールの表示がかすむ中、小隊長は無線に向かって叫ぶ。畳み掛けるように鋭くなっていく警報音が不意にやみ、狭いキャノピーの右下をミサイルでないエネルギー体が高速で飛び抜けた。今日鉄な加速度からどうにか意識を取り戻した彼はレーダーサイトとＨＵＤを見やり、瞬時に映った目標を読みとる。「目標はクローンポケモン、赤外線発信分析の情報を教えろ！」「了解した各機、分析が終わるまで現状を維持され…」

「ネガティブ！ええい…敵性は明らかだ、迎撃するぞ！」男は左手のスラストレバーを手間に引き、スティックを左上に引いてＦ／Ａ－１８Ｅを鋭くターンさせる。警報音が鳴り響いた１秒後には橙赤色のエネルギー体が機体のわずか２メートル右下をかすめて後方へと消える。「俺の判断で好戦許可する、さっさと片付けるぜ！」「〇〇〇２、交戦（エンゲージ）」「〇〇〇３、交戦！」「了解、〇〇〇４、交戦！」

各機の反応が返る前に小隊長は火器管制装置再稼働させ、ウェポンセレクターをミサイルに切り替え、手ごろな一匹に喰らいつく。ここまで来るとコンソールディスプレイの情報を見る余裕などなく、ＨＵＤとヘルメットに内蔵されたヘッドマウントディスプレイが映し出す情報と肉眼の視界だけにパイロットは集中するしかない。小隊長のＦ／Ａ－１８Ｅは出力を高めに保って右方向へバレルロールを打って目の前の目標を追いかける、しかし戦闘中のポケモンが戦闘機並みのスピードとなっているとは言っても小回りの方は相手の方が若干上、対ポケモンモードに切り替えた火器管制装置がＡＩＭ－９に目標情報を入力し、標準ロックが終了した旨を伝える表示がＨＵＤに表示された直後、相手は急減速して右へと鋭く切り込んだ。「んっ…！」この距離ではＡＩＭ－９は使用できない、男は咄嗟にウェポンセレクターを機銃（ガン）モードに切り替えて瞬時にトリガーを引く。一斉射目は相手の後ろ羽１メートルあたりをかすめて前方に飛び去る。Ｆ／Ａ－１８ＥがＦ－４１４ＧＥ－４００ターボファンの出力を一気に絞って機体を右に回すが、相手はそれよりはるかに小さい旋回半径で旋回を終え、瞬時に機体の背後についた。瞬間的に入れ変わる攻防、「来たかっ！」パイロットはスラストレバーを目いっぱい前に倒して機体を急加速させた。ポケモンは機動性は高くても推力と出力は圧倒的に人間の戦闘機に対して劣っている、振り切るのは造作もない。相手の放ったエネルギー体は瞬時に後ろへと遠ざかり、警報音も数秒で鳴りやむ。

　無論これで安心はできない、直後にＨＵＤが再び敵機接近警報を鳴らし、合成音声が警告を告げた。迫ってくる敵影は正面、距離は４５００と表示されている。距離数値の変化からして正面攻撃（ヘッドホン）とあるがこれなら問題はない、パイロットはスラストレバーを押し込んだまま、ヘッドマウントディスプレイに表示された残り距離と照準シーカーに意識を集中させる。すでに７００ノットを超えた機体で正面攻撃となれば攻撃も回避機動も、戦闘結果は一瞬で決まる、その１０秒間は彼にはひどく長く感じられた。

ＡＩＭ－９ミサイルの排熱・赤外線識別装置が照準圏内入ったことを知らせるシーカー音が鳴り響く、「まだだ…」パイロットは武装発射トリガーに指をかけ、攻撃のタイミングを見計らう。急激に減っていくターゲットとの距離、それと同時に鳴り響く接近警告音声、しかし男は機体を止めようとはしなかった。いずれはやってくるその攻撃と回避の一瞬、それに全神経をかけた。鳴り響くミサイル用排熱シーカー音が唐突に短く鋭い物へと変化する、ついにチャンスは来たのだ。「やるぜ！」男にとって前から迫ってくる目標は敵機、軽合金・複合素材と制御機器の塊と同じ、同じ知的生命体のなりそこないに対する同情などない。スティックの武装発射トリガーを引いた彼の思考と意識は既に戦闘機と一体化していた。

それはほんの一瞬だった。低く鳴り響き弾丸をまき散らすバルカン砲、Ｆ／Ａ－１８Ｅの機体の塗装が摩擦熱で溶け、ポケモンの方は摩擦熱で溶けてしまいそうなほどの至近距離、人類の作り上げた鋼鉄の翼と、同じく人間の作り上げた半分機械、半分生物の兵器は瞬時にすれ違った。その直前に鋼鉄の翼の胴体から飛び散る火花と黒煙、戦闘攻撃機のＭ６１Ａ１機関砲の嵐がクローン兵士のフライゴンの首を叩き切り、胴体と翼を引き千切った。キャノピーから右主翼にかけて０．１秒前までフライゴンだった生物の残骸がまき散らす血しぶきが散り、骨や肉片が機体に当たる嫌な音を残してその残骸の集団は瞬時に背後へと飛び去る。一部の破片がＦ－４１４－４００ターボファンジェットに焼かれ、一瞬で炭化して飛び散る。「一匹やった」パイロットは勝利の余韻に浸る間もなくスティックを左前に倒してラダーペダルを思いっきり踏み、ＨＵＤ上を一瞬通過した別の影を追跡する。旋回と同時にターボファンジェットの推力を削り、機体は一気に相手の背後へと食らいつく。「〇〇〇隊各機に通達、敵クローン兵士の発信する電波解析はデパスタ―社、中

国軍の可能性が濃厚である、米韓双方軍が交戦を許可した」「感謝はするが、いまさらだ……」男は空母「ロナルド・レーガン」ＣＩＣからの報告に等に耳はかさず、海面すれすれを飛行し続ける目の前の目標に神経を集める。国籍や製造元など関係ない、敵となっている以上はこの男にとって目標は敵でしかなかった。「〇〇〇１、高度に注意しろ、奴の方が機動力が上だ」「分かってる、相手もそう長くは飛んでいられまい…」一瞬無線機の交信スイッチを押している間にも敵は急減速し、わずかに右旋回をしながら高度を急激にあげる。「っと…」パイロットはスラストレバーを引き、交通事故で車から投げ飛ばされるのと同じ衝撃を受けた。危うく敵ポケモンが右エンジンのインテークに飛び込みそうになり、相手の方も急激に速度を上げてその場の危機から脱する。ひこうポケモンという物は機動や速度が戦闘機に似ているだけでその大きさは鳥と同じかそれより大きい程度だ、鳥がターボファンジェットのインテークに飛び込んでエンジンの燃料噴射機構やタービンブレードを破壊するバードストライクを起こす確率は少ないとはいえず、万が一エンジンに飛び込んだ場合、最悪はエンジンごと機体が爆発する可能性もある。

　とはいえこの回避機動で相手との距離は再び伸びてしまった。機体の姿勢を整えたパイロットは再びスラストレバーを前に半分程度倒し、右上のスティックを右手前に引いて追跡を再開する。人間の飛行機器技術は推力と出力、電子制御にかけてポケモンを圧倒的に引き離しているだけあり、わずか２０秒足らずで先程とほぼ同じ体制に戻る。再び鳴り響くレイセオン社のＡ／Ｎ－ＡＰＧ－６５火器管制レーダーと連動する火器管制装置のシーカー音、「まだまだ…」男はミサイルに切り替えかけたウェポンセレクターのツマミをガンに戻す。相手はしつこいほど細かい機動を取り、パイロットはキャノピー越しの風景が天地もろとも目まぐるしく動き回る挙動とそれがもたらす重力加速度に耐え続ける。耐Ｇスーツの体部各所の圧迫によって血流の乱れは軽減されているが、それでも頭への血流が激

しい機動を取る度に乱れ、目の前の光景と意識そのものが幾度も近づいたり遠ざかったりする。それでも彼はヘッドマウントディスプレイに映る数値と目標コンテナを必死に見つめ続けた。まだ早い、これだけの速度で細かく移動する相手にはチャフやフレアを落としてくる相手でなくても、短距離格闘戦用ミサイルＡＩＭ－９でも難しい話だ。それならば至近距離まで引きつけて機銃で仕留めた方が確実、加速度による肉体疲労が蓄積される中、彼は言い聞かせ続けた。

投射運動のように右旋回をしながら上昇から下降へと変化していく機動、機体のロール角が１５０度以上に達して天地が入れ替わった状になったその直後に、火器管制装置のシーカー音が短く鋭い物に変わり、ディスプレイ上に黄緑色の小さな円、近接射撃用目標位置予想コンテナが出現する。裏返しになったコクピットの中、パイロットの本能がそれを告げる、ついにチャンスが来た！パイロットはためらうことなく左右のラダーペダルで射線を合わせながら、同時に右手の指は武装発射用トリガーを引く。激しい機動に伴う疲弊も天地反転の感覚も今の彼にはない、彼はやはり凶暴に獲物を引き裂くアメリカ軍機の一部と化していたのだ。唸りを上げて砲弾をまき散らすＭ６１Ａ１２０ミリ機関砲、わずか数秒で目の前のムクバードは火だるまとなり、血しぶきと肉片、体内からもれだしたエネルギーの爆発炎を散らしながら海面へと落下していった。

「航空目標は殲滅を確認、上空の脅威は排除された」スティックを手前に引いて機体を引き起こすＦ／Ａ－１８Ｅ、酸素マスク越しに荒い息をつく小隊長のヘルメット内臓無線機に米空母「ロナルド・レーガン」ＣＩＣの通信士の声が響き渡る。僚機が残りのポケモン達をすでに殲滅してくれたらしい。戦闘機動による疲労で視界がぼやける中、自機の右側面下部からＦ／Ａ－１８Ｅが近づいてくるのが見える。「さすがです小隊長、隊長の追いかけた奴は一番すばしこくてめんどくさい奴だったようですよ」「そうか……それにしても量産兵士のプログラム精度も上がったな…人間の戦闘機ではなか

なかできない機動だった…」パイロットは荒い息をしながらもコンソールに右手を伸ばして火器管制装置をロックし、コンソール上のエンジン出力、燃料残量、電子系統、油圧制御部を調べていく。「〇〇〇1、被弾なし、機体の異常もない、全機そうだな?」「はい、こちらも以上ありません」各機のパイロットが次々に報告する。「よし、帰投体勢に入る。管制室、空母の着艦用意を」

「了解した〇〇〇1。ただし、「チャンセラーズビル」以下の米韓の駆逐艦・巡洋艦部隊とわが軍の原潜「ノースカロライナ」「ボーフィン」が中国海軍のものと思われる量産兵士に対し誘導魚雷で制圧中、状況によっては上空でホールドの可能性もある」「了解した…とにかく空母だけは生かしてくれ…」疲れ切った口調で男はそう告げ、ヘルメットのヘッドマウンドディスプレイ付きバイザーを上にあげる。

キャノピー越しではあるが肉眼で見る外部の景色、ディスプレイという戦場の監獄から明るいそとへとようやく出る事が出来た、そういう感情で彼の意識は見たされていた。しばらく周囲を見回してみたが、海面付近に艦隊らしき船団の姿とその航跡だけが見え、艦隊が放っているとされる誘導魚雷の雷跡はどこにも見えない。辛うじて水平線ギリギリに黒い影として見えるもの、おそらくは民間企業の希少金属資源採掘・精製プラントと輸送貨物船だろう。レーダー上では緊急発進してきた韓国空軍のＦ－１５Ｋもいるようだが、彼にはそれも見えない。おそらく自分がつかれ、戦士としての本能が鈍っているせいに違いない、疲弊に停止しかけた思考の中でそう彼は思った。

しかしこの男を含め、まだこの海域にいる人間たちは誰一人として気づいていない事があった、今日が終わりではない事を……

２０１３年　２月１３日　カナダ　リッチモンド市　６時３０分

カナダへ到達した一行が配備されたのはカナダ国道９９号線と呼ばれる、バンクーバー市に隣接するリッチモンド市を通過し、ほど近いアメリカ・シアトルやアメリカ合衆国西海岸諸都市から市の中心部であるメトロ・バンクーバーへと至るオーク・ストリートと呼ばれる長大な幹線道路の一角で、バンクーバー国際空港へと直結する幹線道路であるセント・マリーンドライブとのジャンクション部分であった。とはいってもここに来るまではあまりにも長期間待たされたのだが。１２日の昼前には一行を乗せたエア・カナダのエメリア・エドワーズ国際空港発バンクーバー空港行きのＢ－７８７は到着していたにもかかわらず、カナダの警察が国連からの指示という旨で、空港ターミナルにあるＶＩＰ用待合室に１８時間近く放り込まれていたのだ。経済界の重役、政治家、文化芸能関係者、各国の来賓などが使用する内装だけは豪華な部屋に押し込まれても彼らが嬉しいはずもなかった。映像ディプレイはあれど室内の照明だけで外の明かりが一切遮断された広い空間、人間好みの不自然なほど快適な温度に部屋を保つ空調装置の稼働音、眩しいばかりの人工照明、天井隅にあるのはセキュリティーカメラ、ドアの両脇には空港警備員が無表情に立ち続けるという空間で待たされるポケモン達が如何なる心情と感覚であったが、想像にが難くないと思う。

一行が空港の外に出られたのは１３日未明、ジョージア海峡に注ぐフレーザー川の河口に位置する橋の北側、４１Ａ出口にほど近い場所に一行を乗せた警察車両が停止し、全員が有無を言わさず外に下

ろされる。「うっへえ、やっぱ北アメリカとはいえ緯度が高すぎだぜここは」体格的素早さだけで言えば、チームの中で一番早いオオタチ種族のエンデバーが真っ先に外へと出る。「バカっ、一番乗りは…やっべ!?何だここは?」友人との久しぶりの再会でテンションが上がり、幼き頃のように一番は俺だと言わんばかりにオオタチを押すように飛び降りたブレイブも、想像を絶する寒さに思わず首や尻尾のフサフサした毛が逆立つのを覚えた。

「やばい、俺戻る!」「ふざけんなエンデバー!そんなら俺も帰るぞ!」冗談半分本音半分、2匹は車両の左後方のドア…カナダは日本と同じく数少ない右ハンドル国である…から顔を出したばかりのグラシデアとチェギョンを押しのけるように車両に潜り込もうとする。「痛い痛いっ!さっさと行ってよお男(オス)なんだからさあ!」「アンタ達どこまでヤワいのよ?グラシ、こんなバカ連中はさっさと追い出すわよ!」「う、うん!」こういう時に女(メス)のノリは早い、グラシデアは桃色の両手を、チェギョンはモフモフ翼双方を伸ばし、ブースターとオオタチを高速道路のアスファルト上に叩き落とした。それは積雪に離れているはずのカナダでさえ除雪が追いつかないほどの豪雪で吹き溜まりとなった、粉雪の上に落ちる二つの大きな毛玉。

「うげっ?!しかし気持ちいぜ…グラシとギョンに押されて雪にダイブ…至福だ」「バカ…至福は俺のもんだろーが…」

「ったくアンタ達は、どこまで似たり寄ったりの女(メス)好きなの?」チルタリスが両翼で華奢な首に巻いた複数のマフラーを丁寧に締め直してから、寒波に凍り付いた地面に足をつける。たちまち突き刺すほどの冷たさが彼女の足先から脳天に向かって貫いた。「何これ?!何の選択ミスよ私は?!」彼女は足をせわしなく交互に動かし続ける。そうでもしないと寒さで地面と足が張り付いてしまいそうだ、そうこうしている間にも足先の感覚がしびれ、感覚のマヒが足先から胴体へ、胴体から綿雲に似た翼へと上がってくる。「こ、これってさ…ここで私たちは何すんのよ?」

「ん？人間と一緒に高速道路を見張ってさ、そのお…その悪い人間がああいう機械に乗って現れたら止めちゃっていいんだって」モココが雪にかすむ高速道路の向こう側を右手で示す。「どれ？ってこれ自動車でしょ？」「へえ、そんな名前がついてたのね、初耳」「自慢じゃないけど…私人間と一緒に暮らしてたからね。嫌でも知識が身につくって感じかな」チルタリスの意外なフォローに、彼女は感心して目の前を次々に通過していく人間の乗る車両の流れを目で追った。いつみても人間の機械は信じられないようなスピードで陸を走り、空を飛び（噂では空の上の世界にも住める場所があるらしい）、海を渡り、物を作り上げ、計算し、売買し、連絡する。父親であるバストークと長年行動を共にしてきた彼女でも、人間の作る文明と社会システムは不思議の塊、２００メートルほど離れた場所に見え、道路の上に設置されている電光掲示板でさえ神秘のものであった。しかしその点にグラシデアが関心を持つわけでもなく、掲示板を支える鉄骨が心配になるほど降り積もった雪から下がるつららへと彼女の関心は向けられていたが。「そう言えば…あれ綺麗だね」「え？…うん、あの掲示板か…確かにね」

「いやあそれにしても寒いよなモココちゃん…寒くないかい？」そんな2匹にエンデバーは歩み寄った。「何なら俺がリーヒュンやブレイブにしてやったように温かくしようか？」

「い、いえ…あの…」モココは恥ずかしそうに赤面し、思わず数歩分下がる。オオタチはちょっとだけ失望したような表情を浮かべ、右手で首に巻いてあるマフラーを外して彼女のモフモフ毛のある首元に巻いた。「照れんなよ。女の子は体を冷やしちゃいけないって言うだろ？俺は初見だろうと何だろうとそういう良識だけは持ってるつもりだからな…それで、君名前なんていうんだっけ？」

「え、えと…グラシデア・アマルフィ・ホルスト…そういう名前なんですけど…父親よがりの名前で、恥ずかしいんですよ…」彼女はますます照れくさそうに答える。はっきり言って自分のグラシデアという名前はすきとは言えなかった、花の名前であることは知っ

ていたが、それが父親であるバストークの彼女の知りうる限りの思考とはかけ離れている感じがして、ますますバストークが嫌になってしまう。

「グラシデア・ホルスト…いい名前だよ、ああ。俺が保障する…」マフラーを結び終え、自分の胴体を覆っているローブのひもをしっかりと占めるオオタチ。寒冷地帯の集落に住んだり、寒冷地で任務にあたるポケモン達はベールの上からローブやコートらしきものを羽織り、動物の毛や綿花などその地域それぞれの材料で編んだマフラーで首をはじめ複数本冷えやすい場所を覆い、同じように作った手袋や靴下を履いたり付けたりし（４本足種族だとどちらも同じだが）、その上から保護靴を履く。人間で言えばアイヌやイヌイット、エスキモーのような（最近は混血や欧米風の現代文明化が進んで人類社会に原住民という物はほとんどいなくなっているが）原住民の格好に似ているが、２１世紀の今でもポケモン達にとってはこれが標準だ。

「あれ…そういやあ…父親はバストーク、て言ったんだよね？」防寒具を整えているオオタチが思い出したようにモココの方を覗く。「な、何でそれを知ってるんですか？」グラシデアはびっくりしたようにその場で固まった。エンデバーというこのオオタチ種族は父親と知り合いなのだろうか、この年頃で当たり前と言えば当たり前だったが、彼女はバストークに対人関係は知らないし、興味もなかった。「ちょ、ちょっとアンタさ、いきなり何をグラシのプライベートを列挙しちゃってんの？！」

「バカ、そういう事じゃない。俺は４日くらい前にはソーラ北部にいた。ニュークリアにあるアメリカの自治領領界線の基地最寄りの海岸からラプラスで３時間だもんな…」思わずグラシデアを守ろうと踏み出したチェギョンを右手で制止し、エンデバーは話を続ける。「俺はニュークリアの知り合いと一緒に、ここんとこ物騒なソーラ地域の調査に当たっていた。そこでグラシデアのおとっつあんとピトムニクって子に会ったんだ、まあすぐにアメリカ軍に呼び出

されて俺だけ戻ったけどな…」オオタチは大きく息をついて雪空を見上げる。何回人間の機械による移動を経験してもこの感覚には慣れない。ポケモンにとっては何か月も歩いてたどり着くような異世界の地に、人間の機械を使えば半日かからないのだから。「…やれやれ、こういう移動方法を使ってると何もかもが夢の出来事みたいだぜ。もう少しゆっくりとやりたいもんだが…けど」急に彼は得意げな表情になり、2匹にすっと歩み寄った。「さすがはアメリカ合衆国、いや人間のテクノロジー、て奴だ！ポケモンもここまでできればいいんだが……」

「そんな変な話はいい、それで…」「元気でした、私の父親は？」ブレイブが彼の脇に寄る直前、グラシデアはエンデバーの両手（両前足）を強く自分の両手で握った。「え？おとっつあんも小っちゃい子も元気ぴんぴんだったぜ、まあそのせいか俺の友人とケンカしてたけど……」モココに両腕（前足）を握られたことに思わず顔を赤らめながらも、彼は見た事実を淡々と述べる。

「そ、そう……それなら……」彼女はここに来て自分が初めて彼の腕を握ってしまっていることに気付き、慌てて自分の手を振り払った。それとほぼ同時に、自分の行為に対する驚きと深い後悔を覚える。いったい自分は何をやっているのか？他人なんかに興味はない、自分とピトムニクと同僚だけあれば問題ない、そんな父親の事を自分が心配する理由など合ったのだろうか？彼女は手に残ったオオタチの温もりを感じる両手をこすりあわせ、もごもごと口を開いた。「……それは…まあよくて何よりです…」「…何かパッとしねえ顔をしてるが…まあそれならいいんだけどな」

「おいエンデバー…」隣にいたブースターの右前足がオオタチの耳の部分を引っ張る。「いっつ…何だよブレイブ？」「この年頃の奴にそう言うこと聞くんじゃねえよ」「何かあんのか彼女に？」

「お前は女（メス）に対してお人よし過ぎ何だよ…いいか…」ブレイブはエンデバーの耳元に口を近づける。「グラシとバストークはな、あんま仲良くねえんだ…上手くいってねえって事だよ…」

「うっ……ってどうするんだよオイ…」「どうするもこうするもあるかよ?せいぜい…」

「おいお前ら、そこで何やってんだ?」警察車両から降りた場所で押し問答をしている４匹の元にやってきたのは、警察官と思われる格好をした人間の男だ。この男も寒さに肩をすくめるように歩み寄る。軽く息を吐き出してから高速道路の進行方向側を指差した。「アメリカのサイバー空間解析、及び実行犯の物と思われる携帯端末の電波捜索により、彼等はまだ動いてはいない。おそらく明日、もしくは明後日だ。今日中に警戒線の位置を確認し、お前らの待機場所を作る。詳しくは４１Ａ出口担当の責任者に聞いてくれ」

「はいはい、よっしお前ら、行くとするか」「おーし分かった」こんなところで時間をくれと言うほどでもない、持ってきた装備品を持ち、高速道路のカラーコーンの並ぶ側帯を歩きはじめる一行。「轢かれんなよ」猛スピードで流れていく自家用車や大型トレーラーの脇を歩く一行を見つめ、警察官に人間は無線機を取る。「こちらジャンクションブロック、一行がそっちに向かいます。車両の流れ、お願いします」“４１Ａブロック、了解”

「グラシデア……さっきは悪かったな…ただ、父親ってのはそう簡単に捨てられるもんじゃねえぞ」「へ、はあ…はい…」声をかけられてグラシデアはまた恥ずかしそうな表情をし、少しだけエンデバーから離れる。彼もまた自分の事を心配しているのだろうか、ありがたいような恥ずかしいような複雑な気持ちだった。

「やべえ…さむ……」ブレイブは鼻をすすり、雪が落ち続ける空を見上げる。サンフランシスコへ向かった一行も…同じようなのだ

ろうか？

２０１３年　２月１４日　　アメリカ南部のフロリダ州　マイアミ市　９時１０分

２０１２年度のＡＰＥＣ（アジア太平洋経済協力会議）臨時首脳会合がスタートしてわずか１０分足らずだった、１１時に始まる総会を前にアメリカ合衆国大統領秘書の携帯端末はひっきりなしになり、その度に秘書の女は恐縮ながらも老練な大統領に耳打ちしなければならない。「閣下…ｉｒｏｂｏｔ社とＧＢＴＸ社の情報流出の件ですが、実行犯と思われる人物のメール交信より、本日中にハッカーグループがサンフランシスコを出発する可能性が高いそうです。ハッカーは国防省がファイル割りだしで全世界のサーバにおける検閲を察知していない模様、ネットワークが遮断されたことにいら立った彼ら、デバイスを直接アメリカから持ち出す算段である、国防省から報告が入っています」「分かった、その件に関してはあとで聞くとしよう」大統領は重苦しくうなずき、再びカナダとメキシコの関係者に視線を戻す。円卓の上に置いた両手の指先を組み合わせ、大統領は話を続けた。「失礼しました…それで、我が国の医療ロボット技術と患者側の高度医療技術費用削減の件、どこまで話しましたかな？」医療ロボットというのは近年北米・南、北、西ヨーロッパ・東アジアの比較的高所得国や高所得層・旧イギリス連邦のオセアニア・中東産油国の富裕層に対する医療で急速に利用が広がる高度医療技術の一つだ。“ダヴィンチ”を発端とする医療ロボットは、従来機器や手が届きにくい部位、繊細な欠陥や臓器が集まり手術に高度な技術を要求される部位での癒着剥離、縫合、機器の装着、レーザー切断からカテーテルや放射線・重量子線照射まで行えるレベルにまで成長し、医師・患者双方の精神的・肉体的負担を減らして

いる。もちろんそれらを製造する医療機器メーカー、ロボット産業、高度医療技術の対する補償を含めた生命保険企業の拡大を促しているのは当然だ。高度医療技術は機器に使用される小型モータや精密な制御プログラムといった部品・回路レベルから患者に対する国の医療保障、保険産業にまで広く関わってくる。国家・国家連合・地域間での規格・基準と統一や技術開発協力は、企業間・病院間の拡大競争や新たな経済市場を開拓すると同時に医療技術の進歩を促す重要なものだ。同時に途上国での医療支援体制の拡充といった人道支援貢献の材料にもなる。エネルギー、情報、医療・生命工学分野での科学技術の発展が著しい２１世紀も１５年近い歳月が流れた現在、科学技術研究と技術輸出さえ高度な資本主義経済と結びついた国家の経済成長と自由市場拡大の戦略の一部となっている。

「ええ、欧州・東アジアでの普及、それとそれらの企業間技術競争と市場拡大競争による医療技術の向上を図るための規制緩和、医療機器の北南米・太平洋地域での規格統一に対する法案ですが」カナダの関係者がグラスの水をわずかに口へと運ぶ。「それに足しては我が国は賛同いたします。ただし、それによる生命保険企業の展開拡大が国民保険制度の存続を危うくするという懸念もあるわけでして…」

「それに関してはこちらも同様の懸念を抱いております」メキシコの関係者の男もカナダ関係者の女に同意する。「我々がアメリカ主導のＴＰＰへの参加を決定した際、工業機器や農業製品の関税問題、並びに金融機関や情報通信関連企業、科学技術研究開発機関のシステムや規格の統一、労働基準の一本化に関しては同意できました。先ほどお話しした太平洋送電網の拡充、宇宙太陽光発電受信アンテナの増設、熱核融合炉原発のメガフロート内建設などは各国家や地位間での調整が可能ですが、医療関係や厚生福祉関係の条約となりますと人間の生死が問われるわけです、そこの慎重性に関して、アメリカの方はどう考えているのですかね？」

「それに関しても、国家間での調整は必要と考えています」アメリ

カ大統領の男が軽く右手の人差し指を振る。「大手生命保険企業の多くは民間であり、各国家の法律の定める保険制度に影響を与えないという最低限の方向性さえ維持されれば、民間企業の自由市場活動に国家が介入する権利はありません。もちろん国家によっては法令もありますので、それを加盟国間で調整する必要がある、そういう事です」

「なるほど…貴国としての見解は、そういう事と見てよろしいですね」カナダからの代表者の女が眉間に少ししわを寄せ、合衆国大統領の方に顔を近づける。「そういう事ですよ〇〇〇さん、貴国が我々とともにＴＰＰへ批准した際に各個で交渉にあたりましょう」「どうもありがとうございます」彼女は大統領の男に口先では告げたが、内心での表情は微妙なものだった。アメリカ合衆国が主導である以上、ＴＰＰという物には少なからずアメリカが有利になる条項や方針が入っている。そしてそれは自由資本主義の総本山であり、地球人類社会の政治・経済・技術・安全保障の主要な重大セクターの１つとして機能しているアメリカらしい自由貿易・関税と規制の撤廃・基準と規格の統一をあらゆる商品、サービス、金融、雇用、保険システム、技術研究にまで適用するという物ばかりで、特に医療関係と保険関係の規制緩和にはカナダ国内世論、議会双方で賛否両論の状態が続いている。国際社会での常識だが、遠慮して何でもはいはいと言っていては、残酷・冷酷なほど完全に相手のペースに乗せられてしまう、不明な点は相手にしっかり確認し、自分の意見や自分の立場は対話の中で明確にしておかなければならない。相手に向かっても、そして自分の立場の中でも。

「なるほど、我が国の方もぜひよろしくお願いします」「もちろんです××××さん」メキシコの関係者の男もグラスに残った水をぐいと飲みほし、表情をわずかに緩めて身を少しだけ乗り出す。メキシコ政府の保険制度はやはり北欧の福祉国家と比べてどうしても見劣りしてしまうが、一人あたりのＧＤＰも経済レベルや国民の生活水準も世界各国で中間に位置する（先進国と俗にいう後進国の中間、

中進国と呼ばれる。中国やインドは既に中進国の中でも経済成長した国家だが）中米の国家でもいずれは迎える社会保険問題……中国は過度な人口抑制策によって例を見ない高齢化と急速な人口頭打ち時代の到来に社会保険制度の整備がまったく追いつかず、都市での高齢者の孤独死や農村部における限界集落の出現などが続出して社会問題になっている……、政府が手厚い保険を用意するか、それとも民間の国外の大手保険企業が活動しやすい政策をとるか、それによって医療システムと社会保険の整備…無論これには医療技術や機器の購入や整備も含む…にかける将来の予算や、その財源を賄うための税制改革などの方針が大きく変わってくる。そしてこれは失敗の許されない国家の重大事象である。先進国でも社会保障制度と経済成長戦略の両立に失敗した国の代表例として日本国がある、消費税率5パーセントや極端な所得税の安さという欧米・新興アジア諸国でも破格の税金の安い国家であったこの国だが、度重なる経済の停滞、民間企業の人件費やコストの高さ、急速な高齢化、科学技術成長戦略の失敗、膨らみ続ける国債残高とその利子、租税収入の落ち込みがさらなる赤字拡大、一層の政策停滞という悪循環を招き、2年前の震災と原発問題、にもかかわらず激化する政局争いがこれをさらに悪くしている。それだけ国家の政策という物は慎重なかじ取りを要求されるのだ。

とはいっても、老練なアメリカ大統領の内心も今、決して穏やかではなかった。カナダやメキシコといったアメリカ合衆国と共に北米を構成する2国がＴＰＰ交渉に参加する…まあアメリカが“取り込んだ”のだが…ことは、今後の環太平洋地域での経済開発や産業開発の主導権を巡る米中二つの超大国の争いの中で重要な前進である。しかしそれ以上に、国家機密でありアメリカ経済を支えるハイテク産業の重大な機密でもある、軍用ロボットの稼働記録とクロー

ン量産兵士の使用生命材料の一覧を含むデータが何者かの手で漏洩されたのだ。一応国防省サイバー対策室の手で該当するファイルを含む一切のデータのやり取りをＷＷＷ（ワールドワイドウェブ）ネットワークを構成するサーバ内から遮断する措置によって直接のデータ送信は全世界で不可能にはなったが、万が一でもほかの方法…例えばデータの入ったデバイスやソフトウェアを直接国外に持ち出すとか…でこの情報が国外に（特に中国とロシア）漏えい、もしくは世界に公開された場合、アメリカ合衆国の科学技術開発、ハイテク産業輸出という経済戦略、そして国防戦略を大きく揺るがし、太平洋地域の国勢バランスさえも覆しかねない深刻な事態だ。とりあえずは実行犯の送受信ログから割り出した情報からサンフランシスコとカナダ・バンクーバーでアメリカ軍特殊部隊と州警察、カナダ現地警察、それとアメリカ・エメリア方面軍の交渉によって国連統合軍の特殊戦略戦術部隊……大統領も詳細は知らされていないが、どうやら国連の上層部と？がっている、いわば国連自体の特殊部隊といった存在のようだ……が、国外逃亡を図る実行犯グループの拘束もしくは手にしたデータごと破壊するための……すなわち殺害である……行動をすでに起こしている。それでも完全にデータ漏えいを阻止できるという確証はない、ネットワークを未然に遮断してもハードウェアまで抑えなければ意味がないのだ。

「それでは…」不安を打ち払うように頭に白い毛が目立つ男は両手をポンとうち、次の話題へと話を続ける。「雇用形態・基準の統一、並びに被雇用者待遇の共通基準策定の件、これも随分と交渉国間で意見が食い違うようですがそちらの方の見解はどうですか？」

「我が国としては遺憾ながら国内での労働者基準整備が、でして…」先に口を開いたのはメキシコからの関係者である。「ＴＰＰ加盟を記とした整備を国内議会で行ってはいますが、おそらく貴国と方針

は大きく異なる物でしょう」「なるほど…これに関しても別途に交渉は必要という訳ですね?」「はい、アメリカ合衆国の方法が全てとは限りませんからね、基準や規格の統一は絶対必要ですが、最終的な解釈や詳細な例外の策定はその国ごとに異ならなければならない、とこちらは考えています」この男の発言は、アメリカ大統領の議論にちくりとトゲを刺し牽制するものであった。このままでは目の前にいる老練な大統領のペースに乗せられ、交渉内容もアメリカ優位の物にすり替えられてしまう、そういう危機感のようなものが彼の思考の中にはあった。

「それに関してはこちらも同様です。特に雇用情勢は欧米・アジア双方で複雑な問題となっていますから」メキシコの関係者にカナダからの女も同調する。彼女の方も大統領の男に牽制を加えておくのが得策だと考えていた。「ええ、貴重なご意見、ありがとうございます」大統領の男は微笑を浮かべ、隣にいるアメリカのＴＰＰ会議関係者の男に水の入った容器を取らせる。やはり相手側もこちらを牽制しているといったところか、冷戦時代でもあるまいしアメリカの言う事が世界の全てだとはこの男も思っているはずがなかったが、あまり交渉に難儀し、発効が遅れるのも双方の利益にはならない、と考えている。

「ただし……」カナダの関係者の女が軽く水の入ったグラスに口をつけ、手元のタブレット端末…やはりアップル社のものだ…を卓の中心部に出す。「国家間での調整が難航していつまでもＴＰＰが発効されないのも問題です。長引けばＡＰＥＣのような場で中国が加盟国の切り崩しと中国主導の経済協定への取り込みを行ってくる可能性もあります。ご存じのように、中国の労働・産業・金融における国際進出と影響力はアメリカ並みの拡大を見せていますからね…」

「うむむ…微妙なかじ取りや多少痛みを伴う手段を強いられているわけですな」老練の男は右手でグラスを少し揺らし、足をわずかに伸ばす。やはりここに来て考慮に入れなければならないもの、それは中国の存在であった。世界第２位の経済大国、技術研究面、エネ

ルギー開発、軍事力の面でも世界トップクラスの実力を持ちつつある東アジア1位の大国の行動は常に周辺諸国や取引相手国、国内の世論や自治区とさえ様々な対立を引き起こしている（ただし、アメリカやヨーロッパ諸国もアフリカ、中東、南太平洋エメリアで同じくらい対立を引き起こしているので文句ばかりは言えない）が、その影響力、ひいては実力があるのは事実である。中華人民共和国もまた太平洋地域の覇権を握るため、東南アジア（ＡＳＥＡＮ諸国）や東アジアを中心に、強引ではあるが独自の経済圏の構築へと動いているとされる。ＴＰＰの交渉にてこずれば、アメリカを中心とする経済圏の構築、ひいてはアメリカ主導の太平洋地域の安全保障…少なくとも合衆国や同盟国はそう考えていた…も一層困難になる。ＴＰＰや国家間ＦＴＡを軸とした、世界の経済成長センターである環太平洋地域の安定した経済圏の確立と、今なお軍事対立やエネルギー争奪戦、民族や国家の領土争いが絶えないこの地域の安全保障を確立するには、多少強引な手法で合ってもこれらの成立を進めるしかない。事実、合衆国政府内では日本のようにＴＰＰ参加表明はしてもその先の交渉がまったく進まない国家を切り捨てる可能性も方針に組み込んでいる。それだけ太平洋の覇権争いはスピードと確実性の両立が求められている事態である。

その言葉に当然のことながらメキシコの関係者は口を開いた。「それでは…ＴＰＰへの交渉が遅れている国は…交渉から切り離す可能性もあるという事で？」「ええ、残酷なようではありますが、中国のあまりにも強引な経済開発手法をスタンダードにするわけにもいきませんからね、例えば…」アメリカ大統領が少し眉をひそめた直後、秘書の女がまたしても携帯端末を片手に近寄る。「状況を説明してやってくれ」「はい」大統領はタブレット端末を隣の男にわたし、秘書の方に視線を移す。「どうした今度は？」

「東シナ海で演習中の米韓合同艦隊…中国海軍の機動艦隊の艦船が韓国領海でまた演習を開始した模様です。警告はすべて無視され、米海軍の空母から艦載機が緊急発進をかけるようで…」「そうか…また、というより相変わらず、だな。しかも今度はずいぶんと派手な手に出たものだ…」

「派手かどうかは知りませんが、だいぶ東シナ海の情勢も流動的になっているようです」「そうだな…」彼は少しだけ首を縦に振り、右手の拳を左手のひらに当てる。中国の艦隊は数日前からやけに不審な動きをしてくる、この男にも詳細は分からないが、何となく普段の領海侵犯や領空侵犯とはわけが違う、そういう感覚がした。

「よし分かった…」大統領ははっきりと告げる。「韓国政府にも万が一に備えて航空部隊と沿岸部隊の戦闘配備を要請し、アメリカ軍の在日・在韓の艦艇と航空部隊にも警戒態勢を取るよう指示してくれ」「了解しました」いつにも増して引き締まった表情の男に、秘書の女ははっきりと頷いた。

女は小会議室を出てカーペットが敷き詰められた通路を歩く。首脳会議が数時間後に行われるメイン会議室の正面扉は開いてはいるが内部は無人、ドアに４人立つ施設警備員の表情からは、ここの緊張した空気をはっきりと感じ取れる。１階のエントランスホールへと？がる長いエスカレーターを降り、警備関係の業務情報しか出ていないイベント案内液晶ディスプレイを横目に彼女は自動ドアを通り抜ける。その車寄せ、警備車両や緊急時に関係者を脱出させるために待機している米・ＧＭ社製のエクスプローラー数台、その周りにもやはりフロリダ州警察や警備会社、施設運営会社の人間たちが無数にいる。そこから少し離れ外の空気を吸い込むと、あちらこちらの警備関係者や政府・企業連合関係者が醸し出す締まり過ぎた空気から解放された気がした。

しかしそうリラックスしている暇などない、巨大なドーム状の建物が背後にし、女は携帯情報端末を取り出して耳に当てる。「大統領から指示が出ました、在韓・在日のアメリカ軍部隊に警戒態勢の準備を」

カナダと共に北米大陸の大部分を占める超大国、現在の地球人類社会の国家で政治・経済・科学技術・軍事、あらゆる点で最強クラスの実力を持つ超大国アメリカ。地球人類文明に無限の可能性と自由を発信し続けている大国は今、水面下で大きく揺れているのだった。

渦に巻かれる超大国

２０１３年　２月１４日　アメリカ・サンフランシスコ市　州間高速道路８８０号線

サンフランシスコへと向かった一行が配備されたのは、アメリカ東海岸まで続く合衆国最長の高速道路８０号線がかかるベイブリッジを遠方に見やり、左手にはサンフランシスコ港が広がる８８０号線の一角、空港からそう遠くは離れていない場所であった。時折やり取りされる実行犯の端末から（既にＧＢＴＸ社に対するハッキング時のアクセス解析で端末を逆探知、発信電波を割りだしているのだ。これも全て米国国防省からであった）の電波を解析すると、ここから北へ向かった地点にある２９号線、ブロードウェイ通りに潜伏している可能性が高いとされている。州警察とアメリカ陸軍の部隊は、まずは最寄である３７号線とのインターチェンジを装甲車や歩兵戦闘車まで投入して検問を敷き、警察ヘリ６機と戦闘ヘリ４機を近郊のナパ空港に待機、そこにほど近いサンパブロ港には沿岸警備隊の巡視船を多数派遣し、港湾に停泊、もしくは出入港する船舶に臨検を行った。またそこから南に向かう７８０号線、８０号線、１０１号線、６８０号線、５８０号線、そして中心部を通過する８８０号線にあるすべてのインターチェンジとジャンクションにも警察部隊の検問を敷き、車両に乗る人間と荷物を全ておろして金属探知機と電波探知機での探査を開始した。そして周辺にある空港でも、通常時よりはるかに厳格なセキュリティーチェックを行うと同時に預けられた手荷物にさえ同様の検査を実行した。

この結果はもちろん良い物ではない、サンフランシスコ中の高速道路は検問によって全く動かない状態に陥り、しびれを切らした人間による強行突破や警察関係者とのトラブルが続出、港湾では貨物船への荷物積み下ろしや港湾の入出が困難となって港湾運営企業や

運輸企業のスケジュールは大きく狂い始めていた。空路の方も手荷物検査の遅れや貨物の検査が長時間化して遅延が続出したうえ、貨物検査による手荷物の汚損が相次ぎ、乗り入れ航空会社のカウンターにはクレームや賠償を求める客であふれかえった。

それでもアメリカ国防省とｉｒｏｂｏｔ社が諦めない理由は明らかである、奴らが手にしているのはアメリカ合衆国の国防の重大機密、ひいては国家の帰趨を左右する渋滞な情報である。世界中のネットワークから交信を不可能にした現在、残る手段はハードウェアと媒体そのものの持ち出しであり、それを止めるにはこのような強硬的手段しか残っていないのだった。

「あーあ、今日も寝っころがり日和の晴れだね、うん」警察車両からぴょんと飛び降り、思いっきりウグイス色の首を伸ばすメガニウム。ユイリィ・ランタン・プレミドールにとっては、自分の特異な瞳の色と同じ極限まで澄み切った青空の下にいるといつも以上にテンションが上がる物だ。全く持って人間の移動する機械は、彼女のように大柄な４足歩行種族には狭くてきつくて仕方がない、たった１０分程度の移動が箱型の監獄に１０年閉じ込められた気分だった。

「やっぱりウチのお花にはこれが一番だね、うん」

「確かにな、まあ人間の作る機械がポケモンに合わせて配慮してくれているとは期待しないけどさ」彼女一番の友人（というより遊び相手？）であり、実質の弟分でもあるベイリーフもユイリィに続いて飛び降り、カナリア色の体を震わせる。リーヒュン・バイリング・グリーズもやはりベイリーフという種族であるからにして、自分の頭や首周りにある葉っぱを考えると日差しにそれらを当てる事が出来るのは実に気持ちのいい事だ。しかし、今の彼の心情にはそれに対する安心感というより、視界に飛び込んでくる映像から分かる、またもおかしな場所へとやってきたという感情が多くを占めて

いた。彼からしてみれば人間の巨大都市を間近で見るのは初めて、アメリカ・サンフランシスコ市の目に映る物の多くにこれまで感じたことのない不思議な感覚を覚える。「それにしても人間の作るものってさ、でっかくしたがってんのかな？…崩れたらどうすんだか」「んー？それは人間の技術、てとこかな」メガニウムはベイリーフの表情をちらりと見、その後少し離れた場所にある銀色に輝く高層ビルをツルで示す。「…技術？」「うん、ああいう大きな建物は地面の下にごっつい骨組みを…こう…がつん！って押し込んであるから高くしてもだいじょーぶ！、みたいなのよね」彼女は左のツルを地面のモチーフに右のツルを押し込む杭に見立てて見せる。「ユイリィの予想？」「うんん、想像」「って何だよそれ…」「あはは！いいじゃんいいじゃん、だってそう思うんだもん」建物を見ていて何となく感じた物、彼女はそれを言葉で表現しただけに過ぎない。

「はあ…技術か。俺は頭良くないからそこんとこは分かんないや…」リーヒュンが一歩だけ高速道路の欄干と歩き、遠くに見える巨大な陸橋…８５号線のかかるベイブリッジだ…とその周囲に広がる高層ビルの林を見つめる。手前の建物の間から見えるだけでも、自分たちのスケール感を狂わせるほどの大きさ、多くの資源や資材を利用した頑丈かつ文明最先端の技術を持つ建物たち。だが…彼にはそこまでしかわからなかった。あの建築物の使用目的は分からない、しかし目的だけは存在し、そしてそれしか存在しない単なるモニュメントなのだ。同じなのはガラス張りで太陽光を反射して輝いているだけ、高さも形状も全く違う。それを見ているとなぜかいい印象が浮かばない、ただ目的もなく高くし、周囲より立派であること、形状が美しい事を、建築物各自が身勝手に主張しているだけにも見える。そしてそれは、リーヒュンらしい言葉になって口から出てきた。「でも…あんまり居心地は良くなさそうだな俺らには」

「まあね。人間の機械って部屋の温度も調整できるし、暗くなったら明かりをつければ昼間と同じだし。ウチは慣れてるけど…」彼

の言葉にメガニウムは少しだけ頷き、ツルで頭から生える黄色の雄蕊で右側の長いほうを丸め直す。「慣れてるって…そっか、君はいつも国連施設の建物の中か……」リーヒュンはちらりとユイリィの方を見つめ、左前足の近くにあるアスファルト片を軽く蹴っ飛ばす。爪先で何となくわかる大きさに対し、小石より軽いような重いような不思議な感覚だ、恐らくこれも人間の機械や靴を履いた人間が歩きやすいように、そして動きやすいように土とほかの素材を人工の物質で固めたものに違いない。そしてああいう建築物の、機械に囲まれた部屋の中もこうやって意図的に操作された環境になっているのだろう。そんなところに毎晩いる彼女の体調がふと気になる、別に自分の気にすることでもないし、彼女の具合もテンションも毎日絶好調なのは明らかだが、なぜか気にかかってしまう。「やっぱり普段皆が…って俺もいるけど、あそこくらいがポケモンにはちょうどいいとは俺は思う。森っぽくしてあるのはいい加減だけど」「なるほど、あそこだよね、居住環境を似せて作ったあの出来損ないの森？」彼女が少しちゃかすように尋ねる。

「いや、出来損ないかどうかは知らないけどさ。本物の森は周りにあるし、その…」彼は少しだけ言葉を考える。伝えるべき内容を考える必要がある内容ではなかったが、何と表現したらいいか困った。「生物として…俺だけかもしれないけど、何となく落ち着く場所に感じるんだあそこ」

「やっぱねえ…そうだよね」このベイリーフはそういう“快適”な環境をあまり知らずに言っている、しかしその事がむしろ彼女の意識の水晶の中で小さな気体の塊をパチンとはじけさせた。自分の中でうすらうすら思う事を、このベイリーフははっきりと言ってくれる、メガニウムにとってはそれだけでも嬉しく、心が安らぐのを感じる。「いいなあ、ウチもそうやって素直に暮らせたらいいのに。ねえねえリーヒュン、どうやったらそうやって考えつくの？」彼女の右前足が彼の左前足の爪先にそっと乗せられる。

「考え付くも何も……俺は思ったことを素直に言ってるだけかな

…ごめん、ユイリィの思ってること否定しちゃったか…」彼は左前足の爪先に感じる温もりをちょっと恥ずかしく思いながら、ツルで首元の葉っぱを軽く直す。相変わらず思ったことが口から出てしまう、自分の性格が出てしまったようだ。「でも、考えを言ってくれたほうがいいんだ。そうじゃないと俺、…空気読むとか無理でさ、どう相手と接していいか分かんない。だから、いつもそうしてる」

「さすがリーヒュンってとこだね、やっぱ、感心しちゃうよ、うん」彼のその台詞だけで大満足、ユイリィはリーヒュンの首元にまたしても自分の首を摺り寄せ、やがては胴体の重量全体を彼に押し付ける。「うぐえっ……こんな所でもやんのかよ?…重い…」「あはは!いいじゃんいいじゃん!こうやってると気持ちいいんだもん!うん、ヒュンの体って温かくてウチのマフラーにしちゃいたいなあ!」嬉しそうに体を寄せ続けるメガニウム。そう、ユイリィにとってはベイリーフと一緒にいられるだけ、本当にそれだけでうれしかった、それ以外に理屈は存在しない。「危ない、危ないでしゅよ!ミーがお前の頭から…」「ちゃーんと掴まってればいいのよロズリンは!うん、ちゃんと、ね?」「ううっ…おいおい、頭からちびっ子が滑り落ちちゃうだろ?……」ベイリーフがツルをメガニウムの寄り添う首元からどうにか出して、彼女の頭の雄蕊に掴まるシェイミを抱える。「大丈夫かい?やっぱロズリンもシェイミ種族だもんな、日差しに欲当てないと…」

「感謝してましゅ、兄ちゃんの方が気が利くんでしゅね。どこぞの誰かと違って」彼のツル先でロズリンは大きく気持ちよさそうに伸びをし、背中の草と耳元のピンク色の花を存分に日光に当てる。ツル先から伝わってくるこの男(オス)シェイミの温もりとシェイミの体を走る植物からのエネルギー、それがベイリーフの意識の水晶に心地よさとなって入ってきた。

「はあ…あのねえユイリィ、彼とデートしに来ているわけじゃないのよ、苦しそうじゃない…ごめんねリーヒュン、彼女ったら何かとテンションが上がりやすくて……」「ま、まあいいですサクラさ

ん、僕も普段一緒にいる相手がこうだと…ですから」後ろから彼女の首を離しにかかろうとするサクラに対し、その両手をツルでそっと止めるベイリーフ。はしゃぐ彼女のお相手をするのはいつもの事ながら世話の焼ける事であったが、同時に彼女といると不思議と気分が落ち着く、エメリアのエドワーズ空港にいた時のあの戸惑い、自分の存在が嫌になるような不安感が数日で薄らいでいる。

そう、あの時ユイリィはいなかった、そして今、彼女は自分のそばにいる。自分の意識の水晶から外部をまさぐるエネルギーがこのメガニウムの放つ明るくさわやかな何かをお求めている、そんな気がするのだ。もしかしたら自分と彼女の間には、やはりサーナイトが言ったように、お互いが全く気付かない生まれる前からの繋がりが存在するのではないのか、そしてそれが今の自分と彼女を作り上げているのではないかと。

しかし、それと同時にリーヒュンの意識の中に小さなある感情が芽生え、周囲の気体にその新芽が放つ空気がゆっくりと広がっていく。複雑で、少し心配で、また信じられない、説明しようがない物だ。彼は思わずメガニウムの表情を横目で見やる。嬉しそうにほっぺをこすり付ける彼女を見ていると、彼の直感はもう少しビビットになってきたような気がした。

……もしかしたら……ユイリィは…幼いころからソーラの国連施設、南太平洋に浮かぶ小さな４つの陸地の最南端にある人間文明の浮浪雲（はぐれぐも）が種をまいたあの場所で暮らし、周囲は人間たちばかりであまり施設近郊の集落に遊びに行ったこともないのではないか？おそらく一緒のポケモン達も数匹はいた…そう信じたかった。そうでない予想など怖くて彼にはできなかった…のだろうが、状況がいいとも思えない、その中を生き抜いてきた彼女の明るさと前向きさはそこから生まれたのではないか？

…リーヒュンの背筋が、首の葉っぱあたりが冷たくなっていくようであった。なんで自分はここまで想像してしまうんだ？いくらか前の自分は向こう見ずで直感に従うだけだったはずだ、それをなぜここまで嫌な、しかもとんでもない想像だけしかできない？

自分の直感はやはり強くなりすぎている、あまりにも異常すぎる、自分の直感に対してこれまでにない不安感を感じた。

そんな不安げな表情のまま、彼はいつの間にかサクラに救いを求めるような表情をしてしまったようだ。彼女はベイリーフの背中を二回右手で励ますように叩き、大丈夫、という表情をする。「それならいいの…うまく彼女と間合いを取ってあげて」

「あ…はい…」なぜだか知らないがそれだけで不思議な安心感がする、意識の水晶を満たしかけていた感覚が瞬時に消し飛んだ。「…僕は…」「ん、なあに？」サーナイトに向かって言おうとした言葉が口先で一瞬固まる。一瞬間が開き、彼は小さく、しかし迷いなく口を開く。「……妹の相手をしてきたんで、これ位は普通でしたから」

「でっしょー？それじゃあもう少し強くむぎゅーってしてあげる！うんうん！」調子に乗ってさらにリーヒュンにユイリィは体重をかける。「だからさ、フローラとユイリィじゃ感覚が全然違うんだって…」

「はいはい、ユイもやり過ぎてるわよ。少しくらい妥協しないと……」一応は小隊長であるテルルがメガニウムの左前足辺りを自分の前足で軽く小突く。「ね、ねえ…聞こえてる？とりあえず見てると変な気持ちになるから……」

「え？へ？テルリン、これやめんの？」思わず彼女はベイリーフから体重を戻し、グレイシアの方を見る。それから彼女は再び笑顔を浮かべ、ツルでテルルの頭飾りを撫で始めた。「ごめんごめん！ウチさあ、すぐにヒュンにやり過ぎちゃって…ちょっと見苦しかった？それじゃあまた今度だねリーヒュン！」

「ううっ…あのね、そうじゃなくてさあ…まあユイらしくていい

から…」やっぱりこのメガニウムは、ユイリィは変わり者の度をちょっと超えてるみたい、女(メス)としての親近感を通り越しすぎて引っかかる物さえ感じる彼女は、メガニウムの方に視線を上げ、苦笑交じりに右前足を軽く動かす。「い、一応私が隊長って言うけど、ユイにもいろいろと頼りにしてるとこあるから、ね?だから…あんまりすると私がなんだか、だから…」

「いてて…ユイリィにやられると骨がいくかもしんない…」リーヒュンもどうにか違和感が残る葉っぱの生えた首を振り、テルルの方に向き直る。グレイシアの相変わらずの無理したような笑顔と素振りが気になった。やはり彼女というポケモンは負けん気が強くて他人に弱いところを見せたくない性格なのだろう、あの表情、時折周囲を見渡して浮かべる怪訝と不安をいり混ぜた表情、負けん気を通り越して痛々しいようにさえ見える。

だが彼が精神的助け船を出そうとしたところで、その感情は雲散霧消する。「……骨がダメなんなら止めればいいじゃない…」グレイシアは彼の方に向き直り、彼女の表情は一気に険しくなった。「いい、アンタもユイに迷惑かけない、無茶ぶりして突っ込まない、隊長として言っとくわよ」

「そりゃ…無理する気はないよテルル」「はあ……アンタのする気はない、何とかなるって類はあてになるかどうか…ならなかったらどうするのよ?」グレイシアは呆れたような表情で右前足をつかってもみあげ状飾りをまっすぐに伸ばし、軽く息を吹いてその先端についたホコリを落とした。「まあ、あてにはならないだろうけど、アンタは自分で何とかするタイプだから過干渉はしない事にしとくわよ」

「あのなあテルル…」ベイリーフが少しほっぺを膨らませ、右前足で彼女の左前足を掴みにかかる。相変わらず自分を見下しているようなグレイシアに腹が立った。自分が幼稚で融通が利かないのは分かるが、期待しないと言われるのが許せない。「そんな事言って他人を突き放してばっかでどうすんだ?テルルがどう思ってるか…」

「テルルテルル、て誰呼んでるのよ!?私はアンタに軽々しく…」思わず首元の葉っぱに掴みかかろうとしたグレイシア。この数日間に溜まり続けた戸惑いと、不慣れな土地へと連れてこられたことに対する不安感がせき切って溢れ出す。「バカバカ、そう熱くなんなって!」「ダメだよテルリン!」後方からロックオンとユイリィがそれぞれ両翼と両前足で彼女を抑えにかかる。

そのおかげか、彼女の殺気だった右前足の力は目が覚めたように緩まり、前足をベイリーフの首元から離す。疲れからかは知らないが、妙に気が立っている自分がいる事に気付いた。そしてそれは数秒後に後悔と情けなさに変わる。「……いや、ごめんね…何か私疲れてるみたいで…だけどリーヒュン…」テルルは右前足を踏み鳴らし、大きく息をついてから口を開く。全く自分は何をやってんだか、自分に対する恥ずかしさに消えてしまいたいと思うほどだった。「私はさ…隊長、ていうよりこのチームのリーダーとしてさ…こう意外に皆の命を守る方法がないのよね…それと…」

「おいお前ら、ああそれとサクラ・フユツキ司令さん、頼むからこっちへ…」警察車両のシボレー・カプリスＰＰＶのドライバー席側から降りてきたのはアフリカ系アメリカ人の警察関係者、肩からアサルトライフル、腰には拳銃、電子警棒、無線機を下げ、手にはアメリカ・アップル社のタブレット端末を持っている。「これだけの数を回しながら、昨日、今日と出てくる様子はないが、とりあえず今日の確認だけはしておくぞ」

「そ、それじゃ…とりあえず行こっか…」「うん」「そうだな…」
リーヒュンから前足を離し、気合を入れるように左前足を2回地面に踏み鳴らしてから全員に振り返るテルル。「ごめん…ちょっと今は待って…あとでもう一回いうから」「うん、急ぎはしないよ…」
とりあえず彼女はリーヒュンに軽く謝る。彼の方もまた特に責める気もなく返事を返したが、ベイリーフには彼女の目が明らかにつかれた形状と輝きをしている、そう捉える事が出来た。「許して…私って本当に何しても一回以上失敗するバカだから……」「そこまでは俺言って…」自嘲的な笑みを浮かべるどうにかしてフォローを入れたい、彼が必死に考えている間にグレイシアは視線を正面に戻し、足早に人間の警察官が待つ場所へと足を速めていた。

「とまあ、今のところは、目立ったそれもない。順調と言えば順調だな」州警察の責任者と思われる男が、一行をぐるりと見渡す。８８０号線の路肩緊急停止帯に停車したシボレー・カプリスＰＰＶから降りた連中であったが、この人間から見ればここは随分と後方に当たる。アメリカ政府も州警察もこいつらに期待していないな、見下すような思いがした。「昨日を含めていつになるかは実行犯の通信解析をしても本人にしかわからん、少なくとも備えだけはしておくんだな国連軍のお宝さん」「備えなら、いつでもできていますわよ警察の方、それよりも警察の封鎖線こそ万全にお願いいたします」やや横暴な態度に出ている人間に対し、サクラも皮肉を入れて答える。こういう類の人間には期待するつもりはないが、彼女とて人間年齢３０代、言われっぱなしというのも悔しくて仕方がないのだ。
「実行犯が潜伏していると思われる場所からは相当後方ね？あなた方にも秘策があるんでしょうけど」
「大丈夫ですよ司令官さん、あんた方の命が危険なほどになる任

務にはならないはずだ」まったくこんなサーナイト種族が、国連安全保障理事会に直属する統合軍司令官の一人（一匹）なのか、意識の底では嘲笑を浮かべつつも、人間の男は自信たっぷりに１００メートルほど離れた場所にある機械を指差す。「ｉｒｏｂｏｔ社も我慢がならないようでな、アメリカ軍にも供給しているセキュリティー・制圧用ロボットを投入する。道路のセンサのネットワークとも連動か…あんなのを高速道路中になんてさすがはロボット産業の大手って所だぜ」

「そう…それはさすがですね。期待してますよ」先ほどから意識の底で嘲笑するこの警察官と、遠くに見える無骨で無機質な最新技術の塊であるロボット、双方にサクラは意識の中で“表情を歪め”る。最近の人間という物は技術が発展しているせいか、機械やテクノロジーの優劣を絶対提起に信頼するうえ、高度に成長した社会システム…これは人員や組織構成といったハード面、電子ネットワークなどのソフト面も含めて…が故に構成する人間がシステムの歯車にされていることに対する自嘲か、どうにも斜に構えるか無表情に従うかという、どちらかの態度しかとれない事が多い。彼女、サクラ・フユツキにとってはそういう組織の構成員は嫌悪の対象でしかなかった。身勝手かもしれない、しかし組織の位置んであるからには自分の立場をわきまえ、やれる限りの事はする、同じ地球で文明生物として暮らしながら、ポケモンの文明での常識を多少は学ばないのか、そういう感情を覚えた。

「ありがとうございます司令官、それで…」警察官の男が向き直ったのはあまり気合のなさそうな表情をするグレイシア種族、彼は手に持ったタブレット端末のリードアウトを見る。確か隊長はこいつだったはずだ。昨日こいつらを担当した同僚から聞いていたが、細かい事はよく分からない。というより長くても１週間しか関わらない彼らを知る気もないが。「アンタが隊長だったよな、実行犯が来るとわかれば指示が飛んでくる。それまでは訓練でもそこらへんでやっていてくれ」「は、はあ…」

「ったく、こんなのが隊長か？やっぱ国連統合軍は所詮のところ治安維持部隊か…」憮然とした表情をしているテルルに男は危うく唾を吐きかけそうになったが、唇の先に出かかったところでどうにか止めた。全くこの種族というもは顔が生意気で仕方がない、こいつ以外で近くにグレイシアが出てきたら顔が変形するまで蹴り潰してやりたい、そんな発作が出かかったがあくまで自分は警備中の警察官、相手は気持ち悪くても国連と国連統合軍の重要関係者、人間でないので許可さえもらえば“重要物資”と呼んでもいい存在、こんな事で自分と警察のメンツをつぶすわけにはいかない。「まあいい、お前、テルル・アストラフスキーとか言ったな？」男が一歩歩み寄り、彼女の顔を覗き込むように顔を近づける。

「う…確かにそうですけど……」びっくりしたようにテルルは後ろに下がった。至近距離まで近づいてきた人間の煙草くさい吐息、それに彼女は吐きそうになる。「そうだったら…お前を主導にして、指示が飛んでくるまで適当に体を温めておけ、いいな？」「そ、それは…はい……」

「なんだその二つ返事は…俺に文句があるってのか？」タブレット端末に視線を落としていた男が、グレイシアの言葉にいちゃもんをつける。この警察官は左手の中指を彼女の鼻元に突きつけ、それを左右に動かす。さっきからこいつの目つきが気に入らない、多少は同僚から聞いていたが、このグレイシアの性格の悪さ、という名の噂がますます目の前の彼女に対する不快感にしている。「いいな、真面目に任務を遂行しろよ。人間っつうの物の組織はな、失敗した奴の替えなんていくらでもいる、そういうシステムだ。その責任を問われるのはごめんだからな」

「大丈夫っすよ人間さん、俺らがついてるんだから彼女のフォロー位はやれるはずだ」グレイシアの背中側からロックオンがすっと飛び寄り、右の翼をすっすっと動かす。「頭の数でも頭の質でも劣ってる分のもの、俺らで何とか掴んでやっから、心配はご無用ですぜ」

「ったく、ムクドリもどき風情が俺に説教しやがって…とにかく、そういう事だからワッパをかける訓練でもやっておくんだな」グレイシアの背中にいるムクバードに明らかな不快感を男は浮かべる。全くどういう寄せ集め集団だ、タブレット端末の人員情報に“全員テロリスト”と書いてデータを連邦国防省と州警察に送り返してやりたいくらいだ。

「あの、ちょっといいかしら？」警察の格好をしたゲルマン系人種の女が警察官の男に歩み寄る。「６８０号線とのジャンクションに配置してあるロボットが市警のカメラとアクセスできなくなってるの、無線機でさっきからあなた達の事呼んでるわよ。私はこの辺りのナビゲーションシステムのダウンと市内の通信端末基地局のトラブルの関連を確認しなきゃなんないから」

「６８０号線…そうか、分かった。すぐに行くって連絡入れておいてくれ」人間の男がタブレット端末を地図に切り替え、その一角をちらりと見つめる。こいつらのせいで無線機が読んでいる事にさえ気づかなかった、これで犯人を逃がしたりしたらこいつらの責任問題にしてやる、彼は意識の中でそう決定した。

ちなみに今回の事態で影響を受けているのは交通や運輸だけではなかった、それで精密部品を運びこぶ電機製品メーカーはジャスト・イン・システムのサプライ体制が機能しなくなり当面休業、さらにはｉｒｏｂｏｔ社が支援として持ち込んだセキュリティー・ロボットが市警の交通管制センターとのアクセスを民間の通信回線を利用して常時大容量のデータアクセスをしているせいか、サンフランシスコ中の一般携帯情報端末の回線が異常なほど混雑し、通信企業には抗議が相次いでいる。おそらくは大容量のデータ受信と相互リンクを行うロボット側の不備で不必要なほどのデータを送受信し、一般回線にすら悪影響を与えているのだろうが、民間報道はそれほど多くは触れないものの、おりしもアメリカ合衆国の国防がかかる事態、停止するわけにはいかないのが実情だった。過剰アクセス状態

のロボット周囲の送受信機器を割りだし、そのセンサーを停止させる、少しでも民間の混乱を抑えるにはこれしか手がない。

「そういう事だ、ここにいる間、ヘンな真似はするなよ」警察官の人間はポケモン達向かって前方にある非常駐車帯へと小走りで向かっていく。男は車へ、女は近くにいる警察官と共に端末片手に道路上方にあるセンサーを調べはじめる。その際に男がテルルを軽く指差して発せられた独り言の、捨て台詞のような英語は脅迫じみた物なっていた。「このケダモノ文明が、さっさとクローンだけになりやがれ…」

「ったくバカなこと言ってんじゃねえよこの人間野郎が。先にクローンになるのは人間だろうが……」「やめときなさいロック、ここで争っても無意味よ」背中から飛び掛かろうとしたロックオンをサクラが左手を出して静止する。「そりゃあ分かってますよサクラさん、あれはある意味での負け惜しみと捨て台詞なんですからね」「もちろんよ…」ムクバードの彼も無駄に抵抗しようとはしない。サーナイトも彼も既に３０年以上生きており、人間と自分たちの間にあるわだかまり、文明的な格差や価値観の違い…人間内での経済や生活レベルの格差ではない…から生じる双方に対するお互いの差別感情も理解できる。在日本（とはいっても日本は“かろうじて（実際日本は不況と震災と原発問題で国政崩壊寸前だ）”アメリカの統治領ではない、日米同盟の結果だ）アメリカ空軍の航空騎兵としての経験があるロックオンにとっては、人間などああいう生物であるとわきまえ、気にしない事が常識であったし、サクラにしてみれば人間の浅はかな思想、すなわち自由や繁栄を謳い、民主主義や自由主義の名のもと弱者を強者が食いつぶすか、平等と社会主義を前面に出して強権をもって市民に恐るべき弾圧を加えるかのどちらかしかない考えや方向性、どちらにせよ自分の権利や欲求を満たすことに飢える考え方から生まれる意思決定は手に取るようにわかる。彼女の自慢ではないがそれが分かれば自分の意識とお互いの関係のバ

ランスを取ることなど造作でもない。
「ただし…収まらない奴もいるのは当然だ」ムクバードがほんのわずかに飛び上がり、ほんの１ｍとわずかだがグレイシアの方に近寄って彼女の表情を覗き込む。かたまっているテルルの顔を一目見るなり、ロックオンは落ち込んだ生徒を励ます日本の熱血男教師のような声を出した。「……気にすんなテルリン、あちらだって必死なんだ」「……」
テルル・アストラフスキーの目には疲れの中にギラギラと燃えるものがあった。（…ふざけんじゃないわよ…何を言ってるか知らないけど、アンタにそのなめられた目つきされる筋合いないのよこっちは…）彼女の意識の水晶の中では危険な物質が渦巻いている。そしてそれ以上にこちらを見下すようにこちらを一瞥してきた人間の顔を思い出し、意識の水晶を渦巻く機体の温度が急上昇し、感情の原子炉の制御棒が圧力で折れそうになるほどの黒い感情が彼女を満たす。殺す、何でもなければこんな人間など自分の“こおりのキバ”と右前足の一撃があればぶち殺せる、そんな感情に右前足が震えるのを感じた。

彼女の冷たい怒りが走り去る警察車両と数百メートル離れた路肩に警備されながら待機し、警察官と技術者がたかっているロボットの方に向けられている。ロックオン・ストランにはそういう女（メス）への対処法はすぐに思いつく。別に逆上されることなど怖くはないし、むしろテルルがどう起こるのかを生身至近で体を張って見てみたい、そういう好奇心があるくらいだった。それを出すのはさすがにやめたが。「分かった分かった、あいつらはクソ野郎だ、俺が後でぶっ飛ばしておいてやるから安心しろ」「……」
「それから…」ムクバードはグレイシアの首に左翼を軽く回し、口を彼女の耳元に近づける。おそらくこういう表情をしているのは

周りに助けを呼べる奴がいないせいなのだろう、無論彼女が孤独だという意味とは違う、気恥ずかしさを超える奴がいないのだ。そして彼の計算では、その役を果たすであろう存在はこの場にいなかった。「…お前みたいな気の強い女にはやっぱ男が必要だな。大丈夫だ、ブレイブがいねえ間は俺が代わりやってやるから」「……」相変わらず無言のまま、テルルは検問によって大渋滞が起こっている高速道路をにらみつけていたが、ロックオンにはこわばっていた首や前足の力が抜け、視線が人間たちから足元のアスファルトへと落ちるのを振れている翼の感覚からはっきりと認識する。

「まあ……こうやって立場差を背伸びしたくなる時もあるってわけですよサクラさん。こいつはもう落ち着いたとみていいな」「ええ、ありがとうロック……」サクラは彼女の意識の水晶が急激に冷え込んでいくを見つめながら、車両がいなくなった側帯を見る。気にかかる事には気にかかる、いつの事だったかテルルが感情をさらけ出してしまったことを思い出す彼女には、このグレイシアが本当に、メガニウム以上に愛おしく見えてならないが、それをここで出す脇にはいかない、抱きしめてやりたい母性本能のような感情をサーナイトは押しとどめた。自分の仕事は国連という組織形式上のやり取りと、ユイリィ達の面倒を見る事、他に手を出すなと国連上層の人間から命令されている以上、あまりプライベートに干渉するわけにはいかないのだ。

「それじゃ…あそこの方がちょうどいいわね……最初は私のロックがやってみるから、リーヒュンとユイリィは2匹でちゃんと動作を確認しておくのよ?」

現地時間2月15日　東シナ海上空　0時31分

「やつら、こちらとの距離をつめてる。ずいぶんとあれな状況だ」

米海軍空母「ロナルド・レーガン」に所属する航空隊のＦ／Ａ－１８Ｅ。ダイヤモンド編隊を組む小隊の１番機パイロットである男はコクピット正面のコンソールにあるレーダー・ディスプレイを見つめながら無線を入れる。６時間ほど前から、再び中国軍のものと思われるひこうタイプのポケモン量産兵士らしき（というのも一般的な対空（ＳＰＹ）レーダーで探査すると、旅客機や戦闘機といった人工飛行物体と同様に規則的な電波を発している）機影が出現し、再び韓国領空に侵入したため韓国空軍の基地と米空母「ロナルド・レーガン」から航空機部隊がスクランブル発進したのだ。今日の１回目はしつこかった。いったん離脱したと思ったら再び右ループを描いて韓国領空に侵入、いったんは帰投体勢に入っていた同空母所属のＦ－３５Ｃ２機は再度反転、再び警告へと戻るというありさまだった。「相手の目的は不明。というより理解もできないがな」男の声はかすかに苛立ちを含んでいるものである。２日前辺りから艦隊に接近し、挑発するかのごとく空母の飛行部隊を送り出している。昨日に引き続き応援に上がった、このＦ／Ａ－１８Ｅの小隊の隊長であるパイロットには全く持って我慢ならない事態となりつつあった。

“どうだ？こちらの警告に対する反応は？”空母の航空管制室がパイロットに尋ねる。「聞かなくても分かるでしょうに、無視、全部反応がない…」彼は無線機にそう返し、右手で握るコントロール・スティックを強く握る。その最中、自分の感情が戦闘機パイロットとしてのいら立ちからくる感情ではなく、別の何かから来ていることに初めて気づいた。自分でもちらりと恐怖がよぎるほどの唐突なものに。右手の人差し指が、ステッィクの無線交信用スイッチをいつの間にか押している。「……可能性は無きにしも非ずだ、在韓・在日の部隊も警戒態勢に入っている。何かあったら速攻でも…」

そう、頭上に広がる星の大河、その中を飛ぶ黒い影、Ｆ／Ａ－１８Ｅパイロットのヘッドマウントディスプレイの情報と共に確認できる、星空に落ちた時々鋭い接触警戒灯を放つ黒インクの染み、そ

れがこの男にも、周囲にいる同僚のパイロットを不穏な感情にしている、彼は直感した。同僚のパイロットが指定された中国軍航空機用の周波数帯の無線と、全周波数対応のトランスポンダで韓国領空からの退去と国籍・飛行目的の表明を求めている中国軍機、頭上に自然と人工が入り混じった宝石が輝く漆黒の夜空を飛ぶＪ－１１は明らかに敵意を持っている、不気味な沈黙が全てを察しているように彼には思われた。“無理は禁物ですぜ隊長、奴らいつ反撃に出てくるかもしれん奴らだ…”「もちろんだ〇〇〇、周囲をよく見てろ。俺がこいつらのお守りはしてやる…」３番機のパイロットに対して無線機越しに答える小隊長、その言葉とは裏腹に、ヘルメットのゴーグルに内蔵されたディスプレイ越しの彼の目線は、強化繊維ガラスでできたキャノピーの右上あたりを飛行している黒い影に向けられていた。あの機体が入っている識別コンテナの色は、マウントディスプレイの表示では黄緑、すなわち敵意のない軍用機という事になっている。しかしこの男にはそれが間違っているとしか思えないのは明らかだった。何の確証もないにもかかわらず、彼の本能ははっきりとした警告を彼の思考に投げかけている。昨日の（正式には一昨日）の中国軍機の領空侵入、ならびに量産兵士との交戦とは全く違う、比べ物にならない危険を感じる。繰り返しになるがこの男自身も自分の直感に紺今日は１つもない、ふとこう思っただけだ。相手は時々推力を上げたり落としたりし、また少しずつ右旋回をしながら再び黄海側へと進路を向け始める。「ったく…」男は舌打ちをし、わずかに左手で握るスラストレバーの外側、左側のエンジン出力を上げつつ、右手のスティックをわずかに右に倒し、右足のフットペダルを踏む。少しだけＦ－４１４ＧＥ－４００ターボファンエンジンの出力が上がり、機体がわずかに傾くと同時にＨＵＤとゴーグル越しの星空が左側へと流れ始めた。その間に男は右手のスティックもついたＨＵＤ上の自機周囲レーダー起動スイッチを押す。これはコンソール上のレーダーサイトに目を落とさずとも機体周囲の状況を…極限まで性能を突き詰めた戦闘機は、キャノピーの死角

となる場所が多い…確認できる、高速・かつ高機動下での空中戦を行う際は必須の装備である。ＨＵＤ上に映る黄緑色の輝点（ブリップ）、コンソール上のレーダーと同様にうつる“Ｊ－１１”という中国軍航空機の周囲には“不明熱源”と表示された輝点がいくつもあった。もちろんこれはひこうタイプのポケモン量産兵士であり、熱源となっているのは埋め込まれた内部機器が原因である。奴らも重大な脅威になり得る、そう判断した男はキャノピーの向こう側に広がる夜闇に目を凝らし、一層強く両手のスラスターとコントロール・スティックを握りしめた。「小隊各機、量産兵士にも気を配れ。距離はつめすぎるな、至近でされたらアウトだ…」“了解…”

“飛行中の各機、各艦隊に報告、中国機動艦隊よりヘリ複数発進。進行方向は南東、目的は現在不明”各員から応答があった直後、小隊長機の無線機にもアメリカ海軍空母からの通信が聞こえた。「ヘリ部隊…南西というのは事実か？」“事実だ、「チャンセラーズビル」と韓国の「栗谷李耳」のレーダーがとらえている…”

「南西…」男は右前方を飛ぶ中国軍機から一瞬目をはなし、コンソール上のスイッチを数回たたく。コンソールにあるレーダーサイトの表示に、排他的経済水域識別圏を示す黄色の帯、および韓国領空を示す赤色のラインに加え、水色の帯がレーダーの右下の隅に表示される。彼の右手が一瞬止まり、次に無線機に向けて発信した声は重く険しい物となっていた。「間違いない、奴らは民間採掘プラントの方向だ」

“こちらでも確認している。方向はアメリカ系企業の金属リチウム採掘・精製プラント、この海域で最大の施設だ。軍事衛星が確認したヘリの機影を送る…”やがて小さなメロディー音とともに送られ、機体の情報機器とリンクしているヘルメット内臓されたマウントディスプレイの隅に映し出された高解像度カメラによる衛星写真。「

これは…軍の塗装ではないな…」小さくかつ十分とは言えない解像度だったが、軍人であるこのパイロットにはそれでおおよその機種は理解できる。それと同時に映し出された文字情報に、彼は思わず自分の目を疑う。一瞬軍の各国の軍や政府機関が持つ兵装のデータベースが誤っているのではないかと感じてしまった。「この機体は…ロシア沿岸警備の部隊のヘリか…しかしなぜ中国海軍の空母から発進する？」“ありえません隊長、民間機や他の政府機関の軍所属の部隊がなりすますのは法規違反では……”２番機のパイロットも無線機越しに困惑したような声を上げる。ジュネーブ条約では軍所属の兵士が民間人や他国の政府機関関係者に偽装して活動する事、もしくは民間や他国の政府所有に偽装した車両、船舶、航空機、人工衛星を軍事行動に利用することを厳禁としている。もしこの衛星画像の情報が真実であれば極めてゆゆしき事態だ、しかしそれではあるがその分謎も多かった。なぜロシアの警察に所属するヘリに偽装する？さらになぜアメリカ民間企業の金属採掘プラントの飛行禁止空域圏内へと飛んでゆく？アメリカ・韓国合同艦隊にはそれがまったく理解できなかった。“目的は不明、先に上がった２０３中隊４小隊の各機は、識別不明ヘリの警告と民間地域飛行禁止空域からの退避誘導へと向かえ”それを合図にしたかのように、Ｆ／Ａ－１８Ｅの左わき遠方を４機分の接触警戒灯が通過し、南東を目指して飛行していく。レーダー上でＦ－３５Ｃ４機が識別不明ヘリの方向へと向かうのを核にいした小隊長は、右手で握るスティックに付属するトリガーのカバーをとっさに跳ね上げ、ＨＵＤ内にある照準シーカーに視線を向けた。先ほどから次々に起こる不審な事態、それに対して戦闘機乗りとしての彼の本能が、一層強い警告を鳴らし始めていた。「小隊各機、いつでも撃てるようにしろ。今回はやばい」“了解…しかしそこまではやりすぎでは…？？”「バカ、今回は本当に怪しい、いいから準備を……」やや戸惑う2番機パイロットの声に、小隊長のパイロットは火器管制装置のロックを解除しながら無線越しに答える。

その刹那、再びＨＵＤとヘッドマウントディスプレイの表示に赤くなり、攻撃警告音声が激しく鳴り響いた。表示が示したいるのは左後方「っだと?!…」男は咄嗟に左手のスラストレバーを押し込み、右手のスティックを左前に引き込んだ。息苦しくなるほどシートに叩きつけられる体、彼Ｆ／Ａ－１８Ｅは2基のＦ－４１４－ＧＥ４００ターボファンエンジンを全開にし、鋭く左上に飛び上がってループを打つ。目まぐるしく入れ替わる天地。この展開は昨日（正式には“一昨日”だが）と全く同じ、ディスプレイに表示された識別以前に飛来の速さからして中国軍もミサイルではないの明らかだった。「管制室、ブレイクした!反撃するぞ!」“交戦は極力回避しろ、繰り返す…”

「聞いてられん…各機迎撃を許可する」無線機の通話スイッチから右手の親指を離す前に、左手のスラスタレバーを手前に引き、右手のコントロールスティックを左前に押し込む。Ｆ／Ａ－１８Ｅは電子入力信号修正を加えた油圧制御が瞬時に反応、直ちにエレベータとラダーが空気を掴んでポケモンの背後に食い込んだ。“〇〇2、交戦”“〇〇3、交戦!”僚機も戦闘行動に入ったことを示す無線が鳴り響くが、小隊長にはその音声は聞こえていない、ＨＵＤとマウントディスプレイ越しに見える、航空機と比べてはるかに小さな半人工飛行生物に全ての意識が向けられていた。「まだだ…」一気に急上昇する目標を機体は追い回し続ける。Ｆ／Ａ－１８Ｅは急上昇から反ロールを打ち、そのまま降下しながら右旋回、同時に機体を引き起こす。瞬間的に先ほどの真逆の進行方向になり、高度も再び３００フィートを切る。

“ｗｏｏｐ!ｗｏｏｐ!ｐｕｌｌ　ｕｐ…”“航空管制室より1号機、高度に警戒せよ”「紹介…ったく、だまれＧＰＷＳ…」自動対地接近警報装置の合成音声と空母の管制室からの警告を無視して男

はＦ－４１４－ＧＥ４００エンジンの推力を絞りつつ距離を測る。機体情報をいちいち所属する空母に伝える必要があるのか、男は本気でそう思った。高度が１００フィートを切り、海面に水しぶきが上がってキャノピーを濡らしていくが、それも数秒後に状況は変わる、再び上に飛び上がった。インテークからターボファンエンジンに向かって水が入り込むのはよろしくない、まあ敵を追っているうちに再び高度を上げることができたからよかったようなもの、スラスタレバーを手前に一気に引き、すぐに奥に倒して左に切り込もうとするポケモンに喰らいついた。高度は９００フィート辺りまで上昇、機首を上に立ち上げながら回った結果機体は左に１００度程度バンクを打った状態だが、パイロットは戻そうともせずに再び出力を上げてひこうポケモンの背後にしがみついた。そんな余裕がないのだ。「この程度なら…」小隊長のパイロットはスティックに付いているウェポンセレクターをまさぐり、火器管制をミサイルに切り替える。ＨＵＤに表示された目標コンテナが赤くなり、赤外線排熱シーカー音がなりひびくが、彼はトリガーを引こうとする右指を必死にこらえさせる。機関砲の時と同様各武装の最適距離に接近させた方が命中精度は上がる、それを必死に待たせた。戦士としての攻撃本能が冷静な分析によって押させつけられているのだ。ヘッドマウントディスプレイにＨＵＤの信号と連動して表示される円の中に目標コンテナを取ら続ける、最適なタイミングに入れば火器管制装置から指示が入るはずだ。あまりにもじれったい状況ともいえるが、今のこの男には獲物を捕らえるという欲求が、完璧に相手を破壊できるタイミングを待つという冷静さとのバランスをも保っているともいえる。

その直後目の前を左側から飛び込み、目標と平行飛行し始めたポケモン、一瞬ではあるが小隊長であるこのパイロットが逃すはずもなかった。「邪魔だ！」右へスライドする新入りの相手に米海軍のＦ／Ａ－１８ＥのＭ６１Ａ１機関砲が火を噴く、アメリカ軍機の射線から離れる前にそのクローンのムクバードは火だるまになって飛び

散った。胴体が前後で真っ二つになり、機体の上下をその塊が通り過ぎていく。「たく、俺の小遣いになりたいってか…」パイロットはすぐにウェポンセレクターをミサイルに戻し、右手のスティックを右手前に引く。再び火器管制装置が先ほどの目標を識別し、赤外線識別シーカー音が鳴り響く。思わぬ小遣いができたことに少し気をよくしながらも、男は再びＨＵＤの向こう側にいる敵を追尾し始める。再びめまぐるしく反転する天地、出力を上げ過ぎぬよう左手のスラスタレバーを強く握りしめる。戦果が多い事は極めてありがたいが、それで気を抜いてベイルアウトでは困るのだから。

その間は敵をひたすらにおいつめるだけ。“４番機、１つ潰した…”無線越しに管制を上げる同僚の声も全く彼には耳に入らない。あくまで小隊長の意識はＨＵＤとヘルメットのゴーグル越しの視界に注がれている。「早く入れ…さもなきゃ…」排熱シーカー音が次第に鋭くなっていくコクピット内、速力を上げる相手にＦ／Ａ－１８Ｅも２基のターボファンエンジンをフル回転にし、右旋回で相手より鋭く切り込んで食らいつく。

ピピピピピピッ！排熱シーカー音が一気に短い物となり、ＨＵＤに映し出された円状の表示が赤くなる。「うっし！」瞬時にパイロットの意識はそれに反応し、それと同時に右手の人差し指はトリガーを引いていた。機体左翼のウェポンステーションから赤外線情報を受けたＡＩＭ－９がロケット花火の如く前へと飛び出す。その轟音に気付いたかどうか、相手は右旋回ロールから一気に下へと食い込んだが回避できるはずもない、ＡＩＭ－９の先端に装着された赤外線センサは感情もなく火器管制装置から入力された犠牲者の姿を正確におい、何の同情もなくそれに噛みつく。ミサイルという悪魔に噛みつかれたハトーボーは瞬時に内部から爆発、０．２秒後には細かい肉片と血しぶき、漏れたエネルギーの花火を作って飛び散った。

右にバンクを打ったままの機体のキャノピーからそれを確認した男だったが、戦闘は全くおさまる気配を見せない。すぐにミサイルアラートが鳴り響き、ヘッドマウントディスプレイは目標が背後についている事を示している。「きやがったか！」男は一瞬コンソール上のレーダーサイトをみやり、すぐに次の取るべき行動を判断する。背後にはひこうタイプが２匹、彼はコントロールステッィクを左に倒して機体のバンク戻す。それでも喰らいついてくる２匹のポケモン、パイロットは至近距離までわざのエネルギーを引きつけた。“ミサイル・ブレイク！”“隊長、６時方向！”そんな事は知っている、自分だってさっさと回避するなりなんなりしたい、それでももう少し粘る必要がある、パイロットは次第に逼迫してくる警報音を耳にしながらひたすらにタイミングを待つ。

そのチャンスの到来は一瞬だった、わざのエネルギーが機体後方、ＧＥ社製のターボファンエンジンのノズルまで数メートルまで迫った瞬間、警報音が最高レベルの危険を知らせる音声を発して１秒後、パイロットはスラスタレバーを手前に引き、フラップも全部引き出す。それと同時にコントロール・スティックをいっぱいに引いたのだ。急激に推力と速度を失って持ち上がる機種、それと同時にエレベータが上昇位置に入ったため機体は太刀魚の如く一瞬空中という海で立ち上がり、そのまま後ろへと倒れこむ態勢となった。激しい重力加速度の変化に意識が遠ざかりかける男、「ええい！」どうにかそれに伴うブラックアウト（意識喪失）をしのぎ、彼はすぐにスラスタレバーを奥まで押し込んだ。２基のＦ－４１４－ＧＥ４００が息を吹き返し、鋭いループを描く機体、電子制御サポートが機体の制御を手助けしてくれてもでもコントロール不能になりかねない機体を制御できる能力と同時に、強い重力加速と衝撃に耐えられるパイロットでなければ不可能なテクニックであるカウンター・マニューバ。それによって形勢は一瞬にして入れ替わったのだ。前方に出現した目標を感知したレーダーと連動する火器管制装置が反応し、ＨＵＤ上に目標コンテナと格闘戦用照準が瞬時に表示された。

再びシーカー音が鋭く鳴り響き、火器管制ディスプレイの兵装がスタンバイしたことを示す表示が出る。もっともこの男はそんなものには目もくれず、本能ともいうべきスピードで武装発射トリガーを引き、それと同時に右足でラダーを踏み込んで射線をわずかに右へと踏む。機体前方１００メートル先に出現したＭ６１Ａ１・２０ミリ機関砲のカーテンはクローンのチルタリス２匹を物の数発で粉々にし、先ほどと同じように爆発と血しぶきと肉片が交じった物質を振りまきながら散華した。キャノピーにこびりついては後ろへ飛んでいく血液や肉、いつの間にか何も感じなくなっていく自分に、パイロットの男は気付いた。

“また落としましたが、敵の数は相当です”ヘルメットに内蔵された無線機から２番機のパイロットの声が聞こえる。「どうだ、奴らの機体は？」

“不明機は２機とも領空より離脱、しかし例のヘリは相変わらず南東の禁止空域方向ですぜ”「こちらでも確認した…北西より２機、中国軍機がまだ…」相変わらず事態は混乱している、多少は落ち着いてくれという懇願にも似た思いが意識をよぎる、そんな中を小隊長の男は左手をコンソールパネルに伸ばしてレーダーサイトの索敵規模を調整しようとした直後、またしてもヘルメット内臓のヘッドマウントディスプレイが警告メッセージをだし、コクピット内に警告音が鳴り響く。「な…ちっ！」ＨＵＤに表示されたのは正面から４匹、距離表示は４０００、またしてもヘッドフォンだ。“〇〇〇１、正面に４機、クローン量産だ”「よし、このため…」Ｆ／Ａ－１８Ｅのパイロットは咄嗟に意識をＨＵＤの表示に戻す。右スティックのウェポンセレクターを瞬時に回し、電子音が特殊兵装に入ったことを確認した。そう、今回アメリカ海軍艦艇「ロナルド・レーガン」から発進したＦ－３５やＦ／Ａ－１８Ｅは、ＡＩＭ－９が４

発とＡＩＭ－７が４発、計８発のフル装備、アメリカ国防省から指示が出た兵装なのだ。

コクピット正面のコンソール上にある火器管制装置のディスプレイ、機体両翼を模したグラフィックに表示されている４発のＡＩＭ－７の表示が、発射体制が整った胸の表示と電子音を再度出す。急速に縮まっていくＨＵＤ上の残り数値、Ｆ／Ａ－１８Ｅは２基のターボファンエンジンの出力を上げ、猛然と加速し始める。命中精度が電子制御で落ちない分、相手がこちらを狙いにくくなると同時にミサイルの回避も難しくなってこちらの生存率と命中率は向上する。

数秒後、ＨＵＤ上にある４つの目標コンテナが赤くなり、再び排熱シーカー音が照準ロックを知らせる。「撃つっ！」小隊長がトリガーを引くと同時にＦ／Ａ－１８Ｅの両翼から２発ずつミサイルが発射、機体は直ちに右旋回をしながら出力を絞り、一気に射線から離脱する。命中までわずか数秒、ポケモン達の脳細胞に埋め込まれた人工の戦闘用プログラムと生体用電子機器…いわゆる人間用の人工臓器やペースメーカーなどを原点とする機器…と遺伝子改良で強化された筋細胞でさえよける術はない。４匹とも小さな花火を作って四散、生物の残骸と機械の破片がいっしょくたになった物質となって海面へと落下した。

「潰したが…しかし数がな…」パイロットはスラスタレバーをやや戻し、Ｆ／Ａ－１８Ｅを右旋回させ続けると同時に、コクピット中央のレーダーサイトに視線を落とす。“非航空機飛行熱源”と表示された輝点（ブリップ）がディスプレイ上に大量に表示され、その識別表示がディスプレイを埋め尽くしていた。何というゴミ（・・）、男はレーダーサイトを殴り飛ばしそうになった。飛行制御も火器管制も索敵能力も現代の戦闘機は人間の処理力をはるかに上回ってしまっている、パイロットの闘争心に対し全く持って適切でない、それに対す

る嫌気を一瞬彼は感じる。
　しかしそれがゆえに再び鳴り響く接近警報、パイロットは再び戦闘に全神経を戻し、彼の操るＦ／Ａ－１８Ｅは鋭く高度を上げ、反ループした直後にバンクを戻した。出力を上げ、戦闘開始時のポイントへと戻る方角となる機体。“〇〇〇3、生意気です！1匹1発では到底間に合いません！”「3番機落ち着け、ガンでやれるだけやるんだ」無線機のイヤホンから聞こえる3番機パイロットの荒い息に対し、小隊長としてこの男は答える。同時にスラストレバーを押し込み、ＨＵＤに表示された次の目標コンテナへ向かって距離をつめ始めた。数は多いがとにかく武装が尽きるまでやるしかない、溜まりゆく高機動による肉体疲労を感じる余裕すらない。
“ロナルド・レーガンよりヘリ方向へ急行中の×××隊各機、〇〇〇隊の救援に向かえ、ヘリはこちらからの警告を行う”海上のアメリカ海軍空母「ロナルド・レーガン」の航空管制室が指示を飛ばす。もちろんＦ／Ａ－１８Ｅが搭載しているＡＮ／ＡＰＧ－７９アクティブ・フェーズド・アレイ・レーダーより、米海軍のアーレイバーグ級ミサイル駆逐艦「ディケーター」のＡＮ／ＳＰＹ－１レーダーの方が索敵範囲も性能でも勝っているのは自明だし、韓国海軍の世宗大王級ミサイル駆逐艦や米海軍のダイゴンデロガ級ミサイル巡洋艦の防空索敵システムを経由して「ロナルド・レーガン」に送信されているのだから、周囲の状況はこちらより確認しているはずだ。“了解した管制”
「なぜヘリ部隊に対して―Ｆ－３５Ｃ（ライトニング2）を…」
“援護まで９０秒程度と見た方がいいですね隊長”「それ位だ。あるだけはぶっ放して…」小隊長がコクピットのレーダーサイトを確認しようとしたその刹那だった。
鳴り響く警報音、再びこちらを狙う兵器を探知したのだ、しかしそ

の位置は…“〇〇〇1、ミサイルアラート正面！”「正面…っ？！」ＨＵＤに表示されている正面の目標は…中国軍機！「！！！！」鳴り響くパイロットの思考が一瞬停止する、中国軍機が攻撃…正確に言えばミサイルを射出してきたのだが…してくる！小隊長の思考は困惑と衝撃に占領された。相手側の軍用機に発砲する、現代の国際条規に基づけば中国のアメリカに対する宣戦布告ではないか！「ちっ！」そうこうしている暇はない、瞬時に男は意識を先頭に戻し、機首を持ち上げて出力を一気に高める。それと同時にコントロール・スティックの武装発射用トリガーの下部にあるスイッチを押し込んだ。

Ｆ／Ａ－１８Ｅの後部から射出される複数の発行体、中国側ミサイルの赤外線センサはそれを目標と見極め、制御装置から指示される方向制御翼が空気を掴む。弾薬の矢はアメリカ空軍戦闘機とは全く別の方向へと向かい、射出された発行体を追って海面へと飛び込んでゆく。フレアを使った誘導兵器の回避は一般的な戦術である。だが安心する暇がこの小隊長にあるわけもない、ＳＵ－２７を自国用に改造した中国海軍航空隊のＪ－１１はＦ／Ａ－１８Ｅの背後に食らいついてくる。「こいつはっ…」小隊長はコントロールスティックを左に倒してバンクを復帰させ、同時にスラストレバーを手間に引いて機体出力を一気に落とした。再び機種が急上昇して速度が急激に落ちるＦ／Ａ－１８Ｅ、失速警報音とともにバランスを失いかけて激しく振動するスラストレバーとスティックを彼は強く握りしめた。その機動について行けずに前へと飛び出したＪ－１１が轟音と共に足元を通過するのを確認、彼はスラストレバーを前に倒してＦ－４１４－ＧＥ４００ターボファンジェットを2基とも全開にする。再びＨＵＤに表示された自機速度表示の値が急上昇し、ヘッドマウントディスプレイに目標コンテナに対する近接戦闘用シーカーが円状に表示される。鳴り響く排熱シーカー音、ＡＩＭ－９短距離ミサイルの赤外線誘導装置が機体の火器管制装置から受けた目標情報は既に入力され、あとはパイロットがトリガーを引くのを待つ

のみとなっていた。

しかし今回は違う、相手はＪ－１１という名の人間の駆る戦闘機、しかも米軍機との至近距離格闘戦を想定して作られたＳＵ－２７をベースにした中国軍航空部隊の主力戦闘機である。「くっそ……」重力方向や機体の運動の変化でシートに強く押しつけられる中、小隊長は必死にＨＵＤ上に目標コンテナをとどめようと食らいついた。目まぐるしく入れ替わる天地、方向感覚がマヒするほどの姿勢の変化、それでいてヘッドマウントディスプレイとＨＵＤに表示される速度、高度、目標コンテナと照準マーカーに意識を集中させる。Ｆ／Ａ－１８Ｅは右にロールし完全に裏返しになりながら下へと全開で降下する中国軍のＪ－１１を追いかけ続けた。動作する左右水平尾翼（エレベーター）のふちから噴出する飛行機雲、高速飛行時に空気中の水蒸気が尾翼の淵で発生する摩擦熱で蒸気になっているのだ。

“上空の各機、中国軍機の一部が発砲した模様、発砲は禁ずる、警告射撃を…”空母の管制官も事態を把握したようだが、相変わらず対応が硬直的だ。“そんなの待ってられるかっての！隊長、６時を援護します”「くっそ…何でもいい…」“１番機、許可のない戦闘は禁ずる、命令を守れ”

“ふざけんじゃねえ！相手が発砲したんだ、許可取ってるヒマないんすよ！”２番機が航空管制室を怒鳴りつけ、機体の推力を上げる音が無線機からもはっきりと聞こえる。すでに先ほどミサイルを打ちだした中国軍のＪ－２７に対しては、アメリカ軍が正当防衛として迎撃に出る事が可能だが、万が一にでも反撃をした結果、両者が交戦状態に陥るのは大きな外交問題となるのは当然である。それを避けるための空母側からの指示だったが、当然のことながら上空で戦闘している各機には、そんな外交情勢に配慮している精神的余裕があるはずもない。敵意を米韓双方に明らかにして飛び回る中国軍

のクローン量産兵士、そして武力行使を行った中国軍戦闘機、とても警告だけでその場が収まるようには思えなかった。“隊長、まわります！”「いや…いい…この野郎、俺が絞めてやる…」目まぐるしく姿勢を変化させながら飛びまわるＦ／Ａ－１８Ｅのパイロットに対する肉体的負担は大きい、スティックを左に倒し、スラスタレバーを引きながらＪ－１１に機体を切り込ませるこの男には聞こえていなかった。耐Ｇスーツを着用していても乱れる頭への血流の乱れ、気圧変化について行けない酸素マスクの吸入量調整装置、パイロットの意識が旋回し、加速し、ロールとループを打つたびに波打つように薄れ、また戻り、また遠ざかる、狭まった男の視界に映るっているのはコンソール上の火器管制、エンジン出力、機体制御の状況を表示するディスプレイはなく、目の前コンソール上部にあるＨＵＤとヘルメットのゴーグルに内蔵されたマウントディスプレイが映し出す黄緑色の電子表示しかなかった。

スティックを左まわしたまま反時計回りに機体のバンクを変化させるＦ／Ａ－１８Ｅのパイロットには飛行している位置に対する感覚さえも喪われ始めている。肉体疲労の激しい意識下では動物的な戦士の本能によってＨＵＤの中に映る目標コンテナを追いかける事だけに集中しており、コクピット上面のレーダーディスプレイを見るどころか、おりしも夜間飛行も重なって風景だけで位置を把握するのは全く不可能だった。“〇〇〇１、民間空路上空に侵入中、上空の民間機に十分警戒…”「迎撃していいんだな？どこの民間空路に…」おそらく空母と米海軍の参謀は許可を出したのだろう、頭の中で東シナ海・日本海の民間航空路を思い浮かべて敷きの位置をわり割りだそうとした直後、コクピット内に航空機以上接近警報が鳴り響く。「っ！」ＨＵＤ越しにキャノピーの向こう側の夜空に出現したのは怪鳥のような影、ＨＵＤ上にはＢ－７７７－３００と表示され、残り距離は１５００と表示されている。咄嗟に天地逆転の状態のまま男がコントロールスティックを手前に引き、エレベーターが機体の上側に向いたＦ／Ａ－１８Ｅは急降下する形で民間企業のＢ

－７７７のかなり離れた真下をほぼ垂直に急降下した。中国軍のＪ－１１も同様の機動を先に取っており、ＳＵ－２７をＦ／Ａ－１８が追いかけるという…実際はＦ－１４Ａがそうする予定だったが…米ソ冷戦で想定された空戦が今行われているのである。

“隊長、後方につきました。もう1機が1時の方向です”小隊長の機体の右後方に合流する2番機のＦ／Ａ－１８Ｅのパイロットが、隊長機の追いかけまわす（彼の機体のＨＵＤに表示されたＪ－１１に別の機体が目標照準を定めていることが表れている）中国軍機の左上に、別のＳＵ－２７が飛行しているのを確認した。「了解した、お前はそっちを見張っておけ、ひこうポケモン達はライトニング2で十分だ」小隊長は機体を加速させ、機体をさらに左上へと回して追尾を続ける。徐々に減っていく目標コンテナの残距離表示、シーカー音の間隔が短く鋭い物へと変わり、マウントディスプレイの目標レンジ円のゲージが既定の場所へと近づき始めた。

“各機、海中に量産兵士と思われる輝点を多数確認、×××隊は海中目標の浮上を狙え、上空のクローンは各艦の対空ミサイルが…”どうやら海上にもポケモン量産兵士が出現したらしく、ニミッツ級空母の航空管制室は急行中のＦ－３５Ｃ部隊を呼んでいる。戦闘に集中するために無線機を切ろうとスティックの交信スイッチに伸ばした右手の指がぴたりと止まった。「……！？」ヘルメットに内蔵された無線機から聞こえる空母ＣＩＣオペレーターの声に、小隊長は耳を疑った。“……各機に警告、正体不明の放射線反応を確認した。詳細不明なれど空母原子炉と同様のものだ…”

「原因が分かりません…潜水艦は当軍側の2隻のみです…表示板にデータを回します」「原子力…空母の動力装置じゃないのか？」アメリカ海軍空母「ロナルド・レーガン」のＣＩＣのオペレーターが告げた報告に、ＣＩＣ中央にある戦況表示ディスプレイ周辺に集ま

る米海軍参謀たちは愕然としていた。

「当空母、「ノースカロライナ」、「ボーフィン」各艦の原子力機関運転情報……以上ありません…」貴官関係のオペレーターがコンソールを見てからＣＩＣ中央の方に向き直る。「バカな……それならどこから放射線反応が……」

「放射線反応位置、センサからのデータを表示します」戦況ディスプレイの上に下がっている液晶パネルに、表示された空母とイージス艦が索敵して統合させた海上レーダー表示に赤色の帯が重なる。赤色の染みの中にある輝点（ブリップ）には“正体不明熱源”という表示が無数にでている。

「放射線の正体…ポケモンなのか?!」「信じられん…まさか核武装を?」参謀たちはその解析結果の映像を見ながら凍り付く。全く持って信じられない事態だった、アメリカや国連でもクローン量産兵士に対する各武装計画はあった。そのシステムや出資企業といった詳細は国防省上層部の人間たちしか分からなかったが、当然のことながら大手生命工学企業が参画しているのはだれの目から見ても明らかだ。

それが中国に漏えいし、しかも実戦投入されているというのか?米海軍参謀の人間たち全員が一定程度の戦慄を覚える。事態の重大さに思わず液晶ディスプレイを見つめる事しかできなかった。

「とにかく…」米韓合同演習の司令官に当たる男が帽子をかぶり直してから戦況表示板を見つめる。ただ単に状況に茫然としているだけでは何も進まない。「…放射線を出すそいつら、警戒を怠るな。それから韓国揚陸艦と我々の「チャンセラーズビル」からの量産兵士の射出を要請しろ」「了解しました」司令官の指示でオペレーターの一人がコンソールのキーを叩き始める。「原子力内臓か…迎撃はできるのか?」参謀の一人が緊張した面持ちでまばゆい光を放つ戦況表示板の淵を右手の指先でコツコツと叩く。彼にしても原子力関連の改造を受けたクローンポケモンを目撃するのは始めてであり、何ともいえぬ緊張感を覚える。「核爆発が起きるかどうかは知りま

せんが…そうでない奴らを沈めれば相手方も収まる。私はそう信じるよ……」司令官の男が若干不安を表情に浮かべながらも頷き、コーヒーのマグカップを超大型はめ込みディスプレイの淵に置いた。

「艦長、こういう手を打つのも難だが…」続いて司令官が艦長の男に向き直る。艦隊と乱戦に近い状態の量産兵士、Ｆ／Ａ－１８Ｅ、Ｆ－３５Ｃの位置をレーダーで解析する限り、アメリカ海軍の航空隊が数の上では圧倒的に不利だ。一番妥当なクローン兵士の撃退方法は彼の頭には一つしかなかった。「韓国空軍の機体と在日空軍のスクランブル機、到達まであと何分ぐらいだ？」

「少々お待ちを…出してくれ」「はい」レーダー観測員がコンソールを叩き、戦況表示板の上から釣り下がるディスプレイの表示が変化する。朝鮮半島や日本列島の一部が見えるまで索敵表示を拡大したのだ。朝鮮半島と日本の一角からこちらへと向かう合計４つの輝点、その端に表示された機体情報の…機体に搭載されたトランスポンダが発信している所属部隊情報と共に出力は１００％、速力は双方８３０ノット、高度は１００００フィートと表示されている…脇にある数値に“到達予想時刻”と示されている。「岩国基地からの米空軍Ｆ／Ａ－２２Ａがあと４分３９秒、韓国空軍のＦ－１５Ｋはあと３分１１秒で艦隊ですが」

「そうか…よし、各艦のＳＡＭ（艦船護衛用対空ミサイル）で半人工のゴミどもを打ち払うぞ、残った奴は現況の出撃戦力とこっちの量産兵士で十分だ」その報告で司令官の頭にあった予想は確信へと変わる、本来で言えば日本の航空自衛隊もスクランブル機を出してくるだろうが、あの国は東日本の震災で多くの航空機を失ったまま回復できていない、西日本の戦力さえ交代で使いまわしているが故に今日は飛び立てる機体がないのだろう。そんなふと浮かんだ思いをわきに、彼ははっきりと自信に満ちた声で指示した。

「了解、各艦にＳＡＭをファランクスをスタンバイさせろ、艦隊一斉射で撃退だ」「了解しました！」オペレーター数人がコンソールと無線機にかかり、各艦に指示を通達、同時に米韓双方のイージ

ス駆逐艦のＳＰＹレーダー、管制装置、及び軌道上のアメリカ軍事衛星とデータリンクして、攻撃タイミングと各艦の発射弾数の割り出しを開始していた。

空母同様に幅広いフライトデッキを持つ大韓民国海軍の独島級揚陸艦ＬＳＨ－６００１「独島（ドクト）」にも戦闘配備を告げる警報が鳴り響く。フライトデッキ左舷にあるＭｋ－４１・ＳＡＭ発射機の周囲に要員が集まる。しかし発射機は戦闘管制室からの自動コントロールだ、彼等が扱うのはその脇にあるミサイルランチャーと同じ形状をした箱、一人が右手で持った無線機に何かを発し、もう一人の男と共に左手でその箱を開け放つと同時に、無数の影がレースバトよろしく上空へと猛スピードで飛び上がり、あっという間に星の輝く夜空の向こう側、無数の爆発の花火が輝く場所へと消えて行った。

「あっちか…」先ほどの海中のクローンポケモンから検知された放射線反応といい、数キロ離れた上空で繰り広げられる事態といい、これまでにない前代未聞の緊張状況だ。艦隊に同行しているＮＳＳ（韓国国家安全保障局）の男は艦内ＣＩＣのレーダーサイトと連動して情報を表示しているタブレット端末を確認し、フライトデッキを右舷から左舷へと縦断しようとクルー待機場所のタラップに足をかけた直後、後ろから腰のあたりをクルーに掴まれる。「ここで待機を。ＳＡＭとファランクスで防空射撃します」

「し、しかし……」「ＮＳＳが政府のどこだが軍の上層も知りませんが、とにかく政治的重要人物、あなたを死傷させたら軍の責任問題です。防弾版とヘルメット、無線機器の確認を厳重にお願いします」

「りょ、了解しました…」自分が中国海軍の証拠を押さえなくては、じれったい思いをしながらもＮＳＳの男は渋々とタラップを降り姿勢を低くする。いつの間にか艦船のクルーと同じ戦闘装備をし

ている彼は、ニュートラルグレーの防弾ヘルメットの重量がかかる首を必死に回し、辛うじて見える左舷からフライトデッキクルー待機場所の手すりの向こう側に広がる右舷の海域に目を凝らし、懐に入れたデジタルカメラを左手で握りしめる。だが肉眼で確認できるのは周囲にいるアメリカ・韓国のミサイル駆逐艦やイージス駆逐艦、そしてアメリカ海軍の空母「ロナルド・レーガン」が作る黒い影、はるか遠方に複数見える民間企業の資源採掘・精製プラントと貨物船の明かりだけだ。隣にいるクルーのように、電子双眼鏡（エレクトリックバーキュレーター）くらいＮＳＳは用意すればいいのに、彼の心は意識の隅でＮＳＳに対する不満を呟いていた。

しかし、その直後に入ってきた無線機の音声にデジタルカメラをまさぐる左手の指先がふと止まり、右手に持ったタブレット型情報端末を落としそうになった。“緊急、民間の採掘プラントに中国当局のヘリ部隊降下、許可のない臨検を行って……”

「……んだと？」ありえない、軍の部隊が民間企業のプラントに、しかもヘリボーンで臨検するには両政府と企業本社の許可が必要だ。背筋が冷たくなるほどの愕然たる思いで彼は必死になって水平線ギリギリにある民間企業の採掘プラントと貨物船らしき先程の光の点に目を凝らすが、そこで起こっている事象が何なのか、肉眼でつかむ術はなかった。

その頃、２月１４日　マイアミ郊外　州間高速道路９５号線（Ｌ－９５）　１３時２０分

西太平洋で繰り広げられる、米・韓合同演習艦隊と中国機動艦隊の状況は悪くなる一方だった。アメリカ、韓国、中国、日本の民間・国営メディアは、この2日間東シナ海で繰り広げられる3国間の緊張状態を様々な立場から報道し続け、ことに中国の国営放送はアメリカ・韓国の行動を…特に量産兵士を無許可で撃墜したこと…一方

的な軍事攻撃として激しく断罪、周辺の民間航空機、民間船舶、資源精製施設等の民間施設と民間人に被害が生じた場合は2国の責任であると強く批判し、全世界への中継を行った。これに対してアメリカ・韓国両政府も、それぞれ国務長官、大統領が全く譲らぬ…こんなので譲るほうがおかしいが…声明を発表し、量産兵士の無警告撃墜は２００１年に旧国連で発行された改訂版のジュネーブ条約で国連に加盟するすべての独立国に有効であり、合同艦隊が量産兵士の攻撃を受けた以上迎撃は全くの合法的措置であるという事、むしろ中国軍の艦載機や量産兵士が禁止とされている民間企業が持つ資源採掘プラント付近の低空飛行、韓国領海・領空への船舶や航空機の侵入こそ断罪されるべき事態であり、中国海軍の行動は民間施設と関連機器、民間人、民間の船舶・旅客航空機、海底通信ケーブルや太平洋送電網の極超伝導電線に被害をもたらす恐れが高い事に強い懸念を示す旨の声明を衛星中継で全世界に向けて発信した。どちらもお互いの主張を全く譲る気はなく、しまいには各国の航空運輸企業や東シナ海にプラントを構える採掘企業、通信ケーブルを持つ通信関連企業が、米中双方の政府に過度な軍事衝突による、民間施設や人員への被害を憂慮する声明を次々に出し、ニューヨーク、上海、東京の株式市場で輸出関連や資源・エネルギー関連の企業の指数が急落するありさまだった。

大統領・政府関係者の専用車両、警察車両のシボレー・カプリスＰＰＶ４台に囲まれた米・ＧＭ社製のキャデラックＤＴＳは、アメリカ合衆国大西洋沿岸の都市から北東部の都市回廊…ニューヨーク、ワシントン、ボストン、フィラデルフィアという地球最大の都市地域…へと延びるＬ－９５号線を北上していた。温帯より亜熱帯に近い気候であるフロリダ半島南端、今年の地球規模で発生した北半球の寒波、南半球の熱波の影響はあまり感じられない。初春の穏やか

な晴れ間がのぞき、一行の車両群も…対向車線まで一行が通過する時間は警備によって閉鎖される…快調に流れていく。

しかし専用高級車両のキャデラックＤＴＳに乗る大統領の心中は、外に広がるマイアミ郊外の住宅地と緑とは程遠い状態だった。「どうだ国防長官、議会の方の反応は？」大統領が右手に持った携帯通信端末（モバイルフォン）を耳に当て、話し続けている。連邦政府がＧＭ社に特注で生産させたこの車両には衛星通信用機器や国防総省などとの極秘回線用の変換機器も搭載しており、どの場所にいても最適かつ良好な通信状態を保つことができる。「まあ、この事態に至って中国をかばうような議員もいないとは思うが」

“ええ、一応今回の事態に対する中国への非難声明決議案は上院下院ともに全会一致しています。ただし…”電話越しに答える国防長官の男の声が一瞬止まる。「どうした？」“しかし、です。すでに海軍が計画している迎撃……ええ、すなわち軍事的行動に関して、一部上院議員が決議を停止させようとやっきに。はい、非二大政党、市民団体系の議員が執拗にです。

「いつも通り、って事かな？」“はい、まあこの後の決議に問題はなさそうですが…”そうか、やはり反戦団体というのはえげつない人間たちだな、男は端末越しの声に思わず苦笑を漏らしながらも心の片隅では諦めに近い怒りを感じる。武装を放棄しての世界平和、子供の綺麗事じゃあるまいしできるわけがない。核武装も宇宙のレーザー衛星も化学兵器もクローン量産兵士もサイバー攻撃兵器…すなわちコンピュータウイルス…も抑止力なのだ、それを失くしたら今度は一体どれほど恐ろしい兵器や権力が世界を支配し、市民を平和という名のもとで弾圧するのか、考えたくもない。それに現実問題として、そうなったら国家という物は意味をなさなくなり、自分を含めた政治関係者は全員失職、失業どころ関わって生まれた全世界を支配する“世界平和を謳う”独裁権力に戦争犯罪人として訴追されかねない。

「まあ君の言う事が正しければ特に問題はないという事だ」大統

領が大きく息を吸い込み、両足を組み直す。民間経済・国家間を含めて地球一体化の時代、多くの議員は“国際政治の常識”をわきまえているはずだ。一部の小学生のような議員が寝ぼけなまこに夢話をしているだけ、そんな奴はユートピアにでも行き、年を取って海に捨てられればいい、大統領はそう判断した。「それに、議会で決議が通らなくてもオーバーライドする権利が今、車に乗り、私の服を着、私の声を使っているからね」

“その通り。さすがです閣下…”情報端末越しの国防省の男の声に笑いが交じる。「いやいや、ありがとう長官」“それにしても…大統領はＡＰＥＣ関連をキャンセル…、ええ、それでこちらへと？”「ああ、その通りだ、オーストラリアの海兵隊の件も、太平洋地域の大手金融証券企業と金融機関によるヨーロッパ財政支援の件もな。いずれにせよ残っている関係者と、アメリカ大手企業連合の代表者が上手くやってくれるだろう…」大統領は車両の強化防弾窓ガラス越しにマイアミの風景を見つめる。オーストラリアに駐留する海兵隊の規模を現在の１０００人から５０００人まで拡大し、米・豪両海軍の（アメリカ海軍にはエメリア方面軍第１０艦隊の補給拠点となる予定）港湾施設の拡充する協定、最後の調印を残すのみであったが、それは代理人に任せてきてある。西太平洋や東南アジアでの中国海軍艦艇の行動活発化、不法な中国系民間貨物船の航行や半官半民の資源調査に対するけん制措置と軍事的対抗措置双方を含むうえ、オーストラリアに存在するアメリカ、ヨーロッパ諸国、台湾や韓国などの東アジア諸国の金属資源、ウランやトリウムといったエネルギー資源、ＧＢＴＸ社等の生命工学企業が利用するエメリウム資源といった採掘大手企業の同意もあってのこの協定、代理人が勝手に破棄する事は無いだろう。もう一つのヨーロッパ財政支援の点、既にアメリカ、韓国、シンガポール、オーストラリアの金融機関が独自にイタリアやギリシャの財政・金融企業の支援、市場への資金注入などを行っているが、これを国際共同で計画的に行うという物。工業製品、サービス、エネルギー、金融、さまざまな点で巨大な市

場であるヨーロッパ先進諸国の経済を支える事はアジア・太平洋地域の経済・製品輸出にも重大である、これも難航することなく可決されるだろう。「私は、アメリカ合衆国大統領としての職務をこなしているだけだ」

“了解しました、大統領閣下がワシントンに戻り次第…いえ、こちらからそちらに現在の状況に関するデータをお送りします”

「そうか、すまないな。私という男は飛行機という物が苦手なもんでね、まあこんな国際社会中心の時代にそんな事も言ってられんのだが…」大統領は吹き出しそうになる。マイアミからワシントンのナショナル国際空港まで航空機でわずか2時間程度だが、この男はそれを断り、いつものように車両で移動しているのだ。どちらかと言えば高速鉄道の方が良かったが座席が確保できなかった。「すまん、私の端末の方にお願いするよ」

“では、そちらの方に……”国防長官がそう言いかけた直後、端末越しに聞こえる周囲の音声が急に大きくなった、鳴り響く機器の音、動き回る人間たちの足音やしゃべり声…長官が言う。“失礼…少々お待ちを…”「分かった…」

1分ほどあって再び情報端末にかかる国防長官、彼の声は先ほどよりも緊迫していた。“異常事態です大統領、中国艦隊から量産兵士のようですが…正体不明の兵器が米韓合同艦隊に向け発射された模様…”

「正体不明？なんだそれは？」大統領が声色を替え、組んだ足を戻す。情報端末を見ながら話しているのであろう長官の声は、緊張で震えているようだった。“わが軍のこれまでの識別カテゴリーには無いようで…量産兵士から核兵器と同じ反応がでているようです…今の所、米韓双方の艦隊に損害は出ていません”

「核兵器か…奴らどこの企業からそんなものを…」大統領はうめき、

一瞬窓の外の風景を見やる。いつの間にか紛れ込んだ民間のシボレー社製電気自動車であるシボレー・ボルト。一般車両を追い出そうと警察車両が車外に装着した拡声器でしきりに警告しているが、今の彼にそこまで気を配る余裕はなかった。「とにかく、情報収集を密に、必要な迎撃は大統領が許可したと伝えろ。民間の資源プラントや海路・空路に被害を出すな」“了解しました。データをそちらの端末に送ります”

老練なアメリカ大統領は端末をわきに置き、右手の中指でシートのふちをつつく。現地は１５日に入った深夜だろう。２日前から米韓合同艦隊に接近してきた中国海軍機動艦隊、就役したばかりと思われる空母を中心とした艦隊は、民間資源プラントの近傍通過制限と排他的経済水域識別圏を無視して演習と運用試験を兼ねた航行を続け、ついには所属艦載機部隊の一部が韓国領空に侵入、そのうえアメリカ海軍の艦載機航空隊がポケモン量産兵士の攻撃を受けるまでに至ったうえ、今日もその状況は変わっていないというのだ。相手の狙いはアメリカや韓国のけん制目的か、それとも海上に設置された各エネルギー・金属資源精製企業の採掘プラントに対する妨害工作か、どちらにせよ今回の事態が米中や東アジアの軍事・経済活動双方に何かしらの影響を与えるのは間違いないだろう。そして現在も執行藩の捜索が続くＧＢＴＸ社とｉｒｏｂｏｔ社の技術データ流出事件の事もある、彼は穏やかな日差しに包まれるマイアミ郊外の森林地帯とそこに広がる住宅街を見つめながら、今後の米中外交に思索を巡らせた。

突如として大きくなっていく混乱と混迷の渦、太平洋・本土双方で世界随一の超大国アメリカ合衆国はその渦の姿を見極めようとともがいていたのだ。

意地とプライド

２０１３年　２月１５日　東シナ海　０時３８分

「ちっ…さっきから何を民間施設が呼んでる?、空母管制室、中国の連中は民間の採掘プラントにも手を出してやがんのか?」“〇〇〇1、そうらしい。状況は不明だが、中国艦隊の出したヘリは中国公安辺防海と通信ログから判明、塗装・機種共に新タイプの模様”「そうか…対応はどうするんだ?プラントの連中がドジでもやったのか?」今の自分にあまり関係することではなさそうだ、となると民間と思われるパニックにも似たあの声が耳障りで仕方がなかった。小隊長は荒い息を一つつき、ＨＵＤの向こうに見える目標コンテナを追う。「こっちは目の前の野郎を追う事しかできねえからな!」“ヘリ部隊が向かったプラントは複数、因果関係は不明だが、まず軍事衝突回避を優先してくれ、発砲した機体に対してのみ識別データを送る”「送られる前に追ってる、周辺の中国軍機に目をつけてろ」ＨＵＤ上の目標コンテナが電子音と共に切り替わる。“攻撃目標”そう、米空母「ロナルド・レーガン」以下米韓合同艦隊側がついに迎撃の許可を出したのだ。「何をいまさら……」現代の政治情勢は戦闘という物からかけ離れすぎだ、苛立ちを覚えながら彼は左手のスラスタレバーを押し込んだ。ＧＥ社製Ｆ－４１４－ＧＥ４００エンジンが出力を上げ、下降と共に規則を上げる中国海軍のＪ－１１に喰らいつく。ＡＩＭ－９の排熱シーカー音が近づき、遠ざかり、コンテナ脇の距離数値が目まぐるしく変わる。右にスライドしながら降下したＪ－１１は、２００フィート付近で急上昇し夜空に飛び上がった。Ｆ／Ａ－１８Ｅも全くひることなく後に続く。“隊長、ロックした目標機の追尾を。こちらはもう1機を見張ります”「任せる…っい?!」わずかに右手の交信スイッチに意識を振った一瞬のすき、ほぼ垂直に上昇していたＪ－２７が急激に出力を緩め、

背面のまま機体を返す。咄嗟に小隊長の男もスラストレバーを手前に戻し、コントロールスティックを手前に引いてその後を追う。ＨＵＤ上の姿勢指示器はロール角１８０、すなわち完全背面状態であることを示し、速度を急激に落としすぎた結果による振動がコクピットとシートを経由して男の体全体に広がる。「何…」スティックを左いっぱいに倒してロール角を戻した直後に鳴り響くミサイルアラート、キャノピー越しに機体後方から前へと暗闇の中を飛んでゆく曳光弾が輝く。“ブレイク！”「くっそお…」コクピットコンソールで位置を確認する余裕はない、Ｆ／Ａ－１８Ｅは２基のターボファンエンジンをアフター・バーナー二重燃焼まで開いて振り切る。幸いにも距離が至近すぎるのと発射角度がかなり強引であったためか、キャノピーの上あたりをオレンジ色の寡占が通過し、赤外線目標を失ったそれはゆっくりと左カーブを描いて夜闇へと消えて行った。

しかし相手はなおも追ってくる、一気に５００ノット以上にまで加速したアメリカ海軍航空隊のＦ／Ａ－１８ＥにＳＵ－１１はしつこく追いかけてくる。さすがは旧ソ連・ロシアの主力制空戦闘機であるＳＵ－２７のコピー機、怪物級のターボファンジェット出力は伊達ではない、急加速と激しい戦闘機動に伴う疲労、男の視界にはゴーグルに内蔵されたヘッドマウントディスプレイに表示された脅威識別シーカーの淵に現れた緑色の矢印が唯一見えた。戦闘中というのはＨＵＤ周辺の表示に気を取られると同時に戦闘時の肉体疲労で視界が効かない、コクピットのコンソールにあるレーダーサイトを覗いている暇などないのだ。後方から前方へと向かって飛ぶ敵機機関砲の曳光弾、男はわずかに左足のラダーを踏み込み、コントロールスティックを左に倒して機体を敵の射線からそらす。“こちらはエクソン・プラント２０３、カンパニーでてください！認可の

ない中国防海当局らしきヘリから人員が降下、無線機が確保され…”“ジャパン・エアー４７１、下方１００００フィートにいる小型機は何か?!仁川コントロール、解析と当機の進路指示を…”“各艦個別防衛射撃用意、斉射時刻まで３０秒!”“海中目標に対する迎撃許可まだか!”“×××１、艦隊上空の量産兵士は半減、小隊各機の残弾数、計６!防衛射撃に移行次第退去可能である”迎撃海中に出現したという放射線反応を出す量産兵士に対する艦艇の無線、艦艇からやや離れた場所でクローン量産兵士の迎撃に当たるＦ－３５Ｃ部隊の通信、突如として出現した中国当局のヘリ部隊に混乱する民間の資源採掘・精製プラント関係者の悲鳴に近い無線、下方を飛び回る小型機や無数の発射炎に不安をあらわにする民間旅客機のパイロット、ありとあらゆる無線が飛び交っている。「この野郎…」耳鳴りのするほど交信が交錯する無線機のヘッドホンに苛立ちながらも小隊長はディスプレイに映る脅威識別シーカーと警報音に意識を集中させる。暗闇の中目視では判断がつかないが、ＨＵＤの高度指示表示はあっという間に小さくなっていく。再び鳴り響くミサイル接近警報を彼は必死にこらえた。機種をわずかに立ち上げてピッチを水平に戻すＦ／Ａ－１８Ｅ、背後から再びＪ－２７の放った空対空ミサイルが接近してくるのだ。

回避する手段はこれしかない、咄嗟に判断したパイロットはスラストレバーを手前に引くと同時にフラップを上げ、直後にコントロールスティックを手前に引いた。機種が一気に立ち上がり、鋭いループを描いて飛び出したＪ－２７の背後に喰らいつく。火器管制装置の目標信号入力音と排熱シーカー音が同時に響き、ＨＵＤ内の目標コンテナが赤く点灯した。しかし相手は人間のパイロット、出力を絞ってＳＵ－２７もどきは左に鋭く切り込み、ロールを打ってＦ／Ａ－１８Ｅの下部に潜り込もうとする。「くっそ!」現代の戦闘機

乗りは実戦経験を積むことはほとんどない、すなわち上空に上がっている機体の乗員の多くは相当訓練を重ねた貴重な人材であり、このような格闘戦になると機体性能や電子制御、誘導火器の能力といった技術で勝負がつく以前に決着がつきづらい。アメリカ海軍のパイロットも出力を一瞬絞ると同時に右手を左手前に引き、機体のバンクが１５０度を超えた時点で左足を踏み込んでＪ－１１戦闘機を追った。どちらも速力は７００ノット近い、わずかにでも気を抜けば大きく差を開かれるか瞬時に背後を取られる。どちらも気の抜けない攻防が続くかのように見えた。

２０秒ほどもたったか、Ｆ／Ａ－１８ＥとＪ－１１の間に数匹の量産兵士が割り込み、ＨＵＤの目標コンテナがそちらを捕えはじめる。「邪魔な連中だ…」火器管制装置の目標を再び戦闘機に切り替えようとした刹那、ＨＵＤとゴーグルのヘッドアップ・ディスプレイにブリップが突如として増えた。表示は“海上目標：中国海軍”と表示されている。どうやら敵機を追って中国艦隊の位置まで接近していたらしい。とはいってもＨＵＤに表示される情報はあくまで透明なディスプレイ上に数値を浮かび上がらせているだけであって、戦闘中に必要な機体の情報や至近周囲の状況といった最低限のデータでしかない、レーダーを確認しようと視界をコクピット正面のコンソールに移しかけた直後、再び排熱シーカー音が鋭く鳴り響く。どうやら先ほど割り込んできた量産ポケモンが最適射撃位置に侵入したようだ。ＡＩＭ－９はまだ3発残っている、火器管制装置経由でヘッド・マウント・ディスプレイに映し出された機関砲の残弾数も十分にある。先にこちらを叩いて置くべきだろう、「割り込んだカスどもを駆逐する」小隊長は右手のコントロール・スティックのトリガーに人差し指をかけ、すぐにそれを押した。機体の左主翼付近から目も眩むほどの火球が一瞬現れ、ただちに前方へと飛び込んでいく。ポケモンに回避する手段はない、命中は時間の問題…ほんの数秒しかないが…だ、と思われた。

しかし目標のわずか２０メートルほど手前で、ミサイルの運動方向に左手から別の物体が鋭く飛び込んでくる。ミサイルの先端にある赤外線センサと誘導装置は利口ではあるがそれほど高性能の物ではない、赤外線アクティブホーミングのミサイルは、発射された際は火器管制装置から入力された信号に従って目標を狙うが、その後は自立誘導であるため、追撃する熱源の前に別の熱源が…例えば割り込んでくるとか…出現した場合、そちらに誘導が切り替わってしまうのだ。当然のことながら目の前に現れた排熱目標を瞬時にターゲットと認識し、０．０１秒後には尾部の制御フィンで空気を掴んでその排熱へと方向を切る。それから１秒もせぬうちに目標へと突っ込んだミサイルは爆発を起こした。“目標の１機が量産兵士をかばった模様です”「そうか……フランカー（ロシアのＳＵ－２７のコードネーム）が…」背後から彼らの近くを飛ぶ別のＪ－１１を追撃していた２番機パイロットの無線が入り、小隊長は一瞬キャノピー右手に視線を移した。被弾したと思われるＪ－１１は暗やみの中、時折オレンジ色の爆発炎を残し、時計回りに旋回しながら高度を落としてゆく。

「こちら〇〇〇１、発砲したＪ－１１に命中させた。損傷の具合とベイルアウトの可否は確認できない……」撃墜という言葉を使うのは憚られる、右手で無線交信スイッチを落とし、ニミッツ級原子力空母の航空管制室にとりあえず通信を入れた。“了解した、現在アメリカのイージス艦「ディケーター」以下駆逐艦隊が短ＳＡＭでの迎撃射撃を実行中、残りのＪ－１１は韓国領空から離脱し、交戦意思はないようだ。そちらの１機の状況を確認しつつ空母上空に戻ってくれ”

「了解管制室、燃料残量は２０分前後か…着艦体勢が整い次第、武器補充で再度警戒に上がる。準備を急いでくれ」“了解した”

“こちらもクローンの迎撃で消耗しましたからね…しっかし、俺

らの時間にここまで上がって来るとは…”「何であろうと関係ない、俺らはただ落とすだけだ」２番機パイロットの愚痴も分からなくもないが、今行ったところで情勢が良くなるとも思えない。小隊長は彼を軽く諫めるとＦ／Ａ－１８Ｅの機首をアメリカ海軍艦隊の方向へと向ける。母艦である「ロナルド・レーガン」からの誘導指示がＨＵＤの方角指示器に赤い輝点となって表示され、コンソール上のレーダーサイトにも母艦の輝点に向けて赤い直線が示されている。

左旋回を終える直前、彼はヘルメットを装着した首を回し、キャノピーの視界が許す限り右後方下部に視線を落とす。暗闇と雲で覆われ、中国艦隊はおろか海面すらよく見る事が出来なかったが、この男の本能が相手艦隊がまさしくここにいると感じ取れた。もちろん根拠のない胸騒ぎのようなものだが、見つめる目線の先に存在するであろう物に対してはっきりとして敵を覚えた。

艦隊までの距離は５０キロ程度であり、ジェットタービン機関の戦闘機をもってすればわずか数十秒で到達できる場所だ。まもなくＨＵＤに“空母：ロナルド・レーガン”や“巡洋艦：チャンセラーズビル”、“揚陸艦：独島（ドクト）”といった友軍艦船のコンテナが出現した。機体のレーダーとイージス駆逐艦から得て空母経由で送られてくる情報が連動したレーダーサイトの索敵範囲内にも、数匹の量産兵士とそれを追いかける米軍の量産兵士、残りは水中のクローンポケモンたちだけになっている。２機の進行方向右手５００メートル、高度１５０００フィートにはクローンポケモン達の迎撃に当たっていたＦ－３５Ｃ４機を示す輝点が示されている。「残りは問題の水中だけだな、準備ができるまで上空でホールドする」“了解した、場合によっては艦隊が最大速度で回避行動に入る可能性もある、数分ほどで着艦できるかの判断を入れる。とりあえずランディングリストを確認してくれ”

「了解、機体状況データを送る」パイロットが右手のスティックから一瞬手を放し、右わきにあるコンソールのキーを叩き始める。正面コンソールの機体状況ディスプレイの表示が変化し、着陸装置（ランディング・ギア）の電子・油圧制御機器、着艦ワイヤーの作動状況、ＩＬＳ（計器誘導装置）の着艦シークエンスデータといった着艦・ランディングに必要な機器類のチェックを開始する。

その直後ミサイルアラートが鳴り響き、小隊長の男の意識は再び戦場の緊張へと引き戻された。“正面だ！正面にクローンが紛れている”「なん……？？」ＨＵＤに視界を戻した彼は衝撃を受けると同時に自分の迂闊さに後悔した。先ほど…とはいっても１０秒ほど前にだが…自機の左手に存在していた味方の量産兵士、あれの識別と表示に敵は紛れ込んでいたのだ。妙に激しい挙動をしていたのは重なるように攻撃をぶつけ合っていたからである、量産兵士の発信している識別用ビーコンは生物に搭載する機器であるという特性上干渉しやすく、特に企業や製品バージョンによっては至近距離に存在すると片方が識別表示されない可能性があるという情報は聞いたことがあった。機動が周囲の量産兵士や戦闘機と比べて鋭いにもかかわらず、久しぶりに人間の駆る機体を相手にしたことによる疲労で警戒がおろそかになっていたのだ。「っ！」咄嗟にスラスタ・レバーを前に倒し、コントロールスティックを手前に引くがあまりにも至近距離過ぎる。小隊長は被弾に備え、これも間に合うかどうかは分からないが、機体を右にバンクさせようとした。

ヘッドセットを装着していても耳を突き破るほどの爆発音、下から突き上げられる衝撃、しかし被弾したのは小隊長の機体ではなく、

瞬時に左手から割り込んだ2番機のF／A－18Eであった。「大丈夫か◎◎◎！機体の状況は？」“自分は何ともありませんが、コクピットのディスプレイはお手上げです、常用の電子系統が死にました”小隊長の問いかけに、2番機パイロットは落ち着いて応じる。しかし隊長の無線機から聞こえてくる無数の警報音は、彼の機体がそう長くはもたないという冷酷な真実を物語っていた。“エンジン出力はモニターできませんが、右主翼は半分くらいもげたように見えました…機体の寿命はもうすぐでしょう”

「すまん…ベイルアウトできるか？」小隊長はコントロールスティックを右に倒し、彼の駆るF／A－18Eは右にバンクを取ってゆっくりと右旋回を始める。彼はキャノピー右手をにらみながら交信スイッチを押し続けた。被弾した機は通信機能も低下している、現代の戦闘機において電子系統が完全に死んでしまえば交信も母艦への自機情報発信も不可能になる。“できるかどうかはやってみます……その先の事は考えずにね”

「早くしろ…早くイジェクションだ！」小隊長の男は必死になって呼び続けた。1機あたり数百億ドルはする現用戦闘機、事故・その他問わずで機体を潰せば責任問題になることも度々だ。しかし今の彼にとっては機体など消耗品、乗員がイジェクションしてくれればそれでよかった。早く…早くしろ…祈るような気持ちだった。“了解です…救助ヘリの手配、頼みますよ…”その言葉を最後に無線機は沈黙し、キャノピー越しに見える夜空に残していく黒煙の筋の先端がオレンジ色に一瞬輝く。

「◎◎◎っ！」シートベルトと耐Gフライトスーツの圧迫が許す限り座席から腰を浮かす小隊長。雲の切れ目に黒煙の筋が垂れ下がった紐となり、時折橙赤色の球を作りながら海面へと落ちて行った。

「出たのか……」彼はマウントディスプレイ付きのゴーグルを上に

上げて目を凝らしたが、暗闇に包まれる夜空でパラシュートが開いたかどうかを見分けるのは不可能だった。

「空母管制！2番機がベイルアウトした、捜索ビーコンは探知できるか？」“機体のベイルアウト信号は確認したが、捜索ビーコンは今のところ発進されていない、墜落場所の座標はＧＰＳリンクで識別している。韓国揚陸艦からヘリが捜索を出す”

「そうか……了解した」力の抜けた声で返答した彼、小隊長の男は冷静さを取り戻し、コントロールスティックを左にわずかに動かしてバンクを戻した。もどかしさはあったが今の自分とこの機体では捜索・救助は不可能である。疲労のせいもあるが、とにかく今の彼にはあまり感情が高ぶる勢いはなかった。“〇〇〇1、水中の量産兵士が後退を始めた、フライトデッキは3分後にレディーとなる。高度５０００でそのまま待機せよ”「分かった、上空の警備は韓国と在日米軍基地からの連中にしばらく任せるとしよう…」自機の周囲に1機欠けたライトフィンガー・チップの編隊となって集結する3番機と4番機の航空識別灯をキャノピー越しに確認できた。レーダー上に南東方向と北西方向からそれぞれアメリカ空軍のＦ／Ａ－２２Ａと韓国空軍のＦ－１５Ｋが出現し、こちらへと向かってくる。

ふとＨＵＤ上の表示が左手至近距離に、韓国の識別信号を持った物体が飛行しているという旨を示す。ヘルメットのコンソール表示連動マウント・ディスプレイゴーグルを上に上げたまま小隊長の男は左手を見やると、左の主翼の上１ｍあたりに、ＨＵＤの指示通り自軍の量産兵士らしきフライゴン種族が飛行している事に気付く。ただ、そいつが量産兵士ではないという旨を示す者、それは彼らが装着している無線機越しの声であった。“もう少し早く私が気付くべきでした……すいません”

「いや、責めるつもりはない…貴様こそあれだけの状況下で良く生き残ったな」小隊長は無線交信周波数を量産兵士用に切り替えた。エメラルドグリーンとクリヤーレッドの航空識別灯だけで隣にいるポケモンの表情を察することは不可能だが、声の調子からして申し

訳なさを感じているようだ。こいつに怒りをぶつけたところでベイルアウトした彼が助かるとは思えない。「捜索ヘリも奴のビーコンと機体の非常信号を探している……ところで、貴様の名前は？」“トレミー・ジュンセ・アントワープ……出身は韓国です…”

「そうか…よく頑張ったなトレミー…」無線越しの声の調子からして相手は女（メス）、小隊長は声の調子をわずかに緩め、直後にもう一度右手を振り返る。強化繊維ガラスのキャノピー越しに見える夜空、同僚の機体を飲み込んだ暗闇は全く表情を変えることなくそこに存在し続けていた。

アメリカ海軍の空母「ロナルド・レーガン」の戦況表示板の周囲には第７艦隊第４１打撃群の参謀たちと合同艦隊の関係者が集まり、かたずを飲んで液晶ディスプレイを見つめていた。合同艦隊の中心部に空母は位置し、それを護衛する形で円状にミサイル巡洋艦「チャンセラーズビル」やイージスミサイル駆逐艦「ディケーター」といった一般艦艇が固め、その後方に「栗谷李耳（ユルゴクイ・イ）」を始めとする韓国海軍の艦艇が続いている構図だ。２国の艦隊の中間の位置にいる揚陸艦「独島」からは２つの“ＵＨ－６０Ｋ”と表示された輝点が分裂し、点滅を続ける〇〇〇隊２番機の墜落地点…衛星とのデータリンクから割り出したものだ…の赤いブリップの方へと向かっていく。

艦隊の北東方向１５キロの地点には“放射線反応あり”と警告表示が出て８つのブリップが重なり合って表示され、徐々にではあるがディスプレイが表示できる地形図・海図の範囲の外へと進んでいく。そのブリップを追い回す２匹の、いや２隻の牧羊犬、バージニア級原子力潜水艦「ノースカロライナ」とバージニア改級潜水艦「ボーフィン」も量産兵士たちの後方に確認できる。中でも「ボーフィン」の隠密性と機動性の向上具合は目を見張る物があるが、この表示板を見つめる人間たちには、それを気にしている余裕はなかっ

た。

そう、彼らの関心は全く別の場所、中国艦隊から突如として飛び立っていった中国辺防海公安部のヘリコプターと彼らがたどりついたと思われる民間資源採掘・精製プラントである。あの周囲には中、韓、露のエネルギー企業や政府開発機構の物はもちろん、アメリカのエクソンモービル社、イギリスのＢＰオイル社、オーストラリアのＢＨＰ社といった欧米系の燃料エネルギー・工業資源採掘企業のプラントや海洋採掘技術開発センター、貨物船停泊施設が多数存在する場所、防海公安部は人民共和国解放軍に所属する“沿岸警備隊”で、領海への他国船舶侵入や、違法な海上プラント採掘に対する監視を行っている。プラント関連で彼らが出てくるというのは、よほど大規模なエネルギー流出事故や爆発などの施設破壊事故、もしくはエネルギーの密輸入などといった事態の時だけだ。すなわち、今回の事態は決して穏やかなものでないのは明らかである。

「民間用通信回線を再度開け」「了解しました」米韓合同艦隊司令官の男がオペレーターの一人に命じる。「中国艦隊の警戒を行いつつ、公安部に関する不審な動き、民間の通信にも十分に注意しろ」「はい」オペレーターが手元のコンソールを数回たたき、民間無線周波数帯の通信ポートを開く。

「パイロットの救難捜索は予定通り進めております。搭乗員ビーコンが発見され次第救助に入ります」「了解した、可能な限り最善を尽くしてくれ」航空管制室からの連絡に、司令官は軽くうなずき、両手を戦況ディスプレイの淵につく。中国の軍事行動の目的は米韓のけん制だけではない、資源開発の著しい西太平洋に渦巻く国家と企業と市場経済を結ぶ複雑の流れが行きつく先を考える彼の心境は決して穏やかではなかった。

2月15日　11時30分　アメリカ　シアトル市　GBTX本社

60階建て本社ビルの55階に存在するGBTX社の取締役社長室、公務用デスクの正面に座る男の表情は硬かった。デスクにある情報端末にはGBTX社のNYSE（ニューヨーク証券取引所）での株価指数の同行が表示されている。当然のことながらデータ流出問題が発生した日以降はその値が急落していることをグラフは何の感情もなく物語っているが、男はそれに関して心配しているわけではなかった。世界の生命工学企業はこの企業をはじめ5、6社で独占されているし、一般的な牛や鳥といった家畜のクローニングにかけてはGBTX社とイギリスのデパスター社が圧倒的に優位なシェアを持っている、問題が発生したからといって直ちに業績が悪化するという訳ではないのだ。

だからといってこの男が余裕かといえば、そうであるはずがないのが実情である。まもなくここGBTX社本社タワーに、アメリカ合衆国国防省の関係者と、合同実験を行い関連データを流出されたirobot社の上層部の1人が、今後の対策を検討するために訪れる予定になっている。ただし検討といっても何の感情論もなくそれぞれが黙っているはずがないだろう、この男はディスプレイに映る数値とニュースのヘッドラインを見つめるうちにそう言った予想が自分の中で確信になっていくのをはっきりと理解した。おそらくこちらをかなり強烈に批判し、遺憾の意を伝えてくる、場合によっては連邦政府に目をつけられる可能性もある。

しかしこの社長はそういった類に対して恐れも不安も感じない。この男が“世間の評判通りに”たたき上げてくる間、そのような批判合戦や落としあいという物は何度もあった、壮絶な出世レースを乗り越え、時価総額で米国・アップル社に次ぐ第4位、オーストラリアの資源採掘企業であるBHP社の上に立つ超大手企業のトップにまで上り詰めた彼にとっては、批判やゴシップも自社の宣伝材料に使えると思うほどだ。今考えているのはその時に批判をかわすた

めの台詞、何とでも思いつくようであるが慎重な語彙の選択が求められる部分である。

ふと代表取締役の携帯端末が鳴る、ディプレイに映った番号を見るなりこの男はほくそ笑んだ。「まあ…ここが顧客なら問題は無かろう…」そう、この言葉がまさにふさわしい、電話の相手である人物と彼が中心に立つ巨大組織の需要があれば、たとえ今回の訪問ですべての需要を連邦政府に差し押さえられてもこの企業は安泰だ。

「おはようございます代表」“おはよう〇〇〇君、そっちにアメリカ国防省の人間が今日来るんだって？”「ええ、もうすぐ…」電話の相手である国連代表の男の声には、ごくわずかに状況を楽しんでいるかのようなものが含まれている。“まあ君ほどの腕になればピンチもチャンス、見事な条件付けで売りにかかるかもしれんがな”「お褒めの言葉、大変恐縮です閣下。長年の経験あってか交渉には慣れていますからね」代表取締役の男はわずかに口元を緩め、座席をデスクの背後にあるガラス窓側へと回す。少しずつではあるが近づく春の日差し、それにシアトルの高層建築物の林は照らされ、自分の足元をも白く輝かせている。そこに向かって軽く右手を伸ばせば、日差しが運んでくるエネルギーが、いやそれは自分が今手にした名声と財産がもたらす熱が広げた掌（てのひら）に伝わってくる。「責任問題は自分というよりデータ管理とサーバセキュリティー担当です、問題の調査というのはこの件が終わってからにしましょうか。ええ、上手く引き出しましょう、試作の量産兵士が本日の夜にはバンクーバーとサンフランシスコに配備させましたし、はい」

“試作か……もしかしてあのデータ漏えいが発生した君たちの次世代機かな？”携帯端末越しの声はくすくす笑っている、社長にはそう聞こえる。「ええ、こうなったら、って気分ですよ。メディアが騒いでいる間にロボット見本市でパフォーマンス、といった具合で

す」取締役の男の声にもわずかに笑みが含まれている。まあ実際はパフォーマンスというより、実質の“加害者”であるこの企業の捜査協力という名目での実践テストになっているのだが。

“さすがだな、ｉｒｏｂｏｔ社が捜査協力しているから、まあそちらも手をこまねいて見ているだけにはいかないだろうね。アメリカという国の企業と…悪く言えば癒着、かな？”「その通りです…この国は民間取引以上に国家機関との関係でもうけは出せますから」さすがは国連代表まで上り詰める男、ＧＢＴＸ社の社長は電話越しの彼の声にさえ畏敬の念を抱いてしまった。民間企業でも国際機関でもトップに駆け上がる人間の才能や努力という物は似たり寄ったりのようだ。“それで、今後の量産兵士供給体制…統合軍の上層部に回してくれるな？正規に供給を受けると、広報部やマスコミに嗅がれて厄介だからね”

「かしこまりました。今回もご贔屓のほど、誠にありがとうございます」代表と取締役の男は満足げに腰を椅子から少し浮かし、座り直す。「閣下の御指示の期日、エメリア方面の支社でよろしいですね？」“その通りだ、よろしく頼むよ”

「はい。それで……わが社の提供した細胞粒子破壊システム、実戦段階に漕ぎ着けたようですね」“ああ、順調だよ。当初はこれを使う手段は存在しなかったから計画策定は難航していたが、今は、な？”端末越しの声が一瞬止まり、直後に少しトーンが下がる。“宇宙にある大型プラットフォーム船、いや宇宙機動船、か？いずれにせよ、人類の発展と生存、ならびに地球環境と生態系の保全には一番有効な最低限の犠牲だ。あれだけの駒を捨てるだけで一つ進む、一番妥当な手段だよ”「さすがは代表、新国際連合の理念の代弁者ですね」

“いやいや、私はあくまで象徴、主役は国連総会と上下議会でなければナショナリズムだ。我々はそこまで望んではいないよ…”国連代表も総会や議会、安全保障理事会の紛糾は知っている、それに少なからず統合軍の治安維持活動が制約されていることも、安保常

任理事国の拒否権乱発が国連の存在価値や影響力を必要以上に小さくし続けていることも、そしてそれらがたびたび各国のメディアで指摘される“国連の形骸化”を招いている事も。しかしだからこそ、この男はあの“計画”を“地球社会の形式”となりかけた国連上層の人間で作り、実行しているのだろう。新国連になったにもかかわらず国連の理念の一つ…国際的治安維持…の状況があまり進展しないが、それでも人類が成長と生存に残されたデッドラインは、治安や国際情勢の良悪に関わらない“人類文明の安定”を図れる期日まではそう長くないのだから。

“それよりもだ、君たちの北米にあるプラント、特に完成品のヤードだが…粒子遮断措置は万全かな？”

「もちろんです閣下、すなわち次はアメリカへ行くと？……もちろんご安心を。ご遠慮なく宇宙から天使を降臨させてください」

「……そうだ…利益を入れてくれればいいのだ国連、頑張ってわれわれの市場を拡大してくれよ…」男は通話の切れた携帯端末をデスクに右手で置き、椅子から立ち上がり、続いて腰を伸ばした。窓の左手から差し込んでくる初春の日差し、私用オフィスの窓もとに飛び込む光は自分の栄光を、強化繊維ガラスの外に広がるシアトルの高層ビル街は、自分の権威の象徴だった。市街地を見下ろす位置にいる、多くの市民が暮らす都市を上から見る事が出来る立ち位置に自分がいる。

オフィスのインターホンが鳴る。“×××氏とｉｒｏｂｏｔ社の△△△情報管理部長がお見えになりました”「分かった、通してくれ」男は服装を整え、携帯端末をポケットに閉まった。部屋の空気が少しずつ張りつめていくような気がする、これもこれで対話という場のお決まりなのだが。そしてこれは何度経験したところで慣れはしても消すことはできない感覚である。

秘書の女と共に入ってきた2人の男、連邦政府のバッジをつけた方が格別憂鬱そうな表情をしている。まあ無理もあるまい、その男の姿を見た代表取締役は心の中で吹き出しそうになる。西太平洋地域で発生した米中の問題は現在も進行中である、それの対応にもアメリカ政府も気を揉んでいるのだろう。

2月15日　16時50分　アメリカ　サンフランシスコ市　880号線

めどが立たないデータ保持者（すなわち情報漏えいの犯人）の確保。現場にも中央にも関係企業にも、気が休まらない時間が過ぎていく。ポケモン達にとって1日間の前後程度など待ち合わせに遅刻すると言ったレベルであるが、分秒単位で社会が変化していく今の人間文明にはかなり精神をすり減らすという言葉しか見当たらぬ状況であった。この情勢にしびれを切らしたアメリカ政府と国防省は、16日0時の時点で出現しない場合は、位置をこちらから特定して確保に当たる、という旨の通達をアメリカ・カナダ双方に送ったのであった。すなわち、情勢は遅くとも7~8時間後には動き出すということだ。

時間帯は夕方の帰宅ラッシュに差し掛かろうとしている、世界一の自動車大国のアメリカとだけあって、環境問題がクローズアップされる現代でも、通勤には電車…近年はエコ・モータリゼーションとして高速鉄道網の整備も進んでいる…より自動車やバスを用いる事が多い。国土が広大でオフィスのある都市と住宅が離れている、もしくは日常生活でも大型商業小売施設が住宅と離れていることなどが大きな要因だ。それでも最近はヨーロッパ同様アメリカでさえCO2削減が広く知られ、排出基準を満たす新型車両ばかり、プラグイン・ハイブリット車や電気自動車、クリーンディーゼル車両…軽

油内燃機関はＣＯ２排出量がガソリン機関と比較してかなり少なく、長距離走行向け車両などに使われる。煤が出やすいという印象を持ちやすいのは都市部において発信や停止を繰り返すため、走行音をとやかく言われる時代も機関の改良によって終わっている…などのエコカーも一般車両と何ら違和感なく溶け込んでいる。環境対策が欧州と比べて遅れていると言われていたアメリカ、カナダでさえ温暖化対策を無視することができない時代だ。

そんな風に（一行はさっぱり区別がつかないが）車両を見分ける事が出来るのも、皮肉なことに今日の大渋滞のお陰である。連邦政府の重大機密を保存したハードウェアを持った人間を捕えるために、精密な感知機器を利用した検問は２４時間行われる。昼間でさえ大混雑だった高速道路は、帰宅ラッシュと開始とともに全く動かない状態に陥り、ドライバーの怒声やクラクション、出口にわりこもうとして車両同士接触する音があちらこちらで響く。すでに2日続くこの状況に対して列車通勤も予想をはるかに超える混雑で安全を確保できずに運転を取りやめ、市街地のトロリーも一般道の大混雑で終日運休、検問所周辺に配備されたセキュリティーロボットのデータリンクを優先するためナビゲーションシステムは停止という状態だった。これに伴い工場やオフィスの半日休業や帰宅時刻の分散が市と連邦政府から要請されたが、これが帰って大混雑の終日拡散を招き、さらには周辺工場の一斉休業に伴う電力供給過多と電圧の急上昇が発生、電力供給企業は一番調整の効く火力発電所の停止作業に躍起になっていた。瞬間的にも電圧が一定値を超えると大停電が発生するため、かといって供給量を減らしすぎないという極めて慎重かつ迅速な対応が求められるからである。一般通信回線の混雑や交通事故、ドライバー同士のトラブルなどで警察は終日対応に追われていた。

高層ビル群の照明が星空を作り、ベイブリッジや繁華街地域がきらびやかに明かりを灯し始める黄昏、グレイシアは左手に見えるサンフランシスコ港を一望できる緊急駐車帯の手すりに前足をかけていた。自分が精神が疲れているのか、それとも眼前に広がる人間世界の都市の壮大な風景が自分たちのやる気を劣等感と共に奪うのか。とにかく彼女にはどちらも関係がない、作業用の明かり、クレーンや沿岸の工場と貯留プラント、停泊する多数の大型コンテナ船にともる白色灯が、目を潰すほど眩しい貨物ターミナル、右手に並ぶ車両のヘッドライトの大河、その奥にある検問場所にある警察官と無機質なセキュリティーロボットをかげにしている工事作業用の行燈、遠くに広がる高層ビル街の照明、頭上に並ぶ市街灯のナトリウムランプ、その明かりの全てが彼女にのしかかってくる。特にセキュリティーロボットのセンサーが放つ赤色の光は１００メートルほど離れたここをも睨みを利かせ、警察官の人間たちと相まって業務の傍らこちらを無言・無視線で監視している。見ているだけで息苦しくなるほどの圧迫感があり、すぐに目線を逸らした。

頭上を轟音立てて飛び立つ人工の黒い怪鳥、翼を伸ばしたままの姿をする黒く巨大な影となったＢ－７４７－８が彼女の頭上の左手から右手をフライパスし、航空灯を鋭く点滅させながら日没とともに重みに負けて下がってきた暗い雲の狭間へと消える。思わずそれを見上げた彼女、轟音が去って間もなく、視界を眩しい市街地と港湾に、それから自分の右手にある検査保安員用通路の入り口に移し、高速道路の反対側へと続く通路の入り口、無機質な構造物の影によってできた黒色さえ飲み込む暗がりをちらりと見る。しばらく眺めているとなぜか恐怖感を感じ、慌てて視線を港湾へと戻すが、かといって目の前の船舶やコンテナクレーンを照らす明かりと巨大な影を投げる工場地帯を見つめていると別の憂鬱に自分の意識の水晶が

包まれてしまった。

なぜ自分はこんな場所にいるのだろうか、ここで何をしているのか、ふとそんな単純すぎる疑問が彼女の中で芽生え、いつしか水晶をその問いかけが埋め尽くしてしまった。そんな事を気にしても仕方がない、そうは思っていても今の気分ではそちらの方向に思考が入って行かざるを得ない。しばらくするとそれに対して何の抵抗もできず、ただただ憂鬱になるのに任せているテルル・アストラフスキーに彼女自身が気付いた。目の前に広がるコンテナ船ベースの空気が彼女に覆いかぶさってくる。責めてくるのではない、遠くから白い目をして見つめてくるのである。遠目で嘲笑され批判されるのは、眼前で否定される以上に陰湿で傷つくもの、しかも当人に見える位置で意図的にやられるのはさらなる苦痛でしかないものだ。

「……はあ…もうどうでもいいわよ…」思わず本音が口をつき、テルルの右前足は目的もなくもみあげ状飾りを撫で付けている。一応は隊長として引き継いでいるにもかかわらず周囲の迷惑をかけてばかりの自分、周りを引っ張るどころか足を引っ張ってばかりの自分、彼女の中では自分にリーダーの素質があるとはもはや考えてもいなかったが、だからこそ無意味にその概念を背負うしかない自分が一層情けなかった。その混迷は深くなる一方、考えれば考えるほど後戻りができない場所に落ち込んいる、それから逃れる術を探そうにもその気力自体が暗闇に含まれる有毒な気体に吸い取られていく。

ふと彼女の背中、すっきりとした首のあたりを軽くつつく物体。「テルリン♪、そんな顔してたらその顔で固まっちゃうよ?」「え?そ、そうかな?何でもない何でもない…」振り向きざまにテルルは無理やりな笑顔を作るほかになかった。まあ作った所でこのメガニウムにはおおよそ見えてしまうだろうが、それでも他人に本音をさらけ出したくないと、弱いところは見せないというグレイシアの本

能的なものだった。

「無理な張りぼて表情なんか作りやがって。昨日や今朝がたより顔色もよくなったみたいだしな、ほら、適当にユイと下行っていろいろ買ってきたからありがたく受け取っておけよ」ユイリィの隣にいるムクバードの左翼が持っている白いビニール袋、中身は何か液体が入った容器のようだ。とすると人間の飲料か何かか、彼女はそう思った。「別に怪しい毒物とかじゃねえって、嫌なら俺が口づけした後でもいいんだが？」

「そ、それは遠慮しますよロックさん…いや、大尉とでも…まあとにかくもらいます」テルルはロックオンの方を恥ずかしそうに見、すぐに彼の右翼…鳥類の翼は哺乳類の前足や手に相当する、これは形態的進化論の事実である…が持つビニール袋に自分の右前足を突っ込んだ。今はいないブレイブ程ではないにしろ、このムクバードも相当のやり手らしい、飲料が間接キスになるというある意味可能性の薄い屈辱が急に不安になった。どうやら人間の機器で加熱してあるらしい、透明のペコペコがさらに柔らかくなっている上やけどしそうなほど熱くなったその容器を彼女は右前足で一本掴みとる。

「んと…こういうのは左に左に……」この容器はロシアでもたびたび目にしているから蓋の開け方ぐらいは分かる、ペットボトルのらせん構造となっているキャップをさっさと開け、ボトルの先端に口をつける。

口の中に広がる暖かさと甘酸っぱさ、実に美味く感じれられた。後ろ足が接する冷たいアスファルトの感覚が失せ、人間の都市から自分たちの住む草原の集落に瞬間移動したも同じすがすがしさにも似た感覚が、液体が流れた腹から全身へとゆっくりと広がる。それと同時に自分がひどく冷え切っていたことにも初めて気づいた。

「ったく、結局は色々と体が求めてんじゃねえか、女の子なんだから体の言う事は聞いてやらんと悪いぜ？」「え、ええ…それはそうですけど…」

「ですけど、はなしだ。今後とも気を付けるんだぞ」鳥類型種族の

彼は彼女の背中を左翼の先端で突く。「うぶぅ?!やめてくださいよ飲食中は!」「さすがだテルリン…触った瞬間のびくつき具合がたまんないぜ…」むせ返りそう人りながら首を回したテルルに対しロックオンは少し鼻元を赤くする。自分にしてみればこういう男(オス)づきあいが苦手な女(メス)のびくりと体を硬直させる瞬間がたまらない、ちょっとツンとした場所が…ツンデレは気に入らない…がある女の子はこのムクバードにとって最高の遊び相手だ。

とは言っても、彼の意識の水晶では彼女のまた違った側面もしっかりと捉えられている。おそらくこのグレイシアは人生における真剣の理由があってここにいるのだろうし、今の性格もそうやって作られているに違いない、その内容は笑いごとや軽く日常の中で済まされるものではないのだろう。彼の眼には彼女の表情と顔立ちにそれが明確に表れているように見えた。「そうだ、ユイも飲むか?いやお前の存在を忘れてた…」「うん!ウチのタイミングはいつでも大丈夫!」ムクバードが持つビニール袋の中から、メガニウムは適当に一本掴みだす。人間文明慣れしているユイリィにとってその種類はおおよそ理解できるし、4本足とは別に手の代わりとなるツル先の感覚で、おおよそ自分の好みのものがどれだか予想がつく。「うちっ…温めすぎなのよ人間って、軽くて作りやすいからっても、もう少し持ちやすい容器でも作ればいいのにね、うん…」彼女は両ツルで熱くなっている容器を軽くパスさせたのち、ボトルの首を持ってキャップをひねった。

テルルは数回容器の液体に口をつけると、後足元にペットボトルを置き、再び前足を高速道路の淵にある手すりにかける。飲み物のお陰で多少は気持ちが緩んだか、口から本音が漏れだした。「私ってさ……リーダーとかっていう素質ないよね。何やってるんだろこんな所で…」

「ん?素質がないって…」「言葉のまんまかな。私なんて所詮張りぼてで負けたくないだけで…自分の身の丈忘れちゃうのよ…」ユイリィのきょとんとした表情に彼女は自虐的な笑みを浮かべる。それはかろうじて本音を、言葉を歪めながらも出せたこと、今まで思っていたことをようやく吐き出せたことに対する安心感から物もでもあった。「…結局…多少なりとも軍に入ってたからっていって…ポケモンの組織は人間の常識なんて通用しないのよね、それは分かる…」

「どうだかな、ここって軍よりかはむしろ国連のポケモンに関する研究機関所属なんだってな」「は?…研究機関なんですか?」ロックオンは軽く飛び上がり、グレイシアの脇の手すりに降りる。そこだけは通常の鳥類と変わらない動きだった。「そうだぜ、俺らが所属しているのは国連統合軍っつう人間が言う地球…んと、何と説明するか…夜見える星や昼間の太陽があるのが宇宙って場所でな、地球っていうこの世界もそこに浮かんで…」話が脱線しかけた、ムクバードは右翼で頭の飾り毛を軽くひねる。どうやら今回は失敗のようだ。「と、とにかくこの世界を人間ははっきりと認識してるから…それで世界にあるすべての国家の親玉ていうか会議機関が国連っつって、そこで人類社会の安全保障…すなわちよく分からんが、とにかく平和維持みたいなことをしているのが統合軍ってわけだ。まあ実際は各国家の軍からバイトを呼んでるのがほとんどで、近頃じゃでかい国家の意向に騙されてエメリア以外じゃほとんど動けねえらしいけど……まあいいとこいって災害が起こった時の地面を掘り返したり、海をどぶ浚(さら)いをしたりらしい…俺の生まれた国は日本って言ってな、軍が無くて自衛隊っていうのがあって、普段はな…がけ崩れが起きればスコップ、洪水や水害が起これば死体浚いの棒しか持ってない軍隊もどきだった…」

「あの…それとこれと何が……」テルルは飽きたように右前足で手すりを軽くこすり、ロックオンの方を見る。どうやらこの30歳もブレイブと同じように長弁を振るう性質らしい。「あ、ああ…すま

んすまん。ったく俺は…すなわちそういう機関の軍の所属でも、奴らの目的は俺たちを使ってポケモンという生命体のデータを取る事らしいんだぜ。事に戦闘中の俺らの能力をな」

「……」彼女は目線を伏せ、手すりにかかった自分の前足の甲を見つめる。自分隊がデータ取りに利用されている、つまり自分達は道具だとでも言うのか、今まで同じように人間に対する怒りを感じ、金属を握りしめる前足に力がかかった。「それだけって所だな…これに関しては俺もどうすることもできない、軍なのか生命科学研究機関なのか曖昧な存在ってところだ」

「で、でも…」グレイシアはムクバードの方を見る。「最初の方なんて…明らかに軍隊みたいなことしてたじゃないですか?私だって…自治協会の防衛軍組織なら…警察みたいですけど、とにかく見たことが…」

「エメリアはね、結構人間たちが国連を使って支配してるようなもんなのよ」メガニウムがグレイシアの脇により、手すりを軽くツルで叩く。「ポケモンはエメリア以外ではバラバラになっちゃってるからね、いいところで人間たちと暮らしてるか、ところだよ」人間の港湾を、コンテナヤード、コンテナクレーン、大型コンテナ船、沿岸に並ぶプラントを見つめるユイリィの青空色の目には、ある種の寂しさのようなものが浮かんでいた。「うちらはながーくながーく続いてきた文明の最後の生き残り。しょうがないよね…変えようがないもん。…だから……最後に人間が開発しているあのエメリアは…ウチらを恐れてるのと、別の意味では人間たちの国家や会社が開発で対立したり悪さしたりしないように…国連の軍がいるってわけ」

「……そんな…それじゃ私たちは…」テルルは懇願するような目でメガニウムを見つめる。当の彼女は右前足を手すりの付け根があるコンクリートにかけ、下あごの部分を力なく手すりに軽く乗せた。「仕方がないのよ…今は…」

ユイリィ・ランタン・プレミドールには分かる、考えたくもないがこの世の真実が手に取るように感じ取れてしまう。今ついている足元にも、ここに暮らし、ここを歩いた思われるポケモン達の感情が、意思が、はっきりと残っているのが分かる。どれも背中の筋を一瞬冷やし、それから悲しみに満ちた熱さに変わる、そんな感情だ。彼は人間たちに追われるというより人間たちの開発や経済活動の前に住む場所も、彼等の生業も、そして生きるのに必要な食事すら失い、生き残るための争い、想像を絶する苦しみ、耐えがたき別れと共にここから消えていった。

そして最後に残ったポケモン達の安住の地、人間の文明が起こる何万年も前から文明が根付いていた無限ともいえる南太平洋に浮かぶオアシスも今、人間文明のあくることなき生活向上心、探求精神、そして己の無限の欲望、自らの世界の存続の前に開発という名の改造に飲み込まれている。人間世界を牛耳り、自国の権益拡大と経済成長をもくろむ主要な大国、その国に本社を置き、市民生活から国際社会にまで影響力を持つ巨大企業、宇宙や深海といったマクロスケールから物質や生命、情報技術といったミクロにまで開発する科学技術という強力な道具を商品として権益を稼ぐ公立・民間の研究機関、しかし人間たちのそれら全てが帰着するのは、結局は金という欲望であった。環境ビジネスですら売買の対象、科学技術の開発も権利の利益、エネルギー採掘や工業生産、食料供給は言うまでもない。その結果起こる人間の国家や企業同士の対立を防ぎ、そこに住むポケモン達との衝突を人間の都合で押さえつけるために存在するのが国連統合軍である。あまりにも多いそれを抑止しようとした結果、エメリア地域全体が国連統合軍・安全保障理事会という紐に囲われた柵、しかも出入りが自由なのは人間だけでポケモンに対しては恐るべき力で縛り付ける檻と化している。その日も出さえ大国や国連の思惑が混ざって複雑に変わり、その度にポケモン達を苦し

めるムチのような紐だ。

しゃべり過ぎた、ユイリィが意識をテルルの方にあわてて引き戻す。彼女は沈んだ表情でクレーンが積み下ろしを続けるコンテナ船を見つめている。

グレイシアの一胸（らしき胴体正面）は苦しかった。何とか自分にのしかかる重い空気を振り払おうと息を吐き出し、視線を上空へと移すが、そこでは轟音とともに通過していく航空機…Ａ－３４０－３００である…を示す影の両端の点滅がさらに暗さを増した雲の中へと消えてゆく。自分の意識の水晶が２匹の言っていた現実に苦悩しているせいか、一層明るさが失われていく雲と空がさらに重たく頭上にのしかかっていた。

こんな状況で自分はどうしたらいい？もしそれが現実だとしたら弟は…エルヴィンはどうなってしまう？首の後ろから広がっていく気味の悪い冷たさを、彼女は必死に振り払おうとした。手はある、どうにかしなければならない、しかしその為にはまず自分がもっと成長しなければ…しかしそれが今の自分の問題、そしてそれが……その息苦しい思考のすべてが無限ループを描き、ますます体が重く感じられる。

「い…ごめんごめん、テルリンには関係ないよね……」メガニウムはツルで彼女の首の後ろ、背中のひし形模様の辺りをさする。やはりグレイシアが自分の台詞に引っかかってしまっている、そんな彼女の感情をツル先から感じた。「こんな大きな世界なんかウチらにはどうでもいい、足元がなきゃ視線の先にはたどり着けないから、…ウチの言ったことは気にしないで…」

「そ、そうよね……大丈夫、私はそこまで頭良くないから……」テルルはかなり無理やりな愛想笑いを満面に浮かべ、彼女のツルを右前足でさする。メガニウムに心配をかけたくなかった、それと同時

にユイリィに無駄な心労を与えたくない、咄嗟にそう言う感情を覚えてそうし、実際は彼女とロックオンの言動にかなり落ち込んだものの、どうにか自分を納得させようとしたのだ。ただ、それをどうにか紛らわせると、先ほどまであった疑問が再び意識の水晶を満たし、またしても愚痴っぽく自分の事に関して呟いてしまう。しかもますます憂鬱に。「…でも、そういう世界で私はやってかなきゃならない…その自信がないのよ…」グレイシアは右前足でもみあげ状飾をいじる。「……はあ……どうすればいいんだろ私?…どうすれば強くなれるの?」

「その事なんだけどさ……」メガニウムが彼女の方を向く。「具体的にどこら辺が?テルリンは自分のどこがどうダメってなの?」

「え?…どこがって…全体的にじゃない。……こう、私って、全然融通も利かないし、足を引っ張るだけだし、果てにはすぐキレるし…どうしようも…」「どこが?そこのどこに問題…つまり、そこが嫌なのテルリンは?」

「嫌なのって……こういう性格が嫌意外にないじゃない…」グレイシアはメガニウムの青空色の瞳を不思議そうに覗き込む。「そんな…とぼけないでよユイ…さすがにそれじゃ私だって元気出せるって風にならないし」

「うんん、そういう性格を自分から嫌いになる必要はないんじゃないかな」ユイリィは励ますようにツルでテルルの頭飾りを撫でる。「誰にだってムカつく一面ってのはあるわけだし、それをみんな否定してたらテルリンはすっからかんになっちゃうよ?」「何も残らない、て事?」どういう事だが今ひとつわからない、ユイは自分の事をバカにするつもりはないらしい、グレイシアは手すりにかけたままの前足を見つめ、しばらくして彼女の方に向き直った。「ごめん、ちょっと教えて。やっぱ私って頭悪いわ……」

「大丈夫大丈夫！ウチはこう見えても、ね？」彼女は笑顔でグレイシアの頭飾りをツルで整えていく。「……あ、そうそう、テルリン自分で頭がいいとか悪いとか言わなくてもいいんだよ、うん」

「……うーん…そう言われても…」「ね？多少計算が早いとか機転が利くとか言ったって、誰だって必要になればそんな事はすぐにできるの。むしろ他にない何かに取り組んでるもいいし、何か大きな目標があるのもいいし、そういうのが出ていればさ、個性として残りは別問題、ウチはそう思うな」「……じゃあ…私の場合は…」「うん、テルリンの家族、エルヴィンって言ったよね弟、そのために頑張ってるってのもテルルをテルリンにしてる物の一つ、それでいいと思うよ」

「…そうなんだ…さすがはユイ、って所ね…」「どういたしまして」テルルは首から下げた装飾品の一つを右前足に取り、目の前にそっと寄せる。エルヴィンにも同じものを手渡してある物、中東からの放浪の果てにたどり着いたロシア・サンクトペテルブルク、彼女の２つ目、弟の故郷となった悠久の都市で別れ際に買い、姉弟の証にしたもの。形状には何の意味も持たない金属の塊であるはずなのに、エルヴィンの温もりを、遠くにいるたった一匹の弟の心通った温かさをそこから感じた。

そう、私はこのために全てを捧げている、中東の砂漠を、雪に覆われたロシアの森林を、果てしなく広がる中央アジアの平原を、足の爪先に血をにじませ、こらえようのない怒りに血が出るほど歯を食いしばり、極寒、熱波、ありとあらゆる厳しい環境と人間たちの仕打ちにひたすら目を閉じ、合いつく家族との死別、痛いすらそこに放置するしかない苛酷な現実に枯れ果てるほどの涙を流し、ようやくたどり着いた安住の地、そしてすべてを失った私の心を温め続けるかけがえのない家族との出会い、全ての思い出と切ない願いと愛する者の温かさのためにここにいる。思わずグレイシアは右前足に取ったそれをほおにこすり付けた。切なさに胸が締まりそうになる、絶対に帰って見せる、エルヴィンを一匹にはしない、意識の水晶に

広がる必死の願いに目頭が熱くなった。
「……テルリン？だいじょぶ？」ユイリィがツルを彼女の頭飾りから伸ばし、彼女の右目の下をそっと拭った。「う、うんん！何でもない、私は全然平気……」
「そっか、やっぱテルリンって優しいんだね」彼女はグレイシアのもみあげ状飾りもきれいに丸めはじめる。ツル先に残ったテルルの涙の湿り気、そこから数えきれない彼女の感情を、どこまでも家族のために尽くすひた向きさを感じ取れる。「テルリンは面倒見もなかなかだからね、ブレイブともきっと上手くやってける、ウチはそう思うよ」
「うん…まああいつとは、これといってもめる必要もないしね……」テルルは口にくわえた細い紐でユイリィが丸めてくれたもみあげ状飾りを縛る。彼女に言われるまでブレイブの事をすっかり忘れていた自分、思い出すと突然息苦しいほどの切なさを感じる。あいたい、なぜかブースターに会いたい、カナダのバンクーバーという場所に行ったらしき彼の顔を見たくなった。「大丈夫かなあいつ……チェギョンとかグラシに迷惑かけてるとかないよね？」
「お、さすがはブレイブのお姉さんといったところか」ロックオンがメガニウムの背中にぴょこんと飛び乗る。「でもあれだな、俺の名付けたテルリンは俺に絶対感謝する！そして俺に惚れる！どうだ、今回の仕事が終わったらサンフランシスコに繰り出すか？いや、そうだ、それがいいぜ」
「え、ええ？！いやいや遠慮します遠慮します！ブレイブも大尉も今のところはちょっと…」グレイシアは恥ずかしそうに、というよりこのセクハラっぽいムクバードを回避すべく左側へと数歩離れる。全くあのブースター種族といいこの脂の乗り切った歳の彼といい、このチームにはこういう色男ばっかりらしい。「テルリン焦り過ぎだよ、うん。ロックさんだってまだ独身なんだし、仲良くしたっていいんじゃないの？ですよね？」「さすがはユイちゃん、俺の性格をわきまえてやがるぜ」伸びてきたユイリィのツルがロックオンの

頭の飾りをさわり、ムクバードは嬉しそうに顔を赤らめる。
「こ、こらユイ、そんな事言ったらこの人調子（ポケモン）に乗るでしょうに…」テルルがメガニウムの方に寄り、彼女のツルを右前足で止めようとした。彼女の欠点というのはこういう場所だ、明るくて人付き合いがいいのは分かるが調子に乗りやすい一面もある、その一歩でさっきのように優しい先輩のような面もあるが故に時々対応が難しいと感じてしまう。「調子に乗るも何も、俺は常に女の子の前じゃ調子に乗る男だからなあ、テルリンっていうのも調子なんだぜ。感謝しとけよ」「はい？！自分で言う事なんですかそれ？！……何で全くもう…」グレイシアは呆れたような表情をして鼻を鳴らし、手すりの位置に戻る。自分で自分の悪癖を吹聴するとは、彼に対する失望感に駆られて彼の方を見る気にもならなかった。

「…バカ、そんなふてくされた顔すんなって、別にお前の事を面食らってバカにしてるわけじゃねえし。それにな…」ロックオンは手すり下のコンクリートに飛び降り、右の翼を手すりの柱に当てる。
「…テルリンだって分かるだろ？ケンカするほど、…まあそういうのは言うのはこのこった。誰であろうと普段から一緒にいる奴がいないと引っかかるもんなんだぜ？」彼は左翼で彼女の右前足付け根を取り、逃げるなといわんばかりに彼女のネイビーブルーの瞳を見つめる。「ブレイブはお前を必要としていた、お前が奴を同じように必要とするのにこれ以上正当で真っ当な理由はねえよ。寂しいんだろ？」
「寂しいって……んな事言われても彼はここには……」「だろ？まったく、まあテルリンはそういう性格に見えるから言わなかったが、寂しいの隠してると感情のコントロールが利かなくなるぜ？」ムクバードは左翼の先にある彼女の皮膚をクイクイと押しながらさらに続ける。「お前くらいの年になって人生経験積まないでどうする？

男女関係っていうのは案外生きる授業だったりするんだ。道徳って奴だな」彼は視線を手すりの向こう側に広がる人間の港湾とプラントに向ける。プラントの配管の隙間から見える岸壁を歩き回る人間たち、オレンジ色のコンテナ船がゆっくりと着岸バースを離れていく。「…俺も今だってグラシに会いたい、あいつの事を考えると…ああ、彼女は無事なのか、何かやばい事になってないか、そんなんばっかで怖くて仕方がねえよ」「……」彼の声は小さく、一言一言噛みしめるかのように聞こえる。テルルは思わずロックオンに視線を移す。ムクバードの小豆型の目には港湾のはるか向こうにある見えない何かを捉え、瞳に映るプラントや港湾の明かりは暗く沈んでいた。「…こんなこと口に出すつもりはないんだが、テルリンがそういう表情をしていると、何もせずにはいられんからな」

テルルは手すりから前足を離し、普段の４本足の姿勢に戻る。彼がグラシデアをどう思っているか、本来の隊長でありモココの父親でもあるバストークとの間で問題になるか、それとは全く違う感情がこみ上げてきた。「あ、あの……すいません」「…どうしたいきなり？」「私……何だか…ホントに私は…」再び目の周囲に熱い物がこみ上げ、右前足で腰のひもにぶら下げた刃の柄を握りしめる。右前足には本来愛用品である銛がぶら下がっているはずだが、今はこのスカイラブが差し出した武器しかない、そしてその原因は間違いなく自分の不憫による物、情けなさに再び腹立たしくなった。

「そ、そういう事じゃねえって！それは誰にでもあるって事だ。まあ言うなれば生物として、じゃねえか…文明生物として普通の感情なんだよ…異性の前にはみんな自分の能力が至らん……」ムクバードは俯いたグレイシアの頭飾り辺りを両方の翼で持ち上げ、彼女の目を覗き込む。必死に感情をこらえている彼女の瞳は涙が限界まで溜まり、今にも瞼の堤防を決壊しそうである。彼の表情にはさらなる焦りが浮かんだ。彼女の苦しい心境、どこへ進めばいいのか、そもそも自分は今どこに足をつけているのか、１０代の終わりから２０代初頭という人生で最も入り組んだ迷路に疲れ果てた彼女の感情

は、ロックオンにはそれが苦しいほどわかる。自分もあの時そうだったように、日本の東京の一角、薄汚れた下町の公園の木々から、頭上に広がる大空を目指した日々、最初はエメリア自治協会の（当時はまだ世界各地域でいくらか機能していた）警備隊として、そこから航空自衛隊へ、そしてさらにそこからアメリカ空軍へ、そこに会った苦難をいま語るのは忍びない、その過程で家族の一部も、多くの友人も、故郷すら捨てたのだ。

だが…そこまで経験した彼でも、今こうして同じような人生の迷路に入り込んだ彼女にかける言葉はどうしても思い浮かばなかった。

「……入り込んだ森の中ってのは、一匹一匹違うものだ。俺にはテルリンの底がどうなってるのかは分からんから、具体的な解決法はだせねえ。だけど…これだけは言う…」自分の無力さに体の節々が痛くなるほどのいら立ちを覚えながらも、ムクバードは噛みしめるように言葉を続ける。グレイシアの顔を上げる翼に思わず力がかかった。「一匹でダメなら隣の奴の前足を離すな、そいつもダメだろうがそいつは別の奴の前足を握る、な？いたわり合うなんてお互い精一杯なんだから、少なくとも寄りかかれる場所があれば、倒れる事はねえだろう、そんなもんだ」

「……それは…ううっ……知ってます」「その息だ、お前にはそういう相手は全然いるんだからな……」涙を必死になってこらえる彼女、それを見ている彼も息苦しくなるほど辛かった。そういう相手は今自分にいるのだろうか？自分の思いを少なくとも心の中に収めてくれる存在はいるのだろうか？

いる事にいる……グラシデアがますます心配になってきてしまった。今にでも飛んでいきたい、そんな衝動が自分の翼を何度も広げそうになる。彼女の父親の事は関係ない、これは自分の感情であり、意思であるのだ。そうであるからこそ切ない、伝えたいことが次々に出るのにそれを実際に吐き出すことはできない、テルルを翼で支えるロックオンは耐え難いもどかしさを感じながら視線をユイリィの方に向ける。

「……ウチもそうなのかもしれない……」彼女はグレイシアのそばに歩み寄り、右前足の爪先で彼女の右前足の足首辺りをそっと握りしめる。「……ウチもよくある…自分のしてることが分からないよ時々」「…分かんない？」「うん…自慢話にならないけどね…」彼女はツルでグレイシアの頭飾りをそっと触り、ぼんやりと眼前に星空を作るプラントに視線を向ける。彼女の目線から意識の水晶に入り込んでくる声は泣きじゃくっている、それを受け止めているうちに、自分の感情と記憶の中に思考を入れずにはいられなかった。普段からなるべく触れないようにしてきたもの、考えたくもない記録が眠るその空間に存在する物にテルルの姿と自分の今を掛け合わせてみる。「例えばロズリンなんか…まだあんまり話してくれないの」ユイリィは頭の雄蕊の所でコックリコックリしているシェイミの感覚に意識を寄せる。既に日没、子供のポケモンの感覚で言えばもう眠りに入る時間だ。とはいっても今の彼女が感じているのはこのシェイミの呼吸ではない、自分とこのオスを繋いでいる（とサクラが言っていた）感覚があまり感じられない事に対する、一抹の寂しさが彼女の意識の水晶を満たしていた。「…いつも思うよ、ウチはロズリンを連れてくるべきだったのか、ってね。……まだまだウチも達してないって事だよね」「……」

「ま、まあ…見えない場所を怖がっても動けないからね。そこは…なるべく気にしないように頑張る事かな……」彼女はわずかに体を揺らし、少しだけ手すりの方に足を進めた。「そうそう、もう一つあると言えばさあ、ヒュンの事も…よく分かんないと言えばそうなんだよね、うん」

「そんな……いつも…いつもあの子と遊んでるのに……」テルルは思わずユイリィの方を向いた。メガニウムは普段あまり見せない曖昧な作った笑みを浮かべ、ツルで手すりを軽くさする。自分でもこ

んな事は信じたくないし、実際に存在するそれを考える事さえ嫌だったが、グレイシアを見ていると自分の意識の中に必死に押し殺してきた感情が、沸騰しながら水晶の表面と吹き上がってくる。「リーヒュンの事は……確かに…あの子はウチの最高のお相手、自分の感情に素直で、必要なところでおおざっぱ、やりだしたら止まらない、あとリアクションも最高だし！……それでも……」メガニウムは首を右に回し、高速道路の非常スペースの淵でサーナイトの訓練を受けるベイリーフを見つめる。相変わらずの力任せ、何となく攻撃の飛んでくる方向は分かるようになってきたのは見える、サクラの一発一発を柔軟に体を使ってかわしていく。しかし自分の方の攻撃になるとリーヒュンらしい無茶苦茶さが明らかだ、ツルを振り上げて仕掛ける、全てのプロセスに力任せで強引な面がよく分かる。それが彼のいいとことでもあるのだが。「……ただ…あの子の…特にフローラの事は…替わってあげる事がまだできない…一緒に寄り添うのが精いっぱいなんだよねウチには……」あまりにももどかしい状態、自分が彼の友人であることを吹聴し、実際に彼を散々遊びまわしてるくせに、肝心なところで何もしてあげられない、今まで意図的にかわしてきた自分の現実が、しゃべればしゃべるほど自分の中で明らかになっていく。「……でも…それはあまり気にしても仕方がない、だから無理にでもいいから今はやってるって感じかな……」メガニウムは無理に前向きな声で続ける、こうでもしないと自分が、ユイリィ・ランタン・プレミドールがひどく落ち込んでしまいそうだったから。それに…テルルに暗い表情をするわけにはいかないから。「リーヒュンの事も……ウチは友達だけじゃない……いつかは…そういう関係にならなきゃって、…これからも頑張るよ」

「…ユイもそうなんだ…それじゃあますます私は……」テルルは再び窒息したうめき声をあげ、メガニウムの両前足の付け根にしがみ

つく。「どうしたらいい？私もそういう場所を超えられるかな？…ねえ、分かる？」

「……ごめんね…まだそれは…」答える意志はある、そしてその答えも自分の意識から引き出せる、しかし言葉にならなかった。彼女はツルでしがみつくグレイシアを受け止めたまま近づいてくる夜空を見上げる。プラント、港湾、高速道路を流れていく自動車の大河、都市の高層ビル群が作り出す眩しい光に浮かび上がった夜空、黒く垂れこめた雲の狭間へと消えるＢ－７８７の標識灯、そこにツルや前足を伸ばしても届かない。それは自分たちの間でまだ消える事のない、いや同じ時を過ごし続けているからこそ明らかになってくるのであろう溝であり、壁であるような気がした。

彼等から数百メートルほど離れた大渋滞の一角、検問所が設けられた場所の隅、閉鎖された一番路肩寄りの車線に、州警察車両であるシボレー・カプリスＰＰＶが停止する。「例の物品が到達したのか？」「ああ、例の兵器の護衛も一緒に、な」ｉｒｏｂｏｔ社の自律セキュリティーロボットの脇に立ち発行する作業灯を携帯する警察官、降りてきた車両のドライバーの背後にはキリンリキとキノガッサが大渋滞を起こしている車両の生み出すスポットライトに照らされ、工業機器メーカーの新製品発表のごとく影となっていた。

２月１６日　ポーランド　ジェシュフの北北東１００キロ　現地時間　１１時００分

ポーランドの機械産業、特にアメリカの航空機用ターボファンエンジン、及び民間用大型発電機の大手、プラット＆ホイットニー社

の工場が存在する等、もとよりレベルの高い技術を必要とする航空産業の拠点である大都市ジェシュウ、歴史的にもレベルの高いヨーロッパの職人が集うこの都市から直線距離で北北東に１００キロ、ヨーロッパ高速道路網Ｅ３７１号線とＥ３７２号線を利用し、ウクライナとの国境ともそう離れていないストラホスワフという地域にたどり着いた原子力発電所のＥＣＣＳ（非常冷却システム）の機器。韓国企業連合と政府の経済技術輸出戦略委員会が総出で進めた米国・ＧＥ社とポーランドのエネルゴプロジェクト・ワルシャワ社、共同原発建設の参加計画の成果、それを乗せたドイツ・メルセデスベンツ社のアクロトス２５２２大型トレーラー４台が、建設の始まった原子炉建屋のそば、同じように原子炉関係の大型機器類をフランスから輸送してきたトレーラーとともに停止している。まだ露出した原子炉格納容器、無数のクレーンが忙しく資材を運び込み、周辺に組まれた足場を大勢の人間が歩き回る巨大なキノコは、わずかに春の明るさを帯び始めた雲間からの太陽光を浴び、工事の喧騒の中を静かにそびえている。分裂炉、トリウム塩溶解炉、ヘリウムレーザー核融合炉をはじめとする原子力産業は人類の科学技術の象徴であり、強大かつ温室効果ガスが渋滞の化石燃料発電に対してＣＯ２排出量が極端に少ない電気エネルギー源である。その分事故が起こった際の処理は困難かつ環境影響は大きいが、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、韓国、日本といった原子力発電所システムエンジニアリング企業はそれを防ぐ改良を繰り返してきたし、事故による環境影響は火力だろうと自然エネルギーだろう…風力発電所の低周波騒音に伴う健康被害は広範囲に及ぶ…と大小発生するもの、少しリスクが高いだけで忌避すべきものではない、というのが国際社会と経済・科学技術界双方の意見だ。それは２年前のフクシマ問題以降も変わりはない、原発事故のリスクより国際社会…特に新興工業国…は増大するエネルギー消費量とＣＯ２排出量削減を同時に解決できるメリットを選んだのだ。そしてそれに欧米を中心とする大規模インフラ開発企業はしっかりとそれに答えている。

ただし、４日前にやってきたアクトロス２５２２トレーラーに随伴する警察車両と周囲を固めるポーランド警察の人間たちの姿は、この原子炉関連機器に輸出戦略以外の案件も含まれている事も匂わせていた。国際的にテロ懸念が高まっているが故、政府施設、発電所、石油・天然ガス備蓄プラント、宇宙センターなどには警察や軍の厳重な警備がつくのは標準的である。この建設中のプラント敷地の周囲にも警察や国軍が固め、最近になってＥＵから委託を受けたドイツ軍の部隊も警備に加わっているが、この“ＥＵから委託されたドイツ陸軍”というのが今回重大な意味を握っているのである。そしてそれが今後、ヨーロッパとロシアの間に予想だにしない事態を引き起こすのだが、それは今は置いておくとする。

警察車両の傍らに立つドイツ陸軍の男が携帯端末に耳を当てる。「定時の状況、今のところは本日も順調です。工場の警衛記録も見ましたが、施設周囲でも不審な動きはありません」

“分かったわ、この先もしっかり警備をお願いね。あと、韓国から派遣されている関係者の方々の方にも気を配っておくのよ”「了解しております、どうぞご心配なく…」ドイツ陸軍の男は韓国から技術者としてやってきているらしい人間たちがいるトレーラーの方を…４台のうち３台はアメリカ・ＧＥ社が製造した発電タービン関連機器を乗せた車両である…ちらりと見た。彼らがどれほど政治情勢に詳しいのかは知らないが、少なくとも韓国の人間である以上、原子力開発をめぐる中国や北朝鮮とのトラブルは知っているに違いない、ＥＵ対外行動局の独立組織ができて初めてとなる加盟国軍の特殊部隊を利用する任務を自分たちが行っているわけだが、今回の要請を受けたのは韓国政府と企業連合からであり、ＥＵとは直接関係ないということだ。そしてそれは、現在西太平洋で発生しているアメリカ、韓国、中国の間の緊張状態と何か関係ある可能性も否定で

きない、特殊工作部隊として政治事情にも精通している彼なりの予想だった。

「ああ、それよりも…」男は軽く息をついてから別の話を切りだす。そちらよりもヨーロッパ圏の間では、厄介な問題が民間の間でも国家間の間でも発生している。「スペインのデフォルトの件、そちらも対応も大変なようで…」

“ええ、内閣が交代したり、債券格付けの問題もそれなりに、ね…”電話越しの女の声には苦笑が交じっている。金融危機による財政問題に伴う緊縮財政の実施に対して行われたスペイン議会の総選挙は与党が大敗、首相と大統領双方が辞任し政策はかえって混乱、これを嫌気にした米・英双方の証券格付け企業はスペイン国債の格付けと見通しを大幅に下方修正し、欧州の経済先行きを懸念したヨーロッパ各国をはじめとする世界の株式市場はこの数日間再び下落基調となっている。“でも、それは欧州中央委員会とＥＦＳＦ（欧州通貨準備機構）の問題よ。それに関してはあなたの気にすることではないわ。それよりも、というのもなんだけど……”端末越しの彼女の声がやや厳しくなる。“ギリシャでデモ現場で見つかったロシア製のアサルトライフルとランチャーの事なの”

「ああ、武器の横流しの件か…何かあったんですか？」男の眉が興味深そうに動き、それでいて周囲にいる現地下請け企業作業員の人間に聞かれぬようトレーラーの脇に入る。少なくとも彼はドイツ連邦共和国の軍人、政治や経済論争よりは軍事関連の情報の方がしっくりと耳に来る。“イタリアとスペインでもテロ予告があって、それは当局と現地警察が先に拘束したんだけど…そこでも、ね？”女の声がひどく深刻そうに聞こえる。“イタリアの方じゃ旧型の装甲車と化学兵器生産資料が発見されたの。旧ソビエトじゃなくて現在のロシア軍のよ”

「なるほど……相当拡散してるんですか…まあロシア軍の中にそう言う輩がいても不思議ではないですが…」男はそうつぶやき、防寒用コートのポケットに左手を突っ込んだまま数歩歩く。ただし彼の

内心は言葉のように穏やかではない、軍人である自分が動揺しているそぶりを見せないようにしているだけだ。「まあ中東やアフリカには相当ソ連時代の兵器が横流しされてますからね。奴らもそういう類の一つとしてみるのが妥当でしょうか」

“でも中東諸国には旧ソ連との政治的つながりがあったのよ。だからこそ国兵の兵器生産工廠が武装組織レベルで商品を売買できたの”「ええ、それは分かります」

“だからこそ、よ”女は一言一言探るように続ける。“おそらくこの件では、テロ組織や過激派集団とロシア軍の間にもう一クッション何かが絡んでいるに違いないわ。だからそちらでも何かあったら…すぐに連絡して”

「ええ、分かりました」彼もよく知りはしないが、東欧諸国における原子力発電所や工場地帯といったインフラ・経済開発の面でもフランス、ドイツをはじめとする西欧諸国とロシアの企業や官民集団同士が対立しているのは聞いたことがある。ロシアの企業の事だから、武装組織や工作員といったものを使ってこちらの妨害工作をしてくる可能性は十分に考えられる話だ。「引き続き施設周辺の警備関係者と共に周辺の警戒を続けます」“頼むわね”

携帯端末を切って間もなく、その韓国企業の関係者、すなわち企業技術者に扮した韓国国家安全保障局の人間が彼の元へとやって来る。

「すいません、これから現地の現場監督の方と一緒に格納容器付近の視察が入ってます。警備の方、よろしくお願いします」

「分かりました、こちらの方はご心配なく」ドイツ軍の男は腰に下げている拳銃と無線機を右手で確認する。「韓国の方もいろいろともめているようで…こちらの方はがっちりと固めましょう」

「いえいえ、…助かります」企業の技術者の作業着を着た韓国人はわずかに笑顔を彼に送り、すぐに現地の関係者らしき男数人と同じ

技術者らしき韓国人の女と共に、まだ骨組みしかない原子炉建屋の方へと歩いて行く。残った軍人は周囲の同僚に、2人がいた場所の方に回れと指で指示を送る。旧ソ連の廃工廠跡地に建築の進む原子力発電所、しかし彼の視界正面に広がる針葉樹林は、華やかな発展の背後に存在する企業や国の思惑を象徴する深い緑色に輝いていた。

苦悩のアメリカ合衆国　その１

２０１３年　２月１６日　カナダ　メトロ・バンクーバー郊外　リッチモンド市
３時１５分

深夜にもかかわらず中心市街地の超高層建築がクリスマスツリーの森を作り、目の前にある高速道路の市街灯、そこをまばらに走る自動車が光の大河を形成する。２４時間眠ることなき人間の市街地、今この瞬間も発電所はタービンを回し、宇宙の太陽光パネルを調整し、核分裂制御棒を上げたり下げたりする。高性能ロボットやハイテク電子機器を作る工場は、夜勤の作業員とオートフォーメーションシステムで稼働を続け、証券・金融企業のサーバーは昼の地域での株式や為替、資源の取引を休むことなく行い続ける。軍の施設では上空を通過する航空機のレーダー監視・識別を続け、船舶は自動航海をセットし、セキュリティーカメラと警備会社は、契約した大企業ほうしゃ、工場、公共施設、一般民家の監視をセンターで行い、旅客機や貨物機は自動操縦で雲をかき分けて飛び続けている。国家間のホットラインはこのような時間でも飛び交い、外交問題や経済問題の対応に追われているであろう。そして北米の２大国であるイギリス連邦カナダとアメリカ合衆国でさえ、いやまさに今、国家の科学技術経済戦略と軍事産業の方針を揺るがしかねない深刻な事態に陥っている。それは静かに、しかし確実に、一般市民に見えづらい場所で起こる。というより国家がそうさせているのだが。

　カナダへやってきている一行は、高速道路４１Ａ出口の料金所にある従業員用詰所に並べられたソファで毛玉のカーペットになって

いた。しかし周囲の人間たちはしきりに手持ちの無線機や情報端末を見つめ、時に鳴り響く電話の受話器を取り、入り口では人が出入りを繰り返している。その表情は一応に真剣さと疲れと眠気が入り混じっており、この状況が平常ではないという事を如実に物語っていた。

「眠れねえか……しかしもう3日もこの調子だからな。……どうしたことやら」毛玉の集合体を作る者の一匹、ブレイブ・クレイバーは前足で抱えた小さなイーブイのうつろな眼差しを見つめ、首元の栗色フサフサ毛を直してやる。「そんな事言ったって明るすぎるんだもん…暑いし眩しいし、こんな所で寝ろなんて無茶だよお…」ミオカは泣きつくように顔をブースターの首にあるフサフサ毛にうずめる。どうやら頭上に存在する白い光と、低いな唸りを発しながら温風を出す機器に耐えられないらしい。まだ１０歳にも満たぬ彼女の悲痛な声、兄貴分の彼には痛いほどわかった。３日連続でこんな異様に整った環境で寝かされる方が、慣れないポケモンにとっては苦痛だ、そしてミオカ・ソウヨウはまだ子供であるからしてそれに対する負担は相当である。「ミオカ……まあ、そうだよな…」ブレイブはイーブイの頭のはねっ毛を前足でトントンとたたく。「…よっしゃ、俺がどうにかなるかちょっくらちょっと絡んでみるか…」

「無理無理、明かりと空調機器を止めてくれなんて言ったところで怒られるだけよ」その中で一番元気そうなチェギョン、チルタリス種族は、韓国・ＬＧ電子社が開発したエメリア足型文字のプログラムを内蔵した携帯端末を右翼の先で操作している。「人間は明るくないと何もできないの。それに今は緊急事態でしょうに、いくらロボットとかセキュリティーシステムとか持ってても、最終的には２４時間見張る人がいなきゃダメなのよ」

「確かにそうだが…しかしなあギョンちゃん、こんままじゃミオカが眠くて動けなくなるぜ？」ブレイブは思わずチルタリスの方を見る。彼女の生い立ちが人間の金持ちであるがゆえ、“人間の立場に立った”分析を彼女はしているのだろうが、まさか小さい子が苦

しんでいるのにそれを出してくるとは信じられなかった。
「それは…そりゃそうだけどさあ…それで関わり合いになった所で成功する可能性あんの？」チェギョンは徒歩にしてソファの上数歩分を一回軽く飛んで彼の前により、右の翼で再び端末のキーを叩く。「ミオカ、私のモフモフで寝る？」彼女は華奢な首の先にある頭部で自分の閉じた左翼を示した。「とっても寝心地いいわよ、たぶん。何せレディーの傑作だもんね」「え……はい…ありがとうございます……ふはあ…」「でしょでしょ？！この道１０年念入りにお手入れした置いたことあったわよ、マジ最高なんだけど！」眠気でぼんやりしているかせいかは不明だが、ミオカはおとなしくチルタリスの左翼に歩み寄り、小さな頭を彼女のモフモフの中に埋める。「ね、ブレイブ？目上相手にケンカ売るより、堅実な事をした方が気も楽だし、余計なトラブルにならないのよ」彼女は得意げにブースターの方を見、右の翼で頭のひらひらを一回伸ばしてからまた端末を手に取る。「トラブルになんねえって…まあギョンは人間と暮らしてるからそうかもしんないけどよ…」ブレイブは右前足で目を軽くこすり、端末に向かい続ける彼女を呆れたように見つめる。左側の翼にイーブイの頭を乗せているにもかかわらず、右翼と視線は端末、よくもまあ器用な芸当ができるもんだ。人間というのは同時に３つくらいこなせるのだろうか？「なあチェギョン、その端末見てて眠くなんないのか？」「…え？いや全然、うん……ったく…今どこにいるって？…家系が家系なんだからさあ…ウネだって知ってるでしょうに…」

「おい…お前って奴は…」ブースターは返事も曖昧な彼女の携帯端末を右前足でひったくる。「ちょ、ちょまってよ何いきなり…」「顔ぐらい見て話せって。お前は人間か？」彼はつっけどんな口調で彼女の翼の脇でウトウトしているイーブイに顎をしゃくる。「そ

れにな、チビがそばにいる時くらいそいつの面倒見るのが常識だろ？いつからお前は仕事優先の人間型ポケモンに成り下がった？」

「成り下がったって…別にミオカを振り払ったわけでもあるまいし…てかそれ壊したら…」ロックオンにかつて言われた事と同様だ、戸惑いを覚えながらもチェギョンは右の翼をを伸ばし、ブレイブの右前足に握られた自分の携帯端末を取り返そうとする。「壊したらやばい？ヒュンと一緒だったときは取り替えりゃいいって言ってなかったか？へへっ、そんなら俺がギョンちゃんの温もりいっぱいのこれ、抱っこして潰そうかと思ったが、返してやらんといかんな……」

「い、いや…それは言い訳、方便なのに…」彼は顔を赤くするチルタリスの右翼に端末を握らせ、その上から自分の前足を重ねた。表情も一気に厳しく、諭すような口調になる「いいか、今やってることとそれを結びつける出来事ってもんには自分で作った責任があるんだよ。都合で理由を取っ替えんな……」「……そりゃ…あんま…」「…ったく、これだから金持ちの子息は退化してるって言われんだ……そんな事で内輪もめしてたら人間の思うつぼだぜ」ブースターは左前足で頭のフサフサをかきむしる。金持ちを責めるつもりはないが、金がある、もしくはいい暮らしをしてる奴はこういう何かが抜け落ちている、過酷な環境に順応し、それを受け入れて精一杯生きるポケモンの文明が持つ、恥ずかしい言葉で言えば繋がりというか共助というか、そんなものだ。そういう説教は大嫌いだが、彼にとってそれをおろそかにする相手はどうも放っておけなかった。「…どうしたんだそれは？そんな顔をしてたってポケモンはやめられないんだぜ？」「……」

「……何だへこんだのかよ？…ああ…わりいわりい、図星だった…」彼はチルタリスの右の翼と共ににぎった彼女の携帯端末から右前足をはなし、妙な違和感を覚えるほどふわふわする速成ベットに体を落とす。以外とチェギョン・カリワザキという彼女は、普段のテンション以上に傷つきやすい女のようだった。「…お前の左の翼に温

もりを感じるだろ?押し付けるつもりはねえけど、せめてそこに気を送れるくらいゆとりを持って暮らせや」「……うん…」

自分でも完璧にはわからないが、だいぶ彼女の痛い場所をついてしまったらしい、ブレイブ・クレイバーはちょっとした得意げといい過ぎたことに対する後悔が入り混じった感情を覚えながらもさらに続ける。「……ま、俺たちにとっちゃ多様性があったほうがいいけどな。いまどきの人間に近い背かつ、それも選択肢の一つとは言えるがよ…」

ややあって、チェギョンは吹っ切れたかのように大きく白い翼を伸ばし、水色の首と頭部をソファの上にバタンと倒す。「あーあ、まーさかアンタに説教されるとはね、テルリンが良く喰らってるあれ、まさか私にまで…」彼女は携帯端末を自分のわきに置き、左の翼辺りに頭をつけているイーブイの方をちらりと眺める。ミオカはまだ１０歳いかないせいもあるが、眠っている時の表情は本当に安心しきった安らかな表情だ。チルタリスの意識の水晶に、その温もりを通じて心地の良い空気が入ってくる。「……彼女には…この子が大きくなった時の世界は…もう少し過ごしやすくなってればいいんだけど」

「おお、俺の世界はいまだにギョンちゃんのモフモフで天国…」彼女の右翼に突如として重みがかかる、大見得切って爆睡していたはずのオオタチがいつの間にか彼女の翼に頭を乗っけていたのだ。「エンデバー…お前起きてたのかよ?」「いっちばん寝入りが早いと思ったら…まさか私の…」

「そうだ、そうだっての。……やばい気持ち良さだ…このままチェギョンと結婚しちまいたい…」寝言かそれとも本気の冗談か、エンデバーはもごもごとチルタリスのモフモフを前足でつかむ、チェギョンの翼が抱き枕のようだ。「ちょ、ちょっとアンタ?!離して離

してよ…」顔を真っ赤にしながらチェギョンは右の翼を慌てて振り、オオタチの前足から引き抜く。その勢いで左側の翼にもたれかかっていたミオカがもぞもぞと動き、オオタチの後ろで寝ていたグラシデアも起こしてしまった。「ったくもう…あ、チェギョンか…どうしたのいきなり?」「ご、ごめんねグラシ!ちょっとさ…」「ねえねえ…エンデバーさんかブレイブか(「俺かよ?!」びくんとしたようにブレイブは彼女を見た)誰だか知らないけど…夜くらいはおとなしくしてよ…眠りは命に直結よ…」彼女は分と鼻を鳴らし、腰にぶらさっげっぱなしの太刀を鳴らしながら再び仰向けになる。どうやら彼女は酢民を邪魔されるのがひどく癪に障る性格らしい。「う、うんん!…ちょっとこのエロ男が…」無理な愛想笑いでモココに釈明するチルタリス、彼の残した栗色の毛か白いモフモフに点々と付着、彼女には気持ち悪い以外になかった。「ああーマッジ汚い!何これなんだけど……」

「何だ、やっぱチェギョンはお嬢様か…どれどれ…」「い、いいよいいよ!私自分でやるか…ひいいっ?!」調子に乗ったかは不明だが、エンデバーは右前足でチェギョンの右翼についた自分の毛を優しく、いや妙に甘ったるく落とし始める。彼女の背筋に恐怖と絶望の寒気が走った。何年間も手入れし、洗い、自慢してきた種族と一族伝統のモフモフ翼が何とこんなオスに……「ああーーーもう!私もう止める!種族止めますよお!」

「な、何をそんなに過剰反応を……ああ、ああ……そうか悪かったよ」オオタチはやり過ぎた、といった表情をあらわにし、彼女のモフモフ翼から自分の毛を素早く落とす。「種族的には大事だったなこの毛は。親からもらったんなら一生もんだぜ」

「え、ま、まあ……」チェギョンは恥ずかしそうに顔を赤らめ、自分のくちばしで翼のモフモフをきれいにする。まさか彼にまでこんな事を言われるとは思わなかった。「あとなあ、このちびっ子…ミオカって言ったな」「うん…」「彼女が育つ世界は、ちょうど俺たちが作った後になるか…」エンデバーはチルタリスの左翼でもう眠

りに落ちているイーブイの方にゆっくりと寄り、左前足で彼女の頭の毛を撫でる。ミオカの温もりがかすかに伝わる左前足の先、彼女の未来を思うと、エンデバー・リシャトルの意識の水晶に強い感情の気体が奥底から湧き上がってくる。「ちょ…え…エンデバー、そんなに深く考える事じゃないって…」

「いーや、俺はガチで、てかチェギョンは考えたことねえのかよ…」オオタチは体をわずかに動かし、詰所の曇り切った窓ガラスの外を見る。停止している警察車両の警戒灯と警察官が着用している作業用ベストの発光ライトだけは辛うじて見えるが、それ以上の細かい市街地方向の様子や、ましてや最新鋭のセキュリティーシステムである警備用自動ロボットが見えるはずもない、しかし彼が見つめているのはそれらではない、外にある物体ではなかった。エンデバーが見つめているのは、暗やみという意識の宇宙が流れていく先の時間だ。生い立ちがどうかは…ブレイブに聞いてはいないがいやな予感がする…不明だが、せめて今は安らかな安息というこの上ない幸せに体を浸していると思われるミオカを見ているうちに生まれたこの感情、それは昔から彼が秘めた、誰にも言い出せない本音である。その恐れの核にある物、自分でも認めたくはない、弱い物を自分で認めたくない、周りに知られたくないがゆえの。

しかし、それがあるからこそ、それを構成する周りに固められた思いが、彼の性格を作り、印象を作り出す。だからこそブレイブたちの友人であり、そしてニュークリア地域に移った後にアメリカ陸軍のポケモン部隊に入ったのだ。「俺はな…確かにこいつに似てバカだ、それに頭もこのレベル。だからこそ笑って済ませんだが…」「バカ、お前自分で認めんなよ……ま、全部ホントだけどな…」ブースターの右前足がオオタチの頭に突っ込みを入れる、とはいっても表情は至って明るい物だ。それもそのはず、ブレイブ・クレイバーにとってエンデバー・リシャトルは無二の友人、お互いの性を知り尽くしているからこそ言えるバカの極値である。「すなわち…」オオタチの表情が真面目になり、彼の右前足が眠っているイーブイの

頭の毛をそっと撫でた。「…俺らはポケモンだ。その場の金によだれ垂らす訳にはいかない、人間の広大な栄光を俺たちの手に少しでも渡す、それが現世代の使命だと俺は信じる……」

「栄光を…渡す?」チェギョンは軽く瞬きしてオオタチの方を見る。やはり彼はこのブースターと同じ饒舌な奴のようだが、ブレイブとまた違う、どころかかなり違うニュアンスで生きているようだ。「ああ、人間の文明は多くの栄光をこの地球に注いだ。だからそこから少しでも…俺らと文明を守るために、な?」

「おいおい、お前何言ってんだ?俺らんためとはいえ、あんな連中と手を組むのか?さすがにそれは……」ブースターの方はさらに度肝を抜かれた、といった表情で耳と尻尾が立ち上がる。無類の友人の一匹だった、いや今でもそうであろう彼がこんな事になるとは、背筋に感じる温度が突然変わったような気がした。「……あ、いや…お前がアメリカ軍に入っている以上な、人間に対して感情が変わるのも…俺もそうだが…でもよ…」

詰所のドアがあわただしく開き、緊迫した面持ちの人間が数人入ってくる。「いつまで寝てんだバカども、連中がお出ましだぜ」

「うおっし、待ってましたぜ連中!俺らも一仕事させてもらうッすよ!……」ブレイブがソファを組み合わせたベットを飛び降り、そこらに転がっている自分のプロテクターを前足でひっつかむ。寝起きという物は体温が上がっていない、血液循環が低下しているという点からしてこれは常識であるが、中世の人間の兵士を彷彿させる金属製のプロテクター（というより鎧(よろい)の一種か）のひもを締める彼は、自分のテンションで体の節々から体全体が急激に熱くなっていくのを感じる。「来た来た……いよいよ俺の時代が来たんだぜ……」

「な、何をそんなに興奮してんのよ?まさかこのために起きてんのアンタ…」

「あったり！他に何にもねえんだよギョンちゃん！」恐ろしい、いや思わず後ずさりしたくなるほどの熱の入ったオーラを放つ彼が、チルタリスの頭飾りを右前足でばさっと弾き飛ばす。「バカ、勢いでやるからアンタはテルルちゃんにエロいって…」「そんな細かい事は全部後回し！行くぜミオカ！」「え？ああ…うん…ぎゅ？！」右前足で目をこするイーブイをブースターは無理やり抱き上げ、自分の背中に乗せる。「いよいよ俺らの時間がやってきやがったぜエンデバー！８年ぶりのタッグ、俺の実力を見て驚くなよ！」

「ああ、期待してるぜブレイブ！ちまたの唯一王の称号を見せてくれよな」ブレイブとエンデバーの右前足の拳がガツンとぶつかる。冷静にブースターのテンションを受け止めってやっているかの如く見えたオオタチだったが、その１秒後には彼もテンションで空中に一回飛び上がった。「うおっし！きやがったぜこの展開！」体中の筋肉が張りあがり、血液を流れる粒子が爆発的に増える、もはや彼も自分の感情を抑える事ができないどころか、今やそれに身を任せて走り出しそうになった。「これ以上言葉はいらんな！突撃っ！」

「きた！チェギョンも突撃するぜおらあっ！！」「ちょま、ちょっと待って…」防弾版と頭部保護ヘルメットの紐も締め終わっていないチェギョン、ブレイブに引きずられるように詰所の開いたドアの方へと運ばれていく。

「ってのはノリだ…あいつは興奮するとやばい事も平気でするからな…」チルタリスを強引に連れだす、一歩彼女の表情から間違えれば誘拐しているように見えるブースターの後姿をオオタチはあきれ顔で見守る。北アメリカに住むポケモン集落の探検隊の装備品をモチーフにした、これまた中世ヨーロッパを彷彿させる頭部保護用ヘルメットの紐を締めながらも、彼の後姿が頼もしく見えてしまうのはやはり彼との付き合いの長さ、改めてエンデバーは実感した。「

あ、そうそう…あいつは足だけは速いからな…ヒュンほど突っ込むタイプじゃねえけど……」彼は勢いに白けながらも準備をしているグラシデアのヘルメットをかぶせてやり、ひもを締め始める。

「あ、あの…いいです…すいません」「遠慮はいらねえって…もらった愛想はありがたく受け取っとくほど運のいいこたあ見つからないな…」気恥ずかしさに思わずお城に倒れそうになった彼女、オオタチは彼女の左の頬を軽く右手で叩く。「…グラシデアの親父さんのこと考えりゃくたばるわけにはいかねえだろ?ド派手に、なおかつ繊細に、さらに手早く、成功っつーむくげの花をさかせようぜ」

「え…まあ、そうですよね」モココは右足の蔦で編んだ保護靴を締め直す。相変わらずこのオオタチ種族は、初見にもかかわらず自分の興味を持っているのか、それとも本当の優しさからか、はたまた…彼の言うとおりバストークに会ったのか?父親の事をとやかく言われるのが一番嫌いな彼女ではあったが、なぜかエンデバーにこの話をされても不快に感じない自分に気付いた。「……ここでは死にませんよ。てか軍隊というより…探検隊に近い感じがしますから。……え、よろしくお願いしますって事で」

「まあ確かにそう見えるわな俺から見ても。国連にアメリカと微妙な立場で大変だが、ともかく頑張ろうぜ。…あ、おいグラシデア…」2匹の後に続くために小走りにドアへと向かうモココ、ふとエンデバーが左前足でソファのそばに転がる物体を引っ掴み、彼女の背中をつつく。「……ん?」「君の命だろ?…この感じだと父さんからもらった感じだな…」彼は彼女の太刀を少し見つめ、モココの腰の紐にそれを挿し込む。「年齢からして関係には悩み時だが……拾った縁は大切にしとけよ…腐ってもな」

「……はい…ですよね…」グラシデアは彼に手渡された太刀の紐を締め直す、恥ずかしさに似た感情の思わずオオタチから視線を離してしまったが、同時にエンデバーに対する感情の中に、数日前にロックオンに感じたものと同じあれ(・・)を抱いている自分に気付いた。それを結び付ける何か、父親のバストークの事のようにも感

じられるが、今の彼女、グラシデア・アマルフィ・ホルストにそこまでは思いつかなかった。

先に飛び出したブレイブとチェギョンだったが、高速道路の料金所の広い合流車線の手前で人間たちに制止された。「すでに実行犯の車両は警察車両によっておびき寄せられている、ここの出口に放り込んで袋叩きだ」手に対戦車ライフルを持った警察官は背後に停止し、壁を作り上げている警察車両を指差す。王立カナダ連邦警察（ＲＣＭＰ）特殊鎮圧部隊の人間たち、グレーのヘルメットと防弾装備、米国・ＩＴＴ社のＡＮ／ＰＶＳ－１４暗視装置を装着し、手には自動小銃という軍隊同然の一行の背後には、不気味な赤い光を４方向に放つクモに似た黒い影が複数見える。これこそがｉｒｏｂｏｔ社の誇る軍事用セキュリティーロボット、ここにいるのは一世代前の物ではあるが、最新機種の出た流出した企業が自社の情報漏えいを阻止すべく送り込んだ、潜入破壊工作、テロ阻止、ポケモン制圧…制圧という名の抹殺…用に製造された最新素材、超高性能モータ、大容量エネルギーバッテリ、複合電波探知・交信装置、制御システムといった工業技術の塊である。

「何だよ全く……ここに来たのはガチでやり合うためじゃねえのか…」情報機器で連携を取りながら逃げ場を摘み取り、最新技術で駆逐、全く持って人間らしい戦法にブレイブの高ぶっていた鼓動は少ししぼんだ。すべてを掴まれているおびき寄せとはいえ、相手の方も自動車という機械で全力をもって突破しようとしている、それなら一対一の比率で正面から決着をつけるのが争いってもんじゃないのか、じれったさの余り彼は右前足を踏み鳴らす。「…で、この国の経済界と政界がこんな大がかりな事までしてとっちめる連中、いつくるんすか？」

「もうくる…無線機がもう出口に入れたって言ってるぜ…」警察官

の男の声がやや引き締まり、広い料金所出口の先にある、車両の壁の間際へと駆け出す。それに呼応するように特殊部隊の人間が彼の同じようにライフルを構え、巨大なロボットゆっくりと人間たちの前２５メートルほどに出る。「おいおい、車両に轢かれるか、さもなきゃロボットに蜂の巣だぞ？お前らも例の位置に構えな……いっちょまえに無線機付けてるくせに…指示聞こえてねえのかい…」

「あ？誰が言ってるんだおい？」「あのねえブレイブ、アンタの耳にくっつけてる無線機から流れてんのよ、常識でしょ？」チェギョンがあきれ果てた表情をし、モフモフ翼で彼の正面から耳を示す。

「おお、これかこれか…サンクス…」やっぱり自分に人間の機械は似合わない、ブースターはそういう思いで右前足をつかって無線機を強く耳に当てる。「はいはい…なんて言ってるの人間の親玉？偉いんだったら遠くの建物にいるんじゃねえぞ…」

「あ、……下がったほうがいいよブレイブ」チルタリスが不安げな表情で彼の背中をつつく。女の子のおの字が聞こえただけでフサフサ尻尾が上がるくせに、こういう事になぜここまで彼は気づかないのだろうか？「…あ？」「だから！」彼女は慌てて背後に飛び上がった。もう待っていられない、それが来るのに１０秒ない。「……もうくるんだよ…警察車両は実行犯を連れてくるのよ……」

やばい…このままじゃ彼轢かれるんじゃないのか、目の間に迫る光がちらりと見えたその直後、チェギョンの意識の中でそれを吹き飛ばすほどの衝撃が走り、冷たい感覚が背中からモフモフの翼へ、そして尾羽にまで広がっていく。そう、来たのは潰すべき目標、潰すべき目標であるという事は…自分が出るチャンス……

次の瞬間、チルタリスの思考からあらゆる同情や現況に対する感情が吹き飛び、抵抗する間もなく水晶の底から吹き上がった気味の悪い熱源に全てを飲み込まれた。今までの自分が…今までの自分は役

に立つのか…これでダメだったら、というよりこのままダメでいるわけにはいかない！恐怖と焦りが交じった感情が彼女の意識をマヒさせ始めた。

“１１号車、間もなく料金所にかかる…”“７号車、４番を通過して左に切れ。特殊部隊とセキュリティーロボットの車線に入るなよ”その無線が彼の無線機を通じ、彼の聴覚神経を光速で通り抜け、ブレイブ・クレイバーの思考としてインプットされる前に、その前にまばゆい光が料金所の背後に現れ、それはわずか数秒で威嚇的な、そして危険を覚えるほどのヘッドライトとなる。「やべっ！！！」

「撃て撃て撃て！」初めてこの張りつめた空気の意味が分かり、その存在に気付いた、ほんのわずかな衝撃と喩えが見当たらないほどの緊張の中、複数の車両という人間の機械に追いかけられるブレイブは、左に身をひねって後ろへと駆け出す。そのあとの０．５秒の間は特殊部隊のライフルのトリガーが引かれる音が聞こえるかどうか、わずかに音がした次の瞬間には、赤青灯を回転させる壁から鋭いオレンジ色の針が車両に向かって飛び掛かった。同じように赤青灯を回転させるカナダＲＣＭＰ保有車両のシボレー・カプリスＰＰＶが左右に散り、後ろまで下がりきることのできないブースター種族の左右２メートルをドリフトしながら急停止する。警察車両に誘導されてきた日本・トヨタグループ傘下、レクサス社のセダンは、正面にから飛んでくる実弾とロボットの巨大な影にひるんだのかどうか、ブレーキが遅れたせいかわずかに車体を右に滑らせながら車列に突っ込み、轟音が周囲に響き渡る。飛び散るガラス片、ブースター種族は後転をうって飛び上がり、脇にいる警察車両の上へと飛び上がった。「機械頼みでびくつくかと思ったがよ…案外荒っぽいな…っ？！」軽く息を吐き出し、跳ねあがりかけた心臓の鼓動にワンテンポを作るブースター。直後に彼の目線の先に、彼がどこかで

期待していた光景が飛び込んできた。米・ＩＴＴ社のＡＮ／ＰＶＳ－１４暗視装置は結局必要があったのかなかったのか、データが漏えいしたｉｒｏｂｏｔ社が送り込んだセキュリティー・治安維持用ＳＰＤロボットが４つのクローラーで素早く車両の左側に回り込み、１キロ先のソイ・ビーンズ１粒を打ち抜く正確さで機関砲弾を１発ずつ発砲し、４つのタイヤを使用不能にした。続いて前部左側ドアの窓ガラスをポケモン制圧用機関砲の脇に内蔵された、工作作業の高周波ブレードが叩き割る。波長統合物体識別センサシステムが影やスリットからドアの形状、可動部分を把握し、胴体の脇から超高硬度ロボットアーム・クローが正確に接続部分を切断して、製造過程でドアを自動工作機械が装着するまったく逆の形で手前に引っこ抜く。二重６連装機関砲の銃身とレドームが車内に突きだし、乗っていた４人の人間が見えなくなるほど催涙気体が機関砲脇の射出口から噴き出された。ここまでわずか６秒、他の窓ガラスも警察特殊部隊の人間に叩き割られ、アサルトライフルの銃身がそれぞれの鼻先数センチに迫る。「投降せよ、抵抗してもここに退路はない」「……」乗員の返答を待つ間もなく、ロボットが数メートル後ろに素早く下がり、だだっ広い穴となった車両の左後ろに警察官が殺到した。威嚇するような複合センサの薄暗い赤色の光を発するロボット、周辺の状況やアルゴリズムが味方と識別した人間の行動と目標の状況を分析、内蔵されたプログラムの判断で自分の行うべき動作を判断する。一見すれば簡単そうだが、支援者、目標物、自機の状況、周囲の状況、行動計画全般の進展を同時に判断し、行動するという複雑なネットワーク連動プログラムが完成するまでにｉｒｏｂｏｔ社やその他の大手ロボット企業がかけた予算は並大抵のものではない。計算速度の向上はもちろん、その回路の小型化、それに対応できるだけの制御機器と駆動装置、それを確実に維持するネットワーク端末と保安装置、システムの稼働を保証する電源などすべての要素がこれのために検討される必要があるためだ。

しかしその直後、割られた窓ガラスや外されたドアの隙間を縫い、小さな影が警察官の人間の脇をすり抜けていく。人間たちが肩や腹にわずかな衝撃を感じた直後には、その生物は足元をすり抜け、壁となっていたはずの警察車両の隙間を楽々と通り抜けていく。“おい獣！そいつらをぶっ叩け！”無線機から聞こえてくる小隊長の英語が聞こえる。カナダの西海岸地域は英語、ケベックをはじめとするカナダの東側はフランス語であるが、どうやらこの人間の男は西海岸の人間のようだ。「了解しましたぜおっさん！」無線機越しに返答するや否や、ブースター種族の体温は、体感する温度は急上昇した。ついに来た、ついに自分たちの活躍する時が来た、久々に全開で飛び掛かれるというテンションに体が一瞬震え、車両の飛び移った方とは反対側へと飛び降りる。「いっくぜギョンちゃん…って？！」彼が左を振り向いた瞬間、そこにあったのはチェギョンの水色と白いモフモフではなく、アスファルトと飛び散ったプリズム光を反射する窓ガラスだけである。「おいエンデバー、あいつはどうした？！」「あっちだよ！ったく手が早いなあいつ…ってわけじゃねえのか」ブースターの後ろから駆け寄ったオオタチが右前足で示す向こう側、彼の前足は衝撃と困惑で震えていた。「バカが…1対5はさすがに……」その方向を確認した瞬間、ブレイブ・クレイバーの意識の中でその要因が何であるか、瞬間的に理解し、理解した感覚はすぐに戸惑いと不安に変質する。彼女が何を焦っているのか、何に駆られたのか、首周りのフサフサ毛が周囲の気温を超えて冷たくなるようだ。

「エンデバー、グラシ、行くぜおい！」ブースターの前進の筋肉が痙攣を起こしたように突っ張り、次の瞬間には漏斗状に狭まる高速道路のアスファルトを蹴っていた。「な、何が…」「早く来い！さもなきゃ……」オオタチが聞く間もなく彼は遠ざかっていく。しかし1秒後には、友人としてのカン、エンデバー・リシャトルの判断

に迷いはなかった。彼がここまで焦る、おそらくはあのチルタリスの精神上にとんでもない物があるに違いない、そういう周囲にいる同僚の感情をあのブースターは見逃すはずがないからだ。

「やるぞグラシデア！チェギョンは恐らく……あれだ！」「そ、そうだよね！確かに彼女はそうなのよ！」グラシデア・ホルストにも何の事だか瞬時に判断がつく、チェギョンは自分の事がもどかしかった、この数か月間自分がどうあるべきか分からず苦しんでいた彼女、それを見つけたい、自分がどの道を歩んでいるのかを確認したい、その思いが先走りという形になって出たのだ。「うん、行こ！」

「もちろんだ！」２匹は壁と化した人間の車両の隙間を潜り抜け、高速道路を（特にモココは無理に４本足姿勢で）走った。

走るスピードに差はないのか、だいたい横一列になって逃げ散るポケモン達、チルタリスは上空から一気に回りこんだ。「そうそう…私…私は…」目の前の視界がぼやけるほど力が入った自分の翼、チェギョン・カリワザキの意識の水晶は制御不能なほどのエネルギーを内部の原子炉（リアクター）から発生させている。それは彼女の進むべき、そう信じたい道であり、それが見つからない悲しさと焦りから生まれたある種の自分自身に対する怒りである。

前に出た、そう判断したチルタリスは鋭くターンをかける。高速道路の市街灯のお陰か視界はそれなりだが、今の彼女にそんなものは必要なかった。彼女を突き動かすのは絶対に周りの足を引っ張らないというチェギョン・カリワザキのプライドが３割、任務というのが２割、残りの５０パーセントは自分の感情と突き動かされてという、チェギョン・カリワザキらしい衝動的な感情であった。「くっらえええっ！！」彼女の口元から発射された“りゅうのはどう”、このチルタリスは言うまでもなくポケモンであるからにして、この行為に何の違和感も特別な感覚も感じない。しかし一つだけ違う物

があった、自分の感覚、自分の意識である。寸刻の後には彼女の意識の水晶は単一の物に満たされ、目の前に影を成す5つの物体が火花となって気体とチルタリスの意識を暴走させる。韓国にある旧李氏朝鮮王朝に仕えてきた27代目カリワザキ一家の中で最も末っ子として、代々そうであったように、兄たちが数少ない文明の残る地域（エメリア自治協会には含まれない）の自警集団のリーダーとして訓練を積む姿にあこがれ、同じようにソウル周辺にある集落の警備部隊の一員になった。27代目唯一の女（メス）ではあったが兄と同じ血を持つお陰か、メスであるが故に一族継承の義務もない彼女はやがて大韓民国空軍のひこうポケモン部隊に入り、ついには国連統合空軍の同様の部隊を経由してこの半分軍隊、半分生命研究機関のチームに放り込まれた。最初のうちは何とも感じなかった、自分のやり方で何とかなると、自分の爛漫な生き方なら怖い物はないと思った。それが…そのはずが…この半年近い歳月、チルタリスの中に会った絶対的な自信、自分の生き方に対する好意、現実と間の前の空気を存分に吸い込む喜び、その全ては彼女が待難以上の圧倒的な世界の痛み、苦しみ、涙の前に傷つき、もがき、今まさに彼女という城壁は崩れ落ちかけている。

「っっ！！」体中に集めた体内のエネルギーが口元で強烈な熱となり、1秒後には直進する青白いエネルギー体となって下に広がるアスファルトをぶっ飛ばす。自分のやり方が通用しない、それは分かっていた。

一発目ははずれ、それにさえ彼女は気づかない。反撃とばかりに正面から飛んでくるエネルギー体を、上に上がり、下にかいくぐり、ループを打ち、あらんかぎりのエネルギーを前進から引き出し、彼女は真下へと打ち込んだ。前方から飛んでくる電気エネルギーと交錯し、小さな火球と爆風を引き起こす。何発当たって何発外したか、

そんな事は今の彼女には関係ない、まだ一匹も倒れこんでいないのだけが事実と、暗闇に浮かぶ影とうすぼんやりしてきた意識の中でそう判断した。そのうちに“りゅうのいぶき”だか“りゅうのはどう”だかその区別がつかなくなり、勢いと体力に任せてまでエネルギーを乱射している自分がいた。「ううっ…この…この…バカああああっ!!!??」彼女の小さな丸く黒い瞳に水滴が浮かび上がり、身をひるがえして上から仕掛けるたびにそれが飛び散る。「うぐっ?!こんのおおおおおお!!」脳天を貫くような痺れと痛みが彼女の神経を走る、彼女の視界に飛び込んできたのは真下にいる小さな影。次の瞬間に彼女の意識の水晶の気体がまたしても水晶外部に噴出し、感情を超えた感覚に支配された彼女は上空から逆さ落としを仕掛けた。

感情の制御すらままならぬ、自分の理解できぬ怒り、自分の根拠の見当たらない悲しさ、ただひとつわかるのはそれが自分という今までの存在自体への惜別の情であるということだった。うぬぼれている自分が腹立たしい、世の中という物はままならない、常に目上の都合で動く、小さい頃だろうか母親に命令されていやいや読んだ人間の文学書を思い出した。チェギョン・ナンソーマ・カリワザキはそれだけの教養は学んできた、その意味も理解できる、だからこそ、それが故に手放したくないものがあり、それもダメならせめて…せめて…できるうちには…自分を信じたかった。

「おいおいおい!?出過ぎだ!」彼女の上空からのアタックに後ろへと飛び退く連中、ブースターがそれを見逃すはずがなかった。（…バカしやがって…持ちこたえろよ…）彼女の感情がブレイブ・ク

レイバーに理解できないはずがない、しかしそれに任せていては取り返しのつかない事態になる、先ほどまでのハイテンションは雲散霧消し、チルタリスの無事を気遣う息苦しいほどの切ない思いで彼の意識を満たす。

「くっそ…俺夜は嫌いなんだよ…」鳥目がちの目に加えて眩しすぎる市街地の市街灯のせいで、目の前にいるであろう連中の影はほとんど見えない、チルタリスの方に時折飛んでいく黄色や赤のエネルギー体を頼りにブースターは上に飛び上がる。「エンデバー、下をぶっ飛ばしてやれ!」「いつものか?」「ああ、俺が派手に…」オオタチが素早さに任せて飛び込んでいくのを脇目で確認し、彼は肺一杯に空気を吸こんだ。肺の脇にある器官で四酸化窒素とヒドラジンが合成され、口元いっぱいにその燃焼気体の温度を感じる。「行けえええっ!!」ブースターが放った“かえんほうしゃ”は比較的固まっていた5匹のほぼ中心部を直撃し、2，3匹にはダメージを与えたようだ。「おっし!ぶっ叩くぜ言われた通り!」「まかせろ!」口から吹いた火炎の反動である程度上に飛び上がった後、前転を打って着地したブースター種族の脇からオオタチ種族が飛び込む。このタイミングが分かるのも、お互いのスピードと動きのパターンを4本足から尻尾のフサフサまで染み入るほど熟知しているブレイブ・クレイバーとエンデバー・リシャトルのコンビだからである。「こんの野郎!」「ぐえっ?!」相手のモウカザル種族に飛び掛かったオオタチは全くすきを作ることなく“いわくだき”を4連発して相手をぶっ飛ばす。しかしこの程度で相手もくたばるとは思えず、案の定相手は長いしっぽと両手足をうまく使って、市街灯の柱を真横を向いた踏み台にしてこちらへと飛び掛かってくる。「こいつっ!!」「ぅちっ!」奴の放った“だいもんじ”がオオタチの長いしっぽをかする。ちょっとばかし火傷になったようだが、彼は全くひるむ様子もなく後転をうって、カナダの高速道路の中央分離帯へ飛び下がり、ワンテンポおいてから低姿勢で相手に突っ込む。「頭を押さえろ!」「おうよ!」モウカザルの放つ“マッハパンチ”2発

をオオタチはすいすいとかわし、足元をすくう事を警戒した相手が上に飛び上がる。その直後に相手の頭上をかすめる“かえんほうしゃ”、モウカザルは慌てたように姿勢を屈め、そのまま後転する体制に移った。これだ、この瞬間を待っていた、オオタチは着地する寸前に相手を両前足で掴み、渾身の一撃でアスファルトに叩き落とした。「ぐえっ？！」「決める！」落ちた衝撃で弾み上がった相手に容赦はしない、彼は勢いで飛び上がった体を丸め、長大な尻尾で“アイアンテール”をそいつの腹にぶち込んだ。これがとどめの一撃、モウカザルは背中から地面に叩きつけられ、頭も強くアスファルトに打ってそのまま動かなくなった。わずかに周囲に広がる血液、死んでいてもいなくてもどちらでもいい。とにかく動きを止めればポケモン同士の戦いは勝ちであり、そのあと捕虜になるか、フラフラになって逃げかえるか、はたまたその場で死ぬか、戦士同士の戦いの場合は労わるだけでそれ以上の助けには入らない、逆を返せば不必要な殺傷はしない。一般的に集落や個人間で行われる“バトル”に至っては相手に大けがをさせないよう打ち所が決まっているほどだ。

彼の後ろから走り寄るブースター種族、一言でも声をかけておかない時が済まないようだ。「やるなあエンデバー、お前は結構ひょろい方だったが…“かいりき”でくるとは…」「ありがとうよブレイブ、俺だってこういう組織に入ってりゃあ…おい後ろ！」「な……ったく？！…」「わわっ？！」ブースターが振り返るも間のなくフサフサ尻尾に飛び掛かってくる別の相手、ブースターの方も一気に姿勢を返して応戦に出るが相手の方が一歩先行している。「うえっ！」飛んできた“かみなり”の電撃波、誰が撃ったのかは知らないが別の黒っぽいエネルギーがその電撃の一部を裂いたものの、彼は後方にぶっ飛ばされ、背中にいたイーブイも飛ばされる。「大丈夫かいミオカ？」「え、うん、はい…何とか」転げ落ちたイーブイを抱きかかえたのはオオタチだった。どうやら彼の背中から電撃に向かって何かを打ちだしたのは彼女らしい。「“シャドーボール”か

…面白い物を持ってるんだ」「え、何ですかそれ？」「そ、そうか……まあもう少しあれが必要だが…それより行くぞ！しっかり掴まってろよ……」イーブイを背中に回し、感覚だけでそれを確認したオオタチはモココの方に走り出す。背中の軽さ、こんなあどけない子供をなぜあいつが連れているのか気になるところだが、ともかく今は目の前の彼女を助ける必要がある。

しかしその直後、突き飛ばされた彼の背後から別の電気エネルギーが相手に飛び掛かり、矢継ぎ早にしようとしていたそいつの動きを一瞬止めた。「大丈夫？仲良しなのはそりゃあ……わわっ？！」「お、おいエンデバー、グラシに回せ！」「分かった！」どうやら助けてくれたのはグラシデア、しかし当の彼女も飛び掛かってきたヒヤップ“みずでっぽう”を回避しそこね、股の部分を水圧ですくわれて前に転倒する。ただし、モココが作った一瞬のタイミングは決して無駄ではない。相手はピカチュウ種族であって効果のほどはそれほどでないにしても、そのわずかのタイミングもずれがバトルでは雌雄を決める。そのほんの０．５秒の隙にブースターは後転をうって後ろに飛び下がり後ろ足２本と腰回りの肉をばねにして前に飛び出す。「喰らええええっ！」彼の赤熱化した右前足から飛び出した快心の一撃、ハイドル地域での戦闘経験で強引に獲得した“ほのおのパンチ”が黄色い生物の腹を直撃する。「うぶうっ？！」「くたばれペットっ！」人間界では同居者として人気の高い商品でもあるピカチュウ種族は赤熱化した彼の右前足で胴体に大穴を開けられ、続けてブースターの放った“たたきつける”によって凄まじい勢いで高速道路の防音板に叩きつけられ、そのまま地面に滑り落ちた。彼の右前足が直撃した腹元は焼けただれ、滑り落ちた壁の周囲には血のりがべっとりと付いている。白目を剥いて倒れこむピカチュウ種族、人間界で人気はあっても所詮は雑魚虫、ブースター種族の敵ではない。

「そんで！」地面に着地した彼は素早く姿勢を回し、軽く息をついてからヒヤップと当たり続けるモココの方へと飛び寄る。彼女の方

はタイプ相性…故に染色体塩基分類の違いである…の結果として、目の前の相手に対してかなり優勢に進めていた。「ええいっ！」相手の“ハイドロポンプ”を右に飛びのき、隙を与えず彼女は“１０まんボルト”を直撃させる。「ひいいっ？！」かなりの大ダメージを受けながらも、というよりそうする以外に動きがなかったのだろうが、ヒヤップ種族は中央分離帯にある市街灯の柱に両手を伸ばし、素早く反転してもここに飛び掛かる。「そうくんなら……」電撃を打ちだした勢いから彼女は両足を滑らせて急停止し、右手で腰ぶら下げた物を一本掴みとった。相手がこの手で来るならこちらも一つ、もっと確実な方法でぶっ飛ばして見せる。数歩助走をつけて彼女は飛び上がる。モココの読み通り相手は“アクロバット”を仕掛けてきた、彼女は自分の読みも少しずつ当たるように…父親のバストークみたいに“経験”のカンは大嫌いだが…なってきた事をちょっとだけ嬉しさを覚える。「決まりよっ！」彼女は飛び跳ねた勢いを刃の先に乗せ、１．５秒後には手に持った太刀の先をヒヤップの胴体に突き刺した。「ぎゃうっ！？」「フン！」モココが下に落ちる結果として発生した遠心力、突き刺さったままの相手はそれに乗って上へと突き上げられる。彼女は勢いに乗って左手で“かみなりパンチ”を食らわせ、同時に太刀を引き抜く。この間わずか１秒、モココが電柱にしがみつき、地面に飛び落りた時にはヒヤップの胴体からは滝のごとく鮮血が吹き出し、頭から３車線向こう側にある反対側の防音壁に突っ込み、無力な物体となってアスファルト上に落下した。「やった……久しぶりにこれ使ったわね……」思わず右手で拳を作ってしまった彼女、しかも今回は相手を一太刀で仕留める事が出来た。これをバストークが知ったら自分の実力を少しは認めてくれるのだろうか、ともかく父親をヘコつかせる自慢話が一つできたことに意識の水晶の中では得意顔だった。「これであの人（ポケモンも）…」彼女は前転を打って道路中央へと向きかえり、それから腰に太刀を戻した。「……私を認めるのよ、ええ」

その直後、彼女の右手で凄まじい轟音、何もたとえようのない耳のつんざくような轟音が響き渡る。「こ、今度は何よ?!」思わずその場に伏せこむモココ。「問題ねえって…ありゃあ人間連中のロボット兵器だ……」真っ先にオオタチが彼女のそばに寄り、彼女の首周りのモフモフ毛をそっと叩く。今見た限り相当の実力を持っているようだが、やはりこういう点はポケモンの女(メス)のようだ。「まあ簡単にいやあ、自分で考えて動く電気製品だな…ほら、史上最強のこいつならもう終わりだ」「え?……」恐る恐る顔を上げ、彼女はオオタチの右前足が示す方向を見る。１００メートルほど離れた高速道路のど真ん中に２匹ほど黒い影が転がっている。いや２つではない、２つの塊がバラバラに避けた肉と骨の残骸だ。それもそのはず、ミサイル駆逐艦に搭載する２０ミリ６連装機関砲に撃たれたのだから。

「ま、まあ大丈夫そうだなグラシ……」２匹の右手からブレイブが走り寄る。「いやあそれにしても一発目はさすがだったぜエンデバー！お前もすっかり戦闘用のポケモンになっちまいやがって……」「お前だって２匹目のピカチュウは見事だったな！何せ…」高速道路の路肩に崩れ落ちた赤い液体に浸る黄色い物体を見るエンデバー、表情が少しだけ苦笑交じりの物になった。「…まあ、さすが俺の友人ってところだな！これにアメリカ合衆国の最新技術と俺が加われば怖い物なしだ」「バーカ、俺とお前さえいりゃ、人間どもの助け何て皆無だぜ。あとは…」ブースターはグラシデアの方に向き、直後に両前足で彼女を抱きしめた。何という祝福、褒め言葉としてもなんとも言えない。「やべええ！ヒヤップをぶっ潰した後の表情はかわいすぎるぜグラシ！惚れた！」「うぎゅ……だ、だからやめて……キモイ…」自分の首元にすり寄る彼を必死に離そうとするモココだったが、彼の女アタックはあまりにも強すぎる。無理やり摺り寄せてくるブースターのほっぺの温度、彼女の背筋が凍り付くほど

だった。「バカ…キモイキモイキモイ…何よアンタ?!」「ぐえっ?!」グラシデアの右足の蹴りがもたれかかっているも同然のブレイブの腹元を直撃、彼は後ろに軽く下がり、その場にうずくまった。「いってえ……でも気持ちいい…グラシちゃんの蹴りはマイルドさとスパイシーさが…」

「……何言ってんだこのバカは?まあそれはそれとして…」奴も成長したというか変わったというか、その光景に一瞬言葉を失ったエンデバーだったがすぐに気を取り直し、彼女の頭の白い毛を整えてやる。「……さすがだぜグラシデア。さすがはバストーク隊長の娘さんだ…」「は、はあ…ええ…」

「ったく…恥ずかしがることはねえよ」顔を赤らめるモココの手をオオタチは前足で握る。「君くらいの年だとそういう事もあっからな…さっきも言った通り、家族間ってのはそう固くならず、リラックスしていこうや。肩ひじ張った家族なんて同居したいと思うか?」「はい…やっぱりそういうのが平常ですよね……」モココは軽く息をつき、腰にひもに挿した太刀をしっかりと固定する。ふと見上げた夜空、轟音を立てながらＡ－３４０－３００の黒い影が航空灯を点滅させながらやがてかすみ、やがて一面の黒い平面の中へと消えて行った。

「て言うか……チェギョンは?!」「…やべ、彼女どこ行ったんだ?!」グラシデアの一言に跳ね上がるエンデバーとブレイブ。彼女は案の定だった、中央分離帯の植え込みの脇、そこにもたれかかるチルタリスが、真上にある市街灯のナトリウムランプに照らしだされている。「あいつ大丈夫なのか?!」「まあ…あいつにはよくある事といえばある事だ、まあ助けない訳にゃいかねえ……」「当たり前だろ…行くぞグラシデア」「う、うん…」３匹のミオカは中央分離帯の方に向かって走っていく。特にブレイブ・クレイバーの意識の中は気が気ではなかった。おそらく彼女は……ここのところの自分の調子が気が気でなかった、このままでは自分のいる位置が分からない、そういった霧の中に入り込んだ時の焦りは相当精神に響

くものだ。彼女もまた…思わず前に出てしまい、今は燃え尽き、疲れ果てているのだろう。
それより…彼の意識の中にある物がわずかによぎった。サンフランシスコへ向かったみんなはどうしているのだろうか……同じように……今頃実行犯の人間を追っているのだろうか…

チルタリスの方へと向かう一行を見送るように立つカナダ連邦警察特殊部隊の男。隣に停止している ｉｒｏｂｏｔ社のセキュリティー用ＳＰＤロボットは、複合探知センサの暗赤色の光を放ちながらその場にたたずんでいる。駆動機器やバッテリーが稼働する鈍い音が響く中、彼は無線機を取った。「被疑者の拘束、完了しました。車両と内部の人間から大容量記憶デバイスを確認、データを送ります」
“了解した。サンフランシスコの方も追跡と包囲に入っている、双方ともに１７日までは警戒を崩すな”

同時刻　現地時間：２月１７日　韓国・釜山の西　５０キロの沖合
１５時２０分

排他的経済水域識別圏から徐々に離れていく中国海軍機動艦隊、それをアメリカ海軍のイージス艦駆逐艦「ディケーター」や韓国海軍のミサイル駆逐艦「栗谷李耳」の搭載されたＡＮ／ＳＰＹ１Ｄレーダーが確認して２４時間ほど経過した。米海軍の原子力潜水艦「ノースカロライナ」や試験航海を兼ねた新鋭艦「ボーフィン」のソナー、及びイージスミサイル駆逐艦のＳＱＲ－１９Ｂ大型水中ソナーから水中のクローン量産兵士…というよりは生物兵器…の反応も、そこから発していたと思われる正体不明の原子力反応も既に索敵範

囲から消失している。
あの放射線反応がなぜクローン兵器から発せられていたのか、通常の原子力動力機関とは全く違う、至近距離を通過するとトラブルで内部の物質が漏れ出した原子炉建屋の内部を直接モニタリングしたも同然の数値が一時的では観測された、その理由は何か、米韓双方の参謀たちは一様に懸念を隠しきれない表情だったが、彼等の目の前にはもう一つのゆゆしき事態が発生している。中国の機動艦隊から出現したと思われる辺海防公安部のヘリコプター、その後の民間企業の緊急連絡を洗うと、彼等は人員をヘリから降下させ根拠もない施設の捜査と身柄の拘束を行っているらしい。艦隊や衛星が企業のプラント周囲の海洋を操作しても、採掘資源漏れや違法な採掘作業は行われているようには見えない。日本海（東海）及び南シナ海における民間企業の海底資源採掘は、沿岸国の許可を得てさえいれば原則自由な採掘・精製、船舶・その他による輸出、開発技術研究拠点の設置が行える。そしてこの近海にある大手企業の海上採掘プラントは中国当局も容認した正式なものだ、とすると今回の沿岸部隊によるヘリによる立ち入り検閲、しかも通信機器を確保してまでの行為は、企業による経済活動の侵害に当たる事になる。

ともかく、ヘリ部隊が複数の民間プラントに向かって早半日以上、事態を察知した米・エクソンモービル社やオーストラリア・ＢＨＰ社、及び米豪両政府はこの強引な予定と根拠のない、かつ強圧的な中国当局の行動を、未明に発生した軍事攻撃と加えて強い抗議を発表するとともに、一刻も早い検閲と従業員の拘束中止を求めたが、中国政府側は規定以上の採掘をプラント側が行っていたとして逆にプラントに勤務するスタッフの身柄引き渡し、さらには迎撃に出た米海軍戦闘機パイロットの処罰さえ要求してきている。通信遮断によって状況の深層が不明であるが故、連邦政府は近海で演習を行っ

ていた米韓合同艦隊に状況調査を命じた。しかしこちらの情勢は安定したとは言えない、対空ミサイルによる一種の実力行使に出た中国機動艦隊は現在も韓国沿岸からそう遠くはない位置で航行を続けており、中国側の対応が状況であるが故に新たな行動を起こしてくる可能性は低くない。その上、中国軍機の攻撃を受けてベイルアウトした米海軍機Ｆ／Ａ－１８Ｅパイロットの搭乗員ビーコン反応、及び機体のフライトレコーダをいまだに発見できていない。中国軍艦隊の警戒、パイロットと墜落した機体の捜索、民間企業に対する中国当局の検閲の事実調査、突如起こった軍事衝突に政府、民間メディア、軍が混乱する中、アメリカ軍と韓国軍は難しい状況に置かれていた。

米海軍空母「ロナルド・レーガン」を発艦した対潜哨戒・ＬＡＭＰＳ（艦上多目的）ヘリＳＨ－６０Ｂは、艦隊から北東に４０キロの上空を飛行していた。この機体は海中熱源探知用のセンサ、音響探査ソノブイ、哨戒機用ソナー、ＭＡＤ（磁気探知）センサ、捜索用ＡＰＳ－１２４レーダーを搭載するなど機器が豊富であるというより、胴体左右に予備燃料タンクを装着するなど航続距離が大変長いこと、潜水艦や海上艦艇からの赤外線ミサイル攻撃に対応するフレア（疑似熱源）等の自機防衛システムが豊富で、万が一プラント周囲に存在する当局の艦船から（現在の状況では無警告で攻撃する可能性も否定できない）のミサイル攻撃を受けた際の対処手段があるという事をとって今回の任務に選ばれている。２機のＳＨ－６０は時速２３０ノットで日本海（韓国称：東海）上空１３００フィートで、一路レーダー上に表示されたこの海域で最も大規模なエクソンモービル社の天然ガス採掘・精製プラント、併設された深海採掘技術研究センターの海上施設を目指している。

コクピット内に突如として鳴り響くアラート、機体が民間施設軍用

機飛行禁止空域に入り始めていることを示している。“６０２号機、散開する”「了解した、予定通り南北双方から探りにかかる。十分に警戒しろ」６０１号機の機長はサイクリックスティックに設置されている無線交信スイッチから右手の親指を離し、スティックをゆっくりと手前に引いた。わずかにレーダードームが装着された機首が上を向き、窓ガラス越しの風景は青空の雲が占める面積が増える。「この先の操縦は予定通りだ、俺は空母とのコンタクトに回る」“了解しました”隣にいる副操縦士の声がヘルメット内臓の無線機越しに聞こえた。メインローターが飛行中延々と轟音を立てる非旅客用…すなわちクルーズフライトではない…のヘリコプターでは、隣の乗員との会話すら無線機越しになる。機長は無線機のスイッチを再度入れた。「機体右方向で施設上空を回る、音響による内部分析と状況確認、しっかり頼むぞ」“大丈夫です、すでにシステムはスタンバイ”２人の後方に座るオペレーターの声が聞こえる。そう、今回は無線と本来企業の本社に常時送られているネットワーク自己情報システムが遮断されたプラントに対し、音響機器を利用して内部の機器の稼働状態や人間たちの同行を確認するのだ。潜水艦用音響ソナーは、水中の水分子の運動で拡散する上に防音システムや防音素材によって機関音、推進器稼働音、内部の人員行動音を遮断している潜水艦のそれらを最大限探知し、そこから潜水艦の航行深度や速力、内部状況を分析するために開発されている。通常のプラントの建物であれば内部の人間の足音や声を探知することも難しい事ではない。もちろんそのためには、沿岸から集まりつつある中国辺防海公安当局の艦船に接近するというリスクを侵す必要があるのだが。

速度を５０ノットにまで落としたＳＨ－６０、対潜ヘリの右手に見えてきたのはサッカーコートを縦に４つで４００ヤード、横に６つ

で１０８０ヤード組みあわせたほどの大きさがある日本海（東海）最大の資源採掘・精製プラントである。海上に突如現れた舞台の上に突き出す巨大な複数のやぐら、ＬＮＧ貯蔵用加圧タンクという１０個の巨大なスポンジケーキ、そこに隣接し、舞台の下に伸びる積み込みシステムと停泊する2隻のＬＮＧタンカー、煙を吐き続ける発電装置の排煙口とそれを補い非常電源ともなる太陽光パネルと大容量蓄電器、及び大容量液体燃料電池システム、やぐらや施設のあちらこちらに存在する建造物、研究センターも兼ねるこの施設は小さな工場の敷地となっているのだ。舞台の下で初春の荒波にもまれる9本の脚、これはプラントの姿勢状況を受信する海洋気象データや各部のセンサとリンクさせながら海水の注排水によってコントロールするスタビライザだ。１０００メートル近い海底からさらに深い位置にあるＬＮＧ層にまでポンプや制御機器と共に挿入され、強力な電磁気力によって気体を海上施設にまで組み上げる採掘システムを支える支柱はシステムの数と同じ計7本、最新技術であるナノバイト（微小自己制御分裂物質）、すなわち人工的に制御できる“生きた”金属資材を利用して半年の歳月をかけて設置された。通常の建築資材では連結部分が増大し、自身の重力も相まってその分資材連結部分の強度が低下する、建築用ナノバイトはプログラム制御によって生物のごとく指定された物質にその場で変形するため、輸送や設置が難しい巨大構造物の構成における最新技術として、ナノバイトテクノロジーは絶大な期待が寄せられている。特に将来的なメガフロート建築の本格化、並びにスペースコロニーや月面都市といった数百年スパン開発の技術として続々と企業や国家研究機関、国際研究機関が改良と生産コストの切り下げへ向けた研究に参入しつつある。

大容量電圧バッテリー、燃料電池、採掘ポンプ用超伝導送電機、ナ

ノマシン鋼材と人類の手にした輝かしい最新技術を満載した巨大なステージは、国連メガフロート計画に於いて現在もその成果を提供している。しかし現在、アメリカ海軍哨戒ヘリの乗員たちにはそのような輝かしい文明の象徴は何の意味も持たない。“音響センサ入れます”「ソナー音と解析データを回してくれ」“了解しました”コクピットで機長の目の前にあるコンソールのディスプレイが、オペレータが操作する音響ソナーとその音紋分析結果のグラフを表示した。機体の各種センサやレーダーの情報はＵＹＳ－２機上情報処理装置を経由し、グラスコクピット化された機内のディスプレイやコンソールに表示させる。「６０１号機、データを送る」“了解、受信を開始した”空母に無線を入れ、機長はヘッドフォンに規則正しく響くソナー音に意識を合わせる。定期的に発せられるソナーの発信音と発信音の間に聞こえる音は極めてか細く、わずかにでも操縦系統やレーダーに気を取られていると聞き逃してしまうほどだ。波や風切音に交じって聞こえる低いうなり、これはプラントの採掘機器や発電機の稼働音である。おそらくは施設の空調機器なども混ざっているのだろう。「採掘機器といい精錬工場といい、かなりあれだ……低周波を排除できるか？」“低周波をですね？”「ああ…」パイロットはディスプレイに映る波長を、集中のあまり息を止めて見つめる。呼吸を忘れるほど凝視するディスプレイのグラフの波形の大半は、振幅が小さく長い周期をもつ低周波音で、自動解析の結果も“大型機械の稼働音”とのみ表示されている。“分かりました、低周波音相殺します”オペレーターがコンソールを叩くと、機長の目の前にあるディスプレイから長い波長がゆっくりと消え、彼のヘッドフォンからも鈍い響きが遠ざかって行く。やがて機長のヘルメットに内蔵された無線機から、機械の作動音ではない、高く短い音がゆくっりと、時折間隔を変えながら聞こえ始める。それに混じって金属に他の固い物体が揺れながらぶつかる、それ以上に甲高く鋭い音もしている。「これは……靴音にも聞こえるが…詳細は？」“ええ…音響ソナーのアングルは施設管理棟付近

です…”オペレーターが目の前のコンソールに表示されたソナー探知方向と、プラントの構造を示す３Ｄ画像の合成映像を見る。この男が手元のキーを打ち、映像を機長席前方のディスプレイに送る。“探知信号を上げれば…だと思いますが、その場合ですとほかも混じって分かりにくいかと…”

「そうか…このまま続けてくれ、あと××××…」機長は隣の副操縦士を無線機越しに呼ぶ。「予定通りプラント周囲を回っていいが、もう少し速力を落としてほしい」“了解しました”副操縦士は右手のサイクリックスティックを引くと同時に、左手のコレクティブスティックのダイヤルをわずかにひねる。機体の速力を落とすとその分上方向への揚力が多く必要となるためだ。

機長の男は無線機の交信スイッチを入れる。「６０１号機だ、施設内部音響はある程度行ける、そっちに回す」“了解、データ送信システムスタンバイ”機長はコンソールのキーを叩き、機体が解析した音響データを空母「ロナルド・レーガン」のＣＩＣ（戦闘情報センター）へと送信し始めた。「まあ……もう少し見なきゃわからん、だな…」しばし沈黙する空母からの無線、機長は窓ガラスの右手下部に広がる、初春の日本海（東海）に浮かぶ巨大なプラントに視線を移す。生命発祥の世界であり、地球を象徴する地形環境である海洋に出現した巨大なステージとそこに作られた無数の巨大な構造物、人類の技術と経済活動を反映したその物体は、感情も表情も一切なく見つめる彼から視線をそらしている。その内部で何が起こっているのか、人間社会随一の２大国の経済活動と外交政治を脅かす事態に発展しかねない可能性を持つ施設内部の状況を手に取ってみたい、機長はふいにそんな感情に囚われた。

“……複数の人間がいるな……当然といえば当然だが……”数十秒ののちに、無線機から米空母のオペレーターの声が聞こえてくる。

“施設構造物の外の人間、確認できるか？”

「どうだ△△△△、センサに反応あるか？」“……いえ、人間の反応は今のところ確認できません……”オペレーターがわずかに座席から身を乗り出し、機体脇のスライドドアにある窓ガラスから電子双眼鏡で構造物を確認する。貯蔵タンク、精製施設、採掘機器施設、制御管理棟、研究センター、船舶搭載施設といった建物の屋上や周囲にも、小型電気自動車がちらほらと停止している敷地内道路…横幅が1キロほどあるので自動車でなければ移動できない。ちなみ内燃機関は安全性を考慮し、国家間の海上プラント建築協定に基づき原則禁止である…にも、およそ見える範囲で人影は見当たらない。

“はい……赤外線熱源探知センサにも、人間らしきものは確認できません”

「そうか…空母管制、やはり施設関係者は内部に集まって…いや意図的にそうなっているようです…」機長は無線機を入れ、窓ガラスの外、右下の海洋に広がる巨大な構造物に視線を移す。外に人がいないのは明らかだ、施設のヘリ誘導用のレーダーで状況は掴める、中国当局の人間が従業員を拘束しているのであれば全員を一か所の部屋…おそらくは中央の管理室…に集め、通信機器や採掘・精製機器のインターフェイスを押さえているのだ、中国という国から連想される機長の男の直感は彼にそう語っていた。「もう少し…近寄りますか…？」“頼む。周囲の当局船舶の対応に注意しながらだ。なるべく内部の音を正確に集めてくれ”

「了解した…聞こえたな××××、速度は目いっぱい落としていい、風向きと気流見ながらだ。ディセンドさせるなよ」全く司令部側も無茶を言う、機長は心の中で舌打ちする。アメリカ合衆国と中華人民共和国の外交関係を経済、政治双方で揺るがしかねない事態であるのは分かるが、それをさせられる現場の人間にとってはあまりにも難しいやり方であるのだ。見方を変えればこちらの方が勝手に民間施設飛行禁止空域に入り、中国が行っている検閲を監視しているとも取れなくない形、ヘリポートに停止している中国当局のヘリと

民間のＬＮＧタンカーの脇にいる当局の巡視船舶から入った人間たちもかなり違法性の高い事をしている…企業側はそう抗議している…のではあるが、一歩間違えればこちらが中国当局から批判を受けることもあり得る。

“了解しました…”副操縦士はサイクリックスティックをさらに手前に引き、コレクティブスティックのダイヤルをさらに回す。ＧＥ社のＴ－７００－ＧＥ－４０１ターボシャフト・エンジンの唸りがさらに大きくなり、ヘリのお家芸とも言えるホバリング状態に一層近づいた。副操縦士が右足のペダルを踏み込み、テールロータ脇のラダーをわずかに動かす。プラントへとゆっくりと寄って行くアメリカ軍のＳＨ－６０であったが、通常はこのような位置を飛ぶことは禁止されている、一歩間違えれば企業の（エクソン社はアメリカだが）方から批判を受けかねない状況だ。“音響ソナー、現在感度最大”「よし、管理棟周辺で回してくれ」オペレーターが手元のコンソールを叩き、本来は潜水艦用ですソナーの感度と探知方向を調整する。彼のコンソールから送られた音紋データが再び機長席前のディスプレイに表示された。

感度を上げたお陰か、ヘルメットに内蔵された無線機には先ほどの音に加えて別の小さな音声があらわれている。「感度上げたか？」“はい”男は聞こえてくる音声に意識を集中させた。波や風が施設の構造物に当たる音、内部の人間が歩き回っていると思われる足音、施設の構造物に小さなちりが当たる甲高い音、そして…新しく加わったのは不規則な抑揚やランダムの感覚が入ったこれまでにない音声である。

「ちょっと待て、もう少し寄せられるか…」“やってみます…”「すまんな…接触させるなよ…」これは物理学的な接触や環境音ではない、そう判断した機長は副操縦士を無線越しに呼ぶ。上下や機体の周囲に海面、構造物等があるほどメインローターが引き起こす空気逃れが乱れやすく、その分機体のコントロールが難しくなる。その上にヘリの特徴ともいえるメインローターの旋回径は機体の幅よ

り広く、コクピットの視界から見えない血の障害物にも警戒しなければならない。Ｔ－７００－ＧＥ－４０１ターボシャフトに接続されたメインローターの回転数を上げて推力を保ちつつ、機体は高度を下げてプラントのヘリポートへと近づきつつある。

“…現在いっぱいです。…わずかですか…会話でしょうか…”「……確かに……これは…声だな……」副操縦士の巧みな調整によって、プラント上空７０フィート、距離にして５０フィートの位置にまで接近するＳＨ－６０、機長の男はそれをはっきりとヘッドセットから聞き取った。これは人間の声、まさしく人間同士の会話の声だ。「××××、出力落とせるか？」“無理です…安定を保つのが現在でも精一杯です…”左手のコレクティブスティックの出力ダイヤルを握り目ながら、副操縦士は歯を食いしばる。コンソールのディスプレイにも周囲の気流が乱れて売る旨と、対障害物レーダーに反応する物体が機体に近づきすぎているという旨の２つの警報が鳴り響き、乱れている気流から気体の安定を維持する制御によってかなり振動している。これ以上ローター出力を絞ると機体のバランスを保てなくなってしまう、その紙一重の状態を副操縦士は必死に保っているのだ。

「そうか……何とかこの状況ではな……」そもそも初春の日本海の気流は良くない、ＳＨ－６０もこれ以上は限界であるのは機長にもわかる。この状況でわかる限りの音声を確認しなければならない、コンソールを叩いて再度音紋データを空母側に送信し、ヘッドフォンから聞こえる音声に再度集中する。しかし…機種の潜水艦用ソナーが捕える音紋より、メインローターの回転音とそれが生み出す気流音が圧倒的に大きい。

「くっそ……これ以上は無理か…」“ソナーの感度はマックス、分析プログラムの方も目一杯です”機長の男は厳しい表情でディスプ

レイの波形グラフと表示を見つめる。もどかしい事態ではあるが人間をはるかに超える性能を持つ機械類のセンサでも限界は存在する、これ以上近づくのは危険すぎだ。彼は無線機の交信スイッチを入れる。「空母ＣＩＣ、６０１号機から送れるデータはここまでだ。これ以上の分析は困難……」

“機長、施設外部に人影。ヘリポート付近です”突如としてキャビン後部のオペレータが立ち上がり、窓ガラス越しに電子双眼鏡でヘリ発着ベースを見つめた。「どこだ…何でいきなり…」シートベルトが許す限り機長は座席から身を乗り出し、副操縦士の座る座席の向こう側にある窓ガラスの奥にあるプラント構造物周囲を見渡す。確かに中国当局の物と思われるヘリが駐機しているそのすぐわき、メインローターに少し隠れた場所に数人の人間らしき影が確認できる。しかし双眼鏡も使わないこの位置からの目視ではどのような格好をしているのか、何を所持しているのかは全くわからない。「どうだ、そっちから見えるか?」“ええ…辛うじてですが……”オペレーターが赤外線センサのディスプレイの映像を一瞬確認し、再び目線を窓の外へと向ける。“どちらも性別は男性のようです。所備品は不明ですが…プラントのスタッフではない模様…”

「スタッフではない…外部の人間か…」窓ガラスの外を見つめる機長の不穏な予想は確信に変わる。やはり外部の人間が侵入しているのは疑いのない事実だった、そして…人影から彼は不穏なものを感じた。彼らがこちらを見ているのは偶然ではない、こちらに敵意を持っている、と。「少し機体を離せ……」機長は副操縦士に命じる。「ゆっくりと左にだ。…高度も…１００くらいまで上げた方がいい……」“了解……”一瞬戸惑ったような表情をしながらも、副操縦士はコレクティブスティックをゆっくりと上に引き上げ、サイクリックスティックを少し左に傾ける。ターボシャフトエンジンの回転

数が上がり、ＳＨ－６０はプラントの左上へゆっくりと上昇してゆく。すべては彼の本能的予想だった、これ以上接近するのは嫌な予感がする、そんな感情に囚われて機体をプラントから引き離させているのだ。

“上空を飛行中の米軍機、聞こえているか……”突如として鳴り響く無線機、機長の男はサイクリックスティックに装着されている無線機交信スイッチを押した。「…中国辺防海公安部なのか？」“ああ、現在当局はこのプラントに対する違法操業立ち入り捜査中である……”無線越しの声は自分たちの存在をあっさりと認める、ＳＨ－６０のクルーは顔を見合わせた。ひどく冷たく、無感情に感じられる無線機越しの音声。“当局、政府の後任と規定に基づく、民間企業に対する正当な手段だ。これを妨害する権利はいかなるものも有さない”最後の一言はアメリカを挑発しているかの皮肉が込められているように機長には感じられた。“それが企業の本国であろうとだ。既にアメリカ軍は民間空域規約に抵触している”

機内を流れる気まずい沈黙、オペレーターがコンソールを操作しながら機内交信無線機のスイッチを入れる。“どうします機長？返答の方は…”

「何も言う必要はない、これで証拠は掴んだ」目の前のコンソールとディスプレイを殴り飛ばしたい、機長の男は苛立ちの発作を必死にこらえながら、無線機交信ログデータを呼び出し、空母のＣＩＣへの送信準備を行う。「音紋データと通信ログ保存しておけ。帰投するぞ」彼はサイクリックスティックを左に回し、左足のペダルをわずかに踏み込む。「奴らの検閲は違法、それだけでいい」

ＳＨ－６０のＧＥ社製Ｔ－７００－ＧＥ４０１Ｃターボシャフトファンエンジンの回転数が上がり、メインローターがわずかに左に傾く。ゆっくりと遠ざかっていく米・エクソンモービル社の保有するナノバイト金属が支柱となっている巨大海上施設と停泊するＬＮＧタンカー、それ見つめる機長には遠ざかれば遠ざかるほどわかりにくくなるであろう施設周囲の“空気”、それが離れるほどに暗く、重苦しい物に変わっていくように感じられた。

ＳＨ－６０から送られてきた音紋分析と通信ログの記録を持ったＣＩＣオペレーターの１人は米空母「ロナルド・レーガン」のアイランド・デッキにある航海艦橋へと向かった。資料を手渡された空母艦長と米韓合同艦隊演習の司令官は、表情を変えることなく印刷されたリードアウトを見つめる。「…軍事行動の件は別にしても…これを持ち出すと相当厄介な事態になるな…」書類を持っていないほうの手で帽子を外す艦長、彼が見る書類の交信記録文章と解析グラフはものを言うことなく事実を淡々と彼に伝えている。昨日から未明にかけての軍事衝突、すでに双方の外交関係者は大混乱に陥り、双方のメディアと世論は互いの批判に終始している、これに資源精製・採掘プラントの件も加われば、問題は経済界という現代の国勢の要といえる分野にまで飛び火し、プラントを構える他国までこの問題に巻き込むことになるだろう。

「司令、本国に対する報告は…」「ありのままを伝えてくれ。我が国や同盟諸国の大企業と経済を巻き込む事態だ…」司令官の男は艦長以上に冷静な声を出す。彼は多くの航海関連のコンソールやディスプレイの並ぶ窓ガラスのそばにまでゆっくりと歩き、無数の航空機とクルーがひしめくフライトデッキと空母周囲のアメリカ・韓国のイージスミサイル駆逐艦や揚陸艦を見つめる。「…平和ボケしている政治家連中、あの中国野郎どもと外交で決着をつけさせるか」

その頃　アメリカ・サンフランシスコ市　３時２５分

周囲の空気はこちらもあわただしくなった。セキュリティーロボットが稼働して配置に付き、警察車両が検問所の前で壁のように停止する。８８０号線を走行する一般車両の流れが次第に減り、水道の蛇口を締めていくが如くやがてゼロになった。市街地や港湾のプラントからひびく鈍い音のみが、まだ春には至らぬサンフランシスコの風の音に乗って周囲を包んでいる。間もなく訪れるであろうアメリカ合衆国の重大機密データをかけた攻防に息をひそめるが如く……

苦悩のアメリカ合衆国　その2

封鎖線のかなり奥とはいえ、遠くに見える警察官の構えや警備ロボットの暗赤色のセンサが生み出す緊迫した空気は、そういう物に全く知識がないこのベイリーフ種族の聴覚器官にもピーンというかすかな耳鳴りとして感じられる。それは時折吹く穏やかの風がもたらす鈍く低い音と重なり、静寂と緊迫の双方を一層強くしてくるのだ。

この任務とフローラは関係がない、リーヒュンはなんとなく、いつものように直感がもたらす予想に対し、自分自身に頷いた。ツルを使って中世の人間が使用したものと似ている（彼が知る由もなかったが）頭部保護用の金属製ヘルメットの紐を締め直し、その後４本足に…前足２本は人間でいう手も兼ねるため、その下に毛糸の手袋（足袋）もはめているが…履いた蔦で編んだかつての日本の巻脚絆にそっくりな保護靴のひももしっかりと結ぶ。強くなった足の圧迫感が、緊張感をますます高めてきた。左わきにいるテルルは既にそのような準備を整え、というより彼女はいつでも応戦体制に入っている性格らしく、その目は真っ直ぐと暗闇の向こう、高速道路の向こう側を見つめている。ロックオンは一番近い市街灯の脇、高速道路防音板の段差付近に普通の鳥類と同じように止まり、電光情報表示板の方をしっかりと見据えている。右隣にいるサクラは手に見慣れぬ大きな何かを持ち…洋弓銃に似ていなくもないが…、左手を防音板に当てたまま何かにふけっている。

相変わらずこのサーナイト種族は謎が多い、リーヒュンの十八番（おはこ）である自分でも望まぬ洞察力を持ってしてもそれを探るのは困難だ。彼は思わず意識の中で首をかしげてしまった。思えばこの半年近い

歳月、自分を…何を使ったかは知らぬが、ともかく数はほとんど残っていないとはいえ地球中に分散するポケモンの中から選び、連れてきた。それ以降の出来事、それは彼にとっていまだに信じられず、そしてなんと解釈していいものか全くわからないものだった。その中でもいくらかは分かることもある、この世界では人間の文明も社会も著しく発展し、その一方でそれを巡って不毛な争いが続いている事、それに自分たちは利用され、世界規模で消滅しかかっている事、自分たちの内部でも徐々に混乱や対立が大きくなりつつある事、それはもう十分なほど、足元がぐらつくほどよく理解できている。

しかし、それより深い真実は彼でも探りが効かない場所であった。サクラは果たして人間と自分たちの文明をどのように結び付けているのだろうか?彼女が生まれ持った能力、いまだにその全容を示さぬそれは果たして何を自分たちに見せてくるのだろうか?

そして何より…自分自身にもたらした能力と義理の妹であるフローラが巻き込まれた事態といかなる関係を持ち、後ろにいる（そう感じた）メガニウムと自分の間に何を作り出しているのか、まず第一に自分の持つ能力は果たして何なのか?このベイリーフにとって一番気になるのはそこだ。

「……どうしたの?」サクラの一言に彼は我に返る。どうやら自分が彼女に対して感じた疑問のようなものははっきりと伝わってしまったようだ。「そうね、私は遠巻きに見れば変人かそれ以上に見えるのよね……」

「い、いやそうじゃなくて……何かあったんですか?」「隠さなくてもいいのよ、あなたは私の後姿を見て疑問に思ったんでしょ?それに……」彼女は彼の頭部付けられたコードを右手で示す。「実行犯の方はもう高速道路の方でもう包囲されてるわ。警察と軍の読みは正しかった、今頃はクローンとロボットが警察車両と一緒に追い込みに入っている所ね。無線機はそう言ってなかった?」

「無線機……あ、これですね」リーヒュンはヘルメットの内側を通って、自分の聴覚器官にはめられている無線機のイヤホンにツル

で触れる。全くこれだから人間の機械は性に合わない、彼は意識の中でため息をついた。なぜかは知らないが人間の機械は自分に対して何も伝えてくれない、小さい頃から物に触るとわずかに伝わってくる不思議な感覚、生物でない物体がこちらを見つめてくるような奇妙な雰囲気を、彼は昔からそういう物であるという意識を持って受け止めてきたからだ。それが異常であることはつい最近知ったのだが、それだからこそ感触が来ないもの…すなわち手作業ではなく工作機械によって製造されたもの…にはどうしても違和感を覚えてしまった。そこから出てくる音声に意識を合わせれば、確かにそこから人間の言語が出ている事は理解できる。「すいません…眠いわけじゃないんですけど…ぼんやりしてたようで」なあんだ、結局人間たちが自分で抑えてしまったわけか、自分たちが来た意味ないじゃないか。しかしその直後、意識の水晶の隅に別の感覚が走り、それを言及するのは寸前で止めた。何となくだがまだ自分たちがここにいる必要がある、そうなる可能性は残っていると。

「…別にいいのよ隠さなくても…」サーナイト種族はわずかに笑みを浮かべてベイリーフ種族の首元にそっと右手を当てる。「リーヒュンは深くは考え込むタイプじゃないって事、よく分かってるわよ。変化していく自分の性格や価値観に一定のバランスを保つのも生きるという事なの。そうね、社会通念から外れないとか、周りを心配させないとか、ええ、そういうのも必要ね」「……なるほど…」「いい？あなたにとってはまだ戸惑う所も残っているかもしれないけど、そこはそれで閉まって、今は目の前にあることをこなしてほしいのよ。お願い、あなたは昔から目の前の事は頑張るほうでしょ？無理に先の事を悩んだりすると体に悪いわよ」

「……はあ…僕は…それでいいんですか？」「ええ、もちろん。自分の苦手な方に考えがぶれないようにするのもコントロールのうちね」彼女は彼の首にぶら下がる木製容器にそっと右手を当てる。「フローラも…そうしていく事でなにかが見えてくるかもしれない」

「……はい…」彼は曖昧に頷き、自分のツルで容器を軽

く揺り動かす。内部の水が跳ねるちゃぷちゃぷという音、静寂に包まれるアメリカ・サンフランシスコの空気によってそれは一層はっきりと響く。

ベイリーフ種族は数歩歩き、車両退避用側帯の手すりから作業灯に照らされるコンテナ船ベースと臨海工業地帯のプラントを眺めた。目の前にある事、リーヒュン・バイリング・グリーズにはサクラ・フユツキのその言葉があまりにも重く感じられる。確かに幼いころから自分は頭より体が先に出るタイプだった、やってみれば何とかなる、おそらく死ぬ事は無い、そう思えばとにかくやってしまう性格だった。そういう性格が勝手にできたのには、ブレイブやエンデバーといったよく言えば活発な、悪く言えばバカな同じ集落の友人たちに似たせいかもしれない。しかしそういった親友がいたからこそなのかもしれないが、彼自身の直感的で深く考え込まない性格がそれによって形成されたのは確かだ、内心や裏表を好まず、常に自分も本音を洗いざらいにして接するという点が。

その時はそれでよかったのだ、川で魚をつかみ取りした時も、無理に木々が生い茂る山の斜面を登った時も、一番手が早いのは彼とブレイブだった。そして一番早い分一番危ない目に合うのも2匹だった。しかしそれはそれで良かったのだ。

だが今は違う、それをもたらしたであろう自分の直感の鋭さが今、自分の目の前に広がる夜闇と煌々と輝くコンテナ船、クレーン、作業員や車両、工業地帯のタンクに象徴されていた。自分の能力はサクラ曰くしてポケモンの希望である、しかしその周囲に広がり、それを嫌になるほど引き立てているのは、彼が今まで見てきた光景以上に実際は悲惨であろう自分たちの文明と種族群の現実という闇である。途方もない真実、理解の域を超えるものに彼は自分の背中が重くなり、足元にそれがのしかかるのを感じた。

そして何より…彼女のいう“使命”以上に気になるのは、自分の能力が自分にもたらしている自分自身の異常さだ。リーヒュンは考えるのもいやになってきた。ここの所、時折自分の意識を包む息苦しいほどの不安と困惑、それがまたしても自分の意識の水晶を、しかも訓練によって望まないほどに鋭くなっている感覚を突き刺してくる。周りで目を覆うような惨劇とともに既に多くのポケモンが死んでいる、自分も言われるがままに戦ったこともある、にもかかわらず自分は大したケガもなく生き残っている。その原因がどこにあるのか、まだ誰にも言っていない、すなわちサクラしか知らないのであろうが、自分が短期間ながら集落の自治警備員の一員で合ったことが理由だとは到底思えなかった。そもそもどこの集落でもそうなのだろうが、人間年齢が１３、４歳程度に達すると性別に関係なく地元集落の警備をやらされる。町内会の火の用心とほぼ同じ、集落に入る道に2，3匹で見張りに付き盗賊などが侵入しないようにする、それだけであった。とはいっても彼がそこにいるだけだったという訳ではない、実際ブースターや今はいないオオタチと一緒に１回だけ捕まえるという経験をしたことはあった。隣の集落のちびっ子で、こちらの集落側にあるオボンの木から果実を取ろうとしただけだが。

だからこそ、それだからこそ今の自分は奇妙、それを通り越して異常すぎるのだ。なぜ自分は生き残っているのか、なぜ自分は戦場同然の場所へ行ってここまで平然としていられるのか？

これを考えるのはあんまりに憂鬱すぎる、ベイリーフは聴覚器官に装着された黒いコードをツルでいじりまわした。こういう電子機械は全く理解できず、そもそも意識して考える気もなかったが、こんな無駄な動作であっても気を紛らわすことくらいはできる。それで良かった、もしこれがフローラと…なんて考えていたら気がおか

しくなるか、混迷が眠気に返還されてしまいそうだ、今はそんな事を気にしても仕方がない、彼らしい諦めというか腹のくくり方である。

それはと言えば……思わず向けた視界の先、テルルはすっかり車両がいなくなった高速道路の先、市街灯の作り出す薄暗い河を光のない目で見つめていた。後ろ足にほど近い、人間でいう腰のあたりにベルトを巻きつけられ、そこに装着されたトレージャーバックと（エメリア探検隊連盟などで）呼ばれる装備品入れ。そこからはみ出す光沢のないジャーマングレーの突起物は、探検隊・救助隊が飛び道具の一つとして使用する“てつのトゲ”と呼ばれるものだ。とはいっても金属製の物はそう普及しておらず、一般的には木製の物、沿岸部ではサニーゴ種族の背中から生え代わりの際に外れる石灰質を利用した物が用いられる。

そしてその隣にひもでぶら下げられている物…リーヒュンの意識の底にまた憂鬱という名の重い気体が湧き出してきた。本来は彼女が小さいころから使用しているらしき銛、彼女が命の次に大事にしている物がある場所、だが今はスカイラブからもらった太刀が、時折彼女が体を動かすのと連動してゆらりゆらりと動いていた。彼には彼女がどういう思いでそれを持っているのかが何となく理解できる、おそらく今はいないあの女ルクシオは彼女の事を年下のごとく見つめ、彼女の器量を探り出そうとしているのだ。それをグレイシアは理解できない、いや理解できないのではなく理解できたうえで許せない、受け入れられないのだろう。そういう確執がさっぱり理解できないリーヒュンの視界にもそう見えてしまうほどだから。

しかし……テルルにもそれは分かっている事のはずの事だ、それでもベイリーフには彼女の気持ちも理解できた。自分にさえ譲りたくないものが一つはあるように、彼女にはもっと多くの繊細で譲れないものや信条という物がある。彼にとって他者のそういう面も個性として否定する気は全くなく、むしろ自分は本音まで全くオープンで開くことが重要出ると意識してきた。ただし、それが今の彼女

と自分との間の不和につながっている事は認めたくない事実だ。それであるからこそ、このベイリーフの戸惑いは大きかった。何でも口に出しがちな奴を快く思わないグレイシアの心情は、目線に入れば望まなくともベイリーフの意識の水晶にエネルギーとなって流れ込んでくる。その一方で、というのもおかしいが、リーヒュン・グリーズの中にはそういう探り深い出方や態度が気に入らない性格が残っている。容認か否定が、自分の意識の水晶の中に大いなる山から左右に広がる違う景色を眺める傍観者という立場ができている事に初めて気付いた。

そんなテルルを眺めていると、ふと耳元に奇妙な旋律が流れている。リーヒュンの聴覚器官には、朝日に照らされる海と影を作る山々を見つめるような荘厳なものに聞こえた。誰なのかはだいたい予想ができる、彼の視界の左側、同じように非常駐車帯の手すりに胴体左側を持たれかけたメガニウムがあの楽器を鳴らしているのだ。これを聞くのは何か月ぶりだろうか、ベイリーフにとって以前にあれを聞いたのが随分前に感じられると同時に、自分がまったくと言っていいほどそれを吹いていないのに気づいた。サボるとかサボらないとか言ったものではなさそうだが、ともかくそのような劣等感に近い感情を抱いてしまった。

「んー？どうかしたの？」その彼女、ユイリィがツルでもっていたその楽器を口元から離す。「そっか！ウチの演奏が最高だから見入っちゃったんだね！そうだよ早く言ってくれなきゃ！ヒュンがほめてくれるの待ってたもん！」

「褒めてくれるってさ、いやあ、こういう状況にも関わらず……すごいな」「大丈夫大丈夫！まだ来るのは１０分先位かな、うん。人間の皆さんが犯人っていう人を追い回してるからね、この位置くらいまでは来ると思うよ、うん」メガニウムはゆっくりとベイリー

フに近づく。今話した内容は全て彼女の直感的判断だ、うかつに緊張した表情を“作って”精神を統一しているのは苦手だった。「そうそう、何ならリーヒュンも一音か二音鳴らしてくれる？それだけでいいから！」「お、俺が？」ベイリーフは腰回りにぶら下げられた袋をツルでなでる。この数か月間色々あったせいか全く持って触れた覚えがない、一音出すのにも自信がない。

「うん、別に音を適当に鳴らしてくれればいいの。ウチの音を聞いてればたぶんわかると思うよ」ユイリィはリーヒュンの右前足を自分の右前足の爪先でそっと触る。まあ不安に思うのも無理がないと言えば無理のない話だが、彼女に迷いも心配もなかったし、それを定義することもなかった。ただ、彼と自分を繋ぐものを…見たかった。「…ヒュンとウチの関係…どうなってるか聞けば分かるの。ちょっとだけでいいよ」

「まあ…そういう事か。うん、それなら…やってみるか」ベイリーフ種族は袋から金管楽器に似たそれを取りだし、吹き口を慎重に口元へと当てる。手入れという物を怠ってきたにもかかわらず、その金管楽器は何の痛みも汚れもなく、彼の視線の中で新品そのままを保っていた。「うん、そっちの方向に集中してれば自然に音を出せる、ヒュンの方から始めていいから、ね？」「ああ…うん…」リーヒュンはツル先と口元の感覚に意識を集める、傍観者から見れば何をしているのか全く不明な状態だが、彼にはユイリィの言う事が何となく理解できる。鼻から軽く息を吸い込み、穴を押さえるツル先に少しだけ力を入れた。

2匹の楽器から流れる不思議な音、調和している波長をあえて四半周期ずらしたような旋律である。テルルとロックオンは思わず音の方向に振り返った。「……さすが、特殊なものを持ってるって話だ。お互いで感じるものがあるんだな」「うーん……私にはさっぱりな

んですけどね…」グレイシアは手袋（足袋）の上からはめた保護靴越しに両前足をこすりあわせる。相変わらずあの2匹が何を考えているのかイマイチ掴みづらい点が多い、しかしそれでも…なぜか遠くから感じられるものがある、自分たちを繋ぐ糸をゆっくりと結んでいくかの如くの柔らかい感情だった。「私にも…さっぱり、ね」グレイシアの後方から歩み寄るサクラ。「え、サクラさんでも…あの2匹の事…？」「ええ。私もまだまだあの子たちに偉そうな事を言える立場には…行ってないのよ…」サーナイトはもう1歩ぶん2匹の方へと歩み寄る。おそらくこの行動を起こしたのは、自分でも言うのも難だがあのメガニウムの方だろう。彼女という女（メス）は物事を冷静に構えるのが苦手、何度も言い聞かせてきたが直ったとは言えない。本来は自分が彼女を教え、導く立場だが自分も鍛錬を続けている身、それは痛いほどわかった。「もう…こんな所でもしちゃうんだから…やるときはしっかり頼むわよ」彼女はか細い腕を守るプロテクターの紐を締め直しつつ、2匹の意識の水晶にゆっくりと思念を送ってみる。決してそうではないのだろうが、場所と状況を読まないように見える底抜けな陽気さと明るさを併せ持つメガニウム、そんな彼女に時折翻弄されつつも、大ざっぱながらまっすぐで、あらゆる状況に体当たりで挑んでいくベイリーフ、普段はそんな2匹の関係の在り方に懸念や心配を抱くことの多いサクラの中にも小さな期待に似た小さな感情はあった。自分の予想やエメリア自治協会本部関連で予想したものとはずいぶん違うが、もしこれで良いのなら…これでもその役目を果たせるのなら…少し認めてあげてもいいのではないか、と。

「むくげの花は咲き乱れ、赤く汚れた丸い海は東海（トンヘ）のすがすがしい水で満たされり、か…あの空と関係あんのかな？」ユイリィが口から楽器をはなし、ぼんやりと都市の明かりにかすみがちな夜空を見

上げる。「……どうした？」「ん、いやいや、何でもないよ。今流してた曲の話。こういう歌が付いてるんだよ」リーヒュンの不思議そうな表情にメガニウムはかみ合ったようなかみ合わない様な答えを呟く。「うん…ウチらはまだまだだけど…つながり合う点はいっぱいあるって感じかな。そう思ったよ…」彼女は右のツルで雄蕊の長いほうを結び直す。今ので一層確実になった物があった、このべイリーフとは分かり合える点も、お互いで感じ合える点も多い。この縁はユイリィ・プレミドール自身が思っている以上に強い物がある、大きな気体と喜びに見た風船が静かに意識の水晶の中で膨らんでいくのを感じた。

2匹のそばに寄る別のポケモン。「あの…国連のチームというのは…ここですよね？」「あ、はい…って、お久しぶりです！」思わず振り返ったメガニウムに目にいたのはあの地底湖で出会ったキリンリキとキノガッサだった。「どうしたのユイ、この人達知ってんの？」「うん、ハイドルでうちらがいなかった時あるよね？あの時会ったの」

「うん…ってこの青色の方のポケモンさん…」キノガッサの方、ルザルはグレイシアのもみあげ状飾りを興味に輝く丸い目でじっと眺め、一歩歩み寄った。「…ヒラヒラがおいしそうですね。食べちゃっていいですか？」

「へ？！何言ってんの？！ちょ、ちょま……」「こ、こらこらダメだろルザル！…すいません、彼女は突然こんな事言いだす女で……」右手でテルルのもみあげ状飾りを掴もうとする彼女を、キリンリキ種族のバルチャーが慌てて左前足で制止する。「え…あ、うん…これは食べられるものじゃないからね……冗談だよね？」「はいー♪、冗談ですよね？」「うん…んならいいんだけど…よろしくね」「はい」この彼女に悪気はない、そういう軽い性格なのだろう、グレイ

シア種族はくりくりとした彼女の目を覗いて確信した。

突如として鳴り響く轟音、彼等の遠方で道路を封鎖したｉＲｏｂｏｔ社のＳＰＤロボットがＭ６１Ａ１・２０ミリ機関砲が稼働する。

「来るわよ！」「やっぱね！了解しました！」サクラの一言で周囲の空気が一気に張り詰めた。飛び込んできた逃走車両の前に警察のシボレー・カプリスＰＰＶが３台飛び出し、片側３車線のサンフランシスコ中心方面の道を完全にふさぐ。急ブレーキを踏んだドイツ・メルセデスベンツ社のＣクラスＷ２０４は、一番中央分離帯側にいたカプリスＰＰＶに側面をぶつけ、１０メートル以上警察車両を横に引きずった後に停止した。警察車両から一斉にフル装備の特殊部隊の人間たちが飛び降り、特殊部隊用アサルトライフルであるベルギー・ＦＮ社が開発したＦＮ・ＦＡＬを構える。その隙間を縫ってＳＰＤセキュリティロボットが４本のクローラーを滑らせて車両に接近し、カナダの時と同様にドアをクローとロボットアームで突き破る。窓ガラスを破壊して内部に催涙弾を噴射し、２連装２０ミリ６連機関砲のマウント基部付近にあるＭｋ１５ＳＰ・多用途ランチャーシステムから閃光擲弾（スタングレネード）を打ちだして内部の乗員を制圧する手法、警察や軍の特殊部隊では一般的過ぎる方法である。よもや実行犯側も、特殊部隊や制圧用ロボットを動員してまでこちらを追撃してくるとまでは予想していなかったのだろう、閃光擲弾によって視覚と聴覚を奪われ、催涙弾の降下と合わさってフラフラと車外に転がり出た連中４人のうち３人は、待ち構えていたアメリカ州警察の特殊部隊の人間に取り押さえられる。赤外線識別装置付きＦＮ・ＦＡＬライフルを突きつけられ、数人が実行犯の腕を背中側に締め上げる。これで乗員の排除は終了、何人かの警察官がＡＮ／ＰＶＳ－１４暗視装置を装着して内部に入り、奪取されたデータを入れていると思われるＵＳＢ記憶デバイスを探しにかかる。流出した要領からして

ＵＳＢやマイクロＳＤカードがかなりの数必要だ。ＧＢＴＸやｉＲｏｂｏｔといったハイテク産業系企業の機密データは、万が一漏えいした場合でも1回で大量に流出しないよう、1つのデータに同じ要領のダミーデータが5つ以上含まれている。これを民生用ＵＳＢデバイスの容量に換算するとおそらくは１０個前後、空港の検閲に引っかからないよう、もしくは万が一車両を追跡されても持って逃走できるように準備を整えているはず。すなわち車内にある荷物、車内のどこか、もしくはすでに拘束した４人が身に付けている可能性が考えられる。

「どうだ、トランクにでも隠してあっか？」ドライバー座席から入り、ダッシュボード下を探る隊長が後部座席を引き倒す隊員に声をかける。「ダメです、反応らしきものは…」その男は返答しながらトランクの中から鞄を一つ引っ張り出す。「ちっ…噴射量位わきまえろってんだ。捜索の邪魔になってるだけだろ…」目の前の助手席には人間が一人倒れてまま動かない、ＳＰＤロボットが犯人制圧用に流し込んだ催涙ガスに息を荒げ、隊長はいまいましそうに吐き捨てた。すでに暗視装置の表示がほとんど見えなくなるほど涙で目の前がかすんでおり、這いずり回るが如く息を止めて車内を捜索しているのも長くは続かない。特殊部隊とだけあって催涙ガスが噴射された状態でもなんとか耐えて活動できるよう訓練は積んでいるが、車内が黄色くなるほどの濃度に散布された中ではとてもではないが体の免疫機構が黙っていない。彼は入ったドライバー席から転がり出し、目元鼻元がはれ上がる中どうにか無線機を口に当てる。「身ぐるみはがしたか？全員裸にしちまえ！」

“すでに確認しました。４人で計7個…予定より少ないです”無線機越しに聞こえる荒い息、隊長は愕然として聞き返した。「7個、それしかねえのか？！」“はい！残りは車内か…それとも衝突で転がったかです”

「ったく…こっちじゃ発見できてないぞ…」「ダメです！車内にはデバイスらしきものの反応は確認できません」別の隊員が涙で目を

潤ませながら同じように車両から飛び出した。やはり充満する催涙ガスが効いているのだろう。「そんじゃあいつらが飲み込んだとでも…いっ?!」男が立ち上がろうとした直後、背中に強い衝撃を感じて再びアスファルトの上に叩き倒される。「なんたってんだ今度は…っ!」どうにか戻ってきた暗視装置越しの視界を頼りに姿勢を起こした視界に、彼は衝撃を受けた。ＡＮ／ＰＶＳ－１４ゴーグルに映し出された赤外線画像の影、解析表示は“生物：熱反応不明”と表示されている。

やはりそうだったか、この任務の直前にカナダの連中が言っていた可能性はこれだったのか!自分の迂闊さに腹を立てながら彼は無線機に飛び付く。「クソどもが持って逃げた可能性がでかい!こっちの使い捨て製品に追うように言ってくれ!」

その情報を上空を飛行する州警察が受ける。もともと交通関係の追跡などに用いられる警察用ヘリは、武装こそないものの胴体下部の可視光線・赤外線探知レーダや警察関係物体識別装置…警察官や警察車両が身に着けている、もしくは搭載してるＧＰＳシステムを利用する…を搭載した、警察の空飛ぶ目である。このような上空からの追跡指示や状況確認も、ごく在り来たりな仕事のうちだ。“こっちの使い捨て製品に追うように言うんだ!”

「了解しています〇〇〇〇2小隊、こちらでも確認している……」ヘリに搭乗する通信オペレーターの女が手元のコンソールのキーを叩き、赤外線識別装置の情報を確認した。先ほど通信を入れた男、特殊制圧部隊のＧＰＳ信号から南南東へわずか１００メートル、やはり高速道路上に“ポケモン熱源”と書かれた輝点が6，7つ進んでいる。ここまで探知できるのは、赤外線識別装置が常時警察本部のネットワークにアクセスし、正確な飛行位置をＧＰＳ経由でリンクさせているからだ。

オペレーターの彼女は無線機の表示を切り替え、通信用レシーバを手に取った。本部から送られているデータに従って入力するだけで、一発で特定の相手にのみ通信を合わせる事が出来る。「×××

より量産兵士各隊並びに待機中の各員、前方から逃走者が来るわ。何を使ってでもいいから排除してください」

「そんな事言われなくなくたってこっちからは見えてますよ！行くぜっ！」「頼むわよ！」真っ先に飛び出していったのはやはりムクバード種族、ロックオン・ストランとしては、先鋒を切ることが自分の存在意義であると信じていた。羽ばたきに体内の全エネルギーを集中させ、翼の当て具合をわずかに変えて安定を取る。ひこうポケモンとしては当然だが、物の５秒程度で速度は時速４００キロ前後まで加速してしまう。

とはいっても真っ先に走ってくるポケモン達と接触するのは駐車帯に止まっている警察車両と警察官、同じように検問に入っていたＳＰＤロボットである。「ちっ…あので化物じゃあ俺らの前にやっちまうじゃねえか……」先を越される、彼は負けじと力を振り絞り、一番乗りへ向かって飛び続ける。

しかし前方で発生したのは全く予想外、ｉｒｏｂｏｔ社のセキュリティーロボットは警察車両と警察官の後ろへと入り込んでいた。ＳＰＤロボットは複数探知物体同時識別機能を搭載し、保護対象と攻撃対象が乱戦状態になっても正確に機関砲やガス注入装置で目標を制圧することができるが、もともとは軍事用ロボットではなく、危険地帯作業用、災害救助用、掃除ロボット「ルンバ」などを手掛ける民間企業・公設機関向けのロボット開発を行っていたｉＲｏｂｏｔ社であるが故、万が一でも保護対象の人間を制圧せぬよう幾重にもわたって保護回路とプログラムが組み込まれている。例えば複数のセンサを利用した統合探知識別装置が、前方に民間人や一般車両を探知すると、目標の追跡よりも保護対象の安全確保を最優先し、目標と保護対象の間に移動することを最優先に行動するシステムとなっているのだ。

それが今回あだとなった。ロボットの制御システムは前方にいる警察官と警察車両を保護対象と正確に分析し、その前方に確認されている攻撃対象の攻撃から人間と車両を護衛すべく、両者の間に入ろうとするが、前方に停止している警察車両の隙間は記録されている自機の寸法では通過できない事をも同時に理解したのである。保護対象である警察車両を破壊することはできない、プログラムされた移動が不可能な際の手段として固定射撃に移行するロボットだったが、警察車両とほぼ同等の高さに機関砲本体とレドームが存在し、どうしても制圧射撃の射角は限られてしまう。期待していた以上の支援を受けられず、警察官たちは何とか暗視装置対応スコープ付きＮＦ・ＦＡＬライフルで射撃を行ったが、一回の射撃で予定通りの致命的な撃破に至らない。逆に一匹の放った“はどうだん”をあびた警察車両が暴発し、飛び退いた警察特殊部隊員にガラスと金属片の雨を降らせた。

「ちっ…役に立ってほしいときに役に立たねえんだよなあくそが！」ロボットと警察官の銃撃で立ち往生すると読んでいたムクバード種族、全く人間の最新鋭の機械とシステムはこういう時に限って機能不全に陥る、彼はわざのエネルギーを被弾した車両の真上あたりで一気に切り返す。戦闘スピードに入りつつあるので普通の鳥のようにくるっと、という訳にはいかない、体を裏返しにし、翼を微妙に傾けて空気を羽一つ一つに掴ませることで初めて鋭くターンをかけられる。

「おらおら、そんなよったら飛んでてバトルが務まるとでも思ったのかよ！」ムクバード種族は、上空を飛ぶピジョットに背後から“つばめがえし”をしかけた。背後から1発目、鋭くループを打って2発目、離れ際に3発目、目にもとまらぬ早業である。「くっそ…」相手の方もこれは何とか粘り、下へと入り込んだムクバードに立ち向かう。左にやや傾いたループで巧みに彼のを正面にとらえ、“たつまき”をぶち込んでくる。「体制整わないってのは……」この程度だったら突っ込んだ方が早い、咄嗟にそう判断したムクバ

ードは“でんこうせっか”でドラゴンタイプのエネルギーへ突進し、ダメージも全く気にすることなくピジョットの腹元へ飛び掛かった。「辛いよなっ！」「どぶっ！？…この…」スピードの方では完全にこちらの方が勢いに乗っている。とはいっても、大きさは別として種族の差はいかんともしがたい、ピジョットは直ちに切り返しこちらへと向かってくる。「ふん、俺とつばぜり合いか？」ムクバードも一気にターンして左翼を上へと振り上げた。相手の左翼とぶつかり、エネルギーがもたらすマグネシウム燃焼反応にも似た白い閃光が観客のフラッシュライトとなる。“つばめがえし”の押収の中で彼の方が先に相手の隙という物を認識し、左右の翼で攻撃を受け流しながらそこを破壊する方法を確認した。「肉を切らせてやるぜ！」ムクバードは翼の向きをわずかに変えて相手の懐に突っ込む。最後の一発は彼の右翼の付け根を直撃したが、それに全く臆することなく彼はとどめの“ブレイブバード”で相手の胴体を針で突いた紙人形にした。鮮血をまき散らしながらピジョットはほぼ真下へと落下し、中央分離帯の植え込みに突っ込んで見えなくなる。

「さあて今度は下かっ！」ムクバードは体を再び回し、くの字にターンして地面へと迫った。逆さ落としの相手は一番遅れているヤナップ種族、その前に彼は高度が残っている間に右翼を背中へと回し、胴体に巻いたひもから何かを引っこ抜いた。「料理とは言えんが……それに類する行為とは言えるだろうよ！」一瞬上に飛び上がって高度を稼ぎ、右翼に持った短いダーツのような矢を足の付け根の装甲板にこすらせた。間髪おかずにそれを高速道路上に叩き落とす。もちろん相手に当てるわけではない、赤燐をたっぷり塗ったダーツに似た矢に点火させ、ヤナップの足元を狙ったのだ。相手は草タイプ、体のどこかにある植物質から全身火だるまにならないためには一瞬足を止めるしかないのだ。

「ううっ？！」“でんこうせっか”をかけながら、実行犯の人間に言われた通り闘争を続けるヤナップ種族の足元のアスファルトに、発火したダーツが高速の焼夷弾となって突き刺さった。「甘いぜっ

！」急停止した相手にムクバードは“エアスラッシュ”をまさしく「投下」し、鋭く上へと上がる。「ったく！こいつ相当離されてるじゃねえか……」彼は思わず前方下部を見る。こいつの相手をすることに気を取られた１０秒ほど、その間にも残りは逃走を続けているではないか！

「さあて……その程度で私に勝とうとは……」サーナイト種族は素早く前に踏み出し、左右に散らばりつつ正面から突っ込んでくる連中に意識を集中させた。両手で持った洋弓銃によく似た兵器を構え、手先にサイコパワーを送り込んでゆく。「そうそう…あと何秒もないわよ…」意識の水晶に自らの感覚を移すと周囲で手に取るようにわかる様々な“意識”が彼女の周囲に姿を現し、自分の感覚がそれに呼応したますます研ぎ澄まされていくような気がする。中央分離帯を乗り越えようとする一番中心寄りの３匹、叩き潰してやるのにはもってこいだろう。

その瞬間は何秒も待つことなくやってきた。「諦めなさい！」彼女はわずかに姿勢を落とし、右手から手に持った兵装へと最大限のサイコパワーを送り込む。風切音と共に後方に衝撃波が広がり、それと同時に前から走ってきたオオタチとマッスグマそれぞれ２匹ずつの前後足が爆砕し、彼等は胴体から真っ二つにちぎれる。そう、これがサクラ・ワタリ・フユツキが持つサイコパワーの一撃、これくらいの殲滅であれば彼女にとっては全く苦にもしない。

息をつく間もなく“シャドーボール”のエネルギー体が飛び込んでくる。サーナイトは後方に大きく飛び退き、わずかに左手を突き出すだけでシールドを張ってそれを消滅させた。「飛び散った奴を追って、手法は何でもいいわよ！ここは私で十分」彼女が右手から出すサイコパワー一丁でエーフィの攻撃はおろか接近を防ぎ続けている。

「い、行けという事ですね、はい…」いきなりのサーナイトの指示に戸惑いながらも、グレイシアは腰の装備品ベルトとトレージャーバックの締まりを確認し、同じ腰紐にぶら下げられたスカイラブの太刀も確認する。こういう事はすでに何度も経験しているとはいえ、やはり突然の指示に体が鳴れず、右前足が振るえてうまく動かない。そんな自分が腹立たしく思えるほどだった、何が隊長だ、こんなに戸惑っていてどうするんだ?

「え、はい、そんじゃ行くわよ2匹とも…ってもう行っちゃったの?!」彼女の一言と同時に大きく踏み出そうとしたグレイシアは、一歩足を出したところでびっくりした。左手にいたはずのメガニウムとベイリーフは既に中央分離帯付近にまで達しているのだ。「言ってってくれればいいのに!だって隊長は…」

「隊長は私、と言いたいのか?」グレイシアから見れば初見のキリンリキが長い右前足で彼女の左前足の付け根あたりを軽く押す。「君が隊長だったという事は理解できなくもないが、ともかく文句を言う前にやるのが全てだからな。行くぞルザル!」「了解、戦闘開始。目標を駆逐します」彼の隣で先程までアスファルトをはがして遊んでいたキノガッサの表情が硬くなり、彼女の目から急速に子供っぽい光が失われていく。「行きます、後方援護を…」そういうなりそのキノガッサは片側3車線をわずかな助走で突っ切り、検問がなく通常通り車のテールランプが流れる反対車線へと飛び込む。「う、ウソ…何あの子…」「細かいことは後ですよ、彼女に続こう」目を疑うような性格の変化と想像を絶する能力に茫然とするグレイシアを、キリンリキはもう一発催促してキノガッサの後ろから対向車線へと飛び込む。

どうしてか、気が付いたときには目の前に出現した複数の影を追って、高速道路の中央分離帯に向けて飛び出していた。「あの程度な

ら…ヒュンでも楽勝って所ね！うん」この一瞬前まで、自分はどうしてここにいるのか、なぜ経験もほとんどない（というより全くないも同然だ）自分がこうして生き残っているのか、答えのない問いかけに意識の隅で悶絶していたにもかかわらず、“手法は何でもいい”というサーナイトの言葉に反応した直後には、一番先頭を切ってベイリーフは前に突っ込んでいたのである。「きたっ！」「くっそ！」彼の目の前に現れたのはメスのブースター種族、相手の“だいもんじ”は飛んでくる1秒前に彼自身が咄嗟に左に飛びかわしていた。（…っ！やはり……）考えたわけではない、ふと脳裏によぎった時にはかわす方向へと体が動いている。中央分離帯の植え込みという壁を飛び越え、戻り、飛んでくる“かえんほうしゃ”の何発もかわし続けている自分がいた。しかしいつまでそうしているわけにはいかない、彼は自分の意識に何度も前に出る必要があると言い聞かせたが、その度に水晶の中にある別の気体がそれを妨害してくる。その期待が発するエネルギーがこのベイリーフの視界を狭め、４本足の動きを決定打を欠いたものにしてしまう。（…どうする…どうすればいい？！）そう、自分はここにいる存在ではなかったはず、研究機関とも軍とも区別のつかないこんなチームにいるポケモンではないはずだ、その感覚が彼を苦しめ、目の前の相手を叩き潰す事を不可能にしていた。

「何やってんのよ！？アンタそれでも生き残ってんの！」メガニウムが振り返りざまに彼をどやしつけた。今の彼女は普段のユイリィ・ランタン・プレミドールではない、彼女の意識の水晶中心に存在する特異点から凶悪で黒々としたエネルギーを自ら引きだし、それを体内からツル先や全身の神経細胞に送り込んでいるのだ。今の彼女にとって周囲にあるすべての感覚は４本の足から、頭の雄蕊の上から、残りの五感から、そして意識の水晶の表面から彼女の中心部へと流れ込み、彼女に一番見えやすい光景となって認識される。

メガニウムは正面のライチュウの“でんげきは”を全部ツルから放つエネルギー体で叩き返し、ものの２本で相手の至近距離に食い

込んだ。「ひいいっ?!」「もらったわよ!」相手が恐怖の表情を浮かべるのに彼女は、恐ろしい喜びが自分の意識の中に飛び散るのをはっきりと認識した。そしてその凶暴な歓喜に身を任せ、相手の首をツルで締め上げる。その1秒後にはそいつの首元に“リーフブレード”のエネルギーを送り込んで頸椎を粉砕し、身をよじって高速道路の反対側に投げ込む。「ぎゅえっ?!」「どうっ……」彼女の一瞬飛び上がった4本足が地面に着地した時には、ライチュウは背後から迫ってきたピカチュウを巻き込んで後方に吹っ飛び、大型トレーラーの荷台に高速で叩きつけられた。2匹とも左右に血液をまき散らしながらすっとび、後続車両のタイヤによってひき潰される。もう一匹始末するのもメガニウムの計算通りだ、まとめて始末した方が手早いし、潰す快感も大きい。「分かったでしょ!だったらさっさと潰しちゃいなさい!アンタそんなんでフローラを…っと?!」ベイリーフに向かって声を張り上げた直後、目の前から迫ってくるキノガッサの“ばくれつパンチ”のエネルギーが彼女の水晶の前に現れる。これは瞬時にツルを振り上げ、軽々と受け流してしまったが、目の前にいる相手と目線があった瞬間、メガニウムの意識が一瞬そちらに気を取られた。間違いない、このキノガッサの表情、相手の水晶が放つ気体の流れ……(やっぱね…こういうのって裏で売ってるんだよね…)そう、相手は量産兵士、おそらくは裏ルートで犯罪組織が購入したのだろう。

「うんぐっ!」だがGBTXの量産兵士は思考プログラムや自律神経割り込み指示システムもよくできている、彼女が一瞬なりとも隙を見せたと感知し、“ばくれつパンチ”に続いて“たねばくだん”に攻撃を切り替えてきた。慌ててメガニウムは意識をツル先と周囲の空間に戻すが、ツルを振り下ろすエネルギー体がそれを防ぎきる前に1,2発当たった。しかしこの程度で彼女が同行するものではない、むしろその衝撃を利用して宙返りを打って後方に飛びのく。「なかなかなのねえ…」こいつを吹き飛ばすのはなかなかの快感、彼女の狂的な感情は彼女の足とツルに流れ込み、大きく彼女は踏み

込んでツルを振り上げた。

（…フローラ！……）ベイリーフの意識の水晶にその言葉は強くインプットされた。愛するという言葉は似合わないかもしれない、しかし少なくとも義妹の方が自分の事を信頼していたのは事実、そして自分がそれに対して答えようとしていたのも、義妹に対してある種の感情を抱いていたのも事実だ。リーヒュン・バイリング・グリーズの中にフロレアール・エルピー・リトリム・グリーズの記憶、感情、その表情が大きく湧き上がった。

次の瞬間、このベイリーフから戸惑いという先ほどまでの感情も苦悶も吹き飛び、意識の水晶の奥底から使命感のような、はたまたフローラに対する切ない愛情にも似た感情が全てを満たす。そしてその感情は水晶の奥底にある原子炉の制御棒を何の障害もなく引き抜き、そこから発した巨大なエネルギーが彼の脚４本を、ツルを、そしてすべての感覚から抵抗や迷いという物を消した。

それを彼が感じた時、ベイリーフ自身は幼いころからそうであったような自分のやり方を取り戻し、その刹那には振り上げたツルをブースターに向かって１回、２回、３回、と振りおろし、相手を右に突き飛ばした。「きゅうっ？！」「うっ…こんのっ！」相手が吹き飛ばされながらも姿勢を素早く回し、“かえんほうしゃ”を仕掛けてくる。しかし今の彼にそれが通用するはずがなかった、大きく身をよじった右側に滑り込み、瞬時に相手の懐へと突っ込む。ほとんど隙もおかずに彼はツルを振り上げ、目にもとまらぬ速さで女ブースターの腹元を打ち抜いた。義妹を救い出す、もともと自分の使命とも言われているその感情が意識の水晶から流れ込み、それが生み出した強大なエネルギーはツル先に強烈な刃を作り、それは相手の内臓にまで達する。これに加えてツルのエネルギーがもたらした強力な衝撃波が相手を時速１７０キロ以上で横っ腹から弾き飛ばし

たのだ。ブースターは目のも止まらぬ勢いで車両が流れる高速道を突き抜け、防音板に叩きつけられて動かなくなった。

はるか遠方で飛び散る彼女の意識の断末魔、既にこのベイリーフの感覚は自分でもおぞましいと思うほど鋭くなり過ぎていたのだ。「ええいっ!!」ブースターの残した感情に思わず4本足がぐらつく、しかしそんな事をしていては自分はどうしようもない、言い聞かせるように彼は植え込みを飛び越える。敏感になり過ぎた意識と自分でも解釈しようのないエネルギーが体内から湧き上がり、植え込みも分離のコンクリートもものの数歩で飛び越えてしまった。そして次の瞬間には脳裏に叩くべき目標が思考によぎり、飛び上がった体は前転を打って対向車線の端に着地している。

その後自分が何をしようとしたか、全く理解できなかった。彼は車両が高速で通過していく走行車線に飛び込まぬよう爪を立てて急停止する。視界の先に完全に入ってないにもかかわらず、このベイリーフは“タネマシンガン”で前方にいたメリープを打ち抜いていたのだ。強烈なエネルギーを含有して凄まじい威力に達した粒は相手を尻尾の周囲から胴体の前に突きぬけ、相手は声を上げる暇もなくそのまま前につんのめって動かなくなる。そしてその1秒後にメリープの体は2，3台の車両に轢き潰され、巨大なマグロのたたきとなって醜い痕を道路上に残す。

「なかなかやるのねアンタ!ユイの一言で吹っ切れた?」“こおりのつぶて”で別のキノガッサを植え込みに叩き飛ばし、グレイシアが彼の隣に滑り込む。「テルル…大丈夫か?」「はあ?こんな程度で怯んでたら仕事にならないでしょうに……」彼女は気合を入れるかのように右前足を踏み鳴らした。「んならいいんだが…おいっ?!」「わわっ?!」やはりこのグレイシアは強がっているんじゃないか、彼女の表情から意識の水晶に伝わる物を感じ、思わず声をか

けようとしてベイリーフだった。が、その直後、２匹の背後から鋭いエネルギー体が足元に向かって飛ぶ。それが来ると咄嗟に彼が彼女の前足をツルで引っ張り、爆発はグレイシアの右後ろ足１０センチの辺りで発生した。先ほどまで彼女の背中に隠れていた部分。「……あいつらか…」「やばっ…かったかもね…」あのままだったら自分は真っ二つだったかもしれない、思わず背筋に冷たい物が走りながらも彼女は後ろを振り向く。その瞬間には複数のパチリス、ブイゼルが２匹の周囲に飛び掛かってきた。「やばいやばいやばい！」「いつに間にこんな……」ベイリーフは“リーフブレード”でグレイシアは“こおりのいぶき”で手近な１匹をそれぞれ叩き飛ばし、残りが左右に飛び散ったすきに体を大きくひねって後ろに飛び下がる。

しかし２匹後方に追い払ったくらいで状況が良くなっているはずもない、残りは車両が流れ続ける高速道路の中や中央分離帯の植え込みへと逃げ込み、なおも“ほうでん”や“みずのはどう”で２匹を執拗に狙ってきた。「なんたってあんな所にまで……」左上から飛んできたエネルギー体を、受け身のような体勢で転がり込んでかわした彼の目線に飛び込んできたもの、複数のポケモンが大型トレーラーの真上からこちらを狙っているというこの手でありがちな光景だった。しかしこのベイリーフがその正体に反応したのはそれだけではない、あいつらを潰す必要がある、自分たちの仕事はあのポケモン達を倒すことではないかという本能的直感である。そしてそうと意識の水晶にインプットされれば、その１秒後の彼の意識には迷いも戸惑いも一切なかった。

「あいつらを止める！行くぞテルル！」「え、あんな所に…でも…」「やってみて考えるさ！ダメだったら走りゃ…」言っている暇も惜しい、ベイリーフは大きく息を吸い込み、思いっきり前足で前へと踏み出す。不可能かどうかは別にして、やった所で失敗しても怒られはするまい、リーヒュン・グリーズのお約束を彼自身が忠実に守り、意識を目の前の大型車両と自分の４本足に集中させる。「

ダメだったらって…ったくもうアンタって奴は！」高速で走行する人間の機械を追いかけようなんて無茶すぎる、テルル・アストラフスキーは彼に対して諦めに近い感情を覚えつつ、彼を追って力強く走り出した。

「な、何やってんのあの子……ええいっ」トレーラーに向かって飛びこむ2匹を右方向に確認したメガニウム、おそらくはまたしてもベイリーフの無謀な方法だろう、彼の危険なほどの衝動的な行動傾向はこういう物と解釈していいのだろうか？彼女は体を時計回りにひねり、左後ろ足と思念の入り込んだツルでなおも抵抗を続けるキノガッサの首元を叩き、後ろに跳ね飛ばす。「一体アンタはどこからっ！」振り向いた直後に支援の右から現れたエテボース、“タブルアタック”の方向を瞬時に見抜き、巨大な腕となる相手の2本の尻尾を右のツルで受け流す。「うっ？！」「もらうわよ！」花びらの付いた首を下げ、わずかに後ろに退いてから左のツルを相手の腹元に突き立てる。「みみぃっ！」踏み込んだ勢いで突き刺さったツルを軸につんのめったエテボースの首元を、メガニウムの頭の上にいるシィエミが“エナジーボール”で叩き飛ばした。「ロズリン、ナイス！」「お前に言われるばっかじゃないでしゅからね」「うん！さって一気に突っ込むわよ！」右のツルを伸ばして相手からシェイミの顔もとに飛び散った血のりを拭い、メガニウムは4歩足で思いっきりアスアルトを蹴った。聴覚器官のそばで風切音が鋭くなり、足元の地面が一気に後ろへと流れ出す。意識から引き出したエネルギーを使えば一歩あたり15メートル、速度にして時速200キロは軽く引き出せる、彼女もまたベイリーフと同じように足先と目の前の目標に全感覚を集め、全力で地面を保護靴越しに踏み続けた。（……リーヒュン…テルリンと上手くやってよね……）右手前方を走るトレーラーの上に見える複数の影、おそらく彼と彼女はいがみ

合う余裕すらないのだろう、突如として発生した今回の事態、メガニウムは自分の体力と瞬発に集中する意識の一部をふと裂き、そんな安心感のような感情を水晶の中に押し込んだ。リーヒュン・グリーズが持つ特有の真っ直ぐさと人間関係の築き方はテルル・アストラフスキーも、そしてユイリィ・ランタン・プレミドール自身をも強く巻きこんでいる、そんな彼を見ていれば見ているほど子供っぽいかわいさ以上に頼もしさを感じた。

踏み込んだ前足に続いて大きくけり出した後脚の反動で一気に１０メートルは前へと進むことができる。ポケモンという生物は、戦闘となれば瞬間的なダッシュ速度は時速１００キロ以上、一歩辺りの歩幅は１０～２０メートル、ジャンプする高さは１０メートルにも達するものだ。無論通常の生活をしている時は決してそうではないが、必要とあらば人類や通常の動物をはるかに超える運動能力を発揮する半文明生物、このベイリーフ種族もそうであるが故、最初の数秒間は何の苦も無く大型車両の後部を追跡することができた。「やるしかないか…」徐々に足へと溜まってくる疲弊を案じながらベイリーフはアスファルトを蹴り続ける。この戦闘スピードであと何秒間持つかは分からないが、いずれにせよあそこに飛び掛かる以外に方法はない。そうと決まれば、それ以外に彼取るべき選択肢は意識の中に一つしかなかった。意識の中で目の前にある高台、しかも一瞬気を抜けば距離が瞬く間に変わる目標の場所までの距離を目視し、それに必要な行動を読み取る。この間わずか2秒、このベイリーフが望まなくても彼の意識下にその情報は流れ込んでくる。これに彼特有の無鉄砲さが加わればもう止めるものはない。

「いっけっ！」彼は後ろ足に渾身の力をかけ、力強く上へと飛び上がった。一気に視界の下で平面になる道路、そのまま彼の体は斜方投射の軌道を描き、前足の爪がトレーラーの淵を掴んだ。頭の上に

生える虫食い葉っぱが強烈な気流に揺さぶられ、これに加えて荷台の金属を踏む複数の気配が彼に意識を走る。「…ううっ…これなら…」このまま突き落とされるわけにはいかない、しかしここまで不利な状態に持ち込んだのは自分自身だ、ベイリーフ種族はここに来てひどい後悔に似た感情を覚えた。しかしそれに戸惑っているだけでは状況は打開されない、ともかく上に上がるのが安全そうだ、そう直感的に判断した彼はありったけの力で両前足の爪先に力をかけた。自分の体に意識の水晶から引き出したエネルギーが注ぎ込まれ、彼の足の筋肉に強力なパワーを与える。ベイリーフは上空で宙をうって荷台の上に着地し、後ろ足も荷台の淵5センチの位置にどうにかはいる事が出来た。

「ううっ…アンタ一体どうやってそんなに早く…わわっ?!」「テルル!」その直後、彼に続いてどうにか荷台の後ろにある開閉用の手すりにつかまり、そこを後ろ足の踏み台にして上に上がろうとするグレイシア、大型トレーラーが右に車線を変えた勢いで左後ろ足が滑り落ちそうになった。金属に淵を掴んだ前足がその反動で離れそうになった直後、ずり落ちかけたその前足の爪先をベイリーフの左ツルが掴む。「いっ…何…」ひもで締め上げられるような痛みと痺れで彼女は思わず目線を荷台の上へと挙げる。カナリア色の首元から伸びる暗緑色のツル、ベイリーフは右のツル一本で上に溜まっているポケモン達の相手をしていた。

「いい!ありがたいけど大丈夫!」グレイシアは耳元が風で激しくなる中、必死の声を張り上げる。これで何かしらを食らって2匹とも落ちたら話にならない、左目の隅に移る地面、支援の上から下へとアスファルトがかすむほどの勢いで流れていく。ここに叩きつけられたら…彼女の意識から発せられた恐怖という気体が彼女の背筋を凍らせるが、彼女はムキになってその感情を振り払おうとする。こんなところで彼に頼っているわけにはいかない、どうにか体を回せばケガはしながらも助かりはするんじゃないか、その可能性にかけるしかないと思った。「アンタは目の前の相手に集中して!私は

自分で何とかなる！」「ばか、その証拠は？！」「多分よ！」「そんなら離す訳ないだろっ！…ぐえっ？！」ブイゼルの放った“れいとうビーム”を首に円状に生えた葉っぱに受け、思わず左後ろ足を踏み外しそうになりながらもベイリーフは一瞬だけ首を左後ろによじる。「バカはそっちよ！そんなんで何時まで…」「何時までも持たせてみせるさ！それに……」飛び掛かってきたブイゼルを感覚が伝えるがままに“はっぱカッター”で叩き飛ばしながら彼も声を上げる。彼女を一匹この速度で落とすなんて死んでもしない、それにここまで来たら自分の背中をクッションにしてでも一緒に転げ落ちた方が彼女が助かる可能性は大きい。肝心の自分はどうするか？そんなものは今の彼の思考には無い、落ちた時に考えて体を回せば助かる、すなわち直感頼りにすることに決めた。「…君一匹で落ちるのは心配だからな、落ちる時は俺も一緒に落ちる！何匹か一緒にダイブなら怖くないだろ？」

「あ、アンタって奴はホントに……」足元を流れる高速道路、頭上に広がる夜空、時折通過するナトリウムランプのオレンジ色と案内電光表示板の影、その中で体を精いっぱいの事をする彼に対し、グレイシアは自分の意識の水晶の中に、これまでにない感情が芽生えるのを感じた。ベイリーフは彼が落下して自分をかばった場合は助からないとまで考えが今いかない、しかしそれだからこそ、それに彼特有の生真面目さ、バカさ加減と無駄な誠実さが加わってそれを心配しない行動がとれるのだろう。彼のツルを頼りに右前足を荷台の淵にかけながら、彼女は彼のツルから伝わってくる温かさを感じた。「……変人なのよね！」それと同時に彼女は後ろ足を蹴りだし、勢いを使って前に転がり込む形で荷台に飛び上がり、ベイリーフの左に着地する。「と、とにかく今は我慢する！とにかく目の前をやればいいのね！？」「そりゃ、もちろんだ！」この状況に至っては今までのいがみ合い等気にする暇はない、２匹は思わず見合わせたお互いの目線からそれを確認し、ベイリーフの方から前へと踏み出した。縦方向に１０メートル、横幅は３メートル程度のトレーラー

の荷台の上、彼は足の爪先からくる感覚を意識しながら、目の前にいるエテボースやパチリスの攻撃をかわしていく。飛び上がり、飛び込むように前転してすぐに起き上がり、その隙間を縫ってツルを振り上げる。わずかにでも足を踏み外せば5メートルほどの下、アスファルトという巨大なベルトサンダ（木工で使う研磨機）にうろこが焦げるほど引きずられるか、首から落ちて骨を折るか、それと後続の車両に叩き潰されるかしてしまう。「くっ…なんたって狭すぎるぞ…」なんでこんな場所を自分は選んでしまったか、今頃になって彼は自分のここまでの行動を悔いた。自分の能力を引き出す足元を確保するために意識の一部を自分のツルや周囲の流れにではなく、４本足の先に持っていかなければならず、その分相当なエネルギーの必要な攻撃に手間取る。「ぐ?!」エテボースの“きあいパンチ”に腹元を打たれてわずかに下がった刹那、後ろ足が浮かび上がる感覚と同時に後ろへひっくり返りそうになった。退こうとした際に感じた目の前の相手から伝わってくる奇妙な感覚、それに一瞬気を取られたのだ。

「こいつ……」巨大な尻尾を利用して叩き落とそうとして来るエテボース、ベイリーフ種族は前足で荷台に掴まり、飛んでくる攻撃の嵐をツルですべて受け流す。間違いない、ハイドルの地底湖にいた奴らと同じ、こいつは人工の量産兵士なのだ。メガニウムの話からすれば、彼らを生産する連中は人間の公式機関や団体にしか販売しないとは言っていたが…しかしなぜこいつら犯罪組織に?ともかくそんな事を考えて暇はない、彼は直感が伝えるがままにツルを振り、“ダブルアタック”の猛攻をしのぎ続ける。

しかしその直後、エテボースの反撃が突如止む、相手は後方から首を何者かに締め上げられ、間もなく背後から体が前にしなるほどの殴打を受けた。そいつの背後から現れた別のポケモンは気絶したその相手を後ろへと投げ落とす。すぐさま右から迫ってきたパチリスの“ほうでん”を上に前転を売ってかわし、右足で蹴りをそのパチリスの左ほほにぶち込んでトレーラーからけり落とした。その隙に

ベイリーフは後ろ足を荷台の上に上げ、どうにか安定を取り戻す。彼の左手で目もくれずに周辺のポケモンを叩き落としていくそのキノガッサ種族、やはり彼女に間違いない。「ルザル…なのか？」「目標撃滅を最優先、残りはあとです」しかし先程までのほんわかした空気とは全く違う、まるで別人のようなオーラが彼女の周囲から出ている、それにベイリーフの意識の水晶には敏感に感じられた。しかしその原因を考える余地はないし、考える気もない、右手からはまだ残っている相手ポケモンがいる。彼は軽く息をつき、すぐに体をひねって右手から飛んでくるエネルギー体をかわしにかかった。

「んっ？！」目の前にいたピカチュウ2匹を“ふぶき”で凍り付かせ、ショック死したそいつが荷台の上に倒れこむのを脇目で確認するグレイシア、彼女からしても自分が隊長として負けていられない、そういう負けず嫌いな感情が意識の水晶を満たし、中央分離帯の周囲から飛び乗ってくる連中を次々に叩きつける。「すごい……ルザルちゃん……わっ？」ちらりと見えたキノガッサの動き、頭上を通過していく案内表示板の鉄骨を、彼女はぎりぎりで姿勢を低くしながらも一瞬そちらを見入った。キノガッサの動きには目を見張る、というよりこの世界の物とは思えない何かを感じさせるものがある。先ほどの表示板にマリルを殴り飛ばした勢いで叩きつけ、ムーンサルトでそれを飛び越えて着地、その寸前に上空にいたハトーボーを“たねばくだん”で貫いて撃墜する。テルルの目に映る素早いかつパワフルな肉弾戦、彼女の動きには全く無駄がなく、全身を完ぺきに使いこなしているようだった。

しかしそれが仇となったか、背後からモフモフとした物体に首を掴まれ、背後に引き倒される。「ひっ…締まる締まる…」苦しさに喘ぎながらも、渾身の前足の力で上下を入れ替える彼女、相手の力は大したこともなく、瞬時に相手を締め上げる体制に入れ替わった。

視界に飛び込んできたのは小柄なメリープ種族である。「や、やめて……」「?!」あまりにも甲高いメス声を発する相手に、“こおりのつぶて”を仕掛けようと振り上げた右前足が止まる。自分の鼻先に相手の表情が視界に入ったとたん、彼女の意識の水晶は凍り付いたような衝撃に襲われた。このメリープはまだほんの子供、モフモフ毛の丸まり具合や尻尾の短さから10歳前後だ、なぜこんな子供がこの場所にいるのか?その疑問に対する困惑と自分に対する嫌悪で震えとめまいに襲われ、それ以上の動作ができなくなってしまった。

がしっ!トレーラー前方にいたライチュウをベイリーフがツルで弾き飛ばす。「はあ…これだとほぼ真正面に落ちる……」跳ね飛ばした勢いに乗って彼が後方に飛びのいた直後、轟音とともに3匹や遺体が散乱する荷台が横滑りを始め、彼ら3匹にとって右側だった方向がみるみるうちに正面へと変化していく。「ど、どうしたのいきなり……」「おそらくさっきぶっ飛ばした奴をよけようとして…」「はあ?!それじゃ全部アンタの…ひいいいっ?!」「おいおいおい!?」グレイシアが血相を変えてベイリーフの首の葉っぱに掴みかかろうとした直後、状況がさらに悪化し始めた。彼等の立つアルミニウム製の荷台が水平から滑り台へと変化し始めている、この状況が続くと自分たちを待つ運命、それは明らかだった。

「テルル、一気に行くぞ!」「一気にってどこよ?!」「前前!飛び降りるんだよこっから!」もう逃げる場所は1つしかない、このままでは前にひっくり返って荷台に押しつぶされる、それは確実に決まった結果しか招かない、それならばそのまま首を折る可能性はあっても……そんな考えが彼にあるはずがなかった。飛び出してから何をすべきかはたぶん分かる、たぶん。ベイリーフは瞬間的にツルでグレイシアの左前足を掴んで引き寄せる。「もう時間無いからな!待たない、それっ!」「ちょまちょま……わわわわっ!!!!」グレイシアが抵抗する暇もなく、ベイリーフは4本足で荷台の淵を蹴り、滑り台から絶壁になりつつあるトレーラーのカーゴ部分

から無理やり飛び降りた。

みるみるうちに迫ってくるナトリウムランプにわずかながら照らされた暗闇、ベイリーフ種族はそのわずか3秒の間にこの後何が起こるのか、意識の水晶の周りを流れる未来の時間を思い浮かべ、その感覚を思考にかける。

思った以上に速度もあり、地面も固い。何もしなければまともに叩きつけられるというかなりまずい状況だ。しかも運よく着地できたとしてもその背後からはあの物体が後方から飛び掛かってくる、まずいどころではない、きわめて危ない状況だった。だがここではどうしようもない、やってみて考える間に考える事が不可能になってしまう。冷たい夜風を全身に受ける彼の背筋にあまりにも暗い予想が走る。

視界いっぱいに広がってくる路面、ツルで無理やり掴んだグレイシア、もうどうしようもない。今思い浮かぶことはただ一つである、ベイリーフは渾身の力でツルを引いてグレイシアを自分の腹元に引き寄せ、もう片方のツルを上に振り上げた……

深夜のサンフランシスコ市に響き渡る轟音、米・マックトラック社の大型トレーラーは突然前に落下してきたポケモンの死骸をかわそうとして急ブレーキを踏んで右にハンドルを切った。その結果タイヤのロックで摩擦力を失った、後方のカーゴ部分が大きく右にスライドしてトレーラーがくの字に折れ曲がり、車両が完全にアンコントロールラブルになってしまったのだ。ちょうど目の前に会った出口減速車線を防ぐように横滑りするトレーラー、たまたま減速車線にいたフォード・マスタングＧＴ６のドライバーの目の前に、あ

まりにも巨大なバリゲードが出現する。「っ！」ドライバーが咄嗟にブレーキペダルを踏みつけたが時すでに遅し、マスタングGT6はものの見事にカーゴの左腹に突っ込み、一緒くたになった2台、先に滑っているトレーラーの連結部分が出口車線の分離帯に激突した。その衝撃で漏れ出した燃料が引火、周囲を真昼のごとく染めるオレンジ色の爆炎と衝撃波が辺りを包み、徐々に火の手が強くなりつつあった。幸いだったのは深夜とだけあって交通量が少なく、アメリカのハイウェイにもかかわらず事故に巻き込まれた車両が2台で済んだことだ。まあ、周囲で目撃する者には十分怖いものだが。

それから一体どれほどの時間が経ったか、吹き飛んだ分離帯警報灯と共に草地に倒れこむベイリーフとグレイシアの意識を引き戻したのは上空を飛ぶヘリのローター音、検問所から駆け付ける対向車線の警察車両のサイレンと停止音、出口の方から集まってくる警察官と道路管理企業の関係者の足音と騒ぎ声、火災の発生したトレーラーに消火剤をかける音といった人間世界に何とも在り来たりなものだった。

トレーラーを追いながらそこから転げ落ちてくるポケモン達にとどめを刺してきたキリンリキとメガニウムは火災をよけながら走行する車両の隙間を見抜き、中央分離帯側から一気に出口側へと走る。「テルリン！ヒュン！大丈夫？！」ユイリィの方は炎上する大型トレーラーと足元に飛び散ったガラス片や金属片、車両から漏れ出た軽油をちらりとだけ確認し、そのまま出口方向と本線の間に存在する草地へと飛び込む。軽油に4本足が浸るのは現在だとかなり危険な情勢だが、わずかに足元に寄せた意識から思考を伸ばせばそれらがどう散在していて、どう飛び越えればいいかはすぐにわかった。

「また…かなりやったよなあ彼等は…」ハイドルの時もそうだったが、あのベイリーフとメガニウムはなかなか派手な事をするやり

手のようだ、バルチャーは意識の片隅で2匹とグレイシアに対する驚きと称賛が入り混じった感情を浮かべる。「ん……」3匹の元に寄ろうとした彼が何歩か進んだ直後、右前足元に何かが触れた。足元を見つめた後、右前足でそれを拾い上げ、自分の首をなるべく上に上げた前足に近づける。長さが１０センチ程度の水色、先端の金属の部分も含めてひどく変形し、黒く汚れている。キリンリキ種族にはそれが何であるかすぐにわかり、同時に自分がここに来た理由を思い出した。そうか、こいつを拾えばいい、こいつの奪還が俺の任務だ、バルチャーはわずかに白いつの先から思念を送り、腰に巻きつけてある無線機のスイッチを入れる。「バルチャー・オーソン、例の物の一つは確保しました」“了解したわ、国連のひこうタイプの彼がもう一つ回収したらしいから、今回はひとまず成功、って所ね”上空のヘリにいる人間の女の声が無線機から聞こえた直後、彼の背中もとに何かが飛び乗った感覚がする。「お、アンタもアメリカ国防省の関係者か…不肖ながら俺もアメリカ空軍の関係者でな…」ロックオンは首からかけ直した彼が持っているのと同じ人間の機器を左翼で持ち上げる。キリンリキが右前足にしばりつけている部隊章から、その存在はすぐにわかった。本音を言えば少しだけ羨ましくもあり、上位組織でこき使われるなんてお気の毒でもある。「…俺がぶっ潰したヤナップが持ていやがった。人間連中に頼まれたんだろうな…」

「そうか…無きにしも非ずの話だ…」バルチャーはムクバードの首から下げられているタグを少し見つめ、それから口にくわえ直した機器を右前足で開いたトレジャーバックに放り込んだ。やはり空軍の航空騎兵か、そういう態度を取っているな、と。「大丈夫ですかバルチャーさん?」彼の右手からぴょんと飛び寄ってくるキノガッサ、隣から走りながら見ていてあれだけ凄まじいことをしていたにもかかわらず、ケガらしいケガは一切ない。「ルザル…よく大丈夫だな…」「はい、羽目を外したほうが楽しいですしね。あ、あれ…」きょろきょろと辺りを見回す彼女、ふいに背後の分離帯付近に

ある草地へと歩き、突然川に飛び込むような格好でその草原に体を伸ばした。「気持ちいいですよ～ここ。一緒にやりませんか？」「おいおい…彼女って…こういう性格なのか？」

「ま、まあ…確かにそうなんだが…」楽しそうに体を転がすキノガッサを見つめ、キリンリキは怪訝そうな表情を浮かべた。背中のムクバードが言う事はあまり聞こえてはいない、雑草しかないと思った場所、そこに誰か植えたか、それとも風や鳥が運んだか、季節外れの黄色の菊が2，3本生えている。ポケモン達にとってむくげは誕生とその祝福を示し、菊、特に黄色い物は死と埋葬を示すもの。バルチャーにさえまだ理解できない行動や言動をすることが多いルザル、彼女が菊の上で楽しそうに遊ぶ姿に前途に対する不安を覚えた。

「ううっ……」リーヒュンはわずかに目を開ける。全身の節々が痛み、起き上がれないほどのめまいと体の重さを感じた。ただ、この時点でわかったのは自分が生きているという事、すなわち自分はあの爆発と衝撃を生き延びたばかりか、飛び降りた拍子に大したケガもしなかったという事になる。

生き残ったと言えばだ、視界が戻ってきた次の瞬間に、彼の体は大きく震えた。テルルは、テルルはどうなった!?起き上がりたいところだが体が言う事を聞かない、「テルルは…」彼が何とか周囲を探るためツルを伸ばそうとした直後、右に倒れている自分の左側の体の上に、何かが乗っている感覚があることを彼自身が思い出した。鈍くうずく首をどうにか左回し、自分の体の上に寄り掛かるグレイシアを見た。彼女はベイリーフの胴体の上に乗り、彼の足側を頭にして気を失っている。リーヒュンはツルを伸ばし、彼女の胴体と首元へとツルを伸ばし、そこから伝わってくるものに意識を集中させる。だが…わずかにでも思考を寄せようとすると頭が激しく痛

み、思わず持ち上げた首が下がりそうになった。おそらく彼女がケガをしていれば、何かの違和感となってツル先から伝わってくるはずなのだが……

「大丈夫、テルリンも大したケガはしてないよ……」ユイリィが彼の首元をツルでそっと撫で、もう片方のツルはグレイシアの頭飾り辺りを軽く2回たたく。「リーヒュンもそんなにじゃないみたいだし…ヒュンにとってこれ位は、ね？」

「う、うん……俺は全然平気、そんならいいんだけどさ」ベイリーフは視界をわずかに動かし、倒れこんだままの自分の左前足をわずかに彼女に向かって動かして見せる。カナリア色の細かいうろこが、5センチ程度の長さに当たって赤く染まっているが、この前爬虫類に噛まれた時より大した事は無い。「まったく、噛み傷の次はこれか…まあいいや。それにしても……俺もテルルもどうして無事だったんだろう…」

「ん？それはヒュンがツルと前足のここで頑張ったからだよ、うん」「頑張った…つっ！？」「そう、ここが頑張ったんだよね」メガニウムはベイリーフの右前足ある傷口を右前足の爪先で少し突き、それからそっと撫でる。「リーヒュンはテルルを守りたかった、たとえ自分がダメでも、あのトレーラーから助けようと思ったんだよね。それがでてきたの。大きなエネルギーになって2匹の周り、ね？」彼女は2匹の後ろで、相変わらず火を上げる車両を見る。周囲では警察による交通整理が始まり、周囲の1車線をカラーコーンで封鎖していた。出口車線の方から緊急車両が上がり、それに関係する人間たちが周囲で動き回っている。「すなわち、サクラさんは言ってなかったけど、うちらにはそういう能力ってのもあるのよね。ヒュンの場合はテルル、その感情がね、きっとリーヒュンのツルと右前足から出てきたんじゃないかな」

「なるほど……そんなもんか…」第三者からすればよく分からないが、ベイリーフにはなぜかメガニウムの話が意識の水晶にしっくりときた。理屈は分からないがそれは可能なのかもしれない、この

半年の経験か、意図的に伸ばした自分の勘の鋭さか。
「でも……ヒュンはさすがだと思う」リーヒュンの葉っぱの生えた頭の上をユイリィがそっとツルでなでる。相変わらずこの子はやんちゃ盛りのようなことをする、ポケモン特有の瞬発力を生かしてトレーラーに飛び上がってまで相手にするなんて、真っ当なポケモンなら考えもしない、相手にできたのはそいつらが人工の量産兵士だったからだ。
そんな事を平然とやってのける彼、融通が利かない面やあまりにも清純な物を求めすぎるきらいもあるが、やると決めたことはやり通し、いざとなれば何の疑いもためらいもない、そんな彼が彼女の意識の水晶の中で一層甘酸っぱい存在に感じられるようになった。
「…それでいいの、うん。ウチはリーヒュンの事、こういうのがいいと思うから」

「ううっ…あ、あの子…」ベイリーフの腹の上にぶっ倒れていたグレイシアがもぞもぞと動き、ゆっくりと体を後ろにひねった。「あの子…どこ行ったの？小っちゃいメリープ…どこ？」
「めりーぷ？……あ…あの子ね…」彼女の言っている事はうわ言ではない、メガニウムは咄嗟に周囲を見回す。彼女の意識の水晶が反応した通り、2匹の後方2メートルの草地にモコモコとした影が見えた。
「……！」メガニウムはそのメリープに駆け寄り、ツルで抱きかかえた。背中側を強打したらしく、ツルから大量の血液が滴り、彼女の前足の保護靴を濡らす。ツル先から感じられるこの子の感覚を読み取った直後、ユイリィの首から背中に諦めから生じる涼しさがすっと走った。この子はもう助からない、自分が努力しても助ける事は出来ない……
「……私…私は……」メガニウムのツルの腕の中、メリープが消

え入りそうな声を上げる。「ん、どうしたの……大丈夫、ウチは何もしないよ…」彼女は無理に笑顔を作り、ツルをほんの少しばかりゆすったが、そんな動きも意識の水晶の底から浮かび上がってくるものに数秒で消えた。メリープはか細く肺から空気を漏らすように音を振り絞る。「……父さん…母さん…パル…は…この…」メリープは大きく息をつく音を口からこぼし、直後に青色の首と前足が下へと垂れた。

「……パル…」何とも言えない悲しみをユイリィはこらえた。何があっても泣きはしない、何年も前にそう決めたのだ、彼女は口を強く締め、メリープの左前足についたリボンのようなものを右のツルで取る。

“パルフィ・カリーナ・キタイワキ：ゴールデンゲートブリッジ東部”

「…ブリッジか……そこに住んでたんだね……」彼女はぼんやりと高速道路の向こう側に広がり、ライトアップされた大きな橋を見つめる。アメリカ・サンフランシスコ市のシンボルともいえるブリッジ、まだこの周囲にもポケモンは残っていたのだ。おそらくこの子たちは実行犯に利用されて……彼女の意識の中に強い感情が走る。ポケモンの文明が蒸発していく時代、その影におびえながら人間の思うがままに操られるポケモン達、強大なエネルギーによって煌々と輝く人間の市街地とそれにかすむ空、どちらの光も凍り付いたような冷たさを放っていた。

「ダメ…そんな…」ぼんやりとするグレイシアの目線、彼女からでもそのメリープが力尽きる様は見えてしまった。「私は……どうして…」くらくらする視界と意識の中で彼女は首を下げた。自分が

殺したわけでもないが、何かできる事があったはず、自分が護ってやる事ができなかった、同じ年頃の弟を持つ身としてテルル・アストラフスキーの意識の水晶は激しく痛んだ。今の彼女にはそれ以上の事は考えらなかった。

その頃　シアトル市の一角

「…そうか、データの記憶端末を奪還したか！よくやったぞ…」シアトル市東の郊外に広がる高層住宅街、その中でも格別背の高いタワーマンションの最上階にある一室、ＧＢＴＸ社代表取締役の男がベッド脇にあるスタンドランプのそばにある携帯端末の着信バイブ音で目を覚ました。「…ああ、そうか…わが社のクローン、ｉＲｏｂｏｔ社のメカとは…よし、いいぞ…」寝起きではあったが、ＧＢＴＸ本社で情報収集に当たる情報管理部の関係者からの報告に、喜ばしい快感と共に眠気もすっ飛ぶ。ついにデータの奪取と漏えい阻止に成功した、そればかりでなくｉＲｏｂｏｔのセキュリティー用ＳＰＤロボットと共に新型クローン量産兵士は十二分に活躍したようだ、真偽を聞く前にもかかわらず彼の頭の中で、社の未来図が急に開けたようだった。これでアメリカの技術系経済界、国防連中の軍産複合体もクローンバイオテクノロジーの実力を認め、今まで“非人道的”としてロクな支援を受けられなかったこの業界も成長戦略に示さざるを得ないだろう。もちろん、自分がアプローチすれば、の話だが。

“今日の朝には連邦政府の方から公式に発表があるでしょう、それに関しては報道が入り次第送ります”「よろしく頼むぞ。これで…わが社の実力は西側陣営全体で評価されるだろう…」代表取締役は満足げな声を出す。まだ公式発表も出ていないにもかかわらず、ＧＢＴＸの評価が北米やＥＵ諸国、オセアニアといったＮＡＴＯ陣営

にまで広がるかもしれない、そんな楽観論が彼の意識を満たした。そしてもちろん、国連とそれに関わる全てに対する見通しの良さも。

全てが順調、何のミスもない。完璧だ、怖いくらいに。

興奮と喜びの余り、男はベッドのスプリングを使って飛び起きる。

一人心地で歩み寄った大きな窓ガラスの向こう側に広がるシアトル市中心部、港湾貨物船ベースや臨海工業地帯、シアトル空港の航空機誘導灯火は今、彼にとってまだ夜を開ける気配もない市街で自分を祝福するサーチライトと花火だった。

２０１３年　２月１８日　中国　北京市郊外　　１０時５４分

北朝鮮の核兵器開発に関する６か国協議も開催された経歴のある会議場、そこの空気はかつてここで行われたあらゆる国際会議や大手企業取引、外相会談を超える緊迫感に包まれている。「それで…こちらの見解としても、まずは辺海防公安当局が各海上プラントから撤収することが最優先、というのが本国、及び英・豪の意志です。この状況が続くというのは実効支配も同然ですから…」円卓の前方、通訳用ヘッドフォンを装着する中国当局関係者と中国系企業の代表たちを、アメリカ在中大使の男は強い目線で睨みつける。漢民族というのはこういう表情なのかもしれないが、手元にあるタブレット端末に視線を落としたまま目の形を変えようともしない彼らが腹立たしくて仕方がなかった。先ほどから表情を全く変えぬ銅像と化している眼前の連中、これが一般市民同士だったら殴り飛ばしたい、おろしている右手がかすかに震えるほどだ。「…必要とあれば本国大統領、英・豪の首脳陣とそちらの国家主席間での会談も必要とな

るレベルです。早ければ今日の夜にも、明日でもまったく可能ですがいかかでしょう?」

「さきほどから支配支配と繰り返していますが……」中国政府関係者の人間が、やや間をおいて視線を上げる。「…こちらが行っているのは支配ではありません。貴国の大手企業がわが国との契約を超える資源採掘を行っている、それに対する法的措置ですよ。それに、検閲の方は明日の0時0分0秒を持って終了となります。すでに通達はしてあるつもりですが…」その男は目の前にいるアメリカの関係者と、自国の辺防海公安当局が検閲に入っている海上プラントを所有する企業の関係者に目線を送る。

「法的措置、ですか…それは果たして根拠のある物でしょうか?」まったく、あんな表情をしておきながら手元の端末のリードアウトを呼んでいないのか。それとも読みながらあえてそう言っているのか、ひょっとしたら中国人はタブレット型情報端末を使えないのか、呆れ半分、冗談半分の皮肉な気分に大使と米国の次官は双方ともに思わず座席から立ち上がって退室したくなる。とはいってもそんな事をしたら、中国側の批判の思うがままだ。彼はその衝動をこらえ、左右にいる米・エクソンモービル社、イギリス・BP社、オーストラリア・BHP社の関係者たちにアイコンタクト送る。「情報端末の見せ方を教えてやれ」同時通訳機越しに男は言った。

「はい…わが社の採掘上限の設定は赤帯、この5年間の記録は青帯です」最初に入ったのはアメリカ・エクソン社の男だ。こんな連中に言って聞かせるのも胡散臭い、という表情を慎重に隠しつつ電子端末に表示されたグラフをタッチペンで示す。「見ての通り、わが社が既定の値を超えたことは一度もありません。これ以上拘束が長引けば貴国の資源調達と経済にも悪影響かと思いますが?」

「次はこちらもです…」次に来たのはイギリス・BPオイル社の女、自分でリードアウト位読んでくれという説教するような視線を彼らに向ける。「グラフはエクソン社の物と同じ、隣にあるのは採掘用ポンプと機器の増設要請書です…表示切替、できます?」「も

ちろん」彼女もまた、相変わらず聞いてるのや多難なのやら、免染を合わせようともしない中国の関係者にうんざりした表情をする。思わず皮肉がこぼれてしまった、こんな端末の味方も分からん、といった表情をしている連中には資本主義は向かないんじゃないかと本気で思うほどだ。「この通り、許可はありますしそれで上限を超えた記録はありません。エクソン社と同様、これ以上採掘停止が長引くのは貴国経済にもマイナス材料になります…」

「そして…わが社ですな…」最後に来たのはオーストラリアの希少金属採掘・精製企業であるＢＨＰ社の男である。「まあ言うまでもありませんが…わが社も契約した採掘上限を超えた事はありません」彼は右手に持った煙草を灰皿に押し付け、わずかに顔を中国関係者側に近づける。おそらく多少は脅迫でもしないと、中国当局もそのおべっか使い同然の企業も相手にしてくれないだろう、そう思った。さらにこちらには、もう一つ中国に対して優位に立てる点がある。「こちらの採掘停止は…貴国の工業に大打撃ですな。まあ、採掘中に漏れ出した金属がプラントのナノバイト資材を流出させたのなら別ですが、そうでないにもかかわらずこの状況が続けば、レアメタル資源不足…特にリチウム、ベリリウム、それの枯渇が始まっている貴国の企業が何というやら」

やはり資源採掘・エネルギー系企業とだけあって出してくる口調もなかなかだ、大使館の男はグラスの水を少し口に含んでから立ち上がる。これだけ言われれば少しは態度を変えるだろう、少し得意な気分だ。「…それに対する中国側の見解は？」

「……資源採掘の上限のデータが問題ではありません」中国当局関係者の男が葉巻に火をつける。「我が国の企業の採掘量に対し他の企業のそれが大幅に上回っている。採掘機器の数とくみ上げ量は同じであるはずです。それに対する…審議の調査ですよ」

「採掘機器の設置数が同じ、ですか…」アメリカ・エクソン社の関係者がテーブルに肘をつき、両手を顔の前で組み合わせる。この当局の人間は文系か、アメリカ人の彼は目の前の中国人を見下すような気分になった。文系の人間という奴はたいてい理系の知識…例えば数学、化学、工業技術…に疎い、国によっては科学技術戦略関係の象徴に理系の知識人（たいてい研究機関や企業から出てくるが）がいない事もある。「…それは機器の性能の差では？あくまで数値は計算とコンピュータシュミレーションによるもの、１００％の性能が出ない事も、期待以上の数が出る事もあり得ることです」

「それはそうだとしても……」中国の関係者は卓上に置かれた端末を右手の人差し指で突き、不満げな表情をする。「……規約にある一方の利益独占を防止するという観点ではある程度の制限が必要、それが政府側の判断です」

「観点……市場経済でそれは影響力を持ちませんよ」イギリス・ＢＰオイル社の女が話を切りだす。やはり中国は近年まで社会主義の概念が根付いていたこともあり資本主義市場経済は、という話を考慮してもあまりにも幼稚すぎる。こんな連中にやはり資本主義は向かない以前に、国家としてあまりにも子供のような言い訳をつけすぎだ。彼女はやや得意げな気分で、中国当局という子どもに言って聞かせてやりたくなった。資本主義の常識という物を。「規約の一条目にあります通り、原則は自由市場原理に基づく自由な開発と生産です。企業・国家間の取り決めに違反しない限り、採掘と精製技術の研究や新規開発をしようと、新しい機器の増設を行おうと自由となるはずですよ」

「規約には一方の独占を防ぐとも書いてあります……」中国の資源採掘企業の関係者が初めて口を開いた。その表情には、３企業とアメリカ政府関係者に対する挑発に似たものがありありと出ている。「わが企業はあなた方をはじめとする韓国、ロシア、台湾などのプラントにも生産・出荷量で押されています。この時点で不平等が生じて……ええ…」

「それが自由市場原理に基づく企業間競争ですよなあ…」オーストラリア・ＢＨＰ社の男が新しい煙草に火をつけ、軽く一服する。やはり中国の企業も政府もこの程度の手しか使えないのか、これでは緊張感が起こるはずもないと自分で思った。だからこそ煙草を吸っている余裕がある、自分の傾向を彼自身が考えていられるほどだ。

「そちらの言い分では日本海（ジャパニーズ・シー）…まあ東海（イースト・オーシャン）ともいいますが、そこで他の企業が政府と入れ知恵をして経済活動に損失を当てている、そういう手の抗議は何度もありましたが……」彼は手元の端末に一瞬目を落とす。再び視線を上げた時、この男のその目線は長年の交渉経験が生んだ鋭いものに変化していた。「…あまり意味のない物ですよ。国にも企業にも。今の時代、経済競争に於いては科学技術研究も政府も成長戦略も経済活動の一部、市場競争を勝ち抜くための一般的な方法です」

「まあまあ、企業間の開発競争の件はこれ位にしましょう……」アメリカ在中大使の男が右手を軽く振って話題を戻す。「……やはり、この件に関しては首脳会談に持ち込むのが最善だと思いますね何せ……」彼は水の入った手元のグラスを軽く揺らす。結露したグラスの中で氷が軽く音をたてた。「……軍事衝突の件とも重なっていますし」

「全くその通りですな…プラントの拘束措置解除はあちらの結果を聞いて本日中に判断しましょう……」中国当局の男も頷き、ぶら下げられたシャンデリアが黄金色に照らし出す部屋の壁を見つめる。

「何せあちらは…紛糾していますからね。わが軍の戦闘機が空母に墜落したもので…ええ、こちらは１１人の死者を出してますから紛糾で済むだけまだまとも、といった所ですけど…」

休憩時間に入り、大使の男は会議場入口の車寄せへとでる。どんよりとした曇り空、遠方に広がる北京市再開発地帯の建物、完璧に舗

装された道路と周囲の並木道を歩く系便の人間。世界第2位の大国に育ちつつある中華人民共和国ではあるが、まだまだ国際社会に先進国として認められるレベルには達していない、外の空気を吸いに出たアメリカ大使は、会議場のある緑地の向こうに広がる現代化した市街地を見つめながらそう思った。こうしたいほど会議室内のよどんだ空気を作り出した中国関係者たち、この後は最初から大筋で合意済みの米・中・韓の各首脳と（日本の首脳は日本の大幅な弱体化に追い打ちをかける国内紛糾で出てこれはしないだろう。米軍機が交戦中に日本航空の旅客機に異常接近したという情報は入っていたが、2年前の破局的な震災以後、急速に経済、政治、技術といった面で一気に国際的影響力を失った国家の政局が外遊を許さないはずだ）、海上プラントを所有する企業を持つ英・豪州の関係者による大規模会談の最終調整に入るのだろう。隣の会議室で現在も行われているであろう、軍事衝突を巡る米・中・韓の国防関係者による緊急会合の（携帯端末越しに行われる状況報告から聞く）混乱と対立を、嘘に変える静けさと落ち着きが会議場の建物と敷地に造成された森を通り過ぎていく。

大使の男は携帯情報端末を手に取る。「私です。あちらさんも必要性は存じているようですね。この後は首脳会談の調整に入ります」“分かったわ。それで…プラントの方は今日付けで終了になるって言ってる?”電話の相手はアメリカ合衆国国務長官の女である。彼女の声は小さい子を心配するような調子を含んでいるように感じられた。「はい、確かに各企業に対し、18日0時をもって操業停止と作業員の拘束は終了すると言っています。それに関してもご安心ください……」男の声の中に少し意地悪い喜びが入った。「……もしこれが達成されない場合は会談抜きで国連に動議を出すとでも加えておきますよ。米海軍の空母と艦隊の交戦データと一緒に、と」“そう、よろしく頼むわね。これ以上思い通りにはさせない、と教えてやらないと…”「米韓合同演習の方は…本日をもってすべての日程を終了する、そうですね?」

“ええ、最後の5日間は今回の件で行えなかったわね。あと…”電話越しの国務長官の声がやや沈む。“武力行使した中国軍機に撃墜されたパイロットの方は、結局発見できなかったらしいの。不時着した機体と海に沈んだか…それとも脱出したけどパラシュートを外せなかったか…”

「そうですか……国防省本部では彼を国葬にすべきとの声もありますが…それよりも外交の方があれですから…」大使の声もうら悲しい物になる。3月以降も一部のアメリカ軍部隊の残留が２０２０年まで決定しているイラクやアフガニスタン、ポケモンとの小競り合いが続く南太平洋エメリアのニュークリア地域南部やソーラ北部の際はともかく、西太平洋で武力衝突がわずかながらでも発生し、それで命を落とした自国軍兵士がいるという事は、世論にも軍にも大きな衝撃を与えている。予想だにしない戦闘や緊急事態を前に勇敢に立ち向かい、命を落とした戦士や英雄…例えばアポロ1号の乗組員やスペースシャトルＯＶＴ－１２２「チャレンジャー」のクルー…を国家レベルで追悼する事はアメリカでよくある事だ。ただし、今回はそうしている暇もなほどの緊急事態、現在合衆国が相手にしているのは自国に次ぐ超大国である中国であり、一歩間違えれば経済、政治、軍事で太平洋全体を巻き込み、成長センターと謳われる経済活動や市民に深刻なダメージを与える状況にもなりかねない。どちらもサイバー兵器、弾道ミサイル、大型空母、レーザー衛星、クローン量産兵士といったハイテク兵器を持っているからなおさらだ。“ええそうみたい、大統領はパイロットを勇敢なる合衆国戦士の模範と声明を出しているわ…今回の演習に参加したアメリカ海軍の艦艇は、このままペルシャ湾の派遣に復帰する予定よ”

「ええ…中国艦隊の監視は佐世保の「ジョージ・ワシントン」と韓国の分遣艦隊に移るそうですね……それより」それに関しては国防省の方から確認済みである、それよりもっと今の彼には聞きたいことがあるのだ、男は携帯端末を耳に当てたまま数歩会議場から離れる方向へと歩く。車寄せの屋根がある場所から数歩出るだけで、

敷地を通り抜ける風がすがすがしく感じられた。「…ＧＢＴＸ社のデータ流出の件、実行犯は双方とも抑え、記憶デバイスにも改編が加えられていないと確認されたようですね。実行犯の方法、何か新しい情報はありました？」

“ええ……でもあんまり気分のいい物ではないの…”端末越しの女の声は相変わらず明るくはない物だ。“データを最初に外部へと持ち出したのはＧＢＴＸ社が取引しているエメリウム採掘センターにある端末なのよ。今頃はＧＢＴＸの役員が今日からすべての端末を洗っている所ね……”

２０１３年　２月１９日　オーストラリア　ダーウィンから南東に２００キロ　ＧＢＴＸ社専属のエメリウム採掘施設　１４時２０分

ＧＢＴＸ社が採掘量の９５％を独占するこのオーストラリア系企業が保有するエメリウム採掘場、ドイツ・クルップ社製の露天石炭採掘機器を、冷却機器を中心に熱帯仕様に改造したバケットホイール・エクスカベーター・Ｂａｇｇｅｒ２８８Ｘは、今日もお得意先であるＧＢＴＸ社にエメリウムを供給すべく、ナトリウムの同位体（アイト）元素（ソープ）の豊富に含有する岩盤を掘り続けている。クローン量産兵士一匹の培養槽に完成までに投入するエメリウムの量は述べ１００キロ以上、放電とイオン粒子によって、エメリウムの中からポケモンの体を構成するアミノ酸塩基に必要とされるエメリウム元素が取り出される。ちなみにその膨大な“取り滓”は、アスファルトやコンクリートの資材として、もしくはエメリウム採掘場の造成材料として再利用される。

広大なオーストラリアの山岳に出現した渦巻き状に道路が設置された露天採掘場、１６メガワットという膨大な電力を消費しながら、５人の乗員の操作によって…これでもシステム化・電子自動制御化を進めて人員を減らした方だ…巨大ホイールで岩盤を剥ぎ取り、べ

ルトコンベアで背後へと運ぶエクスカベーターＢａｇｇｅｒ２８８Ｘの轟音、その岩石を積み込み、地面に出現した人工渦巻きを登って行く巨大な米・ＣＡＴ社のダンプ・ＣＡＴ７９７、５台ものエクスカベーターを作動させる電力を供給するミミズのような準超伝導巨大ケーブル、地中に設けられたケーブルラインを通りって５つの巨大な電気ミミズが接続されている、２００万キロワットクラスの変電施設…主に電力はオーストラリア大陸に設置されたメガソーラー発電システムとハワイ沖のメガフロート群にある太平洋送電網の一端として建造された、大型トリウム塩溶解炉型原発に接続された太平洋送電ケーブル…の唸り、バケットホイールエクスカベーターの内部やその周囲で作業を見守る従業員の人間たち、相変わらずホールや関連作業機器の周囲に飛び散ってくる破片を回収させられるポケモン達、しかし今日はそんな喧騒とは無縁の緊迫感を持つ場所があった。敷地入口から５００メートルほど入った場所にある作業管制室と管理施設がある広大な６階建てのビル、その３階を占拠する作業・制御記録、生産量管理センタにイギリス連邦オーストラリア連邦共和国当局の人間と、ＧＢＴＸ社の関係者が本社のあるアメリカ・シアトル市からやってきている。先日発生した、ＧＢＴＸ社と共同実験に参加したｉｒｏｂｏｔ社のデータ漏えい事件、アメリカ合衆国の国防に関する重要データを含んだ情報の流出事件、ＧＢＴＸ社のサーバに侵入したアクセスの通信ログを辿った結果、最初の端末がここであるという解析結果が出たのだ。

ＧＢＴＸ社の関係者は周囲にいる同じく関係者に例の機器をスタンバイしてくれというハンドサインを出した。「ここの従業員でない事を信じたいものですがね。とはいっても可能性がゼロパーセントではない限り疑いはなくなりませんから…」この男の声には脅迫じみた物こそないが、同情のようなものも含まれてはいない。相手は

オーストラリア随一の金属採掘・精製企業であるとはいえ、ここを管理しているのはグループ傘下の実質下請け会社の集まりだ。そんな連中に低姿勢に出ていては、隠れている可能性というものがまったく出てこなくなる。彼は右手で情報端末の本体をポンポンと叩いた。「アクセス解析を取らせていただきますよ。こいつが起動した日時、時間、ログインしたユーザー名、インターネットアクセスの回数、開いたプログラムも全て確認します。いいですね？」

「し、しかし…個人情報まで特定されるものに関しては…本社と従業員の許可を取らないければ……」「大丈夫です、作業員と労働者の個人データを調べるものではありませんから。あくまで確認するのは端末のアクセスの記録です。ログを見ればここの人間の仕業か、それとも外部の端末がハッキングしているのかが分かる……」焦燥不安そうな表情を浮かべる従業員の男女……どちらも管理棟に勤務する事務関係者のイギリス系の人間である……に対し、ＧＢＴＸ社の人間は胸の前で軽く左手を振る。普通の端末ユーザーからしてみれば、記録を取るという事は個人情報が漏えいすることを意味するとも取れなくもない。実際は交信したかどうかのデータを取る、すなわち入出力の有無を調べるのであって個人を特定するものではないのだ。全く情報技術という物は進化しすぎだ、男は心の中で顔をしかめた。人類の生活と活動を大きく変えた情報技術の発展ではあるが、その機構を論理的に理解し、完璧に使いこなせる人間は少ない。

「どうだ、セキュリティーはパスできるか？」「はい、全く余裕です。最新のセキュリティー積んでる方は楽ですからね」隣にいる男が、持ち込んだカバンの中から某ドーナツチェーン店の紙箱ほどの大きさがある機器を取り出した。彼がその機器の淵を掴んで液晶ディスプレイを立ち上げ、ディスプレイの下にあるキーを何回か叩く。「はい、確認しました。これでログは全部読みだせます」「ああ、ありがとう」機器から伸びるケーブルのジャックを端末本体のＵＳＢ端子に差し込む関係者、男は端末側のディスプレイの表示が切り

替わったのを確認し、軽く部下をねぎらった。「あ、あの…何を呼び出してるんですか?」「いえいえ怪しい物ではございません…」あらかさまに不安な表情を浮かべる採掘企業関係者の女に、彼は相手を安心させる薄い笑みを浮かべる。脇目でディスプレイの表示を確認しながら機器のパネルを打っていると、確かに自分がこの分野で優位に立っているという自慢にも似た感情が出てくる。情報端末に見慣れないメッセージが表示されれば大抵の端末ユーザーは動揺する、それに全く表情を変えずに対応できるのも情報技術職人のプライドとも言えなくもない。

ユーザＩＤなしでＯＳを起動させ、端末本体のハードディスクにある記録を出力させる“一般には非公式の”指示を機器から送る。セキュリティーソフトの妨害は一切ない、ここまでくれば残りは一瞬だ、この男は情報端末というわが子同然に使い慣れた存在を、右手でパネルとキーボードを打つだけでいなし、指示を実行させる。ウインドウズはＭＡＣやＵＮＩＸ以上に悪く言えば素人向け、すなわちよく言えば一般市民やオフィスワーカーがすぐ扱えるよう開発されたマイクロソフト社のＯＳだから格別いう事を聞きやすく、指示の手間もかからない。接続した機器のメッセージ音だけで彼が実行したいＯＳに入ったプログラムを呼び出し、動作していくのが確認できる。機器側のコンソールを叩き、音と表示を確認するだけで、端末側のＯＳが何を考え、何を出力しようとしているのか、指先と耳と目の情報から伝わってくるそれは子供のわがままを察する親の感情であった。

軽快な電子音と共に解析を終了した旨を機器が知らせた。「どれどれ…」男が結果が表示されたディスプレイをなめまわすように見つめ、液晶パネルを数回右手の中指で突く。「ありますか?その情報漏えいとやらは…」「ああ……この辺りのはずなんだが…」部下の

男も彼と一緒にディスプレイを覗き込み始める。最新のものを上にして並ぶ膨大なアクセスログ、キーボードのカーソルキーで画面を降下させながら、２人はログに存在する“迷子探し”を続けた。この企業のサーバは無線ＬＡＮで本社、作業場のバケットホイールエクスカベータ、作業場用の大容量変電装置、送電網に常時アクセスしているらしい。とはいっても情報技術業界では常識、２人とも莫大な通信ログの表示を前に焦ったり動揺したりする気もなく、そんな事を考える事もなかった。

そして案の定、それは１分もしないうちに終わる。「これだな…」２月８日２２時４５分だ。これは明らかだな」「ええ、確かに。少なくとも通常のネットワークアクセスではないものです…」部下に当たる年下の男が右手の人差し指を液晶ディスプレイに伸ばし、表示された文字列をなぞる。上司の彼には上下のログとはそれが明らかに異なる表示をしている事がすぐにわかった。そしてその表示を見れば、その発見した迷子がどこに住んでいて、なぜここにやってきたのかはすぐに判断できる。

それが理解できると同時に、彼の中でなにかが抜け、椅子に座った体の力が抜けるのを感じた。案の定だ、こういう事をすると考え付く相手はそもそも少ないが、それが実際にそうだとわかると、また面倒くさいような、もう相手にしたくない様な、脱力感に近い物を覚えてしまう。

「相手は明らかだなあ…」結論があっさりしすぎて腑抜けてしまう、男は椅子からゆっくりと立ち上がり、一緒にやってきたオーストラリア当局の関係者の方に視線を向ける。彼は政治や経済にあまり興味がない、見方に寄れば深刻な事態だが、今の彼には格別周りの空気が変わったようには思えなかった。「中国のハッカーだ、やはりＧＢＴＸ社を狙っているのは中国の当局か企業しかない。アメリカ

政府にそう言ってくれ、中国は量産クローン技術を大規模に狙ってる、とな」

２月２０日　アメリカ・シアトル市　１９時２０分

サンフランシスコとカナダ・バンクーバーの一行が合流することになったのは、アメリカ合衆国・イギリス連邦カナダの国境線にほど近い大都市、シアトル市であった。バンクーバー組からすれば湾を挟んでそう距離のない場所だったが、こちらは実行犯ガニュシュしたと思われるデータ量の分だけデバイスを押収することができず、高速道路上からバンクーバー空港まで警察当局や、ｉＲｏｂｏｔ社の関係者と共に大規模な調査を行っていたのだ。結局高速道路上で、車両に踏みつぶされたＵＳＢデバイスと思われる残骸を発見し、わずかに残ったシリアルナンバーから実行犯が利用していたものと断定されたのである。

さて、ようやく落ち合う事が出来た一行、そんな彼らが向かっているのは……

目の前に移る景色の色

久しぶりにブースター、ベイリーフ、オオタチでそろった3匹、ソーラ南部で暮らしていた幼少期以来である。「そんでそんでな、民間旅客機っていうのは人間の中でも最強の女をそろえてんだぜ！やっべえ…あれが全員メスだったら…な、エンデバー？」「そうだなあれは！あれだけの美人さんを集められるんだから…リーヒュンも乗りたかっただろ？」

「乗りたかったとか…椅子らしきものも人間仕様なんだろ？」リーヒュンは相変わらず、女の話題で熱くなるブレイブとエンデバーに適当な相槌を打って流す。昔はこんなんじゃなかった、このブースターもオオタチも女（メス）には興味がなかったはずだ。「…それにしてもよく人間用の航空機に乗ってその余裕があるな…まあその方が、あれなんだが」

「おいおい、男（オス）として血の気の盛んな俺らに対してお前は縮こまりか？」オオタチがベイリーフの右前足を自分の左手…左前足にもなる…の拳で軽く叩く。「あ、そういう事か。お前は随分と図体でっかくなったからな…姿勢に無理があるからな」「確かにだ、こいつの背丈と体格じゃあ…ちっとばかし人間の座席はきっちいよな…」

「そうだよ…俺は無理に人間と同じ場所に座らせられんのはちょっと無理になってきた」彼は曖昧な苦笑を浮かべ、ツル先で自分の首元の葉っぱをいじる。そう言えば自分はいつの間にか2匹を見下ろす位置に視界が移動している、その状態になっても何の違和感も覚えなかったのは、恐らくポケモンという生命体種族群の本能的な寛容からだろう。これが人間だったら即、偏見や差別につながるものなのだ。「あとは、俺があんまり慣れないせいか、それとも最近よくあるか、だな」

そう…リーヒュンにはもう一つ理由がある、上空を移動するという本来の種族ではありえぬ事態に対し、鋭くなった感覚の異様な反応

が日に日に悪化しているのだ。特に移動中に人間の航空機にある窓から外を覗くとかなりまずい、４本の足元が溶けて底なしの泥地へと引き込まれ、航空機が揺れるたびに平衡感覚がぐらつくほどだ。この不快な感覚は自分の能力と関係がある、根拠もないのになんとなくそんな感じがする、すなわち彼にとってはそれが真実である可能性がきわめて高い。

「どういう顔してるんだよリーヒュン？いつものようにやりながら考えりゃいい考えがお前なら浮かぶだろうが？」ブースターがベイリーフの背中に飛び乗る。もちろん彼の表情に悪気は一切なかったし、ブレイブ・エスコーツ・クレイバーとしてもバカにするつもりは全くなかった。「それとも…お前のカンがそう言うのに関わらん方がいいと言ってるのかもな」

「どうだかな…ブレイブと比べりゃ確かに俺は女事情（メス）は苦手だ…」彼は軽くうなずき、それからツル先で自分の頭の上をポンポンとつついた。リーヒュン・バイリング・グリーズ自身にとってこれは昔からだ、もしかしたら…それはフローラの件のあと、すなわち異性に関心が出てくると言われるちょうどその時だったから……彼はどうしても女と親しくなるのは苦手だった。別に女側（メス）が彼を嫌がるわけではない、ただ彼自身があまり緊密な関係を望まないだけだ。「どうしてなんだろうな？それはどうでもいいとしても…したいんだけど」

「おいおい、今のお前に深く考え込むのは体に悪いぞ」ベイリーフの背中にいるブースターが彼の首元の葉っぱを右前足でポンポンと叩く。「お前が今大変なんだろ？俺は不勉強かつ生粋のバカだから他人の気持ちを読むのが下手だけどな、ヒュンの顔見りゃどういう事を言ってほしいか、てかどういう気分か、つまりどういう立ち位置が必要かくらいは空気で…じゃねえや、感覚的にわかるつもりだ」ブースターのフサフサ尻尾が軽く下に下がる。このベイリーフがどういう状況でどういう感覚がするかは自分には理解の範疇を超えている、もしユイリィやサクラの言う事が真実であれば、彼もまた困

難な道を歩むことになる、しかしそれだからこそだ。そうであるからこそ自分は友人としてできる事があるはずだと。「……今は普段のお前らしく突き抜けようや。そう願い、そう努力すりゃそれに見合った道ってのは転がってるんだぜ」

「ブレイブ、こいつ大丈夫なのか?どうしてここに来たのか、てかお前たちのチームが何で国連の手でできたかは知らねえが、リーヒュンがこういう事すんのって…集落の警備以来だよな?」オオタチが思わずブースターの顔を見る。人間ではないが一応はアメリカ陸軍の兵士であるエンデバー・リシャトルには、このベイリーフがどうして…とはいっても軍隊と生命研究機関の合いの子的存在だが…こんな類の組織に放り込まれたのか、理由がまったくわからない。

「バーカ、それがミソなんだよ」「ミソってなんだよ?脳みそか?」ブレイブはエンデバーの脇に飛び降り、隣を歩きだした。「ヒュンはな、その…なんだ、潜在的な能力が…結構高いって言われてな。それで、人間連中に嗅ぎ付かれて、てわけだ」「そんな、ったくそんじゃ俺が悪者みたいだろ?」

「なるほどな。確か国連のポケモンの研究機関って…何してるかは怪しいが、とにかくそれでリーヒュンやお前はここにいる、そういう訳か…」オオタチは2匹を交互に見つけ、小さな耳をぴくんぴくんと動かす。ポケモンという物はもちろん生命科学という物に興味もなければ概念もない、大半は自分たちを含めた生命も全て草や大地から得た体に太陽の熱や水のエネルギーが血液となり、思考と意識のエネルギーの詰まった目に見えぬ魂がその中に入っているという原始的な自然信仰に現在でも頼っている。あらかたの生物の仕組みや抗生物質、それを使って自由に生物を創造し、人間を含めた生命の病気や異常をかなり直せるようになってきた人間の生命科学・工学は、いよいよ未知の点がまだ多いポケモンの科学的解明にも精を出し、その成果の一部がクローン量産となっているのだ。

しかし、このオオタチがそこまで興味を、持っているはずがない、人間と接触があると言ってもそれは業務上の問題であって、人間の

文明に関していろいろ尋ねる気など彼には無かった。「……まあそれなら、多少へこむこともあるな。特にリーヒュンみたいに何でも真っ直ぐにとらえてしまう性質だと余計か…」彼はベイリーフの方に視界を移し、左手を軽く前に突きだす。エンデバーという彼は本来のポケモンと同じように、細かい屁理屈や理論よりも心情や人情的なものを最優先するという、良く言えばおおらかで悪く言えば粗暴で単純な考え方しかなかった。「ＯＫＯＫ，そういう顔すんなって。人間ってのは進歩が大好きでそりゃあ偉大な存在だが、時に生物的にも道徳的にも融通が利かねえからな。ごたごた言われても気にすんなよ」

「そうだよな、うん、あってそうそうお前に迷惑かけて悪い」リーヒュンはエンデバーの左前足に自分のツルを当てる。こんな自分で申し訳ないという気持ちに加え、相変わらずどうしようもない自分のありのままの友人であり続けてくれる2匹に、心の中で本当に感謝した。「ブレイブやエンデバーが一緒ならな…これからも無茶やるかもしんないけど、その時はよろしく頼むぞ」

「さすが、そうこなっくちゃだぜ。何せ……」オオタチがベイリーフの首元に肩を回すかの如く飛び付く。「このケガ、お前が走ってるトレーラーの上に飛び乗って奴ら蹴散らし、その後はダイブときたもんだ！聞いた話だけどな…それでトレーラーは大爆発…昔っから危なっかしいことするな……」

「こ、これか？いやあ、あの時は何とかなると思ったんだよ」ベイリーフは自分のツルで、右前足にかなりの長さ巻かれた包帯をさする。最初のうちは大したこともなかったが、手当てを受けて日が経つうちに、人間の医師が「よくもまあそんな表情をしてられる」と驚いた通り、ずきずきとかなり痛むようになってきた。「で、今俺はこうして生きてる。なんてこともなかっただろ？」

「さっすが！こいつと一緒にいるとやってみることの大切さが身に染みてくるぜ。今後とも俺らが一緒なら怖いもんなんてねえ！期待してんぞ親友！」「うっ？！…だから傷口をぶん殴る奴がどこに…

まあいいか」ブースターがベイリーフの右前足の傷口に、自分の右前足で軽く拳を入れたうえ、そのまま彼の首周りの葉っぱあたりに飛び付く。これだけ体格の良くなった（背が伸びた）友人相手に派手な事をして笑って済まされるあたり、ポケモン独特の性別関係なく体を接触させるという親密感の表現か、リーヒュンとブレイブという名の信頼関係か。いずれにせよブレイブ・エスコーツ・クレイバーにとって、友人の体の温もりを感じられる、それに対する喜びは大きかった。「という事に続いて俺もお前の背中に乗せていただく、よいしょっと…」「わわっ?!…俺の背中を荷台にすんなって…」調子に乗ったか何か、エンデバーも負けじと背中に飛び乗りブースターの背後に無理やりしがみつく。「こりゃあ楽ちんだな、今後移動するときはリーヒュンに歩かせるか…」「それは不可能だって…今でもかなり重い…」そうは言いながらも、背中に感じる2匹の温度、前足が背中にかけてくる重さ、そこからも何となくではあるが、彼等が自分を信頼しているという感触が伝わってくる。このような状況でそういう存在がいる事は、ありがたい以外の何物でもない。ただ、そのような不思議な感覚や直感が働くこと、否、そうなるように訓練させられている事はブレイブとエンデバーには言い出せなかった。昔は…今でも時にそうなのだが…誰よりも手が早くて向こう見ずだった自分、そんな幼少期の自分をかろうじて危険から遠ざけてくれた自分の直感、それが強くなり過ぎたせいか、それともこれがサクラの言う“運命と必然”なのか、最近になって次々に発生する自分自身の異常や周囲の異変、それが自分の年齢相応の心情と重なったせいか何をするにも戸惑いとためらいが意識をよぎるようになってしまっている。おそらくそれは親友にさえ完全には理解できないだろうし、過度な心配をさせるだけ、フローラとの件もあり特にブースターにはかなり迷惑をかけてしまっている。ブレイブには彼なりの迷いも悩みもあることは明らか、これ以上彼の重荷になることはこのベイリーフの信念上どうしても許せない。

「そんなあ！ヒュンのむぎゅむぎゅポイントはウチの指定席なのにい！よーしこうなったら…」３匹の前を歩いていたメガニウムがひょこひょこと後ろに戻り、ベイリーフの胴体左側に体をのしかからせてくる。「ぐえっ？！やめろユイリィ…これ以上は無理だろ…」「やばいやばい！気持ちよさすぎるよ、うん。これだからやめらんないよねこれ！」ユイリィの相変わらずの愛情表現か、それとも自分に対する悪ふざけか、彼女の楽しそうな表情を見ている限り、どちらかというと後者の方が強そう、それがこのベイリーフには何となく理解できる。

背中の上の２匹も突如すり寄ってきた彼女には驚いたようだ。特にエンデバーの方は相当驚いたらしく、思わず背中から飛び降りてしまった。「てか、お前にもいい女がいるじゃねえかよ！しかもこんなに明るくて楽しそうな子だなんてな」「何言ってんだエンデバー？ユイちゃんは俺の婚約候補だ！ヒュンなんかには高値すぎるぞ！な、ユイ？」「うんん！ブレイブの言ってる事は楽しいからね、ウチが流してるだけだよ」メガニウムはツルでブースターの頭のフサフサを軽く押す。「ウチは誰となるんだろうね？でも今ん所は全然興味ないかな……」その直後、彼女は寄り添ったままのベイリーフの目を覗き込む。「リーヒュン？んなわけないよ！絶対ない！それも楽しいけどね、うん。あはは……危なすぎるもん一緒だと…」彼女は思いっきり笑いそうになりながら彼の頭の葉っぱをツルで軽く押す。「でも今はそれでいいんだよね、うん！今回もナイスファイトだったから。うん、これからもぐいぐい頼むよ！」メガニウムは何の警告もなく彼の右前足の傷口をツルでポンポンとやる。「うえっ、痛いっての…励ますんだったらほかの所が…（て聞いてないや…）」ただ……ユイリィとこうしていると、特に彼女が自分にすり寄ってきたときだが、彼女の意識が自分の中に入り込もうとしているのかは知らないが、何となく彼女が表層的な温もりや暖かさ

を求めているというより、その奥にある自分や彼女に感じ取れるらしき場所に安らぎを求めているような気がする。それを考えるとリーヒュンは、自分の意識の水晶の中にうっすらとした奇妙な予想が生まれ、ゆっくりと自分の体に不思議な感覚となって広がっていくのを感じた。彼女が自分を求める理由、それは単なる自分を年下として（彼女と2歳違うだけだが）見なすときのかわいがりではなく、それ以上に自分という存在を何か大切に思っている、そんな気がするのだ。

「リーヒュンもいい女（メス）に恵まれたじゃねえか。大事にしてやれよ、お前みたいな性格じゃ女の子に心配ばっかかけるようになるからな」エンデバーがリーヒュンの前に数歩進み出て、彼に言って聞かせるかのように右手をすっすっと動かす。このメガニウムはベイリーフの彼とこのチーム内で知り合ったのだろうが、オオタチからすればまっすぐで素直なのはいいが女の子という常識の通用せぬ物体を、直感的で体当たりで物事を進める彼に制御できるか、心配と小馬鹿が5分5分だった。「まあ、彼女はパッと見そう言うのにも面倒見の良さようだし、あんまり心配する必要がないと言えばないんだが」

「大丈夫大丈夫！リーヒュンとウチは最強のパートナーだもんね。さすがはブレイブのお友達！そこは見えがさすがって所かな！」「分かった、君の言いたいことは知ってる…重すぎる…」ユイリィはますます嬉しそうに、リーヒュンに自分の重量をぐいぐいとかけはじめる。「でもユイリィに限らずだけどさ、必要な時に俺はする事をするだけだ。それが誰で…いや、このチーム内での話でだが、できる事があったら全力でやるだけ。そういう事だな」彼は少しだけ恥ずかしそうにしながらも、少しだけ4本足に力を送り、彼女をゆっくりと引き離した。「ああ…その仲良しこよしとかそういうのじゃなくて、そういう点は俺にとっちゃ当たり前だから。テルルの事もそうするって、俺は決めてるよ」

「出た、出やがったよお前のそういう妙に優しすぎるところ！カッコつけやがってこの野郎…」オオタチは彼の葉っぱの生えた首元に

またしても飛び付き、首をぐいぐいと手前に引っ張る。「そんなきざなセリフを自然にでちゃうなんて…やばいやばい俺のかっこいい場所全部奪い取ってるじゃねえか！」「だよねー！ヒュンのいいところはこう来なくちゃだめだよね！あはは…」

「妬くのはよせよ。ヒュンとユイの関係に首を突っ込むなんてお前にゃ１００年たっても無理だっちゅの！」ベイリーフの右背後を歩いていたブレイブがエンデバーの尻尾を掴んで引きずりおろす。「おいおい？！お前はユイのこと好きだって言ったじゃねえかさっきは！」「バーカ、目の前にいる女の子にはとりあえずむくげを差し出す、俺のポリシーなんだよそれは。そうと決まれば、俺らのすること、例えば女の子とのデートとかな…」ブースターがオオタチの頭と胴体の中間にあたる部分を後ろから両前足で持ち、上にぐいぐいと引く。「おいエンデバー！どうしてお前はあんときあの乗務員に言わねえんだよ？！仲良くなれば住所くらい教えくれたらどうすんだ！？」「ふざけんなお前は！お前だって見とれて止まってたくせに、一緒に一杯やろうぜ、くらい言やあいいだろうに？！」

ベイリーフとメガニウムから離れ、じゃれ合うも同然の形で歩き続けるブースターとオオタチ。「リーヒュンもいい友達持ったね。あれだけにぎやかな皆がいるとヒュンみたいに何でも怖くなくなるよね、うん」

「どうだか。あいつら結構変わっちまったよな…」彼は背中に残った2匹の毛をツルで落とし、楽しそうにしている2匹をちらりと視線を送る。彼の知っている2匹はこんなのでなかった、自分と同じように集落の川に高台から飛び込み、絶壁をよじ登り、夕立によって引き起こされた落石で死にかけたこともある。それを共にするくらいまっすぐで、向こう見ずで、それでともかく楽しかった。ただし、あれから何年もの歳月が流れたが、もしかしたら変わっていな

いのは自分の方なのかもしれない、そんな気がする。「ただ…俺の中ではブレイブもエンデバーも変わってない、あいつらが信じるように俺も信じたい」

「うん…それより…」メガニウムは自分たちの前をさっさと歩くグレイシアに視線を移す。「テルリン…まただいぶへこんじゃったみたい。自分の相手になったあの小さい子の事は…まああるよね…」

彼女は相変わらずパッとしない表情をするテルルの意識に、少しだけ自分の意識を集中させて探ってみる。感じられるのは疲労、隊長という立場の感触を全く理解のできぬ手ごたえの無さ、そして…先日自分が相手をし、結局死んでいった年端もいかない女の子…メリープ種族に対する申し訳なさと自己嫌悪、それが彼女の意識の水晶を濁らせ、冷たくしているように感じられた。

さて、サクラの計らいで一行の目指していたシアトル中心部にほど近い一角、ドーム野球場の脇にあるやはりスタジアム型の建物である。「ここって…何してるんですか中で?」「それを見せておきたいのよ」ユイリィの一言に、サクラは目の前にある巨大なドームの入り繰りを右手で示す。複数ある派手な広告塔やイルミネーション、電光案内ディスプレイの下にある入口へと?がる道路は、左右は植え込みと市街灯が並び、人間用のベンチその他も整えられた、人間文明らしいきっちり感を演出している。ポケモンだったらこんな事はしない、大きな施設係にあっても周囲の木々を軽く切って入りやすくするだけ、道は当然未舗装、日が落ちれば真っ暗である。というより夜になったら、見張りと救助依頼以外は寝にはいるのが常識で、かがり火と星・月の明りがあれば済んでしまう。

ただし、サクラ・フユツキの意識の水晶が感じ取れる周囲の流れ、ベンチにところどころ座り込む人間の中には、絶望に冷え切っている者もいる。それが何を意味するのか、彼女にはすぐ分かった。失

業し住む家を失った人々、派手で繁栄しているかのように見える人間の社会も、特にこの数年は様々な問題を抱えている。その最もたるものが金融危機後の経済問題、アメリカ、イギリスと連邦諸国、ヨーロッパ連合諸国から始まった金融機関の経営危機、そこから誘発した先進工業国の財政問題、それらに影響され急激に失速しつつある新興工業国…事に中国やインド…の経済成長、世界規模で少なくない人々が職を、生活を、住居を失い、路頭に迷う生活を強いられている。あおりを受けた途上国はさらに悲惨、先進国や新興国の下請けに近い…中古ハイテク機器のリサイクルとか…仕事も激減、生き残りをかけた工業国の大手企業が市場を切り開くべくアフリカの平原、熱帯雨林にまで進出し、金属資源やエネルギー資源の採掘・精製施設を建造、集落ごと金で買収し、太陽光発電所やバイオ燃料穀物生産工場にしてしまうといった大胆な手法も経済界で常識だ。大企業にも支援する国家にも、これに環境保全・エコテクノロジーによる市場拡大という文句が付けば完璧、経済市場の活性化とともに環境への取り組みという形で広くアピールできる。この傾向は大規模原子力発電所や海水淡水化システム、マグネシウムエネルギー化システムの開発を進める一部の中東・産油富裕諸国でも同じだ。割を食うのは常に弱者、燃料資源耕作目的で土地を失い、食料のうばわれ、仕事を求めて都市へ流入、スラム街の形成は治安の悪化や極思想の温床ともなり、企業が所属する先進・新興工業国に対するテロリズムや破壊活動といった安全保障問題の懸念材料にもなる。

　金融危機の発端となったアメリカも例外ではない、失業率は改善したとはいえ、現在も７．１％と高止まり、ＧＤＰ成長率も３パーセントと今もなお低調気味、連邦政府の累積債務残高もＧＣＰ比１１０％と、一部のヨーロッパ諸国…名を上げるほどでもない…や日本と比べればまだまだいいが深刻な状況だ。こうした経済情勢、生き残りを図る大企業が仕組むリストラクチャリングと中小企業買収によって多くの失業者や生活困窮者が生まれ、それが犯罪の多発や政府に対する暴動の引き金となっている。このサーナイト種族には

すぐに読めた、反映しているかのように見える人類文明は今、多くの課題を抱えていると、しかしそれを乗り越えるには現在の社会構造をあまり変えることなく変化するしかないという苦しい情勢下にあることを。大胆な社会システムや構造の変化は革命と同じで自殺行為、ソビエトがそうであったように、ドイツ第三帝国がそうであったように、人間の歴史がそれを証明していた。

内部に入った一行、すでに予約（アポイントメント）が入っているらしく、内部のゲートらしき（チケットを通す自動改札機に似たシステムがある）場所にいた人間は、サクラが何かを出すなり何の抵抗もなく全員を通してくれた。

さらにもう一空間ラウンジがあり、一行はついにその場所へと入り込む。「これは…」「何ちゅう場所だ…」ベイリーフとブースターはドアが開かれた途端、内部からもれるまばゆい光と聴覚器官をけ破る大音響に後ろにひっくり返りかける。「ヒュンもブレイブも何をそんなリアクトを…まあ普通のポケモンだったら確かに引くわな…」2匹の隣にいるオオタチは右手の拳の甲で2匹を支え、一番真っ先に中へと飛び込む。エンデバーにとってもあんまり居心地のいい場所とは言えないが、少なくとも危ない場所ではないというのは知っている。「…人間ってのはこういう事が大好きだからな。最初見た時は俺もびびったぜ」

「ふん、これが噂のバトルって奴だな。かねがね噂じゃ聞いていたが…」思わずしがみついてくるモココを左の翼で抱えつつ、目の前に広がる光景をムクバードは見つめる。自分はいいとしても、隣のグラシデアに見せていい物なのだろうか、ロックオンにとって目の前で繰り広げられる人類の娯楽は気分のいい物ではない。「なあエンデバー、お前もアメリカ軍だったな？」「あ、はい…そちらは空軍っすよね？」「ああ、そんで…これどう思うよ？」

「まあ…そういう物と解釈するしかないんじゃないすか？」オオタチは座席に向かいつつ頭の毛を右手（右前足）で軽くかき、耳がぴくぴくと動いた。判断する限り、彼も特に批判を持って受け止めているわけではなさそうだ。「別に俺らに危害が加わるわけでもなし、俺らが何かを言っても変わることもなさそうなんで…俺は人間の文明をそうやってみます」

「なるほどな…これも同じ人間の国家の軍に所属する奴の宿命か…」ムクバードは胴体に回したトレジャーバックに右の翼を入れかけ、思わず止めた。「っと…ここはさすがに禁煙だったぜ…」

ここは一体…リーヒュンは進まされるがままに座席にどうにか（大きい図体の重量が短い尻尾にかかってひどく痛い）腰を下ろすふりをする。「やばいな…人間はこんな事をして楽しんでのかよ？」「エンデバーが言ってただろうが。人間ってのはこういう事を平然とする生き物なんだよ…」彼の隣にいるブレイブも、目の前に広がる光景に衝撃を覚え、そして何かしら引っかかる物を感じていると言った目つきでそれを見つめている。ベイリーフの視界も徐々に眩しさに慣れ、周囲の人間たちが上げる歓声も徐々に大丈夫になるが、それと同時に意識の水晶から湧き上がってきたのは、目の前で繰り広げられる事態に対する驚きはもちろん、それに加えて次第に意識を対流して濃くなる自分の無力さとやるせなさであった。

「クソが……」「ん…どうしたんだよ？」見入って何分経ったか、隣にいるブースターがふと呟く。その語気に勘付いたベイリーフの目に移った彼は、光を失い、スポットライトの光でわずかにエメラルドグリーンに輝く黒い影の底から冷たい物を浮かび上がらせた瞳

で前方の光景を見つめている。「ふざけんじゃねえぞバカども……てめえらだって立場が変わったら……俺らを甘く見んな…」ブースターは手すりを握りしめる両前足に、金属がきしむほどの力をいつの間にかかけている。目の前に広がる光景、意識の水晶は、本人も触れたくない記憶を封印した個所からあふれ出た冷徹なまでの諦めに凍り付いている感情で埋め尽くされ、冷やされる。（くっそ……今出てこなくたっていいじゃねえか……）彼は大きく息を吸い、吐き、暴走しそうになる意識を何とか食い止めた。ここで出すのはさすがにまずい、これはとっくに忘れようとしたもの、ブレイブ・エスコーツ・クレイバーとしてではなくほかの誰かの物と無理矢理納得させようとしたものだ。

ただ……どんなに納得させようとしても、一番恐ろしい物が意識の水晶にこびりつき、離れようとしないものが存在した。その恐ろしいもの…彼のさらに右手に座るグレイシア、彼女に対する感情……それは彼の意識の底に隠された恐怖なる怪物を刺激し、いつまでもたたき起こそうと不気味な笑みを浮かべながら彼を見つめていた。

巨大な施設の内壁を取り囲むように設置された座席は多くの人間に埋め尽くされ、彼等が放つ熱気は、身動きが取れなくなるほどの空気の圧迫となって空間を覆い尽くしている。内壁の高い部分に設置された無数の電灯、建物の中心部を照らすスポットライト、観客席の真下にやはり囲むように設置された光の流れゆく電光掲示板、ライトに照らされた場所の真上からぶら下げられ、それと同じように様々な情報を映し出す液晶情報ディスプレイ、ここで人間たちが何かを見物し、楽しむために作られたのは明らかである。

そして、スポットライトの先に照らし出された先にいるのは、向かって右手がジャローダ種族、左手がルカリオ種族、彼等の収まる白いラインの囲いの背後、透明な強化ポリカーネイド板の後ろには複数の人間が立ち、手元にあるテーブルらしき物体に埋め込まれた機

械を叩き、しきりにポケモンを見つめている。
不意にジャローダが前へと進み、“リーフストーム”を打ち出す。ルカリオはそれを飛び越え、“はどうだん”を空中で打ち出すが、ジャローダはその素早さを生かして左手に身をひるがえし、“グラスミキサー”を打ち込む。ルカリオはそれに飲み込まれながらも後転をうって振り切り、着地すると同時に体勢を立て直した。わずかに双方息を整え、すぐに前へと突っ込んいく2匹、お互いが攻撃しあい、それをかわし、体の一部でそれを防ぐという攻防、その度に大歓声が上がり、表示板の情報の数字が切り替わる。

「うーん…テンション上がれば楽しいんだけどなあ…」メガニウムの隣に座る（降りている）チルタリス、チェギョンの気分はあまりさえなかった。韓国でもこういうバトルの試合は開催され、何度も見に行ったことはある。「とりあえず途中参加だけど…１０００ドルくらい賭けてみよっかな…」
「な、何賭けてるの？」「え、うん。ネットアクセスを使って…」チルタリスは携帯端末をトレジャーバックから取り出し、キーを何回か叩く。「どっちが勝つか、とかどっちが何を何発当てるか、とか…ともかくそれで金をかける人間の遊び。儲かるときはマジで儲かっちゃうから最高なのよね…」
「金か……人間らしいっていうのは簡単だけど、私も金になればなんともする人生だったからね…」テルルは階段状になった観客席の一角、最前部に存在する手すりに前足をかける。彼女もいろいろ悩みは多いと聞いているが、それにしても携帯端末というグレイシアには理解不能な人間の機械を喜々として操作するチェギョン、彼女の表情からはそういったものは全く感じられなかった。「そうやって夢中になれる事がある…私はそれを見つける暇もなかったのよ…」
「そんなあ…私のやってる事なんてね、私の所詮…ここに来たから

のあれよ…」チェギョンも左の翼を手すりにかけ、右に翼に持つ携帯端末から視線を離す。「テルリンこそ…皆に囲まれてると自然に楽しそうな表情してるよ…ウチにはそう見えるけど…」「ほんとに？！マジにそう見えるのね…」グレイシアは恥ずかしそうに作り笑いを浮かべ、右前足でもみあげのように伸びた飾りを丸めたり伸ばしたりする。「うん…めっちゃ楽しそう…」

「そっか…なあんか恥ずかしいどころじゃないんだけど…」そんな考えを一度もしたことがなかった、自分がこのチームに囲まれ、自分がいざこざを起こしてばっかりだと思う事もあり、逆に一部の態度が許せないと思ったこともあった。それでも…そういう状況でも逆に幸せと言ってもいいのだろうか、テルルは自分の意識に存在する記憶という部分に前足を伸ばし、触れたくない部分を慎重にかわしながら考えてみる。

確かに…自分でもあまり意識したことがなかったが、ある点に気付いた。「…うん。まあ、見方によれば、色々な意見があるのも分かるような気がする…」そう、考えてみれば自分の周りに、自分との関係がどうであれ何かでつながっている存在は今多数ある。今になってそれが意識に強く響いた、それは…目の前で繰り広げられる人間の娯楽としてのポケモンバトル、スポットライトや電光ディスプレイの明かりに照らし出され、耳を突き破る勢いの人間の歓声に包まれている中での死闘が、あまりにもむなしく、脱力させるものに見えるせいだろうか。「そうかな…うん、ギョンちゃんの言うとおりに近いね」

「だよね…それに引き替えたら私なんかさ…」チルタリスは右翼の携帯端末を翼の先で数回たたき、すぐに力を抜いて視線を前に戻す。そもそもテンションが上がる状況でない中、一応紛らわしで参加してみたインターネット上のバトル賭博、みているうちになぜか気力が抜けてしまった。なぜだろう、李氏一族の末裔と暮らすカリワザキ一家、何の不自由もなく韓国内のリーグをＶＩＰ席から見た昔みたいに盛り上がらない。自分がこの世界の現実を知ってしまってい

るから?それとも…やはり、今の自分に存在するあまりにも多きわだかまり、それが自分の感情を落ち込ませているせいか?「…今回も、皆の足を散々引っ張っちゃったし。何かこう…自分の周りの空気が変わって…苦しいのかな…」

「それは…私だって同じ。私だって今回もロクなことできなかった…」グレイシアも同調するかのように息をつき、無理に座った背もたれに背中を寄りかからせる。(その隙に人間が1人通り過ぎた)

「ユイやあいつに散々迷惑かけて…あいつにはけがさせたしね」彼女はまた身を乗り出し、手すりに両前足をかけた。「なんかさ…私、隊長としてどうこう言える筋合い…ないわよ。そう、そんな事する前に…自分の身辺を何とかしろって…」

「テルリン…なんでそんな事…」チルタリスは思わず身を乗り出し、彼女の方を見る。自虐的な笑みを浮かべる彼女を見ていると、放っておいたらテルリンはテルル・アストラフスキーとしての存在から壊れてしまう、よほど深刻な事態が彼女に起こっていたのか、急に心配になった。「あたしが言うのも難だけど、その…考えすぎじゃない?…自分だってこうどうしようもない奴だから、そこまで気にしてたら何もできなくるよ…?」

「…ありがとうギョンちゃん。でも私はもう…自慢じゃないけど、こういう性格になったんだと思う」テルルは左前足で手すりを軽くたたく。チェギョンは自分を精いっぱい励ましてくれている。思わず感情の原子炉が震えるほどだったが、それだからこそ余計に先日の光景が重圧となって脳裏をよぎった。それであるが故に…自信がさらに揺らいだ。「…私は何とかする、どうしようもない奴でも強制すれば、ね?私は…小さい頃からそうやって…無理矢理でも変化するしかなかったし…」「……なんて言ってあげればいい?」「え?言ってほしい事?」「うん…テルリンやばいよ…危ない…」彼女の意識の水晶は冷え切り、多くのそれが流れる宇宙に無気力に投げ出されている、チェギョン・ナンソーマ・カリワザキはそう認識し、思わず左の翼を彼女の右前足に重ねた。言葉がもどかしいほど

思い浮かばぬが、何かを言わないと怖い。「…お互い苦しい事はあるけど、ね、何かある?あたしはまだまだ殴られても蹴られても平気だから……」

「……大丈夫よ。2匹ともこれ以上の事をかけたりはしないわ」メガニウムのさらに右隣に座っていたサクラが、手すりに乗りだした2匹の方へと歩み寄る。「私もそういう経験はいくらでもしてるの、と言うよりも…人生そんなもの。経験を重ねて性格という土台が固まってく物なのよ」

「土台を固める……ですか…」テルルは思わず彼女の方に視線を向ける。理由は定かでないが、サクラの目線を見ていると不思議と安心する。正論的お説教が大嫌いなこのグレイシア種族でも不思議と素直になった。「…それじゃ、…私のしている事…どうして子どものときはあまり気にならないんですか?」

「ええ。強くなれる伸びしろがあるからこそ…周りが見えてくるとね、どうやって積み上げたらいいんだろうって悩むものなの」サーナイト種族は右手を2匹の前足と翼の上に重ね、スポットライトの背後にできた、向かい側観客席の暗がりに視線を向ける。狭い場所を見つめるより広い場所を見ている方が、手先から伝わってくる感覚に意識が集中できるからだ。「長城を築くために石を積む。できてくればできるほど職人は次の一つに悩むのよ。大きさ、形、積み方…霧霞の変わらざる気質がその先へと導く、て言うわよね?」

「えっと…何かそんな事を聞いた覚えがあります。はい…」チェギョンはサクラの右手の温もりを思い切り吸い込みつつ、記憶をまさぐってみる。彼女の温かさがなぜか自分の思考を澄み切らせ、新鮮なものにしてくれるようだ。「…菊の花をむくげの花にできるのはそれのみ、やがてはその運命さえも変える、そう教わりました…」

「そう、さすがね…」サクラは2匹の前足と翼を重ねた手でトントンとたたく。「2匹の事は聞いてるわよ。データ取ってる国連からも、もっと詳しくはユイリィとブレイブから…」

「え…聞いたんですか…ユイから?」グレイシアは思わずメガニウ

ムの方に振り向く。彼女の背中があの時の記憶を敏感に読み取り、細かく震えた。「ホントに…あの事を…」

「うん……何か知らないけどウチの義務だからね、うん」ユイリィは申し訳なさそうな笑みを浮かべ、彼女の頭飾りにそっとツルを伸ばす。「ごめんね…でも言ったわけじゃないの。サクラさんに伝わっちゃったて言うのかな？」

「う、うんん…それなら別に問題ないけど…」グレイシアはサーナイトの方に視線を戻し、自分の右前足を返して強く彼女の右手を握った。「サクラさん…どうしたらいいんですか私？あの子を……あんな小っちゃい子を…」彼女の声がかすかに震える。サンフランシスコで起こったあの事、体が凍り付くような罪悪感が彼女を襲った。自分に助ける術はなかったのか？「…あれで…あの子を…死なせた…」

「違うわ……テルルは隊長として精いっぱいの判断できたのよ…」彼女は強く握られた右手に力を入れ、左手で頭をそっと撫でてやる。涙がたっぷりと溜まったテルルの瞳、その奥には彼女が自分でも気づかない、彼女の芯の強さがこちらを見つめている。それがある故に感じる自分を責める気持ちと思った通りに進まぬ自分に対する情けなさ、グレイシアの意識の水晶はそれに満たされている、サクラ・フユツキはそう感じた。「あなたはあのメリープに対して一発も加えていない。あなたの意識がそれを思いとどまらせていたの、分かる？」「…私が…」「ええ。それは隊長に、いいえ、引っ張る役に必要な愛情、恋愛じゃなくて…思いやりっていう物ね…だからテルルも問題ないわ」彼女はグレイシアの右前足についたホコリを落とし、もう一度励ますように優しく当てた。「隊長の代わりをするのもあと少し…自信を持ってやってね、いい？」

「……はい…すいません…」テルルは右前足で涙をぬぐい、鼻を大きくすすった。「謝る事は無いわ。あとは…」サーナイトはチルタリスの翼に右手を移す。「チェギョンもね、あなたの性格は…それでいいのよ。変わるときは考えなくても変わるの」「そう…なん

ですか…あたし、こんな状況で…」

「いいのよ。成長と個性は全く違うわ……必要とあらば、進む道は新しく作れるから…」サクラは姿勢をかがめ、チェギョンの翼をしっかりと握る。チルタリスの意識の水晶から発せられる気体の中にはやはり年齢相応の、いやそれ以上の感情や揺れが存在しているようだ。上流層で何の不自由もなく、欲しいものは何でも手に入るという、人間の資産階級と同じ環境で育ち、わがままに近い自己主張も認められていた、それが故に現在の状況が自分の感じてきたものと異なり、それをどうにかして解消しようと焦ってしまっているのだろう。それはサクラ・フユツキ自身経験したことがある物、テルルにしろ彼女にしろその感情が意識から伝わる以上に同情を覚えてしまう。同情は禁物、エメリア自治協会や国連から言われているのは十分身に染みているが、それ以上に最近の自分がどうあるべきか、その悩みが前に押し出されてくる。「一気に変わると、なかなかついていけないもの。今は自分がどうあるべきかじゃなくて、どうすれば進めるか、それを先に考えるのよ」

「ですよね……進めばいいんですよね…」チルタリスは左翼で手すりをさわり、そちらを見ながら大きくうなずいた。ありがたい以上になんだか照れくさい、自分の個性を認めてくれる、そんな彼女に対してチェギョンが抱いたのは、感謝以上に恥ずかしさだった。「…ありがとうございますサクラさん…」

「大丈夫大丈夫！ウチはこんな変態でもサクラさんと一緒にやれるんだから！」ユイリィが身を少し乗り出し、ツルでテルルとチェギョンにある頭の飾りをくしゃくしゃと撫でまわす。「これからもよろしくね！」

「う、うん…」「変態って…ユイらしくていいけど…まあいいよね」グレイシアとチルタリスは思わず顔を見合わせてしまった。このメガニウム種族は相変わらずのテンション、笑顔で自虐どころか自慢をしている、とはいえこれが彼女の明るさと気前の良さ、一緒にいると自然に気持ちが安らぐのを感じる。

「もう…あなたはもう少し現実を見なさい。変態を否定する気はないけど、あなたの立場的にどうなのよ？」サクラは呆れたように息をつき、振り向きざまに右手でメガニウムの頭に生える雄蕊の付け根を押した。「ユイリィのする事は彼をリーヒュンをしっかりと支える事、今回もとやかくつけては遊んでたでしょ？」

「そんなあ…ヒュンとは楽しくやってるだけですよお…何せ…」そこまで言いかけてユイリィは言葉を濁らせ、思わず向こう側にいるベイリーフを見る。彼の方はブースターやオオタチと共に目の前で繰り広げられるバトルに見入っているようだ。「…知ってます。ウチがどうあるべきか、どうすべきかは」こんな状況でバトルさせられるポケモン達、彼の衝撃と困惑、それ以上の人間に対する感情は彼女の意識の水晶にもはっきりと伝わってくる。この先もそういう事態は続く可能性…、いや確実にある、義妹のフローラの件もますますひどくなる可能性が高い、そんな彼を自分は支えなければならない、ユイリィ・ランタン・プレミドールの意識の水晶の中にサクラのあの言葉がはっきりとよみがえった。「…折り合いですよねウチの」

「ええ。こうとまでは言いたくないけど…現実がね…」サーナイトは目の前の光景に視線を戻す。天井からぶら下げらた液晶表示板に映し出されたポケモンと彼らに指示を出す選手の人間たちの情報、試合の状況を示す数値、それが変化するたびに観客は歓声を上げ、それが会場の空気を波立たせる。観客席の下にある帯状のディスプレイにはこの会場と試合のスポンサーをしている企業のロゴマークが次々に表示される。ＧＥ，フォード、ボーイング、マグドネルダグラス、マイクロソフト、シーメンス、フィリップス、ＧＢＴＸ、デパスター…２０１６年のオリンピックで行われる種目の一つ、ポケモンバトルの北米予選、極めて性能とレベルの高いポケモン達が

ひしめく北米地区だからこそか。長引く経済低迷で多くの大手企業が、莫大な金額を要するスポーツ業界での宣伝活動の撤退や規模縮小を行う中、この分野はまだ多くの大手企業がスポンサーを務め、大金を払って宣伝をする。企業によっては選手の“組立”や育成に関与し、この“スポーツ”と密接に関与していることもある。その通り、オリンピック選手として共に戦うポケモン達は、たいてい生命工学企業によるクローンか、能力の高い個体を手術や投薬で強化した“サイボーグ”だ。そもそもオリンピックたる物、スポーツの祭典という名称は表面に過ぎず、実際は国家の意地をかけた戦い、開催国にとっては自国の繁栄を示すと同時に経済成長を促す絶好の機会だ。フルマラソンから棒高跳びまであらゆる陸上種目、水泳、射撃、乗馬、武道、剣術、ありとあらゆる分野の選手に対し、自国政府や大手企業は出資し、トレーニング場所とメニュー、育成する人材を確保する。・ポケモンバトルに至ってはさらに過激、アメリカ、ロシア、中国、ドイツ、日本など強豪国の政府は研究機関や大手企業に莫大な投資を行い、人工内蔵機の埋め込みや投薬、マインドコントロール、ありとあらゆる生命工学・医療技術を駆使してポケモンの改造や育成、場合によっては完全ワンオフのクローンを制作することもある。すべては勝利を手にして国家に栄光を渡すため、オリンピックの種目で勝利した選手には金から住宅まで、親類にわたってまでかなりの富が手にはいる事は少なくないし、手に入れる名誉と人気も絶大だ。相手がポケモンという人間でも野生動物でもない生命体である以上、それを操る選手とそれを取り仕切る機関の思想はさらに熱く、複数の個体を選出し、事故死もいとわぬ過激な訓練を行う。大会で負ける事はポケモンの死を意味し、たとえ勝っても栄誉を受けるのは人間だけ、重傷を負って使用不能で安楽死、もしくは情報漏えい防止のために優勝後の殺害もいとわない場合も多い。人間たちにとって国際大会クラスのポケモンバトルは、最新技術の結晶であり、国家や大手企業の帰趨をかけた争いであり、それが故に何かと黒い裏事情の多い分野としても認識されている。

「ええ……これがそうですから…」メガニウムも軽く手すりに花びらの付いた首を乗り出し、ツルを手すりにかける。これが現実、経済活動、科学技術開発、スポーツや娯楽、そして人類同士の紛争にまでポケモン達は動員され、製作され、そして無感情に捨てられていく。自分たちも生命、彼等が保護しているはずの希少動物と同じ生命、それどころか限りなく人間と同じレベルの知能を持った知的生命体なのに。ぼんやりと見つめる光景に憂鬱にもならないのは、こんな状況にもう慣れてしまったせいか、そう思った。「クローンですよね彼等…または薬や機械でコントロールされてるか…」

「今回は両方ともクローンじゃないわ。ただし…手術は受けているようだけど……」サクラは憂鬱そうな表情をしたまま、自分の座席の脇に置かれた紙束を右手で示す。こんなものがあるとは彼女自身信じられなかったが…ここを予約した国連関係者の人間が持ってきたものだ。「それね、選手たちが試合前に書いたものなの。ほかの皆には見せられないけど…あなたなら理解できるわよね？」

「ええ…まあ…」メガニウムはその紙束を見る、何となくだがそこに書かれている事が見る前から感じ取れる。しかしその一方で明らかに見るように強制してくるサーナイトの目線、そして意識のエネルギー、少し迷った果て、ユイリィはツルでその1枚を取り、2つ折りにされた紙を開いた…

（内容抜粋）

（前略）……2匹での希望を持ちながらも心の一隅で恐れていた“時機を失する”と言う事態がついに現実化してしまった……（中略）……至らぬ自分にかけてくれた親切、温情…月並みのお礼では言い表せないが、「ありがとう」最後のお礼を付け加えておこう…（中略）……形式的なそれとは別個に、一人の男（オス）として女（メス）で

ある君に言いたいことがある。……（中略）？、（省略）？、過去の栄光にこだわらない。？、勇気をもって過去を忘れ、新活面をさぐること…（以下略）……君は現実を生きるのだ、現実の世界に私は今や存在しない……（中略）…これは自分勝手な男としての説教ではなく、客観的な立場に立って君に贈る言葉だ……（後略）

リラベル・ソユーザーから愛するサリスに贈る…

「……これ…これって…」彼女はそれ以上言葉がでない。感動からではない、示されている現実に言葉を失ったのだ。サクラはそんな彼女を見つめ、わずかに口を開く。「そう…それを書き残していくの…死を覚悟でね」

「っ！」メガニウムは思わず目の前で繰り広げられる光景に身を乗り出す。次々に切り替わる情報表示のディスプレイ、徐々に高まる観客の歓声、すでに双方血まみれで立つのもやっとという状況だが、それをはやし立てるかのごとく人間たちが声を上げ、双方の背後で選手たちが機器のコンソールを通じて指示を送っている。あの“遺書”がどちらの物なのか、姿を見ればそこから手にもつ紙からのびる意識のエネルギーがはっきりと伸びているのがツル先から感じられる。「……」ユイリィはただ見つめる事しかできない、過酷な現実、いや絶望的な運命の中でひたすらに前を向くポケモン達、それを多くの難題を抱える自分たちの生存のために切り捨てざる負えない、いや苦労の苦し紛れに遊び道具にさえ仕立てる人間、目の前に広がる人工の空間が現代の地球社会を象徴するかのように薄暗く見えた。

その頃……ガラテア地区の沼地。

これが最後の一匹！1週間以上不寝番で待ち、何日も追跡した果てにようやく1匹、また1匹と捕まえていき、ついに最後の一匹を迎えようとしている。ついにやってきた4匹目、コリンクは今までと全く同じ、自分が銛の紐に掴まって相手の動きを読み、ミズゴロウが泳ぎ回って牽制し、タイミングを見計らって自分の“スパーク”で仕留めにかかろうという算段を今回も実行していた。「うべっ？！よっしゃ、次で仕留めるぜガトル！シンシア！」浮かび合った拍子に、彼は左前足と後ろ足で水面上に浮き出した葦に掴まり、岸辺に待ち構えるパチリスやロコンに向かって右前足を突き出す。「目をよく見開いてろよな！お前らが何かで撃ったらこいつは退く！その隙に…くっそ！」そこまで言いかけてコリンクの右前足を引き千切れんばかりの痛みと共に引っ張られ、やがては体をも水面下に引きずり込まれる。その前に十分に息を吐き切ってあったお陰で、顔面から水に突っ込んで息が苦しくなるほどではなかったが、突然湧き上がった水泡で一瞬方向感覚が失われた。「げぶっ？！」

「大丈夫か？！」激しく身をよじった生物の背中に突き刺さった銛と、それの紐を右前足にしばりつけているコリンク、その爬虫類が暴れ、飛び込んだ拍子に一瞬隙ができた彼は、銛ごと沼地の底へと振り飛ばされそうになる。「いっ…」遠心力で激しく食い込んでくる紐、コリンクは何とか左前足で紐を掴み、必死で食らいついた。「大丈夫か？！」ミズゴロウが下から泳ぎあがり、その醜い生物の前方へと踊りでる。当然のことながらその生物の嗅覚と本能は、目の前にいる彼は獲物ととして認識し、ミズゴロウを食いちぎらんとばかりに襲録敷く巨大な口、中には哀れな犠牲者を骨ごと爆砕する強力な鋭い刃が並ぶ凶器を開く。しかしそこはこのミズゴロウ種族、グリソム・トルーマンであってもなくても恐らくはそうであろうが、少なくとも彼の動きっぷりは目を見張る何かがある。頭の上に立つ突起と頬に出たオレンジ色の鰓に入る感覚神経が、その生物の泳ぎ、身のくねり、口やあごの動きから発生する微妙な水流を、襲い掛か

る瞬間を伺う相手の動きを敏感に感じ取る。「こんの…」平手は閉じ、また開き、凶器が何度もこちらに噛みつこうとしてくる、ミズゴロウは上下へ左右へ体をひるがえし、後ろ足や尾ひれわずか数センチでその顎の先端をかわしていく。

「おっし！」その隙にコリンクは後ろ足と前足で水をかき、その生物の尻尾の付け根あたりに何とかしがみつく。「こいつ……」目の前で湧き起こる水泡の中、彼は何とかして銛を見つけ、振り落とされる前に左前足でそれを掴んだ。

「ちょっとレオ！…ってホントただの子供ねあの子は…」パチリスは岸辺すれすれに走り寄り、激しい水しぶきと波が起こる水面を見つめる。周囲にいるルクシオやウインディも水面ぎりぎりに駆け寄って、生物捕獲用のさす叉や銛を次々に構えはじめる。「どこに行ったんだが、グリソムが上手くフォローしてくれればいいんだけど…」全くもってあのレオ・バイブル・ミュースカイは無茶しかしない、今はいないベイリーフも年上とはいないほど無鉄砲で思考回路が単純だが、彼とあのコリンクはいい勝負という以外何ものでもない、そんな呆れと諦めが入り混じった感情のせいか、彼女の大きさと比較してもあまりにも巨大な生物捕獲用の銛が、一層大きく重く感じられる。「シンシア、後ろの方お願い、私がＯＫ出したら一気に押し出していいのよ」ガトルは巨大な銛の付け根あたりを短い手で抱え、水面に先端を向ける。「刺さったらあいつと一緒に私が出る！シンシアは離しちゃっていいからね！」「え、ガトルそれで大丈夫なの？」

「何の何の！あいつと一緒にやってて学んだことと言えばこれ位なの」パチリスがロコンの方を向き、彼女の大きな尻尾がクイクイと動いた。「…それにあいつが失敗したらフォローもしなきゃなんないし。まああいつの子供具合が役に立つ瞬間よね」

「うん…気を付けてねガトル」シンシアは後ろ足に力をかけて立ち上がり、上に突きあがった銛の上の方へ前足を精いっぱい伸ばす。自分がどれだけあのコリンクに信頼されているかは分からないし自信もあるはずがない、しかし、それだからこそ…信頼されるように、少なくとも見放されないように頑張らなきゃ、彼女は精いっぱい目の前の水面に集中し、銛の柄を握る両前足に力を込めた。

ひたすら上がってくるのを銛を構えて待つ、その道に通じた者…大規模漁業や人工養殖漁業が常態化した人間世界では絶滅しかけている方法だが…ならともかく、単なる速成駆除チームではじれったいにも程があった。「行ける…もう少し…」「もちろん…」しかし文句を言うことなくガトルとシンシアは銛を構え続ける、うかつに何かを言う訳にはいかない、レオとグリソムはその生物とまさに今、泡立つ水面で格闘しているのだ。自分たちができる事をしなくては意味がない、たとえ内部で様々な確執があったとしても。

突如として目の前で大きな水しぶきが上がり、それで生成された巨大な水柱が2匹の上に覆いかぶさる。「わわっ！？」「上がってきた？」パチリスは思わず背後にひっくり返りそうになりながらも必死に巨大な尻尾で姿勢を支え続け、ロコンは思わず力が抜けかけた後ろ足で何とか粘った。「やっべ！ガトル押さえろ！」水面2メートルほどに飛び上がったその水生生物は、角度の大きい斜方投射を打って岸辺の草むらに落ち、そのはずみで突き刺した銛に掴まった…というより縛り付けられた…コリンクはパチリスの顔面に飛び込んできた。

「きゃっ！！！」「ぐえっ？！」パチリスの水色の模様が入った眼の上が視界いっぱいに広がった直後、鼻がつぶれるほどの衝撃が彼の顔面を襲う。コリンクの体はそのまま運動量と力学エネルギーをある程度保ちながら、そのままパチリスを後ろに突き倒し、2匹

そろってペッちゃんこになった。当然のことながらパチリスが短い手で抱えた銛は彼女の手から離れ、上に上がっていた柄の部分がロコンの頭に襲い掛かる。「わわっ！！」くるくる毛の辺りを木製の柄が直撃する0．1秒前に彼女は何と右にかわした。「ひいっ……」すぐに視界を上げた彼女の目、ロコンは目の前に広がる光景に心臓が止まりそうになる。彼女の前に立ちはだかる、醜いいぼで埋め尽くされた巨大な影、光のない膿色をした目がこちらのをにらみ、次の瞬間にその本能は目の前のロコンを食物と認識した。その判断は野生動物にとって即行動へと変化し、ロコンの目の前にあるその皮膚が瞬時に上下に分かれる。その内側に並ぶ凶器、この生物を殺傷の悪魔たらん存在にしている危険な存在、鋭くとがったその物体が瞬時に彼女に向けられ、一気に迫る。

「シンシア…アンタっ！？」スカイラブが大きく開かれたその生物の大あごを食い止めるべく飛び寄るが、1秒にも満たぬごくわずかだけ遅い、背筋の凍り付くような絶望を覚えた。

一歩間違えば、いやそうでなくても助からない、このままでは自分の体は非情な狂気によって引き千切られる、シンシア・ベルーサ・カウンストポビアの意識をその恐怖がよぎる。しかしそれと同時に、それから逃れたいという生物の本能的衝動が突如として彼女の意識の水晶を熱くし、それに反応するかのごとく内部にある感情の原子炉の出力が急上昇した。何もしなければ意味も名前も持たないアミノ酸やカルシウムを主成分とする物体となって草地に転がることになる、生物である以上それから逃れる、その本能は先カンブリア時代に誕生した単細胞生物、いやそれ以前の自己増殖能力を持った化合物の時代から脈々と受け継がれてきたものである。

ただし、彼女が感情として認識したものは違う、彼女が気付いたのは自分がやらなければコリンクとパチリスはやられる、このロコン

がシンシア・カウンストポビアであるが故に起こるレオ・バイブル・ミュースカイとガトル・ハルミア・リベントを守るというごくごく在り来たり、しかし極めて強い思いだ。それが彼女の血液を流れる粒子を刺激し、自分が今まで考えたこともない、それを望んだことの無いような力、それを一瞬ではあるが引き出したのだ。

「ううううっ…」ばね仕掛けのネズミ取りとなって彼女の首に向かってはさみかかる爬虫類の顎、その動きが瞬間的ではあるが、外部からの力によって停止した。ロコンの優美に広がる扇子上の尻尾の周囲に広がる空間が一瞬歪み、そのエネルギーは彼女の前方へと放出されて爬虫類の動きをわずかではあるが止め、その勢いをも封殺したのだ。そのわずかな間がもたらした攻撃のずれ、並びに思わず力んだ勢いで姿勢が下がったロコンの位置も幸運を呼び寄せた。向かって右から左へとやや振り下ろされる格好で閉じられた爬虫類の顎、それが巨大な鉄筋建造物解体用のハンマーとなって彼女の頭、右耳の後ろ辺りを叩く。「あうっ……」人間の靴で蹴られたような激しい衝撃、当然のことながら彼女にはこらえようがなく、彼女は思い切り左へと投げ飛ばされた。

しかしロコンの一発は無駄ではない、その間にルクシオはジャンプし、獰猛に顎を振るった生物の上を取る。「もらったわよっ！」今のスカイラブ・バトルスターには何が起こったか、それは見えても分析する余裕はない、飛び上がった勢いで彼女は“ワイルドボルト”のエネルギーに乗り、そのまま重力で落ちる格好で生物の背中に飛び込む。「ほら次、さっさと攻めたてる！」受け身の姿勢で前転し、そのままルクシオは足の爪を立てて草むらで姿勢を戻す。「はい大人っ！アンタが続かんでどうすんの？！」

「理解してますっ！」サクラの秘書官にしてチームのお目付け役、ジャノビー種族のユーク・ゲープコッチが身をひるがえした。一撃目を終えた爬虫類の本能はすかさず彼を次の目標と判別し、短い前足を上げられるだけ上げてその顎をこちらに向けてくる。「この野郎！」何日もの間いいところを見せられず、スカイラブはおろかガ

トルにまで小ばかにされてばかり、ここで何かを見せなければ自分がいる意味ないじゃないか、ジャノビーの意識の水晶に芽生えた発作的感情が彼の体を突き動かす。ユークの放った“リーフストーム”は見事に爬虫類の首元を鋭いエネルギーの刃で叩き切り、血しぶきと共に大きく後ろへとのけぞらせる。「こんのっっ！！！！」大きな尻尾でコリンクの体を無理矢理どけ、パチリスが転がり込むように爬虫類へと飛び掛かった。「いけえええっ！！」いまだにくらくらする視界と頭、それでも止まるわけにはいかない。自分がやらなければならない相手は目の前におり、自分がやらなければ結果は閉じられたものしかない、ガトル・リベントは頬の帯電器官に最大限のエネルギーを注ぎ込み、半ば倒れこむような格好で“ほうでん”を正面に打ち込む。

岸辺を真夏の太陽の明るさに照らし出す青白い閃光、目が焼きつくほどの眩しさがほんの1，2秒そそり立ち、やがて周囲は元の暗さに戻る。強力な電圧によって中枢神経まで電波リズムを崩された爬虫類は、心臓の鼓動や呼吸を司る自律神経までもがマヒし、わずかに4本の足先をけいれんさせ、心微細動を起こした胸がかすかに動くのみとなる。「トドメは！」現地住民であり、銛突きの名手でもあるウインディ種族がこの好機を逃す訳もなかった、モーリスは強靭な両前足を振り上げ、“かえんほうしゃ”で赤熱化させた巨大な銛を細かく動く爬虫類の胴体に突き立てた。動脈を完ぺきにぶち抜き、衝撃に硬直した爬虫類は、滝のごとく血をまき散らしながらその場で力が抜けていく。

「シンシア…シンシア？！」スカイラブが真っ先に駆け寄ったのは幼馴染のレオではない、爬虫類に叩き飛ばされたシンシアである。「大丈…いっつ…」「動かないほうがいいよ、理解？！ユーク、ガトルを掩護！」「は、はいはい！」彼女はまだふらついているパチ

リスを左前足で制止する。着地し、背後に振り向いた直後に見えたガトルの一撃、必殺のように見えが打ち出すときの姿勢があまりも乱れていた。まだ１５歳であるがゆえの思い切りよさという物を考慮しても、先ほどのコリンクとの激突を考えるとおそらく頭をしたたか撃ったのだろう、スカイラブ・バトルスターにとってそこまで見通すのは簡単な事だ。小さい時からの経験で、レオの動きを見ればば彼の体調やテンションをみすこせるのだから。

「シンシア…どう、大丈夫?」ルクシオは後ろ足を追って尻尾を草地に下ろし、前足でロコンを背中から抱きかかえる。「うん…うううっ…」彼女がわずかにさすってやるだけでシンシアは体を動かし、目をわずかにあける。「どう、どっか動かない場所とかは?!言葉理解?私がどういう奴か見えるん?!」「え、ええ……痛っ…ここ…」わずかに首を縦に振った直後、彼女は左前足を頭の方、右目上のこめかみ辺りに伸ばそうとしながら表情を歪めた。「どこ、どこが…」スカイラブはシンシアの右耳の周囲を探り、耳の下から頭のフサフサ毛の辺りで来た傷口をすぐに見つけた。切れてはいないが皮膚がかなりひどくずる向け、内出血を引き起こしている。とはいってもこれだけで済んだのは奇跡の方だ、瞬間でもタイミングがずれていたら首を凶暴なあごで折られていただろう。それを考えるとルクシオの意識の水晶は温度が下がり、彼女は思考の平静を取り戻した。「大丈夫痛いけど大したケガにはなってないんよ…」彼女は腰のベルトに巻いてあるタオルを右前足で一本取り、ロコンの右耳辺りにこびりついたわずかな血と泥を取り払う。「…シンシアはあいつとガトルを助けようとね。…シンシアの“じんつうりき”、少しずつ出るようになってきたんじゃないんの…」スカイラブは既に尻尾の方から彼女を降ろし、右前足の甲で彼女のほほを軽くなでた。思い返せば思い返すほどレオが危険にさらされていたのがリカし、ますます彼女に対する感謝と温かい気持ちで意識の水晶がいっぱいになっていくのを感じる。「ともかく今は…ありがとう。あんなバカと一緒じゃ色々と大変だろうけど…よろしく頼んでもいいよねレ

オのこと」「え、…はい…」あのコリンクの事をバカだと認識したことは一度もない、いい奴とは思えなかったがさすがに何と返事したらいいか分からない、まだフラフラする意識の中、目の前にいる彼女に対してシンシアは何と答えていいか見当がつかなかった。「いってえ……何でバカをやらかしちまったんだ俺……」「悪い、おいらが悪かったよ。もう少し下の方に追い込んでればなあ…」まさしく水から上がったばかりというにふさわしい、水滴を体のあちこちから滴らせるグリソムはレオを左前足で引っ張るようにこちらへと連れてくる。「バーカ、気づいてんだったら…うつっ…先にやれっての…」

「はいはい、アンタのいう事じゃないんよそれ、理解?」愚痴たらたらのコリンクに対し、ルクシオは右前足の真ん中の爪を彼の方に向ける。「グリソム、４匹ともありがとうね、こいつのバカさ加減とアンタの能力がなきゃ捕まえられなかったんよ」「あ、うん…おいらの手柄はどれくらいなんだろうな…」

「手柄は聞かなくて自分で決めるもん!そういう解釈が重要なの」スカイラブはミズゴロウの右手の先に向かって自分の右前足の爪先を伸ばし、ツンツンとつついた。「他人に縛られた評価も大事なんだけどね、それより自分の評価ってのは厳しいもんよ。アンタはもっと前を歩いてよし!オッケ?」「うん…そういうことにしよっかな」まだ彼女が言っている事がイマイチわからないが、おそらくは自分の事を誉めているのとほぼ同じなのだろう、なんだか照れくさい感じがしてグリソムは両前足をこすりあわせた。

「ったく…ラブはいちいちグリソムやガトルはあらかさまに褒めやがって…俺にはねぎらいも何もなしかよ?」「自分で求めて褒め言葉がもらえたらこの世は天国よ。だいたいね、幼馴染なんかに評価してもらおうなんて求めたらロクな結果がないわよ。それ理解?」スカイラブは鼻を鳴らし、右前足でレオにこっちに来るよう催促した。「あと、今回はシンシアが護ってくれたんだからね、感謝の一言くらいかけてよ」

「お、俺が…てかこいつだったの？」コリンクがきょとんとして彼女の左腕に頭を支えられるロコンを見る。「どこを見てんのよアンタ…うちらの前に入ってくれたのシンシア」でしょうに…」彼の左側に、ジャノビーのツルに支えられたパチリスがゆっくりと歩いてくる。その表情には、レオ・ミュースカイを幼児のごとく扱う普段のガトルの物が戻ってきていた。「あ、ありがとうねシンシア…本当にウチら…間違えれば死んでた…」もしあのまま背後から襲われたら…彼女の背筋が、意識の水晶から湧き上がった気体に冷たくなる。

「そーゆー事よ。ガトルはちゃーんと見てんのにアンタときたら…とにかく一言くらいかけてやんのがマナーでしょうに…いい？」

「わーったわーった…とりあえず感謝っと……」レオはじれったそうに足を踏み鳴らしてからロコンの方に数歩寄ったものの、何を言えばいいのかさっぱり思考に浮かばない。「って…何言やいいんだよ？俺はそういうのに…」

「疎いで済ましちゃいかんと…何でアンタはそうやって…」困ったような表情で自分に視線を送るコリンク、スカイラブは呆れたような表情で右前足の爪を立ててくいくいと動かす。ただし、そんな彼をよく見ていると分からないというより、異性に対する気恥ずかしさの方が先行しているようだ、そんなコリンクを彼女は少しだけおだててみた。「…それともなあに？アンタ意外と照れくさかったり？」

「ん、ンな訳ねえだろうが！？俺はこいつなんか…」「レオってそこんとこが子供なのよねえ、こいつとか言ったらかわいそうでしょうに？」鼻先を赤くしているレオを見ていて元気が戻ったか、ガトルがジャノビーのツルをそっと振り払い、左前足で彼の尻尾元を軽く押す。「わ、分かったよ。くっそなんたっていやあいいんだ…」彼は右前足で頭のはねっ毛を軽くかきむしる。パチリスといいルクシオといい、何を勝手なことを…と思っていたら、それが図星であるという事実を、意識の水晶から湧き上がる気体から感じてしまっ

た。それが故に気恥ずかしさ倍増である、はっきり言って自分に異性の相手は向いていないんじゃないか、ふと脳裏にそんなこれまでにない思いがよぎる。

「ま、まあ…今回は…すまねえな…」コリンクはロコンの方にもう一歩歩み寄り、右前足を彼女の頭のくるくる毛に近づける。「…ありがとうって…言っとくからな…そういう事にしろや…」

「うーん…それでいいよ…」シンシアは相変わらずうつろな目線でレオの方を見る。しかし、その表情のどこかに照れたような赤みが浮かんでいた。彼女からすればこんな事を言われるのは初めて、気恥ずかしいとかそれ以上に言葉が思い浮かばなかった。もっとも、それが彼に対して湧いた信頼によるものなのか、はたまた彼に似合わぬ口調に抵抗を覚えてしまったのか、それは分からない。「…私もアンタに今、うん、何て言ったらいいか分からないしね…」

「まったく、レオって意外と異性に弱いんね。普段の覇気がまったく感じられないわよ…」「ふざんけんなバカ…恥ずかしいだろーが…」顔を赤くするコリンクの顔の右にあるはねっ毛を、ルクシオは軽く右前足の爪先で突く。「それで…はい秘書官！シンシアちゃんの看護、よろしく頼むわよ」

「え？俺がまた？」「そーよ、他に誰がいるの？」シンシアの頭から左前足を離しつつ、スカイラブは右前足の爪先をユークの方に向ける。「実践ってのは戦闘とか探索とか救助とかそんだけに入らないんよ。サバイバルから治療まで経験してなんぼ！わかったらやる、物事理由を聞く前に来ちゃうわよ…」

「はいはい…（って俺がやんの…）」納得がいかないが現場という物はこんなもんなのだろうか、この数日間まったく秘書官らしきことをしていない自分に戸惑いとじれったさを覚えつつ、ジャノビーはとりあえず彼女と交代した。

多くの銛や矢が突き刺さり、力抜けて息絶えている爬虫類。「どうやらこいつが…最初に逃がしたデカブツだったようだな…」ウインディ種族のモーリスには、傷のつき方、あの時一瞬見えた尻尾の大きさ、それだけでそいつの形状や体格を見抜くことができる。というより今の彼は、それ以上にこの爬虫類の体にある雄弁な証拠が一番の確信材料だった。「そりゃあなんつったって…彼女の命がついてるからだよ」「イノチ？」

「ほーらこれだ…」首を傾げるスカイラブをよそに、ウインディは爬虫類の死体から水草や泥に包まれた細長い棒きれを引っこ抜く。「テルルっつったな…アンタが彼女に反してやれよ」「は、はあ……」ルクシオは彼から銛を受け取り、右前足でこびりついた泥と水草を払い落とす。「大事にしてるのよねえあの子。約束したからにはもちろん…」右前足に伝わってくる銛の柄の感触、汚れて木材の色も面影も全くなくなってしまっているそれを見ていると、彼女の脳裏になぜかグレイシアの心配するような表情が浮かぶ。変なところにこだわりが強い上になかなか喧嘩っ早い彼女、しかしそんな彼女の経歴、いや苦難と思い出が詰まっているであろうこの銛、そのさわり心地はなぜか暖かかった。

「本当に迷惑かけてすまなかったな…これでこの湿地帯にいる生物はおそらく一掃された…犠牲者もこれ以上は…」モーリスは右前足で死んだ爬虫類の腹を蹴り飛ばす。「こいつらはここにいるわけじゃない、この湿地帯は沿岸まで続いているからな。海から泳いで入ってきたんだろう…」

「泳いでくるって…この辺りにこいつらみたいな奴が住む熱帯雨林なんて…ニュークリアにはいないですよ…」スカイラブも生物の死体に歩み寄り、右前足の爪先で醜いいぼで覆われたうろこをこする。何とも言えないが不思議な心地よさもある表皮、自然物であるがゆ

えの気持ちよさだろうが、今の彼女にそれを味わうゆとりはない。
「…それにこういう生物はそんなに泳げませんし…可能性は…」彼女は思わず顔を上げる。一番あり得る可能性、好きでも嫌いでもないがあまりにも在り来たりすぎる。「…ありますね」
「正解だお嬢さん…残念ながら、か?」ウインディ種族は爬虫類の尻尾を右前足で軽々と持ち上げ、鼻先でそこに縛りついた物体をしゃくる。「こいつは人間の持ち物だ。内海はほとんど通らんが、こうやって金にしたい奴は通り抜けるんだろう……」ゴムによって結び付けられ、プラスチックの短冊のような物体がそこに括り付けられている。そこには人間の文字と複雑な模様が正方形に描かれたマーク。「俺もよくは知らんが、人間っていうのは世界どこにいても相手の位置や状況が分かるし、こんな文字ひとつで本１００冊分くらいの事が見えるっていうじゃねえか?これもそれの名残だ…さっさと始末した方がいいな」
「確かにですね……犯罪行為のくせによくもまあ情報まで律儀に入れてあんのは…」スカイラブもゆっくりと近づき、自分の右前足でその物体を取る。やはり人間の密輸だったか、エメリアでアメリカ陸軍に協力する自警組織…もちろん軍にも登録されている…にいたから、彼女には多少なりとも人間の文明に関する知識はあった。複雑な黒色の模様は精密機器で情報を読み取るコード、水面下に存在する運輸企業が取引相手に対して示したい情報が入っているのだろう。「……最近の常識、に入るんですよね。はい…」ルクシオは特に何も気分を感じない、驚くような事態でもなければ悲しい事態でもないからだ。ただ単にこういう事実があるだけ、スカイラブ・バトルスターという女(メス)にとってはそれ位のものだった。

「あ、あの……」スカイラブの右手にマグマラシ種族のスカラーが寄る。「皆さん宛てでしょうか…なんか手紙ぶら下げた鳩が来まし

て…この手紙がそう書いてあります」

「あ、なるほど。どうもどうも…」ルクシオは右前足でマグマラシの手から白い紙を受け取り、中に書かれた足型文字をなめるように目を通した。「…今すぐこっちへ来いと？…歩いて１週間もかかるのに？」

２０１３年　２月２１日　ポーランド　ジェシェフの北北東１００キロ　ストラホスワフ原子力発電所建設ポイント　４時１０分

アメリカ・ＧＥ社と韓国のエネルギー・電気機器関連大手企業連合が参加して建設が進むストラホスワフ原発、中欧の電力合弁企業であるエネルゴプロジェクト・ワルシャワ社が工業・交通・生活あらゆる点で急増しつつあるヨーロッパの電気エネルギー需要の拡大に対処し、同時に急速に経済成長する自国の電気コストの低減を目標として進む原子力発電所は、まだ夜の明けぬ中欧の森を吹き抜ける冷風にすくんでいる。２４時間警備のため、作業灯は点灯しているが、作業灯のライトアップによって照らし出されているまだ露出している原子炉はそれによっていっそう寒々と輝いていた。

そろそろ自分たちが企業連合の技術者ではないという事がばれるかもしれない、そんな漠然とした思いを抱き、韓国国家安全保障局（ＮＳＳ）の男は駐車場付近に設置された仮設の詰所を出る。暖房（エアコン）がよく効いたコンテナハウスから一転、ポーランド北東部の北風が防寒着を着込んだ上からでも肌に突き刺さってくる、彼は思わず両手までコートの袖を伸ばし、大きく息を吸い込んだ。韓国も全体的に

冷涼な気候で積雪と寒波に慣れてはいたが、ヨーロッパの冬をここまで体験するのは初めてである。

現在もなお原子炉建屋の建設現場にほど近い、資材運搬車両駐車場と大型資材・機器類一時保管場所を兼ねる速成の屋根付きの倉庫、そこにはドイツ・メルセデスベンツ社のアクトロス２５２２大型トレーラーに載せられたまま、米・ＧＥ社の原子炉制御棒と韓国の企業連合が製造したＥＣＣＳ（緊急冷却装置）のコンテナが静かに出番を待っている。どちらも原子力発電という名の人類技術の結晶に欠かせぬ重要製品、韓国製のＥＣＣＳ部品に関してはもっと重要な意味を含んでいるがゆえ、トレーラー周囲の警備は２４時間体制である。ただしその理由は虚偽、一部に企業機密のシステムを使用しているため、他国の企業関係者がポーランドの原子力関連企業・エネルゴプロジェクト・ワルシャワ社の人物に見せかけて入らぬよう、という名の下で通常より念入りな警備を求めている。ポーランド政府も合弁企業の下請け警備企業も、果てには動向を依頼したドイツ軍のＥＵ対外行動局所属特殊部隊も特に怪しむ事は無く引き受けてくれ、こうして機器をオランダ・アムステルダムとドイツ・ハンブルクから輸送してきたトレーラーの警備についている。大手企業による経済インフラと技術輸出が国家にとっても重要性を強めている現在、企業自らの存続のため、もしくは経済戦略の一貫による国家の指示によって、ライバル企業に対する無許可の調査や、プロジェクト競合時の企業間工作、果てには作業妨害といった事態はそう珍しい事ではなく、国境を超える地球規模での大手同士の経営統合、合併、技術・運営提携、国家と連動した経済戦略会議への参加などが常識化した現在、自らの利益を守るために各企業は、自衛策を余儀なくされている。代表的な例として企業内データサーバのセキュリティ強化、工場や作業現場の警備強化、企業間交渉の報道陣公開が存在する。

　まだ夜明けの気配を見せぬヨーロッパ、建設現場を照らし出す照明の中に重く、大きくそびえる原子炉建屋になりかけの鉄骨と材料

は、各国や企業の思惑をはらんだ機器を警備につく人間たちを含めて静かに見下ろしていた。そう遠くないうちにトレーラーに積まれたこれらの機器は、原子炉という体を動かす臓器として、神経として、いまはただ露出しているに過ぎない光沢を放つキノコの内部から無限なるエネルギーを取り出すための道具になるため、人の手によってその中に取り込まれ、金属のキノコ型容器に過ぎないそれを原子炉という人類文明の到達点の一つに進化させるのだ。その巨大な建屋のなりかけを見つめる男、企業の技術者として潜入している身だがちょっとだけ誇らしかった。我が国の重工業大手と国家が総力を挙げて取り組んだインフラ輸出戦略、東アジアの小国に過ぎない大韓民国の技術と経済力が、欧米や中国に負けずに世界を駆け巡っている、それを証明する場に自分はいるのだ、と。いつの間にか自分がここにいる理由を忘れてしまっていた、自分は企業の技術者のふりをして最低限叩き込んだ知識を元に現地の企業スタッフをサポートする（詳しくは本社に聞いてくれ、と流せばいいし、共に来ている別企業のスタッフが連合の代表であるため、大抵は彼らが答える）一方、ポーランド警察当局とドイツ陸軍と共に不測の事態に備えて警備、その場合の状況報告をするためにいるのだ。シンガポールで北朝鮮工作員らしき人間が危うくコンテナ船に侵入しかけた以上、また彼らの証言からして、本来北朝鮮との共同工業地帯である開城（ケソン）工業地区の電力源となる小型原発に利用されるはずだったこの機器を北朝鮮、もしくは中国が狙っているのは事実、それを考慮すれば、ヨーロッパでも警戒を行う事は決しては無駄ではない。

ふいに鳴り響く携帯端末、電話の相手はＮＳＳ本部局長である。どうせ定時の状況報告だろう、男はじれったそうに右手で頭の髪をかいた。こっちは何時だと思ってるんだ、それに深夜隊の警備は当局とドイツ陸軍特殊部隊がやってくれている、自分は万が一に備えて

いるだけだ。

少しだけ端末ディスプレイの表示を見つめ、彼は左手の指先で通話スイッチを押した。“大丈夫かそっちの状況は？”

「〇〇〇ですが、状況報告するようなことは発生していませんよ」局長の男の声に彼は所掌嫌味を込めて言い返した。局長がこうやって連絡をかけてくるのは状況報告を催促するか、それともどうでもいい無駄話をしてくるときだけだ。定時報告は深夜０時と正午だけといったのは、大統領や政府上層とコンタクトを持つ局長…第一印象は単なる中間管理職的なおやじだが…自身である。「というより、定時報告は０時にしましたが、そっちで何かあったんですか？」

“いや、大したことないんだが、原子力関係でちょっとした物があってな”「原子力関係？北韓（ブッカン）連中の探り場所でも分かったんですか？」ＮＳＳの男はおもわず資材・機器倉庫の脇へと小走りで入り込む。もしそれ関連の情報だったらこちらの警備にもかなり関わってくる、北朝鮮の狙いがやはりこの機器の利用を妨害し中国に手渡すのが目的であれば、彼等の工作員、もしくは依頼を受けたロシアの犯罪組織…近頃多発しているヨーロッパの暴動でも武器を手渡しているとされる…が何らかの行動を模索している可能性は大きくなる、焦りに似た感情を覚えてさらに深入りした。「…やはり、中国と北朝鮮は原子力発電関係で……」

“いやいや、君たちの件とはまた違うが…そちらで自慢話になると思ってな…”端末越しの声は嬉しさに少しだけ踊っていた。“アメリカの４基中残り２基なんだが…ウエスティング・ハウスが共同に我が国の企業連合が入ったそうだ！いやあこれは…”「別に残りの２基は東芝が取ってるんであって…五分五分じゃないですか。あの島国から全部奪い取ったわけでもあるまいし、そんな事を言いに通話してるんですか？」男は呆れたようにトレーラーに体を寄りかからせ、右手を両方のこめかみ辺りを挟むようにあてる。「…いや、すいません局長、向こうの企業に我が国のインフラテクノロジーと企業を売り込むのも、国家外交戦略上、協力を引き出させる方法の

うち。承知しています」

“そう、その粋だな。君たちは我が国の未来を占う人材だ、帝国主義のように国家に身を投げてでも忠誠をしろとは言わんが、一応の公務員としてその業務だけは確実のこなしてほしい。それから…”端末越しの声が付け加えた。“新人の彼女がよろしく頼むよ。万が一の際は可能な限り資料とデータだけ持てばいい、資材の防衛は人間レベルのものでいい。相手が軍隊レベルだと勝ち目はない、当局と特殊部隊に任せるんだ”

数分後、携帯端末を防寒着のポケットにしまい、ＮＳＳの男は詰所に戻るべくゆっくりと歩き出す。自分とて不安がないわけではない、万が一我が国のいわく付きの原子炉関連機器…よく行われる普段の企業レベルではこんな事は全くないのだが…といった国家重要機密物や用人が何者かによって奪取・破壊される恐れが出た場合、できる限りの防衛と実行犯の確保・調査を行わなければならない身なのだ。もちろん韓国大統領府が直々で極秘指揮権を持つ以上、発生するであろう事態は押しなべて苛酷、局員は命の危険も承知しているという契約の上で軍人、警察関係者、その経験者から選抜される。そういう状況下で平然としていられる方がおかしい、いくらか経験のある彼でもそう思いたかった。

それから…建設現場の詰所を目指しながら、ふと男は前方にある明かりの一つに視界を向ける。今回同じように潜入調査へと入っている同僚の女は新人だったな、局長も言っていたが、彼女は初の外部行動とだけあってかなり緊張しているようだ、自分がフォローしてやる必要があるのだろうか、恋愛経験など彼は妙に照れくさい気分になる。とはいってもその方法がまったくわからないが。

あと数歩で詰所のドアへとたどり着く、その直後背後で突如大きな複数の人間の声と、靴底が小石を噛むがさがさという荒い音がした。「っ！」当直の従業員と警備員が酒に酔って口げんかしているようではない、侵入者か…特殊機関の関係者という本能が働き、この男はすぐに背後を振り向いた。送電ケーブルむき出しのまま突貫の工場地帯のような、この地区の道路にある街灯が照らし出しているのは、原子力発電所建設現場の敷地の警備員2人と同行しているＥＵ対外行動局直属のドイツ陸軍特殊部隊の人間に肩の辺りを掴まれたスラブ系の男だった。ＮＳＳの関係者はすぐにそちらへと小走りで寄る。「何かあったんです？ここに侵入者で…」

「その通り。ほかの何に見えますか？」ドイツ人の兵士は暗視スコープ付きアサルトライフルの銃身を、双方の肩を掴まれているスラブ人に突きつける。「こいつはかなり準備が良くてですね…ライフルとロケット榴弾まで持ち込んでました」彼は靴先で地面に転がるＡＫ－４７ライフルを示す。「そして…こいつの身元を証明するものんがありまして、アトムエネルゴプロムの関係者だって吐かせましたけど…」

「アトムエネルゴですか…確かここの受託競売に入っていた奴ですね…」ＮＳＳの男はロシア語で何かをわめきたてるスラブ人をちらりと見る。アトムエネルゴプロム社は、ロシア随一の原子力産業企業であるロスアトム社傘下のホールディング企業だ。ストラホスワフ原発で核燃料棒制作・納入件を巡ってアメリカ・ＧＥ社との競争に敗北している、と聞いている。もちろんこれにもさまざまな情報があり、アトムエネルゴはＧＥがポーランドのエネルゴプロジェクト・ワルシャワ社と不法な事前取引が発生したと批判している。

「……ともかく」ドイツ人の男はロシア語で何かを叫びまくる彼の頭に、アサルトライフルを突きつけて沈黙させる。「チェコじゃドイツのシーメンスが受注した原発でも負けて、その抗議かは知らないが、下請けの現場作業員が建設現場の発電機と送電網を叩き潰し

て1ヵ月工事を止めたこともあります。確証は取れませんが、こいつここで仕事をするはずだったアトムエ根ルゴ下請けの作業員である可能性も、ね。身柄はポーランドの当局に渡しておきます」「お願いします……」韓国国家安全保障局の人間はもう一度スラブ人の方に一歩近寄り、その顔を一瞥する。こちらを睨みつけるこの男の表情に彼は思わず顔をそらす。

原子力発電、大規模工業団地、沿岸部埋め立て、海洋メガフロート、ハイテク機器製造工場、産業廃棄物再生センタ、大規模開発に大手企業間の確執と下請け中小企業からの批判は多い。場合によっては、不満を持つ下請け労働者の犯罪や破壊行為につながる可能性も否定できない。特に２００８年の金融危機以降、先進工業国、新興工業国を問わず、工場労働者や建設関係労働者の待遇の悪さ、過剰労働、大企業の意向に左右される雇用状況などは市民団体のリサーチや各国の経済・厚生労働関連省庁の調査で何度も報告され、彼らによる大規模なデモ、近年では腹いせに大企業のサーバのウイルス送信や企業本社への化学兵器…例えば神経ガスとか…発生装置の送り付けとったテロに近い行動にさえ手を出す強者も出てきているのだ。

　これが中国や北朝鮮のからむこの原子力機器の経緯に関する問題に関与しているかどうか、それは分からない。ただ、もしかしたら自分たちの国策に近いこの大企業による行為が現地労働者や現地小企業とのトラブルを引き起こし、それが現在ヨーロッパの一部地域で大規模デモとなって発生する混乱を助長しているのではないか、そんな不安を意識の隅で感じた。

　異常事態はポーランドのみならない、あの男の読みは正しかったのだ。その日の前日の夕方、チェコのプラハから北東３０キロの郊外、隣の都市ブルゼニとのちょうど中間地点で建設の進むアメリカ軍とＮＡＴＯ軍のヨーロッパ上空・軌道圏警戒用の巨大レーダー施

設でもちょっとした異変が起きていた。まあ本当に小さなもので、その先に今後1年以上待ち構えるとんでもない事態に?がっているとは誰も予想していなかったが。

施設入り口に当たる警衛の詰所に、周囲の住民や小企業の関係者の男女が押しかけ、口々に何かを警備の人間に抗議している。「ともかく……」そのうちの一人の男が警備の米軍兵士に右手の中指を突きつける。「そこの施設から電波が出てる可能性はあるんだ、アンタ達なら調べることくらい簡単だろ?」

「はいはい…ちょっと調べてみますからお待ちください…」全く、インターネット回線が不通だの衛星テレビが見れないだの電化製品の動作不良だの、それは機器と回線の問題じゃないのか、苦情ならテレビ局と機器のメーカーに言ってほしい物だ、投げやりな気持ちで兵士は詰所の中にある電話機を取り、ディスプレイのタッチパネルを叩く。「正面です、周囲の住民と工場関係者が機器や通信回線の異常をこの施設のせいだと言ってきます」彼はじれったそうに左手の指先で電話機本体の淵を叩く。「おそらく事実無根だとは思いますが、実際にレーダーサイトの電波が周囲に飛んでいるかどうか見てくれませんか?」こうしていちいち周辺住民の対応をするのはかなり面倒な話だ、周辺にある都市郊外地域の飲み屋では度々兵士が世話になるし、周辺にある企業とは作業員や電気エネルギーの融通をしてもらっている。特に周辺の小企業からそこと?がる中欧の大企業とコンタクトを持つことは、アメリカの中・東欧における経済的影響力と相互関係を強め、ロシア圏との外交的にも経済活動・政治双方で優位に立てる。国家と言えど自国や同盟国の大企業と経済市場の要求を受け入れなくてはならない現代、周辺の住民や周辺経済といざこざを起こさないのも重大な使命である。

ところが戻ってきた返事は意外なもの、それどころがとんでもない物だった。“いいえ、民間どころかこの施設のレーダーにも正体不明のノイズが出てるのよ”

「出てる?あのレーダーで引っかかる物があるんですか?」兵士は

驚いて窓越しにレーダーサイトを見つめる。中欧のうっそうとした針葉樹林の上からわずかに見える、明かりに照らし出されたテーブルディッシュ、あそこの施設には欧州の電子機器産業において半導体や精密計算回路でトップのシェアを持つ、ニューロン・コンピュータが開発した人工知能の一種、識別不明の飛行目標の危険度を独自に多数を分析・判断して追跡と電波妨害を行うシステムが搭載され、識別不明のノイズや電波妨害をすべて無効化、判断した機体の通信遮断、指定した地上地域のインターネット回線の遮断、人工衛星の機能破壊まで独自判断ですることも可能なはずだ。

“ええ、それもだいぶひどくて……”施設内セキュリティー担当のオペレーターの声は深刻みを帯びている。“ここはニューロン社の人工知能搭載電波測定機器の実験場でもあるから、上は技術者の方に聞いてみるらしいけど…かなり良くない状況ね。そのノイズ、周辺の航空路（エアウェイ）にも影響してるらしいのよ”

「そうですか……」兵士の男はもう一度、黄昏に沈んでいく白い皿に視線を移す。東ヨーロッパにおいてＮＡＴＯ軍、アメリカ軍最強の自己解析能力と処理能力を持つレーダーサイトと電波工作システムに何が起こっているのか？彼の中を渦巻く疑問に巨大なテーブルディッシュは、何も答えることなく窓越しに彼を見下ろしていた。

同日　中国　北京郊外　北京首都国際空港　ターミナル３　１８時１０分

世界有数の規模を誇り、東アジアのハブ空港の一つとしても機能する北京首都国際空港。ワン・ワールドとスターアライアンスに所属する空運企業が主に利用するターミナル３内部、出発ラウンジの一角は物々しい雰囲気に包まれていた。空港警備職員がラウンジの隅を取り囲んで壁を作り、その周囲に撮影機器や中継機器を持った報道関係者がその周囲に構える。それを不思議そうな表情で、セキ

ユリティーチェックを終え出発を待つ乗客たちが視線を運び、一部の人間はそれを携帯端末などで撮影している。知っている人間はすぐにわかるが、このように警備員が立っているという事はラウンジの隅にあるＶＩＰ用待機室に間もなくやって来る人間がいるという事だ。さらにこれだけの関係者と報道陣が押しかけているという事は、その対象が各国の大統領級の政治家、王族、大手企業のＣＥＯ（経営責任者）や幹部、国連をはじめとする大規模国際機関の上層部といったよほどの大物であることを雄弁に物語っている。

点滅するフラッシュ、次々に無切られるマイクや撮影用機器、アメリカ合衆国大統領の男は、無線機を使って巧みに進路を確保してくれるＳＰ達のお陰で、大した混乱もなく無事にＶＩＰ用ラウンジにはいる事が出来た。靴音をかき消す分厚いじゅうたん、部屋の四隅に設けられた大きな鉢植え、応接セット一式と空港情報表示も行う大型液晶テレビ、天井に設けられたセキュリティーカメラとセンサ、オートロック機器のある自動ドアの脇には非常通報装置、天井と壁に設置された間接照明の淡い光がその部屋の高級感を演出しているはずなのだろうが、今の彼にそれは全く意識されない。それを考える余裕がまったくないのだった。

大統領はタブレット端末と資料の紙数枚をテーブルの上に置き、タッチペンで端末のディスプレイを軽くたたく。大荒れの米韓中首脳会談及び今回の件に関与した企業と軍上層部による大規模な対策会議、ただでさえ強硬姿勢を崩さない中国政府と人民解放軍、空母「ロナルド・レーガン」の交信記録と戦闘情報記録を解析しても明らかに先制してきたのは中国軍艦載機であり、当の中国側も一部の部隊の暴走であることは認めている。にもかかわらず、アメリカ軍の迎撃で発砲した機が墜落し、その期待が中国海軍空母に衝突して多数の死傷者を出しているという旨を画像と共に提示し、その賠償

と謝罪が行われなければ中国海軍の艦艇を多数日本海（東海）と東シナ海に派遣し“自国の活動を妨害”する米韓双方の艦艇は無警告で攻撃し、日本海とシナ海に存在する欧米・韓国系の資源採掘企業のプラントにおける常時操業監視の義務付けを行うとまで言い出している。米国・韓国側もそれに対抗し、民間採掘・精製プラントに対する本国の契約した民間軍事会社による警備常駐の義務付け、もしくは米韓に加えて台湾・日本（後者はあまり期待できないが）の海軍艦艇による警戒行動を強化すると提言、中国側が引かない場合はプラントを所有する企業による対中輸出の停止も行うという対決姿勢を前面に押し出した。１９日から始まった本会議は常時平行線をたどり、最悪は決裂とさらなる軍事的緊張の拡大を招く恐れもあるが、エネルギー資源と希少金属資源が多く眠る東シナ海と日本海は米韓・中国双方にとって国家経済戦略や国際社会勢力争いで重要な地域、金属資源やエネルギーを欲する自国の大手精密機械企業を抱える双方は、自国としても経済の面としても妥協する姿勢を全く見せていない。

　そんな中でもこのアメリカ合衆国大統領の男が本国に戻る理由はある、彼は携帯端末を取りだし、耳に当てた。「私だ、１時間後にはここを出る。着いたら国連統合軍の中東派遣に対する承認、それが終わったら明日のうちにはパリに入れるな」

“ええ、あなたの嫌いな飛行機に連続…大丈夫ですか？”端末越しに聞こえる国務長官の女の声は大統領を心配するように言う。当然と言えば当然だ、すでに７０を超えている大統領、しかも根っからの航空機嫌いとあれば不快以前に体調の方が気になる。“すいません…ただ、太平洋と大西洋はその、鉄道でという訳にもいきませんし……”

「いやいやすまないね、私の方は大丈夫だから心配しないでくれ……」彼はわずかに口元を緩め、左手にある大型窓ガラスの向こう側に広がる風景を眺める。確かに飛行機という物は性分に合わないが、そんな事で外遊を拒否していては政治家という物をやってはい

られない。とはいえ、国務長官の彼女が自分に気を使うのも大変ありがたい、自覚もしているが、彼は年齢的にもうアメリカ合衆国らしく外遊で地球を飛び回れるほど若くはないのだ。「…そうそう、出発したら北京の会議場とは衛星回線で会談に戻る。経過は順次送信できるよう手配させるよ」

“分かりました。という事は中国側はやはり妥協する気はないと？”「ああ。もちろんアメリカ側も引く気はないからね。経済的措置はおろか日本海での軍事的措置も辞さんと言ってきてる……まあ、どこまで実際手段に出れていつまで続くか、中国にいい結果をもたらさないとは思うが…」かなり心配そうな彼女の声に対し、大統領は穏やかな口調を保ち続けている。確かに今回は一部の現場部隊が命令を無視して武力行使するという深刻な事態であるが、それをそこと言えばそこまで、双方が正式な命令系統によって互いの殲滅を意図したわけではない。それに中国側にしても日本海（東海）で威嚇的な軍事活動を展開するのは自殺行為だ、ナノマシン構造物の開発や超伝導・真空吸引技術の発達によって深海や地層深部におけるエネルギーや金属資源の採取・精製量が飛躍的に高まった現在、特にレアメタルの生産は徐々にではあるが中国からロシア、オーストラリア、アメリカ、カナダ、及び欧米の企業が持つ北西アフリカ諸国に存在する採掘場へと移りつつある。そもそも中国ではレアメタル鉱山の枯渇が始まっており、今後１０年以内には急増するレアメタルを使用した工業機器、及び電力用の天然ガスやメタンは輸入に頼ることになる。その時期に周辺企業や周辺国に対する恫喝行為に出ているようであれば、将来的に自国や自国企業の活動への風当たりが一層強くなる。ひいては自国の経済・技術開発の停滞をもたらし、結果として国際的影響力を失うという毒薬的作用を持つのだ。すなわち過度に反応する必要はないだろう、政治的対話と経済戦略における判断を優先するのは、軍歴（父はＢ－２９の機長にして東京、神戸の大空襲時における編隊の戦隊指揮官となり作戦成功に貢献。自身はベトナム戦争時にＡ－６Ｅパイロットとして中隊を率い

た）を持ち、自らアフガニスタン、イラクでの米軍部隊の一部駐留延長を提言ながらも、政治・外交上の対話配慮をも長年経験してきた彼の人生訓である。

“なるほど……すなわち今回の件は国連の手を借りる必要はないという事ですね？”「そりゃあそうだろう。国連が出たところで安保理でストップだ。それに安保には経済市場に介入する権利はないから検閲の件は解決できないよ」この男は当初から国連をあてにする気などなかった。たしかに旧国連と比べれば現在の組織は統合軍も所有し、議会も存在するためある程度の国家に対する注文もできる、しかし国家内政・外交の決定は当事国にゆだねられるため強制することはできないし、地球規模にまで膨張した市場経済に関してはＩＭＦ（国際通貨基金）すら制限することはできない。それに米国も中国も安全保障理事会常任国であり、拒否権を出せば決議は全く進まない。国連という国際統治機関はだいぶ立て直されたものの、まだまだ統治というレベルに達することはできない、大統領はそう考えていた。「一応国連安保理が動いているようだが、それまでに事態は収拾するだろうからな。それより、採掘プラントは大丈夫か？」

“はい、点検を終えて昨日から平常通りの採掘・精製・輸送を開始しています”国務長官の女は端末越しに答える。“ＢＰ社とＢＨＰ社もほぼ同様、イギリスとオーストラリアも従業員の交代を完了し、事情聴取に帰国させるそうです”

「そうか、エクソン社の従業員も行うんだったな。それが終わればこちらに有利な展開も作れる…」大統領の男はタブレット端末の表示にちらりと目を落とす。民間のニュースヘッドラインによれば米国電子機器最大手にして世界有数の巨大企業であるＧＥとエマソン・エレクトロニックがフィンランドのノキア、ドイツのシーメンス、韓国のサムスン電子工業、日本の日立に続いて中国内で専用の金属資源・レアメタル採掘場を開発するらしい。経済面、軍事面、政治面、あらゆる点で中国の支配的方法は崩れ、激しい競争にさら

す事が出来る、思わず笑みが出そうになった。この男はもとより中国という物に対する感情が悪く、いざとなればロシアと手を組んでも構わないとさえ思っていた。まあいずれにせよ決めるのは自分ではなく議会だ、ちょっと不謹慎だが単なる個人的願望でしかない。

それより、今気にすることはもう一つある、それが端末に送られてきた情報だ。「ところで米欧日の中央銀行の件…合意に達したんだな？」“はい、既に民間主要金融機関への通告も済ませてありますから……”「分かった、あとは私と欧州首脳陣が確認すれば一応問題なくなるという事か……」大統領はわずかに端末から耳をはなし、秘書の男をハンドサインそっと呼んだ。「念のためだが欧州中央銀行に確認を入れて欲しい。確認をな」「分かりました」

確認の場で違う事を言われては困る、国務長官が信頼できなわけではないが、自分でも確認しておくのが彼の流儀だ。男は再び端末を耳に当てる。「…ああ、済まない。ともかく、我が国の財政問題もある、議会の決裂した奴は再提出されたそうじゃないか。何かあったら伝えてくれよ」“分かりました。財政削減の方は今度こそ通過できるよう、民主・共和双方に調整させます”国務長官の女の声はやや自信なさげである。国政における対立、経済問題、対中政策、中東派遣、エメリア開発、幾多の難題を抱える合衆国を自分を含めてコントロールしなければならない身としては無理もない、彼はその声から思わず同情した。「…決して無理はしなくていい。君なら何とかなると確信してるよ」“ありがとうございます”

深刻な財政問題を発端に、ギリシャやスペイン、イタリアのみならず、フランスやドイツを含めた欧州全体の民間金融機関の資金調達は困難となり始めている。民間大手金融の崩壊はそのままヨーロッパ系企業の資金繰りの停止、ひいては経済活動の停止を招き、ＥＵとユーロ通貨が影響する経済規模を考えるとそれは、アメリカ経済

の再度悪化と中国と中東産油諸国のバブル崩壊を誘発して世界的経済危機に直結する可能性が大きい。アメリカ、ＥＵ諸国、日本の６大中央銀行は、米国連邦準備制度理事会（ＦＲＢ）が潤沢に基軸通貨であるドルを欧州中央銀行と日銀経由でヨーロッパ諸国に融資をしている民間金融・証券会社に供給し、その分ＦＲＢがユーロを購入して欧州の金融機関に資金を回すという通貨交換手法（スワプ）による金融支援を行うと合意した。これに続いて中国、ブラジル、タイといった新興工業国も自国の経済失速を回避するため、預金準備率と政策金利の引き下げを行った。これに加えてアメリカ合衆国の非農業分野失業率も大幅に改善し、この数日間で欧米・アジアの株式市場は幾分上昇基調となっている。今や欧州諸国の財政と金融企業は危機的な状況に陥り、経済不安から発生する市民のデモも、一部ではロシア製兵器を持ち出すという暴動を超えるレベルに発展した事例も一回や二回ではない。ＥＵ内部で打開策が出ない中、先進工業主要国と主要新興国が再度の経済危機を回避するために協調姿勢を明確にした形である。

　とはいっても今回も安泰なもののはずがなく、各国の思惑や支援方向の違いは明らかな支援策の対立を生んでおり、各国も支出超過や援助債務での財政問題を抱えていることも…あまり報道されないが新興諸国も財政上大きな問題を抱えている…あって、完全な協調体制とは程遠い状態が続いている。

「出発が１０分ほど早まるそうです」「そうか、了解した」端末を切った後、電気ポッドからカップの上に置いたフィルターにお湯を注ぎ、コーヒーが抽出されるのを待ちながら再び窓の外に視界を向ける。

ボーディングブリッジのあるターミナルの隅にあるＶＩＰ待合室のブース、エプロンやランプに駐機する航空機、その間を動き回る作

業員や作業車両の動きを、すでに夜闇に飲み込まれたにもかかわらずこの周囲のみ真昼にしている照明によって全く問題なく確認できる。ここの窓ガラスからはやや右端、今は駐機している機体がいないボーディングブリッジの奥にある駐機ランプに止まるマリンブルーと飛雲ホワイトの大型機。垂直尾翼には大きめの星条旗（スタビライザ）、この機体がアメリカ合衆国大統領専用機、ＶＣ－２５“エアフォース・ワン”と通称され、ボーイング社の機体名称はＢ－７４７－２Ｇ４Ｂとされる航空機である。原型こそＢ－７４７－２００であるものの、詳細非公開ながら対核兵器電磁パルス防御シールド、ＥＣＭ機器、チャフ・フレア発射機、迎撃空対空ミサイルランチャーを装備しているとされ、ハイジャック犯との白兵戦に備えた各種携帯兵器と脱出カプセルも存在すると言われている。予備燃料タンクとターボファンジェットエンジン換装によって航続距離は最新のＢ－７４７－８を超え、それとほぼ同様のグラスコクピット・システムを利用、暗号化に対応する通信電話回線、衛星テレビ・ブロードバンドインターネットアクセス回線等を完備し、全世界の民間・軍事・公用の情報ネットワークとのアクセス、交信を可能としている。防衛・通信システムに加えて大統領執務室、応接室、医務室、テレビ会議室等まさしく“飛行するホワイトハウス”という通称にふさわしいハイテク機だ。ちなみにロシア連邦もイリューシン社の新鋭大型機ＩＬ－９６の改造型を大統領・政府専用機とし、近年ではヨーロッパ連合がフランス名義でＥＵ大統領・加盟国首脳陣専用機としてエアバス社の最新鋭機を改造したＡ－３８０－ＳＰ６００を購入、２００９年に誕生した新国際連合もＶＣ－２５に準ずる改造を施したＵＮＶＣ－７４７ＳＲ（ボーイング社の名称はＢ－７４７－８８・ＳＰＲ）を２機、２０１１年に導入している。

いまだに収まることを知らない国際社会の変化の嵐、科学技術や

社会システムが高度に発達したからこそではあるが、それを安泰に通過する術は人類に見つかるのだろうか、カップを口に当てながらアメリカ合衆国大統領はそんな思いにとらわれてしまった。

２０１３年　２月２２日　アメリカ領エメリア州　エドワーズ国際空港　００１０時

１０日以上ぶりに戻ってきたエメリアの地、まだ風寒き北アメリカから南太平洋の低緯度地帯に存在する４つの小さな陸地からなる人類もよる開発の真っただ中にある大地は、この夜も相変らぬ人間の活動に夜を奪われている。エメリア地域で最も大きな都市である、アメリカ領エメリア州州都、エドワーズ市に存在する空の玄関、エドワーズ国際空港もまた２４時間眠る事なき人類社会の営みの中にあった。

国連統合空軍所属のＣ－１７Ｂは行きとほぼ同じ駐機（ランプ）に止まり、数人の空港関係者と統合軍の兵士が見張りについているが、周囲を歩きまわる空港職員や空運企業関係者の多く、ＵＨＤトラックや給油車両はＣ－１７には目もくれず、その隣にいるフェデラル・エクスプレス社所有のＤＣ－１０やＢ－７７７での荷物積み下ろしや運搬…小型精密機器などは空輸コストを考えても海運より割の合う価値になる…に終始している。ただしこの国連統合軍直属のＣ－１７は、周囲の流れから忘れ去られているようだが、実際はそうでない。

接続されたタラップのちょうど降り切った場所、巨大な重量物で

ある航空機が降りるために強化された舗装路の上、そこに立つサクラには足元の地面の冷たさが一層身に染みいる。タラップの周囲を警戒する統合軍兵士の人間の目線などどうでもいい、彼女の意識を満たすのは右手に持つ端末…足形文字用のＯＳを搭載したアップル社のもの…に突如として国連から送られてきた情報、そしてそれに関する指示であった。

「……なんで・・・また科学技術の捨て場に…」彼女は淡く光り端末の液晶に映し出された情報を見つめ、思わず本音をこぼした。自分が彼らに行かせたのは間違いだったのか、それで彼らは今、人間の科学技術がもたらした惨禍に満ち溢れる場でとんでもない事態に陥っている、それが自分の責任のように感じられた。

そしてもう一つは…ちょうどターミナルから警備員に囲まれて戻ってくる（今回もエアウェイの都合で駐機時間が長く、特別に許可した）ベイリーフ、メガニウム、以下数匹に関する件だ。この前もそうだった気がする、こんどもまた…同じような事態になるのだろうか……

「予定通りだ…ハイドルと同じように頼むぞ。宇宙からの鉄槌はもう少し待て…」ちょうどそのころ、アメリカ・ニューヨークにある新国際連合本部、国連代表の男は端末越しに統合軍本部に指示を与え、私用オフィスの窓ガラスの向こうに広がるマンハッタンの超高層再開発地帯を見つめている。またやってくる、彼らがどこまで成長しているのか見せてもらおうじゃないか、そんなこの男の思いを見つめるかのようにビル街の警戒灯と照明は静かに輝いていた。

目の前に移る景色の色（後書き）

大変お待たせいたしました。

次回からは中欧とエメリアに主軸を移してまいります。

中央ヨーロッパに生まれた暗闇その１

「これを伝えるのね…それならいいんだけど…」サクラは電子端末のパネルを数回たたき、もう一度送られてきたリードアウトに目を落とす。ソーラ北部の調査に向かったバストーク達一行が何らかのトラブルに巻き込まれているらしい、彼が持って行った無線機の通信が（おそらくあのメリープが無駄覚悟で試してみたのだろう）アメリカのアラスカ州、エルメンドルフ国連統合軍前線司令部の衛星回線に入ったという情報だった。真相は不明だが、ソーラ北部の現況の調査も兼ねてアメリカに向かった全員をそちらに派遣せよという指令だ。エドワーズ空港からニュークリアの南部沿岸にある国連海洋生態系研究センターまで開通している高速道路…途中からは研究センター専用だが…を使って国連の車両で移動、そこから展開するアメリカ海軍第１０艦隊の艦船でソーラとニュークリア間の内海と呼ばれるイーグリン海峡を渡る、との事だ。そしてもう一つは衛星回線で発信点を検索した際、そのすぐ至近距離にハイドルの地底湖洞窟と同じ反応が確認されている、前回と同じようにこの規則信号がポケモン文明の崩壊と関係がある可能性がある、それも同時に調査してほしいとの事である。ただし詳細は現在も不明、正確な指示はアメリカ海軍の艦艇内で伝える、という情報だった。

駐機場の後方で轟音が響き、貨物機のＢ－７４７－４００Ｆが暗やみの中へと消えていく。周囲にもＤＣ－１０やＢ－７６７の貨物機といった民間空運企業保有の機体が並び、その間を乗務員や空港作業員といった人間や空港関係の車両が行き来し、機体の腹部に装着されたコンテナローダーが銀色の躯体を運び出している。空港ターミナルでの休息を許可し、国連関係者や空港警備員に囲まれながら、こちらへと戻ってくる一向。真昼に近いターミナルと駐機場の照明に包まれる空間、サクラの意識の水晶の中にそんな彼らの周りを渦巻く世界が今までと違って見えた。まだ詳細は分からないが、確実

に世界の動きに関わる事態へと巻き込まれるポケモン達、あのベイリーフやメガニウムだけでない、全員が人類の繁栄と混迷に翻弄される地球世界を変えるのかもしれない、そんな予想を覚えた彼女は、わずかに意識を彼らの水晶が進むべき流れの向こうへと寄せてみる。意識の水晶が流れる空間は一歩先が未知、宇宙開闢（かいびゃく）時の、ヒッグス粒子が対称性を破って公私とそれ以外の素粒子に分裂させる以前の白い光に全ては包まれ、その先にある流れの変化はこのサーナイトをもってしても分からないのだ。ただし、その中に見つけた物、目の前にいる彼らの水晶がその光をわずかに取り払い、未来を自分たちに見せてくれる、そんな不思議な感覚だけが彼女に伝わってきた。

2月22日　エメリア　ソーラ地域北部　　13時00分頃

呉越同舟というのもさしずめ間違いではないが、そうというには多少違和感が感じる、人生経験が他より長いバストーク・ホルストにもそう感じられる。とはいってもそれを気にしている精神的余裕は今なかった、ソーラ、ニュークリア、サーマル、ハイドルの4小陸地が南太平洋で向き合う人類社会の名称でセレス海、ポケモン達の通称“エメリア内海”もしくは“エメリア川”と称される海峡…ハイドルの西からニュークリア南の沖に出る特に幅の狭い部分を正式には“イーグリン海峡”と人類は呼称している…に酷似した内海を望む小高いニュークリア北部の丘陵地帯、天然の防風・防砂林が並ぶ海岸線まで200メートルはある斜面、本来は美しい草原と小さな海岸への道が広がっているはずの場所は、6年ほど前にここへと来たことがあるメリープが知っている限りこんなアレンジはなしだろうという程の変容を遂げていた。「ありえん…有り得ねえだろこれは…」

「アンタの言葉を聞く限り、アンタがここに来たってのは人間世界

でいう6，7年くらい前って算段だ。アンタが来た直後にははじまったんだぜ……」ポニータ種族のシーベルトが右前足で前方の光景を探る。ここで袋小路に入る10日間ほど一緒に来て、このバストークというメリープがなかなかの認識者であることは分かるが、どうやら人間の文明の中で直接暮らした、という経験までには至っていないらしい。「ここは人間の請負企業の倒産と建設権の落札、それに人間世界でいう…経済危機も合ってな…6年も、これくらいの大きさで言えばな、普段の倍以上はかかってんだぜ」

「6年“も”って…これだけ大きい物を作るのって…何十年もかかるもんじゃないの?」「そこが俺らと人間の違いなんだよピトトムさん。まあ肌身離さず体感しないと異文明なんてもんは認めるどころか解らんもんだからな、俺だって5年もかかったさ…」ポニータはわずかに左前足を動かし、ひずめの近くにある炎のような毛に付着した泥を取り払う。“さん”と呼ぶのは明らか、背丈に雲泥の差はあってもピトムニク・マルセイエーズは22歳、対するシーベルト・リヒテントは17歳、ポケモンのおおざっぱさを考慮しても先輩後輩関係が少しではあるが出てしまう。「ポケモン全体、もう少し人間世界とコンタクト持った方がいいんだよ最初から」「また、ていうか…いきなり何の話よ?」「だからな、どうして俺たちという生物種族は、こういう状況にもかかわらず自分の価値観や伝統に固執してられんだよ?」ポニータは女(メス)プラスルに向かって右前足をわずかに振り、ついつい口調に熱が入る。「人間の間じゃ、宗教や文化は紛争の原因のままだが…ああ、確実に生活スタイルや金銭価値観は統一されつつあるってのに…俺らは未開な原住民か?生き残るためには論理的に一番対価の高い価値観に変化するもんだ!道徳、たってその道徳を守ったら死ぬって状況なんだろ?犠牲が出るかどうかその後の努力……」

「はいはい分かった、分かったぜシーベルト。お前の熱論はここで何の成果もあげない」彼の隣にいるゼブライカ種族のベクレルが、シーベルトの右前足を自分の前足で押し下げる。どうやらこういう

状況でもお構いなし、いやこういう状況での心理状態が一層そうさせているに違いない、親友として、良き理解者としてゼブライカはそう思った。それを事荒げぬように遮る方法もまことにベクレル・プルトンらしい。「それだけつらつら並べられる頭を使って、今の状況を切り開いてほしいぜ」

「おいベクレル、貴様は俺任せか?」「へへっ、頼りにしてるって事だぜ相棒!お前だったら俺はお前におんぶしてもらって突破しても怖くない…」ゼブライカは小ばかにするように笑い、ポニータの胴体前部を右前足で軽く押す。「ま、とにかくバストークさんともめないようにやってくれや。俺は文句は言わねえから」「ちっ…こういうときだけ乗りがいいんだなこいつ。…そんでだ」シーベルトは軽く右前足を踏み鳴らし、バストークの方に視線を向ける。「バストーク隊長さん、アンタはどう思う?この状況を突破するには…」

「だからな坊ちゃん、お前のそういう言い方が他の奴と…」「何が坊ちゃんだ?!何でアンタは俺をガキ扱いする?!」ポニータがメリープの一言だけで逆上し、顔を彼の藍色の頭部へと近づける。「ポケモンってのはそこまで他人にのぼせる生物じゃないだろうが…伝統保守とか言いながら、やってる事は人間に媚びを売って古い伝統を何とか守ろとしてるだけ……愛情や絆とか言うバカな言葉の前にやるもんがあるってのに…それともなんだ?アンタ何か怖くて手放せんものでもあるのか」

「ふざけんじゃねえぞおい!てめえは親にさえ育てられたことないのか?!」メリープの方もヒートアップしてポニータの前足を自分の前足でつかむ。何日も前から聞いてて思う、こいつの言ってる事は人間と対等な生命としてのポケモンの文明を形成するだとかでかい理想論ばかり、実際は人間と金で自分たちの立場と物を買っている政府組織の出身だから以前に、生物として本来持っているはず…人間だってかつてはそうだったはずだ…の感情、それから出てくるはずの当然の態度のかけらすら感じられない彼に、バストーク・ラ

ルシア・ホルストの意識の水晶もまた温度が急上昇して理性を超越しかかっている。通常体格より一回り以上大きいメリープ、掴みかかっても貫禄は十分だった。「お前みたいなくそが真っ先に滅ぼすんだよ俺らをな！足元見ねえでひと山越えられる奴がどこにいるんだ？！」

「俺は超えてみせる！アンタなんていなくてもな！」「いっつ…おいおら！？」「黙れこの万年隊長がッ！」「ポニータはさらに顔を赤くしてメリープの前足を自分の蹄で潰しにかかる。自分でもどうしようもない熱っぽさ、今のシーベルト・リヒテントにはそれを顧みる余裕すらない。とにかく目の前の野郎を黙らせる、その感情で埋め尽くされていた。「アンタが探検隊だが救助隊だか軍人かはどうでもいいんだよ…だが、偉そうに愛情だとか絆だとかのたまう前にアンタこそ足元を見た方がいいんじゃないか？アンタこそ目の前の山脈超えようとして足元の食い物無視してるっつうんだよそれを。現実見ろよ隊長」

「ああ？！てめえなめてんのかおい！」「貴様だってのらりくらりと文明批判して…」ますます熱が入る2匹、お互いの右前足が上がり、互いの胴体にその拳をぶち込もうとした直後、ポニータ側の拳が背後から止められる。「シーベルト…そういう理想論はあと、まずはこの状況はどうするのかを考えるのよ……」事の成り行きを見ていたキュウコンが種族が、ポニータの振りあがった右前足をそっと押さえつける。「それに…あそこにいるポケモン達に聞こえるでしょ？彼らがこちらにいい感情を持ってないのは確かなんだから…」

「アリョーナさん…それはそうだが……」「それはそうなら、他に反抗する必要はないの。いつもあなたに言ってるわよね？」アリョーナの声がシーベルトの不服そうな表情に少しだけ厳しくなる、とはいっても俗にいう叱り付けの物ではなく、独特の優しさのこもった、しかしはっきりとした口調だ。「…あなたの理想論を私は認める、でも理想の先に続く道の足を見ないでいい？一歩目が落とし穴だったらどうするのって？」

「うっ……そう、そうですよアリョーナさん…」ポニータはキュウコンの顔色を一瞬伺い、かすかに不満げな表情を残しながらもメリープから前足を退ける。「すいませんでした…隊長さん…」「まあ…子供のうちは多少羽ばたきたい時もある、必要な時に無茶苦茶やってくれよな…」こういう子どもの扱いには慣れている、バストークは素直に一歩下がり、前足をパンパンと掃った。このシーベルトとやらは、（このメリープの印象で）わがままな点で以外とグラシデアに似ている、彼はふと愛娘の顔を思い浮かべ心の中で苦笑さえ浮かべていた。「さっきは俺も上がってたから…すまない。でっかい事が出来んのも思い浮かぶのも子供の内田、思いっきり羽ばたくためにゃまず、この場を切り開く事だ」

「羽ばたくってそりゃ…はあ…はい…」軽く受け流されている事に気付いたシーベルトはとりあえず頷いたが、目の前にいるベテランが言っている事ははっきり言って自分の耳に痛い。自分の夢、いやそれこそが自分の全ての目的だと信じているそれを叶えるために、今こうして自分はなりふり構わない事をしているからだ。

2007

自治協会と自由連合など本心のところどうでもいい、人間では地球という世界を…地球も太陽も星もあるという宇宙という空間に関しての概念は彼にもよく分からない…伝説のポケモンと世界各地に存在する時の歯車と時空翡翠の発するエネルギーが覆い、ポケモン達を自然と調和した文明にしていた、その栄光は今となっては2万年も前の話だ。現在、自由連合は半ば反乱分子同然のエメリア自治協会に敗北してニュークリア地域の密林の奥に身を潜め、とうの自治協会も人間の手にはまってはるか遠い地に移動させられ、形式的な統治行為…すなわち“ままごと”をしているにすぎない。シーベルト・リヒテントが目指す場所は違う、人間によって散々苦しめられてきた彼だからこそわかる事、人間と対等の立場を築ける文明を作

り上げる、それを理解し、支持してくれる仲間は多くないが、人間を利用して出でも勝ち取って見せる、そう心に決めている。だからこそ目の前のメリープが、父親同然の年ごろの彼が言う“落ち着きのなさ”がどうしても許せない、その一方で自分の弱さを見透かされたようで恥ずかしいのだ。

「で、何をすべきかとおっしゃいますと…」ポニータは大きく息を吸って意識を周辺へと戻し、草原の丘が一望できる小さな森の出口に歩きから少しだけ首を出す。「もう何日連続かは知らんが…まずはあそこにいる奴をとりあえず突破せんと、バストークさん、あんたのお望みの所には行けない」

「そんな感じだなシーベルト。俺にもそう見える、ただし……」その脇からメリープも顔を出し、周囲の光景を伺う。自分達より背の高い草むら、目の前には人間たちの手ですでに工事が始まった施設の有刺鉄線が張り巡らされた柵が小道に添って丘の頂点から見えなくなる位まで伸び、斜面が視線の下へと消える右手には南太平洋の一角、イーグリン海峡が初秋の太陽に照らされて輝き、人間の物と思われる船舶…大きさからすれば港湾の警備船のような類…が数隻影になっている。そして有刺鉄線が張り巡らされた柵の脇には、前足に槍を持ったポケモンが1匹、何かを待っているかのように周囲を見渡している。「ふん…あいつらの目的なんか見え見えだ。あまり気分のいい想像にはならねえが…」バストークは胴体のモフモフ毛をすくめ、右前足で軽く足元の土くれを蹴飛ばす。「…あそこにある施設、あれのせいでこの地域の集落は荒廃してるらしい。とするとあいつらはそれらと同じ盗賊の類って解が…」

「正解って事だな…」2匹の背後からゼブライカ種族のベクレルが覗きにかかる。この彼、シーベルト、アリョーナの3匹とバストーク達の行動目的は同一、結局あれから10日近くソーラ北部の内海

に面した地域を探ってきたわけだ。その結果は双方が予想した通りだった、ソーラ地区の北部にも人間の企業や研究機関の進出が進み、その際に土地を追われるか、前後にトラブルを起こして弾圧された集落はその単位で住処や食料源を失い、結果として周辺の治安を険悪なものにしていたのである。１０日間近い間に何度盗賊連中に襲われ、崩壊した集落の惨状を見たか、嫌になるほど意識の水晶に染みついた光景が、目の前にいるポケモンすらも不審に思わせてしまう。「まあ、これまでのパターンからして奴らの行動も明らかだ…」

「どうする…草原になっているのはこの辺りだけだ…」バストークが腰に回したトレジャーバックから地図を引っ張り出し、右前足でそこを示す。「次の森林地帯までざっと1キロない、奴らを少しおとなしくすれば余裕で逃げられるだろう…」

「いや、始末した方が安全そうだ。一気にな」シーベルトが右前足の蹄を地面に打ち鳴らす。彼からしてみれば、並みの探検隊のようにお尋ね者を気絶させるだけでは安心できないのだ。「気を失わせただけじゃ気が付いた後に辿られる可能性がある。それが小さくてもやるのが妥当だろ？」「確かに。俺も始末しておくのがあれだな」ベクレルも彼の意見に同調する。何年間も彼の理想に付き合い、多少強引でも彼の性格と行動が（おおよそ）失敗したことがないという事を知っている、このゼブライカにはそれだけで判断材料としては十分だった。「これだけ物騒な状況だ。多少申し訳ないが永遠に静かになってもらう、有効な手段だぜそれが」

「そ、そんな…ピトム達の場合だと…ちょっと攻撃して少し離れた場所にそっとしておいてあげるのが普通なのよ…」プラスルが衝撃を受けた表情でポニータとゼブライカに歩み寄る。彼女の意識の水晶は、目に見えぬはるか底から湧き上がった恐れという極限まで冷たい気体で全体が冷やされていた。「…せめて…もう少し優しい方法で…ね、隊長？」「どうしたんだピトムさん？アンタの器量があるならこれ位の事は…」

「ま、まあ…そうだ。…これはさすがにだろうよお二方……」ピト

ムニクの目を覗き込み、その後バストークは思わず2匹の前で右前足を否定の示すかのように左右に動かす。この数年間娘のようにかわいがり、彼女がどれだけ穏健な手法と友愛を重んじているか、それを考えると、この2匹が巻き起こすであろう結果が如何なるものか、意識の水晶を充満する気体が、足元がふらつくほどの感覚を彼にもたらした。もちろん、この万年メリープ種族がもつ父親としての感情もそれに拍車をかけ、彼は半ば懇願も同然で2匹に迫る。「頼む、彼女はそういうのは嫌なんだ…まあ俺もだが、とにかく…これ以上無駄な方法で連中を傷つける以上の事はしたくねえ。だから…」

「他に方法がない。確実な道が一つ地図にあるのにわざわざそれ以外の茨を行くか?」ポニータ種族の声に感情はこもっていなかった。「いちいち命を奪い去るのは文明の首を絞めるのも同じだ。しかしな、そうでなければ俺たちが文明の首にかかった紐をほどくことはできない」そうは言っているシーベルト・リヒテントだが、バストーク・ホルストの表情から感じているであろう物、それは良く理解できていた。この数日間、自分たちが沿岸部の起伏にとんだ地形に広がる森の集落の状況を調査しつつ緯度を続けるたび、ひどい時は日に3回は盗賊らしき集団に襲われた。樹海のように苔むした倒木の影から、滝のカーテンの後ろ側から、飛んでくるわざのエネルギー、矢の雨、どうにかして自分たちの能力で退け、しつこい連中はこっちの武器で殺した。年端もいかない子供さえ、食料やその他の物品を求めて半泣きになりながら矢や太刀を振り回し、やむを得ず仕留めたこともあった。探検隊と軍隊の合いの子である自分達だからこそ許されるのだが、それを考えれば、ここにいる全員がこれ以上の事はしたくないという感情になっているのは自明である。

「そうだな。せめて苦しまんように一撃でやってやるのが慰めだ…」ベクレル・プルトンも彼にまた同調し、メリープの右前足を自分の左前足で軽く持つ。「隊長、アンタが自治協会の防衛軍としてやっているのは理解できる。しかしあいつらも考えれば犯罪者、それに

こちらをガチで狙うとしたらこちら手段に出ても間違いにはならないすよ」「しかし…探検隊より上とはいえ、俺らの思考は……」バストークはゼブライカの出た左前足を自分の左前足も伸ばし、何とかして状況を打開しようと必死になる。「…なあ、忘れてないだろ？俺たちは人間連中のように無駄な殺戮をしない、そういう常識はどうした。せめて…しばらく気づかれないうちに……」

「ちょっと待って…いいかしら？」キュウコンがゼブライカの両前足を折らせ、メリープのモフモフを上から抑える。「あの子…こっちを見てる…ここにずっといるわけにはいかないわ…」アリョーナ・ハイペリオンは草地の影から慎重に鉄条網の方を見つめ続ける。純白の胴体から伸びた白いチューリップ型の頭部、胴体腹部に赤や青の模様、小さなトゲチック種族がこちらに何かを勘付いたらしく、ちらり、ちらりと見ている。「…まだ子供のようね…槍も持たされた感じ……」彼女の動きでピトムニクを含めた全員の空気が張り詰める。しかしその一方で、アリョーナの意識の水晶にはあまりにも痛々しい感覚が走り、その冷たさは9本に分かれた優美な尻尾にまで伝わる。彼女の脳裏と視界に隣にいるポニータの幼き頃と、彼女が小さい頃に育てたあのメガニウム（その事はチコリータだったが）が浮かんでしまう。しかしこれが現実、これが荒廃し衰退しつつあるポケモンの真実の姿である。「だったら余計です…」ピトムニクがキュウコンの右の胴体にしがみつく。やっぱりできない、自分にはあんな素直であどけない子の命を奪う事はできない、プラスルの水晶は悲鳴を上げていた。「どうにかして…どうにかしてここを通れるよう…」「ああ、とにかく何とかできませんか？」バストークもキュウコンに歩み寄ってさらに続ける。「…どうするべきか…他に方法がないんだよ。分かってくださいよ隊長…」「そんな簡単に結論がつくか！あいつは的あてじゃねえんだぞ…あの子にも家族も友人も故郷もあるはずだ…」表情を変えずに構えるシーベルト、彼に対しメリープは再び掴みかかった。目の前に無垢な姿を見せるトゲチック、その姿を見ているとどうにかしても状況を変えたかった

のだ。「なあアリョーナさん…どうすべきだこの状況？」

「……」４匹の視線がキュウコンに注がれる、彼女は目の前に広がる光景からその先にあるであろう様子をある限り考えた。自分たちが“まっとうな”手段…普通に“けんほうしゃ”や“ほうでん”で…を使って気絶させ、その場に放置したとすれば、あの子は数分後に意識を取り戻し、おそらくは周囲にいる仲間に存在がすぐに露呈するだろう。その場で殺した場合なら…声を上げさせないよう瞬殺すれば…軽く2，3時間は時間を稼げるし、自分たちの正体もしばらくはばれない。それを考えると…他に方法はない。

「……バストークさん、申し訳ないけど、方法が他にないわ…」しばらくして再びその場に座り込み、こちらを背にして鉄条網の隙間にある足元の花をいじり始めるトゲチック、キュウコンはメリープの両前足をしっかりと握って説得する。やはりどう考えても打開策がない、周囲の状況を考えるとあそこにいる子を倒さなければ打開することはほぼ不可能、アリョーナ・ハイペリオンは罪悪感を感じながらもそれ以外に結論が付けようになかった。「……あの子の親御さんに…せめてあの子が大地の一部となり、優しい風になって親御さんのそばにいられるよう…それを信じましょう……」「そんな…しかし…」

「ごめんなさい……でも他に…間違えれば自分たちがやられてしまうわ…」キュウコンはメリープの両前足を握る。バストークの目には絶望と悲しみがありありと浮かんでいる、アリョーナにも呼吸が苦しくなるほどの申し訳なさを感じていたが、彼女にはそれと同時に現在の状況を分析する冷静さも同時に作用していた。「……お願い…私たちはこれ以上のポケモンの犠牲を出さない事、その為に…今は協力してほしいんです…」

「……はい……いいなピトム？」「……」肩を震わせるプラスルをちらりと見、渋々ながらメリープはかすかに頷く。ピトムニクの目に浮かぶわずかな涙、彼女には耐えがたい現実だろう、バストーク・ホルストは意識の水晶は圧壊しそうなほどの強烈

な気体が充満し、その余り一歩も動くことができなかった。「……お願いします…なるべく…柔らかに…」

「それなら決まりだ…一気に行く……」ベクレルは大きくうなずき、腰の部分に巻いた道具類の中から一つをシーベルトに右前足で手渡す。「一発で決めろ。絶対に声を上げさせるなよ」「そりゃもちろんだ…」ポニータがゼブライカからその凶器を受け取り、左前足を踏み鳴らして気合を入れる。２匹の間での突破方法は決まっている、お互いの目線を見れば次に何をすればいいかなど見えた。「あいつを仕留めたら一気に向こうの森まで向かう。それでいいですねアリョーナさん?」「ええ、そういう方向でいいわよ……」アリョーナは大きく頷き、それからバストークの方にもう一度視界を戻す。シーベルトとベクレルは大丈夫だ、２匹ともわが子のように同じ自由連合のチームとして行動共にしてきたから2匹がいかに強くお互いを理解しているかはよくわかる。問題はバストークとピトムニクのほうである、とはいってももう選択肢はないのだが。「それでは…行きますよお二方」「そちらのタイミングで構いません…」「……はい…」

このトゲチックはやはり子供だった、足音を殺して小走りで寄るポニータに全く気付かない、彼女の首から下げたトゲチック種族…すなわちトゲキッス種族からもそうであるが…に伝わる専用道具なる存在“こううんのいし”に巻きつけるべく小さな花を茎ごと取っては結んで飾り付けをしている。（すまない…しかしポケモンの為ならっ！）シーベルト・リヒテントの脳裏に一瞬罪悪という言葉がかすめる。自分のしている事は罪、状況を突破するためとはいえ小さい子を犠牲にしなければならない、素早く近寄る４本足がわずかに絡みかけた。しかしこれをしなければ自分は助からない、思い上がりではないが、この世界で自分がやらなければポケモンは人間の思

うつぼにはまり、やがては苦しみに満ちた崩壊へと至る、自分の信念を水晶に流し込み、ポニータは迷いを捨てた。自分たちという文明と生物の未来のため、その言葉が彼を突き動かす。「こんのっ！」左前足でトゲチックの口をふさいで上に持ち上げ、相手が抵抗する前にその背中に刃を突き立てた。殺傷力の高いダガーナイフ、その刃先はトゲチックの背骨を突き破り、心臓から出た動脈を2本とも叩き割る。「きゅううう……」突如として後ろから締め上げられたトゲチック、背中に強い衝撃を感じた時にすべては終わっていた。一瞬体をのけぞらせた彼女の浮いた足先から鮮血が地面に滴り、ポニータが前足の力を抜くとその体は力なく地面に落ちる。「やったか…」右前足に握りしめた刃を腰に相当する胴体後部にまいた紐に括り付けるシーベルト、足元に転がるトゲチックの白い体はみるみるうちに赤い液体に染まり、血しょうとヘモグロビンの集合体であるその液体が前足の蹄を濡らす。「OK、行くぞ！」柵の手前に転がるその死体を軽く飛び越え、彼は草地の方に振り返る。刺さった瞬間に感じた憎悪がいまだに意識にこびりつくが、それに迷っている暇はない、彼の右手の視線にはこちらに向かってくる連中がちらりと移っていた。「やっぱり周囲に数匹いた！一気にここを突破する！」

「そうと決まったらっ！」それを合図にしたかのごとくバストークも藍色の4本足に力を入れ、ゼブライカやキュウコンの後から道へと向かって飛び出す。目の前の起こった惨事は関係ない、目の前の上空から迫ってくるトゲキッスやムクホーク、こちらを狙っているとすれば今は生き残るために今はこうするしかないのだ。「行くぜピトム！」「は、はい…」ピトムニクも涙を振り払ってあとから続く、自分がするべき使命のため、愛するプラスル種族や今はいない全員が希望を持って進める未来のため、全ての迷いと一切の感情をメリープは捨てたのだ。相手はわずか数匹、こちら束になってかかれば一瞬でケリをつけることもできる。「こいつっ！！」タイプ相性を考えるとこちら圧倒的に有利、メリープは迷うことなく前方に

向かって“ほうでん”をぶち込む。3匹いたうち2匹はまともに喰らい、残ったムクホークは上にロールをうち、すぐに切り返して急降下してくる。「ピトトム、あいつにかかれ！」「で、でも…」「それはなしだ！俺の背中から行け！」多少感情に流されているプラスル、はるかに年下の彼女を彼はムクホークの放つ“スピードスター”をかわしながら叱咤した。「お前がやる事は俺がすること、責任も罪も俺が持つ！」エネルギー体を多少なりとも受けて後方に吹き飛ぶメリープ、彼はそれを後転に変えてプラスルの脇に着地する。

「早くしろ！奴らも同じだ、こっちの権利はある！」

「え…はいっ！」目の前から迫ってくる相手、考える余裕はない、プラスルは瞬時に足と両手に力をかけ、わずかに助走をつけてメリープの背中に飛び乗る。「ううん！！」彼女は両足のばねを使い、メリープのモフモフ毛から空中に飛び上がる。「正面っ！！」「その調子だ！」背中に軽い衝撃が走ると同時に彼はわずかに下がり、正面に向かって“でんげきは”を仕掛ける。「なっ！？」「よっし！」直撃を受けて“つばめがえし”のタイミングを失したムクホーク、その隙をピトムニク・マルセイエーズが見逃すはずがない。「そのままああああっ！！」彼女は右手にため込んだ電気エネルギーを“かみなりパンチ”として開放、相手の腹部を直撃させる。プラスルはその勢いを前転で打消し、下を走ってきたメリープの背中をマットにして地面に飛び降りた。「これ以上は言い、とにかくあそこまで逃げ切る！それが先だ…」「了解です……」

「よーっしよし…これでいいんだ……」ポニータの“かえんほうしゃ”で片方のトゲキッスは完全にノックアウトされ地面に落ちる、ゼブライカはまだなお健在のトゲキッスの“エアスラッシュ”を飛びかわし、チャンスを待つ。「貴様……アマリアを……」オス声のトゲキッスは明らかに彼に対して敵意を浮かべ、“はどうだん”と“エアスラッシュ”をつるべ打ちにし、ゼブライカの撃つ“でんげきは”を執念でかわしてくる。「なるほど…あの子の名前か…っと！」こいつはやはり父親か、襲ってくる“はどうだん”の一群を彼

は空中前転でかわす。こいつらは家族でこんな事をしてるんだな、しかし彼の思考はそこまでで悲しみはあまり感じない。「すまんな！」もう一発を左にかわし、わずかに息を吐き出すゼブライカ種族、何のためらいもなく体内のエネルギーを集め、正面に“じゅうまんボルト”を叩き込む。「残りはっ！」上空に飛び上がりながらもかわしきれずに直撃を受けてふらりと落下してくるトゲキッス、彼はわずかに踏み込んでから前に突っ込み、“ニトロチャージ”を直撃させた。これがとどめ以上となり、相手は純白の体毛に火がついて５，６メートル前の鉄条網に転がって炎上する。

直後、後方で瞬時に空気が熱せられる激しい衝撃音が響く。「っ！！」もう一匹もまだ動けたか、思わず体を返して彼は身構える、確かにもう一匹のトゲキッスがこちらに迫ってくるが見えたが、その０．１秒後には左手から飛んできた“かえんほうしゃ”２丁に彼の右手へと吹き飛ばされていった。「これで一通り蹴りはついた、とりあえずあっちまで行く…」ポニータが素早くゼブライカに走り寄り、顎先で道の先の小高い場所をしゃくる。「死んだかどうかは知らんが、これ以上は意味がない…」

小高い丘までおおよそ１キロ弱、５匹はすばやく小道を駆け上がり、反対側の斜面へと続く森の入り口の木影に身を潜める。「あれ以上はいなかったのね……」アリョーナはすっと道沿いに歩き、右手の視界に広がる道を確認する。自分たちが先ほど倒した連中はいまだに倒れたままで動こうともしない、単に気絶したか、それとも死んだか、それは分からないが追ってという物は少なくともいない。わずかに不安という熱を帯びていた彼女の意識の水晶も、徐々におさまってきた。「……まあ…仕方がないと言えば仕方なかったのよ…せめて彼らの中に助からないものがいたら…苦しみが少しでも減るように…」

「……そんなんで…でもピトムは…やっぱり……」バストークの影で自分の犯した行為に震えるピトムニク、この何年間か感じたことの無かった、自分のやってきた行動の重圧に押しつぶされそうになる。特にこの1年間……国連という機関に異動して以来、してきた行為は明らかに探検隊や通常の防衛軍の為ではない事、それがあまりにも深くプラスルの意識の水晶を揺らし、圧力をかけた。「……どうして…こんな事を……」「お互い所属する場所も、何をしているのかも確かに違う。でも…」アリョーナは右前足で優しく彼女の頭を撫でる。キュウコンからすれば彼女もまた娘のような存在、本当の年齢は知らないがそう感じられた。そして彼女の優しさも。「…心のどこかにはあるはずよ。こんな状況になってしまったポケモン達を自分たちの手で守ると。それをいつか…ね、私たちの次の世代が、次の人間が思い出して…そう、誇りを持てるように。今はそれを信じるの…」「……はい…」

「ピトム……俺がいる限り……すべての罪は俺が持つ…」メリープはプラスルの目に浮かんだ涙を右前足で優しくふき取る。「今は何が起ころうと…自信を持てピトム。苦しくなったら…ああ、俺ができる限りお前の盾になる。信じろ…」彼の目線の先に広がる小高い草原の丘、美しい砂浜と内海を渡る物の輸送を生業とするひこうポケモン達の集う集落が広がっていたはずの海岸は数百メートル先まで埋立てられ、無数の人間の建物が均されたアスファルトの地面に立ち始めている。建物の太刀具合やその周囲に広がるアスファルトの区画に並ぶコンテナからして、施設の一部は稼働しているらしく、森とは全く違う雰囲気を放つクレーンなどの類は既に完成し、大型の輸送船が岸壁に着岸している。あんな物さえなければ、人間があれさえ作らなければこの辺りの集落が荒廃する事は無かっただろうに、冷たい怒りが彼のモフモフ毛を走り、思わず左前足を握りしめた。「目的は知らんが…こんなだたっぴろく物を作りやがって。住む場所ってのは草原に作りゃいいもんじゃないんだぞ…」「それは…人間には永遠にわからない俺たちの考えだろうな…」シーベルト

はわずかにため息をつき、右前足で足元の石を蹴り飛ばす。ソーラ北部で行われている開発、その内容は呆れかえるばかりのもの、そんな情報に慣れっこのポニータにはそれに関して意見する気力すらない。「…本来人間も自然の許す中で物を作って暮らしていた。いつから変わったかは理解しても仕方ねえよ。それが文明の常識なんだから…」彼もまたメリープと同じように丘陵の先に広がる人工の大地を見つめ続ける、この世界の環境を破壊できるほどの技術と実力を持ち、その技術をもってして環境破壊と気候変動を防ぎつつ更なる利便性を求め続ける人類たち、無限の成長と環境保全を両立することができるのだろうか、可能性を否定はしないまでも、シーベルト・リヒテントの頭にふと浮かんだ文明のありように対する疑問符は消えなかった。

目の前の丘陵地帯と集落の跡地に広がる広大な造成地、フランスの大手電気機器メーカー…主に配電設備や生産オートメーション化機器の製造である…のシュナイダー・エレクトリックとスウェーデンの同じく電気機メーカー大手であるエレクトロラックスが建造を進める電子産業廃棄物再生工場兼最終処分場である。精密機器の回路や半導体にはプラチナ、金、銀、銅、その他の希少金属が利用されており、おりしもレアメタルの価格高騰と枯渇という経済的問題が出てくる中、また急速な情報技術の急成長による情報機器の生産数の増加と中古品の増加、市民生活における電子化、家電機器の普及に伴う廃棄物の増加、最貧国への廃棄物輸出による処分場の周囲の公害の発生、環境破壊、労働問題という環境・国際社会構造にまつわる問題がこれに加わり、対応策を求められている世界各国の企業が進めている電子機器・製品のリサイクルと安全な廃棄物処理の流れが生んだのがこの施設である。アメリカ、中国、ロシアなど広大な土地を持つ大国は居住不可能な山地や渓谷に…森林伐採は環境問題

を引き起こす…、イギリス、ドイツ、スウェーデン、韓国、日本、台湾などの工業先進国、もしくはそれに近いになりながら領地が比較的小さい国家は深海や深層土壌への封印放棄、もしくは企業がアフリカや中東の砂漠地帯などの土地を購入して処分場を確保するといった動き、リサイクルや安定した最終処分がなお追いつかない状況の中、環境破壊と省資源、企業としての利潤獲得、そして顧客のニーズといった複雑な要素に絡まれながら、企業や国際機関、各国は対応を急いでいる、

２０１３年　２月２３日　ポーランド北東部　ストラホスワフ原発建設ポイント　２時１０分

突然の停電、配電盤のせいではなかった。送電線のセキュリティー・センサも直前まで何も問題もない。それにもかかわらず、昨夜２３時ごろになって突如として建設施設全体、工事用クレーンも、詰所も、作業員・警備関係者用の宿泊棟も、原子炉建屋周囲の照明も、それどころか非常バックアップ電源が搭載されているはずのセキュリティーカメラ類、最寄の警察署への緊急発信装置すらダウンしてしまい、この原発建設場自体が夜という暗やみに沈み、この中央ヨーロッパの世界から完全に孤立した状態に陥ってしまった。インターネット回線が全部アクセス不可能になったうえ、通常電源がトラブルを起こした際に、自動で警備会社へと通報されるセキュリティー通報装置が一切動作していない。「内部トラブルじゃここまでにはならんな…」「とにかくブレーカーを全部見ろ。セキュリティー装置が作動しないようじゃ、入ってくれってていてるようなもんだ…」建築が先行して進み、既にその一部の機能が稼働状態にあった管理棟のセキュリティー・通信管制室、監視ディスプレイ、卓上情報端末、まだ試験中の放射線測定モニタはもちろん、室内の非常電源さ

え作動せずに室内は暗闇に包まれている。当直責任者の男はコンソール上にある施設非常電源復旧スイッチを何度も押し、やがては頭を抱えるように右ひじをついて頭を下げる。通常の停電、外部から続く送電網の異常だとしても自動で非常電源が作動するはずなのだ。責任者の思考回路は混乱し、強烈な顔のほてりを感じる。非常事態が発生すればすべての責任は自分、思いがけず降りかかった自分どころか施設の存続にかかわるかもしれない緊急事態である。施設全体の電源が落ちてしまう、今は原子炉が稼働はおろか存在さえしていないからいい物の、これが稼働中だったら冷却機能を喪失し、そしてあの最悪の事態になりかねないのだ。このままでは事故が起こらずとも自らがフクシマの作業責任者と同じ処分を受けてしまう、その恐怖からくる焦りに周囲を懐中電灯片手に忙しく歩き回るスタッフたちの足音や声もあまり聞き取れなかった。

「非常電源回路…短絡や破損痕が一切ありません……」管理棟の停電時解放された自動ドアの向こう側から、外部電源ユニットと送電網を確認しに行った従業員が息を切らせて戻ってくる。「本来なら作動するはずですが…プログラムのログは…」「取れるわけがない、施設のシステム自体が逝ったんだ…」責任者の隣にいる同僚がコンソールをパンパンと繰り返し叩く。「そうか…くっそ、埒がまったく開かん…どこでトラブルを起こしたのか…」

「ったく…何せ最近は通信装置も送電システムもネットワークに接続……」そこまで言いかけた男の脳裏にある言葉が走り、視線を上げた。「そうか！ネットワークシステムのほうだ！あそこは送電量も通信も全部だからな」「しかし……ネットワークの方に問題がある、その証拠はどこに？」

「そうだな…まずすべてのセキュリティーカメラの非常通報装置が作動されていない。これだ…お前の持ち場だろ…」警備関係担当の従業員の男を右手で退け、彼の手元にあったコンソールのキーを数回たたく。「通常ならバックアップ電源でセキュリティシステムは作動するはずだ。それがダメなのは…施設のサーバの方に原因が…

あるんだろう…」

「そうか…道理で別回路の送電網があるにもかかわらずだな…」責任者の同僚が彼のそばに歩み寄り、近くにある別のディスプレイとコンソールを懐中電灯で照らす。「ポーランド国内から3本は接続されている…それもダメってなら…原因は」彼は数回コンソールのキーの一つを右手の指で叩く。「…この施設のサーバ自体がいかれたって事だ。非常通報装置も携帯端末用のもダメにできる。内部異常があった場合はバックアップ回路が働く…それがねえって事は…」

「外部から…やられた?」情報管理部門の従業員が顔色を変え、2人の方に歩み寄る。「しかし…インターネットセキュリティが見逃す…外部端末からのウイルスなら駆除ソフトが作動して……」

「そこなんだよ!外部から破壊されたんなら俺たちはお手上げじゃねえか!」責任者がコンソールを両手で叩く。「クソ…何で最近のシステムは何でもかんでもネットワークに接続しちまうんだ。外部から受けたらおしまいだろ……」せわしなくコンソールの周囲を歩き回る彼、完全に自体は行き詰まってしまっている。非常電源どこらか通常電源と送電網もセキュリティーもハードとシステムは健在、にもかかわらず送電量を常時記録・調整して送電元（電力会社のプラント）にデータを送るのもネットワーク、セキュリティーカメラとセンサを稼働させて状況を内部と警備会社に送っているのもネットワーク、施設内の機密情報や稼働情報を管理し、エネルゴプロジェクト・ワルシャワ本社にアクセスしているのもネットワーク、そのネットワークを管理するサーバが外部攻撃でがダウンした今、現場ではいかなる措置もとることができない。男の焦燥は絶望とまでとは行かずとも、深い諦めに変わり、同時に高度にネットワーク化が進んだ現代社会を呪った。「どうする…ここにいたって何が始まるんだ…」

「プラントのネットワークセキュリティーを突き破るとは……相手端末の暗号解析は相当だな……」責任者の同僚は左手の指先で腰の辺りを数回突き、それから情報管理担当の男にそそくさと歩み寄る。

「ここのグリッド作ったのはＩＢＭだったな？」「はい…」「よし、ＩＢＭの支部…ドイツのシュトゥットガルトだったな…呼んでくれ。ネットワーク管理やってんなら外部から状況を確認できるはずだ」ドイツのシュトゥットガルトというのはアメリカやイギリスの大手情報機器企業の工場や事務所が集まるハイテク産業都市、ＨＰやＩＢＭも西ヨーロッパのオフィスビルを構えている。

「しかし…関係者用ＰＨＳも無理です」２人の右わきから外に出ていた女が、ＬＥＤ懐中電灯を持って困り果てた表情をして歩み寄ってくる。「通信ログを管理するためにネットワークに入ってますからね。それに入ったとしてもこちらの情報通知ができません、ＩＢＭの支社側のコマンドが拒否してくる可能性があります。シュトゥットガルトでなくても、ですが」

「そうか…非常事態だが厄介だな……おっ…」わずかに右手で髪の毛をかく彼の脳裏に、待ってましたとばかりの妙案が浮かんだ。これなら通信が取れる、非常事態とあれば使わせてもらっても許してくれるだろう。「そうだな、外にいるドイツ軍の特殊部隊…軍用の無線機なら衛星回路で回せるはずだ。彼等のを使って外部とコンタクトしてほしい。頼むぞ」「分かりました……」情報管理の関係者が停電解放された管理棟ドア…ＩＣカードのリーダも停止している…の方と小走りで向かう。「ああちょっと待て。ついでに施設の警備を厳重にするよう言ってほしい……」呼び止める責任者の同僚、懐中電灯にぼんやりと照らされているせいか、彼の顔は一層暗く見えた。「…これは何か臭う。サイバーテロか…それともそれに乗じた何かの可能性があるぞ……」

夜間作業の従業員や警備員が入る詰所付近、皮肉なことにコンテナハウスを利用した臨時の物であったがため、非常電源として発電機がある。詰所の周りと、資材と共にトレーラーを止めてあるヤード

の周囲だけがいくつか明かりがともり、そこだけが施設全体の暗闇の中で浮かび上がっている。「それにしても…警備システムもダメ。送電線自体には何の異常もないのに全部落ちる。外部からサーバをやられるとは…」ベンツ社の大型トレーラー、アメリカと韓国からそれぞれ原子炉関係の機器の入ったコンテナを乗せたアクトロス２５２２、その前に立つドイツ陸軍特殊部隊の隊長は既に事態を読んでいた。彼は情報技術産業に詳しいわけではないが、ここの警備任務に就く際の通達では、欧州スマートグリッドに接続されているこの施設で大規模な停電や情報通信機器のダウンが確認された場合はただちの報告するよう指示されている。まさに今がその事態なのだろう。「サイバー攻撃ですねこれは。原子力技術のお二方ならネットワークシステムがダウンした際の非常冷却の話、そういうのありませんか？」

「ええ…まあ多少は……お前もそう思うだろ？」「あ、はい…」韓国企業連合の技術者“として”がやってきているＮＳＳ（韓国国家安全保障局）の男女は、とりあえず曖昧に答える、特に女の方は初任務の緊張から、ロクに問いかけを考えようともせず、ただ意識的に同僚の男に続いただけだ。彼らの本職は技術者ではない、身分を偽っているだけでその実は韓国の特別公務員なのだ。その中でも大韓民国大統領に直属する機関で潜入行動や特殊工作を専門とする、軍人、警察官、刑事から選抜された人間、スマートグリッドに接続されたこの施設の電力供給システムの停止とネットワークの遮断が何を意味するか、ドイツ軍特殊部隊の兵士にはより明らかだった。わずかに光の孤島となった詰所とヤード、その背後に浮かぶ建設途中の原子炉建屋とクレーンの影、黒く染まる周囲の針葉樹林を流れゆく張りつめた空気、それがその可能性を象徴していた。「建設途中の原子力発電所を狙ったサイバー攻撃がするとなったら一つしかありません」特殊部隊の小隊長は、手に持った暗視装置・統合データリンク装置付きＨ＆Ｋ社のＧ１１アサルトライフルの弾倉を左手のひらでしっかりと押し込む。弾倉に入った軽量高速小銃弾の束が

なる音、このライフルも武者震いしている、彼には相棒の感覚がしっかりとそう伝わってくる。「ロシアとつながりのある東欧系企業の体質は資本主義陣営の企業感覚とは違いますからね…自分の取引を通すためには攻撃だってしましたから」

「なるほど…さすがはソ連といった所ですね……」ＮＳＳの男、今度は確証を持ってはっきりと返事をした。政治や経済の概念論だったら彼の得意分野だ、ロシアの大手企業の多くは旧ソ連時代から存在している、すなわち社会主義時代の体制を引きずっているという事だ。“労働者の平等な財産”という名目で中央集権体制に取り込まれ、多くの政治関係者が社長や工場長として送り込まれ、政治家の権力出世や軍派閥間での武器供給争いに巻き込まれつつ腐敗していった旧ソ連時代、社長や上層部の都合の為には従業員の即日解雇はもちろん、相手工場や企業の役員の暗殺、工場の破壊や工作といった汚れ仕事を従業員や自分の影響下にある部隊に行わせ、上層部の政治基盤とすべく、崩壊しかかった雇用状況下で周辺住民を大量に雇用したり、製品を無料で配布するなどと言った不正なねこなで行為も後を絶たなかった。「すなわち今回仕掛けたのも…ロシア系の企業にリンクを持つハッカーでしょう。さらに…」彼はアクトロス２５２２後期型トレーラーの脇を少し歩き、ヤードの向こう側に見える針葉樹林に視界を向ける。「…次の行動があるとしたら、ですが…この暗闇に乗ずるとしたら、ここの原発建設権を落としたロシア系企業、でしょうか…」

「おお、鋭い。自分も同じような事を考えてました…」ドイツ軍特殊部隊の兵士がわずかにほほを緩め、彼の背後からゆっくりと歩み寄る。（この兵士は２人の正体を知るわけではないが）この２人は経済派の技術者なのだろう、彼にはそう見える。「…先ほども申しあげましたが、作成中のスマートグリッド・システムから侵入し、稼働したての原発のシステム全体を落とす、まだ公害を引き起こしているわけでもないのです。とすればこのような行動を起こすとすれば…」

「過去の怨念、という訳ですよ」「その通り。昨日侵入して掴まった男…やはりアトムエネルゴ社の下請けと言ってるそうな…」兵士の男は声を引き締め、タクティカル・グローブをはめた左手を軽く握る。

「なるほど…それに関しては聞いたことがあります」韓国人は左の拳でトレーラーの荷台をバコンと押す。もちろん自分は企業関係者になりすました人間だが、事前にＮＳＳから情報は受けてある。このコンテナと中にある大型機器、それをここに運び込むために自国の企業連合とロシアの企業連合がどのような経済戦略的攻防を繰り広げたかを。「こっちはよく相当の金を積んだもんです。相手がロシアだったからいい物、フランスやアメリカの企業が入ってたら、ええ、こんなおいしい位置にある原発の利権は手に入りませんでしたよ…」

「すいません、よろしいですか？」「はい？」２人の背後から、地元下請け企業の従業員が歩み寄る。「通信手段、ありますか？外部との連絡が取りたいのですが、システムのダウンで内部ＰＨＳもネットワークも利用できないようで…」

「軍の衛星回線を用いたいと？」兵士の男が腰のホルダーから無線機を右手で引っ張りだす。敷地の周囲の展開する特殊部隊の兵士・装甲車同士の通信はもちろん、衛星回線を利用してドイツ陸軍とも交信が取れる。「ＯＫ，ただし、交信する場所と周波数帯を教えて下さい。機器の操作はこちらでします…いいですね？」兵士は右手に持った無線機を左手の指先で示す。「いいんですか、軍事機密のを？」「もちろん、内部の情報を知られない限りなら。このような非常事態だとほかに通信機器はないですし…」怪訝そうな韓国の関係者に、ドイツ人は穏やかに続けた。欧米系の人種は特にだが話すときに愛想笑いは決して出てこない、しかしその分口調や論述ではっきりと伝わる、それが人種の違いという物だ。「グリッドのネットワークの修復…ＩＢＭ社かニューロン社かですか？それなら…」

突如深夜の針葉樹林で爆発が起こり、木々の背後が一瞬真昼の明るさになると同時に、暗闇の中ににごった煙が立ち上る。「どうしたっ?!爆弾でも放り込まれたか?」ドイツ軍の兵士は咄嗟に無線機の交信スイッチを押し、口元に当てる。兵士としての本能が周囲の状況を無駄に強く感じ取り、左手に持ち替えたH&K社のG11ライフルのグリップを強く握った。“南側の通用門です!警備員詰所が爆発、車両が通過してます!……”無線機越しに響く部下の緊迫した声、それと同時に、耳に装着した連動のイヤホンから車両が通過する音が聞こえた。南の通用門は一番侵入される可能性が大きいとして、警衛の建物のそばに極秘で展開させておいたのだ。“民間の警備員は恐らくダメでしょう……こちらには気づいていないようです。方向は原子炉建屋群、背後から回り込みます”

「了解した、くれぐれも無理すんな。やり方は予定通り、相手の撃ち方を見て殺すか抑えるかを決める」“お願いします”特殊部隊隊長は無線機をホルスターに戻し、G11ライフルを両手で握る。「やはりだ、テロリスト連中がぶっ壊しに着やがりましたよ。民間の方は管理棟内部に退避、通信はそのあとでいいですね?」

「は、はい…」「くれぐれも覗きに行こう等しないように。従業員は管理棟の…地下にでも逃げてください」爆発音と周囲の兵士たちの緊張感に凍り付いている従業員の男、そんな彼の左肩を、兵士は右手でグイと押す。「なるべく急いで、そんなに時間がない」

「あ、あの…俺たちはどうすれば?」「アンタ達も民間人だ、それとも拳銃の一丁くらい持ってるんですか?」ドイツ人の兵士が少し小馬鹿にしたような笑顔を浮かべる。自分たちも国外での非常時…まあEU対外行動局の直轄になった以上、今回を含めてこの先はこのような任務が増えるだろうが…に行動する特殊部隊だが、どうやらこの韓国人2人も単なる企業関係者ではない、男の目を見ればすぐにわかった。ただし彼ら技術者に偽装した政府関係者だとしても

今は構わないし、彼からしてみれば永遠に関係することではない。
「詰所を潰してくるなんてそこらの強盗じゃない、イラクやアフガンのゲリラ並みの可能性だってある。できれば下がったほうがいいですよ」
「……分かりました。おい△△！」自分たちの正体が多少なりとも勘付かれたか、一瞬不安が頭をよぎったが、それをすぐに振り払って男は同僚の女に命ずる。「民間人つれて管理棟に行け。ここは俺が何とかする」「でも…あなたも退避…」「このコンテナを守り、相手の正体を見る。それが俺らの義務だろうが？」爆発音におじつけ就く彼女に彼は歩み寄り、韓国語で耳打ちした。「存在が露呈するようなことはしない、いいな？管理棟内で何を言われても口出しは厳禁だ」
「は、はい…了解しました…」女は多少納得しない表情を浮かべながらも、管理棟の建物へと向かう民間作業員たちの後に続いて走り出した。「それじゃあ、あなたもなるべく退避するなりトレーラーを守るなり手段を。だいぶ荒っぽい事になるでしょう……」ドイツ軍特殊部隊の男はＮＳＳの人間に向かってやりとし、それから無線機を取る。「第５班、６班、トレーラーのヤードと原子炉建屋の護衛に付け。奴らの狙いはヤードの機器か原子炉本体、遠距離攻撃にも警戒しろ。１，２，３，４は正面道路に展開、入ってくる車両を阻止、制圧してやる」無線機に早口で声を吹き込み、もう一度彼は韓国人の方に顔を向ける。「そんでは、こちらは頼みますよ。勇敢なる技術者さん」
「あ、ありがとうございます…しかしどこで自分を……」その疑問がわずかに口をつく間にも、ドイツ陸軍特殊部隊の兵士、ボディーアーマー、ニープロテクター、エルボープロテクター、暗視ゴーグル装置付きヘルメットを装着した男は、前方に止まるドイツ陸軍のフクス６輪装甲車…メルセデス・ベンツ社の物…へと走っていく。入れ替わるように同様の格好をした兵士が８人、原子炉建屋の周囲に残っていた民間人を誘導しながら、トレーラーが停止し無数の大

型資材や機器が置かれているヤードの周囲を、そしてクレーンが装着されて建造途中の状態で３つ並ぶ原子炉建屋の周囲へと走って展開していく。

フクス装甲車が移動した、と言ってもその距離は３００メートル程度しかない。走り始めて１０秒程度で車両は十字路の右の路肩に停止し、ドイツ連邦陸軍特殊部隊の兵士たちが一斉に散る。「通用門側からくる。足を止めろ。２班は出てきた奴を打ち抜け」「了解しました」１班率いる隊長は装甲車の背後から道路を渡り、南側通用門から道路が続く十字路の左手、すなわち実行犯が侵入してきた道を確認できる位置についた。十字路の手前にある１号機、２号機の原子炉建屋、その向かいにある据え付けられたばかりの電源盤の躯体の脇に身を潜める。「＊＊＊＊、無反動砲だ、片方を抜け。残りは乗っている乗員をぶち込んでやれ」「了解、いつでもいけます」彼の脇にいる対戦車用無反動砲を持つ男が、ヘルメットに装着された暗視装置ゴーグルを下げ、右目の部分に無反動砲のスコープを当てる。「２班、建屋の脇でいい。入ろうとした奴をまとめて始末しろ、散らすと厄介だぜ」“了解しました”わずかに振りむいた小隊長、暗視装置越しに“第２班”と表示された人型の赤外線オブジェクトが原子炉建屋の後ろへと走り、その影に入り込んだ。建屋内部に入る扉は中心道路の向かいだが、不要な銃撃戦で施設に損害を出すより、わざと相手を内部におびき寄せて背後から撃つ、そういう算段だった。

それから間もなく第１班の左手から聞こえてくる内燃機械の鈍い音、小隊長の心臓の鼓動が徐々に早まる。ベテランの軍人と言えど、戦闘直前には多少なりとも緊張感を覚えるもの、しかし彼はわずかに息を吐き出したのみで構えたスコープ付きＧ１１アサルトライフルを支える両手をさらに上げ、射撃体勢に移った。「用意。前の奴を

ぶっ壊せ」「了解」周囲にいるチームに指示を送るドイツ連邦陸軍の小隊長、「まだだ…まだ遠い…」H&KG11ライフルスコープに意識を集中させる彼は、自分に言い聞かせるようにつぶやく。緊張はするがそれで体のどこかが震えたり固くなるようには感じられない、極限の状況を容認しつつ自分の体と精神を制御する、それが軍人としての本質だった。その直後、彼の暗視スコープに映っている2つの赤外線オブジェクトが理想的な照準内に入ってきた。この暗闇、しかも送電線やパイプライン、各種建屋や測定モニタが並ぶ原子力発電所の配電盤の影に身を潜めていればこちらの存在には気づかれない。「ちっ…やはり持ってやがるか…」車両のカーゴスペースに乗る人間型のオブジェクト、手には明らかにライフルや無反動砲が握られている、奴らの目的はすでに明らかだった。「よし、前を撃て」「了解、撃ちます！」「後方連中、退避！」2人の部下が配電盤の右手に回る。伏せ撃ち体勢の兵士が持つ無反動砲の背後からは衝撃がない分高温の装薬の燃焼ガスが噴出する、作用・反作用を気体の噴出で相殺することで、破壊力の大きい大口径のロケット榴弾を発射できるのだ。

響き渡る轟音、第1班の周囲が一瞬真昼の明るさになった直後、前方で火の手が上がり、アメリカ・フォードモータース製のエクスプローラーが大爆発を起こす。右手から対戦車用のロケット砲の直撃を受けたピックアップ車は、乗員を吹き飛ばしながら左に横転し、真っ暗になっている市街灯に激突、くの字にボディをへし曲げて動かなくなった。「撃て撃てっ！」小隊長は右手の指がかかったG11ライフルのトリガーを構わず引く、軽量高速小銃弾が心地よい振動と共に快調に銃身から曳光弾を引きながら、急停止した後方のピックアップ車に向かって飛んだ。続いて発砲が始まった2班の銃撃も彼のスコープ内に加わり、カーゴスペースに乗ったテロリスト数人が倒れ、助手席側の窓ガラスやボディに無数の銃弾痕が開いていくのが確認できる。それでもなお4，5人の人間が奥に向かって飛び込み、戦闘の車両から間一髪飛び降りたテロリストと共に周囲へ

と逃げ散る。「追うぞ！」「はいっ！」車両の背後からは追撃してきた第３、第４班の兵士がＧ１１ライフルをうちながら突っ込んでくる。第１班の兵士もひしゃげて転がっているフォードのピックアップ車の方へと走って向かった。非常電源でわずかにともる一部の照明、それを頼りにテロリストは目の前に見える原子炉建屋へとやはり向かっている。相手の発砲はかなり散漫だ、おそらく想像をはるかに超える護衛体制、いやテロを見透かしていたような軍隊レベルの警備に士気を失いかけているのだろう、それでもテロリストたちは発砲の間を縫って道路を渡り、同じような空冷冷却機器操作盤の背後に入り込んで撃ちかえしてくる。「相手もなかなか上等なライフル持ってるぞ…」原子炉建屋と躯体の間に身を潜める連中に発砲し、まだ転がった車両の後ろに隠れる。弾が車両だと辛うじてわかる金属の塊に当たってはじけ、金属片をまき散らす甲高い音、発砲音が複数であるからにして相手は３，４人はいる、隊長にはそれだけで理解できる。原子炉建屋の背後に潜めている第２班も発砲し、徐々にテロリストたちを追いこんでいるようだ、背後からフクス装甲車で追いかけた第３班と４班は通用門側へと逃げ散った２名を追いかけ、道をそれて針葉樹林に入る。着弾する場所とスコープに映る火花からも分かるが、相手にはこちらのような暗視照準器もスコープもないらしく、明かりがほとんどない状況の中、命中はかなり加減だった。「もらったっ！」一斉射やり過ごすと同時に、小隊長は素早く横転した車両の腹側に進みトリガーを引く。曳光弾を引きながら暗視スコープ内部を銃弾が飛び、一人が配電盤の手前に倒れこんだ。

その直後２つほど影が右へ向かって走り、原子炉建屋に取りつく。「奴ら、やはり中に入ろうと…」ドイツ連邦陸軍の兵士は無線機を取る。「第２班、周囲を見ろ。俺の部隊が後ろからやる」“了解しました”「第１班、あそこの奴らを…」振り返った直後、左腕の至近距離で銃弾がはじけ、火花が飛び散る。彼は咄嗟に姿勢を低くし、頭を下げた。「この野郎っ！」部下の一人が発砲し、原子炉建屋に

取りついた片方のテロリストを一発で射殺する。だがその刹那、ドア付近で軽い爆発が起こり、その数秒後に原子炉内部へと入る扉は内側へとすっ飛んだ。「くっそ！行くぞ！」「了解！」爆薬で扉を叩き潰す、そこまで準備しているからには内部にはいる目的は明らかだ、第１班の４人は道路を喘息で突っ切り、ついで爆破されたドア周囲に集まった２班の兵士たちの間を抜けて原子炉内部に突入する。“第５班です。東側から車両一台と数名が侵入した模様！車両の方は現在潰しにかかっています…”「よしわかった、援護を送る…」やはり一方向ではなかったか、小隊長の男は無線機を手に取る。「４班、ヤードの援護に回れ、増援の連中が東からも近づいている」“了解しました”

原子炉建屋の内部は照明もセキュリティセンサもダウンして暗闇に包まれていた。暗視装置で確認できるのは、人一人が通過できる程度の通路とその周囲に並ぶまだカバーのかかった計器コンソールのみ。「×××と〇〇〇〇は地下通路、俺と●●●●は上に上がる」「分かりました！」「よしっ…」１班は２手に分かれてそれぞれ狭い通路を走る。頼りになるのは装着した暗視装置とスコープの赤外線照明のみ、しかし相手がそうでない以上これだけ見えれば全く十分だ。「っ！！」案の定小隊長が２階へと向かう階段に足をかけた途端、頭の上を銃弾がかすめ、左後方にある計器盤に当たって跳ね返る。「上です！こいつ…」部下の兵士がＨ＆ＫＧ１１ライフルを発砲し援護する、スコープ越しに見える人間は手すりの金属に身を隠しながら走り、すぐわきにある３階へと向かう階段を上がっていく。「援護しろ、俺が仕留めてやる！」「分かりました！」部下の一人が階段へと向かう隊長を掩護し、Ｇ１１アサルトライフルをフルオートで連射、隊長の彼は素早く作業員用の階段を上り、金属製の床を全力で走る。タクティカル・ブーツがなる高い音、ボディアーマー、プロテクター、複合合成素材の防弾ヘルメットの重さは今の彼にはなく、まだ天井がむき出しの夜空に広がる僅かな明かりの中、ヘルメットに装着した米・ＩＴＴ社のＡＮ／ＰＶＳ－１４暗視

装置越しに見えるオブジェクトとだけで周期の状況を確認しなければならない。ここまで困難な状況をものともせずに任務を遂行できるのも、ドイツ連邦陸軍の特殊部隊であるから故である。「やる気か……」原子炉容器周囲に張り巡らされた作業用3階通路へと向かうラッタルを半分上がった場所、目の前の手すりに甲高い破裂音と共に火花が散り、男は壁側に瞬時に身を寄せる。咄嗟に姿勢を立て直して構えたG11アサルトライフルの暗視装置連動スコープには、こちらに向かってライフルを構えるテロリストの赤外線影が移っている。「こんの…」次で仕留めてやる、兵士は残った数段を一気に駆け上がり、手すり側に一気に体を寄せた。スコープの無い相手ではこちらが狭い通路の前後を入れ替えるだけで弾は当てることができなくなる、彼の右手後方で再び破裂音と共に火花が散り、一瞬姿勢を低くした男はすぐにライフルを構え、トリガーを引く。さらに奥へと走ろうとした男は胸に数発の小銃弾を受け、そのまま手すりを越えて1階へと落下する。

フル装備の重さを感じさせない勢いで素早く1階に戻り、男は転落してきた死体に駆け寄る。「どうだ、身元は分かるか?」「おそらく…一つくらいは…」H&K社のアサルトライフルと暗視ゴーグル付きヘルメットをわきに置いた同僚は、血まみれになっているテロリストのジャケットを脱がせ、ポケットというポケットにタクティカル・グローブをはめた右手を突っ込んでまさぐる。ロクにものを持っていない、今までに出てきたのは血液でぬれた携帯情報端末のみだ。「それより…こいつやはりここを潰す気だったようです。中東と全く同じやり方ですね…」彼はふと視線を上げ、右手に置かれた発煙筒らしき複数の物体を指差す。「とりあえず…これは回収という事でいいですね?」「そうだな…」小隊長は後ろから駆け寄ってきた別の兵士声をかける。彼にとってこれも予想通りだ、やはりここを爆破する目的だったのだろう。「一応あれでやってくれ。入れた装甲車はなるべく安全な位置へ」「わかりました」やってきた男は右手に持った爆発物処理用の箱を開き、黄土色に近い発煙筒の

束を中にいれる。
「全く…ライフルと命しか持ってきてねえのかよ…ん?」脇に転がるロシア製の突撃銃に一瞬目配せし、右わきのポケットに手を突っ込んだ彼の指先に、グローブの合成繊維越しに物体の感覚が伝わる。ひもと…それから薄いプラスチックか?いずれにせよ柔らかい。「首から…下げる奴かこれは?」彼が引っ張り出したのはカードの入った透明のアクリルケース、中には社員証のような白い名刺サイズの紙が入っている。「一体これは…まあ被弾してますからね…」「どれ…ちょっと見せてみ…」小隊長がそのカード入れらしきものを受け取り、血のりをタクティカルグローブで拭い取る。キリル文字で書かれた文字、移っている写真は確かにこの死んでいる男の顔と合致している。そしてその右わきに書かれている企業のロゴマーク、彼には見覚えがあった。「アトムエネルゴ…やはりな…」倒れて動こうともしない男の体を、兵士は無意味に両手で返し、確認してみる。やはり、という印象だ、やはりここの建設権を失ったロシアの原発最大手企業、アトムエネルゴプロジェクトの関係者だったのだ。おそらくは本社ではなく無数に張り巡らされた下請け企業の一部で、建設権の取得に失敗した結果、現在の世界経済状況から察するに職を失ったに違いない、これを行ったのもポーランドに対する抗議と政治と癒着したアトムエネルゴ社の上層部からの指示に対する見返りを求めてものか。彼は複雑な心境になった、新興国や途上国…事にアフリカや東欧…で頻発するインフラや大手企業の向上を狙ったテロ、犯罪、サイバー攻撃、原因になっているのは公害や雇用問題のみならず経済情勢にまでその要因が深々と広がっているのだと。
“第2班、ドイツ軍より緊急入電!国籍判別不能のヘリ複数、東部より接近中!警戒されたし!”「国籍不明だと……なんでチェコのアメリカの奴が反応しないんだ!?」イヤホンから聞こえてくるメルセデス・ベンツ社製ルクス装甲車のオペレーターの連絡、小隊長はしばらくの間答えを失う。冷え冷えとした建設途中の原子炉の空気より冷たい物が背筋をよぎった、チェコにあるＮＡＴＯのヨーロ

ッパ上空半一自律知能（ＡＩ）制御飛行物体認識・管制装置は、ＩＦＦが作動せずとも各国政府や空運企業のフライトプランのデータにアクセスしている。プランに含まれていない、もしくは識別トランスポンダへの応答がない航空機や飛行ルートや連動している衛星画像からの機影データを複合的に分析・判断し、自動的に警告通信の発信、当該空域にある欧州各国軍の空軍基地への通報、当該期に対する通信周波数帯の制限などを独立して行う事が出来る、インターネット回線と接続された高性能の施設のはずだ。それを突き破って来るとは…今回のテロはどれだけ大規模だ、何の目的がある？彼の想像の範疇をはるかに超えている。

そしてそれを明らかにするもの、彼の問いかけに対する応答がイヤホン越しの音声として聞こえてきた。“チェコにある米軍のシステム…航空機フライトプランのデータベースから侵入されて動作不能だそうです……”通信担当の兵士の声も驚きと困惑にしぼんでいる。

“おそらく…テロリスト連中は、これを意図して…”

「それはどうでもいい、東部の守りを固める。各隊に携帯対空ミサイルのスタンバイをさせろ」“了解しました……”意図しているのは明らか、隊長の男の思考にははっきりとした確信があった。確固たる証拠があるわけでもないが、なぜか自分の本能がそう言っている、飛んでくるヘリとやらは確実にこちらに危害を加えようとしていると。小隊長は脇に置いた暗視装置付きＧ１１アサルトライフルを右手で取り、それに気合を入れるが如く弾倉を再度左手で強く押しこむ。ヘリだろうと爆撃機だろうと関係ない、特殊部隊であるからこそ何が何でも撃墜してやる、先ほどのまでの彼の困惑は闘志に替わっていた。「●●●●、援護に向かうぞ！」「了解しました」

原子炉緊急冷却装置（ＥＣＣＳ）の基幹部品のコンテナを乗せたアクトロス２５２２トレーラーの背後に隠れ、韓国国家安全保障局の

男は夜間撮影対応のデジタルカメラで戦闘の様子を数枚撮影し終えたところだ。初めて見るテロリストとの武装衝突、銃撃音や爆発音に意識を奪われ、気づけばドイツ連邦陸軍の部隊がテロリストの車両と武装した人間をあらかた掃討してしまった。しかしここで黙っているわけにもいかない、自分たちの目的はこの韓国企業連合が製作した北朝鮮とのいわくつきの原子炉に関して起こるあらゆる事態に対応し、その原因を調査する事、場合によっては危険を冒して実行犯と接触しなければならない。

彼は腰のベルトに巻いた拳銃を右手で確かめる。万が一こちらに来たらこれで仕留める、場合によってはこいつで人質にとり、何が目的なのかを聞き出して見せる、そういう算段が彼にはあった。それはもしかしたらかなり深刻な結果を、憂慮すべき情報をもたらすかもしれない、冷え切った中央ヨーロッパの針葉樹林帯にある原子力発電所のタマゴとそれをくみ上げていく建設機器や建設資材というゆりかご、すでに建屋周辺にいた民間の作業員も管理との地下へ退避したようだ。そこを通り抜ける風がしばしの静寂に包まれる中で一層冷たく感じられた。

同時刻　ベルギー・ブリュッセル市　ＥＵ本部

ブリュッセルの中心市街地、及び現代建築やビルが並ぶ新市街地からも少し離れた場所にあるヨーロッパ連合本部、まだ冬の空気に包まれる西ヨーロッパの夜の外気は、触れると痛く感じられるほど静まり、冷え切っていた。「ええ、それより状況はどうなの？」「あちらの送信ネットワークが落ちているので詳細状況不明ですが…あ

まりよくないようです」ＥＵ本部のメインエントランスの車寄せに乗り付けたプジョー２０７もそのままにし、出迎えた同僚の男と共にあわただしく対外行動局関係者の女は自動ドアの内側へと入る。夜闇…とはいっても市街灯やその他の照明は当然ある…と共に冷たく張りつめた空気が一転し、空調機器とシャンデリア型の照明機器で人間の活動に最適な環境となった内部、しかし彼女にはその空気の変化を感じる事は出来なかった。ブリュッセル新市街地にある高層集合住宅、ＥＵ（ヨーロッパ連合）の関係者やＥＵと密接な関係を持つ大手企業の社員が利用する高層マンションにいて良かった、彼女はエレベーターホールで待ちながらつくづくそう思った。ここまで自家用車でわずか１０分、深夜の公共交通や店舗・施設の営業が徐々に認められてきているとはいえ、さすがに午前３時近くを回ってトラム（路面電車型交通システム）は運転しておらず、通りかかるタクシーもほとんどいない、環境重視と言われる西ヨーロッパでも自家用車の保持はかなり重要である。

「ええ、韓国側の依頼のあった原発建設ポイント…テロリストはネットワークまで遮断してかかってきてますからね…」部下の男は開いたエレベータに乗り込み、地下４階のスイッチを押す。彼とて入ってきている情報は少ない。「スマートグリッド・システムを利用して外部との交信を絶ちましたから。よほどの手練れと上等な端末機器が大規模にやってるんでしょう…」

「相手は相当大規模なようね……スマートグリッド内部のセキュリティーを破ったの？」女は左手をスイス・シンドラー社のエレベータの手すりにかけ、体重もわずかに寄せる。ここから先、対外行動局の特別管理室までは警備員の人間以外は入れない、ここも含めて機密の空間となっているのだ。「はい、相手はグリッドの電力量管理から侵入し、施設サーバを潰しにかかったようで…」男は到着して扉の開いたエレベータから先に降りる。欧米や中東では、痴漢や強姦などの咄嗟の犯罪に備えて男が先に降りるのがマナーだ。「…まあそのためには、まずは電力会社のサーバに侵入、それからポー

ランドの施設へと?がるネットワークを見つけ出し、それからサーバのセキュリティーを破る。奴らは相当の置き土産を残してくれましたよ」

「置き土産?」皮肉たっぷりの男の声に、彼女は思わず彼の顔を見る。「ええ、実行犯がサーバに侵入する際はめどの立つネットワークをしらみつぶしにしたんでしょう。そのせいでポーランドの原発周辺一部の市街地でスマートグリッドが同じ異常を起こして停電、ドイツの外国為替市場の取引ネットワークの一部でトラブル、ポーランドとチェコ国内のインターネット回線で大幅に通信速度が低下しています」男は女と共に、ＥＵ対外行動局が入るフロアを歩きつつ、手元のタブレット型端末の液晶パネルを数回たたく。「同一の、もしくは複数の共犯者が使用する外部端末から侵入し、大量の攻撃用ファイルをネットワーク内に送信する。中欧ヨーロッパで現在報告されている異常はこれが原因でしょう」

「そうね…私の報告もそうだったわ。おそらくは何らかの形でサーバの構成が流出して…あらゆるリンクからサーバに送り込むために、大量のファイルをネットワーク内に…」そこまで言いかけた彼女の脳裏に、突如としてある考えと疑問符が同時に浮かんだ。「でも、スマートグリッドに使用される方式はハッカーの間でも知られていないはずよ。それに知ったとしても解析に必要な計算量…通常の端末で到底できるようなものじゃないわ…」

「そこだよ〇〇〇、問題はそこなんだ……」男がじれったそうな表情でタブレット端末の淵を右手で軽くたたく。通りすがりの警備員の男が一瞬こちらを振り向いたが、ＥＵ本部ビルのこの区画にいる民間企業の警備員もこの区画の専属であり、業務中に見聞きした情報を口外、もしくは情報端末を利用して外部に流出させることの無いように指示されている。このような極秘事象を多少なりとも多少議論したところで、さほど問題だとは思わなかった。「なぜその実行犯が…いや、実行犯グループのサイバーテロ担当者が、グリッドのネットワークのコマンドを解析し、偽造することができたのか?

とりあえずイギリス、フランス、ドイツ、スウェーデンで販売されてる民間企業のプログラム作成ソフトの応用と、今までに摘発されてる違法ソフトで可能性を分析してみた……」「それで…スマートグリッドの管理サーバに入れる可能性は？」

「ほぼ不可能と出た。どのソフトも解析と操作指示の暗号なんてとても入りきらない…」彼女の問いかけに男は右手を振った。「圧縮したとしても的中する率はシックス・オー（０．０００００１％）以下、第一にサーバアクセス用の回線で送ったらセキュリティソフトに引っかかるはずだ」

「とすると……」女の思考に浮かんだのはかなり深刻な状況である。日進月歩の情報技術社会の変化レベルを考慮しても、いまだ信じられないレベルの状態だ。彼女は目の前に現れた突き当りの自動ドアの脇にあるＩＣカードリーダにＩＣタグを当てる。「ハッカーグループは、ＩＢＭかニューロン・コンピュータが所持しているくらいの解析プログラムと計算装置を持っている事になるわね。悪用されればヨーロッパ全域どころか地球各地のネットワークが止まるわよ」

「確かにな…相当ゆゆしい事態だ」男も彼女に続いてＩＣカードをリーダに読み込ませ、右手の手首をその隣にある読み取り部分に当てる。静脈形状認証機、人間一人ひとり異なる手首の静脈の形状から個人を認識するものだ。「…世界規模でネットワークにトラブルが起これば、それこそ経済市場にも一般生活にも響く。それだけは何としても防がなくてはならない」

「ともかく……まずは現場で起こっている犯罪者の状況を読み取る事ね…」女は足早に薄暗い部屋の内部へと入る。

内部は体育館コートの半分程度の広さ、中央部には複数の大型ディスプレイと大型サーバの躯体、深夜にもかかわらず多くの人間が作業にあたる周囲の卓上には無数の情報端末とそのコンソール、それ

に対して空母のＣＩＣよりやや明るい程度の照明があり、広さや大きさを感覚で捉えるには少し難しい感じだ。「××××、状況はどんな感じ、ＩＢＭとの連絡は取れた？」

「ＩＢＭの支部とは連絡取れました。支社の方の情報サーバから統治と発電所を結ぶグリッドの遠隔操作を試行中です……」卓上端末が並ぶデスクから一人の男が立ち上がり、こちらへと向かってくる。

「当地の状況…ドイツ陸軍の衛星回線越しになりますが、かなり厄介な事態です。侵入者は２０名以上、旧ソ連製ではなく現用ロシアの武装をしている…テロリストの類と見ていいですね？」

「ロシアの武装ね……今日も（正しくは昨日）イタリアで警察部隊に対してやった部隊、押収したのはそうじゃなかった？」「ええ、失業保険の緊縮への抗議でした……双方に数名の死傷者が出ているようですが……」男の声は疲れ果てている、なかなか状況が改善しない南欧の財政危機とそれを発端にしたヨーロッパ連合内のユーロ問題と経済低迷、しびれを切らした民衆…たいていや工場勤務や公務員の失業者…による集会やデモは一向に減らず、情報ネットワークを通じて過激化した集団の中には、警官隊との衝突で発砲するという事態がこのところ相次いでいる。特にイタリアとギリシャは深刻で、連日必ず発生する逮捕者の中に、ロシア製のアサルトライフルや対戦車ロケットランチャーを保持しているものが少なからずいるのだ。流通先は不明、それもたいていはロシア陸軍において現用で使用されているものが多く、旧ソ連製の安物を取り扱う中東の武器商人からの密輸や、スイスやスウェーデンの民間重工企業が中東諸国やそこで活動する民間軍事会社向きにで公式に行っている“兵器見本市”から流れているとは考えられない。そんなこんなの対応で、ＥＵ対外行動局の特別機関であるこの部門のスタッフは、この数日間企業の取引データの調査…今や世界の重工業企業の取引相手は民間企業や市場だけではない、経済活動と産業の優劣、さらに多国籍企業体の存在が国際情勢を敏感に決める今、国家や国軍、民間軍事会社も企業の取引相手の一部だ…などに追われているのだ。そ

れに加えて今回の原発に対するサイバーテロと、それに乗じた謎のテロ事件、経済問題に対する暴動と一連の金融機関同士の協議は最悪期を脱したとはいえ、これに加わった予想がつかない事態にＥＵ内部では混乱が広がっている。

「緊急です、チェコにある欧州自律対空レーダーにトラブル…え、ええ、情報分析サーバで異常発生、分析が不可能になっています」別のコンソールを叩く男が声を上げる。「現在バックアップの対空レーダー、軍事衛星でのデータリンクを構築……」

「ポーランド北東の識別不明の輝点（ブリップ）複数出現！場所は……」ドイツ軍内の衛星回線に接続された別の端末を操作する男の声が一瞬止まる。「…ストラホスワフ付近…要請で在独のアメリカ空軍機とドイツ軍機がスクランブルをかけます……」

「……特殊部隊がいて、ドイツ空軍が待機していた…これで正解だったわね……」次々に目の前で起こる異常事態、何歩か室内の中欧へと足を進めた女はそれ以上口にすることができなかった。韓国政府の依頼で、“念のため”といってつけたドイツ陸軍特殊部隊の護衛、それがこの状況で役に立つとは、混乱の余り皮肉なのか恐怖なのか、自分の感情に一瞬区別がつかなかった。彼女は隣にいる同僚の男と思わず顔を見合わせ、何をすべきか暗黙の状況で確認し、同時に互いを落ち着かせる。「…まずは状況が進展するまでこちらは確認するしかないわね」「もちろん…」東アジアで起こった米中間の緊張に続くヨーロッパの異常事態、場合によっては国際社会全体に衝撃が広がるかもしれぬ事態に２人の瞳双方にある種の不安が浮かんでいた。

中央ヨーロッパに生まれた暗闇その２

ポーランド　ストラホスワフ原発

「一通りやったか……」アクトロス２５２２後期型トレーラーの背後からＮＳＳの男は１歩分前へと進み、周囲の状況を確かめる。自分の盾となったメルセデス・ベンツの大型トラックも、その上に積まれたアメリカ・ＧＥ社と韓国企業連合の原子炉関係の大型機器の入ったコンテナも被害を受けた様子はない。簡易のヤードに置かれている資材も無事の模様だ、振り返った背後にある原子炉建屋…その上部には建築用クレーンもある…とその右にある施設管理棟のビルにも火災の発生した痕跡はない。これもドイツ連邦陸軍の部隊の奮戦のお陰、状況がまだ分からないうえに自分が外に出て状況調査に当たっているのも身勝手であり、不用意に歩き回るわけにはいかないが、安全を確認できた後にお礼の一つくらい言うべきか、そう思った。

しかしその直後、左手の道路の後方からルクス装甲車がヤードの前に停止し、多くの特殊部隊の兵士が周囲に展開する。「機影確認、２機」「誘導弾スタンバイ」「攻撃援護、左右に分散」状況がまだ終わっていない、終わっていないどころか戦闘ヘリが来る、彼の意識は再び戦場に引き戻された。かすかにトレーラーの向こう側、情報管理サーバ・情報管理棟が存在する方向の森の暗闇から、鈍いヘリコプターのメインローター音が響いている。男は再びトレーラーの背後に入り、姿勢を低くする。右手に構えた記録用レコーダのスイッチを入れ、夜間撮影用のモードに切り替える。あんなものまで出してくるとは今回のテロは相当だ、命の危険すら否定できない状況、男は落ち着けるように息を吐き出した。

「来る、来るぞ……目標、機体側面のドアガン」「了解、準備よし」“第２、第３、支援展開ＯＫ”ＩＴＴ社の暗視装置越しにヘリの姿

を確認する小隊長、相手はかなり大型の機体、すでに距離は５００メートルない。ドイツ連邦軍の特殊部隊は原子炉建屋周辺のモニターポスト…放射線データを測定する機器…や資材ヤードの各所に分散、ヘリの攻撃力を奪うチャンスを伺う。通常戦闘ヘリ相手に生身…陸軍特殊部隊の装備はしているが…の人間がやり合うのは、たとえ対空携帯ミサイルを持っていたとしても危険すぎる行為だ、しかし今回はそれ以上に手の打ちようがない。対ヘリ用のミサイルも持っている事だし、特殊部隊にとってはこれくらいの状況がきわめて危険という訳でもなかった。「まだだ、もう少し機体がこちらによるのを待て」「了解…」小隊長は携帯対空ミサイルの暗視スコープをを伏せ撃ちの体制で覗き込む部下に無線機で声を入れる。確実に仕留めなければならない、万が一撃ち漏らせばこちらが施設ごと掃討されるか、墜落した機体が原子炉建屋や管理棟に激突する恐れもある、確実に攻撃手段をそぎ、彼等が“次の手”にでるよう進めなければならない、小隊長の直感だった。

「各隊、撃て…」“撃ちますっ！”無線機越しに男が叫ぶ、しかし各場所に分散した特殊部隊員が携帯ミサイルを発砲するのと相手のドアガンが火を噴くのはほぼ同時だ。１２・７ミリ機関砲の曳光弾の雨が地面を噛み、アスファルトをはがし、民間企業の車両を吹き飛ばす。爆発音と入り混じりつつ道路やモニターポストに当たって金属片を散らす。「くっそ…」「退避退避…」建屋に存在する死角に入り込み、一斉に姿勢を低くする特殊部隊員、ヤードの前に止まっていたドイツ連邦陸軍のルクス装甲車の１両が被弾して炎上する。周囲にいた同僚がどうなったか、そこまでは確認できない。「焼夷徹甲弾か……」ヤードにある大型資材の脇に入り込んだ兵士の一人が、暗視装置越しに炎上する自軍装甲車の姿を確認する。どうやらヘリに搭載されていた機関銃は単なるアサルトライフルではないようだ、もともと戦闘車両は昔も今も上空の攻撃機や戦闘ヘリによるトップアタックには弱い、空対地ミサイルや多目的対地ロケットランチャーが発達した現在に至ってはなおさらだ。しかし幸いなこと

に、２機からの機関銃による攻撃は既に止んでいた。携帯誘導弾の熱源誘導が見事にドアガンの発熱を捉えて打ち抜き、乗務員…つまりテロリスト…ごと吹き飛ばしたのだろう。「第４班、ヘリからの機関砲は沈黙。わが方の一両が被弾し炎上中、負傷者複数」

「了解した、相手も多少なりともビビったらしい。次の手に出るぞ……」無線機のイヤホン越しに状況を確認し、小隊長は建屋からわずかに前に出て状況を確認する。「ちっ！何って野郎だ…こんなもんを…」ＡＮ／ＰＶＳ－１４暗視装置越しに見える機影、彼は愕然とした。相手はＭｉ－１７汎用支援ヘリ、１９７３年に旧ソ連で開発された大型の戦闘支援ヘリである。機種には旧式ながら夜間支援機器も確認できる、テロリストが、しかも２機もどこで手に入れたのか、男には全く理解できなかった。

夜闇を切り裂いて針葉樹林の背後から現れたロシアＭｉ－１７、Ｍ・Ｌ・ミーリ記念モスクワヘリコプター工場製の光学電子ジャイロスタビライザとレーザー暗視装置という、一世代以上前ながら、非合法組織のわりにかなり豪華な装備だ。しかも国籍信号が不明という非正規軍使用、一体どんな場所から手に入れたのか、小隊長には見当もつかない。しかし元は戦闘ヘリだけあってドアガンを叩き潰しても健在、隙を与えれば対戦車ロケットでもなんでも攻撃してくる可能性は高い。先ほどの斉射でルクス装甲車１両が炎上し、負傷者も数名出ている、これ以上舞台と施設に損害を出すのを許すわけにはいかない。「奴らの頭をぶち抜いてやる！降下ポイントまで引きつけろ！」小隊長は建築途中の原子炉建屋の脇に入り込み、ヘリのダウンウォッシュが引き起こす回り込みの風切音の最中無線機のスイッチを押す。原子炉建屋や管理棟と言えどヘリから狙ったところで大した被害を与える事は出来ない、真意はそこら人員を降ろして自爆テロをするつもりだ、彼の直感がそれを物語っていた。「２班、

3班は手前の奴を寸前まで粘れ。4，5，6は奥の奴だ。俺のチームがコクピットをぶち壊してやる！」「しかし…正面からの攻撃は……」「それだそれ、正面に着地したら潰せ……」男は部下に対し、ヘリの影を右手で指差す。すでに相手が次に起こすであろう行為は明らか、むしろ正面に回った所で相手は攻撃を仕掛ける事は出来ない、Ｍｉ－１７というヘリの機体装備を知っている彼にはこれという問題には感じなかった。

第1、第2班のフクス装甲車も第1班の隊員たちがいる原子炉建屋の方へと一気に下がり、数名の隊員が対戦車無反動砲と照準スコープ付きＨ＆Ｋ社のＧ１１アサルトライフルをもって車外に出てくる。「タッチダウンと同時にローターを飛ばす。連中が出てきたら包囲殲滅するぞ」「了解です」装甲車の脇や建屋の影から一斉にアサルトライフルを構える隊員たち、“第2、第3班よし”“４，５，６、配置よし”管理棟や建屋周囲の機器、停止している車両の影などに入り込んだ各般の部隊員の無線が飛ぶ。「よし了解…タッチダウンを待て、おろし始めたら奴らは動けん…」小隊長の男もＧ１１アサルトライフルを構え、ヘルメットに装着した暗視装置越しの機影をにらむ。軍用も民間用も同じだが、降下したヘリから人や物を降ろす際はダウンウォッシュを防ぐためにメインローターの出力を落とさなくてはならない、すなわちその間は機体は飛び上がれないのだ。この時にメインローターを破壊、もしくは機体正面を打ち抜いて撃破する、すでに機体は地上数フィートまで降下し、機体の主脚輪（メインギア）をアスファルト上に下ろそうとしていた。メインローターの引き起こす暴風に、周囲の樹木のみならず建屋のクレーンや資材のカバーも激しくあおられている。2つの目をふさぐ形で装着した暗視装置に巻き上げられた砂粒が音をたてて当たるが、間もなくメインローターの回転音が落ち、複数の人間らしき赤外線画像の影がヘリの機体から現れ始める。「よし、潰せっ！」「撃ちます！」“制圧射撃開始っ！”各員の無線機に双方の喚呼が入り、建屋や管理棟の背後から一斉に誘導弾の火箭（かせん）がヘリに向かって突っ込む。それとほぼ同時

にヘリの四方から激しい銃声が響き、ヘリの胴体やメインローターで火花を散らす。それとロケット砲の命中はほぼ同時、手前の１機は見事にメインローターと胴体中央を打ち抜かれ、燃料と破壊工作用の爆薬に引火して大爆発を起こした。胴体が真っ二つになったＭｉ－１７はそのまま左に倒れこみ、メインローターを地面で折り飛ばしながらつぶれ、航空機用燃料が強烈な燃焼反応を起こす激しい火炎に包まれる。奥に駐機していたもう１機の胴体にも命中、こちらは爆発こそしなかったが周囲にいたテロリスト数名を吹き飛ばし、機体内部に大穴を開けた。「よし！一気に制圧する！」建屋にほど近い駐車スペースに降り、そのまま破壊されて炎上するヘリに向かって、各方向からドイツ連邦陸軍のフクス装甲車や特殊部隊の兵士たちが向かった。残った相手も散発的にライフルを発砲してくるが、夜間照準支援の機器がないせいか攻撃も散漫だ、ボディアーマーにプロテクターという閉鎖戦用装備の特殊部隊員たちはＧ１１アサルトライフルを撃ち、建物のや放置されて損傷した車両の背後に入り、あっという間に炎上するヘリまでの距離を詰めていく。

「これは…」目の前で起こるゲリラ戦同然の轟音と閃光を、しばし呆然と眺めていた韓国国家安全保障局（ＮＳＳ）の関係者、一応は警察機動隊の出身でありながらここまで大規模な戦闘を見るの始めてだ。経験のない物にとって銃撃戦という物は恐怖やスリルという物をはるかに超える感情、すなわち茫然自失をもたらす。「どうする……」それでもこの男が完全に自失したまま戦闘に巻き込まれなかったのは幸いだった、自我を取り戻した彼はカメラを足元に置き、腰のホルスターにはめたイタリアのベレッタ社製拳銃を確認する、もちろん万が一の事態に備えての措置、のはずだった。再び記録を取ろうとカメラを構えてアクトロス２５２２トレーラーから顔を出した直後、彼の視線の先に走ってくる人間の影を見た。「なっ……」

「邪魔だっ！」その人物がはたして誰なのか、それを確認する前にこの男は前から走ってきた人間に右手左でほほを殴られる。「てめえ…」こいつはテロリスト、直感した彼はカメラを放り捨て、背中からそいつに掴みかかる。一応は警察官だった身だけあって暴れる人間を倒して確保するの十八番だ、首に腕を回し、後ろから右足を出して相手の足を払い、そのまま相手を正面へと突き倒す。「くうっ…このっ！」「っ…ちっ！」しかし相手も機関銃と爆薬をかついで突っ込んでくる身、彼ともみ合っているうちにあおむけ姿勢になった所で、彼の腹元に右足で蹴りを入れ、負けじとＮＳＳの韓国人も相手の顔面にストレートを叩き込む。手と足が入り乱れる肉弾戦、ＮＳＳの彼はわずかに落とした拳銃へと意識をそらし、姿勢を浮かせた直後、テロリストに反対側へ突き倒された。「ううっ…」後頭部がメルセデス・ベンツ社製のトレーラーのカーゴに当たり、一瞬意識が遠ざかる、その時に聞こえた音とその男の右手に握られる拳銃。当たれば確実に脳天を打ち抜かれる、その物体の存在で彼の意識が瞬時に戻った。相手の拳銃が火を噴く直前に何とか右前に前転をうち、男の撃った弾はちょうど自分の鼻元の高さであった場所の金属に小さな穴を当てる。かわしたすきに足元に転がった自分のベレッタＭ９２を掴み、勢いで向かい側に止まっていたトレーラーに体をぶつけつつ、テロリストの両手を正確に打ち抜いた。さすがは韓国国家安全保障局の調査員、特殊部隊に匹敵するレベルの射撃訓練を受けている事だけあってスコープなしでも狙いは外さない、右手を狙った１発は見事に二の腕を貫き、激痛にあえぐ相手の男は拳銃を落としてその場にしゃがみ込む。

「この野郎…」ＮＳＳの男は彼を乱暴に蹴り倒し、両足で彼の負傷した両腕を押さえつける。「くっ…アジア系か…てめえはここのセキュリティーじゃねえな……」銃創の痛みに喘ぎながら、彼は下手

くそな英語で呟く。「てめえ誰だ…ここ作った企業の奴か?」

「いや、違う。分かるか?お前らがぶっ潰そうとしたこの機器に関して調査してる身だ…」ＮＳＳの男は感情のこもらぬ声でそう言い、わずかに片膝をつく。「お前の前にあるのが韓国のトレーラー、お前の後ろにあるのがアメリカのだ…お前らの狙いはこのどっちかだろ?」彼は右手の親指で背後を指差す。「ああ、お前らを下請けにしてた大手がここの建設権を取得できなかった、それでお前ら下請けはどん底ってわけだ。大手の裏に頼まれたんだな?ここでテロをやって事故に見せかければエネルゴ・ワルシャワ社が建設権を失う。そうすればお前らに仕事をやる、て、どうだ?」

「違う…俺は違う……」押さえつけられたスラブ系の男が憎々しげな表情でこちらをにらむ。「確かに下請けの連中にアトムエネルゴの奴が来て、何でもいいから建設権を奪取させてやるとはいった。原子炉でもヤードでもどこかで事故に見せかければ、この時勢ならポーランドの企業は確実に終わると……」男は目の前にあるトレーラーの顎でしゃくる。彼の言っている事はあながち間違いではない、２０１１年の日本における原発問題の発生は、ドイツやイタリアのみならず、ポーランド、チェコ、スロバキアなどの電力を必要としている東欧新興国の原子力産業開発にも大きな不安感をもたらしていた。万が一でもトラブルや欠陥、もしくは破壊行動があれば周辺住民の反発は強くなり、その企業の開発と建設は困難になる。セキュリティーシステムがダウンし、テロ活動を許したとなれば、エネルゴ・ワルシャワ社は確かに利権を失う可能性が高い。「しかしそれだけじゃない…上の連中にあれを無傷に押さえろ、あれはそのあとで回収するもんだって言ってやがった……」

「回収する?利権がこっちに渡ったらか?」彼は不審そうに眉を動かす、彼の心のどこかにあった予想は正しかったのだ。やはり韓国の企業連合が製作した原子炉関係製品は、裏社会で取引されているのだ。その事情をこいつは知っている、男の押さえつける両腕に思わず力が入った。「誰だ…回収して誰に手渡す?」

「バカ…下請けのいっぱしの俺が知らねえに当然だろ…」押さえつけられたスラブ系の男は、全てを諦めたように首を振る。その態度から韓国人は、彼のこの目的が結局は金でしかないのだと瞬時に判断することができた。「これをすれば…俺ら下請け企業は建設受注ができる、参加した奴には金も出すってな。ここのシステムを落とす奴は他に雇ってあると言ってやがった」

「フン、そんなもんか……」やはり受注に失敗した大手が下層労働者の不満を悪用した工作だったのか、ＮＳＳの男は今回の事件の裏幕を悟る。２００８年のアメリカ発の金融危機以降、東欧や東アジア…ＡＳＥＡＮに多いＮＩＥＳ諸国を含め…の新興工業国、中東の有力な産油・エネルギー国でさえ民間中小企業の倒産、失業者の増加、投資活動の停滞が続き、途上国程でないにしろ国によっては治安に悪影響が出るほど雇用や経済情勢が悪化している場所もある。彼らが口々に批判する相手はただ一つ、欧米・アジアの大手企業と一部の金融証券企業の資本力が甘い汁を吸っている、正論と言えば正論だが、彼にとってはこれはもう聞き飽きていた。自分と手裕福なわけでは決してないが、そういう当人たちは批判するのみで改善しようとしないからである。それにここまで科学技術が発達し、地球レベルで経済活動や市場取引がなされる現代、大手企業のグループ化や吸収合併がなければ、海洋や宇宙における開発や情報サーバの構築、精密化した機器や製品の自動行程による大量・多品種生産と言った大規模なハード面での活動や金融取引やＣＯ２排出権取引、個人情報共有と言ったソフトウェア面での活動もできない。

しかし…その目的という物はどうやら一つではないようだ。おそらくは単なる原発というハイテク利権をめぐる企業間の確執ではなく、それ以外の目的にも関与している可能性が大きい、男はもう一つテロリストに注意深く尋ねた。「それでだ……分かんねえとアンタは言ったが、国くらいは分かるかそこの?なあ、話を聞いてりゃ国の話の一つや二つくらいは出てくるだろうが…」

「…一つだけ聞いたことがある……」スラブ系の男はどうにかした

少しだけ姿勢を上げる。「…手渡す先は…中国だとな。アトムエネルゴには高性能の物がある、中国が随分いい値をつけてくれ、しかも生産ラインのトラブルで契約に納入できない、だから採算とるための利権を奪取したついでにそれを売ろっつう算段のようだ。詳しくは知らねえけど」

「中国……本当か？」「ああ…それだけは覚えてる…」

「なるほど…やはりか…」韓国国家安全保障局の人間には思い当たる節がある、韓国からオランダのロッテルダムへこの大型機器を乗せて向かっていたコンテナ船、そのコンテナ船がシンガポール港で別の貨物の積み下ろしをしていた時に北朝鮮人らしき工作員が引き起こした潜入未遂の件を彼は思い出した。安全保障局員と港湾警備員との銃撃戦の末に片方を逮捕したが、その後の調査と取り調べで、潜入の目的はコンテナの商品コードの改ざんによるシンガポールでのコンテナの回収である事、裏で韓国側に身柄を引き渡した犯人供述で、北朝鮮当局が中国政府の指示を受けていたという事が明らかになっている。「これは本来開城（ケソン）って工業地域に渡される…いや、アンタには言えん」ふと呟きかけた男は素早く打ち切る。これはわが大韓民国（テハミング）の国家機密だ、北朝鮮でも中国でもない、民間企業であろうが他国の政府関係だろうが、それが国内外であろうとＮＳＳでは業務にかかわる情報の口外を一切禁止しているからである。

周囲でバタバタとあわただしい音がすると同時に、停電で非常灯だけとなったヤードの中にドイツ連邦陸軍の特殊部隊の兵士たちが入ってくる。「うむ…捕虜ですか？」「あ、はい…ここにいたところ、やはり建屋に向かっていたもので…」ＮＳＳの男は慌てたように立ち上がり、なおかつ動けぬように相手の両足の膝辺りを自分の右前足で押さえつける。「周囲もだいぶ静かになったようですね…大丈夫ですか？」

「はい。奇襲をかけてきた戦闘ヘリも制圧することに成功しました」小隊長の男は暗視装置をヘルメットの上に上げ、タクティカル・グローブ越しにトレーラーの荷台を叩く。「米国にも御宅の国の物にも被害は出ていません。原子炉建屋や管理棟にも被害はなしです」

「そうですか…とりあえず、ありがとうございます……」それからＮＳＳの男は後ろに数歩下がり、非常灯によるわずかな光の中で黒い石と化している管理棟を見上げる。見た限り火災は発生しておらず、目立った損傷もなかった。少しだけ安心した、内部に避難している企業関係者や技術者に被害が出たら問題はさらに大事になっていただろう、まあ今でも十分に大事なのだが。「あと…どうにか避難する前に戦闘に巻き込まれてしまったようで…それもご迷惑をおかけしました」

「感謝される、という程でもありません。どういたしましてです。こういう状況下でも自国民や民間人を守り抜くのが我々の特殊部隊の責務ですから……」そこまで小隊長の男が言いかけた直後、東側通用門へと続く道路がにわかに明るくなり、警察車両の警戒灯が複数迫ってくると同時に、上空にも航空機の物と思われる轟音が響き始める。「中央より通信、ポーランド警察当局の対テロ部隊が間もなく到着です」特殊部隊の兵士の一人が小隊長に無線機を持って歩み寄る。「ドイツより在独米軍の対地航空隊と我が国空軍の航空機部隊も発信しました。チェコの対空システムが回復するまでの間、周辺上空で警戒任務に就くそうです」

「遅い…どっちにしろ遅いんだよ全く……」いまいましげに舌打ちし、ドイツ連邦軍の男は夜闇を見上げる。対地攻撃即応装備で発信してきたアメリカ軍、ドイツ軍のＦ－１６Ｃの影が、敷地から少し離れた針葉樹林の上空をゆっくりと右旋回している。いくらレーダーシステムとセキュリティーのダウンが“何かの原因”で重なったとはいえ、さすがに来るのが遅すぎだ。一歩間違えれば原発建屋や管理棟で、民間の犠牲者が多く出ていたかもしれない事態なのに。

「フン…やっぱりアトムエネルゴ社の下請けだったか…」兵士たち

によって上着の下の胴体に巻き付けた爆弾と所持品をはがされ、負傷した両手と両足を４人がかりで抱えられる男、部下の部隊員に手渡されたカードタグを小隊長は手に取る。先ほど建屋内で銃撃戦になった奴と同じ、アトムエネルゴ社の関連会社の社名とアトムエネルゴ社のロゴが入っていた。

現地警察の人間複数と共に、ＮＳＳの調査員は管理棟の入口へと向かう。すでに管理棟入口の自動ドアの前には、地下に退避していた民間技術者や工事関係者が姿を見せている。当然その中には同僚の女の姿もある、男は少しだけ安心した。韓国の局本部と大統領官邸にはこれでいいと言える、中国が絡んでいるらしいという事態ではあったが、あとはＥＵによる企業や武器の出所、拘束した実行犯やハッカーの調査の結果を待てばいい。

ベルギー・ブリュッセル市　ＥＵ本部

「一応……正体不明のヘリ部隊は撃墜、当局部隊による生存者の拘束、完了しました…」オペレーターの男が卓上情報端末に表示されたリードアウトを読む。彼の声からは緊張からくる固さが少し抜け、彼は大きく息をついて、オフィスチェアの背もたれによりかかった。

「周囲の安全が確認され次第、ＩＢＭからネットワークの再構築が送られます…」

「そうか。これで何とかなった、それでいいのか…」彼の背後に責任者の女と共に立つ男が軽く後ろに下がり、体の正面の腰の高さで両手を組み合わせる。「結局…爆発を所持、数名建屋に侵入したこ

とから目的は原子炉建屋に損傷を与える事、そう見てよさそうだ」

「ええ、表面上はね…」

「表面上？どうしたんだい？」背後から液晶ディスプレイに映るリードアウトを覗く彼女、その言葉に同僚の男は眉をわずかに動かす。

「まあ確かに、今回の出来事からしてただ事じゃないな。個々の建設利権の取得にしくじって下請けがつぶれる、それに不満を持った労働者層がテロを起こす…それにしても大きすぎる話だ…」

「そう、その事よ。アトムエネルゴの下請けの失業者、彼等だけでここまで大事を起こせるはずがないわ…」女はリードアウトに目を移しながら続ける。彼女自身、自分の直感には不思議な確信感があった、そうであるに違いない、と。「彼らはまたしてもアサルトライフルにロケットランチャー、旧式ロシア製のそんなものを持っているの。そして…」彼女は左手の人差し指の先でオフィスチェアの背もたれをつつく。「…今度はロシアの小型戦闘ヘリＭｉ－８を２機、そしてクラウドシステムから侵入して発電所全体をダウン。…労働者系のテロリストじゃこんな事は出来ないのよ…」

「確かに、Ｍｉ－８なんてどこで手に入れたんだ…すなわち、ああいう事だ」男は右手をチェアの背もたれにかけ、体重を若干寄せる。

「先月終わりからそうであったように、おそらくヨーロッパ全土にこのところロシアの武器が、って奴だ」そう言う彼自身、あまりにも大きなものを感じ、わずかに右手に力が入る。緊迫し、かつ重苦しい彼の心情を移すが如く、部屋の薄暗さが一層際立って映った。

「ったく…ギリシャ、スペイン…押収されたライフルはロシア軍に登録されているだ？…冗談じゃ済まんぞ…」

「失礼、ＩＢＭのドイツ支社から連絡、入っています…」２人の左手からタブレット端末を持った別の男がゆっくりと歩み寄る。「ストラホスワフに本日の夜には技術者が入れるそうです。端末の電源再起動と同時に支社のサーバからバックアップのデータとウイルススキャンプログラムを送信、クラウドシステムとセキュリティの再構築とウイルスのスキャン・隔離を同時に行うようです」「そうか、

セキュリティ自体は今日中、ああ、今日中、にも復活、か……」男は右腕にはめたシチズンのクオーツ時計をちらりと見つめ、思わず苦笑が漏れた。今回の事態に対応しているうちに、どうやら日付変更時刻をとっくに過ぎてしまっている、情報収集と通信を行うこの部屋の薄暗さのせいで時間間隔がマヒしたようだった。「セキュリティが始動すれば、多少は安泰だな……」

「はい。ただ、ＩＢＭの方もやや懸念を抱いているようでして……」

「ん、どうした？ＩＢＭは我々の警備が悪かったと？」タブレット端末を持つ男、ディスプレイに表示された文字を読みながら、やや深刻そうな表情を浮かべている。「そういう訳ではありませんが…スマートグリッドシステムに、外部サイトからサーバを攻撃して侵入するのはほとんど不可能らしく。それができるのはニューロン社の開発している三次元階層半導体を利用した計算回路レベルの処理力が必要だそうです」

「三次元階層使用、か…まだスパコンレベルの大きさだ…」かなりの驚きを覚えながらも、男は至極冷静な口調を保つ。英仏合弁の新興大手企業であるニューロンコンピュータ、同じように多重階層型量子レベルＩＣ回路の実用化に成功しているのはＩＢＭ、ＨＰ、マイクロソフトといった彼らのライバルとなる米国の超大手情報技術機器大手企業の極一部だけだ。そのＩＢＭのセキュリティ、人の背丈以上の大きさで部屋に並ぶ躯体に内蔵された機器に収められたエネルギーインフラ、都市警備システム、経済取引システムや工場のオート生産ラインの守護神を破る技術、それを持つのはニューロンしかないはずだ。「それをどこで共犯者は手に入れた、そういう問題になるな……」

「ええ、おそらくはハッカーが大金を条件に、って事になるわ…」

女は左手を右手のひじあてにし、見ての先を顎に当てながらゆっくりと歩いた。今まで得られた情報を彼女なりに考える限り、この問題は一筋縄でいかないどころかヨーロッパ連合が経験したことの無い規模の国際問題につながっているかもしれない、漠然とした不安

感に足取りが重くなるのを感じた。「ニューロン社と言えば…ロシアの情報技術研究機関とコンタクトしてる、そうだったな？」「そうね、ニューロン、ロシア、そしてデモやテロに出回るロシア製の武器、この事態はかなり複雑な予感がするわよ……」

情報端末のディスプレイ、キーボード、コンピュータの躯体が並ぶ部屋を出、男はエレベータホールに向かった。喫煙室があるのは3階、夜景でも眺めれば少しは時間感覚が戻ってくるかもしれない、そう思ったからだ。

エレベーターを使って3階に上がり、彼は通路の突き当りにある喫煙室へと向かう。空気清浄機と空調機器の静かなうなり、背後でドアが閉まった後の沈黙、そしてガラス張りの展望窓の外に広がるブリュッセル市の新市街地の夜景。EU本部の周囲にはこれという大きな建物がないため、ここから現代的なビルが林立する再開発地帯は眺め放題、確かに今が夜であること、窓の外に広がる景色とガラス越しに伝わってくる外部の空気の冷たさから彼にははっきりと分かった。しかし、少しずつ生物という人間であっても完全には離脱できない概念の持つ生物的本能の感覚が少しずつ戻ってくる一方で、先ほど彼女が言っていた言葉の意味が重苦しく彼にのしかかってくる気がする。右手で煙草を一息吸い、左手で携帯端末を見ようとして男はすぐにそれを止める。端末のコンソールやディスプレイはもううんざり、またしても秒単位で飛び込んでくる情報に接していると目がおかしくなってしまう、そんな予感がしからだった。

２０１３年　２月２３日　南太平洋エメリア　イーグリン海峡　４時００分

「……リーヒュン、そういう事なの……」船舶の構造物の特性上、この位置だと海上を流れていく風も、いわゆる“ビル風”となって容赦なく吹き込む。隣で言葉を失う彼の心境を謳う風、サクラにとってはそう感じられた。「……そういう事が…本当にあるんですか?」リーヒュンは航空機用エレベータの海側にある…ほかの淵はフライトデッキと一体成型のため設置されていないが…手すりにツルをかけ、あごの部分を力なく手すりの上に乗せている。義妹のフローラが、またしてもフローラに関わる事態がこの先に待ち構えているなんて、このサーナイト種族に告げられた言葉を最初は否定したかった。しかし、言葉進めば進むほど自分のあの感覚が鋭くなり、自分の感覚が伸ばす思考の手が意識の水晶の周囲、特にそれがうごめく流れの先にあるであろう事態らしき事象に届いてしまう。それがもたらした感覚は、彼のひょろ長く葉っぱの生えた首から背中を通って尻尾の先までを冷たさとなり、一番恐ろしく感じる遅さで伝わってきたのだ。結果はあまりにも非情だった、彼が首からぶら下げたゴルフボール大の翡翠、首元から伝わる関係は間違いなく彼女の話に反応していた。「……神秘、僕らの信じる現象、でもそれが……」

「…今こうして現実になっているのよ。しかも人間が繁栄するこの時代に」彼女はベイリーフの葉っぱの生えた首元にそっと右手を当てる。少しだけ冷たい、リーヒュン・バイリング・グリーズの意識の水晶で対流する戸惑いと不安、そして直接の血縁こそなけれど自分の家族が、しかも自分より年下の存在がポケモンという生命体の持つ性質という超自然的現象…人間のように“物理学”という名はとらねどそれに対する理解くらいはこの文明にもある…に巻き込まれているという恐怖を外部に放っている。「それでも、あなたのやるべきことは重要なの、最初に言ったでしょ?」サクラは優しくリーヒュンの首をなで、温めてやる、母親が息子にするかの如く。「あなたの使命はフローラを単に救い出すことだけじゃないの。私に

も完璧には見えないけど…少なくともポケモン達の伝わる物が正しければ、あなたは現在のこの文明を救う程の能力を持ち、実際にそれを成し遂げることができるのよ……」上手くいう事が出来ない、人間の大学を出ているにもかかわらずその概念を的確、かつ普遍的な感覚や想像で己の意識にインプットできる言葉や解説法を見出すことができぬ、意識の水晶が恥ずかしさで熱くなるほどの感情をどうにか押し殺し、彼女はさらに息を吐き出しつつ言葉を続けた。「いい？今はまだあなたにとっては辛い現実ばかりで…ええ、もしかしたらあなたが、あなたみたいな性格でも逃げたくなることが出てくるかもしれないの…」「それは…それは知ってますよ…もう…」ベイリーフ種族は思わずツルを使ってサーナイト種族の右手をしっかりと握る。「…そういう事は考えれば考えるほど大きくなりますから。やるまでは意識の別の所にしまう、それが僕の…」

「違うのよリーヒュン、それでは済まないの…」彼女は思わず左手も彼の鶴見線カナリア色の首に当て、わずかに力を込めてしまった。サクラ・フユツキの意識の水晶をありありと満たす不安と恐れという名の気体、今は彼の性格をポジティブに見る精神的余裕さえ失われたいたのだ。「あなたが見るのはとにかく、ええ、そういう流した言葉じゃ済まないの。あなたのツル先１つ、あなたの前足の踏込１回にこの世界の…」そこまで言いかけて彼女の声は尻すぼみになる。言い過ぎた、そういう後悔の念が大波となって水晶の内部にある感情抑制の堤防に当たって砕ける。「いいえ、ごめんなさい…でもそれに匹敵するレベルの状態に入る可能性は…」

「ツル先１本……何になるんですか？」しかし彼にはすでに遅いらしい、彼女の言いづまった言葉に含まれる意味、それにリーヒュンは反応してしまった。こうなるとこのベイリーフ種族が引き下がるはずがない。「それが何か？躊躇するようなことなんですかサクラさん！？」

「い、いえ……」迫ってくる彼の勢いにサクラは思わずたじろいだ。彼の目に映る明確な意思、中途半端に紛らわすことが許せないこの

ベイリーフ種族らしい強い感情が、意識の水晶の内部からあふれ、ツルを通り、サーナイトの両手を介して彼女の水晶の外壁に当たる。「で、でも…今あなたに言っても理解できないわ。それがあなたの重圧になるだけだったら…」「重圧なんて気にしなきゃ問題ありませんよ！」ベイリーフがさらにツルを強く握ってくる。「理解できなくても留めておくことくらいはできます、はい。必要になれば出せばいいじゃないですかいつも。つまり……」彼はそこまで言いかけて最後がすぼむ。じれったいながら、次の言葉が突然思い浮かばなくなったのだ。「…大人の対応しなくても…自分は、です」

「もう……それだからダメなのよ…」案の定リーヒュンはこうだったか、サクラはいう事を聞かない年頃のわが子を彼の中に見た気がする。「いい？自分の本音を包み隠さず相手も受け止める、それはポケモンという本来のものね。ええ、そういうものよ。ただし…」彼女は彼の葉っぱの生えた首元にしっかりと両手を当て、彼の小豆色の瞳を真正面からと見つめる。「…それだけじゃ理解できないことだってこの時代は多いの。そう、私たちには大きすぎてとても理解できない事もね…」サーナイトはベイリーフの視線からわずかに逸らし、南半球の初秋の空に浮かぶ満天の星空を見やった。サクラにとってもこの話をするのは本当に苦しい、リーヒュンの事を考えるとまともに彼の目を見れない。「そういう事よ。あなたは私が行ったことに集中して、いい？無効についたらもう1回確認するだろうけど、あなたの今後に関しては私が保障するわ。だからあなたは、ね？」

「でも…このまま終わったら…」ベイリーフはなお不満げな、というよりサーナイトが言うであろうはずだった言葉に対する不安に駆られ、そういう表情をしている。「余計に集中できませんよ僕は。これはたぶらかすとかそういう問題じゃなくて、当然の…」

「リーヒュン、いいでしょ？これ以上は早いの」彼女は少し語気を強め、両手のツルが痛いと言わんばかりに戻す。「ともかく…あなたの背後の事はユイリィ…彼女はどうだか知らないけど……そうい

う事なの」彼女は右手の先を彼の鼻先に軽く向ける。しかしその分、口調はやわらいだように感じられた。「あなたにはやるべき事がある。あなたのいいところを生かして全力でやってね。オッケ？」「いい所ですか…まあそれなら…」

「うんうん！ヒュンの後ろはウチが全部持ちだもんね！」リーヒュンの左にいたユイリィが嬉しそうに彼の首元にすり寄る。「任せてくださいサクラさん！赤青二色で真円を描くという事かな、うん。ヒュンが絶対大丈夫なようにやって見せます！」「もう……そんなに軽く物事扱わないのユイリィ。あなたが年上でしょうに」サクラはメガニウムの相変わらずのしぐさに半ば諦めた表情を浮かべ、それからゆっくりと彼女に歩み寄る。実際にやるのはこの２匹、これに関しては自分が介入する権利はない、それは知っていても相変わらず彼女に対する心配と不安は尽きない。「それと…前も言ったでしょ？もう少し大人になりなさいって。こう…今は彼と仲良くする場所にいないのよ」「ふいふい…でもいいじゃないですか仲良しなんですから。仲悪いより１００倍マシですよ…」メガニウムは少しほっぺを膨らませ、ウグイス色の体の重心を自分の方に戻す。確かに先月の終わりくらいにそんな事で一悶着したっけ、何かと破天荒なユイリィ・プレミドールでもそれをわきまえるくらいの融通はあった。「“菊の花の上にむくげの花を植えよ”、聞いたことありますよね？暗くなるくらいだったら無理に元気づけてやるのも優しさのうち、そういうのでいいじゃないですか…」

「そういう解釈しかしないからあなたは…まだ任せられない…」サーナイトは彼女の首元に生える大きめの花びらを、自分の右手で軽く動かす。この能力を持つ自分達に必要な気質、それを理解しているのかは知らないが、彼女にはまだゆだねる事が出来ない。「…いいわね。自分が言った通り、リーヒュンをばっちりとフォロー、必要とあればあなたがやるのよ。いい？」「もっちろん！頑張ろうねリーヒュン！」メガニウムのツルがベイリーフの頭に生える虫食い葉っぱをはじく。「あ、ああ。もちろん俺は必要だからこそ全力で

当たるよ。てか頭の葉っぱを…」「うんうん！ヒュンの葉っぱをパタパタしてると気持ちいいよ。新しいうちの持ちわざかな。うん」「ったく、それだからユイリィは言われるんだよ…」頭と首の葉っぱは種族の急所、それをメガニウムがツルで勝手にいじりまわしてくる、悪気はないとは何となく理解できるが、それでもベイリーフは思わずツルで掃った。「大丈夫大丈夫！ちゃーんと気持ちいい程度にしとくからね…」当然のことながら止める気配を見せない彼女、もちろん彼女に悪気はない。リーヒュンの困りと嫌がりが入り混じったその表情、ユイリィにとってはそのほうがいい。この数か月間の途方もつかない状況と理解するにはあまりにも大きすぎる概念、それに対してあらかさまに戸惑ったり不安な顔をする、そんな彼を見るより何倍もよかった。

「もう……いつまでたっても子供なんだから…」相変わらずこの彼女はどこかが外れている、そのくせ必要になると鋭い直感と整然とした正論を持ちだしてくるからたまったものではない。サクラは諦めたように両手を腰のあたりに当て、２匹の背後にいたグレイシア種族に視線を移す。「テルル、色々と大変だけど、よろしく頼むわね……」「え、ええ…」「…そうよね…誰が隊長になるべきか、私でも結論はつかないのよ…」やはり何か引っかかった表情を浮かべる彼女、サーナイトは右手で彼女のもみあげ状飾りを上に巻き上げているひもを締め直す。右手の感覚から伝わってくるテルル・アストラフスキーの迷い、悩み、積み重ねた経験がもたらす苦しさ、それに押し込められた家族に対する病的ともいえる愛情、このグレイシア種族をテルリウムという彼女にしているものは複雑で、数え切れず、あらゆる感情が入り混じってできた複雑系だ。「…でも、あなたが望む自分の姿をめざす、それを努力する、そうすればいつかは誇りを持てるわよ…あなた自身も周りからも」サクラは紐を最後に締め直し、左右の長さを整える。その表情は穏やかで愛情のこもった彼女らしいものだ。

「あ、あの…聞いていいですか？」グレイシアがわずかに体を動か

す。「ええ、何でもいいわよ」「あ、はい…大したことじゃなし、聞く事でもないかもしれませんが…」テルルは少し口ごもり、わずかに視線を足元に逸らす。こんな事をあからさまに聞いていいい物かどうか、正直迷っている。「……たった一か月ですけど…サクラさんから見て、どうですか私?」

「どうって?」「え?……や、やっぱいいです。はい、すいません何か…」サーナイトのちょっと戸惑ったような表情、やはり聞くべきじゃなかった、後悔の念と共にグレイシアは一歩後ろに下がった。彼女には無駄だと知っていても無理に顔を上げ、かなり強引な愛想笑いを浮かべる。「…それは自分で決める事よね、はい。すいません何か私は…」

「あなたはどう思うの?」「……??」「……自分でどう思ってる?テルルがどう思っているか、それが一番大事なのよ」サクラがテルルの少しずれた種族特有の頭飾りを丁寧に直してやる。「自分がしている事なんて自分にしかわからないものよ。あなたがいいと思えばそれはいい事だし、悪いと言えば直せばいいの……」このグレイシアが自分に尋ねてきた理由が彼女には理解できる、グレイシアがどういう人生を歩み、どのような価値観を作り、どのよう自分の捉え方をしてきたか、そしてそれらの苦労によって掲載された極度に繊細な彼女が自分をどう見ているか。それを考えれば、サクラ・フユツキが多少なりとも同情しない理由などどこにもない。「…バストーク達と合流もあと少しね。最後の瞬間まで自分がどうあるべきか、それを信じて役目を果たせば、みんなもきっと認めてくれるわ」

「……そう…ですよね…」テルルはサーナイトの瞳をちらちらと確認しつつ、相変わらず俯き加減だった。ユイリィにもそう言われたっけ、自分の尺度ですべてを図ることを人間たちに根っから否定されてきた自分、半ば自虐的な思いで自分の尺度を否定し、どうしようもない性格ながら他方の尺度から自分を見出そうと努めてきたのだ。そのせいで近くにいるベイリーフとも、今はいないル

クシオともトラブルになり、周囲に相当な迷惑をかけた、それでも変えようがなかったのは自分の尺度に対する根底からの自己否定があったからである。しかし、それがあまりにも不自然に映ったのか、いやサクラやあのメガニウムには、その能力をもってして見透かされているのか、やはり自分の努力は奇妙なものだったのか、そういう複雑な気持ちになる。

「今回はリーヒュン達と一緒についてきてくれるのよね。あなた達の方から出てくるとまでは思わなかったわよ…」サクラはわずかに姿勢を下げ、戸惑った表情を浮かべるテルルの左前足を右手でそっと取る。表情を見れば、彼女の意識の水晶から伝わってくるものが手に取れる、このグレイシアの精神的な迷いや苦しみという霧はそう簡単には消えないだろう、しかしそんな彼女でもこうして隊長の代行をし、こうしてここまでチームを導いてきた、今はそれだけでも称賛するべき、そういう感情は素直に出せる。「…ありがとうテルル。よろしく頼むわね2匹を、あなた達がいれば随分と心強いわ」

「…すいません…心強いと言われるほどじゃないかもしれないけど…」少しだけ照れくさそうに表情を赤らめるグレイシアに、サーナイトの表情にやさしい笑みが広がる、グレイシアの左前足から伝わってくる確かな感触、彼女の意識の水晶の中に小さな自信の芽は既に出ているようだ、あとはそれが少しでも大きくなってくれれば、そう願わずにはいられない。「…いいのいいの。あなたならできるわ」

「もっちろん、俺も一緒ですよね！」一緒に褒めてほしいのか、それとも単にテルルに構ってほしいだけか、ブレイブがテルルの隣に駆け寄り、サクラに褒めてくれと言わんがばかりの子供のような笑顔でサクラの方を見る。「へへ！俺だって志願したんすよ！ヒュンやユイちゃんのために…もちろんテルリンのために…」「はいはい、良かったわね！」グレイシアがつっけどんに右前足でブースター左腹元を突き飛ばす。「いっつ…そういう痛い当たり方しなくたっていいじゃねえかよテルル。俺は純真なる愛情を…」「いりませんっ

て言ってるでしょうに！構ってほしいのが見え見えよ…」

「あんまり痛いことしちゃだめよテルル、ブレイブだって一緒についてきてくれるって言ってるんだから…」サクラがテルルの右前足を右手でそっと降ろす。「だ、だって…無理なんですよこういうの…」

「…そこはしっかりと相手を見るの。いい？ブレイブにだってあんまり悪気はないんだから……」サーナイトの口調がグレイシアを諭すものに変化する。ただし、彼女にしてみてもブースターの性格があれで良いと言えるものではなかった。なんでもまあ彼はあそこまで変わってしまったのか？ブレイブ・クレイバーの意識の水晶の構造は性格が故に単純、サクラが少しだけ意識を伸ばせば彼の歩みは手に取れるのだが、昔はリーヒュンとかと同じような性格だったはず、彼と出会ったころからそう感じ取れていた。「は、はあ…そうは…したいですけど…」テルルは曖昧に頷く、自分の中では相変わらずブレイブの性格や癖が理解できるはずもないが、サクラがそういうんだったら、という微妙な気体も合って一応同意のサインだけは送ったのである。

「それで…ブレイブも今回はありがとう。経験値の多さはあなたが随一なのよね、皆の事をしっかり頼むわよ…」サーナイトの右手がブースターの頭のフサフサに当てられる。「あと、ユイリィやテルルに無理なことはさせない、言わない、そして変なところを見せない。

あなたがここに来てから言ってるわよね？ちゃんと守るのよ」

「もちろんですよサクラさん！今までに俺がそれを破った事ありますか？」ブレイブからすれば悪気という物は一切ない、もしくは悪気はあっても悟りの境地に入って開き直っているかのどちらかである。

「リーヒュン！ユイちゃん！今回は俺っちが護衛に入ってやるからな！思う存分目的の場所に行ってくれよ」ブースターはベイリーフとメガニウムの方に右前足を上げ、気合を入れるかのように呼びかける。「うん、もちろんよろしくだよブレイブ！」「あ、おう。ブ

レイブの方こそ無茶すんなよ…」

「そうね……しっかり頼むわよブレイブ」サクラは彼の頭のフサフサをもう一回右手で優しくたたき、ふと月明かりの眩しい南太平洋の夜空を見上げる。４匹の中で精神的に一番安定しているのは、間違いなくブレイブである。しかしそういう彼もあまりにも大きな過去の傷を、今なお彼の意識の水晶の底で水晶の表面を時折むしばむ怪物を背負っている、いつかはそれと向き合い、それによって苦しみや痛みがあったとしてもその壁を超克せねばならぬ時が訪れるのは人生という大河の中では自明だ。しかしせめてそれまでは…その時が来るまでは…今まさにそれに苦しむ3匹を導き支えてほしい、そんなサーナイト種族のかすかな祈りを吸い込んでいく夜空の星と宇宙の人工構造物からなる宝石は、何も物言わずに米海軍の艦隊と彼らを見つめていた。

サクラがその場を去るとほぼ同時、彼女と入れ替わる形でチルタリスとオオタチが入ってくる。エンデバーの方は米陸軍の辞令でソーラ地域の警備チームに異動になるらしく、ソーラに入るまで同行するとの事だった。彼自身、人間の機械で世界を転々とさせられるという感覚には慣れていたし、リーヒュンやブレイブと一緒に少しでも長くいれるという感情も手伝って快諾したのである。本来こうやって国連統合軍関係者が移動中のアメリカ海軍の船舶に乗せてもらうという行動自体、それこそ状況が民間に判明すればロシアや中国が（アメリカ自身も、イギリスもフランスといった国連安保理の常任理事国もいい顔はしないだろうが）黙っていない事態だが、こうして上官を許可してもらった上にアメリカ軍関係者と（すなわちエンデバー・リシャトル）の接触さえＯＫなのは、分担金や統合軍の編成、議会勢力の国際地域別の票格差といった諸事情で根強い対立がありながら一応は国連の中心的存在の一国として、もしくは国連

という機関自体を提唱して設立したアメリカ合衆国と国際連合の親密な関係のお陰と言っても過言ではない。

ポケモンにとっては途方もつかない距離をまたしても移動してきた一行、初春と言えど冷たい風に乗って雪が降るカナダのバンクーバーとアメリカのサンフランシスコ（特に前者はなおさらだ）から一転、彼等のくる国連の航空機がエアウェイのフライトプラン扱いでエドワーズ空港で駐機にならず…セキュリティの都合も相まってなかなかおろしてくれなかったこともあるが、人間にとってはこれでも遅い程度ではあるものの、常夏のニュークリア地域を南部研究施設開発用に建設された高速道で移動し、こうして今、南部の国連関係施設からアメリカ海軍エメリア派遣艦隊でソーラ北部を目指している。

目的地に到着するまであと少し、受け入れ先は民間の電子機器・ハイテク機器廃棄物再生処理企業の施設ではあるが国連統合軍のイーグリン海峡警戒管区の港湾施設も併設する地帯である。とはいっても民間の物、統合海軍の物双方ともにアーレイバーグ級イージスミサイル駆逐艦が入港できる深さがなく、南太平洋第１０艦隊旗艦…エメリア地域から資源開発の進む南極沿岸までを守備範囲とする米海軍太平洋艦隊の一角で、通称“エメリア派遣艦隊”と言われている…のニミッツ級原子力空母「バラク・オバマ」からヘリで施設まで向かう予定となっている。

月明かりに照らされる海面、艦隊の遠方には資源採掘プラントの建設や宇宙太陽光発電衛星受信アンテナ施設の建設が禁止され、水産資源確保の操業も禁止されているにもかかわらず、西側のサーマル地域からやって来る中国漁船やニュークリアをわざわざ回って操業しにくるアメリカ漁船が後を絶たない現在の内海の警備に当たるアメリカ沿岸警備隊の巡視船が（航空機も利用されている）２隻見え

る。近くの海上で時々海面下に月明かりによって影を浮かび上がらせ、また海面深くへと消えるミナミハンドウイルカの群れ、知能の高い海洋ほ乳類であるが故、あまりお目にかかれぬ巨大な船舶の姿に驚いているのだろう。そんな世界最大級の大きさを持つ船舶…最近はこの世界最強の空母より一回り大きい民間クルーズ客船が3，4隻はあるが…の要となる航空機戦力を内部格納庫に積み下ろしする部位、右舷後部の電磁式エレベーターの淵に、一概に軍人ともいえぬ人間でない“文明生物”が複数いるのだ。

「おっす、これからの予定って所か。いやあ俺もお前らについていきたいとな、かなりのあれで思ってたぜ…」オオタチは国籍と国際関係を完全に無視した屈託のない態度、終電間際の駅前通りを歩いていたら高校時代の友人に出くわしたような感触だ。エンデバーは種族特有の素早さで4匹の元に駆け寄る。「あーあ、夜ってのはやっぱ眠れないものよね、みんな戻ってこないからどうしたのかって思ったよ……」チェギョンもそれに続くように一行の場所へと軽く飛び上がる。相変わらず彼女が夜間眠れない原因はただ一つ、人間と同じように携帯端末いじりに熱中しているからだ。それもこれまた変わらず友人たちに自分の居場所をねつ造するため、このチルタリスが国連統合空軍の航空騎兵隊東アジア管区の一員であることは知られており、エメリア地域に派遣されいる事も知られている。問題は自分が統合軍というより国連内部の研究機関が作ったチームの一員として、世界各国を飛び回っている事がばれないようにすること、韓国在住のカリワザキ一家にもこれは内緒であり、万が一ばれれば統合軍をやめさせられるどころか、韓国政府ともつながりの強い自分が中国との対立が深い組織に関与していたこととともなり、ただでさえ険悪な韓国・中国の関係をさらに悪化させかねない。もっとも当の彼女にそこまでの自覚はなかったが。「それにしてもさあ、

サクラさんのしゃべりっぷりはハンパないわねえ、どうしてこう…ねえ、趣旨から言わないんだろうね…」深夜にもかかわらず饒舌なチルタリス、今の人間のように深夜の活動も平気になってしまったようだ。「話ってのは主語の次に動詞がいいのよ、目的語はそれからでもいいのよ」

「おう、ギョンちゃん！やっぱりチェギョンは夜も平然と調子を保っているな！俺と仲良くする相手にぴったりだ……」女の子が来るなり眼の色を変えるブレイブ、フサフサ尻尾が犬の本能のごとく振れ、彼はチルタリスのモフモフ翼にアタックを仕掛ける。「相変わらずお美しい翼だぜ！どれ俺の抱き枕に……」「はいはい分かったわよ！させない、言わない、見せない！」「うげえっ？！」テルルが彼女に向かおうとしてブースターの右耳を右前足でつかみ、強引に自分の傍へ引っ張る。「もうこのバカっ！サクラさんに言われたばっかでしょうに。海水でもかぶって頭冷やしなさいよ…」

「いってえなあ……お前だって乱暴なことすんなって言われただろうが…」激しい痛みに右前足で思わず右耳を押さえるブースター、耳が抜け落ちてしまいそうなほどの強烈な感覚、これに限っては気持ちいいとは言えない。「それとこれとは違う、それとは違うのよ！すなわち……」グレイシアは愚痴のようにつぶやくブースターの右前足を掴みかけ、そこで止まる。よく考えてみれば自分がこういう対応の仕方をしてしまうのも、サクラの言う“相手のいいところと悪い所を区別することができない”という、自分の性格が抱える問題があるのだろうか、それに対する劣等感が意識の水晶から突如として湧きあがり、彼女の口をふさいだ。「ごめん…まあ…とにかくバカなことをしちゃだめよ…」

「うんん…？？テルルさんが起きてるんだ…」ブレイブの背中に乗って寝ていたイーブイがもごもごと動く。これだけの声でもここまで寝ていられるという事は、よほどのお疲れなのだろう。「あ、…ごめんねミオカ……」ミオカに対してテルルの表情が一変する、彼女が弟のエルヴィンの姿と合致するからか、それともポケモン特有

の子供という存在に対する感情からか、いずれにしても優しく扱い、必要な時は体を張って守るのが常だ。「そうだよね…ここ1月はずっと外回りだもんね…家族を探せないし…本来そのために…」

「うんん、ミオカは全然平気だよ…」ブースターの背中から飛び降りるイーブイ、ちらりと家族の事を思い出したか、少しさみしそうな表情を出したものの、すぐにそれは普段の子供っぽい物に戻った。

「それに…ブレイブやテルルさんと一緒にいろんなところに行けるのは楽しいし…」

「…ごめんね…本当は私とブレイブでいろいろしてあげたいんだけど…こんな身でさ…」「まあな…俺らが少しでも小器用に動き回れればって奴だろ?」ブースターとグレイシアは思わずお互いの顔を見合わせ、ほぼ同時にため息をつく。やはりミオカを軽い気持ちで連れてきてしまったことに問題があったのだろうか、お互いの目から後悔にも似た懺悔の気持ちが読み取れる。「すまねえな…もうちょい…待っててくれるか?」ブレイブが両前足で幼い彼女を抱き上げる。「時間ができたら…いや、悪い。時間は作るもんだ、なんとかやりくりして…お前をエメリアの行ける場所に連れてってやるから…」「うん…」イーブイは自分でブースターの前足から飛び上がり、彼の背中に掴まる。「私はいつでもいいよ…どこまでも行くから」

「……ミオカ…本当にすまねえよ俺ら…」彼女の表情には10歳前後という子どもらしい隠しきれない感情がありありと見える、ニミッツ級空母の航空機用電磁エレベータデッキを握るブレイブの右前足に思わず力がかかり、不肖にも溢れそうになった感情をぐっとこらえた。自分の家族も、妹たちもこうして自分を待ってくれているのだろうか?自分は父親を除く一家で唯一の男(オス)、ポケモンだから仕事に性別差はないが、なにかとオスがいないと困ることも多かろう、何としてでも自分は無事にあそこへと帰ってやらなくてはならない。一度は。そんな年端もいかぬ家族の姿が、目を閉じるとまぶたの奥にありありと浮かぶ。彼は右前足を軽く踏み、首を大きく縦に振っ

てその感情を振り払った。今は出すべきではない、いつかすべてが終わった時に…周りにいる全員が無事に帰った時に…改めてそれを思い出し、心の故郷に寄り添ってやりたい……

「いいなあミオカは。ブレイブとテルリンがちゃーんと教えてるからかな…」ユイリィがツルでイーブイの背中をなでる。「い、いや…私がそうって言うより…ミオカがそもそもいい子なのよ…ね？」

「うん…でもテルルさんもブレイブさんも…うん」「恥ずかしいよ…私こういうのホントは苦手なのよ…」グレイシアは突き出してきたミオカの頭の上あたりを、恥ずかしそうに顔を赤らめつつ押さえる。自分が面倒見がいいとは思えない、むしろ人当たりが、いや他者に当たること自体が苦手な彼女、正面から褒められるのは実は初めてだ。「さすがテルル、小っちゃい子のお世話はバッチシだね。うん。それに引き替え…」メガニウムは頭の上にある黄色い雄蕊に掴まって眠りこけるシィエミに視線を移し、あらかさまに表情が嫌そうなものになる。「ロズリンは一体何を考えてんだか……この子が何か役に立つことなんかあるの…」「……美味いでしゅねえ…」

「…ったく寝言？これだから…どうすりゃいいんだろうウチ…」彼女は諦めをたっぷり含んだ表情で頭の上にツルを伸ばし、ロズリンの背中に生える草を撫でてやった。今更ながら彼女自身は小さい子の面倒を見るという才能という物を全く感じ取れない、これは考えれば考えるほど不安が募る。あのベイリーフのように“何とかなる”とでも思いたいのだが。「どうすりゃいいんだろって…リーヒュンに今聞くことじゃないよね…」メガニウムは海側に面した位置にある手すりにツルと前足をかけるベイリーフの表情を伺う。掴みあいにこそならなかったが、フローラという個人事情よりも自分の使命を優先しろ、その意味が理解できる彼の表情は、１８という年頃にありがちな意思の流浪と動揺が明確に表れている。「うん…そうだよね…」彼女は今何か言う気は起らない、自分の大切にするものより自分が無意識に背負ったものを最優先、もしくは大切なものを

捨ててまでやる事を遂行しなくてはならない、このメガニウムでさえ個人的感情を押しやるのに5年はかかったものを、さらに過酷な状況に置かれたベイリーフは流し去ることができるのだろうか。

海洋を進むアメリカ海軍の大型船舶、風に乗って流れ込む潮の香り、長期間待たされた国連海洋生態系保全研究機関…アメリカ、カナダ、ドイツの民間企業と国連が建造した巨大施設。養殖漁業に対応する魚介類の遺伝子改良や飼育実験はもちろん、絶滅危急種の保護とクローニング保存、海洋居住のポケモンと通常海洋生物の疑似共生環境による海洋環境変化のシュミレーション、海洋汚染・海洋酸性化に伴う海洋ポケモンの健康影響の調査などが行われている…にある巨大プールのさわやかなものと異なり、まだ夜の明けぬ空の暗さがのしかかってきたかのごとく重く、そして混じりけの多い物に感じられた。

「ああ、そうそう…」こういう状況でこの話を出すのも、いや、言った方がよさそうだ、オオタチは大きく息を吸い、その話を切り出す。「俺もさ…その、実はお前らと同行していい、てか“しろ”ってさっきアメリカ軍の人間から言われたんだよな…まあ上層部じゃなくて末端の誰かが勝手に決めてんだと思うんだが…」

「マジか！そりゃあ俺ら……」ブースターが思わずオオタチの方に飛び付きそうになったが、ベイリーフとメガニウムの方をちらりと見つめ、それは止めておいた。「いや、すまん。そういう事なら最高だ…」彼はオオタチの背中にあたりに右前足を回す。「ヒュンもああいう状況だからな…よろしく頼むぜ」

2月24日　ソーラ北部の森林地帯　0時50分

1日間ぶっ通しで歩いて目的地に向かう、徒歩やその他での移動が

原則のポケモン文明にとっては“たった”の1日というレベルだが、周囲に広がる光景がその感覚を全員から奪っていった。「またここも…なんですか？」「ええ……ここも再生工場からの移民とのようね…」今宵も月明かりに照らされ、かがり火が無くても移動に十分な明るさの中、サクラが一行の左手、河川敷に点々とある黒い影を右手で示す。ユイリィがウグイス色の首をわずかに伸ばし、木々の間から見える黒い小山に視線を移す。「そう、ですよね…見張り台も真っ暗ですし…」しかしそんな事を確認しなくても、彼女の意識には目の前に広がる構造物やそれを使っていた文明がどういう状況に陥ったか、目の前に見える視界以上に情報が感覚として伝わってくる。「…やっぱり、あそこの開発が…この辺りの治安もですよ…」メガニウムの首元は、自分たちの文明が置かれる苛酷な現実に悲しみという冷気によって確実に寒く感じられる。

「さっきのって…人間の機械で降りた場所の事ですか？」リーヒュンもツルに持ったかがり火を前に寄せ、木々の間から見える河川敷の光景を覗き込む。「うん…ウチラの言った国連施設の隣にあった建物、あそこの会社があの周りを思いっきりね…」

「追い出されたって事か？」「うーん…それに近いかも」ベイリーフの愕然たる表情に、メガニウムもまた困惑と諦めに満ちた口調で答える。彼女とて人間文明のやり方には数多い不満がある、とはいっても反論する気も彼に愚痴る気も全く起こらない。どんな悪い結果でも事実は事実、そうやって受け止めるようユイリィは、いやサクラの方もまたそう学んできたのだから。「…まあ人間同士の開発でもお金だ土地だ仕事だ、てね。いろいろもめちゃうレベルだよ…すなわちは…」彼女はツルをベイリーフの前ですっすっと動かす。

「ポケモン何て二の次三の次。“ないオボンの実を願っても”て言うのと同じかな…」

「フン…それがどういう状況か見せてみろ」リーヒュンの葉っぱの生えた首元に伸び乗るブレイブ、彼のツルが持つかがり火の温度に対し、本能がその熱気を吸い込もうと横隔膜をぴくぴくとけいれん

させている。「ヒュン、どのあたりだよ？」「ああ、そこの隙間から見える黒い奴かな…ああ、すまん、お前はダメだったな…」「ったく…いや、いい。何とかすりゃ俺の目でもな…」彼のツルが示す方向、ベイリーフの首の葉っぱを右前足でつかみつつ顔を前に突きだして見回す。鳥目のブースターには月明かりとかがり火があってもぼんやりとしか見えないが、そこは親友関係、ベイリーフのツルが示す方向を彼の目線は正確にトレースした。「ああ、確かに……ありゃあ集落の見張り台だな…」見張り台というのは、かつて中世ヨーロッパの人間の集落にも存在した通り、盗賊集団や気象災害の接近を事前に予想する建造物の事だ。人間の世界でそうであるように、本来生物が休む時間である夜間であっても登板の物が火と共に監視に付き、不測の事態があれば集落の警備体制側に報告する、これもまた一般的には１５歳前後以上のオスメス問わずに、集落の住民は一度以上させられる役職である。

「しかし…あそこを含めて火もなかや誰もいる気配がねえな…」「だろ？すなわち、単純に言えばあそこに住んでいた住民は追い出された…」ベイリーフの声が次第に暗くなり、彼の視線も前脚先の爪側へと若干落ちる。「そしてその原因は…俺たちが降りたあの近くにあった人間の奴のせい、て事か。ユイリィ？」「ま、まあ…可能性はそもそもうちらの文明のせいかもしれないけど……」メガニウムが左前足の爪先で足元の小石を軽く蹴落とし、大きく息をついた。自分はそう言ったつもりはないのだが、どうやら彼の思考には単なる感情論となってしまったようだ。

「……まったく……なんて奴らだ…」リーヒュンの右前足が軽く土に打ちつけられ、足裏に固い表皮…人間でいう“つちふまず”…に土が当たる音が近くに響く。「え？…違うよ違うよ！ウチが言いたいのはそうじゃなくて、ただそういう…」

「結局そういう事実がある、ポケモン達は人間に弾圧されてるって事だ……」ユイリィの方に向かって彼はツルをつきだし、彼女の鼻先で指し示すかのように前後に少し動かす。「君は平気なのかよ？

こんな状況が普通か？」「え、いや…だからいいとか悪いとかじゃなくてそれが現実なの。ウチやヒュンがどういう感想を持っても…」「ったく…目の前の事ほっといて将来のこと考えられるか？」ベイリーフ種族の口調は、メガニウム種族の口当たりに対する不満となって彼女に聞き取れる。ベイリーフにとっては現実はどうこうとか、もう起こったことは論理的に戻せないとか、そういう“理論的諦観”（彼自身こういう言葉が思いつくはずがないが）というものが弱腰にしか聞こえない。「まあ、俺が言うのも難だけどさ…現実から目を背けんなってか…そういう感じなんだけどさ…」リーヒュンの口調はここに来て少し落ち、薄暗闇でよく見えないぶんツルで持つかがり火に照らされて恥ずかしいのか戸惑っているのか、なんとも不思議な表情に見える。「……バトルのあそこの事もそうだけど、なあ、人間ってのはああいう生物なんだよな。だったら…俺らがしっかりしないと…」

「な、何言ってんの？…うん、ウチは…そういう考え方に行ったことなかった…ちょっと熱いよ…」「ああ、ごめん…」勢い余った彼、ユイリィはツルで彼の持つかがり火を後ろに下げる。「ずーっと人間と一緒だったからね。少しはそっちに行ってもいいかな？」

「俺もこいつに賛成する…」「……ブレイブ？」ベイリーフの首元に後ろから掴まるブースターがはっきりとした声でつぶやく。「……こんな状況ばっか作りやがって、俺がここにいたらあそこの施設をぶっ壊すぜ…」「ほ、本気か…そう熱くなんなよ…」首の後ろでつかむ右前足の爪、ベイリーフには彼のその力が急に強くなったように感じられる。背中もとに乗るブレイブの意識、そこからあふれ出て感じられる何か、背中の辺りが熱さと冷たさがマーブル模様になった奇妙な感覚に襲われる。「いーや、俺は本気だ。こういう状況で平然としてられるかっての…」

ブレイブ・エスコーツ・クレイバーの光を失った暗い目線、思わず振り返ったリーヒュンの水晶に、アメリカ・シアトルのスタジアムで見た彼の表情がよみがえる。あの時と同じ、ブースターのわずか

にエメラルドグリーンがかった瞳の奥からは冷たい感情が噴水となり、４本足にはそこから誘発された力が爪先に現れ、普段は陽気に振れるフサフサの尻尾もその感情に遠慮して下に下がっている。「ふざけんなよクソども……どこまで俺らをぶちまければ気が済むつもりだ…」ブースターのオレンジ色の表皮にある毛は、静かな、しかし強烈な感情の前に一層硬直している。自分が過去に封印した記録、もう見せまい、思い出すまいとして、人間に対する一切合財の感情も涙と怒りと共に水晶の無限遠の奥底に押し込んだつもりだった。しかし…それでも時としてその悠久の循環から感情の対流となって押し寄せる水晶内部の感情という怪物が、ブレイブという名のブースター種族が持つ格別頑強な水晶の表面をむしばみ、悲鳴を上げ、水晶の感情を司る原子炉の制御を狂わせることがある。それが今、それがまさしく今である「ヒュン…お前の能力がどういう奴かは知らんが…な、それ使って…こいつらの仇取ってくれや…な?」「仇って…まあ…そりゃそうだ」最初はやや戸惑ったリーヒュンも、最終的には彼の言ったことにはっきりと頷く。このベイリーフが持つ潜在能力、水晶の周囲にある感情やその行く先を時間という平面グラフを超えて読みとり、また自分の水晶から感情を実体的エネルギーに変換するという、人間から見れば“超常的”能力、今の彼にはじれったいほどわずかにしか感覚として伝わってこないが、首元にいる親友のブースターの感情はそれ以上に別のものではっきりと感じられた。もう少しはっきりと分かればいいのだが今はこれだけの判断材料で十分、ブレイブとて人間に対する負の感情を自分とない間に数多く味わったのだろう。それを感じ取ったのは自分の能力化、友人としての感情なのかは分からないが、リーヒュン・バイリング・グリーズにとってはそれだけあれば十分におのれの行動を決定することができる。「俺とブレイブがいれば頑張れるさ…人間に対しては知らないけど…とにかく自分たちの求める結果には一歩以上は近づけると思うよ、それは…やってみればわかる」「ああ、俺はそういう道を行く…お前はフローラがいるんだろ?目的がそれ

だけあれば俺らには十分って奴だぜ…」

「フローラか…それでって言うのも今は難だけどね……」ユイリィが2匹の方にゆっくりと寄る。「ヒュンは…フローラが助かる、それが今の目標なんだよね。まあそれはそれだよ、うん」「うん…一番近いのはそれかな…」ベイリーフは曖昧に頷きながらも、意識の底で浮かび上がった不安のようなものを覚える。彼女が何を言いたいのか、すなわち自分が見逃している何かがある、直感がそう彼に伝えている。「…それがどうした?そりゃ知ってるさ、そう簡単にはいかないってな…」彼は右前足の傷をツルでなでる。表皮がずる剥けた傷口はまだ鈍く強い痛みを放っている。「…なるべく俺はそれしか考えない事にしてる。それ以上の使命だとか大義だとか…そこまではな…」

「でも…リーヒュンの本当の能力は…」メガニウムが彼の首周りの葉っぱの付け根あたりに、自分のツルを伸ばして当てる。こんな事を言いたくはない、リーヒュンに重圧を与えてこれ以上彼の性格からいい物を奪い取るようなことは言いたくない、でも…これが少なくとも、年上としていえる事なのだ。「……そこにある集落みたいなのを増やさないこと、ポケモン達を救う事なんだよ…」既にゆっくりと移動し始めている一行、彼女はツル先で後ろになりゆく河川敷沿いの黒い影をもう一度示す。こんな事をいちいち言わなくてはならない、普通の感覚では理解できない事は言わねばならぬ、ユイリィ・ランタン・プレミドールの意識の水晶は罪悪感でいっぱいだった。「…ごめんね、今のヒュンにはまだ掴めないかもしれない…でも…今はそれを少し意識するだけでいいよ。リーヒュンのしたいこと、それが能力を引き出す最大の力になるから…」メガニウムはベイリーフの首の後ろをそっと撫でる。「…すべての責任、ポケモンを救う義務は…ウチが取るから…」

「ごめんなユイリィ。俺が身勝手なだけかもしれない……」ベイリーフが申し訳なさそうに呟く、全ては自分の器量不足、目先のことに全てを奪われる自分の情けなさが一層足取りを重くする。「…ま

だ分かんないけど、努力はする努力は。もちろんやりながら考える…」そういう彼の口調にいつもの勢いはない。自分の本来の使命はこれ、フローラの事は副産物にすぎず、自分が本当に意識すべきものはポケモンの文明そのものという広く全体的な視野とそれを顧みた感情なのだ。リーヒュンは周囲に広がるもの、夜闇に沈む景色に浮かぶ文明の残骸に意識をどうにか集中させる。分からなくてもやるしかない、突如現実として湧きあがった感情が彼を突き動かしたのだ。

「そういや思ったんだが……」後ろから歩いてきているエンデバーが、ひょこひょこと3匹の方に駆け寄ってくる。「リーヒュンとユイさんのいう能力ってなんだよ？何かこう…魔法みたいなもんでも使えるのか…？」「あ？そんなもんも知らねえのかエンデバーは…だからなあ…」リーヒュンの背中から飛び降り、彼の脇についたブレイブだったが、その先で完全に口ごもってしまった。具体的に何と言っていいか、それを見たことがないブースターには説明のしようがない。「…ああ…だから能力なんだろ？目には見えねえってからそういう名前がついてんだよ」彼は太田との胴体にフサフサ尻尾を軽く当てる。「すまん…俺にもヒュンにもユイにも説明のしようがない、見せろと言って見せるものじゃねえし…な？」

「あ、ああ…すまんエンデバー…」「うん…確かにね…」ユイリィを含め3匹は思わず顔を見合わせる。全く知識ゼロでこの部隊と同行することになったらしき彼、彼がどういう反応を示すかは分からないが、この半分研究機関かつ半分軍隊のエメリア自治協会公認集団が如何なるものであるか、理解するには時間がかかるだろうに、その見解だけは3匹の視線を見るだけで理解できる。

「そうか…まあ…一緒にいれば見えてくるよなそのうち…」釈然としないが彼らが言う限り確かめる術はないだろう、ブースターとベイリーフの友人であるオオタチは一応認めざるをえなかった。アメリカ軍がどう考えているのかは理解できないが、ともかく彼等と一緒に行動していい事になった、その中で見分けるしかない、と。エ

ンデバー・リシャトルにはそのくらいの理解力はあった。

「例の滝まであと2，3時間ってとこだぜ…」上空から響き渡る羽ばたき音と声、月夜に照らされる木々の上からロックオンとチェギョンが降りてくる。「まあ、あたしらの速さならもう少し早いって所かな……」チルタリスが目指す着地ポイントは真っ先にメガニウム、彼女のウグイス色の背中である。「ユイ！背中にモフってオッケ？」「う、うん！いつでもウチはＯＫなんだよ！うん！」「それじゃあ遠慮なく……それっ！」ユイリィの背中にチェギョンが覆いかぶさり、モフモフ翼を花びらの生えた首元を思いっきりくすぐる。「あはは！ホンット気持ちいい！これはさすがに効いちゃう！うん！」メガニウムの意識の中から先程まであったもやが軽くすっ飛ぶ。これだけで彼女には十分、これだけあれば彼女の気を紛らわすには十分だ。いまのところは。「でっしょ！さすがはあたしの記念品！このために洗ってるんだから！」対するチェギョン・カリワザキも随分と嬉しそうだ。彼女にしても気分の一新を精神が求めている、この数日間またしても目にし、向き合うことになってしまった現実から意識を外すにはこうやって和むのが一番だった。

「おおグラシ！元気にしてたか？」「え、はい…ともかくは…」ムクバードが飛び付きにかかったのはモココ、両翼で彼女の首のモフモフ毛をなでまわした。「どこもケガはねえな…まあこの時間だけで判断するのもあれだが…」「い、いえ…そりゃあ…」グラシデアの顔が彼の翼の感覚で一気に赤くなった。相変わらずロックオンは何を考えてこれをしているのかが見当がつかない、やっぱり自分に対するあれなのだろうか、考えるだけで気恥しい、しかしどこか暖かい感情が意識の水晶の底から湧き上がってくるのを感じた。「よーく見とけよエンデバーもブレイブも。これがアメリカ式の恋愛法って奴だ」

「なるほどですねロックさん…あなたもかなり強引ながらいい女の子を見つけたもんだ…」オオタチが少し苦笑を浮かべながら、モココの背中を右手（右前足）でトントンとやる。ロックオンとは同じアメリカ軍の…世界最強の軍隊であるそこの人間に色々とこき使われるが…関係者同士仲良くした方がいいのかは知らないが、一応は相手の方が先任、アメリカ軍とはいっても現地で雇われたようなオオタチだが、立場を守るする必要は感じた。それを考えると、このモココの彼女も彼女が浮かべる表情に比べれば悪い話ではなさそうだ。「まあ良かったなグラシデア、これだけ気にかけてくれる男なんてざらにいないぜ？腐れ縁は大事にしろよ…」「え、ええ…はい…」

「というとでロックさん、俺の相手は…」その様子だけで調子に乗り出すブレイブ、彼は少し歩足を速め、彼が一番そうするであろうまさにその相手に尻尾から飛び付く。「テルリン！俺がアメリカ式の恋愛方法を…」「いりませんっ！」「ぐえっ？！」テルルの左後ろ足の蹴りがブースターの顔面を直撃、彼は背後に吹き飛ばされる。「もう…今はそんなもんに構ってるほど余裕ないし……」テルルが後ろを振り返り、前足を軽くこすりあわせる。隊長としてロックオンとチェギョンに先を見てねと言ったのは、他ならぬ彼女だ。「えっと…ともかくもう少しって所ね…サクラさん曰くこの辺りはどうにも治安が悪いって事だから、くれぐれも気を抜かないこと、いい？」ちょっと恥ずかしいながら、グレイシアは周囲の全員に告げる。彼女の意識としてはむしろユイリィやサクラに助けてほしい、そういう感情で満たされていたが、緊張と責任感、それにテルル・アストラフスキーとしてのプライドが相まってとてもおくびには出せない。「…とにかくそういう事、いよいよ現場が近いって事ね…」気を取り直したように歩きだすグレイシアの脳裏に急激に不安が広がる。（…本当に…あいつ大丈夫なのかな…？）自分もまたそれを目撃した事は無い、もしかしたら今回は直接目撃することになるかもしれないが、果たしてそれに対する備えというものあるのだろうか

？同情とも警戒ともつかぬ感情に、彼女は再び振り返った。「リーヒュンは…アンタは準備いい？ユイちゃんも、て言えばそうだけどさ…」

「お、俺？…まあ、どうだかな…やれば分かるからってのもあるけど…」リーヒュンが少し驚いたように返答する。まさか自分を気にしてくるとは、意識の感覚がそちらに向いていなかったせいか、かなりの不意打ちだった。「そんなんでどうすんの、そんなんで…」呆れたようにつぶやくテルルの鼻元に、ほんのわずか赤い物が浮かぶ。なぜかは知らないが自分でも理解できない不思議な恥ずかしさだった。「い、いや…別に心配とかそういうんじゃなくて…単に…大丈夫かなって…と、とにかく！」こんな事で時間を食ってどうする、彼女の意識の水晶にある気体の対流が彼女を急かし、ベイリーフの右前足元にグレイシアは自分の左前足の拳を軽くいれる。「気合入れていくわよアンタ！そう言うしゃきっとしない顔は無し！いいわね、ユイに迷惑かけない！頼むよユイちゃん」

「うん！ヒュンの事はウチがばっちり押さえちゃうから！ねー？」

「ぐえっ…だから重いんだよそれは…」調子に乗ってリーヒュンの首元にツルを回し、体の体重を思いっきりかけるユイリィ。ベイリーフは相も変わらぬ彼女の態度に戸惑いつつも、グレイシアの方にツルをそっと伸ばす。「…ま、まあ…大丈夫だよ。すまんなテルル…」いよいよ場所が近づいてきている、ただでさえ緊張気味の彼の心臓の鼓動がわずかに速くなった。それに加えて先ほどこのメガニウムが言った使命という現実、それが彼の意識にある自分の能力に対する戸惑いや重圧を一層強くしている。そう、もしそこにたどり着いて、そこにある物が首に下げたように入った翡翠玉と同じなら…またフローラがいる可能性が…意識から出る機体が彼の思考の中に期待となって入り込んでくる。ただ…自分の勘という物が正しいのか、はっきり言って彼自身も確証がない。そんな感情に任せた結果、次にリーヒュンの口から出たのは在り来たりな言葉でしかなかった。「テルルこそ、あんま無理すんなよ。俺らは2匹の問題であ

って、君は君の問題に当たれば問題はないさ」

「ったく…あんまり強がんないでよ…」テルルは思わず彼から視線をそらし、右前足で自分のもみあげ状飾りをいじる。なんでこんな事をあらかさまに彼は言えるのか、グレイシアの恥ずかしさ具合は急上昇していた。それがあいつのいい所なのかもしれないが、ポケモンという物は異性に対しても同性と同じように接する生命体、異性に対してうかつなことを言うのは相手に恋をしていると認めるも同然ととられる。案外このベイリーフは人間に近い性格がどこかに眠っているのかもしれない、そう思った。

がさがさっ！首位の草木から明らかに自分たちの物ではない物音が響く。「何、アンタたてた?!」「違う、違うな…」「う、うん…別の誰かかな…」ベイリーフとメガニウムが数歩分前に飛び出し、それにグレイシアも続く。「これが噂でいう…盗賊連中なのか?」「うん、可能性はあるね。それなりの率で…」メガニウムはツルを前に伸ばし、その先から伝わってくる感覚に意識を合わせる。「ヒュン、右入って。テルリンとブレイブは左。ウチが真正面から潰す…」ユイリィの表情ががらりと変わる、こっちを狙っているとすれば始末するのみ、それに備えてた彼女の意識の水晶は、その底から湧き上がる戦闘という気体に冷やされ、極限まで澄み切りつつあった。

2つ目の翡翠の在り処は

草むらが揺れ、明らかにこちらにやって来るものがある、現在の人間社会なら…国の法律にもよるが、護身道具を製造・取引する企業は世界規模で展開しているからネットを使えば案外手に入ってしまう…高電圧電子警棒なりスタンガンなりで不審者を叩き飛ばし、そのうえで警察を呼ぶのが妥当だ。しかしポケモンに於いては、文明の未発達さもあってさらに“自己防衛”が徹底されている。自分の身は自分で守る、自身の運動能力を持つこの生命体であるが故だろう。

（……何のつもりよ…ウチらを夜闇で強襲なんて１００万年早いわね…）片方のツルをいつでも振り上げられる体勢にし、もう片方のツルを胴体の後部に巻きつけた太刀の柄にかけるメガニウム種族、ツルという便利なマニピュレータがある種族は４本足でも動作に無理をする必要がない、装備品や護身道具（ちょっと場違いにも見えるかもしれないが、ある程度成人になったポケモンやその旅人は、必ずと言っていいほど護身道具を持っている）を効き前足の足首に巻かないのである。（……とりあえず…誰なんだろうね…誰だろうと関係ないけど…）このメガニウム種族はユイリィ・ランタン・プレミドールであるからにし、ゆっくりと物音の方向へと向かいつつ、持ち前の勘の鋭さを意識の底から引き出しにかかった。周囲にそれを伸ばすだけで辺りにある水晶の位置、水晶の現在の状態、そしてそれがこの数秒後にどうなるか、おおよそ掴むことができる。隣にいるベイリーフとグレイシアの意識、普段だったらこっそり探って楽しむところだが、それに今気を取られるわけにはいかない。（ヒュンもあるんでしょうに…こういう時位カンを使ってよね…）草むらの方を見回しているベイリーフの方を、メガニウムは横目で確認する。当のベイリーフ種族自身はその目線には気づいたものの、それがなぜなのかまでは感覚が言っていないらしく、“どうした？”

といった表情でこちらを見ている。とはいってもリーヒュンに対する批判の感情があるわけではない、彼の意識が確実に掴む周囲の状況への鋭さ、そして彼が能力を引き出した時のその勢いには目を見張るものがある。素人でこんな軍人に近い事をさせられているにもかかわらず、わずか1か月あまりで適応してしまったのもその能力ゆえんだ。しかしそれでいて、自分のように何から何でも感じてしまうほどの物にはなっておらず、時に…とくに女の子に対し…自分の感情や意見を適当な言い訳を使ってさらし、それの条件として正論や通念を押し込みがちだ。それでも彼が周囲から非難されない…テルルは別として…のは、彼の尺度が折々伝統的なポケモンの文明が持つ、種族間の違いに対する寛容性と認可、という全員が本能的に感じているであろう社会通念にぴったり合致している事、そして何よりそれを求める分当人も他者のそれを許容している所があるからだろう。あとはリーヒュンが迷いの多い年頃であること、そして彼の抱える事情も少しはある、これを解決するには相当の時間がかかる、それは本人の意思に任せるしかない。

こんな状況にもかかわらず、隣に感じる意識の流れからここまで感じ取れてしまう彼女、あのベイリーフを大切に思うのは彼の不器用な性格がゆえか、水晶の隅に照れくさい物を感じてしまう。（…こんなこと考えている場合じゃないね、うん。集中集中…）ユイリィは前へゆっくりと進みながら雑念を払い、目の前の感覚に再び意識を集める。ここに来て気になる物がある、相手が危険な存在である可能性がそれなりにもかかわらず、自分の意識のどこかに明らかな余裕があるという事だ。メガニウムの意識の水晶の隅に、先程と違う感情が浮かぶ。目の前にいる相手、それはこちらに対して敵意のある存在では無いのではないか？

「…ん？」明らかに感じた違和感、彼女は思わず立ち止まり、前方の草むらにある意識の水晶に感覚をさらに伸ばした。流れを泳いで

その水晶にたどり着いた思考、その意識の水晶が放つ物は見覚えがある。そしてそれに抱く自分の感情も知っている。

「どうしたのユイ?」メガニウムの隣にいるテルルが彼女の方を振り返る。「ん、うん!大丈夫っぽいよ…あの子はウチらに何もしない」彼女の表情と、意識の水晶にあった緊張感は、引き波となって後ろへと下がり、雨上りの雲となって消えた。メガニウムの表情が緩み、物音が迫ってくる方向へと歩いていく。「そ、そんなんでいいの?もし盗賊とかなんかだったら…」「大丈夫大丈夫!もう見えてるのよ全部…」相手が誰であるか予想もつかない、そんなテルルの心配をよそに、ユイリィはいつものにこやかさで、前に向かって声を上げる。意識の水晶の中ではもう相手が誰かさえ見ていた。「ピートム、でっておいて♪」「…へ?」

彼女の直感は正しかった、出てきた小柄な影は黄色いからだ、両手足の先と大きめの耳はフラットな赤色、いずこの種族と同じような帯電器官をもつ頬には赤く、十字状の模様がついている。すなわち“彼女”は…「ユイ!テルリン!」そのプラスル種族、ピトムニク・ソレイユ・マルセイエーズがメガニウムの花びらが生えたウグイス色の首元に飛び付く。「おはようピトム!元気だった?」「うん、まあまあかな…バストークさん達も元気にやってるよ。って…」プラスルが思い出したようにあたりを見回す。「ミニョはまだついてない?ピトムのハトなんだけど…」「え?どこに…その子いつウチに送った?そっちに今いくよってせっちゃんが行ったけど…」「いつって…昨日、昨日なの…」ピトムニクの表情にありありと不安の色が浮かぶ。「ま、まさか…」

「う、うんん!それないと思うよ、うん。たぶんこの辺りに…そんなら」ツルで首元のプラスルを支え、ユイリィは一歩分草むらの方に移動する。ツル先から伝わってくる彼女が持つ不安の感情、それを考えると何もしないわけには当然いかない。「そんなら…ウチのハト笛で…」メガニウムはもう片方のツルを口に当て、思いっきり息を吐き出す。ヒュウーウィッ!という甲高い口笛が森の中に広が

り、その残響も澄み切った並みとなって周囲に拡散していった。それから間をおく事10秒ほど、木々の上で鳥の羽ばたく音が聞こえ、間もなく2匹のカワラバトが彼女のツルの上に降りる。「ピトム！この子だよね？」「そう、そうだよ！この子がピトムのミニョ…」プラスルが彼女の首元から飛び降り、小さな両手を伸ばす。手元に伝わってくるカワラバトの温もり、ピトムニクは頬をこすり付けた。「まだまだ…伝書としては努力しなきゃだめよねミニョも…」今月の初めにバストークからプレゼントしてもらった大切な物にして愛すべき命、この1月前後で随分馴らしたつもりだが、やっぱり育てが足りない、という事か。彼女はユイリィのツルにいるもう一匹のハトに礼を言った。「ありがとうねせっちゃん！」

「うん、せっちゃんもどういたしまして、だって…」彼女自身何とも珍妙と思う呼び方、音的にはこれが一番いい。メガニウムは左のツル先で、右のツル先に降りるカワラバトのセレーヌの頭をなでる。ポケモンと違って言葉も発さず、明確な意思表示も持たない動物だが、彼女の直感を使えばこのカワラバトがどういう感情を抱いているかおおよそは理解できる。彼女には物言わず表情も変えないこのドバトが、こちらに対して明らかに得意げになっているのを感じた。

「うん、それじゃあ帰ったご褒美はポフィンかな。せっちゃん、いつからドロップがダメになっちゃたんだっけ…」

「お帰りピトム、バストークの調子は？」グラシデアがピトムニクのそばに駆け寄り、ピンク色の両手で抱き上げる。「あの人(ポケモン)ったら、ピトムに迷惑かけてるとかあったら許さないわよ…」

「うんん、バストークさん全然大丈夫！ピトム達の行路もいろいろあってさ…」彼女がモココのほっぺを右手でつつく。思い返せば自分達の行路は苦難の連続、そして様々なものを見てしまった。国連からの手回しでこちらへと来てもらった一行はここに来るまでの間に何を見たかはわからない、とはいっても今それを切り出すのもあれだな、プラスルは目の前のモココが、開口一番で気にしている事に対する事への答えを出す。「でも隊長はそんな中で私を助けてく

れたしね。さすがだよ隊長は」「う、うん…大丈夫なんだね…まあバストークがそう簡単にってこともあるけど…」相変わらず嫌味をたっぷり込めた声で呟くグラシデア、しかしピトムニクの耳にはそれが多少なりと違って聞こえる。どこか彼女の声は実の父親であるメリープを気にしている、今までとは少し違う物を感じる。

「テルリン、隊長お疲れ様…」「うん…どうなったかね…お疲れ様っていう程の仕事したのかな…」浮かない表情にあいまいな日本人的愛想笑いを浮かべるテルル、プラスルの目にはそうなる理由がはっきりと映っているように見えた。「うーん、こういう時はフォローするべきだよね。テルリンも一生懸命やってたと思うよ」しっかりと彼女に支えを入れたのはグラシデア、女の子同士上手くやる方法を忘れてはいない。「ま、まあこうやってみんな生きて帰った事だし。とりあえずサクラさんとかには感謝って事で…」

「テルル、そういう言い方はなしよ。何であれあなたがやってきたんだから」「そ、そりゃ…でも誇るようなことでもないんじゃ…」

「いいの、いいのよ。この1月でやったこと、大したことがないように思えるということも努力のうちじゃない」後ろにいたサクラがグレイシアの背中を軽く押す。「私にとっては大変な1月だったわよ。それをあなたは切り開いてくれた、自身を持っていけばいいの。さっき言ったでしょ？」

「う…はい…」やっぱり自分の手柄にするには気恥しい、そして気乗りしない、一瞬背後に振り向いた彼女は何とも言えない自分の心情に気付く。「なあんだ、そういう顔してるってことは自慢できるくらい頑張ったって事だよね？」ピトムニクが彼女の両耳の付け根あたりに両手を置く。テルルの性格からすれば、気の強さと比べて自分の成果やポジションを自慢したりするのは恥ずかしがる性格、すこしおだててやるくらいが彼女の自信につながるのだ。「もうすぐ隊長として、じゃなくなるけど、今後ともよろしくね」

「うん、もちろんってカッコつける所よね……まあそれに近いかな…」またしてもこみ上げて来る熱い感情、グレイシアは思わず大き

く息を吸い込んだ。耳の脇に感じるプラスルの両手の温もり、腰に巻いたスカイラブの太刀の感触、そして自分の情けなさに惨めな気分ばかりに陥ったこの1か月だった。確かに自分のできたことは少ないし、むしろ周りに心配をかけたり足を引っ張ったりすることの方が多かったが、その一方で気づいた事、それは周囲に馴染めない自分が周囲によって立たされているという事実、それ以上の言葉が見当たらなかったが、彼女の意識の水晶は湧き上がる暖かい気体に寄り添い、彼女が自分で閉じ込めた暗い氷をわずかに溶かす。「大丈夫、カッコつけちゃっていい場所ってのもあるから」「だよね、そうだよね。ありがとうピトム…」テルリウムの両前足に強く抱きしめられるピトムニク、少しずつでも彼女が自信を持ち、押し殺していることが多い（であろう）感情や思いを吐き出せるようになればいい、今のプラスルはそれを願うしかなかった。ピトムニク・マルセイエーズとして、よくわからぬ間にかき集められた半分軍、半分探検隊・救助隊のチームの経験者として。

「ひっさしぶりだなあピトム！元気で何よりだ。おっしゃあ、お礼は高く…」「バカ、最初にあったのはこれ俺だ！最初に抱っこしてやっるのは…」「はいはい、やめろって」久しぶりに表れたプラスルの姿、テンションが急上昇したブレイブとエンデバーは彼女の方に飛び掛かりに行く。リーヒュンは2匹の尻尾をツルで無理に押さえつけにかかる、いつの間にか親友2匹は女（メス）にちょっかいを出しまくる正確に変貌してしまっている、まじめにやる時はまじめにやる…オオタチの方はまだ見たことがないが…ブースターではあるものの、ベイリーフをもってしてもその原因の詳細は全く考えつかない。

「痛い、いてえよヒュン。一回くらいキスだっていいだろうが…」「頼む、頼むぜ！一回くらい抱っこさせてくれ…」それぞれと尻尾と胴体後部をがっちりつかまれてもだえる2匹は、彼がリード紐でつつかんだペットの犬と化している。「まったく、こんな俺が言うのも難だけどさ、こう…女の子にな、特別な接し方をするのはやめた方がいいぞ……はい退場」リーヒュンは思い切り後ろ足を踏ん張り、

テルルに飛び付こうとする2匹を後ろへと引きずっていく。ツル先から感じられるブレイブとエンデバーの意識、狙っている物は明らかだが、どうしてそんな感情を抱けるのか彼には不思議で仕方がない。

「何よこいつら……アンタ達の目の前には餌でもあんの？」グレイシアが振り返りざまに汚物を見るような表情で、目を輝かせるブースターとオオタチに右前足で砂をぶっかける。「あ、アンタが押さえてるのか……」2匹の尻尾を掴むツル、それが伸びている先にいる存在に気付いた彼女は、一瞬ぎょっとしたように体をこわばらせ、それから注意深く表情を変える。こういう時は一体何というべきか、何かとトラブルの多いベイリーフの目線を見ていると顔が火照ってくるのを感じる。「ありがと…ありがとうねリーヒュン。アンタもヘンな奴が友達で大変だね。しっかり教えて、うん、教えるのよ…」「そ、そうか…でもテルルもブレイブの事、あんま厳しく殴ったりしないでやってくれよな…」「何言ってんだ、俺はテルリンと殴られるのも人生の…」「分かった、人生の祝福なんだろ？そういう事にしとくよ今は…」ツルを振り払ってブレイブが葉っぱの生えた首元に飛び付く、リーヒュンは彼の温もりを首に感じつつテルルの方にツルを軽く振る。恥ずかしそうにしているグレイシア、目線がちらりとあった瞬間にその表情に加えて意識の水晶に否応でも飛び込んできた感触に、ベイリーフの心臓が一瞬すくんだ。何とも彼のボキャブラリーでは説明の付かないこの感覚、なぜ自分はこのような感情に襲われ、動けなくなっているのか？数秒ほど止まった後、ほぼ2匹同時に視線をそらす。「いや、なんでもない。別にそういうつもりじゃ…ない…」「あ、当たり前よ…」

「で、そんな事より…」ベイリーフは首を振って顔もとの熱さを払い、グレイシアのそばにいるピトムニクの方に駆け寄る。「ピトム、バストークさんはどうした？」「え、んと…さっきピトムに前の様子見てって言われてね、あとから来てたんだけど…」「後？て事は一緒にいるはずだよね、うん……」ユイリィが彼女と一緒に、朽ち

た倒木を覆う苔と雑草が生い茂る森の内側に足をかけ、ツルを前へと少し出す。「…うん…確かにいるんだけどさ…それ以外にも何匹かいるみたい、そんな風に感じるよ」「だよね、バストークさんブレイブたちの友達と一緒だからさ……」

「うっ…やっぱりあいつだったか…」「ん、どうした?」ややまずそうにしているのはオオタチ、エンデバーはリーヒュンのツルを右手（右前足）で払い、こわばった苦笑に近い表情を浮かべる。「友達?俺らのか?となると俺に思い浮かぶのは……」2匹に加えてブレイブも顔を見合わせる。ソーラ地域にいた時からの親友同士、思い浮かぶもう一匹と言えば…決まっている。「なあリーヒュン、お前のソーラ地域の奴か?」「そうじゃないな。おそらく奴は…」

草むらをかき分ける荒い音、小枝が蹄に当たって俺飛び、小石が転がるそれと重なる。脇から出てくるにしては騒々しい。「まったく、戻ろうたってそうはいかないぜ坊や。せっかく昔っからの友人に会えるんだから時には勢力のガサガサなんて気にしねえでどーんといこうや、な?」「やめろよ…おい隊長!こんなところで俺が出たら俺の大義が……」

道の影、朽木と苔と背丈の低い雑草に加えて夜闇のせいで区別のつきにくい、深い森へと続く斜面から通常より一回り以上大きいメリープが姿を現す。頭と胴体を覆い尽くす薄い黄色のモフモフ毛、その膨らみ具合とほつれ具合、そして後方にいる誰かをせかす声でからそれが誰なのかはすぐにわかった。

「隊長、お疲れ様です!」真っ先に駆け寄ったのは暫定のリーダーであるテルルだ。隊長としてどうこう、という物はなく、テーマパークで迷子の子供が親と合った時のあの感情と同じ、不安を抱えた存在が信頼する存在に再開するという、知的生命体として当然の感情である。「お、久しぶりだなテルル、いって…それじゃあ早速だ

がこいつを手伝ってくれるかな……」人間年齢でいえば35歳のメリープは表情を軽く緩めて彼女に答え、すぐさま前足で後ろにいる誰かを引っ張り上げようと苦闘していた。「だ、誰ですかこれ…」グレイシアもすぐに両前足を延ばし、月明かりに沈むうっそうとした森林の斜面を這い上がれないでいる、その相手の前足の蹄らしき部分を引っ掴む。その足の動き方だけで言えば、彼女にしてはよほど深刻な事態に見えたのだ。「大丈夫ですかこの子!?まさかひどいケガとか…」「違う、ケガじゃねえんだこいつは。まあ色々あってな…」「ば、バカ!それ以上言うな…」蹄の主らしいその声が足元で騒ぐ。何だ、ケガどころか元気そうじゃないか、テルルの両前足から力が抜け、いや腹立たしさのあまり殴り落としてやろうと思わず右前足が上がったほどである。「……はあ?嫌だったらずっとそこにいれば?!バストークさんみたいな子持ちに駄々こねるとか100億年早いわよ!」

「い、いや…そんなに俺は言われるほど家族持ちじゃねえんだが…」メリープの顔もとに赤い物がふと浮かぶ（「フン、何自慢してるのよアンタ?」背後でグラシデアが不服そうに鼻を鳴らす）が、彼はすぐさまそれを消し、渾身の力でそいつを引っ張り上げる。「こいつはなかなかの照れ屋でな、前々顔を合わせた時とは大違いだ…」彼の表情に得意げな笑みが現れる。「…ヒュンやブレイブ坊やに久しぶりに顔合わせんのが恥ずかしいんだぜ」

「自分達ですか?」「俺らの友達…こいつは…」リーヒュンとブレイブが飛び寄るのとそいつが上がらせられるのはほぼ同時、そいつの姿が現れた途端にベイリーフ種族はその場に凍り付いた。薄いカナリア色の体、夜闇で見えづらいが鮮やかなオレンジの毛並、そして世間知らずな金持ち一家の男子の物を無用に鋭くしたまさにその目つき、それが誰であるかはすぐに見当がつく。「シーベルト…久

しぶ…」そこまで言いかけた彼のツルが出かかる、特に恨みがあるわけでない、それどころか昔は集落の友人でそれ以降は離したことすらない相手の再会のはずだ、しかしベイリーフの意識はそれ以外の方に向き、リーヒュン・バイリング・グリーズの意識の水晶は目の前にいるポニータ種族に関して依然感じたことのある気体を過敏に読み取り、そしてそれがもたらした感情が彼のまともな思考を一瞬奪いかける。こいつは自分たちの事を散々……自分たちもそうであるのかもしれないが、知っている限り二度も集落に暮らしていた民間のポケモンの事を……「こいつッ…」一方のポニータの方も負けてはいない、ベイリーフの目を見るなり飛び掛かりそうになった。勘の鋭さというより、目つきを読む巧みさの方に彼より一歩得意なものがあったのだろう。

「ば、バカ…やめとけよリーヒュン。別のお前に恨みがあるわけじゃねえだろ……」「言い出したらきりがないだろ！こいつは……」無理やりツルを掴みにかかるブレイブの右前足、それを押しのけつつベイリーフ種族はツルを相手の鼻先に伸ばす。リーヒュンの意識下に他の考えは浮かばなかった。今まで自分が目にしたもの、自分が持ちうる能力で感じたその全て、それを彼の思考というフィルターにかけての結果だが、彼から見れば目の前のポニータ種族に持ちうる気持ちはただ一つである。「…罪のないポケモン達を…特にも角にも勝手に巻き込んで……」

「てめえ勝手な…」「やめとけシーベルト。こいつみたいな民間人上がり…いや、そういう性格なのかは知らねえが、分からん奴には教えてやる、それが知識を持つ者の責任だってな。言いだしっぺはお前だぜ？」彼の態度に思わず熱くなったシーベルト・リヒテントを右前足を、彼の背後にいたゼブライカ種族が突き出して静止する。

「こんなところで勢力陣営のけんか話なんて持ち出すなよ。それにな、勢力争いっつったって、たまたま人間と手を組んだ一方の集落と別の集落の争いに首入れてるだけだろ？今は状況を分けろ。っと、それもお前の持論だったな…」

「うっ…ベクレルなあ、俺をバカにするような事ばっかつらつら言いやがって…」シーベルトが苛立たしげに右前足の蹄を踏み鳴らし、自分を落ち着かせるために大きく息を吸って吐いてからリーヒュンの方を向く。相も変わらずベクレル・プルトンに痛い場所をつかれる自分、勢いをもって進んでいるはずが時に彼のせいで折れてしまう事もある。

「あー、俺から話すとするか。シーベルトに頼むと色眼鏡が入るからな…」「ヘンな事言うなこのバカ！」顔を赤くするポニータを押しのけ、ゼブライカが2匹の前へと出る。「お前の噂はバストークさんから聞いた。一般市民上がりのくせに戦場同然の中を度々生き残ってきたんだって？」「は、はい……確かにそうですけど…」ベイリーフは戸惑いながらも曖昧に頷く。目の前にいる彼に関しても目にしたことがあるが、リーヒュンには警戒感がわいてこない。口調や目つきにシーベルトのようなきつさがないからか、それとも自分の持つ能力のせいだろうか？「いやいや、こいつとお友達とありゃ年の瀬は一緒位か。普通にタメ語、それが俺に会ってるからな…」ゼブライカはベイリーフの表情を見るなり、友達相手をする際の笑顔をふっと見せる。「っと、何も言ってなかったな、リーヒュンてのは大きいベイリーフ、お友達でブレイブっつーのがそのブースターか。俺はベクレル・アンリ・ミタカ・プルトンって奴だ。ニュークリア地域にこいつが越してきてからの仲、へへっ、ベクレルにシーベルト、人間世界で発展してるって言う原子物理学て言う学問じゃ高名な学者さんの名前ってどっちも言うじゃねえか。おっとすまん、またぺらぺらと余計な愚痴を叩いちまったな…」

「おお、なかなか面白い奴だな。お前気に入ったぜ」ブレイブの方はと言えば妙にあっさりと警戒感を解いたらしく、大柄のゼブライカ種族に歩み寄って右前足を差し出す。「ただ…人間連中に対してどうしてるかは知らねえけどよ…」ブースターの声がわずかに沈み、目つきもやや鋭くなる。この彼、ブレイブ・エスコーツ・クレイバーが相手を友人と識別か否かの方法、彼の意識のフィルターにはも

う一つ段階がある。「…今後とも平穏にやってくれよ、な?組織が違い、集落の対立で別になりゃ俺らは戦わなきゃならねえ。それを無理にする必要はないだろうが?」

「大丈夫だっての。今まではごたごたしててすまねえな……」「ごたごたって…その程度でいいのかよ」ベクレルは出てきたブースターの右前足を自分の右前足で掴み、それから明らかに怪訝そうな表情を示すベイリーフの方へと右前足を差し出す。「あ、ああ…よろしく」「こちらこそ、って俺らはどこかの芝居か?ま、どちらでもいいがここからは真剣な話のはずだ…」いまだに注意深く相手の出方を伺うリーヒュン、口調からして出は素直そうな彼のツルをベクレルの方が強引に右前足で掴み、それからもう一歩前へと進む。「お前は集落での警備役ぐらいはやった事あるな?ああ、確かに病気もなさそうだし、俺からすりゃ人当たりも良さそうだ。それと直感強くてやる事なすこと大ざっぱ、まあその分細かい事にはこだわらず他人と付き合える、だからこそひねくれた奴は嫌いそうだけどな」「な…なぜそこまで…」すべて図星、周りから言われることも自分で最近恥ずかしく感じていることも全てだ。彼の意識の水晶に浮かんだ恥ずかしさは並大抵のものではない。どうしてこのゼブライカには読めるのだろう?

「…うっし、当たりか。そりゃあバストークのおっさんから聞いただけじゃねえぜ、お前の目がそう言ってる。目は口ほどにものを言う、人間でいう封建主義とか科学や社会構造が未発達で野蛮な時代に出てくる言葉だ。ってまた話がブレまくりだな…だからこそ言っておきたいんだが…」笑みを浮かべたベクレルの表情がすぐに引き締まる。「お前の見た、まああん時は俺もいたが、あれは戦争であって戦争でない。一応ポケモンの文明史上に戦争という言葉はなかったからな…」「戦争じゃない…?」

「ああ、その通りだぜ。人間と違って俺らは気に入らなかったり金や物の邪魔になったりする奴を殺す生命体じゃねえしな。そのせいで文明的に負けたんだが。…ったくいつから本気のぶち殺しあいを

するようになったんだか…」「…じゃあ、俺と皆が見てきたものは…」

「その通りだぜリーヒュン、ありゃあ人間のせいだ。他に言葉はない」リーヒュンのツルをベクレルは強く前足で握りしめる。「ニュークリアの南部でお前とシーベルトがやり合った時、俺らの勢力はあの人間の…アメリカ合衆国って言ったなあそこの国は、ああ、その施設周囲の集落の奴らがあそこの施設の稼働と警備兵の弾圧が我慢できない、そう言って俺らの勢力に頼んだ。お前らはそれに気づいた人間に利用された、それだけだ…」

「……っ!?」ベイリーフのツルからゼブライカの前足が握っている感覚が失せ、気持ち悪い背中の冷たさが首元からゆっくりと胴体へと落ちていく。（……まさか…原因は人間たちにあったのか？！……）

「それから、ハイドルの時もそうだ、あそこの送電線っての覚えてるか？あそこの先にはイギリスとスイスっつー人間の国家が支えてる大手企業、企業って言う組織だな、その施設があるんだ。俺は人間の社会関連も科学技術関連も学がねえからよくは知らんが、ともかくあれは壊されちゃいけんそうだ…お前らはそれに利用されたって事だよ…」衝撃を受けている彼の顔を除き、ゼブライカはさらに話を進めていく。あんまり世の中に対して絶望を与えるのも気乗りしないが、少なくとも友人と衝突するのを防ぐには真実を言う必要がある。「あれを作るお陰であの周辺の集落は畑ごとサヨナラさせれたわけだしな、それでまた俺らが駆り出し。ったく、今度はお前らの上にいる国連とかっていう人間の国を束ねる、いや一緒にもめる？そういう奴らも周辺の集落使ってそれを守らせた。お陰でハイドルといいニュークリアといい、人間の連中が都合のいい事言って周辺のポケモンを消しにかかっているんだぜ？」ベクレルは大きく息を吸い込み、軽く後ろ足を踏み鳴らしてからさらに続ける。「手早い話、これが全てだ。ああ、他にないな手が。俺らの前にあるのは殺し合いじゃない、人間の勢力争いと金が作ったバトルなんだ。

俺らをガチでやらせて、必要な分は後ろから支援して殺させる。そうすりゃ周辺の人口が減って人間の活動は安泰ってわけだ。全く笑わせてくれるぜ……」茫然自失レベルではない表情と運動の停止に陥っているベイリーフ、ゼブライカは彼の右前足の付け根あたりを軽くたたいた。「秘密だってんでおっさんからあんまり細かくは聞いてないんだが、お前の能力と使命は相当らしいな。俺は世の中でいう伝説や神話には興味がない。だが…ああ、もしお前のそれが俺の目に留まるほどだったら、力を借りる事になるかもしれん。その時はよろしく頼むぞ…同じポケモンとして」

「そうか、そうとなりゃ反対する余地なんてどこにもねえわな。俺も薄々はそう思ってたんだが…」納得が早いのはブレイブ、右前足の拳をベクレルの左前足の胴体の辺りに当てる。「今後とも、なるべく無駄な争いはしねえ、その方向で一致させようぜ、な？」「ああ、そりゃあ当然の結果だ。何せ……」

「ちょっと待った、今まで俺たちは…何してきたんだよ？何であんな…」当然のことながらベイリーフはブースター種族の方にツルを伸ばす。リーヒュンにとって全く信じられない真実、このゼブライカ種族が方便を垂れているようには感じられない、しかし、それでは自分たちの今までは何だったんだ、自分の中で生まれたそのこらえようのない疑問に意識を伸ばす。「……まさか…ブレイブは知っていて。それで…」彼が記憶をまさぐり、そこにあったものの感覚が見えてくる、彼の意識の水晶から上がってきた来た物体、葉っぱの生えた首元がちりちりと熱くなるのを感じる。「…ユイリィ、サクラさんまで…知っていて俺に…黙ってたのか？」

「……うん。言い訳にするのも難だけどね、でもこうするしか…」当のユイリィは彼に視線を合わせられず、うつむきがちに歩み寄る。「…そんな事言ったらヒュンが…もう耐えられなくなっちゃうじゃん…それね、サクラさんと一致させてあるの。うん…」「耐えられないって…そんなこと俺には…！」ベイリーフは思わずメガニウムの方を見る、彼女に対する怒りではない、今の自分の状況を

考えれば言われたところで迷惑をかけるだけ、それどころかベクレルがの言葉が真実かどうかさえ確証できない、信用はできても自分の目で見なければ、やってみなければＯＫは出せない、恥ずかしいがそれが自分だ。それを読み取れなかった自分の情けなさ、それに腹が立って仕方がないのだ。「…ごめん、君の事じゃなくて…俺の事だ…」「悪いのはウチだよね…」彼女の方が申し訳なさそうにツルを彼の首の後ろに置く。彼女とて彼の意識が何を感じ、何の感情を抱いているのが理解できる、それが故にユイリィ・ランタン・プレミドールの罪悪感も大きい。「でも、それでも……今のヒュンの事を考えたら…これ以上辛くするわけには…」

「そうよね…リーヒュン、本当に申し訳ないと思っているわ…」サクラもベイリーフの後ろにゆっくりと寄る。まだすべてを話すことはできないが、せめて彼の誤解だけは改めなくてはならない、それに対する言いようのない後ろめたさを感じる。「…ユイリィと私で決めて、バストーク達には言わないように止めておいたの。対立しているのは組織同士じゃない、２つの勢力がやり合っているのはそれぞれの思想に人間たちの利害が入っているからなの。彼らは人間の組織の周辺に住む物の立場として、私たちは国連という人間の立場として、それぞれの目的を達成しているにすぎないの……」

「どれだけの解釈だそれは。まるで俺たちが人間に対して敵対する悪いような言い方だな！最初から俺たちだって人間には期待してないが、本来を言えばあんたがたが人間に対してもっと…」「シーベルト、ここでその話はいらないの。今は不必要に対立する状況じゃないでしょ……」またもや熱くなるシーベルト、このポニータ種族を左前足で制止するのは、やはりキュウコン種族である。「…あなたの噂はかねがねこの子から聞いているわ、あなたこそが、いえ、まだそんな期待をかける事は早すぎるわね。私はアリョーナ・ハイペリオン、シーベルトやベクレルとは普段から一緒に行動してるのよ」

「久しぶりねアリョーナ、私がいない時はこの子の世話ばかりを…」

「は、さ、サクラさん、確かにウチはそうでしたけど…でもまあ…」
「サクラの方もお変わりないようね、あなたと一緒にこの子のお守りをしていたのが懐かしいわ。そして…ユイリィ、本当にあなたは大きくなった…」アリョーナは何の抵抗もためらいもなく、顔を赤らめているユイリィの前足を握る。「すっかりたくましい体になって、あの時の小っちゃいユイはどこにもいなくなってしまったのね…でも、あなたの瞳だけは…昔と同じ…」自分の美しい白い毛並みの右前足、そこから伝わってくるウグイス色の細かいうろこの温もり、キュウコンの赤い瞳がかすかに潤む。「今までは…本当にごめんなさい…あなたとロクに話すことも、できなくてね。せめてあなたを殺さないよう…それが私のできる罪滅ぼし……」
「……アリョーナさん…ウチは…いえ、あたしは…」右前足の温かい感覚、メガニウムは思わず彼女の首元にツルを伸ばして当てる。遠い記憶に残っているアリョーナの肌触り、自分の母親同然に振る舞い、抱きしめてくれたあの時の気持ち、息を吸い込むと意識の水晶にはっきりとそれが映る。あの時は自分にいかほどの可能性があるのか、ここまで重大な境遇におかれていようとは予想だにしなかった。アリョーナがいなくなってから半年程度か、あのつらく苦しい状況が始まるのは。「大丈夫です…この程度で負けていたら、サクラさんについていけませんし。オーメリアの事だって……」「ええ、彼女の事は…私たちの側にいて…」キュウコン種族は大きく息をついて後ろに下がる。思わず見上げた木々の間から覗く夜空、星々の明かりに多くの失われた者たちの姿を感じた。サクラがそうしているように、自分達にもこの辛い状況を打破する目的がある、お互いそれを口に出すことはできないが、それを確認し合う事はしてきた。「…そのためにも…私たちは努力しなければならないのよ。未来のために、これ以上の争いを止めるという事を…」
「そうね……」キュウコン種族の隣によるサーナイト種族、彼女たちはそれぞれ違う方向からこの世界のために動いている、それぞれの思惑までは掴めない、または深入りしないまでも。それに互いに

干渉しない、双方の目的と行動を認め合う、それがポケモンの文明である。「今のところはお互いご苦労様、といった所かしら。悲しい衝突はあったとはいえ…いつか合流できるその日まで…」

「サクラさん……そんな事まで考えて…」リーヒュンは絶望に駆られたような表情で周囲の面々を見る、事情をあまり知らないであろうテルルは困惑して彼から視線をそらし、バストークやピトムニクはどうしようもない、と言った目で彼を見つめている。ユイリィやブレイブ、そしてエンデバーたちのそれを確認する事はとてもできない。ベイリーフの意識の水晶から湧き上がった冷え切った感情は、たちまちのうちに彼の頭の葉っぱからカナリア色の尻尾まで伝わった。周囲を取り巻く複雑な状況、それを遂行しなければならない面々、その状況がはたしてどれほどの物かまでは読み取ることができないが、いずれにせよそれを感じ取ることのできなかった、何も知らずにがむしゃらにやってきた自分に対する嫌悪を強く感じる。

「いずれにせよ…今はそういう哲学に関与している状況じゃない…もちろん俺を含めるが……」シーベルトが固まっている数匹の間に歩み寄る。「エンデバーを含めて全員一緒になった、今はそれぞれの目的の方へと向かう、それが最優先だ。俺たちも翡翠玉のありかは知っている、俺らとエンデバーでそこへ連れてってやる。バストークさん達は別にみたいものがあるんだろ?」「その通りだな、例の場所に行く以外の奴は俺について来い、もちろんグラシも含むぞ。いいな?」

「……あっそう、別に文句は言わないわよ」「何だよ帰ってそうそうそれは。気体はしねえが多少なりとも父親に対する、こう…ねぎらいとかねえのか?」相変わらず無愛想な態度を取る娘のグラシデア、父親のバストークは諦めたように胴体のモフモフ毛をすくめる。「おいおいおグラシ、俺はこの前言ったよな?まあ…文句を

小言にせんだけいいが…」モココのそばにムクバード種族が飛び寄る。「…ここまで全員無事なのはテルリンのお陰だけじゃねえんだ、それに父親だろうが。一言なりとも何かしら返答しておくのが礼儀ってもんだぞ」「俺も同意、激しく同意だ。グラシデア、俺も確かにそう言ったよな…」真面目な顔でロックオンに加わるエンデバー、左手（左前足）をモココの首のモフモフにかけ、口を彼女の聴覚器官に近づける。「どういう状況かは読めんが、少なくとも困難が多かったくらいは事実だ。そこらへんぐらいは理解してやれ、腐っても親は親だろ、子供に安らぎを得たい時ぐらいはあるんだよ誰にも、そうっすよねロックさん？」「そりゃそうだ、俺らがグラシを求めるようにな」

「もう……恥ずかしいですよお……」グラシデアは恥ずかしそうに顔を赤らめ、それから息を鋭く吐き出す。「…まあ、とにかく無理はしない事ね。ピトムに迷惑かけるとかそういう見つけたら娘としてただじゃおかないわよ」

「褒めてんだか、けなしてるんだか…まあシカトよりははるかにましだ。そういう事だからしっかり頼むぞ俺の娘…」「良かったじゃないですか隊長。グラシ、よろしくね！」もごもごと自分に言葉をかける娘、隣にいるピトムニクがモフモフ毛の胴体を左手で軽くたたかれたことも加わり、互いが思いっきり赤面しているという事に彼は気付く。父親のメリープと娘のモココ、当面誤解は解けないのかもしれない、背後にいるムクバードと新しく加わったらしきオオタチの様子がやはり鼻につくが、ともかく娘との関係はぎりぎりのところで保たなくてはならない、バストーク・ラルシア・ホルストの意識の中にその感情がはっきりと感じられた。

「よっし、そうと決まればもう行くっきゃねえな俺らは。ソーラ地区時代の４匹がこれ出揃ったんだ、細かい事は気にせず思いっきり出るぜ！」「当たり前だ！」「バカ…あんまり強気にでんなよ」一番気合が入ったようにフサフサ尻尾を振り上げるブレイブ。「それから、当然のことながらテルリンもな。最後まで気合い入れていく

ぜリーダー！」「はい？！…まあ…そうだけど…」左前足で自分の右前足を引っ張られ、思わず振り払いそうになるグレイシア、周囲にからの視線を感じ、それ以上強引な手段に出る事が出来ない。「すまんなテルル…あとちょっとだけ…頼むぞ！」「は、はあ…それなら…」右前足の先の拳を彼女の左前足に押し付けてくるバストーク、それに答えるテルルの拳にもやや力がかかる。あと少し、本当にもうすぐ終わるものだ、これさえやればきっと…使命感と重圧からの逃避が入り混じった感情に４本足が震えるのを感じた。

「というわけだ、リーヒュンも当然の事だからぶっ飛ばしてくぜ！」ブースターの右前足がベイリーフの左前足に巻きつけられる。「俺らも支援する、お前は特別のようだがそれを存分に見せてくれ、な？」続いて彼の葉っぱが生えた首の後ろに飛び付くオオタチ、久々にポニータを含めた４匹組で目的の場所へと向かう事になる。「大丈夫大丈夫！ウチも一緒にいるんだから…」友達に囲まれるリーヒュンの首の上に巻きつくユイリィのツル。「フローラまでもう少し、頑張っていこうね…」

「うん、ここまで来たらやるだけさ、俺はこのために…このためにいるんだから…」ベイリーフは意識の中にある迷いを首を振って振り払う。「ああ…確かにこの感じは…」「ね…ここにもそれはあるのよきっと。前と同じ…前と同じようにね…」それと入れ替わるように意識に伝わってくる感覚、彼には経験したことのある説明しようがない物だ、首元にある翡翠と水が入った容器の周囲が温かくなったような気がした。ベイリーフは右前足を軽く踏み鳴らし、目の前にある感覚に意識を集中させる。そう、今は迷うべきではない、自分の目的は、そしてフローラの事を探るために…ここに来たのだから…

その頃　韓国　ソウル特別市　瑞草区（ソチョ）　サムスン電子本社

中華人民共和国、台湾（中華民国）、シンガポール、日本と同様の東アジア随一の工業国として、生活水準はシンガポールや日本といった欧米先進工業国に近い水準にまで成長した大韓民国、１９７０年代後期から始まった、この国の高度経済成長を支えた大企業系財閥の一つがサムスングループである。多くの国内系・外資系問わず大手企業の本社や支社のオフィスが集中する東アジア随一の都市、大韓民国の首都ソウルの中でも格別に高層ビルが林立する南西部の瑞草（ソチョ）区の一角にある格別巨大なサムスングループ本社ビル、大韓民国大統領はここのところの多忙を縫い、エネルギーインフラと工業用工作機械の東南アジア輸出の国家戦略に関し、サムスングループの上層部との会談に訪れていた。公務が続くというレベルではない、忙殺という言葉がふさわしいほどの状況だ。

「……どうですかね？中国の態度の変化は？」「まったくもってですよ閣下、ここで何とか締結に持ち込めるのも、あの国が自国の評判を下げないためです…」円卓で対面する形になっている企業関係者と政府関係者、企業側重役の厳しい態度の前に、大統領は少々及び腰である。「…結局は東海（トンヘ）における自国企業の利益、というのが妥当な狙いでしょうか…」

「まったく、責める気はないが、そちらの外交姿勢にも大いに問題があるには違いありませんよ……」別の企業側の男が不満そうにつぶやき、煙草を灰皿に押し付ける。「大中華といえど遠慮することはありません。李氏朝鮮と清国然りの伝統は経済と市場活動には無意味ですからね…」

「それは存じております。国連安保理の介入があったお陰で最悪の事態は回避、ですが…国内輸出産業に対するリスクばかりで申し訳ない……」大統領の隣にいる外務省の責任者がすまなさそうに詫びた。弱腰と見られても仕方がない、この数日間の対応を見れば自己反省ができるほどに感じられる。２週間ほど前に発生した米韓合同艦隊と中国艦隊の軍事衝突、及びそれに随伴するように発生した日

本海（東海）に設置された米、英、豪の資源採掘・精製プラントに対する過剰ともいえる臨検に対する緊急の米、韓、中各軍上層と関連する大手企業の関係者による緊急会談、双方の主張が平行線をたどり、アメリカ・韓国側と中国側双方が日本海（東海）周辺への艦隊派遣、攻撃用レーザー衛星の軌道配備をちらつかせる中、国連安全保障理事会が常任理事国同士が引き起こした今回の事態に介入、アメリカと中国という現在の世界の覇権を握る2超大国の緊張状態を一刻でも早く解消するため、決裂しかけていた共同報告書策定に関する仲介を行った。とはいっても国連の介入は形ばかり、実際は米中間がエネルギーと資源の確保と供給、2国間での貿易や経済活動の混乱が東アジア・太平洋地域の経済的混乱をもたらしかねないという市場と経済界の懸念を受けて最悪の事態から脱するために歩み寄ったに過ぎない。

「それで、やっと締結に至ると思ったらこの事態ですか…」先ほどのサムスングループの男が手元にあるディスプレイをちらりとのぞきこむ。「…黄海南方沖での件、それに関してもあちらの謝罪を引き出せないんですか？」「どうにかして事態を、いや失礼、我が国の面目を潰さんようにしてほしい物ですな……」最初に喋った財閥関係者が、わずかに政府関係者側へと身を乗り出す。「この事態も世界各国の民間報道によって広く知られている。我が国が弱腰の国家に見られては、開発している企業側としてもやってられませんよ…」

「はい、それに関しても最大限の対応を現在行っている所です……」大統領の男はさらに相手の剣幕に押され、さらに表情に謝罪の意を強く出す。「日本人（チョッパリ）の場合とは違いますからね、容疑者の身柄に関してもこちらで裁判にできると思います。ええ、中国外交局の会見でも、そうでしたが…」彼は手元のグラスの水を少し飲み、それから大きく息をつく。昨日発生した違法操業中の中国漁船団とのトラブル、というより事件の件は少なからず民間企業の違法臨検に対する和解に水を差していた。韓国側の巡視船から海洋警察の調査員が

漁船側に乗り移った際に漁船側の乗員が抵抗、うち一人が刃物で襲い掛かり、海洋警察関係者2名を死傷させた事件、韓国側の強い抗議に対して中国当局は全く意も介せぬ、といった反応で、発生から1日半近く経過して初めて事件触れるというありさまだ。韓国当局が中国漁船から押収したGPS機器の航路解析結果、当然のことながら一般に公表されたそれに対しても、“ねつ造の疑いがあり確固たる証拠に成りえない”としてほぼノーコメント、インターネット上でも一部の人間によって“データが修正されている”という噂が飛び交い、外交面でも世論面でも決定的な根拠にならなかった。これに対して韓中双方が事件の解決なくして軍事衝突の件での若い話、と発効直前になって対話を拒否、状況は一歩間違えれば振出しに戻りかねない厳しい物だ。

「…相当お疲れのようですね大統領。まあ外交関係はなお一層、という感じですか…」「いえ、自慢するのも難ですが、先ほど大邱（テグ）から専用車両で戻ったといいう状況です、はい…」企業関係者の同情とも皮肉ともつかぬ言葉に、大統領の男は思わず苦笑を漏らす。昨日は事件で殉職した警察関係者の大邱市にある自宅を慶弔に訪れ、今日はその帰りである。そしてこの後は大統領官邸へ戻り、今回の中国漁船との件に関する公式声明の発表へと向かわなければならない。普通のビジネスマンだったら忙しいのもいい加減にしてくれ、と喚き散らしたくなる気分だ。さらにそのあとには、韓国国家安全保障局（ＮＳＳ）の最高責任者として、ソウル市内某所にある施設を訪れる事にもなっている。「まあ自分も大統領の身ですから、不満を言っているようでは仕方がありませんけどね」あまり高飛車に出られないのは現代社会の当然、国勢のいく末を握っているのが少なからず大手企業や財閥、自国に関連のある多国籍企業体であるからだ。経済界の意見を聞かない、反映しない国家の政治は現在において存在することはできない。

「ええ、こちらとしても政治問題の愚痴より、先ほどからそれに関して議論しているのであって…」企業関係者の男がすっかり灰皿に

山を築き上げるほどになっているにもかかわらず、さらにもう一本煙草を取り出して火をつける。「我が国の太平洋送電網、並びに大規模契約者向けの次世代電力供給網の件、先ほどお話しした通り、いつでも体制が整っております。企業と工場向けの製品も順次クリア、いつでも発表できる状況にあります…」

「それは心強い…重ね重ね参画に感謝いたします」最初に来た時に続き、またしても右手を伸ばす大統領の男、政治という物が国家の経済や産業を決める時代は終わった、今は自国の経済や産業、市場が国の政策と市民生活を決定づける時代だ。欧米から始まった新自由主義は紆余曲折を得つつも今、世界全体へと広まっている。送電網と言えば…その言葉で大統領はふと思い出した。ポーランドでサムスングループを含む大手企業連合が、米国のＧＥ社やポーランドのエネルゴプロジェクト・ワルシャワ社と共同で進める原発建設、あそこの一悶着もまたヨーロッパと韓国内で相当の物議になっている。ＮＳＳからの報告はとりあえず受けてはいるものの、詳細な現地の状況などのデータはまだ届いていない。ただし、単なるスマートグリッドシステムのダウンには思えないが。「そうそう、送電網に参加するとして、スマートグリッドシステムの方は……」

「ああ、その件ですか。あれもヨーロッパ連合で相当ニュースになっているようですが…とにかく原子炉やわが社の人員に被害がなくてよかった…」サムスングループの関係者の方が今度は苦笑を浮かべる番だ、わが社の信用を同じような原因で失う訳に行かない。彼はタブレット端末を政府関係者側に向け、タッチペンで液晶パネルを示す。「それに関してはご心配なく。わがグループのスマートグリッドシステムはドイツやイギリスのシステムと異なり、アメリカ系の…」

警備員に囲まれ、政府関係者の一行は本社ビルの一室から正面エン

トランスの車寄せへと向かう。中国漁船の件や中国の北京で開かれている米韓中の軍事衝突に対する会談に多くが向かっているせいか、報道関係者と思われる機器を持った人間は車寄せの周囲にちらほらとしかいない。ビルの警備員5，6人で何も起こらない状況、むしろうるさいのは周囲の道路で発生しているデモ隊の人間の怒声である。例の中国漁船乗員による韓国海洋警察関係者の殺傷事件、反中デモは韓国全土の軍人・警察のＯＢ会…韓国は2年間の兵役が全男子国民に義務付けられている…や一般市民団体にまで拡大し、それに対抗する形で中国側から韓国国内の外務省関係のサーバにハッキングが仕掛けられる事件が発生している。

車両が出れないほどになっていなければいいが、そういう感情をちらりと脳裏の隅に浮かべつつ、大統領の男は専用車のヒュンダイ・エクウスに乗り込む。「ああ、私だ…そちらに向かう間にデータを端末に送ってくれ。何でもいい…」携帯端末を耳に当てる彼、サムスングループの言う経済戦略輸出の件など今は頭の中にはない、問題はポーランドで発生した原子炉に対するシステム破壊攻撃とテロの方だった。実行犯の供述によればロシアの原子力大手が中国政府に頼まれたと言っていたらしい…嫌な予感がする。

同時刻　ロシア　モスクワの東２１０キロ　ウラジーミル市郊外

世界最大の国土面積を誇るロシア連邦、旧ソ連崩壊によって東欧や中東アジアの多くの国家が独立、もしくはＣＩＳ（独立国家共同体）に加盟していったものの、今なおロシア連邦は西ヨーロッパ、中央アジア、東アジア、北アメリカにまで領土的、経済活動的影響力を持つ。

ロシア連邦の広大な国土を生かしてできる事、首都モスクワから２００キロ以上離れた広大な針葉樹の森林地帯のちょうど境目、水平線いっぱいに広がる荒れ地に不釣り合いなほど整備された片側2車

線の幹線道路と道路灯が河を作っている。その人工の大河から南に１キロほど入った地点、そこに突如として出現した市街地がある。東欧やロシアでごく一般的な中規模の地方都市をイメージした空間、一般住宅、集合住宅、オフィスビル、駐車場、鉄道駅…自家用車が置かれているばかりか、信号機も作動し、住宅の内部には衛星テレビからロシアではまだ希少な情報端末まで、電子機器もすべて揃えられている。

しかし荒野に降って湧いたこの都市、電気や電気製品なども整備されているにもかかわらず、明らかに奇妙な点が２つある。１つ目は人間が誰もいないこと、外を歩く人がいないレベルではない、電気やテレビがついているにも関わらず建物の中にも施設の中にもそれを利用するはずの人間が誰一人としていないのである。

そしてもう一つ奇妙な点、市街地内の道路に放置された自家用車に交じり、旧式のＴ－８０戦車、ＢＴＲ－７０を始めとする各種の装甲車、戦争下にない都市としては明らかに不自然な車両がそこらかしこに停止している。さらに都市の南東に置かれた飛行場らしき場所、ここにも格納庫や駐機場に旧式のＭＩＧ－２１やＭｉｌ－２４といった戦闘機や戦闘ヘリが置かれている。ここにすら人間はいない、管制施設の対空レーダーサイトは回転しているにもかかわらず、それに関与しているであろう人間の姿は全く見当たらない、生気を感じられぬ静寂に沈む都市の光景はそれによってますます現実離れしている、普通の人間が見たらそう思うであろう。

しかしこの都市は実寸大の精密模型ではない、生活や経済活動をするための場所でもない。この都市は破壊されるために、その砕かれ焼かれるさまを何者かによって観察されるために存在しているのだ。その“何者”の手先の２人はすぐにやって来る。片方は目に見えぬ形で都市の通信回線から、もう片方は直接都市の脅威を与えるため

に空から。
第一の脅威は姿も音もなく都市へと入ってくる、突如として市街地の建物の内部にある衛星テレビの画像が乱れ、砂嵐となった。遠隔操作によって動いていた情報端末のインターネットが突如として停止した。“Ｉｎｔｅｒｎｅｔ　Ｅｘｐｌｏｌｅｒではこのサイトを表示できません”、キリル文字の文字と共に表示された液晶の映像、間もなくそれもぷっつりと途絶え、それとほぼ同時に建物の照明も、信号機も、いや市街にあるすべての明かりと機器の稼働音が失われ、生物の気配が無い静けさは死の沈黙に変わった。北半球の高緯度地方の日没、３月も近いとはいえ１６時前にはこの辺りは暗闇に落ちてしまう。外部によってすべての動力を失った市街地は、単なる鉄筋、金属、コンクリート、その他人工物質の塊となって近づく夜に沈んでいく。
上空に鈍く響き渡る音、最初こそ遠くでかすかに聞こえていたそれは、ものの３０秒せぬうちに爆音となった。黒に近い濃紺の夜空に溶け込む４つの黒い影、これこそが第二の脅威だ。都市の上空に差し掛かると同時に、漆黒の影から無数のオレンジ色の火球が出現、全ての動力を失った都市に命の輝きをもたらすかのような火の玉は、４つの影が轟音と共に空を通過したに続いてホップアップ、宙に舞いあがって間もなく都市へと向かって降下し始める。命無き人工構造物の密集地帯に光をもたらすために。
しかしもたらされる光、それは都市を復活させる為ではない、最初のうちこそは天界から救済に現れた使徒であった火球は年に落ちると同時に悪魔に変化する。美しき橙色の光は全てを飲み込む火炎と衝撃波になり、神秘的な旋律にさえ聞こえた飛来音は鼓膜を突き破るほどの爆発音となった。降臨したのは救済者ではない、地上の人間に獣の刻印を押す悪霊である。見よ、住宅が内部にあった家具や電化製品ともに粉砕され火を噴き、停止していた自動車はベレー島の噴火よろしく内部のガソリンに引火し、Ｔ－８０戦車やＢＴＲ－７０はガスタービン機関の燃料やディーゼル機関用の軽油に加えて

内部の弾薬さえも暴発して宙を舞う。火に包まれた地中のガスパイプラインや宙を走る送電線は己の重量に屈して火花を散らしながらその場に倒れ、地獄の業火に焼かれる断末魔の虚構都市という交響曲に荒々しい打楽器の音を添える。飛行場にも降り注いだ死の雷は駐機しているＭＩＧ－２１をはじめとする航空機を格納庫ごと叩き飛ばし、管制施設やレーダーサイトを溶かす。航空機用燃料と弾薬はガスパイプラインのそれをはるかに上回る紅蓮の炎を上げ、破壊のオーケストラに更なる迫力を与える。火災による温度上昇がもたらす上昇気流によって生じた旋風、聞く物の耳に天才的ソプラノ声となって即行の交響曲を引き立てる。７つの災いの後に火の池、それに投げ込まれた獣と偽預言者の断末魔を象徴するかのごときその光景は広がりつつある暗闇を照らし、天を焦がす勢いとなって周囲にそそり立った。

しかしそんな光景もその事情を知る者、この状況を意図的に作り出した者にとっては戦慄的な感動をもたらすものではなく、単なる実験の良好な結果としてのみ判別することができる。「第１区、無人機の離脱を確認、攻撃結果は予定通り」広大な平原の彼方で上がる火炎、ロシア陸軍の兵士が無線機を手に取る。「消火部隊が状況の確認と延焼阻止に出ました。センサと映像カメラが発信した情報と画像はこちらでも確認しています」“了解した”

現場から１０キロほど離れたウラジーミル市郊外の新興市街地の一角、ロシア連邦政府が情報技術・ハイテク産業の振興を目的として開発を進める新しい工業団地だ。ドイツのインフィニオン社をはじめ、イギリス・フランスの実業家による出資企業（本社はイギリス）であるニューロン・コンピュータのロシア支社もここに存在している。今回の件を引き起こしたのはまさにこのニューロン社、現場を監視する赤外線カメラが送ってきた映像と、あの幻想の都市にしっ

かりと接続されていた通信網やエネルギー供給監視網の数値データが、支社の地下2階、サーバ管理室の一角にある会議ルームのスクリーンに表示されていた。「実験結果はごらんのとおりです。わが社のネットワークのコントロールに異常は見当たりませんでした…」同席する技術者の一人がスクリーン上をレーザーポインタで示す。「それより、こんな事を聞くのも難ですが…」彼の声は成功に喜んでいるものではなかった。フランスにある本工場から派遣されてきた彼ら技術者、こんな事は聞かされていない、“ロシアのハイテク産業育成による国家成長戦略”に含まれる“ロシア系のハイテク情報機器開発におけるソフトウェアマネージメント技術の育成”とされているのであって、このような軍事転用の実験をさせられるとは思わなかったのだ。「…我々がロシアのプロジェクトから伺っているのは民間企業の育成だけです。軍事的行動に利用するシステムの開発は手掛けたことが…」

「成長戦略というのはね君、何も西欧のような民間企業の経済だけではないのだよ…」参加しているロシア軍人の男が、フランスからやってきた民間技術者たちに言い聞かせるが如く右手を振って見せる。「政府による国内の公共事業、他国へのインフラ輸出、軍需産業の活性化、宇宙や海洋資源の開発、企業にやらせるよりも利益が大きいからね」

「しかし…我々が軍需産業に対して直接協力するというのも…」技術者の男は天井に下げられたプロジェクタから映し出された数値データを見つめ、表情をやや曇らせる。自分たちが行った発電所送電網内のスマートグリッド・ネットワークからの侵入による都市単位での送電のダウン、同様の手法を用いたインターネット回線とケーブルテレビの遮断、一歩間違えればサイバーテロに悪用されるどころの話ではない、大国による小国に対する情報通信網破壊攻撃や世論統制にも使用されかねないものだ。ニューロン社の上層は何をしようというのか、言いようのない不安が彼の脳裏をよぎる。「我々の本社からの指示は、エネルギー供給システム管制用の情報技術機

器のソフトウェア開発です。軍や国家が意図的に情報空間をコントロールするような…」

「それは社員への言い分だろう、ロシア連邦経済技術研究機関は、ニューロン・コンピュータのロシア支社と工場と協力協定下にある。無論本社との合意もとり、ニューロン社の技術の提供を承認してもらってだな…」軍人の隣にいるロシア政府直属の研究法人機関の男は手元のコンソールと液晶ディスプレイから顔を上げ、左手の中指で卓をゴツンとつつく。「そしてニューロン社のロシア支社と開発センターはここにある。ここに。ここの上層部はニューロン社の持つ技術、ああ確実に言ったね、それを我が国の研究機関に提供してくれると…」

「支社、ですか…」男は椅子に座るロシア・東欧製造工場からの出席者に耳打ちする。「本当に…軍事関連の開発も認められているんですか?」「…一般の社員である君に言う事か?」責任者はしばらく彼の表情を見つめ、やがて足を組み直してこちらに向き直った。「わが社の方針として、各工場におけるプロジェクトの方向性の組立は、各工場や支社の責任者にある程度一任されている。本社が送ってきた指針から外れているつもりはないはずだ」「はあ…本社の方はＯＫを?」相変わらず納得のいかない、と言った表情を浮かべる技術者の男の方に、彼は右手の人差し指を軽く立て、それを左右に振る。「×××君、そうでなきゃ本社が認めるわけないじゃないか。この情報技術産業の開発支援は莫大な利益をもたらすからな…特にここで子会社化した系列から」

「……分かりました…そうであると言うなら…」ロシア工場・開発センターの関係者の表情を察し、技術者の男は仕方なくディスプレイの方に歩き戻る。平の技術者である自分に対し、座っている彼の方が立場は言うまでもない、うかつに言及すれば自分の立場が怪しくなるし、下手をすればこの企業位置の巨大プロジェクトであるロシア・東欧の国家、企業に対するハイテク情報機器技術開発の支援計画そのものにさえ悪影響を与える恐れがある、一端のスタッフが

本社と本社の合意を受けたグループ企業の方針に逆らう訳にはいかない、それ位の常識はあった。「…はい、今後ともロシア政府の要請する情報機器技術の提供は、当初の契約通りに行われるでしょう。ええ、これ通りに…」彼はスクリーンの前に設置された、机の上に置かれている情報端末のキーボードを数回たたく。「民間企業の育成、スマートグリッド・システムの基づく電力・エネルギー供給調整システムの開発、ならびに航空宇宙産業その他の国家プロジェクトに対する情報技術の共同開発に関しての契約です。詳細の事象に関しては本社と支社工場との調整の元、現場での対応に一任されます…」

「それはそうですとも。あなた方の技術協力、感謝しております…」ロシア連邦の軍人がにこやかにそう言い、グラスの水に軽く口をつける。どうやらこの人間は相手の出方ひとつで自分の態度を入れ替える狡猾なタイプ、悪く言えば参謀タイプの将校らしい、技術者の彼はそう思った。「遠隔操縦によるＳＵ－４７の行った今回の国家危機対策戦闘、あれほどのレスポンスと制御精度をもった無人操縦システムは恐らく宇宙のソユーズを、ですよ」

「はい…わが社のシステムに対するお褒めの言葉、ありがとうございます…」彼の予想は正しかった、組織の上層の人間と言えばそれまでだが、やはり軍人たちは無人軍用機以前に遠隔制御に伴う航空機操縦の事を理解していないようだ。技術者は向かって右手に座り、所法端末のキーボードをたたいて解析を続ける同僚の女に小声で聞く。「…あれでポテンシャルを出しているというのか?」「そんな訳ないじゃないですか…」彼女は端末のディスプレイに表示されたグラフを右手の人差し指で示す。「ここ、このあたりです。インターネットからの情報遮断が入った際に一瞬乱れが、はい。専用回線での既存のプログラム方式では悪影響が出るという事ですよ。記録

映像にも確か…」「そうだったな…」女はキーを数回たたいて、地上のカメラが追跡した無人機の動画を引き出す。「…この通りです。ここが一瞬のタイムラグになっています」「ああ…旅客機の件でも良く出る奴だ。これは空運業界や空軍関係でも言われてる事だ…」男も右手の指先で画像を示し、それから卓の向かい側に座るロシア政府関係者と軍人を一瞥する。やはりあの連中は軍事関連であれ大規模インフラ開発であれ、あらかた素人のようだ。特に空軍や民間空運企業の関係者の間で度々懸念の一つとして上がる、機体の自動操縦装置を自機搭載レーダーから管制塔側のレーダー誘導に切り替えた際に起こる機体の不自然な挙動修正、フライトプランとの合致を調べる際に空運企業やその他のサーバに接続する際に発生する信号の微妙なずれが、送信される飛行位置座標の違いを生み出すものだ。

「こういう所に来る軍の関係者は適当にあしらっておけばいい、反論は本社にしてやれ…」女の隣に座っていた同僚の男が立ち上がり、彼の元へと寄ってくる。話しかける言語は当然のことながらフランス語、社内公用語は英語であるが、フランス・オートガロンヌ県トゥールーズにある本工場における職業の場以外では、当然のことながらフランス語である。「俺たちは事を荒げんようにすればいいんだ。ここでもめたところで崩壊するのみだしな、技術提供や研究以外の口実しなきゃ責任にはならん。そのあとでこの技術でバカげた真似をしたら告発してやろう…」「ああ…そりゃそうだ…」端末の後ろにいる彼は大きく頷き、もう一度端末のディスプレイの数値を指差す。同僚のいう事は全く持って真実、自分たちの置かれている現在の状況は奇異だ、確かにエネルギー、通信網開発や国産航空機用機器の開発といった当初計画されていたものとは全く違う。しかしここでその状況に異議を唱えたり懸念を表明すれば、この巨大な計画と提携そのものがなくなる、ひいては巨大な顧客の需要を奪いかねない。もちろん自分の首の事もある、今は下手な事を言わず、任された業務をロシア支社側と調整しつつ行ってい、しかるべき時

に起こったすべての出来事をはっきりとぶちまけてしまえばいいのだ。

「という事です技術者の皆さん…」ロシア政府関係者の一人が3人の元へと歩み寄る。「スマートグリッド・システム、航空機無人制御、いずれにしても我が国の新興企業やこの事業に参加する欧米諸国の大手企業に大きな利益をもたらすものです、今後ともご協力のほどよろしくお願いします」「はい…それは当然の事です」一応技術者の男も返事をする事にはしたが、彼の本能は目の前にいるロシア人に警戒心と不信感をあらわにしていた。電力や燃料のパイプラインを需要側の状況と連動しながらネットワークを利用してコントロールするスマートグリッド、ＧＰＳや地上レーダー、航空会社とフライトプランサーバに接続された管制システムの交信を取りながら正確に飛行する無人航空機の開発、そのはずが実際に行われているのはそれを利用した電力やネットワークに対するサイバー攻撃システムの開発と戦闘機の無人化…アメリカ空軍は航空・宇宙双方で無人機の実戦運用をすでに行っている…の実験である。ニューロン社は複数の企業が統合した多国籍企業体であるが故に、このプロジェクトを実際に行っているのはイギリスの上層部というよりここロシアにあるグループ企業だ。一定の活動の自由が認められているが故に、本社の方も細かい育成内容に関しては方向に合わせて修正をするのみ、実際の現場の開発はここに任されていると言ってもよい。それにしても、ここまで軍事転用という企業方針から外れているとしか思えぬ方向にまで提携の手が及んでいるのはなぜか、彼の中で渦巻いては消えていく多くの謎と懸念、単なる社員である彼に今、その疑問の霧を掃う答えはなかった。

広大な領土と無数の金属や燃料資源の宝庫を持つロシア連邦、このような大規模な軍事実験が行える国はそうそうない。できるとすれ

ば国連常任理事国のような超大国か先進工業国と呼ばれる国だけ、ロシア以外にもアメリカや中国、イギリスは自国内や自国の連邦国家にある人口希薄地帯…例えば荒野とか…、もしくは太平洋エメリアの自国領で行い、ドイツやフランスの場合は太平洋上に点在する自国領の島しょ、もしくは旧植民地の中で買い上げる事が出来た土地、もしくは水資源や電力開発関係で同様の状況にある中東の砂漠地帯…バイオ燃料開発や希少金属資源採掘を謳って買収した自国大手企業からのまた借りになるが…を利用する。いずれにせよ広大な土地、かなりの資金、企業や経済のバックアップがなければできない事だ。近年はインドや韓国も力をつけており、ブラジルやイランのように国際問題に発展する例もある。近年の軍事活動は単なる国際的影響力の誇示以外にも、自国企業が独占できる資源採掘地域の確保、大手企業の利権、経済や開発で相互依存を強める地域単位での安全保障、民間軍事会社との駆け引きといった予想が入り混じり、一層複雑化している。特に大きいのは貿易で重要視される民間の海・空路、及び工業資源採掘場所の安全保障だ、これもまあ繰り返しなるが、軍事活動の規模が該当国の経済力と資金力に左右されるのも、科学技術が高度に発展した中で経済力が国家や地域の覇権を決める時代の産物である。

7階建てで美しい円筒型をしたオフィスビルの屋上に上がった技術者の男と同僚2人、フランスの本工場で受けた指示とは全く異なる、機器の軍事利用・外交利用が主軸となっている現状に霧深い森に迷い込んだ気分だった。すでに周囲にあるニューロン社の物はもちろん、開発の進むウラジーミル市郊外のハイテク産業地帯に工場をすでに構えるインフィニオン社、アメリカのアップル社をはじめとする情報技術機器産業、ロシアの生命工学企業であるマラーノフ社等の工場もすでに終業時間帯、工業地帯を東西と南北に延びる幹線道

路を多くの労働者の人間や彼らの自家用車、そして近郊の住宅地へと向かうバスが行き来し、２４時間シフト生産制の工場へは夜勤の労働者が向かう姿が見える。すでに日もとっぷりと暮れたモスクワから２００キロ以上離れたと市郊外の工業地帯、真新しい工場やオフィス、施設の建築が進むタワークレーンに付けられ輝く世界各国の大手企業のロゴサイン、それがこの地域の繁栄と成長を雄弁に物語っている。

１３世紀に主だった都市となり始めたこの地域は一貫して工業の街、大型作業機械用モーターや金属資材の加工などが盛んな地域ではあるが、ソ連崩壊以前からの経済低迷によって工業は衰退、ロシア連邦がＢＲＩＣＳの一員として高度経済成長を始めた際も、天然ガス、メタンハイドレード、原油の西ヨーロッパ・中央アジア方面への輸出が中心となり、人工のモスクワへの流出や地場産業の後継者不足は深刻な問題であり続けていた。この都市の救世主となったのがこの政策、ロシアが欧米先進国に対して特に遅れを取っている情報技術機器とそれを利用した高性能の大小各種の電子製品の生産・開発である。アメリカのサンベルト工業地帯や中国、北京郊外のハイテクセンターにひけを取らぬ情報技術機器産業、ロボット産業、ナノテクノロジー産業、生命工学（バイオテクノロジー）産業地帯の形成を目標にロシア政府と公営大手企業の主導で２００６年から開発が始まり、現在では東アジア随一の工業産業地帯を形成するとともに、ウラジーミル市の人口も再び増加傾向へと回復、周辺の雇用情勢も大幅に改善することに成功している。国家的プロジェクトであり、経済技術輸出戦略の要の一つでもあるハイテク産業の育成と同時に、２００８年の世界同時金融危機以降、ロシア、中国、インドなどの新興工業国でも深刻化する失業者の増大や所得格差の増大といった、国家体制や地域全体の情勢に悪影響を引き起こす経済情勢の改善、ここはロシア連邦と中央アジア・東欧地域の今後を占う2つの目的を持っているのである。

しかし今の彼等には壮大な計画も、ここを足掛かりにさらに東欧方

面への展開を強化する自分たちの大企業に対する誇りもない。春遠きロシアの北風、体の芯まで冷やす冷風が今は一層寒く、下の通りを歩く人間たちの足音、夜空を照らす工場の明かりや道路等の照明さえもそれを助長している。アメリカのアップル社やマイクロソフト社といった情報技術機器、ソフトウェア系の超大手巨大企業に成長したイギリス系の多国籍企業体、その上層部の人間が水面下で繰り広げているであろう研究機関への技術輸出による経済への影響力拡大、それ自体は企業の経済活動にとっては当然ありうる行為だ。しかし、その行為がこうして軍事転用に?がりかけている、いや半分以上つながっているという現実、現在ロシアや東欧の原子力関連産業のシェアを数多く握るアトムエネルゴ社をはじめとする企業が、かつて旧ソ連の弾道核ミサイルの開発や核武装人工衛星の開発に携わっていたというような、アメリカ・西側陣営でいう“軍産複合体の癒着”が発生していた、そして今でもそうであるのは事実である。今回もハイテク産業を世界各国から誘致し、自国経済を成長させる以上に、得た技術の軍事転用や国策利用によって国際的影響力の増大・維持と軍事力の増大を狙う、ロシア政府の意図はそこにあるのではないだろうか?西ヨーロッパの大手企業の技術者たちには、たとえ自分たちがいっぱしの民間人であったとしても、かつて自分たちの祖国や周辺同盟国…現在のＥＵである…が晒された旧ソ連との軍事的対立が強く意識に浮かび、先ほどのロシア政府関係者とロシア軍人の言葉が一層暗く怪しい物として感じられた。

その頃…エメリア　ソーラ地域北部

「ありゃりゃ、あいつどんだけ怖いもの知らずになったんだか…それともこの辺りを把握してるだけか?」「どうだかな…ま、とにかく、昔をさらに悪くして論理的危険性だとか行動の妥当性だとか言

わねえだけでも奴は成長したって事か……」向かい始めて2時間ほど、自然に完成したとは思えない石畳の列を超えていく一行、文明によって作られたと思われる階段が崩れ、急傾斜の崖となった場所をも先導するシーベルトは段差をすいすいと飛び越え、崩れ落ちたこれもまた文明が作り上げた橋の残骸に残った基部の部分を使って川を一気にわたっていく。「あんな足元も見ねえであのバカについていけるとは…ヒュンも相変わらずどころじゃねえな…」「バーカ、それがヒュンのいいとこなんだろ?…っと!」目の前に迫ってくる川の流れとその中でわずかな足場、すなわち生命線となった橋の基部の残骸である岩、ブレイブは体から力を抜き、大きく前足を伸ばして飛び上がる。これに関しては隣にいるエンデバーの方が得意そうだが、どちらも勢いは五分五分と言ったところか。着地と同時に前足と後ろ足をほぼ同じ位置に乗せ、軽く息を整えてから後ろ足を蹴りだす、勢いに乗って夜空の星々の屏風絵を作り出す川の流れを飛び越え、軽く空中で前転をうって対岸に着地、この間おおよそ5秒、普通の4本足の動物をはるかに超える運動能力を持っているが故だろう。「ったくシーベルトたちは気が早いんだよ、急いだところで何が変わるってんだ……」「まあ、俺があいつと一緒にやってる限りは、あいつもなかなか気の早い男子だったからな。リーヒュンにどこで似たのかどうか、多少気取り屋なのがあれだけどな…」オオタチは目の前にいるポニータに関してとやかく愚痴とも関心ともつかぬものをこぼしつつ、2匹の後を追う。「ちょっと待てシーベルト、後ろの皆さんと大人の御二人を置いてきぼりにするのか?」「置いてきぼりにするんじゃない!俺の先導するルートが一番確証されてる、それをリーヒュンが…おいこらっ!」「こっちで合ってるってのが俺のカンだからな。あまり速度を上げてはいないつもりだけど!」リーヒュンは足元の岩場を全く見ることなく段差を飛び上がり、本来は階段状になっていたであろう滝の脇の通路であった廃墟をすいすいと上っていく。「うおっと?!」「おいおいおいっ!…たくよお…」ブースターの目の前で後ろ足を滑らせるベイ

リーフ、それでもツルと前足を巧みに使って体制を保ち、ポニータの頭の上に落下するのをどうにか防ぐ。「すまんブレイブ…ちょっとだけ場所を見誤った……」「ったく、まあいいけどよ…こんなところで死んじゃいけねえんだろ？多少直感に頼らん場所も必要だぞ…」

「まったく、お前のおおざっぱさも相変わらず変わらんな。人生というものは緻密な方向性だ…」「そういうシーベルトも変わらんな、相変わらず堅苦しい事に流されて…」「違う、俺は客観的、かつ論理的な計算に基づいた一番妥当な向きへと向かってんだよ！」ベイリーフの少し茶化した声に、ポニータ種族はまたもムキになって反論しかけるが、目の前にある廃墟と化した急斜面を登ることに再び集中する。リーヒュンに全く悪気はない、昔から思ったことをバシバシ言う性格、それを試行に入れると、隣にいる彼が懐かしく思えるほどだ。「フン…それならそれでいい、今は互いのやる事がるからな、ああ、しっかり頼むぞ」「まったく、そんなに照れるなって、俺はこれでも嬉しいんだから…」そう、もう二度と意思疎通ができないほどになったかもしれない、そのシーベルトとこうして再び行動を共にしている、一時的な物だけになる可能性を感じるが、ベイリーフにとって今はそれで良かったのだ。

「それにしても…なあ、ブレイブ、あいつの持ってる力とやらは何なんだよ？」エンデバーが滝の脇を登っていく文明の名残に左手（左前足）をかけつつ、右にいるブレイブの方を向く。「まさか…世の中でいう超常現象とかじゃねえだろうな…人間の科学技術に逆らうオカルト野郎はたいていパチこきだ。それで金稼ぐんだよそれで」

「ああん？お前そんなに人間の科学技術だいすきか？まあそれはそれでいいんだが…俺もあいつとユイの能力がどんなものか、まだ見た事ねえんだ…」ブースターもきつい苔剥いた通路の跡を登りながら、今まで見てきたベイリーフの姿の記憶を意識に持ち上げる。ここのところの彼、ブレイブ・クレイバーという意識のフィルターを通せばあまり変わっているようには見えない。しかし…このブース

ターはリーヒュン・グリーズの親友として感じ取れるものもある。あれほど直感的で、不必要なほど大ざっぱで、それでいて素直で人付き合いの良い彼をここの所あんな表情にしてしまうほどの物だ、自分が見ていい物なのかは正直言って判断できない。「…ただな、俺が見て…理解できねえほどとの物だったら…俺は奴の事を信じていられるか…それは不安だ…」「そんなに…そんなにやばいものなのかよ？」「違う、ちげえよ、俺はだから見たことがねえんだって…だからこそ何が見えるか…うおっと！」「わあっ！？」意識が別の方向に気を取られ、左後ろ足が滑ったブレイブ、背中に乗っていたイーブイの足場もそれに乗じて急になり、ミオカは下へと滑り落ちた。

「このバカっ！！」それをどうにか抑え込んだのは後ろにいるテル、後ろ足で斜面に踏ん張りつつ、両前足を使ってイーブイの背中を押さえ、何もない急傾斜の側面から滑り落ちるのを防ぐ。「大丈夫ミオカ？…私の背中でいいよ」「ううっ…しっかりしてよねブレイブ…」突然起こった事態に腰を抜かしたイーブイ、グレイシアは前足で頭飾りの上に通路を作り、彼女を自分の背中へと送る。「わ、わりいミオカ…」「悪いどころじゃ済まないでしょうに！これで落ちたら…アンタ…アンタ分かってんの？」自分の背中に小さな命が乗っている事に気づかないとは…エルヴィンの経験と、彼に対する感情をミオカにどうしても重ねてしまう。グレイシアは右前足を突き出してブースターのフサフサ尻尾の付け根あたりを思いっきり殴り飛ばした。「いってえ！何してんだテルリン…俺も悪いが、ヒュンの事が多少気になったからって…さすがに…」

「フン、むくげの花を夢見る前に間の前の菊と雑草をむしりなさいよ…」そこまで語気を荒げて言いかけたテルル、彼女の声が少しだけ沈む。「まあとにかく…リーヒュンの事はユイちゃんに任せて…この先何があっても私たちが口を突っ込むところじゃないんだから…」グレイシアにも疑問や不安は渦巻いているが、帰ってそれで諦めがつく。何が起こった所で自分は関わらない、そりゃあユイリィ

達が危ないとあれば助けるが普通だが、それ以上の点…例えば彼らの能力が発揮されたときにおこる現象…を見たところで自分の感情も意志も変わらない、もう決めていた。「そりゃそうだ…そうだよな…」ブレイブは彼女の顔を見て頷き、再び眼前に広がる廃墟の斜面の突破に意識と足の筋力を集中させる。全く持って彼女の言うとおり、今までサクラやその他から聞いたことから考えれば自分たちが何といった所で状況を変えられるものではない、必要とあればリーヒュン達を助け、自分たちの理解の範疇を超える事は彼らに任せるしかないのだ、と。

競うような形でベイリーフとポニータは上に飛び上がり、その背後からメガニウム、キュウコン、ゼブライカ、サーナイトが次々に滝の上へと上がってくる。「ここがお前の言う物がある場所…というより、そうですよねサクラさんという方?」「ええ……湖の真ん中にあるあれの事よ…」サクラが右手で示す先にある物、滝へと流れ落ちる川の手前に半径１００メートル程度の真円に近い湖がある。周囲は一面深い森、湖の中央に向かって水面の上に石が通路として並べられており、湖のほぼ中央にある天然の浮島には、粘土質が固まってできた突起の上から噴水のように水が噴き出し、その周囲は真昼のごとく明るくなっている。「時空翡翠玉…やはりこの場所にあったのね…」「ええ…あなた方がこれを集めている事は知っているわ…」それにこたえるのはアリョーナ、このキュウコン種族も長年の調査と探究でそのような伝説の類は知っている。「これを…この２匹は探し求め、利用する能力があるという事なの?」「ええ…これ以上の事は国連の機密に触れるから…詳しい事は自治協会の地下にある場所にしか記録がないらしくて……」

「……時空翡翠や時の歯車の利用道。…ずっと昔に封印してしまったはずの物…それを開けるポケモンは限られてるのよね…」アリョ

ーナが一歩前へ進み、目の前で輝く物体の周囲を見つめる。「そうよ…でもこの子たちが本当にその存在なのか…私たちも国連も掴みかねているのよ…」サクラも彼女の隣に一歩進む。そう、全ての事実を知っているのは国連と言う人間の組織とエメリア自治協会の上層部の一部だけ、このサーナイトの鋭い直感と能力をもってしてもそれを探ることは不可能だった。

「あるのかどうか…見てみないと分からないですよ…」リーヒュンはその光源から出てくるに何かを感じ、ゆっくりと前へと進みだす。これは前感じた物と同じ、ハイドルの地底湖で感じたあれと全く同じだ。「ユイリィ…この感じはやっぱり…」「うん、これはね…フローラと?がる何かだと思う…」ユイリィも彼に続いて浮島へと向かう水面の石の通路を歩きだす。彼女は隣のベイリーフ以上に意識に伝わってくる感触を分析し、過去の記憶と合致させ、その感覚が導くであろう未来の流れを感じ取ることができる。これはハイドルの物と全く同じ、湖の中心に存在する天然の噴水、そこを光源に変えている物体、それはベイリーフの首に下げられたものと同様だ。

「…リーヒュン、大丈夫…?」

「ああ、前と同じだったら前と同じ方法を取るまでさ……」やや心配そうに響くメガニウムの声、彼は緊張しつつも無理にはっきりと言う。歩みを進めれば進めるほどわずかに伸ばしたツル先からつ割ってくる感触は、その先を伝わって首元を冷たくし、足元から溶け落ちるような気持ち悪さを帯びてくる。「それでいい…これが俺の…必要性なんなら…」彼に迷いはなかった、これがフローラのためになるんだったら多少気持ち悪くてもケガをしようとも問題はない、目の前からくる流れに逆らうリーヒュンの意識の水晶を動かす原動力はそれだ。

ゆっくりと湖の中心部へと足場を伝って向かう2匹、しかし恐れて

いた自体、想像を絶するものは現実化した。２匹が目的の場所まであと５０メートル程になっただろうか、突如として２匹は足元から救われるような感覚に襲われ、次の瞬間には甲高い風切音に似た音と共に浮島にひびが入り、そこから目をくらます白い閃光が噴き出す。「こ、これは…?!」「反応してるのようちらに!」ユイリィは４本足で激しく振動する地面に踏ん張りつつ、突如として自分たちを吹き飛ばす爆風と化した意識のエネルギーの流れをまさぐる。自分たちを拒否している、翡翠のある空間が自分達を追い払うべく激しい流れを作り出している、背筋の凍らせるような寒気によろめきそうになりながらも、メガニウムの意識の水晶を満たす気体は澄み切り、感覚も一気に広がっていく。このために、自分が存在する目的のために……

目の前で起こる異常事態に思わず目を背けたテルル、しかしその直後、周囲に集まってくる別の存在に気づき、思わず一歩前へと出る。「どうしたテルル?!」「来るの、私たちを待ってたやつがいたのよ!……くっ…」目を焼くほどの白い閃光の背後に浮かぶ複数のポケモン達の影、グレイシアの直感は彼らが敵であること、こちらを狙っている事を雄弁に知らせている。こうなったらやるしかない、目の前の状況に隠れている周囲の敵を叩き潰す、彼女は大きく息を吸い込んだ。「行くわよブレイブ!」「あ、ああ!」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4988t/

for the sky of freedom

2011年12月18日11時55分発行